

君、死にたまふ事なかれ【本編完結】

月瓜里

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

2010年のある春の日。

突如“弟”を失った三上優希は失っていた記憶の一部を思い出す。

そこから彼は何度死んでも止めることはできない、繰り返す奇怪な運命の一年間に囚われる。

——すべては弟妹を救うために。

これは、そんな彼の最後おわりの一年間の話。

※この作品には『ペルソナ3』及び『ペルソナシリーズ』本編、PQ、『デビルサマナー葛葉ライドウ対コドクノマレビト』などのネタバレが含まれています。

削除していた作品を加筆修正などした再投稿版です。

新規書下ろしした話には☆印をつけてあります。

目次

プロローグ

あゝ弟よ、君を泣く

I 魔術師

100万回目のマイナススタート(4/6)

那由他の死の目覚めを(4/7)4/25)

II 女教皇

僕と君と(4/27)4/28)

違和感と焦燥(4/28)5/3)

女教皇の誘い(5/9)

III 女帝 & IV 皇帝

神話覚醒(5/9)5/13)

天啓を告げる(5/16)5/26)

黒い男(5/27)5/30)

喰らう者(6/1)6/8)

幕間 : 荒垣真次郎と三上優希

V 法皇 & VI 恋愛

大炎上日和(6/11)6/13)

デジャ・ヴユの少年(6/16)6/20)

☆幕間:自らの手で終わらせた世界で白旗を振る

第一の騎士(6/23)

ナギサ(6/25)

お出かけ(6/26)6/28)

繰り返していたのは、(6/30)7/7)

VII 戦車 & VIII 正義

1 5 18 36 51 59 81 96 108 118 140 147 158 169 182 191 203 220

揺らぎ (7/8) | 243

告解 (7/9 ~ 7/11) | 257

暗中飛躍の特命ボウイ (7/12) | 272

増えていく関係 (7/12 ~ 7/13) | 287

テストと屋久島旅行 (7/18 ~ 7/20) | 303

アイギス (7/20) | 319

もうひとつの罪 (7/20 ~ 7/21) | 336

第二の騎士 (7/22) | 350

今はもういない貴方へ (7/24 ~ 7/29) | 365

ストレガ (7/30 ~ 8/6) | 384

IX 隠者

きっかけは些細なことで (8/6 ~ 8/7) | 406

それは矛盾と言う名の罪 (8/9 ~ 8/16) | 423

第三の騎士 (8/17 ~ 8/20) | 442

幕間：有里湊のみる悪夢 | 468

似た者同士 (8/21) | 476

亀裂 (8/29 ~ 9/1) | 499

カウンセリング (9/1 ~ 9/3) | 516

人でなしの唄 (9/3 ~ 9/5) | 531

X 運命 & XI 剛毅

遺るもの (9/6 ~ 9/7) | 567

第四の騎士 (9/18 ~ 9/22) | 581

パンケーキ・ランデヴー (9/23 ~ 9/27) | 600

嵐の前の (9/28 ~ 10/4) | 615

スワンプマン (10/4 ~ 10/9) | 631

XII 刑死者

受胎告知 (10/4 ~ 10/10) |

658

ぬくもり抱いて (10/11 ~ 10/17) |

676

アリス (10/19) |

692

臆病な自分はそれでも (10/19 ~ 10/20) |

707

回顧と決意 (10/20) |

725

溺れる魚 (10/20 ~ 10/21) |

742

秘密の特訓 (10/22 ~ 10/27) |

758

帰省 (10/29 ~ 10/31) |

772

避けられない戦い (11/1 ~ 11/3) |

788

滅びへと至る路

終わりの始まり (11/4) |

815

命を喰らう徒花の声 (おと) (11/4 ~ 11/6) |

847

データサルベージ (11/6) |

865

教えられること。そうでないこと。 (11/7 ~ 11/9) |

881

接続 (11/9) |

901

確認事項 (11/9) |

921

ニクス教 (11/10) |

937

夢見の悪い (11/10) |

954

禍福無門 (11/10 ~ 11/11) |

972

蛇頭黄幡神 (11/12) |

991

目覚める力 (11/12) |

1009

The Dream-Quest of Unknown

Ka

death. (未知なるカダスを夢に求めて) (11/13) |

1033

Dreamlands. (しあわせな夢の国) (?/?) |

1051

声) (? / ?) _____

死人に山樞子 (? / ?) _____

I, I I Face Myself. (? / ?) _____

帰還 (11 / 13) _____

その理由 (11 / 14) _____

明かされたもの (11 / 14) _____

愛は哀より (11 / 14) ~ 11 / 16) _____

修学旅行初日 (11 / 17) _____

修学旅行二日目 (11 / 18) _____

出会いと湯けむり (11 / 19) ~ 11 / 20) _____

疑念 (11 / 20) _____

予兆 (11 / 21) ~ 11 / 22) _____

メサイア・コンプレックス (11 / 22) _____

決意と諦め (11 / 22) ~ 11 / 23) _____

迫られた選択 (11 / 30) ~ 12 / 2) _____

「俺の勝ちだ」 (12 / 2) ~ 3 / 5) _____

「忘れたままでこのまま生きるんですか？」 (3 / 5) _____
???)

1417

運命へと反旗を翻した者たち

「お前の負けだ」 (12 / 2) ~ +) _____

「時間切れまで足掻けばいい」 (12 / 3) _____

「空っぽだったんだよ、元から」 (12 / 3) _____

「そんなの、認められないだろ？」 (12 / 3) _____

「悪い癖ですよ」 (12 / 3) _____

「燃えろ！ 燃えろ！ 燃えろ！」(12/4)

「ようこそ、俺の根城(パレス)へ」(12/4)

「お前の方がダメだ」(12/5)

「ダイナミックに失礼致しまーす！」(12/7)

「俺は、存在しちやいけなかったのか…？」(12/10→12/1)

1)

「ヒトと一緒に居られなくなる」(12/12)

「さみしい」(12/12)

「許せない」(12/13)

「みんな、あんたたちが殺したのに」(12/13)

「今からやることに恋愛感情は一切含まれておりません！」(12/13)

13)

「人の手には負えない」(12/13)

「——全てを悔いながら苦しんで死ぬ」(12/13)

「『三上優希』をやめます」(12/14)

「全部黒こげにして燃やしちまいなッ!!!」(12/14)

「好きだけ暴れて、ブツ壊したいものをブツ壊す！」(12/14)

一日目・朝(12/15)

一日目・昼(12/15)

不安定な心(12/15)

二日目(12/16)

三日目(12/17)

本心はどこに(12/17)

解決(12/17)

ともだち (12/18)

突撃! 隣の幽霊屋敷 (12/20)

幽霊屋敷のその後 (12/20)

首! クビ! くび! (12/21)

渚にて問う声。答える声はいずこ (12/23 ~ 12/24)

1970

救いの声 (12/24)

クリスマスパーティー (12/25)

大晦日 (12/31)

初詣 (1/1)

たとえ偽りだとしても (1/2 ~ 1/3)

いざ、魔界へ (1/3)

魔王 (1/3)

約束 (1/15 ~ 2/5)

真の覚醒 (1/31)

全ての人の魂の戦い (1/31)

君、死にたまふ事なかれ (1/31 ~ 3/5)

小話

有里渚調査報告書

☆幕間：三上先輩と私。

21092106

20922078205720482039203120202008199819871979

1960194619311912

プロローグ

あゝ弟よ、君を泣く

それは高校を卒業してすぐの、ある雨の日だった。

「みかみゆうき三上優希さん、突然ですが…貴方の弟さんが亡くなられました」

「——は、」

「調べた結果、兄である貴方が直近の親族だと。親族代表で出ていただけますね？」

式場への地図はこちらです。と、有無を言わず紙を押し付けてきた知らない男から突然告げられた、聞き覚えのある名前。

「いえ、自分に弟どころか兄弟などいませんが」と、返そうとした脳裏を焦がすなにか。

咄嗟に、言葉を紡ぎかけた口を噤む。

おとうと。弟。

苗字は自分と違う、『ありさと有里』というもの。

その違和感に気が着いた瞬間、考えがまとまるより早く、身体は土砂降りの雨の中を走っていた。

ありさと、みなと。

わからない。弟だと言われたが自分は一人っ子のはずだ。

それでも、言い様のない違和感が身体をつき動かした。

死んだ弟だと言われた人物の名前を反芻しながら走る。走る。

躓いて転んだ。

すぐに起き上がる。

走る。

息を切らせて式場へとたどり着く。

まだ葬式は始まっておらず、人は疎らだ。

受付や通路に数日前まで通っていた高校で見た事のある人間がちらほらいたが気に止められるはずなど無かった。

「あ……ああ……あああ……」

引き止める人間を振り払い、びしょびしょのまま、亡霊のように棺

へ飛びついた。

そして中で眠るよく似た顔を見て、全て思い出した。

「み、など…」

——弟だ。

そう認識した瞬間、床にくずおれる。涙なのか滴る水滴なのか分からないものが床を濡らした。

どうして今まで忘れていたのだろうか。

自分と彼は年子の兄弟だった。

幼少の、幼い弟の寝顔や笑顔がフラッシュバックする。

——どうして。

どうして、『自分の記憶は穴が空いて』いる？

どうして、兄弟が別々に暮らしていた？

どうして、自分だけが三上家に養子に迎えられた？

どうして、弟がこんなに若くで死んだ？

わからない。答えなど持っているはずもない。

ふらふらと立ち上がり式場を出る。

今度は、誰かに気遣うような声をかけられた気がするが頭に何も入ってこない。

何も分らない。

雨の中、傘もささずによろめきながら歩く。あのままあそこに居たら弟の死を受け入れなければならぬ気がしたからだ。

とはいえ自分は弟を弟だと今まで認識せずこのうのと暮らし、死んでから思い出した薄情者であり、最低限の親族としての役目さえ放り投げて逃げ出した人間のクズだが。

そう自嘲しながらも、記憶と同じくぽっかりと穴の空いた心は涙を勝手に目から溢れさせる。

「——君の弟が死んだ理由を、君の記憶が無い理由を知りたいかい」
ここにきて初めて頭が認識できる言葉をかけられ、顔を上げた。

大雨になりすぐ先も見えなくなった道路の真ん中にいる自分の目の前に男が1人立っていた。

傘で顔は見えないが季節外れな血のように赤いマフラーが揺れて

見えた。

ぼんやりと、大雨にマフラーとは酷く不釣り合いだなと感じた。

「……知りたい」

「その上で君の弟をもし救えるとしたら？」

男は甘言を吐く。

まるで悪魔の誘いのようだ。

救えるはずなどない。弟は既に死んでいる。

結果を覆すことも、時を巻き戻すことも出来やしない。

それこそ、『神や悪魔でないかぎり』出来やしないのだ。

「できるとも。君に、その覚悟があれば」

男はまるでこちらの思考を読み取るかのように告げた。

「ほん、とう…に…？ 俺に…救えるのか…？」

縫るように、吐き出した声は震えていた。

本当に、そんな事ができるのだろうか。

「言っただろう、君にその覚悟があるなら、と。道のりは長く険しく単純じゃない。複雑怪奇だ。私にだってどうなるか分からない。」

けれど、けれども、君には選ぶ権利がある。願う資格がある。もし

この手を取れば君は孤独で長く苦しい戦いに身を投じることになる。何度も失敗するだろう。死ぬ以上の苦しみを味わうかもしれない。

それでも尚、君は弟を、家族を救いたいかい？」

無茶苦茶なことを言う割に、声は酷く優しい。

言外に、「もし嫌ならこの選択はしなくてもいい」という感情を感じ取れる。

「……おれ、は……」

「もちろん、このまま彼の死を受け入れて1人のなんでもないただの人間として過ごすことも出来る。何も知らずに、ただ穏やかに、これまで通り」

本来なら、ここで「やっぱりいいです」と立ち去るべきなのだろう。

与太話だと、鼻で笑って一蹴すべきなのだ。

しかし、首を横に振ることはついで出来なかった。

知りたい。救いたい。

そのふたつの感情が心を、身体を突き動かす。

「俺は、何があったのか知りたいし弟を救いたい。だから、あなたの言葉に乗る」

そう告げた瞬間、男が少し悲しげな顔をしたような気がした。しかしすぐに傘から見える口は柔らかく弧を描いた。

「——わかった。」

私は君に、きょうだいを救うまで永遠に繰り返す呪いをかける。生半可な死程度では決して途中でやめることも出来ない呪いだ」

男が手を伸ばす。

とん、と軽い力で身体を後ろへと押された。

とても軽い力だったのに、身体は地面へと後ろ向きに吸い込まれていく。

後頭部が地面へとぶつかると瞬間、ぶつりと意識が途切れた。

「君の旅路の終わりが、せめて報われるものであらんことを」

I 魔術師

100万回目のマイナススタート（4／6）

ぶつり。

いつもの糸を引きちぎるような音と共に瞼をあげ、起床する。

カーテンをあげ、朝日を浴びながらカレンダー付きの時計を確認した。

4月6日。午前6時ちようど。

予定通りの日付にひとりで頷くと携帯電話でメールと着信のチェック、電話帳の確認を行う。

着信履歴には「湊みなと」と「奏子かなこ」という2人の人物からの着信が連なっていた。

そこにちらほらと別の人間の名前もある。

『今回』は2人ともがこちらにくるのか。このパターンは初だな、と脳内でメモをしながら立ち上がり外へ行くための準備を始めた。

10分とかからずにもう慣れたそのルーティンを終え、寮の自室を出た。

今回は初めから寮生で良かった。ここにいる時の他の寮生との関係や、やるべき事はだいたい決まっているから楽でいい。

のんびりと、欠伸をしながら階段を降りる。

寮のラウンジにはまだ誰も居ないようだ。

恐らく皆まだ寝ているのだろう。

朝とはいえ、朝食にはまだ少し早い時間だ。もしかすると、筋トレ好きの同級生は毎朝の走り込みに行っているのかもしれないが。

兎にも角にも今はまだ人数の少ないこの寮だと誰かがここにいる事の方が珍しい。

冷蔵庫の扉にフックで引っ掛けてあるエプロンを手に取り、脱いだ制服の上着を椅子の背もたれにかけてから被って袖を捲った。

いくらセーターを着ているからと言ってブラウスが汚れない保証はない。

本来は着替える前に調理をすべきなのだろうが朝食を食べてからは洗い物があるので着替えている暇がない。

こだわりとして、自分が使った分くらいは学校に行く前に洗っておきたい。

今日のような休みの日も同様だ。着替える時間はあるがラウンジにスウェットのまま出てくるのもなんだか気恥しいし先に着替えてしまった方が面倒くさくない。

卵を割りながら謎の弁明をするのはもう何度目だろう。

覚えていない。

記憶が擦り切れる程に繰り返してしまった。

これまでの全てを失敗している。

弟である湊が妹である奏子だった時もあつた。その逆も然り。

ふたりとも自分のことなど知らず（もしくは忘れていた？）見かけは他人として、ただの先輩として過ごしたこともあつた。それでも尚、分け隔てなく救おうとしたし、時には陰から手を出したり見守るだけだったりした。

自分と弟（または妹）の2人で死の運命をわかちあおうとしたこともある。

しかしそれでもダメだった。必ず、必ず弟か妹がああ春の日に死ぬ。

それでもまだ想いは褪せず、あの時の始まりの激情だけは罰のように残る。

涙はとうに枯れ果てた。

さて、詰みかと思われたこのループだが『前回』自分はある答えを見つけた。

ようやく、ようやくだ。結局今まで試していなかった——試そうとして他の要因で失敗していた——事を実行に移そうかと考えていた。これはあまり手を回したりする必要のない、とても楽な——それでいて最後の最期まで悟られてはいけない難しい計画だった。気負いだけはあまりしないでもいいというのがすごく楽だ。

卵とウインナーの焼ける匂いが鼻腔をくすぐりつつも、食欲はあま

りない。

ここ最近の周回は常にそうなので問題ないと受け流す。

程よく焼けた目玉焼きとワインナーを皿に盛り、今いる人数分ダイニングテーブルに並べる。遅くなりそうな一年生あしたからにねんせいの岳羽たけばゆかりの分だけはラップをかけておく。

ご飯やパンなどの主食は各自で取ってもらうので自分の分だけ白飯をよそい、席について両手を合わせて「いただきます」とひと言。

ひとくち、ふたくち食べて顔を顰める。不味い訳では無い。味に問題は無い、はずだ。ただ純粹に吐きそうなだけで。

喉元までせり上がる吐き気。なんとか口元を片手で押さえ押し留めれば、どつ、どつ、と不規則に早まる鼓動。

ほんの少し食事をしただけなのにこれとは随分軟弱になつてしまったなど大きくため息を吐く。

ある周から身体は大なり小なり原因不明の体調不良に見舞われるようになった。

意味がわからない。自分が何をしたというのか。

いやまあ、普通の人間ではないような体験ループはしているけれど。

異変に気がついた今からちようど105回前の周回ではほんのたまに、無茶に無茶を重ねた時だけに出ていた。

しかし周を重ねる毎に悪化し今回では食事をとっただけでこのザマだ。少し急激に悪化しすぎな気もしないでもないけれど。

先が思いやられる、と頭を抱えていると階段を降りてくる音がした。

「おはよう、三上みかみ」

「おはようございます、美鶴みつるさん」

降りてきた彼女——桐条美鶴きりじょうみつること美鶴さんに挨拶を返す。

生徒会長の彼女は規則的にきつちり起きてくる。しつかり用意も済ませて。

ついでに言えば結構目敏い。体調不良など悟られては面倒臭いし下手をすれば計画が破綻してしまうかもしれない。

ここは上手く誤魔化さなければ。

「真田くんはまだ帰ってきてないけど、もうすぐだと思う…たぶん」
「そうか。では私は先に頂こう」

ある意味いつものルーティーンに含まれた真田くん——真田明彦さなだあきひこの話題を出したが上手く誤魔化せただろうか。

誤魔化せてると良いな。

「そういうえば、今日は三上の弟達が来る日だな」

「そうですね。おそらく昼頃か夕方には何時に着くかの連絡があるかと」

たぶんね、とは言わないでおく。もしかしたら連絡が無いかもしれないしあるかもしれない。

携帯の着信履歴に残っていた2人の電話の頻度は湊がたまにで奏子が毎日もしくは3日に1度ほどだ。

二人一緒に行動していると仮定するなら何かがあれば恐らく頻度の多い奏子の方から連絡が来る。

そもそも今回は頻繁に連絡を取り合うほどの仲なので苗字は（恐らく）違えども兄妹という関係のままなのだろう。

俺って実はきみの兄なんだ！ワア！驚きだね！なんてカミングアウトしたりモヤモヤしたりする必要が無くて本当に良かったと思う。

いや、このテンションでは流石にしたことないが。
スタートダッシュは中々に良い——体調不良の悪化を除けば——

結果と言える。
実を言うと周回を重ねてはいるがその度に少しずつ背景が違う。

そしてその記憶もない。

始まるのはいつも4月6日だが、始まる場所や湊や奏子との関係や他の人物との関係は違う。

養父母の家から始まったり、全く関係ない普通寮から始まったり。湊や奏子とも顔見知り程度だったり、兄妹であることが最初からわか

かっている今回のようなパターンや、そもそも顔も名前も知らない他人だったりと様々だ。

初めの1週間程は毎回自分の立ち位置と周りからの印象を確認し、上手く相手から自分の過去の言動を確認するための時間になること

が多い。

先程の美鶴さんとの会話で「桐条」や「桐条さん」ではなく美鶴さんと呼んでも怪訝な顔をされなかったのも確認作業のひとつだ。

寮スタートのパターンはだいたい美鶴さんと呼んでいるので、こういう呼び方や言葉遣いで親しさや険悪かそうでないかの関係を推し量ることが出来る。

閑話休題。

「ごちそうさまでした。美鶴さん、お先です」

「ああ」

双方あまり会話をしないタイプなので挨拶以外は無言を貫きつつも、なんとか食事を腹に押し込んで完食した。

今度からは食事の量を半分かそれ以下にしよう。

下手に残して悟られたくない。

適当に理由付けでもしとこう。ペットの金魚が死んで悲しいからとかそんな感じの。金魚飼ってないけど。

席を立ち、シンクで自分の分の食器と調理に使った器具を洗う。

洗っている途中で真田くんが帰ってきたようでバタバタという忙しない足音がする。

「おはよう、真田くん」

「ああ、三上か。おはよう」

「朝食はすぐ帰ってくるかと思ってラップかけ忘れたから必要ならレンジで温め直して。一応プロテインはシャワー後にすぐ飲むように作って冷蔵庫の扉側に入れて置いたから」

「毎日すまない」

「好きでやってるから気にしないで」

言葉を交わしつつ裏で情報のすり合わせを行う。

どうやらこちらもルーティーン通りの行動で大丈夫なようだ。真田くんから「毎日」という単語を引き出せた。

朝の食事は荒垣くんが来るまではとりあえず毎日作るで決まりのようだ。

荒垣くんこと荒垣真次郎あらがきしんじろうは今はこの寮にいないが後から戻ってくる

るメンバーで料理上手だ。レシピを見てなんとなく作る自分なんかよりも美味しくそれでいて凝った料理を作る。

自分は彼が来るまでの代理の料理当番、と言った感じだ。

それはそうと荒垣くんが。奏子が居るからには彼を必ず生存させなくてはならない。というか奏子ではなく湊だった場合も自分の楽とその他諸々のために生存させなくてはならないのでどの道やることに変わりはない。

せいぜい身代わりに死ぬ覚悟で守るだけだ。自分の命は投げ捨てるものなので。

とりあえず適当な方針が固まり、皿洗いも終えたことなのでエプロンを脱いだ。

そして上着を着て寮を出る。

今日はまだ春休みラスト一日とはいえ休みなので私服でも良かったが兎にも角にも制服の方がもしも学校に用ができた場合行きやすいので制服で出歩くことにしている。

街をぶらついてても春期講習の生徒と間違われやすく楽だという狡い思考もある。

部屋で確認するには監視カメラが面倒なので外に出て神社へと向かい、ベンチで通学カバンを漁る。

財布の中には数千円とポイントカードと病院の診察券。……診察券!?

一瞬ドキツとするも、すぐに気を持ち直す。

診察券ぐらいだいたいみんな持っているものだ。変なものじゃない。

うんうん変じゃない。と言いつつ財布をしまい、さらにカバンを漁る。教科書、資料集、勉強用のまとめノート、筆記用具、鉛筆——そして掴んで引つ張り出した白い紙の袋……どこからどう見ても処方された薬ですありがたいがとうございました。

いやもしかするとたまたま直近で風邪を引いていただけかもしれない。

風邪薬であることをファツキンゴッドに祈りつつ中身を確認する。

なにになに：『重い不整脈が出た時に服用してください。』

おもいふせいみやくがでたときに：おもい……ふせいみやく……は
いアウトー!!!

アウトー!!!

ここが外じゃなくて寮でもなくて1人住みのアパートなら1人で
叫んでたレベルでアウトー!!!

は？神さま仏さま魔王さま俺が一体何したんですか？そもそも湊
や奏子が毎回毎回死ぬのもマジであの子らが何したんですかと呪い
たくなるレベル——実際そっち方面はちよつと呪ってる——だがそ
れとこれとは話が違う。

戦闘どころか運動………まともに出来るのか………？

数分後、そんな心配は吹き飛んでいた。

神社の番犬ことコロマル——字は虎狼丸ころうまると書くらしい。かつこい
い——を撫で撫でもっふもふしたお陰もあるがそもそも不整脈があ
るからなんだ、どうせ死ぬ時は死ぬと割り切った。

ヤケになつたとも諦めたとも言う。

ただし、この不整脈云々が知られてない可能性もある。というか自
分の性格からして隠れて病院に行つて痩せ我慢しつつヤバい時には
どこかに隠れて飲んでる可能性が高い。むしろストレガのような人
工ペルソナ使いの使う制御剤じゃなくてちよつとホツとした。彼ら
には悪いしどの道終わりのことも考えたり繰り返すことも含めて自
分には寿命なんてあつてないようなものだけだ。

本格的に特別課外活動部が活動する時にそれとなくナチュラル
にタルタロス散策に参加して真田くんのように止められなければ勝
ちだ。

止められたらその時は………その時に考えることにする。

今考えても後からリアルタイムで対応・対策を考えなければいけな
いのでどうしようもない。

「ありがとう、コロマル」

「わふー」

コロマルをひとしきり撫で回してベンチから立ち上がる。

コロマルは今日もいい子だし可愛い。なんの気兼ねもなしに触れ合えるのはありがたい。張っていた気を緩めることも時には大事なのだから。

そして、万が一の時はコロマルも身を呈して怪我しないように守らねばならない。しなくていい怪我をする必要は無いし、逆に自分は命を捨てることも怪我をすることも惜しくは無い。ピッタリの配役だ。またね、とコロマルに手を振って帰路につく。

他の場所の確認はおいおいで良いだろう。なんとなく、今日じゃないような気がしたのでやめておく。

こういう予感がした時はそれに従った方がいいと途方もない周回でなんとなく覚えた。

それに逆らった場合、即死の時もあれば後々ともない事態を引き起こすこともあったので触らぬ神に祟りなし、だ。

その後は夕飯の仕込みをしたりそれを食べたりラウンジのソファーの上でのんびりしたり部屋に帰って勉強をしたりしつつ適当に時間を潰した。

結局、湊からも奏子からも連絡はなかった。

夕飯の時に「便りが無いのは良い事の知らせとは言うけれど少し心配だな」くらいの言葉を零しておいた。

実際無事に寮に来れるのかどうか、いくら繰り返しているとはいえ毎回ヒヤヒヤものだし、いつも迎えに行きたいのだが焦って迎えに行くといけない自分が死ぬのでやめて待つことにしている。

深夜0時。ついに来た。

棺化しないと分かっている、とりあえずは机の上で突っ伏して寝たフリをしておく。本当はラウンジで待っているうちに寝落ちをしたフリをしたかったけれど諸事情により断念。

深夜になる前に探し物を探すフリをして部屋を見たところ自分はまだ活動に参加していないようで武器のぶの字もない。

召喚器すら持っていないみたいだ。一瞬、不整脈のことを既に知らせているのかと脳裏によぎるが、もしそうだとしたら誰か気遣うような視線を向けてくるはずだ。岳羽こと岳羽ゆかりが特に。

後輩とはいえ馴れ馴れしくゆかりちゃんとも呼ぶ訳にも行かず、岳羽さんだとよそよそし過ぎる。苦肉の策に苗字を呼び捨てにしたらビンゴだったらしい。良かった。

とはいえ、不整脈のことがバレた訳でも無いとすると可能性があるのは『自分は寮に入って数週間ほどぐらいしか過ごしてない説』だ。下手をしたら春休みになってから入ったパターンである。

朝の真田くんとのお話で「毎日すまない」と言われたが、恐らくこれはある程度寮にいつつもあまり日が経っていないため言われたのではないかと推測する。

そもそも、真田くんとのお話が結構ぎこちない感じというか少し距離がある感じがしたのであまり仲良くなれていないのだと思う。仲が悪い訳でも無さそうだけど。

それならそれでいちばん都合が良い、と深く息を吐いて身動きするフリをした。

そして、影時間が終わって数分して一悶着しているだろう頃に自然に目を覚ますフリをして欠伸を噛み殺しながら下へと降りる。

「今日はもう遅い。部屋は2階と3階の一番奥に用意してある。君たちの兄には明日挨拶するといい」

「——よかった、無事に着いたのか。起きてきて正解だった」

美鶴さんの後ろから呟くように声をかける。

「三上！」

「三上先輩!？」

驚いた美鶴さんと岳羽、そして少しだけ目を見開いた弟である有里湊と「お兄ちゃん!？」起きてたの!？」とわりと大袈裟に驚く妹の有里奏子。

なんともなさそうだなにより。

「ふあ…いや、さつき部屋で寝ちゃって今日を覚ましたところ…本当はこっちで待ってようと思ったんだけど…」

言葉を切っておく。皆まで言う必要は無い。

適当に誤魔化し相手の想像に任せるのも生き抜くための手なのだ。それを救うべき対象の実際の弟と妹にも使うのはなんとも言えないが。

「……………」

弁明した所でじとーつと見つめてくる湊の視線は和らぐことは無かった。

「…………えっと、もしかしてヨダレ垂れてる?」

「ついてない。優希は変わらんないなって思っただけ」

「?」

「もう! 湊! お兄ちゃんを呼び捨てにするのはダメだって言うてるのに!」

首を傾げれば湊から否定の言葉が飛び、奏子が湊にむくれっ面になりながら注意する。

それにしても初っ端から下の名前で呼び捨ては初めてかもしれない。大体が兄さん呼びだったり三上さんだったり先輩だったりしたのでかなり新鮮だ。

「別にいいでしょ。優希は優希なんだから」

「ちよつと前までは湊もお兄ちゃんって呼んでたのに!」

「それって小学生までじゃん。奏子うるさい…」

「うるさくないもん!」

ぷりぷりと怒る奏子と耳を塞いであーあー聞こえないと棒読みで言う湊に苦笑いしつつ言い合いを止めることにする。

このままヒートアップすると二人とも眠れなくなってしまう。特に元気な奏子の方が。湊は眠いのか先ほどから何度も欠伸を噛み殺している。

「ほら、俺は呼び捨てとか気にしてないから…2人とももう夜遅いし長旅で疲れただろ? 湊なんか眠たがってるし話もそこそこにして寝ようか」

「はーい」

「…………うん」

素直に頷いた2人によし。と心の中で花丸を送ると、2人に気圧されていたのかそれとも見守ってくれていたのか、微笑んだまま黙っている美鶴さんに向き直った。

「湊は俺が案内するので、美鶴さんは奏子のこと頼みます」

「ああ、こちらこそ頼んだ」

しっかりと頷いた美鶴さんから鍵を渡される。

上へ行く前に隣にいる居心地悪そうな岳羽にも一応声をかけておく。

「岳羽も付き合わせてごめんね、もう12時過ぎてるし気にせず寝てもらって構わないから」

「いえーあつ、分かりました…それじゃ…奏子ちゃん、また明日」

「うん！またね！」

いつの間に仲良くなつたのか奏子のことをちゃん付けしながら先に階段の向こうへと消えていく岳羽を見送り、美鶴さんと奏子が続く。

そしてその後ろを自分と湊が続いた。

「それじゃあ、俺らはここで。おやすみ、奏子。美鶴さん、おやすみなさい」

「ああ、三上もな」

「…奏子、おやすみ」

「湊おやすみ！お兄ちゃんもおやすみなさい！」

2階の踊り場で美鶴さんと奏子と別れる。そのまま廊下の突き当たりまで歩いて扉の前で止まった。

「2階全体が男子寮というか男子の階になつてるんだけどね、一応ここが湊の部屋だよ。荷物は届いててもう部屋に運び込んであるから。勿論、勝手にあげたりはしてないから安心して。まあ普通の方の男子寮に入るまでの数週間だけだから整理してもしなくてもいいかな」

「うん」

「あとは…これがこの部屋の鍵。鍵は無くすと凄く怒られるからなるべく無くさないこと。紛失時には鍵の付け替えとかが必要になるからとても面倒臭い」

「うん…あの、さ…優希」

「なに？」

何かを言い淀むようにこちらを見つめる湊の視線から目を逸らしたくなる。

まるで全てを見透かされているような気がして落ち着かない。

「……署名つて寮に入る時に……した？」

全然なんともない問いかけで内心胸を撫で下ろす。

突然「何か隠してる？」とか言われなくて本当に良かった。そんなこと言われるはずがないけど大なり小なり騙しているという罪悪感が必ず忍び寄るのでそういう悪い予測をしまいそうになるのが欠点だ。

「え？……いや、署名はしたけど……寮に入る前の……ほら、郵送で届く入寮手続きの書類くらいにしか無かったと思う……何かあった？」

「そう……なんでもない。確認しなかっただけ」

適当に困惑した振りをしておく。

何回も何回も繰り返す内に湊や奏子の言う、『署名』も今回聞かれなかった『子供の寮生』も心当たりどころか正解のと真ん中をブツチぎるレベルで知っているのでなんとも言えない。

「じゃあ、明日正式に説明とか案内とかがあるだろうからこの辺で。

おやすみ、湊」

「うん、おやすみ」

挨拶をしてすぐ向かいの扉を開ける。

さて、肝心の部屋割りなのだが実は男子寮が自分がいることにより右三部屋・左二部屋から右三部屋・左三部屋に変わっているのだ。

つまり、一番奥にある湊の部屋の向かいに自分の部屋があつてその隣に今は使われていない荒垣くんの部屋があり、その隣に真田くんの部屋がある感じになっている。

湊の隣の部屋はもうすぐ入ってくる2年の伊織こと伊織順平いおりじゆんべいの部屋になるしさらにその隣は後々来る天田くんこと天田乾あまだけんの部屋になる。

なんだかとってもややこしい。

電気を消し、ベッドに横になって今度こそ本格的に寝に入ろう……とした。

そう、したのだ。

「2人とも無事に着いてよかったね」

横から声をかけられる。

もうかなり眠いので言葉は出さずにゆっくりと頷くだけにする。

ベッドのすぐ横に、小さな『白髪の少年』が立っている。

「——ごめんね。また、始まってしまっけれど…ぼくにはどうすることもできないし、あの子にもどうすることが出来なくて…でも…それでも…」

わかっている、だから泣かないでいい。

そう告げようとした口は動かない。上げようとした腕も動かない。

ずぶずぶと眠りへと落ちていくように意識が落ちる。

「ぼくには、こうしてきみを眠らせてあげることしか出来ない…ほんとうにごめん…ごめんね…」

眠りに落ちる瞬間、そんな泣きそうな言葉を聞いた気がした。

那由他の死の目覚めを（4／7～4／25）

目が覚める。

起き上がり、窓のカーテンをあけ、時計を確認する。

4月7日。午前6時ちょうど。

いつものルーティンをこなし、エプロンをつけて朝食を作る。

2人増えたのでその分も忘れずに——特に湊の分は少し多めに——作って置いて、メモ書きを添えておく。

今日は昨日の反省を踏まえて真田くんの分までラップをかけておいた。

そしていただきますと食べ始めれば昨日と同じ時間に美鶴さんが降りてくる。

変わらない。だがそれがいい。

「おはよう、三上」

「おはようございます、美鶴さん」

その後は無言。

話題にすることがあまり無い。というより自分が喋ると余計な事までポロツと吐いてしまいそうなので極力話さない事になっている。

つい知らないはずの情報ゲロっちゃった暁には幾つか：ゲホンゴホン闇の王子様（笑）に危険視されて事故に見せかけて殺されたり殺されたり殺されたりするのでやめよう！

あの人どこにでも監視つけてるから寮内はまず安心安全じゃない。

話し相手（こちらがすぐに寝るのでだいたい一方的）が幻覚（仮）で良かった。良くない。

バターロールを手に取り小さくちぎって食べる。普通のパンの味だ。…たぶん。

今日は特に食事中に吐き気に襲われることもなかったので昨日はループ初日目だったこともあって気負いすぎたか負担があったのかもしれない、と思い込むことにした。相変わらず身体はなんとなくだるいが。

「ごちそうさまでした。美鶴さん、お先です」

「ああ。……そうだ、三上」

席をたとうとした所を呼び止められる。

こういうことはかなり珍しい。

何か用だろうか、と食器をテーブルの上に置き、向き直る。

「はい」

「学園までの案内のことなんだが…有里奏子の方は岳羽がしてくれることになった。ただ、有里湊までも岳羽に見てもらおうというのは些か荷が重すぎる気がしてな」

「俺が湊の案内をすれば良いんですか？」

「…頼めるか？」

「起こすついでになりそうなので大丈夫ですよ」

快諾しておく。

まあ、そうなるだろうなあとは思っていた。女の子である岳羽に奏子はともかく湊までもは少々荷が重い…かもしれない。いや、どちらか1人だけならできるんだ。岳羽は。でも2人揃うとなると昨日の夜のように流石に勝手に言い合ひし出すしコントし出すだろうしでツツコミが間に合わないと思う。

そう、ツツコミが。

単体なら奏子はあまり変わらないかもしれないが、湊の場合は1人だと借りてきた猫のように大人しくなる。というより鉄仮面を被るので必然的に大人しくなる。

自分と2人だけ、というのは今回はまだ昨日の短時間だけだったので分からないがコントをする羽目にはならないと思いたい。希望的観測。

しかし学園までの案内となると出る時間から逆算して湊を起こさないといけない。

前回までの湊はとにかく寝つきがいい・1度寝たらなかなか起きない・無理やり起こすと不機嫌になる、の睡眠の申し子だったのでその例に漏れなければ何かしら考えながら起こさなければならぬ。

転校初日の朝から不機嫌、だなんて事にはしたくない。

なるべく自分の予定にも間に合うように、と考えるとさつさと皿を

洗って湊を起こしに行つた方が良さそうだ。

善は急げとさつそくスポンジを手に取り皿を洗うことにした。

コンコン、と湊の部屋のドアをノックする。

「湊、起きてる？」

返事はない。

もう一度ノックする。

「寝てるようならとりあえず部屋に入るから」

また、返事はない。

これは寝てるな、と確信し、ドアノブを捻る。

鍵はやはりかかかっていないようだ。鍵はかけておくに越したことはないが熱を出した時やぶつ倒れた時に誰も助けに行けないのでこれでいいと思う。

自分はまだ見られても困らないものくらいしか置かないようにしている。例えパンイチの時にこられても仕方ないと諦めの境地に来ている。大体の人がこうして自分のようにノックしてくれると思うのでパンイチを晒す心配はないと思うが念の為の諦めを持つことは悪くないと学んだ。

どうでもいい話は置いておくとして、そつと湊の部屋のドアを開ける。

整頓されていないダンボールだらけの部屋だ。

仕方ない。昨日の深夜に来たばかりで文字通り即寝たのだろう。こんもりと山になっているベッドの上見て、「今からこれをひっぺがすのか」と思うと少しだけ気が滅入る。ここまで布団糞虫になっているのは久しぶりを見る。

そんなに昨日は寒かったのだろうか。

とりあえずぽんぽんと布団を軽く叩いて呼びかける。

「湊、そろそろ起きないと始業式に遅れる」

「……ん……」

「みーなーとー」

「んん……」

もぞもぞと布団の塊が動いて頭が出てくる。

よし、もう一息だ。

「朝ごはん、冷めちゃうぞ」

近づいて、顔を覗き込みながらそう言う。

実際には既にぬるくなってる頃合だろうがそういうことは黙っておく。

食べる事が好きならこれで飛び起きるはず。

そう思った瞬間、にゅつと布団の塊から手が伸びてきて上着の裾を掴まれる。

「ゆ……き……」

「ん、どうした？」

「……ない……」

「？」

ない？ なにか探してるのだろうか。

ぼんやりと寝起きの目で見つめられ、つい返事をしてしまった。

もごもごと何か聞き取れない言葉を発した湊はまた瞼を落とし夢の世界に飛び立とうとしていた。

流星にこれ以上寝られるのはまずいので実力行使することにする。

手を伸ばして肩を掴んでゆさゆさと揺らす。

「起きて、ほんとにこれ以上はまずいから」

「……………優希？」

今度こそぱつちりと開いた目を見て、「良かった。ちゃんと起こせた」と安堵する。

しかしその顔は「なんで部屋にいるの？」と言わんばかりにはてなで覆い尽くされている。

傍目には無表情で見つめ返してきているだけに見えるが自分には特別な知恵しゅかいのきちがあるからわかる。たぶんね。

「おはよう、目は覚めた？」

「……ん、おはよう……おきた……」

のそのそと布団から這い出る布団虫もとい湊がはつきり起きたことを確認すると少し離れる。

裾を掴んでいた手も目を覚ました時に自然と離れたので結果オー

ライだ。

「かなり時間押してるから急いで準備したほうがいいかも。朝ごはんは下にあるからちゃんと食べてね」

「優希は？」

「もう食べたよ。あとは湊待ち。今日の案内は俺だし、湊も転校初日だし、まあ多少遅れても先生たちには見逃してもらえとは思うけど…」

「急いで用意する」

「了解。それじゃあラウンジで待つてるから。一応、メモは置いてあるけどわからないことがあったら聞いてもらって構わないよ」

起きてすぐなのかまだぼーっとしているようだが少しずつでも用意をし始めたようなので安心して部屋から出られる。

流石に転校初日で二度寝はしないとあるのでそのままラウンジに向かい、ソファアの上でぼーっとする。

どれくらいそうしていたのだろうか。そもそもラウンジに出てきた時間をあまり覚えていないので何分くらいだったかだなんて知らないのだが、壁掛けの時計はいつも出る時間よりも少し遅い時間を指している。

いつもが早すぎるだけなのでこれが標準なのかもしれない。

「それじゃあ三上先輩、お先です」

「お兄ちゃん、行ってくるね！また学校でね！」

「ああ、いつてらっしやい」

もう出ていたらしい美鶴さんと真田くんの二人に続き、岳羽と奏子も寮を出る。

そろそろ自分も立ち上がって荷物を持つべきか、と思い始めた頃に背後から声がかかる。

「お待たせ。それとごちそうさま。美味しかった」

「良かった。じゃ、行こうか」

用意を済ませた湊と共に寮を出る。小春日和でなんとも穏やかな日だ。

「くしゅん！」

「風邪？」

「さあ…う…」

まだ少し、何となく寒い気がするけれど。

——新都市交通 “あねはづる” 車内

モノレール内は学生で満員だ。自分が出るときは少し早いので座るくらいの余裕はあるのだが今日はなさそうだ。

「このモノレールに乗らないと学校まで行けないからな。乗り遅れても10時くらいまでなら15分に一度くらいは出てる。一限…あつと、一時間目の授業には間に合うからサボらずに乗ろうな」

「うん」

「学校は終点の『辰巳ポートアイランド』っていう駅だから、安心して寝られ…：はしないけど少しぐらいなら寝られる」

「あとは…：」と言い淀んで視線を隅に追いやる。

会話だけ聞けば普通の通学案内の範疇だ。しかし、なぜか湊がおかしい。まるで鳥のひなのようにぴったりと引っ付いて離れないのだ。モノレール内は満員だと言っても多少距離を開けられる程度には空いている。

湊はこんなに人肌恋しい性格だっただろうか。距離がとても近い。

その違和感さえ無視すれば、程よく暖かいので冷え気味の身体には便利でちようどいいな、くらいの程度なのだ。

まあいいか、と違和感を呑み込んで窓の外の海を眺めることにした。

駅を出て少し歩けば立派な白い建物が見える。

「あれが月光館学園の高等部。他にも中等部や初等部があるけどあんまり寄ることは無いだろうけど用事があるときには先生に場所を教えてくださいてもらえるから安心して」

高等部内に入り、下駄箱前でとまる。

「俺の靴箱は三年だからこっちなんだけど、湊はなるとしたら多分ここらへんかな…転入生だから今回は靴を脱ぐだけで…ええと、それか

ら来客用スリッパに履き替えて職員室に居る先生にまずはあいさつかな：職員室はこの先を左に曲がってすぐだからわかり易いよ」

言外に、「一人で行けるよね？」という意味を含ませて職員室の場所を教えるも、ひよこひよこことスリッパを履いたはずの湊は自分が靴を履き替えに向かった先にまでついてくる。挙句、裾まで掴む始末だ。

本当に一体どうしてしまったのだろうか。

「……」

「えつと…一緒にいこうか？」

「うん」

掲示板の組み分けはあとで見ることにして、とにかく職員室に行かねば話が進まない。

「失礼します」

「あら、三上君！…と後ろにいるのは話題の転入生くんね。…有里湊。二年生で間違いないわよね」

職員室に来て一番に気が付いてくれたのは鳥海先生だ。ちょうど良かった。湊がどのクラスに入るかも彼女の反応でわかるし色々説明しやすい比較的話の分かる先生に当たった。

鳥海先生は手元の資料を見ながら湊へと視線を向ける。

湊は何が何だかわからないのか置いていかれているのかこちらが答えるのかと思っていたようで突然話を降られて真顔で頷いた。

恐らく反射的に頷いただけにみえる。

「ふうん…結構、転々としてきてんのねえ…えー、ご両親は、10年前の…あッ…もう一人の転校生ちゃんとは双子で……つてええ!?!三上くん、が…お兄さんなの？ 確かに二人ともそっくりだなとは思ったけど…なるほど年子ね…」

「諸事情で苗字は違うんですがそうなります。引き取られた先が違って…みたいな感じですね」

「そうなんだ…ああ、ごめん…バタバタしてて、詳しく読んでなくて…ええと、」

気まづくなつたのかこちらから視線を逸らした鳥海先生が湊へ向き直る。

「私は国語科主任の鳥海です。よろしくね」

「…どうも」

「クラス分け、もう見た？君は私の担任する『F組』よ。でもこの後すぐ始業式だから先に講堂ね。案内するわ、ついてきて。三上君は掲示板で自分の組を確認してから講堂にいくのよ」

湊を連れ、職員室から出た鳥海先生を視界の端で見送りつつ、掲示板でクラス分けを確認する。

自分の名前を探せば三年なので大分後ろになるが端の方にちやんと記述されていた。3―D。美鶴さんと同じクラスらしい。

ちなみに奏子は2―Eだった。

「えー、諸君らの新しい一年の始まりにあたり…」

右から左へと校長のスピーチを受け流す。もう何度聞いたかわからないそれは正直校長には悪いが今更真面目に聞く必要もない。

それよりも、気になるのは自分と湊・奏子の関係だ。鳥海先生に聞かれたときは当たり障りない回答をして一応誤魔化しておいたがいつ自分と二人は再会し、兄妹だとわかったのか。

何度周回しても変わらないのは、『自分が有里を名乗っていない・幼少の記憶がない』ということだった。

自分には有里家：本来の家族と過ごした記憶は幼少――5, 6歳ごろまでの記憶しかない。それもあの葬式の日思い出したものであるしいまだまばらに散らばってしまっている。さらに掘り進めようとすれば気持ち悪さや頭痛が自分を襲う。堪ったものではないしそれで辛うじて思い出せるのが幼い頃の弟妹との記憶だけなのだから割に合わずあまり探ろうとはしていなかった。

そんな不完全な記憶もある日を境に途切れ、気が付いた時にはムーンライトブリッジの上で何もかもわからないまま一人で倒れていた。そのあとの記憶は飛び飛びで曖昧だし、気がついたら保護されて三上夫妻に養子として迎え入れられたというわけだ。そこは何周しようがずっと変わっていない。

どうして一瞬でも橋の上にいたのだろうか。今までどこにいたのか。有里家と行動していて事故にあったのなら弟や妹、両親が必ず近

くにいたはずなのに、自分は一人きり——しかも事故現場から離れたところで倒れていた。疑問が尽きない。

ただ更におかしいと思うのは実の両親である有里夫妻が自分をなんと呼んでいたのか、思い出せないことだ。自分は本当に、『有里優希』なのか、という言いようのない不安感がある。

何度も何度も繰り返してきたがいまだに変わらないそこがわからない。

けれども正直な話、これは知らなくてもいい話だ。二人の救済と、自分の過去に何ら関係は無い。知らなくてもできることだ、と思っっている。実際今までで特に関係したことは無かった。

——でも、もしそうではなかったとしたら？

ゾツとする。いやいやでも意外と何でもなかったりするし、と心を落ち着かせようとする。

何でもないことなら、調べても平気だよな…？と逆転の発想をしたところで始業式は終わりを告げた。

「また君と同じクラスになるとはな、去年から引き続きよろしく頼む」「こちらこそ、よろしく」

始業式や授業など諸々の事が終わり、放課後になった瞬間に美鶴さんが話しかけてくる。

「どうやら去年も同じクラスだったらしい。道理で下の名前で呼んでも怪訝な顔をされないわけだ。」

美鶴さんの言葉に頷き返す。

「夜のことなんだが…」

美鶴さんの口から飛び出た言葉にまさかここで影時間の話が早々に出てくるというわけじゃないだろうなと内心身構える。

「いや…何でもない。きみは…ぐっすり眠れているか？」

「まあ…寝つきはいい方だと思います。というか一度寝たらほぼほぼ朝までぐっすりですね。美鶴さんも無理して眠れてないとかないですよね？」

ベッドに入った瞬間睡眠魔法を食らったときのように意識が暗転して気がついたら朝、なんてことが毎日なので恐らく自分も湊と同じでちよつとやそつとのことじゃ起きないと思う。ルーティンになっているとはいえ、毎日六時に自然と起きれているのが奇跡のようだ。「ああ…私はちゃんと寝ているよ。きみが安眠できているのならよかった。転入生も入ってきたことだし、一度寮での寝心地を聞こうと思っただけ」

「なるほど」

適当に相槌を打っておく。
さて、どうしたものか。9日は満月の日だ。それ即ち大型シャドウが寮を襲う日でもある。

が、実は9日に関しては何も考えていなかった。

9日の大型シャドウはただの傍観者として湊や奏子に任せ、あとでのんびり伊織のように「実はペルソナ使えるようになりましたー☆」パターンが一番楽しちゃ楽だ。

大型シャドウが初陣でなければ自分はペルソナの暴走も起きないのでできるだけ避けたいところだ。フルスロットルで暴れてぶつ倒れたくない。めんどくさい、というのが本音である。

——そんな風に考えていた時期もあったな。

なんて思考を逸らしても現実には普通に迫ってきたしめんどくさい事態に陥っていた。

「ほら、起きないとだめだよ」
ぱちり。

目を覚ます。誰かが呼ぶ声と凄まじい物音がした気がした。

本日の三上優希アワーは4月9日木曜日の影時間からお送りしています。

ハイ満月ですね、大型シャドウのぞる日だ。

とは言っても先ほどの物音から察するに騒動はもう始まっているので逃れられはしないだろう。

「起きちゃった♡」では済まされない。これはもう行くしかないレベルで詰んでる。

本音を言うはずと寝ていたかった。朝まで。

ドン！ドン！ドン！

「先輩！三上先輩！起きてますか!? ええとああもう、有里くん、お兄さんの部屋、入っていいよね!？」

「いいんじゃない?」

「じゃああけるから！失礼します!!!」

慌てたようにノックされ間髪入れず開けられた。そしてなだれ込むように岳羽が息を切らして入ってくる。

「すみません、説明してる暇がないんですけど有里くんを連れて急いで一階の裏口から外に出てもらっていいですか!? 私、奏子ちゃんのところに行くので!」

「ああ、うん、気を付けてね」

「あっそうでした、先輩、これ！一応護身用に持っててください」

押し付けられたのは大ぶりのサバイバルナイフだ。どんなものでもOKだったがこれはまあまあ手になじむので良しとする。

そうして入ってきた時と同じく慌てて部屋を飛び出して行った岳羽を見送り立ち上がった。

「なんかヤバいことになってるなあ…」

「そうみたいだね」

それだけで済ましてはいけないのだろうけど、なにもリアクションしていないと怪しまれそうなのでぼやいておく。

淡白な湊の返事を最後に会話が止まるがそのまま階段を下りる。

特に妨害も何もなく裏口についたので耳を澄ませるがやはり物音がして身構えつつも考える。

外に出ているとは言われたが奏子と岳羽を待たないわけにはいかない。正直、大型シャドウ——マジシャンの処理は奏子に任せて外に逃げてもいいがどのみち外もシャドウまみれで地獄なので待つ方をチョイスする。このまま外に出たら恐らく死んでまた終わりだ。

「湊！お兄ちゃん!」

「待つてたんですか三上先輩!?あつても、ここまで来れば大丈夫…」
息を切らせて二人が滑り降りるように階段から降りて駆け寄ってくる。

少し息を吐いた岳羽に美鶴さんから通信が入ったらしくスピーカーを通してこちらにも聞こえてきた。

『岳羽、聞こえるか!?』

「ハ、ハイッ!聞こえますっ!」

『気をつける!敵は1体じゃないみたいだ!こことは別に本体がいる!』

「マジですか!？」

ドンツ!!!

岳羽がそう驚いた瞬間、裏口が轟音を立てて揺れた。

「うわっ!?! ひ、ひとまず、退却!?!」

二階へと駆けあがる。とりあえずだが先陣を切ることにした。ペルソナはまだ使えないが自分が居ないよりかはましだ。

年下の女の子に守られるだけだなんて正直どうかと思う。

二階へとつくも、窓ガラスが割れる音がする。

「ひゃっ!?!」

「なに、今の!?!」

上から奏子、岳羽の順で悲鳴を上げる。と同時に、何かが迫るような音と揺れが二階を揺らした。

「な、なんか来るっ!?!」

「ひとまず上に逃げよう」

「さ、さんせー!」

下りの階段に向かっていたらそれこそ捕まってジ・エンドだ。

かなり前の周でそれをやって見事に死んだので二度と同じ轍は踏むまいと決めている。

とまあなんやかんやあって結局屋上に来てしまった。

「ふう…鍵もかけたし、ひとまずは、大丈夫かな…」

「ううん…」

分かっているにしても唸らずにはいられない。これじゃ袋のネズミだ。

少し息を整えている間に、吠えるような声と共に手が屋上の淵にかかる。によつきりと青い仮面を持った手が生えたと思つた瞬間、剣を持った手が生えてきた。

これはホラー待つたなし。というかめちやくちや気持ち悪い。

手で移動してこちらに迫ってくるのも気持ち悪い。

「嘘ツ：!?! 外を昇ってきたの!?!」

「キモッ…」

「……」

驚く岳羽に気持ち悪いと吐き捨てる奏子。いつもと変わらない湊。

「あれがココを襲つて来た敵…『シャドウ』よ! そ…そうだ、戦わなきゃ…」

さつき脳内で話題に出したばかりの大型シャドウ——マジシヤンが更に迫る。

それを見た岳羽がホルスターから銃型の召喚器を抜く。

「『召喚』…私だって、できるんだから…」

そして頭に当て——

「…い、いくよっ…!」

深く深呼吸を繰り返す岳羽は銃の引金を引くことが出来ない。その隙を狙つて、マジシヤンはアギダインを放つ。

炎が岳羽に迫つた瞬間、

「だめ!」

「きゃあ!!」

奏子が岳羽に抱き付いて押し倒すように飛び、更にその後ろにいつの間にかいた湊が二人を受け止めきれずに一緒に吹き飛ぶ。

衝撃波で吹き飛んだだけなのか、ギリギリでアギダインは当たっていないように見える。

そしてくるくると回りながらこちらへと滑ってくる召喚器。

選ばれたのはなんと俺でした。傍観者を決め込もうと思つていたのに、なんとという不運なのか。

けれど今回はそういう役回りなのか、と理解してそれを拾い上げてこめかみに突きつける。

「ペ」

ざわざわと耳鳴りがする。

「ル」

どくんどくと鼓動が煩い。

「ソ」

じりじりと脳裏を焦がすような感覚を覚える。

「ナ」

バチン、と何かが弾けた。引金を引き慣れた手は軽く、精神は興奮で満たされている。

青い炎と共に赤い花を纏う真つ白なマリオネットのような人型がコートをはためかせながら現れた。

『——我は汝…汝は我…我は揺蕩う夢の狭間に在りし者…モルペウスなり…』

「よし、モル——」

先手必勝。ペルソナ——モルペウスが勝手に暴れる前に指示を出して倒してもらおうとした。

前はその身体に絡みつくワイヤーのような糸でズタズタにマジシャンを細切れのミンチにしていたのでそんなスプラッタは勘弁だとしても疲れる。今回なんて体の不調が出ているのに暴走されてはたまったもんじやないと考えた次第だ。

が、やはりというか問屋が卸してくれないようだ。

どっ、と冷や汗と寒気が背中を伝う。

「はっ、はっ、はっ、はっ…！」

息が荒くなる。慣れているはずなのに、不調のせいかうまくモルペウスを制御できない。モルペウスのカタチがブレる。

そしてなによりも心臓がおかしくなってしまうそうなくらい早鐘を打っている。

まずい。

まずい。

まずいぞこれは。

頭ではわかかっていても、身体が動かない。喉がしまるような感覚が

する。うまく息が吸えない。

息苦しきで浮かんできた生理的な涙で視界がぼやける。

「あぐっ……」

止めに、不安定なモルペウスをマジシヤンの剣が貫いた。

腹部に激痛。地面に崩れ落ちる。ダメージのフィードバックか意識する間もなく、頭にも激痛が走りもうどこが痛いのかめっちゃやでわからなくなってくる。

霞む視界でモルペウスを探せば、マジシヤンに頭を掴まれ何度も剣を腹部に刺されている。

だめだ、死ぬ。今回はここで終わってしまう。誰も護れず終わってしまう。

そう諦めた。人生、諦めが肝心ともいう。

ガタガタと体が震える。

「は、はは……ひゅっ……ははは、あはははは……！ げほっ……」

なぜか笑いが込み上げてきた。

死に直面しているからなのか、アドレナリンのせいでおかしくなったのか。どちらかはわからない。

引き攣るように息をしながら啜う。啜いながら立ち上がる。痛みは不思議とどこにもない。感覚がマヒしてしまったのかもしれない。

顔を片手で抑える。おかしくてたまらない。

満月

ムーンライトブリッジ

黒いマントの骸骨

手術室

檻

白い部屋

優しい手

血まみれの女性

脳裏にチラチラと飛び交うそれらを振り払い、笑みを浮かべる。

「ははは…… はは——」

笑みを消した瞬間、されるがままだったモルペウスが内側から裂け

る。裂ける。

ぐるりと反転し、純白だったその姿は一瞬にして漆黑へと変わった。

じやりじやり、じやらじやらと鎖の音がする。

「いっばいおたべ」

変異したモルペウスが歓喜するかのように奇怪な叫びをあげ、襪襪切れのようなマントを大きく広げた。

「……!!」

「いっばいおたべ」、と穏やかに、子供に言い聞かせるように吐き出された三上優希の言葉に、美鶴は顔をこわばらせた。

優希は穏やかに見えるが基本的に無表情だ。そんな優希が声を上げて笑うことが滅多にない。

美鶴の知る彼は精々、軽く笑うか困ったように笑うか微笑む程度だ。あのように大きな声を上げて嗤うところを初めて見た。それが、優希ではない違う何かに見えてぞっとしたのだ。

カメラに映る優希の顔は酷く穏やかだ。つい先ほどまで地面で這いつくばりながら激痛に耐え、苦しんでいたにもかかわらず、突然笑い出したかと思えば、それがなかったかのように穏やかな顔をする。

そして、画面に映る変異したモルペウスはマントでマジシャンを覆い尽くすとグチュグチュという嫌な咀嚼音と共に『食べ残し』を周囲にまき散らす。

「何だ、今のは…?!」

「……」

驚く真田と美鶴に対し、幾月は絶句している。

あらかた食べ終えたモルペウスは宿主と同じように何事もなかったかのように元の姿に戻ると消えていく。

ふらりと傾く優希の身体。なにもうけとめることのないそれは、どさりと地面に倒れた。

ぱちり。

目を開ける。いつものルーティンで時計を確認——しようとして自室ではない事に気が付いた。

白い天井。薬の匂い。定期的に鳴る電子音。腕につながる点滴。どこからどうみても病院の病室だ。十中八九あの大笑いのあとぶっ倒れでもしたんだろう。笑ってる途中から記憶がない。

これがいつもの周回どおりなら今日は4月19日の日曜日でやることもないので、もう一度寝に入ろうかと目を閉じかけた。

「あ!!!起きてる!!!」
「閉じれなかつた。」

大きな奏子の声でもう一度目をこじ開ける。奏子と湊が驚いた顔で部屋の入口に立ち尽くしていた。

自分が目を開いたことに気が付いた奏子はベッドに飛びつくど涙と涎と鼻水で病院の掛布団を濡らす。びしょびしょで少し湿ってた。

「うゝええええええええええええんお兄ちゃんが起きたああああああああああ!!!」
「うるさいよ、奏子」

「だって!!! 湊は嬉しくないの!? お兄ちゃん私たちが起きても起きなくて、私達はただの過労みたいなもんだって言われてたのにお兄ちゃんだけいっぱい機械つけてずっと死んじゃうかもって言われてたんだよ?!?!?」

「嬉しいに決まってる。けど、優希は絶対安静なんだから静かにしなきゃ」

「そ、それはそうだね…ごめんさい。痛いところはない?」

しゅんとした奏子を慰めるように声をかける。

「いまはどこも痛くない…かな、それと声を控えめにしてくれればいくらでも喜んでくれていいから…」

「優希は奏子に甘い」

「それを言われると何も言えない」

む、と顔を顰めた湊に苦笑した。両方に甘い自覚があるのであつちに甘い、こつちに甘いと言われるととても否定しにくい。

「そういえばお兄ちゃん、ペルソナって知ってる？　すごいんだよ！」

「奏子。それは後でつて先輩に言われてたよね」

「えーでもー」

「でももだつてもない」

「むー」

窘める湊に今度はむくれる奏子。

そんな様子に自然と笑みが浮かんだ。

——それと同時に頭の中に声が響く。

『我は汝…汝は我…』

汝、新たな絆を見出したり…

汝、“旅人”のペルソナを生み出せし時、我ら、更なる力の祝福を

与えん…』

やつてしまった。笑みが固まる。上手く何事もなかったような表情が出来ているだろうか。

なにかよくわからないが何らかがきつかけで『コミュ』がついに自分と二人の間にも発生してしまった。

今までこんなモノでできた事無かったのに。

…自分にも聞こえているということとは恐らく湊と奏子にも聞こえているんだろう。

正直、こういうのは勘弁してほしい。

更なる面倒ごとの到来を察して、溜息を吐くしかなかった。

ちなみに今日は何日か聞いたところ4月25日だったらしい。

え…俺の…4月…どこにいったの……？

単位、足りるかな…

II 女教皇

僕と君と（4／27～4／28）

4／27（月） 昼

「前にも言ったとは思うけれど、きみの症状にははっきりとした病名がつけられない」

病院の診察室で若い医者から告げられたその言葉に「はあ」と気の抜けた返事を返す。

薬が出されていたので何らかのはっきりとした病気かと思えばそうじゃないらしい。

それと同時に、この医師が主治医だということもなんとなく理解した。

「できるだけ激しい運動は避けてほしい：と言いたいけど前と今回やってももらったトレッドミル検査では必ずしも症状が出ていたわけではないからすぐ薬を飲めるようにしてもらえばある程度はしてもらっても構わない。もちろん、体調が悪い時は絶対に運動は避けること。いいね」

この、「いいね」は「絶対にやるなよ」な「いいね」だ。

無言で首を縦に振っておく。医者の忠告を無視して倒れましたなんてことをすれば余計な心配をかけるだけだ。

「今回は寮住まいなのが功を奏したみたいだ。深夜の寮で倒れたんだってね？ 病院に連絡してくれた寮生に感謝しておくように。一応、倒れたとき用に周知くらいはさせておくべきだと主治医としての視点で思う。きみさえ良ければ、だけれど」

「言いにくいこともあるだろうから伝えるか伝えないかはきみの自由だ」とこちらの内を見透かすような、確かに医者としてはそういうこともいうだろうなというラインの言葉を吐く。その言葉にどこも疑うような要素はない。けれど、なにか違和感を感じた。

「さて、検査の結果は正常。もう症状も落ち着いているようだしこれできみは退院。1週間後にまた来てくれ。学校にはこちらからもう

連絡が行っているから伝えなくても大丈夫だ」

「はい。ありがとうございます」

頭を下げ、診察室を出る。

会計をすまし、薬の処方は前回出された分が残っているのでなし。ということまで晴れて自由の身だ。ちなみに、皆は学校にいる時間なので迎えは無し。できることなら日曜日である昨日退院しなかった。そしたら今日から復帰できたのに。

そんなことをグググチ考えながら一人で歩いて寮まで帰る。

美鶴さんからは金の事は気にせずタクシーを使えと言われたが申し訳ないし歩いて帰りたい気分だった。

湊か奏子のどちらか寮生のだれかが持ってきたと思われる入院セツトの入った旅行用の肩掛けバッグを背負う。

そして病院から出て電車に乗り、巖戸台駅からは人気のない裏道を歩き始めた。早く帰りたいので近道しようと思ったのだ。

「ねえチミ」

「……」

歩き……

「チミだよチミ」

「……」

「そのセクシーなカバンの青いチミ」

声に振り向く。なにもいない。

幻聴だと決めつけ歩き出す。倒れた時に頭でも打ったのかもしれない。そもそもセクシーなカバンってなんだ。これはただの旅行用のボストンのはずだ。

次回の診察時に相談すべきだろうか。

「フウン…無視するんだ。ニンゲンの癖にナマイキだね」

はつきりと、姿の見えない何かが言葉を発した。

いやいや無視だ無視。真昼なので幽霊という線は薄い。というかこんなフランクな幽霊がいてたまるか。

足早に歩く。本当のことを言うなら小走りの方がいいのかもしれない。

荷物を前に抱えなおして道を走る。退院早々走るのは不味いかもしれないがそんなこと言ってられない。

「あつ…」

風を切って飛んできた見えない何か、コンっ！と音を立てて足に当たる。つんのめり、傾く体。

「ぶべっ!?!」

情けなく地面に身体を打ち付ける。退院早々散々だ。

ぶつけた鼻をさすりながら体を起こす。一体何が起こっているのか。

「ボクはヤサシーからネ。チミの足を止めてあげたのサ」

目の前に、ちようど腰くらいの大さきの緑色をしたマスコット人形のような…何とも言えない存在が立っていた。そしてその謎の存在の腰には――

「ふ、ふんどし…!?!」

「モコイさんのイケてるふんどしに目が行くとは。中々お目が高いネ、チミ」

「ついに幻覚が見えるようになってしまった…?」

ふふん、と自慢するようにキメポーズを決める謎の物体に頭を抱える。

幻覚・幻聴。とんでもない。ただでさえイレギュラーなことばかり起こっているのにこれ以上面倒ごとを増やしたくない。

やっぱり次の診察時には絶対相談して頭の精密検査を受けよう。そうしよう。

「ボクのことを幻覚扱いだなんてシツレイしちゃうネ、由緒正しい悪魔なモコイさんであるボクはその気になればチミのことだつて簡単に殺せるんだからネ」

「????」

「ソレをしないことにチミはむせび泣いて感謝するっスよ」

――悪魔？

悪魔ってあの悪魔か？天使と悪魔の悪魔？

よくわからない。いや、シャドウやペルソナという超常の現象とお付き合いはしているが、その次は悪魔と来たら混乱するのも仕方ないと思う。

一応、ペルソナにも悪魔のアルカナのペルソナはいる。けれどペルソナ単体がこんな饒舌に喋ったり動いたりするのでだろうか。

周りに人がいないどころか人がいる気配がないから遠隔系のペルソナでない限りこんな遠くまでいけるはずもない。

相手に敵意や害意はなさそうなので無視して通り過ぎた方がいいのだろうか。いや、自分の見ている幻覚なんだから害せるはずもないか？

そう悩んでいると悪魔もといモコイさん？が通せんぼをする。

「あーっと！ チミには見えないのか見えてないフリをしているのかわからないケレド、この先危険ってやつだね」

「いや、俺は早く帰りたいんだけど…」

「ダメダメ、チミはジブンのミリヨクってやつに気が付いてないんだから。どうしてもっていうんなら、一步踏み出してみるといいサ」

「かなりデンジャー」と続けたモコイさんをちらちらと見ながら一步前へ踏み出す。

正直、幻覚に弄ばれているだけに感じるので何も起こらないだろうなどタカをくくっていた。

瞬間、

「ゲヒャヒャゲヒャヒャー！」

「——ッ！」

甲高い叫び声が聞こえた。反射的に身体を後ろに跳び退かせる。

さつきまで居た場所を鋭利な爪が掠める。

モコイさんくらいの大きさの、紫色をした腹の膨れた古典などでみる餓鬼ガキのような存在がいつの間にかそこにいた。あれは幻覚なんかじゃない。それだけはわかる。

見た事もないこちらに殺意をむけるだけの生き物にじりじりと後ろに後退する。

ペルソナは影時間でしか出したことがないし召喚器もない今、どうすることもできない。

ついでに言えば9日に武器として渡されたナイフも病院にいたので持っていない。できることと言えば体術ぐらいしかない。それか逃げるか、だ。

「行きたいネ、イスタンブール」

必死にどうにかこの状況から抜け出す方法を頭の中でこねくり回している、後ろからポテポテと走り寄ってきたモコイさんが自分を軽やかに飛び越えて餓鬼へととびかかり、手に持ったブーメランを放った。

「ぎゃッ！」

「ボクつてとつてもゴシンセツ」

バチバチとモコイさんに稲光が集まる。

「【ジオ】」

その掛け声が発された瞬間、ブーメランの一撃を食らったばかりの餓鬼に小さな稲妻が落ちる。今度は悲鳴を上げることなく餓鬼は塵となって消えた。

「バンゴハン前だ、ネー！」

ケロつとした顔でこちらを向くモコイさん。

固まる自分。

今、モコイさんは【ジオ】といった。間違いなく。そして実際にシャドウやペルソナの使う【ジオ】と同じモノがモコイさんから発せられ、餓鬼に当たった。

モコイさんはペルソナ？それともシャドウ？いやでも影時間以外に出てくることって無いよな？とさらに混乱する。

先ほど教えてもらった「悪魔」という名称も忘れて。

「————」つてカンジで。チミはボクら悪魔からするととつてもデリシヤス。なのに欠けまくつてとつてもミステリアス。つまみ食いでもされてるんじゃないの?」

「そ、そうなんだ…?」

あの後、モコイさんから説明を受けた。

曰く、この世にはペルソナやシャドウとは違う「悪魔」という存在が陰ながら存在するらしい。

曰く、さっきのやつはそのまま正しくガキというらしい。

曰く、自分はその悪魔から見たらとてもおいしいそうに見えるらしい。

曰く、モコイさんは自分を守ってくれる？らしい。

その代わり、ニンゲンの生活を体験したい、と。

「つまりチミとボクのランデブー」

よっこいしょ、と何の断りもなく肩にかけなおしたカバンに乗ってきたモコイさんに何も言えないまま歩き出す。

影時間と事故にさえ気を付けていれば死なないだろうと思っていたのにここにきて新しい死亡要因が増えたことに内心げんなりする。

(悪魔、か…)

昼でも武器を携帯するか、体術を学んだ方がいいのかもしれない。

その後は難なく寮へと帰り着くことが出来た。すれ違う人は誰もモコイさんの事が見えていないようで安心した。先ほどまで自分もモコイさんや悪魔といった存在を視ることが出来なかったので当たり前といわれればそうなのかもしれないが。

当のモコイさんは自室についたとたん、カバンから降りて散策し始めた。

「ニンゲンの部屋っていうのはオモシロいネ。ボク、気に入っちゃった」

ベッドに飛び込み、元からこの部屋の主だと言わんばかりにくつろぐモコイさん。

少し悩んだがもし他人に見えることがあってもぬいぐるみということで誤魔化せばいいか…と結論付けた。

4 / 28 (火)

今日は特に悪魔に絡まれることもなく、何事もなく放課後を迎えた。

教室ではかなり久々の登校だったのでクラスメイトに心配されて質問攻めにされたり教師からは生暖かい目で見られた。主治医の言ったように学校には話が回っているのだろう。

夜の食事は大体友達付き合いだったり外で食べてくるメンバーが多いので何かリクエストがない限りは残つてもいいようなものを作つて一人で食べる。

急に友達に誘われて、なんてことは高校生なので少なくないだろう。

実際に自分も…と言いたところだが残念ながらぼつちだ。ぼつち飯でも好きなものが食べられれば気にしないタイプではある。

もちろん、人と食べるに越したことは無い。

「あ…うみうし」の牛丼が食べたくなつてきた…」

「ねえチミ、そのうみうしの牛丼」ってデリシヤスなの？」

「美味しいと思うよ。モコイさんも今度持ち帰りで食べる？」

「いいネ」

当然、モコイさんは今日の登校についてきた。

授業中はどこかに行っているようだが放課後には必ず帰つてきて通学用のカバンに乗るのが定位置になった。

毎日ついてくるつもりらしい。

少々重いが筋トレになるしちょうどいいかと気にしないことにする。どうせ誰にも見えやしないし。

そんなことよりも面倒なことが起きた。

そう――

「三上君、少しいいかい？」

寮のラウンジで幾月に絡まれている。

個人的にこの人の事は苦手だ。苦手というか嫌いな部類に入る。目の奥は笑っていないしわざとなのか知らないが寒いダジャレを言うので反応に困ることが多い。

「退院早々悪いけど、きみに正式に特別課外活動部に入ってもらえないかと思つてね」

「特別課外…ああ、美鶴さんや真田君の入つてる――」

無知を装い『あの何かよくわからない部』という印象を持っているように反応する。

「そうだね。詳しい事は美鶴君の口から後で話してもらえる筈だ。ついでにキミも有里兄妹と同じくこの寮に正式に入寮することが決まったからね——それと…」

そういうと、幾月は真剣な顔をしてメガネをくいを持ち上げた。

「1日は24時間じゃない…なんて言ったら、きみは信じるかい？」

「…えらく突拍子もないですね。自分は…到底信じられないです」

「ここも知らないふりで驚いたように答える。尻尾は出せない。

ぼろっと話すこともできない。

「きみはもう、それを体験しているはずだよ」

幾月のメガネの向こうの視線が鋭くなる。ああ、めんどくさい。

「9日の夜。あの日、あの時あった出来事は夢ではない。きみは聡明だ。気が付いているだろう？ あれが普通ではないことに」

「……………」

無言を貫く。下手にこたえて勘ぐられても嫌だ。

無言を貫いてさえいれば、相手は相手のいいように解釈する。

「あれは『影時間』と呼ばれているものでね。一日と一日の狭間にある隠された時間さ。」

影時間は毎晩必ず、『深夜0時』にやって来るんだ。今夜も。そして、この先もね」

知ってます。とは口が裂けても言えない。この説明も何度聞いたか覚えていない。

「きみが9日に襲われたあの化け物、それらの名前を我々は便宜上『シャドウ』と呼んでいる。影時間の住人さ」

「はあ…」

「彼らは人間の精神を食らう化け物だね。特別課外活動部は表向きは部活ってことになってるけど、実際はシャドウを倒すための選ばれた集団なんだ。そしてきみはもう、部に入るための資格はもっている」

「資格…ですか」

あくまでも、突然ファンタジーなことを言われて困惑している風に

装う。

適当に流しても良かったが適当に流したらながしたで疑われるよ
うなことになったら面倒くさい。

「ペルソナ」。それがあの夜、きみが使ってみせた力だ……そして
シヤドウはペルソナ使いにしか倒せない。この言葉の意味が、わかる
ね?」

ぐいぐいと迫ってくる幾月に後ずさる。

正直、先日のガキよりも怖い。

「シヤドウを倒す力を得たからには戦わないといけない……とい
う感じですか…ね…?」

「そういうことになるね。もちろん、きみの弟君と妹さんである有里
兄妹もペルソナ能力に目覚めて入部済みだ。既にきみよりも実戦経
験は多いよ」

なるほど、ここでこうして外堀を埋めてきたか。

元より断るつもりはないが、これなら素直に頷いても怪しまれない
だろう。

「そういうことなら…あの、妹と弟だけで危険なこととかさせないで
すよね?」

ついでにこちらも釘を刺しておく。

「そうならないためにも、きみにはぜひ参加してもらわないといけな
くなるね」

「なるほど」

釘を刺したつもりが刺され返してしまった。あちらの方が一枚上
手だったようだ。

「それじゃあ、今夜0時まで起きていてももらってもいいかい? 美鶴
君たちについていって『あるもの』を見てもらいたいんだ」

「わかりました」

「快諾してくれてありがたいよ。三年生のメンバーが…少し、ね。
不安があったからね」

それじゃあよろしく頼むよ、と肩を叩いて去っていく幾月。

完全に去ったのを確認すると溜息を吐きつつ叩かれた肩を手で掃はら

う。とにかく、タルタロス行き切符と特別課外活動部への参加資格は手に入れた。

これで自分も大型シャドウの討伐とタルタロスの散策ができるようになる。参加できる、のではなく散策をするのだ。一人で。

もちろん、特別課外活動部の活動があるときは一人ではいけないし活動がない日に行くときはばれないようにする。

やっただ。

なんだか、イレギュラーなことが多すぎて、周回を始めたばかりのような気の張り方をしている気がする。

あとでモコイさんに影時間でも悪魔が出るかどうか聞かなければ。出てくるなら出てくるで同時に吹っ飛ばした方が効率もいいし戦闘経験にもなる。

——4/28(火) 0時前

月光館学園 正門前

美鶴さんに案内されて学校までやってきた。

メンバーは自分と美鶴さんのほかに真田くん、岳羽、湊、奏子、そして伊織の6人だ。

チラチラと伊織がこちらをうかがいながら近寄ってきた。

「三上センパイ…スよね? どもっす」

「よろしく、伊織くん」

「いや!伊織くんとかその、恥ずかしいんで…呼び捨てでいいっすよ!」

「そう?じゃあ伊織、よろしく」

今回では初対面となる伊織を「伊織くん」呼びしてみたけれど今回もダメだったらしい。毎回チャレンジしているが結局呼び捨てになる。

「あの一…センパイもここにいてってことは…そういうことツスよね?」

「そういうこと、がなにかはわからないけど…呼ばれてここにいるこ

とは確かかな」

「あ…そっすか…」

肩をすくめて答えれば、居心地が悪いのか離れていく伊織。少し意地の悪いことをしたかもしれないと思いつつも見送ると美鶴さんと目が合う。

「三上、もうすぐだ」

頷き返した瞬間、学園が歪で巨大な塔へとその姿を変える。

どうやら影時間に入ったらしい。

「有里や伊織にはもう説明したが…これが『タルタロス』。影時間の中だけに現れる『迷宮』だ」

「なるほど…」

「あまり驚かないのだな。まあ、影時間が明ければ元の地形に戻るから気にするほどでもないさ」

とりあえず中に入ろう、と促され、中に入る。

中は学校の雰囲気とガラリと代わり神聖ささえ感じられる。

「ここから上の階が迷宮になっていて、そこでの行動チームのリーダーがいるんだが…その、」

美鶴さんが言いよどむ。おおかた、兄という立場である自分に伝えずに湊か奏子を現場リーダーにしたのを伝えにくいのだろう。

「私は、君にやってほしいと思っている」

「えっ」

——えっ（二回目）

美鶴さんから出た言葉は予想していない言葉だった。今までは普通に自分を無視して湊か奏子がリーダーになっていた。だというのに何の風の吹き回しだろうか。

いやこれ…湊や奏子の立場や役目を食ってしまいかねないだろうか…不安になる。

リーダーになったことで得られる恩恵も、それ以外の事も奪ってしまいかねないだろうか。

「臨時のリーダーとして有里…弟の方に頼んでいたが、きみが退院したのならその方がいいと思ってるな。無論、きみがあのまま眠り続けて

いたら：正式に有里湊にリーダーになってもらっていた」

いやそのまま行ってください、とは言えない。

確かに恩恵を奪ってしまいかねないが、湊や奏子がリーダーになることにより要らない諍いや嫉妬を体験する必要もない。それなら自分がリーダーになった方がいずれるだろう伊織の嫉妬やその他諸々も矛先が向きにくいだろう。一人行動がしにくくなるのでとても面倒くさいが。

「わかりました。そういうことなら喜んで」

「ありがとうございます。二つ返事とはきみは本当に不思議なやつだ」

「そうですかね…?」

こちらからすると美鶴さんの方が不思議ちゃんなのでいまいち納得がいかない。

「それでは今日の探索は三上、有里兄妹、それとあと一人を加えて行ってもらいたい。私はサポートに徹することになるし、明彦は怪我で戦えそうにもない。岳羽か伊織のどちらかを選んで連れて行ってやってくれ。二人とも、数日とはいえきみよりは戦闘経験を積んでいるからな」

あと一人…あと一人か。

悩むところだ。

「ハイ！ ハイハイハイ！ オレ！ オレっち行きたいです！」

「順平…」

……。

伊織が凄まじい自己主張をしている。岳羽に呆れたようにジト目で見られているがそれでもなお、しよげない・めげない・あきらめない。

その明るさは見習いたい。

……ので伊織をメンバーに入れることにした。

「じゃあ、伊織で…」

「っしやあー！」

タルタロス内を探索する。

緑の光が照らす薄暗い迷宮をひたすら歩く。

「なあ湊、俺がリーダーになつて良かった？　もしリーダーがやりたかったら美鶴さんに相談してみるし…」

歩きながら、湊にそう聞いてみる。

実際、二つ返事で快諾したものの、湊の意見は聞いてなかったのが気になっていた。

「どうでもいい。それに、僕は臨時リーダーのままだよ」

「えっ」

「優希が居ない日に探索したければ僕か奏子が臨時でリーダーになつてって言われた」

「そ、そうなんだ…」

返ってきた答えは予想もしないモノだった。そうか…臨時リーダーのままか…

これなら色々と都合がつけやすいかもしれない。もしぶつ倒れて入院して探索できない、なんてなれば戦力の低下が起こってしまふ。

それで誰かが死んでしまえばそこで詰み、だ。しかし二人が臨時リーダーになるならそんなことは起こらないだろうから一安心だ。

(それにしても…)

先ほどから歩いているがシャドウと遭遇しない。

まさか刈り取る者が出たわけでもあるまいし…と思い始めたところで前方の曲がり角にシャドウの影を見つけた。良かった。ちゃんとしたようだ。

「！」

少し距離はあるが一気に駆け出して距離を詰めて跳びかかり、大ぶりにサバイバルナイフを突き立て——た瞬間霧散して消えた。

手に残る攻撃の当たった感触が気持ち悪い。どうということだ…？

ここら辺のシャドウであっても周回したてのこの時期の自分は一撃では倒せなかったはずだ。攻撃力の低いサバイバルナイフならなおさら。

と、言うより先ほどの一撃は先制攻撃であり、後ろの三人が戦いやすいように牽制する意味合いで放ったものなので全力でもない。

「……………」

サバイバルナイフをしまい、両手を開いたり閉じたりして確かめる。

そういえば、タルタロスに来てからやけに調子がいい。いつもなら、しんどくて仕方がないか身体が多少なりとも重くなるはずなのに。

と、ここで伊織と湊と奏子が追いついてきた。

「いやー！ センパイはやりすぎっすよ！ そこになにかいたんすか？」

『…三上が今立っている場所にはシャドウがいた』

「えっマジすか！ どこかに逃げたとかっすか!？」

驚きながらキョロキョロと周りを見回す伊織に申し訳なくなってくる。

少しして、美鶴さんのフォローが入る。

『……………いや、消えた。倒したというべきか』

「……………あの一瞬で？」

ドン引きされてしまった。

いや、自分としてもドン引きなので美鶴さんと伊織の反応は至極まっとうだ。

「えーすごい！ お兄ちゃん強いんだ！」

「いや、まぐれだよ。たまたま弱点か何かに当たっただけじゃないかな？」

「それでもー！」

「うーん、そうかな…」

奏子にはそう言い訳したが個人的にもそうだと信じたい。

たまたま…当たり所が良かった？ だけであって自分がこの時点で既に強いわけではない…はず。

強かったらおかしいのだ。これまでリセットされていた強さがリセットされていないなんて、おかしいにもほどがある。

「……………」

また、まただ。

湊が何か訝しむようにこちらを見ている。

いや、もしかしたら心配しているだけかもしれないけれど。今いる階にシャドウは居なさそうなので、上へと上がる。

上がってすぐ、シャドウが歩いている。

『前方にシャドウだ。気をつけろ』

「了解」

返事をしたかしないかくらいで湊が飛び出し手に持った剣を叩きつけた。

瞬間、シャドウが分離し4体ほどの『臆病のマーヤ』になる。

「よっしゃー！ 戦闘だぜー！」

「順平、無茶しないでね」

「わかってるって！」

「私も頑張るぞー！」

「オツ、奏子っち張り切ってるねえー！」

伊織が張り切り、湊が釘をさす。そして奏子が伊織のノリに乗るという、なんやかんやで三人の関係は良いようだ。安心する。

恐らく岳羽とも二人は仲が悪くないだろう。

「『オルフェウス』！」

奏子がペルソナを召喚する。豎琴と茶色の長髪を持つ女性の様なフォルムを持ったペルソナのオルフェウス。いつも通りだ。

「オレっちも！ 『ヘルメス』！」

伊織も続けて召喚する。随分景気がいい感じだ。

二人が召喚したからか、湊も溜息をついて召喚器を頭に当てる。

そして召喚するのはもちろんオルフェウスだ r ——

「……『タナトス』」

——あれ？ (震え)

あれれ〜おつかしいぞ〜？何か違うね
??????

違和感と焦燥 (4 / 28 ~ 5 / 3)

「……「タナトス」」

「——っは……」

湊の呼び声と共に現れた異形に顔が引きつる。

現時点では絶対に所持していないであろうそのペルソナに眩暈がした。というか今までこの時点では絶対に持っていなかったのが今は本当に何かがおかしい気がする。

現れたタナトスはその手に持った剣で臆病のマーヤを蹴散らす。

湊は自分よりも前に立っていたので引き攣った表情は見えてない……と願いたい。もし見られていたとしても「強そうな見た目で驚いた」で済ませればいい話ではある。

だって、湊は何も知っているはずがないのだから。

「——ッ!!!」

残ったマーヤがこちらに跳びかかってくるのをナイフではじき返し、召喚器をこめかみに当てる。

「「モルペウス」！」

呼べば、青い炎と共にモルペウスが出てくる。

真っ白な、その散りばめられた花にしか色味がないような姿と眠っているかのような穏やかな貌は自分には似つかわしくない気がした。しかしモルペウスはその穏やかな顔で背に背負う糸の絡まる、十字架にも見える糸受けをシャドウにたたきつけて押しつぶす。

こう見えてかなり物理寄りな性能をしているモルペウスなので大体初回は引かれる。

「センパイのペルソナ、湊のと違って綺麗なのに攻撃方法チョーえぐ……」

「順平、それどういうこと?」

「見た目だよ見た目! お前のなんかこえーんだって!」

「なに? もっと見たいって?」

「イエ、ナンデモナイデス」

「ね! 順平! 私のは!」

「奏子つちのは奏子つちぽいってカンジかなーやっぱ！」

「なにそれー！」

こんな感じで。

その後は当たり前障りなく探索を終え、エントランスへと戻ってくる。

「無事に初陣を終えられたようで良かったよ」

「美鶴さんのサポートのお蔭だよ」

「ふふ、そうか。褒め言葉として受け取っておこう」

軽口をたたいていると、湊と奏子が同じ場所に向かいポーっとしていた。

その行為の正体には何となく心当たりがあるので黙っておく。

恐らく、〝ベルベットルーム〟に入っているのだろう。

あいにくと自分は自由には入れず、最期の時くらいしか入り込むことが出来ない。

それに――

(従者たちのあの視線が苦手だ)

一度だけ、招かれて入ったことがある。

その時に散々、「空虚」だの「中身がない」だの「打つても響かないお方」だのなんだのそこそこ酷いことを言われてすごく居心地が悪かったのを未だに覚えている。

自分にだって人並に傷つく心はあるしそんな言われようをされれば苦手に思っても仕方ないと思うのだ。

ただ、そこで他にもなにか大事な話をした気がする。

覚えてないので大した話ではなかったんだろうけど。

〝月〟を前に離れていく後ろ姿。

一枚のカードを手に、こちらに向かって優しく微笑んだ『彼』に手を伸ばす。

「…だめ、だ…！」

いけないで。それ以上進まないで。

その先は、

その先にあるのは。

立ち上がろうとする。今度こそ、救わないといけないのに。

“一人で”行かせてはいけないのに。身体はちっとも動かない。

手は、とどかない。

死が、『彼』に絡みつく。

「逃がさない」と。影たちが絡みつく。

酷く苛つかせる。『彼』を止められなかった自分も、『彼』を呼び、逃さない『滅び』にも。

『彼』が消える。

手の届かないところへ行ってしまった。

もう止められない。もう帰ってはこない。

ああ――

「また失敗した。」

奇跡が、反転する。

5 / 2 (土) 影時間

ぱちり。

目を覚ます。周りの雰囲気からして影時間なんだろう。

「起きた？」

声がしたので横を向く。

モコイさんはどこかへ行っているのかベッドにはいない。その代わり、ベッドの横には患者着のような服を着た白髪の少年――否、

「――モルフエ」

自らが“モルフエ”と呼ぶ存在が立っていた。彼がそう名乗ったのもあるが意外と自分のペルソナの名前と似ているので呼びやすく

て好きだ。

彼は湊の言う「ファルロス」——いくつかの周で聞いたことのある存在——に似通っていると自分は思っている。けれど、別に「ファルロス」とは違い、時期によって消えることなく自分の傍に居てくれている。この長い周回生活において記憶を失うことなく寄り添ってくれる彼は唯一の理解者と言っても過言ではない。繰り返すのが辛すぎた自分の生み出した幻覚かもしれないけど。

「うん。えっと、ごめんね、起こして」

「大丈夫」

おどおどと申し訳なさそうにするモルフエに首を横に振る。

「その、あと一週間だね…」

「次の満月か…」

モルフエのその言葉に思案する。

次の満月まで一週間。相手はモノレールを乗っ取る『女教皇』^{ブリーステス}だ。

タルタロスの探索もいい具合に行っているし、戦力的には申し分ないと思う。が、

(問題は伊織だな…)

伊織の行動がその後には禍根を残すことになりかねない。

それは伊織にとっても湊や奏子にとってもよくないし他の特別課外活動部のメンバーにとってもよくない。どうすれば伊織の気持ちに寄り添いつつ、諍いを起こさなくて済むだろうか。

「あのね、なるようにしかならない、から…優希は…難しく考えなくても、いい、よ…?」

「…ああうん、それはそうだけど…」

考え込んでいると、モルフエが困ったような顔で心配してくれる。確かに。いくら考えていてもなるようにしかならない。結局はぶつつけ本番、当たって砕けろの精神で行くしかないのだ。

「でも、でもね…えっと、満月の日、無茶はしないでほしいな…って」
「わかってる。でもきつと俺の出る幕はないよ」

「……………うん」

心配を払しよくさせようと事実を言ってみたが、暗い顔のままモル

フエが頷く。

あれは納得していない顔だ。

「いつもとは違うなにか起こる、とか?」

「……ごめんね、それはわからない。でも、僕は…優希には大きな影には…近づいてほしくない…」

大きな影?

それは、

「大型シャドウのこと、か?」

「……」

こくり、とモルフエが控えめに頷いた。

何故今回になってそんなことを言い出すのだろう。モルフエもそんなことはできないとわかっているだろうに。

自分が湊と奏子を救おうとするかぎり、大型シャドウやニユクス・アバター、そしてニユクスとの戦いは避けて通れないというのに。

「それはできない」

「わかってる! もう、止められないけど、それでも、僕は…! 僕だって……! ……ごめん。やっぱり、忘れて。おやすみなさい」

激情をにじませかけてやめたモルフエの「おやすみなさい」という声に、急激に睨が重くなる。

そして意識が途切れた。

5 / 3 (日) 朝

ゴールデンウィーク初日だ。

今日は何をしようか。

「チミ、この前言っていたデリシヤスな『うみうしの牛丼』を食べにいくつスよ」

予定を確認していると、モコイさんの方からお誘いが来る。正直嬉しいが、人間の知り合いから急にどこかに行かないかとかの誘いが来る場合もあるので一応そういうことを説明しておく。

「誰からもお誘いがなければね」

「ワオ、チミってば実はモテモテ？」

「いや、非モテ。お誘いがなければって言ったけどお誘いがあったためしはあんまりない」

「……落ち込まないでいいっすよ」

「落ち込んでない」

気を使われてしまった。

あるとしても実際に連絡が来るのはだいたいごくまれな湊や、ちよくちよく連絡の来る奏子だったり他のメンツと一緒にいっただったりで纏めて誘われたり、といった感じしかない。

まあそれぞれにそれぞれの仲のいい人間がいるからそんなものだろうな、と思っっている。

たまたま自分がその選択肢からは外れているだけだ。そしてそれはそこまで仲のいい人間をつくっていない自分にも非がある。

荒垣くんが来たらたまーに外でご飯を一緒に食べるがそれもほんの数回かぎり。

そんな自分にとって、モコイさんはある意味救いの神なのかもしれない。悪魔だけだ。

「……連絡、こないからいいっか」

「イエーイー！」

結局、誰からも連絡が来ることがなく、沈黙したままの携帯をポケットに突っ込んでいつものバッグを背負って出かけることにした。

モコイさんはもちろんバッグの上だ。

「今日は食べ歩きしてみてもいいかも」

ぽつりと呟いた言葉に、モコイさんが嬉しそうな顔をした。

最近、無表情にも見えるモコイさんの表情が何となくわかってくるようになった気がする。

「ナイスアイデア。チミが食べきれない分もボクが食べてあげるネ」

「頼むよ」

あまり量が食べきれなくともモコイさんが最近では食べてくれるようになったのでとてもありがたい。

少し恥ずかしいが見えないモコイさんを膝の上に乗せ、自分と一緒に

に食事をとることによって自分が食べられなくなってしまった分を食べてもらっている。

そうすることによって、食べる量が減ったことをより悟られにくくなっていてとてもありがたい。

「牛丼、とてもデリシヤス。気に入ったよコレ」

「それは良かった」

「ゲロゲロゲロゲロ……」

「も、モコイさん大丈夫:!?」

「タコ焼き:とつてもデンジャラスな味だネ:」

「俺はおいしいと思うんだけど……」

「クレープって言うんだ。今日はクリームにしたけど、中にナポリタ
ンが入ってるやつもあるよ」

「うーんとつてもスウィート」

この日は一日モコイさんを連れて食べ歩きをした。殆ど食べていたのはモコイさんで、自分は一口ほどを貰ったくらいだけだ。

隠れてモコイさんにも食べさせていたおかげでなんだか少し勇気が上がった気がする。

三上優希という人間に対し、美鶴が思うことは『壁がある』というところだ。

表面上は穏やかで、気配りもできる。同年代と比べて大人びていると感じる青年だ。

しかし絶対に他人を一定のラインから先へは踏み込ませない冷たさも持ち合わせている。と美鶴が気が付いたのはいつ頃だったのだろうか。

お蔭で、彼をよく言う人間はいれども、親しい人間というのは自分を含めてほとんどいない。己惚れていいのなら「親しい」と言っても

彼は笑って許してくれるだろう。

だが、それだけなのだ。

彼は、近づいたかと思えば掴まれる前にふらりと離れていくタイプの人間だ。

掴もうとすれば離れ、離そうとすればいつの間にか傍に寄り添っている不思議な距離感を保つ存在。

気まぐれな猫のような有里湊かれのおとうととは違い、そのさらに掴めないところがおさら彼の孤独に拍車をかけているのだろう。

表面的にはクラスでクラスメイトにも恵まれ、美鶴とも言葉を交わす仲なので決して孤独とは言えない。

特別課外活動部としての活動においてもリーダーを務め、後輩とも悪くない関係を築いている。が、それも本当に表面上だけのものだ。

妹や弟は確かに他の人間よりかは近い仲であるとよくわかるが、それでも、肉親ですら深いところまで踏み込ませているようにはみえない。

ごく浅い、それでいて他人よりかはほんの少しは深い場所にしか。一体なにがそこまで彼にとっての「他人」を遠ざけるようなことになったのか。

美鶴はとてもそのことが気になるのだった。

女教皇の誘い (5/9)

ゴールデンウィークは特に何も起こることがなく。

それぞれがそれぞれのゴールデンウィークを楽しんだようだ。

もちろん自分も。殆どをモコイさんとの食べ歩きに費やして、財布も大分軽くなったけど。

食欲がなくなり、食べる量が極端に減ったとはいえども食べること自体は好きなのでありがたかった。

真田くんの怪我もだいぶ良くなってきている。復帰までもう少しだろうか。となってきたところでついに満月の日になった。

5/9 (土) 影時間

「お待たせしました!」

「何スか!? 敵スか!?!」

「ふあ…」

「眠い…」

緊急招集がかかり、慌てた様子の岳羽と伊織に続いて眠たげな湊と奏子が作戦室に入ってくる。

自分は寝ていたところを起こされたため、てつきり遅れたかと思いきいで来たら一番乗りをしたので驚いている。

あれだけ寝ないように気を付けていたのに今日という日に限って寝てしまうのはやはり疲れているからなのだろうか。

「タルタロスの外で、シャドウの反応が見つかった。詳しい状況はわからないが、先月出たような『大物』の可能性が高い」

「大物…」

奏子が魔術師マジシャンのことを思い出したのか不安げな顔をする。あれはマジで怖かったのでトラウマになるのも仕方ないと思う。

「外に出た敵は仕留め逃すわけにはいかない。影時間は、大半の者にとつて『無い』ものだ。そこで街を壊されたりすれば『矛盾』が残る」

「ま、要は倒しやいいんでしょ？ やってやるっスよ！」

「また、あんたは…」

調子にのった伊織を岳羽が諫める。

しかし個人的に伊織のこの明るいお調子者な性格は本当にありがたい。

自分も湊も他のメンバーも、奏子を除けばあまりこういうことをするタイプではないからだ。この明るいお調子者のお蔭で、陰鬱にもならず、程よく皆が肩の力を抜ける。

それがとても大事なのだと、自分は思うのだ。

「明彦は、ここで理事長を待て」

「なっ…冗談じゃない！ 俺も出る！」

「まずは身体を治す方が先だ。足手まといになる」

「なんだと!？」

待機を美鶴さんに命令されたにもかかわらず、なおも食い下がろうとする真田くん。

その気持ちはとてもよくわかる。よくわかるが、流石にこれ以上はごねられてはいけないのでこちらからも何か言うことにした。

「真田くん」

「三上！ 三上からも何か美鶴に言ってやってくれ！」

「まだ駄目だと思う」

「お前も美鶴と同じ意見なのか!？」

「うん。俺から見ても今の真田くんは無理だよ。だから、駄目だ」

「ぐう…」

じつと見つめ返せばたじろいだように唸った後、視線を逸らされる。

真田くんも自分ではちゃんとわかっているはずなのだ。ただ、真田くんはまっすぐすぎる。

どうしてもやりたくなかったその時は、ちゃんとバレないように隠れてやらないといけない。なのになっすぐぶつかって、正式に参加しようとしている。

そこはある意味、ずるい手を覚えてしまった自分とは違うまっすぐ

な真田くんの悪い点であり、いい点でもあると評価している。

「三上の言うようにまだ駄目だ。それに彼らだつて戦えるさ。少なくとも、今のお前よりはな」

「……」

「明彦…もつと彼らを信用してやれ。みんなもう実戦をこなしてるんだ」

「……………くそっ」

悔しさをにじませて悪態を吐く真田くんに、伊織が自信満々に向く。

「まかして下さい！ オレ、マジやりますからっ！」

「仕方ないな……」

悔しそうな顔をしていた真田くんを苦笑させる伊織は頼もしい限りだ。

少々、肩肘張っている感じがしないでもないが。

「悔しいが…現場の指揮をたのむ、三上」

「任された」

「ああ、二年のやつらを頼んだぞ」

「やっぱそう来るんスね……」

落胆した様子の伊織が肩を下げる。

「つか、もうこのままセンパイにリーダー固定っばいよな…オレだつてリーダーに……」

伊織のぼやきに誰も反応することはなかった。自分には聞こえていたがわざと無視をする。

ここでかける言葉を持ち合わせていないからだ。

「三上達は先行して出発だ。美鶴は外でのバックアップとなると準備が要るだろう」

真田くんの言葉に美鶴さんは軽くうなづく。

「駅前で待っていてくれ。すぐに追いつく」

「了解」

「了解です」

「はーい！」

上から自分、岳羽、奏子の順で返事をしてぞろぞろと出ていく。
この時点でメンバーが五人と申し分ない人数で安心した。

——駅前

自分は見張りを受け持ち他の四人には階段に座って休んでいても
らっている。

歩いて喉も乾いたのか、伊織と湊は持ち込んだジュースを飲んでい
た。

「まだかな…」

奏子の隣に座った岳羽が不安そうにつぶやく。

「すぐ来んだろ」

「順平の言う通りすぐ来るんじゃないかな…？　だってあの美鶴先輩
だし！」

「順平…奏子ちゃん…そうだよね…」

未だ不安そうな岳羽が、空を見上げる。つられて、自分も空をぼん
やりと眺める。

緑色に光る空と、同じく緑がかった満月。ゾワゾワと何かから見ら
れている様な感覚を覚え、それが気持ち悪くて満月から少しだけ目を
逸らした。

「今夜は満月か…なんか、影時間に見ると不気味ね…」

「……」

湊は岳羽のことが気になるのか、じっと見つめて何か言いたそうに
したがすぐにイヤホンを弄って下を向いた。

その後すぐに大きなエンジン音が駅前に響く。

「…ん？　なんだあ!？」

「来たみたいだ」

一歩前が出る。

その瞬間、猛スピードのバイクが駅前広場に突っ込んできた。

——美鶴さんのバイクだ。

自分の目と鼻の先に止まると、慣れた手つきでヘルメットを脱いで
一言。

「遅れて済まない」

「そんな時間に時間は経ってないと思うから気にしないで」

「恩に着る。：いいか、要点だけ言うぞ。情報のバックアップを、今日はここから行う」

「えっ!? っここで!？」

驚く奏子に美鶴さんは軽く微笑んだ。

「ああ。君らの勝手はこれまで通りだ。……シャドウの位置は、駅から少し行った辺りにある列車の内部」

「そこまでは線路上を歩く事になる」と続けた美鶴さんに、岳羽と伊織が目を見開いた。

「え、線路歩くって、それ、危険なんじゃ……」

うろたえた伊織の意見はもつともだ。ただ――

「心配ない、影時間には機械は止まる。むろん列車もだ。動く筈はない」

列車に関しては今回それがそうじゃないんだよなあ、とは言えない。

「いや、でもそのバイク……」

「これは特別製だ。それに、状況に変化があったら私が逐一伝える」

美鶴さんのその言葉が終わるか終わらないかにピピピ、と音が鳴る。

しばらく片耳を抑えた美鶴さんは、気合いのこもった険しい顔で口を開いた。

「よし、では作戦開始だ!」

「はい」

「はいい!」

「う……うっス! 行ってくるっス!」

「順平、気張りすぎ」

「うるせーやい!」

戦闘がいつ始まってもいいようにナイフをホルダーから抜き、線路に降りると美鶴さんからの通信が入る。

『そこから約200メートル前方に停車しているモノレールがあるはずだ』

『乗客に被害が出るとマズイ。急行してくれ』
「了解」

満月に照らされるタルタロスを横目に、線路を走る。

しばらく走っていると、目の前にドアが全開で停車しているモノレールが見えてきた。あれが美鶴さんの言う車両だ。記憶に違いないければ。

『皆、聴こえるか?』

「美鶴さん、聴こえてるよ」

『三上か。敵の反応は、間違いなくその列車からだ。五人全員、離れ過ぎないよう注意して進んでくれ』

「気を付けとく」

『…頼んだぞ』

「と、言うことで。皆、美鶴さんの言うようにあまり離れ過ぎないこと。単独行動なんでもつてのほかだ。いいね?」

通信を終えて振り向きながら二年生組の四人に確認する。

しっかりと頷いた湊、奏子、岳羽だったがなぜか伊織だけは握りこぶしを作っていた。

「へへっ、腕が鳴るぜっつーか、ペルソナが鳴るぜ!」

……話を全く聞いてなかったのかもしれない。

少々不安を覚えつつ、近づいてあいているドアから露払いも兼ねて最初に飛び込む。

「私と奏子ちゃんの。なにがとは言わないけど見たら殴るから。特に順平」

「なんでオレ!?!」

背後から棘のある岳羽の声が聞こえて来たが聞かなかったことにしたい。

車内に入ってきた四人——主に伊織が、だが——はキョロキョロと周りを見回すと棺桶のオブジェを見つめる。

「これ、人間…つか、乗客だよな?」

“象徴化”ってやつか…うええ…

マジ、気味わりイ…」

驚いたように棺桶を眺める伊織は象徴化した人間だったものに戦々恐々としていた。

「でも影時間に気づいてない人って、今の時間、無いことになってんだよな」

しかしその驚いたような顔を、急に真面目な顔に戻す。

「イヤな事なら、いつそ知らない方が幸せってか？」

伊織の言葉に考える。

嫌なことなら知らない方が幸せだというのはたしかにある。自分が、湊や奏子を救おうとしている今だって、本来なら見て見ぬ振りができることだったのだ。

でも、自分の中の何かがそれを許さなかった。

だから今、自分はここにいる。

こうしてペルソナ使いとなって立っている。

幸せの定義とはなんなんだろうか。

何も知らずに目隠しされ、考えることもなく垂れ流される幸福を享受すること？

否、そんなことは決してない。

みなくていいものは見なくてもいいのかもしれないが、みなくてはならないものはどうあがいても見なくてはならない。それはきつと、どうあがいても逃れられないものなんだ。

自分は、誰かに与えられるだけの幸せなんて、

誰かが犠牲になった上に成り立つ幸福などまっぴらごめんだ。

だからこそ、自分はある時誘いに乗った。

救えるものなら自分の意思で救いたかった。

あの時自分はある所で初めて、『運命』に対する反抗の意思を見せたのだ。

決意を改める。今度こそ、二人の大事なきようだいを救う。

誰も犠牲になんてさせない。

——たとえそれが、自己犠牲という矛盾を孕んでいたとしても。

「あれ…」

考え込んでいると、岳羽が声を漏らす。

「こんな駅でもないところに停まってんのに、ドアが全開って、おかし…」

い、とまでは言い切れなかった。

勢いよくすべてのドアが閉まる。気づいた時にはもう遅い。

車内に閉じ込められるハメになってしまった。

とはいえ、自分は元からこの状況になるということを知っていたのでドアをにらみつけるだけに留めるが。

「くそっ…開かねえっ！ ちつくしよ…ヤラレた！」

ぎゆうぎゆうとドアを引つ張る伊織が片手をぶらぶらとさせた。

「つか、指すつげーイテエし！ つか見て、ほら、ここんトコ、指先、へこんでんだろ!？」

伊織がこれ見よがしにぶらぶらさせた手を見せつけた瞬間、通信が入る音がした。

『どうした、なにがあった?!』

「それが、閉じ込められたみたいで…」

「ゆかりちゃん言う通り、ドアが突然しまつて…」

『シャドウの仕業だな…確実に、君らに気づいているという事だ』

しどろもどろに岳羽と奏子が説明したそれを、美鶴さんが予測する。

『何が来るかわからない。より一層、注意して進んでくれ!』

「りよ、了解です」

岳羽がこちらを見ながら答えるので、心配させないためにもしつかりと頷いてみせた。

「とりあえず皆、危ないから俺から離れないでね」

武器を改めて構えなおし、車両内を進む。

10号車と11号車を抜け、次の車両に入る。しかし、そこにシャドウの影も気配もない。

「あれ？ シャドウいねえじゃん？ んだよ。拍子抜けだよ…」

「伊織、罨かもしれないから気は抜かないでね」

「はいはい。わあーつてますよっと！」

そのまま進み、8号車の真ん中まで来たあたりで岳羽が眉を顰める。

「なんか妙に静かですね…」

「気味が悪いくらいにね」

更に少し進んだ、その瞬間

ドスンッ!!!

「うわっ！」

「きゃあ！」

「——っ！」

「出やがったな！」

大きな音を立てて天井から冠を被った髪の毛のようなシャドウ——偽りの聖典が落ちてくる。

そのシャドウはこちらを見つけるや否や、まるで誘うかのように次の車両へと逃げていく。

それを見た伊織は慌てて追いかけようとした。が、しかし——

『待てっ！』

「待て伊織」

美鶴さんと自分の「待て」が同時にかかり、ぴたりと伊織はその場で固まったように動きを止めた。

『敵の行動が妙だ。イヤな予感がする』

「そんなっ！ 追っかけないと、逃がしちゃうっスよ!?!」

『三上、現場の指揮はきみだ。この状況…どう思う?』

聞かれたので答える。こんなもの、火を見るよりも明らかだ。

知っているから、というのもあるが何も知らないとしても罨だと思えるほどのあからさまな動き。

冷静さを失っていないければ引つかからないようなものだ。

「俺も美鶴さんの意見と同じです。伊織、明らかにあれは誘ってる動きだ」

『同じ意見で安心したよ。…迂闊に追うべきじゃないな』

美鶴さんが安心できたところで伊織も三年の自分の意見なら問題なく聞いてくれるだろう…と思ひ確認するように見つめれば、そこには不満げな顔。

これは失敗したかもしれないと瞬時に察した。

「なんでだよ!? あんなの、オレらで倒せんじゃん！ それとも何スか!? センパイ、臆病風吹かしちゃってビビってんすか!? …なら、オクビョーもののセンパイの意見なんていちいち聞いてらんねーよ！」

「順平!!! 流石にそれは私と湊が怒るよ！」

伊織の物言いに、なぜか奏子と湊が怖い顔をする。

いや、伊織の「臆病者」という意見はもつともだと思う。自分はとも臆病者でもあるし、どのみち前に進まなければならぬのでいつまでも日和つてるわけにはいかない。

「伊織…一緒に——」

「…っ、てか、オレ1人だつてやれるっつーの！」

「あ、コラ、順平ツ!？」

一緒に行くぞ、と言おうとした瞬間、一人で突っ走っていつてしまった。

急いで追いかけてようと一歩足を踏み出した瞬間、

『危ない！ 後ろだ!』

上からシャドウが落ちてくる。数は4体。

これはすっかり忘れていた。ここで挟み撃ちにしようという魂胆だったか。

「お願い! ピクシー! 【ジオ】！」

「はああ…!」

さっそく奏子がワイルドの能力を駆使して新しいペルソナを使っている。

湊もさっそく新しいペルソナ——イヌガミをお披露目しているよ。うだ。

ジオとアギが偽りの聖典に襲い掛かる。

ジオが弱点のようだがダウンをとることなく消滅させた。

「私も…！　『イオ』！」

岳羽のペルソナ——『イオ』が【ガル】で偽りの聖典に風を巻き起こす。が、相手は殆ど無傷だ。

「なんで!？」

「恐らく疾風属性が効かないんじゃないかな、っと」

岳羽が仕留め損ねた個体から追撃される前にナイフで貫き消滅させる。

そしてそのまま近くにいた偽りの聖典も薙ぎ払って倒した。

『よしっ！　伊織が心配だ。先を急ごう』

シャドウが全部消えたことを確認すると、焦ったような美鶴さんの通信が聴こえた。

その言葉の通り、本当に心配なのだろう。なにがあるかわからないから、というのもあるが、先走って大げがもしないか、敵の戦力がどれくらいか、が美鶴さんにとって未知数なのだ。

「つたく…さっそく敵のペースじゃん…」

「そうだね…」

疲れたような顔をして岳羽と奏子が溜息を吐く。

『こうなっては仕方ない。とにかく、君らも伊織を追ってくれ。このままでは各個撃破の的だ』

「もう、順平のやつ！　先輩には酷いこと言うし、自分からはぐれてどうすんの!？」

「見つけたらお仕置きかな」

あ、そこ気にするところなんだ。と一人驚く。

別に酷いことを言われたとは感じていないので周りの怒りがあまり理解できない。

とうかちよつと待って湊。お仕置きってなんだお仕置きって。

お兄ちゃん気になるよそれ。

『反応では、何両か先へ行ってるだけだ』

「了解。——ちよつとお客さんが来たんで適当に蹴散らしてから行きませす」

通信の途中で割り込んできたシャドウを蹴飛ばす。

跳ねたそれを湊の剣が叩き潰した。

そこからはもう、一方的な蹂躪だ。自分がリーダーとして参加したからか、湊と奏子の二人が揃っているからなのか、タルタロスの攻略もとい訓練はいつも以上に行われており戦力はそれなりに上がっている。

一瞬で片付け次の車両へと走る。

「順平、この車両にもいないね。まったく…一人は危険だつてわかってるはずなのに…」

「なんだか順平、様子おかしかつたよね…お兄ちゃん、なにか知らない？」

「うーん…」

伊織について自分が知っているのは湊（もしくは奏子）に当たり散らす、という事だけで、本質的な原因は実のところよく知らないのだ。なんとなく、リーダーの座を欲しがっている気もするのだが、それだけで解決するようなものだろうか、という不安もある。

「ま、順平に聞けばわかるでしょ。とりあえず急いで後を追いましよ、三上先輩！」

岳羽が無理やり納得させるように言う。

確かに、聞けばわかるのだから追いついて、安全を確保できてから聞けばいい。

ただそれだけの事だ。

序盤の妨害に比べてぴつたりと止んだ襲撃に楽でいい、と思いつながら扉を開ける。

車両を進む。

「あつ、いた！」

何両目だろうか。数えていないのでわからないが伊織は比較的近くにいた。

「ヤバ、敵に囲まれてるじゃん!?!」

「助けなきやマズそうだ」

近くまで駆け寄ると順平は正しく孤軍奮闘していた。シャドウを手を持った剣で切り、跳ね飛ばしてうまく近づかれないようにしている。

「順平―!」

ざっと見る限り大きなけがもしていない。大したものだ。

「くそっ…オレー1人だつて! コノ、コノ!」

「手伝うよ―!」

奏子がそう言った瞬間、横からシャドウが伊織に跳びかかった。

「あつ…」

「伊織!!」

伊織は他のシャドウに気を取られ、そのシャドウの一撃に反応できていなかった。もちろん、自分以外の三人も。

その直撃を食らえば伊織は腕に大けがを負いかねない。そしてそれは剣を両手で持っている伊織にとって致命的だろう。

目を見開いて固まり、とつさに迎撃できそうにならない伊織の横に飛び込む。

そして襟を掴んで後ろに引き倒し、こちらも直撃を避けるために左腕で身体を庇う。

「――っ……!」

肉を裂くような音が響き、己の血が顔にかかる。一瞬焼けつくような痛みが走り、すぐにさあと冷えるような感覚に陥る。

「ぐ…っ」

歯を食いしばり、上から右腕にもったナイフをシャドウに突き立てる。

そのままナイフの一撃で地面に落ちたシャドウを蹴り飛ばすと何度か毬のように跳ねた後に消滅した。

攻撃を食らった腕は痛むが、庇わなければ伊織が大けがを負わない保証も無かったので左腕だけで済んで良かったとも言える。これも必要経費だ。

運が悪かったのは相手が伊織の得意とする火炎系の魔法である『アギ』ではなく純粋な攻撃で襲って来た点だろう。

ふう、と軽く息を吐いて、引き倒してしまった伊織を見る。

「荒々しくしてごめん。なんともない？ 伊織」

「……っ！ ……オレは大丈夫っすけど…：センパイ、血が…！」

「ああ、それならよかった。…まあ平気だよ。たぶんね」

その言葉によりやく動けるようになったのか、他のシャドウを蹴散らした岳羽と奏子が走り寄ってくる。

湊はいつの間に構えていたのか、こめかみにあてていた召喚器を大きく息を吐きだしながら下していた。

湊は湊で伊織を助けようとしていたのかもしれない。

「お兄ちゃん！ 順平！」

「三上先輩…：その腕…：…ちよつと順平、アンタね…！」

しーっ、と怪我をしていない方の片腕で口元に人差し指を当てて奏子と岳羽を制す。

「いいか、伊織。これでわかったかもしれないけど、『特別』な立場である現場リーダーって言うのは時にこうしてみんなを守らなきゃいけないんだ」

ボタボタと、腕から血を垂れ流す。

攻撃された場所が悪かったのだろう、中々血が止まらない。

「みんなを引つ張って、誰かが危ない時だったりヘマをやらかした時には身体を張ることだってある」

「………」

「みんなの命を預かってるんだ。指示ひとつで危険な目に遭わせかねない。…：実際、俺がこうして伊織を止められなかったせいで伊織は危ない目にあっただから」

「……そんなことは…：だって、これはオレの…：…センパイのせいじゃ…！」

「そんなこと、あるんだよ」

伊織の言葉を切り捨てて大きく息を吸う。

「間違いなくこの怪我は伊織を止められなかった俺の自己責任。だってあの時、きみを説き伏せるなり殴るなりすれば俺は止められたはずだからね。それをしなかった俺の自己責任だよ」

尻もちをついたままの伊織はとてもバツが悪そうだ。仕方ない。

こちらが何を言ったとしても、自分の行いで誰かを傷つけてしまう結果になって開き直れるほど伊織は悪い人間ではないのだから。

「……伊織」

「はい」

「君は、こんな風に仲間の命を預かって、いざと言う時には守って死んでもいいと思えるほどの覚悟を持って『特別な存在』であるリーダーはやれそう?」

「オレは……オレは……」

眉を寄せ、歯を食いしばりながらも考える伊織のその姿に罪悪感を覚える。こんな考えはまともではないしすぐにできるようなものでもないだろう。意地悪なことを言い過ぎたかもしれない。

「ごめんね、少し意地悪が過ぎたね。これは一般的な現場リーダーの考えじゃないだろうし、答えを出すのはまた後で。俺からの宿題ってことで。今日のところはリーダーじゃなくて悪いけど、攻撃隊長とかになつてみない?」

「オレが……スか?」

「そう。もちろんさつきみみたいな独断専行はダメだよ。その代わりに、きみがみんなが動きやすいように敵を陽動するんだ。みんなとの連携を考えて無茶しない程度にね」

「でも……先走っちゃまったオレなんかが……」

「いいや。これは、伊織にしか頼めないことだよ」

伊織の迷いを覆い隠すようにそう告げると先程までの迷いのあった瞳から一転、決意を秘めたような硬い目付きになった。

これならなんとかなりそうだ。

「やらせてください……オレ、頑張ります!」

「——うん。俺は片腕がこんなだし、足でまといだろうから俺の代わりにみんなをよろしく頼むよ。攻撃隊長さん」

「っスー!」

「3人も、この話はここでおしまいだから、伊織のことは運の悪い事故つてことでこれ以上言わないであげてね」

まあ、湊も奏子も岳羽も今の伊織のことはあまり責める気は無さそうだし余計なお節介かもしれないが、一応言っておく。

「さっさと親玉を倒してきてくれた方がここで待つてることにした俺も楽で嬉しいかな…」

「……優希…」

「お兄ちゃん…やっぱり私か湊のどっちかが居た方が…それか治療しよう？…ね？」

心配そうにする湊と奏子に首を横に振る。治療をしている暇はない。早くしないと列車が動き出してしまい、最悪止まっている前の列車とぶつかって終わりだ。

そんな終わりは絶対に避けたい。そのためには、自分なんかには構っている暇などない事を伝えてしまいたかった。

「大丈夫。思ったより傷は浅いし、大型シャドウは荷が重いつてだけだから気にせず行っておいで。俺はここで雑魚の相手でもしてるよ」「でも…」

「ごめんね、頼むから」

そう笑いかければ、湊と奏子は渋々と言った感じで伊織や岳羽と共に前の車両へと進んでいく。

その姿が見えなくなった瞬間、安心して気が抜けたのか、ずるずると座席の前に座り込んでしまった。

——なんとか無理矢理かもしれないが伊織を説得出来て良かった。あの調子ならもう1人で暴走もしないだろうし、チームワークもより良くなるだろう。正しく怪我の功名、と言ったところか。

そう安堵する。

『三上！ 大丈夫か！』

「うん、大丈夫大丈夫。美鶴さんは俺の事を気にせず二年生組のサポートをしてあげて」

『だが…』

「いいから」

有無を言わずに美鶴さんとの通信を切って深く息を吐く。

やってしまった。

そう考えている間にも血がどんどん出ていく感覚がして、頭がくらくらする。

傷が浅いなんて言うのは嘘だ。出血量からしてかなり深く切られてると感じる。

痩せ我慢するのはあまり良くないかもしれない。

懐から傷薬を出し、口でふたを開けて傷口にぶっかける。ないよりはマシな程度だが仕方ない。

ガタン、と車内が揺れる音がした。

(思ったより遅めだったけど動き出したか…)

モノレールがひとりでに動き出す。

分かっていたこととはいえ、こうして怪我をした自分に出来ることはあまり無い。

他のモノレールにぶつかる前に湊達が止めてくれることを願うしかないのだ。

(――その前に、)

ゾロゾロと湧いて出てきた雑魚シャドウの処理をしないと、と動く片腕で召喚器をこめかみに当てた。

ずるずると、這う。

行かなくては。守らなくては。

金色の蝶が飛ぶ。囁いてくる。責めてくる。

手を伸ばす。

虚空に浮かんだ水色に光るそれを、砕くように握りしめた。

――数分後。

「ギリギリ、セーフか?」

「どうしよう! 止まってないよ!」

「そっか! ブレーキかかんないと、すぐには…!」

ひと悶着ありつつも気合いの入った順平の獅子奮迅によりプリー

ステスを倒した四人は、電車が止まらないことにパニックになっていた。

『おい、どうしたっ!? 前の列車はすぐそこだぞ!』

「うがー! こんなモンの運転なんて分かつかよ!」

その叫びに湊が駆け出しブレーキレバーを引いた。が、間に合わない。

ギヤリギヤリと音を立てて停まろうとする車体はしかし、如何せんその距離が短すぎたのだ。

「何で止まらないの!? だめ、ぶつかるー!」

奏子は叫びながら目を閉じる。

!!!!!!!

四人が四人共、死を覚悟した。その時

「『ポペーートル』……っ……!」

ぱきん、とガラスの割れるような音が響き、車体の前面に枕を抱えた猿ぼくのような生き物が現れる。

それは自身の身体をクッションにし、車両同士がぶつからないようにガードした。

少しの衝撃と静寂。

気が付けば猿のような存在も消えており、乗っている車両の車体は前のモノレールとは少し離れたところで止まっていた。

まだ皆が目を閉じているところを見るに、猿それを見たのはブレーキを引いた湊だけだろう。

「と……止まった……?」

「た、たすかった、の……?」

「たぶん……止まってる……みたい」

『おい、怪我はないか!』

「い、一応、大丈夫です」

ふらつきながら岳羽は立ち上がる。

「や、やば、あたしヒザ笑ってる……」

「わたしも……ゆ、ゆめじゃ、ないよ……ね……?」

「あーっ、あーもうっ、メチャメチャ、ヤな汗かいたっつーの……」

『フウ……前の車両に残った三上以外は無事らしいな。』

……今回は、バックアップが至らなかった。済まない…私の力不足だ。——ッ!?!」

話の途中で美鶴は息をのんだ。

「アレ? どうしたんスか?」

『いつのまに…何故だ…』

おちやらけた風に順平がきくも、美鶴は声を震わせるばかりだ。

『…おい! そこに三上が…! その車両…先頭車両に三上は居ないか!?!』

「えっ…先輩ですか…? ぱつと見いませんけど…」

「っ!!!」

突然叫んだ美鶴に、三人はキョロキョロと辺りを見回す。

湊だけは、血相を変えて走り出した。

座席の横の、陰になつているところを足早に確認していく。

そして先頭車両最後の席の横で座り込むようにくずおれている身体を見つけた。

「優希…!」

その顔色は白く、血の気のない色をしていた。

怪我をしている左手はだらりと下がっているが、空いた右手はきつく胸を押さえるように掴んでいる。

その押さえている右手首を、湊はつかんだ。

酷く冷たい。まるで、死体のように。

「——ッ!!!」

途端に、カッと見開かれる優希の両目。

ちかちかと黄金を湛えたそれは、大きく息を吸い瞬きをした次の瞬間には消えていつもの灰色に戻っていた。

目の錯覚だったのだろうか。

「……なん、で…湊が…? …ああ、もう、終わった、の…」

焦点の合わない目で湊をぼんやりと見つめ、そして憔悴しきつたようなひどく疲れた声で吐き出して、また大きく息を吸う。

「ごめ、ん…なんか…少し…寝て…た…」

「なんではごっつちの台詞! …いま、いま…優希は…!」

ざっと見た限り腰のホルスターにも優希自身の近くにも召喚器は見当たらなかった。

だというのにどうして召喚器無しでペルソナの召喚が行えたのか。そんな疑問を湊は喉奥にしまいこんだ。

「……………」

「…なんでもない。立てる?」

震える声で、滅多に出さないような動揺の仕方をする湊に優希は首を傾げる。

「…………いけ…る、と思…う」

ふらふらと、手すりや壁を支えにしながら立ち上がる。

「あ…召喚器…どこに…やったっけ…………」

いまだぼんやりと、夢見心地の優希が空のホルスターをみて眩く。前方車両に置いてきたのだろうそれを探すように視線を彷徨わせる。

「前の車両に置いてきたんでしょ。帰りしなに探せばいいよ」

「…………うん…………」

まるでいつもとは真逆の会話に、湊は眉をひそめた。いつもしつかりと話す人間がこれほど口数が少なくなる、という事は相当危ないライオンだという事だ。

「さむ、い…………」

「こんな無茶して、皆に怒られるよ」

「みんな、な…?………… ああ、うん…みんな…………だっけ…………わかって、る…………」

ずるずると湊に引きずられるように歩く優希は気を抜けばまた気を失ってしまいそうだった。

そんな優希を見た奏子は悲鳴を上げたし、ゆかりはディアを必死にかけ、順平は自分が怪我させたのだからと介助を申し出た。

兄である優希を順平に任せ、湊は召喚器を探す。

召喚器は予想した通り優希が待つと言った車両に落ちていた。

血に塗れたそれを手に取り、歩き出す。

(後で綺麗にして返そう。それに——)

湊は、どうやって召喚器なしでペルソナを召喚したのか知らない

いけなかった。

己の疑念を晴らすために。

巖戸台分寮 作戦室

『こちら現場だ。たった今、全て片付いた。モノレールにも目立った被害はない』

「ご苦労様、桐条くん」

美鶴からの通信に幾月が答える。

「やー、列車を乗っ取られたと聞いたときは正直どうなるかと思ったけど、上出来だよ」

得意げにはほほ笑んだ幾月はほっと胸をなでおろすようにそういった。

「これなら明日の朝刊にヘンな大見出しが出るようなことは、無くて済むね」

『彼らがよくやってくれました。ただ——』

躊躇うように言い淀む美鶴。

「おや、何か問題でも？」

『……三上が負傷しました。怪我は自体は大したことありませんが出血が多かったらしく、意識も朦朧としている様子です』

「それは…大変だね。こちらで病院を手配しておくよ」

『ありがとうございます』

一連の話を黙って聞いていた明彦が、眉を顰めて真剣な顔で口を開く。

「しかし、シャドウの様子…ただ事じゃないですね。モノレールを乗っ取るなんて、調子に乗りすぎている」

「こちらでも調べているよ」

『ついに…「始まった」という事なんでしょうか？』

不安そうな美鶴の声に、幾月は思案気に答えた。

「うーん、まだ早計には言えないけどね…」

ま、とにかく、まずは現れるきつかけを突き止めないことにはね。いつもこんな土壇場まで分からないのはどうにもマズい」

『……そうですね。私に……私にもっと力があれば……皆の負担を軽くでき……二上のように無茶をさせることなく……』

「思いつめないでくれ。きみはよくやってくれてる」

「——そう、とてもよく、ね」

小さく呟いた幾月の言葉は誰にも届くことなく消えた。

Ⅲ 女帝 & Ⅳ 皇帝

神話覚醒（5／9～5／13）

5／9（土） 深夜

ぱちり。

目を覚ます。

また薬品の匂いが鼻に入り、白い天井とも相まって結局あの後雑魚シヤドウを蹴散らしてぶっ倒れたのかと自覚する。

流石に二回連続ぶっ倒れるのは勘弁してほしい。無茶したのは自分だけれども、倒れるほどの無茶でもなかっただろうと内心むくれる。

怪我をした左腕には包帯が巻かれていて、治療をちゃんと受けられたようでそこは安心した。

痛みはあまりないが動かすには少し厳しい。左手は痺れたように力が入りづらく、指を曲げたり力を入れようとするとき軽く震える。そもそも握りこぶしが作れない。

（駄目か…）

一応、傷薬をぶっかけていたので何とかなるだろうと思っていたのに、本当に焼け石に水程度の効果だったようだ。

まあ痛みが取れただけでも万々歳といったところか。贅沢をいってはいけないと己を戒め簡易ベッドから起き上がる。ここは救急の治療室だろうか。

なんて考えてみるがそれはそうだ。深夜にやっている病院の窓口なんてそこしかない。

「あ、起きてる」

区切りとなっている白いカーテンを開けて、湊が顔を出す。

手には小さな白い紙袋。

「あのさ。優希、上着のポケットに入ってたこれかなにか…わかる？」
持ち上げて見せたそれは、もし外出中に不整脈が起こった時にさつと飲もうとしていた予備の薬だ。

冷や汗が流れる。

「えつと、薬…」

「うん、薬だよ。でもそんなことみたら分かる。僕は、これが、何の薬かって聞いているの」

「ずい、と迫ってくる湊。正直言つて真顔で見つめられるのは怖い。というか若干怒ってるような気がする。」

「い…いざというときの痛み止め…みたいな…?」

「嘘。そんなものじゃないよね」

訂正。若干どころではなさそう。

そしてソレが何か湊は知っている。しどろもどろに言い訳を言ってみただけど通用していない。

知つたうえで、自分の口から白状しろ、ということなのだろう。

随分と手厳しい。

「ふ…不整脈の…えと、心臓の病気の薬…です」

「そうだね。そう聞いた」

「やっぱりバレてる。」

「……………ねえ、どうして黙ってたの」

顔を顰めた湊がベッドの脇に添えられたパイプ椅子に座る。

「どうして、どうして…と言われれば。黙っていた理由はだいたい一つか二つ。」

「大したことないかな…と…」

「大したことない!?!」

「ひえつ」

勢いよく椅子から立ち上がる湊にのけぞる。

そして立ち上がった湊はぐわし、と両肩を掴んできた。

「ねえ、本当にそうだって思ってるの:!! 二回も倒れて、最初の時なんて、心臓が…止まって…このまま息を吹き返さないかもって…」
「えつ」

「なんだそれ。目を覚まさないかも、は聞いたがそっちは初耳なんです。すが。」

死にかけてた、というか一瞬? 数分? 死んでたのか自分…

周回のリセットがかからなくて良かったと胸をなでおろす。

「僕たちは病院についたときに倒れたから：奏子なんて目が覚めた時にパニックになったんだよ。『お兄ちゃんが死んじゃう！ ベッドから出して！』って叫んで…」

「……」

それも初耳だし、本当に申し訳ない気持ちでいっぱいだった。

縮こまることしかできない。

「生きててよかった…って、目が覚めてよかったって僕たちは思ったのに優希はなんでそんな大事なこと隠すんだ！ 自分の命を、大したことないだなんていうの！」

今まで見たこともないくらい、ぐちゃぐちゃになった感情を露わにした湊がぼろぼろと涙を流す。

右腕を伸ばして湊の頭を抱え、抱き寄せる。

「ごめん」

「ごめんは…要らない…！ 僕らは“ごめん”も、“さよなら”も聞き飽きた！ 死なないで…！ ひとりでどこかに行こうとしないで…！」

それは、無理だ。

湊を、奏子を救うには。俺が一人でニユクスを、『死』を封印しなければならぬ。

誰も手の届かない、遠い遠い場所で。

それが正解なのだ、前回で気が付いたのだ。

その先にたとえ死が待ち構えていようとも、自分は独りでやらなくてはいけない。

だから、約束はできない。

俺は、死ぬべきなのだから。

「……………優希はズルい」

「…うん、ごめんね」

「……」

ほんぽんと背中を優しく叩けば湊はぐりぐりと頭を押し付けてくる。

こんなことで気が紛れるとも、ごまかせるとも思っていない。けれど、慰めることぐらいは赦してほしい。

「……これ……」

数分ほど無言で慰めて、泣き腫らしながらも少し離れた湊は、ポケットから召喚器を取り出した。

「優希が落としてたやつ。ちゃんと拾っておいたから」

「……ありがとう」

いつの間に落としたのだろうか。

倒れたときに落としたのだろうか。手に持っていて、シャドウを倒した際に気絶してそのまま？

多分きつとそうなのかもしれない、と思いながら受け取る。

「『ポペートール』」

息をのむ。湊の口から放たれたのは、湊が知るはずのない自分のペルソナの名前。

「どうして、って顔してる。ねえ——」

「優希は何を隠してるの」

何を、抱えているの。

その問いにも、答えることはできなかった。

喉が乾く。ぐるぐると視界が回る。

「……それは……」

全て話してしまえ、ともう一人の自分が囁く。優しい弟にすべてをゆだねてしまえばいい、と。

結末^{おわり}まで、全て。

駄目だ。そんなこと、と頭のわずかに残る冷静な部分が告げる。

信じてもらえるはずがない。1月に死を封印した二人が3月には死んでしまう、だなんてこと。

それに、今度こそ最後まで一人でやると決めたのだ。

「い……えない……」

必死に声を絞り出す。

「今は、言えない」

歯を食いしばる。

言っ·て·は·い·け·な·い。言·う·な。

それは今、言うべきではない。ただ代わりに——
「だけど、言えるときになったら…ちゃんというから。だから待つてほしい」

嘘を吐いた。

それはそれは、大きな嘘を。

それを伝えるときは恐らく来ない。

罪悪感が胸を支配し、ちくりとあるはずのない痛みが襲う。

我ながら酷すぎる。弟の慈悲を、最後のチャンスかもしれないそれを、自ら手放したのだから。

皆まで言わずとも、少しでも言えばきつと湊は協力してくれる。奏子だって信じてくれる。

でも、それではいけない。守^{すく}るべき存在に頼^たってはいけない。必要のない死因を増やすわけにもいかない。

だって、何度も何度も繰り返し返した中で全てを話した瞬間、立て続けに自分か湊もしくは奏子が死に、そこでその周は終わってしまったのだから。

はじめからやりなおし
ゲームオーバーは迎えたくない。

この周で終わらせるためにも、言うわけにはいかないのだ。

「…わかった」

納得していない顔で納得したような言葉を吐きだした湊は目を閉じてパイプ椅子に座った。

騙す形になって本当に申し訳ない。でも、湊と奏子にとっても、そのほうが良いと思うのだ。

これは、しらなくていいことだから。

5 / 10 (日) 夜

「と、いう事で俺はしばらく…長くて一カ月ほど戦線に復帰できないから。湊、奏子、臨時の現場リーダーよろしくね」

「はいー！」

「…うん」

「あまり無理せず、昨日俺が言ったことは忘れて二人は二人のやり方でリーダーをやるんだよ」

夜にリーダーの交代を伝えるとそれぞれの返事が返ってくる。

結局、一日たつてもうまく左腕が動かないので「戦闘に参加するのは禁止」と美鶴さんからお達しが出た。

代わりに、真田くんが復帰する予定らしいので少し間があるが入れ替わりになる点は安心だ。

あまり役に立っていない自分が抜けたところで大したことにはならないだろうとは思いますがそれでも心配なものは心配だ。

「それとこれとは別にもうすぐ試験があるし、わからないところがあればいつでも訊きにきていいからね」

こちらだけ探索が休みのようなものはやはり申し訳ないので学業の面だけでも力になりたい。

自己責任なのでそれはなおさら。

「やったー！ 頼りにしてるね、お兄ちゃん！」

「奏子：ギリギリまでサボって順平と一緒に優希に頼ろうとしてもダメだよ」

「うぐつ、そ、そんなことしないもん！」

「はは…まあ普段の勉強も頑張つて、ね…」

苦笑いする。奏子は夏休みの宿題を最後に残すタイプだ。一応、毎回毎回岳羽たちとちゃんとやっているように見えるから大丈夫だとは思いますが夏休みは気を付けておいてあげようと頭の隅にメモをしておく。

ちなみに、病気の事は湊以外には話していない。もちろん、奏子にも。

これも「言うべき時に言うから」と湊の口に蓋をしたのだ。

「優希も無茶しないでよ」

「そうだよお兄ちゃん！ この前みたいな無茶はしちや駄目だからね

！ 痛いときはちゃんということ！ 重い荷物は持たないこと！」
「分かってる」

「ほんとかなー」

困ったように湊と奏子で顔を見合わせられるとこちらとしても何とも情けないものが込み上げてくる。

自分で言うのもなんだが信用されていない。そりやそうだ。信用に足る行いをしていないのだから。

5 / 13 (水) 放課後

学校も終わり、放課後になったのでモコイさんと二人でぶらぶらする。

カバンを担いでいるのは右肩なので怪我をしたのが左腕で本当によかつたと思う。

「チミも災難っスね」

「自業自得だから仕方ないよ」

今日はポロニアンモールで珈琲でも飲もうか、とモコイさんに告げて歩き出す。

そして着いた自分とモコイさんを待ち受けていたものとは――

「占めて100万円からスタートでございます」

「エリザベス…ちが…」

「分かりました。これは手を洗うところでしょうか?」

「違うからね!!」 まだ正解に近いベスの説明聞いてた!?

噴水に、コインが滝のように落ちていく。

噴水の横には湊と奏子。そして青い姉弟。エリザベスとテオドアだ。

時期が遅い気がするがポロニアンモールの案内でもしているのだろうか。

…:みなかったことにしよう。

彼女らにかかかわるとロクなことにならない。

散々振り回されてポイがオチだ。湊と奏子には悪いがここでじやじや馬の犠牲になってもらうしかない。南無三

「あら、貴方…随分と面白いものを連れているのね」

心の中で合唱して離れようとした瞬間、声を掛けられ反射的に振り向く。

金糸のような髪に青い服の女性が立っていた。彼女はどこからどう見ても…

(あつベルベットルームのヤバい人だ)

ベルベットルームにいる、イゴールの従者たるマーガレットがそこに立っていた。ちなみにその噴水で大興奮している姉弟の姉だ。

見た目はThe・大人の女性といった感じだがヤバいのはその強いイケメン好きなどころだ。

まあその『強いイケメン大好き』というのも繰り返しの中でエリザベスとテオドアから聞いただけであり、自分はその時「ああそう…」とほぼほぼ無関心に聞き流しただけだったのであまり実感はない。そもそもベルベットルームの人たちと関わり合いたくなかったというのが大きい。

「ふふ、そう緊張しないで頂戴。今すぐ何かしようというわけじゃないわ」

「それに、手負いの獣と弱小悪魔を狩る趣味はないもの」とギラギラした目で告げたマーガレットに思わずモコイさんの乗ったカバンを右腕で抱きしめて後ずさる。

——この人、ナチュラルにこちらを獣呼ばわりしたどころかモコイさんの事が見えている。

というかなんでここにいるんだ。どうして自分なんか話しかけてきたんだ。と混乱する。

そもそも、こちらのことを「いくら打っても響かないお方」と言ったのはこのマーガレットだ。

色々むちやくちや言ってるのは何となくわかるし、三人の従者の中で一番苦手な存在ともいえる。それならまだ噴水に100万円の500円硬貨をぶちまけていたエリザベスの方が話が通じるような気がした。

「そういえば、貴方…その様子だとまだ気づいてないのね」

こちらの頭の上からつま先までをさっと見下ろしたマーガレット

が聞いてくる。

気づくも何も主語がないとわからない。

「な、なにを…?」

「いいえ。気づいていないのならいいわ。今はまだ、知るべき定めではないもの、ね? 貴方が越えるべき試練に直面したときまた会いましょう」

勘弁してくれ。

これ以上あの青い部屋の住人とは関わり合いになりたくないのだ。面倒だし疲れるし厄介ごとを運んでくるしこちらに利益があまりない。

マーガレットの口ぶりからするとまた会いに来るかこちらが無理やり呼ばれるかのどちらかだ。

自分に何か用でもあるのだろうか。1人だけ“客”が居なくて暇とか…?

そんなはずないか。と華麗に去っていくマーガレットの後ろ姿を見つめる。

「何なんスかあのベツピンレディーは。チミのガールなフレンド?」

「断じてそれは無い。そもそもタイプでもない。とにかくやばい人、かな…興味はなさそうだったけど一応モコイさんは見られてるし気を付けてね…」

そもそもタイプでもない。と断言した瞬間、悪寒のようなものがした気がしたけど無視することにした。

気のせいのはず…たぶん…

結局、ベルベツトルーム三人衆とんでもないじゃや馬どもに巻き込まれたくないので珈琲は無し。

酷く疲れた気になってとぼとぼと歩いて帰る。

初めに襲われた時以来、悪魔に襲われていなかったのもあり大分気が抜けていたのだろう。

自分は、誘われている“ことに気が付かなかった。

「チヨイマチ、チミ! 道間違ってるっスよ!」

「えっ…あ、ほんとだ。いつもはこっち通らないのに…」

モコイさんの指摘にはた、と足を止める。

いつもなら通らない道。薄暗いそこは夕方という事もありかなりじめつとした生暖かい風を噴出している。

「スグ帰るっスよ。ここは少し『マガツヒ』の流れが濃いからネ」

「『マガツヒ』？」

足を止めて首を傾げる。

初めて聞く単語だ。

「『マガツヒ』はボクら悪魔のエネルギー源っスね。他にもマグネタイトとか赤玉とか色々あるっスけど、コレ。ゴハンみたいなものだと言えといてネ」

「へえ…」

「こうして澱んでるところはとつても濃くて、デリシヤスで、悪魔も寄つてきやすいのね。つまりとつてもデンジャァー」

再び息をのむ間もなく、踵を返す。そんな危険なところに万全の状態ならいざ知らず、怪我をしている今、要はない。

「じゃあ早く戻らないと」

「あく…ダメだね、もう『巢』に入ってる。誘いこまれちゃった、ネ」
「ごめん…」

振り返れば、いつもの道は消え失せ、タルタロス内部のような迷路に迷い込んでいた。

そして奥から獣のような唸り声が聞こえる。この前見たガキとはまた違う悪魔なのだろうか。

「どうすれば出られる？」

「『巢の主』を倒せば、いけるんじゃないかな」

「主か…」

思案する。

一応ナイフを持ってきてはいるが片腕が使えない。ペルソナも使えるかどうかかわからないこの状況で、たとえモコイさんがいるとしても巢の主を倒して抜け出せるのだろうか。

「まあイケてるボクとチミにかかればスグだよスグ」

ひよいとバツグから降りたモコイさんが得意げに手に持ったブー

メランを振り上げる。

頼もしい限りだが、おんぶにだっこは嫌なのでナイフを取り出していつでも応戦できるようにしておく。

迷路状になった道を進む。

空気中に、赤いおたまじやくしのようなものが流れていることに首を傾げながらも警戒は怠らない。

ぞわり、と肌が泡立った瞬間、曲がり角から影がとびだしてきた。

「グルルツ！ ニンゲン！ ウマソウ！ オレサマ、マルカジリイイッ！」

二つの頭を持つ獅子——あれは湊のペルソナで見たことがある。
“オルトロス”だ。

火炎は効かなかったはずだが、物理攻撃に対する耐性は特に持つていないと思うので飛びかかってきたところを横に避けて切りつける。シャドウとは違う、肉を切る感覚に顔を顰めた。

「ギャウー！」

「【ジオ】、いくつスよ！」

モコイさんがジオを放つ。

それが直撃し、痺れたように地に伏せるオルトロスを見たモコイさんは『ニヤリ…』と笑ったような気がした。

「もう一発っス！」

先ほどよりも大きな、威力の高いジオを浴びたオルトロスは断末魔を上げる暇なく赤い粒子となって消えていった。

とりあえず一匹目は何とかなったようだ。

息を吐く。

「この調子でドンドン進むっスよ」

その後は危なげながらもここにいる悪魔自体はモコイさんの敵ではないらしく、モコイさんの言葉通りにドンドン進む。

三体の悪魔に囲まれたときはどうなるかと思ったが、モコイさんの『マハジオ』で何とかなった。電撃耐性や無効をもつ悪魔が居なくてよかった、と内心胸を撫でおろす。

しかし今のところモコイさんのジオ頼りになっているのもダメな

気がする。ジエムを持っていけば放り投げるだけで魔法攻撃を使えて便利だったのだが生憎とそれらをタルタロスで発掘する前なので手持ちが一つもない。

「モコイさん、頼りきりになるけどごめんね」

「ノープロブレム！」

きびきびと腕を上げたモコイさんに微笑む。

自分もモコイさんも軽い切り傷や擦り傷は出来ているが直撃はほとんどしていない。

「この奥、マガツヒがより濃いつスよ。オオモノの予感！」

「巢の主が居るのかな…気を引き締めていこう」

一歩、足を踏み出す。

——バササツ！

「ニンゲン！ ジブンカラ、エサニナリニキタカ！」

獅子の頭に青い鳥の身体。

翼を使い、器用に飛ぶそいつの名前を自分は知らない。

「アンズーは聞いてないつスよ…マズマズさんだネ…」

モコイさんが今までとは違う、真剣な声色で下がる。

「チミ、逃げるつスよ！」

「えっ」

「こいつはヤバすぎるつス！ シビシビが効かないやつで、チミとモコイさんの手には負えな…ぎやつ！」

シビシビ…【ジオ】の事か？と言う暇もなく、モコイさんが横に吹っ飛んだ。

「ゲキヤキヤキヤキヤ！ ジャマダ！」

「モコイさん！」

モコイさんが何度も跳ね、遠くに転がる。アンズーとやらに蹴られたのだ。

ぴくりとも動けないようだが消えてはいないので死んでしまったわけではなさそうだ。隙をみて抱えて逃げないと。

「サテ、臍物ヲヒキズリダゾウカ！ ソレトモソノ目玉ヲ喰ラオウカ！」

不味い。

モコイさんに興味をなくしたのは運がよかったが、こいつは意思をもって自分を甚振り殺すつもりだ。

じりじりと距離を詰められる。こんなところで死ぬわけには行かない。
死にたくない。

(せめてペルソナが使えれば……！)

片手で銃を使うとナイフを手放してしまうため、召喚器で召喚を試すことはまだしていない。

気を抜けば今にも食いつかれそうで、一瞬でも隙を見せたくはなかった。

片腕さえ使えればこんなに緊張せずとも済んだのに、と周回を始めてすぐのころのタルタロス探索を思い出す。

あの頃は、特別課外活動部の皆の事がよくわからず、寮暮らしだったりそうじゃなかったこともあって1人だけで手探りしながら登っていたのだ。そこから鉢合わせして入寮したり、敵と間違われたり、ストレガに誘われたり、エトセトラエトセトラ……

(随分と懐かしいな……あれ……そういえば)

最近は何特別課外活動部に入部してからタルタロスに登っていたのを忘れていたが、召喚器なしでもペルソナを召喚できる事を忘れていた。

「召喚器が無いと召喚できないもの」だと思っていたが焦った時やヤバい時は勝手に出していたじゃないか、と今更ながらに思い出す。

そもそも、聞いた話ではペルソナ使いは基本的に召喚する際は銃を使わない、のどか。特別課外活動部の面々が特別なのだ、とか。

この話は誰から聞いたんだっけか。そもそもペルソナ使いがほかにいるってなんだっけ。忘れてしまったけどそんな話を聞いた覚えがある気がする。

(それなら、もしかすれば、ここでも……)

できるかもしれない。

そう自覚した瞬間、力が湧いてくる。

——さあ、私を早く呼んで：

声がする。今か今かとその時をそれは待っていた。

モルペウスでも、ポベートルでも無いそれが。

脳裏で記憶にないはずの女性が優しく微笑んだ気がした。

「ペルソナッ！」

青い光が自分を包む。

衝撃波が巻き起こり、アンズーを跳ね飛ばす。

そして背後に現れる像^{サイジョン}。

「♪パンタソスッ！」

パンタソスは虚ろな黒いドレスを翻す。

長い髪に周りを漂う水。青い炎で隠された目元からは血の涙を流している。

四肢のない彼女は魔力をかき集め、アンズーへとぶつける。瞬間、大きな嵐を凝縮したかのような風がアンズーを切り裂いた。

「ギヤアア！」

『ニヤリ』と嗤う。

倒れていないのならそれでいい。もう一撃だ、と放つ。

「【ガルダイン】」

「バ、バカナ：異能ニメザメルダト……グギヤッ！」

こんどこそ、耐え切れないほどの風の奔流を食らいアンズーは細切れになった後消滅した。

モコイさんを片腕で抱えて道を歩く。

菓の主だと思われるアンズーを倒した後、景色は元に戻った。モコイさんの話は本当だったようだ。

「…アレ、ボク、生きてる？」

「生きてるよ。大丈夫？ モコイさん」

抱えているモコイさんの目が覚めたらしい。

警戒するように周りをきよろきよろとみるモコイさんに頬が緩む。

「そんなことよりチミ！ アンズーはどうしたの！」

「運よく倒せたよ」

そう言えば、モコイさんが驚いたような顔をした。

「ワオ、ミラクルが起きたんだネ」

「そんな感じかな」

会話が続いたのはそこまででモコイさんは詳しくは聞いてこなかった。

それが酷く心地よく、慣れてしまったこの関係に甘えているような気がして少し申し訳なかった。

他のみんなに隠し事をしているからこそ、余計そう思ってしまうのかもしれないけれど。

天啓を告げる (5/16〜5/26)

5/16 (土) 放課後

巖戸台駅前商店街

たこ焼き オクトパシー前

「今日は大丈夫だと思うから…レッツトライ!」

「チミの妙なその自信はなんなの…?」

モコイさんを連れ戻ったたこ焼きを食べに来た。

ゴールデンウィークに食べに行ったときはモコイさんがゲロゲロになった(ソフトな表現)ので1人で今日は完食する。何と言われようが完食するのだ! たとえ、食欲がなくなるとも! やろうと思えばイケるしやれるはずだ!!! たぶん。

数分後。

「う…もう駄目…美味しいのに…食べたいのにこれ以上は入らない…夜ごはんは無理だ…」

「だから言ったじゃないスカ…」

謎のたこ焼きに完全敗北していた。

全然大丈夫じゃなかった。

さいごの一個がどうしても食べられない。しかしこのまま捨てるとかゲロゲロになったモコイさんに食べさせるとかいう選択肢はない。

「が…がんばれば…うう…やっぱ無理だ…」

割り箸を伸ばそうとしては吐き気が込み上げ戻す。伸ばそうとしては戻すを繰り返す。

もったいないしやはりだめだという現実をたこ焼き一個に突き付けられてとても情けないし辛い。

いち男子高校生がたこ焼き一つに苦しめられているとはだれが思うだろうか。可愛く鎮座するたこ焼きがこちらを見つめている。

「ねえおにいちゃん、それ、要らないなら貰ってあげるね!」

ひよいと、横からつまようじでさいごの一個のたこ焼きが搔つ攫われる。

反射的に横を向けば、金髪の幼い少女。

「ん〜おいし〜〜！ ありす、こんなの食べたの初めて！」

嬉しそうにもぐもぐとたこ焼きを咀嚼する少女はまさに外国のお人形のような可憐な容姿をしていた。青いスカートに白いカチューシャ。

少女の発した『ありす』という名前通りそのまま不思議の国から抜け出してきたかのようにだった。

「ごちそうさまでした！ …おにいちゃん、ありがとう！ …ところで…そのお人形さん可愛いね！」

少女はモコイさんの事が見えているようだ。

しかしモコイさんは動かない。喋らない。あくまでもぬいぐるみのフリをしていてくれるのだろうか。それならそれでありがたい。

「そのお人形さんのこと気になるの！ だからありすにも触らせて？」

少女が言う。

その言葉になぜか違和感を覚え、口は勝手に否定の言葉を吐き出していた。

「…うーん、大事なものだからだめかな」

「ぶー、けちー！」

「ごめんね」

謝罪すればコロリと少女は笑う。

そしてスカートを翻しながら一回転した。

「いいよ！ …でもそのかわり、おにいちゃんがありすのお友達になって！」

少女の友達になるくらいなら良いかな…と妥協の心が芽生える。

そもそもこんな無垢な少女に何か危害を加えられるはずもなく。むしろこちらがそういう目で見られかねないけれども…ここでこの程度のお断りを断って泣かせてしまうのも何とも忍びない。

「わかった。友達になろう」

「ほんとうに！ ありがとうおにいちゃん！ ありすはね、ありすだよ！ …おにいちゃんのお名前はなあに？」

「優希。三上優希だよ」

「じゃあねー、ユーキおにいちゃん！ ね、ね！ 遊んで！」

名前を告げれば花が咲くように笑うありす。

純真無垢なその笑みに、何を警戒していたのだろうかと考えた。

ありすは嬉しそうにベンチの周りをぐるぐると回る。そういえば、この子は一人なのだろうか。親御さんは？と不安になる。

「うーん、ありすちゃんはお父さんかお母さんと一緒にやないの？」

「んー、おじさんたちがいるけどいまはいつしよじゃないの！ ありすは『おるすばん』なんだって！」

聞くと、ケロつとした顔でそう答える。

恐らく、親戚の人と一緒に旅行か何かでここにきて、買い物か何かで一人待ちぼうけかなにかなのだろうか。

なんとというか、こんな小さな少女を街中に置いていくなんて色々と問題のある親戚に感じる。

「おじさんたちが迎えに来るまでならいいよ」

とりあえずそのおじさんたちが迎えに来るまでなら付き合おう、と首を縦に振る。

「なにして遊ぶ？ お人形さんごっこ？ おにごっこ？ それとも――

――あ、

なにをして遊ぶのか、ありすが決めかねていると突然後ろを振り向いて小さく声をあげた。

そして、シユン：とかなしそうな顔になる。

「もうおじさんたちが来ちゃった：ありす、帰らなきゃ。じゃあね、ユーキおにいちゃん。ばいばい」

止める間もなく走り去っていく少女の後ろ姿にまるで嵐のようだったと感じる。

完全にあの子のペースに乗せられていた。

小さいころの奏子もあんな感じだったのだろうか、と思うと随分微笑ましい。見た目は全然違うし、ありすのほうは外で遊ぶような活動的な子には見えなかった。

どちらかというところ、静かに屋内で絵本を読んでいるような子に見える

る。

「…………ハッ！」

ありすが居なくなつて数分ほどして、帰り道の途中でモコイさんが目を覚ましたかのように声をあげた。

まだ人形のふりをしていてくれていたのかと抱えて帰っていたがどうやらそうでもなさそうだ。

「ボクちゃん気がナイナイくんだった…」

気絶していたらしい。

そんなに人形のフリが負担だったのだろうか。

「ごめんねモコイさん、ぬいぐるみのフリはしんどかった？」

聞けばきよとんとした顔のモコイさんがこちらを見つめる。

「はへ？　ぬいぐるみのフリをしてたつもりは無いっスよ？」

「え？」

「イキナリ寒気がして、ボク、風邪カナ…？」

ぶるりと身震いするモコイさん。悪魔にも風邪とか病気はあるのだろうか。

とにかく、

「早く寮に帰って今日は暖かくして寝ようか」

好きなものを作って部屋に持っていくから、と告げると途端に嬉しそうな顔になる。

「モコイさんは牛丼が食べたいナ！」

「うんうん、わかったよ。うみうしの味は真似できないけどちやんと作るからね」

「ラッキー！」

なんだか、ありすという少女とはまた会えるような、奇妙な縁を結んでしまったような気がした。

5 / 18 (月) 朝

中間試験開始　イーーーーー!!!!

ちなみに昨日、湊が予測した通りに伊織と奏子が泣きついてきた。

ちようど良かったので二年生組を集めて勉強会を3時間ほど行った。

伊織はともかく奏子はコツさえつかめば勉強できるタイプだったらしいのでそこまで苦ではなかったけれど…

伊織は…伊織は基礎からダメだったのでまずはそこから教えることにしたが恐らくこの中間試験には間に合っていないだろう。

赤点をぎりぎり免れるかそれより少し上かぐらいになれば上々なくらいかもしれない。

岳羽は良くも悪くも平均的な感じだ。応用が少し苦手なようだが問題なさそうなラインだ。

湊についてはノーコメントで。

というよりこちらが教えることが何もなかった。

全教科パーフェクト。応用についても申し分ない。課題もすでに終わらせて予習復習まで済ませているのには驚いた。マジで何もいう事がなかったのだただ居るだけ、みたいな感じになってしまったのは申し訳なかった。

いや、「居たくなかったら自由に席を外してもいいから」とは言っただ。でもなぜか席を立つことなくたまに伊織をからかいつつ最後まで同席していたのだ。

と、昨日の事を思い出しつつ答案に答えを書き込んでいく。

調子がいい。

というより既に覚えてしまうほどにやった中間試験なので答えは全て暗記のようなものになってしまっている。

数学や計算の問題も計算する前に頭が覚えた答えを吐き出して手が勝手に書いている、という感じになってしまったのは悪い兆候な気がする。

どうせ強さもリセットされるなら学力の方もリセットしてくれれば勉強に毎度身が入るのに…と贅沢な要求をしてみる。

そうなればそうなったで酷く不便なのでやっぱりなしで、と撤回した。

楽しいっちゃ楽しいのだろうが面倒くささが先に来そうな気がし

て学力リセットがなくて良かったとすぐに掌返しをする。
(ここはこれだったな…)

5/22 (金) 放課後

中間試験終了!!!

解放された~~~~~!!!!

と思っっている学生も多いだろう。実際、自分もそうだ。

楽だとは言っても過ぎる時間は同じなので退屈すぎる。それに、自分はずっと1位になるような点を取らないようにしているため適当に問題を空欄で開けているのだ。

その時間も加味して物凄く暇になっている。…ので寝た。

お蔭で体がすごくだるい。絶対にいつもより多めの睡眠時間をとっている気がする。

「……だる……」

「お兄ちゃんがそんなこと言うなんて珍しいね。羨ましい」

「んー…そうかな」

そんなに自分は怠そうにしないのだろうか。結構な頻度で怠いなーとは思っているのでそういわれると意外だ。というか湊はそんなに怠がつているのか。

リーダー業がやっぱりしんどく不安なのだろうか。

栄養ドリンクか何かを差し入れるか朝食の栄養バランスを見直すべきなのだろうか…としなびたポテトを口に入れながら考える。

今日は試験終わりという事で奏子とワックことワイルダック・バーガーに来ていた。

モコイさんは筆記用具と最低限のノートしか入っていないカバンの中に入っている。

寝ているのかとても静かだ。

本当は伊織や岳羽も誘いたかったし湊も誘ったのだがみんな用があるらしく断られてしまった。

「なんかちよつと顔色も悪いよ? まさか、隠れて無茶してるんじゃない」

…」

「ないない」

奏子の心配を笑って一蹴する。

あれ以降、悪魔の巢に入ったこともなければ隠れてタルタロスにいくなんてこともしていない。

やつても精々モコイさんと帰りに食べて帰るくらいしかしていないし夜は出歩いてすらない。夜の食事をモコイさんと一緒に食べて軽く勉強して影時間前には即就寝。タルタロスの探索がある際はついていって美鶴さんの手伝い兼周囲の警戒。

自分からすると珍しいくらいに品行方正な怪我人生活を送っているので顔色が悪いと言われても原因に心当たりがない。

(そんなに顔色悪いかな…)

寝すぎで怠いだけであって、体調が悪くてしんどいわけではないので健康的な生活も相まって顔色は良くなるはずなのに悪いとは納得がいかない。

「…私の気のせいかな」

「ちゃんと夜は寝てるしリハビリの為に病院にも行ってるし心配しなくても大丈夫だよ」

「そうならいいけど…あ、そういえば」

何かを思い出したような顔で人差し指を立てて顔をあげた奏子は話題を変えた。

「同じクラスだね、山岸風花ちゃんって子がいて…」

ここでそう来たか。

山岸風花。美鶴さんの代わりにナビゲートをしてくれることになる二年生組最後のメンバーだ。感知能力に長けたペルソナを扱う無くてはならない存在であり劇物作成のプロ。とんでもないものを生み出す子

確かこの後すぐ位に体育館に閉じ込められることになってタルタロスに迷い込むんだっただか。

「なんだか虐められてるっぽくて…力になってあげたくて、『虐めてるやつらなんかぶっ飛ばす!』って言ったんだけど引かれちゃったみたいで…うー、どーしよ…」

「虐め、か…」

難しいところだ。余所者が下手に首を突っ込む事は良くない。

事態の悪化を招きかねない事もあるからだ。しかし、それを見過ごし止まるような奏子ではない。

「とりあえずぶっ飛ばすのは無しにして、学校にいる間だけでも寄り添ってみるのはどうかな。ちよつと声をかけるだけとか、一緒に昼食を食べるとか、それだけでもしてもらった側は嬉しいかもしれないね」

もちろん相手の迷惑にならない程度に。とつけ足せば奏子の顔が少しだけ明るくなる。

「うん…」

「奏子も虐められそうになったらいうんだよ。その時は俺が何とかするからね」

なんとかするとはなんとかすることである。

やり方は企業秘密だ。ごによごによして合法的に虐めを解決させる…のではなく普通に二度と虐めなどできないようにしてあげるだけだ。

繰り返すようだが企業秘密だ。

でもそんな時は来ないだろうなと何となく思う。自分の手など借りなくても奏子は虐めを跳ねのけることのできる強い心の持ち主だ。心だけでなく腕力もそれなりにありそうな気もするけど。

「私、バツチリ風花ちゃんを守れるように頑張ってみる」

「無茶はしないように、ね」

「お兄ちゃんじゃないんだから無茶はしないよ」

ドスリとキツイ言葉が心に刺さる。最近、無理・無茶をする⇨自分という不名誉な図式が出来上がっていないだろうか。まだ二回だぞ、とは言わないでおく。しよっぱなから二回連続無理するのは途中で間隔を開けて二回無理するのでは意味もインパクトも違いすぎる。

「あはは…ふえくしー!」

「お兄ちゃん、暖かくして寝てね?」

「ん…善処する…」

これではどちらが上なのかわかったものじゃないな、と苦笑いした。

5/23 (土) 夜

「先輩、全快したそうですね！」

「おめでとうっす」

「おめでとうございまーす！」

「おめでとう、真田くん。後遺症がなさそうによかったよ」

「……おめでとう、ございます?」

「なんで疑問形なんだ有里弟」

寮のダイニングテーブルに集まった二年生がわいわいと真田くんの復帰を祝っていた。

湊だけが疑問形だったが。

「……まあいい、復帰メニューも山積みだ。まるひと月サボってたワケだからな」

「急に無理すると、また折れちゃいませんか?」

「そうも言ってられない。三上が抜け、新たなペルソナ使いも見つかったしな」

新たなペルソナ使い、という言葉に伊織と岳羽が驚く。

「おおっ!? 新戦力って事スか! もしかして女子とか:!?」

上ずった声で伊織が期待する。

なんとというか、普通の高校生だなあと感じる感じがした。真田くんはそもそも女子の扱いに困ってるし湊は:湊は良くわかんないし、荒垣君はオカンだし自分は無頓着というかそもそも意識すらしていない。もしかしたら真田くんと近いタイプかもしれない。女子の扱いにはそもそも自分に人気がないので困っていないが。

伊織をジト目で見つめる奏子と岳羽に気が付かなかったことにはいたのでみなかったことにした。真田くんは素で気が付いてないようだったけれど。

「女子だ。ウチの高等部二年のな。: 山岸風花」 : 四人とも知って

いるか？」

「風花ちゃん!? 知ってるも何も…同じクラスの友達だよ! …じやなかった友達です!」

今日なつたばかりだけど! と付け足した奏子の行動力に驚く。さつそく行動してグイグイ行つて友達になつたらしい。凄まじい行動力。俺じやなきや見逃しちゃうね。

「奏子ちゃんてばいつの間…:と…:うかなんか、体が弱いとかで、学校ではあんま見ないような…」

岳羽の言葉に軽く真田くんが頷いた。

「俺たちの居た病院へ来てたらしい。それで『適性』が見つかった。しかし、素養があつても体がそれじゃ、戦いは無理かもな。…:召喚器も用意したんだがな…:」

悔しそうにつぶやく真田くん。

大丈夫、その心配はないと思うよ、とは告げない。

「ええっ、もう諦めちゃうんすか!? せつかくオレが、手取り足取り、個人レッスンとか…」

「…:」

岳羽と奏子、二人分の残念なものを見るような視線が伊織に突き刺さる。

「ナニ? そのかわいそうな動物を見るような目は」

「まるで明日出荷される養豚場の豚を見るような目だよね」

「ブタア!? 湊つてば結構酷いことオレにぐいぐい言うよな!」

「…:…:どうでもいい」

「どうでもよくねーっての!」

結局、その日は順平が茶々を入れたおかげで話が有耶無耶になつてしまったので何となくで解散となつた。

5 / 26 (火) 昼

今日は中間テストの順位が発表される日だ。

順位は…:学年7位。悪すぎず目立ちすぎない中々いいラインだ。

学年1位をぶつちぎって目立つのはあまり好きではない。文武両道とか正直めんどくさい。

隣の二年生の結果を見る。

湊が：学年1位。まあこれはなんとなく分かっていたことだ。

奏子が30位くらいに入っていた。まずまずだろう。

深夜

いつも通り影時間前にベッドに入り瞳を閉じる。するとすぐに眠気がやってきて、眠りに落ちた。

——はずだった。

「……は……」

目を開く。視界いっぱい広がるのは一面の青。

かすかにピアノで奏でられる『月の光』が聞こえる。

「目覚めたようね」

「——っ！」

顔を跳ね上げる。青だと思っていたのはベルベツトルームの床だったようだ。

水槽が一面を取り囲み、水面が月光を反射する。まるで水族館のようなそこは、湊や奏子のベルベツトルームとは大きく違っていた。

そして正面の青いソファにはイゴールにマーガレットが座っている。

「もうすぐ、ですな。貴方様はついに来るべき試練に相對するでしょう」

もったいぶったイゴールの言葉に顔を顰める。

本当に、この住人は具体的には語ってくれない。

「我が主より命を受けた私どもの方から、貴方様への贈り物を致したくお呼びしました」

「これを。受け取りなさい」

なんだか不機嫌そうなマーガレットが机の上に何かを置く。

それは、小さな燭台だった。手のひらサイズのそれは、先端で不思議

議な青い炎が揺らめいている。

「その『メノラー』を肌身離さず持つことです…そしてその炎が燃え上がり、燭台が熱くなったときに貴方様は試練に直面する」

口が動かない。疑問を口にすることは許されていないようだ。

体が勝手に燭台それを手に取る。ほんのりと暖かい。

「その炎は何かに燃え移ったりすることは無いから安心して頂戴」

自分の心を読んだのかと思うタイミングでマーガレットが口を挟む。

とにかく、試練というモノが何かわからないがこの小さな燭台が熱くなって炎が大きくなった時に何か来るらしい。

大型シャドウのようなものなのだろうか。

そうなるのであればそれですとも面倒くさい。

「湊や奏子に…関係は無いんだろうな」

ここではじめて口が動いた。

なるほど、ここではしている質問としてはいけない質問があるのかもしれない。

「その点は問題なく。関係あるのかと言われればあるけれど、直接的な関係は無いわ。あくまでも、貴方への試練ですもの」

そうかそれなら問題ない。

口角が上がる。

「まあ」

驚いたような声を出しつつも表情を変えずにマーガレットは驚いたようなしぐさをする。

が、しかしすぐにぴんと姿勢を伸ばしペコリを頭を下げる。

「それでは、『お客様』。また『次』に最初の試練を乗り越えてからお会いしましょう」

ここで初めて、マーガレットが笑ったような気がした。

黒い男（5／27～5／30）

5／27（水）夜

「やあ、三上君。1人で晩御飯かい？」

（げ…）「ええ、まあ」

モコイさんは先に部屋に帰り、夜の食事を一人でとっていたところを、入口から入ってきた幾月が目ざとく見つけ話しかけられた。失敗した、ラウンジで食うんじゃないか。

じろじろとみられるのは随分と居心地が悪く、そっけない返事を返してたい焼きをほおぼった。

「男子高校生というものがまさかたい焼き一個で済ませているわけないよね？」

「そのまさかですよ。今日は甘いものが急に食べたくなって、それです」

そう返事を返せば幾月は心配そうな顔で寄ってくる。

「それはそれは…妙だね。以前の君なら甘いものと言ってもケーキワンホールくらいはぺろりと食べていたんじゃないかな？ それだけだなんて急に減りすぎてる」

（チツ…）

「腕の怪我もあることだし、どこか具合が悪いんじゃないのかい？」

目ざとい奴。と内心で舌打ちする。

こういうところがあるから幾月という人間は面倒なのだ。じろじろとまるで実験動物^{モルモット}を見るかのような視線で舐めまわしてくる。

気持ち悪い。

「心配には及びません。今日は帰ってくるまでに買い食いとかいろいろしてたんで晩御飯とは言っても夜食レベルの軽食にしようと思っていたんです」

「おや、君はこの寮に来てすぐの頃に夜食と言ってラーメンを二杯食べていたような気が… 僕の気のせいならいいけれど」

ああいえばこういう。

こちらが感知していないことまで引き出しから出してくるこの男

の事は本当に苦手だ。

しかしそれなら相手の言葉に乗らせてもらって気のせいという事で済ませて貰おうじゃないかという気になった。

最後の一口であるたいやきのしつぽを口に放り込んで包み紙をクシャリと丸めて席を立った。

「さあ…気のせいじゃないんですかね？　ごちそうさまでした。それじゃ俺はこれで」

ラウンジのゴミ箱に丸めた紙を捨てることも忘れずにやる。

しつこく聞いて来たり聞かれなさと答えなかつたり深追いをしない幾月の性格はこういう時にありがたい。

あいつは特に闇の皇子（笑）の計画をばらしたりそれを察したような行動をとらない限り直接的な危害を加えてくるタイプではないので放置でいい。個人的に嫌いだし。触れたいとすら思わない。近づかれると蕁麻疹が出そうになる。

そのままドアを開け、外に出る。

今日ぐらいは深夜徘徊ならぬ夜徘徊しても怒られないだろう。

そもそも怪我をしても夜徘徊もとい外出は許可されているのだが、あんまり出回りすぎても心配されてしまうので出ていなかった。

しかし！今日は緊急事態（幾月と同じ空気をこれ以上吸いたくないという理由）なのでこれくらいは許してほしい。

（あ…モコイさんを部屋に置いてきてしまった…）

発作的に飛び出したためモコイさんの居る自室に寄るのを忘れていた。

まあでも一、二時間くらいしか出歩かないだろうし…と気楽に考えながら駅へと向かった。

クラブ エスカペイド

ポロニアンモールにあるクラブに遊びに来た。

厳密には遊びに来たのではなく、ボーっとして来たというべきか。

この絶妙にうるさい感じとぴかぴか光るライトで幾月によるスリップ精神ダメージを何とか上塗りしてごまかそうという魂胆だ。

正直、CDシヨップによってCDの視聴でもしていた方がよっぽど気が紛れるのだけれども今日はなんだかこの方がいい気がしたのだ。

壁にもたれかかってボーっとする。

クラブの音楽は騒がしいが嫌いじゃない。ただ、個人的にはピアノだったりバイオリンだったりを使う静かな曲が好きなだけで。

それを考えるとベルベットルームの謎のBGMは中々にいい曲だと思う。すごく落ち着く。

なんて考えていたらサングラスにスーツの男がカクテルグラスを片手にこちらに寄って来た。

いかにもやり手そうな男だ。ボディガードとか社長とかやってそうな感じでもある。

「きみは高校生かい？」

「……はい、そうですけど」

そんな「いかにも」な男が自分になんの用なのだろうか。

「そうか……夜も更けてきたことだ。未成年がこんなところにいるのはあまり感心しないな。親御さんが帰りを心配していないかな？」

普通に非行少年じゃないか確かめられているだけかもしれない。

「いえ、大丈夫です。ちょっと嫌なことがあつて気晴らしに来ているだけなので気が済んだらすぐ帰ります」

「そうか、ではその「嫌なこと」を私に聞かせてはくれないか？ 私もね、ここへは気晴らしに来ているんだ」

ナチュラルに壁際の椅子に座りかかった男はどうやら自分から離れるつもりはないらしい。

まあ大した事でもないので適当にオブラートに包んでからにかわ膠にも包んで話せばいいか、と結論付けて口を開く。

「よくうちに来る親戚に苦手な方がいて、その人の対応に疲れたから……ですかね……」

「……ふむ」

「大したことないんですよほんとに。よく言うギャグは寒いしとんだ狸野郎とは思いますが、まあ見かけはいい人なので…」

何かを思案するようにカクテルグラスを持っていない方の手を顎に当てる男。

何か変なことを言ったのだろうかと首を傾げる。

「きみは、その親戚の人を信用していないのだな。それどころか、嘘までついている」

「なっ…」

「まず、苦手な人は親戚じゃないだろう？　そして大したことないというのも嘘だ。違うかね？」

なんでそこまでわかるんだ。

この男は何者なんだ。

「…まあ、冗談だがね。あてずっぽうの何の根拠もない男の戯言だ。そうだろう？」

「…うーん」

どうでしょうね、とごまかす。

正直こんなクラブであっただけの男性にごまかしを見破られるとは思っていなかった。

もしかしなくてもこの人も自分の苦手なタイプでは？　と思い始める。

一度関係をもてばずると引き摺られそうな、呑み込まれそうな心配がする。

「そうだ。代わりに私の話も聞いてもらえるかな？　高校生くん」

「まあ、いいですけど…」

ゆっくりと、カクテルグラスを飲み干す男にどうせ帰っても幾月がラウンジでお出迎えしてくるんだもんな…　と思いつく。

「私はね、昔事業で大きな失敗をしたんだ。これでもかつては会社の社長をやっていたね」

どこの会社かは秘密だ。と大人っぽく笑う男になぜか親近感を感じた。

「その時に高校生というモノを侮ってはいけなとよく学んだよ。彼

らの行動力は世界をも救い、変えてしまう」

何か事業でアドバイスを貰ったりしていたのだろうか。それとも、高校生に天才起業家が出て、事業の邪魔をされたとか、競合相手になってしまったとか、そんな感じなのだろうか。

「あの頃の私は青かった。そして無謀だった。万能感に支配されていたともいうな…」

苦い思い出なのだろうか。懐かしむような声色と、悔しそうな口元がそれを物語っていた。

「しかし私はそれを間違っていたとは思わない」

男はその苦い思い出を、呑み込んだ。

「人間は善と悪、光と影を決めたがる生き物だ。世間ではよく正義や光が良いものだ」とされているだろうか?」

「そうですね…」

日曜朝からやってる特撮ドラマ『フェザーマン』とか特にそうですね、とは言わない。

言ってしまうたらなんだか自分がそれを観ているような印象を持たれてしまいそうに感じたからだ。

「だがね、私は思う。光には光の役割があるように、影には影なりの役割があると」

確かに、フェザーマンは正義だけれども悪役がいないと成り立たない。まさか、今はこの人は執筆家でもしているのだろうか。

それならこの妙に聞き入る感じの語りにも合点が行く。

「確かに、そういうのは大事ですよ。表裏一体、でしたっけ。光ある限り闇もまた消えぬ」とか」

「ああ、そうだ。光ある限り、闇とは切って離せない」

面白そうにふふ、と笑う男は酷く上機嫌だ。

「今は何か物書きでもされてるんですか?」

「物書き…ふむ、そうだね、そういうことにしてくれ」

問いかけるとどちら付かずなあまりはつきりしない答えが返ってくる。自分も割とぼんやりとした答えを返しているのでもそこはお相手さまだろう。

「光はもちろんなくてはならないものだ。だが闇も受け入れねばならんのだよ、少年。清いだけでは影に勝つことはできない。勝てないとわかりきっていることでも、それを受け入れたうえであがき続けろ」まるでこちらの状況を読んでいるようなその言葉に、なぜか背中を押された感じがした。

「…と、らしくもないうんちくを語ったが君にはあまり必要そうには見えないな。むしろ君は…私とよく似ている。きみもそう思わないか」

「はあ…」

じつと見つめてくるサングラス越しの瞳が、闇をも吸い込む漆黒のように見えてたじろぐ。

本当はそんなことはないのだ。自分がこの男のえも知れない威圧感に押されているだけで。

「さて、そろそろ深夜に差し掛かろうとしているんじゃないかね？ きみはそろそろ帰るべき場所に帰った方がいい。夜の道は人ならざるものが出るという」

立ち上がった男は綺麗な足取りで壁際から離れる。もしかして、この人も影時間の事を知っているのか、それとも噂程度の話としてこちらを子供と見立てて脅してきているのか。

どちらかと言えば後者なのだろう。シャドウの研究をしていたとされる桐条のエルゴ研にこんな人がいたという記憶はないし話にも聞いたことがない。過去に在籍したことのある人なのかもしれないがそれともまた違う気がするのだ。

「そうだな…私は毎週水曜日の夜にここにいる。また会いたければくるといい。私としても、きみにとても興味があるのでね…一度きりというのは惜しい限りだ。また楽しいお喋りでもしようじゃないか」

手を出される。握手をしようということなのだろうか。

「はい、また」

差し出された手を握る。黒い手袋越しにしつかりと握られ、一瞬びつくりしたがすぐさまその手は離された。

男は満足したような雰囲気そのままクラブの奥へと消えていっ

た。

：帰れと言われたからには追う気にはならない。

その日は素直に帰ることにした。

(あ、あの人の名前聞き忘れた)

とりあえず黒スーツの人で良いかな、と考える。全身ブラック物書きおじさんとかはさすがに失礼過ぎるし。

中のシャツとネクタイまで黒だったのである意味全身黒づくめのオシャレな人だった。

もしかして靴下やパンツも…？と考えたがさすがにそれは無いと思いたいし見たくもないので考えるのをやめた。

でもあの人ならパジャマも真っ黒にしてそう…

そういえばなんで暗いクラブの中でサングラスをしてたんだろうか。ライトが明るいのが苦手だったんだろうか。

5/30(土) 朝

月光館学園 正門前

「ねえ、ちよつと聞いた？ 二年の…」

「聞いた聞いた！ 今朝、ここに倒れてたんでしょ？ 家出とかだつ

たらいいけど、ちよつとヤバイ匂いするよねー」

珍しく湊と奏子と歩いて登校していると女子生徒の話が聞こえてくる。

自分は小耳に入れるだけだが湊はちらりと一瞥し、奏子はガッツリ顔を向けてその話を聞いているようだった。

あと一週間ほどで次の大型シャドウが出る日にちになってしまう。

残念ながら左腕の調子はあと少し、といった感じだ。前回の大型シャドウの時の真田くんと同じ状況ともいえるので今回は大人しく待機しておくことにする。

戦力としては本当に申し分ないくらいに出来上がっている。

『女帝』と『皇帝』相手でも十分やっていけるだろう。

というかこれ俺要らないよね？という状況をまざまざと見せつけ

られていたので正直少し自信がなくなってきている。まあ確かに自分は湊や奏子のような「ワールド」じゃないし：戦闘センスもあんまりよくないし皆の補助とかもうまくないしどちらかといえばワンマンタイプなので1人で突っ走ってやってしまうところが本当にダメなのは分かっている。

ほんとうはもう少し協調性をあげたいし頼ってほしかったりするのだけれど、どうしてかなぜか何の因果か、いつもみんなに頼りっぱなしになってしまうのはどうにかしたい。

装備の事もナイフじゃなくてももう少し長物に変えたい気持ちもある。剣もいいし槍でもいいし三節棍も悪くないと思う。

とにかくこの小さい武器から変えたい。片手で扱えるし持ち運びに不便はしないが、たまには別のものを持ってみたいのが男のサガってやつだと思う。

(復帰したら交番に行つて品ぞろえを覗くか1人でタルタロスにでも登るかな…)

湊か奏子と一緒に交番に行くのは無しで。なんだか少し恥ずかしいのだ。

ばったり会うときはノーカンで。

一番現実的なのは1人で交番に行くことだろう。タルタロスに隠れて潜って装備を新調して怪しまれても困る。それかもしくは1人の時の装備と皆で潜るときに装備を使い分けるか。

その方が武器によって戦法も変えられるしいいかも。

(出来ればモコイさんと相性のいい装備がいいな)

さっそく考えなくては、と予鈴を聞きながら校門をくぐった。

放課後

結局モコイさん本人と要相談、という事で帰ろうと正門をくぐった時に奏子もちょうど帰るところだったのか声をかけられた。

「あ！ お兄ちゃん、帰り？」

「そうだよ。奏子も？」

「うん！ あ、そうだ…帰りに『小豆あらい』に寄ろっ！ ……話し
たいことがあるの」

話しはじめは明るかったというのに、最後の方は暗く低い声になっ
た奏子に眉をひそめて最悪の事態を想定する。

「わかった。行こう」

頷くと、肩に乗ったモコ伊さんがこっそりと耳打ちしてくる。

「ネ…どこか食べにいくの？」

「うん、モコ伊さんにもこっそりあげるから楽しみにしててね」

「ヤツタネ」

こちらもこっそりと小さな声で返せば嬉しそうにガッツポーズを
するモコ伊さん。

最近の楽しみはモコ伊さんに食事を食べさせることになっている
ような気がする…と思いつながら、悪魔に肥満とかあるのかな…となん
となく心配になった。

巖戸台駅前商店街

小豆あらい

「それでね、話って言うのは…お兄ちゃんも知ってるよね、校門で倒れ
てたって生徒の話」

「まあ、三年でも噂になってたしね」

あんみつをスプーンでかき混ぜながら、奏子が暗い顔で話し出す。

「その倒れてた子がさ…私のクラスの子なんだよね、しかも」

——風花ちゃんを虐めてた子の1人だった。

そう告げた奏子は思いつめたような顔をしていた。

「偶然ならいいんだけど、この前から風花ちゃんも欠席してるし…気
になっちゃって」

「そうか…」

ここで自分から奏子にかけられる言葉は持ち合わせていない。

ただごまかしの言葉をかけることしかできないのだ。

「まだ関係あるかどうかはわからないし、噂どおり家出かもしれない

だろ？　あまり思いつめない方がいいよ、噂半分に聞いておこう」
「うん…」

「もしそうだとしても準備は要るし動くな情報が出そろってからのほうがいい。でしよ？」

「それはそうかも…」

それっぽい話で何とかごまかす。我ながら酷い兄だと思う。

他の誰かならいい答えを奏子にあげられたのだろうか。わからない。

もしかしたら美鶴さんなら的確にアドバイスしてくれたのかもしれないが自分にはわからない。

…わからないことだらけで本当に情けない。

「…とにかく！　今は甘いものを食べて精をつけよう。何事も心の元気が大事だしね」

「それは賛成！　よーっし！　たべるぞー！」

何とか一時的だけでも元気つけることが出来たようだ。

ほっと胸をなでおろして、膝に座らせたモコイさんにお汁粉を食べさせた。

ちなみに奏子はそのあと二回あんみつをお代わりしたあとに湊と一緒に夜ご飯をしつかり食べていた。

喰らう者（6／1～6／8）

6／1（月）夜

「…まあ、全部私の推測なんですがね」

帰ったら寮の一階が真つ暗だったので（だれもいないなんて珍しいな…）と思いつつぱちん、？と電気のスイッチを入れると悲鳴と物音。

「ぎゃー……ぎゃー……ぎゃー……」

「!!!」

「ぎゃつー！」

慌てて物音と悲鳴の方へ駆け寄るとダイニングで岳羽と伊織がもみくちやになって倒れていた。

「順平…サイテー…！」

べちん！

「イテエ!? なんでオレツツ!?」

そのまま伊織は岳羽にビンタされて目を白黒させていた。なんだから悪いことをしてしまつた気がする。

「…なんかごめん…それとただいま」

「…三上、帰ってきたか。おかえり。ちょうどいま、先日の女子生徒について話していたところだ」

「ついでに順平が怖い話してたの！ なんだかよくわからなかつたけど！」

ああ、そんな時期か…と遠い目をする。

残念ながら自分にも怖い話の持ち合わせは無い。精々オブラートに包んだ自分の死にざまを語るくらいしかない。そしてそれはそれでホラーなのか？という気もするけれど。かなり味気ないし。

「話がそれだが…明彦、先ほどの話、どう思う？」

「調べる価値はありそうだな」

美鶴さんの言葉に真田くんが頷く。真剣そうな二人の空気を中和するためか、それともおちよくるためなのか、伊織がにやりと笑いなから岳羽の方を向いた。

「しっかし、ゆかりツチさ。お化けがニガテとは、チヨイ情けないよな」

「なっ!? 情けないって言った!? い、いーわよ、順平。だったら、調べよーじゃないの。お互い、これから1週間、色んな人からテツテテキに話を聞いて回るワケ」

キツと表情をきつくした岳羽が鼻息荒く宣戦布告をする。

自分に情報収集の役目が回って来なくてよかつたなと思う。そういうのはあまり得意ではないしあまり好きでもないから。

「怪談なんて、ゼツタイ嘘に決まってるし!」

「それは助かる。気味の悪い話だからな」

「じゃ、宜しくな。あー怖い怖い」

「どうでもいい…」

「俺としても物理攻撃が効かなさそうな幽霊が出てきてもらったら怖いなあ…殴れないのは困るよね」

「三上センパイ、そこ気にするとこっすかね…」

まあ、幽霊が出ててもハマ系で即成仏だとは思うが。

そこところは本当にペルソナ様様だと思う。あつてよかつたペルソナ。

影時間

ぱちり。目が覚める。

「起きた…?」

顔を覗き込んでいるモルフェに少し驚くも声は出さない。いつものことだ。たぶん。

「あのね…次の満月…」

モルフェが皆まで言わずとも言いたいことが分かった。

恐らく次の大型シャドウにも近づかないでほしいとかそんなところだろう。

「ああ、それなら大丈夫だ。たぶん俺は待機だし…」

次の大型シャドウに関してでは自分が出る幕がない。

怪我をしているしなによりも戦闘に参加しないので近づきようがない。今回は我慢だ。

心配を払しよくしたと思っていたその言葉を聞いても、モルフエの顔は明るくない。

「うん…」

「いや、ホントに隠れて行ったりとかしないから…湊たちも十分強いし」

「うん…」

それでもなお、心配そうな表情をするモルフエに何か声をかけようとした。

しかし

(あれ…急に眠気が…)

まるで泥に沈むように眠気が襲ってくる。

瞼と身体が重い。鉛のようだ。

「…ごめんね」

意識はそこで途切れた。

6 / 3 (水) 放課後

なんだか体がだるい。

今日は夜にクラブに行こうかと思っていたがやめておいた方がよさそうだ。

あの男性の話をまた聞いてみたかったが仕方がない。体調が悪化するよりかはマシだ。

「チミ、顔色悪いっすよ」

「そんなに？ …うーん」

モコイさんにまで心配されてしまうとは。

これは明日保険の江戸川先生の薬を飲むべきかもしれない。

今日は申し訳ないけどタルタロスにはついていけないので早めに寝るとして、明日の昼休みか放課後に保健室にいかなくては、と脳内に予定を書き込んだ。

結局体調不良は朝になっても治らず更に悪化しているような気がしたので昼休みになった瞬間保健室に駆け込んだ。

「失礼します…」

「保健室に何か用かねイヒヒヒヒ…ってこれはこれは三上くんじゃないですか…いつも調子が悪そうですけども、今日は随分と顔色が悪いですよ…ヒヒヒ…」

「はは…」

「これは…出番ですね、イヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒ…さて、取りだしましたるこの秘薬——」

ニヤニヤと笑いながら薬を出してくる先生に苦笑いする。そしていつもどおり凄まじいにおいがしてるのでげんなりした。正直、体調が悪くなければ死んでも飲みたくない。

「あ、原材料とかはいいので…早くください…」

「慣れてしまつては面白くないですねえ…イヒヒ…では、どうぞ」

それでも先生は最初の頃に比べて大人しくなつた方だと思う。以前の周で見たときの先生はとんでもない台風のような存在だったので。飲め！飲め！とイツキを強要してくるとんでもねえ先生だった。今もそうかもしれないけれど。

匂いだけで吐きそうなので鼻をつまんでから大人しく差し出された薬を一気に^{あお}呷る。

「~~~~~！」

味に関しては激烈。なんというかこの後味の濃いものを食べてもしばらく苦みと渋みが抜けそうにない感じである。舌にこびりつくこのピリツとした感じが堪らない。主に嫌なのを我慢できないという方の意味で。

ドブよりも酷い薬臭さの残る独特の残り香で吐いてしまいそうだ。うっぷ。

「いいですねえその顔、慣れてしまった三上くんでも薬を飲むときだけは最初と変わらない顔をする」

「も…もう少し味と臭いなんとかならないんですか…」

「無理」

「そうですね…」

味と臭いの改善については無理らしい。なんだか少し疲れた。ついでに体調も悪いままだ。でもすこしだけ、勇気が上がった気がする。

6 / 5 (金) 夜

身体が怠い。今頃ラウンジで岳羽と伊織が集めた情報の確認会がされているのだろうが出られそうにない。

とりあえず、今日も夜は早めに寝ておくことにする。

6 / 6 (土) 夜

なんだかすぐく体調がいい。昨日までの不調が嘘のようだった。連日早めに寝た事が功を奏したのだろうか。

モコイさんの食べ歩きを今週はあまりしていなかったので調子に乗って出歩いていたら遅くなってしまった。今日はいつもの「うみうし」と「わかつ」と「ワック」をハシゴした。なんだか食欲も以前のように戻ってきている気がして今日は本当にうれしい。

帰る途中、見覚えのある四人を見つける。

「アレ、チミのシスターとブラザーとそのフレンズだよネ？」

「…あ、ほんとだ」

モコイさんが不思議そうに首を傾げる。

湊と奏子と伊織と岳羽だ。四人が一緒にいることは珍しくはないが向かっている先が問題だ。

あつちは確か不良のたまり場になっていて遊ぶような場所では無かったはずだ。

四人だし大丈夫だとは思いたいけど念のためとこっさりついていくことにした。危なくなったら偶然を装って通りかかったフリをすればいいし。

結局四人は本当に不良のたまり場に用があるのか何なのか、来てしまったようだ。

「ちつと、オマエらさ。遊ぶとこ間違えてんじゃねえの?」

「あ…いや…べつに…」

不良の言葉に陰ながら頷く。

危ないだろうこんな薄暗くてじめじめしてて不良の多い溜まり場なんて。犯罪の温床かもしれないのに。

本当に、タカられて連れてこられるならまだしも何の用があつて――

(あ)

思い出す。以前の周の記憶に間違いないのなら、四人はたしか山岸の件に関わる情報収集の為にここに来たんじゃなかったろうか。

記憶をたどり寄せていたその時、不良が不意に四人に近づく。ここはどうすべきか。

「フウ…オマエらみたいの来つとシラけんだろ…帰れよ、ヒゲ男くん」

「ヒ、ヒゲ男くん? …あ、あー、オレの事っスね…」

たじろぎながらも答える伊織に対し、岳羽が口を開く。

「ここに来るのに、なんで、あんたの許可が要るワケ?」

「ちよつ、おまつ、バカかよ! お前あれか!? 空気詠み人知らずか!?!」

伊織が焦るのと同時にこちらもいつでも出れるようにしておく。

岳羽は意外と根性があるというか負けん気が強いというか、それはそれで問題を引き寄せることも多いが良いところだと思った。押しが強くないとどうにもできないことはある。自分は不得意だけど。

「なにそれ…て言うか、こんな連中にビビんないでよつ!」

「ああ?」

「ッこんな連中」 つつたよ、そのコ」

「やつちやえばー? ツキ高とか、カンケないし」

「つか、写メとか撮って流しちやおーか! パパとかが気い失うよーなセクスイーポーズのやつ!」

「きやははははっ!! やべ、ちよーウケるっ!」

岳羽の言葉にカチンときたのかたまり場にいた者が沸き立つ。

「というかセクシーじゃなくてセクスイーなのか…というのは突っ込まないでおこうと思う。」

女子って怖いなあと他人事のように思う。

「こいつら、サイッター…」

確かに、言ってることは犯罪ストレスだしかなり倫理的に低俗だ。だけれども、それができるかどうかはまた別なのだ。音を立てず、こっそりと後ろから近づく。周りの何人かは自分に気づいているようだったがさつと目を逸らされるしなぜか何も言わないでいてくれるようだった。

もしかしたらサプライズ精神でもあるのかもしれない。

「あちゃー。彼女いま『サイター』とか言ったよね。ヒゲ男くんも大変だ。こんなアグレッシブなコと一緒にだ…」

男がこぶしを引く。

伊織の腹にぶつかる瞬間にその腕を右腕で掴んで止めた。

「そうかな？ 俺は良いと思うんだけど」

につこりと、不良の男の方に笑いかける。こういうのはファーストコンタクトの印象で全てが決まるのだ。悪印象ではなくいい印象を植え付けてなるべく穏便にここは済ませよう。

「あ…オマエ…」

「お、お兄ちゃ…!?!」

「随分と楽しそうなことをしてるね！ …俺も仲間に入れてくんない？」

できるだけ友好的な事を示すために「僕も仲間に入れてよぶるぶる」的なセリフを吐いておく。お決まりの、もちろんお前がサンドバッグな！とは絶対に言わない。

「ひっ…い…」

怯えたように腕を振り払われる。残念だ。第一印象をよくする作戦は失敗だったようだ。

とてもやさしく言ったつもりなのに。もしかして言わなかった方の言葉を察されたとか？

それはそれは申し訳ないことをした。

「な、なんでオマエがここに…俺たちのことはもう手出ししないって…！」

「俺は、お前たちが俺の身内に危害を加えようとしないう限りは”っ”て言ったよね？ そんなことも忘れちゃったか。あーあ、仕方ないなあ…」

口が勝手に言葉を吐き出す。

もしかして1、2年の時の自分はここで何かやらかしたのではないだろうか。具体的にはわからないが凄まじくとんでもないことを。

第一印象は今までなく去年or一昨年で決まってしまうていたのでは???

よくよくみれば周りも一歩下がって怯えるようにこちらを見ている。そんな目で見られると少しショックだ。こちららガラスより脆いおぼろ豆腐ハートなのだ。

「お、俺はこいつらがオマエの身内だなんて知らなくて…！ た、頼む…！ 見逃してくれ…！」

「こつちだつてそつちの事情なんか知らないよ。あ、そうだ。今度は腕一本だけじゃなくて両方いつとく？ そういう約束だったもんね…！」

青ざめる男に対し、あくまでもにこやかに告げる自分。ちなみに、ここもまた勝手に口が動いている。

我ながらとんでもないことをしてる。今度は両腕という事は以前にこの男の片腕を折ったことがあるということだ。

めんどくさいことはなるべく避けるをモットーに生きているはずなのに、どうしてこうして感知外の自分は問題を増やしているのだろうか。いや、自分の事なので恐らくはそうしなければならぬ理由があつたんだろう。止むにやまれない理由が。

…なるべくはそうであってほしい。

蹴り倒して男の左腕に足をのせる。

「ひいっ！ 頼む…！ 頼むからやめてくれよオ！」

「やめて、くれ？ 何か違うよね」

「やつ、やめてください!!! もうそいつらに手出しはしないのでやめてください!!!」

「うーん、どうしようかな」

酷い。

今日の晩御飯を悩むかのような気軽さで他人の腕を折るかどうか決めようとしてる自分とか正気じゃない。

このままだれも止めなきやマジでこの男の腕は折れてしまう。ちらりと湊と奏子を見るもドン引きしてるところか少し怖がっているようなのでストッパーにはなりえなさそう。

安心させるためにもすこし笑いかけておこう。にっこりスマイル。ついでに腕に乗せている足に体重を乗せる。あ、これ、もう少しで折れそう。やばい。

「いぎ…ぐつ、マジで…手を出そうとしてすみませんでした! だから、」

「うんうん。そうだね。でも、約束を破ったのはきみなんだし——」

「そこまですておけ、三上」

「駄目だよ」と、口が勝手に紡ごうとしたその瞬間、脇から聞こえてきた聞き覚えのある声に顔をあげて足に込めていた力を緩める。でもどけはしないようだ。

「…やあ、荒垣くんひさしぶり」

奥からやってきた荒垣真次郎——荒垣くんに片手をあげて挨拶をする。なんだか荒垣くんが苦虫を噛み潰したような顔をしているのは気のせいだと思いたい。

「変わらないなお前は。…そいつから離れてやれ…漏らしてる」

「うわ、それはやだな」

汚いな、と今度こそ足を放して離れてあげれば本当に失禁していたらしくズボンを濡らした男は片腕を押さえながらとどろくはずと這いずって距離をとった。あれはひび位は入ってるかもしれない。

「あ、そうだ。きみ、荒垣くんに感謝しておいてね」

「ひいひいひいひい!」

——そうじゃないと、ホントに折れてたよ。マジで。

そう親切心で告げたつもりが悲鳴を上げて逃げられてしまった。ほんとうに、申し訳ない。これっぽっちしか申し訳ない気持ちには心ないけど。

「…三上、そろそろとガキを連れて何の用だ。帰れ。お前はともかくコイツらの来るトコじゃねえ」

荒垣くんがようやく口を開くころにはこのたまり場は自分たち以外誰もいなくなっていた。

後ろから殴られたり人質を取られなくてよかった、と胸をなでおろすも荒垣くんの言葉は間違いなので訂正しておく。

「俺が皆を連れてきたわけじゃないよ。四人が路地裏に入ってたから心配で来たら巻き込まれただけ。たまたまだよ」

「…そうか、なら、さっさと連れて帰りやがれ」

そういつて踵を返した荒垣くんを、岳羽が呼び止めた。

「待って！ …ごめんさい、私たち、知りたいことがあつて来たんです！」

「その顔…アキの病室にいた…おい、アキに言われてきたのか？」

荒垣くんの顔が湊へと向く。こちらはたまたま会っただけというのは信じて貰えたようだ。

「…別に」

「…フン」

湊の答えに納得してないのかしてないのか。どちらかという「仕方がない」と言いたげに息を吐いた荒垣くんは素直に口を開いた。

「知りたい話つてのは何だ。例の『怪談』とやらか？」

「そうですけど…え、なんでわかつたんですか？」

岳羽の言葉に荒垣くんは傍にあつた階段へと移動する。

ここに幾月がいれば「階段で、怪談の話をする…ぷくく…傑作だぞこれは！」くらい言つてそうだ。いやいや冗談じゃない。脳内幾月はしまつちやおう。しっしっ！

「…ウワサだ。病院送りになった女どもが、その辺にタムロつて毎日話してた。『山岸』って同級生を色々イジってるってな」

「はあ。」

ここで奏子がドスの利いた低い声を出した。

「へーふうーん、あの子たち、放課後はここにいたんだあ…」

知らなかったや、なんて笑う奏子の目は笑っていない。怖い。

下手すればお礼参りに行きかねないくらい怖い。

「そういうえば、奏子ちゃんが山岸さんは虐められてるって言ってたね…」

「おかげで騒がれてるぜ…犯人は、その山岸の怨霊だ、とかな。話じゃネットでも、昨日あたりから、そんなネタばっからしい」

「はあ?!?! 風花ちゃんの『怨霊』ってそれ、どういうことなの?!?!」

奏子がキレる。本人曰く彼女の友達らしいのでその言われようには許せないものがあるのだろう。

そりゃあ、友だちが勝手に死んだことにされて怨霊扱いとなるとキレても仕方ないと思う。

「お前ら…知らねえのか? その山岸ってやつ、死んでるかもって。もう一週間かそこら、家にも戻ってねえって話だ。ってか、毎日通ってるお前らがなんで知らねえ?」

心底不思議そうに語る荒垣くん。

学校に行っていない荒垣くんが知っていて、毎日真面目に学校に行っているはずの奏子たちが知らないことに驚いているのだろう。その真相はE組の担任である江古田がいじめ発覚を恐れて隠してたとかなんとかじゃなかっただろうか。そこら辺だった気がする。

興味がないのでよく覚えてないけれど。

そして「なんで知らないのか」と言われた湊以外の三人が顔を見合わせた。

湊はあまり興味がないのかそれともどうでもいいのか、手持ち無沙汰気味にイヤホンを弄りながらぼーっとしている。

「どうなってんだ? 山岸って、確か、病気だつて…つか、行方不明じゃねえか!」

「これ、もう『怪談』じゃないよ…ねえ奏子ちゃん、E組の担任って江古田だったよね、アイツ、このこと知ってそうだった…?」

「どうだろう…私のクラスでも風花ちゃんは病欠っていわれてたから

…」

三人がこそこそと言いついでいるあいだに、考え事をしていた荒垣くんは何か気づいたようにはっとした。

「そうか、アキのやつ…あの日出来なかった事の“代わり”ってか？
ったく…過去を切れねえのはどっちだっただけだ…」

その言葉に四人の視線が荒垣くんに集まる。

ちなみに自分は荒垣くんの言う「あの日出来なかったこと」が何かは知らない。真田くんの妹さんに関するとか、それともまた別のとか。

あまり詮索するのは好きではないため知らないままにしてある。

「…っ！ なんでもねえ…知ってんのは、それだけだ。…もういいか？」

早くこの場から立ち去りたい、そんな空気になった荒垣くんの言葉に、伊織が帽子を外してお辞儀をする。

「あ、はい！ お世話になったツス！」

そして横を向いて

「…ほら、お前も頭下げろよ」

湊の頭を下げさせた。確かに、湊は荒垣くんにこういうことしなきゃさうだもんなあ、と感じたので伊織の言うことは間違いでもないと思う。

「ありがとうございますっ！ すっごい助かりました！」

「私も…知らないことを教えてくれてありがとうございます！ 優しくてびっくりしちやった…」

「あ…？」

荒垣くんが低い声を出したので慌てて遮る。

「あ…俺からお礼を言わないとね、ありがとうございます。本当にありがとうございます」

止めてくれてなかったらあの不良の両腕は今頃ボツキボキのベツキベキに折れていただろうから本当に感謝している。さすが、（未来の）寮のオカンド。

「チツ…もう来んじゃねえぞ。特に三上、てめえが出入りするとこれ

以上に人が寄り付かなくなっちまう」

「善処する」

失礼な。過去の自分が何をやったのかは知らないが今の自分はハイパーミラクルスーパーパー品行方正な高校生なのだ。

過去の自分が何をやったのかは知らないが(大事なことなので二回言った)

「なあ湊、オレゼってー三上センパイのこと敵に回せねえわ…:というか怒らせらんねーよアレは…:」

「わかる」

「いつも通りの優しい声と表情なのがまた怖かったよね」

「わかる…:いつも通りの変わらないお兄ちゃんがいつもとまったく違うことしてるの凄く怖かった…:」

後ろでひそひそと4人がそうやって話していることも気づかずに、自分は自分でモコイさんと晩御飯を何にするか決めていたのだった。

6 / 7 (日) 朝

「寒い…:」

ハロー風邪、グッバイ絶好調。

朝起きたばかりだというのに頭はくらくらするし眩暈はするし起き上がれそうにない。

昨日の絶好調はどこに行ったというのか。神は俺を見放したというのか。なんてひどい神だ。出来ればぶっ殺してやりたい。

おっと本音が。オフレコでお願いします。

外は暑いのに吐き気もするしとにかく寒いしで起き上がりたくない。息苦しいし布団に入って震えるしかない。

とにかく、連絡を入れて今日は一日部屋で過ごすことにする。

明日までには治っていることを祈って。

6 / 8 (月) 朝

(…38.9℃…駄目だ…)

動けない。

一日たったが風邪がさらに悪化して夜中から熱が上がりだして今では39℃近くにもなってしまった。

これでは学校にすらいけないだろう。

担任に連絡を入れ、一応美鶴さんと湊と奏子にも休む旨を伝えておく。

(ヤバくなったらさすがに救急車呼ぼう…そうしよう…)

今日は大型シャドウの出る満月の日だがそれどころではない。普通に命の危機を感じている。脈も随分と速い。いざというときは病院で貰った薬を飲まないといけないかもしれない。

(そういえば、水分なにも用意してない…モコイさんに下までとってきてもらおう…)

動かずに飲める位置に水分を用意していなかった——というか昨日飲み切ってしまったので下の冷蔵庫まで水か何かをとってきてもらおうと思ったのだ。

「モ…コイさ…」

「ナニナニナニ！ 呼んだ？ この優しいモコイさんのこと、呼んだ！？」

モコイさんは小さな声でも気が付いてすぐに寄ってきてくれた。その優しさに感謝しかない。

「した、から…みず…とってきて…」

「オツケー！ ボクちん超特急！」

ポテポテと足音を鳴らしながらドアを開けて急いで出ていくのを見送ったあと、意識が暗闇に落ちた。

「ん…」

目を開く。

寮の自室じゃない。妙にふわふわとした感覚がする。ここはどこだろう。

足が勝手に動く。これは夢の中だろうか。

考えがまとまらない。視界もあまりよくない。もやがかかっているみたいだ。

(あれ、なんだかこれみたことあるな…)

手に、妙にしっくりくる何か長い棒状のものを持っている気がする。槍のようにも思える。

それは、なんだったか。なにか思い出せそうな、見た事のある気がするものだ。

しかし考えがまとまらない。

(まあ、夢ならそれでいいか)

再び、意識が落ちた。

影時間

タルタロス エントランス

湊たちはタルタロスに迷い込んだとされる山岸風花の探索に乗り出していた。

待機組として美鶴とゆかりが残ったのだが二人の関係はあまりよくなかった。

「なかなか連絡がないな…通信の感度は最大なんだが…」
「……」

必死に機器を弄る美鶴にゆかりは顔を顰めるもすぐに顔をいつもの通りの表情に戻した。

そして沈黙に耐え切れなくなったゆかりは適当な話題を探して口を開いた。

「そ、そう言えば、あの森山って子…三上先輩が寝てるとはいえ寮でほぼ1人きりなの、大丈夫ですかね」

「正直を言えば、影時間に絶対安全な場所など無い。だが、高熱の三上与彼女をここへ連れてくるわけにも、2人のためだけに何人も割くわけにもいかないだろ」

「そうなんですか…」

「森山だけなら誰かひとり残せたかもしれないが、高熱で動けない三上もとなると守るのは少々厳しいからな…」

「気まずい空気が流れる。」

雇い主である桐条の娘とその研究員の娘という関係であるためか元々ゆかりと美鶴の仲は良いとは言えない。ポートアイランドの事故がなければこの時点で良い学友になれたのかもしれないがそういうわけではなく。

その上で寮で寝ている動けない人間とシャドウに魅入られたかもしれない人間だけで待たせるのは些か不安なのではないかという懸念を言ってみたが美鶴に「人員を割けない」と即座に言われゆかりの胸の内になにかもやもやとしたものが溜まる。

適性のある風花の探索には特別課外活動部全員をかり出して行っているのに、同じくらい危険な二人には一人も割けないとはどういうことなのか、と。

ここに来る際も湊か奏子が残った方が良いのではという話題は出ていたが、今日だけは寮に来ておらず通信機越しに聞いていた幾月によつて「全員で出た方が良い」と押し切られたのだ。

「…でも、山岸さんひとりの救出には、こうして全員で——」

そんな疑念を音として発しようとしたゆかりの言葉は最後までいう事が出来なかった。

途中で、明彦からの通信が割り込んできたのだ。

『美鶴、聞こえるか?』

「私だ。いま、そちらの位置を確認した。思ったより上だな…通信がギリギリだ。それより、4人とも無事か?」

『だ…わら…な…』

ノイズ混じりの混線しているような音が通信機から発せられた後にぶつんと通信が切れる。

「明彦! おい!」

「…通信圏外、とかですか? なんか、心配ですね…」

何が起ころかわからない状況に、不安な表情のまま、ゆかりは俯いてロビーの床を眺めることしかできなかった。

「……こは、」

湊はタルタロスの中で目を覚ました。

たったひとりで倒れており、周りに誰もいないことからどうやら皆とはぐれてしまったようだ。湊は自覚する。

何も無い。ただタルタロスの奇妙な床が広がっているだけでシャドウの一匹も居らずしばらくは安全かと小さく息を吐く。

いたとしてもタナトスで蹴散らせばいいか、と湊は声には出さずに思った。この程度の階層に出るシャドウが相手ならそれができる程度の強さはある。

「目が覚めた？」

そうやってぼんやりと周りを見回していたところ、突如聞こえた己によく似た声に反射的に振り向く。

そこには影時間には似つかわしくない見慣れた縞々の服を着た少年が立っていた。

「大丈夫かい？ 僕が誰かわかる？」

猫を思わせる黒い癖毛に綺麗な青色の瞳を持った7、8歳くらいの少年はぼんやりしている湊を見つめ返す。

ただ、自己紹介されなくとも湊はその少年の名を知っていた。

「…ファルロス」

「うん、大丈夫そうだね。言いたいことは色々あるけど、今はゆっくり話してられない」

少年——ファルロスは目を伏せる。

何かを憂うようなその表情を湊はじっと見つめる。情報共有なら既にしてあるため、何をそんなに憂う事があるのだろうか、と。

「大型シャドウが二体来ることなら、もう知ってる。というかそれはファルロスも知ってるでしょ」

「…違うよ。今日はそれよりもっと怖いものが来ようとしている。…シャドウとは違う、違うけどよく似た、とても大きな存在だ。なぜかわからないけど、そんな気配を感じる…とにかく、急いだほうがいい

よ…」

『いつも』とは違うそのファルロスの本当に焦っているような様子に、湊は頷いて走り出した。

山岸風花を保護したはいいが、大型シャドウ『女帝』と『皇帝』に襲われた特別課外活動部の面々。

そのさなか、シャドウの呼び声に呼ばれてきた森山を守るため風花のペルソナが覚醒し、バックアップを美鶴と交代する。

「美鶴！ 下がって居ろ、コイツは俺たちが…!?!」

動けるメンツが前へと出た瞬間、明彦が突然身震いをして何かに気づきタルタロスの入口を見る。

「……み、三上…?」

「、――」

そこには俯いた優希が片手に槍のようなものを持って立っていた。今日は髪を結んでいないのか、その男性にしては長めの髪が顔を隠している。

高熱で倒れて寝ているはずでは、とか何なんだその槍は、とか明彦は色々聞きたかった。が、それよりも早く優希が動いた。手に持っている槍を女帝へと投げ、地面に縫い付ける。

悲鳴をあげたそれを意に介せず静かに優希は顔を上げた。

「…ペ…ル、ソ……ナ…」

虚ろな目の優希が召喚器も無しに小さくそうつぶやくと、背後の影から黒いもやの様なものが現れた。

明らかに、ペルソナではない。いつも見る、モルペウスなどでは決してなかったし、湊の知るポベートールでもない。まるで、不定形なペルソナのなりそこないのようなそれは徐々にその形をボロ布と鎖とに変えていく。

「……！」

湊には、それに見覚えがあった。しかし、どうしてそのことを虚ろな兄がペルソナと言ったのか、理解が出来なかった。

あれは、そんなものペルソナではない。

「あの人も……怪物のほうも……どっちもすごく怖い……、どうして……？

なにも、見えない……」

風花が怯えたように呟く。

「あれは……！」

「……！」

美鶴と明彦にも、それは見覚えがあった。

最初の大型シャドウの襲撃の日に、優希のペルソナが暴走して現れた存在だ。

そしてその後にしたことと言えば――

「……！！！」

大型シャドウの捕食だ。

倒れ、地に伏した女帝エンプレスに覆いかぶさるようにして、ぐちゅぐちゅと食い荒らす。

「ひっ……」

「やだ……」

そのグロテスクな姿に倒れていたゆかりと、前線に立っている奏子が悲鳴を上げた。

そんなことを気にせず『なにか』は食事を続ける。が、それを見逃す皇帝エンペラーではなかった。その手にもった剣で、『なにか』を攻撃しようとしたのだ。

彼らからしても、その異質な存在は敵に見えたのだろう。実際、片割れである女帝エンプレスが目の前で食べられているのだ。これを敵だと言わずして何になるのだろうか。

勇ましく剣を振り上げた皇帝エンペラー。

対して『なにか』は食事に夢中だ。直撃は免れないだろう。そう思われた。

が、

『なにか』の目が、視線が、皇帝を一瞥する。

それだけで、皇帝の身体は後ろ向きに倒れ、動かなくなる。まるで、絶対的な捕食者を前にした小動物のように。

「…つに…はや、く…ひ…つに…」

ぶつぶつと、感情のない声で優希が呟く。

「足りない…まだ…足りない…」

髪に隠された隙間から見える虚ろな視線の先には、倒れた皇帝。そして、その目は満月のように黄色く、鈍く輝いている。

それを見たのはたまたま隣になった湊だけだろう。

湊は、その目にぞつとした。前回の満月の時にみたあの目は、夢でも見間違いでもなかったのだ。

そして、ふらふらと皇帝へと歩み寄ろうとするその姿に危機感を覚えた。

「優希、だめだ！」

思わず、手を掴む。冷たい。

手を掴んだのはいいが、『なにか』の方は邪魔が入らないとわかるとさっそくエンペラーを捕食しているらしくそちらの方に移動していた。

あんな異質な相手に手を出せるはずがない。湊は優希を繋ぎ止めるのでいっぱいであるし、ゆかりは怪我をされていてダウン。奏子は心配そうにこちらを見ているし、残りの三人も『それ』の異様な気配に怖気づいて動けないのだ。

「ど…して、…れは…し、んで…」

焦点の合わない虚ろな目がぼんやりとこちらを見つめてくる。ぶつぶつとまた何か話しているようだが湊には聞き取れないほど小さな声だ。

口だけ動かしていると言っても過言ではない。

「優希、お願いだから帰ってきて。目を覚まして」

そんな異常な様子の子の兄に湊は手を握り締め、祈るように言う。

遠くへ行ってしまうわないで。消えてしまわないで。そんな柄にで

もないことを思いながら。

「湊…お兄ちゃん、どうしちゃったの…？」

「わからない。けど、危ないのは確かだ」

不安そうな奏子が『なにか』を気にしながら寄ってきた。

そして、その異常な様子から言葉を交わすまでもなくもう片方の手を握る。

「お兄ちゃん…」

「優希…」

奏子と湊が再び呼びかけるも目は虚ろなままだ。

しかし、口がわずかに動く。

「おれ…は…おれは、なんだ…」

まるで問いかけるようなその言葉に湊と奏子は顔を見合わせあい、頷いた。

「お兄ちゃんは私たちのお兄ちゃんだよ」

「…おれは、ふたりの…おにい、ちゃん…」

「そう。優希は僕らの兄」

「……………ゆう、き…」

優希は名前を反芻しながらぼんやりとしている虚ろな目を、ゆっくりと瞬かせる。

その一瞬で異質な輝きは消え、元の色に戻った。そしてそのまま一瞬意識を失ったのか地面へとくずおれる。

「お兄ちゃん!？」

「…っ!」

倒れそうになるのを慌てて奏子と湊で支えれば、しばらくしたのちにゆらゆらと揺れ徐々に焦点が合った目が二人を捉えた。

「…えっ、俺…なんでタルタロスに…部屋で寝てた筈なのに…こわ…」

優希はしっかりとした目と心底不思議そうな顔できよろきよろと周りを見回す。

その様子は心底何が起こったのかわからないと言いたげだ。どうやら、異常な行動をしていた最中の記憶がないらしい。これでは話の聞きようがないかもしれないな、と湊は少しだけ目を逸らしてまた小

さく息を吐く。

そう言えばあの化け物はどうなったんだと大型シャドウがいた方向を見れば、その時にはもう『なにか』も謎の槍も大型シャドウも消えていた。

まるで、夢のように。

「…話は後にして、帰ろう」

「ああうん…なんか、山岸がいるってことは俺の知らないうちに全部終わってるっぽいね…頭痛いな…」

支えた身体は先ほどとは違い、温度が戻ってきていた。

むしろどんどん上がってきているような気がする。

「熱、上がってきたんじゃない…」

「頭が痛い以外は…身体はなんだかすごく楽なんだけどなあ…それにしても夢遊病なんて俺持ってたっけ…」

「シャドウに呼ばれたんじゃない？ 森山って子も、呼ばれてここに来たみたいだし」

「そうかな…そうかも…？」

不思議がつている優希にはやはり先ほどまでの記憶は全くないらしい。

「今日の事は黙って居よう」と、優希以外の面々は視線を合わせると頷き合った。

幕間　：荒垣真次郎と三上優希

荒垣真次郎が三上優希という人間と出会ったのは高校1年の夏前のことだった。

6月という中途半端な時期に転校してきた彼は、担任に紹介されて教室にまっすぐ入って黒板に名前を書いた。

「フランシスコザビ：三上優希です」

おい今なんて自己紹介しようとした？

転校生が来るという話は心底どうでもいいと思っていてよそ見をしていた荒垣だったが、そのトンチキな自己紹介に顔を向けた。

「こんな時期に転校してきて変なやつだなんて思われるかもしれないけど仲良くしてもらえるとありがたいです。目に入れても痛くないくらい可愛い妹と弟がいて、好きなものはたこ焼きと牛丼で、趣味は深夜徘徊と食べ歩きです。あ、深夜徘徊はやっぱり趣味じゃないです」

兄妹構成と好きなものと趣味は聞いてない、と荒垣は内心でツツコむ。

しかし顔だけはいいのか転校生が微笑むともう誰も何も言えないようだった。

荒垣からしたら、変なやつが来たな…という印象でしかない。

休み時間になり、クラスメイトに囲まれる優希を盗み見る。

「三上くんって好きなタイプの子とかいるの？」

「うーん、努力家で頑張りやでお父さんを大事にしてて一人で抱え込みがちでバイクが好きで学年テストで毎回1位になるような子かな」
「そ、そうなんだ…」

具体例がいろいろとピンポイントすぎる。

そんな存在、このクラスには一人もないだろう、と遠い目をした。いや、そのタイプの女子がこの学年にはいるにはいるが転校してきただばかりの優希がそれを知るはずもなく。

普通に理想のタイプかうるさい女子を避けるためのたためか何かなのだらうと勝手に納得した。

「じゃ、じゃあ最近ハマってるものとか…」

「ハマ…？ ああ、最近というかここにきてからなんだけど、散歩が好きかな」

「散歩…」

「そう、散歩。ぶらぶら観光みたいなものだよ」

その後も当たり障りない質問が優希にぶつけられるがのらりくりとホントかウソかわかったものではない答えを返していた。

「なあ、三上、カラオケの十八番なによ？」

「サトミタダシ薬局店。ヒットポイント回復するなら〜つてアレ」

「まじか」

「前住んだところにあつて覚えちゃったんだよねー」

今歌おうか？と告げながら答えを聞く前にもう握りこぶしを作り「てててててててててててててて」とイントロのメロディーを歌い出す三上は相当変人だとはや1時間で評価を改めた。

そんな変人な優希でもしばらくすればまともな言動をするようになり、クラスメイトとも適度な距離感をとるようになっていた。

そもそも、変な言動をしていたのは初日だけだったようでそれから最初からそのクラスにいたかのようになじんでいた。

目つきがきついたために不良だと言われて遠巻きにされる荒垣じぶんのよ
うな人間よりもよっぽど。

「荒垣くん、次は移動教室だよ」

一カ月ほどだっただろうか。全く接点がなかった優希が不意に声をかけてきたのは。

ただしそれは単に教室でサボって狸寝入りをキメようとした優希に次の授業が移動教室であると告げただけだ。

「…分かってる」

「そっか」

顔を伏せたままの荒垣の耳に椅子を引く音がする。

(……………?)

「俺、サボっちゃおうかな」

その声に驚いて顔を上げれば、頬杖をつけてこちらを向く優希の姿が。

「お、やっとこっち見た。やあ、荒垣くん。 はじめまして」
「あ……？」

夏の日差しに照らされた優希の表情が眩しい。

酷く得意げな笑みを浮かべたその顔は、いたずらが成功した子供のようだった。

「いままで話したことなかっただろ？ だから、サボって荒垣くんと
の親交を深めようかなっていう実に男子高校生らしい健全な理由だ
よ」

「必要ねえ」

「荒垣くんからしたらそうかもね。でも俺は必要かな」

——だってクラスメイトと親睦をはかるのは大事だろ？

いけしやあしやあと告げたその顔に、荒垣はげんなりした。これは
どう繕っても離れそうにない。

「荒垣くんは好きな食べ物とかある？ 俺はね、たこ焼きと牛井かな」
「……」

優希の、『牛井』というチョイスに別のクラスになった幼馴染を思い
出す。

触れれば折れそうな優希と、ボクシングで鍛えている幼馴染は全く
真逆だが。

「…てめえと話すつもりはねえ。さっさと行きやがれ。今ならまだ間
に合う」

「つれないなあ」

困った顔で笑った優希は本心ではそう思っていないような声色で言
葉を吐いた。

「俺は睡眠を邪魔されたくねえよ」

「それは悪かったよ、ごめんね」

それじゃあまたこんど、と次があるかのように告げた優希はそのまま
ま立ち上がってカバンをもって教室から出ようとする。

「…? おい、三上。カバンはいらねえだろ。バツくれるつもりか?」
「ああ、俺さ——」

「——今から病院だから早退するんだ」

どこが悪いのか、とか怪我でもしてるのか、とは聞かなかった。

荒垣としてはそこまで踏み込む義理もない。

「まあ流石に病院サボっちゃまずいよね、ありがとう」

なんて、お礼を言う優希は先ほどとは違い今にも消えそうな儂さがあつた。

それに顔をそむけることで答えた荒垣はそのすぐ後に「触れれば折れる」「儂い」なんて言う印象も撤回する出来事が起ころうなどとは思ひもしなかった。

夏休み。

あの日以降、「またこんど」と言った優希だったが全く絡んでくることは無く。

連絡事項の伝達や実習でのコミュニケーション程度のものは行っていたが前のように直接何かを聞いたり言ったりすることも無かった。

としては「五月蠅い奴に絡まれなくて良かった」程度のことだが、たびたび優希が早退していたこともあり頭の片隅に置くくらいにはなっていた。

目の前で倒れられても困る。その程度の思考だった。

たまたま通りかかった路地裏の不良のたまり場で喧騒が聞こえ「また喧嘩か…」といつもなら無視するはずの荒垣の耳に、「きみで最後だよね」という聞き覚えのある声と男の雄たけびが聞こえた。

それはそこで聞こえるはずのない声で。

角からこつそり覗き見る。

「…!?!」

10人近い不良がそこで倒れ伏しており、最後の一人と思われる男の振り下ろした鉄パイプを避け強烈な蹴りを叩きこんだのは見間違

いでなければ同じクラスの転校生である優希だ。

「大人しくのこのこついていった俺もダメだけどさあ、カツアゲに失敗したからってリンチは駄目だよ。…こんなモノまで使ってたさ」

死屍累々な状況を作り上げたにもかかわらず、心底つまらなさそうに頭の後ろを片手で掻きながらもう片方の手に持っていた鉄パイプを放り投げた優希からは儂さなどというモノは消え去っていた。

獣だ。

荒垣はそう思った。

リンチしようとした相手を一人で逆に完膚なきまでに叩き潰すのはそうとう喧嘩慣れしていないとできるものではない。

人当たりのいいやわらかい印象しかなかった優希は今、倒れた男の左腕に足を乗せている。

「…利き腕って右？　パイプ持ってたから右だよ。ああ、左だったらごめんね」

「…ま、まさか…」

優しく、クラスメイトに語り掛けるようないつもの声色で不良の男に語り掛ける優希の足に、体重がかかる。男が何か口にしようとしたがもう遅い。

「があああ!？」

「今回は一本で許してあげるよ」

先ほどと声色は変わらない。

優しく、きわめて優しく語り掛けるその姿に、荒垣は不良の男に対して憐れみを抱いた。

「ひっはひ…っ…ひいい…」

「折れたんだから痛いよね。でもね、俺も悪魔じゃないからさ、君たちが俺の身内に危害を加えようとしなない限りは」もう来ないしこのことも水に流すし君たちには近づかないよ。知らない他の人に対しては好きだけすればいい。だってそれは、俺の知らないところだからね」

「…はひ…」

男の顔が希望を与えられたせいなのか少し明るくなる。

「でも、」

と優希は区切る。そしてその変わらない優しい表情のまま、笑う。それはまるで、駄目な子を見る母親の顔だ。しかし、

「次は両方貰うからね」

告げられた言葉は酷く残酷なものだった。

「やあ、荒垣くん。散歩？」

倒れた不良を背後にして、たった今喧嘩をしたばかりだという気配は微塵も感じさせない優希がまるで世間話でもするかのように話しかけてきた。

こんなところ、散歩にしる何にしる、好んで通る訳がない。

先ほどの光景を見ていなければ「危ないから帰れ」程度の言葉をかけただろうに、見てしまったがために心からそんな言葉を吐けるほどの持ち合わせはさすがになかった。

「あ、ああ……」

「ここら辺、治安悪くて危ないから気を付けてね」

お前の方がよっぽど危ないだろ。

荒垣はその言葉を呑み込んだ。危険物なのは明らかに目の前の優希コイツだった。

「おい」

「なに？ あ、もしかしてやっと俺と親交を深めてくれる気になった？」

「違う」

「じゃあ『うみうし』に行こう。俺お腹すいちゃって」

拒否権は無いらしいその言葉に、黙ってついていく。

どの道見つけた時点で連れまわされる運命だったらしい。

荒垣は溜息を吐いてから少し離れてついていった。

「おいてめえ、まだ食うのか」

「うん。あと二杯はイケるかな」

「勘弁してくれ……」

“うみうし”で幼馴染なんかよりもよっぽどの量を平らげる優希に頭を抱えるとも知らずに。

V 法皇 & VI 恋愛

大炎上日和（6／11～6／13）

6／11（木）夜

シャドウに操られていた可能性もあったので満月の次の日は大事をとって休んだが、リハビリも先週の金曜日の時点で終わっていたので昨日から学校と戦闘に復帰している。

名実ともに完全復活というわけだ。

あの後、山岸は森山夏紀と和解し、奏子ともちゃんとした友だちになっただけ。

奏子は「風花ちゃんが許してるなら私はそれでいいよ」と大人な対応をしていたらしい。

らしい、というのは自分は湊と先に帰ったからでその場になかったため伝聞で聞いた形になるからだ。

体調は昼やそれ以前に比べて格段に良くなっていたが、それでも熱が上がってきているらしかったので「早く帰って寝ろ」という事だった。

寮に帰ればモコイさんに酷く心配されたし痛みのないポカポカという擬音付きのパンチを何度か喰らった。訳せば、「突然消えてどこかに行ってしまうって探そうにもどこにいるかわからなかった」とのこと。

「チミの気配も何もかもが消えてたからボクちんビツクリちゃんだよ」

とはモコイさんの談。悪魔による誘拐も頭をよぎったらしい。たまに、そうやって洗脳もしくは思考を鈍らせて言葉巧みに自分の巢へと誘き寄せるやつがいるのだそう。

この前のアンズーのように。

その事実にはシャドウの呼び声も悪魔の誘惑にも気を付けないといけないのかもしれないと気を引き締めた。

モコイさんが自分を心配した理由として「チミのお金で美味しいも

のを食べられなくなるのは惜しいからネ！」と言い放った時は悪魔らしいな、と思いつつもそれが半分本心混じりの照れ隠しであることはこの短い付き合いの中でわかっていたので礼を言うにとどめておいた。

そして今日、幾月によって作戦室に特別課外活動部の全員と山岸が集められていた。

理由は言わずもがな山岸の勧誘だろう。

ソファに深く座り込みあくびを噛みしめる。

「話は聞いてるよ。『山岸風花』君だね」

「は、はい」

「ハハ、そんな緊張しなくていいから。ま、かけて」

幾月がやさしく促すも、なぜか山岸は自分の方をちらちらと気にしながら怯えたようにぎこちなく頷いてから奏子の隣に座った。

(…?)

何か彼女の気に障るような、怯えられるようなことを自分はしたのだろうか。

覚えがないし心当たりもない。

もしかしたら、不良の件と同じく去年か一昨年のもどちらかに既に見知りで、とんでもないことをした可能性が無きにしても非ずなのだ。

(とりあえず何か誤解があるんならさっさと解いところかな…)

思案する。

あの怯えようは正直びくびくしてばかりいる今の山岸にしてもおかしい。

自分の顔だってそんな怒ったような表情をしているわけでもないしそもそも山岸や女子なんかに手を出す性格を自分がしているとは思えない。というかまずない。これは自分が真逆にひっくり返らないかぎりまずありえないと断言できる。

そしてそのような要因は、特別課外活動部に所属していなければ起こりえないことだ。

していても起こらないかもしれない。

とにかく、可能性はほぼゼロに等しい、という事だ。

(それなら…なんで怯えられているんだ?)

まさか自分の変な言動をみられたとか変な噂を聞いたとかじゃないか、と思うもすぐにその可能性を一蹴する。

もし変な噂が飛び交っていれば自分なんかよりも先に奏子か湊か美鶴さんが気づく。

しかも奏子は山岸の友達だ。その友達の兄の話くらいするだろう。そしてそこ経由でこちらに回ってくるはずであるし全く以て何が原因で怯えられているのかさっぱりわからない。

正直、巷で話題の探偵王子にパッとこのなぞを解いてもらいたいくらいだ。

…：…：…：そういえば全く関係ないが明日はバナナが夕方特売だったはずなので放課後に買って帰らないと。奏子が好きなバナナケーキにしてもいいかもしれない。チョコも入れれば更においしそうだ。モコイさんも食べるだろうか。

「…くん、三上君…」

「はい!？」

突然幾月に呼ばれびくりと驚く。

思わず大きな声で声をあげてしまった。視線が自分に集まる。

しまった、考えに夢中になって全く話を聞いていなかった。いや、大体会話の内容は意識不明に陥っていたいじめつ子たちが回復したとか山岸に特別課外活動部に入ってほしいとか満月に大型シャドウがやって来るとかそんなところだったので聞く必要もないかと流していたのだ。

それが、こんなところで裏目に出るとは思わなかった。

「三上君、きみはまだ少し体調が悪いんじゃないかい?」

「いえ…少し考え事をして…：…すみません」

「大丈夫か三上。らしくないぞ。無理しているんじゃないか」

「違うんですホント俺クツソどうでもいいけどどうでもよくない考え事してしまつててホントすみません…」

しどろもどろになる。

凄まじく恥ずかしい。顔に熱が集まるので両手で覆う。

「お兄ちゃん何考えてたの…」

「明日特売のバナナのこと…一個80円は安いから…沢山買ってケーキにしようかなって…真面目な話してたのに頭がバナナでいっぱいになってましたすみません…」

最終的にはそうなってしまったのでそういうことにしておく。

すると『バナナ』という単語に反応したのか奏子が即座に食いついた。

「バナナなら仕方ないかも…!? お兄ちゃんケーキ作ったらもちろん食べてもいいよね!」

「僕にもそれ貰えるよね?」

「そのつもりで考えてたから…」

湊まで便乗したことにもうどうにでもなれと顔を覆いながらそう答えると、「ぷ」と吹き出すような笑い声が。

「あははは…三上先輩のこと、怖い人だと思ってたんですけど、思ったより普通に安心しました」

山岸が笑っていた。

目を見開く。何とか印象を変えることに成功したらしい。というか怖い人だと思われてたという事はやっぱり何かやらかしてたわけ。

(これからは気を付けないとな…)

もしかしたらまだ見ぬストレガのメンツとも何かあったりなかったりするかもしれない。

正直、彼らの事は憎からず思っているのであまりごたごたを巻き起こしたくない。勧誘はノーサンキューだが。

6 / 12 (金)

夕方の熾烈な戦いを勝ち抜き、特売のバナナを無事ゲットしたので寮のキッチンでケーキを作ったのはいいが、殆ど奏子と湊の胃袋に収まってしまった。

モコイさんにもプレゼントしたところ、喜んで食べてくれたので嬉

しい限りだ。

残念ながら明日くるであろう山岸の分は残らなかった。

奏子と岳羽が作りたそうにしてたので、今度は奏子と山岸と岳羽を誘って作ってもいいかもしれない。

奏子と岳羽はともかく山岸にはレシピ通りに作ることを厳命して材料はこちらで分量まではきっちり量ったものを用意する。勝手に別の材料を使われないようにすればいいけるとおもう。…そう思いたい。

ゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!

燃え盛る炎。

火柱が立ち上がるように激しく燃えるその炎を前に、自分は顔を真っ青にしてモコイさんは遠い目をしていた。

「あわわわわわわわ…」

「燃え上がるほどバーニングだね…」

一言言わせてもらうなら、こんなに燃えるとは思ってなかった。が現在の心境だ。

もちろんネットでの炎上とかじゃない。放火魔でもない。

何をと言えればいいのか。何から説明すればいいのか。正直なところよくわからない。

とにかく、この炎は放置していても大丈夫なものかつ人間社会に影響を与えるものではないことは確かだ。

ただし、

「ギャアアアアアアアアアアアアアアアアア!!!」

巢の主である悪魔は身体を炭化させつつも現在進行形でファイアー地獄盆踊りしていた。

こうなった経緯は数時間前に遡る。

6 / 13 (土) 放課後

「今度はラムレーズンケーキにでも挑戦してみようかな…」

「また何かデリシャスでウマウマなものを作るんだね」

「そうそう。あ、お酒をしみこませたスポンジのチョコケーキでもいいな…」

「モコイさん、実はとってもテイステイで好きなんスよ…お酒。グフフ」

「飲酒は駄目…いや、悪魔だからいいのか…？ とにかく、未成年は飲酒目的じゃアルコール買えないからモコイさんは食べ物に入れる以外ではお酒我慢になっちゃうけどごめんね」

「ノープロブレム！」

ポロニアンモールにある酒屋でまた別のケーキに使う製菓用の洋酒を購入し（もちろん飲酒目的ではないことをちゃんと説明した）、帰り路を歩いていた。

いつもの道から外れていないちゃんとした道を通っていたにもかかわらず、後ろから悪魔に襲い掛かれ——もつれこんでいるうちに悪魔の巣へと迷い込んでしまった次第だ。

しかし怪我也治り万全の状態かつ新しい武器を手に入れた自分とモコイさんの敵ではなく。

さつくりと最深部まで到達し、さあ主とご対面だ、というところまで来た。

「オー——ッホッホッホ！ アタシの美貌に酔いしれ、そのまま養分となるがいいわ！」

「ワオ、とってもファビュラスだね」

「イヤね、ニンゲンだけじゃなく汚い悪魔もいっしょだなんて。濃厚な生き血が啜れないじゃないの」

バラの花弁が下半身になっている妖艶な美女悪魔の前に、「アレは妖樹 アルラウネって悪魔だヨ。またひとつ、賢くなったね。チミ」とモコイさんが耳打ちしてくる。

植物がうねるようになっていてこの巣の内部構造からみるに、見た目が思いつきり植物なアルラウネはそのまま火に弱いと見ていいかもしれない。

こういう時にアナライズしてくれる味方がいないというのはキツイ。シャドウならともかく悪魔は未知の存在なのだ。湊や奏子の降

ろすペルソナと姿かたちが似ているとはいえ、そうそう弱点や耐性までもが一致するとは限らないため常に手探りの状況に戦っているに等しい。いつまでも、こちらがあてにしている同じ姿のペルソナと同じステータスだとは限らないのだ。

弱い敵なら全属性の魔法攻撃を交互に試しで打ちつつ弱点を探るといふやり方もしやすいが、強い敵となつてくると反射や無効で戸惑っているうちにお陀仏となりかねない。

ペルソナ・パンタソスの「アギダイン」でもいいが弱点ではなく反射だったときにこちらがダメージを負いかねないのでもう少し威力の低い属性攻撃手段をとることにした。

(とりあえず様子見でアギラオジエムを…)

なぜか悪魔の巢の宝箱(のようなもの)に入っていたジエムを懐から取り出そうとまさぐつた。

つるつるしたそれを手に掴み、よく見もせず放り投げる。

パリン!

「なんなのよ!?…?」

それは、アルラウネの蔓に叩き落とされ音を立てて割れた後甘い匂いをまき散らした。

おかしい。アギラオジエムなら割れた瞬間に発火するはずなのだというのになぜ、とその甘い匂いを鼻腔に入れた瞬間、その正体に気が付く。

(しまった…! あれはさつき買った洋酒だ…!)

「アーツハツハツハツハ! なにをしているのかと思えば、こんなものとは! 馬鹿ねえアナタ!」

高笑いする悪魔がバラのような蔓で攻撃してくるのを避けるも、二撃目が飛んできて思わず買い物袋を盾にして横に飛ぶ。

買い足した小麦粉の袋が買い物袋ごと裂かれ、空气中に粉が飛び散る。アレが直撃していたら無事では済まなかつただろう。

「チツ…モコイさん!」

「お呼びカナ!」

「さあ、もう逃げられないわよニンゲン! 小賢しい真似もここまで

「へえ…」

「で、葛葉はそのなかでもイケてるサマナーのコトだヨ。で、イマのライドウくんは…ぶるぶる」

モコイさんが身震いする。

そんなに怖い存在なのだろうか。

「ボクら、正式に契約してないからサマナーと仲魔の関係じゃないんスよね…場合によっては洗脳してると取られて…がくぶる」

「ああ、口約束だもんね…」

「それに、サマナーになるには召喚器が必要で…チミがペるそな？を召喚する銃じゃないヨ、管やGUMP、COMPトカってヤツね」

管とGUMP、それにCOMP。聞いたことがない。

一般人には無用の長物なので知られてない部類のアイテムなのかもしれない。

「ボクから見方によってはダメダメ違法ダークサマナーか、野良悪魔とそれに憑依されてるニンゲンになっちゃうのネ…」

それが何故先ほどの葛葉云々に繋がるのか。今のこの大炎上な現状とモコイさんの怯えようからして何となく察しがついた。

「もしかしてその葛葉って警察みたいなものなの？」

「ノンノン！ ポリスメンは“ヤタガラス”って集まり。ソコ、悪魔カンケー専門のポリスマン。クズノハのライドウくんはそこから依頼を貰って働いてるんだネ。デスマーチ」

まあ、どちらにせよ変わらないものなのだろう。

違法なサマナーと人間に害成す存在を討伐する集団。それがヤタガラスであり、そこで働いてる強いサマナーが葛葉ライドウくん？という人物らしい。

そして自分たちは正式に契約してないのでモコイさんが人間に害成す存在もしくは2人纏めて違法サマナーとその仲魔として目を付けられかねない、という事だ。

「とにかくそう言うのに目を付けられないように行動しつついこっか」

「ウム」

目立ったりお尋ね者になるのはこちらとしても避けたい。

悪魔を狩りつつ鍛錬できるちょうどいい場所、と思いきやそういう落とし穴があったとは。というかそうじゃないと悪魔なんて言う特定条件下で人間を好き放題できる存在がいて人間が滅ばないわけがないよなあとも思った。

今の平和（仮）はそんな陰ながらサマナーが頑張ってくれていた上のものなのかもしれない。ただし今度は自分たちが頑張らないと1月末には確定事項で滅びが来てしまうのでどうしようもないけれど。

影時間

タルタロス

「三上、今日から私も前線に復帰する。…よろしく頼む」

「無理しないでね」

「ふ、分かってるさ」

アルラウネを大☆炎☆上させたあと、寮に帰ると湊と奏子がタルタロスに行きたい、と言い出したのでさっそく新メンバーの山岸を連れて来ていた。

美鶴さんも今日から復帰らしく、やる気満々だ。

しかし残念なことに自分は待機組。今日は湊がリーダーだ。

臨時リーダーだった結局自分が不安定なので時と場合によって臨機応変に事前に相談の上で変えてもらう、という事になった。

今日の自分は待機したい気分だったし、四人組で挑まなければいけないという制約はこれっぽっちもないがバックアップする山岸が慣れるためでもあるしまずは基本の形から行こう、という事で待機を選んだ。

「そういうえば、三上。得物を変えたのか？」

湊たちを見送り、しばらくぼーっとしていると、唐突に真田くんに話しかけられる。

視線の先には組み立て式のバトルアックス（模造品）が。ちなみに時価ネットたなかで購入したものだ。

本当にあそこは何でも取り扱ってるので武器商人かと思っ
てしま
うがそんなことは無いらしい。

「まあね。サバイバルナイフも取り回しがよくて嫌いじゃないけど腕
が完治したしこれもいいかなって」

「意外と鍛えてるのか」

「まあそんなかんじかな」

主に力に振ってます。なんて言っても伝わらないだろう。

正直自分でもよくわかっていない。なんで筋肉量や体形が変わら
ないのにぐんぐん力や魔力や体力や素早さが上がっていくのか。

ペルソナによる補正以外にも最近は成長を実感した時になにか任
意で値を割り振っているような…うっあたまが。

「三上先輩…よかった…今日はちゃんと「視え」る…」

真田くんの横で、安心したようにそう息を吐いた山岸のつぶやきは
聞こえるはずもなく。

結局その日は湊と奏子が満足するまで真田くんと伊織と待ちぼう
けしていた。

デジャ・ヴュの少年（6／16～6／20）

6／16（火） 放課後

授業が終わってもモコイさんがどこかへ行つたまま帰つてこない
ので、そのまま一人で帰ることに。

たまに、そう言う時があつてモコイさんも一人で何かしたいときも
あるんだろうと半ば慣れのようなものも感じていたので気にしては
いない。肩の重みがないことに少しさみしさを感じるときはあるが。
モコイさん曰く「サマナーの仲魔もたまに迷子になるときがあるつ
スよ」とのこと。

それは単独行動したいわけじゃなく…と突っ込みたかつたがモコ
イさんが頑なに「人生の迷子つてやつだネ！ け、けつして衝撃魔法
で遠くに吹き飛ばされて、迷子になるトカじゃないからネ、チミ！」と
主張していたのでそういうことにしておくことにした。

「あ！ ユーキおにいちゃん！」

商店街を歩いていたら突然呼ばれたので振り返る。

金髪に白いカチューシャ、青いワンピースの少女がそこにいた。
ありすだ。

「ありすね、またおるすばんなの。だからね、今日こそ遊んでくれるよ
ね！」

思案する。

時間には余裕があるし、遊ぶにしてもあまり離れ過ぎてもいけない
だろう。

「じゃあその公園の遊具で遊ぼうか」

近くに小さな公園があつたはずなのでそこで遊んでいれば親御さ
ん（ありすはおじさんたちと言っていたが）も探しやすいだろう。

「わーい！」

喜ぶありすに微笑ましくなる。

「ありす、シーソー好きよ！ ブランコも好き！ すべり台は…高く
て怖いからヤダ！」

「じゃあブランコでもする？」

「うん！」

人がいない公園について早々、ブランコに腰掛ける。

ありすは座りながらゆっくりと漕いでいるようで、その振れ幅は大きくない。

「…ありす、おるすばんきらい」

不意に、下を向きながらありすがそうつぶやく。

「おじさんたち、いつつも『おしごと』だからっておうちにありすを置いてくの。だから、ひとりでお人形さん遊びや積み木で遊んでたよ。…でもやっぱりひとりはつまんないの！ 勝手にお友達も作っちゃ駄目って言われてるし…」

ありすはいまにも泣いてしまいそうだった。

やはり、1人だどこの年頃の子は寂しいのだろう。それに、おじさんがいるにしても両親とは暮らしていないようだった。

この年で親の愛情を受けられない、かつ友達作りも禁止されているとはかなり厳しい状況だ。

「—でもね、おじさんたちはおにいちやんと遊ぶのはいいっていつてくれたの！ だからありす、寂しくないのよ！」

ニツコリと笑うその顔は裏表のない純粹なものだった。

同年代の子供と遊ぶよりも、高校生でしかも男の自分にまかせる「おじさん」たちの気が知れないが、子供同士で遊んでだけがでもしたらいけないとか、ある程度の判断が付く高校生なら安全だという考えなのだろうか。

しばらくブランコを漕いで遊んだ後、ありすが唐突に後ろを向いた。

「あー！ おじさんたちが迎えに来ちゃった！ ありす、今日は帰るね！ ばいばいおにーちゃん」

ぴよん、とブランコから飛び降り、手を振りながら去っていくアリスを見送った。

今日こそはクラブ エスカペイドにいつてあの黒スーツの男性と話をしたい気分だったので帰寮してすぐに荷物とモコイさんを置いて寮を出る。

モコイさんはネットゲームの「デビルバスターズ・オンライン」で遊びたいらしく部屋に残るとのこと。監視カメラの類は大丈夫なのかと思つたが、そこは悪魔の力でちよちよいのちよいらしい。：大丈夫だろうか。

電車に乗つて、ポロニアンモールまで歩いて向かう。

途中、誰かが前を横切つた気がして思わず目で追うも、そこには誰もおらず。

ただ、黄金の蝶が夜の闇に消えていっただけで。

(金色の…蝶…俺は…あれを…知っている…?)

どこか、遠い昔にどこかで見た事のあるその蝶を気のせいだと首を振つて忘れる。

——いいや、キミは覚えているはずだ——

「っ！」

目を見開き、思わず膝をつく。

がたがたと身体が震える。得体のしれない恐怖が襲い、吐き気が込み上げた。

「はっ…はっ…はあっ…」

息がうまくできない。眩暈もする。

警鐘のようなものが頭の中でガンガンと鳴り、見たこともない光景が目の前で再現される。

槍に貫かれる自分の胸。伸ばされた手は自分に届かず、倒れ伏す身体。悲鳴。

青ざめる仲間の顔。傷口と口からとまることなくあふれる血。

「うっ…おえっ…おええっ…」

現実ではないはずのその光景とないはずの痛み思わず吐瀉する。胃液だけが吐き出され、地面を汚した。

それでも幻覚はまだ続く。自分が倒れたすぐあと、何かに食いかつた湊と奏子を含む特別課外活動部の面々がぱたと倒れてい

くのだ。

まるで『死』^{death}がもたらされたように。

霞む視界で、幻覚の中の息も絶え絶えな自分は手を伸ばす。

『いま、なら…まだ…まにあ…う』

そして、何かを掴んだ。

ガラスの割れるような音と共に、薄れる視界に黄金の蝶が映った。そしてやつと長いような短いような幻覚が終わる。

「はあ…はあ…はあ…くそ、」

最悪だ。

胸と頭がとんでもなく痛い。

あんなこと、自分は知らない。あんな死に方をしたことは一度もない。

それに、槍とは言っても特別課外活動部の槍使いである天田は自分の得物をもって仲間とともに青ざめた顔でこちらを見ていた。

そして自分は胸から穂先が突き出ていたことを考えると後ろから誰かに槍で刺されていることになる。

…自分が対面で仲間と向き合うことなんてあるのだろうか。あるとしたらそれは先に自分一人で敵を倒した時か万が一にでも敵対した時だけだ。

少なくとも特別課外活動部のメンバーが全員参加している時期で、湊と奏子がいたという事は過去の出来事ではなく未来視のようなものなのだろうか？今までにそんなことが出来たことがないので不安が募る。でももし、そんな未来が起こるのなら、絶対に起こしてはならない。

(させない。させてたまるか)

ふらふらと、立ち上がる。

見たアレがただの幻覚なのか何なのかわからないが尚更死ぬわけにはいかなかった。

(…とにかく、頭の片隅に置いて今はクラブに行かないと…)

邪魔が入ったところで最初の目的を忘れたわけではない。

多少ふらついているがまあ大丈夫だろうと夜道を歩き始めた。

「…大丈夫かね？」

後ろから肩を叩かれびくりとして振り返る。

そこには目的の人物である黒スーツの男が立っていた。その姿に、安心感を感じる。

「——なるほど、体調が悪いのなら今日はもう帰った方がいい。私も少し仕事に長引いてね…遅れて行くところだったのだよ」
「でも…」

「会いに来てくれたのはうれしいが、私としてもきみとは万全の状態
で話したい」

しばらく歩きながら軽く話をしたがこちらの体調が悪いことを悟られたのか優しく帰るよう促されてしまった。

風邪ではないが倒れて迷惑をかけるのも本意ではない。大人しく
今日も帰ることにしよう。

「はい。すみません…」

「いや、謝らなくていい。その代わりしつかり休むんだ。…それとこ
れを」

ポケットからカードケースを出した男はぱちん、とその蓋を開いて
一枚の紙を差し出した。

「ありがとうございます…？」

礼を言ってから受け取る。

「しんじょうひぎたか神条久鷹”だ。…作家をしている」

「…三上優希です」

「三上くんか。…覚えておこう」

この人は神条さんというらしい。

この前言っていたように作家さんだったというのは驚いた。社長
を辞めて作家になったんだろう。たぶん。

「それでは、駅まで送ろう。——きみに余計な『虫』でもついたら大変
だからね」

「え？」

「いや、なんでもない。さあ歩こうじゃないか」

神条さんだつてクラブに行きたいだろうからわざわざ送つてもら

わなくても、と思っただが本人がずんずん駅まで歩こうとするので着いていくのに必死になって言うタイムミスを逃してしまった。

「さて、次は『虫』の居ない日になるといいな」

「そうですね…？」

駅の改札で神条さんと分かれることになった。

しかし虫がいない日なんて六月のこの時期にあるのだろうか。わざわざこだわるといふ事は神条さんは虫がニガテなのだからかもしれない。

ううん、わからない。

なぜ虫の話をしだしたのか分からないが、とにかく次も会えることになったので嬉しい限りだ。

悪く思われてなかっただけましというか。

結局その日はそのまま帰ってタルタロスに行ったあと寝てしまった。

6/20 (土) 放課後

久しぶりに神社に寄ったらコロマルが階段の上に座っていた。

横に腰掛け、わしやわしやとコロマルの頭を撫でる。

「コロマル、散歩はまだ？」

「わん！」

「そっか、じゃあ一緒にいこう。俺が今住んでる寮の前も通り道だもんね」

「わんわん！」

元気よく返事をしたコロマルはそのままじつとこちらの肩を見つめている。

もしかして――

「コロマル、モコイさんが見えるの？」

「わん！」

「ガツデム。このワンコロちゃん、ボクの事見えるんスカ」

「モコイさんは悪い存在じゃないから齧らないであげてね。あとモコ

イさん、この子はコロマルだよ」

「コロコロちゃんスね。COOL!」

「わんわん!」

ちゃんと返事をしてくれるコロマルは本当に賢い犬だと思う。しかもモコイさんという超常の存在を見ても襲い掛からずにくれる理性があるのはすごい。自分ならまず一番に様子見してから切りかかっている。

尻尾を横にブンブンと振るコロマルに頬がにやけながらも立ち上がって歩き始める。

モコイさんはなぜか自分の方から降りてコロマルと並んで歩き始めた。

「コロコロちゃん、中々の猛者なんスね」

「わん!」

「なるほど、ボクも見習っちゃおうかな」

「わんわんわん!」

なんだか仲良くお喋りしている様子だけで癒される。

というか歩いていてだけで可愛い。清涼剤だ。

「コロコロちゃんもぺるそな?使いなんスね。寮に住んでるニンゲンと同じ気配を感じるネ」

「くーん…」

「モコイさんもそういうのわかるんだ…」

「ボクら悪魔は気配だけっスね。分かっても襲い掛かるオバカちゃんは、もちろんいるケドネ」

「ふーん」

それからしばらく無言で歩くと寮が見えてきた。

玄関前でちょうど岳羽と山岸と奏子が寮に入ろうとしていたようでごこちらを見つけると立ち止まる。

「あ、お兄ちゃん!」

「奏子…と岳羽と山岸、おかえり」

「先輩、おかえりなさい」

「三上先輩、おかえりなさい…コロちゃんが一緒なんですネ」

「神社にいたから誘って一緒に散歩コースをね。俺が付き合ってもらったんだ」

「わんー!」

コロマルを撫で、寮の玄関の扉を開ける。

「コロマル、喉乾いたよね? 水持つてくるよ」

いったん部屋までダツシユで上がり荷物とモコイさんを置いて、またダツシユで駆け下りキッチンに入って深めの皿に水を入れて零さないように玄関の外まで運ぶ。

外に出たら湊も帰ってきたようで女子に交じってコロマルを撫でていた。

「湊、おかえり」

「ただいま」

「ほら、コロマル、お水だよ」

「わふ」

皿を地面に置いて飲むように促す。

6月とはいえかなり暑くなってきている。たとえ犬でも水分補給は大事だ。飼い主が亡くなってしまう犬ならなおさら。

コロマルはひとしきり飲み終わると満足したかのように立ち上がると去っていた。

その後ろ姿を山岸は不思議そうに見つめている。

「どしたの?」

「…ううん、ごめん。気のせいだったみたい…」

首を横に振る山岸にそれ以上問い詰めるものはなく。

「あ、それより今日って、確か、理事長が来るって…」

「ああ…」

「じゃあ早く寮に入っとかないとね! ほら湊、いくよー!」

「…どうでもいい」

忘れてた。

どうせ「今までの大型シャドウはタロットの大アルカナの順で来たんだー! だから残りは8体だよ!!!」「ナ、ナンダッテー!!!」なので正直サボりたい。

夜

サボるのは結局無理だったので大人しく作戦室に集まっている。

「や、どうもどうも。調べ物に答えが出そうなので、いち早く伝えよう
と思ってるね」

入ってきた幾月は随分と上機嫌だった。

「例の『満月に出るシャドウ』の件だよ。ちよつと、面倒なんだか、よ
く聞いてほしいんだ」

以上割愛。

特に以前の周と変わった事を話してなかったので今度は考え事を
せずに聞き流すに努めた。

「…面白いですね。ただ、シャドウがなんであつても、残りも、全部倒
すだけのことです」

「…そうだな。ヤツらの目的が何であれ、全部潰すしか今はやれるこ
とがない」

美鶴さんの言葉に頷いておく。

どの道大型シャドウを倒さないと影人間が増えてBADENDだ。
一度それとなく邪魔をして大型シャドウを倒させなかったことが
あつたがとんでもなく影人間が増えてどうしようもなくなつてし
まったのでこの案は凍結させてる。

「あと8体か…相当だな、それ…」

次の『法ハイエロフアント 皇ラヴアーズ』と『恋愛チャリオット』、『戦車ジャステイス』と『正義フォーチュン』、『運命ストレンジス』と『剛毅』
はそれぞれペアで二体同時に来るので実質あと5回だ。

「…改めて思うと二体同時多いな!？」

「データでは、来るたびに強くなつてます。こちらも力をつけないと
…」

「なんとかするさ。…時間は充分ある」

何とかならない場合は俺が何とかします。とは言わない。言えな
い。

やろうと思えば9月ごろまでの大型シャドウならパンタソスでこ

り押しして消しとばすことはできるけどそれでもギリギリまで皆に足搔いてもらわないと困るのだ。

「…タルタロスか。なんで、あんなものがあるんだろ…」

「……」

岳羽の呟きに美鶴さんが暗い顔になる。

「やっぱり思うところがあるのだろう。美鶴さんだって十分“被害者の立場”だというのに。」

「たえそれが肉親の罪でも、それは子や孫が背負うべきではない。背負うべきではないものを、必死に背負って頑張ってすり減らしていく様を見るのは心苦しい。」

「…美鶴さん、」

「三上、どうした？」

話し合いが終わった後、美鶴さん呼び止める。

「力にはなれないかもしれないが心配はしてるんだよ、ぐらいは伝えてもいいのではないかと思っただからだ。」

「どうか、無理はしないで」

「分かっている。もとかからそのつもりさ」

「フ、と笑った彼女の顔は今まで陰りがある。」

「違う、そうじゃなくて…と酷くもどかしくなる。どうしてうまく言葉が伝わらないのだろう。自分が言いたいのはそういう事じゃない。彼女の触れられたくない部分に踏み込む事になるかもしれないけれど、そんなうわべだけのものじゃなくて、」

「ちがう、色々一人でしょい込むのはやめてほしいってだけで…ああもう！ 相談役でも愚痴吐き先でも友だちでもなんにでもなる！」

「俺は口だけは堅いから…！ だから…！」

頭を掻きながらそう言った俺に美鶴さんがぎよつと目を見開く。

「そして先ほどとは違う笑みを浮かべて口を開いた。」

「やつと敬語が抜けたな」

「は…」

「ずっと気になっていたんだ。きみのその、距離感のある対応が」
「へ」

ツカツカとヒールの音を立てながら、目と鼻の先に美鶴さんが迫る。

「だから、これから『友だち』として私に色々なことを教えてくれないか。もちろん、きみになんでもとは言わないが困ったときは相談もしよう。敬語ももちろん不要だ。友だちなものだからな」

「えっ、あ、はい…じゃなくて、うん…？」

なんだか思っていたよりも美鶴さんが積極的すぎて驚いてしまった。

強がりなのかそうじゃないのかいまいち判断がつかない。

「それでは後日、予定が空いている日に連絡するから外で友だちらしいことでもしよう。ふふ、楽しみにしているからな」

「うん…？」

肩に手を置かれ、首を傾げている間に美鶴さんは颯爽と去っていった。

一応、励ますことには成功しているのだろうか。そうなのだとしたら一応成功、ということになるのだろうか…？よくわからない。

(それにしても)

美鶴さんと『友だち』になるのは初めてかもしれない。

あまり特別課外活動部の面々と最低限以上の親しい付き合いはないようにしていたことが多かったし、そもそも美鶴さんは湊に信頼を寄せているときが多かったので邪魔しないようにしていた。

だからこんな親しい？関係になるのは初めてで驚いている。と、同時に

(なにすればいいんだ…？)

美鶴さんと何をすればいいのか、外に遊びに行く？らしいと言っていたがどこに行けばいいのかさっぱりわからなかった。

☆幕間：自らの手で終わらせた世界で白旗を振る

おーっす！ 俺、三上優希！

というふざけた自己紹介は置いておいて、もう何周目か忘れたがまた死んだらしい自分は4月6日の今日、見知らぬ天井で目が覚めた。

どうやら少し探索してみたところ、一人暮らし用のアパートらしい。近くに巖戸台駅前商店街の店が見えることから、その近くに住んでいるようだった。

携帯電話の電話帳を確認しても三上家の養父母以外の電話番号が登録されておらず、とても殺風景だ。湊の名前も奏子の名前もない。手紙もなければ写真もない。どうやら知り合いでは無さそうだ。

さて、事前確認を終えたところで自分はこの繰り返しの中で気がついたことがある。

12の大型シャドウを倒すことによって散らばっていたそれらが元のひとつとなり、「死の宣告者」が目覚めるとするのなら、例えば全て倒させないように邪魔をしてしまえばニユクスは目覚めず、滅びは来ないのではないか、と。

だから、寮からの始まりではなく巖戸台駅近くのアパート住まいだった『今回』は邪魔をすることにした。

4月9日 影時間

『今回』転校してきたのが弟である湊だという確認をしたところで今日は始まりの大型シャドウである、魔術師マジシャンが来る日だ。

大まかなプランは特別課外活動部の戦力を削りつつ、満月の日をやり過ぎさせるパターンだ。

大型シャドウは満月の日の影時間でしか顕在化できない。

後になればなるほど特別課外活動部のリスクや何も関係のない人の被害は増えるだろうが、少しでも世界の寿命が先延ばしになるなら、湊が死ななくて済むのなら。

それで構わないと思った。それくらい、この繰り返しに行き詰まっ

ていた。

準備をする。

顔がバレないように渋谷のセントラル街にある怪しいお店で買っておいたサバイバルゲーム用の丈夫なメカメカしい髑髏のマスクをかぶり、その上にパーカーのフードを被れば顔を隠す分には完璧だ。

見た目は完全に不審者だが、これも仕方ないと諦める。どうせつけておくのは影時間だけなのだ。

3日しか猶予期間がなかったが、まだ今の特別課外活動部はタルタロスの探索をメインで行っていないはずなので影時間にタルタロスに直行し、現状で出来る限りの戦闘能力の底上げを行った。

ペルソナはまだ召喚器を持っていないので召喚できなかったがペルソナによる能力の補正はちゃんと効いていたので一安心。

武器はマスクと同じく怪しいお店ことミリタリーショップで買った特殊警棒——のレプリカだ。後は己の脚。

特殊警棒は畳んで懐に仕舞ってしまえば持ち歩いていることがばれにくいし家の中でも隠しやすい。とはいえ一人暮らしなのでそんな心配するのはこちらのやっていることがばれた場合もしくは怪しんだ特別課外活動部のだれかがこの家まで来たとき用なのだけだ。

さて、今日の目標として、まず狙うは真田くんからだ。

影時間になったばかりの今なら真田くんは魔術師との戦いで腕を怪我するだろう。その隙を狙って召喚器を頂いてしまおうということだ。

怪我をしても逃げられるのなら、召喚器を奪われたところでどうということはないのだろう。もしかすると、骨折していない方の腕で召喚器を使って逃げていたとするなら、自分が召喚器を奪うことで最悪逃げきれないかもしれないがそれは魔術師に随伴している雑魚を一掃すればいいだけの話だ。

魔術師は寮に向かったことと一番に岳羽を狙ったことから、恐らく脅威とみなした強い反応もしくは13番目のシャドウが封印された湊を狙ってくるだろう。

なら、真田くんの代わりに適当に引き付けて寮まで連れていき首尾よく岳羽の召喚器をどさくさに紛れて壊して魔術師マジシャンを弱らせるなり鬼ごっこなりを刻限まですればいいだけだ。

そうすれば来月まではタルタロスに近づいたりイレギュラーシャドウに会うことさえ無ければ安全に影時間を過ごすことができる。奴らは満月の日までは人を誘い影人間にすることはできても動けないのだから。

——結果的に、真田くんの召喚器を奪うことに成功した。

「待てっ！ 貴様は何者だ!? 何が目的だ！」と聞かれたけれど答える訳にはいかなかったたので無言で寮までダッシュ。喋ったらボロが出てしまいそうでした。

でも相手が腕を折られた直後だったおかげか走って追われることはなかったたので一安心。流星に腕折られて猛ダッシュしてきたらビビり散らかすところだった。

次に、タイミングを見計らって寮の壁を排水管伝いに登り屋上まで行ってから静かに待つ。これは寮の部屋から抜け出してタルタロスに一人で行っていた『これまで』の周の経験が活きている。

流星に屋上まで登ったのは初めてけれど。

真田くんに接触し、寮まで来た以上美鶴さんに気取られているだろうが仕方がない。これはどうしても避けられないことなのだ。

探知に長けたペルソナをもつ山岸が後々加入することを考えると探知に対して阻害するような手を考えないといけないな、と悩みつつ隠れて息を潜めた。

そこからは予定調和のように毎度毎度同じように進む恒例のイベントだ。

岳羽が魔術師相手マジシャンにペルソナを召喚して戦おうとして、けれど出来ずに吹き飛ばされてしまう。

そうして吹き飛ばされた召喚器はぼんやりと突っ立っている湊の方へと向かうわけだ。が、それを割り込んで足で踏んで止める。

立ち位置的にちょうど魔術師と湊の中間に割り込むような位置だ。丁度いい。

先端の尖ったロッドに近い特殊警棒を伸ばし、魔術師を見ながら岳羽の召喚器に勢いよく振り下ろして砕いた。耐久性に優れているようだがペルソナによる補正込みのロッドには負けるだろう。

ちよつとした属性剣のようなものだ。■■■■ならよくやるだろう。刀に■■■の力を纏わせる疾風剣とかそういうものを。

(……?)

少し、思考が逸れた気がする。

とにかく、真田くんから奪った召喚器を使い道すがらの雑魚シャドウで初召喚を終えた「モルペウス」の能力を一時的に付与してなんやかんやして召喚器の耐久をぶち破って砕いたというわけだ。

これで条件のひとつは果たされた。

湊と伊織の配属時にさっくりと召喚器が用意されていたところを見るに2週間もあれば追加の召喚器が用意できるのかもしれないしスペアが元々あるのかもしれないが、少しの邪魔はできただろう。

本音を言うのなら幾月の所業を全部ゲロってしまつて活動をやめて欲しいが、そういうことをすれば1発アウトのレッドカードからの自分か湊の死に繋がるし、記憶を消すとか出来る訳でもないのだからいった直接的な手段に出るしかないのが難点だ。後々敵対するかもしれないのが怖い。

「…誰？」

訝しげな声の湊が問いかけてくる。

真田くんの問いかけと同様にそれには答えず踵を返して屋上から飛び降りる——フリをして壁伝いに降りる。

魔術師はそんなこちらを見ると湊では無くこちらへと向かうように同じく壁伝いに降りてきた。

少々危ないが地面まであと3m位のところで飛び降り、スタートダッシュを決める。よいい、ドン！

あちらの方が降りるスピードが早いので、目と鼻の先まで迫ってきた魔術師を引き連れてたまに飛んでくる「アギダイン」をよけな

がら街中を爆速ダッシュして「モルペウス」を適度に召喚して倒さない程度に削っておく。次の満月の時までには多少は弱っていてもらわないと困るのだ。

そうして地獄の鬼ごっこを30分ほど続けていれば景色が影時間のものから普通の夜の景色に戻る。

やっと、最初の大型シャドウを倒させずにやり過ごすことが出来た、と安堵の息を吐いた。

疲れた上に課題が山盛りなのでまずは持久力を付けるために体力と速度の底上げを重点的にしないと、と頭にメモをしておいた。

問題は次の女教皇だが、これは普通に倒そうと思う。

通学に使うモノレールという高校生活に密着している場所であるし、こいつのせいで大事故が起きかねないからだ。

その他のシャドウの対処としては絶対に討伐を阻止できるものは戦車チャリオット & 正義ジャスティスだ。こいつらは廃棄された陸軍の地下施設にあるひとつの入口以外はどこも繋がってない地下空洞にいたので生き埋め決定。唯一の入口をパンタソスカモルペウスで崩落させて埋めてしまえば二度と出て来れないし、いくら桐条マジンヤンと言えどもすぐには掘り返せないだろう。先程逃げ切ったばかりの魔術師をこの時まで残しておいて特別課外活動部にぶつけている間に崩落させるというのも手かもしれない。それまでに倒されてしまったらまたそれはそれだ。

そして、逆に絶対倒すべきなのは隠者ハイミットだ。こいつは電気をチューチュー吸ってるので非常に宜しくない。地球環境のために節電しなきゃ行けないご時世だと言うのになんてことをしてくれているのか。

近くに病院もあるしそこの電気をチューチューされると色々支障をきたすだろうから殺すべきなのだ。

ついでに巖戸台駅前に出てくる運命フォーチュン & 剛毅ストレングスや白河通りのホテルのひとつにいる法ハイエロファント 王と恋愛ラヴァーズもただそこに陣取っているだけなので無理して倒さなくていい部類かもしれない。奴らはそこから動かないし放置でいい。要は影時間にそこへ行かなければいいのだから。

そんな計画を練って次に来たる女教皇戦ブリーステスに向けて1人でもやれるように力をつけていたのだが、ある問題が起こった。いや、自分からすれば大した問題ではないしタルタロスに特別課外活動部が来たとかそういうことでは無い。

その逆なのだ。

明らかに特別課外活動部がタルタロスに出入りする頻度が低い。今はもう五月に入っているというのにまだ1度もタルタロスで彼らの姿を見ていない。

遭遇覚悟でロビーでのんびり休憩している時にすら居ないことを考えるに、入れ違いになっていくということもなさそうだった。出会っていたらちよつとだけ憧れてたカツコイイ匂わせ悪役ムーブを試してみたかったのに残念だ。

真田くんの召喚器を奪い、湊の覚醒を邪魔し、岳羽の召喚器を壊したことが響いているのだろうか。

学校に湊が来ていないという事は無かつたし伊織も岳羽も美鶴さんも腕にギプスをはめたまま真田くんも普通に来ていた。

誰かが大怪我したとか居ないからという訳では無さそうだ。ちよつとそこは一安心。

そんなことを考えながら昼ごはんの焼きそばパンを買いに購買へと歩いていけば目の前の生徒がズボンのケツにあるポケットからぱろりと財布を落とした。

気づかずスタスタと歩き去ろうとするので拾って追いかける。

「ねえきみ。財布、落としたよ」

「…どうも」

素知らぬ顔で初対面を装ってその生徒——湊に落とした財布を渡す。

別に、他意があった訳では無い。大飯喰らいな湊が財布を落として食いつばぐれたら可哀想だなと思っただけで。ただ、この興味無さそうな反応を見るにこちらの事を覚えてなさそうだ。下手に知られているより他人同士という認識の方がやりやすくていい。

サクツと財布を返したあとはそのまま会話があるわけでもなく購買へと向かつて目当ての品物を手に入れることに成功した。やっぱり焼きそばパンは美味しい。

5月10日

大変なことが起こった。

なんと、昨日出てくるはずだった女^{プリーステス}教皇がモノレールに居なかったのだ。

そもそもどこにも気配がなく、いたのは元気いっぱいの魔^{マジシャン}術師だけ。

影時間になってアパートの玄関から出たら屋根の上から「やつほ〜」と言わんばかりにこちらを覗きこんでいた時はびっくりした。驚きすぎて2度見したし心臓止まるかと思った。

というかお前もしかして実体化出来ないだけで満月の日じやなくても移動してずつとこつちみてたのか？　と言わんばかりの待ち具合にちよつとだけうすら寒いものを感じた。執念深すぎるのかそれとも気に入られてしまったのか。

よく分からないが昨夜も昨夜で魔^{マジシャン}術師と命懸けの鬼ごっこ(女^{プリーステス}教皇の出現を確認するために線路の上を馬鹿みたいに走った)を1時間まるまる繰り広げた。

結局、女^{プリーステス}教皇が居るはずの途中で止まっていた車両があるにはあったがドアが不自然に空いていると言うことも無く、動き出すことも無くその日はそれで終わってしまった。

と、ここである仮説を自分は考えついた。

もしかして、一体でも大型シャドウを倒せなければそれ以降のナンバリングの大型シャドウが出てくることは無いのでは？　という仮説だ。

実際昨日は本来なら女^{プリーステス}教皇が現れるはずで、魔^{マジシャン}術師も併せての対処法をこれまで想定してきていたのだ。

けれど蓋を返してみればそうではなく、魔^{マジシャン}術師しか居なかった。

来月も同じかどうか分からないが、これは確かめてみると同時に
もつと速さを鍛えなければという決意に満ち溢れたのだった。

6月12日

今回も魔術師マジシャンと鬼ごっこをしました。

特に変わったことはありませんでした。

相も変わらず無気力症患者影人は増えてるみたいです。

嘘だよ変わったことありまくりだよ。

エンプレス エンペラー
女帝と皇帝がタルタロスに居なかった。

山岸を探しにくるであろう特別課外活動部に見つかるはずいの
で警戒しつつロビーに陣取っていたが魔術師マジシャン以外のシャドウはおろ
か誰も来なかったので早めに撤退した。その時にどつたんばつたん
とタルタロスのロビーで魔術師マジシャンと攻防を繰り広げたのは言うまでも
ない。

だが、そんな件の山岸が無気力症になって見つかった。助けようと
していなかった訳では無いが、さすがに大型シャドウが出てくる日く
らいは特別課外活動部が捜索に出ているだろうとたかを括つたのが
ダメだったらしい。

満月の日が終わったあと、タルタロスを探索していると倒れた山岸
を発見したので助けて影時間が終わり次第、即警察と病院に通報。

「物陰で倒れていた」と見つけた時の状況をでっち上げ、事情聴取まで
され、病院へと連れていかれる山岸を見送ったがどうやら無気力症に
なってしまうていたらしい。

おそらく、ペルソナに目覚める前にどうしようもなくなつてシャド
ウに襲われてしまったのだろう。ペルソナに目覚める前から探知能
力の片鱗はあつたらしいが完全では無いため、消耗し疲れたところに
不意打ちされて防御も何も出来ずにそのまま——と言つたところだ
ろうか。

もう少し気を配っていれば、という後悔はあるがこれ以上うじうじ
していても仕方ないと気を取り直す。

予測通り魔術師マジシャン以外の大型シャドウは出てこないが来月は白河通

りへ向かおうと思う。

7月8日

特筆すべきことは特に無かった。

と言えればいいがそんなことはなく。

相も変わらず影人間は増えている。降り積もるように。そして様々な場所で。

まだ7月だと言うのにチラホラ街中の施設や道端で虚ろな目をした無気力症に陥っている人達が出てきた。

それもこれも超移動型の大型シャドウである魔術師マジシャンを倒さず放置しているせいなのか。最近あいつは何故かこちらのやることを学習してきているのか鬼ごっこを楽しんでいるフシすら見えている。こちらは命懸けだと言うのに。

白河通りのホテルに居るはずの法ハイエロフロント 王と恋愛はやはりというかなんというか、気配も姿もなかった。元からいなかったかのようにも思える。

器用に一緒にホテルまで来た魔術師マジシャン（の腕）と揉み合った際に叩きつけられて調度品の鏡を割ってしまったが見なかったことにした。

あとペット可のアパートだったので世話をしに来ていたコロマルの飼い主さんの遺族の方（事情があつてコロマルを引き取れないらしい）に理由を説明してコロマルを引き取ることにした。

特別課外活動部の戦力としては強力だが、今回は危ないことが多いのでアパートで待つてもらった方が良さだろう。

今月もまた、特別課外活動部の姿は見えない。

8月7日

昨夜は命をかけたいつもの鬼ごっこのついでに念には念を入れて地下施設の埋め立てを魔術師マジシャンに手伝ってもらった。

なんであいつノリノリなんだよ。お前はシャドウかつ敵だろおかしいだろ。あとなんかお前小さくなつてない？

結局、来るはずのストレガも特別課外活動部もこなかった。

ついでに神社に来ていたイレギュラーシャドウは叩き潰しておいた。神社が壊されてコロマルが悲しむのは良くない。山岸を助けることが間に合わなかったぶん、これくらいはやりたかった。

9月8日

満月の日はいつもの通り鬼ごっこだった。
隠者はい^{ハイミット}なかった。影人間は増え続けている。
タルタロスにいるシャドウの数が少ないような気がする。

異変についてだが、いつもなら転校してくるはずのアイギスが居ないどころかまだ天田くんが巖戸台分寮に入っていないかった。荒垣くんもいない。

荒垣くんは1週間ほど前に溜まり場で見たきり。天田くんは普通に男子寮から初等部に通っているところを確認している。

それどころか、美鶴さんが倒れたらしい。

無気力症だとか。そうじゃないとか。

どういう事なのかは分からないが、今は入院していると聞いた。心配だが原因に心当たりがない。

……。

自分のせいではあるのだけれど、特別課外活動部の戦力がどんどん減っている気がする。

10月15日

満月の日の事は以下略。

影人間をそこらじゅうで見かけるようになった。テレビでも無気力患者の増大で医療崩壊が起きているとかこのまま増え続けなければインフラが停止する可能性がでるとか騒がれている。

じわじわと追い詰められているような、そんな気がする。

タルタロスにいるシャドウの数が明らかに減っている。気のせい

じゃなかった。

コロマルが目を覚まさなくなった。

ある日突然、朝起きなくなったのだ。

動物病院に連れて行っても分からないと言われ、このままでは死んでしまうためどうするのかと問われて何も答えられなかった。

自分は、どうすべきなのだろうか。

11月4日

以下略。

コロマルが死んだ。病院で点滴やら延命の為の治療をバイト代を捻出してやつてもらっていたが目を覚ますことは無かった。

そのまま逝ってしまった。何も出来なかった。

自分のせいなのだろうか。こんな選択肢を選んだから？

停滞は悪だと突きつけられている気分だ。

12月2日

かわったことは ない。

1月×日

世界が止まった。

否、終わりにかけている。

養父母も、湊も、真田くんも岳羽も伊織も天田くんも荒垣くんも、幾月でさえもみんな、みーんな無気力症になってしまった。もう大勢死んでいるし、あとは残った僅かな人間が緩やかに死んでいくのを待つのみ。

そしてこんな世界でまともに動いているのは自分だけのようにも感じる。

生きるために必要なシステムのなにかもが止まっているのでこのまま何もしなければあとはほかの人たちと同じように餓死するのを待つしかないんだけど。

さて、自分はここまで手遅れになってようやく魔術師を殺した。……初めに見た時よりも小さくなったそれを殺すのはとても簡単だった。

ずっと、ずっと一緒にいたようなもので、不思議と命懸けだったにも関わらず『この』魔術師には一種の連帯感のようなものを覚えていたから心苦しかった。そんなもの、世界を崩壊させた原因となつてしまった自分が覚えるべきものでは無いのに。

でも、こんなことになるだなんて思わなかった。大丈夫だと思ってた。集めさえしなければ。倒しさえしなければ大丈夫なんて。そんなことは無かった。

自分の考えは間違いで、ズルなんかしちゃダメで、他人を不幸にしただけだった。

大型シャドウを全て倒してニユクスを目覚めさせ、それを阻止するために湊なり奏子なり誰かの犠牲を出さなければ世界は救われないらしい。

ほんとうに、嫌になる。

兎にも角にも失敗したことは確かなので完全に世界が終わってしまふその前に、やり直さなくてはいけない。無かったことにしなければならぬ。

この時ばかりは影時間の月が綺麗に思えた。

いま、世界でいちばん月に近いのはタルタロスの頂上にいる自分だろう。何故かタルタロス内部の門は全て開いていたため、シャドウがほとんど居ないいま各階にある転送装置も駆使すれば登るのは簡単だった。

ここは高いお陰かビュービューと風が吹いて見晴らしがいい。死

ぬには絶好のポイントだ。

お腹がくうくうと鳴っている。空腹を訴えている。

大丈夫。次からはひとつで我慢しないから。ちゃんと全部残さず食べるから。

「……そろそろ、行かなきゃ」

——そしてそこから身を投げた。

第一の騎士（6／23）

6／23（火） 放課後

今日は珍しくどこにも寄るつもりがなかったのでまっすぐ帰ろうと、駅までの道を歩いていたら時の事だった。

不意に、ポケットが熱くなる。

「あつっ……」

まさぐり、熱源を取り出すとそれはイゴールから渡されたメノラーだった。

掌に収まるサイズのその先端に灯った炎が風に吹かれたようにゆるゆらと揺れている。

今までは穏やかに燃えていただけだというのに。

瞬間、誰かに見られている感覚がした。

……とてつもなく恐ろしい何かの気配がする。

「ここに、とどまりますか？」

誰かにそう問われている気がする。

とどまってはいけないと思うも、手に持ったメノラーが火傷しそうなほどに熱くなり、その炎を激しく燃え上がらせた。

つまりこれは、イゴールあやマーガレット部が言っていた『試練』というやつなのかもしれない。

「本当に、とどまりますか？」

足が縫い付けられたように動かない。

拒否権や逃亡する権利は無いらしい。頭の中に響く声は疑問形であるのに答えを聞いてはくれていなかった。

「Yes」 or 「はい」の選択肢しかない。仕方なく、小さく頷く。

すると、間髪入れずに足元に穴が開いて何の抵抗もなく落ちてしまった。

モコイさんを抱きしめている暇はなく、思わず目をつぶる。少しの浮遊感とバチリと静電気のような音が。

「……………あれ？」

しかし、想像していたはずの痛みはやってこなかった。

落ちたら絶対に体のどこかを打つだろうと考えていたのにその痛みは無い。しかも、浮遊感すら感じない。地に足つけて立ってすらいるように感じる。

目をゆっくり開く。

赤い雲。

嵐のように荒れて黄色がかった緑の空。

落雷。

そして草一本生えていない一面の荒野の真ん中に自分は立っていた。先ほどまで街中にいたというのに。

荷物は手に持っておらず、その代わり勝手に長剣が握らされていた。

「ココ、どこなんスかね…」

無事らしいモコイさんが肩から降りて見回す。

モコイさんが悪魔の巣だと言わないという事はそれとはまた別の空間なのだろうか。

しかしマーガレットや他の兄妹である『力を司る者たち』が待ち構えていそうな場所ではない。

ピリピリとした刺すような空気が漂うこの場所は、濃厚な死の気配が漂っていた。

「…わからない。ただ、普通じゃないことだけは確かだ」
身構える。

武器も持たされたあげく身一つプラスモコイさんという組み合わせに、何が来るかわからないため警戒を緩めることが出来ない。

ヒヒーン！

馬の嘶いななきが聞こえる。

聞こえたのは、真上。

反射的に一歩下がり、顔を上げる。

また嘶きを上げながら垂直落下してきた馬は白く、そして体中に目が大量についていた。

一度地面を蹴り空へと躍り出たその馬の上には、王冠を被り弓を手に持った黒いローブを纏う骸骨が。

「オマエがメノラーを持ちしヒトの子か！　すべてはメノラーの導き
：我々の試練を越えられなければ死、あるのみよ！」

見た目に寄らず随分とハイテンションな骸骨らしい。
正直思っていたのと違う。なんかこう、イメージではおどろおどろ
しい感じで話しかけてくるものだと思っていた。

でも快活な感じで爽やかさすら感じるのはどうなんだろうか。

「オマエ、なにか失礼なことを考えていたな！　…まあいい！　俺は
魔人　ホワイトライダー！　勝利を約束された白き騎士よ！　どう
だ、かつこいいだろう!?!」

「あ、はい、かつこいいと思います」

「フハハハハハ！　そうだろうそうだろう！　では、存分に我ら死合^{しあ}
うとしよう！」

骸骨——ホワイトライダーは殺気を漲^{みなぎ}らせた。

こちらにも剣と召喚器を構え臨戦態勢をとる。

「なんなんスか!?!　ままま、魔人つてやべーヤツだよチミ！　でも、チ
ミが戦うならモコイさんも頑張っちゃうヨ！」

ぶるぶると震えながらだがモコイさんもブーメランを構えた。

それを見たホワイトライダーは満足そうにモコイさんへ向けて弓
に矢をつがえる。その矢に、光が集まった。

「…つ!!」

…冷や汗がぶわりと吹き出てとっさにペルソナをポベートルに
変えてモコイさんの前に踊り出してから召喚器をこめかみに当て手引
金を引く。

瞬間、凄まじい威力の光の矢が弓から放たれた。

ガキイン！

放たれた光の矢は、ポベートルに反射されて霧散した。

ポベートルの耐性は『物理属性全てを吸収』と『呪殺と破魔を反
射』だ。となるとこれは物理攻撃ではなく破魔属性の攻撃だろう。

「なるほど、この俺の必殺^{ゴッドアロー}の一撃を直感のみで凌ぐか。面白い、面白い
ぞヒトの子よ！　オマエはその死を察知できるまでに何度死んだ？

何度、死の匂いを感じた？　さあ、もつと俺に教えてくれ！」

“必殺”という単語に冷や汗が出る。これを受け切れていなかったらモコイさんは即死していた可能性が高い。そんなこと、させるわけがない。させていいわけがない。

悪魔だろうとモコイさんはもう自分の大切な存在だ。死んだものは元に戻らない。だから、失うわけにはいかない。

ギリリと、ホワイトライダーの空洞の眼孔から光が漏れた。

【龍の眼光】

「ハッハー！」【死天召喚】

心底楽しそうにそう叫んだホワイトライダーの両脇に青い半透明のゼリーののような体を持つ天使 ヴァーチャーが現れる。現れたヴァーチャーはそのままこちらに手をかざしてきた。

【ラクンダ】

一瞬青い光に包まれ、身体がすくむ。防御力を下げられたらしいことに気が付いて舌打ちする。

「あ、させないスよ！」【デクンダ】！

「モコイさん、その魔法いつのまに……！」

「へっへ、オトナの秘密っス！」

覚えていなかったはずの魔法を使うモコイさんに驚きながらも召喚器の引金を引く。

「モルペウス！」【チャージ】

力を貯める。

そしてそのままモルペウスが大きく両腕を開いた。

【大殺界】

空間ごと斬るかのようにヴァーチャーとホワイトライダーに斬撃を浴びせる。

呼び出されてすぐのヴァーチャーはその一撃で消え失せ、ホワイトライダーはすこしのけぞった。

「いいぞー！ その一撃、骨の髄まで響いたぞ!!! だが、オマエたちはこれを耐えきれるか!？」

ホワイトライダーが手を上げると上空に熱が集まる。

その熱と魔力はアギダインの比ではない。これは――

「!!」

【プロミネンス】

「ああああ!!!」

手が振り下ろされた瞬間、正しく太陽と形容されるような熱と炎が襲い掛かる。

衝撃で立つこともままならない。肺の中の空気が一気に吐き出された。

「ぐ……う……!」

「うう……」

地面に倒れ伏すも顔を上げてホワイトライダーを睨み付ける。

鼻に制服が焦げたような匂いがつく。

「ふつ……う……ぐ……」

なんとか立ち上がり、召喚器の引金を引く。

「ポベートルール!」【メデイラマ】

枕を抱えた猿がくるりと一回転し自分と倒れたままのモコイさんの傷を癒す。ポベートルールは補助と回復に特化したペルソナになっているのでホワイトライダーの攻撃を凌ぐだけなら事足りる。

だが、死なないことが大事のではなく相手を倒さないと終わらない戦いなのでポベートルールで受け続けるという事は無理に等しい。相手に戦意の喪失は見込めず、いずれ気力が尽きてしまう。

そうなれば終わりだ。

「これも耐えたか……では、これはどうだ!」

心底楽しそうにホワイトライダーは魔力を練る。

先ほどのプロミネンスとは違い、それは純粹な魔力の塊から生み出される強大な攻撃だということがはっきりわかる。

「モコイさん!」

「ウイ!」

「さあ、ヒトの子よ! 名残惜しいがこれで終わりにしようではないか!」

——そしてそれは放たれた。

【メギドラオン】

爆発。

強大な魔力がうねり、紫の炎の爆発を起こす。辺り一帯が更地になるようなその攻撃は地面をえぐり、破片と土煙を飛ばす。

土煙が晴れた後、そこにはボロボロの優希だけが倒れていた。仲魔と思われるモコイは死んで消滅したのだろう。

「…まだ死んではいけないようだが、倒れたか。面白いヒトの子であったが所詮はこの程度か…」

ホワイトライダーは落胆する。

全力の攻撃を耐えきり、向かってくるかと思えばこの程度などとは思わなかった。と。

止めを刺すべく矢をつがえ、狙いを定める。もう動くことが出来なただの的に死を与えることは造作もない。

ぴくりと、倒れ伏したヒトの子の手が動いたような気がした。

「油断大敵アメラレっスよー!」【挑発】

「——!?!」

後ろを振り向く。目と鼻の先にブーメランを構えたモコイが跳びかかってきていた。

死んだはずでは、と思う間もなく咄嗟につがえていた矢をモコイの方へ向け、放った。

【ゴッドアロー】

その光の矢が当たる瞬間、今度はモコイの前に枕を持った猥のような像ヴァイジョン——ポベートルが現れくるくと回転しながらその矢を弾いた。

あれは、ヒトの子の——

「今だネー!」

「おおおおお!!」

ホワイトライダーがそう察した瞬間、モコイの声と共に聞こえる別の雄たけび。

顔を正面に戻せば剣を振り上げたヒトの子の姿が。

モコイに気を取られ、至近距離まで迫られたことに気が付かなかったホワイトライダーはその一撃をまともに受ける。

振り下ろされた刃が躰からだに食い込む。

「ふ、はは、ははは！ そう来たか！ 見事なり！ ヒトの子よ！」

そのままふらつき、崩れるように落馬した後ホワイトライダーは愛馬ともども消え去った。

「…終わった…のか…？」

「チミ、それはフラグっていうんだネ…」

ホワイトライダーが消えた後、力が抜けて地面にへたり込む。

最大威力の『メギドラオン』が来たときは死を覚悟したがポベートルのスキル『食いしぼり』が発動してギリギリ耐えることが出来て本当によかったと思う。

ぶつかる瞬間に宝玉を持たせたモコイさんを範囲外に投げ飛ばして囿こましてもらったのが上手くいったのも功を奏した。

これがシャドウとかならず上手くいかなかっただろうと思うのである程度人間よりの思考能力のある悪魔という存在で助かった。

ヒヒイイイン！

「フハハハハハ！」

と、安心していたら高笑い馬の嘶こゑきが聞こえ、目の前に青い稲光と共にホワイトライダーが現れた。

「ヒトの子とその仲魔よ!!! 先ほどの機転、驚いたぞ！」

「ウワー！ チミがあんなこと言ったから復活したじゃないスカ！」

「モコイさんごめん！」

思わず抱き合ってお化けでも見たような反応をする。

というか実質倒したのにまた出てきたのでお化けで間違いないと思う。流石にもう一戦は勘弁してほしい。消耗もしているし二度もせこい手を使って勝てる相手とは思わない。

「まあそう構えるな！ 確かに俺は一度死んだのだからもう死合うつもりはない！ 出来ればもう一戦欲しいが…な？」

「なっ…」じゃない。

なにが「な？」なんだろうか。勘弁してくれ。

「魔人ってヤベーっスね」

モコイさんの言葉に頷く。

一回殺されてももう一回やりたいとかとんでもない。自分は目的の為に死んでもやり直してチャレンジとかしているがホワイトライダーのそれは戦闘狂のそれだ。

「そうか！ 褒め言葉として受け取っておこう！ しかし俺は勝者に与えるものを忘れていたのぞな！ 戻ってきた次第だ！」

「要らないです」

絶対口クなものじゃない。

即答でノーサンキューしておく。

「まあそう言うな！ オマエにとっても必要なものだろう！ 受け取れ！」

なんでだ。

断ったのに押し付けられてしまうことになるらしい。とは言ったものの何かを差し出されたわけではなく。

「……」

首を傾げる。

こちらの不思議そうな様子にホワイトライダーが高笑いした。

「フハハハ！ まだ実感はないだろうが資格あるオマエには俺の分霊を降ろしておいた！ どうだ！ 死と戦争の足音がいまにも聞こえては来ないか!？」

「いや、無いかな……」

「そうか……」

特に足音とかは聞こえてこないのぞバツサリ切ると落ち込むホワイトライダー。

さつきまで殺し合いをしていたのにこんなにしよんぼりされては可哀想になつてきた。

が、本当に特に実感はないのぞ降ろしたという言葉を信じるならば、ペルソナを貰ったということでもいいのだろうか。

「如何にも！ 我ら悪魔はヒトの認知によって変わる存在！ 即ち心の海から生まれたペルソナとやらとも規模が違いながらもまた同じ

存在ともいえよう！」

なので、『神霊としての格を落としてヒトが扱えることのできるペルソナとして降魔させた』というのがホワイトライダーの主張なので自分の考えは間違つては無いのだろう。

「ヒトの子よ、勝利をもたらす終末の白き騎士の力、上手く使うと良い！ では、さらばだ！」

視界が白に染まる。

気が付けば、メノラーが熱くなった道の同じ場所に戦う前と同じ状態で立っていた。

「マボロシ…だったんスカね…」

「いや…」

モコイさんの言葉を横に振って否定する。

メノラーはもうその熱を失ってしまったが自分の中で確かに今までは違うペルソナがひとり、息づいている気がしたからだ。

ナギサ（6／25）

目を開けば一面の青。

「『第一の試練』を乗り越えたようね」

「ん…」

ぼんやりと、聞き慣れない声に軽く返事をした。

「あら、まだ寝ぼけているのかしら。ここは寝る場所ではないわよ？」
「!？」

半分意識がまどろんでいるところにくい、と顎を上げられ、そこでようやく意識がはつきりとする。

ガラスで包まれたこの青い部屋はベルベツトルームだ。そして目の前にはマーガレットが。

そう言えば、『試練』を乗り越えたらまた呼ぶと言われていたような気がする。とそこでやっと思い出す。

「起きたわね…まったく、世話の焼けるお客様だこと」

心底、呆れたと言わんばかりにため息をつきながらイゴールの隣に戻ったマーガレットはペルソナ全書と思われる分厚い書物をめくる。

「貴方様は『第一の試練』を越え、無事にその力の一端を手に入れた…大変喜ばしいことです。我が主も喜んでらっしゃることでしょう」
「な」

「そうですか…」

主が喜んでいると言われてもイゴールの主人とか知らないので反応に困る。

「どうかその主、こんな試練（という名の悪魔とのガチンコの殺し合い）を用意したうえで喜んでるとかかなり性格が悪いのでは？」

絶対性格が合わないと思うので会いたくない。

「それは黙示録に示される『死神』の力。…けれど、それは貴方にとつて呼び水に過ぎないわ。どう使うか、生かすも殺すも貴方次第よ。うまく利用して頂戴」

マーガレットが示したのは『死神』のタロットカード。

青い光に包まれて現れたそれをまたペルソナ全書で挟むとマーガ

レットは更に続けた。

「あのお方から示された試練は残り三つ。次は一か月後…と言ったところね」

「それではまた、お客人が次の試練を乗り越えたときに相まみえましようぞ…」

短い会話の中で具体的な数字が示された。

試練は残り三つ。次回は一か月後。

たかが三回といえども、大型シャドウのようなスパンで大型シャドウよりもめんどくさい敵を自分とモコイさんだけで相手にしないといけないと考えると、些か厳しいものがある。

今回のような不意打ちやズルは効かない可能性が高いからだ。今回は、本当に運が良かっただけに過ぎない。

(もつと強くならないと…)

そう決意しながら意識は再び闇の中へと落ちていった。

6 / 25 (木) 放課後

今日はモコイさんと2人で帰りつつ、喉が渴いたので缶ジュースを自販機で買って歩きながら飲んでいた。

今日は本当に暑い。病気のこともあるため長袖登校が許されていて直射日光が当たらなくても暑いものは暑い。それこそ、頭がくらくらしそうになる。本当に六月なのかという暑さだ。

「やつぱりナギサや！ お前、生きとつたんか!？」

そんな声と共に突然腕を引かれ、脇道に引つ張られる。

思わず横を向けば、青い髪とメガネ。ついでに半裸。

どこかで見た事のある二人組だ。見間違いであることを願いたいし幻覚ではないのだろうか。

「ほら、タカヤ、この顔どー見てもナギサやろ！ 見間違いあらへん！」

「ええ、そのようですねジン。さあナギサ、行きましょう」

ストレガのジンとタカヤだ。聞き間違いでも見間違いでも幻覚で

もなかった。

ぐいぐいと腕を引つ張られるが自分を誰かと勘違いしているらしいようにとても困る。

思わず腕を振り払い、叫ぶ。

「ひ、人違いじゃないんですかね!?　　というか誰ですか!?　いきなり何なんですか!？」

軽くパニックになって思わずどももってしまったがその意志を伝える。このままいけば誘拐だよ誘拐!しかも人違いという。

後半は本当に白々しくてごめんと謝るしかない。君たちストレガの事は(まあまあ)知ってますでも無理なんですごめんなさい。

というかナギサって誰だ。知らないぞそんな人。ついでに湊と奏子もいるし既に特別課外活動部所属なので今からストレガの仲間入りするというのも無理な話で。

どう考えても彼らについていくことはできない。

人違いだという事を聞いた彼ら——というよりジンがタカヤの方を向いて顔を見合わせる。

「これって…ナギサは記憶を失つとるんじゃ…」

「そのようですね…ナギサ、私はタカヤ。そして横の彼はジンです。幼いころ、貴方と共にあの地獄を耐え抜いた仲ですよ」

「いや…すみません…ホントにわかんないんです…人違いだと思います…」

知らない。

マジで知らない。俺とストレガきみたちは今年の八月で(あくまで特別課外活動部の一人として)初対面のはずだよ。と未来の予定を伝えようにもそんなことはできないので首を横に振る。

顔は知らないけれど自分によく似た顔らしいナギサ君に心の中で手を合わせることにしかできない。

「こらあかんわ…ナギサ、ホンマに覚えとらんのか?　あん中でひとり自然覚醒したにもかかわらず、わしら人工ペルソナ使いを一番気にかけてくれとったんはお前やないか!　わしはよう覚えとる…お前が、タカヤのペルソナに自分のペルソナの名前をあげたときかて…わ

しらを庇ってクソツタレの塔から落ちて居なくなった時のことかて
：ついさつきのことみたいに思い出せる！　せや、もう計画は凍結さ
れたしチドリも生きてて一緒におるんや…！　記憶が無いくらいか
まへん！　帰ってきてくれや…ナギサ…」

こちらの両肩を掴んで継るようによくし立てたジンが可哀想に
なってくる。

でもこちらにはそんな記憶一切ないので本当に人違いだと思っ
としかできない。ここで自分が付いていけば本当のナギサ君に悪い
気がしてしまうのだ。

タルタロスから落ちたという事はもう死んでいるかもしれないけ
れど、もしかしたら生きているのかもしれない。そんな中で恐らく
そっくりさんだろう自分が居たら本当のナギサ君は良い気がしな
いと思うのだ。

だってそれは、居場所をとってしまうことになるのだから。

「…すみません。ホントに人違いだと思えます。それに俺の名前はナ
ギサって言うんじゃないんで優希って名前なので…」

「そうか…そら、すまんかったな…」

やんわりと手を外してちゃんと名前も違うことを説明する。

少し残念そうな顔だが納得してくれたようで離れてくれたのは本
当によかった。

とにかく、いずれ敵対する彼らに下手にかかわる訳にはいかないの
だ。

情を持ってば覚悟が鈍ってしまうし何より彼らはもうペルソナの制
御剤のせいで体はボロボロ。あと二年生きられるかどうかだという。

救うのであればもっと早めに行動すべきだろうし、結局のところ自
分の意識が自分としてはつきりするのはどうあがいても4月6日な
のでどうしようもない。

逆のことを言えばそれ以前の事は自分にもわからないし自分が何
をしていたのかよくわからないのだ。しかしそれもあくまで自分な
ので自分の予測から離れた行動はあまりしないし記憶はなくとも体
が勝手に喋ったり動いたりするときはある。ただ意識していないだ

けで。

そして今回タカヤとジンに会っても何の反応も言葉も無かったの
で自分は本当に2人の事を知らない可能性が高い。

つまり件のナギサ君とは別人というわけだ。

「別人：そうですか。ナギサ、貴方がそういうのであればそういうこ
とにしておきましょうか」

(!?)

タカヤの方は諦めていなかったらしい。というか話を聞いてな
かったらしい。

とんでもねえ電波だ彼は。こういう時に電波を受信するのは本当
にやめてくれと言いたい。

「私は感じますよ。私のペルソナ『ヒュプノス』と貴方の中の存在が
共振しているのを。ですが、貴方の中のそれはいま、酷く小さい：ま
るで、砕けてしまったかのように。…いえ、わ分割れされた”：？」

いや、本当に電波だとは思わなかったがこつちとしては共振とやら
はこれっぽちもわからない。ホワイトライダーが言う、聞こえない
足音くらい実感がない。

というかタカヤは共振云々どうでもいいので半裸をやめて服を着
てほしい。夏ならまだいいけれど秋や冬場はみているこちらが寒い
ので服を着てほしい。とにかく服を着てほしい。寿命が短い分余計
に服を着てほしい。敵に回るとはいえ風邪ひかないのかとか心配に
なる。

夏でも長袖を着ている自分が言える話ではないけど。

「よくわかりませんが…か、帰っていいですか…」

「ええ、もちろんです。ですがナギサ、記憶があるうが無かろうが、私
は今のあなたに興味があります。：気が変わったらすぐにでもここ
ら側へ帰って来てください。あなたはどうかあつても『こちら側』な
のですから。私たちはいつでも貴方の帰りを待っていますよ」

全く嬉しくない「帰ってきてね♡」だ。

しかもこのまま自分の事をその居なくなつたナギサ君と重ねるつ
もりだ。ジンはすぐにわかってくれたというのにタカヤはどうして

こうも電波なんだろうか。

というか思い込んだら止まらないタイプなのだろうか。

以前の周で会った時はこんなにしつこくなかったし、場合によっては誘われはしたけどナギサなんて名前は出なかったし一体全体何がどうしてこうなってしまったのか。面倒だ。

「では、また会いましょう」

「まあタカヤがこう言うてはるんや。人違いかもしれんけど付き合ってもらおうで」

「ええ…」

目を細めて満足そうにするタカヤと諦めたようなジンに再会の約束を無理やり取りつけられ困惑する。

十中八九近いうちにまた会うことになるそれだ。憂鬱になる。

「はあ…」

2人が去った後、溜息を吐いた。

あまり五月蠅くないふたりではあるけど、なんだかあつというまだった。

なんで彼らが接触してきたのかよくわからないし、今後のいろいろに関りがないとは言えないけどもともと『これまで』で彼らの状況を理解してしまっているいま、悪印象はあまりない。

「なんか…嵐のような2人だったっすね…」

「たしかに…すごく疲れた…」

ぬるくなったジュースを飲みながら、これから起こるであろう面倒を想像してげんなりしつつ帰宅した。

夜

ラウンジのソファに座りながらうつらうつらしていると、珍しく湊が横に座ってきた。

「…ねえ優希、ペルソナ増えた?」

「へっ? なに?」

突然そう言われたものの、対応できず素っ頓狂な声をあげてしま

う。

『これまで』でポベートルやパンタソスに目覚めたときも同じく湊や奏子に聞かれたことがあるので謎だが、ふたりはどうしてペルソナが増えたことに気がついたのだろうか。

「だから、ペルソナ増えた？　って」

「え…あ、うん…なんかわかる？」

これは湊に言っても問題ないだろうと真面目に答えつつもそう問い返せば湊は困った顔をする。

そんなに答えにくい事だったのだろうか。それとも、こちらの訊き方が曖昧過ぎたせいだろうか。

「なんか…なんだろう…気配が増えたとかじゃなくて…なんとなく、気配が強くなった気がして」

なんとも要領を得ない答えが返ってきて首を傾げる。

気配が強くなったというのはホワイトライダーの分なのだろうか。でもそれなら、湊は増えたというはずだ。

なのに強くなった…？　もしかして、ホワイトライダーがうるさいからだろうか。とにかくやかましかったのでもしかしたら降魔されたホワイトライダーの分霊もやかましくてそれで気配が強くなったんだろう。

「なんかやかましい感じ…？」

恐る恐る聞いてみる。もしかしたらホワイトライダーの言った足音云々は自分じゃなくて湊に聞こえてるのかもかもしれない。

「ううん。違う。そうじゃない。ただ…どうだろう、僕には少し表現しにくい感じだと思う」

「そっかあ」

まあうるさくないのならそれでいいか、と納得する。

「こういうのは奏子に聞いたら早いだろうけど、たぶん奏子は駄目だ。よく視えすぎるし…いまの優希を意識して『視よう』としたら怖がるよ。山岸もあんまり見てないと思うからまだ大丈夫だけど、しっかり視たらダメかも」

困った顔で湊がそう言うので奏子と山岸が怖がりそうなことを想像する。

……。

もしかして、背後霊みたいな感じでホワイトライダーがピースしてるとかじゃないよね？

とても不安になってきた。山岸もダメという事は間違いなくその線が濃厚になってきた。

よくわからないがホワイトライダーの制御に気を配った方がいいんだろうか。まだ実践では使っていないから本当に出せるかどうかもわかっていないのだ。

自分の心から生まれたペルソナではなく、悪魔から直接貰ったペルソナなので正直どう動くかわからない。ホワイトライダーとマーガレットが太鼓判を押ししていたので使えることには違いないだろうが、それでも湊にこんなことを言われてしまう代物なら不安になるばかりだ。

「ごめん…増えたやつがその…見た目ホラー一直線の骸骨系だからさ…(乗ってる馬に) 目も多いし怖いよね…あまり使わないように気を付ける」

「え…？…そう、…僕は平気だからいいけど…優希は——いや、なんでもない」

なんだか歯切れの悪い反応だ。

やつぱり湊でも目がたくさんあるやつは怖いんだろうな、と思った。

非常時以外はお披露目できない存在(暫定)になってしまったホワイトライダーほんとうにごめん。申し訳ないというしかない。でも可愛い弟と妹の為なんだ。と心の中で謝ると、なんだか抗議するような声が聞こえたような気がした。

…聞こえなかったことにおこう。

「じゃあ、なんでそのペルソナが増えたか聞いてもいい？」

話を変えたかったのか、湊がペルソナを増やした経緯を聞きたいらしい。

試練云々は抜きにして適当になんかやかましい人にもらったって
感じで話そうと思う。

実際そんな感じだし。

「なんか…戦闘狂の骸骨みたいな人に…感銘を受けて？」

「ええ…」

「いや違うな…なんか貰った？ 押し付けられた？ みたいな…」

「悪徳商法じゃないよね？」

「悪徳商法かもしれない」

「クーリングオフしようよ」

真面目なのかそうじゃないのかわからない湊の言葉に苦笑いする。

確かに、まだホワイトライダーは未使用だ。クーリングオフも十分
できるんじゃないだろうか。

(できません)

…心の中でまた抗議するような声が上がった気がした。

今度も聞こえなかったことにする。

「悪魔って…クーリングオフとかの制度あるのかな…」

「なんだって？」

「いや、なんでもない…押し付けられたにせよ何にせよ、ペルソナが増
えるのはありがたいし怖がられない程度に使うことにするよ」

「うん」

悪魔にそういう制度があるのかはわからないが、多分ペルソナの
クーリングオフはできないんだろうな、という事は察せられるのであ
りがたく有効活用しようと思う。

何か問題があればイゴールの主とやらを呼び出してしばけば良い
だけな気がしてきた。しばけるかどうかは別として。

全力の拳一発分くらいなら許してくれそうだ。

もし殴ることがあるなら思いっきりチャージしてタルカジャ重ね
がけして助走をつけて大きく振りかぶって殴ろうと思う。

なんだか魂がそう叫んでいる気がするのでそうすることにする。

そう固く決意を秘めていると、湊が口を再び開いた。

「次の満月、あと二週間くらいだね」

「そういえばそうだな…」

「…優希は僕と一緒に行動しよう。流石に二度も勝手に動かれたら心配にもなるし…目の届く範囲にいてほしい」

至極真面目な顔でそう告げられて何も言えなくなる。

これではどちらが兄かわからない。兄としての面目はもうあんまりなくなってしまうてる気がする。

三回連続でぶっ倒れる。r寮から勝手に脱走ってとんでもないやらかしだと思う。三回目である今回はシャドウに誘われたらしいので不可抗力ということだ。こんなこと自体初めてなので戸惑っている面もあるが。

「ああ…足手まといにならないよう頑張るから…」

「足手まといなんかじゃない」

湊が眉をわずかに寄せる。ああ、これはよろしくない対応をしてしまったようだ。

「…ただ心配なだけ。僕も、奏子も。他のみんなも」

「でもさ、ほら、俺はここるところ活躍できてないし…」

倒れてばかりだし、と小さな声で続ける。

自分無しで特別課外活動部の皆が大型シャドウに勝てるのは喜ばしいことだ。だってそれは、自分が居なくても大丈夫ということなのだから。

安心すべきことなのだ。

でも、気持ちはずうではなく。役に立っていないことや大事な局面で倒れてしまうことが酷く悔しいのだ。それも、以前なら倒れないよな時に倒れたり風邪をひいたりしているのが尚更もどかしい。

もつと動けるはずだと動いていた時の感覚でやるのは不味いことだとわかっている。

それが自分という生き物だとわかってしまった。

しかしわかっただけでも止まれない。

まるで下りの坂道を走るブレーキの壊れた車のようだ。

「だから、無理しない程度に頑張るよ。流石に四回連続って言うのは嫌だしね」

「怪我したらちゃんと回復する?」

「うん」

「単独で突っ走らない?」

「しないよ」

「怪我してるのに限界まで無茶しない?」

「しないしない」

まるでおつかいに行く子供に言い聞かせるように質問を投げかける湊に頷いていく。

「——誰かが危ない時に庇ったりしない? たとえそれが、僕や奏子でも」

「…それは、」

言い淀む。

しないと約束できない。だって、俺にとって大事なものは湊と奏子だ。その次に他の人の方が優先度が高い。

正直、繰^替り返^えすこと^の利^利できる自分の命よりも。

だから、

「約束できない。湊も奏子も、きつとほかのみんなも、庇うよ。大切な人が大けがしたり死にそうなきには」

湊の目をみてはつきりと告げる。

それをどう受け取られたのかわからないが湊が深いため息を吐いた。

「…わかった。僕も、奏子や優希が大けが負いそうとか、死にそうとかになったら庇うかもしれないし…でも僕らだってそんなに弱くない。優希一人に全部負わせるほど弱くないから」

まるで宣戦布告するようにそう告げて来た湊に無言を返す。

しばらく見詰め合った後、玄関が開いた音で視線を外して玄関を見た。

「おかえり」

——ああ、『飢えた獣の為に身投げするよう』だとそう評したのは、

誰だったのだろうか。

湊は玄関に向かって声をかけた兄を見て、苦虫を噛み潰したような顔をした。

お出かけ（6／26～6／28）

6／26（金） 昼休み

教室の自分の机に座り購買で買ったクリームパンを口に運びつつ参考書を読んでいると、不意にそこに影が差したので顔を上げる。

「三上、少しいいか」

美鶴さんが机の前に立っていた。

周りのクラスメイトの反応をちらりと盗み見ると自分が美鶴さんに話しかけられるのは珍しくないのか、こちらにわずかに視線が向くが「ああ、三上くんね、はいはいいつものいつもの」みたいなさほど興味もなさそうな慣れた目でこちらを見るような反応を一瞬だけしてみんな食事や歓談に戻っていく。中には興味本位でちらちらとこちらを探るような気配もあるけど。

気にしていても仕方ないので食べかけのクリームパンを袋に戻し、参考書に付箋を挟んで閉じて立ち上がった。

「どこかに移動したほうがいい？」

「いや、この場がいい。大事なことだが重大ではないからな」

「わかった」

「それでだな——単刀直入に聞く。三上、日曜の予定は空いているだろうか？」

真剣な目で聞いてきた美鶴さんに今週の予定を思い出す。

日曜日は特に：：なにも予定をいれていない。モコイさんとの食べ歩きも今週はない。

「空いてるよ」

「そうか。では、日曜日に私と出かけないか？ この前言った友達らしいこと」をしよう」

なるほど、そうきたか。

「じゃあ当日待ち合わせてことで：：ぎっくりとした予定は俺が立ててもっ」

「ああ。：：恥ずかしながら私はまだ友人付き合いすらまだだからな：：友だち」となると更にわからない：：きみに任せよう」

顔を赤らめながら恥ずかしそうに美鶴さんはそう告げた。

しかし、友人と友だちという言い方を言い分けているところを見るにそれぞれ別のものだと考えているのではないのだろうか。確かに、「友人」だと改まった言い方で少し硬い感じがする。つまり気軽な友だちとしての付き合いを求められているということなので――

(ゲーセンとかカラオケとかに誘う…? とか)

いや、それだと距離が些か近すぎないだろうか。

そんなにいきなりカラオケやゲーセンという普段美鶴さんが利用し無さそうな場所に連れて行っても困るだろう。

友だちとして付き合うなら2人とも楽しめる場所の方がきつといい。

「了解。考えとく」

そのまま立ち去った美鶴さんを見送り、姿が見えなくなったところで再びクリームパンを袋から出して考える。

正直、当日合流した時に適当に「どこにいく?」と聞いてアドリブで決めてもいい。その方が友達らしい気はする。が、今と美鶴さんと自分は友達とは名ばかりの関係だ。それはそれで困ると思う。

(いや…難しく考えるからダメなのか?)

とりあえず財布の中身を見てから考えよう、とカバンから財布を取り出して中身を確認する。

(……あ)

放課後

「と、言うわけでは…食べ歩きとその他諸々でついにお金が少なくなってきたのでアルバイトしようと思うんだモコイさん」

「悪魔を麻痺^{シバ}させてカツアゲすればスグツすよスグ。チミなら上手くカツアゲできそうな気がするし」

「そういうのはちよつと…」

食う食われるの関係でも可哀想だしそう言う手段で手に入れたお金を交友に使ってもいいのだろうかという気持ちになる。

なんだか倫理的にアウトな気がするのだ。

ならタルタロスで手に入れたお金で武器や防具を買っていいのか

？という話になるがそれは経費として落とされているのだろう。たぶん。

「イけるイける。投資フアンドという名目で悪魔からカツアゲ、デビルサマナーみんなそんなかんじで稼いでるカラ。ヤタガラスからの依頼料だけだと、厳しいんすよ…経費と天引きが…ネ…」

遠い目をするモコイさんは以前サマナーのところに行ったりしたのだろうか。

前々から妙にそういうことに詳しい。

モコイさんの過去をわざわざ訊こうとは思わないがただのお人よしの悪魔というわけでもなさそうだ。

「カツアゲはやめておいて、今は放課後入れるバイトを探すよ」

「じゃあモコイさんはチミがセコセコおバイトしてる間、お散歩にでもいってくるカナ」

喫茶シャガール

ポロニアンモールにあるその喫茶店で丁度臨時アルバイトを募集していたので日雇いとして入ることにした。こののコーヒーを飲むと魅力が上がるとかなんとか噂されている。もちろん、そういう事は抜きでコーヒーがおいしいので客足が絶えることは無い。

「ご注文はお決まりですか？」

「フェロモンコーヒーひとつ」

「かしこまりました」

注文を取ってコーヒーを入れてから席まで運ぶ。もしくはデザーとと一緒に。

バイト内容自体はそれプラスレジと店内清掃の繰り返しだったが、厨房で黒い虫を見つけたので客席があるスペースに逃げられないうちに始末して捨てておく。

こんなのが客席を歩いていたら大騒ぎになる。衛生的にも悪い。

シャガールの厨房自体は綺麗だがやはり入っているポロニアンモールが複合商業施設なのでどこかで湧いた個体が入ってきてしま

うのだろう。

なるべく触れたくないしこんなのが入ってくること自体嫌だが、我が物顔で床や壁を這われている現実もそれはそれで嫌だ。

部屋に一人で居るときに出たら間違いない情けない悲鳴を上げるがここは店だ。

ゲ○ゲジだろうがGだろうがネズミだろうがなんでも駆除してやる、という心意気で気合いを入れなおした。

…度胸がそれなりにあがった気がする。

「いらっしやいませ」

「あ、お兄ちゃん!」

何人目の客を席に案内したか忘れた頃にドアを開けて入ってきたのは奏子と湊。

転校してきてからは珍しい組み合わせだな、と思いつつも営業スマイルで対応する。

「お客様、こちらの席にどうぞ」

「うわ…すつごい営業スマイル」

「どうでもいい…ほら、早く座るよ」

うわ、はこういう意味の「うわ」なんだろうか。

悪い意味の「うわ」だったら落ち込む自信がある。やっぱり営業スマイルは不自然なんだろうか。不安だ。

「注文がお決まりになりましたらまたお呼びください」

「店員さん対応のお兄ちゃんスゴク新鮮だけど違和感ある…うぬぬ」

「確かに。というかなんでバイト?」

奏子が唸り湊が首を傾げる。

単純に小遣いとして自由に使えるお金が少なくなったから。なんて今は言えない。バイト中だから。

それに今日は自分のような臨時バイトを募集するほどだからなのか結構客が多く、忙しいので喋ってる暇はなさそうだ。

すぐに呼ばれて別の席に走るのだった。

「助かったよ、機会があればまた次もよろしく」

「いえ、こちらこそ」

店長から給料の入った封筒を手渡しで貰い、店を後にする。
もう夜も遅いし寮に帰らないと条例に引つかかるし影時間ギリギリになるのは心配されてしまう。

足早に帰る道の途中でモコイさんと合流して寮へと帰る。

「モコイさん、もしかしてずっと待っててくれた？」

「ノン。モコイさんもチミと合流するまでは野暮用をしてたのネ」

「なるほど」

チラチラと後ろを気にするモコイさんが若干気になるが特に視線も悪魔の気配も感じないのでそのまま歩みを進めた。

6 / 27 (土) 放課後

もう少し手持ちを潤しておきたいので今日はラフレッシュ屋でバイトすることになった。

勤務は短い時間だったがさすがここは花屋という事もあり一定の色でまとめた花や季節の花、冠婚葬祭用、花言葉でまとめた花束を作ることがあり、花に対する知識が増えた気がする。

…今日は少しだけ誰かからずっと見られているような視線を感じた。

悪魔ではないと思うので放っておこうかと思う。

6 / 28 (日) 昼

「それじゃあモコイさん、行ってくるね」

「留守は任されたっスよ！」

今日は美鶴さんと出かけるのでモコイさんには留守番を頼んで部屋を出る。

モコイさんはその気になれば窓からでも出られるので部屋の鍵はちゃんと閉めてから出ることにした。

「ごめん、待たせた？」

「いや、時間丁度だ。いこうか」

私服の美鶴さんと寮の玄関で落ち合い連れ添って歩く。

「予定は一応軽く考えてきたけど美鶴さんが興味なければ飛ばしても

いいし、土壇場で変更してもいい。ゆるく適当に行こう」

「ああ…だが、少し緊張するな…」

「難しく考えないで時間までに帰ってきてくれば何してもいいんだよ。だって今日は友達同士の遊びなんだし」

軽くそういえば美鶴さんは少し微笑んで「そうだな」と頷いた。

これで美鶴さんの緊張をほぐせたのなら上々だろう。

しばらく歩いて巖戸台駅前商店街にある古本屋『本の虫』に来た。美鶴さんが読書が好きかどうかはわからないが、伊織のようにはしゃぐタイプでもないしな…と考えた結果がこれだ。苦肉の策すぎる。

「まずはこの本屋に行って、飽きたら他のところにも行こう。行きたいところとかある？」

「いや、今日は実の所何も考えてなくてだな…すまない、任せきりになる」

「いいよ、謝らなくて。予定立てるって言ったのは俺だし。その代わり今日は俺に付き合ってもらうからね」

扉を開けてこんにちは、と挨拶しながら入る。

古本屋の中は薄暗く、クーラーが効いているのか涼しかった。その上で、店の奥ではカラカラと古い扇風機が回っている。

「おお、湊ちゃんかい？ 今日も取つかえ引つ変えべっぴんさんを連れとるんだなあ」

「違いますよ。俺は湊じゃないです」

「なんの、わたしも負けとらんぞ！ 若い頃はぶれいぼおいでなあ」

店主の文吉おじいさんは自分の事を湊と勘違いしているようで微笑ましく笑われてしまった。少々ボケてきているらしく、訂正しても聞こえてるのか聞こえてないのかよく分からない。こればかりは仕方ない。

「そうじゃ、湊ちゃん、彼女さんとお食べ。この前美味しいっていってったじゃろ？ メロンパンじゃ」

袋入りのメロンパンをふたつ差し出され、断るのも悪いので受け取っておく。

「ありがとうございます」

「湊ちゃんは礼儀正しいのう…うちの息子にもあわせてやりたくらいじゃ…おーいばあさん!」

そのままぶつぶつと何かを呟きながら裏へ引っ込んでしまったおじいさんを見送り、美鶴さんの方を向く。

「メロンパン、貰っちゃったしあとでおやつに食べようか」

「ああ…だが有里弟が女を取っかえ引っ変え…? 処刑か…?」

「いや、文吉おじいさんの…店主の勘違いだと思うよ。あの人、少し痴呆が入ってるみたいなんだ…だから、」

物騒な単語が聞こえた気がしたので訂正しておく。

すると納得したようで「そうか」と短く呟いた美鶴さんは山のように積まれた本と本棚を眺めた。

「すごいでしょ、ここ。殆ど漫画の古本なんだ。俺はあんまりそういうの見ないから漫画以外の本を探しに来るんだけどね、たまに漫画以外でも古い料理の本とか面白い本が見つかることがあるんだよ。なんだか、それって宝探しみたいじゃない?」

「確かにな」

「俺のおすすめはこの『悪魔事典』。9年前くらいの本なんだけど…実はもう持っていて今日は2冊目を…」

1時間ほど古本屋で語り明かし、色々2人で見てから本を買って店を出た。個人的にずっとスペアとして買おうとしていた本の二冊目を買えたことにほくほくしている。

「あんなに饒舌に喋るきみは初めて見たよ…ふふ、これも友だちにならなければ知らなかった事なんだな」

大事に噛み締めるように、はにかみながらそう言った美鶴さんに目を奪われる。

「なんだか、今まで意識していなかったがとてもきれいだとおもった。」

まるで、触れられない花のように。

その気持ちを振り払い、話題を変える。

「つぎ、どこ行く? 美鶴さんは行きたいところ特にないって言って

たけど、〃行ってみたい所〃なら俺は着いてくよ」

どうしてもないって時はプランBだけどね、と続けるとおずおず、と言った様子で美鶴さんは小さく告げた。

「なら、先程から言われて再度考えてはいたんだが…有里兄妹や伊織のよく行くという…：ゲーセン…：というものに行ってみたい」

「了解。エスコート致しますよお姫様、なんて」

手を差し出して恭しく格好をつけて告げると、美鶴さんは急に目を見開いて顔を真っ赤にさせた。少しクサかっただろうか。

「お、おとおおお姫様!？」

「あ、お嬢様の方が良かった？ 実際お嬢様だし…って感じで気の許しあえる友だちなら冗談言い合ったりするね。コツは掴めそう？」

「あ、ああ、冗談か…：まったく、心臓に悪い…」

ほっと胸をなでおろした美鶴さんは盛大にため息を吐いた。まだこういうギャグは早かったかもしれない。

「三上、きみはなんというかこう…：いつも突拍子も無いことをするな…」

「えっそう？…：そうかなあ…」

いつも自分は変わりなく自分なので突拍子も無いことをしているという感覚はない。

ただ、美鶴さんが言う「突拍子も無いことをする」というのはよく言われる。湊と奏子にも指摘された。

個人的に突拍子も無いことをするのは俺より湊の方だと思うんだけどなあと思うもこの周では特にまだそんなことをしていなかったので出せる手札がなかった。くそう。なんか悔しい。

むしろ今回の自分が『イレギュラー要素が入りすぎて突拍子すぎるぞボーイ』になっているのが問題だ。不可抗力なので本当にどうにかして欲しい。神社でお祓いをして貰うべきなんだろうか。

「三上、そんなに考え込まなくても…」

「いや、なんか突拍子もないことをしなきゃいけない原因の殆どが、運が悪い以外に思い浮かばないからお祓い行った方がいいかな…：って…：最近なんかトラブル続きだし…：厄病神とかついてそう」

「そ、そうか…」

憑いてるのは厄病神とかじゃなくて死神なんですけど、とは言わない。

直接貰ったから憑いてるのはまた違うかもしれないがこの前の湊の話からするとそんな感じに見えてしまうらしいので似たようなものだと思う事にする。

(あ……)

厄病神と似たようなものだとしたらお祓いに行ったらホワイトライダー(ペルソナのほう)が消えてしまうのではないだろうか。日本の悪霊や厄病神と片やイスラムとキリスト教の存在が同じ祓い方で祓えるかどうかはさておき、厄祓いはやめておくかな…と、決めた。

毒を食らわば皿までというのでもうこの際はブツチぎって栄光の不運ロードを突き抜けてもいいかもしれない。立ち塞がる悪魔や神は物理で解決すればいいし、出来ない時は死ぬだけなので。

モノレールで移動し、ポロニアンモールのゲームセンターまで来た。

入り口にあるクレインゲームの中ではヒーホーくんことジャックフロストのぬいぐるみがつぶらな目でお持ち帰りして欲しそうに訴えている。でも今日は我慢だ我慢。それにモコイさんが居るしジャックフロスト(のぬいぐるみ)まで部屋に連れ込めば「ハレンチ！ 浮気者！」とテレビで見たららしい昼ドラの真似をまたされるに違いない。観葉植物を貰って帰った時にそうだったのでモコイさん的には植物も浮気に入るんだろうか。なぞだ。

「前を通った事は何度もあるんだが、いざ入るとなると、緊張するな……」

「初めは入りにくいのがわかるよ。独特の空気感があるよね」

薄暗いし、うるさいし。

でも遊ぶとたのしくて時間を忘れちゃうんだよなあ。ついでに財布の中身の残りも。

「ここでは基本的に1000円玉か5000円玉でゲームやったりするからこの両替機で両替しとくといいいよ」

手本を見せるように千円札を両替機に入れ、ボタンを押して百円玉10枚に交換する。

美鶴さんはそれを真剣な目で見て、必死に覚えようとしていた。

「もう覚えたかもしれないけど分からなかったら俺に聞いてね」

「ああ。分かった」

そう言いながら綺麗な黒い革財布から美鶴さんが取り出したのは――1万円札。

「ちよ、ちよつと待った!!!!……ああ」

慌ててとめたが遅かった。

1万円札は見事に吸い込まれ、声をかけたせいで驚いた美鶴さんの手が「1000円に両替」のボタンを押してしまい、ジャラジャラという音と共に大量の百円玉が機械の受け皿に落ちていく。

「み、みみみ、三上……っ！ これはどうすればいいんだ……!? 止まらな
いぞ……!」

「とりあえず、1万円分の百円玉を出したら止まるだろうから止まるまで待つて……あとはどうしよう……美鶴さんの財布……はそんなに小
銭入らないだろうしポケットもダメだし……」

半泣きになりそうな美鶴さんの困窮した叫びに考える。

大量の百円玉を入れる場所がない。いや、あるにはあるが自分の
バッグとかだし美鶴さんもいい気はしないだろう。

そういえば、バッグの中に手ぬぐいが入っていた気がする。

洗ったばかりだし程よい大きさもあるし小銭をまとめて入れて風呂敷みたい包めばちょうどいいのではないだろうか。よし、それで行こう。とさっそくバッグから手ぬぐいを取り出す。ちなみに柄はヒーホーくんだ。この前このクレインゲームでモコイさんと格闘しながら取ったものでもある。手ぬぐいは浮気判定にならずOKだったので本当に基準がわからない。

「美鶴さん、財布に入れられるだけ入れてあとはこれで包んでこつちから使おう」

「すまない…」

「俺もごめん。こういうのは、初めては千円札でやるってこと教えるの忘れてたから…まあ1万なんて使い切れない額では無いし意外とすぐ消えるけど…」

「？」

そう言いながら遠い目をすれば、美鶴さんが不思議そうにする。

「遊んで見ればわかるよ…遊んでみれば、ね…」

濁しておく。

一万円なんてここではあつという間に溶けてしまうのだという現実を身をもって体験してもらおうというわけだ。いや、まあさせるにしても三千円分くらいで止めておいた方がいいとは思うので本当に一万円分すべて使い切らせるわけではないが。

「美鶴さん、このなかで気になるものはある？」

「そうだな…あれがいい」

店内を少し歩いたところにバイクの車体のようなものと画面が付いているゲームが置いてあり、美鶴さんはそれを指さしていた。

どうやら体感型のゲームらしいそれは画面に表示された景色をそのバイクにまたがって擬似的に走るものようだ。

1プレイ200円と書いてあるので何回かできそうだ。

「じゃあ俺は見てるから、行っておいで。説明は画面に出るし大体お金をここに入れたら始まると思うよ」

自分はバイクとかには乗れないのでコインの投入口などを説明しながら遠慮しておく。

そうしてバイクそっくりの機械に跨った美鶴さんは――
—すごかった。

ゲーム内ではあるけど遠慮なくスピードを出してぶっ飛ばしていた。初めてなのにミスもない。

「…ふう、」

何回か連続でプレイした後になんか息を吐きながら降りてきた美鶴さんは心底楽しかったと言いたげでどこか満足したような顔だった。

「…現実ではああいったスピードを出すことはなかなかないから楽し

かったよ。走るときの風がなかったり謎のブーストがあったりとりアリティには欠けるが素晴らしいゲームだった」

「楽しかったのなら良かった」

「ああ、では次は——」

ん…？中々ない…？無いとは言っていない…？時速200kmオーバーを？

後でそう気づいたが追及するのは野暮だと思ったので水に流すことにした。

そうして店内をぐるぐる回りながらクレインゲームをしたりまたバイクのゲームに戻ったりパンチングマシンで遊んだりと美鶴さんと二人で様々なゲームを遊んだ。

「ほら、美鶴さん、これはこうやって写真を撮った後に写真に文字や絵を描けるんだって。書いてみる？」

「だが何を書けばいいんだ…？」

「うーん…」

プリクラの脇で二人してうんうん唸る。

半ばヤケ、半ばハイテンションで調子に乗ってプリクラを撮った方がいいが正直自分も美鶴さんもこういうのは疎い。

男だけでプリクラに来たのなら「テレッテー」やヒーホーくんをふざけて書いてもいいがそんなわけにもいかず。

「…：ハートとか…うさぎさん、とか…？」

「そうか」

苦し紛れにそう提案してみる。

凄まじく苦し紛れだが美鶴さんはそれに頷いてペンを持った。

「…できた」

「おお…」

印刷されたプリクラを美鶴さんが掲げ、自分がそれを覗き込むようにしてみる。

写真には妙に美白されてお目めぱっちりの自分たち二人とかわいらしいうさぎさんのイラストが写っていた。プリクラすごい。

奏子はこれで何度も撮ってキメ顔などを練習しているらしいし、話

に聞けば湊も似たようなことをやっているらしいのでもしかするとプリクラにはなんだかそう言う効果でもあるのかもしれない。

小心者なのでプリクラではやらないし、自分にはそこまで研究することができないけれど、2人の度胸のありすぎる行動は素直にすごいと感じる。特に湊は山岸のお弁当を少し前にチャレンジぶったいxしたらしい。漢だ。

「えっと、付属のはさみで半分に分けて分けて持って帰る、のかな」「では切ろう」

ちよきん、と綺麗に半分に分かれたプリクラの片方を貰う。

それを財布に入れて、バッグにしまう。：美鶴さんの百円玉は使い切れなかったがそろそろ夕方を過ぎて夜だ。

「晩御飯はどこかで食べる？ あ、もちろん高級料理店とかじゃないところだけど。良くてファミレスとかはがくれ」かなあ。大丈夫そう？ 駄目そうなら寮で何か作ってもいいし」

「私ははがくれ」のラーメンと「うみうし」の牛丼は明彦や荒垣と体験済みだ。だから安心してくれ。どこだろうと行って見せるさ」

ふふん、と自信たっぷりに告げた美鶴さんの前に出て歩き出す。

「じゃあ、俺がたまに行くところで良ければ」

夜

ファミレス ビックリぼーい 巖戸台駅前店

ウエスタンな雰囲気の内店のファミリーストランである「ビックリぼーい」に来た。

今年の春に開店したらしいそこは、デザートを食べたりドリンクバーを飲みにもコイさんとたまに来る場所になっている。

店内にバイクのレプリカが飾つてあるし、まあまあ好きなものを選んでお値段が安いこともあって美鶴さんと来るには悪くない場所なんではないかと思ったのだ。

「このドリンクバーって言うのが飲み放題でスープバーがスープお代わりし放題なんだ。料理とセットで頼めば割引も入る」

「なるほど。お得だな…だがこれでは店の経営が…」

「そういうのは大丈夫なようになってるんだと思うよ」

メニューを見ながら説明する。

他の料理については説明しなくても大丈夫だろう。ここで問題なのはドリンクバーでもスープバーでもなく、自分の胃の要領だ。

今日は調子がいいが、モコイさんと一緒じゃないので普通の量は食べられるかわからない。

(軽めでいこう)

メニューを眺めながら考える。コラーゲンたっぷりのぷるるんフルーツティーやグランドマザーバーグがおススメと書いてあるがこはサンドイッチにすべきだろう。

びっくりサンドと書いてあるが大丈夫だろうか…と少し不安になるもサンドイッチに決め、注文をする。

「——ごちそうさまでした」

「ごちそうさま」

料理とデザート(は美鶴さんだけだったが)を食べ終え携帯で時間を見る。

20時を少し過ぎていた。外で食べてくるといふ事と、遅くなるかもしれないという連絡は入れておいたので大丈夫だろうとは思いますがあまり遅くなるのもよくない。

「そろそろ帰ろうか」

「そうだな」

帰りはお互いたわいのない話をして終わった。

「楽しかったね」とか「また行こう」とかその程度だ。でも、それでいい。

だって別にこれは特別なことではないのだから。

またいつでも時間が合えば適当に待ち合わせして適当にぶらついて楽しんで、それで終わり。別に高尚なものでもなんでもない関係。

それが友だちと言うモノなんじゃないかと自分は思う。

ただ——

(なんていうか今日のはデートっぽくないか…?)

他の人から見たら完全にこれは友だち同士と言うよりデートして
る男女じゃないんだろうかという不安が鎌首をもたげる。

美鶴さんには許嫁がいるだろうし変な噂がたつてもただの友人だ、
で貫き通すつもりだが些か不安だ。

それに自分には、そんな気持ちもなければ責任も取れないので手を
出そうなんてことも頭にない。仲間や友達としては大事なんだろう
けれど、『好きになって恋愛して』というのは向いていない。いや、向
いていないというよりその資格がないんだと思う。

どうせ死ぬから、だろうか。：理由はよくわからない。

「それじゃあ美鶴さん、また明日」

「ああ、また明日」

寮二階の踊り場で別れ、部屋に戻る。結局、おやつに食べようとし
ていた文吉おじいさんから貰ったメロンパンを食べ損ねてしまっ
たのでモコイさんにあげようと思う。

メロンパンはまだ食べたことないはず、と思いながら鍵を回しドア
を開ける。

「ただいま、モコイさんいる？」

……………。

返事は無い。

部屋はもぬけの殻だった。

窓が開いているのでまた散歩だろうと窓を開けたままにしておく。

朝には帰ってくるだろうし、メロンパンは机の上に置いておいて風
呂に入って先に寝てしまおう、と立ち上がった。

モコイは走っていた。

否、〃逃げて〃いた。暗い夜道をそれはもう必死に。

「ダァ~~~~~！ いい加減しつこい男は嫌われるよ、チミたち！」

「待て！ モコイ！ 〃先代〃の仲魔だったお前だけが手がかりなの
だ！」

黒猫と学ランの男に追われているモコイはその言葉にぴたりと足

を止める。

「ハア…ハア… “先代” つスカ…ボクの話すことはなにもねえ！ダネ。先代のお目付役でもあったチミの方がよく知ってるんじゃない？ ね、ゴウト」

「……」

モコイがゴウト、と呼んだのは男ではなく黒猫の方だ。

黒猫——ゴウトはその言葉に押し黙る。

「だんまりっスカ。そうだろうね。だってチミは置いてかれたんスカら…あの人に」

怒ったような声でモコイは吐き出す。そしてその言葉に男が反応した。

「どういうことですか。先代は、事故死だと…！」

「どうもこうも事故なんかじゃナイナイさんだよ。ライドウくん。ボクはチミたちの言う先代に逃がされてここにいるんスカから。だからといってチミに協力しろとは言われてナイからネ。だからボクはボクで探すと決めたんスよ…たとえその魂が混沌に喰われていたとしても、ニンゲンじゃなくなっても、ボクは」

「だからと言ってどうやってその身体を維持しているのです！ マグネタイトやマガツヒがなければ貴方たち悪魔は姿を保てないはず！

まさか人を…!?!」

男——ライドウが怒鳴るように問い詰める。

しかし、モコイは更に怒気を強めて言い返した。

「は？ チミ、あの人のことを、あの人の仲魔であるボクを舐めてるの？ そんなナンセンスさんなコト、するわけないネ」

「ではどうやって…！」

方法がわからない、といった様子 of ライドウに、モコイは溜息をついた。

「野良悪魔とニンゲンの食事ダヨ、チミ。それで十分」

「……」

「まあチミには理解できないかもしれないケド、天才なモコイさんはもう協力者を見つけてんスよ。だから、教えない。言わない。ボロボ

口で元気ナイナイなあの人を無理やり生贄にしたチミたち。『ヤタガラス』には」

「それは……！」

沈黙していたゴウトが口を開く。

先ほどとは違い悲痛な面持ちで一步前へ出たゴウトに、モコイの視線は揺らぎもしない。

「それは……仕方のないことだった……！ いや、今のお前に何を言っても伝わらないかもしれないが……あの時、あの強大なものを相手に動けるのはあやつしか居なかったのだ……！ あやつが居なければ、今頃世界は滅んでいただろう……！」

「あの人、最期までチミたちを恨みはしてなかったみたいっすけど、そういうキレイゴト嫌いなんだよね、ボク。だって、身体も魂もまだ帰ってきてないじゃないスか」

「……ああ」

「だからこんなところまで来て、ボクなんか追っかけまわして調べてるんスよね。人気者でヤになっちゃうナ……」

わざとらしく手を広げながらよたよたと回る。

そして、

「ボク、ネムネムちゃんだし。もう話す気しないね、キャントーク。……じゃあネ」

くるりと一回転して強い風と共にその姿を消して、モコイはライドウとゴウトの前から居なくなった。

「ゴウト、あのモコイの話は……本当ですか」

「……ああ。お前に隠し事をしていてすまなかった。ライドウ。この件について調べると通達されたときに話しておくべきだった……」

「いえ……」

「お前はそういうところも本当に十四代目に似ている……だが、そうだな……生まれ変わりなど……ないのだったな」

夜空を見上げながらゴウトは己の入ることのできない『説教部屋』を思い出し、何かを懐かしむように呟いた。

繰り返していたのは、(6/30〜7/7)

6/30 (火) 影時間

「やあ」

その声に、湊は沈ませていた意識を表に上げる。

目を開ければ、ベッドにファルロスが腰掛けていた。

「…何を伝えに来たかわかる？　なんて、訊かなくてももう分かっているよね」

「……」

「でも今日は、その話じゃない。…変なんだ」

困ったような顔をしたファルロスはベッドから立ち上がる。

「順調にいけば大型シャドウを倒すたびにきみに施された僕の封印は力を付けた僕によつて緩んでいく…それが『いつものこと』だったよね」

「そのはずだよ。それが変わったことなんて一度もない。…僕らがどうあがいても変えられたことはなかった」

「うん。だけど『今回』は違う。僕に流れてくるはずの大型シャドウが誰も来ないんだ。…まるで、別のどこかに流れているように」

「…!?!」

表情を硬くした湊は前回の満月を思い出す。

突然現れた優希。そしてそこから召喚されたモノ。

「…まさか、」

湊は体を起こして、青ざめる。

最近少し濃くなった気配も、優希のことを意識して視ようとするとき、視える、身体中に手をかけるようにまとわりついている黒い靄も、全部。

ファルロスはそんな湊の心を読むかのように頷いた。

「うん。あの時僕は大型シャドウよりもつと怖くて似て非なる者って言ったけど…アレは僕と似た気配がした。…と、いうよりも殆ど同じものと言っても差支えないと思うよ。…ただ、死の宣告者たる僕が二人いるなんてありえないんだ」

「もちろん、力の一端としてきみに遺した『タナトス』は別だけど」と
ファルロスは続けたがすぐに口をつぐむ。

そして、迷うように視線を彷徨わせた後、小さく吐き出した。

「…それとは別に不思議ときみの近くにきみのお兄さんがいると落ち
着くんだ。ひどく懐かしい感じがするのはきみのお兄さん…だから
なのかな。きみの記憶が、感情が、僕に作用しているのかもしれない
ね」

「……」

黙り込み、考える湊にファルロスは忠告する。

「…気を付けてあげて。あの様子は尋常じゃない。もしあれが僕と同
じ宣告者だとして、僕の封印されていたきみが大型シャドウを倒し続
けてもなんともならなかったのに、彼だけあんなことになるなんて絶
対に変だよ。それも、こんな初期からだなんて」

ファルロスですらわからないこの現状、できることと言えば湊に忠
告するくらいしかなかった。

そして気を付けていたとしても何もできないのがないのは、ファル
ロス自身がよくわかつていたことだった。

「それじゃあ。また、会いに来るよ」

ファルロスは姿を消す。

気休めにならない忠告をしたところで何かが変わるわけではない
が、それでもしなないと得体のしれない不安に押しつぶされそうだっ
た。

ぱちり。目が覚める。

視界に広がるのは自室の暗い天井。

「……モルフエ？」

モルフエに呼ばれたような気がした。

けれどどこを見てもその姿はなく、首を傾げる。

いつもならすぐに姿を現すはずなのに、と訝しむも一向にその姿は
見えない。

(今日はいないのか…?)

勝手にそう結論付けて寝ようとするも、前回の満月の一週間前の日を思い出して何か引つかかった。

あの時のモルフエは酷く何かを気にしていたようだった。

いや、それ以前から急に「大型シャドウに近づくな」と言われるようになったことがまずおかしかったのだ。

以前の周では何も言ってこなかったのになぜ今回に限って近づくな、と言ったのか。聞いたただそうにもこの前ははぐらかされてしまったし今は姿すら見せない。

どうしたんだろう、と心配になるが姿を見せてくれない以上はどうしようもない。

やっぱり寝てしまおう、と布団を被りなおして目を閉じた。

その日、珍しく夢を見た。

いつもなら見ないそれは、幼い湊と奏子と一緒に公園で遊ぶ夢だ。

自分の体も小さく幼稚園児ほどの背丈しかなく、視界に映る景色がやけに大きい。

穏やかで、平和な夢。

湊が蹴飛ばしたボールがころころと転がっていったので自分がそれを取りに行く。

公園を出て道路まで転がったボールを追いかけて、それを拾った瞬間に射す影。

見上げて、口を開く。

「——おじさん、だあれ？」

そこで、夢は終わった。

7/3 (金) 夜

寮のドアを開け、ラウンジに入る。

「三上、お帰り」

「ただいま」

迎えてくれた美鶴さんにあいさつを返す。

「また、影人間が増えだしている。次の大型シャドウ出現の予測の日まであと一週間もないが戦力の方は三上から見ても大丈夫そうか？」

「大丈夫だと思うよ。俺抜きでも湊や奏子がいればまとまってるし、強さも申し分ない」

「そうか…影人間とさえ、今回の影人間は少し毛色が変わっていて男女ペアで被害に遭うケースが多い。時期が時期だけに、次に出るシャドウと何か関係があるのかもしれないな」

美鶴さんの言葉に内心で（あー…）と何とも言えない思考をする。

次の『法王』と『恋愛』戦の舞台はラブホ：げふんごほん…ただのホテル（仮）だったつけ、と思わず遠い目になってしまった。

「…このままの戦力で十分だと思うからどっしり構えていこう」

ちよつと間隔が空いたがまあ問題ない範囲かと思う。

そのまま満足そうに頷いた美鶴さんを後に、部屋へと帰る階段に足を一歩踏み出した。

7/7（火）夜

今日は満月の日だ。

二体出るとは言っても大型シャドウ自体は別々で出てくるし、敵による魅了とホテル内で分散させられることだけがネックだがそれ以外は特に脅威でもなんでもない。

「どうだ、反応はあるか？」

「待つてください…」

作戦室の窓際に全員集まってペルソナ “ユノ” に収まる山岸の反応を待つ。

少し探るようなそぶりを見せた山岸は、すぐに顔を上げて口を開いた。

「…見つけました！ 市街地に、大型のシャドウ反応！」

「ほんとにキタッ！」

「フンフン。満月の件、どうやら確実に見ていいね」

驚く順平とどこか納得したような幾月。

2人は対照的ながらも、同じことを話している。

「場所は巖戸台の、ええと…白河通り沿いのビルです」

「白河通りか…」

山岸のその言葉に、幾月がハッと何かに気が付いたような顔をした。

白河通りといえばラブホテル街と呼んでも差し支えない場所であり、あまり月高ウチの生徒は近寄らない場所だ。

治安があまりよろしくないことに加え、ホテルや飲み屋ばかりでそこに用事がなければ遊ぶ場所がないからでもあるが。

「ここ数日、影人間がよく2人1組で見つかるって聞いてたけど…なるほどねえ」

「2人1組か…」

少し考えるそぶりを見せた美鶴さんが小さく呟く。

「…そういう事か」

言わずもがな、ホテルの利用客のことだろう。

そして、その内容は秘すべきだと思う。お楽しみ（隠語）に使っていたとかそういう事だとは思う。

「白河通りって、どんなところでしたっけ。私、あの辺あまり行かないもので…」

「私も知らなーい！」

ユノを戻した山岸と奏子の言葉に「知らなくても大丈夫。普通の高校生はあんまりあそこ近寄らないから」と言ってあげたい。言わないけど。

「聞いたことはあるけど…」

「あ、そっか、ホテルんところか。だから、2人1組なわけね。奏子っちと風花も知ってたんだろ？ ホテル街だよ、ホテル街！」

「なるほど！ ホテルでセツ」ちよつとまったあああああ!!!」なに?! なになにいきなり叫んでどうしたのお兄ちゃん?!」

奏子の口から真実を照らす単語がとびだそうとしたので慌てて叫んで妨害する。

皆濁してるんだから言っちゃ駄目だろ!!!と叫びたくなる気持ちを

押さえて口を開いた。

「奏子、その単語は禁止。ついでに情報の出どころを教えてくださいませんか…」

もし人間ならそいつ縛ってホワイトライダーが延々周りをシヤカシヤカ走り回る刑に処すから。

そう心に決めた瞬間、奏子が無邪気に横の伊織を指さす。

「え、順平だよ!」

「……すまない伊織。きみの犠牲は忘れないよ」

「南無三。さらば順平。僕もきみのことは忘れないから…」

召喚器を頭に当てる。横の湊は手を合わせて合掌していた。

「えっ、ちよっ、えっ、オレなにかされるんスか!」

突然の凶行に慌てる伊織。大丈夫大丈夫、ちよつとホワイトライダーの顔が忘れられなくなるだけだから、と言わずにただ笑いかけるとその顔をさらに青くした。

「…三上?」

茶番はもういいか?と言いたげな美鶴さんの声に、召喚器を降ろす。

ホワイトライダーの初お披露目になる予定だったのに残念だ。

「命拾いしたね、順平」

「コエー! マジで何される筈だったんだ…?」

「ごめんね、順平?」

「いや奏子っちのせいじゃねーからいいよもう…」

がつくりとうなだれた順平に湊と奏子がそれぞれ声をかけていた。湊は追い打ちしているようにも見えたけど。

「おいおい、奏子くんは何を言おうとしたんだ? あれは内装が凝っ

てるだけの単なるホテルだから」

余計なことを言ってほじくり返すな幾月。

そう思いながら珍しく侮蔑を込めながら睨み付けければ奴は肩をすくめて笑った。

「言ってみれば、そう…アミューズメント・ホテル?」

「アレ、そうなんスか?」

嘘つけ。

あのホテル「シャル・ド・フルール」は立派なラブホテルだ。でも都合がいいので黙っておく。

「なーんか、今回はヤな予感する…行くのヤメよっかな…」

正解！

この大型シャドウ戦の嫌な予感を見事あてた岳羽には10ポイントあげよう。

別に溜まっても何かが起こるとかそういうわけではないけど。

「まあた、ゆかりツチ。意外なトコ子供なんだから…」

「ちよっ、子供はどっちよ！ オツケー、行こうじゃん！ さあ、現場の指揮は誰がやるんですか？」

売り言葉に買い言葉で岳羽は前に出た。

やる気満々のようで頼もしい限りだと思う。なおこの後。

現場の指揮と言えば自分が今日は元気だし、湊も奏子も申し分ない。どうなるかな、と見つめながら美鶴さんの判断に任せることにした。

「そうだな…」

「ねえ、」

美鶴さんが口を開いたその時、湊が口を挟む。

「今回は僕をリーダーにしてほしい」

「理由を聞いてもっ？」

いつもは黙って成り行きを見守ってる湊が口を挟むなんて珍しい、と思っていると急に腕を引かれて寄せられる。

「優希と一緒に行きたいから。というかりーダー権限で監視するため」

「まさかの個人的な理由で職権乱用!?!」

まさかの理由に思わずツッコむ。

そんなことにリーダー権限使っちゃたまったものではない。心なしか美鶴さんや他のメンツも若干引いているような…

「だって、見てないところであらうどこかいかれても困るし。無理されても困るし。一緒にいくって約束したでしょ」

「ア、ハイ。ソウデシタ」

湊のちゃんとした理由に棒読みで答える。

そうだった、そう言う約束をしたんだつたと今更ながらに思い出してまた遠い目になる。

皆の引くような顔が「あつ、これは仕方ないな…」みたいな生暖かい視線に変わるのがよくわかる。やめろー！そんな目で俺を見るんじゃないーい！と叫びだしたくなる生暖かさだ。

そうやって現実逃避をしていると、更に反対の腕をぐい、と引つ張られて横に傾く。

…奏子だ。

「えー湊するーい！ 私もリーダーになってお兄ちゃんと一緒にいる！」

「いや、駄目だから！ リーダー権限ってそういうのに使うわけじゃないから！」

咄嗟に叫ぶ。

なんというか、5月の時はリーダーつて大変だし責任のある仕事だよね…みたいな真面目な雰囲気だったのに二か月そういう事が無かったらこんなことになってしまうのか。暗いよりかはいいがなんだろうしてこうなった。

「…ということ、有里弟がリーダーでかまわない？」

「センサー。なんかオレ、三上センパイをずっと見てるとか無理だから、リーダーやれそうにねえわ…」

「同感…先輩頼りになって強いのはいいけど無茶しそうだしカバーできなさそう…むしろ私たちがカバーされそうなカンジ…」

「…まあ三上だからな。俺も賛成だ。そもそも俺はリーダーに向かなし論外だ」

「湊！ 今日は譲るけど次は私ね！」

「ん」

凄まじく（個人行動に関して）信用がないこの現状に泣いたらいいのか笑えばいいのかわからなくなってくる。どちらかと言うと泣きたい気持ちが強いかもしれない。ついでに奏子も湊も俺にリーダー

権を返すつもりはないらしい。なんでだ。

「では、決まりだな。バックアップは今回から作戦時も山岸に頼む。よろしく頼むぞ」

「はい、がんばります！」

影時間

ホテル シヤル・ド・フルール

山岸以外全員がホテルに突入する。

階段を駆け上がり、二階に来たところで通信が入った。

『三階に巨大な反応があります！ 至急、向かってください！』

更に階段を駆けあがりながら考える。

（湊と奏子と：伊織と岳羽と美鶴さんと真田くんだから：俺含めて7人か：あ、）

人数は奇数。

この後起こる自体で誰かが一人あぶれることになるがどうなるのだろうか。

もし男メンバーと一緒になった場合だろうがなんだろうがこのことを記憶から消していくことになるのか：と必要のない覚悟をしたところで扉の前につく。

『この扉の向こうに巨大なシャドウの反応を感じます！ 準備はいいですか？』

「大丈夫」

湊が扉に手をかけて押す。

そして全員で飛び込むように入ったその部屋のど真ん中には、ハイエロファント『法 王』が鎮座していた。

見た目は聖職者そのものだがでつぷりと太った体形をしており、女性のようなシルエットの一部分に撫でられているという何ともいやらしいイメージを抱かせる。

ラブホテルにいるんだからまあこんな見た目にもなるか、とは思いますがそれにしてもそれである。

「こんなところに出現するから、とんでもないことしてくるかと思っただけど…まあ良いや、すぐに片付けて帰らせてもらおうよ！」

「敵、法王ハイエロファントタイプです。気をつけて！」

山岸が注意した瞬間、法王ハイエロファントは高笑いを上げながら魔力を練る。

【ジオンガ】

見慣れた雷が奏子に落ちるも全く効いていないのかピンピンしている。

「へっへーん。効かないよーだ！ 来て！ ハイピクシーハイエロファント！」
クカジヤ

奏子の頭上に現れたパンクな妖精が手をかざすと岳羽に防御力上昇の効果がかかる。

「ありがとう奏子ちゃん！ よーく狙って…」

岳羽が弓矢で法王ハイエロファントへと攻撃し、その横を湊と真田くんが駆け抜ける。

「来い！ ポリデュークスハイエロファント！」
【タルンダ】

「ビヤツコハイエロファント！」
【デスバウンド】

真田くんが呼び出したポリデュークスハイエロファントが敵の攻撃力を下げ、湊のビヤツコハイエロファントがその巨体に猛攻を仕掛ける。

鋭いかぎ爪のついた太い腕を何度も叩きつけられた法王ハイエロファントは大きくのけぞった。

「よっしやー！ トドメはオレっちが頂きー！ いけえー！」
【キルラッシュユ】

伊織のペルソナヘルメスハイエロファントが突撃し、さらに大きくのけぞる。が、僅かに削りきれなかったようハイエロファントで法王は体勢を立て直すとまた高笑いした。

【滅亡の予言】

周囲が薄暗くなり、靄のようなものに包まれる。

瞬間、ぞつと背筋を得体のしれない恐怖感が這いずった。

「な、なにこれ…怖い…！」

「やだ…」

『あの技は、相手に恐怖心を植え付けるみたいですよ！ みんな、しっか

り!』

身がすくんで動けない。

皆も恐らくそうなっているのだろうと思うが確認することが出来ない。

「…っ、」

突然、ずきずきとひどい頭痛がして立ち眩む。

パチパチと視界が弾け、白み、明滅し、恐怖心を上回ったその痛み
に思わず手で頭を抱えるように蹲る。

「あ…あああ…あああああ!!!」

激痛に叫ぶ。

痛い。とんでもなく痛い。頭が割れそうだ。気持ち悪い。怖い。
痛い。気持ち悪い。怖い。

床につけるように頭を下げるも痛みはひかない。

「う…ぎ、ぐう…!」

『あ…また…三上先輩が見えなく…!? ひっ…!』

痛くしてるのは、誰だったか。

怖くしてるのは、誰だったか。

俺はなんだ? …わからない。

激痛と恐怖で思考があやふやになる。ただ、見えるのは目の前の美
味しそうな影。

一部にしないといけない。血肉にしないといけない。ひとつにな
らないといけない。元に戻らないといけない。

現れた黒い靄のような何かが訴えかける。内から訴えかけてくる。
でもだめだ、あれを食べたら戻れなくなる。そんな気がした。だか
ら、

「…いや、だ。それは、だめだ」

痛みの中で否定する。

ちかちかと眩む視界も、響く声も恐怖も痛みも美味しそうに見える
それも。何もかも。

ズ…と何かを形作ろうとしていた黒い靄が霧散する。

「はあ…はあ…、【アムリタ】…!」

何とか召喚器の引金を引いて「ポベートル」を召喚し、自分を含めたみんなの恐怖を癒しの光で相殺するもそのまま地面に倒れ込むように横になる。痛みはまだ、じわじわとこちらの精神を苛んでくる。

「ふー、ふー…ッ！」

痛みを逃すように息を吐く。目を閉じてしまつて、痛みを感じないようにしてしまいたい。

そう思つてしまふがそんな余裕はなく。

「っ…！　ペンテシレア！」【ブフーラ】

ハイエロフアント いち早く立ち直つた美鶴さんが「ペンテシレア」を召喚し、ハイエロフアント 法 王へと氷の塊を叩きつけているのが滲む視界で見える。

「キヤアア——ッ！」

金切声のような叫びをあげて、ハイエロフアント 法 王は倒れた後に散り散りの影になつて霧散した。何とか倒せたみたいだと安堵する。

『…えと、お疲れ様でした。少しヒヤツとしましたが今回も無事、倒すことが出来て本当に良かったです。外で待つてます。帰還してください』

「…う、あ…！」

『三上先輩！　大丈夫ですか!?　返事を！』

終わつたと安堵しかけた矢先に、突然下腹部にまで刺すような激痛が走り焦る山岸の声を聴きながらまるでイモムシのように縮こまつたところで意識が途切れた。

頭の中がボンヤリしている。湊は、何となくそう思つた。

どうしてベッドに腰掛けているのだろう。どうして、バスルームから水音がするのだろうかとさらにボンヤリ考える。

何故ここにいるのか思い出せない。思考がまとまらない。

何か大事なことを忘れてるような、そんな感覚がした。

——享樂せよ…

突然、頭の中で不思議な言葉が浮かぶ。

——我、汝が心の声なり…今を享樂せよ…見えざるものは幻…形ある“今”だけが眞実…

いや、そんなことはない、とその言葉を咄嗟に否定する。なにかがひっかかる。

(だつて、こんなものが “眞実” だというのなら、生きているはずだ死ななかつた)

湊はぼんやりと思った。どうしてそんなことを思うのだろうという疑問と共に。

——未来など幻想、記憶など虚構…欲するまま、束縛から解き放たれよ…汝、それ望む者なり…

この言葉が浮かんできた瞬間、猛烈な怒りのような激情が湊を支配する。

ふざけるな、ふざけるな、ふざけるな、お前ごときがそれを語るな。否定するな。

「勝手に決めるな…ッ！」

思わず、そんなやつあたりのような言葉を口に出してしまつていた。

激昂。それに近いものを今の湊はしていた。昂り、どうしようもなく抑えられないどす黒い感情が身体を支配している気がする。身体が怒りで熱いのに、頭はなんだか血の気が引くように冷たくなつていく気がする。

ああ、今の自分はきつと家族にも見せられないような酷い顔をしている。そう、何となく湊は自覚した。

「——その通りだよ、湊。彼らにきみの苦しみはわかるはずがない。きつとね」

誰か聞き覚えのある声が湊に同意した瞬間、何かの悲鳴とガラスの割れる音が聞こえて言葉は頭から消え去り意識がさらにはつきりとしていく。身体にくすぶつていた激情もそれに伴い引いていく。

そしてすぐにこれは恋愛ラヴァースの精神汚染だ、と思ひ出して湊は顔をしかめる。

ただ悲鳴はこれまでしていなかつたはずだ。どうしてだろう、と顔

を上げればそこにはタナトスが浮かんで居た。

召喚した覚えはない。そして、これは己のよく召喚するタナトスではない、と気がつく。ならこの姿を湊に見せることができる存在はひとりだけだ。

「ファルロス…？」

「うん。今はタナトスじゃなくて僕だよ。…時間がないから手短に伝えるね。嫌な予感がするから気を付けて」

「わかってる」

「危なくなったら僕も手助けするから、がんばってね」

その言葉を最後にファルロスは再び姿を消す。

今バスルームにいるのは誰なのだろうか。と湊は気になるが、見ようとは思わなかった。

男だったらいわずもがな。女性でもビンタされたら困るし。と口には出さずにげんなりした。

そう思いながら待っていると、出てきたのはバスタオル一枚のゆかりだった。

じつと見ていたらビンタされてしまった過去があるので今回は服を着ることを提案しようと思っ

「え…あれ…私…」

「岳羽、服着た方がいいよ」

バスタオル一枚なのはさすがに駄目だろうと服を着ることを提案してみたが、ゆかりは顔を赤らめた後わなわなと震える。そして、

「~~~~~っ!!」

バシン!

「いたっ」

健闘虚しく結局湊は頬をビンタされてしまった。

どうしていつもこうなるのか。と考えたがゆかりが相手だとうあがいてもこうなるのでは、という結論に湊は達した。要は諦めたのだ。

——あついで。くるしい。いたい。わからない。

きみはなに？ ぼくはだれ？ ちよつと、あいまいだ。

ぐるぐるとまぎって、くろくとけて、よどんで、まみれて。

ぼくらはとけちやっただって。

ぐるぐるませられて、とけてくつついちゃったから、もうはなせなくなっちゃった。

ぼくがたべたからだ。きみがえらんだからだ。すぐわれたからだを。

ねえ、ぼくはなんなんだろう。たくさん、なまえがある。かおがある。

いのりになつたひと
■ずの■し■う？

おじいちゃんにあいされていたことも
■くら■し■■？

それとも、

ほんとのなまえ
■ありさと■■？

のどをつぶされたことも

：いくつ■か■るのときもあつたかもしれないね。たくさん、たくさんのかのうせいがあつたから。

ああ、もしかして、みかみゆうき、かな？

でもちがうよね。そのどれもがせいはいだけ、ふせいはい。

だって、きみは——…

眼が見ている。黄金の目が、責めるようにこちらを見ている。

“どうして殺したんだ”って俺を責める。

見ないでくれ。俺は違う。おれは、ちがうんだ。

『よかつた、やつと通じた！ 2人とも、聞こえますか？』

「うん、聞こえる」

『フオローが遅れてごめんなさい…シャドウの精神攻撃のせいで、呼びかけが届かなくて…飛ばされたのもシャドウの仕業です。おかげで、みんな分断されて…敵の位置は、さつきと同じ部屋です。急いでもう1度集合してください』

ゆかりの着替えが終わった後、湊は部屋を出て二階に上がると奏子と順平、明彦と美鶴の二組と合流できた。

「あ、いた！ もう1体いるなんてきいてねえぞ…つうか、お前ら、大

「丈夫だったか？」

「そつちは？」

「オレは…奏子つちが猛獣だったとだけ…とほほ…思い出したくねえ…」

「あ？ なにもある訳ないだろ！ なあ美鶴！」

「全くだ。何もなかった。…いいな？」

『皆さんお話のところすみません、三階のドアに張られている結界を解除する方法がわかりました！ 鏡です！ このホテルにある鏡から本体と同じ反応が感じられます！ たぶん、この鏡を壊せば結界が解けるはずです！ …三上先輩は未だに反応がありませんが、いずれ合流できるかもしれませんしこのまま行ってください』

風花の言葉に仕掛けが、いつもどおり、なことを再確認する。本体と同じ反応の鏡の場所は知っているので手間取ることは何もない。

が、肝心の兄の姿がない。

嫌な予感がする。

そしてその嫌な予感は的中した。怪しい鏡をすべて割り、三階の部屋へと転がり込むとそこには――

「お兄ちゃん…？ どうしてそつちに――」

「……」

奏子が戸惑ったような声をあげ、見つめる先にはハート形のシャドウ――『恋愛』^{ラヴァーズ}を背にしてこちらにふらふらとダガーナイフの刃を向ける優希の姿が。

『気を付けてください…！ 三上先輩は今、精神攻撃を受けてシャドウに操られています！』

「!？」

「チツ…先ほど状態異常を無効化した三上を狙ってきたか…！」

『もしかしたら、前回呼びかけられたせいでシャドウの影響を受けやすくなってるのかも…！』

「不味いな…」

下手に攻撃すれば優希が怪我を負ってしまおうし、手加減をしてそれを許してくれる相手でもない。どうやって正気に戻すか——と湊が考えている間に優希が動いた。が、

ぼとり、とダガーナイフを床に落とすとまた頭を抱えて蹲った。

そしてなんども頭を横に振る。何かに抵抗するように。必死に呪縛を振り払うように。

「優希…!?!」

「う…ううう、あああああ…か、なこ…みな、と…お、おれは…おれは…!?!」

唸り声。

その抵抗を否定するように恋愛ラヴァースが下品な笑い声をあげて影を優希に這わせて絡めとった。

「ああああ!!! 違う! おれじゃない! おまえなんか、俺じゃない!!!」

唸り声は血反吐を吐くような悲鳴に変わり、大きくのけぞった優希は目を見開いて手をだらりと降ろした。

瞬間、赤黒い光がオーラのように優希を包み、そこから前の満月の時にみた『なにか』が姿を現す。

ツ
!!!!!!

咆哮。

かつてボロ布と鎖だけだったそれは、今となってはタナトスに似た頭骨のような頭部と腕を持っていた。

——成長している。

湊が一番に感じたのはそれだった。

『あれは…!?!』

風花が次の言葉を発する間もなく『なにか』はぎろり、と恋愛ラヴァースをにらむとその両腕でズタズタに切り裂いた。

その姿に、湊はモルペウスの姿を思い出すも首を振る。あれはそんなペルソナじゃないし真逆だと。

そして例の如く大型シャドウを捕食しだした『なにか』は湊たちには目もくれない。眼中にない、と言った感じだ。

優希は力尽きてしまったのかぐったりと床に倒れ、固く目を閉じて小さく呻いている。

「助けないと……」

奏子が臆せず走り出そうとした。その時、

「ッ!!!」

咆哮と共に赤黒い大きな鎌が『なにか』によって奏子に当たるか当たらないかギリギリの距離で振るわれる。

まるでそれは牽制し、優希を護ろうとしているかのように見えた。が、その『なにか』も大きく体を震わせるとその首に手をかける。その姿はまるで制御を失い、暴走しているようにも見えた。

「駄目っ!!!」

奏子が叫ぶ。

もがくように動く優希の手足に力は入っていない。首元に届かず、ただ床を力なく掻くだけだ。

「くっ！ 三上を助けるぞ！ ペンテシレア！」【ブフーラ】

戸惑いから回復した美鶴の『ペンテシレア』の氷が『なにか』に当たる。少し顔を横にのけぞらせた『なにか』に対しそのダメージは微々たるものだったが標的ターゲットを美鶴に移すことに成功した。

一瞬で迫った『なにか』が手を振り上げる。

（……までか……）

その瞬間を覚悟して、美鶴は目を閉じる。

しかし、いくら待っても痛みは来ない。

「……」

恐る恐る目を開くと、寸前で手を止めた『なにか』とそれを牽制する『タナトス』が。

「——ア……ツル……サン……アアアア……ノ、タイ……セツ……アアアア……チツ……ルサ……ゴメンナサイ……ゴメ……サイ……」

『なにか』は手を静かに下ろすとノイズの走る酷く幼い声を発しながら無防備に血の涙を流した。

美鶴から見ると『タナトス』が止めなくともその手は止まっていただろうと感じるほどには。

(ちづる…“千鶴”…!?)

美鶴には、『なにか』の発した名前に一人心当たりがあった。

『なにか』は美鶴をその“千鶴”と勘違いしているようだった。

「ボク、ガ…ボクラ…アアア…イタ、カラ…アアアアア…」
苦しむように頭を抱えて慟哭する『なにか』は悲痛な叫びをあげてその姿を消した。

それを確認すると“タナトス”も静かに姿を消す。

『アンノウン、反応消失しました。…危なかった…』

「いや、ヒヤヒヤしたつよ…なんなんスカアレ…」

「三上先輩がシャドウに操られたから、出てきた…でいいんだよね…？」

安心する順平とゆかりを見ながら、湊は引金を引けなかった召喚器を下ろした。

脂汗が止まらない。震えも止まらない。タナトス—ファルロスが勝手に出てきていてくれないければどうなっていたかわからない。

もしかしたら。何かが一つ違えば、奏子も優希も美鶴も死んでいたかもしれない。その事実には、恐怖していた。

ぱちり。目を覚ます。

視点が定まらず、ふわふわする。

頭も痛い。なんとなく、息もしづらい。

「…さ、なだ、くん…?」

「目を覚ましたか。三上」

「…ごめん、あやつ、られてた…」

なんとなく、法ハイエロファント王を倒してから一度意識を失って、湊たちが部屋に入ってきたことまでは覚えている。

自分でも何となく恋愛ラヴァーズに洗脳されてるんだろなという意識がどこかではつきりしていて、それを振り払おうとしてまた気絶したので気力が尽きたんじゃないかと思う。

「だれも、けがして、ない…?」

大事なのはそこだ。

ナイフを一度わざと落としたがまた操られて拾いなおしていないとは限らない。

なのでそう問いかければ真田くんは少し微笑んだ。

「大丈夫だ。誰も怪我はしていない」

「そっか…げほっ…あー…あー…よし」

起き上がって声の調子を整える。なんだかまだ喉が絞まる感覚はあるしイガイガするが及第点だろう。

「おい、いきなり立ち上がるな。誰も怪我はしていないとはいったがお前が怪我をしてないと言ったわけじゃない」

「へ…?」

いや、どこも痛くないしな…と思いつつながら全身をくまなくチェックする。

ついでに腕をブンブン回して腕も怪我していないか確かめる。うん、大丈夫だ。

「…大丈夫だけど」

「はあ…鏡、見て来い。皆で下の山岸の持っている包帯を取りに行っている」

ぴつ、と親指で後ろの鏡を指した真田くんは盛大に溜息をもう一度はいた。

その様子にまたやらかしてしまったのかとひやひやする。そして、鏡の前に立った。

「うつわ…なんだこれ…」

首に手形が付いていたのだ。なんとまあびつくり。というかドン引き。ホラーだ。

シャドウにでも絞められたのかと思つたが恋愛には手らしい手がない。

どういうことだろうか…?

「真田くん真田くん! これ何!?!」

首に指をさしながら真田くんに迫る。

「だから言っただろう…お前が怪我してないとは言ってない。お前のペルソナのせいだ」

「はあ?!?」

いや!?! 自分のペルソナでそんなことできるやついないし。そもそも暴走する子いないよね?

と無い心当たりを必死に探るも全く思い浮かばない。ホワイトライダーはそもそも首絞めてくるぐらいなら直接戦いで死合を狙ってくるタイプだろうし。

「騒がしい奴だな…よくは知らん。だが、尋常じゃなかった」

「その話——」

くわしく、と言おうとした瞬間、バーンと扉が勢いよく開いた。

「たのもー!」

思わず驚いて肩を跳ね上げたのは言うまでもない。

心臓に悪い。

「あー！ お兄ちゃん意外とびんびんしてる!? よかったあああああああああああ!!」

「ぐふっ!」

奏子の強烈なタツクルを喰らってよろめく。痛い。普通に痛い。

腹に頭を押し付けてぐりぐりするのはやめてほしい。

「ほら、奏子。離れる」

「はーい」

湊に首根っこを掴まれた奏子は渋々、といった様子で離れた。若干ぶーたれている気がするのは気のせいだろうか…?

「ほら、優希、包帯。首に巻くからじつとして」

「あ、ああ。ありがとう」

くるくると包帯を首に巻かれている間、皆無言だった。

食い入るように見つめてくる奏子の視線が痛い。

「あの、き——」

「ごめん。僕が優希と一緒にいるって言ったのに目を離した」

擦られていたことを謝ろうとしたら先に謝られてしまった。

でもそれは違う。湊のせいじゃない。

「それは違う。みんな恋愛^{ラヴァーズ}の攻撃を食らって意識を失ったんだ。それは、どうしようもできないよ。だから悪いのは俺だ。兄である俺が、操られないようにもつと心を強く持つべきだった」
湊は何かをいいたそうに眉を寄せる。

口を一度開いて、また閉じて、包帯の端をテープで止めた。

「…うん。包帯、巻き終わったから」

「ありがとう。巻き加減もちょうどいいと思うよ」

離れて首をさする。特に痛みは無いが巻いてもらって少し楽になつた気がする。

気休めかつプラーシーボかもしれないが手形が見えなくなっただけでも上々だ。

「帰ろうか。他のみんなは下で待ってるんでしょ？」

「…訊かないのか？」

真田くんがこっそりと耳打ちしてくる。それに首を横に振ることによって答えた。

「話す必要がある事なら、きつと話してくれるだろうし。皆何も言わないってことは思い出したくもないし言いたくないことかもしれないだろ？ だから、無理に踏み込みたくない」

「お前は…なんでもない」

階段を下りながらのその会話はそこでぱったりと止まる。

湊と奏子は先に降りたので、真田くんとは2人というのは珍しかった。

ホテル シャル・ド・フルールを見下ろしながらタカヤは拍手を送る。

「想像よりも、早い解決でしたね。大した見世物です。彼らはここしばらく、毎月こういった活躍をしていますね。…最近では頭数も増えているようですし、戦い方もなかなかユニークだ…」

その視線の先には1人で立ち止まる優希が。

「あの『塔』にも、頻繁に出入りしているようですね…」

タカヤは後ろを向いてジンに問いかける。

「どうでしょう、ジン。ナギサは論外として彼らは敵でしょうか？」

「もうすぐ、ヤツに会う頃合いやし、訊いてみたらええんとちやいますか？」

「なるほど…それはいい。彼は今や、私たちと同じ運命を背負う者…すぐにも会って、話してみましよう。…まあ——」

タカヤはにやり、と恍惚な笑みを浮かべる。

「——ナギサもそろそろ我々と“同じ”になりそうですが」

歪んだ笑みを浮かべ、金の瞳をした優希と視線が合った気がした。

VII 戦車 & VIII 正義

揺らぎ (7/8)

7/8 (水) 午前

授業を受けながら首の手形について考える。

真田くんはあの時、「お前のペルソナのせいだ」と確かに言った。つまり、意識のない間の自分が、ペルソナを暴走させたとみて間違いないだろう。

もしかしたら、怪我人が出なかっただけで暴れた可能性だってある。わからないのはその暴走するペルソナに心当たりがない点だ。

モルペウス、ポベートル、パンタソスはそもそも暴走しないし唯一その可能性があるモルペウスは初回召喚かつ大型シャドウが相手という特定条件以外暴走しないことはわかりきっている。

それに召喚さえしてしまえばちゃんとこちらの言うことを聞くし暴走するようなものでもない。

ホワイトライダーに関しては意志とかそういうのはあまり無く、希薄な感じがしたのでまずないだろう。というか人格を持つもう一人の自分や心の鎧や剣でもなく、ペルソナという切り取られた現象ちからに近い感じだった。

そうになると、何が原因なのかわからない。

もう一度昨日の事をゆっくりと思い出し、ある点で『それ』の存在にはた、と気がついた。

ハイエロファント法 王の攻撃で恐怖漬けにされたとき、自分は何かを抑えた。その時現れようとしていたものこそが真田くんの言う『ペルソナ』だったのではないか？

あの時は謎の頭痛と恐怖でもう感情がぐちゃぐちゃになっていてよくわからなかったが精神のバランスを欠いていたともいえる。

そして問題の恋愛戦ラヴァース。

精神攻撃を食らって洗脳されていて、振りほどこうとしたが意識を失った後に暴走したと仮定するなら『こちらの意識がない時』もしくは

は『精神的に不安定になった時』に出てくるのではないか？

それか、シャドウによる干渉を受けた時？

わからない。ただ、このような事態が昨日の一回で済むとは思えない。

もしかしたら、誰も言わないだけで前にも同じようなことがあったこともあるかもしれない。

山岸と初めて顔合わせした時におびえていたのも、もしかしたら前回の満月の時に意識のなかった自分が『それ』を呼び出していたからだとしたら？

シャドウと呼ばれてタルタロスまで来たという前回と、シャドウに操られて暴走した今回。

状況に違いは有れど、自分の意識がなかったしシャドウの影響を受けていたのは間違いない。むしろ、そうなっていない可能性よりもなっていた可能性の方が高いかもしれない。

そんなことにならないために意識を失わなければいい、と考えるもそんなことは無理だとすぐに己の甘い考えを一蹴する。

——今回、運が良かっただけで、もし怪我人が出たら？

——怪我どころか誰かの命を奪ってしまったら？

——それが、特別活動部の皆や奏子や湊だったら？

ゾツとする。

戦っている以上、いつ攻撃で意識を失うかわからない。下手したら気絶する可能性だってある。

今回のように精神攻撃を受けることだってある。

——その時、ペルソナが暴走しない保証は？

あるはずがない。

そんなもの、あるはずがなかった。

「来週の火曜から期末試験だから予習復習しつかりと！ 君たちは受験生なのだから模試のつもりで挑むように！」

その結論に達し、憂鬱とした気持ちになりながら教師の言葉を聞き流した。

この調子だと勉強にも探索にも集中できそうにないだろう。

どうするか。どうすればいいのか。

手段はある。あるにはあるが…それに手を出すには「彼ら」に協力を仰ぐことになる。

それは、自分からペルソナ使いであるとバラすようなものだ。

けれど彼らではなく彼らと繋がりのある荒垣くんに頼むというのも考えたが駄目だ。

彼はやさしすぎる。きつと、黙っていてくれと言えば黙っていてくれるだろうが抱え込んでしまいもするだろう。

だから、巻き込むわけにはいかない。

放課後

帰り道を歩いていると目の前にジンが割り込んできた。

ナイスタイミングというべきか、バッドタイミングというべきか。

「ワシと一緒に来てもらおうか。タカヤが呼んどる」

まるで昨日のことは見て知っていたのかと思うほどのタイミングの良さに、大人しくついていく。

そういうことになったということは、「そういうこと」なのだ。

「…モコイさん、ごめん。先に帰ってて」

「…」

ジンへの視線を外さず小さくそう告げると、モコイさんは心配するような目線をこちらへ向けながらも肩から降りて帰り道を歩いていったのかぼてぼてと足音を立てて遠ざかっていった。

「…こつちや」

黙って後ろをついていく。

ペルソナの暴走を「どうにかする手段」は彼ら——ストレガの持つ「ペルソナの制御剤」だ。

副作用がきつく、正しく命を削るそれに、自分は手を伸ばそうとしていた。

問題は、その話をどうやってするか、だ。

突然制御剤の話をしたとして、その話の出どころを訊かれかねない。

どうやってその理由を説明するのか。無理だ。

荒垣くんに聞いた、なんて言ってもすぐにばれる。

…などどこねくり回していた心配はすぐに払拭された。

案内されたコンクリートむき出しの部屋で待っていたタカヤが、挨拶もそこそこに錠剤の入ったピルケースを差し出してきたからだ。

「今の貴方に必要なものです。ナギサ」

「……は……？」

「ペルソナの『制御剤』です。貴方も、ペルソナをまた暴走させて大切な弟妹や今の仲間を傷つけたくはないでしょう？」

「……」

こぶしを握り締めて視線をそらすように下を見る。

全とお見通しというわけか。弟と妹がいることも、特別活動部のことも。

自分が昨日、ペルソナを暴走させたらしいことも。

「ああ、勝手に調べたわけではありません。貴方のお仲間については詮索すべき時に詮索はしますが。…弟妹については自分で話していただしよう。その口で」

タカヤは笑みを浮かべる。

「——苦しくても忘れたことはない、と」

それはもう、得意げな笑みだった。憎らしいほどのそれは、暗に脅しているように見て取れた。自分たちはお前の弱みを握っているんだぞ、という脅しに。

「手を出すというのなら許さない」

咄嗟に口から出たのは自分でも驚くほど低い声。

タカヤはその言葉にさらに笑みを深くする。

「ああ、ああ。その表情。その殺気。——濃厚な死の香り。いいですね。今の貴方の方がより、本来のナギサらしい」

ふざけるな。俺はそのナギサとかいう人間でもないしお前に話したつもりもない。

そう言いたいが一蹴することもできない。

——だめだよ。

まるで見えない『誰か』が嗤いながら口封じをしているように。

「安心してください。我々は貴方の兄妹には手を出しませんよ。もつとも、我々の敵となることが決まったその時は…わかりませんがね」
「……」

「私だって貴方に恩や情はあります。だから、こうしてこの薬も分けようとしているのです。できることなら、こちらへついてほしいのですがそれも無理な話でしょうか？」

演技がかった仕草で手を平げ、そう説明するタカヤに心は一つも動かされなかった。

それはそうだ。自分はナギサという存在ではないのだから。だからタカヤの語る恩も情も自分からしたら得体のしれない気持ち悪いものにしかなじられない。

これから絆を育んだり仲良くなる分にはいいが、最初から他人を投影されて面白い人間はいない。

「とにかくなんで知ってるのかとか、どこまで知ってるのかとかは俺の方からも訊かない。でも、俺のことをそのナギサって人と同一視するのはやめてほしいかな…」

「同一視ではありません。彼と貴方は同一の存在だ。それはどうあがいても変えられないものだというのに」

「らちが明かない。」

タカヤの認識を変えることはやはり無理なようだ。

「はあ、とため息を吐いて諦める。」

「…分かった。俺の負けだ。もう好きに呼ぶといいよ。でも、本当のナギサくんが生きることが分かったら、俺のことは忘れてちやんとその人を見てあげて」

「…まあ、いいでしょう。そういう事にしておきます。自分に居場所がないと思っているのも、甘いのも相変わらずですね…」

「なぜかこつちがわかっていないような反応をされた。解せぬ。」

タカヤは疲れた、と言いたげに部屋に置いてあるソファアに座り、天井を仰いだ。

「とにかく、その薬を受け取ってください。お金はもちろん取りませせん。貴方の寿命を削り、縮めるものですが効果は保証されています。」

「私たちも使用していますしね」

「…水で飲んでいいんだよね？」

「構いません。噛み砕いても大丈夫ですよ」

「へー…」

そうなっていたのか。と思いつつながらピルケースを手を取った。

薬を使うこと自体に抵抗はない。これでペルソナの暴走による皆の被害と（自分以外の）死亡リスクがなくなるなら安い。

「あー…ありがとう。横、失礼」

「…あなた、」

敵意が（今のところは）無いとわかれば躊躇なく横に座れる。

なぜか驚いた顔をするタカヤに笑みを向けてやる。どうだ、びっくりしただろう。

これでも俺の気の変わりようは早いしどうにでもなるとわかったらウジウジ悩まず切り替えるタイプだ。

問題は、どうにもならなかった時だけで。

「俺はタカヤやジン…あとチドリだっけ？ みんなの事、まだよく知らないからさ。教えてくれよ。まずはそうだなー…好きな食べ物とかなんで半裸なのかとか。…お節介かもだけど発汗で冷えて体が弱りやすくなるし服は着た方がいいよ」

「そう気を許せば距離をすぐ詰めてくるところも変わらない…やはり、貴方には敵わない」

困ったような、穏やかな笑みを浮かべたタカヤの顔を初めて見た。

いつも敵対していて、どこか切羽詰まったような顔やこちらを嘲笑するような顔しか見てなかったので酷く新鮮だ。

「薬のお礼になにか欲しいものがあつたら今度会うときに持って来るとよ。…あー、メールだと、文字として証拠が残るしバレたとき面倒だから、電話だけ登録する？」

「…いいのですか？ 我々はいずれ敵に回るかもしれない」

「今更。それを言うなら俺もだよ。敵に回らない限りは馴れ合いでもいいから、仲良くしよう。薬を渡してはいおわり、だなんてさみしすぎるだろ？ それに俺は君たちに何も返せてない。…薬だつてタダ

じゃないんだろうし、これじゃフェアでもギブアンドテイクでもない」

そう言うと、またタカヤは笑う。それは驚くくらい邪気のない笑みだった。

「わかりました。次に会う時までにはジンとチドリにも訊いておきましょう」

「ありがとう。じゃあメモに…紙とペンある？」

「…そこに」

「ん」

立ち上がってタカヤが指差したテーブルの上からボールペンと紙切れを手に取り携帯電話の番号を書いて渡した。

「これ。一回かけてみてもらっても？」

「ええ」

タカヤが慣れた手つきで番号を入力していく。そして、携帯電話を耳に当てる。

1秒ほどの間を置いて、自分の携帯から着信を知らせる音が鳴った。

「もしもし。ふふ、この距離で電話なんて不思議だね」

「確かに、この至近距離での通話は酷くレアケースではあります」

通話を切る。

目の前で通話していても電話代の無駄…というところまで考えて、どうやって携帯電話を彼は契約したのか気になったが指摘しないことにした。

突っ込んではいけない領域の話な気がする。

「それじゃ、この番号がタカヤの番号ってことか。覚えとくね」

「また薬が切れそうなときは連絡してください。こちらも残数を覚えておきますが非常時に連続で服用した場合はその限りではありませんしね」

「オツケー、それ以外の時に来ても？ 薬の受け渡しの時だけじゃ味気なくない？」

緊張感のない自分の言葉にタカヤはまた困ったような笑みを浮か

べた。

「…あまり目立たない程度に」

「わかっている。影時間外で会うときは取引相手かつ友達ってことでひとつ」

「…ともだち、ですか。また、酷く懐かしいことを言う」

「それも例のナギサクさんから言われたやつ？ 二番煎じになるのはなんだか悔しいな…」

別に一番最初の特別が欲しいわけじゃない。でも、重ねられてしまうと自分の知らない誰かの話題になってしまつて面白くはない。

置いていかれているような気持ちになるのは自分が我儘で欲張りだからだろうか。

けれど、

「ま、いいや。俺はそのナギサクさんとタカヤ達に何があったかは聞かない。だって、俺には関係ないことだし…」

そう言つて、否定した。

背中合わせにいる誰かの影を無視するように。

——ほんとうにそれでいいの？

誰かが問う。

わからない。けれど、自分は優希だ。それ以外の何者でもない。

——そうだね。ぼくには思い出さない方がいいこともあるよね。

影が嗤う。

そうだ。思い出さない方がいい。

苦しいことも、辛いことも、悲しかったことも、怖かったことも、痛いことも、死にたいと思わされたことも、全部。

閉じ込めて、封じ込めて、なかつたことにしないと。

だって、だって、

そうしないと全てが崩れて壊れてしまうから。

(あれ…?)

どうして、そう思つたんだろう。

どうして、そんなことを思うんだろう。

自分は、誰だ？

自分は、なんだ？

——視界の端に見えないはずの赤が、ちらついた。

夜

美鶴は自室で珍しく資料を読んでいた。

調べ物、と言えば聞こえはいいだろう。しかしその内容はごく個人的なことだ。

(10年前の事故で死亡。いや、あたりまえ、か)

資料をめくり、目を通していく。

美鶴が調べているのは、先日的大型シャドウ戦で現れた三上のペルソナが発した名前についてだった。

あの時、覚えた心当たりを確かめようとしていたのだ。

「叔母上……」

ふう、と息を吐く。

資料の横にある写真に写っていたのは白衣を着た若い赤毛の女性。

名を、きりじょう桐条ちづる千鶴ちづるという。

美鶴の叔母であり、桐条でありながら研究職に就いた稀有な人だ。そして、エルゴ研でシャドウについて研究を行っており、10年前の事故で爆発に巻き込まれ死亡した女性でもある。

性格は優しく、柔和、子供好き。

母性に溢れながらも研究職だった故か、年が若かった故か伴侶も許嫁もないという桐条では珍しい人で、美鶴も可愛がってもらった覚えがあり、よく懐いていた。

そんな叔母の名が、何故三上のペルソナから出てきたのか。

基本的に、ペルソナは本人の分身のような存在だ。自分の影と言ってもいいかもしれない。ならば、三上本人に叔母と面識があってもおかしくはないだろう。

ペルソナに刻み込まれるほどの、暴走していたペルソナが自ら攻撃を止めるほどの相手なら、叔母に抱いていた感情は相当根深いもの

はずだ。

(だが…)

彼は美鶴に初めて会った時も他の人間に対するものと同じ表情と対応をした。

もし、面識がありペルソナが勘違いするほど叔母と自分の容姿が似ているのなら、よほどのポーカーフェイスではない限り戸惑ったりするだろう。

三上の性格上、有里湊とは違いポーカーフェイスを保つことは難しいだろうと推測する。

穏やかにほほ笑むことが多くあまり感情を荒げない、というだけで彼は有里奏子に近い、はつきりとした感情の表現の仕方をする。

彼女がこちらに来てからはそれがよく分かった。

書類には三上と関係があるという情報は一切無かった。

これでは面識があるのかどうかわからない。

知ったところで何になるのかもわからない。

美鶴自身、何故このようなことを調べているのかわからなかった。それでも、なぜか調べなければいけないような、とても大事なことのように思えた。

「直接…彼に聞いてみるしかないな…よし」

美鶴は椅子から立ち上がった。

「三上、居るか？ 私だ」

コンコン、と部屋のドアをノックする。

まだ遅い時間ではないので外出か風呂に行っていないければ部屋がラウンジにいるはずだ。

「…美鶴さん？ あ、ちよつとまって…」

少しして、足音と声がして目の前のドアが開けられた。

その首に白い包帯を巻きながらも、括っていた髪を下ろして男にしては長い髪が僅かに肩にかかっている。

それに、冷房が効きにくいせいだろうかあまり汗をかかない三上が

珍しく少し汗ばんでいた。

「えと、ごめん、ベッドで本を読みながら横になってたからすぐ立てなくて…」

困ったような申し訳ないような顔をしながら頭の後ろを搔く三上は、いつも通りだった。

それは恥ずかしかつたりするときにする癖なのを美鶴は良く知っている。

「いや、突然来た私のほうこそすまない。少し聞きたいことがあつてな。…いいか？」

「いいけど…立ったまま？ 椅子に座る？ あ…でも俺の部屋、ちよつと今冷房あんまり効いてなくて暑いから窓開けてるんだけど…虫とか入ってきてきたらごめんね」

後ろをちらりとみた三上は部屋の窓を確認したらしい。

カーテンは閉めてあるがそのカーテンは外からの風でひらひらと動いている。

「すぐに終わる。ここで大丈夫だ。ありがとう」

「ん。分かった」

首を横に振ると三上は頷き返してこちらの言葉をまった。

「…桐条 千鶴」という名に聞き覚えは？」

「ちよつとまって…」

顎に手を当てて考えるそぶりをする三上は真剣に心当たりを探ろうとしてくれているのだろう。だが、

「ごめん、考えてみたけどやっぱり覚えがない」

困ったように眉を寄せながら謝られてしまった。

「…私の叔母だ」

「そっか…」

微妙な顔をされてしまう。

これではいけない。なぜ、訊く事になったのか理由を言わなければ一方的に聞いてしまうだけになってしまう。

だが、先日のことを言ってもいいのだろうか？ と悩む。

三上に先日の事を教えれば抱え込んでしまうだろう。気に病むだ

ろう。だが、話さなければそれはそれでまたしこりが残ってしまう。

美鶴は、口を開いた。

「三上、実は——」

大型シャドウ戦の時のことを全て話した。

ペルソナが暴走したこと。大型シャドウを喰らっていたこと。鎌を振るい有里奏子に当たりかけたこと。三上の首を絞めたこと。果てにこちらに向かってきたことも。そしてそれを有里湊のペルソナが止め、暴走したペルソナが『千鶴』と確かに言っていたことを。

「…なるほど。わかった。話しづらかったと思うのに話してくれてありがとう。美鶴さん」

三上の反応は、酷く普通だった。

そのことに、違和感を覚えるほどに。

「ごめん。俺のせいで怖い目に、危ない目に遭わせてしまった。でも大丈夫。次からは絶対にならないから。俺が、させないから。だから俺を今まで通り使ってくれないか？ もちろん、美鶴さんが無理と言ったら俺は引き下がるよ。それだけのことを俺はしてしまっただから」

「絶対にならない」と笑った三上に得体のしれない危機感を覚えた。

これまで通り作戦に参加するのは問題ない。大方、大型シャドウの影響だろうと皆で結論が出ていたからだ。

たとえそれが尋常じゃないものであっても。

それよりも、なにか三上が黙って危ない橋を渡ろうとしているのではないかという予感めいたものがあった。

しかし、確証はない。

(杞憂か…)

美鶴は視線を一度逸らす。

「三上にはこれまで通り作戦に参加してもらおう。だが、リーダーを任せるというのはこれまで通りとはいかないかもしれない」

「わかってる。…期待に応えられなくてごめん」

「それは…」

そんなことはない、と否定しようとしたが言葉は最後まで出なかった。

三上は後ろを向いたかと思うと唐突に口を開いたからだ。

「ええと、俺の方も千鶴さんのことをなにか思い出せたらまた話すし協力するから。これ以上続けると長話になっちゃうし」

「…そうだな」

どうやら時間を気にしていたらしい三上はこちらを気遣いながらも話を切った。

確かにこれ以上ここでもだもと話していても無意味に時間が過ぎるだけだ、と美鶴も思った。

「じゃあ、おやすみ」

「ああ、おやすみ」

挨拶をして別れる。

気にならないといえは嘘になるが、確証も何もないものを訊けるほど、美鶴は三上に踏み込むことが出来なかった。

美鶴さんが去るのを確認した後、ドアを閉めてずり、と凭れる。薬を受け取って、ストレガたちの元からどうやって帰ったのか、途中からよく思い出せない。

本を読んでいたなんて嘘だ。本当は、ずっとベッドの上で頭を抱えて眠ってしまったおうと必死に目を閉じて耳もふさいで全てを見たり聞かないようにしていただけだ。

でも、何かを遮断すればするほど、五感だけは鋭くなり、自分の大事な輪郭はぼやけていくようで不安になるばかり。結局、変な汗をかきことしかできなかった。

なんて無意味な抵抗だったんだろう。

「…モコイさん」

「なんだい、チミ」

「おれは、いつも通りに…ちゃんと…三上優希に」なれてたかな」
ぼんやりと、部屋の天井をみつめる。

頭が痛い。

「チミ、おバカさん？ チミはチミでしょ。それ以外ナイナイさんだ

よ」

「…うん」

「ハ…」

溜息のように息を吐き出すような声が聞こえて、ぽてぽてと足音がする。

続いて、何とも言えない感触と重さが膝に乗った。視線をのろのろと下におろせばモコイさん。

「チミはチミ以外のなになれはしないんだカラ、悩む必要ないの！ わかった？」

「うん。ありがとう、モコイさん…」

「まったく、ニンゲンってそんなことで悩むんだカラ、大変さんな生き物だネ。…このモコイさんが慰めたんだから、＼はがくれ＼のラーメンでヨロシク」

「そうだね。また、食べに行こうね」

モコイさんの言葉は不思議だ。

悪魔だからなのかもしれないけれど、聞いてると落ち着くしどんな大変なことでも何とかなってしまう気になってしまう。

人はそれを依存というのかもしれない。わかっている。わかっているからこそ、それに頼りきりになる事はいけないことなのだと自分を戒める。

(だからこそ、俺は)

どんなイレギュラーがあろうと、一人でニユクスを封印して、湊と奏子を救うと決めたからには誰かに頼って立ち止まったりすることなく走り続けなさいといけない。

その、来るべき終演^{おわり}まで。

告解（7／9～7／11）

7／9（木） 放課後

一晩寝たら、ぼやけていた輪郭も得体のしれない気持ち悪さも全部消え去っていて、現金なやつだと自分の事を嘲笑する。と同時にあの感覚をずっと引きずっていかなくて良かったと安堵した。

駅前商店街を通っていると、日蔭のベンチに腰掛けているありすを見つけた。

彼女もこちらに気が付いたようで、立ち上がって手を振ってくる。

「あー！ ユーキおにいちちゃん！」

「今日も留守番？」

「そうなのー！」

返事をしたありすはピンク色のかわいい水筒をぶらさげていた。

彼女の保護者であるおじさん達はこの暑い日差しの中での水分補給を忘れていないようで安心した。たまに、そういうのを持つていな子供が公園の水飲み場で水をがぶ飲みしているところを見ることがあるが、さすがにありすにそういうことをさせるのには些か不安が勝る。

当たってお腹を壊したりしたら痛いだろうし、と考えるのは過保護過ぎだろうか。

いや、自分はいいがそれが奏子や湊だった時を考えると公園の水飲み場で飲ませるより普通に自販機で飲み物を買って渡すと思うので過保護じゃないと信じたい。

高校生にもなってそんな心配をすることは殆どない（というよりちゃんと2人とも自己管理できている）ので、杞憂ともいえるのだろうけど。

「ね、おにいちちゃん、今日は何して遊ぶ？ ウサギさんと追いかけて？ それとも、人形遊び？ トランプ遊びでもいいよー！」

なんというか、チョイスに困るといいうか外で遊ぶそうにない選択肢ばかりだ。

ウサギさんと追いかけてっこというのはそもそもウサギを捕まえる

or探すところから始まるので無理だし逃がしたら逃がしたで大変なことになりそうだし現実的ではないので冗談かなにかだとして、人形遊びも今ここに人形がないのでダメ。トランプ遊びもありすがポケットにトランプを入れてあるのならできるかもしれないがそんなことはなさそうだ。

それにこの外の狭いベンチの上でやろうものなら強風が吹いてきて山札が吹き飛んでしまう。

「うーん…」

悩む。

公園はこの前行ったしありすの提案する遊びはどれもできそうない。

無意味に時間を垂れ流すなんてできないし、ありすの要望も叶えなくてはいけない。難しい。

しかし、夏の日差しで溶けそうなほど暑い。いくらありすが座っている場所が日陰とはいえ、これは…

「あ」

思い付く。暑いのなら、涼しくなればいいのだ。

「ん~~~~~~~~!! かきごおり、おいしー! つめたーい!」

何とか説得して遊ぶのはやめておいて、ありすと2人で近くの甘味処『小豆あらい』に来た。

夏になつたのでかき氷を売り出したので食べにいくのにぴったりだと思っただ。

それに、かき氷なら腹にたまらなくて満腹になりにくい。と思う。

ふわふわとした羽のように軽いかき氷を、マンゴーソースと混ぜながら食べる。

珍しく、『小豆あらい』のメニューの中では小豆を使っていないものになる。期間限定だからだろうか。

(またモコイさんと食べに来よう…他の誰かを誘ってもいいし…うん、そうしよう)

食欲が落ちた自分でも楽においしく食べられるかき氷はありがたく、何度でも食べたくなる一品だった。

たこ焼きのほうはもちろん好きだが、最近はあれもペロツとは食べられないので食欲が出ないときは食べに行かないようにしている。モコイさんはゲロゲロになってしまっているので食べてとは頼めない。

「かきごおり、置いてたらずぐ溶けちゃうの勿体ないの…ありす、好きな時にかき氷たべてたいのに…そうだ！ 凍らせちゃえばいいのね！」

「たしかに、冷凍庫に入れておけばいつでも食べられるね」

「…冷凍庫ね！ おじさん達に言っておきごおり、たくさん買ってもらおうかな…？」

「食べすぎるとお腹壊しちゃうからほどほどにね。ありすちゃんだって痛いのは嫌だろ？」

「…うん。ありす、痛いのはイヤ。寂しいのも、イヤ」

しゅん、と落ち込んでしまったありすにいけないことを言ってしまった気になる。

もしかしたらなにかトラウマでもあったのかもしれない。

「ほどほどにすれば大丈夫だから…」

「そうね！ ありす、ちゃんとほどほどにする！」

キラキラとした目をこちらに向けながら、微笑ましい約束をしてきたありすに頷く。

これならかき氷を食べてお腹を壊すなんて事態は起こらないと思う。多分。

いちごのソースがかかった赤いかき氷を食べながら、ありすは笑った。

「それじゃあ、おにいちゃん。かき氷ごちそうさまでした！ ばいばい！」

「ばいばい」

かき氷を食べ終わるころには日が傾いていた。

また近くまでおじさん達が迎えに来たらしいありすはこちらに手を振るのもそこそこに、遠くへと駆けだして行った。

7/10 (金) 放課後

駅前の路地裏で元氣のないネコに餌をあげている湊と奏子を見つけた。

特に声をかける用事もなかったのでそつとしておく。

すこしネコのモフモフとした毛並みがうらやましかったけれど自分にはモコイさんとコロマルがいるので見なかったことにする。

べ、別に撫でたかったとかそういうわけではない。

嘘だ。めちやくちや撫でたい。ネコバンザイ！モフモフバンザイ

！

…ちよつと落ち着こう。

夜

「奏子つち、流石にそれはナイ！ 無いつて！ アツイテテテテテ！

ギブ！ ギブ！」

寮に帰ると上から順平の悲鳴が聞こえた。

丁度二階からのようだがなにかあったんだろうか。正直、めんどくさいことにしかならなさそうなので見に行きたくない。

でも部屋に帰るにはおそらく順平（と奏子）が居る場所を通らないといけないだろう。予想があっていたら、の話にはなるけど。

「三上、帰ったか」

「真田くん、ただいま」

「ああ…今は上にはいかなない方がいいぞ。試験に向けての勉強会をやっているらしいが…」

「ああうん…そうみたいだね…」

2人で遠い目になる。

今なおどつたんばつたんとお騒がせな音が聞こえてきているのでしばらく近寄らない方がよさそうだ。キッチンにでも引つ込んでパンケーキでも焼こうかな…と考えているとその音が静かになる。

「あれ、優希おかえり」

「ただいま。上で何があったの…」

「勉強してる間に目玉焼きになにかけるかの話になって、順平が奏子に『目玉焼きにケチャップは流石に無い』っていつて^{まんじ}正固めくらった。で、うるさくなってきたから静かにさせて、今は一応勉強してる」

「目玉焼きにケチャップ、美味しいと思うんだけどな…」

「…どうでもいいけど伊織は醤油派らしいよ」

「へー」

からあげにレモンをかけるかかけないかの話題と目玉焼きにかけるものの話題はしないことにしよう、と心に決めた。

血で血を洗う争いになりかねない。なんて恐ろしい話題なんだろう。

静かになった今なら横を通つても巻き込まれないだろうし、何事もなく通れるかもしれない。

「……」

「？」

湊がなぜか不思議そうな顔でじつとみつめてくる。

まさか、湊はモコイさんの事が見えてるんじゃないのだろうか。モコイさんを肩に乗せてる＝変人だと思われてないかドキドキしてきた。

実際、悪魔が見える人からすると肩にモコイさんに乗つけてるなんて変人でしかないのでそう思われていても仕方ないけど。

「…な、なにかついて…る？」

「…別に」

声は多少どもってしまったけれど平静を装ってるんじゃないかと思う。

興味なさげに視線をふいと逸らした湊はそのままラウンジのソファーに腰掛けた。

少し気がかりになりながらも、言うことが無いのなら無理に聞く必要もないか、と階段を上がった。

7/11 (土) 夜

「…以上が、7日に行った作戦のあらましです。やはり、個体によっては一筋縄では行かないようです」

いつもの如く作戦室に集まってソファアに座る。

そして、美鶴さんの口から大型シャドウ戦のあらましが語られた。もちろん、自分のペルソナの暴走の事も含めて。

「なるほど…洗脳までしてくるとは…敵も徐々に手ごわくなってるね」

神妙な顔で幾月がこちらを見る。

おおかた、操られでもした自分の事をよく観察でもしたいのか。どの道良い意味では見ていないだろう。

美鶴さん以外のメンバーは——特に湊と奏子は——きまらずそうだった。

だから、立ち上がった。

「…俺の心が弱かったせいで敵に塩を送ることになるばかりか、下手したら全滅の危険性まであった」

申し訳ない、と頭を下げる。

「…このようなことは二度とないように対策はとったけど、絶対だとは約束できないし俺は皆の不安を完全には取り除くことはできない。だから——」

「おいおいおい、三上君、頭を上げてくれよ。君は何を言ってるんだい？ まさか、責任を感じて特別活動部をやめようって言うんじゃないだろうね？ 荒垣くんのように」

「……」

美鶴さんには使ってくれとは言ったし、自分でも薬は飲んだし精神的にも安定させて制御するつもりではいる。

けれど。それとこれは別問題だ。

メンバーが怯えたりして作戦に支障をきたせばそれこそ本末転倒。自分一人が増える戦力より、自分がいることにより落ちる戦力が大きい可能性の方が高い。

それでは、意味がない。

「だけどきみは誰一人として傷つけてはいないだろう?」

「…それは結果論ですよ幾月さん。それに、彼がここをどんな理由で抜けたかは知りませんが、二回もシャドウに操られた俺よりも荒垣くんの方がまだ安定しているように見えます。メンバーに加え入れるのなら俺なんかより彼の方が良い」

幾月の言葉を否定する。

あれは結果論でしかないのだ。何かが一步違っていれば、本当に全員死んでいたかもしれない。

ペルソナの暴走というのはそれくらい恐ろしいもので、おそらく周回を繰り返した自分のペルソナの強さなら、現時点での荒垣くんのペルソナの比ではない。

現状の湊が本気を出してタナトスを使えば何とか止められるかどうか、だ。

ただ、その暴走したという件のペルソナを自分は見ていないので何とも言えないというところも不安点だ。

「……三上君、きみは酷く優しい。だけどねみんなの意見を聞かずに勝手に決めつけて抜けようだなんて許されるわけではないよ。だろう? 美鶴君」

「ええ。…三上、昨日も言ったがきみにはこれまで通り作戦に参加してもらおう。今回の事も、前回の事も、皆仕方ないと思っっているはずだ」皆から目を逸らす。

信用していない、と言われればその通りなのかもしれない。「仕方がないだなんて、そんなはずがない」と思っているのは、自分だけかもしれないというのも頭ではわかっている。

でも、それでももしかして、という感情が消えない。

皆に、面と向かって聞く勇気がない。

「……」

「…まあ、この話はここで置いておくとして、一旦話題を切り替えよう。実は悪い話ばかりじゃないことが判明したからね」

パン、と手を叩いて幾月が話題を変えたのを見計らって座る。

誰とも顔を合わせる事が出来ない。
皆を信じ切れない自分にその資格はない。

「今日、みんなに集まってもらったのは——」

「…待ってください」

岳羽が幾月の話しを遮る。

「この際なんで…桐条先輩に訊きたいことがあります」

「私に…?」

「私だけじゃないと思いますけど、ここに来てから、ビックリの連続で…私、少し流されてきた気がするし、だから、この際、はっきりさせたいんです。ズバリ訊きますけど…」

——センパイ、私たちに、まだ何か大事なこと言っていないんじゃないですか？ 例えば「影時間」や「タルタロス」の事、分かんないみたいと言っていましたけど…あれって、10年前の「事故」と関係あるんじゃないですか？」

「——っ!!」

美鶴さんの、息をのむような音が聞こえた。

「10年前のジコ…?」

伊織が不思議そうに呟く。

10年前の事故、それは——

「学園の周りで爆発があつて、たくさん人が死んだ話…当時すごいニュースになった筈ですし、先輩は、知ってますよね？」

…湊と奏子、そして両親が2人とともに巻き込まれた事故だ。

そして、両親が亡くなった事故でもある。

その時の自分は、自分の記憶は、殆どない。家族で車に乗っていて、湊や奏子と一緒に事故に遭ったのか、それとも。

ただわかるのは一人でムーンライトブリッジの上で倒れていたことだけだ。その前の記憶も、その後の記憶も、養父母である三上夫妻に引き取られるまでの記憶が全くない。

今まで気にならなかったのに、一度気になると今度は心底、この穴だらけの記憶が恨めしい。

「…ああ」

「幸い生徒は無事だったみたいですけど、でも、なんかヘン。なぜかちょうど同じころ、一度に何十人も不登校になってるんです。…コレ、偶然なんでしょうか」

「どういう意味だ」

きわめて感情の乗っていない声で美鶴さんが訊き返す。

顔を上げると、岳羽が申し訳ないような顔をしつつも口を開いたのが見えた。

「私、実は学園に残ってる昔の書類とか、調べたんです。そしたら、不登校なんてのは記録だけ。ホントはみんな、急に倒れて入院したって…似てると思いませんか…？ 風花をイジメた子が…入院した時と」

「……」

美鶴さんは、目を逸らした。

先ほどの自分と同じように。

「ちゃんと説明してください！ 10年前の事故…あの日、本当は何があつたんですか？ 学園は桐条グループが建てたんだから、桐条先輩は知ってるはずでしょ！私、ホントの事が知りたいんです！」

皆の視線が、美鶴さんを集まる。

自分はそれを見て、目線を下に落とした。

友だちだと言ったのに、彼女を庇うことすらできない自分もどかしい。だが、今の自分がこの時点で知り得ないことを言っても怪しまれるだけ。

最悪、幾月に消されるかもしれないだけだ。

「…隠してる訳じゃない。必要の無いことは告げてないというだけだ。しかし…」

「…仕方ないさ。きみのせいじゃない」

「わかった。全て話そう…」

いつも、こうやって、美鶴さん一人に押し付けてしまう。

「シャドウには幾つもの不思議な能力がある。研究によれば、それは時間や空間にさえ干渉するものらしい。私達は敵と思ってるからあまり意識しないが、もしそれを利用できたら…どうだ？ 何か大

きな力になるかも知れないと思わないか？」

「え…？」

「今から14年前、そう考えて実践に移した人物が居たんだ…桐条グループの先代、桐条鴻悦…私の祖父だ」

今度は、自分と美鶴さんと幾月以外の皆が息を飲む番だった。

「祖父は、シャドウの力にいたく魅せられ、それを利用して何か途方もないものを造ろうとしていたようだ」

「途方もないもの…？」

「実現のため、祖父は特別に研究者を集い、数年がかりで大量のシャドウを集めさせた」

「シャドウを集めたア!? ええ、正気かよ…」

伊織が驚きながら叫ぶ。

驚くのも無理はないだろう。あんなもの、集めようとすら思わないのだから。しかし、それを大量に集めたとすると正気を疑うものであるのも分かる。

「しかし、10年前実験の最終段階で暴走事故が発生。制御を失ったシャドウの力によつて後に忌まわしい痕跡が残ることになってしまった」

「それって…まさか、」

「そう、”影時間”と”タルタロス”だ」

「…!」

もう一度、皆が息を飲んだ。

「記録では、集められたいたシャドウは分かれて飛び散り”消失”した、とある。満月の度にやって来るのは、この時のシャドウだ」

「”消失”…それでいつも、予想できない場所に…」

「ちよつと、いいですか? 今の話がホントなら、なんで学校がタルタロスに? まさか…実験をやった場所って…!?!」

岳羽の顔が青ざめる。

話の中の関連性に気がついたようだ。

「…そうだ」

「じゃあ…ウチの生徒が何十人も入院したっていう、あれも…」

「全て、きみの考えている通りだ。傘下にあつて、人も集まり、最も好きなようにできる」場所：恐らく、ポートアイランドは最適だったんだ。実験の場所は、紛れもなく、10年前の月光館学園だ」

「それ…どういうことですか…それじゃ、この部の活動って…無関係の私たちを使って、その時の後始末って…？」

揺らぐように、うわごとのように呟いた岳羽はキツとその目線を強め、美鶴さんをにらみつけた。

「…騙したんですか？」

「……」

違う。

いや、騙された側だと思っっている方はそう思っても仕方のないことだ。

でも、結局影時間に適応してしまった時点で、ペルソナを持ってしまった時点で、だれしも「無関係」では居られない。無関係ではなくなってしまう。

「真田先輩だつて知ってたんでしょ？ これじゃ私たち、都合よく利用されてるだけじゃない!? それとも先輩は、戦う理由なんて、どうでもいいって事なんですか？」

納得できない、といった風に真田くんへと食って掛かる岳羽は、もう半分ムキになっていた。

覚えても仕方のない怒り。隠していても仕方ない事情。仕方ない事ばかりで、けれど仕方ないでは済まされないものだった。

「そんな風に言つた覚えはない！ …理由なら…あるさ…」

「どう取ってくれてもいい…黙っていたのは、確かに私の意思だ。」

…すまなかつた」

小さなその謝罪は離れた席に座る自分の耳にもはつきりと聞こえた。

「隠す気など無かつた。だが筋道よりも、きみらを確実に引き入れることの方が、私には大切に思えた。理不尽だろうと、戦えるのはペルソナ使いだけ…世界で私達だけだからだ」

「今さら……」

「それに、私には…力を得るかどうか、選ぶ余地など無かった。私は…」

「美鶴…もういい」

俯いてしまった美鶴さんに、真田くんがやさしく声をかける。

ああ、どうして自分は真田くんのように美鶴さんを守ってあげられるどころか、迷惑をかけてしまっているのだろうか。

ほんとうに、どうしようもない人間だ。自分は。こうなることがわかってるのに何も手を打たないのだから。

「岳羽くん。…罪は、〝過去の大人たち〟にある。そして彼らは、みんな自らの行いによって命を落とした…今はもう、当事者はいないんだ。謂れない後始末なのは、みんな同じなのさ」

「でも…」

それでも食い下がろうとして黙った岳羽に、穏やかに幾月が語り掛ける。

「事故から10年…シャドウたちがどうして今になって目覚めたかは、本当にわからない。でも、目覚めたってことは、見つけて倒せるって事でもある…これ、どういうことかわかるかい？」

A. 幾月の思惑通り全部倒して終わりが来ます。

なおその終わりって世界の終わりなんですけどね。クソが。

反吐が出そうになる。優し気に語るこいつの言動全てに。〝嘘は〟言っていないだけであって誤魔化していたり美鶴さんよりもひどい隠し事をしている部分が本当に癩に障る。

むしろいつかはちゃんと言おうとした美鶴さんがクリーンすぎるし訊かれなかったからで済みますこいつがまっくろくろすけなの問題なんだけれど。

「あの12体こそ、全ての始まりなんだ。…と言ったら、分かるかな？」

「ヤツらを全部倒せば…〝影時間〟や〝タルタロス〟も消える…？」

「そのとおり！」

真田くんの推測に、満面の笑みで頷いた幾月に嫌悪感を感じる。

大方、うまく乗ってくれたとも思っているのだろう。本当に気持

ち悪いやつだ。

「さつきは話の腰を折られちゃったけど、どうだい、朗報だろ？」

「本当なんですか!？」

「確証となる記録もある。ここからが、本当の戦いの始まりだね」
幾月の都合のいいように改ざんされたモノならな!

ああ本当にムカつく。こいつを目の前にすると平常心が保てそうにないのが本当に嫌だ。

な〜〜〜にが本当の戦いだ。
お前が死んでからが本当の戦いだよこちとら。大事な弟と妹の命と世界の命運かかってんだよこの腐れメガネ、と声を荒げて言いたくなるのを抑えて物憂げに視線を下げておく。

本当に、何故かわからないが平常心を保てずこれだけ心の中が荒れ狂うのはちよつとおかしいかな、とは思うものの、こいつがやったことは凄まじいやらかしレベルのことでもあるので擁護しない。死んでもしたくない。

「ホントの、戦い…」

「事情がどうあれ、人を守るためなのは変わらない。シャドウ達は、だんだん力を付けてる。待っているだけじゃ勝てない。それに、タルタロス自体にも謎は多いからね。なぜあんな巨大なものが現れたのか… 僕らの知らない『答え』が、きつとあるはずだ」

そういえば、幾月は予言云々は知っていても、タルタロスの『役目』は知らないだったか。

そのまま知らないまままでいてくれ…と祈るしかない。

話が終わって作戦室から皆が出ていき、室内には自分と幾月の2人だけが残っていた。

あんなどうしようもない空気で解散したというのに美鶴さんを含めた皆はこちらに心配するような目線を投げかけていた。

心配されるべきなのは、自分ではなく美鶴さんなのに。

それとも、戦力の低下を案じてのことだったのだろうか。…わから

ない。

「三上君。私はね、きみに部を抜けてほしくはないんだよ」

「……」

ギラリ、とメガネの奥の目が光ったような気がした。

「きみは彼らにとつて…特に有里兄妹にとつては欠かせない存在だ」

幾月が、迫る。

思わず後ずさる。

「きみが部にいる限り、弟さんと妹さんである2人が無茶をしないはずだ。きみがいるからこそ、繋ぎ止める鎖となり、ストッパーにもなっているんだよ?」

また、幾月が迫ってきた。

ゆっくりと、後ずさる。

「それにね、きみは私にとつても大事な存在だ。そう——ととも、ね」

幾月が、息のかかる距離にまで迫ってきた。

後ろは、壁。もう逃げ場はない。

「何故逃げようとするんだい? 私はこんなにも、いつも通りだというのに」

「……」

めちやくちや距離が近いからだよ。

なんて言つて引いてくれる相手ではない。いや、もしかしたら「冗談冗談」といつて離れてくれる可能性はあるだろう。

だが、この幾月は何かおかしい。まるで、被っていた皮を脱いだよ
うな——

「…まあ、とにかく部を抜けないで、大事に育つてくれたらそれでいいよ。身体を壊さないように気を付けるんだ」

「…はあ、気を…つけます…」

そう言つて離れてはくれたが意味が解らない。

気持ち悪い。

言われた言葉に何か違和感を覚える。

ぞわぞわと、背筋を虫が這うような気持ち悪さがする。

そそくさと頭を下げて離れる。

あの男と同じ空気をこれ以上吸って居たくない。

今日はもう、風呂に入って寝てしまおう、と考えた。

さっぱりして、モコイさんとなんでもない話をするか部屋にあるテレビで騒がしい番組を見て忘れて寝よう。たとえそれが、先延ばしにする行為であっても。

そう思いながら、自室のドアを開けた。

暗中飛躍の特命ボウイ（7／12）

7／12（日） 昼

暑い。

夏なのだからそりやそうだと言われても仕方ないのかもしれないがとにかく暑い。

ビルのガラス窓とアスファルトは太陽光を反射してこちらに照り返してくるし、地面は地面で灼けるように熱いしでたまったものではない。

「あつっ…」

ふらふらする。

制御剤を飲み始めたのもあつてかあまり体調も良くないし、暑いからか気持ち悪い。

胃の中には何も入ってないのに吐きそうだしひとりです外出したことを後悔するレベルだ。

それでも、暑苦しくなるが直射日光に焼かれるよりかはいい、と薄手のパーカーのフードを被りなおして歩みを進める。

今日の目的は神社へのお参りとコロマルの様子を見ることだ。

境内への階段を一步ずつ、ゆっくり上がる。そしてようやく上がりきったころには眩暈が更に酷くなっていた。

（日陰…どこか日陰…）

汗をぬぐって日陰を探す。

境内を見回していると、こんなに暑いのに学帽を被り、長袖で真っ黒の学ランをきた男子学生とペットと思われる首輪をつけた黒猫がベンチの上で座っていた。

見たことがないのでこちら辺の学校の制服ではなさそうだ。

（他の参拝客かな…）

この人気のない神社に舞子ちゃんや神木くん以外の人がいるのは珍しい、と思いつながらも自分は軒下の日陰に腰を下ろして凭れかかる。

本当に暑くてどうしようもない。飲み物でも買って持ってきてくれれば

よかった、と後悔する。こんなに体調が悪くなるなんて思わなかったし、夏の暑さを舐めていた。

少し体調が落ち着くまでじっと息を整えていよう、と深呼吸を繰り返している、目の前に学ランの男子学生がいつの間にか立っていた。

「もし。気分がすぐれないようですが」

「ああ、えっと、大丈夫です…暑さにやられてるだけなんで…休めば大丈夫なんで…」

いきなり話しかけられたので驚く。

よくよくみると美丈夫とも呼ばれそうな整った顔をしている彼は、懐から缶ジュースを取り出した。

「水分を摂っていないようでしたので。お節介でなければ、これを」
「ありがとうございます…」

「…ライドウ。バテている相手にそれは不味いであろう。別の物にしろ」

差し出されたもの——マッスルドリンコを受け取ろうと手を伸ばした瞬間、横から声が聞こえてきて止める。

「この妙に渋い声はどこから聞こえてきたのだろうか。…ではなく、」
「…ライドウ…？」

聞こえてきた名前を思わずつぶやく。

ライドウと言えばモコイさんが警告していた…というかぶるぶる震えていたあの葛葉ライドウじゃないのだろうか。

「この人間…私の声が聞こえているのか…？」

「…ゴウト、出てきてしまったては余計に驚かれますよ」
「!!」

猫だ。黒猫が喋ってる。

男子学生——たぶんライドウ君の肩からによきりと顔を出したのは先ほどの首輪をつけた黒い猫。名前はゴウトというらしい。名前も中々に渋くてかっこいい感じた。可愛いけど。

妙に渋い声で猫が喋る現実、脳みそがフリーズする。いや、普段悪魔やシャドウやらなんやらを見ていてこういう非日常の事には慣

れたと思っっていたのにここにきてまさかの猫が喋るという事態に思考が追いつかない。しかし可愛い。

緑のまんまるな目がくりくりしてとても可愛い。

「うぬよ、私の声が聞こえているのなら首を縦に振るのだ」

古風な言葉づかいで喋るゴウトねこちゃんが語り掛けてくる。

興奮のあまり首を縦に何度か振った。

「そ、そう何度も振らずとも良い!」

「俺…暑さでやられて猫ちゃんが喋ってる幻覚見てるのかな…」

マボロシだろうが幻覚だろうがどうでもいい。

猫が喋っているという現実感謝した。ありがとう夏の暑さ。

「私は幻覚ではない! 幻聴でもないぞ! …ライドウ、この人間が暑さでどうにかなってしまいう前にさっさと別の飲み物を渡してやれ」
「はい」

次に差し出されたのは四ツ谷さいだあ。

無難なチョイスだ。できれば炭酸じゃないのが良かったなんて口が裂けても言えない。

「えと、すみません…」

頭を下げて受け取り、プルタブを開けて中身を一口。

ぬるい。

善意で貰ったものに文句をつけるのはどうかかと思うが人肌程度のぬるさと炭酸の舌触りと甘みがなんともいえない感じになっている。それでもからからに乾いていた口は潤ったので、貰えたことに感謝しなければいけない。

「ありがとうございます。少し楽になりました」

「それは良かった」

微笑むライドウくんは眩しかった。

これは夏の日差しのせいじゃなくてライドウくん自身が輝いてるに違いない。

「……ライドウ、こやつ…」

「ええ…」

ライドウくんの笑顔にやられていると、なにやらコソコソと2人で

話し合いをしているらしい。

まさか、モコイさんと居ることがバレてしまったのか。

もしそうならどうしよう、と考えが頭の中で回る。

「すみません、つかぬ事をお伺いしますが、血縁に神職の方がいらっしやったりその家系ということはありませんか？」

ライドウくんが真面目な顔をして訊いてきたのは別の事だった。ほっと安心する。

でも心当たりも無いし首を横に振る。

有里の家はともかく三上家はそんな知り合いも血の繋がりもなかったと思う。

「いえ…」

その答えに、ライドウくんとゴウトは顔を見合わせた。

「血筋由来のものではない…？ どう思います？ ゴウト」

「かのホワイトライダーを神降ろしするなど尋常ではないであろう。あやつほどの悪魔をこのような若くか細い人間に降ろそうと思うと負担も労力も相当なものになる。しかも害を与える目的ではなくただ降ろすだけとなるとさらに理由がわからぬ。…守護目的か？」

ゴウトの口から飛び出したホワイトライダーの名にドキツとする。

もしかして、モコイさんじゃなくてホワイトライダーが見えているのか？

しかし、ただのペルソナっぽいホワイトライダーが見えているなら他のペルソナも見えてないとおかしい。でも特に追求されないのを見えてないと思いたい。

「お名前をお伺いしても？」

「三上です。三上優希。あの、なんかヤバいんですか…？」

「三上さん、ですね。いえ、ヤバいと言われればヤバいんですが…特に害は無さそうなので大丈夫かと。それより、最近変わった事などに心当たりは？」

めちやくちや心当たりしかない。

ホワイトライダーと生死をかけたシバキあいをしました！なんて言って信用されるわけが無い。

もしかしたら信用してくれるのかもしれないけど個人的に到底信じられないことなので黙っておこうかと思う。

「……ないです」

本当にごめん、めっちゃくちや心当たりしかないけど黙秘します。と心の中で謝る。

ライドウくんがいい人そうなのが罪悪感を余計に煽ってしまう。モコイさんが言うような怖い人じゃなくて良かった、とは思うけどこちらはこちらである意味怖い。

顔と性格的な意味で。

「……イヌガミ」

「ナンダ、ニンゲン！」

「…読心術を」

突然ナチュラルに懐からパイプタバコの管みたいな金属の細い管を取り出したかと思えば、そこから悪魔を呼び出したぞこの人。

「んん!？」

「ライドウ…」

というか即座にその悪魔に読心術を命令させたって言うのにびつくりだ。こつちが目の前にいるのに堂々と悪魔を出すわ読心術命令させるわでモコイさんの言ってた怖いってそういう事なのか…と手のひらを返しそうになる。

ゴウトはそんなライドウくんを呆れた目で見てるしこつちは驚くくらいしかないし…って、あ！

「アオーン！ コノニンゲン、ナニモミエナイ！ コイツコワイ！

オレサマ、モウモドリタイ…クウーン」

「なにも…?」

よかった。モコイさんのことを考えていたので読心術で繋がりがあることがバレてしまうのではと心配したけどなんだかよくわからないまま心の中というか頭の中がバレなくて済んだ。

ライドウくとゴウトは真剣な顔つきでこちらを見る。

「いや、あの…その犬みたいなのですか…妖怪…? それとも幻覚…?」

そんなに見られても困るので話題を変えつつイヌガミを指さす。

湊の使うペルソナで見たことはあるが悪魔としてのイヌガミを目にするのは恐らく初めてだ。くねくねと空中で八の字を描きながら浮かぶ姿はとても可愛い。頭の黒い毛が短く艶々で触ってみたくなる。でも油断すると噛みつかれそうなのでちよつと怖い。

なんだか怯えてるようにも見えるけどどうしたんだろうか。

いやまあ、どうしたんだろうとは言ったものの十中八九ホワイトライダーが原因だろうしホワイトライダーが怖いのなら仕方ないと思う。イヌガミと魔人もとい黙示録の騎士だとレベルが違いすぎる。

…そう断言すればちよつと心の中で抗議の声が挙がった気がした。貰ったホワイトライダー、本当に人格のない力だけの存在なのか…？

個性…あると思うんだけど…気のせいだろうか。

「ライドウ。 見える人間もいるのだから目の前で悪魔を出すなどあれほど…！ ましてやいきなり読心術を使うなど！」

「すみませんゴウト。ですが…」

「だってもなにもないであろう！ …うぬの見えるこれはイヌガミと呼ばれるものだ。ライドウによって使役されているものであるから勝手に襲い掛かったりはせぬが…ライドウが無神経な事をしてすまぬな」

「あ、幻覚じゃないんですね。噛みつかないんなら大丈夫です」

「うぬ、ずぶといと言われることは無いか…？」

そんなため息と共に、ゴウトの口からモコイさんがだいたい話してくれたことと同じような悪魔の説明がされる。

「——つまり、悪魔が見えるという事はそれだけ“素質”があり狙われやすいという事だ。我々から見てうぬは非常に危うい。が、しかし…うむ…」

「ゴウト、彼には我々の連絡先を渡しておいた方がよいのでは？ 調査のついでに護ることくらいならば…」

「ライドウ、我らとてそうすぐに駆け付けられるものでもなかろう。だがそうであるな…連絡先くらいは交換しておいて損はない」

では、と勝手に話が進められてライドウくんが懐からシルバーの携帯電話を出す。

そして真顔のまま、
「番号を」

と言葉少なにその携帯電話を差し出してきた。

それを受け取り、自分の携帯電話の番号を入力する。

それと同時にこちらにも携帯電話を出した方がいいと思っただのでライドウくんにもそれを手渡した。が、

「……」

受け取ったライドウくんは沈黙して微動だにしない。

それどころかダラダラと顔を青くして冷や汗を流し始めた。

「だ、大丈夫…？」

「だだだ、大丈夫…です…電話番号の登録くらい…自分にだって…でき…でき…あつ…変な画面に…!?!」

人差し指でボタンを押そうとしているライドウくんは酷く挙動不審だ。

もしや、これは…操作がわからない…とか…？いやそんなまさか。

彼だつて（たぶん）高校生だ。携帯電話で番号を登録することくらいはできるだろう。

「ライドウ、大人しく観念して携帯電話をミカミに渡すのだ。機械が大の不得手のうぬに扱い切れるモノでもあるまい。ついこの間、支給された電子召喚器であるCOMPとやらを壊したことを忘れたのか？」

「うつ…」

「あれは試供品扱いの支給だったから良かったものの…COMPを使う事態になったらどうするのだまったく…報告書も我がこの手を使い「ばそこん」の「わーぷろそふと」で打っているというのに…よいかライドウ、いつも我がいるとは限らんのだぞ。いつまでも我に頼ってばかりでは18代目葛葉ライドウとして一人前になる事は出来ぬ！」

「はい…」

ぶんすこ！と愚痴混じりに怒るゴウトに言葉でぼっこぼこにされてライドウくんは頭が上がらないどころか今にも地面にでも埋まってしまうようなほどに落ち込んでいる。

機械音痴のライドウくんには任せるのは先ほどの会話から駄目と分かったので電話番号を言ってもらって登録しよう。きつとその方が早いだろう。というかそうしたほうが絶対に携帯電話も無事ですみそうだ。

「じゃあ俺が登録するので携帯返してもらって…番号お願いしてもいいですか？」

「かたじけない」

意気消沈するライドウくんは携帯電話を返してもらってたどたどしく伝えられる番号を登録する。

そしてこちらからライドウくんの携帯に電話をかければ、着信音がちゃんとなったのですぐに切った。

「ミカミ、夜道には気をつけよ。いや…夜道でなくとも悪魔は出るが夜の方が奴らは活動しやすい。何かあればこの番号にかけるのだ。すぐにとは言わないが急いで駆け付けよう」

「ありがとうございます」

気まずい。1人でもほぼほぼ対処できます、なんて今更言えない。モコイさんと一緒にいることやナイフなどの武器を持ち歩いている事がバレたりすると弁明のしようがない。この無償の善意がごく心にくる。

ライドウくとゴウトがいい人(猫)なだけに。

「では、そろそろ時間なのでな。ゆくぞ、ライドウ」

「はい。…では、さようなら」

「さよなら」

頭を軽く下げたライドウくんの肩にゴウトが飛び乗る。

そしてそのまま1人と一匹は神社の境内から去っていった。

まるで台風のような二人だったな、と思うと同時に変なつながりができてしまったことをモコイさんに報告するかどうか悩む。

言ったら言ったでモコイさんに怒られそうではある。けれど伝え

なくてはバツテイングしたときにモコイさんに言い訳が立たない。

(よし)

つながりができてしまったものは仕方ない、と諦めて大人しく報告することに決めた。

怒られるより信頼を失う方が自分は怖い。

立ち上がってお参りをする。

内容は、「次の試練と大型シャドウ戦が無事に終わりますように」だ。

こんなときに神頼みとは何とも微妙なものかもしれないが、祈らないよりはマシという気もする。

(コロマルはいなかったしこの後はどうしようかな…)

お参りが終わり、神社ではやることがないので予定が空いてしまっている。

先ほどまで体調が悪かったのですがこのまま帰ってもいいが、なんだか楽になっているし飲み物を持っている今なら大丈夫だろうと高をくくった。

——のが、駄目だった。

(ま、まずい…さつきより悪化してる…)

ふらふらと駅前を歩く。

途中で飲み物を追加で買い、飲みながら歩いていたがライドウくん達と一緒にいたときより楽じゃない。

日陰で休んでいたから楽だったのか、誰かと話していたから楽だったのか、どちらかはわからない。けれど移動を始めて少したって調子に乗ってきたらこれだ。

自分は馬鹿か。

「はーっ…はーっ…げほっ…けほっ…」

暑さでむせる。

息もあがっているし眩暈も酷い。ぐにやぐにやと世界が歪んでいくようにも見える。

ひとときわひどく視界が揺れた気がして、思わず建物の壁に手をついて蹲る。

「……最悪だ……」

まっすぐ帰ればよかった。

蹲っても視界の揺れは治まらない。心臓の音が煩い。息が苦しい。深呼吸をして落ち着こうと息を大きく吸った瞬間、ふ、と意識が飛んだ。

「おいー」

目を開ける。

何度か瞬きしてぼやけた視界が治るころに分かったことは、ここがどこかの家の一室らしいことと腕に点滴が刺さっていて簡易ベッドに寝かされていることだ。

ここはどこだろうか。病院のように処置をしてもらってはいるが病院ではなさそうなことだけはわかる。

視界を少し動かせば、大きな水槽があり、そのアクアリウムの中で熱帯魚が泳いでいるのが見えた。

ここが病院なら処置室にはアクアリウムは無いはずだ。

不思議な部屋に頭の中ではてなを浮かべる。

「目が覚めたか。まったく、世話かけさせやがって……」

部屋のドアが開き、マグカップを持った男が入って来る。

よれよれのスウェットにぼさぼさの髪。疲労を濃く残したその顔に、自分は見覚えがあった。

「まさかオフの日に買い物に出かけたら受け持つる患者が意識失ってるなんて誰が思う？ なあ、」

かかりつけの主治医だ。

名前はそう、たしか——朝倉だったはず。

それにしても口調がなんとも荒いしいつも病院で見ている雰囲気は全くない。別人だと言われたら信じてしまいそうな感じだ。

「あ？ 病院で見てるオレと違うって顔してんな？ 鳩が豆鉄砲喰

らったみたいなの顔してるぜ。こつちが素だよ、素。あつちはよそ様用
ペルソナをな…こう、チヨイチヨイツと付け替えてんだ」

「?!?!」

「お、そのカオいいねえ。正しく驚きましたって顔だ。お前のかんが
えてること、あててやろうか? どうしてペルソナの話をしたんだ
”ってトコだろ? 決まってるあ、お前がペルソナ使いな事くらいわ
かってるからだよ」

朝倉先生は皮張りの椅子に腰掛けてラムネ菓子を口に流し込んで
バリバリと音を立てながら砕く。

どうしてペルソナ使いだという事がばれたのか、そもそも先生もペ
ルソナ使いだったのか、という驚きが衝撃的すぎて他の事が何も考え
られない。

「おーおー、驚いてら。驚いてるお前の想像してるであろう質問に答
えてやろう。なんたってオレはイイ医者だからな。」

ひとつ、オレは高坊の頃、ダチと『ペルソナ様遊び』をした。『ペル
ソナ様、ペルソナ様、おいでください』ってやつな。そこで肩幅広
めのエセ紳士に名前を告げてペルソナに目覚めたってわけだ。お、訳
わかんねえって顔してんな。ジエネレーシヨンギャップだなあ。お
前が幼稚園児くらいのガキのころは流行ってたんだぜ? これ」

ペルソナ様遊び。

聞いたことがない。そんな簡単そうなものでペルソナに覚醒でき
るってことはこの世界がペルソナ使いだらけにならないだろうか。

そんなことを思いつつも他にペルソナ使いがいるという情報に特
段驚きはない。なぜだろうか。

「ふたつ、なんでお前がペルソナ使いだと分かったか。お前が春先に
ぶつ倒れて寝込んでる時に視えたから、つっののが答えか。曖昧かも
しんねーがそのあと独特の“匂い”がしてんだよ。お前も、お前の
見舞いにきた同じ寮の人間とやらも」

匂い。

モコイさんも言っていたがなんだか臭いんだろうか。動く右腕を
くんくんと嗅いでみる。

…わからない。

「匂いはペルソナ使いの中でも変わってるやつにしかわかんねえよ。まあその匂いに関してはお前はあの匂いが濃い。あとはお前の弟と妹もだな。お前と比べると弟はお前の5割。妹は2.5割くらいといったところか。というか前より濃くなってるねえか? …まあいいか。

みつつめ、ここはどこか。ここはオレの家兼自営の病院だ。ここで人には言えないモン抱えたやつらの治療やそいつら向けの薬とかの販売をしてる。悪魔とかの相手をしたやつとかな。…お前、悪魔ってわかるか?」

こくりと頷く。

さつきゴウトにレクチャーしてもらったばかりだし、日頃モコイさんと一緒に襲い掛かってきた悪魔を返り討ちにしたりしているのでタイムリーな話題ともいえる。

「手間が省けて助かるわ。ペルソナ使いやサマナーってやつらが悪魔とかと戦うときがあるんだが、そういうやつらは普通の病院だと変に勘ぐられちゃうし頻繁に利用してたらややこしいからな。そういうやつらにやそういうやつらの為の場所が必要なのさ」

足を組んで悪い顔で笑う朝倉先生はいい意味で悪い大人だと思う。ニヒルという言葉が似合うその出で立ちには、ちゃんと整えていたらもっとかっこいいだろうにと思うと残念だ。

「ところで、これ、な〜〜〜なんだ?」

スウェットのポケットから取り出されたのは、タカヤからもらった制御剤の入ったピルケースだ。

さあ、と顔から血の気が引く。

ある意味一番バレてはいけない人間にばれてしまった。

「オレの処方した薬じゃねえよなあ〜〜〜? おい、答えろ。これはなんだ?」

怖い。

顔が堅気のそれじゃない。

「どうせお前が急激に体調悪くしたのもこれのせいだろ。お前の病氣

は確かに発作が出るときがあるが、そのタイミングが分からなくて日常生活にも運動にも支障がないはずだ。あんな顔真つ青にして汗ボタボタ垂らしてイキナリ気絶するほどのもんじゃねえ。…そういうや、春先に運ばれてきたときも死にかけてたな。あんときのもこれが原因か？」

首を横に振る。

制御剤はあときは飲んでいないしそもそも貰ってすらいなかった。

どうして倒れたのか、自分ですらわからないのだ。

「春先のは違うってわけか？　じゃあこれはなんだよ。まさかラムネってわけでもねーだろ」

「ペルソナの…」

「あ？」

「ペルソナの制御剤…です…それで、ペルソナを…抑えてる…」

「ああ!？」

責められてもごもごと自白すれば、朝倉先生は勢いよくソファーから立ち上がってずんずんとこちらへ近づいてきた。

その顔は般若に近い。

「ペルソナの制御剤だど!?　ふざけんな！　なにがあってそんなもん飲んでる!?!　お前が…お前がそんな体調悪くするほどのモンを!!!

いつからだ!？」

「えっと…」

頭の中で思い出す。7日が暴走した日で、その次の日である8日に制御剤を貰い、それから毎日昼に飲んでいる。

つまり…

「5日前…くらいから…です」

「たった5日でこれか…!?!　馬鹿野郎！　飲むのやめろ！　今すぐにだ！　ああくそ、今からお前の精密検査…いや、採血だけでも…!」
ガシガシと頭を掻きむしって焦った顔をする朝倉先生がうろうろと部屋の中を歩きだした。

飲むのをすぐに止めろと言われても止めるわけにはいかない。そ

んなことをしてまた得体のしれないペルソナが暴走したら困るのは自分だ。

「俺には…飲むのを止めることはできません…やめられ、ないんです」「なんでだ!!! 中毒性でもあるのか…!?」

「違います…! 飲むことをやめたら…俺は…周りを傷つけることになる…! だから…」

必死に否定する。

中毒性はない。けれど飲むことは何を言われようとも止めることが出来ない。

ペルソナが暴走すれば傷つくのは自分ではなく周りだ。自分だけが傷つくのならそれでもいいが、周りに被害が及ぶのならそうもいかない。

「…そーいや、ペルソナの制御剤つつってたな。なるほど、お前ペルソナが暴走してんのか?」

無言でうなづく。

自分としては暴走しているつもりはないが、周りが言うのだからそうに違いないと思うのだ。というか、湊たちが嘘を吐く理由も意味もない。

「はあ…そーか。そーいうのの対処はオレの専門じゃねえから…どうすつかなあ…」

困ったようにまた頭を掻く朝倉先生はいい先生だ。

こんな自分のような患者を本気で心配して、怒って、何とかしようとしてくれている。

「…ただ、制御剤なんてモンが出回ってお前みたいな高坊でも手に入るってことはペルソナが暴走してる人間も少なからずいるってわけか。なるほどな。…おい、これ何個かサンプルで貰ってもいいか?」「どうぞ…」

「ペルソナを無理やり薬で押さえつけてることが相当体に負担がかかるモンなのか、それともこの薬自体が劇薬なのか。オレが調べてやるよ。んで、よけりや改良もしてやる。効果はちよつと薄いが体に負担がかからないやつ…つてな感じだな。…まあお前の中にいるや

つは効果を弱めたやつじゃ無理そうだな…なるべく早く制御できるようにしとけよ」

この医師には何が視えているのか。

自分にはわからない。けれど、手を伸ばしてなんとか助けようとしてくれている事だけはわかる。

「ありがとうございます…」

「あ？ 礼をいわれるまでもねえ。つーか、礼をいうくらいなら体調管理しつかりしろ。街中でぶっ倒れんな。オレが偶然通りかかってなけりや下手すりゃ熱中症になって死んでたぞお前」

「はい…すみません…」

耳に痛い。

今度からは調子に乗らないようにしたい。

「わかりやいいんだよ、わかりやき。…まだ動けそうにないだろ。寝とけ。寝てる間に採血も済ませとくし夕方になったら起こしてやるから」

優しい気なその声に瞼が重くなる。

自分では意識していなかったが気を張っていたのかもしれない。

「他にこの薬飲んでるやつサンプルが欲しいな…1人じやたりねー…ツテ使って探るか。最悪なんじょうくんかなんでも屋みてーになつてるナオリンにでも頼んで…」

なんて声が聞こえていたことは聞かなかったことにして瞼を落として眠りについた。

増えていく関係（7／12～7／13）

路地裏

優希が医者ので眠っている頃、明彦は溜まり場にいる荒垣の元を訪れていた。

「暇そうだな、相変わらず」

そう声をかければ気だるげに視線が上げられる。

「ん…？ テメエか…何しに来た。また連れ戻そうってんなら、話す事はねえ」

「…そんなんじゃない。腐れ縁の相手でも、たまには心配になる事もある」

「ああ？」

眉をひそめた荒垣に、明彦は表情を変えないまま近くの階段に腰掛けた。

そして思い出すように目を閉じ、天を仰いだ後口を開いた。

「お前とも長いな…孤児院で顔を合わせてから、もうすぐ14年か…よく美紀とお前と三人で、まだ新地だったこの辺を夜まで走り回ったな。フ…影時間どころか、“時間”なんてものに目が行くことさえ無かった」

懐かしい思い出に微笑む。

あの頃は全てが輝いていて、よそ見をする暇もなかった。

「つたく、変わらねえな…」

「？」

「弱音なら、仲間に吐きやがれ」

「ッ！…なんだと？」

心配するように吐き捨てた荒垣の言葉に、明彦は立ち上がって食って掛かる。

まるで自分は“もう仲間ではない”とでも言いたげなその言葉は、頭に血を登らせるのに十分なものだった。

しかし、次の荒垣の言葉で登った血はすぐに下がることになる。

「普段のテメエは馬鹿みてえに前しか見てねえ。昔の話なんかしね

え。分かり易すぎんだよ」

「……………思い出話くらいするさ…俺だつてな」

凶星を吐いたその物言いに、明彦は黙ってしまふ。

なんとかかんとか絞って吐き出した声は酷く情けないものだった。

しかし、それではいけないと表情を元に戻す。弱気になつてはいけない。

なぜなら、折角影時間やタルタロスを消せる方法が分かったのだから。

「実はな…影時間やタルタロスを消す方法が、ついに明らかになった」

「!! 本当なのか…?」

頷く。

「今まで俺は、強くなる事さえできれば、正直、他は二の次だった。だが昨日、目的もなく戦つてるのかと正面から言われて、とつさに返せなくてな…」

「戦う理由か…そんなもん、それぞれだ。理由がねえなら、いつそ手を引きやいい。…俺みてえにな」

自嘲するように吐き出した荒垣は視線を下へと落とす。

明彦はそれを首を横に振って否定する。

「お前とは…違うさ。と言うか、お前に説教をくうとはな…ヤキが回つたもんだ」

「……………」

「邪魔したな」

「いや待て」

踵を返し、立ち去ろうとする明彦の背中に声がかかり立ち止まる。

「…アキ、お前らんとこに三上がいんだろ」

「ああ、それがどうかしたか?」

「…気をつけてやれよ。アイツはああ見えてなんでも綺麗に隠しやがる。ちよつと隙を見せたかと思えばそれより大きなモンを隠してるなんてザラだ。例えるなら、弱みを見せて油断させたところに特大の爆弾を隠し持つてるようなモンだ…そういうやつなんだよ、アイツは」

あまり接点がないかと思われていた荒垣が優希について言及するのは珍しい。

というよりも明彦の前ではこれが初めてだろう。珍しいこともあるものだ、と目をぱちくりとさせた。

「詳しいな」

「まあな。アイツが転校してきたときからずると、な。最近はずっとなくなりなかってたが…6月に2年のやつらを連れてここに来やがった」

「ああ、あの時か…」

「…悪い奴じゃねえ。けどな、俺には何かが引つかかる。だから気をつけてやってくれ。いい意味でも、悪い意味でも、な」

「言われるまでもない」

そう言って再び踵を返し去っていく明彦を、荒垣はじっとみつめていた。

「ちっとも変わってねえな。お前は…」

巖戸台分寮

「お兄ちゃん、大丈夫かな…あんなこと言うなんて…」

「そうだね」

湊の部屋のベッドで寝そべる奏子が心配そうに呟いたそれに湊は頷いた。

最近の兄はよく思いつめたような顔をしたりはぐらかしたりと隠し事が多いが昨日のそれは

その比ではなかった。

——憔悴しきっている。

そんな表現が的確だった。

原因は分かりきっている事だが先日的大型シャドウ戦でのペルソナの暴走だろう。

誰から聞いたのかはわからないが、一步間違えれば奏子と美鶴を傷つけてしまいかねないその行為を知ったらあの責任感の強すぎる兄

が悩まないはずがない。

「どうせ要らないことまで考えて気にしてるんだよ」

「そうだね…お兄ちゃん、そういうところあるもんね。あーあ、ホントに桐条先輩とお兄ちゃん、そういうところ似てるよね…」

「わかる。でも優希より先輩の方が相談してくれる時はしてくれろしマシだよ」

「…なんでお兄ちゃんあんなに全部しよい込みたがるんだろー、1人で全部できるわけないのに」

2人そろってため息を吐く。

兄が頑固者なのを双子は良く知っていた。

あまり相談ごとをせず、何でもひとりでやろうとする。

そして思いつめがちなのだ。

今までそれで大事に至ったことはない。だが、この状況ではどうなるかわからない。

しかしいつから兄がこうなったのかが双子にはわからない。中学の時から？ それとも、高校になってから？

覚えがないため奏子は少し眉をひそめた。

「ねえ湊、覚えてる？ 私たちがお兄ちゃんと再会した時の事」

「忘れるわけない」

「だよね…」

思い返す。

あれは事故が起こってから2年ほど経った小学4年生の時のことだった。

両親を亡くし、親戚をたらいまわしにされていた2人は突然、御影町に住む三上夫妻に引き取られたのだ。

そこで顔合わせとして連れてこられたのは、幼いころに行方不明になった兄だった。

思い出よりも少し身長が伸びていて、それでいて変わりの無い表情の兄。

「やつとあえた……！」

そういつて、ぎゅうぎゅうと抱きしめられ頭を撫でられる。

どうして兄がここに、どこにいつてたの、と聞きたいことが二人には沢山あった。

「お、おにーちや……！」

「……！」

さわ、と2人がタイミングを合わせたわけではないが同時に兄の背中に手を回す。

帰ってきたぬくもりに、これは夢ではないと2人で確かめ合うように兄の服を握り締めた。

顔合わせが終わった後、心配そうにそわそわとする兄は席をはずし、三上夫人からこの家で暮らすにあたっての注意事項が伝えられた。

ひとつ、遠慮しないこと。

ふたつ、亡くなった両親の事は忘れなくてもいいけれど、我儘をいったり甘えることはしつかりすること。

みつつ、よく学びよく食べよく遊んでよく寝ること。

よつつ、兄の名前を以前の名前で呼ばないこと。

四つ目を聞いたとき、奏子が「なんで？」と悲しそうに眉をひそめたのを湊はよく覚えていた。

ただそれにも理由があった。

「私たちがあの子を引き取った時、あの子には全ての記憶が無くて：貴方たちのことくらいしか覚えてなかったのよ。名前も覚えてなかったから私たちは『優希』って名前を付けたんだけど：貴方たちの事を調べて、あの子のこともわかって、貴方たちのお父さんとお母さんから：本当の、両親からもらった名前のことも伝えたの。でもその時、貴方たちのお兄ちゃんであるあの子は、突然吐いて：発作みたいなものを起こしてしまって：わかるかしら：そうね、とにかく大変なことになったの」

目を伏せる夫人に、不安になった奏子と湊はぎゅつと手をつないだ。

どうして、なんで、兄がそんな目に？ と同じ疑問を抱えながら。「急いで病院に運び込んで、しばらく入院して診察をうけたわ。お医者さんはね、『心が蓋をしているモノを、名前をきっかけに思い出してしまいそうになるからそれに対して無意識に拒否反応を示してるんじゃないか』って言うてたわ。きつと、思い出したくないほどつらいことがあったんでしよう。だからね、2人とも、お兄ちゃんが大丈夫になるまで我慢できるかしら…?」

「できる！ 私、我慢します！」

「…僕も」

「ありがとうね。…そうだね！ ふたりとも、今日の晩御飯はなにがいいかしら？」

「オムライス！」

2人で声をあげると夫人は微笑ましそうに笑う。

今思えば優希が穏やかに微笑むような表情をするようになったのは彼女の影響かもしれないなかった。

「…あの時、お兄ちゃんには私たちの記憶以外ないって言われてたし、ホントにお父さんやお母さんのこと覚えてなかったから間違いないと思うんだけど…この前、ううん、6月の満月の日に変になったお兄ちゃんが呼び出したアレ、私たちは10年前に見たことあるよね…?」

「奏子も覚えてた？」

「うん。なんとなくだけ覚えてる。てか、お兄ちゃんが呼び出したアレを見たときに思い出したかも」

体を起こしてベッドの上に座った奏子はチョコ菓子の蓋を開け、口に放り込んで咀嚼する。

「なんで怖いアレがお兄ちゃんのペルソナなんだろ。何か変だよ…」

「けど、僕らは何もわからない」

「そだよね…お兄ちゃんが私たちと同じ『ワイルド』なら、わかるんだけど…お兄ちゃんの話なんてあの長鼻のおじいさんから聞いたこ

とないしテオとベスからも聞いたことないよね…」

「そもそも同じワールドなら優希も僕や奏子と一緒にベルベットルームに招待されない？」

またベッドの上に倒れこんだ奏子は天井を見上げながら、考える。

しかしヒントも何もない問題を解こうとしても解けないように、全くなんでそうなるのかなんて奏子にはわかりようもない。

「うーん、わからん！ お手上げ侍だー…」

「だろうね」

順平の真似をする奏子を横目で見ながら、湊は別の事を考えていた。

昨日の夜、兄は確かに「このようなことは二度となないように対策はとった」と言った。

そして確かに9日くらいから優希にまとわりついていた黒い霧のような手が視えにくくなっていった。

湊が知る中で暴走したペルソナを押しさえつける手段はひとつ。ペルソナの制御剤を飲むことだった。

しかし兄がそんなものを手に入れるツテを持っているわけもないだろうし、知るはずもない。

だとしたらどう抑えているというのか。

強靱な精神力？

そんなはずはない。あの話し合いの時でさえ、兄の視線はぐらぐらと不規則に揺れていた。

となると、先ほど振り払った可能性である制御剤の存在をこの短期間の間にどこかで知り、手に入れたとしか考えられない。

ただ、もしそんなものを飲んでいたらただでさえ持病がある身体は持たないわけで。

(なおさら無茶はさせられない…)

かといって目を離すと勝手に無茶をする兄に内心舌打ちする。

兄は知らないのだ。どんな思いで湊がここにいるのかも、奏子の絶望したような顔も、涙も。

いや、兄である優希の事だ。もし知っていたとしても無茶をして、

笑って一人で全部背負い込んで誰にもばらさずに全部持っていく
とするだろう。

(どうして…)

分かっているのに止められない。

——湊には、止められたためしがなかった。

夕方

ゆつくりと意識が浮上して目を開ける。

眠る前に見た天井と同じ天井に、外された点滴。

その跡には絆創膏のようなものがはってあり、少しかぶれているの
かかゆい。

体調の方は寝る前よりもよく、眩暈は無くなっていたし気分の悪さ
もない。

起き上がって簡易ベッドに腰掛ける。

(影時間の時にこんなことになったら困るな…)

もしそうなって足手まといにでもなったら目も当てられない。

これはこれで対策を練らないと、と考えていると部屋のドアが開
く。

そしてこの家の主である朝倉先生が入ってくる。

きつちり白衣に着替えてぼさぼさだった髪は整えられて、手に大量
の荷物をもっていた。

「!?」

「おー、起きたか。顔色も随分マシになったじゃねえか」

「あ、はい。あの、それは…」

「あ? これか? お前が使うやつだぞ。これからな」

そう言つて、机の上の一つずつ置いていく。

「お前が何と戦ってるのかは知らねーが、だいたい悪魔とかそんなも
んだろ。だから、餞別に初回限定でウチのよく効く薬をタダで譲つて
やろうってわけ。あ、次からはちゃんと金だせよ」

次もここに来ることが確定なのかと目を見開く。

いや、確かに制御剤の研究をしてもらったので定期的に行わなければならないのかもしれないが、アイテムを買う客としても来ることになるのかと思うと少し驚きがある。

「毒で痛いよデイスポイズン、麻痺した時は」

「デイスパライズで？」

机の上に歌を歌いながら薬を置いていく先生のそれは良く知る歌のフレーズで。

思わず反射的に続きを答えてしまう。

「そうそう。ってお前サトミタダシの歌知ってるのか？」

「家が御影町だったので：店が近所に」

「ほー…じゃあオレと同じか。…ついでに名刺渡しとく。裏に地図が載ってるから、迷うことは無いはずだぜ」

「ありがとうございます」

名刺を受け取って財布に入れた。

そしてしばらく朝倉先生が薬類を纏める様をボーっと眺める。

「よし、と。これならまあ運べるだろ」

小さい小包くらいに纏められたそれを、紙袋に入れ手渡される。

それを受け取り立ち上がって脱がされていた上着のパーカーを羽織った。

「病院での診察の他に、ウチにも定期的に来い。それと、他にも制御剤を使ってるやつがいたら何とか説き伏せて連れてくるんだぞ。いいな？」

「はい」

「わかったならよおし！　じゃ、帰れ。オレは今から忙しいからな！」
玄関まで案内されて、何やかんや玄関先が見えなくなるまでちゃんと見送ってくれる朝倉先生は面倒見がいい。

少し良すぎる気もしないが今だけはその優しさに甘えようと思う。
帰りながら財布に入れていた名刺を取り出し、電話番号を登録する。この三カ月ほどの間で連絡先が随分増えたような気がした。いや、気のせいじゃなく確実に増えている。

今までの周ではあり得ないくらいに自分の交友関係が広がって

るのが手に取るように分かる。

これが吉と出るか凶と出るのか。

そんなことわからないが、もし失敗すればこの思い出が“次”には無くなってしまうのが惜しいなと感じる程度には、彼らとの関係が悪くないと思っっている自分に自嘲した。

情や絆なんて、自分が失敗してしまえば泡沫のように消えてしまう脆いものだというのに。

影時間

「やあ、起きた？ 湊」

湊はその声で目を覚ました。

横を向けば、ベッドに腰掛けるファルロスが。

「僕ら、初めて会ってからのどのくらいかな…時が経つのは、あっという間だね。色んな意味で。…今は、何回目だっけ」

「ぴつたり10回目」

「そっか。もうそんなに繰り返してるんだね、僕ら」

湊が短くそう答えれば、ファルロスは納得したような顔をしてぴよんと淵から飛び降りた。

「ねえ、きみのお兄さんが行方不明になったのって何年前かな」

「…12年前だけど」

「そうみたいだね。…実は、思い出したことがあるんだけど、僕がファルロスとして意志が目覚めたのがちょうど12年前だったんだ」

「…」

ファルロスの何か引つかかるような言葉に湊は疑問を持つ。

デスであるファルロスが生まれたのは10年前の実験からではないのか。

何故、12年前なのか。2年も空白があるじゃないか、と言いたげな湊の目線に気が付いたのかファルロスは困ったような顔で笑みをこぼす。

「どうして12年前なんだ、って思ったでしょ？ まだ僕は君たちの

中に封印されてすらいなかったのに。 …でもそれはまだ思い出せてないんだ」

しゅん、と意気消沈した様子のファルロスは珍しい。いつも飄々と微笑んでいるのに。

「ぼんやりとした微睡みの中で浮かんで誰かを見てた気がする。それがきみだったのか、奏子ちゃんだったのか、他の誰かだったのか、それすらも僕にはわからない。ああ、こんなの僕らしくないよね…ごめんね…」

「いいよ、別に。今更でしょ」

「ふふ、きみのそういう物言いも嫌いじゃないよ」

そこでようやくファルロスはいつもの調子に戻る。

「それじゃあまた、次は満月の一週間前に会おうね」

7/13 (月) 朝

「明日から期末か…」

電車の席に座りながら考える。

今回、自分のことではいっばいいいっばいになって二年生組の勉強を見ていなかったが大丈夫だろうかと心配した。

確かに何度か勉強会を開いていたようだし、湊と奏子に対する伊織と岳羽の関係は以前の周より悪くはないから勉強が滞っているというわけでもなさそうだ。

ただ、美鶴さんと岳羽の対立（と言うほどでもないがギスギスな関係）は自分にはどうすることもできなかった。

明日から試験だというのに何となく落ち着かない。しかしこれが終われば屋久島でバカンスだ。

海！カニ！エビ！海！カニ！エビ！あとたまに戦車系乙女アイギスと幾月とシャドウって感じで。

そういえばになるが屋久島に滞在している間にちょうどマーガレットに告げられた一か月後になって次の試練が来そうなのでメモラーを忘れずに持っていいこうと思う。モコイさんに関しても本人（本

悪魔?)に行くかどうか聞いてから決めようかと思う。最悪、1人で戦うことも視野に入れる。

バカンス中に死闘を繰り広げて大丈夫なのかという不安はあるが恐らくホワイトライダーと同じようにあの訳のわからない荒野に飛ばされるだけだろうし、勝って戻った時には何事もなかったかのようになっているし細かく心配する必要はないか、と考えないことにした。

負けたとき? …そんなものは知らない。

夜

「……」
「……」

寮のダイニングの空気が重い。というか気まずい。

「え、ええと…も、もうすぐ夏休みですね。皆さん、何しようとか、考えてますか?」

山岸が上手く話題を出してくれたのでそれに乗っかる。

「俺は…特には…あつでも、体調がよければ海の家とかで海鮮系のグルメツアーはしたいかもね!」

「海の家! 三上センパイの言う通り夏と言えば海つしよ。ビーチに、水着に、ひと夏の思い出! ああーっ、気晴らしにどっか海とか行てえー! なんかこう、南の方の、メチャクチャ透き通ってるっぽいトコ! つか、明日から期末だよ…あー、マジだりいいー…」

「期末…勉強…うつ…頭が…」
「奏子…」

頭を抱える奏子にこれは勉強足りてないパターンか勉強漬けだったかのどっちかだな、と遠い目になる。たぶん足りてないパターンの方だろうけど。

「まあまあ。けど、キレイな海っていうと、沖縄とか、一度行ってみたいな」

「沖縄じゃあないけど、〃屋久島〃って選択肢ならアリかもね」

「!」

突然割り込んできた声に皆がそちらを向く。

歩いてきたのは幾月だ。

…声の主も幾月だ。めんどくさい。

「理事長…いらしてたんですか」

「いや、前を通りかかったんで、来週の予定をちょっと知らせにね。桐

条君、お父上は今年の休暇を、屋久島でとられるつもりらしい」

「え…お父様が?」

驚いたように小さく呟いた美鶴さんの声は近くにいた者しか聞こえていなかった。

「試験が明ければ、君らは休みだろ? どうだい、ここらで気分転換でも?」

「マジッ!? それ、旅行って事ツスよね!! キタァー!! 海! 海!

水着! 水着!」

伊織がガッツポーズをとる。

こちらもそれに合わせて小さくガッツポーズをした。ついでに目をキラキラさせて幾月に向かって「目的の物」を叫んでおく。

「エビ!」

「カニ!」

「バナナ!」

「水着、水着って…こいつ…てゆうーか三上先輩に有里くんと奏子ちゃんまで…まだ順平よりかは健全だからいっつか…」

呆れたような岳羽の視線がこちらに向くがそんなものは関係ない。

今はエビが大事なのだから。

「理事長! もし屋久島行きが無理でもカニとエビとバナナ、楽しみにしていますね! おつきいやつですよ!」

サムズアップして念押しする。

理事長のポケットマネー（意味深）でエビを狩ってきてもらおう。否、買ってきてもらおう。

イセエビくらいのかいやつ。それが中くらいのを沢山。エビフライにして食べるから。

ついでにカニとバナナも。金は沢山持つてんだからこういう時ぐらい豪勢に振る舞ってくれたっていいと思う。

今なら幾月さんってどんな人？って聞かれたら真顔で「お金を出してくれる人」と言ってしまうかもしれない。

「はは、まあ、考えておくよ。それでどうだい、桐条君」

「しかし…お父様もお忙しい方ですし、せつかくのご休暇をかき回すわけには…」

まあそうだよね、と言う感想しか浮かばない至極まつとうな意見である。

いくら同じ寮に住んでいるとはいえ、同級生（湊たちから見れば先輩）の父親（しかも多忙）の息抜きに大人数で押しかけようというのは常識的に考えて失礼の極みだ。いくら自分たちが美鶴さんと仲が良かったとしても。

「ハハ、珍しく弱気じゃないか」

美鶴さんが弱気なんじゃなくてお前が失礼なんだよ、と言いたくなる口を押えて黙っている。

「ご息女が顔を見せに来るといふのに、お父上は嫌がるん？」

美鶴さんだけなら絶対嫌がらないだろうし結局みんなで押しかけても嫌がりはないけどそれは親子水入らずにはならないだろこの野郎。と内心でキレる。

マジで幾月はこちらをキレさせる天才か？ それとも自分がこいつの本性を知ってるからムカつくだけなのか？ と悩む。どうしてこう、いちいち癪に障るのか。普通にいい人そうに見える（そう見えるだけ）のに。

「君らは本当に、よくやってる。たまには息抜きも必要だよ。次の作戦日も分かっている訳だし…私はいいと思うけどね」

「……………分かった。気分転換は必須事項のようだ。行こうじゃないか」

すこし笑い混じりにしようがないと言わんばかりにそう言った美鶴さんは可愛かった。

いや、最近は思いつめたような暗い顔ばかりだったので多分そうい

うギャップ萌えとかいうやつなんだと思う。恋愛的な意味は無い。はず…たぶん…恐らく。

「オツシヤアー!!」

「カニー」

「バナナー!」

「海か…」

叫ぶ伊織に湊と奏子。そしてぽつりと海に想いを馳せる真田くん。

「…特別メニューが組めそうだな」

考えてるのは筋トレのメニューなんだけれど、それはそれで楽しめるのならいいと思う。

「やっべ、楽しみー!」

「私、水着とか買わないと…」

「あ! 私も!」

「なんだよ!オレの貸してやるってー!」

「順平のはさすがに着ないでしょ」

「ま、そうだよな。そう言う湊は水着持ってるのかよ?」

「いや、今度買うしどうでもいい」

「幾月さんも泳ぐんですか?」

「私は泳ぐのはちよつと…」

これから始まる旅行について皆は話の花が咲いているようだ。

そんな中、岳羽と美鶴さんの二人が出て行ったのを目だけで追う。

あまり問題は無いと思って放っておくとして、こんなに無理やり幾月が屋久島に連れて行きたがったのは湊か奏子、もしくは二人ともをアイギスに会わせたかったからだろう。

屋久島にはアイギスが保管されているエルゴ研の研究所がある。その近くまで2人のどちらかを連れてくる事が出来れば無事ミッションコンプリートというわけだ。

岳羽の父である岳羽主任のビデオレターの公開はもしかしたらついでの可能性すらある。

とことん掌の上で転がされてるなあ、と思いながらも別に変えるべきことではないので上手く転がされることにした。

ただ、岳羽のフォローを自分でするか、湊か奏子に任せるとは出来ないに悩んでいる。放っておいても彼女は立ち直ることはできるだろう。だが、受けなくてもいい傷があるのとないのとは違う気もするのだ。

非常に悩ましい。

(まあ、なるようになれ、か)

ウジウジ悩んでも仕方ないか、と立ち上がる。

そして気がついた。

——今年まだ水着買ってない!!!!!!

あと浮き輪も。

テストと屋久島旅行（7 / 18 ～ 7 / 20）

7 / 18（土） 放課後

怒涛の期末試験の日は終わった。

校舎から出るときに二年生組と真田くんが一緒にいたのでそれに合流して歩く。

期末テストからの解放感とこれから行くことになる屋久島旅行にムードメーカーの伊織だけでなく他の皆も浮き足立っているようだった。

「ツシャアー！ んーっ、この解放感！ なーにすっかなー！」

「ほんと！ なにしよーっかな！ 屋久島！ 海！ 夏休み！ 楽しみだよねジュンペー！」

「順平くんと奏子ちゃん、切り替え上手だよね」

山岸の言葉に、伊織とスキップしていた奏子が足を止めて振り返る。

そして同時に返事を返した。

「まあな！」「まあね！」

「息びったりだね…」

「…てか、あれ、そういや三上センパイはともかく真田サン一緒なの、珍しっスね？」

苦笑いする山岸の横にいる真田くんにふと目がいったのか、伊織が頭にはてなを浮かべた。

確かに真田くんと美鶴さんがセットで居るのならともかく、真田くんだけというこの組み合わせは皆からすると珍しいかもしれない。

「幾月さんに呼ばれてる。なんでも、”新たな戦力”について話があるらしい」

「戦力って、また新人ですか？」

「さあな…」

知らない、と言いたげに真田くんは首を横に振った。

まあ、この新人というのは天田くんのことだろう。と言うかそれ以外考えられない。

「風花——！ 奏子——！」

そんな声と共に後ろから森山夏紀——六月にシャドウに操られてタルタロスまで来た山岸と奏子の友達——が駆け寄ってくる。

「あれ、夏紀ちゃん。どうしたの？」

「汗びつちよびちよだよ大丈夫!? 走ってきたの!?!」

「：はあ、はあ、教室から超特急で走ってきた：あんね、風花と奏子さ、補習付き合ってくんない？ 知ってる顔、無くてさ：あ、っ—か：今日はアレか：奏子はオニーサンと一緒にいるし：風花は実家帰るとこ？ じゃ、いいや」

「待って！」

踵を返し立ち去ろうとする森山に、山岸が声をかける。

「いいよ、大丈夫。一緒に行こう」

「私も行くっ！ テストの結果：ヤバそうだし：一応受けとかないと……！」

「じゃあそういう事で：済みません、先に戻ってきてください」

青い顔をして冷や汗を垂らす奏子と山岸が森山に駆け寄る。

この様子だと奏子のテストの結果は：察するべきかもしれない。だが奏子はやればできる子なので赤点にはいかないだろうし大丈夫だと信じたい。

信じ：うん。勉強会してたし信じるべきだと思う。

隣の湊が諦めたような遠い目をしてるなんて見えないもんね！
なあモコイさん！

：モコイさんは今日は留守番の気分だからって留守番してるんだった。つらい。自分は1人でなにやってるんだらう。

ちなみにモコイさんに「屋久島行く？」と聞いたら「モチのロンで行くに決まってるネ、チミ」と言われたのでモコイさんも屋久島行きが決定した。悪魔とはいえ南の方はこっちより暑そうだし子供用かペット用の帽子でも買って被せるべきなんだろうか。でもモコイさんは他人から見えないらしいし帽子だけ浮いてるというのもそれなりにホラーなのでちゃんと着てる物も隠せるかどうか聞いてから考えよう。

「怪奇！ 屋久島で浮く帽子！」とか伊織あたりが喋り出したら申し訳なさでビーチに埋まる自信がある。

奏子と山岸が森山と共に校舎に戻っていくのを眺めながらそう思案した。

それにしても、一時期は「ぶつ飛ばす！」とまで言ってた森山と奏子の仲が良くなって良かったと思う。

「なんか、変わったよなあ…びっくりだぜ、マジ」

「仲良きことは美しきかな。いや、結構。青春って素晴らしいよね！
なんか、キラキラしてる」

伊織の言葉に被せるように、思ってもないようなクツサイ言葉を吐きながらこちらへ歩み寄ってくる幾月に顔を顰める。

幾月、お前の発言はキラキラどころかゲロゲロしてるけどな、と言いたいのを我慢して振り向く。自分は今、渋い顔をしてないだろうかと思うが別に渋い顔ぐらいは見られてもいいかと開き直すことにした。

「理事長…？」

「人を迎えに来て、近くを通りかかったもんでね。ちょうどいい、紹介しとこう」

幾月の後ろから、背丈の小さい初等科の少年——天田くんが歩いてくる。

「どうも」

「あれ、天田君じゃん。どしたの？」

「！ 知り合いだったのか…」

岳羽の驚くような声に、真田くんが目を見開いた。

「彼は、事情があつて、休み中も帰らないんだよ」

「あ、少し聞いてます…確か、ご両親…」

「もともと母さんと2人だけだったんですけど、その母さんも、事故に遭ってしまって。一昨年の事です」

微妙な空気になる。

家族についての話はここらではタブーだ。いろいろと、特別課外活動部は家庭環境が複雑な人しかない。

「まあ…そういう事なんだ。今は遠縁からの学費の保証だけで通ってる。でも、だからって1人ぼっちで初等科寮に居たんじや寂しいだろう？　そこで、彼を夏の間だけ、君らの寮へ転居させることにしたんだ」

「転居って…えっ?!　いいんですか!」

「もちろん、招くからには、彼にも『見込みがある』という事だよ」

「!」

幾月の言葉に、全員が目を見開く。

「見込みがある」。その言葉の意味を解らない皆ではない。天田くんにも、ペルソナ使いの素質がある、もしくは影時間に適応した。ということだろう。実際そうなのだけれど。

「それじゃ、俺が聞いてた、『新たな戦力』というのは…」

真田くんの言葉に、幾月は天田君のいる横を見つめながら口を開いた。

「うん、まあね。でも、ご覧の通り、彼は初等科だし、あくまで、可能性の話だけだ」

「……」

「真田明彦せんぱい…ですよね」

複雑な顔をした真田くんに、天田君が歩み寄る。

「あ…ああ」

「ウワサ、初等部にも届いています。ボクシング…負け無しだって」

「ああ…よろしくな」

挙動不審な真田くんは明らかにいつもとは違った。

天田くんと荒垣くん関係の事で挙動不審になっているんだろう。そんな心配は必要ないのに。

(あれ…?)

なんでいま、自分はそう思った？

7 / 19 (日) 昼

昨日天田くんをみてから謎のもやもやが止まらない。

胸騒ぎと言うのだろうか、そんなよくわからないものがぐるぐると

渦巻いている。

それでも、まだ水着を買っていなかったのでモコイさんとポロニアンモールに出かけて色々物色した。

モコイさん曰く、悪魔は持ったものも同時に見えなくすることができる（範囲は限られているけれど）らしいのでモコイさん用にサングラスと麦わら帽子を買った。

自分は水着とその上に着る濡れてもいいパーカーと日差しを防ぐキャップと大事な浮き輪を買った。

海に入るにしてもぶかぶか浮き輪で浮かんでいたい派なのでこれだけは譲れない。

「サマーバケーション、ビーチ、トロピカルハワイ…グフフ…モコイさんは楽しみだネ」

「行くのは屋久島だからハワイじゃないけど、楽しめるといいね」
「ウイー！」

ウキウキと嬉しそうに買ったばかりの麦わら帽子とサングラスを被りながら、子供用の小さなリュックに荷物を詰めるモコイさんにこちらも笑顔になる。

自分も荷物を詰めないと、と荷物をまとめ始めた。

7/20（月）朝

フェリー

「うおー！ ようやくはつきり見えてきたぜ奏子っち！ アレが、や・く・し・まー—————!!!」

「待ってるバナナ—————!!!」

「はは…」

絶賛海の上を爆走しているフェリーで順平と奏子が叫ぶ。もう船に乗ってからはテンション上がりっぱなしらしく、きやいきやいとふたりで元気にはしゃいでる。

自分は日陰に座りながら海と鳥を眺めているし、湊は眠そうにあくびをしていた。

「ん…？」

伊織がこちらを向いて俯く。

山岸を挟んで微妙な空気になっている岳羽と美鶴さんが気になったんだろう。

真田くんもなんだか静かだ。まあ、こればかりは仕方ないと割り切るしかない。

——ところで理事長はちゃんとカニとエビとバナナを用意してくれているんだろうか。

昼

屋久島につき、案内された大理石の床と柱が並ぶ建物の中をぞろぞろと歩く。

「すごい…」

「リアルに『世界の豪邸訪問』だな…」

山岸と伊織がそう呟くのも無理はない。なんていうか、建物全体が輝いているのだ。

ぴかぴかに。

埃ひとつ無さそうなその道の向こうから、メイドが2人歩いてきてぺこりと頭を下げた。

「お帰りなさいませ、お嬢さま」

一言一句同時に喋るメイドに、湊以外の二年生組はすこし引いたような顔をした。

いや、誰でも初見のこれは驚くと思う。あとビビる。ドラマとかで見るとようなマジお嬢様対応をこの目ではつきりと見ることが出来るのだから。

「そちらは、ご学友の皆様ですね。ようこそいらっしゃいました。どうぞこちらへ」

「『ご』がくゆう…って…」

「メイドって、実在してんだな…」

「ヤバイよね…ドラマみたい…」

「やっぱり先輩、スゴい人なんだ…改めて実感…」

メイドに連れられ少し歩くと、前から美鶴さんの父親——桐条武治さんが歩いてくる。

そしてすれ違いざまにこちらを見ると、小さく言葉を漏らす。

「……きみは…」

「？」

「お久しぶりです」

その声をかき消すように美鶴さんが挨拶するが、武治さんは美鶴さんを一瞥すると少し照れたように呻いてから視線をわざとらしく外し、そのまま去っていった。

「い、今の人って、もしかして…」

「先輩の…お父さん？」

「怖っ！ 南の島だけに…海賊ルック？」

「キャプテン・キッドの真似とか!？」

「そんなわけがあるか…」

伊織と奏子の眩きに、呆れたように真田くんがツッコむ。

真田くんはボケる側だと思っていたが、それよりもさらにボケる伊織と奏子が来たおかげでツッコみとして目覚ましい成長を遂げているような気がする。これからもツッコミ要員として頑張ってほしいところだ。

「フフ…短い休暇だが、まあ存分にくつろいでくれ」

「おし！ 楽しんでもらうツスよ!!となりや、すぐそこだし、まずは海だな。やっべ、テンション上がってきた！ さっそく、ビーチに突撃!？」

「ちよ、もう海？ てか、行くのはいいけど、女子はそんなすぐ支度なんて無理だよ？ だよね、奏子ちゃん」

「あ、そっか。確かにそうかも…」

岳羽の言葉に奏子が頷くのを見た順平はしかし、抑えきれない、と言った様子でウキウキしている。

ステイ！ と言いたいところだがこちらもモコイさんをキャリーケースに入れっぱなしだったので急いで部屋に行きたいところも

あつて止めない。

「ならオレたち、先行つてるぜ。つか、1秒もムダに出来ねーからなツ
!!」

大興奮である。

そしてそのまま各々の部屋に案内された。

自分もキャリーケースを開き、水着とモコイさんを出す。狭いキャリーケースに押し込むように入れてしまつて本当に申し訳ない気持ちでいっぱいだ。

「ごめんねモコイさん、狭かつたよね？」

「ぶはー！ ノープロブレム！」

「帰りは肩に乗つていいからね」

空港でモコイさんが引つかからなかつたので肩に乗せてもいいだろうと思つた次第だ。

足踏み式の空気入れで浮き輪に空気を入れながら、後ろの髪を結んでいたゴムを取つて髪を下ろす。

そうして、着替えを終えてモコイさんを肩に乗せながらビーチへと向かつた。

浮き輪をもつてキャップを被つた上に更に上着として買った白のパーカーのフードを被つて真っ白な砂浜を歩く。

海だ。

とんでもないくらい澄んでて綺麗な海。と照りつける太陽に青空。

「モコイさんはあばんぎやるどな体験をしてくるっスから、ここでバイさんだね。ヒューー！」

そう言うと、モコイさんは小さな浮き輪をもつて駆けだして行つてしまった。よほど海が楽しみだったのだろう。それを見送つてから前を見れば伊織がモコイさんと同じくはしゃいでいた。

「んー、この、ビーチサンに、指の足の付け根が食い込む感じ…ようやく

“夏” 実感だぜ！」

「どうでもいい…」

「沖に目印になるようなものは無いな…泳ごうかと思ってたが」

真田くんの言葉に残念そうに伊織が溜息をもらす。海の楽しみ方は人それぞれだから別にいいと思うんだけどな、と思うも口には出さないでおく。

自分なんて浮き輪でぶかぶか浮くのが楽しみというなんとも子供っぽい感じだし。

「ああ…出ました、遊びに海来たのに『黙々と泳ぐ』タイプ」

「悪いか。お前こそ、何して過ごす気だ」

怒ったように食って掛かった真田くんに、伊織が待つてましたと言わんばかりに自信満々に言い返す。

「そりゃあ、夏で海と言ったら、お楽しみは決まりつしょ！」

「カニ」

「いやいや湊、確かにグルメも大事ですけども？ でもさあ、それはオレツちの答えじゃないから…お！」

湊の答えに落ち込みかけていた伊織は建物へとつながる道歩いてきた女子組が目に入ったのか、嬉しそうに駆け寄る。

「え…なに？」

戸惑い気味な岳羽の反応は正しい。伊織の言う、夏の楽しみ方。それは――

「おーっ、ゆかり選手、想像よりけっこう強気のデザインですな！」

やっぱ、部活でシボれてるって自信が、大胆さにつながってるんでしょうか!？」

「はあ!？」

女子の水着の批評とナンパだ。

うん、横で聞いててもデリカシーに欠ける発言だと思う。伊織がぶつ飛ばされたり処刑されないか不安だ。実際現在進行形で岳羽が微妙な顔をしているし。

「パラソル…空いてるとこ、勝手に使っているのかな？」

「いーんじゃないかな？」

少し遅れて山岸と奏子が歩いてくる。それを見た順平はまた目を輝かせた。

「おつとー続いては奏子選手と風花選手ですなー。奏子つちのはこれまたキュートな人魚ですなー！ 普段は見えないラインが、もう、ね！ たつまりませんねー!!」

「わーありがとー!」

「いんやー、いーんでない? いーんでない? つーか、風花オマエ：めっっちゃ着やせするタイプ：!?!」

「え…ええっ?」

「んだよー、そんなハズかしがなくても、いいじゃんよおー、ムフフ」
「順平、オヤジくさい」

「ムフフって、変態かつつの!」

「ごもつともである。」

変態オヤジ臭い順平のそれは控えめにした方が穏便に済む気がする。特に美鶴さん相手には。

「それで、トリを務めますのは…」

「ん…どうした?」

そんなことを思っていたら美鶴さんが遅れて歩いてきた。白い水着に大胆に映えるハイビスカス。

何度見ても思うが——綺麗だ。

「うわー、桐条先輩、キレイ…」

「ホントすっごい、白くて、キレイ! 日焼け止め、もう塗りました?」

「い、いや…って、三上…凄まじく重装備だな!」

「直射日光が最近痛くてさ…肌もヒリヒリするし…俺も塗ろうかな…
日焼け止め…暑さで灰になっちゃいそうだ…」

「三上也塗るのか…? そうか」

「お兄ちゃんも白いもんね…! 私の貸してあげる!」

女子じゃないけど肌がかぶれたり痛くなるのは避けたいので塗りたい気持ち強い。

こうなるなら買って来ればよかったかもしれないと後悔する。

まあでも、奏子が貸してくれるらしいので少し分けてもらって塗ろうと思う。

「日光で灰になるとかセンパイは吸血鬼かよ!? ところで、湊サン。

ぶつちやけ、誰が好みよ?」

「どうでも…うん、優希と奏子」

「いや、奏子っちはともかく三上センパイは女子じゃねーし! 湊つてばテキトーに無難なの選んだな!? てか、いまどうでもいいって言いかけてなかったか!?!」

「三上と有里妹か…そうか…」

「真田先輩は何を納得してんスカ!?!」

何やら三人で話し合っているようだがよく聞こえない。

「ほら、お兄ちゃん! 日焼け止め塗ったげる!」

「ぶべっ」

「わーお兄ちゃんのほっぺむにむにー」

日焼け止めを出して両手に塗りたいくった奏子に頬を挟まれた。そのままむにむにと触られる。これ、塗るためじゃなくて頬を触る口実に揉まれてないだろうか。

「——でもまあ、いいなあ、こういうの。ホント、来てよかったよなあ。よっしや、そいじゃそろそろ水に浸かるとしますか!」

行くぜっ!!」

そんな大声とともにバシャバシャと伊織が海に入っていくのを横目で見ると。

「うわ、ツメテー!! ギャハハハ!!」

…青春だなあ。

皆がはしゃぐ様を、パラソルの下に座ってぼんやりと眺める。

もう少ししたら海で気ままに浮かぼうかと思うが、今ははしゃぐより海を眺めている方が楽しい。

「三上、海は楽しめているか?」

横のビーチエアに座る美鶴さんが話しかけてくる。

たぶん、他から見たら自分はただボーっとしているだけでとてもじゃないが楽しんでる風には見えないからかもしれない。

「うん、もう少ししたら俺も泳いで…泳いで…? いや、浮かんでくる

よ」

「浮かぶ…?」

「あ、水死体とかどぎえもん的な意味じゃなくて浮き輪で…」

「そ、そうか…」

会話が続かない。

せっかく話をしていているというのにどんな話題を出せばいいのかわからない。

共通の話題があまりないというのも困りものだ。こちらは美鶴さんの好きなものがバイクだということは知っているが、話に付き合えるほど詳しいわけではない。

下手に間違った情報を喋るのも悪いだろうし、訊いてもいいのか謎なところである。

「その、だな、三上。夏季休暇の予定は…空いているだろうか…?」

そう悩んでいたら美鶴さんの方から話しかけてきた。気を遣わせてしまっただろうか。

「…空いてると思うよ」

「なら、この前三上が言っていた食べ歩きに…もしよければなのだが私も…連れて行ってくれないだろうか」

「えっ、俺が一緒だなんて迷惑じゃない?」

美鶴さんの提案に、思わず言葉が先に出てしまう。

体調がよければ食べ歩きに行く予定だったが美鶴さんの方から一緒に行かないかと誘ってくれるのはすごくドキドキする。

でも、もしかしたら途中で体調を崩すかもしれないし、当日になって体調が悪くなってドタキャンするかもしれない。

忙しい美鶴さんにそんな迷惑はかけられないと反射的にでた言葉がそれだった。

「迷惑なわけがあるか! 私とお前は“友だち”なんだぞ!?! …この前あんなに私を連れまわしたというのに…食べ歩きはまだ早いというのか…?」

「ご、ごめん! でも、俺…最近体調崩しやすいし…迷惑じゃないかなって」

その言い方はちよつと語弊を招きかねないので止してほしいところではあるが、間違いではないので謝るしかできない。

「だから…いや、いい。三上、きみに連れて行ってもらうのはやめにする」

「……！」

その言葉に、ガツンと頭を石で殴られたかのような衝撃が走った。

美鶴さんの機嫌を損なってしまったばかりか、失望させてしまったかもしれない。

どうしよう、どうしようと頭の中がぐるぐる回る。

もしかしたら情けなく半分涙目になってるかもしれない。

それぐらいシヨックだ。

そうやってまた頭の中をぐちゃぐちゃにしていると、美鶴さんが突然自分の手を取った。

「——私が、きみを連れて行けばいいだけの話だ」
「!？」

「きみが私を連れて行くのに不安があるのなら、私がきみを連れて行く。何があっても私の都合なのだから、途中で体調を崩そうが予定がキャンセルになろうが気にする必要はない」

名案だ、といわんばかりに微笑んだ美鶴さんは酷く満足気だった。

「それに、私は三上の事を迷惑などと思ったことは一度もないさ」

「美鶴さん……！」

失望されてしまったかと思っていたのに、予想外の答えが返ってきて逆に涙目になりそうだ。というか美鶴さんがなんだかかっこいい。

「では、夏季休暇に入り次第、予定の連絡をする。これは2人だけの秘密だ。誰にもバレてはいけないぞ」

なんて、悪戯っぽく笑う美鶴さんに圧倒される。やっぱり美鶴さんはすごい、と思ってしまうのはまだまだ自分が未熟だからなのだろうか。

「わかった」

「体調が悪い時は遠慮せずと言ってくれ。きみに合わせよう」

「美鶴さんも体調が悪い時は言ってね、夏だから熱中症になりやすい

し健康な人も気をつけるべきだから」

「ああ、その点はわかってるよ」

「…なあなあゆかりっち、桐条先輩と三上センパイ、またイチヤついてね？」

「イチヤついてるって程じゃないでしょ。…ってホントだ、イチヤついてる…」

美鶴と優希のいるパラソルを見やってそう告げてきた順平に、呆れたようにゆかりはその言葉を否定した。が、すぐに振り返って砂浜のビーチチェアにいる2人を見るとまるで2人だけの世界と言わんばかりに楽しそうに会話しているのが見えた。

「なんか、三上先輩と桐条先輩、あんな感じで仲いいけど男女の関係ってわけでもなさそうだよね…」

「わかるぜ。桐条先輩もだけどよ、三上センパイのほうがなんつーか…そういうのと無縁そうだもんな…」

「だいたい話題が事務的すぎるもん…そりゃあね」

「オレっち、この前『効率的なタルタロスの登り方』談義してるの聞いたぜ…内容は…思い出たくもねえ…とりゃあ隙あり！」

「きやつ！…ちよつとアンタねえ…不意打ちとか、ずるいわよ順平…」
暑い日差しの中かで顔を青くしてぶるりと震えた順平はその記憶を振り払うように水をかけあうのだった。

夜

宿泊場所である桐条の別荘のホールで美鶴は父である武治を待っていた。

皆の前では父が照れてまともに話ができないのを見越してのことだ。

「ご無沙汰しました」

そうして葉巻をふかしながら帰ってきた父に、そう声をかける。

「お元気そうだなによりです…」

「彼らは、寮にいる者たちか？」

「済みません、ご休暇を大人数で騒がせてしまって…」

「彼らに…明かしたそうだな。なぜ、今まで隠していた」

怒っているようなその顔に、美鶴は少ししたじろぐ。

美鶴は少しだけ、父に責められることが苦手だった。もし見放されてしまったら、失望させてしまったらどうしよう、という心はどうしてもあるものだ。

「別に、隠したわけでは…」

「言つてあるはずだ。元々、お前が負うべき罪ではない」

「ですが…」

それは不器用な父の気遣い。彼は不器用ながらに親として美鶴を愛しているし、美鶴が祖父の——武治の父の罪を背負うのはお門違いだと思つている。

「調和する2つは、完全なる1つに勝る”。『南条』と分かれた折りより、我ら『桐条』に伝わる言葉だ。…美鶴、人を信じてみる。どれだけ己を殺しても、所詮は個の力。この世には、1人では成せない事がある」

「…はい」

武治はもう一度葉巻を吸う。そして、息を吐いた。

「——宗家のデータベースに入り込んだのは、お前だな？」

「！」

「それも然りだ…旅行などにかこつけず、なぜ初めから、じかに私に問わない？ 私とて桐条の当主である前にお前の父なのだから、遠慮することなど何も無いはずだ」

「申し訳…ありません」

その言葉に美鶴は頭を下げる。

悪いことをした気になつたし、なぜ初めから父を頼らなかつたのだろうかという気持ちが生まれたからだ。

「謝るな。怒っているわけではない。…だが、そうだな。彼らを全員、ここに集めろ」

「？」

「元より隠す意図などない。全てを伝えるため、準備をしてある。連

れてきた中に、“岳羽”という少女と“ナギサ”という名の少年がいるだろう。彼らが力に目覚めるとは…もはや、運命なのだ…」
「お父様…？ 岳羽はいますが“ナギサ”という少年は居ませんが…」

武治の口から出た名前に、美鶴は頭にはてなを浮かべる。

特別課外活動部にも、寮にもそんな名前の人間はいない。しかし武治はゆっくりと首を横に振って美鶴の言葉を否定した。

「いや、いるはずだ。『有里渚』ありさと なぎさという少年が」

「…？ いえ、彼は有里湊ですよ。二年の…」

「違う。美鶴、お前の隣を歩いていた彼だ。髪を一つ結びにした」

その言葉で美鶴は武治が言おうとしている人物が誰かようやく合点がいったようで目を見開いた。

「有里…まさか、三上…三上優希の事ですか!? 彼の本名は有里優希じゃないんですか!」

「三上優希…？ いや、彼は有里渚ではないのか」

2人でこんがらがって混乱する。

まるで、2人が2人とも、別々の人物の話をしているようで、話しがつながらない。

いや、武治が『有里』と言ったのだから有里兄妹の兄である三上で間違いないだろうと美鶴は思う。だがなぜ名前が変わったのかわからない。

彼女とその父にはわからなかった。

「…そのことも含めてやはり私は彼らに説明しなければならぬようだな、頼んだぞ美鶴」

「は、はい…」

美鶴は困惑しながら去って行く父の姿を呆然と眺めることしかできなかつた。

アイギス（7／20）

別荘の応接間に呼び出された特別課外活動部は皆複雑な面持ちでソファアの上に腰掛けていた。

「やあ、みんな集まったようだね」

別荘についてから姿を消していた幾月がにこやかに言う。

大方、アイギスを起動させていたのだろうがそれにしても神出鬼没すぎる。

「美鶴から、だいたい話は聞いているな」

真ん中のソファアに座る武治さんが重々しい口を開いた。

その言葉に、岳羽が頷く。

「左様、全ては大人の…我々の罪だ。私の命ひとつであがなえるのなら、とうにそうしていたところだが…今や、君らを頼る他はない」

それぞれが顔を見合わせる。

「父、『鴻悦』が怪物の力を利用してまで造り出そうとしたもの…それは、『時を操る神器』だ」

「時を、操る…?」

武治さんの口から語られた話は、美鶴さんは初耳だったらしくわからない、と言ったように呟いた。

それを見た武治さんは小さく息を吐いた。

「言葉の通りさ…時の流れを操作し、障害も、例外も、全て起こる前に除ける。未来を意のままにする道具と言ってもいい」

「す、すげえ…野望のサイズがデカイ…」

「だが研究は、父の指示によっておかしな方向へ進んでいった。…晩年の父は、何かとても深い虚無感を胸の奥に持っていたようだ。今にして思えば、父の乱心は、それを打ち破るために始まったのかもしれない…」

今度は深く落ち込むような息を吐いた武治さんはもう一度口を開く。

「君らが全てを知りたいと望むのは当然の事だ。私にも、伝える義務がある」

その言葉と共に、部屋が暗くなりスクリーンに映像が映し出される。

これから始まるのは岳羽の父である岳羽主任の後悔のビデオ——を、幾月がちよちよいと自分の都合のいいように編集したやつのだ。だ。

「これは…?」

「現場に居た、科学者によって遺された、事故の様子を伝える唯一の映像だ」

そしてビデオは始まる。

『この記録が…心ある人の目に触れることを…願います』

「この声…!?!」

ビデオから聞こえてきた声に岳羽が目を見開く。

『ご当主は忌まわしい思想に魅入られ、変わってしまった。私は知らなかった。知らなかったんだ！ 私の娘と同じくらいの年の子供ひとりに…かき集めたものを…全部詰め込むだなんて正気の沙汰ではない！ …この実験は…行われるべきじゃなかった！ もう未曾有の被害が残るのは避けられないだろう…でも、こうしなければ…世界のすべてが破滅したかもしれない!』

「世界の…破滅?」

山岸が小さく呟いたその言葉は酷く大事なことだ。けれど、自分はそのビデオに違和感を覚えていた。

なぜだろう、背筋がぞわぞわするのだ。いつものビデオを内容が違ふような、それでいて間違っていないような、僅かな違和感。

だがそのビデオの一言一句を覚えているわけではないし、幾月によって編集されているので付け足されたところもあるかもしれないのだ。気のせいだということはおこう。

『この記録を、見ている者よ、誰でもいい、よく聞いて欲しい!! 集めたシャドウは、大半が爆発と共に近隣へ飛び散った。悪夢を終わらせるには、それらをすべて消し去るしかない!』

『全て…僕の責任だ。全てを知っていたのに、成功に目がくらみ、今まで知らなかったとはいえ結果的に幼子を犠牲にし、結局はご当主に従

う道を選んでしまった…全て、僕の…責任だ…』

「!? お父…:さん…」

そこでビデオは終わり、岳羽が立ち上がって呻く。

自分の父親が、大型シャドウを生み出すきっかけになってしまった事故の原因と知ったショックは計り知れないものだろう。実際は違うけど。

「お父さんって…今の人が…?」

「……」

岳羽は、答えなかった。

しかしその沈黙が肯定を表しているだろうことはありありと見て取れた。

「お父様、これは…」

「彼は岳羽詠一郎…当時の主任研究員だ。実に有能な人物だった。その彼を見出して利用し、こんな事件にまで追いやってしまったのは、我々グループだ」

困惑しながら武治さんを問い詰めた美鶴さんに絞り出すように答えが出された。

「詠一郎は…桐条に取り殺されたも同然だ」

「ま、まさか…」

「つまり…私のお父さんが、やったって事…? 影時間も…タルタロスも…沢山の人が…犠牲になったのも…みんな…父さんのせいってこと…?」

「お…おい…」

うわ言のように呟く岳羽はゆらゆらと視線が揺れていた。

「じゃ…色々、隠してたのって…ホントはこれが理由? 私に気遣って、隠してたってこと? そういう事なの…!?」

「岳羽、それは違う、私は…」

最後の方は叫びに近いようなその言葉に美鶴さんはたじろぎながらも言葉を紡ごうとしていた。が、

「かわいそうとか、やめてよッ!!」

岳羽はそう叫んで走って部屋を出て行ってしまふ。

いろいろきつく当たってしまったこともあって、素直にしおらしくなれなかったのもあったり、その上で憐れみに近い生ぬるい同情を受けていると彼女は受け取ってしまったのだろう。

「あの…誰か…行った方が…」

「……」

どうしようか。

ここで自分が行ってもいいが恐らく岳羽は美鶴さんとそれなりに仲のいい自分には心を開いてはくれないだろう。「桐条先輩に言われてきたんですか」とか、「先輩も同情してきたんですか」とか言われるのがオチだ。

「…有里兄妹。ふたりとも、彼女を…追ってくれ…」

「でも…ゆかりちゃんのこと、いまはそつとしておいた方が良いでしょう…」

「僕はいいけど」

「湊お…」

美鶴さんに頼まれたのは奏子と湊だ。確かに、2人ならちようど奏子が慰めて湊がズバツと言う役というバランスが取れているしぴつたりだと思う。

ただ、奏子は納得がいかないようだけれど。

「…済まない」

そう美鶴さんに頭を下げられると奏子もやめると言えないよう静かに席をたった。

「じゃ、はやくいこ、湊」

「うん」

並んで駆け出す2人を見つめて、正反対だけど岳羽を心配しているという事には変わりはないな、と改めて思った。優しい子に育てられて兄としてはうれしい限りだ。でも、

「2人だけだと心配だから俺も行ってくる。美鶴さん、こういう時は1人でも年長者が居た方が良かったら？」

「…三上…頼む」

「うん、任せられた」

安心させるために笑いかけて、席を立つ。

自分は岳羽が見える位置まで行くがばれないように近づいて話しが終わった頃合いを見て帰るよう促す役だ。

じゃあ、ゆつくりいこうかな、と特に心配することなく部屋を出て歩みを進めた。

影時間

「ずっと信じてたのに…」

血のように赤くなつた海を見つめながら、ゆかりはぽつりと言葉を零す。

いつの間にか、湊と奏子の2人がそこには寄り添っていた。

「こんなの、キツイよ…」

「そうだね」

ゆかりの言葉を湊は迷いのない言葉でオウム返しをするように肯定した。

短いその言葉は、飾り気がないからこそゆかりによく染みるように目に涙が溜まる。

「…2人とも、覚えてる？ 前に、病院で言ったこと…私のお父さん、子供の頃に死んだって…さっきの話で分かったでしょ…あの事故が原因なんだ。普通の人は、真相なんて知らないから、当時は根も葉もないうわさが立ってさ…父さん主任だったから、世間から目の敵にされてね…いろんな場所を転々と引っ越したの」

「大変だったね」

今度は奏子が慰めるように寄り添う。

その言葉で、ゆかりはこぼれそうになる涙をこらえた。

「うん…でも私、ずっと信じてた。父さんは悪くない筈だって。小さいころから大好きだったし、絶対悪いことするような人じゃないって。…実は、春頃ね、手紙が届いたの。10年前の父さんから…」家族へ”って」

ゆかりは泣き笑いのようなものを浮かべる。

「笑っちゃった。殆ど私の事しか書いてないんだもん…だから信じようと思ってたのに…」

そこで一度伏せたゆかりの瞳からぼろりと涙がこぼれた。

「だから、自分に力があるってわかった時は、偶然じゃないと思った。怖かったけど、桐条グループの傍にいれば、父さんの事…なにか分かるかもって。だからペルソナ使いになって、戦いも続けてきた」

ゆかりは暗い顔をして俯く。

「でもさ…なんていうか…そんなの無駄だったんだよね…」

「ゆかりちゃん…」

その言葉をきっかけに止められなくなったのか、ぼろぼろと涙をこぼすゆかりは心のダムが決壊してしまったかのようだった。

「——無駄なんかじゃない」

「フフ、気休めだよそれ」

ゆかりのその言葉に、湊は首を傾げた。

本当に純粋な疑問を浮かべるように。

「なんで？ だって、岳羽の父さんが実験を中止しなきゃ世界が滅んでたんでしょ？ そもそも今がなかった可能性すらあるし、こうやって僕らが出会うことも、岳羽の父さんがどうして死んだのかもわからなかったかもしれない。だから、無駄なんかじゃないよ」

「あ、そっか！ ある意味英雄じゃん！ ゆかりちゃんのお父さん！

ゆかりちゃんと出会わせてくれてありがとうー！ あでも、事故起こしちゃったからありがとうーも違うのか！ なんて言おう!？」

「フフ、あははっ！ なにそれ…！ 有里くんも奏子ちゃんも…ありがと。確かに言われた通りかも。父さんが止めなきゃ世界が滅んだかもなんだよね…そもそもそんなアブナイ実験するなってハナシだけど、それでも父さんはそれが悪いことだって土壇場で気が付いたんだよね…そっか…そっか…」

湊と奏子の言葉に、ゆかりは泣きながら笑みを浮かべた。

先ほどまでは父が悪事を成したという事ばかりに目が行っていたが、確かにビデオで父は「被害は出るが世界すべてが滅亡するよりはマシ」に近いことを言っていた。

もし父があそこで止めなければ、被害はポトアイランドだけでは済まなかったかもしれない。そう思うと、先ほどまで落ち込んでいた気持ちはどこかへ飛んで行ってしまったかのように楽になっていた。捉えようによって変わるとはこのことか。

「でも、桐条先輩には悪い事しちやったな…嫉妬つていえばいいのかな。あんなことがあったのに、なんで桐条先輩にはまだお父さんがちゃんと居るのかって…あーあ、みっともないなあ、私」

「ちゃんと謝れば大丈夫だよ！ 桐条先輩やさしーし許してくれるって！」

自嘲するようなゆかりにかかった奏子の言葉に、ゆかりは目を見開いたあとに微笑む。

「…そうだよね。謝ればいいんだよね…なんでこんな簡単なこと、分かんなかったんだろ。すごいなあ、ふたりとも。こんな私にこれだけ付き合ってくれるんだもん。いろいろ当たり散らしたり険悪な空気にしたたり振り回したりしたのに。…それに、ふたりと…三上先輩も実の両親亡くしてるのね…私ばかり話聞いてもらってゴメンね」

「…岳羽は大事な仲間だから」

「もく、湊！ ゆかりちゃんは友だち、でしょ！」

「そうとも言うかもしれない」

「ぶー、湊の強情〜！」

せっかく湊がいいことを言っていた気がするのだが、それは奏子の介入によってすっとんでしまう。

いつの間にか空気はいつも通りの明るいものに戻っていた。

「…そろそろもう帰らないとね。みんな心配してるだろうし、もう影時間だし——…」

ゆるく笑いを浮かべたゆかりが横を向いた瞬間、その表情を固めた。

視線の先には、蠢く大量のマーヤが。

「シャドウ!? どうしてここに…!?」

「うそ…！」

「岳羽！ 奏子！」

湊がふたりを庇うように前に立つ。そしてペルソナを召喚しようとホルスターに召喚器が嵌っているであろう場所を手で掠った。

「!?」

空を掴んだ感触に、湊は目を見開く。

これまで、屋久島でシャドウに相對したことがなかったために油断して召喚器を置いてきたんだった。

顔の横を、「アギ」の炎が掠める。

「…逃げなきや!」

そう言いながら奏子がゆかりの手を取って走ろうとした瞬間、目の前にいたシャドウ達が光の矢によって蹴散らされる。

「な、なに…!?!」

ゆかりは突然の事に戸惑う。一体何があったのか。

「射殺せ!」　「ホワイトライダー!」

そう叫びながら三人の前に滑り込むように転がり込んできたのは優希だった。

呼び出された、馬に乗った骸骨のペルソナ——ホワイトライダーが弓に矢をつがえ、シャドウに向かって躊躇なく打つ。

「お兄ちゃん!?!」

「話は後!　…もう一度蹴散らせ!!」　【マハンマオン】

召喚器がないにもかかわらず、もう一度ホワイトライダーが現れ、破魔の光でシャドウを何匹か纏めて仕留める。

しかしまだまだ数もいて、さらにそこから湧いているように別荘へ戻る道すらもシャドウに塞がれていた。

「はあ…はあ…別荘へは戻れないし…俺もこの召喚方法だと今はあまり連発ができない…とりあえず今はシャドウがいない向こうに逃げよう!」

顔を顰めながら頭を抑える優希は酷く余裕がなさそうだった。

シャドウの間を縫うように、四人は駆け出す。

どうしても通れない場合は優希がホワイトライダーを召喚することによって無理やり道を開けていた。

しかしその繰り返しも長く続く筈がなく。いくら退けても減らな

いシャドウに、優希は限界を迎えていた。

「はー…はー…げほ…っ」

湊の背後で、荒い呼吸と咳き込むような音が聞こえた。思わず、立ち止まって振り返る。

「三上先輩…！」

「…！ お兄ちゃん、血が…！」

「ごめ、ん…もう限界…かもしれないな…う…げぼ…ごほ…っ！」

口元を己の血で朱に染めた優希が、倒れないながらも苦しそうによろよろと歩みを進めていた。

ああそうだ、兄は今、体調を崩しやすいのに加え、制御剤を飲んでるかもしれないことを忘れていた、と湊は内心自分に対して舌打ちした。ただでさえ無茶をさせられない兄に、必要以上に負担がかかっているのは明白だった。

背後には、シャドウが迫っている。

「させない…！」

足元にあつたスイカ割りに使われたまま捨てられたであろう手ごろな棒を手取る。

そして、迫るシャドウに叩きつけた。

しかしそれはばきん、といい音をたてて折れ、すぐに使い物にならなくなってしまうた。

「くっ…！」

「どうしよう…！」

「絶体絶命じゃん…！」

「ぐ…う…！」

追い詰められる四人。それぞれが身を寄せ合いながら、どうしようかと頭を巡らせていた。

優希だけはペルソナをもう一度召喚しようとして集中するが、カタチがうまくまとまらずにすぐに霧散してしまい上手くいっていないようだった。

万事休す。そう思われたその時――

――少女が、立っていた。

赤い景色の中、青いワンピースに金髪の彼女は、影時間だというのに象徴化することなくそこに二本の足で立っている。

「え、女の子…？　なんでこんなところに…!？」

「…アイギス…？」

小さく、誰にも聞こえないような声で湊は呟く。

彼女は今、本来ならこの場にはいないはずだ。会うのは明日。仲間になるのは明後日のはずだった。

「見つけました」

その声は、誰にも届かなかった。しかし、それでも。彼女は跳んだ。そして、湊たちの前に着地する。

「間違いないです」

「きみは…」

「危ない！」

なぜいま、ここに？　と訊こうとした湊の声は岳羽の叫びにかき消される。

その声に答えないままアイギスは振り向いて跳びかかって来るシャドウを手刀で一刀両断した。

「障害は取り除きます。ペルソナ、レイズアップ！」

アイギスの叫びと共に、青い光と力の奔流が渦巻く。

「ペルソナ使い!？」

【ヒートウェイブ】

岳羽の驚きに答えることなく、アイギスのペルソナである「パラデオオン」が多くの範囲のシャドウを衝撃波で押しつぶした。

それがきつかけとなりアイギスの事を敵とみなしたシャドウは【アギ】を連発するが身のこなし軽くひらりひらりと避ける。それでもドレスに引火したらしく、アイギスが大きくジャンプした際に燃え広がりに、その姿を消して機械の乙女の姿を暴いていく。

「!」

アイギスはそのようなことを気にも留めずに数えるほどしかいなくなったシャドウの残党に向かって手の指に内蔵された機銃を掃射して綺麗に着地した。

そしてスタスタと湊と奏子へと歩み寄る。

「——ようやく見つけた。貴方たちをずっと探していました。…わたしの、一番の大切は…貴方たちの傍にいますことでもあります。ですが…」

アイギスは突然その表情に怒りの感情を乗せ、指を——銃口を優希に向けた。

「貴方は、ダメであります」

その言葉と行動に、湊と奏子は戸惑いを隠せなかった。

「え…?」

「えっ、えっ、お兄ちゃんになにしようとしてるの!? お兄ちゃんはだめなんかじゃないよ!」

「いいえ、彼は危険です。わたしの中の何かがそう告げています。貴方たちは近づいてはいけません。どいてください」

優希を庇うように前に出た奏子にひるむことなくきっぱりと言い切ったアイギスは奏子を優しく押しつけて、優希の胸に銃口を当てた。

「…ああ、そっか。そういう事か」

しかしそれでも、銃口を突きつけられている側である優希は——何かに納得したかのように微笑んでいた。まるで、幼子を見るように。

「僕たち、本当はそうする方が良いのかもしれないね。アイギス」

アイギスは銃弾を撃とうとはしなかった。

その代わり、突きつけた指先が震えていた。わなわなと、アイギスの瞳が大きく揺れる。

対する湊と奏子は、兄の発言にいいようのない違和感を抱いた。いや、湊だけはその違和感に気が付いた。

——なぜ、兄がアイギスの名前を知っている?

「あ…なた…は…」

「——でも、それはまだ選んではいけない選択だ」

優希の口が弧を描く。その瞳は、満月のように黄色く輝いていた。

——兄はこんな誰かを見下ろすような嗤い方をしない。

…湊はぞつとする。目の前のこれは誰だ?

兄じゃない、と何かが否定する。それは、防衛本能とでも言うべきものかもしれない。

「だから、少しだけ忘れるといい。そう、これはなにかの悪い『夢』だ」と

につこりと綺麗に笑った兄の姿をしたなにかは指先を唇に当てて、「シーツ」とまるで秘密の約束をするように音をたてた。

瞬間、足元からぐぼぐぼと音を立てて黒い泥のようなものがあふれてあつという間に地面を侵す。

湊たちが「あ」と声を出す暇もなく、視界は黒で塗りつぶされた。

「——ようやく見つけた。貴方たちをずっと探していました。…わたしの、一番の大切は…貴方たちの傍にいたことでもあります」

「ちよ、それどういこと!?!」

(……あれ?)

無理やりペルソナを使い過ぎたのか、一瞬意識が飛んでいたような気がする。

アイギスはいつも通り湊と奏子に近寄って大切宣言をしていた。ただ、これまでと違うのはそれが20日の夜であることと、今が影時間であることだ。

「ごしごと、口元の血をぬぐう。制御剤を飲んでから初めての召喚器なしでの召喚(しかもとんでもないデスマーチ)だったがアイギスが助けに来てくれて本当に良かったと思う。

彼女が間に合わなければ自分たちは詰んでいた。

本当に助かった、と安堵の息を吐く。

「無事か?!?!」

「おーい! 三人プラスセンパイだいじょうぶつスカー! ってなんだそのカワイコちゃん!?!」

大きな声と共に伊織が駆け寄ってくる。

後ろには、真田くん、美鶴さん、山岸、幾月と続いていた。

「いやあすまないね、近くの研究施設で保管されていたシャドウが逃げ出したらしくてね。大事は無いかい？」

いけしやあしやあと悪びれもせずにそう告げた幾月にキレそうになる。

あの大量のシャドウ、お前のせいじゃ幾月。大事あったわ。こちらら危うくぶつ倒れかけたんだぞ、と抗議の意味も込めて視線をこっそり送っておく。

「この子が守ってくれたので…」

「ああ、アイギス。突然起動して脱走したかと思ったらここにいたんだね。探したんだよ」

さも、何も知りませんでしたと言いたげな声色の幾月の言葉に内心でげんなりする。

「はい。わたしの大切はふたりの傍にいますから」
「…けほっ」

そんなアイギスのお決まりの言葉を聞きながら、軽くせき込む。掌に点々と血が飛び散るのを見て、顔をもう一度顰めた。

最悪だ。喉を切ってしまったのかもしれない。ごしごしと今度は服のすそで拭っておく。どうせこういうのはばれても誤魔化せるんだから適当でいい。

「立ち話もなんだし、一旦屋敷に戻ろう」

そんな声を聴きながら歩き出す。

少し息を整えることが出来たからか、時間が経ったからなのか、必死にペルソナを召喚していた時に襲って来た頭痛はなりを潜めていた。

「——紹介しよう。彼女の名はアイギス。見ての通り機械の乙女さ」

幾月は、応接間にある噴水の前に立つアイギスをそう紹介した。

「はじめまして、アイギスです。シャドウ掃討を目的に活動中です」

「対シャドウ兵器…そんなものが？」

「彼女は10年前の実践で大破し、ここの研究所で管理されていたの

だ」

「なにをしてもうんともすんとも言わないから、もう起動は無理だと思ってたんだけど、それが今日になって突然動き出したわけ」

武治さんと幾月がそれぞれアイギスについて簡単に説明する。

「どうして…」

「それは、わたしにもわかりかねます。ただ、わたしの一番は湊さんと奏子さんの傍にいます。…！」

愛おしそうに湊と奏子を見つめたアイギスの視線は、すぐ横の自分へと向く。

こちらを目視してすぐはずんずんと近づいてきたアイギスは、自分と湊たちの間に割り込んで通せんぼするように両手を横に広げた。

「貴方は、ダメであります！」

「えっ」

困惑する。

なんでアイギスにダメと言われなくてはならないのか原因がわからない。

原因に心当たりが全くない。いや、情けないとか兄たるなにかが足りないとかそういう事なのだろうか。

そうやって悩んでいると、アイギスの肩の後ろから奏子がひよっこりと顔を出す。

「なんでお兄ちゃんは駄目なの？」

「…その理由はわたしにもよくわかりません。ですが、この人は駄目であります！」

よくわからないのにダメと言われるのは少し落ち込む。やっぱりにじみ出ている情けなさとかアイギスにしかわからないそういうのがあるんだろうか。

「アイギス。大丈夫」

なおも手を広げてブロックしているアイギスの腕を、湊がやさしくつかんだ。

「優希は、大丈夫だから」

「湊さん…：わかりました。わたしは彼に対する警戒を僅かだけです

が解くことにします」

「ありがとうございます」

じつと湊の目を見つめたアイギスはそこでようやく分かってくれたのか腕を下ろす。ほんのちよっぴり警戒を解いてくれたらしい彼女はまたこちらを観察するようにじつとみつめてきた。

「なんだか少し恥ずかしい。」

「えっと、よろしく、アイギス」

「はい。よろしくお願いします。優希さん。ですが、わたしは貴方がふたりの傍にいるのはダメだと思っっています」

「うん、今はそれでいいよ。これから俺はその印象を変えられるようがんばるね」

警戒していると言いながらもきっちり挨拶してくれるアイギスは律儀だ。

そうするようプログラムされているのかもしれないが、普通は警戒している相手にここまで優しくはしてくれないのだろう。

もしくは、大事である湊が大丈夫だと言ったからそれを優先したのかもしれないけれど。

「アイギスが会ったこともないはずの三上君を、これだけ警戒しているのは、湊くんや奏子くんへの認識と同じくメモリのバグかなにかかもしれないね…私の方でも調べておくよ。…ところで、」

すすす、と今度は幾月がこちらへ寄って来る。

思わず、後ずさってアイギスを盾にするように逃げる。アイギスにごめんと内心で謝っておこう。

「おいおい、また逃げないでくれよ三上君。別に取って食おうってわけじゃあないんだ。この前は少し強引に迫ってしまったって悪かったね…」

「えっ!? 理事長が先輩に…!?!」

誤解させるようなことを言うなアホ幾月。

山岸がとんでもない勘違いをしているかもしれない驚きの声をあげているのも耳に入っただけならいい。これはそういう意味じゃない。「部を抜けないでくれって話の事ですよね…というかそりゃ警戒しま

すよ俺でも。あんなに真顔でぐいぐい距離詰められたらビビりますよ。なんだか幾月さんらしくなかったし…」

「それは失礼。私も少し焦ってたようですね、つい」

「ついでももないです。あと部は抜けたりしませんよ。安心してください」

「ああ良かった。ひと安心だよ。それで、岳羽くんたちの報告によるときみは先ほど“召喚器なしでのペルソナの召喚”を連続でしたらしいね。体調などに問題は無いかい？」

舐めまわすような視線をまた寄越してきた幾月に眉を顰めそうになる。

自分はこの目が嫌いだ。

「…いえ、特には」

「お兄ちゃん、ウソついちゃだめだよ！ だってさっき、咳き込んで血が…！」

「気のせいじゃないかな。影時間で海が真っ赤だったから見間違えたんだよ」

特に問題は無い、と言おうとしたら奏子に遮られてしまった。

我ながら苦しい言い訳をして視線を逸らす。しかし、湊の鋭い視線が自分を射抜いた。

「優希。奏子の言う通りウソは駄目だ。奏子だけじゃなく僕も岳羽も優希が血を吐いてたところ、見てる」

「たしかに、私も見たよっ！ 先輩が血を吐いてたの！ ケロっとしてるから頭から抜けてたけど、ナニなんにもなかったようにフツに立ってるんですか！」

逃げ道を防がれてしまった。あの場にいた三人全員に見られてるなんて思いもしなかった。

自分としては誤魔化せるだろうとタカをくくってスグに拭わなかったのと三人と距離を詰め過ぎたのが問題だったのかもしれない。

「それはそれは、ダメじゃあないか三上君。きみはすぐに部屋に戻って休むべきだ。前も言っただろう？ “身体を壊さないようにして

欲しい”って」

幾月に肩を掴まれる。

顔は笑っているが目の奥が笑っていない幾月は真剣そのものだ。

「…わかりました」

「分かったならよろしい」

なぜか満足げな幾月はそのまま肩から手を放して背中に回す。

そしてそのまま自分の背を押しして部屋から追い出した。

「まっすぐ、寄り道しないできみの部屋に戻るんだ。いいね」

「わかってます。流石に寄り道するところもないですし、しませんよ。

…先に失礼します」

頭を下げて部屋を出る。

若干、自分を追い出したいかのような幾月の行動に顔を顰めるがまあ他意はないし考えすぎかと考えるのをやめて歩き出した。

もうひとつの罪（7／20～7／21）

「三上君は大人しく部屋に帰ったようだ。…これでやつと話が出るというものだよ。…でしよう?」

優希を部屋から追い出した幾月は、やれやれといった様子でズレていたメガネを押し上げて武治をみた。

「ああ、私は、桐条の犯した『もうひとつの罪』について…君たちに話をしなければならん」

「『もうひとつの罪』…?」

武治の言葉に美鶴は疑問の声を上げる。

桐条がしたことはあの事故だけではなかったのか、と。

「発端は——タルタロスというあの忌まわしき塔が生まれ、幼くして美鶴がペルソナ能力に目覚めた事だった」

「!」

美鶴以外の特別課外活動部の全員が目を見開く。

「シャドウにはペルソナが有効だということとは美鶴の話で聞いただろう。我々はそのペルソナ能力に目をつけ、タルタロス攻略への足掛かりとしたのだ。…孤児を使って」

「そんな…!」

「ウソでしょ…」

驚きと衝撃。

風花やゆかり、そして美鶴までもが青ざめる。

美鶴は初耳だった。父が、桐条がそんなことをしているなんて知らなかった。

「お父様…それはっ! そんなことは…!」

「…わかつている。到底許されることではないだろう。だがあの時の我々は焦っていた。どうにかあの事故の原因を究明しようと…タルタロスの謎を解こうとした」

武治は心底悔やむような声を出しながら顔を顰めて深く息を吐いた。

「美鶴がペルソナ能力に目覚めたことから、そのくらいの感受性の高

い年齢の子供には何かがあるのだろうと予測し、美鶴と同じ年頃の孤児を100人ほど集め、〃無理やり〃ペルソナに目覚めさせた：いや、人工的に植え付けたのだ。ペルソナ能力を」

「人工的に…ペルソナを…!?!」

明彦が信じられない、といった風に呟く。

この場にいる誰もが信じられないだろう。人工的に、しかも無理やりペルソナに目覚めさせられるなど。それにどれだけの苦痛が伴うのか、想像できないほど皆は馬鹿ではなかった。

「——その中に、ある少年が居た。彼は、我々が他の子供を人工的にペルソナに目覚めさせる前から…それを使いこなして見せた。幼いながらに孤児たちをまとめ上げ、まるで他の子が得た能力を理解しているように役割分担をさせ、時に庇い、今の君たちのようにタルタロスを登っていた」

「そんな子が…」

「てか、なんでこの話するって時に三上センパイがいちやダメなんですか？ むしろセンパイが聞いている時にすべきなんじゃ…」

順平がもつともな発言をする。この情報は、優希にも共有されてしかるべきだ、と。

美鶴もそれはそう思った。部屋に帰らせたのなら、この話は明日にすべきだろうと。なぜ、わざわざ三上を追い出してまでする話なのか、彼女にも、他の面々にもわからなかった。

「…それは、これを見てもらった方が早いかな」

幾月の言葉と同時に部屋が暗くなる。

そして、プロジェクターで一枚の書類がスクリーンに映し出された。

青い髪に灰色の目。生気を感じさせない無表情で湊によく似た幼い少年が書類の写真に写っている。

「!!」

皆が一斉に息を飲む。

名前は〃有里渚《ありさとなぎさ》〃。

その下には簡潔にペルソナに目覚めた年月日やそれからどうやっ

て活動していたのかが書いてあった。

「エツエツ!? 有里!? 有里つてあの有里!? 湊と奏子っちの有里だよな!」

「お、にい…ちゃん…」

「……………」

順平がきよろきよろと湊と奏子と書類を交互に見ながら戸惑う先で、奏子と湊は目を見開いて青ざめた。

「そう、これは三上君だ。本名は、有里渚くんというらしいけれど、どうやら彼にはその記憶が無いらしい。そしてそれに酷いトラウマがあるみたいでね、だから迂闊に彼の前ではこの話はできなかつたんだよ」

どこから調べ上げてきたのか、幾月がトラウマの事まで説明する。

「彼は、我々の犠牲者の一人と言っても過言ではない。…私も、今日顔を合わせるまでは彼が生きていたとは思っていなかった。人工ペルソナ使いの生き残りは、計画が凍結されるまでの半年で殆どいなくなってしまうた事に加え、彼は事故で塔から落ちた。まず助かる高さではなかつたからな」

武治の言葉に場が静まる。

100人もいたのに生き残りは殆どいないという言葉に、自分たちが上っている塔がどれだけ危険なのかを再確認したからだ。

実際は、まだ体のできていない幼い子供たちに対して無茶なスピードでのタルタロスの探索をさせたことに加え、武治が承認していなかった人体実験に連日の投薬、生活環境の劣悪さ、ペルソナの暴走など様々な要因で使いつぶされてしまったということだけなのだ。

「…ですが三上がペルソナに目覚めたのは今年の四月の事です。これでは辻褄があわない」

「ふーむ、恐らくは記憶喪失になったことでペルソナ能力を一時的に失ったんじゃないかな。三上君の使うペルソナは当時使用していたそれとは大きく変わってるんだ。ペルソナは精神に左右されやすいからね、そういう稀なこともあるんだと思うよ」

美鶴の疑問に答えるようにそんなことを言いながら、幾月はリモコンのボタンを押す。

するとスクリーンに映しだされていた書類の画像は消え、映像が始まる。

『……、……て……』

粗い、不鮮明な映像。

そこに映っていたのはシャドウ——刈り取る者の周りを1人で跳ねるように駆ける幼い少年。

持っている剥き身のナイフは体に比べて大きく、そしてひどく不釣り合いだった。

『……うしろに、さがって……』

そこでようやく、彼が誰かに何かを言っているのが鮮明に聞こえる。

瞬間、映像の中で青い光と力の奔流が渦巻き、主を守るようにそれは現れた。

タナトスによく似た、しかし違う姿のペルソナ。

タナトス纏うコートの手元がある部分は、そのペルソナの場合漆黒の羽で埋まっており、湊はそれを「ニユクス・アバター」のようだ」と感じた。

——ニユクス・アバター。

ある意味湊たちが最終的に倒すべき敵であり、死の宣告者であり、湊の大事な存在の成れの果てだった。

それに似ているということは、あれも自分のタナトスと同じくデスの力の片鱗なのか。もしそうだとしてみなせ、この時点の兄がそんなものを持っているのか、湊にはわからない。

考え事をしている間にも、画面の中のペルソナはぐぐぐ、とのけ反りその頭骨に力を溜め、一気に放出する。

【アンティクトン】

それは湊が見たこともないものだった。

メギドラオンとも他の魔法とも違う、禍々しい力の衝撃。

そうして一瞬にして刈り取る者を消し飛ばした後、その映像は途切

れた。

「——と、こんな風に今とは全く違う姿のとても強力なペルソナだという事がわかるね」

ビデオを消して部屋の電気をつけなおした幾月は軽く、といった様子でそう告げた。

「私としては彼には是非ともこの力を取り戻してほしいと思ってるんだけどね。だけどそれは、すなわち辛いことを思い出すことになるだろうから、無理強いはできないしねえ…おっと、皆もこの話は三上君には秘密にしていってくれよ？ トラウマを刺激されて意識を失ってしばらく体調を崩したって症例を聞いている。迂闊に話すのは危険すぎるかな」

しかたない、と言いたげな言葉を吐きつつもどこか納得していなさそうな幾月に湊は違和感を覚えた。

湊にとっても幾月は信用ならない相手だ。この男のお蔭でアイギスや岳羽を含むどれだけの人が要らない傷を負ったか。表面上は優しいが酷く狡猾い狡猾な男だと湊は思っている。

だからこそ、その言葉になにか含みがあるように湊は思えた。戦力の増強と言う意味ではなく、別の意味でこの時の兄の力を欲しているような、そんな言い方だった。

「…本来なら庇護されるべき彼のような子供たちを利用し、人工ペルソナ使いとして苦しませたばかりかあまつさえその命を散らせた。それが、桐条の“もうひとつの罪”だ。すでに凍結させた計画とはいえ、あまりにも失ったものが多すぎる。…この罪も償っても償いきれないものに変わりはない。君たちには、こういうこともあったのだと私の口から隠さず伝えておきたかった」

武治が後悔をにじませる声色でそう言い放った。

部屋は静まり返っている。

映像と、伝えられたものとで皆それぞれ思うところがあるのだから。

皆が黙ってそれぞれ考えている横で、アイギスだけはじつと先ほどの映像を思い返すようになにも映していないスクリーンのあった場

所から目を離す事をしなかった。

7/21 (火) 朝

あの後部屋に帰ってすぐにベッドに入り込んだらぐつすりとお眠ってしまっていて、いま朝食を食べているがなんだかみんながよそよそしい気がする。

よそよそしいというか、なんだか気を遣っているような、そんな距離感だ。生暖かい視線を感じる。

やっぱり血を吐いたという事が衝撃的すぎたんだろうか。今度からはもつとうまくごまかそうと決意した。

そう決意しながらバナナ(幾月が買ってきた訳ではなく桐条の別荘が用意してくれた)とりんごのジャムをヨーグルトに突っ込んでスプーンで混ぜていると幾月が寄ってきた。

「そうだ、三上君。きみは今日一日安静にしてくれよ? なにかあるかわからないからね、夜まで様子見という事で」

「泳がないんで海を見るだけでも」

「ダメだねえ。なにかあったときになるべく人を呼びやすい自室で待機しておいてくれないかな?」

「…わかりました」

食い下がったが今日の予定は丸つぶれらしい。

昨日へまをやらかすんじゃないやなかった…と後悔する。まあ、やることといえば伊織にビーチでのナンパに連れまわされることくらいだろうし我慢することにする。

「じゃあ皆はそれぞれ気にせず楽しんできてね」

それぞれ屋久島の縄文杉観光もとい森林浴とビーチでのナンパに行く皆にひらひらと手を振る。アイギスはどちらについていくのか悩んでいるようだったが、しばらく湊と奏子を交互にみつめたあとこちらへと振り向いた。

「では、わたしはここに、優希さんの傍に残ります」
「えっ」

突然のアイギスのその行動に驚く。

「昨日はあれだけ警戒して「ダメ」とまで言われていたのに一晩でこの反応をされるとさすがに驚くものがあると言うものだ。

いや、もしかしたら自分の監視という意味で近くにいるのかもしれない。そう考えると妥当だ。でも女性陣といっしょに縄文杉を見てもいいんじゃないかと思う。それもまたアイギスにとって良い体験になると思うから。

「優希さんもわたしの『大切』だと判断したままであります。よく思
考し、ダメだというのは気のせいとして一時保留にする結論に至りま
した」

「????」

「そして、順平さんたちと行動する湊さん、美鶴さんたちと行動する奏
子さんとは違い、優希さんはひとりであります。いま優先すべきは目
を離すと単独行動しかねない優希さん、と判断しました」

意味が解らない。

アイギスは気のせい、だなんて言うような子だっただろうか。もつ
とこう、理路整然にシャキシャキと判断するタイプじゃなかっただろ
うか。

「アイギスえらい！　ちゃんと昨日私と湊が言ったこと覚えてるんだ
ね！」

「はい。優希さんは目を離すとすぐに単独行動をする、と言うのは覚
えました。それと好きなものはオクトパシーのたこ焼き。生年月日
は1991年4月4日。年齢は18歳。身長は174cm、体重は――
「ストップ！　ストップ！」：？　わかりました」

このまま止めていなかったら危うく自分でも知らないような個人
情報を全て暴露されるところだった。冷や汗をかく。

救いなのはアイギスに悪意がないことだ。たぶん、普通に教えても
らったことを復唱しようとしたただけだと思う。きつと。

「アイギス、優希を頼んだよ」

「任されたであります。では、いつてらっしゃいます」

「いつてきま〜す！」

湊にそう言われて自信ありげに敬礼して横に並んだアイギスは自分と同じように手を振って皆を見送った。

そして自分はそんなアイギスを見つめる。

「…？ わたしに何かついてるではありませんか？」

「なにかついてるってわけではないけど、きみが俺の隣にいるのはなんか珍しいなって」

「珍しいも何も初めてであります」

「…そうだった」

しくじった。

既にこの場から湊たちが去っていて本当に良かったと安堵する。勘のいい湊に気づかれでもしたら厄介なことになる。要らぬ疑いをもたれるどころか最悪ループしていることを話してしまわないといけない状況に陥るかもしれない。そんなことは絶対に避けたい。

「優希さん、貴方は安静にしてないといけないので迅速に部屋に戻りましょう」

「一晩寝たから大丈夫だよ」

「それでも、であります」

押しが強い。

ぐいぐいと背中を押されて部屋まで連れていかれる。

そして、部屋のドアを開けた瞬間、

「あ、お帰りなんだネ、チミ。モコイさんはこれからバ——」
バタン。

モコイさんの言葉を最後まで聞かずにそのドアを閉めた。

モコイさんが部屋にいるのを忘れていた。もしアイギスが『そういうのも見える』んなら大変なことになりかねない。コロマルと会話するほどだ。モコイさんが見えるというのも可能性としては持っている方が良さだろう。

「入らないでありますか？ では、わたしが先に——」

「ちよ、ちよつと待って！ へ、部屋が散らかってるから！ いま片付ける！」

「わたしは部屋が散らかっていても作戦行動に支障はきたしません。

ですがそれが命令というのなら了解しました。アイギス、待機するで
あります」

先にこちらの部屋に入ろうとするアイギスを止め、急いで扉の間に
自分の身を滑り込ませて部屋に入って鍵を閉める。

「モコイさんごめん、急いで窓から部屋の外に出られる?」

「ど、どうしたのチミ、そんなに焦って…」

「部屋に特殊なセンサー積んだヒト型ロボットが来る。モコイさんバ
レるかも…みたいなの?」

端的に説明するとそんな感じになる。

「ゲエ。ロボットつか、そりゃヤバヤバさんだネ…」

「そう、だから——」

「失礼します! 優希さん以外の声と反応を検知しましたので緊急時
のマニュアルに基づいて突入させていただきます、であります!」

「わあああああああ————!!!」

バーン!とドアを開く音と共にアイギスが侵入してくる。

終わった。

もう終わりだ。

ホワイトライダーと戦った時のようにモコイさんと抱き合って叫
ぶ。というか部屋のカギ閉めたよね俺? どうして入ってこれたん
だ…?と思ったが彼女の特技は鍵開けでこれくらいの簡素な鍵なら3
0秒と経たずにあけられるんだった。

「ああああアイギス、こ、これは…ペット! 俺のペットだから!
噛んだりしないから!」

「…ペット、愛玩を目的として飼育される動物のこと」であります
か。ですがその方はわたしの中にあるデータの“動物”の見た目か
らはかけ離れているであります」

「……………」

目を逸らす。

そう言われると誤魔化しようがない。

「えっと、このことは俺とアイギスの秘密に、してくれないかな…?
とても大事なことから…」

「秘密、ですか」

「そう。守秘義務…的な？」

「なるほどな」

罪悪感が心にクる。

騙してごめんアイギス。と口に出さないうで内心だけで謝っておく。

モコイさんの存在がバレる^{すなわち} 勝手に悪魔と戦ってる事がばれる、

だ。これ以上どやされるのは勘弁したい。悪魔をシバって回復アイテムとかを強奪してるのもバレたら幻滅されかねない。あの時は仕方なかったんだ。うん。手持ちに回復アイテムがなくてモコイさんも自分もボロボロで気が立ってただけで…つい。

「では、これはわたしと優希さんの秘密という事ですね。了解しました」

「ごめんね」

「? なぜ謝るのでしようか」

「まあ、いろいろあるんだ…いろいろと…」

ホントにいろいろある。

どうしようもなくて言えない事ばかり増えていく。

「ところで、そちらの方のお名前をまだ聞いていませんでした。私はアイギスです。貴方は？」

「ボクは悪魔のモコイさんっていうんすよ。カレの仲魔ってやつだね、チミ」

「優希さんの仲間のモコイさんさんですね。記憶しました。優希さんの仲間ということはおたしにも仲間であります」

「仲魔の、モコイさんだネ」

「モコイさんさん」

「?????」

モコイさんとアイギスの間で名前の訂正とその復唱が続いているが一向にかみ合わない。

このままではモコイさんがモコイさんさんさんになってしまいうになったのでちゃんと説明することにした。

「モコイさんは“モコイ”が名前で、それに『さん』をつけて自分の事

を呼んでるんだ」

「なるほどなー、ではモコイさんでいいのですね」

「正解だね、チミー！」

ピンポーンとどこで手に入れたのかボタンを押すとマルの絵が着いた棒が起き上がるおもちゃをモコイさんは鳴らした。裏面はバツが書いてある。

しばらくモコイさんとアイギスでなにやら和気あいあいと話したのちに、モコイさんはサングラスとハイビスカスの首輪をつけてひとりで外へとバカンスを楽しみに行った。

そうになると、部屋にはアイギスと自分の2人だけになる。

「では、優希さん。私はここで待機していますのでごゆっくりください」

直立不動で部屋の隅に立ったアイギスはそのまままっすぐこちらを見たまま微動だにしない。

なんとというか、気恥ずかしい。

一応ベッドの上に腰掛けたがこのままアイギスを無視してくつろぐなんて自分にはできそうにない。

「アイギス」

「はい、なんでありますか？」

「どうやってくつろげばいいんだろう…」

違う、そういう事が聞きたかったんじゃない。でもある意味、(アイギスががいる場合)どうやってくつろげば良いのかわからない。いつも彼女は湊か奏子と一緒にいたから。

自分はあまり接点がなかったからどう対応すればいいのかわからない。

機械とは言っても彼女はちゃんと心を持った存在だ。広義のヒトである彼女を無碍にすることなどできないし、便利な機械扱いできるのは幾月くらいなものだ。

「くつろぎかた、ですか…では、優希さんは体調がまだ芳しくないと思われまますので寝てみてはどうでしょうか」

「なるほど」

アイギスの言う通りベッドで寝てみる。天井を見つめ、数秒。

「……」

だめだ、アイギスの視線が気になって寝るどころではない。起き上がる。

「どうかしましたでありますか?」

「…えっと…アイギスもくつろいでくれたら俺もくつろぎやすい、かも…?」

苦肉の策だがそう提案してみる。

もしかしたらこれで彼女も丁度いいくつろぎ方なるものを考え付くかもしれないし。

「そうですか。では、失礼いたします」

——そうして、ベッドの前まで来たアイギスは自分の横に寝そべった。

なんで??????

どうしてそうなる??????

もう頭の中ははてなでいっぱいだった。別にアイギスの事は恋愛的な意味で意識しているわけではないのでドキドキもしないのだがこういう突然の奇行となると別の意味でドキドキしてしまう。主に恐怖的な意味で。

「む、心拍数が上がっているであります。何か異常でもありませんか?」

大アリだよ!と叫びたい気持ちを抑えて、起き上がってベッドの上で正座したアイギスと向き合う。

「あのさアイギス、一応アイギスは女の子なんだから軽々しく男とベッドで寝るっていうのは駄目なんだよ…」

「? 軽々しくはありませんが」

そーゆー誤解させることを言うんじゃないやありません! と頭を抱えなくなつた。

可愛く首を傾げるアイギスのこの天然っぷりをよく耐えてたな皆(主に女性陣)と今になって実感する。なんていうか、妹がもうひとり増えた気分になるのも仕方ないと思う。

「アイギス的には軽々しくなくても…あー、その、あれだよ、他の人か

ら見ると男女のまぐわいとか恋愛的な意味で受け取られちゃうからね、あんまりこういうことしちや駄目だよ」

「わかりました。ですが、皆さん外出中ですのでこの部屋には現在誰も入ってきません。こうしても問題ないかと」

「…ああ、うん。もうアイギスの好きにしていよいよ」

「? 了解しました」

もう諦めた。どうなっても知らない。

再び横になったアイギスは至近距離でこちらをガン見してくるけどこつちも横になって目を閉じて寝ることにした。

アイギスは横になって目を閉じて寝息を立て始めた優希を見つめる。

(脈拍、呼吸、体温。どれにも異常は有りません。極めて平常です)

なぜあれだけ胸騒ぎのようなものを感じていた優希のことが突然気になったのか、それはアイギスにもわからなかった。ただ、あのビデオを見たときから、湊と奏子に感じているものと似ているモノを感じるようになったのだ。守らなければいけない。近くにいて、見ないといけない。そんな感情を、アイギスは名前を付けることができなかった。

(幾月さんの言う通り、わたしにはなにか認識を誤っているのでしょうか。湊さんと似ているから、間違えて…?)

わからない。

この感情は、認識はバグだともいうのか。アイギスには判断がつかない。

ただ、いまだけは、それでもいいとなぜか思ってしまう。

(ココロ…わたしには、まだ…)

目を伏せ、考えに耽ろうとした、その時

(!?)

センサーが異常を知らせる。

だがそれは、自分の異常ではない。

「優希さん、起きて、起きてください！」

「う…っひゅ、こひゅっ、けほっ！」

慌てて起き上がり、肩をたたく。

大きく息を吸って目を薄く開いた優希は肩で息を吸いながらも酷く不思議そうにしている。

「…あい、ぎす…どうしたの…？」

「優希さん…いま、貴方は…！」

「？」

アイギスは続く言葉を発することが出来ない。

——アイギスには、優希が寝に入ってしばらくした後、『呼吸も心臓の鼓動もまるで示し合わせたかのように同時に突然止まった』などと言える訳がなかった。

まるでそれは、電池の切れた機械のように。

「いえ…わたしの気のせいだったみたいであります」

「…そう…？　じゃあ、おれ、またねるから…」

うつらうつらとしながらまたもぞもぞと布団に潜り込んだ優希に、アイギスはこのことを報告すべきなのかそうでないのか、もしかしたら本当にただの気のせいだったのかもしれない、と思考を回す。

気のせいならそれでいい。アイギス自身も再起動したてでもしかしたらどこか異常があるのかもしれない。ただ、次にまた起こらないか目を光らせておく必要がある、とじつと優希が起きるまで見つめ続けるのだった。

第二の騎士（7／22）

7／22（水）昼

昨日は結局あの後好きただけ惰眠を貪り、夜の食事に出たエビとカニに大興奮して終わった。（なおこれも幾月ではなく桐条の別荘が用意してくれたものである。ごちそうさまでした）

終始、アイギスがじつところちらを見るにとどまらず、ぴったりとくつついてきたことには驚いたが湊や奏子にしていることの延長だと思えば特別おかしなことではない。

ちなみにアイギスが添い寝したことは誰にもバレていない。とんでもねえあらぬ誤解を受けることは無かった。

そうして朝はぐだぐだとカラオケをしたり広い浴場で朝風呂をしたりトレーニングの為に走り込みに行ったりなどそれぞれ楽しんでいたようで、自分も軽く海辺を散歩しに歩いたりした。

（…あれ…?）

その途中、海で3m以上はありそうな大きな亀を見たような気がしたが、瞬きをした瞬間に見えなくなっていたので蜃気楼か幻かなにかだったんだろうと思う。現実にあんな大きな亀いるわけがないし、そもそも顔は亀と言うよりサルっぽいような獣っぽいような感じで尻尾も蛇のように長かった。

もしかして悪魔かと思ったが悪魔ならまず襲ってくるだろうし暑さで見た幻だろうと結論付けた。

昼になつてから皆でまたビーチに行こう、という事になったので荷物を持って浜に出た。

アイギスが海水に濡れても大丈夫なのかとか遊ぶことは大事だとかいろいろな話をした気がするけれどひたすら浮き輪で浮いてくるくと回って酔ってしまっていたのであまり覚えてない。楽しいからって調子に乗りすぎた。

ただ、沖に流されそうになった時になにかに下から押し上げられて浜まで運んでもらったのは不思議な感じがした。その何かの姿は見えなかったが、押し上げられたときにごつごつとした岩のような感触

がしたのを覚えている。

まさか、朝に見た亀：なわけはないかとその予想を振り切る。たぶん、波がたまたま自分を押し上げて、岩か何かに足が触れただけ、だと思いたい。

少しだけとはいえやはり暑さと海に浸かったことで体が疲れたので、先に帰ると言い残して別荘へ帰った。

シャワーを浴びて、服を着替える。

もうすぐマーガレットが言っていた試練の日になるのだが、メノラーの炎は依然揺れもせずに穏やかに燃えていた。

今日じゃないのなら明日来るのだろうか？　と思いつながらテーブルの上にメノラーを置いて眺めるも動きは無い。

部屋のテレビでも見ようかとリモコンに手を伸ばしたとき、テーブルの上のメノラーの炎が揺れた。

「っ!!」

きた。

誰かに見られている感覚と、とてつもなく恐ろしい何かの気配がある。

「ここに、とどまりますか？」

誰かにそう問われている気がする。

頷く。心の準備はできている。いつでも来い。

「本当に、とどまりますか？」

再度頷く。

頷いた瞬間、足元に穴が開いて落ちる。

目を開けば、そこは以前見たものと同じ荒廃した風景が広がっていた。

が、今回はモコイさんがどこにもいない。

それどころか自分の服装もボタンとネクタイは絞めていないようだが黒いスーツになっていてとても戦うような服装ではない。

腰には刀と拳銃とベルト。

そのベルトにはライドウくんが持っていたものと同じ管のようなものが何本か装着されている。

「…?」

なぜこんな格好にする必要があるのかよくわからないがこれも必要なことなのだろうと気に留めるだけにして、魔人がやって来るのを待つ。

ヒヒイーン!

嘶きと共に、地の底から這い出るようにして現れたそれは、血のように赤い馬だった。

その上には、ホワイトライダーと似たような黒いローブを纏った姿の長剣を持った骸骨が跨っており、その虚ろな眼窩でこちらを見つめてきた。

「ほおー、まだ生きておるとはのおー。我ら四騎士、世に聞こえた死の担い手を一騎といえど退けるとはー…見事、見事。しかし、このレッドライダーは戦闘きよ…白の騎士ほど甘くはないぞ」

「いまホワイトライダーのこと戦闘狂っていいかけませんでしたか」

「ほっほー。気のせいぢやよー」

ホワイトライダーに続きレッドライダーまでもがこんな感じでなんだか締まらないのは黙示録の騎士特有のものなのだろうか。

黙示録の騎士は意外とアットホームで和気あいあいとした集団だった…?

「闇より出でた鮮血の騎士であるワシが、おまえの息の根を…」

止めてやろうぞっ!!」

クワツ!と口を開いて殺気を迸らせたレッドライダーに、警戒を高め、刀に手をかける。

「おまえの乱心が我が喜びよ。…では、はじめるとするかのー」【死兵召喚】

笑い声を上げながら、レッドライダーは天使 パワーを呼び出す。

いつ襲い掛かれてもいいように、こちらも刀を抜いた。が、

「なんじゃ、はようおまえも仲魔を召喚せぬか。今日の死合こんにちい、ペルソナとやらは禁止なのじゃからのう。ぼさつとすると死ぬぞー」

「ほっ」

レッドライダーのその言葉に、ぽかん、と気の抜けたような顔で聞

き返す。

ペルソナが使用禁止だなんて聞いてないし仲魔の召喚なんてしたことがない。そもそも、仕方がわからない。仲魔なんてモコイさんしかいないしモコイさんも召喚とかそういうことをするタイプの悪魔じゃない。

常に一緒にいるのだからいきなり召喚しろと言われてもどうすればいいのかわからない。

「おまえ、その様子だとなにも知らされておらんのだな？ 乱心は乱心でもそのような乱心は望んでおらぬわ！ はー：あの詐欺師ペテンも我らにかのようなことを言いつけておきながら実態すら把握していないとは、心底呆れてモノが言えんわ：悪魔王の方がちゃんとしておつたぞ：」

レッドライダーが頭を抱えたように唸る。

なにやら、レッドライダーたちに何かを頼んだ存在に対して呆れているらしい。なんとというか、さながらバイト先の店長から何も伝えられていないバイトのようだ。

「まあよいわ。腰につけている管を持って。さすればどうすればよいか本能的にわかるじやろう」

言われた通り、ベルトについている管を二本手に取り手に持つ。

その瞬間、身体からペルソナの物理スキルを使ったときに近い感覚で何かが吸い取られていくのを感じた。きゆる、とひとりでに管が開く。

——召喚。

「やあ、ボクを呼んだかい？ サマナー」

「おいライドウ！ オレっちの活躍時か!? ってまたクリシュナと一緒にかよ〜」

「なんだいカルキ、キミは随分とまた喧しいね」

「んだとう!? 昔は救世主カルキ、救世主カルキって煩かったのによー」

「サマナーの召喚した分霊のキミが想像以上にアホで脳筋でボクの理想とかけ離れていた。ただそれだけだよ」

何だこれ。

とても悪魔とは思えない褐色肌の少年2人（片方は笛をもつてふよふよと浮いてるしもう片方は槍を持って白馬に乗ってる）が出てきた。

「なんだか2人で言い合いをしているしレッドライダーの事はかなりアウトオブ眼中だしマジで何が起こっているのかよくわからない。」「…少し見ない間にあのキョウジとかいう人間の真似をして、カロンにでも頼んで身体を替えてもらったのかい？　おや、魂が違う…？」
「なあおいクリシュナ、こいつさーオレっち達のライドウに似てつけど、似て非なるもんだぜ」

「カルキの言う通り、キミはよく似ているけれど、ボクのサマナーではないね。甘美だけれど酷く不快なああの混沌の臭いがする混じり物のようだ…ただの人間にしては歪だね…一体誰にそうされた？」

「え…？　いや、わからない、です…」

クリシュナ（笛を吹いている少年）とカルキ（槍を持っている少年）に警戒された目で見られるも、言われていることがよくわからないから答えようがない。

「あの、さ。2人は今のところ俺の仲魔って事でいいん…だよな？」

確認する。これで人違いなので仲魔じゃありませんと言われたらチェンジを要求したいところだ。

「まあいいよ。どうせこの夢のような邂逅は一時的なものだろう？」

「なら、彼によく似た輝きを持つキミの手助けくらいはしてあげるよ。これもまた、救済への一歩だからね」

「オレっちは戦えるなら誰でもいいぜ！　あつてもオレっち達のライドウは甘いもんもたくさんくれたしなあ…やっぱライドウだな！　困ってるやつを助けてやってくれって言われてるしオレっちもお前と一緒に戦ってやるよ！」

勝手に納得されて共に戦えることになったようでホツと胸をなでおろす。

さつきからライドウくんの名前が出てきているが彼らはライドウくんの仲魔なのだろうか。もしそうなら、ライドウくんの仲魔を勝手に使っていることにならないかと少し心配になった。今度会ったと

き謝ろう。

「ほっほ、これで場は整ったようじゃな。これでこそ殺しがいると言うものよ！」

律儀に待っていてくれたレッドライダーは酷く上機嫌だ。

まるで料理の下ごしらえを終えたと言わんばかりに歯を鳴らすレッドライダーは剣を振り上げた。

「なんとまあ気の早い魔人だ。こういうのは事を急くものではないよ」『戦いのターラ』

そこへ、クリシユナが割り込んでリズムを奏でる。

そのリズムを聞いてみると、なんだか力が湧いてくるような感覚がした。まるで、心を奮い立たせてくれるような、不思議なリズムだ。

「なるほど、能力をかき上げしおったか。まあよいわ。小手調べにわしの一撃、受けてみよ！」

【タルカジャ】

【タルカジャ】

脇のパワーたちが両方とも攻撃力を上げる魔法を使う。こちらには【強化を打ち消す魔法】がない。ペルソナが使えたらパンタソスが覚えているデカジャでなんとかできるのに、と歯噛みする。

レッドライダーの振り上げた剣に光が集まる。

その瞬間、ぞわ、と背筋が粟立った。まるでホワイトライダーのゴッドアローが放たれる寸前のような感覚を覚えて身構える。

【テラーソード】

それは、純粹な横風ぎだった。しかしただの斬撃ではない。

熱風のような衝撃波が付随した強力なものだ。

「ぐうっっ！」

刀で防御するがあまりの衝撃で頭がぐわりと揺れる。とんでもなく痛い。

「サマナー！ 大丈夫か！」【ジャベリンレイン】

カルキがパワーを蹴散らし、声をかけてくるが頭がくらくらしてそれどころではない。

いま、何をすべきだったのかわからなくなってくる。誰が敵で、誰

が味方だったか。

「だああ！ クリシユナ！ なんかも回復できねーの？ アイツ混乱してるぜ！」

「ボクが『ニヤリ』ともしないのに混乱を回復できる魔法を持つてるとでも？ ああ、これなら山のようにあるから使いなよサマナー」

ぽん、と肩に手を置かれ、見せられたのは傷薬。

「あ、ああ、ありがとう」

札を言ってからそれを受け取る。そして大きく振りかぶって――

「つて、傷薬で混乱が治るかー！ー！ー！！！！」

バチコーン！

――受け取った傷薬を地面にたたきつけた。

そしてすぐにホルスターから銃を抜いて乱射する。

ヤケクソで乱射したそれは運よくレッドライダーに何発か当たって弾切れになった。

「はー…はー…」

弾が無くなってもなおカチカチと音を鳴らしながら引金を引くも、乱射したら少し冷静になったのか、頭の中がクリアになった。

いや、銃を乱射して冷静になるとか我ながらイカレてるなと思うけど実際冷静になれたので無問題だ。

「緊縛弾を仕込んでカツアゲ…緊縛弾を仕込んでカツアゲ…」

なぜか空になった銃に弾を補充していると頭の中で別の思考が渦巻くのでぶつぶつと口に出して精神の安定を図る。こんなことを考えてしまうなんてモコイさんにカツアゲの仕方を教わったせいかもしれない。

「大丈夫かこのサマナー…カネがない金欠ん時のライドウみてーなこと言ってるぜ…目もイツちまつてるしよー、まだ混乱してるんじゃないやねーの…？」

「ボクのサマナーもあれはあれで正常だったんだから彼も大丈夫なんじゃないかい？ ああ、ボクのサマナーも緊縛にしたいのなら『百麻痺針』を覚えた仲魔じゃなくて、ボクの『毒龍のラーガ』を使ってくればよかったのに…」

「いや、お前のアレ使い勝手わりーじゃん」

「はっ？」

「怒んなって〜！ お前のその顔こえーんだよ〜！」

横で2人がなにやら言い争っているがよくわからないのでスルーして、先ほど地面にたたきつけた傷薬を拾ってレットライダーから距離を取る。ちよつとへこんでいるけれど使えないことは無いだろう。

とりあえず自分に使うことにして、2人の様子を確認する。

こういうことになれているのか、それとも見た目に反して強力な悪魔なのか、クリシユナもカルキも「テラーソード」の直撃を受けたに
してはあまり傷がないように見えた。

「おっと、ワシから目を離してよいのか？」
「!?」

真横から聞こえてきた声に、反射的に刀で受け身を取る。

金属がぶつかり合う鈍い音がして腕が痺れるような感覚と相応の重さがかかった。

レットライダーが瞬時にこちらへと距離をつめ、その長剣を振るつたのだ。

「受け止めたか。なるほど、ホワイトライダーに勝ったのはまぐれではないらしいのう」

いや、まぐれです。と言いたい気持ちを抑えてこちらもお返しと言わんばかりに刀を振るう。

しかしひらりと避けられた。

「ほっほ、剣のキレは粗削り。まだまだといったところだのー。じやが、その構え…ふむ。あの詐欺師ペテンが我らに頼むだけのことはある。確かに、磨けば光るやもしれんな…ほれ」 【真空刃】

「がっ!!」

「サマナー！」

至近距離から、まるで子供に駄賃をあげるような気軽さで強烈な風の刃が飛んできた。

殺気も前振りもなにもなく突然飛んできたソレを避けられるはずもなく、直撃して吹っ飛んだ。

ゴロゴロと地面を転がり、痛みに呻きながらも刀を支えにして立ち

上がる。

「げほっ…」

血を吐く。ボタボタと垂れるそれは先日咳き込んだ時に吐いた血の比ではない。

強い。ホワイトライダーも強かったが、アレは単純な力比べといった感じだった。対してレッドライダーは攻撃時にある殺気を感じさせない、まるで自分の危機予知に対しメタを張るような戦法を取ってきている。

——勘に頼るのではなく、実力で戦えという事か？

「サマナー、大丈夫かい」

「だい、じょうぶ…」

横へと瞬間移動してきたクリシユナに返事をする。

自分の着ている服の腹の部分は裂け、血に塗れているが関係ない。動けるのなら上々だ。

「はー!? ダイジョブじゃねーだろ！ おいクリシユナ！ 『メシアライザー』でもつかってやれよ！」

「やだよ。ボクがあれを使うのが嫌いなのは知っているだろう？ 僕は救世主^{メシア}だなんてガラじゃない。どうしてカルキ^キが覚えられないんだか…」

苦々しい顔で顔を顰めるクリシユナはなにやら事情があつてこちらを回復することが出来ないようだ。それならそれで仕方がない。手持ちで何とかするしかない。

「ぐ…おれは、大丈夫だから…」

「だ、そうだぞ。おまえ達もよそ見をしていてよいのかのう？」

横に立っていたクリシユナとカルキが吹っ飛ばされる。

殺気も何もあつたものじゃない。目を離しはしていなかったはずだ。冷や汗が流れる。

このままでは、死ぬ。

「はあ…はあ…」

「おまえの仲魔もこれでは近づけまい。素質は感じるが、それまでよ。」

これで終いにするかのー。まあまあ楽しめたぞい」

レッドライダーが再び剣を振り上げる。

——死にたくない。

——死ぬわけには、いかない。

黒い何かが、足元から湧き出る。

レッドライダーの手が止まり、こちらをじっとみつめてきた。

「これは…まさか、濃度の濃いマグネタイト…!? こんなものを放出するなど本当におまえはタダのニンゲンか…!?」

「…知るか」

自分が人間かどうかなんてどうでもいい。

管を一本手に取る。呼ぶのは1人。

決まっているしこの管の中に誰がいるかも解っている。

「来い」

——召喚

ヒヒイーン！

「ハッハー！ ペルソナとしてだけではなく、こちらでも喚ばれるとは思わなかったぞニンゲンよ！」

——魔人 ホワイトライダー

「俺は、お前を喚んで、お前は俺を選んだ。それが答えだ」

「ああそうだな！ 俺を喚ぶだなんて相当オマエはラッキーボーイなようだ！ 分霊とはいえオマエと並んで戦えること、光栄に思うぞ！」

「…さて、仕切り直しさせてもらう。俺と、俺の仲間たち」で

馬の嘶きと共に現れたホワイトライダーが横に並ぶ。

レッドライダーに刀を突きつけた。

「カッカ！ なるほど、ホワイトライダーを呼び出したか。だがお前が満身創痍だという事に変わりはないぞい？ さあ、どう切り抜ける？」

「どうもこうもない。ごり押しだ」

「なんじゃと？」

「だから、ええと、ごり押し…だけど」

「……」

レッドライダーがこちらの答えに口をあんぐりとあける。

「ごり押しはそんなにダメだっただろうか。自分的には最適解だと思うのだ。」

「ぐちぐちぐちぐちと考えるのがダメだったんだ。脳みそ空っぽにして、身体に動くのを任せた方が、よっぽど俺は動ける。だろ——クリシュナ」

「——まあ、そんなこともあるかもしれないね」【戦いのターラ】

クリシュナの奏でる戦意を上げるリズムが響く。それで能力を底上げして、駆ける。

レッドライダーの剣戟を、ホワイトライダーが矢で相殺することによって護ってくれているのが分かったのでそのまま走り続ける。

「レッドライダー！ 今は俺と死合ってもらおうぞ！ たまにはこういうこともいいだろう!!」【プロミネンス】

ホワイトライダーが作り上げた火球が爆発し、膨大な熱を発生させる。自分の頬を熱が撫でるがそれでもレッドライダーに近づくことをやめない。

「ええい、分霊とはいえホワイトライダーよ！ きさま、ちよございな！」【龍の眼光】

【チャージ】

「暑苦しいおまえはこれでもくらうがよいわ！」

レッドライダーは一瞬で力を溜め、ホワイトライダーに向けて剣を振り下ろした。

【ベノンザツパー】

「ぐおお!! フ、フハハ！ この痛み！ “イイ”な！」

「ウワ、キシヨ…ワシ、永らくおまえと共に騎士をやってきていたが…今になっておまえのことかなり気持ち悪いと思うぞい…」

威力が倍増されたそれが直撃したホワイトライダー——の馬が膝をつく。何とか、上のホワイトライダー本体は馬から落ちていないようだがふらふらとよろめいていた。だが、それで十分だ。

「うおおおおおお!! 突撃突撃突撃イ——!!! オレッツちつてばい

まッ最っ高に英雄ヒーローしてるぜー！ー！ー！ー！！！！
オラッ！ 【天罰】てきめんだー！ー！ー！！！！

カルキがそのガラガ空きの背中に向かって白馬と共に突撃する。その槍の切っ先が放った光は、レッドライダーを捉えた。

「じゃあボクはまた奏でていようかな？」 【戦いのターラ】

クリシユナがトドメと言わんばかりにもう一度リズムを刻む。レッドライダーの距離はもう目と鼻の先。

“準備”はこれで終わりだ。これならば、レッドライダーに止めを刺せる。自分は、その方法を知っている。

地を蹴り、レッドライダーの上を取って刀を振り上げ力を溜める。そして、

「魔を祓え——」

——それを、振り下ろす。

「——“赤口葛葉”」

刀が、レッドライダーを袈裟斬りにする。

レッドライダーはそのままぐらりと傾き、落馬してその愛馬と共に消え去った。

「イエー！ー！ー！ オレっち達大勝利！~~~~~ ところで

ホワイトライダーオマエさ、そんな性格だったっけ！?!?!?!

「ハッハー！ いい質問だな！ 今の俺はオマエ達の同僚のホワイトライダーの身体を借りているだけだ！ じきに還る！ 心配するな——」

「へ~~~~~よくわかんね！」

「そうか！ ハッハッハッ！」

「まったく、脳筋が2人いると喧しいね。…まあ、キミも脳筋だったから3人かな？」

レッドライダーに勝った喜びから、カルキとホワイトライダーが会話している。その横で、クリシユナが寄って来た。

「ほら、傷を見せなよ。ボクがこの手で癒してあげようじゃないか」

「あ、傷薬？ ありがと——」

【メシアライザー】

「!?」

傷薬を塗ってくれるのかと傷口を見せた途端、癒しの光が自分を包む。これは、先ほどクリシユナが使うのを嫌がっていた「メシアライザー」という魔法ではないのだろうか。

一体、何の風の吹き回しでそれを使ってくれたのだろうか。首を傾げる。

「——きっとボクらはなにかがあつてキミと離れ離れになつて2度と会えなくなつてしまつたんだね」

「…?」

どういうことだろう。

クリシユナもカルキもホワイトライダーも、目の前にいるのに離れ離れになつたというのは意味が分からない。もしかして、クリシユナは不思議ちゃんなのかもしれない。こう、ポエミーな感じで。

「ボクからすればキミをそんなにしたヤツをくびり殺してやりたいところなんだけど」

「なんて物騒な悪魔なんです!?!」

「おや、ボクは昔から物騒だよ? キミの仲魔になつたのも世界を(ボクの都合のいいように)救済しようとしたボクをキミが血まみれの殺し合いをしながら調伏したからだつたじゃないか。あの時の赤口葛葉^{カタナ}の切っ先の痛みは今でも思い出せるよ」

「すっごいバイオレンス! というか出会いを捏造しないでくれないかな!? 俺とキミたちはさつき会つたばっかだよ!?!」

「なにを言うんだい。純度100%実話だよ。誉れ高き17代目葛葉ライドウ。ボクの認めた『ボクのサマナー』」

「ひいひい……絶対ウソだ……勘違いしてる……」

この人、俺の事ライドウくと勘違いしてるよ……コワ……今度伝えとこ。なんて思いながら、ケロッとした顔で冗談を言うクリシユナにビビって距離を取る。なんだかその目に幾月と似たようなほの暗いものを感じて怖くなったからだ。

ヒヒーン!

「ぶえつくし! とんだ脳筋どもじゃわい! ワシがおまえ達のように

な脳みそにコロツケでも詰まってそうなやつらに負けるとは思わなんだわ：じやが、これも実力のうちといえようぞ」

馬の嘶きと共にレッドライダーが復活リカムしてして帰って来る。

なんというか、酷い言いようだ。なんで頭にコロツケなのかよくわからないけれど、なんだか馬鹿にされてるのはわかる。

「おや、ボクは一緒にされちゃ困るんだだけどね？」

クリシユナの笑みが怖い。

その気迫にレッドライダーが少しビビって後ずさる。うん、わかるよその気持ち。

クリシユナは怒らせると怖い。さっき分かった。

「う、うむ：そうじゃな。して、ニンゲンよ。勝利の報酬としてホワイトライダーのやつめがしたように、ワシもおまえにワシの分霊を降ろそうぞ」

「ありがとうございます…？」

正直、これに何の意味があるかよくわからない。

確かに今回の屋久島旅行ではホワイトライダーのペルソナが居なければあの大量のシャドウへ時間稼ぎをして切り抜けることはできなかっただろうし、この縁がなければ今回管からホワイトライダーが出てきてくれることもなかっただろう。

それでも、本当に何のためにこんなことをしているんだろうかと疑問に思う。だれもそれに答えてくれる人がいないというのが答えなのかもしれないけど。

「血と内乱を司る終末の赤き騎士の力、頑張つてうまくつかうんじやぞ！ ワシとの約束ぢや！ カカカ！」

チャーミングに顎を鳴らしたレッドライダーに頷いた瞬間、視界が白に染まる。

クリシユナやカルキに「一緒に戦ってくれてありがとう」と言わないと、と口を開いたがもう遅い。

気が付けば、別荘の自室のテーブルの前に元の格好で立ちすくんでいた。

「あれ…」

つつ、と頬を濡らす水滴を手で拭う。
涙だ。

どうして自分が泣いているのかよくわからない。だって、彼らとの出会いはあのひと時だけだった。そんなある意味少しの付き合いしかないような悪魔に対し、泣くようなことだったのだろうかと思う。それにライドウくんに会えばいつでも彼らに会えるのだから、泣く必要なんてないじゃないか、と考えた。

(旅行から帰ったら、また彼らに会えるといいな…)
今から帰るのが少し楽しみになってくる。

メノラーの火は、何事もなかったかのように穏やかに燃えていた。

今はもういない貴方へ（7／24～7／29）

目を開く。

視界いっぱい広がる青と光が漏れる水槽。そして聞こえる『月の光』。

——ベルベットルームだ。

「あら、今回はちゃんと寝ぼけずに起きたようね？」

満足げにマーガレットが微笑む。

ペルソナ全書を開いてイゴールの隣に立つ彼女に、自分は小さくうなずいた。

「して、貴方様は『第二の試練』を越え、またもやその力の一端を手に入れた…大変喜ばしいことです。我が主もよろこんでいらつしやることでしょうか」

イゴールの言葉に、ずっと聞こうと思っていたことを訊こうと口を開く。

「あの、前からずっと言ってる『我が主』って誰ですか？」

「貴方様も知っておられるはずですよ。貴方様が覚えていらつしやらないだけで我々は…我が主はその昔から貴方様と契約をしております」

「？」

なんだかぼかすような言い方をするイゴールは要領を得ない。

「貴方がわからなくても良いのよ。契約は今もきちんと続いているもの。時が来れば分かるわ」

マーガレットまでよくわからないことを言ってくるので首を傾げることしかできない。

「あのお方から示された試練は残り二つ。次もまた一か月後よ。頑張って頂戴」

「それではまた、お客人が次の試練を乗り越えたときに相まみえましょうぞ…」

視界が暗くなる。

次に目を開けたときにはすでに朝だった。

7/24 (金) 放課後

屋久島から帰ってきて1日たった。

アイギスが仲間入りすることになり、アイギスを連れて屋久島から帰ってきてくれたたではある。

昼休みに期末テストの結果が発表され、今回も10位圏内でも無難な9位という微妙なラインの成績を取り一安心した。

湊はまたぶつちぎりで学年1位を独走していた。問題の奏子は47位に落ちていたがそんなに気にするほどではないと思う。

ちなみに朝に自分の部屋の向かいである湊の部屋から岳羽とアイギスがひと悶着するような、

「私の待機場所は湊さんの部屋か奏子さんの部屋、もしくは優希さんの部屋がいいとおもうであります」

「ダメだからね!？」

なんて声が聞こえていたが聞こえなかったことにした。アイギスには大人しく3階に部屋を用意してもらってそこで寝起きしてもらいたいものだ。

そんなこんなで神社の日陰で涼んでいると、丁度ライドウくんとうトがタイミングよくやってきた。

クリシユナとカルキの事を訊こうと立ち上がった瞬間、

「増えてる…!」だと!？」

と2人に驚かれました。

そういえば、レッドライダーが増えたんだった、とホワイトライダーが見えているっぽい2人に苦笑いする。

「身体は大丈夫ですか。何ともありませんか」

ライドウくんは肩を掴まれて心配される。

「大丈夫と言えば大丈夫。そうだ、この前悪魔に襲われたときにライドウくんの仲魔に助けてもらったんだ」

「自分の仲魔に…ですか？」

不思議そうな顔で首を傾げたライドウくんは、クリシユナとカルキ

について話す事にした。

「そうそう、クリシユナとカルキって2人なんだけど助けてもらったから改めて礼がしたくて…」

「クリシユナとカルキだと!？」

話の途中でゴウトが驚いたように叫ぶ。

驚くという事は2人は相当問題児なのだろうか。それとも、管ごと借りていたから記憶が無い、とか？

そんな自分の予想を裏腹に、ライドウくんがおもむろに口を開いた。

「自分の仲魔にはクリシユナとカルキという、そのような高位の悪魔はいません。彼らは魔神と英雄というカテゴリーの悪魔で、御するのには酷く熟練したサマナー：ライドウといっても自分のような未熟者に彼らはまだ：それに自分がもしそれらの悪魔を御すことができたとしても、その「縁」^{えにし}がないので召喚には応じてもらえないかと」
ライドウくんが言った言葉が理解できなかった。

クリシユナとカルキはライドウくんの仲魔ではない？ そんな馬鹿な。だって、あの時、クリシユナとカルキは確かに「ライドウ」と、「サマナー」と呼んだのだ。

青ざめる。まさか、もう会えないというわけではないだろう。そんなはず、そんなはずない。

そんな自分を見かねてか、ライドウくんがゴウトを短く呼んだ。

「…ゴウト」

「ああ、ミカミよ。その悪魔とどこで出会った？」

「…：悪魔の巣、みたいなところですよ」

正確には違う場所なんだろうがそんな感じのところだ。

「…時空が歪んだか…？ どのようにして出会ったのだ？」

どのように、か。

まさか腰からぶら下がってました、なんて言えるはずもない。巢に管が落ちていたことにしようと思う。

「管が何本か落ちてて…：拾ったらこう…：出てきた…：みたいなかんじです」

「封魔管が落ちていた…？　もしかすると流れ着いたやもしれんな…」

「それで出てきたクリシュナとカルキに守ってもらって、巢から出たらもう管も2人の姿もなくて…ライドウって言ってたから、ライドウくんの仲魔かかって思ってたしお礼が言いたくて…でもライドウくんの仲魔じゃない…？？」

「だいたいは間違っていないと思う。」

ただ、ライドウくんの仲魔ではないと言われてショックを受けている。あの2人の言っていたライドウとはいったい誰なのか。一体どのライドウと自分を勘違いしていたのか。

「ゴウト、彼にも話すべきです」

「うむ。こればかりは仕方あるまい」

何かを観念したようなゴウトが口を開く。

それは、到底認められないような内容で。

「ミカミよ、うぬが出会ったクリシュナとカルキは、このライドウから見て“先代”の17代目葛葉ライドウの仲魔であり——18年ほど前にとある戦いで先代ごと喪失した悪魔達だ」

「!!」

喪失した。それは、居なくなってしまったということ。

もしかしなくとも、死んだかもしれないということ。いや、自分にはなんとなく、彼らはもう死んでいるという直感めいたようなものがあった。

本当に、あれは奇跡の出会いだったのだと思うとの同時に、はた迷惑な善意の誰かが面白がって演出した結果というある意味必然的なこの出会いがあったのだとなぜか感じてしまった。しかし、それを感情は理解してくれない。

「え…あ…そんな、うそだ…だって、だってこの前、ほんとに…たすけてもらって…」

たくさん、助けてもらったのに。

自分はまだ何も返せてないのに。「ありがとう」の言葉すら、彼らに言うことが出来なかったのに。

「そんな、そんなの…うそだ…」

地面に雫が落ちる。涙が止まらない。

まるでずっと連れ添ってきた友達を喪ったような、そんな悲しみの感情が襲ってくる。

あのたった瞬きの間のような戦いの中でしか一緒にいなかったのに、涙は一向に止まってくれない。

「なんで…どうして…!」

「三上さん…」

「そつとしておいてやれ、ライドウ。こうなってしまったらもう気の済むまで涙を流すしかないのだ」

ライドウくとゴウトに見守られながら、涙が止まるまで嗚咽を零し続けた。

「…落ち着いたか？」

「…はい、ご迷惑おかけしました。みつともなく泣いてしまってますません…自分で思ってたよりショックだったみたいで…」

「あやつらは命の恩人だったのだろう？ なればその反応も仕方あるまい」

ライドウくんから差し出されたポケットティッシュで涙と鼻水を拭く。

「だが、時空が歪んでいる悪魔の巢の中とはいえ、彼奴らと会うなどぬにはなにか縁があるのかもしれない。それとも、ライドウに出会ったが為に“先代”とも縁が繋がったか…？」

微笑むように目を細めたゴウトに考える。

先程から『縁』という言葉をよく聞くが、もしかしたら悪魔の召喚や出会いにもそういうものが必要なのか。

ライドウくんの先程の口ぶりからすると、そういう縁がないと一緒に戦えるほどの技量があつても召喚に応じてくれないと言っていた。

レッドライダーと戦った時、当然の事のように自分はそれを理解していたが、今になってみると何も知らない自分がなぜあんなことを思ったのかよく分からない。

「彼奴らのことは残念だったな…だが、もしやすると救えるかもしれない

ぬ」

「……」

「自分とゴウトは先代について調査を行っている。どうして、いなくなってしまうたのか、彼は何と戦っていたのか。……それを知るために。消えた場所が分かれば、生きていることがわかれば……！」

「いや……俺は、もう大丈夫……大丈夫だから……」

ゴウトとライドウくんのその話を聞いても、自分は首を横に振るだけだった。

「大丈夫じゃない。そんな顔を、貴方はしていない……！」

なぜか、ライドウくんのほうが自分よりも辛そうな顔でそう言うてくる。

ただ、俺にとっては『もう終わったこと』なのだ。

「本当に、もういいんだ。俺は……これ以上知りたくない」

知って辛い思いをするくらいなら知らない方が良い。

見たくない。聞きたくない。

「……でも……！」

「ライドウよ、ミカミはあくまで神降ろしされているとはいえ何も知らぬ一般人だ。これ以上巻き込むのはやめにしようではないか。それに我らとて全て伝えられるわけでもない」

「……そう、ですね」

そうして、自分は知るべきだろうことから目を逸らした。

7 / 25 (土) 夜

路地裏のたまり場でひとり黄昏ている荒垣の元に、ストレガの3人が歩み寄る。

ストレガの姿を見たたまり場の人間は、蜘蛛の子を散らすように立ち去って行った。

「ん……？」

「こんばんは。お元気そうで何よりです」

タカヤが荒垣にそう声をかける。

その表情は酷く冷たく、感情を感じさせない。

「今回分の制御剤や。受け取りい」

ジンが前に出て制御剤を投げて寄越す。荒垣はそれを器用にキャッチすると、まだ立ち去らない三人に頭の中ではてなを浮かべる。

「そう言えば彼ら…また1人、面白い仲間を加えたようですね。…もとい、アレは1人ではなく、1つかな？」

「別に興味ねえ」

タカヤの言葉に心底興味が無い、といった風に返事を返す。

実際、あまり興味は無い。荒垣自身、彼らの活動に戻るつもりはまったくないしできることもないからだ。

「あなたから聞いたこと…本当のようですね。彼らは本当にやる気のようにだ」

タカヤが荒垣から聞いたこと——それは、『特別課外活動部が大型シャドウをすべて倒し影時間を消そうとしている』という事だった。

前回の薬の受け渡しの際に、荒垣は半ば脅しのようにその情報を吐かされたのだ。

「まったく嘆かわしい…」

心底嘆かわしいと言わんばかりにため息混じりにそう吐き出したタカヤ。

「これでは私たちも、立たない訳にはいきません」
「！」

「彼らがなにをしようと構わない…力の使い道は持ち主が決めることです。しかし彼らは影時間を消すと言っている。それは力そのものを否定することです」

力の否定。

それは、タカヤ達ストレガの、桐条によって生み出された人工ペルソナ使用の存在意義の否定だった。

「それだけは、何があっても許容できません」

影時間への適性とペルソナ能力の喪失は影時間を主に生きてきた彼らにとっての死を意味する。彼らはまだ知らないが、力と適性を喪

えば影時間に関する記憶もなくなってしまふ。

そうなると、彼らの記憶も少くない量が消えてしまうことになる。それは、実質的な彼らの『死』とも呼べることだった。

そんなこと、許されるわけがなかった。

「好きにすりゃいい…」

そう言つて、荒垣は立ち去ろうとする。

「待ちや」

ジンのその声に、荒垣はぴたりと足を止めた。

「お前…どないする気や。知つとるで。戻つて来いて、誘いが来とるやろ」

「ムカつくぜ、このストーカー野郎が」

「わしらはアイツらを止める。ナギサもあそこにおるけど関係ない。こないだ薬渡したときにそういう『約束』になつたからな」

「ナギサ…？ 誰だ、そいつ」

ジンの言葉に荒垣は疑問をぶつける。特別課外活動部にはナギサという人物はいない。

そんな荒垣の疑問に、タカヤが薄笑いで答える。

「ああ、あなたがたはナギサのことを『三上優希』、と呼んでいるのでしたね。それは失礼」

「!! 三上、だと…!? 待て、薬を渡したつーのは…!」

「せや、わしらやお前の飲んでるのと同じ、ペルソナの制御剤や」

ジンの言葉に荒垣は大きく目を見開いた。

「どういうことだ！ なんでアイツがそんなものを飲んでやがる…!」

「あなたと同じですよ。彼も、ペルソナの暴走を起こした。それだけです。幸いにして彼自身以外に被害は無かつたようですがね。しかし彼にはずいぶん堪えたようで、すぐに薬を受け取ってくれましたよ」

「……アイツは、それでも戦つてるのか…」

「まあ、彼があそこに縛り付けられている理由はそれだけではないんですが」とタカヤは内心ほくそ笑む。

そんなタカヤの内心を知らない荒垣は俯いた。

「オイ、アイツらに味方する言うんやったら、真つ向カタキ同士や…ええんか？」

気持ちの揺らぐ荒垣に、ジンが追い打ちをかけた。

しかし、荒垣には戻る理由がない。

優希が薬を飲みながらも戦っているという話を聞いて揺らいだ気持ちを振り払った。

「前にも言ったろ。俺にはもう、関係ねえ…」

荒垣はそのまま立ち去っていくのをストレガの3人は見送る。

タカヤだけは、顎に手を当てて何かを思い出すように地面を見つめた。

（先日見たナギサからは…かのペルソナの気配が濃くなっていましたね…もしや条件は、『大型シャドウの捕食』だけではない…？ まさか）

7 / 26 (日) 昼

今日から夏休みだ。

明日からは湊が運動部の特訓だし、8月1日からは奏子が八十稲羽という土地で1泊2日の合宿に行くらしい。

それぞれのお弁当をつくろうかと思ったがこの暑さだ。痛んでしまっではいけないので声かけだけにとどめることにしようと思う。

ちなみに、天田くんが今日から入寮らしく部屋の掃除や荷物運びなどを手伝った。

それでも小学生にしては少ない荷物ばかりで、これから増えるとはいえ毎回心配になる。

荷物が少ないと言えば湊も少なかったがいまではヒーホーくんとジャックフロスト人形だったり柿の実だったり変なものが部屋に増えている。

ある意味これも毎回恒例だが一体なにをしてるのか不思議だ。

奏子の部屋も同様に変なものが増えている気がするのかもしれない。

たないと割り切った方が良いのだろうか…？

7/29 (水) 夜

神社前

今日は確かコロマルがイレギュラーシャドウに襲われる日だ。

水曜日なので神条さんに会いに行きたかったが影時間にコロマルが襲われるためにその予定をキャンセルし、なるべく今日はコロマルの傍にすることにした。

「コロマル、今夜は俺と居ようね」

「ワン！」

そう語り掛ければ、わかつたとしても言うかのようにコロマルは一声吠えた。

時計を見る。今は11時50分。あと10分だ。気は抜けない。

召喚器をホルスターに入れて持ち歩いて職質されても困るのでもって来ていない。一応、屋久島の時のように連続召喚チキチキ耐久デスマーチさえしなければ、薬を飲んでいようが召喚器なしでもペルソナを召喚できる事は確認済みだ。

召喚器を使うよりかは少し疲れるがその程度、許容範囲内である。

時計の針が11時59分になり、秒針が59秒を指した。

1秒後、世界は一変する。

「ワン！ ワン！」

「あの足音、コロマルにも聞こえてるよね。——こっちに来るみたいだ」

ついに影時間になったがそのまま神社前で待機する。

守るべきはコロマルとこの神社なので場所を変えてなんて戦えないし意味がない。

遠くの方からズシンズシンと大きな足音が近づいてくるのが聞こえる。

恐らくは剛毅のシャドウ・激震のギガス。シャドウの癖に筋肉モリ

モリの変態マツチヨマンだ。

ちなみにシャドウの癖に魔法や重火器の類は使用しない肉体派。ガチムチともいう。

「ウー……」

そして見えたその姿にコロマルが唸る。

ビンゴ。相手は何の変哲もない激震のギガスだ。

「ワン！ ワンワン！ ワンワンワン！」

威嚇するように吠えるコロマルの前に立つ。

たしか、コイツの弱点は電撃属性と祝福属性——ハマなどだ。ホワイトライダーのゴツドアローで一撃だろう。

そのまま、近づいてくるギガスを睨み付ける。

「射殺せ！ ホワイト——」「なんだよ……なんだよこれ……！」天田、くん……？」

ホワイトライダーを召喚しようとした瞬間、聞こえてきた声に集中と注意がそれた。

形作られようとしていたホワイトライダーが消え失せ、そのまま収束する。横を向けばそこにいるはずのない天田くんが呆然といったように立ちすくんでいた。

どうしてここに、天田くんがいるのか。そんな考え事を一瞬でもしてしまい、隙が出来てしまう。

「がっ……!?!」

その逸れた瞬間を見計らい、その強靱な拳で殴り飛ばされ、階段にたたきつけられた。

「ウー……バウツ……！」

痛みとぼやける視界の中、コロマルが唸りギガスに跳びかかっているのが見える。

ダメだ。このままだとコロマルが怪我をしてしまうし最悪の場合、まだペルソナに覚醒していない天田くんもやられてしまう。

「三上さん……!?! まさかコロマル、神社を守って……うわっ！」

天田くんがマーマヤに覆いかぶさられる。

——立たなくては。助けなくては。

よろめきながら、立ち上がる。

ただ、天田くんにダメージを伝播させずに倒せる技を覚えたペルソナを自分が持つているかと問われれば、厳しいものがある。

悩んでいる暇なんてないのに、巻き込むことを恐れてしまい、ペルソナが召喚できない。

「はあ…はあ…！ くそっ…！」

【アギ】

最悪、殴りかかってやろうかとヤケクソになった瞬間、炎がマージャを焼いた。

マージャはすぐに消えて、その背後にはオルフェウスを召喚した湊が立っていた。

「み、など…？」

「コロマル…！ 優希…！」

何故湊がここにいるのか自分にはわかっていないので不思議な顔をしてしまう。

そんな中、コロマルに噛みつかれたギガスはコロマルを振り払おうとその大きな腕を振り回し、コロマルを投げ飛ばした。

「キャウンッ！」

「うわっ！」

投げ飛ばされた先には湊が。

コロマルを綺麗に受け止めた湊は尻もちをついて召喚器を手放してしまう。

くるくると地面の上を滑った召喚器は、天田くんの足元へと転がった。

「まさか、コイツが…コイツが母さんを…？」

呻くように何かつぶやいた天田くんに近づいていくギガス。

ホワイトライダーを召喚しなくては、と集中するも、痛みがそれを邪魔して許さない。

痛む身体を抑え、盾くらいにはなろうとギガスの横を滑って天田くんの横へと転がり込んで抱きかかえる。

ギガスはそんなこともおかまいなしに拳を振り上げ、自分ごと天田

くんを潰そうとしてくる。痛みに備え、きつく天田くんを抱きしめて目をつぶった。

「っああ、かあ、さ…ん…？　ちがつ、あ…みかみ、さ…う、うああああああああああああ——ッ！！！！」

その瞬間、天田くんが叫んだ。

——そして、召喚器を掴んで、額に当てて引き金を引く。目に眩しいくらいの青い光と力の奔流が渦巻き、ギガスの拳を防いだ。

形作られたのは、車輪のようなものを挟んだ黒い人型——復讐の女神の名を冠するペルソナ・ネメシスだ。

「くっ…い…」

天田くんがギガスをにらみつけると同時に、ギガスをお札のようなものが取り囲む。

【ハマオン】

祝福属性の即死効果を持つ魔法であるそれは、ギガスに張り付くと一瞬にしてその姿を消し飛ばした。

「はあ…はあ…やった…やれたんだ…」

息を切らせながら自分に抱えられた天田くんを離しつつ、湊たちの方を向いた瞬間、それが目に入る。

「——避ける湊！」

声を張り上げる。

湊の後ろにもう一体…いや、激震のギガスの上位互換である闘魂のギガスが湊とコロマルに向かって腕を振り上げていた。

もう一体イレギュラーがいるなんて知らなかった。こんなことになるなんて、気を抜き過ぎていたのかもしれない。

「…っ！」

湊がこちらの声に反応して振り向くも、動けそうにない。

湊が死ぬ。殺されてしまう。そんなこと、許していいはずがない。

「うおおおッ！　斬り裂け！　『レッドライダー』！！」

もはやそれは集中もへったくれもない無理やり引き摺り出すような召喚だった。

ぐっそりと、精神力が削られるような感覚がして意識が飛びそうになる。

それでも何とか形作られたレッドライダーはその剣を横風ぎに払い大きな風の刃を闘魂のギガスへとぶつける。

【真空刃】

戦いのときに自分の腹を裂いたそれが、ギガスに直撃し、容赦なくダメージを与えた。

しかしまだ、相手は膝をついただけで倒れない。

「もう一度…消えるまで何度だつて撃つてやる…！ やれ」

フー、と息を吐く。

無理やりだろうがなんでもいい。目の前の、湊とコロマルを害そうとしたこいつだけは、完膚なきまでに叩き潰さなくてはいけない。

そうでもしなくては、自分の気が収まらない。

【コロシの愉悦】

【チャージ】

レッドライダーの虚ろな眼窩がキラリと光る。

そして、カカカと特有の歯を鳴らす音を立て、剣を振り上げた。

【テラーソード】

力を増したレッドライダーの長剣が闘魂のギガスの耐性をぶち抜いて斬り裂き消し飛ばす。2発も耐えられないのかという嘲りのような感情と、安堵がないまぜになって不思議な感覚に陥る。

昂っているような、そうじゃないような、そんな感覚だ。

これは恐らく血の気の多いレッドライダーを使ったせいかもしれなくて勝手に決めつける。

血の気の多さで言えばホワイトライダーも負けていないと思うがそういうことではないっぽいのでこれはレッドライダーのせいだ。そういう事にしておこう。

…なんだか心の中で抗議の声があがった気がした。

「天田くんも、湊もコロマルも怪我はない…？」

「…三上、さん…はい、なんとも…」

「僕とコロマルは大丈夫」

「ん。じゃあ、ちょっと休憩してから寮に帰ろう…ごめん、情けない話だけど…俺がしばらく立てそうにないや…」

苦笑して石垣に凭れこむ。

背中の痛みは打ち身程度なので息をしたら少し痛いかな、と言った感じで動くのに支障はなさそうだ。

息を深く吐いて昂りと疲れを追い出す。どっと感じていなかった疲れが身体を襲って今にも寝てしまいそうになるがここで寝たらまたシャドウに襲われかねない。身体と眠気に鞭を打って立ち上がる。

「…もう大丈夫。帰ろっか」

「影時間に対応できる犬ってそんなのアリ!？」

「ハツハツハ…」

「よしよしコロちゃん、いい子だねー」

「ワン！」

「お兄ちゃんは打った背中見せて！ 湿布貼るから！」

「ありがとう、流石に背中には手が届かないから…頼むよ」

「うわ…青あざになってる…」

撫でられるコロマルの横でブラウスをたくし上げて背中を見せる。

どうやら青あざになってしまっているようで奏子のドン引きする声が聞こえたあと、ばちん！と湿布が貼られる。

「いてっ！」

「湊！ 乱暴にしちや駄目だよ！」

「勝手に無茶する優希にはこれくらいでいいんだよ。骨折れてたらまた待機してもらうだけだし」

絶対零度の視線が突き刺さる。

どうやら、湿布を貼ったのは奏子じゃなくてなぜか不機嫌な湊らしい。

「な、なんで怒ってるんだ…?」

「自分の胸に訊いてみれば?」

理由を答えるつもりはないらしく、一刀両断されてしまう。

正直、原因に心当たりがありすぎてどれが湊の怒りのポイントなのか見当がつかない。

「…お手上げ侍だ」

「こういうときだけ順平の真似しても駄目だから。優希だって馬鹿じゃないんだから考えればわかるでしょ。なんで、僕が怒ってるのか」

「う…コロマルと一緒にとはいえ影時間までに俺が帰ってこなかったことと、応援呼ばずにシャドウと戦闘したことと、召喚器を持たずに歩いてまた召喚器なしで無理やりペルソナを召喚したことと、寮にここまで怪我を黙ってたこと…?」

とりあえず今回の事だけに限り思いつく要素を羅列する。するとみるみるうちに奏子の顔は驚愕に染まった。

「えっお兄ちゃんそんなことしたの!? そりゃ湊も怒るし私でも怒るよ! もし湊がたまたま寮を出た天田くんを追っかけなきゃ、お兄ちゃんもコロマルも天田くんも大けがしてたかもなんだよ!」

「はい…」

「ごもつともです。」

でも怪我のことは正直寮についてからきちんと申告したんだし問題ないと思ってる。

確かに、1人で何とかできるといふ甘い考えは捨てた方が良いのかもしれない。天田くんに覆いかぶさったマーマヤに対して巻き込むことを恐れて攻撃できなかった自分がいた時点で、1人では何にもできないという証明にしかない。

「そもそもイレギュラーが起こるのがわる「イレギュラーは起こるものだよ、優希」…わかった。気をつける」

「その言葉何度目…? ま、いつか…お兄ちゃんが単独行動するのは今に始まったことじゃないし…」

2人にこうして怒られるともう何も言えない。

散々絞られ、美鶴さんにも「このような無茶は2度とするな」と釘を刺されてコロマルにも『礼は言うがこのような無茶は頂けない』といつているであります」とアイギス翻訳で苦言を言われてしまったの

で大人しくしていようと思う。

ただ、自分が少し背中を打ったくらいで他には誰も怪我をしていないという現状に、自分は満足していた。

「自分の、使命は…東京を、人の生きる世界を…守護すること…！」

黒い泥のようなものにまみれて消えかけの仲魔を前に、満身創痍の男は刀を杖にして立ち上がる。

「あくまでも使命に生きるか！ ライドウ！ クハハハハ！ 人形のような貴様にはそれが相応しいだろうな！ だが結果を残せなくては無意味だ」

「いや…今までは、そう思っていた。けど…今は違う…！ おれは、おれ自身の意思で守りたい…！ 例え何度裏切られるとしても、そこにある人の温かさは変わらない。遺るものはそこにきつとあるから…！ そんなみんなの想いを守りたい…！ だから、」

「だからなんだというのだ！ 人は愚かで忌まわしく汚い存在だ！

その事実を直視して絶望しろ！ 貴様にはろくに戦える仲魔はもう存在しない…！ 抵抗などするだけ無駄だ！ 苦しみ悶え、世界を救えなかったという結果だけを抱いて死んでいけ！」

杖にしていた刀を地面から離す。

「…14代目が出会ったという供俱璃の媛…彼女らは…いや、彼女は”、身体に膨大なMAGを溜める蠱毒の器だった。人の温かさに触れた彼女は…14代目を含む大切な人たちを守るために、その身を呈して異星より来たりしかの邪神を祓う剣と化したという」

「まさか、貴様…！ あの媛と同じことを…！」

「ああそうだ。けど、お前を倒すのはおれじゃない。おれと、おれの仲魔と、おれに関わった総ての存在の想いだ。おれは…その為の祈りになろう。みなを守る、祈りになろう…！ その為なら、この命惜しくはない！」

ちらり、と男は後ろを見る。

そして、腰に着けていた管を1本外し、中から仲魔を召喚する。

「――、今までありがとう。こんなおれに最後まで、ついてきてくれて。でも、おれはもう帰って来られないだろうから。きみだけでも、逃げて、自由になって…それでいつかゴウトに伝えてくれ。この管の中に、しばらく単独でも活動できるだけのMAGは詰めてある。…大丈夫。おれは、救うよ」

洩る仲魔に向かって笑いかける。

「だっておれは、使命に生きることよりもみんなが生きて笑っていられることの方が…大切だってわかったから」

「させぬ!」

「それはこちらの台詞だ」

男は迫る泥を切り伏せ、仲魔が走り去るのを見届ける。

そして、刀の切っ先を自らへ向けた。

「命が惜しくはないのか! もし自刃し、私を倒せたとして、貴様は己が守った後の世界も見ることが出来ぬのだぞ!」

焦ったように先程とは正反対のことを泥が叫ぶ。

まるで、思い通りにいかないと駄々をこねる子供のように。その先になにがあるかを知っているように。喚び出される存在モノが何か知っているように。

「言っただろう。惜しくはない、と。おれがいなくなっても、おれの想いは誰かが継いでくれる。それはきつと、どんな絶望の中でも消えることの無いものだから。…おれの体質が、魂が、特別なものだったのは、このためだったんだってやつと分かった。だから、お前にも感謝するよ。」

――「ありがとう」

そうして、泥に向かって酷く穏やかな表情をした後、切っ先が胸へと吸い込まれる。

「葛葉ライドウウウウウ!!! 貴様ア! 最後の最後で筋書きから外れるなど、認めぬ! 認めぬぞおお!!!」

倒れゆく男を見て、泥は痲癩を起こしたように発狂し、叫ぶ。

泥となった者の拵えた筋書きシナリオ通りに動くだろうと思われた男は、最

後の最後でとんでもないどんでん返しをしてみせたのだ。

そんなもの、それに認められるはずもなく。

まばゆい光が、空間を満たす。

祈りによって喚ばれたもの、それは——ひとつの光だった。

『我は、総ての者の背後にありて究極で不変の現実——宇宙^{犠牲}の力そのものである。 扱って、ここに奇跡を起こそう』

——かくして、奇跡は成り世界は救われた。

ストレガ（7／30～8／6）

7／30（木） 影時間

ぱちり。目が覚める。

視界に広がるのは自室の暗い天井。

「優希」

声がする。

聞き慣れた、それでいて2ヶ月ぶりくらいに聞いた懐かしい声だ。

「——モルフエ？」

声の方に視線をやればベッドのすぐ横に、何も変わらないモルフエが立っていた。

「ふふ…もうすぐ、だね」

「あ、ああ、そうだね…」

小さくはにかみながら頷いたモルフエに頷く。まるで、先月出てこなかった事やそれ以前の心配したような表情が嘘のようにその顔は明るい。

そんなウキウキしている様子のモルフエの言う、もうすぐというの
は十中八九大型シャドウ戦の事だろう。

「もう我慢しなくてもいいって、すてきだね」
「？」

モルフエの言葉の意味が分からない。

首を傾げる。今日のモルフエは別の意味で何か変だ。

「ぼくたちね、いっぱいいたべたからすこしだけぼくたちがなにかおも
いでしたんだ。でも、ひみつ」

部屋の中を踊るようにくるくるとまわりながら、熱にうかさされたよ
うに酷く上機嫌なモルフエは笑う。

「優希のことは、ぼくが、まもるから。だから、優希はなにもかんがえ
なくていいんだよ。だいじょうぶ、きつとぜんぶうまくいく。優希が
つらくなって、ないて、くるしむひつようなんで、ひとつもなかった
んだ」

モルフエの冷たい手が首筋に触れ、撫でるように滑る。

「だから、優希は優希のまま置いてね？　なにも、かんがえるひつようなんてないから。そしてそのまま、なにもおもいださないで、なにもしらないで、ぼくたちとずっとずっと一緒にいるんだ」

ぞつとした。誰だ、これは。

こんなの、俺の知っているモルフェじやない。

これは、モルフェじやない。

「なにもこわがることなんて、ないんだよ。だいじょうぶ。ぼくたちに、ぜんぶゆだねて、目を閉じて、こんどこそぼくたちといっしょにしよう。あんな身体を壊すようなくすりなんかもやめちやえばいいんだ。：これまでなんどもなんども兄さんとそのお気に入りじやまされたけど、もう離さない。にどと、離さないからね」

尋常ではない執着の色を見せるモルフェになにか言わないと、と思うのに急激に抗えない眠気が襲う。

瞼が勝手に下がって意識がボンヤリしてくる。

「ごめんね…無力なぼくを、ゆるして」

意識を失う前に見たのは、いつもの、泣きそうな表情のモルフェだった。

8 / 5 (水) 夜

神条さんに会いに、エスカペイドへと向かう。

明日は満月の日だが先週会うのをすつとばしたので今週くらいは会っておかないといけないと思ったからだ。

エスカペイドにつくと、いつもの壁際に神条さんが立っていた。

「少年。久しぶりだな」

「ご無沙汰してます」

頭を下げる。

この人に会うと酷く安心するのは何故なんだろうか。すこし懐かしい感じがするというか、親近感というか、そんなかんじのものが浮かんでくる。

「忙しかったのかね？」

「まあそんな感じですよ」

「成程。失礼…」

神条さんが近づいてこちらの肩の近くで何かを掴んで握りつぶすような仕草をした後すぐに離れた。

「ゴミがついていたようだ。取っておいたよ」

「あ、そうなんですか。ありがとうございます」

「…随分と大きなゴミが、ね」

「？」

含むような言い方をする神条さんの言葉が不思議だが、物書き特有の言葉の綾とかそういうものなのだろうか。

「さて、今日は『死』についての話でもしよう」

「死について、ですか？」

「ああ、とは言っても聖書の話だけね。ヨハネの黙示録に記される四騎士のうちの一騎。その話だ」

なんとというか、とてもタイムリーな話ではある。

黙示録の四騎士のうち2体とやり合ってペルソナとして持っているものでこれほどまでにぴったりの話題は無い。

「七人の天使——彼らはトランペッターと呼ばれ、それらがラツパを吹いた時が終末の始まりだというが、その前に子羊が七つの封印を開封するのが”彼ら”のやって来る合図だ。子羊というなんとも人畜無害そうな存在が、死を運んでくる者たちがやって来る原因になるのは、ある意味残酷だろう」

「はあ…」

神条さんがニヤリと笑うが笑うポイントなのかわからない。

「第一の封印が解かれると、白き馬に乗った騎士が勝利の上の勝利を得ようとして出ていく。次に第二の封印が解かれ、辺りは赤い馬に乗った騎士によって戦争がもたらされ血にまみれる。第三の封印が解かれると、黒い馬に乗った騎士が食料を制限するための天秤を使い、地上に飢餓をもたらす。

そして第四の封印が解かれたとき、^{ハデス}黄泉を従えてそれはやって来る。青ざめた馬に乗った”死”そのものだ！」

神条さんは一気に話すと手に持ったグラスの中のカクテルをひと飲みした。

今は第二の騎士であるレッドライダーまでを退けているが、あと二体残っている。しかも、神条さんの話している通りの存在なら、第四の騎士である青ざめた馬に乗った騎士とやらはアスと同等かもしれない。は似て非なる存在なのかもしれない。

一筋縄ではいかなさそうだ。

「さて、その第四の騎士は地上の人間を死に至らしめる役割を持つ。その騎士が現れると戦争・疫病により人は死に至る…それが現れるだけで、だ。面白いと思わないかね？」

「面白くはないですね…だって、人が死ぬんですよ…？」

「正直で結構。きみは人の死を忌む普通の人間の感性を持っている。それでいい。私のように麻痺してはいけない」

神条さんの意見を否定したというのに、なぜか彼は満足そうだ。

「先ほど言った四騎士が現れる原因となる封印を解いた“子羊”だが…キリスト——救世主^{メシア}を象徴しているのではないかなんていわれている。だが、この記述があるのはヨハネの黙示録とヨハネによる福音書だけだ。もし本当に子羊が救世主の暗喩だというのなら、なんとも皮肉なものだ。世界を救うべきものが、世界を滅ぼす原因になるのだから」

もう一度、神条さんはグラスのカクテルを口に含んで息を吐いた。

「さて、話は変わるがきみは10年前にウワサされた、『噂が現実になる』という話を聞いたことはあるかね？」

「すみません、幼かったのでそういうのはあんまり…」

「ふむ…そうか」

神条さんの問いかけに、首を横に振る。

10年前。丁度記憶がすつぽり抜けていたのもあって分からない。

噂といえば確かに家のある御影町の隣の市である珠？瑠市が浮いたとか浮いてないとかその周辺で見たことも無い怪物を見たとかという話が、今から10年前——事故のあった年に飛び交っていたというのは幼い頃に養父母や他の人から聞いたことがある。ただそれよ

りも、ポートアイランドでの事故の方が大きく取り沙汰されていたし、噂が現実になるだなんて話は聞いたことがなかった。

「まあいい。そういうこともあったのだと、頭の隅にでも留めておいてくれたまえ」

「はい」

「その中にね、『アドルフ・ヒューラーが復活し、ナチス残党を率いて仮面党と呼ばれる集団と衝突し、ラスト・バタリオンを起こした』と言うものがあつたのだよ」

なんというか、ブツとんだ噂だ。

本当に、そんな噂があつたら桐条の起こした事故なんてメじやないほどの死者がでていいるはずだ。やはり、噂は噂という事で神条さんはこちらをからかっているんだらうか。

「そしてアドルフ・ヒューラーと言えば聖槍ロンギヌスを探させ、その手に収めたという逸話の他に、『聖杯』を探し得るために他の者と争ったという陰謀論がある。聖杯は最初、病氣治癒などの奇跡をもたらす聖遺物と語られていたが後にケルト神話などの伝承と合わさって万能の願望器のような扱われ方をするようになったのだ」

神条さんは天を見上げグラスを傾げるも、その中身を回すだけで飲むとはしなかった。

「さて、そんな聖杯だが、ヨハネの黙示録にもその存在を持つ物がいゝる、と言つたらきみは驚くだらうか」

「…わかりません」

「なるほど。わからない、か。聖書や神話に明るくない普通の人間はその反応をして当然だらう。杯を持つもの、それはバビロンの大淫婦、七つの首を持つ赤き獣に跨るマザーハーロットと呼ばれる女だ。七つの災いの後に来たりし彼女のそれは、聖杯と言つても聖なるものではなく穢れて濁つたものだがね」

そしてこんどこそ神条さんはグラスの中のカクテルを飲み干した。

神条さんの話の意図が分からない。

もしかしたら、小難しいはなしなだけで、別の意図など無いのかもしれないので深く考えないことにした。

幾月と腹の探り合いを繰り返したせいで勘ぐりすぎるようになってしまったのは悪い癖だ。

そう思うと、なおさらに特別この話に何か別の意味があるようには思えなかった。

「さて、そろそろ夜も更けてきた。きみはもう帰るべきだ。…夜道に、気をつけたまえよ」

ニヒルに笑った神条さんに見送られ、エスカペイドを出す。

難しい話だったが、そのおかげで少し知識が増えた気がする。

8 / 6 (木) 影時間

作戦室

「さて…また今月も満月の晩が巡ってきた訳だな」

「山岸、どうだ？」

「はい、確認できています。やはり今回もシャドウの反応があります」
作戦室のソファアールの上で、いつも通りの作戦会議もとい大型シャドウの場所を山岸に訊く会話がされる。

「フ…そうこなくちな」

山岸の言葉に、真田くんがやる気十分、といった様子で気合いを入れる。

「場所は、巖戸台の北の外れにある、廃屋が並んでる一帯です。ただ、反応は10メートル以上の地下から確認されてて、それがちよつと…」

「単に建物に地下があるって事じゃないの？」

首を傾げる山岸に、岳羽が一般的に推測される答えを示す。

しかしそこに、アイギスが口を挟んだ。

「港湾部北側には、建築時に地下10メートルを申請している建物はありません。ですが、ずっと以前には、陸軍が地下施設を置いていたという記録があります」

「陸軍？…そうなの？」

「彼女には、この辺りの地形や建築に関する情報が一通り記録されて

るんだよ」

岳羽の疑問に幾月が答える。一介のロボット（と言うのも変だが）であるアイギスにそんな情報を与えるというのは情報管理がかなりガバガバかと思うが桐条グループの力をもってすれば難のないことなのだろう。

「もつとも…放置していたので最後の更新は10年前だが」

「10年前であります。ちなみに、その場所には大正20年ごろに帝国陸軍が使用していたとされる戦艦の一部が保管されているという情報もあります」

「なんじゃそりゃ…つか、更新しようよ…」

伊織のツツコミが炸裂する。

たしかに、今まで放置していたとはいえ再起動したのだから情報の更新くらいは行ってもいいだろう。というか、作戦行動を円滑に行うためにも行うべきだと思う。

「で、結局どう解釈したらいいんだ？」

「じれったい、と言わんばかりに真田くんが山岸に訊く。

眉をひそめて困ったような顔をした山岸は、首をひねりながら口を開いた。

「詳しいことは、実際に行ってみないと何とも…」

「戦争の遺物、か…今回は、状況が未だ不透明だ。よって、山岸もシャドウの近くまで一緒に行ってもらうことにする」

「了解だ」

「了解であります」

真田くんとアイギスの返事を聞いて頷いた美鶴さんは立ち上がって口を開いた。

「では、行こう」

巖戸台・港湾部北 地下施設入り口

よくわからない道を抜けて、土がむき出しのトンネルのような地下施設の入口へとぞろぞろと足を踏み入れた。

「ターゲットはこの下みたいです。慎重に進んでいきましょう」
道は一本だけ。

警戒しつつ下り坂のようなそれを歩いていく。

——ヤ…ツ…

「？」

なにか小さな声があったような気がして立ち止まる。

「お兄ちゃん？」

「ああいや、なんでもない」

奏子に心配そうに呼ばれて、声は気のせいだったかとまた歩き出す。

洞窟のようなこの事だ。入り口である鋼鉄の扉をあげ放つているので風でも入ってきてそれが響いてるのではないか、とかそんな感じの事なのだろう。

「はつきりとはわからないのですが、一番奥で2つの反応が重なり合って、ひとつの大きな巨大な塊になっているようです。それにここは…戦時中に武器庫として使用されていたみたいですね…こんなに無造作に兵器が転がっているのを見るのは初めてです。全て…人を殺すために作られたものなんですね」

山岸がなにかを憂うように目を伏せる。

「生きる為に人が人を殺すなんて…そんな時代が過去にあったなんてとても信じられないです…あ、すみません。先を急ぎましょう」

まわりにごろごろと転がる人よりも大きな歯車や、武器や何かのパーツに思うところがあつたのだろう山岸の語りに、皆神妙な顔をする。

たしかに、生きる為に人が人を殺す時代はあつた。しかし、今もそうじゃないとは誰が言いきれなのだろうか。

日本だけじゃなく、世界という視点で見れば、今でも戦争は起こっているし誰もが生きる為に殺し合い、戦っている。

日本が特別平和なだけなのだ。悪魔やシャドウというひとならざるものがあるにしても、普通の人間なら人と人の衝突とは無縁だ。

けれど、まだ特別課外活動部の皆はわかっていない。

ペルソナ使いの敵はシャドウだけではないという事を。時には、同じペルソナ使いだつて敵に回るかもしれないという事を。

おそらくそれは、ペルソナ使いが自分たちだけだろうという無意識から来ているものだ。タカヤ達ストレガの事を知れば、彼らが敵対すればそうはいかない。

タカヤ達は人を殺すことに戸惑いが無い。元々生死感が軽いのもあるが、そうしなければ生きていけなかったからというのもある。

それに対して特別課外活動部の面々が人を殺せるか、と言われるとNOだ。

コロマルとアイギスは論外として、天田も他の皆も土壇場になったその時、誰かを殺すという決断はできないだろう。

(……けどもし、本気でタカヤ達が皆を殺そうとしたら、その時は)自分が、守らないといけない。

たとえそれでタカヤ達を殺すことになつても。優先順位を間違えてはいけない。間違えるな、と自分に言い聞かせる。

——ヤソ：マ…ツヒ…
立ち止まる。

また声が聞こえたような気がした。

「三上、大丈夫か？」

「あ、ああうん、大丈夫」

美鶴さんに心配されるように肩を叩かれてはつとずる。

首を横に振って、先ほど聞こえてきた声のようなものを振り払う。シャドウと呼ばれているのかとも思ったがそんなものではないような、ここからのような、ここではないどこかで聞こえているような、そんな感じの声だ。

長い長い坂を下り、また大きな鉄扉の前に来た。

はて、ここにそんな扉はあったのだろうか。なんかこう、もつと洞窟の奥の大空洞みたいな感じじゃなかっただろうか。しかもなんだかこの先の空気がピリピリしている。シャドウの気配じゃない。それとは別の何かの気配のような、例えば、悪魔のようなにかの気配を感じた。

しかし影時間には悪魔はいないはずだ。影時間になるとモコイさんも忽然と姿を消すし、悪魔の気配もぱったりとなくなる。

だとしたらこれは、なんだ？

「この先が、一番奥の様です。ターゲットはその奥で私たちを待っているようです。準備はいいですか？」

「うん、大丈夫。いこー！」

今日のリーダーは奏子だ。

鉄扉を皆で押し開け、その隙間に身体を押し込むようにして中へ入る。

大型シャドウの姿は、ない。

「大型シャドウの姿はない、ね…？」

「シャドウの反応、ここからなんだよな…？」

「おかしいです…気配はここからしているのに…」

岳羽と伊織の言葉に山岸が首を傾げる。

それにしても、鉄扉の奥は洞窟のようだった通路とは違い、えらく近代的な、レンガ作りの壁で包まれた部屋のような構造になっている。

部屋の端には通気口と思われる穴が何か所かあいているが、今も使えるかどうかはわからない。

「罨じゃ…ないよね？」

奏子が不安そうにきよろきよろと周りを見回す。

周りには、戦艦の一部だったろう砲身の更に一部分のパーツやアンテナのようなものが無残に捨て置かれていた。

皆が皆、寄り添い合い警戒する。その瞬間、部屋の入口の方からパチパチと拍手するような音と足音が聞こえてくる。

「…正確な情報の把握、お見事です」

その声に、自分を含む全員が一斉に入口へと振り向いた。

そこにいたのはタカヤとジンだ。チドリは別の場所にいるんだろうか。

「誰…!? 私のルキアには、今の今まで何の反応も…！」

「貴方たち、誰っ!？」

奏子が警戒するように鋭く声を飛ばす。

「…ですが情報の使い手がいるのは自分たちだけだとは思わないことです」

奏子の言葉を見無視して、タカヤが語り出した。

「私の名はタカヤ、こちらはジン。『ストレガ』と、我々を呼ぶ者もいます」

「ストレガ…?」

「さて…今日までの、皆さんのご活躍、陰ながら、見せていただきました…聞けば、人々を守るための、『善なる戦い』だとか。ですが…今夜はそれをやめて頂きに来ました」

湊と自分以外の全員が目を見開く。

「そりやそうだろう。いきなり大型シャドウを倒すのをやめろ、なんて言われて驚かないわけがない。」

「犬に小学生にロボット…お仲間が随分増えたようですが、それは、ここが罪深い土地だからでしょうね。」

——タルタロスは今宵も美しくそびえている…」

今度は首を傾げる番だった。

確かにタカヤの言うことは酷くポエミーだ。意味が解らないものしかたないと思う。自分もいまだにタカヤの言うことは意味が解らない。

「それと、戦いをやめろってのと、何のカンケーがあんだよ?」

「噛みつくように伊織がきき返す。それにジンが手榴弾をお手玉にしなから答えた。」

「簡単なこつちや。シャドウや影時間が消えたら、『この力』かて、消えるかもしれん。そんなん、許されへん」

「『この力』…? まさか…ペルソナ使いなのか!?!」

「『ご名答。と言っても我々のものはあなたがたとは違い、押し付けられたものですがね』」

「押し付けられた…おい、それって、人工ペルソナ使いじゃネーの!?!」

あの、100人くらいいたけど生き残りは三上センパイ以外ほとんど居なくなっちゃまったって言う…」

酷く忌々し気に語るタカヤに、伊織が驚いて口走る。

ああ、いや、いま、伊織は何と言った？ おれが、人工ペルソナ使いの生き残り…？

そんな、まさか。

「順平！」

「あつやべ…ッ、わりい！」

「そこまでご存知でしたか。ええ、そうです。我々は桐条によって望まない力を押し付けられ、虐げられ、殺されかけたかつての子供です。

——ねえ、ナギサ」

タカヤの言葉に、思考が、まとまらない。

気持ち悪い。

頭が酷く痛い。

自分は、違う。自分は、ナギサじゃない。

「はあ…はあ…はあ…ちが、う…俺じゃない…」

思い出したくない。

見たくない。

忘れろ。忘れろ忘れろ忘れろ忘れろ忘れろ。

思い出すな思い出すな思い出すな思い出すな思い出すな思い出すな思い出すな思い出すな。

頭の中で警鐘がガンガンと鳴る。

「まあ、いいでしょう。ナギサ、嫌でも私のペルソナを見ればあなたは自覚するはずだ。はあああああああ!!!」

赤黒い光が、頭を抑えたタカヤを包む。

「来なさい——『ヒュプノス』」

その名前を聞いた瞬間、腹が、疼いた。

苦しい。息が、できない。

——だいじょうぶ。ぼくが、優希を守るよ。

苦しみの中、モルフエの声が聞こえた気がした。

「あああああああ!!!」 “ヒュプノス”!!!」

腹を抱えた優希がタカヤのペルソナと同じ名前を叫んで赤黒い光に包まれる。

禍々しい力の奔流。濃厚な「死」の気配にその場にいた全員が、ぶるりと身震いする。

そして、まるで、影から這い出るように『それ』は静かに姿を現した。

襪襦切れのような布に、湊のタナトスのような獣の頭骨。すらつとした足。凶暴な爪のついた腕。

「あれ、は…そんな…!」

天田が、その姿を視界に入れた途端目を見開いて息を飲んだ。

「——ッ!!!」

胴体だけが不自然に足りない『それ』は、虚ろな眼窩を光らせ、咆哮してタカヤの召喚した「ヒュプノス」に跳びかかる。

「なるほど、やはり元に戻ろうとしている。いや、更に大きくなるようにしている…? ……ッ!!」

冷や汗を流しながら後ずさったタカヤは、自らのペルソナに牙をむいた『それ』を注視した。

『それ』は頭骨の大口を開けて力を溜める。嫌な予感がしたタカヤは咄嗟に指示を出した。

「[ザンダイン]!」

「[アンティクトン]」

嵐のような風と、禍々しい魔力がぶつかり合う。

それにより、巻き起こされた土埃が視界を奪った。

「…かのペルソナが完全なものでは無くて助かりました」

タカヤは、ホッと息を吐いた。『それ』が出したものは本来ならばタカヤのヒュプノスでは相殺しきれないはずの威力を持つものだ。

しかしなおも『それ』は優希の意思に関係なくタカヤ達を敵視し、ヒュプノスに噛みつくこうとする。

「ちっ…敵に回すと厄介ですね…」

舌打ちする。

このまま戦い続ければ、『それ』に命を奪われかねない。

「ここは一旦引かせていただきましょう。藪を突くのはあまりよくなかったようだ」

ヒュプノスを消し、踵を返す。

だが、『それ』はそこで終わらなかった。

「——ッ!!!」

咆哮。

獲物を失った『それ』は迷うことなくタカヤへと肉薄した。

「狂犬が!!」

「あかん、タカヤー!」

腕が振り上げられる。当たればただでは済まないだろう。最悪、バラバラに切断されるようなその攻撃をタカヤは避けられそうにない。嗤う。ここで、終わるのならそれも定めだと。

「——だめ、だ。止まれッッッ!!!」

叫びに、ぴたり、と振り下ろされかけていた腕が止まる。

「ころ、すな…! 俺の、いう事を、聞け…!」

苦し気に腹を抱えたままではあるが、ギラギラと獣のような目をした優希のその言葉に、「どうして」と言いたげに不服を伝えて呻る『それ』。

「もう一度、言う。そいつを、殺すな。お前も俺のペルソナだというのなら…俺のいう事を、聞け…ッ!」

吼えるようなその声によく、『それ』は観念したように姿を空に溶かした。

「——礼は言いませんよ」

「…うるさい。もうどっか行け」

片手で頭を押さえて数回ほど振りながら投げやりにタカヤへと吐き捨てた優希は酷くぶつきらぼうだった。

しかし、この様子ではタカヤ達の事を思い出したようには思えない。

「つれない人だ。では、ナギサの言葉に甘えて我々は去るとしましよ
う」

「せいぜい、あがきや」

立ち去る瞬間、ジンは八つ当たりのように扉の横をガツン!と蹴つた。

「おい、待てっ！」

明彦が追いかけるも虚しくその鋼鉄の扉は音を立てて閉まってしまふ。

「くそっ…やられたッ!!」

「な、なあ…これってオレたち閉じ込められたんじゃ…」

しまった扉を叩く明彦に、青ざめた順平が呟く。

扉が閉まってしまった以上、別の出口を探さないといけない。そして何よりも、大型シャドウを見つけ出さないといけないのにそれすらもできなくなってしまった。

「ごめん、あいつが…あのペルソナが、この前、奏子と美鶴さんを襲ったやつ、なんだよな…もう暴走させないって言ったのに、俺は…また…」

湊に悔いるような声でそう告げた優希の顔は暗い。

だが、これも事故のようなものだ。順平がうつかり口を滑らせ、ストレガのタカヤが挑発し、それに呼応しただけのこと。

「いいんだ。だから優希…順平の言ったことは…」

「…？ 伊織が何か言っていたのか？」

「順平の言ったことは気にしないで」。そう告げようとした湊の耳に、心底不思議そうな兄の言葉が入る。

まるで、兄の中での発言がなかったことにされているようで気持ちが悪かった。しかし兄の精神状況を鑑みれば、最悪意識を失っていた可能性のあるトラウマを、忘却することにより無かったことにして乗り切るというのは当然の事ではないだろうかと考えた。

「…：…なんでもない」

そして、湊は目を逸らした。

「くっそー！ シャドウは見つかんねーし、閉じ込められちまうし、ストレガのヤローぜってーゆるせねー！」

順平が地団太を踏んだ。

それとほぼ同時に、風船から空気が抜けるような、空気が勢いよく噴出しているような音が聞こえてくる。

「な、なに!？」

「何の音?」

部屋にある通気口のようなものから噴き出したそれは瞬く間に地面に落ち、紫の煙となった。

「これ、上から…?」

戸惑う面々。

見上げれば、どこかにあるスピーカーから声が聞こえてきた。

『このまま去ろうと思ったのですがタダで言うわけにはいきません。せつかなので基地にあった物を利用してもらいました。私たちからのプレゼントです』

「これは…みんな吸っちゃ駄目!! 神経を麻痺させる毒ガスです!!」

ひとり、ペルソナ「ルキア」の中にいる山岸が叫ぶ。

叫びに皆反応して一瞬でその手で口をふさいだ。

「吸うなっっていうてもよー…!」

順平が困ったように呟いた。その横で、怒った顔をした奏子が静かに問いかける。

「どうして、こんなことをするの…!」

『決まっとする。さっきも言うたけど「影時間」を消されるのは困る。アンタらはわしらにとって邪魔なんや』

『あなた方は気付くべきだ。自分たちが影時間を知る前よりも今の方にいつそうの充実を感じていることに。あなた達のそれはエゴで「偽善」だ。そんな方々に、影時間を消してもらいたくはない』

『さて、長話はなんやしもうすぐやっこさんが「降りてくる」頃や。わしらは退かせてもらうので』

ジンのその言葉が聞こえた瞬間、大きな音を立てて戦車が一台降りてくる。

「戦車…!?!」

「シャドウが、戦車の装甲を身にまとって利用しているようです! えっと、敵タイプ、「正義」…じゃなくて「戦車」…あ、あれ? 見かけは1つなのに、反応が2つ…? こんなシャドウ、初めてです!」

「オイオイ、このタイピングでかよ…!?!」

順平がたじろいだ様に一步下がる。

毒ガスに大型シャドウとなるとかなり厳しい戦いにしかならないだろう。

「さっさと片付けて脱出するぞー！」

召喚器を構え、明彦がその引き金を引く。

横にならんだ奏子も、合わせるようにその引き金を引いた。

【ラクンダ】「いまだ！」

「お願い、ジーサー！」 【ジオンガ】

奏子のシーサーが防御力の下がった大型シャドウに雷を落とす。

一瞬ぐらつく大型シャドウだったが、すぐに体勢を立て直した。

「敵シャドウ、いまだ健在です！」

そして、戦車の上の砲身部分と下が分離した。

「なっ、分離だど!?」

分離した砲台部分は小さな甲冑を着て羽の生えたシャドウ正義ジャステイスに変化し、銃弾を放った。

「きやあ！」

「うわっ！」

急いで頭を下げる。が、その頭を下げた先は毒ガスが溜まっていた。

「力が…入らない…」

「天田くん、大丈夫!?」

「げほっ、やだ…これ…」

湊も奏子を含む特別課外活動部の誰もが、咳き込んでまともに立ってられないようだった。

何人かは武器を支えにすることによって立っているが、それでも万全とはいえない。

その隙を狙って、正義ジャステイスは奏子に狙いを定め、弾を発射した。

「——！」

「大丈夫ですか!？」

身構える奏子の前にアイギスが躍り出てその弾を迎撃する。

小さな爆発と共に爆発したそれを気にも留めずに正義ジャステイスは戦車とチャリオットチャリオットと再び合体して突っ込んできた。

「させません!」

「アイギス! だめ!」

アイギスがそれを抑える。

しかし、上の正義ジャスティスは抑えているアイギスを無視して再び砲身を奏子へと向けた。

「危険察知!」

アイギスから青い光が迸り、ペルソナ『パラディオン』が召喚されて何度もその砲撃の盾になる。

鉄に物が当たるような鈍い音と共に、それを防ぎ切ったパラディオンは姿を消した。

「だめだよ! アイギス、1人じゃ無茶だよ!!」

「アイギス!」

「貴方たちを守るのが、わたしの役目であります!」

奏子と湊の言葉に答えたアイギスの関節部から火花が散る。

「全リミッター、解放します…! 『オルギア』発動!!」

赤い、熱気のような光が放たれ、そのままモーターが回るような音と共にアイギスは正義と戦車ジャスティス チャリオットが合体した大型シャドウを投げ飛ばした。

壁へとその身体をめり込ませた大型シャドウは、砲身だけをアイギスに向けて乱射する。

しかし、それすらもいつもより速くなったアイギスには届かない。空中へと跳んだ彼女はそのまま指先の銃口を向けて銃弾の雨を降らせた。

そして降りる勢いを利用して、戦車チャリオットへと一撃お見舞いして着地する。

「すごい…」

あまりの速さとその身のこなしに、そうとしか言いようのない面々はただそれを見つめるだけだった。

だが、再び正義と戦車ジャスティス チャリオットはひとつに合体しようとした。

「させませ…あつ…」

「オーバーヒートか…」

アイギスが、突然煙を吐いて膝をつく。

“オルギアモード”は強力な分、デメリットが大きく、使うと一定時間オーバーヒートしてしまう代物だ。

つまりは、時間切れといったところか。

「予想外の…展開…です…」

「アイギス…!」

湊と奏子、2人が助けに行こうと前にのめるも、毒が回ってきたのかそのまま倒れてしまう。

「2人…とも…!」

「ぐ…」

召喚器も手放し、もはや意識も手放しかねない状況に、もはやこれまで、と思つた瞬間、横を影が通つた。

「……!」

それは落ちていた湊の剣をひつたくり、地を蹴つて高く飛びあがつた。

「はあー!」

大きく息を吸い込む音が聞こえる。

ジャステイス正義が狙いをアイギスからその人物——優希へと変えた。

「当たれええええええええ!!」

大きく剣を振り上げ、打ち出された弾の爆発をポベートルで吸収しながら落下する。

そのまま正ジャステイス義の部分に剣を突き刺し、また引き抜いて蹴つて離れた。

「……ちい、ここままでしても浅いか…げほつ…」

優希は一度咳き込んで、よろめきながら湊と同じように剣を杖にして立つ。

「これで…おわり…なの…?」

有効打が見つからない。その事実、天田はひとり、絶望しそうになった。

そのとき、

「——“カストール”!」

ドアを蹴破るような音と共に、馬のようなペルソナが乱入し、その勢いのまま大型シャドウを壁まで弾き飛ばした。

「……っ！」

天田が、また目を見開く。

「この、ペルソナは……！ シンジ……！」

明彦はそのペルソナ——「カストール」の主に見覚えがあるのか小さく呟いた。

開け放たれた扉から外の空気が流れ込み、毒ガスも一緒に抜けていく。

「……タナトス……！」

その隙を見逃す湊ではなく、何とか召喚器を手にとると引金を引いてタナトスを呼び出す。

呼び出されたタナトスは、ありつたけの魔力を溜め、一気に放出した。

【メギドラオン】

紫の炎と爆発が、大型シャドウを逃すことなく焼いていく。

これで倒せた、と思ったのも束の間、その姿は消えていない。

「な……!? あれだけ喰らってまだ……！」

「敵シャドウ、もう少しです！ でも、これじゃ時間が……！ 影時間が終わってしまいます！」

「チィッ！」

焦る山岸の声に、誰もが今回の討伐が失敗したことを悟った。

荒垣以外の誰もがもう、毒でまともに動けないのだ。だが、そうは問屋が卸さなかった。

「ヤソマガツヒィ……！！！！！！」

どこからか、声がした。

男のような、そうではないような、多くの声が重なったような声だ。

「ヤソマガツヒィィィィ！！！！」

虚空から現れたのは、気味の悪い巨大な顔だった。

大量の手を持ち、半分が焼けただけ、グロテスクな肉のような見た目のそれはお世辞にもシャドウとは似ても似つかない。辺りに、甘い

香りが漂う。

「新手のシャドウ…か!？」

「いえ、違います…けど、シャドウに怒ってる…?」

「ヤ…ソ…マガツヒツ!!!」

巨大な顔はそのまま大型シャドウへとのみしかかり、その巨体と手に持った斧のようなもので押しつぶした。なすすべもなく潰された大型シャドウはそのまま霧散し、消えていく。

あつけないその終わりに、皆は呆然と口を開けるばかり。

「ヤソ！ ヤソ！ ヤソマガツヒ~~~~~」

「なに…こいつ…」

「ヤソマガツヒ！」

嬉し気に勝利の舞を踊る巨大な顔に、岳羽がドン引きする。

ひとしきり踊った顔は、そのまま出てきたときと同じように虚空へと消えた。

「えと…みなさん、お疲れ様でした…毒の方はしばらくじっとしていれば抜けると思うので、じっとしててくださいいね…」

「幻覚、か…?」

結局、あの顔の事については皆が毒ガスのせいでみた幻覚というこゝとで片付けられてしまった。

「おい、生きてるか?」

荒垣が天田を起こす。

少しうめいた天田はしかし、嬉しそうに口を開いた。

「貴方は…また、助けてくれたんですね…ありがとうございます」

「礼なんていらねえ…」

照れたように天田の言葉にこたえる荒垣はまんざらでもなさそうな顔をしている。

その向こうで、よろよろと奏子と湊がアイギスに近寄る。

「大丈夫…?」

「うええ…アイギス、もう駄目かと思ったよお！ 痛いところない?」

「はい。機械に痛いなど言うのは適用されかねますが、わたしは七転び八起きであります!」

「はは、使い方、違うよそれ…」
苦笑するような奏子の声と共に、波乱の大型シャドウ戦は幕を閉じた。

IX 隠者

きつかけは些細なことで（8／6と8／7）

作戦室で待機していた幾月の元に、美鶴から連絡が入る。

「はいはい、僕だ」

「こちら、美鶴です。目標のシャドウは鎮圧しました」

「そうか。ご苦労様、戻ってくれていいよ」

「待ってください」

いつも通りのねぎらいの言葉をかけ、通信を切ろうと踵を返した幾月に待ったの聲がかかる。いつもならかからないその言葉に疑問を覚えながら幾月は通信機の近くへと戻った。

「実は、今回はそれ以外にも報告すべきことが。作戦中、`ストレガ`と名乗る者たちから、妨害を受けました。奴らの口ぶりからして、桐条の犠牲者である`人工ペルソナ使い`の生き残りかと」

「`人工ペルソナ使い`の生き残りだっ!?」

美鶴の発した`人工ペルソナ使い`の生き残りという言葉に、幾月は形だけ驚く。

「しかも、1人ではありません。適性を押し付けられたとはいえ影時間の中に平然と現れ、我々の事も知っているようでした」

「ううむ…」

情報を横流ししているのは自分だからそれはそうだろうね、と幾月は口に出すことはせず、思案するように呻ってみせた。

ただし、大型シャドウ討伐の邪魔だけは頂けない。それだけは、阻止されてはいけない。釘をさす必要があるそうだと幾月は考える。

「なにか分かるかもしれないし、僕の方でも調べてみるよ」

「お願いします。それと…もうひとつ報告が」

「なんだい？ 言っつてごらん」

また一段と声を低く、小さくした美鶴に幾月は優しく声をかけた。

「三上が…伊織がこの間の話を口走ってしまったこともあったのですが、ストレガにもなにかされたようでもまたペルソナを暴走させてし

まって…幸い三上自身が自力でそれを抑え、誰も怪我をすることなく済んだのですが、一応ご報告だけでもと」

その言葉に幾月はひとりで口角を上げる。しかし声色を変えずに美鶴へと聞くべきことを訊くに留める。

「ふむ…そのペルソナは、前となにか様子が違っていたかい？」

「様子…ですか…」

少し、思索するような沈黙が続く。

「…そういえば、姿が変わっていたような気がします。前は腕と頭しかなかったのに…今回は足が生えていました」

「そうかい。ありがとう。だいたいわかったよ」

美鶴から伝えられた報告に幾月は適当に返事をする。

ここでそれを聞いた理由をわざわざ言う必要はない。そんなもの、幾月にとっては無駄以外の何物でもない。

「――では、通信を切って帰還します」

「シャドウの危険はなくなったとはいえ、夜道は危ないんだ。気をつけて帰ってくるように」

「はい。ありがとうございます」

通信機の電源を切り、ほくそ笑む。

「…ハハハ、ハハハハハハ！ これだけ揃ってればもう逃げられない！ 聖杯」の中身が満ち、『予言』が達成されるときが楽しみだ…！」

『計画』は順調に進んでいるようだ、と思うと幾月は笑いが止まらなかつた。

この部屋にある監視カメラの録画は切つてあるためこの言動が誰かにばれることは無い。なに、後で機材の不調だという事にしておけばいい。

かつて失つたそれを雁字搦めにして逃げられないよう縛り上げ、再び手中に納める。

それが幾月の目的のひとつであり最終目標へたどり着くための手段であり、必要な物なのだ。

そのために、10年間様々なことをしてきた。

——どんな手を使っても。

8 / 7 (金) 昼

コンクリート剥き出しの部屋で自分は絶賛頭を抱えていた。

「昨日の今日!!! 敵に回らない限り仲良くしようって言ったのは自分だけどき!!! いくらなんでも早すぎるし現在進行形で俺たち敵対してる!!!」

「おつええツツコミすんなア、のう、タカヤ」

「そうですね。思っていたより元気がよくて結構」

「誰が!!! 原因だ!!! 思ってたん、の!!!」

「それはそれ、これはこれ、ですよ」

ストレガのアジト。

その一室で仲良くテーブルを囲みながら、昼ご飯を食べていた。

…いや、どうしてこうなったのか。

「ナギサ、その味玉ちょうだい」

「え、ああいいよチドリ…って違う!!! なんで俺は毒ガス撒いて殺そうとしてきた相手と仲良く昼飯食ってんの!!!」

「うるさい…」

「うっごめん…」

自分のどんぶりから味玉を攫っていったチドリに顔を顰められる。

正直、この敵対した翌日に街を歩いていたら強制連行されて突然「ゆでるタイプのレトルトのラーメンを買ってきて作れ。食べたいから」と言われて素直に買い出しをして作って昼飯を平然と囲んでいたらうるさくなつて当然だと思う。

いや、ラーメンを作り終えるまで抵抗しなかったというかそのことに気が付かなかつた自分も自分で相当絆されていると思つてしまつた。

優先順位は考えなくてはと決意したのはいったいどこのどいつだったのか。

「…というか、ジン…この二人の生活習慣とか色々…なんとかしよう

よ…」

「わいかて頑張つとるんやけどな…タカヤとチドリやし…」

「ああ…ごめん…苦勞してるんだな…」

ゴミ袋だらけの部屋を見る。

以前はなにもない部屋だと思っていたが、その時は頑張つてジンが片付けていたらしく、今回来たときにはそこらじゅうに空き缶やペットボトルやラビニール袋などが散乱していて汚部屋状態になっていたのでジンに了承を貰って慌てて片付けたものだ。ゴミ出しはしかたないのでやりそうなジンに頼もうと思う。

ちなみに、チドリの部屋は手を付けていない。女の子の部屋なので触れなかった。

部屋の中で黒光りするGが湧いていなかったただけでしたが、冷蔵庫には水とか栄養ドリンクとか冷蔵が必要な甘いものだけとおおよそ食料と呼べるものが入っていない事にも愕然とした。そりや体壊すし寿命も縮む。特にタカヤは霞でも食ってるのか。現在進行形でラーメン啜ってるから違うけども。

料理に関してはタカヤとチドリは論外。唯一の希望であるジンですらあまり料理が出来ないらしく、結局インスタントラーメンや出来合いのものを買ってきたり、コンビニ弁当が食生活のメインになっている。鍋と包丁があつたのが奇跡としかいようがない。しかし、——これではいけない。

恐らく、そんな義務感のようなものがあつたのだろう。だから、レトルトだろうがラーメンとその具材を買ってきて、野菜を刻んでぶち込むような手間もしたんだと思う。

そこまで考えて、日常生活の殆どの負担がジンに行っていないかと気がついた。

「…昼ごはん食べたらもう一回スーパーに行ってくる」

「は？…なんでや？…まさか、逃げるつもりとちゃうんやろな？」
疑いの視線を向けるジン。

そんなわけない。というか逃げたらこの三人の食生活が大変なことになる。

健康はまず食から、だ。

「食生活、不安。俺、作り置きして、冷凍庫、ぶち込む。お前ら、電子レンジでチンする。それ食う。俺、その為の食材、買ってくる」

「あ…す、すまん…」

思わずカタコトになって責めてしまいがジンは悪くないので咄嗟に謝る。

「あー…いや…ごめんジンは謝らなくていいや…不安ならジんがついてきても…って誰かに見られちゃまずいか…こつそり後つけるくらいならいいかな…? というか炊飯器もないのか。えつと白飯くらいはその都度買ってきても問題ないかな…スーパーに売ってるだろうし」

「すまんナギサ、ウチには電子レンジもないんや…」

「それマジで言ってる!?! …スーパーは後にしてまずは電器屋に行こう。それか、ジンはネット得意なんだから適当に安い電子レンジをネットで買おう。ネットなら届く日選べるし…」

おずおず、といった様子でジんから衝撃的な発言が飛び出してきたのでそう提案する。

まさか、コンビニ弁当を温めることすらなく食べていたのか、それともコンビニで温めてから持って帰っていたのか、どちらかはわからないがこの場所に電子レンジがないというのは致命的だ。電子レンジがあれば冷凍食品が食べられる。冷凍食品が食べられるという事は、おかすが一個増えるという事だ…!

ビバ・冷凍食品。モコイさんは焼きおにぎりが好きらしい。

「わかった。電子レンジの件はわしに任せてくれへんか。けど、買い物にはひとりで行ってもらおか…タカヤもチドリもこういうの向いとらんのや…」

「なに。私だって買い物くらい、いける。タカヤと一緒にしないで」「お前の場合は買いに行けたとしても菓子や画材くらいやろが…」

ジんが遠い目をしてチドリにツツコミを入れる。

その心中、察するほかない。

食生活を改善するのは作り置きを定期的に置いていくこととして、

次は部屋の掃除——ではなく制御剤の改善…のための人員確保だ。

この三人を強制的に朝倉医院に連れて行く。自分の！ために！

ヒューー！自分の考えが悪魔的過ぎて怖い。自分は天才か？

まあ「散歩にでも行こう」と誘い出して連行すればいいと思う。コロマルの予防接種も先日それで済ませた。いけるはずだ。

なおコロマルが数日ほど自分と散歩に行ってくれなくなったのは秘密だ。

伸びに伸びた麺をずるずると啜る。というか気がついたらチャーシューが1枚減っている。隣を見ればタカヤがニヤニヤと笑ってこちらを見ていた。食ったのはお前か。

「考え事などという無駄なことをして早く食べないのが悪いのです」

「あつ、言つたな!!? ねえそれ禁句なんだけど知ってる?」

「知りませんね…」

「んだとこんにやろ」

確かにそのひとときは笑顔にあふれていて、ひどく穏やかで楽しいものだったのだ。

(…いきが、くるしい)

どうして、こうなったんだろうか。と本日二日目の思考をぼんやりと回す。

気を抜けば、どこかへ意識が飛んで行ってしまいそうな苦しさ痛みが胸を襲っている。

横になったばやけた視界の向こうで、タカヤが酷く焦ったような顔をしていた。

目を覚ます。

知っている天井だ。けれど、ストレガのアジトではない。

「起きましたか」

「タカ、ヤ…?」

「ええ」

「……」

ぼんやりする。

意識がまとまらなくてすぐにまた飛んで行ってしまいそうだ。

それになんだかタカヤが半裸じゃなくてちゃんとTシャツを着ているような気がする。幻覚だろうか。

「おいタカヤ、アイツ起きたか？」

「まったく、今日会ったばかりだというのに慣れ慣れしく呼ばないでくれませんか？」

「うっせえヒヨロモヤシ！ てめーがいきなりオレに電話してきてピーピー泣いてコイツをなんとかしろつつったんだろうが。つーか、てめえらも大人しくオレ様のモルモットになってさっさと健康になりやがれバーカ！ じゃねえと殺すぞ！」

「あなた、それでも医者ですか」

「残念ながらな！ 殺すしか能のない馬鹿なオマエらと違ってオレはなんでもできる天才だから？」

「殺しますよ？」

「おうやってみろやくソ雑魚。オレのペルソナが火を噴くぜ」

「あなたのはその汚い口に似合わない治療専門でしょうに……」

「おっとそれは禁句だぞ。まあ付け替えれば攻撃特化にできんだけどな」

このうるさくて口汚い声には覚えがある。朝倉先生だ。

なんだか、タカヤとすごく仲良く言い合いをしているような、そんな気がする。この言い合いのお蔭で意識がはつきりと戻ってきた。Tシャツを着ているタカヤは幻覚じゃなかったらしい。

そして朝倉先生がいるという事は、ここは朝倉先生の病院である朝倉医院ということだ。なるほど、道理で見知った天井なわけだ。

「おうガキ、起きたか。点滴取り換えるから待ってろよ」

「……？」

「なんでここにいるんだ？ って顔してんな？ てめーがぶっ倒れたからだ。まあ今回のはお前の持病のほうの発作だったみてーだから

多めにみてやるよ…ただ、残念なことに悪化してやがる。お前、ずっとわ言で痛みを訴えてたぜ。やっぱあの薬、不味いな」

最悪だ。これ以上悪化したら最悪特別課外活動部の活動が出来なくなる恐れがある。

悪化の原因は薬のせいかもしれないが、薬を飲んだうえであのペルソナが出てきてしまったということは、飲まなければもつと暴走していたかもしれないということだ。

一瞬にして飲まないという選択肢は消える。

「あなた、持病持ちだったんですか」

「まあ、うん…」

正直、4月になるまで自分の意識としては知らなかった、なんて言えない。

結局今までのループどおり健康体のつもりで動こうとするからこうやってしくじるんだろうけど、病人らしいムーヴはそれはそれで不慣れだ。

しかも、戦闘に参加できなくては意味がない。

「…気にしないでいいよ、タカヤのせいじゃないし」

「ええ、気にしませんとも」

こちらの言葉にそう答えたタカヤだったがその表情はなんだか複雑そうな感じだった。いつものように嘲っているわけでもなく、余裕たつぷりの笑みでもなく、なんとも言えない、といった顔だ。

「ところでオマエらストレガ三人衆。さっきも言ったが近いうちに荷物まとめてウチに越してこい。オレが養ってやる」

「!？」

朝倉先生からとびだした言葉に驚く。ウチにこい、つまり…一緒に住めということなのだろうか。自分に言われたものではないが、タカヤ達にこんなことを言えるのは朝倉先生の心臓に毛でも生えているからなのだろう。

「お断りします」

「今なら暴走したペルソナの対処ついでに健康になれて通信高校を無料受検できちまう！　ワオ！　お得だと思わねえか？」

「結構です」

「は？ うるせえつべこべ言わずにとつとウチに養子にこいこの不摂生ども。三人ガキ育てるくらい超余裕な金持ってんだこちとら。んでぐくたら勤勉に過ごしながらたまに血を抜かれる生活をしろ。健康優良児になれ」

ばつさりとタカヤに断られる朝倉先生だったが先生も負けてはいなかった。

1を言われれば10を返すマシンガントークでこちらが口を挟む余地がない。

「私たちにはやるべきことがあるのです」

「アーハイハイ↑選ばれし力↑、↑選ばれし力↑。中学生ン時のオレよりひでー厨二病だな。ペルソナは別にどんな人間でももってるもんだつつの。目を覚ますか、覚まさないかの違いだけだ」

「ちゅう…？」

「そういうとこだけ世間知らずの純真さを出すな」

鋭いツツコミをタカヤに入れた朝倉先生とタカヤの相性はよさそうだ。

「2人とも…仲いいね…」

「それだけはない」です」

半笑いで言った言葉に同時に返事を返されて、内心で「ほら」と思う。

絶対先生と住んだ方がタカヤが楽しそうでいいと思う。勝手な考えだけど今のタカヤは人間らしさというか、本来のタカヤらしさがある。あれ？本来のタカヤらしさって、なんだ？

「いっとくけどな、オマエらの言う『影時間』？ つーのにオレが適応してねー時点でんなもん消えてもペルソナは消えねーの。おわかり？ なんならオマエの目の前でもういつペン『カラドリウス』先生だしてやろうか」

「カラドリウス先生…？」

朝倉先生から飛び出た聞き慣れない名前に疑問を浮かべる。出す、ということとはペルソナという事でいいんだろうか。

「嫌ですよ。あなたのペルソナはピーチクパーチクと喧しい…癒しの力は相当なものの様ですがなんなんですかあれ」

「なにしてカラドリウス先生以外のなものでもねえけど」

「そうですか…もういいです…あの喧しきはやはりあなたのペルソナとしか言いようがないのでしよう」

タカヤの口ぶりからすると朝倉先生のペルソナで間違いなさそう
だ。

「というかタカヤから「もういいです」という諦めの言葉を引き出すとは、朝倉先生は相当の話術（と言う名の正論っぽく聞こえるごり押しパンチ）の使い手だ。」

朝倉先生のごり押しパンチ！ タカヤにこうかはばつぐんだ！

「ねえ、さつきからうるさいんだけどナギサは起きたの？」

「オツサン、なんであつちの部屋に帰ってこーへんねん！ ナギサに
なんかあつたんか!? …ってナギサ、起きたんか!」

ドアが開いてチドリとジンが入って来る。

「どうやら3人もこの朝倉医院に来たようだ。どうやってきたん
だろうか。」

「みんな、どうやってここに…?」

「あ? あー…オレの車でオマエどこいっつらをここまでデリバリー
してやったんだよ。オマエがぶつ倒れて発作起こしてる時に、このタ
カヤが財布の中にあつたウチの名刺見つけて慌てて電話かけてきや
がつてな。ったくこいつらオマエのことナギサって言うもんだから
最初はオマエだつてわかんなかったつもの。まあ、コイツらも制御剤
を飲んでるつて知れたから僥倖だけだな」

髪をガシガシと掻きながら朝倉先生がそう説明する。

なるほど、ちようど買い出しをして帰ってきた後だったので、意識
を失った時にタカヤがこちらの財布の中にあつた名刺に気がつくこ
とが出来たのか。

「いやでも、普通は連絡するだろうか…自分ならしない。だつてここ
怪しいし。」

「と思つたが財布の中覗いてるなら診察券もあつたらうしもしかす

るとそれを見たのかもしれない。そちらの方が濃厚そうだ。

「……タカヤ、ありがとう」

「礼には及びません」

ありがとうと言うと少し照れたようにそっぽを向くタカヤ。これは珍しい。

「オレには感謝無いわけ？」

「ありがとうございます、先生」

「よし。許そう。ちなみに保険効くから安心しろよ」

保険が効くと聞いて胸を撫で下ろす。

これでウン万円取られていたらお財布が爆発して素寒貧になっていたところだった。最悪、ツケにしてもらうか悪魔からカツアゲしなければいけない。

まだあるだろうか？ ほら、そこでジャンプしろよ。的な。

「オレの方からお前の寮には連絡しといたから今日はこのまま泊まれ。経過を観察して悪化しないか見張つとかねーといけねえ」

革張りの椅子に座ってラムネ菓子を食った朝倉先生は気だるげだ。

泊まりが強制的に決まった訳だが先生が寮の誰に電話したのか、どこまで話したのか分からないため正直な話今から帰るのが怖い。というかモコイさんは1人で大丈夫なのだろうか。心配だ。

そう考えていると、不意に朝倉先生が口を開いた。

「そーいや、オマエらが飲んでる薬の原料がわかったんだが…なんだと思う？ 正直な話、オレじゃ原料に該当するものに心当たりが無くてな…ヴィクト…知り合いにブン投げ…依頼したら1発だったぜ」

「色々なんか漏れてんで、ヤブ医者」

「うっせーツীবロメガネ」

「どこから制御剤を…ああ、ナギサからですか」

「受け持つてる患者が処方した覚えのねー薬持ってたらそりゃ調べるに決まってるんだろ。つかさっさと予想言えや」

「とんでもあらへんムチャクチャな医者やコイツ」

制御剤の原料なんて、知りようがないし皆目見当もつかない。

ただ、朝倉先生でも分からなかったということはマトモな材料では

無さそうだ。

「…解答者がだれもいねーんで勝手に正解を発表しちまうけどな…」
血”だったぞ”

「血？ どうして、そんなものを…」

チドリが訝しむように眉をひそめた。

血。血液。なんでそんなものを薬に？

そんな自分の考えを見透かしたのか、朝倉先生が口を開いた。

「知り合いでも正確な血の主の正体はわかんなかったらしいんだがな、人間でも獣でもなく、”悪魔の血”らしいっ—ことだけはわかった」

「悪魔の血い？ なんや、エライオカルトやな」

「オカルトだけど眉唾じゃねーよ。オマエらに影時間の適性があるように、悪魔にも見える見えないの適性があつて実際にいんだよ悪魔は。神とか天使とか魑魅魍魎とか人外存在をまとめて『悪魔』つってんだ。ペルソナがオマエらの言うシャドウだけに有効な訳じゃねえ。むしろお前らみたいなシャドウとかと戦ってる奴らの方がレアケースだ。オレの知り合いでも影時間のことは誰ひとり…まてよ」

はた、と何かに気がついた朝倉先生はそのマシンガントークを停めた。

「影時間…”シャドウ”…ペルソナ…無気力症候群…いや、まさかな、もしそうだとすると…やべえぞこりや…」

「どうしたんです、一心不乱に書きなぐったりして」

「…影時間という仕組みは…”アイツ”が『前回』の反省を活かしてオレらの様な経験者を入れない為の対策だったとしたら…？ 無知なペルソナ使いはアイツの掌で踊らされるって訳だ…無気力症候群と影人間の特徴が似ているのにも合致がいく…」

「無視ですか…」

タカヤの言う通りブツブツと何かを呟いて一心不乱にメモを書きなぐっている。

言っている意味はほとんど分からないがなにか深刻な事には違い

なさそうだった。

「クソがッ！ オレらじゃ何もアイツに手出し出来ねーのかよ！ トコトンおちよくってきやがる！ このまま指くわえて見てろってか！」

いきなり叩きつけるようにペンを置いて立ち上がった朝倉先生は明らかにイラついていたが深く息を吐いてそのイラつきを追い出すようにまた椅子に腰掛けた。

「フー…悪い。ひとりでイラついちまって。話を戻すか。薬の原料が悪魔の血ってトコまでは言ったな？」

「そうね。そこまでは聞いた」

「んでその作用だったんだが、ペルソナや悪魔の異能を封じる効能があつた。こりや、制御剤じゃなくて抑制…いや、封印剤つた方がいいシロモンだぜ」

制御剤ではなく、封印。

その言葉の意味がわからない訳では無い。

ペルソナを使用できなくする薬で無理やり無意識なペルソナの使用をせき止めているということだろうか。

「『封魔』って状態異常わかるか？ アレみてーなもんだ。ただこれでも相当薄まってやがるからペルソナを意識して使う分には問題ねえ…はずなんだが、血の方が薄まってても動物や人間の身体に劇物らしくてな。それがオマエらの身体を蝕んでやがる…一体、なんの血なんだか…」

朝倉先生は頭をまたガシガシと掻いた。

「二応オレの方でもヴィクトル…あー知り合いと一緒に悪魔の血を使わねー暫定の改善版を作ってみたがな、それでも今まで薬で傷ついた身体のだメージがいきなり治るわけじゃねーし上手くいくかわかんねーから、治癒魔法や治療と併用して使つてかなきゃなんねえ。試すならウチに通いは必須。できりや住み込みが望ましいけどな。あとオマエはダメだ。今のやつでも効いてるか怪しくなってきた。制御剤を飲めばフツーはコイツら3人みたいにペルソナの気配が希薄になるんだが、オマエの場合薄くなるどころかどんどん濃くなって

るっつーのはオカシーぜ」

ピツ、と指を指されてバツテンマークを作られる。

残念だ。通いが必須でも良いから副作用の無いものを使いたかった。それに、今の制御剤でも効いてるか怪しい、と言われて眉を顰める。やっぱり、あまり効いていないかもしれないということも他人の口から言われると現実味を帯びてきてしんどいものがある。

「正直、飲むなっついていいーけど、飲まねえともっと濃くなるかもしねえ。その状態で暴走したら…間違はなく手がつけられねえだろうな。こんな得体の知れねー劇物を飲ませるしか手がねえっつーのは主治医として…医者として悔しい限りだ」

深く息を吐いて顔を俯かせた朝倉先生の顔は暗かった。

「待てや。つまりナギサは無理でも、わしらはその副作用がない薬でなんとかなるってことかいな？」

ジンが疑問を投げかける。

「まあな。けど副作用が全くないわけじゃねえ。飲み始めは気持ち悪くなったり、身体が怠くなったりはすると思う。ただそれも飲みなれるまでだ」

「そんな美味しい話があるかいな。信用できへん。そうやって美味しい話で、わしらを釣って騙そうって魂胆とちゃうんやろな？」

キツ、と目つきを鋭くして疑うジンの数倍はギラギラとした目で朝倉先生は睨み返す。

個人的にタカヤ達3人は大人たちにかつていいように扱われた経緯から、大人である朝倉先生に警戒を抱くのも仕方ないものだとは思う。

「あ？ オマエらみてーなペルソナ使いとしてもクソ雑魚なクソガキ騙してなんになるっついていうんだ。そもそも、騙して薬漬けにして切り刻むつもりなら自分かコイツで勝手にやってる」

低い、地の底から這うような静かな声にジンも、他の2人もたじろぐ。

「いいか、オレはな、本来は慈善事業なんてガラじゃねえんだ。だから働キブ&テイクきに報酬を用意すんだよ。体組織や血液、データっつーのはタダ

じやねえ。大事な資源だ」

あとは、そうだな…と目を伏せた朝倉先生は何かを思い出すように黙る。

「オマエらがオレの…兄妹に似てたからかもしれないねえな。この短時間で重ねてみたのものもある。」

：興味ねえかもしんねーがウチは貧乏だったし、クズオヤジとクソババアがぼこぼこガキこしらえたはいいが、そのガキであるオレらを虐待しまくっててな。最後にヤクソオヤジの寝タバコの火の不始末でオレ以外全員家ごと焼け死んじまった。そういうこともあつて医者を目指したから、悪い意味だけじゃねえ。…けど、だからこそこれはオレのエゴってわけだな」

「あーあ、天も神様も祈ったつてガキなんか助けてくんねーんだよ」と背を伸ばしてバキバキと身体を伸ばした朝倉先生はまたラムネ菓子を口へと流し込んで食べる。

「天も神様もオマエらを見放したかもしれないけど、オレならオマエらに手を差し伸ばしてやる。人を虐げるのも人だがな、人を救うのもまた人なんだよ。…気が変わったらでいいからいつでも来い」

そう言った朝倉先生に、答えるものは誰もいなかった。

気迫に押されたのか、先生の話が衝撃的だったのか、三人共何かを考えるように黙っている。

「てか、オマエらが飲んでる薬も出どころ不明なんだからよー、オレの作ったやつ飲んでサクツとダメなところに文句つけるなり暴走したらキレるなりしてくれよめんどくせーな」

——そんな湿っぽい雰囲気をぶち壊すような発言をブチかました先生に、自分はもう何も言えなかった。台無しである。

「あ…あなた…アホだとかバカだとか壊滅的に話がヘタクソだとか商談がニガテとか空気が読めないとか言われませんか？」

ドン引きするようなタカヤの声は少し震えている。怒っているとより本気で「わけわからん」という顔と声だ。

「タカヤの言う通りや…コイツ…アホや…底抜けのアホや…ちよつと同情したわしらの気持ち返してくれや…」

「バカ」

散々な言われようである。

対して朝倉先生はそんな言葉を聞こえていないとでも言わんばかりに無視してファイルを取り出した。

「晚メシ、出前取るから好きなトコ選べ。より取り見取り、どこでもいいぞ」

「なっ、飯でわしら釣るつもりかいな!? くっ、そんな汚い手には騙されへん!!」

「そう言いつつガッツリ釣られてんじやねえかこのガキ!」

憤慨するようにぷりぷりと怒るジンだったが、朝倉先生からファイルをひったくってさっそくその中身を見ているので言葉と動きが一致していない。そこへチドリが顔を出して一緒に中に挟まれているチラシを見ている。

「ねえ私、このお寿司を食べてみたい。タカヤ、良いでしょ? お寿司なんていつもスーパーの特売の残り物なんだし」

「やれやれ…仕方ありませんね…」

「金払うのはタカヤじゃなくてオレなんだが?」

「せやせや。しかもわしらの財布管理しとるのはタカヤでのーてわしやでチドリ」

「そう…どうでもいいわ…」

「ジンは苦勞してんだな…予算はこんだけいるし奮発して2万までな」

「は?!?!? 2万?!?!? ホンマかいなヤブ医者?!? ほなわしは…」
「ヤブ医者い!?!のやめろって」

…とても賑やかでいいと思う。うん。

ストレガの食事情、意外と世知辛くて頭痛がしてきた。もつと復讐代行サイトで稼いでると思ってたけどそうでもないらしい。

やっぱり朝倉先生の元で生活したほうが、本人たちもお金を気にせず好きなことが出来ていいんじゃないだろうか。朝倉先生が相手という事もあるのか、出会ってまだ一日と経ってないのに仲も悪くなさそうだし。

「オマエ、起きれそうか？」

朝倉先生がこちらを見て優しく聞いてくる。それに頷いてゆつくりと体を起こそうとすると、背中に手を回して介助してくれた。

「オマエは寿司食うなよ。経口補水液と、食べそうならやわらかいパンとかを少しずつ、だな。後で持ってきてやる」

その発言にショックを受ける。

自分も食べたかったのに、高級出前寿司。

せっかく先生のお金で寿司が食べられたのに、とんでもない好機を逃した気分だ。

ダウンした敵に追撃を与え損ねた挙句総攻撃チャンス逃してしまいうレベルの。

「い、一貫だけなら…」

「アホ言え。魚介食って吐いたらどうすんだ」

「ぐぬぬぬぬぬ」

「おーその心底悔しいって顔、見物だぜ。ギャハハハハ！」

朝倉先生にダメと言われたあげく笑われた。悔しい。絶対体調良くなったら幾月の金で寿司を食おうと決意した。

なんで幾月かって？

…八つ当たりだ。

世話になつている朝倉先生に「元気になつたので寿司奢ってください！」なんて言えるわけがない。対して幾月にはあんまり世話になつてない。この前の屋久島旅行だつてリクエストのエビとカニとバナナを用意したのは桐条家だ。ついでに研究施設で保管してた大量のシャドウを逃がすなんてあいつが意図的にやったに違いない。それくらい信用がない。

だからこれくらいの扱いでいいし寿司を奢らせる。なんとしてみよう！

そう決意しながら4人が届いたおいしそうなお寿司を食べるのを横目に、ちびちびと経口補水液を味わい夜は更けていくのだった。ひもじい。

それは矛盾と言う名の罪（8／9～8／16）

8／9（日） 昼

「……」

「昨日の朝まで病院に居たから心配してたけど今日も体調は大丈夫そう
うで安心したよ。さき、今日は退院祝いということで遠慮せずに食べて
くれ」

綺麗な店内に檜でできたカウンター。魚の泳ぐ水槽。目の前にあ
るガラスケースの中には魚の切り身が並べられている。

そして横には、幾月。

「さっきから黙りこくってどうしたんだい？　せつかくきみの要望通
り〃回らない〃寿司を食べに来たんだから…ああ、緊張してるのか。
わかるよ。僕もハジメテはそうだった…いやー懐かしいなあ〜」

こうなるとは思っていなかった。

どうやら倒れた日に朝倉先生からの電話を受け取ったのは幾月
だったらしく、昨日である土曜日の夜に体調は大丈夫かと訊かれたつ
いでにいぼろつと「寿司が食べたいなー！　高級なやつ！」みたい
なことをオブラートに包んで零したのだ。

そしたら今日の朝、昼前に拉致られてこんなマジモノの回らないす
し屋で、幾月と二人つきりになって自分で墓穴を掘った状態になっ
ているというわけだ。ぬかった。

確かに回らない寿司とは言ったがそれは出前のことであって、こん
なザ・高級な店に連れて行って欲しいわけじゃなかった。というか店
に連れていかれる、すなわち幾月と2人きりになるのでどうしても避
けたかったのだ。

なので湊と奏子も連れて行こうとしたが2人ともそれぞれ予定が
あったらしく断られてしまって、結局このぎまだ。

「僕のおススメはタマゴだね。甘くてふわふわでまずはコレ！　って
カンジだ。三上くんも食べてごらん」

「じゃあそれを、いただきます…」

幾月の言葉に玉子の寿司を握り始めた大将を前にしながら頭を下

げる。

「あつー！ いいギャグ思いついちゃったよ…！ 孫とタマゴを食べる…くふふ、今日も僕のギャグのキレはよきそうだ！」

勘弁してくれ。

そうげんなりしながら口に運んだ玉子寿司は確かに甘くてふわふわで美味しかった。

「いっぱい食べてくれよ。きみと2人きりだなんてこんなことは滅多にないんだ」

「そうですね…あんまりこういうのはないですね」

こつちが幾月と2人きりになるのを避けているからと言うのもある。

原因は言わずもがなこちらが幾月のことを嫌いなのと、たまに見せる観察するような視線だ。

というか今日は本当なら美鶴さんと食べ歩きに出かける予定だったのだ。それが突然、美鶴さんに急用が入ったからということではキャンセルになり、こうして幾月と2人きりで寿司を食べに来る羽目になってしまったというわけだ。

「マグロを頼もうかな」

「俺はエンガワをお願いします」

「おつ、渋いねえ三上くん」

こうなればもう幾月の言葉通り、遠慮なく寿司を食べるしかない。ヤケだ。ヤケ。

湊や奏子、モコイさんにお持ち帰りで寿司を持って帰ろうと思ったが、夏場で生魚が傷みややすいらしく持ち帰りはやっていけないと言われ、てしまつて残念である。

店で食べた寿司はもう文句の付けようが無いほどに美味しかった。でもできるなら、朝倉医院にいたあの時、自分も寿司を食べたかったな、と思うのは贅沢な願いなんだろうか。

高級な寿司を奢ってもらつたというのになにか物足りないし、思つたより箸がすすまなかつた。

ただ、今回は本当に幾月はなんの思惑も無しに奢ってくれた様で、

そこを疑ったことは悪いなど感じた。たまにこういう本心からの善意を見せてくるのがまたこの男の夕子の悪いところだ。

会話も怪しいところはなかったし、今日はあの嫌らしい観察するよ
うな目も一切なくて安心した。

なにかあるんじゃないかと警戒していた自分が馬鹿らしくなるく
らい、何も無かった。

帰りも至って普通だったし、その後もラウンジでくつろいでいると
きでさえ、なんらおかしな含む様なものはなにもなかったのだ。

考えすぎだったんだろうか。

8/16 (土) 夕方

10日から15日の5日間は夏期講習で模試の対策範囲などを勉
強した。

ほぼほぼ自習のようなものだったが勉強はいくらしても困ること
では無いので真面目に取り組んだ。

ただ、最近悪魔に襲われる頻度が減って、モコイさんと一緒にどこ
かへ行くということも減ってしまった。

なんというか、自分に悪魔自体が寄り付かなくなってきているらし
い。変なこともあるものだ。

モコイさんはモコイさんで最近忙しそうにどこかへと出かけてい
るし、寂しいといえば寂しい。

いつか、それも近いうちに、モコイさんが自分のことを「もう大丈
夫だ」と言つて離れる時が来るのかもしれない。

ただ、それを考えると、胸の奥がチクリと痛むのだ。物理的には
無く精神的に。

モコイさんのことは大事に思っているのでモコイさん自身が離れ
たいと言ったら、自分にはそれを止める権利がない。一緒に居てく
れ、だなんてわがままは言えない。

そもそも、これまでモコイさんが一緒にいてくれたのも危なっかし
い自分を守る為であり、善意でやってくれていた事だ。それに縋って

さらに後ろ髪を引こうなどというのは些か強欲が過ぎるというものだ。

それでも、

「モコイさん、今日神社で夏祭りがあるんだけど一緒に行かない？」

屋台が出てたらしらりんご飴とか焼きそばとか鈴カステラがあるかも」

「ナイス提案だね、チミ！　ぐふふ、食べ歩き、タマリませんなあ……！」

モコイさんと一緒にいる時間を少しでも増やしたかった。

女性陣が下で浴衣に着替えるだのなんだのと言っていたのを聞いて夏祭りということを思い出したのは秘密だ。

正直、すっかり忘れていたので今日はそのまま風呂に入って寝てしまおうかと思っていた。けれど夏祭りと聞いて行かない訳にはいかなかった。

たこ焼きの屋台もあるかもしれないし、と言い訳しつつ私服のまま財布を持ってモコイさんと部屋を出る。

「優希さんにモコイさん、お出かけでありますか」

玄関でばったりアイギスと会ったので返事をする。

「夏祭りにね。屋台のもの食べ歩きしようかなって」

「なるほど。男性の皆さんは既に出かけていらっしやいますし、わたしも奏子さん達とお祭り専用の迷彩を着てから出かけたと思うであります」

「ソレってもしかして、＼ユカタ＼ってやつ？　フウー！　ボクちん、ちよつとコーフン」

モコイさんがこんな感じでエロオヤジみたいになるのはたまにキズだと思う。こういう時のモコイさんと伊織は似たもの同士な気がするのだ。

「モコイさん。ヤラシイ、であります」

「ガーン！」

アイギスもモコイさんの謎言語や他のみんなの言葉遣いを学習していて、セクハラなどにも対応可能になってきている。なのでモコイさんはたまにこうして言い返されているのだった。南無三。

夜 長鳴神社境内

境内はお祭りの屋台やそれを楽しむ人で賑わっている。

「ボク、りんご飴ナメナメさん」

「美味しそうでよかった。えつと次は…焼きそばかカルメ焼きかな…」

財布を片手にモコイさんと境内を歩く。

食べ歩きにしようと思ったが予想以上に人が多く、結局纏めて食べ物を買って境内の端で座ってゆっくり食べようということになった。

「すみません、焼きそば一人前ください」

「あいよー!」

焼きそばを買って袋に入れる。次の屋台を探そう、と見回すと前から浴衣を着た奏子とアイギス、岳羽、山岸が歩いてきた。

「あ、三上先輩! 来てたんですね!」

「お兄ちゃん! たこ焼き買って!」

「しようがないなあ…」

財布を開いて残りを確かめてから、たこ焼きの屋台に並ぶ。

「あれ、優希」

「湊もたこ焼き食べる?」

「いいの?」

「うん。いいよ」

ちようどいいタイミングで後ろに湊が並んできたので領いて三人分買うことにした。

焼きたてのそれをひと皿受け取り湊に渡して、もうひとつはパツクに詰めてもらって袋にしまう。

最後の一皿はそのまま少し離れたところで待っていた奏子に手渡した。

「お兄ちゃんありがと!」

「奏子も湊も熱いから気をつけてたべ…って湊もう完食したのか…」

熱いから気をつけてと言おうとしたらペろりと平らげた湊はもう空になった皿をゴミ箱に捨てるどころだった。

もはや食べてるんじゃないかと思うぐらいの速さでもぐもぐとたこ焼きの残りを食べた湊は「ごちそうさま」というとそのまま去っていく。

…1人で来たのだろうか。

「湊さん、待ってくださいであります！ 順平さんが湊さんのことを探していました！」

その後を慌ててアイギスが追いかけて行ったのでもしかして順平と来て単独行動してたのか？ とも思った。

「じゃあねーお兄ちゃん！」

「先輩、さようなら」

「ああ、さよなら」

手を振って別れる。

そしてまた屋台を見つつ、買い物をしていると今度は真田くと荒垣くと天田くんが一緒に歩いているのが見えた。3人はまるで本当の兄弟のように仲睦まじく歩いている。こちらがわざわざ話しかける必要もないだろうとそのまま無視して鈴カステラの屋台に並んだ。

荒垣くんは今月の大型シャドウ戦の時に助けてくれたこともあり、自分の記憶よりも少し早い今月からなし崩し的に特別課外活動部に戻ってくるようになった。

主にコロマルと天田くんからの熱烈なアピールに根負けしたのだ。やはり荒垣くんは子供と動物には弱いらしい。

タルタロスの探索にも一緒に行くようになったので、これでメンバーは全員そろったことになる。

ただ、メンバーが全員そろったという事は、6月頃に見た全滅する幻覚——未来視のようなものがいつ起こるか分からないという事だ。あれ以来、あの幻覚は見えていないがアレがただの幻覚だったとも思えないのだ。

あれを思い返そうとするたびに、チクリと胸が痛む。今度は、物理的に。

まるで、槍で刺されたことが現実だと自分に教えるような小さな小

さな痛みだ。

しかしそんな記憶は無い。自分の持つ周回の記憶の中に、そんなものは存在しない。

(なおさら、倒れるわけにはいかない、か…)

目標を見誤ってはいけない。

今度こそ、ニユクスを自分だけで封印して湊と奏子の二人を生かさなければいけないのだから。

ただ、なぜニユクスを封印するのか自分はよくわかっていない。なんとなく「封印するものだ」と思っているがなぜそうしなければいけないのか、なぜ、封印すればなんとかなるのかよくわからない。

そもそも、どうして死の宣告者だなんてものが生まれたんだろうか。桐条鴻悦や幾月が『滅び』とやらを得ようとしていたが、それとニユクスとデスに何の関係があるのか。

いや、ニユクスが『死』そのものであって、到来すると実質的に全生命が死ぬので『滅び』ということには間違いないが何か引かかる。(うーん、わからないな)

空に浮かんでいる月の正体がニユクスだったわけだが、ただ今まではなにをしても落ちてくることなんてなかったはずだ。

死の宣告者であるデスが生まれて、落下地点の目印であるタルタロスができて、それで初めてニユクスが落ちてくるようになった。なら、なぜそんなものができた？

事故が原因とはいえ、シャドウが爆発したくらいで死を呼ぶ目印など簡単にできるのだろうか。

そもそも、どうして死の宣告者なんて存在が生まれた？

目印なんて用意するんだから、誰かが、ニユクスを呼んだとか？

いや、ニユクスを呼ぶのが死の宣告者の役目だっただろうか。わからない。

情報をもう一度整理するか、死の宣告者としての記憶を取り戻した綾時くんが説明してくれる12月まで待つしかないか。

長い事周回をしていると、記憶が混じってたまにどれがどの情報だったかわからなくなるのは頂けない。完全に記憶できればいいが

生憎と自分にはそんな能力もなく。

むむむ、と唸るがわからないものはわからないので今は置いておくことにした。そんなことよりたこ焼きだ。

「いただきま——あ、」

軒下に座ってたこ焼きを食べようとした自分とモコイさんの目の前に、見慣れた学ラン。

「ライドウくん」

「こんばんは」

頭を下げたライドウくんは学帽のツバをもって向きを直して、そして横のモコイさんを見つめた。

——しまった。

「モコイ…貴方…」

「……キャントークだね」

ライドウくんに呼びかけられたモコイさんはそっぽを向いた。

顔見知り程度ではなく名前を呼ばれる程の知り合いだったようだ。

しかし仲は良くなさそうな感じがする。

「モコイさん、ライドウくと知り合いなの…？」

小声で訊いてみる。

「ボクちん知らないヨ、あんなシツレイなニンゲン」

嘘だ。絶対に前に話してくれた以上の事を知っている。

でも、無理やり聞く気にはなれない。モコイさんが隠したいことから、それを無理やり聞いて喧嘩別れになるくらいなら、聞かない方が
良い。

「ライドウ、モコイのことは諦めよ。こやつはもう我々に喋ることは
なさそうなのだからな。…ただ、ミカミよ。うぬにはこれがどうい
うことか聞かねばなるまい」

「…それは、」

仕方がないので悪魔に狙われていたのを助けられたこと、それから
ずっと一緒に生活していることを白状した。ついでに憑依されている
訳でも利用されているわけでもなく、あくまで『友だち』です。と
答えておいた。

「成程。モコイが言っていた『協力者』とはうぬのことであつたか」
「『協力者』？」

「ツゴウト、チミ……！」

首を傾げたところに焦つたようなモコイさんの声が割り込んだ。

しかし、ゴウトはそんなモコイさんの声をお構いなしに無視して口を開く。

「ああ、そうだ。モコイも我々とは別に『先代』を探しているようだな。うぬはその為の協力者、といったところだつたらしい」

「なるほど」

モコイさんがどこかへ出かけている事への疑問が解けた。

モコイは、先代のライドウを探していたというわけか。18年間、ずっとひとりぼっちで。それを考えると大変だなという感情しかわかない。

「チミを騙して、ゴメン……」

「へ？ 騙していないよね？ どこが？」

モコイさんの悔やむような言葉に首を傾げる。こちらとしては騙されたという気は一切ない。それどころか協力できなくて申し訳ない気持ちさえ湧いてきていたのだ。

「だって、モコイさんは……モコイさんはチミに大事なことを黙つてたし……」

「でもモコイさんはちゃんと守つてくれてたよ、俺の事。アンスーの時なんて無視して逃げてもよかつたのに」

「……ボクは……」

しゅん、と俯いて声を小さくするモコイさんはこちらに負い目があ
るらしい。

別に、寝込みを襲うとか勝手にマグネタイトとやらを吸われたりしていないのでこちらに不利益は一切ない。まあ、少し財布が痛む程度だがそれもこちらが勝手にモコイさんを連れまわしているだけで自己満足だ。

どこにモコイさんが負い目を感じるところがあるというのか。

「……なにか複雑なものがあるようだが、こちらもうぬらに報告しなけ

ればいけないことがあるのでな。特にモコイよ、うぬは心して聞くが
良い」

「…?」

声を低くしたゴウトの目つきが鋭くなった。

そういえば、以前「もういい」とは言ったがライドウくんとゴウト
は先代やクリシユナとカルキ達について調べていたんだったか、と思
い出す。

となると、報告と言うのはそのことについてか。

「我とライドウが調査を行った結果、17代目は当時目付役であった
私の目を欺き、ひとりで『混沌』との戦いに向かったことが分かっ
た。それは、モコイよ、うぬの発言がヒントになっていた。間違いは
ないな?」

「……そうっすよ。奴は…ボクにはよくわからなかったっすけど、泥
みたいな見た目をして…みんなを…呑み込んでいたみたいだね…」

「『みんな』と言うのはライドウが連れていたうぬ以外の仲魔全員か
? クリシユナも、カルキも、かのシヴァも、パールヴァティーも、他
の仲魔も、すべてか?」

ゴウトの確かめるような言葉に、小さく、モコイさんは頷いた。

その様子に、「ああ、やっぱり」という諦めの感情しか自分の中から
は湧いてこなかった。なぜだろうか。今その事実を聞いても、不思議
なくらい感情が何一つ動かないのだ。

「最後に立っていたのは、あの人だけだったっす…それで、あの方は…
ボクを出す直前に14代目とか供俱璃くくりの媛ひめについて話してたっす…
剣に変わっただの…祈りになるだの…管の中からじゃよく聞こえな
かったんすけど…」

「なに!? 供俱璃の媛だと!? それはまことか!」

モコイさんの言葉に、噛みつかん勢いでゴウトが問い詰めると、ま
たモコイさんは小さく頷いた。

「あの大うつけが…ッ! 自らの命とMAGマクネタイトを使って東京を守るため
に神を喚よんだな…!! あの子供俱璃の媛と…同じように…! だが、
あやつには媛の時のように依代としての役目を終えた後に命をつな

ぐ霊薬ソーマもなければ、それをつかう仲魔もなにもいない…つまり、捨てたというのか、命を…！」

人間であったのなら、青ざめるような顔をしていただろうゴウトが、吼えるように吐き捨てた。話している事の殆どが専門用語なのか自分にはこれっぽっちもわからなかったが、死んだとされるのは間違いなさそうだ。

「ゴウト、供俱璃の媛とは14代目の報告書にあった、あの、アメノオハバリの依代となりコドククラノマレリビトオンを共に打倒したという…」

「ああ…その媛に間違いはない。14代目の目付けをしているときに私も直接この目にしたものだ。あやつめ、あの報告書からいざというときの自らの体質の使い道を知ったな…！ 愚か者めが…それで死んでは元も子もないであろう…！」

「あの、」

激怒している様子のゴウトに、声をかける。

俺には何となく、その先代さんの気持ちがあわかってしまったから。「きつと、先代さんはゴウトに自分が死ぬようなところは見せたくなかったんじゃないかって思う…ます。俺でもきつと、勝ち目のない戦いに行くことになって、自分が帰って来られ無いつてわかったら、家族を置いていきますから」

自分が、もし…いや、これからニユクスの封印をすることになったら湊と奏子には間違いなく宇宙ユニバースのアルカナの力は渡さない。

ひとりで行けるものなら、最終日のタルタロスの攻略だって、ニユクス・アバターとの戦いだって、ひとりで行きたいくらいだ。

置いて行って、彼らが何も知らないうちにすべてを終わらせたい。そう思うのは、ダメなことなんだろうか。

「…うぬもうつけであったか」

静かに、吐き捨てるようにゴウトはそう小さく呟いた。

「…我は、あやつの勝利と生還を願っていた。だが、あやつはあの時すでに、勝つことしか考えていなかったのだな…我が、そう育ててしまったのか…」

「ゴウト…」

「…ミカミよ、うぬに何が起こっているのかは知らんが、うぬの周りの人物が望むのは勝利ではなくうぬの生存よ。我が、時間をかけてそうなったようにな。…ライドウもこの言葉、しかと心に刻んでおくのだぞ。我は、うぬが死ぬくらいならば里に帰ったほうが良いと思っっているのだからな」

「はい…肝に銘じます」

よく、わからない。

確かに生きることには大事だ。でも、手段が命を捨てる以外になかったら、命を使うしかなかったら、それしか選べないじゃないか。

「置いていく側は気楽なものよ、遺される側のことを考えなくてよいのだからな…」

わからない。ゴウトの話を知っていると、自分の選択が本当に正しいのか、わからなくなってきた。

どうして、ひとりで終わらせてしまうのがダメなことなんだろうか。どうして、誰かを守る代わりに死ぬのがダメなんだろうか。

俺はただ、みんなが傷ついてほしくないだけなのに。

場所は変わってストレガのアジト兼住居。

その階段下の入口であるそこに、幾月は立っていた。

「オツサン、なんや。わしらになんか用かいな。アンタからもろた薬のストックはまだあるんやし、来ることないやろ」

心底不愉快だ、といった様子のジンが、幾月を迎え入れる。

その顔は嫌悪にまみれ、用がないなら来るなど暗に伝えているようだった。

「やあ、今日はそれとは違う話がしたくてね。タカヤはいるかい？」

「…チツ、こつちや」

舌打ちをして幾月を奥へと案内するジン。

「——わしらはまだ、アンタの事が許せへん。ナギサにムチャクチャやったことも、わしらにやったことも」

「必要なことだったんだ。どうしてそれが許される必要があるんだい

？」

幾月の目は酷く冷たく無機質だった。

それは、まるで感情を出す必要すらないというような、物に対するような反応だった。

ジンたち人工ペルソナ使いの生き残りを、幾月は人だとは思っていなかった。それは、人工的にペルソナ能力を付与されたわけではない。『ナギサ』にも向けられている。

10年前も、今も、幾月にとって『ナギサ』は道具だ。それ以上でも以下でもない。

「ははは、彼が切り刻まれなければ誰を切り刻むというんだい？　まさか、桐条のご令嬢を？　おいおい、冗談はよしてくれよ！　そんなことをすればクビになるし僕の目的が達成できなくなってしまうだろう？」

「やっぱ、最低のゴミや。アンタは」

「心外だなあ……これも慈善だよ、慈善。代わりにキミたちが切り刻まれることはなかったんだ。彼の尊い犠牲に感謝しようじゃないか」

「…タカヤにソレ、言うんやないで。わしやからまだ耐えれてるけど、ナギサに一番救われたあの人がなにするかわからん。最悪、利害無視してアンタのこと殺すかもしれへん」

吐き捨てるようにそう言い放ったジンの顔は嫌悪以上のなにかを浮かばせていた。

これだから、幾月この男は嫌いだ、と内心でもう一度舌打ちする。

「わかってるとも。僕だってまだ死にたくはないからねえ…」

わかってるのかわかっていないのかわからないような態度で、へらへらと返事をする幾月にジンはもう何も言うことは無かった。

そのまま、階段を上がってタカヤのいる部屋まで案内する。

「タカヤ、幾月や。なんかわからんけど話があるらしいで」

「どうぞ、はいつてくください」

「だ、そうやで」

投げやりに幾月に吐き捨てたジンはドアを開けようとしなない。その様子に幾月はやれやれと首を横にゆるく振るとドアノブに手をか

けた。

「それじゃ、失礼するよ」

幾月が部屋に入った時、タカヤはボロボロな1人用革張りのソファーに足を組んで座っていた。

埃で薄汚れ、ところどころ革が破れて中のスポンジがはみ出ているそれに、まるで王様と言わんばかりに座っているのだ。幾月からすれば、あのゴミがゴミに座っているなんて見物だ。と内心笑いが止まらない光景だったが。

「それで、話とは？」

「いやあ、今日は君たちに話があつてね。単刀直入にいうよ。特別課外活動部らが大型シャドウを倒す行為を、邪魔しないで貰えるかな？」

その言葉を聞いたタカヤの眉がピクリと動く。

「それは、何故？」

「何故つて、困るからだよ！ あれを邪魔されたら『聖杯』の中に入るべきものが溜まらなくなってしまうだろう！ 困るんだよねえそんなこと！」

「聖杯…？」

「なんやそれ」

馴染みのない言葉にタカヤとジンの2人は同時に眉をひそめた。

幾月はこれまで予言だの目的だの意味の分からないことを言っていたが、今回の言動はいつももおかしい、と2人は感じ取る。

「聖杯は聖杯さ！ 万能の願望器…即ち『時を操る神器』と呼ばれる物そのものだ！」

「アンタ、まだそんな耄碌ジジイの与太話信じとつたんか」

「で、それと大型シャドウの討伐を阻止…いえ、影時間を消させることの阻止をすることに何の関係があるのです？」

芝居がかったような、狂気に染まったような幾月の言葉に「信じられない」と言いたげなジント、話の論点が見えてこないタカヤが問いかける。

「簡単なことさ。聖杯の『中身』に必要な物が大型シャドウだからだ

よ」

「はっ？」

また、意味の分からないことを言い出した幾月にジンが顔を顰める。そもそも、大型シャドウは倒せば奴らは霧散する。中身が溜まるどころではないしそんな入れ物を幾月が持ち歩いているわけでもない。どうということなのか。

「ああ、そういえば君たちは『影時間』が消えることに不安があったようだけれど、別にすべての大型シャドウを倒しても影時間自体は消えないよ」

「なっ…!?!」

「はあ!?!」

いけしやあしやあと衝撃の事実を告げた幾月に、今度は目を見開く番だった。

「影時間という時間の存在自体は事故以前から確認されていたんだ。ただ、10年前の事故でそれが連日起こるようになっただけでね」

「ど…:…どういふこつちや、荒垣は…:アンタが手綱握ってるあのイロモノ集団のやつらは大型シャドウを倒せば影時間は消える言うもつたで…!?!」

ジンは信じられない、といった様子の震えた声で問い詰める。

自分たちもその情報を鵜呑みにしてあれだけ勿体ぶって登場して顔見せをし、更に妨害工作まで行ったというのにそれすらも無意味なことだったというのか。

そもそも、こいつは、自分の関わっている桐条の令嬢さえも騙しているというのか。

ひくり、と口の端をひきつらせた。

「ああ、アレ、嘘。だってそうだと言わないと彼らは大型シャドウを積極的に倒そうとしてくれなくなってしまうからね。何事もモチベーションや目標が必要だろう?」

「アンタ…:アンタってやつは…:」

悪びれもせずにケロリと嘘だと白状した幾月。

その顔に罪悪感という文字は1つもなかった。

「それに、どのみち倒さないと無気力症候群の患者が増えてしまつて手が付けられないからね。僕の目的も果たせる。彼らはシャドウを倒すという特別な使命を帯びた非日常な生活を送つて充実感を得る。Win—Winの関係じゃないか！ それのどこがいけないんだい？」

一個も悪いところは無い。むしろ、いいことをしているんだと、その言動に一つも疑問を抱いていない幾月にタカヤもジンもなにも言うことが出来なかった。

ストレガは、殺しやハッキングなど人に言えないようなことをやってきた。だが、それも全てが生きる為であり、生きる為に仕方なくしていたことだ。他に生きる道があるとするならそちらを選んでいた。

しかし幾月は違う。目的の為に人を殺しているのは同じだが、生きる為と自らの愉悦のためでは大きく意味も必要性も異なる。

コイツア、真正正銘のゲス野郎や、とジンは内心で唾を吐き捨てた。「……わかりました。あなたのその言葉を信用するとして、こちらからも聞きたいことがあります」

「いいよ、なんでも答えよう」

「あなた——ナギサをどうするつもりです？」

ギラギラと、威嚇するような目つきで幾月を睨み付けたタカヤは珍しく怒っているようだった。

対して幾月は余裕そうに薄く笑っている。

「どうするつもり、とは？ うーん。僕は別にもう彼を切り刻んだりはしないよ？ その必要がないからね！ ああでも、時が来れば〃処分〃するかな。中身が無くなれば器はただのゴミだし、僕が用があるのは〃中身のほう〃だ」

「……」

「まあまあ、そう怒った顔をしないでくれよ。大丈夫、全ての大型シャドウを倒すまでは彼の安全は保証しよう」

「…その後は？ 処分というのは、ナギサの命を脅かすということですか」

怒気の膨らんだタカヤに睨みつけられてもなお、幾月は余裕な態度を崩すことはしない。それは、彼らの手綱も幾月が握っていることに代わりは無いからだ。制御剤が無くなればペルソナが暴走して自傷し、最悪殺される彼らに薬を提供している側の幾月の絶対的優位が崩れることは無い。

幾月にとってストレガとは幾月に搾取される側でしかないのだ。それに、幾月自身が手を下さなくともじきに彼らは制御剤の副作用で死ぬ。

勝手に死んでくれるなんて、なんて便利な道具だろうか、と幾月は内心でまた嗤う。

「おいおいおい、命が残り少ない君たちがそんなこと気にしてどうする？　どのみち彼も長くないんだ。君たちからもらった制御剤を飲んでいることを僕が知らないでも？　この間も倒れたそうじゃないか…可哀想に…ズタボロになっても彼は歩みを止めることが出来ない」

「それはアンタがナギサをあそこに縛りつけとるからやろがツ！」

あまりの幾月の責任転嫁に、ついにジンがキレた。いろいろな手を回して縛りつけていることを、ストレガの三人は知っている。『ナギサ』をズタボロにしているのはこいつ自身だというのに、なにを言うのか。

「縛りつける？　人間きの悪いことは言わないでくれ。僕はただ、彼には彼の兄妹が必要だと思っただけさ。彼は彼自身の意思であそこにいるに過ぎないよ」

「……クソ野郎が」

「酷い言いようだなあ。僕はそんなに悪いことはしてないよ。良かれと思っただけ行動が結果的に、そうっただけさ」

幾月は思い出す。

彼をここ、辰巳ポートアイランドへと呼んだ二年前のことを。

彼さえ用意できれば、全てそれで事足りると、大型シャドウ達が目覚めると思っていたのだ。だが、結果は違った。『何も起こらなかつた』のだ。彼は監視付きの男子寮の部屋で、影時間も象徴化すること

なく1時間眠り続けた。だが、それだけだった。

何が足りない、と幾月は考えた。考えて考えて、昨年冬にようやく、「ピースが足りないのだ」と気がついた。

目覚めのための呼び水。封印された欠片。

それは、湊と奏子の存在だった。

あの二人の存在を知った時、幾月はほくそ笑んだ。

アイギスによってデスを封印された双子の兄妹。永らくそちらも探していたがまさか、そこで繋がるのは幾月は思っても見なかった。

——あの兄弟たちは、三人そろってこそ意味があるのだと。

まるでそれは、呪いのように。

「で、もし僕が彼の命を脅かすとして、それでどうなるというんだい。まさか、僕の邪魔をするなんて言うんじゃないよね？ 制御剤を渡しているのが誰か、今一度よく考えた方が良い」

「……ええ、わかりました。わかりましたよ」

幾月の言葉に観念したように怒気を霧散させ、息を吐いたタカヤの返事に幾月はにつこりと笑みを浮かべた。

「——特別課外活動部が行う大型シャドウ討伐の邪魔をするのは、やめましょう」

「タカヤッ！」

「それでいいんだよ、それでね。僕は物わがりのいい生徒は嫌いじゃないんだ」

「ケツ、なにが生徒や……わしらのことかて物くらいにしか思つたらんくせに……」

満足そうにうなずいた幾月と、しかたないといった風のタカヤにジンは奇妙な違和感を感じる。

いくら薬の事を出されたからといってこんな簡単に引き下がる訳がない。

だが、それでもタカヤがやめると言ったのだ。ジンはその意見に従うしかない。

「じゃあ、僕はこれで帰るよ。夜分遅くに邪魔したね。ああ、見送りは結構」

そう言つて、去つていった幾月の姿を窓の外から見えなくなるまで見送つたタカヤは不意に口を開いた。

「チドリを起こしてきてください。…これから大事なことを話します。ここままでコケにされたのです…少しくらい反抗しても許されるでしょう?」

そう囁うタカヤの顔はひどく楽し気で生き生きとしている。

「幸い、我々にはナギサのお蔭で利用できる人間が出来ました。

——それならば、骨の髄までしゃぶり尽くし、お望みどおり利用してあげようではありませんか」

すべては、自分が優位だと信じてやまないあのいけ好かない幾月おとなを玉座から引きずり下ろすために。

ストレガ 彼らは、理不尽な運命に反抗するために方針を固めた。

第三の騎士（8／17～8／20）

8／17（月） 昼

絶賛夏休み継続中だが、今日から駅前の映画館で『映画祭り』が始まった。

モコイさんと『怪傑！ 悪魔探偵キョージ』なる、10年前にやっていたドラマのリメイク映画を見に行った。

売店で買ったポップコーンをかじりながら、悪魔使い兼名探偵のキョージがさまざまな試練を乗り越え謎を解決するオカルト痛快アクション作品を食い入るようにみた。

特に、クライマックスでのライバルであり黒幕でもある黒人系筋肉モリモリマツチョマン神父なシドー・デビースとの一騎打ちは熱かった。

膝の上に座っていたモコイさんも心なしか目をキラキラさせて画面を見つめていたし、映画館から出ても興奮冷めやらぬと言った様子で、シドー・デビースの肉体言語（と言う名の格闘技）を真似して「ホアチャー！」と素早いパンチとキックを繰り返していた。

その短い手足でそれをやるものだから、ただただ微笑ましいものでもしかなかったが。

8／18（火） 昼

今日も映画祭りだがモコイさんが家で留守番ネットゲをしていると言ったのでひとりで映画館に入ろうとした。そのとき、チケット売り場で困ったようにうろうろと彷徨っている少女を見つけた。

——ありますだ。

ひとりで居るといふ事は、おじさん達とは一緒じゃないのか。

「どうしたの？」

「ユーキおにーちゃん！」

そう声をかければ顔を明るくしたありますが振り向いてこちらを見る。

留守番と言うには番をしていない彼女ではあるが、おじさん達公認らしいので気にしないことにしよう。

「あのね、ありすね、またひとりなの…それでね、」

もじもじとしながらありすが視線を寄越すのは『不思議の国のアタタ』と書いてあるファンシーな女兒向けっぽいアニメ映画のポスターだ。なるほど、これが見たかったがおおずかいが足りないのかないのかでチケットを買えなくて困っていたと。

「一緒に見る？ 俺もちょうどなにか映画を見ようと思っていたんだ」

「いいの？ わーい！ おにーちゃんありがとう！」

ここは空気を読むことにしようと思う。

ありすの分のチケットを一緒に買って、売店でジュースを手に入れ映画に臨んだ。

ただ、ポスターはファンシーだったが内容はファンシーじゃなかったことを記載しておこう。

「たのしかったー！ ありすもウサギさんでカワハギしたーい！」

：おおよそ小学生低学年の幼女が映画館から出た後でスキップしながら言う台詞ではない。

いや、映画の内容が内容だったので仕方ないが年齢区分仕事しろとしか言えなかった。

見た目ほのぼのを装った、とんでもない映画だったとはいえ子供の入りが結構多かったので途中からは「こわいー！」「マァマァアァー！」など聞くに堪えないような、いたいけな子供の悲鳴が飛び交っていたのはいうまでもない。もう阿鼻叫喚である。

ありすはその中でもずっとニコニコしていたしキラキラとした目を向けて映画を見ていたので、もう本人が楽しかったのならいいやと諦めることにした。

ただ、二度と見ない。絶対にだ。

「あー！ おじさん達が迎えに来たみたい！ じゃあね、ユーキおにーちゃん！ バイバイ！」

「バイバイ」

いつも通り駆けだして行くありすに手を振って別れる。

「そういえば、ありすの言う“おじさん達”に会ったことがないんだが本当に存在するんだろうか。」

「いや、彼女がいるというんだからいるんだろう。そうじゃなければ、あの身ぎれいなありすの説明がつかない。」

小学校低学年の幼児が、誰からの庇護も受けずに過ごすなど言うのは不可能に近いからだ。

心配するだけ杞憂か、と思いながら帰路についた。

8 / 19 (水) 昼

「おや、奇遇だな少年」

「こんにちは、神条さん」

今日もまた、映画館に入ろうとしたら神条さんとぼったり出くわした。

昼間に神条さんに会うのは初めてかもしれない。そんなことを思っていたら神条さんも同じことを思っていたようで、

「きみと昼に会うのは初めてかな？」

と言われてしまった。

それに頷くと神条さんから一緒に映画を見ないかと誘われたので、一緒に映画を見ることに。チケット代も中で食べるホットドッグ代も全て神条さん持ちになってしまったって頭を下げたが大人の余裕で「なに、きみほどの年齢の子供は何も言わず大人の財布に頼っていればいいのだよ」と言われてしまった。これがブルジョアか。

見たのはSFアクション映画『^{sin}罪』だった。

映画の主人公が頑張って頑張って、一度は失った仲間との絆を取り戻して真の黒幕を倒すも、黒幕はもう一段階奥の手を隠しておりヒロインが殺されて世界も破滅してしまうというバッドエンドのそれは酷く胸にくるものがある。

最後は主人公ひとりだけの「俺たちの戦いはこれからも続く」みたいな終わり方で些か不完全燃焼だったが横の神条さんはなぜか

笑っていて驚いた。

とくにラスト、主人公を手助けしていた謎の肩幅広めな仮面の男が主人公にブン殴られるシーンで大爆笑。とまではいかないが、こらえきれないといった風に肩を震わせて口角を上げていたのが隣に座っていてよく分かった。

たまに、「くっ……くっ……」と笑い声がこぼれていたのは言うまでもない。

ただ、ツツコミたかったのは真つ暗な上映中でも神条さんがサングラスを外さなかったことだ。どのタイミングで神条さんが外すんだろうとすごく気になって映画に集中できなかつたのをよく覚えてい

る。
「これは私の知り合いが作った映画でね。チケットをあらかじめもらっていたのだよ」

と言うのは映画館を出てすぐの神条さんの談。

なるほど、だから神条さんのイメージとは違うSFアクション映画だったのか、と思った。

どちらかと言うと神条さんは静かな映画を好みそうな感じがするのだ。勝手にそう思っているだけなのだが。

その後は晩御飯までご馳走になってしまって申し訳ない気持ちとありがたい気持ちで板挟みになりながら、頭を下げてついでに寮の近くまで送ってもらった。

なんというか、至れり尽くせりである。

そういえば、ラストでヒロインが槍に刺されて死ぬシーンにどこか既視感があつたのはなぜだろうか。

8 / 20 (木) 昼

「あ」

これまた映画館前で人とばったり。

学ランに学帽姿の全身黒づくめの美丈夫はどこをどう見てもライドウくんだ。肩にはゴウトも乗っている。

「…えと、ライドウくんも映画？」

「…はい。たまにはこういう息抜きもした方がいいとゴウトに言われまして」

気まずい。

夏祭りの日の会話で微妙な空気になっていたのをすっかりと忘れていた。

しかしそれでもめげないしよげないここであつたが百年目。何とか会話を紡ごうと口を開く。

「…ライドウくんは何を見るか決まつてる？」

「あれを、と。少しでも乙女心が分かるようになれと鳴海さ…下宿先のお世話になつている人に言われまして」

指をさしたのは小豆色のセーラー服の少女とモミアゲの鋭い学ランのイケメンが写る恋愛映画『大学芋とセエラア服』のポスターだ。

2人でそれぞれチケットを買い、ライドウくんはアイスクリームを、自分はジュースを買つて中に入った。

なお、ゴウトについてだが受付の人に「ネコは一緒に入れません」と言われてショックを受けた顔をしたライドウくんが無理やり学ランの中に詰めていこうとしたが「我を窒息させるつもりか！」と怒られてしよげていた。

ゴウトは近くの日陰で待っているとライドウくんに告げ、そのまま姿を消した。

アイスを片手に意気消沈するライドウくんを隣に、無慈悲にも映画は始まつてしまった。

時は大正2X年。主人公の女子学生がモミアゲの鋭いモダンボーイ略してモボな学園一のイケメンとひよんなことからお近づきになり距離が大接近するというものだ。

途中の「大学芋が頭についている」というイケメンの台詞は衝撃的だった。なぜ大学芋が、頭に。

さらに主人公である女子学生が途中でバツサリその長い髪を切つて男装を始めたりその状態で刀をぶん回したりと（これ、恋愛映画か…？）と言いたくなるような展開が続くが、一緒に風呂屋に入ったり

(なお男女別なので混浴ではない)、突然軍の重役の陰謀に巻き込まれたり、果てにデカイ戦艦ロボが出てきてヒロインがその上で高笑いしてゲスな悪役顔になるわ、イケメンがその戦艦を刀ひとつでぶった斬ったりともうムチャクチャなとんでもねえ映画だった。

最後は幸せなキスをして終了。

なんだこれ。

もう一度言う。なんだこれ。

「恋愛と言うのはかくも大変なこと…自分をもつと戒めなくては」

映画館を出たライドウくんが謎の決心をしている。いや、あの映画絶対まともな恋愛映画じゃないから気にしないでもいいよ、と言おうとしたがそれを言う気力もない。

恋愛映画の皮を被ったアクション映画だあれ。初日にモコイさんと見た『怪傑！ 悪魔探偵キョージー』に近いアレだ。アレ。

「ライドウよ、恋愛の機微について学ぶことはできたか？」

「ゴウト…はい。自分も刀一本でいつか巨大ロボを粉碎できるようになりたいです」

「????? うぬら、なにを見てきたのだ？」

まあそうなるよね、と思った。

ゴウトはライドウくんの返答に目を白黒させている。そりゃ「恋愛映画観てきます！」といつて別れ、ポスターも完璧に恋愛映画っぽいイケメンと主人公であるヒロインが手を取り合って見つめ合うそれをみたらそんな内容だとは思わないだろう。

ありすと見たファンシー女兒向けアニメ詐欺激鬱映画よりかはマシかもしれないがこれもこれで相当詐欺だと思う。クレーム来ないのかな。

「…なに、と問われれば恋愛映画、ですが」

「もうよい…聞いた我が愚かであった」

溜息をついてライドウくんの肩に乗ったゴウトは気疲れしているようだった。

慣れっこのようなそれは普段からライドウくんがそういう天然発言を繰り返しているという証拠であり。

そんな二人の微笑ましい会話を眺めていると、不意に、ポケットが熱くなった。

ポケットに入れていたものと言えば、メノラーぐらいしかない。取り出してみると、その炎がゆらゆらと揺れている。

まさか、今日か。

全く準備も何もしていない。すっかり忘れていた。

「うぬ、それは……」

掌に出した炎の燃え上がるメノラーを見たゴウトが目を見開いてこちらを見つめる。

瞬間、寒気が襲った。

誰かに見られている感覚と、とてつもなく恐ろしい何かの気配がある。

「ここに、とどまりますか？」

誰かにそう問われている気がする。

いや、ちよつと待って今ここでは無理、と言おうとするもこれは拒否権がない『Yes』or『はい』の選択肢なんだった、と汗をかく。

「本当に、とどまりますか？」

いやいやいや、ホントに待って、心の準備もなにもクソもないし、ここにライドウくとゴウトがいてガッツリ見られてる前で穴に落ちたら何事かと言われてしまうじゃないかと心の中で抗議するも、無慈悲に足元に穴が開く。

ついでに、隣に立っていたライドウくんを巻き込むようにして。

「はっ！」

「えっ！」

——そして、落ちた。

目を開ける。

いつもの荒れ果てた草ひとつない荒野。三度目となるともう見慣れたものだ。

違うのは、隣に外套を着て刀を持ったライドウくんがいることだ。

「……は……」

「気をつけよ、ライドウ。ここは魔人の領域……気を抜けば死ぬぞ」

そんなライドウくとゴウトの会話が終わるか終わらないかくらいでレッドライダーと同じく地面から湧き出るように、しかし馬の嘶きはない静かな登場で黒い馬に乗った天秤を持つ骸骨が現れた。

「……」

その虚ろな眼窩と見つめ合う。

今持っているものはタルタロスにいつも持つていくナイフと召喚器しかない。今回は特殊な条件とかはなさそうので安心した。

「…我らは……ただ死を与えるもの……汝が…死を欲する限り…我らは汝に試練を与えねばならぬ…」

「？」

口を開いた黒の騎士は、ホワイトライダーやレッドライダーに比べて静かで言葉少なだ。ただその分、あの二人以上によくわからない感じがする。

「四騎士が……ブラックライダーが…汝が裁き…執り行おう……」

その言葉に、ライドウくんが身構える。

「いざ…罪人よ…参られい……」

黒の騎士——ブラックライダーは静かに、天秤を揺らして顎を開いた。

「ライドウ、相手は魔人に属する高位の悪魔だ。ゆめゆめ油断するでないぞ！」

「はい」

刀を抜いて構えるライドウくんだったが、ブラックライダーは自分しか眼中にないのか、ライドウくんに視線をむけることはない。

「…汝の魂の軽重が…我に計られる時…死は…その身の上に現れよう……」【死霊召喚】

「幽鬼 レギオンか……！ 厄介な……」

気味の悪い声をあげて、ブラックライダーは肉でできた顔の集合体のような塊に触手がついた悪魔——レギオンを呼び出す。

それに悪態を吐いたゴウトが、こちらを見つめた。

「ミカミよ、うぬは戦えるのか。はつきり言うところのライドウだけではうぬを守りながらあ奴に勝つことなどできぬ」

「ああ、えつと、そこは大丈夫です。自分の身は自分で…というかブラックライダーは俺の敵なので俺にやらせてください」

「できるのか?」

「やらかなきゃ、死ぬだけです」

召喚器を構えて息を吐く。

これは、ライドウくんの仕事じゃない。自分の、戦いだ。

ライドウくんはそれに巻き込まただけであって何ら関係ない。むしろ、ライドウくんを守らなくてはいけないのはこちらの方だというのに。

「な、うぬ、自殺するつもりか!」

銃の見た目をした召喚器をこめかみにあてた自分に、ゴウトが叫ぶ。

しかしこれは自殺するためじゃない。生きる為にすることだ。最初はこの召喚器の見た目で驚かれるがすぐに慣れる。

「♪パンタソス!」【ラストキヤンディ】

引金を引いてパンタソスを召喚する。彼女が虹色の光を落とし、それにライドウくと自分がつまれ力が湧いてくる。

以前は覚えていなかったこの魔法、レッドライダー戦以降いつのまにか覚えており、クリシュナの【戦いのターラ】とほぼ同じ効果を持っているので非常に重宝しているのだ。

「これは…!」

相手の手がわからない以上、まずは様子見をしなくてはいけない。

こういう時は補助魔法をかけるに限る。

「…笑止…」【デカジャ】

しかしそれもすぐにブラックライダーの魔法によってうち消されてしまう。

レッドライダー戦で行った手は対策済みということか。これでは補助魔法をかけても一瞬で水の泡だ。

【テトラカーン】

【マカカジャ】

ブラックライダーの召喚した両脇のレギオンがそれぞれこちらと

同じように補助魔法をかける。テトラカーンは物理攻撃を反射するバリアを1度だけ貼る魔法だ。

そしてマカカジャは魔法攻撃力を高める補助魔法だ。導き出される予測としては、ブラックライダーはレッドライダーとは違い、魔法攻撃を主体として使ってくるかもしれないという事だ。

もしかしたらホワイトライダーと同じように高威力の魔法をバンバン使ってくる系の可能性もある。

「自分も……」

ライドウくんが胸元にとめてあつた管を引き抜く。そして、緑の光と共にそれは現れた。

——召喚

「キヤハハ！ ねえライドウ！ サツリク、しちやう？」

凶鳥 モー・シヨボー

全体的にピンク色の配色の、羽の生えた可憐な少女がライドウくんの頭上に現れる。

モー・シヨボー、モンゴルに伝わる悪魔で、愛を知ることなく死んだ少女が変化する存在。「悪しき鳥」を意味する名の通り、旅人を誘惑して口で頭に穴を開け、直接脳みそを啜るといふかなりバイオレンスな悪魔だ。

そんな彼女はこちらとブラックライダーを一瞥すると、ライドウくんへと向き直った。

「ねーねーライドウ！ あのニンゲンの脳ミソ食べてもいいーい？」

「ダメだ」

「ケチね！ でもいいわよ。アタシはアナタの事好きだし、仕事してあげる！」 【デカジャ】

ブラックライダーがこちらにやったように、モー・シヨボーが相手の強化効果を打ち消した。そしてさらに、残忍な笑みを浮かべると、その髪の毛と一体化した羽で羽ばたきを起こした。

【マハザンダイン】

マハガルダインに似たそれは、名前こそ違えど見た目も威力もほとんど同じだった。緑の風がブラックライダーごとレギオンを切りつ

ける。

「成程……サマナー……悪魔の力を使うか……厄介……なればこそ……」
そこでようやくライドウくんを見たブラックライダーは、その手に持つ天秤を振り上げる。

【ソウルバランス】

周りを、【ムド】を使った時のような黒い炎が囲んで身体力を奪っていくので思わず膝をつく。体力を半分ほど削られた感覚がある。

「これ、は……！」

「ヤダ、これじゃ魔法使えないじゃない！ ムキー！」

モー・シヨボーの叫びに、こちらも自分の状態を確認する。召喚器を当てて引き金を引いてもペルソナが出てこない。封魔状態にされてしまったようだ、と舌打ちする。これではどう足掻いても物理攻撃しか手段はない。しかし相手は先程テトラカーンを貼っている。迂闊に攻撃すればその分のダメージが自分に帰ってくる。

「まだ……終わりでは……ない……」【龍の眼光】

虚ろな眼窩が光った気がして身が竦む。それを好機ととったのか、両脇のレギオンが再び魔法を発動させた。

【マカカジャ】

【マカカジャ】

【龍の眼光】

もう一度、眼窩が光る。

……嫌な予感がする。

【マカカジャ】

【マカカジャ】

【コンセントレイト】

まずい、と思った時にはもう遅い。相手は補助魔法を限界までかけ終わっている。そして、ブラックライダーが最後に使った【コンセントレイト】という技は集中力を高め、魔法の威力を2倍にする技だ。そして今、自分たちは先程の謎の技で封魔状態かつ体力を半分にさせられている。道具で回復している暇はない。つまり、どういふことかと言うと、詰んだ。

——死ぬ。

「！戻れ、モー・シヨボー！」

紫色の光が上空に集まる。

その様子に、危険を察知したライドウくんがモー・シヨボーを管の中に仕舞う。

足掻けるような手段が何も無い。せめて、ライドウくんだけは守らなければ、と別の管に持ち替えたらしいライドウくんの首根っこを引っ掴んであらん限り遠くへと投げ飛ばした。瞬間、紫の爆発。

〔メギドラオン〕

痛みとか息が出来ないとか、そんな事を考えられるものでは無かった。ただ、肌を焼く感覚。それと、頭を打ち付けるような衝撃と共に、意識が落ちる。

ああ、ダメだった。ついに、死んだ。

隔絶された意識の中で、そう感じた。

「……死の……安らぎは……等しく……何者にも……訪れよう……人に非ずとも……悪魔に非ずとも……大いなる……意思の……導きにて……」

ブラックライダーは、ボロボロになり倒れ伏して口の端からただ血を流すだけとなった優希を見つめる。

その目に生氣は無い。命の火が、今にも消えようとしていた。

その事実を試練は終わりだと、その魂を回収して天秤に乗せようとしてそれを直視したブラックライダーはその違和感に気がついた。

「疑問……何故、魂が……2つ……？ 否、これは……」

ぶくぶくと、倒れる優希の下からどす黒い泥が湧き出る。そして、そのまま軀を静かに飲み込んだ。

時間にして約数秒。瞬きの間に泥は盛り上がり、人型をとる。

パラパラと、乾いた泥が落ちるようにまとわりついたものは剥がれていく。

そうして、その男は現れた。

背の高い美丈夫。伏せられている目の端は切れ長で短い黒髪の男。

スーツの上着のボタンは止められておらず、ネクタイも閉めていない出で立ちのその男は、伏せられていた目を開いた。

金色の目。その鋭い視線と飲み込まれた優希とは違う気配にブラックライダーはたじろいだ。

「何者…」

「……葛葉。17代目葛葉ライドウだ」

そう名乗る男に、ブラックライダーは首を横に振る。目の前のそれは、葛葉ライドウと名乗るがそんなものではない。

生きている存在かと言われると、それもまた違う。

「笑止…汝は葛葉ライドウに…非ず」

「……そうか」

「なにゆえ…汝…ヒトの姿を…真似るか…」

ブラックライダーの疑問に、男は顎に手を当てた。何故。何故と言われれば答えはひとつ。

「——そうあるように、望まれたからだ」

「……」

「葛葉ライドウたれ、と。誉れ高き17代目たれ、と。ヒトの世を守護するものであれ、と。そう望まれたから、こうしている」

男の答えに淀みはない。

それがそうなのだ、信じきっている目だ。

だが、男は少し黙った後に、もう一度口を開いた。

「いや、そう『認知』されているためでもある。目覚めはまだ遠く、自らは抑圧され、大衆の認知がわかりやすいカタチを当てはめたものではない。【契約】はまだなされていない」

男はそこで初めて、逸らすように視線を横にやった。

「質問は、以上か？」

「是…試練を…続行する…」

「そうか」

気配も姿も変わったが、男が優希の身体を利用しているので広義の意味での『ペルソナ』だと解釈し、彼自身であることには変わりはない。ブラックライダーはそう結論づけた。

そしてその身にある魂も、変わらずにそこにある。
ならば、多少反則じみた存在だろうが大して変わりはないだろう、
と判断した訳だ。

このようなことがこの場で起こるといふ事は、これはこの試練を四
騎士へ行うよう言ってきた存在が織り込み済みなのだ。
たとえ目の前に立つ存在が、得体の知れない、人でない何かであろ
うとも。

男は、ちらりと背後で倒れる18代目葛葉ライドウと1匹の黒猫―
「ゴウトを見る。そして、足元に落ちているライドウの刀―」 赤口
葛葉”を拾い上げた。

「目覚めよ」

短く呼びかける。

青い光と力の奔流と共に、青い肌の魔神が現れる。

否、それは魔神ではなく、破壊神だった。

「……」

破壊神 シヴァ

ヒンドゥー教における主神のひとり。

強力な悪魔であるそれを、男は難なく召喚してみせた。

しかしシヴァに対する目は、酷く無機質でなんの感情もない。ただ
振るうべき己の力だと認識しているだけだ。

男は刀を構え、駆け出した。

目を開ける。

否、目を開けたような感覚がしただけだ。

見渡す限り、1面の黒。

光も何も無いこの場所に、見覚えなどあるはずもなく。

自分は死んだはずじゃないのか、とかそもそも死んだのなら4月6
日のベッドの上からじゃないのかとか、戸惑いがぐるぐると回る。

身体感覚はほとんどなく、上を向いているのか下を向いているの
か、起きているのか寝ているのか、それすらも分からない。

暗闇の中を、もがくように。

目印になるような光なんてない。けれど、自分が動かなければ溶けて消えてしまう気がした。

そうして、もがいていると、唐突に水から、引き上げられるような感覚がする。

ばしやり、と水音がして、大きく息を吸い込んだ。

「…はっ…い…」

目を開ける。視界いっぱい、青色が広がった。

ぜえぜえと、めいっばい息を吸う。

耳に入るのは、呪詛めいた言葉ではなく、ピアノの旋律とヴァイオリンが奏でる『月の光』。

——ベルベツトルームだ。

だがそこに部屋の主も住人も居ない。

自分の目が覚めた場所はいつもの椅子の上ではなく床の上だ。しかも、びしょ濡れで倒れていると来た。

とりあえず起き上がろうとして、全身に力が入らないことに気がついた。

かろうじてのろのろと首を動かして周りは見れるが、とても動けそうにない。

それでも、起きなければならぬ。

まだ自分が死んでいないのなら、生きているのなら、動けるのなら、目を覚まして戦わなくてはならない。抗わなければならない。

——生きなくては、ならない。

「む……………う……………」

ゴウトは、ライドウよりも先に意識を取り戻した。ライドウに庇われ、そのライドウを優希が投げ飛ばしたために直撃を避けたとはいえ、即死レベルの攻撃だったそれを受けて気絶しないはずも無く。

「ライドウよ、起きよ……！」

「…う…」

起き上がってペしペしと、その手でライドウの頬を叩くも、ライドウは呻くだけで起きる気配がない。

ヒトではないゴウトが庇われてこのダメージだったのだ。ならばライドウはもつと深くても仕方ない、死を回避しただけでもマシだとため息を吐く。

そういえば、ライドウを放り投げたミカミはどうしたのか。無事なのか、と視線を動かす。

その時、ゴウトはそこに喪つたはずの姿を見たのだ。

レギオンを2体とも物理反射によるダメージフィードバックをものともせず一刀両断の元に切り伏せ、シヴァと共に襲いかかってきた男にブラックライダーは苦戦していた。

何を隠そうこの男、悪魔と同じ技や魔法をさも当然と言った風に使ってくるのだ。いや、男はブラックライダーから見て人間では無いのでそういう類の力を持っていても何らおかしくはない。おかしくは無いのだが見た目が現代の人間に寄りすぎているために、ブラックライダーの認識にどうもズレが生じてしまう。

道具も何も使わない生身でその動きをするというのは、些か反則者だと。

さらにシヴァとの連携もまるで己自身だと言わんばかりのタイミングで併せてくるのでシヴァを2人相手取っているような感覚に陥っていた。

そして男には、人間が普通は持つだろう恐れや怯えという感情はなかった。

ただただ、機械的にその場で最適な判断を下し、それを行えるだけの力も有していた。

問題は、自らのダメージは無視といわんばかりの動きだ。相手がブラックライダーではなくレッドライダーであれば男は腕の1本でもがれていたことだろう。

この男なら四肢をもがれても何食わぬ顔で戦闘を続行するかくっつけそうだが。

だが、そんなブラックライダーに対し、猛攻を加えていた男の動き

が止まったのは不意にだった。

糸が切れたかのように、がくんと身体から力が抜けて傾いた男の姿が、ブレた。

ブラックライダーを見る男の無機質な目の金色が、ちかちかと灰混じりになる。

その横で、ブラックライダーに拳を振り下ろそうとしていたシヴァが霧散する。

それでも足をふんばった男に、ブラックライダーは隙ありと見て愛馬の蹄を振り下ろした。

刹那、力の奔流と青い光が視界を埋めつくし、くるくると回転しながら目の前に枕を抱えた漠——ポベートルが現れその攻撃を吸収して宿主の生命力へと変換した。

隙が出来たのは、ブラックライダーの方だった。

そこへ、赤口葛葉の切っ先が突き出される。

「——ッ！」

荒れ狂う力の奔流。そこから姿を現したのは男ではなく優希だった。

姿は依然ボロボロだったが、その目にはしつかりと生氣と闘争の意思が宿っている。

「ッレッドライダーッ ツッ!!」

召喚器を構えずに、叫びのままにペルソナを召喚する。

それを迎え撃とうとしたブラックライダーは天秤を掲げた。

「小手先の…手は…通用せん…」【絶対零度】

巨大な氷の塊と、冷気が優希を襲う。レッドライダーは消え失せ、守るものはなにもない。

ヒトひとり、凍らせることなど余裕であるそれを喰らってまともに動けるとは思えない。

だが、

【プロミネンス】

天から降り注いだ太陽の炎の如き灼熱が冷気を吹き飛ばし氷を溶かし水蒸気を発生させる。横を見れば、ホワイトライダーのペルソナ

が矢をつがえた状態で浮いていたがその姿を消す。

「……まだまだ。まだ、やれる」【メディアアrahアン】

そうつぶやきながらポベートルを召喚して体力と傷を回復した優希は、血をぺつと吐き出し口の端をぬぐった。まさか、氷漬けにされたあの状態からペルソナを召喚したというのか、とブラックライダーはそこで初めて優希という存在に對し驚いた。

ギラギラと闘志を燃やす目は、先ほどとは大違いだった。例えるなら——そう、何度瀕死にさせても、「まだまだ」というその言葉と共に食いしぼり、いくらでも立ち上がりそうな感じであった。

厄介な、とブラックライダーは思った。あの男の力量も厄介だったが、本体自身もなにか覚悟を決めたのか不屈の闘志を持ち合わせるようになってしまった。

否、ブラックライダー自身がそこまで追い詰めてしまった。仕留めるのなら、一撃で仕留めなければならなかったのだ。

ちろり、と優希の足元と目元で燻る様に小さく青い炎が駆け抜ける。

その背後に、ブラックライダーは朧気になった先ほどの男を幻視した。計算通りだとばかりに得意げな笑みを浮かべたその男の青い幻は、一瞬にして空に溶けて見えなくなる。

そんな事が起きていたなど露知らず、ゆつくりと赤口葛葉を鞆に戻した優希は、それを丁寧^ニに地面に置き、ダガーナイフ構えた。

そして跳躍。

「……………」【死霊召喚】

明確に狩る意思を感じて壁を作る様にレギオンを召喚し、ブラックライダー自身は後ろへと後退する。

レギオンの急所に深く突き刺さるナイフ。優希は着地しながら『ニヤリ』と嗤^ニつて召喚器を片手で構え引金をひいた。現れる赤の騎士。それは何かをするように身構える。

「……………させ……ぬ………」【龍の眼光】

行動に移させないため威圧する。

しかし、それは無意味なものとなった。

【威圧】

現れたレッドライダーのペルソナがブラックライダーの行動を真似するように眼窩を光らせた。

身がすくむ。

おかしい、どういうことだ、とブラックライダーが戸惑いを見せたその一瞬は優希が行動するのに十分な時間で。

跳躍し、首元にそのダガーナイフが振るわれる。

何度も抉る様に振るわれたそれはしかし、ブラックライダーの首を跳ね飛ばすにはほど遠い。

「…無意味…」

そう、ブラックライダーは呟いた。

傾いた首で。

「…！」

驚きに骨の口を開ける。

首が、取れた。だが、ブラックライダーはその理由がわからない。

地面に落ちた骸骨の頭がコロコロと転がる。消滅までのその一瞬、ブラックライダーはそこにいるものの存在を見て、合点がいった。

「成…程……」

——そこに立っていたのは、妖獣・ヌエと18代目葛葉ライドウだった。

気絶していたはずの彼は肩にゴウトを乗せ、手に持った赤口葛葉を振るった姿勢で止まっている。

陽動。

優希という存在に気を取られ、気絶したままだと思っていたライドウがヌエに乗って近づくのを察知できなかつたのだ。

なぜ、立っているのは1人だけであるはずなのに回復魔法を全体化させていたのか。なぜ、リーチが長い刀を地面に置いたのか。

ホワイトライダーと同じ手でやられたことは癪だが、全てはこのためだったのか、とブラックライダーは勝手に納得した。そして、賛辞の言葉を吐く間もなく消え去った。

「し、死んだかと思った…いや、多分棺桶に片足突っ込んだ…絶対…」
消えたブラックライダーを見て息を吐く。

ライドウくんの刀をパクったのか、持ったまま無意識に戦っていたらしいのは我が身ながら戦闘狂過ぎて怖すぎるが、何とかやってよかったと思う。

なんというかまあズタボロで、今度こそダメかと思ったレベルだ。まさかあんなにひどい補助魔法重ねがけからのコンセントレイトメギドラオン・オンステージを喰らうとは思っていなかった。たぶんあんな体験は二度とないと思う。ない事を祈る。アーメン。

いや、フリではないので本当にやめてください。食いしばればい
いってももんじやないんだぞ！

「ライドウくん、巻き込んでごめん…大丈夫？」

「……」

「へ？」

申し訳ない気持ちで声を掛けたら、無言でむんずと胸倉をつかまれた。

頭を後ろにそらしたライドウくんは、そのまま勢いよくこちらに頭を振ってきた。

そして――

ゴチーン！

「~~~~~っ!!!」

頭突き。

それはもう鋼鉄のデコから繰り出される、必殺の一撃だった。もしかしたらさっきのメギドラオンより痛いかもしれない。ちよつとだけさっきのベルベットルームが見えた。イゴールとマーガレットが笑ってる気がする。

「バツツカなんですか貴方はッ!!!」

「ひっ、」

ライドウくんのあまりの剣幕に身を引こうとするも胸倉をガッツ

り掴まれていて逃れることが出来ない。

「誰が逃がせと頼んだんです！ 自分なら、新しい仲魔を出して防壁を張ることだって不可能ではなかった！ どうして！ 貴方は!!!

あんなことしたんですか!!!」

怒っている。

確かに、ライドウくんの言う通りライドウくんに仲魔を召喚してもらって防壁を固めて貰えばワンチャンあったかもしれない。ただ、自分はサマナーではないのでその意識がすっぽり抜けていた。知らなかったともいう。

でもそれより、なにより、

「間に合わないならライドウくんだけでも…:と行って…」

目を逸らす。ライドウくんの顔を直視できない。

「そこがバカなんです!!!」

ゴチーン!

もう一度頭突きを喰らう。痛い。涙目になる。絶対にこれは腫れる。

「うわあ！ デコ、タンコブになるよ!」

「もうなってます!!!」

「酷い」

「ひどいのは貴方のほうです！ 善きデビルサマナーは…:ライドウは人を守らなければいけないんです！ なのに、貴方と来たらひとりで突っ走って…! 気絶している間説教部屋送りにされて『本来守るべき人間に守られるだなんて、ライドウとして情けないこと極まりない!』と歴代のライドウに説教されたんですよ！ そんなに自分は信頼できない存在ですか!」

いや、そんなことはないけれど。

というかあの気絶していたタイミングでそんな幻聴を聞いていたのかと思うと余計に申し訳ない気持ちになって来る。

夢であってもそんな怒られるような幻聴を聞くというのはライドウくんは相当厳しい環境にいたに違いないと同情した。というかライドウくん、怒るのはいいけどゆさゆさしてくるのやめて吐きそう。

「ライドウ、そこまでにしておけよ。ミカミはモコイと共に行動しているとはいえあくまで異能使い——否、アスクラと同じ。ペルソナ使い」である。サマナーとしてのイロハを知らずとも仕方ないであろう。信頼以前の問題だ」

「……ですが！」

「くどい！ ミカミが心配なのはわかるが、それ以上揺さぶるとこやつが吐くぞ」

「あつ……」

ライドウくんがやつと手を放してくれるも視界が回って気持ち悪い。おえー

「すみません…熱くなってしまつて。ですが、先ほど言った思いに偽りはありません」

信頼していないわけじゃない。信頼していたからこそ、回復魔法を広範囲にかけてライドウくんの目が覚めることに賭けたし、ライドウくんが一瞬のスキをつけてくれることを願つたのだ。

たくさん、たくさんきつかけは撒いた。それでダメなら成功するまで繰り返せばいい。

自分はただ、戦いにおいて他人が出来ないのなら自分でやればいいと思つて動いているだけだ。

それが独りよがりに見えるのなら、それはそれで仕方ないと思う。些か、ひとりで戦つてきた時間が長すぎた。

まともに自分の頭で考えて連携を取るようになったのはモコイさんと一緒になつてからだと思う。それまでは湊か奏子という現場リーダーの指示に一任していたし、自分も指示を出す側ではなかった。

そもそも、特別課外活動部と関わり合いがなくなつとひとりだった周もあるのだ。

ほんとうに、今更過ぎる。

「こちらこそごめん。自分の悪い癖だつて他の人からも言われるけど染みついちゃつて抜けないんだ」

「…そうですか」

「こやつのはそれは筋金いりか…死んでも直らんな…」

なぜか呆れたような1人と1匹の溜息と視線が向けられる。

が、すぐにその目は驚きの目が変わった。どうしたのだろうか。

「……汝…」

「？」

ちよんちよん、と肩を誰かに突かれる。

そして、振り向いた視界いっぱいには骸骨のドアップ。

「うわあああああああああ!!!」

思わず叫んで腰を抜かす。

!!!

情けないけどそれくらい驚いた。

ここはお化け屋敷だったのか。

「驚嘆…そこまでのこととは…これは…謝罪する…」

申し訳なさそうに静かに距離を取った骸骨ことブラックライダーはまた指をさす。とても律儀な性格なのかもしれない。驚いてゴメン。

「汝…試練たる我に打ち勝ち…勝利を手にした…よつて勝者には…報酬を与えねば…ならない…それが…定め…」

いつもの分霊の降魔らしい。腰を抜かしたままという情けない格好だしました降ろされた実感はないが、満足そうにうなずいたブラックライダーを見るにたぶんできているのだろう。

「…汝…黙示録の四騎士たる我の…黒き騎士の力…活用すると…良い…だが無理は…しなくとも…よい…」

なんて謙虚なんだろうか。前の2騎がそれはもう押し売りとか押し付けるような感じだったのでとても謙虚に感じる。謙虚な騎士はというのはそれだけで好感が持てるものだ。

…心の中で「自分たちも謙虚だ」と言いたげな抗議の声が2つあがった気がした。

視界が白み始める。

次に目を開けたとき、映画館の前で穴に落ちる直前の姿のままそこに突っ立っていた。

ライドウくんも穴に落ちる前と寸分たがわらない姿で同じ場所に

立っている。

「…さて、ミカミよ。このことについての詳細を聞かせて貰おうか？」

「アツハイ」

貫くようなゴウトの目線と低い声に、自分は大人しく従うしかなかった。

「——なるほど、うぬはうぬ自身の意思であやつら魔人と相対しているわけではなく、誰かに仕組まれて戦っている、と」

「そうなります」

頷く。

あのあと、どうして降魔されている騎士の数が増えたのかや何故戦っているのかの説明をした。すると、ゴウトが何かを理解したようにひとり納得する。

「…かの人修羅と同じであったか」

「？」

「いや、なんでもない」

だれかこのめんどくさい試練と似たことを強制されている人がほかにもいるのだろうか。

それはご愁傷さまとしか言えない。

「正直ペルソナがこうして増えて戦略に幅ができるのはいいんですけど、毎回毎回ほほほ死にかけてるんで勘弁してほしいとか割に合わないというか…いやこれ絶対死んでるだろって言うか…とにかくもうやめたいけど拒否権ないし毎回強制連行だしまじでコレ仕組んだやつと会うことになったら一度心行くまでボコボコにしたいっていうか…劇物を口にぶち込んでやりたいっていうか…そんな感情しかない」

「三上さん…」

死んだような目をしてそう話しているとライドウくんが憐れみの目を向けてくる。

思いやりと生暖かい目が心にしみる。

「でも、あと一回って言われてるしもういいかなって…」

正直な話あんまりめんどくさい相手とあと一回と言えども戦いたくないのが本音だ。今回なんか死にかけたというかたぶん棺桶に片足突っ込んでたと思うし、なんで無意識で動いていたのかも謎だ。意識失つても戦い続けるとか正気の沙汰ではない。そんなものを湊と奏子に見られた日にはベッドに雁字搦めにされた後にドルミナーで強制的に眠らされかねない。

「それはそうだが…もし終えたとてうぬが一般人と同じ日常に戻れるとは限らぬ。一度魅入られたものは悪魔と一生付き合っていかなければならないのだからな」

「それは…困るなあ…」

本当に困る。

これ以上忙しくなったら身が持ちそうにない。

確かに強くはなりたいがさすがになんでもOK！ というわけではない。物事は正しい順序を踏むべきなのだ。こんな突然やってきて突然去るようなものは要らない。ノーサンキューである。

結局、頭を抱えている自分でも、ライドウくんでも手掛かりなしの現状にどうすることもできないしもうあと一回だけと何故か決まっているのでこの話は一旦不問という事になり、その日は解散した。

ただ、その日の夜からとても腹が空いてしまっただけで、はがくれ”でラーメンを三杯食べてしまったのは秘密だ。

幕間：有里湊のみる悪夢

1回目

『それじゃ、今から迎えに行くから駅で待ってて』

「わかった」

そんな兄からの電話を切り、湊は隣の奏子を見た。

予定より遅れてしまったが、今日から兄と同じ寮に入ることになったのだ。その為、養父母達と共に住んでいた御影町から電車を乗り継いでここまでやってきた。

2年生から転入だなんて珍しいかもしれないが、色々事情があつてそうなっているだけだ。

駅の入口で兄を待っていると不意に景色が変わる。全ての機械が止まり、辺りは棺桶が並ぶ世界になった。

ただ、それに対し今更反応する自分と奏子ではない。昔からそうなのだ。

そして、兄もこの異様な世界に適應している。心配しなくともすぐ来るだろう。

「ごめん、待たせたよね。あ、それとも、ようこそ辰巳ポートアイランドへって言えばいい？」

そう思っていると、まるでタイミングを合わせたかのように兄がやってくる。につこり笑い、いつもと変わらない兄の姿に安堵する。

「どうでもいい。けど、会えて嬉しい。最近メールだけだったし…」

「そーだそーだ！ 私も湊も我慢してたんだからね！」

「だからごめんって。じゃあ、寮に行こうか。案内するよ」

そうして、歩き出す。

奇妙な景色の中で、何の変哲もない思い出話や近況を話し合いながら歩く。

養父母から自分達までこちらに転校となると寂しくなると言われたことや、一時的にとはいえ特別寮に転寮で優希と一緒なら安心すると言っていた事などを伝えると「あの人たちは心配性だからなあ」恥ずかしそうにはにかんでいた。

もうすぐ寮につくよ、と兄がそう言つて、さらに話を続けていたその時、物音が聞こえた。それに最初気がついたのは、兄だった。

「俺も巖戸台分寮には男子寮の全体クリーニングがある関係で今年の春休みと4月はじめの2週間丸々だけお世話になる予定なんだけど……ん……? なんだ……この音……」

普通、この変な景色になった時は環境音以外の物音が一切しない。だと言うのに、先程から金属を打ち合わせるような甲高い音が何度も響いているのだ。

立ち止まつて、きよろきよろと周りを見回す兄の視線が、先程来たT字路で止まる。

そして、顔を青ざめて口を震わせた。

「……ひっ……!」

兄が見たものを直視したらしい奏子が、小さく悲鳴をあげる。

そこに居たのは、腕の沢山生えた化け物だった。

それは器用に奏子の悲鳴を聞きつけると、ぐりんと首を回して水色の仮面のような顔をこちらへと向けた。

「……まずい……!」

兄が、息を飲む。

そして湊に顔を向ける。

「……湊、これから奏子連れて寮まで走るんだ。その角を曲がれば一本道ですぐだから、その寮に入ったらすぐに桐条美鶴っていう赤い髪の女子生徒にこの話をして欲しい。いいね」

「優希は……!」

「今から、全力であいつを引きつける。大丈夫。俺が2人を守るから」
湊の返事も聞かずに化け物へと向かっていく兄を見て、湊は奏子を連れ、寮まで走ることしか出来なかった。

2人で転がり込むように寮に入り、謎の少年に求められるがまま急いで書きなぐるようにサインをして、桐条と名乗る先輩に兄が化け物から逃げる時の囿になったことを伝えた。

部屋の場所だけを教えられ、「君らの兄のことはこちらに任せもう寝るといい」と言つて青い顔で飛び出していった先輩の言葉通り、2

人はそれぞれの部屋に入る。

しかし、眠ることなど出来なかった。

結論から言えば、兄は翌日、別れた場所から少し離れた道路で死んでいるのが見つかった。

全身切り傷と火傷だらけ。致命傷は、腹を何かで貫かれたことによる失血性ショック死だったそうだ。

冷たくなってもう目覚めることの無い兄を前に、奏子は泣き崩れ、養父母は静かに泣くだけだった。湊は、泣くことが出来なかった。

ただ、ぽつかりと心に大きな穴が空いたような、そんな感覚だけがずっと残っていた。

兄の死は表向きには『深夜コンビニに行こうとして通り魔に襲われた』という犯人不在の痛ましい事件として処理された。

同じ寮に住む岳羽ゆかりと真田という先輩、そして美鶴には転校して早々不幸な事に見舞われてかける言葉も無いと酷く慰められた。

が、湊と奏子にはあの化け物が犯人だと分かっていた。否、同じ寮にいる人間は皆分かっていた。

あの、仮面の化け物が兄を殺したのだと。

——だから、湊は笑みを浮かべたのだ。

寮の屋上。追い詰められたそこで、銃をこめかみに当てたその時、やっと兄を惨たらしく殺した奴をここで殺せるのだとハッキリとわかったから。

自らのペルソナを突き破って出てきたそれも、そいつを切り刻める歓喜とどうしようもなく抑えきれない怒りに打ち震えているようだった。

2回目

1年が過ぎ、ニクスという滅びを回避するために封印をして眠りについたはずだった。

目を開ければ、奏子と共に辰巳ポートアイランド行きの電車に乗っていた。

日付は、2009年4月6日。

時間が巻き戻っていることにあれは悪い夢だったのか、と思おうとするも、

現実味があり過ぎてどうも夢だとも思えない。

奏子にそれとなく探りを入れてみるも、「なにそれ？」という返答しか帰ってこず、この奇妙な記憶は自分しか持っていないのかと首を捻った。

そして駅に着くも兄からの連絡はなく、そのまま慣れた足取りで寮へと向かえば今度は何も起こることがなかった。

しかし、謎の少年——ファルロスからのサインは求められたし、ゆかりや美鶴との出会いはなんら変わりがなかった。

兄は急に体調を崩してしまったらしく寝込んでいるらしいと聞いて、もうあんなふうにならなくしてやっつけて殺されることは無いのだと安堵した。

そんな安堵も、10月には消えてしまう。

10月の満月の日。大型シャドウとの戦いの時、兄と天田と荒垣先輩はそこにはいなかった。

その時点で嫌な予感しかしなかったが、銃声を聞いて走って駆けつけければ、そこには胸から血を流して仰向けに倒れる兄の姿が。

「ばか、だなあ…荒垣くん…きみが、考える…こと、なんて…わかって…ごぼっ…」

「テメエ！ 馬鹿野郎が!!! 喋るんじゃねえ！ 傷に響く！」

「そ、んな…三上さん…どうして…」

「なぜ…なぜあなたが…庇ったのです…！」

荒垣先輩と天田の反応は湊にも分かったが、銃を撃った側であるストレガのタカヤすらも顔を青ざめてありえない、と言いたげに狼狽えていた。

「……」

「おい… 三上、死ぬな！ おい！」

荒垣先輩に揺さぶられた兄は、既に事切れていた。

その後、最後の大型シャドウ戦の時に、1度目の記憶が正しければ

ストレガとの戦いになるはずが、ストレガはどこかへと行ってしまったかのようにその姿を消してしまった。

病院に収容されていたチドリはペルソナの暴走が起き、その場に居合わせた順平が決死の覚悟でその暴走を止めたが結果虚しく仮死状態に陥り、後に象徴化と蘇生を果たした。

そして、湊は2度目のニユクス封印を迎えてまた春の日に眠りについた。

3回目

また電車の中から始まった。

3回目となるともう慣れたもので奏子に記憶が無いことも確認済みだ。

駅に兄が迎えにこないことを確認する。クリア。

このまま10月まで何も無いことを祈りながら毎日を過ごした。

問題の10月の大型シャドウ戦も、タカヤに撃たれた荒垣先輩が意識不明に陥るだけで助かったという奇跡が起き、兄の無事を確認して安心して過ごした1ヶ月。

11月、最後の大型シャドウ戦を終えた次の日。

幾月によつて捕えられた湊達はタルタロスまで連れてこられた。

そこで、兄は皆の目の前で見せしめとして銃で撃たれて殺された。

もつとなにか幾月が言っていたような気がしたが、湊にはそんな事を覚えていられるほどの余裕はなかった。

4回目

タルタロスでの探索時、強敵からのバックアタックを食らった湊と不調でふらついた奏子を庇って兄はあっさりと死んでしまった。

バックアタックを食らってしまったことと奏子の不調を見抜けなかった自分に湊は苛立ちと無力感を感じた。

5 回目

夏の日

7月29日。

コロマルをイレギュラーシャドウから守ろうとしたらしい兄は更なるイレギュラーシャドウの出現によって死んでしまった。

コロマルも大怪我を負い入院している。湊は、次も同じようなことが起こらないようにこの日は気をつけようと決意した。

6 回目

昼間に出かけたはずの兄が惨殺されてしまっていた。獣に食い荒らされたような跡があつたらしい。

帰ってきたのは骨だけで、遺体は酷く損傷していた為にすでに火葬されて見る事が出来なかった。

昼間に出かけたのでシャドウの可能性はない。

ここまで来ると、湊も心が麻痺したかのように動かなくなってしまうていた。苦しい。辛い。そんな感情が浮かんでは消えるがそこまでだ。かつてそれを受け止めて慰めてくれていた存在はもう居ない。

どうして兄は1年と経たずに死んでしまうのだろう。

7 回目

湊は奏子と一緒にニユクスを封印した。

しかし、そこから兄が帰ってくることは無かった。

帰ってきたのは冷たくなった身体だけ。兄は誰にも言わなかったらしいが、1月31日時点で動いていられるのが奇跡的な程に満身創痍だったらしい。その状態でタルタロスの頂上という至近距離でニユクスの死の波動を浴びればどうなるか。

答えはひとつしかない。

湊は、また失敗した。

8回目

湊は、その時の兄の死に様を思い出したくもなかった。

否、記憶が無い。

ただ、凧いでいた心を久しぶりに占領した燃え盛るような激情と強烈な殺意だけは覚えている。

9回目

兄が、1人で立ち上がる。

ニユクスによる死の波動で、皆動けないのに、兄だけが何も無いようにそこに立っていた。

「これで、俺の旅路もようやく終わる」

兄が、何を言っているのか分からなかった。けれど、死のうとしていることだけはとてもよく分かった。

「俺のいのちは、やっぱり2人を救うためにあっただな」

そうしてひとりで納得した兄の身体が浮く。

違う。そんなのがいのちのこたえだなんて湊は認めたくなかった。そんなものを認めてしまえば湊の繰り返しているこの悪夢はなんだというのか。

“ニユクス”を前に離れていく後ろ姿。

“世界”のカードを手に、こちらに向かって振り返り優しく微笑んだ兄に手を伸ばす。

「…だめ、だ…い」

いけないで。それ以上進まないで。

その先は、

その先にあるのは。

湊と奏子は立ち上がろうとする。今度こそ、救わないといけないのに。

“一人で”行かせてはいけないのに。宇宙ユニバースのアルカナを手に入れている自分たちの身体はちつとも動かない。手は、とどかない。

「――さよならだ」

死が、そう言っただけで微笑む兄に絡みつく。

「逃がさない」と。影たちが絡みつく。

それが酷く湊を苛つかせる。

兄を止められなかった自分も、兄を呼び、逃さない『滅び』にも。兄が、優希が消える。

手の届かないところへいつてしまった。

もう止められない。もう帰ってはこない。自分や奏子と違って、ニクスを封印した兄が3月まで生きていられるなんてありえない。

そんな、直観めいたものがあつた。

隣で這う奏子の、絶望したような顔がひどく痛々しい。

ああ――

「また失敗した」

そうして、流転する。

10回目

揺られる電車の中で、また湊は目を覚ました。

今度こそ、兄を死なせはしないと覚悟を決めて外の景色を見るのだった。

似た者同士（8／21）

目を開く。

もう、確認するまでもない。

視界いっぱい広がる青と光が漏れる水槽。そして聞こえる『月の光』。

——ベルベツトルームだ。

「もう寝坊助さんはやめたのかしら」

慣れた、と言わんばかりにマーガレットが微笑みながらペルソナ全書を開く。

「貴方様はついに『第三の試練』を越え、その力の一端を手に入れた。我が主もよろこんでいらつしやることでしような」

いつもと変わらないイゴールの言葉を聞き流した。

どうせ次で終わりなのだ。深く考えることもない。

「さて、我が主より賜りしこの『試練』——今までお伝えすることができず、心苦しい限りでしたが…これは我が主から貴方様への『仮の儀式』となりますゆえ」

「…？」

イゴールが話した言葉に首を傾げる。『仮の儀式』とは、一体何なのか。

「度重なる運命の繰り返しにより、貴方様はついに真実にたどり着いた。しかし、そこで得たものをかの者に砕かれ、奪われてしまったのです。その砕かれたものを擬似的に補うための仮の儀式。それが、試練と」

「……」

わからない。そんな記憶はどこにもない。

「わからずとも致し方ないでしょう…貴方はその記憶とやり直すことを引き換えにしたのですから…」

記憶とやりなおすことを引き換えにした。

すなわち、自分はその記憶を失っているということなのだろうか。

「左様。ですが貴方様は来るべき時までその記憶を思い出すことはで

きませぬ。砕かれ、奪われたものを取り返そうとしたその時、やっと貴方様は思い出すでしょうな」

「貴方はまだ、本当の自分とまだ向き合えていないの。この空白のカードは、本当の貴方を映す鏡。私は、貴方が空虚な存在でも何でもなく、本当の貴方になれる時を待っているわ」

マーガレットが、空白のカードをペルソナ全書から取り出し浮かばせる。

本当の自分。よく、わからない。自分は自分。そのはずだ。

「第四の試練を越え…貴方様がまたここにいらっしやるのを心待ちにしております…」

その声を最後に、意識は暗闇へと落ちる。

8 / 21 (金) 昼

巖戸台分寮

昨晩から腹が減って減って仕方がない。

朝からとんでもない量を食べ、美鶴さんから怪訝な目で見られてしまった。

それでもなお、腹が満たされる感覚が来ることはなく。食欲が落ちる前は沢山食べていたとはいえ、これは少しおかしい。

棺桶に片足を突っ込んだせいで満腹中枢が壊れてしまったのだろうか。それはそれで両極端すぎやしないかと文句を言いたくなる。

しかし満腹中枢が当てにならないのなら、世間一般的な1人前で我慢するしかない、と飢えを訴える腹を無視して外に出ようとラウンジへ向かう。

映画祭りはまだ続いているが、今日は映画を見る予定は無い。

ただ、あのまま部屋で寝るのも辛いと思ったから外に出てあてもなく彷徨おうとしているだけだ。

「おい三上、てめえそんな顔してどこに行こうとしてやがる」

「……………」

横を向いて声の発生源を確かめれば、鋭い目付きの荒垣くんがそこ

に立っていた。そんな顔、とはどんな顔なのだろうか。

「俺が言えるギリじやねえがな…そんなギラついた目をされちや天田やてめえの妹含む女子どもが怯えんだろうが」

自分は今、そんなにギラついた目をしているのか。むにむにと瞼を指先で揉んでみる。そして何回か瞬きして開く。

「…どう？」

「ンなもんで治るわきやねーだろ」

「いてっ」

デコピンをされて額を押さえる。

荒垣くんはふう、とため息をついた。それを見て、やらなくてはならない用事を思い出す。

「夜までにかしとけよ」

「どうにかつて…あ、そうだ。荒垣くん、今日空いてる？」

「あア？ まあ、空いてるが…どうした？」

荒垣くんを朝倉医院に連れて行くのをすっかり忘れていた。

「着いてきてほしいところがあるんだ」

「…？」

怪訝そうな顔をした荒垣くんを引つ張って、朝倉医院へと向かう。

場所は、駅前商店街の近くにある住宅街だ。

「はーっはっはっは！ よく来たなあ！ オレのモルモット予定の不

摂生なクソガキイ!!!」

「おい、なんだコイツはよ」

朝倉医院に入るとハイテンションの徹夜明けらしい朝倉先生に出迎えられる。

げんなりした顔の荒垣くんが朝倉先生を指さし、珍獣でも見たかのような反応をしている。まあ初見はそうなるよね、という気持ちしかない。

「…俺の主治医の先生…うん、こんな医者いるかって顔してるのによくわかるよ…」

「おい聞こえてんぞクソガキそのーイ！ ウツセー、オレは徹夜明けなんだよ！ テンション高くて悪かったな！」

「…個性的っていやあいいのか？」

困ったようにこちらを見る荒垣くんは何も言えない。

素の朝倉先生は平時でもインパクトがデカいが今日はいつも以上にハイテンションで少し変だ。徹夜しているのは確定だがそれ以外にも白衣が血で汚れていたり、擦り切れていたり、腕に包帯が巻かれていたりして、獣か悪魔かなにかを相手取ったような様子だった。

そんな視線に気がついたのか朝倉先生は「あー」と言いながら苦い顔をして包帯の巻かれた手首を上げる。

「昨日の夜にな、ちよつと暴れん坊な悪魔なりかけ人間を捕まえてな。そいつを専用の部屋にブチ込むのに手間取ったんだよ。…今は麻酔が効いてぐっすり寝てるから安心しろ」

「…？」

悪魔になりかけた人間というのはなんなんだろうか。その名の通り悪魔になりかけている人間？

いや、まさかそんな人間が悪魔になるなんてこと…と考える。悪魔は悪魔じゃないんだろうか。

「で、そいつが荒垣ってやつだな。まあ、とにかく奥に入れよ。話はこつちでやるぞ」

奥へと案内されていつもの部屋とは違う部屋に向かう。

その部屋には冷蔵庫にパソコンとソファア、そして本棚にテーブルとベッドという、成人男性の一人暮らしの部屋のような場所だった。ベッドの上にライフルが置いてあるがモデルガンだろうか。

「ちよつち待ってる。昨日使った商売道具をしまわなきゃなんねえ」

そう言っつて、ライフルを手を取った朝倉先生はガンケースにしまふ。

ちらりと見たケースの中に、実弾のようなものが入ってたのは気のせいなんだろうか。

荒垣くんもライフルが仕舞われていく様を食い入るように見ているので気になるものがあるんだろう。

「…よし、待たせたな。話があるのは荒垣、お前の方だ」

「俺に…？ 医者の世話になるようなこたアした覚えがねえぜ」

よっこらせ、とソファアに深く座り込んで欠伸混じりに荒垣くんの方を向いた朝倉先生は、荒垣くんのその答えにニヤリと笑った。

「おっと、オレを欺こうつたつてそうはいかねーぜ。話は全部聞いている。お前…ペルソナの制御剤使ってるんだつてな？」

「!? てめえ…どこでそれを…!」

「こいつ」

さも当然といわんばかりにこちらに指をさされ、荒垣くんの視線が向く。

「いつ知った…？」

「…えーつと、」

ずっと前の周です、とは言えない。

適当にタカヤから取り引きしてる事を聞いたでいいかと考えた。ついでに自分も飲んでいること、湊たちには秘密だぞ☆しておくのも忘れずに。

「…タカヤ、から…実は俺も色々あつて飲んでるんだ…それ」

「そうか…そうだったな…」

納得してくれたように目を伏せる荒垣くんに追撃チャンスが発生したのでここで畳み掛ける。

「荒垣くんが飲んでること、俺みんなには言わないからさ。俺が飲んでることも秘密にしておいてくれないかな？」

「…しゃあねえ。黙つといてやるよ。けどな、バレた時はそんなときだぜ。腹くくろうや」

その言葉に頷く。バレてしまった時はもう仕方ないと思うしかない。その時に考えよう。

「で、アンタは制御剤を飲んでることを知ってなにがしてえつてんだ？」

荒垣くんが朝倉先生に向き直る。

その目は鋭く威圧感すらある。

だが、朝倉先生は全く気にしてない様子で飄々としている。

「なにつて、治験と血液検査させて欲しいだけだぜ。サンプルはもう5人分集まつてんだが、サンプルやデータはあればあるだけいい。いくらあつても困らねーからな」

また欠伸混じりそう言った朝倉先生はひどく眠そうだ。いま、先生が5人分と言ったが自分とストレガの3人を合わせても4人なのでもう1人誰か制御剤を飲んでいる人を見つけたのだろうか。

「そのかわり、限度はあるが制御剤でボロボロになった体がある程度までは治してやれるし副作用のほとんどない無い制御剤だつて飲める。至れり尽くせりだと思わねえか？」

そう腕を広げて演説する様に得意げな顔をして言った朝倉先生を見た荒垣くんは、げんなりとした顔をこちらに向けた。

「おい、三上。こんなやべー医者を用いてんのか？」

「言動はアレだけど腕は確かだし良い人だよ」

「シャラップクソガキ！ それを言うなら全てパーフェクトな天才ドクターと言え！」

素直な意見を述べたらとんでもない言論修正をされた。口の汚さに関しては、ある意味完璧かもしれないので確かに間違つてないのかもしれないがそういうには何故かはばかられた。

……。

とうかさつきからなんだか無性にトイレに行きたい。腹が減つてるんだからついでに処理してしまえと朝適当にがぶ飲みした賞味期限切れの牛乳が不味かつたのかもしれない。夏場だから余計に。

どうせこの話は荒垣くんがどうするか決めることだし、一刻も早くトイレに行きたい。

「先生、トイレ借りてきてもいいですか」

「おう、話があるのはコイツだけだからな。お前は席外しても問題ねーぜ。場所はわかるな？」

頷いて部屋を出てトイレへダッシュする。そしてドアを開けて急いで鍵を閉めた。

手を洗ってトイレから出る。

何がとは言わないがスッキリした。絶好調とまでは言わないが少

し調子が良くなった気がする。

「……………」

廊下を歩いていると、不意に先程までは感じなかったチリチリと脳裏を焦がす様な、後ろ髪を引かれるようなそんな感覚がして立ち止まる。

右を向けば、1枚の扉。

無意識に、ドアノブを捻ってその中に身体を滑り込ませていた。

中は、真つ白な部屋だった。

鉄格子でふたつに区切られており、その向こうに黒い人型のなにかが蹲っている。

チリリとまた、脳裏を焦がすなにかを感じた。

自分はまるでそうするのが正解だというかのように鉄格子へと吸い込まれるように近づく。

そして、鉄格子の隙間から手を伸ばして触れられる距離にあった眠っている様子の『だれか』の鉤爪の生えた黒い大きな手に触れた。

「……………」

冷たい。

僅かに体温のようなものは感じられるが、それでも平熱よりかは低い。

包み込むように、両手で優しく握る。

自分は、これが誰か知っている。けれど、覚えてはいない。ただ、助けたいと思った。

「…フウー…」

目を閉じて息を深く吐く。

大丈夫。俺ならやれる、と自身を励ます。

やり方はわからない。けれど、なんとなく、できる気がするのだ。

目を、開いて目の前の『だれか』の中で蠢く異物だけを吸うように意識する。

【吸魔】

瞬間、ずくと腹が痛みに疼いた。

耐えられない痛みでは無いので続行する。

「ぐ……いつ……」

異物を喰らうように吸収する。

吸収する。

痛みが酷くなってくるがさらに耐えて続行する。

吸収する。

時間がどれほど経ったのか分からない。分からないが、終わる頃には汗でびっしりと髪と服が濡れていたし、腹部は先程の比では無いほどに痛みを訴えて脈打っている。

「……う……あ……」

人のものに戻った手から自分の手を離し、腹を抱えて丸め込むように床に倒れ込む。

苦しい。熱い。痛い。なにかに侵されるような感覚がする。

苦しみながら、腹の中で暴れ狂うような異物を押さえつける。

黙れ、黙れ、黙れ、俺に喰われたからには言うことを聞け、と怒りのようなものをぶつけた瞬間、鎖の音が一瞬だけ聞こえて大人しくなった。

もう苦しくもなんともない。ただ、しばらくは起き上がれそうにないなとも思った。疲労感がすごいのだ。

というか、自分がいま、なにをしたのかよく分かってない。

なにを、したんだったか、わからない。でも、いつもあんなふうになだれかの手を、握っていたような気がする。

あたまが、ぼんやりとする。ぐるぐると、しかいがまわって、チカチカする。赤い。あかい、血が、視界の、端に。

「ここに居たのかクソガキ！ おい、大丈夫か!? って、なんだこの異様なMAGマグネタイトの気配……それにどういことだ……ヤツが人に戻ってやがる……? いや、そんなことよりも、オマエ、意識はハッキリとしてるか? 自分の名前は言えるか?」

扉を蹴破るように入れて部屋に入ってきた先生に抱き起こされる。

先生。せんせい。目の前のこのひとは、だれだっけ。

「だ……れ……う?」

「……っ!」

どうしておどろいたような顔を、するんだろう。

よくわからないけれど、白衣をきてるから、きつと、いつものおとなのひとに、ちがいない。

そうだ、いわなきや、なまえを、いわなきや。きかれたことには、こたえないと、おりのなかのあのこがいたいめにあわされてしまう。そんなのは、だめだ。

じぶんは、ぼくは、

「あ……………り…さと……………」

「…何？」

「ありさと、なきや」

朝倉はそう告げて苦しげに意識を失った優希に舌打ちして横抱きにする。

こちらのことを認識できずまともに自分の名前も言えないとくるとなにか異常が起こっていることは確実だった。ただ、ナギサという名前は朝倉自身聞いたことがある。ストレガの3人がよく優希を指して言う名前だ。つまるところ、こうなるような原因があつて記憶の混濁かなにかが起こっているのでは無いかと推測した。そしてそれは、昨夜、*「ジンの頼み」*でストレガと協力して捕まえてきた檻の中の男絡みだということも。

「あ……………」

腕の中の優希がぶるり、と震えて青ざめる。

嫌な予感がした朝倉は持ち上げていた優希の身体を迅速に、だが優しく床に降ろして回復体位をとらせた。

そして優希はもう1度大きく痙攣するように身を震わせ――

「おえ……………げつ……………う……………」

――嘔吐した。

食べたものだろう消化されきつていないそれらが胃液と共にビチャビチャと吐き出され、すえた臭いが漂う。

吐瀉物を喉に詰まらせていないか気をつけながら、朝倉はトントんと背中を叩いて全て吐ききるのを待った。

「う……」

呻きながら目を開ける。

喉がイガイガする。見た事ある天井だ。

とうかこのくんだりは3回目な気がする。つまるところまたなにかやらかしてぶっ倒れたのだろう。バカか自分は。いい加減学習しろ。

「よ、不健康不良児。お目覚めか？ 名前は言えるか？」

「三上優希……です……」

「じゃあ俺が誰かわかるか？」

「え……朝倉、先生……？」

「ん。大丈夫そうだな。気分が悪かったりとか変なところはねーか？」

やけに朝倉先生が優しい。いや、言葉が汚いだけでいつも優しいけれど。

首を横に振る。

「オマエ、倒れる直前までなにしてたかわかるか？」

朝倉先生の言葉に思い出すように記憶を辿る。が、トイレを出てからの記憶が無い。ついでにパンツとズボンは上げていただろうか。出たんなら上げてるだろうが何かあつて下ろしたままとかの可能性もあるから不安だ。

「トイレを出てからは何も……覚えてないです」

「そうか……」

「……俺、パンツとズボン下ろしっぱなしで倒れてたとか無いですよね！？」

「ねーよツ!!! つか、そこは覚えとけや！」

ぐもつともだ。

だがしかし現実は無慈悲かな、ズボンを上げるのは特別意識してやる事では無いので上げた記憶がない。いや、先生がちやんと履いてたって言ってるのなら履いていたのだろう。普通に朝倉先生は「ノーパンだったぞザマア」くらいは言いそうなのにそれが無いということはその事だ。

「パンツ云々は置いといて、その先は覚えてなくてもしやあねえか：このことに関しては：良くやった、と褒めるべきなのか勝手なことすんじやねえと怒るべきなのか：今のオレにやわからねえ：」

困ったような顔をする朝倉先生は、何かを言うことを戸惑っているようだった。それは、いつもズケズケと物を言う先生にしては珍しいことだった。

ただ、自分が覚えてなくても仕方ないことが起きたらしい。まさか、やっぱりノーパンで：いや、考えるのはやめとこう。

「ま、そんだけ元気なら大丈夫か：」

ガシガシと頭をかいた朝倉先生はまた口を開いた。

「そうだ、荒垣は通いでオレのモルモットになる事が決定したぜ。いやあ、タカヤ達に比べてすんなり行つて驚いたぜ。物分りが良くて結構結構。まあ、ちつとややこしいもん抱えてるみてえだけどな：」

満足そうに笑う朝倉先生の苦労は計り知れない。

モルモットなんて言葉を使ってるが、患者に対する扱いは丁寧だしとても細やかに気を使っていることは自分に対する扱いから見ても分かる。朝倉先生は悪ぶりたいだけなのだ。

「ついでに雑用として週に何回かバイトしてもらうことになったから人手が増えてありがたいことこの上ねーわ！」

ガーハツハツハ！と笑う先生は大金を前にした悪巧みする悪役のようだがそんなことは無いのでスルーする。

「ところで、話は変わるが定期検診の分もこつちに転院してこい」

「え、なんでですか：？」

突然のことに戸惑う。

確かに、あつちの病院での朝倉先生の言動がこつちとギャップありすぎて最近ゾワゾワしていたがそんな急に言われても困る。

「理由としてはいちいち切り替えるのめんどくせーのとオマエしかあつちの病院で診てる患者が居なくなつたから、だな。どうせこつち知ってるなら近い方がいいだろ」

「なるほど…」

「紹介状はこつちで書いてくから気にすんな。次の診察からこつちに

来てくれりゃいい」

先生のその声に頷いて、身体を起き上がらせる。

来週からはこっちの病院でいいとなると通うのが楽になる。時間の空きもできるしいいことづくめだ。

そんな思案をしながら帰るための準備を始めるのだった。

「断る」

「あ？　なんでだ。まさかオマエも死にたがりとかか？　あつちはあつちでなんか複雑みてーだが」

優希が部屋を出たすぐの頃。

「副作用のほぼない制御剤を提供する代わりにモルモットになれ」という朝倉の要求に対して、そう答えた荒垣に朝倉は首を傾げたが、ストレガの三人を思い出してそれと同じかと予測する。

「……」

「なにがあつたかは知らねえがそういうのはやめとけ」

そう言った瞬間、眉をひそめた荒垣が口を開いて小さく呟いた。

「テメエになにが分かる……」

「あ？」

怪訝そうに顔を顰めた朝倉に、荒垣は立ち上がった。

「テメエになにが分かるつつつたんだ!!!　…人を殺しちゃったやつ

の気持ちなんざ、人命を救うオイシヤサマにはわかんねえだろ！　俺は

…くそつ！」

頭を抱えてなにかを抑えるように叫んだいつもと違う荒垣の様子に、優希が居ればなにかわかったのかもしれないが、今は席をはずしているし朝倉は生憎とその様子を気にして口をつぐむようなタイプでもなく。

対する荒垣といえはこんな一介の、今日会ったばかりの医者になにが分かるのかと激しい怒りのような何かを覚えていた。

「…わかんねーな。どうして人を殺したことと自分が死ななきやなんねーのがイコールで繋がってるんだ？」

「は…？」

今度は荒垣がぼかんとする番だった。

いや、自責の念やそういうのがあるだろ、と思っただが確かに何故イコールで繋がるのかと問われればこのみようちきりんな医者^を納得させるだけの答えを荒垣は持ち合わせていなかった。

「ああ、あれか？ 命ひとつ奪ったからにや、責任取って死ななきゃいけないんですう〜ってやつか。バカかオマエ。んなわけねーだろ。命を奪っちゃまったつっても、その分生きて生きて奪っちゃまった分以上の命救えばいいじゃねーか。幸いなことにオマエはペルソナ一つー特別なもんをもってんだ。抗え、生きろ」

「なっ…ニメエ…どこまで…」

「さーな。けど、現にオレはそうしてる。それになあ、キレーゴトだが死んだら殺した奴の周りが悲しむのと同じように、オマエの周りも悲しむだろうが。同じことなんだよ、結局。誰もが納得できる死に方なんかねえ。大往生して布団の上で家族に見守られながらポツクリ逝く以外はな」

「堂々巡りだ」と言いたげな朝倉の視線が荒垣を貫く。

しかし、荒垣の気持ちは揺れ動きながらもまだ『死』に囚われていた。

「だが、俺は…きつと…恨まれてる…」

「いいじゃねーか恨まれたって。恨むようなら勝手に恨ましとけ。そんで、殺されそうになったら『まだ死にたくねえんだすまん』って開き直りやいい」

「…マトモな人間じゃねえな…」

呆れたように荒垣は下を向く。この医者^はカタギ^{じゃ}ない。

価値観が一般のそれとは大きくかけ離れている。

「いいか、さつきも言ったがもし償いがしてえつてんなら生きろ。生きて、生きて生きて、奪った分の命を背負って歩け。その道がいくら茨の道だろうが許されなからうが何だろうが、歩き続けるしかねえ。死んだらさつきと楽になれるかもしんねえけどな、死にたいなんてそりや逃げだ。オマエは、まだ逃げ続けるつもりか？」

「……」

その言葉に、荒垣は目を見開いた。

荒垣はこれまでずっと逃げ続けてきた。なし崩し的に特別課外活動部に戻ってきたが、それは天田を——荒垣がペルソナの暴走で殺してしまった女性の息子を守るためだった。その上で、天田が復讐をしようというのなら、荒垣はそれを受け入れようと思っていたのだ。だが、それも『逃げ』だと言われてしまうと何も言えなくなる。

「なら、俺は……どうすりゃいいんだ……」

「決まってる。オレのモルモットになれ。薬でぶっ壊した身体もある程度までは何とかしてやれるしペルソナの暴走も完全にとは言わねーが飲んでる限りは抑えられる。そんで開き直って生きていけ。簡単なことだろ？」

なにが簡単か。

荒垣はそう反論したかった。が、なぜか首を縦に振っていた。

ちらりと、脳裏にここへ自分を連れてきた人間の姿がよぎる。

「……ああ」

荒垣は、そうして地獄に垂らされた一本の蜘蛛の糸を掴んでしまった。

目の前の医者には、満足そうにニヤリと嗤った。

なお、その感情の内容は「よっしやあ~~~~~~~~!! 新しいモルモット、ゲットだぜ!」という何の含みもない残念な物だったが、荒垣がその心の声を知れば速攻でクーリングオフしていたであろうその言葉を口に出さなかったのは朝倉のフラインプレーだったかと思われる。

荒垣と優希が病院を去った後、朝倉は革張りの椅子に深く腰かけて天を仰いでため息を吐いた。耳元には、携帯電話をあてている。

「——はあ……ああ、成程な。だいたい分かった。サンキューなタカヤ。ついでに、ジンに『オマエのダチはもう大丈夫だ』って伝えたいてくんねえか? 頼むわ」

通話を切る。

タカヤに必要なことを聞いて終わりにしようと思つたらまだ話が続き、面白くはないが重大な話を聞いたので良しとする。

「荒垣が茨の道ならアイツは死体を積み上げて出来た道ってか…そんなもん10にも満たなかつたガキが全部背負つてちや、歪みができていずれ破綻しちまう…そりや精神もぶっ壊れるわけだな…：今回は結果的に良かったが、あの部屋はアイツが不用意には入れねーように鍵掛といた方が良いな…つたく、桐条も惨いことしやがる」

思案する。

朝倉は荒垣に対し「殺した人間の死を背負つて開き直りながら生きていけ」とは言ったが、タカヤから聞いた「ナギサ」の話はそんなレベルではなかつた。

到底、ひとりでは背負いきれない人数の死を背負つて歩いている。それも、自分で殺したわけでもない人間の死を。

「本人は無意識か知らねーが、あんな細い糸一本の上に乗ってるようなバランスでまともそうなフリをしてるのは、かなり不味いよなア…どうすつかな…」

一度傾けば、崩壊は一瞬だ。ただ、朝倉にはそれがどの要因…どのタイミングで来るかわからない分、どうも手出しすることができなかつた。

朝倉からすれば、三上優希という人間は、まともな人間の皮を被つた狂人の部類に入る存在だった。しかしその狂った精神は別に他人に向いているわけではない。あくまで、すべて本人へと向かっているのだ。

他人の為に平気で命を投げ出すようなことを繰り返すのに、それでも生きることがあきらめない。

酷く矛盾している。

いや、もしかしたら本人の中では矛盾していないのかもな。と朝倉は独り言ちた。

他人のために自分を投げ出すことと、死ぬことは恐らく本人の中でイコールで繋がっていない。根本的な価値観のようなものがズレて

いる気がするのだ。

だが、朝倉にはなにごズレているのかは分からない。だからそうではないと己の常識範囲内で予測することしかできなかったのだ。

『お前の言う通りいっぺん殺すか！』

電話の先の声はジンに対し気軽そうにそう言い放った。

事の発端は1日前に遡る。

ジンは旧友であり同じ人工ペルソナ使いだったイズミと数日前に再会したのだ。ナギサに続き、イズミまで、と喜んだジンは彼と交流を重ねた。

その中でイズミは今、知り合いである看護婦の女性の元でその一人娘と共に世話になっていること。制御剤は看護婦のツテである薬剤師から取り寄せていること。イズミが桐条の管理から逃れるきっかけになったタルタロスでの探索時の事故以降、しばらく保護してもらい世話になっていた恩人の女性が亡くなったこと。そのひとを殺した犯人を殺してほしいとジンたちに復讐を依頼したこと、などを知った。

その復讐依頼の調査をしていたさなか、ジンは『シャドウ喰らい』と呼ばれる存在と対峙する。

それはシャドウを人間から引きずり出し、喰らっていたのだ。ジンはその時たまたま居合わせた荒垣の機転により逃げ出すことに成功したが、その存在はジンの心に大きなしこりを残していた。

そして、交流していくうちに何度も吐血するイズミをみてその命が長くないことを悟ったジンは、「神も仏もありはしない」と世界を呪った。イズミは漠然と死へと向かっている自分たちとは違い、大事にしたい関係も守りたいものもある。生きたいとあんなに強く願っているのにそんなのはあんなに強くだ、と。

さらに追い打ちをかける様にイズミに対して復讐してほしいという依頼が届いてジンは頭を抱えた。その内容は、「イズミと会った彼氏が廃人化して戻ってきたから復讐してほしい」というものだった。つまるところ、ジンが会った「シャドウ喰らい」がイズミである可能

性が高くなったという事だ。

だとしても、もう長くない彼を殺すことなどジンにはできるはずがない。だが、タカヤの言葉は冷ややかだった。

「イズミはペルソナに、人間からシャドウを狩らせています。狩りの対象を今は選んでいるのかもしれませんが——もし。しもべたるペルソナに逆に支配されてしまったら、どうなるか。わかりますね？」
「そりゃ、手近な人間から襲うやろ——」

言って、ジンはイズミの手近な人間を思い出す。

イズミが愛する看護婦の女性に、その幼い一人娘だ。

もし、暴走すれば、まず一番に廃人になるのはこの2人だという事実に、ジンは愕然とする。

「そないなこと、むごすぎる……」

運命は理不尽だ。まるで、この再会がこんな惨いことをジンに見せつけるために仕組まれているのだとしたら、ジンはこんな運命にした神を呪っただろう。

「イズミも、そんなことなど望んでいないのでしょう。彼の命が消えるのが先か、ペルソナが制御不能になるのが先か。それは分かりませんが……時間は、もうありません」

タカヤは憂うように目を閉じて、しばらく言い淀むように黙るとゆっくりと目を開いた。

「今、唯一の真実は。そんな彼を救えるのは、我らだけだということですよ」

ジンはその言葉に拳をきつく握りしめ、悔しそうに壁にたたきつけた。

「それなら。わしがこの手で、イズミを葬る。それが、奴を友と呼ぶ、わしの義務や」

そうしてジンはズボンのポケットから携帯電話を取り出した。イズミを呼び出そうと、震える指でボタンを押して電話帳をスクロールする。

途中、まるでそこで止まるのが正しいというかのように『ヤブ医者』の文字が目に入り指を止める。

先日、幾月の横暴さにキレたタカヤが、「朝倉を利用すればいい」と言っていた言葉がフラツシユバツクする。

あのトンデモな医者だ。もしかしたら——なんて僅かな期待を込めて、ジンはイズミではなく朝倉に電話をかけていた。

『もしもし〜！ こちら悪魔とやり合ってバカみてーな怪我を負ったポケカスどもを24時間営業で治療する朝倉医院です！ 御用の方はピーという着信音の後にい〜』

「ふざけるのも大概にせえよヤブ医者」

『お、なんだジンか。どうした？ またチドリが怪我でもしたか？ それとも包帯のストックが尽きたか？』

緊張していたジンのそれが吹き飛ぶくらいふざけた受け答えから始まったその電話は、次第に真剣みを帯びていく。

『…なるほどな。オマエはダチを救いてえってわけか。で、オレは新しいサンプルが欲しい。利害の一致だな！ まあ、寿命の事はどうしようもできねーが、一時的なペルソナの暴走くらいは何とかできると思うぜ。一時的なら、な』

「ホンマか!？」

朝倉の言葉に希望が見えてくる。

イズミが助かるかもしれない。それだけで、ジンはさつきまで呪っていた世界を少しは見直してもいいかもしれないと思った。

『ああ。けど相手が暴れるとなると面倒だしな〜あ、そうだ。お前の言う通りいっぺん殺すか!』

「は!？」

まるで明日の朝はトーストにしよう！ と言いたげな朝倉にジンは面食らう。救ってくれるんじゃないやなかったのか、とか、いろんな感情がないまぜになる。が、

『まあまあそう食って掛かるなって！ 仮死状態もしくは麻酔で眠らせてウチに運び込んでベッドに縛り付けて蘇生リカームなりなんなりして経過観るからそこは安心しろって!』

「安心できる要素ないやないか!」

この男と話していると本気なのか冗談なのかわからなくなってく

る。

『で、問題があるんだが、オレはオマエらの言う“影時間”つつーのに適応してねえみたいなんだわ』

「知っとる」

『だから呼び出すなら絶対に人が寄り付かないであろう人気のない場所。影時間が終わる30分前くらいにしといてくれ。終わり次第オレが仕留める。ただ——』

言い淀む朝倉はなにか懸念があるようだった。

『——影時間内で暴れられた場合はオマエらが全力で耐えてそこに留めといてくれねえか』

その言葉を聞いたジンは、なんやそんなことと。と思った。朝飯前どころか元々どうにもならなかったのならイズミを殺すつもりだったから覚悟は済んでいる。

「かまへん。任せとき」

『ん。じゃあ任せるわ。オレも影時間になる前に用意して指定の位置につく。またあとでな』

その後はもう、壮絶としか言いようのない戦いだった。

「死にたくない」と叫んだイズミは己のペルソナである“名無し”——シャドウ喰らいと共に抵抗を始めたのだ。拳句の果てにシャドウ喰らいと同化し、暴れた。ジン達3人が、もう駄目だ、負けると思っってしまうほどに。

しかし最後にイズミの愛する女性の一人娘である紗耶さやが影時間だろうにイズミを探しにそこへふらりと来てしまったのだ。

その姿に一瞬だけ自我を取り戻したイズミが自らの身体を抑えた。瞬間、影時間が終わる。

——物陰から、一発の銃弾が飛んできた。

それは確かにパスンと音を立ててイズミに命中する。が、影時間が終わっても尚、黒い化け物の姿のままのイズミは銃弾が飛んできた先を睨み付けた。

「ちつ、物陰にいてもやっぱ弾道でバレるか。つーかオマエらなんだよコイツ！ ペルソナ使い飛び越えてほぼ悪魔人間じゃねーか！
MAGがぶんぶん臭ってやがるぞ！ いやこりゃマガツヒか…？
マグネタイト

つてあぶねえ！」

跳びかかってきたイズミの一撃を一度腕で受けてから避け、慣れた手つきでライフルに次の弾を補充した男——朝倉は脂汗を流しながら叫ぶ。

「来い！」

青い光。そこから現れたのは蛾のようなかわいらしいペルソナ——
「モスマン」だ。

前に見たカラドリウスという青い小鳥のようなやかましいペルソナとは違う。

「シバブー」

半透明のモスマンは相手を縛りつける魔法を放った。

影時間外だというのにペルソナをみせた朝倉に、タカヤ達三人は特に驚きはしない。

朝倉は、「そういうペルソナ使い」なのだ、既に教えられているからだ。ただ、先ほどから気になっているのは影時間も終わったというのに景色が妙に揺らめき歪んでいることだ。だがその疑問は朝倉の口から答えが出されることになる。

「おーおー！ いっちょ前に悪魔なりかけな人間の癖して空間を歪め始めたか…道理でペルソナが出しやすいこつて！ わりーが、悪魔が寄って集って『巢』になる前に仕留めさせてもらうぜ」

ニヤリ、と嗤った朝倉は「シバブー」を喰らって動けないイズミに対し、ライフルの銃口を向ける。いくらシャドウ喰らいと同化し万能の耐性を持つようになったイズミでも、それは攻撃に対してのみであり状態異常には適用されていないようだった。それとも、朝倉のペルソナとタカヤ達のペルソナの性質が違うからなのか。判断はできなかった。

至近距離で何発も銃弾がイズミへと浴びせられる。

装填した分を全て撃ちきった朝倉はライフルにもう一度弾を込め

ようとして——やめた。

目の前で崩れ落ちるように倒れるイズミを目に入れたからだ。

「イズミッ！」

「待ちなさい」

ジンが駆け寄ろうとするのをタカヤが制す。

朝倉は倒れたイズミに近づいてなにかを調べているようだ。

しばらくそうやって待っていると、歪んで揺れていた周りの景色も元に戻っていく。

「お。景色が戻ったつーことはオレの麻酔で完璧寝てるなコイツ。よしよしよし、脈は弱いがすぐ死ぬようなもんじゃねえ。おいオマエら！ 撤収だ撤収！」

つんつんとつついた後に異形化したイズミを背負い、近くに止めてある朝倉の車へと怪我しないように放り込んだ朝倉はエンジンをかける。3人と気を失った紗耶もそれに合わせて乗り込む。紗耶はチドリが抱えて乗ったが。

「なあヤブ医者。イズミはどうなるんや？」

「んく…どうなるんだらうなあ。悪魔になりかけてるからすぐには死なないとは思うんだがな…」

さつきから朝倉の言っている、『悪魔になりかけ』という言葉に対し疑問を覚えていたジンは問い詰める。

「さつきからいつとる悪魔って、あの悪魔やろ？ なんでイズミがそんな…しとったことと言えばシャドウ喰ったくらいや」

そのジンの問いに、朝倉は車を走らせながら答えた。

「前にオマエらが飲んでる薬にや悪魔の血が使われてるって話、しただろ？ ああいう悪魔由来のは、飲み続けると悪魔になりやすくなる効果もあんだわ。ただ、相当濃いものを飲まないとおあはなんねえし…ああ、なるほど、シャドウ喰らったのがポイントかもしれない」

「シャドウを喰ったことか？」

「まあな。仮説だがシャドウも広義の悪魔とみると同じようなもんだろ？ だから、悪魔の性質に近いシャドウを食ったせいで悪魔化しやすくなつて『生きたい』って想いと反応して悪魔になっちゃったん

じゃねえか、と。似たようなケースは何個か見た事があるんだよ。悪魔の本質は「欲望」だからな：生きたいって想いも欲望だったんだらうさ」

生きたいと願うことも、欲望のひとつだと言った朝倉にジンは考える。

それほどまでに生を渴望していたという事だろう。それは自分たちにはないもので、ジンは羨ましくもあった。

「さて、その嬢ちゃんの家はここでいいか？」

「あつてるわ。私が送り届けてくる」

「頼んだでチドリ」

家の鍵は開いていたようで、数分してチドリがひとりで戻って来る。

紗耶をどうにか家の中に戻すことが出来たのだろう。

「布団に寝かせておいた。これでいいでしょ？」

「パーフェクトだぜ、チドリ。じゃあオレの病院に行くか。コイツをこのままベッドに寝かすのも無理だしちよつち特殊な術式ぶち込んだ檻にでも入れときやいいだろ」

「は？ イズミを檻に入れるって言うんか!？」

朝倉の言葉にジンは憤る。

桐条の実験体として時には檻に入れられたこともあったジンたちストレガにとって、否、人工ペルソナ使いの生き残りであるイズミにとって、それがどれだけ苦しい事なのか。この男は分かっていない。「ジン、やめなさい。ああなってしまった彼ではベッドに寝かしたところで、起きて暴れられでもしたら手の打ちようがない事くらいわかっていてでしょう」

「せやけど…」

タカヤの言葉を聞いても、納得がいかない。

頭では理解しているが気持ちを追いつかないのだ。せつかく実験体扱いから逃れられたというのに、こんなところでこんな扱いだなんて、と。

「まあ人間の身体に戻せれば檻の中生活からはオサラバだぜ。：問題

は、悪魔になった人間を元に戻す方法が分かんねえとこなんだけども
：最悪、ヤタガラスでも頼るか？ メンドクセー！」

「そう悔しそうに告げる朝倉に、ジンはもうなにも言えなかった。

ただその翌日にその問題が解決することなど、誰も知りようがな
かっただけで。

亀裂 (8 / 29 ~ 9 / 1)

8 / 29 (土) 影時間

「やあ」

湊はその声に目を開けた。ベッドの横にファルロスが立っている。

「…あと1週間で、次の満月だよ」

「…わかつてる」

もともと布団の中で動きながら湊は気だるげに返事をした。

「試練も残り少なくなってきたね…きみのお兄さん、どんどんおかしくなってきたているみたいだ」

「…!」

その言葉に湊は跳び起きてなにかを言いたげにわなわなと口を震わせる。

言葉を形作ろうとして、息をひきつらせるように吸って、そこでおわる。

湊は安心しきっていた。もしかしたらペルソナの制御剤を飲んでいるかもしれないが、それでも以前まで見えていた黒い霧は見えなくなっていたのだ。前回暴走していたことを鑑みるに、飲んでない可能性だつてある。だから、大丈夫なのかと。

だが、おかしくなっているという事は、すなわち、兄は。

そんな湊の様子をみたファルロスは、心の内を察する。

「湊が心配しているような風にはすぐに死んだりしない、と思うよ。けど…死の匂いがどんどん濃くなってる。それと同時にもうひとり、だれかの気配が濃くなってるみたいなんだ」

「だれか…?」

「それが誰かはわからない。けどきみや奏子ちゃんに対する僕のような…そんな気配なんだ。僕の封印がああシャドウ達を倒すことによって解けるように…もしかしたらああ気配は…やっぱり…」

ファルロスの言葉に湊は唇をかみしめた。だが、それもこれも11月の大型シャドウを倒せばファルロスがそうしたように身体から離れていくはずだ。

兄を蝕んでいるなにかも、きつとそうなれば終わる。果てに、ニユクス而降臨が待つていようとも、少なくとも兄がこれ以上命を不必要に削る必要はなくなるわけで。

11月まで待たないといけないうのは辛いものがあるがそこまでの辛抱だ、と湊は不安ながらも覚悟する。

これまで何度も兄は死にかけているが、ファルロスが言うのなら以前のようにすぐに死んだりはしないのだろう。なら、十分に目を光らせて手綱を握って縛りつけてでも無茶をしないように見張っておかなければならない。自分が無理でも最悪、奏子やアイギスに頼めばいい。

目を閉じればいつも、困ったような笑顔と死に顔ばかりがフラッシュバックする。

奏子が記憶を持つていなくてよかつたと、湊は毎回安堵しているのだ。それくらい、兄の死は暗い影を落としている。

「あんまり無理、しないでね。それじゃあ、また会いに来るよ」
慰めるように声をかけたファルロスが消える。

ただ、今は無性に兄のぬくもりが恋しかった。

布団から這い出て部屋を出る。こっそり、兄の寝顔でも見て幻を振り払おうとしたのだ。

そして向かいの部屋のドアを音を立てずに開いた。

——影時間特有の色合いに染まる暗い部屋の真ん中で、優希が突っ立っている。

まるで、オブジェのように。伏せられた目に感情の色は無い。

思わず、目が釘付けになる。

顔が、こちらを向いた。

「……」

「ゆう、き…あ、ごめ…起きてるとは、思わなくて…ああいや、そうじゃなくて…」

ゆっくりと、肌が触れ合いそうな距離まで近づいてきた同じ色の目を見上げながら、たじろぐ。

しどろもどろになりながら言い訳をこねくり回すがまともな言い

訳にならない。

そんな湊を、しばらく黙っていた優希がゆっくりと抱き寄せる。そして、片手を頭に置かれる。

「…急に、いろんなものが怖くなった？ 辛い？ 苦しい？」

兄はまるで幼い子にするように頭を撫でながら、優しく訊いてくる。

湊はそれに、小さく頷いた。

兄が死ぬことが怖くないはずがない。兄を救えないことが辛くないはずがない。兄の死に顔をみるのが苦しくないはずがない。

「大丈夫、大丈夫。湊や奏子が怖かったり、辛かったり、苦しいことは、全部俺がなんとかするから」

まるで、湊の気持ちを分かっているかのような兄の言葉はそれでもひどく優しい。

そうじゃない。兄に全部何とかしてほしいわけじゃない。湊はただ、兄に生きて笑っていてほしいだけなのだ。ただ、それだけでいい。兄が生きてくれるなら、兄が生きる世界があるのなら、それだけでいい。

だが、

「——今度こそ、俺が2人を救うよ。ニユクスを封印して死なせたりなんてしない」

「…っ！」

その兄の口から飛び出した言葉に、湊は息を飲んで目を見開いた。そんな湊の様子に気がついていないのか、優希は尚も優しく頭を撫でる。

『今度こそ救う』『ニユクスを封印して死なせたりなんてしない』。

いや、そんな、まさか。

サアツ、と湊は顔を青くした。血の気の引く感覚。ぐらぐらと、揺れる視界。

どうして、兄がそんなことを知っている？ どうして、今度こそ、なんて言うのか。

がたがたと、身体が震える。兄の手を振り払ってよたよたと距離を

とった。

優希の顔が、影に隠れてよく見えない。影の中から金色の双眸が静かにこちらを見つめている。

何度も何度も兄が死ぬのも、兄が無茶をするのも、全部。

——自分が、いや、自分と奏子がいたから？

湊は、最悪を予想して目の前が真っ暗になる。

「おまえなんか、いなければよかったのに」

そんな怨嗟を吐き出す兄の声をききながら、意識が途切れた。

8 / 30 (日) 朝

「——っ！」

湊は、自室のベッドの上で飛び起きるように目を覚ました。

荒い呼吸を整えて、汗でぐっしよりと濡れた額を。パジャマの袖の裾で拭った。

昨夜のアレは悪い夢に違いない、と頭を振って振り払う。きつと、ファルロスと話した後に気がつかないうちに寝てしまって、不安になった自分の弱い心が見せた悪い夢なのだと言い聞かせた。

そうでなければあんな、直前の行為とは矛盾したこちらを呪う様な言葉を吐くはずがないし、ニユクスの事も優希が知るはずがないのだ。というかそもそも兄はあんな誰かを呪うような言葉を自分たちには絶対に吐かない。そう信じている。

だから、アレは自分を兄に投影した自分の本心だと思い込んだ。

それでもしなければ、湊はおかしくなってしまうそうだった。

名前や両親の記憶とともに、自分たちの事も一緒に忘れていた方が兄は幸せになれるだなんてそんな結論に達したくなかった。

優希は優しい。

だから、あの夢のように縫れば笑って許してくれるだろうことも、分かっていた。

自分たちが望めば、いつもと同じ笑顔で身を投げ出そうとすることも。

それがひどく湊には恐ろしかった。

一言、『生きて』と言えば兄は生きるだろう。だが、それでも最後には、兄はきつとその命を投げ出してしまおう。否、失つてしまおう。

繰り返し始めて7回目の兄の死因がなんだったか、その時に自分と奏子が兄にかけた言葉がなんだったか、湊は忘れはしていない。

『ニユクスを乗り越えて、みんなで生きよう』と言ったのだ。その言葉通り、兄は、ニユクスが来るまでポロポロの身体で生きた。自分がニユクスを封印して、3月まで生き延びたように。ただ、自分とは違って優希に奇跡は無い。あれは殆ど死んだ身体を精神力だけで引きずっていただけに過ぎないと、湊にはよくわかったからだ。

ニユクスによる死の波動で一瞬、気を失った瞬間に、兄は掠め取られた。

だから、湊は優希においてそれと『生きて』などとは言えなかった。のそのそと、布団から這うようにして出る。夏休みもあと残り数日といったところなのに、悪夢のせいで湊の気分は文字通り最悪だった。

昼

あと一週間もしないうちに次の満月になる。

次の相手は隠者^{ハイミット}だったか。と思いつくように記憶を遡らせる。たしか、ポロニアンモールの電力を食って力をつけているとかなんとか。

制御剤のストックも十分にあるし今回はタカヤ達が出張するようなこともない。唯一気になる点といえば荒垣くんがペルソナを暴走させかねないという点だが、今は朝倉先生から処方されている薬を飲んでるようだし大丈夫だと思いたい。その上でなにかがあれば自分が止める。それだけだ。

そんなことより今日も映画祭りは続いている。ひとりで観に行くか、モコイさんと行くか。そう悩んでいた自分の携帯電話に珍しく着信が入った。

美鶴さんからだ。

「もしもし」

『三上、今日の予定は空いているだろうか』

「うん。どうしたの？」

『ちょうど家に送られてきた優待チケットの中に、配給会社の物があつて…だな、』

歯切れが悪いようななんだかいつもと違うはつきりしない美鶴さんの物言いに頭の中ではてなを浮かべる。

『もしだぞ？ も、もしよければなんだが…私と…その、映画に行かないか？ この前約束していた食べ歩きに私の都合で行けなかったこともある。その代わりといつてはなんなんだが…チケットは私が持つ。どうだ？』

なるほど。

どのみち誘われたことを断るつもりは無かったが、食べ歩きの代わりに言われればなおさら断ることはできない。二つ返事で快諾する。

「喜んで」

『ふふ、そう言ってくれると私も思い切つてきみを誘った甲斐がある。では準備が出来次第、下で落ち合おう』

「わかった」

そう言つて通話を切り、さつさと出かける用意を始めた。

夏の日差しが照りつける中、駅前の映画館についた。

今日はいつものように単品でみるのではなく、映画祭りのテーマに沿った連続上映のコースにしようという話になった。のだが…

「今日のテーマは『エターナル・ラヴ』…だつて」

上映内容を見てそう美鶴さんに告げる。

なんと今日のテーマは恋愛モノ…でいいのだろうか。恐らくそうだと仮定する。

先日ライドウくんを見た『大学芋とセエラア服』は恋愛映画の皮を被ったアクション映画だったので論外として、今回見るやつはまとも

なものだと祈って入るしかない。あんな体験は三度も要らない。1度目が『不思議の国のアナタ』で2度目が『大学芋とセエラア服』なので2度あることは3度あるというがこの場合は外れてくれるとありがたい気分だ。美鶴さんと観に行くので特に。

「考えてみると、こういうストレートな恋愛ものは初めてかもしれないな」

「自分もかも」

「まあ、何事も経験だ。楽しむとしよう」

中の売店で飲み物を買って席に着く。

だんだんシアターの中が暗くなってくる。トイレよし、ジュースよし、携帯の電源は切つてある。よし！ 準備万端だ。

映画の1本目が始まり、タイトルを映しだした。

…様々な愛の形を見た気がする。

人によつて、物語によつて、恋愛だったり親愛だったり家族愛だったりしたのには驚きだ。

てつきり今日のテーマからして恋愛だけだと思つていたがそうでない作品も混じつていたのは意外としか言いようがない。

「これが…『エターナル・ラヴ』なのか？ 例えば1本目のラストで、どうして男は女性の居所を都合よく知り得たのか…しかもあの男、土壇場で『実は他国の王子だ』などと…そんな大事、『言えなかった』で済まされるか！」

興奮気味な美鶴さんは納得がいけないと言いたいかのように憤る。

確かに、土壇場でのカミングアウトはなあなあになりやすいし聞く側が冷静な判断を失いやすい。明かすなら最初か少し仲が深まったころにした方が良いのでは、と思う気持ちもわかる。が、この王子様の気持ちもわかる。ずるずるとカミングアウトを引き延ばして言うタイミングを逃しまくつて結局言うしかなくなったタイミングがあるそこなのだ。まあ、脚本の都合と言うのもあるけれど。

思い返せばこの王子様と7月の美鶴さんの状況と被っているところ

ろがある気がする。あくまで個人的な意見だが。岳羽に言われてカミングアウトするしかなくなつたところとか特に。

「おまけに、王子の男と結ばれた、その後については描かれなまま終劇……」

落胆しているような美鶴さんはどこかあきれ顔だ。

「実際の王族の暮らしを見た事があれば、あんなものはハッピーエンドじゃない。最大の試練は、むしろあそこからだ」

その感想もよくわかる。

ヒロインの少女は庶民の娘で、プロポーズされたとはいえこれから王族に嫁入りするかもしれないのだ。礼儀作法やしきたりなどをいちから覚えていかなければならないし、庶民の娘という事で派閥争いに巻き込まれたりやつかみにあつたりするかもしれない。桐条家という日本でも有数のセレブ家系に生まれ、そういうごたごたに巻き込まれたり礼儀作法を叩き込まれたりしている美鶴さんらしい意見だ。

だが、結局これは言ってしまったえばフィクションだ。

フィクションのラプストリーと言うのは総じて結ばれて終わり！ となるのが普通だ。

キリのいい幸せの絶頂でおわるからこそ、手短に楽しむような幸福感の得られる物語として通用する。一部例外はあるけれど。

「……あ、いや、すまない。せつかく映画鑑賞につきあつてくれたというのに……その……つい、自分と重ねてしまつてな……そういう意味では、私も割と楽しんだという事なのかもな」

「そうかもね。俺もひとりじゃこんな観に行かなかつただろうから貴重な体験できたよ。ありがとう、美鶴さん」

美鶴さんと映画について話し合いながら帰り道を歩く。

「そういえば、美鶴さんはこんな言葉知ってる？ 恋は落ちるもの。

愛は育むもの” っていうの」

「ふむ……恋は落ちるもの、愛は育むもの、か」

「ネットの受け売りだけだね。……恋はある日突然雷にでも打たれたかのように落ちるものだけど、愛は自分で慈しみながら育てていくものだ、って。恋はそのひとの事をよく知らなくても芽生えるけど、愛そ

うと思うと相手の事をよく知っていかないといけないものだって言われてて、きつと今日の映画は恋と愛、それぞれ別れてたんじやないかなと俺は思うんだ」

恋と愛。

自分で語っていてなんだが、とても難しいものだと思う。偉そうに言ってる割によくわからないし好きだという気持ちのどこからが恋なのかもわからない。

「1作目はきつと、恋をして2人が相手を愛し合うようになるころまでを描いてるんだ。だから、愛しあうようになることが結末の、恋の物語だったんじやないかな」

「恋の…物語…」

「——なんて、得意げに語っちゃったけど俺自身、愛とか恋とかそういうのよくわからないし、あくまでネットの受け売りからこう考えただけだからさ。あんまり深く考えないで参考程度にしてくれろとありがたいな…」

語ったら語つたでなんだか恥ずかしくなってきた。

美鶴さんから視線を外すように道行く車たちを見る。車通りの多いこの道は何の変哲もない道だ。特に気になるようなものは無い。なので、本当に目を逸らすためだけになんとなく車道を見たのだ。

そういえば、車道といえば幾月のギャグに車道とシャドウをかけたクツソつままないギャグがあったような、と要らないことを思い出してしまう。最悪だ。

「ところで三上、今日はこのまま帰るのか？」

「ああうん、特に用事ないしこのまま帰ろうかなって」

「そうか…」

釈然としない様子的美鶴さんに、頭の中ではなを浮かべた。どこか、行きたいところがあったんだろうか。

「どこか寄りたいところでもあった？」

そう訊いてみる。

「いや、そんなことはないんだが。なんだか勿体ないような気がして、な」

「勿体ない?」

「ああ、このまま帰るだけなのは些かな。あんな映画を見たせいかもしれない」

美鶴さんの言葉に、成程、と思う。しかし、だ。

自分と美鶴さんはどうあがいても友達なので恋愛に発展することはない。そもそも自分にそんな資格がないし恋愛方面での好意を寄せられる理由もないはずだ。

確かに、美鶴さんの事は好きだ。だが、それは恋人だの結婚したい相手だのそういう意味ではない。友情だとか親愛のようなものだ。

それに百歩譲って自分が美鶴さんの事を恋愛方面で好きだとして、それは許嫁のいる美鶴さんの立場からしたら浮気だ。さらに、自分もし美鶴さんと恋に落ちても美鶴さんの家のような礼儀作法がきちりしているタイプでもないので不釣り合いなことこの上ないだろう。それくらいなら顔も名前もしらない美鶴さんの許嫁の方が良いだろう。住む世界が同じと言う意味で。

なので、きつとどんなことがあっても間違いはないし、友だちや仲間といった関係以上の関係になることはない。

「気のせいじゃないかな。勿体ないけどこのまま帰ろう。帰ってぐーたらするのも楽しいよ」

だから、わずかでもある可能性はここでへし折っておくべきなのだ。

ニツコリと、いつも通りの笑みを張り付けて。

これ以上、踏み入られないように。誰かに踏みにじられることのないように。

9 / 1 (火) 朝

今日から二学期だ。悲しいかな、夏休みが終わってしまった。

出された課題はすっかりすませてあるので問題ないとして、忘れ物がない事を確認して朝食を作るために降りてキッチンを覗く。すると中で荒垣くんがフライパンをもって立ってた。

「おう、起きたか」

「荒垣くん、おはよう」

先に荒垣くんが起きて朝食を作ってくれていたらしい。

今日の朝食はだし巻き卵と焼鮭、そしてワカメの入った味噌汁のようだ。良い香りがする。

「もうちよいでできるから待ってろ」

「……つまみ食いはしないよ?」

「わかってる」

湊と奏子だったら恐らく脇からちよいちよいと玉子焼きを一切れ二切れほど拝借していたところだろう。実際、自分が晩御飯を作る日につまみ食いされたことがある。

「お前の弟と妹は俺がここでなんか作ってる時、よくつまみ食いに来るがな」

「ああ……ごめん……」

意味は無いけど謝っておく。

さて、手伝えることもなさそうなので時間を持て余してしまっている。

「……なあ」

不意に荒垣くんから声がかかって顔を上げる。

「俺にあの医者を紹介したのは…打算か? それとも、俺を哀れんだか?」

あの医者とは朝倉先生の事だろう。打算か哀れみかと言われたら打算しかない。

荒垣くんは居なければいけない人間だ。自分なんかよりもよっぽど。

「打算だと言ったら?」

「…ワケ、聞いてもいいか」

「そうだなあ…」
考える。

荒垣くんを救うことによるメリット。

まずは、食事当番が増える。こうして美味しい料理を作ってくれる

荒垣くんがいるだけで毎日の生活が潤う。

次に、戦力が増える。これはもう言わずもがな。シャドウに操られたり制御剤を飲んでもペルソナを暴走させてる自分なんかよりもよっぽど安定している荒垣くんの方が良い。

さらにコロマルは美味しい食事でありつけ続けることが出来る。

さらにさらに奏子と荒垣くんが良い感じになった場合、荒垣くんが身体を壊さないでいてくれるとかなりありがたい。というか10月の大型シャドウ戦は何があってもタカヤによる凶行は阻止する。もうこの際喧嘩になってもいい。身体を張って止めるのもありだけど死ぬのは極力避けながら。まあ死んだら死んだで今周は諦めるしかない。人を庇った結果だ。

あとは真田くんや他のメンバーに暗い影を落とさなくていいというのもある。確かに決意でペルソナが変化することもあるが、なにも人の死でなくてもいいだろう。

と、簡単に思いつくだけでもこれだけある。うーんこれはどうみても俺の上位互換！

やっぱり自分は要らないのではないのだろうか。いや、駄目だ。ここで憂鬱になっても仕方ない。

「うーん…みんなにとつて荒垣くんが俺なんかよりもよっぽど必要な人、だからかな…」

とりあえず、そう答えておく。

「……てめえは、あの医者で作った制御剤じゃなく、元の副作用のキツイヤつをまだ飲んでんだろ」

「ああ、うん、そうだね…」

それでも効きにくくなってるらしいけど、とは言わない。

カチリ、とコン口の火を消した荒垣くんがずんずんと近づいてくる。そして、胸倉をつかまれて壁に押し付けられる。

「てめえだけは相も変わらず命削るようなモン飲んで、頼んでもねえのに俺には副作用のねえモンを勧めた挙句、理由はてめえより俺が必要だからだ?! ふざけんじゃねえ…! てめえは…俺が…どんな気持ちで…俺がどんな気持ちであの薬を受け取ったか…わかっ

ちやいねえ！ 自分に向けられる気持ちをてめえは…お前は見ないフリし続けんのも大概にしろよ!!」

言われている、意味がわからない。

言葉としてはわかる。けれど、中身がまるで頭に入っていない。何故？ という気持ちしかない。

「ごめん。意味が、わからない」

「…っ、てめえ…!」

「ちがう、荒垣くんの事を怒らせたいわけじゃないんだ。ただ、本当に意味が解らない。俺に、向けられる気持ちって…なんなんだ」

わからない。

「わかんないよ…俺には、そんなの」

わからない。

「お前…泣いてるのか…」

「泣いてないよ」

ゆつくりと、胸倉を掴んでいた手を離される。

考えても、荒垣くんに気づけと言われるような自分に向けられる気持ちなんてわからない。

「バカ言え、そんな顔しやがって言い訳できるか」

「……」

顔を逸らす。

なんだか泣いてることを認めたようで癩だけど、自分は今、どんな顔をしているのかわからないので無視する。

「…お前の弟の方がまだマシだな。いいか、てめえはてめえが思ってるよか大事にされてるし想われてんだよ。こっちに戻ってきた俺より、よっぼどな」

「そんなことないよ」

「頑固だな」

荒垣くんもだろ、とも言わない。

ただ、本当にそんなことはないだけで。

「本当だよ。俺は、今でさえ誰の役にも立ててない。迷惑かけてばかりだ。なにも、できていない」

結局最後には誰かの手を借りてしまって、結果的に良い結果になっているだけで自分個人としてできたことはひとつもない。しりぬぐいを他人にさせてばかりだ。

「……それに、俺は奏子や美鶴さんを殺しかけたしみんなを危険な目に遭わせた」

「俺はペルソナを暴走させてひとり殺してる」

「荒垣くんがペルソナを暴走させたのは、事故だよ…俺は、俺のミスだ」

「っ！ なにも、なにも変わりやしねえだろうが！ 俺も、お前も!!!」

ペルソナを暴走させたこと、その何が違うってんだ！ ああ!? むしろ、お前はまだ誰も殺してねえだろ!!」

「ごめん」

荒垣くんの言葉に謝る。

今のは不用意過ぎた。踏み込み過ぎた。荒垣くんの、触れてはいけないところに触れてしまった。

「今のごめんはなんに対しての謝罪だったんだ。ハッ、俺に対してなら受け取らねえぞ。てめえはてめえの事だけ考えてりやいいんだ。他人にばっか自分をやってんじやねえよ」

「俺は自分の事しか考えてないよ」

「考えてねえな」

一瞬で否定されてしまったのは少し悲しい。どうしてこんなに自分中心でしか動いていないのに他人の為に動いているように思われるのだろうか。なにもかも、全部打算づくめで自分が楽をするためのずるい事なのに。

荒垣くんやタカヤ達が朝倉先生と関わる様になって副作用の少ない制御剤を飲むようになったと聞いて安心したのは「副作用で死なない」という事だ。だが、それと同時に自分は彼らの刹那的な生き方も否定してしまったのではないかと思う。彼らの、生きる意味を奪ってしまったのではないかと。

結局、自分がやっていることは偽善の押し付けだ。自分がしたいから、無理やり押し付ける。これが自己中心的でなくてなんというの

か。

湊や奏子を救うことも、誰も頼んでいないのだ。湊や奏子に頼まれたわけでも何でもない。自分が勝手にそうしているだけで、誰も頼んでいない。

だれも、俺の存在など望んでいない。俺は、本来いるはずのない異物だ。

だから、この場所に立っている資格もない。今更、そんなことを思い出してしまった。

「…おい、大丈夫か？」

「ああ、うん、大丈夫だよ」

荒垣くんは怪訝そうな目で見られている。

いま、自分はうまく笑えているだろうか。

『お前が死ねばよかったのに』

「…そうだね」

聞こえないはずの声に返事をする。俺が死ねばよかった。

俺が死んでいればよかった。ただそれだけだ。

『どうして死なないんだ？ どうして、お前だけが生きてるんだ』

「どうして、だろうね」

わかる、わけがない。どうして、自分は生きているんだろう。

でも、タダで死ねるはずがない。死ぬなら、誰かの代わりにならないと、意味がない。だって、

「——俺の命に価値なんて、ない」

「てめえ…！ それは本気でいつてやがるのか!!!」

「…あ、らがき…くん…?」

頬に走る衝撃と痛み。そこでようやく荒垣くんの声が帰ってきたような気がした。

どうやら殴られたらしい。

ぞつとする。自分は今、誰と話をしていた？

「チツ…その言葉、他のやつには聞かせるなよ…!」

「…もう遅いよ」

「!?」

割り込んできた声の方向を向く。

そこに、湊が立っていた。いつから、どうして、朝早く起きないはずの湊が、ここに。

一瞬で血の気が引く。

「どこから、聞いてやがった?」

「先輩が優希の胸倉つかんだところから」

湊の目には、感情がなかった。

荒垣さんに胸倉を掴まれたところから、ということとはほぼほぼ最初からだ。ああ、きつといま、自分の顔は真っ青にでもなっているんだろう。

湊が近づいてくる。

「優希はなんにも知らないんだ。想像を、していないんだ。優希が無茶して死んだら、僕や奏子：ううん、他の人だってどうなるか、考えてない」

「それは…」

「優希のこと、どうでもよかつたら、兄として慕ってないしそもそも放置してる。どうでもいいから」

湊の顔をまともに見れない。きつと失望されただろう。考え至らない兄だと思われただろう。

もう、それでもいい。自分の役目は、それではない。

「ねえ、優希はなにを見てるの。なにを、見たの」

「はは、はははは、はははははは…」

言えるわけがない。教えられるわけがない。こんなこと、自分は湊が死んでからその存在を思い出し、湊を見殺しにしただなんてこと。

だから、笑う。嗤う。

「三上…?」

「なんだろうね! 俺が見てるのは、悪夢なのかな! それとも、俺は…俺が、バカだから、弱いから、いつまでも同じ失敗をするのかな! もう、諦めた方が、いいのかな…やっぱり、俺が生きてちゃ、駄目だったのかな…あそこで、せんせいに、いわれたとおり、しんでいれば、おれは…ぼくは…あああああ!」

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい
ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい
ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい
ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい
ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい
ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい
ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい
ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい」

突然叫び、蹲って耳を塞いで狂った機械のように泣きながら謝り出した兄に、湊はやってしまったと思った。

なかがスイッチだったのかは全く分からない。

けれど、「優希がおかしくなってきた」というファルロスの忠告を聞いていながら、不用意に追い詰めてしまった。先走ってしまった。

兄は、滅多に泣かない。弱音を吐かない。こんな風に引き攣った呼吸を繰り返しながら、子供のように泣いたりしない。こんな兄を見たことがない。

「おい、三上…!？」

荒垣の、焦るような声に湊が顔を上げると、優希が喉奥に自分の指を突っ込んで嗚咽を繰り返していた。

「うっおえ…げえ…っ…げぼっ…」

びちやびちやと零れたのは胃液ではなく、血。

「げぼっ(げぼ)ううえ…えああ…あああ…」

目の焦点は有っておらず、顔と唇は真っ青。

嗚咽と引き攣った呼吸の合間に咳き込み、またびちやびちやと血を吐き出す。明らかに、正常などと言う言葉とはほど遠い。そう湊が判断している間にも、優希はがたがたと震え出して、床に倒れる。その衝撃で口に入れていた手が抜けるが、引きつった呼吸のままさらにその唾液と血まみれの手を首元へともっていき掻きむしり始めた。

「っひゅー、ひゅー…!」

「っ、おい有里！ こいつを抑えるぞ！」

その行為でようやく危険だと判断したのか、正気に戻ったのか、どちらか定かではないが荒垣が優希の身体を押さえつける。その声に湊もすこし遅れて、ばたばたともがくように暴れる足を押さえた。

興奮しているのか瞳孔が開き、口から血を垂れ流すその姿に湊はかつての優希の死に顔が重なって、ひゅ、と息を飲んだ。ただ、今回はまだちゃんと生きている。死んでいない。

押さえつけられ、焦点の合わない瞳は何も写さない。しばらくして優希の全身から力が抜け、引きつった呼吸は徐々にゆっくりになり、穏やかなものになる。

「……っ、もう暴れねえか…？」

その様子を見た荒垣が力を抜いてそっと離れる。依然、様子はおかしいが先程のような自傷行為をしないでだけマシだろう。

荒垣としてもこんなに取り乱した——否、突然発狂したと言ってもおかしくない優希の姿に、恐怖を覚えていた。

一体何が原因でこうなったのか、荒垣にはさっぱりだった。だが、確かに荒垣との会話の途中からおかしな兆候はあったのだ。先程のやり取りを思い出す。

「…おい、大丈夫か？」

「ああ、うん、大丈夫だよ」

「そんなこと言ったってな、大丈夫そうに見えねえんだよ。…一旦温い茶でも飲むか？」

「…そうだね」

「じゃあいれてきてやるから、そこで待ってろ」

「どうして、だろうね」

「あ…？」

「——俺の命に価値なんて、ない」

ここで、荒垣は優希との会話が成立していなかったことに気がついた。優希は、別の方向を向いて別の何かと話している。この時点から、既におかしかったのだ。

最終的にスイッチを押したのは、引き金を引いたのは湊なのかもしれないが、その精神にヒビを入れたのは間違いない、荒垣との会話だった。だが、荒垣は優希が何故そう言ったのかに気にすることなく、言われた言葉の方に注目してしまった。

そこに気がついて舌打ちをする。

「こいつは…ソファァーで寝かしといた方がいいな。俺が運ぶから、てめえは兄貴をしつかり見てやれよ」

「…」

弟である湊の顔も青ざめている。仕方ない。兄がこんな事になつてんだ、と荒垣は勝手に納得する。

口元や手、倒れた時に頬ついた血を、優しくティッシュで拭ってから持ち上げた身体は想像より少し軽かった。

そのままラウンジのソファァーに寝かせた時、不意に「荒垣くんは、魂には重さがあるって知ってる？」と以前問いかけられた時の事を思い出した。

「知らねえな」

「魂の重さって21gなんだってさ。不思議だよ、見えないものに重さがあるんだ。死んだら、21g軽くなるんだって」

「ほお…」

「…死んだら、魂はどこに行くんだろうね」

夕日に照らされ、憂う様にそう答えた優希は荒垣から見て今にも消えてしまいそうだった。

あの時、自分はなんと答えていたか。荒垣はよく思い出せなかった。

9 / 2 (水) 昼

園村麻希は臨時のカウンセラーとして雇われた辰巳記念病院で、目の前の少年と対峙していた。

歳は18歳。高校3年。

先日、学生寮で突然取り乱し自傷行為を行った為に受診。

記憶の欠損あり。心臓に持病あり。

『他人へと危害を加えることは無いと思われるが自傷行為など何かあった場合はすぐに看護師を呼ぶこと』と赤い文字で書かれた紙と、目の前の少年とを見比べる。

首に包帯を巻いている以外は何の変哲もない普通の少年だ。

受け答えもはつきりしているし、笑い方が変ということもない。視線もきつちりと合わせてくる。本当に、この少年が取り乱し、自傷行為を行ったのかと疑わしいくらいに表面上はなんの異常もない。

少し大人びてるな、と思うだけで。

「カウンセラーの園村です。三上くん、これからきみに色々なことをやってみてもらおうし、聞いていくけど、大丈夫かな？」

「はい。俺に答えられることなら」

軽い質問を何個かし、問題がないと判断した麻希は次に紙に海の絵を描いてみて、というお願いをした。

「えっでも俺、絵心無いですよ…下手くそでも、笑わないでくださいね…」

「大丈夫。笑わないよ！」

「ありがとうございます」

恥ずかしそうに言った少年に、そう答える。麻希自身、高校生の頃に賞をとるほどの絵を描いたことがあるが、だからといって他人の絵を笑ったりはしない。人には人それぞれの感性があるのだ。

鉛筆を手に取り、紙に向かった少年はすとな、とその表情を無くした。まるで、暗示にかかったかのように。そこで、麻希は「あ」と思った。

がりがりと、無表情で紙にひたすら鉛筆を擦り付けていく姿は先程とは大違いだ。

ただ、自傷行為をするといった感じでは無いので見守る。

そうして、出来上がったものは到底絵とは呼べない一面黒塗りの紙だった。

「……」

「三上くん？」

「えっ!? あつ、す、すみません……うわなんだこれ……じゃなくてできま
した! えーと……たぶん、よ、夜の海です!」

「そっかー、ちよつと見せてね!」

手を止め、無表情で沈黙したままの少年に声をかければ、ハツと意
識を取り戻したかのように表情が戻って恥ずかしそうに話し始める。

少年はこの絵を『夜の海』だと言ったがそれは嘘だと麻希は直感的
に判断した。

麻希はこの『海の絵を描いてもらう』という行為は、その人の見て
いる“心の海”を写し出していると思っっている。

夜の海だと言ったのに、麻希が用意していた色鉛筆の青色や藍色を
使うことなく、黒1色。しかも夜空や水平線、砂浜を書くでもなく、た
だ塗りつぶしたとなれば尚更違うと言える。

ふざけてこういう事をするようなタイプにも見え、さらにあの表
情の抜け落ちた顔を見るにアレが本人でもわかっていない無意識の
部分なのかもしれない、と麻希は分析した。

そして、心の海がそう見えるということは、普通ではない。

ふと麻希の脳裏に、『パパ』——神取鷹久の顔が浮かぶ。実の父親で
はなかったが、あの人もこんな底知れない闇を抱えていたのかな、と
思うと同時に哀愁のようなものが胸の奥から漂う。それは既にこの
世に居ない死人を想う感情なのか、なんなのか麻希にはわからない。

しかしすぐにその思考を振り払い、もう1枚紙を出す。

「じゃあ、今度は家族の絵を描いてくれるかな?」

「わかりました」

今度は表情がなくなることも無く、悩むように「んゝ……」と唸りな
がら悪戦苦闘している。先程は使わなかった消しゴムもちゃんと使
用して、家族を描いていつている。

「……できました」

「じゃあ、1人ずつ、誰なのか説明してくれるかな?」

完成された絵に描いてあるのは4人。

大人と思われる男女と、子供と思われる制服を着た男女だ。皆、笑
顔を浮かべている。

「えつと…これが母さんで、これが父さん。それでこっちが弟と妹です」

その答えに、麻希はつい口を開いてしまう。

「家族の絵だから、きみも入れて良いんだよ？」

「へ？　なんでですか？　入れる必要、無いですよね」

「うーん、そうかな」

「入れたほうがいいのなら、入れますけど…」

恐らく、これが彼の本音だ。

麻希はそう思った。

家族について質問した時に、この少年は家族について愛情と慈しみたつぷりな幸せそうな表情で語っていた。幼い頃に本当の両親とは死別しているが、血の繋がった弟と妹と一緒に養父母のところへ虐待を受けていたという情報もない。去年までは大型連休には毎回帰省し、受験生になった今でも定期的に連絡を取るとも言っていた。調査書でも事実確認が取れている。絵に描いたような実に円満な家庭だ。だとすると、彼は、家族にとって特に自分は必要ではないと自分で思っているのだ。

入れる必要があれば入れる、というのはそういう事が必要になったらそこで初めて自分を家族の一員として認識する、というだけであって、家族にとって自分は異物か何かだと思っっている。

きつと、彼の歪みはそこにある、と麻希は目をつけた。

「三上くんは、どうしてそう思うのかな？」

「どうしてって…理由が要るんですか？」

少年は、きよとんと不思議そうな顔をした。

「要らないものは要らないですよ？　そこに要らない以外の理由ってありますか？」

「……」

「あ、すみません…変なこと言って…せつかく聞いてもらったのに…」
「大丈夫。そういうのも、ちゃんとした答えだから！　こっちこそ変なことを聞いてごめんね。あつ、そろそろ時間…今日はここまでにしよっか」

お手上げだった。

麻希は、この少年にやんわりと、しかし頑なに拒絶された。

「ありがとうございます」と頭を下げて部屋を出た少年を見送る。

少年にまとわりつくような黒い靄を幻視した麻希は、目をぱちくりとさせる。

その姿は幻だったかのように一瞬で消えたが、もしあれが、少年の持つペルソナだとしたら。

これは、一筋縄ではいかないと感じた。

夜

麻希は帰宅途中、歩きながら携帯で話をしていた。

電話の相手は数年前から港区に住むようになった高校時代の友達だ。今も交流が続いている仲であり、非日常を駆け巡った仲間の1人でもある。

『よオ、こつち来たんだってな、園村』

「うん、辰巳記念病院つてところで臨時で雇ってもらえることになって…尚也くんも南条くんから頼まれたお仕事があつて一緒だよ」

『へえ、ナオリンもこつち来てんのか。つか、はよくっつけオマエら。見てるこつちがモダモダすんだよ!』

「あはは、朝倉くんは厳しいなあ…」

苦笑いする。

電話の先の男に会う度、連絡する度にこうしてせつつかれるのだ。まあ、本人に悪気はないしいつまで経つてもその1歩が踏み出せない麻希自身が悪いのだが。

『そんな調子じゃ、ナオリンをエリーに取られちまうぜ。良いのか?』

「良くないよ! もう、朝倉くんの意地悪!」

『あーいや、訂正。エリーじゃなくて、なんじょうくんに、だな。ケケケ』

いたずらっぽく笑う電話越しの彼——朝倉はいつまで経つても高校の時のままだ。こんな中でも、凄腕の医者だというのだから驚き

だ。人は性格によらないと麻希は思った。

「南条くん相手だと流石に勝てないよ〜！ うわーん尚也くんがお仕事人間になっちゃう〜！」

『ならさっさとくつついちまうことだな！ で、どうだったよ？ 初勤務はよ』

「うーんとね、すごい子が来たよ。詳しくは言えないんだけど」
『フーン…』

心底、興味無さそうな返答に麻希は乾いた笑みを浮かべる。

「海の絵を描いてもらったんだけど、紙一面ぜんぶ黒塗りだったし、あと…帰る時にペルソナ…って言えばいいのかな…それが、見えた気がするの。たぶん、悪魔の気配とは違うからペルソナだと思うんだけど…」

『んだよ、なんかやべーなそいつ。海の絵ついていやあアレだろ？ 園

村お得意の心の海診断だろ？ アレが真っ黒ってどういうこったよ…マトモじゃねえな…』

「うん…わたしもそう思う。何かに巻き込まれてなければ良いんだけどね…」

ドン引きしたと言いたげな朝倉の声に麻希は心配そうに答える。

麻希としては心配以上のことは出来ないし、カウンセラーという立場で立ち入ったことを訊くこともできないためにどうしようもないといったところではある。

「あまり無茶をするものではないよ、少年」

「すみません…迷惑でしたよね。神条さん」

「いいや、前も言ったが迷惑ではないよ。ただ、きみはもう少し自分をいたわるべきだ」

不意に、前から昼に診た少年と、サングラスの男が話しながら並んで歩いてくる。

少年は学校の帰りなのか鞆を持って歩いていた。あの後恐らく学校に顔を出したのだろう。が、

その男の姿と少年が告げた名前に、麻希はぼとりと携帯電話を落とした。

「え……うそ、なんで…ぱ、ぱ…ううん、神取…?」

「あ、園村さん…? 昼はお世話になりました」

すれ違う距離まで来てこちらに気づいて礼儀正しくぺこりと会釈した少年と、その横で静かに笑みを浮かべる男を、麻希は知っていた。

神条久鷹——否、神取鷹久だ。麻希を利用し、デヴァ・システムを使い神になろうとしたが藤堂達高校生のペルソナ使いに止められ、死んだ男。

その姿は昔となんら変わりがない。いや、サングラスと顔に走る傷のようなものだけが変わっている。

それは、麻希ではなくかつての仲間である南条くん——南条圭が見たらすぐにその正体に気づいたであろう。

麻希は、10年前の珠? 瑠市での事件の時に南条から「神取が神条と名乗り復活した」と聞いていた。

だが、南条が語らなかった部分にこそ、重要な部分があったのだ。

神条は、本物の神取ではない。噂の力によって蘇り、神取の記憶と精神を持ったニヤルラトホテプと呼ばれる邪神の化身だ。それを、麻希は知らない。ただ、再び死んだと言われていたので2度も死んだはずの死人が現れて狼狽えているだけだ。

「あ、携帯電話落ちてますよ。これ園村さんのですよね」

「え、ああ、うん。そう、だね、ありがとう三上くん」

落とした携帯電話を拾ってにこやかな笑みで返してくれた少年に礼を言って受け取る。

電話の先では、まだキャンキャンと朝倉の声が聞こえていた。

「それじゃ俺はこれで」

「もう暗いし、気をつけてね」

そう言っつて、先を歩き出した少年を見つめていると、その横に並ばなかった男が麻希に語りかける。

「気になるかね?」

「何を…」

「全てだよ、園村麻希」

くつくつと、喉奥で笑う神条に、麻希はキツイ視線を向けた。

「気になるわよ。でも、あなたは教えてはくれないでしょう?」
「もつともだ。だが、安心してくれ給え。私は彼に直接危害を加えるつもりは無い」

「信用出来ないわ」

言い返した麻希に何かを言おうと口を開いた神条だったが、少し離れた場所で立ち止まりこちらを見つめる少年を見るとそのまま麻希の前から歩き去っていく。

『おい!・今の声…!』

「朝倉くんにも聞こえてたんだ…いま、目の前に…死んだはずの…神取が居たの…」

『大丈夫か!? 何もされなかったか!?』

「わたしは、大丈夫…けれど…三上くんが…さつき話した患者の子が…」

電話の向こうから、息を飲むような音が聞こえた。

『三上って…三上優希か? 月光館学園高等部3年の、三上優希』

「う、うん…そうだけど…」

なぜ朝倉が少年のことを知っているのだろうか、と麻希は不思議がる。

『そいつが神取になにかされたのか!? 攫われたとかか!?』

「ううん、そういうことじゃないの。凄く、親しそうだったってだけなんだけど…」

切羽詰まったような朝倉の声に驚きながらもそう答えた。

今日初めて会った自分なんかよりも、よっぽど神取に、神条に心を開いていた。傍から見れば、仲のいい叔父さんと甥のようにも見える。

『けどよ、アイツに目をつけられてるっつーことは、利用する気マンマンって事じゃねーのか。オマエん時みてーによ』
「……………」

麻希は、答えられなかった。

ただ、直接危害を加えないと言った神条の言葉が気になる。あくまでも、神条は少年には手を出すつもりは無いのだろう。それは本心で

あるというのは麻希にも伺えた。

だが、なにか引つかかる。

神条の存在自体にもだが、10年前に珠？瑠で起こったようなことが、自分達の知らないうちにここでも起きているのではないかという漠然とした不安。

『とにかく、気をつけろよ。あのガキに関してはオレも気をつけとくし…園村の場合はこれからナオリンに送り迎えして貰え。な？』

「うん…ありがとう」

そうして、電話を切った麻希は帰り道を足早に歩いた。

9 / 3 (木) 放課後

一昨日の記憶が全くない。朝から夜まで、全部。

起きたら2日だった時の自分と驚きは計り知れなかった。夢かと思つて頬をつねりながらカレンダーと携帯を交互に確認したくらいだ。

しかも、湊と荒垣くんがひどく気遣うような視線を向けてくる。他のみんなからも心配するような目を向けられたが、特にこの2人からの視線がわかりやすい。

恐らく、というか絶対に自分が2人の前で何かやらかしたのだ。

今は包帯に隠れて見えないが、知らない間に首は掻きむしったような傷があったし、喉はひどくイガイガしていた。

最近、こうやって記憶が飛ぶことが増えている気がする。

どう考えてもおかしい。いや、一昨日に関しては確実に自分はおかしかつたようだ。

話に聞いたところ、朝、突然おかしくなつて倒れたとかなんとか。その後ずっと眠り続けていたらしい。つきつきりでいてくれたモコイさんが心配していた。

あまりにも心配されるので昨日は美鶴さんの勧めで午前中は心療内科を受けて午後から学校へ向かうことになった。

カウンセラーの園村さんは良い人だったし、特になんともなかつ

た。これと違って問題があったわけでもない。逆に、おかしくなった原因がなにかわかった訳でもないけれど。

けれど、途中で「家族の絵に自分も入れていいのに」と言われたときは少し困った。逆に、なぜ自分を入れなくてはいいのかがわからない。

そういうのも何かカウンセラーだと引つかかるところがあるのだろうか。

夜は動けたのでそのまま神条さんに会いに行ったら首元の包帯を見られてしまって叱られてしまった。

こういう時は翌日でも休んだ方が良さらしい。次からは体調が悪かった日の後は神条さんに無理に会わず休むように気をつけようと思う。

ただ、何となく神条さんと一緒にいるとひどく落ち着く。まるで、幼いころから知っている親戚のような、そんな感じがする。

そして今日。

「お兄ちゃん、大丈夫?」

「大丈夫、大丈夫。昨日カウンセリングにも行ったけどなんかよく分からないだけだったし…あ、もしかして心療内科じゃなくて…脳の方か…?」

「ええ!! の、脳?!」

奏子と岳羽、山岸と帰り道を歩きながら喋る。

よくよく考えたら、記憶が飛ぶなら精神じゃなくて脳の方に異常がある場合もある。

そつちを調べて貰えばよかったか? と思うが次の満月まで日がないのでいきなり病院に行くという事も出来ない。

「あーいや、もしかしたらって思っただけだから気にしないで」

「三上先輩の大丈夫って大丈夫じゃないですよね」

「うぐ…」

岳羽に痛いところを突かれてしまう。

「俺的には大丈夫だと思ってるんだけどな…」

「お兄ちゃんの『大丈夫』はホントに大丈夫な時と大丈夫じゃないとき

があるから信用できないんだよね」

「うぐぐ…」

手厳しい。

そう言われてしまうと何も言えない。いや、大丈夫だと思ったことがイレギュラーなことが起きて大丈夫じゃなくなるだけで、予想の上では大丈夫なのだ。ただ、結果はこの通り散々なもので何も言えない現実だけがのしかかる。ふがない。本当にふがない。

「先輩、あんまり無茶しないでくださいよ？ 有里くん、一昨日ずっと顔が暗かったし先輩から離れなかったみたいで…」

「私もお兄ちゃんの看病、したかったんだけど。湊が女子はダメく！」

つて！ ぶー！ 私だつて女子の前にお兄ちゃんの妹だもん！」

「ごめんね」

腕を振り上げてぷりぷりと怒る奏子に苦笑いする。なるほど、モコイさんだけでなく湊もつきつきりでいてくれたのか。昨日そんなことは聞かなかったたので帰ったら改めてお礼を言おう。

「明後日、満月の日ですね…」

唐突に、ぽつりと呟いた山岸の言葉に2人が表情を固くする。

「あんまり緊張しないようにね」

「わ、わかってます！ けど、毎回何か起こってるし、今回も何かあるんじゃないかって思うのは変ですか？」

「変じゃないよ。そうやって起こりうるアクシデントを予測するのは大事なことだ。でも、起こりうる可能性ばかりに目を向けて、他の大事なことを忘れないようにね。一番は死なないこと、怪我しないこと、だから」

「お兄ちゃんがいうと説得力なくい」

「あはは…でも死なないことは大事だよ」

自分とて、別に意味もなく死にたいわけじゃない。

選んだ選択に付随しているのが死であるだけであつて、死なないのならそちらを選ぶ。

でも、どうあがいても死ぬときは死ぬのでそういう諦めと言うものは持つてるのかもしれない。

「とにかく、満月の日は気合い入れていこー！ おー！」
「おー」

「奏子ちゃんは元気だね。見てるだけで、なんとかなるって気になるのがすごいよ」

「あ、それ私も思う。奏子ちゃんってなんかいつも元気モリモリだね。元気の塊ってカンジ？」

「ふたりとも、ありがとー！」

「元気いっぱいいいことだ、と微笑ましい光景を目に焼き付けながら思った。

「すこしでも、この明るさが続くように、失われないように、頑張らないといけない。」

夜

「湊、お帰り。少しいいかな？」

「ん」

寮に帰ってきた湊を出迎えて一緒に上にあがる。

一旦荷物を置いて来てもらい、部屋に迎え入れた。

「ベッドに座ってもいいからね」

「うん」

何の躊躇もなくベッドに座った湊は特別変わったところがあるようには見えない。ただ、湊はそういうところを隠すのが上手いから、見えないだけで本当は辛いかもしれないし、なにか異変があるのかもしれない。けれど、それを無視して今から自分は湊にとってひどく残酷で惨いことを言う。

「湊、まずは一昨日…つきつきりで居てくれてありがとう。奏子から聞いた」

「別にいい」

「ごめんね。それで、今日部屋に呼んだのはこれだけじゃなくてさ…」

湊の眉が寄る。怪訝そうに思っているんだろう。

「湊に頼みごとをしたいんだ。嫌なら断ってくれていいから」

「頼み事…?」

「うん。前置きしておくけど、聞かないと言う選択もあるんだ。今聞かずに、この話を無しにすることもできる。今から俺が言うのは、酷くて狡くて、惨い事だ」

そう告げると湊の顔が曇った。俯き、考えているようだった。

「本当は、美鶴さんや荒垣くん、真田くんに頼むのがいいんだろうけど。きつと、俺を除いた特別課外活動部のなかで今一番強いのは湊だ。だから、俺は…湊に重荷を背負わせることになると思う。それでも、いいのなら」

「…聞かせて。いいから」

顔を上げた湊は決意を秘めた目をしていた。

「こんなお願いをすることになって、本当に、申し訳ないと思う。でも、これは湊にしか頼めない事だ。」

「俺…最近、記憶がよく飛ぶんだ。一昨日みたいに、さ。実は数日前にも短時間だけど記憶が飛んでる」

湊は黙って聞いてくれている。

「原因は、わからない。けど、最近…俺はどこかおかしくなってきたんじゃないかって気もするんだ。湊も、きつと一昨日の、おかしな俺を見たんだろ。だから…」

「…」

「もし、もしだ。俺が、俺じゃなくなろうとしてるのなら…俺が、俺じゃなくなったその時は、」

ああ、俺は本当に狡い兄だ。

赦してほしいだなんて、今更、思わない。

——けれど、誰かを傷つける前に、殺してしまう前に。

「俺を、殺してほしい」

人でなしの唄 (9 / 3 ~ 9 / 5)

自分の惨い頼みの後、湊は首を縦に振る事も横に振ることもしなかった。

ただ、「考えさせて欲しい」とだけ言われて自分はそのれに対して、「……俺が頼んでることは、忘れたかったら忘れていいんだ。ふざけるなって怒ってもいいんだ。だって、馬鹿だろう？ 大事な弟に……こんな……人殺しにするような、こと。頼むなんて」

「……優希は、傷つけてるけど傷つけてないよ」
「？」

と自嘲するように吐き出せば、よく分からない答えを出される。

「優希がおかしくなった時にいつも傷つけてるのは、優希自身だけだから」

「……」

湊の言葉を信じられないわけじゃない。

けれど、にわかには信じ難い。

結果的に、そうなるだけで運が悪ければ怪我をさせてしまったかもしれない。殺してしまったかもしれない。そんな危険な要因は、湊や奏子を傷つけるような可能性は、要らない。

ふたりを殺すくらいなら、自分を殺してこの周を強制的に終わらせる。

きつと、時間が巻き戻って4月からになれば、この異常も無かったことになるはずだ。救うのは、そこからでいい。

この周で必ず救うという決意は、自らの異常によってぐらぐらと揺れていた。

「結果論だ」

「結果論じゃない」

即座に言い返されて押し黙る。

「僕らは怪我させられたくらいで優希を怖がったり嫌いになっただけじゃない。ペルソナの暴走だろうが、シヤドウに操られようが、優希が抗っていたのを、僕らを守ろうとしたのを僕は見てる。けれど僕らは

……みんなは優希1人に全て背負わせるほど不和じゃないし弱くもない！ 己惚れるのも大概にしなよッ!!!」

湊が叫んで立ち上がり、肩を掴んで壁に押し付けてくる。

それは、『己惚れるな』という響きの『ふざけるな』という叫びだった。

「優希が僕の立場なら、殺さずに止めるでしょ。それと、同じだよ。誰かを殺したくないのは、僕も同じだ……！ それも、家族をだなんて……優希は自分が嫌だと思ったことを、僕にさせるの!? それで、良いと思ってるの!?!」

「良いわけないだろッ!!!」

今度は、自分が叫ぶ番だった。湊の胸倉を掴み返そうとして、やめる。

別に自分は、湊に暴力を振りたいわけじゃない。湊を、怒らせたわけじゃない。

「いいわけ……ないだろ……」

手を下ろして下を向く。

実の弟にこんなことを頼んで、良いわけがない。そんなこと、わかってる。

けど、自分がおかしくなっているのは確かだ。自分が死ぬのはいい。どうでもいいんだ。

しかし、誰かを人殺しにはしたくない。

極力、自分でできるところまではどうにかするつもりではある。あんなに、意識を失ってしまえばそこはもう自分の手の届かないところだ。だから、誰かに頼むしか、ない。

「俺が、どうにもできないから……湊に、頼んでるんだ……お願いだ……いや、やっぱり……だめだ……そんなの、そんなこと……」

「迷うくらいなら、どうしてあんなこと、言ったの」
「……」

答えられない。

どうしてだろう。どうして、そんなことを思ったのか。

理由は簡単だ。自分がおかしくなっているから。

ペルソナも暴走させているし、日常生活でも最近記憶が飛ぶ。そこまで考えて、「ああ。自分は焦っていたのか」と合点がいった。

自分は、焦っていた。だから、こんな取り返しのないお願いをしてしまった。

湊の言う通り、己惚れていたのだ。

こんな頼み、誰が相手でもしていいはずがなかった。

「焦ってた…とさえばいいのかな。大型シャドウが来るたびに、俺の記憶が飛んだり、ペルソナが暴走したり、操られたり。今回は大丈夫でも、次は、誰かを殺してしまうんじゃないかって不安が常にあった…と思う」

「…うん、」

「——怖かったんだ。俺は。でももう恐怖の正体はわかったから大丈夫。ありがとう、それとごめん。さっきの頼みは取り消してくれ。俺のことは、俺で何とかする」

「取り消さなくていい」
「？」

自分でこの焦りと恐怖を何とかする、と決めたのにあの惨い頼みを取り消さなくていいと言われて首を傾げてしまう。

「取り消さなくていいって言ったんだ。——決めたから。もし本当に優希がおかしくなって、止めなきやいけなくなった時は僕だけじゃない。奏子もアイギスも含めた、みんなで止めるんだ。その代わり殺さない。殺させない。嫌だと叫んでも絶対に死なせないから」

その目は、自分なんかよりもよっぽど強い決意の光を湛えていた。みんなに止めてもらう、は盲点だった。なるほど、その手もあったか。

「だから、ね。僕や奏子…あとは荒垣先輩とか、もつと頼りなよ。〴〵兄さん」

悪戯っぽく笑った湊の「兄さん」呼びになんだかおかしな気分になってこちらも半笑いになる。先ほどまでの憂鬱な気持ちはきれいさっぱりとは言えないが緩和されている。止めてくれる、という約束だけで気楽になるのだから現金なものだ。

「ん。ありがとう。善処するよ」

「善処じゃなくて全力で甘えていいんだよ？ 逆に一日兄と弟入れ替えてみる？ 僕ら年子だしイけるでしょ」

「えーこれ以上弟に甘えたら兄としての尊厳がなくなるので遠慮の方をですね…」

「もう無いから遠慮しなくていいよ」

「ひどい」

兄としての尊厳はやはりもうないらしい。ショックだ。けれど今更ではあるので仕方ないところもあると思う。

そんな湊は掴んでいた肩から手を離してベッドに腰掛けて膝をポンポンと叩いた。

「ひどくない。ほらお兄ちゃんカッコカカリが膝枕してあげる」

「膝枕!? そのチョイスはちよつと…」

「文句言わない」

「湊お兄さんや。他のチョイスはなにか無いですかね？ 例えばテレビを一緒に見るとかゲームするとかそういうの」

「無い。早く来て。あとお兄さんはやめて。なんか兄っぽくない」

「ぐぬぬ…」

具体的に恥ずかしくない案を出してみたがダメらしい。

弟に膝枕してもらうとか恥ずかしさの極みだ。ギギギ、と油の切れたブリキのおもちゃのようにゆっくりと、それでいてぎこちなく近づく。

そして、ベッドの上に座り、そのままゆっくりと頭を湊の膝の上に置いた。

「……………」

「どうっ…」

「…………うーん、いや、どうといわれても…」

なんともいえない。別に湊は女の子ではないのでドキドキもしないし落ち着くわけでもない。

ただ、あまりしない事なので慣れないな、という気がするだけだ。あと硬い。

「というか兄は膝枕とかじゃなくてやっぱり一緒にゲームしたりだ
と思うしこれは姉とか母親とかの役割では？」　　「思ったが言わない
でおく。奏子が食いついたら今度はラウンジあたりで膝枕を体験さ
せられてしまいかねない。なんという恐るべき公開処刑だ。」

「太ももがつかれてきた…」

「ええ…言い出しつpegが根を上げるの早くないかな…」

結局、五分もしないうちに湊がギブアップする。

「膝枕って疲れるんだ…タルタロス登るよりしんどいかも」

「そんなに?!　じゃあ俺もやる!　湊、交代しよう!」

五分もしないうちにタルタロスに登るより疲れる膝枕ってなんだ、
と気になってしまつて起き上がつてチェンジを要求すると湊がぽか
んとした顔でこちらを見た。

「あー…やつぱダメかな?　恥ずかしい?」

「いや、ダメじゃないけど…優希がそんな楽しそうに笑うの、久しぶり
だなつて」

言われて頬をむにむにと触るが、自分は湊が驚くほどの笑顔をして
いるのかどうか確認することはできなかった。

「まるで、小さい頃に戻つたみたいだ。まだ、優希がうちに居たころみ
たいな」

「うちに…有里家にいたころの事か?」

「うん。あの頃。丁度幼稚園に行つてたくらいだつて。優希はその頃
のことは…覚えてる?」

「ちよつと待つて」

湊の言葉にその頃を思い出そうとする。

朧気に残っている記憶はどれも湊と奏子の顔以外ぼやけている。

記憶を掘り出そうとして、突然込み上げてきた吐き気に顔を顰めて
口元を押さえる。

「……」

「優希…?」

「ああいや…大丈夫…すこし、気持ち悪くなつただけだから…」

笑いかけてみるも、心配するような湊の顔は戻らない。

言われたとおり、ちよつとだけ甘えてみても良いんだろうか。こんな顔をしている湊に。

「大丈夫じゃ、ないんでしょ。思い出さなくて、いいから。無理して思い出さなくていいんだ…だから、無理はしないで。ごめん…ダメなこ」と聞いて」

「ダメじゃ…ない。けど、俺もごめ、ん…やっぱちよつとこれは…思い出すのいまは無理かも…甘えても、いいかな」

湊が背中をさすつてくれる。それに甘んじて大きく息を吸つて吐くことを繰り返していると気持ちの悪さはすぐに消えて落ち着いてくる。吐かなくて良かったという安堵と急激な眠気が襲ってきた。いつもは、こんなことないのに。

「あ、れ…」

ぐらりと、身体が傾く。

ぶつりと意識が途切れた。

湊は突然眠りに落ちた兄の身体が床に倒れこむ前に咄嗟に腕を出して支える。

すうすうと穏やかに寝息を立てる兄は、先ほどまではつきり起きていたとは思えないほどに一瞬で夢の世界に旅立っていた。

湊が上半身をベッドに横たえさせ、足をベッドへと持ち上げてても全く起きない様子はまさに熟睡しているといつても過言ではない。これはどうやつても起きないだろう。

「おい三上、いつまで話し込んでるつもりだ！ 飯できた…ぞ…」

荒垣がドアをノックして顔を覗かせたので湊は唇に指をあてて『静かに』というジェスチャーをした。

「お、おう…」

荒垣はベッドで寝息を立てる優希とその横に腰掛ける湊を見て小さい声で返事をした。

湊の予想としては、優希は湊との言い合いによって張りつめていた

糸が、湊が背中をさすって落ち着いたことよって切れてしまったために突然寝たのではないかと考えている。

確かに、気を緩ませるためと落ち着かせるため、という目的はあったがここまでとは思っていなかった。

まるでスイッチのオンとオフのようにはつきりしていたのには驚いたが。

「こりやしばらく起きねえな」

「たぶん。僕は今から行く」

「おう。今日は唐揚げだからな。早くしねえと順平とアキのやつに食われて消えるぞ。……まあ、ここで寝てるやつに分くらいは取ってやるか」

2人は部屋の電気を消して部屋から出た。

「で、どうだったんだ。兄貴との話し合いは」

「殺してくれたって言われた」

「なんだって?」

湊の答えに荒垣は眉をひそめた。あの馬鹿、弟になんて事言ってるだ、と怒りを覚える。

「でも、なんか最終的に優希をたっぷり甘やかす方向で丸く収まったよ。そこは大丈夫」

「どういうことだ? よくあいつを言いくるめられたな?」

「兄と弟の立場を入れ替えて膝枕した」

「????」

「膝枕ってすごくしんどい。アイギスのこと尊敬する」

荒垣の心の中では怒りが飛んでいき代わりに猫が宇宙を見ていた。正にスペースキャット状態。何をどうやったら「殺してくれ」と言われたのに兄と弟の立場を入れ替えて膝枕をして、甘やかす方向になるんだとツツコミたかったがツツコんだら負けな気がして荒垣はツツコミを放棄した。

「荒垣先輩は優希の満面の笑み見たことないでしょ」

「ねえな。あいつはそういう笑い方しねえ」

どちらかというと静かに微笑むタイプで子供のように笑ったり満

面の笑みからは程遠い存在だ。目の前の後輩もそうと言えばそうなのだが。

やはり兄弟にはそういう顔を見せるんだろうかと考えた荒垣の耳に、とんでもない言葉が入ってくる。

「さつき、12年振りに見たんだ。それ」

心底嬉しそうな、今までに見たことの無い表情をした湊も珍しいと荒垣は思った。なんだ、今日はお前ら兄弟揃って表情筋動きまくってるのか、と言わんばかりの事態だ。

「12年振りってそりやまたアレだな」

「…僕も10年前の事故から性格変わったらしいけど、優希のアレは見た目だけ取り繕ってる」

顔をいつもの無表情に近いそれに戻した湊の足が止まる。

「たぶん、だけど…優希はもう、とつくの昔に壊れてたのかもってたまに思うんだ」

「そりや、なんでだ」

「わかんない。でも、この前みたいな取り乱し方を見ると…なおさらそうとしか思えなくなってきた」

荒垣にも思うところはあった。

あの時の取り乱しようは半端ではなかった。発狂していたと言ってもおかしくはないレベルだ。

「…優希は、12年前に誘拐されたんだ。公園で僕と奏子と一緒に遊んでる時に。僕が道路にまで蹴飛ばしてしまったボールを『お兄ちゃんだからとつてくる』って言って取りに行つてそのまま帰つてこなかった」

「……」

「ボールは、道路の端に落ちてた。まるでそこで、優希が手から落としてみたみたい」

それから大変だったんだ。と告げた湊の声色はなんの感情も感じさせない平坦なものだった。

「…誘拐されたあとどうしてたのかは知らないけど、10年前の事故があつて、優希は桐条の研究施設で人工ペルソナ使いと一緒にタルタ

ロスを登ってたんだった。夏休み前の屋久島旅行のとき桐条先輩のお父さんに教えてもらった」

「……なるほどな、どうりでストレガのやつらと面識がある訳だ」
荒垣は優希が倒れた後、制御剤のことも洗いざらい湊に話した。その為、荒垣がかつてストレガから制御剤を貰っていた事も湊には伝わっている。

ただし、現時点でこれは2人だけの秘密ということになっているが。

「……きつと、あんなにおかしくなるくらい酷い環境だったんだと思うよ。同じ被験者が100人くらいいたらしいけど生き残りはもう殆ど居ないって。だから、まともそうに見えても、記憶になくても、優希の心はボロボロになっちゃったんじゃないかって。今日、なんで優希があんな無茶するのかちよつとわかった気がするから。……優希は、たぶん失うことが怖かったんだ」

「失うことが怖い、か」

荒垣はその言葉に納得した。

荒垣自身、制御剤を飲んでるのは贖罪の為もあったが同じ事を二度と繰り返したくないからという意味もあった。言い換えれば、それはペルソナの暴走でまた誰かを傷つけたくないという恐怖からくるものでもあったのだ。だから、荒垣には優希の無茶な自らを省みない行動の原因が失ったり傷つけることが怖いという意味の表れだと言っていて安心したのだ。

「なら、沢山俺らがデキるところ見せたり甘やかしてやらねえとな？」

「そのつもり。だから明日は順平じゃないけどイイところ見せて頑張ろうかなって」

湊は無言で荒垣の方から差し出された拳に自らの拳を打ちつけ、秘密を共有するかのように悪戯っぽく笑いあう。

原因は、喪失への恐怖以外にもあると知らぬまま。

——人には、人でなしの心は分からぬと知らぬまま。

辰巳ポートアイランド駅前

順平は夏休み後半から会うようになった「彼女」に会いにここへ来ていた。

キヨロキヨロと見回し、いつもの花壇に腰掛けている姿を目に入れて近づく。

「よっ、チドリ。この前のケガ、あれからどうした？」

この前の怪我とは、順平が少女——チドリとであって数日ほどした時にできていた手首の傷の事だ。

順平の目の前で血を流した彼女の手を優しくつかみ、自分のハンカチで止血したのだった。もちろん、「医者に見せろよ」と順平に言われたチドリはそのまま朝倉のもとへ行きぶつきらぼうに「『メーディア』で治したけど医者に見せろって言われたから。見て」と言いながら既に治った傷口を見せ、朝倉を困惑させてから帰った。

「え、アレ…傷は？ 跡もない…？ 意外と軽かったのか…？」

困惑している順平にチドリは手を止めて目を伏せる。

「順平はき…何をしてる時、『自分は生きてる』って思う？」

「え、さあ…息してる時とか？」

それは、チドリの純粋な疑問だった。

チドリは生の実感というものが薄い。否、ストレガの面々は、チドリ同様、生きていくという実感が薄い。

道具のように扱われ、常に死と隣り合わせ。幼小にそんな生活をしていればそうもなるわけで。

違うのは「ナギサ」とイズミくらいだろう。

そのイズミも今では元気に愛する看護婦の女性の家と朝倉医院を往復している。

何の奇跡が起こったのか、イズミは翌日に人の姿に戻り精神も合わせて健康体になっていた。朝倉はイズミが健康になった理由を、「悪魔化した時に欲望である『生きること』に忠実な健康な身体に作り替えたんじゃないか。元より悪魔は人間より丈夫だからな」と予測していた。

ただ、復讐を依頼してきた人間に生きていと知られるのは不味いので『はがくれ』でのバイトはそのまま辞め、代わりに朝倉医院でバイトをすることになったが。

ジンは「今更、ひとりふたり殺したところで変わらんのやから、イズミの邪魔になるようなら依頼してきた女殺せばええやろ。どのみちこの依頼は失敗なんやから」と語っていたがタカヤに止められていた。イズミも止めた。チドリは止めなかった。

「ハハ、つか、考えたことねーや。チドリは、やっぱ絵描いてる時か？」

「どうかな…こんなの全部、ただの落書きだし…自分の事なんて…分からない」

目を逸らす。

チドリには、わからなかった。どうしてイズミがあんなに生きたいと願うのか。

女性を、人を愛したからだと言っていた。ならば、チドリはだれかを愛せるようになったその時にわかるのだろうか、と考える。

ジンに「イズミのことは運が良かっただけなんやから、チドリは変な男に引つかかるんやないで」と言われた際に、「自分の絵に理解がある人間が現れたら考える」とチドリはそう言い返したがそんな人間が現れたところで自分が『愛』を知れるとは到底思えなかった。

ジンも、タカヤも、イズミも、〃ナギサ〃も、チドリの絵を否定はしないが理解もしていない。「よくわからないが好きなら好きにすればいい」程度の扱いだ。チドリの絵を『良い』と言ったのは順平が初めてだった。

「そっか…隣、いつか？」

チドリは否定しなかった。無言で順平をみると許可を貰えたのかと思つた彼は隣に腰掛ける。

「オレさ、実は1コだけあんだよね。充実してつかなくて、思える時がさ。まあ、なんつか、〃正義のヒーロー〃やってる時かな？」

チドリが不思議な顔をして順平を見つめれば、食いついたと思われ

たのかキメ顔を作って芝居がかった様子で語り始める。

「今日と明日の間にある誰も知らない時間：そこは、選ばれた力を持つ者だけの戦場！ 影の怪物から人々を守るため、ヒーローは今日も戦い続ける！」

そこまでほぼほぼノンブレスで語った順平は勢いよく立ち上がった。

「つとまあ、そういう感じでさ、充実の瞬間っすよ！」

「……」

チドリは、思わぬ人物からの情報に呆然とする。

それと同時に、順平はタカヤとジンが言っていた影時間を消そうとしている集まり——特別課外活動部の一員なのではないかという疑問が浮かんだ。

ただ、彼らに関してはほぼぼぼ手出ししないことが決まっているし、半信半疑だが邪魔したところで影時間が消えるわけではないと聞いてヘイトが幾月に行っている状態だ。

幾月さえいなければ、チドリたち人工ペルソナ使いは苦しまなくて済んだのだから。

更に、幾月はストレガを邪魔な人間を消すための道具とでも思っているのか何度も殺人の依頼をしてきている。この10年間——最近は何もないが——いいように扱われっぱなしだったのだ。そんなやつに散々バカにされ、拳句に勝手に死ぬのだからどうでもいいだろうという扱いさえ受けたのだ。死ぬことに恐怖は無いが、人としてのプライドや大人たちへの怒りまで捨てたわけではなかった。

「そろそろ横暴な飼い主に繋がれている鎖を引きちぎり、裁きを下すべきでしょう」というタカヤの考えにジンもチドリも頷いた。

だから、敵対する必要はない。けれど情報は欲しかった。

ナギサに情報をくれと頼んでも、恐らく口を閉ざすだろう。それに、不用意に刺激したくないというのがタカヤの意見だった。それにはチドリも同意見だった。

ナギサは、たまにチドリから見てもひどく揺らぐときがある。揺らいだ時のナギサはひどく不安定で、怖いものだった。だから、そんな状

態にさせないために、刺激しない方が良いとチドリも思ったのだ。

「えつと…鼻で笑ってツッコむとこだけ？ 冗談だから」

真面目な顔で思案しだしたチドリに順平はおちやらけた雰囲気や霧散させて真面目にツッコむ。そんな順平を無視してチドリは気になる事を訊く。

「それ…あなた一人で戦ってるの？」

「お、おいおい、真に受けんなって」

「誰も知らない時間の中なんですよ？ なら…誰も知らなくて当然じゃない」

チドリは思ったことをそのまま言った。ただ、すこし順平の事を素直にすごいと思う感情も湧いてくる。

「誰も知らなくて、誰も誉めてくれないのに、戦ってるんだ。エライね。ちよつと見直した」

最初、押しつけがましい距離のわからない男だと、チドリは順平の事を思った。

ただ、こうしてチドリに話しているとはいえ、このお調子者の男が頑張っているというのはまあまあ評価を見直しても良いポイントだった。

シャドウとの戦いは正しく命懸けだ。それをこんな、ペルソナやシャドウといった超常の存在と関係なさそうに幸せそうな家庭でお気楽そうに過ごした男が、望む望まざるどちらにせよ頑張っているのだというだけでチドリは更に興味を抱いたのだ。

「そう…かな？ こんな話、信じてくれちゃうとは、思わなかったな…」

「ねえ、それ、もつと聞きたい」

チドリは情報が欲しかった。けれど、今は少しでもこの男が何を感じ、何故戦っているのかを知りたかった。

「！ なんか…不思議だよな、キミ。んーと…」

そう言っただけで少し考えるそぶりを見せた順平は再び口を開いた。

「ま、いつか。じゃ、これ絶対ヒミツにしてくれよ？ ペルソナって超能力みたいなのがあつてさ。それ使えるヤツだけが、怪物を倒せ

んだ。けど誰でもペルソナ使えるわけじゃなくて、だから選ばれた何人かで戦うしかない。仲間がダチとか先輩でさ……こう見えても、オレ入ってからは連戦連勝なんだぜ？　ま、ちっと危ない時があったし……オレを庇って先輩が怪我しちまった時があるけど……」

「へえ、楽しそうね」

実験関係なく、ある程度スパンと自由があった上の仲間とか友達と
いうのはチドリにはいないので純粹に楽しそうだな、と思った。

チドリには、タカヤとジンしかいなかった。否、いなくなっ
てしまった。

今年に入ってナギサとイズミに再会することが出来たが2人はチ
ドリにとつては遠い人だ。

イズミはジンの友達だったというだけで親睦は殆どなく、記憶喪失
のナギサには何度かペルソナが暴走した時に手を握ってもらったが、それはあそこにいた子供たちが皆そうだった。

不思議と、ナギサに手を握られると安心すると同時に暴走していた
ペルソナが沈静化するのだ。間に合わずに死んだ子もいるがそれは
運が悪かっただけ。

被験者の中でペルソナに自然覚醒した存在であるナギサはよく実
験に連れ出されており、そこから抜け出してまで、施設に残った中で
ペルソナが暴走した誰かの手を握りに行くわけにもいかなかった。
実際、チドリはストレッチャーの上でガチガチに拘束されていたり意
識を失ったりしていて動けない状態で苦しみながら大人たちに運ば
れるナギサを部屋の外から見た事があった。

それはともかく。

「順平が来てから連勝って事は、順平は、チームのエースみたいなもの
？」

「ま、まあな……」

照れたように帽子のつばをもった順平の声はうわずっている。

「リーダー的な役割……ってどこかな。とりあえず、オレがいないと始
まんないって感じ？　作戦始まったら、みんなオレの指示で動くん
だ。結構、大変なんだよな、リーダーってのも」

「……」

順平の言葉にチドリはナギサも似たようなことをしていたな、と思
い出す。ただ、ナギサはあまり具体的な指示はせずに本人の意思に任
せていたし、危険なら「その攻撃は駄目」だの「下がって」だの「炎
がよく効くよ」だのどちらかといえは指示というよりもアドバイスを
言うような役だった。誰かが危険になれば身を呈して庇うことも
あった。

そして、この目の前の男がそんなリーダーをしているというのはに
わかには信じがたかった。

チドリはスケッチブックを閉じて立ち上がる。

「ありがとう…順平。楽しかった」

タカヤとジン、そしてイズミからは聞けそうにない話を聞けてそれ
と同時に思考することを、チドリは普通に楽しんでいた。

「そ…そっか?」

「でももう時間。また明日…会いたいな」

明日は満月の日だ。

処方された薬のお蔭か、おともだち「メーディア」の調子もいい。

たつぷり、話を聞くことが出来るだろう。今度は、もっと込み入っ
たことを。

「へへッ…また明日、か。よおーし!」

そんなチドリの思惑に気がつかず、順平は嬉しそうにそう呟くの
だった。

9 / 5 (土) 夜

「チドリ、今日居なかったな…」

順平は時間ギリギリになるまでチドリを駅前で待ったが、その日彼
女がいつもいる場所に来ることは無く。

街中を駆けずり回って探したがその姿が見えることもなく、途方に
暮れていた。

「やっぱ、もっぺん探してみつかない…」

そう思うも、順平の足はそこで止まる。

「でも、流石にマズいか…作戦あんだしな、今日」

はた、とそこで顔を上げて独り言ちる。

「作戦か…考えてみりゃ、あの子を守る為の戦いでもあるしな。なんか、そう考えつと、やる気出てきちゃうな…」

チドリも守るべき一般人だと思っている順平は自分に気合を入れなおした。

今日はいつもより一層、活躍せねばなるまい、と。

「つか、これこそまさに正義の戦いつてヤツか？ …オシツ！」

そうして、寮に戻ろうとする順平の背後から、聞き覚えのある声がかかった。

「動かないで！」

「えっ？」

影時間

作戦室

「今日で、もう6度目の満月だね。敵は見つかったかい？」

「はい…多分、ポロニアンモールの辺り……だと思っんですけど」

「多分…？」

今日も今日とて大型シャドウの位置を山岸に見てもらっていたが、妙に歯切れが悪い。

それもそのはず。今回の大型シャドウは電気を食うためにポロニアンモール周辺に『根』を張り巡らせているからだ。

あと、あるとするなら山岸のペルソナ「ルキア」と同じく探知系の能力を持つチドリのペルソナ「メーディア」による探査妨害か。

「何だか、モールの周辺から、ぼんやりと感じるだけで…範囲を絞ろうとはしてるんですけど…」

「今回のシャドウの『能力』って事か？」

「わかりません」

真田くんの問いに困ったような顔で山岸は答えた。そこへ、荒垣く

んが助け舟を出す。

「十分だろ、そんだけわかりや」

その言葉が終わるか終わらないかで作戦室に天田くんが帰って来る。

「どうだった?」

「順平さん、何処にも居ません。カバンもないし、今日はまだ部屋に戻ってないみたいです」

恐らく、というか絶対チドリに拉致られている。今頃手斧を持ったチドリとO☆H A☆N A☆S H Iでもしている頃だろう。あーコワ。と、ここまで言っていてなんだが伊織が拉致されるというイベントをすっかり忘れていたというのは盲点だった。以前の周に比べて伊織は明らかに誰かに当たったり特別な何かを欲して焦っているという事がなくなつて余裕があるように見えたのが悪かったのだろう。完全に気を抜いていた。

ただ、これで伊織が殺されることは無いのであまり心配する必要はない…と思う。

「あいつ…満月つて分かってんでしょに!」

「寮の近くにも居ないようですね。順平くんの反応は見当たりません。念のため、少し時間を使って探してみましようか?」

「いや、いいよ。若い君らだ。そういう気分の時もあるだろうさ」

「——でも、なにかに巻き込まれてる可能性だつてゼロじゃないですよね?」

あえて、幾月の言葉に割り込む。

多分伊織を探させることは無理だろうけど、それでも。

「どうしてそう思うんだい?」

「あの目立ちたがりの伊織は昨日まで大型シャドウ戦に對しやる気満々でした。すくなくとも今朝までは。湊、岳羽、伊織は今日学校にいる間、何か変だった?」

「ううん。いつも通りテレットしてたよ」

「ヘンだったっていうか…惚けてた? つていうか…妙に気合入つたのは確かですけど…確かに作戦をすつぽかすようなカンジじゃない

かったような…」

「だ、そうですよ。と、なると本人の意思で今居なくなってるわけではない可能性がでてきますよね？　生きる気満々の人間が理由もなく自殺しないのと一緒です」

そう言えば、一瞬だけ幾月は顔を僅かに顰めたような気がする。

というかテレットしてたってなんだ。ちよつと知りたい。

「じゃ、じゃあもう少し時間をかけて探知——」

「ふむ。こうして話している間にも時間も差し迫っているし、きみたちはもう出た方が良くないんじゃないかな。ただでさえ大型シャドウの気配がどこにあるか正確にはわからないだろう？　とにかく、今は目の前のシャドウをなんとかして欲しい。特に三上くん、まさか彼を探しに行くだなんて言い出すんじゃないだろうね？　なに、彼の事は大丈夫だと信用してあげたらどうだい？　探すのは影時間が終わってからでも遅くはないはずだよ」

妙だ。

何故幾月がここまで伊織を探すことを不都合だと考えるのかがわからない。いや、普通に大型シャドウを倒してほしいからそんなことを言うんだろうが、何か引っかかるような、そんな気がしなくもない。ただ、その理由がわからない。

「……」

荒垣くんがなぜか幾月の方をちらりと見る。

なにか思うところがあつたのだろうか。

「ここですぶつていても仕方ない。とにかく出動だ」

皆、釈然としない面持ちのまま寮を出た。

——ポロニアンモール

噴水の前で山岸が「ルキア」を使って再探知を始める。

「どうだ？」

「この、ボンヤリした感じ……こんなに近くに來てるのに、どうして……」

山岸の困惑するような声が小さく響く。

「よし、あとは手分けして探すぞ。時間は掛けられない、急げ！」

「待ってください！　お願いします、やらせて下さい！　これは、私の役目だから……！」

美鶴さんをそう言って引き留めた山岸は集中するように目を閉じてぶつぶつと呟き始めた。

「ルキアの指が触れる……土の答え。髪が触れる……風の答え。唇が触れる……水の答え。教えて……この霧のような姿は、何……？」

自分には山岸がルキアを使っているときの感覚は自分にはわからない。

だが、この山岸のトランスしたような状態に真田くんが不安を覚えたようでこちらに話しかけてきた。

「おい、大丈夫なのか……？」

「大丈夫、だとは思うよ。危なくなったら止めればいいし」

「ふたりとも、集中の邪魔をするな」

「これは……足の……下……網目……？」

山岸のその言葉を耳に入れた瞬間、視界が一瞬ブレた。思わず、頭を何度か振りながらこめかみのあたりを押さえる。

「……？」

「網目……もしかすると、地下ケーブルと関連があるかもしれません。

ここは、島が開発中の頃は工事中電源の基地があった場所です」

「地下ケーブル……？」

「はい。網目のような相当量の電気ケーブルが、地下に放られたままになっていくようです。それとこの近くにはポートアイランドの電力を賄う発電施設が何個か地下に併設されているであります」

「それが索敵の邪魔になってるって事か？」

真田の声にこたえるように、山岸が口を開いた。

「……ありがとう、アイギス。今ので全部分かったわ。ケーブルに、シャドウの位置が、かく乱されてる訳じゃなく……」

「……そのケーブル網自体が、シャドウに乗っ取られてる！」

皆が一斉に息を飲んだ。

「え、えええ!? ケーブル全部を!」

「それっ…え…?」

奏子と岳羽から驚きの声上がる。あまりの規模に倒せる算段がつかないのだろう。

「つまり…足の下は、そこらじゅうシャドウって事!」

「…絞れなかったワケだ。本当にこの辺全部を占める大ききさって事が…」

「そ、そんなの、どうやって倒すんです!」

「チツ…地面の中か」

手詰まり感が半端ない皆の絶望したような声をBGMに考える。

今回、もしイレギュラーなことが起こるとしたらこの大型シャドウが得意とする電気関係だが、まるで予想がつかない。唯一可能性があるとするれば、さつきアイギスが言っていたポートアイランドの電気を賄う複数の発電所でも乗っ取るくらいしか思い浮かばない。

…いや、まさかそんな。いくら大型シャドウとは言ってもポロニアンモール付近の電力しか喰ってなかったし発電所に手を出すわけないよね? いや、フリじゃなくて。

「じゃあ穴でも掘ってみる?」

「バカ言え。んなことしたら時間がかかりすぎる。ここもただじゃ済まねーだろうが」

「まあそうだよね」

そんな嫌な予感を振り払うように冗談を言ってみたが普通に却下されてしまった。悲しい。

「前にモノレールを乗っ取ったシャドウがいたと、記録で見ました。恐らくそれと同じで、どこかに『本体』がいるはずです。私が見つけない、これは…こここのすぐ近く…このモールの中です! 異様な電気の集まりを感じます…!」

「この中!」

岳羽が驚き叫ぶ。意外と近くに居たらそりゃ驚くので何も言わない。

「地下にできている小さな空間の中です。…四角い箱の形をしてるから、たぶん、人工の空間だと思います」

「四角って…地下室とかかな…」

「そーいや…」

天田くんの呟きに荒垣くんがなにかに気がついたように呟いた。

「『エスカペイド』のフロアやってる奴…最近、電源の調子がどうのってボヤいてやがったな…」

「電源?」

「確か、昔からあった地下の空間を、部屋に改造したとか、聞いたことがある。ひよつとすつと…」

「間違いないとおもいますっ!」

荒垣の言葉を肯定するように力強く、山岸が頷いた。が、しかしすぐに切羽詰まったような表情に変わる。

「ですが…先ほどから異様に電気が集まってきている気配がするんです…! これは…ポロニアンモールだけの電気じゃなくて…ポートアイランド中から電気を吸い上げているような…」

「確かに、ポロニアンモール付近には先ほども言ったようにポートアイランドの電気を賄う地下発電所が併設されています」

アイギスの言葉に山岸が青い顔をする。

「じゃあ、もしかしたら…! 大型シャドウは…ケーブルを伝ってそこから電気を吸い上げて力にしているのかもしれない!」

嫌な予感が大当たりしてしまった。なんてことだ。

「膨大な力を扱う敵には、恐らく殆どの攻撃が通用しません! 倒すには、繋がっているケーブルを破壊して力のもとを断たないと! それだけじゃありません! このまますべての電気を奪われると、ポートアイランド周辺が死の街になってしまいます!」

「!」

「なんだと…!」

「なので、ケーブルを切る班、心臓部のシャドウの力を削ぎつつ時間稼ぎをする班に分かれてください! 私の探知したところでは、発電所はこの付近に3つあります!」

山岸の言葉に緊張が走る。

“死の街”という単語に電気が無くなった時のことを想像して最悪を想定したのだろう。

「わたしの情報とも合致しています。ここは、別れるのが賢明な判断だと思います」

「よし。有里兄妹、メンバーの選出は頼めるか？」

アイギスの言葉に美鶴さんが頷いて湊と奏子の方を向いた。

ただ、自分はそれに手を上げて口を出す。

「ちよつと待って。時間稼ぎのメンバー、俺と荒垣さんと真田くんにしてくんないかな」

「どうして？」

奏子の純粋な目がこちらを向く。理由は簡単だ。

「荒垣くんには弱点がない。真田くんは電撃属性の攻撃に耐性がある。もし相手が電撃属性の攻撃をしてきても耐えられる。そして俺のペルソナは回復特化と物理と呪殺祝福以外の全属性に耐性を持つペルソナがいる。時間稼ぎにはぴったりの人選だと思わない？」

この人選はガッツリ耐久型だ。

回復特化の“ポベートル”と属性魔法特化の“パンタソス”は組み合わせると自分だけに限るが永久機関といっても等しいレベルで傷と気力を交互に回復させるペルソナだ。ポベートルで回復魔法をばらまき、パンタソスの「ソウルドレイン」で相手から精神力を吸い取りこちらの物に変換する。

今回のようにしてくる攻撃の属性が固定されている敵の相手はしやすい。

「うーん、どう思う？ 湊」

奏子が困ったように隣の湊を見た。

たぶん、突飛な行動や無理をしないか疑われてるんだと思う。

「いいんじゃない？ 荒垣先輩もいるし優希にしては今回補助に回るだけみたいだし無茶はしないでしょ。…しないよね？」

「たぶん」

「お兄ちゃんこつち向いて。ちゃんと私たちを見て。無茶、しないよ

ね？」

「しません…」

湊と奏子に迫られて白旗をあげる。

2人の目が笑ってなかった。怖い。いや、こんな目にしてしまったのは自分の行いなので甘んじて受け入れるがこの信用の無さは今回で是非とも消したいところだ。

まさに汚名返上戦といった感じだ。

「では、メンバーはこれで決まったな？ 各自、無茶はするんじゃないぞ！」

「応！」

それぞれがそれぞれの役割を果たすために、目的の場所に駆けて行った。

「——で、これが件の大型シャドウ、な…」

「わー…近づくだけでバチバチするね。髪の毛逆立ちそう」

『身体がケーブルですから、三上先輩が予測した通り電気を使った強力な攻撃をしてくるかもしれません！ どうか、気をつけてっ！』

巨大なケーブルを束ねた四肢からシャドウの身体が生え、背中に何本も真空管プラグがささった異形は灰色のたてがみを立ち昇らせている。

今日のメインディッシュの隠者だ。

「俺たちはここで奴の力を削いで有里達がケーブルを切るまでの時間稼ぎをすればいいというわけだな。…腕が鳴る」

「へっ、俺たちらしい仕事だな！」

「ああ、全くだ！」

「俺の事も忘れないでいてくれるとありがたいな…」

気合十分な真田くんと荒垣くんのコンビネーションの後ろで小さく吐き出した言葉は雷鳴にかき消されて恐らく聞こえない。

とにかく、自分は2人が攻撃する後ろで補助魔法と回復魔法をばらまいていればいいのだ。

「行け！ カストール！」 【デッドエンド】

荒垣くんの「カストール」が隠者ハイミットに迫り攻撃をしようとするが電

気の障壁に阻まれる。

「チツ、やっぱ効かねえか…」

「なら次は俺だ!」【ソニックパンチ】

真田くんの「ポリデュークス」が拳を振り上げ障壁に打ち付ける。しかしやはりというべきかダメージは無い。

「あんまり飛ばされると補助するこつちが追いつかなく…はならないか」【ラストキヤンディ】

召喚器の引き金を引いてポベートルを召喚する。くるくると回る可愛らしい彼は今日も絶好調らしい。

ポベートルは虹色の光を3人全員に落とした後「ぷう」と可愛い音を出して消える。

ああ、本当に癒した。モコイさんに次ぐ癒しかもしれない。実体があるなら抱きしめたいレベルだ。

「これは…三上、助かる」

「ん、じゃあ次は…これか」【ランダマイザ】

ペルソナを切り替えるように意識してまた引き金を引いた。

現れるのは赤髪の乙女。パンタソスだ。

彼女は隠者ハミットに向かってオレンジ色の光を落として僅かに弱体化させた。どうやら障壁は攻撃だけを弾くようだ。これは、良いことを知れた。このままガンガン弱らせてやろうと笑みを浮かべる。

「おい三上、テメエ…楽しそうだな?」

「いやあ、最強の壁を持つてると思われる敵をこうして知らぬ間にクソ雑魚にできるってすつつつこい楽しいよね! ジャンジャン弱体化させてやろうと思ってるさ!」

「…「クソ雑魚」…いや、良い性格してるとは思ったが…やっぱ不良共を返り討ちにするだけのモンは元々あんだな…こういう性格は妹が似てんのか…」

「?」

荒垣くんが疲れたような顔をしているがどうかしたのだろうか。

まあ、このままとにかく弱体化とこちらの強化と障壁に使っているエネルギーを減らすための攻撃を繰り返して行けばいいか、と思っ

いた矢先、沈黙していた隠者^{ハイミット}が身体を動かして変な挙動をし始める。まるでこれは、周りの電気を集めるような――

【充電】

『敵シャドウの体に、大量の電気が充電されています…！ 一時的にですが障壁が解除されました！ 何か、しかけてくるかもしれない！』

「毘だか何だか知らないが、今なら近くで殴れるというわけだな!?」
『はい。ですが気をつけてください！ なにをしてくるか本当にわかりませんから！』

「問題ねえ。なにかされる前にぶったたきやいいだけだ」

その言葉を聞きながら荒垣くんが鈍器をもって走り抜ける。いや、鈍器じゃなくてアレはどうみてもバス停だ。奏子からにこやかに渡されたそれを荒垣くんは最初、微妙そうな顔で使っていた。今では愛用の品になっているが。

「うらアツ！ 喰らいやがれ！ ツせいやあ！」

一撃。二撃。三撃。攻撃をすべて隠者^{ハイミット}にフルヒットさせて体勢を崩させた荒垣くんはこちらへと振り向いた。

「今ならボコれる。やっとかか？」

「ああ！ やるぞシンジ！」

3人で囲んでこれでもかと言うくらいに一方的にボコボコにする。しばらく切ったり殴ったりしていると隠者^{ハイミット}が動くような気配がしたので後ろへと飛び退く。

大きく頭をのけぞらせた隠者^{ハイミット}は1秒ほど止まった後バチバチと充電していた電気を放つように勢いよく頭を下げた。

【サンダーストーム】

凄まじい音と共に「ジオダイナ」とほぼ同じ威力を持った雷が竜巻のようにこちらを襲う。

こんな攻撃を自分は知らない。パンタソスは電撃耐性を持っているはずなのに、それを貫通してくるような痛みが襲う。

「ぐううー！」

「うああー！」

「ぐ…ッ！」

痛みと共に、身体から力が抜ける感覚がする。否、先ほどポベートルの「ラストキャンディ」であげた分が下げられたというべきか。他の部分はなんら変わっていないので下げられたのは攻撃をする力だけらしい。

煙が晴れ、ひとり立ち上がる。

「ふたりとも、無事…？」

「おうよ。まあ、ちつと傷は負ったが動けねえほどじゃねえ」

「ああ、なんとかな…だが、なんだ…今のは…」

分からない。あれは自分の知る隠者^{ハイミット}が充電した後の攻撃である【ギガスパーク】ではない。

それでも今は2人の傷の回復が先だ、とポベートルに切り替えようとした。

そのとき、鞭がしなるような音と腹部に衝撃が走って吹っ飛ばされる。

「三上！」

ごろごろと、ケーブルだらけの床を転がった。

痛みで起き上がれない。恐らく地面を這うケーブルの一部を操って攻撃を仕掛けてきたんだろう。

パンタソスは「物理攻撃全てが弱点」だ。つまり、今の攻撃は物理攻撃だったというわけだ。だが、記憶の中の隠者^{ハイミット}はこんな物理攻撃もしてしてきた覚えはない。

ポベートルに切り替えて息を吐く。

もしかしたら、今まで通りにはいかないのかもしれない、とかわらうじて手に握ったままだった召喚器をこめかみに当てる。

「メディアアラハン」「大丈夫！ ふたりはさつきみたいに障壁を削って！」

とりあえず自分を含めたこの場にいる全員の傷を治して立ち上がる。

真田くんと荒垣くんがペルソナを召喚をしてまた障壁へと殴りかかっているのが見えた。

『3人共！ 聞こえますか！ いま、3つすべての発電所につながるケーブルが切断されました！ 障壁がすぐに解除されるはずです！ トドメを！』

その声と共に隠者が^{ハイミット}大きくのけぞって溜めていた電気を霧散させる。ビリビリと先ほどまで感じていた電気が迸るような感覚も消えていた。

「よし、これなら！ あいつらはやってくれたみたいだな！」

しかし、そうは問屋が卸さない。

隠者の背に刺さる真空管がバチバチと音を立てながら発光しだした。

「まさか、さっきの技をもう一度出そうと言うのか!？」

「最後のあがきってか…!」

「いや、違う。これ…真田くん！ 『ポリデュークス』を出して防げるやつだ!」

死の気配を感じて危険を察知するときとは逆に、なぜかそんな予感がした。

「なっ…!」

「ポリデュークスが無理なら俺が行く！ 大丈夫、俺の言うことを信じてほしい」

横に並んでそう言えば、真田くんがやれやれといった感じで召喚器を額に当てた。

「仕方のない奴だ…なら、信じるぞ。三上!」

「ああ！ 荒垣くん、トドメは任せたよ!」

「へっ、2人分の期待背負ってるとなっっちゃ責任重大だな。任せろ。きっちり沈めてやるよ」

自分もこめかみに召喚器を当てる。そして、叫んだ。

「『パンタソス』!」

「『ポリデュークス』!」

【ギガスパーク】

瞬間、1点集中させるためか電気で作られたビームのような攻撃がこちらを襲う。が、ダメージは思ったより少ない。

「荒垣くん！」

「シンジ！」

電気の奔流が消える。今だ。

叫ぶ。

「——決めろ!!!」

「——うおおおおお!!!」 “カストール”!!!」

パンタソスとポリデュークスを飛び越え、カストールが突き進む。

そして、その蹄を振り下ろした。

【デスバウンド】

その攻撃は隠者を地に伏せさせるには十分な威力を持っていた。

「3人共、無事か!？」

発電施設のケーブルを切った湊たちがなだれ込むようにしてエスカペイドへと入れば、倒れ伏した隠者の目の前で背中合わせにして座り込む3人が居た。

よろよろと疲れたように拳を上げた3人に、一同はほっと一息吐く。

「完全勝利って…やつ?」

「チームワークは良かったな」

「へっ…まあな。そうかもしれないねえ」

「無事なようで良かった。見たところ大きな傷も…いや待て、何故大型シヤドウは消えていない!？」

だが、大きなミスを犯していたことに気がついた3人は勢いよく跳ねるようにしてその場から跳び退く。

優希がそのミスに気がつかなかったのは、単純に安堵と疲労からだ。

「今日は暴走しなかった。ああ、良かった」という気の緩み。

それが、このミスを招いた。

「…完全勝利どころか大ボカやらかした…トドメ、差しきれて…ああもう、バカか自分は! みんな下がって! まだコイツ、起き上がる

かもしれない！」

「待て三上、俺がや…ぐ…っ…」

召喚器を慌てて構えた優希を押しよけるようにして前にでた荒垣が急に胸を押さえて苦しそうにする。そして、ボタボタと尋常じゃない量の汗をかいて下を向いた。

「シンジ…？」

「あ、荒垣くん…まさか…」

「はな…れろ…！　ぐ、ああああああああ!!!」

叫びと共に召喚器なしでカストールが出てくる。現れたカストールは隠者ハイミットを掴み上げると壁に叩きつけて何度も何度も踏みつける。その様子は尋常ではなかった。

「暴走…してるのか…？　ペルソナが…！」

「荒垣さん！　しつかりしてください！」

カストールを制御できていない荒垣に天田が駆け寄ろうとする。

「天田…！」

「駄目だ！　天田くん！」

隠者ハイミットを押しつぶしたカストールの次の標的となったのは、荒垣の近くにいた優希と——天田だった。

「まずい…！　ブラックライダー”!!!」

召喚器の引き金を引いて、現れたのは漆黒の騎士。その黒い馬をもってしてぶつかり合うようにカストールの一撃を防ぐ。

が、その姿にノイズが走った。

「あ…なんだ、これ…きもち、わる…う、あ…あ…いやだ…俺まで、ペルソナを暴走させるわけには…」

頭を押さえて呻いた優希の姿も尋常ではなかった。荒垣と同じように汗をかき、呼吸が荒くなる。

「ちがう…なにか、書き換えられて…いや、さいしょから、これは…ブラックライダーじゃ…なくて…！　まさか…カモ、フラージュ…!？」

優希が違和感に気づき目を見開いて息を飲んだ瞬間、カストールを抑えるブラックライダーの姿がノイズと共にブレてボロ布と鎖を

持った化け物へと変わる。

「——ッ!!!」

咆哮。

その2体のペルソナが取っ組み合う姿を見た天田は、完全に記憶を思いだした。

母親が、死んだ時の記憶を。

「…ああ…い…」

ギガスを押しつぶすカストール。

それがこちらをギリリと睨んだ瞬間、割り込むように入ってきた鎖とボロ布の化け物。ボロ布の化け物の方は頭とボロ布しかなかったが、2体の化け物は天田と母親がいる路地裏を破壊しながら双方喰い合うように暴れた。

さながら怪獣が暴れるように。

その争いに巻き込まれ、天田の母は天田を庇い飛んできたガレキで頭を打ち付けてなくなってしまったのだった。

「…そんなの…あんまりだ…」

うわ言のようにぶつぶつと心情を吐き出す。

目の前の、信頼できると思っていた頼れる人が、母を殺した人殺しなんて、と。

仇が、ふたりいたなんて、と。

「く…そ…止まりやがれ…い…」

荒垣の叫びは虚空に溶けて消えた。

巖戸台分寮 屋上

順平は屋上で縛られ、横になりながら叫ぶ。

「なあ、どういうことか説明してくれよチドリ！」

月に照らされながら順平を見つめる少女——チドリはその叫びに冷めた声で返す。

「説明することなんてない。順平は私に話をしてくれるだけでいいの」

「へ？ は、話をするだけでいいの？」

「ええ。それだけでいいわ。縛ったのは逃げられないようにするため」

予想外の話に順平は拍子抜けした。もっとうこう、大層な要求をされると思っていたのだ。

「じゃ、じゃあさ……この縄といてくんねーかなー？ なんて」

「ダメ。順平は逃げるでしょ」

「ゼツテー逃げない！」

「嘘」

チドリの容赦ない言葉に順平は少しへこむもめげないしよげない諦めない。

アピールを続けることにした。が、それよりもチドリの横に立つ人影が気になってつい聞いてしまう。

「なあ……チドリの横のソレ……ペルソナ……だよな」

「ええそうよ。『メーディア』……私の友達」

「へー、なんか可愛いな！ 炎を使うとかオレッちのペルソナとお揃いじゃん!？」

「かわ……お揃い……そう」

掌で炎を揺らめかせながら立つ牛の頭骨を持つ赤い姿を、順平は意味もなく褒めた。

その言葉に、チドリは少しだけ今まで感じた事のない感情を覚える。なんだか胸の中で小さな火が灯ったような、そんな感覚だ。

「ああ！ オレのペルソナは『ヘルメス』って言って、火が得意な燃える熱い男だぜ！」

縛られているのにのんきに自らのペルソナを語る順平に先ほどの戸惑いは無い。

チドリに敵意がないと分かったからなのか、その表情は明るかった。

「今日も獅子奮迅の活躍を……する予定だったんだけどなあ……まさかこんなことになるなんて思いもよらねえだろ……」

「そう……ごめんなさい。でも聞くなら今日しか——」

「ん？ どしたチドリ」

落ち込んだ順平に感情のない声色で謝ったチドリが急に言葉を切る。

そしてポロニアンモールの方を見ると青い顔をしだした。

「…ッナギサ」が不安定になつて…！ どうして…？ ひどく揺らめいて…ダメ、ダメ、ダメ！ 止めないと…！ 恐ろしいものがやって来る…！」

「な、なんだよ？ いきなりどうしたんだよ!? チドリ、どこか悪いのか!？」

「…違う、私じゃない。順平。一緒に来て。『メーディア』、お願い」突然青い顔で取り乱し始めたチドリを心配してうろたえた順平の首根つこを掴んでチドリは跳んだ。

「えつちよ、まつ…うああああ!？」

影時間の夜の街に、情けない順平の叫びが響いた。

咆哮と暴れる音。衝撃。

エスカペイドでの2体のペルソナの暴走は、つけ入る隙が無いほどに激しく、半端に手を出せば2体ともに目をつけられる危険性を孕んでいた。

落ち着くまで、どちらかがどちらかを食いつぶすまで、手出しができない状況に陥っていた。幸運だったのは2体とも魔法やスキルを使おうとせずただ暴れるだけだった点だ。

宿主の2人はいかにかこうにか制御しようとしているものの、互いのペルソナ暴走自体が共鳴しているようで激化しており荒い息で蹲ることしかできない。

もう駄目か、と思われたその時、炎が2体の暴走するペルソナへと降り注いだ。

「順平。やって」

「えっ、ええ!?! オレツちが!?! あの怪獣大戦みたいな2体の間に!?!」

「そうよ。『ヘルメス』と順平ならきつとできる」

「ち、チドリがそういうなら…オレ、頑張るぜ！ うおおお！ ヘルメス”！”」

後ろからやってきたのは白いゴスロリドレスを着た少女——チドリと居なくなつた順平だつた。

召喚器の引き金を引いた順平の背後から、”ヘルメス”が2体のペルソナに突撃する。

【アサルトダイブ】

それは無謀ともいえる突撃だつた。だが、完全にヘルメスの突撃を予測していなかつた2体はその一瞬で同時に体勢を崩す。ダメージは殆ど無いに等しいが隙を作るには十分で。

先に体勢を立て直したのはボロ布の化け物の方だつた。腕を振り上げ、カストールをひと薙ぎして床にたたきつけた。

その攻撃でカストールが消える。続いて、ヘルメスに跳びかかろうとした『それ』はぴたりと動きを止めるとうなだれるようにして消えた。まるで、糸の切れた人形のように。

「うう…ぐぐ、クソ！」

「っ…待って！ 荒垣くん！」

「シンジ！」

カストールが消えてすぐ、胸を押さえたまま苦しそうにエスカペイドから走り去る荒垣を追うように明彦と優希が走り出す。後者は多少ふらついていたが。

残つたメンバーは呆然とそれを見ているだけしかできない。今、目の前で起こつた現実を上手く処理できていないのだ。

「大丈夫？ 天田くん」

「……………」

奏子に声をかけられても、俯いたままの天田は何も言うことが出来なかつた。

ゆかりは順平とチドリに話しかける。

「どこいつてたのよ順平！ それにその子は…？」

「貴方たちに説明する必要があるの？」

「なっ、」

首を傾げて説明する必要性を感じない、といったふうは無機質に答えたチドリにゆかりはカチンとくる。

「なによ！　というかアンタもペルソナ使いなの!?　なんでここにいるのよ！」

「ナギサが心配だっただけ。邪魔もしない。言われなくても帰る」

「ナギサ」って…まさか、三上先輩のこと…?　っ！　人工ペルソナ使いの生き残り…!?!」

ゆかりがチドリの口から飛び出た名前に彼女の正体を言い当てる。

チドリはそれを否定しなかった。が、踵を返して去ろうとする。

「じゃあチドリは…あのストレガってやつらの…!」

「…そうね。さようなら、順平」

順平の言葉は肯定したチドリは赤い髪をたなびかせながら炎に巻かれると一瞬にして姿を消した。

「なんで…なんでチドリが…」

「あんな奴らの仲間なんだ」と順平は天国から地獄へ落とされたような表情をしていた。

ポロニアンモールの外。海に面した埠頭で、明彦と優希は荒垣を探して走っていた。

「居たか!」

「ううん、居ない」

「シンジのやつ、何処に行ったんだ…?」

「今は探すしか、……ッ!?!」

びくり、と優希が身体を跳ねさせてある方向を向いた。明彦も同じようにそちらを向けば、先ほどカストールが暴走した時と同じような光が立ち上っている。

「あそこか…!」

近くまで来たとき既にカストールが天高く腕を上げ、荒垣の首を絞めあげているところだった。

荒垣は呻きながらもポケットからピルケースを取り出すと、制御剤

を2つ口に放り込んだ。瞬間、空気に溶ける様にしてカストールの姿が消える。

地面へと落ちた荒垣に明彦が駆け寄る。

「シンジ！」

「荒垣くん！」

「今飲んだのは何だ!? 答えろシンジ！」

こぶしを振り上げる明彦に荒垣は顔を逸らした。

「…なんでもねえ。って、あっおい！」

そんな荒垣の手に握られていたピルケースを明彦は奪い取る。

「聞いたことがある…ペルソナの制御がうまくいかない場合、無理やり抑え込む薬があると…! だが、この薬には副作用が!!」

「…ねえよ」

「？」

「副作用がねえんだ。今飲んでるやつにはな。…けど悪いな、三上。バレちまったみてえだ」

謝る荒垣の視線は優希を捉えている。その事実にも明彦は後ろの優希を振り返った。

今回、ペルソナが暴走をしたのは荒垣ひとりだけではない。つまり、

「——まさか、三上もか!？」

「あはは、まあ…うん。バレちゃ仕方ないよね…」

悪びれもせずに認められた優希に明彦は頭を抱えた。

「そんな…おい、嘘だろ…何故だ! 何故なんだ三上！」

「あつ俺? 何故って真田くんはよく知ってると思うけど」

その言葉に明彦は思い出す。

7月の大型シャドウ戦の時のことを。つまり、あの後からずっと

「——7月から…薬を…飲み続けていたのか？」

「そうなる。あ、でも安心して。俺のは副作用のあるキツイやつじゃないとダメなんだけど、荒垣くんは今副作用のないやつになってるから」

「安心などできるか! お前は…命を削ってる自覚はあるのか!？」

明彦は優希に迫る。まったくもって安心などできなかつた。

明彦は荒垣だけ副作用がないものを飲んでいると伝えられて安心できるような薄情者であるつもりもなかった。曲がりなりにも戦友だ。それも、先ほどはいいチームワークを發揮して大型シャドウを倒す寸前まで追い詰めたのだ。だてに共同生活をしていないし、友情が生まれないわけがない。

そんな存在が自分の命を削るようなものを飲んでいると聞いて、明彦は憤る。

「あるよ」

「じゃあ何故!!」

「え、飲まなきゃならないからだよ。それ以外に理由なんてない」

明彦はそこで、触れるような距離まで近づいて初めて『三上優希』という存在のもつ歪みに気がついたのだった。

幼なじみの呆れたようなため息が漏れる。

「そいつは、そういうやつなんだよ。諦めろ、アキ」

X 運命 & XI 剛毅

遺るもの (9 / 6 ~ 9 / 7)

9 / 6 (日) 夜

「三上君に荒垣君か…三上君の事はわかっていただけだけど荒垣君もとなると、頭が痛いねえ…」

「はい。幸い天田に変わった様子は見受けられません。ただ、三上が飲んでいるという薬に関しては…」

「難しいところだね…命を削る代物なんだろう？ 途中離脱は何としても避けたい。彼は非常に強力な戦力でもあるんだ」

作戦室でソファアに座り幾月は美鶴と話していた。

彼が以前から制御剤を飲んでいることは知っている。だが幾月は言わない。嘘はついていない。

途中離脱を避けたいのは間違いのない本心であるからだ。

「どうにかならないのでしょうか？」

「どうにもならないねえ…薬を飲むことをやめたらすぐにペルソナが暴走して彼の命を奪ってしまうかもしれないね。そういう研究結果のデータが見つかったよ」

「……」

暗い顔で俯く美鶴は知らない。

目の前のこの男が、人工ペルソナ使いを生み出すストレガ計画を発案・主導し多くの子供を手にかけてきたことを。

命を削る薬をストレガに——まわりまわって優希に渡しているのが、この男だという事を。

「まあそんなに落ち込まないでくれよ美鶴君。僕の方でもどうにかならないか調べてみるからさ」

「…ありがとうございます」

幾月は言葉だけの慰めを吐き出す。

調べるわけがない。そんな不都合なこと。

アレにはこのまま命を削り続けて貰わなければいけないのだから。

意気消沈して部屋を出る美鶴を内心ほくそ笑みながら見送った幾月は立ち上がった。

あと3カ月。早ければ2カ月の辛抱だ、と。

静かに階段を下りてきた美鶴を明彦が待っていた。

「例の薬についてなにか分かったか!？」

無言で首を横に振った美鶴に、明彦は悔しそうに食いしばると、両腕を手すりへと叩きつける。

「くそっ！ 俺には…どうすることもできないのか…！」

泣きそうな、その血を吐くような声に、美鶴は何も言うことが出来ずただ見つめることしかできない。

半端な慰めの言葉を伝えたところで何の意味もなさないだろうことは美鶴にもわかっていた。

それよりも、美鶴は荒垣や優希が誰にも相談せずひとり抱え込んでそんなものを飲んでいたという事がショックだった。

(私は…信用されていない、ということなんだろうな…)

信用などという問題ではないということ、彼女も、他の誰も、分かってはいなかった。

あのふたりはただ、誰かに知ってほしくなかったただだ。悲しんでほしくなかったただだ。

ある意味では似た者同士の彼らは、それでいて大きな違いがあることを誰もわからない。

わかるはずがなかった。

「お兄ちゃん、聞いたよ…命を削るような薬…飲んでるって。なんで、そんな薬…」

奏子は兄に暗い顔を向け、問い詰める。

が、すぐに首を横に振り一度目をつぶって開いた。

「…わたしたち、の為なんだよね。ペルソナを暴走させて、傷つけないように。荒垣先輩も、お兄ちゃんと同じで」

「いや、荒垣くんはそうだけど俺は違うよ」

「え……？」

あつけからんと言いつつ兄に、奏子はぽかんと口を開ける。

「荒垣くんは同じことを起こさないために、誰かのために飲んでるけど、俺は自分の保身のために飲んでるんだ。黙ってたことも含めて、荒垣くんみたいな綺麗な感情じゃないよ」

「え……え……どういふこと……？」

奏子には意味が分からない。

兄はなぜ、そんなことを言うのか。

「——狡くて、ごめんね」

困った顔でそう謝る兄が、奏子には今までと同じ兄ではないようなイメージを与える。

そしてその謝罪は奏子の感情を爆発させた。今まで押さえつけていたものを、噴き出すように。

「わ、わかんないよ！　なんで、なんで!?　お兄ちゃんは、狡くなんか……狡くなんかじゃないよ！」

「いいや、俺は狡いよ。狡い奴なんだ。軽蔑してくれたって構わない。奏子や湊に、俺はたくさん隠し事してる」

「じゃあ、今教えてよ！　だって、私たち、兄妹なんだよ……！　なのにお兄ちゃん、いつも黙って無茶して、死にそうになったり、大けがしたり……！　私、ヤダよ……お兄ちゃんに死んでほしくない!!!　ケガしてほしくない!!!」

奏子はぼろぼろと大粒の涙を流しながらしゃくりあげる。

零れる涙を、手で拭うも止まらない。視界が、涙でぼやける。

「俺もだよ、奏子。俺も、奏子や湊が傷ついたり死んだりするのは、嫌なんだ。だから、俺が全部、持てる分は持たないといけないんだ」

「それって、わ、わたしと、みなとが、いるから……お兄ちゃんが……」
傷ついてしまうのか。

奏子はその答えに行きついてしまう。しかし、目の前の兄は優しく奏子の頭を撫でると幼子に言い聞かせるように首を横に振りながら否定する。

「ちがうよ。奏子と湊がいるからじゃない。俺が、やりたくてやって

るんだ。俺は、そうしなければいけないから。そうしなきゃ、俺はもう動けないし歩けないんだ。：俺が動くための理由に勝手に使つてるだけなんだ。だから、気にしなくていい」

「ひどいよお……！ ひどいよお！ なんて、そんな言い方するの!!!
…う、ううう……！」

奏子の思考はぐちゃぐちゃだった。だが気づいてしまった。

兄が、もう既に壊れているという事実。兄が、自分たちを通して別の何かを見ていることに。

奏子は、最近の兄がおかしいことに気がついていて。けれど、それを見て見ぬフリをすることで無かったことにしたかった。まともなままだと、昔の、幼少の頃の兄だと思ひ込みたかった。

双子の弟である湊が気がついたように、奏子も薄々なんとなく気がついていて。それが疑念に変わったのは屋久島旅行での人工ペルソナ使用の話の時だ。

そして今、はつきりと、兄の口から出された言い訳から、兄がまともではないと気がついてしまった。

ただ、実の兄が壊れてしまったことをすぐに受け止められるほど、奏子は強くはなかった。これが、寮のメンバーの誰かだったり『コミュ』相手なら奏子は相談に乗りつつ適度な距離を保つただろう。しかし相手は肉親。それも、親しい実の兄だ。

『いつも頼りになって、ちよつと情けないし無理はするけどいいお兄ちゃん』

それが、壊れた上に出来上がったものだと知ってしまったなら。奏子は、耐えることができなかった。

「——うん。ごめんね」

それは、優しい謝罪の言葉の形をした明確な拒絶^{ざんこくなことば}だった。

奏子の脳裏に、愚者の——否、^{旅人}のタロットカードが浮かぶ。それが、真つ二つに斬り裂かれた。

「……っ！」

息を飲んで青ざめる。

奏子は、今起こった事象について、理解ができずにいた。よろよろ

と、兄から距離を取る。

「奏子：う？」

不思議そうに奏子を見つめる優希は、突然奏子が青い顔で距離をとったことに対し何故なのかわからずきよとんとしていた。

ただただ静かにしやくりあげながら涙を流す奏子に、何が起こったのかと心配して近づこうと一歩足を踏み出した。瞬間、

「優希！ なに、したの：い！」

切羽詰まったような表情の湊が優希の肩を掴んだ。

「みな：ああ、俺が奏子に酷いことを言った」

「なんて言ったの」

「俺が、奏子に自分と湊がいるから無茶をするんじゃないかって言われたから、そうじゃなくて俺が2人を言い訳に利用してるだけで2人のせいじゃないって。たぶん、それだと思う」

「…」

優希の答えに、湊は考える。

違う。

確かにそんな言葉を言われたら奏子はショックを受けるだろうが、そんなことで『コミュ』はブローケン状態にはならない。

だとすると、奏子になにか選択を間違えたのだと、湊は思った。

湊は自分の部屋で勉強をしていた。だが、突然脳裏に“旅人”のタロットカードが浮かんだかと思ったら、それが真つ二つに裂かれたのだ。

なにか異常があったに違いないと探してみればすぐそこで奏子は泣いているわ兄は何が起こったかわからないような表情をしているわで、まず兄がこの間湊に言ったようなことを頼んで奏子を傷つけたのではないかと思ったのだ。しかしそうではない。

確かに、この様子だと奏子も傷ついてはいるのだろう。けれど、それよりももっと重大なことが兄のなかで、優希の中で起こっているのではないか。

普通、『コミュ』はブローケン状態にならない。浮気したり、恋人になつた相手を放置したり、言う事を間違えない限りは。

そして、兄は恋人ではないので奏子になにか選択肢を間違えた以外考えられない。

「奏子…喋れる?」

「ううつ…みなど、どうしよ…ひつく…おにいちゃんに…おにいちゃんに…」

「…俺は、出て行った方が良いな」

未だ泣き止まない奏子を見て目を伏せた優希が踵を返し階段を降りる。

湊には今の兄をどうすることもできないので追えなかった。壊れた絆は、時間と会話しか解決してくれない。

「…お兄ちゃん、もう、壊れちゃってたんだね…私、妹なのに気がつかなかった」

しばらくして、落ち着いた奏子が自嘲するようにそう呟く。

「湊は、気がついてたんでしょ? …馬鹿だなあ私。ずっと、お兄ちゃんは大丈夫って、思い込んでた」

「仕方ないよ。僕も、この前までヘンだけど大丈夫だと思ってたし」
奏子のこういうところは兄に似ているな、と頭の隅で考えながら答える。

「…お兄ちゃんにね、拒絶、されちゃった。どうすれば…いいのかな。…おかしいね、いつも、他の人ならこうすればいいのかなって何となくわかるのに、お兄ちゃん相手だとぜんぜんわかんないや…」

また瞳を涙で潤ませた奏子は不格好な笑顔を作る。

そこも、似ているところだなと思った。どうあがいても自分たちは兄妹という括りからは外れることが出来ない。兄妹という、関係からは逃れられないのだ。

「大丈夫。優希は僕らを遠ざけても、きっと嫌いになる事はないよ。だからゆっくり待ってみて、落ち着いてから優希になんて拒絶したのか聞いてみよう。きっと理由があるはずだし、今度は僕も一緒に聞いてみるから」

「うん…ありがと…湊」

2人の姉弟は、静かに手を取り合った。

ただ、湊はずつと疑問に思っていたことがある。

(どうして、優希との『コミュ』だけ、なにも進まないんだろう)

“旅人”の『コミュ』はずつと、ランク1のままだった。

ランク1の未発展の状態であるのに、ブロークン状態になるという今までにない事態に、湊は頭を悩ませることしかできなかつた。

路地裏でひとり、月を眺めていた荒垣の耳に、足音が聞こえて顔をそちらに向ける。

「……三上か」

「俺もきちやつた」

へらり、と笑いながら優希は荒垣の隣に座る。その横顔は少し憔悴しているようにも見えた。

「あのさ、荒垣くん」

「聞かねえぞ」

口を開いて何かを話そうとした優希の言葉を遮った。

「えー：聞いてくれたっていいじゃん」

「どうせくだらねえ話だろ」

「くだらなくないよ。大事な話だ」

真剣な声色でまっすぐ視線を合わせながら優希は荒垣を見た。

いつも都合が悪い時は視線を逸らすくせのあるこいつが、こんな真剣な表情をするなんてやっぱりろくでもないことなんだろうな、と荒垣は予測する。

「——もし俺に何かあったら、奏子のこと頼むよ」

「ケツ、縁起でもねえ。断る。自分の妹くらい自分で守りやがれ」

ほら、ろくでもない頼みだ。

荒垣は顔を顰めた。

「それが出来なくなるかもしれないだろ。だから」

「妹となんかあったのか」

「……」

そこで初めて露骨に目を逸らした優希を見て、荒垣は凶星か、と

思った。

「喧嘩なら、早く仲直りしろよ」

「うん」

返事に感情の色は無い。

「とにかく、俺を頼るのはやめろ。てめえが生きて守りやいい話だろ」
つい二週間ほど前まで死ぬつもりだった自分を柵に上げて、荒垣は優希に説教を垂れる。

「こうでも言わないとこのバカは勝手に安心して勝手に死に行こうとするのだ、と。」

そんなことが分からない荒垣ではない。

ただ残念ながら、その言葉の意味の殆どが、荒垣が優希に向ける心配や思いやりといった気持ちを通じていないことを荒垣自身が分かっているという事が、大きなすれ違いを生んでいた。

「……ごめん」

「謝るんじゃないよ。まったく……まあ、今日はふたりでここでしげ込むとするか。たまにや悪かねえだろ」

「……うん」

ふたりは、言葉なく月を見上げるのだった。

「どうしてチドリが……ストレガなんだろうな。……クソツ」

「どうしてあのふたりだったんだろう……僕は……母さんの仇を……どうすれば……」

そんな、迷いの声があるとも知らずに。

9 / 7 (月) 放課後

昨日、不用意に喋ったせいで奏子を傷つけてしまった。今日の朝も顔を合わせたがやはりというかなんというか、自分も奏子もぎこちなかった。

これは、ちゃんと自分が謝れるまではしばらく必要以上に関わったり話しかけないほうがいいのかもしれない。

「チミ、最近元気ないっすね」

「そうかな…」

モコイさんと下校しつつ、帰り道を歩く。ひどく、喉が渴いているし腹も空いているので今日は荒垣くんに晩御飯は要らないと連絡して『はがくれ』の特製ラーメンとはがくれ丼でも食べたい気分だ。

ただ、モコイさんの言うように元気がないというのはよくわからない。自分はいつも通り。そのはずだ。

「モコイさん、今日は『はがくれ』にいこっか」

「ナイス！ モコイさん、沢山食べちゃうっスよ！」

モコイさんに確認を取ってから携帯で荒垣くんに電話をする。

手短かに晩御飯は要らない旨と遅くなることを伝えると短く「わかった」とだけ言われたのでそのまま『はがくれ』へと向かった。

店の中に入れば濃厚な魚介系のスープの香りが食欲をそそる。カウスターに座ってモコイさんを膝の上に乗せた。

「いらっしやい」

「特製ラーメンとはがくれ丼をください」

「あいよ」

ラーメンと丼が来るのを待つ。

モコイさんも久々の『はがくれ』でウキウキしているようだ。帰りにオクトパシーのたこ焼きをデザート代わりに味わってもいいかもしれない。今ならラーメンと丼を食べても6皿くらいはぺろりと食べられそうだ。

「へいお待ちー！」

「いただきます」

出てきたラーメンの中の具と麺とスープを小皿を取ってモコイさん用に取り分けてそっと渡す。モコイさんが持ったものは見えなくなるらしいのでこういう時に便利だ。

そして自分も麺を口に運ぶ。

美味しい。

麺の小麦の味と醤油スープの魚介の味が絶妙にマッチしていて「ああこの味だ」となる。チャーシューをほおばり、口の中で蕩けるような食感を味わいっつレンゲでスープを掬ってひとくち。

そうやって食べ進めている途中で、一緒に出てきたはぐれ井へと手を伸ばしてタレのかかったご飯と焼きネギ、チャーシューを同時に食べて味の切り替えを行う。こうすることで味のマンネリ化を防ぐのだ。

とは言っても「はぐれ」のラーメンは味に飽きるという事は無いのでただ単にラーメンを食べ進める合間に丼を食べるのが好きというだけになるが。

モコイさんは小鉢のラーメンでお腹いっぱいになってしまったらしく、満足そうに膝の上でげっぷをしている。

「フウ、ボク、まんぞくさん」

少し前まではモコイさん用に頼んだ小盛のラーメンのおこぼれを自分が貰う形だったのに、いつの間にか逆転してしまっている。いや、本来ならこれくらいいつも食べていたので4月からの自分がおかしかっただけでブラックライダーを倒したころくらいから調子が戻ってきたという感じなのかもしれない。エンジンがかかるのが遅すぎる体だとは思うがこうして食欲が戻ってきたのはいいことだと思う。戻ってきたというよりかは壊れた感じに近いのかもしれないが。

またスープを一口飲んで今度はカウンターの上にあるコシヨウのビンに手を伸ばした。

半分くらい食べたので、コシヨウをかけてまた違う味を試すのがこのラーメンを食べるときのいつもの食べ方だ。

「ごちそうさまでした」

そうして、ラーメンと丼を完食し、手を合わせ立ち上がって会計を済ませる。

そのまま階段を降りてたご焼き屋「オクトパシー」へと向かった。

「あ」

「オクトパシー」の前のベンチに、今はもう見慣れた黒い学ランの姿を見つける。

とりあえず、先にたご焼きを注文してから声をかけた。

「ライドウくん、こんばんは。横、いい？」

「はい。どうぞ」

自分もたこ焼きを受け取ってライドウくんの横に座る。

モコイさんはなんだか居心地悪そうだ。

「モコイさん、俺はしばらくここにいますし食後の散歩にでも行つてくるっ。」

「た、たしかにモコイさんは食後の運動をするのがマイブーム。チミ、よくわかったネ」

そんなよくわからない言い訳をしながらモコイさんが駆けていくのを見送る。

ライドウくんは心配そうにモコイさんの事を見つめていた。

「いつもああやってひとりで散歩してるから大丈夫だよ」

「……ええ、そのことではなく、その」

何だかライドウくんは歯切れが悪い。

「……実は港区での調査を終了して中央区の方に帰ることになりました。それで、最後に会えれば、と思っていたところで」

「あ、ライドウくん帰っちゃうんだね。寂しくなるなあ……」

電車で長くて数十分ほどと比較的近いとはいえ、ライドウくんにも他の仕事や学業があるし、用がなければこちらへ来ることはないだろう。

それは寂しくなる、と思っていいたらライドウくんがガサゴソと懷をまさぐり始めた。そういえば、今日はゴウトはいないんだろうか。

「ねえライドウくん、ゴウトは？ 今日是一緒じゃないの？」

「ゴウトは、先に寄宿先に帰っています。自分だけ、今はここで食事をと」

「なるほど」

そうなるとゴウトにはお別れを言えないというわけだ。なんだかそれはそれで惜しいな、という気分になるが会えないものは仕方ない。

「あの、親睦の証に、これを」

ライドウくんが取り出したのはハンカチに包まれた石だった。

何の変哲もないただの石に見えるのに、なんだか少しピリピリする

ような気配を感じる気がする。

「こんなモノを贈るなどとゴウトが居たら怒られるのかもしれないが、なぜか貴方にはこれが良いような気がして…これは、『宿魂石』と呼ばれる代物…の欠片です。かつて死の星——アマツミカボシの力を宿していたというこの石は、縁起ものとはほど遠いのですが…それでも、自分は貴方が持つべきだと」

「えっ、ヤバいものじゃないよね!？」

「いえ、ヤバいものです」

咄嗟に叫んだ自分に被せる様にあっさり「ヤバいもの」だと言ったライドウくんはいつもの無表情に近い顔だった。

「マジ?」

「マジです。ですが安心してください。これの大元の石にきつちりとアマツミカボシは封印されているので。…恐らく」

「すっごい不安!!! むしろ不安じゃないよ!？」

ホントに不安しかない。悪魔が寄ってきたりしないんだろうか、と不安になるも、もし寄ってきているのなら今襲われているだろうし、そんなことは無いかとすぐにその不安を誤魔化した。

「と、いうことで受け取ってください」

「あ、ありがたく頂戴いたします…?」

「はい」

包んでいたハンカチごと半ば無理やり手渡されて、謎の石——宿魂石を受け取る。

自分が持った瞬間にピリピリとした気配がなくなったのでやつぱり気のせいだったのかと気にしないことにして、懐にしまった。

「ああ、やはり貴方が持っていたら鎮まりますね。良かった」

「?」

このライドウくんの口ぶり。まさか、自分はいいように使われたのではないのだろうか。なんというか、ライドウくんが持て余していたものを、自分が持つことによってなんともなくなったような…いや、そんなまさかな。

うんうん、ライドウくんが自分にアマツミカボシとやらの封じられ

た危ない石の欠片を渡して無理やり無効化したなんてこと、ないよね？

……無いと信じたい。純粹に、善意しかないお別れのプレゼントだと思いたい。

「と、とにかくありがとうございます？ 大事に……うん、なるべく手放さないようにしとく……」

「そうしてください。もし、その石にヒビが入ったりなどの異常があったら自分の番号にかけてください。すぐ向かいますから」

「ああ、うん……わかった……」

絶対何かある。

けど多分自分では計り知れないことなので深く考えないようにしておこう。

この石ひとつで世界が減るわけでもないだろうし、良いものを……あいや、良いもの、かどうかはわからないけどライドウくんとの思い出の品として大事に取っておこう。そうしよう。嚴重に保管して。

「それでは、自分はこれで。渡すことが出来て良かったです。また、会えるといいですね」

「うん。またね、ライドウくん」

ライドウくんは立ち上がって去っていく。

これでライドウくんとお別れかと思うと寂しいものがあるが、別れとはいつも突然だ。再会の約束をして、見送る。

横には食べるのをすっかり忘れて冷えたたこ焼きが置いてあった。それに手を伸ばしてひとくち。

「うん、冷えたたこ焼きも悪くない」

少し寂しいけど、それだけだ。

生きている限り、また会えるから。

そう思つて、「あ、自分には来年以降がないんだつた」と自嘲した。バカみたいだ。

失敗したらまた4月から。失敗しなくとも1月末には死ぬつもりでいるのに、また会える、だなんて。一瞬でもそんな絵空事に夢を見ていただなんて。

一気に冷や水を浴びせられた気分になって、テンションが下がる。人は死んだらそこで終わりなのだ。なにもかも、全部。築いたものも、死んでしまえば意味など無くなる。残るものなどきつと、なにもない。

第四の騎士（9／18～9／22）

9／18（金） 放課後

結局、あれから奏子とは微妙な距離のままが続いてついに文化祭前日になってしまった。

荒垣くんからは「早く仲直りでもしろ」とせっつかれたがこちらとしてもこんな喧嘩のようなもの（自分が一方的に奏子を傷つけてしまった）をしたのが初めてなのでどうやって謝ればいいのかわからない。

下手な言葉をかけたら更に奏子を傷つけてしまいそうで、その一歩が踏み出せないのだ。

なんとも臆病で酷い兄だと思う。

さっさと謝ればいいのに、ともう1人の自分がせっつくがどうも口が動かない。

「あ…」とか「う…」とか言っている間に奏子は岳羽や山岸、アイギスなどとの会話を始めてしまう。たぶん、というか恐らく奏子からも避けられているんだと思う。

湊もなんだかジト目で見ることが増えたし真田くと美鶴さんは言葉には出さないが思いつめているようだし、伊織に至ってはずっとチドリについて悩んでいるようだった。

そんなに悩むくらいならチドリに会いに行けばいい、だなんて簡単には言えない。たまに朝倉医院で顔をあわせり薬を貰ったりしているが、それでも敵対していることには変わらないわけで。

そんな場所に伊織を連れて行くわけにもいかないしそこで絶対チドリに会えるとも限らない。ストレガの3人組は別に朝倉医院に住んでいるわけではない。

朝倉医院といえど1人男の人のバイトが増えたようで、この前初めて顔を合わせたがいきなり「ナギサ！ ジンから聞いたぞ。生きてたんだな。俺だ、イズミだ。覚えてるか!？」と言われて「あの…ちがいます…俺はナギサくんじゃなくて…あの3人が勘違いしてるだけで…」としどろもどろに答えているときにバイトの人——イズミさんが

朝倉先生に無言で首根っこを掴まれてずるずると別の場所に引きずられていったのをよく覚えている。

好青年、といった感じの印象と、なにかやらかしたのかな…という困惑が胸を占めていた。

そんなことを思い出しながら、豪雨の中をへし折れた傘を盾にするように両手で持って帰り道を歩く。

(雨と風の勢いが強すぎる——ッ!!!)

ブワアアアアアアアアアアアアアアアア！と音を立てながら吹きさらば強風に髪の毛をまとめていたゴムは早々にどこかへ行つて伸ばしていた髪が仇のように顔にたたきつけてくるし、雨で顔面どころか全身びちよびちよになるしで最悪だ。

もう靴の中までぐっしより濡れ、歩くたびにガッポガッポと湿った音がする。

モコイさんを留守番させておいてよかった、と思いつながらまさか傘が折れるとは思わず湊と奏子の持つて行った傘は大丈夫なのかと不安になった。

「あつ…」

そう心配しているとひととき強い風が吹いて手に持っていた傘になんとかへばりついてたビニール部分が吹き飛ばされ遙か彼方に飛んでいく。

いやもう、これは人間の歩いていい天候じゃない。

いつもこんな激しかったかと思いつくとするも、雨が降り出す前に帰ったりあまり風が強くないときに帰っている記憶しかない。ダメだ。頼りにならない。

どうにかこうにかびしょ濡れになって息を切らしながら寮へと帰ると同じくびしょ濡れの奏子と湊が頭を拭いていた。傘立てにはへし折れた傘が2本。残念ながらビニール部分が行方不明になってしまった自分の傘と同じく殉職してしまったらしい。南無三

玄関に敷いてあるマットの上で帰ってきた人用に用意されたバスタオルを取って頭を拭く。

疲労感が半端じゃない。すごく身体がだるい。

「お兄ちゃん…」

「優希、おかえり」

「あ、ああ、ただいま…ふたりもお帰りなさい」

会話が續かない。自分だけかもしれないが気まずい。

「ふえつくしよん！」

「…奏子も湊も、風邪ひいちゃうから身体を冷やさないうちにお風呂に行つた方がよいよ」

なんとか言葉を絞り出す。いま、自分はちゃんと当たり障りのない顔をしているだろうか。

笑えているだろうか。

「お兄ちゃんも…顔、青い…よ…?」

おずおず、といった様子で奏子が言う。それに大丈夫だ、いつもの返事をしようとして——それは言葉になることなく。

ぞわり、と寒気が全身を襲い、胸のあたりが気持ち悪くなって押さえる。

「…う…」

「どうしたの…!?!」

まずい、とポケットをまさぐって制御剤ではない方の薬を口に放り込んで壁の方へとよろめきながら向かう。

息が辛い。気持ち悪い。

どくどくと、服越しに触れる心臓の鼓動が乱れる。

こんな時に発作が起きるなんてと顔を顰めながらなんども息を大きく吸う。

「だい、じょうぶ…すぐ、おちつくから…」

何としても落ち着かないといけない。

こんなところで倒れるなんて、不味い以外の何物でもない。せめて、部屋まで帰らないと、思いながらも身体はずると壁に凭れるように下がっていく。

不整脈の方は薬が効いてきたのか落ち着いたというのに、息苦しさと身体から力が抜けるような感覚、そして寒気が止まらない。

ぐにやぐにやと、視界が歪む。頭がふわふわとして考えがまとまら

なくなる。

「……っ！ お兄ちゃん、熱が出てる……！」

「……っ？」

急にひんやりとしたものが前髪をかき分けて額に触れたと思ったらしいの間にか奏子が前にいた。

どうして、そんなに慌てたような顔をしているんだろうか。

「優希、立てる？」

なんとなく、立てるかどうかが聞かれたような気がするので首を縦に振る。そして、立とうとして――

身体が傾いて床に頭を打ち付けた。

「あ、れ……？」

確かに力を入れたような気がするのだ。けれど、力が入らなかった。

だれかが、何かを喋っているような音は耳が拾うのだが脳がうまくそれを処理してくれなくなってきたのか日本語だという事はわかるのに何をしゃべっているのか理解が出来ない。

身体が持ち上げられて、どこかへ運ばれているのがわかる。しかしその間、自分はぼんやりと動いていく天井を見つめていた。

運ばれたのは自室だった。

しばらく運ばれながら息を吐いて吸ってを繰り返しているとまだ頭の中がふわふわするがさつきよりかはマシになってきた。思考もまとまりやすくなっている。

ようやく、だれが運んできたのかきっちり目に入れて理解する。荒垣くんだ。

そのまま流れる様にこちらの衣服を脱がそうとしてくるので手で掴んでとめる。自分の服は自分で脱がせてほしい。さすがに同性といえども脱がせてもらうだなんて男としてのプライドまで失うわけにはいかない。これが荒垣くんではなくアイギスだったら容赦なく服をひん剥かれて死んでいた。

「離せって、脱がせられねえだろ」

「じぶんで、自分で脱ぎます……流石にそこまで、してもらうのは、ヤバ

「イ…」

「さつきまで意識が朦朧としてたやつがいう事かよ…」

「おねがい、します…」

「無理そうなら言えよ」

そう言つて部屋を出て扉のすぐ前で待つことにしたらしい荒垣くんを置いて、まずはびしょ濡れのベストを脱いで這つて籠に入れる。そしてぶちぶちとブラウスのボタンをはずして同じく籠に。靴下とズボンも脱いで籠へ。

以下省略してなんとか乾いたスウェットに着替えてぬいぐるみのフリをしているモコイさんが寝転ぶベッドに緩慢な動作で腰掛ける。身体がすごくだるいし何となく胸も痛い。これは間違いなく体調不良だ。

「終わったか？」

「終わった…」

「体温計はあるか？」

「ある…熱、はかった方が…いいんだっけ」

答えを聞く前にベッドサイドの小物入れに入れている体温計を手にとって脇に挟む。

しばらく待つて音がなつてから取り出せば『38.8℃』と体温計にかいてある。これは前のように土日が潰れるタイプの熱かもしれない。

「高熱じゃねえか…チツ、大人しく寝てろよ。飯は粥にしといてやるし後で経口補水液なりなんなりもつてきてやる」

「ごめん…」

「こういうときはな、礼を言うんだよ」

「ありがとう…」

「おう。てめえの弟と妹にもあとで礼を言つとくんだな」

荒垣くんの好意に甘えてベッドにゆっくりと潜り込む。モコイさんが心配するように寄り添ってくれているのが分かつて安心したのかすぐに眠りに落ちた。

9 / 19 (土) ???

頭が痛い。

無理やり瞼をこじ開けるようにして目を開く。

視界にぼんやりと広がるのは草一本も生えていない荒野。が横になった景色。

いつもの魔人の領域とやらだと思う。知らない間に誘い込まれていたのか、それとも今日がメノラーの試練の日だったのか。

恐らくは後者だとは思いますがメノラーの火が燃え上がった記憶も熱くなつた記憶もない。

昨日から熱を出してベッドで臥せていたので気がつかなかったのかもしれないがこれはあんまりにも唐突で強制的や過ぎないだろうか。

「う…」

呻きながら、立ち上がろうとするが身体に力が入らない。こういう時は都合よく動けるようになってるものでは無いのか、とぼんやりする頭で文句を垂れるが動かないものは動かない。

ヒヒーン！

馬の嘶きが聞こえる。

のろのろと視線をあげれば、音も無く現れた青白い馬に乗る大鎌をもった骸骨の騎士がこちらを見ていた。黒いローブのその姿は黙示録の騎士に共通する装いだ。

「…いよいよ最後の試練を与えるときがきたようだ。我ら四騎士をも退ける力…果たしておまえにそれだけの力があるのか否か。死に近き者よ…死を味わいし者よ…おまえが我らを喰らい終末の鐘を鳴らすことができるのか、

——このペイルライダーが、終審しようぞー！」

跳びかかって来るペイルライダーの鎌の一撃を、なんとか地面を転がることによつて避ける。

「見るがいい、私は黄泉を連れてきた。おまえの前に…後ろに」

首をのろのろと動かして前と後ろを見るが黄泉とやらは見えない。

物理的に見えるものではないのだろうか。

いや、恐らくホワイトライダーの言う戦争の足音とかそういうものと同じようなものなんだろうと勝手に納得した。

「…此度の試練は、死わたしに打ち勝つことではない。死は万物に共通する終わりの定め：決して打ち勝つことはできない。だが、おまえはこれから味わわねばならぬ。幾億もの死を！ ありとあらゆる死にざまを！」

ペイルライダーは大鎌を上げる。

今自分の手元には召喚器も武器もない。体調も最悪だ。

本当にただただこれからこうして地面に這いつくばったまま、嬲り殺しにされるのを受け入れなければならぬのだろうか。

【パンデミアブーム】

蠅の羽音のようなものが聞こえたかと思うと怠かった身体により一層力が入らなくなり、寒気が全身を襲ってガタガタと震える。

「では、まずはひとつめだ」【ペストクロップ】

「がつ…！」

容赦のない大鎌の一撃が身体を裂き、ごぼりと血を吐いて意識が途切れた。

かと思えば次の瞬間にはまた意識が浮上する。

「おえっ…げっ…！」

気持ち悪さと徐々に味わう死の感覚に胃液を吐き出す。

まるで、一度死んで食いしぼりをするギリギリの状態でもりやり復活させられたような気分だ。

「まだ始まったばかりだぞ」【ソウルドレイン】

今度は悲鳴を上げる間もなく意識が途切れ、またすぐに無理やり浮上させられる。

気持ち悪い、気持ち悪い、気持ち悪い。

【ブフダイーン】

もはや言葉は無かった。

ひたすら死んで、無理やり死ぬ一歩手前のギリギリの状態で生き返らせられて、また殺される。

その繰り返し返しだった。

「……」

「叫ぶ声すら無くしたか」

大鎌の先で腹を抉られる。が、もう自分には声を出す気力もなにもなかった。

何分、いや何時間経ったんだろうか。何度、死んだんだろうか。また意識が途切れる。

浮上する。

【ベノンザッパ】

大鎌で斬り裂かれる。転がる。意識が途切れる。浮上する。

【死魔召喚】

【自爆】

召喚された髑髏に蛇が巻きついた悪魔——夜魔　ロアの自爆で爆殺され意識が途切れる。浮上する。

【マハムドオン】

呪殺の魔法で呪い殺されて意識が途切れる。浮上する。

【毒噛みつき】

ロアに巻きついた蛇に噛まれ、毒を受けて意識が途切れる。浮上する。

【永眠への誘い】

急激な眠気と生気が抜けるような感覚がして意識が途切れる。浮上する。

——ああ、気持ち悪い。気持ち悪い。気持ち悪い。気持ち悪い。気持ち悪い。気持ち悪い。気持ち悪い。気持ち悪い。気持ち悪い。気持ち悪い。気持ち悪い。もういやだ、もういやだもういやだもういやだ。

殺してやる。

死とて食べてしまえば、同じことだ。食べられれば、血肉となる。

同じ、いのちになる。

ざり、と地面を手で搔く。

「あ……あああ……あああああ……」

喉から、絞り出すように声を出す。どぷり、と水音が聞こえた。

「『ニヤルラトホテプ』 ツ!!!」

自分が、何を喚んだのか分かりはしなかった。ただただ、黒い泥のような何かが、ペイルライダーを一瞬で呑み込んで静かに消えただけだ。

「う…おえ…っ…」

腹が痛い。

気持ち悪い。なにかに侵蝕されているような感覚を覚える。

——嗚呼、その力を使ってしまったのだね。

どこからか飛んできた金色の蝶が、感情のない声で語り掛けてくる。

直感した。自分は、コイツが嫌いだ。

——私は、全ての人間の意識と無意識の狭間に住まう者…私は君で、君は私だ。…嫌ったとしてもそれは変わらない。

その蝶を、知っている。

いまさら何を語りかけようというのか。心はひどく冷めていた。

こうなってしまうまで黙って見ていただけの癖に。この試練とやらを押し付けていただけの癖に。こうなることをわかって待っていたくせに。

そんな怒りを覚える。

——誤解だ。きみはなにか勘違いをしている。

誤解などしていない。こいつは、そういうやつなのだ。怒りをもつてはつきりと理解している。

目の前から、消えてほしい。

「『ペイルライダー』」

喰らったばかりの『ペイルライダー』を召喚し、その大鎌を振るわせる。蝶はバラバラに四散し光の粒子になって消えた。

どうせあれは死なない。しばらくしたら現れるのかもしれないが、あの耳障りな声を少しの間でも聞かなくてもいいというのは良い事だ。

苛立ちを抑える様にゆっくりと息を吐いて目を閉じる。感じた死

と苛立ちを早く忘れてしまいたかった。どうでもいい事だとは言っても、苦しいことに変わりはないのだから。

目を開ける。

かすかに聞こえてくる『月の光』にここはベルベットルームだと認識する。

今回はそのまま現実で目を覚ますことなくここへ直送されたいらしい。

「『第四の試練』を越え、儀式を全て終わらせたこと。是非ともこの偉業を成したことに、賛辞の言葉を贈らせていただきたいところですね」

イゴールがパチパチと手を叩く。

イゴールに悪意はないし称賛以外の他意がないのもわかっている。だが、その背後にちらつく黄金の蝶を思い出して思わず顔を顰めてしまう。

「さて、貴方様が失ったもの。全てとはいかずともその身に補い、あとは完全なる目覚めを待っただけにございます。ただしそれは、貴方様にとって残酷な真実を突きつけることと同義——それを乗り越えて真の自分と対峙してこそ、我が主の眼鏡に敵うといえましょう」

「貴方には期待しているのよ。私も、主も、私の妹たちもね。特に末妹のラヴェンツァは貴方にとっても興味を持っているようなね。まあ、仮とはいえ私のお客様なのだから会わせるつもりはないのだけれど」

まだ下が居たのか。とマーガレットの発言に驚く。てつきりエリザベスとテオドアだけかと思っていたらラヴェンツァというのがあるらしい。彼女もマーガレットに振り回されてそうな予感がするが性格がマーガレットやエリザベス寄りならテオドアの胃が死んでしまうなどとも思った。ただ、自分には同情することしかできないので放置にも等しいが。

「ただ、まだ貴方は本当の自分に気づいてすらいない。聞こえてくる声によく耳を傾けて。貴方自身の考えで歩き出さないといいけないわ。

誰かに敷かれたレールの上を歩くのではなく、貴方自身で、ね？」

自分は、自分の足で歩いているはずだ。自分で選んで、自分でその責任をとっているとおもっている。だって、そうじゃなきゃ、あの最初の雨の日、自分はあの男の手をとったりしなかった。見て見ぬフリだってすることも、弟の死を受け入れ抱えて生きていくことだってできた。でも、自分にはできなかった。できない方を選んだのだ。

それは、自分で選んだことには変わりはないのではないのか。

「…わかっていないみたいね。でも、これは私たちの口から言えることではないわ。貴方が貴方の目で見て、耳で聞いて、感じて、直視すべきよ。貴方を雁字搦めにしてあるものの正体がなんなのかを」

マーガレットは厳しい声で叱責するように言った。自分の目で、耳で、身体で、感じなければいけない。それは、いつもやっていることと何が違うのか。よくわからなかった。

「——この部屋が貴方にとって違うものになる日を、私は待っているわ」

最後に見えたマーガレットの顔は少し悲しそうな表情を含んでいた。

9 / 21 (月) 昼

二日飛んで9月21日。

最後の試練を終えて目覚めた日の朝はひどくだるく、まだ熱が下がっていないかったので一日ベッドの上で過ごした。当然、タルタロスの探索も自分ひとりだけ休んでベッドの上で惰眠を貪った。

しかしそれでもまだ朝に熱が下がっていないかったので今日も学校を休むことにしたのだ。

とは言っても今日は恐らく18日にあるはずだった文化祭の片付けだろうしこんなフラフラの状態で行っても邪魔になるだけだろうから休んで正解だったと思う。早く熱が下がってほしい。

「…モコイさんはチミに渡したいもの、あるんすよね」

ベッドで寝ていると、不意にモコイさんがそう言いながら頭の隣に

座る。そしてこちらの胸元に一本の管を置いた。これはライドウくんが持っていたものと同じ管だ。

「これは、『封魔管』っていうっすよ。ボくら悪魔を封じて、サマナーが使役するための道具だネ」

「どうして俺にこれを…?」

「今日をモコイさんとチミの新しいフォーエバー友情記念日にしようと思ってネ。だから、コレ、プレゼントフォーユー。長年入って染み込んだボクの香り付き。キャツ、えっち♡」

またそんな急に、と思うもせつかくモコイさんがくれるというのだから有り難く受け取ろうと思う。

「これでボクを仕舞ったり出したり。ウーン、COMPで悪魔を出し入れする時代にコレはコンサバだネ」

「俺にもできるの?」

「できると思うヨ。けど、モコイさんは今までどおりが好きカナ」

確かに自分もモコイさんと直接会話できる肩乗り形式に慣れてきてしまっているし管からにゆるんと出すのもなんだか違う気がする。管に入れて持ち運びは満場一致でなしになった。

「モコイさんは、ずっといなくなったボクらのライドウくんを追ってたケド。これからはチミとずっと一緒に居ようカナって」

「…いいの?」

モコイさんが追っていた『先代』さんは既に死んでいるらしいと夏祭りの時にゴウトに聞いてから、モコイさんはぼったりと外出することをやめた。ただ、見回りや散歩自体はまだ行っているようだったのでそっとしておこうかと思っただがモコイさんの中でなにか区切りがあったらしい。

「いいの。ボクはもう、見つけたから」

「よくわかんないけど、モコイさんの中で区切りがつけられたのなら良かったと俺は思うよ。でも、無理はしないでね」

「ノープロブレム!」

手を上げてカッコつけたモコイさんにこちらも笑顔になる。

見放されなくてよかった。モコイさんと離れることになることに

ならなくてよかったという安堵が胸を駆け巡る。

実のところ最近不安だったのだ。モコイさんが自分のもとを離れてしまうのではないかという危惧で。いや、離れると言われたら引き留めるつもりはやはりないのだが、それでも辛いものは辛い。

永遠なんてないとはわかってはいるが、自分が生きている限り——すなわち1月末まではずっと居てくれるものだど心のどこかで思っていたからだ。その杞憂が飛んでいって本当に良かったと思う。

「熱が下がって元気になったら、また食べ歩きに行こう」

「ウー！」

そんな約束を取り付けて、また眠りに入ろうと布団を引き上げる。

ただ、これだけ寝ていて寝すぎにならないかと思ったが眠れるのなら眠れるときに寝た方が良さだろうと自分を納得させた。明日ちゃんと朝に起きれるか心配だが致し方なし。

9 / 22 (火) 朝

朝起きれるかという心配は全くする必要がなかったらしくいつも通りの時間にぱちりと目が覚めた。

むくりとベッドから起きて立ち上がる。

カーテンを開けて朝日を浴びながら首を回して身体を伸ばせばバキバキといい音がする。

——快調だ。

昨日までの不調はすっかり治ったらしい。今日の夜は奏子に謝らなければならぬ。あと金曜日の礼と大事なことも言わなければいけないので湊にも同席してもらおう。

いつもの用意を済ませて部屋を出る。モコイさんはまだ寝ているようなので朝食の後で迎えに行こうと決めた。

放課後

商店街でモコイさんと約束していた食べ歩きをしているとあります

がやってきた。

「どうやら今日もお留守番しているらしい。」

「おにーちゃん、今日もなにか食べているの?」

「まあね」

「ふーん。ね、ありすも一緒に行ってもいい?」

考える。今日はモコイさんと食べ歩きすると約束していたので大丈夫なのだろうか、と肩のモコイさんを見ると顔を青くして震えている。どうしたのだろうか。

とにかく、モコイさんの調子が悪そうなので今日は申し訳ないけど断ろうと思う。

「ごめんね、今から帰ろうと思ってたからもうお店にはいかないんだ」
「…そうなんだ」

「うん。だから今日はこれでバイバイかな…」

明らかにシユンとしている様子のありすに罪悪感を覚えるがモコイさんが優先だ。

「こんな様子のモコイさんは尋常ではない。」

「それじゃあ、おにーちゃん。またね」

「うん、ごめんね。またね」

足早に帰路を急ぎ、ありすが見えなくなった頃に話しかけてみる。

「モコイさん、大丈夫? 具合悪い? ゲロゲロしそう?」

「…チミ、なんであんな…あんな存在と仲良しこよししてて平気なの…」

「?」

震えながら、モコイさんが口に出した言葉の意味がわからない。ありすがなにかモコイさんから見て変だったのだろうか。

「チミは…もしかして近づきすぎて気づいて居ないのかもしれないっすけど…アレは——」

モコイさんは大きく息を吐いた。そして

「——あの子は、『魔人』っすよ。しかも、とんでもない強さの…もしかしたらホワイトライダーよりも…ぶるぶる」
「は…?」

とんでもない事を言ったのだった。

夜

モコイさんから言われた「ありすが魔人だ」という話にはわか
信じがたいものだった。

だって、ありすは普通の女の子だ。普通に笑って、ご飯を食
べて、遊んで、むくれて。

そんな女の子が魔人だと、悪魔の中でも強力な存在だと言
われて「そうなんだ」と納得できるわけがなかった。

今度会える時があったら聞いてみるしかない。そして、もし
ものときは。

……。

……モコイさんの口ぶりからするとなんとかかなりそうにな
さそうなので全力で逃げよう。

うん。そうしよう。

全速力で逃げよう。そしてライドウくんへ電話——はダメだ、
とすぐにその思考を振り払う。

ブラックライダーでさえ荷が重かったのだ。ホワイトライ
ダーより格上だとモコイさんが感じたあたり相手には戦える
とは思えない。

やはり逃げ一択か。

それに、まだありすが危険な悪魔と決まったわけではない。
あんなに無邪気なありすのことだ。きつと、悪魔であることを隠
して普通の子供のフリをして生活を楽しんでいるに違いない。
話し合えばわかるはずだ。

そう結論付けて、椅子から立ち上がる。

そろそろ湊も奏子も帰ってくる頃だろうとラウンジに降り
ればちょうど2人がそこにいた。

「晩御飯食べたら、話があるんだ。ちよつと付き合っ
てもらってもいいかな」

そう告げると、顔を合わせた後に頷いた2人に自分はほつ
と内心胸

をなでおろした。

夜の食事をとり、湊と奏子連れで夜の街を歩く。終始、自分たちは無言のままだった。

そして長鳴神社の境内まで来てそこで止まり奏子に向かって頭を下げた。

「――まずは、奏子。この前はごめん。俺は奏子の気持ちかわからな
いままに酷いことを言ってしまった。言われた側の事を何にも考え
てなかった。次からは、あんなことが無いように気をつける。無茶も
…うん、できるだけしないようにする」

「……」

奏子の顔は、暗い顔のままだ。

ダメかもしれない、という不安が自分の心に巣食う。

「……私も、ごめんなさい」

小さく、呟かれた言葉は謝罪の言葉だった。大きく目を見開く。

「えっ…なんで奏子が謝る…えっ?」

混乱する。悪いのは自分だけのはずだ。なぜ奏子が謝るのか全く
意味が分からない。

「私、お兄ちゃんのこと、不用意に傷つけて怒らせちゃった。お兄ちゃ
んはあんなこと、言いたくなかったのに」

「いやそんなことないって! あれは俺が、俺が悪いんだ…! 奏子
は何も悪くないからな!」

おたおたと慌てて慰めるも泣きそうになっている奏子の瞳はあつ
という間に涙が溢れそうになっている。

困ってしまったって湊に助けを求める視線を送るも、溜息をつかれて視
線を逸らされてしまった。なんてこった。孤立無援か。

「泣かないで…俺は傷ついてないし怒ってもいけないし、気まずい感じ
だったのは俺がヘタレなだけだったからで…奏子は何にも悪くない
から、な?」

「ううん、悪いの。私、気がつかなかったもん。知らなかったもん。だ
から…だから…」

「ああその、奏子! 今度の日曜! パンケーキ! 仲直りにパン

ケーキ一緒に食べに行こう！ 俺の奢りで！ 夏休み言ってただろ？ ちよつと遠いけど食べに行きたいって…だからほら、泣き止んで…大丈夫だから…」

「パンケーキ…？ いく…！」

食いついた。よし。と内心でガッツポーズをする。

このままなんとかかんとか泣きそうになっているのを誤魔化そう。しかしそうは問屋が卸さない。

「僕も行って良いんだよね？」

湊が手を上げてリングインしてくる。

もちろんだ、といたいところだが食欲が増えた自分＋結構元気に良く食べる奏子＋とてもよく食べる湊のトリオで行くとなるとお金
がヤバイ。

「さ、財布と相談させてください…」

冷や汗を垂らしながらそう告げた。

またバイトの日々になるかもしれない、と頭の端で予定を組みながら考える。が、そこで2人をこんなところまで連れてきた本当の目的を思い出した。

「あ、そうだ。2人に言おうと思ってたことがあってさ、この前、奏子が俺が秘密にしていること聞きたいって言ってただろ？ あれ、この前でもう終わったから言ってもいいかなって思ったから伝えようかなって思ってたさ。…あー…あんまり聞いてて面白い話じゃないし2人は怒るかもだけど、聞く？」

別に、メノラーの試練の話は口止めされているわけでもなんでもないし実際ライドウくんにも暴露しているので話しても問題ないだろうと思っただ次第だ。

「聞く」

「ん。わかった」

そうして、簡潔に。ライドウくんやクリシュナたちの話はぼかして試練の事を話した。

「お兄ちゃん、そんな変なことに巻き込まれてたの…!？」

「まあね…戦ってるやつがちよつと特殊だったから特定の誰かに相談

なんてできなかつたんだよね…こちらとしては不可抗力だったし押し付けてきたやつはしばらく接触してこないだろうから大丈夫…だと思いたいな…」

はあ、と溜息をつく。

「奏子も湊も、喋る金色の蝶には気をつけてね…絶対口くでもないから。あいつ」

「青い蝶なら見た事ある、けど…金色の蝶、か…」

湊が何かを思案するように顎に手を当てるがすぐにそれをやめてしまう。心当たりがないのだろう。

逆に自分は青い蝶を見た事がない。湊と奏子いわく、寮や教室などそこらじゅうにいるらしいが見た事がない。

「…ちよつと優希に聞きたいんだけど、その試練の最期の日っていつ？」

「えつと風邪で寝込んでる時だから…19日。先週の土曜日かな」

「…ふーん」

「えつなにそのなんか意味深な『ふーん』は!？」

湊のなにか納得したような顔に驚く。

一体何を感じて今ので納得したというのか。

「つて、お兄ちゃん寝込んでる時に戦ってたの!？」

「強制的に呼び出されて動けないところをボッコボコにされてただけだよ…たぶん、あれは勝ってない…」

遠い目になる。

あの時の事はあまり思い出したくない。ちよつと気持ち悪くなってきた。うつぶ。

「さ、サンドバッグにされてたってこと!? どこのどいつなの!? 私と湊でギツタンギツタンにしてやるんだから!」

「いや、奏子いいよ…もういない、というかそいつ俺のペルソナになってるし…」

「えっペルソナになったの!?! ど、どういうこと!?!」

だって食べたから、とは言わない。

というかどうして悪魔を食べられると思ったんだろうか。なんで、

食べたからといってペイルライダーがペルソナになっているんだろうか。

分からないし思い出そうとすると腹がじくじくと痛むのでやめた。「俺もよくわかんないんだ。まあ…とにかくこの押し付けられた苦行は終わったし、あとは3体の大型シャドウを倒せばいいだけだし、無理せず頑張っていこう。で、日曜はパンケーキだ。予定を空けておいてくれると嬉しいな」

「はい！」

「わかった」

一応まとまって話も終わったので夜道を3人で歩いて帰る。

行きとは違い、明るい雰囲気できなげと帰る帰り道はとても良いものだったとだけ言っておきたい。

「——ふうん、おにーちゃんの大物、やっぱりあの人形さんなんだ。ふふつ、ワタシの本当のオトモダチになってもらうためにはやく死んでもらわないと！ あのお人形さんと一緒に！」

「つぎの月が見えなくなる日に、また会おうね。おにーちゃん」

「アリス」は、待ってるよ」

アリス少女の笑みはまるで新しい玩具を見つけたかのようにきれいな笑みだった。

パンケーキ・ランデヴー（9／23～9／27）

9／23（水）夜

パンケーキ遠征の為に喫茶シャガールでバイトをしてからエスカペイドを梯子して、今日も神条さんに会いに来た。

「こんばんは、神条さん」

「今宵も良い夜だ…何か語るにはびったりだと思わんかね」

「はは、まあ、そうですね…」

よくわからないがそういう夜なんだろう。静かな夜といたいのかもしれないがエスカペイドは音楽ジャカジャカのライトピカピカ空間なので聴覚的にも視覚的にもまったく静かではない。薄暗いとは言っても静かとはほど遠いものだ。

「…少年」

「はい」

「最後まで諦めないことだ。私にはそれしか言うことはできんが…さやかな助言だと思つてほしい」

「あ、はい…ありがとうございます？」

突然じつと見つめられたかと思えば頭を撫でられてそんなことを言われてしまった。というか神条さんに触れられたのは初めてなので少しびくついてしまう。バレてないだろうか。

あまり誰かに撫でられたりという経験がないのでこういうのは少しくすぐつたい。と同時になぜか少し怖くなる。自分の頭より上に手を上げられるのが苦手なのかもしれない。

「怖いかね？」

「…少しだけ」

「ふむ。なら、撫でられることに慣れていない、ということか。これでも私はかつて娘が居てね。今は…ふふ、”独り立ちした”とでも言うか。私の手を離れて行ってしまったのだよ」

まさか既婚者だとは思わなかった。

神条さんはてつきり独身だと…いや、そんなことを思うのは神条さんに失礼か。

「『家族サービス』をしたりわがままに付き合ったりしたものだ。あの子はひどく気難しくてな。ひどく苦勞した」

少し疲れたような顔をしつつも懐かしむようにそう語った神条さんはまんざらでもなさそうだ。

「今となつては遠い思い出だ…そう、遠い、ね」

となると娘さんは自分よりも年上ということなのか。神条さんは30代ぐらいに見えるのに自分よりも年上の娘を持っているかもしれないという疑惑に謎が増えてしまった。

「——話題を変えよう。きみは、『この世界が誰かの見ている夢』だと言われたらどう思う?」

「え…いや、驚いて、嘘だつて笑い飛ばすかもしれないです…到底信じられません」

すこしばつが悪そうな神条さんは話題を変えた。

が、いきなりそんなことを言われたら驚く以外の何物でもないし冗談だと思うだろう。

「古代中国の思想書『莊子』にはこんな説話が載っている『昔、莊子は夢に胡蝶となり、自由に楽しく飛び回っていたが、目覚めると紛れもなく莊子である。しかし莊子が夢に胡蝶となったのだろうか、胡蝶が夢に莊子となったのだろうか』、有名な『胡蝶の夢』だ…もしかしたら、自ら身体を動かしていると思つていても、きみは誰かの見ている夢で、きみじゃない誰かがきみだと思ひ込んできみの身体を動かしているのかもしれない」

難しい話だ。

頭がこんがらがってきた。要するに、自分という存在は自分自身ではなく、この身体に入った別の誰かの見ている夢かもしれないということなんだろうか。うーん、分からない。

この話は、結局どちらが夢で現実なのか、という問題なのかもしれない。

こういう難しい話はあまり得意じゃない。

「少し難しかったかね? では、もうひとつの例を挙げてみよう。万物の王である盲目にして白痴の神『アザトース』という存在がある。

クトゥルフ神話にて語られる原初の邪悪であり万物の王だ。その話の中のひとつで『この世はアザトースが見ている夢』だといわれている。さて、ならばその愚かなアザトースが眠りから覚めるとこの世はどうなると思う?」

どうなるか。夢から覚めたら夢はそこで終わってしまう。続きはしない。

つまり、

「消える…?」

「正解だ。もし目覚めたらこの現実が消えてしまう。だからこそ、彼を崇拜する者達は必死に夢から覚めないようにあやしているのだよ。まるでそれは赤子のようではないか」

今日の神条さんの話はなんだか難しくてよくわからない。

「ペガーナ神話に『この世はマアナユウドゥスウシャイの見ている夢』という説もあるが、先ほどのアザトースの話はこの説と混同された可能性もあるらしい。一部の書籍ではアザトースの化身としてマアナユウドゥスウシャイが挙げられている。同様の例え方をされているので勝手に結びつけられたようだ。が、それもまた人の『認知』と言えよう」

グラスを傾けてカクテルに少し口をつけた神条さんはニヤリと笑った。

「神話に語られる神や悪魔など…否。私やきみを含むこの世のすべての事象は、すべて人の『認知』によって成り立っている。そうだとすれば、この世に生きている人間——民衆そのものが白痴であり盲目な『夢見るアザトース』みたいなモノではないかね?」

「認知…」

「そうだ『認知』だ。それを認識することによって、初めてその存在を知る。それが世界に存在すると認識する。そんな経験がきみにもあるだろう」

言葉なく頷く。

悪魔もシャドウもペルソナも、知らなければこの世界にあるなどとは到底思えなかっただろう。

そして、知った瞬間にさも初めからそこにあつたかのように日常に非日常を運んできて、非日常が日常になつてしまふ。

なるほど、『認知』とは自分たちがそうだと認識するかどうかという事なのかもしれない。

『そう』だと分かなければいつまでたつてもわからない。

見て見ぬふりをしてしていると、いつまでも『真実』にはたどり着けない……？

そもそも、『真実』ってなんだ……？

そんなもの。知る必要があるのか？ 知つて、湊や奏子を救うための何かになるのか？

ニユクスを封印するだけでは、なにか、足りないのだろうか。いや、そんな筈は無い。原因はあれだけなはずだ。他になにかがある訳がない。

「っ……」

「大丈夫かね、少年」

頭が痛くなつてきたので考えるのをやめた。

今日の自分は全くもつて考えることに向いていないらしい。

「……大丈夫です」

「難しい話をしすぎたようだ。……それにもうきみが帰らねばならない時間だな」

高級そうな腕時計を覗き見た神条さんが話の終わりを告げる。

いつもと変わらず頭を下げ別れの言葉を言い、エスカペイドを出た。

9 / 27 (日) 朝

ガタンゴトンと走る電車で揺られながら今日に至るまでのバイトの日々を思い出す。

フラワーショップ『ラフレッシュ屋』でバイトをしたり映画館『スクリーンショット』で売店のバイトをしたり、エトセトラエトセトラ。

日雇いばかりだったが『ラフレッシュ屋』からはもしよければ今度から

定期的にバイトに来てくれても構わないと言われて少し悩んでいる。もし都合が合えば週に何度か入ってもいいかもしれない。とにかく、この急なバイトの日々でなんとか遠征費用は稼げたので良しとする。

「パンケーキ楽しみだなあ……」

「奏子さんが楽しそうだと、わたしも嬉しいです」

蕩けるような顔で今か今かとパンケーキ屋の近くにある駅に電車が着くのを待っている奏子に、湊と自分。

——そしてアイギスが電車の座席に横並びになって座っている。

今朝になってパンケーキを食べに遠くまで行くという話を聞きつけたアイギスが「わたしも共に行くであります！」と名乗りをあげたのが発端だ。

まあアイギスは食事が取れるロボと言っても食欲お化けではないし大した出費にはならないだろうということでOKしたのだ。

「コロマルさんとモコイさんも一緒に来られないのは残念です。ですのでふたりの分までわたしはパンケーキというものを味わいたいと思います」

モコイさんはともかくコロマルは電車に乗れないし店にも入れない。こういう所で犬という種族と姿が仇になっているのをコロマルはいつもアイギス翻訳で憤っている。映画館に湊と行った時も犬はダメと断られ、自分たちと同じ学校にも行きたかったのに犬だからダメと言われ…荒垣くんがいるから寂しくはないものの、やはり疎外感を感じていたようだ。

「モコイさん？」

奏子が聞き慣れない名前に首を傾げる。

しまった。アイギスと視線がぶつかり何とかごまかせないかと伝わりはしないテレパシーを送ってみる。

「わたしとコロマルさんの友達です。ナウなヤングで緑色をしていますであります」

「緑色…亀かな…?」

「黙秘します」

アイギス、それは墓穴だよ。とは言えない。

モコイさんが自分に関係あると言われなかった時点で微妙にテレパシーは通じていたことだけはほつと胸をなでおろした。

「黙秘って…ま、いつか」

自分が黙秘したときは真つ先にツッコまれそうな会話も、不思議ちゃんというイメージがついているアイギスならこのとおり。信用されているかないかの違いって大きいな…と遠い目になる。

自分の信用のなさは自業自得なので言い訳することも出来ないが。

昼

そうして電車に揺られること2時間。

今日は人身事故も何も無く、バスも乗り継いでスムーズに珠^{すま}？^{まる}瑠市の港南区に着くことが出来た。

今日の目的はここにある複合商業施設『シーサイドモール』に、今年の春先に出来たパンケーキ屋のスペシャルパンケーキだ。

「ついたー！」

「目的地に到着であります」

「眠い…」

湊は電車とバスの移動で少し疲れたみたいで眠そうだ。ここは休憩を促した方がいいのかもしれない。

「少し休む？」

「ん…大丈夫。パンケーキが逃げるから早く行きたい」

訂正。食欲の方が勝っているらしい。

パンケーキは逃げないと言いたいところだったが、スペシャルパンケーキは昼12時から数量限定販売だ。今は11時30分。目の前に見えているとはいえ、今からシーサイドモールまで歩いて店の前に並ぶとなったら少し急がないと行けないかもしれない時間だ。

少し歩調を早め——ようとして突然前に現れた人とぶつかってしまった。

「へぶっ…す、すみません！」

「いや…よそ見していたこっちがわりい。ケガはねえか？ ボウズ」
「だだだ、大丈夫です」

鼻をさすってぶつかってしまった人をまじまじと見る。

黒髪ロングの男性。金ピカなスーツにサングラス。如何にもカタギじやなさそうなその格好に思考が停止した。この人の雰囲気は朝倉先生よりも「ヤバ」いと感じた。

「ちよつとパオ、あんたなに子供イジめてんのよ！ ビビってるわよそのコ！ ただでさえあんたイカツいんだから！」

そんな感じでビビっていると後ろから女性が駆け寄ってきて男性に食って掛かる。

「…まだ俺はなにもしてねえ」

「ほんとごめんねえ、このオジサンが怖がらせちゃって！」

「おい」

「本当に大丈夫なので…こちらもぶつかってしまってすみません…」

「いーのいーの。このオジサン、ジョーブだからさ！」

ペーリと頭を下げてそのまま湊たちの方へ寄る。男女はそのまま

「俺はオジサンなどでは…」

「あれから10年も経ってるんだからもうオジサンでしょ！」

などと言い合いを繰り返しながらこちらから離れて行った。恋人か夫婦なのだろうか。

…何だか踏み込んではいけない気がするのでやめておこう。早く忘れることにしよう。

「……」

「どうしたのアイギス？」

「…いえ、なんでもありません」

じつとふたりのことをアイギスが見つめていたので首を傾げる。

なんでもないらしいのでそのまま歩みを進めた。

「おいしかったー！」

「すごいクリームだった…うぶ…」

「1皿限定なのが勿体ないな…あと5皿はイケたかも」

「パンケーキの原料はすべて記録したのでこんど荒垣さんにコロマルさんの分も作ってもらおうよう、たのんでみるであります」

パンケーキ屋に時間通りにつき、少し並んでから店内へと入って無事目当てのスペシャルパンケーキにありつくことが出来た。が、自分は想像以上に盛られた甘ったるい砂糖の塊のようなクリームに気持ち悪くなってしまい半分でダウン。湊は自分の分の半分と自分の分を完食し、奏子とアイギスは一皿丸々を綺麗に完食していた。ただ、ひと口目でアイギスがパンケーキに使われている材料を隠し味込みのパーセンテージ付きで解説しだした時には三人で慌ててアイギスの口を塞いだが。

すこし周りの視線が集まったのは言うまでもない。

「次どこ行くー?」

「うーん…」

モール内を歩きながら悩む。湊と奏子はまだまだお腹が空いているようだ。かくいう自分もクリームでダウンしただけなので腹自体は空いているのだ。

「あー、あれどう?」

奏子が指差したのはスイーツバイキングの店だった。被っているが先ほどの店はパンケーキ専門店でこちらはケーキやアイスなどスイーツ専門のチェーン店の様だった。

「なになに…、カップル特別メニューキャンペーン中…? ねえお

兄ちゃん! 私これ食べたい!」

「えっ」

口の端が引きつる。カップル。

いやこのメンツでは無理でしょ、と後ろを振り向けばさも当然とばかりに湊に腕を回すアイギスが。

「わたしもとても興味があります。なので、湊さんとわたしが“かっぷる”ということでききましょう」

——本当にアイギスはこの場合のカップルの意味を分かっているのだろうか。

「私も食べたいのに！　じゃあお兄ちゃんとカップルになる!!!」

「いや、俺と奏子ちゃんと顔似てるしカップルは兄妹だとなれないからね:!?　というかカップルって言ってなれるものなの!？」

奏子に腕を引かれてそう言われるが無理なものは無理だ。

アイギスと湊はギリギリ行けるかもしれないが自分と奏子は無理。確実に無理だ。

「それなら、変装をすればいい、と誰かが言っていました」

「変装！　それだよそれ！　よおーし、そうと決まれば善は急げだよお兄ちゃん！」

「どこがどう善なのか分からないよ……」

「がんばって」

アイギスと奏子の言葉にもうツッコむのをやめた。

そして湊、自分は巻き込まれてないからってサムズアップしない。

「ぶっぶお!!」

散々アイギスと奏子に連れまわされ、髪型を弄られ、伊達眼鏡まで買って出てきたら湊が噴出して肩を震わせて笑いだした。

髪型をオールバックにされたので印象がだいぶ変わっていると思うがそんなに噴出して笑うほどなんだろうか、と鏡で自分を見たら見事に湊カラーの眼鏡をかけた髪の毛長めの綾時くんが出来上がっていて自分も噴いてしまった。

「ぶっ……!」

「何笑ってるのお兄ちゃん……ほら、さっき言った言葉遣いの練習！」

「あ、ああ……じゃなくて……うん……えーっと、君の瞳に乾杯……で、えーと……僕……と一緒に食事でも行かないかい？　……こんな感じ？」

「ダメであります」

ダメだった。

アイギスに手厳しく首を横に振られてダメ判定を受ける。その目はなぜか冷たい。

「ぶっくく……ぶっくく……ぶっくく……」

ついでにそれを見た湊の腹筋が崩壊寸前になっている。

自分の腹筋も崩壊しそうだが何とか耐える。耐えなければ特製メ

ニューは無いし奏子の要求は満たせないしどうしようもないのだ。

「ダメかあ…」

「ダメでありますね」

「恥を捨てるべきだよ！」

「恥を…ええ…」

捨てられそうにない。自分に綾時くんみたいな言葉遣いは無理だ。と、いうか奏子にプロデュースされて思うが奏子の好みは綾時くんみたいなタイプなんだろうか。それはそれでちよつと複雑だ。

「…さあ、僕と一緒にいこうじゃないか。きみにとっておきの体験をさせてあげるよ」

「合格であります但ダメです」

「どつちななの…」

「不穏な気配を感じるであります」

「ぶふおっ！ あははははははは！ ごめ…ダメだ…ツ！」

頑張つて綾時くんっぽく振る舞つて奏子に手を差し出したらついに湊の腹筋が崩壊した。そしてアイギスから合格かつダメという謎の判定をいただいてしまった。

結局、綾時くんエミュ作戦（自分命名）は失敗に終わったので髪型と眼鏡だけそのまま先ほどの店に入る。

「カップル、二組であります」

堂々と名乗つて湊を引きずるアイギスを先頭に、難なく店に入りカップル専用メニューを頼むことに成功した。

出てきたのはハートの散りばめられたチョコケーキ。これでもかとチョコがかかったそれはバレンタインデーかと思うほどにチョコチョコしていた。

「いっただつきまーす！ ほろ苦！ すっごい！ 甘いのにビター！」

「使われているチョコレートのカカオは97%だと断定します」

「あ、これ美味しい」

それぞれがケーキをほおぼる中、自分は付属のサラダバーから掻つ攫つてきたサラダを口に黙々と運ぶ。が、せつかくなので奏子から

かってやろうという悪戯心が芽生えた。振り回されたので多少こつちがからかっても怒られはしないだろう。

「奏子」

「なにー？」

「それ、頂戴」

「いいよー」

ケーキを指さす。

すると奏子は皿を差し出してきたのでニヤリと笑って口を開いた。

『あくん』、してくれないの？ 俺たち、恋人同士、なんでしょ？」

「こ、ここここここ…っ、こいつ！ あ、荒垣先輩にもまだ言われたことないのにつー！」

一瞬にして茹蛸のように真っ赤になった奏子に内心してやったりとほくそ笑んだ。

が、からかうのはここまでにして冗談だと言わないと大変なことになるだろう。というかやかんのように真っ赤になっている奏子が初心すぎて可哀想になってきた。いつもは天田くんや荒垣くんにぐいぐい距離詰めてセクハラみたいなことしてるのに。押すのはいいが押されるのは駄目なタイプなんだろうか。というか荒垣くんと最近イ感じになっているのはやはりそういうことなのか。

「まあ冗談なんだけ——ぐはっ!？」

冗談だ、と言おうとしたら口の中に高速でフォークに刺さったチョコケーキを突っ込まれて喉奥にダメージを受ける。情緒もへったくれもない。これは貫通つきの物理攻撃だ。

「あ、ごめん…！」

「いや…からかった俺が悪かった…ごめん…げほげほっ…甘…」

「確かに今のは優希さんが悪いと思います」

「うん。アイギスの言う通りだ」

二度と奏子をこういう方面でからかわないと決めた。

もぐもぐとケーキを咀嚼してからコップの水を飲めば、アイギスと湊の呆れたような視線が突き刺さっていたたまれない気分になる。

皿の上のサラダ（決してオヤジギャグにあらず）がなくなったので

席を立って新しいものを取りに行く。千切り大根とレタスをたくさん取ってイタリアンドレッツシングをかける。そのうえにポテトサラダをトッピングして意気揚々と座席に戻った。

「スイーツバイキングなのにサラダしか食べてない…」

「後で食べるよ、後でね。でも今はサラダの気分だから」

奏子の視線は皿の上に盛られた山盛りのサラダにくぎ付けだった。

こんなに好きだけサラダを食べられる機会はあるまいないのでこういう時に食べるしかないのだ。

サラダを完食し、今度は皿を持たずに立ち上がって目指すはアイスクリームコーナーだ。

好きなだけシャーベットを取って席に戻ってほおぼる。うん、爽やかでおいしい。

アイギスは様々なデザートをバランスよく一口ずつ。奏子はバナナスイーツ中心。湊はとにかく全部ドカ盛り、といった感じだが個性が現れていていいと思った。

夜

「楽しかった〜」

「疲れた…」

「今日は貴重な体験として記録に残しておこうと思います」

「もう少し食べればよかった…」

駅から寮への帰り道を4人で歩きながら仲良く帰る。もちろん、伊達眼鏡を外して髪型は元に戻してある。

最後、湊が聞き捨てならない発言をしたような気がしたが聞かなかったことにしようと思う。

「大型シャドウ、全部倒したらまたああやって…今度はみんなで遊びに行きたいよね！」

「名案です。では、次回はコロマルさんとモコイさんも一緒に、であります」

「いいんじゃないかな」

大型シャドウを全て倒してすぐ、というわけには幾月がやらかすせいでいかないが、11月中…修学旅行後くらい Тайミング ならばギリギリみんなのメンタルもマシになってるし綾時くんも誘ってみんなでいけるんじゃないか、と思う。その後はニクス云々でまたみんなのメンタルがヤバイことになるのでいけそうにないし、2月以降は影時間の記憶が消えるので言わずもがな。というか自分が失敗しても成功しても2月以降は無いのでどのみち11月末以外に選択肢がなさそうだ。

「じゃあ、約束ね！ 大型シャドウを倒して、影時間が消えたら、みんなで！」

「うん」

「はい」

湊だけは、なぜか頷かなかった。

そこに何か引っかけりを覚えるがどうせ聞き流しているかなにかなのだろう。適当にしれっと参加する、と後で奏子に言うだろうし放っておくことにした。

影時間

「昼のアレは反則だよね…」

ファルロスの苦笑する声が聞こえて湊は目を開けた。

昼のアレ。心当たりしかない湊は思い出してまた肩を震わせる。

「もう、笑わないでよ…！ そんなに笑われると僕だって傷つくんだから。…お兄さんのアレ、そんなに綾時ほくに似てた？」

「似て…いや…似てな…でも…くく…ふふふ…」

「あーあ。こりやダメみたいだね。はあ…綾時の時の僕って、あんな印象なのかな…そんなにプレイボーイなつもりはないんだけどなあ…」

拗ねたように肩をすくめたファルロスはぶらぶらとベッドの端に腰掛けて足を揺らした。

「———そういえば、気がついてるよね。きみのお兄さんの雰囲気さま

た少し変わったこと」

「…うん。聞いたら、19日だった」

「やっぱり。僕が感じたのと同じ日だ。…明らかに、大型シャドウだけじゃなく他の物も取り込んで大きくなろうとしてる」

ファルロスは困った顔で床を見つめた。

彼自身、優希の中にいる存在がなんなのかわかりかねていた。自らによく似た存在だという事はわかる。が、自分の他に宣告者など、いなかったはずなのだ。

「…：ううん、だれか、もうひとり、僕の隣にいたような…」

珍しく、ファルロスが顔を顰めて呻く。

ぼやけた記憶を思い出そうとするも、ファルロスにはその感覚がなんなのか、わからなかったので話題を変える。

「そうだ。もうすぐ満月の日だけど、気をつけてね。2回目のことを忘れたわけじゃないんでしょ？」

湊は頷いた。

湊が繰り返し返しているこのループの2回目、兄は天田と荒垣を庇って凶弾に倒れた。

今回はそうならないという確証がないのだ。兄の事だ。天田と荒垣先輩の関係を知り、タカヤが狙っているとわかれば身を呈して庇うに違いない、と苦い顔になる。

そんなことはさせせない。兄と知り合いのようだが邪魔だと感じれば撃たないとも限らないのだ。

それが、湊のもつタカヤのイメージだった。が、2回目といえば、と何かが引つかかった。

あの後、ストレガがぼったりと出てこなくなったのはやはり兄が死んだせいなのだろうか。

となると、やはりタカヤは兄を殺せないのかもしれないと結論付けた。もちろん、違う可能性もあるので湊は警戒を怠らないようにしようとして決意して。

「今回も、何が起こるかわからないから。気をつけてね」

「分かってる」

「それじゃあ、またね」
ファルロスはその言葉を最後に姿を消した。

嵐の前の（9／28～10／4）

9／28（月） 放課後

暗い顔の伊織に呼び出され、ワックで萎びたポテトを食べながら珍しく何も手をつけずに黙ったままの伊織が口を開くのを待った。

「…センパイ、オレ…どうすればいいんスカね…ずっとバカなりに考えて考えたけど、わかんないですよ…」

「伊織…」

十中八九チドリの事だろう。

前回の満月の夜に自分と荒垣くんのパルソナが暴走したのを察知して止めに来てくれた？らしい。自分は余裕が無くて気がつかなかったが、さらにそこでチドリがストレガだと分かってから伊織はずっと悩んでいるようだった。

「チドリは敵で…でも、チドリはオレを傷つけたりはして来なかった。ただ、話をしたかっただけで…チドリ自身はなんにも悪いこととしてねえ…けど…」

複雑なものがあるのだろう。

8月の満月の夜、チドリと同じストレガのタカヤとジンに毒ガスを撒かれ荒垣くんが来なかつたら全滅していた可能性すらあった。

そんな人間達の仲間であるチドリに平気な顔をして会えるかと言うと、伊織は無理なんだろう。

いや違う。毒ガスを撒かれたというのに次の日に会って絆されて一緒にラーメンを食べた自分の感覚がおかしいのだ。

「それに、あの日以降いつもチドリが居た場所にもう来てないみたいで…オレ、確かめようもなくて…」

「会って、なにを確かめるの？」

「！」

口から出た言葉はひどく冷たかった。が、止まらない。

「チドリに会ってストレガじゃないかまた確かめる？ 何度やっても無駄だよ、彼女は紛うことなき人工ペルソナ使いの生き残りで、ストレガに変わりはない」

「……っ、」

伊織が目を見開いてから悔しそうな表情に変わる。ただ、ここで終わらせるつもりは無い。

「伊織は…順平は、どうしたい？ チドリがストレガという事実を揺るがないんだ。でも、伊織の気持ちは、そんな事だけで諦められるものなの？」

「んな訳ねえ！ スけど…」

「なら、それでいいんじゃないかな」

ポテトを摘んで口に入れる。

「チドリはストレガで、敵かもしれないけど、そこを含めてチドリなんだし。無理に綺麗なトコ見なくていいんじゃないかな。ストレガだって知る前は普通に会ってたんだろ？ なら、また会えばいいじゃん」

「そんなこと…出来るわけねえよ…！ 今更、どんな顔して会えば…」

「笑えばいいと思うよ」

「……笑えねえっすわ」

伊織は裏切りなどの心配をしているのだろうか。確かに、自分のやってる行為はストレガと内通しているというある意味とんでもないものだが、正直な話あそこにいる時や朝倉医院で顔を合わせる時はほとんど世間話や薬の話だけであえて影時間の事やあちらこちらの内情に触れないようあちらも気をつけているように感じる。なので伊織とチドリが出会ったことを今回は知らなかったのだ。

ただ、伊織は会えないと言いつつもいつもの待ち合わせ場所とやらでチドリが居ないか毎日待っているらしいので会う気はマンマンなんだろう。なら、叶えてあげようじゃないか。

この間は雑に合わせるなんてダメだと思ったがここまで煮詰まってしまうているのなら仕方ない。下手すれば自分もタカヤ達に拒絶されるかもしれないがこれ以上伊織が煮詰まっている所を見るのも忍びない。

「…んー…じゃあさ、俺と一緒に『悪い子』になろつか。伊織」

「へ…っ？」

「チドリに会わせてあげるよ。まあ…今から俺らが行くところに確実に居るかはわかんないけど…駅前よりかはいる確率が高い」

「え…え…!? ど、どういうことスか!? ち、チドリに…チドリに会える…!?!」

目に見えて狼狽え始めた伊織は狼狽えながらも先程とは違い顔が明るい。どんな顔して会えばいいんだと言った割に会えるかもしれないとなるとそちらに負けるのは伊織の良いところかもしれないし欠点かもしれない。

「あ、でもその前にポテト食べきってからでもいい?」

「も、もちろんっス! ごゆっくり!」

「ゆっくりはダメじゃないかな…ああでも、もしかしたらチドリに拒絶されるかもしれないってことも覚悟しといてね」

そういうと、またガツクリと落ち込み始めた伊織に忙しいな…と感じながらもポテトを食べ進める。Lサイズを食べ終え、席を立った。

「じゃ、行こうか」

朝倉医院の玄関を雑に開けて声もなく中に入る。最早顔パスだが、院内にある来客用チャイムは自分だとわかるように3回ピンポンと鳴らしておく。

「センパイ…ここって…病院…スよね? ここにチドリが…?」

「居る時もあるっただけだよ」

さすがにストレガのアジトを教える訳にもいかない。

なのでふたつの選択肢から消去法でこちらが選ばれただけの事。

特に理由はない。むしろ朝倉先生がうるさいので逢瀬には向いてないかもしれない。

「いらっしやいませーってナギサか。ん? 後ろにいるのは友達か?」

「どうも、イズミさん。後ろに居るのは学校の後輩です」

「ど、どもっス! 伊織順平っス!」

「なるほどな」

イズミさんが（病院に似つかわしくもない挨拶で）出迎えてくれたのでさっさと要件を伝えてチドリが居るか居ないか確かめよう。

「…つか敬語じゃなくても良いって言ってるだろ？ ま、良いけどさ。今日はどうしたんだ？ 薬とか包帯の購入か？ 怪我か？ それともどこか具合が悪いのか？ タカヤ達とメシ食ってる先生呼んでくるか？」

矢継ぎ早に心配されるが首を横に振る。

今日は別に体調が悪いわけでもない。用があるのは自分ではなく伊織だ。

「彼がチドリに会いたって言ってたから連れてきた」

「フーン…あ、彼が件のジュンペーくんか」

少しばかり警戒したような顔で伊織を眺めたイズミさんはしばらくしてどこか納得のいったような顔で頷いた。

伊織のことを知っているのか。

「そういう事なら案内しない訳にはいかないよな！ ほら、こっちだ。来いよ」

「エツ、こんな簡単に会えちゃって良いんすかオレ!？」

ニカツと笑ってから踵を返して着いてこいと歩き出したイズミさんに伊織が困惑した。

いや、自分もこんなにスムーズに行くとは思っていなかったの内で内心驚いている。もう少し警戒されるかと思ったのに。

「パパおかえりー!」

「紗耶、ナギサお兄ちゃんだぞ」

「ほんとー!？」

「おや、ナギサの後ろにいるのは…」

「あ、ホンマや。なんか余計なおマケついとるやんけ」

「センパイ、なんスかコレ…」

「いつもの集まり。だと思っ…気にしたら負けだよ」

部屋に入り、食事中の彼らに出迎えられる。

ドン引きしたかのようなこの濃厚な集団を見た伊織と小声で会話を交わして目を逸らす。自分もある意味この集団の一員だが気にし

たら負けだ。

「じゅ、順平…どうしてここに来たの」

明らかに狼狽えているチドリがわなわなと震えている。これは拒絶されるパターンか？と心配してみていると、伊織が近づいてチドリの肩を優しく掴んだ。

「ぎ、触らないで…！」

「オレ…オレ…チドリに会いたくて…！ それで、ずっとどうすればいいか悩んだけどやっぱ分かんなくて…でもぎ、チドリに会えてやつと分かった。チドリがストレガだろうが人工ペルソナ使いだろうが関係ねえ！ オレはチドリの事が好きだ!!!」

「す、好き…？ …私、順平の敵よ。順平のこと、殺すかもしれないよ」

「関係ねえって言っただろ。チドリはオレのこと殺さねえ。オレもチドリのことを殺させねえ。それでいいじゃんか」

「バカな人…」

なんとというか、すごく置いてけぼりだ。

2人だけの世界というかなんというか。お熱いことで。と言うべきか。拒絶されるかも？ と悩んでいたのがバカバカしくなるくらいだ。こんなことならもつと早くに連れて来ればよかった。

「チドリ、こないだから明らかにイライラしとつたし元気なかつたんや。自傷行為も増えとつたから理由聞きよつたら黙って手斧飛ばしてきよるし、何事かと思うたらなんや痴話喧嘩かいな…しかも相手はお前の仲間のアホと来た…とんでもあらへん…犬も食わへんわ」

こつそりとジンが近寄ってきて耳打ちしてくる。

なんと、チドリも伊織と同じような状況に陥っていたらしい。ある意味お似合いなのかもしれない。

「まさかチドリまでイズミと同じようになるとは思いませんでしたね。彼女はそういうものとは無縁だと。…相手は…かなり喧しいようですがまあ良いでしょう」

幼い紗耶ちゃんを怖がらせないためか、朝倉先生に言われたのか分からないが長い髪を後ろでひとつに結び、刺青を隠すようにちやんと

服を着たタカヤが値踏みするように伊織を見て、少し疲れた顔で無理やり自分を納得させるように頷いた。タカヤもこんなことを無駄だと切り捨てないのは朝倉先生との交流で変わった証なのだろうか。

「おうおう、お熱いこって」

朝倉先生は砂糖を吐きそうな顔で酢豚を食べている。思考が被つてしまったようだ。

「パパ、あの人…お姫さまの王子さま？」

「ああ、そうだよ」

「そうなんだー！」

紗耶ちゃんの無邪気な笑顔が眩しい。が、イズミさんは嘘を教えないでほしい。まだ伊織はチドリの王子様（予定）だ。

とにかく、立ちっぱなしもなんだしと空いていたタカヤの隣に勝手に座る。

「ナギサ、貴方…なにか変わった事はしませんでしたか？」

不意に、そう聞かれて首を傾げる。

変わった事と言われても特に思い当たる節はない。

「いや、無いと思うけど…なんか変？」

「……」

聞き返せば途端に黙るタカヤに不安になる。もしかして、なにか自分のやったことで変な事が起こっているのだろうか。

だが、思い当たる節が全くないのも確かだ。

「忘れてください。こちらの気のせいだったようです」

おもむろに口を開いたタカヤは何かを誤魔化すようだったがわざわざタカヤがこちらに伝えずに誤魔化したことに対し無理やり踏み入る訳にもいかない。

「そっか」

「……」

タカヤは何かを悩むようにこちらを見ているが気にするなと言われたからには気にするわけにもいかない。

というか伊織とチドリの方を見れば2人とも満更でもなさそうなスツキリとした顔で隣同士に座って話をしているようだった。ひと

まず、伊織に関しては解決したと見てもいいのかもしれない。

が、問題はもうすぐ来る満月の日だ。むぎむぎと荒垣くんを殺させる訳にもいかない。が、ここでタカヤに口出しをするのはルール違反というものだ。

そもそも荒垣くんが死んでしまうのは天田くんが母親の仇を取るために荒垣くんを呼び出しててんやわんやしているところに、こちらのアナライズ系のペルソナ使いを始末するつもりだった（この時点で誰かはわかっていなかったために天田くんが山岸を庇うために言った嘘を信じた事故みたいなものだった）タカヤが来て天田くんを狙った銃弾から庇ったせいだ。ただ、アレはチドリが居なかったために対策できず厄介だったからという理由だったはずなのでチドリが2人とともにいる今回は無いと思ってもいいのだろうか。

いやいや、それを考えればここに伊織を連れてきたことをなぜジンもタカヤもさも当然の事のように許容しているんだ。さっきまでは拒絶されなくてよかった〜というお花畑思考だったし自分が言うのもなんだが、おかしくないか？

うだうだもだもだと悩んでいたらタカヤが怪訝そうな顔でこちらを見つめていた。

「どうしたのです」

「いやごめん、俺が言うのもなんだけど、なんでタカヤもジンも伊織を——順平を受け入れてるんだ？俺たち、敵同士なんだよな？」

「そのことですか。我々は彼を受け入れたつもりはありませんよ。こちらの情報を漏らすようなら彼は始末します」

あつさりと始末すると言った冷めたタカヤの目がチドリといちやつく伊織へと向けられる。

「ただ——、これは他言無用ですが。我々は貴方たちの邪魔をする必要がなくなつたのですよ」

「？」

意味が分からない。どんな心境の変化だということなのか。

タカヤ達にとって影時間は消されたら困るものだ。だから、影時間が消える原因になる12体の大型シャドウの討伐を阻止するために

邪魔をしてきたはずだ。

だというのに、その必要がなくなったとはどういうことだというのか。

朝倉先生と共に過ごす中で影時間やペルソナに依存しなくなった？ そんなまさか。流石にそれはないと断言できる。

なら、どんな理由があるというのか。考えられるものとすれば12体の大型シャドウすべてを倒しても影時間は消えないという情報をどこかから手に入れた、という線だが、それはそれで難しいものがあるだろう。あの情報は今のところ幾月しか知らないはずだ。

「……うーん……」

「納得がいきませんか」

「まあ、ね。そうすぐに納得できるわけじゃないよ。それとこれとは話が別」

「そうでしょうね」

そこで会話は止まる。

何となく気まぎらくなって携帯の時計を見ればもう晩御飯前——と
言うより晩御飯の時間だ。

そう言えば、なんでタカヤ達が朝倉先生と食事をとっているんだと思っていたが早めの晩御飯だったのかもしれない。

それより、

「伊織。そこまでにしてまた今度にしないと荒垣くんの作る晩ごは
ん、なくなっちゃおうよ」

置いとはくくれるだろうけど、とは言わない。

晩御飯の時間より遅くなると取っついてもらえる代わりにおかわり分は無いので深夜には夜食を食べる羽目になる。

まあ、その夜食も最近は荒垣くんに作ってもらう事が多くなっている
のでほんとに頭が上がらない。

「つべ、マジすか!?! もうそんな時間かよ!?! じゃあ早く帰らないと
! じゃあなチドリ、これからはまた“いつもの場所”で会おうな
!」

「そうね」

勢いよく立ち上がった伊織に、チドリがいつもと同じように興味無さそうな顔——ではなく少し嬉しそうな顔で見送る。

これが恋する乙女というやつか。

邪魔したことを告げて、朝倉医院から去る。

「センパイに相談して、結果的にチドリとも会えるようになってラツキーってやつ？ これから俺、ブイブイがんばりますから！」

「あんまり調子乗って怪我したらチドリが悲しむだろうからほどほどにね……」

「わかってますつて！ いや〜！ 今日のタルタロス探索は絶好調な予感がしますなあ！」

——ホントにわかってるんだろうか。

いや、これも自分が言えた立場ではないのでこれ以上言うのも野暮というものか。

吐いたため息は薄暗い夕闇の街に溶けていった。

10/3 (土) 夜

伊織はあれから毎日チドリに会っているようで、絶好調になりっぱなし・タルタロスでの活躍も獅子奮迅、といった感じでまさにエースと呼んでも過言ではない活躍をしていた。

が、問題はもうひとつ。

「……」

「……」

美鶴さんだ。

なんだか、すごく余所余所しいというか思いつめているというか、近寄りがたいというか、そっけないというか。とにかくなんだか変なのだ。

しかし、そんな彼女に「どうしたの？」と聞けるほどの度胸は自分にはない。こういう時の美鶴さんは拗らせると大変なのだ。まさにデッドオア処刑。選択を間違えると一発で極寒の地へと招待されることだろう。

「……」

「……………」

さて、なぜ自分がこんなに思い悩んでいるかと言うと、今日の前に美鶴さんがいるからだ。

というか自分が呼び出された。そして双方無言。

美鶴さんは何かを話したすこともなく、こちらも何故呼び出されたのかわからないまま、作戦室のソファで冷や汗をダラダラと流している。

「……………」

美鶴さんが息を吐いてこちらを見た。

「三上、前から…言おうと思っていたのだが」

「う、うん…」

「——私は、きみの友人…しいては共に戦う仲間として足り得ているのだろうか」

「えっ?」

美鶴さんから言われたことに、頭がフリーズする。

「私は桐条の人間だ。今まで隠していたこともある。だから信用できない人間ではないのか、と……………」

不安そうな美鶴さんの顔に、フリーズした頭が高速回転する。

「そんなことはない」

「だが…」

「ない!」

半ば意地になって美鶴さんの不安を払しょくしようとして声を張り上げる。

どうしてそう思ってしまったのか、聞かないといけない。せつかく美鶴さんが勇気をふり絞って話してくれたのだ。

「…どうしてそう思ったのか、聞いてもいい?」

「……………」

美鶴さんは視線を左右に彷徨させた。

なにか、言いづらいことなのだろうか。

「…三上と荒垣が、」

「うん」

「薬を：飲んでいるだろう。暴走したペルソナを抑え込む薬を」
「そうだね」

「7月。あの時お前はペルソナが暴走することはもう絶対はないと
いつていたな。：あの時から、飲んでいたのか」

消え入りそうな声でそう聞いてきた美鶴さんに無言で頷く。真田
くんにも言ったがもうばれてしまったものは隠す必要がない。

「私が、きみを追い込んでしまったのか…？」

見当違いの答えに目を見開く。

美鶴さんが、俺を？ そんなこと、あるはずがない。むしろ美鶴さ
んと食べ歩きに出たり遊んだり、映画を見たりしたおかげでメンタル
を保っている部分もあるのだ。美鶴さんのせいなんてことはひとつ
もない。

「そんなわけないよ」

「…だが、きみは私に制御剤のことなど一言も…」

なるほど、そういうことを美鶴さんに報告しなかったのが先ほどか
らの言動の理由か、と何となく察しがついた。

「ああ、アレ、誰にも言っていないから美鶴さんにとってだけじゃないよ」

「荒垣には言っていたそうじゃないか」

「荒垣君はねー、共犯者だから別」

あはは、と苦笑いする。

荒垣くんは朝倉医院に連れていくうえでそういう情報の開示が必
要だったからしただけだ。正直、必要がないのなら荒垣くんにすら教
えなかったと思う。知られて自分なんかを心配されるのは勿体ない。

「私は…：三上にそこまで頼ってほしいと思うのは己惚れなのか…
!? 相談してほしいと思うのはおかしくないことなのか!？」

「さあ、どうだろう…：おかしくはない、とは思うよ」

ただ自分にそれが向けられると嬉しいとか助かるという気持ち以
前に自分より良い人がいるのではないかと、自分より見てあげるべ
き人がいるんじゃないか、という気持ちが湧くだけで。

「ならー！」

「——でも、それを俺に向けるのは違うんだ」

自分の言葉に美鶴さんが大きく目を見開く。

「俺はどうしようもなくどうしようもない奴だから、心配するだけ無駄だよ。俺なんかより岳羽や山岸、奏子を見てあげた方がいい」

「——っ！」

美鶴さんの顔が怒りの色に染まる。

あ、言う言葉を間違えた、と思った瞬間、美鶴さんが大きく息を吸った。

「私は！ お前の！ 心配をしている!!! それを他人に向けるなどと、お門違いも甚だしい！ 言語道断だ！ ええい、もう我慢ならん！ いいか三上、お前が私の感情の邪魔をするな!!! 私がそう思いたいと思ったからそう思うんだ!!!」

「えっ」

先ほどまで悩んでいたしおらしい姿はどこへやら。暴君もかくやといった様子でぷりぷりと怒り出した。色々暴論な気がするがツッコんだら処刑されそうなので言わない。

「えつと、じゃあもう好きにして…」

「ああ、そうさせてもらう。で、他になにが隠していることは無いのか。無茶はどれくらいする予定なんだ。好きな食べ物はなんだ。好みの女性のタイプも教えてくれ。今後の参考にする」

「聞きたいこと多いね!? あと最後のなに!?!」

「いや。最後の質問は聞かなかったことにし…やはり教えてくれ。詳しく」

頭を抱える。

もしやアイギスにインプットするつもりでは、という疑念が湧くが流石にそんなことはしないだろうしとすぐに振り払う。が、いつもの美鶴さんらしからぬ言葉に困惑しながら質問の答えを並べようとした。

「えーと、隠してることは…今は無いかな…たぶん。ぱつとは思いつかない。無茶は…思いつく限り…? どれくらいってというのが難しいな。好きなものはオクトパシーのたこ焼き。これははつきりと言

える。好みの女性のタイプ…は…ええと、その…いえない…というかよくよく考えるとわかんないかな…」

「なんだ、えらくはつきりしないな…」

「そんな残念そうな顔をしなくてもいいじゃんか…」

「いいだろう。実際残念なのだから」

手厳しい。

はつきり言われてしまうと中々にくるものがある。面と向かって残念だのなんだの言えるのは湊と奏子を除くと荒垣くんしかいなかったので新鮮かもしれない。美鶴さんもどこか遠慮していたところがあつたから、この変化はうれしいにはうれしいが…真っ向から言われると、なんとも。

「…いや、それがきみという人間なんだろう。実際のところ、きみは私が思うほどの人間ではないのかもしれない。理想を押し付けていただけに過ぎない。『完璧超人』などどこにもいるはずがないんだ」湊とか意外と完璧超人に近いけれど湊は湊でいろいろ悩んでいるし、美鶴さんも完璧超人なんてこともなく。というか美鶴さんが自分の事を何だと思っていたのかすごく気になる。

とてもとても気になる、が聞くのはやめておこう。絶対口クな答えが返ってこない。過剰に評価されていたと知った日にはあまりのショックで死んでしまうかもしれない。死なないけど。

「まあ…俺は実際残念だし情けないし兄としての威厳はないしすぐ落ち込むし病気がちだしすぐ熱だすしすぐ怪我するし信用ないし首にひもつけてた方が良くいか言われることもあるけどさ…」

「例が多いな。自覚はあるのか」

「でもさあ、俺だって男だし、男にはやらなきゃいけないって時があるじゃん？」

目元を抑えながらそう言うと、美鶴さんが苦笑する。

「些かきみはそれが多すぎる。たまには他人を頼って見たらどうなんだ」

「頼りまくってこれなんだよ…は…荒垣くんや湊にも言われるけど、既に頼りまくってるのにさらに頼めと申しますですかお嬢様…」

「お嬢様はやめてくれ」

「ごめん。というかそれを言うなら美鶴さんだつて悩みとかないの？」

延々と愚痴になりそうだったので話を交える。こちらも言ったんだから美鶴さんの悩みや愚痴だつて聞いてもいいはずだ。聞く権利があるはず…たぶん。

「悩み…悩みか…そうだな、私には定められた『許嫁』がいるのだが…近く提携する相手企業の新任社長…ふた周りも歳の離れた、大人の男性だ」

「えっ」

「ふふ、驚いただろう…？ ……その…実は、私のあまり好かんタイプ…でな…」

驚いたのは許嫁がいるということではない。許嫁がいること自体は知っていたが、ふた周りも年上だとは思わなかった。武治さんは一体何を考えて…と思ったが政略結婚とはそう言うものだと思つちを収める。自分が口出ししていい問題ではない。が、美鶴さんが好かないタイプと聞いてその気持ち揺らぐ。

「…私に淑女たれ、と。いずれ夫になる自分の後ろを黙つてついて来いという言動が多く、ウェイターなどにも横暴。性格もお世辞にも良いとは言えない。しかしそれとは別に、望まれば私は理想通りにしてみせようとは思っている。だが…」

「なんだか納得がいかない？」

こくり、と小さく美鶴さんは迷うように頷いた。

「…わかつているんだ。地位も権力も才能もある彼と結婚することが桐条グループにとつても、誰にとつても最良の選択だと。お父様やお母様も通つて来られた道だからな、覚悟はしている」

「美鶴さんはそれでいいの？」

「わからない。迷っている自分がいるのは確かだ。だが、縁談を断つたからといって…その先のこととはどうしろと言うんだ」

確かに、美鶴さんは桐条の娘として、日本有数のグループの娘として育てられてきた。

そして、許嫁もいるし将来も決まっているレールの敷かれた道の上に立っている。いまさらそのレールを壊して好きな道を歩けばいい、というのには厳しいものがあるだろう。けれど。

「俺は、美鶴さんがどんな選択をしても応援するよ。だってそれが、友だちだろ？ だから、美鶴さんの心のままに。嫌なことは嫌って言うて抗って見たら意外とうまくいくかもよ？」

俺は美鶴さんに悔いのない選択をしてほしい。

たとえこの先、時間を巻き戻すことになってこの会話がなかったことになったとしても。

自分が、死んだとしても。

「フ、友だちか。そうだな。私ときみは友だちだ。…ありがとう、少し気が紛れたよ」

「お役に立てたようでありにより」

笑い合う。

やっぱり、この距離感がいい。

少し近づいた気がしないでもないが、それは親友とかそういう感じの距離なんだろう。

「あ、そうだ。すっかり渡しそびれていたんだけどこの前珠？ 瑠市に行った時のお土産。渡そうと思って」

「これは…？」

「それは開けてからのお楽しみってことで」

ポケットからラップピングされた袋を出して手渡す。

不思議そうな顔をした美鶴さんが中身を取り出した。ちりん、と鈴の音がする。

「これは…」

「金の招き猫ストラップだよ」

「その、独特のセンスを…持つてるんだな…」

サムズアップしてみたが、美鶴さんは金の招き猫ストラップをもつて苦笑している。

「…だが、きみからの贈り物だ。大事にしよう」

「ありがとう」

ストラップを再び袋にしまった美鶴さんは笑みを真剣な表情に戻した。

「明日は満月の日だな。準備はできているか？」

「もちろん。体調バツチリ戦力バツチリって感じだよ。みんなの中だと特に伊織が勢い良いね」

「そうか」

「まあ細かいところは湊と奏子に訊いた方が良いんじゃないかな。俺は待機も多かつたし」

今回は熱を出したり待機だつたりしてあまりタルタロスの探索には参加していない。

正直、一人で別行動しても良かったがそれだと湊と奏子の視線が厳しくなるのは目に見えているし当然許されることでもないだろう。

鍛錬しようと思魔の巣に潜るのも、誘き寄せる悪魔がこちらに目をつけなければ自分の場合は入る事すらできないので確実な方法ではない。

結局、ペイルライダー戦以降自分はまだ強くならない気がする。ただ、その分自分以外のメンバーが強化されているようなので今回は自分がいなくても大丈夫だろう。

タカヤは邪魔しないと云ったが天田くんと荒垣くんが心配なのでこっそり見守ることにしようときめた。

10月4日（日） 影時間

「あ……あ……そん、な……」

尻もちをついた天田の顔は驚愕に見開かれていた。

服についた返り血と、地面に広がってゆく血を呆然と見つめる。

ガチガチと歯を鳴らし、目の前に広がる光景を認識できていないようだった。

「な……んで……お前が……僕を庇ったんだよ……!」

天田の呟きは影時間の路地裏に静かに落ちていった。

スワンプマン (10/4〜10/9)

10月4日(日) 影時間

「目標を発見しました。これは…巖戸台の駅前広場です!」

「これで10体目か…:12体まであと少しだね。1体ずつ慎重にいくとしよう」

作戦室で大型シャドウの居場所を探知した風花の言葉に幾月が頷いた。

「…って、1体ずつとは限らないですよ。ハハ、ウソですけどね」

幾月の言葉に対して冗談めかして笑い飛ばしたゆかりに、風花がすぐに驚いた顔をして口を開いた。

「…すごい、ゆかりちゃん。反応、2つあります」

「!? え、マジ? 当たんなくていい、そんなの…」

「また2体同時かあ…:今度はどんなのなんだろ…!」

ゆかりの脳裏には8月の大型シャドウ戦の苦い記憶がよみがえっているのだろう。

ドン引きしたようなゆかりと興味津々な奏子は正反対の反応を返した。

その2人を気にするでもなく、明彦はキョロキョロと周りを見回す。

「…:三上とシンジはどうした?」

「荒垣さんと三上先輩でしたら、あとから合流するって、さつき連絡が。それぞれ理由は聞いてませんけど…」

「…後から? 相変わらず、勝手な奴らだな。…だがなにか、嫌な予感がするのは気のせいか? あの2人が2人ともいないというのはなんとかな…:前回の満月の夜を思い出す」

「杞憂じゃないんすか? 後から来るって言ってるし」

「まあね、この前の順平も集合に来なかったからね」

心配そうな明彦を励ますように順平が言った言葉にゆかりがからかうように被せた。

途端に、順平の顔が引き攣る。

「あ、あれは仕方ないだろ？ もう心配ねえって言ってんの！」

そんな順平を無視してゆかりは先ほどの明彦のように部屋を見回した。

「あれ、天田君も来てないし…ほら、順平呼んできて。この前の罰ね、これ」

「罰…？ うわ、マジうぜえ…ハア、ま、ガキは寝てる時間だしな」

部屋へ呼びに行った順平を皆は視線だけで見送る。

すこしして完全に部屋の外へ出て行ったのを確認した美鶴が口を開いた。

「今回は、敵2体だ。とにかく、現場に急ごう」

皆一様に頷くが湊だけは明彦の言ったように、言いようのない嫌な予感を抱いていた。

この状況は『2回目』とまったく同じ流れだと。

巖戸台駅前

「ワンワン！」

コロマルが一番乗りし、吼える。

その後ろから追いついた特別課外活動部の面々は、駅から響く轟音と機械音が動くような音を耳に入れる。

「うわ、居る！ この辺、いつも学校行くのに使うし、暴れられると、マジ困るんだけど…」

「使えなくなったら遠回りしなきゃだもんね…」

「なんだか、私たちを待ってるみたい…」

その話を聞き流しながら、美鶴は先ほどから気になったことを順平に訊くように口に出した。

「…ところで、天田はどうした？」

「…あ、なんか、部屋に居なかったんすよ。急いで呼びに行ったんすけど。で、メモ帳に『今日はいけません』って。いやーナイーブなお年頃なんすかね！」

「三上はともかくあの2人が…？ つ!!」

順平の返答に少しの間思案するように視線を下げた明彦だったが、やがて何かに気がついたようにハツとして顔を上げる。

「まさか…」

「どうした明彦？」

目を見開いた明彦に、美鶴が怪訝そうに聞き返す。

「美鶴、今日の日付は…10月4日か…!」

「ああ、そうだが。…まさか、」

10月4日という日付になにか心当たりがあるのか、美鶴と明彦は2人して青い顔になる。

そして、焦る様に明彦が山岸に向かって叫んだ。

「山岸、シンジと天田の位置を探ってくれ!」

「え…？ わ、わかりました…!」

「あの、あのふたりって何かあったんですか？」

その尋常ではない様子にゆかりが尋ねる。が、美鶴も明彦も顔を悲痛そうに歪め見合わせる。そして口を開いたのは美鶴だった。

「…二年前、街に出たイレギュラーシャドウを討ちに行った時の事だ。当時、ペルソナを得たばかりの荒垣に力の暴走が起きた」

「暴走…」

ゆかりが以前の満月の夜の暴走を思い出して顔を曇らせた。あの暴走は誰か巻き込まれていれば確かに死人が出ていたレベルのものだ。

「…その時に、運悪くひとりだけ犠牲者が出てしまった」

「それが、天田の母親なんだ」

美鶴の言葉を補完するように明彦がそう告げた瞬間、ふたりの居場所を探知していた山岸が顔を勢いよくあげて声を張り上げた。

「反応がありました! ふたりは一緒にいます! それに…三上先輩もそこに…!! 場所は、ポートアイランド駅の裏路地です!」

「くっ…!」

その言葉に駆けだそうとした真田の目の前に、大型シャドウが2体降りてくる。

「すぐに片付けるぞ…！ 誤るなよシンジ…天田…！」
その声に、湊は震える手で召喚器を手にとった。

薄暗いそこで、天田は槍を持ってひとり道に背を向けて立っていた。

それは、誰かを待つような後ろ姿だった。

そこに、影が差す。

「来て、くれましたね。…2人とも作戦を放ってまで来てる訳だから、分かっているんだよね」

「ごめん…俺はなんで呼ばれたのかわかんない」

優希はひとり困惑していた。

こっそり影から見守るだけにしようと思っていたのに、夜になって急に天田に呼び出されたのだ。なぜ自分が、といったげな優希に、天田は心底忌々しい、といった表情を向ける。

「わからないなら説明してあげますよ。2年前の今日。あの日、僕の母さんはここで死んだ。死因は事故ってなってるけど、あれは事故なんかじゃない…僕は見ていた…母さんは殺されたんだ！ お前らが殺したんだ…！」
「っ!？」

憎悪を含んだその叫びと表情は、荒垣と優希に向けられていた。

ただ、それを向けられたふたりは困惑し——特に優希の瞳はぐらぐらと揺れていた。

「…さて、俺はわかる。だが、こいつも…三上もだと…？」

「……いいことなんて、ひとつもなかった。生きてくなんて辛いだけだった。まわりだってそういう扱いさ。どこに行ったって、『可哀想』って」

荒垣の困惑を無視し、天田は拳を握り締め、親指と人差し指をこすり合わせる。半ばそれは癖のようになっていいる動きだった。

「死んじやおうって思ったときもあつたけど、このまま母さんに会う

ことなんてできない。だから決めたんだ！ 仇を討つまで生きようって…！」

そこで、天田が槍を構えてふたりへと向けた。

「はじめは、シャドウだと思っていた。でも、違ったんだ。…この前、はつきりと思い出したよ。お前達のペルソナが暴れる姿を見て…ッ！ ああやって…殺したんだな…!? 母さんのことも…っ…絶対許さない!!!」

それは血を吐くような叫びだった。

涙をこぼし、しかし拭うこともしない天田が初めて顔を上げて息を大きく吸う。

「—だから、僕がお前らを殺してやる…！」

「ペルソナ！」

青い光と共に、アイギスが「パラディオン」を呼び出して柵を纏う乙女の像のような大型シャドウストレンジス剛毅の攻撃を防御する。

「ポリデュークス！」【ソニックパンチ】

明彦が駆けながらポリデュークスを召喚し、肉迫するもそれはトロイの木馬のような金色の薄い像の見た目をした運命フォーチュンに阻まれる。

「チッ！」

【アギラオ】

その運命フォーチュンに順平の「ヘルメス」のアギラオが命中し、跳ねたままの勢いでフォーチュンは地面へと投げ出された。

「よっしやあ！」

「っ、これで！」

ゆかりも負けじと召喚器を額に当て、引き金を引く。が、その隙を狙って剛毅はその身に纏う花びらでゆかりをふつとばした。

「きやあ！」

「ゆかりちゃん!？」

「召喚の隙を!？」

「岳羽!？」

吹き飛ばされたゆかりを、それぞれが心配する。が勢いよく吹き飛ばされたゆかりは頭を打って気絶しているようでピクリとも動かない。

「大丈夫でありますか!?!」

「おい、ゆかりツチ!」

「クウーン…」

それを見た湊は召喚器をこめかみに当て、引き金を引く。

「『ビシヤモンテン』!」【『ディアラハン』】

現れたのは四天王の一人毘沙門天。塔のアルカナに属するペルソナだ。

そんな四天王の一人が手を前に突き出し癒しの光をゆかりへと降らせ、傷を癒す。

この戦闘中、意識は回復しないだろうが受けた傷は治せただろう。と湊は息を吐いた。

地面へと投げ出された運命が体勢を立て直し、天を仰げばどこからか赤いカーペットが降りてきて地面に敷かれ、その上にドーン!と巨大なルーレットが落ちてきた。

『な、なにこれ!? ルーレット…!?!』

そのルーレットに運命が勢いよく飛び乗り、くるくると回り出す。

『つ!! これは…! ダメです! みんな避けて!!!』

風花が咄嗟に叫ぶも間に合わない。

止まったマスは、火花のようなマークが書いてあった。

瞬間、光が収縮し、巨大な爆発を起こした。

「みんな、無事か!?!」

土煙が晴れ、美鶴が顔を上げれば、そこには死屍累々といった光景が広がっていた。

運よくアイギスに守られた美鶴と明彦、湊だけがそこに立っていた。

「奏子…ッ! ペルソナツ…!」

タナトスが吼える。刀を構え、高速で飛来し運命を斬りつけようとするも、それを剛毅が邪魔をした。

「チイツー！」

湊は舌打ちした。

早くいかないと手遅れになってしまう。早くしないと——そんな焦りが湊の中に生まれていた。

「……仲間と離れたのも、薬で力を抑えたのも、要は忘れたかったからさ。けど、ダメだった。身体が、忘れねえんだ。気がつけばここに来ちまう。見たくもねえ場所なのにな」

「今更……ッ！ そんなこと言っても……！」

荒垣くんの言葉に、天田くんの持つ槍の穂先がわずかにぐらついた。

動揺しているんだろう。自分にはよくわからないけれど、きつと。

「わかってる。けど、俺は」

「——ごめんね。それはできない相談だ」

その動揺した瞬間を見計らって荒垣くんの前に割り込んで天田くんの持つ槍を叩き落とす。

自分はすぐ死んでやり直すかとか命で救えるなら命を使うとなるタイプだが、天田くんに死ぬといわれてはいそうですかと言えるほどではない。それとこれとは違う。

どうせ殺すなら、自分が自分でなくなってしまうって誰かを殺しかねないときにしてほしいものだ。

「なにを……ッ!？」

「荒垣くんはともかく。俺はね、死ぬときは誰かの為って決めてるんだ。でもこれは、誰かの為に入らない。だから、駄目だ」

「っ！」

「俺は狡いから、俺がいまここで無意味に死ぬより、俺が生きて一生きみに恨まれ続ける方を選ぶよ」

更に足で叩き落とした天田くんの槍を踏みつけた。へし折ってもいいんだろうけれど、流石に金属製のこれは無理そうなのでやめてお

く。

「そんなの…勝手すぎる…！ 母さんの仇を取ることは無意味だって言いたいのかよ…！」

そう叫ぶ天田くんに対し、心はひどく凧いでいた。なぜだろうか。「勝手に結構。復讐されて死ぬことは俺にとっては無意味だからね。けれどきみのその行為はきつときみにとって無意味じゃないよ。まあでも、天田くんも俺の守る範囲に相変わらず入ってることは意識しておいてほしいな。別に、こんなことされても天田くんのこと嫌いじゃないからさ」

「意味…わからない…意味わかんないよ！ なんで殺そうとしてきた相手を嫌いじゃないとか守れるとか言うんだよ!!! お前、頭おかしいよ！」

「え？ だって復讐は正当な権利だと思うから、かな？ 別に家族を殺されて怒る気持ちはよくわかるし…俺だって湊と奏子を殺されたら同じことするかもしれないしね」

そう言えば、天田くんは訳が分からないという顔で半分パニックになりながら服の下の方を掴みかかってきた。

「だったら…！ だったらなんで殺されてくれないんだよ…！ 僕に、復讐させてくれないんだよ!!!」

「それとこれとは話が別、だからかな。権利があってもそれをしていいわけじゃない。それが易々と許される訳でもない。それに、俺ら殺したら天田くんも自殺でもするつもりだったんじゃないの？」

「!?!」

そう。それとこれとは別だ。

復讐は誰にとつてもする権利がある。けれど、それをして許されるかどうかは別だ。

自分の記憶にないことなので弁明も何もできないが、自分はそうだといわれてむぎむぎ殺されるほど被殺願望があるわけではない。意味もなく自殺したいわけじゃない。

自分は、どうせ死ぬ運命なら意味のある死を迎えたいのだ。だから、自分はわがままだ。誰かの役に立って死にたいなどと。誰かの代

わりに死にたいなどと。

「な、んで…それを」

「ひみつ。でもやめといた方が良いでしょう。きみにはまだ道があるんだから。死ぬ以外に選べる道があるのにきみは死に逃げるの？」

「僕に殺されたくないからそんなこと言うのか!? そんな言い訳聞きたくないよ!」

「違うって。天田くんはさ、復讐して自殺する以外の道もあるんだって。んー…少し難しいかな…」

良いたとえが浮かんでこない。自分の事に例えても難しいだろうし、この路線はやめよう。

「じゃあさ、天田くんは責任を取る方法が死だと思ってるのかな」

「え…?」

「だって、お母さんを故意か不可抗力かわかんないけど殺した荒垣くんや俺を殺したいし、その後死ぬんでしょ? なら、死に対する報いは死なのかなって思ってたさ」

「そ、それは…」

明らかにうろたえ始めた天田くんにもう一押しする。

「天田くんはさ、知らないし優しいんだね。酷いやつはさ、どんなに苦しくても生かすんだ。死ぬより苦しい事って生きてると沢山あるんだ。だから、それから解放してくれる天田くんは、優しいね」

「ぼ…僕が…お前らに…やさしい…!? そ、そんな…」

「荒垣くんもさ、ちょっと前までは制御剤の副作用で静かに死のうとしてたんだよ。だから、そんな苦しみからさっさと解放してあげるなんて天田くんはやさしいね」

「ど、どういうことだよ…ホントなの!? 勝手に死んじゃうって言うのか!? 僕が…なにもしなくても…勝手に…! そんなの有りかよ!」

よたよたと離れた天田くんの見開いた目が荒垣くんへ向くと、荒垣くんはバツが悪そうに顔を逸らした。

「それなら僕は…今まで何を…!」

「はは、絶望させちゃったみたいでごめんね! きみのやってること

が無駄って言っちゃってさあ！」

「おい三上……！」

へらりと見下すように薄く笑えば怒った様子の荒垣くんは肩を掴まれて天田くんから引き離される。けど、このままだと上手くいくはずがない。

だから二度と起き上がらないようにお前のやっていることは無駄だと、意味のない事だと刻みつけようかと思っただけだ。

「てめえ……さつきからどこがおかしいんじゃないかねえか。らしくねえ……！」

「どこが？ 俺はなんともないよ。いつも通りだ」

「いいや、変だ。いつものお前は天田に対してだろうが誰だろうがこんなことあしねえし言わねえ……ッ！」

——そこまで言われて、ふと我に返る。

いま、自分はなんと考えた？

どんな顔で笑っていた？

慌てて、口を押える。気持ち悪い。

「大丈夫か？」

聞かれても、答えられない。

気持ち悪さの中で、ぞわりと殺気のような何かを感じて不意に顔を上げると、風を切る音が聞こえて天田くんは触手のようなものが鞭のようにしなって飛んでくるのが見えた。

「っ、だめだー！」

身体が、勝手に動く。荒垣くんを振り払い、天田くんを突き飛ばす。

左腕が、ちぎれて飛んでいったのが見えた。

わき腹が抉れて、灼熱が駆け巡った。

足が、地面に縫い付けられて、首に痛みが走って、血が噴き出すのが見えて、血がせりあがってきて、

「ああ、よかった」

——ぶちりと意識が途切れた。

「あ……あ……そん、な……」

尻もちをついた天田の顔は驚愕に見開かれていた。

服についた返り血と、地面に広がってゆく血を呆然と見つめる。

ガチガチと歯を鳴らし、目の前に広がる光景を認識できていないようだった。

「な……んで……お前が……僕を庇ったんだよ……！　タダで……死にたくないんじや、なかったのかよ……！」

視線の先には、左腕が吹き飛び、血みどろになった優希が血だまりに沈んでいた。おおよそ五体満足とは言えないその身体からは既に命の灯が消えているように見える。

「天田……三上……！」

荒垣は何が起こったのかわからなかった。

突然優希が駆けだしたかと思ったら天田を突き飛ばした。瞬間、黒い何かによって片腕が弾け飛び、血を吹き出して倒れたのだ。

シヨックを受けて、呆然と既に死体となった優希の身体を見つめるだけの天田を咄嗟に荒垣は抱きしめて庇うように後ろを見た。

「なんだ……どこのどいつだ……!?!」

暗闇から現れたのは、影。

ギチギチと音を立てて現れたそれはひどく歪な形をしていた。

「ア、アア……アアアア……アアアアアア……」

呻き声なのか、叫び声なのか、歌声なのか。荒垣には判別がつかなかったが、その口から漏れる声は明らかに人間のものではない。

「テケ……リ……テケ……リ……リ……」

そしてその見た目は醜悪のひと言に尽きるものだった。黒いスライムのような体に牙や目玉、手足など人間のパーツとシャドウに共通する複数の仮面が乱雑に散りばめられている。

「リ、リ、リリリリリ、リイイイ……！」

シャドウにしても醜悪すぎるそれは発声はするものの、人間の言葉のようなものを喋ってはいない。

が、明らかにこちらに敵意のようなものを向けているのを荒垣はしっかりと感じ取った。

「天田、動けるか?! おい、天田!」

「よかった、ってなんだよ…なんで…どうして、僕を見て安心したみたい…笑って…」

逃がそうと天田を揺するも、その虚ろな視線は血だまりに沈む死体に向けられている。とてもじゃないが動けそうにない。片手で懷をまさぐる。

「ちっ、」

召喚器を構え、カストールを召喚しようとした荒垣の肩を灼熱が貫いた。

「がああッ!」

激痛に召喚器を取り落とす。

天田までは貫通していないことを確認して、更に庇うように抱きしめる。

肩は、恐らく先ほどの触手で貫かれたのだろうと荒垣は咄嗟に判断する。が、召喚器を取り落とし、今少しでも動けば触手が飛んできそうなこの状態に、八方ふさがりか、と諦める様に荒垣は目を閉じ——
ようとして天田の息を飲む声で再び目を開いた。

「ふ、ふふふ…あはははははは、」

聞こえるのは、笑い声。

聞き覚えのある——否、先ほどまで聞いていた声だ。

しかしそれは、聞こえるはずのない声で。

——どぶり、と水音がした。

ぞわぞわと荒垣は背筋が粟立つのを感じた。

いいようのない恐怖感に身体が震える。先ほどのシャドウを視野に入れたときよりも恐怖している。

『あれ』は、なんだ。

血だまりの中からまるで映像を逆再生するかのような歪な動作で五体満足な人影が笑いなから立ち上がる。

その姿にブレるようなノイズが一瞬走り、ごぼごぼと影から黒い泥のようなものが湧き出した。

「とつても、おいしそう」

無邪気な声で。
歌うような声で。
笑うような声で。

月のように濃い金色の目をした『それ』は告げる。黒衣の『誰か』は
眩く。

荒垣は、その姿を知っている。けれど、知らない。あんな姿は、知
らない。

鎖の音が聞こえ、静かに影からボロ布と鎖の化け物が現れた。

あれは、前回の満月の時に見たペルソナだ、と荒垣は直感的にそう
判断した。いや、いまの荒垣にとつてはもはやあれがペルソナなどと
言う存在かどうかすらわからなくなっていた。

今見ている光景は、幻ではないかと、悪い夢ではないかと思いたい
くらいだ。しかし、肩の痛みがそれを許さない。

「いた だ き ま す」

迫るシャドウもどきの触手が、届く前に全て腐り落ちる中『それ』は
幼子のように嗤った。

「ッ!!!」

咆哮。

呼び出されたペルソナは大口を開けてシャドウに跳びかかり、がつ
がつとそれを喰らい始めた。悲鳴のようなものを上げるシャドウは
抵抗しようとする前に、それをしようとして動かした部位から腐りおちて
いく。

否、腐るという表現は近くて遠い。『死んでいく』といった方が正し
いのかも知れないと荒垣はその光景を見て思った。

最後には、シャドウを影に沈める様に押し込んだペルソナが同じよ

うにそのまま影へと沈み込んだことにより、静かになる。

立っているのは、感情のない金色の目をした――

「――三上、」

違う、と荒垣はその名前を呼んですぐに否定した。

『あれ』は三上優希ではないと。だが、

「三上――」

荒垣はその名前を呼び続けた。

「帰ってこい!!!」

声を張り上げた。

「てめえの弟と妹を――兄妹を置いてくつもりか!!!! 生きて、守るんだろツ!!!」

その声に、姿がノイズがかったかのようにブレた。感情がない瞳が、そこで初めて見開かれた。

「……いきり……まも……る……?」

うわ言のように呟いて、ちかちかと目の色が灰色混じりになる。

そして、傾いて地面へと倒れた。

コートのようにまとわりついていた黒衣は霧散し、服は血まみれのベストとブラウスに戻っている。

左腕が千切れ、弾け飛んだ方向を荒垣が改めて確認するとそこにはなにもなく、ただ血だまりだけが広がっていた。

「どこからが夢か幻か、わかったもんじゃねえな……」

ぱちりと目を開く。

鎖のついた両開きの扉がひとつだけの白い部屋。そこで自分は寝転がっていた。

自分はどうしてここにいるのだろうか、と起き上がって記憶を遡ってみれば、天田くんを庇って左腕とわき腹が吹き飛んで天田くんの無事を確認したところまでは覚えていた。

しかし両腕はちゃんと動かしつついている。手を握って開いて動きを確かめるもちゃんと動くし痛みもない。わき腹も同じだ。

死んでしまつて天国に来たのだろうか、と思うもそんなことは無
く。天国にしてはやけに：子供っぽい。

ぱつと見、子供部屋のような感じがする。

積み木が落ちていたり、壁には落書きのような絵が貼つてあつた
り、ぬいぐるみが並べてあつたり。

立ち上がつて歩き回る。

部屋の端のゴミ箱を覗くと、中には使用済みの大量の注射器が捨て
てあり、まさかヤク中の部屋か!? と身構えたが他に血の滲んだ包帯
や点滴のパックも捨ててあつて杞憂だつた。明らかにこのゴミ箱の
中身だけこの部屋には似つかわしくない。

あらかた部屋を探索し終え、目の前にそびえる巨大な両開きの扉に
近寄る。

その扉は鎖と鍵で施錠がされており、取っ手を掴んで押したり引い
たりしてみたが簡単には開きそうになかつた。

ため息を吐いて一旦扉からは離れる。

なんだかあまりあの扉には近づきたくない。近づくと気持ち悪く
なる。

おもむろに壁の絵の方に近寄り、一枚剥がして手に取つた。

『さづろちい』という文字が一緒に書かれた赤い髪の女の人の絵だ。
白くて長い服が描かれているので医者だろうか。

文字の解読が全くできないのでこの部屋の謎を解いて脱出するの
は無理そうだ。

『さづろちい』

何かの暗号だつたりしないだろうか。

こう、ゲームでよくある暗証番号をいれたらあの扉が開くとかそう
いう。

……そもそも入力する場所がないのでダメだつた。

もう一枚、絵を見る。縞々の服の子供と患者着を着た子供とネズミ
とクマが描いてあつた。書いてある文字は『ともだき』。だき？

なぜ突然訛つたんだろうか。いや、これは子供が描いたと仮定すれ
ば、『さ』は『ち』なのではないのだろうか。

つまり『ともだち』と。なるほど。じゃあ先ほどの『ぎづろちい』は、『ちづろちい』？

うーん、わからない。お手上げ侍だ。

というかこんなところで謎解きしている場合じゃないのは分かっているのだ。けれど一向に出られる気配がない。

穴でも掘ってみるか、と思うも、召喚器も武器もなく。うぬぬと唸ってペルソナを召喚しようにも誰も応えてはくれない。

八方ふさがりで再び床に寝転がる。

そして横を向けば、ゼンマイ仕掛けのネコかネズミかわからない黄色い生き物のおもちやとテイディアがこんにちはと挨拶してくる。嘘だ。彼らは喋らない。

その横にはフェザーマンのソフビ人形が転がっているし車の玩具も落ちている。

この部屋の主が男の子なのか女の子なのかわからない。なんとうか、とにかくあるだけのおもちやを適当に集めました、といった感じだ。

不意に、部屋が揺れたような気がして上半身を起こす。

最初の内はわずかな揺れだったその振動は、徐々に大きくなっていき、発信源も分かる様になってくる。

——あの扉だ。

あれを、誰かが外から叩いている。否、破ろうとしている。

ぞわりと例えようのない恐怖感が迫る。

ダメだ。

何だかよくわからないが、あの扉を開けてこちらに入り込まれてはいけない。そんな危機感が鎌首をもたげる。

けれど、今の自分でできることは何も無い。ただ、部屋の隅で扉が破られないように神様仏様大魔王様とガタガタ震えて祈ることしかできない。目をつぶる。怖い。気持ち悪い。

バキリ、と音がして扉が僅かに開く。薄目を開けてそれを見て、後悔した。

鎖がジャラジャラと音を立てながら扉がそれ以上開かないように

しているがその隙間から沢山の黒い手がこちらへその手を伸ばしているのだ。なんだこのホラーは。

「こっちにおいで…こっちにおいで…こっちにおいで…」

聞こえてくる声にさらに身を縮こまらせる。あれに自分を捕まっ
てはいけないと本能が呼びかけてきた。

「…ひとつに…ひとつに…これでひとつに…あとすこし…あとすこし…」

一体自分が何をしたと言うのか。

どうしてこんな怖い目に遭わなければいけないんだとヤケになっ
て憤る。

それでもこんな男か女か子供か大人かわからないような無機質な
声で直接的な欲求を向けられると、怖いものは怖いので後ろにじりじ
りと下がる。悪魔と違って人間っぽさとか俗っぽさが無くて怖
いのだ。純粹な欲求なのは分かるのだが純粹過ぎて無機質というか。
そんな感じがする。

と、下がった自分を追うように手も細長く伸びてくる。ドアの向こ
うのまっくろくろすけはゴム人間か。

自分は薬キメてるし病気持ちだしおいしくないなので帰ってくれ、と
願うも全く帰る様子は無いし手は更に本数を増やして伸びてくるし
でたまったものではない。

正直、これが夢ならもうそろそろ醒めてほしい。

黒い手が、空を搔いた。あと少しで触れられそうだったので壁にへ
ばりつくようにして離れる。

離れた瞬間、扉の向こうの存在の質量が増えたような気がしてぞわ
りと背を震わせた。もしかして、自己増殖型のアメーバみたいな生物
なんだろうか。いや、これを生物と呼んでいいのかよく分からないが
確かに増えたことには変わりなさそうで、縋ってくる手の本数が増え
た。ガッデム。

武器か召喚器かどちらかあれば逃げずになんとかできるのに、と思
いながらも無いものは無いので諦めてじりじりと手から距離をとる。
そしてちらりと扉の隙間から下手人を覗き見る。

——後悔した。見なきや良かった。

大きな赤い、瞳も瞳孔もない丸いだけの目と剥き出しの歯が笑みを浮かべてこちらを探すように隙間から覗いている。

それと、目が合った。

ハッキリ言つてキモい。とてもキモい。どうせ出てくるならもう少し見れる見た目の存在が良かった。こんなまつくろくろすけは嫌だ。全くもって嫌だ。

というかもうこれで確定したが確実に扉の向こうのアレはヤバイ存在だ。

ヨダレ垂らして「オレ…ニンゲン…クウ…」とか言うタイプの化け物だ。実際はもつと流暢に喋っているけれども。

こちらを見つめた手の主がはつきりとこちらの場所を確認したのか、手のこちらを追う動きが正確になってくる。

勘弁してくれ、とげんりしながら部屋の端を手とつかず離れずの距離で回る。

この部屋に出口がないので手の主が諦めるまで耐久戦になるのが悔しいが仕方ない。

どれだけこの微妙な攻防を繰り広げたのだろうか。

時間の感覚がないのでもしかしたらまだ3分も経っていないのかもしれないが、とても長い時間この攻防を繰り返していたような気がする。

その攻防が終わったのは、自分がふと気を弛めたせいだった。

一瞬の油断。それをあの化け物は逃さなかった。

「ひとつに…:…ひとつに…:…こつちに…:…こつちに…」

足首を掴まれて思わず悲鳴を上げそうになる。

細い手はその見た目に反して凄まじい力でこちらを転けさせるとずるずると手繰り寄せていく。身体中に手がまとわりついて、振り払おうともがいてももがけばもがくほどまとわりついてきて離れないし、なにか力を吸い取られているような気がして段々こちらの動きが鈍る。

笑みの表情のまま大口を開けた化け物の顔にだんだんと近づく。

アレは自分を食べるようだ、と感じながらも動くほどの力が残されておらずただぼんやりとそれを見るだけだ。

そして遂に扉の前まで引き摺られもう終わりかと覚悟し——
ガッ！

「……………」

引つかかった。

それはもう見事に。

そもそも扉自体はとても大きい、そこに開いた隙間が人が通れるサイズの隙間じゃないので普通に扉に引つかかった。

ガッ！

もう一度引き込もうとしたのか力を込めてこちらを引っ張るも、通らないものは通らない。

ざまあみろ！ と笑いたいところだがそんな気力も無く。

諦めたようにまとわりついていた手が離れる。

そして静かになった。

ガァン!!!

…気がしたただけだった。

慌てて這うように扉から離れる。

轟音を立てて、扉の向こうの化け物が、扉を再びこじ開けようと体当たりを繰り返している。

ガァン!!!

扉と鎖が、悲鳴を立てる様に軋む。

ガァン!!!

パラパラと、部屋にヒビが入り壁の欠片が落ちてくる。もうこの部屋自体が限界だ。

ぎゅつと目をつぶる。

——ごぼごぼと、水音が聞こえた。

「あ、ああああ、ああああああ——ツ!!!」

悲鳴を上げて起きる。が、すぐに自らの身体を誰かが抑えた。焦点の合わない視界でそれが誰か思い出そうとする。

「三上ッ！ 落ち着け！ 大丈夫だ、大丈夫だ！」

「……あ、真田、くん……」

しつかり焦点が合い、真田くんだと認識して肩で息を吸う。

ここは白い部屋じゃない。黒い泥の中じゃない。気持ち悪い、あの化け物の腹の中でもない。

寮の自室だ。

夢、だったのだろうか。

たぶん、おそらく、夢だったのだろう。天田さんと話をして、それで。どうなったんだっけ、と左腕を見る。

ちゃんについていて動いている。

そうだ、よくわからないやつに襲われたんだっけ、と思い出す。あの時、左腕がもげて死んだような感覚を覚えたが、五体満足だし怪我は治っているようだし治癒魔法で治る程度の怪我で当たり所が悪く気絶したのかもしれない。腕が飛んだような気がしたのは幻覚か何かを見せられていたのだろう。たぶん。

天田さんと荒垣くんは無事かと周りを見回す——までもなくふたりが顔を覗き込んできた。

「俺らのことがわかるか？ 痛いところかねえのか？ 腕は両方とも動くか？ 変なところはねえか？」

矢継ぎ早に聞かれるので小さく頷く。

天田くんに至っては少し気まずそうだがそれでも心配するような顔をこちらに向けてきていた。敵意と困惑と憎悪たつぷりだったのにどういふ心境の変化なのだろうか。

「……あ……天田くんを、襲ってきたやつは……？」

自分は触手みたいな部分しか見ていない。悪魔か、シャドウか。それとも別の何かか。

それを倒せたのか、倒せなかったのか。

「ああ、あれか……恐らくは、シャドウじゃねえか……と俺は思うがありやあ普通のシャドウでもねえシロモンだ。俺ら全員死んでたかかもしれ

ねえ」

その言葉に青ざめる。

まさか、他のみんなが居ないのは、そのシャドウと交戦しているからではないのか、という嫌な想像をしてしまう。

「い、いかないと…いかないと…!」

「馬鹿野郎! どこ行くつもりしてやがる!」

「突然暴れるんじゃない!」

勢いよく起き上がろうとして荒垣さんと真田さんに抑え込まれる。

でも、いかないと。急がないと。

そんな焦りが思考を塗りつぶす。

「いいから、お前は寝ている! 天田とシンジが見たシャドウは俺たちがつく前にすでに消滅していたから問題は無い!」

「え…あ…どう、どういう…」

ベッドに押し戻されて困惑する。

全滅していたかもしれない強さのシャドウを、不意打ちとはいえ自分を一瞬で血まみれにするほどの攻撃ができるシャドウを、どうやって真田くんたちがつく前に倒したというのか。

そう思っただけで荒垣さんと天田くんを見れば、なぜか目を逸らされた。

「…自滅した」

そうして、しばらくの沈黙の後荒垣くんが口に出した答えに、目を見開く。

「奴の見た目からしてまともなシャドウじゃなかったらしい。だがシンジたちの目の前に現れてすぐに自壊して消えた、と。被害は天田を庇ったお前の怪我とシンジの肩ぐらいだ。それももう治療してあるがな」

真田くんがそう補足する。

詳しく話を聞けば、マーマヤを大きくしたようなスライム状の身体に、目や牙、人間の手足のようなパーツが沢山ついた歪なシャドウだったようで、シャドウの中でも捕食を繰り返した個体が結局自らの力に耐え切れず自壊したんじゃないか、というものだった。

「…そっか。じゃあ、他のみんなは…?」

「今日は学校だ。お前は今日までずっと目を覚まさなかったからな。俺たちが交代で看病兼監視をしていた。さっきの慌てようを見るに、居て良かったというわけだな」

「俺、何日寝てた…？」

大型シヤドウ戦は無事に終わったらしい。しかしずっと目を覚まさなかったということは何日か寝ていたというわけだ。

「ちようど5日だ。シンジと天田は初日と2日目以外は毎日。それ以外は他のメンバーが交代でお前を看ていた。他になにか異常があったりもう少し眠り続けるような病院に連れていく予定でもあったがな。それと、お前の怪我は通り魔に襲われたとして表向きには伝わっている」

「5日か…出席足りるかな…」

今年、というか今回は特にヤバイ。4月にほぼ1カ月潰れているし、熱で何度か休んでいる。そして今回5日連続で休み。

いくらどの道全て無意味になるからといって流石にこれだけ休むとクライメイトからの評判が『病気がち』から『怪我しまくりな病弱のヤベーヤツ』にクラスチェンジしてしまう。

「留年したときや俺と一緒に三年もう一度やりやいいだろ」

「えー…」

「なんだ、不満か？」

「湊や奏子たちと同じ学年になるのはちよつと…」

複雑なものがある。

先輩と呼ばれるのか。はたまた呼び捨てにされるのか。なんてあり得ない未来を想像して苦笑いする。と、自分の出席を気にしていたが、学校を休学している荒垣くんはともかく、小学生の天田くんは毎日看病してくれていたらしいので学校は大丈夫なのかと気になった。

「…あのさ、天田くんは学校…」

「僕はしばらく…休みを貰ってます」

「あ、そうなんだ…」

そう答えた天田くんの顔は複雑そうだったがこの前の時のような怒りや憎悪は見受けられない。

酷い事を言ったのに殺そうとしてこないのかな、とか色々聞きたいことがいろいろあったが、先に口を開いたのは天田くんの方だった。「…桐条さんと真田さんから、聞きました。ペルソナの暴走は、自分で制御できるものじゃないって。だから、抑え込むための薬を飲んでるんだって」

「天田にも他のメンバーにも、説明していかなかったからな。…それがこの悲劇を生んだ」

ばつが悪そうに真田くんが口を開いた。

湊と奏子は自分と荒垣くんが抑制剤を飲んでいることに気がついていたようだったが、どうりで天田とアイギス含む二年生の他のメンバーからはなにも追及がないと思えばそういう事だったのか。遠慮していたわけではなく、単に伝えられていなかったという事か。

「僕は…事故だと言っても母さんを殺した奴を見つけて、殺してやるって。それが正解なんだってずっと自分に言い聞かせてきた。でも、それは違ったんだって。ペルソナの暴走は、誰にでも起こることで、自分の意志で止められるものではなくて、どうしようもできないものだったんだって。…それで開き直るやつなら、僕は迷うことなく今も憎んだし、殺していたと思います」

天田くんの言葉に、内心で「開き直っててごめん」と謝る。

本当に悪いことをしたと思う。心をへし折ろうだなんて、そんな考えを持っていたこと自体がおかしい。

どうして、そんな誰かを嘲笑うような考えをしてしまったのか。

「でも、あそこで…母さんが死んだ場所であのあともう一度…見つめなおしてみても、わかったんだ。三上さんが言った通り、僕は…逃げたかったんだって。母さんが死んだことから、僕がひとりになってしまったという事も。特別課外活動部の皆さんは…こんなに気をかけてくれて、心配してくれて、僕は、ひとりなんかじゃなかったのに。ひとりで立っている気になっていて」

それは違う。あの時の自分が言ったのは狡い言葉ばかりだ。まさしく、命乞いのようなものだ。だというのに、天田くんはそれをいい方向に勘違いしてしまっている。

「三上さんも荒垣さんも、これまで何度も僕の命を救ってくれていたのに。たとえばそれが罪悪感からだとしても、今までしてくれていたことの全てを僕は見て見ぬふりをして仇だとわかった途端に憎んで命を奪おうとして……ごめんなさい」

「…謝らなくていいんだ。俺は許されるべきじゃない」

そう声をかけると、天田くんが顔を上げる。

「俺は、記憶が無いからって…言い逃れようとしていた。死にたくないって開き直った最低人間だ。俺は、いまの天田くんが思うような綺麗な人間じゃないよ…」

「…やっぱり、荒垣さんから聞いた通りだ」

「え…?」

天田くんはなぜか得意げな顔をしている。まるで、謎を解いた名探偵のように。

「荒垣さん、言ってたんですよ。『いつもの三上は絶対に謝られると悪ぶろうとする』って！ 言われた通りでしたね！」

「あ、荒垣くん…!?!」

「フン」

顔を引きつらせて荒垣くんを見れば、してやったりという顔で笑う。天田くんに変な情報を吹き込んだのは間違いなさそうだ。

「あのね、悪ぶってるつもりじゃなくて実際に俺は狡くて悪い奴なんだって…あんな意味の分からない命乞いをしようとしたり天田くんの復讐を無駄なものだっていったり…おかしいだろあんなの…」

「狡くて悪い人は自分を殺そうとしてる人間を庇って『よかった』なんて言って笑いませんよ」

「俺は、そんなこと言ってない。きつと聞き間違いか何かだよ」

「じゃあそういう事においてあげますね」

否定したのに「そういうこと」になってしまった。意味が分からない。

殺されたいわけじゃないが簡単に許されるべきことなのではないのも分かっている。だというのに、こんな簡単に許されていいのだろうか。いや、天田くんが許すと言っているのだから許されていいのか

? わからなくなってきた。

うんうんと唸る。

「荒垣さんと真田さんの言う通り、三上さんってとっつってもめんどくさい性格してるんですね…」

「ぱつと見はまともそうに見えるんだがな…俺もこの前シンジに言われるまで気がつかなかったくらいだ」

「俺が見たときはぱつと見からヘンな奴だったぞ。転校早々自己紹介でフランシスコ・ザビエルって名乗りかけたやつだぞコイツは」

なんか聞き捨てならない話題が聞こえたが自分はこつちに来て早々ともない自己紹介をしたらしい。過去の自分よ、どうしてそんなことを。頭を抱える。

いや、自分なんだからたぶん場の雰囲気や和ませようとか純粹にふざけてからかおうとかそんなことなんだろうけど。こういう時、過去の記憶があんまりないというのが恨めしい。

ただ、今回天田くんの母親をペルソナの暴走で殺してしまったというのは本当に覚えがないものだった。あの頃の記憶は殆どないが男子寮に住んでいたのと夜は必ず12時前に寝るようにしているという記憶はちゃんとある。

そしてペルソナを使えたわけでもないし、ペルソナが未覚醒の時に暴走しただなんてこともおかしい気がするのだ。それは本当に自分のペルソナだったのだろうか。

そもそも本当だとして、なんで2年前に暴走をしたのに今年の7月まで暴走しなかったのか、とか色々疑問がある。

それが分かる日は、来るのだろうか。

10月4日(日) 影時間

満月の光に照らされながら、作戦室に残った幾月は緩くグラスを揺らす。

「ふむ、あと1体で12体か…」

来月には、自身の目的が完遂される。

そのことに笑みを浮かべた。あと少し。あと少しの辛抱だ、と。

「そういえば…」

数日前に廃棄した『シヨゴス』はどこに行っただろうか、と幾月は考える。

暇つぶしに多くのシャドウを継ぎ接ぎして擬似的に『デス』を作り上げようとしたが、できたのはどのアルカナにも属さない——しいて当てはめるとするなら、数を持たぬ者を意味する「愚者」のアルカナだろうか——気持ちの悪いスライムのような不完全体ができただけだった。

神話の生物から名を取って、『シヨゴス』と名付けられたそのシャドウはお世辞にも大型シャドウのような目立つ特異性はなく、凶暴性が高いだけの失敗作でもあり、これ以上の観察の必要も使い道も無いとしてタルタロス付近で廃棄したのだが特別課外活動部から遭遇したという報告は今のところあがっていない。

擬似的にはいえ死神以外の12のアルカナのシャドウを合体させたシャドウだ。それなりに強いだろうが、不意打ちさえ喰らわなければ大した相手ではない。

ただし、他のシャドウを捕食して強化されていなければの話だが。シヨゴスは他のシャドウには見られない『共食い』と『弱い敵から優先的に狙う』いう奇妙な性質があった。あまり目立つものでもないし幾月の求める大型シャドウ並ではないが、ある意味では特異性といつていいのかもしれない。

恐らく、継ぎ接ぎをした際になにかそうなる原因が出来てしまったのだろう。シャドウは人間の負の感情に等しい。ならば、誰か飢餓状態に陥っていた人間のシャドウが紛れ込んでいた可能性もある。もしくは、捕食したいという欲求そのものか。

『弱い敵から優先的に狙う』の場合は複数のシャドウを駆け合わせた結果、僅かでも知性が身についたからではないかと予測された。が、その弱い強いをどう判別しているのかは終ぞわからず仕舞いだった。(…まあ今回の作戦にあまり関係はないだろうから、追々報告があがるのを待とうかな)

何かあればストレガが特別課外活動部を焚きつけて処理させればいい。

幾月はそう思いながら水面に映る満月を呑み込むようにグラスの中身を飲み干した。

受胎告知 (10 / 4 ~ 10 / 10)

大型シャドウを倒し、ポートアイランド駅の裏路地へと駆けこんだ湊たちが見たのは血まみれの3人だった。

特に、優希は血だまりに沈んでおり、青白い顔で目を閉じたままピクリとも動こうとはしない。

その様子に湊はひゅ、と息を飲んだ。

「シンジ！」

「っ、三上先輩!？」

「三上!!」

明彦が荒垣に、優希にアイギスと美鶴が駆け寄る。だが、湊を含めそれ以外のメンバーはあまりの惨状に咄嗟に動くことができなかった。

「あ……あ……お、お兄ちゃ、ん……?」

「……」

奏子が青い顔で震えながら血だまりに沈む身体を見る。対して湊は、直視することも確認することも出来なかった。

もし、兄が死んでいたら。その身体が、冷たくなっていたら。そんな最悪を想像してしまう。

「俺と天田は大丈夫だ……肩を少しやったくらいでな。あいつをみてやってやれ」

荒垣は血にまみれた肩に視線をやる。

そこへすかさず動けるようになった岳羽が荒垣の方へ寄って召喚器を構えた。

「じゃあ……回復しますね」【ディアラマ】

引き金を引いて、"イオ"を召喚し癒しの光を降り注がせる。

完全回復、とまではいかないが、荒垣の肩の傷の血は止まり、マシになっていく。

「悪いな」

「いえ、」

礼を言う荒垣に、ゆかりは気まずそうに返事を返す。

「……脈拍、呼吸、共に少し弱弱しいですが正常圏内であります。外傷は多数。気絶しているだけのようです」

「そうか……」

「……………」

アイギスはじつと見つめる。明らかに、出血量に対して怪我が軽すぎることだ。

これは、明らかにかすり傷としか言えないものばかりだった。一瞬、荒垣の怪我かと思ったが彼の傷もここまで血だまりになるほどの物ではない。

血だまりに指をつけてそれを舐める。

「アイギス？ なにを……」

「失礼します」

続いて、一番出血しているであろう優希の着るブラウスの左腕の袖をまくり、傷口から僅かに出血している場所を探しそこをまた指でなぞって血をこすり取り、そして口につける。

(……これは……どちらも優希さんの血液……？ ですが、そうすると更に不可解であります。それに……データにはない成分が検出されている？ どういうことなのでしょうか)

アイギスは首を傾げた。

結果は、どちらも——傷口の血と血だまりの血を比較して——優希の血液である可能性が高いというものだった。だが、そうすると出血の原因がわからない。これだけ出血しているというのに、左腕以外は目立った外傷ともいえる外傷が無いのだ。

(誰かが治療した……？ それにしては……出血量から予測される傷の治りが……)

「アイギス……」

アイギスがハッと顔を上げると美鶴が心配そうに顔を向けていた。「呼びかけても返事がなかったが、何か彼に異常でもあったのか？」

「いえ……」

アイギスは言葉を濁した。

これが、言つて良い事かどうかともアイギスにはわからなかったので

黙ることにしたのだ。

「優希さんは私が運びます。異常があればすぐにお知らせしますので皆さんは荒垣さんと天田さんを」

優希の身体を持ち上げると、アイギスは後ろを振り向く。

既に立ち上がった荒垣と、青い顔で心ここにあらず、といった天田を連れ、一行は帰り道を無言で歩いた。

誰も、この話を今聞く気にはなれなかった。

10月5日(月) 夜

前日になにがあったのか詳しく訊き、天田が荒垣と優希を復讐の為に殺そうとしたこと、その話の途中で異様なシャドウに乱入されたこと、そのシャドウはすぐに自壊し消えたこと、ペルソナの暴走と制御剤についてなどの話が優希を除く全てのメンバーに共有された。

もちろん、幾月もその場におり、異様なシャドウについての話になつたときは「共食いする個体だったんじゃないかな？ だから、力に耐え切れず自壊した。イレギュラーシャドウだったのかもしれないね」とアドバイスを入れていた。

ただ、天田は部屋の窓から勝手に抜け出しどこかへと行っていたのでこの話はすべて荒垣の話したものになる。

とてもじゃないが天田からは話が聞けそうにない様子だったが、それでもどこかへ行くとは思わず、探しに行こうというメンバーもいたが、結局は荒垣と真田の「放っておけ」という一声で沈黙した。

優希は依然、眠り続けていた。

10月6日(火) 深夜

草木も眠る丑三つ時。珍しく眠れなかった湊は天井を見つめていた。

しかし急に部屋の外からばたん、とドアが閉まる音がしたので湊はベットから起き上がる。

向かいの兄の部屋か、隣の順平の部屋か。

前者だとしたら誰か入ってきたのか、と気になって部屋を出る。兄の部屋のドアを開けると、ベッドの上はもぬけの殻で湊はすぐに踵を返して部屋を出た。

そして廊下を走り、階段をふらふらと降りていく後ろ姿を見つめる。その姿はまるで夜の闇に溶ける幽霊のようだった。

「優希」

だらりと下がっているその手を掴む。しかしその動きが止まることは無く、つんのめる様に階段から落ちそうになるのを慌てて湊はひきとめた。

「……」

その目はぼんやりとされていて何が起こっているのかわかっていない様子だった。

湊の存在が目に入っていないように見えるその虚ろな目で何事もなかったかのように再び歩き出す。そして、一階に降りるとキッチンに入り冷蔵庫を開けて漬物のパックを取り出した。

何か危険なことをするのか、と思っていた湊にとってその行動は拍子抜けだった。外に出るんじゃないのならいいか、と見守ることにした湊の目の前でぼんやりとした表情のまま、まるでそうすることが自然と言うように茶碗を出してご飯をよそい、食べ始める。

そしてそれらを食べ終えると、茶碗と箸をシンクに置いて漬物の残りを冷蔵庫にしまい、またふらふらと歩き出す。

次に向かったのは、手洗いだった。

さすがに起きているのではと湊は訝しんだがそれでも表情は虚ろなままであるし、一言も声を発さないし、湊の存在を眼中に入れていない。しかも、たまに家具にぶつかるとのど。一拍置いて何事も無かったのよう歩き出すがとても周りが見えているとは言えない。

しばらくして手洗いからふらふらと出てきた優希は今度はまた階段を上っていく。そして何事も無かったかのよう部屋に戻ってベッドに潜り込むとすぐに寝息をたて始めた。

この行動がなんなのか湊にはわからなかったので「明日誰かに相談

してみよう」と思いながら自分の部屋に戻りベッドにはいつて目を閉じた。

10月7日（水） 深夜

居なくなっていた天田が寮に帰ってきた。

湊たちは心の整理がいたらしい天田を出迎え、何があったのかなどを軽く訊いてそのままその日は就寝となった。

しかしまた、ドアの閉まる音で湊は目を覚ました。

今日も一日、目を覚まさなかつた兄がふらつきだしたのかと急いで部屋を出て追いかける。

昨夜のことを相談したところ、みな首を傾げていたので原因はよくわからなかつた。

対策としてはとにかく部屋を出たことに気がついた人が見守る、という事になったがほぼほぼ自分しか気づいていないのでは、と湊は思った。だが、

「有里。あいつがふらつきだしたのか？」

荒垣が自室の扉から顔を覗かせていた。それに湊は荒垣と共に頷いて後を追う。

「昨日は普通に飯を食べてトイレに行つて寝てた。でも今日はどうするのか分からない」

「…止められねえのか？」

「階段から降りるときに手を掴みただけど分かってないみたいでそのまま歩きだそうとしてたから、一筋縄じゃいかないかも」

「そうか…」

ふらふらと一階に降りた優希はそのままキッチンを素通りした。

「通り過ぎたな…」

「通り過ぎたね…トイレかな…」

更にトイレにも寄らずにラウンジを歩く。その向かう先は、玄関だった。

玄関の扉に手をかけ、開けることはせずにそのまま静止している。

そしてしばらくじつとしたあとまた扉から手を離し、踵を返していく。

「何がしたかったんだ…？」

「さあ…」

ふらふらとまた歩きトイレへ入り、出てくる。

階段を上り、部屋へと戻り前日と同じように布団に入って眠る。その一連の行動に、湊と荒垣は首を傾げた。

「特に危なそうなことはしてねえみてえだな」

「昨日もこんな感じだったよ」

「危ないことはしてねえ分、よく見とくしかねえか…」

10月9日（金） 昼

「——ってな感じでお前は夜になると寮内をあっちへフラフラこっちへフラフラしてたってわけだ」

「マジ？」

「信じられねえってんならてめえの弟と妹や他の奴らにでも確かめてみるんだな」

「……やめとく」

これは絶対聞かない方が良いやつだ。

天田さんと真田くんが退室し、ダイニングに移動しておおよそ5日ぶり（正確には夜に徘徊して勝手に食事を食べていたらしいのでそうではないらしい）の食事であるたまごうどんを食べながら話す。

温かいスープと玉子の甘さが身体に染みる。とんでもない悪夢を見たせいか若干気が滅入っていたが少し元気になってきた。なんて現金な体と心なんだろうか。

ずるずると麺を啜り咀嚼する。砂糖は入っていないのにほんのり甘い甘みにほう、と息を吐いた。

「あ、そういえば」

思い出す。大型シャドウ戦の直前、荒垣さんと奏子がいい感じになっっていたことを。

まさにこのうどんくらい熱々な2人はもうくつついている頃だろう。なんて邪推する。

「荒垣くん、奏子とイイ感じだったみたいだけどさあ…どうなったんだね〜?」

ニヤニヤしながら訊く。

まあ、返答によつては四騎士のペルソナが延々と周りを回る刑になるけれど荒垣君に至つては奏子を悪いようにはしないだろう。

「どうもこうも…ねえよ」

荒垣くんは照れたようにそっぽを向いた。

これは絶対何かあつただろ。あつたに違いない。笑みを深める。

「そんなこと言つて、絶対なんかあつたでござるな?」

「…腕時計を…」

「ん?」

小さくもごもごと呟いた荒垣くんの言葉を聞き逃したので首を傾げると、荒垣くんは観念したような表情で口を開いた。

「腕時計をな、渡した」

「おお! 他には!?! 他には!?! デートとかもうした!?!」

「何もしてねえ」

荒垣君の言葉にほかん、と口を開ける。

デートもまだどころか手をつないだりキスもまだと申すか。

「へ?」

「だから、何もしてねえんだよ! そもそも、告白とか、ガラじゃねえし…俺らはそう言う関係じゃ…ねえ…」

「うわー…それマジで言ってる? あんだけキッチンとラウンジでイチャイチャして?」

「それを言うならためえもだろうが。桐条とイチャついてんじやねえか。告白しねえのか?」

荒垣くんの言葉に再び首を傾げる。自分と美鶴さんの関係は友だちで、告白するような特別なこともなく。話もそんなにいちやいやするようないはずだ。たぶん。

「美鶴さんとはどこまで行つても友達だよ。それに、美鶴さんはそも

そも大財閥の令嬢なんだから俺とそういう関係になるだなんてない。あり得ないって。俺が美鶴さんの邪魔になっちゃうよ」

「それ、桐条には言うなよ。絶対だからな。フリじゃねえぞ」

「？ うん」

笑って訂正すれば怖い顔で荒垣くんが肩を掴んできたので素直に頷いておく。

「ほら、冷たくなっちゃもうからさっさと食え」

「そうだった」

再び、少しぬるくなつたうどんに手を付ける。

まさか荒垣くんが奏子に告白もしていないとは思ってもよらなかった。が、腕時計をプレゼントしたとのことなので実質告白みたいなのだろう。そう思っておこう。

「あいつらが帰ってきたら、散々言われるだろうがな、あんな無茶は金輪際やめろよ。今回は運が良かっただけだ」

「む…」

善処しよう。

そう考えて、もぐもぐとうどんを噛みながら返事にならない返事をする。

「てめえを犠牲にして救われて喜ぶ奴なんざここにはいねえんだ。それをよく覚えとけよ」

「…：うん」

そう言われると何も言えない。

けれど自分は死ななければ、そうしなければいけないのだと。自分の命と相手の命を秤にかけてたとき、重いのは相手の命の方だから守らなければいけない、と違ってしまう。

自分はいくらでもやり直せる。けれど、皆はやり直せない。元来、命はやり直すことなんてできない。

なら、やり直せる自分が救ったって罰はあたらないだろう。

——それにもう、身体に、意識に、その奥底に染み付いてしまった。今更それをやめることはできない。自分の意志でも止まることはできない。歩き続けるしかないのだ。

まあ、そんなことを思っていないながらも大半の死因は慢心と事故なのでこれは許されるべき——ではないな。慢心してる時点でダメだ。「それとな、お前のブラウスとベストは使い物にならなくなったから捨てたぞ」

「ああ…血まみれだつて言つてたね…落ちないよね…血は。仕方ないよ。むしろ処理させてごめんね」

自分でも何度か自分の血のついたブラウスを洗ったことがあるのでわかる。アレは落ちない。

周回したての頃、1人でタルタロスに潜り、怪我をした後に知らずにお湯で洗って落ちなくなつて破けてもいたので結局諦めて捨ててしまった苦い思い出を出した。

ああいうのは水で漬け置きして洗つた方が落ちやすい…らしい。

「気にすんな」

「ありがとう。…それと昼食ごちそうさま！　すごくおいしかったよ」

「おう」

食器をシンクに運び、ササつと洗う。

寝てばかりだったからかまだぼんやりと眠いが体調に問題はなさそうだ。やれるなら今日からでもタルタロスに登れそうな感じがする。なんて言つたら湊と奏子に怒られそうなので伺いを立てるだけにしよう。それとなく、探りを入れる感じで。

夜

「先輩が好きだからです!!!」

「は?」

「聞こえませんでしたか?!　じゃあもう一度…荒垣先輩、だいすきだ——!!!」

「あ?」

「えっさらにもう一度?　仕方ないですね…先輩、好きですよ!」
「だああ!　か、からかうな!」

「私の事、信じられませんか!？」

「そ…ういうワケじゃねえけど…だ、大体おかしいだろ。こんなところで…お前の兄貴も見てんだぞ…」

ラウンジで雑誌をめくっているのとんでもない告白が行われたので顔を上げつつじつとみる。

ついでに顔を一気に赤らめた荒垣くん言葉にうんうん、と心の中で頷きながら奏子による盛大な愛の告白を心の中のアルバムに記録しておいた。ここまで大胆だったのは初めてかもしれない。史上初なレベルだ。

「じゃあ私の部屋に行きましょう！ ほらほら早く！」

「だ…駄目だ。お、お前は…その、嫁入り前なんだから、誤解されんだろうが」

「ぶっ!!」

ぐいぐいと腕を引っ張られる荒垣くんが出した言い訳に思わず噴出してしまう。嫁入り前。いや、確かにそうなんだが律儀というか純情といふかなんというか。今どきそんなことを言う人は珍しいので言い訳がヘタクソというか。しかし奏子はその程度じゃめげないしへこたれないし止まらないぞ荒垣くんよ。

「じゃあ先輩の部屋に行くしかないですね！ レッツゴー！」

「ば、馬鹿！ 俺は…紳士じゃねーんだ。部屋なんか入れられるか」

「荒垣くんは怖いオオカミさんなんだってさー。奏子は食べられないように気をつけてね〜」

横からそう口を挟めばじろりと荒垣くんが睨んでくる。

「おい三上！ んな事していいと——「大丈夫だよお兄ちゃん！ 私が！ 食べる側だから！」……!？」

「!？」

サムズアップする奏子の言葉に荒垣くんとふたり同じタイミングで顔をひきつらせた。

自分の想像以上に我が妹はたくましかったらしい。

「今日は、立派様着けるからなんだかいける気がする！ ベストとテオにも褒められたんだよ！」

その言葉に頭を抱える。言わずもがな着けているペルソナは「マール様」だろう。

「ご立派ア！ なペルソナだ。いつの間に作ったのか。そんなに短期間で強くなったのか。兄としていろいろ気になるが地雷を踏んで死ぬわけにはいかないので食いしばる。代わりに、」

「荒垣くん、あとできみの骨くらいは拾っておくからさ…逝ってらっしゃい」

「待って待って待って、いつてらっしゃいの意味が違くねえか!? なんなんだ!? 俺は死ぬのか!?!」

微笑んでサムズアップすることにした。

友よ。永遠なれ。

名誉の戦死を遂げた暁にはデビルバスターズ・オンラインのクライン内で二階級特進しといてあげよう。荒垣くんはやってないし最近サービス終了したけど。

モコイさんが残念がっていた。自分も少し悲しい。

「それじゃあ先輩、行きましよう！」

「お、おう…!?!」

奏子に引き摺られるように二階へと上がっていく荒垣くんへ合掌してこの様子だと今日はタルタロスへは行かなそうだなと考える。

ついでに今日は誰も奏子と荒垣くんを呼ばないようそつと根回しすることを心に決めた。

こういう時に助けになるのが友として、兄として大事なことだと思う。

……………。

友としてはともかく、こんなのが兄としての役目でいいのだろうか。

疑問に思ったが疑問に思わないように無視することにした。これはいい事だ。

奏子もハッピーで、奏子がハッピーなら俺もハッピー。だからそうに違いない。うん。何も間違っていない。たぶん。きつと。メイビー。

「ひえ〜〜〜…奏子っち、トンデモねー」

告白より前からずっとラウンジのソファにいた伊織が戦々恐々、といった感じでようやく口を開いた。

その意見は兄であっても同意見と言わざるをえなかったの दौरानとまた頷いておくことにしたのだった。

天田くんがボソツと「僕だって：もう少し大人で身長が高ければ：」と呟いていたのを耳に入れてしまつて妹はなんて罪作りなんだ：と戦慄してしまつたのはまた別の話。

10月10日（土） 放課後

今日は早めに帰宅したのでアイギスとコロマルとモコイさんの四人で散歩をすることにした。

「ケガの調子は大丈夫でありますか？」

「大丈夫。もう痛くないしむしろ調子いいくらいだよ」

「ワンワン！」

「コロコロちゃんも『元気になつて良かった』って言ってるっすよ」

アイギスに返事をするコロマルが何度か鳴いたので何事かと思つたらモコイさんが翻訳してくれたので撫でてお礼を言う。

「コロマル、ありがとう」

「わん！」

コロマルは優しいのでこんな自分でもよく心配してくれる。

モコイさんもちろん心配してくれていたのだから本当の本当に無茶は意識を失わない程度に収めないと、と戒める。正直今回はぶつ倒れることが多すぎて自分でも焦燥感があるレベルだ。それもこれも自分が弱いせいなのだろうか。

なんだか急にムカついてきた。今日はタルタロスに行くなら戦闘メンバーに入れてもらおう。

神社の境内に着き、コロマルが駆けまわるのを眺めながらモコイさんと話をする。

「最近、全然悪魔みないけど居なくなったの？」

「居るには居るっすよ。けど、今のチミにはとてもじゃないけど近寄

れないっスね」

「? まさか、臭いとか?」

モコイさんの言葉にくんくんと服の匂いを嗅ぐ。悪魔にとっての悪臭か何かしているのかと思ったからだ。

「違うネ。これ…チミに言っているいいモノなのかモコイさんは分からないんだけど…聞いちゃう? 聞いちゃう?」

「聞かせてほしい…かな」

モコイさんが言うのを戸惑うほどとはいったいなんなのか。まるで予想がつかない。

「…悪魔ってすごい下剋上、弱肉強食の存在なんスよ。でも、その割上下関係や力関係ははつきりしてるんス。僅かな力の差だと下剋上されやすいケド、明確な力の差があると滅多にされないんスよ。悪魔はそこら辺本能で察知するタイプも多いカラ」

「へーやっぱりシャドウと似てるんだね」

シャドウもこちらが強くなると戦う前に逃げるやつが増えてくる。

この周で最初に登った時のように、全くシャドウを見かけません、なんて事もあるのだ。

つまり、そういうことなんだろうか。

「じゃあさ、俺がここら辺にいる悪魔より強くなったってこと?」

「……そゆこと」

しばらく間を置いてモコイさんがそう答えたことに内心で首を傾げる。

そんなにモコイさんが言うのを戸惑うような内容ではない。強くなることは喜ばしい事のはずだ。

「そっか。強くなれてるのなら俺も頑張って戦ってる甲斐があるかな」

「そうスね」

モコイさんの声色はあまり明るくない。やはり何か変だ。どうしたんだらうか。

「モコイさ…」

「そんなことより! この前CMで見た新しいカップラーメンがボク

は食べたいなく！ 帰りにコンビニで買ってくれないかな〜！」
「しようがないなあ…」

大きな声でそう叫んだモコイさんに、そういえば満月の日の少し前にそんな話題ではしゃいでいたことを思い出した。

自分はしばらく寝ていてモコイさんにも迷惑をかけた事だし帰りに買って帰るのもいいかもしれない。アイギスとコロマルに打診してみてもコンビニに寄ろう。

影時間

タルタロス141F 豪奢の庭ツイア

久しぶりにタルタロスで戦闘メンバーとして入れてもらって探索を行うことになった。

来たのは金ぴかの内装が目眩しい豪奢の庭ツイア。

全部これ金なんだぜ！ 金！ と言いたい気持ちを抑えながらも床削ったらどうなるんだろうと前々から気になってはいた。削らないけど。

「終わりかな、お疲れ様！」

奏子の声で敵シャドウを全部仕留めた事を確認しつつポーっとする。

何だかさつきから頭がふわふわするような、もうすぐ何か起こるよ
うなそんな予感がするのだ。

「うーん…」

「さつきから唸ってどうしたの？ お腹痛い？」

「そういうわけじゃないけど…」

もう一戦だけ戦ってみて様子を見たい気もする。

体調が悪いわけじゃないけれど、かといって違和感がないわけではないといった感じだ。

「…あとちよつとだけこのまま様子をみてもいいかな」

「無茶はしちや駄目だよ！」

「なんだ三上、無茶をしそうなのか？」

「違うよ真田くん…」

真田くんとコロマルが心配したような顔で見ているが無茶をするわけじゃない。

「とにかく、体調は問題ないからもう少し探索を続けよう」

そう無理やり皆を納得させて、数戦シャドウとの戦闘を繰り返した。

「うーん、うーん…うーん…」

「まだ唸ってる…ねえお兄ちゃん、さつきからヘンだよ？ やっぱり何かあったんじゃない？」

「なんか…出そう出ない…そんな感じがさつきからするようないような…」

頭を抱える。

さつきから何かが起こりそうな気はするのに、何も起こらない。

「まさかトイレ!? 下に帰る!?!」

「トイレ違う。NOトイレ。なんて言えば良いんだろう…」

奏子にどう伝えればいいのかわからないし自分でもこの感覚は初めてでよくわからないのだ。ただトイレに行きたいとか腹痛とかそういうことでは断じてない。断じて。

「うーん…」

あと少しな気がするのにその少しが足りないような、そんな違和感。

「あともう一戦だけ…」

それでなにも無かったら今日は帰ろう。

そう奏子に伝えてもう一戦。

総攻撃でボツコボコにしてフィニッシュ。そして戦闘終了。

かと思えばなんだか先ほどまでとは違う感覚がした。手で何か受け止めないといけないという無意識が身体を突き動かす。

ぼとり。

そして何も無い場所から手の中にいきなり落ちてきたのは顔くらいのサイズの淡く水色に発光する薄い板のような物質。ほんのりと暖かい気もする。

(なんだこれ…)

「ゴミか？」と思うがゴミではなさそうだし…と思いつつ、自分には到底要らないもののように見えるので奏子に押し付けようと思った。

正直、こんなよくわからないゴミみたいなものを奏子に押し付けるのは忍びないが奏子や湊ならまあこんな変なものも大事に持つてくれるだろうというよくわからない信頼から大丈夫だろうと判断した。

要らないなら捨ててもらっていいと思うし。

…むしろ意味が分からないものの処理を押し付けているようになってきた。実際その通りなんだけれどもやっぱ渡すのやめようかな…

「お兄ちゃん大丈夫？　ぼーつとしてるけど…」

「あー…奏子、ヘンな物好き？　ガラクタだと思うんだけど…なんか出てきたからさ…」

そう言いながらその発光体を差し出す。

ええいままよ！　と半ばヤケである。こんなことでいいのか自分。

「わーきれー！　いいの？」

「俺にはよくわからないものだし…不安なら湊や他の人にも見せてもらっていいから…」

「不安じゃなくてもこんなきれいな物貰ったら見せびらかしちゃうよ！　やったー！」

ゴミ（推定）を押し付けたのにこんなに喜ばれてしまうと罪悪感がすさまじい。

さつきまでの予感のようなものは完全になくなっているし、少しすつきりした気もするし、もしかしたら原因はこれだったのかもしれない。

ただ、何も無い空中からぼろつと落ちてきたのでそのところは本当に意味が分からない。今までこんなことがなかっただけに戸惑いまくっている。敵が出てくるとかそういうことではなく、こんなヘンなモノが出てくるとはどういうことなんだろうか。

そんなことが気になりながら、ロビーへとつながるワープ装置に手

をかけた。

「みてみて湊〜！ お兄ちゃんからこんなもの貰った〜！」
「!?」

ロビーに帰ってきた後、ぶんぶんと発光体を振り回しながら待機していた湊に駆け寄った奏子に、湊とアイギスと美鶴さんがぎよつとしたような顔をした。

いやまあ、確かにあんなぴかぴか光る物体振り回してればそりや驚くよな…と遠い目をしていたらいつの間にか歩み寄ってきていた美鶴さんに肩を掴まれる。

「三上、あれをどこで手に入れたんだ!?」

「えっ、あれなんかヤバいの!? ど、どこでって…こう…いきなり出てきた…? みたいな…」

「ヤバイも何もあれは『黄昏の羽根』だ!!! しかもかなり大きいものだと思う…理事長に渡して研究に回せばもしくは…」

「たっ…」

ひゅ、と息を飲む。

『黄昏の羽根』。

召喚器や美鶴さんのバイクやアイギスに使われている物質の名だ。えーつとなんだったか。すぐくて大事な物なのはよく覚えているのだが何故それがすぐくて大事なのかはあまり覚えていない。

とにかく、とんでもない代物なのは知っている。

「ど、どどどどどうしよう、か、奏子に渡しちゃった…ヘンなことにならない…?」

「いや、持っているだけでは人体に有害な影響を与えるものではないから大丈夫だ。そんな青くなつて震えなくてもいい」

慰められるも安易に渡してしまった後悔が苛んで頭を抱える。

今度から何か渡すときはちゃんと安全かどうか自分で確認しなければ。

バキッ!

「はい、湊、半分ずつ〜!」

「ん。ありがとう」

そんな音が聞こえて音の発生源を咄嗟に見れば奏子が先ほどより半分のサイズになった黄昏の羽の片割れを湊に渡していた。

何だかよくわからないが躊躇なく半分に割られて少し悲しくなった。いや、先ほどまでゴミだと思っていたのでそんな感傷はお門違いというものかもしれないが。

「…割ったな」

「うん。割ったね…奏子が昔から自分が貰ったおやつとか、湊と半分ずつこするの好きなの忘れてた…」

落書き帳やクレヨンまで破つたり折つたりして湊と半分ずつこしようとしていた幼少の記憶がぼんやりと蘇る。

あの時、実の両親が慌てて湊の分まで買い足した——その時の湊にはボールや別の玩具が与えられていたので問題はなかったはずだ——んだったつけ、と思い出して頭が痛くなってきた。微笑ましい記憶のはずだが頭が痛くなるので思い出すのはやめておこう。

「あれほどの大きさだったんだ…先ほども言ったが理事長に渡せば何かしら有効活用できただろうな…」

残念そうに美鶴さんがそう告げたが、自分としては幾月に渡すくらいなら奏子に渡って良かったと思う。

あの野郎に触れられるというだけでなんだか嫌な気分になる。拾ったというか出てきたというか、もう少し違うかもしれないそんな代物だけれど幾月に渡すのだけは絶対に嫌だ。

想像しただけでもぞわぞわする。ついでにあいつはロクなことに使わなさそうだ。無理やり人間に埋め込んだりしそう。

…いやまさか、してないよね？

してない事を祈ろう。

XII 刑死者

ぬくもり抱いて (10/11) 10/17)

10/11 (日) 朝

すっかり忘れていたが明後日から二学期の中間試験だ。

今回、全く勉強していないので少し不安なところがある。いくら内容を毎回覚えているとは言っても1月にセンター試験があるので勉強するに越したことは無い。

正直、2年の時の自分が進路相談にどう答えていたのかわからないが、大学進学をすることは間違いないのでセンターに向けても兼ねて今日は部屋に籠って勉強をしようと思う。

奏子や湊たちはどうかは分からないが、勉強会をするならちよつと覗きに行ってもいいかもしれない。

『あなたのくテレビにく時価ネットたなか』

モコ伊さんがテレビをつけて通販番組を見ているようだ。テーマ曲が妙に耳に残る。

洗脳度でいえばサトミタダシ薬局の方が上だが。アレはもう1回でも店内に入って10分ほどいたら洗脳が完了されてしまったかなりタチが悪い歌だ。とんでもねえ。

『さくあ、本日お届けするのはコチラ！ズバリ、ラジコン下駄！オシヤレも長寿も足元から！ヒュウ、ワンダホー！これになんとはがくれカップ麺を5個お付けしてお値段はたったの47800円！』

「!?」

「時価ネットたなか」はあまり見ない番組だがトンデモないぼつたくりともいえそうな値段設定に思わずノートから目を離して画面を見てしまう。

テレビの画面の中では、あのたなか社長がいつもの得意げな顔で喋っている。

「チミ、チミ！はがくれカップ麺だって！ボク、食べたいな」

「いやでも…これ下駄が本体だよ…？ しかも5万近いし…」
モコイさんに可愛くおねだりされたがとんでもない出費だ。5万
円あれば「はがくれ」の特製ラーメンを何回食べられるか。
想像しただけでお腹が減ってきた。どうしよう。

「今日のはやめとこうよ…その代わり、今度また『はがくれ』に行こう
ね」

「ウー！」

即座に代替案を出して我慢してもらうことにした。

流石にカップ麺に5個に5万は無い。大富豪でもない限りない。
これならコンビニに行つて買ってきた方が安上りもいいところだ。

本当におまけという意識で買わないと大変なことになる。

『さくあそれじゃあ今日はこれまで。売り切れ御免！ 残念無念！』

それではまた来週の日曜に、このチャンネルでゲッチュー！』

先ほどと同じく耳に残る曲が流れ、番組が終わりバラエティに変わる。

再び手元のノートと参考書に視線を落とした。

10/12 (月) 昼

今日は荒垣くんが朝倉先生のところアルバイトの日なので昼ご飯は各自で用意することになっている。

つまり外食しても何ら問題はない、ということなのでモコイさんと一緒に「うみうし」に行くことにした。最近、超絶メガ盛りデラックス牛丼なるものが期間限定発売になったらしく、それを食べに行こうという算段だ。

「うみうし」に着いて件の代物を頼む。

食べ残し厳禁と言われたそれと小盛の牛丼を頼んでモコイさんと一緒にいただきますと手を合わせた。

特盛りの三倍はありそうな量の牛肉とご飯の上に、さらに豚バラをタレで炒めたものや生姜焼き、焼き鳥、カルビがトッピングされているまさにデラックスな牛丼だ。ちなみにお値段1480円(税抜)。

かなりののご馳走だ。

紅シヨウガの箱をパカリと開けて中身をトングでつまんで乗せる。

乗せる。

乗せる。

乗せる。

山盛りにこんもりと盛られたシヨウガに満足した後は七味のビンを手に取って上に振りかけた。

「いつも思うんすけど、めちやくちや乗つけるっスね…」

「これがいいんだよ、これが。紅シヨウガがホントにおいしいから好きだ…」

そう。紅シヨウガがたまらなく美味しいのだ。焼きそばやたこ焼きにもこれが入っていないと始まらない。

ようやく箸を手に取りまずは牛丼の肉とご飯を一緒に口に運ぶ。いつもの味だ。美味しい。

そうして、みるみるうちに牛丼は胃袋に収まっていく。

全て食べ終わり、会計を終えて店を出た。

「チミの最近の食べっぷりには目を見張るものがあるネ…」

「モコイさんと出会う前からこんな感じだったんだけどね、あのころくらいから体調崩しちゃって…」

「なるほどネ」

嘘は言っていない。以前の幾月の言葉からも周りの態度からも、今年の4月になるまでの自分は相当食べていたらしいので体調が悪くなり始めるころより前の周回の食欲と同等と考えてもおかしくはない。むしろ、どうして自分が『自分』としてはつきり自覚する前と後では体調に変化があるのが謎だが、まあそういうものなのだろう。

変化といえば記憶に関してでもそうだ。自分には4月以前の記憶が殆どない。というのにたまにそれを覚えているかのように勝手に喋ったり行動したり。

思い出そうと思えば体自体が忘れていているわけではないので出来るんだろうが、どうしても自分の自由で思い出せるものでもなさそうで。まるで、もう一人他の自分がいるような、同じ自分のはずなのに

微妙に違う自分が別で居るような感覚がするのだ。

最近、特にそれが顕著だ。天田くんのお母さんの事件のことだつて、たまり場の不良のことだつてそうだ。あれらは普段の自分なら絶対に首を突っ込まない。

ついでに美鶴さんと顔見知りどころか何度か話をする仲で、荒垣くんと転校早々仲良くなつていてというのも珍しい事である。

基本、入寮前の自分は特別活動部のメンバーとは無縁の生活を送っていることが多い。

ゲームで言うごくごく一般的なモブみたいなものだ。村人Gくらい。

だというのに、こんなにぐいぐい行くというのは珍しいを通り越して何かがあるのかと勘ぐつてしまいそうになる。

——何を言うんだまったく。『そうなること』を俺たちが望んだんじゃないか。

「!?」

一瞬、脳裏でそんな声が聞こえた気がして、思わず足と思考を止める。

顔を上げれば、いつの間にか周りには真っ暗な闇に包まれ、目の前に転校前の学校である聖エルミン学園の制服を着て不格好な子供の落書きのようなスマイルが描かれている仮面をつけた自分が立っていた。

「——忘れちゃった？ まあ、仕方ないか。前回の俺とこれまでのお前。俺たちは失敗したんだからさ」

「な…なに、を…」

「『同調』だよ、同調。まあ同じ自分同士だからなにか起こらない限り失敗しないんだけどさ…多分なにか起こったんだろうなあ…あの時俺がああ言ったせいかな…アレのせいかなあ…うわあやだなあ…」
困ったような声でもうひとりの自分がそう告げるが言っている意味が分からない。

同調とはそのままの意味だろう。ただ、そうなると自分ともうひとりの自分が同じ時間軸に存在していることになる？

もしかして、単に時間を巻き戻しているだけではないのか。

「ご名答！ ただ時間を巻き戻してる訳じゃないのはなんとなく分かりきってることだったろ？ そもそも、湊と奏子が…あー…いや、今はやめとく。でも俺とお前はどうかあがいても変わらない。同一の存在なんだ。むしろ今、こうして分離していることが異常というか…なんというか、わざわざ俺を『俺』として残したことがおかしいというか」

「うーん。というかどうして今更？」

出てきたというか話しかけてくるようになったのだろうか。

自分自身であるならもう少し早く接触してもいいはずだ。というかしてほしかった。主に天田くん関係で。

「今更どころか5月から精一杯呼びかけてたの！ 俺だって頑張ったの！ でもこの前の満月まではお前にどれだけ呼びかけても返事してくれなかったんだよ。それにまたよくないもの沢山食べてるし…あんな悪食、自分とは言えども客観的に見ることになると思えばドン引きモノだよ。いや、同じ轍を二度踏んでるのか…ほぼほぼ俺も同じことになってたし…どうしようもできないってことか…」

ぷりぷりと怒るような声で訴えるもうひとりの自分のその言葉に思わず驚いてしまう。

悪食。よくないもの沢山食べてる。つまり、最近の食生活がやばい…？ しかしなにも思い浮かばない。うどん、焼肉、肉じゃが、豆乳鍋、シーザーサラダ、牛丼…うん、普通だ。

「ごめ…えっ、なんか変なモノ食べてる…？」

「変も何も…いや、言わないでおこう…多分その方がいいし…うんうん。まあ実際にアレやったの、一部は俺たちのせいじゃないし…スルーでいこう…」

気になる。めちやくちや気になる。が、自分が知らない方がいいと言っているのなら知らない方がいいのだろう。やめておこう。

「そうした方が良くない。絶対に良くない。むしろアレって俺しか感知してないのかなあ…はあ…俺たち、統合されたらショックどころの騒ぎじゃなさそう…気が滅入るなあ…どうせこれもあいつらのせいだ

ろうし：絶対笑ってるよ今頃……後でまとめてぶん殴ってやる……」
落ち込んだような、困ったような声ではあ、と溜息をつきながらぶつぶつ文句をいう姿は正しく自分だ。言っていることの大半は自分には意味が分からないものだったが。

「——ああ、それと“モルフエ”に気をつけてあげて」
「？」

「あの子、最近変だからさ。俺は見ることにしかできないけど、確実に苦しんでる。本来は“あれらを受け入れられる存在”じゃないから：まあでもあんなモノ食べたら腹壊すかなあ：連鎖して俺らも腹壊さないといいね：あ、もう壊れてるんだった」

モルフエに何かあったのだろうか。

というか知らないうちに何か食べて腹を壊しているらしい。今度会えたら整腸剤でも渡してあげようと決めた。というか何故モルフエの腹痛がこちらに連鎖するのだろうか——まさか、使っているトイレが一緒とか：ないか。ないな。普通に整腸剤渡してあげよう。モルフエ自体、俺の見てる幻覚かもしれないけど渡せるはずだ。

「それ、効くかな？」

「たぶん効くと思う」

「そうかなあ……」

同じ声で悩むとどっちが自分の考えだったのかわからなくなってくる。

モルフエに整腸剤が効くと思う自分と不安視している自分。どちらも同じ自分なので感じている半信半疑という感情は多分同じ：だと思いたい。

「俺もそう思いたいよ。というか違ったらビツクリ侍だ。俺はお前でお前は俺なんだよ。：えっと、我は汝、汝は我、つてやつ？ 一度言ってみたかったんだよね！ これ！ わーい！ 言えた言えた！」
「それは良かった」

バンザイをして喜ぶ自分に、確かにちよつと言ってみたかったけれどもどこまで喜ぶというのはかなり言ってみたかったの裏返しだったりするのだろうかと思う。自分でありながらやっぱり自分のことは

いまいちよく分からない。

「んー…そろそろ会話はやめにしよう。あんまりブーツとしてるとモコイさんに心配されるだろうし、俺から話せることもあまり無いしね。あ、こつちからは何もなければ基本的に話かけもしないから、居ないものだと思ってもらっていいよ。とかいかいつもは仕事がないときは殆ど寝てるし。俺のこと意識して呼ばない限りはお前の行動をぐつつり寝ながら夢で見てるからさ。そんなもんだと思ってよ」

そんなことを一方的に言っつて、じゃあ、なんてひらひらと手を振るもうひとりの自分がかき消える。

それと同時に周りの景色も元に戻った。

「ぼーっとしてどうしたの、チミ？」

「なんでもない。ちよつともうひとりの自分と話してただけ」

「はへ？」

「内なる自分との対話…みたいなの？ うん、間違いない」

不思議そうな顔をするモコイさんを連れて、そのまま寮へと帰宅した。

そういえば、最近ありすに会うことが出来ていない。中間テストが終わったら探してみるのもいいかもしれない。モコイさんに悪魔だと判断されているが、間違いという事もあるし話も通じるはずだ。きつと。

10/13 (月) 昼

二学期の中間試験が始まった。

試験内容は概ねいつも通りだ。

これなら復習しなくても良かったかもしれない。

と思っっていたら江戸川先生の担当教科である保健のテストでいつもとは少し違う問題が出た。

が、江戸川先生が授業中に「ここ、テストに出しますからね。キヒヒヒヒ」と言っつていた所だったのでしっかりノートにメモしてあった。ちやんと覚えがある。

おそらく正解できているだろう。たぶん。

10/17 (土) 放課後

二学期の中間テストが終わった。月曜日には試験の結果が張り出されるだろう。

モコイさんとふたりで「オクトパシー」のたこ焼きを食べていると寒い風が吹いてくる。

ベストをこの前ダメにしてしまったので新しいのを買ってでもいいかもしれないな、と考えながら腕をさする。

「チミ、寒いのか？」

「まあね…でもモコイさんと一緒だから寒くないよ」
言葉の綾だ。

実際は少し寒いが本気で寒いわけでもない。モコイさんと話す事によって緩和されているのもまた事実。独りだと寒い寒いと唸っていない程度には今日は寒かった。

そろそろカイロとマフラーの導入を考えるべきだ。両面に一枚ずつ貼るので一日二枚の消費と考えると「青ひげフアーマシー」で箱買った方がいいのかもしれない。

「明日はポロニアンモールに行こう。で、帰りに「はがくれ」の特製ラーメンを食べようか」

「ナイスだね、チミ。モチロン、3時のデザートは「シャガール」のケーキだよネ？」

「そうしようか。モコイさんは今、ジャスミン茶より『おいしい牛乳派』なんだっけ」

「イエス！ ゴックゴク飲むのがマイブーム。寒いこの時期、ホットにすると更にテイステイ」

じゃあ明日は14時ごろに寮を出てポロニアンモールまで行ってカイロを買ったら「シャガール」を梯子して、しばらくそこで暇をつぶすのもいいかもしれない。丁度読みたかった本を手に入れたので

それを持っていこうと考えながら二皿目のたこ焼きを平らげた。

10/18 (日) 昼

カイロを買ったその足で「ジャガール」に寄った。

モコイさんの分のホットミルクとケーキを頼んで膝の上に乗せて本を開く。

傍から見れば本を読んでいるだけ、に見えるはずだ。たぶん。

「うくん、テイステイ。あちつ」

「大丈夫？ ちゃんとフーフーしてから飲んでね」

「気をつけるネ…」

冷まさないまま暖かいホットミルクのマグに口をつけたせい小さい叫び声をあげたモコイさんを心配する。火傷になっていないだろうか。というか悪魔は火傷するのだろうか。炎上はしているところを見た事はあるが火傷になっているのは見た事がない。

朝倉先生曰く、ケガをしたなら人間より悪魔の方が治しやすいらしいが、ケガはしないにこしたことはない。傷薬を追加で買っておけばよかったかな、と思うも、そもそもモコイさんに火傷する舌があるのか見た事が無いのでわからなかった。悪魔は不思議だ。

「あれ、三上くん？」

モコイさんを心配していると、聞き覚えのある声で呼ばれたのでそちらを向くと、この前カウンセリングを受けた園村さんと、もう一人、黒髪でピアスをつけた男の人がそこにいた。旦那さんだろうか。

「園村先生、こんにちは」

「こんにちは。あれからどう？ 何か変なことは…って、その膝の上に、乗せてるの…ぬぐるみ…?」

園村さんのぎよっとするような視線が思いつきりモコイさんを見る。まさか、園村さんは「視える」人なのか。

「え、あはは、そ、そうなんです。かわいいでしょう？ ってモコイさん今はだめだつてケーキに手を伸ばしたら!」

できるだけ小声で言い放って慌てて隠すももう遅い。モコイさん

はケーキを口に入れてしまった。

そして園村さんの顔は驚愕に目を見開いているし、横の男の人は何が起こっているのかわからないような顔をしつつもモコイさんをしつかり見ていた。

「……それ、全部食べ終えてからでいいから話聞けないかな？」

「……はい」

観念するしかない。今日の読書の予定はキャンセルだ。

油断していた自分のミスなのでモコイさんは何ら悪くない。万全を期すなら普通にお持ち帰りにして部屋で食べても良かったのだ。

席に着いてこちらにニツコリと笑いかけた園村先さんは謎の凄味があった。ちよつと怖い。

「ごめんモコイさん……こんなことになるならお持ち帰りにしてホットミルクは寮で作ればよかったね……」

「ゆつくり食べるからノープロブレム！ いざとなったらこの『えんまくだん』で〜」

「いや、ごこじやだめだと思うよ……お店の人の迷惑になるしやめようね」

「ウイ……」

モコイさん秘蔵の『えんまくだん』で逃げようという作戦もごこじや無理だし、美鶴さんの紹介でかかった心療内科なのでたぶん住所も知られてる。詰んでるのなら素直に話し合いに応じた方が良いというのが自分の考えだ。

そんなにいきなりモコイさんを消そうとか排除しようという気も感じられない。あくまで、モコイさんがいることに驚いているだけのように見える。ならそんなに警戒する必要もないだろう。カウンセリングの時の園村さんの印象からして、無理やり踏み込んでくるタイプでもないような気がした。

ただ、園村さんと一緒にいる男の人が少し気になった。その人は特にこちらを見てくるといふ事もなく、普通にコーヒーを飲んでいる。が、逆に普通過ぎててなんだか気になるのだ。

(気にし過ぎかな……)

詮索するのはやっぱりよくないか、という事でそのまま本に目を戻す。モコイさんが食べ終わるまでは読書でもして待っていていようかと思っただけだ。が、全然頭に内容が入ってこなかった。

「そんなことだったんだね。無理言っでごめんなさい」

「大丈夫ですよ。ね、モコイさん」

「ウイ！ 飴ちゃんくれる人に悪い人はいないっすから」

「お、おやつで懐柔されてる…」

ポロニアンモールから駅までの道を、園村さんとその彼氏さん？（園村さんは同居人だと言っていた）である藤堂さんと歩く。

モコイさんとの関係をオブラートに包んで話して、悪い悪魔でない事をしっかりと知ってもらった。とりつかれているわけではなく、ただの大事な友達だと。

そして驚いたのがふたりが朝倉先生の知り合いで、ペルソナ使いだということだ。

多分さつきから藤堂さんが気になっていたのはそれが原因かもしれない。

園村さんと藤堂さんは高校時代と10年前にいろいろあったらしい。高校時代は御影町で。10年前は珠？ 溜市で、だそうだ。

そういうえば、神条さんの話で10年前の珠？ 溜市で噂がなんとなく、というのがあったんだっけか。

「10年前の珠？ 溜市ってあれですか？ 珠？ 溜市が浮いたとかかっていう…」

「そうそう、よく知ってるね。こっちだと10年前って言ったらポトアイランドの事故の方が有名じゃない？」

「か…知り合いの人から聞きました。あれ、悪魔がらみだったんですね」

知らなかった。そんな話の裏でペルソナ使いが戦っていたなんて。

実際、自分たちの戦いも誰も知らないようなもので同じような感じか。知らなければ存在自体分からない。『認知』されない。

「そう、〃ニヤルラトホテプ〃”っていう悪い神様のせいだったらしいの」

「ニヤルラ…トホテプ…」

何だか言いにくい名前だ。噛みそう。

あとよくわからないけどムカつく。すごくムカつく。幾月ぐらいムカつく名前だ。多分すごく悪いことをやったんだろう。幾月みたいに高笑いしながら。

…想像していたらめちやくちやムカついてきた。

「名前聞いて悪そうな感じを想像したらなんかめちやくちやムカついてきました。噛みそうな名前だからですかね」

「さ、さあ…」

園村さんが困惑している。

少し素直な意見を言いきたのかもしれない。流石に名前を聞いただけでムカつくとか思うのはさすがに悪い奴でも可哀想だったりするのだろうか。

「でも、三上君の方も大変みたいじゃない?」

「まあ…その…そうです、ね…」

朝倉先生伝いに、朝倉先生に伝えたこちらの情報はほぼほぼ伝わっているらしい。

言えるわけがない。「来年の1月末にはこの世界滅ぶんですよ」とか、「来年の1月末には死ぬ予定してるんですよH A H A H A!」とか。

もちろん、朝倉先生に大型シャドウの事は伝えていない…筈なのになぜかそのことも伝わっていた。桐条云々も伝わっていたのでタカヤ辺りがバラしたのか。多分そうに違いない。

一体どういうつもりなんだろうか。

「——実は、俺は急増する影人間の原因と桐条の起こした10年前の事故について調べてるんだ。きみの知ってることで良ければ教えてくれないか?」

「…藤堂さんが、ですか」

ここで初めて口を開いた藤堂さんの言葉に眉を顰める。桐条へ、ひ

いては美鶴さんに何かするつもりなのは、という警戒心が生まれる。

「ああ。桐条の本家本元。『南条』から調べるようそう言われてる」
南条。

日本有数の財閥である桐条の、源流とも呼べる大財閥だ。『南条コンツェルン』という超大会社を運営しているバリバリのセレブ一族だった気がする。つまり美鶴さんの親戚とも言えるのだ。

「今の当主である南条くんも私たちと同じペルソナ使いなんだよ。だから、悪いことはしないし、信用してほしいな…なんて」
「……」

園村さんの言葉に思案する。

確かに、かの南条なら分家である桐条の事情を察知しててもおかしくはない。が、逆になれば何故10年前に調査に来なかったのか、とか色々疑問が——あ、

（もし園村さん達と同じように、10年前の珠？瑠市の事件に現・南条家当主がペルソナ使いとして関わっていたら、さすがに忙しすぎて分家かつもみ消しのプロな桐条を問い詰めることは出来なかったとか…？ 影時間だの実験だのの資料はほぼほぼ幾月の手中に収まっていて見れなかったろうし、朝倉先生のように影時間の適性がないペルソナ使いや一般人なら影時間中に起こったシャドウの暴走による事故だなんて知りようがない…）

だから、朝倉先生経由でシャドウや影時間の情報が現・南条家当主に伝わるまで動けなかったとかだろうか。

とてもじゃないが先代の南条家の当主さんがペルソナ使いだったり影時間への適性を持っているようには思えないからだ。

「それ、調査始めたのって、朝倉先生から連絡行っただからですか」
「よくわかったな。そうだよ。ブンヤ：朝倉からなんじようくんに電話があったらしくて、それで俺に回ってきた。それだけだよ」

こればかりは自分が撒いてしまった種みたいなものだ。

影時間やシャドウのことを朝倉先生に伝えなければ——否、そもそもあの夏の日に倒れなければこんなことにはなっていない。

けれどあの出会い方をしなければ制御剤の副作用をなくすこともできなかつたわけで。

「…朝倉先生に話したことと同じです。それ以上は、さすがに俺も知らないです」

しらばつくれることにした。

今ニユクス云々喋ったところで何もできやしない。

それにタカヤ達が『影時間を消す方法』について朝倉先生に何もしやべっていないという事はそういう事だ。大型シャドウが月一いちで来るという情報しか藤堂さんは話さなかつた。

つまり、そういうことなのだ。

嫌でも12月頃にはニユクス教で大騒ぎに……ならないな。

今のタカヤ達がニユクス教を作るとは到底思えない。

今となつてはTシャツGパンで紗耶ちゃんの相手を洩々しているタカヤが、終末思想の宗教なんか始めた日には紗耶ちゃんが大泣きだ。そしてチドリとイズミさんが怖い顔になるに違いない。というかその前にジンが止めそうな勢いではある。ジンはジンで今でもタカヤの事を信奉はしているが、そのベクトルが少し変わりつつあるよ
うな、そんな気もする。

まるで紗耶ちゃんという子供を通して、みんな未来を見る様になつた感じだ。

ついでにガッツありまくりでザ・元気の塊って感じのイズミさんが居るのも大きいのかもしれない。あの親子がいるだけで部屋が明るいのだ。シャイニー。

それはともかく、

「…そっか。じゃあ、無理には聞かない。だから、話せるようになったら話してくれよ」

藤堂さんには自分が何かを隠していることはお見通しだったらしい。

薄く笑ってそう言ってきた藤堂さんは朝倉先生のように騒がしいという事もなく。本当に、自分の事を信頼して待っていてくれるような声色でそう伝えてきた。

この短い時間に出会ったわけのわからない高校生を、どうしてそれも信用できるといふのか。自分にはいまいちよくわからない。

「それじゃあね、三上君。今日は無理に話を聞いちゃう形になってごめんね」

「いえ、大丈夫です」

「またなにかあったらカウンセリングに来てね。話をするだけでもいいから」

駅の前で園村さんと藤堂さんに別れを告げ、電車に乗る。

「まだ少し時間があるからマンガ喫茶にでも行く？」

「行く行く！」

『はがくれ』で夕食を食べる予定の時間まで時間があるので寄り道しようと思う。

少し買い物してもいいかもしれない。流石に防寒具がカイロだけは少し心もとないから。

夜

「マフラー、フヒヒ。いいですなあ」

「こうして巻けばモコイさんも一緒に温まれるからね」

赤いマフラーを巻いて、夜道を歩く。

モコイさんも巻けるようにと長めのものを選んで買ったのだ。実際には、首に巻いているマフラーの輪の中にモコイさんが入り込む形になってしまって少しくすぐったいが。

「そうだ。12月になったらクリスマスがあつてケーキとか食べるし、年末には年越しそば…1月にはおせちもあるから楽しみにしていいね」

「クリスマスケーキ！ おせち！ ン、楽しみつスね！」

「おせちの他にお雑煮もあるかも。お出汁はどうしようかな…」

まだ早いが今から計画を立てていても損はしないだろう。

楽しめることは楽しまないと損だ。死ぬからと言ってこういうイベントを逃したいとは思わない。流石に死んだり何度繰り返すと

言ってもイベント事は毎回やりたいのだ。特に、モコ伊さんが居るから今回は新鮮で楽しい。

もし、世界を救ったとして。なにか奇跡が起こって死ななかつたとしたら。きっとこの先もモコ伊さんと一緒に歩んでいけるのだろう。悪魔に寿命は無い、らしいから。

だから、もし自分が湊も奏子も世界も救えて未来を生きれるようになったら、ちゃんと奏子と湊にモコ伊さんを「俺の一番の友だちだ」と紹介する。

——それくらいの希望をもっていたって、きっと許される。

たとえば待ち受けるものが、絶対の死だとしても。

今はただそれだけで頑張ろうと思える。

最近、湊や奏子、美鶴さんやモコ伊さんと一緒にいると、死ななければという暗示のようなものが少し和らぐような気がした。

依存でもいいから、見えている終わりに怯える心を少しだけ奮い立たせてくれる存在に頼るのを許してほしい。本当は守らなければいけない存在に寄りかかるのを許してほしい。

「あたたかいね」

「あたたかいですな」

そうやって、ふたりで笑いながら夜道を帰った。

アリス（10／19）

10／19（月） 放課後

中間試験の結果を確認し、いつも通りモコイさんと帰り道を歩く。ありすを探して本当に悪魔かどうかのをそれとなく確認しなければいけないのも忘れずに、と言いたいところだが正直会えるのかどうかすらもわからない。

彼女は商店街によくいるとはいえ、確実にいるかどうかは分からない。更に、モコイさんが怯えるほどの存在に、モコイさんと一緒に会いに行ってもいいのかどうかという心配がある。なので一旦、寮に帰っていてもらおうかと思った。

「モコイさん先に帰っててくれないかな」

「藪からステイックにどうしたんだネ、チミ」

「…俺はありすをさがそうかと思ってる。もし会えたらモコイさんは怯えちゃうだろうし、今日は話をするだけだから俺は大丈夫だよ」

モコイさんが心配そうな顔で見てる。

そんなに心配しなくとも、今日は本当に話をするだけなのだ。ありすも急に街中で人を襲ったりはしないだろうし、人に溶け込んで生活しているくらいだ。話し合いくらいはできるだろう。

「危なくなったらちゃんと言えと逃げようから。俺だって死にたくはないし…」

「それなら…」

渋々、といった様子で肩から降りたモコイさんは寮のある方向の道歩きを歩いていく。それを見送って商店街とその周辺を歩き出した。

1時間ほどぐるぐると歩き回ったのだろうか。

辺りはもう暗くなり、夜と言っても差し支えない時間になった。もうそろそろ今日は諦めて帰るべきだろう、と帰り道の方向へと身体を向けて歩き出す。

これ以上はモコイさんも心配するし何よりも晩御飯の時間に遅れてしまう。

「——おにいちゃん、こんばんは」

後ろから声が掛かる。

立ち止まって振り向けば、暗い夜道の真ん中でありすが街灯に照らされたついでいた。

「こんばんは」

「ひどいよー。ありす、今日はずっとおにいちゃんのこと探してたんだよ?」

「俺もだよ、聞きたいことがあって…じゃなくてこの前はごめんね」

一応、この前ありすとの予定を断ったことを謝しておく。

すると、無邪気な笑顔でほほ笑んだ彼女はその小さな口を開いた。

「いいのよ! でも、今日はお人形さんとは一緒じゃないのね。ざんねん」

お人形さん。ありすの言う、〃お人形さん〃とはモコイさんの事だろうか。

「あの時は人形だつて言ったけど、モコイさんは人形じゃなくて俺の友だちだよ」

「そうなの? ふーん。でも、ありすもおにいちゃんの友だちよね?」

「そうよね?」

「え…ああ、うん」

「良かった! それじゃあねー…おにいちゃんにお願い! ありすのお家まで一緒に帰ってくれる? 今日はおじさんたち、お仕事が長引いちゃったみたいなの!」

ありすはどうやら家まで送ってほしいようだ。

本当に彼女が悪魔か怪しい感じになってきた。魔人とも称される悪魔で、ホワイトトライダーよりも強いというのなら、こんな夜道へつちやらに違いないのだ。

だというのに、送ってほしいというのは彼女が悪魔でない証拠ではないのだろうか。

「…いいよ。道を教えてくれるかな?」

「わかったー! ありがとう、おにいちゃん!」

荒垣くん「帰りが遅くなるので今日は夕飯は外で食べます」とメールで連絡しておく。

「あんまり遅くなるんじゃないぞ」という短いメールがすぐに返ってきたのを確認して携帯電話をポケットにしまう。

「こつちだよ、おにいちゃん!」

夜道を歩く。

商店街の前まで戻り、さらにそこから住宅街の方へと歩く。

「ありすちゃんのお家ってどこらへんなんだ?」

「もつとねーあつち!」

かなり向こうの方を指さすありすに、結構遠くから来てるんだなと感じた。こんなに遠いと確かに1人で帰るのは心もとないだろう。

寮から長鳴神社に行く距離よりも離れているかもしれない。

「このさきのね、こつちにいくのよ!」

ありすは自分がいるからか、努めて明るく道案内をしてくる。ただ、こつち辺になってくると閑散とした住宅街なので人っ子ひとり歩いている。

そして、ありすが指さしたのはこの住宅街に似つかわしくない鬱蒼と茂る林に続く道だった。

「あつちに住んでるの…?」

「そうよ! ありす、おじさん達とお屋敷に住んでるの!」

どうやらありすはお嬢様だったらしい。

林の先というのが少々気になるが、お屋敷に住んでいるという事は、かなりのいいところのお嬢様だ。こういうのは、使用人とか雇っているものではないのだろうか。と気になったが、単にお嬢様ではなく屋敷に住んでいるというだけでそんなに金持ちではない可能性も出てきた。

街灯のない月明かりの照らす、落ち葉の敷き詰められたレンガの道を歩く。

本当に最低限の舗装がされている道だ。

そして、その向こうにライトで照らされている門とレトロな外観の屋敷が見えてきた。本当にありすは屋敷に住んでいたようだ。

「あれがねーありすのお家なの! トモダチが沢山いるのよ!」

「へー」

おそらくそれは、ぬいぐるみとかペットとかそういうたぐいなんだろうなと思う自分の思考からはありますが悪魔かもしれないという可能性は消え去っていた。

「おうちついた〜！ ほら、おにいちゃんも中に入って！」

「いや、俺はここで帰るよ」

門の前まで来て、ここまで来れば大丈夫だろうとありすに別れを告げることにする。

インターホンが門には無いが、ありすはひとりでも家の中に入れるだろう。なんせ、留守番の途中で1人で出てきたらしいのだから。

「だめよ！ おにいちゃんも中に入らないと！ だって、ありすの友だちなんでしょ？」

(…ん?)

ありすの発言に、なにか違和感を感じた。

「ごめんね、俺もそろそろ帰らないと、晩御飯食べられなくなっちゃうから」

「そうなの？」

「そうだよ」

ありすが、不意に無表情になった。

その顔にゾツとした。まるで、そう、これは――

「あーあ、つまんないの。おにいちゃんもワタシから……」
「アリス」
から離れようとするのね。あとちよつとだったのに」
「!？」

ありすの――否、アリスの目が赤く光った。

瞬間、周りの景色がぐにやりと歪み、まるで『不思議の国』のようなメルヘンチックな遊園地に変わる。

「ようこそ、おにいちゃん。アリスの国へ」

そしてその中心で、アリスはふわりと花の咲くような笑顔で笑った。

「…あ、ありす……？」

気配が、少女のものから悪魔のそれに変わり、気持ち悪い死臭のようなものがそこから中からひしひしと感じられた。

——そして、間違いなく目の前の少女は彼らと同じ『魔人』だと内なる四騎士が訴えかけている。

「まずい。」

「もしかしなくても、誘いこまれた？」

「おにいちゃんはワタシの友だちなのにワタシだけのオトモダチにはなってくれないから、今日は『お願い』するために探してたのよ」

「ぶらぶらと、その異様な景色の中をスキップするようにアリスは歩く。」

「アリスとね、トモダチになつてくれたらおにいちゃんをここから出してあげるよ。ね、それならおにいちゃんもナツトクしてワタシとトモダチになつてくれるよね？」

「……」

「どうしてだんまりなの？ もしかして、アリスにおどろいちゃった？ うふふ、じゃあおにいちゃんがトモダチになりたくなくなるように、もつともつと驚かせてあげるね！」

依然、言葉が出ない自分に可愛く笑いかけたアリスは、片手をあげる。

「紹介するね、これがアリスのオトモダチ！」

「…アアア…」

地面から生えるように次々と現れたのは、一言でいえばゾンビだった。

「思わず後ずさり、距離をとって鞘からダガーナイフを取り出す。」

「かわいいでしょ？ これがアリスのトモダチなの。ここに来てからはおじさんたちに『オトモダチを増やしちやダメ』って言われてけど、おにいちゃんだけは良いよって言われたの！ それにね、アリスのオトモダチになつたらずっとずっと一緒に居られるのよ！ おにいちゃんもすぐにこうなれるから安心してね！」

「なにも安心できない。」

「こうなる、というのはゾンビになるという事だろう。そんなのは御免だ。」

「だがしかし、アリスの能力も強さも未知数だ。気を抜けば殺されて

しまうかもしれない。

「だからね——…死んでくれる？」

ぞわり。本能が危険信号を放つ。

急いでその場を飛び退けば、地面からアイアンメイデンが飛び出て先ほどまで自分がいたところでガチャンと音を立てて閉まった。

飛び退くのが遅ければ即死していたに違いない。

「あらら、おにいちゃんどうして避けられたの？ アリスの『お願い』は絶対なのに」

心底不思議そうに敵意の無いアリスが訊いてくるが答えられるはずがない。

と、同時にあれを連発されたら避けきれないということもはつきりしているわけで。

ただ、自分に死んでくれるかときいてきて殺しにかかってくる割に、アリス自身に敵意のようなものは微塵も感じられないのが気持ち悪い。まるで、遊ばれているような感覚だ。

「だんまりなのね。べつにいーもんね！ ワタシのオトモダチにおにいちゃんをオトモダチにしてもらうんだから！」

10人ほどのゾンビがこちらに向かってくる。流星にこの数をいちいちナイフで相手をしていられるわけがない。ゾンビ映画みたいに噛まれたらゾンビになるという仕組みだったらもつと嫌だ。なので。

「モルペウス！」【空間殺法】

現れた「モルペウス」がその双腕の爪でゾンビたちを切り裂く。「パンタソス」の「マハラギダイク」で焼き払っても良かったがこちらの方が早い気がして、実際正解だったので良しとする。

モルペウスによって斬り裂かれたゾンビたちは肉片になるかならないかの段階で塵となって消えていく。どうやら、彼らも悪魔と同じ存在の様だ。

「う~~~~~！ よくわかんないけどおにいちゃんはすぐに死んでくれないってことなの!? じゃあ、トランプ兵さんいっけ~~~~！」

癩癩を起したようなアリスが次に呼び出したのはまさに『不思議の

国のアリス』に出てくる槍を持ったトランプの兵隊だった。が、こんなもの、まともに相手などしてられない。

踵を返し、走る。

「あー！ 逃げる気!? でも残念ね！ おにいちゃんはここから出られないの。ここではアリスが女王様。アリスの命令は絶対なの！」

「……！」

突如現れたアリスに回り込まれ、足を止める。

ぷりぷりと怒る彼女はしかし、それでも凶暴さが無い。本当に遊ばれているようだ。

「ほら、おにいちゃん。逃げてばっかりだと疲れちゃうよ？ アリスはおにいちゃんが早く諦めてくれるならそれでもいいけど！」

後ろにはトランプ兵。前にはアリス。

まさに前門の虎後門の狼と言ったところだ。アリスへの注意をおろそかにすれば先ほどの攻撃を再びされるかもしれない。トランプ兵を無視すれば、いずれ追いつかれて攻撃されることは確実だ。

「チツ…」

アリスから注意をそらさずに、また走り出す。

そして、丁度両者が一方向になる様にしようと――

「も~~~~~！ 逃げてばかりだとつまんないの~~~~！」

「!?」

したら再びアリスが目の前に現れた。

まさかとは思うが「ここではアリスが女王様」だというのは比喩ではなく、本当の事だとしたら。アリスはこの空間のどこへでも瞬時に移動できるという事なのだろうか。

これなら確かにいくら逃げてても意味がない。

ただアリスは自分から手出しをする気はない様だ。ならばその好意に甘えよう、と“ホワイトライダー”を呼び出した。

【プロミネンス】

太陽の如き業火がトランプ兵たちを焼き尽くす。

そして塵も残さず焼き尽くした跡にアリスが立ってぱちぱちと拍手をしていた。

「すごいよね、おにいちちゃん！ アリス、びつくりしちゃった。お人形さんだけじゃなくて、骸骨さんとお馬さんも呼び出せるのね。それがおにいちちゃんのオトモダチなんだ！」

「アリスの口が弧を描く。」

「でも、まだアリスとトモダチになつてはくれないんでしょう？ うくん、どうしよつかなく」

くるくると思索しながら回る姿は可憐な少女そのものだ。だが、それがまるで蟻をすり潰すように人の命を奪える存在だとしたら、恐怖でしかない。

「きーめた！おにいちちゃんのお友達も来てるみたいだし、お友達の前でおにいちちゃんには死んでもらうことにするね！」

「それは、どういう…!?!」

「ことだ、と言おうとした瞬間にアリスが指を「えい」と振つたのが見えた。」

それが攻撃の動作だと認識するかしらないかのタイミングで、身体を斬り裂く痛みが走る。

「いっ…!」

飛んできたのは無数のトランプ。

それが、雨のように降り注いで受け身をとる暇もない全身を切りつけていく。血が滲み、服が切れていく。

雨が終わるころにはロクに立ち上がれなくなっていた。

このままではまずい、と思うも痛みで体が動かない。

「うくん、ボロボロのおにいちちゃんはカツコよくないから直してあげる！」

くるりとアリスが回ると服だけが修復される。ここではなにもかもアリスの思いのまま、らしい。

「え〜つと、服をボロボロにしないでもつとおにいちちゃんから元気を奪うには…これね！」

【エイガオン】

「——ッ!？」

悲鳴をあげる間もなく、足元から黒い光が噴出して受けたことも見

た事も無い魔法で体力を削られる。呪いの力で攻撃する、という点では「ムド」に近いのかも知れないが、今つけている「モルペウス」で即死しないという点ではまた別物のような気がする。死にはしないだけで既に地に伏せつて起き上がれなくなっているが。

「これでおにいちゃんは今もう起き上がれないね！　ねえ、おにいちゃんのお友達が出てこなくてもいいの？　このままだとおにいちゃん、死んじゃうよ？」

先ほどからアリスが何も無いところに向かって話しかけている。しかしそこにはだれもいない。いないはず、なのだ。

「怖くてでてこれないのかな？　じゃあ、いいや。おにいちゃんに死んでもらったら次はアナタの番ね！」

アリスが手をあげる。

死ねない。こんなところで、死ねるはずがない。

「よろよると立ち上がる。」

「わあ、すごい！　おにいちゃん、まだ立ち上がれるんだ！　でも、気を抜いていいの？」

ぞわり、とまた死の気配を感じて後ろへ飛び退く。が、アイアンメイデンは出てこない。

「…？」

「よそ見はだめだよ、おにいちゃん。ほら、上を見てみて！」

アリスのその声に咄嗟に上を向くと、上空から槍とトランプがこちらめがけて振って来る。

その距離は到底今から動いて避けられるものではなかった。死ぬ。

今から全身をあれらに貫かれて死ぬのだと、はっきりと分かった。それでも、諦めることなくペルソナを変えようとした瞬間、ドン、と何かに突き飛ばされて地面を転がった。

と同時に先ほどまでいた場所に槍とトランプが突き刺さる。

そして、自分の代わりにそれを受けたのは。

「——モコイ、さ…え…なんで…どうして…！」

そこにいるはずのないモコイさんだった。這うようにして、モコイ

さんに近づく。

「やつぱり…チミの事が心配で…こつそり着いてきて…良かったっスね……」

「あれれ？ おにいちゃんが逃げられないように、槍とトランプにしたのにおにいちゃんのお友達の手で失敗しちゃった！」

アリスが何か言っているが聞こえない。モコイさんを震える手で抱き上げる。

「モコイさん、穴、が……あ……回復……回復しなきや……」

モコイさんの体の真ん中には、槍で貫かれただろう大きな穴が開いていた。

そこから赤い粒子が血のように流れ出ていつている。

どうにかしないと。はやく、治療魔法をかけないと、と思うも震えて集中することが出来ずになかなかうまくいかない。

「もういいっスよ……モコイさん…はもう、ダメダメさんだから……」

「そんな事ない！ いま、いま…俺がなんとかするから……！ どうにか……するから……！」

救わなきや、助けなきやと思うのに、なんとかして探し当てた傷薬では効果が出ず、じゃあ宝玉なら、としてみても全く回復する様子が見られない。だめだ、これじゃ、だめだ。

モコイさんを死なせるわけにはいかない。

死なせるなんて、そんなこと。

「楽し…かったよ……チミとの……ランデヴー……」

「だめだ、モコイさん…死んじやだめだ……！ 嫌だ……！ 嫌だ！ 俺を…置いて逝かないでくれ……！ 消えないでくれ……！」

——その叫びもむなしく、モコイさんは自分の腕の中で他の悪魔と同じように消えた。

「う、ああ……あああ……あああああああああああ——ッ
!!!!!!!」

…消えてしまった。

死んでしまった。

死んだ者はもう元には戻らない。帰ってこない。二度と話すことはできない。

もう、触れられない。抱きしめようと力を込めても、そこにはもう何も無い。

「ユーキおにいちちゃん、感動のお別れはもう済んだ？ ふふ、大丈夫だよ。おにいちちゃんも死ねばすぐにその子と会えるからー！」

ガチガチと震える歯を食いしばる。引き攣りながらも大きく息を吸う。

「だから、ね？ 今度こそ「死んでくれる？」」

虚空からトランプや槍が降り注いでくるが関係ない。

身体の痛みなど、この心を引き裂くような慟哭に比べたら無いに等しい。

ごぼごぼと、足元で泥が泡立つ。まるでそれは自分の激情に反応しているかのように湧いてきているようだった。

——そして泥の中から出てきたそれを、掴んだ。

立ち上がる。手によく馴染むそれを、自分は知っている。

聖槍ロンギヌス。本物の聖遺物であり神話の代物だ。

どうしてこんなものがという疑問はない。だって、これは10年前から自分の手元にあったのだから。

「なんで!? なんでおにいちちゃんは死なないの!? ユーキおにいちちゃんは……! ひっ! やだ……それ……こわい……! その手に持つてる

ものをどこかにやって! アリスに向けないで! 近づかないで!!!

こっちに来ないで!!!」

「駄目だよ。逃げるなんて俺が赦さない」

赦せない。

捕まえて乱暴に足で押し倒してからロンギヌスの矛先をアリスに向ける。

自分の中からはもう、アリスに対する情や優しさといった感情は消え去っていた。

「やだ! やだやだやだやだやだ! 死にたくない! 消えたくない!」

「モコイさんも同じことを思っていたと思うよ」

何も感じない。

ただ、こいつは消さなきやという感情だけが頭を支配していた。

「どうしてみんなワタシをイジめるの！　いつもひどいことするの！　アリスはただ、遊びたかっただけなのに！」

「ごめんね」

謝罪の言葉に中身はなく。

なんの躊躇いもなく、槍をその胸に押し付け力を込めた。

「いやー……ッ！」

何度やっても慣れない、悪魔の肉の感触。

ああ、五月蠅い。面倒臭い。一丁前に人間みたいな姿をするんじゃない。人間みたいな反応をするんじゃない。モコイさんを、“俺の大切な友達”を殺したくせに。

力を入れ、槍を更に深く食いこませる。

…まるで犯罪者みたいだ。いたいけな少女を殺す、猟奇殺人鬼。なんて。

これじゃあどちらが殺人鬼かわかったものでは無い。

それでもなお、アリスに対してなんの感慨も浮かばない。

モコイさんが死んでしまっただけから、まるで感情が全て抜け落ちてしまったかのようだ。

しばらくぐりぐりと押し込んでいるとアリスは霧散して消えた。

他の悪魔と同じように。モコイさんと同じように。

いつの間にかロンギヌスも手から消え去っていたがそんなことはどうでもいい。

(……………帰ろう)

鞆を拾い上げ、踵を返す。

アリスの創り出した空間はすでに消えていた。空間を維持するほどの力すらなくなったのだろう。

「待ちたまえ」

不意に、後ろから声が聞こえた。男の声だ。

振り向けば、それぞれ赤いスーツと黒いスーツを着たふたりの紳士が立っていた。

「…………」

が、そんなことは関係ない。

無視して歩こうとした瞬間、世界が一変した。

まるで魔人の領域のような異様な空間に足を止める。

「我々を無視しようとはいいい度胸ではないか」

「君は、自分がどういうことをしたのか分かってるのですか？」

目の前の男たちは憤慨しているようだが答える義理もない。興味がない。どうでもいい。

「ひとりの少女のささやかな夢を踏みにじったどころかその形を奪ったのですよ。『ベリアル』も私も、ただあの子の笑顔を見たかったけなのです」

「…だから、俺の一番大切な友達を殺してもいいと？」

口から洩れた声に温度はなかった。

その返事に黒い方の男が笑みを浮かべる。

「ええ、ええ。悪魔といえども死ねば永遠となれるのです。永遠の平穏を享受できるのです。そののながいけいけないのか。消滅させないだけありがたいと感謝すべきです」

狂ってる。

黒いスーツの男が笑いながら言っていることの意味が分からない。自分にとってはどちらも同じことだ。

今しがたアリスにしたことも、モコイさんがされたことも。

「アリスの遊び相手として君も永遠を手に入れるべきなのです。時間がかかりますがあの子はまた復活する。ならばそれまで耐えられる形になっておくべきです。私としても、君のその歪な魂には興味がありますからね」

どうやら逃してくれる気はないらしい。

面倒くさい。こいつらもどうせ悪魔なんだろう。

——なら、殺しても問題は無いわけだ。

「ッ!? 『ネビロス』…ッ、いかん!」

「『ヒュプノス』」

赤い男が何かに気がついたようだがもう遅い。

また湧いてきた足元の泥から、『ヒュプノス』が鎖の擦れ合う音を

鳴らしながら這い出てくる。

そして眼窩を光らせて大口を開けた。

「……【アンティクトン】」

爆発。

もう一度、

【アンティクトン】

こんなところでくたばる程度の悪魔じゃないだろう。

もう一度。

【アンティクトン】

念には念を入れよう。背後からの奇襲なんてめんどくさいことこの上ない。

【アンティクトン】

死体など見たくもないしうるさい言葉も聞きたくない。

【アンティクトン】

聞きたくない。

【アンティクトン】

聞きたくない。

爆風の余波を身に浴びながら、耳を塞いでひたすら「ヒュプノス」が放つ魔力の爆発の光を見る。あまりの威力に空気がビリビリと揺れているらしい。

どれくらい連発したのか覚えていないが、殆ど気配もしなくなったのもういいだろう、と一旦止めさせて、土煙が晴れたそこを見やる。

そこには先ほどのスーツ姿から打って変わって細身の赤いトカゲのようなフォルムの悪魔とオレンジの布のようなものを身体に巻き付けた骸骨メイクの悪魔が地に伏せていた。

なんと2体ともまだギリギリ生きていたらしい。

しぶとい悪魔だ。モコイさんはあんな簡単に死んでしまったというのに。

「ぐ…愛する者の為に尽くすのが…なぜ…いけないのだ…」

うわ言のようにそうつぶやく悪魔の話聞く義理はない。やっぱりもう一撃放っておくべきだった。

ただ、このような状況になっているのはこちらのせいじゃない。アリスや彼らが好き勝手にすぎたせいだ。自業自得じゃないか。自分としては自分の知り合いやモコイさんにさえ手を出さなければ見て見ぬふりをすることもできた。

越えてはいけな一線を越えたのは彼ら自身だ。だから、

「ヒュプノス」

告げる間でもなく、自らの意志を汲んでくれたヒュプノスが大口を開いて魔力の塊を放てば地に伏せる悪魔たちの真上で魔力が爆発した。

爆風。

風がやみ、煙が晴れる頃には悪魔の気配と姿は跡形もなくなっていた。

周りの景色も元の物に戻っているようだ。

いつの間にか薄曇りになった夜空から、ぽつりぽつりと雨が降ってくる。それは瞬く間に勢いが強くなり、頭から足までを濡らしている。

(寒い、な…)

そう思っても心配してくれる声はもうない。

自分に力が無かったから失ってしまった。自分が甘かったから失ってしまった。

身の丈に合わない願いを持ってしまったから、失ってしまった。

希望など、要らない。奪われるくらいなら、要らない。

頼ってはいけなかった。甘えてはいけなかった。

――繋がりなど、持たなければよかった。

自分はどこまで行っても独りで居るべきなのだ。

「……………」

酷く軽い肩が虚しかった。

臆病な自分はそれでも (10 / 19 ~ 10 / 20)

急に土砂降りの雨が降ってきたので窓でも閉めるか、と院内の窓を閉め始めた朝倉は最後に寄った玄関近くの窓から玄関の外に備えつけられた自動点灯のライトが光っている事に気がついた。

あれは訪問者があると勝手に着くタイプのもの、前を通った程度だとすぐに消える代物だ。

それが、先程からずつと点灯しっぱなしだった。

この朝倉医院は悪魔や超常の存在と戦う人間専門のような病院なので、よくぶつ倒れて力尽きた人間が玄関の前で倒れ込んでいる時がある。大体は仲間の人間か仲魔の悪魔がインターホンを鳴らすので大事には至っていないが、たまに一人でぶつ倒れている輩もいるのだ。今回もその類かと朝倉は舌打ちしながら玄関を開けた。

「……お前……!」

しかし、そこに居たのは血塗れの怪我人でも呪いを受けた大馬鹿者でも何でもなく、突っ立っているびしょ濡れの優希だった。

ただし、その目に驚くほど生気がない。

唇は真つ青で肌の色は白い。そして言葉も発さない。

「おい、どうしたんだ……とりあえず中に入れ、な?」

このまま雨に濡らす訳にもいかない、と手をとって無理やり院内に引き込めば、その手は酷く冷たく朝倉はゾツとすると同時に早く温めるか安静にさせないといけなさと感じた。このままだと低体温症になる。

いや、もしかしたらこの様子だと軽度か中度の低体温症になっているかもしれない、と歯噛みする。一体いつからあそこに立っていたというのか。

「話は後で聞いてやるから、とりあえず着替えろ。……着替えれるか?」

奥の部屋に通してそう訊くも、うんともすんとも言わない優希に朝倉は眉をひそめ、中度の低体温症の症状によく見られる『無関心』の

状態じゃないかと訝しんだ。

とにかく、着替えさせねばと制服の上着に手をかけると抵抗もなく脱がされる。いつもならあーだーこーだ恥ずかしいあの自分でやるだのなんだのと文句を言うような人間が、だ。

「たく、手のかかる患者だぜ…」

なんとか患者着に着替えさせ、ベッドに寝かせてから部屋の暖房をつけた朝倉はそう軽口を叩いてみるが、虚空を眺めてぴくりとも反応をしない優希にかなり不味いか？ とまた眉を潜めたと同時に口をこじ開けて体温計を突っ込んだ。

体温を測っている間に色々と準備をする。

電子音が鳴り、口から体温計を取り出して見れば『33.6℃』とやはり低い。

軽度だが低体温症には違いなかった。

相応の対応を頭の中でシミュレートしながらなぜここに来たのか全く分からないが、どうせ寮に連絡もしていないだろう、と思い立って電話をすれば荒垣がそれに出る。

「お、荒垣か。ちょうどいいや。クソガキ…三上優希をこっちで1晩預かるから今日は帰らねえって連絡伝えといてくれや」

『あいつ、夕飯は要らねえつつって連絡してきたがどうしたってんだ？』

「雨に降られてちよつくら体調崩したみてーでな、帰らせるのが少し危なげだから泊まらせて様子を見るだけだ。安心してくれ」

朝倉がそう伝えるも、電話の向こうで考えるような沈黙が流れてくる。

『……………車で送ってこねえつつーことは相当ヤバいんだな？』

「ヤバいかと言われりゃヤバいかもな。ありや明らかに正常じゃねえ。心当たりはねーか？」

沈黙の後、小声でそう聞いてきた荒垣に朝倉は観念して白状する事にした。

そもそも、優希という人間が傘を忘れるのはまだしも、軽度とは言えども低体温症になるほど外で突っ立っているというのがおかしい

のだ。それにあの生氣のない虚ろな目。意識が混濁しているわけでもなさそうだし、何かあったに違いないと朝倉は予想した。

『いや…特に何も無かった。少なくとも朝まではな』

「そうか…じゃあ昼以降になにかあったかもしれねえな。悪いな、こんな夜遅くに」

『構わねえよ。三上のこと、頼んだぜ。朝倉センセ』

「まあ任せとけて」

電話を切る。

ただ、明日になって体調がマシになってから話を聞かないと判断できそうにないな、と朝倉は珍しく弱気になっていた。もしこれが、精神的な問題だとしたら。

(オレにや無理かもなあ…)

朝倉は管轄外だった。

ぽりぽりと頭をかいて、コーヒーでも入れに行くかと給湯室へと向かった。

コーヒーを入れて戻ってきた朝倉はベッドから優希が起き上がっているのが目に入りギョツとしつつも近寄った。

「おい、喋れるか？ 喋れなくてもオレの言ってることが分かるか？

わかるなら、頷いてくれよ」

「え、わ…わかり、ますけど…なんで俺、ここに…？」

声をかけてみれば先ほどとは違いちゃんと返答が返って来る。どうやらちゃんと話が出来るようだ。

わけが分かりませんが、と言いたげな様子の優希の目は先程までの虚ろな目では無かった。が、朝倉はなにか違和感を感じる。

「オレの名前、言ってみろ」

「……………」

沈黙。

しばらくした後に優希はおずおず、といった感じで口を開いた。

「…まさか今日はフルネームの気分ですか…？」

「違えよバカ！ どうしてそういう思考なんだよ！ いつも呼んでる呼び名でいいに決まってるんだろ！」

「あ、そうなんですな」

朝倉はこの会話の中でもなにか言いようのない違和感を感じていた。

なにか大きなズレがあるような、なにか見逃しているような。そんな違和感だ。

「ほら、スーパーカッコイイオレの名前を言ってみろ」

「……えと……朝倉先生……?」

何故そこで疑問形なんだ、と朝倉は憤りそうになったがいつもの事なので堪えた。

「よし。一応及第点って事にしといてやるよ。オマエ、ウチの玄関にずっと立ってたのは覚えてるか?」

そう言えば、数拍遅れて僅かに目が見開かれる。微妙に反応が鈍い様な気がするのには気のせいだろうか。単純に、体力が落ちているせいかな。朝倉は判断しかねていた。

「いえ……俺、寮に帰ろうとして……急に雨が降ってきて……それで……どうしたんだっけ……」

考え込むようなその表情は、真剣そのものに見える。

駅からだと仮定するところらと寮の方向は反対と言っても過言ではない方向にある。

「……すみません、ちよつとそこからは覚えてないです」

しばらく考え込んでいたが思い当たるような記憶が無いようで、困ったように眉を顰めるその顔は嘘をついていないようにも見える。だが、先ほどと同じように朝倉は妙に拭えない違和感を感じ続けた。

「あの、よくわからないですけど俺はもう大丈夫なので帰ります……」

「ちよい待ってって」

慌てて冷えた肩を掴んで、立ち上がりとする優希をベッドの上に押し戻した朝倉は苦い顔になる。まだ体温が上がりきってもいない危ない状態であるのになぜそんなに焦って帰ろうとするのか。何かを隠しているような、話をしたくないとでもいうかのようなその対応を訝しんだ。これは、明日になっても話を聞けそうにないか、と内心

で舌打ちする。

「いいか、お前は今低体温で危ない状態だ。こんな土砂降りの雨の中、傘を持っていたとしてもこれから寮に歩いて帰るなんてもつてのほかなんだよ。お前が普通の健康優良児なら体温めて乾いた服渡してハイ帰れつつ帰すがな、お前の身体は持病持ちかつ制御剤の副作用で普通の人間よりも体力が落ちてるんだぞ。そんなのから目を離したらコロっと死んじまうから帰せるわけねーだろ」

「……」

まただ。また、一瞬目が虚ろになった。

すぐに元の目に戻るが、一体どうしてしまったというのか。まるで乗った糸の上でぐらぐらと揺れて、今にも落ちそうなのを必死に耐えているようにも見える。

「……でも、これ以上迷惑かけるわけにも……」

「『迷惑』だあ!?! 医者の仕事は患者の命を救い・健康を守る事だぞ? 迷惑じゃなくてこれも仕事の内に決まってるんだろ。どのみち乾燥機にかけても服が渇くのは1、2時間後だからもう今日は泊まっつけ」

「ほら、寝た寝た!」とベッドの上に再び寝かせ、薄手の毛布を掛けてやる。

暖房もかけているので一晩寝たら体温は回復するだろう、と考えた朝倉は部屋の電気を消した。

「良い夢見ろよ」

「良い夢見ろよ」と、そう言って朝倉先生は部屋のドアを閉めた。

残念ながらとてもじゃないがいい夢は見られなさそうだ。そもそも、自分は眠っているときに夢を滅多に見たりしない。

「……」

何故、自分は朝倉医院にいるのだろう。と真っ暗な部屋の中ベッドの上でぼんやり考える。

ここに来るつもりは全くなかった。あの後、まっすぐ寮へ帰ろうと土砂降りの雨の中を歩いていたはずなのだ。

これ以上誰にも頼る事の無いように。甘えることのないように。何ら変わらないいつも通りの自分を演じようと、そう思い直したはずなのに。

雨の中を歩いている途中から記憶がない。そして気がついたらこのベッドの上だ。朝倉先生の話によるとこの玄関に突っ立っていたらしい。

そんなつもりも予定も全くなかったのに、どうしてここへきてしまったのか。本当に意味が分からないし我ながらまだ誰かに頼ろうとするのかと忌々しく思ってしまう。

かといっておめおめと死ぬわけにはいかない。

モコイさんに救われた命だ。先生の言う通り、無理やり土砂降りの中を帰って発作を起こして誰にも知られぬまま死んだとなると顔向けできない。情けないし恥ずかしすぎる。

ただ、ちゃんと明日からはいつもの自分でないといけない。誰にも弱みを見せずに、誰にも頼らずに、少しだけ頼るようなそぶりを見せて安心させることも忘れずに。ただし、全力で甘えたり頼ってはいけない。あくまでも「誰かに頼っているところを見せて安心させる」ためのパフォーマンスなだけだ。

そしてこれからはもうグダグダ考えずに本気で隠れてタルタロスへと行って鍛錬をすべきなのも忘れずに。

ひとりでやって、ひとりで終わらせる。

最初からそうすれば良かった。ただ、それだけだ。

今回、知り合いが増えたからと調子に乗ったツケがこのザマだ。愚かだとしか言いようがない。自分は泣いてはいけない。悲しんではいけない。やることは反省と対策を練る事だけだ。

故人を悼むのと、自分が悲しいから悲しむのは違う。

ただ泣くだけならいつでもできる。

悲しみに溺れて死のうと思って死ぬことだってやろうと思えばいつでも死ぬる。けれど、まだ死ぬわけにはいかない。

矛盾していると言われてもいい。元から、自分は死ぬべきだと思っているのに死ぬことに対し価値を求めすぎるくらいがある。価値が無ければ死ねない。つまり、誰かの代わりに死なないと意味がないと思っっているのだ。

なんて傲慢なんだろうか。

なんて汚れているのだろうか。

薄々、なんとなくだが自分なんかには救われても皆は良い気がしないだろう、という気持ちはあった。だって、庇って目の前で死なれたら余計なトラウマになる可能性だってある。人の死を間近で見るというのはそれだけでしんどい事だ。けれど自分には『自分の死を見せるという不快感』を与えずに救う方法をあまり知らない。というか庇う時点でケガをするもしくは死ぬの二択なのだからそれはそうだとはいわれたら何も言えない。自分はモコイさんのように優しく清く、正しい存在じゃない。だから、惜しまれる価値は無い。

自分は完璧じゃない。神様でもない。ただの無力な人間だ。

ペルソナだって最初から持っていたわけじゃない。影時間のことだって、タルタロスのことだって、最初から知っていたわけじゃない。それらの存在を知るようになったのは周回を始めてから10周くらい経った後のことだ。

最初はわけもわからずに弟や妹が死ぬのを何度も見てきた。何故死ぬのかと、意味もわからなかった。

それらの存在を知ってから、特別課外活動部というものがあると知るまでさらに30周ほどかかった。何度も死んだ。

そりやそうだ。ペルソナを持っていないのに影時間には入れるようになって、そこでシャドウに襲われたら何もなすすべがない。

ペルソナに目覚めたのはそこから20周ほど後だ。そこからは1人でタルタロスに登って特別課外活動部とバツティングして追いかけられたり、ひとりなのでシャドウに袋叩きにされて死んだり普通に事故死したりと色々あった。暴走車両許すまじ。

まともに特別課外活動部とかかわるようになったのは1000周を越えたあたりだ。正直、自分でもどうかしてると思う。1000回近く

は死んだか、弟（もしくは妹）の死を知ったことになるのだから。

自分か湊と奏子、もしくはその両方が死んだときに強制的にリセットされるのは楽といえれば楽なのかもしれないが積み上げてきたものがパーになるのは些か不満だった。

知識ばかり積み上がり、成長度合いは4月に戻った時点でリセット。湊や奏子のようにベルベットルームがあるわけでもなく。湊や奏子のいう『コミユ』とかいう代物も自分にはないので繋がりを持つのも無意味と言われているようなものだろう。

“ポペートル”と“パンタソス”だって最初から使えたわけじゃないしモルフエだって影時間を知って初めてそこで現れるようになったのだ。

いや、恐らくは10周程度で精神的に参ってしまった自分が生み出したもうひとりの自分だったりしないだろうか、という疑念は今でもある。そうでなければ都合よく記憶の持越しなどしているものなのだろうか。

モルフエが自分自身だというのなら、納得がいくのだ。が、それはそれで今回のモルフエの言動は納得がいかないこともある。しかも明らかに言動が自分自身のものではないものも含まれているのが気になる。

自分は大型シャドウを倒すべきだと思っているし、近づきたくないなどとはもう思っていない。

シャドウとの戦いを始めたすぐは大型シャドウなんて化け物に立ち向かうどころか、シャドウですら怖いと思っただけ。湊や奏子、特別課外活動部の皆はよく初めからあんなに戦えるな、と思ってしまう。

自分なんか初陣は金属バットを持ってへっぴり腰になりながらなんとか臆病のマーヤを10分以上かけて倒したくらいなのだ。多分情けない悲鳴を上げていたと思う。

ただ、土壇場で身体が勝手に動いて避けたりして攻撃を喰らうことはなかったのが謎だ。普通にビビってヒット&アウェイ方式で殴っていたからだろうか。まあどうでもいいか。

大型シャドウを倒さなければいけないということを知ったのも100周を越えてからで、ニユクスがやべーぞという認識になったのは更にその300周後だ。自分死に過ぎじやないかと思うけど周りが強すぎるのだ。周りが。あと結構な頻度でバックアタックを喰らって湊と奏子もシャドウにやられたりしていた。

さらに、湊と奏子の死因がニユクスの封印によるものだと気がついたのは…何回目だったか。よく覚えていない。

ただ、死因を知ったとしても邪魔をするとか一緒にやるとか色々ためしはしてみた。けれど世界が滅んだり3月のあの日に必ず湊と奏子は死んでしまったりするので手づまりだったのだ。

結構最近までヤケクソになっていたのを覚えている。

結局ヤケクソになってしたこと全て、どれもこれもをした瞬間に死んだり失敗したり後で殺されたり色々あったのもうしない事になっている。

クツソしようもないことで死んだりもしていたので最速記録は4月6日の夜だったりする。夜、湊（or奏子）を迎えに行つてそのまま影時間に入ってイレギュラーシャドウに襲われて死ぬとか、迎えに行く途中でなぜかブレーキの利かなくなった車に撥ねられたりとか、通り魔にぶつ刺されて死ぬとか。

おお俺よ 迎えに行つて 死んでしまうとは 情けない！

いや本当にその通りだと思う。

なんなんだ。迎えに行つちやだめだというのか。

普通兄は弟や妹が遠くから来たら迎えに行くもんだらう。兄じゃなくとも家族や親しい人間ならそうするはずだ。長旅かつ深夜に着いた家族を迎えに行かないとかどうかしていると思う。わざわざ迎えに行かないというのは薄情ではないのだろうか。結局、迎えに行かないということでも今も我慢をしているが納得がいったためしがない。

「……」

毛布を少しだけ握りしめる。

——嫌になる。なにかも。

ただ、何度も何度も繰り返し、絶対に忘れてはいけないと思うのは

自分がなぜこうして繰り返しているかだ。それは今も変わらない。湊と奏子を救うため。それ以外に目的は無い。

皆を救うのは、そのついで。自分がそうしたいと思うからだ。

高尚なんかじゃない。優しくもない。どこまでいっても汚い欲にまみれた自己中心的な考えを持っている。それが俺だ。

だから、身の丈に合わない評価やイメージを抱かれるとひどく罪悪感に苛まれる。それを利用してするのは自分だというのに、何を一丁前に罪悪感を感じているというのか。悲しんだり罪悪感を感じる行為そのものが、自分にとってはいけな事のように思えてならない。

そんな資格は自分にはないのだと、目的のためだけにただ無心で動いていればいいという意識が端の方から自分を急かすのだ。

諦めてしまおうと思った時だってある。何もかも見て見ぬフリをして、平穩に一年を過ごすそうと逃避したことだってある。けれどそれをしてこの繰り返しは終わらないばかりか、いろんな人の知らない一面を知ったりするばかりで尚更やめることなどできなくなってしまう。止まれなくなってしまう。

築きあげた絆はなくなるが、そこで得たものはずっと自分の中に残っている。感情が、受けた思いが、ずっとしこりのように。だからこそ救わないと、守らないと思ってしまうのだ。

死んで無意味になる、と自分はよく思う。遺るものなど無いと思っ

ている。けれど、自分が自分としてこの繰り返しの記憶を持っているうちは、まだ立ち向かう意志が残っているうちは、自分の中だけには確かに遺っているのだ。自分の死んだ意味も、みんなの死んだ意味も。

無意味なんかじゃない。無意味なんかにしてたまるか。

そんな感情が鎌首をもたげるときがある。

いったいどちらが自分の本心なのだろうか。

わからない。

わからない。

わからない。

わかるわけが、ない。
深く息を吸って、ゆつくりと目を閉じた。

10/20(火) 朝

目が覚める。

起き上がり、ここが寮の自室ではないことを思い出し時計を探した。

シンプルな壁掛け時計が8時半ちょうどを指していた。

明らかな寝坊だが高校へは今からここを出れば何とかギリギリ間に合うだろう。

少し離れた革張りの椅子の上で朝倉先生がぐっすり眠っているようだった。

枕元を見やれば、昨日着ていた制服が置いてあった。器用に畳まれている制服は恐らく朝倉先生が乾かして畳んでおいてくれたんだろう。こういうところはあの口の悪さとガサツさからは考え付かないほどに丁寧だ。

それらに袖を通し、共に置いておいてくれたらしい自分の鞆の中からメモ帳とペンを取り出す。

それに『昨夜はお世話になりました。体調もいいので学校へ行ってきます』と書いて枕の上に置いてから着ていた患者着を畳んでバッグを持った。

ふと思いついてベッドの上の薄手の毛布を朝倉先生にそつとかける。疲れていただろうに急に自分を看ることになってしまったのだ。寝てしまっても仕方ない。

そのまま静かに部屋を出て、玄関を開けて外へと出た。

瞬間、目の前にイズミさんが立っていた。相変わらず、前髪が長い。

「お、おはよう、ごいいます…」

「おはよう？ ナギサがここに泊まってるなんて珍しいな。どこか体調が悪いのか？」

首を傾げて朝の挨拶を返してきたイズミさんに首を横に振る。

「昨日の夜、帰りに急に雨が降ってきて…あれで帰れなくなってお世話になってたんです」

「あー昨日酷かったもんな。じゃあ今から学校か。頑張れよ！」

「はい。ありがとうございます」

嘘は言っていない。

敬語じゃなくていい、といつも言われるがイズミさんは恐らくタカヤよりも年上だろうし、一応『大人』の部類に入る人だと…思う。たぶん。そんな人に敬語を使わないのはどうかと思うのが自分の考えだ。大人には敬語を使う。

自分が大人になったら？ その時はその時で考えることにした。生憎、『大人』になれそうにもないが。

それよりも、今日も自分は“ナギサくん”ではないと訂正し損ねてしまった。タカヤ達もさも当然と言いたげに呼んでいるしもう訂正する必要もないかと諦めそうな自分がいるのもまた事実。

そんな考え事をしながら青空を見上げて住宅街から駅までの道を歩く。

10分ほど歩いて、もうすぐ商店街といったところで不意に眩暈と血の気が引くような感覚がした。

「…っ」

頭を押さえて目を閉じて蹲る。ここで倒れるわけにはいかない。

少し太陽を見つめ過ぎたせいかもしれない。昨日と打って変わって晴天の青空は憎らしい程に澄み渡っていたから、つい。

それか朝食を食べずに出てきてしまったからか。まあ、理由なんてどうでもいい。

こういうのは治まるまで待つしかないのだ。

しばらく深く息を吐いたり吸ったりしてぐらぐらと揺れる視界が治まるのを待つ。

そうしてなんとか立ち上がろうとした瞬間、不意に肩を掴まれて反射的に振り払ってしまう。

「あ、わ、悪い。驚かせちゃったか？」

「え……あ……い、イズミ、さん……」

先ほど朝倉医院に出勤したはずのイズミさんが息を切らしてそこにいた。

一体どうして、と思う間もなく手を引かれる。

「朝倉先生さ、俺が起こしたら大慌てで飛び起きてもぬけの殻のベツド見てブチギレてたぞ。だめじゃないか、体調悪いのに体調が良いって言うなんて」

「いや、体調が良いのは本当なので……」

どうやら、イズミさんは朝倉先生の命令で自分を探しに来たらしい。

こちらとしてはあのメモで十分だと思っていたのにブチギレられるとは思ってもいかなかったので意外だ。が、自分のそんな言い分もぷりぷりと怒るイズミさんには信じてもらえないようだ。

「そんな青い顔して蹲ってたやつが元気なわけないだろ？ ほら、早く戻らないと倒れちまうぞ」

「た、倒れはしないです。たぶん……」

強制送還ルートしか自分にはないらしい。

諦めて、学校に休みの連絡を入れようかと思いつながら先ほど通ったばかりの道をゆっくりと駅へと向かう人の流れに逆らって歩く。というか、自分はそんなに青い顔をしているのだろうか。個人的にはすごく元気だと思うのだが。

「……何か言い残すことはあるかクソガキ」

「まさかの辞世の句!? いや俺まだ死ねないので無理です!」

朝倉医院の玄関で仁王立ちする怒髪天の白衣を目に入れた途端、自分は踵を返してダッシュで逃げ出そうとした。それはもう、脱兎のごとく。

しかしそれはイズミさんが首根っこを掴んだせいで失敗に終わり、「ほら、観念するんだぞー」と親に運ばれる子猫のように大人しく院内に引き込まれてしまったというわけだ。

そして医者にあるまじき言葉を吐かれて、今から死ぬことになるのかと戦々恐々している状態だ。正直言って死因が朝倉先生がキレた

からとかいやだ。別の意味で死にたくない。

仁王立ちする朝倉先生の背後にうつすらとペルソナのようなものが見えたのも気のせいだと思いたい。

「殺すわけねーだろボケ。で、なんで勝手にでてったんだ？」

「元気に…なったかなーって思ったから…です…」

「バーカ！ 患者が自己判断で勝手に帰れたら病院も医者も要らねーんだよバーカバーカ！」

子供の癩癩のように『バカ』を連発する朝倉先生の理論は言動に反して筋が通っている。

確かに自己判断で勝手にここを出たのは悪かったかもしれない。ただ、メモを残していたのでそんなに怒られるほどの事でもないと思うのだ。

「でも…授業に出ないと…」

「てめーは自分の命と授業、どっちが大事なんだ？ え？ 言ってみろ」

「い…命です…」

そういう問いは狡いと思う。

選ぶとするならば命一択しかないだろう。

…いや、もし自分がこんな周回なぞしていなくて、いぎ単位がヤバいとなったら体調が悪くとも授業をとっていかもしれない。

「だろう？ だっていうのに勝手に病院から抜け出した大バカ者は、誰だったかなー？」

「お、俺でーす…」

手を煩わせないように黙って出たらかえって手を煩わせてしまった。こういうところが自分はスマートではないのでボロが出る。

もつとうまくならないと。自分の悲しみさえ覆い隠せるように、不調でさえ、無かったことにできるように。

「反省してるってんならオレとしっかり目を合わせろクソガキ」

「はい…」

出来れば目を合わせたくないが、合わせないと終わらない。渋々目を合わせるとニヤリと朝倉先生が笑ったような気がした。

「オレと目を合わせたな?」　「モスマン」、【ドルミナー】

やられた、と思ったときにはもう遅い。可愛い蛾のマスコットのよ
うなペルソナ「モスマン」がこちらを眠らせる魔法を放つ。

「患者にペルソナ使うのは反則だろ」という思考と共に意識がぷつり
と途切れた。

次に目が覚めたときはベッドの上でなおかつ夕方だった。朝見た
ものと同じ壁掛け時計は5時を指しているのがぼんやりと霞んでみ
える。

「起きましたか」

不意に、声が掛かってのろのろと寝ぼけ眼の視線を動かせばタカヤ
がパイプ椅子に腰かけてこちら見ていた。

「どうして…」

「ここに、ですか?　あの医者から薬を貰いに、少々。…ところでナギ
サ」

タカヤが足を組みなおす。そしてその目つきを鋭くした。

「——あなたから、”大型シャドウをこれ以上倒さないでほしい”と
お仲間に打診してくれませんか?」

「は…?」

ラスト1体に差し迫り、前回などは「もう邪魔はしない」とまで言っ
ていたタカヤが何故そんな事をいきなりいうのか。意味が分からな
い。

「これはあなたのためでもあるのです。これ以上、大型シャドウを倒
せばどうなるか…:…いえ、あなたに言うよりもあなたの弟妹に言う方
が確実ですね」

「っ、湊と奏子に何かするつもりなのか…!?!」

身構えて身体を起こした自分を笑うように軽くタカヤは微笑んだ。

「いいえ、しませんよ。断られた場合は当日、邪魔をするだけです。あ
なたがたは最後の1体を倒してはいけません。影時間が終わるとい
う意味ではなく、別の意味で」

「…べつの、意味…?」

別の意味。影時間が終わる（実際には終わらない）以外の意味を持つと言え、死の宣告者の完成だ。それくらいしか思い浮かばない。ただ、タカヤ達がそれに行き着くとは思わない。もし幾月から情報が流れているとしても幾月がそれを教えるという事もないだろう。

だとしたら、一体何の理由があつてそんなことを言い出したのか皆目見当がつかない。

「……あなたの中で渦巻く『それ』はもはやかつての『それ』とは大きく性質を変えようとしています。そのせいか、私のペルソナがひどく怯えていますね。以前は惹かれ合うように呼応し合っていたというのに」

「は…? え…?」

本当に言っている意味が分からない。これが理由、でいいのだろうか。

こちらからすれば突然話題が変わったかのように思えて仕方がない。

「眠りの神はどうひっくり返っても死神にはなれません。彼が与えるのは最後の眠りだとは言いますが実際に魂を刈り取るのはその兄だ。その性質を大きく変えらるれば、どれほどの負荷がかかるのでしょうか。想像もしたくない」

心底、理解できないといった表情でタカヤが言う言葉の意味の大半が抽象的だ。

一体何を指しているのかは分からないが何かを心配しているようにも見える。

「そもそも、我々がもう少し早めに気づいていれば良かったのかもしれないですね。最初は元に戻ろうとしているのか、もしくは大きくなるうとしているのかと思っていました。どうやら違うらしい」

ス、とタカヤの目が細くなる。

「あなたは元々普通ではないとあの頃から思っていました、これはもう一度情報を洗い出す必要がありそうですね」

「???

頭がはてなで埋まる。

一体何を納得してそう結論付けて動こうとしているのか。自分としてはタカヤ達が危ない橋を渡らなければどうでもいいのだが、と心配になる。

「よくわからないけど、危ないことはしちや駄目だよ」

「ええ、分かっています」

自分の事を柵に上げて、釘を刺しておく。だが、タカヤはそのままこちらを気遣うような視線を向けて口を再び開いた。

「あなたも、悪食は大概にしておいた方が良いでしょう。たとえばそれが誰かを救うためであっても澱みが溜まればいずれその身を蝕み、穢れる。清潔な水の中に一滴でも血が混じれば、それは水ではなく薄まった血になるのと同義…ですが、随分と遅れましたがイズミの事は私からも礼を言っておきましょう。ジンが喜んでいましたから」

「いや、俺は何もしてないけど…イズミさんのことで感謝されるようなこと、何かしたっけ？」

「ああ、覚えていない、と。なら結構。聞かなかったことにしておいてください」

「うん…」

今日はまた、一段と不思議なタカヤにさつきから戸惑いつぱなしだ。

悪食といえ、もうひとりの『俺』にも同じ事を言われた気がする。やっぱりそんなに食生活が悪いのだろうか。

ただ、しばらくは食欲が湧きそうになかった。どこかに食べに行けばその度にモコイさんとの思い出が蘇って気が滅入りそうになるだろう。下手をしたら、泣いてしまうかもしれない。

そんなことは許されてはならないというのに。

ギリギリ、心のダムは決壊しないで耐えてくれている。

けれど、これが一回壊れてしまったら。誰かに「泣いてもいい」のだと「悲しんでもいい」のだと言われたらもう立ち上がれなくなってしまういそう怖い。

できることならずっと自分の部屋に籠ってみつともなく泣きわめ

きながら思い出に浸っていたい。モコイさんが居なくなってしまうという現実を受け止めたくない。ずっと、逃げてしまいたい。

それが出来ないから板挟みになってこうして苦しんでいるわけで。悲しみに浸りたいがそんなことは許されないし立ち止まることも許されない。なら、歩き続けるしかない。ただそれだけのことだ。

「行き過ぎた偽善は身を滅ぼすだけです」

「あはは…気をつける」

——今の自分は、上手く笑えているのだろうか。

回顧と決意（10／20）

「苦しいの？」

ポートアイランドのそこに建てられた研究所は、滅びの塔タルタロスの攻略とペルソナ能力の研究のために集められた孤児こどもたちが暮らす場所だった。

そしてその簡素なベッドの上でペルソナの暴走に苦しんでいたタカヤにその声をかけたのはタカヤよりも幼い少年だった。

「だいじょうぶだよ」

そう言つて近づいてくる少年はタカヤの手を取り笑う。

この時のタカヤはまだペルソナをうまく御しきることでもできず、他の子供に比べれば少ないものの制御を外れて暴走させることがたまにあつた。

そんなストレガじっけんの子供こどもたちのペルソナの暴走を止める子供がいる、というのはここに来て日が浅いタカヤもたまに耳こに入れていた。

ペルソナ能力に自然覚醒をした一番最初初めから古いたこと参もだ、と聞いたのは一体いつだったのか。幼いタカヤはこの異常な日々で記憶が少し曖昧だった。ただ、何となく目の前にいる少年がそれなのだということには何となく気がついていていた。

「怖くなんかないんだ。きつときみは、怖いから自分を傷つけちゃうんだね」

その灰色の目はタカヤではなく、タカヤを傷つけるタカヤ自身のペルソナ——当時それにヒュプノスと言う大層な名は無かった——に向けられていた。

「ねえ、この子に名前はあるの？」

「……あ、るわけ……ない……でしよう……」

「そっか」

そこで初めて少年の目にタカヤが写る。

ペルソナの名を、と聞かれたがそんなもの、ついている子供の方が少ない。

「はじめにね、名前を覚えてくれるんだ。けど、きつとここにいるみんな

なはその声をまだ聞けないんだね」

きゅ、と握られる手に力が籠められる。

僅かに、タカヤのペルソナが大人しくなった気がした。

「ぼくには代わりにもその苦しいのを食べることでしかできないから、ちよつとの間しかだめだけど」

微笑んだ、少年の目が金色混じりになった気がした。瞬間、凄まじい勢いで苦しみやペルソナの暴走が収まっていく。まるで、吸い取られるように抜けていくそれにタカヤは思わず手を引っ込めた。

「な…にを…」

「しんぱいしなくても大丈夫。苦しいって思ったことや怖いってものを食べただけだから」

タカヤには少年のいう事が何となく「苦痛を取り除いた」という意味だと分かった。だとしても、ペルソナも薬も使わずにそんなことをするこの少年は何なのか、という疑問と「そんなことをして何の利があるのだ」という疑念が浮かんだ。

タカヤは、幼いながらにここにいる大人が打算づくめなのを知っていた。だからこそ、最古参で大人たちの『お気に入り』だと言われているこの少年に対し、大人の犬なのではないかという疑念が浮かんだのだ。

「ばいばい、また会う時までにはぼくが生きてたら、きみとそのこの名前教えてね」

なんてことを言うのか。確かにここは子供の減りが激しい。

けれど今まで生き残っているというこの少年の別れの言葉がタカヤには「こちらが生きていたらの間違いじゃないのか」と思うような内容で、少し眉をひそめた。

その意味は、すぐにタカヤの知るところとなる。

今日も今日とて、栄養管理だけがされたあまりおいしくない食事が運ばれ、タカヤはそれを黙々と食べていた。食べられればなんでもいというのが当時のタカヤの考えだった。

タルタロスの攻略はあまりうまく行っていないようで、大人たちはしびれを切らしているようだったのと、苛ついているのか最近は無茶

な特攻を指示される場合が多い。

何度か遠目からあの少年を見かけたが、あの時とは違い常に血の滲んだ包帯だらけで見えていて痛々しいことこの上なかった。一番怪我をしているのは彼なのではないのだろうか、という有様にタカヤは目を離せなかった。周りは単に彼が弱いからあなっているのだと勝手に想像し、言っていたが。

定期的な健康診断がある。

健康診断とは名ばかりの簡易的なものだ。メンタルチェックも行わない雑な形式的なそれは当時のタカヤからすればよくわからないもので。

白衣の大人に連れられ、タカヤを含む同室の子供たちは廊下を歩く。ふと、開きつ放しのドアの間隙からガラス越しの部屋の中にあの少年がいるのが目に見えた。思わず足を止める。

あの部屋は、タカヤ達の誰もが入れないのだ。

だから、よくそこに連れ込まれる少年が大人たちからあそこで特別扱いを受けているんじゃないかというような孤児の声もあつた。だが、タカヤが見たのはそんな甘いものではなかった。

——地獄だった。

特別扱いは特別扱いでも、他の孤児たちが想像しているものとは真逆。

僅かに「暴れるな！」と叫んでいる大人の声が聞こえる。床は血まみれで、診察台の上で大人たちに無理やり押さえつけられている部屋と同じく血まみれの少年の目は苦痛と恐怖で歪んでいた。

そして押さえつけられながらも、そのその腕にメスが突き立てられるのをタカヤは見逃さなかった。

ひゅ、と息を飲んだ。

まさか、いつも怪我をしているのはシャドウのせいじゃなく、ここにいる大人たちのせいだったのか？ と。

悲鳴じみた絶叫が聞こえた。

「おい、何を見ている！ さっさと歩け！」

そう考えていると乱暴に腕を引かれ、引き摺られるようにタカヤは

無理やりその場から離れさせられた。その後、少年がどうなったのか、なにをされていたのかタカヤは随分後になってから知ることになる。

数日後タカヤはまた、少年と顔を合わせる事となった。

今度はタルタロスの探索メンバーという形で。またガーゼと包帯だらけの少年がタカヤを目に入れると嬉しそうに駆け寄って来る。

「あ、この前の…ねえ、なまえおしえて！ 約束したもんね！」

「そつちからむりやりでしょう。そういうのは、そちらが先じゃ…ないです…か」

つつけんどんにそう返し、ムスツとしたタカヤに臆することなく少年ははにかむと端にガーゼを貼った口を開いた。

「あつそつか！ ぼくはナギサ。ありさと、なぎさっていうの。弟とね、妹がいるんだよ！ ふたりともすごくかわいいんだよ！ こういうの、なんていうんだっけ、〝お口でたべても痛くない〟？」

「…〝目に入れても痛くない〟の間違いじゃ？」

「そうだったかも！ すごいね、物知りだね！」

兄妹のことは別に聞いてもいないのに紹介してきた少年——ナギサにタカヤはげんなりした。まるであの部屋の中の光景が夢だと思えるくらいにはケロつとしていいる。それどころか、能天気の部類に入るかもしれないナギサはこの中でも珍しい。

大体、冷静になって子供らしからぬ思考をもつか無気力になるか荒れるか依存しあうかのどれかだ。タカヤは子供らしからぬ思考を持ってしまったタイプだが。俗に言うアダルトチルドレンというやつだ。

「…タカヤ、です」

名乗られたので渋々、名乗る。

暮らしていた孤児院で礼儀作法は厳しくしつけられていたのもあったし、そこにいた先生が優しくも尊敬できる厳格な存在だったという事もある。なのでこの頃までのタカヤは意外とそういうことを気にするタイプではあった。

「みよーじは？ ないの？」

「いいたくありません。あまり仲が良いわけでもないでしょう」

「ふーん。じゃあ今からぼくときみ、友だちね！」

「は？」

名案だ！ とでも言いたげにタカヤの手を取ったナギサに、タカヤは思わず嫌な顔をした。

ごり押しが過ぎる。

友だちというのは、言ってなれるものではないことくらいタカヤにはわかっていて。そして目の前の存在がとてつもなくうざくてめんどくさい存在であるということも、何となくわかってきた。おそらく、タカヤが折れるまでこの少年はつきまとうだろう、と。

しかしタカヤは今よりも言葉や感情を操るのはうまくなかった。なので

「いやに決まって…いますか」

真っ向から拒絶した。

拒絶して、さらに面倒くさいことになるのでは、と思い直したタカヤの目の前でナギサが口を開く。

「そっか。じゃあまた、友だちになりたくなったら言ってね」

すん、とハイテンションな笑顔から僅かな微笑みに戻ったナギサは、タカヤの予想に反し驚くほど素直にひき下がった。

あつけないくらいのに、タカヤは逆に違和感を感じる。この押し強さから言って、もっと泣きわめいたりぐずったり我儘を言うのかと思っていたからだ。

「あ、この先、シャドウが2人いるよ。壁の向こう。あるいてる」

「…？ わかるのですか？」

タルタロスの中を歩きながら話していたのだが、不意にそう言い放ったナギサにタカヤはチドリや他の子供のようにそういうのが分かるタイプのペルソナ使いなのだろうかと疑問をもった。

ナギサは、小さく頷くと壁に手を当てた。

「んー…壁の向こうになにかあるか見えるだけ。みるの、目を閉じなくちゃいけないからちよつとつかいづらい…」

不満げに唇を尖らせながらそういうナギサは曲がり角に立って目

を閉じている。そして、目を見開いたかと思うと飛びだして大ぶりのナイフを反転してこちらに背を向ける形になったシャドウに突き立てた。

——奇襲。それを慣れた手つきで行ったナギサに、タカヤは経験の違いを悟った。

「こうするの。後ろを向いたらしばらくでも攻撃できるから。…たまた失敗しちゃうけど」

一瞬だった。

ペルソナを出したかどうかすらも分からない速度でシャドウを殲滅したナギサはケロツとした顔でそう告げる。

タカヤに見えたのは青い光と大きな黒く鋭い腕だけだった。

その日の探索はほとんどナギサの後ろについて歩くだけで事足りた。階層が低かったせいもあるのだろう。定期的に周りの音を確認するように階段付近で休息を取り、ゆっくり探索をするナギサはタカヤの知らない何かを知っているようだった。

「あんまりね、階段をのぼらないでいると怖いのがくるんだ。鎖の音、ぼくのヒュプノスと似てるけど、ちがう。前にね、あいつのせいでみんなしんじやった。…まもれなかった。ぼくが、弱かったから。知らな…かったから。ここで休もうって、みんなに言っちゃったから」

タカヤと他のメンバーに悔いるような声でそう語るナギサの目からはポロポロと涙が零れていた。

死人はよく出る。ペルソナの制御剤が身体に合わずに衰弱したり、ペルソナの暴走だったり、シャドウに殺されたりして。それを悲しむ孤児はもちろんいる。兄弟で参加させられている孤児だっているのだ。

反対にこうなった原因である大人を恨む孤児もいた。

ただ、ナギサはそちらを見ることなくひたすら自分を責め続けている。誰も知らなくて当然のことなのに、知っていなければいけないという強迫観念があるようにすら見えた。

「おまえ、なんでそんなに必死なん？ ほっとけばええやんか、そんなん。…おまえはあの大人もお気に入りなんやろ。自分さえ良けれ

ば生き残れるはずや」

「よくない!!!」

不意に、苛つきつつも素直な疑問をぶつけたもうひとりの探索メンバー——ジンにナギサは当たり前散らすように叫んだ。

「……お、大声出してごめんさい。でも、ぼくだけ生き残るなんて、だめだよ。みんなは生きなくちゃだめなんだ。ぼくは、死ななきゃだめだから」

「？」

その答えにジンは訳が分からない、というふうに首を傾げた。タカヤにも、その言葉の意味はよくわからなかった。なぜそう思うのか聞きたくとも聞けない。

「……上がろう。もう少しでたぶん、怖いのがくる」

話を逸らすように腰掛けていた階段から立ち上がって上へと昇っていく。

次の階層に着いた時、誰も口を開こうとはしなかった。

気まずく、喧嘩をした時のような空気が漂っている。かといって、連携を忘れた訳ではなかったのでナギサは先行しつつもタカヤとジンのことをチラチラと気にしながらシャドウを蹴散らしていた。

タカヤとジンは悔しかったがそのお零れを貰う程度しかやる事が無い。

「……ありがと。ごめんね」

しばらくそんな感じで探索を続けていたが、帰る時間だと転送装置に向かったナギサが不意に口を開いてそう言った。少しバツが悪そうだったが機嫌が悪いというわけではなさそうだったその声に、ジンが1番に反応した。

「わ、わしかて…要らんこと言うてすまん…」

「えっと……何くんだったけ…田中くん？」

「ちやうわ！ ジンや！ 白戸陣！ よおーく覚えときや！」

「わかった！ ジンくん！ ぼくはありさとなぎさです！」

全くかすりもしていない名前と呼ばれて反射的に叫び返したジンはしまった、と思った。

ジンとしてもこの能天気で変なやつであるナギサとは気が合いそうにないと思っていたのに、つい名前を教えてしまったのだ。

「ほーん…じゃあナギサか…」

嬉しそうにはにかむナギサに、うってかわって弟のようなイメージを抱いたジンは知らなかった。身体が小さいだけでジンと同じ歳だということ。

そうして何度かタルタロスでの探索を繰り返すうちに、ナギサとの仲を凶らずとも深めることになったタカヤは、ある日大事な話をする事となる。

探索中、ふとタカヤのペルソナを見て思い出したナギサが口を開いたのだ。

「その子の名前、まだないの？」

「名前など、不必要です」

「大事だよ。ペルソナってみんなの中にある神さまの名前と姿のいめーじ？をかりてるんだって、ぴかぴか光るちよちよさんが言ってたんだ。だから、名前をつけてあげないとうまくかたちにならなくて、ふあんでーになるかもって。イズミくんのペルソナは『名無し』って名前だからいいけど、タカヤも名前つけてあげなくちゃダメだよ」
何故かタカヤだけは初めから呼び捨てだった。ジンは最近呼び捨てになったが、タカヤに関しては名前を教えたあの日からずっと『タカヤ』と呼ばれていた。それに不満がある訳では無いがなにか納得がいかなかったのもまた事実。

「あ、そうだ！」

なにか名案が思い浮かんだかのように得意げな顔になるナギサが、反対にタカヤはげんなりとした。

短い付き合いだがナギサがこういう顔をする時は大抵突飛な行動をとる時だ。

「ね、ぼくのペルソナとお揃いにしない？　“ヒュプノス”っていうんだけどね、ずっと一緒にいるぼくの友だちなんだ。死ぬ前に怖かったり痛くないように眠らせてくれる優しい神さまなんだよって教えてもらったんだ。だから同じ名前にすればタカヤのペルソナもタカ

「ヤに優しくなれないかな？」

「とんでもない理由だ。」

タカヤとしては今までナギサのペルソナの全身をハッキリと見た事がある訳では無いが明らかに優しいとは程遠い存在だということだけはわかってる。敵を一撃で葬り去るという点ではたしかに優しいのかもしれないが、子供がイメージする優しさとは違うものだ。けれど、名前が無いと困るというのは薄々タカヤも感じていた。

それにタカヤはナギサの事を疎んでは居なかった。たまにこうしてうるさくなるが、悪い人間でなければ裏表も無い、少し歪な自分たちと同じただの子供だったからだ。

聡明なのか愚かなのかわからなくなる時があるが気をつかってくれていることに変わりはない。彼は彼なりにタカヤを思いやり、心配しているのだと言われれば、悪い気はしなかった。

「……いいでしょう」

「ほんと!?」じゃあ、あの子の名前は今日からヒュプノスだね！ お揃いだね！」

わーい！ と跳ねるように喜ぶその笑顔は3ヶ月たった時点のここでは珍しくなってしまうものだ。

1番酷い扱いを受けているはずの子供が、いちばん無邪気に笑う。その歪さを、タカヤはしつかりと理解していた。

既に壊れているのだ。この少年は。

タカヤはそれを見て見ぬフリをしていた。

いや、タカヤだけではない。ジンも、イズミも、他の子供も、ナギサの置かれている状況と精神状態の異常さには薄々気がつき始めていた。最初の頃はやつかみも込めて『お気に入り』だなんだと言われていたが今では意味が違ってきている。

「それでね、マイちゃんがね…グリーンピース残すのはダメって言うてきたんだよ！ ぼく、グリーンピースだけはだめなのに！ でもマイちゃんはぼくよりおねーさんだからおこるとこわいんだ…」

「はあ、そうですか」

ナギサは時間があれば他の子どもたちの部屋やタカヤの部屋を回って

いた。ペルソナが暴走している子供が居ればタカヤにしてやったように手を握り、居なければタカヤの隣でこのようにとりとめのない他の孤児たちとの話をするのだ。大体が食事の話だったり探索の話だったりする。

例外があるとすれば、死人が出た日だけだ。その日だけは、ナギサはいつもの明るさが嘘のように喋らなくなる。

「ナギサ」、時間だ。来なさい」

不意に、部屋に白衣の男が入ってきた。

眼鏡をかけたウェーブがかった茶髪の男は『幾月』と書かれたネームカードを首から下げている。この男が来て名前を呼ばれると、決まってナギサの表情がなくなり、目が虚ろになるのだ。

「…はい、せんせい」

今日もだ。今日もまた、表情が抜け落ちて虚ろになる。

いつも行う「ばいばい」という挨拶もなく、ナギサはフラフラと男の元へと歩み寄り、手を引かれていくのだ。

行先は、あの部屋だという事をタカヤとここにいる子供たちの誰もが知っていた。

この頃、特にあの部屋に連れていかれる頻度が上がり、部屋から歩いて帰る姿を殆ど見なくなっていった。代わりにストレッツチャーに乗せられ、また別の部屋に運ばれていくのをよく見るようになった。

そして単独でタルタロスに登らされているらしいと残った数少ない子供が話していた。

ナギサのお蔭でやつと連携が取れるようになったというのに、この時期となつては殆どナギサが勝手にどこかへ連れ出されることが多くなりリーダー不在のようなものに陥り連携もできずに傷を負う子供が増えた。

引率できそうだった比較的孤児の中では年長のイズミは戦闘能力に難があるもののしつかりしていた、にもかかわらず数日前に他の子どもとタルタロスに登った際に事故に遭い生死不明になったばかりでどうしようもなかった。

かろうじて、タカヤが20人程度になった子供たちを纏めていたお

蔭でなんとかなっている程度。

しかもナギサが居なくなることによりペルソナの暴走をしても止める人間がおらず、一旦は少なくなつたはずの死ぬ子供が増えていつている状態。どうすればいいというのか、タカヤには分からなかつた。

「ああ、君たちはしつかりと”ナギサ”を繋ぎ止める楔：モノになつてくれればそれでいいんだ。それ以外に失敗作であるきみたちに価値があるとでも？」

ある日、タカヤ達は『幾月』というネームカードをぶら下げたひどく冷たい目をする男にそう言われた。どうしてその話になつたのか、タカヤはよく覚えていなかった。

「それに、感謝してほしいくらいだ。彼と、彼のいう事を汲んだ僕のお蔭できみたちは切り刻まれたり苦しくなるような薬を入れられずに済んでいるんだからね」

「ど、どういうことだよ…!？」

困惑したようなひとりの子供——アキラの声に、幾月は嗤つた。

「きみたちも薄々気がついてるんだらう？ 本来、きみたちが受けるはずだったペルソナ能力に関する実験を全部彼ひとりで担っているんだ。僕らとしてはサンプルは複数欲しかつただけど、彼が全部ひとりで頑張るから他の子供には手を出さな、と言いつ出したんでね。これは聞いてあげなくちゃと思つて。僕個人としても失敗作のきみたちのサンプルより成功例のサンプルの方が欲しいからねえ」

へらり、とまた嗤いながら言つた幾月に、同じ部屋にいた子供の何人かは青ざめる。

特に、ナギサにお姉ちゃん風を吹かせていたマイという少女は震えていた。

タカヤは、この男の言葉に自分たちが人質としてつかわれているとばかりと理解した。歪でありながら優しさを捨てることができるのでき

ない少年を、この地獄へと繋ぎ止めておくための人質のようなものだ。

どうせ、ナギサにはこう言っているのだろう「きみさえ頑張れば他の皆は苦しまなくて済む」と。

大嘘吐きが、とタカヤは燃え滾るような怒りを大人に覚えた。

「なんなんやー！」

幾月が去った後に、一番に叫んだのはジンだった。

この部屋がカメラで監視されているのは分かっていた。けれども、叫ばずにはいられなかったのだろう。この数カ月という付き合いの中で、ジンとイズミもそれなりにナギサと交流をしていたらしいので仲間意識や情といったものが湧くのも仕方ない。一番べったりされていたのはタカヤの様だったが。

そんなジンがタカヤや他の子供たちの内心を代弁しているようで、逆に冷静になる。

「ジン、落ち着いてください」

「せやけど……！」

ジンを止めたタカヤだったが、大人を出し抜き無事でいられるような知識がある訳でも無かった。この人数で、誰も死なずにここから脱出できるというわけでもない。そもそもここから出たとしてすぐに見つかって連れ戻されるどころか保護してくれる奇特な大人などいないだろう。だが、

(黙ってこのまま見ている訳にもいかない)

この頃のナギサは憔悴しきっているようだった。皆の前では気丈に振る舞っているが、しんどそうに大きく息をしたり脂汗を浮かばせていたり精神的にも体力的にも限界が来ているように見えた。ペルソナによる治癒魔法も万能ではないのだ。

そして数日後、満月の日に事件は起きた。

唯一残った探查系能力のペルソナを使えるチドリをバックアップに、ナギサ・タカヤ・ジン・マイという珍しく5人の万全の体制でタルタロスに登れと言われたのだ。

しばらくは順調だった。だが、ある階に差し掛かった瞬間ジャラ

ジャラとおびただしいほどの鎖の音が聞こえてきたのだ。

「ひっ……」

ナギサが怯えるように息を飲んだ。

「ど、どうして…まだ、まだここに来たばかりなのに…！ 逃げよう…逃げよう！」

踵を返し、階段を降りかけたナギサは下からも聞こえてくる鎖の音に一步後ずさった。

チドリもそれを感じたようで、少しだけ顔を顰めた。

「ダメ、下にも…恐ろしいものがある」

「転送装置なら…そこからなら…」

ひどく怯えながらもチドリに近くに『それ』が居ないか確かめながら皆は進むことになった。転送装置にさえたどり着けば、大丈夫だと信じて。

ぐるぐると迂回しながら迷路のようなそこを抜ける。転送装置がどこにあるかなど、分からない。けれど見つけなければ全滅は免れない。

そんな異様な緊張感と死の気配に、誰もが喋ることが出来ずにいた。そしてやつとのことで転送装置が見えた、と思った瞬間に床を銃弾が貫いた。

「あ、ああ…！」

じやらりと、鎖の音を鳴らして現れたのは死^{刈り取る者}神。ナギサの顔が絶望に染まった。

「やだ…いやだ…こ、こわい…いやだ…！ ごめんなさい、ごめんなさい…ごめんなさい…ごめんなさい…！」

「あと…少しだから、ナギサくん、行かなきゃ、だめだよ！ 生きて帰らなきゃ…！」

滅多に見せないナギサのその怯えように、なんとかして引き摺る様に連れていこうとしたマイも召喚器の引金を引けそうにない。そもそも、この場にいる誰もが刈り取る者の姿に怯え竦んでいたのだ。動けるはずがなかった。

「生きて…かえる…そ、そうだ…いか、なきゃ…みんなを、逃がさな

きや……！」

怯えた瞳のままのナギサはマイの言葉と眼前まで迫る刈り取る者を見て歯を食いしばった。

そして、マイの手を振り払ってナイフを抜いて跳ねるように駆けだした。

「ダメだよ！ ナギサくん！ 死んじやうよ！」

「みんなは……みんなは先に逃げて！ ……うしろに、さがって！」

その言葉に、タカヤ達はようやく動けるようになる。あと少し走れば転送装置だ。

ならば、ナギサの行為を無駄にするわけにはいかない。だからといってナギサを置いていくこともタカヤ達にはできなかった。

「行けるわけがないでしょう！ ナギサ、〃きみ〃は——」

「〃ヒュプノス〃、おねがい……みんなを、守って……！ あいつを、殺して……！」

タカヤが連れていこうと叫んだその時、青い光と力の奔流が渦巻き、主を守る様にそれは現れた。

漆黒の羽が辺りに舞う。じやらり、と鎖の音がした。

——タカヤはそこで初めて〃ヒュプノス〃の姿をはっきりと見た。

濡れ羽色の全身にすらりと伸びた手と足。その手には青々とした葉が茂り赤い花の咲く木の枝が握られており、コートの後ろから鳥の翼のようなものが生えている。

それは、ひどく静かなペルソナだった。

見た目は凶暴そうではあるのに、動きは全く凶暴ではないのだ。だが、攻撃はそうではない。

【アンティクトン】

〃ヒュプノス〃はのけ反りながら獣の頭骨の顎を大口開けて魔力を溜め、一気に放出する。

瞬間、禍々しい力の衝撃と爆発がフロアを襲った。強烈な爆風に、ころころとチドリが転がったのが見えた。

「後ろに下がれ」というのはこのことも含めてだったのか、とタカヤは自覚した。

煙が晴れ、塵一つ残さず消え去った刈り取る者と肩で息をしながらも立っているナギサの姿にタカヤ達は安堵の溜息を吐く間もなく腰を抜かす。正直、限界だったのだ。しかし、
じゃらり

「!!」

「そうだ、気配は… ひとつじゃない…!!」

また、鎖の音がする。その事実には、抜かしていた腰を何とか立たせ、彼らは転送装置まで走る。あと少しだというのに、その距離が酷く長いもののように見えた。

「転送装置を、うごかしたわ。これなら、」

チドリの言葉にやつと後ろを向いたタカヤとジン、そしてマイはいるべき存在がそこにいない事に気がつく。

否、その位置は先ほどから全く動いていない。

「アホー… なんであそこで止まっとるんや!? こんなん、間に合わない…!!」

ジンが叫びにも似たその声をあげたと同時くらいのタイミングでナギサが追いついてきた2体目の刈り取る者——否、刈り取る者によく似ている別の存在に斬り飛ばされている瞬間を目撃してしまう。そのままの勢いで、爆風により割れた窓からナギサは落ちた。いくらペルソナを得ていたとしても、刈り取る者に斬られ窓から落ちればこの高さだ。死は免れないだろう。

「あああ、ああ——ツ!!!」

叫んだのは、誰だったか。その叫びは届くことなく、転送装置による光で遮られた。

エントランスに戻ってきたタカヤ達を迎えた大人たちはナギサが落ちた事を知るとすぐに搜索を開始した。勿論、タルタロスの中ではなく外を、だ。

死体の欠片ひとつでも重要なサンプルになる、と。

しかしその目論見は外れ、血痕ひとつ見つかることは無かった。数日程搜索されたがこれ以上は無駄だと打ち切られたのだ。

そしてそのすぐ後に『ストレガ計画』は建前上は「効率が悪い」と

して凍結された。だが、それまでにアキラとマイは探索中の事故で死に、他の子どもたちもこれまでナギサが受けていた実験を無理やり受けさせられ死んでいった。

結局、残ったのはタカヤとジン、そしてチドリだけだった。

何人かはうまく逃げ出したようだがあの調子では長くはなかっただろう。

タカヤとジンは最後に制御剤を盗んで逃げ出してやろうと計画を練っていたがそれに失敗し、見逃される代わりに幾月の命令をなんでもきく、という取引を行った。

そして5月。影時間の駅前に後輩と思わしき同じ高校の人間と佇むその姿を見たとき、タカヤは喜びを隠せなかったと同時に「アレは本当に生きている有里渚なのか？」という疑念が湧いた。

タカヤの中の「ヒュプノス」は確かに呼応していたが、あの状況でどうやって生きているのかが謎だった。あれは、ナギサの姿をした別人ではないかと疑ったこともあった。

そんな心配も、記憶喪失だと聞いてその上で懐かしい事を言いだす彼の前には吹き飛んでしまったが。

そしてその中で渦巻く異様な気配も、見て見ぬフリをしてきた。

だがそうもいかなかった。

『アレ』は大型シャドウを喰らい、大きく、そして別物へと変化しようとしていた。

ただそれが変異するだけならいい。しかし宿主を蝕むとしたら、そうはいかない。

タカヤの目にも最近の彼は特におかしくなってきたようにも見えただからだ。

夏ごろまではたまにしか無かった「ナギサ」ではない誰かの気配が濃くなる時が増えた。言動だつて、他の皆が気がつかない程度だが僅かにおかしくなっているときもあった。

もし、ペルソナがナギサを蝕み食いつぶし、乗っ取ろうとするのならたとえ嫌われてでも殴つてでも止めなければいけない。夏の終わり、イズミに対し覚悟を決めたジンのように。

「それが、友だちというものでしょう。…ナギサ」
らしくないとは思いつつも、タカヤは旧友を守る決意をした。今度こそ、失わないためにも。

だからこそ、これから目の前で眠るナギサに言わねばならない。
——『大型シャドウをこれ以上倒すのをやめろ』と。

溺れる魚（10／20～10／21）

タカヤと会話をしたあと、朝倉先生による検診が終わってシャワーも浴び、ようやく帰ってもいいと言われたので朝倉医院を出て寮へと帰る道を歩く。

タカヤはまだ朝倉先生とイズミさんに用事があるらしく、残ると言っていた。

「モコイさ——…」

モコイさんに晩御飯を何にするか聞こうとして、いなくなってしまうたことを思い出し、やめた。

溜息だけを吐いて、バッグを背負いなおして歩みを進める。

せっかく買った赤いマフラーも、モコイさんがいなくなってしまうては使う意味がないし使っているとモコイさんの事を思い出してしまいそうのでバッグの中にしまっている。

寮に帰ったらキャビネットの奥にしまっってしまったおうか、と思っっているくらいだ。それくらい、今はモコイさんに関する物を使ったり見たりする気が起きなかった。しばらくは商店街も寄れないかもしれないレベルだ。

下手をすると寮の自室もダメだったりしないだろうか。もしそのときは我慢するほかない。

寮の玄関を開け、中に入る。

「おかえりー…あ！ お兄ちゃんおかえりなさい！ 病院に泊まったってきいたけど大丈夫だったの!？」

ラウンジで一番に自分を出迎えたのは奏子だったらしい。

いつもなら外にいる時間帯だろうに珍しい事もあるものだど頭の端で考えながら返事を返す。

「ああ、うん、大丈夫だよ。念のため、今日は検診も兼ねてってことだったみたいだから」

「そっか。でも、私たちに隠れて無茶をしちや駄目だよ？」

「わかってる」

嘘だ。

けれど半分は嘘ではない。これからすることは無茶ではなく、しなければいけないこと”なのだ。

「そうだ…今日ね、夏紀ちゃんが転校することになっちゃって…」

ああ、もうそんな時期か、と思ってしまう。

残る大型シャドウは後1体。それが終わったら幾月が闇の皇子（○）になるとか言い出して自滅するイベントがあるのと綾時くんが転校してきて、12月と1月はタルタロスの攻略がメインになるはずだ。

あと3カ月程度で終わりの日1月3日が来るのだと思うと随分と早いもんだと思ってしまう。いつもはここまで来ることが珍しかったりするのだ。原因はほぼほぼ自業自得だけれど。

なるべく死なないように、死なせないように。それをモットーでいかなければここまで来てパーだなんて考えたくない。

「それでね、風花ちゃんのペルソナが別のペルソナになっちゃってね、ビックリしたんだよ！」

「へえ…そんなことあるんだ」

奏子には悪いがあくまでも初耳ですという対応をする。

そういえば、今回は天田くんのペルソナも真田くんのペルソナも覚醒していない。

いつもなら荒垣くんが離脱することにより覚悟を決めた2人が新たなペルソナに覚醒し、使用するペルソナが変わるのだが、それがなという事は荒垣くんの離脱というきっかけが無かったからだろうか。

このまま山岸以外のペルソナがだれも覚醒しなかったら。

もしかしたら、少し不味いことになるかもしれない。最悪、戦力不足で全滅、だなんて状況は避けたいところだ。

けれどペルソナの覚醒というのは無理やり誰かが促してなるものでもない。ペルソナは心の持つ力そのものだ。だからこちらとしても手出しできる内容ではない。

ただ、山岸のペルソナが「ルキア」から「ユノ」に覚醒したことを考えると皆が覚醒しない、という事は無いはずだ。

「……」

「奏子？」

不意に、奏子が黙り込んでしまう。

そのことが急すぎて、思わず呼んでみるが奏子からの反応は無い。どうしたのだろうか、としばらく待っているとようやくやくおずおずといった風に口を開いた。

「お兄ちゃん……悲しいの？」

「え？」

なんで、と聞き返す前に奏子そのまま言葉を続けた。

「なんだか、そんな気がする。なにか悲しいことあったんだよね……？」

だから、

「なんでもないよ。気のせい……じゃないかな。今日は特に何も無かつたし」

気の所為ということにしておいて欲しい。そうでなければここで全てさらけ出してみっともなく泣いてしまいそうだったからだ。とにかく、今日くらいはもう少しだけ切り替えに時間が欲しかった。優しくされたくなかった。

「あ、洗濯物洗わないとだからごめんね、部屋に戻るね」

「うん……」

誤魔化して何とか部屋に戻る言い訳を考えたが奏子の顔は納得がいかなさそうかつ明るくない。そんなに悲しそうに見えるのだろうか。もしかして、ちゃんと笑えてなかったりするのだろうか。

「そんな顔していると逆に俺が奏子の事心配になるよ……ほんとに気の所為だから、気にしないで」

奏子に責任を押し付けるように胸糞が悪いが仕方ない。

逃げるように言い捨てて階段へと向かう自分に奏子がこれ以上何も言ってくることはなかった。

廊下を歩き、部屋の鍵を開けて中に入る。

ただいま、と言いかけてモコイさんはもう居ない事をまた実感して無言で扉を閉めて鍵をかけた。

運悪く耐えきれなくなって泣いてしまったところを見られでもしたら大変だ。余計な心配をかけてしまう。

制服を脱いで寛ぎやすい私服に着替え、カバンにしまつてあつたマフラーを取り出した。

きつともう使うことはないだろうからキャビネットの奥底にしまつてしまおう、とキャビネットの扉を開けて中にあるダンボールの中に畳んでしまい込んだ。ついでに、モコイさんから貰つた封魔管も片付けてしまおうと思ひ立つたが机の上に置いてあるそれを見た瞬間、片付けることが出来なくなつてしまつた。

机の上のそれを手に取つて握り締めながらベッドで横になる。そして固く目をつぶれば、込み上げた悲しみがなんとか我慢できるような気がして。

そしてふと、気がつく。

モコイさんはいなくなつてしまつたがモコイさんのいた証はここにちゃんと残つている。

嘘でも幻でもなんでもない。死んでも、無かつたことになつていない。

無意味にはなつていない。なら、

(自分でも湊と奏子に、何かを遺すことはできる…?)

たとえば死ぬとしても。たとえば、繰り返すことになつて無意味になつたととしても。

何度だつて渡せばいい。無意味だろうがなんだろうが、その行動を行うことに意味があるような気がした。

自分に遺せるもの。ふたりに残せるもの。今はまだ、よく思ひ浮かばない。

中途半端なものではだめだ。

まだあと3カ月も猶予がある。なら、ゆつくり考えてもいいような気がした。

瞼が重くなつてくる。

荒垣くん今日の晩御飯は食べれそうにないと連絡しなきゃ、と思ふ間もなく意識が闇へと沈んでいった。

「三上が帰って来たらしいな」

「ああ、らしいけどな。部屋に帰ってからまったく出てきてねえ」
夜。

ダイニングでそう明彦に返した荒垣は寮に帰ってきたというのに
まるでまだ帰ってきていないかのように部屋から出てこない優希を
心配していた。

いつもなら晩になれば腹をすかして降りてくるものなのだ。

たまに寝ていることもあって今日もそれではないかという予測を
立てるが、呼びに行つた際に反応がなく部屋には鍵がかかつていた。
基本的に寮にいるときは部屋に鍵をかけないようにしている優希が
部屋に居ながら鍵をかけるというのは少し引つかかるところがあつ
た。

「中で倒れていたらどうするんだ」

「まあ、それだな。心配は」

かといって、無理にこじ開けることはできない。体調が悪くて寝て
いるとしたら起こしてしまうのも忍びない。

「腹が空いたら起きてくるのを待つしかねえだろ」

「そうか…シンジがそう言うのなら、待つしかない…か」

そもそも、たまたま鍵をかけたまま寝てしまったという可能性もあ
る。荒垣たちには優希が急にそんな行動に出る原因がなにかあつた
のか、と思ひ当たる原因が何もなかった。

本当に、違和感だけだ。いつもなら軽口として流せるそれに、なぜ
か嫌な予感がついて回っているだけで。

荒垣が心配しているのは夕食の時に奏子から聞いた「お兄ちゃんに
絶対に何かあつた」という半分駄々をこねる様な叫びを含んだ意見
だった。それを聞いていたのは湊だったが何を考えているのかわか
らないいつものポーカーフェイスが少し崩れて真剣な表情になつて
いたのが印象に残る。ただ、何もできないのもまた事実で。

誰だって、他人の傷口に指を突っ込んで抉るような真似をしたくは
ないのだ。もしその傷口が本当にあれば、の話だが。

影時間

ぱちり。目が覚める。

「起こしちゃった？」

聞こえた声にそちらを向けばベッドに腰掛けるモルフエがそこにいた。いつものように患者着を着て、切り揃えられた白い前髪が両目にかかっている。

「ごめんね、ほんとは今日は起こさないようにって思ってたのに……」

心底申し訳なさそうな顔をするモルフエは前のような狂気が全く見当たらない。そのことに少し安堵する。やはり、前のモルフエは少しおかしかったのだ。

「大丈夫だよ。ああ、そうだ……」

起き上がり、机の引き出しに入れている小瓶を手取る。ラベルには『オナカヨクスール』と書いてある。すなわち、整腸剤だ。

「青ひげファーマシー」で買ってきたそれをモルフエに渡そうと差し出す。

「これ。モルフエに。お腹壊してるって聞いたから」

「だれに……？」

「……えと、ひみつ……？」

もうひとりの自分、だなんて流石にモルフエには言えない。

困惑しているようだが腹を壊しているのなら飲むべきだと思う。痛いのは誰だっていやだ。

「……そっか、ヒトはお腹が痛いとそういうものを飲んだね。でもぼくは痛くないから優希が持っていてほしいな」

「本当に？」

「うん。ほんとう。それよりも、優希のことがぼくはしんぱいだよ」
ならいいか、と薬をしまつて同じようにベッドに腰掛ける。

「……優希はこのまえ、大切なともだちを亡くしちゃったよね。死は誰にも平等だけれど、それがやってくるタイミングは誰にもわからない。つらかったよね、くるしかつたよね、かなしかつたよね……」

そう言つて、モルフエは自分よりも辛そうな顔をしたまま冷たい手

でこちらの頭を撫でてくる。どこで知ったのかは知らないがきつと言っているのはモコイさんの事だろう。

優しくされなくなかったのに、なぜかモルフエにならいいだろう、という軟弱な思考が湧いてくる。ダメなのに、泣いてしまったらもう、戻れないのに。

涙が、ぽろぽろと零れる。

「ふっ……う……ぐ……うん……うん……！ 辛かった……！ 悲しかった……！
なんで、どうして……モコイさん……嫌だよ……俺、おれ……さよならなんてしたくなかった……！ 俺のせいで、殺してしまった……！ うああ、あああ……ごめんなさい……おれが、よわくて……ごめんなさい……」

一度流れてしまえばもう止まらない。子供のように嗚咽を繰り返す自分の涙はとめどなくあふれてきてとどまることを知らない。それでもなお、撫でてくれていているモルフエの手が余計に優しく感じて、他の事も吐き出してしまおうかと思ってしまう。

「うん。つらいよね……もつと、ないていいんだよ。つよがらなくていいんだよ……ほら、全部吐き出してもいいんだ」

「ほんとは、たたかいたくなんか、ない……！ 痛いのは嫌だ……苦しいのも……死ぬのももういやだ……！ 怖いよ……怖いんだよ……どのみち、俺が、死なないといけないけど、そんなの死にたくないに決まってる……俺だって、死にたくない……湊と奏子にあえなくなるのは、いやだ……！

でも、でも……奏子や湊が死ぬのはもつと嫌だし……これは、俺の決めたことだから……頑張らなくちゃ、いけないから……！ おれ、は……おれは、がんばら、ないと……」

「うん、でももうがんばらなくて、いいんだよ。もどれなくても、救えなくても、いいんだよ。ぼくが、ぜんぶ、ぜんぶ、優希のくるしいこと、かなしいこと、つらいこと、食べてあげるから。あといつかいでおわりなんだ。だから、」

不意に、頭を撫でていた冷たく小さな手が肩へと移動した。

そしてベッドの上に押し倒された。モルフエはそのままこちらの腹の上に乗ると首へと両手を持つてくる。その行動に違和感を感じた瞬間、モルフエが見た事もないうっそりとしたような笑顔でこちら

だっけ、と考えて妙に息がしづらいことに気がついた。

乾燥していたから風邪でもひいたんだろうか、と頭を搔きながら顔を洗うために部屋に備え付けの簡易洗面台の前に立ってようやく正体に気がついた。

「なんだ、これ…」

また、首に絞められたような跡があるのだ。痣になってしまっているそれに指を這わせれば、なんだかぞわぞわしてしまつて気持ち悪くなる。

一体誰がこんなことを、と思うも自分では無理だし部屋の扉は鍵がかかっているので外からの侵入は無理。搔きむしつたわけでもないその痣をつけた犯人に思い当たるところが全くない。

ただ、もしかしたら7月の痣が今になつてまた出てきた？ という可能性がある。たぶん。

医療についてはよくわからないのでそういう事もあるんだろう、という事で自分をごまかして、薬箱から包帯を取り出してぐるぐると巻く。

「……俺、包帯巻くのヘタクソすぎか」

中々上手くいかなくて自嘲する。

少し巻き過ぎかもしれないがまあ隠れているからいいかと妥協した。人間、妥協が大事なのだ。

何度も何度も包帯を巻いたり自分で治療などをしてきてはいるが包帯を巻くことだけはずっと慣れないし上手にならない。不器用なのがこういうところを出ているのかもしれない。もし、器用さが必要とされることがタルタロスの探索であつたら自分は間違いなくお荷物だろう。ちなみに、料理の盛り付けも実は得意じゃなかったりする。なぜか菓子類は上手くできるのだけなぞだ。菓子作りは料理じゃないというのか。

溜息を吐きながら洗顔と歯磨きを済ませ、髪をくくつてから制服に着替えて下へと降りる。

「おはよう、荒垣くん」

「おう」

「昨日はごめんね、なんか寝ちやつてたみたいで…やつぱり検診で疲れてたのかも」

キッチンに顔を出せば、荒垣くんが朝食を作っていたので手伝うためにエプロンをとりながら言い訳を並べる。実際、疲れていたのだらう。寝ていた、と言つても朝倉先生のペルソナに強制的に昏倒させられただけだ。あれを睡眠ととつて良いのか正直わからない。使われたのは睡眠魔法^{ドレミナー}だけれど。

「別にいい。てめえの妹がえらく心配してたぞ、あとで声かけてやれよ」

「うん」

やはり昨日言い逃げをするように上にあがったのは不味かったか、と思いつつも何故だか心が軽いことに気がついた。誰かに辛いことを打ち明けた後のような、ひとしきり泣いた後のような、そんな感じだった。けれど、泣いた覚えも誰かに打ち明けた覚えもない。ずっと寝ていたのでもしかしたら睡眠が良かったのかもしれない、と的外れなことを考えながらエプロンを着て荒垣くんの手元を横から覗き込む。

なるほど、今日の朝食はウインナーとオムレツの様だ。

何本かタコさんウインナーになっている。細かい。

汁物はまだ作っていないなかったようなので冷蔵庫を開けてカットキャベツとコンソメを取り出してドアを閉めた。

「汁物まだだよね？」

「まだだな。今日は無くてもいいんじゃないか？」

「寒いしコンソメスープにしようよ」

「…俺にやわかんねえからな」

「俺も自分の感じる温度が正確なのかわかんないよ。でもスープあった方がいいよ、たぶん」

正直、最近ずっと寒いのだ。

皆が暖かい、という日でも寒くて寒くて仕方ない。だからこそ、カイロとマフラーを買ったのだが後者は精神的な理由でもう使えない。

ただ、温度計で示されている温度と体感温度がかなり違うので制御

剤の副作用で既に体温調節が狂ってきている可能性の方が高い。

つまり、自分も荒垣くんも「今日は寒い」とか「今日は暑い」とかの話題には弱い。まったくもってダメダメである。

とにかく、コンソメスープを作ろうと沸かした湯の中にキャベツとコンソメを入れる。

コンソメスープは自分のようなズボラでも手軽に美味しく作れるのでいいと思う。具がキャベツだけなのはめんどくさいのと時間がないからだ。それでも美味しいのでコンソメ様様だ。

火が通ったことを確認して、少し味見をすれば予想通りの味になっていて満足した。不味くはない、と思う。

そろそろ、他のメンバーも起きてくるはずだ。特に美鶴さんはもう準備を終えて降りてくる頃だろう。ちらりと横目で見れば荒垣くんはポテトサラダを作っていたようで、手際が良いないつもながらに感心する。

「なあ、」

「なに？」

「その首の、どうした」

聞かれて「ああ」と思いながら少し手でなぞる。これは別に正直に言ってもいいだろう。

「なんか起きてたら痣になってて、見えていいものじゃないし気持ち悪いから隠したんだ。たぶん、寝違えたかかゆくて掻きむしったかなにかしたのかも…部屋の鍵は閉めてたみたいから誰かのせいじゃないし…」

7月の痣については話さないことにした。ので、思いつく限りの理由を述べてみたが荒垣くんの反応はよろしくない。なにか不味い事でも言ったのだろうか。

「痣…なあ、それ、絞められた跡じゃねえのか」

しばらく考え込むように黙り込んだ荒垣くんがそう訊いてくる。その言葉に、どうしてわかったのだろうかかと戸惑いながらも返事を返した。

「え…あ、うん」

「ちゃんと制御剤は飲んでたんだな？」

「うん。忘れずにちゃんと飲んでたよ…あ…まさか、ペルソナが暴走した…とか…？」

荒垣くんに訊かれたその確認で、まさかペルソナの暴走では、と考えるが、普通痣が残るほどに首を絞められて寝続けることはできるのだろうかと思いついた。昨日の自分は、ぐっすり眠っていて何もなかったはずなのだ。首を絞められたら息が出来なくて苦しくて起きてしまう。やっぱり、その線は薄い気がする。

「うーん、でも昨日の俺はちゃんと寝てたよ。夕方ベッドに寝転んでから朝までの記憶がないし外にも出てないんなら俺の記憶が無いんじゃないかって本当に寝てたと思う。だからペルソナの暴走じゃないのかも…」

「…そうか、悪かったな。へんなこときいちまってよ」

「あーいや、ペルソナの暴走って線を無くせただけでもありがたいよ」微妙な空気になる。気まずい、訳ではないが結局この痣の謎について解決したわけではないので謎が謎のまま。薬がちゃんと効いていることにも安堵しつつ、話題を変えることにした。

「そういうえば荒垣くんは11月の修学旅行来ないの？ たしか京都だって…」

「行かねえよ。三上、土産はすぐきと柴漬と千枚漬で頼むぞ」

「あっそう」

断固として行かないらしい。

普通に漬物のお土産をリクエストされてしまったので買って来ようとう頭の隅にメモした。

「俺は天田やコロマルとここに残る。つーか、ここに残らねえと誰があんのふたりの飯をつくんだ」

「それもそう…なのかな…」

そもそも荒垣くんはこの前の満月の日に死んでも死ななくても離脱しているのだから修学旅行の間の天田くんとかコロマルに関しては各自で何とかしていた記憶しかない。

自分が楽だったときはできるだけ作り置きできるものを残してい

たりはしていたが、どうしていたのかはその時の彼らに訊くしかない
のでできないし予想するしかない。なのでそういうことにしておこ
う。

それに、確かに荒垣くんがここに残ってくれたほうが安心できる。
あの頃にはもう幾月のあん畜生は天文台からヒモ無しバンジーして
いるのである程度年長がいた方がいいだろう。

本当に肝心な時には役に立たない幾月だと思う。

「つーことで、頼んだぞ、土産」

「頼まれた。他によさそうなものがあつたら買ってくるよ。でも、奏
子や真田くんからの土産も覚悟しておいた方が良いでしょう」

確実に奏子はバナナ八ツ橋を買ってくるだろう。あと真田くんは
毎回毎回絶対になぜか土産だというのに抹茶プロテインを探し当て
て買ってくるのでプロテインの神にでも呼ばれているのかと思つて
しまう。ある意味恐ろしい。

「お、おう…アイツから、か…」

奏子の名前を出せばわかりやすく赤面するのでお熱だなあ、と思
いながらもあんまり期待しない方がいいと釘を刺したい気分だ。

いや、何かの奇跡が起こってすごくいいお土産を買ってくる予感も
なんとなくあるのでそちらになる様に祈りたいと思う。恋愛成就の
神に自分が祈っても意味ないし相手はいないけど。

そんな話をグダグダとしながら、朝食の用意を済ませ荒垣くんと同
時に席についていただきますと手を合わせれば丁度美鶴さんも降り
てくる。

「おはよう、美鶴さん」

「ああ、おはよう。体調の方は大丈夫か？ ……なんだその包帯は」

「体調は調子いいくらいだよ。包帯は…朝起きたら痣が出来て。原
因が分かんないし見てていいものじゃないから隠してるんだ。あ、ペ
ルソナの暴走とかじゃないから安心してね」

「……そうか」

「ホントになにかあつたわけじゃないと思うんだ。だから心配しない
で。俺もよくわかんなくて困ってるし原因が分かつたらしつかり報

告するよ。もう隠さないから」

「ちゃんと報告してくれるんだな？」

「するよ。もう隠しても意味がないし隠すこともないし」

嘘に嘘を積み重ねているがこういうリップサービスも大事なのだと学んだ。

隠さないなんて嘘だ。原因が分かったら報告するつもりではあるがそれはそれが話しても問題がない事だった場合だ。

話すと余計な気を遣わせそうなことだったり戦えなくなるなら言わない。別のそれらしい理由に変えるかまだわからないを貫く。

「冷めちゃうし、早く朝ごはん食べちゃおう」

促して、自分も箸を持ってポテトサラダを食べる。

程よくほぐれたジャガイモと、マヨネーズの味が甘くておいしい。

そうやって箸を伸ばして朝食を黙々と食べ続けた。

夜

今日は水曜日なので久しぶりに神条さんに会いにエスカペイドに行こうと思い、向かえば既に神条さんはカクテルグラスを傾けながらそこに立っていた。

「神条さん、こんばんは」

「ああ、きみか」

今日の神条さんはまた一段と陰があるように見える。

何かあったのだろうか。

「さて、いつもの話は無しにして、今日の私はきみに大事なことを伝えなくてはならなくてね」

「…？」

「別の仕事が入ってね、今までのようにここには来れなくなってしまうのだよ」

「そ、う…なんですか…」

かなりシヨックだ。

ライドウくんは都心に帰り、モコイさんがいなくなり、アリスはこ

の手で殺し、ここに来て神条さんまで、と思うと寂しくなってくる。かといって、引き留めるわけにもいかない。神条さんも仕事なのだ。余計に外に出る理由がなくなってきた。けれど、ちょうどいいのかもしれない。神条さんは死ぬわけじゃない。仕事が忙しくなるだけだ。

「今日が最後の逢瀬といったところか。いや、もしかするとたまたま巡り合えるかもしれない。そんな奇跡でも願ってみるかね？」

「それもいいかもしれませんがね」

シニカルに笑う神条さんに思ってもない事を愛想笑いと共に返す。奇跡には願いたくはないがたまたまくらいはあってもいいと思う。それは本心だ。

「フツ、ならば祈っていてくれ」

ガラにもなさそうなことも言うんだな、となんとなく思った。

神条さんは神様とか嫌いそうな感じだったのだ。別に、非科学的だといって否定するのではなく、自分のように純粋にあまり神といった存在が好きではない感じがする。もしかして、安心感を感じるのはそのような親近感を勝手に覚えているせいかもしれない。

「でも、今日が最後だなんて悲しいですね」

「そうか。寂しいときみは言ってくれるというのか。こんな私に。だというのなら、きみと交流を深めたことは無意味ではなかったという事だ」

無意味などでは決してない。

こうして、いなくなっても自分が覚えていられる。記憶の続く限り。魂が朽ちぬ限り。この繰り返しが続く限り。きつと。

「きみさえ良ければなのだが、最後にこの本を受け取ってほしい。私の自著でね。いつか渡そうと思っていた」

「ありがとうございます」

札を言って差し出されたハードカバーの文庫本サイズの本を受け取る。厳かな装丁のされている黒一色の表紙に白い字で『死を求め続ける愚かな黒山羊』と書かれたタイトルが印字されている。

暗いタイトルだな、と的外れな感想を抱きながらそれを丁寧にカバ

ンの中にしまった。こんど、ブックカバーでもかけてから読もう。
「まだ時間には早い。今日はもう少しだけ最後の逢瀬を楽しもうじゃないか」

こちらが本を受け取ったのを満足そうに見た神条さんはそう言っ
てまた笑った。

結局神条さんと帰る時間になるまでたわいもない話をしながらす
ごし、さらに駅まで送ってもらい円満に別れを告げた。

「種は蒔かれた。あとは芽吹くのを待つだけ、か」

神条は去っていく後ろ姿を見ながらそう呟く。

「なに、文句はないだろう。私はちゃんと言われた分の仕事をしたはずだ」

誰かに話しかけるようにひとりつぶつぶつとしゃべる姿は異様他
ならない。

だが、その場にはだれもいない。それを咎めるような人間すらいな
いのだ。

「気は進まないが、やれと言われているのなら遂げてみせよう。何分、
仕事は手が抜けないクチでね。知っているだろう？」

神条は目を不意に細める。

「…10年前の海底遺跡の件はわざと負けたわけではない。私とて、
アレが全力だった。石神さんとふたりであったとしてもね。彼らが
私を超えただけの話だ」

むしろ、と神条は続けた。

「なぜあのままあそこで眠らせてくれなかったのか、と文句を言っ
ても許されるだろうな。それくらいの特権はあってしかるべきだ。今
の私とて、お前なのだから。お前がそう、『自覚』させたのだから」

地面に映る影が嗤う。神条も、嗤う。

「そうだろうか? —— “ニャルラトホテプ”よ」

闇夜の中で、サングラスの奥の黒い結膜に浮かぶ金色の目がギラギ
ラと輝いていた。

秘密の特訓（10／22～10／27）

10／22（木）夜

珍しく自分とコロマル以外だれもいないラウンジで欠伸を噛みしめながらひたすら天井を眺めていると、アイギスが横に座って来る。「優希さん、モコイさんとは一緒ではないのですか？　ここ数日、気配も姿も見えませんがどうかされたのでしょうか？」

ついに来たか、と覚悟を決める。

アイギスとコロマルは唯一寮内でモコイさんを知る秘密の仲間のようなものだ。

そんな2人にモコイさんが居なくなったといつかは伝えなくてはいけないとは思っていた。思っていたが中々死んだと言い出しづらく、自分から切り出せずにいたが訊かれてしまったのならもう仕方がない。観念するしかない。

「モコイさんは…旅に出たよ。すごく遠い場所に旅に出たんだ」

「旅、ですか。挨拶もせずになんな急に出ていってしまうだなんて。遠い場所、というのも理解できません。どこか特定の場所ではないのですか？」

訝しむアイギスに薄く笑って首を横に振る。

「…本当に急だったから。モコイさんがどこに行ったか、きつとアイギスももう少ししたら分かると思うよ」

アイギスの問いをはぐらかし、視線を落とす。

12月、綾時くんに敗れた後の人の心を得たアイギスなら分かると思う。死への恐怖を覚えたアイギスなら、モコイさんの行先も、きつと。

けれどアイギスは正確さを求めたいようで、真顔で再び口を開いた。

「もう少ししたら…それは、いつなのでしょう。優希さんにはわかりますか？」

「うーん、ごめんね、俺にも正確な時間とかはわからないや。けれどアイギスはいずれ分かる。嫌でも、気づいてしまう」

自分のその言葉に、今まで静観を貫いていたコロマルが、「クウーン」と寂しそうに鳴きながら足元へとすり寄って来る。コロマルはわかったんだろう。モコイさんが死んでしまったことを。飼い主を目の前で失ったことがある故に。同じようなことをいろんな人間から言われたことがある故に。

その頭を撫で、「アイギスにはまだ秘密だよ」と囁きかければ分かったように頭を一度縦に振って頷いてくれた。コロマルは本当に賢くていい犬だ。賢いからこそ、こうして人の心の機微まで察してしまうのかもしれないが。

「嫌でも……?」

アイギスは何か考え込んでいるようだった。

自分の回答は今のアイギスの納得するようなものではない。だからこそ、直接言うことを避けたと言うものだ。簡単に納得してもらってはいけない。死を簡単に受け入れてもらってはいけない。死を軽いものだと思ってしまう。

随分と自分を棚に上げた身勝手な理由だが、アイギスには大事なものだと思うから。

という考えすらも勝手かもしれないな、と自嘲しながら自分を慰めるようにずっと撫でさせていてくれるコロマルの毛並みを堪能した。

10/23 (金) 影時間

今日はタルタロスの探索がない、という事なのでこっそり窓から抜け出し夜の街に繰り出す。徒歩だと少し時間が無いかもしれないが寮からタルタロスへ向かう最短距離はしっかり把握してあるので慣れたものだ。

全力で走る。

タルタロス内を探索できる実時間は30分あればいい程度だがそれで十分だ。自分の目的は攻略ではなく鍛錬なのだから。

タルタロス前に着き、暴れる心臓と息を落ち着かせながら思考する。

発作が出なくてよかった、と思いつつもこの調子ならもう少し無理しても…と欲張ろうとしてやめた。倒れたら元も子も無いし最後の大型シャドウ戦を目前にして病院送りにだけはされたくない。

とにかく影時間は電子機器が使えないため、時間を計れるものは黄昏の羽根が内蔵されていないと動かない。だから自分で何となく時間を計るしかないか、と息を吐いて門を乗り越えてエントランスに入る。

今日は誰もいないので静かなそこをぐるりと見回せばいつも通りで安心する。転送装置に手をかけて、一番最後に来た区切りの階に行こうとした——瞬間、視界が揺らぐ。

「…っ…」

眩暈のようなそれが治まり、気を取り直してさあ移動しようとした装置に手を賭けようとしたが、妙な視線のようなものを感じて後ろを振り向けば湊と奏子の言う、本来ベルベットルームの扉があるだろう場所にベルベットルームよりかは少し色のくすんだ藍色の扉がそこに鎮座していた。

「…っ…」

つい気になってしまったので近づき、ドアノブに手をかけた。

意識が吸い込まれるような感覚がして思わず手を引こうとしたが間に合わず、顔を上げたときには扉が沢山浮かぶ青い空間に移動していた。

「——貴方、これ以上に強くなりたいそうね？」

そして、目の前に立っていたのはマーガレットだった。

わけのわからない状況に混乱しつつも、強くなりたいことには変わらないので頷く。

誰の手も借りず、ひとりでも十分に戦えるようにしないといけないのだ。

「…そう、貴方は私の正式な客人ではないけれど、そう願うというのなら『力を司る者』として貴方を鍛え上げる責務があるわ。本当は、こんなことしないのよ。けれど、あの御方の頼みだというのはだから私は逆らえない。その代わり、死ぬ方が楽だったと思うくらい、しごいて

あげる！ さあ、始めましょう、一夜限りの舞踏会を！」

そう叫びながらペルソナ全書と共に突如として浮かびあがったマーガレットに、こちらもナイフを抜いて構える。

「倒れちゃ駄目よ」 「メルトダウン」

その言葉と共に、見た事のないペルソナが現れる。剣を持ったその赤い鎧を着た偉丈夫が地面にその手の剣を突き刺した瞬間、地面が溶けるような衝撃派がこちらを襲う。が、たまたま「ポベートル」にしていたおかげでダメージを喰らうことは無かった。ポベートルで防御できたところから見ると恐らく、物理属性の攻撃だろう。

「今のうちに言っておくわ。手加減は無用よ。殺す気がかかってきなさい」

と、言われても困るものがある。

本当に、手が滑って殺しでもしてしまったらどうするのだろうかという不安があるのだ。

だが、そんな不安を読んだかのようにマーガレットがため息を吐いた。

「……貴方ね、私たちがそんなにヤワだとても？ 本当の殺し合いなら貴方は今ので死んでいるのよ？ どうして本気になれないのかしら？」

「どう、して……」

どうしてだろう。

悪魔やシャドウは殺す気にならなくても殺せる。アリスや四騎士に至っては殺そうとしてきたから殺し返したのもあるが、そこに躊躇は無かったはずだ。

しかしマーガレットはダメ。となるとどこかに原因があるはずだ。

いや、違う。四騎士はともかくアリスに対してはモコイさんが自分を庇って死ぬまでは防戦もしくは逃走を考えていた。

モコイさんが殺されてしまったから、頭の中で抑え込んでいた何かがあつりと切れたのを覚えている。けれど、殺したという結果以外何も覚えていないのも確かだ。

どうやって殺してしまったのか、記憶に霞がかかったように思い出

せない。ただし、共通点は何となくわかった。

「……ヒトの姿をしている、から……」

恐らくはそれだ。これまで出会った悪魔も、完全に街中にいるようなヒトの姿をした悪魔は居なかった。

例外はアリスだけだ。彼女だけ、本当にそこら辺を歩いているような少女の姿をしていたのだ。

「人間は殺せない、というところかしら。甘いわね……貴方の心の奥底に浮かぶ戸惑い、怯え。まずはそれを超えていかないと駄目ね」

マーガレットがそう言いながらペルソナ全書をパラパラとめくる。

「貴方は貴方から私に挑みに来たわけじゃないから、その態度を侮辱だなんて思わないわ。けれど、ヒトの姿をしているからと殺せないようじゃ、強くなるどころか大事なものを失うわよ」

「……」

分かってる。

いくら覚悟を決めたところでそれが土壇場になってどうにかできないかと考えてしまうのが自分だ。その弱さが、命取りになることも沢山見てきた。けど、一步踏み出せない。

そのラインを自分の意志で越えてしまうと自分が自分でなくなってしまうようなそんな気がするのだ。しかしそんなことも言ってもらえないだろう。自分がやらなければ湊や奏子、他の誰かがそれを背負うかもしれない。ならば、自分が我慢して乗り越えれば、誰かが背負わなくて済む。

「成程ね、貴方……自分が殺されそうになるより誰かがそうなる方が覚悟できるのね。立派だわ、と言いたいところだけれど貴方のその感情の出処は本当に貴方の物なのかしら。それは、誰かに植え付けられたものではなくて？」

降りてきたマーガレットがツカツカと歩み寄って来る。

そしてこちらの顎をくい、と指で持ち上げてきた。

「——貴方は、一体何なのかしら？」

「……み、三上優希です……？」

「違うわよ、そういうことを訊いてるんじゃないの」

何、と訊かれても自分は自分だとしか答えようがないし他になにか回答があるのなら教えてほしいものだ。

この距離はほんとうにドギマギするのでやめてほしい。

「……私知っている貴方の情報とは別で、貴方がとんでもなく要領と察しの悪い人だという事がよくわかったわ」

溜息を吐かれて指を離される。

自分でも要領と察しが悪いことくらい自覚している。けれど

「さあ、やり直しましょう。時間のことは気にせず……たっぷりとね！」
霧散していたはずの殺気が再び戻ってくる。それに応えるように
召喚器を構え、引き金を引いた。

「『モルペウス』！」

「『ヨシツネ』！」

それぞれが空中でぶつかり片や糸引きで、片や刀とその手にもつ得物で応戦する。

【狂乱の剛爪】

【八艘飛び】

「ぐ……」

『モルペウス』が糸引きをしまい込んでその両腕の爪で切り刻もうとするも、マーガレットのペルソナである『ヨシツネ』の強烈な斬撃に対しモルペウスが力負けしてその姿を消す。

ペルソナの負ったダメージのフィードバックで少し呻くがこの程度なら問題は無いので戦闘を続行する。相手が物理で来るのならポベートルの出番だ。

「『ポベートル』！」 【テトラカーン】

「あら、そんな防戦一方でいいのかしら？」

物理攻撃を反射する膜を貼った瞬間にマーガレットが横まで肉迫してくる。目で追えないその速度に冷や汗を流しつつも、こちらも距離を取ろうとした瞬間マーガレットの手の中でカードが光る。

「来なさい……！」

現れたのは紫の魔王。蝙蝠のような羽を持ち紫のボンテージスーツを着たニヒルに笑うトリックスター^キは胡座をかいたまま両手を広

げた。

【ニブルヘイム】

強烈な冷気が襲い、凍てついてしまいそうになるが食いしばって耐える。

急いで回復しようとし、召喚器を構えて引き金を引こうと指に力を込めた。

——終末の時は近い。しかして目覚めはまだ遠く。我が福音、獣の呼び水とならん。

「つあ…ぐ…」

そんな声が頭の中で響いた瞬間、腹が疼きなにかが割り込んできたような、そんな感覚がした。

その原因の分からない気持ち悪さを堪え、無意識に叫びながら引き金を引き切る。

「——トラン、ペッターツ！」

「ここにきて、新たなペルソナですって!？」

現れたのは、ラツパを持ち白い法衣を着た骸骨の天使だった。

その姿にざわりと心の中の四騎士達がざわめいたような気がしたので恐らくこのペルソナも魔人なのだろう。

【神恩のラツパ】

トランペッターがその手に持つラツパを吹き鳴らせばみるみるうちに傷が癒えていき、同時に気力も回復する。

どういう条件でこうなるのかは分からないが、便利な技に違いはないだろう。

ただ、自分でもこのペルソナがなんなのかいまいち分りかねている。突然出てきたこのペルソナは、本当に使っているものなのか。自分の精神から生まれた、という訳でも無さそうだ。かといって、黙示録の四騎士達のように降魔されたわけでもなさそうではある。

そもそも、自分はこんな魔人と戦ったことがない。

得体の知れないものはあまり使いたくないし気味も悪いので慌ててペイルライダーに切り替える。

「貴方、どうなってるのかしら？　今、無からペルソナを産み出さな

かった…？」

「そんな事言われても俺にもよく…」

分らない。

困惑するように答えながら横へ跳ぶ。

正直、自分が生み出したというよりもこれは誰かが無理やり割り込んできたような感覚に近い。答えようがないしこういうことに関してはマーガレットの方が詳しいのではないかと困ったような視線を向けてみれば同じように困ったような顔のマーガレットが考え込むように顎に手を当てていた。

「…私はあの御方からの頼みどおり続行すべきなの？ それとも、これ以上はやめておいた方がいいのかしら。わからないわ…どうしてなの、こんなに先が見通せないことは初めてよ。まるで…そう、霧に包まれているよう。私の未来のお客人であるあの人が直面する試練のように」

自問自答するように悩むマーガレットは深刻そうだ。

彼女が戦いを止め、躊躇するほどだ。そんなにまずい事なのか、と口の端を引きつらせるも、得てしまったものを消すことはできない。受け入れて過ぎていくしかない。利用していくしかない。

「それでも、貴方はまだ戦う意思があるようね。…なら、気は進まないけれど続行しましょう」

考えることを一度やめたらしいマーガレットが再びペルソナ全書を構え戦う姿勢をとる。

そうして、“トランペッター” 抜きで時間の感覚がなくなるまで戦いに明け暮れた。

そこに言葉は無く。ただ淡々とした殺し合いに近い何かだった。

何度死にかけたかはわからないが、確かな手ごたえと自分の中にあった戸惑いが少しなくなつたような気がした。

気がつけばタルタロスのロビーに立ちすくんでいた。そのことに夢だったのかと思うも、確かにトランペッターと言う異物がそこに存在していたので夢ではないと自覚する。

このままタルタロスの内部に侵入するには疲れすぎているし、素直

に寮に帰ることにしよう、とタルタロスの外に出て行きと同じルートでこっそり帰ってベッドに潜り込めばやはり疲れていたのか一瞬で意識が闇へと落ちた。

10/24 (土) 放課後

寮にそのまま帰るつもりで廊下を歩いていると珍しく鳥海先生に書類を生徒会に渡してほしいと言われたので、それを手に持って生徒会室へ向かいドアをノックする。

「三年の三上です。鳥海先生から頼まれて生徒会の確認が必要な書類を持ってきました」

「入ってくれ」

美鶴さんの声にそのままガラリと戸を開ければそこには美鶴さんと岳羽しかいなかった。美鶴さんはともかく、岳羽がここにいるのは珍しい。自分のように書類の提出をしに来たのか、部活の活動報告か何かだろうか。

「三上先輩、珍しいですね」

岳羽も同じことを思ったのかこちらにそう言いながら笑いかけてくる。

自分は生徒会委員ではないので確かにここに来るのは珍しいかもしれない。実質、教師陣に美鶴さんへの伝言や書類の運搬を頼まなければここに足を運ぶことは滅多にないからだ。そもそも、それは美鶴さん公認の生徒会お手伝いをしている湊か奏子を捕まえれば済む話なのでこういうことになる確率は本当に低い。もしかしたら明日の天気は槍かもしれない。

「そういえばさつきまで戦う理由について話してたんですけど、三上先輩は何のために戦ってるんですか?」

「何のため…うーん、自分のため」かな

突然岳羽に聞かれたので美鶴さんに書類を渡しながらそう答える。

「自分のため…?」

「うん。自分のため。自己満足とか自分勝手とか、そんな感じの感情かな。なんていうか：やらなきゃいけないって言えばいいのかな：まあ、成り行きみたいなのだよ」

どこまで行っても自己満足なのでそうとしか説明できない。湊と奏子を救いたいと思うのも、こうして繰り返しているのも全て自己満足だ。

「あはは、ごめんね。なんか参考にならなそうな答えで」
苦笑する。

誰かのためとかではなくこれっぽっちも高尚な理由じやないので先輩として幻滅されたかもしれない。けれどこれはどうあがいてもごまかしようがないので仕方ない。

「いえ、こちらこそこんなタイミングで訊いちやつてすみません」
微妙な空気になってしまった。なんとというか、ここで気の利いたギャグでも言えればこの空気を何とか出来たのかもしれないが生憎と手持ちがないし自分は多分ボケよりツツコミ派だ。荒垣くんや岳羽のように冴えているわけではないけど。

「書類、渡したし俺は帰るね。サインとかいらなから内容を確認してその枠に確認印を押してくれるだけでいいって」

「ああ、ありがとう。そろそろ生徒会の委員が来るころだ。岳羽。話なら、後でも聞くが…」

「あ、いいんです。すいません、お邪魔しました」

岳羽も自分と同じように部屋を退室するような声を後ろに、今日もまっすぐ帰って寝てしまおうと考えながら帰路についた。

夜

「やあ、三上君。大型シャドウも残り1体だけれど、調子の方はどうだい？」

ダイニングで夕食の海鮮たっぷりペスカトーレを食べていると不意にやってきた幾月に声をかけられて内心でげんなりする。せっかく荒垣くんの美味しい晩御飯を堪能していたというのに、なんてやつ

だ。と思いつながら作り笑いを浮かべて対応することにした。

「調子はいいですよ。体調も悪くは無いですし」

「そうかい、それは良かった。ところでこの戦いが終わった後の事は何か考えているかな?」

「いえ…特には」

「こいつに言うことは特にはない、と言うだけだ。教えてたまるかバカ。という反抗心が何となくある。というか絶対に教えたくない。」

「親御さんとはごまめに連絡をとっているんだろうけど、今年に入ってからのおきみはひどく体調を崩しやすくなっているし何が起こるか分からないんだ。明日にでも帰省して一度ゆっくり話でもしてきたらどうだい」

余計なお世話だ。と言いかけた口をつぐみ、笑顔を崩さずこう答える。

「考えておきます」

「まあ、確かに明日だなんて急だしね…来週でもいいんじゃないかな? ああでも、御影町からここまで片道2、3時間ほどだったか。そうなる朝早くでなきゃいけないから大変だろうね」

こいつがこんな気を効かせてくるという事は何かあるのか。訝しむも原因は十中八九満月の次の日にある諸々のカミングアウト&特別課外活動部の面々を生贄にします! 宣言&幾月フライアウェイ事件だと思ふ。そしてどうせそこで全員生贄になって死ぬとも思っているから最後の思い出作り云々を暗に勧めてきたのだろう。こいつの好意に限ってはめんどくさいしどうでもいい。

何が起こるか分からないと言うがこいつの故意なので何か起こすの間違いじゃないかと言ってしまうそうになる口を再びつぐんだ。

「さて、食事の邪魔をしたようだしそろそろお暇しようかな」

ぼん、と肩に手を置かれる。なんでお暇すると言ったときながら自分に触れてくるんだ気持ち悪い。

さっさとどっかいけ、と笑顔で念じながら幾月がラウンジまで歩き離れていくのを見て、溜息を吐きつつパスタをフォークにぐるぐると巻き付けた。

「こんばんは」

湊はその声で目を覚ました。

もう慣れたその声にベッドの淵へと視線を移動させると、ファルロスがいつものようにそこへ腰かけていた。

「あと1週間で、満月だよ。いよいよ、今回が12体目だ」

その姿が蜃気楼のように揺らぎ、ベッドの淵からベッドの横へと移動する。

「ここまで、長かったのか短かったのか……でも、いろんなことが起きたね。けれど、思い出話をするには、まだ、早いよね」
「……」

「きみのお兄さんがどうなるか。僕がどうなるか。きみのお兄さんの中に巣食うものがどうなるのか。それは僕にもわからない。だからこそ……くれぐれも、気をつけてね」

「わかってる」

湊は目を伏せてそう答えた。

毎回気をつけている。しかし対策法が無いために兄はペルソナを暴走させたり傷ついたりしているわけだ。

力技で止めるわけにもいかないし、傷つけることはもつとしたくない。ファルロスはどうなるかわからない、と言っているが兄に纏わりつくような黒い霧のような気配は段々濃くなってきた。一度無くなったと思われた気配が、水曜日辺りから押さえられていた分も噴出するようにぶわりと増え始めたのだ。

それに首に包帯を巻いていたのも兄曰く「朝起きたら痣が出来ていたけどペルソナのせいではないと思う」と言っていたがどうも信用ならない。というよりも一番黒い霧のような気配が纏わりついているのが首なのだ。もしあれがペルソナでないとしたら尚更なんだというのか。呪いや『死』そのものだとしたら優希は何に呪われているというのか。何に、憑りつかれているというのか。

思わず、眉を顰める。

「ファルロスには、アレが何かわからない？」

「アレって…ああ、あの気配…？　アレはきみのお兄さんに巢食うモノじゃないよ。けれど、お兄さんを蝕む要因のひとつだ。道連れにしたいと願う思いとか、どうしてお前が生きてるんだと恨む思いとか、不特定多数の死んだ人が持つそういうものの集まり。こういうのを、人は『怨念』っていうんだっけ。たぶん、きみのお兄さんはそういうものを寄せやすいんだと思う」

「怨念…」

「うん。死してなお、強烈に焼き付いた感情っていうのはなかなか消えないものだよ。それが良いものでも悪いものでもね。もしかしたら、あれもシャドウと言えるのかもしれないけど…まだ形を持つまでには至っていないみたいだ」

それでもなお、牙をむこうとまとわりついているのかと思うと湊は更に眉間のしわを深めた。何の権利があつて死人ごときが兄を傷つけようというのか。

「『メサイア』でなんとか…」

「うーん、召喚できないしペルソナじゃ引き剥がすのは難しいかもね」
「じゃあお祓いをお勧めするとか…」

「どうだろう…」

うんうんとふたりで唸る。

『メサイア』は今回の周での湊が未だ使っていないある意味で最強のペルソナだ。

しかし使っていないというよりかは使えない、と言うべきか。

そこにいる気配が確かにするのに、召喚することができない。今まではそんなことが無かったというのに、一体なぜ、と焦るような気持ちがあつたのも確かだ。

それと同時に満月の日が過ぎてても心配すべきことはたくさんある。

ただ、目下のところどうなるかがわからない日が満月の日であるだけであつて。

それを乗り越えたら次は幾月による兄の殺害が成されないのを湊

は祈るしかない。あの時、どうして兄を殺したのか見せしめ以外にわからないがあまり反抗的な態度をとらないようにしないといけないと決意する。幸い、湊の経験から湊や奏子がつっかかりさえしなければ兄は死なないという結果がでているのでその方向で行こうと彼は思ったのだ。

「考えていても何も解決しないし、今日のところは寝た方がいいよ。それじゃあ、おやすみ……」

ファルロスの姿が消える。しばらく後、湊も瞼を閉じて眠ることにしたのだった。

帰省（10／29～10／31）

10／29（木）朝

朝食を食べ、湊と奏子に話す事があるので学校へ行く準備だけして2人が降りてくるのを待つ。しばらく待っていると2人がちようどタイミングよく同時に降りてきたので近寄って声をかけた。

「俺、土曜日の夕方から御影町に帰るから」

「えっ」

「ええっ!?!」

大きく声を上げたのは奏子で、小さく声をあげて目を見開いたのは湊だった。

少し急すぎたかもしれないが、それでも直前に言うよりはマシだと思っただのだ。

幾月の言う通りになるといふのは癪だし色々ムカつく。けれど、この先のごたごたを考えるといいタイミングだし養父母の家に帰って彼らが引き取ってくれた有里家の遺品と三上家で保存されているものを確認しなかったのだ。主に、写真や手紙を。

自分の高校3年になるまでの記憶があいまいなので他に変わったなかりが無いか確認したい。こつちで旧友に会って「おう久しぶりだな!」なんて言われた日には答えようがない。

…というのをなぜもっともう少し前に思い浮かばなかったのか。やるべきことはたくさんあったというのに。

「ほら、もうすぐ最後の大型シャドウ戦だろ？ 終わったらめんどくさい後処理とかいろいろありそうだし…直前だけど今帰っておこうかなって。もしよければ着いてくる?」

「いく! 帰ってもいいなら私も小母^{おぼ}さんと小父^{おじ}さんに会いに行きたい!」

「奏子が行くなら僕も」

「じゃあ、きまりで。外泊届ちゃんと出しといてね」

すんなり決まってよかった、と内心で安心しながら昼休みに連絡しておこう、と考える。

もしかしたら、本当にこれで最後になるかもしれないから。

10年前から今まで愛して育ててくれた恩を返せないのは悔しいけれど、そんなのこれまでだつてずっとそうだった。

何をいまさら、と愚かな自分を噛う自分がある。やり直しているだけであつて何度も何度も自分が死んでいることには変わりないのに。本当に、何もかも今更過ぎる。かといつて自分は器用じゃない。ひとつの目的しか見えないのだ。そうしないと歩けない。だから、そうしているだけ。

昔はもつと器用になんでもしていた気がする。気のせいだったかもしれないけど、湊が、弟がいたと思ひ出す前はもつと要領も察しも良かった気がするのだ。

ただそれも今となつては遠い思ひ出だ。

あの春の雨の日以外、全てが霞んでいると言つても過言ではない。自分がどうやって生きてきたのか、どんな友達と交流していたのか。大学は、なんでそこに行こうと思つていたのか。

でも、それでいいのかもしれない、と今は思う。普通の生活の思ひ出を引きずつているときつと立ち止まつてしまうから。

ため息を吐いて鞆を持つ。

「あ、お兄ちゃん溜息吐いたら幸福が逃げちゃうんだつて〜」

「ベタだなあ…大丈夫だよ、俺はいま幸せだから少しくらい逃げてても」
そう、幸せだ。そのはず、なのだ。

モコイさんはいなくなつてしまつたが自分は生きている。救われている。湊と奏子だつて生きている。荒垣くんも生きている。順調にシナリオは進んでいる。

これ以上ない幸せじゃないか。

「えー！ いやあお兄ちゃんが出した幸せ私が貰つちゃうもんね！」

「それなら沢山溜息吐いた方が良くないかな？」

「やっぱりだめー！」

「どつちなさ…」

奏子の熱い掌返しに困りながら苦笑いすれば、隣の湊がわずかに笑つていた。このやり取り、そんなに面白いのだろうか。よくわから

ない。

けれど結局よく分からなくていいか、と謎の納得をして駅への道を歩くのだった。

昼休み

「三上くん、ちよつといいかな」

焼きそばパンを自分の席で齧っていると不意に声をかけられたので袋にしまってから顔を上げれば、クラスメイトの…

……。

何だか頭が痛い。彼とは毎日クラスで顔を合わせているはずなのに名前がすんなり出てこない。

「どうしたの、三上くん。体調でも悪い？ 保健室にでも行く？」

「ああいや、大丈夫…それで、話つて？」

…えつと、そう、思い出した。朔間さくまくんだ。

物静かでクラスであり目立たないけど『クラスの良心』と言われている朔間くん。保健委員のように見えるけどそうじゃないらしい。

そんな彼が心配するような表情でこちらを見てくるので非常にたたまれない。大したことは無いのだからそんなに心配しなくてもいいのに。周りのクラスメイトもなぜかこちらを見て怪訝そうな顔をしている。そんなに体調が悪そうに見えるのだろうか。

「大した話じゃないんだ。次の授業が何だったのか聞きたくて」

「次は数学じゃなかったかな」

「ありがとう。それとごめんね、体調悪そうなのに…」

そう言つて短い会話を終わらせた朔間くんは去つていったがクラスメイトの名前まですぐに思い出せないのは流石に変じやないだろうか。

いや、変だとか思うレベルではない。満月が近くなると体調が悪くなることは多々あった。けれど、現在の日常で使用する記憶まで霞んだりすることは無かった。ましてや、クラスメイトの名前までとなる

と他の記憶も霞んでいたりしないのだろうかと不安になって来ると同時に気持ち悪くなってくる。

無言で席を立ち慌ててトイレへと向かい、胃の中身をぶちまけた。

「おえっ……え……はあ、はあ……」

洗面台で口をゆすいで蛇口を閉めた。

そのままトイレを出たが流石に昼食を食べる気になれなくて席に座ってから机に突っ伏して考える。

他に忘れていないことは無いか。思い出せないことは無いか。ぐるぐると頭の中で記憶の確認をする。

けれど、朔間くんの名前をすぐに思い出せなかったこと以外の異常は特になさそう。それが一層気持ち悪さを際立てた。忘れていないというわけではなく今のところは記憶が霞んですぐに思い出せずにいるだけだ。

ただ、忘れていないことを忘れていないのではないか。自分の知らない間に、自分が消えていつているのではないか。今は思い出しにくくなっているだけだがいずれば湊や奏子のことまで忘れてしまうのではないかという不安が鎌首をもたげた。

いま、2人の事すら忘れてしまったら、自分は自分でなくなってしまう。

ただし対策が無い。忘れていくという確定的な情報もない。気のせいかもしれないこの違和感を誰かに相談できるはずもない。

無い無いづくめだ。一体どうしろと言うのか。

日記でもつけたほうがいいのかだろうか。帰りにノートでも買おうと決めた。

10/31(土) 夜

御影町

地下鉄の駅を出て、外食に来ているだろう親子連れや飲みに出ているのであろうサラリーマンに混じりながらビルの立ち並ぶ道を御影サンモールの方向へと向かって歩く。アーケードになっているそこは今の時間だと寄っても居酒屋と、レストランやファストフード店とゲームセンター、後はバーくらいしか開いていないだろう。自分の

知っている店が今も残っていれば、の話だが。

最近店の入れ替わりが激しいらしく、数カ月見ない間に別の店に変わっているなんてしょっちゅうだ。

「なんか、帰ってきたー！　って感じがするね！」

「たしかに。僕らにとつてはもうここが地元だからね」

「あつそつか、湊たちも今日が今年初の帰省になるのか」

色々忙しかったので仕方ないし下手をしたら1年丸々帰ってこなかっただろう。

なのである意味今回だけは幾月の提案は悪くなかったと言えるのかもしれない。ほんの少しだけ。

誰かの事がすぐに思い出せない、などという事は朔間くんの一件以降全くなく、何となく安心している。もしかしたらたまたま調子が悪かったとか自分が思ったよりぼーっとしていたとかそういう事なのかもしれない。でなければ、朔間君があんなに心配してくることもなかっただろう。

こればかりは早とちりの気にしすぎだったかも、と考える。

「小母さんと小父さんには電話してるけどやっぱり直接会うのとは違うから楽しみだよ！　それと小母さんがご馳走作ってくれてるって！」

「養母かあさんのご飯おいしいもんね」

奏子の言葉に賛同すれば、隣の湊もうんうんと頷いて僅かに笑顔になった。

「荒垣先輩に負けなくらいじゃない？　僕も好きだよ。…小母さん

の唐揚げ」

「唐揚げはずっと取り合いだもんね〜」

「俺が居なくなつてからも取り合ひしてるのか…」

その光景を想像して苦笑いする。

自分たちもよく食べるが養父とつさんもよく食べるのだ。我が家のエンゲル係数が気にならないと言えばウソだが確実にやばいとは思っている。

それを支えている養母さんはすごい。おひとりしていて穏やかな

ひとなのに、いざというときは養父さんの尻を叩くしきつく叱るして人は見た目によらないを文字通り体現している人だ。

養父さんは養父さんで、あまりしゃべることは得意ではないが行動で愛情を示してくれる親として尊敬できる人だ。出来損ないに近い自分なんか彼らの子供として本当に情けないが、それでも愛してもらっていることはひしひしと感じている。そもそも実の子ではないので血を引いてないから似るわけがないと言われれば確かだ。

いや、こんなことで落ち込んでいるわけにもいかないし、考え事をしながら歩いていると危ないからやめておこう。

「あく家が見えてきた~~~~~！ つかれた~~~~~!!!」

奏子が見えてきた一軒家の玄関に向かって走り出す。

「あんまり走るとコケちゃうよ」

「コケませ~~~~~ん！ わっ、とと！」

調子よく返事をした奏子がさっそく地面に蹴躓いてよろめいた。ほら、言わんこっちゃない、と思ったがすぐに体勢を立て直し玄関までたどり着いていた。ここでタルタロスでの戦いが活きてくるとは思いもよらなかった。

「へっへ〜ん、私が一番乗り〜！ ただいま~~~~~!!!」

勢いよく玄関に飛び込んだ奏子の後に少し遅れて湊と一緒に家の中に入る。

そこには奏子とハグをしている養母さんが居た。養父さんは恐らくリビングでテレビでもみているのだろう。

「湊くんと優希もお帰りなさい！ 待ってたわよ！」

「ただいま、養母さん」

「…ただいま」

満面の笑顔で迎えられ、挨拶もそこそこにリビングへと入る。

予想通りリビングのソファアに座りながらテレビを見ながらこちらに振り向いた養父さんは僅かにほほ笑むと一言。

「おかえり」

「わー！ 小父さん、ただいま〜！」

そこにまたしても奏子が飛んでいく。あれでも養父さんは奏子に

デレデレなので問題なく受け止める。

奏子を受け止めながら、養父さんの視線がこちらへと向いた。正確に言えば、自分に。

「優希、首の包帯はどうした」

首に巻いている包帯が気になるらしい。

しまった、言い訳が思い浮かばない。かといって、素直に話すわけにも…いくか。

素直に話しているものだ。だってこの怪我自体にやましいことは無い。

「怪我してて痣になってるから巻いてるだけ。もう少ししたら治りそうなんだ」

「…そうか。あまり無茶はするなよ」

「うん。分かってる」

そのあとは少し遅めの夕食になり、久しぶりの養母さんのご飯を堪能した。

なんというか、荒垣くんのごはんも美味しいのだがやっぱり養母さんで作るごはんが好きだ。

「そうだ、養母さん、有里家の遺品ってどこにしまっただけあるかわかる？」

俺、写真のアルバムが見たくて…」

「写真のアルバムなら…二階にある物置部屋に整理して置いてあるはずよ？ そうよね、ハジメさん」

「…ああ。ダンボールに纏めてある。ラベルが貼ってあるからわかるはずだ」

「ありがとう」

二階の物置部屋は物置とは名ばかりの書斎のような部屋だ。養父さんが集めた蔵書や変な品や模造刀みたいな本物と見紛うばかりの品が置いてある。

「それ、僕も見たい。アルバムとか、あんまりみたことなかったし」

「私も私も！」

「でもどうして突然？ 今まで見たいだなんて一言も…」

不思議がる養母さんに、枝豆のサラダを箸でつまみながら答える。

「いや、何となく…もうすぐ高校生活も終わるし、大学に行く前に見ておきたくなつて。俺が生まれた家で、俺がどんな風に過ごしてきたのか今まで知ろうとも思わなかったから」

「……無茶だけはしちや駄目よ。少しでも気持ち悪かったり、ダメだと思つたらすぐに見るのをやめなさい」

いつになく、真剣な顔でそう自分に言い含める養母さんに嫌な予感がする。やはり、自分の失つた記憶はあまり良くないものなんだろうか。

横に座る養父さんを見れば、養父さんまで険しい顔をしている。

「俺も着いていこう。部屋の外で待っているから、何かあつたらすぐに呼びなさい」

「……、うん…」

これはかなり不味いんじゃないか。

養父さんまでこんな事を言いだすという事は、絶対に何か起こる気がする。しかしない。

主に、自分に。

ただ、ここまで来てアルバムを確認しないという道は無い。今逃したら二度と確認できなくなりそうなそんなそんな予感がする。

なら、ここは養父さんの好意に甘えてごり押しで見るとは出来ない。毒を喰らわばなんとやら、だ。こういう時に思い切りの良さは使っていない。ききたい。

食事を食べ終え、片付けと皿洗いも終えてから養父さんと湊と奏子の4人で二階へと上がる。そして物置部屋の電気をつけ、ダンボールを探せば意外とすぐに見つかった。

中を開ければ綺麗に整頓されており、目当てのアルバムも一目でわかった。

中をパラパラとめくれば書いてある文字までは判断できないが自分と湊と奏子が写っている写真が見えたのでこれに間違いないだろう。

「どこから見る？」

「やっぱり最初からでしょ！ お兄ちゃんの赤ちゃんだった頃の写真

見たい見たい！ あ、でも無理しないでね」

「うん、湊は？」

「僕はどこからでもいい」

と、いう事なので最初のページをめくる。

最初のページは幸せそうに微笑む腹が膨れた藍色の髪を持つ母さんと思わしき人物が写っている写真だった。

「わ、お母さんだ。若ーい！」

「ほんとだ」

2人の反応を見るに母さんで間違いないらしい。その顔は奏子と湊を足して割ったような美人な顔立ちだった。

写真の下には、『初めての私たちの子供。名前はまだ決めていないけれど、今は妊娠8ヶ月目。すくすく育っていつてね』と書いてある。「よくみたらさ、ちよつとお兄ちゃんに似てるよね。お兄ちゃん、お母さん似なのかな？」

「え、奏子の方が似てない？」

「僕らみんな似てるんじゃない？ 家族だし」

「あつ、そっかー」

雑談もそこそこに、次のページをめくる。

次のページには写真が無い。文字も何もなく、ただ空白だけが残っている。

「あれ？」

奏子が不思議そうに首を傾げる。ページがたまたま抜けただけかもしれない、と次のページをめくればまた腹の大きく膨らんだ母さんの写真が。

『妊娠7ヶ月目。今度は双子だってお医者さんに言われた。あの子の弟かな、妹になるのかな。それともどっちもだったりして。どちらにせよ、無事に何事も無く生まれることを願ってる』と書いてある。

あの子、とはもちろん自分だろう。つまりこれは湊と奏子を妊娠している最中の母さんの写真という事だ。

さらに次のページをめくる。

おくるみにくるまれた双子の赤ん坊を抱いて笑う母さんの写真だ。

『無事に生まれてきてくれて本当に良かった。湊と奏子。パパとふたりに考えたこの子たちの名前』と写真の下に書いてある。つまりこれは…

「わー！ これ赤ちゃんの時の私たちだよ!? すっごい！」

「……」

驚いてハイテンションで写真を眺める奏子と、無言でしげしげと眺める湊。2人とも自分が赤子だった頃の写真を見るのは初めてなのだろう。

「お兄ちゃん、次のページ！」

「はいはい」

奏子に急かされ、次のページをめくる。

今のところ、気持ち悪さや不快感といったものは何も感じていない。これならいけそうかもしれない、と写真を先に見る。

赤ちゃん用の服を着て、ひよひよとした産毛のように柔らかい藍色の髪の毛の生えた可愛い赤子が何かにつかまり立ちしている写真だ。湊だろうか。

文字は『1歳とお兄ちゃんになった渚、つかまり立ちをする。初めてじゃないけどやっと写真に映せた。撮影はパパ』と書いてある。この文字は、恐らく名前だ。

渚。なぎさ。 “ナギサ” …?

それに、お兄ちゃんと書いてある。湊と奏子の兄は、自分だ。つまり、自分は、有里渚ということになる…?

ナギサは、タカヤの知り合いで、人工ペルソナ使いで、桐条の監視下にいた、人間で。

つまり、タカヤ達は最初から居もしない “ナギサくん” ではなく、俺のことを、指していた?

俺だけが、理解を拒んでいた?

「……」

頭が痛い。この『名前』を見ていたくない。気持ち悪い。早く、忘れないと。

「ごめん、ちょっと、俺…ダメかもしれない。あとは、ふたりで…」

吐き気とちかちかと明滅する視界を抑えてなんとか声を絞り出す。知ってしまったことを脳から追い出したい。吐き出してしまいたい。

目の前で切り替わる血みどろの光景を、両手にべっとりついた血を、直視したくない。

返事も聞かずになんとか立ち上がって部屋を出る。そこで力尽きて倒れそうになったところを養父さんが支えてくれる。そしてそのままふたりに廊下のフローリングに座った。

「…しんどいか？」

「…かなり。ねえ、養父さん…関係ない、話して…ちよつと、嫌なものが見えるんだ。だから、」

「わかった」

少しでも気を紛らわせたい。どちらが夢か現実かわからない切り替わる凄惨な光景ではなく、こちらがちゃんとした現実なのだと自覚したい。

「っ、けほっ…」

咳き込む。養父さんが背中をさすってくれているのを感じて、少し力を抜いて大きく息を吸った。

「そうだな、これは父さんが母さんと結婚する前の話だ。母さんはいまとは似ても似つかないくらいやんちゃで、おてんばで、負けん気が強くて、跳ねつかえりで、男よりも腕つぶしが立ってるんじゃないかと言われていた」

衝撃の事実だ。

その話に、明滅していた視界が和らいだ気がした。少しだけ、自分が『有里渚』であるという事を受け入れられそうな、そんな感じがしてくる。

相変わらず気持ち悪いし吐きそうではあるけれど。

「ある日、俺はデートの予定を…その、遅刻…した。理由はもちろん、あった。だが、母さんには…ヒロコには関係なかった。連絡も…忘れていた、から。それで、ボコボコにされた。とんでもなく泣かれた。心配した、事故に遭ったのではないか、と。だから俺は二度と遅れま

いと誓った」

養父さんが尻に敷に敷かれているのはそういう事だったのかと妙に納得が出来た。力関係は元から養母さん、養父さんだったわけだ。

良い感じに思考が逸れてきている。このまま、楽になってしまえば、事実を持って行つたまま正気を保てるのではないかと思つただ。

「…どうだ」

「ちよつと、楽になつてきた…ありがとう、養父さん」

養父さんの黒い瞳がのぞき込んでくる。そのことに安心して、もう一度深く息を吐いた。

「とは言つてもまだ辛そうだな。部屋に帰るか？」

「…どう、しよう…でも、ひとりになりたくない。怖い」

「わかつた」

養父さんはそのままできてくれるようで、すごくありがたかつた。

けれど代わりに胸がぐるぐると気持ち悪くなってきて、服の上から掴むように抑える。

「けほ、けほっ…」

咳が止まらない。あの部屋はあんなに埃っぽかつただらうか。

相変わらず、養父さんは背中をさすつてくれているがそれに反して息がだんだんしづらくなってきて咳き込む回数も増える。

「ひゅっ、ひゅっ、けほっ…げほっ…」

「落ち着くんだ。大きく、ゆっくり息をしてみろ」

「う、ん…」

言われた通り、落ち着いていて息をしようと大きく息を吸い込んだ。

瞬間、目の前に、男が、あの男が立っていた。冷たい目で、自分を、舐めまわすように見ている。

ひゅ、と息を引きつらせた。

「あ、あ…嫌だ…いやだいやだいやだいやだ!!!!!! ちがうちがうちがちがう!!!! たすけて、たすけて!!!! いたいのはやだ!!!! ぼく、いいこにするから、なかないから…ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい

「ごめんなさ——」

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい……」

怯えたように身体を縮こませながら錯乱している優希を優しく抱きしめつつ、三上ハジメは我が子である血のつながらない子供のトラウマの原因に対して顔を顰めた。

善戦はしていたが『今回』もダメだったか、と思いながら頭を撫でて声をかける。

「大丈夫だ。ここには『ナギサ』を怖がらせたり傷つけるやつはいない。そんなやつがいるなら、父さんがどこかにやってやる。だから、大丈夫だ」

過去に数度、こうして不意に記憶のフラッシュバックをしてしまった際の息子は、記憶を失う前まで退行しているようだ。

『優希』と呼びかけても何の反応もなかったが、こうして『ナギサ』と呼んで抱きしめると驚くぐらいすぐに落ち着いてそのまま意識を失うことが多い。そして次の日には目が覚める。何もしないよりかは回復速度が全く違うのだ。

「あ……お、とう、さ……きて、くれ……た……」

引き攣らせた呼吸のまま、安心するように涙目で僅かにはにかんで意識を失う。

恐らく、これはこの時の『ナギサ』が求めていた助けだったのだろう。だが、現実はそうではなかった。だからこそ、こうしてトラウマを抱えているわけだ。

三上ハジメは、息子の過去を詮索するつもりはない。だからこそ、何も知らない。

しかし、これでは根本的な解決にならないのでは、と今の様子を見て思い始めていた。

なにが、「時間が解決してくれるだろう」だ。高校生にもなってもうすぐ大学生だというのに息子の傷は何ひとつ癒えていない。息子はいまだ、本当の意味で『三上優希』にはなれていないのだ。

ずっと、幼少の『有里渚』の影がついて回っている。ハジメとて、それを受け入れて『三上優希』ではなく『有里渚』に戻るのならそれでもいいと思っていた。

『三上優希』という名は、子供に恵まれない自分たちが降って湧いてきた天の恵みのようなこの子に押し付けた名前なのだから、と。

完全に跳ねのけるのならそれでまた良かった。『三上優希』であることだけに目を向けなければいいのだから。

しかし受け入れることも否定もできていない今のままではどっちつかずだ。ふたつの存在の間で、不規則に揺れているような、何者にもなれないそんな中途半端な存在。

「優希はもう大丈夫だ。後でベッドに寝かせるからもう出てきていい」

ハジメは物置にしている部屋のドアにそう語りかける。

僅かに開いたそのドアの隙間がさらに大きくなり、ふたつの頭がひよっこりと出てきた。

「う…バレてた？」

「心配が丸わかりだ。心配なんだろうが、俺から隠れようと思っっているのならそわそわしているのをやめた方が良く」

奏子の言葉にハジメは淡々と答える。

その答えに奏子は「うーん」と唸り、代わりに湊が口を開いた。

「小父さん、なんでわかるの」

「……職業柄だ」

顔を逸らす。そしてそのまま優希の身体を持ち上げれば、2年の冬休みに帰ってきた時より軽くなっているように感じて。

2年の冬休みの時はたまたまこちらに来ていた兄妹たちの親戚——すなわち湊と奏子がこの家に引き取られるまで家に置いてもらっていた有里の血筋の人間——に名前を呼ばれ、体を触られた結果、その場で錯乱することは無かったが逃げ込んだ先のトイレで嘔吐し続け、最終的に意識を失う事態にまで陥った。もちろん、すぐに急用ができたともともと好かない縁もゆかりもないその親戚を追い出し、妻と共に介抱したがあの時寝かせに持ち上げたときよりも軽いとは

どういふことなんだ、と今度は眉だけをハジメはひそめた。

「もし、まだアルバムや遺品を見たければ好きにすればいい。けど深夜12時前には寝ること。いいな」

「うん」

「…うん」

そう告げて、立ち去ったハジメの後ろ姿を見てから、ふたりはすぐに物置に引っ込んだ。

「お兄ちゃん、途中まで頑張ってたのに…」

「何がダメだったんだらう。名前を見たところまではまだ耐えてるみたいだった」

「うん。小父さんに話をせがんでたよね」

「ちよつと持ち直した感じだった」

双子はふたりで考えながら遺品を漁る。すると、遺品の中に一枚の手紙があることに気がついた。

「これ…手紙…?」

「奏子…裏…! 差出人…!」

封筒の裏に書いてある名前に気がついた湊が眉を顰めた。

その顔と声に、奏子が封筒を裏返せば、差出人の名前に『幾月修司』と書かれているのに気がついた。消印は1999年の8月の終わりだった。

「え…理事長…? なんで? だってこれ、ウチに…有里に出された手紙で…いつの…!?!」

慌てて中身を取り出して読めば、要約すると『行方不明になった息子さんが見つかったので辰巳ポートアイランドまで来てほしい』という内容だった。

「ねえ、この指定された日付…事故の、次の日…だよ…行方不明になった息子って、これ…これ…お兄ちゃん、だよ…なんで…どうして、理事長の手紙に、お兄ちゃんが…?」

「…わからない。たまたま、保護されただけかもしれない」

そう結論つけた湊だったが、実のところあの日の両親がなぜ自分たちを乗せて車でムーンスライトブリッジをわたっていたのかはつきり

と思い出したのだ。

『明日、きつとお兄ちゃんに会えるから、今日は海の見えるホテルに泊まろうね』

そう母に言われたことを。

ポートアイランドにある、海沿いのホテル。白河通りではなく、立派な、桐条グループが管理するそのホテルに向かう途中で影時間になりあの事故に巻き込まれた。

湊と奏子は母親に投げ出される形で、炎上し爆発する車から出るこたが出来た。そうして命をつないだ先で、デスと戦うアイギスを目撃し、その身にデスを封印されたのだ。

兄を餌に自分たちは誘き寄せられた？　と思うもそれは違う気がした。あくまでも、それは付属するおまけのような、そんな気が。

それに幾月は基本的に嘘つきではない。必要なことを言わないだけであって、あの言動に嘘偽りはない、筈だ。たとえ当時エルゴ研の研究者だったとしても。

引つかかるがこれだけでは判断材料が少なすぎる。

「そっか、理事長、優しい人だもんね。昔もきつと優しくかったんだろうなあ」

奏子は知らないからそんな能天気なことが言えるのだ、と湊は思ったがアレは初めての湊も胡散臭いと思いつつも騙されたので人の事を言えない。

しかも、あと数日でその本性は嫌でも明らかになるのだ。

湊は溜息をひとつだけ吐いた。

避けられない戦い (11 / 1 ~ 11 / 3)

11 / 1 (日) 朝

ぱちり、と目を覚ます。

吸い込んだ空気の匂いに、ここが寮の部屋ではなく家の自室だと気がついて息を深く吐いた。

そして記憶を遡る。

倒れたことは覚えていいる。なら、何故倒れたか。

アルバムを見たからだ。

アルバムの何を見たか。

自分の、『有里渚』という名前だ。そして何かを理解した、はず。

「……」

ダメだ、そのところだけ記憶がどうしても思い出せない。かといつて、もう一度確認すれば恐らく同じことの繰り返しだ。

だがこれでわかった。自分は、自分の昔の名前をトリガーに意識と記憶を失う。つまり、それに関する何かがあるはずだ。大型シャドウ戦が終わって落ち着いたらひとつずつ、ゆっくり調べていこう。二ヶ月は猶予があるのだ。恐らく、記憶を取り戻すことは無理でも、昔の自分の名前くらいは言えるようになるだろう。多分。

無理をすれば倒れるだけなので、なるべくそれは控えて。時間を無駄に消費することだけはやめたいから。

楽な私服に着替えて二階にあるトイレに行ってから下に降りれば養母^{かあ}さんが朝食を作っていた。

「養母さん、おはよー」

「おはよう、今なら洗面所空いてるわよ。さっきハジメさんが出てきたばかりだから」

「ん」

洗面所が開いているらしいと聞いたのでそのまま洗面所に向かつて洗顔と歯磨きに向かう。リビングに居なかったという事は養父^{とっ}さんはトイレにでも行っているのかもしれない。

それらを終えて出てくるとちょうど奏子が降りてきていたのかり

ビングで寝ぼけながら朝食のトーストを齧っている。湊は寝ぼけているというより半分寝ている状態でコーンスープを掬ってはスプーンから皿に落とす作業をしていた。

「ほひいひゃんほふあふお〜」

「んー…」

「おはよう」

口の中のトーストで殆ど発音できていないがたぶん「お兄ちゃんおはよう」あたりだと思うので挨拶を返しておく。湊はもはや言葉になっていない唸り声なので答えなくて放っておくことにした。

そんな奏子の隣の席では養父さんが新聞を読みながらコーヒを啜っている。

「養父さんもおはよう」

「…ああ」

マーガリンをたっぷり塗ったトーストにオムレツを乗せて食べ、次にベーコンサラダを合間に挟んでサンドイッチにしてまたひと齧り。

「昨日の事は、どこまで覚えているんだ」

「んー：アルバム見て、気持ち悪くなって、養父さんのしてくれた養母さんとのデートに遅れた話をきいたとこまで、かな」

「まあ、ハジメさん、そんなこと話したの？」

不意に、養父さんにそう聞かれたので包み隠さず話せば養母さんが恥ずかしそうに顔を赤らめた。心なしか養父さんも恥ずかしそうだ。

「あ、あの話…は、気を紛らわせるために…：しただけだ」

「うんうん。ありがとう、養父さん。あ、それと…あの家での名前だけがどうしても思い出せないのと多分あの名前を見たり聞いたりしたタイミングで自分が変になってるってのなんとなく自覚したから、ゆっくり何とかできないか試してみる。もちろん、無茶はしない方向で」

「そうか」

そこでその話は一旦終わり、「無気力症が増えていて怖いね」とか「冬休みには帰って来るのか」という話などを途中から起きてきた湊も含めて家族全員で話した。

冬休みの帰省については受験もあるし恐らくできないかも、と返せば少し養母さんが寂しそうだったが嘘は言っていないので何とか耐える。今まで同じような言い訳を何度も何度もしてきたので慣れっこだ。

夕方までには巖戸台に帰りたかったので昼には出ると伝え、物置部屋に向かって今度は三上家のアルバムを探す。

そちらのアルバムの置き場所は何度か見た事があるのですぐにわかり、手に取ってパラパラとめくれば聖エルミン学園に入学した時の自分と中学の制服を着ている湊と奏子が写っていた。この時の記憶もよく思い出せないが、きつと自分は卒業までずっとこの高校に通うと信じきっていた頃だろう。

他の写真を見てみたが特にめぼしいものは無かった。水族館だったり海水浴だったり遊園地だったり博物館だったり。小学生の中学年くらいからだったがいرونなところに連れていってもらっている自分たち兄妹の写真ばかりだ。

アルバムを閉じて仕舞い、自分の部屋に向かう。もし、全ての周で自分の部屋の前提が変わっていなかったら自分の日記のようなノートがあるはずだ。

高校に入ってから書かなくなったが、中学までは毎日なんでもいから起きたことを日記に書いた方がいい、と言われていたような気がする。誰に言われたのか覚えていないが養父母ではなかった事だけは確かだ。

ダンボールを漁ればあっさりと纏めて束ねてあるノートが見つかる。そのうちの表紙に書いてある年月日の近いものを手に取って中身を読んだが「見かけた野良ネコが可愛かった」だの「今日は連続8回のチョコク避けに成功した」だの「早弁してもバレない方法をクラスの伊藤くんと考えた」だの「岡田がいつもの如く女子更衣室を覗いてフルボッコにされていた」だの特筆すべき内容は無いと言えば無かった。

適当にその日あったことを書いていただけだったようだ。飽きたと思われる日はひたすら晩御飯のメニューだけが書かれているとき

もあつた。

しかも、特に仲がいい人間がいたとも書いてない。まんべんなく、クラス的全員とそれなりのつきあいがあっただけというか今とあまり変わらないというか。そんな感じだった。

手がかりは無しか、とノートをしまつてベッドに寝転がる。

家で燻つていても何もならないか、とすぐに起き上がると上着をひつつかんで携帯電話と財布をポケットに突っ込んでから階段を降りる。

「ちよつと散歩に行つてくる。1時間もかからないから心配しないで」

リビングにその声を投げかけて、返事を聞かずに玄関を開ければ秋の寒い風が頬を撫でた。

上着の襟に首をうずめるようにして歩き出す。金木犀の香りが鼻腔をくすぐる道を歩きながら、足は寂れた神社へと勝手に向かっていった。

アラヤ神社と呼ばれるそこは10年前までは祭りがあつたりそれなりに人が来ていたらしいがいまは人気が無い。社の前で手を合わせ、賽銭を投げ入れて社に入るための階段に腰掛ける。少し罰当たりかもしれないがベンチが無いので許してほしい。

目の前を、チラチラと何かが飛んでいる。それが金色の蝶だと理解した瞬間、自然と眉が寄る。

「……」

立ち上がり、その蝶から離れるように歩き出す。散歩は終わりだ。

あの蝶には近づきたくない。絶対になにか不快になる事を言われるだけだ。そもそも、あの蝶が何なのか自分はよくわからないが、ただの良い奴”ではないのは確かだ。

逃げるように家へと帰れば、養母さんが「おかえりなさい、早かったわね」と声をかけてくる。本当はもう少し街を見て回りたかったがアレがいるとなれば話は別だ。

結局、昼食を食べてすぐに巖戸台に帰る時間になってしまい挨拶もそこそこに御影町から離れることになった。

夜

寮に帰ってきて幾月の寒ーい「ゲン担ぎに店屋物のカツでもご馳走しようかな」というギャグをゴミを見るような目で受け流す湊を見つ、自分もできることならそういう目をして対応してみたかった、と内心で悔しく思う。

「幾月さんがギャグを披露しておりますが、誰も相手にしていませんね。現にわたしの思考回路もまた、彼のギャグが入り込む余地はありません」

アイギスにさえも拒絶された幾月のギャグって一体何なのだろうか。いや、ここにいる皆は現状での最終決戦（最終決戦にあらず）に向けて気合いが入っていてギャグをいちいち気にしていないだけだ。「最後のシャドウ：影時間の消滅：影人間のいない平和な街：そういったことで、容量が全て埋め尽くされていますので」

対シャドウ兵器であるアイギスにとつて、戦いがなくなると言うのは初めての物なのだろう。ただ、残念ながらこの戦いは今回で終わる訳じゃない。それにこのまえタカヤが言った通りなら何らかの理由でタカヤ達ストレガの妨害にあうかもしれない。結局、こうなることは変えられないというのか。

ストレガが襲撃してくるかもしれない、というのを皆に伝えるべきなんだろう。けれど、タカヤは湊と奏子に話をする、とも言っていた。伝えるべきか伝えざるべきか。悩む。

安全を考慮するなら襲撃に備えてあの話を伝えるべきだ。ただ、その話を本人たちから直接聞いたとなれば内通を疑われかねない。チドリに会っている伊織には秘密にするようにと頼んでいるがそれは伊織がいい意味で深く考えないお調子者だからであり、他のメンバーは真っ先に自分を疑うだろう。ちよつと伊織は惚けが漏れている気がしないでもないが。

とにかく、ここで皆の士気を下げるわけにもいかない。それにもかしたら話し合いで何とかなるかもしれない。だからここは黙って

いようとそう決めた。

11/2(月) 夜

「…いよいよ、明日で、最後の作戦ですね」

「まあね…」

皆で集まった寮のラウンジのソファアの横に立ちながらその話を聞く。

「けど、たった半年チョイで色々あったよね…奏子ちゃんと有里くんはどう?」

「あつという間だった」

奏子と湊がぴったりと同じタイミングで同じ感想を吐いた。そのことに訊いた岳羽が目を丸くして驚く。

「うわ、流石双子…まあ、そうだよな」

「オレ的にゃ、ヒマしてるよりかは、全然良かったけどな。いろんな人にも会えたしさ」

伊織が指しているのはいろんな人というか主にチドリだろうけど、そこにツツコむ人は誰もいなかった。

「そうですね。僕も皆さんに会えてよかったです。その、荒垣さんとも」

「…おう」

天田くんの言葉に照れたように荒垣くんがそっぽを向いた。素直じゃないんだからなあ、と言いたげな奏子の視線が荒垣くんを貫く。

「無駄なことは一つもなかったさ。〃力〃を得て2年半…悪くない時間だった」

「ワン！」

「2年半って長いですよね…あ、アイギスはもつと長いか」

真田くんの言葉を肯定するように吠えたコロマルと、2年半という言葉聞いて納得するように呟いた山岸はアイギスの方がペルソナ能力を得てからの年月が長いことに気がついて訂正する。その声に、皆がアイギスの方を向いた。

「わたしは、ほとんど寝ていたので、実稼働は極めて短いであります」
「桐条先輩は、いつからやってんですか? 確か、真田サンよりもつと

前からって…」

伊織の言葉に今度は美鶴さんへと皆の視線が向く。随分とせわしない。

「…ん？ 私か…？ …最初は、私一人だった。もっともその頃は、まだ作戦も無く、ここもただの学生寮だったかな」

「先輩も、理事長から誘われて？」

岳羽の疑問に美鶴さんは首を横に振った。

「いや…違う。私は幼い頃から影時間への適性があったんだ。以前、父の指揮するタルタロス調査の一団がシャドウに襲われたことがあってな。傍らで見えていた私に、その時、ペルソナが覚醒したんだ」「そんなことが…」

「…私は、安定制御下でペルソナを覚醒できた最初の例だったらしい。…あの日、私に覚醒が起こらなければ、三上や人工ペルソナ使いたち…それに今日のみんなの苦労は…無かったのかもな」

「先輩…」

なぜか美鶴さんがこちらを見つめてくるが美鶴さんのせいではないので首を横に振っておく。

「遅かれ早かれ別の誰かがペルソナに目覚めて戦ってたんだろうし、美鶴さんが気負う必要はないよ」

「三上の言う通りだ。どのみち、誰かがやっただろ。敵は、放っておけないんだからな」

「…そうだな」

その言葉に少しだけ微笑んだ美鶴さんの顔は先ほどまでとは違い明るかった。

そのまま会話を終わらせて、最後の調整という事で疲れないう程度にタルタロスに登って満月の日を迎えるのだった。

11 / 3 (火) 影時間

影時間になった瞬間に、示し合わせたように作戦室に集まる。

そこであたらし新しく目覚めた「ユノ」を使い山岸が大型シャド

ウの探査をしていた。

「発見しました。場所は、ムーンライトブリッジ南端。12番目：最後のシャドウです」

「フンフン、いよいよだね…」

「それと、付近にペルソナ使いの反応あり。数は：4：!? ストレガの3人だけじゃなく、もう1人：反応が微弱だけど誰かいる…?」
「!?」

4人と言う山岸の言葉に皆が目を見開いた。チドリがこちらに捕まっていないので、3人は確定として、もうひとりとなるとだれかわからない。全く予想がつかないともいえる。

「4人…? だが、連中にとっても、最後の砦だからな。予想はしていたが、油断するなよ」

「あいつら…」

軍事基地跡での毒ガス事件が尾を引いているのだろう。天田くんが顔を顰める。

「フン、探す手間が省けたな」

「おいアキ、突っ走るんじゃねえぞ」

「分かっている」

やる気満々で鼻息荒い真田くんを荒垣くんが諫める。この調子ではイノシシの様に突撃していつてしまいそうだったので抑えるストッパーたる荒垣くんがいてくれてよかった、と遠い目をする。荒垣くんが入院したり死んでいた場合こうやって突撃しようとする真田くんを止めるのは自分の役目なのだ。ついでに言えばそんなに仲良くなかったりするので酷い時は当身チョップする羽目になるのであまりしたくない。

「みんな…今までよく戦ってくれた。これが最後の作戦になるだろう。いつも通り、細心の注意を払っていくぞ」

美鶴さんの言葉に皆が頷く。大型シャドウ戦に限ればこれが最後の作戦だ。ようやく、ここまで来た。

満月の日は制御剤を飲んでいても毎回ペルソナを暴走させている気がするので、ムーンライトブリッジに向かう前に制御剤を多めに飲

んでいこうといつもより多めに出して一気に呑み込んだ。

お茶か水でも持つてくれば良かった、と顔を顰めれば、いきなり肩に手を置かれて身体を跳ねさせる。振り向けば、幾月がそこに立っていた。

「ああ、声は掛けていたんだけど聞こえてなくて驚かせてしまったみたいだね」

「…どう、したんですか、理事…長」

「いや、作戦頑張ってくれたまえよとうら若き青少年を激励しようとおもつてね！ あと緊張しているようだったからここで一発、僕の厳選した連続ギャグ傑作集を…」

おほん、と息を吸い込んだ幾月に首を横に振る。

「あ、結構です」

「酷いね三上くん!? みんな聞いてくれないんだからせめて君だけでも聞いてくれたっていいじゃあないか!」

「すみません、湊が呼んでるのでこれで」

「そんなー」

誰が好き好んで幾月の寒々しいオヤジギャグを決戦前に聞かねばならないというのか。

適当にあしらって湊たちと合流し、ムーンライトブリッジへと向かった。

タカヤ、ジン、チドリ。そしてイズミの4人はムーンライトブリッジで特別課外活動部が来るのを今か今かと待ち構えていた。

大型シャドウである『ハングドマン刑死者』より随分手前の位置だがこれはハングドマン刑死者からの攻撃を受けないためと“ナギサ”をそれに近づけさせないためだった。

「他の面々も強力ですがまずはナギサの“ヒュプノス”を出させないことに全てを賭けてください。アレは、恐らく次は無差別に邪魔をするものすべてを襲うでしょう。下手をしたら、ナギサ自身がアレに乗っ取られかねない。そうなれば我々の作戦は失敗です。刺激しな

いように、しかし手は抜かずに行きましよう」

「ヒュプノスで…アレか…昔とはえらい違う姿になつとつたな…」

「アレは怖いものよ。昔のあのペルソナとはもう違う。だから、気をつけて」

ジンとチドリが顔を顰める横で、イズミが考えるように顔を伏せる。

「イズミ、〃名無し〃の調子はどうや？」

「大人しいよ。あれから、まるで従順になつたみたいに…いや、こいつは元から俺の気持ちに従順だつたな…」

少し悲しげな顔をして己の召喚器である柄に黄昏の羽が埋め込まれたナイフを撫でる。

あの1件以降、健康体になつたイズミだったが影時間への適性とペルソナ能力は失つていなかった。しかも、ペルソナが暴走すらなくなったというのだからイズミとしてはうれしい限りだが少し複雑だった。

「ま、戦えるならそれでええわ。やつこさんら、来よつたで」

歩いてきた10人ほどの集団に、目を向ける。

「今日で最後という事は、むろん知っていますね？ あなた方はシャドウが災いを招くから倒すのだと言つた…けれど、そのシャドウを倒すことにより、取り返しのつかないことになるかもしれない」としたら？」

「どういふことだ!？」

美鶴がタカヤの言葉に食つて掛かる。それに眉を顰めたタカヤは優希を指さした。

「彼、ですよ。私と彼の中にいるペルソナには特別なつながりがありましたね。大型シャドウを倒すたびにその内で気配が増すのを感じていました。最初は、砕かれたそのペルソナが元に戻ろうとしているのかと思つていましたが、どうやらそうではないらしい。…喰らっているのですよ。大型シャドウを。そして何か恐ろしいものに変貌しようとしている。さて、愚かなあなた達に質問です。最後のピースであるあのシャドウを倒せば、ナギサはどうなってしまうのでしょうか？」

ね」

「……そ、れは……」

視線が一気に優希の方向へと向く。視線が集まった本人は、顔を伏せている。

「もしかしたら、変異したペルソナが内側から彼を食い破るかもしれない。もしかしたら、何も起こらないかもしれない。仲間想いのあなた方は、どちらを取りますか？」

誰も答えられない。

大型シャドウを倒すたびに異変が起こるのを目の当たりにしてきたメンバーには、タカヤが言っていることもあながち嘘ではないと何となく察せたからだ。

だが、

「どの道倒すしかないなら倒すしかないでしょ。なんでみんな悩んでいるの」

「三上ッ!!!」

感情の乗っていない声でそう答えた優希に、明彦が食って掛かる。一体、皆がなぜ悩んでいるのかわからないと言いたげなその発言に耐えられなかったのだろう。

「どう考えても俺一人と日本中の人間が影人間になって滅亡するの、どっちがマシかなんてわかりきってるじゃん。それに、タカヤの言う通り何も起こらないかもしれない。…なにか起こったらその時は……湊、前に頼んだこと、覚えてるよね？ タカヤ達も。俺の事殺してくれていいから。食いつぶされたんならそれはもう俺じゃない。俺の姿をした何かだ。だから、気にせず、誰かを傷つける前に」

殺してくれ。と、何かを覚悟したような顔で言い放った優希にジンが憤慨するような表情で叫んだ。

「ワシらはどうでもいい人間共とナギサを天秤にかけるまでもないわ！ もうええ、交渉決裂やタカヤ！ 殴ってでもこの阿呆を止めるで！ 連れて帰ってあのヤブ医者の説教受けさせな!!!」

「…確かに、お前達ストレガの意見に今は賛成だ。だが、我々が大型シャドウを倒さなければいけないのもまた事実。退いて貰うぞ！」

空気が張りつめたものになる。が、ひよい、と手を上げた優希がそこにさも名案だと言いたげに水を差した。

「じゃあその意見折半して、とりあえずは大型シャドウを倒してその後で俺が変になったら殴ってもらうってのはどう？」

「お兄ちゃんは無かって！ あと私たちからも後で説教だからね！」

桐条先輩に処刑してもらうんだから！」

「優希、邪魔だから下がってて。あと今日はペルソナ使用禁止だから」

「しよ、処刑!? 邪魔!? あ、はい…」

弟妹である奏子と湊にぴしゃりと叱られ、すごすごと縮こまって後ろで道具袋と思われる袋を持って下がる姿は情けないこと極まりない。先ほどまで何かを覚悟していた人間と同じだとは思えない。

「うわ…俺も人のこと言えないけどあれはな…」

「奏子っち、コエ〜…」

思わずイズミと順平は少し同情した。発言が発言なので擁護はできないが。そんなイズミと天田が相對する。

「イズミ、さん…貴方もペルソナ使いだったんですね…」

「あ、ああ…乾君…いやその…隠してたわけじゃないんだけど…な？」

「ごによごによもごもごと言ひ淀むイズミに、知古の中である天田は「変わらないなあこの人」と遠い目をした。イズミは隠し事がニガテというか誤魔化すことがヘタクソなのを夏のわずかな期間だけが共に過ごした天田は良く知っていた。悪い人ではないのだ。悪い人では。」

「俺だつて納得して道具係してるけどさ〜…あんないい方しなくたってさあ…というか基本的にみんな魔法でぱつと傷治すじゃんか…これ実質的な補欠じゃ…あ、やめよ…考えてたら情けなくなってきた…落ち込みそう…」

天田はイズミについてそう思いながら背後でぶつぶつイジイジといじけている優希の言葉を聞かなかつたことにした。ここまで来てしまえば先ほどまでの緊迫した空気が弾け飛んでしまいそうで。一体誰の為にこうやって争っているんだっけ？ と不思議な気分になつて来る。

「なんや、思ったよりナギサ平気そうやないか？ どうや、チドリ」
「変なところは無い。けど、タカヤがああ言うのなら急に変になる事も、ある」

チドリの顔は険しい。イズミがいるお蔭で戦闘に直接参加はしていないが常に気を張っているのだろう。横を見れば、胸元を扶る様に召喚器で切りつけたイズミが「名無し」を召喚しようとしていた。

赤黒い光と力の奔流が渦巻く。そうして黒い霧のようなものが出てこようとした瞬間、

「来い、名無し——」

「止めて！ いま、ナギサの気配が乱れた…！」
「!?」

そのチドリの声に、イズミが召喚を止めようとするももう遅い。

「あ、ぐ…あああああああああああああ!!!」

絶叫。腹を抱えて大きく目を見開いた優希が必死に何かに耐えるように膝をついている。

イズミから噴出した黒い靄が巨人の形を造ろうとして、弾けた。

そして、イズミの頭の中に声が響く。

—— 我は汝。汝は我。

—— 我は汝の心の海より出でし者…選択する運命の女神「ケーレス」なり。

弾けた靄がひとつの形を作る。「名無し」と同じ真っ黒な体躯に鋭い爪。翼の生えた真っ黒な女性の姿をしたそれが、青い光と力の奔流を纏い現れる。

「『ケーレス』…？ 『名無し』、お前…なのか…？」

「ペルソナの覚醒…!? 微弱だった反応が変わってはつきりとしたものになってる…相性は…え、全ての属性に耐性があります！ 皆さん、気をつけて！」

驚きに呆然と「ケーレス」を見上げるイズミと弱点が無いペルソナに驚く風花。

突然のペルソナの覚醒に皆が皆、理解が出来ないでいる様だった。ただ、絶叫して苦しんでいた優希に目をやらねば、とイズミが気づい

た時には優希はぬらりと立ち上がっていた。

「三上先輩、だいじよ…ひっ…」

声をかけようとした岳羽の声を無視して、前へ一步でた優希は嗤っていた。その目は、ギラギラと金色に輝いている。

その異様な雰囲気を感じ取ったチドリが顔を顰めた。

「出てきたわ。…アレはナギサじゃない」

「あ、そっか。きみと山岸って子にはわかるのか。ほんとに邪魔だなあ、ふふふ…」

心底忌々しい、という顔をした優希から、赤黒い光と力の奔流が噴出する。

そして現れたのはボロ布と鎖のペルソナである “ヒュプノス” だった。ニイ、と優希が邪悪な笑みを浮かべる。

「まずい——」

「アンティクトン」

瞬間、即死レベルの禍々しい魔力の爆発が全員を襲う。それも、ストレガと特別課外活動部に関係なく、全員に。

しかし、

「……へえ」

煙が晴れ、その光景を見た優希はまた忌々しそうに薄く笑う。

全員がほぼ無傷でそこに立っていたのだ。

「何をやったのかは知らないけど——っと、アイギス、きみは少し人の話を聞いた方がよいよ」

「貴方は、ダメであります！ …優希さんから出ていってください!!!」

話をしようと嗤った優希に、アイギスが跳びかかる。

その顔は鬼気迫るもので、誰も手出しができないようだった。

しかしひらりとそれを避けた優希は数歩下がってまた嗤いながら口を開く。

「それはまだ駄目だっていったはずだよ？ 覚えていないだろうけど僕らはまだそうすることができない。やりたいなら、あの大型シャドウを食べてからじゃないと。それに僕と優希は一心同体だ。離れる

なんて……いや、それもいいかもね。名案だ。きみたち全員を、殺してから離れることにするよ！」

目がぎらりと光る。そして、取り乱したように頭を振って叫びだす。

「お前達さえいなければ、優希が苦しむことも無かったのに!!! お前たちのせいだ!!! お前たちが生きているから!!! 消えてしまえ、消えてしまえ、消えてしまえ!!!」

「勝手なこと言わないで！ お兄ちゃんがそんなこと望んでるはずがない！」

「あははははは！ 妹の癖になーんにもしらないんだあ、どれだけ優希が苦しんでぐちゃぐちゃになってるのかもー！」

嘲笑う。兄の顔をしてそれは奏子をバカにするように叫んだ。その表情は侮蔑が含まれていた。

兄がいつもなら絶対にしらないその表情に奏子はたじろぐも、負けじと言い返そうとする。

「そんなことないもん！ お兄ちゃんが私たちを大事に思ってたそんなこと言わないことぐらい知ってるもん!!! お兄ちゃんの身体を使ってそんなこと言わないで!!!」

「あーあーあー!!! もうごちゃごちゃうるさいなあ!!! もういいよ!!! お前の言葉なんか聞きたくもない!!! ぼくには、僕には優希がいればそれでいい!!! 他になにもいらなんだ!!! もう消えちゃえよ!!!」
駄々をこねる子供のようにならんだ優希の背後に再び「ヒュプノスが現れた。そして大口を開けて力を溜め始める。

「いけません、全力で止めますよ！ さすがに2度目はイズミのペルソナでも防御しきれないでしょう」

「せやかてどうやって…」
「全員なら、あるいは…！」

力をもう一度溜め、放出しようとする「ヒュプノス」に敵味方関係なく皆が召喚器を構え、引き金を引こうとした。しかし、

「アンテイク——」
突如力を溜めていた「ヒュプノス」が霧散する。そしてがくりと

膝をついて地面へと倒れ込んだ優希が意味が分からない、という表情でうろたえている。

「あああああああ!! どうして…どうして!! なんて止めるの!!! 優希…! きみまで、ぼくのこと、否定するの!? だってぼくは…優希のために思ってる…! アッ痛!?!」

狂気混じりに叫んだかと思えば突如、自分で地面に頭を打ち付け始めた優希に皆がぼかんとする。

「うえっ、ごめんなさ…っ! 怒らな、いでっ!? 痛い! わかった、わかったから! 頭を地面で打つのをやめて! 血が出ちゃうよ!!! え? もう出てるだろっ? そ、そうだけどっいだった!?!」

先ほどまでの狂気はどこへやら、半分涙目でおろおろとしながらひたすら地面に頭を打ち付けようとしているその姿はひどくちぐはぐで。いや、ある意味これはこれで狂気的なのだが先ほどとは大違いだ。

しばらくそうやってうろたえながら地面へと頭を打ち付けていた優希が不意に静かになりボタバタと額から血を垂れ流しながら立ち上がる。

「…ごめん、ちょっと時間かかったけど、あの子」には引っ込んでもなかった。いっぱいお話したおかげで多分今日はもう無理やり出てこないと思うし安心してもらっていい」

バツの悪そうなその顔のまま、乱暴に手で血を拭ってそう答えるのは正気に戻ったららしい優希だった。その目はギラギラと輝く金色から元の灰色に戻っている。

「お、お兄ちゃん…本物だよね!?!」

「ああ、うん。そうだよ。さっきは怖がらせてごめん」【メデイアラハン】

奏子に答えながら優希が召喚器を取り出し、眉間を打ち抜けば、ポベートールが現れくると回転しながら全員の傷を癒す。

「タカヤ、あの子はもう俺を乗っ取ったりとかもたぶんもうしないからさ。大型シャドウ、倒しちゃ駄目かな」

「……」

「まあ、信じてくれないならここでタカヤ達にはぐっすり寝てもらおうことになるけど」

もう一度召喚器を構えたのを見て、タカヤが観念したように溜息を吐く。その表情は本当に仕方がない人だ、と言いたげなジト目だ。

「…わかりました。我々はここで待ちましょう。ですが、」

「全部言わなくても分かってる。死ぬ気はないし…さっきはごめん」
「タカヤ、ナギサはもう大丈夫。揺らぎも兆候も何も無い…凧いでいるだけ。ねえ、何したの」

タカヤと優希にぬつと近づいてきたチドリが補足する。そしてどうやってアレをひっこめさせたのかと聞けば、優希は困った顔で頬を掻く。

「…ちよつと肉体言語で語り合っただけだよ」

「…野蛮ね」

「そう言われると何も否定できない」

バツが悪そうにそそくさと特別課外活動部の方へと戻っていく優希を見つめたあと、チドリは視線を順平の方に移した。順平と刃を交わす事が無くてよかった、と安堵している自分に、数カ月前までだったらあり得ない事だと頭を振った。良くも悪くも変わってしまった自分に対して。

皆の方へと戻れば湊と美鶴さんが今までにないくらい怒っているような気配がして、あのままタカヤ達といればよかったかなあ、とぼんやり考えながら先ほどの事を頭の中でもう一度思い出す。

イズミさんがペルソナを召喚しようとした瞬間腹に激痛が走って蹲った。そのとき、身体の主導権が誰かに奪われたのをはつきり感じてそれが誰かもわかってしまった。

——自分の体を使い、喚いて怒ってしていたのはモルフエだ。

半分狂気に落ちているモルフエに自分の言葉は届かないようだったので、2発目の「アンティクトン」を撃たせなかったために奏子の言葉で錯乱した隙を狙って思いつきり自分の顔をしたモルフエに飛び膝

蹴りするイメージをすればあら不思議、体の動きだけを奪い取ることが出来たのでひたすら頭突きをしていたら現実では地面に頭をぶつけていたことになっていたらしい。やはりペルソナでの戦いは精神的に強い方が勝つ。今ならムキムキマツチヨの雷神である、トールでも出せそうなくらいだ。

ついでに古事記にもそうかいてあるので間違いないだろう。嘘だけど。

あの少年の姿のモルフエだったら躊躇していたかもしれないが自分の姿になってるのならためらいは無かった。それはもう遠慮なく頭突きしまくった。

けれど、モルフエは狂ってはいたがアレは善意100%だったのでもし今度会える時があるならもう一度よくよく言い聞かせておかねばならないと思う。ああいう思想はだめだ。全くもってうれしくない。と思っていたらなんだかすこし落ち込んだ気配がした。

……もしかして、モルフエは自分の中にずっといた？

つまりモルフエは俺のペルソナで、その中でまだいう事をきかないというか制御ができてないのは一体だけだ。

「……」

やっぱりモルフエは自分が10周程度で精神的に参ってしまったて生み出したもう一人の自分だったらしい。それが今回、力を付けてあんなペルソナになった？ と考えればつじつまが合うんじゃないかなるか。

「ああ、えと、みんな、ごめん。一応タカヤ達には静観してもらおうことになったし俺も大丈夫だから……」

「大丈夫なわけがあるか！ それになんださっきの言動は！ 殺せだど!? そんなことできるわけがないから私たちはああして……」

「ごめんって！ だからあとで殴るに訂正したじゃんか！」
「意味があまり変わっていないだろう！ くくくくくつ！ 処刑する！」

やばい。説得に失敗した。

召喚器を構えた美鶴さんに慌ててペルソナをブラックライダーに

切り替えて逃げる準備をする。が、そうは問屋が卸さない。肩をがしつと掴まれて振り向けばとてもいい笑顔の湊がそこにはいた。

「優希」

「はい」

「正座」

「はい！ ありがたくさせていただきます！」

観念するしかないので顔を引きつらせながらコンクリートの道路の上に正座する。

「見ちゃ駄目だよ天田くん」

天田くんの目を隠すジト目の岳羽の言葉が痛い。美鶴さんの処刑は氷結属性なのでブラックライダーが吸収してくれているから全く効いてないがコンクリートの上に正座していると精神ダメージが本当に痛い。

「…処刑された割にむしろ元気になってねえか…？」

「はっはっは、気のせいだよ気のせい！ ほら、もう時間が無いし最後の大型シャドウもぱつと倒しちやおう！」

荒垣くんの言葉に強がりながら急かせば真田くんがため息を吐いた。

「誰のせいだと思ってるんだか…というかあいっつら、影時間が消えることについては良いと言っついていったのか？」

「えっ、あ…うんまあ、気が変わったんじゃないかな…うん」

そこについては聞くのを忘れていたというかタカヤ達は曖昧に返事を濁していたのでそういう事なんだろうという事しておく。緑の夜空に満月を背にして浮かぶ^{ハングドマン}刑死者の姿を見つめる。あれを倒せばあとはニユクスまで突っ走るだけだ。

「前方上空を浮遊するシャドウに今の所、動きはありません。あれを倒せばすべて終わりです」

山岸の言葉に頷いて、確かに全て終わりだなあ、と考える。

言い得ているというか、嵌められているというかなんというか。^{ハングドマン}刑死者自体はタカヤ達と比べてクソ雑魚にも等しいシャドウなので苦戦は全くしないだろう。

ある意味浮いてるしか能のないシャドウというか、トリがこれいいのかという不安というか。

湊と奏子が準備を整えている間にくると回る刑死者（ハングドマン）の天使の輪のようなそれを眺めていると、不意に頭痛がして顔を顰める。一瞬、赤い空間に安置されている金色の杯のようなものが見えたような、見えなかったような。幻覚だろうか。

「準備できたよ。行こう」

湊にそう声をかけられたので武器を手に刑死者（ハングドマン）へと向かう。

近くまで来れば地面に置かれた3体の白い聖母像がそこにはあった。そして、空に浮かんで居た刑死者（ハングドマン）が顔を上げなくとも見える距離まで降りてきた。

『最後の戦いです…私も全力でバックアップします。皆さん、どうか、お気をつけて！』

とは言ってもこの戦況はあまり激しく動くものでもない。変わったギミックがあるわけでも…あるか。この白い聖母像をすべて倒せば刑死者（ハングドマン）が落ちてくる仕掛けになっている、はずだ。

『あの浮いているのが、シャドウの本体だと思うんですが…あんなところに居られちゃ、攻撃が届きませんね…少しだけ待ってください、ちよつと、調べてみます』

届かせようと思えば気合いでなんとかかなりそうなシヨボい高度ではある。

けどそれをするのも野暮と言うものだろう。なのであくまでも正攻法で行こう。

刑死者（ハングドマン）自体は天使の輪のような2連プロペラの下にある十字架に吊り下げられているムキムキマッチョマンだが先ほども言ったように白い聖母像を倒さなければ意味がない。ここは纏めて倒すのが吉だ。

召喚器をこめかみに当てて引き金を引く。思い浮かべるのはモルフェの——いや、"ヒュプノス"の姿だ。狡いかもしれないがさつきのある力を貸してほしい。

「頼んだよ」

そう呼びかければ青い光と力の奔流の中からボロ布と鎖を纏った

ヒュプノスが姿を現す。

その手には、見た事もない真紅の大鎌が握られている。

「!?」

驚いた皆の視線を集めながら、今回はちゃんという事をきいてくれるらしい「ヒュプノス」に良い子にしててくれよと願いを込めて微笑んで一言。

「アンテイクトン」

ヒュプノスはそのまま力を溜めて一気に放出し、聖母像を纏めて全て木っ端微塵にする。

なるほど、これは納得の威力だ。力を放ち終わったヒュプノスはそのまましゅん…：とうなだれたまま少し元気がなさそうな様子で姿を消していく。

…少し怒りすぎたかもしれない。

確かめて見たらヒュプノスは他にもいろんなスキルを持っているらしいので出来るなら使ってあげよう。そうすれば多分自分も慣れるし機嫌も直るはずだ。たぶん。きつと。めいびー。

「——ッ!?!」

「体勢を崩して地面に落ちてきた！ 皆、総攻撃だ！」

金属の軋むような音を立てて、ハングドマン 刑死者が空中から地面へと落ちてくる。

体勢を崩して地面に突っ伏したハングドマン 刑死者を取り囲み、全員でボコボコに蹴りつけたり切りつけたり殴ったり銃と弓で撃つたりした。誤射があるのはご愛嬌といたところか。自分はというと総攻撃には参加せずにくるくると召喚器を回してこめかみに当てた。

「♪パンタソス」【ラストキャンディ】

彼女が虹色の光を落とし皆の能力を底上げする。そして彼女が消えるのを見送ろうとした瞬間、不意に視界が切り替わる。

リノリウムの床に倒れる白衣の女性。

そこから流れる血。

満月。

爆発。

燃える車とムーンライトブリッジ。

——あるとき、彼女は何と言っていた？

「っ……」

ぞわぞわと得体のしれない悪寒が背筋を駆け上がる。

気持ち悪い。気持ち悪い気持ち悪い気持ち悪い。

「おえっ……」

「優希さん!!」

げえげえと地面に胃の中身をぶちまけていると、アイギスが叫ぶような声で名前を呼んでいるのが聞こえて顔を上げれば刑死者の黒い手がなぜか自分に迫ってきているのが見えた。

驚きに声を上げることもなく身体をこわばらせれば、乱暴に掴まれてそのまま空中へと拉致される。いや、なんでだ。このシャドウにこんな知恵、なかったはずだ。というか力加減が絶妙過ぎて逆に気持ち悪い。握りつぶすのならいつそのこと一瞬で終わらせてほしい。

『大変！ 三上先輩がシャドウに捕まって……！ これじゃシャドウを落とせても先輩が危ないです！ どうにかしないと……！』

「俺は俺で何とかするから！ うええ気持ち悪い：肌触りはなんかざりざりしてるのどこかヌメツとしてる……」

触り心地は全く嬉しくない感じだ。モフモフしていたらそれはそれで複雑になるが。

というかそんなことを気にしている場合ではない。握りつぶされない間にここからどうやって抜け出すか考えなくてはいけない。両手が空いているのはいいが胸から太ももにかけてを掴まれているので召喚器は取り出せない。ナイフも地面に落としてしまっている。

やれることといえば殴りつけることと手を振ることくらいかもしれない、と思っていたが召喚器無しでも召喚はできるんだった、と思いついて——かけてぞわりとした感覚を感じ、慌てて顔を逸らせば顔ギリギリを「タナトス」の一閃が通り過ぎた。

「うわっ!? あ、あ、あ、危なっ!? なんとかするとは言ったけど俺に攻撃当てていいとは言っていないからね!? ちよつと前髪切れたかもじゃん!!」

「優希は元気そうだから落としていいよね、アレ」

『え、ええっ!? だ、駄目ですよ! たぶん…』

下を見ればこつちを指さす湊が見えた。恐らくその顔は呆れに染まっているんだろう。

けれど確かに湊の意見も一理ある。一度落としてみて何かの拍子でこちらを手放すかもしれないし。

「落としても良いよ」と返事をしようとした瞬間、掴んでいる腕が動いた。

仮面のを着けている顔の方へとドンドン寄せられていくのだ。

「ひっ…き、流石に俺は…美味しくない…ぞ…!」

そう言ってみるみるものの、止まる気配はない。こうなればヤケクソだ。誰か適当に喚んでぶん殴ってでも止めるしかない。

「出来ればテラーソードで腕ごとぶった切れそうなのレッドライダー来いできればレッドライダー来い」と、祈りながら集中すれば青い光と力の奔流が巻き起こる。

そして現れたのは、

(は、ハズレだ…!)

——「トランペッター」だった。

よくわからないそのペルソナに、ガチャガチャでハズレを引いた気分になる。どうしてあの中でハズレ枠に近いこのよくわからないペルソナを引いたというのか。こういうところで不運を發揮しなくてもいいと思うのだ。

ふわふわとその白い羽で空中に浮かぶトランペッターは天高くラッパを挙げると、高らかに吹き鳴らした。

【悪魔の産声】

あまりいい音ではないそれに眉を顰めていると、突如として刑死者（インゴドマン）が苦しみだし始めた。そして、自分を手から離す。

かなり高い高度に上がっているのにもかかわらず、だ。やっぱりあのペルソナはハズレだ。

「は、話が違っ…っ…っ!!!」

叫びながら無意識でぐるりと一回転して足から着地した。これは

前世、猫だったかもしれない。

「……生きてる？　ねえ俺、いまちゃんと地に足つけてる？　死んでない？」

足に伝わる地面の感触があるにもかかわらず、笑う膝にまだ浮いているような感覚を覚えて平泳ぎのように手をバタバタしながら思わず振り向いて聞けば、目の前にアイギスが。

「はい。バイタルに何ら問題はありません。わたしが向かう前に高所から1回転して着地された方は初めてです。優希さんには驚かされてばかりであります」

「あ、ありがとうございます」

「ですが、わたしの行動が遅かったのもまた事実。精進します」

助けに行こうとしていたらしいアイギスに、そう言われてちやんと自分が生きていることを再確認する。死んでなくてよかった。あんな間抜けな死に方だけは絶対にいやだ。ほぼほぼ自滅のようなものじゃないか。雑魚だと思って油断したのもダメだった。油断大敵ダメ絶対。

そうしてげんなりしながら地面に落としたダガーナイフを拾って、皆の元へ戻れば伊織が声をかけてくる。

「センパイ、さっきの…召喚器使ってなかったっすよね？　アレ、どしたんスか」

「気合い…とか…？　こう、あれだよ…出るくく！　って念じた系？」

「気合いで出たら苦労はしないんじゃないスかね…」

「まああの時は死にそうだったし、ペルソナの召喚条件は満たしてるんじゃないかな…」

誤魔化した但实际上念じたら出てくるので伊織も試したらいいと思う。

「来て、セト！」【マハラギダイーン】

奏子の召喚した兄殺しの神である漆黒の竜が業火で聖母像を焼き尽くした。

そして地面に落ちてきた刑死者（ハングドマン）を再び取り囲んでボコボコにする。

「今度こそ、これで終わりだ！」

美鶴さんのレイピアの一撃が刑死者の仮面を砕いて顔面を貫けば、そのまま刑死者は力尽きて黒い霧になって消えていった。

「……」

「終わった…のか？」

とんでもない刑死者戦だった。

この1時間で3日分くらい疲れた気がする。主に自爆で。

「作戦終了といいますが、〃任務完了〃でありますね」

「ああ…終わったな…」

「こういう時、現場リーダーの〃とっさの一言〃が、必要かと思いません」

アイギスのその声に視線が湊へと集まった。

「〃勝利宣言〃をお願いしますであります」

「じゃあ、腹減った」

「せーの…腹減ったー！」

「腹減ったー！」

「へったー！」

湊に続きアイギス、奏子、自分の順番でやまびこのようにそう叫べば皆が一瞬で笑顔になる。

「プツ…アハハ、なにそれ」

「ハツ…流石兄妹、って言やあいいののか？」

笑う岳羽にまんざらでもなさそうな荒垣くん。中々にこのやり取りはウケたらしい。

場の雰囲気や和んでよかったよかったと思っていると、その横でそれそわとしている伊織が美鶴さんに問いかけた。

「あ、あの、桐条先輩…明日の夜は〃祝勝会〃するんスよね…」

「なんだ、気が早いな。もちろん、その予定だが、どうした？」

「その…美味しいスシとか喰いたいな…なんつって…」

そんな伊織の言葉に真田くんの顔が嬉しそうになる。

「寿司か…いつ以来かな…」

すみません自分は8月ごろに回らない寿司を理事長の奢りで食べ

に行きました、とはいえずに無言で黙っておく。

「俺はヒラメだ。あと、ウニも予約だ」

「わわ、ええと、じゃ私、中トロ」

「はいはいはい！ 私は大トロとビンチョウとタコとエビとバナナ！」

「え、え、言わないと駄目？ ええと、じゃあイクラ予約で」

「あ、俺はエンガワがいいな」

「俺ア……そうだな、タマゴとカツパにするか……」

次々と欲しい寿司ネタをあげていく面々に伊織が焦り出す。

「ちよ、待ってよ……予約とかって、おかしいだろ!」

「わたしは、大トロ、マグロ、エビ、イカ、ホタテ、鉄火……あと、アナ

ゴも確保であります」

「僕もアイギスと同じので」

「取りすぎだーっ!! つか、湊はともかくお前は食わなくてもいいだろがっ!!」

「わたしだつて、食事を構成する成分や味を分析するという大事な仕事があります。お寿司というレアな食事ならなおさらであります」

「みにくい争いだ……」

そんな言い合いを見つめる天田くんがため息を吐く。

「桐条先輩、一応、タマゴも頼みます。寿司屋の実力はタマゴで分かるって言うから……」

「ほお、分かっくんじゃねーか天田」

「えへへ、荒垣さんもタマゴを頼むなんて流石です!」

「寿司屋の実力? ったく、子供のくせに、かわいくないな」

「わかったわかった。それじゃあ明日は、特上品を運ばせよう」

そんな話を横耳にいれつつ、皆の元を離れて1人でタカヤ達が待っている場所に向かう。

が、何処にも居ない。もう帰ったのかもしれない。せめて、別れの挨拶くらいしたかったが居ないとなるとしようがないので諦めて皆の元に戻る。

「この景色も……もう見納めなんだな。忌まわしいと思ったことしかな

いが、不思議と名残惜しい気持ちになる」

「そうだな…」

戻ってくるのとちょうど皆で月を眺めて黄昏ているようだった。

「守ったんですよね、私たち」

「ああ。私たちのすべき事を、ちゃんと果たしたんだ。たとえば、誰かの記憶に残らなくてもな」

自分も、誰かの記憶に残らなくても頑張らないといけな思考えながら帰路について汗を流した後布団に入る。

その日、久しぶりに夢を見た。

黒い液体に溺れる夢だ。息が出来なくなつて、肺に胃に、全身の穴という穴からその液体が入ってきて、苦しいと叫ぶこともままならな間に身体まで融かされて自分の輪郭すらわからなくなる。そんな夢。

飛び起きればべつとりと嫌な汗をかいているし心臓はどくどくと不規則に音を立てているしで枕元の小物入れに入れている不整脈の発作が起きたときの薬を取り出して口に入れた。

少し落ち着いたのを見計らい、時計を見たら寝に入つて1時間も経っていない。

刑死者に^{ハングドマン}掴まれたせいでこんな夢をみたのかもしれない。

最悪だ、と思いつながら再び布団に潜り込んだ。

滅びへと至る路

終わりの始まり（11/4）

11/4（水） 放課後

満月の日はもう終わつたというのに何だか朝から体調が悪い。

熱っぽいしずっと吐き気がして休みの時間になるたびにトイレに駆け込んで吐くことを繰り返していたら顔色が相当悪かったのか今日もまた、話しかけてきた期間くんに心配されてしまった。

せっかく祝勝会でピザやら寿司やらご馳走を食べられるチャンスだというのにこんな調子が悪かったら堪ったものではない。夜までに治すために部屋に籠って寝よう。

「これで全員分か」

「はい」

武治さんの確認と共に、特別課外活動部のメンバー全員の前で机の上に置かれたトランクの中に召喚器の最後の1個が仕舞われる。

「全ての元凶であった12のシャドウは、君らの活躍によって滅んだ。君らの活動は今夜24時をもって解散となるだろう。今まで本当に良くやってくれた。誰にも知られず、称える者もない勝利だが、これは紛れもなく偉大な功績だ。心から称賛の言葉を贈りたい」

皆を眺めるように動いていた武治さんの視線が、真ん中に立つ美鶴さんへと戻る。そしてわずかに微笑んだ。

「——よくやったな、美鶴」

「……はい」

その声はひどく優しく、桐条グループの社長としてではなく、ひとりの父親としての声色のように感じられた。対する美鶴さんも少し嬉しそうだ。

「これ以上は、なにも背負う必要はない。君らには若さの本分を謳歌する権利がある。戦いに身を投じる必要はない。明日からは大手を振って、ごく普通の学生生活に戻ってくれたまえ。……では、これで失礼する。私はまた夜の祝勝会に来よう」

「お待ちしております」

穏やかな別れの挨拶と共に、召喚器の入ったトランクを持って武治さんは去っていく。

それを見送ってがやがやと祝勝会やこれからのことを話し始める面々を他所に、自室へと足を急がせる。そして部屋に入って洗面台に胃液だけを吐き出した。

ひどく眠いし頭も痛い。風邪をひいてしまったのだろうか。

制御剤で体力が落ちているらしいのでこういうこともあるのかもしれないが何も今日じゃなくてもいいだろう、と恨めしく思いながら布団へと潜り込む。ベッドの脇にビニール袋も用意したのでこれでいつ気持ち悪くなくても吐けるしいけそうなら洗面台まで行けばいい。

夜には治っていますように、と祈りながら目を閉じた。

夜

なんとかかんとかラウンジに降りてきたが体調はすぐれないままなどころか少し悪化しているような気がした。先に届いたまだ開封されていないピザのチーズの匂いで吐きそうになってトイレに向かい吐いてしまう程にはやばい。

「理事長はアイギスが受ける点検の為に先にラボに行っちゃって遅れるって。ふふ、こんな時でもラボに行っちゃうなんて、ほんと理事長、好きですよね」

「はい。わたしはこの後、幾月さんと合流してラボで1時間ほどの点検を受けるであります」

「これまでずっとメンテナンスなしだったもんね」

そんな話を聞きながら吐き気をこらえる。ぐにやぐにやと揺らぐ視界と頭痛が更に追い打ちをかけてくる。

「優希、大丈夫？」

「…あ、ああ、みなど、うん…まあ、へーき…ヤバくなったら部屋に…」

帰るけど…」

一瞬、誰から声をかけられたのかわからなかった。隣に座っていたらしい湊だという事に気がついたのは5秒ほど遅れてからだだった。

正直かなりきついが耐えられないほどではない、と思う。それでも食事をとるのは勘弁したい。いま何かを口に入れたらまた吐いてしまいそうだ。

「…強がらないでね」

「わかってる、しんどいときは、しんどいって言うから…」

「……、」

何かを言おうと口を開きかけた湊が何かを言う前に寮の前で止まる車の音が聞こえて注意がそちらに向く。

「いらしたようだ」

武治さんが宣言通り祝勝会に来たらしい。皆が立ち上がるのをのろのろと目で追い、一番最後に立ちあがって後を追うように玄関に向かった。

僅かな距離だが何とか追いつけば、丁度扉が開いてボディガードと秘書を連れた武治さんが入ってきた。

「お待ちしていました」

「ああ、君らの祝勝会を私も祝わせてもらおう。ささやかだが私からも差し入れを用意してある。だが、その前に——」

武治さんは岳羽を見ると近寄りその手を取った。

「感謝している。よく最後まで力を貸してくれたな。…ありがとう」

「あ、いえ…そんな…」

それは心からの感謝だった。岳羽の父は桐条の被害者だ、と屋久島で告げたように武治さんにも負い目があったのだろう。岳羽は途中で投げ出してもおかしくない状況だったにも関わらず、最後まで戦い抜いた。それに感謝した、といったところだろうか。

照れた様子で謙遜する岳羽から手を離した武治さんは、自分の方へと向くとこちらへ歩み寄ってきて手を握ってきた。

「それと、きみもだ」

「…俺、ですか…?」

「本当に、申し訳ない。いまはまだ、この謝罪の意味がわからないだろうが、謝罪させてほしい。許さなくてもいい…だが、全てを知った後でも美鶴の事だけは嫌わないでいてやってくれ」

「お父様…」

悲痛そうな面持ちでそう告げてきた武治さんに、頭の中ではなを浮かべる。

何か自分に都合の悪い事でも隠しているのだろうか。まさか、部屋に仕掛けられた監視カメラとか？

しかしあれは全員の部屋についているはずだ。よくわからないが美鶴さんを嫌うような要素は無いので領しておく。

「え…あ、はい…大丈夫、だと思えます…」

「…感謝する」

そうして自分から離れた武治さんを見て、美鶴さんが口を開いた。

「さあ、楽しんでいいぞ。せっかく取ったものもある。遠慮しないで手をつけてくれ」

「やったっ、ようやくだ！」

「ピザはオーブンで温めなおしてやるか…」

駆けだした伊織を発端に、それぞれラウンジのテーブルに戻っていく。ダイニングの方にも荒垣くんの手料理や飲み物、ケーキなどのデザートが乗っているのでまさしくパーティー状態だ。今ならまだゼリーくらいなら食べられるかもしれない。

「あっ！… ちょい待ちー！」

さあ料理に手をつけよう、といったところで一番はしゃいでいたはずの伊織が待ったをかけた。そして懐からデジタルカメラを取り出すとニヤニヤと笑う。

「えー、突然ですが記念写真撮りたいと思います！」

「？」

伊織の突然の発言に、皆が頭にはてなを浮かべたような顔をする。が、それもわかってると言いたげに伊織はその発言の理由を語り始めた。

「ホントは昨日、現場で撮ろうと思ってたんすけどね。でも、影時間

だって、すっかり忘れてて、見事に使えませんでした！」

「現場でつて：お前、戦いに持って行ったのか」

「そつスよ。だって、最後つて分かつてた訳つしょ？」

あきれ顔の真田くんは伊織は当然だと言わんばかりの返事を返す。

「すいませーん。これ、お願いできます？」

そう言いながら持っていたカメラを武治さんのボディガードの男性に渡す伊織は上手いこと使い方をレクチャーしているようだ。

「もう：どっかの観光客かつての。：でもま、写真、ちよつと欲しいかも」

「思い出にはいいよね。これから写真見返して『2年生の時は波乱万丈でしたなあ』って思い出すの！」

「あ、私はアルバムにしまっておこうかな：」

2年の女子できやいきやいと話し合っているのを横目に、伊織がはた、と何かに気がついて振り向く。

「あ、幾月さんまだだっけ：ま、来たらまた撮りやいっか。おっし、そんじや、撮るんで集まつてくださーい」

伊織に手招きされて玄関に集まる。一番前の真ん中にコロマル。その隣に天田くん。

その後ろに山岸、湊と奏子とアイギス、岳羽と伊織の順で並ぶ。

そして最後の列には武治さん、美鶴さん、荒垣くん、真田くん、そして自分の順で並んだ。一番後ろの一番端だがこれなら顔色が悪いのも何とかごまかせる位置だ。本当は元気な時に撮りたかったが仕方ない。

「では皆さん、宜しいですか？」

「！ オツシヤアア！」

「こら、騒がない」

伊織が両腕をあげる、のをぴしやりと岳羽が諫めた。

「えー」

「ではこちらを向いて。撮りますよ」

ボディガードの男性の声にみんなが瞬時に前を向く。伊織も岳羽に諫められたせいか大人しい。

パシヤリ、という音と共にカメラのシャッターが切られる。何度かその音が響いたのち、ボディガードの男性の「確認していただいて宜しいでしょうか」という声に皆が力を抜いてばらばらと離れ始めた。

「おお、いいっすねえ〜！ 写真のプロみたいだ」

「お褒めに与り光栄です」

カメラを覗き込む伊織とボディガードの男性を横目に、2階へと上がる階段へ向かって歩き出す。

「あれ、三上さん食べないんですか？」

「ああ、うん…記念写真撮ってすぐなのにごめん…やっぱり……なんだか気分がすぐれない、から…部屋に戻って寝てるね…お寿司、届いても俺の分は残さず食べていいから…」

「そうですか。お大事にしてくださいね」

「ん…ありがとう」

声をかけてきた天田くんに伝えることだけは伝えて上手く笑えているかどうかすらわからない顔のままよろよろと2階へと上がる。そして部屋のドアノブに手をかけたとき背後から声が掛かる。

「優希さん」

「……アイ、ギス？」

「随分と体調が優れない様子でしたので。有事の際は医療機関へ通報することも視野に入れておくべきかと」

「……でも、皆の気分をじゃましたく、ないし」

救急車を呼べばそれこそ皆に悪い。お祭り気分になんか射したくないというのもある。

自分が耐えていれば済む話なのでここは寝てなんとか過ごしたいのだ。

「ですが、人命が何よりも大切です。せつかく大型シャドウをすべて倒したというのに優希さんが死んでは元も子もありません」

「……だいじょうぶ、寝たら…治るから…」

そう言つて部屋に引込んでベッドに潜り込んだ自分の胸に、ナチュラルに部屋に入ってきたアイギスがベッドの横に座って手を当

ててくる。

そのまま10秒にも満たない時間黙っていたアイギスが口を開いた。

「呼吸に雑音が混じっています。不整脈かと思われる脈拍の乱れもあります。メンテナンスの予定がありました但急遽変更してわたしはここで優希さんを見守るべきだと判断しました」

「だめだよ…アイギス、おれの…事はいいから…メンテナンスは受けとかないと…」

しんどいからなのかまともな思考が出来なくなってきた。

なんだか、アイギスがメンテナンスを受けなくて安堵する自分がいるのに、アイギスのメンテナンスは大事なのだから行かせなきゃ、という感情もあってどちらが正解なのかわからなくなってくる。

「いいえ。行きません。私の大切は湊さんに奏子さん。そして優希さんの傍にいますから」

「だい、じょうぶ。くすり…のむ、から…アイギスは…いつてきて…」
結局、勝つたのはアイギスのメンテナンスは大事だ、という当たり前の思考だった。

どうして自分はアイギスのメンテナンスに行かせてはいけないという思考があったのか、頭痛で思い出せない。

「ですが、」

「おれも、アイギスが…メンテナンス受けられなくて、不調になるの、いやだから」

「…分かりました」

その言葉に、渋々といった様子でアイギスが立ち上がる。

暗い部屋を出て、廊下に向かう後姿を見送ると自分はまた起き上がったて葉を飲む。昨日の夜も発作を起こしたばかりだというのに、どうなってるんだと眉を顰めながら上体を起こしたまま落ち着くのを待った。

落ち着いてなんとかかんとか寝られるだろうと布団に入り直し、目を閉じればすぐに意識が落ちる。

そして唐突に寝たのか寝ていないのかわからない状態のまま、激痛

で意識が浮上した。

「あ、がつ…い…」

痛い。ひどく腹が痛んで思わずシーツを手で掴んでもがく。

痛む腹を押さえるまでいけず、脂汗をかきながら荒い呼吸を繰り返して痛みを逃そうとしたが上手くいかない。

「う…ぐ…あ…う、うう…」

呻くことしかできない。

「どうせならこの痛みで意識を失ってしまえばいいのに」と思った瞬間、急に全身の力が抜けるような感覚がして強制的に意識が落ちた。

「お兄ちゃん、どうしたんだろ。昨日の大型シャドウとの戦いでやっぱり疲れちゃったのかな…」

「体調、悪そうだったし後で見てくる」

「うん。ありがと。湊。倒れてたら大変だもんね…ってアイギス？」

届いた寿司をつまみながら兄を心配して話し合っていた湊と奏子は、階段から降りてくるアイギスを見つけてそちらへと視線をやればアイギスもその視線に気がついたようで湊と奏子に近寄ってきた。

「湊さん、奏子さん。私はこれからメンテナンスに向かいます。なので、体調の悪い優希さんのことをお願いしたく」

「お願いされるまでもないよ！ お兄ちゃんの事が心配なのは私たちもだし」

奏子の返事を聞いたアイギスは「そうですね」と相槌を打つと、口を開いて優希の状態を説明する。

「体調はあまり芳しくないようです。不整脈の発作を和らげる薬を飲んでようですが呼吸に雑音が混じっていたので悪化するようなら医療機関に通報を、と。優希さん自身は『寝れば治る』と言っていましたであります」

「寝て治るなら薬なんかいらなただけ…：ありがとう、アイギス。」

僕が定期的に様子を見ることにする」

「はい。では、失礼します」

ペこり、と頭を下げたアイギスが寮から出ていく。

湊はさっそく様子を見に行こうと階段へ向かおうとすると順平がその後ろ姿に声をかけた。

「アレ、湊、トイレか？」

「優希が体調崩したっばいから見てくるだけ。すぐ帰って来るよ」

「あー…」

順平の複雑そうな声を後ろに、とんとんと階段を上り廊下を歩いて優希の部屋のドアを開ければ、中は電気がついておらず目的の人物はベッドの上で苦し気に浅い呼吸を繰り返して固く目をつぶって寝ているようだった。

額にそつと手を当てれば熱は出ていないようだったがしんどそうなことに変わりは無く。

5分ほどそうしていたが良くなることも無ければ悪化することもなさそうだったので再び下に降りて束の間の宴を楽しむ。24時になれば嫌でも現実を見る羽目になるのだから、と湊は小さく溜息を吐いた。

——23時59分。

料理もほとんど食べ尽くし、もうそろそろ食べるのはやめようかと皆の意見が満場一致しかけたところで視線がラウンジの時計に集まる。

「そーいや、幾月さんとアイギス、もう出ていってから4時間以上すぎるのに帰って来ねえし…もうすぐ0時だぜ？ …でもそうか、もうすぐ、か…」

順平のその哀愁を含んだ言葉のすぐ後に、秒針と分針が動き時計は24時を示した。

瞬間。

「んだよ、コレ…!?!」

「な、なんだこれは!?!」

景色が一変した。

電気がすべて消え機械の動きが止まり緑色の光に照らされる。そして、武治についていたボディガードの男性と秘書の女性が象徴化現象を起こし黒いモノ言わぬ棺と化した。

「秘書の人と黒服の人…象徴化してる…」

天田の、ありえないと言いたげな眩きが静かに反響する。

「どういうこった…」

「ウウ…ワンワン…」

その眩きのすぐ後に困惑する荒垣と何かを感じ取り唸って吼えるコロマル。

反応はそれぞれだが皆が思うことは1つだけだった。

「か、影時間が、また…!? 桐条先輩、これ、いったい…!?」

「わからない、私にも…」

「可能性がゼロじゃないとは思ってたがな…だが、見る。外もいつも通り、だ」

窓の外を見やり振り向いた明彦が美鶴の言葉に答えながら後ろの窓をくいと指さす。

「確かに、ぜんぶが終わったって実感…あんまり、無かったですよね…あのシャドウ、最後の一体だったのに、あんまり強くなかったですし…」

「そんな…」

絶望するような順平の声が場に沈む。

——ゴーン…ゴーン…

そのとき、外から不気味な鐘の音が鳴り響いた。

「ちよつと…なんか聴こえない？ これ…鐘の音？ どつから…？」

「!! おい、外を見ろ…! タルタロスからだ…!」

窓際に立ったままの明彦が乗り出しそうな勢いで窓ガラスの外を見る。その視線の先にはそびえたつタルタロスが鐘の音を響かせながら建っている。

「幾月は…何処にいる…! 何故、何も言って来ないっ! アイギスを連れてたまま、何の理由で遅れているのだっ!!」

「……」

「…美鶴」

悩むように顔を下げた美鶴に明彦が声をかける。その声に、美鶴はキツ、と目つきを鋭くして声を張り上げた。

「みんな…出撃の準備だ！ タルタロスへ向かう。召喚器は無いが… 私たちは行かなければいけない」

突然の出撃号令に、皆の間で困惑が走る。無理もない。終わったと思われていた影時間が再び起こり、タルタロスもそこに健在。そして謎の音が鳴り響いているとなればすぐに動けないのも仕方が無かった。

「あの、何が…」

「まだ、わからない…だが、鐘の音はタルタロスからだ。何が起きているかを、確かめに向かう。三上は…様子を見て連れていけそうなら連れていこう。有里、頼めるな？」

美鶴の言葉に湊は頷いて階段を駆け上がる。

そして、優希の部屋に入り、ベッドを見れば。

「いな、い…!? どうした…!?」

ベッドはもぬけの殻で窓からびゅうびゅうと寒い風が入り込んでいる。

トイレに行ったのなら誰かが気がつく筈であるし、靴はベッドの下に脱ぎ捨てるように置いてある。つまり、ベッドがもぬけの殻なのと窓が開いていること以外何も変化が無かったのだ。

だが、あの体調で優希が外に——ましてや窓から外に出ることはできない。万全の状態ならいざ知らず。寝ているだけでも苦し気だった今日の兄が動けたとは思えない、と湊は眉を顰めた。

もしも、6月のようにシャドウに呼ばれてきたのなら靴もちゃんと履いているはずだ。だというのにそれもなし。ただ、居るとするならばタルタロスだろうという確証が湊にはあった。呼ばれているのならそこにしか行きつかない。誰かに攫われたのであっても、こんな時に兄に用があつて攫う輩といえどひとりしか思い浮かばない。

とにかくさつさと用意してタルタロスに向かわないと、と用意を済ませた湊は兄がいなさと恐らくタルタロスにいるのではないかと

というを報告して特別課外活動部の皆でタルタロスへと向かった。

影時間

湊たちは近くまでやってきたがタルタロスはなおも眼前にそびえたっている。

そしてその入り口の前に幾月が立っている。

「やあ、遅かったねえ」

「幾月さん……！」

「今日はなんて素晴らしい日だ……滅びの鐘の音を直に聴けるなんて……！」

歪んだ笑顔で両手をあげ、天高く見上げる幾月は狂気に染まっている。

「なんスカ、滅びの日って！　なに言ってんスカ、幾月さん！」

「幾月さんは言いましたよね、12体のシャドウを倒せば影時間もタルタロスも消えるって！！」

「クッククッククツ……」

意味の分からない幾月の言葉に順平とゆかりが叫ぶ。だがそれに対して幾月は意味ありげに喉奥で笑うことしかない。

「幾月さん……」

「何笑ってんスカアンタ！」

下がった眼鏡を上げなおし、幾月は再び口を開いた。

「きみたちはよくやってくれたよ……『僕の望み』を叶えるため、頑張ってくれた。感謝してもしきれないよ……！」

「『僕の望み』だ……？」

困惑する面々を嘲るように再び腕を大きく開いた幾月は一気にまくし立てる。

「シャドウを倒せば『影時間』や『タルタロス』が消える？　そおーんな訳ないだろう！　なにしろ今までの行いはそんなこととは真逆の行いだよ……！　君たちがシャドウを倒し『器』を満たしてくれたおかげで間もなく再誕する、滅びを呼ぶ者……！　デスと呼ばれる究極

の存在が！」

「そんな…」

「騙してたってこと!？」

今まで理事長である幾月が自分たちを騙していたともとれる言葉に叫ぶ。だが、幾月はほくそ笑むと首を回してコキコキと鳴らした。

「フウ…そうだね。全て、思惑通りさ…」

「最初から…知っていたな…!？」

美鶴は幾月の様子と言葉にそう結論付けた。

幾月は多くを語らなかつた。どうもはぐらかすような、聞かなければわからないようなことを喋らないという特徴があつた。

そういうところは兄と似ている、と湊は幾月は睨み付ける。兄である優希も、悪い事ではないがまだ何かを隠しているようだった。ただ、それが何なのか湊にはわからない。

「10年前…僕も研究者として計画に携わっていたんだよ。実験は失敗したけど、〃影時間〃や〃タルタロス〃は、そのせいで生まれたわけじゃない。あれこそ、〃シャドウの力〃の正しい現れなのさ」

それは、10年前の事故に関わっていたことも示していた。

そしてその深く食い込んでいたということも。

「だから先代は集めたんだ…〃滅び〃を得るためにね」

「滅びを得るため…?」

「もう忘れたのかい? 屋久島でも説明しただろう。鴻悦氏が求めて求めてやまなかつた代物さ」

やれやれ、といった風に首を横に振つた幾月はまた演説でも語る様に両手を広げる。

「人は世界を満たし尽くし、まっ平らな虚無の王国にしてしまった!

もはや〃滅び〃によってしか救われない! 予言書に曰く…滅び

は〃黒き聖杯〃を得た〃皇子〃の手により導かれる。そして〃皇子

〃は全てに救いを与えたのち、〃皇〃^{おう}となつて新世界に君臨する!

10年前に試みた男は核心を知らなかつた。しかし時を経て、ついに

僕が『こちら側の世界』の〃皇子〃となる!」

「く、狂ってる…マジでいつてんのか…?」

あまりの突飛な言葉に信じられないようなものを見る目で順平が呻いた。

まるでおとぎ話か厨二病を患った者の発言のようなそれが、到底現実を起こりえることだとは思えなかった。この男はそんな世迷言を本当に信じているのか、という困惑が広がる。

「まあ、ウソをついていた事は謝るよ。でも、君たちは未来の為に必要な事をしたんだ。あと少し、黙って僕についてれば、君たちも『救済』を得られる」

「死ぬのが…救済…?」

幾月の言葉に誰も同意などしていなかった。

死が救済などと戯言もいところだ。母親が死んだ天田や、両親の居ない湊と奏子、そして事故により父親を失ったゆかりにとっては。

そんな中、ゆかりがはた、とあることに気がついた。

「…ちよつと、訊きたいんだけど」

「何だい？」

「10年前の、父さんの記録…飛び散ったシャドウを倒せて言う、あれも、ウソだったってこと？」

幾月の話によれば飛び散った12体のシャドウを倒すこと自体が罠だったというわけだ。

ならば、父親の推測が間違っていたというのか。

そんなゆかりの思考とは別に幾月が何の気もなしに答えを出した。

「ああ…あの記録は、実際に本人が残していたものさ。…もつとも、意に沿わないくだりには手を加えたけどね」

「ツ…改ざんしたのか!?!」

「そういう言い方は良くないなあ…」

叫んだ美鶴の声に、うるさいと言わんばかりに幾月は溜息を吐く。

「君の父上…岳羽詠一朗氏は、実に有能な科学者だった…主任だった彼は、当時の若い僕など知らなかったろうけど、私は科学者としての部分だけは尊敬していたよ」

惜しい、と言いたげに目を細めた。

「殆どの研究者がシャドウの能力だけを見てた中、彼は『滅び』につ

いて熱心に研究したようだ。でも惜しいことに、彼は「滅びの素晴らしさ」までは理解できなかったようですね…」

「なに…それ…」

あまりの言い草にゆかりが絶句する。

それではまるで父親の倫理観がおかしかったとでも言わんばかりの言い草ではないか。明らかにおかしいのは、目の前のこの男の方だというのに。

「あれは、岳羽の父上の命と引き換えに遺された記録だった！」

「らしいね。役に立ったんだから、良かったじゃないか」

「…全部、利用してたってことだよね…父さんの事も…私も!!」

キツ、と幾月を涙目で睨み付けた岳羽を歯牙にもかけず、幾月はいけしゃあしゃあと口を開く。

「利用なんて言わないでくれよ。世界の為なんだ、しょうがないだろう？」

「なにを…言ってるの…？ 正気…!？」

「とてもそうは見えないな…まずは黙らせてから話をゆつくり訊こう」

「同感だぜ…あいつぁ…正気じゃねえ」

明彦の声に皆が頷いて戸惑いながらも戦う姿勢を見せる。

世界のため。そんな大義名分が幾月のこれからやろうとすることにあるとはとてもじゃないが思えなかった。

「おいおいおい、理事長先生に暴力を振るうのかい？ ひどいなあ…そう思うだろう？ アイギス！」

「!？」

幾月が呼んだ名前に、一同が後ろを振り向けばそこには武治に指の銃突き付けている虚ろな目のアイギスが居た。

「お父様！」

「美鶴…ッ」

「アイギス！」

呼び合う父子と様子のおかしいアイギスに向かって呼びかける奏子。

その様子を見て幾月が笑う。

「フッフ、無駄だよ。君たちの声は彼女には届かない。コレはきみたちの仲間では無く私の指示に従うただの殺人マシーンだからね…」

「そんな…」

「アイギス、駄目だ！」

出来ないとわかっていても湊はアイギスに寄ろうと前が出るがその足すれすれを銃弾が穿った。それ以上進めば警告ではすまなくなるのを湊ははつきりと感じた。『今回』もダメだったようだ。

「…っ、」

「さあ、儀式を始めよう」

恭しく身体を曲げた幾月のその言葉に武治を気絶させたアイギスが次々と特別課外活動部の面々を気絶させていく。

そうして、動く者が居なくなつたのを確認した幾月はまたほくそ笑んだ。

「う…」

湊が目を覚ました時、月光館学園の別館である天文台がある場所の頂上で巨大な十字架に磔はりつけにされていた。

湊にとつてはもう10度目のそれに落ち着きを取り戻し、皆が無事か確認すればコロマルと武治、そして優希以外は気絶して同じく磔はりつけにされているだけでケガなどはなさそうだ。

コロマルはタルタロスの下に放置されているのである意味安全だと分かっている。

下を見れば幾月と武治を押さえるアイギス。そして幾月の足元に兄である優希が倒れているのが見えた。しかし、ピクリとも動こうとはしない。まさか死んでいるのでは、と思うが幾月が早々兄を殺すとは思えなければ、もし殺していたとしても死体をそのままにしておくとも思えなかったからだ。

「…っ？ うおっ、なんだこりゃ!?!」

「ん…なにこれッ!?!」

「えっ…!?!」

「な、なにこれ…動けない…!」

他の面々も目を覚ましたらしい。

「クソツ…外れないッ…!」

「完全に留められてやがる…!」

「お父様ツ!! 三上!!」

なんとか外そうともがく明彦と荒垣。そしてアイギスに拘束されている武治と地面に倒れている優希を目に入れて叫んだ美鶴。それに答えることは無く、武治は幾月を問いただす。

「幾月…これは何の真似だ!? そしてなぜ彼がそこにいる!?!」

「見ての通りですよ…彼らには、少し数は多いですが滅びの先駆けとして『生贄』となつてもらおう。これで予言書に示された段取りは全て完了だ。あとは、『聖杯』が滅びを産むだけとなった」

「なんだと!?!」

「テンメー! フザけんなよ!」

「やれやれ、騒がしいねえ…折角の歴史的瞬間を目の当たりにできるというのに…僕の話を聞く余裕すらないとみた。知りたくはないのかい? なぜ、三上くんがこうしてここにいるのかを」

幾月の言葉にぴたりと野次は止み、誰かが息を飲む声が聞こえた。

その様子に満足した幾月は口を開いて語り出す。

『時を操る神器』を作る必要があったという話はしただろうか? 神器、というようにそれは正しくシャドウを入れて作る器だ。僕の居たチームはその器の研究も行っていたのさ」

かつて、幾月は一介の研究員だったといったがそれは優秀ではないという証明にはならなかった。そして、桐条鴻悦と同じ滅びへの無意識の渴望も抱いていた幾月は見初められたのだ。

「ペルソナ能力はともかく、黄昏の羽が無い無機物じゃシャドウの支配権の方が勝ってね。かといって少しならともかく大量のシャドウを受け入れるには黄昏の羽を搭載した無機物より生物の方が適していたことが研究で分かっていた。だから、秘密裏に僕はシャドウを集め、入れる器を生き物を使って作るよう先代から言われたのさ」

先代から、という言葉に武治が苦虫をかみつぶしたような顔をす
る。

そんなことをしていたというのは武治にすら聞いたことが無いも
のだった。本当に極秘の研究だったらしい。

「最初は、虫だったよ。そこから実験用のラット、モルモット、イヌ、
ネコ、魚、鳥…浮浪者、孤児。試せるものはなんでも試した。先代か
ら支援を受けていたとはいえ、建前上の立場は一介のヒラ研究員の僕
だ。用意するのに苦労したよ…けれどね、ダメだったんだ。どれもこ
れも、大量のシャドウを、滅びを受け入れる器じゃなかった」

「そんな…ことを…!」

でも、と一度切った言葉を続けた幾月はおぞましい笑みで再び口を
開く。それは、狂気を孕んだものだ。

「行き詰まっていた僕に、ある日『神からのお告げ』があったんだ！
ある子供を使えばいい、と！ だから攫って来た。必要な事だったか
らね。けれど笑ったよ。まるで神が僕に味方しているかのようにな
りながらもがすんなり上手くいったんだから!」

「攫ってきた…?」

幾月の言葉を、磔にされたままの奏子がうわ言のように繰り返し
た。隣の湊は青ざめて、わなわなと震えているようだった。攫ってきた、
という言葉にひたすらに嫌な予感がしているのだ。

「貴様! それがどういふことか分かって言っているのか!」

「もちろん。先代公認だったので正しい事だと認識していますよ」

「っ、倫理観まで腐りきっていた我が父に毒されていたのか。貴様は
…」

幾月は齒噛みする武治の言葉に耳を傾けることは無くそのまま語
り続ける。

「驚くことにね、お告げ通りその器を使ったらどんどんシャドウを入
れることが出来たんだ! まあ、ある程度の量になって来るとさすが
に抵抗はあったみたいだから苦痛に泣き叫んでいたけど他の実験体
みたいに痙攣しながら目鼻口から黒い液体を出して死んだりしな
かった。兆候すらなかったよ! そういう意味では、本当に素晴らし

「い器だった!」

「下衆野郎が…!」

荒垣が心底軽蔑したように呟くも、それは風にかき消され幾月の耳には届かない。

「2年かけて実験の内容が『時を操る神器』の作成から『滅びを得るための聖杯』の作成にシフトした後も、その器は水を吸うスポンジのようにシャドウを受け入れた!。そしてついに完成したんだ。13体の大いなるシャドウで内を満たした黒き聖杯がね!」

「あの実験以前に、既に完成していたというのか…!?!」

「岳羽詠一朗氏が『聖杯』の存在に勘づいたのはそのすぐあとだったよ。器の扱いに我慢できなくなった彼女…桐条千鶴きりじょうちづるが遂に研究主任である彼を頼つたらしい。つくづく、彼女は生物を使用する研究の研究者に向いていない人だった」

「千鶴が…」

武治の目が見開かれた。

桐条千鶴。

それは美鶴の叔母であり武治の妹であった人間だ。そして、10年前の事故で死亡している。

「けれど、詠一朗氏は器を救うより、あの時点では確定していなかった滅びを防ぐ事を選んだ。そしてあの事故が起こったんだよ。そのせいで器が破損して集めた大いなるシャドウは飛び散ってしまった。まあ、滅びの到来まであと少しだったんだけどね」

「父さんがやった、事……」

ゆかりが複雑な表情で考え込む。幾月の話が本当なら、あのビデオの言葉通り父は周辺の人と当時の自分と同じくらいの歳の幼子を犠牲に滅びを防いだことになる。

果たして、それは改竄されていなくとも、手放しに褒められることだったのだろうか。ゆかりの気持ちは再びぐらぐらと揺れていた。

「聖杯は完成しただけで滅びをもたらすものではなかった。当然だ。あれは願望器に過ぎないんだから。それに、驚くことに器自体にまだ自我があつたんだよ。あれだけのシャドウを受け入れておきながら、

自己の喪失もなく、無様に滅びを抑え込もうと抵抗していた」

狂気を孕んだ笑みから一転。機嫌が悪くなったように真顔に戻った幾月はその事が心底面白くなさそうだった。

「必死に家族のことをうわ言のように呟いて生きることが諦めなかったのには驚いたけれど。先代がどんなに願っても脅してもなだめすかしても滅びを放とうとしなかったからね。そう思うように仕向けたんだ。拷問だろうがなんだろうがなんでも使ってね。けれど、それでもダメだったから桐条千鶴を使って脅すことにしたんだよ。ああ、これも先代の許可の上ですのでこちらを責められても困りますよ?」

「まさか貴様…千鶴を…!」

「——まあ、貴方の予想通り最終的には殺すことになりましたよ。脅しても器が思ったよりもスムーズに『死にたい』と、滅びを願ってくれなくて。彼女も器を励まそうとして五月蠅かったのです。それに彼女を殺せば懐いていた器も絶望するかと思ひましてね」

「貴様アツ!!! くっ…!」

「冗談じゃねえよ…こんなヤツがガツコウの理事長やってて…オレらと一緒に居たってことかよ…!」

「……叔母上を…理事長…いや、幾月が…!」

激昂し、暴れた瞬間にアイギスに押さえつけられた武治と、悪びれずに「拷問し、脅しの材料に使った人間は殺した」と言い放った幾月を今まで信じていたものがガラガラと崩れていく認識となった順平と叔母の死の真相を知った美鶴が信じられないものを見るような目で見た。

幾月がその手段に踏み切ったのは個人的な思惑と桐条鴻悦による実の娘でさえ己の目的のために犠牲にするG○サインがあったからもあるが、そもそも鴻悦がこれにG○サインを出さないような家族想いならこのようなことになってはいなかったのだ。

故にこれは幾月だけの罪では無かった。

「桐条千鶴が死んで絶望した器の精神は目論見とは少し違ったけど見事に壊れた。そして、抑えが無くなった滅びは放たれようとした。けれど知っての通り岳羽詠一郎氏の手によって爆発事故が起こり、器の

中であつた13体の大いなるシャドウは散り散りになつてしまつたんだ」

酷く残念そうにため息を吐いた幾月は床に倒れ、浅く呼吸を繰り返す薄目の優希を見やると笑顔になる。

「でも君たち特別課外活動部がまたひとつに戻してくれたおかげで再び器は満たされ滅びがやつて来ることになつた！ とても感謝しているよ！ そして、」

さらに笑みを深め、パチパチと幾月は拍手した。

「——おめでとう。全て君のせいだ。三上くん」

「え……あ……お、おれ……俺の……？」

「全て思い出すといい。君の目の前で彼女が——桐条千鶴が死んだのも、岳羽くんの父親やポートアイランドの人達が死んだのも、君の実際の両親が死んだのも、有里兄妹が親戚中をたらい回しにされたのも、君と共に居た人工ペルソナ使いの子供たちが死んでいったのも、皆が大型シャドウと戦う羽目になつて苦しんだのも……そう、すべて。全てが滅びを抱える器となつた君のせいだ。きみがあの時死にたいと願わなかつたせいだ。そうだろうか？」

——「ナギサ」

「あ……あ……あ……あああ……あ、あ、」

薄く開かれていた目が、これまでにないほど見開かれる。

無理やり封じ込めていた記憶を幾月によって1番最悪な形で引きずり出され、瞳が絶望の色に染まつた。

跳ね起きるように身体を起こす。

自分のせいで、みんなが。

自分のせいで、千鶴さんも、父さんも母さんも、死ぬ羽目になつた。

自分のせいで、デスを内側に封印されることになつた湊と奏子を苦しめた。

自分のせいで、タカヤ達人工ペルソナ使いの皆が苦しんだり死んでいたりしてしまつた。

自分がいたから、ニユクスが来てしまつた。

自分がいたから、湊と奏子はニユクスを封印する羽目になつて死ん

いから！」

「優希のせいなんかじゃない！ だから、死のうなんて考えないで！

僕達は……僕は……！」

奏子と湊がいち早く「幾月曰く優希こそが滅びをもたらすものの器」という衝撃から立ち直り引き留めようと吠えるように叫ぶ。

「しなないと……みんなを、すぐわないと……ぼくが死ねば、みんな、みんなあわせ、に……なる、から……せんせいがそう言った、から……いままで、生きてて、死ななくて、ごめんなさい……いま、いま……死ぬから、ゆるして……」

だが、壊れてしまった優希には妹と弟の声さえ届かない。恐らく、幾月以外の誰も認識できていないのだろう。

虚ろな目から大粒の涙を流して壊れた精神で死の恐怖に怯えながらも引き金に指をかける。

それは間違っていることだと僅かに残った正常な心が叫ぶのに、もう止められない。止めることが出来ない。

「良い子だ、ナギサ。そのまま引き金を引くといい。ほら、いつもやっているだろう？ なにも怖いことなんてない。君が死ねば桐条千鶴が助かるんだ……ほら、見えるだろう」

実際には桐条千鶴などいない。だが、幾月は己の真横を示した。

狂気に落ち、幾月の言われるがままになっっているいまの優希ならば、嘘でもこうやって言ってしまうえば無いものを見ってしまうのではなにかという思惑があったのだ。

「あ……あ……千鶴、さ……ん……ゆ、ゆるして……ぼく、いまからしぬから、ゆるして……わすれて……生きて……！ 死んだりなんか、しないで……！」

そして、その幾月の思惑は思い通りにいった。

優希は見えないはずの桐条千鶴を幻視したのだ。引き金に添えられた指に力が込められる。

勝った、と幾月はそこで勝利を確信した。

しかし青い光が淡く優希を包む。

拳銃を持つ震える手を覆うように、半透明な白い手が優しく添えら

れた。

「——っ!？」

『ええ、赦すわ。：けれどあなたが死のうだなんて思う必要は無いの』
「あ……」

黒いドレスを着た赤髪のペルソナ——“パンタソス”が後ろから優希を抱きしめるように顕現していた。

閉じられていた目から流れていた赤い血は止まり、優しい光をたたえる陽の光に似た金色の目が悲しげに細められている。

虚ろなドレスしか無かった身体は白く透けているが確かに滑らかな人のような柔肌の四肢と胴体を得ていた。

そしてその顔は武治と美鶴、そして幾月にとって覚えがある顔で。

「桐条…千鶴ウウウ!!」 また君が邪魔をするのか!」

『あなた、まだこの子を傷つけるつもりなのね。本当に、卑しいヒト…』

呆れた様子で忌々しげに叫ぶ幾月を睨みつけるパンタソス——桐条千鶴の残滓はゆつくりと放心状態になった優希の手から拳銃を離させた。

「卑しいのは君の方だろう! 死人に口なしさ。だというのに…桐条千鶴。きみは死してなおいつまでもソレの肩を持つ。ソレの心に焼き付き、そこに魂は無いというのにペルソナとなってでも守ろうというのかい? どうやら僕は死人の未練という非科学的なものを侮っていたようだ」

『あら、冴えないあなたに一矢報えたのなら本望だわ。私は本物の桐条千鶴ではなくてこの子の心に焼きついただけの偽物だけれど…それでもこの子を守りたいと願う思いは本物よ。ヒトはそれを“愛”と言うのでしょうか?』

「はは、紛い物のペルソナが愛を語るのかい。これは論文がひとつ書けそうだ。“自己愛”という題材でね」

『どうぞ(勝手に)。世界を滅ぼそうだななんて考えたりこの子を傷つけることよりよっぽど良いわ』

パンタソスと幾月による舌戦は声色こそ穏やかだが内容はとても

刺々しい。

犬猿の仲、と言つても間違いないほどにお互いに対し良い印象がないようだ。

死人がペルソナになる事例はこの場にいる誰もが知らないがひとつだけある。

桐条の本来、南条家の現当主である南条圭のもつペルソナの中にヤマオカという存在がいる。

その姿はサーフボードのようなものに乗った機械の羽をもつスーツ姿の翁の天使だ。

当時はまだ高校生だった南条圭の幼い頃からの専属執事であり、忙しかつた南条圭の親の代わりに愛を与え様々なことを教え、南条圭が唯一心を開いていた山岡というヤマオカの元になった人物はセベク・スキャンダルという事件の際に悪魔から人々逃がすためにその命を散らした。

それがきっかけで南条圭はペルソナに目覚めるのだが、その時死した山岡という人間が何の因果かその事件の終盤に南条圭のペルソナとして降りてきたのだ。

ただ、こちらはパンタソスのように偽物という訳ではなく。

恐らく本物の山岡の魂もしくは精神が心の海たる普遍的無意識に介入したのではないかと思われている。

「ち、ちづる、さん…ほんもの…？」

『…ごめんなさい、私はあなたなの。でも、あなたに生きていて欲しいと願ったのは本物の私もよ。ちゃんと思いついて。あの時、私言がなくて言つたのかを』

「おもしろい、だす…？」

パンタソスの言葉に、優希はぐちゃぐちゃになった記憶をぐちゃぐちゃになった精神で手繰り寄せようとする。だが、そう上手くはいかない。

幾月の拳銃によって撃たれ、リノリウムの床に倒れる千鶴の姿がフラッシュバックする。

優希を——ナギサを涙を流しながら見つめた桐条千鶴は、口から血

を吐きながらはくはくと口を動かして声を絞り出した。

「死になきさい、ナギサ」

それは歪められた遺言ねがいだった。

生きる、と確かに彼女は言ったはずなのに幾月によって強烈に刷り込まれた自殺願望がそれを上書きしたのだ。

愛が、願いが、洗脳のろいに負けた。

そしてそれがトドメとなる。

「わああああああ!!! ごめんなきさい、ごめんなきさい、ごめんなきさい
…やっぱり…やっぱり、ぼくは、死ななきや…! ちづるさんも、そ
う言つてたから…う…:…かはっ…げぼっ…:…げえっ…えげっ…:…!」
最後の縁よすがを砕かれ、浮かび上がろうとしていた精神が再びドン底に
落ちる。そして同時にえづいた優希の口からぼたぼたと血が吐き出
された。

『そんな…ちがう、ちがうわ…だって、あの言葉はそんな呪いじゃ…!
ダメ、信じないで! 私は、あなたに生きて、ほし——』

そのまま床に倒れ呼吸すらままならなくなった優希を守ろうと手
を伸ばすパンタソスの姿にヒビが入り、硝子のように砕け散る。

それは召喚を終えて消えるときの様子とは大きく違っていた。

その尋常ではない様子に特別課外活動の面々は青ざめ、武治がひく
りと口の端を引き攣らせて眩く。

「あれはペルソナの…崩壊…!」

ペルソナとは心の鎧でもあり剣でもあり、もうひとりの自分だ。

それが崩壊するということは、すなわち完全な精神の崩壊を意味し
ていた。

その証拠に、倒れる優希の目には既に光がなく、呻き声すら上げる
事無く何も喋らなくなってしまった。

かろうじて息をしているだけの人形に成り果ててしまったのだ。

末期の影人間のような有様にもうダメか、と武治は顔を歪ませた。

「まったく、ヒヤヒヤさせなくておくれよ。驚いたじゃないか…!」

幾月が、唾いながら倒れた優希を蹴飛ばして仰向けにさせる。そし
て、その腹の上に片足を乗せた。

「精神が崩壊してもまだ無意識に滅びを抑え込んでいるのかい？ 無駄な努力はするものじゃないよ、ナギサ。きみは滅びを抱える聖杯であり母胎だ。早く滅びを産んでもらわないと、ね」

「やめて!!!」

腹の上に幾月の足が上げられ、勢いよく落とされる。

奏子が止めようと叫ぶも、それは止まることがなく。

びくん、と一瞬優希の身体が強ばり口から血が漏れるがそれだけでなんの反応もない。

そのまま誰も止める人間がない幾月は何度も何度も抵抗することの無い柔らかい腹を踏みつけた。その度に、口から命が流れしていくように血が零れる。

「やめろ幾月ッ!! くっ、この枷さえなければ…ッ！」

「やだあ!!! やめて！ やめてよ！ これ以上お兄ちゃんに酷いことしないでよお!!!」

青い顔になりながらも必死にガチガチと枷を外そうと試みる美鶴と、涙で顔をぐしやぐしやにして声を張り上げるように叫んだ奏子にそこで初めて幾月が忌々しそうな顔を向けた。

「桐条くんはともかく…奏子くん、きみは些か先程から騒々しい。これは教育的指導が必要かな？」

「ひっ…」

「てめえ…やるなら俺にしやがれッ！」

「荒垣くんには興味が無いんだ。申し訳ないね」

荒垣が噛みつくも、心底興味無さそうに受け流した幾月は床に落ちていた拳銃を拾い礫にされている奏子にその銃口を向けた。

「はあ…君たち兄妹はいつもそうだ。実験が終われば結果がどうであれ抜け殻になった用済みのナギサを返してあげようと親切心から10年前、この港区に呼んだというのに、勝手に事故に巻き込まれて勝手に面倒なことにする。まあ、ナギサを縛りつける餌としては上々だったけどね」

「お前…ッ！」

つまり、三上家にあつた有里家宛てに出された10年前のあの手紙

は、実験で使いつぶし廃人になった幼い兄を適当な嘘をついて処理するための方便だったという事実に憤りを感じた。だが、幾月の思惑は予想以上に固い兄の精神と岳羽の父によって防がれた。

瞬時にそこまで考えた吠える湊を無視し、見向きもしない酷く冷たい目の幾月は本気で奏子を害そうとしている。

引き金に指がかかる。

「うう…か、なこさん…：みなと、さん…：まも、る…：わたし、は…：そば、に…：」

ここでアイギスが初めてうわ言のように何かをつぶやき虚ろな目が何かを確かめるように揺らいで僅かに動くがそれだけだ。

もうダメか、と思われたその時。

「…：終末の時は…：来たれり…：」

ぼそり、と優希の口が動いて言葉を発した。そして、手をゆるゆると上げて掴むように月へと伸ばす。そして5つの不吉なラツパの音が鳴り響いた。

その音に拳銃を放り投げた幾月が高らかに笑い、両腕を上げる。

「これは…：予言書にある「7つ」のラツパの音！ ふ、ははは！ ついに…：遂に来た！ さあ、産まれるぞお！ 待ちに待った滅びの到来だ！ あはははははは！ これで僕はようやく闇の皇となる！」

月を背後にした影時間の空に、天使が降臨する。

その天使が再びラツパを吹けば、その天使を挟むように黙示録の騎士たちが現れる。

「ああ、ああ！ 予言書の通りだ！」

その光景に幾月は歓喜し、さらに笑みを深くした。

『我が福音、終末の獣の招来を報せるものなり。来たれ、来たれ、来たれ。満たせ、満たせ、満たせ。黒き杯が満ちるまで…：しかして目覚めの時は尚も遠く…：』

トランペッターはそう語る。その言葉はその場にいる誰もに聞こえていた。

最後に、ボロ布と鎖を纏うヒュプノスが現れもう一度鳴らされたラツパの音に合わせてそれぞれが光の玉となりひとつに合わさって

天に昇っていく。

その光景を見た湊は何故かベルベットルームで行うある行為を想起した。

——ペンタゴンスフレッド
六身合体。

ペルソナを6体使って行う強力なペルソナを生み出すための合体だ。

そして、湊の持つタナトスを生み出すための合体方法でもあり、その中にペイルライダーが含まれていたこともよく覚えていた。

タナトスの場合は死神に属するアルカナのペルソナばかりを6体集めて作っていたが、これは違う。黙示録の四騎士にトランペッター、そしてもうひとりの死神デスの疑惑があったヒュプノスだ。

さらなる何かが産まれてしまうのか、それともここに直接ニユクス・アバターが降臨してしまうのかと冷や汗を垂らすと、優希の手がパタリと力尽きるように降ろされ、落ちて来た光が弾けてその中身を現した。

漆黒の翼が勢いよく開き、タナトスに似た姿のそれが黒い羽根で出来たコートをはためかせる。

その姿は、屋久島のビデオで見た昔のヒュプノスだった。ただ、ひとつ違うのはその手に深紅の鎌がある事だ。

「さあ！　“滅び”よ！　7人の生贄を喰らい、虚無にまみれ平になった世界を滅ぼし愚かな人類に救済を！」

『救済…？』

子供のような幼い声が幾月の言葉に反応する。その事に対話の余地アリとみた幾月は嬉々とした顔でヒュプノスに歩み寄る。

それが、どれだけ愚かな行いか知らずに。

『よくわからないけれど、“滅び”が欲しいの？』

「そうだ！　そして僕を『こちら側』の闇の皇に——」

『そう…』

幼い声が底冷えるようなものに変わる。実際に周りの空気も急激に冷え、ぶるりと幾月でさえも身震いした。

『優希を…ナギサをそんなくだらない事のためにぐちゃぐちゃにして

ぜんぶぜんぶ壊しちゃったんだ。ふふ、ふふふ…あはははははは！ 優希を守れなかったばくもわるい子だけど——おまえが、いちばん、わるい子”だ』

「は…う？」

目に見えない速度で鎌が振られ、刃の先で肉を抉り取る様に幾月の身体が深々と袈裟斬りにされる。

返り血が、ヒュプノスではなく近くで倒れていた優希の顔にかかるが反応はない。

「きゃああああ!!!?」

「う、うわああ!!!」

その光景に、誰のものかわからない悲鳴が上がる。

幾月は突然の事に片手で傷を押さえながらよろめきながら後退し、はくはくと口を動かした。

「な、なぜだ…！ わたしは…ぼくは…閻の皇子で…滅びを…よげん、を…」

『きみはそこから落ちるといい。ほら、求めていた滅び死が底そこにはある』
黒い靄タルタルのような手が、冥府タルタルの底でうごうごと蠢き幾月を歓迎していた。

その言葉と示されたヒュプノスの指に誘われ、まるで夢を見るかのような表情で後ろに倒れるように幾月は落ちる。

それを見送るとヒュプノスは倒れたままの優希に近寄り、顔を近づけた。

「や、やい！ バ…バケモノ！ 動けねー三上センパイになにしようとしてんだ！」

その様子に順平がビビりながらも食いかかる。傍から見ればバケモノが優希を食べようとしているように見えたようだ。

ひとまずそれを無視してヒュプノスは癒しの光で優希を包んでから、そこでようやく獣の頭骨の様な装飾をつけたのっぺらぼうの顔を上げる。

『優希の傷を癒しただけさ、伊織順平。…でもバケモノか。そんなものじゃない。ぼくはもつと恐ろしいものになった。人はぼくを“死

の宣告者”とも呼ぶ。来たる “避けられない終わりを告げる者”だ』
「来たる、終わり…？」

『そうだよ。12体のシャドウが倒され、13番目である^{デス}ぼくとひとつになることで滅びそのものである “ニユクスの招来” を確定させる存在になるんだ』

風花の疑問にヒュプノスは素直に答える。

その声は先程の幼い声のままだが僅かに優しい音を含んでいた。

『ニユクスが来た時が本当の終わり。あの男が言っていた “滅び” っつてやつだよ。きみたちは、それを防がないとこの戦いの真の終わりは来ない。タルタロスも影時間も消えはしない。だから、タルタロスの頂上を目指し続けるんだ。そこが、1月31日にニユクスの舞い降りる場所だから』

「1月…31日…？」

訝しむ一同にヒュプノスはまた説明する。

『来ることを取り消せはしなくても少し遅らせることは出来るからね。だから、刻限ギリギリである1月31日にしたんだ。それ以降はどうあっても伸ばせない』

「そんな…！」

『それが嫌なら影時間に関する全ての記憶を消してなにもかも知らなのまま滅びを穏やかに待つことも出来る。でも、きみたちなら奇跡を起こせるかもしれない。だから、頑張つて欲しいと僕は願う。』

…1ヶ月後の12月2日の影時間。ムーンライトブリッジでぼくは待つているから返事を考えて欲しいな』

一方的にまくしたてるようにそう言うと、ヒュプノスは翼を広げて羽根を舞い散らせながら夜空へと浮かび上がりその大鎌で全員の拘束を外した。

拘束が外れたことにより、地面に落下するがやわらかい風が吹いてその衝撃を和らげる。どう考えても目の前のヒュプノスが行ったことだろう。ファルロスと同じく随分と優しいんだな、と湊はそれを見上げた。

『さあ、もうすぐ今日の影時間が終わる。彼女も命令をする人間が居

なくなっただしもうすぐ正気に戻るだろうね。また襲いかかられるのは勘弁だから、ぼくはどこか遠くに行くよ。——有里湊。きみのことは殺してやりたいくらいに大嫌いだけど…優希を、お願い。ぼくは優希を傷つけてしまうことしかできなかつたから…』

「言われなくても」

最後に湊に向かってそう告げたヒュプノスは翼を羽ばたかせ、影時間闇に消える。

大嫌い。理由はわからないが湊に対しヒュプノスが嫌う何かがあるのだろう。

ただ、そんなことよりも大事なのは心の碎け散ってしまった兄をどうにかしなければいけない、という事だった。

命を喰らう徒花の声（おと）（11／4～11／6）

“ヒュプノス”が飛び去った後、影時間が終わりただの天文台に戻ったそこで一方的に告げられた『滅びの到来』について特別課外活動部の皆は困惑していた。

拘束を外され床に降ろされたとはいえ、それだけで聞かされた話の理解が出来るわけでもショックを呑み込めるわけでもなかった。

「なんなんだよ…死の宣告者とか、ニユクスとか…イキナリ聞かされて、全部来月までに決めろって無茶苦茶すぎだろ…！」

順平の意見はもっともだ。

突然現れた存在に、突然「この日に世界が滅びます」「滅亡は避けられません」「でもお前らが頑張ればなんとかなるかもだから頑張れ」「まあそれが嫌なら記憶を消して穏やかに滅びを待つこともできる」などと言われてどちらがいいかなど決められるはずがない。否、2人だけ聞かれるまでもなく決めている人間がそこにはいたが片方は既に精神が崩壊し、片方は聞かれるまで何も話す気はないという状況なのでそれが分かる人間はこの場にはいなかった。

「うん…それに…」

ゆかりの視線は倒れたままピクリとも動かない優希に向けられていた。

抱き上げられて上半身を起こされ他に怪我がないか確認されているようだったが、くたりと力なく落ちている手やいつも以上に血の気のない顔と口元についた血から死体と言われてもおかしくない有様に言葉が出ない。

順平もゆかりの視線を追うように目を向けた。

「…センパイ、幾月のクソヤローに思い出しくなくなっちゃもうくらいひでえこと言われて…ひでえこと、沢山されてきたんだよな。挙句にペルソナの崩壊、だっけか…こんなのって…ねえよな…」

「さっき桐条先輩のお父さんが言ってたけど…ペルソナが壊れちゃうってことはさ…つまり」

「…オレだってなんとかなるって信じてえよ。センパイもそうだけど

さ、あのままとか湊と奏子つちが可哀想すぎるだろ」

ゆかりが言いかけた言葉を遮った順平はじつと優希に寄り添う湊と縋りついて泣きじゃくる奏子を見る。

幾月の語ったことは聞いているだけだった順平たちでさえ、吐き気を催すような理解が出来ない領域の話だった。だというのにその全責任を被害者であるはずの、事故当時ただただ攫われただけの幼い子供だった優希に押し付ける。

その行為がどれだけ残酷なことなのかわからないほど今の順平も、他の人間も馬鹿ではなかった。

いくら『滅びを生む器』だの「全部優希のせいだ」だの言われたとしても、そうでないことは幾月自身が語っていたのだ。

「何をやっても滅びを放とうとしなかった」と。

今回そうなってしまったのは幾月が無理やり封じ込めていた記憶を呼び覚まし、正気で居られなくなったところに命の危機に陥るような暴行を加え続けたせいだ。

幾月の言葉によれば精神が崩壊してもなお“滅び”を抑え続けるほどの事をしていたという。たとえ無意識であったとしてもそれだけのことをするというのはよほど深く刻まれた決意に違いないだろう。

実際のところ、トリガーは幾月による暴行ではなく。幾月が奏子を殺そうとしたために砕かれた欠片であっても残ったごくごく僅かな滅びを抑えようとする意志が揺らぎ緩んでしまったから、というのが真相ではある。

なので砕けたと言っても完全に消えたわけではないので希望が無いわけではない。ただし、以前の状態に戻るかどうかはまた別の話だ。

「……わたし、は……」

まだ操られていた時の名残があり思考がうまくいかないアイギスは湊たちをぼんやりと見つめていた。その記録メモリの中で、フラッシュバックのように炎と瓦礫の中で倒れる血まみれの子供と死神の姿が蘇る。ただ、すぐにそれもなかったかと思う前にメモリの奥底

に消えてしまう。

「……」

目の前で何が起きているのか、何故、皆が暗い顔をしているのか。アイギスは機械であるにもかかわらずいまだ夢の中にいるように理解できていなかった。ただ、そこに行かなければという思考が身体を動かす。

「——アイ…ギス？」

「わたしの、たいせつは…あなたたちの傍に、いることでありますから」

ぼやける思考で奏子と湊の隣に腰を下ろしたアイギスはそれきり黙ってしまふ。それを見た武治はおもむろに近寄ると2人に——主に湊に声をかけた。

「彼は桐条が責任をもつて全力で治療にあたらせてもらう。…それが我々にできる唯一の償いだ」

11 / 5 (木) 夜

美鶴からの「今後について話し合いたい」というメールで呼び出された特別課外活動部の面々は作戦室に集まっていた。

「理事長の部屋のもの、全部持っていかれちゃいましたね…」

「まあ、当然だろうな」

「ハア…正直もう、何が何だか…三上先輩はまだ目を覚ましてないみたいだし、1月末には世界が減ぶとか…急すぎて…」

ゆかりがため息を吐く。1日経っても頭の中の混乱は収まっていない。それだけ、明かされた真実が衝撃的だという事もあるのだが。

「新聞やニュースは、もう盛んに騒いでますね。『名門学園の理事長が天文台から転落死』…三上さんの事も表向きでは天体観測中に持病の発作を起こして倒れたことにされてるらしいですし」

「ああ…いつも、事実とは違う」

「そうだな…」

暗い顔で噛みしめるように言った明彦と荒垣をみつつ、順平は空いている席を見つめた。

「湊と奏子たち…流石に居ないっスね…」

「有里姉弟は、病院だ。三上の状態は極めて良くない…だから、彼女ら2人にはそばに居てもらっている。…私たちでは、何もできないからな」

「なんか、それツラそう…大丈夫かな…」

美鶴が悲痛な面持ちで2人の居場所を喋れば、ゆかりが心配するよううに同情した。

極めて良くない、と美鶴が言葉を濁したがそれは下手をすれば死んでしまうかもしれないという状態だということだ。

もし、優希が死んでしまったら。ふたりはそのまま看取ることになってしまう。ロクに言葉を交わせないまま、心が壊れたままの兄を取り戻すことも癒すこともできずに。

その辛さと不安を考えると同情せざるを得ない。

「オレらこれから、どうしたらいいんスかね…あのバケモノはタルタロスの頂上に登れだとかどうするのか決めるとか色々いつてきましたけど…」

「アイギスも大丈夫かな…」

風花がアイギスを心配する。あの後、やってきた桐条の技師によってアイギスは回収されていったのだ。そしてそれから音沙汰がない。メンテナンスをしているだけと分かっているだけでも幾月によるあの凶行が行われてすぐなのもあり、どうも信用できないのだ。

「アイギスについては幾月によって組み込まれた余分なパーツを取り除いている。お父様は今、事後処理に追われていらっしやるから…私たちがどうなるかは…わからない」

「そっスか…結局俺ら…放置されるんスね…」

「放置、か…」

落胆した様子の子の順平に同意するように同じ言葉を繰り返した。

「皆、あの死の宣告者って名乗ってた化け物が言ったこと、覚えてる？」

「あの人の言ってた『滅び』がニユクスという存在で、それが到来したら世界が終わる…でしたっけ。そして、12月2日にどうするか決めてくれて…」

ゆかりの問いに皆が頷き、天田が答えた。

「わかんねえが、あいつは俺たちに選択を委ねてんだろ？ なら、期日までにきっちり決めるしかねえだろ。…最終的な判断は、『リーダー』に決めてもらうかもしれないけどな。責任は、全員で負わねえといけねえ。そこだけは、間違っちゃいけないモンだ」

「影時間に関する記憶を全て消して、滅びが来るまで穏やかに過ごすか。それとも奇跡を信じて抗うか、か…」

沈黙が場を支配した。

それぞれに思うところがあるのだろう。考えるべきことがあるのだろう。

「でも、もし…三上先輩が元に戻らなかつたら…記憶を消した方が…いいのではないか、というゆかりの言葉は最後まで吐き出されなかった。それが間違っていることもわかっている。だが、もし影時間関連の記憶が無ければ、という淡い望みのようなものが鎌首をもたげるのだ。

しかしそれを美鶴が首を横に振って否定した。

「いや…記憶に戻る前ならともかく、今の三上は記憶が戻ってもう心が壊れた後だ。今更記憶を消したところで壊れたものは元には戻らない。…帰っては、こない」

「桐条先輩…ごめんなさい。軽率でした…」

「クウーン…」

ゆかりは即座に謝った。美鶴の顔があまりにも悲痛すぎてみていられなかったのだ。

コロマルも、不安げに鼻を鳴らした。コロマルはコロマルで倒れた後の優希を直接見てはいないが皆の雰囲気と湊と奏子がいらないという事でなにか感じるものがあるのだろう。

「…結局のところ、すぐには決められないな。ならば、あの化け物が言っていたタルタロスの頂上を目指すのが目下の目標、といったこ

るか」

「でも、奏子ちゃんたちが戻ってきてからになりますよね。リーダーが居ないと始まらないって感じですし…」

真田の言葉に風花が同意する。探索をするにしても、選択を決めるにしても、優希はともかくリーダーである2人がいないと始まらないのだ。3兄妹のうち、誰か一人でも残っていたのならここでの話し合いも何か変わったのかもしれないが実際はそうではない。

「でもま、今すぐ決めなきゃってことじゃねーし、オレたちはいつも通り過ごして三上センパイや奏子つちや湊が帰ってくるの待つしかないっしょ」

「…そうだな」

その言葉を最後に、無言で解散となる。

それぞれ部屋から出てゆかりも席を立とうとしたとき、風花から声が掛かる。

「あ、そうだ、ゆかりちゃん」

「？」

ゆかりが足を止めて風花の方を向く。一体何の用なのか。

「あのね…理事長の私物のハードに映像が残ってて…殆ど消されかかってたけど、なんとか復元してみたの。きつと…ゆかりちゃんの、大切なものだと思う」

「ありがと…後で見してみるね」

風花から受け取ったDVDを落とさないようにしっかりと持ち、ゆかりも部屋を出た。

規則的な電子音が響く病室で、湊と奏子はひたすらベッドの上で眠る優希を見つめていた。

桐条が用意してくれた医者からは「全力を尽くすが今夜が峠かもしれない」と言われる程に兄は衰弱し、数時間の間で何度も発作を起こして死の淵をゆらゆらと彷徨っていた。

心電図がおかしくなったり呼吸が止まってナースコールを押した回数も夕方から今まで5回は超えている。その度になんとかこちら側に引き戻されているがこれもいつまで耐えられるか分からないほどに弱っているのだと言われた。

次に発作が起きたら終わり。次に呼吸が止まってしまえば終わり。そんな嫌な覚悟をこの数時間でなにか異変が起こる度に何度もしている。

夕方には三上夫妻にも連絡が行ったらしく「急いで行く」との返事があつたが運悪く渋滞に捕まってしまい、遅れるらしい。

ベッドの横でパイプ椅子に座りながら優希の片手を握っている奏子が、震える声でもう何度目になるかの確認をするために口を開いた。

「お兄ちゃん、死なないよね…？ だいじょうぶ、だよね…？」

「……わからない。いつまで耐えられるか、って話だからこのペースだと小父さんと小母さんが着くまで頑張れば…」

なんとか持ち直してくれるかもしれない、と柄にも無いことを湊は思った。

湊から見ると今の兄は殆ど死んでいるに等しい。棺桶に片足どころかほぼほぼ全身を入れて片手だけ辛うじて出ている、程度である。

血の気のない顔にいくら温める措置をしても上がらない体温。非常にゆっくりとした脈拍。酸素を吸えているのか分からないほどに浅い呼吸。

4月に倒れた時の比では無い。あの時も心臓と呼吸が止まったがごく短時間。一時的にだ。こんなに連続して発作を起こして何度も何度も死の淵を彷徨ったりしていない。

生と死の狭間を行ったり来たりしている兄が、今度こそ死に足を踏み入れることになったらもう帰ってこないかもしれないという不安は湊も抱えていた。

そもそも、養父母が来たからといって完全に心の壊れてしまった兄が反応して持ち直すかどうかすら怪しいのだ。湊と奏子の事でさえ、あの時の兄は分かっているようだった。そして今も、これだけ奏子

が呼びかけているのになんの反応も返さない。なら、望みは薄いのは、と嫌な想像をする。

「はやく小父さんと小母さん…着かないかな…」

「渋滞、抜けられてるといいね」

「うん…」

それきり沈黙する。

いつものように明るく軽口を叩いて雰囲気明るくできるほどの余裕は無かった。

何分、何時間経ったのだろうか。

じつと下を向いて養父母の到着を待ただけだった湊と、疲れてうつらうつらしだした奏子の耳に何度目かわからない異常を知らせる音が聞こえた。その声にハッと顔を上げれば心電図はミミズがのたかったような線を描いており、明らかに異常だと一目でわかった。

ナースコールを押そうと手を伸ばせば、押す前に部屋に慌てた様子で医師と看護師がなだれ込んでくる。

湊と奏子を優しく押しつけ、処置を施していくがのたくっていた心電図の線がまっすぐ伸びてそれきりになった。

5分。10分。30分。

必死に蘇生させようと医師と看護師たちが手を尽くすが状況がよくなることもその心臓が再び鼓動を刻むこともなく。

瞳孔の反応を確認するためにライトを当てた医師が無言で首を横に振った。

「…残念だが、君たちのお兄さんは…もう…」

看護師たちが手際よく勝手に身体につながれているコードを外していく。それを見た奏子がゆらゆらと揺れる不安定な視線で生命活動の止まった優希の身体を見る。

「あ、あの…まだ…まだ…なんとか…なんとかならないんですか…だって、お兄ちゃんは、死んでなんか…」

「奏子」

「お兄ちゃんはまだ生きて…！ きつと、寝てるだけだから…！」
「奏子!!」

湊が叫ぶように名前を呼ぶと奏子はびくりと肩を跳ねさせて沈黙した。

そしてぼろぼろと大粒の涙を流し始める。

「うっひぐっ…お兄ちゃん、やだよ…やだよお…！ 一昨日まで、あんなに元気だったのに、こんな…こんなのってないよ…！」

しゃくりあげ、制服の袖で涙をぬぐう奏子の肩を湊はそつと抱いた。

「なんで、なんでお兄ちゃんばかり…！」

「どうして、なんだろう…！」

湊は奏子の言いたいことが痛いほどにわかった。

今回もまた、兄を救えなかった。こんな死に方になるなどと誰が予測したのだろうか。殺されるのはいつも誰かによってだと思っていた。

ある意味、間接的に幾月が殺したことになるのかもしれないが、直接的な原因は持病の発作だと言われている。さすがに病気までは湊に何とかすることが出来ない。

どうして兄は2010年の2月を迎えるまでに死んでいくのか。高校を卒業することが出来ないのか。呪いのようなそれに、湊は歯噛みした。

11/6 (金) 深夜

11月5日の影時間を終えて11月6日の午前1時に差し掛かったころ。ようやく三上夫妻が息を切らしながら病室へと入ってきた。

既に機械はすべて仕舞われており、ベッドの上では両手を胸の上で組むように置かれた優希の躰が静かに横たわっていた。

「…頑張ったのね」

養母である三上ヒロコが優しくその冷たくなった頬を撫でる。

病気の事は高校に入った時にヒロコ自身が気がついたことだ。

「なんか胸がずつと気持ち悪い。背中の方から刺されてるみたいになる」と珍しく不調を訴えた優希を病院に連れていき、原因不明の不整脈の発作が起こることがあるが病名はつけられないと診断された時の「湊と奏子には心配をかけたくないから秘密にして欲しい」という願いを叶え、今まで黙っていたがそれがこんな結末になつてしまふとは微塵も思っていなかった。

今年に入ってから体調が悪化していたとは聞いていた。だが、電話越しでも先日帰省した時も元気そうだったので油断していたのだ。

「でも、ごめんなさい…私たち、あなたがこんなに弱っているなんて気がつけなくて…」

夫である三上ハジメは湊と奏子に寄り添うようにしてじつと黙っている。10年だ。その短いような長いような期間の中で、優希は不器用ながらも2人の息子であり続けた。2人の愛にこたえようとしていた。

それだけは間違いようのない事実だった。数日前まで確かに笑ったり泣いたり拗ねたり怒ったりしていたごく普通——とは少し違いかもしれないが生きた人間だったのだ。

ベッドの上で静かに眠っているだけとなった存在が湊と奏子であろうとヒロコとハジメは同じように悲しんだらう。3人共、今は三上夫妻という夫婦にとつてはかけがえのない子供なのだから。

「小父さん…あの、ね…お兄ちゃんの昔のこと、全部じゃないけどわかったの。お兄ちゃん、悪い人に沢山ひどいことされて…それで、昨日…ううん、もう一昨日になるのかな…その悪い人に無理やりそれを出させられて…動かなくなっちゃって…無事に目が覚めてもどうなるかわからないっていわれたのに…結局目も覚ましてくれなくなっちゃった…」

涙目で肩を震わせながら何があつたかを伝えようとしている奏子の頭を撫でる。

奏子の話を噛み砕けば、強烈な精神的ショックによるストレスで体力や免疫が急激に低下したせいで死に至つたに近いのだろう。悪い人、というのがどこか引つかかるが直接的な死因は衰弱したせいで頻

発してしまった持病の発作だ。

「その悪い人は今どこにいるんだ」

「死んだ」

奏子にそう聞けば、奏子ではなく湊から返事が返って来る。湊の顔もいつもの無表情に近いそれとは違い酷く暗く、何かを決意したような表情だった。

兄の死というものはこの姉弟に響き過ぎている、とハジメは感じた。

だが、それも仕方ないだろう。

実の両親が事故に巻き込まれて死に、血のつながった兄は目の前で衰弱死。彼らの血のつながった家族はそれぞれの片割れだけになってしまったのだから。

いくらハジメやヒロコが彼らと一緒に住んでいようと、優希はともかく湊と奏子にとっては養父母ではなく血のつながらない小父小母だ。親戚ですらない。

未だに距離があるのはそういうことなのだろう。別の意味でこの双子は自分たちを家族としては見ていない。

自分たちが2人を引き取るまでの間、それはもうひどい扱いを親戚から受けていたらしいことは調査結果から知っている。

葬式で「忌み子」と罵られたことも、両親の遺産を食いつぶされたあげく遺品まで捨てられそうになっていたこと。「引き取ると必ず不幸が起ころ」と罵られ暴力を振るわれネグレクトをされ、親戚中をたらいまわしにされたこと。果てに双子がそれぞれ引き離されようとしていたこと。

自分たちが双子を引き取れたのは優希が『有里渚』本人であるとDNA鑑定で判明したからだ。本人も有里湊と有里奏子という名前の双子の弟と妹がいると言っていたのもあり、正直引き取りたくなかったのだろう彼らの親戚から押し付けられるように無理やり引き取ることが出来た。

その時、あちらが一見有利に見えるような接触禁止の宣誓書を書かせ手切れ金代わりに少くない額を払った。それもこれも我が子に

なった優希の精神と、双子の精神を守る為だった。その為なら何でもする、とハジメは思っている。

それほどまでに、ふたりは優希という子供を実の子供のように可愛がったし湊と奏子を愛した。

最初に双子も引き取ると決めたときは妻であるヒロコの「優希もいい子なんだからそんないい子の弟と妹なら絶対にいい子よ」というにこやかな笑顔に負けたというのもあるが彼女の予測は何も間違っていないかった。

しかしそれとこれとは別だ。双子は確かに自分たちに懐いてはくれている。だが、彼らにとつての家族はそれぞれの片割れと死んでしまった両親とここでこうして冷たくなっている兄だけなのだと思うと、無力感を感じた。

「ふたりとも、泣きたくなったら泣いていい。いまは、そういう時だ」
「……うん、ありがとう、小父さん」

それでも奏子は先ほどまで泣きはらしていただろう目から涙を流すことはしなかった。その顔は憔悴しきつていえると言えはいいのか、もう涙が枯れてしまったというべきなのか。

無理やり笑顔を作り出した奏子は酷く痛々しかった。かといって、口下手なハジメはこれ以上の慰めが思いつかない。

「葬儀場は病院が手配してくれるって話…なのよね。家に連れて帰ってあげたいけれど、ここからは遠いし、無理よね…」

ヒロコが残念そうに呟いた。港区から御影町へはたとえ渋滞に捕まっていない状態で高速道路に乗って飛ばしても車で2時間はかかる。

「そうだな…」

病院が手配してくれる葬儀場となれば港区のどこかだろう。ならば往復四時間の旅をさせるわけにもいかない。

実際の所、手配をするのは桐条グループなので言えば御影町の葬儀場に手配してくれるだろうという事は想像に難くないが夫妻はそのことを知らない。

「…失礼します」

「桐条、せんぱい…」

沈黙が支配した部屋に、美鶴が飛び込むように入ってきた。

入ってきたときの夫妻と同じく息を切らし、僅かに汗ばんでいる彼女は恐らくバイクを飛ばしてきたのだろう、と湊はぼんやり思った。病院側から勝手に連絡がいったのだろう。

湊も、奏子もメールや電話をすることはおろか他の何かをする気力すらなくなっていたのだから。

「きみは？」

「わ、私は…」

美鶴を見やったハジメがお前は誰だと問う。

その鋭い視線にたじろぐも、一度深く息を吸って吐いて。美鶴は口を開いた。

「桐条美鶴です。彼の…三上の…、…友人、です」

「そうか…」

友人だ、と名乗る時に躊躇いと戸惑いが見られた。

その様子になにか複雑なものがあるのだろうと察したハジメは小さく頷くだけにとどめた。

「彼がこうなった原因は…我々桐条グループにあります。謝ったところで許されるわけではないのは…重々承知の上です。ですが…謝罪させてください」

「先輩!!」

頭を下げた美鶴に奏子が勢いよく立ち上がって涙目のまま叫んだ。

「先輩だって…先輩のお父さんだって、お兄ちゃんがあんなことされてたなんて知らなかった!! 謝るべきなのはあの人の方でしょ!?

桐条先輩だって…お兄ちゃんの事…!」

「有里…皆まで言わないでくれ…私は加害者側の立場だ。幾月の本性を見抜けず、彼を苦しめた挙句こうして死なせてしまったのだから」
「そんなことない!!! 先輩だって叔母さんを殺されてたって分かったのに…そんなこと言ったら私たち全員があの人の本性なんて見抜けてなかったもん!!! だから、だから…」

「ありがとう。だが…」

美鶴は複雑そうな表情でベッドの上の優希を見やる。その顔は許されてはならない、と思っているような表情にハジメは見えた。

だが、話を総合すると『幾月』という人間が息子を死ぬまで追い詰めた『悪い人』という事になる。確か息子が無理やり入学したばかりの聖エルミン学園から寮付きの月光館学園に転校した時の理事長からの推薦書にそんな名前があつたな、と思いだした。

なるほど、そもそもの目的は息子である優希を己の手元に置くことだったのか、とハジメの表情は険しくなった。その果てにこうして壊して命を奪つたと。

だが、その目的の内容が分からない。独占欲？ それとも、名前の付けられない欲だともいうのか。

人知の及ばないような何かがあるような気がして、ハジメはそれを聞くために口を開こうとした。瞬間、

「う……」

小さなうめき声が聞こえ、誰のものと分からない息を呑むような音が響いた。

——自分は、誰だったか。

バラバラに砕けて、ふわふわと散らばって、どろどろに溶けて。

輪郭すらもわからなくなった自分は、なんだったのか。

ごうごうと、炎が燃えている。

身体の半分が吹き飛んでいる小さな子供を、焼いている。

「……」

ああ、あれは自分だ。何となく、そう感じた。

あれはもう、死んでいる。自分はもう、死んでいる。

だからあとをただ、焼かれて灰になるだけだ。

何か大事なことを忘れている気がする。

何か大事なことをしなければいけなかった気がする。

何か大事な願いを忘れている気がする。

自分は、願われた。望まれた。だから、こうして存在していた。たとえ自分がどんなに悪しき物であろうと、得てしまった善性までは失えない。

——否、自分が最初に得たのは負の感情ではなく愛だ。

ならば自分は負の存在だとは定義できない。しかしそれすらも揺らいでいる。

願われた者なら、何故そう願われたのか意識しているべきだ。覚えているべきだ。

それを忘れた願望器は役目を果たせない役立たずにも等しく、存在価値が無い。

月が、呼んでいる。

人が、呼んでいる。

滅びを、と呼んでいる。

願いを叶えろと叫んでいる。

自分は、それを聞き逃してはならない。この身は人類の総意たる願いを叶えるためにある。

ならば、代行者たる自分に人間性は要らない。ただただ願いを聞く機能だけがあればいい。

目の前で炎に焼かれていた子供が灰になって消える。

残っていた最後の人間性が、焼き尽くされた。

「——とでも、思ってる？」

誰かが、目の前に立っている。けれどそれが誰なのか認識できない。

「あー…ああー…ほとんど消えかけか…俺の時よりヤバいかな。まさかほぼほぼ同じ道をたどっているとはいえここに来てこうなるなんて思わなくて。起きてくるのが遅れたし正直甘く見えた。ごめん…」

音がしないはずの空間にどこか聞き覚えのあるような声が響く。

「4月までは一緒の存在だったんだ。なら、いま“同調”しても変わりはないよね。予定より少し早いけど、やるなら今しかない」

いましかない、と断言する声は断言しているにもかかわらずどこか戸惑うような雰囲気を感じられる。

「ああ、成程。だからフイレモンは俺を分離させて残したのか。……
こうなることを予測済みだったと。本当に、ムカツクやつ。全部知っ
ているのに言おうともしない。結局はあいつと表裏一体に変わりな
いか。だいたい、『この』俺が今までの俺と同調をすればどうなるかわ
かって：ああごめん、お前が消えないうちに早くした方がいいよね」
誰かが話すその言葉の殆どが自分には必要の無いものだ。

「どちらにどちらが上書きされるのかはわからない。俺たちが何の代
償もなくひとつに戻れるとも思わない。けれど、今しなきや共倒れ。
『世界はこのまま滅んでしまいました』か『救世主^{メシア}になった双子は避け
られぬ滅びを回避しましたが永遠の眠りにつきました』のどっちか
だ。俺は、そのどちらも認めない。『前回』は俺が：俺が最後に皆に甘
えたから、世界が滅んだ。俺が：俺たちが最後までやるしかないん
だ」

世界が滅ぶ。

それは、駄目だ。自分に与えられた願いはそれではない。

滅びの声を聴いた。だがむしろ真逆の方向性の物だ。

——ああ、臍気だがなんとなく思い出してきた。

「うんうん、その調子で頑張って自分を保って。まあ、お前は既に優希^{おれ}
じゃなくて無理やり決めつけられた『聖杯』としての機能寄りの思
考に寄ってるっぽいけど、願いを叶えるだけの道具じゃないし人間で
あることやめちや駄目だから。ほら、定義定義。俺は奏子と湊の兄で
す。ハイセーの、復唱」

……。

「ふ・く・しょ・う！ 定義が揺らいだら俺はすぐ飲まれちゃうんだか
らさ。今はそういう曖昧な状態って理解して！」

奏子と湊、というの誰なのか。わからないものは定義できない。
聖杯^{しじふん}に必要なのは『滅びを阻止するという願いを叶える』という目的
だけだ。

それ以外に、なにがいるのか。それが、自分に願われた『大衆^{だれか}の望
み』だったはずだ。

「うわあ、思ったより重症かな：本当にそこ以外全部砕け散っちゃって

混じったのか。冗談抜きで人間性吹き飛んでたの……というか最後に残ったそれすら吹き飛びかけてたって……幾月のクソ野郎め……今度会ったらガムテープでヒゲ引っこ抜いて眼鏡割ってやろっと。

……ほら、俺が願われたのはそんな無責任な大衆だれかの願いじゃない。意味があるとかないとかどうでもいいから思い出すか定義して。俺は奏子と湊の兄で、2人を救うためにいる”んだと”

——自分は、奏子と湊の兄で、2人を救うためにいる。

「そう。この決意が俺たちの核。俺を俺たらしめる存在証明ねがい。他の全部は吹き飛んでも、これさえあれば俺は三上優希おれで在れるんだ。まあ……兄じゃなくて2人の姉でもあんまり変わんないと思うけど……まさかそう定義したらホントに女になったりしないよね……怖いから遊び半分で試すのはやめとこ……」

誰かがそう落ち込みながら近づいて来たような気がした。

相も変わらず自分はその誰かを認識できない。けれど、ひどく懐かしい匂いがした気がした。ここには匂いなんてないのに。そもそも自分には匂いというものを知覚する感覚はもうないはずなのに。

とくとくと、と小さく心臓の音が聞こえる。

自分は死んだはずだ。なら、この音が聞こえるはずがない。自分は死人であり、思考するだけの物だ。

滅びを防ぐために時間を、時間を巻き戻さなければ。

「まだ生きてる。まだ死んでない。まだ滅んでない。まだ”その力”は使っちゃ駄目だ。思い出して。忘れないで。僕が、俺が、何者だれだったのかを。」

——そして、今度こそ救おう」

誰かの呼ぶ声がする。自分は目を覚ますべきだと誰かが呼んでいる。

行かなくては。戻らなくては。

「ああ、そうだ。その通りだ。だから俺たちは1つに戻らなくちゃいけない」

『俺』が笑う。

——その顔はひどく優し気で哀しそうでもあった。

目を開く。

自分は、奏子と湊の兄。2人を救わなくてはならない。

それ以外の情報が無い。どこかに散らばっているような、手を伸ばして手繰り寄せないと届かないような、そんな気配はするが何もわからない。

頭が酷くふわふわする。

何か大事なことを忘れていている気がする。目の前で驚いている人たちの事が何も思い出せない。ただ、奏子と湊が誰かというのはすぐにはわかった。

「お、にいちゃ…」

「……」

上手く喉が動かない。喋る、とはどうすればいいんだったか。

そうしてぐるぐると無意味に思考を回している間にいろんな人が入ってきた。いろんな事をきかれたり、されたりしたがよくわからない。

何もかもが、自分には理解できない。

入ってきた人たちが居なくなつて、奏子と湊。それと3人の誰かはつきり判別できる奏子と湊以外、顔も声もよくわからない。

手を握られるが3人いるうちの顔のわからないだれかだ、という判断しかできない。

「三上、良かった…本当に良かった…」

「……」

「無理はしなくていい。ゆっくりでいい」

「……、……」

答えられない。何を言っているのかよく聞き取れない。

眠い。起きたばかりだというのにひどく疲れている。ぼんやりする。

ゆっくりと、再び目を閉じた。

データサルベージ（11／6）

死んだはずの優希がうめき声をあげて、咳き込んだ。そして引き攣った呼吸を繰り返した後に、目を開けた。

その時、全員の息が止まったかと思うほどに音がしなくなる。

「お、にいちゃ…」

「……」

のろのろと虚ろな目で奏子と湊をぼんやりと見た優希は、何かを喋ろうと口をはくはくと動かしていた。しかしそこから声が出ることは無く、僅かに首を傾げるだけだった。

養母であるヒロコがナースコールを押せば、何かと看護師が飛んできた。そして、飛んできたときと同じ速度で出ていってすぐに医師とともに帰ってくる。色々確認などを済ませ取り外した機器を持ち込んで優希の身体につなげていく。

当の本人はいまだに覚醒しきっていないのか、ぼんやりしてなされるがままだ。

医師が質問をしていくが奏子と湊の時とは違い、口を開くこともせずに視線すら合わない。まるでそこに人間の顔があると認識していないように。

「三上、良かった…本当に良かった…」

「……」

「無理はしなくていい。ゆっくりでいい」

「……、…」

医師たちが出ていったあと、美鶴が手を握り、養父であるハジメが眠そうな兄に無理はしなくていいとやさしく告げるが反応は芳しくない。

奇跡が起きた、ととればいいのか。湊にはわからなかった。兄は息を吹き返した。だが、この様子だと自分たちを認識することすらしていないのではないかという不安が浮かんだ。

自室のピンクのベッドに座り、ノートパソコンに風花から貰ったDVDを入れ再生を始めたゆかりはその画面を食い入るように見つめる。

『この記録が：心ある人の目に触れることを：願います』

人の悲鳴とパニックになっていっているような音。炎と瓦礫に塗れたそこにゆかりの父である岳羽詠一郎が映っていた。

「これって、あの時の…！」

『ご当主は忌まわしい思想に魅入られ、変わってしまった。私は知らなかった。知らなかったんだ！ 私の娘と同じくらいの年の子供ひとりに：かき集めたものを：全部詰め込むだなんて正気の沙汰ではない！ …この実験は：行われるべきじゃなかった！ だから私は、強引に実験を中止した。しかし、そのせいで『器』たる幼子は死に、その内から飛散したシャドウが後世に悪影響を及ぼすのは間違いないだろう。』

…でも、こうしなければ…世界のすべてがいま破滅したかもしれない。『器』にされた彼も…僕にこの実験の真の危険性を教えてくれた千鶴さんにも…結果的にその命を奪うこととなって申し訳ないと思っている。私は本当に愚かな研究者だ。だが…』

『頼む、よく聞いて欲しい…くれぐれも警告しておく…散ったシャドウに触れてはいけない！』

「えっ、これ…」

ゆかりは父の言葉に目を見開いた。屋久島で見たときのビデオと言っていることが微妙に違ったのだ。

『この研究…私は止めることが出来なかった…悪魔に魅入られたご当主の耳に、私ごときの言葉は届かなかった…あれらは器から離れれば互いを喰い合いひとつになろうとする…そしてそうなれば、もうすべてが終わりだ！ 彼が…器たる彼は…最後までそれを食い止めようと耐えていてくれた。だが…それももうダメだった。だから私は…』

いや、これを見る誰かには関係のない事が…

……もう一度言う…散ったシャドウに触れてはならない！ ましてや、彼のような「器」を作ったりしてはならない！ 彼のような犠牲者がでるのは彼ひとりですらにしなければならぬ…！ 二度と…未来ある子供を犠牲にするなど…そんなことは絶対に許されてはならないはずだ！』

「これ…ホントの記録…幾月が、イジル前のホントの…父さん、実験を止めようとしてたんだ…」

幾月の話によれば都合の悪いところに手を加えたという事だったがこれは屋久島で見たものとする意味真逆の内容ともいえる。屋久島の時は成功に目がくらみ、当主のいう事をきいてしまったという内容だったが、これは途中からちゃんと止める様にと進言していたようにも聞こえる。

『僕はもう…助からないでしょう…』

『最後に…ひとつだけ…いや、ふたつ…ひとつめは…これを見たどなたかが、娘に…ゆかりに会うことがあったら、伝えてほしい…帰るつて約束したのに、こんなことになって、済まない…でも父さんは、おまえと一緒に過ごさせて…この世の誰より幸せだった。…愛しているよ、ゆかり。どうか、元気でいてほしい…』

「お父…さん…」

『ふたつ目は——…『幾月修司』という男に…気をつけてくれ…やつにだけは…この記録が渡ることがあつてはならない…！ やつこそ、ご当主と共に悪魔に魅入られ…『器』である有里渚さんと、彼を庇った桐条千鶴さんを弄んだ外道だ…！ だからこそ——』

言葉は最後まで聞こえることは無く、瓦礫の崩れるような轟音と、何かが爆発するような爆音にかき消された。

「お父さん!? お父さんツ!!」

10年前の記録だというのにゆかりは叫んだ。ノイズが走り、記録していたカメラが焼けたのか、映像はそこで終わってしまう。

「うう…うう…」

唇を噛みしめ、下を向いて涙をこぼす。しばらく涙をこぼし続けた

ゆかりは顔を上げた。

「でも、無駄じゃなかった…信じてたこと、無駄じゃなかった…」
父は最後まで実験を止めようとしていたし、その結果を悔いていた。だからこそ、再三この記録で2度としてはならないと言い含めていた。悲劇的なのはこの記録が一番渡つてはいけない者の手に渡つてしまったことだ。

幾月についても警告していたというのによりによってその幾月の手にこの映像が渡つてしまい、改ざん捏造され、事実が歪められた。そして結果的に「滅び」は来てしまうこととなった。だがそれでも、自分たちががんばればなんとかなるかもしれないと滅びを呼ぶ者自身から言われている。ゆかりは、「理不尽に立ち向かう決意」を新たにした。

「私は、元気だからさ…随分かかっちゃったけど…メッセージ、ちゃんと受け取ったよ」

そしてそれが、新たな力を呼び覚ます。

脳裏で「イオ」の姿が光に包まれ、牛の角と翼をもつエジプトの豊穡の女神・「イシス」に覚醒した。

「私、なんとか足掻いてみるよ。それでいいよね、父さん…」

天を仰いでひとり呟いたゆかりは、そこではた、とあることに気がつく。

「さっきの父さんの言葉…三上先輩を死なせたって言ってたけど、三上先輩は生きてる…よね…どういふことなんだろう…」

首を傾げたゆかりは後に優希が死んだと美鶴から聞かされるなどと思ってもよらなかった。

11 / 6 (金) 昼休み

「三上先輩、亡くなったって聞いて気が気じゃなかったけど息を吹き返したんだよね。…ホント、良かった」

「ビックリだよな…影時間合わせたら2時間死んでたことになるん

だぜ!? ……まあ、今日も奏子つちと湊は付き添いで休みみてーだけど…」

空席になっているそこを見つめながらゆかりと順平が話す。

5日の影時間が終わって少しした後、「優希が死んだ」と伝えられた特別課外活動部の面々はショックを受け、美鶴は寮から飛びだし病院へ向かったが他の面々は暗い面持ちをして美鶴の帰りをラウンジで待つばかりだった。

そうして1時間ほどして、美鶴からの電話で「息を吹き返した」と聞いたときは皆安堵し、脱力したものだ。正直、何の奇跡が起きて蘇生を果たしたのかはわからないが生き返ってよかったと喜んだものだ。が、かと言って完全に元気になったというわけでもなく。

「まだしばらくは入院だって言われてたよね。修学旅行、先輩いけるのかな…」

「どーなんだろうな。ま、いけなかったらいいけなかったでオレたちが土産買って来ればいいっしょ」

放課後

辰巳記念病院の病室。そのベッドの上でぼんやりと文字と絵の書かれた紙を眺めているのは優希だ。

そしてそのベッドの脇にいるのはカウンセラーである園村麻希だった。

夕方になるまでの検査で脳や体になんの異常もないとわかった優希のこの状態は精神から来るものではないかと診断され、一度カウンセリングをしていた麻希がカウンセラーとして呼ばれたというわけだ。

だが、その途中経過でさえも芳しくない。指示や問いかけなどの言葉を優希が聞き取れていないどころか、麻希を麻希だと認識していないのだ。忘れていたのではなく、認識できていない。両親や友達だったらしい人間の事も認識が出来ていないようだという報告書を手に、

麻希は悩んだ。

それでも、弟妹である湊と奏子の顔をちゃんと見てその言葉を理解しているようだったので、それ以外の認識能力がガタガタに落ちてい
るのではないかと予測した。

例えば、麻希が「これは何か言える？」と指をさしても無反応だが、
湊や奏子が「これは何か言える？」と指をさして聞けば紙にゆっくり
とだがその物の名前を書くのだ。

発声もうまくいっていないようで口を何度か動かすようなそぶり
を見せるが声を出せないように本人も少し困っているような雰囲気
を感じた。感情の色が無い表情であるのに何故声が出ないのだろう、
と不思議そうにするのだ。

トイレに行ったり食事をとったりなどの日常生活能力に問題はな
いようなので、本当に人間の判別と認識がぐちゃぐちゃだという事だ
けが問題らしい。

「お兄ちゃんごめんね。園村先生が居るし私と湊、小父さんと小母さ
んのところに行ってくるから待っててね」

「……、……」

奏子の言葉に視線を湊と奏子の方にのろのろとやった後、小さく首
を縦に振り、優希はこくりと頷いた。そして部屋を出るまで見つめる
と、視線を下に向けた。

弟妹である湊と奏子、どちらかが部屋から離れようとするはまだ体
力が回復しきっていないのに立ち上がり、点滴を外してついていこう
とするのも問題といえれば問題かもしれない。その度に、「トイレに行
くから」「購買に行ってくる」などと行先を告げて待つように弟妹が言
うと大人しくベッドに腰掛けたまま待つが、こうして麻希がいるから
と2人が同時に居なくなった途端に人形のように下を向いて1点を
見つめたまま動かなくなるのは少し怖いな、と麻希は感じてしまっ
た。

前回、カウンセリングを受けに来た時の彼はあんなに普通だったと
いうのに、一体何が起こってしまったというのか。

麻希が感じていたあのペルソナの気配ももうしない。その代わり、

それよりももつとぞわぞわとする嫌な気配がするのだ。だがそれが何か麻希にはわからない。もしかしたらこの無機質な、表情を浮かべなくなってしまう顔に対する恐怖なのかもしれない、と彼には悪いが麻希は思ってしまった。

なまじ顔が整っているだけに、無機質な表情をされてしまうと精巧な人形のように見えてしまうのだ。僅かに呼吸をしているのでそれでようやく生きているのだとはつきりと理解が出来ているが、これで呼吸が浅ければ生きているなどと到底思えないだろう。

「三上くん、私の声が聞こえてないかもしれないけど、もし聞こえていたら首を縦に振って返事してくれるかな？」

「……」

やはり、反応は無い。相変わらず顔を下に向けて微動だにしない。その様子にふと、麻希は前回のカウンセリングの時にあつた不意に無表情になった時を思い出した。

あの時の雰囲気と今の雰囲気はよく似ているような気がするのだ。つまり、今の彼は無意識だという事にならないだろうか。

そもそも意識を向けていない・意識を保てていないから、弟と妹以外の世界のなにかもを認識できていないのではないか、という仮説が組みあがるが如何せん材料が少なすぎる。

これはカウンセリングよりも弟と妹と一緒に行動していた方が少なくとも彼ひとりでなにかするより早く回復しそうだ、と麻希は思った。こういう精神的なものというのは、誰かがきっかけになって回復につながることもある。なら、今一番認識が出来ていて興味をもっているのが弟妹なら、そうするほかにと判断したのだ。

園村は湊と奏子、そして養父母が戻り次第カウンセリングを終了し担当医にそのことを告げ、体調がよくなり次第退院して兄妹で生活させた方が良いことを伝えた。元々寮暮らしだったようだし日常生活能力にも問題は無いとすればこのようにあまり人が来ないだろう病院にいるよりも知り合いばかりらしい寮に戻った方が良いと思ったからだ。

夜

出された夕食を食べた気がするが何を食べたのかわからなかったし何も味がしなかった。

「……」

食べなくてはいけない雰囲気を感じ取ったのでなんとなく口に運んで咀嚼した。ただそれだけだ。

相変わらず、自分が何なのかわからない。声も出ない。どうやらこれまで記憶だけではなく、声の出し方も忘れてらしい。

自分が『優希』という名前であるのと昨日手を握ってきた誰かが『桐条先輩』という名前だという事だけは分かった。そして後ふたりいる誰かが養父母らしいことも分かった。

けれど自分にはどちらがどちらなのかいまだに判別できない。

そしてまた、今日も誰だかわからない人が来たらしい。

相変わらず声も言葉もわからなかったが、奏子曰く、「前にお兄ちゃんがお世話になったカウンセラーの園村先生」だという。お兄ちゃん、というのは自分の事だ。たぶん。

つまり、園村先生という人に世話になったことがあるらしい。わからない。当然だ、顔も声も、どんな服を着ているのかすらわからないのだから。

奏子と湊以外の物に色も匂いも何もついていない。更にぼやけている。音も声もすべて同じふわふわとした奇妙なものに聞こえる。奏子と湊以外の何も認識できない。片方が離れるとすごく不安になるし、2人が居なくなるとこうして身体が自由が効かなくなっていることしかできなくなる。

そんな自分が変らしい、というのは2人の反応を見ていれば分かる。

こうして頭の中で考えをぐるぐると回していることしかできないが、頭の中で考えるのと実際の体の動きの速さがあまり比例していな

い気もする。

非常に緩慢にしか身体を動かせないし動かそうと思わないのだ。ひどく、億劫というか。気力がわかないというか。それに、『怠い』や『億劫』や『眠い』以外の何かを感じる事があまりない。わからない。腹が減る、という衝動があるのは知識として覚えている。けれど、それがなにかわからない。

もしかしたら、記憶を失ったせいであんななっているのかもしれない。なら、少しずつでも拾っていくしかないだろう。自分の周りに落ちているのを何となく感じるなら、それを拾うことによつて何か思い出せるかもしれない。たとえばそれが、思い出したくないモノでも思い出すしかないのだという事はわかる。

あまり感情というものが無い今の方が受け止められるはずだ。

何を言うのか。

絶望し、慄き、恐れ、嘆き、苦しむからこそ面白いのではないか。それすらできないのなら人形以下だ。

……。

いま、自分は何を考えていたんだろうか。

自分は奏子と湊の兄だ。それ以上でも以下でもない。だが、兄だというのに2人の記憶が無ければ意味がない。とりあえず、2人に関係してそうな記憶を手繰り寄せよう。

——と思ったが中々うまくいかない。それはそうだ。自分の自由で記憶が思い出せるなら苦労はしない。なんだか、前にもこうして悩んでいたような、悩んでいなかったような。

脳裏で、炎が揺らめいた。

そして一瞬にして景色が目を閉じている暗闇から住宅街の道路に変わる。

自分の体も小さく幼稚園児ほどの背丈しかなく、視界に映る景色がやけに大きい。

「有里、ナギサくんだね？」

「——おじさん、だあれ？ どうしてぼくのなまえ、しってるの？」

ボールを持ったまま、見上げる。ウェーブがかった髪の毛、メガネを

かけた冴えない男が逆光の元、そこに立っていた。どうやら、自分の名前は有里ナギサ？ というらしい。優希という名前ではなかったのか。それとも、これは別の誰かなのか。

「おじさんはね、きみが必要なんだ。だから、こっちへおいで」
「知らないひとについてっちゃだめっておかーさんが言ってたからやだ！」

踵を返して公園に戻ろうとした瞬間、首根っこを掴まれ、声を出す間もなく口と鼻を塞がれる。

息が出来ない。

息が出来ない。

息が出来ない。

息が出来ない――

――目を開いた。

気がしたただけだった。場面が変わったらしい。どうやらこのまま上映会を続けるようだ。

今度は自分が自分と思しき子供になっているのではなく、それを外からぼんやり見ているような感じがする。

「わあああああ!!! やだああああ!!! 痛い痛い痛い!!!」

手術台のようなものの上で幼い頃の自分と思しき子供が泣き叫んでいる。だがそれもすぐに止む。薬を打たれ、ぐったりとしてそれからしゃべらなくなった。

自分には、その時の子供の感情も痛みもわからない。まるで他人事の様だな、となんとなく思った。恐らくこれは自分の事だろうに、何も感じない。ただただそうだったという情報しか読み取れない。

また場面が変わった。

白い病室のような部屋で点滴をつけたあの子供がひとりでぶつぶつと何か話している。

「だいじょうぶ…だい、じょうぶ…ぼくはおにいちゃんだから…ぼく、ぼくは……ぼくは、ありさとなぎさ…みなとと、かなこの…おにいちゃん……せんせいという…せーはい、なんかじゃ…ない…」

成程。奏子と湊の兄と言っているのならば、やはり彼は自分という

わけだ。

そう理解したのに自分はこの時の記憶がよみがえってこない。あくまでも、そういう事実があると受け止めたただけだ。

「おうち…かえりたい…ひとりはやだよ…たすけて…おかーさん…おとーさん…くるしいのも、いたいのも、もうやだよ…」

ぼろぼろと涙をこぼす姿は見ていて痛々しい。けれどそれだけだ。

感情が動かない。

なにも、感じない。

おかしい。自分もこうして人並みの感情があつたはずなのだ。だというのに何も感じないままで、本当に弟と妹を救えるのだろうか。思いやれるのだろうか。兄として、やっていけるのだろうか。

…わからない。

「……きみたちは、だあれ？ どこからきたの…？」

ふと、目の前の幼い自分が虚空を見つめて呼びかけ始めた。自分には、何も見えない。なにもいない空間が広がるだけだ。

「だめだよ…ここにいたら、ひどいことされちゃう……え？ だいじょうぶ？ そうなの？」

どうやら、目に見えないなにかと会話をしているらしい。

表情が少し明るくなっている。

「ふたりとも、ぼくのもだちになつてくれるの？ ほんとう？ うれしいな…！ ぼくね、ここにきてから、ともだちいなかったから…えへへ…」

目に見えないいかを友だち扱いしだした幼い自分は気でも狂つたのだろうか。

否、今の自分だって他の誰かから見れば十分気狂いだろう。それを言うのは野暮というものだ。

また場面が変わる。

ベッドに腰掛けて——はいない幼い自分はリノリウムの床に座りながらクレヨンで画用紙になにか絵を描いているようだった。幼い我ながら、壊滅的に画力がない。いや、幼稚園児くらいの年齢といえはこの程度か。

「おいしやさん、みたいなおじさんは…ぼくのこと、た…たづ…たび…
“たじゅーじんかく”じゃないかって言ってた。たぢ…たじゅーじ
んかくってなにかな？ “もるふえ”はわかる？」

何度も噛みながら幼い自分はまた見えない誰かにその日あったこ
とを話しているようだ。

多重人格

解離性同一性障害と呼ばれる神経症ではなかっただろうか、と傾げ
られない首を傾げた。

たしか、己のキャパシティを超えて虐待されたりトラウマを持って
しまった子供の中に全く別の人格を作り上げ苦しみや痛み of 知覚
だったり記憶だったりを無かったことにする（別の人格に押し付け
る）といった感じの病気だったはずだ。自分の知識があっているかど
うかはわからないが。

だが記憶にはないが知識にはある多重人格の要素として、『それぞ
れの人格は別の人格があると認知できない』という事柄を見た事があ
るような気がする。ならばこれは多重人格ではなく普通に幻覚を見
ているんじゃないだろうか。

どのみち、こうやって逃避してしまうほどに幼い自分が耐え切れな
いほどの苦痛と苦しみを受けた事には変わりないが。

「わかんない？ そつか。むつかしいはなしだもんね。あ！ でも
ね、今日ね、ちづるさんにね、かんじをかけてえらいねってほめられ
たんだよ！」

どうやら最低限の勉強はさせてもらっていたらしい。漢字を書け
てえらいと言われているのならやはりまだ小学校の入学前だったん
だろうか。それとも、入りたてか。まだまだ親が必要な幼さに変わり
はない。

「ちづるさんのことはね、すき。大人になったらケツコンしよーって
いわれたようちえんのマリちゃんよりすき」

ようちえんのマリちゃん。

彼女は幼稚園児によくある口約束であり小学生になればすぐに忘
れ去られてしまうような甘酸っぱい約束を交わしたのにもかかわら

ず、幼い自分の中で『ちづるさん』という女性に負けてしまったらしい。同じ年の幼稚園児より幼稚園の先生の方が好きになる事はままある、と特に要らない記憶だけ蘇る。

「ちづるさん、おかーさんみたい。……ぼく、いつになったら帰れるのかな……いま、なんがつなんにちなんだろ……”もるふえ”は、わかる？

……わかんない、よね……」

『ちづるさん』という女性の事を母親代わりとして見ていたのか。

これならベクトルが違う。だが幼稚園児なら母親に向ける『好き』と恋愛としての『好き』の方向性は同じなので結局は同じものだ。たぶん。

少し気になっていた、落ち込んだ自分が先ほどから呼んでいる『もるふえ』という名前は見えない友達とかそういう物だろう。何だか、その名前だけは少し懐かしく感じる。あと少しで手練り寄せそうな、そんな感覚がするがまだ何か足りない。

場面が変わる。

赤い髪の女性が屈んで虚ろな目の幼い自分の手を取っている。

「いい、ナギサ。あなたはこうしてちゃんと生きてるひとりの人間なの。願いを叶える道具なんかじゃないの」

「う、ん……」

「……何かを願わなくてはいけないのなら、私は貴方に願うわ。お願い、”人間として生きて”」

「にんげん……？ いきる……？」

幼い自分はぼんやりとしたまま不思議そうな顔をした。

彼女の思いやりが伝わりそうな場面だがこれさえも実感がわからない。本当にこんなことを言われたのだろうか。

もつと、もつとそれよりも前に、誰かに別の事を願われていたような、そんな気がする。

祈りのようなそれを、どこかで、聞いたような。ないような。どうにも思い出せない。

…記憶を利用できないのは厄介だが仕方ない。流星においそれと取り出せぬほどにバラバラに砕けて散らばってしまったているのだから。

砕け散って残った上澄みである聖杯としての機能が『前回』の人形と同調し、かろうじて人間性を補った上で出来上がったのがこの不良品。全く持つて愚かとしか言いようがない出来損ないだ。まあ、壊れる以前の人格も出来損ない極まりないものだったが。

……？

いま、自分は何の考え事をしていたんだろうか。

たまにこうして思考が飛ぶことがあるがやはりトラウマなどが起因しているのだろうか。

自分では知覚できないレベルで精神的にダメージを受けているのだろう。記憶が全部ふき飛んで他者も何もかも認識できなくなっているくらいだ。

思考だけが冴えわたっても意味がないというのに。

場面が変わる。

炎と瓦礫に囲まれ、血まみれになった幼い自分がひゅうひゅうと息も絶え絶えになって虚ろな目で月を見上げている。

これは死んだだろう。そう思うのにまだ生きている幼い自分に驚く。

そんな幼い自分の目の前に、濡羽色の夢魔しにがみが佇んでいた。

『ごめんね…ごめんね…ぼくたちが居たせいで…ちづるさんも…ナギサも…こんなことに…でも、死なせない。絶対にぼくがきみを救うから…だから、もう少しだけ、頑張って』

「……………」

何かを話そうとしてそのまま言葉を発せなかった幼い自分を抱え、夢魔は緑の夜空を飛んだ。

こんな状況でも意識を失っていないというのは大変だな、という的外れな感想を抱きつつ、どこまで飛んでいくのかと見れば大きな橋まで来てそれは降り立った。

『兄さんとあの子が戦ってる……そっか、ぼくは“違う”からさつき

は分からなかったのか…でもここから先に行けばあの子と交戦することになる…死にそうなナギサを抱えてなんて…行けない…なら…』
幼い自分を地面に下ろした夢魔は光に包まれる。

『飛び散った12のシャドウ…それに兄さん…ぼくはなりそこないだけど…一度喰らってしまえばどうなるかわからない…だから、ナギサは…辛かったことやぼくらの事は忘れて、無縁の生活を——』

それは祈りに近い何かだった。光になった夢魔はそのまま幼い自分の中へと吸い込まれていく。

しばらく何も起こることはなかったが、不意にぴくりと幼い自分の手が動いた。

「……う。」

立ち上がって訳もわからない、といった風に橋の上にある道路をフラフラと歩き、すぐに倒れる。怪我が治ったんだろうか。よくわからない。

そして場面が変わった。

どうやら、どこかから落ちているらしい。夢魔と一緒に落ちていく。

びゅうびゅうと、風が幼い自分を切る様に鳴っている。海が、眼下に見えた。

『どうして、どうして、どうして、いつもこうなるの！ ああでも、今度こそ——ぼくらのことは忘れて。忘れられなくても、ぼくが、ぼくが封じて見せる。絶対に思い出させなんかない——！』

金切声をあげるようにそう叫び、自分を庇うように夢魔の黒く大きなカラスのような翼が開かれる。

だが、それで飛べるわけもなく。大きな水しぶきが海にあがった。次に見えたのは暗い海。

暗くて冷たくて重い海。

混沌の、海。

ずるずると、全身に纏わりつかれる。侵蝕されるような感覚がある。

違う。こんなもの、知らない。海はこんな気持ちの悪いものではない。

かったはずだ。

ああ、気持ち悪い。気持ち悪い。気持ち悪い。気持ち悪い。

「……ッ！」

今度こそ、本当に現実で目が開いた。

息が乱れている。ひどく疲れてもいる。とても眠い。

眠いのなら、寝てしまおう。それがいいと教えてもらった。

それを教えてくれた養父ひとの事は結局まだ思い出せないけれど。

教えられること。そうでないこと。(11/7~11/9)

11/7(土) 放課後

ひとりで発声の練習をしようと口を動かしていたが中々うまくいかない。

湊と奏子が居ないと思惑はともかく身体が思うように集中して動いてくれないのだ。もう少し誰もいなくても動いてくれた方がいいのかもしれないが、これはこれで致し方ないのかもしれない。

未だ自分が何かの実験をされていてとんでもないストレスを受けて記憶をなくした幼少期がある、という事しかわかっていない。それも記憶としてよみがえったのではなくそういう情報があつたと知っただけだ。

湊と奏子に関しても、何が好きだとか自分となにをしたのかとか何から2人を救わなければいけないのか、とか何もわからない。ただ、目を離すとどこか遠い場所に行つてしまいうので、すごく不安になる。

いまでさえ、実を言うと落ち着かないのだ。落ち着かないのに身体は動いてくれないし、練習は上手いかな。しかしそれ以外の感情があまり浮かばないのには困りものだ。未だに顔も姿も声も分からない養父母らしき人がなにかしてくれているみたいなのだが感謝の言葉すら伝えることが出来ていない。

文字も絵も、湊と奏子に指し示してもらわないと理解が出来ないのだ。読めているはずなのに、脳が理解をしていないのか、その所は医者では無いのでよく分からないがそんな気がする。

妹と弟に頼りっぱなしというのは本当にダメな兄だと……

ああ、そうだ、なんとなく自分はこんな感じでダメで情けない兄だったような気がする。なにか大事なことを隠していて、それでよく、湊と奏子に呆れられたり叱られていた。

なんのために隠していたんだったか。そこを思い出せれば記憶も

芋づる式に出てきたりしないだろうか。

「っ……う……」

頭が痛い。

痛い、が気持ち悪くは無い。

……どうして自分は気持ち悪さが同時に来ると思ったのだろうか。

もしかしたら、これも何度かあったことなのだろうか。記憶を失う

前の自分も、何かを思い出そうとして頭痛と吐き気を覚えていた？

つまり、必要があつて幼少の頃の記憶を求めていたという事なのだ

ろうか。ということは、あの夢魔しじがみと実験にすることが湊と奏子を脅

かすモノのヒントなのでは。

「……」

かといつて記憶を思い出すきっかけも情報も何も無い。声も出せないし湊と奏子以外を認識できないのでそれ以外の人間から情報を引き出すこともできない。

正直、詰んでいる。

そもそも、自分がこうして記憶をまた飛ばしているというのは明らかに何かがあつた証拠ではないのか。

一度死んだと言われたがあくまでも持病の発作によって仮死状態に陥っただけらしいと聞いている。そしてあのふたりの様子からして、それ以外にも何かあつたに違いない。

——ふたりに訊けば、教えてくれるのだろうか。

学校が終わり次第見舞いに来てくれるという話らしいのでその時に訊いてみよう。それではぐらかされたら、それはその時だ。食い下がるか諦めるかはその時考えよう。

それよりも今は友だち……らしい桐条先輩なる人について思い出した方が良いでしょう。なんとなく、そんな気がする。

「たのもー！ お兄ちゃん、元気〜？」

「奏子、いくらここが他のとこと離れてる特別な部屋でも病院は静かにしなきゃ」

「湊さんの言うとおりであります。病院は静かにすべきだと私も教えてもらいました」

「はい……」

病室のドアを開けて湊と奏子と——奏子と同じ制服を着た金髪の女の子が入ってきた。

湊と奏子以外で初めてちゃんとはつきり顔と声と言葉がわかる。

「あ、お兄ちゃん驚いた顔してる……？ どうしたんだらう」

「さあ……」

今の自分は驚いた顔をしているのだろうか。そこどころも自分でもよくわからないがそう言われているのならそうだろう。つまり、これが『驚く』という感情なのだろうか。

……よく、わからない。

そもそも、感情というものは言語化できるものではないのではなからうか。

「！ アイギスの方を、見てる……？」

「わたし、ですか？ ですが優希さんはいま、湊さんと奏子さん以外を認識できない筈では？ 美鶴さんでさえ認識できなかったというのにどういふことなのでしょう」

自分でもよくわからない。ただ、彼女の名前はアイギスというらしい。青い目に金髪という装いは帰国子女だからなのだろうか。それとも、留学生か。

「ね、お兄ちゃん。アイギスのこと、わかるの？」

わかる、というのが視えているもしくは認識できているという意味なら自分は彼女の事が判っている。

頷けば、奏子と湊、そしてアイギスと呼ばれた女の子が目を見開いた。しかしすぐに表情が入ってきた時のものに戻す……どころかアイギスは少し落ち込んだような顔になってしまった。湊と奏子以外で顔がちゃんと認識できる人が初めてだったのでこちらとしても（恐らく）驚いて見つめたのはダメだったのだろうか。

「優希さん、あの日は申し訳ありませんでした。たとえ幾月に操られていたとしてもわたしは……湊さんと奏子さん、そして優希さんを守る

ことが大切なのに」

突然謝られたが意味が解らない。あの日、というのはなんなのか。養母（だと言われた顔の見えない誰か）に買って来てもらったスケッチブックに三色ボールペンのどれかよくわからない色で文字をゆっくりと書いてそれを見せる。

「自分にはわからない。幾月という人は誰なのか。あなたが誰なのか」

「っ……」

彼女が目を見開いた。違う、そんな顔をさせたかったわけじゃない。

ページを裏返して文字を書き直す。

「あなたの顔と声がちゃんと認識できているだけであってあなたに関する記憶は無い。なのでわからない」

「記憶が、ない……」

さらに落ち込ませてしまったようだ。暗い顔で下を向いたアイギスが黙り込んでしまう。

「優希、もしかして……僕らのことも……覚えてないとか……」

言葉を最後まで聞かずに頷く。正直に言えば覚えていない。

「自分は2人の兄である」という情報しかないのだ。思い出そうという努力はしている。が、そんな簡単にうまくいくはずもなく。ショックを受けたような顔をさせてしまうのは申し訳ないが下手に嘘をついて隠すわけにもいかないだろう。

再びボールペンを手に取ってベッドについている机の上で文字をガリガリのろのろと書く。3人は丁寧にも待っていてくれるようだ。

「自分が2人の兄だという事実以外何も覚えていない。思い出そうとはしているが上手くいっていない。なのでとにかく説明と情報が欲しい」

「……」

「……」

湊と奏子が無言で顔を見合わせる。

恐らく、こちらが記憶喪失だということに戸惑っているのだろう。仕方ない。それはそうと、アイギスまで黙ってしまうというのは余程言い難いことなんだろうか。

「こちらのことは気にしなくていい。何を言われても今は特に何も感じないのでそういう事があったのだと受け止めるだけ」

時間はかかったがそうスケッチブックに書いてみせれば、さらに複雑そうな顔になった。何故なのだろうか。こちらとしては遠慮しなくていい、という意味で書いたつもりが却って彼らを困らせている。

なぜそんな顔をしているのか、訊いた方がいいのだろうか。自分には、わからないから。

理由がわからなければ対処のしようがないから。

「どうする、湊？ お兄ちゃんはある程度書いてるけど…」
「どうするって…何も感じない、の範囲によるでしょ…」

ひそひそと話し合いをしているようだがちゃんと聞こえている。困らせてしまうことになって少なからず悪いな、という思いが湧くがそれが顔と口を動かすほどのものにはならない。

「あの、何も感じない、というのは『悲しい』も『嬉しい』も、何もかもですか？」

アイギスの言葉に頷く。

かつての自分にされたあの所業を見ても何も思わなかったのだ。心を動かされなかったのだ。

もしかしたら自分の体験だったせいかもしれないが、そんなに悪いことなのだろうか。

わからないことだらけで、なにひとつ答えが出ない。

「自分にはわからない。幾月という人は誰なのか。あなたが誰なのか」

「っ…」

兄の見舞いに来た奏子と湊は、優希に謝ったアイギスに向けられたその言葉にアイギス自身が目を見開いたのをはつきりと見た。否、それだけではない。アイギスが悲しそうな顔になったのを見た優希は無表情な顔を動かすことなく再びスケッチブックに向かい、ページを

裏返すと新しい文字を書き始めた。そして書き終わるとそれを見せる。

「あなたの顔と声がちゃんと認識できているだけであってあなたに関する記憶は無い。なのでわからない」

「記憶が、ない…」

アイギスが明らかに落ち込む。

湊はアイギスがこうしてこれまでの12月以降のような感情の発露を行うような行動が増えているような違和感を感じていた。感情の発露自体は喜ばしいことだ。というより、アイギスには元から感情があるのだ。なのでどちらかといえば人間性の獲得といえいいのか。

それが『前回』以前より早い気がするのだ。未だアイギスの精神を構成するものの殆どがこれまでのアイギスのままだが、明らかに表情豊かになりつつある。

そしてそれが無表情になりアイギスよりロボットらしくなった兄との対比のようにどうも思えてならない。

まるで、兄が人間性を失って無機物にでもなってしまったとでもいうのか。そんなことはない。

兄の身体は柔らかく脆い肉のままだ。機械ではない。

そうやって思考していた湊だったが、ふ、とあることに気がつく。文字であろうともこうして一応会話のできる兄が今までこちらに何の会話の切り出しも行わなかったことに。

兄の性格が元のままで自分たちの兄という事を自覚して記憶もあるなら「自分はどこまで覚えているのか不安だから確認してほしい」くらいのことは言わ^書ないだろうか。

それ以外の話題すらも出さず、首を横に振るか頷くことしかしなかったというのは、まさか。嫌な予想が浮かぶ。

「優希、もしかして…僕らのことも…覚えてないとか…」

最後まで言葉を聞くことなく、優希が頷いた。

そのことに今度は湊と奏子が青ざめる番だった。

「自分が2人の兄だという事実以外何も覚えていない。思い出そう

とはしているが上手くいっていない。なのでとにかく説明と情報が欲しい」

「……」

湊と奏子は書かれた文字に青ざめたまま顔を見合わせることもしかできなかった。

誘拐されて惨い実験の被害に遭い、三上家で再会した時でさえふたりの事は忘れなかったと言っていて確かに忘れていなかった兄がここに来て何もかも忘れてしまっている。

その事実にも、あの男が兄にしたことがどれだけあの時の兄にとってどれだけ大きなダメージを与えたのか、改めて思い知らされた気分だった。

本当に全て吹き飛んでしまっている。まさか、目を覚ました時に自分の名前すらもわからなかったのではというさらに嫌な予想が浮かんだがこれを聞いてしまえば耐え切れそうになかったので湊は出かけた言葉を呑み込んで考える。

本当に、全て教えていいのだろうか。

本当に、あの衝撃的な事実を伝えてもいいのだろうか。

本当に、これからの戦いにこんな兄を巻き込んでいいのだろうか。

何もかもを忘れているというのなら兄にはこのまま自分たちの帰りを待ってもらうだけは駄目なのだろうか。

そうすれば、自分は死んでも兄は死なない。死ぬことが無い。

ぐるぐると、なんとか優希を巻き込まない方向へもつていかなければと思っていた湊のそれが、兄が再び提示したスケッチブックの文字にかき消される。

「こちらのごことは気にしなくていい。何を言われても今は特に何も感じない。そういう事があったのだと受け止めるだけ」

こうなってしまった兄はなぜか妙に聴かった。

まるで、今まではわざと知らないフリや人の話を聞かないふりをしていたのではないかと思うくらい、情けなくも優しいいつもの兄ではなかった。

そもそも困ったように笑って眉を下げることも無ければ、半ば口癖のようになつた「大丈夫」も「ごめんね」も発することが無いのだ。直接的に、遠慮も何もなく必要なことに向かつて突き進んでいるような、そんな印象を抱いた。そして無表情であるのにどこか焦っているように見えるのも気のせいではないのだろう。

あれだけ表情豊かだった兄が、こんな風になつてしまったことに痛み心と悲しむ心は湊にはあつた。これは、事故直後の無表情になつたと言われた自分よりも酷い。そう自分を柵に上げながら湊はそう思つた。

「どうする、湊？ お兄ちゃんはある程度書いてるけど…」

「どうするって…何も感じない、の範囲によるでしょ…」

顔を見合せて相談し合う。

はつきり言つて『何も感じない』の範囲がどれほどなのか、湊にはわからないため教えることに抵抗があつた。

「あの、何も感じない、というのは『悲しい』も『嬉しい』も、何もかもですか？」

おずおずとそう訊いたアイギスに躊躇いなく即座に頷いた兄を見て、湊は思わず表情を歪めた。

『『悲しい』も『嬉しい』も、何もかも感じない』。

それはどう考えても兄の心が壊れている証拠に違いない。なぜもっと早くそのことに気がつかなかつたのか。言われてみれば、違和感はいくつかあつたのだ。

まずは食事。以前の兄なら僅かでも頬を緩ませていたその行為を、ひたすら黙々と無表情で作業を行うようにしていたのがおかしい。

そして、上手く具を箸で掴めていなかった事にも違和感がある。ペンを持つ手は別に震えていなければ緩いというわけでもない。箸も綺麗に持っていた。だというのに出された病院食のおかずや汁物の中の具をうまくつかめていないようだったのだ。そこにそれがあるというのがよくわかつていないようなそんな感じだった。味についても奏子が聞いた「おいしい？」という言葉に頷いただけだ。今のようにならなくてスケットブックに文字を書くことはしていない。

その次に、湊や奏子の言葉やいつものやりとりに笑うことも困ったような顔もすることなくただただ観察するように無表情に見つめていただけというのも違和感といえれば違和感だっただろう。

昨日、兄の傍からあまり離れてはいなかったがそれがわからなかったのは、あくまでも体調が悪いせいだと思っていたからだ。まだ体調が悪く、夢見心地でうつらうつらしているのだと。だから誰も認識できていなかったのだと。言葉も喋れない分、ただただ純粹にそう思った返事の為に頷いているだけだと。

だが、得られた情報から考えると兄は深夜はともかく昨日ちゃんと朝起きてからはある意味で素面または正気の状態でも感じていないので言われたことに適当に頷いているだけだったというわけだ。

正気なのに、他の人間の事が認識できていなかった。何も感じていなかった。感情の動きが無かった。

湊は頭が痛くなってきた。恐らく、隣にいる奏子も同じ答えにたどり着いて内心で頭を抱えているに違いない。

だから園村麻希は白旗をあげて「元気になり次第退院させて、療養あのカウンセラーしつついろんなことに触れさせてあげてください」と自分たちや養父母に言ったのか。

「…優希、今の自分の状態で答えられる範囲でいいからまずは僕らの質問に答えてくれないかな。それからじゃないと何も教えられない」そう湊が言えば、小さくこくりと頷いた兄はスケッチブックとペンを持って質問されるのを待った。

——結果、分かったのは

・今の自分は優希という名前であること。前の名前？はアリサトナギサ（漢字はわからなかった）ということ。

・何らかの実験を受けて記憶を失った幼少期があったという情報だけは持っている（思い出した？らしい）

・上記の記憶を思い出し？ても何の感情も浮かばなかった。他のものごとに対してもあまり何も感じない。感情とは何か。

・声を出す方法を忘れた。どうやってだせばいいのか。

・食事に関しては匂いも味もしないし見た目もほとんどわかっ

ない。食べなければいけない雰囲気を感じたので食べただけ。

・いまのところ湊と奏子、アイギス以外の人間が声も顔も姿もすべてぼやけて一緒に見える。匂いも同じ。

・なので認識できていない人に話しかけられてもその内容がわからないので答えようがない。

・勉強に関することや、一般知識はある。が、自分が義務教育中なのかフリーターなのか高校生なのか大学生なのか、社会人なのか、立場が全く分からない。

・ただ、2人の兄だという情報と2人を救わなくてはならないという情報しか持っていない。何から救うのかは不明。なるべく早く知りたいので早く思い出したい。

・影時間？ ペルソナ？ わからない。教えてほしい。

という事だった。

あまりの有様に湊は再び頭を抱えた。ここが病院ではなく裏路地あたりなら思わず叫びたくなってしまいう情報たちの羅列だった。

これは全てを教える教えないのラインですらない。

日常生活に問題は無いと言われていたがコミュニケーションに必要な能力が壊滅している。そして最後からふたつ目の『2人を救わなくてはならない』という情報。これが今の兄を突き動かし、焦らせている原因らしい。さらに深く訊けば、2人がいないときは身体の動きが酷く重くなり、どこか遠くに行ってしまうそうだと感じて不安になるのだという。

完全に感情を失っているわけではなさそうだが激情や喜びといった発揮するのにパワーがいる感情はあまり感じないらしい。

紙に書かれている受け答えだけで、狂っているようには見えないのにその内容はとんでもないことのカミングアウトという事実。

そのことに、本当に全て教えたとして兄がすぐに記憶を取り戻せるとは思えなかった。

以前の兄より強情さがなくなっていて素直になんでも答えてはくれるが、それが尚更違和感を生む。

まるで今までの兄が死んで、この兄に替わってしまったようにすら

思えてしまう。中身だけ、別人に挿げ替えられてしまったような、そんな感情だ。

だがそんなことを思ってしまうのはこうして頑張つて思い出そうと、元に戻ろうと格闘している兄に失礼なのではないかという感情が鎌首をもたげる。

兄が無理をせず素直になる事は喜ばしい事であるのになぜか湊は喜べない。

「んゝ…湊、まずは名前とか、教えても大丈夫なことからお兄ちゃんに教えよ？ とにかく漢字で名前書けるようになって損はないし！」

いち早く復活した奏子がパイプ椅子を引っ張つてベッドの横で組み立て座る。

奏子の強いところはこういう精神ダメージからの復活が早いところだ。湊よりも切り替えが早いというべきか。

「わたしも、力不足ですが参加させていただきたく」

アイギスも横に並ぶ。その様子に湊は観念してはあ、と溜息を吐いた。

気になる事はたくさんある。知りたいこともたくさんある。だが、今はまだすぐに答えを出すときではないのだろう。そもそもそれを聞くべき相手が何も覚えていないのだから。

一切表情の変わることがない優希と和気あいあいとまではいえないがそれなりに穏やかな勉強会が夕食の時間になるまで開かれることとなった。

夜

寂れた教会にまばらに人が集まっている。

その壇上に上がったのはサングラスをつけたひとりの神父だった。

「死の主たるニユクスは人であろうとも人に非ずとも、貴賤に関係なく遍く全ての存在に救済を与える。そしてそのニユクスの代弁者た

る我が教主の言葉を聴き、予言の通りに共に歩めば痛みも苦しむこともなく救済を得られるだろう」

演説するその男の横に、暗い色のローブを被り、素肌をほとんど晒していない存在が紫色の座布団の上で正座をして静かに座っている。

男か女かわからないその存在がそこにいるだけだというのに尋常ではない存在感と圧があるのだ。常人とは一線を画したその気配に、神々しさすら感じられその場にいた人間は神父の演説を聞きながら食い入る様に見つめることしかできない。

「救済が欲しくば『滅び』を求めよ。これが教主のお言葉である。親兄弟、友人、隣人、恋人、伴侶、子供、親戚、同僚。我々は思いつく限りの人々にこの善き言葉を伝えるべきである。さすればその伝えられた者も救済され、至上の救いを得られるだろう」

神父の言葉に、教主と称された人物のローブから辛うじて見える口元が綺麗に弧を描いた。

美しい女神のほほえみとも取れるような、はたまた艶めかしい娼婦の笑みとも取れるようなその無言の妖艶な笑みは一言も声を発していないというのにまるでその場にいた人々の思考を侵蝕するようにその精神を蝕み深く食らいついった。

——『滅び』を願わなければいけない。求めないといけない。

その刷り込みは、冷やかして来ていた筈の大してこの演説に興味の無かった、特に日常的に死も滅^救びも求めていない普通の人間の心でさえ、じわじわと毒が徐々に染み込んでいくように染みていった。

あれは毒蛇だ、と感ずることが出来たのはいったい何人いたのだろうか。そう感じたとしてもその毒牙から逃れられたのは違和感を感じた人間の中に果たして何人いたというのか。

逃げるなら、演説が始まる前に逃げるべきであった。教主と呼ばれる存在と、神父が現れる前に出るべきであった。

否、もし出ようとしても既にこのカルト宗教に依存しきっている終末思想の信者に「良い話だから是非聞いて言ってくれ」「途中で出ていくなんてとんでもない」と囲まれ引き留められ出ることには叶わなかっただろう。

この教会に興味本位であつても入った時点で既に「取り込み」は終了していたのだ。

しかし神父も教主と呼ばれた存在も実のところなにも強制はしていない。

『救済が欲しくば求めればいい』。

ただそれだけだ。ただし、それを選ぶか選ばないかは本人が決めること。例え同調圧力であろうがなんだろうが、最後に選択するのは自分なのだ、というスタンスである。

圧力をかけ、洗脳するのは神父でも教主でもない。あくまで、その思想に同意している信者というひとりひとり人間だ。教主に逃られない圧があると、神々しきがあると個人で勝手に感じているだけだ。心が強ければそれをなんてことないと突っぱねられるだろう。だが、無気力症候群の患者が増え、事故や事件、自殺が多発しただした最近の世で、そこまで強い心をもっている人間はそもそもこんなところに来ない。

素質があるから、引き寄せられるような心の弱さがあるからこんなところに来てしまうのだ。

心のどこかで神仏に縋りたいから、救いを求めるから、こんなカルト宗教の集会に来ようと思ってしまうのだ。

元から、人々の心に『不安の種』は植え付けられていた。それが芽吹くかどうかは本人次第だ。

このカルト宗教——「ニユクス教」はそのきつかけを与えているに過ぎない。

ただ、それだけだった。

11/9 (月) 午前

黄色いマフラーにチャームポイントの泣き黒子。そしてオールバックにされた黒髪と青い瞳。制服の上着を着ずにブラウスにサスペンダーだけを付けた教室に入ってきたその人物を見た瞬間、湊は珍

しくあんぐりと口を開けた。それはもう、あんぐりと。鉄仮面の崩壊も辞さないくらいに。

「はい、今日からまたまた、2年F組に新しい仲間が加わります。もう3人目よ？ ハットトリックっていうの、コレ？」

担任である鳥海の言葉に教室が静かになる。が、湊の思考はそんなことは無く嵐の海のように荒れ狂っていた。なんで、どうしてこいつがいまここにいるんだ、と。

「……早く、自己紹介してよ」

空気がしんとしたので困ったように言う鳥海の言葉に急かされ、
「転校生」が自己紹介を始める。

「望月綾時もちづきりょうじっていいいます。わからないこと、優しく教えてくれると嬉しいな」

兄に似た物腰柔らかい口調でそう自己紹介したスケコマシ——ではなく綾時に湊は今度こそ現実で頭を抱えた。きやいきやいと行き交う女子の黄色い声なんて聞こえない。聞こえないったら聞こえない。

「…よろしくね」

ちらりと、綾時が湊の方を見てウインクをしたのをしっかりと確認した湊は、さらに深く頭を抱えた。「アレは確実に『ファルロス』だ」と確信したのとんでもない嵐の予感に胃まで痛くなってくる。こう、キリキリと。

「彼は、ご両親のお仕事の事情で、海外生活が長かったの。そういうご家庭なので、日本の習慣に慣れてないところもあるそうです。みんな、校則以外の事でも、親切に教えてあげてね。…さて、貴方の席だけど、そうねえ…」

鳥海は教室を見渡すと丁度左から2番目の列の一番前の席が空いていることに気がつく。面倒なのでそこに誰かが居るというのも考えずにそこでもいいか、と決めた。なんとも適当である。

「そこ空いてるわね。左から2列目の、一番前」

「！」

その席の主に覚えがあるらしいゆかりが鳥海を制止しようと口を

開いた。

「あの…ですから先生、その席は、単なるサボリ…」

「そういうのは、居ないのと同じって言ったでしょ？ 世の中は椅子取りゲームなの。みんなも気をつけてね」

ゆかりの奮闘虚しくアイギスの時と同じようにサボリのクラスメイトの席が転校生の物となってしまう。そう言えば、今年の兄は病気やケガなどで休みがちだがまさか3年にも転校生が居て席が取られやしてないだろうな…？という謎の不安が襲ってくる。受験シーズンにもなつて転校してくる人間は滅多にいないだろうから杞憂か、とすぐに心を落ち着けると、綾時を見る。

「湊くん、放課後ちよつといいかな？」

なぜかアイギスではなく湊に直接声をかけてきた綾時に（なんでこのタイミングで声をかけるんだ）と内心で憤りつつ頷き返した。

「湊さん、お知り合いですか？」

「…まあ、うん」

いつもと変わらないアイギスの対応に更に湊はどういうことだと頭にはてなを浮かべる。いつもなら「貴方はダメです」くらい言いそうなものなのに、何の反応もない。

「有里くんさ…帰国子女の転校生と知り合いつてどういう関係なの？」

「幼なじみ…かな」

「へーそうなんだ。以外」

適当に思いついた間柄で答えたが間違いではないだろう。実際10年前からずっと一緒なのだ。ある意味、共に過ごした時間は10年超えているかもしれないが。

そうやって適当にはぐらかしつつ、放課後に向けて湊はげんなりした。一体、どんなことを言われるというのか。あの綾時には確実にこれまでの記憶がある、という謎の確信が湊にはあった。

放課後

3—Dの教室で、席を立とうとした美鶴の前にひとりの男子が行く手を阻んだ。

否、阻んだというよりかは用があつて訪ねてきたというべきか。綺麗に切りそろえられた黒い髪に、丸い目。3年生だというのに幼い顔つきの、美鶴と同じくらいの背丈の気弱そうなその男子のことを美鶴はとっさに思い出せなかった。クラスメイトであるはずなのに、名前が出てこないのだ。

「桐条さん、三上くんが体調を崩して休んでるって聞いて…その…」

男子にしては高いその声に、美鶴は頷いた。

「ああ。きみは…」

「さ、朔間です！ …僕、影が薄いんでよく名前を忘れられてる気が…じゃなくて三上くんの事です」

男子——朔間に名前を告げられ、そこで美鶴はようやく目の前の生徒の名前を思い出す。美鶴は生徒会長としてあるまじきことだ、と2度と忘れないように覚えると、話の続きを待つ。

「休む前の日、すごく体調が悪そうで…それで心配で…その前も何だか体調が悪そうだったので大丈夫かな、と。聞けば寮暮ららしいのでもしよければお見舞いに行かせてほしいな…なんて、アハハ…本音を言うと先生に三上くんへの届物を頼まれたのもあるんです」

なんだ、そのことか。と美鶴は苦笑した朔間に納得する。それなら寮を訪ねてもらって構わない。だが、今優希が寮にいないことを伝えなくては、と美鶴は口を開いた。

「済まないが、三上が寮に居るのは明日からなんだ。今日の夕方までは病院でな」

「そ…そんなに悪かったんですか…？ だって、あの時は…」

さつと朔間の顔が青ざめた。

よほどショックだったのだろう。美鶴からみてこの朔間という生徒が優希と仲良くしているところを見た事は無かったが、この気弱そうな外見からして心はとてもやさしいのかもしれない。それか、美鶴が見た事が無いだけで校外で交流があったとか。ならば知る権利は

あるだろう、と美鶴は言葉を選んで再び口を開いた。

「ああ、一時危篤状態に陥って…」

「え…あ…き、危篤…?」

青ざめた顔が青いを通り越して血の気が引いて真っ白になったような気がした。そしてそのまま朔間はへなへなと床に座り込んでしまふ。

「お、おい、大丈夫か!？」

「あ、はい…アハハ…すみません…僕、ちよつと驚いちゃって…」

「すまない…シヨックを与えようと思ったわけではない。こちらの考えが至らなかつた」

慌てて手を伸ばせばそれに掴まって朔間は立ち上がった。

ぬかつた。言葉を選んだつもりでもこの心優しい生徒には強すぎたらしい。更に言葉を選んだ方が良かったのか、それとも「今は体調も回復している」と伝えた方が良いのか。美鶴が考え込む。

「すみません、僕…あまりこういう話題に慣れてなくて…」

「ごちらこそ、本当にすまなかつた。だが安心してくれ。三上はしばらくは学校には復帰しないが体調が整うまでの間だ。じきにまた通うようにはなるだろう」

そう確証のない予測を伝えればはにかんで「よかつた…」と嬉しそうに呟いた朔間にどことなく、優希に似た雰囲気を感じた。類は友を呼ぶとでもいうのだろうか。

「じゃあ…明日の放課後に先生から頼まれた課題とかプリントとか持っていけますね」

「わかつた。寮の者にもそう伝えておこう」

そう円満に会話を終え、美鶴は生徒会室に行くために鞆を持って今度こそ立ち上がった。

屋上に呼び出された湊は両手をズボンのポケットにツツコಂಡままそこで待っていた綾時の背に話しかける。

「今回はナンパしまくらないんだな、綾時」

「やだなあ、僕が毎回ナンパばかりしてると思わないでよ、湊」

「湊くん呼びでも全然かまわないし女子とみたら誰彼構わず連絡先教えているのはいつもじゃん」

「うーん、これは手厳しいね」

刺々しい湊の声と言葉にくるりと振り返りやれやれと肩を竦めた綾時は本題に入るために口を開いた。

「湊が聞きたいのはどうして僕がいまここにいるか、だよな？」

その言葉に湊がこくりと頷く。

「もちろん、死の宣告者としての記憶を封じて束の間の日常を味わいに——ではないんだよね…はつきり言っただうして僕がここにいるのか僕にもわからないんだ」

「どうせそんなことだろうと思った。最初から期待してない」

「酷いなあ」

しよぼん、と肩を落とした様子の綾時を湊が真顔で受け止める。

そもそも、本来のデスであるはずのファルロスが死の宣告者になれずに湊と奏子から分離したとなればその役目はファルロスもとい綾時のものではないし記憶を消して日常を謳歌する必要もないのだ。

「無理やり2人から引き剥がされる感覚はあつたんだけど、それが何者によるかはわからないし僕はただの人間みたいになってるし、わからないことだらけだよ」

「それっていつ？」

「…4日の朝かな。気がついたらマンションの一室で目が覚めて、帰国子女って扱いになってた」

いつもなら、綾時ファルロス自身が死の宣告者として封印を解き、別れを告げるタイミングだ。そこは変わらないのか、と眉を顰めた湊に綾時が困ったように笑う。

「いろいろズレてきてる。何が起こるかなんてもう誰にもわからない」

「6月くらいからずっとそうだけどね」

「それはそうだね。ところで、お兄さんの調子はどう？」

何の気もなしに湊に訊いたのだろうかその問いに湊の顔が曇る。そしてその顔の曇った湊を見て、綾時の顔も曇った。

「きみがそんな顔をするってことは…あまり、良くないのかい？」

「…うん。今日まで病院にいる予定」

「病院に？ …なにかあった？」

湊は綾時に幾月が語ったことも含めてこれまでのことを説明した。するとどんどん綾時の顔が険しくなったかと思えば青ざめる。

「…：僕以外の死の宣告者が目覚めて…ニユクスの招来を告げただね。これまでより早く、そして余裕がない。結論を決めるのが12月2日にだなんて彼は何を焦っているんだろう。僕と同じことをするなら、12月31日ではダメだったのかな…」

青ざめた顔のまま、綾時は考え込む。確かに些か早い気がしなくもない。考える時間自体は1か月間とかつての綾時が提示したものと変わらない。だが、この時期に言いだして1月31日にニユクスが来るのなら、決断をするのは12月31日でもいいはずだ。

「僕の場合はきみか奏子ちゃんに殺されることによつて影時間に関する記憶を消すことが出来たけど…じゃあ、湊の言う、〃ヒュプノス〃の場合は？ 誰がその役目を担うんだろう」

もし記憶を消すとして誰が死の宣告者となった〃ヒュプノス〃を殺して記憶を消すというのか。封印されていたつながらで湊と奏子を選ばれたというのなら、封印されていたわけではないが長い間その身に宿していた人物が該当するだろう。つまり、

「優希…？」

「どうだろう…動けそうにない彼を指定するかな…ペルソナも砕け散っちゃったんだろ？ あ、でも砕けたところを見たのは複数あるうちの1体だけなのか。もしかすれば他の2体は無事かもしれないね。それに彼自身が僕みたいに力の一端をお兄さんの中に残してるかもしれないし」

「……」

確かにそれはそうだ。

ペルソナ能力さえあれば記憶を消すために死の宣告者を殺すこと

はできる。

「……めん、僕も10年前以前の事を思い出せばいいけどいまいち分からないみたいだ。それでも、お兄さんの見舞いにくらいは行かせてよ」

「うるさくしなきゃいいよ。というか今日の夜には寮にいるから来るなら明日の放課後にして。優希も他のみんなもたぶん今日はごたごたしてると思うし」

皆が今の兄を見てどうなるだろうか、と湊は不安でもあるのだ。

絶対に良い雰囲気にはならない。皆、暗い顔になるか腫れ物を触るように扱うだろう。正直、あの状態の優希は優希自身コミュニケーションを取れずに困っている様子であるし養父母でさえ扱いあぐねているのだ。誰が悪いというわけでもない。

しいて悪者をあげるとするなら幾月くらいのものだ。

ああ、本当にままならないと湊は目を伏せた。

接続 (11 / 9)

11 / 9 (月) 夕方

もう一度すべての検査を終え、少し性急のように思える退院の目処がたった優希を養母であるヒロコが駐車場まで手を引いて歩くが、ヒロコの事を未だ認識していないようで無表情に手を引かれるまま歩いている。

その足取りは先日と比べてしつかりとはしているが視線は相も変わらず顔に合うことは無い。その表情を見ることもしなければ、話す事もしない。

養母であるヒロコは本当にこんな状態の息子を学生寮に返してもいいのだろうかと疑問に思うが病院にいても弟妹以外の人間を認識することもできないのなら、体力が回復してもひたすらベッドの上で過ごすよりは良いのではないかという感情も湧いてくる。

自分たち夫婦も、いつまでも港区にいるわけにはいかないのだ。夫であるハジメも有休をとってはいるがそれとつとというわけにはいかない。

そして湊と奏子ともうひとりの女の子しか認識できていないというのが本当なら、その3人にいつまでも病院に通い続けて貰うわけにも休んでもらうわけにもいかないのだ。彼らには彼らの学業なりなんなりがある。自分の事で弟と妹や他人を煩わせるのはかつての優希が一番嫌っていたことではなかったか、と思いついてヒロコはわずかに眉を顰めた。

夫であるハジメが病院の前まで持ってきた車に乗り、寮までの道を行く。

車内に会話は無い。暗いわけでないが明るいわけでもなかった。

不意に、何を思い付いたのか後部座席にヒロコと共に座っているぼんやりとした優希が横を向いてヒロコの頬に触れた。まるでそれは形を確かめるように酷く優しい手つきだ。

「優希?.. どうかしたの?..?」

「.....」

その行動を止めることなくヒロコは問うてみるが、答えが返って来
ることは無い。恐らくこの言葉も理解していないのだろう。

そして手が離れ、しばらく迷うように彷徨った後にヒロコの頭に乗
せられた。

「……、……」

僅かに目を細めた優希の手が髪に触れ、撫でるように動かされる。
奏子や湊と勘違いしているわけではなさそうな息子の行動をヒロ
コは更に不思議がった。

「……」

はくはくと、優希は口を動かして何かを喋ろうとして声が出ずにま
た考え込む。その頬を、優希がしたようにヒロコは包んだ。

「無理しなくていいのよ、ゆつくり。ゆつくりでいいの。私たちはい
つまでも待つているから」

その言葉が聞こえたのか、僅かに優希の目が見開かれた。そして視
線がぼつちり合ったような気がしてヒロコも目を丸くする。

ゆつくりと、優希の口がはつきり一言一句、言葉を伝えるように開
かれる。

「か」、「あ」、「さ」、「ん」と。

今度はヒロコが目を見開く番だった。認識できない筈じゃなかつ
たのか、と驚いていると優希がメモ帳を取り出してそれに文字を書き
始めた。

「さわったらなんとなくわかった」

エスパーのようなそれに、ヒロコは再び目をぱちくりとさせる。そ
して、口を開いた。

「私の言葉も、分かる?」

小さく、こくりと頷いた優希は今度こそしっかりとヒロコと視線を
合わせている。

まさか、顔と頭を触ることによって認識できるようになるとは誰も
思わなかっただろう。

入院中、ヒロコたちも優希も触れていたところはだいたい手だ。顔
や頭に触れることが無ければ顔や頭があるか認識しているかすらあ

やふやだったのだ。

つまり、これなら回復が早まるのではないだろうか、とヒロコが思うも、誰構わず顔を触る訳にもいかない。

「寮についたらハジメさん——お父さんの事も触ってみてくれないかしら？　もしかしたら、わかるかもしれないわ」

とにかくまずは夫の顔に触れさせてみよう、とヒロコは思ったのだった。

そしてその言葉にすっかり頷いたのをバックミラー越しに確認したハジメが少しうれし気な顔をしていたのをヒロコは見逃さなかった。

そして寮の駐車場に車を止め、入院の際に使っていたポストンを持って優希が車から降りる。

ヒロコもその後が続くように降りれば車のカギを閉めたハジメも降りてきた。

そして並んで寮の玄関前まで歩くと優希が唐突に荷物を地面に置いて手を出したりひっこめたりしていた。その様子にハジメが頭を下げれば、ヒロコが優希の手を取ってハジメの頬に添えさせる。

「……………」

「…どうだ？」

しばらく確かめるように顔を触った後、頭へと手を乗せると、今度こそハジメと優希の視線がはつきりと交わった。

頷いた優希にハジメが微笑む。顔を触ってそれがだれか分かったというのなら、これは確かに有効だという事が分かった。

ハジメの大きな手が、お返しとばかりに優希の頭に乗ればわずかに見開いた目が見つめ返してくる。

「そろそろ入ろう」

「そうね」

ハジメに促され、その言葉が判るようになった優希が荷物を持ち上げ寮内に入る。

ドアを開ければラウンジのテレビの横から白い犬が「わん！」と吠えながら嬉しそうにブンブンと尻尾を振って優希に近寄って来る。

優希はそれを屈んで迎えると、触ろうとして——やめた。その手と視線はうろうろと彷徨っている。

そんな優希をわかつているのかいないのか、白い犬——コロマルが勢いよく飛びかかった。

「ワンッ！」

「!？」

押し倒されてころりと床に転がると、そのままコロマルにべろべろと顔を舐めまわされる。

目を白黒させてコロマルを受け止めた優希は、おずおずとコロマルに触れてその毛並みを撫でた。

「……あ……ふわ、ふわ……」

無表情が、緩んだ。

そしてそのまま顔を舐めることをやめたコロマルの毛並みにうずめて息を深く吸う。コロマルはそんな優希の首筋を舐める。その行動に、緩んだ顔のまま優希は身体を震わせ口を開いた。

「ぶ、あは……あは……あははははっ！ えへへ……くすぐりたい……！」

大きな声を出して笑った優希にハジメとヒロコは目を見開く。

笑った。声も出た。

恐るべしアニマルセラピー。カウンセラーが言っていた様々なことに触れさせるといっものは間違いではなかったようだ。即効性が効きすぎる気がしないでもないが効果は抜群だ。

べろべろと舐めまわされながらくすぐったそうに身をよじる優希の息が引き攣つて来る。そこでぴたりとコロマルは舐めるのを止め、ぐりぐりと首筋に頭を擦りつけるようにしだした。

「えへっ……えへへ……っ、あはは……っ」

「わん！」

無表情がもうでろっでろに溶けてなすがままにされている優希は起き上がれそうにない。

白い犬と動けない少年の、寿司を逆さまにしたようなものの出来上がりだ。些か優希がコロマルに対して大きすぎる気がしないでもな

いが。

「笑い声が聞こえたと思えば…三上…てめえ、退院してき——…ツス」

キッチンの方からエプロンを付けたまま出てきた荒垣が、コロマルに押し倒されている優希を見てからヒロコとハジメを視界に入れて軽く頭を下げた。

「優希の母親の三上ヒロコです。ええと…同じ寮の方かしら？ 責任者の方とか大人の何とかいらっしやらないのかしら」

「あいつらの…？ ああ、引き取られた先の…まあ…息子さんとは良く…良く？ ……腐れ縁…ですかね。責任者は……あー…いないつスね、たぶん」

珍しく敬語を使う荒垣の事をいつもの優希が見ていれば、「似合わなさすぎ！」と抱腹絶倒ものだっただろうがそんなことは無く。蕩けるような笑顔から無表情に戻った優希がコロマルを抱きかかえながらぼんやりと荒垣の足元を見ている。

荒垣は荒垣で、優希の養父母の来訪という珍事に「奏子娘さんとお付き合ひさせてもらっています」と言うところが頭からすっぽ抜けて珍しくテンパリながらの対応になっている。

1人で入院先から帰らせるなど言語道断レベルなのだが、湊と奏子からも、「明日退院する」としか聞いておらず、まああいつならふらつと帰ってきそうだなという悪い信用でまさか養父母が来るなどとは荒垣は思ってもみなかったのだ。そして、状況がかなり奇妙なことになっているという事も。

「そうなの？ ……じゃあ、貴方に説明したほうがいいわよね…ハジメさんはどう思う？」

「時間は差し迫っている、かといって説明しないわけにもいかない。つまり、手短に、だ」

そう告げるハジメを見て荒垣はこの親にして優希コイツ有りか、と感じた。ふとした雰囲気似通っている。育ての親というのは伊達じゃないらしい。

「ひとつ。今の優希は湊と奏子以外の事を認識できていない。ふた

つ。記憶喪失になっている、らしい。みつつ。数日程は学校を休んで療養に努める。……これくらいか」

「ハジメさん、それじゃ手短過ぎないかしら?」
「むう」

妻に指摘され、ハジメの眉が困ったように顰められる。

この男、本当に必要最低限しか言わない。それを補うように妻であるヒロコが口を開いた。

「ごめんなさいね…ハジメさんはこういうこと得意じゃなくて…」

「いや、何となくわかったんで後は任せてください。それだけわかりや十分です」

謝るヒロコに対し荒垣は首を横に振った。そんな荒垣を見て、ハジメが「ほらな」と言いたげな顔をするがヒロコに「調子に乗っちゃダメよ」と窘められて意気消沈している。

「それじゃあ…私たちは帰るけれど、優希や奏子ちゃん、湊くんのことをよろしくお願いします」

「っす」

頭を下げた出ていった夫妻と同じく頭を下げていた荒垣は、2人が見えなくなると後ろを振り向いた。

相変わらずコロマルに乗られたまま床に転がった優希が無表情でぼんやりしている。いや、半分寝かけているのか瞼が下がりにかけていた。荒垣は腰を下ろして声をかける。

「そんなトコで寝てっとカゼひくぞ。せめて部屋に帰りやがれ」

「……」

反応が無い。

なるほどな、あの養父が言っていたのはこういうことなのか、と荒垣は合点がいった。だが、コロマルの事はきちんと抱きしめているしどうしたものかと悩んでいけば、むくりと優希が起き上がってコロマルを床に置いて立ち上がった。

「……………」

そして両手をあげ、アクリイの威嚇のようなポーズを無表情のままでとる。

否、手がゆらゆらと荒垣の頭の上の高さあたりを彷徨っている。一体何をしようというのか。

「……ふわふわ」

「ふわふわ、だア?」

「わん!」

やっと吐き出された言葉は「ふわふわ」。

全くもって意味が解らない。

コロマルが優希の足のまわりでじやれる。それをしつかりと見た優希はコロマルの頭を撫でた。

「…うん、ふわふわ。……ふわふわ?」

そして荒垣の頭頂部辺りをぼんやりと見て無表情のまま首を傾げてそう呟いた。

「つーかお前、どうしたんだ。もうちったあマトモに喋れねえのか?」

「……」

答えない。

代わりに、ぐつと距離を詰めた優希が無表情のままに何を決心したのかそつと荒垣の頭に触れようとした。瞬間、

「ただいま帰りました。あれ、三上さん、帰ってきてたんですね! ……なにしているんですか?」

天田が玄関を開けて帰って来る。

その声と気配にぴたりと手を止めてひっこめた優希はコロマルを抱きかかえて荒垣から距離をとった。

「? ……どうかしたんですか? ……なんだか三上さん、変じやないですか?」

「俺が聞きてえくらいだ。が、どうやらコイツ、俺らの事を認識できてないらしい」

「えっ!?!」

「ついでに記憶喪失、だとよ」

驚きの声を上げた天田に、荒垣がそう説明すればぎよつとした顔のまま優希の顔を見つめる。

「……そりやそうですね。あんなの、無事でいられ——ふえっ!?!」

暗い顔でそう言いかけた天田の言葉は最後まで発されることは無く。むんず、と僅かに顔より下を見ている視点の合わない優希の手が天田の頬を挟んだ。そしてそのままさわさわと撫で始める。

「み、みかみさっ……も、もう！ なにするんですか!？」

くすぐつたいと身をよじればぴたりと手を止めて首を傾げた優希に、天田はぷりぷりと怒り始めた。それもそうである。突然頬を手で挟まれて撫でられたら誰だって驚くだろう。ただ、如何せん相手が悪かった。今度は天田の頭に手をやると、その柔らかい髪を撫で始める。無表情を緩めて僅かに微笑んだ優希に、天田は何も言えなくなる。

「荒垣さん、ほんとに三上さんどうしちゃったんですかっ!」

「さあな……まあ、暴れられるよかマシだろ」

困ったように荒垣に助けを求めろが、荒垣は素知らぬ顔だ。優希より身長の高い自分は被害にあわないと思っっているのだろう。しかしそうは問屋が卸さない。

「……うん、ふわふわだ」

天田の頭を思う存分撫でまくった優希は荒垣の顔のある辺りを何となく見つめ——荒垣が「あっ」と思う間もなく手を伸ばしてニット帽に触れた。

「……」

さわさわと、ニット帽を触る優希の顔が曇っていく。無表情の顔にあるその眉が訝しむように顰められた。そして発された一言に天田が噴き出す。

「(っ)わ(っ)わ……?」

「ぶっ—」

「ふわふわ」と来て荒垣のニット帽は「(っ)わ(っ)わ」だったらしい。触り心地が気に入らなかつたのか、すぐに真顔に戻って手を離される。そして間髪入れずに荒垣の頬に手を触れて天田の時と同じように撫で始めた。天田の時は気がつかなかったが、荒垣はその触り方がただ撫でるだけにしては少し変わっているような、何かを確かめるような動きをしているような気がしたのだ。

合わないはずの視線が、不意にかち合う。荒垣の顔から手を離れた優希はそのままずっとと荒垣を見た。

それは先ほどまでのぼんやりとした視線ではなく、しっかりと荒垣の目を見たものだった。

はつきりと荒垣を認識しているようなその視線に先ほどと違う印象を抱いて、荒垣は問いかける。

「三上、俺の言う事が判るんなら『はい』つつってみろ」

「……？ ……はい」

少し間が空いたが抑揚のない返事が返って来る。

無視されていなければ言葉に返事もした。そのことが、荒垣の中で先ほどの行動がまるで目の見えない人間が物の形を確かめるように触るものと似ているのではないかという印象を確信に変えた。優希は、顔を触ることですその人間の『形』を確かめていたのだと。

「まさか目が見えない訳じゃ…なさそうだな」

「？」

しっかりと荒垣を見ているし天田の事も見ていたので目が悪いというわけではなさそうだ。荒垣から離れ、屈んでコロマルのにおいをすんすんと嗅いでいた優希は相変わらずその顔に表情は浮かんでいなかったが声をかけられてなんとなく不思議そうに振り向いた。

「おい、一旦部屋に帰るぞ」

詳しいことは本人に後で聞くとして、とりあえず立ち上がらせて荷物を持たせて先を歩く。

階段をちゃんとついてきているのか確認しながら上がれば見るものすべてが珍しいのかキョロキョロとしている。

荒垣とて、あの異常な様子だった優希がなにもないまま無事に帰って来るとは思っていなかった。だからといって、こうなってしまうとかという予想外だった。ずっと意識不明になってしまふのではないかという不安ばかりあったのだ。しかしふたを開けてみれば一度死んだというのに身体の方はピンピンしていそうだ。顔色は相変わらず血の気が無い感じだが前はあったふらつきもない。

「ここがお前の部屋だ。鍵は持ってるか？」

聞けばこくりと頷き「ごそと襟から胸元に手を入れ首紐に引つ付いた寮の鍵を取り出した。前は変なひとつ目の、ヒトデの様なキラのストラップがついていたはずだ。

その様子に（小学生か！）とツツコみたかったが今の優希の状態を考えると小学生どころか幼稚園児レベルかもしれない、と荒垣は思った。幼稚園児みたいに動き回りはしないが些か目を離せない危うい感じだと感じたのだ。

鍵穴に鍵を入れた優希は四苦八苦しながらもなんとか鍵をあけ、30秒ほどでがちやり、と音が鳴って部屋のドアが開いた。

中は倒れる前と何ら変わらないものだった。乱雑にモノが置いてあるというわけでもなく、荒れているわけでもなく。ノートパソコンにゲーム機。小さい本棚。

殺風景でもなんでも無い、ごく普通の部屋だ。この部屋の中なら目を離れたとしても危ないことは無いだろう。

「流石に俺はてめえの部屋の中身までは知らねえから聞くんじゃねえぞ。場所がわかんねえ時は自分で探せよ」

「……」

「あとは――…3階は女子の部屋だからな。基本立ち入り禁止だ。入ったらどやされちまうぞ」

こくり、とまた頷いた優希に「晩飯が出来たら呼ぶからな」と声をかけて荒垣は部屋を出た。

名前を聞くのを忘れた、と思ったのは部屋の説明を受けて彼が部屋を出ていつてからだった。

ここが自分の住んでいる部屋、らしい。部屋の空気を吸い込んでも、嗅ぎ慣れない匂いがするだけだ。何かを思い出すといったこともない。

玄関にいた白い犬にじやられて、笑った勢いで声が出せるようになったのはいいが自分自身にあまりしゃべる気が起きないのか喋れるようになったというのにあまり喋りたいと思わなかった。あとひどく疲れる。

それと、輪郭がぼやけて誰が誰かわからない人でも顔を触ってみれ

ばそこにどうあるのかわかる様に——いや、それが誰なのか判別でき
るようになった。声も同じだ。一体どういう原理なのだろうか。

ただ、突然分かるようになるわけではなく、ぼやけていた輪郭が揺
らいでそこに突然普通の人間がポンと現れるような感じだ。明らか
に普通じゃない、という事は何となく分かる。

ボストンを置いて、ベッドに腰掛けてみる。

「……っ」

頭痛がする。

誰かと、こうやって病院から帰ってきてベッドに腰掛けた事がある
ような——

——まったく、シスターとブラザーのことだけじゃなくボクのこと
まで忘れちゃうだなんて。チミはほんとにダメダメさんだネ。

咄嗟に顔を上げて周りを見回してみるも、だれもない。

声が聞こえた気がした。かつて誰かがこのベッドの上で寝転んで
いたような、既視感というか、そんな感覚を覚えた。自分の覚えてい
ない誰かが、ここにいたのだろうか。そのひとは今、どこにいるのか。
視界の端で緑の光が舞っている。蛍かと思ったが季節外れないま、
それがこんな室内にいないことくらい自分は知っている。

それを目で追えば、光は机の引き出しで自分を待つように止まって
いる。引き出しを開けるといふ事なのだろうか。

立ち上がって引き出しを開ければ中には白いハンカチで丁寧に包
まれた何か金属の棒のようなものが出てきた。わざわざ質のよさそ
うなハンカチで包んであるのだ。よほど大事なもののだろう。

それを手に取れば見えていたはずの光は消えてしまった。代わり
に手に棒の重みが乗る。といっても万年筆程度の重さだ。さほど重
いものでもない。けれど、自分にとってはとても大事で重要なもの
のように感じる。

ガンガンと、頭がちやんと思い出せと信号を発しているかのように
痛む。きつと自分は大事なことを忘れている。そうでなければこん
なに不安な気持ちにはならない。悲しい気持ちには、ならない。

ぼたり、と床に雫が落ちた。

「……？」

片手で頬を撫でれば、自分は泣いていた。なるほど、これが『悲しい』。こんなに胸を引き裂かれるような苦しいものが、悲しいというものなのか。

自分はこの謎の代物に関わることでなにか大事な悲しい出来事があったのだろう。それこそ、脳が思い出せと急かすほどには。

——ふふふ、ユーキおにいちゃん。ワタシたちのこと、わすれちゃったの？　ワタシやおじさんたちのこと、殺したくせに？

今度は少女の鈴を転がすような声が聞こえた。

部屋中を見回しても、誰も——

「……！」

暗くなってきた外を映す窓ガラスに、まるで童話の世界に住んでいるような少女が笑みを浮かべて映っている。

——ね。繋がりにんて、いらなんでしょう？　……アリスはね、おにいちゃんのことならなんでも知ってるのよ。

窓ガラスに映った少女がこちらを見て話しかけてくる。

なんでも。本当なのだろうか。

いまのところ、繋がりは欲しい。手がかりが一つでも得られるならなんでもいい。

まずその時点でこの情報は間違っている。

——嘘よ。おにいちゃんはすぐに繋がりを手放したくなるの。だって、そうしなければいけないから。どこまでいってもおにいちゃんはひとりぼっち。ずっと一緒にいたあの子にまでどこかへ行かれちゃったものね？　でもアリスならずっと一緒にいてあげられるわ！

綺麗な笑みで、アリスが笑う。ずっと一緒に。それはそれは魅力的な提案だ。だが、脳内の妄想では意味がない。

——あら、アリスのことを妄想だっというの？　そうかもしれないわね！　それでもおにいちゃんは求めずにはいられない。ホントは寂しがりやで臆病者だから。繋がりを手放そうとするのにそれに見えて憐れなくらいすがっているもの。

そうなのだろうか。妄想かもしれないと言えばアリスは肯定するが、自分は寂しがりやで臆病者だと嘯う。あれはこちらの足元を見て嘲笑っている。なんとなく、そう思った。

これはたしかになんでも知っているのかもしれない。

——愛してほしいうでしよう？ 認めてほしいうでしよう？ 生きていていいと言つてほしいうでしよう？ アリスなら、おにいちゃんの全てを叶えてあげられるわ。

それが自分の本心だというのか。よくわからないといったところが今の感想だろう。

あまりアリスの言葉に心を動かされないといいか。きっと自分がまともな精神を持つていたのならばぐらぐらと揺れていたのだろう。だが、よくわからない。

魅力的な提案だなどは思うがそれに乗るといふ考えは一切ない。

——……このおにいちゃんはダメね。ちつとも靡いてくれなくておもしろくないもの。前のおにいちゃんの方が遊びがいがあったのしかつたのに。

彼女はなんてひどいことをいうのだろうか。

このペラペラと喋るアリスという存在がなんなのかわからないが、自分の妄想だとしてもかなり辛辣ではないだろうか。

——ねー、だからはやく元のおにいちゃんに戻つてよ。そうじゃないと遊びがいが無いもの。それに、ぼやぼやしているとおにいちゃんの大切なモノ、ぜんぶなくしちゃうよ？ それでもいいの？

それはダメだ。

元の自分、がどういふものなのかわからないが自分が戻れなかつたせいですべて無くすわけにはいかない。

手の中の棒状の物を握り締めれば、自分を励ますようにほんのりと暖かくなつたような気がした。

——なら、ちゃんと思ひ出さなくちゃ。ワタシになにをしたのか。おにいちゃんが何を失つたのか。おにいちゃんが、誰だつたのか。はやくしないとママにおにいちゃん自身がたべられちゃうよ。

ママ？

突然出てきた母親の呼び名に、首を傾げるもそれきり声が聞こえなくなる。まさか、養母^{かあ}さんが？　と思うもそんな感じには見えないし食人はタブーだ。それとも比喩表現としてのたべ…いや、そんなわけはないと強烈に心の端が主張している。ないな。ない。とにかく無いという事にしておきたい。養母さんは無罪だ。

ならばママというのは別の何かを指している…？　クラブとかバーのママだろうか。

「……」

考えてみたがわからない。オカマのママ…という線はありそうでない。

そもそも冗談の可能性もある。怖がらせようとして、考え付いたのが『ママに食べられる』という表現だったり…しないだろうか。いや、ないな。これもない。

訳がわからないので一旦この話題は置いておこうと思う。自分の強迫観念がこんな妄想を生み出した可能性だってあるのだ。やけにべらべら喋っていたのも、いまはあまりしゃべらない反動かもしれない。本当はべらべらと喋りたいとか。

ただ、自分の妄想であるのに金髪青眼の可憐な少女というのは自分のなりたい理想の姿だったりするのだろうか。それはそれでドン引きものである。部屋を調べて女装のためのカツラとか服とか道具が出てきたらどうしよう。下手に処分して記憶が戻った際に捨てなければよかったと嘆いたりしそうなものではある。が、まだ見つからないので早計というものか。

アリスという自分の幻覚の言うことが本当なら、自分はアリスに対し過去に何かをした可能性がある。そしてその際に自分は何かを失った。

否、アリスが最初に言っていたでは無いか。——ワタシを殺したくせに、と。

なら、自分は殺人犯なのか？

少女を殺めて、拳句の果てに記憶を失った？　だから少女の幻覚を見ている？

本当にそうなら、自分は警察に自首すべきなのではないのだろうか。

だから早く思い出せと言っていたのでは無いのだろうか。

「……………」

考える。

もし本当に自分が殺人犯なら、自分のそばに湊と奏子がいるのはよろしくない。それに犯罪者の兄妹として悪い噂がつきかねない。

記憶を失う前の自分はシリアルキラーかサイコパスか何かだったのだろうか。

そのキャビネットを漁ってナイフとか出てきたらどうしよう。

「……………」

もし適当に物を探しているときにそうなたらどうしようもないので確かめるだけ確かめてみよう。

キャビネットを開けて、何となく視線を持って行った場所にそれはあった。革でできた鞆にしまわれた大ぶりなそれは銀色の拳銃らしきものと一緒に置いてある。

(いや、そんなまさか…)

もしかしたら模造品かもしれないし、と鞆から抜いてみれば、それはピカピカと綺麗に輝いている。よく手入れされているな、と思つて指で少し撫でれば指の先が僅かに切れて血が出た。出た血を止血の為にすぐに口で吸えば、特有の鉄臭い味がする。美味しくは無い。食事の味はわからないくせに自分の血の味はわかるのか。最悪だ。

それはともかくナイフは間違いなく本物だ。どうしてこんな危ないものを自分が。やはり自分はシリアルキラーだった？ それとも、キャンプ用のサバイバルナイフだったり…はしないな。キャンプ関連の道具がキャビネットにも他の場所にも一切ない。

これを街中でチラチラ見せつけてナイフペロペロとかしてたんだろうか。嫌すぎる。

部屋を漁ればあさるほど、かつての自分のイメージがどんどん崩壊していく。これは思い出さない方が良いのでは？ という気持ちにもなってくる。

拳銃の方も手に取ってみれば、銃口が塞がれていて模造品だという事がわかる。ナイフに銃。特にナイフは本物なので湊や奏子、あとはニット帽の人に訊くのもはばかられた。

だが、記憶を失う前の自分がとんでもなくヤバイ人間かもしれないというのはなんとなく判明したので最悪の場合は警察に行くことも視野に入れるべきだと思う。

——ハア、チミ：勘違いさんもそこまでくるとどーしようもないネ。もしかして、ボクが隣に居た時からそんな感じだったんスか？

呆れるような声でした。

その声は最初に聞いたものとおなじものだった。

アリスと名乗った声とは違い、こちらを心配するような声色を感じる。勘違い。隣にいた。

もしかして、自分はシリアルキラーかもしれないという発想は勘違いだとしてもいいのか。そして隣にいた、という事はこの声の主は自分の知り合いだった可能性が高い？ だとしても、声が聞こえてくるなどという事があるのだろうか。

やはり、自分の妄想なのでは。

わからない。わからない事ばかりで本当にどうすればいいのだろうか。

記憶が思い出せるというわけでもなく、疑問ばかりが降り積もっていく。この声だって自分の脳内妄想かもしれないしもしかしたら本当に聞こえている声かもしれない。

結局、自分が住んでいたらしい寮に帰ってきたというのになにひとつ進展していない。ただただ、自分の異常性を浮き彫りにしただけだ。

酷く眠い。きつと疲れているのだ。だから、今日は寝てしまおう。

きつとその方が良い。晩御飯の時間になったらニット帽の人が起こしに来てくれるらしいのでそれまでは寝て一旦情報の整理がしたい。

そう思つてベッドに横になる。枕元に金属の棒を——よく見たら管だった——を置いて、目を閉じた。

——ごぼごぼと、水音がした。

海面は月を映し、揺らめいている。その宙を、何匹もの青い蝶がふわふわと飛んでいる。

とても幻想的な風景だ。自分の夢の中でこんなファンタジーな風景になるのはやはり心の内のどこかでこういう夢を見たいと望んでいるからだった…？

よくわからない。

「——ああ、あなたははじめからここにいたんですね。灯台下暗し、とはこのことです」

声がして、振り向けば黒い髪で赤い目をした少女が宙に浮かぶ星々を背景にしてそこにいた。

「ずっと見ていました。話しかけていました。けれど、あなたがだれだか私はわからなくて。それで気づくのに遅れてしまいました。でもやっとこれで、声が届いた。……あなたの事が、視えた」

その少女は、よくよく見れば球体関節人形のような手足をしている。黒いボディに頭についた蝶のような形のバイザー。そして同じ意匠のスカートのようなパーツが腰についていた。

赤い光がきらめいて、ステンドグラスの様で綺麗だと思った。

「私は——本当の彼女とは違うんですけど、 “メテイス” って呼んでください。あなたに会うのにはこの姿の方が良いと思って…貴方の住む寮の地下から…その、少し…姿だけを模倣して拝借したんですけど、彼らはともかくあなたは会った事が無いので覚えがないですよね…」

“メテイス” と名乗る誰かに一方的に話しかけられているがよくわからない。

きつと、自分の知らない何かがあって、誰かは彼女を見た事がある？

「恐らく、なんですけど、眠りの中の夢を通して私とあなたの距離がすごく近づいたから分かる様になってしまったんではないかな、と。私は本来、人間には知覚できない存在なんです。住んでいる次元が違いますから。たまに、私たちの居る領域に触れられる人間がいるんです

が、それだけなんです。私たちの本質まではわからない。それに……
いいえ、やっぱりいいです」

つまり、彼女はただの人間ではないのだろうか。いや、そもそも球
体人形のような関節の彼女が人間かといわれると怪しい。

「はい。私は人間ではありません。けれど……今のあなたに私が誰なの
か説明するのはとても難しいんです。それでも私があなたの敵では
ない事だけは覚えてほしくて」

悲し気に彼女は笑う。なら、彼女が敵じゃないということとは本当の
事なのだろうか。

そもそも、敵というのは何なんだ。なにか、こう……漫画やアニメの
ようなわかり易い何かがあるとでも？

そんなファンタジーなことに自分は巻き込まれているというのか。
「例え、あなたを蝕むことになってもそれは私の意志ではないんです。
ただ、私という存在がそういうものなのでどうしようもなくて……
あ、この姿のままなら大丈夫ですよ。廃棄された後継機という名のボ
ディに私と彼女の精神を詰め込んで——でも結局今のままだどこ
で姿を模倣しているだけなので人間界での行動には向いてないん
ですよね……そもそもここから出られませんし……」

やはり人間ではないらしい。色々と事情が複雑そうだが、結局彼女
が何なのか全くわからない。

「……いまは、わからなくてもいいんです。もうすぐ、望んでいても望
まなくてもあなたは自覚してしまうから。私とあの時間の外でも、
繋がってしまった」というのはそういうこと。私と、こうして意識を
共有するというのはそういうことになるんです」

彼女が近づいてくる。そして片手を伸ばして優しくこちらの頬を
撫でた。

「……彼、もひとつの命には違いなかったけれど、そこに魂があるの
かと言われれば私にもわからない。けれどあなたはちゃんと魂があ
る。あなたたちはかつて、ちゃんと生きていた人間で、生まれたばか
りの無垢な魂で……それなのに、私の不用意な発言のせいで目をつけら
れて勝手にひとつにされて、そのせいで歪んでボロボロになって……ご

めんなさい…」

彼女が自分の何かを知っているのかぼろぼろと涙を流して泣き始めるが、自分には心当たりがなければボロボロになっているという自覚もない。気のせいじゃないのだろうか。自分は一応元気だと思う。退院の許可が出たのだから早かった。それなりに。だから泣かないでほしいと思う。整っている可愛い顔が台無しだ。

「そういう事を言ってるんじゃないです！　もう、その鈍感さは何回死んでも変わりませんね！　『三つ子の魂百まで』のレベルを超えていますす！」

すぐに涙をひっこめた彼女にぶんすこと怒られる。何回死んでもどうか自分はまだ死んでない。死にかけたただけだ。たぶん。仮死状態は死には入らないとおもう。

「いいえ、あなたは何度も死んでます。何度も何度も死んで、その度に時間を10年前まで…いいえ、それよりもっと前まで巻き戻しているんです。そして、そこからありとあらゆる可能性を手繰り寄せている。とんでもない試行回数を重ねて、あなたは救おうとしている。もうここまでくると無意識なのかも、しれませんが」

「??？」

「…でも、10年前の事はどうあっても変わらない。あなたは、何度繰り返しても逃れられない。あなたがあなたである限り。あなたが固定しているせいで前提条件は変えられないんです」

時間を巻き戻す。

そんなこと、出来るわけがない。今日はなんだかこういう常識ではありえないことが起こる日なのかもしれない。言われているだけで実感は無いが。

「あ、信じてませんね？　別にいいですけど…記憶が戻ってしまったらすぐに気がついてしまうでしょうし…」

むくれっ面になった彼女が頬から手を離す。

「——呼ばれていますよ。もう時間ですね。…晩御飯、美味しく味わってくださいね？　なんてったっていまのあなたは一次的にでも私と感覚を共有してるんですから！　私だって人類の生み出した娯

楽兼栄養補給の一つである食事を楽しんでみたいものなのです！」

「…ん、善処する」

「はい！ 約束ですよ！ ……それと、短い間ですが楽しんでください
いね」

彼女が紅い瞳で母親のように自分を見つめる。自分は、その目を見た事があったような、ないような。

そんな既視感だけを抱いて、夢の輪郭がぼやける。

ごぼごぼと、また水音が聞こえた。

確認事項 (11/9)

「おい、飯だぞ。起きろ」
ぱちり。

そんな声で目が覚めた。いつの間にかベッドの脇に立ってこちらを見つめているニット帽の彼は、なんて名前だったか。

「……」

「寝ぼけてんのか？」

「なまえ……」

思い出せば楽なのだが、記憶はうんともすんともいわないし戻ってきてもくれない。なにか夢をみていた気がするがそれも思い出せない。大事なことを言われたような、言われていないような。いまはどうでもいいか。

「あ？ 名前だあ？ 俺のか？ ……荒垣真次郎、だ。記憶をなくす前のためえからは『荒垣くん』っつー柔っつい呼び方されてたけどな」

覚えた。

たぶんもう忘れないだろう。忘れないことを祈るしかない。

ベッドから抜け出して立ち上がり、ぶるりと身震いした。何だか寒いなど思ったら部屋の窓が開いていたようだ。自分は換気の為に部屋の窓を開けて寝たんだろうか。

…覚えていない。

「いくぞ、全員帰ってきて今はお前待ちだ」

踵を返して部屋を出た。『あらがきくん』に、頷いて後ろを歩く。

下まで下りれば、そのダイニングに夕方に顔を触った小学生の男子と、湊と奏子、それにアイギス。あとの5人いるように見える人たちが座ったり立ったりしていた。あの白い犬が近づいてきたので抱き上げる。ふわふわでおちつく。

「お兄ちゃん、退院おめでとう！ ……って言うべきなのかなこれ？」

「さあ……」

そういえば、顔が判らないなら触ればいいと判明したのでとにかく

一番近くの人から触って認識を何とかしないといけないのではないのだろうか。

このままではまともに話すらできない。とにかく、手始めに誰かに近寄って顔を触らせてもらうべきだ。

「三上…その、体調の方は大丈夫なのか？ 何か変なところは…無い、か？」

白い犬を下ろして、恐らく話しかけてきたであろう人物に近寄る。突然触るのは夕方の件からもわかったがやはり驚かせてしまうので、言葉に出して触る意思を伝えてみようと思う。

「顔を」

「？」

「顔を、触らせて欲しい」

「わ、私のか!？」

「……？」

戸惑うような雰囲気を感じられる。それと同時に、湊と奏子が驚くように息を呑んだような気がした。

「お、お兄ちゃん！ 喋れるようになったの!？ いつ!？」

「夕方。この子に。くすぐったかったから」

「ワン！」

「でかしたぞ〜〜！ コロマル！ 明日はおやつちよつと豪華なのにしようね！」

コロマルと呼ばれた白い犬を指させば、胸を張る様にして吠えた。

それは「どうだ、えらいだろう」と言いたげで可愛かった。

おかしい、自分は猫派だったはず――

そこまで考えて、思考が止まる。なるほど、自分は猫派だったのか。なんというかどうでもいい情報ばかり判明するのはどうにかして欲しい。

それはそれとして、先ほど顔を触らせてほしいと言ったので触っても驚かれることは無いだろう。たぶん。

「えっ、いまか？ いまなのか!？ もう少し、心の準備というものをだな…!？ つ…!？」

手を伸ばせば、驚いたような雰囲気がある。申し訳ないがすぐ終わるので我慢してほしい。

頬のあるあたりだと思ふ場所を触れば、やわらかい感触が手に触れる。感触からして女性なのだろうか。頭に手を移して髪を撫でる。さらさらとしていて長い。

不意に、そのぼやけた色のない輪郭がブレた。

まるでゲームのキャラがポンと湧いてくるように、ぼやけた輪郭と入れ替わる様にして赤い巻き髪の女の子が現れる。いや、女の子というよりかはお嬢様っぽいが同じ年くらいなら女の子だろう。

続いて他の4人の顔も触っていく。致し方のない事だし弁明は後でするので許してほしい。

昨日から思うが認識の仕方はもう少し何とかならないのだろうか。これでは自分の認識が彼らと違う場所にあるような、彼らとは違ってもを見ている気がしてならないのだ。

どこか少しずれている。それを、こうして触れることによつて合わせている。個人的にはそんな感じがする。

それにこの寮内にはいないが病院と車に乗っている間の道路に、自分でも認識できる変な生き物がいたのだ。

人と思われるぼやけた輪郭の合間を縫って、それらはいる。化け物みたいな姿だったり、妖精みたいな姿だったり、双頭の犬だったり、よくわからない鬼みみたいな姿だったり、人魂みみたいな姿だったり。

彼らははつきりと見える。それぞれ何かを喋っている。ヒトに介入しようとしている。けれど他の人間には認識できていない。もしかして幻覚かとも思っているが、どうもそういうわけでもなさそうだ。

だって、幻覚が行きかう車をわざわざ器用に避けたりするのだろうか。もしそうだとしたら自分の想像力に驚くほかない。

それとも、昔から自分にはアレが見えていて、実際に存在しているアレが湊と奏子を脅かすのだろうか。部屋にあったナイフもそういうやつら対策に使っていたとか。ありえなくはないが人間が戦つて勝てる相手なのだろうか。

邪推に過ぎないが当たらずとも遠からず、といったような感覚がある。感覚がするだけで記憶は全く蘇らないのが残念だ。

全員分触り終え（ひとりには室内だというのにキャップ帽を被っていた。あらがきくんといい、この寮は室内で帽子をかぶるのが流行っているのだろうか）、食事をしながら話が聞けるようになった旨を伝えれば、改めて自己紹介された。やはりというかなんというか、皆複雑な表情をしている。記憶を失う前の自分と今の自分はかなり違うものなのだろう。

「三上、これで我々の事は全員分理解できただろうか。まったく、突然顔を触りたい…などというから驚いたぞ」

「……………」

「……………本当に、記憶が無いんだな」

自己紹介できりじょうみつる、と名乗ったあのお嬢様の言葉に頷く。

きりじょうが一番複雑そうな顔をしている。他の人間も自分に対し距離があつたり複雑そうな顔をしているが、彼女が一番なんというか距離があるのだ。怯えているというべきか。

踏み込んではいけない雰囲気のようなものを感じるが、それと同時に彼女もこちらに踏み込みたくないような雰囲気を感じた。

過去の自分が彼女になにかしてしまったのだろうか。

「きみには説明しなければならぬことがいくつもある。……………思い出してくれば一番手っ取り早いのだが、そういうわけにもいかないだろう?」

「桐条先輩! いまの三上先輩にはまだ早いんじゃない? 退院したばっかりなんですよ!」

「……………だが、影時間は今日も来るだろう。彼が戦えるのか戦えないのか。見極めておかねば寮に置いていくことも連れていくこともできない」

たけばゆかり、と名乗った少女がきりじょうのように食いかかったがすぐに言い返されて黙る。

戦う、と言われたが湊と奏子を含めたここにいる全員が何かと戦っ

ているのだろうか。まさか、自分が見えているアレと？

「三上、今日は深夜0時まで起きてここで待機していてくれないか？」
頷いて、あいかわらずよくわからない晩御飯を食べ——ようとして目をやれば今度はちゃんとそれがなにか分かる。一体どうしたのだろうか。先ほどまでよくわからないものが机に並んでいただけだと思っただのに。

つやつやとした炊きたての白米に、マイタケなどきのこの入ったサラダ。そして人参と玉ねぎ、これまたきのこの入ったコンソメスープ。自分が箸でつまんでいたしつとりもさもさとしたものは白身魚のムニエルだったらしい。今度こそ口に含めば、ちゃんとしつとりとした食感と共に魚特有の匂いと香草の香りが広がる。

マトモに食べ物の味を感じたのはこれが初めてかもしれない。

ただ、誰もしゃべらない。何人かが居心地悪そうにしているところを見るに、食事中だからというわけでもなさそうだ。

自分は本当にここにいていいんだろうか。ここにいないべきではないのではないか。

そう考えると、先ほどまで感じていた食事の味もなくなる。

ああ、面倒なことを考えなければよかったと思うももう遅い。吐き気がしてきた。

「…………ちそうさま」

これ以上食べる気になれない。勿体ないが席を立つ。

「優希…？」

「三上センパイ、大丈夫ですか？ やっぱ、病み上がりだからしんどいですか？」

「……」

自己紹介の時に、いおりじゅんペーと意気揚々と名乗っていたキャップ帽を被った少年に心配されるが答える気力が無い、が答えなくてはならないので手短にする。

「休む。約束の時間には出てくる」

後ろを振り返れない。

前にもこうして、体調が悪くなって皆が食事をしているのに部屋に

帰ったことがあるような。自分は病気がちだったらしいので恐らくそういう事もあったんだろう。けれど、妙にそれだけではないような、ぞわぞわするような、そんな気持ちになる。

部屋に入って布団に潜り込む。これにも何だか既視感を感じるが寝ることは人間にとつて毎日行うことなので既視感が無くてどうする、と無理やり納得させて目を閉じた。

「お兄ちゃん、急にしんどそうになったけど…大丈夫かな…」

「センパイ、病み上がりだもんな。それにこの空気じゃ…」

順平が周りを見れば、気まずそうに顔を逸らすゆかりと美鶴。

荒垣は依然黙ったままだったがその横に座っていた明彦が口を口を開いた。

「…あの様子で三上が以前のようにまともに戦えると思うか？俺は無理だと思うが。美鶴、お前の意見はもつともだが焦りすぎじゃないのか？」

「……」

美鶴は答ええない。ただ、何かを思い悩むように下を向いている。そんな美鶴の助け舟になったのは風花だった。

「でも、ペルソナを召喚できるかくらいは確かめた方がいいんじゃないかと思うんです。私には、いまの三上先輩は何も見えなくて…わからないので」

「わからない？」

訝し気に明彦が聞き返す。

「はい。今の三上先輩はなんというか…何も見えないんです。ペルソナの反応すらあるかないかわからないんです。えつと…無いと言われればないんですけど、隠されているとしたらそれはない事にはなりませんし…」

「とにかくわからない、といったところか。成程な」

風花の答えに納得がいった明彦は満足そうに頷く。わからないか

らこそ、召喚器を使いペルソナを召喚できるか試さないといけない、というのが風花の意見らしい。それで召喚できれば戦い方を教えて戦闘メンバーに戻ればいいし、出来なければ待機させるだけだ。

とにかく、影時間にならないければ何もわからない。

「ね、奏子ちゃんと有里くんはこれでいいワケ？　今ならまだ、あんなになった先輩のこと——巻き込まずに済むんだよ」

「……ゆかりちゃん……」

「いいわけない。けど……身を守る術がなければどの道シャドウに襲われて終わりだ」

気遣うようなゆかりの言葉に、奏子は複雑そうに下を向き、湊は同意したが別の懸念が邪魔をした。

ふたりだつてゆかりの言うようにこれ以上何も知らないままの兄を巻き込まずに済むなら戦力が大幅に低下しようとしてそれを補う気がある。だが、そうはいかない。一度死んだあの日も、それ以降も、影時間の兄は象徴化せずに病院で眠り続けていた。そして影時間に安全地帯は無い。

それが何を意味するのか、わからないほど愚かではない。

影時間内に象徴化せずにシャドウに襲われた場合、無事ではいられない。戦わせて過酷な運命に巻き込まれるか、それとも知らせずに放つておいて影時間に出歩かれイレギュラーシャドウに襲われて死ぬか。どちらかなのだ。

「影時間への適性を失っていないのなら優希さんは知っていた方が良いでしょう。入院中の優希さん自身も知りたがっていましたし、ちよūdいいいのでは」

アイギスが空気を読まずに横槍という名の正論を入れる。

これはどうあがいても巻き込まないという方向には持つていけない。まるで、見えない強制力でも働いているようだ、と湊は苦虫を噛み潰した。

影時間

薄暗いラウンジに集まった特別課外活動部の面々は、召喚器をもつて無表情に立つ優希を見つめていた。これからペルソナが召喚できるかどうかを確かめるのだ。

「では、三上。その銃を引き金を引いてみてくれ。その引き金を引けば、先ほど説明したシャドウという存在を倒すための力——ペルソナが現れるはずだ」

こくり、と美鶴の言葉に頷いた優希は召喚器をこめかみに当てて何のためらいもなく引き金を引いた。

カチリ。

「……っ？」

なにも、起こらない。

いちど召喚器を降ろして、カチャカチャと振ってからもう一度こめかみに当てて優希は引き金を引いた。

カチリ。

なにも起こらない。

「……壊れてる」

2回目に引いた引き金も、ペルソナを呼び出すことは無く。召喚器が壊れていると思った優希は湊の方へと歩く。

「湊。少しの間だけ、交換してほしい」

「ん」

召喚器を交換してもらい、再び試そうとこめかみに当てる優希を見て、美鶴がぼそりと呟いた。

「召喚器が壊れる…？ いや、これは滅多に壊れない代物だが…まさか、な…」

薄々、優希以外の全員は嫌な予想の方が的中しそうだという予感がしていた。

皆が神妙な面持ちで見守る中、優希が交換してもらった召喚器の引き金を引く。

カチリ。

「……どう」

「どうって…何も…風花、なにか分かる？」

「ううん…私の方にも何の反応もないかな…」

ゆかりの言葉に“ユノ”の中でペルソナの反応を探っていた風花が首を横に振る。

結局、召喚器を交換してもペルソナが現れることが無かった。うんともすんとも言わないし何も起こらない。あの時碎けたペルソナはやはり“パンタロス”だけではなく、残りの2体もだという事が証明されてしまった。

つまり、優希は戦えない。それはすなわち、自衛できないということにもなる。

だというのに誰かの安堵混じりに息を吐き出す音がした。

そんな空気の中で手本を見せるために、交換した召喚器のまま湊がこめかみに当て引き金を引けば青い光と力の奔流と共に“タナトス”が現れる。

「これがペルソナ。さっき優希が壊れたって言ってたこれで、ペルソナが使える人は呼び出せる」

「なら、壊れてたわけじゃなく、自分が、使えない…？」

「そうなる」

「……」

湊が素直にそう告げれば、タナトスを見つめていた優希は目を逸らして下に俯いてしまった。その顔は無表情から僅かに悲し気なものに変わっている。ペルソナが使えない＝戦力外だ、と自覚してしまったのだろう。

「…無理を言って済まなかった。ペルソナはだれしも召喚できるものでもない。そう落ち込まないでくれ」

「かつての自分は…出来ていたんだろう。なのに、いまの自分は」

なんなのだと、と言いたげに美鶴の言葉に悲しそうな顔から一変、悔しげな表情をする。

美鶴としても、他の面々にしても、いまの優希が過去にペルソナを召喚していたことを自覚しているとは思わなかった。そしてそれがまさか本人の口から飛び出すなどとは。

「桐条先輩の言う通りだよ、お兄ちゃん！　もしかしたら、体調がもつと良くなつて記憶も戻ればペルソナが使えるようになるかもしれないしー！」

「そうですよ、きつと…きつと、大丈夫なはずです！」

「……………」

更に俯いてしまった優希に、奏子と天田の励ましは届かなかつた。俯いて何かを考えているようだったが退院してすぐでこれ以上無茶をさせるわけにもいかない、と美鶴が口を開く。

「疲れただろう？　今日のところはもう寝るといい。……本当に、すまない」

その言葉に返事は無く。

感情の読み取れない顔に戻つた優希は湊に召喚器を返すと2階への階段を上り出す。

その後ろ姿を見送りながら、美鶴がぼそりと言葉を吐き出した。

「私には…彼を傷つけることしかできないのか」

今にも泣きそうなその顔で、ぎゅ、と二の腕を掴んで自らを抱きしめるようにした美鶴の声は震えて小さかつた。

「美鶴、それは違う！　今回の事は全員で決めた事だ。それにこれが実戦で無くてよかつたと思うべきだ。もしあのままタルタロスに行つて三上がペルソナを召喚できないと土壇場でわかつて誰も庇えず大けがを負つていた可能性すらある」

「……………」

「アキの言う通りだぜ。まア、あいつをこつからの戦いに巻き込まなくて済んだつーことで良かったじゃねえか。今のあいつはとてもじゃねえがペルソナを使えたとしても戦えるようには見えねえ」

明彦の言葉を肯定した荒垣が洩る美鶴に畳みかける。

「それに、影時間への適性を持つていても桐条先輩のお父さんや幾月さ…あの人は大丈夫でしたよね。なら、三上先輩にも寮で待機してもらうというのも有りだと思います」

「あ、そっか。三上さんを無理にタルタロスに連れていく方が危ない、か…」

「たぶん、移動中に襲われるよりここにいた方がまだいいと思う。一応ここには対シャドウ用の防衛機能がある、んですよね？」

風花の問いに、おずおずといった様子で美鶴が頷いた。

「……ああ。よく知っていたな山岸。シャドウの侵入を感知した際に各部屋の窓と扉にロックがかかりシャッターが下りるシステムだ。4月の時は動作不良で使えなかったが今はメンテナンスも済んでちゃんと動作するようになってる」

「すみません、頼まれてハッキングした時にデータベースに載ってたの、見ちゃって……」

「へえ、そんなモンあったんすね！」

初耳なその機能に感心するように順平が感嘆の声を出した。

だが美鶴の表情は優れない。

「戦えない無力さは私にもよくわかる：我々にとっては彼をこれ以上巻き込まずに済むという安堵があるが：彼にとっては：どうなんだろうな。前のように1人で無茶をしなければいいが」

「あつ、そつか：お兄ちゃんペルソナ使えなくてもシャドウ倒しに行きそうだもんね：むしろ前のお兄ちゃんなら間違いなくペルソナ使えなくなっても行ってた。なんかそんな感じする」

複雑な表情でうーん、と唸った奏子は心配そうだ。先程の思いつめたような優希の様子に思うところがあるのだろう。

「かといってタルタロスの頂上まで登れと言われている今、見張るために誰か人員を割く訳にもいかないだろう。やはり、寮でひとり待機してもらおう他無いんじゃないか？」

「あと3ヶ月はあるし、ちよつとくらい余裕を見ても……」

「いいや、何があるか分からないんだ。強行軍は無しにしても限度がある。毎日誰かを置いていけばそれこそ戦力に偏りが出る」

「うーん、どうだろ」

明彦の言葉に奏子と湊が悩む。そこへ、荒垣が口を挟んだ。

「無茶すんのを悩んでるみてーだが、あの様子じゃ1人で外には出ねえだろ。基本、うわの空だぞ今のあいつ。あとは言い含めりや勝手な行動しねえよ」

「クウーン…」

同意するように悲しげに鼻を鳴らしたのはコロマルだ。夕方にじやれたついた時の異常な様子をすっかり覚えていたのだろう。

「うわの空、か…」

湊は病院での優希を思い出す。確かに誰もいない状態だとひたすら眠っているか下を向いて沈黙しているだけだった。なら、動かないように言いつけておけば今の素直な兄なら無茶はしないというのだろうか。

あれは、いい事なのだろうかと湊は眉を顰める。待機させておくのには都合がいい。だが、あんな兄の様子は明らかにおかしいのだ。

おかしいのに、それを利用する。戦いに巻き込まないようにするには、最低でもあと3ヶ月はそのままでもいらわないといけな

そんなこと、許されていいのだろうか。

それに湊自身と奏子がニユクスを封印すれば間違いなく死ぬ。そして時間が巻きもどるのだ。

元気な兄が帰ってくるといえば聞こえはいいが、同じ道を辿ればそれまでだ。また同じことの繰り返し。そうなったとしても、今のままでも、本当に兄が救われたことになるのか。

そしてもし時間が巻き戻らなかったら？

兄は壊れたままだ。その上、湊か奏子のどちらか、もしくは両方を喪うことになる。そうなれば、今度こそ完全に兄が壊れてしまいそうな気がした。時が巻き戻ろうとも2度と帰ってこないような、そんな気が。

難しい問題だった。いま、自分たちがやるべきなのは兄を戦いから遠ざけることではなく、兄の回復に努めることでは無いのだろうか。かといって、タルタロスの攻略を放置することなどできない。

「ちよつと、優希のところに行ってくる。寮で待機は決定事項？」

「あ、ああ…」

「ん。じゃあそれ伝えてくるから。もう解散でいいよね？」

「そうなるな…だが、」

たじろぐ美鶴の言葉を最後まで聞かずに、階段をずんずんと上がっ

た湊は優希の部屋のドアをノックした。

「起きてる？」

返事はない。

寝ているのかと思ったが一応部屋を覗くか、とドアノブを回せばずるりと回ってドアが開いた。

影時間なので電気はついていないが、件の人物はベッドに腰かけて下を向いている。どうやらまだ寝ていないようだ。

「…優希」

「……」

声をかけるが反応は無い。否、のろのろと視線を僅かに上げてすぐに下に引っ込んだのだ。湊は返事をする気力もないらしい兄の横に腰掛ける。

「僕達はタルタロスってところに行って戦ってくるけど、優希は寮で待ってて。みんなと相談してそう決めたんだ」

「……そう、か…けほっ…」

「うん。ごめん。でも戦えないから、連れてけない。みんな、優希に危ない目にあつて欲しくないんだ」

吐き出された言葉は酷く掠れて震えていた。

シヨックを受けている、という訳ではなく咳も出ていたので単に喋り慣れてないだけだろう。

そう判断した湊はさらに続けようとして、優希の言葉に固まった。

「…お荷物。役立たず」

小さく、無意識だったのだろう吐き出されたその言葉は優希自身の今の優希の評価だった。

「ちがう!!」

思わず叫んで否定すれば、そこで初めて目があった。暗くなんの感情も浮かんでいない瞳は湊を吸い込んでしまいそうで、思わず目を逸らしてしまった。逸らした気まずさのまま、言葉を続ける。

「優希はさ、もし僕や奏子の目が見えなくなったり勉強出来なくなったり、戦えなくなったら役立たずだと思う？」

「思わない」

「でしよ、それと一緒に。それに、優希はいまの優希にできることをやるんだ」

「いまの、自分にできること…?」

感情の色のない瞳がぱちくりと瞬いた。

あつさりと考えを改めた兄に、素直さは記憶を失う前の何倍なんだろうとどうでもいい考え事をしながら湊は続けた。

「今の優希に出来ることはしつかり休んで体力を回復させること。あとは…個人的にだけど僕らが帰ってきたときに “おかえり” って言ってくれるとすごく嬉しい。優希が待っていてくれるなら、明日も頑張ろうって思える」

最後のは本当に個人的な意見だった。奏子に聞いても同じことを言うだろうし、湊の場合はアイギスやコロマルでも頑張れる。もちろん、双子の姉である奏子がおかえりと出迎えてくれるのも捨て難い。だが、どうせ兄が寮で待機してくれるのならタルタロス探索で疲れた時にそういう言葉を兄の口から聞くのもいいだろうと思ったのだ。影時間終わりの出迎えなど、今までにない新鮮なものになるだろう。ただし、体調がもつと良くなってからに限るが。

今はまだ、養生してもらわないとまた体調が悪化して今度こそ死んでしまいました、となっては意味が無い。

「おかえり…うれしい…」

「そう。優希がちゃんと留守番をしてくれて、出迎えてくれて、おかえりって言ってくれたら僕も奏子もアイギスも、他のみんなも嬉しくなるよ」

「きりじょうも?」

突如、兄の口から出てきた聞きなれない美鶴の呼び方に湊はどきりとした。記憶を失って呼び方が変わっても、やはりなにか感じるものがあるのか、それとも好意でもあるのか、と思っていれば、優希の口から答えが飛びでる。

「元気がなかった。たぶん自分のせい、だから…嬉しくなれば元気になるだろうか」

まるで小さな子供のような不器用な発想に湊は思わず兄ではなく

弟のように思ってしまう。

ある意味、記憶を失ってまっさらになつてしまつて新しく生まれた人格だと考えればこの優希あには弟と言えるだろう。が、身体は兄だし記憶が戻れば元の兄だ。優希はどう足掻いても兄という存在なのである。だと言ふのに幼く見えるのは記憶喪失になつて自分たちの兄だという自覚が薄いからか。それともこれが本来の兄の性格だということなのか。

湊には判断がつかない。

「きつとね。戦えなくても出来ることはたくさんあるし、桐条先輩のことだつて励ませるはずだよ」

「そうか。頑張る」

そう言えば、くい、と制服の上着の裾を引っ張られる。

「けど、わからないから教えて欲しい。湊やみながどういうことをされるの嬉しいのか」

「僕は…きつき言つたおかえりつて言つてくれること、とか…あとは…」

すぐには思い浮かばなかった。

そもそも以前の兄はこうして聞くことも無くなんとなく察して先回りしてくるタイプでもあつたのだ。自分に向けられていることは察しが悪いくせに、他人だけの事になると察しが良すぎるくらいなのだ。まるでなんでも知つてます、と言わんばかりに。

故に、距離があつた。兄として振る舞わねばという意識からの距離がそこにあつた。

前までの兄は、どうあがいても兄としてしか湊と奏子に接してこなかった。だからこそ、年下であり弟妹である湊と奏子に頼るのはダメだという遠慮に近い意識があつたように今の湊には思えてならない。

「悩んでる、なら、また分かつたら教えて欲しい。…待つてる」

その言葉とこれまでのやり取りで、湊は少し今の優希の事がわかつたような気がした。

バキン、と湊の脳内で音がしてカードが浮かび上がってくる。

——Rank UP!

XI “罅イ諧”

三上優希 Rank 1 ↓ Rank 2

“罅イ諧”のペルソナを生み出す力が増幅された！

(…?)

ここに来てやっとコミュランクがアップしたのはいいが、アルカナの数字が変わっているし名前は文字化けしている。

アルカナは“旅人”だったはずだし、数字は“愚者”と同じ0だったはずだ。11ではない。カードの絵柄だって変わってしまったている。どうということなのだろうか、と湊は首を傾げる。

そもそも旅人のアルカナのペルソナを生み出すことは湊にも奏子にもできない。

どの組み合わせにしてもベルベットルームで生み出すことが出来ないのだ。そのアルカナのペルソナが何かと言うのもわからない。

それもこれも記憶喪失になった影響なのだろうか、と湊はわずかに眉を顰めた。

「もう寝ないとダメだろうし、僕も部屋に帰るから」

その言葉に無言で頷いた優希の部屋を出て、すぐ向かいの自分の部屋に入って寝巻に着替える。今日は解散なのはもう確かめだし、明日も学校があるのだ。早めに寝てしまおう、と湊はベッドに潜り込んだ。

ニユクス教（11/10）

11/10（火） 昼

『先週から今週にかけて、全国で突発的に集団自殺などが相次いでいます。いずれも未遂だと報道されていますが——』

『東京地下鉄脱線事故負傷者80名以上。運転手は無気力症発症か』

『井の頭公園で変死体が発見される。獣に食い荒らされた跡が。野犬の犯行？』

『富山湾沖にある海底油田のケーブル破損か。沖合に重油流出』

「物騒だな……」

休みである優希以外の全員が登校するのを見送り、一通り朝の家事を済ませた荒垣はラウンジのテレビをつけながらコロマルの餌を足していた。

そんな時、たまたまつけていたテレビから流れてきたニュースに顔を顰めた。

11月の大型シャドウを倒しても、一向に無気力症患者が減ることは無く。むしろ増えていっている現状でこのニュースだ。顔を顰めない筈がない。それに突然無気力症を発症する件数も増えてきている。

無気力症とは本来影時間中にシャドウに襲われることによる症状だ。だというのに、日中つい先ほどまで元気だった人間が突然無気力症になるのだろうか、と荒垣は訝しむ。

今までなかった集団自殺が増えたというのも気になるところだ。無気力症だけでなく、集団自殺までと来るといよいよこの世の終わり感が出てきた気がしないでもない。これで暴動でも起こればある意味アポカリプスの要素としてはパーフェクトだな、と荒垣はガラでもないことを考える。

最近、巷ではなぜかニユクスの招来が実しやかに囁かれており、噂になっているほどだ。

とは言っても今はまだ噂程度でよくある「終末の予言」のようなものだ。

バラエティでも連日取り上げられてはいるがどれもこれもかすりもしていない中身のない噂程度の代物。だが、どれもこれも共通しているのは『ニユクスという存在が舞い降り滅びをもたらす』という点だ。ノストラダムスの予言にある、*“恐怖の大王は1999年に空から来る、アングルモアの大王を甦らせる存在だ”*という文面に近いものがあるがニユクスの件に関しては最近突然出てきたものだ。

まるであの死の宣告者と名乗る化け物や幾月の言っていたあの世迷い事が意図的にばらまかれているような気がして、尚更面白い。

そして更に言われているのは、『12月31日に世界は終わってしまふのではないか』という噂だ。

これもよくあるある意味毎年恒例の噂といえそうなのだが、今度という今度はニユクスという明確な滅びが来ることを死の宣告者からダイレクトに宣言されてしまったので荒垣たち特別課外活動部にとっては起こりうる現実でしかない。

ただ気になるのが噂でささやかれている予定の日が1月31日ではなく12月31日という点だ。

所詮噂は噂なので気にしないことにするか、と荒垣はコロマルの水入れをキツチンに運んで洗うついでに中身を入れ替えた。

「ほら、コロちゃん。水だぞ」

「わふー。へっへっへっ……！」

ラウンジに自分とコロマルとソファアに座って眠るように目を閉じている優希しかいないので、恥も外聞も気にせずコロマルを*“コロちゃん”*と呼んで荒垣は撫でた。

撫でられたコロマルは尻尾を振ると、水を飲み、自分でリードを啜えて持つてくる。

「そーいや、もう昼の散歩の時間かつつか、バイトの時間だな……」
時計を見て、そろそろ朝倉医院でのバイト兼手伝いに行かなければいけない時間だと荒垣は独りごちる。

いつもはコロマルの散歩がてら朝倉医院まで行き、その中でコロマルを待たせつつバイトを2〜3時間程するのだが今回は優希がいる。

どうしたものか、と悩んでいたが散歩できないほど体調が悪いわけではないだろうし行先はかかりつけ医の病院なのだから連れていってしまえばいいか、と荒垣は即座に思考を終わらせる。

そして静かにしている優希の元へと向かい、肩をトントンと叩く。「おい、起きてるか。ちよつとした散歩にいかねえか？」

「……散歩？　いく」

ゆつくりと目が開いて、荒垣の言った言葉を反芻する。

片手に持っていた文庫本サイズの小説がぱさりと床に落ちた。

題名は、『死を求め続ける愚かな黒山羊』。著者は神条久鷹と書かれている。見た事も聞いたこともない作家だ。

「落ちたぞ」

「……？　ありがとう」

「面白れえのか、それ」

「……わからない。部屋にあったから読んでるだけ」

拾って手渡せば葉を挟んでラウンジのテーブルの上に置かれる。

見慣れない小説だ。そもそもが、元々の優希コイツの趣味らしくない、と思っただ。

部屋に悪魔辞典なるものが2冊あるのは知っているがそれ以外は料理本だったり菓子作りの本ばかりだ。あと漫画や旅行雑誌か。このような小説は無いに等しい。

だというのに珍しく小説を持っていたということに違和感を感じる。

病院の見舞いで誰かが差し入れたのだろうかと思うも、こんな無名の著者の小説を差し入れるような人間はこの寮にいない。唯一ありそうな山岸は漫画本ばかり見ているし、湊と奏子は論外だった。あのふたりは兄に小説よりも食べ物か厳選お気に入りCDを差し入れそうなタイプだからだ。

となると両親からか、と勝手に決めつけて荒垣はそのそと緩慢に動き出した優希の準備が終わるのを待った。

ダウンジャケットを着こんだ優希がコロマルのリードを持ったことを確認して、荒垣は歩き出した。コロマルも体力が回復しきつてい

ない優希を気遣っているのか、走ることはせず ゆっくりと歩いている。

「会話は無い。」

荒垣自体も口達者というわけではなく、今の優希は全く喋らないとすれば静かなのは当然だった。

優希は自分の足で歩いているというよりコロマルに引つ張られてなんとか道を歩いている、といった様子でこれではどちらが散歩をさせているのかわからないな、と横を歩く荒垣は目を細めた。

視線もおぼつかず、何処を見ているのかよくわからないことが多い。

電線の上で鳴くカラスをぼんやり見つめながら引つ張られているかと思えば、のろのろと視線を下げる。少し進んで小さな川沿いの道に来た時は川を見つめながらコロマルに引つ張られて歩いていたら不意につんのめるように立ち止まったりしていた。コロマルはそんな優希に合わせるように歩き、荒垣もコロマルの横に並んでいたのど止まれば同じように止まったりした。

そして商店街近くまでくると見るものすべてが珍しいのかゆっくりだがきよろきよろと街並みを見ている優希に何か思い出すことがあればいいが、どうやらそうでもなさそうだと荒垣が思っている間に朝倉医院まで着いてしまった。

いつものようにインターホンを押してから、荒垣は中に入る。

「とりあえずお前も入ってこい。コロマルも中の部屋に連れてくからな」

「ワン！」

頷いて、リードの外されたコロマルと朝倉医院に入った優希はそのまま荒垣の後ろをついていく。

「先生、いるか？」

荒垣がいつも朝倉がいる部屋のドアをノックもせずには開ける。そこは処置室ではなくもはやストレガの面子とイズミにその娘の紗耶、荒垣たちの憩いの団欒スペース兼たまり場と化してしまっているが、朝倉がいるとしたらだいたいそこなのだ。

ちなみに順平がチドリに会いに勝手に待ち合わせに使われているのもこの部屋だったりする。

中には、ピアスをつけた黒髪の癖ツ毛の男と黒髪ショートヘアの女性がソファアーに腰掛けていた。

ふたりとも肌の見える場所に包帯や絆創膏などが巻かれていたり貼られていて痛々しい。

「っと、すいません」

「待って！」

朝倉の客かそれとも悪魔と交戦でもした患者かと思ひ、慌ててドアを閉じようとした荒垣を可憐な女性の声が引き留めた。

その声に、再び扉を開いて中に入れば、先ほどの女性が扉と荒垣の方をしっかりと向いていた。

「——バイトの荒垣くん、よね？ 朝倉く：朝倉先生、ちよつと寝込んでるから、いつも通りお部屋の清掃だけでいいって」

「了解っす」

寝込んでいるという事は風邪でもひいているのか。それとも、彼女ら2人と同じくケガでもしたのか。荒垣にはどちらかわからなかったが、詮索するつもりは無かった。あのおしゃべりな朝倉がなにもいわないということは、そういうことなのだと言わんと似た思考をぐるりと頭の中で回した。

「ほら、てめえはコロちゃんとかつちで休んでろ。散歩で疲れただろ？」

「わからない」

「わからない、じゃねえ。病人のてめえはこの距離歩いた程度でも疲れてなきやおかしいんだよ。おら、そこに座るか寝てろ」

「……」

まったく、世話の焼けるやつだ。と表情が変わることのない優希を部屋に押し込んで半ば倒れたとき専用になつていつものベッドの淵に座らせれば、コロマルが後ろからついてきてわざわざ朝倉に用意してもらったペット用のクッションの上に寝そべる。

水入れ・エサ入れ・トイレ・おもちゃ完備の至れりつくせりな環境

だ。

コロマルもいつもの位置についたことを確認した荒垣は、頼まれた掃除をさっさとやってしまおうか、と別の部屋のロッカーに入れておいた清掃用エプロンと道具をもって部屋を回り始めた。

黒山羊の足からは歩きたびに汚く醜い泥が溢れ、触れるものすべてを蝕んでしまう。

周りに誰も、近寄らず。近寄るものすべてを侵してしまおう。

それが通った後には何も残らない。黒山羊自身の願いすらも、残さない。

「どうして自分は生きているのだろう。誰も救えやしないのに」

黒山羊は慟哭する。

周りはみんな真っ白で綺麗なのに、自分だけが黒く汚れて染まっている。

救おうと手を伸ばせば黒く穢し、そして失う。願いを叶える黄金でできた器でさえも、汚して壊した。そんな全てを穢すことしかできない自分に嫌気がさして黒山羊は崖から飛び降りた。

けれどそこに終わりはなく。飛び降りた先の海の中で黒山羊は溺れながら尚も死ねない。

視線の先には黒い雲。もうもうと音を立てて飛んでいる。

パンが濁流のなかを流れてきた。黒山羊はそれを齧り、味がしないと吐きだした。

飛んでいた雲が月に吸い込まれて黒山羊は眠くなってくる。荒れ狂う濁流の中、温度も音も感じなくなった黒山羊は、そっと目を閉じる。

「ああ、こんどこそ安らかに死ねますように」と願いながら。

だが現実是非情だ。黒山羊の願いを叶える存在はいない。それでもなお、愚かにも黒山羊は死を求め続ける。届かぬ月に手を伸ばす。

本心では「皆に認められたい」と、「生きていたい」と願っているのに。濁流がそれを許さない。深淵から見つめる目。沢山の目がそれ

を許さない。

生きること死ぬことも許されず、崖から落ちた罪を嘲笑われ、存在自体が罪なのだと言われ、黒山羊は海の上を彷徨う。

流されていくうちに、大きな丘が見えて黒山羊は瞬きをした。その丘の上に、巨大な塔と見紛うばかりの大きな鉄塔が立っている。そしてその塔には沢山の鏡と凸レンズがあった。

それらが丸く大きな月を映した時、黒山羊は自分が呼ばれていると感じた。自分が自分と呼んだのだと自覚した。

黒山羊の躰が溶けた。黒山羊が海とひとつになった。黒山羊は、千の顔を持つ月を映した。振れた蹄と触手を伸ばした。

「嗚呼、あそこに自分の本当の躰があるのか。きつとそうにちがいない」

海になった黒山羊が笑顔で囁いた。

遠い遠い昔、月の内に昏き星をもってして黒山羊の身体は閉じ込められてしまったのをようやく理解したからだ。

今まで死ねなかったのは自分に躰が無かったからに違いないと黒山羊は嗤って、星々瞬く宙へどろりと堕ちた。

——以上が、自分の読んでいた小説『死を求め続ける愚かな黒山羊』の内容だった。

前半はどうでもいい描写ばかりだったので省いたし、読んでいると酷く眠くなる代物だったので最後まで読めていないのでこれからどうなったのかはわからない。面白さも自分にはいまいちわからなかったのでもしおりを挟んでは置いたがこれ以上の興味もない。

記憶を失う前の自分はこれを好んで読んでいたのだろうか。文字が目から滑り、意味がないような描写ばかり続くこの小説を。

だとしたら相当な物好きなのだろう。やっぱり記憶を失う前の自分は変人だったようだ。

それとも、あの文章たちには自分が解らないだけで何か意味があるのだろうか。

がちが明かないのでいつものように寝ようと思い、ここは自室ではないのだったと思い出す。

朝倉医院、と看板には書いてあったが散歩がてらに何故病院に連れてこられたのか。

あらがきくんは自分とコロマルを置いて何処へ行ってしまったのか。さっぱりわからない。体調でも悪いのだろうか。

ソファアーに座っている誰だかわからないふたりに訊けばなにか分かりそうだが、関係なさそうな人の顔を急に触るといのはどのようなだろうか。どう考えてもダメだと思う。

そう考えたらやる事が無い。やっぱり眠ってしまったおう、とマットレスに体を横たえ目を閉じた。

11月9日。21時ごろ。

冬の寒さが分かる様になってきた空気の中で朝倉、尚也、麻希の3人はなにか知っているであろう神条こと神取の足取りを追っていた。

そしてたどり着いた寂れた教会で見たものは、壇上に立って演説する神取の姿だった。どうやらニユクス教と呼ばれる宗教の元締めのようなことをしているらしい。

「ケツ、元社長サマが神父の真似事かよ…似合わねえことこの上ねえぜ」

「ねえ、朝倉君。わかる？ あの奥の…ローブの…」

教会の後ろのさらに隅で顔を顰めた朝倉に話しかけた麻希の顔は青い。視線は神取の横で座っている暗い色のローブで身を隠す存在に向けられている。

「…アレ、どうみても人間じゃねえな」

「うん…すごく嫌な感じがする」

「悪魔…にしてもあんな奴滅多に居ねえよ。きなくせえとは思ったが、ここまで来るとあからさま過ぎるぜ」

顰めた顔から一転。朝倉までもが怖気づいたような顔へと変わる

のを見て、尚也もそのローブ姿の「教主」と呼ばれた存在に目を向ける。人間ではないような妖艶な雰囲気を感じはするが、ふたりのように異様な雰囲気を感じるという事は特には無かった。しいて言うならば、なぜか懐かしい感じがした。ただそれだけだ。

どこかで嗅いだことのある香り。それが漂っているような気がして、尚也は記憶を手繰り寄せようとしていた。

「——そろそろ集会も終わりか？」

「そうみたいだ」

ぞろぞろと教会を出ていく虚ろな目の人々を見送り、壇上へと再び目をやれば、先ほどまでいた神父の真似事をする神取と教主が居ない。

あの一瞬でどこへ——と尚也が考えた瞬間、入り口近くに移動した朝倉が何者かに外へ吹き飛ばされ塀の一部を破壊する。

「朝倉くんッ！」

「ブンヤ!!!」

麻希と尚也が叫んで朝倉を呼ぶ。土煙がもうもうと立ち込める中、瓦礫から身を起こした朝倉はふらついている。

何が起こったのかわからない。それだけが3人の共通の認識だった。

「げほっ……んだ……いまのは……！」

「——奇襲を喰らっても尚、動けるとは。流石私の野望を止めてみせたペルソナ使いのひとりといったところか」

ぱちぱちぱち、と神取が神父の服装のまま、土煙の向こうから拍手をしながら歩み寄ってきて姿を現す。そんな神取の姿を見た朝倉はその顔を怒りの表情に染めた。

「神……取……ッ！」

「ふむ。あれから10年以上経つが鈍ってはいないようだな。
あさくらふみや
朝倉文矢」

「こちとらてめえが起こしたセベク・ショックから今までほぼ毎日悪魔がらみの事に巻き込まれまくってんだよ……！ 鈍るわきやねーだろーが……！」

ぺっ、と血反吐を吐きだし、鼻血をぬぐった朝倉を麻希と尚也が庇う。今日は戦闘をしに来たわけではない。あくまでも情報収集だ。

ペルソナだけでも戦えはするが、それで神取に勝てるほど相手は甘くない。

「君たち旧世代のペルソナ使いはこれからの事に邪魔なのでね。お引き取り願おうか」

「古いモノ扱いだなんて随分な言い方だな…」

「実際そうだろう？ 舞台の主役は既に君たちではなく彼らに移っている。だからこそ、きみたちにはその『資格』がない」

「チツ…」

神取の言葉に、尚也と朝倉が歯噛みする。

資格というのは十中八九『影時間への適性』の事だろう。それが無いという事は自分たちは蚊帳の外だという事に他ならない。そして、その言葉は神取が影時間を使ってなにかしようとしていることも同時に表していた。

「今度は何を企んでやがる…!」

「何も。ただ、私は代役をしているだけだ。役者はきちんと役を演じなければいけない。だというのに欠員がでてしまうから誰かが代わりなるしかないのだよ」

あくまで自分は演じる側だとはぐらかし、何も話そうとしない神取はこれ以上語ることはしたくないとでも言いたげだ。

「…そんなに気になるというのなら、我らが教主に訊けばいい。もつとも、応えはしないだろうがな」

そんな神取の声と共に、闇の中からぬらりとローブの裾と袖を風に揺らしながら『教主』と呼ばれた存在が現れる。瞬間、空気がピリピリとした張り詰めたものに変わる。

それはハイヒールを履いているのか、一步あゆみを進めることに力ツリカツリと足音を立てた。

「ナオりん、さっきも言ったがアレは人間じゃねえし悪魔にしてもまともな存在じゃねえ。オレからみたアイツは黒い霧が辛うじて人の形をしてるだけのバケモノだ。もし攻撃されそうになったら尻尾巻

いでも逃げるぞ。……悔しいけど、今のオレらの敵う相手じゃねえ」

「ああ、わかった」

尚也はソレが近くに来てようやく、先ほど感じたなつかしさと香りの正体に気がついた。

“死臭”がするのだ。

——お前が死ねば良かったのに。

消えたはずの幻聴が、尚也の頭の中で木霊した。教主の姿がブレ、尚也そっくりの姿になる。

「……和…也、」

尚也そっくりの顔。聖エルミン学園の制服。金色の瞳。ピアスをつけていないその姿に、尚也はたじろいだ。

藤堂和也。

幼少の頃に交通事故で死んだ双子の兄であり——その姿を模した尚也自身の自分自身^{シヤド}への悪意^{ウツ}そのものだった。だが、それはセベク・シヨック事件の時に尚也自身が受け入れ一体化したはずだった。そこに、いるはずがないのだ。

「ナオりん、アイツが和也って…どういうこつたよ…!」

「和也に…いや、違う…わからない…! 違う気がするのに、似てるんだ…気配も、雰囲気も、何もかも…!」

「私たちにはあの人^{ナオ}が和也くんには見えないわ…! もしかして、尚也くん^{ナオ}にだけ…見えてるんじゃない…!」

混乱する3人の前で沈黙していた和也の姿を模したと思われる教主が、口を開く。

「――、――」

何を言ったか3人にはわからない。ただ口を開いただけかもしれない。なかつた。

だがその瞬間、教主の足元で沸騰するようにごぼごぼと黒い泥が粟立ち、中から青黒い煙が沸き立つ。

そして現れたのは4匹ほどの狼の様な奇妙な生物だった。身体からは黒い触手が生え、口からは鋭い舌をだらりと垂らし、全身からは

悪臭を放つ液体を垂れ流している。そしてその目は燃える炎のように赤く光っていた。

「これって……！」

「ああ、確かにこりゃあ……マガツヒの匂いだ。となるとあいつら自体は悪魔か……！」

麻希と朝倉が身構える。

尚也があまりの悪臭に顔を顰めて目を一瞬閉じ、再び開いたときには教主の姿は死んだ双子の兄でも自分のシャドウでもなく元のローブ姿に戻っていた。

あれは、教主が何かしたわけではなく自分が勝手に見た幻覚なのか、と尚也は小さく震えた息を吐き、同じように身構えた。

——ブラックドッグまたはヘルハウンド。それが泥から呼び出された彼らの名前だった。

イギリス全土で昔から言い伝えられている死の先触れともされる犬の姿をした不吉な妖精。悪魔としては毛むくじらのヘアリージャックという魔獣が同じブラックドッグの1体として数えられるが、これはヘアリージャックの愛くるしい姿と到底同じものとは思えないほどに醜悪でおぞましく不浄な生き物だった。

ぐちゅぐちゅと粘液がぐもるような音と共に聞くに堪えがたい声で唸り、吠えた獣が飛びかかって来る。

【肉断ちの鋭爪】

【狂いかみつき】

「ッ、逃げる！ 全速力で走れ！」

鋭い爪と悪臭を放つ牙が迫る中、咄嗟に叫んだ朝倉の言葉に麻希も尚也も応戦することなく駆けだした。一般人に被害を出すわけにはいかないので街中は走れない。その意見は言葉を交わさずとも3人の中で共通だった。

しばらく走り、わざと遠回りをして人気のない場所で交戦しようという意見が満場一致したその時、違和感に気がつく。

獣は相変わらず追って来てはいるようだったが、人の気配が全くしないのだ。それどころか、周りには奇妙な棺桶のオブジェが乱立し、

月が緑の光をもって夜の街を照らしていた。

「なんだ…？」

「この感じ…悪魔の巢に近いモンがあるが…町全体となると別物だな」

朝倉は思案する。棺桶のオブジェに自ら発光する月。そしてこの人っ子一人いない街。

まさか、と当たってほしくない予想が脳裏をよぎるが、どう考えてもタカヤ達から聞いた影時間の特徴に当てはまっていた。

となると、ポートアイランドの方角には塔があるはずだ、とそちらを向けば予想通りタルタロスが月光に照らされそびえ立っている。

自分たちは『影時間』を認識できないのではなかったのか。何故いきなり認識できるようになったのか。そして、影時間は深夜12時からではなかったのか、などと様々な疑問が浮かんだ。だが、人がいないのなら好都合だった。これなら人目を気にせず暴れられるし応戦できる。

くるりと反転し、あの醜悪な獣を迎え撃とうとした朝倉達が見たのは眼前で跳躍する本体^{教主}だった。

「——ッ！」

獣は何処にも居ない。ハイヒールの特徴的な音も今までしなかった。

あれらの1連の行動はブラフだったのか、と気づいた時にはもう遅い。

空を跳ぶ教主が足を後ろへと引き、朝倉へと叩きつけた。

「がッ!？」

咄嗟に腕で体を庇い受け身を取ったものの、吹き飛ばされた朝倉は腕からばきりと嫌な音が聞こえたのを自覚して続いて襲って来た激痛に呻く。軽い蹴りの一撃だけでそれなりに鍛えている成人男性（ペルソナによる身体能力補正込み）の腕の骨を折るとは、なんて馬鹿力なのか。

「ぐ…うう…『カラドリウス』…!」【ディアラハン】

痛みに呻きながら己のペルソナである『カラドリウス』を呼び出

せば、水色の小鳥が羽ばたいて朝倉の身体に癒しの光を降らせる。
そしてのろのろと視線をあげて元いた場所を見ると蠅ベルゼブブの王が雷を
もってして麻希と尚也を薙ぎ払っていた。

その姿はペルソナのように光に包まれている。もつとも、色は青で
はなく赤く禍々しいものだったが。

不意に、「ベルゼブブ」の姿が消え新たなペルソナのような存在が
ぶわりと現れる。

黒い色の体躯をした天魔——「デヴァ・マール」はその片方の手に
円盤を持ち、もう片方の手には弓を携えていた。マールといえば緑色
の男根の煩惱大王なアレをイメージするがこのデヴァ・マールはそち
らのイメージよりも天魔、釈迦を誘惑したものである。または死
そのものである「殺す者」としての側面が強いのだろう。

つまり、それだけ相手の人格は殺意に塗れていると言っても過言で
はない。でなければこんな『死』そのもののような存在をペルソナと
して人に向け、召喚できるはずがないのだ。

デヴァ・マールが手に持っていた円盤を天高く放り投げ、弓に矢を
番えた。そしてそれを天に向ける。徐々に天高く放り投げられた円
盤に光が集まりその力の余波で一帯がビリビリと震えた。

限界まで引き絞られたそれが放たれようとした瞬間、不意に世界自
体がブレた。

景色が影時間独特のものから一瞬にして元のものに戻り、デヴァ・
マールもかき消える。

デヴァ・マールを消した教主は朝倉達に目もくれずローブを風に揺
らめかせながらゆるりと踵を返した。

——まるで、全力を出す価値も意味もないと言わんばかりに。

その行動を見ていた朝倉は、「わざと見逃された」と感じたのだ。朝
倉達は煩い羽音を立てる羽虫以下の存在だと思われたらしい。

癪に障る。が、見逃されずにあの一撃が放たれていたら、朝倉も尚
也も麻希もどうなっていたか分からない。否、確実に死んでいただろ
う。

手も足も出なかった。

武器が無いという不利があつたが相手はそんな次元ではない。例えちやんと用意をして戦えるペルソナ使いを全員呼び、作戦を立て、万全の体制で挑んだとしても勝てるかどうかはそれこそ賭けになるだろう。それに加えて神取もいるとなれば勝率はさらに下がる。

静かに夜の闇へと紛れ、消える教主を睨みつけながら朝倉は意識を失った。

そして今日。11月10日。

「う……ぐ……いつ……てえ……！」

折れた腕の痛みにはベッドの上で目を覚ました朝倉はここが自分の家兼診療所の朝倉医院の自室であることに気がつく。

今は何時だと時計を見れば昼前だったので折れた腕を無理に動かさないように立ち上がると、他のふたりを探しに院内を歩き回ればたまり場と化している部屋のソファとベッドである後自力で治療を行って寝たと思われる2人が眠っていた。思ったより軽症で朝倉はほっと胸をなでおろした。それはそうと今日は昼から荒垣がバイトに来る時間だったなと思いついて机の上にメモを置いておく。起きた2人のうちどちらかが見て伝言してくれてもよし。荒垣自身がそれを見てもよし。とにかく部屋に帰るかと動く方の腕で頭の後ろをぼりぼりとかいた。

いくらペルソナで怪我がある程度治せるとは言っても骨折した骨はくつつけられない。治癒魔法のお蔭で再生力があがるため多少は早く治るだろうが最低でも1、2週間はそのままだ。これがマグネタイトやマガツヒの濃い異界ならもつと治りは早くなる。だがここは現実世界だ。悪魔の巣を見つけ殴り込みに行けば楽に治せるかもしれないが余計に怪我をすることもしれない危険も孕んでいるのでそういうわけにもいかない。

しばらく休診か、片手で診られる人間だけ受けてあとはヤタガラスにでも押し付けるか、と脳内でこれからの予定を立てた朝倉は痛み止めの薬を呑み込むと昨日の事について整理し始めた。

まず、〃ニユクス教〃というカルト宗教を神取が取りまとめている。そしてそのバックには〃教主〃と呼ばれる謎の存在が居た。

神取自身は代役だとかなんとか言っていたが、ニユクス教の目的は『滅びを得ること』だ。これは、4日以降にタカヤ達が持ってきた幾月という男が隠し持っていた資料の内容に近いものだった。が、それを民草に求めさせてなんになるというのか。朝倉にはいまいちわからない。

確かに、神が信仰を得ることにより力を増すというのは古来からある手法だ。その為、悪魔の中には自分を讃えさせるように人間を洗脳する者もいた。そういうものがヤタガラスに見つかり、歴代の葛葉ライドウだったりゲイリンだったりキョウジなどデビルサマナーに征伐されているのだが、ニユクス教がそれに当てはまるかといわれると微妙だ。

そもそも本来祀られているべきかつ神輿であるニユクスが、『滅びを得る手段』としてしか扱われていないような、ないがしろにされているような雰囲気をあの演説から感じたのだ。

『ニユクスの声を聴く者』として神取に祀り上げられていた教主も神取からして敬うべき存在なのかと言われれば、あの口ぶりからしてそうだとは思えなかった。

とはいえ、神取自身があの性格であるため教主と対等な関係を築いているという可能性もある。神性、またはあの邪悪さを持った存在と対等という意味では蘇った神取も人間ではないということなのかもしれないが。

朝倉から見てあの教主と呼ばれていた存在は人の形をした渦巻く黒い靄だ。それが辛うじてローブの隙間から見えている、といった感じか。

尚也が見たという藤堂和也の姿には見えなかったし、アレが人間だとも思いたくなかった。あんな高濃度の負の感情を纏わせた存在が人間なはずがない、と。

悪魔ですら高位の存在——それも邪神に近いものでなければあんなものは受けきれないだろう。一体何を神取は喚よんだというのか。あのペルソナに酷似した力は魔王かそれに近しい悪魔を従える者かもしれない。それとも、邪悪なれども神性を持つ存在がペルソナを得

ているとでもいうのか。いや、これならば最初にけしかけてきた四足歩行の獣と同じく悪魔と見た方が正解に近いか、と朝倉は結論づけた。

それと、神取の言っていた『演者』というのは間違いなく荒垣や優希たち特別課外活動部とタカヤ達ストレガだろう。

神取は彼らと影時間、そしてシャドウとニユクスを使いなにかするつもりらしい。なにかといっても『滅びの招来』なのだろうが、神取は新世界の神（意識）になりたいだけであって世界を滅ぼしたいわけではなかったはずだ。

何か違和感を感じる。が、朝倉にはその違和感の正体がわからなかった。

「チツ…寝るか…」

考えても仕方ない。

ごろりと折れた腕を上にして寝転んだ朝倉は目を閉じた。

次に目を覚ました時、眼前に無表情の優希の顔があって飛び起きるなどとは思ってもせずに。

夢見の悪い (11/10)

燃え盛る室内。朝倉は、よろよろと灼熱と形容するに等しいその場を歩く。

畳が焼ける匂いと煙があばら家の内を焼いていく様を見ながら、兄妹を探した。

「げほっ……げほっ……兄貴……姉ちゃん……ケンタ……ハルカ……アイ……！」

どこだ……！ 返事……返事してくれよ……！」

兄と姉と幼い弟妹たち。両親にネグレクトと暴力を受けながらも、自分たちが出来る限りのことをやって支え合い、これまで生きてきた大事な家族だ。

クズな両親はこのまま焼け死んでしまえばいいと思っただけが大事故な兄妹が死ぬのはダメだ。朝倉はその思いで肺の中に煙が入り噎せようとも声を張り上げ兄妹を探した。だが、返事は無い。

(もしかして、みんなもう逃げて……)

どうかさうでいてくれ、と朝倉は神に祈った。祈りながら、玄関を目指し炎を避けて歩く。

熱い。ただただそれだけだった。もしかしたら、玄関に行くことはできないかもしれない、と酸欠でぼやけてきた頭で死を覚悟する。瞬間、ぐい、と腕を引かれて顔を上げる。

「あに、き……」

「フミヤ、これで口を塞げ」

身体をかがめた兄が朝倉の腕を引っ張りながら薄汚れたハンカチを差し出してくる。兄自身の口を塞いでいたであろうそれを押し付けられて、朝倉は渋々それを空いている片手で口にあてた。

玄関までの距離はひどく短いというのに、兄に引っ張られるようにして歩いてもお出口が遠い。

兄は煤だらけ火傷だらけで見ている痛々しい。おそらく、自分と同じように他の兄妹を探しに行っていたのだろう。

ならば他の兄妹はどこに、と聞こうにも鬼気迫る兄の顔に何も言えない。

そうやって炎と熱、そして煙を回避しながらあと少しで玄関のドアだ、といったところでミシミシと嫌な音が聞こえた。

「ッ！」

ドン、と背中を押されて玄関のドアの前まで押された瞬間、爆音と衝撃が朝倉を襲う。

玄関の引き戸と共に外に投げ出され、その上を炎が撫でた。地面をなんども転がり、ようやく顔をあげた朝倉が見たものは、焼け落ちて崩壊する母屋だった。

先ほどまでいた兄はどこに、と辺りを見回すもその姿は見えない。逃げているはずと信じていた他の兄妹の姿もない。外にいるのは自分ひとりだけだ。

つまるどころ、全員あの炎の中で――

――そう結論づけた朝倉の目の前で、陽炎のように炎に巻かれる兄の幻覚がああ教主の姿に変わり、*「祈りなど無意味だ」*と嘲る様に嗤った気がした。

「――兄貴ッ!!!! いやなんでオマエがここに!?! ……つつう…!」

兄を呼びながら目を覚ました朝倉の眼前に無表情な見慣れた顔があり、思わず飛び起きて折れた腕の痛みで顔を顰めた。

表情が抜け落ちている見慣れた顔――優希は飛び起きた朝倉に驚いて表情を変えることすらしない。朝倉は何故ここに学校に行っているはずの優希がいるのかと考えたが、麻希や荒垣から死の淵を彷徨ってしばらく休養していると聞いた事を寝起きのぼやけた頭で思い出した。

時計を見れば昼過ぎで荒垣がいつもバイトに来ている時間だ。

という事は荒垣に連れてこられてここに来たのか、と身体を起こしてまじまじと見つめるが何も反応が無い。いつもなら「あの、俺の顔に何かついてます…?」と恥ずかしそうに訊いてくるというのに無言。何か決定的な自分たちとのズレのような物を感じた。

麻希から様子がおかしいと聞いていたがここまでとは思っていなかった朝倉が頭に片手を置けば、そこで初めて無表情が緩んだ。

「んだよ…ちゃんと笑えるじゃねえか。いや…こりや笑うに入るのか

…?」

うんうんと朝倉は悩む。夢見は最悪だし患者である優希は表情が抜け落ちているしでまだ悪夢が続いていたのかと思っただがそうでもないらしい。少しムカついたのでうりうりと乱暴に髪のおろしてある頭を撫でれば抵抗することなくなすがままにされている。

それに気をよくした朝倉が撫でることを継続していれば、緩んだ顔がどんどん困惑の顔に変わっていく。どうやら長時間撫でられるのには慣れていないらしい。

不意に、優希の手が伸びてきてお返しと言わんばかりに朝倉の顔を弄った。そして頭をさわさわと遠慮がちに触り、手を離れた。

「満足したか?」

無表情に戻りこくりと頷いた優希の頭をもう一度うりうりと乱暴に撫でたあと朝倉も手を離し起き上がる。

「つと…わりいな。今日のオレは片腕臨時休業中だ」

動かないほうのだからと垂れた片腕を見せればその腕にそつと手が添えられる。

「…痛い、のか?」

「あ? 痛えに決まってるんだろ。折れてんだよなー腕がなあ! これはおもうぼつきりとなあ! あーいてえなあマジで!」

「そうか」

あからさまに痛がるフリをしながらちらりと優希を見ればさほど心配していなさそうな無表情がお出迎えた。10月末の雨の日に来た時のような無表情っぷりに何かあったのかと心配する気持ちがありつつからかいがないの奴、と思ったが明らかに喋り方が違うような気がして気になった。

「つーかお前なに、イメチェンでもした? クールキャラで通すつもりなの? 今更? マジ?」

「…? たくさんしゃべると疲れる。それだけ」

「あっそう。…ってそれで済ませられるか!!! 疲れるつー理由だけで性格まで変わるかつーの!」

「?」

「お、おい…？ 冗談だからな…？ パンツの中覗いてみる？ サイズはともかくマイサンがいるからな…？」

混乱しているのかうわごとをぶつぶつと呟き始めた優希の様子がおかしくなってくる。呼吸が荒くなることから始まり、だんだんと目の焦点が合わなくなり、ヤバいと感じてネタばらしした朝倉のことすら認識できていないのか無視して口から言葉を垂れ流している。

「…認知、定義、存在証明、フィレモン、契約…自分は…俺は…？」

…あ、ああ…あああ…！ 違う違う違う違う違う、逃げるな逃げるな逃げるな逃げるな、俺のせい、俺のせいだ、から…だめだ、死ななきや、俺が死ねば、いま、いまならまだ、間に合う…ッ！」

突如、泣き叫び始めた優希は朝倉が止める間もなくベッドの近くにあったデスクの上のペン立てからひっ掴むようにハサミをとると自らの首につき立てようとした。

「馬鹿ッ！ 早まるんじゃねえ！」

そこでようやく身体が動いた朝倉が腕の痛みも気にせず優希へと突進し、押し倒して手からハサミを奪い取る。

朝倉とてまさかあんな100%冗談で言ったあからさまな嘘の発言がこんな行動のトリガーになってしまうなど思いもよらなかつたのだ。医者としても人間としても、やってはいけない選択であつたし浅慮だつたと自分に対し舌打ちした。

「おい、大丈夫か…!? 悪かった、悪かったって！ ありや嘘だしオマエはれつきとした男だからよ、忘れる。な？ あとマイサンがちゃんどついてるかの確認もしくんだぞ!」

「……………」

抱き起こして呼びかけるが返事がない。

まさか、こちらが突進した際に頭でも打ったのか、と青い顔になつた朝倉の耳に遅れて返事が返ってくる。

「……………眠、い」

「え？ あ？ 眠いだけか…心配させんじゃねえっつーの…」

朝倉の服をぐい、と掴んで甘えるように首筋に顔を埋めてくるその

行動に酷く幼さを感じて朝倉はあんな夢を見たこともあり火事で亡くなった年端もいかない弟を思い出して小さく息を吐いた。

錯乱したのは一瞬だった事への安堵と、覚えた懐かしさにぼんぼんと背中を優しく叩きつつベッドまで片腕で誘導して寝かせてやればすぐに夢の中へ行つてしまったようで、弟が生きていれば丁度こいくらいだったのかと哀愁に浸りながら一通り異常がないか確認した朝倉も横で寝ることにして目を閉じた。

(…ま、ぜんっぜんこれっぽっちも似てねえけどな)

そもそもただの患者で大した付き合いがない優希と、生まれてからずっと面倒を見ていた弟を比べるのは些か酷だろう。目が離せないという点では似たようなものかもしれないが。

弟はとんでもないいたずらっ子なガキんちよだったし、とそんな皮肉のような言い訳を浮かべた朝倉は、先程まで気にしていなかった優希の言動のある一言が頭に引っかかった。

(そーいや…こいつ…さつき取り乱しながらファイレモンつつって無かったか…?)

朝倉の聞き間違いでなければそう言っていたはずだ。だが荒垣やストレガの面々からはファイレモンと会話してペルソナを覚醒させたという話は聞いていない。そもそも、何もきっかけがなく自然に覚醒した荒垣と、桐条によつて人工的に覚醒させられたらしいストレガの話聞く限り、今のペルソナ使いは『ペルソナ様遊び』もせず、ファイレモンに名を告げないものなのだと思っていたのだ。

だが、優希に限りそうではないなると初めて朝倉がペルソナ使いだと暴露した日に言った『ペルソナさま遊び』についてまるで知らないような反応をしたことに合点がいかない。

一体どうなってるんだか、起きたらまたちゃんと話を聞かなきゃならないな、と考えて朝倉は再び寝ることにした。

「うわー！ー！ー！ー!!! オレのマイサンがフライアウェイしやがっ

たー！ー！！！！

そう叫んで飛び起きた朝倉はじつとりと嫌な汗をかいていた。

とんでもない夢をみた気がする。自らの股間のご立派なマール様がちよつきんされる夢だ。正直火事の時の夢よりも酷い。拷問かよ、となんとなしに身体を起こせば折れていたはずの片腕の痛みがない。

どうなってるんだと動かせば、ちゃんと動く。

まるで、最初から折れていなかったかのよう。腕を動かしながら横を見ればあんなに叫んで朝倉が飛び起きたというのに横で眠っている優希はのんきに寝息を立てている。かと思えば「ん…」と小さなうめき声をあげてぼんやりとした目を開いた。

「あさくら…せん、せ…い…？」

その声の出し方が、以前と同じ感情のあるものに聞こえた。

先ほどまでの優希の声はひたすらに平坦だったのだ。だが、いまは困惑するような声色が戻ってきている。

「おれ…俺…なんだか、ながい夢を、みてた気がするんです。ながい、ながい、こわい、夢を。誰かに手を引かれて、歩いて、歩いて、沈んで、いきたく、ないのに。でも、おれのからだは、いうこと、きいてくれない。おれのからだ、なのに」

怖い、と言いたげに震える声で朝倉の服を掴んだ優希はそのままほろほろと泣き始めた。

「俺じゃなくなっちゃみたいで…こわかった…！ せんせい、せんせい、いま、せんせいはゆめじゃ、ない、ですよね…？ おれは、ちゃんと、おれですよね…？」

「おーよしよし、そうか。怖かったな。オマエはオマエだしオレは夢じゃねえからな」

そう言って両腕を使って抱きしめるようにして慰めてやれば子供の様に泣きじやくる。

無表情だった先ほどよりもさらに幼いイメージを朝倉は抱いて、本来は遠慮がちでも何でもなくこんな風の甘えん坊なのか？ と思いながらタカヤの話の思い出して、本来甘えたい盛りだった頃に両親と死別し凄惨な実験に参加させられていたらそりゃこうもなるか、と勝

手に納得した。

「落ち着いたか？ クソガキ？」

「…う…はい…」

泣き止んだのを確認してから座ってまた頭を撫でれば恥ずかしそうに優希は顔を俯かせた。

「…：…しゃべるの…：疲れる…」

「あ？ なんか言ったか？」

「…：…」

目を逸らした優希を気に留めることなくボリボリと頭の後ろを掻いた朝倉は今まで気になっていた事を訊こうと口を開いた。

「オマエ、さっきのこと覚えてるか？」

「さっき…？」

考えるように目も下に向けた優希はしかし、数秒ほど黙るとわなわなとまた震え始めた。

「あ…あれ…？ あれ？ な、んで…あたまのなか、まっしろで、なんでおれ、なにも、おもいだせないんだ…？ おれ、いままで、なにを…」

「おいおい、大丈夫かよ？」

心配しながら肩を竦めた朝倉を見た優希はびくりと身体をひときわ大きく震わせ、またボロボロと涙を流して泣き始める。

「ちよつと、待って、おねがい、おれ、ちゃんと、おもいだしますから、まって、ください、おねがい、おねがい、します…！」

それはもう、お願いというよりは“懇願”だった。

また様子がおかしくなり始めたのか、パニックになりかけてるかのどちらかだ、と即座に判断した朝倉はストップをかけることにした。こういうものは忘れているのなら無理に思い出させても悪影響を引き起こすことの方が多い。

「あー、ストップだ。クソガキ。わかんねえんなら無理して今思い出さなくていい。さほど大事なことじゃねえし、しんどいなら寝とけ。混乱してるだけだろーからもっぺん寝たら多少は頭ン中、整理つくかもしんねーだろー」

「で、でも…」

「ダ・メ・だ。スーパーウルトラ天才医なオレのいう事聞けないワケ？」

「…う」

そこまで言つて漸く渋々、といった様子で頷いて、また朝倉のベッドで横になった優希は不安げな顔のままふわふわとした毛布と羽毛布団に顔を埋めた。

「荒垣のバイトにオマエはついてきたっぽいし、アイツのバイトが終わるころにや起こしてやるから安心して寝とくんだぞ。あと、怖い夢をみたら…あ…そうだな、フェザーマンでも呼んどけ。多分駆けつけてくれんだろ。知らねえけど」

朝倉は亡くなった弟や妹の年頃くらいの幼い子供ならともかく高校生を見る悪夢の対処法なんて知らない。なので適当に頭をまたわしわしと撫でてながらそう言つてやればおずおずと無言で頷かれる。

ファイルモンと呟いた事については覚えていないようだったのでもた思ひ出した時にでも訊くしかない、と朝倉は諦めて立ち上がろうとした。が、引き留められる。

「……眠くない。寝たくない」

「マジのガキみたいな我儘言うんじゃねーの。なら、いつもの部屋にでも行くか？ 今日の俺は臨時休業、しようと思つてたが営業再開だしその説明もしねーとなんねーし」

「行くー！ 行きます！ 行かせてくださいー！」

『行く』の三段活用をした優希は布団を勢いよく折り畳んで起き上がり、ふらついてまたベッドに倒れ込んだ。

「オマエ、病み上がりらしいからな。あんまし激しく動くんじゃねーぞ。じゃねーと、また病院に逆戻りかもなあ？」

そう朝倉が意地悪く笑いながら伝えれば、目をぱちくりとさせて小さく嫌そうに「う…はい…」と頷いた優希はゆっくりと身体を起こしてベッドから立ち上がった。

記憶が無い。何も覚えていない。元に戻った。

——全部嘘だ。

朝倉先生に自分が女だと言われ（どう考えても大嘘だったが）、『前回』の自分と同調した際の事がまるで稲妻のように脳裏を駆け巡って混乱しながらも知ることが出来た。

いま、殆どの記憶は情報として得ている。三上優希は誰なのか。記憶を失う前の三上優希とはなんだったのか。どんな風に喋って、どんな風に行動したか。

それをエミュレートして、演じて、心配をかけさせつつ他者を安心させる。

それが、情報として自身の記憶を得た“自分”にできる限界だった。

以前の自分に戻ったわけではない。ただ、『前回』の自分と同調した際の内容を思い出しただけ。三上優希という個人における人間性が限界まで吹き飛んでしまったのだと自覚しただけ。自分がどうやって壊れ、一時的な死に至ったのかを自覚しただけ。忘れている、と言った方が都合が良かったのでそうしているだけ。

もう少し強い衝撃でも加えられればショック療法的な勢いで戻って来るかもしれないが、今の自分にはこれが精いっぱいだ。いや、今回の記憶が戻るトリガーがまさかの朝倉先生による嘘だというのがなんとも言えないが、『前回』の自分に感謝すべきなのかそれとも朝倉先生に感謝すべきなのかわからない。

：どちらにも感謝しなくていい気がしてきた。

ただ、夢をみていたというのは本当だ。

あれだけは本心から——今の自分に本心と呼べるような心があるとは到底思えないが——『怖かった』。

あとは、“ファイルモン”と“ニヤルラトホテプ”というふたつの存在に対する強烈な『怒り』も内から湧き上がってくるような気がしている。あれらがどう自分に関わってきているのかは同調した『前回』の自分の記憶になるらしいのでさっぱりだが、確実に良い事ではない

だろう。

結局、思い出したと言っても以前の自分の感知の外の記憶は無いのであまり変わりはないという有様だ。

ただ、記憶を読み取ってしまったせいで自分の目的である『ドキドキ☆ニユクス封印に割り込んで自分だけで封印するぞく作戦』を思い出してしまったが、ペルソナが使えないとなるとどうやっても割り込めやしないだろう。湊や奏子が最終決戦に戦えない自分をタルタロスに連れていくとは思えない。

あと、以前の自分にどうしてそんな名前で記憶したのか小一時間間い詰めたい。記憶を読み取っても全く持っこのようなふざけた名前の作戦名にしたのかわからない。なにがドキドキ☆だ。あんなもの、ドキドキというよりハラハラだ。

「どうしたの、三上くん？ まだ体調悪い？」

「あ、あはは…いえ、そうじゃなくてちよっと考え事を…いろんなこと、早く思い出せないかなーって…あと心配をおかけしたので何と言って良いのやら」

「そんなこと、いいのよ！ 無理はしないでね」

「ありがとうございます」

記憶が戻っても相変わらず他者の存在をいまいち上手く認識できなかったので朝倉先生を通して通訳してもらい触らせてもらったのでいまじや藤堂さんも園村さんもちゃんと顔が判る。

なので園村さんに愛想笑いで答えて思考を再開する。

そう、なんであんなふざけた作戦名にしたのか。…：…ではなく。

ニユクスの封印というのをどうやってするか、だ。

このままなにも知らない兄のフリを続けてもいいがペルソナが戻ってこない事には八方ふさがりだ。自分が想定している封印の仕方はベルベツトルームで“宇宙”^{ユニバース}のアルカナを得た湊と奏子のそれを、横から搔っ攫って無理やり使うというトンデモない方法なのだが、上手くいくかどうかどうかも怪しいし現状ペルソナを持っていない自分がベルベツトルームに呼ばれるかどうかともわからない。

それか、自力で“いのちのこたえ”とやらにたどり着くことくらい

なのだが、そんなものわかるはずがない。いのちにこたえなどそもそもあるのか。いきるからいのちなのだ。生きている間にその答えを探すから、答えにたどり着くということ——まさか、

(その答えにたどり着いたから、湊も奏子も死んだのだろうか)

そんな馬鹿な。自分の命のある意味を、答えを知ったからといって死ぬというのは理不尽ではないのだろうか。しかも、その答えがみついているのか間違っているのかもわからないというのに、勝手にだなんて。

身勝手だ。

自分のいのちのこたえなんて生きているうちにコロコロ変わっていくものだ。だというのに、自分ともかくあのふたりにだなんて酷すぎると思ってしまった。

それとも、いのちのこたえというものはただの覚悟完了みたいなもので、そのものに意味は無いとか、そういう事なのだろうか。なんだから、その方が近い気がする。

だとすると、やはり宇宙ユニバースのアルカナに何かがあるのだろうか。

…分からない。

「ワン…」

「コロマルにも心配かけてるよね、ごめんね」

嘯いて、近づいてきたコロマルの頭を撫でる。

いのちのこたえ云々も封印のやり方も解らないので一旦置いておくことにして(置いておくものが些か多すぎるかもしれないが)、目下の不安要因は朝倉先生や園村さん、藤堂さんから聞いた「ニユクス教」の教主と神父のことだ。色々はぐらかされたが、とても強いペルソナ使いだということと限定的にだが適性のない朝倉先生たちが「影時間」を体感したらしいこと。あとその2人が特別課外活動部やストレガの面々を利用して何かしようとしていること。

はつきり言って何をしてくるかわからないから気をつけろ、ということらしい。

正直、ニユクス教が出てくること自体は以前の自分が予想はしていた。そしてその教主をタカヤがしないであろうことも。

かと言つてここで朝倉先生たちのような大人でさえ歯が立たないような相手が出てきて特別課外活動部が余裕で勝てるかと言われればNOだ。なぜか平均より強い湊がいたとしても、それよりも強いであろう藤堂さんを含めた3人がかりでたった1人に手も足も出なかつたらしいのだ。

自分はそのふたりを見ていないので正確には判断できないが、厳しい戦いになるのは間違いないだろう。そして自分がタルタロスに登れない今、一番タルタロスの中で厳しい階層である「深層モナド」に潜る訳にもいかず、それとなく誘導することもできない。そもそもそれがいまあるのかすらわからないし、よくよく考えたらいきなりモナドに行くというのも危ないだろう。

どのみち楽な戦力強化は無理という事だ。出来ないものはできないので諦めよう。

思考を止めてぼんやりしていれば、掃除を終えたららしい荒垣くんが部屋に戻ってきた。

いったん休憩だと戻ってきたときに説明はしていたし、微妙な顔はされたが、とりあえず色々思い出せない穴だらけの記憶喪失程度になつたくらいに言つておくことにしたのだ。

全部嘘だが。

「そろそろ放課後になんだろ。帰るか。今日はお前に渡すもんがあるつつつてクラスメイトがくるらしいぜ。あと有里の知り合いだとか幼なじみだとかいうやつもだな。美鶴が俺にその予定だから寮に居とけつつつてたからな」

「…誰だろう」

「さあな」

わからない。

そんなに親しいクラスメイトは自分に居ただろうか。それとも、ただ単に先生から面倒な役を預かつたそんなに親しくないただのクラスメイトだったりしないだろうか。その方が可能性が高い気がする。

そう考えながら朝倉医院を出て、コロマルのリードを持ちながら荒垣くんと帰り道を歩いていたが、自分の見ていたものの正体がやつと

わかってそれらから視線を逸らし続けることを繰り返している。

自分がつきりと見聞きしているものは「悪魔」だ。

目を合わせて、『視えている』と知られたら最後、跳びかかって来られそうで知るんじゃないかと思いたったと彼らの行きかう世界を歩く。こんなことならある意味何も知らない白痴のままだった方が楽だっただろう。

ただ、もしかしたらモコイという自分と親しかった悪魔が見ていた景色もこうだったのかもしれないと思うと、なぜか悪い気はしなかった。

「……ただいま、でいいのか？」

「……ん、ああ。良いに決まってるんだろ。手洗いでもしてラウンジで待ってりゃあいつらも帰って来るだろうし、さっさと済ましちまえばよ」

頷いて、手洗いに行つて色々済ませてからラウンジのソファアに座り、コロマルを撫でて帰りを待つ。

有里——すなわち湊か奏子の幼なじみらしい子も来るというので考えてみるが、月光館学園に彼らの幼なじみなんて居ただろうか。頭の中で情報をひっかきまわしてみるも幼なじみに関することはなにも出てこない。

しかも、自分の見舞いに来るくらい自分の事を知っていて、かつ、湊か奏子と親しい。

「……」

わからない。思い当たる人物が全くいない。

間違はなく、湊と同じクラスの友近くんではないだろう。だとすれば、一体誰が——と考え込んでみると、不意に玄関の開く音がして反射的に顔を上げた。

「たっただいまー！」

「……ただいま」

「お邪魔します、でいいのかな？ やっぱりここは落ち着くね」

「あれ？ 綾時くん、寮に来るの初めてじゃなかったっけ？」

「あ、あはは、湊くんから話を聞いて落ち着くんじゃないかな〜って想

像してたからね！」

「へえ、そうなんだ！」

……。

なんだろう、声を盗み聞いている限りすぐ面倒な人物が湊たちと一緒にいる気がする。いや、今日の日付を考えるといてもおかしくないとと思うのだが、なんとなくか、想像している彼が湊と一緒にいる人物だとするとなぜ自分の見舞いなぞにくるのかという疑問が浮かんでくる。

「……おかえり」

とにかく、考えていても仕方ないので顔を上げて迎える。気が抜けて無表情になっていないだろうか。いまいち上手く表情筋が動いていることを自覚できていないのでうまく以前の自分を演じられているのか解らないがなんとなくかっていると信じよう。

「お……お兄ちゃんが……笑顔で……お、おかえりって……」

「なにか、変だった……かな」

「変じゃない！　けど、ぜ、ぜんぶ、思い出した……の？」

奏子がまるでお化けでも見たような顔をするので変じゃないか訊いてみたが変ではなかったようなので上手く装っていたかと安心する。

ただ全部思い出したかと訊かれれば答えはN。だ。思い出した訳では無いし全部でもないので物憂げな顔をしておく。

「……ごめん、まだ全部は」

「そっか……」

しみみりさせるのはあまり良くないので、話をさっさと変えてしまおうと湊の横に並ぶ件の人物——望月綾時を見やった。

何故かはずきりとわかる黄色いマフラーと泣き黒子のある顔が見間違いでなければ、どこからどうみても望月綾時だ。

「えっと、その彼は湊と奏子のお友達……でいいのかな？」

「望月綾時って言います。奏子ちゃんと湊くんの幼なじみです！」

「あっおい、コラ綾時！」

転校生である彼は幼なじみでは無いだろうし、荒垣くんの聞き間違い

いだと思うことにして訊けば、幼なじみという返答が本人から返って来て混乱する。

「あはは、綾時くん、こんなこと言って口説いてくるんだよ？ 私にはもう荒垣先輩っていう旦那サマがいるのに！」

「おい、俺はお前と付き合っちゃいるが結婚したつもりはねえぞ！」

「同じことじゃないですかー！ ぶー！」

「違え！ そ、そういうのは…親御さんに挨拶…してからとかじゃねえのか…」

口説き文句だと言った奏子の声を耳聴く聞きつけ、キッチンから荒垣くんの声が飛んでくる。最後の方はなんて言っていたのかよく分からなかったが、結婚と交際することは別だと思うのでここは荒垣くんの肩を持ちたい。

「…優希、綾時のアレは冗談だから気にしなくていいよ」

湊と奏子の口ぶりからすると幼なじみというのは冗談らしい。いや、彼の正体を考えるとあながち間違いでも無いかもしれない。それを奏子と湊がわかつているかどうかは別として。

領いて、次の言葉を待てば綾時の——いや、以前の自分は彼のことを綾時くんと呼んでいたのでそう呼ぶことにする。

そう、綾時くんが口を開いた。

「せつかくだし、お兄さんの部屋にお邪魔してみたいな。僕、年上の部屋ってどんなのか気になって！ ね、お願いします！」

「……綾時はこういうやつだから。帰国子女で色々抜けてるんだ。嫌なら嫌ってガツンと言ってやった方がいいよ」

普通、こういうものは女子の部屋に行きたがるものなのでは無いのだろうか。

何故自分の部屋なのか。これがわからない。が、ラウンジでこのまま騒ぐのもあまり好きではないし疲れるので湊の提案は選ばず部屋に上げることにする。

「……いいよ。あと、敬語は無しでいい」

「じゃあ、お言葉に甘えて！」

湊と声が似ているので湊に敬語を使われているみたいでぞわぞわ

するので敬語をやめてもらう。

後ろを向けばじつと湊がこちらを見つめていたがやがてため息を吐いて後ろを着いて来たので特に何も無かったのだと判断した。

奏子はそのままラウンジに残って荒垣くんとお喋りを続けるようなので、自分のクラスメイトが来たたら部屋に上がるよう伝えてくれと伝言を頼んでから階段をあがった。

「…どうぞ」

「お邪魔します！ わあ、初めて入るかも」

「優希はまだ病み上がりなんだから無茶させるようなことしたり、あんまりはしゃいじゃだめだからね」

「わかってるよ。お兄さんに無茶はさせないから」

綾時くんを部屋に入れば湊が彼の兄のような事を言うしそれに綾時くんが元気に返事をするので居心地が何となく悪くなる。正直、兄らしいことをなにひとつ湊や奏子に出来ていないので兄と名乗っていいものかと、記憶を読み取ってからは自信をなくしてしまいそうではある。

こう思うということは、もしかしなくとも読み取った記憶に自身が引つ張られているのかもしれない。朝倉医院で目覚めたときに自分の意志とは関係なく『寂しい』と泣いたことも、別に自分の意志で泣きたかったわけではない。たぶん。

これはこれで、いい事なのだろうか。

「わ、ゲーム機だ！ お兄さんは結構ゲームするの？」

「……？」

「お兄さん？」

そんなことを考えていたせいか、テレビの下に置かれていたゲーム機を見やっつた綾時くんの質問に咄嗟に答えることが出来ず首を傾げられてしまう。

「綾時、優希は病み上がりだってきつき言ったでしょ。ぼーっとして居る事が多いから、すぐには答えられないと思う。……どのくらいゲームはするの？ だって」

「どのくらい……、……、……欲しかったら持って帰ってもいい」

「ええっ！ 良いの？」

「最近はずんぜん触ってないみたいだから。別にいいと思う」

そう答えれば、綾時さんと湊が困った様な顔をした。

何か変なことをいったらどうか。自分の返答に間違いは無いはずだ。

そういえば、綾時くんは顔を触っていないのに最初から存在を認知出来ている。アイギスといい、綾時くんといい、なんの共通点があるのか。

考えながらベッドに腰掛けると、綾時くんが困った様な顔のまま口を開いた。

「やっぱり、遠慮しとくよ。それよりも僕はお兄さんの部屋でやりた
いかな！」

家にテレビとか無いんだろうか。というか彼に家とかあるの
だろうか。

「…うるさくしなければ」

分からないがベッドの脇からクッションを出してふたりを座らせ、
自分はベッドに潜り込む。

「クラスメイトが来る予定だから、すぐ起きる。…おやすみ」

正直、自分が彼らのゲームプレイや会話についていけるとは思えな
かったので僅かな時間だけでも目を閉じて寝るふりをすることに決
めた。

起きているとどうしても喋らないといけなくなるし気を遣って話
をあちらも振って来るだろうし。

要はめんどくさいということなのだが、色々理由をつけて少し目を
閉じたかった。それだけだ。

禍福無門（11／10～11／11）

軽快な音楽と共に画面に映ったジャックフロストが氷を発射する。湊の操るジャックザリツパーがその氷を避け、華麗なナイフコンボを叩き込んだ。

「えいっ！ えいっ！ あっ…もう少しだったのになあ…」

「下手糞」

「辛辣だなあ…僕、ゲーム触るの一年ぶりくらいだし、これなんかやるの初めてなんだよ？」

一旦コントローラーを置いた綾時は湊の方を向いて息を吐いた。

綾時の言う一年ぶり、は『前回』の周回の事を言っているのだろう。これまで綾時は順平や友近とよくつるんでいて、こうして湊とふたりだけで行動するのは無いに等しかった。

湊自身の認識も、そういうものだと思っていたので今回のこの行動は意外というほかないのだ。

「そもそも、こうして優希の部屋でゲームしてること自体、変じゃん」
「変って…だってこれまでは…お兄さんの部屋なんか入ったことなかったし」

声を少し響めて目を閉じている優希を覗き見て、内緒話をするように綾時はそう答えた。

綾時は寮に来るとしても順平の部屋からウンジくらいにしか寄り付かなかったのでそういわれればそうだとも言える。そもそも、学年が違い、順平の友だちと聞いて「そうなんだ」くらいの反応しか返さない優希と親しくなることがまずないのだ。

修学旅行の温泉云々も、優希は先に済ませてしまっていて一緒に入らないかそもそも先に逆上せてしまいあがつてしまうというパターンだ。女子と鉢合わせすらしていなければ処刑されている様を見た事がないため関係自体希薄だった。

いまだって、部屋に上げてくれたのはいいがあくまでも『弟の友だち』としか見ていない。

ただ、綾時が死の宣告者だと分かった後の兄の反応はどんなもの

だったか。湊は思い出そうとしたがいまいちこれといったものがない出せなかった。

それくらい、あっさりしていたような気がする。「湊と奏子の判断を尊重するよ」という反応しかしていなかった。本心を語る訳でもなく、優希自身の所感を語る訳でもなく、静かだったのだ。いや、いまいち思い出せないのはそれ以前に死んでいることが多かったので反応自体なかった事の方が多いいせいかもしれない、と思考を振り切った。

「あのさ…さつきのお兄さんの言動、すごく他人事だったような、そんな気がしないかい？」

「なんで、そう思うの？」

湊にも心当たりがあつたが一応訊いてみる。

「さつき…僕がこのゲーム機について訊いたときの話し方が何だか、他人の事を思い出すような言い方だったからね。自分のもののはずなのに、どれくらいゲームをしているのか訊かれて「欲しかったら持って帰ってもいい」、最近はさわっていいみたいだから」、だなんておかしくないかい？ 記憶喪失でも、自分の物をすぐに他人にあげてしまうだなんてそうそうないだろう？ ゲーム機を見てコンセンクトに刺さってなかったり、仕舞われてたり、埃とかが積もってたりして使っていないのだと判断したのならわかるけど、この通りこのゲーム機は出っ放しだったしソフトも中に入りっぱなし。埃もあまり積もってなかったから定期的に触ってはいいたんじゃないかな。それなのに、最近は何も触ってないみたいだからだなんてまるで触ってないことを自覚しているような発言は矛盾してる」

おおむね自分が違和感を覚えていたところと綾時が違和感を覚えていたところが同じだったと答え合わせをした湊は思っていたことを素直に吐き出した。

「そこまでを一瞬で判断してほぼノンストップで言うのキモい。流石綾時」

「それほどでも…って酷いね!? い、一瞬じゃないよ！ プレイ中、ずっと気になってたんだ。それにお兄さん、まるで僕が「死の宣告者

“だったって知ってるみたいな目で僕の事、見てきたから…：すこし怖くって”

「——そんなわけないじゃん」

小さく吐き出した綾時の言葉に対して咄嗟に出たのは否定の言葉だった。かかりつけの朝倉医院で僅かに記憶を思い出したらしい優希は帰ってきてからも記憶に穴があると申告してきているのだ。

そして、綾時が元・死の宣告者などというのを現時点で知るのは湊だけだ。アイギスですら、綾時に「貴方はダメであります」とも言っていないのだ。今日の授業中も、休憩中も放課後も、湊や奏子に絡みにいった綾時を冷めた目では見ていたがそれは綾時が朝に性懲りもなく奏子をナンパしたからであって軽蔑以上の感情はなかった。

兄が綾時が死の宣告者だったと知れるはずがないしそもそもわかるはずがないのだ。

かと言って、怖いと言っている綾時の言葉を完全に切り捨てることが出来ないことも、湊は自覚していた。

「ところで、タルタロスの探索はしてる？」

「してる。一応、全部伝えられて登れって言われてるから」

「そっか、じゃあ僕の出番はなさそうかなあ」

話題を変え、背伸びをした綾時はえへへと困ったように笑いました。ゲームのコントローラーを手に取り、使うキャラクターを選び始める。

「綾時の出番って…お前、なにかするつもりだったの」

「なにかって言うか…：いろいろ、助言とか？」

「…役に立たなさそう」

「そんなあ。まあ今の僕は影時間を体感できるってだけでペルソナも使えない非力な人間そのものなんだけどさ…：そんなに言わなくったって…」

なぜか綾時にだけは辛辣な湊の冷めた目が綾時を射抜く。

その時、コンコン、と控えめなノックの音が響いて外から声がかけられた。

「こんにちは、えと、同じクラスの朔間です。三上くん…：先生から頼ま

れた配布物とか持つてきたよ」

その声が聞こえたのか、ぱちりと目を開けた優希が体を起こしてのろのろと緩慢な動きでドアへと向かう。その顔は表情が抜け落ちており、倒れてから今日の朝までの物と同じように見えて湊は顔を顰めた。端々から感じる違和感から、兄は無理をして以前の兄を装っているのではないかという疑念を抱いていたが短時間で疑念は確信へと変わった。

湊と綾時を気にすることなくドアを開けた優希はドアの眼前にいた小柄な生徒を見下ろした。

「あの、これ…先生から。修学旅行に来れるかどうかの問診表とかだって。それでこれは僕が…その、勝手にまとめたものだけど、先週からの授業のノート。もし良ければ使って欲しいな」

「ありがとう」

札を言つて朔間からプリントとノートを受け取る。

「…うん、あの…その、体調、あまりよくないってきいたから…えと…ゆ、ゆつくり！ 休んでね！ そ、それと！ これ、僕の電話番号！ 何か欲しいものがあつたら買つてくるから、だから、連絡してくれとうれしいな…！」

「…？」

不思議そうな顔をして電話番号の書かれたメモを受け取つた優希はそれをぼんやりと見つめる。

部屋の中から話を聞いているだけの湊からしたら、ただのクラスメイトであるのに随分と親切なんだなと思うと同時に風花と似たようなおどおどとした印象を抱いた。

恐らく、あまり気は強くないのだろう。そういう性格だからこそ、教師にこんなおつかいのようなことをさせられているのかもしれないが。

ふと、ドアの隙間から見えた朔間の左の手首に包帯が巻かれているのが目に付く。受験シーズンだというのに腕を怪我するとは大変だな、と湊はそれを即座に意識から追いやり、テレビの画面へと顔を向けた。

「またプリントとかあれば持ってくるね。それじゃあ、さよなら…」
その会話を最後にはたんとドアが閉じられ、優希は勉強机の上にプリントやノートを纏めて置くとのろのろと歩きまたベッドに潜り込んで目を閉じた。

「……ねえ、お兄さんが寝てるのにこのままゲームしてていいのかな…」

「さあ。けど、優希はうるさくしなければいいって言ってたし別にいいんじゃない？ ダメだったら起きてくるよ。きつと」

「ずっと起きてるよ。寝てない」

「!?」

割り込んできた優希の声に、ぎよつとふたりの視線がそちらを向く。そこにはしつかりと目を開いている優希がじつとふたりを見返していた。

ずっと起きていた。つまり、先ほどの会話は全部――

「もしかして、会話、ぜんぶ聞いて…」

「ああ、うん。聞こえてた。あのさ、死の宣告者つてもしかして――」
その言葉に湊と綾時はゴクリと生唾を飲んだ。

「――フェザーマンの悪役とかそういうの？ ほら、小さい子は好きだろ。天田…くんも好きみたいだから、もしよければ話し相手になつてあげてよ」

2人は揃って安堵のため息を吐いた。全く違う話題だった、と。

「…うん。綾時は好きなんだ、悪役」

「ちよつと湊くん!? 僕の事裏切るのかい!?!」

「裏切るも何も僕は元からレッドイーグル派だったけど?」

「そんなのアリ!? 初耳なんだけど!?!」

いけしやあしやあと綾時に対してそう言いきった湊は話題を変えて話をこれ以上追及されないように有耶無耶にした。

湊にとつても、デスやニクスについて兄が知り「着いていく」と言われてしまうのを何としても避けたかったからだ。勘違いしてくれて良かった、と内心で再度安心した。

立ち上がり、テレビとゲーム機の電源を消す。

「あつ、もうすこしやりたかったのに！」

「さつきは続けていいか迷ってたくせに」

「それとこれは別だよ！ ひどいよ！」

その言い争いは止める者が誰ひとりいなかったたので荒垣が夕飯の時間だと呼びに来るまで続いたのだった。

11 / 11 (水) 放課後

「なんだか、お兄ちゃんと湊と私の3人だけで買い物って久しぶりだね！」

「そうかな…」

夕暮れ時の薄暗い街中を歩きながら、奏子が湊と優希に呼びかければ優希の不思議そうな声が帰って来る。

たまたま用事がなく同じタイミングで帰ってきた湊と奏子、そしてラウンジでまたぼーつと何も無い場所を眺めていた優希に荒垣が「ヒマなら晩飯の足りない材料を買ってきてくれ」と財布を投げて寄越して買い出しを頼んできたのだ。本当なら優希だけに頼みたかったらしいのだが、記憶が僅かに戻ったと言ってもぼーつとしていることが多かったので誰か付き添いが居た方がいいだろうと考え、踏み切るこゝとができなかったらしい。

そこへ丁度何も用事がなかった湊と奏子が天田より先に帰宅したことにより、この面子になったというわけだ。

「そうだよ！」

「…そうかも…？」

奏子が肯定すれば、優希はまた不思議そうな声色で首をわずかに傾げる。

そうやって、帰り道の茜射す澄んだ空気の中を歩く。湊がほう、と息を吐けば、白い靄となって宙へと浮かんだ。

「昔はね、お母さんとお兄ちゃんと、湊と私でよくお買い物に行ったんだよ。帰りにチョコ買ってもらったりしてた！」

奏子が幼少の頃の話を始める。

そういえば、湊にも臍気だがその記憶がある。毎週、水曜日の夕方は母親と共に4人でスーパーへ行き、1人ひとつ、100円までの好きなお菓子をひとつだけ買ってもらっていた。

奏子はチョコ。湊はスナック菓子。兄である優希はよく音の鳴るラムネを買ってもらって気分よくぴゅーぴゅー帰り道に吹いていたのをなんとなく覚えてる。

「あの音の鳴るラムネ、まだ売ってるのかな」

「売ってるよ！ この前コンビニでみたもん！ あずきミント味になってた！」

思い出し、呟けば奏子が即座に反応する。

あずきミント味とは一体…と湊が好奇心をそそられながらも戦々恐々としていると、懐をがさごそと弄る優希がコートのポケットから何かを取り出した。

お買い上げありがとうございますと書かれた橙色のシールの貼られた薄いパッケージの中に、ほんのりと紫色に染まる白いドーナツ型のラムネが7個ほど収まっている。ひとつ少ないのは食べてなくなってしまったからだろう。

「…もしかして、これ？ 昨日、夕食後に伊織から貰った。罰ゲームかなにかで買ったけど、不味…口に合わなかったからって…」

言い直しているが要はぼんやりしている兄に、順平が思ったより不味かったらしいあずきミント味のラムネを押し付けたのは明白で。

「順平…」

思わず、奏子も湊も遠い目になる。

順平にしては気を遣ったの事だったのかもしれないし、実は美味しいのかもしれないが理由が理由だ。

兄はまだ食べていないようだし順平のその行動を何ら気にしていないようだったので、奏子も湊も何も言うまいと決めた。

ただ、あまりなんでもかんでも今の兄に渡さないように、と言いつめておかないといけないという意見は一致したので顔を見合わせて頷き合う。

これで雛鳥のように餌付けされても困る。

「ごそごそと歩きながら優希がラムネのパッケージを開け、中身を取り出して噛み砕く。一応、口の中で音を鳴らせる仕組みになっているが、今の兄には関係なかったらしい。」

ぼんやりとした表情が、一瞬で顰められる。そしてはひはひと息を吐いて、口元を抑えた。

「どうしたのお兄ちゃん!？」

その様子に奏子が驚いて詰めよれば、はひはひと息を吐きながら、優希は絶え絶えに話し出す。

「す、ごい……っーんってする……!」

「う、うそだあ! そんなわけ……ひゃい!」

優希の言ったことを否定して、差し出されたラムネを口に含んだ奏子が悲鳴を上げた。

そして同じようにはひはひと息をして、湊の肩を叩いた。

「すっつごい、っーんってする……!!」

全く同じ感想を言つて、涙目でぶるぶると震えている奏子の想像以上にそのラムネには多量のメントールが含まれていたらしい。

「ううん、これ、っーんってより、南極……! 小豆の味がほんのりとしかない……! 詐欺だよこんなの!」

「そんなに……?」

こんなことを言われてしまうと湊も気になってしまう。

子供向けのお菓子であるはずのそれが、高校生でも涙目になる悶絶モノと来れば興味がそられない訳がない。

物によつては順平が押し付けた理由も許せるかもしれないそれを、口にするかどうか、湊は考えあぐねていた。

が、結局は怖いもの見たさにそのラムネを食べることに決める。

「優希、僕にもひとつ頂戴」

「……ん」

差し出されたラムネを手に取り、意を決して口に入れる。瞬間、とんでもない衝撃が口内を駆け巡り、思わず湊は悶絶した。

「なっ……にこれ……! いやいやいやいや、だめでしょ! だめでしょ

「こんなの!？」

思わずポーカークフェイスを崩して感想を叫んだ。ミントでもあずきでもなく、痛みにも等しいメントールが口の中を刺激し、ひんやりとする。

なるほど、これが奏子の言っていた『南極』か。と湊は合点がいった。そして、これはあずきミント味ではなく激烈ミント味に改名しろと内心で憤った。

これでは、音を鳴らそうと口内に外気をいれた瞬間にメントールが反応してキンキンに口内が冷えること間違いなしだろう。なぜこれを夏ではなく寒くなってきた秋に出そうとおもったのか。あずき味はどこにいったのか。子供向けのパッケージにしたら子供号泣でダメだろ。味のチエツクをした担当者はミント中毒だったのだろうかなどという正直どうでもいいことが頭の中で浮かんで消えた。これは順平が誰かにあげても仕方ないと思える味だったが、それと同時にこんなものを何も知らない兄に押し付けるなバカ、という感情も湧いてきた。

「あー…とんでもないもの食べちゃった…味わって音を鳴らすってレベルじゃないよー…」

げんなりとした表情の奏子が肩を落としてとぼとぼと歩く。湊もその意見には同感だった。

とんでもない劇物に当たってしまい、思い出話どころではなくなってしまうのでそこで話がいったん止まる。

そうして歩いてあともう少しで寮か、といったところで怒鳴り声か聞こえたかと思えば、眼前に1人の男性がつかつかと歩み寄ってきた。

「悪魔め！　なぜだ！　なぜ生きている!？　お前の存在がわたしの人生を狂わせたというのに!!!」

70代ほどのその老人はボケが来ているのか、驚きに固まっている優希に向かって延々と暴言を吐いている。湊と奏子も、突然の事に思考をピタリと止め、動けずにいた。

「貴様は盗っ人だ…！　わたしは知っているぞ…知っているんだ！

お前が偽物だということな！ 天啓が教えてくれたんだ！」

「なに…この人…」

怯える様にじり、と後ずさった奏子を庇うように優希が移動し、無表情で老人の言い分を黙ってきいている。だが、それがいけなかったのか、老人はさらにヒートアップし始めた。

「その目…その目だ…！ お前はいつもそうだ…その目でわたしを見る！ 若き日に来た葛葉の女が連れていたあのガキもそうだった！

…年端も行かない子供だと言うのに、その目が！ わたしを！ お前が居るせいでわたしの人生も娘の人生も、そこにいる双子の人生もめちやくちやだ!!!」

「……っ！」

「悪魔めが！ そんな表情をしても人になどなれぬわ！ 貴様は人間ではないのだと自覚しろ！」

双子、と湊と奏子をみてハッキリと言った老人の言葉に優希の無表情が崩れ、動揺が走る。その動揺を隙とみたからなのか、老人が杖を振り上げ「あつ」と誰が言う間も無く優希の頭へと振り下ろされる。

がつ、と鈍い音がして赤い飛沫が飛んだ。

「お兄ちゃん！」

「優希！」

悲鳴じみた奏子と湊の声が人気のない道に響く。

殴り抜かれたままだった姿勢から、ゆっくりと優希が無言で元の姿勢に戻して老人を睨みつける。その間にも、額から血が流れ、ぼたぼたと顔を伝いながら地面へと落ちた。

「……」

「…な、なんだその目は…そんな目でわたしを見るな…！ 誰だお前は…！ なんなんだ、おまえは…！」

「知るか」

短い答え。しかしそれを聞いた老人の顔に怯えが浮かぶ。

1歩、前へ優希が足を踏み出した。

「ひっ、悪魔め！ 近づくな！ わたしに近づくんじゃあない！ それ以上近づくな!!!」

後退りながら老人の口から盛れたそれはもはや悲鳴に近い叫びだった。

優希は奏子や湊を庇うように背を向けているため、その表情は何い知れない。

「…なら、お前の方こそ湊と奏子に2度と近づくな。今すぐどこかへ行ってしまう。なんの用でこっちに来たのか知らないけど、お前みたいな孫に理不尽な暴力を振るうような『祖父』はこちらから願ひ下げだ」

今まで聞いた事のないような、ハッキリとした怒りを含む拒絶の言葉に湊は本気で優希が怒っているのだとわかった。

それに、ただの気狂いの老人だと思っていた存在がこれまでであったことも無い祖父だとわかってなおさら血の気が引いた。恐らく、顔も覚えていないということは、両親の葬式の時に絶縁したと聞いていた母方の祖父なのだろう。思い出した記憶の中にその顔があったのか。それとも湊と奏子のように老人の言葉から推測したのか。どちらかは分からないが、優希に祖父と言われた老人が顔を顰めた。

「理不尽なものか！ お前はわたしの孫じゃない、悪魔だ！ 悪魔を殴って何が悪い！ お前の存在をわたしは認知しない！ わたしの…由緒正しき倉橋の血を継いでるのはその双子だけだ!!! お前は…いや…渚は…私の孫は…死んだはずなのだ…！ だからわたしはなにも…なにも間違つてなどいない…！」

頭を掻きむしり、血反吐を吐くような声で妄言のようなものを叫んだ老人の目から優希に対する怯えは消えない。

そんな取り乱している老人を、優希は酷く冷めた目で見ていた。「聞こえなかったのか。失せろ、といったんだ。それとも、聞こえる耳も無くしたか？」

「…つ、そういうところも…貴様はあの鬼子そっくりだ…！ わが父がああ裏切り者のせいで没落した倉橋家を持ち直させたというのに！ 葛葉の女とあの鬼子が来てからというもの、我が家はまた没落の一途をたどっている!!! 貴様の現れも、あの女のせ——」

「黙れ。他人をこき下ろす事がそんなに楽しいならずつとひとりで他

人のせいにし続けて喚わめいている」

底冷えするような声と、普段の兄らしくないきつい語気と口調に湊と奏子はまるで兄が知らない誰かになってしまったようで恐怖を覚える。だが、言うだけ言った優希はため息を吐いて老人へと背を向けて額から流れる血をぬぐうこともせず湊と奏子に向き合った。

「…帰ろう。湊、奏子」

いつもの困ったような顔を湊と奏子に向けながら、買ったものが入ったスーパ―の袋を持ち直し老人を無視して優希は帰り道を歩こうとする。

困惑しながらも湊と奏子はその横に並んで老人を伺うようにみながら徐々に離れていく。それでもなお、老人は喚き散らしていたようだった。3人はひたすら無言だった。

奏子は頭の中で「止血しなきゃ」という思いがぐるぐる渦巻くが行動に移すことが出来ず、湊は湊で老人の話が頭からこびりついて離れず、何も話す事が出来なかったのだ。

「おかえ……どうしたんだ三上!?!」

寮に帰り、玄関から中に入れば、出迎えた美鶴がぎよつとした顔で立ち上がり駆け寄ってくる。

「……転けてぶつけたただだよ」

「有里姉弟、本当か?」

優希の言葉を信用していないらしい美鶴が2人を問いつめれば、困惑したような表情で美鶴から顔を逸らす。それは、優希の言葉が嘘だと言っているようなものだった。

止血もしていないようだし、治療もされていない様子に何かあったのだな、と美鶴は察するが訊かれた2人は「突然絡んできた十数年ぶりに会う実の祖父に殴られました」だなんて荒唐無稽なことを言っているのか、考えあぐねていたのだ。

そんな珍しく困った様な顔の2人を問い詰めるよりも先にすべき

ことがある、と感じた美鶴はすぐに思考を切り替えた。

「…話は後できつちり聞かせてもらおう。三上、きみは荷物を弟に渡して治療をすべきだ」

「……………わかった。湊、頼んだ」

渋々、といった様子でスーパールの袋を湊に渡した優希が美鶴に連れられてラウンジのソファアールに座らせられる。

「…きみは、いつもこうして無茶をするのだな」

「無茶じゃない。あっちが勝手に…それに、もう寮に近かったし帰った方が早いかと」

「せめて止血ぐらいはしてくれ…」

「…すま…ごめん」

美鶴に濡らしたタオルで血をぬぐわれ、消毒し、ガーゼで止血される己の額にかかる長い前髪をあげながら優希が居心地悪そうに謝った。

対する美鶴はどうして病み上がりかつペルソナを持っていないのにこの友はこう性懲りもなく怪我をしてくるのかと苦虫をかみつぶしたような表情をした。

ただ喧嘩をした、というわけではないのだろう。

「お兄ちゃん、痛い…?」

「痛くない」

「ほんと?」

「本当だよ。大丈夫だから」

荒垣に買い物の品を渡してきたらしい奏子と湊が心配そうにラウンジのソファアールに座る。

「それで、何があったか教えてくれるか?」

美鶴がそんなふたりに向き、何があったのかを訊いてくる。

こういう時の優希本人の言葉は信用がないためだ。湊と奏子は美鶴がそうやって確認してくるのも仕方ない、と半ばあきらめている。悪いのはすぐに誤魔化したり隠し事をする兄なのだから。

「優希はこけたんじゃないやなくていきなりボケたお爺さんに絡まれて殴られた」

「湊の言うこと……間違つて無い、けど……すぐく怒鳴つて……あのひと……言つてること、ぜんぜんわかんなかったもん……こわかった……」

「ボケ……痴呆か……？ 御歳を召された方だったのか」

思案する美鶴に、湊と奏子が頷いた。

「うん。あのお爺さん、私たちのお祖父ちゃんだつて言つてたけど、お兄ちゃんの事をなんで生きてるんだく！ 悪魔だ！ 悪魔だく！
つて……お兄ちゃんを勝手に殺さないでほしいし悪魔なんかじゃ、ないのに」

「言つてたことも殆ど妄言だと思うし、あの様子じゃもう僕らに——
優希に近づいては来ないだろうけど……ほんと、悪魔はどっちだか」

あの老人の方が兄よりもよっぽど悪魔憑きのような言動をしていた、と双子は顔を顰めた。

片方は恐怖から、もう片方は嫌悪からだつたが浮かべた表情はそつくりで。

ただ、美鶴はふたりの発した「優希を殴つたのは祖父だ」という発言に目を見開く。

「その御老人は君たちの……祖父だと……!? つまり、三上の……」

「そうなる。ずっと会つたこともなかったけど、由緒正しい倉橋だとかなんとかって言つてた。傲慢そうなおじいさんだつたよ。優希が珍しく怒るくらいには」

「……あの人が、あのまま湊と奏子に殴りかかるんじゃないかって、そう思つたから」

「……そうか」

道理で、先ほど訊いたときに複雑そうな表情をしていたのかと美鶴は合点がいった。

恐らく美鶴がその場にいたらあまりの言葉に怒りを覚えていたか絶句していただろうその言動を予測して、ため息を吐いた。美鶴とて、好意を寄せている友人に危害を加えられたあげく悪魔呼ばわりされて黙つていられるはずがない。

自分が、自分の祖父がその想い人の心を壊す原因になつていたとしても、それでも美鶴は友人として居たかつた。

今の優希本人は全く気にしていないのでいらぬ心配だということ
を知らないまま。

ただ、倉橋といえは三上や有里姉弟の調査をした際に産みの母方の
姓がそんなものだったな、と美鶴は思い出す。あの大手商社である倉
橋商事の娘が駆け落ちしたという話も桐条も出席する重役の集まり
では有名なものだが、まさかな、と出かけた正解を呑み込んだ。

実際、そのまさかのまさかである。本来は駆け落ちではなく祝福さ
れた結婚であったが、“あること”が諍いとなり、娘本人が父である
倉橋翁と接触を断ち絶縁したのだ。

湊と奏子、そして優希はもうあの老人のことに触れたくないのか全
員口をつぐんでいる。

湊と奏子からすれば『理不尽に兄が殴られ、罵倒された怖い相手』
で、優希からすれば『意味不明なことを喚いている、いつ弟と妹に手
を出すかわからない危険人物』といった印象だろうか。

祖父としても、関わりのない他人だとしても良い感情が微塵もない
事は明白だった。

「言いにくい事を訊いてすまなかった」

「いいんです。誰かに説明する必要はあったと思いますし、桐条先輩
で良かったと思います。順平やゆかりちゃんだったら多分、怒りま
くつてたと思うし…アイギスは…『排除してくるであります！』つて
言って銃弾撃ちこみそうだし…」

「…そうか。それなら、いいんだが」

アイギスは意味無く人に発砲しないだろうがこれは奏子が件の老
人を人間扱いしていないことになるのか、それともアイギスに対する
認識がそうなのか、どちらなのかという疑問を覚えつつも美鶴は遠慮
がちに笑う。

すると、それを見た奏子がぷりぷりと怒り始めた。

「もう！ もっと先輩は自信持ってもいいんですよ？ ね、お兄ちゃ
ん！」

「ああ。きりじよ…美鶴さんはもつと自信を持っていいと思う。容姿
端麗、文武両道で努力家。バイクにも乗れて両親を大事にし、優しく

責任感が強い。そしてお茶目で可愛いというギャップがある。…褒めるとこしかないな」

奏子に話題を振られた優希が急に饒舌になる。

突然の褒め殺しに美鶴は思考回路がショートした。可愛い。あの三上から直接可愛いと言われた。

頭の中はそればかりが埋め尽くす。これが有象無象の他人から言われたのならこうはならなかっただろう。「だが相手は三上なのだから仕方ない」、と美鶴は自分で自分に言い訳をした。

「そ、そこそ、そうか!？」

「ああ、可愛いよ。美鶴さんは可愛い。…いや、美しい、と表現すべきなのだろうか」

芸術家のように思案しだした優希と、褒め殺しに声が上がらず美鶴。

そんな初心な2人を見て奏子はニヤニヤした。

「湊おく、ようやくお兄ちゃんにも春ですかね〜!」

「なに順平みたいなこと言ってるの。それに今は秋だよ」

「湊はわかっててそーゆーこという!」

奏子の順平のような軽い言葉を受け流し、湊は2人を観察する。

兄が直接可愛いなどと奏子以外に言うのは珍しい。いつもは曖昧な言葉でのらりくらりと直接的に言うのを受け流しているのだ。

奏子には可愛い可愛いと「あーはいはい」と受け流せる程度には言っているが、こうして他者に何度も言うとなれば明日槍でも降るのではないかと湊はテレビをつけて天気予報をチェックした。

しばらくニュースが流れ、出てきたお天気番組のお姉さんが言うには今日の深夜から明日にかけては雨。どうやら槍は降らないらしい。

それでも雨が降るとなれば今日のタルタロス探索は無しだな、と頭にメモをしておいて、テレビをつけたまま湊は意識の集中を2人のやりとりに戻した。

「可愛いや美しいという表現では間違っではないが自分が抱いている美鶴さんへの感情を表せない。なら…適切な言葉は何だ…?」

「お兄ちゃん、そういう時は『好き』、とか『愛してる』っていうんだよー!」

「そうか」

「ちよ、」

「何を横から優希に吹き込んでいるんだ奏子」と、ついツツコんでしまいそうになったのを湊は寸でのところで我慢した。

他人に「好き」や「愛してる」と囁く兄はこれまで見た事がない。つまり、ここで湊が余計な事を言わなければそんなレアな兄が見られるというわけだ。

これを逃さない手はない。

「美鶴さん」

「な、なんだ…？」

顔を赤らめながらも満更ではなさそうな美鶴が姿勢を正して言葉を待つ。

「俺はどうやら美鶴さんのことが——」

「帰ったぞ!!!」

ただ、残念ながらその告白は上手くいかないのがセオリーである。

タイミング悪く大声で帰寮を知らせた明彦に、優希の言葉が止まる。

「おかえり、真田…くん」

「ああ、三上…どうしたんだその怪我は。誰かにやられたのか？」

「…こけたってことにしといて」

曖昧にはぐらかした優希はどうやら美鶴以外に正確な理由を話すつもりはないらしい。それか、面倒がったか。恐らくは後者だろう。

ついでに優希から告白されて関係が『ただの友人』から別の何かにランクアップするかもしれないという千載一遇のチャンスを逃した美鶴は、意気消沈していた。

『好き』なのか『愛してる』なのか、それとも別の言葉だったのか。頭の中で「どれだったんだ!？」と美鶴は歯痒くなっていた。

しかし話題が変わってしまったので恐らく次は無いだろう。

優希本人の頭からもその話題は吹き飛んで、すっかりなくなってしまうようでもたぼんやりとしている。

「こけたって…お前な……ん？ どうした美鶴？ 落ち込んでいるよ

うだが」

そんな落ち込んでいる美鶴を見やり、明彦は不思議そうに首を傾げたが、咄嗟に奏子がフォローに入る。

「真田先輩、理由は訊かずにそっとしておいてあげて…乙女心って色々あるんです…」

「あ、ああ…？　そうか、頑張るんだぞ」

不思議そうなまま、タオルで首筋の汗を拭いてシャワーを浴びに共同浴場のある裏口へと向かった明彦を半分ジト目で見ながら美鶴は決意した。

（今度は絶対に誰にも邪魔されないような場所で彼の真意を問おう…！　もしくは、私の気持ちを伝える…！絶対だ！）

ただ少し喋り方に違和感があったのは何故だろうか、となにか引つかかったがまだ全快では無いのだから仕方がないんだろうと美鶴は違和感をごまかした。

そんな美鶴の決意を他所に湊と奏子のふたりはぼんやりとする兄を見つめながら、怪我をしてまで自分たちを庇おうとしてくれたことに記憶を失ってもそこだけは変わっていないなかつたんだなど確かなものを感じた。

その瞬間、バキン、と湊と奏子の脳内で音がしてカードが浮かび上がってくる。

—— Rank UP！

XI 〃研イ譜〃

三上優希 Rank 2 ↓ Rank 3

〃研イ譜〃のペルソナを生み出す力が増幅された！

「わ！　うそ、上がった!?!」

今まで進展しなかったコミュのランクが上がったことに奏子が思わず叫んでソファから立ち上がれば、不思議そうな美鶴の視線が視線が奏子へと向く。

「有里、いきなり叫んで立ち上がって…どうかしたのか？」

「あ、あはは…なんでもないです…」

それに苦笑いを返して静かに席に着いた。

実を言えばこの時の奏子はコミュランクが上がったことだけに注目しており、既にランクが3になっていることに気がついていなかった。他のコミュは姉弟で別々だというのに兄に対してだけは同じものを2人で共有しているということ自体が異常なのだが、湊は湊で「まあそういうこともあるか」と受け入れ、奏子は気づいていなかったという。気づいても不利益があるわけではないのでなにもできるわけでもなく、上がる条件も親睦を深めるだけでもなく、このようなタイミングだったりしていまいちわかっていないので気づいている湊としても受け入れるしかないのが現状だった。

影時間

雨が降りしきる音が響く誰もいないラウンジで、影時間中は動かないはずのテレビが勝手に点きノイズと共に砂嵐を映す。

発光するその画面が徐々に鮮明になり、濃霧のようなエフェクトに遮られながらも砂嵐のノイズ以外の人型のシルエツトを映し出した。

ガツ、ザザ…

『——真実も、生きる意味も、その答えも。全ては深き霧の中へ』
その言葉は誰にも聴きとられることはなく。気づかれることもなく。

テレビに映った人影はただ静かに腰ほどの深さのある暗い水の中で立っていた。

それを数分ほど映したテレビは不意にその電源を落とし、最初から何もなかったかのように沈黙したのだった。

蛇頭黄幡神（11／12）

11／12（木）朝

朝食をすまし、学校へと向かう用意も出来た湊はラウンジに降りる。

今日も兄である優希は怪我をしたこともあり、まだ様子を見て休んでいべきだと判断されて私服のまま、ラウンジのソファに座っている。

前髪で隠れてはいるが、額に貼られたガーゼが昨日の出来事を思い出させて思わず顔を顰めてしまう。

そんな湊の内心を露知らず、優希はぼんやりとした視線を湊に向けて僅かにはにかんで口を開いた。

「湊、いつてらっしやい」

「うん。行ってくる」

いつてらっしやい、と言われれば返事をしないわけにはいかない。

まんざらでもない気分のまま昨日の事は即座に頭から消して無かったことにして、湊はイヤホンを耳にかけてプレーヤーで音楽を再生させて傘を持ち、玄関を開けて外に出た。

「——やあ湊くん！ おはよう！」

「なんでお前がここにいるの」

瞬間、また雨が降り出しそうな曇天と綾時の清々しい笑顔に出迎えられるとは思っていなかったので思わず辛辣な対応をしてしまう。

この時間なら女子に囲まれながら意気揚々と登校している筈じゃないのか、とか何故順平や友近ではなく自分のところに来たんだとか色々言いたいことがあったがめんどくさくなって口をつぐんだ。

「や、だって僕と湊は“友だち”だろう？ なら、学校だって一緒に行くべきだと思ってる！」

「どうでもいい…」

なんだ、そんなことか。と妙に気疲れした湊は歩き始める。その横を、ひよこのようにひよこひよここと綾時が着いてくる。双葉のような頭のアホ毛がひよこひよここと同じように揺れた。

「どうでも良くないよ！ それと、話したいことがあったんだ」

「…話したいこと？」

またくだらない事じゃないだろうな、と綾時を見ればいつになく真剣な表情で。

イヤホンを外して襟に引っ掛け、綾時が続きを話すのを待った。

「昨日の影時間、湊は部屋にいた？」

「居た。けど寝てた」

それがいったいどうしたのか、と眉をわずかに顰める。

「昨日、僕の家…あ、マンシヨンのね！ リビングに置いてたテレビが影時間中に勝手に点いたんだ」

「そんなわけないじゃん。影時間中は電化製品とか機械は全部止まるの、綾時だって知ってるだろ」

綾時はマンシヨン住まいなのか、と全然話に関係なさそうな情報を頭に入れながら湊は当たり前前の事を言う。

影時間内に、機械が動く筈がない。ましてや、テレビが勝手に点くなどと。

「で、でも、本当に点いたんだよ！ で、そこにきみのお兄さんが映ってたんだ。なんだか、ノイズ塗れでよくわからなかったけど悲しげな顔で“ぜんぶ霧の中に”って。そんな感じのことを言ってたんだ」

「寝ぼけてたんじゃやない？ だいたい、優希はずっと寮に居たんだからテレビに出られるはずがない」

兄がテレビに、しかも影時間という特殊な時間に映し出されたというのはいくら綾時の話でもにわかには信じがたい。

「寝ぼけてなんかやないよ…僕、元々シャドウだったお蔭か影時間はバッチリ眼が冴えちゃって…眠れないんだ。おかげで…ふあーあ、毎日少し眠いんだよね」

「居眠りしちやだめだからね」

「きみじゃないんだからしないよ！ たぶん…」

自信なさげに返事を返した綾時はしかし、諦めていないようで再び口を開いた。

「そうだ、湊。今日か明日の影時間、タルタロスに行くことになっても

暇を見てテレビを点けてみてよ。何か映るかもしれないし！ 映ったら僕の話が本当だったって証明できるし、一石二鳥だね！」

「映らなかつたらたこ焼き奢りで」

「えっ、うん。分かったよ！ いいよ！ たこ焼きだね！」

湊にたこ焼きを奢るといふ意味がどういうものになるか、綾時はいまいち自覚してなかつたようで空返事のようなものを返す。ファルロスとして湊の内において湊が大食いだと知っていても、奢る側に回ることの無かつた綾時はのちに悲鳴を上げると同時に「お金持ちの帰国子女って設定で良かった」、と安堵するのだった。

なお、「そのお金ってどこから出てるの？」という湊の何も考えていない一言により固まることになるとは思ってもみなかった。

昼休み

「——つてことがあって、今日はタルタロスの探索に行くけどその前にテレビが点くか見てもいい？」

ゆかりや順平と昼食のカツサンドをほおぼりながらそんな話をする。

綾時は奏子や他の女子目当てにE組へ行っているため不在だ。

最近乙女心が芽生えたらしいアイギスはそんな綾時がこれ以上奏子や風花に手を出さないか監視するためにゴミを見るような目をしてつつ着いていったのだった。このまま放置していれば修学旅行の時に美鶴からの処刑だけでなく、アイギスから綾時に向けて『不純』という動機でその指から火を噴くことになるかもしれないと湊は遠い目をしながら見送ったのはつい5分ほど前だ。

「影時間、ひとりでに点くテレビ…砂嵐…そこに映るのは悲し気な三上センパイ…どう思いますよゆかりッチ！」

「そこで私に振るワケ!? そういうの、苦手って言ったじゃん!!! や、三上先輩は幽霊じゃないけどさ…！」

うげ、と嫌そうな顔をしたゆかりは順平の言葉を頭の中で繰り返し

ていたのか、しばらく黙ったあと再び口を開いた。

「…でも、望月くんって世間知らずではあるけどそういうタチの悪い冗談言わないよね」

綾時がペルソナ能力のない幾月のような影時間を体験できる人間であるということは昨夜説明済みだ。そして短い付き合いの中で綾時は女たらしではあれどもそのような冗談を言わないある意味真摯な人間だという評判はゆかりや順平、そして他の人間にも知れ渡っていた。

「まーな。綾時のヤツはそーゆー冗談は言わねえ。オレっちが保証してもいいぜー!」

「アンタの保証ってなんか信用無いからいらない…!」

「ゆかりツチ、そりやないぜ…:ま、でもいいんじゃない? オレも気になるし、なんも映んなかったら綾時がたこ焼き奢ってくれんדר?」

がつくりと落ち込んだ順平はすぐに顔をいつもの表情へと戻した。

いつのまにか綾時がたこ焼きを奢る人数が湊ひとりから湊と順平に増えている事に気がつかないふりをして、湊は頷く。

まあ、なんとかなるだろうという適当な考えの元だ。

「おっし、じゃあ今日の影時間、タルタロス探索前にテレビがつくかチャレンジだな!」

「私はしないからね。それよりチドリちゃんとはどうなのよアンタ」

「え? チドリと? グッフ、それはですねえ…!」

「あ、やっぱいいや。めんどくさそう」

「どうでもいい…!」

「そんなこと言わずにく聞いてくれよ! 京都のお土産どうするかとかさ〜!」

そんな順平の調子のいい声と共に、昼休みは過ぎていった。

夕方

昼までに降っていた小雨は止み、すっかり晴れているさまを自室の

窓からぼんやりと眺める。

本当は、修学旅行に行くかどうかの出欠と問診表を書かなければいけないのだが、それを書こうとシャーペンを握った己の手は止まっている。

正直なところ眠い。書類を書くのはおつくだ。しかし提出期限は迫っている。今日書いてしまつて桐条…ではなく美鶴さんに渡さないで提出期限である明後日までに間に合わないだろう。

改めて書類を見れば、『※出席する場合は体調を鑑みて保険医でもある江戸川先生と同じ部屋で泊まることになります』と書いてある。そこに不満は無い。が、記憶にあるとんでもない薬を飲まされることになることだけは勘弁したい。

いつそのこと休んでしまおうか、と思うも折角の修学旅行だ。行かなければ心配されるかもしれない。

それに、荒垣くんにお土産を頼まれてしまっている。買いに行かねばならないという義務感くらいはある。

用紙の「出席」に丸をつけ、一息吐けば唐突に昨日殴られた額が今になってじくじくと痛むのであるの老人を恨めしく思いながらも、なぜあの老人も声と姿が何もせずになつたのかと疑問に思う。

アイギス、綾時、そしてあの老人…あとはプリントなどを届けに来てくれた朔間というクラスメイトも。

この4人は何もせずともその人だとわかつた。ハッキリと聞こえ、見えた。

だからこそこの怪我を負う羽目になつたと言うべきかもしれない。どうしてこうもままならないのか。正直な話、共通点など何もわからない。湊と奏子は唯一記憶が無いながらも認識できたのは『前回』の自分とのやり取りのせいだろう。

記憶を読み取った今でさえ、『前回』の自分が言っていた言葉の意味の殆どは分からない。『前回』の記憶だけでも読み取ることが出来ない。なのでなにがあつたか全くわからないのだ。

辛うじて、自分が湊や奏子そしてほかのみんなに土壇場で甘えてしまったせいで世界が滅んだということだけ分かつたが、自分が甘えて

世界が減んでしまうなどあるのだろうか。

もしかして、土壇場で死にたくなかったとかなのだろうか。だが、それなら湊や奏子がいつもどおりニユクスの封印をするはずだ。狡い考えだが、世界はそういう風に回っている。

「っ、けほっ…けほけほっ…さむ…」

正直な話、常に寒いのだがここ数日は更に寒い気がする。

咳き込んだ後に冷えた指先を撫でて、シャーペンをしまった。

食事をとったり風呂に入ってもあまり体温が上がらないのはやはり持病のせいなのか、それとも今月の初めまで飲んでいたというペルソナの制御剤の副作用なのか。どちらかはわからないが元気ではあれども健康とは言い難いのは確かだ。

自分の感覚としてはしんどくないが、身体は明らかに異常を訴えてきている。

よく以前の自分はこれを耐えられたな、と感心したいが最後の大型シャドウを倒した次の日は今の比ではないくらいに体調が悪かったようなのでこれでも回復しているということなのか。

そうなればきつといい。元気になれば、出来ることが増える。皆の役に立てる。

そのはずなのに、

(――どうして、嬉しくないんだろう)

影時間

タルタロスに行くと言えしたが、出る前に綾時が言っていた事の確認をしようと言はテレビの前に立った。

「……」

1分。2分。3分…5分経ってもテレビは一向に動かない。

それどころか、湊が電源ボタンを押してもうんともすんとも言わないのだ。やはり、綾時が寝ぼけて見ていた夢のようなものだったのだろうか、と結論付けて立ち上がり、ラウンジまで下りた。

ラウンジでは湊以外の全員が準備を終えてそこにおり、優希も湊と約束した“できること”である見送りの為か眠たげにラウンジのソファ―に座ってぼーっと何もない場所を眺めて、髪を弄る奏子のなすがままにされている。

「よーつす！ その顔じゃ、湊の方もテレビは点かなかったっポイな」
順平が片手をあげて出迎える。順平の口ぶりからすると順平の方もダメだったらしい。

「え、なにになに？ テレビがつく？ 影時間なんだから動くわけないのになんで確かめてるの？」

優希の髪を弄っていた奏子が手を止めて不思議そうに近寄り、話を訊こうと輪に入る。

「あー…綾時の野郎がさ、影時間にテレビが点いて三上センパイが映ったつつつてたから、確かめてやろうと思ったワケよ！ 結果はこの通り惨敗…まさしくお手上げ侍ですわ…」

「ふーん…」

興味ありげに呟いた奏子はそれでも『テレビが映らなかった』という結果が出てしまっているためかそれ以上の反応を返すことは無かった。

だが、深夜のテレビに知人が映る、という現象に奏子は「あ」と声を出した。

「……そういえば、合宿に行った八十稲羽ってところで『雨の日の深夜12時ぴったりひとりでテレビを見ると運命の人が見える』って話は聞いたよ。『マヨナカテレビ』っていったかな…おまじないみたいなもので昔はラジオとかで運命のヒトの声が聞こえるってやつだったらしいけど。もしかして、綾時くんの見たのってそれじゃない？」
「なら、綾時の運命の相手が優希だっていうわけ？ ええ…」

奏子の言葉に、湊は頭を抱えた。

まさかの綾時が兄の運命の相手だとは思いたくもない。いや、ある意味で元々は死の宣告者だったので運命といえれば運命だがそれは恋愛面的な方面ではないしここにいる全員の運命の相手ともいえるだろう。

とにかく考えるのはやめよう、とため息を吐いた。それか、湊じぶんと兄を見間違えたのだと言われる方がまだましだ。

自分がたとえ綾時の運命の相手になるとしても。それはそれで不可抗力である。なんせ綾時デスを宿していたのは奏子もだが主に自分なのだから。

ふと、頭の中を「ぐくこんきつき」という単語と灰色の髪の毛の学ランを着た少年の姿がよぎった気がするが気のせいだと湊は頭を振った。

「それじゃあ、優希、行ってくるね」

「ああ、行ってらっしゃい。みんな気をつけて。怪我の無いように」

ぼんやりとした表情から微笑みに変わる兄の顔を見ながら、今日帰ってきたら兄の「おかえり」が待っているのだと思うと、少し浮足立つような気分になった。

タルタロスへとついた一行を待っていたのはいつもの静寂なエントランス、ではなくタルタロスの玄関前で立つサングラスをかけた神父の男だった。

「何者だッ!？」

「誰…? いままで、反応なんて何も…!」

風花が怯え、後ずさる。

風花のペルソナが進化したことにより強化された探知能力をもつてしてもそこに誰かがいるなどという事が探知できなかったのだ。

強力なジャミング能力を持つペルソナ使いか。それとも、と身構える一向に男——神取が口を開いた。

「お初にお目にかかる。私の名前は神取鷹久。『ニユクス教』というしがない宗教の神父をしている者だ」

「ニユクス教だと…?」

訝しむような荒垣の呟きに、神取が頷く。

「ああ。ニユクスの招来を目的とし、それによりもたらされる滅びを至上としている。さて、私がここに来た目的が何か、きみ達にはわか

るかね？」

問うような神取のサングラスの奥の眼は笑っておらず、空虚な眼窩だけがのぞいている。

ニユクスの招来によって起こる滅びを目的としているというのなら、それを阻止しようとしている特別課外活動部は目の上のたんこぶのようなものだ。

もつとも、何故特別課外活動部の目的を知っているのか、という疑問が残るが目の前の男は間違いなく味方ではないと全員が何となく感じ取っていた。

「神取…？」

ただ、美鶴ひとりだけは神取の名前に思うところがあるようで、ひとりその名前を小さく呟いた。

どこかで聞いたことがあるのだが、どうにもおもいだせない。

「…たったひとりで僕らの邪魔をするっていうの!？」

「そーだぜ！ オッサンは1人、こっちは10人も戦えるやつがいるんだ。なに企んでるのか知らねーけど鍛えてきたオレたちたちが早々負けるはずねーって!」

天田と順平の言葉に神取は口角をあげる。

「誰がひとりなどと言ったのかね？ 宗教には、神父だけでなく人を導く教主が必要だ」

その神取の言葉と同時にタルタロスの影からぬらりと暗い色のローブを纏う人物と、ひとりの杖を持つ老人が現れた。

「あーっ！ あ、あのひと！ 昨日お兄ちゃんを殴った…おじいさん!」

思わず叫んだ奏子の視線の先で老人——倉橋翁が苦虫をかみつぶしたような顔をした。

「まさか、教主たる主の邪魔をするモノが居ると聞いて来てみれば…我が血を継いだ孫がそれだとは…だが、しかし…うむ…あの悪魔ならばこうも躊躇わずに済んだというものを」

悪魔。

それは兄の事を指していると瞬時に判断した奏子は顔を顰めた。

祖父であるという倉橋翁は兄を傷つけることに何のためらいもない、と分かり、余計に腹が立ったのだ。

「あの人：お兄ちゃんを傷つけることに何の躊躇いもないの：？」

「奏子、クールに。怒り散らしたら相手の思う壺だよ」

「分かってる。それにいまここにいてるってことは——敵、なんだよね……」

奏子の言葉に小さく頷いた湊は倉橋翁ではなく、その横にいるローブを着た人物にぞわぞわとしたものを感じていた。

第六感か、それとも別の何かか。

わからないが間違いなくこの中で一番危険なのはあの人物だ、と使えなかったはずの己の内のペルソナである “メサイア” がぶるぶると共鳴するように反応しているのが分かった。

「躊躇うというのか？」

そんな危険人物である教主が嘲るような、試すような口調で倉橋翁に向かって口を開いた。

その言葉に倉橋翁は顔色をさあつと青くして震え始める。あれは畏れだ、と湊は感じ取った。

倉橋翁など、あのローブの人物は指先すら動かさずに消すことが出来るだろう。それこそ、言葉でもってして「死ね」と一言いうだけで、あの老人は怯えながらも喜んで死ぬ。そんな確証が湊にはあった。

「滅相もございませぬ！ 奴らを排除した暁には永遠が手に入る！

血筋も跡継ぎも、何ら必要ない永遠が！ そう約束してくださいましたのは教主様でしょう！」

到底信じられそうにない言葉を吐きながら、倉橋翁は必死に教主と呼んだ存在に向かって弁明する。この哀れな老人は彼らに騙されているのだ。そうでないと、滅びを至上とする教えと正反対の事である永遠を約束するはずがない。

しかしもう後戻りが出来ない場所まで来てしまっている。全く会わなかった孫と、信じ切っている教主。そのどちらの言葉を聴くと言われれば、間違いなく後者だろう。

倉橋翁の弁明を聞いた教主の唯一見える部分である口元は、微笑ん

だ。それはもう、綺麗な笑みで。

「——なら、いまお前がすべきことは何か。分かるだろう？ 倉橋」
教主はまるで鈴を転がすような声で倉橋翁の頬に手を優しく添えながらそう囁く。

その瞬間、湊は何か引つかかった。だが、それもすぐに倉橋翁の叫びによってかき消される。

「ああ、ああー！ 全ては主の仰せの通りにイイ！」

それに答えるように天を仰ぎながら叫び小瓶を取り出して倉橋翁は中身の錠剤を全て口の中へ流し込んだ。

「う……ぐぐ……ぐぎききい……今！ わたしは！ 人の身を超越るのだアアア!!!」

薬を多少に摂取した倉橋翁の身体から黒いモヤの様なMAGが吹き出し、目鼻口を含めた身体中からどす黒い泥のような液体が流れ、地面に落ちる。

そしてその地面へと流れた泥は瞬く間に広がっていき、倉橋翁を頭の先まで呑み込んで一瞬だけ静かになった。

しかしすぐにごぼごぼと音を立てて泡立ち、その中から山が盛り上がるように多頭の巨大な蛇が姿を現す。

「は、ははは……これが力！ ……これが永遠！ ……これが真に『悪魔になる』という事か!!! なんと、気分のいい事か!!!」

それは空気を震わせるほどの咆哮をあげ、歓喜に打ち震えるように身体をくねらせた。

その様子を見た教主は満足そうに微笑んで姿を消す。自分はもう帰っても大丈夫だといわんばかりに。

「再誕せし我が名は蛇頭黄幡神!!! 主の邪魔をする貴様らを踏み潰し、食らうものオオオ!!! げきやギャギャきやー！」

蛇頭黄幡神——元々はインド神話に登場する“ラーフ”と呼ばれる蛇神であり、災害・日食・月蝕を引き起こすものとも呼ばれ恐れられている。

日本ではスサノオと同一視され、九曜の羅刹としても奉られている者だ。

道祖神としても身近に感じられる蛇神であるそれは、その身近さなどを微塵も感じさせない禍々しい黒の光輪を湛えた八又の蛇と化していた。

そしてその体躯はタルタロスに巻きついていても尚有り余るほど大きく、今まで見たどんな敵よりも強大に思えた。

その8つの頭にある口がノイズがかった倉橋翁の下卑た嗤い声とともにガチガチと音を鳴らし、怪しい光を湛える瞳孔の開き切った蛇眼は特別課外活動部の面々を睨み付ける。

「うそ…人が化け物…ううん、悪魔になったの…!？」

奏子はその光景に慄く。一応とはいえ血のつながった祖父が、目の前で異形の化け物と化したのだ。

いままで奏子や特別課外活動部が戦ってきた相手はすべて最初から異形であるシャドウだ。なんとなくゲームの敵のようにすら思っていた現実感のない相手とは違い、目の前の「蛇頭黄幡神」は人間が変化したものだ。

『人が化け物になるなんて』という戸惑いと、倉橋翁本人の心の弱さがあったとはいえ、こんな簡単に人間を異形の化け物へと墮とした教主という存在がどれだけ奏子たち特別課外活動部を潰すことに対し手段を選ばないのか、突きつけられたような気がしたのだ。

「あんなの、反則でしょ!!!」

『反応はシャドウのものとよく似ています。でも…少し違う…？ タイプがアルカナじゃなくて「邪神」…？ どういうことなんだろう…？ と、とにかく皆さん、気をつけてください！』

「どの道やることはシャドウ相手の時と変わらないんだ。やるしかないだろう！ むしろ俺は、こういう大物の方が燃えるがな！」

風花の言葉に全員が身構える中、アイギスが蛇頭黄幡神を睨みつけた。

「あの反応は…モコイさんのものと似ていますが決定的に違うところがあります。モコイさんの言うなればワルワルさん、であります！」

「ワン！ ウウ…!！」

あれは悪しきものだとは断定したアイギスのそれに同意するようにコロマルも吠えてから唸り、口にくわえたアセイミナイフを啜えなおした。

「——だとしても、それは悪魔となったと言えども元は人だ。きみ達は己の目的の為に人を殺せるというのか？　まだ救えるかもしれないというのに？」

嘲るような神取の言葉が横から聞こえ、反射的にアイギスとコロマルは跳び退いた。

元居た場所のすぐ横で、サングラスの向こうから虚ろな眼窩を覗かせながら神取が刀の刃先を下して立っていた。避けなければ一太刀の元に切り捨てられていただろう。

「な、なに言ってるのよアンタ：あんなになつて、人間に戻れるワケがないじゃない！　なら倒すしかないでしょ！」

ゆかりが咄嗟に神取の言葉を否定するも、神取は愉快そうにくつつと喉奥を鳴らすだけだ。

「何がおかしいのよッ！」

「いやなに、きみ達があれを倒せると信じ切っているのが面白くてね。

：シャドウと違って「悪魔」は影時間外であっても活動できる。精々、頑張つて倒すと良い。もつとも、それが成された時にはきみたちは人殺しだが」

それだけ言うと神取は夜の闇に溶ける様にして消える。

鞭の様にしなりながら暴れる蛇頭黄幡神の身体を避けながら、その言葉の真意にたどり着いた美鶴が叫んだ。

「：不味い！　奴のいう事が本当なら、ここで奴を止められなければ：大型シャドウをとり逃す以上に街に被害が行ってしまう！　：下手をすれば、寮にいる三上も：！」

もし蛇頭黄幡神が特別課外活動部を倒したとしても、それで止まるとは思えない。

教主がそれを止めるのはもつとあり得ない。なにせ、ニユクス教の教えは「滅びこそ救い」なのだから。むしろ多くの人に死を与えるそれを、喜んでほつたらかしにするに違いない。

そしてここで蛇頭黄幡神を逃せば、影時間内にしか影響を及ぼせないシャドウとは違い現実の時間でも動けるといふ蛇頭黄幡神はそのまま街へ出て巨体をもつてして大暴れするだろう。

そうなれば、美鶴たちにはどうすることもできないほどの甚大な被害が出る。下手をしたら港区は壊滅するかもしれないのだ。

そして、察で待つなにも戦える手段の無い優希はそのまま――
「そんなこと、させるわけにはいきません！」

最悪が全員の頭をよぎる。

キツ、と表情をきつくしたアイギスが指先からマシンガンの様に銃弾を発射した。

だが、蛇頭黄幡神の黒い靄の集まりのような体表はそれを難なく弾き、傷一つない。

その様子に生半可な攻撃では効かないと悟った明彦が「ユノ」の中にいる風花へと呼びかけた。

「山岸ッ！ アナライズはまだか!？」

『いま、解析中です！ でも、シャドウと少し違うので：時間がかかるかもしれません』

「それまで持ちこたえてりや良いわけだ。ついでに倒せりや文句ねえだろ」

焦る明彦を落ち着かせるように首薙ぎの斧を持った荒垣が明彦の肩にポンと手を置いて前に出る。

「こう首が多いとこの斧も役に立てるってもんだ」

首薙ぎ、と称されるそれを満足そうに持ち、蛇頭黄幡神の首をぶつた切るつもりでいる荒垣はやる気満々だ。

刃自体は暴れまわる巨体に弾かれながら、それを滑らせて片手で召喚器を構える。

「突っ込め！ カストール！」 【デスバウンド】

引き金を引けば、「カストール」が蹄を振り上げて蛇頭黄幡神へと突っ込んだ。

巨体といえども流石にペルソナの物理的な体当たりは堪えたように僅かにその姿勢をぐらつかせた。が、それも数ある首のひとつだけ

だ。すぐに別の首が荒垣へと迫り、弾き飛ばした。

「ぐあつ！」

「シンジ！」

「チツ大丈夫だ……こんなもん、唾付けときや治る」

フラフラと立ち上がり、血反吐を地面へと吐いた荒垣は斧を構えなおした。

だが、荒垣を弾き飛ばした首はそのまま口を大きく開く。

「ふしゆるるる……愚かな……このわたしに刃向かうというのか……？ 人を超えた、このわたしに？ ならばそうだな……こうしよう」

その目が向いたのは——天田だった。

目にもとまらぬ速度でさらに別の首が天田へと迫り、その小さな体を締め上げた。

「ぐあああつ!!!」

「天田ツ!!!」

「くそ、天田！」

「天田くん!!!」

それを見て悲鳴を聞きつけた面々が天田を呼ぶが、他の首に分断され、それぞれ対処で手一杯でそちらに向かうことが出来ずにいた。

いま、天田を救うことが出来るとすればそれは目の前で首に身体を締め上げられているのを見ている明彦と荒垣だった。

「貴様らがいま武器を捨てるというのならコレは解放してやろう。そしてその後でひとりひとり鬻り、縊り殺してやろうではないか。なあに、苦しみは一瞬だ。グキキキキ……」

そんなこと、できるはずがない。どのみち殺すと言われているのだ。

だが、天田の命を失うわけにもいかない。

(どうすれば。どうすればいいんだ……！ 俺はまた、失うのか!? 妹の……美紀のときのよう……!?)

歯ぎしりしながら、明彦は拳を握り締める。

また、失うのか。また、守れないのか。

何度も同じことを繰り返していいいいのか。

——力を欲したのは、何のためだ？

「!?」

一瞬、時が止まったようになり、目の前に金色の眼をした明彦自身が立っていた。

『——お前は、何のために力を求めた？ 思い出せ。そして欲しろ。』

それが、欲望だ。受け入れるべき、お前の一部だ』

「思い出す…？ 欲する…？」

『お前は己惚れているんだ。誰も死者が出ていないことに安堵していた。だが、その裏で誰が傷ついていた？ 誰も死ななかったのは誰がそれをおつかぶさっていたからだ？』

もうひとりの自分にそう語りかけられ、明彦は考えた。

力を欲するようになったのは、妹の美紀を守りたかつたから。そしてなにより、美紀の様に誰も死なせないために。大切な誰かを守れるようにだ。

そして、弛んでいる・己惚れていると言われてハツとした。

確かに明彦は誰も死んでいない現状に甘え、今回も大丈夫だろうという気の緩みがあった。

否、それは明彦だけではなく特別課外活動部の全員にも言えることだったが、今の明彦にとっては自分が一番緩んでいたのだと本心で自覚するほどには弛んでいたのだ。

その油断が、今回の事を引き起こしたのだと金色の眼は責める。

さらに誰のお蔭で誰も死ななかったのか・誰が一番ボロボロになっていたのかと言われれば、間違いなく思い当たる人物がひとり。

「三上…か…？」

5月のモノレールの時は明彦が参加していなかったとはいえ、順平を庇い、軽くは無い怪我を負い、7月の時には洗脳されつつもそれに耐えようとしていた。

それ以降、暴走したペルソナを抑えるために決して副作用が軽いとは言えない制御剤を飲みながらもタルタロスの探索に変わらず参加し、9月は幼なじみである荒垣のペルソナの暴走を止めようとした。その後の10月も優希は身を呈して天田を庇った。

そのある意味病的な自己犠牲に等しい行動のお蔭とまではいわないがその先に、死人が出ていないという現状があったのだ。

だがもし、ボタンをひとつかけ間違えていたら。優希や荒垣、そして天田が死んでいたかもしれない。否、順平だって美鶴だって、他の誰もか死んでいたかもしれないのだ。

そんな明彦の考えを読んだもうひとりの明彦は、さらに問いかける。

『お前がそう思うのならそうなんだろう。で、お前はその三上になにをしてやれた？ どうにかしてやりたいと、制御剤を飲んでいると知った時に決意したんじゃないのか？』

「ああ、そうだ。けど俺にはなにも……」

『できない、と？ なら、このまま諦めて目の前で天田が死ぬところを黙ってみているんだな。このまま負けて、全て失うと良い』

目の前のもうひとりの明彦の目は冷徹だった。

「何もできないと諦めるのならこのまま死ぬ」とでも言いたげだ。

考えてみれば幼なじみの荒垣だってそうだった。

8月には特別課外活動部の命を救い、罪の清算をする覚悟をし、10月は優希が倒れたあとに荒垣自身も身を呈して天田を守ったらしい。だが、自分はどうか？ 何が出来た？

まだ何もできていないじゃないか。と齒噛みする。

いつも、大事なところで踏み込めずにいたのだ。

お世辞にも強いとは言えない弱いままの自分。ペルソナという力を得たが、ただ得ただけであって明彦自身はそれを得る前と何ら変わらさず、“守る”覚悟が出来ていなかったのを自覚した。

ただ美紀いもつとの死から逃れるために、力さえあれば妹のような犠牲者を出さずに済むと、そう思っていただけだったのだ。

だが、それは違った。力を持つていたとしても、力がなくても。必要なのは覚悟だったのだ。簡単なことだった。その、簡単に難しいことが明彦にはできないでいたのだ。

だから、明彦は今もこうして妹を失ったときと変わらない無力感を感じていた。

ならばどうすればいいのか。明彦の答えは既に出ていた。

「……せ……」

震える息を吐きながら、明彦は目つきをきつくする。

その目には、覚悟の光が宿っていた。

「――俺に力を寄越せ！ 守れるだけの力を！ 例え、この身が砕けてもいい！ もう俺は自分自身の弱さから目を背けたりなどしない！」

『嘘じゃ、ないようだな』

血を吐きそうな声でそう叫んだ真田を見やり、満足げに、しかし穏やかに目の前のもうひとりの明彦が笑う。

『なら、引き金を引け。その覚悟があるのなら、もう大丈夫だ』

明彦は召喚器を持ち、引き金に指をかけた。

大丈夫だと、そう言った己に応える様に頷けばその姿が幻の様に霧散した。

そして、その名を呼んだ。

「――来い、カエサル！！！！」

目覚める力（11／12）

一方、血を拭い蛇頭黄幡神じゃとうおうはんしんを睨み付けた荒垣もまた、無力感を感じていた。

天田が蛇頭黄幡神に掴まり締め上げられているのは荒垣からすれば自分のせいともいえるのだ。

荒垣が油断したから。荒垣が天田から目を離したから起きた事態だ。

天田を仲間として信頼しているから目を離したわけではない。頼って、背中を預けていたわけじゃない。

こんな事態になっているというのに、いつも通りで行けば何とかなるだろうと思っていたのだ。

しかし、天田はまだ小学生だという事を失念していた。いくら場数を踏んでいると言っても天田が一番若輩者であり経験不足だという事を忘れていた。

普段のタルタロス探索や、大型シャドウ戦で高校生に混じって遜色なく戦っていたこともあり荒垣が気にかけていたといっても、それはすぐに大丈夫だろうという油断に変わっていたのだ。

そのタイミングで冷や水を浴びせられるように蛇頭黄幡神により天田が捕らえられ、死んでしまうかもしれないという自体に陥ってしまった。

（どうすりゃいい。生半可な攻撃じゃあアイツを怯ませることすらできねえ…考えろ。考えろ。考えろ!!!）

今は手加減されて絞められているのだろうが、下手に動けば天田の全身の骨を砕くことも蛇頭黄幡神にはたやすいだろう。

隣で歯ぎしりする明彦幼馴染を見て考えてることは同じだと直感した荒垣はしかし、目の前をとおった過ぎた青い色の蝶に目を奪われる。

そんなことをしている暇はないというのに、その蝶から目を離せない。

どこか知っている雰囲気を感じさせるその蝶は荒垣の事を気にも留めないように空高く飛んでいく。

瞬間、時間が止まったような気がした。

気配を感じて顔を目の前に戻せば、そこには金色の眼をしたもうひとりの荒垣が立っていた。

「俺……？」

荒垣がそう呼びかけるが、もうひとりの荒垣はじつと無言で責める様に荒垣を見つめている。

「なんだよ」

『……』

もうひとりの荒垣は喋らない。

それどころか、ゆらゆらと陽炎の様に不安定に揺らめいている。不意に、その姿にカストールの幻が重なったような気がした。

それを見て荒垣は何となく目の前のもうひとりの自分が己のペルソナであるカストールなのではないかと察しがついた。

「ああ、成程な。てめえは正真正銘俺ってわけだ。で、なんだ。わざわざ出てきたっていう事はなんかあんだろ。言いたいことがあるならさっさと言えよ。俺は急いでんだ」

『……』

投げやりに乾いた笑いを零しながらそう言えば、もうひとりの荒垣は少し悲し気に眉を顰めた。ただそれだけだ。

「んだよ……喋れねえのか？」

『…怖いんだろ』

相変わらず沈黙したままだったもうひとりの荒垣はそこでようやく口を開いた。

怖い。

候補が有りすぎて、荒垣にはわからない。

『どうして俺を受け入れてくれねえ。どうして、抑え付けるんだ。俺は、お前の力なのに』

悲しげな表情を怒りの表情に変えて、もうひとりの荒垣はその金色の眼で荒垣を睨み付けた。

『どうして俺に怯えてやがる。俺は、どうあがいてもお前なのに』
「お前……」

どうあがいても自分。その言葉に荒垣は思わずかぶりを振った。

「俺はてめえを受け入れたはずだ。暴走したのはてめえがわる…」

言いかけてはた、と気づく。

「…違え。てめえの言う通り俺はビビってんだ。お前を受け入れて力を持つことに、まだ」

荒垣は自嘲気味に苦笑する。

真に受け入れられているのならそもそも暴走などしなかったのだ。

ペルソナ能力に目覚めてすぐの頃の荒垣には漠然と力に目覚めたという認識がなく、己の心を律し、カストールを御するという気持ちになかった。ひたすら明彦が危なっかしいから傍にいてやらないという気持ちもあり、心を律せずともいう事を訊いてくれると思っていたのだ。

だが、それは無知ゆえの甘い考えで。

戦闘に対する怯えが本心にあつたからか結果的に土壇場で暴走させ、天田の母親の命を奪ってしまった。『ビュプノス』という乱入者があつたのもあるが、結果的には恐らくカストールだけであつても天田の母親を害する結果になつていたには変わりなかつただろう。

そして制御剤を飲み、命を削ってまで本心を押し殺して生きてきた。

カストールは制御剤を飲んでいたというのにその上でそんな荒垣に反発するように再び暴走し、また天田を危険にさらした。

今もなお、暴走しないように気をつけてはいたが結果的に荒垣のような自然覚醒型のペルソナ使いが暴走させているという事は、荒垣自身もペルソナを受け入れ切れていないことにも原因があつた。

もうひとりの自分。

荒垣はそれを未だに認められていなかったのだ。

「デケえ力ちからをもつて、それを振るつて。それが出来りや何の文句もねえつてのにまだ暴走させて傷つけちゃうことにビビってやがる。アキや美鶴、天田。それに三上と有里——いや、奏子を守ろうつてどの口がいつてんだかな」

ハッ、ともう一度自嘲気味に笑った荒垣はもうひとりの自分に呼び

かける。

「なあ、お前はどうしたいんだ。言えよ。自分の本心なんざ滅多に聞けねえだろ。だからよ、俺に教えてくれよ。俺がどうしたいか。カストールおまえが、どうしてほしいか」

『……』

もうひとりの荒垣は答えない。「自分で考えろ」とでも言いたげだ。そのまま何も話すことは無く、揺らめいたもうひとりの荒垣は姿を消してしまふ。

「てめえの答えはてめえで出せつてか。成程な」

その意図を汲んだ荒垣は考える。自分がまず、どうしたいか。

まずは明彦や天田、奏子を守るような力が欲しい。それは間違いない。

そして次に、ペルソナを暴走させたくない。

暴走させていることがネックなのだから、暴走させたくないのは当然だ。

だが、いまいちしくりこない。守りたいと思ったのも、暴走させたくないと思っっているのもある意味本心だ。だというのに何か違う気がするのだ。

不意に空間が揺らいで戦っているはずの奏子の幻が荒垣の目の前に現れる。

『荒垣先輩が思ってることはそんなことじゃないですよね。大丈夫。私、いい子ですから先輩の思ってること、ちゃんんと、わかってますよ。だから、思いつきりぶちまけちゃってください！』

その声と笑顔は陽だまりの様に酷く優しく暖かかった。奏子の幻はすぐに揺らいで優希の幻へと変わる。

『荒垣くん』

ただ、優希の幻は以前の様に微笑んで荒垣を呼んだだけだった。だが、それだけで。たったそれだけで荒垣は気づいたのだ。

（ああ、そうか。俺は――）

簡単なことだった。

誰かのためじゃない。自分が自分自身の為に思っていることが、本

心だったのだと気がついた。

荒垣の本心からの願い。

それは――

「聞こえてんだろー！ 見えてんだろー！ 俺の本心は…本当の想いは…」
「この先も馬鹿みてえに騒ぎながらあいつらと生きてえ」ってことだ！ 俺は諦めねえぞ…！ てめえがいくら暴走しようが俺は何度だって止めるし受け入れてやる！ 根競べといこうじゃねえか！」
「生きたい」、と荒垣は消えたもうひとりの自分に叫ぶ。

それは死ぬ覚悟ではなく、本心から生きる覚悟をした荒垣の咆哮に近い叫びだった。

なぜ現れた幻が幼馴染の明彦ではなく、あのふたりだったのか。

荒垣はなんとなく分かった気がした。生きたいと荒垣に思わせたのは明彦でも美鶴でも、天田でもない。

奏子と優希だったのだ。

あのふたりが、義務でも責任感でも何でもなく「生きて欲しい」と荒垣を肯定し死の淵へ歩もうとしていたところを引つ張りあげたのだ。多少、強引すぎる気がしないでもないが、荒垣にはその強引さはどうにも心地よかったのは確かだ。

思えば、最初から『アキを守りたかった』のではなく、荒垣は『アキの隣を歩んでいたかった』のだ。だから、はき違えていた。間違えた。

(けどな、これからはそうじゃねえ)

その叫びと覚悟により、本来変わることはないそれがかけがえのない絆を紡いだ奏子のアルカナである。『愚者』と共鳴し、新たな力を呼び覚ました。

愚者のコミュを最大まで上げると解放されるペルソナである
蛇神ヤマタノオロチ殺しの伝説を持つ「スサノオ」。

そしてその名を冠する悪魔はかつて14代目葛葉ライドウと共に、帝都を蝕まんとする別個体の蛇頭黄幡神を討つたことがある。

――分霊あくまとペルソナ。

本来なら結びつかないはずのそれが、荒垣自身が紡いだ奏子との

絆。そして優希という葛葉ライドウと繋がりがあある人間と荒垣もまた、絆を結んでいたために奇跡的に結びついたのだ。

しかし、「カストール」が生まれ変わるのとはそれではない。

龍と見紛う大蛇を殺しうる力を持った存在——すなわち、「竜殺し」を荒垣が深層心理で求めたために、カストールは自らその姿をスサノオではないそれに変えた。

消えたはずのもうひとりの己が笑ったような気がして荒垣も得意げな笑みを浮かべる。

「だからよ、全力で来やがれ——『シグルド』!!!」

【グラム】

召喚器の引き金を引けば、荒垣によく似た髪型をした白髪の偉丈夫のペルソナが現れ片手に携えた剣「グラム」で天田を捕らえる蛇頭黄幡神の首を一刀両断する。万能属性のそれが硬い体表の防御も関係なく易々と斬り裂いたのだ。

——その姿はまさに「竜殺しの英雄」だった。

「おのれえええ!!!」小癩な小童風情がアアアア!!!」

頭をひとつ切り落とされ、天田という人質を取り逃がした蛇頭黄幡神は怒りのままに別の首で、切り落とされた首と共に地面に落ちた天田を踏みつぶそうとする。だが、それを新たなペルソナに目覚めた明彦が許さない。

「——来い、「カエサル」!!!」【ジオダイン】

強烈な雷撃が蛇頭黄幡神の首を牽制し、その隙に天田が何とかこちらへと走り寄って来るのを確認した明彦は戻ってきた天田を庇うために前へ出た。

「天田、大丈夫か!?!」

「けほっ、すみません…御心配、かけました…」

「バカ言え、謝るんじゃないやねえよ。お前から目を離れた俺らもわりい。

…悪かったな、怖かったろうし、痛かっただろ?」

ぼんぽん、と天田は荒垣に頭を撫でられる。しかしそれを素直に受

け取ることはできなかった。

「そんなこと…」

ない、と言おうとした天田の目の前を青い蝶が過ぎ去った。

それに一瞬目を奪われた瞬間、全ての音が消えた。

『——結局、僕だけいつも守られてばかりだ』

「誰だっ!？」

目の前に暗い顔をしているもうひとりの天田が現れる。

それを咄嗟に敵だと判断した天田は、蛇頭黄幡神に捕まった際に落とした槍を拾いなおしてその金の眼をしたもうひとりの天田へと向けた。

『ずっと僕は弱いまま。母さんに守られ、三上さんに守られ、荒垣さんに守られて。ただのお荷物じゃないか』

「そんなこと…わかってる…」

思わず向けた槍の穂先が揺らいだ。

もうひとりの天田が言ったことは紛れもなく天田が今抱えている無力感——本心そのものだったからだ。

10月の大型シャドウ戦のあと、もともと天田とその母が住んでいたアパートがあった場所に来ていた天田がしたのは許す決意とこれからも戦う決意だった。だがそれは天田の心持ちを本心から変えたわけではなかった。

確かに一大決心ではあったが、『これまで』の天田とは違い『今回』の天田は母親以外誰も失っていないのだ。

『これまで』なら荒垣が優希のどちらかが戦線離脱もしくは死亡し、そこで「もう逃げない」と決意を固めるところだったのが今回は何の因果か誰も離脱していない。

そのおかげというべきか、そのせいというべきか。

天田は上記にある様に許す決意とこれからも戦う決意しかしていなかったのだ。そのツケともいうべきものが、ここに来た。

『わかってないよ。わかってたら、こんなことにはなっていない』

「なら僕にどうしろっていうんだよ!」

わからない、と乱暴に叫んだ天田を見るもうひとりの天田は風いで

いた。

『——それは自分で考えないと。誰かから貰った答えが本物じゃないくらいはわかってるだろう?』

「……」

その通りだった。

天田は黙る。この目の前にいる自分の偽物? は天田の考えを呼んで一番痛いところを突いてくる。しかし害そうという気は一切感じられず、見守るような雰囲気さえ感じられる。

天田は何となく待たせてくれているのだとわかった。だがそれもいつまでも、というわけではないだろう。

ここで天田が何もしなくとも、きつと他の誰かが——例えば強いリーダーである湊や奏子、新たなペルソナに目覚めた明彦や荒垣がなんとかしてくれる。そんな思いがなかったとは言えない。

天田が知る中で、自分だけが現状に甘え、逃げようとしていたのだ。だが、それではいけないという気持ちがあるのも確かだ。

「僕は…小さいから、力がなかったから…大人扱いしてほしいってずっと背伸びしてたのに、結局は誰かに甘えて。当たり散らして。さっきだって誰かが助けてくれるからって期待して。やっぱり僕は子供のままだった」

『そうだね。でも甘えることは悪くないよ。大人だって狡くて甘えん坊じゃないか』

落ち込む天田を励ますようにもうひとりの天田がそう告げた。

それでも、天田は頭を横に振る。

「けど、それじゃだめなんだ…! 他人ばかり見て比べたり、羨ましがらんじゃなくて…自分で出来ることを探さないと。諦めて逃げてちや、ダメだったんだ…!」

『うん。確かに、そのとおりだ』

もうひとりの天田が優しく微笑んだ。

その姿に、天田は死んでしまった母を幻視して誓うように叫ぶ。天国で見守る母に恥じないように。母に、要らぬ心配をかけぬように。「…もう僕は自分の弱さや未熟さを理由に逃げたりなんかしない。僕

には僕の出来ることをする！　それで、胸を張ってみんなの…ううん、荒垣さんの横に並ぶんだ！　だから、見守っててね、母さん」

叫びに呼応するようにもうひとりの天田が光となって消える。その間際、本当に一瞬だけ母親の姿に変わり、「頑張ってるね」と言わんばかりに口を動かしたのを見逃さなかった。

「うん…僕、頑張るよ…頑張るから…心配しないで…！」
ぎゅ、と持っていた槍を握り締める。

天田は、目の前のもうひとりの自分が己のペルソナなのではないかという漠然とした勘のようなものがあった。

気づき、というべきか。

だからこそ、天田は呼びかける。もうひとりの自分に。否、「もう逃げない」と覚悟したことにより新たな力を得て姿を変えた己のペルソナに。

「——あいつを倒す力を…僕に貸して！　“カーラ・ネミ”！」

召喚器の引き金を引けば、ばきん、というガラスが割れるような音と共に力の奔流が巻き起こる。

車輪の様だった姿は、無限を意味する砂時計を横にしたような八字を主張する上半身と華奢な下半身に変わり、真っ黒だった体躯とはうって変わりオレンジ主体のヒロイックなロボットのような姿になっていた。

【審判の光】

「ぐ、ぐぎいいいいいい！！！！」

蛇頭黄幡神に向かって、くるくると“カーラ・ネミ”が両腕をあげて上半身を回転させれば強烈な聖なる光が地面に縫い付ける様に蛇頭黄幡神の首のひとつに何度も突き刺さり、悲鳴を上げさせた。

それは、『これまで』なら使えなかったはずの攻撃。

悪魔と特別課外活動部。

決して交わらなかったそれが、歪んだ因果をきっかけに交わった影響で戦力の強化にもつながっていたのだ。

危機に陥ることもあればこうして力の覚醒を促すこともある。それが、因果というものだった。

『天田くんのペルソナも変わった…!? もしかして、私やゆかりちゃんと同じように…変化したってことなんでしょうか…?』

「天田少年ってば、ピンチになってから新しいペルソナに目覚めてやがって! くらくらく! とんだヒーローじゃねえか! それに荒垣センパイに真田センパイのペルソナも変わってるし…こりや勝てちまうかもな!」

依然7つの首が残っているために厳しい状況であることには変わりないが3人のペルソナが覚醒し、圧倒的な力を見せつけた事により希望が見える。

「ぐぎぎぎぎぎ…五月蠅い羽虫共が調子づきおって…ちよこぎいな!!!」

【デスバウンド】

怒り狂い、タルタロス前の広場の地面を抉りかねない勢いでのたうち回る蛇頭黄幡神。

しかし冷静さを失ったことで次の人質をとろうなどと言う思考は消え、ただただ力のままに暴れまわり、目の前の邪魔な存在を殲滅しようとする躍起になっていた。

「ちい、一度この巨体の動きを止める必要があるな!」【コンセントレイト】

美鶴は意識を集中させる。止める首を正確に選び、狙わねば鞭の様にしなるその巨体に押しつぶされて終わりだ。

いまはまだ、運よく荒垣以外の誰もがその巨体の餌食にはなっていないがそれも時間の問題だろう。

相手は化け物である悪魔。こちらはペルソナで補正がかかっているとは言えどもスタミナに限界のある人間だ。時間をかけ過ぎれば集中と息が切れた者からその餌食になる。

【ブフダイーン】

そんな予測に美鶴が冷や汗を流しながら召喚器の引き金を引き、ペンテシレアが大口を開けゆかりに噛みついて来ようとしたひとつの頭の動きを巨大な氷で凍らせることよって一時的に止める。

「ありがとうごぎいます!」

礼を言いながらゆかりが弓を引いて蛇頭黄幡神の目に向かって矢

を撃てば、それは目に纏っている黒い炎によって燃やされ無効化されてしまった。

「こういうの、目とかが柔らかいのがセオリーって聞くけどやっぱ効かないか……ならー!」

『皆さん、お待たせしました。解析、出来ました! 光と疾風の属性に弱いみたいです! 物理攻撃全般に耐性があって火炎と闇は効かないみたいです。吸収されちゃうみたいです』

「ナイス風花! じゃ、ペルソナの攻撃はキクってわけね! ……っ、きやつ!」

風花に告げられた弱点を突こうと召喚器を構えようとしたゆかりを、蛇頭黄幡神の首が2本がかりで吹き飛ばして阻止する。

「岳羽ッ!」

おもわず美鶴の注意が逸れる。その一瞬を、蛇頭黄幡神のいくつもある目は見逃さなかった。

【蛇神の眼光】

蛇目が怪しく光り、見つめた先から黒い炎が湧き出た。

それは迷うことなく美鶴の足元を掬い、足を止めさせる。そしてそのがら空きの身体に蛇頭黄幡神の首がたたきつけられた。

「がっ!!!」

「桐条先輩!! ……っ!!!」

そうして美鶴を心配したゆかりをもその巨体は呑み込むように弾き飛ばした。

この巨体だ。たった一撃ですら致命傷になりかねず、戦況をひっくり返してしまう。

蛇頭黄幡神にとって、ある意味特別課外活動部もそのほかの人間も、蟻に等しい存在だった。

それくらい、簡単に踏みつぶせるものだったのだ。かといって、既に頭のひとつを落とされているので特別課外活動部は蟻は蟻でも毒をもつ蟻、と言ったところか。

「桐条の令嬢か…南条も桐条も新参者の癖に我が倉橋を歴史に置いていかれた老いぼれ扱いしおって…! ぎ、ぎぎぎ、ぐぎいいいい…」

美鶴を睨み付けた蛇頭黄幡神は金切り声を上げる。

その思考は悪魔になったことによりもはや正常ではない。

「倉橋は分家と言えど古来よりある安倍晴明の血筋だぞ!? 本家の奴らとて、大正の頃に一度没落したというのに!!! 裏切者を出したわが家ばかり責め立てる!!! 全てはあの悪魔と葛葉のせいではないか!!!! わたしはしっている…知っているんだぞ…!」

びたんびたんと暴れながら次々いろんなものへ責任転嫁し、蛇頭黄幡神——倉橋翁は叫ぶ。

ただし、この責任転嫁をする癖は悪魔になったからでも気がふれたせいでも何でもない、もともと彼本人が持っていた癖だ。だからこそ、娘であった優希と奏子、湊の母は「あること」が起こった際について耐え切れなくなり絶縁したのだ。

それを知らず、尚も無関係に近い知っている人物の名を挙げながら暴れる首が倒れている美鶴と気絶しているゆかりへと襲いかかった。

「くそっ!」

「ゆかりちゃん! 桐条先輩!!」

誰もが間に合わない。そう思ったのだ。

轟音と共にしなつた首が振り下ろされる。

衝撃で巻き上がった土煙が晴れ、そこには——

「……………」

【メデアアラハン】

潰れた美鶴とゆかりの姿ではなく、くるくると回る枕を抱えた漠が2人を守っていた。

否、それは「ポベートル」そのものだった。眠たげにくるくると回るポベートルはついぞと言わんばかりに美鶴たち全員の傷を癒すと、その姿を変える。

【ラストキヤンデイ】

ポベートルから姿を変え、現れたのは「パンタソス」。

しかしその姿は以前のものとは違い、天文台で見たより人に近い姿に変わっていた。

そんなパンタソスは特別課外活動部の全員に虹色の光を落としその能力を底上げしてまた姿を変える。

【物理貫通】

【コロシの愉悦】

【チャージ】

【狂乱の剛爪】

最後が変わったのは「モルペウス」だった。

モルペウスはお返しをするようにスキルを発動させると、蛇頭黄幡神が叩きつけてきたその首を鋭利な爪でズタズタに断ち切った。

「が、ぎいいいいい……！ 貴様、貴様はああ!!! 悪魔が!!! 貴様はいつもわたしの邪魔をする!!!」

モルペウスから聴く優希の気配と面影を感じとった蛇頭黄幡神はまたしても痛みと憎悪に叫ぶ。しかしモルペウスは素知らぬ顔だ。

「三上……?」

その代わり、そこまでしか出来ない、と惜しむように美鶴を見つめながら空気に溶けるように消えていくモルペウス。

そんなモルペウスを惚けた顔で見つめ返した美鶴は、なんとなくだが優希が守ってくれたのだと思った。そうでなければこの不可解な現象に説明がつかない。

かといって、優希本人が出てきたわけでも無さそうだ、と美鶴は判断する。

もし来ていたらまっさきに突っ込むのはペルソナではなく本人だからだ。

美鶴の知る優希ならそうする、と美鶴は目を僅かに伏せ身動きしただ。

その拍子に貰った金の招き猫のストラップがポケットから零れ落ちてちりんと鳴る。

バイクのキーにつけていたそれは置いてきたはずだったのに美鶴のスカートのポケットにいつの間にか入っていた。

そして、それに青い蝶が止まって空気に溶けるように消える。

幻だったのかと目をぱちくりとさせた美鶴だったが、そのストラップを大事にそっと拾うとポケットへと仕舞いすぐに気を持ち直して立ち上がりゆかりを守るために蛇頭黄幡神を睨みつけた。

「……うっ……げほ、げほげほっ……！ ひゅっ……ひゅっ……はひゅっ……はっ……はっ……」

咳き込み、酸素を肺にめいっぱい吸いながら目を開く。

「……？」

霞んだ視界に映るのは横向きになった真つ暗なラウンジだった。どうやら、自分は湊たちの帰りを待っている間に寝てしまっていたらしい。

しかしそれにしては座っていたラウンジのソファアーではなく床に倒れていたのは何故かと思いつながら上半身を起こした。

まるで長い間走っていた時のような息と鼓動の乱れ方をしている自分の身体は悪夢でも見たのか少し汗ばんでいる。

しかし反対に身体はとても寒い。

ラウンジの床で寝ていたからか氷のように冷えきっている。

あまりの寒さにぶるりと体を震わせた。

影時間中だから暖房はつかないんだっか、と思い出して自室から毛布をもつて来ることにする。

布団に入ったらまずぐっすり朝まで寝てしまいそうだったのでやめた。

まだ、ソファアーの方がもし寝てしまってもみんなが帰ってきた時に起きる確率が高い。…はずだ。

影時間が終わっていないということは、恐らく意識を失っていたのは数分程度だろう。そんなことを考えながらずるずると薄手の毛布を引きずって階段を降りる。

そのせいなのか途中で躓いて、残り7段ほどの階段を転げ落ちた。

「……………」

起き上がった後も視界と頭がぐわんぐわんと揺れているので暗がり
で無理に毛布を引きずりながら歩くんじゃないかと後悔した。

異常を訴える体を無視して這うようにラウンジのソファアールへと
なるとかたどりで着いてそのまま毛布を被って寝ようするも何だか喉が
渴いているような気がして、仕方なくキッチンにあるペットボトルに
入った水を取りに行こうとよろめきながらもゆっくり立ち上がる。

そこで眠る前の事を何となく思い出した。いまと同じように何と
なく喉が渴いて水を取りに行こうとして——それで。

そこからの記憶が無いので恐らく眠気に耐え切れなかったのだら
う。

そんなことを考えながらぼんやりと立ち止まっていると、不意に誰
もない筈なのに誰かの気配を後ろに感じた気がして振り向いた。

闇に溶けるような暗い色のローブ。

それを着た誰かが入口に立っている。

「っひ、」

——それを揺らぐ視界で認識した瞬間、ぞわりと背筋が粟立って思
わず息を飲む。

影時間内であるのにも関わらず知らない人間が寮内のラウンジへ
と音もなく入って来たという事実には、思考が固まる。

今までこんなことなかったのに、どうして突然。というかアレは人
間なのか、シャドウなのか。それとも悪魔か別の何かなのか。

わからない。分からないからこそ怖い。

無意識にじりじりと後退れば、何かにぶつかった感触がして後ろを
盗み見る。

テレビだ。

しまった、階段側に逃げれば良かったか、と内心で舌打ちするもそ
の目を離れた一瞬で暗い色のローブの人間はその距離を詰めて来て
その手をこちらの首へと伸ばす。

音もなく瞬間移動するなんて、まともな人間じゃない。

そんなことを思いながら自分はその腕から逃れようと、咄嗟に足を

動かした。

が、

「…っ!？」

眩暈がしてふらついて足をもつれさせ、後ろに倒れる体。

それを受け止めてくれるだろうとおもった背後のテレビの画面は自分を受け止めてはくれず、ぶつんと意識が途切れた。

蛇頭黄幡神の首は残り6つ。

一本は荒垣の新たなペルソナ「シグルド」によって断たれ、もう一本は突如現れた優希のペルソナによって断たれた。

【物理貫通】のスキルがあれば攻撃を通すことが出来るとわかったが、それを持つペルソナが居るのは湊と奏子、そして荒垣くらいだった。

「ね、ねえ…今の、今の！ お兄ちゃんのペルソナだったよね!？」

『はい。見えたのは一瞬でしたが…三上先輩のペルソナと同じものでした。でも…』

「山岸、どうかしたの」

言い淀む風花に暴れまわる蛇頭黄幡神の首を斬りつけながら、湊が問いただした。

『その、反応が3体全て同じひとつになっていたのと出どころがよくわからなくて…それに名前も変わっていて…反応は同じなのに本当に三上先輩のペルソナなのかどうかは…ちょっと自信がないです』

自信なさげな風花の言葉に湊は首を傾げた。反応が一つになって名前が変わるなどあるのだろうか。湊が見た限りでは3体ちゃんと居たはずだ。だというのにひとつの反応しかなかったというのは三位一体のペルソナになったということなのだろうか。疑問に思った湊は名前が判っているらしい風花に聞き返す。

「名前が？」

『はい。彼らは“オネイロイ”という名前みたいです』

風花から告げられた名は“オネイロイ”。

知らない名前だ。これまで兄がそんな名前のペルソナを召喚したところを見たところがない。そもそも、『これまで』使っていたのはモルペウスだけだった。

「ポベートル」や「パンタソス」は『今回』始めて湊が見るペルソナだったのだ。いや、その2体だけではない。ホワイトライダーたち黙示録の四騎士や、「トランペッター」もこれまで湊は兄が使っているところを見た事がない。

兄になにが起こっているというのか。そして、色々変わってきている現状、この先どうなるのか。

湊には何もわからなかった。

だというのに。

—— Rank UP!

XI 「碁イ譜」

三上優希 Rank3↓Rank4

「碁イ譜」のペルソナを生み出す力が増幅された！

「!?!」

脳裏に突如カードが浮かび上がり、コミュランクが上がったことを知らされた。

戦闘中だというのにコミュランクが上がった事実には湊と奏子の思考と足が止まる。まるで、「オネイロイ」の名を知ることがトリガーだったようなタイミングだ。そこになにか作為的なものを感じ、湊は思わず顔を顰める。

そんな湊の後ろで分断されている順平が蛇頭黄幡神の首をいなしながら文句を言うかの如く叫んだ。

「くっそー！ 完璧オレツちとコロマルに対してメタ貼ってきてんじゃねーかよ！ せっかく伊織順平大活躍くってしようとおもったのにさあ！」

「ワン！」

「順平さんでも補助魔法などを駆使すれば活躍できるかと」

悔しがる順平を窘める様にコロマルが吼え、アイギスが奏子に迫る首を蹴り飛ばしながら補足するようにアドバイスする。

「おつ、その手がありましたか！なるほどな！よおーし、じゃんじゃかけまくるぜ！」【マハラクカジャ】

「アオーン!!!」【スクカジャ】

それに気を良くした順平が防御力を上げる魔法を全体にかけ出す。その恩恵を受け、コロマルが後に続いて“ケルベロス”を呼び出してアイギスの回避率と命中率を上げた。

「順平さんとコロマルさんに感謝、であります！　“パラディオン”

!!!」【マハタルカジャ】

アイギスが全員に攻撃力を上げる補助魔法を使い、さらに皆の能力値を上げる。

あらかじめかかっていた「ラストキヤンデイ」の効果も合わせればかなり能力値が増幅された状態になったと言えるだろう。

「来て、　“だいそうじょう”!!!」【マハンマオン】

「ぐ、ああ!?　祖父に…祖父であるわたしに…攻撃するということのか!!!」

「お兄ちゃん殴ったりゆかりちゃんと桐条先輩や天田くんを殺そうとしたりする人は私たちのおじいちゃんなんかじゃない！　というか、今の貴方は正真正銘悪魔でしょ!!!」

怒り気味の奏子が呼び出した　“だいそうじょう”が神聖な力の宿る札で蛇頭黄幡神の持つ首全ての動きを止めた。

「湊！」

「分かってるー！」

蛇頭黄幡神の動きを止めたままの奏子が湊に短く呼びかけながらもう一度召喚器を構える。

呼びかけられた湊は奏で子の意図をいち早く察し、同じように構えた。

——そして同時に引き金を引く。

「“ミトラ”！」

「“メタトロン”！」

それは湊が奏子に教えた秘密の技。ミックススレイドいざとなったら一か八かで撃とう、と相談していたものだ。

奏子がこのタイミングでこうして目配せしてきたという事は、そういう事なのだと湊は判断した。

「【ラストジャッジ】!!!」

蛇頭黄幡神を威力の上があった光の柱が呑み込んだ。

本来、ミックスレイドは湊か奏子どちらか一人でも使えるのだが、なぜか2人で使った方が効果が上がりやすい気がするために湊は奏子に「出来るだけふたりでやろう」と伝えているのだ。

10回ほどこの1年を繰り返しても何故自分たちがミックスレイドなどというものが出来るのか、記憶がある湊にも記憶の無い奏子にもさっぱりだが便利なものは使って損は無いという価値観で一致している。

度重なる補助魔法により後押しで威力を増した【ラストジャッジ】の光が収まり、地に倒れ伏す蛇頭黄幡神の姿が露わになる。

「た…たおせ、た…?」

「これでまだ起き上がるようならもう一発撃てばいいよ」

「む、むりだよお！今のですごく疲れちゃったもん…お兄ちゃんがたまに連れてってくれた『タルタロス周回特別訓練コース』くらい！逆になんで湊はそんなにぴんぴんしてるの!」

「ひみつ」

へたり込む奏子と蛇頭黄幡神を睨みつけながらそう告げる湊。

少し離れてみても蛇頭黄幡神はピクリとも動かないようだった。

「本当に倒せたんでしょか…」

「さあな。だが、まだ動くようなら有里弟の意見と同じくもう一度倒すまでだ。俺はまだまだ動けるぞ」

不安げに勝利を確認する天田に軽く笑った明彦は戦闘の構えを解かない。

そんな明彦の横で湊と同じく蛇頭黄幡神を睨みつけていた荒垣は小さく口を開いて召喚器をこめかみに当てた。

「……いや、ほだだ」【グラム】

「ギヤアアア!!!」

『シグルド』を呼び出した荒垣が何もない場所に向かって『グラ

ム』を放つ。

——否、奏子に跳びかかろうとした切断されたはずの首に向かつて放ったのだ。

「…おい、じーさんよお、テメエ、切れた首だけになっても孫…それも女に対して不意打ちたあ随分と往生際と根性がわりいじゃねえか。ああ、ついでに性格も悪かったか。すまねえな」

煽るようにそう呼びかければ本体が身じろぎし、壊れたブリキの様に残りの首を上げようとした。が、もうほとんど力が残っていないようにすぐに地へとまた倒れ伏し黒い靄に包まれる。

「う…ぐ…ぎぎ…わたしは…わたしは人を超えたはずなのだ…」

そして靄の中から元の倉橋翁がズタボロの姿で倒れ伏したまま現れた。

「…だというのになぜ…なぜこのような小童どもに…負け…いいや、まだだ！ まだわたしは負けていない!!! 主よ！ 今一度わたしに力をー！」

「いいや、テメエの負けだ。諦めろ。教主とやらも現れやしねーよ」
ムスツとした顔で荒垣が告げる。

もう倉橋翁は動けそうにない。そして教主が出てくる気配もない。再び力を授けてもらえないなどと言うムシのいい話はなさそうだった。「え、どーすんだよこのじーさん。黒沢さんに捕まえてもらう、とかか？ あーでも奏子っちや湊のじーさんなんだよな…ふたりの身内がハンザイシヤになっちまうのはちよつとな…」

「桐条こじょうで身元を引き受けよう。今はどう見ても動けないようだから後で人員を手配し保護することにする。訊くべきことは山のようにあるからな。無論、三上や有里達には何ら関係のない人物として扱う予定だ」

「ひ、ひいー！」

順平の言葉に怒髪天気味的美鶴がそう答えれば、倉橋翁は悲鳴を上げた。

天田やゆかり、そして美鶴自身を殺そうとし、あまつさえ桐条やその本家である南条に対しての悪態を吐いたのだ。捕縛されれば命の

保証はされるのだろうか待遇が良いとはお世辞にも言えないだろう。その想像だけはいち早くした倉橋翁はとことん自己保身の塊だった。

「お、おい！ なにを見ている！ 孫ならわたしを助けんか！ この女と仲がいいのだろう?! 口添えのひとつでもしないのか?!」

そう叫ぶ倉橋翁の言葉を聞き、湊と奏子は顔を見合わせた。

「孫、だって。都合のいい時だけ孫扱いする人みたいだねあの人。私、さつきあんなお祖父ちゃん居ないって言ったばかりなのに。あ、でもそれは悪魔になつてた時か」

「あの人、悪魔にならなくても父さんと母さんが死んだときに葬式にすら来なかったし僕らを養いもしなかったし連絡もなかったよね。そして優希を殴った。つまり、そういうことだよ」

「やっぱり？ お祖父ちゃんとお祖母ちゃんといえばやっぱり小父おじさんと小母おばさんのお父さんとお母さんの事だよね！ 私たちのほんとのお父さんは若い頃にお祖父ちゃんとお祖母ちゃん亡くしてたみたいだし」

先ほどとは違い、悪い顔で倉橋翁をちらちらと見ている湊と奏子は結論が出たのか更にその顔を綺麗な笑みに変える。

「うん。だからあの人——」

「——知らない人だよね、湊！」

「……なっ!?!」

双子が放ったその言葉と明確な拒絶の笑みは倉橋翁の目論みを完全に砕き、希望を奪った。

待つのは桐条での尋問。そして桐条が『ヤタガラス』にたどり着けば倉橋翁はヤタガラスによってしかるべき処罰を受けるだろう。最悪、お取りつぶしになるどころか倉橋自身が死にかねないような罰を、だ。

しかし特別課外活動部が止めていなければ事態を知ったヤタガラスのサマナーか葛葉ライドウが出てきただろう。そうなれば倉橋翁は悪魔のまま死んでいた可能性が高い。それを考えると特別課外活動部で運が良かったともいえるのだ。

ただし、

「折角、教主が力を授けたというのに——ふむ、負けてしまったか」
「!!」

倉橋翁の背後に突如サングラスの男——神取が現れる。

足音も気配もないその現れ方に、皆が皆、身構えた。

「倉橋翁——残念だよ。特別課外活動部のひとりも消せないとは、貴方は役立たずだったというわけだ。いや、違うな。良くやってくれたと評価すべきか」

「お、お褒めに与り光栄です！ ですので神父の方からもう一度教主様に口添えをば、と……!」

笑みを浮かべる神取に、倉橋翁は希望を見たのか目に光が戻る。が、そうは問屋が卸さなかった。

「だがね、負けた事には変わりないのだよ。主は『残念だ』と嘆いておられたよ」

「そ……そんな……! もう一度、もう一度チャンスを下されば……!」

尚も追い続ける倉橋翁を足で蹴飛ばし、神取は鼻で笑う。

「私としては手心を加えてやってもいいのだがね。彼らの血縁というものは大いに価値のあるものだ。しかし、残念なことにお前はいま、その価値を失ったらしい」

「ひ……あ……あ……あああ……」

神取のサングラスの向こうの眼窩を見た倉橋翁は慄く。慄いたばかりに、周りの影が持ち上がっていることに気がつかない。

「しかし我らが教主は寛大だ。その働きに免じて、ティンダロスの獵犬どもの糧となる幸福を恵んでくださるようだ」

「ひ、いいいいい! ば、化け物! 化け物!」

鼻を突くような強烈な異臭があたり立ち込める。

影の中から、ぐじゅぐじゅと粘液のくぐもるような音が聞こえ、四足歩行の狼のような生き物が現れた。

身体からは黒い触手が生え、口からは鋭い舌をだらりと垂らし眼は燃える様に赤い。

それは、先日朝倉達が遭遇した「ブラックドッグ」そのものだった

た。

「な…んだ…あれは…」

明彦が呆然と呟く。

それらは影から現れると倉橋翁に跳びかかり体中を貪り始めた。

「ぎゃあああああッ!!!」

「そんな…酷い…」

あまりの惨状に風花が青ざめて吐き気をこらえる様に目を逸らした。

荒垣は咄嗟に天田の目と耳を塞ぎ、明彦でさえも目を逸らす惨状は誰が止めることもできないまま数十秒ほど続いた。

やがて、叫び声すら聞こえなくなり、残ったのは血塗れの地面と僅かな肉片だけだった。

倉橋翁の姿は何処にもない。

「さて、きみ達がちゃんとどめを刺してやらなかったお蔭で御老人は惨い死に方をする事になったのだが、今度はちゃんと、惨い死に方をする前に止めを刺してやるといい」

「んだとてめー! ふぎけんじゃねーぞ!」

「…フツ、青いな」

まるで良い助言だと言わんばかりな神取に順平が突っかかる。

だが、神取はそのまま軽く鼻で笑うとまた同じように姿を消したのだった。

「クソが! 逃げんじゃねー!!!」

「そこまでしておけ。やつは恐らく先ほどの化け物よりも段違いに強い。…悔しいがな」

順平は義憤に燃える様に神取が消えた場所を睨みつけていたが明彦に抑えられ、声のトーンを落とす。

「けど…あんなんでも…! 湊や奏子つちの…いや…そっか…三上センプイが殴られてるから…どう、なんスかね…」

順平は何か言おうとして口ごもり、やめる。

順平の父親は母親にDVを働いていた。そんな、家庭内暴力を働く父親と、優希を殴ったという倉橋翁の姿が重なったのだろう。

だからこそ、そこで順平は悩み、言葉を出せなかった。あの老人は死ぬべきだったのか。そうでなかったのか。

分からないからこそ、順平は迂闊に何も言えなかったのだ。

言ってしまうえば、それが自分の父に抱く感情と同じだと思えてしまうから。

人に戻った倉橋翁が悪魔のような生き物によつて食い殺されるというアクシデントがあつたせいとか、帰りは皆無言だった。あの順平でさえ、何かを考え込むように押し黙っている。

気絶していたゆかりもすぐに目を覚まし、どうなつてきたかを訪ねてきたが簡潔に話す事しかない皆の様子に悪い予感を感じ取りあまり深くは訊かなかつたのだ。

そうして、微妙に暗い空気のまま、寮に帰る。

「ただいま」

玄関を開け、湊が声をかけるも反応がない。返ってくるはずの『おかえり』という言葉すららないのだ。

ただただ、静寂が支配している。

「お兄ちゃん…？ 部屋に帰っちゃつたのかな…？」

「え、でも、ソファアに行く前は無かつた毛布が置いてあるし…手洗いとかじゃ？」

ゆかりがそう言つたので湊がトイレを見に行くも、もぬけの殻でだれもいない。

明彦が駆けて優希の部屋を見に行つたらしいがすぐに帰つてきて首を横に振つた。

「ど、どういうこと…？ お兄ちゃん、なんでどこにもいないの…？」

総出で寮内やその付近を捜したが優希の姿は無く。

体調が万全とはいえない優希が遠出するはずもない。毛布を用意していたという事はそこで寝ていたか寝るために持ってきたものだろう。そして、出ていく前の様子から察するに勝手に影時間中、意味もなく出ていくなどはあり得ないだろう。

しかしどうみてもこれは間違いなく――

――失踪だつた。

The Dream—Quest of Unknown Kadath. (未知なるカダスを夢に求めて) (11/13)

11/13 (金)

その日は朝から雨が降っていた。

ジメジメとしているながらも肌寒い空気が妙に湊を不快にさせる。

結局コロマルにも匂いを辿らせてみたが困ったような顔でラウンジと二階の優希の部屋、テレビの前をぐるぐる回るだけにとどまり、なにも収穫が得られなかった。アイギスがコロマルに訊いて翻訳された答えも「外には出ていない」という反応が返ってきただけだったが、だが、寮内にはいない。ならばどこにいったというのか。

「やあ、湊くんおはよう！」

そんな燻っている湊の背に、聞き慣れてしまっている声が掛かる。

渋々振り向けば予想通り黄色い傘を差した綾時がそこにはいた。

黄色い傘という小学生のような持ち物を持っているにもかかわらずそれが妙に様になっているので「小学生か」という言葉を呑み込んで、湊は黙って歩く。

悪いが、今日ばかりはこの明るすぎる綾時のテンションについていけないほど元気でもなかった。

「昨日はどうだった？」

「何も映らなかった」

湊の顔を覗き込むように訊いてきた綾時に湊はぶつきらぼうに口を開いた。

正直、こうして会話している間にもどこかで兄が倒れているのではないかという焦りのようなものが思考を占める。

そんな湊の焦りが顔に出たのか、それとも察したのか。綾時の顔が真剣なものになる。

「……他に、なにかあったのかい？」

正直、今の綾時に話してなんになるのだろうか、と湊は思った。

きつと綾時は親切で優しいから、理由を知れば兄を探す事を一緒にしてくれるだろう。それこそ、放課後でも、今すぐにでも、傘を放り出してびしょびしょになっても共に探してくれるだろう。

だが、そこまでだ。

特別課外活動部全員で探しても見つからなかった。いくら街中を探したところで見つからないかもしれない、という己の行動とは矛盾した気持ちが浮かんだ。

「もしかして、お兄さん絡みかい？」

またしても沈黙していた湊の心情を読むように綾時が訊いてくる。こういう時、こうやって察してくるような長い付き合いの相手に会うのは嫌なんだ、と湊は少し忌々しく思った。が、何故綾時に知られたくないのかと考えれば、綾時も無理に手伝って来ようとするクソがつくほどのお人よしだったからだと気がついた。知れば、どこにだってついていくだろう。

「人手は多い方が良い」などと言って。

そしてそこが兄とそっくりだという事にも気がついて、思わず顔を顰める。

「僕で力になれるかどうかはわからないけれど、それでも話せば楽になるかもしれないから。それに僕なら影時間やペルソナのことを話しても大丈夫だからね！」

こういう妙なところで自信なさげなところも似ている。似ていないのは、女子に好んでアタックしに行く女たらしかそうでないからだ。

そんな綾時を何が起こっているのかわからないことに巻き込まれなくなかった。湊にとって。いや、奏子にとっても恐らく綾時の存在は死なせることの出来ない大事なものだ。

この10回の繰り返しの中で、湊は1度も死の宣告者となった綾時を殺した事は無かった。だからこそ、ただの人になってしまった綾時を巻き込みたくなかったのだ。

ただの人は脆い。それは、綾時が1番知っていて1番知らないことだろうから、と。

「お生憎さま。そういうの、もう間に合ってる」

「そんなあ」

なので湊は綾時の誘いを一蹴し、情報の整理をする。

かかりつけ医である朝倉の元へは来ていないという事は確認済み。

それか、知り合いらしいストレガのアジトにいるか。

湊は場所を知らなかったが、もしそこにいたとすれば送り返しに来るか朝倉医院に連れていかれるはずだ、という荒垣の予測を信じることにしてタルタロスに何かきっかけがあつて迷い込んだのかもしれないと仮定して放課後の予定を立てた。

影時間

夜になつても雨が止むことは無く。誰からも兄を保護したという連絡もなく。

優希を探しに行こうと雨ではあるが今日もタルタロスへと行く用意をしていた湊の目の前でひとりで消したはずのテレビの電源がつく。そして、周波数を合わせるときの様なノイズの音と共に砂嵐の画面になつたかと思えばすぐに鮮明な画面を映し出した。

未知なるカダスを求めて

ポップなフォントで作られたその番組タイトルらしきテロップが映し出された。

そしてそのテロップが消えると場面が変わり、霧の立ちこめる遊園地のような場所が映る画面の真ん中で、月光館学園の制服を着て黒ぶちメガネをかけた優希によく似た三つ編みの少女が立っている。と言うよりは優希をそのまま女子にしましたと言われた方が納得出来る見た目だ。ただし、表情は全く似ていない。どちらかというといハイトンションになつたときの奏子のように明るい顔つきをしていた。

『やつほ〜！ みんな大好き “ナギサちゃん” だよっ！ 特別前倒しで枠をお借りしてお送りします今日の『未知なるカダスを求めて』はこのみーんなハッピーで明るい夢の国な “忘れ去られたカダス” の案内を〜…ここにいる特別ゲストのユーキくとやりまあ〜す

！ いえ、い、ぱちぱちぱちゅー！』

『……』

腕を引かれ画面の端から真ん中へと連れてこられたらしい優希は己によく似た顔の金の眼を持つ、自らをナギサだと名乗った少女に腕を引かれとても嫌そうな顔をしながらも黙っていた。

「……は……？」

それを見た湊の第一声はこれだった。

脳みそが理解することを拒絶している。頭が痛い。居なくなったはずの兄がなぜテレビに。ここはどこなのか、と色々考えたかったがまとまらない。

目の前で流れているこのテレビ番組は何なんだ、合成かしこみか何かなのかと疑問に思っている間にも番組は進んでいく。

『もく、ユーキくんは連れないなあ……せつかくあたしたちが主役の番組なんだよ？ もっとハツチャけちゃおうよ！ 本心、おっぴろげでいこうよ！ その欲望、解放しちやおー！』

『けほつ……要らない。帰りたい。眠い。しんどい』

『帰りたい！ 眠い！ いいね！ それも欲望だよ！ でもしんどいのは仕方ないよね！ だってここは本来ヒトが立ち入る場所じゃない』

優希のぶつきらぼうな遠慮のない短い拒絶の言葉を聞いたナギサはニツコリ、と笑みを深めて言う。

『この霧のせいでタルタロスの中以上の負荷がかかっててふっーのペルソナ使いさん達でも疲れやすくなってるもん！ ペルソナも使えなくて身体が弱ってる今のユーキくんだとかなーりしんどいよね！ 長居してたら死んじゃうかも!?!』

兄が死んでしまうかもしれないという言葉がでた瞬間、嫌な汗が流れるのを感じたが、これは質の悪い仕込みかなにかに違いないとその思考を振り払った。

『そ・れ・と・も……きやつ、ヒミツ！ でも、それはそれでいいよね！ ハラハラドキドキデンジャラスって感じで！』

きやぴきやぴとしているナギサになにが「それでいい」んだと湊は

言いたくなかった。しかし画面に映る兄の顔色はお世辞にもいいとは言えない。心無しか疲れた様な表情もしている。

それに反して血色も良く元気がよすぎる。『ナギサ』のテンションが一層場違い感と歪さをかきたてる。

『ユーキくんのごとはひとまず置いといて、えーいまは…魅力的な霧が立ち込める高い崖の上』に来てます！ いや、絶景ですね！ デートスポットにいかがでしょうか！』

場面が切り替わり、ナギサが霧深い崖の上に立っている。霧のお蔭で一先すら見えないようなその場所を絶景だという少女は傍から見れば狂氣的だ。

そんな狂氣的なりポートの背後で土のうを落とした時のような音が定期的な間隔で響いている。

『あ、そうだった！ これを見ているみんなには見えないんだっけ？

なら、特別出血大サービス！ 見やすいようにカメラさんを寄せて、画面を鮮明に！』

ガサゴソと物音がしながら画面が揺れ、徐々にピントが合うようにして霧が晴れて鮮明になった。鮮明になった崖の先では、月光館学園の制服を着た男子生徒が次々と飛び降りていつている。

否、それらは優希と同じ顔立ちをしていた。クローンのようにまったく姿かたちが同じそれらが、一様に虚ろな目をしてフラフラと崖の端まで歩きそこから飛び降りているのだ。

悪夢か何かか、と湊は顔をひきつらせた。

「う…」

先ほどからしている定期的な音の正体はまさか、と察したくないことまで察してしまつて喉元まで込み上げてきた吐き気をこらえる。

『…あら、向こうではたたくさんの“お人形さん”たちがヒモ無しバングーにいそしんでいるようです！ 楽しそうだね、ユーキくん！ っであれ？ ユーキくんは？』

飛び降りの光景を『楽しそう』かつ飛び降りている存在を“お人形さん”だと形容したナギサはしかし、優希に話を振って見える範囲のどこにも本人がいなことに気づく。そこで初めて明るく楽し気な

表情から少し焦ったような表情へと変わったナギサが辺りをキョロキョロと見回した。

『え、うそー！ さっきの一瞬でどこかに行っちゃった!? そ、それとも、ヒモ無しバンジー体験したくて並んでるとか!? おーい、ユーキくん!』

そのまま呼びかけてキョロキョロと並んでいる列を見たりして探すが徐々にその表情は焦りから「どうしよう」とでも言いたげな不安げな表情へと変わってゆく。

『ここで想定外のトラブル! ユーキくん、勝手にどこかに行っちゃったみたい! ま、なるようになるか! もう放送終了時間だし、ひとまず今日の『忘れ去られたカダス』の案内はここまで!』

『未知なるカダスを求めて』はまた明日の影時間から! 見てるみんなは明日の放送までにユーキくんが死なないかお祈りしててね! チャオ!』

てへぺろ☆と兄にそっくりな顔でムカつく表情をしたナギサが手を振って番組が終了する。

それと同時にテレビの電源も落ち、部屋に静寂が戻った。

慌てていたにもかかわらず「なるようになる」と結局は軽く流した少女の言葉にぼかん、と湊が口を開けたまま茫然としていると少しの間をおいてドタドタと慌てて上から廊下を駆け抜けるような足音が聞こえてくる。そして近くの部屋からはドタバタと五月蠅い物音がしていた。恐らく、寮にいる全員がこれを見たのだろう。

「湊ッ!! おい! い、いまの! いまの見たよな!」

1番初めに湊の自室のドアを蹴破る勢いで開けたのは隣の部屋の順平だった。

その顔には驚愕の感情が浮かんでいる。

「……………いまの?」

「おっまえ、見てなかったのかよ! 三上センパイと…センパイにそっくりな女の子の番組だったの!!! つーか、綾時が言ったの、これなんじゃねーの!」

喧しい順平に半分耳を塞ぎながら湊がとぼけて首を傾げれば、更に

喧しくなった。

「どうやら順平も同じものをみていたらしい。」

あの綾時の言っていたことが本当だったとはいえ、既に放課後無理やりたこ焼き屋に連れていかれて「僕は賭けに負けたから」と言った綾時に潔く奢られた湊からすれば、同じくたこ焼きを奢られた順平の言ったようにそれを認められるわけでも――

「……そうかも」

意外とあった。

綾時の与太話を認めるのは癪だが、それは今、目の前で与太話では無いと証明されてしまったのだ。

「一昨日の夜も雨が降っていたな、と思い出せば奏子の言っていた『マヨナカテレビ』というおまじないのようなものもついでの思い出す。」

その話の通りなら、湊や順平、そしてこの寮に居るこのテレビを見た人間の想い人が兄またはあの兄そっくりな少女だと言うのか。

冗談も大概にしてくれ、と湊は頭をまた抱えたくなくなった。

自分ですら男女問わず寮内の全員攻略などやったことは無いぞとある周の自分を棚上げして問題の兄である優希にため息を吐いた。

「みなとみなとみなとみなとっ!!! たたた、たいへん!!! テレビにお兄ちゃんが映って!!! それで、それで!!!」

階段を駆け下りてきたらしい奏子が弾丸の様に部屋に突っ込んでくる。

「はあはあと荒い息で起こった出来事を興奮気味に話そうとしているらしいがパニックになっているのか話がまとまらない。」

「ちよ、落ち着けて奏子っちー!」

「順平の言う通りだ。深呼吸してゆっくり話してみなよ」

そんな奏子の勢いに気圧された順平と、あまりにも慌てている奏子を見て逆に冷静になった湊が落ち着かせようと言葉をかけた。

「ひっひっふー、ひっひっふー! よし、落ち着いた!」

「それ深呼吸じゃなくてラマーズ法だっつー!」

「あとちよつとでアバドンが何か産みそうだったから、つい〜」

「産まれそうになったら言って」

「イヤ、そーゆーのいいからな!? オレっちいつも思うけどサ、奏子っちのペルソナ、なんかチョイスがゲテモノばっかだよな…」
げっそりとツツコミをするのに疲れた順平はそれを放棄した。

湊と奏子のボケしかない漫才のツツコミをし続けるのは至難の技だ。

どちらか片方なら問題は無い、というのがここにいない優希の談ではあるが。

「えーなんでー！ 可愛いよアバドン！」

「どうでもいい…それで、奏子。話の続きは？」

「あっ、そうだった！」

今思い出しました、と言わんばかりに拳を作って手のひらを叩いた奏子は緊張感が無い。

否、あまりにも現実感がない現象を見たせいで未だ半分パニック状態なのだろうなと湊は分かっていた。だからこそ、何も言わずに話の続きを促した。

「えと、それでね！ ビックリしてテレビの画面にバーーンって手を突いたら…：…な、なんと！ テレビの中に手が吸い込まれちゃったの!!!」

「は…？ え…？ いやいやいや、ジョーダンだよな？」

「寝ぼけてる？」

「ちーがーうーもーんー!!! ほんとだもん！ 私、寝ぼけてないし嘘もついてないもん！」

あまりに突拍子が無い話だからか、信じようとならない湊と順平にもんもんと鳴きながら拗ねた奏子が湊の部屋の奥まで入る。

「ほんとだってこと証明してあげるから！ 見ててね！」

そして、ベットのそばにあるテレビの画面へと勢いよく右手を突きだした。

瞬間、画面に弾かれるはずの奏子の手はテレビの画面にすっぽりとなんの抵抗もなく入ってしまった。

「う、うえええええー!?」

「おい、よくわかんねー番組見せられてパニックになる気持ちもわかるが少しは静かにしやが……れ……れ……れ……」

叫んだ順平の後ろからひよつこりと顔を出した荒垣が、テレビの画面に片手を突っ込んでふんすと鼻息荒く「ほら見た事か」と言いたげに得意げな顔をした奏子を見て絶句する。

テレビの画面は奏子の手を受け入れ、水面のような波紋を描いている。

「あ、新手の…マジック…か？」

困ったような視線を荒垣から送られても湊はブンブンと首を横に振ることしか出来なかった。

「ひとまず、情報を整理しよう」

頭が痛そうな美鶴がラウンジでふう、と息を吐いた。

あのあと、とりあえず作戦室ではなくラウンジに集まろうということで招集がかけられたのだ。

だが皆の顔は困惑に近いものばかりだ。恐らくここにいる全員が頭を悩ませていることだろう。それくらい、先ほど起こったことは突拍子もなかった。

「まず、昨夜の影時間に三上は失踪した。コロマルの嗅覚と言葉が確実なら彼は寮から出ていないことになる。これは間違いないな？」

「ワンワンー！」

「はい。コロマルさんも『間違いない』とおっしゃっています」

「そうか…」

コロマルとアイギスの言葉に美鶴が頷く。

「では次に……にわかには信じがたい事だが、影時間であるにもかかわらずテレビの電源が入り三上と三上によく似た女子生徒がテレビに映っていてここにいる全員が視聴した。ここまではいいか？」

美鶴の言葉に今度は全員が頷いた。

「あの女子生徒は『ナギサ』と名乗っていたがナギサという名前は三

上の本来の名前じゃなかったか？」

「うん。お兄ちゃんのホントの名前は有里渚だよ。でも、なんであの女の子が名乗ってるのかはよくわかんない……」

「知り合いじゃないんですか？」

「知らない」

明彦の質問に答えはしたが不思議そうにする奏子が気になったのか、天田が問いたです。

しかし湊にしても奏子にしてもあんな少女、これまでに見た事も聞いたこともない。

「じゃあ、生き別れのお姉さんだったりしないかな？　ほら、三上先輩も双子だったとか……」

「それにしたって同じ名前はねーんじゃねえか？」

「前に小さい頃のアルバムを見たけど優希は……双子じゃない」

そう断言した湊に視線が集まる。

双子ではないと言ったが、かといって湊にもあの少女が何か全く分からないでいたのだ。

「なんだか、難しい話ですね……」

天田が湊の心情を代弁するようにぼそりと呟いた。

「ああ。難しい話だ。だからこそこうして情報を整理してなんとか手がかりを得ないといけない。

——話を戻すが、ナギサと名乗った女子生徒はあの場所を『忘れ去られたカダス』と言っていた。そしてそこには三上もいて、長居すれば三上の命が危ない」

「実際にあの女の子もそう言っていましたもんね。ペルソナ使いなら疲れるだけで大丈夫、みたいなことも言っていましたけど」

「ああ。そしてもしそこがタルタロスと同じように常世と隔絶された通常ではたどり着けない場所だと考えると次はどうやってそこに行くか、が問題になって来る。そこでだ、有里」

美鶴は奏子の方を見る。この場合の『有里』は奏子しづんのことだと察して口を開いた。

「なんですか先輩？」

「あの奇妙な番組と、きみの手がテレビに入るようになってしまったことは何か関係があるのではないかと私は見ている。皆の前でもう一度、試してみてはくれないだろうか」

「えっ、わ、わかりました!」

突然話を振られ、皆の前でテレビに腕を突っ込めと美鶴に言われた奏子は緊張しながらもテレビの前に立つ。

湊と順平の前では成功したが今回も成功するとは限らない。もし入らなかったらどうしよう、と不安になりつつも手掛かりは自分しかないので気をしっかり持たないと、と奏子は深呼吸をする。

「すー…はー…よし! 入れます!」

テレビの画面に手を突っ込む。

すると抵抗なく奏子の腕は肘まで入ってしまった。

「なっ、腕がテレビの中に入っている!」

「一度見たけどやっぱヤベーよなこれ」

「私、目の前で起こってるのが夢なんじゃないかなって思えてきた…」

「わ、私も…」

「テレビの中に物理的に腕を入れることは不可能です。ですが実際に入っている。まったくもって謎です」

奏子の手がテレビに入る様を見た特別課外活動部の面々の反応は様々だった。

そんな他の面子の会話を横で聞きながら、奏子はテレビの画面を凝視した。

そして、

「あ、なんかいけそう」

そう言っただけで奏子はテレビの画面に手だけでなく上半身も突っ込んだ。

「ちよ、え、奏子ちゃん?!?!」

風花が突然の行動に困惑し、声をかけるもすぐに上半身だけではなく下半身もすっぽりとテレビの中に入ってしまった、姿を消した。

「そんな…奏子ちゃんがテレビの中に…?!」

「くそ! どうなってやがる!?!」

慌てて駆け寄り荒垣がバンバンとテレビの画面を叩くが奏子の様に手が画面の中に入るなどということは無く。

「――破壊しますか?」

「ダメだってアイギス! こ、壊したら奏子さんが帰ってこれなくなるかもしれないし…」

「了解しました」

指をテレビへと向けて発砲しかねないアイギスを天田が止める。

もしテレビを壊して奏子が帰って来れなくなってしまうたらそれこそ終わりだ。優希を助けられないどころか奏子も失うことになる。

全員、何としてでもそれだけは避けたかった。

「みんなー!」

「ぎゃあああああああああ!!!」

「きゃあああああああ?!」

「わあああああああああああああ?!?!?!」

唐突に、ひよいとテレビの中に消えたはずの奏子が帰ってきた。

同じようにテレビの画面から上半身だけを出して、だ。

その姿は某有名ジャパニーズホラーを彷彿とさせ、ゆかりと順平、そして風花を絶叫させる。否、いつもは叫ばないであろう天田と明彦も絶叫している。他の面子は思考停止し固まっていて言葉も出ないようだった。

そんな面々にお構いなし、といった感じで上半身を出したままの奏子が喋り出す。

「テレビの向こうに変な世界があったよ! たぶん、あそこにお兄ちゃんがいると思う!」

「どうなってるのそれ!?!」

「わかんない! けど、すぐ後ろに『お帰りはコチラ☆ ←』って書かれた看板のついたおつきなテレビがあったからそこに入ったら帰ってこれたの!」

よっこいしょ、とテレビの画面から這い出てきた奏子はピンピンしているようだった。

「うーんでも、このテレビだと出入りにくいなー…」

「そういう問題じゃねえだろ。ったく、焦らせやがって…」

テレビの横に立つ荒垣が頬を掻きながらため息を開いた。何もなくてよかったという安堵とあまりにもこちらの事を気にしていないマイペースさに呆れてのふたつの感情からだった。

「荒垣先輩、もしかして心配してくれたんですか!? えへへー嬉しいなあ…」

「…んなことよりなんともねえか。怪我は?」

「ないです! あ、でもこのテレビからだどひとりひとり入るしかないのかな」

荒垣が手を差し出し、その手を取って立ち上がった奏子は困ったような顔をする。

「テレビの向こうが例の場所に繋がっている、もしくは似たような場所に繋がっている…かもしれないというわけか」

「はい。けどさっき言ったようにラウンジのテレビだとちよつと…みんな入れなさそうだし…出入りが大変過ぎて武器とかを持ちながらだと駄目かもしれないです」

困ったような顔のまま、奏子が美鶴の言葉に答えた。

そんな奏子の言葉に美鶴は思案する。たしかにラウンジのテレビは小さすぎて1人がようやくよく入れる程度だ。

「…待て、ひとり? 確か三上の匂いはテレビの前で途切れていたと…」

美鶴は浮かんだ答えに嫌な予感がした。

「いやいやそんなお兄ちゃんがテレビに身体突っ込むなんてないですよやだなー! いくらお兄ちゃんでも…ねえ?」

「流石に突飛な行動をする優希でもテレビに身体突っ込むのは無い…ない…いや…ある…かも…?」

「何故そこで悩む有里!」

思わずツツコンでしまう。

何故この姉弟はこうも己の兄に対する信用がガタ落ちしているのか。美鶴にも思うところがないと言えばウソだが優希に対する信用の無さはここまでではなかっただろう。

だが、次に口を開いた湊の言葉で美鶴は頷くことになってしまう。「いや…なんか…躓いてバランス崩した拍子に…とか」

そのとおりだった。最近の優希はこちらが見ているハラハラするくらい危なっかしかつたのだ。

寮内をひとりではぼんやり歩いているときもズボンのすそを踏みつけてこけかけたり、よくふらふらとおぼつかない足取りで歩いているのは記憶に新しい。

しつかりとした足取りで歩いていると言っても入院中に比べればの話だ。入院中のあれはもう歩いていたというよりかは点滴に捕まってなんとかずるずるとあるいていたただけだ。

なら、何かの拍子にこけてテレビに上半身を突っ込んでしまった可能性だって大いにあり得る、ということだ。美鶴としてはそんな事故のような情けない失踪理由だと信じたくないが。

「もし、テレビの中に三上も入ってしまったと仮定して、だ。出入りをどうするかだな」

「先輩の部屋のテレビとかどうですか？ おつきいし、迫力あるし！」

「…私のか？」

幾月の起こした事件以降美鶴も叔母という肉親を殺されていた事が判り和解し、たまに美鶴の部屋に出入りするようになっていたゆかりがそこにあるテレビの存在を思い出す。

「確かに、私の部屋のテレビは大きいが…いや、恥を忍んでいては三上を助けることなどできないな。わかった。各自準備を整えて私の部屋に来てくれ」

一瞬何かを躊躇した美鶴だったが人助けのためなら仕方ないと腹をくくったのだった。

「それじゃあ、画面に触れるのでこの中にバーツと飛びこんじゃってくださいー！」

美鶴の部屋。

そこにあるテレビ触れた奏子の手から画面が揺れ、水面のようになってる。

「マジでこの中に飛び込むんだよな…ごくり…」

「ほら、行くよ順平」

「ちよ、まつ、まだ心の準備がっ?!?!?」

そんな戸惑いも首ねっこを掴んで順平をテレビの中へ放り込んだ湊の行動により無理やり吹き飛ばされる。

テレビの中に順平を放り込んだ湊は続いてさも平気そうにテレビの中へと入っていった。

「有里くんも順平君も…ほ、ホントに入って行っちゃった…!」

「ね、風花。私たちもいくよっ!」

「えっ、ええ!? 待ってよゆかりちゃん!!」

テレビの中にすすいと入っていくゆかりを追いかけて風花が目をつぶりながら飛び込んだ。

「女子に負けてられないな。行くぞシンジ、天田、コロマル!」

「ああ」

「はい!」

「ワン!」

そして明彦、荒垣、天田、コロマルがテレビの画面へと飛び込む。

残るは奏子とアイギス、そして美鶴だった。

「では、美鶴さん。私と共にいきましょう」

「…わかった」

はい、とアイギスに手を差し出された美鶴はその手を掴んでゆつくりとテレビの画面の中へと入ろうとした、瞬間。

「あっ、置いてかないで! 私も入りますー!」

「ま、待て、いま飛び込めば私たちは——」

美鶴の言葉は最後まで発されることなく、奏子が突っ込んできて雪崩る様にテレビの中へ落ちていった。

？月？日（？） 霧 影時間

忘れられたカダス

「ここが…テレビの中…？」

「一面霧だらけで何も見えんな…これじゃあシャドウが出ても満足に戦えない」

テレビの中へと入った特別課外活動部を出迎えたのは視界一面を覆い尽くす霧だった。

気を抜いてしまえばすぐ近くの皆を見失ってしまいそうな濃い霧の前では闇雲に探索することもできない。

「あれ？ あれあれ!? なんでヒトが居るの!? とゆうか、ヒトはヒトでも特別課外活動部のみんなじゃない！」

と、そこへ少女の馴れ馴れしい声がかかる。

そして「ツキコー」と訊き慣れない呼び方で特別課外活動部を呼んだ少女が霧の中から姿を現し、首を傾げている。

「お前は…！」

「あー…っ！ お兄ちゃんと一緒にいた女の子！」

全員が身構え、奏子が少女——ナギサを指さした。

「え？ え？ なに？ ナギサちゃんになにか用!? じゃなくて、なんでいまここにいるの!? ホントなら明日の影時間に『テレビの中に入るならコチラ♡』ってする予定だったのに！ 居なくなっちゃったユーキくんといい、今日来ちゃうみんなといい、番狂わせすぎるよう…！」

困ったように眉を顰めたナギサはしかし、すぐに顔を笑みの形に変える。が、そんなナギサにアイギスが跳びかかり手刀を浴びせかける。

「優希さんを返してください！」

「そーだそーだ、誘拐犯〜！」

「ちよ、あぶなっ、ユーカイハンとか知らないよ〜！ あたしの役目はただ、ここをみんなに案内するだけなんだから！ ユーキくんをテレビに突っ込んだのは別のやつの仕事なの！」

アイギスの手刀を器用に避け、そう叫んだナギサの言葉にぴたりとアイギスが止まった。

「あ……いや、ユークくんのはあれは自爆というかなんとか……足を滑らせたようなものだったかな……でも滑らせなかつたらアイツが無理やり入れてただろうし……ひとまず休戦！　というかあたしキミたちの敵じゃないし！　ピースフルでいこ！　ね!?　何事もヘーワテキカイケツが大事なのです！」

お手上げ侍〜！　と手を挙げたナギサの前半部分はぶつぶつと言っていて誰にも聞き取れなかった。

「あ、あれ？　あの人……なんだろう……不思議な感じ……ここにいますよ、いないような……」

“ユノ”を出してナギサを視ていたらしい風花が首を傾げた。

しかしこの霧のせいであまくアナライズ出来ないのかもしれないとすぐに振り払い、ユノを消す。

対するナギサもまた、不思議そうに首を傾げている。

「あれー？　ってことはみんなにはヤソガミコーコーの記憶はないんだっけ。あーあそこはクロちゃんのこと……ええと、ちよつと特殊な場所だったから記憶が無くても仕方ないかー……でもそのせいであるドグサレ×野郎がナミちゃんの十八番に目をつけてパクっちゃうんだからちよつち許せないよね〜！」

ぷんぷん！　とわざとらしく三つ編みを振りながら怒るナギサは湊たちには分からない話をしている。

それが嘘か真か、敵か味方か。それすらも、湊たちには判断できないでいた。だがナギサの口ぶりが本当なら、以前に自分たちとこの何処までも自由奔放な少女は会ったことがあるという。

にわかには信じがたい話だ。
「信用できないね。だいたい、お前はなんなんだ！　ここでなにしているんだ！」

槍を構えた天田の噛みつくような言葉に笑みを深めたナギサは天田や他の面々から向けられる敵意を意に介していない。それどころかどこか楽しんでいる風にすら見える。

「えー…じゃあ改めて自己紹介！ あたしはナギサ！ この『忘れ去られたカダス』の案内人兼花のジョシコーサーだよっ！ なにしてるって言われたらここはあたしの住んでる場所だから、住んでる場所にいるのはおかしいかな？ って返すことしかできないよ〜！」
改めてナギサの口から語られた自己紹介はあまり意味のない言葉の羅列のように感じた。

だが、そんなナギサの自己紹介に思わず順平がツツコむ。

「分かったことだけだよ、センパイと同じ名前とか呼びにくツ!!!」
「ジュンペーくん、ナギサちゃんって呼ぶのが嫌ならあたしのことはノーちゃんって呼んでくれてもいいんだぞ〜？ あ、でもでも！ ホントの姿はオフレコで！ 髭モジヤのオジーさんが案内人とかイマドキ地球では流行ってないから〜！」

電波のようなナギサの言動に誰も何かを言うことが出来ない。

のらりくらりと特別課外活動部を弄んでいるようにも思えるちゃらんぽらんな言動はしかし、訊けばちゃんと答えてくれてはいる。

そこだけが救いに思えて、湊は口を開いた。

「じゃあここはなんなの」

「おっ、湊くん良い質問だね！ すごくいいよ！ ブアイソーな今のユーキくんとは大違い！ そういうの待ってた！ ここはね、」

一度言葉を止めたナギサが不意に笑みを消し、真顔になる。

「——ユーキくんが作り上げた幸^{自分}で満^{死ぬ}ち足^たりた夢^{場所}の国だよ」

Dreamlands. (しあわせな夢の国) (? / ?)

望まれていた。

祝われていた。

愛されていた。

その子の居場所をとったのは――

「ここはね、ユーキくん自身が作り上げた幸せで満ち足りた夢の国だよ」

真顔でそう告げたナギサに場の空気が凍る。

何者かによって作り出されたこの特異な空間に、優希が巻き込まれたのだと想っていたのだ。

だが、ナギサによればこの空間は優希が作り上げたものだという。

「優希が…作り上げた…?」

「そだよー。正真正銘、ユーキくんが作り上げた世界。ユーキくんが積み上げて、無意識に棄ててきた記憶と感情と願いの墓場。または『パレス』…みたいなものとも呼べるかもね」

聞き覚えのない単語に一同は首を傾げる。

「パレス…? 宮殿…か…?」

「せいーかいー! 美鶴ちゃんやっぱ賢いよね! 大好き!」

「だっ…!」

大好き、と言われた美鶴は顔を耳まで真っ赤にして俯いた。

しかしナギサはそれに気づいているのかいないのか、分からないような素振りで話を続行する。

「ここは強いて言うなら認知世界って言ったところかな。今の地球で認知科学についてどんな研究が進んでるのかは知らないけど、ここはそういう場所。詳しい話は…うーん…」

また湊たちには預かり知らぬ事を言いだしたナギサは頭を抱えて

むむむ…と唸ると数秒後に何かひらめいたような快活な顔で人差し指を上にした。

「……おお！ ビビつときた！ ……7年！ 7年後くらいに聞けるよ。たぶん！ ナギサちゃんは賢いからわかるのだ！」

「7年後オ!? ソレって天田少年がセンパイ達くらいになった頃ってか!? それまでオアズケかよー…」

「ダイジョーブ！ いまのジュンペーくんがどれだけ詳しく聞いてもたぶんわかんないだろうから安心して！」

「ヒツデエ!!」

この少女、兄とは違いちゃらんぼらんだけでなく色々と良くも悪くも歯に衣着せぬ性格をしているようだ。湊が感じたのは間違いではないだろう。性別だけでなく性格まで正反対だと来るとまるで兄を反転させたような存在だな、と感じてしまった。

順平を笑顔で一蹴するとナギサは再び口を開く。

「ジュンペーくんは置いといて…話を戻すけどパレスは心に歪んだ欲望——それも大きなものを持つてると生成されるの。そしてその歪みは願いの元であるオタカラを盗めば正されるってわけ。盗むっていうか、取り除いちゃうっていうか。パレスを無くそうと思つたらそーゆーことすればいいの」

パレス、オタカラ。歪んだ欲望。盗む。

影時間について聞いた時よりも多いその情報量を呑み込んでいるのはこの中に何人いるのか。

湊は隣にいる奏子の顔を覗き込んだがちんぷんかんぷんといった様子で首を傾げている。

「待て、それが三上となんの関係がある？」

来るだろうなと思つた質問が明彦から飛んできて、湊はナギサの方を向いた。

なんとなく湊は関係性について分かつてはいるが確証を持ってなかつたのだ。

主にナギサのこのちゃらんぼらん言動のせいだ。

「あーダメ、ぜんっぜんダメだなあ、鈍いよアッキーは」

「んなっ!? アッキーというのは俺の事か!？」

対してナギサは答えずに『ぷすすー』とバカにするような素振りをして肩を竦めた。恐らく、これを聞いたのが天田やコロマル、女性陣だったのならちゃんぽらんなりに素直に優しく教えたのだろうなと思うとこの少女が鼻肩していないタイプの人間について何となくわかってきた気がした。

「もしかして、ここがパレスみたいなものってことは三上先輩も歪んだ欲望をもってるってワケ…?」

恐る恐るといった様子でゆかりが答える。

ナギサの話がこの現状と無関係でなければ間違いなく優希が歪んだ欲望——パレスを形成する核を持っているという事になる。そしてそれが正解だったのか、ナギサがニツコリとまた笑顔になる。

「ゆかりちゃん大正解! ナギサちゃんポイントを10点あげましょう! 貯まったら豪華景品が待ってるかも!？」

「うええっ!? えっ、ホント!？」

「ホントホント。ナギサちゃん嘘つかない。で、ユーキくんが歪んだ欲望を持っているってことなんだけどー、欲望って言うより心が壊れちゃってるって言えばいいのかな? ほら、心当たりない?」

「…ある」

ゆかりを揶揄うように謎のポイントを加算したナギサは全員に向かってそう言い放った。

欲望というより心が壊れている、と言われれば全員ではないがほとんどの人間が心当たりあるもので。

代表するように湊が頷いた。

「うん。だからその歪みを正せばここが元に戻る。あたしもハッピー、みんなもハッピーってわけ! と、ここまでた~~~~く~~~~きん話してきたんだけどー、全部ウソだから忘れてね!」

「はあ!？」

「えっ!？」

「そんな都合のいい話ある訳ないじゃーん! 地道にユーキくんを探す他ありません! やーい騙されてやんのー! ぷぷぷー!」

と、ここまで語ってきたナギサが急に掌を返した。

先ほどまで語っていたことは全て嘘だと言いだしたのだ。まるで湊たち特別課外活動部をおちよくるような言い方もあり、ナギサという少女自体に疑念が生じる。

正直な話、湊たちは目の前のナギサが敵か味方かはつきりとは断定できない。

敵意が「今は」ないだけで罠に嵌める事があるかもしれない。ナギサは優希をテレビに入れたのは自分ではないと言っていたがそれが本当なのかすらわからない。

幾月の事もあり、誰もが突然現れた表面的には友好的だが怪しい存在を簡単には信用できなくなっていたのだ。

「つまりみんなはユーキくんを連れて帰りたくばこのさいつきよーに可愛いナギサちゃんとカダスを歩くしかないのです！」

「――嫌です」

なぜか、ナギサの誘いを否定したのはアイギスだった。

「わたしは、このまま帰還すべきだと判断しました」

「どうして…!? えっ、だって急がないとお兄ちゃんが…」

「いいえ、帰るべきです。…っ、優希さんは、ダメです！」

先程までは優希を奪還することに必死になっていたというのにまるで屋久島で出会った時のように「ダメ」と言い出したアイギスに一同は首を傾げる。

奏子が理由を聞いているにも関わらず、まるでそれをわざと無視しているようなアイギスの言動に謎の必死さを感じたのは気のせいではないだろう。

「そうだね。その方がきつといいのかもしれないよね」

そこへ、妙に静かな声のナギサの援護が飛んだ。

優希を探して欲しそうであり、アイギスの意見を否定するはずの立場であるナギサがアイギスを肯定し、まるで幼子を見るように微笑む。

ちぐはぐなそれに違和感を覚える間もなく、どこかでそんな表情を見て似たような言葉を聞いたことがあるような気がして、湊は一瞬眩

暈がした。

海辺。砂浜。影時間。兄に指先の銃口を向けるアイギス。嗤った兄の眼は——果たして何色だったか。

ぞわり、と背筋が粟立つ。知らない。こんな出来事、湊は知らない。覚えがない。酷く嫌な予感がする。

戸惑う湊を他所に、ナギサは言葉をつづける。

「きみたちはあたしを信用せずこのまま闇雲に霧の中を彷徨うもよし。ユーキくんの事は諦めて帰るもよし。あたしを信用して一緒に行くもよし。沢山の選択肢がある。あたしのおススメはアイちゃんと同じ意見な。このまま諦めて帰る。だけど」

「そ、それって…三上先輩を見殺しにするってこと…？　そ、そんなの…」

「うん。ダメだよ。でも気にする必要も気に病むこともないの。だって、ここでユーキくんが死ねばユーキくんという人間に関する記憶や証拠は世界やみんなの中からすべて消える。全部なかったことになるんだから。これ以上、辛い思いをする必要はないんだよ」

「!!」

見殺しになど出来るはずがない、と戸惑いを見せた風花にナギサは容赦なく告げる。

「ここで優希が死ねばすべて消えるから気にしないでいい、と言いつ張るナギサはまるでこちらを揺さぶっているように目を細めた。

「そんなナギサが美鶴が激昂して食いかかる。」

「三上に関する全てが消える!!　冗談も大概にしろ!!　例えそうだとしても三上を見捨てるなど、出来るわけがないだろう!!」

「噛みつかんばかりに食いかかる美鶴を軽くいなしたナギサは小さく息を吐いた。

「そう怒らないで。あたしは別にみんなの敵になりたいわけじゃないよ。あくまでも、ユーキくんの意見を優先してるだけ」

「三上の…意見を…?」

「こそ。ユーキくんの意見。というか本心?　あたしと一緒に行くって選択をしてくれればわかるよ。…それが、良い事なのかはわからない

いけど」

「だからほら、〃みんな〃と相談しておいで」とナギサは困ったように微笑んで美鶴を送り返す。

美鶴はその顔に釈然としないものを抱えつつも促されるままにナギサから離れた。

「ね、アイギス。なんでお兄ちゃんがダメなのか、何となくで良いから言ってみて。私も湊も怒らないから」

丁度、奏子がアイギスに理由を聞いているところだったようで、ナギサの発言に衝撃を受けている人間もいれば、それは一旦置いておいてアイギスの答えを静かに待っている人間もいた。

「わ、わたしは…その、彼女の——ナギサさんの話を聞いて。もう手遅れだと、優希さんはダメだと、漠然とそう思ってしまったんです。でも、どうしてなのかわたしにもわから、なくて…！ 優希さんも湊さんや奏子さんと同じくわたしの〃大切〃のはずなのに、わたしは何が正解なのかわからなくなってしまうて…：奏子さん、わたしは、おかしくなってしまったんでしょうか…!？」

わなわなと瞳を震わせながら、今にも泣きそうなアイギスは自分の感覚が信じられない、と言いたげだった。

自分はおかしくなってしまったのか。

アイギスのその問いに、奏子は暫し悩んだ後に口を開いた。

「ごめんね、アイギスがおかしくなってしまったかどうかは私にもわからないかも。けど、もしかしたら前みたいに気のせいかもしれないし、お兄ちゃんに会ってみてから確かめてみるのはどうかな？」

「会ってみてから、確かめる…」

「うん、やらないで後悔するよりやって後悔しろって言葉もあるし！」その答えは何の解決にもなっていないかもしれない。

奏子はアイギスの直感めいたそれを否定しきることが出来ずに有耶無耶にしまうような回答を選んだ。自分の感情を優先したと言われても仕方ない。

だが奏子には例え兄が本当にそう望んでいてもそれを兄の口から聞くまではこのまま帰るといふ選択肢は無かった。

否、恐らく奏子も湊もし兄から「置いていってくれ」だの「帰れ」だの言われても、たとえ2人だけになったとしても兄を連れ戻しに行つただろう。

兄が自分たちの立場でも必死に探そうとしたらうし、家族とはそういうものなのだと言子に思っていたからだ。

「……」

奏子の言葉にアイギスは依然、複雑そうだったが小さくこくりと頷いた。

「アイギス以外に三上を連れて帰ることになにか意見がある者は居るか？ 遠慮しなくていい。どんな些細な理由でもいい。懸念があるならここで吐き出してくれ」

話がひと段落したらしいとみた美鶴が全員に向かってそう告げれば、明彦が口を開いた。

「意見といえるのかわからないが、あのナギサという女はいまいち信用ならん」

「それは確かにありますよね。あの人、さつきからヘンなこと言つてばかりで信用できるかといえれば……」

天田が顔を顰める。

ナギサの発言は信用できない、と言いたいのだろう。それは全員が多少なりとも感じていることだった。

「だがもしこのまま嘘だと一蹴して帰れば三上は失踪したままになる。唯一の手掛かりである彼女を信じるか、信じずに帰るか。それとも彼女の言う通りこの濃霧の中を彷徨い歩くか。どれかしかないだろうな」

「はいはいはい！ オレたちは信用してもいいんじゃないかねえかな、なんて思うんですけど！ だってあんなカワイイ子ちゃんがオレたちを騙せると思います!? ……あー…三上センパイそっくりつてのが…まあ……」

「順平、アンタねえ……」

ハイテンションだったにも関わらず、急にテンションを落とした順平は十中八九ナギサが優希にそっくりなことになり落ち込んでいた。優希の顔がどうしてもチラついてしまうのは仕方の無いことだが順平にとってはテンションを落とすのには十分な要素だったらしい。

「あ、あの…少し良いですか…?」

「どうした、山岸」

「えっと、さっきからアナライズが全く上手くいかなくて…恐らく私たちだけでここを探索するというのは無理に近いと思います。感覚的には全部霧でぼやけて分からないんです。だから、あの中を普通に歩けたあの子なら何か知ってるんじゃないかって」

アナライズができない。

それはつまりナビゲーションできないということだ。

地図もない。土地勘もない。敵がいるかどうかも分からないこの濃霧の中で探索するのは無理だと風花は断言した。

美鶴も集中し、辺りを探るようになってみたが一切わからなかった。それどころか、少し霧で気持ち悪くなりかけていたので即座にアナライズをやめる。

「確かに、これでは彼女無しで探索するというのは無謀だな」

そこで今まで黙っていた荒垣が初めて口を開いた。

「どのみち、あの女を頼るしか方法はねえってことか?」

「そうなるな」

「…そうか」

荒垣も複雑そうな表情で返事を返してきた。どうやら、口には出さないだけでなにか思うところがあるのだろう。

これまでは静かに静観していたということは、優希を救うことに関して自体に意見は無いように見えた。

「有里姉弟…は聞くまでも無いか?」

「はい！ 私はあの人を信用しても…うん、いいと思います！ 悪い人ではなさそう！ ってこれあの人幾月の時といっしょか…」

奏子はうむむ、と唸って首を傾げた。

幾月のようにナギサが特別課外活動部を嵌めないとも限らない。

あえて優希を殺すような行動をとらせるかもしれない。

そんな疑念のようなものは奏子の中にもあったが何故かそうだとは言いきれず、信用してもいいのではないかという気すらあるのだ。見た目が兄に似ているからか。それとも。

奏子にはその確証のない信用の出処がなにか、イマイチ分からないでいた。

「…僕は優希を連れて帰ればどうでもいい」

「有里くん、そういうところあるよね…」

順平の時と同じくまたしてもゆかりがジト目になる。

ただしこちらは呆れではなく仕方ない、といったような表情だった。

湊からしたらナギサと名乗る少女がなんであれ、敵対すれば倒すだけであるしそこまでだと思っているので大して気にかけていないだけだ。

「ねー、そろそろ決まったかな〜?」

しびれを切らしたのか、ナギサが声をかけてくる。

「ああ…決まった、とは言い難いがな。三上を助けるにはきみを頼るしかないようだ」

「ふーん、やっぱりあたしが信用できなくて困ってる感じだよね!

仕方ないなあ。でも、みんな成り行きだったとしてもそう決めたからには忠告とかはちゃんと聞いてね。別にあたしがここに住んでるからってここが危険じゃないわけじゃないからー」

ぶんぶん、と怒ってもいなさそうだった顔をニツコリと笑顔に戻し、ナギサは特別課外活動部全員に向かって口を開く。

「それでは、ここで歩くのに必要な物資を皆さんに支給したいと思いますーますー!」

虚空から小包を取り出したナギサはそのふたを開けて中身を見せる様に持ち替えた。

「じゃーん、メガネ」でーすー!」

「見りゃわかる」

中に綺麗に陳列されていたのはメガネだった。様々なデザインの

それが互いに干渉しあわないように傷つかないように並べられていた。

それを皆が知らないものだとしてもいなかのように自信ありげに紹介したナギサに、呆れた荒垣が皆の心情を代弁すればナギサは頬をむくれさせた。

「むむ！ これはただのメガネではないのですぞガツキー！」

「……なにも突っ込まねえぞ」

「えーじゃあガツキーのメガネはこの鼻眼鏡つて事で」

「おい」

ガサゴソと箱の中から鼻眼鏡を取り出したナギサに一瞬で荒垣が負けてしまった。

丁寧にも出されたそれは、鼻から息をすれば『吹き戻し』がピロピロとなる仕組みの鼻眼鏡だ。

ナギサがそれを元のメガネの上からかけるとそのまま息を吸って鼻から吐く。

ピロピロピロピロピロピロピロピロピロピロピロ

「うん。やめよ。五月蠅いし」

荒垣の代わりに自らそのメガネをかけたナギサは即座にメガネを外して箱にしまった。

そして改めて箱を差し出す。

「このメガネをつけるとあら不思議！ この深い霧が晴れて鮮明に周りを見ることが出来ちゃいます！ ワオ！ 便利だよね！ という事でこれをみんなにプレゼント〜！」

まるで通販番組である『時価ネットたなか』の様に説明を始めたナギサは特別課外活動部の面々に無理やり押し付ける様にメガネを渡ししていく。

無理やり渡されたメガネをそれぞれがかければナギサの説明に嘘偽りは無かったようであれだけ濃かった霧が視界から消え、周りを見渡せるようになった。

「どう？ 調子悪いとか見えないとかあったら言ってね！ じゃ、行こっか！」

ナギサに連れられ、そろそろと会話もなく歩けば数分もしないうちに『ようこそ忘れ去られたカダスへ!』と書かれたポップな配色の看板とアーチが特別課外活動部を出迎えた。

そして青空をバックに軽快な明るい音楽すら流れ、風船が飛んでいる様子に、ナギサ以外は全員目をぱちくりとさせる。

「え、遊園地…?」

「おい、どうなってる? なんだこれは」

「見ての通り遊園地だよ! 入口だけね! 中は全然違うけど。ちなみに入場料とかいるから気をつけてね」

困惑する一同に、ナギサが説明する。

入場料をとるらしいと聞いて一部のメンバーの顔色がサツと変わった。

「ハア!? か、金取るのかよ!?!」

「まあ外見は遊園地ですから? 一応、ね?」

「マジかよ…変なところで現実感あんな…今月オレ、チドリに渡す修学旅行の土産とか色々買いてえしキビシーんだよなあ…」

ガツクリと肩を落とした順平は薄い財布の中身を数えている。

いくらかかるのか分からないが遊園地の入園料だ。数百円から下手をすれば数千円かかるだろう。人命と引き換えにするという点で見れば安いものだが順平にとっては痛い出費にほかならなかった。が、しかしそこに救いの手が現れる。

「——待て、ここは私が出そう」

それは美鶴だった。

「マジすか!?! やりい!」

「えっ、桐条先輩良いんですか!?!」

「ああ、一応部費ということ落とせるからな」

「アザッス!」

「すみません、ありがとうございます」

喜ぶ順平とゆかり、風花に財布を出しながら美鶴は頷く。だがしかし、部費という言葉聞いて半笑いで美鶴に近寄る人間がひとりいた。

「……あの……武器防具代とか、その部費で……」

落とせませんか、と恐る恐るといった様子で近寄った奏子が美鶴へ訊いた。その話は今までタブーだった領域だ。

何せ特別課外活動の財布は湊と奏子が共同で握っている。そしてそれはなぜかこれまで一度も支給されることがなかった。すなわちそれはタルタロスに落ちている金や湊と奏子のアルバイト代から出ていると言っても過言ではなかった。

たまに気に入った防具や武器を個人で買うことはあれど、基本的にそういうものを見繕うのは湊と奏子の役目だ。

最近が入ってくるお金と出ていくお金の差が減ったとはいえ、それでも厳しいものがあるようだった。なお、ペルソナ全書からのペルソナの引き出しにもそのお金が使われていることは湊と奏子だけの秘密となっていて、それが財布を軽くする主な使い道だということは2人以外に知らないしタルタロスで拾ったものやペルソナが受胎して生み出したものを装備しているのも秘密だ。

「うっ…そ、それはだな…その、済まない…」

そんなこともつゆ知らず、美鶴はたじろいでそれはできないと言うように謝罪した。こちらには言えない複雑な事情がいろいろとあるらしい。

「と、とにかくっ！ チケット買いに行こ！ ね？」

微妙な空気になったのを察したのか、ナギサが愛想笑いを浮かべながら話をブツ切り割り込んできた。

そして美鶴を引っ張る様に皆を誘導しつつチケット売り場へと向かう。

カウンターへと目を向ければそこは人間ではなく緑の奇妙な生物が受付をしていたことに美鶴だけでなくアイギスとコロマル以外の全員が目を見開いた。

「モコイさん…？」

「ワンワン！」

「アレ？ アイちゃんとコロコロちゃんじゃないスか。なんでチミ達ここに居るの？」

「優希さんの搜索であります！」

「カレ、勝手にどこかへ行くの好きだよネ……」

奇妙な生物——モコイが不思議そうな顔をしながらカウンターの中で牛丼を食べながらアイギスとコロマルへと話しかけたが、アイギスとコロマルからしたらモコイの方が何故ここにいるのかと問い詰めたいくらいなのだ。

「モコイさん、あなたは『遠い所へ行つた』と優希さんが言っていました。がこんなところにいたんですね。突然いなくなってしまうので驚きました」

「あ……その、それについては……モコイさんはモコイさんとしてここにいるから泣くんじやないぜベイビーってカレに伝言しといてよ、ネ」

「了解しました」

「知り合いなのか？」

「はい。わたしとコロマルさんと優希さんの友だち、であります！」

「……そうか」

複雑そうな顔をした美鶴はしかし、詮索するのはやめてチケット売り場の上にある『チケット1枚3000マツカ』と書かれた看板を見て財布から1万円札を3枚取り出してモコイへと渡した。

「すまない、これで入場チケットを10人分欲しいのだが……」

「これじゃムリムリさんだね。人間の世界のお金はここではケツ拭く紙にもなりやしないっすよ」

「……」

ぺい、とモコイに1万円札を3枚とも返された美鶴は門前払いを食らい言い返す言葉も無いのか無言で戻ってきた。その後ろを追撃するようにモコイの言葉が続く。

「……ここでは魔^マツ^ツ貨^カしか受付してないんすよ。いくらカレのシスターやブラザーとそのフレンズといえどもタダでここを通すわけにはいかないんだよネ……でも中学生以下のキッズとコロコロちゃんは無料っすよ」

「う……ごめん、そうだよね、普通の人はマツカなんか持ってないよね

…」

天田とコロマルの分が無料と聞いてもそもそも通貨が違うので払うことが出来なければ、天田とコロマルだけ侵入する訳にもいかない。またしても手詰まりか、となつた一行にモコイが再度声をかけた。

「そこら辺の悪魔からカツアゲしてくればスグっすよスグ。そこら辺ほつつき歩いてるバルバトスとかちようどいつすよ。ボクちゃんはないけど」

「だ、だめだよカツアゲなんて！　“先代”くんがしてたからつてそーゆー悪いことをユークンだけじゃなく湊くんたちに教えちゃ、みんな怯えて逃げちやうよ！」

「ちようどいいんじゃないスカ？　カレを探すのにいちいち襲われてちや邪魔っすよ〜」

それに、とモコイは続ける。

「アレが活性化しだしてるネ。まだ奥の森の中を彷徨ってるケド、手当たり次第に悪魔を殺しまくってる」

「アイツが？　……そう。じゃあここで遊んでないでちよつち急いの方が良いよね。へそくりだったけど仕方ない。マツカでちゃんと払うから中に入れて」

「ウイ！　団体様ごあんない！　だネ！」

短くモコイと会話したナギサが焦つたような顔になり、自ら財布を開いてジャラジャラと見た事もない硬貨を出してモコイへと渡せばチケツトも無しに門が開けられる。

ここはチケツト売り場ではなかったのか、という疑問もそこそこに門の中へと入っていく。

「頼んだっすよ、カレを救えるのはチミたちだけなんスから」

そんなモコイの声が後ろから追うように聞こえた。

門を抜けた先はなんと巖戸台分寮のラウンジ。

まるで戻ってきたような感覚に面々は戸惑う。

「寮に…戻ってきた…？」

「ううん、違う。ここはまだカダスだよ。でもユーキくんの『出入口はここ』って認知のせいであたしの知ってるカダスの構造が変化してるみたい」

即座に否定したナギサが周りを見渡した。ラウンジの光景は蜃気楼のように少し揺らめいている。

「たぶん、ここから先は扉を開けても思い通りの場所に繋がってるかは分からないんだよね。ユーキくんの記憶とカダスの性質が混じって全部ちぐはぐな場所に繋がってるかも」

「一筋縄じゃいかねえってか」

「うん。でもいつかは辿り着けるはずだしユーキくんの認知と記憶を元にしてるってことは一定の規則性があるはずだから。とにかく1番奥を目指すの。ゴールはきつと、そこだよ」

あまり気乗りしなさそうな表情になったナギサが「ただ、」と吐き出す。

「最深部の直前に絶対に森を通ると思うの。あそこだけはどうかあつても変わらないから。そこに『パンの大神』っていう刈り取る者よりもヤバい奴が居るってことだけ今は覚えといて。詳しい話はそこに入ってからするけど…アレと対面して勝てるだなんて思わないで。メガネを外して直視するのも絶対にダメ。アナライズは厳禁だからね」

いつになく真剣な表情と声色でそう忠告してきたナギサは言うだけ言うとそのまま階段をあがって廊下を進むとひとつひとつドアノブを触って開かないことを確認してから乱暴に優希の部屋のドアを開けた。

「…やっぱり、別の場所に繋がってる」

ドアの向こうは影時間の月光館学園の天文台に繋がっていた。

そして、そのフチギリギリに1人の男子生徒が月明かりに照らされながら腰掛けて足を揺らしている。

「優希…？」

思わず湊が声を零せば、男子生徒が振り向き驚いたように僅かに目を見開いて立ち上がった。

「驚いた。天文部の見学…とかかな…こんな夜更けにどうしたんですか」

「て、天文部…？ お兄ちゃん何言ってるの…？」

男子生徒——優希らしき人物が発した声はまるで他人行儀で、奏子だけでなく全員を混乱させる。

「ええと、誰と勘違いしているのかは知らないけど俺はひとりっ子ですよ。…桐条さんがいるってことは生徒会か特別課外活動とかいうやつですよ。今日の活動は理事長公認ですのでどうぞ気にせずごゆっくり」

愛想笑いをしてまた座り直して空を見上げた優希は不意にそこから身体を押し出すようにして飛んだ。

「っ…！」

咄嗟に伸ばした湊の手は空を掴んだだけで終わる。

誰かが止める間もなく夜の闇にかき消え、数秒間を置いてどしやり、と嫌な音が聞こえた。

しん、と辺りが静まり返る。

「先、進もつか。アレは…色んなものが混じった認知上のユーキくんだから気にしなくていいよ」

その静寂を破ったのはナギサだった。

たとえ気にするなど言われても目の前で優希が身投げしたのだから気にしない方がおかしい。

奏子は震えながら腰を抜かしているし、湊だってこれまでの優希の死に様を思い出しかけ吐き気をこらえるので必死だった。

「きつとこの先…こういうのが続くから慣れるとは言わないけど動じないでね！ …ぶっちゃけちやうとユーキくんの認識の中では自分が死ぬことってああいう世間話をするくらいには軽いものでもあるから、そういうのがモロ出ちやってるんだと思う」

そう言いながらナギサが1歩前に踏み出した瞬間、景色が一瞬ブレた。

「！」

足を止めたナギサが現れたモノを凝視する。

それは、天文台の十字架に括り付けられたコロマルと優希以外の特別課外活動全員とアイギスに拘束される桐条武治。そして幾月と幾月に前髪を掴まれ膝立ちの状態で頭に拳銃を突きつけられている優希の姿だった。

全員が全員、半透明で向こう側が透けている。

「なんだよ……これ……あの時の……!?!」

天田が困惑したような声を漏らす。

それもそのはず。その光景はついに10日ほど前に見た光景そっくりだったからだ。

違う点があるなら、優希は苦しげに倒れ伏しておらず強い意志を宿した目で幾月を睨みつけるように見ている点だろうか。

『——ぎゃあぎゃああと煩いんだよねえ君たちは。生贄は黙って新世界の礎になってくれれば良いんだよ。ああ、それとも見本を見せてあげないと分からないかい?』

壁を1枚隔てたような、酷く穏やかだが苛立ちを含む幾月の声が聞こえる。

仕方がないと言いたげな幾月はどうやら先程の認知上の優希とは違い、こちらを認識してはいないようだった。

どちらかと言えばビデオを再生した時のように、この場にいる誰の介入も許さない。

『それなら、三上くんで見せてあげよう。役立たずにもう利用価値は無いからね。廃棄処分といこうじゃないか』

『やめろ幾月ッ！ 貴様……ぐっ……!』

武治が叫びすぐにアイギスに取り押さえられる。いよいよ地面に這いつくばるように押さえつけられた武治は苦しげに呻くだけだった。

『さて、三上くん。最後に言い残すことは?』

『地獄に落ちろファツキンクソメガネ。お前の望んでる物なんか何度死んでも手に入らねーよバーカ』

そう吐き捨てて狂暴に笑う優希の顔は生き生きとしており、今からとても殺されるとは思えない程にその目は爛々と輝いていた。

自身に対する剥き出しにされた優希の本性を垣間見た幾月は、その顔を一瞬怒りで歪ませその頬を拳銃を持った手で殴り抜いた。

『……お兄ちゃんっ！』

縛られている方の半透明な奏子の悲鳴のような声が響く。

殴られた勢いで地面に倒れてもなお、優希は強気に睨み付けることを止めない。

その事に幾月は得体の知れない物を感じるも、見下し、ずっと利用してきた物だと思っていた存在に『自分の得たいと思っているものはどう足掻いても手に入られない』と言われたことを再度確認する。

怒り狂い乱暴にキレ散らしてもおかしくはないその言葉と態度に乱心しないだけ幾月はまだ比較的冷静だった。ただし、内心でどうやって苦しませて殺してやろうかと頭の中で考えてはいたが。

『っ…、ははは、君はほんとうに…私をイラつかせるのが得意なようだ。だけどこれは…そう、見せしめだ。闇の皇子たる僕に逆らうとどうなるか、みんなに教えてあげなくちゃあいけない！』

幾月は引き金に指をかける。

そして、

「やめ——」

——パァン！

乾いた銃声が一発響き、体を起こしかけていた半透明の優希の頭がごとんと床に落ちて血だまりを作り現れた幻覚は全て消えた。

しかしそこで湊は限界を迎える。

「——うっ…おえええっ…！」

「おい、湊ダイジョーブかよ!？」

胃の中身を胃液と共に全て床にぶちまけ、荒い呼吸のままぶるぶると震える自身の体を掻き抱いた。

いま、目の前で繰り広げられた光景は湊の記憶の中の物だった。

湊が、『3回目』と呼んでいる周に実際に起こった出来事だ。それを再度直視して湊が耐え切れなくなったのだ。

「いまの、なに…」

小さく、震えた声で言葉を零したナギサが後ずさる。そして、湊の顔を見た。

「ねえ、いまの…みな、と…くんの記憶…？」

「……」

「いや、何を言ってるんだ。そもそも三上は死んでいないだろ」

押し黙る湊に明彦が助け舟を出した。

明彦——否、特別課外活動部全員からすれば今日の前で垂れ流された惨劇は、起こっていないことだ。

優希はあんなに元気ではなかったし、幾月に反抗的でもなかった。そして殺されてもいない。

湊以外が知る中では確かに一度死にはしたがそれは衰弱死ですぐに生き返ったのだ。銃殺という結末では決してない。

その事実を理解したナギサはその話を無かったことにした。それよりもやるべきことがある、と。

「そう…だよね…ごめん、もう少しだけ歩けるかな。近くに“セーフルーム”があるとと思うからそこで休もう。この調子じゃ慣れるより先に潰れちゃいそうだし」

ナギサは、人では無い。

だからこそ人の心の脆さを知っているつもりで知らない。分からない。だがその人間が限界に近いかどうかくらいはだいたいわかる。

腰を抜かしたままの奏子の手をとり立ち上がらせて、ナギサは数歩先へと歩を進めて動かない特別課外活動部の面々へと振り向いた。

「それとも、帰る？ 言ったよね。みんなが辛い思いをする必要ないって。耐えられないなら無理に進む必要はないよ」

ナギサの声と瞳は先ほど休むことを提案した時とは違い、酷く冷たい。

突き放すような拒絶を含むその言葉を吐いた一瞬の心変わりとは異常としか言いようがないものだったが、その“後ろ”からさらに声が響いてきた。

「いやあ、彼女の言う通りだよ。まったくもってその通りだ」

「！」

「けれど…酷いなあ、ほんとうに酷い。キミ達は人の心に無断で立ち入ろうとしているにも関わらず何のためらいもないというんだね」

影時間の闇から姿を現したのは――

「アンタは…」

「幾…月…!?!」

タルタロスの天文台からあの日、転落死したはずの幾月だった。

The Call from Beyond. (彼方からの呼び声)(?/?/?)

「おいおい、幾月さん”、だろう？ まったく、仕方のない子たちだ。まあ”幾月”という名前と姿もそろそろ飽きてきたからやめてもいいのだけれど」

ふう、と幾月は溜息を吐いた。

幾月のあの目と寸分たがわぬうすら笑いを浮かべたその姿は瞳だけが黄金に輝いている。

「飽きた…？ 貴様は幾月では無いのか!？」

「いいや、違うさ。そもそも、幾月修司という人間自体は10年以上前に死んでるしそもそも私は人間じゃあない。幾月修司という人格を持った私の”化身”だ」

「そんな…じゃあ…私たちが接してきたのは…」

誰なのか、という風花の問いに『幾月の姿をした誰か』は笑みを深める。

「そうだね、きみ達とずーっ…と接してきたのは自覚のない私という事になるね。ああ、本当に滑稽だ。ちよつと吹き込んでみたら面白いほどにすべて上手くいったんだからさ！」

10年以上前に幾月という人間は死んでいて、特別課外活動部と共に過ごしていたのは幾月の名を騙る誰かだった。

化身、と言う事は人間ではないだろう。ならばなんなのか。

その言葉の意味と目の前の存在に皆に動揺が走る中、ナギサだけがそれを睨み付けて噛みつかんばかりに声を低くしてその名前を呼ぶ。

「——ニヤルラトホテプ”…アンタ、なにしに来たの。わざわざ化身のものまねまでして。ダサイよ？」

その言葉に幾月の姿を騙る”ニヤルラトホテプ”は深く笑みを浮かべるとすぐさまその姿を霧散させ、聖エルミン学園の制服を着た優希の姿になる。

金の瞳を鈍く輝かせ今度は嘲笑うように笑みを浮かべるその顔は、

確かに優希の物だが全く違うもののように見えた。

「フン、早速種明かしとは芸が無いな？　もうやつらで少し遊んでいたかったのだが。何をしに、というのは貴様が一番わかっていることだろうが」

そして発された声は低く優希とは全く違う。『だれか』の物だった。全てを見下し、嘲るその存在に全員がピリピリとした威圧感のようなものを感じたのだ。

鈍い金色の眼が、唐突に湊の方を向く。

「時に、有里湊。貴様は三上優希——……アレのまるで未来を見ているような言動に違和感を感じたり、疑問に思ったことはあるだろう？　それを知りたいと思わんのか？　私なら、それを教えてやれるぞ？」

「え……？」

それは甘言であり凶星だった。

まるで湊の心の内を覗き込んだかのように不安を言い当てたニャラトホテプに湊の瞳が揺れる。

実際、兄の行動に対しての違和感と不安は湊自身が知らないうちに日に日に膨らんでいたのだ。

その違和感と不安が、『疑念』にまで成長したのはいつのことだったのか。湊はわからない。

しかしニャラトホテプという存在は湊が何度も繰り返していることを分かっている。そんな甘言を発した。

「知りたいと言えば私はいくらでも見せてやれる。一言。そう、たった一言だ。『知りたい』、とそう望むが良い」

いつの間にか湊の目の前まで来ていたニャラトホテプが湊の頬にそつと手を添え見つめてくる。

「——ほら、湊。今なら教えてあげられる。いまなら、なんでも聞いてもいいんだ」

兄が、湊に甘言を吐く。

思考が鈍くなる。

なにも、考えられなくなる。

金色の眼に湊は吸い込まれ、頷きそうになり――

「ちえすとおーっ！」

「……チツ！」

かけて、優希――ではなくニヤルラトホテプが弾かれたように身体を湊から離れたことによつて寸前でとどまった。

靄がかかったかのように鈍った思考が一瞬でクリアになる。

「旧き神よ、邪魔をするのか？ 何もかもがもう手遅れだというのに？」

「当たり前でしょ！ ユーキくんだけじゃなく、湊くんにもで手を出そうだなんて許しませんからね！」

割り込んできたのはナギサだった。その手にはどこから出したのかバズ停が握られている。

恐らく、ニヤルラトホテプに向かって横からそれを突き出したのだろう。

「そう断言するのは何故だ？ 出来損ないのアレだけが他人の秘密を一方的に知っているというのは公平ではないだろう？ だから私はやつらに見せてやろうというのだ！ 憐れな操り人形がなぜやつら特別課外活動の秘密を知っているのかをな！」

高らかに告げるニヤルラトホテプは人の心を解っている。解つていて、ナギサと同じく解らないのだ。だから湊を誘惑し、今なお、特別課外活動部自体を揺さぶろうとしているのだ。

「アンタのことが大っ嫌いだから！ ファイレモンもだけど、そういうのほんとやめたらどうなの!？」

「フハハ！ 嫌い、か。私の失態を見たくて邪魔ばかりしていた貴様にしては随分と人間らしいことを言う！ だがな、『周防達哉』もあの人形も私の玩具だ！ 所有物をどうしようが私の勝手だろう！ ファイレモンも私と同じく、やめろと言われてやめるわけがないだろうな」

嘲る様に高らかに笑うニヤルラトホテプは湊たちに全く分からない話をしている。

否、ここに来てから湊たちは常に置いてけぼりだったのだ。誰も説

明してはくれない。

これまで幾月という「大人」に影時間やシャドウ、ペルソナについて説明を受けていた特別課外活動部が、ここに来て誰からも説明を受けられないという事態になっているのはなるべくしてなっているのか。

彼らはいま、自分で推察するということを無意識に放棄している。そしてニャルラトホテプはそれをもわかっていてわざわざ無視してナギサと彼らがわからないような会話をしているのだ。

いま、わかるのは優希が自分たちの秘密や、未来を知っているとニャルラトホテプが語ったことだけ。

「なぜアレの味方を気取っているのかは知らんが貴様は所詮人から忘れ去られた遺物！ 自ら信仰を捨て、かつての力を失い無力な分霊貴様には黙って「道案内」でもしてもらおうではないか！」

「……っ、」

ナギサはニャルラトホテプの言葉が凶星だったのか押し黙る。

どう答えようがどう思おうが、このネガティブマインドの化身には筒抜けなのだ。何かを喋ってこれ以上おちよくられても癪だとナギサは判断した。

喋るだけ労力の無駄だと。

「どうやら、凶星のようだな？ アレが明かしくいことを代わりに明かしてやる。それが愚かにも数え切れぬほどやり直してきた人形に対する私からのせめてもの親心というものだ。クッククックッ……」

嫌がらせの間違いじゃないの、とナギサは言いたくなかったがどうせそれを言ったところでニャルラトホテプが気色の悪い笑みを浮かべ喜んで否定することは目に見えているので閉口した。

そんな様子のナギサに満足したのかニャルラトホテプの姿が空に溶けるように消える。代わりに黒い扉が現れ、声が遅れてその場に響いた。

「私の言葉の意味。そしてアレに対する疑問の答えを知りたければ扉の先へと進むがいい。貴様らの望むものがそこにあるだろう」

そして、ナギサ以外の面々は誘われるようにその扉の向こうへと何

の躊躇もなく足を踏み入れた。

「待って！」

そこしか道が無かったとはいえ、なんの躊躇も思慮もなく踏み入れてしまったのだ。

——それが引き金になるとも知らずに。

望まれた。

願われた。

たすけて、と声がした。

今を大切にしたい、と意志が囁いた。

悔いを残したくない、と慟哭が鳴いた。

やりなおしたい、と後悔の念が響いた。

仲間を傷つけたくない、と心の軋む音が聞こえた。

だからこそ、自分は

ふらふらと、道を歩く。

どうして自分がここにいるのかわからない。ただ、何となくどこか懐かしい気がして少しだけ安心する。

一面霧に包まれているのに、足は勝手に進んでいく。まるで行くべき場所が分かっているとしてもいうかのように。

先ほどまで酷く身体が怠くてしんどかったはずなのに、今はなぜかそんなしんどさもどこへやら。遠くへ吹き飛んでいつてしまっている。

むしろ調子がいいと言っても過言ではないかもしれない。

自分と同名前の存在
ナギサと名乗った少女はどこかへいつてしまおうし、早く帰って寝たいのに、正しく五里霧中といった様子で一向に出口へ着かない。

そもそも、この場所に出口はあるのか。

これが夢でないとしたら今頃寮では大騒ぎになっているのか。それとも、自分の事なんて無かったことになっているのか。

……。

流星にそれは無いか。無いと思いたい。

憂鬱な思考を振り払ったはいいものの、なぜ自分がこんなところにいるのかさっぱりわからない。

たしかタルタロスへ行くと言った湊たちを見送って、それから。

それからは、記憶が無いので何も思い出せない。

うむむ、と頭を抱えて唸っていればざわりと唐突に鳥肌が立ち、その場から離れる”と言わんばかりに危険信号が頭を支配した。

急に自由に動くようになった体で慌てて飛び退けば、粘性の黒い泥のようなぬめぬめとした液体を滴らせた触手が先ほどまで立っていた場所を薙ぎ払った。

「ペル——」

言いかけて、武器もなければペルソナも召喚できない事を思い出して舌打ちしてから走り出す。

あの触手は10月の満月の日に見た良くわからないシャドウの物によく似ている。となると、ここには似たような奴が沢山いるのか。自分は無事に生きて帰れるのか。とにかく逃げないと。

思考が一瞬で頭の中を駆け巡る。

この体調の良さと身体の軽さはまるで持病がなく体調不良に殆どなる事の無かった以前の『周』に戻ったよう。

確かにペルソナが召喚できないという点ではある意味身体の状態が巻き戻されたと言ってもいい。それも、10周目くらいまでの自分の状態に。

となると交戦は絶対に避けなければいけない。身体能力的にもペルソナを持つていなければシャドウに対する攻撃を受けたときのダメージが半端じゃないのだ。

恐らく、ペルソナに目覚めることによってシャドウや悪魔に対する耐性？ のようなものが出来るんだろうが生憎今は持ってないので一発でも喰らえばアウトだろう。

こんなところで死んでられるか！ と叫びたい気持ちを抑え、走る。

どれくらい走ったかはわからないが辺りが鬱蒼とした木に囲まれた暗い森に変わったところでこちらを追って来ていた気配がなくなった。が、

「霧の向こう、遠くから不安定な音程の男とも女ともつかない声が聞こえる。」

妙に間延びしたそれはぞわぞわと背筋を這いあがるような恐怖心と共に脳内をじわじわと侵蝕してきた。

そして、その声が止んだと思っただけで後ろから

「ひっ……」

声が、聞こえた。

かと思えばぐい、と身体を引き寄せられ拘束される。すぐ近くに声の主が居るはずなのに深過ぎる霧のせいで何も見えない。

「ふぐっ!？」

不意に口になにか黒いぬりとした物をつつまれぐいぐいと喉奥に押し込まれた。

「んぐ……っ、おえっ……ふ……あ、あぐ……あ……あ……」

苦しい。

気持ち悪い。

くらくらする。

息ができない。

吐きそうだ。

なんでこんな目に遭わないといけないのかと思うも抵抗しようにも酸欠で体にうまく力が入らない。

このまま死んでしまうのか。それとも蹂躪されて死ぬよりも恐ろしい目に遭うのか。ぞっとしたが抵抗する手段がないからどうにもできない。舌を噛み切つて自殺、なんてことも考えたがそもそも舌を噛み切った程度では死ねないし噛み切るためにはこの口に入っている異物を何とかしないとイケないのでそれも無理。

最悪だ、なんてだんだん暗くなってくる視界とどこか遠い思考で考

えながらしばらく耐えていれば『なにか』は満足したのか、興味を失ったのかどちらかわからないが自分を解放してべちやりと乱暴に地面に落とした。と、同時に咳き込んで息を吸い、その衝動のままにせりあがってきていたものを息と一緒に地面に吐き出す。

「げほっ、げほげほっ、げほ…うっ…おえええ…はあ、はあ、はあ、はあ、はあ…うう…」

意味が分からない。いったい見えない『なにか』は何がしたかったのか。殺すわけでもなく、拘束して喉奥と口の中になにかを突っ込んできた以外は何も危害を加えられなかった。

殺されてやりなおしになるよりかは何倍もマシなのだが、単純に不快で気持ち悪く苦しかっただけだ。

それがまた、奇妙な違和感を発していて気になるようなならないようなそんな気分させられる。

まだここが何なのかよくわかっていないのに本当に嫌になってきた。せめてモコイさんが居ればこんな心細くなかっただろうに。

「……？」

ふと、自分の思考回路が11月以前の物に戻っていることに気がついた。というより、あのもやのかかった堅物じみた思考回路がどこかへとすっぽ抜けてしまったというべきか。

さつき変なものを口に突っ込まれたショックのせいかなにか分からないが、すっかり全快な自分が戻ってきていた。

ありがたい事だとは思いますが今度は自分の問題を直視しなければいけなくなつて自嘲気味の乾いた笑いが零れる。

「——は、はは…結局、全部自分のせいじゃんか…」

10年前の事故が起こったのも。実の両親が死んだのも。あの場所での唯一の味方だった千鶴さんが死んだのも。タカヤ達が辛い思いをしたのも。大型シャドウが現れ、世界が終わってしまうのも。

湊と奏子が命を懸けてニユクスを封印せざるを得ない状況になつたことも。

全部自分のせいだった。

なにが『湊と奏子を救う』、だ。原因がそんなことほざいているのは

本当に何様のつもりなのか。

自分さえいなければ事故は起こらなかった。デスも産まれなかった。『ストレガの子供たち』なんていなかった。

今まで忘れてのうのうと生きてきた自分が誰かを救おうだなんておこがましいにもほどがある。

全部自覚したせいで狂ってしまいそうなほどの自責の念が急に押し寄せてくるも、ここで狂ってしまえばそもそも意味がないため僅かに残った理性が押しとどめる。

正直、どうやって湊達に顔向けすればいいのかわからなくなってきた。

今すぐ死んでしまいたい。この存在を消え去れるものなら消え去ってしまいたい。

無かったことにしたい。

ぼたり、ぼたり、と雫が頬を伝って落ちる。ごしごしと乱暴にそれを拭いながら、立ち上がって歩く。

みつともなく泣く資格が自分にあるとは思えない。なんで自分が泣くのか。泣きたいのは自分のせいで被害を被ったみんなの方だろう、と思った。

悲劇のヒロインごっこがしたい訳じゃない。ここで歯を食いしばって頑張つて、頑張つて頑張つて頑張つて、湊と奏子を救う事が唯一自分にできることなのに、それすら放棄しようだなんて狡いにも程があるだろう。というかそれを無くしてしまつたらそれこそ存在意義がない。

もしそうなら自分なんて無価値で、いる意味の無い居なくてもいい存在じゃないか。

むしろ居ない方がいい存在に違いない。

——やっぱり自分は要らない存在なんだ。

この世の異物。それがきつと自分だ。

ああ、ほんとうに気持ち悪い。

この気持ち悪さを誰かに相談しようにも、それすらも贅沢だと言うのか唯一の相談相手だったモルフエは自分の中からいなくなつてど

こかへいってしまったのか出てきてはくれないようであたただひとり行く先もわからないまま歩くしかない。帰り道を探すしかない。

「——のい……………ら…に…い…いえ…しゆ……………す」
「？」

ふと、急に誰かに呼ばれたような気がしてきよろきよると周りを見回す。

どこからか聞こえてくる自分の事を切に求めているようなその悲痛な声に酷く心をかき乱される。

行かなくては。

求められているのなら、行かなくては、と頭が急にそれだけしか考えられなくなる。

歩みを進める。勝手に足が動く。誘われるように。呼ばれるように。

ぎぶぎぶと、足元を満たす水に近い黒い泥をかき分けしばらく歩き続ければ、ようやく足が止まる。

気がつけば、霧は全て晴れて真つ暗な闇と光る満月。そして静寂だけが支配していた。

おもむろに真つ暗なそこで仰向けに寝転がれば、生ぬるい温かさに意識がぼやけてくる。

しばらくぼんやりとしていれば、可愛い子山羊が寄って来た。なぜかそれが酷く愛おしく見えて撫でようとしたが手足に力が入らなくてやめる。

するとそれはこちらが見えていないのか、そのままフラフラとどこかへ去って行ってしまふ。

「オカアサン、オカアサン、オカアサン…ドコ…ドコ…触れたい…会いたい…来て…来て…ひとつに…」

遠くからどこかで聞いたような声が聞こえる。

赤子のような泣き声がある。

子供が母親を探しているような気がする。

声を出さないと、と思うも思考回路がうまく回らない。異常であるはずなのにその異常を異常と認識できない。

眠ってしまえ、と誰かが囁く。

眠らないと、と誰かが囁く。

ここで眠ってしまえばすべてが解決消えることができるするのだと、誰かが囁く。

帰らないといけないのになぜかここでずっと眠っていることが正しい事のように思えてきて、ゆっくりと目を閉じた。

救いたいと思った。

救いたかった。

…救えなかった。

——巢食われた。

扉をくぐった先で湊たちが見たものは一本の道だった。

その両端に何個ものデザインの違いの違う扉が立っていて、突き当りには大きな南京錠が両脇の扉の数だけついた大きな扉が聳え立っている。

道は何の変哲もない、むしろ穏やかさすら感じる春のあたたかな木漏れ日の入って来る桜並木だった。

そこにナギサが叫んで止めるほどの物があるとは思えず、その穏やかな景色で幾分か立ち直った奏子と湊は首を傾げた。

「……ねえ、帰ろう？ この先のものなんて、見たってなんにもならないよ……」

震えて、泣きそうな声のナギサが帰ることを執拗に勧めてくる。

出会った時とは大違いな余裕のないその態度に、先ほど出てきたニャルラトホテプという存在が彼女にとってどれだけ苦手な存在だったかをありありと見せつけられているようで。

そしてそのニャルラトホテプという存在は尊大かつ油断ならない者だというのはわかったが悪いものなのかどうかすらわからない、ときた。

ナギサ自身は敵意を露わにしていたし、湊もかの存在に言いようのない不安のようなものを感じていたが疑問を解決できると言われればその提案に乗らないわけにもいかず。

と、いうよりもこの扉の先に向かうしかめぼしい道が無かったとい

うべきか。

何も言つて来ない面々に諦めたのかナギサはため息を吐いた。

「……………安全地帯のセーフルームはこの扉だから」

しばらく沈黙した後、ナギサは入ってきた扉を開けて中を見せる。

セーフルーム、という割には薬局のような内装が一同を出迎え、開けたドアから軽快な店内BGMが漏れてくる。

「いらっしやい！」

『ヒットポイント回復するなら傷薬か宝玉で〜』

「……………やっぱリナシで！」

ボタン、と速攻でドアを閉めたナギサは張り付けたような笑みをし、どこからか取り出したガムテープで扉を封印しようとした。

「えっ、いまの、『サトミタダシ』…？ えっえっなんでここに？」

「ユーキさんの認知…と、アイツの気まぐれかな…売ってるものは真面目なんだろうけど流れてる曲がね…美鶴ちゃんまでサトミタダシの歌に洗脳されちゃうのはさすがにあたしやだよ…あ、傷ついちゃってどうしても回復アイテムが欲しいとかなら開放するけど…」

惚けたように呟く奏子に答えたナギサはナギサでなにかこだわりがあるらしく折角のセーフルームを封印してしまった。

「まだここは森じゃないし、パンの大神に襲われる心配もないからガムテープで封印しなくても大丈夫かな…この道もまだ…うん、大丈夫そうだし。ヤバかったら即剥がすからね」

それきり沈黙して湊と奏子に選択を委ねたナギサはゆっくりと目を閉じた。

仕方なく湊と奏子は扉のノブが回るかをひとつひとつ確認する。

結局、右側の1番近い扉しか回らず、進める道が決まりきっているようなその強制的なものに徒労感を感じた。

「なんつーか？ ゲームのお約束って感じだよな。となると、全部の扉に入って鍵をゲットすればあの奥の扉が開くとかじゃね？」

「それ、ありそうですね」

順平が奏子の後ろから顔を出し、奥の扉を見た順平がそう言い出し

それに同意するように天田も頷いた。

ナギサは依然黙ったままだったが特に止めることも邪魔もしてこないでドアに入ってもいいだろう、と湊は判断してドアノブに手をかける。

「じゃあ、開けるよ」

「ああ。何が来てもOKだ。心構えはできているはずだからな」

明彦の言葉が終わるか終わらないかでドアノブが回り、ドアが開かれる。瞬間、景色が塗り替わった。

どこかの暗い一室の隅で仮面をかぶった優希がぐったりと角に凭れている。

その真つ白な仮面には、なにも描かれてはいない。

『要らない。自分はみんなの輪には要らない。世界には要らない。ただ湊と奏子が笑って生きていられるならそれでいい』

優希の声が響く。

『俺はクズだ。最低限の事すらしてやれなかった』

自嘲するようなそれは、後悔が滲んでいた。

『受け入れたくないと否定して、自分可愛さに逃げた卑怯者だ…だから…』

それきり声は聞こえなくなって目の前で壁に凭れている仮面をつけた優希が縮こまる様に膝を抱える。

湊が一步踏み出して、その優希に近づこうとした瞬間仮面をつけた顔が湊たちを睨み付ける様に上がった。

「…誰だ」

発された声は気力がなく、今までにないくらい拒絶の色が強い。そのことに一瞬湊はたじろぐ。

だが、そんな湊達の目的をすぐに察したのか、元々知っていたのか分からないが優希は誰の言葉も聞かずに相変わらず気力の無い声で納得したような言葉を吐く。

「ああ、あの扉を開きたいんだ。…鍵はあっちの部屋だから。勝手に持って行ってくれよ」

指をさしながら投げやりに答えた優希にまるで全てをあきらめて

いるような印象を感じた。

「お兄ちゃん、どうしてそんな投げやりなの？」

「…どうでもいいから」

返ってきた返事に奏子が口を震わせる。湊の口癖と同じそれを兄の口から聞くことは珍しい。

「どうでも、いい…？」

「生きるのも、死ぬのも、痛いのもつらいのも怖いけどもうどうでもいいんだ。何も感じない。ただただ怠い。けど、頑張って動かなきゃ、湊と奏子を救わなきゃ。やったことの責任を取らないと、俺に生きる価値なんてないから」

それは一種の強迫観念だった。

認知上の優希だと言えどもそれは優希の本心のひとつであることに間違いは無く。その無気力さにメツキが剥がれた優希はこうも壊れていたのかと全員が自覚した。

「おい、まだそんなこと思ってやがったのか!? あんだけてめえの弟や妹が…こいつらがてめえを想ってるのをまだわかっちゃいなかったっていうのかよ!!」

だが、その言葉に激昂したのは荒垣だった。

仮面をかぶった優希の胸倉を掴み上げ、壁に押し付ける。

「うん。わかんないんだ。…わかっていたら、俺はもつとちゃんとした人間になれてたのかな」

その問いに誰も答えることは出来なかった。素直に分からない、と言われてどう答えればいいのか分からない者ばかりだった。

中途半端な慰めの言葉すら言えない。

下手な言葉をかけることすら出来ない。そもそも、本心をさらけ出された場合の対応に慣れていない者ばかりがこの場に立っていた。

すなわち、真の意味で仲が良い訳では無いために理解が足りない事を意味していた。

あくまで優希は仲間という点を除いて先輩または同級生。良くて友達程度だ。そして仲間とは言っても特別課外活動部は同じ寮に住んでいるだけであって全員の仲がとても良いという訳では無いし複

雑な事情もありギスギスすることだってある。優希自身も手を出すところは出しているが殆どは成り行きに任せ、静観することが多かった。たがいに全員と仲が良い訳でもなかった。

特にゆかりと風花の2人に關してはほぼほぼ『ただの親切な先輩』もしくは『湊クラスメイトと奏子の兄』程度な認識に近かったのだ。

どこまで行っても義務という責任の上に成り立つ活動ありきの関係。それはもしかすると仲間という関係ですら無いのかもしれない。

優希が無意識に壁を作っていたせいかな。それとも特別課外活動部自体に問題があるのか。

どちらにせよ、ここに来て自分で考えるということと共に特別課外活動部の面々は改めて自分たちの関係の見直しまでさせられそうになっっているのだ。

「きつと全部知ってしまったらみんな軽蔑する。いや、違うな。俺の事、恨むだろうな。狡いって。卑怯者だって」

優希の口からうわ言に近い自嘲の言葉が漏れる。

「お前なんか死んでしまえ」って思うだろ。絶対」

「そんなこと……!」

咄嗟にゆかりが否定の言葉を吐こうとして言葉に詰まる。幾月からカミングアウトされた優希の過去を知ってしまった手前、そんなことない、とは言いきれなかったのだ。

「だって、俺は、俺は……」

どぼん、と優希の姿が黒い泥になって溶け落ちた。そして、そこから影がムクムクと起き上がる。

「離れてガツキー!」

ナギサの鋭い声が飛び、咄嗟に荒垣が退けば泥が形を成し色づいてゆく。

現れたのはシャドウとはまた違う異形。灰色がかかった血の無い白い肌がてらてらと輝き、目の無いずんぐりむっくりとしたその姿はまるでつるりとしたヒキガエルのようだ。

鼻があるべき場所にはピンク色の触手がだらりと垂れ下がっている。

醜悪。その一言に尽きる容姿だった。

「あくまで認知上のユーキくんだから、対応しきれぬ感情の臨界点を超えて化けの皮が剥がれちゃって悪魔になったっぽい！ 俗にいう、刺激しすぎってやつ〜!？」

「わ、悪い」

「いーのいーの！ 最後は多分勝手にヒートアップしちゃったみたいだし元からこうなるように仕組まれてたんだと思う、よー！」

ふわり、とナギサの眼前に青いカードが舞い降りる。それを握りつぶしたナギサを青い光と力の奔流が覆った。

「GOGO！ ナイトゴースト」！ 「ムーンビースト」なんかやっつけちゃえー！」

多少デフォルメされているであろうマスコット風味な真つ黒なのっぺらぼうな顔をした悪魔のような風貌のペルソナを召喚したナギサは白い化け物——「ムーンビースト」にそれをけしかけた。

【百烈突き】

目にもとまらぬ速さで「ナイトゴースト」がその手に持った三又の槍でムーンビーストを穴だらけにして悲鳴を上げさせる間もなく消失させる。

「いえーい大勝利！ ムーンビースト1体程度ならナギサちゃんでも楽勝なのです！ ぶいぶい！」

自信満々に振り返り「褒めて」と言わんばかりにひとりで大はしやぎするナギサはまるで積年の恨みを持つ相手を倒したようだった。実際は雑魚も良いところの敵なのだが、それを湊らは知らない。

湊はそんなナギサを無視して認知上の優希が指差した扉を開ける。相手をするだけ振り回されてしまうだけだ、とナギサがニヤルラトホテブに抱いた感情と近いものを湊が抱いているのは何の因果か。

「ペルソナ使いだっただの!？」

「ちよつと違うけど、そんなカンジ！ なのでちゃんとナギサちゃんも戦えるんですよ、はいー！」

驚くゆかりに笑顔で答えたナギサの声をバックに、湊が部屋の真ん中に置いてある机の上にあった鍵を手にとるとほんのりと暖かく、何

となく落ち着く気分させられる。

「まずはこれでひとつ、でありますね」

アイギスが横から覗き込んでそう言うが、湊は頭の中でぐるぐると先程の仮面を被った優希の言葉の意味を考えていた。

あの優希は拒絶しつつも酷く何かに怯えているようにも見えたのだ。

どうでもいいと達観しつつも隠している何かを知られ、幻滅されることを死ぬ事よりも恐れている。

それは湊と奏子に対してか。それとも特別課外活動部のメンバー全員にか、湊は分からなかった。

だが、隠していることなら湊にもある。

何故かこの1年を繰り返していることだ。

それは誰にも言っていない。双子の姉である奏子にも、ひとつ上の兄である優希にも。誰にも。到底信じてもらえるわけが無いし言う必要も無いか、と思っていたのだ。

なので唯一知っているのはファルロスもとい綾時ぐらいなものだった。

もし、ニヤルラトホテプの言っていた「数え切れないほどやり直している」という言葉が湊の想像通りのものだとするなら。兄の言っていた「湊と奏子を救わないといけない」という言葉とあわせて考えると最悪の予想がよぎる。

もしかしたら、兄は——優希は。湊と奏子がニユクスを封印して死ぬ事を知っているのでは無いか、ということだ。

だが、それをどこで知ったのか。何故、そんなことがわかるのか。湊はこの先の扉も見えて答え合わせをする事ではかそれらを知る方法が無いのだと確信してしまった。

それが本人の意思を無視した乱暴なものなのだと、その結果どんな影響をもたらしてしまうのかも分からずに。

「ところで、悪魔ってなんなんですか？」

「え？ 悪魔のこと知らないの？ 昨日戦ってたでしょ？ みんなは」

ふと、ナギサが先ほどのムーンビーストを「悪魔」と呼んでいたことに疑問を持った風花がナギサへと悪魔とはなにかと訊けば、ナギサが不思議そうに首を傾げる。

昨日の、と言われて思い浮かべるのは倉橋翁が変化した蛇頭黄幡神のことだ。あれは自ら悪魔だと名乗っていたが、シャドウの他にもそういう「化け物」がいるとは思っていなかったのだ。

「あ、みんなはシャドウの事も悪魔の事もよくわからない化け物だと思っただけで倒してらんだっけ？ ゲームの敵みたいに」

「……違うとも言えるのか？」

「うん、違うよ」

美鶴の疑問に即答したナギサは元の道に戻るドアを開きながら説明を始める。

「悪魔は人々の間で伝わる神仏とかそのまま悪魔とか、妖怪とか広義の括りがマグネタイトやマガツヒって物質を媒介にこの世に姿を現したもののなの。例えば…さっきの受付にいたモコイも悪魔になるかな」

周りの景色が桜並木に変わる。と同時に出てきた扉が砂となって消えた。

「で、シャドウなんだけどシャドウは人間自身が持つ負の側面そのもの。直視したくないもうひとりの自分って言ってもいいかな。得体の知れない敵じゃなくて、みんなの中に必ずある自意識の影みたいなもののなの。ほら、みんなも自分の嫌なところってあるでしょ？ 一応、シャドウも広義の意味では悪魔とも言えるかもね」

シャドウが得体の知れない化け物ではなく、人間の負の側面だと言われた特別課外活動部の面々はナギサの言葉をにわかには信じられなかった。

「待て…なら何故シャドウが人を襲ったり襲われた人間が無気力症候群なんかになるんだ」

「何故って、さあ？ 悪魔が人を襲う理由ならわかるけど…シャドウが人を襲う理由はわかんない。けど、無気力症候群に関しては結局生きてくには正も負もどっちも必要だから、精神の負の側面であるシャ

ドウが抜けちゃったから精神のバランスを崩しちゃって起こるのかも」

明彦の疑問に答えたナギサはしかし、自分の出した答えに納得がいかないようで唇に指を触れさせながら悩むように視線を落とした。

「んー…でも、なんか負の側面が無くなったただけでああなるとは思えないんだよね…負の感情っていうある意味『精神の穢れ』と言うべきものを取られた人間はむしろ気持ち悪いくらいのポジティブにしかならないはずなの」

そのままナギサは言葉を続ける。

「だってそうでしょ？ 負の感情が無くなったんだから。残るのは正の、ポジティブな感情だけなはず。なのに、無気力になってる。やっぱり変だよ」

「確かに…」

そこだけは特別課外活動部の面々にも納得ができた。ふつう、負の側面を取り除いたら残るのは正だけになる。逆もまた然り、だ。

「人間が生きる上で必要な夢見る力や希望を奪い取られたっていうのなら、やる気とか燃え尽きちゃって無気力になってもおかしくは無いんだけど、根本からなにか違う気もするし…あー！ わかんない！

あたしはこういうこと考える側じゃないの！ どうせ全部アイツのせい！ はい、決まり！」

無気力症候群について考察しようとしたナギサは結局判断材料が足りないのか、それとも詳しいことは何も分からないのか思考を放棄して頭を掻き毟って叫んでニャルラトホテプに責任転嫁した。

いささか暴論に思えるそれは、実際元を辿ればそのパターンが多いのでニャルラトホテプの被害者に聞けば全員首を縦に振りかねないものだ。

「ああそうそう、ペルソナもシャドウと同じ存在だよ。自分の見たくない嫌なところを制御して力に変えてるの。でも、みんなのやり方はたぶん…ちよつと特殊かな。召喚器を使って『今なんとかしないと死んじゃうぞー！ ほら死ぬぞー！』って生命の危険信号を出して無理やりペルソナを引き摺りだしてるみたいなの？ 結構ヤバいと思うんだ

よねそれ」

じと、と奏子の腰のホルスターに刺さっている召喚器を睨めつけたナギサは「まあ、あたしの所感だからどーでもいっか」と背伸びをする。話を無理やり断ち切った。

「どうでも良くなんかないだろ！ どこがヤバいのかちゃんと教えてよ！」

「えー…」

噛みついてきた天田に至極めんどくさい、と言いたげにナギサは目を逸らして不満げな声を出した。

話を聞いていた他のメンバーも自分たちの召喚方法が『ヤバい』と言われて不安にならないわけではなかったのでそこでわざとらしく話を断ち切ったナギサから詳しく話を聞きたいのは天田と同感だった。

「なにか話すことで不都合なことでもある？」

洩るナギサに湊が追い討ちをかけた。

湊としても不都合があるならその不都合の理由まで聞きたかったからだ。しかし、

「や…ない…けど…」

「無いならなんで話してくれないの？」

「う…そ、それは…」

不都合がある訳でも無いのに洩るナギサの目は左右に泳いでいた。が、小さくため息を吐くと観念したのか話し始めた。

「…アイちゃんとコロマルを除く、きみたちの召喚方法って言ってしまえばこう…擬似的な自殺じゃん？ それってすなわち死に触れる行為って言うか、死に触れたがる行為な訳なの。それで——」

ナギサの説明の途中で、ぐらぐらと地面が僅かに揺れる。

「地震…!?!」

「ホントだ。揺れてる。…えと、結論から言っちゃえば死に触れようとする行為自体が問題だよって話。さっきのあたしがしたシャドウについての説明とあわせると間違いなく、良いイメージは無いよね」

地震について流しつづ、そんな召喚方法になったのは召喚器そを作っ

た人達が、命の危機に瀕した時にペルソナに覚醒するパターンを見た
せいかもしれない、と続けてナギサは予測を話す。

そんなナギサの予測を聞いて、考え込んでいた風花が口を開いた。
「シャドウは負の感情や負の側面……つまり、私たちがペルソナを召喚
する際の死に触れようとする行為に伴っている感情が、シャドウを産
むかもしれないってこと……ですか？」

「そんな感じ。風花ちゃんやっぱりちよつと鋭いね」

短く風花を褒めたナギサの表情は笑っていたが消して明るいは
言えない物だ。複雑そうな感情を孕んだその表情は優希がよくする
困ったような笑顔に似ていた。

「いや、でもオレら、毎回そんなこと考えて戦ってる訳じゃねえし、ト
ツゼン言われても……ピンとこねえっつーか、なんっつーか、ペルソナ召
喚して、戦って、街の人達守ってさ、そーゆーの、悪いことじゃねえ
のにさ……シャドウを増やしてたかもしんねーだなんて……」

納得出来ない、と言いたげな順平の歯切れは悪い。だが、その言葉
は湊一人を除いた特別課外活動全員の気持ちに代弁していた。

シャドウを倒すために使っている力を発動する方法がシャドウを
生み出すかもしれないなどと言われたら困惑するのも当然だろう。

「大丈夫、その反応が普通だよ！ 一回ずつならあくまで微々たるも
のだし相対的には減ってるんだから気にしなくていいよ。ただ、それ
が大衆の死に触れたいと思う気持ちと共に積もり積もればどうなる
か、って話になってくるわけ。けど気にしてたら戦えなくなっちゃう
し今は気にしなくていいよ。ほら、気にしすぎも毒って言うじゃん
？」

軽い慰めの言葉を吐いたナギサはそれきりまた沈黙する。

その中で湊は一人だけ、ナギサの伝えようとしていたことの真意を
解ってしまった。

ナギサが言った「死に触れたいと思う気持ちから生まれたシャド
ウ」はただのシャドウではない。

——「エレボス」。

それがナギサが暗に示したシャドウの名だ。

そしてそれは大きな黒山羊のような姿をしている。

厳密にはニユクスやニヤルラトホテプと同じ「悪魔」や「神」に近い存在ではあるが、人の死に触れてみたい・知りたいという欲求や悪意が積もり積もって顕現したシャドウともいえる。

なぜ彼女がその存在について知っているのか、という疑問があるがそんなもの今となっては些細なことだった。

問題は、『それが何をするか』。

エレボスは死に触れたい、知りたいという気持ちだ。それは、死を呼ぶことと同義とも言えるのではないのだろうかと湊は考えている。

否、実際そうだった。人のそういう感情が「死の宣告者」を生み、結果としてニユクスを動かしたのだ。

それを最後の最後に気づいたからこそ、かつての湊と奏子はニユクスを『消す』のではなく封印した。

彼女とその化身アバタイとなった綾時が悪意に晒されないように。望まない死をふりまかないように。

そもそも生と死は表裏一体なのだから消すことが出来ないというのは置いておいて、だ。

言ってしまうえば『形を持つまでに肥大した、人の死に触れてみたい・知りたいという欲求エレボスや悪意』そのものが今回の元凶といっても過言ではない。

ただ、湊にしてもこの場にいる誰にしても、それをどうにかするという事は出来ない。

世界を動かすことは力のない個人にはできないはずだ。

——だからこそ、兄か、湊自分たちと奏子たちかの誰かが封印するために魂を賭け、死なないといけな

「……と、みなとー」

「っー」

奏子に声を掛けられ、湊は顔を跳ね上げた。

エレボスについて深く考え込み過ぎて、奏子が呼んでいるのに気がついていなかったらしい。

「もー、何度呼んでもぼーっとしてるから心配したんだよ？」

「ごめん。で、なんだっけ」

「ん、いまからふたつ目の扉に行こうって話になったとこ」

つかつかと桜並木を歩いて奏子がふたつめの扉のノブに手をかける。

がちやり、と開ければ世界が塗り替わった。

『なりきらなきや。頑張らなきや』

声が響く暗い部屋の中でパチパチと、炎が燃えている。ベルトコンベアで運ばれてその炎の中に投げ込まれているのは顔のないマネキン達だ。

『まいにち、ちゃんと “三上優希^俺” を演じないと。ちゃんと “いつも俺” でないと。 “湊と奏子の兄” でないと、心配、かけるから』
そして声が聞こえなくなる。

暗く、その燃えている炎しか光源がないその部屋で炎と向き合うように椅子に座っているのはまたしても優希だった。

恐らく、何らかの仮面を被っているのだろうがその顔は炎と向き合っており見えない。

「三上！」

認知上の存在だとわかっているとしても、美鶴は優希を呼んだ。一体マネキンを焼いて何をしているのか。一体、何を考えているのか。対話は、できるのか。

ただただそれを確かめたかったのだ。

名を呼ばれた認知上の優希がのろりと振り向く。

その顔にはやはりと言うべきか仮面を被っており、子供の落書きのような笑顔^{スマイル}が描かれていた。

「あれ、美鶴さんに…みんなも。なんで？ ここには来ないと思ったのに。困ったなあ。えーつと、出迎えの挨拶ってなんだっけちゃんと考えてたんだけどな…」 『“ウィツカーマンの焼却場” によるこそ！』 だっけ？」

なんだか違うなあ、とぼやきながら考え込むように顔を下げた優希はひとつめの扉の中にいた認知上の優希のような無気力さや拒絶の感情というものがない。

多少ぼんやりとしている印象を受けるが最近の優希に比べれば忘れっぽいような雰囲気があるだけだ。

「その、三上は何をしているんだ…?」

「えっと、なんにもないからおもてなしとかできなくてごめんね。それに“鍵”が欲しいんだよね。って、あれ? 違うの? 俺が何をしているか? 見ての通りだけど…」

美鶴の問いにツンツンと火かき棒で炉の中を突いた優希は首を傾げる。

見ての通りで分かっていたら聞いていない、と言いたくなった美鶴を察してか、優希が小さく納得するような声を零す。

「…ああ、具体的になってことか。え、これ言って良いやつかな? 本物の俺”に対して怒らないなら言ってもいいけど」

どうやらこの認知上の優希は自分が認知上の偽物であることを自覚しているらしい。

それでいて、そのままの優希を演じたままでは先ほど聞こえてきた声と何か関係があるのか。そんなことを考えながら美鶴は口を開く。

「…怒らないと約束しよう」

「ほんとに? 処刑もしない?」

「しないと誓おう」

「そっかあ。なら、話すよ!」

急に嬉しそうに椅子から立ち上がった優希の声はうきうきと弾んでいるようにも聞こえた。

「俺さ、ずっとここで『要らない感情』たちを焼いてるんだ! だからヒマで寂しくて! みんながこの世界に来たって聞いてから力になりたかったんだ!」

純粋に「力になりたい」と言った優希は仮面をつけていなければこれ以上ないくらいにキラキラと目が輝いていたことだろう。

美鶴は何となくそんな様子ハイテンションな優希に大型犬が尻尾を振る様を想起して、こめかみを抑えなくなった。

「あ、ああ。ありがとう? それで、要らない感情とはなんなんだ?」

そんなもの、あるわけ——」

「あるよ」

「ない、と言い切ろうとした美鶴の言葉を先に口を開いたらしい優希が遮った。

「…みんなにだってあるだろ？ なにかを選択するときには切り捨てる感情が。俺の場合はこうして目に見えているようにみえるだけだよ」
「だが、どうしてそんなことをしている。そんなに多くの感情を捨てなくてはならないほどに、きみは、日々何かを悩んでいるのか？ わたしでは、きみの気持ち軽くすることはできなかったのか？」

「それは違うよ！ 俺だって美鶴さんに対して無力だ！ 許嫁だったり家の事で悩んでいる美鶴さんを見てもな————んにもできやしない！ 俺なんかより真田くんの方が美鶴さんのことを考えて動いてるんじゃないかな？」

「お、俺か!？」

突然話を振られた明彦が驚くも、話が妙に噛み合わない。

まるであえて所感を述べようとはせずに自分の至らなさを語り話をすり替える優希の話し方に、ここで初めて美鶴は荒垣や湊が覚えたものと同じ違和感を持った。

それは些か遅すぎる気づきだったが、それでも手遅れになる前に気づいたのは僥倖だったのかもしれない。

「いや、明彦の事はいい。私はきみについて話しているんだ。三上」
違和感に気づいたものの以前に「自分の好きなようにする」と誓った手前、感情を乱すことはせずに軌道修正をするためにまつすぐ仮面を見て美鶴がそう話せば、首を傾げながらも優希もそれに追従するように一度口を閉じて息を吸った。

「え？ あ、そうなんだ。えーつと、なにについて話してたんだっけ？」

「感情を頻繁に切り捨てなければならぬほどに何かに悩んでいるのか、それとも私ではきみの気持ちを軽くすることが出来なかったか、という話だ」

美鶴が痛くなってきた頭で説明すれば、「そっか！」とわかっている

のかわかっていないのか、どちらかわからないようなただただ元気なだけの普段見ている優希らしからぬ返事が返って来る。

ひとつめの部屋に居た認知上の優希もそうだったがどうにも極端に見えて仕方がない。

「『本物の俺』は2010年の1月31日に死ぬ予定をしてるんだ！その日までに『本物の俺』が死ななかつたら、だけどね。だから、未来につながるような感情は全部いらないんだ。だって、大事にできないし今度こそ成功させなきゃいけないからどのみち死ぬことは絶対なんだからさ！だから、美鶴さん、『本物の俺』に代わって謝ってくよ。色々ごめんね！」

死ぬ予定をしている。

その言葉と死の願望に謝罪の言葉など右から左に通り返し息を飲んだのは、美鶴だけではない。ナギサを除く全員が息を飲んだのだ。想像以上にズタボロの精神を引き摺っていた証拠なのか、それとも何か別の理由があるのか。

ナギサと湊以外には分からなかったが、精神的に異常である事には間違いなかった。

可哀想に言葉の裏に隠された意味を予測して、息を飲んだあげく青ざめた顔になったのは湊だ。

「な、んで…なんでツツツ！ 優希が、そんなこと…あんなの、する必要は…！ だってあれは、」

「あれれ？ なんだ、もしかして湊も記憶があるのか。困ったなあ。これ、『本物の俺』が知ったらリセット案件では？ ま、でもいつか！」

青ざめて思わず叫んだ湊の慟哭を流して認知上の優希はマイペー
スにがさがさと火かき棒で足元をまさぐると、その先端に鍵をひっか
けて美鶴へと手渡す。

「はい。詳しい事はよつつめの扉で聞いてきてね。ああでも、みつつ
めの扉にいる『彼』が素直に鍵を渡してくれるとは思わないな。あ
る意味あそこに囚われてはいるけど、出ていったヒュプノスを除いた
最後の防壁みたいなものだから。『本物の俺』もこうして秘密を知

られるのは本意じゃないだろうしその意志に従って全力で排除しにかかるかもね！」

戦いになるかもしれない、と脅してくる優希の声は冗談めいてナギサの言動に近しいものがあつた。

「でもラッキーなことに　　彼”は俺や　本物の俺”と違って命までは奪わないと思うからさ！　　本物の俺”はもうほんとのほんとにダメだとわかったら、怖くて怖くて仕方ないのに誰かを殺したり自分が死ぬのを厭わないよ！　　こう、ぶちっと！　　ほんと、矛盾してるよな！　　あははは」

空元気のように虚ろに笑った認知上の優希は突然口を噤んで立ち上がり、くい、と手元に垂れ下がっている紐を引いた。

瞬間、床がパカリと開く。

「それじゃあ、団体様ご案内〜！」

入り口で聞いたモコイの言葉と同じものを優希の声で聞きながら、全員が落ちていった。

欠けていた。

だから補った。

酷いほどの渴きと空腹を覚えた。

耐えられない。耐えられない。耐えられない。

はやく、欠けた部分を取り戻さないと。

——ひとつに、ならないと。

自分は、呼ばれているのだから。

落下したと思えば衝撃もなく全員が地面に着地していた。

その事に内心胸を撫で下ろす者がいれば、平然としている者もいる。

それぞれがそれぞれの反応をしつつ周りを見回せば先程の暗い部屋とは違う、山奥の日本家屋の前と言った感じだった。

「びっ…くりした…さっきの部屋も覚えがなかったけど、ここもお兄ちゃんが知らなさそうなど…」

あんな暗い工場のような部屋には来た事がない、と言いたげな奏子に湊も領けばナギサが補足する。

「そだねー。さっきの部屋はユーキくん自身の歪んだ認知から作られたものだから知らなくてもーぜんかな。そしてここはユーキくんの記憶にある場所じゃないし」

「三上さんの記憶じゃない…？ それって矛盾してないの？」

その補足に天田が疑問を呈す。

ナギサの話によればここは優希の認知と記憶によって作られているはずだ。だと言うのに先程から家族である湊と奏子ですら知らない場所ばかり。どういうことなのかと疑問を覚えるのは仕方の無いことだろう。

しかしナギサは迷いなく門の向こうの玄関を見つめると口を開く。「天文台で見たのと違って、ここは覚えてる覚えてないに関係なくユーキくんの中にあるという点では矛盾はしてないから。でも、さっきの認知上のユーキちゃんと戦闘にならなくてほんとに良かったね。あの子、自分で自分が悪魔の姿を晒さないようにすごく気を遣ってたみたい」

話を切り替え、戦いにならなかつたこと自体が自分たちにとって幸運だった、と言いたげなナギサに明彦が眉をひそめた。

「なに？」

「あの場所…と言うよりあの子自身にユーキくんの『三上優希』という“人間”を演じなければならぬ』っていう強力な認知の枷が嵌ってたと思うの。だからこそ、ひとつめの部屋みたいに感情の臨界点を超えることを許されなかつたし悪魔としての姿を晒せなかつた」
ふう、と息を吐いたナギサの表情がここで初めて物憂えげになる。「…それに、戦闘になってたらあの場所自体があの子のトリトリーだから激戦は避けられなかつたかもね。下手すれば吸収や反射とかの強烈な属性耐性も貫通して焼き焦がされてたかも」

先程の部屋にいた認知上の優希の悪魔としての姿をまるで知っているかのように語るナギサは憂えげでありながらも心底安心しているようだった。

属性耐性を貫通する、と言われて冷や汗をかいたのは順平だ。

「ちよ、ソレってオレっちやコロマルもガッツリダメージ食らうってことかよ!？」

「うん。あの子自身も炎が苦手だけど敵対してたら自分の身を焼き滅ぼしてでもみんなを焼いたんじゃないかな。あの子が演じていたユーキくんを矛盾していると評したように、その顕著さの認知存在であるあの子もかなり誇張されてはいるけどそうなんだよ。きつと」

「な、なんだよ…それ…」

愕然とする順平の顔は青ざめていた。

先程の認知上の優希の言葉といい、ナギサの予測といい、まるで優希は自分たちとは違う価値観を持っているように思ってしまったのだ。

要は、異常だと。

その判断は間違っていない。優希は間違いなく異常なのだ。だからこそ、数え切れないほどの繰り返しに耐えることが出来てしまっていた。

壊れていたのは一体どこからなのか。それは誰にもわからなかった。

「どのみち、鍵を手に入れられなきや…なんにもわかんないんでしょ。

…行こう」

会話が無くなった一行を引き連れ、1番狼狽えていたはずの湊が先へ進む。

奏子は湊の狼狽えようから薄々、湊が自分の知らない兄の何かに気づいたのだと感じていたが問い詰めることは出来なかった。聞いてしまえば兄を含めた自分たち兄妹という関係が崩れてしまうような気がして怖かったのだ。

玄関を開けてぞろぞろと入れればその家屋は本当にただの田舎にあるような屋敷で、何も変わった物があるようには見えなかった。

重苦しかった前2つの扉の場所とは違い、むしろ夏の暑さと青々とした空に清々しさすら覚えるほどだ。

警戒しつつもぎしぎしと音が鳴る階段をあがり、2階の部屋を見る

もただただ何の変哲もない生活感の溢れる見覚えのない部屋があるだけだ。ただ、部屋に置いてあるものが妙に古めかしかつたり90年代初頭に流行った湊たちに馴染みのないものだったりして首を傾げた。

「なんにもないな。おい、本当にここが3つ目の扉の中なのか?」

「それは間違いないよ。…彼がいるのは多分…離れの方かな。ここは他のお弟子さん達が住んでたところだと思う」

「…知ってるのか?」

ナギサは訳知り顔で部屋を軽く見回してまた階段を降りる。

「知らないよ。あたしは…モコイさんから教えてもらっただけだから。直接見た訳じゃないし…ここにいますと思う彼の事はあんまりよく知らないの」

「ここにいんのは三上じゃねえのか」

「違います」

疑問を口にした荒垣の言葉に答えたのはナギサではなくアイギスだった。

「先程までの2人の優希さんはモコイさんと同じような気配も僅かにしていましたがほぼほぼ間違はなく優希さんと呼べる気配でした。ですが、ここにある強い気配は優希さんともう1人、誰か混じっているような反応がするんです。そしてその比率は優希さんの気配の割合の方が小さい」

澱みなく、そうつらつらと述べたアイギスは先陣をきるためか1番前に出た。

「恐らく離れはこちらかと。2人の人間——と呼んで良いかわかりませんが、その反応があります」

迷いなく歩むアイギスは何かに怒っているようなそんな気迫があった。

長い廊下を渡り、ピシヤリとアイギスが襖を開けた先は広々とした板張りの修練場のような場所だった。

「やだねえ。最近の若いのは礼儀がなつちやいない」

低い、女の声でした。

咄嗟にアイギスが腕をクロスにして防御の構えを取れば、その鋼鉄の腕が飛来してきたものを弾いた。

キーン、と甲高い音を立てて弾かれた太い針のようなそれはそのまま修練場の床に突き刺さる。アイギスが鋼鉄の乙女では無かったら、もしくは扉を開けたのがアイギスではなければ。大怪我では済まないだろうそれに一同はゾツとした。

明らかに、部屋の中の人物は害意を持って針のようなものを投げつけてきたのだ。

「義手…？ いや、違うね。アンタ、人間じゃあないのかい」
声の主はニタリ、と笑った。

それは顔を隠すように渦巻きのような模様の描かれた紙を貼り付けた三十代前半とも言えそうな見た目の女性だった。だと言うのにその雰囲気は歳を重ねたベテランのそれに近い。

その矛盾している見た目と雰囲気から若さの中にいぶし銀の気配があるのか、いぶし銀の気配の中に若さがあるのか判断がつかないでいた。

「悪かったね、と言ってやりたい所だけどアタシの挨拶こてしちやくくらいなんとかしてもらわないとうちの倅とはやってけないよ」

黒髪はその女性は一纏めにした緩やかなくせ毛を揺らしながら名乗りもせずにまた快活に笑う。それが邪気を奪うようで、一同は警戒しながらも悪い存在では無いのでは、と僅かに思い始めていた。

「すまないが、貴女は…」

「ああ、ああ！ アタシとしたことが自己紹介をするのを忘れていたよ！ これじゃバカ息子のことを言えないねえ」

女性は立ち上がって胸にかかっていたその髪をばさりと後ろへやった。

「アタシは16代目葛葉ライドウ…マア、今となっちゃ18代目に席を譲ってるから『元』だがね。ややこしいからアザミとも呼んでくれりやええよ」

「葛葉…？」

知らない名前だ。

否、聞き覚えだけはあった。

蛇頭黄幡神と化した倉橋翁が何度か恨み言のなかで叫んでいた名前だった。

恐らくなんらかの繋がりはあるのだろうが、それがなんなのか特別課外活動部には昨日の今日だったので調べがついておらずわからない。

ストレガのジンの言葉遣いに近い関西弁のような独特のイントネーションで自己紹介をしたアザミの横に座る男を見る。

その容姿の中でまず目についたのは般若だ。

般若の面を被ったスーツを着た美丈夫がすらりと背筋を伸ばしてアザミの隣である部屋の真ん中で正座している。

黒髪は短く切り揃えられ、パーツ単位で見ればどこからどう見ても優希と似ても似つかない。強いて言えば、背格好や纏う雰囲気がよく似ているくらいか。

そんな男の頭をアザミはわしわしと豪快に撫でる。

「認知上の存在だかなんだか知らないけど、どんだけ高位のカミサマにすぎ替わっちゃってもアンタはアタシのバカ息子に変わらないからねえ。アタシの認知の上ではさ。だから早く現実のアタシのところに帰りなつて言つてんのにこのバカ息子は…」

「認知上の我が贄の師よ。自分は贄の姿と人格を大衆の認知によって望まれ与えられこうして縛られたに過ぎない。贄自身では無いと何度説明すれば良いのだろうか。そもそも贄の身体は溶けきりもう無いのだから帰りようもないのだが」

「あーもー五月蠅いねアンタは！　そういう理屈っぽいところがバカ息子だつて言つてんだよ！　髪の毛一本とか骨くらい遺してないのかい!?!」

「無いが」

目の前で漫才のように言い合いを繰り広げる2人は止まりそうにない。アイギスがじつと男の方を見ていることから、この扉の内部に限り、この空間を構成する『核』は認知上の優希でも優希本人でもなく、目の前の男なのだと言信した。

それが、優希に何の関係があるのかはわからず仕舞いだが。

「あのく、鍵…貰つても…？」

そんな2人に割り込んだのはナギサだった。

正直、奥に踏み込むことにあまり気乗りしなかったがこのままぎやいぎやいと練り広げられる漫才をぼーつと見ている訳にも行かない。先程空間が揺れた事から察するに、残された時間はあまり多くないだろう。

カダス自体が崩壊を始めるのもそう遠い未来ではない。

核を失えば空間は崩壊する。それは正常な姿に戻るか、核である優希本人もしくは優希のシャドウが消えるときだ。

原因はなにかわからないが優希かそのシャドウが脅かされていると見て間違いないだろう。

シャドウが本人の中に還らず、消滅した場合も宿主である本人が死ぬことになる。その原理は分かっているがシャドウと宿主は文字通り一心同体かつシャドウも本人の1部であるとも言えるので切つては切れないものだからなのだろう、とナギサは予測している。

だが、それを特別課外活動部に言うつもりは無かった。

ナギサとしては、矛盾しているが自分や他の悪魔が巻き添えになろうとも優希がここで死ぬ事を望んでいる。

だが特別課外活動部の面々はそれでは納得しない。巻き込まないようにしようとしても帰ろうとはしないだろう。

なら、どうせ優希が死ねば全て忘れるのだしさつきと見るものを見せて納得させて帰らせようとナギサは考え直したのだ。

初めはナギサとて迷い込んだものは仕方ないので適当に優希のシャドウを演じ、特別課外活動部に浅い場所で自分を倒してもらって優希を連れ帰ってもらおう算段だったのだ。ナギサだってやられたフリをするつもりだった。それが本来の筋書きだったのだから。

だが、あの状態で1人でまともに動けるようすではなかったはずの優希がひとりでどこかへ消えた時点でナギサは嫌な予感がしていた。だから、あそこでアイギスの「帰るべき」だという言葉肯定して促した。

そして半信半疑だったそれはニャルラトホテプが出てきた時点で確信に変わった。

ニャルラトホテプの言った「手遅れ」だという言葉にナギサが動揺していないはずがなかった。アレは何重にも糸を張り巡らせている。きつとないかよからぬ事をしたにちがいない。

ナギサがすべきだったのは優希が入り込んだ瞬間に、テレビの外へ放り出すことだったのだ。

役割に固執したせいでこうして優希が知られたくないことを暴かれようとしており、最悪な方向へと進みつつあることを内心でナギサは忌々しく思っていた。

「…はて」

そんなナギサの焦りを知ってか知らぬか、男は首を傾げる。

「何処へやったか。覚えがない」

「大事なモンなんだろう？ ほら、さも忘れまして、って顔してないで思い出しな！」

バシバシと力強く男の背をアザミは叩く。

男はボケ老人が如く「ふむ…」と言いながら立ち上がり、横に寝かせていた刀を脇に抱えてスーツの裏をまさぐり管を取り出した。

「フェンリル」

そう短く呼べば、管から巨大な狼が姿を現し、光る眼光を湛えながらビリビリとした威圧感を放った。

これにはコロマルも食い入るように見入っている。

「グルルル…ナンノヨウダ、マルカジリカ!？」

「否、鍵を」

「オレサマ、ソナモノ、知ラナイ！ 食ベテナイ！ 持ツテナイ！」

そんなフェンリルは耳をぺたんと曲げ、首を横にブンブンと勢いよく振りながら困ったように鳴いた。

切なげに鳴くフェンリルに先程までの威圧感はない。コロマルはなんとなくフェンリルが無茶振りされているのだとわかって神話の大先輩とも呼べる悪魔に同情した。

「違う。鍵を探してほし…」

「アンタ、そんな事で^そ子の悪魔を使っ^てんじやないよ！ 失くしたんならアンタの足で探しな！ そういうところはバカ息子とは違うね！ うちの倅は大事なものを失くしたり忘れやしなかったよ！」

「ぐっ…我が贄の師は矛盾している…」

バシーン！ と勢いよく男の背を叩いたアザミは痛みに呻く男を無視して特別課外活動部の方へ向くと男の頭を片腕で押さえて小さく下げさせた。

「うちのバカ息子がすまんねえ！ ちょっと時間がかかるだろうからあつちでゆつくりしていきな！ 冷えたジュースと麦茶もあるからね。飲んでいくと良いさ」

「…黄泉戸^{よもつへぐい}喫にはならないから安心するといい」

無理やり頭を下げさせられた男が頭を下げたまま、疲れたような声を出したのは気の所為ではないだろう。

ひとつ前の部屋で会った認知上の優希に脅されたような戦闘にはならず拍子抜けした一同が促されるまま離れから母屋に戻る道すがら、その中で順平が首を傾げる。

「よも…なんスかそれ」

「『ヨモツヘグイ』ですね。死者の国の物を食べるとたとえ生者でも死者の国の住人にされ現世に戻れなくなるという言い伝えです。恐らくは古来からある『同じ釜の飯を食う』という習慣から死者と同じ食事をする^と己も死者の仲間とみなされてしまう。『認識』から来ているのかと。有名な例はイザナギノミコトとイザナミノミコトの神話です」

順平の疑問にアイギスが答えた。

「アイギスがそういうの知ってるなんて意外…」

『後々必要になるはずだから』とメジャーな神話についての解説は一通り。…：…：…：…：…：…：誰から教えて貰ったんでしようか…：…？』
教えて貰ったはず、と言ったアイギスだったがそれを誰から受けたのか思い出せない。

ちらちらと赤が視界の端で揺らめいたような気がしたが、カメラの異常だろうとアイギスはそれを受け流した。

なにか、それよりも大事なことを誰かに言われたような気もしたが
どうしてもアイギスは思い出すことが出来なかった。

死人に山梔子（？／＼）

汚い。穢きたない。きたない。

洗っても洗っても、とれない。

まるで自分自身が汚れになったかのように黒くて、暗くて、狡くて、汚くて。

血まみれの両手を見つめていたら影から死んだみんなが睨みつけてきて責めるんだ。

「どうして助けてくれなかったの」って。

日本家屋の台所。

大きなテーブルが置いてあるそこで予期せぬ休憩となってしまう特別課外活動部の面々は冷蔵庫から言われた通りペットボトルに詰められた麦茶と色とりどりの缶ジュースをそれぞれ取り出して椅子に座って息を吐き出しリラククスしました。

ナギサからもここは安全だとお墨付きを貰ったので張り詰めていた糸を弛めていた。

そんな面々から外れ、部屋の端へと逃げるように腰を下ろした湊の方へ順平が歩みよる。その手には、古いデザインのコーラの缶を持っている。

「よ、湊。ちゃんと休憩してるか？」

「別に。…どうでも…」

いい、と答えようとした湊に順平は険しい顔になる。

「良くねえっての。天文台で吐いてたし、その…色々センパイのことで取り乱してただろ？ 奏子たちには風花やゆかりツチ、それにアイギスや荒垣センパイがついてるから良いけどよ。お前はほら…一人だったからさ」

「…心配、してくれてるの」

意外だと言いたげに湊がぶつきらぼうにそう言えば、勝気な笑みを浮かべて順平は胸を張った。

「つたりめーだろ。オレはお前の相棒で、親友なんだからな！」

「両方とも、なつた覚えはないけど」

「コーユーのはいつの間にかなってるモンなの！　じゃなくて、とにかくリラックスしろよ」

そう言つて順平は湊の隣にコーラの缶を持ったまましゃがみこんでおもむろに口を開いた。

「…まあ、オレはさ、センパイには最初の頃にメーワクかけたし、チドリと再会させてもらった恩があるけど実質繋がりがりつて言われたらそれだけだし、お前ら姉弟やゆかりツチとか桐条センパイと違って10年前のジコとかには全然カンケーねえから、ある意味蚊帳の外みたいなもんじゃんか」

「…うん」

「それに、ちよつと怖かつたんだわ。センパイのこと」

順平の顔が下がって被っているキャップの睡で見えなくなり、その表情が伺い知れなくなる。

「他人の不注意のせいで腕から血がドバドバ出るような怪我をしたら普通、怒るだろ？　でもセンパイはさ、全部自分が悪い、みたいなこと言つてオレのこと窘めただけでさらにには応援してきたじゃんか。なんてつか、あの時はやる気に満ち溢れてて、どーやつて挽回しようつて気持ちしかなかったんだけどな。あとから思い出して、センパイ変だつたよなつて」

順平も態度や口に出さないだけで気づいていたのか、と湊は僅かに目を見開いた。それほどまでに今回の兄は危うい。

異常さが顕著だつたとも言える。

「だつて見た目的にとんでもない怪我してるつてのに…お前じゃないけどどうでもいいって言いたげだったじゃん。そつからちよつと怖くて避けてたところもあつて」

湊は順平の気持ちがよく分かつた。

湊だつて優希が兄でなければ、肉親でなければ遠巻きにしていたかとしてつもない気持ち悪さを覚えていただろう。赤の他人がどうしてそこまで、という違和感と共に。

「でも結局不良に絡まれた時は……湊や奏子つちのおまけだったかもしんねーけど…その、助けてくれたし。チドリと関わりあいがありそうなのはセンパイしかいなかったから相談したらいつもと変わんねえセンパイでさ。」

——…オレ、あの人のこと誤解してたのかなって思ったんだわ」
ほう、と珍しく順平がため息のように息を吐いて手元のコーラの缶を握りしめる。

「順平の怖いって気持ちも間違っではないと思うけどね。僕もたまに優希が怖いと思うこと、あるよ」

「弟のお前もあんのかよ…」

「そりゃあ。前までは気づかなかったけど、戦いだしてからよく分かるようになったから」

それに理由があると気づいたのはつい先程だ。

兄は、優希は、確実にニユクスの封印を自分でするために動いている。そして、前の部屋での認知上の優希の言動から、優希もどこまでかは知らないがこの1年の記憶を持っていると言ってもいい。

ニユクスを封印すれば魂を使うので死ぬこと。

それが原因で湊と奏子が死ぬ事を知っている。否、記憶を失っているので知っていた、ととるのが正しいのかもしれない。なんとか思い出したと自己申告した今でさえ、大人しく待とうとしていたのだ。完全には記憶が甦ってないとみていいだろう。

病院で言っていた「湊と奏子を救わなくてはいけない」という言葉も、恐らくあの時の優希自身は分かっていたのだからその事を指していたのだ。

そう、湊は推理した。

「たぶん認知上の優希が話してた事が大体本心なんだと思う。だからあんな無茶を…いや、僕もか」

「エッ、お前も?」

僕も、と言った湊の言葉に順平が目を見開く。

「たぶん、奏子と優希が居なかったら僕も『生きてるのも死ぬのもどうでもいい』って思ってたかも。全部がどうでも良くて、リーダーとか

全部成り行きで引き受けて、それで終わってたと思う」

「あー…確かに、ありそうだよな。で、オレがセンパイにやったようにお前に当たり散らしそうだよ」

「僕や奏子に当り散らした場合はしばらく尾を引くよ。12月くらいまで」

「12月ウ!? なんだよその実際に見てきたみたいなの発言!? エツオレそんなにイライラしてんの!? や、なんかゴメンな…トートツに申し訳なくなってきたわ…」

1回目、優希が居なかつた事により実際に体験したから、とは言わない。

兄が引越し当日に亡くなってしまい多少神経がささくれ立っていたのもあつたのかもしれないが、1回目で湊は順平と衝突を繰り返した。

とは言つても湊から順平に何かするという訳ではなく、絡んでくる順平をウザがったり自身や奏子に突っかかってくる順平に対し棘のある言葉や態度で返してただけだった。

それでも屋久島や夏祭りといった行事を挟んで仲を徐々に深めていけたので湊は順平が悪いヤツどころか良いヤツなのをちゃんと言っている。

特別な事にこれまで巻き込まれて来なかつたどこにでもいるような等身大の高校生だからこそ、泣いたり笑ったり怒ったり喜怒哀楽が年相応に出ているだけの話で。

余裕があればこうも他人を気遣えて冷静に周りを見ることが出来るし、ヒステリックさでいえばゆかりの方が激しいから気にしないでいい、と言つた日にはゆかりに睨まれそうなので湊はその言葉を飲み込んだ。

「別にいい。あのさ順平、まだやつてもないことを謝るのは良くないよ。やらなきゃ謝る必要ないんだからさ」

「それもそうか? なーんかもやもやすっけど、これ以上やんねーよーに気をつけとくな」

『今回』の順平は多少ポカをやらかすがそれでも以前に比べて落ち着

きがあり余裕もある。そして、より良い方向へと進んでいるようにも見えた。

「で、センパイの話に戻るケド。オレ、なんてつかここに来てあんなセンパイを見て怖いのもあんだけどさ、安心してんだよ。『ああ、センパイもちゃんと悩んだりする人間なんだな』って。むしろなんか、手を伸ばしてやんねーと、って思っちゃまって…あ、怒るなよ!? 悪い意味じゃなくて…なんてつか、奏子っち見てる時みたいなの…」

「それはヤラシイ目で奏子と優希を見てるってこと? 順平のエツチ」

「だーっ! 違えよ! オレはチドリ一筋なの! それに奏子っちはともかくセンパイはお・と・こ・だ・ろ! 間違ってもねーよ! そそっかしいとか、危なっかしいって事が言いたいんだよ! 察しろってーの!」

順平のその叫びに「なんだ、そんなことか」と湊は納得した。もちろん、先程の言葉は冗談だ。いくら自分や兄が中性的な顔をしていようとそこまでだ。女ではない。

ただ、湊はそう思い返して最近の優希の表情の端々にアルバムで見た母のような面影を感じるようになってきたことにひっかかりを感じていた。

ぼんやりとしている時に時折、正気に返ったように慈しむような目で湊と奏子を見てくるのだ。

それは兄妹の情と呼ぶには逸脱している。かと言って、恋慕の表情でも無い。

まさに親が子に向けるような表情だったのだ。

声をかけるかしばらくすればまたぼんやりとした表情に戻っていたので優希本人にそんなつもりは無いのだろう。あれを意識してやっていると言われたら正気を疑うレベルだ。

優希は兄であって親ではない。

アルバムを見たせいだろう、とこれまで誤魔化していたが、思い返せば思い返すほど違和感は膨らんでいく。

なにか、兄のあのがらんどろになった精神を別の何かに上から塗り

つぶされていつているような。芽生え始めた芽を傍からむしり取られているような。

そんなイメージを抱いたのだった。

(でも、もし全部思い出してしまったていたら)
どうすればいい、と湊はぬるくなったコーラの缶のプルタブを開ける。

そして中身を喉へ流し込めば、なまぬるいというのに痛いほどの炭酸が喉をチクチクと刺激した。

もし、優希が全てを思い出してしまったら。

そんな湊の心配は実は手遅れであることを湊は知らない。かつ、全て思い出したと申告してきてもペルソナがない今の優希には何も出来ないことを知らない。

そう、戦えなければ三上優希は死ぬ以外何も出来ないのだ。

兄を救いたいと思いつつもこのループの出口が分からない湊は原因が優希であることを知らない。

『湊を救いたい』と願ったことが始まりだとは露ほども知らない。

だが、それを知るのも時間の問題。あと少しといったところだった。

ごめんなさい。

ごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい。

許してなんて言わないから。

こんなこと、許されることだとは思わないから。

だって、俺には力なんてない。才能もない。

助けられるいのちには限りがある。だから俺は取捨選択をした。

それで分かったんだ。

いちばん要らないのは、自分だったんだって。

時間にして15分ほど。

真の姿はなんの悪魔なのか分からないが般若の面の男がアザミに連れられてやってきた。

少し疲弊しているようにも見えるその姿は哀れみすら覚えるほどだ。

恐らく、こつてりとアザミに絞られながら鍵を探したのだろう。

それを見るに力関係はアザミの方が上か、と湊は思いかけるも明らかにビリビリと伝わってくる気配の質のようなものが男の方が上だった。

単純に、師とも呼んでいたので頭が上がりないだけか。

「鍵を見つけてきた。だが…」

「何を悩んでるんだい！ 待たせたのはアンタだろ？ ほら、さつさと渡してやりな」

男はやはり、前の部屋で会った認知上の優希の言った通り鍵を渡すのを渋っていた。が、戦闘になるほどでは無い。

それをせっついているのはアザミだ。

そこに、違和感を感じる。

普通、認知上の優希と同じく優希が作り出した存在であるなら、先ほどの部屋にいた認知上の優希が言ったように優希本人の意志をくんで邪魔をするはずだ。だと言うのに何故鍵をこちらに渡そうと促すのか。

そんな湊の疑問は同じ違和感を感じたらしいナギサが零した呟きによつて解消される。

「あれ…？ このアザミさん…認知上の存在じゃなくて…現実にいるアザミさん自身のシャドウ…？」

認知上の存在とどう違うのか分からなかったが、湊は何の変哲もない他人のシャドウが人の形を保っているということ自体に驚いた。

綾時だけが特別だと思っていた。それ以外は、みんなよく見る化け物のような姿をしているのだとさえ思っていた。

「あ、そっか…強い『後悔』をもつてたから…心の海を通じてここに引き寄せられて…彼も彼で拒絶できなくて…でももう、先代くんは…」

ぶつぶつとナギサが何かを確かめる様に呟いているが湊にはあまり聞き取れなかった。

聞き取れたとしても、湊には理解が出来ない範疇の事なのだろう、と耳を澄ますことをあきらめる。

「渡すことに抵抗や不満はない。全てはなるべくしてなるのだから」「なら渡せばいいだろう?」

「:渡す前に言うべきことがあるだけだ」

男は奏子に鍵を差し出す。

「目覚めの時は近い。じきに全て溶けあう。道化と月が視えぬ時に現れる黒い仔山羊に気をつけよ」

「??」

かけられた言葉は何ひとつ意味が分からないちんぷんかんぷんなものだった。辛うじて、道化と呼ばれる存在と黒い仔山羊に気をつけなくてはならない、という事だけわかる。

「あ、ありがとうございます? でも、」

躊躇した奏子に男が首を横に振る。

「いい。これは必要なことだ。先へ行け」

「もし現実のアタシにあつたらこの事は秘密にしておいてくれよ。アタシだけバカ息子と一緒にだなんて現実のアタシに知られたら大喧嘩になっちまうからね! 現実のアタシなら気合いでここに来ちまいそうだしさ!」

ナツハツハ! と豪快に笑うアザミは唐突に笑いを止めて声を潜めた。

「アタシは最後まであの子のことを信じてやれなかったからね。アタシたちはちゃんと信じてやるんだよ。絶対に、手を離しちゃいけないよ」

白んでいく景色の中で、そんな後悔の滲む声だけが響いた。

扉から出てきたと思ったら無惨にも桜は雨に降られ散っていた。

閉じられた空間の中だというのに豪雨が身体を叩く。これはどこかへ移動しないと休んで回復した体力まで削られていつてしまうと

判断した奏子は慌てて残った最後の小さな扉のノブを回した。

景色が塗り替わると同時に声が聞こえてくる。

『たすけて』

『だれか、たすけて』

それは短く、助けを呼ぶ声だった。3つ目の部屋を除く前ふたつの部屋で聞いた声よりもそれは幼く、か弱かった。

声はそこで終わり、聞こえなくなる。

最後の部屋は白い、無機質な部屋だった。あまり広くはないが、ぬいぐるみや積み木といった玩具や落書きの描かれた紙。毛布などが散乱している。

「子供部屋……？」

思わず風花がぼつりと感想を零せば、部屋の奥に落ちていた毛布がもぞりと動いた。

「……だれ……？」

舌足らずな寝起きの幼い声。

毛布がずるりと下に落ち、それを被っていた存在の姿が露わになる。

まんまるとした金の目に、無表情に近いぼんやりとした顔。

湊の髪型に近い短さで切りそろえられている藍色の髪。毛布にすっぽりと収まってしまふほどの小さい体躯。薄緑色の患者衣。

その姿は目の色以外は屋久島で見た書類にあった幼い優希そのもの——否、湊と奏子の記憶にある誘拐された当時の姿そのままだった。

「み、三上……か？」

「みかみ……？ わかんない。ぼくは……ぼくはなんだっけ？」

美鶴が問うも、幼い子供は分からない、と言いたげに視線を落とす。

「お兄ちゃん、私たちの事は……わかる？」

「……？ えっと、まってね」

うーん、と暫しの間考え込んだ幼い子供は、「あ！」と声を上げる。

「おとうさんとおかあさん！」

「惜しい」

「うん、惜しいね」

幼く無邪気な子供に違う、とはつきり否定することが出来なかった。

惜しいと言えばまた悩み始め、再び答えを出したらしい子供は今度は自信満々に鼻息をぷすー、と出した。

「おにーちゃんとおねーちゃん!」

「とっつっても惜しい! むしろアリでは?」

「ダメだつて」

奏子が幼子可愛さに流されかける。

そして子供に近づいて毛布から出して抱き上げ、頬ずりをした。

「小さい頃のお兄ちゃん、とつてももちもち…! 魅惑の柔肌だよ」

!

「ぼくが、おにーちゃん?」

「そうだよ! 私と湊のお兄ちゃんだよ」

「えへへ、ぼく、おにーちゃん!」

奏子と幼い子供の微笑ましいやり取りを見ながら、ナギサがそつと子供に近寄った。

「〃渚くん〃、あたしがだれか、わかるかな?」

「うん! わかるよ! ノーちゃんはノーちゃんだよね!」

「せいかい。良かった。まだそこまで消えてなくて」

安堵したように悲し気に笑ったナギサは面々に向き直る。

「∴最後の鍵はこの子自身。ユーキくんのシャドウだよ」

最後の鍵。

ナギサのその言葉に面々は息を飲んだ。

先ほどまでに手に入れた3つの鍵とは違い鍵の形をしてないじゃないか、という気持ちと共に優希のシャドウと聞いて疑問が湧く。

「三上先輩の、シャドウ? 認知上の三上先輩とは違うの?」

「違うよ。この子はもうひとりのユーキくん自身。このカダスを構成してる『核』だからこんなところに追い出されてるのは普通ならおかしい事なんだけど、ここを構成してる『核』がこの子からユーキくん本人に変わったと考えるとおかしいことじゃないの」

ナギサの説明によると、こうだ。

このカダスは優希自身がうち捨てたり忘れたもので構成されているが、それを制御しているのはこの幼子シヤドウなのだ、と。

だがそれは優希自身がこの空間に足を踏み入れ、奥まで進んでしまい主導権が変わったせいでもいかなくなかったらしい。

「ですが、この子は…自分のことすら良くわかっていないようですが、本当に優希さんのシヤドウなんでしょうか」

「間違いないよ。これが今のユーキ君の認めたくない“自分”だから」

「どうして…こんな幼い子供が…」

アイギスには何故優希がこんな純真無垢だった子供の頃を認めたくないのかわからなかった。

ひとつ、思い当たるとすれば誘拐された後のころくらいか。

「やはり、優希さんは桐条で行われた実験が辛くて…」

「ちがう、違うの。ユーキ君が認めたくないことは、それじゃない」
優希自身は、この頃の記憶が認めたくないわけではない。思い出したくないと思っていたのと酷い拒絶反応があったのはヒュプノスが思い出さないようにとわざわざ記憶を封じ込めていたせいだ。

まだ記憶を失っていなかった事故後に被験者扱いされていたころも、正常とは言えなかったが精神は崩壊しきつてはいなかった。

あの日、幾月によって逃げ道を防がれた状態でカミングアウトされたせいで今まで抑えていたものが濁流の様になだれ込んできて耐え切れずに崩壊しただけで。

エピソード自体はショッキングなものだったがゆっくり呑み込めば優希は折れずに済んだはずだった。

『前回』の優希が『これまで』の優希の与り知らぬところで歩んだ一年で、同じように記憶を取り戻しても精神が崩壊し『かけた』だけで済んだのはそのせいだ。

そんなことは知らないが、とにかく違うのだとその“見たくないモノ”の正体を知るナギサは首を横に振る。

「？」

そんなナギサを子供は不思議そうな顔で見ている。

現状をなにひとつ理解できていないのは、この幼い兄のシャドウもだ、と何となく湊は思った。きつと、自分が鍵であることすらよくわかっていないんだろう。

「この子と一緒に外に出ればいいよ。ここには…いまなら悪魔もいないし、アイツもわざわざ邪魔はしてこないだろうから」

これ以上ここにとどまる必要もない、と外に出ることを促すナギサの声と共にぞろぞろと面々は出口の扉へと歩き出す。

その途中、湊は壁に貼り付けられている一枚の絵にふと視線が向いて立ち止まった。

(…………?)

それを手に取る。

『ともだき』という文字と縞々の服の子供と患者着を着た子供とネズミとクマが描いてあった。恐らく『ともだち』と書きたかったのだろう。そんな幼い子供特有の下手糞な字と共に書いてある縞々の服の子供に湊は既視感があった。

「ファルロス…?」

子供の落書きなので正解かどうかわからなかったが、縞々の服の子供の目は青いクレヨンでぐるぐると描かれていた。

どうして幼い兄の描いた落書きにファルロスらしき子供が描かれているのか。ファルロスは幼い兄と共にいた誰かをモデルにしたのか。そして、隣に描かれている白い子供は誰なのか。

湊の中で疑問が渦巻いた。

「ねえ、知りたい?」

そんな湊の背後から少女の無邪気な声が問いかける。

「!？」

「ミナトおにいちゃんっていうのね。ユーキおにいちゃんについて、知りたいんでしょう?」

湊が振り向けば、赤と黒の人形を抱え、くすくすと鈴を転がしたように笑う西洋人形のような少女がそこにいた。

湊はその少女に見覚えがあった。

「アリス…?」

「そう、ありすはアリス。ユーキおにいちゃんのもだちよ!」

「友だち…?」

死神のアルカナに属するペルソナの「アリス」に瓜二つな少女は己をアリスだと名乗った。

まさか、優希のペルソナにもアリスがいたというのか、と眉を顰めた湊にアリスは笑みを深める。

「ちがうよ? アリスはね、ユーキおにいちゃんに殺されたの」

優希に殺された。

その言葉の意味に湊は息を飲む。ペルソナでないのなら、兄はよく似た同じ名前の少女を殺したことになる。

一体何の理由があつて、と引くりと口の端をひきつらせた湊は、ひとり部屋に取り残されていることに気がついていない。

「ミナトおにいちゃんもユーキおにいちゃんみたいな勘違いしてるのね! いいわ! 教えてあげる! いまのアリスはとっても気分が いいの!」

湊の心の内を呼んだように笑う少女は明らかに人ではない。どちらかといえば——そう、ふたつ目の扉であつた認知上の優希に近い異質さを感じる。

「ワタシはね、ユーキおにいちゃんをオトモダチにしようとして…ユーキおにいちゃんのお友だちも殺したから、怒っちゃって。それで殺されたの! 赤おじさんと黒おじさんもよ!」

そこまで言つて、アリスは急に無表情になった。

「その絵の子はね、ユーキおにいちゃんとずっと一緒にいた子よ。でもね、ミナトおにいちゃん。ユーキおにいちゃんから、目を離しちゃだめよ? もしかしたら、ママにぺろりと食べられちゃうかも!」

また、意味の分からない事だ。

先ほどの般若の面の男と言い、このアリスといい、湊たちにはわからない抽象的な言葉で忠告してくる。

はつきり言えないのか、はつきり言う必要がないのか。いずれにせよ、アリスという少女はまた面白がるようにくすくすと笑っている。

「ママ……?」

「そうよ。ママ。ミナトおにいちちゃんもみたらわかるよ。アリスはユーキおにいちちゃんがこのままママに食べられちゃうのは嫌なのよ? だから、教えてあげたの。だって、アリスが欲しいのはユーキおにいちちゃんだけなんですよ。あんな怖いモノ、要らないわ」

訊き返してみたがアリスにしか理解できない事柄だったようで、湊には理解できない内容だった。

分かったことは、絵に描かれている2人の子供は優希とずっと一緒にいたこと。

この少女はただの人間ではないこと。もしくは悪魔だということ。そして、兄の友人が巻き込まれ、死んでしまったこと。それに対し激昂した優希がこの少女を殺したこと。

それだけだった。

もうこれ以上付き合つてられない、と湊は扉へと急ぐ。幸い、アリスには湊を妨害したり殺そうとする意志は無いらしい。

ここで時間を食わなくて済むのはありがたい、と思いつながらドアノブに手をかければ、くすくすとまた笑い声が聞こえてきた。

「——ユーキおにいちちゃんに、よろしくね?」

ねつとりとしがみつくような執着をにじませたその声に、湊はぞわりと悪寒を感じた。

兄は一体何に執着されているというのか。黒い靄といい、あの少女といい、誘蛾灯のように“よくないもの”を引き寄せる兄は一体何なのか。

湊の中でじわりと疑念が鎌首をもたげた。

時は2日程前に遡り、港区から離れた某所の産院にて。

朝倉の元で休んで怪我を回復させた藤堂尚也は神取や謎の教主についての調査を一旦止め、別の事について調べていた。

影時間やシャドウなど、桐条のやらかしたことについては既に纏め

て雇い主である南条圭——なんじょうくんに送ってある。書類を送ったと連絡した電話の向こうで疲れたような声をだして答えたなんじょうくんのふかい溜息はまだ耳にこびりついていた。

しかしこの調査は依頼されたものではなく、あくまで個人的なものだ。

三上優希
有里渚。

ペルソナ使いであり桐条の実験を受け、心に酷い傷とトラウマを負ったという少年。

そして、麻希曰く神取に魅入られているという存在。ひとめみたときから危うさを感じていたが先日朝倉医院で見た時の優希の様子は尚也の『桐条のこと以外にもなにかある』という疑念のようなものを酷く刺激した。

そのルーツを探すためにまずは産院を訪れていたのだ。

「有里さん？ ええ、ここの産院で出産されていますよ。男の子と——男女の双子ちゃんですね」

受付にいたスタッフに話を聞けばまだ書類が残っていたようです。ラストラと答えてくれた。

が、

「あ、でも……」

と女性のスタッフは言い淀む。

「何か問題でも？」

「いえ、一番最初の男の子の欄が……『死産』、となってますね」

「死産……？」

尚也は眉を顰め訝しんだ。

どういうことだ。三上優希こと有里渚はちゃんと存在している。養父母である三上夫妻が行った遺伝子検査の結果でも間違いなく双子の姉弟との繋がりが確認されたと書いてあった。

そして兄妹の数は3人。もしかすると、有里渚の前にもうひとり死産した子がいたのかもしれない。たまたま、長男だけ別の病院で出産したのかもしれない。

どうかそうであってくれ、と尚也は祈りながらあることを聞いた。

「その死産した子供の出産日は…分かりますか」

「えーっと、1991年4月4日ですね」

書類をめぐりながらそう事実を淡々と告げたスタッフに、尚也は頭がおかしくなってしまうそうだった。

開けてはいけないパンドラの箱を開けてしまったかのような、触つてはいけない藪をつついてしまったような。そんな気持ちになったのだ。

1991年4月4日。

それは、間違いなく戸籍上の有里渚三上優希の生年月日と一致している。

これで有里渚と言う存在が生まれる前にいた死産した兄妹、という線は完全になくなった。だがまだそれが本当かわからない。何かの手違いで書類上そうなっているだけかもしれない。

尚也はまだそういう可能性に縋りたかった。

「当時の事を知る医師か助産師がいたら教えてほしい」

「…そういうのはちよつと…あ、でもベテランのユキエさんならもしかすると…今お昼だから、つてちよつどいいところに！ おーい、ユキエさ〜ん！」

スタッフが手を振ってひとりの女性を呼べば、白衣のまま年配の女性が歩み寄って来る。

白髪混じりの灰色の髪を纏めたふくよかで優しそうな女性だった。

「なーに？ 山本さん」

「この人が18年前に息子さんを亡くされた有里琴音ありさとことねさんの事について知りたいっておっしゃってて…」

有里琴音。

その名前を聞いた助産師は即座に険しい顔になったが悟られまいとすぐにその表情を元の物に戻した。

「……わかつたわ。ちよつと外にでてくるわね」

「はーい」

ガサゴソと白衣を脱ぎだした助産師——ユキエに、尚也は話を聞けるのだと確信した。

それと同時に、それが良くない話題であることも、ユキエという人

物に即座に18年前の記憶を思い出させるほどの案件であることも想像に難くなかった。

「さて、どこから話せばいいのかしら？ 探偵さん」

「俺は探偵じゃなくて、」

人気のない喫茶店。

ジャズが流れるそこで、尚也とユキエは向き合っていた。

探偵ではないと否定した尚也に「人の事情を嗅ぎまわっているのだからどちらでも変わらないでしょう？」と笑ってコーヒーを飲んだユキエは強かだった。

「……当時の事を」

「良いわよ。どこから話せばいいのかしらね」

そう言いながらユキエは話し始めた。

「そうね…彼女は毎日毎日、大きくなるお腹を慈しんで、旦那さんも素敵な人だったわ」

語られたのは有里琴音という女性がどれだけ生まれてくる長男を楽しみにしていたか、という話だった。

「元から琴音さんはあまり身体が強くなかったそうなの。だから、あの産院に出産前から入院して経過を見ていたのよ」

兄妹の実の母親である有里琴音の身体があまり強くないことは調査で分かっていた。

旧姓・倉橋琴音は名家倉橋家の出身であり、現役当主が可愛がっていた一人娘だったと聞く。

結婚相手の有里朔也ありさととしくやはしがらないミュージシャンだったがあの偏屈爺で有名な倉橋翁にも認められたほどできた人間だったらしい。ただし、本心である狡猾な倉橋翁が有里朔也を認めていたかどうかは知らない。ただ利用価値があったと判断したのか。それとも別の理由があったのか。

今となつては既に分からない。

「旦那さんも旦那さんで毎日奥さんである琴音さんの元に通つてふたりで産まれる子供を楽しみにしてね。院内でもおしどり夫婦として有名だったの！ それこそ、私たちがこうして覚えているくらい

にはね」

当時の事を思い出し、思わず笑みがこぼれたらしいユキエはしかし、次の瞬間には暗く悲しげな顔になる。

「……出産の日だったわ。出産前の事前検診では琴音さんも産まれてくる予定だった赤ちゃんも健康体そのもので問題なんかなくてね。出産は無事にいくんだとみんな信じ切っていたわ」

でも、そうはならなかった。

「ダメだった。琴音さんは頑張ったわ。でも、産まれてきた赤ちゃんはピクリとも動かなかったし泣かなかったの。…懸命に息を吹き返そうとみんな手を尽くしたけど…ね。それからよ。琴音さんがおかしくなってしまったのは」

「よくある話なんだけどね」とユキエは続けた。

ユキエが言わんとしていることは尚也にもわかった。子を失った親というのは一瞬にしてその精神のバランスを欠く。

産まれてくることを望み、楽しみにしていた第一子を失い、気が狂ってしまったと言われるのも仕方ないだろう。

「琴音さんは赤ちゃんを…渚くんを失ってから塞ぎこんで、退院の日も渚くんが死んだことを受け入れられなかったの。ここまではほんとうによくある話よ。まだ、ね。ご遺体は琴音さんがまだ入院している間に旦那さんがひとりで火葬場に持って行ったっていうのはきいたんだけど…本当におかしかったのはその後よ」

ユキエはコーヒーを口に含んだ。

「…おかしかった?」

「二年後、くらいかしら。琴音さんが双子を妊娠してまたうちにやってきたの。そしたら、居たのよ」

なにが、と訊くための尚也の喉は張り付いていた。つ、と冷や汗を流しながらミルクを入れたコーヒーを一口無理やり喉へ流し込む。

ユキエはまるで怪談でも話すように声を潜めた。

「——死んだはずの渚くんが」

尚也は即座に疑問を覚え、口を開く。

「赤子が息を吹き返した、ということとは」

「あるわけないでしょ。色々処置をしてご遺体を引き渡したのは産後2日ほど経ったときよ。死後数日たった遺体が生き返るなんて…怪談でもないんだから」

それもそうだ、と尚也は納得した。そして、この助産師や医者之死確認に「間違い」が無かったことも。

「私、あの子を見たときに死んでしまった渚くんそっくりな子を渚くんの代わりとして病んでしまった琴音さんがどこから攫ってきてしまったのかと思っただわ。でも目鼻立ちが琴音さんや旦那さんそっくりだったの。怖いくらいに。元通り明るくなった琴音さんや旦那さんにそれとなく聞いても、『息子は死んでませんけど』って怪訝な顔をされちゃったし、私たちの頭がおかしいのかと思ったくらいよ」

明らかに有里渚の出生に関する事でなにか異常なことが起こっている。

遺体を渡したことから生きていたのに死んでいたことにするメリットが産院にもないためその線は無いとみて良いだろう。確実に、生まれた赤子は死んでいた。取り替え、という線も考えたがそれでは1年後に現れた有里渚だと言われている存在の説明がつかない。

ただ、遺体を火葬したのは夫だというのが有里家の墓にも倉橋家の墓にも渚の文字はなかった。ならば骨壺は、「死産した本当の有里渚」の遺体はどこに消えたというのか。

現れた有里渚——三上優希は一体どこの誰なのか。なぜ、遺伝子検査の結果で血のつながりのないはずの有里湊と有里奏子との血縁を、そして実の両親とされる2人との血縁が証明されたのか。

夫である有里朔也は遺体をどうしたのか。

神取との関係性を調べるつもりが、とんでもないものが出てきてしまったと尚也は夏でもないのにじっとりとした空気と寒気を感じてゾツとした。

I, I l Face Myself. (? / ?)

桜の木の下には死体が埋まっている。

そんな与太話は有名だろう。

扉からでてきた湊は内心、それにしても酷すぎると目の前の光景に何度目か分からない吐き気をこらえた。

目の前に広がるのはあの穏やかな桜並木ではなく、一面に敷きつめられた死体の山だった。

桜は消え失せ、血が滝のように脇を流れ、空間自体に崩壊が始まっているのかヒビ割れができています。

穏やかさの欠けりも無いその黒と真紅の光景は湊の精神をぐらぐらと揺さぶってきた。

これが、兄の精神状態の表れなのだと思えば。

深層心理なのだしたら。

ナギサが地獄と表現したのも頷ける有様だった。

青い顔で死体の山を見ないように突き当たりの大扉を注視している一行に追いつくと、子供は奏子ではなくアイギスにしがみつくように抱きついて顔をうずめ、必死にこの光景を見ないようにしているようで、それを囲っている面々も刺激しないようにか青い顔をしつつ無言を貫いている。

救いなのは、地面を踏んだ感触が肉のそれではなく、平面で無機質なものだだったことくらいか。

「……待ってたよ。鍵は、持ってるよね」

複雑な表情の顔のナギサが出会った当初の明るさの欠けりも無い声色で聞いてくる。到底、この異様な景色の解説を頼めるような空気ではない。

「この先に、ユーキくんが1番大事にしている、1番見られたくないものがあるの。…今ならまだ、引き返せる。引き返す気は無い?」

湊は引き返す気は更々なかった。

何があっても兄を連れて帰らなければここまで来た意味が無いからだ。そして、疑問に思ったことを問い詰めなければいけない。

だが、そんな湊の行動こそ、ナギサが最も憂っている事だった。そんなことも梅雨知らず、湊が首を横に振ればナギサがため息を吐いた。

「…うん、わかってた。奏子ちゃんに聞いても同じだったし」

呆れたようなその声はどこか悲しげな音も含んでいて、湊は眉を顰める。

「——ごめんね」

その謝罪は一体だれに対してなのか。

湊は訊かなかった。

ただ、その謝り方が兄のものと似ていて、まるで兄に謝られているようだと感じたのは気のせいでも済ませていいのかわからない。

「鍵、持つてる人は出して。それだけでいいから」

ナギサの言葉に美鶴、奏子、湊の3人が懐から持っていた鍵を出す。するとそれは一瞬で砂となって崩れ落ちた。と同時に大扉にかかっていた錠前がちやんと音を立てて落ちていく。

「…ひっ」

あとひとつ、という所で小さく悲鳴を上げたのは、最後の鍵であるアイギスに抱かれた子供だった。

「やだ、やだやだやだやだやだやだ！ むこうにこわいのがいる！」

「優希さん…っ!?!」

目を見開き、怯えた顔をしてガタガタと震え始めた子供は扉から目を背け尋常ではない怯え方をしていった。そんな子供をアイギスは強く抱き締める。

「ぼく、きえるの、やだ！ しんじやうのもやだ！ いたいのやだ！

あけないで！ みないで！ でてこないで！ こっちこないで！」

「大丈夫です。優希さんのことは、わたしが守りますから…！」

正に半狂乱、といった様子の子供は扉の向こうに何かがいることを察知したらしい。

アイギスに抱きしめられ、慰められるも火がついたように泣き始めた子供はなおも身体の震えが止まらない。

しかしそのパニックの中で吐き出される叫びは普段の優希からは

聞くことがない言葉ばかりだった。

嫌だ。

消えたくない。

死にたくない。

痛いのが嫌だ。

湊はこれまでそんな言葉を兄の口から聞いた事があつただろうか、
と思ひ返した。

結果は、聞いた事がない、ということだけだった。

優希はいつも笑つて隠してはぐらかしていた。死んだ後も。

困つたように笑つて、そして死んでいく。

受けた痛みも苦しみも全て悟らせずに。病死にしろ事故死にしろ
他殺にしろ、気がついたら死んでいる。

優希はそんな存在だった。

だからこそ湊は兄がどこかへ行つてしまわないように見ていよう
と思つたし死因をなるべく取り除こうとした。

どうして兄は命を軽く放り投げてしまうのかと憤つたこともある。

だが、そうじゃないとしたら？

シャドウは本人の見たくない面だという。

なら、優希のシャドウが幼い子供の姿をしていて年相応に素直で甘
えたがりで嫌なものは嫌だとはつきり拒絶し、死にたくない泣いて
叫んで生にしがみつこうとしているのは。

優希自身が誰かに甘える自分も、辛いと弱音を吐く自分も、生きよ
うと生にしがみつく自分も見たくない面だと認識しているからなの
か。

本当は、泣き叫んで嫌だ辛い苦しいと訴えたいのかもしれない。

だがそんな面すら兄は目的の為に切り捨てた。だから、こうして幼
子がシャドウとして存在している。

そんな答えに辿り着き、湊はなんとも言えない気持ちになつた。適
切な表現がわからず、ただただ胸が締め付けられるような感覚がす
る。

兄は誰も信じていなかった。

弱音を吐く自分すら排斥するくらいなのだ。兄妹である湊と奏子の事すら——否、育ての親である養父母ですら心の底から信用してはいなかったのだろう。

全部独りで抱え込み、困ったような笑顔の裏で壮絶な死への恐怖や生への未練を煮詰めて切り捨てていつていたのだとすれば、ああも歪んでしまうのは仕方ないことなのかもしれない。

どうして兄——優希がそんな歪みを持つほどに煮詰まってしまったのか。

ニユクスの封印という優希の目的を知ったせいで、湊は歪んだ原因が上手く噛み合っていなかった。

「この先の扉って、何がいるんだよ……こんなに怯えるなんて尋常じゃねーだろ！」

「……この先にいるのは……たぶん、パンの大神……だと思っ」

思わず、といった様子で叫んだ順平にナギサが答えたが、歯切れは悪い。

ナギサもこんなに優希のシャドウである幼子が敏感に扉の向こうの気配を感じ取り、怯えるのは想定外だったのだ。

それに、『パンの大神』は基本的に『核』である子供と優希には無害だ。ただ眠り、ただ夢うつつで歌いながら彷徨うだけ。だからこそ『核』だった子供はこれまで存在することが出来ていた。だが、もしその『例外』が起こっていたとするなら、『パンの大神』が目を覚まし、そこら中の悪魔を殺戮しているとモコイから聞いていたナギサはそれが暴れているせいで子供が脅えているのではないかとアタリを付けた。

そしてその説明をしようとナギサが口を開きかけたその瞬間。

ガアンツ！

「!!」

それは大扉の内側からなにかが扉を壊すような勢いでぶつかった音だった。

鈍く、大きな衝撃は音と合わさり扉と錠前をガチャガチャと揺らし、内側にいるなにかが扉をこじ開けようとしているのが分かる。

その様子にナギサは疑問符を浮かべた。おかしい。ナギサの知るパンの大神はこんなにアグレッシブでも目の前にいない得物を狙うような存在ではなかったはずだ、と。

パンの大神は目を覚まして暴れているとしても獲物の気配を感知しない限りは休眠状態とほぼ同じく歌いながら彷徨うだけだ。

そしてその感知範囲はあまり大きくない。ましてや、扉の向こうの存在を感知できるほどパンの大神は感覚が鋭くない。だからこそ、パンの大神という存在自体は厄介だがセーフルームに逃げ込めば何とかなるという対処法が確立されており、対処がしやすいのだ。

戦闘になった場合はパンの大神の不死性と持つ特性からペルソナ使い程度の異能を持つ人間が手に負える相手ではないが。

それこそ同等レベルの悪魔か神相手。もしくは神殺しを成せるほどの者を連れてくるくらいでもないといけない。連れてきたとしても、精神的に耐性がない半端な者だと取り込まれるか発狂して死ぬかのどちらか。

もしかして、扉の向こうにいるのはパンの大神ではないのかもしれないのか、とナギサは思い始めていた。

ガアン！

また、扉が揺れる。

「これは不味いんじゃないのか」

「もし、パンの大神だとしたら、」

ナギサはさっと後ろを見る。

サトミタダシ薬局があつたセーフルームの扉は四つ目の扉から出てきたときには消えていた。

まるで、タイムアップだと言わんばかりのタイミングにナギサは逃げ場がない事を悟る。

「……あたしが、囷になるからその隙にみんなはこの扉の向こうに行つて。すれ違ってくるくらいは何とかできると思うから」

「それは…そんなの、できるわけないでしょ!?!」

ナギサの言葉にゆかりが噛みつくように言い返す。だが、ナギサは首を横に振つた。

「……」

「この、声…あいつの…でも——」

顔を覗かせたのは、アルビノの少年の顔だった。

髪を結んでいない優希そっくりな顔で真っ白な髪と血の様に紅い目を持ち山羊のような巻き角を生やした目を離せないような魔性の物を感じる存在、とさえいいののか。

湊の脳が警鐘を鳴らすものの、目が縫い留められたように『それ』から離せない。

『それ』は、アイギスの腕に抱かれている子供——優希のシャドウに紅い目をぎよろりと向けうつそりとした笑顔を浮かべた。

「あは、み…つけ…たあ…！」

「ひっ…！」

小さく悲鳴をあげた子供は更に強くアイギスにしがみつく。

直感的にそれが “よくないもの” だと判断したアイギスは目つきをより、きつくした。

「あの顔…やつぱりユーキくんを少し “食べ” てる…！ だから、ユーキくんのシャドウも狙って…まさか、 “手遅れ” って…ニヤルラトホテプの狙いは…きやあつ?!」

“パンの大神” の顔を見て何かに気がついたナギサを邪魔するようにパンの大神が触手を当てるすれすれで放つ。

まるで、「邪魔をするな」と言わんばかりにナギサを冷たい視線で一瞥したパンの大神はアイギスへと一歩踏み出した。

「させるわけ、ないでしょ！」

「ゆかりっ子の言う通りだぜ！ それになんかヒョロいしなんとかなるだろ！」

それを見た面々が立ちふさがる様に前へ出る。

「バカっ！ 直視したり戦おうとするなって言ったよね?! そいつは、見た目なんか関係なくて…死なないの!!! 死なないけど、きみ達を殺すことなんか息をするよりも容易いの！ だから戻って！」

「なら、どうしろっていつの!? このままだと、あの子が…お兄ちゃん
のシャドウが…！」

ナギサが叫べば、薙刀をパンの大神に向けた奏子がヤケに近い叫びを返した。

ナギサとて彼らが下がったところでどうにもならないことはわかっていた。だが、パンの大神と直接相對することの方が危険だとナギサは伝えたかっただけなのだ。

逃げ場のない状態で詰んでいる。アレを攻撃すればどうなるか、奏子たちは知らない。

ナギサは息を吸う。

パンの大神の目的が、ナギサの推測通りなら。アイギスに抱かれている子供ではなくナギサでも事足りるはずだ。

ならば。

1歩、前へ出た。

「ノーデンス、お願い。あたしが…戻るから、みんなや渚くんは見逃して」

「どう…してえ…？ あはは、あはははは、おまええ、だけえ…じゃ…足りないあい…足りないのお…」

「…っ！」

ナギサでは足りない。

その言葉にナギサはパンの大神が既に正気では無いことを悟る。ナギサが分離わかれた時からからこれは正気では無かったが、その狂気はナギサが知るものからさらに酷くなっていた。

悪魔を殺していたのも純粹に邪魔だったからという訳ではなく、力を喰らい底なし沼のように吸収してきたからだだったのか、と。

しかしそれでもパンの大神の空腹は満たされなかった。満たされないようにされてしまった。

恐らく、微睡みの中で彷徨い歩いてきた時にうっかり優希という『本物』の血液なり体液なりなんなりを吸収してしまった。

そのせいで本来同一の存在であるパンの大神——旧神 ノーデンス——の分霊である筈のナギサですらも『満足』出来なくなってしまうのだ。

そして、変異している。パンの大神は次の段階へと足を踏み入れて

しまっていた。

「おれ？ われ？ われわれ？ ぼく？ わたし？ あたし？ あはつ、あはははは…っ！ だめだよお…？ だめなのお…！ くらくて、ふかくて、満ち、落ちる…からあ…！」

多くの悪魔を喰らい、自我が混ざりきったパンの大神は狂氣的に嗤うだけだった。

「くらくて、ふかい…」

小さく、アイギスの腕に抱かれた子供が言葉を反芻する。

そして何かに気づいたように小さく声をあげると、その顔から怯えが無くなった。

「もしかして、そこに…いる？」

ニイ、とパンの大神は答えるように嗤った。

唐突に、黒い触手が目にも止まらない速度で振るわれる。誰も反応できなかったそれは、子供の首筋だけをすばんと斬り裂いた。

「あ…え…？」

どうして、と言いたげなその口は言葉を発することなく、ひゅう、と息が漏れた。

傷口から血は流れず、ただただ黒い靄が噴出するだけ。

がくり、と頭が垂れ見開かれたその目の瞳孔が広がり、光が一瞬にして失われる。

音を立てて最後の錠前が落ち、完全に大扉が開かれた。

「あ、ああ、あああ——ツ!!!」

腕中の死にかけの子供を見て、叫んだのはアイギスだった。

ざりざりと、記憶領域が警鐘を鳴らす。

思い出すな。必要ない。消されたはずの記憶だと。

それでも、止まらない。濁流の様に記憶がフラッシュバックした。

炎。瓦礫。満月。血。子供。

『ごめんなさい…わたしは、あなたを…まもれなかった…』

ひゅうひゅうと、息も絶え絶えな死に体の子供。血塗れの子供を

「もう助からない」と判断したアイギスはそれでもと飛び去る。

『ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい…ッ!』

アイギスは、かつて桐条千鶴から小さな「お願い」をされていた。
『もし、この子になにかがあつたら。その時は、この子の事を守つてあげてね、アイギス』

『それは、命令という事でしようか』

『違うわ。これはお願い。アイギスの意志でするかしないか決めてくれたらいいの』

命令でも何でもないそれを、当時のアイギスはわけもわからずに聞いていた。

『命令と何が違うのでしょうか。わたしにはわかりかねます』

『そうね、今はわからないかもしれないわね』

でも、それでもいいの。と、笑つた千鶴の顔はひどく穏やかで。

アイギスが幼い優希の写真と映像を見てから感じていた「大事」だという感情はそこから来ていたのだとはつきり理解した。

アイギスは、この幼い子供を守らなければならなかつたのだ。それがただのお願い事であつたとしても。

だが、アイギスは一度ならず二度までも、目の前で子供を失つた。今度は、守れる距離だつたにもかかわらず、だ。

ゆつくりと、子供の身体を地面に横たえさせる。

「——ッ!!」

上げた顔は怒りと憎悪に染まり、アイギスはその銃口ゆびをケタケタと唾うパンの大神に向けた。

「……………許さない」

ぽつり、と落とされた言葉は震えていた。

アイギスは機械だというのに。

「わたしは、自分の事も…ッ、貴方のことも赦せそうにない…ッ！ オル——」

「駄目だッ！」

「オルギアモード、発動」と叫んで今にも飛びかかるとしたアイギスを止めたのは湊だつた。

後ろから羽交い絞めにするように、その身体をそこに留める。そこから先に行かないように。アイギスを、死なせないために。

「離してッ!!! わたしは、わたしはッ! 優希さんを守らなければならなかったのにッ!!! なのにッッッ!!!」
「アイギス!!!」

喉があるとするなら、血反吐を吐いていただろう叫びはこれでもかというほどに感情が含まれていた。

「本物の優希はまだ、生きてる! 助けられる! だから、堪えて:!
!」

「…っ、」

湊の言葉にアイギスは沈黙し、うなだれた。

殺されたのは本物ではなく優希のシャドウなのだから。言外にそう言った湊は知らない。

シャドウと本体は一蓮托生。同一の存在だという事を。

だがそんなことよりも目の前の存在が “ニユクス” と同等に近い雰囲気醸し出していることの方が問題だった。

同等の存在といえば、ニユクス・アバターだった綾時はファルロスとして湊と奏子の内に10年間という長い期間いたせいで人間性を獲得し、不死性を無くした。だから殺せた。

だが、目の前にいる『あれ』はどうだ?

認知世界というある意味異世界に住み、角の生えた人の姿をしているが気配は明らかに人間ではない。

そもそも人間は触手を持たない。

もしかすればあの人の様な姿は幻覚の可能性だってある。

——『あれ』は殺せない。

そんな湊の予想は当たっていた。

パンの大神の真の姿は見るに堪えないグロテスクな姿だ。一瞬でもその姿を見た瞬間、発狂か死かの二択を迫られるほどの。

だからこそ、パンの大神を良く知るナギサは警告した。アレを直接見るな・近づくなと。

「あ、ははあ…! だい…じょうぶう…:…しななあい、しなない、よお…?」

パンの大神がへらへらと笑い混じりにそう告げる。

何が大丈夫なのか。何が死なないのか。誰にもその言葉の意味は解らない。

「おなかあ…なかで…ぜんぶぜんぶいっしょに…なるう…：…からあ…：… あは、あはは、あはははは！」

ふふ、と笑ったパンの大神のその表情が、見覚えのあるものに変わった。

「——みんな、みんな俺のお腹の中にしまっちやえば、死なないよお。ずっと、ずうっと一緒にいれる…！」

唐突に、優希そっくりな表情とゾツとするようなはつきりとした声で喋ったパンの大神にナギサは警戒度を跳ね上げた。ナギサの予想を裏切り、パンの大神はなぜか優希になり替わろうとしているらしい。なれるはずがないというのに。

「こいつ…ッ！ ユーキくんのお模倣が上手くなってきて…！ まさかなり替わる、つもり!? ユーキくんじゃないのに！」

「…あはは、あはははははははは！ ——：…我は影、真なる『影』!!!」

ナギサの言葉がなにかのきつかけだったのか、大きく笑いだし叫んだパンの大神の身体からボタバタと黒い泥が落ちてきて瞬く間に勢いを増やし、横たわった子供の骸をも呑み込んでいく。

そんな暴走状態とも呼べるパンの大神へナギサが身体ごとタツクルをするかの如く勢いよく突っ込んだ。

「行って！… いいからッ！」

短くそう叫んだナギサの言葉に、固まっていたはずの全員の手が動くようになった。

その必死の叫びに誰もかれも言いたくないわけではないわけではなかったが異様なパンの大神という存在に怯えてしまったのも事実で。対処できるのがナギサしかないとなれば、任せるほかないと判断してしまったのだ。

ナギサ以外の全員がパンの大神の身体を抑えているナギサを走らせて通り抜け、扉の先へと身体を滑り込ませる。が、奏子だけは足を止めた。

「だめ、だめだよ！ ナギサちゃんも行かないと！」

「いいの！ 例え力不足だろうとここであたしはこいつを——あたし自身を止めないといけないの！ あたしが、ユーキくんの名前と姿を貰ったせいで、こいつがこんなことになったのだとしたら。その責任はあたしにある。だから、これは罰なの。今まで自分と向き合ってきた、あたしへの」

泥まみれで悲し気に笑ったナギサに奏子は扉の向こうへと行くしかなかった。

どう言っても何をしてもナギサはパンの大神を封じるためにこの場から動く気はないと分かってしまったからだ。

「もしあたしが消えても、みんながあたしの事を思いだせなくても、それでもいい。あたしは本来みんなに出会うことなんてなかったんだから。だから、『またね』」

扉が閉まる直前、後ろ髪を引かれ振り返った奏子は見てしまった。

ナギサの大きな三つ編みがふたつ垂れた頭が触手によって斬り飛ばされて胴体から離れ、残った体が後ろに倒れていく瞬間を。

扉の先へと息も絶え絶えに逃げ込んだ特別課外活動部の面々はまさにお通夜、といった雰囲気だった。

優希のシャドウとナギサ、2人の犠牲者とも呼べるものを出してしまったのだ。例え2人が人間でなくとも、犠牲は犠牲に違いなかった。

「これから、どうすればいいんですかね」

貰ったメガネは手元に残っているがナギサという案内人を失い、先行きが不安になったせいでゆかりがそう眩いたのも無理はないだろう。ナギサがどうなったのか、という話はできない。したくもなかった。ただ居なくなっただけ。その事実さえあれば良かった。

「あの少女——ナギサはこの先に三上が一番大事にしている一番見られたくないものがある、と言っていた。何かの手がかりになるかもしれない」

美鶴の言葉に何人かが頷くも、風花は複雑そうな顔で頷くことはしなかった。

「でも、みられたくないなら、見ない方がいいんじゃないんでしょうか

…」

秘密は誰にだってあるものだ。だからそれを無理やり見るような真似は良くない。

風花はもう手遅れかもしれないがそう言いたかったのだ。

「綺麗事を言っただけなんになる。三上が死ぬよりはマシだろう。それに、犠牲を無駄にする訳にもいかない」

「犠牲って…でも、無事じゃないよね…あんなの」

明彦が自分に言い聞かせるようにそう言った。

それは少なからず全員が思っている事だった。有事だから仕方ない。人命がかかっているから仕方ない、と言い訳を述べながら。

他人の秘密を知ることには罪悪感が無いわけではなかった。しかし好奇心が無いわけでもなかったのだ。

何を隠しているのか。気にならないと言えば嘘になる。

「…奏子」

湊は奏子に「大丈夫？」と訊けなかった。ただ、静かに涙を零す奏子に名前を呼ぶことしか出来ない。そんなにナギサとの別れが辛かったのか、と思った湊は奏子がナギサの最期を見てしまったことを知らない。

ちらりと視線を無言の奏子から離し、アイギスへと向ける。

アイギスも優希のシャドウを守れなかったどころかナギサを置いていくことになってしまっただけで安心していいのか、虚ろな目で地面を見つめている。

精神的にボロボロになっていることはひとめでわかった。せつかく休憩を挟んだと言うのに、湊と奏子、そしてアイギスの精神状態は最悪に近い。

湊は最悪を予想してしまったために。奏子はナギサの最期を見てしまったがために。アイギスは優希のシャドウを守れなかったために。

これ以上なにが来るのか。正直な話、湊は怖かった。

扉の先であるこの場所は、どこかの斎場の入口のようだった。ザアザアと激しい雨の音が聞こえることから、扉が閉まっていて外に出られるか分からないが外は雨なのだろう。

先程のパンの大神の気配を感じさせない静かで寂し気な雰囲気だけが救いだっただけかもしれない。

ただ、この静けさもいつ豹変するかわからない。安心できるのは今だけかもしれない。

湊は斎場の空いている扉に足を進める。

無言だったが進み始めた湊の後を追うように全員が緩慢な歩みでついてきた。

現場リーダーの片割れである湊が動きはじめたのだから、ついてこないといけないとでも感じたのだろうか、とどこかぼんやりとした纏まらない思考で考えた。

開いている扉の部屋は、誰かの葬式が準備されている部屋の様だった。

白い菊をメインに色とりどりの花が飾られ、遺体の入っているらしい棺が安置されている。

祭壇の中央に置かれているはずの写真の額縁には何も入っていない。ただ、空白がそこを満たしている。

斎場という場所でありたい予想していたが随分悪趣味だ、と眉を顰めたのは恐らく湊だけではない。

そして棺の前に光の弾のようなものが静かに浮いている。

引き寄せられるようにそれに歩み寄って触れれば、光が弾け湊の手に一枚の紙が収まった。

そこに書いてある字を見て湊は大きく目を見開く。

“ 有里湊 逝去のお知らせ ”

ぐるぐると、吐き気が腹の中で巡る。喉まで達して来そうだった。「…んだ、こりゃあ…どうなってやがる」

横から湊の手の中にある紙を覗き込んだ荒垣が顔を顰める。

湊はこれが、優希が一番大事で一番見てほしくなかったものだと言

感した。

こうして何重にも鍵をかけて心の奥底にしまい込んで隠していたもの。それが、この紙切れ一枚なのだと。

「なんだよこれ！ 湊は死んでねーだろ!? なんで、センパイの隠したがったことが、これなんだよ!? ぜんっぜん、意味わかんねーよ!!!」
「三上先輩の認知の中では有里くんは、死んでる存在ってこと…?」

これだけでは何もわからない。解説をしてきていたであろうナギサはもういない。

もう限界に近かった。勘弁してくれ。もうやめてくれと叫べるものなら叫びたかった。

そんな特別課外活動部の願いを聞き届けたのか景色が塗り替わる。

どこかのアパートの一室。

個性がない最低限の生活ができればいいと言いたげな簡素な私物の殆どない部屋で、私服の優希が雨の降る外を窓から眺めてぼんやりしている様子が再現される。

カレンダーは、3月。2010年の3月だった。終わった日には赤いペンでバツがつけてあり、ちょうどこの日は3月7日だという事が判った。

ブーツ、と掠れて経年劣化してるであろう呼び鈴の音が鳴り、優希が立ち上がる。

その小さい部屋の玄関までぱたぱたと小走りで向かうと、何の躊躇もなくドアを開けた。

が、覚えがなく知らない人間だったようで僅かに優希の眉が怪訝そうに顰められる。

『どちらさま、でしようか』

声は警戒と疑念が滲んでいる堅いものだ。

だが、突然訪れた男はそれを意に介さず、さも残念そうに口を開いた。

『三上優希さん、突然ですが…貴方の弟さんが亡くなりました』

『——は…?』

『調べた結果、兄である貴方が直近の親族だと。親族代表で出ていただけますね? ……式場への地図はこちらです』

男に有無を言わず紙を押し付けられた優希の顔は、心底意味が分からないと言いたげだった。だが、しばらく考え込むように黙ったあとに、はっとしたような表情を浮かべ、男を突き飛ばすように押しつけて着の身着のまま外へと駆けだした。

『っ、待ってください——』

男の声は最後まで聞かれることは無かった。

勢いを強めた土砂降りの雨の中、優希は走った。通行人から不思議そうな顔で見られても、ずぶ濡れになっても関係なしに走った。

躓いて転び、履いていたズボンに血がにじんでも、それに気づくことなく優希は走る。

走る。

走る。

息を切らせて優希が斎場へと飛び込むように入れば、人がまばらなそこをぐるりと見回す。

その視界の先で、美鶴や明彦、風花やゆかり。そして順平といった特別課外活動部の面々の姿が映しだされた。

皆、一様に暗い顔をしている。

だが優希はそんな面々など知らぬと言わんばかりに無言でずるるとゾンビのように歩きながら開いている扉の部屋に入る。

奇しくもそこは、湊たちが入ってきた斎場と全く同じ場所だった。のろのろと優希が顔を上げれば、白黒の湊の写真が優希を迎えた。

『あ……ああ……あああ……』

呻く優希の表情は絶望に彩られている。

そしてそのまま棺へ倒れ込むように飛びつき、目を見開いてから小さく名前を零した。

『み、など……』

ずるりと飛びついた棺から床にくずおれ、震える体を掻き抱くこともせずに糸の切れた人形の様に数十秒、優希は沈黙して動かなくなっ

た。

唐突に、ふらふらと立ち上がり齋場の出口へと歩みを進めれば半透明な明彦が優希へと声をかける。

『三上。お前も、有里の知り合いなのか？ アイツが死んだことは信じられないだろうがあまり気を落として変なことをするんじゃないぞ…っておい待て！』

明彦の言葉を聞かず、優希は無言で外に出た。恐らくは声をかけられたことすら気づいていなかったのかもしれない。

その顔からは表情が抜けおちているにもかかわらず、涙だけがぽろぽろと零れていた。

しばらく土砂降りの雨の中を歩く痛々しい優希の姿を見せられたものの、ぱたりと足がとまる。

目の前に、傘を差した男がひとり。立っていた。

春だというのに季節外れの血のように赤いマフラーが明るい。どことなく、湊はそのマフラーに既視感があった。先月、そのマフラーを見た事があったような。そんな気が。

『——君の弟が死んだ理由を、君の記憶が無い理由を知りたいかい』

男が問いかければ、優希が緩慢な動きで顔を上げた。

『……知りたい』

『その上で君の弟をもし救えるとしたら？』

その言葉に、優希が目を見開いた。

それは甘言だった。やりなおせるはずなどないのに、目の前の男は優希に弟の生存を餌に取引を持ち掛けたのだ。

『そんな、こと…神様や悪魔なんかじゃない、かぎり…できるはずが……』

『できるとも。君に、その覚悟があれば』

首を横に振り、戸惑った優希の無意識の眩きを男が聞き逃すはずがなく。

『ほん、とう…に…？ 俺に…救えるのか…？』

確かめる様に。縋る様に吐き出された声は震えていた。

まるで地獄の中で一本の蜘蛛の糸を垂らされたが如く。優希はそ

れを手に掴もうとしていた。

『言っただろう、君にその覚悟があるなら、と。道のりは長く険しく単純じゃない。複雑怪奇だ。私にだってどうなるか分からない。』

けれど、けれども、君には選ぶ権利がある。もしこの手を取れば君は孤独で長く苦しい戦いに身を投じることになる。何度も失敗するだろう。死ぬ以上の苦しみを味わうかもしれない。それでも尚、君は弟を、家族を救いたいかい？』

狡いな、と湊は感じた。優希あにの事だ。こんな問いをされればこの男の取引に乗るしかないだろう。だが、そんな湊の予想に反して優希は渋る様に顔を下げた。

『……おれ、は……』

『もちろん、このまま彼の死を受け入れて1人のなんでもないただの人間として過ごすことも出来る。何も知らずに、ただ穏やかに、これまで通り』

渋る兄に男はもうひとつの選択肢を出した。

多くの人間が選ぶしかないその選択肢はまっとうで、何ら間違っていないもので。

しかしむしろ優希はその問いのせいで覚悟を決めたのか目つきをきつくし、睨み付ける様に男を見つめた。

『俺は、何があったのか知りたいし弟を救いたい。だから、あなたの言葉に乗る』

その返答に、傘から見える口が柔らかく弧を描く。

『——わかった。私は君に、きょうだいを救うまで永遠に繰り返す呪いしあはれをかける。生半可な死程度では決して途中でやめることも出来ない呪いだ』

それは、何の力もないただの暗示ことばだった。

優希の目が虚ろに、灰の目がちかちかと金色混じりになる。

『永遠に……繰り返し……きょうだいを……救うまで……』

ごぼごぼと、足元で黒い泥が粟立った。

ぱちりと瞬きをした優希の目が、元の灰色に戻る。それを見た男は優希へと手を伸ばし、その身体を押した。

優希の身体が泥めがけて傾く。

『君の旅路の終わりが、せめて報われるものであらんことを』

最後に見えた男の顔は、蝶の羽をあしらった白い仮面を被っていた。

真っ暗になつて景色がまた変わり、ぐるぐると謎の文字が羅列された魔法陣のようなものが足元で回る神殿へと姿を変える。

「さて、グノーデンス」が消え失せたようだが余興は楽しんでもらえただろうか？」

目の前にいたのは金色の眼をした聖エルミン学園の制服を着た優希——ではなくニヤルラトホテプだった。その顔は醜悪にも嘲るような笑みで満たされている。

「なにも楽しくなんてなかった、と言いつ返したかったがそんな気力もなく。」

「有里湊。先ほどまでの全てがアレの隠していたこと。お前の知りたかったものの核心だ。あの人形は「ファイルモン」の甘言に乗り、お前達双子を救うために今まで何度もこの1年を繰り返してきた。それこそ、本当の意味で数え切れぬほどにな」

ニヤルラトホテプが補足をするように先ほどまでのすべての説明をする。相違はあれども大体が湊の予想通りだった。

「ファイルモン、と告げられた名に湊は覚えがない。だが、蝶の仮面をつけた男がそれなのだろうとなんとなく察した。甘言を吐いたのは傘をさしていたあの赤いマフラーの男しかいなかったからだ。」

「アレが心底憐れだ。ああ、憐れだとも」

ニイ、とパンの大神に似た笑みをニヤルラトホテプは浮かべた。

「だがその説明をしてやる前に、有里湊。お前の罪をここでおさらいしようではないか」

パチンとニヤルラトホテプが指を鳴らせばまた景色が塗り替わる。

影時間の夜空。そこに巨大で歪な赤い目のような物体が塔の頂上に迫っていた。

黒い波動を放つそれに特別課外活動部の面々は倒れ伏し、動けないでいた。それは湊と奏子も例外ではなく、優希だけがただひとり立っている。

『これで、俺の旅路もようやく終わる。俺のいのちは、やっぱり2人を救うためにあつたんだな』

穏やかな笑顔を浮かべた優希はこの場に似つかわしくなかった。

『世界』^{ワールド}のアルカナのカードを手に、優希の足がふわりと浮いた。

吸い込まれるように巨大で歪な赤い目のような物体——ニユクスへと向かう優希へ、湊は手を伸ばした。

『…だめ、だ…！』

『お……にい……ちゃん……！ や……だ……！』

倒れ伏した奏子が絶望したような痛々しい顔をしている。

完全に優希の身体がニユクスへと吸い込まれ、湊はもう駄目だと悟った。

ああ——

『また失敗した』

景色が切り替わり、金色の卵のような物体を前に片腕を上げた優希が唐突に目を見開く。

先ほどまで魂を焼き焦がすように燃え盛っていた死の炎と上げた片腕から溢れていた奇跡の光が、まるで時が止まったようにぴたりとその動きを止めたのだ。

——金の卵が闇の中から噴出した泥によって真っ黒に染まり、浮かんでいた『世界』のアルカナのカードが砕け散った。

『え……？』

紅いふたつの目が、泥の中から優希を見つめていた。

「アレはようやくお前達を救い望んだ終わりを迎えようとしていたというのに。有里湊！ 弟であるお前が！ アレが救いたいと望み足掻いていた目的であるお前自身が！ 土壇場で時間を巻き戻しそれを阻止した！ それがお前の『罰』を受けるべき『罪』だ！ 私から

すればよくやったと賛辞したいところだが…それを知ればあの人形はどう思うだろうな？」

景色が元の神殿のような場所に戻り、ニヤルラトホテプが湊を煽る。

他の面々からしてみれば、優希だけではなく湊も時間を巻き戻していたという事実を教えられ頭がパンクしてしまいそうだった。

湊は湊でニヤルラトホテプの煽りを受け、兄が数え切れないほど繰り返しが壊れるまでやり直してきた原因が奏子と自分にあつたどころかようやくつかんだ兄が満ち足りて逝ける終わりを阻止してしまったことが『罪』なのだと言われれば、それを認めるわけにはいかなかった。兄にとつて生まれ変わることはない永遠の死が『救い』などと認めたくなかったのだ。

「黙れッ!!」

「認めたくない、か。その反応も想定内だ。なにせ私はお前なのだから。だが実につまらないな？ アレはつまらないならつまらないなりに愉快的傀儡としての役割はきちんと果たしているぞ？」

ニタニタと嗤うニヤルラトホテプは湊がどんな反応をしても想定内だと言っただろう。

人の心を知り尽くしている無意識領域カダスの真の支配者は、湊を嘲笑う。

「人形の癖に時間を巻き戻し死した弟妹にんげんを救いたいなどと言う傲慢なアレの願いこそ、最たる欲望といえるのではないか？ なあ？」

ニヤルラトホテプの手中に1枚のカードが浮かび上がる。

その数字は、XI11。アルカナは「欲望」LUST。7つの首を持つ獣を従えた女性が描かれていた。

まさか、と湊は顔を青くする。あのカードは、あの、アルカナは。兄の。

「アレと紛い物の絆を結んだらしいが、果たしてそれが本当に絆と呼べるのか？ アレはお前達にこうして大事な事を何ひとつ話してこなかったというのにか？」

「どういふことだ…？」

わけがわからない、と美鶴が戸惑ったのも無理はないだろう。優希とは美鶴自身や荒垣、そして明彦や順平と言ったそれなりの面々が春先ではありえなかったほどに距離を縮めていた。隔てていた壁を一枚通り抜けた。そんな気すらあったのだ。だが、そんな確かに絆と呼べるものを紛い物だと断じたニヤルラトホテプはその絆を否定するかの如く浮かんだそのカードをぐしやりと握りつぶす。

それはガラスの割れたような音を立て青い粒子となって砕けた。

「フン、ここまで言ってもわからないか。ならば愚かなお前達に教えてやろう！ お前達はアレから仲間だと思われてすらかなかったのだよ！」

「……っ！」

ニヤルラトホテプのその言葉は、疑念を確信に変えてしまう。それが本人の口から吐かれたものではない偽りのものだとしても。

「お前達にも自覚くらいはあるだろう。まさか、無いとは言わせんぞ？」

「戯言を！ そもそも貴様は何者だ！ なぜ幾月や三上の姿をしている!?!」

ニヤルラトホテプの言葉を断ち切り、美鶴は噛みつき返す。が、ニヤルラトホテプはそれすらも愉快だと言わんばかりに笑みを深める。

「何者だ、と問われれば私はお前達自身だ。ノーデンス…ああ、お前達はナギサと呼ぶように言われていたのだったな。アレから聞いていなかったのか？」

「なにを…」

「私の事だよ。まあ、そんな無知で愚かでどうしようもないお前達にも教えてやるとしよう。無知すぎて笑い転げたいくらいだが、ンツナー…そうだな、簡単に教えてやるとするならば、私はお前達が当たり前に持っている負の感情そのものを力の源としている。要は全人類のシャドウというわけだ」

「全人類の…シャドウ…!?!」

目の前に対峙する存在がとてつもない存在だということを示さ

れ、一向に緊張が走る。

ニャルラトホテプはネガティブマインドの化身。それらを糧に力を増す存在だった。そして、かつて“世界を一つ滅ぼした”人間の影そのものでもあった。

「わざわざ私がお前達のその無知で愚かなちっぽけな脳みそでも理解できるように説明してやったのだ。呑み込めなくては困る」

明らかに、目の前のニャルラトホテプはパンの大神と同じく優希の認知が作り出した存在ではない。それどころか、優希の事すらも嘲笑っている様に人知の及ばない何かを感じ取った。絡めとるようなその言葉はじわじわと心に侵蝕してくるように歩み寄って来る。

「だが、私は優しいからな？ 本来ならここでゲームオーバーといきたいところだがお前達にチャンスのひとつでもやろうというものだ」ニャリ、とニャルラトホテプはまた別の笑みを浮かべた。

チャンスとはいうが目の前の存在が到底チャンスを与えるような存在に見えず、湊が武器を構える。

「おいおい、そんなに身構えるなよ。簡単なゲームをするだけだ。お前達が勝つ条件はこの先へ歩みを進め、無事に三上優希^アを現実世界に連れて帰る。それだけでいい。元々の目的ではあったのだから、簡単だろう？」

そう言いながらニャルラトホテプは2つの扉を創り出した。

黒い扉と白い扉。その2つを。

「もちろん、お前達にはゲームを放棄して帰るといふ手もあるぞ？」

帰りたいと思うのならこの白い扉に入るがいい。そうすれば、棄権扱いにでもしてやろう。クハハッ！」

優希の顔をしたニャルラトホテプは高らかに笑うとまるで煙に巻かれるように姿を消した。

優希が隠していたものを知ってもなお、湊が優希を連れて帰りたいという想いは変わっていない。だが、他のメンバーはどうだろうか。時間を巻き戻している、なんて知られてしまったのだ。美鶴や順平やゆかりから何らかの追及があってもおかしくない。

ニャルラトホテプが「話し合え」、とでも言うようにわざわざ姿を消

したのも、つまりはそういうことなのだろう。
湊は小さく、息を吐いた。

帰還（11／13）

ニヤルラトホテプが去った後、特別課外活動部の面々は黙りこくり、沈黙だけが支配していた。

「おい」

気まずい所ではない空気の中、荒垣が口を開いた。

「あの三上の姿をした野郎の言ったことってえのは本当か？ 三上や、お前が時間を巻き戻したつっののはよ」

「……たぶ、ん。僕の場合は：勝手に巻き戻ってるんだって、さっきまで思ってた。少なくとも、前回以外は：なにも：思ってたなくて、わからなくて……」

荒垣は湊の言葉に顔を顰めた。

「くそつたれ、妙に世話を焼いてくるなと思えばそういうことだったのか」と叫びたい気持ちを抑えて言葉を続ける。否、荒垣にもわかっていて思惑だけではなく、優希自身の性格もあつて荒垣の事をみながったことにするなどできなかったという事くらいは。だが、そう叫びたくなるくらい許してほしかった。

『前回』つっことは：これまで何回もあつたんだな？ その巻き戻しとやらが」

「う、ん：僕が覚えてるだけで：10回。あいつが言ったことが本当なら、優希は：数え切れないほど繰り返してる……って……」

湊は小さく頷いて途切れ途切れに言葉を紡ぐ。

それはなんの弁明にもなっていないだろう。だが、言えることは言っておかないといけないと感じたのだ。

しかしそんな湊の言葉を聞いて口を震わせながらも開いたのはゆかりだった。

「っ、なによ……それ……じゃあ有里くんも、三上先輩も、こうなるって知ってたわけ!? 知ってて、全部黙ってたってこと!?」

そうじゃない、と湊は言えなかった。

湊は意図的に黙っていた訳では無い。なぜなら、これは何ら関係の無い事だったからだ。知っていても、知らなくても、どうにもならな

いことがあるのだと湊は10回の繰り返しの中でわかっていった。が、兄の突飛な行動によって大幅にズレてきているのもまた事実だ。こんなもの、未来予知にしても不完全すぎる。

だから喋る必要が無かったのだ。こんなもの、喋ったところで怪訝な顔をされるか頭が狂ってるのかと言われるのがオチだ。

だが、ゆかりの怒りの矛先は湊ではなく優希へと向いた。

「それに、三上先輩は…大型シャドウを倒すのだって止められたはずだし幾月のことだって警告できた…！ それに私のお父さんや美鶴先輩の叔母さんだって救えたはずだよ…！？」 だって、記憶があつたんでしょ!? あつたんなら、やり直しなんて出来たんなら…！ 10年前にあつた事故を防ぐことだって…なの…なんで…！」

してくれなかつたの、とゆかりは不満を叫んだ。

恐らくはここにいる同学年で親しい湊より、先輩でここにはいない優希の方が責めやすかつたのだろう。そんな甘えのようなものを含んだゆかりの言葉に息を飲んだのは美鶴だった。

事故を防げた。それは、本当なのだろうか。そんな思いが鎌首をもたげる。

「どうせ、先輩のこれまで全部演技だったんじゃないの!? 私たち、仲間だとすら思われてなかつたって…：…優しくしてたのも、全部私達を騙すためで…！ 本当は全部知ってるのに手のひらで私達が振り回される姿を見て内心で笑ってたんでしょ!？」

その思考の飛躍は冷静に考えればそれがおかしいとわかることが、今のゆかりには判断出来ないでいた。ただ、やり直せる資格を持つていたにも関わらず、どうして父を救ってくれなかつたのかという嫉妬や狡さ、羨ましさといった感情が湧き出てきて、それらが疑心暗鬼の燃料となりどうしても止まらない。

だからカダスで見た事のショックから余裕が無くなっているゆかりは気がつかない。その責任をすべて優希のせいにしようとしていることに。それが、あの天文台で幾月がしたことと同じ事だということに。

湊は1番初めの部屋で見た認知上の優希が語っていた「きつと恨む

だろう」という言葉はこういう事だったのか、と頭の端で納得した。

「ちよ、ゆかりっ子……！」

「ゆかりちゃん、それは……！」

言い過ぎ、と順平と風花が窘めようとするも遅かった。

荒垣がズカズカと迫るとゆかりを見下ろす。

「岳羽。てめえ……いい加減にしやがれ……！」

「なんなんですか！ 荒垣先輩は三上先輩と仲がいいから庇おうって言うんですか!? そうですよ、荒垣先輩と三上先輩は天田くんのお母さんを事故とはいえ殺してしまっただですよ？ そりゃあ、庇いたくもありませんよ」

天田の復讐に至る経緯とその母親に関する事故の詳細は全員に共有されていた。

その上で、天田が吹っ切れたのならそれでいいと全員判断していたのだ。あくまでも、あれは贖罪をすべきことなのだろうが事故に違いないのだ、と。

だがゆかりはここでそれを蒸し返した。

「天田くんも、なにか覚えてないの？ 先輩の変だったトコ……！」

キツ、と表情をきつくしたゆかりが天田へと振り向く。

突然話を振られた天田はしばらく考え込むようにしていたが意を決したように口を開く。

「……確かに、三上さんは変でした」

「ほら、天田くんだってそう言って——」

「もしこれまでの記憶をすべて持っていたとしたのなら、あの日、僕が荒垣さんや三上さん呼び出した時の狼狽えようが説明がつかないんですよ」

「え……？」

ゆかりが天田が出した言葉に目を見開く。まさか、優希の擁護をするとは思ってもみなかった、と言いたげな表情だ。

「途中の僕を窘めるような言動には……今思えば繰り返しをしていたから分かっていただんだろうなって思えるようなものはありましたけど、母さんを殺した事に関しては三上さんはあの時が初耳だった。そう

としか思えないような反応だった。それに、あの人は僕の事をシャドウから庇って安心したように笑ったし、目を覚ました後に1番に僕のことを心配して謝罪してくれたんです。だから僕は、『記憶が無い』ってハッキリと言った三上さんを信じたい」

笑みを浮かべながらもキツパリと言い切った天田の意志は固かった。

「だって、あそこまで僕から殺意を向けられていて荒垣さんが認めたのに、1人逃げるために信じてもらえるかどうか分からない嘘をつくメリットも1人で逃げるメリットも、ないじゃないですか。逃げたところで針のむしろですよ？ そんなの、ペルソナの使用禁止を言い渡されただけでしょ？ 三上さんが耐えられると思いますか？」

思い出されるのはついこの前のムーンスライトブリッジでの最後の大型シャドウ戦だった。

ストレガとの戦闘の際にヒュプノスを暴走させないように湊と奏子からペルソナの使用自体を禁止されていたのだ。その時ブツブツと情けない文句をたれながしていたのを全員が覚えていた。

「それもっ……！ 演技だったって可能性は考えないの!! ああ幾月みたいな……！」

食い下がるようにゆかりが幾月の名前を出されれば、皆は複雑そうな顔になる。

たしかに言いたいことは分かった。幾月のように、完璧に裏と表の顔を使い分けていたというのならありえない話ではない。

(三上は……全部知っていて……その上で、私の隣で友と称し笑っていたのか……？ 加害者側である私の隣で……？ まさか、三上の目的は……) 復讐、だったのだろうか。

美鶴の心を弄び、そして捨てる。

それが桐条鴻悦の孫である美鶴への、復讐だったのか。

一瞬そう考えるが、そもそも優希は友人になってもなお、遠慮があったし捨てるならさっさと恋人にでもなってしまうって婚約者から美鶴を奪い取り散々弄んだ後に手酷く捨てた方が美鶴の心を傷つけやすい。だと言うのにそれもせず、ひたすらもだもだと遠慮したり

挙句体調の安定しない自分が迷惑になるんじゃないかなどと言った
り。

それに全部知っていたのならペルソナが出せなくなるほどに心を
壊すことも、1度死に足を踏み入れてしまうほどに衰弱する必要も無
かったはずだ。

幾月や湊と奏子の話によれば過去に関することに記憶障害を伴う
酷い拒絶反応があり、ストレガの事も殆ど覚えていなかったことから
口裏合わせをした可能性もなくはないが確かに記憶喪失でもあると
言われていた。

ペルソナの暴走に関しても、8月の大型シャドウ戦でもタカヤに挑
発されてペルソナを暴走させる必要は無かったはずだ。そもそも暴
走などは狙ってできるものではないことを7月と9月にまざまざと
見せつけられている。

そして臓腑を溶かし寿命を縮める制御剤などという劇物を自ら飲
む必要も無い。

なら事故前後、少なくとも9年前までの記憶は幾月によるカミング
アウトのあったつい最近まで無かった可能性がある。

そして焼却場に居た認知上の優希が言った「自分は美鶴に対して無
力だ」という悔いるような言葉と、つい先日蛇頭黄幡神から美鶴を
守った三位一体のペルソナの姿が美鶴のなかで納得としてすとんと
落ちてきた。

優希の中に、全ての記憶がある訳では無いし美鶴に対して復讐をす
るというのはありえない。美鶴の結論はそれだった。

(私は…なんてことを…)

美鶴は一瞬でも友人を疑ってしまった自分を恥じる。

そんな美鶴の横に立っていた明彦が気になることがあったのか、湊
へと視線を向けた。

「…有里、この1年に起こった出来事はお前の知る通りなのか？」
小さく首を横に振る。

「だいたい…一緒だけど、優希が…今までにないことばかりした
り、されたりしてる…から…めっちゃくちやに変わってる。それにも

う、全然知らないことばかりで…」

「なるほどな。わかりやすい相違点はあるか？」

湊は躊躇うように押し黙る。

人の生死や怪我に関わることを言っているのだろうか、と悩む自分がいたのだ。

「どうした、そんなに言い難いことか」

怪訝そうな明彦が、ナギサを問いつめた時の湊自身のように湊を問いたです。

ただ、ナギサとは違い湊は荒垣の生死や桐条武治の生存、コロマルの早期加入など思いつきり言い難いことがあった。

だが、言わなくては伝わらない。湊は息を吸った。

「…6月に優希が腕を怪我したこと、荒垣先輩が10月の大型シャドウ戦の時に死ななかつたこと、と…幾月にタルタロスで生贄にされそうになった時に桐条先輩の父親が死んでないこと。それと、屋久島でシャドウに襲撃されたのとコロマルが大きな怪我もなく部に加わしたこと…優希がペルソナを暴走させたこと。僕の知らないペルソナを使っていたこと。…優希が幾月にムチャクチャされて死にかけたこと。ざっと、大きな相違点は…そんな感じ…だと思う」

「そんなにか!? かなりあるんだな…」

まず1番に湊から伝えられた相違点の共通点に気がついたのは奏子だった。

小さく、息を吐いて声を震わせた。

「それ、ぜんぶ…お兄ちゃんが…怪我、したときの…」

湊は頷いた。

「そして優希のケガや奇行が増えたのは今年に入ってから。僕が繰り返してると気づくのは4月の転寮の日。あの電車の中で意識が…いや、記憶が戻るんだ。だから、もしかすると優希も…」

たとえ記憶があっても今年の4月以降の事しかなんとかできないかもしれない。

湊はそう伝えたかった。それに、10年前から記憶があって手を伸ばすことが出来るなら港区へ行かないという手もあったのだ。湊と

奏子も説得して、優希自身もなながあっても港区へ、ポートアイランドへは近寄らない。そうすれば、永遠にデスもニユクスも目覚めることは無いのだから。

「なるほどな…少なくとも、有里弟が体験している繰り返し…俗に言う『ループ』は4月から、というわけか」

明彦がどこか納得したような顔で頷いた。

優希の性格を信じるならば、出来るのなら彼は10年前のことをなかつた事にするだろう、となんとなく美鶴は思った。

そうすれば、実の両親と懐いていた桐条千鶴は死ぬ事が無かつたのだから。だからそれが成されていけないということはこの繰り返しにはなにか条件があるのだ、と。美鶴はそこまで推察した。

そして、何故皆は自分の意見に同意してくれないのだと言いたげなゆかりに声をかける。

「岳羽。やり直せるならやり直してみたいと羨む気持ちはわかる。狡いと思つてしまつて疑う気持ちもな。だが、知識として知っているだけなのと実際に行動に移す難しさはきみにも分かるんじゃないか？」

「そ、れは…い… わかります、けど…」

美鶴でさえ例え未来の記憶を持つていたとしても祖父の凶行を止められる気はしなかつた。

だから、復讐されることを予想はしても、優希がわざと救わなかつたという事は考えられなかつたのだ。

それでもまだ、ゆかりは納得がいつていないようだったので美鶴は更に言葉をつづける。

「ましてや、誘拐され親兄弟から無理やり引き離された10にも満たない子供が…実験動物モルモットのように扱われていた三上が、もし記憶を持つていたとしても出来ることは無かつたのではないかと私は思つている。それとも、岳羽は三上に事故が起こる前に死んで欲しかつたのか？ 三上さえ居なければおそらくデスはともかく器は完成しなかつただろうからな」

唯一優希のことを人扱いしていたのは叔母の桐条千鶴だけだつたという。あとの人間はただのシャドウドを入れる器ぐとしてしか扱つて

いなかった様子が察せられるような情報が、幾月の残した資料には無機質に羅列されていた。

それが、どれだけ苦しいことなのか。美鶴は察することはできても実際に理解はできなかった。だが、慮ることはできる。

「……っ！ そんなこと……っ！ ただ、私は……！」

そう美鶴が問いかければ、顔をサツと青くしたゆかりはようやく自分の言動の不味さに気がついたらしく、バツが悪そうに顔を下げた。

美鶴も内心で自分を棚に上げ、こんなことをいうのは卑怯だと思っていたがどうにも表面的な言葉だけでは冷静さを失っているゆかりを説得するには難しいだろうと感じていた。

「……すまない、きみにそんなつもりがないことはわかっている。岳羽は……岳羽の父上を救って欲しかった……いや、やれるものなら自分の手で救いたかったんだろう？ だから、突然三上が繰り返すという到底信じられない権利を得てしまったことを知って羨んでしまった」

恐らく、湊や優希には言うに言えない事情があったのだろう。そんなものがなくともループしているなどという荒唐無稽な話を信じる者はこの中に何人いただろうか。

タルタロスやペルソナ・大型シャドウという物証や、それを成し得るだろう権力と財力がある桐条家の事情より、ループしているという物証がないただの高校生である湊や優希の話信じる方が難しかっただろう。

美鶴とて、このカダスでの有り得ないような体験が無ければこうもすんなり信じられなかったはずだと感じた。

「だが、本人の口からはまだ確認できていない。本当かどうかもまだ分からない。繰り返すという現象自体があるのはにわかには信じ難いが有里の口ぶりから確定している。しかし三上が繰り返しているという証拠は先に見た光景とあの紙。そしてニヤルラトホテプという奴の言葉でしかない」

「でもっ、三上先輩が居なかったら美鶴先輩のお父さんが死んでたかもしれないって確証はないんですよ!? 彼の言葉を信じないわけじゃないですけど、三上先輩がいたからどうこうってことなんて……」

そんなの、結果論じゃないですか……」

意固地になったゆかりはしかし、それでも引かなかった。恐らくは振り上げたこぶしが下せない人間がいるのと同じく、出した意見の引っ込みどころを無くしてしまったのだろう。

ゆかりの性格を考えれば、こうして意固地になってしまうのも予想できる話ではあったが。

だから美鶴は努めて穏やかな声でゆかりに言い聞かせるように畳みかけた。

「そうだ。結果論だ。それに逆を言えば岳羽の言う、三上が私たちを『悪意を持って騙している』という事に関しても、有里の言う三上が『ループしている』という事に関しても証拠もない。だから、三上を連れ戻し、話を聞く。それで有里の言動と整合性がとれたなら、信じようじゃないか。岳羽も、連れて帰ること自体に異論はないだろう?」
「ないです。ないですよ!」

うまく美鶴に丸め込まれている感がある気がしたが、ゆかりは熱の冷めてきたヤケな頭で頷いた。

「なら、先へ進むしかないだろう」

そう言って、まるで決定事項のことにように美鶴は黒い扉に歩を進めた。

しかしそれに誰も言うことは無いようで、斎場で湊についていたのと同じくそろそろとその後ろを追った。

ゆかりが優希を連れて帰ることに異論がないとはいったが空気は最悪に近い。空気が悪いのはこのカダスに入ってからずっとそうなのだが、比較的それを無視してハイテンションだったナギサが居なくなったことによりそれは輪をかけてひどくなったような気がした。

だがそれを指摘する者はだれもない。してしまえば、またもだもだど時間を消費するだけの言い争いに発展しそうだったからだ。

美鶴は有無を言わずに黒い扉を開けた。

現場リーダーは湊と奏子だったがふたりは暗い顔をして黙り込ん

でいるため、そんな役を背負わせるのはさすがに酷だと感じたからだった。

景色が塗り替わり、暗い森の中になる。

景色が塗り替わるのにももう慣れた。ここはそういうところなのだろうとそれだけは全員が納得していた。

無言で歩き始める。

歩きながら、たしかにニヤルラトホテプから言われた通り自分たちが育んできた——と言っているものかわからないがとにかく作り上げてきたものは——紛い物の絆かもしれない、と何と無しに美鶴は思った。

もし、仲がもっと良ければ。もっと踏み込めていたのなら。

カダスの入り口でも、ここでも、ぐだぐだと迷わずにすんなりと「助けに行こう」の一言で満場一致で決まっていたのかもしれない。だが、少なくとも特別課外活動部^{S.E.}はそうならなかった。それは、自主的に集まったものではなく、ペルソナ能力ありきで幾月によって集められた集団だからなのかもしれない。

そこまで考えて、美鶴は「それは言い訳か」とため息を吐いた。たとえ能力ありきで集められたとしてもそれぞれの仲を深めることはいくらでもできたはずだ。

そしてその機会はいくらでもあった。それを怠った——否、深めなかったのは自分達だ。

ただ、言い訳じみているかもしれないが仲良しこよしではなくとも『特別課外活動部^{S.E.}の絆』は出来ているようには思えた。たとえそれがぶつかり合うようなものでも、薄情なモノでも、それなりのものが。

ざわざわと、ここを歩いている自分たち以外の気配がそこらじゅうにある気がするが、姿が見えず物音しかしないとなれば湊であっても警戒だけしておくしかなかった。

「見えないけど……なにかいるのは確かです。でも……あっちも私たちに興味がない……？ それとも、いるところが一枚隔てた場所なのかな……？ えつと……とにかく、危なくはない……と思います」

と不思議そうに風花が探知した結果を述べるので、もう湊たちにはそれ以外でできることがなかったのだ。

ニャルラトホテプが持ちかけてきた「ゲーム」だったが、しばらく歩いて何の妨害もない。あの様子を見るになにか妨害のひとつでもしてきそうなものだったが、これだけなにもないとむしろ警戒心が強まるというもので。

「また、私だけ何も知らなかった……」

そんな中、ぽつりと奏子が小さな眩きを落としたりした。

兄妹の中で、奏子だけ蚊帳の外のような。そんな感覚がしたのだ。

湊も優希も、どちらもがどちらにも何も話していなかっただけだが、それでも奏子には『ループ』とやらもわからなければ「タナトス」のような強いペルソナを持っている訳でもない為に仲間外れにされているような気分だった。

実際の話、今となつてはタナトスと同等レベルに強力なペルソナが作れるようになってきていることを奏子は分かっていない。実感がないと言えいいのか。

それも仕方ない話だった。5、6月ごろに猛威を振るったタナトスのイメージがそのままずっとついてきているのだから。

その後は何もなく歩き続けた一行を待っていたのは一面の闇だった。

先ほどまで感じていた何かの気配もなりを潜め、月の光と静寂だけがそこを満たしている。

ざばん、と何か液体のようなものを湊の足が蹴った。

足元が真っ暗だったからか気づくことが出来なかったが、波打ち際のような場所らしい。

そして、その水面の真ん中に立っているのは――

「――優希……」

そうやって背を向け、満月を眺める様に佇んでいる優希に湊が声をかければ酷く緩慢な動きでこちらへと振り向こうとした。

瞬間、黒い雲が月を覆い隠す。

優希の瞳が一瞬、赤く瞬いた。

金属を溶かした時の色のようなその鮮烈などろりとした金と赤の混じった瞳に湊はゾツとする。

そして優希の姿にノイズが走り、見たことも無い黒衣をまとっているようにも見えた。

だれだ、あれは。

しかしそれはすぐに雲が過ぎ去り現れた月光によって幻と消える。ぱちくりと、僅かに驚いたように瞬きをした優希の瞳はいつもと同じ灰色だった。そして服も失踪する前に着ていたものと同じ普段着だ。

「……みんな、どうして」

小さな呟きだったろうそれは、酷く掠れていた。

後ろにいたアイギスが、ピタリと躊躇うように足を止めた。

「三上、帰ろう」

美鶴が、率先してぎざぎざと水に近い泥をかき分け優希へと迫る。

そして手を差し出せば、ぼんやりとそれを見つめられる。大方、夢だとも思っているのだろう。

「でも、」

しかし優希は何か悩むように後ろを振り返った。そこには爛々と輝く満月がある。

「呼んでるんだ、俺のこと」

「呼んでいる?」

美鶴は眉を顰めた。

「だから、俺、あつちにかかないと。ずっと、ここに居たらいいって思ってたんだけど、そうじゃなくて……」

そのままふらふらと奥へと向かいかけた優希の手を、追いついた奏子が掴んだ。

いきなりのことで優希はそのままつんのめり、がくんと身体のパラッスを崩して泥の中に座り込む。

「……いかないで、お兄ちゃん」

そのまま動きを止めた優希に、奏子が縋る。

「そつちに行ったら、帰ってこれなくなっちゃうから…」

「俺は…」

縋る奏子に応える様に小さく言葉を漏らした優希はしかし、顔を上げることがしなかった。

「——おれは、ここで死んだ。それでもいいと思っていた」

声はいつもの優希が発するものとは違い、かたく低い。

静かで、それでいて通りのいい声だった。

「けれど、死んだのに、生きている」

落とされた言葉は虚無で満たされている。

奏子にはなぜか目の前にいる優希が兄ではない誰かのような気がして、しかしそれでも手を離しはしなかった。離してしまえば優希はこのまま向こう側へ行ってしまうような予感がしたからだ。

「どうしてか、教えてくれないか」

幽かに、血と白檀の甘い香りがした。

湊たちはそこからどうやって帰ったかわからなかった。

ただあの問いかけの後、答えも聞かずに気を失い前のめりに泥に倒れこんだ優希を湊が引き上げ、荒垣が背負い、一行は足を引き摺るようになってなんとかしてテレビから出たのだ。

気を失った優希は仕方なく荒垣がベッドの上に寝かせ、それから時計を見ればテレビの中に入った時間から動いていなかった。

要するに、影時間すら終わっていないかったのだ。それどころか、テレビから出てきてからこうして一息つくまでに過ぎた時間を考えるとほぼほぼ時間が経過していないことになる。

「どういうことだ…?」

真田が首を傾げるも、全員がくたくたでもう解散したい気分だった。

どうせ、不思議でありえないことは先ほどたくさん見てきたのだ。

テレビの中で時間が経過していかないことくらい、どうつてことはない。

戦闘はほぼないに等しいくらい少なかったが精神的に疲れすぎた。気を失っている優希に話を聞けるわけもなく、全員の頭の中をいったん整理するためにも「今日はもう寝よう」ということになりその日は解散となった。

つけていたはずのメガネがなくなっていることに誰も気がつかないまま。

夜の暗い明かりのついていない部屋の中。

アイギスはベッドで眠っている優希を見つめていた。

ゆっくりと両手を伸ばして生白い首筋に触れる。

トクトクと脈が手に触れ、優希が生きている事を教えてくれる。だが、あんなにも願っていたものだと言うのに今のアイギスは何故かそれに対し安堵できなかった。

無意識に首筋に触れた手に軽く力を込める。

ほんの少しだけ力を込めたそれは首を絞めるには十分な力だった。

「う……あ……」

うめき声。

「！」

その声に弾かれたようにアイギスは優希の首筋から手を離れた。

自分は今、一体何をしていたのだと混乱が思考回路を埋め尽くす。守るべき相手を、この手で殺そうとしていた。

その事実にも、震えた。

また幾月に操られていた時と同じことをアイギスはしかけたのだ。それも、操られていない状態で。

どうして、と混乱するアイギスの思考は間違いなく優希が『守るべき対象』だと示しているのに、感覚が『排除すべきだ』と警告を発していた。

アイギスは自分が恐ろしくなった。人間としてではなく、対シヤドウ兵器という、自分が。

これでは、優希を——ただの人間である『守るべき存在』を“敵”として見ているようではないか。

これ以上この部屋にいられない、と判断したアイギスは踵を返して足早に部屋を出た。

しばらくしてむくりと人影が起き上がる。

「……」

そつと己の首筋を撫でたその表情は、まるで何かに耐える様に顰められていた。

その理由（11／14）

11／14（土）朝

ぱちり。

目を覚ます。そう、いつも通りに。

カーテンをあげ、まだ薄暗い外を見ながらカレンダー付きの時計を確認した。

11月14日。午前6時ちょうど。

それを確認しながら朝の準備を始める。

いつも通り髪を結ぼうと鏡の前に立てば、伸びてしまった髪が目につく。

定期的に髪を切りにいっていたがそれを最近怠っていたせいで肩につくかつかないかくらいだったのが完全に肩についてしまっている。ちよつと余ってるレベルである。

この際、心機一転にバツサリ切ってしまった方がいいかと悩みながら10分とかからずにもう慣れたそのルーティンを終え、寮の自室を出た。

眠気は無い。欠伸を噛みしめることもないな、と思いながら階段を降りる。

寮のラウンジにはまだ誰も居ないようだ。

恐らく皆まだ寝ているのだろう。

朝とはいえ、朝食にはまだ少し早い時間だ。もしかすると、真田くんはこの暗い中毎朝の走り込みに行っているのかもしれないが。キッチンを覗けば、荒垣くんが朝食を作っている最中だった。

「おはよう」

いつもと変わらない声色を装いながら挨拶をすれば、荒垣くんは目を見開いてこちらを見つめてくる。

「どうしたの？」

それに、とぼける。何の問題もないのだからこう言っただって不自然ではない。

「あ、ああいや…変なところはねえか？」

「…？　ないけど、どうかした？」

直接訊いてこない、という事はそういうことだ。自分から尻尾を出す必要はない。

冷蔵庫の扉にフックで引っ掛けてあるエプロンを手に取り、脱いだ制服の上着をダイニングの椅子の背もたれにかけてから被って袖を捲った。

「手伝うよ」

そうやって、しれっと横に並ぶ。

本当はうれしくて小躍りしたいくらいだけれど、ここで突然笑い出しても怪しまれるだけだ。

はつきりと、なにからなにまで全部思い出したお蔭で最後のピースがかつちりとはまった。あと少しの辛抱だ。もう少ししたら、全部終わる。湊たちの手を煩わせることなく。

よくわからないところに放り込まれたのは癪だったが、あそこも自分の勝手知ったる領域と言えそうだ。その自覚もなく、忘れていた自分が悪い。

「聞かねえのか」

無言で差し出された調味料と卵の入ったボウルを受け取り、それを菜箸でかき混ぜていると、ぽつりと荒垣くんがそう言ってくる。

「なにを？」

正直、何を訊くべきなのかわからないし訊きたいことも特にないのでまたとぼける。

思い出すべき記憶も得るべき情報も総て得た。

“モルフエ”が居なくなつたことも、居なくなつたその理由も。だからきつと訊く必要はない、はずだ。たぶん。

「…いや、わからねえってんならなんでもねえ」

「ん」

軽く返事すれば荒垣くんは苦虫をかみつぶしたような顔になった。

自分が薄情なのは今に始まつたわけではないがこうもあからさまに罪悪感があるような顔をされるとこちらも良心の呵責が起ころうというものである。

混ぜ終わった卵液を油をひいて熱されたフライパンに落としていく。

「身体の調子はどうなんだ」

言われて、卵の焼き加減を見ながら確かめる。

怠さは無いしどこか痛いという事もない。熱もない。変な動悸もしない。身体の冷えはあるが健康そのものだ。

「悪くないよ」

くるり、と焼けた卵を丸める。少し箸で押さえながら焼き目をつけてまた丸めた。

「……どこまで覚えてやがる?」

その問いに、一瞬びたりと箸を止める。

どこまで。どこまで話せばいいのか。たしかに、そこは悩みどころだ。

なので無言で首を傾げた。さも分かりませんよと言うかの如く。

「朝起きて、1日過ぎてたつっのに疑問を覚えなかったのか?」

「いや、また俺、倒れたりしたのかなって……」

「てめえは……いや、いい」

声を低くした荒垣くんにそう答える。

なんら間違っていない。嘘でもない。あの日、自分は倒れた。それに間違いはないし実際に今回は倒れまくってる。

そして荒垣くんの口ぶりから、荒垣くんはこちらがそのまま一昨日からの続きだと思っているのだろうか、その言葉に乗らせてもらう。

もうあの堅物じみた『自分』は居ないけれど。

あれは、自分という散らばった欠片を集めるために、過去の事実を事実として客観的に受け止められるよう、『前回』の自分か恐らくフィルターの中のどちらかが保険としてフィルターをかけた物と言うべきか、なんというか。今となってはもう必要ないものだが。

普通の人間が住む場所と座標をひとつずらすことによって、感覚をズラすフィルターをかけ、客観的に物事を見られるようにということらしいが、客観的に物事を受け止めるところかほぼ廃人状態だったの

はどうにかならなかつたのだろうか。おかげで多方面に余計な心配をかけてしまったし黒歴史を量産したような気がする。

なにか変な事を口走ってないことを祈ろう。

そこまで考えて、廃人状態だったのはフィルターのせいではなく精神的ショックのせいもあつたんではないかと思ひ当たる。

フィルターと言つても見たいものがあるなら座標を合わすだけでいい。つまるところ、触つてたアレコレのような確認作業がそれだ。チューニングと言つてもいいかもしれない。

それをしていてもなお、ぼんやりとしていたのは精神がぐずぐずに崩れていたからなのだろう。憎むべきは幾月のあん畜生という訳だ。綺麗に焼けた卵焼きをまな板の上に置き、冷めるのを待つ。

先程の問答から荒垣くんは黙つたままなので、話題を変えるべきか、それともこのまま黙つたままにしておくか悩んだ。

が、自分は別にめちゃくちゃおしゃべりという訳でもないし純粋に話題がない。

「へい荒垣くん！ 最近奏子とはどう？」なんて訊けるわけなければ言えるわけもない。

自分にはそこまでの度胸もない。

なので沈黙を貫きつつ冷えてきた卵焼きを包丁で切つて皿に乗せていく。

さっきの思考の続きをしよう。

散らばつた欠片を集める云々は結局カダスで無意識にフラフラと歩いている間に完了してしまつたみたいで納得がいかないがフラフラと歩くような精神的な『隙間』。いや、『それが入り込む余白』がどうやら必要だつたらしい。

だから結果としてあの堅物じみたなんにもない空きの多い素直な…素直か？ いや、素直なんだろう。とにかく素直な性格で良かったらしい。

変に個性に芽生えていたら元の自分の個性と新しい自分の個性がぶつかり合つて大変な事になつていたに違いない。おーくわばらくわばら。

ちよつと芽生えかけてたので影響を受けてないとは言えないが、大したものでは無い。はず。

本来なら周りの手を借りながらゆっくり時間をかけて記憶を取り戻したり、傷を癒していくところだったのだろう。が、些か時間が足りなかったようでこのような強行手段に出たらしい。まあなんというか色々と不便だったのだと思うあちらにしても、こちらにしても。

このあちら、と言うのは誰なのか知らないが恐らくあのローブを着た奴なんだろう。

道中で変な奴に口の中と喉を舐め回すようにかき混ぜられた気もするがアレは正直な話無かったことにしたい。アレはノーカンだと思ふ。というかアレが何だったのか自分には分からない。カダスに迷い込んだはぐれ悪魔だったのだろうか。

というか、その後のグラグラ揺れてた自分の決心も元に戻り、臨時のプランも失敗したのだからもうどうでもいい。

落ち込んだり元気になったり忙しいやつだと思われるかもしれないが、切り替えくらいはすぐにしないと間に合わない。

だから結局のところ、千鶴さんのことも色々明かされた衝撃の事実も引きずってるっちゃ引きずってるが、過ぎたことは過ぎたことだ。一晩寝て、つつかれなければ意識しない。

刺激されなければ別に耐えることは出来る。きつと。

刺激されたその時は——女々しいが、ちよつと泣いてしまうかもしれない。鍛え上げられた(はずの)表情筋は実はまだ熟練度が足りないのか湊並みのポーカーフェイスは披露してくれないのだ。

まあ、湊がああなつてしまった経緯と原因を考えると喜べるものではない。自分が原因なら尚更。

「汁物は味噌汁でいい? …あ、冷凍庫に入ってるカット大根使うね」「ああ」

素知らぬ顔でガガゴソと台所に備え付けられている業務用冷凍庫の冷凍庫部分を上半身を突っ込みかねない姿勢でまさぐりながら訊けば、短い返事が帰ってくる。

とりあえず目についた大根と油揚げは確定として、鮭を入れたい気

分ではある。

食欲が出てきたら途端にこれだ。酒粕があるならそれを使って粕汁でも良かったかもしれないと考えつつ、しかし如何せんものぐさなので鮭フレークでいいか、と冷蔵庫部分の扉を片手で開け、味噌とビンに入ったそれを出してお湯を沸かす。

出汁入り味噌でよかった、と安堵しながら沸いたお湯を一旦止めて味噌を投入する。一人暮らしだったなら火を止めずにそのまま味噌も材料も全部投入してたかもしれないがこれは美鶴さんやみんなも食べるものだ。少しくらい気は使わないといけない。

この際、鮭フレーク使ってるとかのツツコミは抜きで。冷凍庫と冷蔵庫に鮭の切り身が無かったのが悪い。

そういえば、荒垣くんは朝に弱く、とんでもない音の目覚ましを使っているらしいが隣の部屋であるにも関わらず自分はその時計の音で目を覚ましたことがないな、と思った。

真田くんはおそらくその前かちょうど同じくらいに起きるようになっているんだろうけど、寝ていて音が聞こえないという事はこの寮の壁が分厚いか噂に聞くような目覚ましでもないのでは無いか、とも思ってしまう。

それか、今の自分がとんでもなく寝つきがいいかのどちらかだ。

実は今月までは寝ているんじやなくて“ヒュプノス”——モルフェに夢を見て記憶を思い出したりしないよう、強制的に意識を落とされていたというのがオチだった。

昼寝や自分の意思で寝入った時も寝入った後はかなり深い眠りに落とされていたらしい。相当な念の入りようだ。

どうりでモルフェや影時間に関すること以外殆ど途中で目を覚ますこともなければ意識が途切れたみたいだにスッキリ眠れるわけだと思ったらそういうことだったらしい。

ある意味で、快適な最強の睡眠だった。

ただ今日も鳴っていると思われる目覚ましの音で途中で目を覚まさずに、6時ちようどに起きたという事は自分本来の寝つきも良いのかもしれない。

それとも、身体が習慣化されすぎて勝手に深い眠りに落ちるようになってしまったとかだろうか。

(うーん)

わからない。わからないので考えるのをやめよう。

荒垣くんの方を見れば朝食のメインディッシュである鯖が焼けたらしく、大きなオーブンからそれらを取り出していた。ご丁寧に大根おろし付きだ。他にもきんぴらとおひたしの小鉢つきだったりする。

こんな品数の多い毎日の食事を荒垣くんひとりで作ってると思うと尊敬に値するとともに10月の自分グツジョブと言わざるを得ない。勿論、荒垣くんが生きること諦めなかったことと朝倉先生の尽力、そして真田くんに天田くんと奏子の存在が大きかったのがある。むしろそつちが主な理由だろう。

そう考えると自分が自画自賛するほどの事をしたか？ となつて来る。してない気がしてきた。

「できたぞ」

荒垣くんのその声で、出来た朝食を2人分をダイニングテーブルまで運んで席について両手を合わせ、「いただきます」と一言。

のんびりと焼き鯖をほぐしていると階段を降りる音が聞こえ、反射的にそつちを見てしまう。

「…起きていたのか」

——美鶴さんだ。

大体朝食が出来た頃ぐらいに起きてくるのはいつものことなのでそこは気にならない。

「おはよう、美鶴さん」

「ああ…おはよう、三上」

挨拶をすれば、荒垣くんと似たような戸惑いがちな反応が返って来る。

それもそうか。今までまともじゃなかった奴が突然まともに戻れば戸惑うくらいはするか。

あまり自分も美鶴さんも騒がしくしゃべるタイプではなかった事に安堵しつつ、箸を進める。

美鶴さんはコチラを伺うようにちらちらと見てきていたが、その視線もすぐに手元の料理へと向けられる。そうなってしまうえば美鶴さんも自分もあとは黙々と食べるだけだ。

「ごちそうさまでした。美鶴さん、お先です」

「あ、ああ…夜に話がある。予定を開けておいてくれないか？」

「わかった」

そう言っただけ席を立ってシンクへと自分の分の食器を運べば、入れ替わりで調理に使った器具を洗い今から朝食を食べるためにエプロンを外した荒垣くんがキッチンから出ていった。お互い言葉は無い。

自分の分の食器を洗い、上着を着なおして階段を上っている途中で真田くんが帰ってきたようでバタバタという忙しない足音がする。が、自分はそれに立ち止まることなくそのまま2階へとあがった。

部屋に入ってもう一度歯を磨いて本当に通学するための準備を終え、時計を確認すれば出るにはまだ少し早い時間だったので鞆を持ってラウンジに降りることにした。

ラウンジに降りても真田くんの姿が無かったので風呂場にシャワーを浴びにでも行っているのだろう。冬場の朝はあそこ、お湯が張られていないせいで底冷えするんだよな、などとどうでもいい事を考えつつテレビを点けた。

『今日は平崎市にある矢来銀座の商店街にきています！ いやー風情のある旧き良きアーケードですね！』

テレビを点けるとちょうど朝のニュース番組でお天気お姉さんが商店街のリポートをしている場面だった。残念ながら夜の番組に出ているぼったくり素晴らしい回復施設を営んでいそうな人気リポーターのお姉さんではなかったが、別に気にするほどでもない。

『あつー、あそこに髪の毛をバッチリ決めた白いスーツのお兄さんが居ますね！ ちょっと話を聞いてみましょう！ おはようございますー！』

ソファアームに座って目を閉じる。テレビを点けたが真面目に見る気もないのでBGM代わりにすることにした。電気代の無駄とかはこの際気にしない。

『へ!? 俺!?!』

『お兄さん、お仕事なにされてるんですか?』

『探偵やってます! ちょうどそこに事務所が――』

「――お兄ちゃん?」
ぱちり。

突然聞こえてきた声に目を開ければ、奏子が心配そうにこちらを覗き込んでいた。

「……、…おはよう」

挨拶を一言発してテレビを見れば先ほど見ていたお天気お姉さんのコーナーは既に終わっており、一瞬寝ていたのかと思ったが眠気は無かったはずだ。となると、考え事に没頭しすぎていただけか。

テレビに映し出されている時間も登校するにはちようどいい時間になってる。

自分も登校しよう、と立ち上がろうとした瞬間、肩を掴んでソファアーに引き戻された。

ソファアーに自分を引き戻したのは後ろからこちらを覗き込んでいた奏子だ。

問うように見つめ返せば少しだけ、視線がずらされてまた戻る。

「おはよ! お兄ちゃん、今日は…朝倉医院だっけ? 学校に行くならそこで検査してもらってOK貰ってからだって」

「だれから?」

「桐条先輩。荒垣先輩やコロマルと一緒に行ってねって。ぜつつつたいに、1人でいっっちゃ駄目だよ?」

「わかった」

奏子の様子も少しおかしい気がするがすぐになりを潜めたのでそれも気のせいだと流すことにする。

明らかにおかしい様子が続くなら訊いたり相談に乗ったりすることもやぶさかではないが、今のままならまだ静観していても許されるのではなからうか。

内容にもよるが。たとえば自分が原因とか自分が原因とか。

「それじゃあ、いつてきまーす!」

「いつてらっしゃい」

結局、学校に行くという予定はキャンセルされてしまったので手持ち無沙汰になってしまった。

なので一旦荷物を置いて着替え、適当に部屋で時間を潰すことにした。

昼

「こんにちはー」

朝倉医院に着いて、インターホンを押して声をかけながら荒垣くんやコロマルと一緒に中に入れば、ちょうど玄関でイズミくんが掃き掃除をしていた。

「いらつしやいませー！ お、ナギサ、何しに来たんだ？」

「学校に復帰したいから検診受けに来た。荒垣くんはいつものバイト」

「先生はいつもの部屋にいるぜ」

「ん。ありがとう、イズミくん」

何気ない返事をしたつもりが、イズミくんが小さく目を見開いた。そして、太陽の様に明るい笑顔になる。

「やっと敬語じゃなくなったんだな！　なんか、昔に戻ったみたいだ」
止める間もなく、「タカヤ達に知らせてこなきゃな！」と箒を立てかけて奥へとドタドタと走っていったイズミくん置いていかれ、ぽかんとしたまま立ち尽くす自分とため息をはいてコロマルの足をウエットティッシュで拭う荒垣くんがそこに残された。

いや、元から案内無しでいつもの部屋に向かうつもりだったので関係ないと言えはなのだが、記憶を思い出したせいで無意識に被験者時代と同じような馴れ馴れしい話しかたをしてしまったのは失敗だった気がする。荒垣くんの向けてくる訝しむようなジト目が痛い。

「…奥、いこっか」

「ワン！」

このいたたまれない空気の中、コロマルの元気の良い返事だけが救いだった。

注射器の中へと抜かれていく血をぼんやりと見やる。

あのあとタカヤ達がたむろしているであろう部屋には寄らず、荒垣くんとコロマルとは別れ、直接朝倉先生を訪ねればそのまま診察室へと連行されてから問診を経た後様々な検査をして最後に採血ということになったのだ。

「気持ち悪くなったら言えよ」

「大丈夫です」

しばらく見つめていると必要な分の血を抜いたのか、注射の針が抜かれる。

そして、小さくたたんだガーゼを傷口に当てられ、テープが貼られた。

「おし、終わりだ。しばらく押さえとくんぞぞー」

「はーい」

立ち上がり、少し離れた場所に採った血液の入ったシリンダーを置いた朝倉先生の声が飛んでくる。

それに適当に返事をしながら、考えることもないので沈黙を貫いていると朝倉先生が戻って来る。

「血液検査の結果は一週間後ぐらいにでるだろうからまたそんな時来いよ」

そう言って、特に怒っている様子でも心配している様子でもない朝倉先生に大事なことを訊いてみる。

「あの、来週火曜から修学旅行なんですけど、行ってもオツケーですか？」

「あー…修学旅行、なあ…行ってもいいんじゃないやね？ 検査結果も血液検査以外はなーんも悪いとこがねえ。健康そのものだからな。けど、無理はすんじゃないやねぞ。戦闘なんてもつてのほかだからな！」

「はい」

口酸っぱく釘を刺してくる先生に苦笑いし、返事をすればぐい、と前髪を上げられた。

突然のことに思わず身を固めれば、「あー…」と唸りながら朝倉先生は顔を寄せてくる。そして、顔を顰めた。

「…やっぱ見間違いじゃねえな。この額の。どうしたんだ。コケたのか？」

忘れていた。

倉橋と名乗る変な爺さん——その実、血のつながった祖父だった男に殴られた傷だ。朝見たときにはもうカサブタを通り過ぎて治りかけていたのでバレないと思っていたのだが、ダメだったらしい。

「そんなとこ、ですね…なんていうか…ぶつけた？」

「ああ…」

詳しく話せばめんどくさいことになるのでぶつけたことにすれば、遠い目をして朝倉先生は納得してくれた。ある意味、杖に頭をぶつけたという事は間違いない。自分の頭が杖にぶつかるか、杖が自分の頭にぶつかるかの違いだ。うん。

「治りかけだからオレにできることはなんもねーがな、気をつけろよ？」

「はい。あ、タカヤ達が来てるって…」

「ああ、来てんぞ。検査もこれで終わりだし、ゆっくりしてってもいいからな。ただし、はしやぎ過ぎるなよ？」

そこで会話が終わり、礼を言っつて診察室から出た。

「ナギサ、貴方変わりましたね。いや、〴〵戻った」というべきか」

部屋に入り、コロマルを撫でながらたわいもない話をタカヤとしていれば唐突にそう言われた。たわいがない、というか身体の調子はどうかとか幾月死んだぞとか影時間終わらなかつたなとか。

紗耶ちゃんはお昼寝中。チドリは何かを描いているしジンはジンでノートパソコンを触っていて画面からこちらを離していないので話を聞いていないようだった。つまるところ、その感想を抱いたのはタカヤだけらしい。

「そう見える？」

「ええ。思い出したのでしょうか？ 全て」

どうやら、よくわからないがタカヤには筒抜けらしい。

だがもう『繋がり』である。『ヒュプノス』は自分の中にいないのに何故分かったのか。不思議に思って黙っていると、それを察してくれたのかタカヤが口を開く。

「あなたがあの日、あの男に害されたことも、過去実際になにがあったのかも調査済みです。あの男が死んだことにより遺された資料もこちらの手に渡りました。今は、あの南条から派遣されたという男の手にあります。我々にはもう不要ですからね」

なるほど、そっちにも自分の情報が纏められていたのか。納得がいった。

確かに、あれだけこちらを利用してベタベタ観察してきた幾月がそうだったものを残していないわけがなかったのだ。

「…書類に書いてあるかどうかは知らないけど、あのクソ野郎が言っていたみたいに願い事を叶えるとか云々はできないからね。今はムリ」「クソ…こほん。分かっています。そもそも、あなたは人間でしょう」「ありがと。なんていうか、そういうこと言ってもらえると気が楽になる」

まったく、幾月のあん畜生は無茶ぶりが過ぎるのだ。

色々むちやくちやされたが自分はまだ人間だ。

それ以上でも以下でもない。だというのに願いを叶えろだの世界を滅ぼせだの、できるわけがない。有里渚という人間には何ら特別な力もないのだから。

「あのクソ野郎の話はやめよう…気が滅入る…」

「あなたにとっては良い記憶ではないでしょうね。では、お望み通り話題を変えましょう。これから、『避けようのない滅び』が来るようですがどうするおつもりか、伺っても？ まさか、何も手が無いとは言わないでしょう？」

これまたざっくりと切り込んできたことに少し驚く。

タカヤはいつも抽象的な言葉で暗に匂わすだけかと思っていたからだ。こんなに直接的に訊かれたのはいつぶりだろうか。

ただ、残念ながら自分は誰かに話せる答えを持ち合わせていない。
「……ノーコメントで」

俺がペルソナを使えないことも知ってるだろ、と言う気持ちも込めて抗議の視線を送ればタカヤはやれやれと肩を竦めた。

「ええ、あなたはいま戦えない状態だとか。それも知っていますよ」
「ほんとになんでも知ってるんだなあ……」

謎の情報収集能力に驚くばかりだ。チドリのメーディアの能力か、それとも察に盗聴器でもあるのか。どっちにしろプライベートはガバガバの筒向けだという事だ。
じゃなくて。

「とにかく、なんとかするよ。なんとかか、ね。だから、タカヤ達は何にも気にしなくていいよ。ただ、春になったらどうするとか元気になったらどうしようかとか考えといてよ」

そうやって、笑いかければ今度はタカヤが睨み付けるようにこちらを見てきた。

「そら……また難儀なことというなあ……」

睨み付けてきたタカヤの代わりにぼやいたのはジンだ。パソコンの画面を見たままだったが、こちらの話を聞いていたらしい。

「——我々には生きろと言う割に、ひとりで死ぬおつもりですか」

底冷えするように低いタカヤの声がジンのぼやきの後に発される。

いま、タカヤは怒っている。それだけはあるありと伝わってきた。

「そんなこと……」

言っでない。

「勝手に救って、勝手に生きる希望を見出させておきながら、自分だけ死に逃げようというのですか？」

「す、救ってない！俺はなにも……なにもしてない！ だって、これは……タカヤ達が自分で掴み取ったものだろ!？」

「んうう……」

思わず叫んで立ち上がれば、紗耶ちゃんがベッドの上で身じろぎし、連鎖的に横でスケッチブックから顔を上げたチドリに睨み付けられる。

「ナギサうるさい。紗耶が起きちやうでしょ」

「…ごめん」

そのまま大人しく座る。紗耶ちゃんを起こしてしまうのはこちらとしても不本意だ。

「先ほど、〃自分は何もしていない〃と言っていましたけど…あなたはしていますよ。良いことも、悪いことも。全て思い出したのなら、御自分が夜な夜なシャドウを喰らうために彷徨っていたことも分かっているでしょう？　〃シャドウ喰らい〃はふたりいた。あなたは、港区へ来た時から既におかしくなっていた。違いますか」
お手上げだ。

そこまでバレてしまっていたのなら仕方ない。もう、隠す必要もない。

上手く笑えているのかはわからないが、笑みの表情を作る。

「…そうだよ。俺がおかしくなっていたのは、今年からじゃない。二年前からだ」

『12時前には寝ている』なんて嘘だった。自分は、自分すらも欺いていた。記憶を書き換え、監視の目を掻い潜り、改竄した。

天田くんの母親が死んだその日も、自分は満たされない飢えと喉の渇きに〃代わり〃を求めてさまよっていた。そこで、荒垣くんのカストールと天田くんの母親から出てきてしまったシャドウが暴れているところに引き寄せられ——あとは天田くんが語った通りのことが起こった。ただ、それだけだ。

「自覚があるようで結構。それで、あなたはシャドウを喰らって一体何になるつもりですか」

「イズミは延命のためでしたが」とタカヤは付け足した。なるほど、もうひとりの〃シャドウ喰らい〃はイズミくんというわけか。だから8月、あの檻のような部屋にいたのか。

しかし何になるつもり、か。これもまた、返答するには難しい問いだ。

「うーん、やっぱり神様かな〜！　崇められて供物も食べられる快適ニートライフ楽しそう」

「ふざけないでください」

「あ、やつぱダメ？　じゃあ金持ちになつてさ、こう…両手に花とかもいいよね！」

「意外と俗物的なですね。ですが、訊いているのは稚児が垂れ流す将来の夢じゃないんですよ…」

「はあ、とタカヤがため息を吐く。が、しみつたれた空気をリセットすることはできたようだ。」

「そもそも、自分には湊と奏子とついでに世界を救うという目的以外ないのだから何になるんだと言われてもわからないし答えようがない。つつい困ってしまつて、頭の後ろを搔く。」

「やー…わかんないな。いきなり何になりたいんだつて言われてもさー…」

「なら、なぜあなたはシャドウを喰らっていたのです」

「さあ、飢えてたから、としか…ああでも、今はもうないのか。じゃあ、多分俺の中に残つてたデスの欠片——じゃなくてヒュプノスのせいじゃないかな。えーつと、デスの事は知ってるよね？」

「訊けば、タカヤは頷いた。」

「ええ。資料にも記載がありましたからね。成程、そのせいと言いたいのですね」

「そうなる。だから俺は、もうシャドウを食べることはないし安心してよ」

「そして、その必要もない。」

「完成した物に余分なものは必要ないからだ。」

「死の宣告者は既に完成し、この世界に君臨している。なら、それ以上飢えを満たすためにシャドウを食べる必要はない。元々砕け散つた12のシャドウを求めて飢えを感じ、それを補うためにイレギュラーシャドウを喰らつていたのでから。」

「…そうですね。そうだといいいのですが、ね」

「心底、納得がいつていませんと言いたげなタカヤは不満げだ。」

「なら自分なり答えを言うしかない。納得するかどうかは別として。」

「でもさ、俺は湊と奏子を救うためだったら神様だろうが悪魔だろう

が、何にでもなるよ」

そう、何にでも。

だからこそ、邪魔はされたくない。

大人たちにも、ストレガにも、特別課外活動部にも。他の存在にも。

夜

夕食を食べた後に「話がある」と美鶴さんから言われた通り待っていれば、全員がラウンジに集まって来る。

いつも通りと言われればそれまでかもしれないが、纏う空気が違う。

テレビさえつけず、誰も言葉を発することなく。ただただひたすら重い空気だけが流れている。

「単刀直入に聞く」

しばらくの沈黙のあと、意を決したような美鶴さんが口を開いた。

「…三上、きみがこの1年を繰り返しているというのは、本当か？」

ああ、なるほど。どこで知ったかは知らないが、ついに。

「——バレちゃったか」

明かされたもの (11/14)

緩く、笑みの形を作った。

別にいつかは話さなければならぬ事だったし、バレる事だろうとも思っていたので不安や戸惑いもない。

「それで、なにから聞きたいんだ？」

腕と足を組んで背もたれにもたれ掛かる。どうせこの話は長くなるんだ。話しやすく砕けた格好をしたって誰にも怒られやしないだろう。

「三上、きみの目的は何なんだ。繰り返しをして、なにをしようというんだ」

「ああ、それね。前もほら、言った気がするんだけどさ。戦う理由は何かって話の時に。でも美鶴さんと岳羽しか聞いてなかったからここでぶつちやけるのもアリか」

戦う理由も、繰り返している理由も大差ない。ほぼ同じと言った方が良い。

勿論、必要がなければ戦いたくないが。

「自己満足だよ、自己満足！ 別に崇高な理由なんざこれっぽっちもございませぬ！ ごめんねー」

カラカラと乾いた笑いを零せば皆はまるで恐ろしいものを見るかのような目で見てくる。

なんなんだ。何がいけなかったんだ。

あんな傲慢な願い、『自己満足』以外になんと形容すればいいというんだ。

「俺は聖人君子でもなんでもないんだけどな。ましてや、善意で命を懸けられるとも思ってたのか？ それなら、とんだお花畑思考だと言わざるを得ないけど。…ああごめんごめん！ 言い過ぎた。話題変えよう？ ね？」

そう言って、話を逸らす。上手く逸らせればいいんだが。

まだアイギスは記憶を思い出してないんだらうから、詳しい事はわざわざ話さなくていいだろう。

それに、これ以上追及されてアイギスがさっさと記憶を思い出すのはこちらとしても都合が悪い。

「そうか…では、これまでの繰り返し…『ループ』と今回の相違点について話してはくれないだろうか」

「…」

どうしてそんなことを聞こうと言うのだろうか。そんなことを聞いてそれが正解なのだとは判断する材料がみんなにある訳じゃないのに。

まあ、いいか。

「あのクソ野郎…ええと、幾月が俺の過去について話したことと俺があまり活躍できなかったことかな」

めんどくさいので手折る。

正直幾月は名前を呼びたくないくらいだがここは我慢しなければ。四騎士云々はどうしても良さそうだし、今更混乱させる必要も無いだろう。

「それじゃわからん。もっと詳細を語ってくれ」

横から真田くんが抗議の声をあげたので考える。

荒垣くんの生死や武治さんの生死について突っ込んだ方がいいのだろうか。

「あー…えと…美鶴さん、武治さんは幾月に撃たれたりしてない？」

「…父上は大丈夫だ。健康そのものだよ」

幾月が死ぬのは確定事項なので分かっていたことだが、武治さんが撃たれもせず元気なのは初めてだ。自分は途中から意識自体が無かったのでよく分からない。一体何があつてそうなったのか。

「じゃあ、そこも相違点のひとつかな」

そう告げれば、美鶴さんは顔を俯かせた。

申し訳ない、という気持ちで顔を覗かせるがこれも仕方のない事だ。訊いてきたのはあつちなだから、ここで嘘を吐くわけにもいかなかった。

「お兄ちゃん…桐条先輩のお父さんだけじゃなく、荒垣先輩も死んだかもしれないって、ほんと？」

美鶴さんが俯いてしまつて間が空いたからか、奏子が震える声でそう訊いてきた。

ウソかホントかどうかで言えばホントだ。
となると、頷くしかない。

「ホントだよ。10月の大型シャドウ戦のあの日。荒垣くんは天田くんに呼び出されて、ポートアイランド駅近くの路地裏に居ただろ？
本当ならあそこでタカヤに撃たれるはずだった天田くんを庇つて殺されてた」

「っ!？」

一同に動揺が走る。なぜか、湊だけは表情を変えずにいた事が引つかかったが構わずに続けた。

「その天田くんがタカヤに撃たれるつて事件も、チドリが9月の大型シャドウ戦のあの日に伊織を捕まえて人質にしたせいで逆にチドリ自身がこつちに捕まつて、あちらが天田くんを探知系ペルソナ使用だと勘違いしたことで起こることだからそこも違うのか。そもそもチドリは伊織を人質として捕まえてなかったし、10月はストレガにチドリがちゃんと居たからその必要はなかったのかもね」

「チドリが…!？」

本当は何らかの理由によって特別課外活動部の邪魔をしなくなつただけ、が今回の理由なのだろう。

それに探知系のペルソナ使用をピンポイントで殺したかつたわけじゃなく、天田くんの「自分が探知系ペルソナ使用だ」という証言を信じたタカヤの行動によるものだ。

「とにかく人数が減らせればいいから天田くんの証言に関して正誤は気にしてない」みたいな事を言っていた気もする。荒垣くんを助けようと物陰からやり取りを見ていた周もあつたのでうろ覚えだが「人数減らしのついでに探知系ならその方がいいな」レベルの思考のようにも思えた。

そりゃあ、10人近くの人間をチドリを抜いた2人で相手取るとなるときついものがあるだろう。減らしたくもなる。自分がストレガの立場なら絶対に闇打ちするか各個誘い出して撃破するだろうし。

そう考えるとタカヤとジンは頑張った方だと思う。命を狙われる側としては堪ったものではないが。

「だからシンジが死ななかつた、というわけか」

「変なシャドウは出たらしいけどね。『修正力』みたいなものが働いたんだと思うよ」

「だから、イレギュラーシャドウという『代用品』が用意された。『修正力』？」

「そう。物事や歴史において、大まかに道筋っていうのは決まってるんだ。たとえば時間を操作しようが過去へ遡ろうが、世界線自体が分岐して確定した『要素』は簡単には覆せない。Aという事象を変えたければ、それに連なるBとCを変えなきゃならなくて、それぞれにそれぞれの因果や別の事象が絡んでくる。それこそ、一番手っ取り早い手段である10年前にあった事故とその原因である『デス』の完成自体を防ごうと思えば俺の生まれる前から様々な要因を取り除いて来なきゃならなくなる。流石にそれは無理だってわかるだろう？」

トントン、と机を人差し指で叩けばなぜか岳羽がバツの悪そうな顔をした。

「まあ、逆を言えばその『要素』の最低限のポイントさえ覚えておけば覆そうとすること自体は簡単だ。それが上手くいくかいかないかは自分の頑張りに左右されるけど。で、『修正力』っていうのはその要素の中でもどうあっても変えられない根幹にかかわる部分を変更されないための力みたいなものって言えばいいか」

俺もそれがどうやって働いているかはよくわかんないんだけど、とつけ足す。

人の生死にも、修正力が働く場合と働かない場合がある。それが、どういう基準なのかは本当にわからない。だが、間違いなく10年前の事件に直接関わっている——否、10年前、事故が起こった施設内にいた人間の生き残りは幾月と武治さん以外許されていない。あの桐条鴻悦ですら、許されていないのだ。

ただそれにも抜け道がある。行方不明だったり別人になり替わる。もしくは記憶喪失になるなりなんなりして、『いなかった』ことにすれ

ばその通りではない。

「そして、『修正力』には2種類ある。ひとつは先ほど言ったような『変わってしまった要素の代用』、もうひとつが『ズレた軌道を元に戻すために行われる強制リセット』だ。ひとつ目が状況の修正だったら、ふたつめはサツカーで出されるレッドカードってわけ」

「レッドカード…つまり退場って意味ですか？」

天田くんがハツとした顔で訊いてくるのでニヤリと笑いながら口を開く。

こういう時、聡明で察しがいいのはありがたい。

「ご名答。テレビゲームに例えるけど、定められた行動じゃないことをするぽつと出のNPCはバグそのものだ。最悪、ゲームシステムそのものが破壊されかねない。なら、ゲームの制作者から弾かれてもおかしくはないよな？　そして俺はそのバグったNPCってわけ。ちなみにそのルール違反をしたら数日程…早ければ数分で俺か湊か奏子が『不慮故意の事故』によって死ぬ。そして、ルール違反の中には『未
来の出来事を話す』が含まれてる」

自分の名前だけでなく、湊と奏子の名前が出た瞬間、今度は湊を含めた全員に動揺が走る。

兄の迂闊な言動で命をとられるかもしれないと思うとそりやあ動揺したくもなるだろう。だからこそ、黙っていたのだ。

「——これが、俺が『ループ』しているという荒唐無稽なことを今まで話してこなかった理由のひとつだ。俺は、話さなかったんじゃない。話せなかったんだ」

「じゃ、じゃあ…大型シャドウのことも…幾月のことも…知っていたのに何も言ってくれなかったのは、そういうことだったの!？」

バツの悪そうな顔をしていた岳羽が耐え切れない、と言った様子で叫んだ。

どうやら岳羽は『岳羽主任の残した修正されていないビデオ』を見たからなのか12体の大型シャドウを倒す前に——幾月が裏切る前に止めてほしかった、という思いを少なからず持っていたらしい。そう思ってしまうのは仕方ない事なので、その気持ちもわかるぞという

気持ちを含めてニッコリスマイルを浮かべる。

「大型シャドウについても幾月についても、それらしい事を言ったら俺は幾月に『処分』されてたから。まあそりゃそうだ。かつてのモルモットが己の企みをゼーんぶ知ってて拳句それを暴かれましたなんてあいつには耐えがたい所業だからな。かつて、ちよつと屋久島でビデオの違和感について指摘しただけで俺を溺死させたくらいだ。あの時は海水浴中の不幸な事故ってことで片付けられてそうだけど」
他にもあつたが溺死の件は今でもはつきりと思い出せる。

あの時の幾月がしていた余裕のない表情とこちらを見下すような目はそういうことだったのだ。

飼い犬に手を噛まれるもとい、モルモットに手を噛まれるのが大っ嫌いなあの幾月ヒゲメガネは冷静を装いながら些細なことで内心ブチギレるし意外と心が狭い。

アイギス含め、『自分の物』と判断したものが言う事をきかなければ癩癩を起す子供みたいなやつ。それが自分の知る幾月だった。

「でも、今話して良かったんですか…？ 三上先輩の話の通りならこのことを話したら…！」

「ルール違反」とそのペナルティーについて山岸に指摘されたので、説明をした方が良いかと思いつ。確かに、自分たちが訊いたことによつて人が死ぬのは困るだろう。

「それはもう大丈夫。皆の方から気づいたりして話題として出されて話すのは大丈夫っぽいんだ。そういうことになってる。それに、ここまで来てれば大丈夫なんだ」

なにが、とは言わない。言えない。

「あ、そうだ。『ループ』の『リセットポイント』について話はしたっけ？ まだだよな？ さっきのルール違反云々に繋がる話なんだけど、俺のループの始まりは4月6日。で、リセット条件がさ、俺か湊か奏子のうち、最低でも誰か一人が死ぬことなんだよね。だからこのことを話すと一発退場なんだ」

どうせ死ぬなら奏子や湊より自分が死んだ方がいいのでどうしようもなくなつたら自殺したりしてたが、守り切れなかった周はいくつ

もある。心底、力がない自分が恨めしかった。

それも過去の話だが。

「そして俺がとあるやつと交わした契約の達成条件はひとつ。湊と奏子が生きた状態で2010年の3月5日の夜を迎えること」

小さく息を吸って、吐き出す。

「条件に、俺の生死は含まれていない」

ひゅ、と誰かが息を飲んだような音がした。

「つまるところ、俺はどんな手を使ってでも湊と奏子を生かさなきゃいけない。身勝手な願いのせいでみんなは覚えてないとはいえ同じ1年を延々と繰り返し返しているしこれ以上時間が進まないのは申し訳ないと思ってる。それに、湊と奏子には俺の勝手なものを押し付けてるともいえるし。まあ、2人の意志を確認しても俺はやめないけどね。：戦えなくとも俺はいまの俺にできることをするだけだよ」

そう言い放った兄に湊は最悪だ、と思った。

優希が語ったことはおおむね、カダスで見たとおりだった。だが、とんでもないところで優希は自分にできることをしようとしている。数日前に湊が励まし、その際に言ったことをそのまま実行しようとしている。そして「やめない」とまで言い放った。

恐らく、本人は本当にやりたいだけなのだろう。だからこそたちが悪い。湊や奏子と相性が悪い。こうなった兄は止まらない。こういうところだけ、やけに頑固なのだ。

「私も湊もッ！ お兄ちゃんの名と引き換えに救われたくなんかない！ そんなことしてもらって、この先…どうやって生きてくの!？」

奏子が立ち上がって表情を険しくして叫んだ。奏子が叫んでいなければ、湊が叫んでいたであろうそれを奏子が代わりに叫んでくれたことに湊は息を吐く。が、同じように表情を険しくする。問題は、優希の返答だ。

「ああごめん、生理的嫌悪については考えてたけど考慮はしてなかった

た。確かに兄からこんなこと言われたら信じられないしキモいだけだよな…でもなるべくキモくないようにひっそり消えるから安心してほしい」

(やっぱり…)

奏子の叫びの意味もまるで伝わっていない。心配する点が全く違う、と湊は内心で溜息を吐く。

湊と奏子は優希に救われることやその向けられる思いが気持ち悪いから嫌だと言っているわけではない。

「違う」

思わず湊はそう吐き出した。溜息は我慢できても言葉までは我慢できない。どうしてこうも兄はわからずやなのか。どうして、こうも自分に向けられる感情に関してはどことん後ろ向きなネガティブになるのか。

「えっ違う？　じゃ、じゃあ今すぐ消えろってことか？　わかった。今すぐに寮を出ていくから——」

「違うの!!!　行かないで!」

「え？　え？　ならどうすれば…」

奏子にまで「違う」と言われ、おろおろとする優希に湊はもう一度溜息を吐く。

家族として愛してくれているのはわかっている。救いたいと思ってくれているのも、それが自己満足なのだと思えるのもわかっていて。が、それではだめなのだ。

「私の言った『救われたくない』っていうのは、お兄ちゃんの命を犠牲にして救われるのが嫌だって話であって、気持ち悪いからとか迷惑だからとかじゃないの!　どうして、なんで…そんなことなの!?!　私も湊も、お兄ちゃんと一緒に生きてほしいから嫌なの!　お兄ちゃんが死んじゃうこと自体が嫌だってわかってよ!」

駄々をこねる様に「嫌」と連呼する奏子に、優希は苦虫を噛みつぶしたような顔になった。

そして、大きく息を吐いて再び口を開く。

「…言っただろ。俺は、バグったゲームのNPCみたいなものだって。

本来なら居るはずがないんだ。俺は、湊と奏子の記憶を思い出すことなく。10年前の事件以降、家族に戻ることもなく。他人のまま、無関係で、ただの三上優希として、最後までこの出来事に関わることは無い。そういう存在だった。すべて終わってしまったから初めて思い出した、何にも知らない薄情者だったんだよ。元々いなかったんだから、消えても何の問題もない」

「そんなこと知らない！ お兄ちゃんはちゃんと今、ここにいますでしょ!? ここにいて、私たちの家族で、お兄ちゃんです：特別課外活動部の仲間にいるのに！ 消えていい人間でも薄情者でもない！」

恨んでくれとでも言いたげな優希に奏子が言い返すように言葉を否定するが、優希の顔色は優れない。それどころか、合わせていた視線をついに奏子を含む全員から離すように俯いて首を横に振った。

「……、俺にとっては、今まで繰り返してきた1年で出会った湊と奏子は同じじゃないんだ。みんな、微妙に違う。なら、大切な弟と妹というのは同じであっても俺にとって全員が別の存在と言える。救えなかった、ひとりひとりなんだ。たとえ、時間を巻き戻してなかったことにしても、それは覆らない。無かったことにはならない。俺の中から、なくならない。だから、俺が薄情者にならないんだ」

震えた声で吐き出されたそれに奏子はようやく合点がいった。

9月の大型シャドウ戦のあと、優希と言い争いになったあの日。兄が別の何かを見ているように感じた正体がこれだったのだと。

優希は、これまで救えなかった湊と奏子の回数分、その命を背負っている。否、気負っている。それも勝手にだ。

だが、湊と奏子が許すと言っても、他の励ましやどんな言葉をかけようと兄はそれでも自分を責めることをやめないだろう。言葉通り兄にとってはこれまで救えなかった弟妹を全員別の人間だと認識しているのだから。

ここで重要なのは優希が湊や奏子に許しを得たいと思っているわけではなく、優希が優希自身を許さないという感情を持っていることの方だった。

ここまでくると記憶を失ったままの方が兄にとっては幸せだった

のではないかという気持ちすら奏子に芽生える。だからこそ、言葉を吐かずにはいられない。

「そ、そんなの……！ これまでの私たちだって頼んでないし望んでないよ、きつとー！」

「言つたら、だから自己満足だつて」

その短い言葉で、切り捨てられる。

これに関してはただの言葉だけでそうじゃないと否定できるものでもないのだと、改めて奏子は自覚した。どうやっても、優希自身が自分を許せないと終わることがないのだ。

「…俺からも、聞きたいことがあるんだけど」

顔を俯かせたままの優希が、腹の底から発するような低い声で言葉を絞り出した。

「どうして俺が『ループ』してるって思ったんだ」

前髪から覗く目がギラギラと獣の様に輝いている。

返答をひとつでも誤れば、喉元を食いちぎられそうなその獰猛な目つきに全員がたじろいだ。

「そもそも、これが俺の作り話だとは思わないのか？ 嘯うそぶいて、みんなに合わせているだけだと思わないのか？ こんな荒唐無稽な話、よく信じられるな？」

しかし上げられた顔に浮かんでいるのは獰猛な笑みではなく、一見嘲笑に見える泣きそうな顔だった。

「信じてほしい」「信じて欲しくない」という相反する感情がその表情を作り上げているのがありありと見て取れた。

優希の作り出したそれは、カダスで見たニヤルラトホテプの嘲笑に比べて何倍も下手糞だ。

「それは…カダスという場所で…」

「ああ。だから俺はあそこから出て…その結論に至ったのも、全部見たからつてことか…」

言い淀んだ美鶴の言葉で全てを察したらしい優希がひとりごちる。

あつさりと受け流した優希に湊と奏子はどこか引つかかりを覚えただが、冷めているといえいいのか妙にあつさりしているのはこの話

し合いを始めてからずっとだ。

湊と奏子に関することだけは感情をにじませていたがそれ以外は冷静過ぎるにもほどがある。

「まさか…先輩はカダスでのことを、覚えてるんですか？」

「いや、覚えてるって訳じゃない。テレビの中へと入ってしまったということと、あそこがどういこうとこなのかってのをなんとなく知ってるだけだよ。記憶は…ほとんど無いかな」

「そうですか…」

嘘を言っているようには見えない優希に風花は少しだけ落胆したような声を出した。

もしかすると、同じようなことが再び起こるかもしれない。もしもその時の参考として聞いてみたかったのだが、覚えていないのなら仕方ないと諦める他なかった。

「それだけじゃない」

そこで話を終わらせなかった湊に視線が集まる。

「僕も『ループ』してるから」

「は…？」

優希はまるで惚けたような、なんだそれといわんばかりの顔をしたら。

「最初は転寮の日に優希が駅まで迎えに来てくれた。そして影時間になって寮に向かう途中で、最初の大型シャドウに襲われて、優希は僕と奏子を逃がす為に囮になって死んだ」

「は…？ え…？ まってくれ、どういう…ことだ…？」

わなわなと、また口を震わせながら顔を青くした優希は信じられないものを見るような目で湊を見つめた。

「2回目は10月の大型シャドウ戦の時に荒垣先輩を庇ってタカヤに撃たれて死んだ。3回目は、天文台で幾月に殺された。4回目は体調が悪かった奏子と奇襲を受けた僕を庇って死んだ。5回目はコロマルがイレギュラーシャドウに襲われた日、たぶん、コロマルを助けようとして、そのまま…僕や真田先輩達が駆けつけた時には大怪我をしたコロマルを庇うようにして死んでた」

羅列される己の死因に何を思ったのか、優希は黙り込んでいる。その横で、コロマルが鼻を鳴らして吠えた。

「クウーン…ワンワン！」

「コロマルさんが、『あの時誰も来なかったら死ぬ可能性は大いにあった』と言っているであります。湊さんがおっしゃったことと優希さんのこれまでの行動を考えれば、いずれも有り得ないこととは言い難いかと」

それをアイギスが翻訳すれば、観念したような表情で優希は口を開く。

「ひとつ。確実にルール違反として俺自身が殺される条件がある。それが、『転寮の日、湊と奏子を駅まで迎えに行く』こと…：…なんで満月の日じゃないのに大型シャドウに襲われたのか、わからないけど…湊の言っていることは…冗談でも…なんでも…：…ない…？」

そして、頭を抱える。

湊はどうして優希がこんなに狼狽えるのかよく分からなかった。ループしているのなら、記憶があるはずだ。なら、こんなに狼狽える必要はないのではないか。

その狼狽えようがどうも不安で、念を押すように追撃の言葉を発した。

「僕が面白くもないこんな不快になるだけの冗談言うと思う？」

「ああそうだよ…クソツツ…わかってる！ 湊と奏子がそういうタチの悪い嘘はつかないってことくらい！ わかってるさ！ けど…」

ガシガシと頭を掻き毟ったあと「俺は知らないんだ」と小さく優希は呟いた。

知らない。

その言葉を湊が脳内で反芻し、理解するまで数秒ほどを要した。

「知ら…ない？」

やっと吐き出せた言葉は同じく優希の言葉を繰り返しただけの陳腐なもの。

湊のその問いに、優希は小さく頷いた。

「俺は、湊が言ったような死因で死んだ記憶が無い。本当に、知らない

んだ。俺が何も知らない俺で『周回している』という認識のないまま歩んだ1年が何回もあることになる。でもそうなるって湊が見たつていう俺の行動がおかしいんだ。記憶が無ければ10月の大型シャドウ戦で荒垣くんがタカヤに撃たれて死ぬこともわからない。7月にコロマルを助けようとするのもできるはずがない。だって、知らないからね」

優希は視線を下げ、人差し指を唇に当てて考え込む。

湊からすればその発言は衝撃的以外の何物でもない。湊は優希がループしていると判明してから、ずっと優希が分かっているという行動をしたと思っていたのだ。

しかし蓋を開けてみればそうではないという。

「うーん、湊が『ループ』していると信じるにしてもなんでそうなってるのかの判断材料が足りないな…」

情報が欲し気な、乞うような視線を向けられて今度は湊が観念したような表情になる。

いずれは言わないといけない事であるし、優希以外の全員にはもう知られてしまっている。

「僕が『ループ』する条件は、2010年の3月5日に眠りにつくこと。『ループ』から抜け出す方法は…わからない、けど僕が繰り返した8回全てで優希は2月1日を迎える事が出来てない。全部死んでる。だから、9回目に僕は…優希が死ぬのはダメだって思って時間を巻き戻した」

「湊が…巻き戻した…？ 湊にはそんなこと出来ないはず…」

「優希は、僕と奏子を救えば終わりだって言ったよね？ それは成功しかけてたんだ。でも、僕が止めた。無意識に時間を巻き戻してしまった」

直接言わないでも分かっただけだった。

湊は今この時点でニクスの封印をすれば死ぬことになる、と皆に知られたくは無かったからだ。

そうやって湊がじつと優希の目を逸らさず見ていれば、一瞬眉を顰めてから納得したように目を見開いた。

「成功しかけてた…？ ああそうか…アレなら…いやでも、それなら…湊、そのとき俺が使った“アルカナ”はなんだったかわかるか？」

完全に現在の思考の方に集中しているのか、湊が阻止したというのに特に怒りも落胆もしていない様子の優希に訊かれて思い返す。

あの時優希が携えていたカードの絵柄はこれまでに見た事ないものだった。だが、数字は覚えている。X²X¹I—— “^{Universe}宇宙”と同じもの。つまり、

「…“世界”^{WORLD}だと思う」

「“世界”？ もうひとつの方じゃなかったんだな？」

「うん」

「ならそういうこと、か。奇跡が奇跡じゃなくなるんだからそりやあ時間巻き戻すくらいはできるよな…」

確かめるように訊いてきた険しい顔の優希に頷けば、納得したように苦笑いを浮かべられる。何に納得しているのかも知らない。

しかし何故優希が“宇宙”のアルカナについて知っているのかという事に関してもどこかの周回で知ったのだろうと納得できてしまっていることにまず湊は驚いた。

慣れにしても早い。が、どうでもいいかとそれを流して口を開きかけた湊を順平が遮る。

「ちよい待ち！ なんか勝手にセンパイが納得してるけど、さっきから二人にしかわかんねーよーなことばっか話してないでセンパイも湊もオレらにわかるように話してくれって！ 置いてきぼりじゃん！」

「ごめんごめん。でも、ちよつとした確認だったから特に関係はないよ。大丈夫」

苦笑いのまま、困ったように順平に謝罪した優希は湊が願った通りこのことを話す気はなさそうだった。

もしかしたら、意志を汲んでくれていたのかもしれない。

「順平や俺らに対する答えになっちゃいねえ。どうしても言えねえことか？」

「んー…そうだなあ…説明するほどでもないっていうか。どうでもいいことに成り果てちゃったというか。晩御飯の確認以下のものだったから気にしなくていいよ」

優希の中では湊がどうやって時間を巻き戻したのかを知るのはその程度のことだったらしい。それは既に優希の中では湊が時間を巻き戻したのは“どうでもいい”ことだとして処理されていることを意味していた。

「ああそうそう、それで話を戻すんだけど。俺が『ループ』してるって確かめてどうしたいの？」

ニツコリと、今度は苦笑ではなく綺麗な笑みを浮かべた優希が全員を問いただす。

「え…いや、そこから先は…なにも…、…伊織はどうだ？」

困ったような顔をした美鶴から、順平にキラーパスが投げられたが、唐突に話を振られても答えられるわけがなく順平もおろおろと狼狽えてしまう。

「え!? オレ!? いやいや、オレっちだってなんも考えてねーですよ!? ほ、ホラゆかりツチはセンパイに何か言いたいこと、あんじゃない?」

「はあ!? や、な…ない…けど…もう! ないです!」

全員が顔を見合わせた。

ループしてるのか否かを確かめるつもりではいたが、その先のことを何も考えていなかったのだ。話し合いがこんなにスムーズに行くとも思っていなければ、優希がスラスラと情報を出してくれるとも思っていなかった。もつと、いつものことを考えれば誰かが感情を爆発させてごちゃごちゃとした言い合いに発展するように思えたのだ。

そんな挙動不審の面子を見た優希は思わず吹き出してしまう。

「ぶ、あはは…! うーん、じゃあさ。たぶんだけど皆は“ヒュプノス”からふたつの選択肢を示されてない?」

“と二本の指を立てた優希に風花が「あつ」と声を出した。

“ヒュプノス”と言えばあの日十字架に縛りつけられていた全員を降ろしてくれたペルソナ——否、シャドウだったのではないかと。

となるとヒュプノスに示された選択肢といえは到底覚えがないなどとは言えなかった。

「逃げずに滅びに立ち向かうか、影時間に関する記憶を消して滅びを待つか、でしたっけ」

「そう、それ。バタバタしてたのと俺が迷惑かけてたのもあつてロクに話し合いもできてないんじゃないかと思つてき。俺としては、皆がどちらの選択をしようがそれに従うだけだよ」

ニコニコと笑みを浮かべたまま優希は風花の言葉に頷き、己の意見を述べた。

が、その日和見のような芯のない意見にゆかりが思わず食いつく。「ソレって、先輩の目的と矛盾してませんか？ だって、有里さんと奏子ちゃんが生き残ることが先輩の目的なんですよね？ なら、滅びに立ち向かうって選択をしてくれたほうが良いんじゃないですか？」

そんなゆかりに対し、優希はぽりぽりと困つたように頭の後ろをかいた。

実際、湊と奏子に否定されても「やめない」と言い放つたにもかかわらず、そんな日和見な意見を発した優希は矛盾している。確実に救うにはゆかりの言うように滅びに立ち向かうという選択をしてもらった方がいいはずだ。むしろ、強制的にそちらへと持つていってもおかしくは無い。だが優希はそれを肯定しつつもやんわりと否定した。

「そうなんだけどね。俺は本当にどちらでも構わないんだ。だって俺には誰かの選択を止める権利はないし…あつ、いまテキスト言つてるだろつて思つてないよね？」

「思つてませんよ！ でも私もまだ決めてなくて…突然あんなこと言われて、どうしろつて言うんだろつて、そればかり考えて…」

「まあそうだよね。だって、みんなに世界の命運はかかつてる。それこそ、大型シャドウなんかメじゃないくらいの奴を相手にするんだ。緊張も、葛藤も、恐怖も、不安も。全部全部乗つけたフルコースみたいなもんだよね」

自信なさげに、それでいて困つたように笑う優希の口ぶりは酷く他

人事だ。心配しているという事は伝わるが当事者意識が薄い。

「随分と他人事だな」

「まさか！ 他人事なんかじゃないよ。今からでもタルタロスの探索についていきたいくらいだ！ 思い出した分、使えるペルソナがないだけで考えは浮かぶのに出来ないことが多すぎてさ…」

言われてみればそうだった、と指摘した明彦は納得した。

戦えないのならばそれは蚊帳の外に近い。なら他人事のように聞こえる言動でも納得できる。しかしそれでも我慢できないのかうずうずとしている優希をぴしゃりと天田が窘める。

「あ、ダメですよペルソナがないのに戦おうとするのは！」

「わかってる。皆が探索に行くことになっても、俺はちやんとここで待ってるよ。お荷物になるなんて御免だし」

はあー、と深い溜息を吐いた優希はその後恥ずかしそうに頬を掻いた。「無茶をするな」と口酸っぱく言われているのがようやく伝わったのかどうなのかはわからないが、無理やりついていくような意志は見られなかったのだけが幸いだった。

「だが、私たちはまだ何も決まりきっていない。毎度毎度、土壇場にならないと決められない、というのはなんともな…」

「それも大事っすけど、やっぱり修学旅行が終わってからっつーか？ 考えるならそっからがいいっていうか！」

美鶴の言葉に被せる様に順平が割り込み、調子のいい言葉を吐く。確かに修学旅行は目と鼻の先だ。楽しみにするのも仕方がないと言える。この二択を選べと言われて既に決めているのは未だ優希と湊くらいだ。片方は『できれば』がつくが。

「順平、そう言って宿題最後まで残すタイプだよね…私も言えないけど！」

「うっ」

いつも一緒にはしゃぐ立場である奏子にまで苦言を呈され、思わず順平は呻いた。

まさに痛いところを突かれたような表情だ。

「言われてる日まで皆さんの修学旅行が終わったらあつという間です

けどね。あ、お土産は無理のない範囲でお願いしますね！」

「うぐぐ。天田少年はちやつかりしちやつてサ〜」

「わっ、やめてくださいよー！」

うりうりと天田の額を順平が突けば、天田はそれから逃げる様に荒垣の後ろに隠れる。

「荒垣サンの後ろに隠れるとかずりー！」

「いや、ズルくはねえだろ…」

話が脱線してしまっている。が、誰もそれを指摘することなく自然と話し合いではなくいつもの世間話にシフトしていく。

いつのまにかテレビがつけられ、テレビの話題に移れば話し合いが終わったと言わんばかりに皆は部屋に帰るなりなんなり始めた。

がやがやと騒がしくも明るくなり始めたラウンジで、それを機と見た美鶴は口を開く。

「三上、もう少しだけ良いだろうか」

美鶴のその言葉を聞いてぱちくりと目を瞬かせた後、優希は僅かに笑みを浮かべた。

「いっよ」

誘われるまま、美鶴さんについていけばそのまま部屋に迎えられて美鶴さんの部屋に入ることになってしまった。

（良い香りがする、なんて言ったら間違いなく変態だよな…処刑されそう）

女の子の部屋に入るのには慣れていないのでドキドキすることこの上ない。しかも、美鶴さんの部屋である。

例外は奏子の部屋だが基本的には入らないようにしているしむしろ奏子がこっちの部屋に突撃してくるくらいだ。

もじもじと豪華な椅子に座っていれば、同じく対面に座った美鶴さんが口を開く。

「先ほどは…話しづらい事を聞いてしまって、すまない。いくら異界

で見たからと言って人の秘密のようなものを暴くというのは許されないだろう」

「いや、いいんだ。確かに、思うところがないとは言わないよ。でも：そうだな、ホントにもういいんだ。知られてしまったことも、訊かれることも」

それは謝罪だった。

謝罪されるほどではないので笑いかけてみても美鶴さんの表情は明るくなるどころか暗くなってしまった。

もういい、と言うのは本心だ。少し前の自分なら何故見てしまったんだと憤ってリセットしても仕方ないところだったが、そんなものは誤差と言えるものになってしまったので本当にどうでもいい。

知られたところで何の問題もない、と思う。皆の精神衛生は考えてないけど。

「恨んで、いないのか」

小さく、吐き出された言葉は予想してなかったとは言えないが、美鶴さんにいま言われるとは思わなかったものだ。

「恨む？ なにを？」

「桐条と私をだ。きみは、私たちのせいで——」

「ごめんストップ。わかったから、それ以上言わないでいい」

それは、美鶴さんが言うべき言葉じゃない。

自分から訊いたことではあるが、そこから先を聞きたいわけではない。

そう訊かれれば、答えはひとつだ。

「——恨んでないよ」

「だがっ！」

「恨んでない。美鶴さんこそ、俺のせいで叔母さんを——千鶴さんを失ってる。俺のことを恨んだっておかしくないだろ？」

自分に関わらなければ、少なくとも千鶴さんは幾月に殺されたりしなかった。

爆発事故で死ぬか、拳銃で撃たれて死ぬかの二択になるかもしれないが、それでも、もしかすると何かのボタンの掛け違いであの日事故

現場にいることはなかったかもしれない。

確かに、俺に関わったせいで千鶴さんは死んだ。俺が原因と言っても過言ではないのだ。

しかし、美鶴さんは緩く首を横に振った。

「私は…そのことを加味しても三上の事を恨むことは無い。きみは、どこまでいっても被害者だ」

「ちがうよ、俺は加害者の側だ。だって、世界を救えてたかもしれないのに自分の思い通りにならなかったからって時間を巻き戻し続けている。美鶴さんのお父さんを助けられるかもしれないのに、変わることを恐れて見殺しにした時だって何度もある。今回武治さんが無事だったのはたまたまだよ」

どこまでいってもたまたまだ。むしろ、見殺しにするのは故意にできる。

だからこそ、自分は加害者側なのだ。救えるはずの人間を救わなかったのだから。

「…そうだろうか」

それでも美鶴さんの顔は納得がいつていないようだった。

「現実には、いまお父様は生きています。なら、重要なのはそこではないのか…?」

「え、あ…うーん、そうかも…?」

言われて、考える。確かに美鶴さんからすれば『前回』も『前々回』も『その前』も、関係ないことかもしれない。

知らないし、体験をしていないのだ。なら、見殺しにしたと言われなくても実感はないに等しいのではないだろうか。

「私は…思うんだが、三上がこれまで経験してきたことは確かに大事だろう。蔑ろにしたくないと思う気持ちも、完全に理解できているとは言えないが尊重したいという気持ちはある。だが、私たちにとっては『今』しかないんだ。だから、きみへの気持ちも…その、『今』の私たちの物だ。はっきりと言うならば、私たちの知らない、起こらなかったことにきみが執心してしまうのは、好みではない」

すり、と目の前に座る美鶴さんが己の手を撫でた。

その姿が優雅かつ妙に艶めかしくて、「好みではない」と言われたことも忘れて思わず顔を逸らしてしまう。

「そうだな…面白くない、というのかもしれないな。私は——きみの中にいる『今』の私ではない私に『嫉妬』している」

「目を逸らさずにこちらを向いてくれ。私は、ここにいます」

対面から手が伸びてきて、くい、と軽い力で美鶴さんの方へと顔が向けられた。

抵抗しようとするればできる、ほんの軽い力だ。だが、先ほどとは違い視線が美鶴さんから離れない。

「恨んでいない、と言ってくれた事は嬉しい。救いともいえるかもしれない。私は、ずっとそれだけが気がかりだった」

美鶴さんの瞳は、潤んでいた。

泣きそうなその顔に、思わず口開いて言葉を発してしまう。

「あのさ、なら、もうこのことは白紙にしない？ 桐条でも、その被害者でもなく、俺はただの三上優希で、美鶴さんの友だちで——美鶴さんもただの桐条美鶴っていう、か、可愛い…女の子でさ。だから、だから…」

羞恥で顔を真っ赤にして、しどろもどろになりながら情けなく言葉に詰まる自分の目の前で、美鶴さんが泣きそうな笑顔で首を横に振る。

「いいや、それではだめだ。だめなんだ」

もしかしたら、友だちと言う関係も白紙にしたいという事なのだろうか。

もしそうなら先ほどの自分はピエロにもほどがある。これからも以前と変わらない関係が続けていこうにも、傲慢がすぎると言うものだった。

それもそうだ。美鶴さん個人が恨んでいなくとも、『ループ』していると周囲について知ってしまったら気まずいにも程がある。付き合いを控えたいと思うのも無理はないだろう。

期待していた自分がバカだった。そんなプラスな感情を向けて貰えるわけがなかった。

美鶴さんが口を開こうとする。

ああ——きつと今からあの口から綺麗な声で死刑宣告がなされるのだ。もう終わりだ。

いや、終わりなのも仕方のない事だ。いい頃合いじゃないか。何を落ち込んでいるのか。

「好きだ。三上」

その言葉に俺は、目を見開いた。

愛は哀より (11 / 14 ~ 11 / 16)

好きだ、と言ってくれた美鶴さんに対し舞い上がりそうな自分がいる。

今すぐ抱きしめて、喜んで、「俺もだ」って言いたい。言ってしまう。けれど、表情を動かすことが出来ない。喜びの色を表すことが、できない。

「友達でも、仲間としてでもなく、私個人の気持ちとして、きみのことが好きなんだ」

だというのに美鶴さんはこんなにも自分を想ってくれている。

好きだ、という事は勇気がいることだ。先ほどわだかまりを解くようなことをした後とはいえ、こんな空気の中でそう言ってくれたという事は嘘偽りない気持ちなんだろう。

「嬉しい」と「どうして俺なんかを」という気持ちがぐるぐる回る。だって、つり合わない。俺と美鶴さんじゃ、つり合わないんだ。

「……秘めようと思っていた。許嫁がいる私が持つべきではない感情だから、と。だが、いま言わなければ……きつと、もう伝える機会は二度と来ないと思ってしまった」

美鶴さんの中でも、葛藤はあつたらしい。そりやそうだ。美鶴さんには許嫁がいる。

そして許嫁との結婚というのは家同士の取り決めのようなものだ。そこに個人の感情は含まれない。

できるなら、今すぐ許嫁から美鶴さんを奪って誰の目も届かない場所に閉じ込めてしまいたい。心だけじゃなく、身も。独り占めして、俺だけを見て欲しい。その全てを俺だけに向けて欲しいと思ってしまう。そんな感情がぐるぐると渦巻く。

でもそんなこと許されないしできやしない。俺には、どちらが美鶴さんの幸福なのかわからない。

いや、俺と一緒になれば確実に美鶴さんは不幸になる。それだけは確実だ。

だから、俺の答えは――

「…ごめん。俺は、美鶴さんの気持ちに応えることはできない」

目を逸らして爪が食い込むぐらいに拳を握り締めながらそう言えば、美鶴さんが大きく目を見開きそして目を閉じた。

落胆するような、諦めともつかない表情で彩られたその顔を一筋の涙が伝う。

「そう、か…」

泣かせてしまった。そのことが罪悪感となって襲い掛かって来る。けれどきつとこれで良かったのだ。

「その理由は、私に許嫁がいるから…か？」

「…」

返事を返すことはできなかった。

そうだと肯定することも、そうじゃないと否定することも、今の自分にはできない。

「それとも、きみが…：…1月31日には、死んでしまうつもりでいるからか？」

「…っ」

どうして、なんて言葉も吐けない。

喉が張り付いて息が上手くできない。なんでそのことを知っているんだらう。そんなこと、『日付も決まりきった確定事項として』は言っていないというのに。

「私がきみに生きてほしいと思うのは…っ、傲慢なことなのか!? 私 はきみが好きだっ！ だから生きていてほしいと願うのもダメなのか？ 私とて、君が私に私と同じような好意を抱くことを強要できないことくらいわかってる！ 否定されることも予想していた…だが、私の隣でなくとも…生きてくれたっていいじゃないか…私は…もう、それだけでいい…！」

「…それは、無理だよ」

それ以外、何も言えなかった。

上っ面だけの「そんなことないよ」という言葉すら言えず、美鶴さんの不安を払しよくすることもできず。無能なまま。自分の意見だけを押し付けた。

美鶴さんの好意に応えるよりも、美鶴さんの「生きて欲しい」という願いを受け入れる方が自分には難題だった。

立ち上がって、部屋から出ていこうとする自分を美鶴さんは引き留めようとはしない。俯いて、ただただ沈黙していた。もしかしたら、泣いてしまっているのかもしれない。

けど、それでいい。これでいい。いつそのこと嫌ってくれ。恨んでくれ。暖簾に腕押しだと、俺に向ける好意すべてが無駄なのだと言めて欲しい。

そうすれば、負うかもしれない傷は少しでも浅くなるはずだから。

11月15日(日) 昼

(寒い…)

寒さで目が覚めた。もぞもぞとズレていた布団を引き寄せ、くるまの様に再び潜り込む。

なんとなく、朝ちゃんと起きて朝食を食べる気になれなくて二度寝を決め込んでしまったのだったっけと思いつく。

布団から腕だけを出して枕元の時計をひつつかみ、布団の中に引きずり込むようにして見れば13時を過ぎている。寝坊にもほどがある時刻だった。

布団から出たくない。今出てしまえば冷えた部屋の空気に一気に体温がうばわれることこの上ない。ただでさえ低いのに、これ以上冷えて貰ったら困る。

何をするにもおっくうだ。外出をする気力もなければ読書をする気にもなれなかった。

なので、思考をぐるぐると回すことにした。予定の確認でもいいかもしれない。

昨日の自分は美鶴さんの告白を断って傷つけた。はっきり言って最低だと思うし謝らなければいけないのはわかっている。けれど、出来そうにない。顔を合わせることにすら気まづいだろう。

夏に美鶴さんと観たロマンス映画なら、あそこで告白を了承し晴れて結ばれて問題が何もかもとんとん拍子に解決してハッピーエンドだったのだろう。

だが、そうはならない。これは現実だ。そんなわけにもいかない。だから仕方がなかったんだ。許嫁から美鶴さんを奪ったあげく、その後すぐに死ぬ彼氏なんていらないだろう。他人の御家の事情をかき回すだけかき回して死ぬなんて許されない。例え、両想いだとしても美鶴さんは勘違いしているだけなのだ。

自分は美鶴さんに想われるほど出来た人間じゃない。狡く、汚い存在だ。だからこうして逃げ続けている。

そのくせ、『普通』の関係は続けていきたいだなんて狡い以外の何と云えるんだ。嫌われるなら嫌われた方が良いのには、自分はどこん臆病者なので予防線を張ってしまう。

（――ああ、そっか）
自分は、美鶴さんの事を『愛している』訳じゃない。単に、『好き』なだけなんだ。

『好意が持てる』。ただそれだけだった。そう思い込むことにした。

だって、閉じ込めて独り占めしたいだなんてそんな歪んだものが愛なわけがない。きつと、もつと他者へ向ける愛というものは綺麗なものはずだ。映画の中のそのように。

そう自覚した途端自分に対し、気持ち悪いという嫌悪感しか浮かんでこない。吐きそうさ。歪んでいるからどれだけ言われても、願わなくても、生きようとしな。美鶴さんの願いを優先しようとしな。

どこまでいっても自分本位。自分だけを愛している。自己愛の獣。幾月が天文台で『パンタソス』に言ったことは何ら間違いないやないだろう。ある意味、ニヤルラトホテプの化身のひとりらしい幾月の言い得ていたところともいえる。

認めるのは癪だが、自分と幾月はよく似ている。

幾月は世界を滅ぼすことによって。

自分は、何度も時間を巻き戻しながら弟妹を救うことによって。

それぞれ自己愛を達成しようとしている。世界を巻き込んだ迷惑さはどっこいどっこいだろう。

だからこそ、似た者同士で同族嫌悪を引き起こす。自分が無意識に感じていた幾月に対する嫌悪感は、実験を受けていた時の物と同族嫌悪の二種類あつたのだ。

似ていたからこそ、相容れない。相反するものになる。非常に似通っていても、まったく同じではないから。それぞれがそれぞれで認められないものがあつたからぶつかったただけだ。

ごろりと寝返りを打つ。

気が滅入る思考ばかりしていたら落ち込むばかりなので気分を変えてこれからあることについて考えよう。

明日——月曜日に一度登校して、その次の日からは修学旅行だ。

荒垣くんから頼まれた土産を買い忘れないこと以外に修学旅行で気をつけることは特にないので懸念はないだろう。気を抜いて、ゆつくりのんびり観光だ。

シャドウの襲撃があるわけでもないし、危険はないはず。悪魔の襲撃は知らない

次にあるイベントと言えば22日のタルタロス前で起きるチドリやストレガとの戦いだがそれも今となっては起こりようがない。タカヤ達とは現在敵ではないし、伊織とチドリは相思相愛と言つても過言ではないくらいにイチヤイチャしている：らしいから。起こるとすれば痴話喧嘩くらいだろうし、(チドリが伊織に手斧をブン投げなければ)命の危険はないはず。別に何か代替があるとしても誰かが死ぬようなことにはならないと思いたい。ただ、そうなると伊織のペルソナの覚醒がどうなるかというのは不安点だがもしかしたらそこも何らかのカバーが入るに違いない。そうならなくてももう大丈夫なところまで来ているが。

なら、問題は12月2日の満月の日だ。おそらくその日にアイギスは全て思い出す。

ムーンライトブリッジの上で全て思い出して、そして死^デの宣告者^スと戦闘になつて大破してしまはずだ。

大破することによって死にかけ、「死にたくない」と自覚するきつかけではあるがなるべく酷くならないように気をつけてあげたい気はある。かといって、できるかどうかは別問題ともいえる。

それに自分はその日の影時間に別に行くところがあるので皆と共にいけそうにない。ついでにいえばペルソナが使えないのに影時間に外出したとなれば大目玉を食らうこと間違いなしでもある。

なので別行動がばれないよう、出来ることならそのままアイギスも纏めて全員で影時間が終わるまで「ヒュプノス」と戦っていてくれる方が嬉しいのだ。双方に戦意があるかどうかは置いといて。

ただ、自分にとってはこの日が正念場だ。この日さえ、想定していること以外何事も無く過ぎれば湊と奏子の生存が確定する。1月31日まで待つ必要など、どこにもなかったんだ。

「くっ、ふふ…ふふふ…」

おかしくて、思わず笑いがこぼれる。

俺の、勝利だ。

ファイルモンや「奴」が何をしようと、もう覆らない。その前に地球を爆発させる、とかになったら流石に駄目かもしれないがそういう面白くない事はしないだろう。

今からその日が楽しみで仕方がない。まるで遠足の前の日の様に心が浮つく。

修学旅行の前々日と言う点ではある意味遠足の前の日、に近いかもしれないが修学旅行自体に浮ついた気持ちはない、はずだ。たぶん。

テンションが上がってきたことにより布団から出てもいいか、という気分になってきた。

修学旅行に持っていく物の準備もしなくてはならないし、そろそろ洗顔と歯磨きもしたい。

のそのそと布団から出て、欠伸をひとつ噛みしめた。

モコイさんという同居人がいなくなってしまった分、なにをするにも億劫になってしまった節があるが恐らくモコイさんと一緒にいて外出しまくっていた『今回』がおかしかったのだろう。

基本的に自分はインドア派だ。街を散策することはあれどもそれ

が終わってしまえば用があるときしか外に出ない。主に食べ歩きとか食べ歩きとか食べ歩きとか。

食べ歩きしかしてないというのはこの際気にしないことにした。

唯一積極的に外に出ていたのは——というより殆ど寝る以外に家に帰らなかつたのはアパート暮らしかつ不良の真似事をして学校に行かなかつた周ぐらいだ。外とは言ってもあの時は常にたまり場や薄暗いところにいた気がする。それも途中から寮暮らしになったので1年丸々というわけでもないが。

色んな可能性を探っている内にヤケになつて興味本位からピアスホールを開けたりタバコを吸ったり飲酒をしたり喧嘩三昧だったり非行に走りまくつてみた周でもある。

けど派手な非行は自分に合わなかつたので二度としない。してない。あんなの、頭がどうかしてたに違いない。今過去の自分に出会えるなら頭ひっぱたいで「絶対にやめとけ」って厳しく言い含めたいくらいだ。

よくあの周は勘当されなかつたなと思う。親不孝者にも程がある。もしかしたら養父母は知らなかつた可能性もある。主に幾月が情報をせき止めてたとか。

でもまあ、悪いことをしたのに変わりはない。その非行のおかげで荒垣くんと繋がりができて巖戸台分寮に入ることが出来たとしても、だ。

不幸にした人が多すぎるしあの時は厨二病真つ盛りだったと言わざるを得ない。

恥ずかしすぎる黒歴史だ。絶対にこれだけは死んでも明かすつもりは無い。墓まで持つていく。

ちなみにタバコはめちやくちや不味かつたけどカツコつけて吸つてたし寮に入つてからは「寮に入ったから非行もやめたついでに吸うのやめました!」という建前でサツパリ止めた。ビールも無理。チューハイは美味しかったけれどジュースでいいじゃんつてなつたので1度きり。

その代わり棒状の砂糖菓子をポリポリ齧つても生暖かい目で見

られるだけで済んだ。困ったのは制服の臭いがタバコの甘い匂いだらけになったことくらいか。しばらくその匂いが抜けなかったのを思い出す。

人間関係は黒沢さんを含めた大人や美鶴さんや真田くんとか寮のメンバーからは不良だったからめっちゃやくちや評判悪かったしかなりギスギスした。

ギリギリ適正持ちってことと荒垣くんの紹介だからみたいなどで首の皮が繋がった感じではある。元々寮のメンバーにあまり関わっていないかった周だからなのか、『今回』と違って一度も同じクラスにならなかった美鶴さんから明らかに信用ならないと言いたげな目で見られたのはあの時くらいだろう。見られても仕方ない行いをしたから妥当とも言える。ただ、同じような不良やどうしようもない掃きだめのクズ以外には手を出していないだったのでそこは許して欲しい。喧嘩を買っただけで売った覚えもない。

だから無関係で善良な人を殴ったりするほど自分は落ちぶれてない、と思いたい。

ヤケになった報いか針のむしろみたいな状況だったが、唯一、何故か知らないけどその周の湊だけが積極的に話しかけてきた気がする。湊にもこちらの記憶がなくて、自分はただの先輩で他人という関係だったのにかかなりの頻度で部屋に来てたし屋上で隠れてタバコ吸う振りしてラムネを齧ってれば気がついたら横にいたし、とにかく行く先々で会っていたような気がする。自分は我関せず、といった感じで「好きにすれば？」って言うだけにして特に相手にしないようにしてたし、気にかけるにしてもこっそり気を使うだけで日常生活ではすぐ更生しても怪しまれるだけだったしイメージ通りの非行少年みたいな行動を心がけるようにしてたから気の所為かもしれないけど。

好奇心の旺盛な奏子ならともかく湊がこんな近くに近寄ってくるのは珍しいなと思っていたのだ。

ヤンキーとか不良に憧れがあったんだろうか。もしくは珍獣扱いか。どの周の湊も大抵は荒垣くんにも物怖じしないし、その可能性は大いにあるかもしれない。

「…あ」

そんなことを考えながら一通りのいつもの用意を済ませて荷物を確認していれば、『遺せる物』について何も考えていなかったことを思い出した。

ちようどいいから修学旅行で適当にお土産として買ったものを——なんてことをしたらボッコボコにされそうなのでやめておこう。かといって、あまり思い出の籠ったものを遺しても重いだけだ。思いだけに。なんちやって。

……。

自分でギャグを脳内で言っただけで寒気がしたのでやめておこう。幾月と自分は似ているのかもしれないが自分にオヤジギャグの才能は無かったようだ。

遺す物についてはなるべく役に立つものの方が良い、気がする。しかしあまり大きいものだとか湊と奏子も困るだろう。

レシピ本とか良いんじゃないだろうかと思っただものの、自分の味というものがなく作れるわけが無いので却下。そういうのもなんだか重い気がしてきたし、形あるものを残そうとするのは凄く難しいと今更に気がついた。

特殊な処理をするにしても、しないにしても、あまり自分からの物だと悟らせないような、それでいて2人が持つていてもおかしくない違和感の少ないものを選ばなければいけないというのは難しい。

名前入りなんて論外だし、写真もアウト。

やはり、京都土産で適当な物を買った方が1番当たり障りなさそうな気がしてきた。どうにもこうにも滅びを受け入れるにしろ回避するにしろ記憶の修正は絶対に入るだろうから、記憶に残らないものの方が絶対が良い。何かのきっかけでこちらのことを思い出されて傷になったりしたら嫌だ。もし滅びを回避した後もギリギリ生きていたとして、今際に「死ぬな」って泣き叫ばれるのはもつと嫌だ。

死ぬ時はひっそり死にたい派なのだ。

出来ればベッドの上で、寝る前に「おやすみ」って挨拶してあつさり死にたい。持病の発作とか自然死に見せかけたい。ベッドの上は

ベッドの上でも病院のベッドの上は嫌だ。わがままだけれど、これくらいが一番自然な気がする。

でも確か、自宅や寮で死んだ場合は警察に連絡しなきゃいけないんだっただか。事件性の有無うんぬんで。

それなら病院のベッドの上がいちばん迷惑がかからなさそうではある。

「！」

もしかして、自分が遺すべきなのはお金なのでは？

現ナマ。またの名を葬儀代。ううん、生々しすぎるような、そうでは無いような。親の立場からしたら嫌かもしれない。

これは難しくなってきたぞ。

パソコンでも立ち上げて「遺す 家族へ 死ぬ前」ってキーワードで検索した方がはるかにマシンな答えが出てきそうだ。遺書とかオススメされそう。

それにしても、どうして辰巳記念病院の担当医も朝倉先生も『何も悪くない』『健康そのものだ』なんて言ったんだろうか。

持病も身体の不調も治った訳では無いんじゃないかと疑念を持ったのはついさっきだ。

健康になったのなら、体温だって元に戻るはずだ。なのに、冬だということ差し引いても今の自分の体温は低い。かといって、特有のだるさやしんどさはない。ならもう不調を不調として捉えられないのではないのか。

数日前に体調がマシンになったと喜んでいたが、それも感覚が麻痺してきたからであって全く良くはなっていないなかった可能性が出てきた訳だ。

かといって機械での検査もしていたし朝倉先生はカンの鋭い人だ。ちよつと変ならピシヤリと言ってくるはず。

本当に、健康に戻ったのだろうか。臓腑を溶かすような薬を飲んで、何度も吐血していたのにな？

未知なる力で治ったとか。

自分の感じている『死の気配のようなもの』は身体が持たなくて単

に死にそうだからではなく、降臨が確定しているニユクスの気配だとも言うのだろうか。だから、気の所為だと。それならそれでとても嬉しいのだが、そうなったとしても死ぬ事には変わりないので遺す物を考えていた方がいいのは確かだ。

（金の延べ棒とか？ 金は普遍的価値を持つって言うし、困った時に売ってもらえれば良いし万能なのは）

と思ったが、自分が受け取る側なら微妙な気持ちになることこの上ないのでやはり却下になった。

修学旅行に持っていくもので足りないものがあつたので、それを買いに行つたついでに神社にお参りをする事にした。

フィレモンやニャルラトホテプといった神はクソ喰らえだと思いが、こういった地域に根付いた神様は敬おうという気持ちで湧くのだから自分はどこと日本人なんだなと思わざるを得ない。

階段をのぼって境内に入れば、寒い日だと言うのに薄着の青年がひとりベンチに座っていた。そしてこちらを視界に入れた瞬間、驚いたように僅かに目を見開いて口を動かしたのが見えた。

はて、どこかで会つたことがあつただろうか。

自分には覚えがない。湊と自分を見間違えている、という可能性の方が高い。

湊と奏子の交友関係は自分と違ってとても広いのでこうして歩いているとたまに間違えて声をかけられることがある。身長は湊と奏子より大きいのだから見間違えようがないと思うのだが、何故か間違われてその後慌てて謝られるまでがセットだ。今回もおそらくそうなのだろうとペこりと会釈してさっさとお参りしてしまおうと思つた。

顔色の悪い青年が気にならない訳では無いが勘違いならあまり話しかけなくてもいいだろうしあとで交友のありそうな湊か奏子のどちらかが訂正してくれるだろう。

12月の満月の日にやるのが上手くいきますように、と願掛けをして足早に立ち去ろうとした。

「…いほつ、いほついほつー」

咳き込む音に足を止め、そちらを向けばベンチで先ほどの青年が激しく咳き込んでいた。

喘息だろうか。なんにせよ、無視をすることなどできない。今、自分がここを離れたらこの境内に彼は一人きりになる。もしその時にもつと悪化したら？ 死んでしまったら？

そう考えただけで何も知らない他人相手だというのにぞつとした。

「…き、みは…げほ…ほっ！ 僕を…迎えに…」

「違います。あの、えと、楽になるまで横にいます。もし必要なら病院に連絡しますから」

「げほっ…」

有無を言わずに隣に座って、ゼイゼイと苦しそうに息をする見知らぬ他人の心配をする自分は変な人間だろう。ただただ何もせずに見守るだけというのおおきな話だ。けれど、素人が変に手を出して悪化させても不味いだろうしこの青年が咳き込んでいるのが喘息だという確証もない。ただ、見守ることしかできないのだ。湊か奏子がいればもしかしたらなにか分かったのかもしれないが、生憎と今日は一緒ではない。

しばらく咳き込む音を聞きながら、じつと収まるのを待っているのだんだんと咳き込む回数が少なくなり、落ち着いてきたようだった。先ほどは虚ろで焦点のあつていなかった目がしつかりとこちらを向く。

「収まってきた、みたいだ。ありがとう。…君は、あの変わったふたりの子の家族だろうか？ 女の子と、男の子の」

自分に似たふたりで変わった女の子と男の子と言えば十中八九奏子と湊だろう。それ以外に思い当たらない。それ以外だとしたらむしろ驚きだ。

やはり2人の知り合いだった、というわけだ。なので頷けば、嬉しそうに彼は笑った。

その瞬間、ふわりと嗅いだことのある匂いがした気がした。

「そうだと思ったんだ。けほっ…顔は彼によく似ているし…それでいて雰囲気は彼女に似ている」

ああでも、と青年は続ける。

「ちよつと違うな。ふたりとは、何か」が違う。彼らといると僕はすごく穏やかなんだ。それに反して、君は冷たくて暖かい。まるで——いや、なんでもないよ」

言葉をはぐらかした青年はやんわりと弱弱しく微笑んだ。

何を言おうとしたのか気になるが、言うのをやめたという事はきつと彼の中では言い表せないようなことだったんだろう。自分は彼のことをよく知らないが、自分なら言うのをやめるときは言い表せない時か純粹に言えない時だ。

「なんとなくふたりを待っていたんだけどね。きつともう、今日は来ないだろうから」

恐らく約束を正確に決めたことではないのだろう。だから、彼も気にしていない。本当になんとなく、来てくれればいいなという程度の感覚でここにいた。こんな寒いというのに、だ。

彼はあまり身体が丈夫ではなさそうだし、こんなところにおいていいのかという気持ちがあるが慣れた様子を見るに自分が止められるものでもないだろう。

「彼らとはもう一期一会を過ぎて何度も会っているけど、君とはなんだか本当に一期一会になってしまいそうな気がするよ。僕は君の名前を知らないし、君も僕の名前を知らない。けど、それでいいんだ。これが普通のことだから」

ほう、と息を吐いた彼は寒そうに己の腕を擦った。

「僕はもうすぐ死ぬ。遺伝性の難病でね。この前薬も止めたしもう入院も必要なくなった。あとは死ぬのを待つばかりともいえるね…それでも、僕は満たされているんだ。最期に彼らに出会えて生きた意味を知ったからね」

彼は「もうすぐ死ぬのだ」と自らの死期を悟っている。感じた匂いは間違いなく死の匂いそのものだろう。冬の足音に紛れて、この青年に忍び寄ろうとしている。手を伸ばそうとしている。

けれど彼はそうしてまた弱々しい笑みを浮かべる。

「——出会えて良かった」と、最後に言えそうなんだ…」

その言葉に嘘偽りはなさそうだった。

死を目前にしているというのに清々しきすら感じる。きつと、この青年がこんな風になれたのは湊と奏子との出会いがいい方向に作用したからだろう。けれど湊と奏子もまたこの青年に影響されたことがあるに違いない。それが他者との交流というものだ。たぶん。

「勿論僕はこの一期一会の出会いにも感謝しているよ。君にも、出会えてよかった。例えば君が——」
『でも』
「?」

「ああ、もうこんな時間だ。時が過ぎるのは早いね……ほっ……」

彼の言葉は風に揺られた枝葉の音にかき消され、断片が聞き取れなかった。

けれど、なんとなく、本当になんとなくだが悩んでいたことについての答えを知れたような気がした。

俺が遺せるもの。それは——

11/16 (月) 昼

久々の登校だったのでクラスメイトから心配されつつもそれを何とかいなし、美鶴さんと微妙な空気になりながらも色々はぐらかしながらようやく昼休みを迎えた。

放課後には江戸川先生との面接が待っているし、仕方ないと言えば仕方ないのかもしれないが先週復帰できればこのぎゅうぎゅう詰めのスケジュールも何とかなったのではないかと己の不運と幾月を恨んだ。おのれ幾月。ファツキュー幾月。

正直、疲れた。

寮で過ごしているより他者と会話をすることが多いので圧倒的に疲れるのが早い。体力は大幅に落ちているとみてもいいかもしれない。

基礎トレーニングとか散歩くらいはしないと大事な時に動けなくなるのでその予定を頭の中にメモしておにぎりを齧る。今日は鮭と

梅の気分だ。いつもは購買でパンを買うけれど、流石にあの争奪戦の中を今行く元気は無くて断念した。修学旅行前に骨折とかしたくない。

「み、三上くん、えと…良くなったみたいで良かった…」

恐る恐ると言った様子でやけに緊張しながらこちらに話しかけて来たのは朔間くんだ。

朔間くんが話しかけてこなくても、こちらは朔間くんに用があったので好都合だった。

「おかげさまで。この前はノートとプリントありがとう。返すよ。すぐく役に立った」

「ほんとう？ それなら嬉しいなあ」

朔間くんは差し出したノートを受け取ってへにやりと笑う。

幼さを感じさせるその笑みに笑い返せば安心したように眉を下げた。

授業内容が自分の記憶と同じものか確かめるために、ちよこちよこ合間を縫ってノートを見ていたりしたので実際に役に立っている。概ね記憶通りだったことが確認できたし早く返さないと朔間くんも困るだろうと思ったから手早く返すことにしたのだ。

「あ、修学旅行の班は僕と一緒にんだけど良かったかな…？ 三上くんはお休みだったし、人数が奇数だった僕らの班に入れようってことになって…」

「いいよ。大丈夫。他には誰がいるんだ？」

「え…つと…その…」

そう訊けば朔間くんは少し言いにくそうにもぐもぐと口ぐもる。

「…桐条さんと高梨さんだよ」

なるほど、そう来たか。

あまり美鶴さんという個人に関心がないメンツと仲のいいメンツで教師も固めたかったのかもしれない。下手にファンの子と一緒にしたり美鶴さんをやっかんんでいる子とは一緒にできないだろう。何か問題があつてからでは遅いのだ。美鶴さんなら大抵の事は自分でなんとかかしようとしてしまうにしろ。

自分と朔間くんはともかく高梨さんはミステリアスでありながらクールであっさりとしているタイプの女子だ。口数があまり多くないと言うべきか。冷めたチドリのような子と言えいいのか。たまに男勝りだったり大胆不敵に笑ったりするので油断出来なかったりするが美鶴さんの敵でもファンというわけでもなく、あくまでクラスメイトのひとりとして扱っているような感じの人だと思う。良くも悪くもフラットなのだ。

だからこそ、この班のメンバーになったのかもしれない。

ちなみに彼女も良いとこのお嬢様だったりするらしい。噂ではヤクザだとか拝み屋だとか色々尾ひれが着いているが大きな日本家屋の純和風な屋敷に住んでいるのは間違いなかった。

朔間くんはそもそも男女分け隔てなくこの調子なので下手なことはしないし、下心なんか無さそう。むしろこの見た目だと小さくて可愛いと女子に弄られてそうではあるが。

恐らく自分が旅行に行けなかった場合、美鶴さんと高梨さんに挟まれて気まづくなっていたことだろう。いや、自分ひとりであのふたりと同じ班となったら気まづくなるか縮み上がっていたかもしれない。縮み上がらない執拗い男はたぶん処刑されているか高梨さんにアソコを蹴られていると思う。

実際に俺は目撃したことがある。

7月に廊下で高梨さんのスカートをめくろうとしたバカが地獄を見た様を。

思わずこちらもヒュツと息を飲んでしまったほどだ。主に股間への痛みを想像して。

好意を持つことは悪くないが好きな子のスカートをめくろうとするなんてバカだ。なんでスカートめくりで気を引こうとしたのか意味がわからない。嫌われるだけだろう。

いや、パンツは浪漫っていうけども。

自分は嫌われたくないししたくもないのでしない。

ただ、その時のバカは「無言かつゴミを見るような目で蹴られたのが「褒美」になっちゃってしまったらしくより高梨さんのことがより好きに

なつてソツチ方面に目覚めてしまったとか目覚めなかったとか。真相は定かではない。どのみち、高梨さんからすれば迷惑この上なさそうな話だ。

「大丈夫…？ まだ体調悪い…？」

「ああ、大丈夫。ちよつと考え事してた」

「それなら、いいんだけど…三上くん、なんか今日桐条さんと気まずそうだったし休みの間に何かあった？ 彼女になにかされた？」

思考に浸つて黙つていれば僅かに怒っているようにも見える怪訝な顔をした朔間くんは心配されてしまった。何かあったかと言われればあつたしなかったと言われればなかったのだ。

「……いや、なんでもないよ。俺が勝手に避けてるんだ。その、大きな声では言えないけど、俺が彼女を傷つけてしまったから…」

「えっ!?! ゆ…三上くんの方が？ 桐条さんを？」

「うん…まあ…色々…色々あつたんだ」

はあ、と溜め息を吐く。

そんな自分を朔間くんは有り得ないものを見るような目で見た。

精一杯の気遣いからか、声を抑えてくれはしたんだろうが残念ながら朔間くんの声はよく通る。近くの席に座っていたクラスメイトの視線がいくつかこちらを向いた。

「ごめん、やっぱりこの話はやめにしてもいいかな。いくらきみ相手でもあまり話したくないんだ」

そうやって無理やり話の腰を折つた。

「あ…ご…ごめんね…言いたくないこと、だよね…」

謝つてそのまますごと自分の席へと帰つていく朔間くんの後ろ姿を見ながら緑茶の紙パックにストローを突き刺しし中身を啜つた。冬場だからよく冷えている。本当、嫌になるくらいに。

放課後

屋上

ちょうど優希が保険医でもある江戸川と面談している最中、学校の屋上で美鶴はひとり夕陽に照らされる街を眺めていた。

考えるのはこれからのこと。

来る滅びに立ち向かうべきなのか、記憶を消して滅びまで何もかも忘れて過ごすか。

美鶴にはどうしても決められないでいた。特別課外活動部の部長として、そして全ての原因である桐条の者として、選ぶべきなのはもちろん滅びに立ち向かう事なのだろう。やってしまった責任を取らなければならぬ。尻拭いをしなければならぬ。

その責任感に父に「お前が負うものではない」と否定されてもなお、美鶴の中で燻っていた。

が、滅びに抗えたとして、美鶴は想いを寄せている優希と共になれるわけでもなければ、優希が生きているという保証もない。

それならば——と、仄暗い感情が鎌首をもたげる。

いつその事、皆記憶を失ってしまったら優希は死なずに済むし自分もこんな想いを背負わなくてもいいのではないかと、と。

それがいけないことだというのはわかっている。だが、僅かに『影時間の記憶が消える』ということに希望を見いだしてしまっているのも事実だ。

「あの事故さえなければ」。

たればだとわかっているが美鶴はどうしてもそう考えずにはいれなかった。

そもそも、10年前の事故がなければ優希や2人の弟妹は桐条と無関係の人間なのでこちらに引越してくることも無かつただろうということにはわかっている。出会えず、無かつたのだ。

(だが…もしかしたら)

可能性は無いわけではなかった。

優希の祖父はあの倉橋商事の会長だ。何らかの理由で気が狂っていないければ、社交界に連れてこられた可能性だってある。なんせ、初孫で溺愛していたひとり娘そっくりらしいのだ。老いていたにしろ、倉橋翁はそれくらいの力を持つていたはずだったのだ。

そんな男があのような最期を迎えると誰が予想しただろうか。気が狂っていたのか、病に蝕まれていたのか。それとも、本当に悪魔に憑かれていたのか。

美鶴にはわからない。ただただ、父があのようになって欲しくないと怯えただけだったのだ。

そんなこんなで美鶴は珍しく悶々と悩んでいた。

優希との付き合い方にしたってそうだ。告白をした手前、あつさりと同じような関係に戻れると思っていないうし戻っていなかった。

避けられているのだ。

美鶴が。優希に。

話しかけても視線を外される。

妙に態度がぎこちない。

美鶴がラウンジに降りればすれ違うように部屋へと帰ってしまう。

まるでわざと意識しないようにされているようで、美鶴は心外だった。そんな自分の告白が嫌だったのかと。それならば、言わない方が良かったのでは、と後悔すらしているくらいだ。

ずっと秘めたままでいてしまえば良かった。友達という関係のままでいればよかったのだ。今のこの、苦しさしかない状況よりその方がずっとマシだった。

優希は白馬の王子様とかいう美鶴が憤慨したような映画の中の存在ではないし、現実には映画のようにスッキリ終わったりしない。

そこまで例えて自嘲して、夏に優希と観に行った映画のことを思い出していると気がついて溜め息を吐いた。

一昨日からずっとそうだ。はつきりと断られたというのに1度言葉に表してしまっただけから美鶴は何気ない優希の一挙一動まで気になるようになってしまった。だからこそ、避けられていると気がついた。

美鶴がはつきりと異性として優希を意識するようになったのはあの映画を観に行った日だ。

特別ななにかがあった訳では無い。本当にいつも通りの優希の対応だった、はずだ。少なくとも、美鶴にはそう感じた。

しかし愛にまつわる映画をこれでもかと観たせいなのかもしれないが、隣を歩く優希の横顔が少しいつもと違うような気がしたのだ。夏の暑さで頭がどうにかしていた可能性だってある。だが、「私は彼が好きだ」と美鶴がそれを自覚したのは確かにあの夏の日の帰り道だった。

美鶴は、優希とはもうすぐで2年の付き合いになる。もちろんクラスメイトとして、だ。

1年の途中で転校してきたという優希の事は幾月から訊いてきた。もしかしたら、仲間になるかもしれないと。

しかしそんなことはなく、2年が過ぎた。どんなときも優希は普通だったのだ。物怖じせず、美鶴に接した。

今から思い返せばそれは『ループ』していたから成せたことだったのかもしれない。だが、それだけではないような気がして少なからず悪い気にはならなかった。

なによりそのおべっかもやつかみも無いつかず離れずな距離が心地よかったのだ。穏やかな気性に救われた数は何度だったか。

しかしそれとは別に壁も感じていた。本当に、美鶴がそう気がついたのはなんとなくだったのだ。もうきっかけすら思い出せないその気づきは今となってはフラインプレーだと思ふ他ない。

美鶴は、美鶴が思っていたより垣間見得る『素』の優希に惚れ込んでいた。惹かれている、と言った方がいい。

もつと見たい。素を自分にさらけ出して欲しい。

もしかしたら、そんな高望みをするような感情を持つてしまったのが運の尽きかもしれない。

「はあ…」

美鶴は今日何度目か分からない溜め息を吐いた。

「ここかあ…やつと見つけた。生徒会に出てないなんて、珍しいですね。探すの時間かかっちゃいましたよ」

その声にのろのろと美鶴は緩慢な動きで振り向けば、ゆかりがそこに立っていた。

「探して来いと頼まれたのか？」

発された声は美鶴自身が驚くほどに低く、掠れていた。

そんな美鶴にゆかりは苦笑しながらも答える。

「ええ、まあ。生徒会、関係ないんですけどね、私」

「そうか…済まなかつたな」

「つていうか、忙しそうでしたよ？ 修学旅行が近いとかで。ウチのは2,3年合同だし、生徒会長だつて忙しいはずじゃないんですか？」

そうだな、と美鶴は言えなかつた。

自分の悩んでいることが色恋沙汰かつ、そんなことで生徒会の業務をおろそかにしている自分を恥じた。

しかしいま生徒会室に行つたとして、この調子では役に立てそうにないどころか心配をかけてしまいそうなのも確かだつた。だからこそ、美鶴は気持ちの整理をするためにここに来ていた。もう少し落ち着けば、戻るつもりでもいたのだ。

「先輩？ なにかあつたんですか？」

「……」

聴く何かに気がついたゆかりに美鶴はどう答えようか悩んだ。まさか、恋愛相談をするわけにもいかないだろう。気まづくなるか、これからの活動に支障をきたすかもしれない。

「あ、もしかして三上先輩と一昨日話をしたときのこととかですか？」

「それは…」

「あつたんですね!? もしかして、なにか酷いことされたんですか!？」

「いや、その、三上に、告白を…」

「告白ウ!? 受けたんですか!? えっでもそうならそんな暗い顔してませんよね!？」

やけに食い気味なゆかりは鼻息荒い。

やはりゆかりも女子なのか、その手の話題には一瞬で食いついてきた。もう逃れられる段階ではない。こうなつたらヤケだ、と美鶴は考えた。最後までゆかりにぶちまけてしまおうと。

旅は道連れ世は情けというのなら、お情けで地獄まで付き合つてほしいものだと美鶴はもうめちやくちやにヤケになることにした。

「…断られた」

「えっ、誰が、誰にですか!？」

「私が三上に好きだと告白して、三上に…はつきりと断られた」

ゆかりの目が大きく見開かれた。「嘘でしょ…」というぼやきもセツトで。

嘘だと思いたいののは美鶴もだった。いや、断られることを想定していなかったわけではない。実際そのように弁明したし覚悟もしていた、しかしやんわりと逃げられるだけかと思っていたのだ。そうなたら押し切つてしまおうという邪な気持ちもあった。

しかしあんなはつきりと拒絶されるとは思ってもいなかった。一方通行だとは思って…いかなかったわけではないが少なくとも好意はもたれているのだと思つたのだ。それが、蓋を開けてしまえば自分ひとりが勘違いして舞い上がったただけだったという始末。これが笑い話でなくてなんとこのだろうか。

「隣れな女だと、笑つてくれ…」

「……えーと、奏子ちゃんじゃないですけど、三上先輩のこと、一度ブン殴つてきましようか?」

「…遠慮しておく」

乾いた笑みを浮かべた美鶴を見たゆかりは憤慨した。

それはもう、ありえないと思つたのだ。あれだけイチヤイチャベタバタして、蛇頭黄幡神との戦いの時だつて失われたはずのペルソナが勝手に出てきて美鶴を守つたくらいなのだ。

ゆかりはあの時に出てきた「オネイロイ」はゆかりと美鶴のふたりを守る為ではなく、美鶴を守ろうとして出てきたのではないかと今も思っている。それだけ、思いのこもつた何かを向けられていた。そんな気が。

そのことでも、面白くないしやきもきするしでいい加減くつついてしまえと何となく思っていたのだ。しかしここに来て優希の方が断つたとなればむしろ憤慨せずにはいられない。あれだけの強烈な感情を美鶴に対して向けおきながら美鶴の方から告白すれば断るなど言語道断だと言いたくなるレベルであった。主にお前ら両想い

じやないのかはよくつつけ的な感情で。

「いや、だって三上先輩と桐条先輩、傍から見てもいつくつつくのかってレベルでしたよ!?」話してる内容が事務的でもなんでも! そりゃあ、桐条先輩が勘違い…じやないとおもいますけど、好意持ちちゃうの仕方ないですって! だってあんな…あんなですよ! 先輩には分かんないと思いますけど、三上先輩、桐条先輩といるときだけなんとなくなんですよけど笑顔がちよつと違うんですよ! あんなに思わせぶりならそう思っちゃいますって!」

美鶴からしてみれば初耳だった。

笑顔などはまったく気にしていなかったのだ。「ああこの表情が好みだ」と思うことはあれども、美鶴からしてみればどれも優希が浮かべる表情の内、『外向き』か『素』のどちらかなのだからうなという感想でしかなかった。そして美鶴は『素』の表情を浮かべた時を見つけてはきやいきやいと内心で喜んでいただけだったのだ。つまるところ、美鶴は優希が近い者に向ける表情と己に向けられている表情の違いがわかっていなかった。

「そ、そんなにか!? 私には友だちの関係を維持していたつもりだったんだが…」

「え…あれで友だちのつもりだったんですか? もしそうなら…ふたりとも、相当ですよ」

なぜかゆかりにドン引きされてしまい、美鶴は困惑する。

そこまで周りから思われていることにも驚いたが、もしかして、自分たちの関係はとつくの昔に『ただの気軽な友だち』を越えてしまっていたのではないかと今更ながらに自覚した。

普通の友だちは連絡するときにあんなに緊張しないだろうということをも美鶴はよくわかっていなかったのだ。

「そう、なのか…」

「あつ、でも今回のことに関しては三上先輩が悪いですよ! むしろ桐条先輩を弄んでたつてのが現実になっちゃったつていうか…あの、いまこんなことというのはアレかもなんですけど、カダスでのことは本当にすみませんでした…」

「いや、いい。過ぎた事だ…」

だが美鶴は弄ばれていたとは思っていない。好意の有無に関係なく、断られたのは理由があったからだ。しかしこの場合、美鶴が有責と言うわけでもなく一方的にフラれてしまった形になるのでゆかりの言っていることは傍から見ればそう見えるだろう。

「ありがとうございます。それで——」

「もうこの際、サボって気晴らしにでも行きませんか？」と正しく『友人』として傷心の美鶴を誘おうとしたゆかりの耳にばたんと屋上のドアが開いた音が聞こえた。

「あ、いたいた！ おーい！」

聞こえたのはこの一週間余りで聞き慣れてしまった声。

それも、男子の物だ。振り向けばそこに長身で黄色いマフラーを巻いた生徒——望月綾時がいた。

ゆかりはなんとなく、頭が痛くなってきた。悪い生徒ではないが、彼が関わるとロクなことにならないのだ。

「探しちゃいましたよー」

「綾時くん…ん…なんで、このタイミングで来るかな…」

とてつもなくタイミングが悪すぎる。ただでさえ、美鶴は玉砕して傷心中なのだ。そんな美鶴に綾時がナンパされるようなことがあればゆかりは奏子に顔向けができなかった。

その兄が美鶴の傷心の原因だとしても。

「え…でもゆかりさん、会長さんを探しに来たんでしょ？ 僕も同じですよ。知らない人に頼まれちゃって…」

「なにそれ」

「え、頼まれたの、僕だけじゃないですよ？」

不思議そうな顔をす綾時に訊き返せば、これまた不思議そうに返される。

「その人、会長さんを見つけないと旅行を中止するぞって」

その人、と綾時が言った人物にゆかりは覚えがあった。

おだぎりのでとし
小田桐秀利。

2年生で生徒会の副会長を務める優秀な生徒だ。ただ、堅苦しく模

範に厳しい生徒としても評判だった。

しかし最近は態度が軟化してきているようでなにかあったのではないかとゆかりは踏んでいる。美鶴ならなにか知っていそうだがペラペラと話すタイプでもないのでゆかりはただただその事実だけを受け取っているにしかすぎないが、良い変化なのではないかと思っていたのだ。が、こうして完璧に別人になったわけではなく、目的の中では法や規律を遵守した上で強引な方法をとることもあるのは変わりないようだった。

「副会長さん…誰彼かまわず頼むんだから…」

「という訳で、ええと、桐条美鶴さん。見つけた！…しかし、何と言う美しさでしょう。良ければ、今度ご一緒しませんか？ 3ツ星ホテルの最上階…あなたのイメージにぴったりの、夜景が楽しめるレストランがあるんです」

しょうがない、という顔をするゆかりをとりあえずは置いて、綾時は恒例のナンパにでることにした。歯の浮くような言葉を使って。全力で。何度繰り返し返してもその手は抜いていない。一言一句同じ言葉で。なんというか、もはやこれは一種の挑戦のようなものになってしまっていた。まあできればラッキー程度だが。

「…夜景？」

怪訝そうな顔を浮かべた美鶴は、なんとなくそんなところにいくよりましたゲームセンターに優希とふたりで行く方が楽しいのではないか、と思ってしまう。食事に限定するなら、あのバイクの飾ってあったファミリーストランの方がよっぽど。

ここに来てまで頭の中を占領してくる未練に眉を顰めれば、それを見たゆかりがさつと顔色を変えた。

「せ、先輩！…ここは、戻った方がいいですって！」

「あ、ああ」

ゆかりに促され、突然のことにもった美鶴だったがすぐに気持ちを切り替えて歩き出す。が、途中で立ち止まった。

「岳羽…来てくれてありがとう。気が楽になったよ」

「？ あれ…返事もらっていないのに…」

去り行く美鶴を止めることなく見送り、「今回もダメだったかー」と内心でさほどダメージを受けていない綾時は気づいていない。

自分がとんでもないタイミングでこの場に来てしまったことに。

「うーん、あの調子だと吹っ切れてないよね…どーしようかな」

ぼやくゆかりになればと綾時は口を開いた。もうおかまいなしである。

「あの、ゆかりさん、よかったら、今度ご一緒しませんか？ 白河通りあたりの…」

「フンッ！」

「アウチ!？」

「白河通り」 という単語と間の悪さに渾身の一撃をつま先に喰らった綾時は呻いたのだった。

修学旅行まであと1日。

修学旅行初日（11／17）

11／17（火）朝

今日から修学旅行だ。

相変わらず美鶴さんとは気まずいままだったが、昨日の放課後の面談はビツクリするくらいスムーズにいった寝る時の部屋割り以外は皆と同じ予定で行動してもいいということになった。つまり、市内散策も参加してOKだということだ。

ただし体調が悪くなったらその通りではないし、携帯電話と保険証と薬を必ず所持してすぐ出せる場所に入れておくことときつく言い聞かせられた。

まったくもってその通りだと思う。

そんなに頻繁に発作が出る病気とは言えないものの、いつ出るかは本当にわからないし旅先で倒れたら大騒ぎにも程がある。

とはいえ、これから学校に集合して東京駅まで向かうので京都に着くのは夕方頃。観光もなくホテルに直行して、夕食を食べて明日からの注意事項を確認して寝るだけだ。不安要素はあまりない。

「移動で初日が潰れるってどうなんだ…」と毎回思っているが東京から関西の京都まで新幹線で行くのでそれだけの時間かかってしまうのは仕方ないのかもしれない。

荷物の確認をしながら、ここにモコイさんが居ないことだけが心残りだった。

自分さえ強ければ。もっと、アリスについて警戒していれば、今頃。なんてありもしない事を夢想して溜め息を吐いた。

寂しいと思ってしまうのはモコイさんといえることに慣れてしまったからだ。モコイさんと居た時間より、モコイさんが居なかった時間の方が長いというのにまるで旧友を失ってしまったかのようにずっと未練のようなものを引き摺っている。

それだけモコイさんと居るのが心地よかった、というのは間違いなくある。モコイさんは自分のやることを深く詮索しては来なかったかといって、一方的に守る守られる相手では無く、あくまで持ちつ持

たれつな対等な相手だったのだ。そして、初めて会う存在でもあった。まあ、初めて会う存在といえればライドウくとゴウトに神条さんやアリス、朝倉先生もそうなんだけども。

とにかく、モコイさんはいくらでも素の自分を出して弱音を吐いたり甘えても構わない相手だったのだ。そしてそれをモコイさん自身も許してくれていた。だからこそ、モコイさんも遠慮はしてこなかったのだ。

たぶん、素の自分とモコイさんはよく似ているんだと思う。素じゃなくても似てるとかは置いといて。

(発作を起こした時の薬よし、歯ブラシよし、タオルよし、パンツよし……しおりは持つてるし筆記用具もあるな)

荷物の確認はバッチリだ。

ふと、ベッドの枕元に目が行けばモコイさんがくれた封魔管が静かに置いてあった。

元々モコイさんが入っていた物だというそれから目が離せなくて、ふと思いつく。

(そうだ、これを持っていけばモコイさんと一緒に居るような気になるのでは)

名案だった。

物に魂が宿るとか何とか言うし、モコイさんが幽霊になって見守ってくれているのなら管を持っていけば一緒に京都を観光できるかもしれない。

我ながらファンタジーな妄想に縋るのもなんだが、縋らなきゃやっていけないという面もある。

こういう時のために、雑貨屋で見かけたオシャレな管を入れるための袋を買っておいたのが良かった。

紫色のつるつるとしたビロード生地で作っていて肌触りは抜群。紐で口を縛れるものなので、その中にことんと管を入れてベルトに通す。

無くすのが怖いのでさらに別で袋とベルトを繋ぐチェーンも付けてセキュリティも万全だ。これでもう無くしたりしないだろう。完

壁だ。

ちなみに、ビロードの別名はベルベットというらしい。つまりベルベットルームのベルベットはビロード生地 of ベルベットが語源だとするならふかふかつるつるな生地のできた部屋とも言えるのかもしれない。

自分が招かれた場所は全面ガラス張りの殺風景な部屋だけど。というよりは海の中にある観賞用の水槽といった感じか。

いや、やっぱり水族館に近い気がする。

座らされる椅子もそんなにふかふかじゃないし間違いなくふかふかつるつるの部屋ではないのは確かだ。

なんとなくそこまで考えてマーガレットに呆れた顔をされている様を想像して、その思考をうちきった。

中身の確認を終えた旅行カバンを持って立ち上がる。

ポケットに発作が出た時の薬を入れておいたし、保険証などは財布に纏めて入れてある。携帯電話の充電も問題ない。それに充電器を持っていくので旅館に着けば充電し放題だ。

そのまま一階に降りれば自分が一番最後だったようでラウンジには人が無かった。

いるのはコロマルと荒垣くんだけのようだ。
しまった。

天田くんにお土産を何がいいのか訊くのをおぼろけに忘れていた。朝聞けばいいと油断していたのがダメだった。

(ご)当地フェザーマンストラップとかでいいかな…)

それ以外ならお菓子とか困らない消耗品にしよう、と考えながらコロマルを撫でる。

「それじゃあコロマル、行ってくるね」

「わん！」

荒垣くんへの挨拶は朝食の時に済ませているので行ってきます程度で良いだろうし、ちゃんとメモも取ってある。買えなかったら奏子のドキドキワクワクサプライズプレゼント(と言う名のおそらくバナナ生八つ橋詰め合わせ)と真田くんのバナナプロテインのみが荒垣く

んの土産になると思われる。

「荒垣くん、行ってくるよ」

「おう、気をつけろよ」

「わかってる」

ダイニングに声を飛ばせばすぐに返事が返ってきたのでそのまま荷物を持ち上げて寮を出る。

朝倉先生やタカヤ達にも何かお土産を買って帰ろうか、なんて考えながら道を歩き出した。

昼

新幹線車内

「……」

「……」

気まずい。すごく気まずい。

いや、新幹線の席は自由だったのだが、何となくで座ったら同じ班のメンバーで固まってしまった、的なの。

二人掛けの椅子が向き合い、自分の横に朔間くん。そして向かいには美鶴さんと高梨さんという組み合わせになってしまっている。

高梨さんはこの気まずい空気の中、マイペースに保温水筒から緑茶をとぼとぼとコップに注いで飲んでいるし、朔間くんは俺と美鶴さんのこの微妙な空気をなんとかしようとするとおろおろして何か言ううとして黙るを繰り返している。

何から話したせがいいのかわからず、相席になってからもう30分ほど黙り込んでいる自分と美鶴さんの間の空気だけがやけに重い。

それを見かねたのか、ついに耐え切れなくなったのか、それとも興味本位か、高梨さんが口を開いた。

「至くん。貴方、この私の横にいる美鶴さんをフツたらしいわね」

「?!?!」

「すぱん、とまるで世間話をするような気軽さで大胆にも切り込んで

きた高梨さんはいつも通り読めない表情をしている。

そんな高梨さんの言葉は静かで、新幹線の走る音とこの騒がしい車内の音にかき消され自分たちにはしか聞こえてない事だけが幸いだっ

た。「なぜそれを、と言いたげな顔をしているわね。世間一般の有象無象が考えるように横の彼女が喋った、というわけじゃないわ。でも、壁に耳あり障子に目あり」。気をつけた方が良いわよ」

つん、とまるで優しさの欠片もない彼女の言葉は厳しい。

彼女も彼女で一体どうやって調べているのかと思えるほどの情報収集能力を持っていた。それが、生家が拝み屋だとかヤクザだとか言われる理由になっているのを恐らく彼女は知っている。知っていて、くすくすと笑いながらそれすらも利用するのだ。

だからと言ってここまでとは思っていなかったのは確かだけれども。舐めていた、というより自分がその標的になる事はないだろうと思っていたのだ。

高梨さんはその艶やかでまつすぐ伸びた黒髪を後ろへとやると少し間を置いてから口を開いた。

「そうね。私から忠告するとすれば、そういうことはやめたほうが良いわよ。という事だけね。される側の気持ちも考えて頂戴な」

高梨さんの黒い黒曜石のような目が自分を射抜く。そんな事言われてもただ受け入れるだけだなんてことは出来ないしそんな中途半端な気持ちで告白を受け入れて付き合うなんて無責任では無いのだろうか。

ただ、なんとなく彼女は美鶴さんをフツた事に対し忠告している訳ではない気がした。

気のせいと流すことだってできる。だが、彼女の忠告の真意が別にあると勘ぐることは気のせいでは無いような気もするのだ。かといって彼女の真意を確認することもどうすることもできないのも確かだ。

そんな怪訝そうな表情が表に出てしまっていたのか高梨さんは白々しく笑みを深める。

「あら、そんな顔をされるのは心外ね。心配しなくても私はよそ様に手出しするつもりはないわ。怒った山羊に蹴られたくないもの。だから、忠告だけ」

そう言つて、言いたいことだけを言つた高梨さんはス、とその目を細めた。ううん、やつぱり自分が美鶴さんの告白を断つたことに対する忠告なような気がしてきた。

「ところで美鶴さん？ 私、交流を何度かしているあの八十稲羽高校というところの制服が可愛いと思つているのだけれど。黒いセエラアに黄色い三角タイ、とても良いと思わない？」

「…はあ。高梨、制服を自由にするという案は却下したはずだ。それに私個人にはそのような権限はないぞ」

「あら。わかつてるわよ？ ただ私はいいと思うんじゃないかしらと言つただけだもの。そう、とても興味があるだけよ。制服にも、その土地にも」

困つたように今日初めてちゃんとした返事を発した美鶴さんにふふと笑い返した高梨さんはまるで蛇の様だった。獲物を見つけたときのような、恍惚とした笑みだ。

横の朔間くんを見れば、青い顔でぶるぶると震えている。そんなつても仕方ないくらい、うっそりとした笑みを高梨さんは浮かべていたので仕方ないと思う。

「まったく、きみのいう事はたまに冗談なのか本音なのかわからなくなる」

「ふふ、でも少し気は紛れたでしょ。折角の修学旅行なんだし、しみつたれた空気なんてものは誰だつて嫌でないかしら？ 貴方の事をフツた酷い三上くんのこととは一旦頭から放り出して私と自由散策でどこに行くか考えましょう？ きつと楽しいわ」

「ひ、酷い…？ いや…」

手厳しい。というか恐らく高梨さんは自分に対して怒っている。もしくは当てつけか。

やけに口数が多く饒舌なものも修学旅行への興奮だけではないだろう。いつもは「そうね」「興味ないわ」「ごめんさい」程度しかしや

べらないし最低限の言葉ほどこしか聞いたことがない。

「ほら…パンフレットを用意してきたのよ。本当は“彼”と行きかけたのだけれど…残念だわ」

「ああ、きみの許嫁の…他の高校に通っているんだったな」
「ええそうよ。…とても素敵な人なの」

それが挑発的な笑みを浮かべてこちらに勝ち誇ったような顔をするものだから間違ひなく当てつけた。そして自分はそうされても仕方のない事をしたのだ。

もつと、穏便な断り方だつてあつたはずだが、そうしなかつた。だから美鶴さんを傷つけてしまったしこうなつてしまった。ただそれだけのことだ。

「ぼ、僕…この班でやっていけるか不安になつてきた…」

頭を抱えて青い顔でそう呟いた巻き込まれる形となつてしまった朔間くんは内心で謝りながらどこでどう美鶴さんに切り出そうか考え込むことにした。

あの時の断り方が自分勝手すぎたのはわかつている。けれど、それでこうも支障をきたしてしまうというのも考えものだった。

気まずいままでいるのは心苦しいが致し方ないことだとは思ふ。けれど、関係を修復するのもまた正しいことなのだと思う。

問題は、どちらを選んでも美鶴さんを悲しませることになつてしまふということだ。

今辛い。ずっと辛い。その二択を迫つてしまふ。

いや、次の満月の日になれば全て解決する。それなら——もういっそ、このまま。気まずいままでいたらいいのでは無いのだろうか。

ちらりと美鶴さんを見れば楽しそうに高梨さんと歓談している。やっぱり自分には要らない。居ない方がいい。

結局、自分は何がしたかつたのだろう。美鶴さんの友達になつて、傷つけて、フツて。

力になりたかつたのは確かだ。けれど何故力になりたかと思つたのだつたか。

——頑張つてたから？

そうだけども違ふ気がする。

——クラスメイトだから？

それは違ふ。

——女性だから？

それも違ふ。

——千鶴さんに似ているから？

…違ふ、と思う。

千鶴さんと美鶴さんは別人だ。それに、好意のベクトルが違ふ。千鶴さんは母さんを重ねて見ていた節がある。それと良くしてもらっていたのに結果的に自分のせいで命を失うことになってしまった罪悪感。

けれど美鶴さんは千鶴さんとの記憶が無くても良く思っていたし惹かれていた。無意識に面影を追っていたのならともかく、最初の周も繰り返す前も、近寄り難いと思っていた人だ。だから有り得ない。

千鶴さんに対しては美鶴さんに向けるようなあの気持ちの悪い独占欲など湧いてこないからそれも論外だろう。そも、千鶴さんは故人だからと言われたらそこまでもしれないが。

つまるところ、自分は何回も何回も繰り返して美鶴さんと接するうちに自然と好きになってしまっていた可能性が…：高い、と思う。だから力になりたいと思つたのかもしれない。

『今』の美鶴さんを見ていた訳じゃなく、全ての周の桐条美鶴という存在を見て好きになつたということなのだろうか。なら、次の周があったとして、俺が好きなのは『今』の美鶴さんじゃないから次の美鶴さんも好きになるのだと？

…：どうだろうか。なんだか、そうは思えない。

奏子とは他人のような関係で、先輩後輩の仲だった周があった。

その時に、好意を寄せられ告白されてどうしてもということと恋人の真似事をしたことがある。

奏子の事は有里呼び。俺もただの三上先輩と呼ばれていた。

家族に關しても双子の弟（恐らく湊だろう）がいた、ということしか聞いていない。

もちろん、性行為などはしていないし付き合おうと決めた時に申し訳ないけどと謝って自分には奏子への気持ちは親愛しかないこと。性行為はできないこと。恋人ではなく恋人の真似事になってしまおうがそれでもいいかと正直幻滅されても仕方ない取り決めをした。それでも、その週の奏子は頷いた。

はつきり言って断るなら断るで適当に想い人をでつち上げるなりまともな理由を言うなりなんなりして断れば良かったんだろう。けれど、自分には出来なくてズルズルと引きずってしまった。

そんな自分の判断がダメだったのかバチが当たったのか最後は12月入ってすぐ、綾時くんから諸々の説明を受けた後にニクス教の終末思想に煽られた信者だったかよくわからないラリった男——とにかくヤケを起こした通り魔にぶっ刺されてお陀仏というわけだ。

ルール違反をした覚えはないし奏子と恋人の真似事をしただけがダメだったのだとしてもタイムラグがありすぎるのでそれが直接的な原因ではなさそうだった。

結局あの時の奏子はどちらの選択をしたのか。自分は知らない。

ただ、死ぬ前に犯人が取り押さえられた事と奏子の無事だけは確認したのでばっちり。ナイフは腹にぶっ刺さったままだったし抜けないように押さえてた手はズタズタの血まみれになったけど、一番最初に刺されそうになった奏子を庇って腹部を穴だらけにされた自分以外に被害者が出なかったので無問題だ。

もうクソ痛いし血が抜けて寒くなってくるし力は入らなくなってくるのに己の腹に聖剣が如く刺さってるナイフを離れたら犯人が絶対他の人刺すだろうから意地でも死ねないしである意味修羅場っちゃ修羅場だったかもしれない。

痛すぎて「めっちゃ痛てえ〜〜〜〜〜!」と叫ぶこともなく、かっこいい世辞の句も読まずに死んだけど。こう、コロッと。

そして、そんな『その周』の奏子の存在を引きずっているか？と言われると別にそうでも無い。

奏子は奏子だ。可愛い妹である。

(……待てよ)

「奏子は妹だ」という認識は引きずっているのでは無いのだろうか。だから鼻屑目に見てしまおうし、可愛いと思ってしまう。湊と奏子が弟妹という認知はどう足掻いても変わらないので周回する内にできた認識かどうかはまた別なんだろうけども。

どのみち、自分は美鶴さんに関してなにかしらの固定概念を引きずっていることになる。

それが何か分かれれば美鶴さんに向けている感情の正体が分かりそうなるものである。

笑っている顔が可愛い、とか。

楽しそうにしている姿を見るのがうれしい、とか。

初めて食べるものを食べたときの驚いた顔が可愛いとか。

考えれば考えるほど、美鶴さんのことしか浮かんでこない。なんなんだ。こんなに自分は美鶴さんのことを見ていたのか。歪んだ感情とはまた別のベクトルで気持ち悪くないか？

これじゃ、まるで自分が――

いや、やめておこう。

そもそもそんなことを考えるんじゃない、普通に「避けててごめん」「恋人とか特別な関係になるのは無理だけどこれからは友達ちとしていたい」と伝えればいいだけの話だ。

そう決めて、目をつぶった。

「――み……くん」

ふ、と名前を呼ばれているような気がして目を開いた。

眼前にはいつも通りの静かな表情を浮かべた高梨さん。そして自分のことを呼んでいたのは横に座っていた朔間くん。

「ああよかった。ぐっすり寝てみたいだったから起きなかつたらどうしようかと……もうすぐ京都に着くから起きて降りる準備した方が良くなかって思ってた」

「ありがとう」

「どういたしまして」

礼を言っただけの席を見ればそこに美鶴さんの姿は無く。手洗いにいつているのか別の席に移動したかは分からないが今はいい

ようだった。

「まるで死体の様に熟睡していたわね。そんなにこの旅行が楽しみで昨日眠れなかったのかしら？」

「高梨さん…そういうの、病み上がりの三上くんにはきつい冗談だよ…」

「それもそうね」

つまらなさそうに高梨さんは言うが、朔間くんというようにこれまでの自分の状況を思い出すとにシヤレにならない冗談だ。よくこの短期間で動けるようになるまで復活できたなと思える程度には。

「探しているところ残念だけど、彼女は貴方が寝ている間に2年の子のところに行ったわよ」

キヨロキヨロと周りを見ていたのを美鶴さんを探しているのと勘違いしたのか、高梨さんがそう耳打ちしてくる。

恐らく岳羽か、山岸と奏子達のところだろう。その方が良い。共通の話題も多いだろうし、自分なんかというよりよっぽど。

電光掲示板が『次は京都』と映しだしたのを見て小さく息を吐いた。

夜

京都駅から数時間ほどバスに揺られて今夜のお宿である『東山三条・後醍醐』という旅館にきた。もうすっかり夜になってしまっている。

風情のある『いかにも』な旅館で、普通なら泊まることはおろかお目にかかる事の無いような豪華な内装の旅館だ。ここは月光館学園が私立だったことに感謝すべきだろう。

そんなことを考えて気を紛らわそうとしたがやっぱりだめだ。

バス移動で酔ったのか少し気持ち悪い。思わず胸のあたりを抑えれば、心配したように朔間くんが顔を覗き込んでくる。

「大丈夫…？」

「ああ、うん。大丈夫だよ。ちよつと酔っただけみたいだから」

そう返事をしてみたが朔間くんの顔は心配したような表情から戻らない。

それもそうか、とひとりで流していれば前によく見知った顔がいるのが見えた。

特別課外活動部の2年生組と綾時くんだ。今ではもう、綾時くんがいるのが当たり前で見慣れてしまっているのが慣れって怖いなと思うところだ。

「これが噂に聞く露天風呂と言うやつですか」

「いや、これはただのお庭でしょ…入口から丸見えだし…」

「なるほどな…！」

きやいきやいとはしゃぐ生徒やいつものメンバーを前に朔間くんと歩いていけば、庭の豪華な池を見ていたアイギスがこちらに気づいてずんずんと近づいてきた。そして、自分と朔間くんを交互に見てその間に割り込んできた。

「あなたは、だめであります」

「えっ？」

まさかここでその台詞を聞くとは思わなかったので、目を丸くする。

どうして自分と朔間くんなのか。

「優希さんに近づかないでください」

「そんなこといわれても…僕は三上くんと同じ班だし…と言うかきみって三上くんの寮の…」

「アイギスであります。早急に、優希さんから離れてください」

「ええ…そんな、僕が危険物みたいな言い方あんまりだよ…」

キツ、とアイギスに睨み付けられおどおどしながらも理由を話す朔間くんだったが、理解を得られることはできなかつたようでアイギスに言い返されて困っているようだった。

「ほら、お喋りは後よ。進まないよ、後ろがつかえちゃうでしょ」

「すみません」

そんな中、鳥海先生がアイギスと一緒にいる自分たちに向けて声をかけてきた。ナイスタイミングだ。まさに、渡りに船といったところ

か。

アイギスと朔間くんの押し問答が無限に続かなくて良かったと思っていたところだ。

恐らく、何を言ってもアイギスは自分と一緒にいる限り朔間くんの一緒にいる理由〃を認めはしないだろう。綾時くんに対してそうだったように。

ただそうなるとなぜ朔間くんに対してアイギスがそんな反応をするのかわからないのだ。朔間くんは綾時くんとは違う。アイギスが危険視するほどの物はないと思うのに。

「はい、じゃあ女子から先に部屋にあがってちょうだい。それと、三上くんは江戸川先生と同じ部屋だから。体調が悪くなった子とかも来るかもしれないけど、よろしく頼むわよ」

「わかりました。それじゃ俺はお先で」

「えっあっうん…またね…」

半泣きになっている朔間くんと僅かに不満げな顔をしているアイギスを置いて、荷物を持つて上に上がる。途中、ずきりと胸が痛んで思わず足を止めてしまったがその一瞬だけで発作ではなかったようにふうと安堵の息を吐いた。大丈夫大丈夫、きっとこれは運動不足由来だ。そうに違いない。

そうしてヒイヒイハアハアと情けなく息を切らしながら階段を登り切り、自販機に目が行く。

毎回毎回、このイチジクジュースを飲むのが楽しみなのだ。『充実イチジク』と言う名前だった気がする。他にもドリアン・オレだったりトマトジュースがあつたりするが飲み比べした結果イチジクジュースが一番お気にいりになってしまった。

モコイさんにも飲ませてあげられれば良かったが、もしモコイさんが生きていてもジュースによつてはゲロゲロになってしまう可能性もあったしそもそも江戸川先生と相部屋なので人目を盗んでモコイさんに飲ませるとするのが難しいということもあるのでお留守番になつていた可能性は大いにある。

自販機に120円を入れ、ボタンを押してガコンと音を立てて落ち

てきたソレをポケットにしまう。

(……?)

ちりちりと、京都に足を踏み入れてから——正確には駅を出てバスに乗って移動している最中からなにか変な視線のようなものを感じていた。

かといって視線のようなものだけであるし、何も危害は加えられていないので気のせいだと思いついてしまった。が、時間が経つにつれてその視線のようない気配のようないかには強くなっているような気がして、警戒を深める。

そうして周りを見回しても何も変わったことは無かったのでそのまま割り振られた部屋に向かって荷物を置いて浴衣に着替えた。

そしてウツキウキにテンションを上げて念願の温泉に行こうとすれば合流した江戸川先生から「ヒヒ、ダメですよ……今日は様子見として室内に備え付けの浴室で入ってくださいね……イヒヒヒヒ……」と言われて落ち込んだのは秘密だ。

温泉に入るのが最大の楽しみと言っても過言ではないのに、こんなところに来て倒れた事や持病が邪魔をするとは思わなかった。

先生曰く、高温のお湯に浸かるのはやはり体力を使ってしまうので倒れてしまわないように少しぬるめの温度の出る備え付けの浴室で体を慣らしてそれで大丈夫そうならまた明日、ということらしい。

ただよかったのはこの備え付けの浴室にも温泉がひいてあって、お湯だけならしっかりと外の露天風呂と同じ物だという事だ。水で割られているので源泉かけ流しとは言えないがそれは露天風呂もそうなので黙っておく。

風呂に入り、多少くらくらと視界が揺れていたが逆上せの範囲内だったので敷かかれている布団に横になる。江戸川先生はこのまま明け方頃まで起きていらっしゃるらしい。先生って大変だ。

明日になったら、折を見て美鶴さんと話をしよう。そして、謝ろう。そんなことを決めて目を閉じればすぐに眠気が襲ってきたので自分はその抗うことなく眠りに落ちた。

影時間

「う……」

胸に走った鋭い痛みで目が覚めた。

息が苦しい。ぜえぜえと情けなく脂汗を垂らして枕元に置いてある薬をなんとか手に取り、ひとつ口の中に放り込んだ。江戸川先生は例に漏れず象徴化していて棺のオブジェと化しているために助けは求められない。

この痛みと苦しきは何度か体験したことがあるような気がしたので恐らくいつもの発作だろう。長距離の移動で体力を使ったせいか幾分か悪化している気がしないでもないが。

生まれ、生まれ、と痛みと苦しきに歯を食いしばって願いながら布団の中で身体を縮こませれば意識の方が耐えられなかったのかぶつんとなにかが切れるような音と共にブラックアウトした。

優希が発作で苦しんでいるのとはほぼ同時刻、奏子はふと、何かを感じて目が覚めた。

「……？」

布団から起き上がり、窓の外を見つめればいつもと同じように緑の空と満月が奏子を迎える。

「どうかしたでありますか」

「ううん、なんでもないよ。ちょっと気になっただけ」

アイギスがのそのそと布団から這い出て、奏子の横に並んだ。

初の温泉に入った後、アイギスが男子部屋に乱入したりその男子部屋から綾時や順平、そして湊と揉み合いになり下の池まで落下するという事故があったがそこは割愛する。彼らとアイギスが鳥海に叱られたのは言うまでもない。

ふたりで並んで窓際に座り影時間の空を眺める。そこで、奏子は違

和感に気がついた。今日の月齢は新月だったはずだ。だというのに、何故月が綺麗に円を描いているのか。

そんな疑問を持ったのと同時に、どろりと月から何かが垂れた。そしてその垂れたもの——黒い泥は下に落ちると平行して月を黒く染め上げていく。まるで垂れた墨汁が半紙に染みていくように。

「なに…あれ…」

気味が悪い。

奏子を感じたのはそんな感想だった。新月の日にタルタロスに行ったことは何度もある。だが、こんな現象を見たのは初めてだ。

しばらく食い入る様にその様子を見ていれば、黒い泥は空も地も真っ黒に染め上げ、いつもの影時間とはまた違った様相を見せる。月は月蝕の時の様に食いつぶされ、縁ふちの光輪だけを残して真っ黒に染まっていた。

空気もいつもの慣れた静かなものではなく、重く、じっとりとした物のようにも感じられる。

「美鶴さん達を起こしてきます」

「で、でも…待って。まだ、ここにいて」

立ち上がるうとしたアイギスを引き留め、じっと中庭を見やればちようど泥が盛り上がり、形を成そうとしているようだった。

その光景にカダスで見た少女ナギサの最期を思い出して奏子は小さく何度も息を吐いた。大丈夫、アレが出てきたわけではないと自らを落ち着かせるように。

そんな奏子の気持ちを知らずに泥はその姿を変えていく。

ゲラゲラゲラゲラゲラゲラゲラゲラ!

笑い声。

否、骨と骨を打ち付けたような乾いた音だ。

それが笑い声の様に聞こえるのだ。

奏子かようやつと分かったのは、八つの首と長い尾。それと二対の翼だけ。

一体何本の足があるのか。色づいておらず真っ黒な影色をしたそれがなんなのか奏子には見当もつかなかった。

ただただ、奏子の存在自体を否定するような嫌な感じがするだけで。

「……！」

不意に、どぼんとその姿が沈むように泥に戻る。一体何が現れようとしていたのか、それでも戦いになるような存在でなくて良かったと奏子は胸をなでおろす。

潮がひくように世界を覆っていた泥も徐々に消えはじめ、あつという間にいつも見る影時間の景色に戻ってしまった。

不安と安堵がないまぜになりつつもこれ以上変なことが起こってもらっても困ると奏子は思った。

なんせこの宿に武器を持ってきてはいない。屋久島でのことを踏まえていても何も知らない知り合いが大勢いる中で武器を持つていくことが出来ず、ギリギリ召喚器しかないのだ。そんな中で戦闘になればどうなるか。間違いなくジリ貧だろう。

それに戦闘中に影時間が終わってしまったえば何をしているんだと言われかねない。

幾月という誤魔化し役兼後ろ盾がない今、そんな状況は特別課外活動部にとつて一番避けたい事態でもあったのだ。

そう考えると幾月と言う存在は悪と一言で表していい存在だったかと言われるとまた別なのだと言えたかもしれない。

「先ほどの反応は…一体…」

アイギスが考え込むようにして顔を下げる。

ほんの一瞬現れたあの獣のような何かに対し、思うところがあるのだろう。

ただ、本当に一瞬だったのでアイギスも報告すべきか決めかねているようだった。

「寝よつか」

「ですが…」

「気のせい…とかじゃないだろうけど、もう元の景色に戻ってるし、大丈夫だよ、たぶん」

先ほどまで感じていた嫌な気配はもうしない。

まだ影時間だったが寝ても大丈夫だろうと奏子は判断した。アレが何だったのかわからず仕舞いだが、きつと知らなくていいことだつてあるのだと、そう自分をごまかして。

優希がもう試練は無いからいいだろうと判断して持ち込まなかったメノラーが、寮の自室でその火を大きく揺らめかせ、燃え上がらせていたことに誰も気がつきはしなかった。

修学旅行二日目（11/18）

11/18（水）朝

嫌な夢を見たような気がした。

ベタベタとベタつく汗への気持ち悪さで目が覚める。

時計を見ればまだ5時で、起きるにはいささか早い時間だ。

昨日の影時間に発作を起こしたせいかな、少し身体がだるい。

寝たのに疲れているという意味のわからない状況に陥っている。

枕がいつもと違うからダメなのか。

本音を言えばこのままシャワーを浴びたい。熱くて目がさっぱり覚めるような。

そんな自分のこのじめつとした粘つくような不快感とは真逆のほど徹夜なはずなのに江戸川先生の疲れを感じさせないいつもと同じ顔がお出迎えする。

「おや、三上くん。随分と早起きですねえ」

「江戸川先生…おはようございます」

「はい。おはようございます。そうそう、昨日の夜、正確には3時間ほど前ですか。魘されてましたよ。起こそうか悩んだのですがね…」

顎をさすった江戸川先生はいつもの特徴的な笑い方をせず真剣そのものだった。本当にギリギリまで悩んでいたようだ。

それは申し訳無いことをしたと思うと同時に発作は影時間内に治まったのだと分かってほっとする。

「心配かけたみたいですね」

「いえいえ、いいんですよ。ええ。私としても何事も無くて良かったと言えるので。せっかくの修学旅行だというのに病院送りになる生徒を見るのは忍びないのでね…ヒヒツ」

何事もないのが1番だと言外にそう言ってきた江戸川先生はいつもの特徴的な笑い方をようやく出した。

顔はいつも通りだったのにこの笑い声を聞かないと緊張してしまうというのはダメな兆候かもしれない。

「先生、シャワー浴びてきますね」

「あまり熱い温度や水のシャワーを浴びてはいけませんよ。三上くんは特に心臓が悪いんですからビツクリしてしまつては元も子もありませんからねえ」

「あー…はい。気をつけます」

別に病気があるからといって心臓自体に障害があるわけでもそんなにひ弱でもないと思うのだが、昨日の今日ということもあるので忠告通りに昨日と同じく少しぬるめのシャワーを浴びることにした。

部屋と浴室の気温差に関しては良い旅館だからなのか暖房が浴室にまで備わっており全くと言っていいほどにないのでそこは心配なかった。

さつと頭と身体を洗い、気持ちの悪い汗を流してしつかりと水気をとるように身体をバスタオルで拭く。しつかりと拭いておかないとそれが原因で身体を冷ましてしまうしそこは念入りに。

流石いい旅館と褒めるべきなのか、美品のタオルはふかふかふわふわだった。いつも使っているよく分からない1枚200円くらいの安いノーブランド品のバスタオルとは大違いだ。値段も大違いなんだろう。

そしてまじまじと鏡で自分を見れば、うっすらとついていたはずの腹筋の割れ目が完全に消えていてげんなりした。元々筋肉がこう：目に見えてつきにくい体質だったので10月頃にやつとうつすらとつき始めて喜んでいたというのに、この短い休養生活の間にさよならと別れを告げられてしまったらしい。辛い。

「はあ…」

憎らしげにぺたぺたと僅かに摘めるほどの腹の皮と肉をつつけば柔らかい感触だけが返ってきてげんなりとする。

欲しいのは触り心地抜群の柔肌じゃなくて硬くて素晴らしい筋肉なんだが。そも、自分の腹をさすることの何が楽しいのか。どうせなら女の子の、それも美鶴さんの柔肌に触れた：げほんごほん。

まったく、自分は朝からナニを考えているのか。あーバカバカしい。さつさと着替えてしまおう。

降って湧いた欲望を振り払って、ドライヤーで髪を乾かしてまた浴

衣に着替え部屋に戻れば江戸川先生は仮眠をとっているようで布団に横になっていた。

幸い、自分以外の生徒がここに来ることは無かったようでありま部屋に居るのは自分と江戸川先生だけだ。

机の上のお茶請けに目がいき、ちょうど喉も乾いていたしテレビでも見ながらお茶でも飲むかと電気ポットに手を伸ばした。

電気ポットのロックを外し机の上に並べてある湯のみのひとつを手にとって傍に置き、急須にお茶つ葉を入れて湯を注ぐ。

お茶つ葉の量は完全に目分量だがあまりお茶に好みはないので薄くなければいい程度の考えしかなかった。

付属の紙を読めばどうやらこのお茶つ葉とお茶請けのお菓子は下の売店でも売っているようだ。ここでこうして飲み食いして気に入ったなら買ってくれ、ということだろう。中々に商売上手と言わざるを得ない。

お茶つ葉のパックの裏に書いてある時間きっちり蒸らし、用意しておいた湯のみに注げば良い香りが鼻腔をくすぐった。

味は：自分の舌がバカなのか市販のものや違いがよくわからなかったが渋みや苦味といったものはよく飲む紙パックのものより少ないように感じる。

それだけしか分からないのが残念だったが所詮は喉を潤すために飲んだものなので気にしないことにした。

テレビのリモコンを手にとって、その電源をつける。江戸川先生が寝ているのでその音量は小さめに。

朝早くだったので知らないニュースキャスターの映る無機質でなんの面白みもないニュース番組がやっていた。

内容は、今日の天気だったり最近よく報道される集団自殺未遂と無気力症の増加についてだ。

無気力症については毎回同じなので特に言うこともないが、集団自殺未遂なんてものはこれまで取り沙汰されてこなかった事だ。なぜそのような事が頻発しているのか。

ニユクスが降臨するからその影響とかだろうかとは思うがそんな

るとこれまでそんなことが頻発していなかったという点が矛盾点になってしまおうし、当たり前だがスッキリするような答えが出なかったので思考を止めてお茶請けである八ツ橋に手を伸ばした。

ちなみに八ツ橋と言われてイメージできる三角形の生地の中に餡が入っている柔らかい八ツ橋は生八ツ橋で、今手に取った乾いたせんべいみたいな八ツ橋こそが普通の八ツ橋だそう。これは修学旅行に来て初めて知ったことだ。

個人的には生八ツ橋も良いがこちらの八ツ橋の方が好きかもしれない。甘すぎず、柔らかすぎず。好みの味だ。

もさもさとそれを齧りながら緑茶を飲めば絶妙にマッチしていてなんとも言えない甘みが口の中に広がった。

これがまた堪らないのだ。

こだわりで言えば緑茶と組み合わせるよりシナモンを入れたホットミルクと一緒に食べる方が好きだったりする。

この八ツ橋をお土産として買うことは確定事項なので銘柄を確認して脳内にメモしてからくあ、と欠伸をして時計を見れば6時ちょうどだった。

朝食は7時30分かららしいのでまだ時間には余裕がある。

(どうしようかな…)

散歩に行ってもいいかもしれない。が、突然居なくなったら先生が心配するだろうし、そもそも散歩が認められているのかどうかも分からないのでやっぱり部屋で待機していることにしておく。

廊下の自販機や1階の露天風呂や売店に行くくらいなら許して貰えそうだが、流石に旅館の外に出るのは不味いことくらいは分かる。かといってこれ以上の暇つぶしができるものを持ってこなかったというのは失敗だった。

ちらりと布団を見ればまた眠気が襲ってきたのもう一度横になることにした。

唐突に、謎のデロデロという音で目が覚めた。

ぱちりと目を開けて音の正体を確認すれば、江戸川先生の携帯電話の目覚まし機能だったようで安心する。

その江戸川先生はというとすぐに目が覚めたようで音を止めたあとムクリと起き上がった。

そして洗面所へと緩慢な動きで向かっていったのだった。

対する自分はどうと、ちょうど7時になっていたので服を着替えるべく起き上がった。そろそろ浴衣から制服に着替えて、下に降りる準備をした方がいいだろう思ったからだ。

さつさと着替えて管が入っている袋をしつかりと着けて立ち上げれば洗顔と歯磨きを終えたらしい江戸川先生が帰ってきた。

「今日は京都各地の名所を巡るようですねえ。かの有名な清水寺では、病氣平癒の願掛けもできるとか。今の三上くんにはピツタリでは？ ヒヒヒツ…ここはひとつ、お願いしてみるのはどうでしょう」

ニヤニヤと笑いながら江戸川先生はそうオススメしてきた。

それもいいかもしれない。もう既に手遅れかと言われればそうかもしれないが、僅かな間だけでも願掛けしてもいいかもしれない。こちらとしてもこれ以上発作が頻発してもらっても困るのだ。

「それと。清明神社という選択肢もあります。陰陽師としては一番有名な人物、安倍清明を祀っている神社ですね。そこも無病息災や病氣平癒の願掛けが出来ますよ…そうそう、特別講義でもしましょうか」ヒヒ、と指を一本立てた江戸川先生は朝食までの15分ほどでなにか語ってくれるらしい。

「清明神社の御朱印には『桔梗紋』と呼ばれるマークが描かれています。さて、そのマークとはなんでしようか」

「え…」

突然そんなことをノーヒントで言われてもわからない。

生粋の陰陽師マニアとかならサツと答えられたのかもしれないがあいにく自分はそちら方面に興味はない。ついでに

「わからないです…」

仕方ないので早々に音をあげれば、江戸川先生はメモ帳を取ってボールペンで星のマークを一筆書きした。

「正解は『五芒星』でした。答えられなかったので今日1日、三上くんのオーラはビビットピンクと黒のギンガムチェックになります。：五芒星は五線星、星型五角形とも呼ばれるものです。世界中で魔術に関する記号として扱われているんですよ。イヒツ：これを逆さにしたものがデビルスター：サタニズムに見られる悪魔の象徴とも呼べるマークになります。おおエロイムエツサイム、エロイムエツサイム：」

うやうやしげに両手を上げながら謎の呪文を唱える江戸川先生は授業中のような妖しさを帯びていた。特別講義なのでおかしくないと言われればおかしくないんだが。

というかオーラを今日1日だけビビットピンクと黒のギンガムチェック柄にするってなんなんだ。いつもの冗談だと思うので困ることは無いだろうけど微妙に気になる。

「安倍晴明ですから、ドーマンセーマンの方が三上くんには馴染み深かったでしょうか。一般的に星形というのは至る所で見ることが出来る意匠ですが、これ、魔除けとして使われてもいるんですよ」「へー：そうなんですな」

知らなかった。

というか、興味がなかった。まったく。

こんなことを言ったらこれから参拝する予定の晴明神社で怒られそうな気がするがきつと許してくれるだろう。たぶん。根拠はないけど。

「五芒星に纏わる神々といえば、メソポタミア神話のイシュタル、クトウルフ神話のシュブニグラスなどの地母神がいます。エジプトでは性的な意味合いを持つもの：『ウブ』という名でこれと呼んだとか。地母神も多かれ少なかれ性的だったり母性を意味するものが多いので、性と母性は切っても切れない関係にあるということがよく分かりますね」

「は、はあ…」

「そして性とは『生』そのもの。リビドーとエロスは生きる活力そのものといえるのです。ええ、まあ。三上くん、今のきみに足りないも

のは恐らくそれですよ」

なんだか話が脱線してきている気がする。

そして何故か勝手に願掛けから活力が足りないという説教のようなものに変わっているような。

首を傾げていれば時計を確認した江戸川先生がサツと妖しい雰囲気霧散させた。

「おっと、もうすぐ朝食の時間のようなので特別講義はここで終了ということ。地母神やエロスについてもっと深掘りしても良かったのですがね…いささか時間が足りませんし、またの機会にしましょう…イヒヒヒヒヒ…三上くんも遅れないようにして来てくださいね」
そういつてつかかけのような靴を履いてぺたぺたと足音を立てて出ていった江戸川先生の後続く。

電気はつけっぱなしでもいいとの事だったが気になったので一応消しておいた。

昼

朝食を済まし、いよいよ歴史の名所めぐりに出発となった。

観光バスの乗務員さんの話を聞き流しつつ、バズの座席からぼーっと外を眺める。

「えと…名所巡り、楽しみだね。三上くんはどこが気になってる？」

「清明神社かな。朝、江戸川先生に教えて貰ったんだ」

「へえー…」

隣の席にいる朔間くんとのお話が続かない。これは仕方のない事だろう。

朔間くんも自分もこれといって話す話題がないのだ。これまでクラスメイトとして特に仲が良かったというわけでもなく、最近少しずつ話すようになったただけなので自分は朔間くんの趣味すら知らない。そして朔間くんも自分も話す気がないのに無理やり話題を創り出すタイプではないのはこの短期間の付き合いでわかったことだった。

ついでに言えばまだ美鶴さんに謝ることが出来ていない。朝食の時も探してみたがタイミングが悪かったのか会えず、バスに乗車する際も岳羽や山岸、奏子と楽しそうに談笑していて邪魔できずに情けなく逃げてしまったというわけだ。

本当に自分が何をしたいのかよくわからない。夕方の自由行動までにはなんとか心を決めておかなければ、と気合いを入れる。

観光を邪魔するのではなく、空き時間になんとか美鶴さんに会えればいいのだが。

夕方

鴨川「三条大橋」付近

金閣寺や清水寺などバスで巡る京都の歴史的名所の観光を終え、昼食を食べた後に旅館近くを流れる鴨川の近くで解散となった。3時間ほどぶらぶらと自由行動というわけだ。

昼食を公園で食べたのだが、配られた弁当を隣に座っていた朔間くんがトンビに襲われておかずをほぼすべて奪われるというアクシデントが発生し、半分に分けて食べることになったので少し腹が空いている。

朔間くんや高梨さんと別れ、ひとり川の上で水浴びをするサギを眺めてあれは食べられるんだろうかなどと考えて、更に腹が減ってきてしまったので少し考えを切り替えることにした。

ずばり、どうやって美鶴さんに謝るか、ということだ。謝る言葉は決めたが、あまり直接的にズバツと言ってしまうと更に傷つけかねない。

どこまでオブラートに包むか。どんな言葉を発するか。それが問題だった。

そんなことを考えていれば、近くで足音がして思わず座ったまま振り向く。

「三上…」

「美鶴さん……」

そこにいたのは美鶴さんだった。

こんな川べりに何しに来たのかわからないが、タイミングを伺っていたというのにいざ顔を合わせると気まずくなる。

「…邪魔したな。すまない」

「待って！」

そう言っただけで立ち上がり、踵を返そうとした美鶴さんの手を思わず掴んでしまう。しまった。まだ話す言葉を何も決めていない。

ええい、ままよ。こうなったら当たって砕けてしまえ。

「美鶴さん、これまで避けてごめん」

勢いよく頭を下げれば美鶴さんはぱちくりと目を瞬かせる。

「俺から断った癖に、勝手に気まずくなつて…美鶴さんを避けてたのは最低だ。今更謝つたつて遅いかもしれないけど、その、なんていうか、あの時も色々言葉が足りなくて、美鶴さんを傷つけた。だから、もし美鶴さんさえ良ければ、少し俺に時間をくれないか」

「今更、君の言葉を聞いてなんになる」

美鶴さんから返ってきたのは否定の言葉だった。

その言葉に目を見開けば、その言葉を発した美鶴さん自身も「やってしまった」と言いたげに青い顔ではくはくと口を開け閉めしていた。けれど、それはきつとこれまでの美鶴さんの本心だろう。そういう気持ちになつても仕方ない事だと思う。

「…あ…ちが、三上、す、すまない、ちがうんだ」

「…ええと、うん。ごめん…都合よすぎだよな。一方的に俺が美鶴さんを避けてたし、何様なんだよって話だよな…」

美鶴さんの手を離す。あまり強い力で握っていたわけではないが、何かの拍子で跡がついてしまつては美鶴さんを傷つけることになるし、父親である武治さんに叱られるどころか接触禁止令でも出されてしまいそうだ。

「……あ……」

手を離して、寂しそうにする美鶴さんから視線を外し座り込む。あくまでも、離れやすい雰囲気づくりが大事なのだ。

「これはあくまでも俺の独り言だから。すぐ立ち去ってもいいし、聞かなかったことにしてもいい」

『独り言』だということ強調する。

独り言なのだから、自分が恥ずかしい事をべらべらと喋っていてもそれは美鶴さんのせいでもなんでもない。

「：俺さ、美鶴さんから『好きだ』って言ってもらえてうれしかったよ。すぐく。舞い上がっちゃいそうだった」

後ろにいるであろう美鶴さんの気配はそこから動いていないようだ。ただ。後ろは見えていないので美鶴さんが今どんな表情をしているのか、全く分からない。

だから戦々恐々だ。自分の勘が鈍って誰もいないのにこんなこっぴどかしい『独り言』を延々喋らなくてはいけないのだから。

「それで、なんで断ったかっていうとき、理由は色々ある。俺はこんなだし、近いうちに死んじゃうかもしれないってのもそうだし、きつと、美鶴さんの望むようなことはなにひとつしてあげられない。けど、一番は俺ということで美鶴さんが不幸になっちゃうんじゃないかなって思ったからなんだ」

「だったら友だちになるなって話なんだけどき」と続ければ、少し虚しくなった。

最初から関係を持たなければ、喪って傷つくことなどない。だから、俺の選んだ手はとことん悪手なのだ。

誰とも関係を持たず、目的以外に無関心でいればよかった。ただそれだけの簡単なことだったんだ。

「勝手に幸せ・不幸せを決めつけるなって言われちゃいそうだけど、俺は美鶴さんに不幸になってほしくない。遅かれ早かれ来てしまう。別れ”で美鶴さんが辛い思いをしてほしくない。特別な関係になつてしまったら、”別れ”はきつと耐えがたいものになつてしまうから」

自分は何を言おうとしていたんだっただか。

もう話がめちやくちやで、とにかく浮かんだことを口走っているだけになつているが、なんだかこれでいい気がしてきた。もう美鶴さん

に許嫁がいるとかどうでもいい。

最初から、本音を包み隠さず言えばよかったんだ。

「あとは、美鶴さんを千鶴さんと重ねてみるんじゃないか、とか。ちやんと『今』の美鶴さんを見れているのか、とか。たくさん。沢山あるんだ」

「…そういうものを、抜きにした…三上の気持ちはどうなんだ…？」
独り言にここで初めて返事が返ってきた。まだ美鶴さんはいてくれているらしい。

それがよかったのかはわからない。けれど、不安要素なりなんなりを抜きにした今の俺の気持ちはなんだと言われればそれは一言で表せる簡単なものだ。

「好きだよ。俺も、美鶴さんの事が好きだ」

ただ、その好意は綺麗なものではないけど。

小石を拾ってぽいと川に投げる。水切りをしようってわけではなく、言ったことが少し恥ずかしくてそんな恥ずかしさをごまかしたかっただけだ。

美鶴さんの顔もまっすぐ見れないのに、こんな形で「好きだ」と伝えてしまうことになるとは思わなかった。そもそも、言うつもりもなかったのだ。

当初の予定では特別な関係にはなれないがこれまで通り友だち付き合いしましょうね的なアレコレを言って何とかごまかす予定だったのだ。それが、何の因果かこうして好きだと口走ってしまったている。

ああ、どうしよう。

「そうか…」

足音がした。

カツリとハイヒールの特徴的なその音が数回して、影が差す。

「あ」と声を出す間もなく、背中に重みと柔らかい感触が乗った。

これは、まさか、もしかしなくても、いま、自分は

「…ふふ」

笑い声。それと、身体に回される手。

「私もだ。何度でも言おう。…好きだ。君のことが」

周りの音が何も入ってこない。

川の音も、夕日に反射して輝く水面も。美鶴さんの声と触れた感触以外、全部が遠くなる。そつと俺を抱きしめている美鶴さんの腕を放し、向き合う形になれば美鶴さんの顔は真っ赤に染まっていた。きつと、自分も同じように真っ赤になっているのだろう。

「お、俺だって男だよ…？　な、なにするか、わかんないよ。ひ、酷い事とか…しちやうかもじゃん。それでも、いい？」

「するのか？　私としては…そ、そうだな、君の違った面が見られるのならウエルカムと言いたいところだが…程度にもよるだろうな」

「や…そんなこと言われたら…しない、し。たぶん。だって、閉じ込めて誰の目にも触れさせたくないだなんておかしいだろ…」

ふたりでしどろもどろになりながらついに醜い欲望を吐き出せば、美鶴さんはまた恥ずかし気にはにかむ。

「君がそんな気持ちを私に対して持っていたのは意外だな…だが、短時間なら、いい…と思う」

ぽぽぽ、と美鶴さんの顔がより赤くなる。

「いや、自分が思っている閉じ込める云々は恒久的なんだ」と言えずにこちらもへにやりと表情を緩めてしまう。だらしない表情筋だ、と思いつながらもうだうだと悩んでいたのがバカらしくなってきた。なんかもう、小難しい事は後で考えたい。

自然と美鶴さんと手が触れ合い、そして絡み合った。

「私たちの関係は私に許嫁がいる以上しばらくは表沙汰にはできないだろうが、私からお父様に掛け合ってなんとかしてみよう。勿論、お叱りを受けるのは承知だ。しかもし許されなかったら、その時は…」

「それ、俺も一緒に行くよ。もし美鶴さんのご両親に叱られるなら俺と美鶴さんの2人じゃないと。だって両思い、なんだろう？」

「それもそうだな」

ふたりで笑い合う。

できれば、12月になってしまう前に。

そんなことを考えていれば唐突に美鶴さんが真剣な表情になった。きゅ、と顔を引き締め、こちらをまつすぐ見つめてくる。そして、緊張するのか大きく息を吸った。

「…私はこの前、三上に生きてほしいと言ったな」
「うん」

「よくよく考えてみたんだが、ただ『生きていてほしい』などと言うのではなく、君が生きれる道を探すべきだったんだ。死ぬ原因があるなら、それからきみを守る力が欲しいと思った」

美鶴さんの表情が憂い気になる。

こんなタイミングでこんなことを思うのは酷いが、美鶴さんの決意は無駄に等しい。絶対ニユクの死スにただの人間ひとりが抗えるものではない。

湊と奏子が得た『宇宙のアルカナ』だって、奇跡が起こって手に入れたものだ。

だから、ちよつと力を得た程度では難しい。それこそ、魂や己の存在自体を賭ける程度でないと。

どちらにせよ少なからず人であることをやめる必要があるのだ。

「君はもう知っているのかもしれないが、以前私は戦う理由を『罪滅ぼし』だと言っただろう。その、あれは嘘だ。本当は、お父様を守りたかっただけなんだ。お父様は、桐条の責任のすべてをたった一人で抱え込んでいた。あの事故以降、死に場所を探しているような顔をしていて…それが今のきみの顔とよく似ているんだ」

「……そ、れは…」

「もちろん、君のことが好きだというのは嘘偽りない気持ちだ！私だって、三上が言ってくれたことと同じで君をお父様と重ねてみていたかもしれない、と不安だったんだ！だが、告白を断られてから常に君のことが頭の中から離れなくて、わからなくて…」

美鶴さんが武治さんのことが好きなのは知っていた。俗にいう、ファザコンというやつだ。

だが、武治さんと自分を重ねていたかもしれないというのは初耳だった。

そんなに自分は死に場所を探しているような顔をしているのだろうか。思わずむにむにと触ってみるもわからない。

「だが、もう決めたよ。私はお父様だけでなく、きみも守りたい。君を守るだけの力が欲しい」

「そういうの、普通は俺とか男の方が言うもんだけどね…」

カッコよく告白されて、もはやこちらは形無しである。

はは、と笑い返したその瞬間、ぱきんとガラスの割れるような音が響いた。

「!?!」

空に「ペンテシレア」の姿が浮かび、その姿が鎖鞭を持った正しく『女帝』と言わんばかりの姿に変わる。

「アルテミスシア」。

ギリシャ神話の月の女神アルテミスに由来する女性人名を持つハリカルナッソスの女王だ。夫の死後女王になったという意外とシャレにならない経歴を持つペルソナでもある。

正直、まだ両想いになってすぐだが美鶴さんをこのアルテミスと同じ道を辿らせたくない気持ち湧いてきた。

ほんの、すこしだけ。けれど湊と奏子、ついでに世界を救うためには自分の考えている方法しかいまのところないわけで。

だから、何も言わずに黙っておこう。

「仲直りしてみたみたいで結構ですけどー、もう戻らないと夜の点呼に間に合いませんよー」

後ろから飛んできた声に自分も美鶴さんも反射的にバツとつないでいた手を離して何事も無かった風を装う。

後ろを振り向けば岳羽がそこにいた。

「三上先輩、江戸川先生が探してましたよ。なんでも、温泉に入る前に聞いておきたいことがあるとかなんとか…」

「わかった。すぐ行く。それじゃあ美鶴さん、またあとで」

温泉に入る前に、ということとは軽い問診だろう。

昨日もそれはあったので特別なことではないし、待たせるのも悪いので美鶴さんに向かって手を振れば、またはにかんで手を振り返して

くれる。

「ああ。また」

そうしてばたばたと小走りで、かつ顔のにやけを抑えながら旅館へと向かった。

足早に立ち去った優希の後ろ姿を見ながら、ゆかりは美鶴へと歩み寄る。

先ほど見た2人はどう見てもこの数日とは比べ物にならないくらいに親し気で、仲直りした以上の何かがあったに違いないとゆかりは推測した。

「で、どうだったんですか？ 仲直りどころか仲が進展しちゃったんじゃないですか？」

「ああ。ふふ、聞いてくれるか？」

「もうすぐ点呼なのでまたあとで、なんて」

嬉し気な美鶴の顔にゆかりまで嬉しくなり、軽い冗談を言う。

だが、ゆかりがここに来たのはもうひとつ、しなければならぬことがあったからだ。

幾月の裏切りがあつて以降、ゆかりと美鶴は親しくなった。それまで険悪、とまではいわないが双方気まずいものがあつたのは確かだ。それが幾月によって解消されたとなると悪い事だけではなかったようにも思える。されたことはそれぞれ肉親を殺されているので最悪にも等しいが。だが、もしそれがなかったとしたら。ゆかりはここまですべて美鶴と親しくなれたらどうかと思索した。

そして、きつと自分の性格から考えるにそうはなれなかったかもしれない、と考え至つたのだ。

きつと、いつまでも意固地になつて色眼鏡をかけたまま美鶴を見てしまつていただろう、と。ゆかりから見た美鶴はこれまで完璧人間というイメージだったが、一步近寄つてみるだけで全く完璧でも何でもない可愛い人だというのがよくわかつた。そして、邪気がないという事も。

綺麗すぎてそれはそれでまた嫉妬してしまいそうではあるが、そこはもう、ゆかりにとつては美鶴の愛嬌だと思うことにしてしまった。「私…前に、この辺に住んでたことがあるんです。父さんが死んでから、母さん…いつも知らない男と一緒にいたんです。それが嫌で、いつつこの辺の川べりに1人で来てました」

これはまだ仲良くなつたとはいえ、美鶴にも話したことない事だった。

正直なところ、ゆかりは母親のことまで話すつもりは無かった。ここに来なければ、思い出そうとすら思えなかつたのだ。

「だから私…せめて父さんを信じてないと、普通でいられなかつた…」美鶴の顔がさつと陰る。ニクスという最終的な立ち向かうべき存在が明らかになつたとはいえ、桐条の罪は帳消しにはならないのだ。

「君の父は…そそのかさされただけだ」

「…お父さん、危ない研究に加わつてたけど、最後は、食い止めようつてしてくれた。シャドウを放つておくと危ないぞつて。身体を張つて、食い止めようつて。幾月のことも警告してくれて…でも、それも全部幾月にパーにされちゃいましたけど。けど、私、だからこそ戦うことにしたんです。私、影時間をなくすために戦いたい。お父さんの遺志を…継ぎたいから。たとえ相手が勝てない相手でも、立ち向かつていこうつて思つたんです」

「岳羽…」

「だから先輩。その、私と一緒に戦つてくれませんか。これまで先輩に沢山ひどいこと言つたりしましたけど、全部チャラでなんていいませんよ!?! けどちゃんと、引け目なしでもっと仲良くなりたくて! あ、三上先輩とのことはもちろん応援してますよ! あの手先先輩相手だとメンドクサ…いろいろと大変でしょうけど頑張つてくださいな!」

「ぶっ…」

言いたいことを詰め込んでいけばつい本音が漏れ、慌ててゆかりが誤魔化すように中途半端な応援をすれば美鶴は噴出して笑みを浮か

べた。

その実、ファザゴンという点ではゆかりも美鶴も似た者同士であるのだ。だからこそ、ゆかりは父親が生きていた美鶴に嫉妬していた面もあった。

それももう過去のことだが。

「ふふ、ありがとう。私の方こそよろしく頼むよ。　ゆかり」
「！」

美鶴からの「ゆかり」呼びにゆかりは破顔する。

「ヒュプノス」から提示されたふたつの選択に対し迷いがあつた美鶴だが、優希との会話やゆかりからの誘いもあり完全に意見が固まった。

もう迷わない、と美鶴自身も避けられぬ滅びに立ち向かう事を決め、その表情から愁いが消えたのを見てゆかりは頷く。

「…じゃあ、帰って露天風呂ってことで。三上先輩との話もそこで聞きますよ」

「風呂？」

突然ゆかりに提案されたロケーションが露天風呂、という事に美鶴は首を傾げる。

何故風呂なのか。

「まだ見てないんですか？　あそこの露天風呂すごいんですよ。これからは、裸の付き合いという事で、恋愛でもなんでも、相談してくださいね！」

「…裸？　どうも、恥ずかしいな」

基本、寮では美鶴は自室にあるバスルームに入るか、下の共同浴場に入るにしても女性メンバーが少ないために鉢合わせする場面がほとんどない。だから慣れなくて、美鶴にはどうも恥ずかしかったのだ。

しかし恥ずかしいのはゆかりも同じだった。

「ちよっ、赤くなんないで下さいっ！　こっちだって、ハズかしいんだからっ！」

同じく恥ずかしがったゆかりはそれを振り払うようにわざとぷり

ぷりと怒るようなフリをする。

「もう、行きますよ、門限過ぎてるし！」

「わかったわかった」

走り去っていくゆかりの後を、困ったように美鶴が追いかけていく。

変わっていく関係性。それが、こうして円満に移り変わっていくのだから秋も捨てたものではないな、などと美鶴は幸せをかみしめていた。

たとえその先に避けられない絶対の滅びが待っていたとしても、今なら勝ててしまえばいい、そんな気が。

夜

旅館2階

「よう。三上、ヒマか？」

夕食を終え、念願の露天風呂にも短時間だが入浴できてホクホク顔で部屋に戻ろうとしたら、ガタガタと茶色い革張りのマッサージチェアの上で揺られている真田くんがこちらを見つけて声をかけてきた。

やることも無いしあとは布団をひき直して適当に時間を潰して寝るだけだと思っていたのでちょうどヒマではある。

なので頷く。

「なら、ちょっと付き合え」

「いいけど、何するの？」

「露天風呂、旅館と言えばアレだろう」

「アレ？」

コーヒー牛乳とかフルーツ牛乳イッキ飲みだろうか。

こう、腰に手を当ててグイッと。

温泉や露天風呂、銭湯の風物詩だ。定番とも言う。最近はこちらよちよち飲むヨーグルトなどの変わり種がラインナップされていたりして面白い。

自分は風呂上がりに牛乳も良いが、アイスも捨てがたいと思っている。

小さい60円くらいのバナラアイス。なんとかバーという名前のやつだった気がするが、あれを食べるのもまた良いのだ。

モコイさんと一緒に銭湯にでも行つて楽しめばよかつたな、と名残惜しく思つていれば浴衣に入れた袋がカタカタと僅かに震えたような気がした。

「ここだ」

「ここつて…」

真田くんに連れてこられた場所は売店でもコーヒー牛乳などが入っている自販機の前でもなんでもなく。

旅館の中にある人気の無い遊戯室だった。

ちやちなクレールゲームや90年代のゲーセンに置いてあつたんだろう古いゲームの箱体が何個も並んでいる。

そしてその奥にある卓球台へと真田くんはずんずんと歩を進めた。

「やるぞ」

「やるつて、卓球を？」

「それ以外に何がある」

聞き返せば真田くんはムツとした顔になった。たしかに、ここに来てラケットとピン球を出せば卓球をする以外何やるんだつて話にはなる。

なるけれど、正直体力のなさを実感しているので元氣モリモリな真田くんと自分ではまともな戦いになるとは思えない。

でもまあ、運動不足でもあつたのでちようどいいかもしれない。いま、やる気だけはあるのだ。やる気だけは。

「それともなにか、怖気付いたか？」

勝ち誇つたような笑みを浮かべた真田くんはえらく挑発的だ。

そつちがその気ならそれに乗つてやる、とこちらも挑発的な笑みを浮かべ返してやる。

「はあ〜？ 怖気付いた訳じゃないし〜？ んにやる、それなら受けて立つてやる！ 泣いて這いつくばる様を見るのが楽しみだ

な〜〜!」

あつはつは! と笑えば目を一瞬ぱちくりと瞬かせた後、真田くんは獯猛な獣のような顔になった。

なんとというか、捕食者のアレだ。真田くんの闘争スイッチを自分は押してしまっただけ。やってしまった。

「ならば、手加減は要らないな?」

「アツ、その、やっぱ病み上がりなんでお手柔らかに…」

「問答無用ツ! いくぞ!」

スパアーンツ!

「ヒィ!」

顔面スレスレを真田くんが打ち出した豪速球が掠め、だらりと冷や汗が流れた。

今のはピン球ではなく銃弾かなにかか。卓球のルールを無視したそれは当たっていたら間違いなく痛いじゃ済まなさそうな感じだった。アザくらいは出来そうだ。

自分の知る卓球はもつとこう、穏やかなものだと思っていたんだが。

こんな命と命のやり取りをするスポーツが卓球だというのか。いやいやそんなわけないだろうとかぶりを振ってコロコロと転がったピン球を拾う。

「えーと、いくよ…?」

「ドンと来い。どこからでも受け止めてやる」

打ち上げて、ワンバウンドさせて真田くんの方へとサーブしたピン球が向かっていく。

それを難なく打ち返してきた真田くんは余裕綽々のようだ。

カコン、と音を立てて自分はそれを打ち返す。

まだ1回打ち返したくらいなら体力は大丈夫そうで安心した。むしろ1回目で息切れするようななら早急にギブアップしているところだった。

「美鶴に告白したらいいな?」

突然の真田くんの追及に動揺して手がブレるも、何とか打ち返す。

カコン

「ど、どこでそれを…」

「高梨からだ。こっそり教えてくれたぞ。あとは、美鶴の雰囲気が変わったからな。大なり小なりなにかあったんじゃないかとは思っていた」

「なるほど…」

壁に耳あり障子に目あり、とはそういうことらしい。どこから見ているのか知らないが、情報の伝達が早すぎる。

カコン

「俺は、美鶴が幸せならそれでいい。だからあいつを泣かせるようなことがあれば…分かっているな？」

突然卓球に誘われたかと思っただけなら説教が始まったのにはびっくりだ。とはいっても、今のところ真田くんは先程のような本気じゃないのかピン球の速度はあまり早くない。

言われたことに関しては、分かっている。

両想いだとわかって、結ばれて。いま、すごく、幸せなんだ。

けれど俺はきつと、美鶴さんを泣かせることになってしまう。置いていってしまうことに変わりはない。

大事なことは何も解決してなくて。

カコン

「……っ、」

息が乱れる。

ここで初めて、真田くんから打ち出された球をとりそこね、拾って打ち返す。

ダメだダメだ。暗い思考に浸ったら気落ちしてしまう。自分は引つ張られやすいのだから、ちゃんとしていないと。

カコン

「…だが、よく分からんそこの男より、俺はお前で良かったと思ってる。それとまだ礼を言っただけじゃなかったな。ありがとう」

「な、なんの…？」

カコン

「天田とシンジの事だ。お前がいなければ今頃…いや、なんでもない」
真田くんは照れたように顔を逸らした。とはいってもちやつかり球を打ち返してきているので礼を言ってくれても負けるつもりは無いらしい。とことん、真田くんらしいっちゃらしいのでそこは嫌いではない。

しかし天田くと荒垣くんのことに關しては自分は何もしていない。いや、したことと言えば天田くんを嘲ったことくらいだが、あれはノーカン。

カコン

「はあ、はあ…」

しばらく打ち合いを無言で続けていたがそろそろ体力の限界みただい。

直前に露天風呂へ行つたのも不味かつたのかもしれない。

カコン

「なんだ。あんな啖呵を切ったくせに覇氣がないぞ覇氣が。そんな奴に美鶴は渡せんな」

カコン

「ひい、ふう、はあ…すみません調子乗った俺が馬鹿でした…てか、真田くんは小姑かなにかなの…ふうふう…」

カコン

「そんなわけないだろう。俺と美鶴は血縁關係にない」

「はあ…いや、そう、じゃなくて、もののつ…例えというか…うえ、げほげほつ…」

カコン。

ムスツとした顔になった真田くんに訂正しつつ咳き込みながらへろへろとなんとかピン球を打ち返せば、真田くんは心配そうな顔に変わってその球を打ち返さずにぽんと打ち上げて片手でキャッチした。

「大丈夫か？」

「ごめ、ほんと、ちょいギブ…はーっ、はーっ…ごほつ…」

心臓の音がこれでもかと早鐘を打っている。ほんの少し、遊んだだけなのにこうなってしまうのは予想外だった。

卓球台に手をかけぶら下がるようにしゃがみ込み、息を整えようとした。

「……っ……！」

ぐにやり。

視界が歪んで暗くなる。あつという間に卓球台にかけた手が滑り落ち、身体がくずおれる。

呼吸をしているはずなのに、酸素が足りない。まるで水の外に投げ出された魚のように口をはくはくと動かすも、上手く息が吸えない。

「三上ッ！ くそ、いま誰か先生を呼んで……」

近くに駆け寄って来た真田くんの浴衣の裾を掴んで首を横に振る。

「だ、いじよぶ……ほっとけば、なお……るから、」

上手く言えてるかどうかはわからない。

ただ、今ここで人を呼んでもらう事だけは何としても避けたかった。

「バカを言うな！ 放っておいて治るものじゃないだろう!? それこそ……死んでしまつたらどうするんだ!?!」

「……」

首を、横に振る。

発作では無い。単に、きつと酸欠なだけだ。

真田くんの浴衣の裾を掴んだまま呼吸を落ち着かせることを意識して、大きく吸う。

ごろりと姿勢を変え、なんとか息を整えた時には身体は冷えてしまったし、裾を掴んでいた手なんかは真つ白になってしまっていた。カタカタと、僅かに震える。

「……ほら、ね。言っただろ、だいじようぶ、だつて」

へらりと笑えば真田くんはバツの悪そうな顔になった。

「そんな死にそうな顔で言われても説得力ないぞ。ただ、悪かった。そこまですとは思わなくてだな、無理をさせた」

「いや、俺も……ここまですとは思わなくて。調子乗ったし、実際ちよつと楽しかったし……げほっ……だから真田くんのせいじゃ、ないよ」

本当に、見通しが甘いと言わざるを得ない。

もう少しいい勝負が出来ると思ったのに蓋を開けてみればこのザマだ。

露天風呂に入っていたことを加味してもこんなちよつと運動しただけでぶつ倒れるなんて体力不足にも程がある。

「コーヒー牛乳奢るから、このことは秘密つてことで」

「鼻血まで出しておいてよく言う。流石にそれは隠せないぞ」

起き上がるのを手伝ってもらい、身体を起こせばポタリと浴衣に赤い水滴が落ちたので鼻の下を触ればべつとりと血が指についた。気がつかなかった。

それは真田くんも慌てるわけだ。

「うわ、クリーニング代とか請求されなかな」

「知らん。そのまま外に行くなよ。頬までべつとりだ」

「ごめん、タオル持ってきてほしい」

そう言えば、頷いてタオルを取りに離れていった真田くんの後ろ姿が完全に消えるまで見送り、床を見つめる。

流石にこれはまずい。床にまでベタつとハンコを押したように血がついている。

このままにしておいたらそれはそれで大騒ぎだ。

恐らく露天風呂の熱さで逆上せて、その上こんな運動をしたので興奮して鼻の血管がちよつと切れてしまったんだろう。

「う…げぼっ…」

喉からなにせりあがってくる感覚がして、そのまま背中を震わせべしやりと床に吐き出せばそれは嘔吐物は嘔吐物でも食べたものや胃液ではなく血だった。

拭くものが何一つ無いので仕方なしに手で拭う。

「は…は…は…ああクソ、」

いま追加で床に吐いた血も、興奮して身体が驚いたからなのだと誤魔化そう。

どのみち、タイムリミットが近いだなんて信じたくない。

天国から地獄に落とされた気分だった。

けれど今だけは、見なかつたことにしたい。

見なかったことにして、楽しいことだけを考えていたかった。

じゃばじゃばと朱に染まったタオルを洗う。

あの後、真田くんからタオルを貰った自分はゴシゴシと乱雑に頬と鼻と口元を拭って、床を綺麗に拭いてから近場の洗面台でタオルを洗うことにしたのだ。もちろん、誰にも見られないようにササツと移動してここまで来た。気分はステルスゲームの主人公だ。

血が落ちにくくなるからお湯で洗えないために水で洗っているものの、指先の感覚がなくなってきたような気がする。ついでにめっちゃくちゃ身体がだるい。疲れた。

「…本当に誰にも言わなくて大丈夫なんだろうな？」

心配だから、と後ろで見守ってくれている真田くんが不意に口を開いた。

出てきたのは不安げな、それでいて気遣うような言葉だった。

「んー…大丈夫だよ。さつきはちよつと久々の激しい運動で身体がビククリしちゃっただけだし、ほんとに大事でもなんでもないから」
「……」

それに、顔を向けずに答える。

真田くんからの答えは無かったが、気にせず洗濯を続行した。

薄く赤く染まった水が排水口へと流れていくのを見ながら、このくらいでいいかと注意してみないと赤くなっていたと分からなくなったタオルを固く絞って広げる。

あとはこれを旅館の至る所に設置されている適当な洗濯物入れカゴに入れるだけだ。

「待っていてくれてありがとう。もう洗えたし、さつき奢るって言ったコーヒー牛乳買いに行こうよ。俺、喉乾いちやった」
「…ああ」

露天風呂前の自販機コーナーまで向かえば色とりどりの変わり種な自販機が出迎えてくれる。カップラーメンの自販機に、お菓子の自販機。あとはホットドリンクが紙カップに入れられて出てくる自販

機だったり、目的の乳製品専用の自販機もある。

残念ながらパーキングエリアで置いてあるようなハンバーガーやフライドポテトなどのジャンクなスナックを扱っている自販機はさすがになかった。

「はい」

ガコン、と自販機から落ちてきたビンを取り出して真田くんに渡す。

鼻血は完全に止まったので洗っていた時に鼻に嵌めていたティッシュは既にゴミ箱へとシュートされている。

浴衣の襟に垂れた血も洗ってあるので誤魔化しは完璧だと言わざるを得ないだろう。

真田くんはそれを無言で受け取ると、きゅぽ、と音を立ててビンのキャップを外してそれを飲んだ。

自分も真田くんが続いてフルーツ牛乳の蓋を開けて飲む。

ごくごくとすさまじい勢いで腰に手を当てて普通の牛乳を一気飲みする真田くんは様になっている。

対して、自分は長椅子に座ってちびちびと舐めるようにして飲んでいる。あまり急いで飲んで嘔せても心配されるだけだし、冷えてしまった身体がもつと冷めてもいけないので少しずつ。

半分まで飲んで、寒いのなら横の自販機にあるホットココアにすればよかったかなと考える。が、結局鼻血を出したのだからカフェインの含まれる飲み物はやめておいた方がいいかと結論付けてまたフルーツ牛乳を味わう。

「こんなところで寝るなよ」

「流石に寝ないよ!?!」

あつという間に牛乳を飲み干した真田くんがようやく喋ったかと思えば幼児を注意するような言葉で思わずツッコんでしまった。

自分はあるか、腹が満たされたら眠くなる子供だとも思われているのか。だとしたら心外だ。なんか、荒垣くんにしる真田くんにして、自分のことを年下の子供か何かだと思っていないだろうか。湊でもあるまいし、自分はそんな食べてすぐに椅子で寝るようなタイプでも

…ない、はず。

……。

だと思ったが思い返せばここ2週間ほどはぼーっとしてラウンジのソファア-で寝ることも多かったので真田くんの言葉はあながち間違いでもなかった。ぐぬぬ。

呆れたような顔でこちらを見つめてくる真田くんはこちらの言葉を信じていない様子だった。確かに、思い返せば信憑性は無いに等しいと思う。

「飲み終わったら部屋に帰れよ」

「分かってるよ。暖かくしてちゃんと寝る」

「そこまでは言っていない。が、まあいい。風邪をひかないようにな」

もう少し体力が残っていたら、この暖簾の向こうにある露天風呂にもう一度入ったのになあ、と名残惜しく見つめて残ったフルーツ牛乳を飲み切って空きビンをゴミ箱へと突っ込んで立ち上がった。

出合いと湯けむり（11／19～11／20）

11／19（木） 昼

今日は京都市内の散策だ。班で固まって自由行動である。もちろん、別の班同士でくっついて行動しても大丈夫だ。

お土産屋巡りをするもよし、観光地を巡るもよし、普通に市内のビル街に行つてワックをたべるもよし。これぞ修学旅行の醍醐味！
といった感じだ。

自分も美鶴さん達と意見を合わせて観光がてらお土産屋の並ぶ新京極しんきょうごくどおり通までやってきたのだが、

（どうしよう…）

はぐれた。

迷子といつても過言ではない。ひとりぽつねんと人の往来する道路の端で立ち止まる。

観光シーズンだから人が多く、ちよつと目を離れた際に皆の姿が見えなくなつてしまった。

電話をかけてみたが美鶴さんも朔間くんも誰も出ず。高梨さんの電話番号は知らないので電話をかけることが出来なかった。

折角楽しめると思つたのに、早々迷子になるとはなんとというか、運がない。ちよつとシヨックだ。

とりあえずメールで「諸事情により別行動するので気にせず楽しんで」と送つて江戸川先生に電話をかければ「ムリに合流しようとせず、散策に満足したら旅館まで戻つてきてください。何かあればまた電話を」と許可を貰つたので気を取り直してお土産を見ることにした。

荒垣くんに頼まれた漬物を見ようと漬物の専門店で試食しつつどれがいいかと悩んでいると、ちよつと手を伸ばした先で誰かの手とぶつかつてしまう。

「すみません」

はつと顔を上げて謝れば、60代くらいの女性もはつとしたような顔でこちらを見つめていた。

灰色がかつた黒髪をまとめ上げ、頭の後ろで結わえたその人はが

しつと俺の手を掴むとずんずんと引つ張って店を出る。

「ちよ、えつ、ちよつと!?!」

「静かにおし」

突然のことに驚き、戸惑うも女性は止まらない。誘拐か!? と思うが自分なんかを誘拐してこの女性が得することは何も無いしそもそも力関係で言えばたぶん、自分の方が強い、と思う。なのでいきなり連れ出された意味が分からない。

人気のない路地に入り、そこでやっと女性は立ち止まってこちらの手を離れた。

「——悪かったね、突然連れ出して。ただ、そうさね…「イツマデ」、あの雑魚悪魔を燃やしな」

「まったく、悪魔使いの粗いばあさんだ!」

ケケケ、と笑い声がして、頭が骸骨の青い鳥のような悪魔が現れた。かと思えば自分の背後の虚空を焼く。

否、虚空ではない。そこには確かに何かがいいて、ギャツと断末魔を上げることなく消し積みになった。気がつかなかった。というより、最近襲われることがめつきりなくなっていたから油断していた。

なにか——恐らく悪魔だろう——を焼いたイツマデはすぐに消え、女性はその黒い喪服のような自らの服をはたく。

「まったく、減らず口を…ああ、アンタ本当に報告書通り悪魔に狙われやすい質^{タチ}みたいだねえ。18代目とゴウトから聞^{タチ}いてるよ。黙示録の四騎士を神降ろしされてるっていう子だろ?」

「へ? あ、はい…?」

18代目とゴウト。ついでに黙示録の四騎士の関係となれば自分以外にありえない。つまり、この女性はライドウくんの知り合いかなのだらうか。少なくとも、サマナーに間違いなさそうだった。

「ほら、オトコノコなんだからもう少しシヤキツと返事しな!」
「!?!」

ナハハ、と豪快に笑いながら背中をバシバシと叩かれて目を白黒させればすぐにその手が頭へと乗せられてわしわしと撫でられる。

「ま、もう大丈夫だし帰んな。修学旅行で観光中だったんだろ。邪魔

したね」

「え、あの…それだけ？」

頭から手を離し、さっさと踵を返そうとした女性を思わず呼び止めれば待つてましたと言わんばかりの茶目っ気のある笑顔で音もなく寄つてきた。

「そうかいそうかい。なら暇で寂しい年寄りに付き合ってもらおうじゃないか」

そしてそのままぐわしと腕を掴まれて女性の腕と組まれる。

この人は構つて欲しいのかたまたま自分を見つけて助けてくれたのか、さつきからよくわからない。

ただ、嬉しそうな表情をしているので満更でも無さそうだ。

僅かにカタカタとモコイさんの入っていた管が揺れているような、ほんのりと暖かくなったような気が袋越しにした。

「ここらに行きつけの喫茶店があるんだよ。アタシが奢つてあげようねえ」

「えっ、ええ…あの、ありがとうございます…？」

連れられて、引つ張られるまま薄暗い雰囲気のカフェへと入る。人はまばらでレトロな感じのカフェだ。

「ほら、好きなのを頼みな。遠慮しないでいいよ」

「けほっ…」

タバコを吸っている人がいるのか少し煙たい店内の窓際の席に女性と対面するように座つてメニューを開いた。

ソファも店の内装通りずいぶんと古めかしく、少し穴が空いていたりほつれている。

メニューはパスタやサンドイッチなどの軽食からコーヒーフロート、メロンソーダなどのソフトドリンクが文字だけで羅列されている。その中のある飲み物を見つけてそれにすることにした。

「…じゃあ、これで」

「あいよ」

おずおずとそれを指さして注文してもらえば、しばらくして頼んだものが運ばれてくる。

目の前の女性はコーヒーをブラックで飲むらしく砂糖とミルクを外していた。対する自分というと、頼んだもの——ホットのミルクセーキをくるくるとスプーンでかき混ぜて小さく口をつけた。

「アンタ、それ、好きなのかい」

「ええ、まあ…」

「ふうん」

あまり飲める機会はないけど、とは口に出さないのでおけば女性は複雑そうにこちらを見つめてくる。

しばらく自分がミルクセーキを飲むさまをまじまじと観察した彼女は机の上に手を伸ばすと小さな瓶をとって差し出してきた。

「シナモン、入れるの好きだろう？」

どうしてそれを。なんて言葉は吐き出されなかった。

彼女の言う通り、自分はホットミルクと同様にミルクセーキにもシナモンを入れるのが好きだ。そして、自分はこの店に別で入れられるパウダー状のシナモンが置いてあるとは思っていなかったのだからそれをおくびにも出さないようにしていたのだ。なのに、何故か彼女は会ったばかりだというのに自分がシナモンを入れることが好きでそれを入れたがっていると分かった。

ライドウくんやゴウトから聞いた可能性もないことには無いだろうが、そもそもそんな情報を彼らは知り得ないだろう。

だって、港区にある『喫茶シャガール』でも他の店でもミルクセーキを頼むことはおろか、今年に入ってからなにかにシナモンを振りかけたことがなかったからだ。そもそもミルクセーキが置いてある店が少ないというのも理由のひとつとしてあるが、知りようがない。

なのに知っている。

思わず警戒心を強めれば、フツと女性は軽く笑った。本当に、子供を見て笑うような感じで。

「そう警戒しなくてもいいさ。ただ、なんとなく——そうなんじゃないかって思ったただだよ。なんてこたあない、年寄りのカンってやっだ。当たるも八卦、当たらぬも八卦ってね」

「……」

本当にそうなのだろうか。

不思議に思いながらくるとミルクセーキの入ったティーカップの中でスプーンを回す。

そしてシナモンの入ったビンを手にとり中身を振りかけてからまた口をつけると対面に座る女性は嬉しそうに微笑む。

これではまるで、孫と祖母が仲良くカフェにやってきたみたいだ。少し恥ずかしいし実際は自分とこの女性は初対面かつ名前も知らない関係なのだけれど。

そんなことを考えていれば不意に女性の表情が微笑みから憂いを帯びた顔になる。

「ああ、そうそう。アンタの母方の爺さん、死んだよ」

「…？」

まさか、養母さんのお父さんが亡くなったとでもいうのか。だがそうなれば一番に電話が来るだろうし、先生からも連絡があるはずだ。それが無いという事は、養祖父ではないということだ。

一瞬眉を顰めると女性が怪訝そうな顔をした後すぐに納得したような表情を浮かべた。

「わからんか。倉橋くらはしおうせい黄盛。産みの母親の方の祖父だよ」

そして、女性はやっとコーヒークップに手を付ける。

倉橋。くらはし。

どこかで聞いたことがある。だが、いまいち思い出せない。思い当たる人物が居るにはいるが、正直関わり合いたくない人物だったような気がする。

結局また首を傾げることとなった自分を女性はまた、小動物を愛しく見るかのような目で見てくる。

「やっぱり、分かんないって顔してるね。いいよ、あの男は良い噂なんかないからね。生前のやらかしなんて知らない方がいい。ただ、アンタはあの男の死因とこれからアンタに与えられるものだけは知っていた方が良くとアタシは思うんだよ」

コーヒークップに口をつけ、中身を静かに飲む女性は飲みなれていく感じで絵になっていた。

良い噂の無い祖父と言われてちらりとあの老人の事がよぎるがまさか、そんなはずはないだろうと内心で否定しようとしたが、あの時『倉橋』という名前を出していたような気がして顔を顰めれば何を勘違いしたのか女性は真剣な顔つきになる。

「見つかったのは下顎と腕、それに脊椎だけ。バラバラ死体だ。食い散らかされた残骸って言った方が良いかもね。あの男、恨みだけは人一倍買ってたから、『まともな死に方しにやせんだろう』って言われてた矢先にこれだ。誰かが呼び出した悪魔に食われて死んだって線が濃くてね。だからサマナーであるアタシの知る所になつてこうして伝えられたのさ」

とんとん、と女性の細く長い爪の生えた指が机を叩く。

バラバラ死体。食い散らかされた残骸。恐ろしすぎる。一体何をやったらそんな死になるのか。ぞわりと鳥肌が立った。

「で、こっからが本題だよ。気を引き締めて聞きな。あの男が遺していた遺言状に、『初孫である『有里渚』に保有する株式を全て相続させる』つて文言があつてね。まあ、大方アンタが生まれてすぐか産まれる前に初孫フィーバーして書いたんだろうねえ。んで、あの男のこどだからすっかり忘れていた、と。狡賢いがそういう所が詰めが甘いというか…」

「へえっ!？」

全部。

全部!？」

思わず手が震えてティースプーンを机に落としてしまう。

いや、老人が持つている株だ。大したことは無いだろう。平常心平常心、と心の中を落ち着かせて口を開いた。

「その、株ってどこの…」

「もちろん、倉橋商事さ。名前くらいは聞いたことあるだろう。大手商社、輸入業なんかでも有名だわね。一時期はあの南条や桐条にも並んでたくらいだ。いまでも十分力はあるよ。で、あの男はその会長。アンタの相続分はジジイが持ってた分全てだから…その倉橋商事の株式の20%」

「に、にじゅう…!? 五分の二つてことですよね!」

おもわずあんぐりと口を開ければ「ハッ」と女性は鼻で笑いニヤニヤとする。

その顔は「ご愁傷さま」という感情も含まれているが大半は好奇心のような物で占められている。

いや、倉橋という名前はどこにでもある。それこそ、普通にありふれた名前だ。桐条や南条といったパツと聞いて『有名』という名前ではない。

だからこそ、知らなかった。産みの母親が大企業の会長の娘で、自分たちがその孫なのだという事を。祖父母に関しては殆ど会ったことがない、と思う。

幼少期の記憶を纏めて全て思い出した今も、母親から祖父の話は聞いたことがなかった。ただ、母方の祖母に関しては母の幼い頃に病気で亡くなったという事は聞いている。

それだけであって、祖父に関してはノータッチだったのだ。驚いても無理はないと思いたい。

「ああそうさ。一夜にして大株主だよアンタ。大企業の20%の株を相続したんだ。食う飯に困らないどころか全盛期の勢いがなくなっても倉橋商事って会社自体がいろんなところに食い込んでるからか余程のことがなけりやタダ飯食いながら良い生活ができる。やろうと思えば経営にだって口出しできる。実質的に会長を継いだにも等しいよ。いよつ、会長!」

「茶化さないでください…」

「なんだい、堅物だねえ」

とんでもない事を平然と言つてのけた女性にこちらは戦々恐々しっぱなしだ。

遺言状にとんでもねえことを遺したあの老人も大概だ。なんとうか、死んだことに対して驚きはないが最後の最後までよくわからない置き土産を遺されたこちらの身にもなってほしい。

「…アンタは、産まれてくることをあの偏屈ジジイにすら望まれてたのさ。あの男、他人を食い潰す癖に気に入った自分の身内にはとこと

ん甘いからねえ。可愛い一人娘が産む初めての孫だ。そりゃあもう、可愛くて可愛くて仕方無かったんだろうさ」

今更そんなことを言われても、自分からすればあの老人は祖父と言うより見ず知らずのよく分からない怖い人だし、悪魔呼ばわりされて殴られた相手でもある。

あんな言い草をされて、産まれてくることを到底望まれていたとは思えない。

それを伝えれば、女性は顎に手を当ててしばらく何かを考えているようだった。

「あの男が、ねえ…まあ、娘に絶縁されて晩年はトチ狂って変なモンに手を出してたって噂もあったしそういうもんなのかね」

「あの…そういうのって相続放棄とか、できないんですか…」

流星に自分にそんな遺産は持て余すどころか持ち腐れだ。そしてそれが湊と奏子に行かず、自分だけに行くとなればなおさら。

「してもいいけどあまりお勧めはしない。しない方が身のためだろうね。アンタには悪いけど、養父母や弟妹を守りたかったら無理に手放すよりアンタひとり相続して管理した方が良い。四騎士が憑いてるなら雑魚悪魔や大概の呪いは跳ねのけるだろうしね。危ない事には変わりないだろうけど一般人よりはマシさ。それに、何かあればアタシやライドウが出張ってやるよ」

女性の口ぶりは倉橋という老人がとんでもないところに敵を作っていると言っているも同然だった。

もう憑いてないんですけどね、なんて言えずに頭を抱える。どうしてこう、『今回』はこうも本筋から外れたトラブルが多いのか。自分ももっとこう、ぱっとしない普通の人間だったはずだ。適当に社会に埋もれ、歯車の一部として生活する一般人。

こういう、御家事情などというごたごたには巻き込まれたくないのだ。

とは言っても12年前に誘拐された時点でそんな文句は寝て言え状態なんだろうが。幾月もよく自分なんかを誘拐できたもんだ。普通ならバレて桐条グループが倉橋商事を敵に回していたかもしれない

いのだ。いくら天下の桐条とは言っても倉橋商事というそこそこ名前を聞く大きな会社を相手にして無傷でいられるとは言えない。ただ、それがなかったという事は余程巧妙だったか、あの老人——倉橋翁が自分に興味がなくなっていたというのも大きいだろうから、タイミングが良かったというべきか悪かったというべきか。

「もし、もしですよ。俺が死んだら、その、相続した分ってどうなるんですか」

「アタシも法律に詳しくなんざないから恐らく、だけど。アンタが遺書を残さずに死んだらそのまま弟妹に相続されるだろうね。詳しい事はそっち専門のやつに訊きな。あとで書類がくるだろうし、いいとこのをクズノハから紹介してやるから」

「ありがとうございます…」

もうめちやくちやだ。

一夜で大株主になってしてしまったのを幸ととるか不幸ととるか。美鶴さんに近い世界の人間になれたと思えば良いのかもしれないが、正直その受け継いでしまったものの重さを考えて気が滅入りそうだな。知らない間によく知らない祖父が死んで大企業の大株主になってしまったというのは間違いない。養父母だけでなく湊と奏子に説明しなければいけないだろう。

精神的に頭が痛い。単純に12月に死んではい終わり！ という状況ではなくてきたことのためにため息を吐く。

いや、ちようどいい具合に影時間の記憶修正が行われるのでなんとかなるっちゃなるんだろうけど、過信しすぎるのも良くない気がする。膨大な遺産はトラブルのタネと相場が決まっている。

「本当は12月にアタシが東京に帰って説明する予定だったんだがねえ…こんなところで会えたんだから運がいいにもほどがあるよ、アンタ」

自分を落ち着かせるためにミルクセーキを飲もうとカップを傾ければ、中身がもうない事に気がついた。

「おかわり、飲むかい？」

「遠慮しときます…」

「そうかい」

ニツコリとやわらかい笑みを浮かべてそう訊いてきた女性に対し、自分は首を横に振った。

喉は潤ったし身体は温まったが、話だけでお腹いっぱいになってしまった。

カフェを出て、はい解散とはならず、外の外気に一瞬ぶるりと身を震わせた自分を見た女性はじつと自分のことを見つめると「行くよ」とだけ言っただけ手を引いて道を歩いた。

そして、入ったのは高級そうな呉服屋。部屋の中に所狭しと反物や着物が置かれ、並べられ、自然光に照らされてテラテラと輝いている。そして空気感が違う。間違いなく、自分なんかが入っていい店ではないだろう。

「これはこれは、アザミさま。お久しぶりです。本日はどのようなご用件で？」

「ああ、今日はちよつとね。この子の羽織を作ってほしくてね」

「……後継の方でしたか。わかりました」

恭しく彼女——アザミというらしい——に接客した男性は頭を下げるとさつと奥へと入っていった。

「さて、アタシがアンタにいい羽織を見繕ってあげよう。いい男になるにはまず着物からっていうからね」

「え？ え？」

「好きな色とかはあるかい？ アタシや、この無地の紫色のなんかが良いと思うんだがね。浅葱色つてのも捨てがたいねえ」

「はあ……」

突然連れてこられて突然生地を選べと言われてもよくわからない。

こんな店に場違いな制服の小僧がカチコチになっっているのはさぞかし滑稽な光景だと思うが、それを誰一人気にしていない。

奥から男性が戻ってきて制服の上着を脱がされ、てきぱきと採寸をされる。

まさかもまさか、この店、オーダーメイドであった。

「紫は紫でも、董色もいいかもしれんね。ああ、アンタは派手な色じやなけりやなんでも似合うよ」

そうやって、よくわからないまま褒められつつ着せ替え人形という程ではないが小一時間ほど布と自分の身体をにらめっこされ、見本の羽織だったり仮縫いされた羽織だったりを着せられそして脱ぐを繰り返した。高級品だからか羽織っていても違和感どころか羽のように軽い。そして着心地もいい。

襟が擦れても全く痛くないどころか心地よさすら感じるのだ。

「うーん。どうやってもアンタにやこの配色が似あっちゃまうんだねえ……よし、ちよつと暗めに見ようかね」

困ったようにアザミさん（と呼ぶことにした）がもう何着目かわからない仮縫いされた羽織を着た自分を見てそう呟いた。

流星にもう疲れてきたのでそろそろ終わりにしてほしい。

そう願って最後に出されたのは鉄紺の羽織だった。裏地は鮮やかな紫——えびぞめ葡萄染色をしている。

「よしよし、よく似合ってるよ。後はそうだね……ちよいと、羽織の裏に『いつもの』をつけといてくれ」

「ええ。場所はどうかございますか？」

「そうだね：アンタ、モコイの入っていた管を出しな。後生大事に持ってるんだらう？」

「!？」

男と会話していたアザミさんの言葉に目を剥く。

突然話を振られたこともそうだが、どうしてモコイさんの入った管を持っているとわかったのだろうか。先ほどのミルクソーキの件といい、これといい、この人は謎だらけだ。

もたもたとベルトにつけていた管の入っていた袋を外し、中から管を取り出した。

「利き手はどっちだい？」

「えと、右です」

「なら、左側だね。両手で使う事を考えたら左右で6本ずつでもいい

か」

何が何だかわからないが仮縫いされた羽織を脱がされ、また別の羽織を着せられてその内側にあつたポケットのような部分で管を出し入れしてみると言われる。

「どうだい」

「どう、と言われても…」

よくわからない。出しやすさで言えば、ちよつと引つかかるような気がする。

それが何を意味するのか全く分からないまま、必要かわからない謎のポケットについて試着を繰り返す。

「アンタはあの子よりすこし身長が低いから、高めの位置にあるやつを選んだけど微妙そうだね。あの子と同じ物を持ってきてもらおうかね」

そう思案気に呟いたアザミさんの一声でまた別の羽織が持つてこられ、着せられる。

それはすこしばかぶかと大きかったが言われて触つた謎のポケットの位置はちょうど良かった。慣れた場所、と言えばいいのか。サイズが合うなら召喚器をここに入れても良いくらいには物が取り出しやすい位置だった。

そんな自分の満足しているような雰囲気伝わったのか、アザミさんも満足げに頷いた。

「よし。それがいいみたいだね。決まりだ」

「では、出来上がり次第ご自宅へとお持ちいたしますので…」

そう言つて、恭しく頭を下げた男にアザミさんは首を横に振る。

「いや、今から書く住所に送つておくれ。ほら、この紙に寮の住所を書きな」

「あ、はい」

流されるままメモとペンを渡され、寮の住所を書けば丁寧にそれを男が受け取る。

「お疲れ様でした。1週間ほどでお送りできると思いますので、しばらくお待ちください」

「だつてさ。良かったねえ。ちよいと出かけるのにも使えるし、野暮
用で汚したつて構わないよ」

良かったね、と言われたがちんぷんかんぷんだ。

こんな高級そうな店の商品。それも羽織一枚だけとはいえ、値段を
想像すると恐ろしくなる。アザミさんは汚したつて構わないと言つ
ているが値段を考えると2桁万円は軽く超えてそうなそれは、汚せる
ようなものではないしちよつとしたお出かけなんかには使えるはずも
ない代物だ。

もう戦々恐々しっぱなしである。そんなポンと買えるはずのない
ものを、ただたまたま出会っただけの高校生に買い与えるこの女性は
一体何なのか。

「あ、あの…」

「金のことなら気にしなくていいよ。これはアタシからアンタに贈る
プレゼントみたいなものさ」

「ありがとうございます…?」

だから、そのプレゼントの理由がわからなくて困っているのだ。

物好きなのか、それとも。

嬉しくないわけではないが申し訳なきの方が先に来てしまう。

「ほら、寒そうにしていたしこれでもつけてな」

いつの間にか買っていたのか、彼女の手には青い手織りのストールが
あった。

それをふんわりとこちらの首に巻いてまた満足そうに笑ったアザ
ミさんは上から下まで自分を見つめてニヤニヤとしている。が、こち
らは薄いのに暖かいストールの肌触りが良くてまたとんでもない代
物なんじゃないかと寒さを抜きにして震えることしかできない。

「えと、これのお値段とか…」

「ああこれかい?? 10万ちよいだね」

「10万ナンン?!?!? あ、ありがとうございます」

頬が引きつる。もう金銭感覚がおかしくなりそうだった。

ストール1枚が10万。それを惜しげもなくポイと自分に与える
彼女は本当に何がしたいのか。

特に見返りを求めているわけでもなさそうだし、相続する遺産目当てでもなんでもなく、単に自分に構いたいだけというか、なんとなくそんな気がする。ただ、そうなる理由がわからなくて怖いのだ。

「…そんなに怯えなくていいさ。アタシはアンタを怖がらせようってんじゃないんだよ。むしろその逆だ。けど、悪かったねえ。見ず知らずの人間から与えられる無償のものなんざ怖いだけだもんねえ…」

「い、いえ…そんなことは、ない、と思います」

何故だかわからないが彼女の悲し気な顔を見ると、こう、妙に落ち着かない。

「アンタを一目見たときから、全く似てないのにバカ息子と重なっちゃまってね。つい世話を焼いちゃまったってわけだ。ごめんよ」

「そういうことなら…」

仕方ない、のだろうか。

むしろこの女性がオレオレ詐欺にひっつかからないか心配になってきた。そうになると、茶目っ気もあつて愉快的…愉快的？ 女性ではないだろうか。

「そういうことで、アタシに付き合ってくれてありがとうね。羽織とストールはこれの駄賃だと思ってくれていいよ」

やったことと奢ってもらった物の値段を考えると、とんでもないパ活ならぬオバ活だと思う。まるで自分がアザミさんを引っかけたようで罪悪感が増した気がした。なんというか、よからぬことをした、みたいなの。

まったくもってそんなことは無いただただ買い物に付き合わされたというだけだが、値段が値段だ。

もう少し凶太いか無関心なら気にすることは無かったのだろうか。分らない。

「そうだ。モコイを生き返らせたけりや、いま横浜の天海市に停泊してる『ビー・シンフル号』の『業魔殿』に行きな。各地に設置されている邪教の館でもできなくもないが…あそこの主は、いまSTEVENとかいう輩とあぶり制作？ かなんかで忙しいって言うってたから、所在はつかめないだろうし、居場所がはっきりしてる

業魔殿の方が良いだろうね」

「！」

まさか、悪魔を蘇らせられる場所があるとは思ってもみなかった。そこに行けばまたモコイさんと出会えるかもしれない可能性が出てきて、浮足立つ。

「ほんとですか!？」

「ああ。けど、そこに行ったときアンタは『スケロク』って男と関わるんじゃないよ。『葛葉キョウジ』ならいいけど、スケロクは絶対に避けな。ヤバけりやライドウの坊ちゃんに電話したって構わないからね」

釘を刺すようにスケロクという男について忠告してきたアザミさんの顔は真剣そのものだった。まさか、危険人物なのだろうか。いや、この口ぶりは十中八九危険人物なのだろう。

スケロクという人物はヤバイ。そう脳内にメモして小さく息を吐く。

「それじゃあね、息災でいるんだよ」

「本当に、今日はありがとうございました」

「こちらこそ、ありがとうね。楽しかったよ」

ペこりと頭を下げてアザミさんと別れる。

結局、アザミさん自身から名前を聞くことは無かったがそれでもいい。名前の有無は関係なく、あの人に付き合ったということが大事なことだったのだと思う。

日がもう落ちかけの夕焼けの街並みを見ながら、そういえばとんでもない爆弾を相続したんだとすこしげんなりする。

これをどう説明すべきか。そんなことを悩みながら旅館近くまで行くバスに乗り込んでため息を吐いた。

夜

遺産相続などと言う小難しい話は修学旅行が終わってから、もしくは

は正式に通達やらなんやらが来てからでいいかとすぱっと諦め、満月の日までのあと2週間弱の期間でやることをどうするかを考えを完璧に放棄した。仕方ない。後で考えよう。その後が無いかもしれないというのは別として。

そんなことを思いながらぶらぶらと旅館内を散策していれば、伊織が走り寄ってきた。

「おっす！ センパイ、あとで露天風呂行きませんか？ 最後まで一緒に入りましょうよ！ 人殆どいませんし貸し切りっスよ！」

「あとで？ いいけど…」

伊織が笑顔で誘ってくるものだから思わずうなずく。

貸し切り。良い響きだ。

昨日入った時はちょうど夕食後すぐだったので酷く混雑していたのを思い出す。体調の面でもあったが、人が多かったからこそ短い時間しか入れなかったのは惜しいなと思っていたところだったので伊織の提案は渡りに船だった。

「じゃ、時間になったら部屋に呼びに行くんで！」

「うん、ありがとう」

手をひらひらと振って見送れば、浴衣のまま騒がしく伊織はそのまま走り去っていった。

温泉に浸かるのだから髪留めがいるので忘れないようにしよう。

そんなことを思いながら部屋へと続く廊下への道を歩くことにした。

深夜

タオルを腰に巻いて更衣室から外に出る。

大きな岩から源泉が湧き出ているこの露天風呂は広く見晴らしもいい。

冬なので石で作られた床が冷たいがそんなものは湯の温かさですぐに気にならなくなるだろう。

「いやー、やっぱだれもないっスね！」

「楽しみだねえ！　ね、湊！」

「……ああうん……そう……だね」

「？」

妙にテンションの高い伊織と綾時くん。それに対して妙にテンションの低い湊。

そして普通のテンションな自分と真田くんと言うメンツが今回の露天風呂のメンバーだった。

サツと身体を洗い、髪も洗ってゴムで後ろにお団子の様にしてまとめれば準備万端だ。

とはいえ逆上せてぶっ倒れたら困るしあまり熱い湯温のところには行けないので入口近くの端っこに居ようと思う。

「ヒヤッホーウ！」

「わあい！　貸し切りって凄いな！」

そうはしゃいで露天風呂にダイブする2人は風情もあつたもんじゃない。が、こういう時にしかこんなことは出来ないだろうし、今なら誰も見ていないのではしゃぎ放題でもある。

こんなことならお土産屋にあったアヒルのおもちやを買っておくべきだったか……と謎に惜しみつつも自分も露天風呂にちよんと足をつけて更衣室に繋がる入口に背を向けて入る。

「俺は……あんまり熱いとしんどいしこっちの浅いところにいるから」

「ん、わかった」

奥の源泉が湧き出る場所の近くは熱くてすぐにのぼせ上がってしまうためにそう伝えれば湊が聞いていてくれたようでしつかりと頷いて奥へと湯をかき分けながら去っていった。

しかし何か忘れているような、ないような。

でもまあいつかと肩まで湯に浸かりながらぼんやりと空を見上げる。

新月に近いほとんど欠けた月と少し曇り気味だが澄んだ夜空。

だいたい修学旅行に行くまでに死んだり色々焦ったりしててこんなにゆっくりここで星空を見たのは久しぶりかもしれない。

体調が悪すぎて修学旅行にいかなかった周もあるのでゴリ押しして本当に良かった。帰った後が怖いっちゃ怖いはその時はその時の自分がなんとかすると思うので放置で。いまは楽しいことだけを楽しむことにしたのだ。

「ふあ…」

なんだか、お湯でぼかぼかと暖かくなってきたからか眠くなってきた。熱すぎない端の方で浸かっているからか、ほんとうにちょうどいいくらいの温かさなのだ。

うつらうつらと船を漕ぎ始める。

寝ちゃいけないのはわかっているが、疲れからか身体が眠気に負けそうになる。

「はあ~~~~~~~~」

ぱしやり、と湯を掬って顔にかければそこから顔がじんわりと温まってきて深く息を吐いた。

優希が眠気に抗っているその頃、奥の岩場の影で湯に浸かっている湊に綾時がウキウキと声をかける。

「ほらほら湊、今回こそ成功させるよ!」

綾時が「成功させるぞ」と意気込んでいるのは女子とこの露天風呂でバツティングしてドツキリなハプニングを起こす事だ。そしてあわよくば裸を見る。とは言っても結果はわかりきっている。なので正直な話、湊はこうして負け戦に誘われることにうんざりしているのだ。

「どうでもいい…綾時と順平だけでやってれば。どうせ…」

「わー! それは言わないお約束だよ。もしかしたら成功するかもしれないじゃないか!」

ぷりぷりと怒る綾時を無視していれば、ニヤニヤと笑顔ですり寄りながら順平が湊の方を向いた。

「いやー、湊サン、頼みますよー。どうせ知ってるんだろー? ちよっ

とくらしいじやんかー」

「嫌だ。てか近い」

「ぐえ」

順平にチョップを喰らわせ、湊は少し距離をとった。めんどくさいし暑苦しいことこの上ない。

恐らく、順平は湊が『ループ』していると知っているのでこの先どうなるかを訊きたかったのだろう。あわよくば、協力してほしい。そんな気持ちも込めて。

だが湊の対応は冷ややかだった。それもそうだ。誰が進んで地獄へ向かうバカな行いの片棒を担がねばならないのか。

「協力なんかしない。綾時に聞けばいいだろ」

「へ？　なんでリョージ？」

「ああ、そうか：知らないのか：なんでもない。ふたりの馬鹿な企みに協力もしない」

咄嗟に綾時の名前を出すも、そういえば自分以外綾時も自分と共にループしているとも元・デスだったとも知らないんだ、と思い出してはぐらかした。

だが、『馬鹿な』という言葉の前につけたことによって何か知っているのではと順平に勘ぐられてしまう。

「やっぱなんか知ってんじやねえか！　な、な、オレらどうなった？」
しつこく聞いてくる順平を無言で無視し、そう巻き込まれるこっちの身にもなってみろ、と湊は憤慨した。

バレれば処刑だぞ、とは口に出さないまでも、睨みつけることはする。

巻き添えで処刑された数は8回。ほぼほぼ露天風呂からの脱出に失敗しているので逃げられる確率はごく僅かだ。確かに、ここでそれを伝えれば早めに風呂から出られるかもしれない。が、この2人に關してはその結果を伝えても綾時が言ったように今回こそはとやる気に満ちてより悲惨な結果をうみかねない。ならばと湊は諦めた。そもそもこの風呂の誘いに乗らなければいいだけの話だが、つついっつも頷いてしまう自分の愚かさのため息が出た。少なからず湊自身、

こんなふざけたことで女子からゴミを見るような目で見られるのは勘弁したい所ではあったが男子でこうして固まって露天風呂でバカをやることに関しては悪い気もしていなかったのだ。その途中と結果に女子からの侮蔑の視線と処刑が含まれていなければ、の話だが。「おい、何の話だ」

順平と綾時が湊に絡んでいるのを不思議がった明彦が怪訝そうな表情で2人を問いただす。

「い、いやーこの露天、男湯と女湯が時間交代制なんだって話を：ねえ、順平くん」

「おおーそうだったそうだったー。じゃ、途中で変わってしまったかもね。でも、もしそうなくても、それは事故だよね」

「それは、そうでしょ。もしそうなくても、僕らに責任は無いよね」
「そんな話じゃなかっただろう：で、その男女が交代する時間というのはいつなんだ」

棒読みで白々しく話を逸らそうとする2人に痺れを切らした明彦がその『万が一』の間違いがあつてはいけないともう一度問いただせば、順平と綾時は顔を見合わせた。

「えー、アハハ。そりゃ、確認してないっすけど。：ねえ、リョージ君？」

「うーん、もしかすると、結構ギリギリかもねえ、順平くん？」

「：お前ら、バカだろ？ どうりでこんな妙な時間に：現実、鉢合わせしたら穩便に済むわけがないだろう？」

呆れた明彦に同調し、湊もうんうんと頷く。

まったくもって同意見である。

「ははは、冗談っすよ。確かに、ギリギリで来たっすけど：もう夜中だし、こんな際どいタイミングでわざわざ入ってくる女子なんて：」

ガララッ！

「！！！！」

順平の言葉が終わるか終わらないかのタイミングで扉の開く音がした。一斉に身構え、順平は焦りのあまり狼狽える。

「えっ、マジかよ、誰か来たぞ！ ど、ど、どうしよう：」

「…男子だろ」

そんな順平を一蹴し、明彦は眉を顰めた。

順平を一蹴したものの、明彦は少しばかり順平と同じ気持ちだった。どうか男子であってくれ、と内心で祈る。

「まあ、そう焦らないで。湊のお兄さんが出ていっただけなんじゃないかな？ お兄さん、入り口近くの浅いところにいるんだらう？」

「そ、そうだったな！ その可能性もあるよな！」

そんな誤魔化しを話す綾時とそれに頷く順平を見ながら、湊は諦めた。今回も処刑は免れないだろう。

せめて目でもつぶるか、と考えていれば、きやいきやいとはしゃぐ女子の声が聞こえてくる。

「わあー!! やっぱ、この露天、ひつろーい!!」

「わ、ホント…流れるプールみたい」

「あつそっか、風花ちゃんはこっちの露天初めてなんだっけ？ ふふ、くるしゅうない、くるしゅうないぞー！」

「きやあ、奏子ちゃん、と、突然くつつかないでー！」

「これが『ロテン』、でありますか。わたしには、効かない効能ばかりです。…ところで奏子さん、それは冬の風物詩ともいわれる『オシクラマンジュウ』でしょうか？ わたしも是非参加したいです！」

「ちよ、危ないって！ 風呂場ではしゃがない！」

「げげげ、アイツらだ…なんで、こんな時間に…」

はしゃぐ奏子とそれに巻き込まれる風花、そして便乗するアイギスにそれを諫めるゆかりの声が聞こえ、順平は苦虫をかみつぶしたような顔になった。

「ほら、他の女の人もいるしやっぱり時間、間違ってたんじゃないじゃんく！」

「それはそうだけど…結構早くなかった？ まだ男子いたりして！」
「ふふ、そんなはずないだろう。だが、あまりはしゃぐと危ないからほどほどにしておくんだぞ」

順平たちは岩陰にいるためそこから顔を出しさえしなければ入口及びシャワーが設置されている洗い場が見えないようになっていた

が、声が響くために誰が来たかは一瞬でわかる。嫌でもわかってしま
う。

「う、ウグ…やっべえ、桐条センパイまでいんじゃん…ど、どーしよ、
退学とか…なっちやうんスカね…ここ、こんなの、出来心で…」

「出来心もクソもあるか…！ 見つかったら「処刑」は免れんぞ…
！」

「ひい…！」

明彦の処刑という言葉に順平がさらに青ざめる。綾時は素知らぬ
顔だ。あの恐怖を忘れたとでも言うのか。

「いや待て、『他の女の人』、と言っていないかったか？ 女子共が何の反
応もなかったことから三上が先に出ていつているとして、女なんか
入ってきたか…？」

「ま、まさか…お化け…!?!」

女子の話を盗み聞いていた4人に戦慄が走る。

先にいるという女が先に入ってきていた物音はしていなかった。
そして、その気配も。

時間は深夜、影時間近くだ。丑三つ時には遠いが、幽霊が出てもお
かしくはない時間とは言える。

日常的にシヤドウと戦っているとはいえ、幽霊となれば話は別だ。
そしてこんなそれらしい風情があるところから出ると言われたら。

明彦からすれば殴って倒す事に変わりないが女の幽霊となれば多
少ためらいもあると言うもの。

「わっほ〜い！ 私いっちばんのりい〜〜！ …ん？」

「こら有里、飛び込むのはあぶない…ぞ…！」

「ぶえっ…うう…なん…、…うわあああああああああ
!!!?!」

「ええええええええ!?!」

バシャーン！ と奏子の飛び込む音。それを窺める美鶴の声。そ
して聞き覚えのある声の悲鳴。ついでに小さな水音。

聞こえてきたそれらに明彦と湊は冷や汗を流しながら顔を見合わ
せる。

「おい、今のは…」

「まさか…」

岩陰からこつそりと入口辺りを覗き見ればしやがむようにして己の身体をかき抱き、湯の中に肩どころか顎の下まで浸かった優希が下を向いてぶるぶると震えているのが見えた。そしてその横にはバスタオルを胸まで巻いた美鶴と奏子が立っている。

「う、うう…うううう…ごめ、ごめんなさつ…ひぐつ…み、見ないで…見ないでくれ…お、おれつ…も、みない、からあ…！」

「お兄ちゃんごめんね!? 深夜だからだれもいないでしょ…って思ったらまさか、お兄ちゃんが入ってるなんて…髪型いつものと違ったから女の人かと…」

奏子の謝罪に優希はふるふると頭を横に振ってまたしやくりあげる。珍しく兄が本気で泣いている様を見てこれはやってしまったと奏子は顔を青くした。

まさかまさか、こんな時間に兄が露天風呂に入っているとは思わなかったのだ。

温泉でほんのりと紅潮した肌としばらく療養していた為に元々細身だったが筋肉が落ちて柔らかく見えるようになった身体。寮に入ってから見る機会が少なくなった兄の半裸。そしてタイミングが合わず切らずにいた伸びた髪。そしてその髪をいつものひとつ括りではなく湯につけたくないがために滅多にしない上の方でまとめて団子のようにしていたこと。湯けむりで視界が悪かったことに加え肩付近まで浸かり、大まかな身長や上半身全体が見えなかったこと。そしてこの時間に居るのは自分たちと同じ女性だろうという先入観。

それら複数の要素が奇跡的に噛み合い、パツと見た後ろ姿のシルエットでは完璧に女性に見えていた。そう思い込んでしまった。だからこそ、優希の後ろ姿を見慣れていた奏子ですら別人だと判断した。

その結果、こんな事態になってしまったのだ。

これはこんなギリギリの時間に風呂へと行くことを計画した順平と綾時が悪いのだが優希はすっかりこの処刑事件のことを忘れており、奏子はそもそも知らなかった為に起こった不幸な事故であった。

そしてその裸をガッツリ見られたのは奏子ではなくお湯に浸かって眠気に負け、微睡みかけていた優希の方だったが。

とはいえタオルを巻いていたので大事な部分は見られずに済んだし見た相手は奏子だ。妹なので普段なら特に気にする必要も無い相手である。

問題は、あとから来た相手だ。

「な、泣かないでくれ！　すまない、まだ男湯の時間だったのか…？」
「たぶ、ん…こんなことなら…ぐすつ…さつさと上がってればっ、よかつた…！」

そう、美鶴である。

晴れて両想いになった2人だが、そんな矢先に美鶴と風呂場でバツティングしてしまうなど良い意味でも悪い意味でも意識しない方がおかしい。

優希はその実、好意には疎いが1度意識をしてしまうと好きな女性の裸を見るのはおろかキスをするのもまだ早いなどと思ってしまう初心なのである。手を繋いだだけでも大進歩といえる。あれだけ荒垣と奏子の中をからかっていたのに自分の立場になるとセックスのセの字も言えないほどだ。

そんなバカ男子高校生が好きな人の裸を見て、己の裸も見られるとどうなるか。察するまでもない。

奏子が飛び込んできたことに優希が驚いて立ち上がった瞬間、腰にかけていたタオルが落ち…かけただけで済んだ。

が、それを見られてしまった、ともう思い込んでいた優希は多大なるショックを受け、情けなくも本気で泣いており「もうお婿に行けない…」などと冗談なのか本気なのかわからない呟きをブツブツと発しながら湯の中へと縮こまる羽目になってしまったというわけだ。どちらかと言えばそのセリフを言うべきなのは優希ではなく美鶴たち女子の方である。

これが両想いでなければ、もしくは入ってきたのが優希の方だったのなら。

優希が「ごめんなさい」と目をつぶってからの土下座のひとつやふ

たつである意味双方のダメージは比較的少なく軽く流されたのだろう。

もしくは大人しく処刑の流れだったのかもしれない。が、意外と好きな人に不意打ちのように裸を見られたこと(未遂)が堪えたのと、お湯の温かさに微睡んでいたら突然来るはずがないと思っていた女子が風呂に入ってきたという本人的によく分からない事象が重なった為に脳みそがキャパオーバーを起こして弱点を突かれた時の如くダメージが跳ね上がりパニックになって泣き出してしまったのだった。そしてついでに自分がぐずぐずと泣き続けていることも本人にとつて情けないことであり、継続ダメージを与え続けている。どう足掻いてもダメージは免れないというなんとも哀れな状況である。

そんなこんなで精神的に癒えない傷を負い、未だ泣き止まないうらしい優希を慌てて慰めているふたりは岩陰にいる湊たちに気がついていないようだった。恐らく、優希が1人でこの露天風呂をこっそり満喫しに来たと思っっているのだ。

そういう所は信用問題と言うべきなのか、日頃の行いであると言わざるを得ない。

「よし、気づいていないな…今なら何とかなるんじゃないか…？ 有里、いい考えは無いか？」

「茂みに隠れてやり過ぎす、とか裏口から抜けて出るとか…」

「あそこか…宴会場に繋がっているが美鶴に処刑されるよりかはマシだな」

サツと顔を引つ込めた湊と明彦はなんとか脱出しようと作戦を練る。

もう見つかってしまっている優希は犠牲となったのだと諦めて、自分たちが助かる方法を模索しただしたのだ。が、

「ウツヒヨ〜〜丸見えじゃん！」

「おおつ、ホントだ。奏子ちゃんに桐条さん、ゆかりさんや風花さんもいる。お兄さん、羨ましいな〜〜！」

「全くだぜ。オレっちもあの真ん中に座ってみてえ〜〜！」

先ほど処刑に怯えていたのも喉元過ぎればなんとやら。

バカ2人こと順平と綾時が岩陰から顔を出して優希を慰めている女子——ゆかりと風花があとから来てしまっている。4人いる——の姿を凝視していた。

「このバカ…ッ！」

「声が大きい…！」

慌てて明彦と湊が1人ずつ温泉の中に頭を一瞬突っ込んで黙らせる。

特に綾時に関してはすぐに抗議するのが目に見えたので湊が湯から上げたあとも念入りに口を塞いでおく。絞め落とさないだけ有情だと思つて欲しい。

ついでに湊は内心で「というか綾時お前、奏子の裸くらいファルロスだった時に見慣れてるだろ」とツツコミたくなるのをなんとか抑えた。

肝心の優希はというと泣き止んできて色々と諦めたのか、それとも疲れたのか、湯から上がり足だけをつけて縁に腰掛けるようにしてぼんやりと俯いている様だった。

もしくは、女子に囲まれて戦々恐々としているのか。濡れた長い前髪が邪魔をしてその表情は窺い知ることは出来ない。

「ねえ…なにか聞こえなかった？」

「え、やだなあ奏子ちゃん！ ねー風花、そ、そんなわけ…：…ないよね…？」

「ええっ、ゆかりちゃん、なんで私の方を見るの!? アナライズとかはできないよ…？ この湯けむりでちよつと…：…それに恥ずかしいし…！」

「ふふ、山岸の探知能力も裸では振るえないか」

どうか優希が女子に湊たち4人がいるのを暴露しませんように、と祈りながらまた様子を伺いみる。

ちようどアイギスがぎぶぎぶと湯をかき分け優希の目の前まで立つと、その手を前に突き出した。

「失礼します」

「うわああ!?! …ぶはっ、あ、アイギス、なに、して…！」

ぺたぺたと胸に触れるアイギスの手から逃れるために情けない悲鳴を上げながら身をよじった勢いで再び露天風呂の湯の中へと落ちた優希はすぐに顔を上げると、腰のタオルが外れないようにしっかりと押さえで一瞬抗議の声を挙げたが顔を上げた先に女子がいると分かる。また湯の中で下を向いて縮こまる。

アイギスはそんな優希に対し小首を傾げ、続いて奏子のバスタオル越しの胸に触れた。

「奏子さん、失礼します」

「ひゃうんっ!？」

「アイギス!? なにをしているんだ!？」

そんなアイギスの暴挙とも取れる行動に、美鶴を含めた女子全員が目を丸くした。

「男女や個体に体形の差があるという情報は存じていました。ですが実際に見て、触れて計測してみたデータが無かったのでこの機会にと思ひまして。ダメでしたか?」

「ダメに決まってるでしょ!?! そういうのはやる前にちゃんと一言いといとー!」

「ですので、失礼しますと断りを入れました」

何が悪いのか、どうして悪いのかわからないと言いたげなアイギスに対し、ゆかりが目を剥く。ちがう、そうじゃないと言いたいゆかりの心情を読み取ったのか、風花がなだめる様にアイギスに言い聞かせる。

「アイギス、それだけじゃわかんないよ…ちゃんと、何をいつするかを訊かないとダメだよ? 三上先輩みたいにシヨックを受けちゃう人も居るから。ね?」

「なるほどなー。以後、気をつけます」

「うん、ほんとに…気をつけてもらえるとありがたい、かな…:はあ…:」

アイギスの返事に優希は疲れたように苦笑いしながら溜息を吐いた。少しぐったりとしているのは気の所為ではないだろう。

優希からすればのんびりするためにこんな時間にやってきたとい

うのに、却ってトラブルに巻き込まれているという現状は疲れるし非常に不眠であった。

それはもう、誘ってきた順平と己の不幸を呪うレベルで。

今回ばかりは誰かを恨まずにいられない。彼の機嫌は現状、かなり下降している。これは恐らく1晩寝た程度では直らないだろうことは確実である。

それを少ししか表面に出さないのは女子が悪い訳では無いというのをわかっているからであって、不満がなかったり怒っていない訳では無いのだ。

「優希さんと奏子さんのデータだけを採取できましたが：目視による確認だけでも個体によって違いがあるというのはなんとなくわかりました。はつきり言ってオドロキであります。男女の違いだけでなく、同性間での個体差もあるのだと。特に胸部の：」

「ああー、分かったから、アイギス。熱いしもう出よ、アイス奢るから」
つらつらと語り出したアイギスに、それ以上は不毛な会話になると察したゆかりがそれを中断させた。

アイギスに他意はなくとも、一応ここには優希という男子がいるのだ。胸の比較レビューなど語られた日には気まずいことこの上ない。そしてその比較には恐らく男である優希のものも含まれるだろうことは想像に難くない。

そうなればもつと微妙な雰囲気になること間違いなしである。

「アイスでありますか。クールダウンは大好きであります。ついでに、バニラアイスを所望します」

「はいはい。ほら、先輩も逆上せないうちに。言つときますけど、着替えは覗かないでくださいね！」

「言われなくとも覗いたりしないよ：なんかもう、いろいろと疲れた：」

アイス、という言葉にアイギスは食いつく。

パンケーキを食して以降、アイギスは食事に興味を持ち始めた。

ただただ成分を分析するだけでなく、味も楽しみたいと思うようになったのだ。特に最近のお気入りは甘味。

本日の市内散策でもアイギスは風花や奏子と一緒に抹茶スイーツを食べたりお土産屋の生八つ橋の試食に精を出したりしていた。

そして風呂上がりにはアイスクリームとなれば逃さない手はない。既にアイギスの思考回路の中はアイスの食べ比べでいっぱいだった。それこそ、先ほどの会話がすつとぶくらしいに。

出ていく女子に対し先陣を切り、しよぼしよぼと下を向いて先を行った優希とそれに続くようにして女子の姿が見えなくなってガララと脱衣所への戸を開ける音がした瞬間、明彦と湊は安堵の息を吐いた。

「…行ったようだな。危なかった…もう少しで、美鶴の『処刑』を味わうところだった…」

「優希には悪いけど、本当に僕ら『処刑』されなくてよかった…」

本当に良かった、ともう一度安堵の息を吐く。

兄は犠牲になったが必要な犠牲だと思って合掌でもしておこう、と湊は思う。

そして同時に感謝した。自分が兄の立場なら順平と綾時のことを速攻でバラシてスケープゴートにでもしていただろう。

それで処刑を免れるかどうかは別として。

「まったくだ。…って、ん…?」

そんな湊の内心を知ってか知らずか、明彦は頷いた。が、横にいた順平と綾時が静かなことに気がつきそちらを見れば逆上せて真っ赤になっているふたりが仰向けで水面に浮いている。

「…逆上せたか」

「自業自得だと思っ」

「…そうだな」

処刑されるよりかはまだ逆上せている方がマシだろう。同時にそう判断した湊と明彦は、女子の気配が脱衣所から無くなるまで騒げなくなつた順平と綾時にジト目の視線を送った。

11/20 (金)

修学旅行最終日。

夕方には京都駅に集合。それまでは昨日と同じく市内を自由に散策できるという。

「みんなー、京都駅に集合の時間、忘れてないわねー？ 遅れたりされると監督責任で吊るされんの、私なんだからねー」

そんな鳥海の声を、湊たちは旅館内の土産屋近くに設置されている長椅子に座りながら聞く。

「京都なんてアリガチとか思ってたけど、あつたな、結構…つてゆーか、昨日に集約されてるけど」

と、順平がぼやけば、湊、明彦、綾時の3人が頷いた。

「……」

「と言うか、オフロでしょ、オフロ。お兄さんの犠牲は僕、忘れないよ…」

「バカ、声がデカイ…！」

風呂、という湊たちにとつてはなかったことにしたい出来事に関するキーワードをそれなりに周りに聞こえる声で放った綾時を明彦が諫める。

そこへちようどいつもと同じように髪をひとつにくくった優希が高梨や朔間と共に歓談しながら荷物を持って歩いてきたかと思えば、じつと4人を——特に順平と綾時を睨むようにして口をつぐんだ。

「ど、どうしたの三上くん？」

「……なんでもない。ちよつと用事があるから先行つてて」

「あら、あまり遅れないでちようだいね。美鶴さんを待たせてるんだもの」

「わかってる」

ふたりと別れ、持っていた旅行鞆を床に置いた優希は目を逸らして小さくため息を吐いて微妙そうな顔になったかと思えば、再び口を開いた。

「昨日、なんで置いてったのさ。誰か出るときに一言くらい言ってくれば良かったのに」

おかげで大変な目に遭った、と言いたげに恨みがましい目線を4人へと投げかける。

直接的な『露天風呂』と言う言葉を言わないまでも、どうやら優希は4人が先に露天風呂を出ていったのだと勘違いしているようだった。

「…いや、あの、なんだ…その、」

「たけ…もう女湯の時間だと思って入ってきた女子に女と見間違われたあげく、詐欺だ” って言われた俺の気持ち分かるか？ どうせ羨ましいとか思っただけだから言うけど、すごく気まずかったんだからな！ …うう…思い出したくない…」

「…すまん」

「…ごめん」

ゆかりの名前を出しかけて女子とはぐらかし、顔を手で覆って俯いた優希に見捨ててごめんという意味も込めて明彦と湊は小さく謝罪した。

が、むしろ順平と綾時は目をキラキラさせて謝るところか興奮しました。

「で、で！ あの後ゆかりツチたちとはどうなったんすか?! まさか、ムフフなことが…?」

「あつたんですか!?!」

「あるわけないだろ。というか、あっちゃだめだから」

ただ着替えてアイスを食べたという事は言わずにむっとした顔で順平と綾時を睨みながら答えた優希は途中で違和感に気がついて小さく首を傾げて口を開く。

「ん…? 岳羽たちってことは…もしかして、伊織…」

優希はゆかりの名前しか出していない。にもかかわらず、『たち』と複数形をつけた事から女子が入ってきてから4人があの場に居たのではないかという事を察した優希は途端にゴミを見るような目になった。

「裏切り者。こんなことなら皆に話しちゃえばよかった。誘ってきたのも伊織だったし、分かってたか狙ってたんだろ」

「いやあ…オレっちもまさか女子がくるまでは…予想できなかったって言うか、その、スンマセン…」

そんな視線に耐えかねてその場にいたことを暗に認めたと順平が頭を下げるも優希の苛烈な視線は止まない。

しかし湊は優希もループしているのなら一度くらいは修学旅行の露天風呂処刑事件くらいは味わっているだろうことを思い出し、それを知らないということはないだろうと思いつく。

なら、どうして恨みがましそうな視線を寄越しているかと思うと、ひとつの仮説に思い至った。

「優希、もしかして奏子達が来るの忘れ…」

「ああそうだよ…忘れてたんだよ。伊織も気が利くなくくらいに思ってた自分を殴りたい…湊も止めてくれれば良かったのに…」

優希はすっかりすっぱりそのことを忘れてしまっていたらしい。

そもそも、覚えていたのならさっさと上がっているだろう。だからこそ自分が忘れていたことを棚に上げ、誘ってきた順平とその共同企画者であるという事は思い出した綾時を睨んだのだ。

優希自身、これが八つ当たりだという事はわかっている。が、そのまま黙っているというのもどうにも腹の虫が治まらなかったのだ。

「…まあ、無かったことにするけどさ。『処刑』、されなくてよかったね」

ああ、珍しく兄がキレているな、と湊は思った。

これは皮肉だ。にこやかに笑っているが言葉の端々が刺々しい。

これは「自分も無かったことにして黙るから、お前らも黙ってるよ」という脅しだ。

途端に青い顔になってコクコクと頷く順平と綾時を横目に、湊と明彦もすっかりと頷いた。

黙っていよう。その方がみんな幸せなのだ。後からバレて処刑されれば今度こそ『処刑』された際の氷を溶かす場所がないしゴミを見るような目は優希だけでなく他の女子からも浴びせられることになるだろう。

そんなことを満場一致で以心伝心させた4人へと近づいてきたの

は奏子と風花とゆかり、そしてアイギスだった。

「あれ、みんな、どうしたの？」

「え、あ、イヤ、ちよつと、反省会をな」

優希の「言ったらどうなるかわかつてるよな？」という目だけ笑っていないにこやかな笑みが4人に突き刺さる。言ったら別の意味で“処刑”される。そんな凄味をもったその表情に、順平はあせあせと焦りながらなんとか取り繕った。

「…何の反省よ」

「え？ な、なんでもねえって…」

怪しいと思つたゆかりの追撃に、順平はまたしどろもどろになりながら言い訳したが先ほどの優希の表情にそっくりなジト目の奏子に怪しまれる。

「あやしー…なんか、悪い事でも考えてたんじゃない？ たとえば、お風呂覗くとか！」

「ぎ、ぎくう!!」

「ま、私の予想なんだけどね！ 湊だけならともかく、お兄ちゃんや真田先輩もいるし、流石にそんなことしないよねー」

大きく肩を跳ねさせた順平を見た奏子はしかし、これ以上追及せず、にその疑惑をうやむやにした。

そしてそのまま奏子たちは女子の間での会話を再開し、去っていく。何もしないのなら興味もないと言わんばかりに。

優希も女子が歩み始めて話が終わったとみるや荷物を持ち直して手を振り去っていった。念押しはせずに、ただ無言で。

そんな優希と女子の姿が見えなくなり、安堵したような息を吐いた順平はほぼ無言だった湊を見る。

「イチレンタクシヨードかんな。…墓まで持つてけよ」

こうして、以降この話は禁句となった。

疑念（11／20）

昼

京都市内

昨日は色んな意味で大変な目にあつたが、露天風呂でのことは無かつたことにして今日も今日とて夕方まで市内散策だ。夕方には京都駅に集合。そこから新幹線に乗って、辰巳ポートアイランド駅で解散となるため夜には巖戸台分寮へと帰ることが出来る。

昨夜の事だが、風呂からあがりお土産屋によくある機械で絞るソフトクリームをロビーで食べている時も岳羽に「女子と同じくらい肌綺麗だなんて詐欺ですよ、詐欺！」とか「なにかスキンケアやってます？」とか聞かれるのはすごく堪えた。

そんなものやってないし肌が綺麗に見えるのは日焼けしてないと温泉のせいなんかじゃないかと思う。むしろ病的な感じがしてひ弱に見えるので自分はもう少し日焼けしたい。あと筋トレも。

山岸にも「先輩って女性の方みたい綺麗な顔してますよね。あの、悪い意味じゃないんですよ……！」と今更ながらに言われたが女顔は湊もそうだ。

つまるところ湊が自分にそっくりなのか自分が湊にそっくりなのかはわからないが自分達が母親似なのは間違いないしそこは遺伝なので許して欲しい。

奏子は湊とは二卵生双生児で瓜二つという訳では無いが、どちらかと言えば父と母のいいとこ取りというか、可愛いパーツだけを集めた目に入れても痛くないパーフェクトに可愛い女の子だと思っている。身内鼻肩が多分に含まれていると思うけれど、本当にめっちゃくちゃ愛らしい。そりや中学やエルミンでファンクラブもできるわけだ。

結局、スキンケア云々を否定してマンゴー味のソフトクリームを舐めていれば美鶴さんにはなにか微笑ましいものを見るような目で見られるわ、奏子がからかいながらくつついてくるわで大変だった。

奏子を「彼氏がいる女の子が兄とはいえ異性に胸を押し当てるんじゃないやしません！」と叱れば「けちー」と言われる始末だし、奏子も

そうだが彼女らは俺が男だということを失念していないだろうか。

いや、情けなくボロ泣きした姿を見られているので今更男だとか男じゃないとかの問題以前になってしまったが、脅威認定されていないというか、俺ならなんとかなりそうと思われてそうなのが若干ショツクだ。

女性陣のこのメンツで彼女らが勝てない方がおかしいと言われたらそうですねと肯定せざるを得ないけど。

アイギスは黙々とアイスを食べて自分にはあまり近寄ってきていない様子だった。ただ、奏子や湊が自分に近寄ると僅かに眉を顰める様な表情をしているのを本人は気づいていないんだろう。そこはそのまま、気づかないままできて欲しい。

昨日とは違い、今日は逸れることなく班で固まって行動できている。とはいっても昨日の様に必ずしも班で固まって行動しろと言われているわけではないのでただ単になんとなくで集まりやすいメンツで自然と固まっただけ、と言えればいいのか。

休憩がてら紅葉がよく見える適当な茶屋風にレイアウトされている土産屋の軒先で自分と美鶴さん、高梨さんと朔間くんの4人で並んでありきたりだが茶菓子のほうじ茶クッキーと飲みやすくミルクと砂糖の入った甘い抹茶ラテに舌鼓を打っていればなにやらもじもじと美鶴さんが緊張している様子だったが意を決したように口を開いた。

「み、三上」

「なに？ 美鶴さん」

「そろそろ、〃三上〃…と呼ぶのもなんだと思つてな。きみは私の名前を呼んでくれているのに私の方が名字だけというのも他人行儀だろうか？」

確かに、美鶴さんの言う通りせっかく両想いになったのにこれまで通りと同じく名字呼びというのも他人行儀な気がする。

「だっ…だからっ！ 呼び方を変えてみたい、と思…う」

「いいんじゃないかな」

なので肯定した。

美鶴さんが変えたいと思うのなら好きにしたらいいと思う。他人を呼ぶ呼び方くらい好きにするべきだ。それが蔑称とかでない限り。「三上、と呼ぶのはやめにするとして、ゆ、優希さん…？ 優希くん…？ それとも、呼び捨てで…ゆ、ゆ、ゆ…」

考える美鶴さんの顔は蒸気を吹き出しそうなほど真っ赤になっていて、どんどん声は尻すぼみになっていつている。

これは助け舟を出すべきじゃないのだろうか。そうじゃないと美鶴さんはこのまま湯だつてしまいかねない。

「ええと…呼び捨てが無理そうなら、まずは美鶴さんの呼びやすいあだ名とかで呼んでみるとかどうかな？」

「すまない…ゆかりの時はすんなり呼べたんだが、どうにもきみのこととなると上手くいかないようだ…」

「仕方ないよ、同性の友達と異性じゃ違うだろうし」

岳羽に対する呼び方が変わっているのも、あの告白の後なにかあったからだろう。

武治さんが亡くなっていないことによりなにか変わってしまったのではと危惧していた面はあったが、岳羽と美鶴さんは無事わだかまりを解消し、友人になれたようで一安心だ。

とはいえ、美鶴さんは呼び方に悩んでいるようだし緊張もしているみたいなので、こちらから手本を見せてリードした方がいいのではなにかという気も芽生えてきた。

それと同時に小っ恥ずかしい気持ちが始まる自分を落ち着かせて、小さく息を吸う。

そして、美鶴さんの顔をじつと見つめて口を開いた。

「——美鶴」

「ひゃー！」

…ひゃい？

「ぶべっ…!?!」

ひゃいってなんだ？ と思った瞬間、顔に濡れた布が押し付けられた。

……………たぶん、これはおしぼりだ。

「だっ、だめだっ！ それは反則だっ！ 禁止する！ 断りもなく突然呼んだら…しょ、処刑だからなっ！」

「え、ええー…」

頑張っつてこちらも呼び捨てにしてみたのに、それがダメだったらしい美鶴さんに上擦った声と共におしぼりを顔面に押し当てられて視界が塞がれてしまった。多少理不尽と思っただが、恐らく美鶴さんもテンパって咄嗟にそうしたのだろう。自分も美鶴さんから先に言われていたら恥ずかしくて顔を逸らしてしまうくらい自信がある。流石におしぼりは押しつけないが。

しばらくしておしぼりが離れ、先程よりも顔を真っ赤にした美鶴さんがふるふると震えていた。顔に熱が集まるような感覚から、こちらも恥ずかしさで今頃顔が真っ赤になっていることだろうがそれを確認することはできない。

「さっきのは例にしてほしかったというか…や、ごめん…そこまで嫌がらなくても…」

「…嫌と言うわけでは…ないが…私には、呼び捨てはするのでもされるのもまだ早いようだ。すまないが、もう少しだけ心の準備ができるまで待つてくれないか？」

涙で潤んでいるようなその瞳に少ししたじろいで、慌てて弁明をしどろもどろになりながら口走れば首を横に緩く振られた。

嫌と言うわけではなく、単に恥ずかしいだけらしい。それなら、自分もそうなので拒否する理由もない。

「わかった」

が、正直なるべく早くが良いなあ、なんて我儘なことを考えてしまった。りした。

ゆっくり待つてあげたい気もするし、そもそも呼ばれる前にこの関係が終わってしまうかもしれない。えてして初恋というものは実らないというか実を結ばないといったのは誰だったか。結んでるじゃんというツツコミはどこまで有効なのだろうか。婚約？ それとも、結婚？

「いちやつくのも結構だけれど、そろそろ休憩も終わりにしない？」

「いちやついてはいないと思うんだけど…」

そんな変なことを考えていけば、さらつと高梨さんが飲んでいた飲み物を飲み切つて、休憩をやめないかと提案してきた。ついでに、いちやつくなと釘をしつかり刺してきたのでいちやついていないと否定すれば「まったく…」と言いたげな呆れた顔をされた。

心外だ。

「そういうのを、いちやついているというのよ。ねえ、朔間くん」

「えあつ!? そ、そうだと思う。…たぶん」

朔間くんはどうやら裏切り者だったようだ。昨日から自分には味方がいないのか。

いや、内容にもよるが高梨さんに同意を求められて否定できるほどの度胸が自分や朔間くんにあるかと言われればないし、裏切り者と言うのは酷かったかもしれない。

「僕は三上くんが楽しそうならそれでいいけど…もう少ししたら休憩を終わりにしたいのは同じ気持ちだよ」

「それなら…あつ…」

「どうした?」

休憩を終わりにしよう、と言いかけて家に電話しなければいけない事を忘れていた。

土産のお菓子や漬物などを冷蔵宅配便で送るのを伝えていなかったからだ。いつもなら、御影町まで帰って養父母の顔を見がてら手渡しして1日泊まっていくのだが、恐らくそんな余裕はないので店から直接送ってもらうことにしたのだ。さすが観光地・京都の土産屋。そういう旅行者に向けたサービスは充実しているらしく、纏めて梱包・配送もしてくれるらしい。ただし、冷蔵宅配便なのでそれなりに別料金がかかる。

一旦寮へと持ち帰って家へ届けるより、断然楽なので手間と苦労を金で買ったと思えば安いものだ。

けれど直接家に帰って家族に渡せない、こういうところは寮暮らしで不便だなと思うばかりだ。

「ごめん、家に電話しなきゃ。土産のこととかの連絡忘れてた」

「それなら、待っているから行つてくると良い」

「ありがとう」

美鶴さん達から離れ、物陰に背を向けてからポケットから携帯電話を出して電話帳から目当ての名前を見つけ、通話ボタンを押した。

何回かコール音がした後には相手が出る。家の固定電話にかけたのだが、どうやら家に養母さんか養父とっさんがいてくれたようだ。

『もしもし?』

「あ、養母かあさん?」

『優希? どうしたの?』

電話に出たのは養母さんだった。

養父さんは仕事だろうから、買い物かパートに行っていないければ養母さんがでるとわかりきっていたことだったが、養父さんが出たら出たで伝言を頼むだけだったので問題ない。

ちなみに養父母には日曜の内に朝倉先生からお墨付きをもらった件と元気になったことを伝えている。

なのでそういう話はしなくていいので楽っちゃ楽である。

すごく心配されたし元気になってよかったと泣きそうな声で言われたのと、心配させたことを平謝りしたのは記憶に新しい。

これから自分がやることによってはすぐに泣かせてしまうことになるけど。主に相続問題とか相続問題とか相続問題で。

生きていても死んでもそれがつきまとってしまうのもうとんでもない。

「いま修学旅行で京都に来てて…っていうのは知ってると思うけど、その旅行のお土産、食べ物が多めだから帰って直接手渡しとかじゃなくて冷蔵便で送ることにした。時間は午前受け取りにしてるし家の電話に配達連絡が来ると思うからちやんと受け取ってね」

『お土産、楽しみにしてるわね。…そうだわ、優希も湊くんや奏子ちやんと一緒に近いうちに帰ってくる予定はある?』

「俺はちよっと忙しいから今回は見送りかな。湊と奏子は…んー…どうだろう。また養母さんの方から電話してみて」

自分や湊と奏子も帰って来るんだろうかと訊かれるも、特にそうい

う話は出ていなかったと思うので濁す。湊と奏子も恐らくは帰らないだろう。

『そうなの？ でも私の方から電話するのは煩わしかったりお節介とか面倒とか思われなにかしら…』

「それくらい、そんなことないって。大丈夫大丈夫」

どうしていきなり養母さんはそんなことを言い出したのか。

少し引つかかるが、それを否定しておく。湊と奏子は十分養母さんや養父さんのことを父母として——とまではいれないが家族だと思ってくれているはずだ。

自分だって過去の記憶を思い出してもなお、実の両親は実の両親であるし、養父母は養父母ではあるが実の両親と同じかそれ以上家族としての情がある。

まあ、実の両親の二元で過ごしていた年月は6年あるかないかなので実の両親より養父母と共にいる期間の方が長かったりするので当たり前といわれれば当たり前かもしれないが。

とにかく、湊と奏子は養父母に懐いていると思う。たぶん。

少なくとも、中学の頃に家に来た僅かに血の繋がりがあられるらしい見知らぬ親戚よりかはよっぽどだ。そんな存在と養父母を比べるのもおこがましいかもしれないけれど、血の繋がりがなんか関係なく、ふたりはきつと養父母の事を良く思っているはずだ。電話ひとつかけたくらいなんとも思わないどころか喜ぶだろう。奏子は目に見えて喜ぶし、湊も目に見えないながらも実は嬉しがつてたりするので可愛いものである。

ただ、自分が正常ではなかった先週先々週になにかあったとすればその通りではないと思うが。

後でこっそり聞いてみるべきか。

「でも少し気になるし俺からもそれとなく聞いてみるね。もし養母さんが気まずいなら俺がかけ直すけど…」

『大丈夫よ？ 思春期って色々あるじゃない？ そういうことが少し気になっただけで大したこと無いの。ありがとう』

「そっか、それなら気にしないでおくよ。というか、俺にはそーゆー

の、思わないんだ？」

悪戯っぽく茶化すように返事をすれば、電話の向こうで小さく笑い声がした。

『ふふっ、何言ってるの。たくさん、思うわよ。面と向かって言わないだけ。そうそう、倒れたばかりなんだから無茶はしちゃダメよ』

「うん。わかってる」

『ほんとかしら。…二学期もあと少しだけだけど体調が本当に悪かったら気を遣わずに休学も視野に入れていいのよ。こっちに帰ってきてきても、御影総合病院があるんだから通院や療養だつて出来るんだもの』
養母さんは真剣に自分の体調を心配してくれているようだ。そして、朝倉先生のお墨付きに僅かな疑念を抱いていたらしい。否、朝倉先生が故に元気になったと言つてもそちらが原因で弱つてしまうもしくは突然死んでしまうという心配があるのだろう。実際、つい最近死にかけたのも間接的には幾月のせいではあるが直接的には持病の発作だ。

だからこそ、その出来事が喉元も過ぎていない今、養母さんは警戒しているのだろう。いや、警戒しているのは養母さんだけではない。恐らくは養父さんもだろう。

「……うん」

曖昧に返事をしてそのまま言葉を二、三回ほど交わして電話を切る。

ふと、顔を上げると道の方に人だかりができてるのが見えた。なにかイベントでもあるのだろうか。

そうやって人だかりに割り込んで少し覗き込めばマイクやテレビカメラなどを持ったテレビクルーがいた。

『ブラウンのぶらり観光散歩』！ 今日のゲストはフレッシュな駆け出しアイドルのりせちーこと久慈川りせちゃんです！

なんと、バラエティー番組の顔なタレントのブラウンと駆け出しアイドルだというりせちーが京都に来ているらしい。

というか、この人だかりの中にいた。

アイドルのりせちーの方はよく知らないが、ブラウンはテレビでよく見る今では居なくてはならないタレントだ。

特徴的な笑い声と寒いギャグ。それとくすりとするような幅広い小ネタでお茶の間を賑わせている。そして、看板番組も多い人気タレントでもある。

それとなく場を盛り上げたりフォローに回ったりとその気遣いも人気の秘密らしい。この前特集番組でそう解説されていたのを覚えている。

とはいえ、彼らの熱心なファンでもないし美鶴さんたちを待たせているのでそそくさと人だからから離れ、元の場所へと戻る。

「ごめん、お待たせ」

「ああ、おかえり」

「三上くんおかえり」

「おかえりなさい。さ、三上くんも帰ってきた事だし、行きましょ」

三者三様の返事を貰い、次はどこに行こうかと話をしながら歩き出した。

夜

巖戸台分寮

やっと港区へと帰ってきた。

疲れてへとへとになりながら寮のラウンジに足を踏み入れれば、待っていてくれたらしいコロマルが尻尾をブンブン振りながら飛び込んでくる。

「わふっ！ ワンワン！」

「ただいま、コロマル」

わしゃわしゃとその頭を撫で、顎をかいてやれば満足してないのかコロマルは奏子の方へと突撃していく。

「わん！」

「わははー！ ただいまコロマルー！ 良い子にしてたー？」

「わんわん！」

「コロマルさんは『しっかり散歩と寮の番はしていた』と言っているではありません」

「なるほどねー？ 褒めて遣わすぞ〜！」

アイギス翻訳のコロマルの言葉とそれを褒める奏子の声を聞き流しつつ、階段をあがる。

そして部屋に入って荷物の整理をして貴重品を置いて下に降りる。手に持つのは、寮内で渡すお土産だけでいいだろう。

下まで降りて、ダイニングで寛いている荒垣くんに声をかけて買ってきた漬物の入っている袋を渡す。

「はい、荒垣くん。これ。言われてたやつ。一応試食はしたから不味い物は選んでない…と思うけど、頼りないから荒垣くんの方でも味見しといてくれないかな？」

「おう、あんがとさん。…つか、試食までするたあテメエもいちいち律儀なやつだな。フツー、適当に買ってくるだろ、こういうヤツはよ。『どこで買ってても変わんねえ』ってな」

「そうかな」

奏子だって湊だって食にはそこそここだわりがあるので試食や味見をする事が多い。

とはいえ、バナナが好きかな奏子とは違い湊は不味くなければいい、程度なのでこだわりと言えるほどのかはまた別かもしれないが。

そして自分も不味くなければいい、程度のこだわりくらいあるのだ。不味い美味いは好みによるところがあるので自分が正確かどうかはまったくわからないけれど、それでも人並みではあると思う。

「そうだったの。アキのやつなんか…見ろ。プロテインだぞ？ 意味わかんねえだろ。なんで京都まで行ってプロテイン土産に買ってきやがるんだ」

「ノーコメントで」

予測はしていたがあきれ顔の荒垣くんの視線の先にあるプロテインの缶を見て何も言えなくなった。しかも3缶もだ。『いつも』なら1缶だけで我慢している(らしい)のに、今回に限ってどうして3缶

も買ってきているのか。というか、帰りに少し財布の中を覗いて青い顔になっていたのはプロテインや土産を買いすぎて結構ギリギリだったからだろうか。

「天田にも土産だつってプロテインを渡してやがる。…まったく、あいつのプロテインジャンキーはそろそろ矯正しなきゃなんねーかもな」

やれやれといった顔で肩を竦めた荒垣くんはそのまま漬物をパツクに小分けし始めた。

天田くんはプロテインはまだ早いんじゃないだろうかと思いつつも自分も天田くんは渡す土産が残っているし、ラウンジに置いておきたいものもあったのでテーブルの方へと向かえば天田くんは伊織や湊と一緒にそれぞれが買って来たらしい土産を見ていた。

「つーわけで、天田少年にはオレっちからコレ。ご当地フェザーマンキーホルダーよ!」

「わあ、ありがとうございます!」

伊織から新選組の羽織を着たフェザーマンのキーホルダーを買って天田くんは喜んでいた。

と、同時に自分のチョイスが被っていないことに安心した。安直にキーホルダーを買わなくて良かった。

続いて、湊ががさごそとそれなりに大きな袋を差し出した。

「僕からはこれ」

「……? あ、ご当地フェザーマンTシャツ!」

不思議そうな顔でそれを受け取った天田くんが袋から中身を出せば、白い布地にフェザーイーグルの金箔押しマスクのイラストがプリントされたTシャツが顔を出した。

背景には京都の名所がデフォルメされたシルエツトで並べられており、ダサイのかオシヤレなのかよくわからない絶妙なデザインになっている。

天田くんが幼稚園もしくは小学校低学年くらいなら着けていても違和感は無かっただろうそれは些か手に入れるのが遅すぎたかもしれない。ただ、ファンからすればコレクション品として価値あるお土産

なので湊のチョイスは何ら間違っていない。

「…これは、外で着るにはちよつと恥ずかしいですね…でも、大切にします！」

「よかった。天田が気に入ってくれて」

天田くんは恥ずかし気に頬を掻いてから、満面の笑みでそれをきれいに畳んで大事そうにそれを抱えた。

すぐくうれしそうで何よりだ。湊も安心したように笑っている。

その空気を壊したくなかったのでさりげなく近寄って、ラウンジのテーブルに紙袋を置いておく。

「天田くん、ここに天田くんへのお土産置いておくね」

「あ、ありがとうございます。後で見ますね」

「うん。お菓子だけど食べ過ぎないようにね」

そうやってあまり気にせずと言った言葉に天田くんは耳聴く反応してすこしふくれっ面になる。心外だ、と言わんばかりに。

「そんなに食べませんよ。順平さんじゃないんですから」

今度は天田くんの発した言葉に伊織が目を剥いてあんぐりと口を開けた。

「オレじゃないからってドユコト!? オレっちそんなにだらしく見えるワケ!?!」

「…否定はしません」

「うん。しないね」

自分は何も答えなかったが、確かに伊織はだらしない。というか部屋がめちやくちや汚い。汚部屋だ。美鶴さんが『強盗が入ってきて荒らした』と勘違いして黒沢さんと呼ぶくらいには。

天田くんと湊がほぼ同時に頷いたのも納得である。日頃の行いだ。日頃の行い。

日頃の行いといえば露天風呂云々の話は口止めしておいたので2度と語られることはないだろう。というか、無かったことにしてほしい。あわよくば、影時間が消えた時の記憶修正でなんとかならないだろうか。結局、卒業式の日には残念な記憶が蘇ることになるけれども。

「ひつでえ!!! 三上センパイはどうスか!? そんなことないっスよね!?!」

「……ノーコメントで」

「あつ逃げたー!」

こういう時は作り笑いをして逃げるに限る。

留まったせいで面倒ごとに巻き込まれるのはもうごめんだ。というより、自分はずっともともとこういう人間なのだ。

事なかれ主義で目立ちたくない。何事もなあなあにしがちで自分本位な面倒くさがり。

優しいとか面倒見がいいという評価からはかけ離れている。

ふにやふにやと曖昧なので自分の芯というものがなく、マーガレットから訊かれたように「お前はなんだ」と言われると答えにくいものではある。が、そんな答えを明確に持ち合わせている方が少なくないだろうか。俺は俺だ、で良くないだろうか。それ以外に何かあるのか。

いまは、厳密に言えば違うけれど。

もしかしてマーガレットやあの部屋の住人は知っていたのだろうか。……。

いや、考えるだけ無駄だ。もう自分はベルベットルームに招かれることは無いだろうし、その資格は元から無い。

嫌なことは考えないに限る。

ラウンジで適当につまんで貰う用の八ツ橋の箱を開封して中身が見えるように置いておく。そしてメモ帳を出して「ご自由にどうぞ」と書いて小分けパックに梱包されている八ツ橋の上に置いた。

自分がだらだらとラウンジで食べる用でもあり、良ければお茶を飲む時の共にでもして貰えればそれでいい。

明日からちびちび食べよう。

唐突に、ぶるぶると携帯が震えた。

新幹線に乗っていたので今までマナーモードにしていたのをすっかり忘れていた。

「どうやら朝倉先生から着信のようだ。なんの用なのだろうかと考えながら階段をのぼり、踊り場で立ち止まって通話ボタンを押す。

「もしもし?」

『…おう。オレだオレ』

「オレオレ詐欺の電話なら切りますけど」

案の定、電話の主は朝倉先生だった。たまに、ジンやイズミくんが朝倉先生の診療所の電話を借りてかけてくることがあるので電話の主が違う場合があるのだ。それはそうと、突然「オレだオレ」と言われたらオレオレ詐欺かと思うのも致し方ないだろう。冗談だが。

『オレオレ詐欺じゃねーっての! なんつーか、オマエ最近このパーフェクトなオレに容赦なくねーか? もうちったあ敬えや!』

「いやいや、そんなことないですって。先生の気の所為なんじゃ?」

『…ま、オレは寛大だから気の所為って事にしといてやるよ。聞くんが、明日ヒマか?』

鋭いツツコミを披露した朝倉先生は冗談だと分かっているのかあつさりとそれを流した。

さて。明日暇か、と問われれば暇だ。

学校があるが放課後の予定は何も無い。修学旅行後すぐなので皆もタルタロスに行くという訳では無いだろう。

「暇ですけど…あ、もしかして高級出前寿司奢ってくれるんですか!?

やったー! ご馳走になります!」

『ちげえよバーカ! てかオマエいつまでそれ根に持ってたんだよ!!!

血液検査の結果が出たから聞きに来て話だつたの! ついでにウチに2泊しろ』

「へ」

電話じゃダメなんだろうか。

そんな自分の心を読んだのか、朝倉先生が少し言い淀みつつも説明してくれる。

『あー…ちよつとな、検査結果がな。2泊しろっつーのは別件でタカヤがゴネたからだな』

「じゃあ、タカヤも枕投げしたかったとかそういう…」

曖昧に結果をはぐらかした朝倉先生が告げた外泊の理由に首を傾げる。タカヤがそういうことを言うなんて珍しい。意外と普通の願望があるのだろうか、と思うがそれは即座に朝倉先生に否定された。『いや、流石にそれはねーだろ…ねえよな…？　もし枕投げしたいって言われても暴れんなよ？』

一応ここ、病院だからな、とタカヤとこちらに対する信頼が揺らぎまくってる朝倉先生が不安げに告げる。

流石に枕投げはしない。言われてもしない。そもそもタカヤはそういうアクティブなタイプではなかった。残念。

ただ、外間もプライドも投げ捨て本気で枕投げをすればどうなるか。最悪、部屋が荒れるだけでなく窓でも割れそう。ついでにホコリで噎せて体力を使い果たしてぶっ倒れる。真田くんと卓球をした時のように。

「しませんって。してもお土産話くらいで…あつ、修学旅行のお土産そっちに持っていきますね」

『おう。楽しみにしてるわ』

明日は学校帰りに寄ろう。そう決めて、電話を切る。

22日にあるストレガによる襲撃も、今回は起こり得ないので安心して泊まることが出来るだろう。ペルソナが使えない身体だからどの道警戒していても意味が無いというのは置いておいて。

「…いふう」

朝倉は携帯電話を仕舞うと小さく息を吐いた。

「なあ、ナオリン。さっきの話はマジか？　正直なところ、信じたくねえってのがホンネなんだが」

振り返った朝倉の表情は固い。先の電話でも、平静を装えてたかどうかすら怪しかったのだ。そして、そんな朝倉の視線の先にいるのは藤堂尚也だった。

彼は、産院で聞いた話を南条に通さずに、まずは朝倉へと持ち寄っ

たのだ。ちょうど、朝倉が血液検査の結果に眉をひそめている時に。「……こういうことになるから、ブンヤに話そうかは迷った。けれど、知っておいた方がいいだろ？ きつと彼は——」

「言うんじゃねえッ！ アイツは……アイツは……ッ！ 絶対人間に決まってる！ こんなモン、何かの間違いだ。そうに決まってるあ!!!」

その言葉と共に、朝倉は片手に持っていた紙を握り潰した。

「そんな『結果』が出てるのにな？」

それでも。尚也は腐れ縁の学友に現実を突きつける。

逃げてはいけない。逃げさせてはならない。

血液検査の結果、『彼』の血液からペルソナの制御剤に使われているとされる正体不明の悪魔の血液と全く同じ成分に『置き換わっている』事が判明した。

同じモノと表現した方が良いか。

つまるところ、悪魔化していると言えなくもないのだ。ただそれだけなら、イズミのように制御剤の服用で身体が蝕まれたとも取れるだろう。

だが、朝倉にもたらされた『本物の有里渚という人間は産まれる前に死んでいる』という話。それがあつたためにそこから導き出される答えはひとつに近い。

『彼』が無害ならいい。しかし、そうではない可能性だつてある。

いつ、『真実』に気がついて気が狂れるかわからない。そしてもし、その時その化けの皮が剥がれれば？

恐らく、取り返しのつかないことになりかねない。低級の悪魔だろうがなんだろうが、人を食い荒らさない保証は無いのだ。そして、成り代わった意図もわからない。目的が不明のなら、監視して縛っておくしかない。そして必要なら殺す。

それが大人として、力を持つものとして出来る最大限の努力だった。

タカヤが伝言を頼んだ2泊に関しては全く別の話のようだが。

だが、朝倉は首を横に振った。認めたくなかった。認めてしまえ

ば、『彼』の感情まで否定してしまうことになる。

「…アイツが死んだはずの人間に成り代わった悪魔だなんて、そんなわけ、ないだろ」

そう。

ここまで『彼』が本当は悪魔なのかもしれないという前提で話しているが、もたらされた情報が両方とも間違っている可能性だってある。朝倉とて、尚也を信用していない訳ではなかったが今回ばかりは信じられない。

イズミのように何か異常があつてこのような血液検査の結果が出ているのかもしれない。

あれだけポロポロに傷ついて、それでも前に進もうとする人間らしさの塊である気狂いが、人間でないはずがない。なにより弟妹や周りを想う感情こそが『彼』を『彼』たらしめているモノだというのに、それを否定されてしまえば『彼』はどうなってしまうというのか。こんな事実が本当だとしたらあまりにも報われないだろう。

だからこそ、朝倉は嘘だと信じたかった。そう、信じていたかった。

「…俺もだよ」

尚也も、祈るように小さく呟いた。

目を伏せ、しばしの沈黙の後にもう一度尚也は口を開く。

「…：ブンヤ、ドツペルゲンガーって悪魔は知ってるよな？」

「知ってるっついの！ 散々オレらが高校ン時に硝酸を舐めさせられた相手じゃねーか！ いま、そういうのは関係ねーだろ！」

ヤケ気味に叫んだ朝倉の音量に顔を僅かにしかめながら、尚也は表情を真剣なものにした。

「それが、あるとしたら？」

「はっ？」

あくまでも仮説だが、と前置きして尚也は語り出す。

「ドツペルゲンガーは本体とは別の場所に現れ本体の目の前に現れた時には本体が死ぬっていう内容の都市伝説なのは知ってるよな。元々は自分の姿を自分で視る幻覚の一種とも言われてる。日本では影法師という名前の悪魔が昔から居たがそれに近いらしい。似てる

存在だと沼男、とかな」

尚也から語られたドッペルゲンガーの情報は朝倉ですら知っているありふれたものだった。

「それくらい知ってるっての。…で、それがどうしたんだよ」

「…：…なら、ドッペルゲンガーは、本体を殺し本体になり変わろうとするという説も流行ってるのを知ってるか？」

「まあ…流行ってるっつーか、たまにそういう案件に携わってるサマナーもいるくらいだな。話には聞いてる」

うんうんと朝倉が頷けば、尚也は続きを話すために息を吸った。口が乾いてきたのか、インスタントコーヒーの入ったコーヒーカップに、ついでのように手を伸ばす。

「『本体』よりも自らの方が優れている。『本体』より自分の方がもつと上手くやれる。辛いなら、変わってやろう。そうやって、本体となりかわろうとするんだってさ…：…これ、どこかで聞いたことないか？」

「それって…：ナオリンの兄弟の…ああいや…：…」

はた、と提示された言葉の共通点に気がついた朝倉は言いかけて言葉を濁した。

しかし尚也はコーヒーを一口飲むと気にした様子もなく更に続ける。

「別にいい。あのカズヤも、俺のうち捨てた感情という意味では死人だった。そして『本物の彼』も死人だ。ならカズヤと同じく誰かが意図して死人を甦らせたとみるのが正しい気がするんだ。カズヤと違ったのは、本当に『本体』が既に居なかったことだろうけど」

甦らせた。

その言葉は朝倉にとってえらく荒唐無稽だった。

反魂とはそう易々と出来るものではない。完全に事切れていないならまだしも、既に死体となった人間を甦らせるのはそれこそ神にか無理な所業だ。それも、多大な対価が必要になる。

「甦らせたっつっても…：あの世界と違ってここは現実だぜ？　なんでもかんでも創造主サマの思い通りって訳にやいかねーだろ。赤ん坊

とはいえ人間ひとり甦らせようと思えばどれだけの生贄がいるんだか：想像もしたくねえただの赤ん坊相手にそんなことして利があるやつなんているのかよ？」

朝倉の問いに尚也は頷いて懐からひとつの古めかしい本を取り出した。

ボロボロの紙に掠れた字。どこからどう見ても年代物の冊子である。

僅かに、かび臭い匂いがして朝倉は顔を顰める。

「なんだよそれ」

「反魂の術の方法が記された書物だ。安倍晴明の時代から連綿と続く安符[？]家由来の禁忌の術も載ってる」

「っ!!! バツカやろっ！ テメエ：なんつーもん持ってきてんだ!!!」

朝倉は尚也のともでもない暴露に口直しに飲もうとしていた砂糖とコーヒー粉末のどろりとした練り物と化している物体を口から吹き出しかけた。

安倍家由来の書物。つまり陰陽師の大御所の家の国宝として保管されるか悪魔の専門家であり陰の国家機関でもあるヤタガラスが封印するレベルのともでもない書物を持ってきたと告げているのだ。

ちなみにヤタガラスが陰なら陽は龍脈の操作に長けた峰津院家が牛耳る『気象庁・指定磁気調査部』である。『JP^ジXS^{クス}』のことを指す。

かつてはヤタガラスに属していたその家も、今では別れ似たようであり別の役目を果たしているという。

朝倉にとつては彼らの言う龍脈に繋がるアマラ経絡だのアウラゲートだの、星を喰らうマガツボシの予兆だのアカシツクレコード理論云々はまったくわからなかったが、高尚な存在には何かしら常人では理解できない何かがあるのだろう。そしてそれらに関係することを管理しているということも。

朝倉は悪魔や超常の存在と関係を持つにあたってそんなあきらめを持っていた。

「んで、なんで持ってきたんだよその危険物」

「資料として必要かと思つて」

いけしやあしやあと悪びれず、サラリと言つてのけたこの悪友に、朝倉はうへえとげんなりした顔をした。昔から彼はそうなのだ。クールでしつかりしているかと思えばはしやぐ時ははしやぐし抜けてる時はとことん抜けている。だからこそ、朝倉やマーク、ブラウン、あやせ、それに城戸といった真面目ではない生徒とも付き合いがあったとも言えるが。

「あー…忘れてたけどナオリンそういうタイプだもんな。雪の女王ン時も——もぐぐつ」

言いかけた朝倉の口に、尚也はおやつ代わりのチョコチップス ティックパンをねじ込んだ。

ドロドロの砂糖とコーヒーの混合物に比べ、程よい甘さのそれが疲れた脳にしみ渡る。

「その話はやめよう。不毛だ…」

「もぐもぐつ…んぐつ…そうだな…やめとくか。つか、あん時ナオリンに絡んで『この箱開けちまおうぜ！』って面白がって騒いだのオレだわ…それを考えりや同罪もいいとこだったな。いやー若気の至りつてこええな…」

朝倉にとつても散々な思い出であるので満場一致で語りかけた話を無かったことにした。とても平和的である。

犠牲を出すことなく解決したからこそ、こうしてただの黒歴史と なっているのはもちろん分かっていた。なので、会話の上では無かったことにできるのだ。

「その本はヤバい事にならねーうちにさっさとヤタガラスに渡しとけよ。で、だいたい察しはつくが話してもらおうじゃねえか」

ニヤリ、と朝倉はあくどい笑みを浮かべた。もうやけっぱちである。

何が来ても驚かねえぞ、と。

「——最初は、父親の独断かと思った。けど、それは違った。赤子を生き返らせて利のあった人間は2人居たんだ」

「ふたりいた？ どいつとどいつだよ」

訝しげに朝倉は顔を顰めた。驚くほどではないが、気にはなった。

尚也の調査がここまで長引いたのは容疑者が1人から2人に増えたせいである。と、言うよりかは有里朔也がなかなか足取りを掴ませなかったから、というべきか。18年前の出来事だということを加味しても、そんな事実がなかったのかもしれないと思えるほどに痕跡が上手く隠されていたのだ。

最初は、遺体を持っていった父親である有里朔也がなんらかの代償を差し出し反魂の術を実行したのだと思っただのだ。

独学で悪魔と取引をして。

だが、調査を進め足取りを追ううちにそうでは無いと分かった。

有里朔也は巧妙に偽装をして、義父である倉橋翁の元へ向かっていたのだ。

その件に関して倉橋邸を訪ねた際にヤタガラスと少々事を構えかけたが、別件で調査に来ていた相手の女性サマナーが実力もあり話のわかる人間だった為にその小競り合いは起こる事無く済んだのは幸いとも言えるだろう。

そして、何が起こるかわからないからとそのクズノハの女性サマナーと共に行動することになった尚也は、倉橋翁の遺した屋敷の蔵の地下にあった隠し部屋でこの古書と翁の日記、反魂の術を行使したらしい儀式の跡を見つけることに成功した。

「甦らせたのは、彼の祖父である倉橋黄盛。そして父親である有里朔也のふたりだったんだ」

「は…？ ああ、そうか、父親と爺さんならそりゃあ産まれてくるはずだったガキを生き返らせたかも知なるわな…」

朝倉は納得した。方法は褒められたものでは無いが家族の情が根底にあるならば、それは悲劇だ。

意図も何も生き返らせて利用しようなどという事ではなく、『生き返させること自体が目的』だったのだ。

その結果が、これだ。

非正規の手段で悪魔の力を借りた人間が、幸せにならないというのは迷信ではないらしい。実によく見るパターンだ。

しかし反魂の術だって完璧では無い。古文書にのみ伝わっていた

不確定なものだ。

生き返らされた『彼』も生き返った訳ではなく、捏ねた土塊に人格を反映しているだけなのだとしたら。

ただの、人間のフリをしている反響音エコーなのだとしたら。

それこそ、神や悪魔の力を借りない限り人間として完全に蘇生することなどできないためにそんな可能性だってあった。

そこまで考えて、もしかすれば、と朝倉はある予測を立てる。

有里朔也と倉橋黄盛が反魂の術を実行したのだとして、その保険として悪魔も呼び出し願いを叶えたのだとしたら。

その対価はもしかすれば、と。

「ナオリン、もしも、もしもだ。アイツ自身が悪魔なんじゃなく、アイツに悪魔が巢食つてるってんなら身体の変化も人間としか言えない振る舞いも納得出来ねえか？ 身体の中に、人間のアイツと、隠れてもう一匹いんじゃねえか？」

「……どうして、そう思う？」

射抜くような訝しげな尚也の視線にたじろぐ事無く朝倉は言葉を紡ぐ。

「いや、なんとなくだ。もしアイツが本当に悪魔だとして、だ。悪魔の方が反魂の代償に甦らせた身体を間借りしているとすれば。アイツをスケープゴートとして利用してるなら、アイツ自身が消耗しきって苦しんでるのにも理由がつく。ついでに、アイツが無意識にソイツを抑えていると仮定してみろ……」

「彼を殺すのは逆に悪手かもしれない、という訳か……」

「ああ。身体つっ—器がぶっ壊れても、それを利用して好き勝手する悪魔はこれまで何度も見てきたからな」

どうして、朝倉はただの患者である『彼』を擁護しようとしているのか、自分でも分からなかった。

だが、これまでにそうやって人間社会へと紛れ込んだ悪魔はよく居た。悪魔にとっては肉体だけが大事のではなく、肉体に含まれるマグネタイトも重要で、器が壊れたくらいは本来の自身が顕現する足がけ程度でしかないだろう。本来の人格が邪魔するならば尚更、死んで

欲しいと思う者もいるという訳だ。死ぬ時に発する強烈な感情からなる物質——マガツヒも悪魔にとつては有り難い代物なのだから。

対価が反魂でないにしろ、召喚者の体に乗っ取つてクズノハのサマナーが振るう一刀の元に切り伏せられた悪魔は数しれない。

もしくは、カードにされてマハ・ラギオンで燃やされたか。

とにかく、そういう悪魔は珍しくないのだ。

となると、『彼』は一方的な被害者とも言える。

勝手に生き返らされ、気がつかないうちに身体が徐々にヒトでなくなつてしまうなど、あんまりにもあんまりだ。

結局、いくら話し合つたところで真相など分かるはずもないので朝倉と尚也は悪魔が巢食つているのなら取り除く。それが無理ならばらくは『彼』を刺激せずに見守るという結論に至つた。その結果、彼の中の「悪魔」が暴走すれば必ず殺すと決めて。

予兆（11／21～11／22）

4月21日（土） 放課後

朝倉医院

「単刀直入に言うがな。お前の血の成分が制御剤に含まれていた悪魔の血と同じになってたぞ」

「えっ、ええ…そう、なんですか…？」

「ああ」

いつも通りの声色でそう告げた朝倉先生は検査結果の紙をとんとんと人差し指で突いた。

書いてある数値などはよくわからないし実感もないが、自分の血が悪魔の血と同等の成分になっているという事だけは分かった。

心当たりがないわけではない。制御剤を乱用し、シヤドウを喰らい、まともでいられるはずがないのでそんな結果が出てしまうのは妥当だろう。

ただ、それで不便があるか？ と言われると無いのだ。なんら、変わったところはいまのところ見当たらない。

健康や丈夫になったわけでも、気性が荒くなったといったこともない。そんなことより。

そんなことより。

「あの、先生。後ろの人は…？」

先ほどから部屋の端でここにこと微笑みながら立っている金髪の女性が気になって仕方ない。

あんな人はこの病院にいたのだろうか。

「あ？ どこからどう見ても看護師に決まってるんだろ。オレが全部ひとりだけでやってる訳じゃねえからな。オマエが今まで見た事なかったのはタイミングが悪かったからだよ」

「はあい、ヨロシクネ。それはそれとして、フミヤちゃあん、そういう淡白な紹介は無いんじゃないの？」

「あーもう、オレが悪かったからオマエはあんまししゃべんなって…」
すり、と朝倉先生に近づいた看護師の女性がその肩を撫でればう

ざったそうに朝倉先生は顔を顰めた。

猫撫で声の様に甘い声とその魅惑的な容姿は看護師というより、コ
スプレとかホステスとか別の物に見えてしまうのは何故だろうか。

とにかく、朝倉先生の知り合いなのはわかったので良しとする。あ
まりお近づきになりたくないが。

「で、どこまで話したんだったか。えーっと、そうそう、血の成分につ
いてなんだが、異常とかはねーか？」

「いまのところは…無いと思います」

ペルソナが使えないのも血の影響があるのかもしれないが根本は
恐らく別の要因だ。だから、変異した血のせいで何か不便だとか不都
合だとか異常があるということとは無い。

「そうか…なら戻っていいぞ。タカヤ達が来てつから、今日はあの部
屋で寝泊まりすりゃあいい。晩飯の時間になったらまた出前取るか
ら今のうちに決めとけよ。あと、外出するならオレに一声かけてから
な」

「はーい。…ありがとうございました」

いつも通りペこりと頭を下げ、診察室から出た。

今日明日はここに泊まることになっているが特に検査といった用
事はなく、単にタカヤの要望らしいので友だちの家に泊まる感覚に近
いかもしれない。

「…：リヤナンシー。どうだ、なにか分かったか？」

優希が部屋から去った後、くるくるとペンを回しながら朝倉は看護
師の女——鬼女・リヤナンシーに問いかけた。

彼女は悪魔であり、朝倉の使役する“仲魔”のひとりだ。

リヤナンシーとはアイルランドに伝わる美しい女の姿をした妖精
であり、愛を囁き見初めた男にとり憑いて、絵画や詩の霊的な才能を
与える代わりに生気を吸い取るという。

そんな伝承を持つ悪魔のリヤナンシーは普段、朝倉の持つ小型コン

ピューターであるCOMPにデータ化されて格納されており、サマナーの治療で人手が足りない際に呼び出されることが多い。

悪魔と関わりのないタカヤ達や荒垣にリヤナンシーや他の悪魔を見せれば下手にそちらとの繋がりができていけないトラブルに巻き込まれかねないため、朝倉は彼らの前で彼女や他の悪魔を呼び出すことは一切していなかった。だからこそ、優希は彼女の存在を今初めて知ったのだ。

シャドウという化け物と対峙しているのだから、これ以上余計なものを背負わせたくないという朝倉の身勝手な配慮でもある。

その気遣いが蛇頭黄幡神との戦いで無駄になっているとは知らずに。

朝倉に問われたリヤナンシーは少し言い難そうに視線を逸らし、小さく唸った。

言っているのか、駄目なのか。決めかねているようだったが、やがて決心するとやつとといった様子で口を開いた。

「——悪魔じゃないかどうかはわからないけれど、あの子、魂がふたつあるわよ」

「はあ!？」

リヤナンシーの言葉に朝倉は目を見開いた。ふたつの魂がひとつの身体に入っているなど普通ではない。

どういふ事だと朝倉が迫れば、リヤナンシーはまた表現しづらそうに口を開いた。

「ごめんなさい。ワタシの表現が悪かったわ。：別々にひとつずつあるんじゃない、欠けたふたつの魂を歪に継ぎ接ぎにしてひとつにしたようなものに見えたの。だから、ふたつなんだけれど、ひとつ。繋ぎ方がとても綺麗だからよく見ないと歪なひとつに見えると思うわ。欠けていて、よく分からない魂、といった感じに」

そこら辺の悪魔からしたら凄く魅力的に見えるでしょうね、とリヤナンシーは続ける。

ふたつの魂があるだけでも異常だというのに、よりにもよってそれらを繋げ合わせひとつにしているのだと語った彼女に朝倉は頭を抱

える。

そのふたつの魂の出処はどこからなのか。なぜふたつの魂を掛け合わせたのか。朝倉はそれをそうした存在の意図が全くもって理解が出来なかった。しかし、気になったことはそこでは無い。

「おいおいおいおい、まさか、その片方が悪魔の魂って言うんじゃないか？」

「それも…わからないわ。ワタシたちにわかるのは魂の大まかな形と惹かれるか惹かれないかだけだもの。普通のニンゲンが果実の良い匂いにつられたとしてもその中身が空洞なのか詰まっているのかどうかわからないのと同じ。専門家じゃないとわからないわ。それこそ、死神だったり冥府の川にいる渡し守カロンとかね」

「……そう、か」

朝倉はリヤナンシーの言葉にぐうの音も出なかった。確かに、ただの悪魔というだけでぼんぼんと魂の形や特質が分かってしまっっては彼らも人間に擬態しづらいしすぐバレてしまっって使いづらいう。となると、人間に憑依するメリツトも無くなる。

しかし悪魔でさえ並の者では魂の大まかな形や個数しか分からないのなら誤魔化してしまえと思う悪魔もいるだろう。そして、実行に移せる程の力を持ったものが実際にそれを行うことも。

「ワタシが見てる分では少なくとも彼は悪魔じゃないように見えるわ。悪魔だとしても、あれだけのニンゲンらしさがあったって今まで目立つような形で他の悪魔やヒトを襲っていかないのなら、相当高位の悪魔かニンゲンのどちらかよ。フミヤちゃんもワタシ達がニンゲンの世界に出てくる為にはMAGマゲネタイトやマガツヒが必要だっって知ってるでしょう？」

「あ、ああ……」

そうだった、と朝倉は思い出した。

悪魔が異界化していない人間界に姿を現そうと思うとそれらが必ず必要になってくる。

人と遜色のない気配に擬態できる技術を持つ悪魔ほど、高位と言っても過言ではないのでその必要量も多くなる。

ネコマタや人に化けるのが得意な悪魔もいるがあれらはあくまでも一時的であり他の悪魔は騙せない。並の悪魔では見破れないほどに擬態できる存在こそ稀有でありながらも高位であると言えるのだ。

モコイやガキ、ピクシー、リヤナンシーといったよくいる低級の悪魔ならマグネタイトやマガツヒを人の食事などで代用できる場合もある。もしくは、召喚主から微量のそれらを供給されることによつて。だが、悪魔が人の擬態をしていて、人の模倣をしつつ人間界に常に居続けるというのは至難の業に近い。

悪魔の巢に足を踏み入れることがない時の朝倉は生体エネルギー協会という施設で金と交換でMAG^{マグネタイト}を仕入れているので、人や悪魔を殺さずともMAGを得ることは可能といわれれば可能だがそれを出来る纏まった金が必要、ただの高校生である優希がそんな大金を持っているとはとても思えない。

「高位の神や悪魔じゃない限りずーっと精巧にヒトの姿を保つていようと思つたら、どこかで必ずヒトか他の悪魔を殺さなきゃいけなくなるわ。だって、ヒトのマガツヒやMAG^{マグネタイト}の含有量が1番多いもの」
だから、もし悪魔だとしても人を無闇矢鱈と襲うような悪魔ではないとリヤナンシーは判断したらしい。

それはそれで何故高位の悪魔がただの人の真似事をしているのだという話になってくるのだが。

「いずれにせよ、荒唐無稽ね。でも、あの子は悪い子じゃなさそうだし信じてあげましょ」

つまり、リヤナンシーの見立てでは優希の場合はふたつの魂をひとつにされているだけで本人が悪魔だということや悪魔が憑依している可能性は薄いらしい。

朝倉の『優希が悪魔を抑えている』という意見も、尚也の『悪魔なのではないか』という意見もハズレの可能性が出てきたというわけだ。

そうになると、また別の疑問が出てくる。

どうして血液の成分が制御剤に含まれている未知の悪魔のものと同じものになったかということだ。

そもそも、朝倉とそれを調べたヴィクトルという専門家の答えが間違っていたというのか。

「あー……わっかんねえ！」

ギシギシと音を鳴らす事務椅子の背もたれに大きく身体を倒し、朝倉は背を伸ばして降参した。

ひとまず脅威ではないとリヤナンシーが判断したのだ。それを信じるしかない、と朝倉は諦めた。

「でも、すごく美味しそうよね。良い匂いがしていたわ。…鼻が曲がりそうな腐ったような匂いも幽かにするけれど、大半は甘く、熟れて爛れた果実の様に甘美……」

「食うなよ」

うつそりと舌なめずりをしたりリヤナンシーに朝倉は釘を刺す。

理性的な彼女でさえ、ここまで惑わすとはなんなのか。よく今まで悪魔に襲われてこなかったな、と朝倉は感心した。

しかしそれに領いたリヤナンシーが小さく口を開いて放った言葉に朝倉は怪訝な顔をすることになる。

「わかってるわ。それに……なんだか怖いもの」

「あ？ 怖い？」

「ええ。魅力的だけれど見えないからこそ怖くて近寄りがたいの。だから、分からないって言ったのよ」

それだけを言うとりヤナンシーはこれ以上話したくないのかCO MPに戻って行ってしまった。

それは矛盾してないか、と朝倉が指摘する間もなく、だ。一体何が見えないというのか。見えないのが恐ろしいというものを、朝倉にさえ伝えてくれなかったということは何かあるのではないか。

そんな気持ちが生かぶが、その思考の途中ではた、と朝倉は思い出したことがあった。

がばり、と背もたれから起き上がる。

「そういや……アイツ……神取に目エつけられてなかったか……!？」

すっかりその事を忘れていた。

あの男は、麻希には「害をなそうなどとは思っていない」と言っ

いたらしいが信用出来るはずもない。

そして、あの男も尚也の言った例えに当てはまる死んだはずであるのに蘇った存在だ。

ならば神取は悪魔に近い者、もしくは優希の異常と何らかの関係性があるのではないかと朝倉はみた。

しかし、手がかりがないのであくまで『異常に関係があるかもしれない』というだけだ。

そして神取の性格を考えても穏便に話を聞くなどということはお出ないだろう。十中八九意味深な言葉ではぐらかされるか戦いになるか、だ。

八方塞がりになってしまった思考を一旦とめ、朝倉は小さくため息を吐いたのだった。

夜

ビルの一室に十数人ほどの人が集まっている。

部屋の中は暗く、冬だというのにじつとりとした重苦しい空気が漂っていた。

ロウソクの僅かな灯りの中、集まった人々は何か呪文のようなものを詠唱している。

「いあーる むなーる うが なぐる となろろ よらならーく しらーりー！」

「いむろくなるのいくろむ！ のいくろむ らじやにー！ いえい え にゆくす！」

彼らはニユクス教の信者であった。

今は、教主から教えられた有難い呪文を唱えている集会サバトの真つ最中だ。これを唱え、死を望むことにより、滅びの際、"ニユクス"に救済されるのだという。

そうやって、教えられたのだ。

「となるろ よらなるか！ 母よ！ 月の母よ！ 我が生け贄を受取

り給え！ にやる・しゅたん！ にやる・がしやんな！ にやる・しゅたん！ にやる・がしやんな！」

そう唱え、彼らは各々で手首をナイフで切り裂いた。そして、その血を大きな黒ずんだ杯の中に溜まった水に垂らした。

彼らは気がつかない。

それが間違っているということに。

11月22日(日) 朝

『またもや都内で集団自殺未遂事件が起こりましたねー、これで何回目でしたっけ？』

『10は軽く超えていますよね。全国でも無気力症候群と併せて突発的に増えてますしこの件、ゲストの…さんはどう思いますか？』

テレビを流しながらもぐもぐと目玉焼きを乗せたトーストを咀嚼する。

タカヤに朝倉医院に泊まれと言われたが特にタカヤが何か言ってくることも無く。いつも通りたわいない話をして昨日は終わった。

この前のように暗い雰囲気になることも無く、わざとその話題を避けているような気配を僅かに感じたが、自分からすればありがたいことこの上なかった。

タカヤは少し険しい顔でテレビの画面を見つめ、ジンは食事をしながらノートパソコンのキーを叩いていた。

チドリは自分と同じくもぐもぐと無言でイチゴジャムを塗ったトーストを食べている。

朝倉先生はまだ寝ている。いつものことだ。

いつも通りといえはいつも通りな、それでいて少し珍しい光景とも言える。

特に、いつもテレビを気にしないタカヤがあんなに険しい顔で真剣にテレビを見ているなんて珍しい。

ただ、集団自殺未遂の件は自分も気になっていたことだ。

無気力症候群と違い、シャドウのせいではないと言えそうだが、ここに来て今までなかったこんな事が起こるとするのは奇妙で気味が悪い。

人為的なものなのか、それとも、たまたま連続しているだけなのか。本筋に関係なさそうとはいえ、こんな変なことが起こっていれば何か別の事件が起こっていると考えても不思議ではない。

このことが、みんなの行動に響きませんようにと願うしかない。いつぞやのニユクス教に感化された通り魔みたいなことにならないのがいちばん困るのだ。

敵は、人知の及ばないモノだけでは無い。同じヒトだってありえる。

そして、今のところ特別課外活動やストレガは影時間にしか安定してペルソナを使えない。

ペルソナしか武器がないということでは無いが、日常で武器もなく、暴れている人間に対処しろというのも難しいだろう。

そんな時に襲われでもしたら。

自衛できないわけじゃない。けれど、突然ペルソナ使いでもなんでもないただの人間に襲われるとなれば何人が躊躇い無く無力化の為に咄嗟に動けるのだろうか。

そこまで考えて最悪だ、と思いつながらコーンスープを啜る。

そんなこと、あると仮定する方が邪だ。

そもそもなにがあればただの人間が表面上はただの高校生である特別課外活動を狙って襲おうというのか。

タカヤ達ストレガも、朝倉先生の庇護下にいるうちは狙って襲われるようなことは無いし、路地裏で「ヤバイやつら」と言われてはいるが依頼の殺人などは影時間にしか行っていないためバレていないはずだ。

つまるところ、この心配はほぼほぼ杞憂なのだ。

警戒すべきは通り魔くらいだが、催涙スプレーなどの防犯グッズを持たせておけば事足りる話だった。

「はぁー……」

「なんや、いきなり辛気臭いため息はきよってからに。どないしたんや」

「どないもこないも無いです。俺の馬鹿さ加減にため息が出ただけ…」

「ふーん…ま、大したことないならええわ」

ジンの返答はあつきりしていた。

パソコンでなにかしている途中だったということもあるのかもしれないが、こちらの返答がバカバカしすぎたこともあるかもしれない。というか、馬鹿なのは否定してくれないのか…とちよつと凹んだ。

馬鹿だつて言ったのは自分からだ、こうもあつきりと流されるとそこそこ辛いものがある。かといって、どう反応して欲しいというビジョンはないので無い物ねだりである。

「ナギサ、昼は用事ある？」

「や、無いけど…どうかした？」

「なら、買い物に行つてきて。そろそろ消しゴムが切れそうなの」

チドリはそう言つてまたトーストを食べに戻る。

どうやら拒否権は無いらしい。伊織と行けばいいじゃんと言おうとしたがそんなことをすれば彼女の得物である手斧が飛んでくること間違いなしなので黙つて首を縦に振つておく。

「あ、せや。ほならあのヤブ医者^{いしや}が昨日渡してきた買い物リストもナギサに渡しとくか。ちよこちよこ買^かうてきてくれ言われとつたんやけど忘れてしもてたし、頼むわ」

「えっ」

突然の追加オーダーに思わず声をあげれば、ジンは気にせずメモをこちらに渡してきた。

最近、なんだか皆の押しが強い気がするのは気の所為だろうか。

「どうせここにおる間はヒマなんやし、ええやろ？ ワシもちよつと手え離せれへんし頼むわ」

「えー…」

頼まれたものは仕方ない。「一応俺病み上がりなんだけど…」とい

う言葉を呑み込む。

抗議の声をあげたところで誰かがいずれは買いに行かないといけないしそういう用事だけ済るのもどうかとおもう。

それに暇なのは確かだ。気晴らしに外に出るのもいいかもしれない。

そして、ゆっくり街を見て回る。そうしよう、と決めた。

「気をつけてくださいね。倒れたり、知らない大人について行ったり、誘拐されたり、迷子などにならないよう」

「しないしならないからね!？」

「そうでしょうか…」

「そうだってー!」

ふむ、と思案げに目を伏せたタカヤは俺の事を小さな子供かなにかだと思っているのだろうか。

というか、つい最近も似たようなことを思わなかっただろうか。

なんなのか。みんなには自分が何に見えているというのか。身長だって174cmもあるし決して小さいという訳では無いはずだ。

髪か!? やはり髪なのだろうか。いやいや、そんなはずは無い。

ざっくり短く切ってみてもいいが、中途半端に長いままだと湊と瓜二つになってしまうので勘弁したい。見分ける方法が身長くらいしかないのは困るしその身長もかなり違うという訳でもない。

後ろから見ておさげというわかりやすい違いがあるのがちよっどいいと思っているのだ。

髪さえ括つていればひと目で違いがわかるから。

ということとで脳内でこねくり回されていた散髪案は却下になった。

ちよつと外出した時に行こうかなと思っていたが下手に散髪してちよつとだけ整えてもらうつもりが湊そっくりの髪型になったら困る。こういうときは触らない方が身のためなのだ。

「……まあ、いいでしょう」

なにがだよ、と訊かなかった自分を褒めて欲しい。

一体タカヤはこちらの何を見て納得したのか。これがわからない。

夕方

画材屋に寄ってチドリの指定した消しゴムをまとめて買い、朝倉先生からのメモに書かれていたものを全て買って帰ってきた。

お金は朝倉先生から事前に渡されていたジンからそのまま流すように渡されていたので問題なく、そのお釣りを朝倉先生に返せばいいという事だったので先生の自室にノックをして入る。返事が無いのはいつもなので気にしない。

「先生、買ってきた物とおつり…」

声をかけたが朝倉先生は疲れているのかデスクの前の椅子の上でぐっすりと眠っていた。

仕方がないので荷物を置いて、レシートとお釣りをデスクの上に置くことにした。

そこでふと、デスクの上に置いてある古めかしい本に目が行く。色あせ、一見茶色いしわしわの紙束に見えるそれから目が離せなくなつた。

どくどくと、心臓が音を立てる。

喉がからからと渴く。

くらくらと目眩がする。

手が勝手に動いて、それを手に取った。

ぱらぱらと解読がほとんどできない書物の中を滑る目で読む。

内容は、理解出来ない。理解できない筈なのに、知っている気がした。

ずきずきと、頭が痛む。足が勝手に後ずさる。

「う、え…」

血の気が引くような感覚と吐き気がする。手に持っていた本をばさりと床に落としてしまうも、拾う余裕がない。

そんなことよりもまだなにか、大事なことを忘れている気がした。

とても、大事なことを。

自分がこうなってしまう何かが起こったはずだ。思い出さなくては

いけない、大事なことが。

『このまま時が過ぎることを納得できない…大事なものを失った今を認めたくない…だから、望み通り時は進まなくなつて、思い出の場所から出られなくなつた…』

『つまり僕たちは…命と引き換えに“救われた”んですよ』

『納得できなくても、腹をくくつて——』

『彼が居なくならない選択肢があるなら…避けて通れない』

『もしかして、奇跡を起こしたつていうその人…ただ居なくなつたんじゃないくて…死んだの?』

『彼は…もうこの世にいない』

揺れる。

揺れる。

震える。

聞いていた。観ていた。外から。

彼らの会話を。思いを。心を。願いを。未練を。だから、出られなくした。

チャンスを与えた。だが、それではダメだった。願いは正しい形で果たされなかった。結局救われはしなかった。

だから、変えた。

…出られなくした? 一体どこから? 誰を?

わからない。自分は過去に一体誰になにをしたのか。何を変えたのか。

「っ…!」

苦しくなつて胸を押さえる。心臓が生きようと必死に動いていることは当たり前であるはずなのに違和感を感じる。

からっぽで、動いていなかつたはずのそこがどうして動いているんだろうと疑問を覚えてしまう。息をしないと、死んでしまうのに息をしていないことが正常だと錯覚しそうになる。

唐突にぐるりと世界が回つてぶつんと何かが切れるような音がした。

がしゃん、と何かが倒れたような音で朝倉は目を覚ました。
いつの間にか寝てしまっていたようだ。

寝ぼけてペン立てでも落としかと横を見れば、ぐったりとした優希がそこに倒れていた。

ガラス製の天板があるローテーブルが少しズレているのでそこどこかぶつけて先程の音が鳴ったのだろう。

一体何の用があつて部屋に入ってきたのか。突然体調が悪くなり朝倉を呼びに来たのか、何か別の用があつたのか、どちらか分からないが顔色が悪いのでこの様子は普通ではない。

「っ！ おい、大丈夫か!？」

肩を叩いて呼びかけてみるも、反応がない。それどころかピクリとも動かないのだ。

首筋に手を当てれば触れるはずのものが無い。

「…マジかよ…ッ！」

朝倉の顔は一瞬で焦りに支配された。

手伝わせる人を呼びに行けるような余裕はない。

「ああクソ、カラド——」

心臓と呼吸が止まっているだけで完全に死んでいないのならやりようはある、と朝倉はやけくそ気味に己のペルソナの名を呼ぼうとした。

しかし、それはぱちりと目を開いた優希を見た事によって止まる。

「っ、は、あ…っ…ひゅはっ…」

ぜえぜえと息を吐きながら身を震わせ、呼吸を再開した優希の視線はぐらぐらと揺れている。そしてその目の灰色に、ちかちかと金が混じっているようにも見えた。

「あ………だ、いじょうぶ、です…おれは、まだ、………だい…じょうぶ、だか、ら……」

朝倉を見てはいるものの、まるで自らに言い聞かせるように答えた優希はしかし、うめき声を上げて胸を抑える。

異常だ。

何も検査をしなくてもそれだけははつきりと見て取れる。

「いかな、きや……呼んでる……こえが……する……」

「動くんじゃないやねえ……」

おぼつかない足取りと虚ろな目のまま立ち上がろうとした優希を朝倉は引き留める。

このままどこへ行くかもわからない優希を朝倉は放っては置けなかった。

「どこへ行くか分かんねえがな、今のオマエを行かせられるわきやねーだろ！」

「…ねがいを……かなえ、ないと……」

「『モスマン』！」

それでも優希は止まりそうにない。

それを見て『カラドリウス』から『モスマン』にペルソナを切り替えた朝倉は無理やり「ドルミナー」で優希の意識を落とすことに決めた。

何かに呼ばれているというのは悪魔がらみか。抵抗なく意識を落とした優希を苦虫を噛みつぶしたような顔で見つめながら朝倉はピリピリと神経を逆立てた。

深夜

タカヤ、ジン、チドリ、イズミの4人がなにやらガサゴソと外出しようとしている気配を朝倉は感じていた。

そもそも、夕方頃からなにか話し合っていることは知っていた。だからなにかするのではないかと思っていたのだ。

しかし今でなくなっただけいいだろう、と朝倉は不機嫌になりながら問い詰める。

「おい、どこ行く気だ。アイツの傍に居てやんねーのか」

倒れ、未だ目を覚まさない優希の傍に誰かついてやらないと不安な

状態であることも確かだった。

そのことも踏まえて、朝倉にはこんな時くらい自分以外の誰かが優希の傍に居るものだと思った。

とはいえ体調自体は安定してきているのでわざわざ親や弟妹を呼びつけるのは論外だろうし、今日は休みな荒垣を呼ぶなんて以ての外だ。そして朝倉は実際に連絡することを諦めた。近しい間柄のタカヤ達がいるのだから、大丈夫だろうと。

あれだけ執着しているタカヤ達が優希の傍を離れるはずがないと思っただけだ。朝倉とタカヤ達ストレガが出会ったあの日のように。

しかしそんな意図に反して彼らがしたのは外出の準備——それも物々しい雰囲気となると朝倉だって問い詰めたくもなるものだ。そんな、戦いに行くような準備をしてどこに行こうというのかと。

「ええ。今後の憂いを断つ為に。我々は少し確かめなければならぬことが出てきたのでね。…ナギサのことは頼みましたよ」

タカヤの返答はいつも通り直接的な言葉を避けたものだった。なにを、どこで、どう確かめるのか。なにをするつもりなのか。

朝倉が知りたいことをなにひとつ彼らは語らない。だからこそ、「ぜってーに生きてここへまで帰ってこいよ。生きてたら、いくらでも治してやれるからな。……完璧に死んじまったら、どうにも出来ねーんだからな」

「…善処しましょう」

いくらでも、というのはいきなり言い過ぎかもしれないな、と朝倉は思ったがそれをおくびにも出さずに見送った。

メサイア・コンプレックス（11／22）

影時間

優希が朝倉医院に行っているのをこれ幸いにと思った湊からの提案で、今日もタルタロスへ向かうために風花が作戦室で“ユノ”を使い周辺の安全を確認していると不意にタルタロス前に複数の気配があることに気がつく。

そしてそれらは見知った気配で、戦闘がたつた今終わったのか荒れた気配が徐々に鎮まってくかののように静かになった。

「これは…ストレガの4人と…この前のニユクス教の…」

「どうした山岸、なにかあったのか？」

様子のおかしい風花へ美鶴がどうしたのかと訊けば風花はその口を開いて感知したことを告げる。

「どうやら、タルタロスの前でストレガの4人が前の…蛇頭黄幡神との戦闘の際に居たあのニユクス教の教主と神父を相手に戦闘をしていたようで…」

そんな風花の言葉に一番に反応したのは順平だった。

食いかかる様に風花に詰め寄ると、焦ったように顔を青くした。

「はあ!?…ど、どういうことだよ!? チドリは!? チドリは無事なのかよ!?!」

「生きてはいるみたいです。でも一瞬で——『少々気づくのが遅いのではないかね、特別課外活動部の諸君』っ!?!」

突如、風花の探知を妨害し、寮の通信機を乗っ取って話しかけてきたのは神取だった。

その声に、全員が身構える。

「おい神取…! だっけ? ああつと、そうだ…チドリに手を出したら許さねーかな!!」

順平が珍しく威勢よく噛みつくようにその声に反応すれば、くつくつと喉で笑うような笑い声が響いた。

『善処しよう。だが、先に手を出してきたのは彼らだ。はやく君たちがこなければどうなるかわからんな?』

挑発するような神取の声に全員が眉を寄せた。

「それは、こちらに來いということか？」

明彦が眉を寄せたまま、静かに訊いた。

『來なければこちらから行こうではないか。教主がそうしたように。悪趣味だがストレガ^彼の死体を手土産にな』

「……!？」

ストレガを殺して直接乗り込む、と言い放った神取の言葉に戦慄が走る。

そして、『教主がそうしたように』という口ぶりから察するにニユクス教の教主がかつて誰も知らない内にこの寮にのっぴきならない理由で来たことがあると断言しているも同然だった。

狭い寮内で戦闘になるのと、タルタロス前の広い空間で戦闘をすることを天秤にかけ、どちらが良いかなどと考えるまでもない。

前回のように巨大な悪魔を召喚されれば、寮やその周りが被害にあってしまう。

それは許されないことであるのだ。

おびき出されているようにも思えるが、どちらにせよ戦闘になるのならストレガのことも考えれば行かないという選択肢はなかった。

「…わかった」

美鶴は観念したように表情をきつくして誘いに乗ることを了承した。

「チドリッ!!」

息を切らしてタルタロスの前にやってきた特別課外活動部を待っていたのは、地に倒れ伏すストレガとそれに対し興味もなさそうに佇む神取。そして――

「お、にいちゃん…?」

先頭に立つようにして神取の横に立つ教主を見た奏子がそう零した。

わなわなと震える身体で後ずさり、頭を振る。

「奏子…う」

「おい、どうした？ どこに三上がいやがるんだ」

「ちよ、奏子ちゃん!? 三上先輩がいるって…私たちにはなにもみえないけど…!? ちよつと風花、なにか分かる?」

「いえ、私には何も…」

奏子以外の人間には、優希がそこにいるようには見えなかった。

ただ、暗い色のローブを着た顔の見えない教主がそこに立っているだけだ。

「なんで!? だって、あそこに、お兄ちゃんが…! 神取つて人の横に…!」

間違いない、狼狽える奏子が震える指で指したのは教主だった。

奏子には教主が優希の姿に見えるらしい。これでは戦えないと判断した湊はそつと奏子を己の後ろ——荒垣の横へと押した。

「アイギス」

「はい」

奏子をよろしく、と言うまでもなくアイギスは湊の言いたいことが分かったようできつと奏子を守る様に立つ。

「奏子ちゃんは精神を攻撃されている可能性もあります。皆さん、くれぐれも油断しないでください」

注意を促す風花に奏子と駆け寄ってチドリを抱き上げている順平以外の全員が頷く。

精神攻撃で親しいものの幻覚を見せつけてくるとなれば戦いにくいことこの上ない。

「ふむ。きみには『そう』視えるのだね。有里奏子。実に興味深い」

「ど、どういうこと…!?!」

神取は笑みを浮かべ奏子を見つめた。

何も見えない真つ黒なその瞳から逃れるように奏子は武器を構える。

「きみは片割れよりも『察する』力が強いのだろうな。だからこそ、影響されやすいともいえる。覚えていなくとも、機敏に感じ取る」

他の者に対するものより幾分柔らかめな声で奏子にそう告げた神取はくい、とサングラスを上げなおす。

「なに、簡単なことだ。有里奏子。きみはほんの少しその“目”を塞ぐと良い」

奏子には神取の言っていることがわからない。何故、突然優し気な声になったのか。アドバイスのようなものをし始めたのか。

混乱する奏子を守る様に美鶴が一步前へと出た。

「神取鷹久。私はこの名をどこで聞いたのかずっと疑問に覚えていた。だが調べはすぐについた。——お前は1996年の“セベク・スキャンダル”で亡くなったセベク支社の社長の神取鷹久本人で間違いないな？」

「これはこれは、ご名答。桐条の御令嬢は聡明でいらっしやる。流石はあの南条の血筋といったところか」

パチパチと拍手をしながら神取は嗤う。

だが、美鶴以外の全員が目の中の相手が死人だということに慄き、どういうことだと戸惑う。

「おい美鶴、どういうことだ。目の前の神取が既に死んでいるだど？」

じゃあ、目の前にいるこいつはなんなんだ!？」

「…それは私にもわからない。だが、彼自身がそう認めたという事は、死んでいるということとやつが神取自身であるということに間違いではないんだろう」

調べはついた。違和感の正体もわかった。しかし美鶴はどうして死人が生き返ったのか、わかるはずがなかったのだ。

「さて、お喋りはここまでにしよう。タイムリミットは刻一刻と迫っている。私にもしなければいけないことがあるのでね」

神取が刀を構える。

それと同時に順平以外の全員が戦闘態勢を取った。

「チドリ! オレだ、順平だ! 大丈夫か!？」

「う…順平…?」

一方順平は傷ついたチドリを抱き上げ、道具袋から拝借していた宝玉を割る。

癒しの光がチドリを包みその傷を癒す。

その横で倒れ伏していたジンが睨みつけるように、しかしへろへろと力なく顔を上げた。

「ぐ……う……ワシらにはなんなんもしてくれへんのかいな……ケチくさい、のお……」

「あつ、わりい……」

順平は忘れてた訳では無い。無かったが、そう言われると慌てて謝ってしまう。

宝玉だけでは足りそうにないと思った順平は宝玉輪を取り出してそれを砕こうとした。だが、

「——来い。グイザ・ベル」

突如黙っていた教主が声を発した。

ぞわり、と赤黒い光と共に闇がもちあがる。

そこから枝分かれし、樹木のような形を作っていく。

黒い泥のような影が剥がれ、姿を現したのは何本も枝分かれした紫色の薔薇に人間のパーツが散りばめられた巨大な女の化け物だった。

「キヤハハハハハハハ!!」

それが甲高い声で高笑いする。

一言で表すなら、下品を体現したかのようなその気持ちの悪い見た目のペルソナのようなものに倒れ伏したものの以外の者たちが身構えた。

「また、違うペルソナです、か……」

タカヤが忌々しそうにそれを睨みつける。

「“また違う” ってどういう事だよ!? アイツも湊や奏子っちみてーなペルソナ使いなのかよ!」

「……」

タカヤの言葉に驚いた順平が聞き返すも、タカヤは何も答えない。仲良くは無いため仕方の無いことかもしれないがこんな状況になってもタカヤが何も答えないことも異常だったが、じりじりと発される威圧感に順平はだらりと汗を流した。

「……さつきは……燃える檻のようなペルソナだったわ。私のメーデー

アの守りでさえ貫いてくる強力な炎を使ってきたの。順平…あの黒いモヤを相手にしちやダメ…！」

代わりに、チドリが答える。

守りを貫く。それは耐性を無視した攻撃をしてくるという説明に他ならなかった。

怯えたように教主を黒い靄と表現し、目を逸らそうとするチドリに一体何が見えてるのかと聞きたくなる気持ちと恐怖を抑えて順平は立ち上がる。

「でも、アイツらの相手しねーとチドリを守れねーだろ！ だから、オレたちに任せとけて！」

自分を奮い立たせながらも目の前の教主と名乗る人物がこれまで戦ってきたシャドウやタカヤ達のような他のペルソナ使いとは違うことを順平はなんとなく察した。

まるで、自分たちとは違うルールを適用しているような相手にどう立ち向かえばいいのか。必勝法などある訳ないが、きつとどこかにあるはずなのだ、と順平はありもしない希望を見出そうとしていた。

一方、湊は教主が自分や奏子と同じ『ワイルド』なのかもしれないと言われたことにより謎の引っかけりのようなものを覚えていた。

メサイアが呼応するように共鳴しているのは、相手がワイルドだからなのだろうか。

(…本当に?)

湊にはあの教主が『ワイルド』だとは到底思えなかった。

それどころかあれは本当にペルソナ使いなのかという疑問すら浮かんでくるのだ。あんな禍々しいものが本当にペルソナなのか。

あんな、シャドウそのもののような気配を放っている存在がペルソナ使いなのか。

「——怖いか？」

「!!？」

少し。ほんの少し目を離した隙に湊の眼前に教主は迫ってきた。ローブのフードの下から覗く口は緩い弧を描いている。

周りの皆を見ればイザ・ベルと交戦しているようだった。

「恐れているのだろうか？ 否定したいのだろうか？ 救いがほしいのだろうか？ その何もかもが無駄だというのに」

「お、まえ…は、っ！」

その口調に何となく湊はカダスで会ったニヤルラトホテプを思い出した。

心を見透かし、なおかつ嘲るような口調と笑みに苛立つ。しかし、この言動のおかげで湊の中で教主は完全に敵だという認識がようやくとできた。

こいつは倒さなければいけない。ニユクスとは「違う」。そんな認識が。

「——ハ、」

愚かだと言うかのように苛立つ湊を教主が鼻で笑う。そして強烈な蹴りを放った。

湊はそれを剣で受け止めるが、ビリビリと腕が痺れるほどの衝撃に顔を顰める。なんて馬鹿力なんだ、と内心で悪態を吐きながら。

「どうした？ …ああ、あの月にでも思いを馳せていたか？ あれこそがお前達を苦しめている原因そのものだというのに」

「黙れ…！」

「黙れ？ それしか言えないのか？ 随分とおめでたい頭だな？」

(……………)

ふ、と湊は違和感を覚える。目の前の教主の言葉が何か変なのだ。

まるでこちらの心を読んでそれをネガティブな反対意見として反響しているだけ。そんな印象だ。

「——つまらないことを考えるのはやめたらどうだ」

不意に教主の声のトーンが一段下がる。

不機嫌そうな聞こえるその声は、一瞬だけ湊に全てを聞いた時の優希を想起させた。

「つまらなくない」

「いいや、つまらないさ。何故抗う？ なぜ立ち向かおうとする？

何もかもを諦めてしまった方が楽なはずだ」

試されている。揺さぶられている。

滅びを求める宗教の教主であるこの存在にとって、湊が——否、特別課外活動部が立ち向かうのをやめてしまうことは利点しかないだろう。

「お前こそ、無理やり彼女ニユクスを呼んで何になるっていうんだ。彼女も僕たち人類も滅びを望んでなんかいない。それを何度だつて証明したはずだ」

「黙れ、黙れ、黙れ！ その否定は、まだ起つてはいない！ 人類は未だ、滅びを求めている！ 無かつたはずのことをあつたことだ」と告げるな……！」

心の内を見透かしているのなら湊がループしていることも知っているだろうと睨み返せば何らかのスイッチを入れてしまったのか、ここに来て初めて怒りの色を滲ませた教主が赤黒い光を纏う。

「——来たれ……！ デヴァ・マール！」

他の者を相手取っていたイザ・ベルが消え、現れたのは黒い体躯の天魔「デヴァ・マール」だった。

そのデヴァ・マールが手に持っていた円盤を天高く放り投げ、弓に矢を番えた。そしてそれを天に向ける。

徐々に天高く放り投げられた円盤に日輪が如く光が集まり、その力の余波で一帯がビリビリと震え、全員の膝をつかせた。

「まずい……！」

そんな声を上げたのは誰だったか。しかし誰も止められる者はおらず限界まで引き絞られた弦がついに放たれた。

【カーマ・シラーストラ】

暴風。力の奔流。圧。熱。

朝倉達に振るわれなかつた暴力的にも程があるそれがめちやくちやな衝撃となつて特別課外活動部とストレガを襲おうとしていた。

ばかりと湊の視界が一瞬弾ける。【カーマ・シラーストラ】の衝撃によるものではない。別の要因だ。周りを見れば自分以外のすべてのものの動きが止まっているようにも思えた。

（あれは……）

そんな異常な光景の中を、青い蝶が飛んでいる。

いつも見る、みなれたその蝶はまるで来ようとしている衝撃を気にしていないようにゆっくりと羽ばたいていた。

その蝶を認識した瞬間にばきん、と鎖が壊れるような澄んだ音が鳴り、止まった時の中で青い光と力の奔流が巻き起こる。

それと同時に湊の中で、己の名を呼べと言わんばかりにあるペルソナが存在を主張した。

いま、そうなっているという事はそういうことなんだろう。

なぜか漠然とそう感じた湊は召喚器の引き金を引き、喉奥から声を張り上げる。

「——メサイア!!!」

まばゆいばかりの光が一面を覆い尽くし、その光が「カーマ・シラー ストラ」の衝撃をデヴァ・マラーごとかき消した。

「なに…？ 私たち、無事なの…?!」

「あれは…湊のペルソナ…？」

そのまま光が大きなヒトの形を成してメサイアの像サイジョンが形作られようとしていた。が、

ゲラゲラゲラゲラゲラゲラゲラゲラゲラ!!!

ゲギヤギヤギヤギヤギヤギヤギヤツ!!!

召喚されかけていたメサイアに呼応するように影から下品な髑髏と獣の笑い声が発される。

形作られようとしていた光が飛び散り、消えてなくなってしまった。

そしてその笑い声は湊達を嘲笑うかのように影の中から盛り上がるようにして姿を現す。

翼と7つの首を持つ赤い獣に跨った赤衣を着る骸骨の女——黙示録に記される大淫婦・マザーハーロット。

「ひっ！ あれ…は、京都で見た…やだ…こわい…」

奏子が恐怖に顔を慄かせ、後ずさる。

湊もその存在は知っている。タルタロスに存在する深層モナドで手に入れることが出来るペルソナだ。だが、ここまで大きく異質な気配は知らない。まるで、ペルソナとは違う存在のように感じられる。

『…ぼやけていて名前以外よく、見えない…？　　“魔人”…マザー
ハーロツト…？　え、まさか、あれも悪魔…!?!』

風花のその言葉は正解だった。
そこにいる存在はペルソナではない。魔人と呼ばれる悪魔の中
でも高位の存在。

マザーハーロツトは中でも例外を除き最高位に位置する。
終わりを報せる圧倒的な力と存在感を放つそれは、原典にはない
る力を擁していた。

——“救世主の否定”。

アンチテーゼとも言えるそれを、条件が揃ってしまったが為に力と
して持ち得ていたのだ。

だからこそ、湊の持つペルソナの中で最も力のあるメサイアの召喚
に呼応し、連動するようにそれを否定して現れた。

湊がメサイアを召喚しなければこの魔人は現れることは無かった
のだ。とはいえ、メサイアを召喚しなければデヴァ・マラーの攻撃で
全滅していたのも事実である。

メサイアがデヴァ・マラーを否定し、マザーハーロツトがメサイア
を否定する。

これは繰り返し返される後出しジャンケンのようなものだ。

「カカカ。妾を目覚めさせたのは…妾と契った死に染まりし者である
か。良きかな。さあ、世界を舞台に死の宴を始めようぞえ…」

くすんだ黄金の杯を傾けながら、マザーハーロツトは流暢に喋り出
す。

それはこれまで見てきたペルソナとは違うものだというのをあり
ありと見せつけてくる。

その様子を見て湊はひとつ、思い出したことがあった。

カダスで聞いたアリスと名乗る少女の言葉だ。

『そうよ。ママ。ミナトおにいちちゃんもみたらわかるよ。アリスは
ユーキおにいちちゃんがこのままママに食べられちゃうのは嫌なのよ
？　だから、教えてあげたの。だって、アリスが欲しいのはユーキお
にいちちゃんだけなんですもの。あんな怖いモノ、要らないわ』

「ママッ」というのはこいつか——と湊はその悪魔を睨み付ける。

この強大な魔人が優希あにを狙い、害し喰らおうというのか。つまるところこの悪魔の召喚主である教主は兄の脅威でもあるというわけだ。

「これ、は……」

いつの間にか順平に傷を癒してもらっていたらしいタカヤが立ち上がりマザーハーロットと教主を見つめ、顔を顰める。タカヤからしてもあまり良くないものに見えたのだろう。

「カカ。まずは小手調べと行こうかえ」

教主本人と神取はマザーハーロットの後ろに佇み、先程湊たちと戦い会話していたとは思えないほどに静かにしている。

マザーハーロットがいるのなら、動く必要がないとでも言いたげに。

ゆつくりとマザーハーロットがくすんだ黄金の杯を掲げる。

『これは……！ 強力な攻撃が来ます！』

風花が警告するももう遅い。

マザーハーロットの虚ろな眼窩がギラリと光った。

【地母の晚餐】

マザーハーロットを起点として地面が凄まじい勢いでひび割れ、光り、そこから衝撃が噴出する。その攻撃は全員を飲み込まんとし、逃げる隙など与えてくれなかった。

「ぐああ!？」

「きゃあっ!？」

波だ。容赦なく衝撃の波が全てを飲み込む。

これが小手調べというのはどういうことなんだ、ふぎけるな、と言いたい気持ちを湊は抑えてなんとか倒れないように踏みとどまった。

『そんな……皆さん、大丈夫ですか!? 返事を、返事をしてください!』

ようやくと土煙が晴れた後に湊は風花のその声に横と後ろを見る。

そこでは湊を除く全員が呻き声を発さずに倒れ伏していた。

先程傷を癒していたはずのストレガ達ですら、再びボロボロになって地に伏している。

一撃。たった一撃で壊滅状態にまで持っていかれたことに湊は冷

や汗をかく。

——皆殺しにされる。

蛇頭黄幡神との戦いの時には覚えなかつた恐怖が湊の背後から忍び寄ってきた。

要は、今の湊たちとは力の差があり過ぎた。例え今の湊たちが『これまで』よりも実力をつけていたとしても、猫が虫をいたぶるようにして殺されるだろう。

「つまらぬ…人の子の力というのはこの程度かえ？　これでは宴の余興にもならぬではないか」

マザーハーロットはどふんと影に姿を溶かして湊の目の前から消える。

そして、

「…不完全とはいえ、覗き見られるというのはげに不愉快なものよ」

「やめろー！」

『え…!?　きやああー!』

マザーハーロットは風花を狙った。

湊の叫びも虚しく、風花の背後に姿を現したマザーハーロットの乗る赤い獣の前足が風花をユノごと薙ぎ払う。

大型シャドウの攻撃からでも無傷を誇るユノの守りを難なく引き裂き風花を傷つけた。

力なく倒れる風花に興味をなくしたのか、マザーハーロットは次は僅かに呻くチドリに目をつけた。

「ほう。あれを耐えたのかえ？　そして汝はその命の揺らめきを持つてして妾を観測し、妾が何者か看破しようとしておるな？」

「……!」

チドリもアナライズに近いことをしようとしていたらしい。

それを不愉快に思ったのか、それともまだ息があるのが許せなかったのか、マザーハーロットは何も無い眼窩で睨みつけた。

「であればそのゆらめきを止めるまでよ」

ずるり、と獣がチドリへと向かう。

そして風花と同じくその鋭い爪の一撃の元、トドメを刺そうとした

剛腕が振り下ろされることなくピタリと止まった。

「…おい、待てよ」

低い声。

マザーハーロットがそちらを見遣ればそこには順平が剣を支えにしてよろよると立ち上がっているところだった。

そのことにマザーハーロットは驚愕する。

「汝は既に限界なはず。なにゆえ立ち上がり無謀にも妾に立ち向かうというのじや？」

マザーハーロットからしてみれば順平は控えめに言ってもこの集団の中で強いと思える存在ではなかった。

取るに足らない木っ端。簡単に潰せる羽虫以下の存在。だと言うのになぜ、まだ立ち上がれるというのか。

「…チドリを守れねーなんて…このまま黙ってチドリが殺されるとこ、見てるなんて…出来るはずがねーからに決まってるだろ…!」

「成程。男女の愛ゆえにと言うか。その意気、甘く、耳障りの良いものよ」

問いかけ、順平の答えに納得したマザーハーロットはくすんだ黄金の杯をゆらし中身を飲み干した。

「クカカ、妾に向かってそのような言の葉を吐くのだ。なればこそ、その愛をもつてして恐怖に耐えきれるかどうか、妾が試してやろうぞ…」

マザーハーロットの眼窩が光る。

【龍の眼光】

ひと睨みされただけで順平は身が竦むような、背筋から上がって来るような恐怖を覚え身体がこわばる。が、それを抑えて順平は剣を構えてマザーハーロットに飛びかかった。

「う、うおおー!」

「その汚らしいモノで妾に触れるでない」

「がっ…!」

一蹴。まさしくその言葉が似合うような腕の振り払いだけで順平はサッカーボールのようにバウンドしながら吹き飛ばされた。

「ぐ、う……いつ……てえ……！ はは、クソ痛え……！」

ボタボタと腹から、口から血を流してよろよろと順平は立ち上がった。

そんな順平を見て、湊は順平の傷を回復させなければと召喚器を握ろうとするが立っているのもやっとで手が震え、召喚器を持つことすら出来ない。

「ぐ、りゃああー！」

痛みに呻きながら、順平は再び声を張り上げて剣を構え直しマザーハーロットへと向かった。

「その程度よな。最初から期待なぞしていなかったが……くだらぬなあ」

「いつ、がああつ！……この……！」

もう一度。スキルを使う必要すらないと言いたげにマザーハーロットは順平を剛腕で跳ね飛ばした。

「ちく、しょう……！ まだまだあー！」

何度それが繰り返されただろうか。何度も何度も順平は跳ね飛ばされ、そしてマザーハーロットに立ち向かっていく。

湊はその痛ましい光景をただ見ていることしか出来なかった。

「順平……もういい……もういいから……っ！ これ以上はほんとに順平が死んじやう……っ！」

悲鳴に近いチドリの声を聞いたマザーハーロットがため息のようなものを吐き出す。

マザーハーロットは感嘆を通り越して呆れさえ覚えていた。そろそろ戯れにも飽きてきたところだ。本気で殺しても良いだろう、と。

「そこなおなごの言う通りよ。これ以上の苦痛を味わう前に諦め、甘美な死を受け入れた方が楽ぞえ？」

しかし順平は諦めていなかった。

微塵も勝てないとわかつているのに、身体はもう限界だろうに全く諦めようとしなかった。

ボタボタと血の道を作りながら順平は歩みを進める。

その光景は狂気としか言いようがない。だが、それでも。

「げほっ……言っただろ、オレはチドリを守れなきや、死んでも死にきれねえんだよッ！」

順平は吼えるようにマザーハーロットへとその決意を叩きつける。剣が僅かにマザーハーロットの前足に傷をつけた。

その瞬間、順平の中でばきん、とガラスの割れるような音が響く。力の本流と青い光。そして熱。それらが順平を守るように包みこむ。「センパイが言っただこと、……やっと覚悟出来たからさ……！」　「リーダーは体を張ってでも仲間を守らなきや」　「って！オレは……ホントのリーダーじゃねえけど……チドリやみんなを守る為なら命の炎だって燃やしてみせるっての！」

青い蝶が飛ぶ。

浮かび上がった「ヘルメス」の姿が変わる。兜を被った人の頭をしていたところが、黄金の鳥の頭のようなものにかわり、くすんだ茶色だった身体はメーディアと同じハッキリとした燃えるような赤で彩られる。

背中から黄金の翼が生え、全体的なシルエットこそ大幅な変化はないものの、明らかに変わったその姿はペルソナが進化した事を知らしめていた。

「だから——いくぜ！　「トリスメギストス」！」

新生したヘルメス——否、トリスメギストスが焰を束ねる。

偉大なるヘルメスの名を持つそのペルソナが放つはギリシャ語にして「3度の聖なるもの」の意を持つ最上級の火炎魔法。

マザーハーロットにとつて、忌むべきもののひとつ。

「ぶちかませえ！　「トリシアギオン」!!!」

「プロミネンス」の太陽が如き炎とはまた違う、光に近い輝く炎の柱がマザーハーロットを飲み込む。

そのあまりの眩しさに湊もチドリも目を閉じ、その光から逃れようとした。

だがその光の如き炎の柱はすぐに収まり少し熱いくらいの熱風をぶわりと撒き散らすだけに留める。

「どうよ！　オレの新しいペル、ソ……ナ……」

ぐらり、とガッツポーズをした順平が傾く。

ついに本当の限界が来てしまったのだ。精神は新しいペルソナを召喚したことで疲弊し、身体はそもそもスタボロ。耐えきれぬはずがなかった。

「順平……っ！」

そんな倒れた順平にチドリが這いずるようにして近づき、守るように覆い被さる。

「——ク、ハハ、ハハハ。げに愉快なものであった。ジユンペイ、と言ったか。妾は汝のその愛ゆえの蛮勇を讃えようぞ！」

笑い声がした。

倒せたとは露にも思っていなかったが、マザーハーロットが先程と全く同じ場所に変わらず佇んでいる。否、少しだけ焦げるような臭いがすることから、マザーハーロットに少なからずダメージを与えられていたようだった。

「褒美に愛する者との安らかなる死を——」

獣が嗤う。

ガチガチと歯を鳴らす。

【邪神の蛮声】

おぞましい声が響き、生命力が吸い取られるような感覚を覚える。

身体に力がいらなくなり——

「が、はっ……!?!」

ごぼり、と湊は口から血を吐いた。

灼熱が通ったかのような痛みにその発生源である腹を見やれば己の血に塗れた白い刃が突き出ていた。

ゆっくりと、スローモーシヨンのような動きですぐ後ろを確認する。

そこには、神取が持っていた日本刀を握った教主が静かに佇んでいた。

注意がマザーハーロットだけに向く時を待っていたのだろう。だからこそ、何も動かずに静観していたに違いない。

(こんな……ところで、おわ、れ……な……い……!)

視界が暗くなり、傾く。

ここで自分たちが死んでしまえばまたやり直し。

これ以上繰り返し返せば優希あには心身共に更に壊れ、取り返しのないところまで行ってしまふのでは無いかという不安と焦りが湊を僅かに繋ぎ止める。

何とか踏ん張ろうとしたが既に身体に力は入らず。

抵抗虚しくごぽりともう一度血の塊を吐き出し、そこで湊の意識は途切れた。

決意と諦め（11／22～11／23）

湊を刺し殺し、その身体を蹴りひっくり返して仰向けにし完全に死んだことを確認した後、他の全員がマザーハーロットの攻撃によって死んだのを見届けた教主は興味を失ったのかすぐに踵を返そうとする。歩みを進めた先にある倒れ伏すタカヤの身体を器用に避けるようにして。

しかし、異変はすぐに起こった。

最初は小さな光だった。

奏子の懐から光が漏れだしたのだ。

それを教主は振り返り立ち止まって見つめる。

ゆらゆらと光に誘われるように青い蝶が教主の目の前を飛ぶ。

握り潰そうとして手を開き――

――けれど握りしめることは出来なかった。

――キイイーン………！

触れた瞬間に教主は腕を弾かれ、耳鳴りのような甲高い音と共に青い蝶が光となって消える。

「ぐ……っ！」

その光が反射し、教主の虚ろな瞳に青い色を映す。それと同時に教主は頭を抱え始めた。

まるで、酷く痛むというように。

そして何度か青色を振り払うかのように頭を横に振り、震える手をマザーハーロットへと向けた。

ごぼり。

影から大量の手が現れる。

それは一瞬にしてマザーハーロットの全身を掴み、影の中へと引きずりこもうとした。

当然、その凶行に驚いたのはマザーハーロットだ。

「ああ……！ 嗚呼……！ 契約者よ……！ なにゆえ、汝は妾を喰らおうと言うのかえ……!? 妾はしかと望み通り彼奴らに死を与えたはずぞ！」

縋る様に叫んだマザーハーロットの声に教主は答えない。
ただ、マザーハーロットを飲み込む影のスピードが上がっただけだ。

「……い。成程……贄は彼奴らではなく、妾の方であったか——！」
何か気がついたマザーハーロットはそのまま抵抗をやめ、影の中へと引きずり込まれてゆく。

そして10秒もしないうちにどぶん、とマザーハーロットの頭のとっぺんまでが綺麗に影に吸い込まれ場はしんと静まり返った。

その真ん中で、教主は項垂れるようにして沈黙している。が、すぐにジリジリと後退し始めた。

暖かい光を忌むように。

発される光が一層強くなる。

目を覆うような明るさになったそれは、湊たちだけではなく一帯を包み、弾ける。

「あ、れ…？ 私たち、生きてる…？」

光が弾けた後、いつの間にか立ち上がっていた奏子が呆然と呟く。
マザーハーロットの攻撃によって意識を失ったかと思えば、次に意識が浮上した時には無傷でその場に立っていればそういう感想にもなるだろう。

キョロキョロと周りを見回せば奏子だけでなく全員が何事も無かったかのように立ち上がっていたのだ。

そんな奏子達をしり目に、教主はわなわなと震え、更に後ずさった。

「……………！」

後ずさった時に教主が呟いた小さな声を、1番近くにいたタカヤは聞き逃さなかった。

否、聞いてしまった。

—— どうして。

その声は酷く震え、現状を理解できていないようだった。それは、戸惑いからというようににも、力尽きたはずの湊達が暖かい光と共に蘇ったからのようにも聞こえた。

教主はそのまま煙に巻かれるように黒い霧の中へと消え、居なくな

る。

そして教主のはるか後ろにいたはずの神取もその姿を消していた。

11月23日(月) 深夜

巖戸台分寮 ラウンジ

教主や神取との戦いの後、何故傷が癒されていたのかわからないために蛇頭黄幡神戦とはまた違った気味の悪さを残しつつも寮へと戻ってきた特別課外活動部は、そのまま朝倉医院にもアジトにも戻ることなくついてきたタカヤ達ストレガをソファアに座らせた。

順平が新たなペルソナに目覚めたがそれを祝ったりすべしと言えりような雰囲気ではなかった。

「どうしてお前達はあそこにいた？」

まず口を開いたのは明彦だった。

ストレガがなぜニユクス教の教主や幹部である神取と戦っていたのか。それが訊きたかった。

「——最近、集団自殺未遂が頻発しとるんやけど……それをタカヤがニユクス教絡みやないか言うたのが発端や。いまのナギサがそういうやつらのしょーもないことに巻き込まれでもしたら困るさかいに確かめようつてな」

それに答えたのはタカヤではなくジンだった。

メガネをくいと上に押し上げ、背もたれに凭れなおした。

集団自殺未遂。

テレビでも最近取り沙汰されるようになったあれか——と、その場にいる全員がおのおの思い当たるものを思い浮かべる。

中には集団自殺そのものに発展した物もあったが、概ね未遂と呼べるものが頻発している為に集団自殺「未遂」事件と呼ばれるようになり、無気力症と合わせて危険視されるようになってきていた。

場所も人数も自殺する方法もバラバラ。一見共通性のないそれらから、タカヤはどうしてニユクス教の仕業だと思ったのか。

「私も半信半疑でした。ただ滅びを願う宗教がそんな積極的なことを

するのか——と。なので、その可能性を捨てるためにそのまとめ役をしているという神取と名乗る男に会おうとしたのです。：知り合いがその男と諍いを起こしているのは知っていたので穏便に済むとは思っていませんでしたから、備えていたというのにこのザマです」
忌々しそうに語るタカヤの脳裏に浮かぶのは11月に神取と事を構えていた朝倉の姿だった。

あの時、タカヤ達も近くにいたが神取が一瞥し「フツ」と軽く鼻を鳴らしていたことからわざと見逃されていたのだろうと察したのだ。影時間以外では何もできないだろう、と知られているかのように。

「それに、あの男からは幾月と同じ匂いがした。それだけで十分でしょう?」

タカヤは自殺未遂の件をどうしようというものではなかった。ヒマだから調べ、その先に神取という幾月と同じような気配を漂わせる男がいたから突きたくなっただけだ。いまの優希^{ナギサ}が巻き込まれて困るというのも本音でもあるが。

「ま、ビンゴやったんやけどな。あいつらニユクス教が集団自殺未遂事件を起こしとるらしい。なんや『結果的にそうなった』とか言うて直接的な言葉は濁しとった。んで、そこまで気づいてもたんなら逃がせへんって言われてやりあつたつちゅーわけや」

集団自殺を起こさせているのがニユクス教であると神取や教主はすんなりと認めたらしい。

ただ、タカヤからすればその『逃がさない』という言葉もいまとなつては本気ではなく戯れだったように思えた。

ほぼ一瞬で決着は着いたが、特別課外活動部が来るまでは追撃されることなくその場に放っておかれたのだから。

『餌』として扱うならもう少しいたぶるなりするだろうにそれもなかったのだ。教主もタカヤ達が地面に膝をつけばすんと動きを止め、追撃をする素振りを見せるどころか確実に殺せるタイミングでペルソナをひっこめた。これを『遊ばれている』と表現する以外になんかあるだろうか。

「一体何のために…」

風花が呟く。

何のために集団自殺などというものを起こしているのか。理由は全く分からなかったがタルタロスを登ろうとする特別課外活動部を邪魔しようとしていることと共通することはひとつ。

「——まさか、ニユクスの降臨にそういうのが必要、だとか？？」

「でも、滅び——ニユクスの降臨って、デス”ってシャドウが現れた時点で決まってるって言ってましたよね…？」

ゆかりの気づきに天田が補足する。

ヒュプノスという“死の宣告者”が現れた時点で、ニユクスの降臨は決定しており覆せるものではない。

だというのにニユクス降臨の為に“自殺させること”ではなく“自殺未遂”を起こさせることが目的とはよくわからない、と一同は疑問に感じた。

「そういうえば——カダス、で…あの…ナギサちゃんが言ったシャドウが増えるっていうのと…関係、あるのかな……」

「…。」

“ナギサちゃん”という名前に眉を顰めるタカヤに気がつかず、カダスのナギサ”の最期を思い出し少し落ち込んだ様子の奏子の言葉の意味を理解した美鶴が納得したようにうなずいた。

「…成程な。『死に触れようとする行為に伴っている感情がシャドウを産む』というものだな？」

「うん。私たちのやってる召喚方法自体がシャドウを生んでるかもしれないねってやつ…」

未だ表情が暗いままの奏子は段々しりすぼみになりながらも言葉を吐き出した。

「では次に、『シャドウを生んでどうしたいか』という話になりますね。安直に考えるならば、シャドウを増やしてタルタロスの探索を妨害する意図があると思われます。ですがこれまでの探索と同様、タルタロス内部のシャドウの数はそれほど増えていないようにも思えます。私たちの妨害が目当てと仮定しても、とても意味のある事には思えません」

「アイギスの言う通り、シャドウの気配も一カ月前とかに比べて増えているってわけじゃないの。もちろん、上に進めば進むほど強いシャドウがいるのはそうなんだけど…それでもすごく強いシャドウがいるってわけでもないんです…」

理路整然と推測するアイギスの言葉を補足するように風花が言葉を紡ぐが奏子とはまた違う理由でしりすぼみになっていく。

そんな困った顔でしどろもどろになっている風花の顔を見て明彦が不思議がる。

「なら、あのナギサという少女が言っていたことは間違いないのか？」

「カダスのナギサ」の言っていたことが間違いないのか、それともシャドウはどこかで増えているのか。

なにも判断材料が無いため、全員が黙り込む。

「あのさ」

沈黙の中、声を発したのは湊だった。

湊は言うか言わざるべきか悩んでいたことを今、言おうとしていた。

ただ、これを言うと全員の混乱は免れないだろうというのも理解していた。下手をすれば、戦意を喪失してしまうかもしれないということも。

「もしかしたら——ニユクス教はニユクスが来るのを早めたいんじゃない？」

「……は？」

惚けた声を出したのは順平だ。だが、湊は構わず続ける。

「あのナギサって子は、僕ら一人一人がペルソナの召喚に使う分ならシャドウは相対的に考えて減っているから大丈夫だって言ってたけど、逆に他から沢山増やされたら一気に降り積もる…それに比例して減びを願う声も大きくなるんじゃないかな。そしたらきつと、ニユクスは…」

呼ばれてしまうだろう。来てしまうだろう。

たとえヒュプノスが遅らせているとしても、あれは「1月31日が限界」と言っていたのだ。あの時点で1月31日がギリギリなのだ

したら。

ニユクス教のやっていることのせいで“エレボス”死を願う声が強大になればなるほどニユクスを目覚めさせ易くなり、そのタイムリミットは短くなっていくことだろう。

——だから、ヒュプノスは焦っていたのか、と湊は納得した。もとよりかつての綾時本来のデスより力があるようには見えなかったのだ。力の制御も完全ではないのだろう。

湊から見てヒュプノスはペルソナとしては強力なのだろうが、なぜか借り物の力を無理して使っているようにも見えた。

元々、花を携えた静かで穏やかなペルソナだったのだ。とってつけたように深紅の鎌を持っていたが、それに振り回されているようにも思えた。だからこそ、言動が支離滅裂だったのではないかと。

「んだよ、それ。早めたいって：そんなことされたらある日突然めちゃくちゃになって全部滅んじまうかもしれないねーってことかよ!? そんなの：アリアかよ！ オレたちにはどうしようもできねーだろそれ！」

「：落ち着いて、順平」

「落ち着け伊織。あくまで有里の推測だ。確かにその線も濃いだろうがそうと決まったわけではない」

「う……：スンマセン」

立ち上がり、感情のままに叫んだ順平だったがチドリと美鶴に窘められ、また座る。

「結局、目的ははつきりしませんね。直接聞けば何か教えてくれないこともなさそうですけど……今の僕らで戦いになった場合、勝てませんよね。先ほどの戦いだって一方的でしたし」

天田は悔しそうに膝の上で拳を握りしめながら下唇を噛む。無力感。叶わない圧倒的な力の差というモノをまざまざと見せつけられ、悔しさしかなかった。

「そうだな……さっきタカヤが言ったように、俺たちは手も足も出なかった。神取って人は無茶苦茶に強かったし：教主のペルソナは——俺の“ケーレス”の護りでさえも貫いたどころかそれぞれのペル

ソナの持つ耐性も全部無効化しやがったんだ」

きついな、と呟いたイズミは小さく息を吐いた。

「次に出会えばまた今回のような『奇跡』が起こるかわからない。迂闊に探る訳にもいかない、か…」

美鶴までも参ったような表情で俯いてしまう。

何故致死に至る傷が癒えたのかという奏子の持っていた『黄昏の羽根』の効果によるところが大きい。

黄昏の羽根は月そのものであるニユクスの体表が外的要因で薄く剥がれ、落ちてきたものだ。

物質として手に持つことができるにも関わらず、その性質は情報の塊という極めて特異な構造をしている。

物質と情報の間であるため、生と死、ふたつの性質を兼ね備えており、生命の本質に関りがあるのではないかともいわれているのだ。

そんな黄昏の羽根は莫大な生命エネルギーを保持しており、大きければ大きいほど力が強く、無機物にひとつの命を与えることもできる。

例えば、アイギスなどペルソナを扱える対シャドウ兵器に使われる『パピヨンハート』と呼ばれる蝶のような形のものである。

優希から与えられた黄昏の羽根は所持者である奏子の生命活動が止まったことを察知し、その内にある生命エネルギーを放出した。

完全に死んでいなければ黄昏の羽根は致死の傷でも癒し、立ち上がらせる。だからこそ、全員が死したというのに生き返る事が出来たというわけだ。

しかしそんなことは露知らず。

原理不明の現象として片付けられようとしていた。

「俺らがあいつらより強くなりやあいつつっても時間は限られてやる。とはいえ、諦めるつもりはねーけどよ」

「それでこそ、だ。シンジ。要はタルタロスの頂上を目指しつつより力をつけられただけの話だ。と、いうことで明日からお前らもどうだ、朝からのランニングは」

「ワンワン！」

「うわ出たよ、真田センパイの根性理論……」

ランニングⅡ散歩に連れて行ってもらえると思っっているのか嬉しそうにコロマルが吠えるが、順平がうげえ、と嫌そうに顔を顰めれば、明彦は目に見えて不機嫌になる。

「なんだと、馬鹿にしているのか!? 何事も体作りからだど習っただろう」

「いやそれ確かに体力つくっすけど、オレ、早起き苦手だし…毎日なんてバテますってば!」

「まあ、お前はコロマルの散歩当番ですらもサボりがちだからな」
「うぐ…」

事実を言われ、黙り込んでしまう順平。

コロマルの散歩当番は朝夕とあるが、順平はその朝の当番を早起きできないからとサボりがちなのだ。

その分明彦や奏子、天田やゆかりなどが代わってやっている。たまに、湊が起こされて散歩に連れていくこともあった。

閑話休題。

「お前らの散歩事情はどうでもええねん。話はこれで終わりでええか？」

そう言っつてソファアールから立ち上がったジンにつられるようにストレガの他の三人も立ち上がる。

もう深夜2時になろうとしている。そろそろアジトにでも帰ろうということらしい。

「…それでは」

何か言いたげに湊と奏子を見たタカヤはしかし、終ぞ何も言うことはなくそのまま寮を去っていった。

——ごぼごぼと、水音がする。

目を開けば、満天の星空。綺麗な宇宙が広がっていて、踏み出した足がぱしゃりと水をはじく。

海だ。ここは。海のとて深いところ。くじらの眠る場所。

「思い出してしまったんですね。なにもかも。あなたが本当は何者で、何を願われ、『前回』の終わりに何へ至ってしまったのか。そして私が誰なのか」

ぱしやりともうひとつ弾くような水音がして機械の乙女が現れる。

黒い髪に赤い瞳。アイギスとは真反対の漆黒のボディ。

「——うん」

吐き出された自分の声は思ったよりも落ち着いていた。良かった。まだ自分は大丈夫だと言いつ聞かせる。

目の前にいる彼女は対シヤドウ兵器で『アイギスの妹』のメテイス。だが、彼女が純粋なメテイスではないことを知っている。

そもそも、『アイギスの妹』であるメテイスはまだ生まれていない。

「…全て思い出してなお、本当にあなたはその考えでいいと思ってるんですか?」

メテイスの聞きたいことはわかっている。

次の満月の日。12月2日に計画していることを本当に実行に移すかどうかを確認したいのだ。

「それしかないなら、そうするしかない。それが、最善だ」

思い出したからこそ、だ。たった一人で終わらせるには、それしかない。

一番つなかりが強くなる満月の日に、やるしかないのだ。

「それじゃあ…ッ! やってることはあのひと…かつての湊さんや奏子さんと何ら変わらないじゃないですか! 影時間が消えて、記憶の修正があつたとしても結局ぜんぶ思い出して…また、アイギス姉やあの人は囚われてしまう。かつては湊さんや奏子さんを想い、囚われていた人たちの未練想いの先があなたに代わるだけでしょう!? 私はそんなの ごめんです!」

メテイスが吼える。その表情はとても人間らしく、ヒトではないなごとは到底思えない。

メテイスは、アイギス自身が無意識に切り捨てようとした部分が分離して生まれたアイギスのシヤドウのような存在だ。

本来なら、湊や奏子が死に、それに対してどうしようもできなかった哀しみを抱えたアイギスから生まれる。つまり、3月の卒業式以前にはどうあっても生まれることは無いし湊や奏子が死ねば強制的に2009年の4月6日に戻される。『俺』とはあったことがないのだ。だが、こうしてここにいる。

世界の時間は俺や湊と奏子が死んだタイミングで巻き戻されるわけじゃない。2010年の3月31日まで続いてしまう^{過去}未来もあった。

「あなたは、自分以外のすべてを——『私』をも救う気ですか！ 奏子さんも言っていましたけど、そんなことは誰も頼んでなんかじゃないじゃないですか！」

同じようなセリフを聞くのはこれで三回目なような気がする。タカヤ、奏子、そして彼女。

頼まれてなんかいないってことはわかっている。誰も、直接言ってきたりなんかしていない。でも、それが願いなのだから仕方がないだろう。

「わたしは…私はただ…：静かに微睡んでいられるだけで良かった…：利用されるのはムカつきますけど、呼ばれるならそれまでだって諦めてたのに…」

「キミはそうでも、人類はそんなこと望んじやいない。求める心はあるだろう。でも、本気じゃない、ちよつとした好奇心だ。こうして足掻こうとするものがあるのをキミが一番よく知ってる」

「そう、ですけど…」

歯切れが悪い。

『彼女』とて本気で人類が滅びを求めているわけではないことを知っている。これはあくまで誘導・操作されたものだと分かっている。

よりネガティブなことを望むように。かつて、人々の噂によって世界をひとつ滅ぼしたように。種を蒔かれ、水を撒かれ、そしてじわじわと根を張った。

たとえそれが人の総意であったとしても最後まで希望を捨てず抗

う人がいなかったわけではないのに。奴は嘲笑い無理やりその濁流で飲み込んだ。

そのことに対し、俺は奴らに対して非常に怒りと嫌悪感を感じている。

同族嫌悪ゆえに。

「それに既にキミの身体はキミのものじゃなくなってる。それが嫌だから、諦めきれなくて、僅かな可能性に縋りたくてメテイスの姿を借りてるんだろ。ああいや、今のキミはメテイスと融合してるのか…」
彼女は恐らく『これまでの全ての周回』に生まれたメテイスと合一を果たしている。

全てをアイギスに返したあと心の海へ消えたメテイスは共通の存在で、どこへいつても1人にしかならない。メテイスという独立した人格と経験と記憶の積み重ねだけが重なる。しかしそれまでなのだ。『今回』のメテイスはまだ生まれていない。

「そこまで、わかっているのならどうして…！ あれと心中するつもりなんですか！ 私は救われても良くて、あなたはダメなんて道理はないでしょう！ それに、あんな約束をした美鶴さんを置いていくつもりなんですか!? 考え直してください！」

「…無理だよ。俺が本当はなんなのか、キミもよく知ってるだろ。だから、俺はそこに全部持つていく。すべて溶かして…もとの…『何者でも無いただの現象のひとつ』に戻るんだ。そうすれば人はちよつとだけ希望をもてるし、『ニユクス』は滅びをもたらすものとして二度と人類に観測されない。『認知』されることはない。『三上優希』という存在も、『有里渚』という存在が生まれていた事すらも残らない。ぜんぶ、無かつたこと正しになるんだ形。誰も悲しくない上に、湊と奏子も、世界も救われる。はは、これ以上の大団円はないだろう？」

「それでも、影時間に関しての記憶の修正は完璧じゃない…！ あつたことを無かつたことには出来ないんですよ！ もう起こってしまっている！ その時点で時あを操なる神器の『障害も、例外も、全て起こる前に除ける』という定義は揺らいでいるはず…！なのはどうしてそこまで…！」

メテイスは顔を俯かせてしまう。

たしかに記憶の修正は完ぺきではない。ただ、それは『影時間にまつわる記憶の修正』についてだ。

自分が今からやろうとしている方法なら、『三上優希』という存在を完全にこの世界から消すことができる。無かったことにできる。だけれども、悲しまない。

だからこそ、『障害も、例外も、全て起こる前に除ける』のだ。自分の定義は揺らいでいない。間違っていない。

「貴方は一人の人間として生きる権利があるって私言いましたよね？」

……手を伸ばせばきつと、あの人たちは……」

「助けてくれる」。共に歩んでくれる。立ち向かってくれる。

そう、メテイスは続けようとしたのだろう口を閉じた。

今の自分に何を言っても通じないとわかったようだ。

それもそうだ。

だって、自分の本質は絆を嘲笑い、否定するものなのだから。

自分に願われた願いは、『湊と奏子』を救ってほしい』というもの。

の。そして、俺の願いは『湊と奏子を救いたい』というものだ。

自分にしかできないことで全てが解決できるのなら、願ったりかなったりだ。

「……嘘つき」

11月23日(月) 朝

目を開く。

目に映る景色は朝倉医院にあるいつもの部屋の中で、なにもおかしいところはない。

怠く、重い身体を持ち上げふらつきながらも立ち上がる。

「……」

あと10日程度で全てが終わる。

これ以上、対戦^{取引}相手であるニヤルラトホテプとフィレモンが邪魔をしていくことはないだろう。全てを思い出した時点でフィレモンはその必要がなくなった自分に対し干渉を止めるに決まっている。自分^{ベルベートルム}はあの部屋の正式な『客人』ではないのだから。

ニヤルラトホテプは——よく知っているからこそ、正直どうするか分からない。が、こちらが相手の条件に乗つかる以上当日こちらに對して何かちよつかいをかけることや『12月2日』になるまでに何かしてくる事はないと思う。

そうすることが面白くないのは自分がよくわかっている。やるなら根回しは地味に、けれど確実に。結末は盛大に。希望を奪い否定し嘲笑うのがやつ^の好むやり方だ。

とにかく、勝負には負けるが戦いには勝つことができる。それで十分じゃないか。

美鶴さんのことや相続問題とかの他の心配してたことだって、俺という存在が元々居なかったことになるのなら杞憂に等しい。

（——けどまあ…「嘘つき」、か…）

しかし去り際のメティスの言葉がリフレインする。

嘘じゃない、と言いつ返しても言っていたことが本心の全てでは無ければ嘘になってしまう。

「……」

けれど皆を頼ってどうにかなるものでもないだろう。

なにせ相手はニユクスではなく、『ニユクスそのものを呑み込んだ別の神』だ。

ニユクスやかつてのニユクス・アバターのように潔く眠ってくれるとは思えない。だって、外から来た神だなんてこの星の生き物に対する理解があるのかどうかすら難しいのだから。

そして湊や奏子が命を懸けて得たような『奇跡』の力を持っていてもなお、退けることしかできなかつた相手以上の存在に他の皆が犠牲をささずにやり過ぎることができると言われれば答えは否だ。

なら答えはひとつだ。

全部持つて行って、『それ』がこの星に落ちてくるまでに溶けてしま

えばいい。

『それ』がニユクスの身体を喰らい、エレボスによって呼ばれるのなら、『それ』の『人類から見られた観測結果』ごと自分は集合的無意識の闇の中に消えてこの輪廻の輪を終わらせる。

これは『それ』ともエレボスとも強力な繋がりがある自分にしかできないことだ。

集合的無意識の最も深い場所にあるそこで溶けて消えてしまえば跡形も残らない。『滅びは消えた』という認知だけが世界に作用する。いくら強力な神であろうが人々の認知を基準に存在しているのなら、『集合的無意識の深層で分解され、消えてなくなる』というのは『無』や『認知されなくなる』のと同義であり、世界への干渉ができなくなるのだ。

ニアルラトホテプだろうが他の神だろうが人間だろうが、触れられず知らないものは無いのと同じことになるのだから干渉のしようがない。

影時間の記憶に関する修正のように『修正に伴い別の要因に置きかわる』訳ではなく、『元から無かったことになる』のだからこれ以上の最適解は無いと思う。

これは一種の意趣返しでもある。

ニアルラトホテプが人類を誘導して滅びをもたらそうというのなら、自分がその逆をしても何ら悪い事ではないというわけだ。

「…起きてたか」

ガチャリ、とドアが開く音がして朝倉先生が入って来る。

その手には小さな手のひらサイズの鉢植えが。

「……………」

朝倉先生は微妙な表情をしている。が、すぐにガシガシと頭を掻くと、ずい、とその鉢植えを差し出してくる。

「…これ、やるよ」

「まさか世話できなくて植物枯らしまくるからヒマそうな俺に世話押し付けるとかですか!? 花屋バイト歴トータル数週間の俺に!?!」

「んなわけあるかっての! ちゃんと観葉植物の世話くらいしてるわ

！」

茶化してみればいつも通りのツツコミが返って来た。

先生が辛気臭い顔をしているのはなんだか似合わないしこちらとしても調子が狂うというものだ。

「つか、そんだけ元気そうなら…もうしばらくは大丈夫そうだな」

まるで何かに怯えるように、安心したようにこちらを見てくる先生の表情は優れないように見える。

「お前…いや、なんでもねえ。言いたいことはちゃんと言っとけよ。それができるかできねーかは別として聞くことだけはできるんだからな」

メテイスと同じく、朝倉先生も何かを感じ取ってそう忠告してくれているのか。それとも単に倒れてばかりいる自分を気遣ってか。

「これはな、まだ芽吹いちやいねえが『アガステイアの木』お前の地元 つつーご利益がある木の種が埋まつてる鉢植えなんだわ。御影町にもたくさん植えてあるあの木だな。…このまま水をやり続けりゃ、春先には芽吹くだろう」

来年の春。

このまま人として生きるにしても、12月2日にすべて終わらせるにしても自分がたどり着けない季節だ。

「そつから植え替えりゃ、大きくなる。少し大きな鉢植えに移し替えて観葉植物にしたっていい。まあ、なんだ、要はあれだ。お前もなんか世話すりゃもう少し…いや、忘れろ。でもこれは持って帰れよな！ 枯らしたら承知しねーからな？」

「り、理不尽だ…」

苦笑いの表情を作りながら鉢植えを受け取る。

譲られたものに罪はない。世話ができそうにないから枯らしてしまつたらその時はもうどうしようもないけれど。

朝倉先生はもう分かっているのだろう。俺が人として生きるのにはいろんな意味で手遅れだということに。

人で居ようとするにも残された時間は短く、人であることを捨てたとしても願ひによつて消える。

後者の選択のことを先生は気づいてないんだろう。けれど、俺が変だということには気がついている。

だから似合わない植物の世話などを押し付けてきたのだ。何かの世話をさせることによって自分をこの世界に繋ぎ止めるわずかな希望にしよう。

「朝倉先生、みんなにこのこと、秘密にしといてください。タカヤにも、俺の弟と、妹にも。俺がもうあんまり長くないことも、血の成分が変なことになってるのも、全部」

「ガラでもねーこと言うんじゃねーよ」

「あと俺、死ぬ時はたこ焼きに囲まれて死ぬって決めてるんで」

「いやそれどんな死に方だよ。アレか？ 病室でたこ焼き器セットして焼くのか？ …ウチは禁止だからな！」

たこ焼きの匂いに囲まれて死ぬのはそこそ理想なのだけど、ツツコミどころがありすぎてつつこまれてしまった。残念。

「は？ たこ焼きバカにしてるんですか!? げほつごほつ…うええ…噎せた…」

「してねーしはしやぐなはしやぐな不健康不良児。死にかけてたんだから安静にしてろっての」

もし、身体が限界を迎えて死んだとしても朝倉先生は怒らない。ケガや病氣、どうしようもないことで死ぬのは割り切っている。もともと、そういう人だ。

ただ、生きているのに、まだ生きようとすれば生きられるのに命を捨てようとする人を嫌う人だけ。

その期待を裏切ってしまうことに罪悪感はある。けど、全部消えてしまうのなら、この罪悪感もきつと杞憂になるから。

迫られた選択（11／30～12／2）

11月30日（月） 夜

一週間なんてあつという間だ。

修学旅行の時にアザミさんに買ってもらった羽織が届いたり、二年生が体験学習にいったり、ちよつとした用事を済ませたくらいであったことと言えばその程度。

羽織は大事に畳んで、届いたときに入っていた桐の箱に入れ、引き出しに保管してある。

袖を通すことはきつとないだろうけど、雑に扱いたくなかった。

ヒュプノス^{モル}から提示された選択の答えを決めるために、夕食後ラウンジに集まることになった。

自分は12月2日にヒュプノスと会うつもりはないのでこの話し合いも最低限言うことだけ言って静観に留めるのみだ。

この話し合いも意味の無いものになるだろうけど、ここで止めた、関わりが無いから参加しないと行ってしまえば怪しまれる。まだ全てが終わった訳では無いし、ペルソナもモルペウス達が使えなくなっただけで関わりが無くなった訳では無い。

ソファアに座らず壁に背をもたれさせて腕を組む。

「結局。どうすんだよ。ヒネポン？ だっけ、あのバケモンに言われたこと。もう決めなきやだろ」

「『ヒュプノス』だってば。悪いけど、私は答えもう決めてるからね」
ヒュプノスの名前を間違える伊織は仕方ないとして、答えを決めていると言った岳羽の顔はすっかりとしたものだった。そこにヒステリックさや不安定さは欠片もない。

「…俺もだ」

「私もだな」

「アキも桐条も決めてんだな。…聞く必要なんかねえくらいのことだけだよ。決めなきや、なんねえんだもんな」

真田くんと美鶴さんの返事を聞いて、荒垣くんは大きく息を吐いた。

仕方ないな、と言わんばかりに奏子と天田くんを見つめながら。

「ぼ、僕だつてちゃんと決めてますよ。もちろん！」

「わっ、私も……！」

「ワンワン！」

天田くんが焦つたように早口になり、それにつられるように山岸とコロマルも声を上げる。

ちゃんとみんな決めてきたようだ。

それが誘導でも何でもなく、己の意志なら自分はいうことはない。

「……私も、ちゃんとして言えるかどうかは言えないけど、決めてるよ」

妙に硬い表情の奏子がいつもとは違う真剣な声色で静かに告げる。

その視線はわずかにぐらぐらと揺れていて、何かを戸惑っているようにも見えた。

「……ねえ、お兄ちゃん」

「なに？」

戸惑い、不安げな表情のまま奏子がこちらに呼びかけてくる。

「お兄ちゃんは私たちのどんな選択も受け入れるって言ってたよね？」

そのこと、嘘じゃないよね？」

「受け入れる、じゃなくて『従う』んだけどね……まあ、嘘じゃないよ。どっちでもいいんだ。俺は」

以前と同じ返答を返す。

どちらでもいい。どのみち、自分一人で終わる。この選択は最後の意思確認のようなものだ。

「本当に？ 素直にしたがうの」

湊がこちらをじっと見つめて訊いてくる。その目が何を思っただちらを見つめてくるのか、自分には読み取れない。ただ、今初めて湊のその目が少し苦手なのだと、自分がまっすぐ目を合わせられるのが苦手なのだと自覚した。だから、自分は目を逸らしがちなのだ。

自分からは覗き見る癖に、相手から見られることを嫌う。あまり好ましいとは言えないだろうなあ、と頭の端でぼんやりと考えた。

けど、本当に彼らがどんな選択をしようが構わない。

「……本当だよ。何度も言うようにその言葉は嘘じゃない」

大事なものはそこじゃないから、こんな口約束くらいなんてこともないし平気だ。

「そう、ならいい」

納得しているのかしていないのか。どちらかわからない声色で湊はその話を終わらせた。

奏子は依然、少し不安げな顔をしていたがもうこれ以上は何も言うつもりはないようだった。

「後は…アイギスだけだな。どうだ？」

「わたし…ですか？」

(……?)

真田くんに戻事を問われたアイギスが挙動不審になりきつと視線を下に落とした。

まるで、「決めかねている」と言いたげな表情はアイギスらしくない。

「わたしは……」

また、言い淀む。

「…わたしに、〃いのち〃はありません。機械なので破損しても、パーツを交換すればいくらでも修復できます。そんなわたしが…この選択を…決めていいこと…なのでしょうか」

「アイギス…」

そんなことはない、アイギスにだってこの選択を選ぶ権利はあると叫ぶ者は居なかった。実際、アイギスは機械と生物の中間のような存在だ。心はある。だけど身体は無機物。

アイギスの言っていることは間違いではない。だからこそ、皆は突発的に出されたアイギスの問いに答えられなかったんだろう。

否、湊は何か言えただろうが悩むように口をつぐんでいる。

「わかりません…わたしは確かに皆さんの仲間です。もちろん、可能性がゼロではないのなら、滅びに立ち向かうべきだとわたしも思います。でも、皆さんがこれ以上危険な思いをするくらいなら…辛い思いをするくらいなら…！ わたしは…わたしは……」

アイギスは決めきっていないようだったが多数決で決まるならアイギスの意見は却下されるだろう。恐らく。ただ、何かが変わた。

なにか、酷く葛藤しているようにみえる。

「オイオイ、どうしたんだよアイギス？　なんかヘンじゃね？」

「皆さんは機械のわたしと違って生きています。ヒトの…いいえ、生きているものの命は、ひとつしかないんですよ!?!　なのに、死に行くようなことにわたしは、賛成…できかねます…。」

最後は消え入るような声で自らの意見を告げたアイギスは、恐らく皆が決めきつているであろう「滅びへと立ち向かう」という選択肢に反対することとなったようだ。

それでもいい。自分はアイギスが最期まで気づきさえしなければそれでいいんだ。

「…そっか。わかった。でも僕も奏子も、みんなも滅びに立ち向かう事決めてるから」

「……っ！」

アイギスの答えに対し、切り捨てているのかと思えるほど冷静を装った湊の言葉は覚悟が決まっていた。たとえ反対していたのが自分や、他の人間——アイギスでなくとも容赦なくこういわれていただろう。それくらい、湊の言葉も視線も強情さを孕んでいた。

こうなるのならなぜ訊いたと言わんばかりだが、アイギスの不安は実際とても正しい。しかし所詮この話し合いは意見の確認と多数決であり、最終的に決めるのはリーダーである湊と奏子だということを除けば。ここでアイギスの他にあと3人程度、記憶を消す派の意見を持ったメンツが居れば何か変わったのだろうか？　そうもいかない。目を見開いてふるふると震えるアイギスを無視して「そうだよね？」と問うような視線を湊が送れば、アイギスと自分以外の皆が頷く。

アイギスには残念だが、決まりだ。

「明後日の影時間。ムーンライトブリッジでヒュプノスに返事をする。優希も、これでいい？」

「ああ。大丈夫」

先に出れば間に合うだろうか。大事な時だが、朝倉先生に呼ばれて

いると言えは何かごまかせるだろう。

「… あ、でもごめん。明後日の話し合いには俺いけないから」

「え、どうしてですか…?」

「病院に行かなくちゃいけない。また、検査とかで泊まりだろうから。後から合流するにしてもいま一人で影時間に出歩くのはちよつとね…体調が悪いとかじゃないよ。こんどのは定期健診ってやつ」
でつちあげる。

さも、「病院で大人しく待ってますよ」と言うかのように。これなら影時間前から寮に居なくても不審がられない。

「それなら仕方ないか…先輩、気をつけてくださいよ?」

「わかっている。この前もタカヤから釘刺されたところだしね」

岳羽が納得したようにうなずいたのを見て、こちらも苦笑いで答えておく。適当にでつち上げた理由だが、特に怪しまれていないことから湊や奏子を含めた皆を納得させることができたようだ。

「それでは、方針が決まったところで解散だな。…アイギス、大丈夫だ。私たちはこれまでもやってこれたんだ。きつと乗り越えられるさ」

「ですが……」

美鶴さんに励まされたアイギスだったが結局思いつめたような表情から回復することはなかった。

「わたしは、死なない。なら、わたしがみなさんのために…やるしか……」

「奏子、湊。ちよつといいかな」

それぞれの部屋に帰ろうとしたふたりを二階の踊り場の前で呼び止める。

「なに?」

「どうしたの? お兄ちゃん」

呼び止めればほぼ同時にふたりともが立ち止まった。

ここで立ち話をするのもなんだし、近くの椅子に誘導する。

「や、大したことじゃないよ。でも滅びに立ち向かうって決めたんだろ。だから俺から餞別をしないとって思ってるね」

得意げな顔をしつつ勿体ぶって懐から「あるもの」をふたつ取り出して掌を広げた。

小さな、金色の金具に親指の先程度の大きさの青く輝く石がついているだけのストラップ。

ちようど、この石の色のような青をブルームーンというらしい。なんというか、皮肉にもほどがあるだろうと思うけれど奏子はそうじゃなかったらしくこちらが手渡したそれを食い入るように見つめている。

「きれい…」

これは、「保険」だ。

建前的には「戦力的に自分が役に立ってないから、せめて物だけでも」という理由になるけれど。

俺が失敗した時やニヤルラトホテプや『あれ』にちよつかいをかけられてなにかあった時のための、保険。

一見ただのストラップのように見えるそれは、この一週間で急造したものだ。

自分は神様のようにモノづくり慣れていないということはないので、無から有を生み出すことに苦労した。もちろん、この言い方は八つ当たりと皮肉だ。

たとえば、『自分から一部を切り出して云々』、などならなんとか自分でもできる。

だからといって別に肉体を切り取ったわけじゃない。流石にそんな趣味はないし。

ほんの少し、核たる部分の情報を少し切り取って結晶化させただけだ。少し削ったくらいでは今更変わりはないし、ひび割れ砕けてゆくものを摘まみ上げて再利用しただけの何が悪いのか。これが他人のものなら躊躇してそんなことをすることはなかったかもしれないが、自分のものなら別にどう扱ったっていいだろう。

お守りと称してニヤルラトホテプや『あれ』といった脅威になりそうな相手にとって最悪の反撃手段カウンターを用意したわけだ。

たとえば、北欧神話で語られる何物をも傷つけられないバルドルを害した唯一であるヤドリギのように。

これさえ使えばやつらを害することができる。やつらに、及ぶことができる。ヒトの世界にひきずりだし、繋ぎ止めることができる。のりこえられるもの倒せるものとしてみんなに『認知』させることができる。自分がいなくても、これさえあればなんとかなる。あとは、人の手でなんとかできるようにと作り上げたものだから。

要は、自分という存在自体が「敵」に食い込んでいるためにそれらに干渉できる触媒の様なもの——に近いのかもしれない。

「これ、どうしたの？」

「あー…その、いまはみんなといっしょに戦えないからなにか俺にもできないかなって思っ。お守り、作ってみたんだ。もちろん、クーリングオフ制度はないからね！」

「なんだか、売り物みたいだ」

茶化して言えばそんな反応が返って来る。

色々と「ズル」をしたのでハンドメイド初心者が作るような不格好なものではなく、既製品のように綺麗なものは当たり前だ。ちよつとアクセサリー雑誌を見たり「Be blue v」（ヒーリングショップでもある）でオシャレなアクセサリーのデザインを見てきたけど。

知識を仕入れずに自分の感性MAXで作ったら参考資料がお土産屋に売ってる剣のキーホルダーくらいしかなく、それ並みにキラキラですんごいものが出来そうだったので勉強にすることにした結果シンプルなデザインに決めた自分を褒めたい。

「とにかく！ ペルソナは想いの力でもあるんだ。…きつと、なにかあったときにふたりの力になるから。できれば肌身離さず、持っていてほしい…かなあ…って…」

なんだか恥ずかしくなってきた尻すぼみになってしまう。

今更になつてめちやくちや気持ち重いんじゃないかとか、これっ

てメンヘラじゃないのかとか、不格好じゃないかとか、やっぱデザインダサくね？ とか：手放したせいかストラップを作っていた時は अच्छ ya 具合が抜けて冷静さが戻って来るにつれていたたまれなくなってくる。

「あー：うー：なんか、急に恥ずかしくなってきた。帰る！ じゃあ、おやすみ!!!」

「待って！」

自分から呼び止めたことなのに、そそくさと逃げ出すように奏子と湊を見ずに部屋へと急ぎ足で戻ろうとすれば奏子に手を掴まれて止められる。

「そ、の：お兄ちゃん、ありがと！ 大事にするね！ ぜったい、大事にする！」

「：うん。そうしてくれると俺も嬉しい」

たぶん。いや、絶対自分は不格好な笑みを浮かべているだろう。

それくらい、気恥ずかしさと色々な感情がないまぜになって襲ってきていた。

ほんとうは、これが役に立つことなんてなくて、誰から貰ったものか分からなくなるくらい平和なのがちょうどいいのだけれど。念には念を、だ。

満月まで、あと二日。

覚悟はもう、出来ている。

ぱちり。

湊と奏子は揃ってふたりで目を開いた。

流れるのはピアノの旋律。目の前にはイゴールとエリザベス、それにテオドアが居た。

いつも通りの湊と奏子がよく知るベルベットルームだ。だが、ふたりはそこへ行くこうと思ってきた訳では無い。寝ていて突然呼ばれたのだ。

「突然のお呼び立て、申し訳ありません」

「この度、お客様は重大な決断をし、特異な縁を結ばれた事でしよう。それによつて得、新たにお目覚めになられた力についてお伝えしたくこちらへとお呼びいたしました」

テオドアとエリザベスがそれぞれ謝罪と説明をする。

重大な決断とは滅びに立ち向かうかどうか、のことだろう。しかし「特異な縁」には心当たりがない。

「貴方がたが新たに目覚めた力。それは原初の雛形。本来存在するはずのないイレギュラーナンバー。『アーキタイプ原型』に分類されるアルカナのペルソナ、でございます」

エリザベスが一枚のカードを掌に浮かび上がらせる。

そのカードは絵柄がなく、白紙のようにも思えた。が、くるりと湊と奏子の正面へと絵柄があるはずの面がきた瞬間、青い炎と共にカードが燃え上がった。

そしてその白紙に絵柄が浮かび上がる。

白かった面は黒く塗りつぶされ、その上からさらに青と白で彩られた波打ち際。

満天の星空を背景にした海の波打ち際がそこには描かれている。

「海……？」

「左様。これは普遍的無意識である心の海と貴方がた生きとし生けるものの狭間を示すもの。生と死の渚。みきわワイルド WORLD 愚者や世界と同等であり、しかしまだ目覚めてはおりませぬ。意志の力の根源を司るアルカナでもありますゆえ、祈りや意志の強さによつてこれは力を増すのです」

イゴールが説明する。

宇宙でも世界でも愚者でもないそれは、ポテンシャルこそあるものの、まだ強い力を持つてはいないと言う。

何に使うのか。どんなペルソナが目覚めたのか。イゴールが教えるつもりは無いようで、僅かに微笑むばかり。

そんなイゴールの様子に奏子は少しだけ不安になる。言葉が分かりづらいのはいつもの事だが、なぜ何も言ってくれないのか。

「ほほ。そう心配なさらずとも。悪いものではありません。ご安心くだされよ。お客人の求めしものは彼の者と向き合う時、自ずと見えま

しよう」

奏子の不安を払拭するかのようになり、イゴールが言い聞かせた。大丈夫だと。

イゴールからは何も言えないが、来るべき時が来たら分かるはずだ、と。

「――善悪を問わず、人の心に雛形を残した人間達は、皆優れたペルソナ使いでもありました。無論、貴方がたも……」

イゴールが目を伏せる。

「どうか、後悔なき選択を……」

12月2日（水）霧 影時間

ムーンライトブリッジ

決断の日だ。

何が起ころかわからないということと武装をした状態で濃霧が周りを覆う異常な様子のムーンライトブリッジへと向かった特別課外活動部を待ち受けていたのは――

「……こんばんは」

「お前は……朔間!? なぜきみがここに居る!?!」

美鶴や優希のクラスメイトである朔間だった。彼は影時間だと言うのに平然とそこに立っている。

いまは影時間などではなく、ただの夜中なのではないかと錯覚するほどに。

それを異常だと感じた美鶴のもっともな質問に朔間はすこし目を逸らしたあと、口を開く。

「――待ってたよ。どうするか、決めて、来たんだよね」

“待っていた”。 “どうするのか決めてきたのか”。

このふたつの言葉だけで十分、朔間がどういう存在なのか理解することが出来た。

「朔間……まさかお前は……!」

狼狽える明彦に対し、朔間は静かに頷く。

「そうだよ。僕が、ヒュプノスだ。優希から別れて、みんなをずっと見ていた。優希以外の人間がどういう生活をして、何を思うのか、とても気になっていたからね」

その自嘲気味な言葉とともに黒い旋風が巻き起こる。漆黒の羽根が舞い、暴風が朔間を覆い尽くすように荒れ狂う。

「きやつー！」

「わああー！」

これは攻撃ではない。が、あまりの風圧に皆が受身をとる。

それは一瞬だったが、風が収まった頃には朔間は人の姿ではなく、以前も見たヒュプノスへと姿を変えていた。

「さあ、どうするんだい？　『記憶を消して穏やかに滅びを迎える』

か『奇跡を信じて立ち向かう』か。答えを聞かせてほしい」

大きく黒い翼を広げたヒュプノスは以前の狂気を見せずに静かに訊いてくる。

アイギスは震え、今にも飛びかかりそうだったがまだ抑えているのかそれとも機を伺っているだけか、その手の銃を撃とうとはしなかった。

「私たちの、答えは——」

問われた湊と奏子が代表で前に出る。

「『奇跡を信じて立ち向かう』」

「……そう」

静かに納得したように頷いたヒュプノスが微かに笑った気がした。

「きみたちの考えはよく分かったよ。辛い選択だったと思う。突然、こんなことを言われて、半信半疑だと思う。けれどありがとうと言わせて欲しい。僕としても——」

「——っ!!!」

ヒュプノスの言葉は最後まで続かなかった。突然、飛び出したアイギスがヒュプノスへとその身を踊らせ、己の腕と一体化した銃を乱射したのだ。ヒュプノスは咄嗟に自らの翼で守り、無傷のようだったが。

「どうしたんだアイギス！　彼は戦う意志を見せてはいないだろう

!？」

突然のアイギスの強行に、皆戸惑いを隠せない。

「ペルソナ、レイズアップ!」【デッドエンド】

アイギスと共にパラディオンがヒュプノスへと突撃していく。

が、攻撃は全て黒い翼で無効化され、鎌の1振りでも吹き飛ばされてしまう。

「くう……い……わ、たしは……わたしの役目は……! 皆さんを……湊さんと奏子さんを守ることで……、……っ!？」

ごろごろと地面を転がり、起き上がりながらそう吠えるように言ったアイギスはしかし、途中で何かに気がついたように目を見開く。

「いえ……違う。わたしの、やくめは……」

「アイギス、大丈夫!？」

よろよろと立ち上がる。

そしてアイギスは目を伏せるように視線を下げた。

「思い出した……ぜんぶ、わたしの……せいだったんですね。わたしが、奏子さんと湊さんに、デスを……封印したから」

「!？」

「は、え?! ど、どういう事だよそれ?! 湊と奏子たちにとって……デスってやつが封印されてたのは、三上センパイじゃねーのかよ!？」

アイギスの言葉に衝撃が走る。

幾月が話していたことと、アイギスが言ったことはまるで違う。

どういふことなのかと皆が狼狽える中、戦意を喪失したらしいアイギスが語り出した。

「10年前の事故のあった日。わたしは爆発により解放されてしまったデスを止める為に戦っていました。その最中、事故に巻き込まれ、影時間だと言うのに象徴化せずにここにいたのが、幼かった奏子さんと湊さんでした。……、わたしは今と同じように全く歯が立たず、やむを得ず、ふたりに——分割したデスを封印しました。優希さんという器に入っていたのだから、同じ人間という存在を器にすれば成功する確率はきつと、あるはずだと。でもまさか、おふたりが優希さんの家族だなんて思わなくて……わたし……!？」

「そう。だから12の大型シャドウは彼らがここへ再び来た時点で目覚め、活動を再開した。彼らの中のデスと再びひとつになろうと呼応したんだ」

泣けないためか、顔を両手で覆ってしまったアイギスの言葉を引き継ぐ様にヒュプノスが補足をつける。

「それって…有里さんと奏子ちゃんが来たせいだ…ってこと!? ふざけないでよ! ふたりはなんにも悪くないじゃないの! 事故に巻き込まれて…お父さんとお母さんをいつぺんに失って…その上こんな封印されて…それで滅びに立ち向かわせるって言うの!? 冗談、大概にしてよね!」

「…ふたりの…三上も含めて有里家の兄妹の転校には幾月が主導で手を出していたらしいが…おかしいと思っていた。なぜ、三上だけではなく二人も呼んだのかと。しかし、そういう事だったのか…! 幾月は最初からこの事を知っていて、彼らを——!」

理不尽さに激昂するゆかりに、歯ぎしりする美鶴。

美鶴はなぜ、養父母との関係が良好であり、金に不自由はなく、聖エルミンというちゃんとした場所に通っていたというのに無理やり取り上げるように三人を転校させたのか疑問に思っていたのだ。

もし、三人のうちでも誰かひとりが酷い生活環境だったというのなら分からなくもない。だが、三上家に引き取られた三人はそこで満ち足りていたのだ。

だと言うのに無理やりこちらへと連れてこられ、戦いに巻き込まれ、拳句の果てに滅びの原因となってしまうなど、あんまりではないかと思うと同時に幾月への怒りが芽生えた。

「わ、わたしが…私たちが…? こっちに来たせいで、お兄ちゃんが…」

「ううん。奏子ちゃんのせいじゃないよ」

「山岸の言う通りだぜ。お前のせいじゃねえ。悪いのは幾月だろうが」

「風花…あらがき、せんぱい…」

不安定に瞳を揺らし、今にも泣きそうな奏子を風花が慰め、荒垣が

安心させるように頭に手を置いた。

その暖かさに奏子のゆらゆらと揺れていた瞳は少しだけ落ち着きを取り戻す。

「すみません…わたしが、弱かったせいで…守れなかったせいで…ふたりを…優希さんをも…、みなさんを…不幸にしてしまった…！」

「それも、違うんじゃないの？」

アイギスの震える声に順平が真剣な顔付きで否定する。

「なんてつか、オレはショーヅキこんなことあつてさ、辛いこととか、痛てえ事とか沢山あつたけどさ。でも不幸だとか思わねーぜ！ なんてつたつてチドリだけじゃなくてゆかりつちや風花や奏子つちつていう可愛いコと仲良くなれたんだからさー！」

「僕も、デスが産まれなければ母さんは死ななくて、今も生きていたのかなって思うこともありました。けど、その分きつと僕が皆さんと…荒垣さんとも会うことがなかったと思うと僕はこの出会いを否定なんてできません。それに楽しいことは沢山あつたし、この出会いを不幸だつて思つたことは1度もないから！」

「アイギス、お前は考えすぎだ。俺もだが、ここに居ない三上もお前のことを恨んじやいないし不幸だとは思つたことがないだろうな」

明彦の言葉に奏子が「あー…」と独りごちる。

「お兄ちゃんはアイギスに対してさっぱりだけど、カダスで見たお兄ちゃんのシャドウはアイギスに凄く懐いてたもんね。シャドウがナギサちゃんの言うようにその人の隠されてた本心なら、もしかして…お兄ちゃんはアイギスのこと大好きつてこと!？」

「アイギスが取られちゃう〜！ どうしょー！」とふざけた調子で慌てる奏子には先程までの不安さはない。

空元気のようなその1連は周りを和やかにするには十分で。

「——アイギス」

「みなと、さん…」

それでもと頭を振るアイギスに湊が近づく。そして向き合うような形で見つめ合う。

「僕は、アイギスと出会えてよかったよ」

「——っ!!」

アイギスは耐えきれなかった。地面に崩れ落ちる。

微笑むように、湊にそう言われてしまい、アイギスはどうすればいいのかわからなくなったのだ。

「アイギスは自分を許すべきだと僕は思う。アイギスが僕らにデスを封印しなきゃ、世界はその時に終わってた。みんなに出会うことも、僕らがまた優希と会えることも無かったんだ。だから、あの時の選択を後悔しないで」

そんなアイギスを抱きしめ、慰めるようにぼんぼんと背中を優しく叩きながら湊は語りかける。

悪いことばかりだったとは到底思わない。実験がなければそもそも兄が誘拐されることは無かつただろうが、アイギスが止めてくれないなければこの再会も無かつただのだ。

兄には通じないであろうその言葉も、アイギスにならきつと。

「わた、し…わたし…良いんですか…？ わたしには、そんなこと、言ってもらう資格なんて、どこにも…!!」

「良いんだ」

その言葉だけで十分だった。

「アイギスは僕の、”大切”だから」

「——！！」

不意に、湊の肩が濡れるような感覚がしてアイギスの顔を見れば――

彼女は泣いていた。

機械であり、涙を流せないはずのアイギスが、ぼろぼろと涙を零している。

その事に、今度は周りが息を飲む番だった。

「これが… “涙”……？ わたし、機械なのに…いま、泣いて、いるんですか…？ なら、いまのわたしのココロは…悲しい…？ でも、なんだか、こんなことを…思う、のは変だとは思いますが…満たされている感じで……」

「ちがうよ。それはきつと、 “嬉し涙” だ」

「嬉し…涙…」

戸惑うアイギスに湊は優しく教える。

感情に対し、赤子よりも未熟なアイギスは嬉しいことも楽しいこともこれからたくさん知っていけば良いと湊は思っている。

その為に、滅びに対し犠牲を出さずに立ち向かい、勝たなければならぬというトンでもない状況に置かれているが。

(……………)

また。まただ。青い蝶が飛んでいる。

それはアイギスの周りをふわふわと飛び、そして頭に止まった。

瞬間、ばきん、とガラスの割れるような音がする。

青い光と力の奔流が巻き起こり、アイギスのペルソナであるパラディオンが現れた。

「どうして…？ わたしは召喚なんて…！」

戸惑うアイギスを他所にパラディオンの姿が一瞬で塗り替えられ、別のものになる。

戦女神の形をした鉄の置物だったその見た目が、似通ったデザインデザインの別の像へと変わる。

それは全体のカラーはそのままに、内蔵されていた槍を手に携え、周囲を回転するようなりリングに盾が付属しペルソナ本体を守るような形になっていた。

「『アテナ』…これが、わたしの新しいペルソナ…」

ぼんやりと、アイギスが己のペルソナが消える瞬間まで眺めていると、ヒュプノスがクスリと笑ったような気配がした。

「なるほど。よりヒトらしい精神の目覚めがきみに良い作用をもたらしたのかもね。良かったんじゃないかな」

さほど興味もなさそうに、しかし祝うような口振りでヒュプノスはアイギスの新たな力の目覚めを祝福した。

かたやアイギスは先程までの攻撃性が嘘のように、ヒュプノスを見つめている。

「わたし…勘違いしていたんですね。ずっと、あなただと思っていた。

だから、《ダメ》なんだって」

全てを思い出したアイギスは目を伏せた。

「でも、あなたは……違う。死の宣告者はあなたじゃない」

「何を言ってるんだい。僕が死の宣告者だよ」

不機嫌そうにヒュプノスは翼を広げる。

湊も、他のメンバーもアイギスが何を言っているのか分からなかったのだ。

目の前のヒュプノスが《死の宣告者》では無いというのはどういうことなのか。

「おかしいと思っただけです。あなたからは確かに死の宣告者の反応が違います。でも、それはとても小さくて、わたしがかつて見たそれとは違っていて。あなたが湊さんや奏子さんに近づいても違和感があまり大きなものではありませんでしたから」

きゅ、と口を結んだアイギスは、何かを決意するように息を吸った。そして、核心を突く言葉を発した。

「本当の死の宣告者は——優希さんです」

「……ふ、あははは！ あはははは！ そんなわけないだろ！ 優希が！ 死の宣告者だなんて！ 死の宣告者は僕だ！ 僕なんだ……！ だって、僕が何もかもを喰らって、やっと死の宣告者になれたの……！ 僕が偽物だって言いたいのか!?」

「こいつの言う通りだ、アイギス。三上が死の宣告者なはずがないだろう！ あいつは俺たちと同じ人間だ！」

アイギスの言葉を受け、ヒュプノスは笑い出す。

湊たちも「優希こそが死の宣告者なのだ」とアイギスから言われてもにわかには信じ難かった。

「…いいえ、違います。わたしがどうして優希さんを手遅れだと思っ
たのか…優希さんを殺そうと思ったのか。それは、優希さん自身が
死の宣告者だからに他なりません。あなたが離れていったあの日か
ら、優希さんへの違和感は屋久島で再会した時よりも膨れ上がってい
ました。ペルソナを使えなくなったのも、心が砕けたのではなく人で
なくなってしまったせいだとするのなら…っ！」

アイギスが言葉に詰まる。得たばかりの涙がまた、ぽろぽろと零れ
ていた。

「…教えてください。優希さんはたった1人でいったい何をしよう
としているんですか!? どうして、あなたの後ろから、もっと大きな
死の宣告者の気配がするんですか! 答えて!!!」

「……………」

ヒュプノスは黙り込んでしまった。

しかし、霧の向こうにある後ろをちらりと見て、そこを覆い隠すよ
うに翼を広げた。

「ここから先は行かせない。優希の邪魔はさせない! 僕が…
死の宣告者なんだ…! 優希じゃない!!!」

暗に優希が死の宣告者なのだと思っているようなヒュプノスの言
動に、交戦すら辞さないという先程とは違うはつきりとした敵意を出
し始めたことに皆が確信を持つてしまう。

そして、病院を抜け出してきたのかそもそも最初から病院に行くこ
と自体が嘘だったのか、湊たちには分からなかったがなにかよからぬ
事が起きてしまうのではないかという不安も浮かんできた。

「優希が言ってたんだ… 今日さえ乗り切れればなんとかなる”って
…! だから、僕の役目は…ここで…お前たちの足止めをすることな
んだ…! ああもう、帰れ! 帰ってよ! 帰れ! これ以上優希の
邪魔をしないでよ!!!」

半狂乱になり、頭を抱え出したヒュプノスの様子がおかしい。

先程までの冷静な姿とは違い、駄々っ子のようなその様子に全員が
身構える。

しかし、

「ヒュプノス、もう良い。…もういいんだ」

声が、響いた。

静かで落ち着いていて、しかし聞き慣れた声。

霧の向こうから、人影がこちらへと歩み寄ってくるのがわかる。

ピタリ、とヒュプノスが動きを止める。そして、油の切れたブリキのおもちやのようにゆっくりと後ろを振り向く。

「どう、して…戻ってきちゃったの…？」

ヒュプノスの声は震え、今にも泣きそうな声だった。

「…別の方法に変えるのも良いかな、と思っただけだよ」

「お兄ちゃん…」

「優希…っ！」

そうして霧の中から姿を現したのは、そこにいないはずの優希だった。その手には、見慣れない細長い槍がある。

「さて、アイギスの言う通り、俺が本当の死の宣告者だよ。俺はね、皆をだましてたんだ。だって、ちゃんと滅びは迎えなきゃいけないだろ？ けど皆はいずれ知って邪魔しに来るだろうし隠してたんだよ。ここでヒュプノスに足止めをしてもらっている間に、俺がニユクスを目覚めさせる。そうすれば全部終わるし俺はお役御免だというわけだ。やっつと、解放される」

「な、なにを…そんな…」

つらつらと述べられた言葉が耳に入ってこない。

優希は一体何を言っているんだ、と全員が理解を拒む。

湊は湊で混乱していた。あれだけ救うだのなんだの言っていた兄が、ここにきてそれらが全てブラフだと言い始めたのだ。

ここに来て全てを捨てるような発言をする意味が分からない。契約云々の話も、カダスで見た事も嘘だったというのか。すべて、演技だったというのか。

「ああ、なんだか信じられないって顔してるね。湊や奏子を救うなんて嘘だよ。だって、俺はみんなを一度殺してるんだから」

ぞわ、と全員の肌が粟立つ。

黒い霧が集まり、優希の身体を覆う。そして、霧散した後にいたの

は。

「お前は…っ！」

暗い色のローブを着た、ニユクス教の教主だった。

「驚いた？ ぜんぶ、俺だったんだよ。この前だっけ？ 伊織が新しいペルソナに目覚めたとき、ストレガとみんなを一度殺したのは俺。あの倉橋とか言う邪魔なじいさんを悪魔にさせてみんなを殺そうとしたけど、まったく役に立たなかったから殺したのも俺。集団自殺未遂を起こさせてるのも、俺だよ。だって、みんな邪魔だし」

ニユクス教の教主の姿のまま、優希は嗤う。

「そ、そんなの…嘘だよ…嘘だつて言つてよお兄ちゃん！」

「——くどいなあ。信じたくないなら信じなくてもいいけどさあ、そんなヤワな思考してると死ぬよ」

優希は奏子の言葉を一蹴した。つまらない、と言いたげなその冷たい声はこれまで決して奏子に向けられることはなかったもので、到底家族に向けるようなものではないということだけが全員が理解できることだった。

「…させません！」

アイギスが飛びかかる。

しかし優希は身動きひとつとる事すらしない。

「……相変わらずだよねアイギスつてさ。お前みたいに一人で突っ走る、学習しないガラクタに誰かを守れるワケなんてないだろ。ヒュ^{残り}プ^{カス}ノスにすら敵わなかったのに死^本の宣告者^物に敵うとも思いうわけ？」

影が泡立ち、そこから触手が伸びてアイギスを切りつける。

切れ味の良いらしいそれがアイギスの鋼の身体を傷つけるのは容易なことだった。

何の声も発することなくアイギスは吹き飛ばされ、再び優希やヒュプノスとの距離を離される。

「センパイ、どうしてこんなことするんすか!? アイギスもオレたちも、仲間じゃなかったのかよ!!!」

容赦なくアイギスを傷つけた優希に順平が思わず叫ぶも、その言葉

がなにも響いていないのか、はあ、という溜息とともに優希の姿がローブ姿から元の制服に戻る。そしてガシガシと己の頭を乱暴に掻いた。

「あーほんと、バカみたいじゃん。みんな仲間だの絆だのぐちぐちぐちぐち言うんだからさあ！ 聞き飽きたんだけどそういうの。なんかもっと別の言葉を持ってきてくんない？ ああ、ここで今すぐ死んでくれるってんなら歓迎するけど。俺はやさしいからねー、なるべく痛くない方法で殺してやるよ」

ヒマそうに優希が槍を片手でくるくると回す。

その目は、月のように黄金に輝いていた。

「三上！ 戦うしかないのか…？ きみは…私のことを好きだと言ってくれていたのも嘘だったというのか!？」

「俺はみんなの——生きとし生けるもの全ての敵だ。会話とか必要ある？ 相互理解なんて、する必要なくない？ 俺はみんなを殺すし、みんなは死にたくない。それでいいじゃん。それとも、悲しい過去があるからどうしよもなくとか和解とかそういうのを望んでる？」

「無理無理」と一同を嘲笑った優希の表情はカダスで見たニヤルラトホテプの笑みそのものだ。

話がかみ合っていない。話の流れを完全に優希に持っていていかれている。

「埒が明かない。面倒だからみんなこっちにひきずりこめば少しは危機感出るかな？ はは、俺がヒトじゃないってこと、分かってもらわなきゃだしね」

周りが黒い泥で覆われ、景色が塗り替わる。

濃霧のムーンライトブリッジ上にいたはずが、一瞬で別の場所へと移動させられていた。

一面真っ暗な水面に、大きく光る満月。この光景に皆は見覚えがあった。

「……は……」

「カダス」へようこそ。それと、改めて自己紹介をしよう。俺の名は、ニヤルラトホテプ。貴様ら人類が望んだ滅びの先触れだ」

「!!?」

優希は自らのことをニャルラトホテプと名乗った。これはどういうことなのか。

カダスで幾月だと名乗ったニャルラトホテプと優希は違うのではないかと誰もがそう思った瞬間、不機嫌そうに優希は顔をしかめた。「いま別のやつのことを思い浮かべただろ。幾月だったアレもニャルラトホテプさ。そして俺もまた、ニャルラトホテプだ。千の貌を持つ、ヒトのネガティブマインドという点では何ら変わらない。ヒトが持つ負の感情の、数多の側面だというだけ。ま、ヒトじゃない事だけは確かだよ」

また、くるりと優希は槍を回した。酷く楽しそうに。唄うように。そして歯をむき出しにして笑う。

「ほら、ここから出て、生きなければ俺を殺すしかないんだよ。世界を救うんだろ？ 生きたいんだろ？ なら、やれよ。やって見せろよペルソナ使いどもツ!!! お前らの言う、絆の力っていう反吐が出るほどくだらない、役に立たないもので滅びを克服できるのか見せつけてみる!!!」

最終的には目を見開き、吠えるように優希は笑みを消して叫んだ。その鬼気迫る表情は本気で特別課外活動部と戦うつもりなのだ。突きつけるように。

「っ、僕は…僕らは…!」

選択を迫られる。殺すか、殺さないか。

湊と奏子はただ下を向いて、武器を構えることが出来なかった。

「優希を殺す」

「優希を殺さない」

「俺の勝ちだ」(12/2〜3/5)

▶「優希を殺す」

「優希を殺さない」

長くも短い思考の果てに湊は、ゆっくりと剣を構えた。

「湊…!？」

「有里、正気か!？」

アレは兄の見た目をした別のなにかになってしまったのだと感じた。でなければ奏子の言葉を切り捨てたり、アイギスを容赦なく攻撃してガラクタ呼びわりしないだろう。

以前の兄が、絶対にしない言葉の刃を突きつけるようなそれは、中身ごとすげ替えられているようで。

それにどのみち、やらなければやられてしまう。そんな直感めいたものを湊は覚えていた。

「や、やめてよ湊！ お兄ちゃんなんだよ！ 殺しちやダメだよ！ は、話し合えば…きつと…きつとわかってくれるよ…!？」

奏子が泣きそうな顔で片腕にしがみつくも、湊は渋い顔で優希を見つめることしか出来ない。

対話が出来ればやっている。しかし湊は約束したのだ。『優希が優希でなくなってしまう時は殺す』と。

あの時は兄がまだ兄のままならなんとしてでも生かして連れて帰るつもりでいた。

だが、目の前にいる存在は兄ではない。兄を塗り潰したなにかだと湊は判断した。

「そうだ湊…それでいい。それでこそだ！ 俺を失望させるな！ 奏子や皆はくだらない言葉のやり取りなど捨ててしまえ！ ほら、どうしたんだ。さっさと武器構えるなりなんなりしないとさあ…死んじやうけどいいの?」

優希は壊れたように啜う。

そしてまたくるりと槍を回した。

「ひとつだけ、聞かせて欲しい。優希が、僕らを救うって言ったのは嘘だったの？」

そう問うて睨みつける。

対する優希は湊の質問を鼻で笑った。

「ああ、そうだよ。嘘だ。ループしていたのは事実だけど、それもこれも全てお前たちみたいなのを呼ばない為の思考実験さ！ 世界を滅ぼしたいのに邪魔者がいたら滅ぼせないからな！ 今回はそういうことが起こる前に滅ぼしてやろうと思っていたのに…！ アイギス、…お前が気がつくから俺がわざわざ行動に移さなきゃいけないんじゃないか！ 真実になんて辿り着かず、目と耳を塞いで愚かな安寧に身を任せていればいいものを！」

忌々しい、と優希は表情を歪める。

「奏子、湊。お前たちふたりの兄をやっていたのも、優しくしていたのも、本当の父さんと母さんを事故の時に殺したのも、全部お前たちを孤立させて近くで見張るためだよ。だって、俺以外の誰かと仲が良いのは困るし嫌われてちや意味が無いからな。そして、機が熟せばなんの疑問も持たれずに俺はお前らふたりを排除できる…そういう算段だったのに」

「ど、うして…」

明確な殺意を向けられた奏子がついに崩れ落ちた。

湊は泣いてしまいました。叫んでしまいました。これまでもの全てが嘘偽りだと突きつけられ、奏子の心を深く傷つけた、兄の形をしたなにかに。

「そんな言い方…無いでしょ！ アンタのこと、信用してた私が馬鹿だった…！ やっぱみんなを騙してたんだ…！ 桐条先輩のことも…奏子ちゃんの事も弄んで…許せない…！」

ゆかりが怒りに任せ、弓を構えた。

信じようと思っていたところに、突然の裏切り。そして衝撃のカミングアウトにゆかりは激情に支配される。

「…天田くんのお母さんが死んだ時のことは覚えてないって言ったけど、あれも嘘。俺は、知っていてわざと荒垣くんのペルソナを暴走

させ、きみのお母さんを殺したんだ…だってそうしなきゃきみはペルソナに目覚めない！ 役者は揃わない！ だから俺は力を使った！
ごめんね、恨むなら素質を持った自分を恨んでね！ なぁーんてさ！
あははははは！

「な、なに言ってるんですか…！ そんなの、嘘だって言ってくださいよ！」

「てめえ…！ 自分で何を言ってるのか分かってんのか!? あの事件が全部てめえのせいだと…！」

戸惑う天田と訳が分からないといったげな荒垣を、優希はまた鼻で笑う。これだから無知な人間は困ると。

「ニヤルラトホテプはネガティブマインドの化身であり、シャドウそのものだ。そんな俺が、ペルソナに干渉出来ないはずがないだろう？

精神を暴走させるなんてお手の物だ。それとも今、もう一度味あわせてやろうか？ はは、名案だ！ それもいいかもしれないな！ 仲間同士薄汚く殺し合えばいい！」

「グルル…ワンワン！」

ずっと騙していた。

そう捉えるには十分な知識と言葉に、荒垣と天田は対話で何とかしようという心が折れてしまった。

それぞれの武器を構える。コロマルはふたりを傷つけた優希に怒りを覚えたのか、唸り、吠える。

「チドリ達のこと…オレらと同じく騙してたって言うのかよ。辛い思いをしたもの全部嘘だって言うのかよ!?!」

「ン…：タカヤたちに接触したのは遊びさ。無理やりペルソナに目覚めさせられた人間がどうなるかのデータを幾月とは別にとる必要があったからね！ それに、彼らに接触して接点を持っていれば後々利用出来る。『かつて』荒垣くんを殺した時のようにね。邪魔になればもちろん彼らも消す予定だったよ」

「テメー！」

へらり、と笑った優希に順平が食ってかかるも素知らぬ顔だ。

己の手のひらで踊らされていた有象無象など意に介さないとでも

言うかのように。

「さて、真田くんに関連することは……そうだなあ、妹さん、美紀ちゃんだっけ？」

「なぜ美紀のことを……！」

唐突に、優希の口から己の妹の名が出てきたことに明彦は動揺した。

明彦自身から妹のことについて話したことも無ければ荒垣から聞いたということもないだろう。だというのに優希はなんでも知ってますと言わんばかりに喋り出す。

「あの子、可愛かったよねえ。真田くんに似てなくて。まあ、ニャルラト^俺ホテプの呼び声に当てられた精神異常者にお前たちの住んでる孤児院が放火されちゃったせいで死んじゃったけど。もしかしたら、救えた道もあったかもしれないねえ！ でもやんないよ。俺にはそんな義務ないもんね。あーあ、でも可哀想だ。美紀ちゃん、たすけて、熱いよ、苦しいよって泣きながら死んじゃったんだからさ！」

「それ以上言うなッ！ 無理だと言うのなら俺がその口をいまずぐ黙らせてやる……！」

「やだなあそんなに怒らないでよ。でも良いね。その怒りが俺の力になるんだ……もつと怒って。俺にその憎悪を向けてくれよ。そうすればお前たちを殺しやすくなるんだからさ」

優希は残った美鶴を見やった。

あと戦意が無いのはそこでグズグズと泣いている奏子と、美鶴だけだったからだ。

「美鶴さんにはとっておきの秘密を教えてあげよう。……千鶴さんのことだ。幾月じゃなく、彼女は、俺が殺したんだよ」

「……！」

優希の言葉にどういう事だと美鶴は驚きの表情を見せる。その事に気分を良くしたらしい優希はふふ、と得意げに笑った。が、すぐに目を逸らしバツが悪そうな顔をする。

「……まあ……その事実だけで十分だよ。彼女は俺が殺した。俺のせ

いで死んだんだ。というか、あー…なんか材料ないからつまんないなこれ。とっておきでもなんでもないや。使い古されたものばっかだ。うん、そう、美鶴さんに近づいたのも湊や奏子と同じ理由さ。騙して、いつか排除するため。義務でタルタロスを消そうなんてされても困るし。それだけだよ。好意なんてこれっぽっちもない。ゲーム作業だつたんだよ、これは」

「!!」

美鶴はあんなに紡いできた事が全てが作業だと言われたことに酷くショックを受け言葉がでなかった。

好きだと言ってくれていたのも、好意があるからこそ突き放していたのも、全てが嘘だったと。

なら、目の前にいる『これ』はなんだ？ そう、美鶴は思った。好いていた人間でないのなら、目の前のこれはなんなんだと。

美鶴は優希が得体の知れない化け物のように思えた。なぜか、そう思えてしまった。

人の隠していることを勝手に暴き、人の心と命を弄ぶ。思い通りにいかないからと悪戯に時を巻き戻す。化け物——否、悪魔と言わずとしてなんになるのか。

もしかして、本当の優希はどこかにいて、これは偽物で、あの幾月に化けていたニヤルラトホテプなのではないか？ と疑う。

「…そういう事にしといて。その方が俺も楽だしきみも楽だろう？」

思考を読んだのか、優希は美鶴に対しそう言った。目は逸らされ、表情はひどくつまらなさそうだ。

その事に美鶴は僅かな違和感を感じた。「俺も楽」というのはどういうことなのだろうか。目の前にいる優希の“本当の”目的は一体何なのか。

その疑問のせいで美鶴は己の武器であるレイピアを手に取る事が出来なかった。

「やらないの？…気にせず、やればいいんだ。怒って、泣いて、失望して、恨めばいい。その方がずっとやりやすい」

小さく息を吐いた優希は片手で槍を構える。天田のものとは違う

その構え方は手慣れているようにもみえた。

そして、戦いが始まる。

だが、やはり何か変だ、と武器を手に取らなかつた美鶴と奏子は気がつく。妙に、皆が昂っているような気がするのだ。

まるで誰かにそう操作されているかのようには、最初から交戦する意志を見せていた湊を除く、他の皆が容赦なく次々に交戦の意志を見せている。

突然の優希の裏切りや、傷口を抉るような言葉の羅列もあるのかもしれないが、普段なら冷静になる所を冷静にならずに即座に信じきってしまっている。

(もしかして…)

先程、優希は「精神を暴走させるなどお手の物」と言っていた。

僅かだがより積極的に戦うように意志を操っているのだとしたら？

だが、もしそうだとしてもその理由がわからない。その意図が何も見えない。

注意力を散漫にさせ、殺しやすくするため？

(いや…)

違う気がした。

ただ殺すためならデヴァ・マラーやマザーハーロットを呼び出し、その圧倒的な力を持ってさっさと殺した方が楽だろう。

なのにそれをしない。なにか焦っている様子の優希の真意は美鶴には計り知れなかった。

「優希さん…ごめんなさい」

アイギスがその腕の銃で狙いながらも謝って来る。なんて場違いなんだ、と優希は顔をしかめた。

そんな辛そうな顔をするくらいなら謝らなければいいのに。悩むくらいなら戦わなければいいのに。どちらかにすればいいのに。そう思いながら銃弾を槍で弾く。

「…どうしてお前が謝るんだ？ 俺は死の宣告者で、アイギスの敵だ。躊躇うことはひとつもないだろう。だから、やればいい。その代

わり俺も遠慮なんかしないからさあ！」

おねがいだから、躊躇わないでくれ。気に病まないでくれ。やるならひと思いにしてくれ。

どうせ消えてしまうとしても、そんな顔は見たくもない。同情しないでくれ。哀れまないでくれ。

これが自分に出来る精一杯なのだから、そんな、可哀想なものを見るような目で見られると、

「……ああああ!!! ほんつと、苛々するなあ……！」

苛立つ。前髪をクシヤリとかき乱して歯ぎしりをする。

お門違いだとわかっているが、アイギスのその煮え切らない態度が癪に障った。

命令されているのなら、そちらを優先するのなら、こちらを敵だと認識しているのなら、得てしまった感情すらも切り捨ててくれ。優希は睨みつけながら、アイギスに向かって蹴りを放つ。

しかしそれも腕で受け止められてしまったので後ろへと後退する。与えられたものヘルソナなんて使う余裕はない。今それらを使うとこの内で暴れ狂う殺戮衝動がいつ暴走するかわからない。抑えているだけで神経は昂り、何もかもが過敏に感じ取れるようになってしまっているのに、それ以上の制御ができるかと言われれば優希には苦しいものがあった。

天田のヘルソナであるカーラ・ネミの「ハマオン」を避け、槍の持ち手を叩きつけて意識を刈り取る。そのまま湊の呼び出した「アタバク」の「アカシヤアーツ」を槍で受け流し、三步、横に飛ぶ。

懐に潜り込んで拳を振るってきた明彦の腕を槍で叩き落とし、蹴り飛ばして別の方向から迫ってきた荒垣のシグルドの「グラム」をその身体で受けとめる。

「ちっ……！」

よろめいたその隙をついたのか、ゆかりのイシスが放った「ガルダイン」が身体を切りつけつつ足元を掬ってくる。

強かに水面に身体を打ち付けるも、優希は即座に起き上って距離を放そうとした。

瞬間、コロマルのケルベロスと順平のトリスメギストスによるふたつの【アギダイン】が襲い掛かり、水面にぶつかり爆発する。

衝撃、熱風。それらすべてが優希を襲う。

撒き上がる泥と水蒸気爆発のように膨らんだ煙で視界が奪われ、同時にチリチリと己を焼き焦がす炎を優希は睨み付ける。邪魔くさい。

「ウソだろ、こんだけやってもまだ起き上がってくんのかよ…」

順平は、わけがわからない、と言いたげにそう呟いた。

いくら相手が敵対しているとはいえ、先輩で元は仲間だ。ヒトであるなら、これだけの猛攻を喰らって立ち上がれるはずがない。コロマルとふたりで放った【Wアギダイン】は順平にとって行動不能にさせるには十分なものだというのに、平然とそこに立っている。

恐怖を感じないと言えば、嘘になる。本当にヒトで無くなってしまうのか、と順平は僅かに眉を顰めた。

「ぐ……うっ……」

短く息を吐いて、「こんな隙だらけの攻撃、反撃しようと思えばいくらでもできるんだ」と、そう優希は内心で言い訳をした。

あえて、しなかった。その身で受けた。

無抵抗は怪しまれる。かと言って圧勝は目的ではない。だから、その後も優希は適度にメンバーを倒しつつ攻撃を受け続けた。

槍——ロンギヌスで刺さないように。傷つけないように、なるべく峰打ちで意識を刈り取るか全身を強かに打ちつければ起き上がらなくなるだろう、と。

ロンギヌスには2種類の力があるが、誰かに致命傷を与えることなく手っ取り早く死ななければいけない今、それを使おうとは思わなかった。むしろ、邪魔でさえある。

「ぎ、っぼっ……く、そ…」

血を吐く。攻撃からではない。内的要因だ。

優希はそろそろ身体の方が限界らしいと悟る。無理やり自分のものでは無い力を使ったこともあるのだろうが、この調子では抑えが効かなくなるのもすぐだろう。

はやく、しなれば。早く倒されなければと焦る。

視界が一瞬暗くなり、その拍子によるめいて何とか足を踏ん張り、矛先を変える。

この際、もう手段を選んでられない。

蹲ったまま、ゆらゆらとこちらを見る奏子に視線を向ける。見せつけるように。分からせるように。

「！」

終わらせるには、アイギスカ湊を本気にさせるしかない。

一步、二歩、三歩と一気に飛び、そのままの勢いで槍の穂先を奏子に向ける。

奏子は信じられないと言わんばかりの絶望したような表情をして、顔を背け両手を前にして身構える。

「え……っ、おにいちゃ……やつ……」

「てめえ！ 何をしようとしてんのかわかってんのか!？」

先ほど強かに全身を打ちつけ倒れ伏し、動けない荒垣の叫び声が優希には聞こえた。

当てない。殺さない。絶対にぶつけない。地面にあてるつもりで振りかぶる。

けれど、直前までは本気だと思い込ませる。

「奏子さんッ!!!」

影が割り込む。

ずぶり、となにかが胸を貫いた。

目を見開いて、力の抜けた手からぱしやりと水音を立てて槍が落ちる。

「……あ……」

見れば、湊がその手に持った剣で己を貫いていた。長い前髪でその顔は覆い隠されていて、表情はわからない。

痛い。熱い。寒い。気持ち悪い。僅かに残った様々な感覚が危険信号を送るも、それよりも優希の思考は歓喜が勝った。やり方は最悪だがどうせみんな忘れてしまうんだから問題ないだろうと見なかったふりをして口角を上げた。

「あ……は……は……おめでどう！ 人類は無事俺という滅びに打ち

勝ったわけだ！…ああ、負けだよ。認めるよ。滅びは人類に負け、退けられた”。だが俺は俺の勝負に勝ったぞ！ あはははははは！ やった！ やってやった！ げほっ…ざまあみやがれクソツタレども！」

血反吐を吐きながら凶暴に優希は笑った。負け惜しみのような勝利宣言はいつそ、哀れみすら覚える。

不意に、湊は抱きしめられた。手に持った剣により深く、肉が食い込む感覚がして顔を顰める。

すわ自爆でもして湊を巻き込むのかと湊を含む全員が身構える。しかし、

「これでいい…湊は、正しいことをしたんだ。だから、もう忘れていい」

発されたのは掠れた、湊にしか聞こえないちいさな声だった。咄嗟に顔を見る。

「——っ！」

優希は泣きそうな、酷く優しい顔をしていた。先程までの嘲笑うような笑い方ではない。いつも見るあの困った笑みに近いそれだ。

そこで、湊は急に目が醒めたようにある『間違い』に気がついてしまった。兄の意図に気がついてしまった。

最初から優希は正気で、どこも狂ってなどおらず、すべて自分を殺してもらったためだけに動いていたのだと。

しかしもう遅い。なにもかもが遅すぎた。全て兄の手のひらの上だったのだ。

「ニャルラトホテプは…お前ら生きとし生けるものの背後に常についてまわる…一度乗り越えたとしても何度でもお前たち人間の前に現れるだろう！ ゆめゆめその事を忘れるな…！ はあ…はあ…ぐ、う…常に…抗い続けてみせろ…！」

もうひとつ、負け惜しみのようなものを叫んだ優希の抱きしめられていた手が離れた。突き放すように湊を押し、もう一度血を吐いておぼつかない足取りで後ろへと距離を離れたあとにふらりと横に傾き刺さった剣ごと倒れ込む。

「……………」

なにかを小さく呟いた優希は虚ろな目で奏子と湊に縋る様に手を伸ばそうとして、しかしそれが出来ずに眠るように目を閉じ、そして息をとめた。

その瞬間、ズブズブと泥にまみれるように水面に沈んでいく。同時に泥へと溶けていつているのか、ぐずぐずと身体は崩れ、分解されていた。

微かに動いた口の形から、呟こうとした言葉がなにか気がついてしまった湊は己が止めを刺したという事実を放り捨て、咄嗟に駆け寄る。

「だめ、だっ！ 消えちゃダメだ！ どうして何も僕らに言ってくれなかったんだ！ 一人勝ちして消えるなんて、そんなの、僕は認めない！ 優希が…兄さんが消えて、それで幸せになんかなれるはずないだろ！」

溶けていくその身体を、必死に湊は掬いあげようとした。

バシャバシャと黒い泥を掬うも、何も掴めない。そこに優希はもう居ない。一瞬で溶かされ、無かったことになってしまったのだ。

「あ…ああ、ああああ…！」

ぼろぼろと湊は蹲って涙を流した。

兄だったものがあつた場所に。全て溶けて消えてしまった水面に。突然叫び泣き出した湊の様子に、奏子も同じことに気がついてしまった。

察してしまった。

兄がわざとこうなるように仕向けたのだと。湊と奏子を救うために、自ら消えることを選んだのだと。

しかしどこまでが本場で、どこからが嘘か奏子には分からなかった。

2010年 3月5日（金） 昼

月光館学園・高等部

今日は3年生である明彦、美鶴の卒業式があった。
当然、奏子たちもそれを見送るために式に出ていた。
「今はその、帰り道だ。」

荒垣は休学していたので来年度から通うことになっており、今年卒業ではないため卒業式には来ていない。一応、照れたように「馳走くらは用意しといてやるよ」と言っていたので帰れば豪華な食事が待っていることだろう。

「やー、立派でしたなあ桐条先輩のスピーチ！ オレっち、感動して涙が…ヨヨヨ…」

「うん。なんか凄かったよね！ いつもよりビシツとした感じがする…！」

「ほんと、カッコよかったよね。私、ドキツとしちゃった」

湊はそんな3人の話を聴きながら、イヤホンから流れる音楽を聴いていた。

この曲は自分の好みのタイプの曲ではないのにどうしてプレーヤーに入っているのか不思議だったがクラスメイトの友近か誰かから借りたCDのものだろうと適当にアタリをつけて聞き流す。

「そういうや、こんな今もさ、オレらが守ったものなんだよな…」

「…うん。ゆかりちゃんのお父さんのビデオに残ってたとおおり、ほんとに12の大型シャドウを倒せるなんて思わなかったけど…」

「私たち、やれたんだよね」

風花の言う通り、12の大型シャドウを倒した特別課外活動部は無事滅びを退けた。

12体の大型シャドウを倒した時点で全てが終わり、タルタロスと影時間は消え、それによりもたらされる滅びも同時に消えたのだという。春を迎えることは無いと告げられていたため、今あるこの時間は自分たちが勝ち取ったものとも言えるのだ。

(…本当に?)

湊はその話をする度になにか、違和感があった。いまいち実感が無いのだ。

喉に小骨がひっかかったままのような、頭に霧がかかったような感覚

に襲われるのだ。自分たちが影時間に戦い、12の大型シャドウを倒したことは間違いない。だがなにか、なにか違う気がしたのだ。ちやり、とバッグにつけてある青い石のストラップが揺れる。これも誰から貰ったものなのか、湊は思い出せない。

奏子とお揃いで、ずっと肌身離さず大事にしていることから事故で亡くなった実の両親から貰ったものだったかと思うも、違和感が拭えない。

「もう、先に行くなんて酷いよ！ 少しくらい、待っていてもいいじゃないか！」

「あ、綾時くん！ ごめんごめん！ でも、アイギスと一緒にだし良かったんじゃない？」

「よくありません。綾時さんは奏子さんたちを探すと言って歩いていましたが、全て見当違いの方向で…」

後ろから走ってきた綾時とアイギスが合流する。アイギスは見当違いの方向へと行こうとする綾時を引っ張るのに疲れたのか、微妙に怒っているようだった。

「それより！ 卒業パーティーだぜ卒業パーティー！ 盛大に食うぜー！」

「ちよつと、主役はあくまで先輩たちだからね！」

そんな和やかな会話を聞きながらも、湊は例えようのない違和感に襲われ続けていた。

誰か、足りない気がする。巖戸台分寮に居て今日卒業するはずだった生徒はもうひとり居なかっただろうか。居るはずがないのに。

そんな違和感がずっと湊を責め続けていた。

「忘れたままでこのまま生きるんですか?」(3/5、

???)

2010年3月5日(金) 昼

巖戸台分寮

「おかえりなさい」

自室へと帰った湊を待ち受けていたのは、ベッドに腰掛ける見知らぬ少女だった。

赤い蝶のようなバイザーに、暗い藍色の髪。そしてアイギスとは違う漆黒のボディ。

機械の乙女であることは確かだが、そんな存在を湊は見たことがなかった。

「誰?」

「私はメテイス。あなたが覚えている違和感の正体。それを私は知っています」

端的に自己紹介をした少女——メテイスは不機嫌そうな表情を変えずにそう告げた。

そして、立ち上がる。

「来て」

有無を言わずに部屋を出て、向かったのはすぐそこ。

向かいにある使われていない空き部屋だった。

メテイスは懐からひとつ目のヒトデのようなキャラクター——デカラビアのストラップがついた鍵を取り出し、それを回した。

鍵は本当にその部屋の鍵だったらしくすんなりと鍵穴に入り、部屋のロックを開けた。

メテイスがなんの躊躇もなくそのドアのノブをひねり、開ける。

「!?!」

湊は驚いた。空き部屋なのだから何も無い、と言われていたはずの部屋が、空き部屋ではなく生活感の溢れる誰かの部屋だったのだから。

つい先程まで誰かが居たのではないかと思わせるほどの生活感に、空き部屋だという情報が噛み合わず混乱する。

『……見るな。見ないで、すべて忘れて、そのまま』

「……彼の目論見は外れて、完全な消去はされなかった。ぜんぶなかったことにはならなかった。それは、忘れることを選んだ奏子さんとは違って、あなたは何かあっても覚えておくことを選択したからです」

懐かしい匂いがした。聞いたことのあるような声があった。

しかし湊はメティスの言っていることが分からなかった。

自分は何を忘れている？ なにを、無かったことにしようとした？

いまのは、誰の声だ？ 疑問が次々と浮かんで消える。

「時間が無いから、さっさと思い出してください。：違和感を抱えたままでもいいのなら、私は止めませんけど。あなた達2人とも、彼と同じくやつらと取引をしていたことも、忘れたままでこのまま生きるんですか？」

「それは一体……」

わからない。目の前の少女の言っていることが。

自分と奏子がだれと取引をしたというのか。なにを忘れていているというのか。

「彼だけじゃなく、あなたたちふたりも勝負の主役だったんですよ。今回、彼の勝利条件は満たされた。でもあなたたちは負けてしまった。3人で明日を迎えなければ意味が無いんです。誰かひとりでも欠けていては意味が無いんです。：私の言っていること、わかります？」

「わからない」

首を横に振る。

なにもわからない。覚えがない。メティスの言う「彼」がこの部屋の主で、自分たちに関係があることだけはわかる。

だが、ゲームだの負けただのということが突拍子も無さすぎて何も思い出せないのだ。

ふ、とベッドを見れば誰かが寝ている。寝ているのだが、その顔に

白い布が被せられている。まるで、死体にそうするように。

「ようやく気がついたんですか。これは彼が己の存在を賭けて逃がし、私が掬いあげることの出来た彼のほんの一欠片です。そしてあなたたちふたりのもっている、触媒を通して辛うじて形になったものでもあります。この部屋だって、本当は酷く不安定で、アカシツクレコード”による世界の修正の波間に消えてしまいそうなのをなんとか安定化させているんです。要するに、縛りつけて無理やり認知させてるんですよ。あれだけ消えたいと願っていた彼の残滓を」

メテイスは自嘲気味に笑った。その笑い方が誰かに似ているようで湊はやはり思い出せない。

「やっぱり、強烈な記憶の修正とプロテクトがかかっている？　…彼も、面倒なことをしますね……よりによって湊さんにこんな呪いじみた事をしますか。それとも、覚えていられるのが怖かった…？」

思案気味のメテイスは湊から目を離している。

対する湊はベッドに静かに横たわる誰かから目を離せない。息をしていないのか、その胸は動いていない。身動きすらしない。

なんとなく、気になり顔にかかっている白い布をとろうとして躊躇する。

伸ばしたはいいものの、布に触れる前に手が動かなくなるのだ。

「めくって下さい」

『お願いだ。見ないで。思い出さないでくれ』

メテイスが催促する。

手は、動かない。これを見てはいけないと本能が拒絶する。見るなと拒絶する誰かの声がする。

「あなたが見ないといけないんです！あなたの手で、それが誰なのか、顔を確認してください。……お願い、ですから」

懇願するメテイスの声は泣きそうなくらいに震えていた。

それでも手は、動かない。

「みなと…？」

不意に、後ろから声が聞こえてきた。

振り向けば、奏子が部屋へと入ってきていて、混乱するようにベッ

ドの上の誰かとメテイスを見比べている。

「……」

何かを覚悟したようなメテイスがゆっくりとドアへと向かい、バタンとその扉を閉じた。

「奏子さんまで来てしまったのなら、もう後戻りはできません。揃ってしまったのならもう見るしか、無いんです」

「あなたは誰?! 　そこで寝てるのは……動か、ないのは……あ……あ……あ……つ、やだ……思い出したくない!」

ベッドの上の誰かを見た奏子は取り乱し頭を抱える。そして、嫌だというかのように頭を振った。

「私はメテイス。アイギスの妹です。……奏子さん、落ち着いて。大丈夫」

優しくメテイスは奏子を抱きしめ、落ち着かせるように背中をゆっくりと叩く。

「奏子さんは少なからず彼の影響を受けています。だからこそ、本来見えない感情や残留思念といったものを捉えやすくなっている。いま、取り乱しているのも感じやすいからこそです。いつそ記憶を封じて思い出を奪ってしまうなら、そこも持つて行ってしまえばよかったのに……」

メテイスが怒ったように低い声で誰かに——否、ベッドの上の人物に文句を吐いた。どうやら、メテイスはかなりご立腹らしい。

「何度も言うように、時間がもう無いんです。確かにあなたたちふたりと世界は救われたかもしれませんが。彼の望み通り、このままでもいいかもしれません。けれど、それではダメなんです。また同じことの繰り返しになってしまうんです。だから、」

湊の手が、ようやく動いた。

同じことの繰り返し。その言葉に既視感があつたからだ。

違和感が最大にまで膨らみ、止められなくなる。

ガンガンと警鐘を鳴らす頭を無視して、湊はその白い布を剥ぎ取つた。己によく似た、血の気の無い白い顔がそこにはあつた。

知っている。湊はこの顔を知っている。

「!!」

瞬間、濁流のように記憶が流れ込み、何度も何度もその死に顔を見るはめになった。ただし、シチュエーションは全て別だ。

ぐるぐると頭をかき混ぜられるような感覚と、頭にかかっていたモヤが晴れ、どこかスつとしたような感覚を覚えて湊は泣き笑いのような表情を浮かべた。浮かんだのは、怒り。壮絶な怒りだ。

「…全て、思い出せましたか?」

数十秒、それとも数分か。

しばらく黙っていたメテイスは奏子を抱きしめながら湊へと問いかける。

それに頷いて湊は小さく口を開いた。

「優希…」

ベッドで寝ていたのは、仲間や自分たちに何も伝えず嘘を吐き、勝手に消えてしまったひと。薄情で、けれど誰よりも自分たちの幸せを願った兄だと思い出した。

「あ……あ……ああつ……嘘つき……お兄ちゃんの嘘つき! ばかあ! うああああああああああん!!」

奏子も顔を直視してしまったのか、大きく目を見開いたあとに息をひゅ、と吸って叫び、大粒の涙を流しながらしゃくりあげている。

それを見たメテイスはバツが悪そうに目を逸らした。

「……彼は、わざとニヤルラトホテプ^敵を演じてた。だから色んなことを知っていたし、語れた。本当はガラじゃないのに。確かに彼は、ニヤルラトホテプ^ドでしかたけど……それは身体を動かしていた力がそれ由来なだけで、本質は別だったのに。当てつけ、だったのかな…」

「いつから、優希は…」

「人で無くなってしまったのか、ですか? 身体で言えば最初から。彼は人ではありませんでした。……生まれた時から、あなたたちのお兄さんは……有里渚という人間は死んでいたんです。それを、ニヤルラトホテプが目をつけた」

メテイスは語る。

「手始めに、ニヤルラトホテプはあなたたちのおじいさんである倉橋

黄盛を唆しました。そして、反魂の術を使わせ、それに乗じて赤子の身体を再び動かすために己の化身へと変えさせました。…くだらない実験のために。けれど、魂だけはあいつでもどうしようもなく、本来の優希さんの——…渚さんの欠けてしまった不完全な魂ともうひとりの砕けた魂を混沌で繋ぐことによつてひとつの魂として植え付けたんです。そうしないと身体はすぐに死んでしまうから」

湊と奏子は信じられなかった。

兄が、最初から人ではなく、誰かとの混じり物だと言うことに。

しかし綾時だつて元はと言えばシャドウだ。どうして、兄だけが『そうじゃない』だなんて言えるのか。

湊はいまさらになつてそのことに気がつき、顔を顰めた。

「その後は——…ふたりの知っている通り。優希さんはデスの器にされて、けれど親和性がありすぎた。同じ全人類のシャドウという存在だったからこそ、デスという性質を受け入れられた。代わりにその性質そのものが器を侵食してしまった。混じってしまった。彼は死の宣告者になる資格を得てしまつていたんです。優希さんが『前回』と『今回』、死の宣告者になつたのはそのせいでもありません。もちろん、ならなかった時の方が圧倒的に多かったと思いますけど…優希さんは1度取り込んでしまつていたから…もうどうしようもなかったんです」

メテイスの言っていることが湊と奏子にはなんとなくは理解出来た。優希もヒュプノスやファルロスと同じだったと言うだけで。

「そうして、どうしようも無くなつてしまったことに気がついた優希さんはひとりでもぜんぶ持つて行つてしまうことにしたんです。サイアクですよ。私の…誰の話も聞かないで、辛い気持ちに蓋をして、バカです。バカなんです。彼は」

口調は怒つたようなものだが、その声は酷く悲しげで、表情も泣きそうな顔のままだ。

ふと、落ち着いてきた奏子は疑問に思った。どうしてこの、メテイスというこれまでであった事の無い少女が兄のことをこんなにも詳しく知っているのか。なぜ、ここに居るのか。

「あの、メテイス：ちゃん？ どうしてお兄ちゃんの事、そんなに詳しいの？」

「メテイスで大丈夫ですよ、奏子さん。私が彼について詳しいのは、私
が彼と深い繋がりがあるから。私は、メテイスという対シヤドウ兵器
であり、ニユクスでもあるんです」

「!!?」

突然のカミングアウトに湊と奏子は衝撃を受ける。

メテイスであり、ニユクスでもある。その言葉は混乱をもたらすの
に十分だった。ニユクスと言えば、倒すべき敵であり、滅びそのもの
だ。

そんな存在がどうして機械の乙女の姿を取っているのか。

「ええと、話すとき長くなってしまうので端的にですけど。私、
自分の身体月に戻れなくなってしまったんです。あの、私ニユクスが戻ったら
もちろんこの星の全ての生命は死に絶えてしまうのもう戻るつも
りは無いんですけど！ えと…その、恥ずかしながら別の問題があつ
て、その身体を別の存在にとられてしまつて…はい…だから、本来の
メテイス私と利害が一致してこの姿をとらせてもらつてるんです」

しょんぼりと意気消沈したメテイスはいたたまれないような雰
囲気を醸し出している。別の存在に身体を取られてしまったから、メ
テイスの姿を取つているということに疑問はない。だが、それでは説
明がつかないことがある。

「なら、どうして死ニユクス・アバターの宣告者がニユクスの精神そのものの代わりにな
れるの？ だって、きみがニユクス本人なんでしょ？」

「…そのままの意味です。ニユクス・アバターは化身。私という本
来の精神の代わりに人類が用意した代わりの呼び水。ニユクスとい
う器の形に合えば、なんでもなれる。大事なのは内包されている死、
そのものですから。それに…私は飛び散つてしまったニユクスの精
神のごく一部。核の部分の分霊わけみたまみたいなものなんです」

複雑そうな表情をしたメテイスはそのまま深く息を吐いた。

「優希さんはその、私の本来の身体を奪つた存在がこの星に滅びを撒
き散らす前に消そうとした。死の宣告者ということは私とも、それと

も深い繋がりができてしまう。そこを優希さんは利用した。全ての繋がりを利用して、あなたたちに自身を倒させた。そうすれば、滅びは人類によって退けられたという『認知』が作用しますから」

「だから、僕らはいま無事に今日を迎えられた？」

「はい。本来、あなたたちはニクスを…滅びを封印して死ぬ予定でした。奏子さんは覚えてないと思いますけど…それを優希さんが捻じ曲げ、己の存在と引き換えにそれらしい形に整えた。…でも、それじゃダメなんです」

目を伏せる。そしてメテイスは何かを決意したような表情をして、もう一度口を開いた。

「いまならまだ、やり直せます。ただし、巻き戻せるのは1度だけ。あの選択の直前までです。しかもおふたりは今日の——うん。優希さんを殺すか、殺さないかを選ぶ所までの記憶全てを失います。もちろん、私と話したことも。知ったことも、すべて。それでも良いのなら…それでも、優希さんを取り戻せる可能性に賭けてくれるのなら、私は全力で皆さんの手伝いをします。だから、お願い。

ひとこと、言ってくれただけでいいの。

——「戻りたい」って。

そうすればきつと…時を操る神器は——…優希さんは応えてくれる。僅かなその欠片で願いを汲み取ってくれるはず」

そつと、ベッドの脇へと歩み寄ったメテイスは目を閉じたままの優希の頬に手を添えた。

動かない、ただの物と化したそれが目を覚ますことは無い。それもそうだ。これはここに投影された虚像であり、本当の死体ではない。

「……………」

湊と奏子の間に、言葉は必要無かった。

ただ、顔を見合わせるだけでお互いの考えが何となくわかる。

それは双子ゆえか。それとも元は同じひとつの存在だったかゆえか。

そうして、湊と奏子は口を開いた。

満月が輝く夜空を背景にしたムーンライトブリッジの上。そこで優希と特別課外活動部は相対していた。双方ボロボロで、息を切らしている。

先ほどまで感情の全てをぶつけ合うほどの激戦がここで繰り広げられていた。しかし、

「俺は…」

カラン、と優希の手にあったロンギヌスが落ちる。

「……強がるのは、もうやめる。独りでやろうとするのももうやめる。みんなを、頼ろうと思う。だから、連れて帰って……くれないかな……」
ぎこちなく微笑んだ優希に、特別活動部の面々はほっと胸をなでおろした。

戦意は完全に無くなっているようだった。

「これで一件落着、でありますね！」

「ワン！」

「いや、一時はどうなるかと思ったぜ！なあ、湊！ 奏子っち！」

「全くだよ。ほんとに優希は手のかかる兄なんだから」

「でも、お兄ちゃんが帰ってくるって言ってくれて嬉しいよ！ 滅びをどうするかとか、色々あるけど、それでも！」

「三上さん、僕じゃ頼りにならないかもしれないかもしれませんが、僕は貴方に恩を返せてませんでしたから。…帰ってくるって言っなのは素直に嬉しいです。問題は山積みですけどね」

「三上、てめえ独りで抱え込みやがって……オレらはそんなに頼りねえか？まあ、帰ってくるってんなら答えは保留にしといてやる」

「ああ、そうだなシンジ。三上、帰ったら覚悟しておけよ。俺たちで1から10まで全部聞いてやるからな」

「三上……私は、きみが嫌と言っても連れて帰る……そう決めたからな、今更嫌だと言ったら処刑だからな……！」

全員の言葉を聞いて、優希は泣き笑いのような表情になる。その心の内は、安堵か、それとも。

「…みんな、」

優希が立ち上がる。もう、敵ではないし相対するような場所にいる必要はないからだ。

そして、歩み寄ろうとした。

「あ……」

目を見開く。

ぐらぐらとした視線の先には、自らの胸から突き出るロンギヌスの穂先が。

「な……い……」

それは、誰の声だったのか。

分からない。小さなつぶやきのようなそれが止まっていた時を再び動かしたかのようにゆっくりと優希がスローモーションのように倒れていく様をまざまざと見せつける。

なんの抵抗もなく倒れる身体。

ゴツ、と頭をうちつけた優希がせき込み、口からは血が垂れる。

「きゃあああ……」

「三上さんっ……」

「お兄ちゃん!!!」

悲鳴のような奏子の声が響く。

倒れた優希の後ろに、誰か立っている。

返り血に染まったその人物は――

「――幾月……!?!」

「やあ、特別活動部の面々。元気にしてたかい？」

幾月修司その人だった。

しかし幾月はタルタロスの天文台から落ちて死んだはずだ。死人は甦らない。だと言うのになぜ、ここにいるのだろうか。

そんなことは誰にも分らなかった。

「君たちには2度も感謝するとは思わなかったよ。本当に、実にいい働きをしてくれる」

「幾月…貴様、死んだはずでは…!」

「ああ、そうだね。私は天文台から落ちて死んだね。でもね、〃本物の私〃も10年以上前に既に死んでいるから関係はないよね」
「は…?」

美鶴は幾月の言葉の意味がわからなかった。いま、幾月は『本物の私』と言わなかっただろうか。

「お前は…誰だ…!」

「君たちの疑問は尤もだと思うよ。実際、僕も天文台から落ちて1度死ぬまで気がつかなかったんだ」

ゾワゾワと、得体の知れない悪寒が背筋を走る。

「僕はね、化身の1人だよ。ニヤルラトホテプという存在の、ね」

開いた幾月の瞳は黄金に輝いていた。

「ここでもうして無様に滅びをどうにかしようかと耐えている彼も、僕と同じ化身のひとりだ。どうしようもできないほどに愚かな人形ともいうね」

「がはっ…!?!」

心底、忌々しいと言った表情で優希の身体を蹴りつける幾月の背後で、黒い触手が蠢いていた。

「無駄なことを。抵抗しているようだけれど、ロンギヌスで刺され、予言が成就されたうえで器が破壊されたんだから、もう滅びは避けられない。とはいえ、ちよつと変更を入れたから予定とは少し違うけどね」

「何を言っ…:…う…:…」

幾月に食いかかった美鶴を皮切りに、ぱたぱたと抵抗も出来ずに特別課外活動部のメンバーが倒れていく。

その原因は、空から迫ってきた〃滅び〃だ。

全員がそれに倒れ伏すまでにそう時間はかからなかった。しかしニヤルラトホテプという存在に死はない。なぜなら、彼が死ぬ時は別のナニカに取り込まれる時、もしくは全ての生き物が死に絶え光と闇という物がなくなった時だからだ。

その様子を見た幾月は、満足そうにほくそ笑む。

「…これでやっと、あの忌々しいペルソナ使いどもに阻まれた『こちら側の破壊』が達成される！もう止めることなどできない！ ヤツらは見ていないだろうが、わけもわからず後継によって達成されるのはさぞかし悔しいことだろうな！ハハハハハ！」

それはもう、幾月では無かった。

ニヤルラトホテプの化身と名乗った幾月は高笑いをする。

「ああ、できることなら『あちら側』の周防達哉の目の前でこれを壊してやって1度は救った世界を滅ぼされる絶望を味あわせても良かったが：特別課外活動部の面々でも十分に愉快だ：そうは思わないか？ ファイレモン」

幾月——ニヤルラトホテプの声に答えるものは誰もいない。

ただ、ガラスの割れるような音と共にまるで滅びの間を縫うように金色の蝶が1羽飛び立ったただけだ。

暗闇の中、血の気の無い肌の色をした銀髪の女は紅い目を歪ませて囁く。

「愚かな。焦り、熟す前に器を壊したとて、最早ニユクスを食らい取り込んだ滅びの権化たるわたくしの目覚めは止めらぬというのに。たかがひとつの星に住まうもののシヤドウごときがいくら愚計を講じても無意味ですよ。——ですが、その無駄な足掻きを多少は評価し、取り込むのはやめにしましょう。我が半身の願いの為に一周だけ、待つて差し上げましょう。」

……命拾いしましたね、とるに足らない塵芥“ニヤルラトホテプ”」
くすくすと、楽しそうに。ひどく愉快そうに。

「エレボス。ええ、わかっています。わたくしの可愛い子。もうしばらくだけ、辛抱しててくださいね…この星のすべての生命共々すぐに“産みなおし”て差し上げますから…」

おぞましいとしか形容できない巨大な黒山羊を慈母のような微笑みで撫で、女はまた囁く。うしろでは似つかわしくなくちゅぐちゅと粘液のような水がねばつく音がしている。

その女の目はほの暗く、とてつもない執着心が滲んでいた。

「そのためには、必要なのです。わたくしの半身が。何としてでも、取り戻さねばなりません。だから、もう一周。完全に目覚めるまで、待ちましよう…」

運命へと反旗を翻した者たち

「お前の負けだ」(12/20)

「優希を殺す」

▶ 「優希を殺さない」

「嫌だ。殺さない」

長くも短い思考の果てに湊は、はつきりとそう答えた。
違和感があった。

たいてい、優希が長々と喋ったり相手の話をわざと無視する時はなにか都合が悪いことを隠しているか嘘をついている時だ。もしくは、どこかがおかしいか。

それに、世界を滅ぼすつもりなら早々に全員を殺してしまえばいいし、幾月に囚われる必要も湊と奏子を守って何度も何度も死ぬ必要は無い。

つまり、優希はなにかやむにやまれない理由があるか何かで嘘をついて殺されようとしている。9月に殺してくれと頼んできた時のように。

結局、湊や皆の思いは優希にこれっぽっちも届いていなかったというわけだ。

そのことに対してふざけるなよ、と怒りが湧いてくる。

ちりちりと脳裏を焦がすような感覚が湊を襲い、思考を邪魔してくるも、何故か湊は冷静にそう判断した。

「約束したし、ボコボコにして気絶させてでも絶対に生かして連れて帰るからね。詳しい話は帰ってからたつぷり聞くから。今のうちに言い訳でも考えといてよ」

おそらく、カダスから出た後に妙に聞き分けよく全てを話したのも、選択に対しどちらでもいいと日和見だったのも、今日殺されるのを虎視眈々と待っていたからなのだろう。

カダスに居た「笑顔の仮面の優希」は「1月31日に死ぬ予定をしている」と言っていた。

その予定が、早送りになったのだとしたら？ 死の宣告者になってしまったせいで、かつての綾時と同じように自分たちに殺されることよって苦しくもなく辛くもない選択をさせようとしていたとしたら？

自分たちはその程度の存在だと思われていたのか。仲間ではなく一方的に救われ、守られるだけの存在だと思われていたのか。

そのことに湊は壮絶な怒りを抱いていたのだ。

「わ…湊、怒ってる？」

「怒ってない。キレてるだけ」

「ソレ、怒ってるって言うんだよ！」

怒気を滲ませる湊に奏子があわあわと慌てる。

普段の言動が物騒で気が強いのは奏子だが、本当は丁寧で気弱だ。誰かのために頑張ったり、やる時はやると言うだけで、根幹は普通の女子と何ら変わらない。だからこそ風花とも早々に仲が良くなつたとも言える。

逆に普段物静かな湊は1度暴れ出すと止まらない。普段はどうでもいいと言っておきながら、キレるときはキレる。それはもう、奏子がビビって優希や養父母に泣きつくくらいには。

つまるところ奏子より、1度火が着いたら危険物で爆弾なのは湊の方である。

しかしそんな奏子でもさすがに湊が察したものと同じ違和感を今回は察せたようで、む、という顔つきになって優希を睨みつける。

「お兄ちゃん、悪ぶってもダメだからね！ さっき、髪の毛ガシガシしたでしょ！ あれ、お兄ちゃんが困ってたり、恥ずかしかったり嘘つく時にやる癖なの、私知ってるもんね！」

「は…!? そんなわけ、な…」

咄嗟に、優希は奏子の言葉を否定しようとしてまた手を首筋へと無意識に伸ばしかけた。瞬間、

「あ—————！ またやってる!!! やっぱりお兄ちゃんもちよつとイ

ライラしてるけどさつきまでの話、嘘なんだ！」

「……………」

奏子は指をさして大声で叫んだ。

その声にビクウツ！ と肩を跳ねさせ硬直した優希はそのまま目を逸らしてのろのろと上げていた腕を下げた。

「なるほどな。今度から見分ける基準にしよう…」

横で、美鶴が奏子の予想通りになった優希を見て感心する。

今度から、嘘をついたり恥ずかしたりする時はそういうことをするのかよく観察してみよう、とそう思ったのだ。

『ぷぷー、クセ、バレてんの』

優希の視界に、ふわふわと浮いている半透明の自分が映る。

不格好な、子供の落書きのようなスマイルが描かれた仮面を被ったもう1人の自分は笑うような仕草で優希を煽る。

「黙れ」

『なんだよ。せつかくの計画がご破算になりそうだからって俺に当たるなよ。俺もキミなんだからさあ。汝は我、我は汝ってね！』

真剣な場面だと言うのに茶化すように突然現れたもう1人の自分ウィットカーマンはくるりと回って私服から聖エルミンの制服に一瞬で姿を変え、そのまま肩にもたれかかってくる。

その姿と言動は統合されたはずの『前回』の自分そのままだ。だが、何か違う。

「俺に統合したんじゃないかなかったのか？ というかお前……ほんとは『前回』の俺じゃないな？」

『あ、バレた？ 俺はニヤルラトホテプさ。ニヤルラトホテプによって赤子のきみに植え付けられた化身部分。混沌でもありキミの中の、ニヤルラトホテプ成分を司るところってやつ？ 18+n年間一緒に生きてきたんだからさーもうちよい優しくしてくれてもいいじゃん…俺なのに俺に厳しくて泣きそう』

「いや、俺の計画を邪魔するような人格なんか要らないんだけど」

他の人間には見えていないそれと優希は小声で会話する。

なにか手っ取り早く殺してもらおう計画でも考えてもらえるのかと

思えば、こちらをおちよくなるだけの敵でも味方でもない
もう1人の自分にイライラしてくる。

そんな事を分かっているのか、もう1人の自分はそのよるによると黒い触手を出して更に煽るように笑うような仕草をした。

『てか、【精神暴走】使っておいて湊たち焚き付けられないとか何？

バカ？ 能力の使い方下手くそ？ 弱火どころかチヨロ火？ 全然作用してないんですけど！ まー人外0歳児ちゃんだから仕方ないでちゆかねー？ バブバブ』

「いつペン死ぬ？ ほら、ここにちようどいいロンギヌスの槍がある。楽に出血多量で死ぬるよ」

『うひひ、俺、幻覚なんすわ。流れる血が無くてサーセン！』

「いますごい無性に自分にロンギヌスぶっ刺して死んでやりたくなつた。訴訟」

ひとり漫才をやっている場合ではないのはわかっている。だが、このもう1人の自分が先程から何かを邪魔するように茶々を入れてくるのだ。

『それやったら前回とほぼ同じになるから却下な！ ここで死ぬから良いけどさ、今回は妥協するんじゃないやなくて全力で戦った後に助けられてみない？』

「それこそ却下だ。『前回』、説得されてみんなの所に帰ると決めた瞬間に殺されて『アレ』を放ちかけただろ。あんなのは二度とごめんだ」
『ああ、前々回の話ね。…まあ、今回は保険を用意してるから助けてもらう方にシフトしてもいいと思うんだ。俺、ゲームに負けるの嫌いだから。いやあの敗北条件はズルいつて』

「…？」

妙に、生易しく説得してくる。

気味が悪い。

「なにかぶつぶつ言ってるみたいだけど、言い訳は思いついた？

謝って帰ってくるなら今のうちだけど」

もう1人の自分と小声で言い合いをしていた優希に対し、湊が冷酷にそう言い放つ。

これではもう、どちらが悪かわからない。

『うわ、あの湊。バチバチにキレてんじゃない。こわ…しかもペルソナ付け替えたな今!? ゲエ! ルシファー! ルシファーナンデ!? あっ読めたぞこれ、奏子は嫌がるだろうからひとりでアレやるつもりだな!? やつべ、俺逃げるわ。モコイさん風に言うなればバイバイくんだネ!』

何かの準備をしているらしい湊をみてそそくさと慌て始めたウイックカーマンも、もう1人の優希はモコイの真似をしてそのまま姿を消す。ウイックカーマンもう1人の自分の察したことを、優希も察していた。

ペルソナを「ルシファー」に付け替え、それでもウイックカーマンが慌てて逃げたということは、アレしかない。

人に向ければ一撃で気絶させる所で済むものはないが、確実に止められるであろう方法を選んだらしい湊に、優希は苦笑する。

「…いいや。俺は謝らない。帰るつもりもない」
見せつけるのもいいだろう。

そう思っただけで。

実際、優希はどうしてすんなりと敵だと認識して殺してくれないのかとイラついていた。兄という仮面をかなぐり捨て、全力でぶつかり合って、意図して相手を傷つけてもいいとは思えるほどに。

「そう。ならその曲がった性根、叩き直してあげるよ」

「やって見せろよ救世主! やれるもんならさあ!」
吠える。

来るのは殺意ではない。この程度で死ぬわけが無いと優希は知っている。

しかし、優希の中の危険信号が「死ぬぞ」とビリビリと警告する。それと暴れ狂う殺戮衝動を無理やり抑えつけ、構える。

「ルシファー!」 「サタン!」

湊が召喚器の引き金を引く。

最強の堕天使が二柱。明けの明星と敵対する者。

それらの異名を持つ最強格のペルソナが2体同時に召喚され、それぞれの力を放ち超新星爆発の如きひとつの大きな光となって放出さ

れる。

——ミックスレイド【ハルマゲドン】

喰らえば、力を司るものほどの力がなければ即死の必殺の一撃。湊はそれを、どうなるかわかっていて放った。

しかし、

『ばあーか』

湊の耳元で囁くように啜うような声が聞こえたような気がして振り向くも、誰もいない。慌てて顔を優希が居たはずの場所へと向けた。

瞬間、ゾツとするような気配と共に、爆風が止んだそこから先程と変わらず立っている影が見えた。

「なんで…」

ギラギラと、黄金の双眸が睨みつけてくる。その事に湊は戸惑いを隠せない。

『えと、三上先輩はまだ健在です！ 良かった…でもこれ…無傷!? 先輩はダメージを受けてません!』

風花がアナライズ結果を知らせる。

無傷ということは効かなかったということだ。あれだけの攻撃が無意味と化した。

「ンなッ!? 湊のよくわかんねースゲーヤツを喰らって、センパイ無傷で立ってんのかよ!? ウソだろ!」

順平が後ずさりし、息を飲んだ。

湊以外の面子から見ても、先程の湊の攻撃は全力だと思わざるを得ない。

だというのに平然とそこに立っている。

その異常さにたじろいだ全員を冷めた目で見た優希は少しだけ気分を良くして口角を上げた。

「…お返しだ。『デヴァ・マール』…! 『ニャルラトホテプ』…!」

『この反応…皆さん! 逃げて!』

召喚器を使わずに、片や黒の破壊神。片やネガティブマインドの化身であり千の貌を持つ外なる神の異名を持つペルソナを呼び出す。呼び出されたニャルラトホテプはナイトゴーストに似た黒いのつぺらぼうではなく、『月に吼えるもの』と呼ばれる仮面をつけた触手が人の形を成したような姿をしていた。それらが、湊が呼び出したルシファーやサタンと同じく力を練り上げる。

——ミックスレイド【ハルマゲドン・R】リバーズ

先程と同じ、超新星爆発の如き爆発が今度は湊達を襲う。

悲鳴を上げる間もなく、全員がそれに飲み込まれた。

足元の黒い泥に近い水が巻き上がり、水蒸気爆発のように水飛沫をあげる。

あとに残るのは死んではないが行動不能にまで追い込まれた全員だった。

ナビゲーターとして守りを固めていた風花でさえ、そこに倒れている。

そんな惨状を作り出してなお、優希は誰か立ち上がるだろうと信じていた。

そうでなければこの先、自分が居なくなつたあとでもし何かあった時に彼らは乗り越えられない。それは困る。

「……………」

そう思いながら、襲つてきた気持ち悪さと頭の痛みに片手でそこを押さえて一瞬ふらつければまたもう1人の自分が現れる。

『あーあー…無茶するから。大丈夫?』

「ぐ……これが、大丈夫に見える…?」

吐き気を抑えて返事をすれば珍しく心配そうな声色でもう1人の自分は首を横に振った。

『うんにゃ。見えない。今のでかなり食い込んで来てるかもね。調子に乗ってアイツ由来のペルソナ使おうとするからだよ、我慢してれば

いいのに。それか「ウィツカーマン」^俺にしてくれれば全部燃やしてあげたのにさ」

「それじゃ意味無いだろ……」

『うん。意味無いね。ならプランBに変更だ。全員のペルソナを封じちやおう！』

うきうきとロンギヌスの槍を指さしたもう1人の自分^{ウィツカーマン}に対し、繰り返すように優希は先程のもう1人の自分^{ウィツカーマン}と同じように首を横に振る。

「それも、意味なんて無い。それだと俺が死ねない」

『でもミックスレイドされるの邪魔じゃん？』

「ミックスレイドをするのも実力のうちだ」

『いやだ！ せっかくロンギヌス使えるのにその能力1個も使わないとか勿体ない！ 宝の持ち腐れだあ！ そういうとこだけ湊たちのこと高く評価するのやめろよお！』

もう1人の自分が駄々をこねるようにロンギヌスを持つとうとするも、実体がないためにスカスカと透過するのみ。

「や・め・ろー！」

短く睨み付けながらそう言葉を飛ばせば、もう1人の自分^{ウィツカーマン}は大人しくなる。しかし、「あ」と声を上げて優希が背を向けた湊たちが倒れ伏している方向を見て少し離れる。

なにをやってるんだ？ と優希が頭に疑問符を浮かべた瞬間、胸倉を勢いよく掴まれる。

「よそ見、してる暇あるの？」

どうやってあそこから立ち上がったのか。ボロボロになった湊が狂暴な眼光を湛えたその目で睨み付けながら噛みつかんばかりに迫っていた。

咄嗟に優希は槍で刺そうとして——しかしできないと躊躇し、ひっこめた瞬間。

「っ!？」

バチリ、と槍から稲妻が走る。

それは光となって湊へと直撃し、一瞬だけその動きを止めさせた。が、

「……？」

痛みはない。不思議に思った湊はしかし、優希の胸ぐらを掴んだままそのまま召喚器を片手でホルスターから引き出して引き金を引いた。

カチリ。

シン、と辺りが静まり返る。

何も起こらない。

その様子を見た優希は咄嗟にもう1人の自分を睨みつけた。

「お前……ッ！」

勝手にロンギヌスの槍の力を、ペルソナを封じる能力を使つたな。余計なことをしやがって。と怒りを込めて睨むも、もう1人の自分は素知らぬ顔だ。否、少しだけ顔を逸らした。

対する湊はペルソナが呼び出せないことがわかると拳を握りしめる。そして、振りかぶり、

「この…優希のわからず屋！」

殴る。鈍い音が響き、優希は手に持っていたロンギヌスの槍を手放した。

優希が必要ないと判断したのか、ロンギヌスの槍はそのまま消えていく。

しかしそのロンギヌスを持っていた手を握りしめ、これもお返しとばかりに湊の頬を殴った。

「わからず屋なのはどっちだ！ さっさと俺を殺せばいい！ 俺はもう、人じゃないんだぞ！」

「うるさい！ 人じゃなくなっても優希は優希でしょ！ 僕らの家族で、兄さんだ！」

殴られる。

「ただ悪魔になっただけならなんとかなるかもしれない。けど俺はもう死の宣告者だ…！ 敵だ！ どうしようもないってわかれよ！」

殴り返す。

「わかるわけないだろ！ 僕がどれだけ…どれだけ優希の死に顔を見てきたと思ってるの!? これ以上見たくないに決まってる！ まし

「てや、自分の手でなんて！」
殴られる。

「それを言うなら俺の方が…お前たちふたりの死に顔を見た回数は圧倒的に多い！ 目の前で救えなかった無力感が分かるか!? 死ぬとわかっているのに止められない虚しさが！ ただ家族が死ぬと分かっているながら仮面を被って日々を過ごすやるせなさが！」
殴り返す。

目から流れる汗とは違う水滴が、頬を伝う。
わかる・わからないの応酬は兄弟喧嘩そのものだった。

「それは優希の感じたことだから、僕にはわからない！ 前にも言ったけど、優希は自分と同じ辛いことを僕と奏子にも味あわせるつもりなの!?!」

「……っ！」

同じ辛いこと。

その言葉に思考が停止し、目を見開いて息を飲む。
拳が握れず、迷っていれば優希は湊に水面に押し倒され、馬乗りになってこちらに拳を振りかぶっていた。

思わず、目をつぶる。

しかし痛みは来なかった。代わりに、胸に手が乗せられる。

そのぬくもりに優希がゆっくりと目を開けば、泣きそうな顔の湊がそこにいた。

「優希はまだ、生きてる。死んでない。なんとか、なるはずだよ」

「ならないよ。……ならないんだ」

目を逸らす。

「もう限界なんだ。身体も、ほかの色んなことも。たくさん誤魔化しているけど、軋んで、ヒビが入って、割れそうなんだ」

今もほら、砕けてきてる。

そんな言葉を飲み込んで、へらりと笑った。

「俺、皆を殺したくない。滅びになんてなりたくない。消えたくない。だから、湊。お願いだ。嫌でも、俺が俺であるうちに、殺してくれ」
弱音を吐く。

ウィックカーマン
もう1人の自分は倒れているらしい奏子たちに視線を向けながらも
茶化すことなく成り行きを静かに見守っている。

「どっちも覚悟してた綾時より、情けないね」

「…そうかもね。でも、もう俺には…俺自身が救われて、なおかつ湊と
奏子を救う方法はこれしか無いんだ」

その他の方法を優希は思いつかなかった。もう既に巻き戻せない
ところまで進んでしまっている。

「だめだよ、お兄ちゃん…」

奏子が這いずるように近づいて覗き込んでくる。そして優希の手
をそつと握ってきた。

「私、お兄ちゃんに死んで欲しくない。消えて欲しくもない。一緒に
…みんなと一緒にたくさん考えるから、誰も死ななくてもいい方法！
だから…だから！」

「……奏子」

奏子の必死さに、その追い詰められたような表情に、優希の決意が
揺らいだ。

そんな泣きそうな顔が見たかったわけじゃない。

「置いてかないで…居なくならないで…！ 消えないで…！」

怯えながらもがりついてくる奏子の姿は今までに見たことの無い
もので。

否、優希はそれを何度も体験している。しかし死の間際なので覚え
ていないだけだ。何度も何度も、優希はかつての奏子の前で死んでい
る。逆もまた然りだ。

双方の記憶が保持されていないだけで、魂には染み付いている。
もつとも、優希のほうは掠れて消えかけであるが。

「三上」

奏子の肩に手を添えながら、美鶴が覗き込んでくる。

「……私からも、お願いだ」

目を閉じて、思考する。

「……………でも、」

首を縦に振れない。今更、別の手を考えると言われてもどうなる訳

でもない。

このやり方だつて途方もない回数繰り返し、様々な条件が重なった結果やつと見つけた最善の解決策だったのだ。それ以上の大団円な解決策を、たった1回で見つけ出せるとは優希には到底思えなかった。それに、

「さつきも言ったけど、近いうちに俺が死んでしまうことに変わりはないんだ。滅びとの戦いが無くても、俺の身体はもう限界できつと春まで耐えられない。だから、」

「っ！ だから…今のうちにぜんぶ、解決したかったの…？ お兄ちゃんがここで死ぬことで…？」

「ああ。奏子と湊が死ななくても済む方法はこれしか無かったから。…解決策はもうひとつある。けど、それをすればふたりは死ぬ。必ず誰かの犠牲が出る。だから、健康でこの先も生きていけるふたりより、終わりに近い俺ひとりで済む方法を選んだ。それだけの話だ」

優希は空いている片腕を目元に寄せ、深く息を吐いた。

泣いてはいない。

全てではないが悪役ぶるのをやめて、話してしまったことに後悔はない。どうせこうなるだろうことは湊が優希を殺さないと決めた時点で決まっていたのだから。

『泣くなよ。エンドロールにはまだ早いんだからさ！ あと2ヶ月丸々あるんだぞ！ …たぶんね！』

「…泣いてない」

横から空気を読まないもう1人の自分が茶化してくるも、優希の気分はまったく明るくならない。

「…お願いだから殺してくれ。そうじゃなくても、もう、放っておいてくれるだけでいい。出口は作るから、ここから、出て行ってくれ」

もう一度、深い息を吐いてから顔を背け拒絶の言葉を吐いた。名案なんて浮かんでこない。全てを解決出来る素晴らしい策なんてどこにもない。

そうやって否定し、拒絶すれば湊の顔が顰められる。

「僕や奏子の話聞いてた？」

「そうだよ！ 絶対に、一緒に帰るんだから！ だって、まだ何もしてない！ なにも考えてないんだよ！ それなのになんで、お兄ちゃんは諦めちゃうの!? きつと、大丈夫だから——」

それでも、湊と奏子は優希に光を見せつけた。

希望を与えるような言葉を吐く。

それに優希は酷く拒絶反応を示した。

「俺の心にずかずかと踏み込んで、根拠の無い希望を持たせるのはやめてくれ！ そうやって…期待させるだけ期待させてまた俺を置いていくつもりなんだろう！ 一緒なんだよ…！ 俺も！ お前達ふたりの選ぶだろうやり方も！ なにが “いのちのこたえ” だ！ そんなもの…そんなもの…!!」

糞喰らえだ。

その言葉を発さずに優希はそのまま目を固くつぶり光を拒絶した。

もう何も聞きたくない。見たくない。放っておいてくれ。このまま静かに眠りたいだけなんだと。

「そうか、きみは、きみの妹とよく似ているのだな」

「……っ、」

静かに降ってきた優しい美鶴の声にびくりと身体を震わせる。

「本当は寂しがりで、置いていかれるのが怖くて、否定されたくない。だから先に捨てようとしているのか。自分から捨てれば自分から捨てたのだという建前ができて心の傷は浅いように見えるからな。私の告白を断った時と同じか。ふふ、なんだ…そうか、そんな事だったのか」

穏やかに、慈しむように笑った美鶴は、握り返されもしなければ拒絶もされていない奏子も手を添えている優希の片腕に手を添えた。

しかし美鶴の発言に黙っていなかったのは奏子だ。

「えーっ！ 桐条先輩、私のことそういうふうに見てたんですか!? ショック！ 探索のリーダーもちゃんとやってるしこんなに頼れて強くて可愛いのに!? それに私、お兄ちゃんみたいに自分からなにかを捨てたりしませんし！」

「そ、そういう訳ではなくてだな、三上の方が、臆病さに磨きがかかっ

ていて酷いと言ってるんだ！ きみはちゃんと強い。……おそらく」
奏子に弁解する美鶴は気づかない。このやり取りで優希のおぼろ豆腐メンタルな心にグサグサとダイレクトダメージが入っていることに。

本人はとてもしたたまれなくなっているということに。

奏子と美鶴さん、希望を持たせるなどは言っただけどそういう方向じゃない。断じて違う。そう言いたい気持ちを押しさえ込んで、優希は沈黙を貫く。

『泣いてる？』

「泣いてない」

そうやって黙っていれば再び、もう1人の自分が確認してくる。この程度で泣けるわけが無い。何を思っただけでいちいちもう1人の自分は確認してくるのか。優希にはわからなかった。

もう1人の自分は優希の返答を聞くと、興味が失せたのかその半透明のからだを空気に溶かして本来の持ち場に還っていった。

どうやら、ただの暇つぶしかなにかだったらしい。

そういうところはニヤル本体気取りの化身ラトホテプと同じく、それらしいなど優希は感じた。

不意に、身体に乗っていた重さが無くなったと思えば、馬乗りになっていた湊が降りて横に座っていた。

優希が上体を起こせば、それと同時に湊の視線が別の場所を向く。つられてそちらを見るとボロボロになったアイギスがよろよろと立ち上がってこちらへと向かってきていた。

他のメンバーも意識が戻ったのか、身体を起こして心配そうにこちらを見ている。

よたよたと覚束無い足取りで近づいてきたアイギスは、奏子や美鶴のいる優希の左側ではなく、湊のいる右側へと来るとそのまま腰を下ろした。

そして複雑そうな表情をしたまま、口を開いた。

「…優希さん。わたしはまだ、あなたをどうしたいのか…わかりません。でも、湊さん達を悲しませないためにこれだけは伝えておかない

ちやならないから：伝えます。前回、カダスを探索した際にモコイさんが居て、『モコイさんはモコイさんとしてここに居るから泣くんじやないぜベイビー』、と伝言を頼まれていました。それがどういう意味なのか、わたしにはわかりません。それでもきつと、いまのあなたには必要なものだから」

「！」

アイギスの言葉を聞いて、優希は視界が揺らぐ。完全に失ってしまったと思っていた存在が、見えずともちやんとまだいた事に安堵した。

「モコイさんが：そうか、そつか：モコイさんは：あれからずっとここに居たんだな」

目を閉じて、大事なものを抱えるように胸に両手をやり、身体を丸める。

その表情は湊や奏子に向けるものとはまた違う愛しさを孕んでおり、それまでどう呼びかけてもかたくなだった表情を一瞬で緩めたことからモコイという存在に優希がどれだけ心を許していたのかを4人にありありと分からせるには十分だった。

「……有里」

そんな優希を見て、小さく低い声を出したのは美鶴だ。奏子呼び、ちらりと視線を向ける。

「なんですか桐条先輩」

「私は今、猛烈に嫉妬している。理由はわかるな？」

そう問えば、奏子もうんうんと頷いて同意する。

「私もです先輩。お兄ちゃんにあんな顔させるなんてどこの泥棒猫!? 桐条先輩でもダメ、私もダメ、湊もダメでモコイさんっていうあの変な緑のならいいっていうのがすごく複雑…」

「? モコイさんは猫ではなく悪魔ですよ」

奏子のボヤキにアイギスが訂正する。

言うなれば泥棒猫ではなく、心を奪っていった泥棒悪魔なのだ。

「そーゆーことじゃない! …でも、お兄ちゃんが笑ったならそれでいいか…」

奏子は諦める。

結局、最終的に優希の心を動かしたのはなんの根拠の無い「情」だった。

それは絆と呼べるものでもあり、愛情でもある。

何も解決しておらず、なんの解決策も浮かんでいない状況であるのに、優希は安堵して笑った。

「生きて」と言われるのではなく、優希に必要なだったのは、「大切な存在がちゃんとここにいる」という安心出来る存在証明だったのだ。

救う、救われるではなくただ一緒に横で生きていただけでいい。それが何もかもが重しになっていた優希にとって無意識に1番の救いになっていった。だからこそ、自暴自棄でかたくなだった優希の心を動かした。「この先も生きたい」と願っていた時のことを思い出させた。「優希」

その隙を見逃さず、湊が呼びかける。

「ずっと、悩んでただけ。僕と奏子のふたりだったらダメだったけど、僕ら3人なら？ それかもっと、たくさんの人と一緒なら、なんとかならない？」

「3人……たくさん……そうか……！ その手があつたか！」

湊の提案に優希は思わず声を上げる。

湊の提案は、封印を2人でするのがダメならそれ以上の人数でやれば犠牲をささずに済むのではないかということだ。ひとりふたりで封印に死ぬほど魂を割くのなら、それ以上の人数で折半すればいい。一番多い母数で考えるなら、地球に生きる全人類で分担すれば個人単位での負担はほぼゼロに等しい。

そして優希は封印ではなく、カダスカダスでやろうとしていたことを、同じ普遍的無意識領域である影時間でもやればいいのだと気がついた。

1月31日、全人類が影時間を認識しているタイミングで『滅び』を打ち倒せば封印する必要はなくなる。人類が乗り越えたのだと世界に認知させることが出来る。

死ではなく、滅びだけを乗り越えたのだと錯覚させれば、無理な話ではない。

ただし、自分のことについては何も解決していないので先程までやろうとしていたことと結果は変わらないのを伏せて。

「…それなら、なんとかなる…と思う。詳しい方法は、みんなで考えればどうにか…」

どうにかなればいい。

ならなければ、刺し違えるしかない。

「そう。じゃあ、優希はもう『殺して』なんて言わない？　というか、一昨日言ってたよね。『僕らの決めた事には従う』って」

「そうだった！　お兄ちゃん！　私たち、お兄ちゃんと滅びに立ち向かうって決めたんだから！　お兄ちゃんが居なきやダメなの！」

そう言っって手を伸ばして立ち上がる様に催促する湊と奏子の手を優希はとれなかった。

躊躇う。

「——それは、俺がヒトじゃなくても？」

返事をする前に、咄嗟に優希はそう問いかけてしまった。

瞳が揺れる。拒絶されるのが怖い。

しかし、受け入れられるのも怖い。気持ち悪い。

自分で口を閉じる前に、どんどん言葉が流れ出してくる。

「…嘘ついて、ごめん。たくさん痛くして、傷つけてごめん。謝っても済む話でないだろうし、身勝手なのはわかってる。けど、それでも、俺は…敵なのに、みんなの仲間でいいの？　隣にいて、いいの？　…存在生している、いいんだろうか」

最後の言葉は自問だった。

未だ、優希の中では自分が存在してもいいという気持ちはあまりない。

死の宣告者であり、自らがニヤルラトホテプの化身でもあるのだと認識した今ではその違和感は更に膨れ上がっている。

自分は異物で、人類の敵で、存在しているだけで周りを不幸にしていく。そんな感覚を覚えるのだ。

存在するだけで災いの元になるのなら、消えてしまった方が良いのではないかという希死念慮が精神を苛んでくる。

許されるはずがない。許されてはならない。
生きてみたいが、生きていいとは思えない。

「もちろん」

だというのに、奏子と湊は頷いた。何の迷いも躊躇いもなく。

そんな2人に続き、美鶴もしつかりと頷いた。

「当然だろう。お父様にまだ何も言っていないのに勝手に居なくなられては困る。私を、独りにさせないでくれ。死の宣告者だろうと何だろうと『今』の私が好きになったのはきみだ。きみじゃないと嫌なんだ」
「……うん」

小さく、返事をする。

「で、どこからどこまでが本当なの？ お兄ちゃんがニクス教の教主で……えーつと、死の宣告者^デつてやつなのはほんど？」

優希は奏子の言葉に首を横に振った。

「厳密には、ちよつと違う。……ごめん、詳しく説明したいんだけどもう、限界で……」

普遍的無意識領域の深層に皆を引きずり込み、ずっとその状態を維持していたために気力の消耗が激しい。

場を形成している力さえ解いてしまえば、カダスの1部でもあったそこからすぐにムーンライトブリッジの上に戻る事が出来る。

そのことを自覚した優希はさっさと元の場所に戻るために抑えていた力を抜いた。

景色が一瞬揺らぎ、そして影時間のムーンライトブリッジの上へと戻ってくる。

「は……はあ……はあ……はあ……」

短く、息を吸って吐く。

脂汗を垂らしながら、うずくまって下唇を噛み締めながら反動の気持ち悪さに耐えた。

自分の力でもあるそれをちよつと使っただけだ。例えそれが借り物で、その資格がないとしても。

それだけであるのに、優希の気力と体力の両方をごつそりと持つていった。

「やあ！ 彼女から聞いたんだけど、お兄さん、早とちりしてないよね！」

「……」

「早とちり、しました」とは言えない。

メテイスからの視線が痛い。

「その様子だと意気揚々とニヤラトホテプと同じようなムーヴをしようとして、嘘を見抜いた湊さん達にコテンパンにされたか説得されたかで時間切れ、といったところですか？ ……向いてないんですよ、優希さんにはそういうの」

むっとした顔のメテイスが一刀両断し、優希は顔を俯かせる。どうやら全てお見通しだったらしい。

「ところで、三上と知り合いみたいだがお前は一体なんなんだ。見たところ、桐条の対シヤドウ兵器のようだが」

明彦が馴れ馴れしく優希へと声をかけ、喋るメテイスに問いかける。

美鶴としても、メテイスのような機体は見た事がないため、極秘で作られたものかと思うも、そんなものがどうして優希を知っているのかという謎が残ってしまう。

「自己紹介がまだでした。私は対シヤドウ特別制圧兵装七式・アイギスの後継機——つまり、妹であるメテイスです。そういうことにおいでください」

「そういうことにおいて…なんだ、はつきりしねえな」

メテイスの釈然としない物言いに、荒垣がモヤモヤとしたものを感じつついボヤク。

その荒垣の言葉の感覚は優希と綾時以外の全員が覚えており、自己紹介を経てもなおメテイスという存在が得体の知れないものであるという疑問を捨て去ることはできなかった。

そして急に姉だと言われたアイギスは混乱し、複雑な表情でメテイスをゆらゆらと見つめている。

「わ、わたしの…妹…?」

「はい。姉さん。一応、この身体が作られたのは——かなり、前なんで

すけど。稼働開始時期で言えば姉さんより遅いんです。つまり私が姉さんの妹、という認識は間違っていないんですよ！」

優希はふんす！ と力説するメテイスの言葉に苦笑しながらも嘘は言っていないから指摘するほどでもないかと沈黙を貫く。

彼女は随分と嘘が上手になつたようだ。ニユクスと混じつてしまったからかどうかはわからなかったが。

「そんな君が突然起動してどうしてここに？ そしてなぜ三上と知り合いなんだ？」

美鶴が訝しみながら問う。

その疑問はもつともだ。アイギスの妹だというのなら、もっと早くに特別課外活動部に合流してもおかしくはないし、その存在を美鶴が知らないということはないだろう。

だというのに優希とは知り合いで、よく知っているような態度をとる。

矛盾しているのだ。

そう、眼光鋭く美鶴に問われ、メテイスは「う…」とたじろいだ。

彼女とて、「私はニユクスでもあるんです！」とこの人数を前に説明して、すんなりと理解してもらえらるような状況ではないというのを解っている。だからこそ、先ほどとは違い言葉に詰まった。

そんなメテイスの様子を見て、優希がメテイスの前へと庇うように立つ。

「彼女は——その、どちらかというところ、こちら側なんだ。俺やヒュプノス、かつての綾時くんと同じ、こちら側」

「こちら側って…ヒトじゃないってこと、ですか？」

「いいや。違う」

風花の問いに優希は緩く首を横に振った。

純粹にヒトではない、というだけならロボットであるアイギスや犬であるコロマルもそうだ。

そういう意味ではない、と線引きをする。

奏子だけは兄の「かつての綾時くんと同じ」という言葉に何か違和感を感じていたがそれを問えるような雰囲気ではなかったため、不安

げに口を横に結んで黙っていた。

「彼女も、シャドウだ。…それも、『母なる存在』と呼ばれる強大な」
「母なる存在…まさか、彼女は!」

はつきりと言い切った優希の言葉に、何を指すのか気がついた綾時が隣に立つメテイスを見て目を見開く。

メテイスはその視線を、真っ向から受け止めた。優希から喋ったというのなら、信じてくれるだろうと願って。

「彼女は…ニユクスだ。お兄さんの言葉が本当だと、するなら」
「ニユクスだと…!」

一斉に全員が身構える。

絞り出すように出された綾時の声は震えていた。動揺し、『恐れ』
さえ感じられる様子にメテイスは苦笑する。

「とはいっても、混じりものですけどね。対シャドウ兵器でアイギスの妹であるメテイスと…シャドウの母、ニユクス。それがいまのメテイス^私の精神を構成するものです」

身構えた全員からメテイスを隠すように再び身体を動かした優希を、メテイスは手で制止する。

大丈夫。何も悪いことは起こらないから、怯えなくていいと。

「安心してください。私は姉さんの味方ですし、皆さんの敵ではありません。ただ、姉さんや湊さん、奏子さんが辛い思いをするから——
優希さんが消えようとするのを止めたかった。それだけなんです」

「でも、ニユクスって滅びなんだろう？ この世界を滅ぼす、『終わり』
だって」

天田の吐き出すような小さな眩きを、メテイスは聞き逃さなかった。

「そう、ですね。はい。そうです。私が目を覚ますことで、私の精神の波動にあてられたこの世界の全ての命は滅んでしまう。ただし、それは私が私の本来の身体で目覚めた場合に限ります」

「そ、それじゃあ…あなたがその姿でいるってことは、世界に滅びは来ないってこと?」

「いいえ、滅びは来ます。確実に。明確な意志と理由を持って。だから

ら、優希さんは己の存在を賭けて消そうとしたんです」

ゆかりの言葉に首を横に振ってメテイスは答える。

そのまま月を睨み付け、口を開く。

「——『ジユブニグラス』」。

それが私の代わりに来る滅びの名です。はるか昔から月私の内に封印されていた、外なる神。彼女はヒトの破滅の願いを聞き、この世界の全ての生命を産みなおそうとしています」

メテイスの言葉に、動揺が走る。ニクスでもあるメテイスがここにいるのなら、滅びが回避されたというのも同義だというのに、そうではなく。

別の神が明確な意思と理由を持ってこの星を滅ぼそうとしているというのなら、それはそれでまた違った話になってくるのだ。

「はあ!? 産みなおし…? どういうこったよ、それ…」

「彼女が何を持ってその思考に至ったのか、私にはわかりません。ただ、ひとつ確実に言えることは彼女が完全に目覚め、私にあった『滅び』を振るえばこの星の生き物なんて簡単に死んでしまうということです。皆さんの営みも、この星が辿ってきた歴史も、全て否定され、彼女の望むようにぐちゃぐちゃに作り替えられるんです。それは、あなたたちの言う『滅び』と同義でしょう?」

メテイスは憂うように下を向いた。

彼女はこの星の全ての生命を一度滅ぼして産みなおすことで己の好きなように作り替える——そんな途方もない目的を聞いて、皆が動揺しない方がおかしいとわかっていた。

「いまはまだ、彼女は半分眠っている状態で、覚醒してない。…直接、手出しをできる状況ではないんです。だからこそ、世界が滅んでいないと言えるんですけど。それに…なぜか彼女は優希さんを欲しがっている。優希さんがいないからこそ、目覚めていないともいえるんです」

「それは…」

「——その人形が苦し紛れにアレの半分を奪ったからだろう」

なぜ、滅びが目覚めていないのか。優希がその理由を説明しようと

口を開きかけた瞬間、別の声が割り込む。

それは霧の向こうから、しかし静かに現れボロボロになり人の姿に戻ったヒュプノス——朔間を放り投げた。

「モル…朔間くん…！」

優希がよろめきながらも受け止めて後ろへと横たえさせて前へ出た。

モルフエ、と呼びかけて慌てて訂正し、そしてちらりと見て気絶しているだけだとわかるとそんな朔間を傷つけた件の存在を睨み付ける。

その内にあるのは、怒りだ。

アイギスをガラクタ呼ばわりし、ヒュプノスを残りカス呼ばわりしたのも情がなくなつた訳ではなく、あえて別人のようになったのだと印象付けるためだけのことだ。

本心でそんなものだとは、微塵も思っていない。だからこそ本当にヒュプノスに対し、ぞんざいな扱いをし、わざと蹴つたのだろう本体気取りの化身に優希は憤つた。

しかし、ニヤルラトホテプはそんな優希を歯牙にもかけず、嗤う。

「アレにとって重要な部分を、人形は奪つた。だからこそアレは人形を求めるのだよ！ …それにしてもお前達の愚かさは驚愕に値する」

下衆な笑み。醜悪に尽きるその笑みを浮かべた幾月の顔をした男——ニヤルラトホテプは優希を値踏みするように見て、つまらなさそうに吐き捨てた。

「その人形さえ居なかつたことに見殺しにすれば、お前たちが何もせずとも定められた滅びを回避できたのになあ？ …そして影時間と人形に関する記憶は消え、なんら問題のない日常を送ることになるはずだった！ …なぜ諦めなかつた？ …それともアレか？ …お前達が友情や愛情などというなんの意味もない脆いものをヨスガにし、この人形を救いたいと願いでもしたのか？ …滑稽だな」

その目はどこまでいっても冷酷で、優希のことを感情のある一つの人格としてみていないようなそんな印象を与える。

悪ぶりながらも結局はどちらにもなれず、迷っていた優希とはそこ

が明確に違った。

「だが残念だ。この玩具もまた私であり、ただの道具だ。ヒトの形をした玩具だよ！ 決して救うことなどできぬ！ 永遠にだ！」

高らかにニヤルラトホテプはそう宣言する。楽しくてたまらない、と言いたげに。

「ククク…何も知らぬお前達が紡いだ絆と兄妹愛は見物だったぞ！

十二分に楽しませてくれた！ だが、これはお前達2人と血のつながりのある兄弟ですらない！ 私の作り上げた泥人形…否、操り人形だ！ 今、その証拠を見せてやろう!!」

そう言うや否や、ニヤルラトホテプが手をかざしてくる。

途端に、優希が苦しみ始めた。

「う…あつ…ふつ…おえつ…！」

ガタガタと体が震え始め、せり上がってきたものをそのまま地面に吐き出す。

血だ。とめどなく血が口から流れている。

「優希!」

「か…あつ…は、…は…あ、あ…！」

視界が霞む。真っ赤に明滅する。

キーン、と甲高い耳鳴りと共に意識が霞がかってゆく。

寒気と、胸から喉を焼くような灼熱が通り過ぎて、それが吐き出した己の血だと認識した時には身体に力が入らなくなり、地面に膝をつく。

辛うじて、抵抗しようとするもごっそりと大事なものが抜けたような感覚がして、優希の視界は暗くなつていく。

そうして、ぶつりと優希の意識は途切れた。

そんな風に突然苦しみだしぐったりとして動かなくなった優希を見やった奏子がニヤルラトホテプ睨み付け、口を開く。

「ねえ、お兄ちゃんになにしたの!」

「なに、私がこの人形に与えていたものを返してもらっただけだが?」
「どういふことだ!」

ニヤルラトホテプの意味深な言葉に、明彦が聞き返す。ニヤルラト

ホテプから与えられていたもので、取り上げられたから死にそうになるほどのものとはなんなのか。明彦にも、メティス以外の他の人間にもそれが予測出来なかった。

そうして、戸惑っている様子の特別課外活動部を見てニヤルラトホテプは喉を鳴らす。

「その様子を見るに、私の化身のひとつを消したあの忌々しき男の魂と死した赤子を再利用して新たな化身にんぎょうに仕立て上げたのは正解だったというわけだ！　しかしそれにももう飽いたところだな。私が手を加える前に戻してからお前達に返してやろうという親切心だよ。ニユクス、お前も喜ぶといい。当初の予定通りになったぞ？」

そう語ったニヤルラトホテプはニヤニヤと気味の悪い笑みで湊と奏子を見つめた。本心から、親切にしてやってるんだぞと言わんばかりに。

湊と奏子はそれを睨み返す。

そんなふたりとは逆にメティスはしばし思考したあと、あることに気がついて顔を上げた。

「優希さんが与えられていたもの…私が喜ぶ…？　まさか…！　優希さんを元の死体に戻したと…!？」

メティスがニヤルラトホテプの言葉に目を見開き、咄嗟に叫んだ。「湊さん！　優希さんに黄昏の羽根を！　魂が身体から離れてシユブニニグラスに回収される前に！　早く！　ニヤルラトホテプの目的は、優希さんの精神と魂が身体から離れて取り込まれ、シユブニニグラスが完全に目覚めることです！」

「っ!!!」

メティスのその言葉に湊が駆け寄り、首元に手を当てるも生きていれば触れるはずのそれが無い事に愕然とする。

「何を驚くことがある？　最初からそれは死んでいた。私が仮初の命を与えてやっていただけにすぎない。動く死体だよ、それは」

「そんなことない!!!」

奏子が叫んで否定する。

「お兄ちゃんは生きてる!!!　生きてるの！」

「だが、それはたった今、死体に戻った。ならば何も変わらんだろう。黄昏の羽根とやらで生命力を補ったところで穴の開いた器から水が漏れるのと同じことだ。有里奏子、ひとつ教えてやろう。そういうモノを、『無駄』または『徒労』というのだよ」

「何を言っている…ッ！」

「どういうことですか、それ…」

ニャルラトホテプの言葉に美鶴とメティスが怪訝な顔をする。

たとえ元が死体でも、蘇生されたのなら、腐ったり完全に死んでいないのなら、先ほどもまで生命活動を行っていたのなら、黄昏の羽根で生命力を循環させ、魂が身体から離れるのを防げば何とかなると美鶴はともかくメティスはそう思っていたのだ。

だというのにニャルラトホテプはそれを無駄と一蹴した。

そんな、何も知らないと言わんばかりのメティスを、ニャルラトホテプは嗤う。

「近くで触れていたというのにお前は気がつかなかったのか？ なんの対価も無しに時など巻き戻せる訳がない。この人形は時を操る神器として無意識に己の記憶と魂を削り、そしてそれを焼^くべて時を巻き戻す力としていたのだよ。自らの記憶や魂が摩耗していることにすら気がつかないほどに無意識に、な」

魂の量にも限りがある。それを燃料としてつかっていたのなら、最初は完全にできていた巻き戻しもその燃料が少なくなればなるほどできなくなる。そこで無意識に優希が選んだのが必要の無い記憶を燃料にすることや自分の身体の状態を撒き戻すことに割く力を減らすことだったのだろう。

そうメティスは予測した。

「優希さんはこれまで途方もないくらいの繰り返しを行ってきた…つまり、もう魂もボロボロ…？　だから2009年4月6日時点の『^{巻き戻し}原状復帰』が完全にできなくて身体の不調が出てきたり『^{前々回}』であなたが優希さんに刺したロンギヌスの槍によって出来た傷が後遺症として残ったという訳ですか!？」

肉体を表面だけ回復させても、魂という生命活動に必要なもうひと

つのが壊れかけているのなら、その穴から徐々に水漏れするように命が漏れ出してしまおう、と暗にニヤルラトホテプは語った。

そして、魂を損なつた身体は例え見かけが健康体だとしても何の補助もなしに長くは生きられない。だから無駄だと断言したのだ。

「まったく、嘆かわしいことにそうなるだろうな。だが、アレを目覚めさせるには十分な物だ。クク、その身体に残っているといいな？」

ニヤルラトホテプは最初から賭けに優希を勝たせるつもりはなかった。

どうやつても救えないと自覚させつつも、希望をちらつかせ、その魂が摩耗して消えるのを待っていたのだ。そうすれば、優希が諦めずとも自動的にニヤルラトホテプの勝ちになるのだから。

そのついでに人の業によつて人類を滅ぼせるとなればニヤルラトホテプにとつて愉快なことこの上ない。

そして、ニヤルラトホテプはニタリ、と嗤うと奏子を指さす。

「有里奏子。お前達も私と賭けをしていたな？ あの時お前は記憶を引き継がないことを選んだ。だが実際忘れてみて、どうだ？ 何も知らぬ自分を恥じた事はないか？ 悔しいと思つたことはないか？」

「知らない…そんなこと、ない…」

と言えば、嘘になる。

ニヤルラトホテプの言っている『選択』は奏子には覚えがないが、9月に優希に一度拒絶された際も、カダスで自分の知らない兄の姿を見たときも、なぜかそんなループをしているという兄を知っている風な湊を知った時も、疎外感を感じていた。

どうして自分は何も知らないのか、と。

ニヤルラトホテプは否定しきれない奏子を見て笑みを深くする。ここにカダスのナギサは居ない。

「嘘はいかんなあ？ なあ、有里奏子。だが——そうだな、私は今とても気分がいい。嘘を吐いたことを許し、いま、それを返してやろう」「や、ああああああ!」

返事をする間もなく奏子は押し付けられ、突然襲つてきた記憶の濁流に悲鳴を上げる。

痛み。感情。光景。匂い。刺激。

バチバチと視界が何度も弾け、見たくもない光景が垂れ流される。湊が覚えていて、奏子の覚えていなかった周回分の記憶が一気に奏子に流れ込み、それに耐えきれなかった奏子の脳はそれらを処理できずに意識を強制的に落とすことに決めた。

「テメエ…ッ！」

聞こえた悲鳴にニヤルラトホテプを一瞬睨み付け、意識を失い倒れる奏子の身体を抱きとめたのは、荒垣だ。

「奏子ッ！ おい、しつかりしろ！」

「う、うう…」

それでも、なんとか夢として処理をしようとしてるのか、奏子は呻く。

脳が負荷に悲鳴を上げているのか、奏子はぶるりと身を震わせて冷や汗を流し始めた。

そして、ぐんぐんと体温が上がっていく。

「奏子ちゃん、熱がどんどん上がってきてる…！ はやく休ませないと…！」

風花が奏子の額に手を当てて焦る。

脳が必死に記憶の濁流を処理しようとして意識を落としたのはいが、それでもなお余りある記憶の量に負荷がかかっていて発熱しているのだ。

要するに、パソコンと同じようなものだ。本来は処理しきれない量の情報を処理しようとするれば、当然全力の性能で動かすことになる。

そこで、ショートするか発熱しながらも処理するか。

どちらかといえれば後者が奏子の脳で起こってしまっているというわけだ。

「奏子…！」

ニヤルラトホテプの行動により突然悲鳴を上げた奏子に湊は咄嗟にそちらを向くも、荒垣に抱えられたのを見て「息を止めてしまった兄を何とかする方が先決だ」と懐をまさぐる。

教主との戦いの時に全滅した際は、奏子の持っていた黄昏の羽根だ

けが効果を發揮した。なので湊の手にはまだそれが残っていたことが幸いだった。

元は兄から奏子へ渡されたそれが、まわりまわって自分たちの命を救い、兄の命をも救おうとしていることになにか作為的なものを感じるも、湊はそれを無視して黄昏の羽根を優希の胸に押し当てる。所持者が死亡なりなんなりしたときに効果を發揮するなら、死んでいる人間に押し当てるか触れさせれば効果を發揮させることができるのではないかと湊は予想したのだ。

そしてそんな湊の考えは当たり、すぐさま黄昏の羽根は淡い暖色の光を放ち、身体の中に溶けて消えていく。

しばらくしてゆっくりと心臓が動き出し、小さいながらも呼吸も再開する。

そのことに安心した湊だが、優希はピクリとも動かない。目を覚ます気配もなければ身じろぎひとつしないのだ。

一カ月前と同じ状態に逆戻りしてしまったような感覚に湊はゾツとした。今度こそ、居なくなってしまったら。本当に魂が身体から抜けてしまっていたら。もう、

そんな湊をニヤルラトホテプは嘲笑うと同時に哀れむ。

「人形と有里奏子を休ませたいのだろうか？　ならば、行けばいい。私は引き留めようなどとはしていないのだからな」

口先だけの言葉を吐き、やることはやったとニヤルラトホテプは霧の中へと溶ける様に消えていく。

残されたのは優希と高熱に倒れた奏子を囲む者たちだけだった。

「…とにかく、寮かどこか安全な場所へ行きますせんか。ここだと影時間が終われば目立ちますし…優希さんや奏子さんをそのままにしておくわけにもいきませんし」

優希と奏子の惨状を見たメテイスが顔を顰めて帰る事を提案すれば、そこで意識を失っていた朔間が意識を取り戻す。

ダメージは見た目ほどないらしい。

「う…、」

そうして、ふらりと立ち上がって絶望をしたような表情で優希を見

つめた。
「… ゆう、き」

「時間切れまで足掻けばいい」(12/3)

かたん、と音がして目を開く。

一面の暗闇。

自分は。

(おれは…そうだ、ニャルラトホテプに……)

死体に戻されたのだったか、と記憶を手繰り寄せる。

自分が——有里渚というこどもが元々死んでいた事には朝倉医院で古めかしい紙束を見て倒れた時に知ってしまった。気がついてしまった。

そして、その子供がニャルラトホテプの化身として作り替えられたことを。

侵食され、大型シャドウを食らったせいで死の宣告者になってしまったことはカダスを出た時点で気がついていたのでそこは関係ない。アイギスの反応が、いつもと違っていたことに嫌でも気づかざるを得なかっただけの話だ。

「……………」

最初は、ただの現象のひとつだった。

『滅び』を得るためにシフトした実験の副産物。本来の目的だった『時を操る神器』。

問題が解決しない限り2010年3月31日を繰り返す『時のから回り』を起こした原因。

『滅び』^{デス}から分離し、独立した無形の現象。

そんな何物でもない自分が、なぜ意思を、人格を持ったのか。よくは分からない。もしかしたら、誰かのシャドウが核の元になっていたのかもしれないがそれも分からない。

ただ、特別課外活動部の住む巖戸台分寮を起点に観測していた。ぼんやりと、微睡むように。機械的に。

最初は、見ているだけだった。天からの視点、とも言えるのか。テレビ画面でひたすら垂れ流されるような感じで観ていた。

そこには湊もいた。他の皆もいた。増えたり、減ったり。喧嘩したり、泣いたり。喜んだり。裏切られたり。苦しんだり。様々な感情を感じた。

人間というものを、『ペルソナ使いの高校生』というものを学習した。

『滅び』と共によく見ていた機械乙女の事も、もちろん見ていた。

幾月が無自覚なニャルラトホテプの化身だということも知っていた。

同じ、普遍的無意識に住まうものだから、そういうものだと思っていた。あちらは明確な意思があり、こちらにはない。

敵や脅威だという認識でもなかった。

自らはただの現象であり、道具として求められていたのでその程度の認識しか無かったのだ。

人格を得ようなどとも思っていなかった。なのに、気がついたら肩入れしていた。道具としての領分を超えていた。

ある日、湊が死んだ。ニクスを封印して、魂が身体から離れてしまったのだと知っていたから、「ただ身体の機能が停止した」それだけの認識でいた。

人というものを学習しても、死はよく分からなかった。どうしても悲しむのかも、よくわからなかった。悲しいという感情は避けるべきだと思うのに、悲しいがなんなのかよくわかっていなかった。

けれどアイギスが、死んでしまった湊に置いていかれたくない。悲しいと言うのでそれならばと思い出に閉じ込めた。

皆が、終わりたくない。離れたくないと望むので3月31日を繰り返させた。そうすれば、望みを叶えれば悲しくないのだと思っていたから。

けれど、違った。

結果的に大丈夫だったものの、その選択はみんなを、メテイスとアイギスを傷つけてしまった。

見たくないものを見せてしまった。選択肢を与えたつもりだった

のに、解決法を用意していなかった。
救いたいという祈りを聞き届けた。

なのに、自分は何も出来なかった。遅すぎた。

だから、何度か繰り返し返させた。2009年の4月から、何度も。

他に燃やすものなんてなかったから、皆の思い出を勝手に消費して繰り返し返した。

選択した末の結末を、覚悟を、決意を踏みにじった。理解が出来なかったが故に。

引き継げたら、なにか変わったのかもしれないけど、それでもダメだった。

何をしても、湊は——奏子も——死んでいく。皆が悲しみ、メテイスが生まれて、また自分は繰り返し返す。閉じ込める。

ある時、世界の記録そのものであるアキシックレコードを手持ち無沙汰に観測していたら、湊と奏子には生まれる前に死んだ兄がいたことを知った。

羨ましい、と思つてしまった。ヒトという生き物が、家族というモノがなんなのか、知りたかった。その時にはもう薄くても人格のようなものを得ていて。

異常なくらいに願いに執着していた。湊と奏子を救うことを優先していた。

もしかしたら、既に愛おしく思っていたのかもしれない。

運命に必死に抗おうとする姿に魅せられていたのかもしれない。それとも、彼らがニユクスを封印したせいで普遍的無意識にいたということもあつて距離的には非常に近かつたせいかも。

とにかく、理由はわからないけど執着していたのは確かだ。

ある時、いつもより多めに巻き戻してあればニヤルラトホテプが『ニユクスを封印する運命の者の兄』という事だけでその死んだことも実験の材料に使おうとしていた。

しめた、と思つた。

同じものに目をつけていたことに歓喜した。自分に出来るのは時に関する事だけ。元々生まれる前に死んでいるものを生き返らせ

たりはできない。

だからニヤルラトホテプが介入した時に自分も入り込んだ。その子には、魂がなかったから、なかったせいで生まれてこれなかったから。

自分が魂の代わりになった。ニヤルラトホテプにも元々の『有里渚の魂』だったのだと認識させた。自分をそう、書き換えた。

得た記憶も、感じた感情も、アカシックレコードを観測する権利も、その殆どを引き換えにして最低限の『時を巻き戻す』機能以外はすべて魂として自分を変換した。はずだった。

結局は情報であるので記憶や感情も魂に変換されたとはいえ、こうして大雑把に「そういうことがあった」と思い出せる程度には焼きついてしまった。

それに、見よう見まねで——しかもちつぽけなりソースから作られた魂もどきは歪で小さくて不完全で。

それだけでは足りなかった。自分だけでは足りなかった。

そんなこと知っていたと言わんばかりにニヤルラトホテプはきらきらと輝く力強い魂をひとつ、持ってきた。

けれどそれは半分に割れていた。もう半分は、色を失って崩れていた。焼けて灰になっていた。もしかしたら、『有里渚』には魂が無いことを知っていて、不完全をわかっていて使うつもりで持ってきたのかもしれないけど。

そして、自分とそれを混ぜた。繋げて、混沌で補填して、ぐちぐちと混ぜた。

その時、認識がおかしくなった。

自分がなんなのかわからなくなった。ぴかぴか光る魂の——だれかの記憶と感情が混じって、弾けて、ばらばらに砕けて、自分とぐちやぐちやになって溶けていった。今も僅かな感情しか読み取れず、その内容をほとんど知ることは出来ない。そのだれかが誰だったのか、自分にはわからない。

そういうことを見越してわざとニヤルラトホテプはそうしたのかもしれない。『時を操る神器』に本当はあの時点で気がついて面

白おかしくするために、わざと。

でもそれでも良かった。自由に動ける身体があつて、たくさんのことを感じる心があつて、なにかに触れられる感覚がある。

十分すぎるものを得ることが出来た。

そうして、^{ほく}俺が生まれて初めに得たのは『愛』だった。

母親からの愛。父親からの愛。

すぐ後に生まれた弟妹を愛しいと思う感情。

混沌と混ぜられていずれ無自覚の悪となつてしまつていたはずの自分がそれを得られたのは幸運だつただろう。

マイナスを補うほどの愛に溺れた。愛されることを、愛することを覚えた。

それでもペルソナには目覚めなかった。

ヒトでは無いから最初からその資格がなかった。

どちらかと言えばシャドウではあるけれど神魔や超常現象に近い自分はヒトの形をしてもヒトではなく。己のペルソナを得ることが出来なかった。

誘拐されたあとの実験の際に植え付けられ、自分の元に唯一残つてくれたヒュプノスをペルソナだと思ひ込むことでそれとしていた。

影時間への適正もタルタロスの塔から落ちた際に記憶と共にヒュプノスに封じられ、無くなつていた。

だからこそ最初、ファイルモンと取引をする前は何も知らないただの三上優希だったのだ。

あれとしてもニャルラトホテプと同じく、その化身が罪だけを重ね、のうのうと何も知らず生き、本当に何もしなかったことにやきもきしたのだろう。だから、取引を持ち掛けてきて俺の中にある『時を操る神器』の機能に暗示をかけ、無意識に作動させるようにした。

それか、本当に善意か。

どちらかといえば結末を覆すという意味で10年前に本来の時間軸である珠？瑠市で起きた事件の当事者である、『周防達哉』^{ヤツらの犠牲者}たちを唆した時のように、その選択肢をとることがニャルラトホテプに対する敗北だと分かっているながら差し出した時と同じなのかもしれないが。

何度も言うがファイレモンもニヤルラトホテプと方向性は違えど同じ穴の貉だ。個人の感情をあまり鑑みず、世界の命運がそれで終わるのも仕方ないと思っっているタイプだ。

天野舞耶あまのまやという大切な女性を失った『周防達哉』ヤツらの犠牲者に世界をリセットするかどうかを訊いてきたときにもそのデメリットを説明しなかったことから伺える。

あいつはすべてを知っているくせに黙っているのだから、同じことだ。どうしようもなくなってから、「全てお前のせいだ」と嘲笑う。そういう、『決して善ではない』ところはなにも違いはない。

自分がニヤルラトホテプの化身だということもわかっていて、あいつは四騎士の試練を持ってきた。

ファイレモンとしては四騎士という死神の要素を補填することによって、こちらを死の宣告者として覚醒させやすくする為にやった事なのだろう。そうすれば、ニユクスと一体化し自動的にニヤルラトホテプの化身の一体が勝手に消える。邪悪に目覚めることも無く。ただ世界の敵として。

しかし別の——それも宇宙のはるか外から来た神が途中で乱入してきたせいで奴らのシナリオ通りにはいかなかった。

奴らが考えていたのは、「湊と奏子の代わりに俺が封印の要になって死ぬ」か「それでもできずに完全に世界が滅ぶ」か「自分という存在が繰り返しのよって摩耗して消えること」だ。

要は、実験も兼ねていたが、自分という意志を持ってしまった『時を操る神器』が別の要因でも世界に干渉できないようにしたかったのだと思う。

しかしシュブニグラスが目覚めたせいで、奴らも焦っていた。シュブニグラスはこちらを通じてニユクスの身体月だけではなく、ニヤルラトホテプをも呑みこもうとしたからだ。あれはヒトがヒトの業によって自滅するのを見るのは好きではあるが、己が別の存在に意図的に呑み込まれ消され、別物なかったことにされるのは好まない。

だから、『前回』にニヤルラトホテプは特別課外活動部と敵対したにもかかわらず最終的にシナリオから外れ、和解した俺を突発的にロン

ギヌスの槍で貫いて殺さなくてはならなくなった。

そしてフィレモンはフィレモンで即座にシナリオに修正を入れ、俺に更なる取引を持ち掛けた。

『今回の記憶を全て忘れる代わりに、フィレモン自身が足りないリソースの分の巻き戻しに協力する』
と。

そうして俺は、巻き戻すことを選んだ。

抑えていた部分がシユブⅡニグラスへと殆ど回収されかけ、それが目覚めかけていたからそうするほかなかったのだ。

俗にいう、〃詰み〃だった。それだけだ。

けれどその結果がこれだ。アレは今度こそ自分が死の宣告者として正しく倒されるように、シユブⅡニグラスが目覚めないように動いたつもりだったのだろう。試練を与え、明晰夢を見せ、神条さん——神取との接触を邪魔しようとした。だが、それが逆効果になった。神条さんの件はニヤルラトホテプや神条さん自身がフィレモンをウザがったのもあるかもしれないが。

奴らにとつて予想外だったのは、四騎士たちとランペッターが別口で合体しマザーハーロットになってしまったことだろう。アレのせいで自分はほぼ半身と形容してもおかしくないほどに、〃シユブⅡニグラス〃とのつながりをさらに深くしてしまったのだから。

奴らはどこまで行っても表裏一体で、『有里渚』という人間と何かの手違いで思考する核を得てしまった『時を操る神器』という現象を実験材料にしたことに違いはない。

俺はずっと、『時_自を操る神器_分』や、ニヤルラトホテプやフィレモンに誘導された道を歩き、奴らから直接与えられたもので戦っていたというわけだ。

三上^俺優希と『時_自を操る神器_分』、そしてニヤルラトホテプたる己は全て同じで全て違う。

マーガレットが言っていたことも、今ならわかる。

自分の足で歩いているつもりだった。

実際、自分の足では歩いてきた。けれど、それは「三上優希」としてでは無い。無意識に『時を操る神器』として、願いを叶える為にはあるいていただけだった。

ニャルラトホテプやイゴールたちの主——ファイレモンの手のひらの上だった。

四騎士の試練だつて、一番初めにメノラーを渡される際に拒絶しようと思えば出来たのだ。

けれど、受け取ってしまった。

マーガレットが言っていたことは、俺というひとりの「人間」が俺自身の足で歩いていかなければならない、ということなのだろう。どうやってヒトになるのかわからないけど。

それに1周目だと思っていたことが、本当の1周目ではなかったということに驚きはあれど、戸惑いはない。自分のやったことだとわかってるから。

ヒュプノスが俺の記憶を封印することに注力し、戦う力を失ってしまったあとは、ひたすらなすすべも無く殺される自分に飽きたニャルラトホテプからモルペウスを。それだけで足りないのなら次にポベートール、そして最後に心に焼きついていた千鶴さんを元に形作られたパンタソスを植え付けられ、ペルソナに目覚めたのだと誤認した。

彼らは最初からニャルラトホテプの欠片であり、カダスのナギサと同じカダスにいた存在であり、己の心の内に住まうペルソナではなかったのだ。

誰かのペルソナに干渉できたのも、トランペッターが勝手に出てきたのも、暴走した他者のペルソナに対し手を握り【吸魔】するだけで暴走を抑えられたのも、ニャルラトホテプの化身であつて容易に心の海に触れることができたからだろう。要するに性質が近いからこそ、無意識に親近感を持たれ内に入れられたシャドウや他人のペルソナに拒絶されにくかつただけの話だ。

ウィツカーマンはニャルラトホテプの化身としての己。たしかにもうひとりの自分とも呼べるかもしれないが、あれは繋いだ混沌部分

であってペルソナではない。同じであり、別物だ。

ここまで整理して、けれどこうなってしまった以上立ち止まる訳にはいかないと決意する。

立ち上がる。

湊や奏子、美鶴さんが別にヒトでなくてもいいと言ってくれたのだから、今更身体が死んでいようがどうでもいい。動かなければ。燃やさなければ。自分でちゃんと、抑えておかなければ。

湊も奏子も、一ヶ月は魂がない状態で身体を動かして頑張っていたのだ。自分は、内を少し損なってしまっただけ。なら、時間切れまで足掻けばいい。自分の身体に対する自分の『認知』を悪用して生きていくことにすればいい。

動く屍状態だろうが関係ない。

もはや『時を操る神器』やニャルラトホテプの化身という存在から変質していたとしても。

俺は、行かなければならない。

12月3日（木）朝

目を開く。

今が何時で今日がいつなのかわからないが寮の自室のベッドの上だ。起き上がり、自分の状態を確認する。

心臓が動いて、息をしている。生きている。大丈夫だ。

「……………」

胸の奥から、黄昏の羽根のような気配がして少しだけぞわぞわとした。

恐らく認知を悪用するまでもなく、湊が黄昏の羽根を使ったか埋め込んだかしたのかもしれない。一瞬でも死んでいるのは確実なので、効果を知っていたかメテイスか綾時くんかに言われたんだろう。4月とは違いつくのとうに限界だったので黄昏の羽根を使うくらいしか蘇生の方法は無かつただろうし。

それが無理でも認知の悪用と気力だけで身体を動かすつもりではあつたけれど。

黄昏の羽根に意識を向けていると、近くにいる訳ではないというのに奏子と湊の気配をなんとなく感じとれて、変な気分になる。

もしかしたら持った拍子に遺伝子情報でも焼き付いてしまったのかと要らない思考を回す。最初に持っていたのは自分なので自分の遺伝子情報も焼きついているのかもしれないが、それはそれ。これはこれだ。

迷子になつた時には便利そうだと思つた。

ベッドから立ち上がり、腕を回してみる。問題ない。

足を踏み出し、足踏みする。少しふらつくけれど大丈夫。

視界は良好——とは言えないがまあ及第点だろう。

鏡で自分の顔色を確認すれば、青ざめていて不健康そうであり良くはないがなんとかなると流すことにした。

軽い頭痛と体のだるさはあるが少し動く動作をするくらいなら問題はないと確認し、時計を確認すれば12月3日の早朝だった。

部屋を出たとして、初めにどうするかだ。皆の無事を確認した後、学校に行くか、休むか。

個人的には学校に行くのを優先したいところではある。しかし、奏子の気配がなにかおかしい。朝早くだというのに寝ている気配ではなく苦しんでいるような、泣いているような。そんな気配がするのだ。

湊に関しては揺らいではいるけれど寝ているような雰囲気で大丈夫そうなので、奏子の様子を見に行ってから決めるのもいいかもしれない。

かなり早いがいつものルーティーン通りに制服に着替え、学校に行く準備をして部屋のドアを開ける。

「あ……」

「……朔間くん、おはよう」

ドアを開ければいつからいたのか、そのすぐ横で体育座りをして座り込んでいた朔間くんに挨拶する。その顔は、憔悴しきっているよう

で見ると堪えない。

「怪我は大丈夫？」

「……………」

ボロボロだったので怪我は大丈夫かと聞いてみたが、目を逸らされてしまう。

「辛い役を押しつけて、ごめん」

「なんでっ!!!」

謝れば、朔間くんが叫ぶ。

「謝るのは僕の方でっ、僕がちゃんと全部受け止めきれたら…優希は死の宣告者になんてならなかった!!! 僕がおかしくなつて優希を傷つけたり、優希が一人で消えようだなんて決意したり辛い思いもなくて済んだのに！」

「しーっ、まだ朝早いんだから静かに。でも、違うよ。違うんだ、モルフエ」

朔間くんの——否、モルフエの言葉を否定する。

モルフエのせいでは無い。確かに、最初に大型シャドウを喰らうようになったきっかけはモルフエだったのかもしれない。

モルフエが——ヒュプノスが大型シャドウを吸収しきれず、こちらに大半が回ってきてしまったことも原因かもしれない。けれどモルフエはちゃんと警告していた。大型シャドウには近づいて欲しくない、と。

悪いのは吸収できる土壌を持ってしまっていた自分とフィレモンとニヤルラトホテプだ。

「俺は、最初からこうなる運命だったんだ。…あの時モルフエが頑張ってくれたから、俺はこうしてここにいる。辛い思いをさせて謝らなきゃいけないのは俺の方なんだ」

昨日、モルフエは介入しようとしてきていたニヤルラトホテプを限界まで抑えていてくれていたんだろう。

だからこそ、自分は（一応）無事に帰ってこることが出来た。

謝罪と感謝こそすれ、こちらが謝られる理由はない。

それに逆に自分がモルフエを——ヒュプノスの力を取り込んで喰

らったという表現もできる。謝るべきは、こちらのほうなのだ。

「モルフエさえ良ければ、これからは湊達に力を貸してあげて欲しい。

……俺は、もしかしたら役に立てないかもしれないから」

そう言っただけを撫でれば納得してなさそうな顔でコクリと無言で頷かれる。

身体を動かせているとは言っても探索込みで連続した戦闘ができるほど動けるかどうか分からない所がある。来る決戦までには戦えるようにしておきたいので、慣らしはするが。

「ぼく…僕は、優希がみんなを救って消える事を望んでたから、協力しなきゃって思ってた。だって、それが優希の幸せならって！ でも、優希の弟と妹の目を見てたら、ほんとにそうなのかなって疑問が湧いてきて……それで……そのせいでアイギスや特別課外活動部のみんなにバレちゃったから…優希がちゃんと終われなかった…また、苦しい思いをする羽目になってるのに、ぼく、いま何故か優希がまだ居てくれて、生きてて良かったっておもっちゃって……！」

俯いたまませきをきったように話したモルフエは止まらない。

モルフエは優しすぎる。こちらの願いを叶えようと動いてくれて、己が死の宣告者なのだと言わさずとヘイトが向くように名乗っていた。恐らく自分が気がつかないまま過ごしていたら、そのまま死の宣告者を名乗って立ちはだかつていたことだろう。

そうすることが無意味だとわかっていながら。

そして自分が思い出してしまったあとは、精一杯特別課外活動部をムーンライトブリッジに留めてくれようとした。

アイギスが気がついてしまったからこそ、自分はひとりでカダスへは行かずに戻ってきた。

気づかれてしまったのなら、殺されてもいいと思った。演じて、敵意や憎悪を向けさせようとした。あのまま行けば、モルフエきつと倒されてしまうしいらない傷が増える。それも嫌だった。

しかしそれが間違いで、嘘がすぐに見抜かれるわ、湊たちは俺を殺すつもりなんて全くなくて。

何をやっても中途半端で、思いも中途半端なままこうして戻ってき

てしまつて、モルフエや皆の思いを踏みにじつてしまつたのは自分の方だ。

「いいんだ。モルフエは何も悪くない。悪いのは全部、なんにも決めきれない中途半端な俺なんだ」

許してくれとは口が裂けても言えない。

許されることではないことくらいわかっている。

「でも…」

「ああやって思うのは正常だよ。矛盾してるかもって思うけどさ。それが、ヒトの心なんだよ、モルフエ」

モルフエは俯いたまま答えない。

こういうのはアイギスと同じでおいおいわかつていけばいいと思う。

モルフエの場合、幼い頃の『僕』だった頃の俺の人格くらいしか参考データが無いんだろう。

一方、自分はモルフエに記憶を封じられてから養父さんの真似をして『俺』と言い始めただけだ。そして口調は養母さんのものに近い。

だから、いまの人格は『三上優希』という人間とも呼べるかもしれないと勝手に思っている。

逆に、モルフエは『実験体だった頃の有里渚』を基準に人格を得ている。

なら、自分があのまま成長したらこうなっていたのだろうか。

……。

わからない。

どちらかと言うと今の口調のまま、『僕』呼びだったのでは無いのだろうか。うーん、なんだか胡散臭い気がする。

「…眠かったら俺の部屋で休んでいいから。朔間くんとしては慣れて無いだろうけど、モルフエにとっては慣れてるだろ？ だから、寝てていいよ」

思考が逸れていたので修正して、「まだ朝早いし」とは付け足さずに申し出る。

この調子だと綾時くんやメテイス、モルフエは作戦室かラウンジの

ソファで寝ていたのかもしれない。この寮にはもう空き部屋がないので、寝られる場所といえばそこくらいしかないのだ。

「いいの…?」

「良いんだよ。ほら、ゆっくり休んでおいで」

奏子や湊に言い聞かせるように、部屋の鍵を渡してモルフエを部屋に入れる。

おずおず、といった様子で部屋に入ったモルフエは遠慮がちに制服の上着を脱いでベッドに寝転んだ。

スウェットかなにか、寝やすい服を貸してあげられればよかつたけれど朔間くんとしてのモルフエと自分はかなり身長差がある（もちろん、朔間くんとしてのモルフエの方が圧倒的に低い）ので着てもぶかぶかになるだけだろう。裾を折ったとしてもなおあまりあるというのは想像に難くないのでそのまま黙っていることにした。

あと、借りること自体に負い目を感じて遠慮しそうではあるし。洗えばいいだけなんだけれど。

「おやすみ」

そう言つて、部屋の電気をぱちんと消してドアを閉じた。そして二、三歩歩いて立ち止まる。

(さて…)

1度下に降りてから奏子の様子を誰かと見に行くべきか。それとも兄妹特権で部屋に直接行くか。悩ましいところではある。

とはいえ、家ではないし奏子もそういうのをあまり好まない——とは思ふ。たぶん。奏子の方は容赦なく湊の部屋やこっちの部屋に入ってきているけど。三上家では、自室の扉開けた瞬間こちらが買つて置いておいたおやつを食べながら我が物顔でくつろいでる時もある。あつて気にしてないような気もあるがあれは家だからだろう。

それになにか不安定になっているのなら先に誰かに事情を聞いた方がいいかな、と思つた瞬間、目の前の荒垣くんの部屋の扉から目覚まし時計の爆音が僅かに貫通してビクリと身を震わせる。

そうだ、荒垣くんがちょうど起きてくる頃だった。

荒垣くんなら何か知っていないだろうか。出来れば部屋に行くな

ら女子と一緒にいいが、この時間は美鶴さんでもまだ寝ているだろうし背に腹はかえられない。

荒垣くんなら一応、奏子の彼氏だし、部屋に行っても問題ない……はず。

いや自分単品の方が血縁関係ということを考えて問題ないっちや無いんだろうけど。うむむ。どうするのが最善か、分からなくなってきた。

(湊か？ 湊と一緒にいけば1番問題ないのか?)

だがそうなるにあの寝付きの良すぎる湊をこんな早朝に起こさなきゃならないし、色々聞かれるだろう。

湊の睡眠時間とかを考えると素直に待った方が……

そうやって決めきれずにうろろうろと右往左往してれば、ガチャリとドアが開いて中から長袖タンクトップの荒垣くんが出てくる。

「……」

寝起きだからか、荒垣くんは目つきはいつも以上に鋭い。

「おはよう」

「……おう」

荒垣くんの返事は短い。

チラチラとこちらを見てくるのでヘラリと笑う。

「俺は大丈夫だよ。大丈夫。まだ、死ねないからさ」

「お前の『大丈夫』は全くもって信用できねえんだがな」

溜息を吐かれてしまう。心外な。自分の『大丈夫』は大丈夫な時にしか言っていない。

なんとかなっているの『大丈夫』ではあるけど。

「そうだ、奏子になにか無かった？ もしかしてあのクソ……じゃなかったニャルラトホテブに何かされたとか……そんなところのなにか」

そう訊けば、荒垣くんは途端に目を逸らした。

何かを躊躇うように床を見て、そして俺を見る。30秒ほどだんまりを継続した後、覚悟を決めたように真剣なまなざしになって、口を開いた。

「てめえの察してるとおり、…あのヤローに何かされたみてーでな、倒れて高熱を出してやがる。今は、アイギスや… アイツの妹だとか名乗ったあの…メテイスとかいうのがついてるから安心しろ」
「は？」

それを聞いた瞬間、耳元でバチリと空気が弾けた音がした。

「あー、そうなのか。あいつ、奏子に手を出したのか。俺の、大事な、妹に。そうかそうか

——殺す」

殺せないことはわかっている。けれど、一度完膚なきまでに消し飛ばさなければという激情が湧いてくる。おおよそ10年は浮上してこれないくらいに、完膚なきまでに。

荒垣くんの話だけでは奴が奏子に何をしたのかわからないが、十中八九ロクでもない事だろう。

「落ち着け！ チツ、だから言いたか無かったんだよ…」

「なに言ってるの荒垣くん。俺は、落ち着いてるし、極めて、冷静だよ」

左手の親指の先を噛む。チリチリと、肌を焼くような感覚がする。

頭はとても冴えている。冷静に奴に対する最大限の嫌がらせは何かを考えるくらいには。

「そういうことじゃねえ！ てめえは寮を火事にするつもりか!？」

「えっ」

聞こえてきた言葉に驚きに顔を上げればぴたりと肌を焼くような感覚が止まる。

「人間じゃなくなっちゃったつうのは、マジみてーだな。何もなくてここで良かったが、燃えてたぞ」

「ええっ、えっ!？」

荒垣くんの呆れたような声に嘘じゃないと理解できるも、何も無いところが燃えていたと言われて自分で受け入れられずに周りをキョロキョロとみる。

床や壁が燃えていないことから、発火したのは本当に何も無い空間だったのだろう。それも、火災報知器が発動しなくなれば煙の出ないタイプか火が小さかったか。

そんな動揺している自分を見た荒垣くんは自分と同じようにぎよつとした顔をしてから次に怖い顔になって肩を掴んでくる。

「おい、いまのまさか、意図的でもなんでもなく、無意識だったっつーのかよ?」

「…お恥ずかし、ながら」

そもそも、元は人間ではないとは言えども入っている器は人間そのものなので、自分には感情が昂ったくらいで突然発火させる力を発揮できるほどそこまで人間をやめた覚えはない。

ガチャリ、と自室のドアが開き、朔間くんがおずおずといった様子で顔を出してきた。どうやら、自分が無意識に練り上げてしまったらしい魔力に気がついてしまったのかもしれない。

「な、なにか…あつた…?」

「なんでもないなんでもない。うん。なんにもなかった。大丈夫だから寝てていいよ」

苦笑いで答える。

自分としてもそんな簡単に異能を扱えるなどとは思っていないかつたし心配されるほどのことでもない。

すこし境界線があいまいで、より『あちら側』に寄ってしまったただけだ。もしくは、もう1人の自分ウィックカーマンとの境目が無くなってきているか。

炎、と来れば彼しか思い浮かばないから。

朔間くんはそのまま遠慮がちにひっこみ、沈黙が戻って来る。

「あれ、自由に出来たらライターない時にタバコの火をつけるのに役立ちそうじゃない?」

「バカ言え」

沈黙に耐え切れなかったので苦し紛れに冗談を言ってみたら怒られた。そしてはあ、と大きく溜息を吐かれる。

「さっきのお前な、やべー顔してたぞ。まさにキマってた、つーかよ…」

「え…こわ…」

「いや、なに他人事のフリしてやがる。お前なことだつつの。なんだ、ストレガのアイツ…タカヤそっくりでビビったぜ」

「んんん…」

他人事のように怖がって見せれば真面目な顔でツッコまれる。そりやそうなんだけども。そうなんだけども…面と向かってそう言われるとドン引きするというか。てかタカヤそっくりでキマツてる顔ってなんなんだ。ペルソナ召喚する時のアレか？ 心外な。

とにかく。

「ええと、奏子の様子、見に行っても良いかな。俺にもなにかできることがあるかもしれないし」

「見に行くのは構わねえがてめえも死にかけてたのを忘れんじやねえ。なにかありやあ問答無用で朝倉センセ呼びつけるからな。嫌がっても呼ぶからな」

「はい…」

無茶をするんじゃないぞ、と釘を刺される。

荒垣くんの中では自分は死んでいたのではなく、死にかけていたことになっているらしい。ということは、死んでいなかったのか。

ニヤルラトホテプが嘘をついたということになるのか。

それは、ないと思う。アレはそう言ったサブライズはしないタチではあるし、そうなると黄昏の羽根の気配に説明がつかない。

いずれは溶けて完全に同化するだろうそれも、今はまだ異物みたいなものだ。

「あとで桐条やアキ、それに有里…てめえの弟にも無事を伝えとけ。もちろん、他のやつらにもな。…他にも色々言いてえことはあるが…俺からはこれで我慢しといてやるよ」

こつん、と軽く小突くように拳で額を殴られる。

本当に痛みも何も無い、下手をすればただ押しただけのその拳はこちらが死にかけたというのもあつてか随分と優しい。

「…甘いなあ、荒垣くんは」

「あ？ なんか言ったか？」

「…なんでもない」

頭の後ろを搔きながら、朝食を作り到下へと向かう荒垣くんを見送って歩き出す。

荒垣くんだけに限ったことではない。みんな、甘すぎるのだ。

なぜ怒るべきところを怒らないのだろう。なぜ、責めるべきことを責めないのだろう。

自分はみんなを一度殺したばかりか、自分が殺されるためだけにまた殺そうとしたというのにどうしてまだ味方だと——仲間だと思えるのだろうか。

「また、ヘンなこと考えてませんか？」

突然、降って湧いてきた声にびくりを肩を震わせる。

顔を上げると三階の踊り場からメテイスがこちらを覗き込んでいた。

「なんだ、メテイスか……」

「なんだ、じゃないんですけど……？」

声をかけてきたのが岳羽や美鶴さんじゃなくて良かった、と胸をなでおろしていればメテイスはムツとしたような顔をして不服そうに返してくる。

「ごめん、別にメテイスが嫌なわけじゃない。ただ、」

「分かっています。もし美鶴さん達に見つかって、甘い対応をされたり許されるのが気持ち悪いんですね？ 『どうして』って思うんでしょう？」

どうしてわかったんだ、と口に出す前にメテイスはやれやれといったげに肩を竦める真似をした。

「もう、言ったでしょう。死の宣告者となった優希さんとニクス私は繋がってるのだと。思考とかその他もろもろ、駄々漏れですよ。一方的に」

「あー……そういうことか……」

納得する。それなら、ここまで筒抜けでも仕方がない。とはいえ、少々プライバシーがないんじゃないだろうか。

「失礼ですね。私が読み取るまでもなく、あなたが勝手に漏らしてるんですけど？ 　　というか、ほんとに仕方のないヒトですね。私だって姉さんのこともありますしこうして思考以外のこともしなきゃいけない上でいろいろ駄々漏れなの、面倒なのでこれからは接続を切り

ますけど。湊さん達に説得されて負けたんですから潔くシユブニグラスをどうにかして生きる方法、探してくださいね。間違っても『差し違えてでも』だなんて考えないでくださいよ」

言葉が出ない。

考えていたことが全部筒抜けだったことに。というか『漏らその言い方してる』は語弊があるからやめてほしい。

とても。

メテイスも遠慮が無くなってきているのか、こちらが色々やりすぎたのか、随分と遠慮がちにしていた最初の邂逅よりズケズケとものを言うようになってきた。

否、自分が意図してニヤルラトホテプの力を使ったせいでニヤルラトホテプと同様の扱いをされているだけかもしれない。それとも人間の犠牲者ではなく有里渚という人間になるはずだった命を弄んだ立場である『時奴らと同類を操る神器』だと分かったからか。

自分としては『目をつけた』はそれだけではなく、加害者になる十分な理由になると思うのだ。

「馬鹿ですか。馬鹿ですよ。馬鹿なんです。あなたは優希さんであり、渚さんでもあることは事実なんですから、そこに被害者も加害者も無いでしょうに。一体なにを悩んでるんです?」

まだ筒抜けだったらしい。接続とやらを早く切つて欲しいところではあるが、馬鹿の三段活用をされてまで言われるとは思わなかった。

そうしてこちらにそう訊いてきたメテイスだったが、しばらく黙つてじつとこちらを見てきたかと思うと何かを納得したように頷いた。「……なるほどな。優希さんは自分がなんなのか分からなくなってるんですね。複合の存在ゆえに。何になりきることも出来なくて中途半端にさまよっている。だから、過去を思い出してもまだ自分は渚さんじゃないと思ひ込もうとしてるんですか。一種の乖離を起こしてますよね、それ。大丈夫なんですか?」

メテイスが心配するような顔で問いただしてくる。

けれど、大丈夫かそうでないかなんてよくわからない。乖離を起こ

していると言うのもよくわからない。

「俺は、大丈夫だか…うっ…!?!」

まるでノイズが走るように視界がブレる。

ぞくり、と背筋に悪寒が走って身体に力が入らなくなり、ずるずると手すりにもたれるように膝を着く。

冷や汗が止まらない。気持ち悪い。嫌な音を立てて跳ねた心臓を鎮めるように胸を押さえる。

「……はっ……はあっ……はあ……はあ……!」

——いま、ほんの一瞬だが無理やりこちら側を覗かれた。

自分を通して、別の繋がりを持った相手が無理やりこちらやメティスを観測してきた。

いまの自分は、死ニユックスの端末の宣告者であってそうではない。

覗いてきた相手はニヤルラトホテプか——それともシユブⅡニグラスか。

恐らく後者だろう。

今はもう化身という枠から外れてしまい、そうされていないが、ニヤルラトホテプに対しては勝手にこちらの情報がネガティブマインドという集合知に常に自動送信されているようなものだ。そして、己がニヤルラトホテプだと自覚してしまった化身なら、共通意識の上である程度は好きな情報を引き出せる。情報の送信も読み取りもこちらに限った話ではないし、それはあの本体気取りの化身もそうだ。

自分が集合的無意識の深層で溶けてしまえばいいとはつきりと思いついたのも、あの本体気取りの化身が10年前の珠? 溜市でペルソナ使いたちに負けた情報を見たからだ。

なので、わざわざこうして見せつけるように、バレるように無理やり覗き込む必要すらない。

わざわざ覗き込む必要があるのは、この星に居ない存在だけ。

つまるところ、繋がりがあったてこちらを覗く必要があるのは現在月に封じられているシユブⅡニグラスしか有り得ない。

「ちよつと!?! まったくもって大丈夫じゃないんじゃないですか!」

慌てて踊り場から階段を駆け下りてきたメティスに対し首を横に

振る。

「ほんとに大丈夫。ただ、ごめん、一瞬だけど俺を通してアイツに見られたかも。目的は分からないけど」

手すりを支えに立ち上がり、吐き気を抑える。

軽い頭痛と視界の揺らぎがあるが体調不良以外の異常は見当たらない。

「見られたくらいでは問題ないと思います。大したことを話していた訳ではありませんし。ええと、身体を乗っ取られたりはしてませんよね？」

「そこ、は…平気。身体が効かないとかないから」

流石に先程の発火現象とこの視界ジャック事件が短時間で重なる、ヒトであることをやめてきているのだと自覚せざるを得ない。

しかし昨日の今日でいささか急すぎる気もする。

「ならいいですけど…奏子さんの様子を見に行くんですよね？ 姉さんがいますから、私もいないとダメでしょうし一緒にいきますよ」

メテイスはアイギスと自分がごたごたを起こすだろうと警戒しているのだろう。

もしくは、アイギスから自分が奏子になにかするのではないかと思われるのを防ぐためか。

一緒に階段を上り、廊下を突き切りまで進んでメテイスが奏子の部屋のドアを開ける。

「姉さん、入りますよ」

「はい…！」

メテイスをちらりと見たベッドサイドにいるアイギスはその後ろにいた自分を見て目を見開く。

「どうして…」

「？」

小さく、声は聞こえなかったがそう呟いたように口を動かしたアイギスに頭の中で疑問を浮かべる。

そしてアイギスはそのままだの両手を見やり、もう一度こちらを呆然と見た。

もない。

(辛いよな…楽にさせてやれなくて、ごめん…)

その苦しさを少しでも緩和できないかと奏子の手を握ろうとして触れた瞬間、

「っ！」

頭の中でばちん、と変な音がした。

自分の喉から声にならない悲鳴があがる。

否、叫べていたかどうかも怪しい。

ごとんとなにかが床に落ちる音と共に意識が一瞬で途切れた。

「空っぽだったんだよ、元から」(12/3)

奏子はひたすら夢を見ていた。

最初は、奏子と湊を巖戸台駅まで迎えに来た兄が、現れるはずのない魔術師の大型シャドウから奏子と湊を逃がすための囿になり死ぬ夢。

次は、奏子が想いを寄せた荒垣を兄が庇い、ストレガのタカヤに銃で撃たれ死んでしまう夢。地面に広がる血溜まりに、ヒューヒューというおかしな呼吸音までもがリアルに耳にこびりつく。

奏子は、何も出来なかった。

3度目の場面は天文台の上で見せしめだと言われながら幾月によって撃たれて死んでしまう兄の夢。

カダスで見た、カダスのナギサが困惑していた場面そのもので、奏子は「だからナギサちゃん湊の記憶なのかってきいたんだ」と納得してしまった。

これが幻覚ではなく、本当にあつたことなのだと奏子は気がついてしまった。

4度目は、力不足を感じた奏子が不調を隠してタルタロスに登ったことが原因だった。

奏子、湊、明彦、そして優希という珍しい組み合わせで。

奏子は不調でありよりよしくなかった。それこそ、ふらふらとたまにふらつくくらいには。兄が心配そうに奏子に視線を向けていたのはわかっていた。わかっていたが、なんとかなると思っていた。

油断していた。

そんななか、後ろから不意打ちを食らってしまった。

真つ先に攻撃を食らうはずだった奏子を庇ったのは兄だった。その次に、別のシャドウから攻撃をされそうだった湊を庇い、兄は吹き飛ばされた。

タルタロスの壁に打ちつけられ、ごっつ、と嫌な音がした。

ずるりと壁に血の跡を残して崩れ落ち、床に血が広がる。動けなくなった兄は更に追撃を受ける。兄は、ピクリとも動かない。

誰かが叫ぶような声が聞こえた。風花が何かを言っていたが奏子の耳には入らず、気がつけば病院のベッドの上で。

兄が死んでしまったことだけを遠慮がちに伝えられた。

奏子のせいだった。そう、自覚せざるを得なかった。

5度目は7月。

奏子はその日、特に何も無かった。問題という問題がなかった。だから、兄が神社にいるというコロマルという犬を守ろうとしてイレギュラーシャドウと戦って死んでしまうだなんて思いもしなかった。その兄が守ろうとしたというコロマルもシャドウと戦い、大怪我を負っているのだと。

奏子は呆然とした。

6度目も、奏子にとつては唐突で。

休みの日。昼に用があると出かけた兄が、翌日遠く離れた井の頭公園で見つかったと言われた。

ただし、遺体の損傷が激しく、獣に食い散らかされたような跡があつたという。

奏子はその兄を見ていないが、今ならわかる。恐らく、祖父を食らったもの達と同じ存在——悪魔に殺されたのだと。

7度目。

奏子は、湊と共にニユクスを封印した。

兄はその時点まではきつと生きていた、のだと奏子は信じたかった。

その時の奏子は無邪気にも、兄が大丈夫だと言うのを信じきっていた。

たまに、苦しげに息を切らしているのを見ることはあつたが、気の所為だと無かったことにしていた。見なかったことにして、不都合なことを考えないようにしていた。兄は、そういうことを詮索されることを苦手に思っているようだったから。

それでも不安だったから、奏子と湊は兄に「ニユクスとの戦いを乗り越えて、みんなで生きよう」と言ったのだ。

兄がどんな状態で、どれほど弱っていたのかも知らずに。

兄は、奏子と湊が目を離した隙にタルタロスの頂上で限界を迎えて死んでしまっていた。

奏子の不用意な言葉のせいで、休ませるべき兄を死なせてしまった。

8 度目。

奏子に見えたのはどこかの薬臭い部屋でいつも静かな湊が我を忘れたように獣のように吼え、憎悪と怒りの表情で幾月に飛びかかろうとして、しかし皆に押さえられてできない場面だった。全員、恐ろしい顔をしていた。

床には血と、肉片のようなものがべたべたと落ちていて。

台の上には下腹部から胸にかけてぐちゃぐちゃに開かれた兄だったものが乗せられている。

その目は、濁っていてどこも見えていなかった。

9 度目。

奏子は願ってしまった。

カダスで見た、湊の罪だという光景。その時に奏子も願ってしまったことを思い出した。

ニクスと相対すれば死ぬと記憶が無いなりに確信めいたものがあった。だから、一人で行かせてしまえば兄が確実に死んでしまうことも、なんとなくわかっていた。

兄が立ち上がる直前、湊と奏子はベルベットルームで“宇宙”のアルカナを得ていた。

あらゆる事象・どんな行いも奇跡でなくする力だという。

なら、ならば。

「行かせない……っ！ お兄ちゃんを……ひとりで行かせない！ だから、いま戻ってきて！」

終わる瞬間ではなく途中で願ってしまったが故に。『無事に戻ってきて欲しい』ではなく色んなことを無かったことにして——全てを巻き戻して戻ってきて欲しいと願ったが故に。

『今』があるのだと気がついてしまった。

湊だけではなく、奏子も罪を担っていた。

片棒を担いでいた。

「ごめんなさい…お兄ちゃん…ごめんなさい…！ わた、わたしのせいだ…！ 私たちのせいだ…！」

なにもない真つ白な空間で、ひとり、奏子は蹲って泣きじやくる。全てを知ってしまった。夢だが、夢ではなく現実に起こったことなのだと知ってしまった。

綾時がファルロスで、本来の死の宣告者^{デス}で。自分たちはそれを内に封印されて、この10年間過ごしてきたのだと。

そして兄が苦しんでいるのも、死にそうになっているのも、死んでしまったのも。ぜんぶ。

奏子はまた、兄に言ってしまった。「生きて欲しい」と。

7度目と同じではないか。

兄はもう限界なのだと今度は隠さずにちゃんと言っているのに。

けれど奏子には諦められなかった。受け入れられなかった。知ってしまった。

ニユクスに——否、シユブ^滅ニグラス^びに相對すれば自分たち双子か兄のどちらかが必ず死ぬ。

それではいけないのだと。

3人ともが生きて、2010年^{卒業式}の3月6日^のを迎えなければならぬ。

この物語は大団円でなければいけないのだ。そうでないと、終われない。

「でも、私にお兄ちゃんを助けられるような力なんて…」

ないのだと、奏子は閉じこもる。

兄や、湊ほどのすごい力は自分には無いのだと。

「そんなことは無いさ」

不意に、声とともに影が差す。

「え…？」

奏子が顔をあげれば、そこには兄が立っていた。兄は優しい顔をしてしゃがみ、奏子の頭を撫でる。

「大丈夫。繋がりを信じればいい。疑いようのない、自分の絆を」

見た目は兄なのに、奏子は不思議と目の前にいるのが兄ではないような気がした。

雰囲気は、兄のものに近い。だが、少し違う気がして。

「あなたは、だれ…？　ほんとにお兄ちゃんなの…？」

そう問えば緩く、兄の姿をした誰かは首を横に振る。

「俺はきみだよ。きみの中にある原型^{アニメス}。きみの兄と紡いだ絆の形だ」

そうして、兄の姿をした誰かは目を閉じた。

ちりり、と青い炎が床を焼く。瞬間、凄まじい勢いで燃え広がりに兄——優希が青い炎に包まれ、姿が変わる。

青い肌に4本の腕。腰まである黒髪。奏子よりもかなり大きい背丈。兄や湊、そして自分の面影を残すような顔。

奏子の知る、シヴァによく似ていて、しかし違う姿。

シヴァであれば腰布がある部分や腕の1部、そして足先と踵が無機質な甲殻のような鎧に覆われている。

「——我は汝。汝は我。宇宙の炎。破壊を司るもの。シヴァ・マハーデーヴァ^{なり}也…」

「シヴァ・マハーデーヴァ」…それがあなたの名前…？」

「如何にも。我らは輪廻する旅人であり、宇宙の始まりを根源とする原型でもある」

シヴァ・マハーデーヴァの言っていることは奏子にはよくわからないう。しかし、己の力だと言うことははっきりと分かった。

そしてこのペルソナが奏子の力になるうとしていて、兄との絆によつて生まれたペルソナだということも。

信じてみよう、と思った。自分を信じて、やれるのだともう一度立ち上がろうと。忌むべきだと思ったはずのこれまでの兄との思い出に、背中を押された気がした。

これまでの全てが無駄ではないと肯定できそうな程には。

「ありがとう、シヴァ。私、頑張ってみるね。だから、力を貸してね」「案ずるな。我らは常に汝と共に。来るべき時にはこの力を存分に振るおう」

口調は厳しいが、その表情は優しい。
微笑んだまま、シヴァ・マハーデーヴァは光となって奏子の中へと消えていく。

「…行かなきゃ。寝てる場合なんかじゃないよね！」

レツツ、ポジティブシンキング！ と鼻息荒く立ち上がった奏子は目を覚ますことを選択する。

整理はついた。全て思い出した。なら、起きて兄の無事となぜあんな行動をしたのかを確かめねばと。

奏子はやる気に満ちていた。

夕方

ぱちり、と目を開く。

寮の自室で、窓からはオレンジの光がさしている。

「おれ、は……」

奏子の見舞いに行って、触ろうとした瞬間に頭の中で変な音がして——そこから記憶が無い。

ベッドの縁に垂れている左腕に、点滴の管が刺さっている。

のろのろと横を見れば、無理やり点滴かけが部屋に置いてあるのがわかった。

こんなもの、寮には無いはずなので荒垣くんに言われた通り朝倉先生を呼ばれてしまったのだろう。

そりやそうだ。喉元過ぎるどころか数十分ほどしか経っていないのに気絶すれば容態が急変したと思われるでも仕方ない。

「……………」

頭が痛い。

起き上がって、なんとなくくぶちりと無理やり点滴を抜いた。

頭の痛みのせいか、点滴を抜いた時の痛みはない。

血がぼたぼたと垂れるのが不思議で、けれど床を汚すのはいけないと思いが働き緩慢な動きで傍にあったタオルを腕に巻く。

奏子の無事を確認しないといけない。それだけが、身体をつきうご

かしていた。

部屋を出る。よたよたと歩いて、階段を上る。

3階について、奏子の部屋までまたよたよたと歩く。

ドアを開けようとして、すこし悩んでやっぱりドアノブに手をかける。

そしてそのまま開けようとして——力を籠める前にドアが開く。

「!」

目の前にいる人物が、一瞬誰だかわからなかった。

脳が処理しきれしていないのか、声と顔はわかるのに誰なのか分からない。

「オマエ……あ……こ……こまでくるともう怒る気も起きねーわ……」

目の前の人物が溜息を吐いた。

「朦朧としてんのか……? おい、返事できるか?」

「……………?」

首を傾げる。なぜ、そんなことをきくのだろうか。

「…オマエの妹は熱も下がってもう落ち着いてる。だから、安心してもうちよい寝てろ。オマエの方がヤベー状況なんだからな」

そつと、手を握られて肩を支えながら方向転換させられる。

奏子が落ち着いて、無事ならそれでいい。

大人しく、歩調を合わせて歩いてくれる——朝倉先生、に連れられる。

「喉、乾いてねーか? ちょっと水飲むくらいなら大丈夫だからな」

「……………」

はい、と返事をしようとして、けれどそこまでの力が出せずにゆつくりと階段を下りる。

代わりに小さく頷いて、そのまま部屋まで帰れば床の惨状をみた朝倉先生が顔を顰めたような気がした。

「……点滴を外してるから覚悟はしてたが……オマエから目を離したオレがバカだったわ」

つられて見れば床のフローリング部分に小さな血溜まりが出来ていた。

つまり、点滴を外してすぐにタオルを巻いたと思っていたが、実はそうではなかったということなのだろうか。妙に、頭がクラクラするのはこのせいだったのか。

「どーーーーーしてオマエはこーーーーんなに問題児なのかね。今まで見てきたどの患者よりヤベーよ。倒れた当日くらい大人しく休めや！　なんで、それが、できねーーーーんだよおおおおおおお……」

朝倉先生が比較的抑え目な声量で文句を言ってくるがその通りなので黙る。というよりは答える元気がないといえいいのか。

自分をベッドに寝かせた後、ごしごしとタオルで床を拭いた朝倉先生はもう一度溜息を吐いてこちらを見た。

「オマエ、マジで、絶対安静な。外や学校も行くなよ。絶対だからな！」

こくこくと頷く。

そのまま、また点滴を別の所につけられるのを見つめながら、意を決して口を開く。

「せんせい、夜に藤堂さんたちを…呼んでください。おれ、全部話します。何があったか。おれがなんなのか」

そう伝えれば、朝倉先生はじつとこちらを見てくる。

その視線は真剣そのものだ。

「……いいのか」

「いいんです。話さなきゃ、いけないことだから」

朝倉先生は知っている。

自分があまりこういうことを話したくないということ。

黙示録の四騎士についても自分は朝倉先生に話さなかった。ライドウくんについても、トランペッターや大型シャドウについても。

なにも、話さなかった。聞かれなかったから。

モコイさんと同じく、藤堂さんや朝倉先生は何があったのかをあまり詮索してこない。だからこそ、居心地が良かった。

せめて、その恩に報うべく傷つけてしまったことを謝らないといけない。

「……わかったよ。呼ぶよ。けど、無茶はすんじやねーぞ。やべーと思つたら無理やり中断させるからな」

また、こくりと頷いた。

夜

ラウンジ

「全部、説明させて欲しい。俺が何で、どうなってるのか」
ソファアの上で口を開く。

夕食後、全員に「話さなければいけないことがある」と言つて集まつてもらつた。自分は寝ていたため夕食を摂っていない。

腹も空いてないし、気持ち悪く何かを飲むだけで吐いてしまいそうだったのでちようど良かったと思つている。

特別課外活動部の10人＋メティスと綾時くん、それに朔間^{モル}くん＋朝倉先生、藤堂さん、園村さん＋更にストレガの全員という20人近い大所帯だ。

藤堂さんたちを呼んでくれとは言つたものの、タカヤたちも呼んでくれと頼んだ訳では無いので少し驚いている。

それでも、話さなければいけないので言葉を続ける。

酷く身体がだるいけれど意識ははつきりしているから、大丈夫だと誤魔化した。

「自分は、人間じゃない。元々は無形の——ひとつの現象に近いものだった。幾月の報告書にあつたと思う、『時を操る神器』そのものだった」

自分の言葉をみんな黙つて聞いてくれている。ただ、動揺は少なからずあるようで伊織はよくわからないといったように首を傾げている。

「ん？ エ？ センパイが実験で『時を操る神器』になつたんじやないんスか？ だって、アイツ…幾月の話じやそうだって…」

「逆なんだ。順序が」

それに答えて、少し目を下に向ける。

「三上優希が生まれたのが先じゃなくて、『時を操る神器』が生まれた

のが先なんだ」

はつきりとそう答える。

「どういうことだ…？ 祖父は既に18年以上前に完成させていたと…？ いや、だがそれでは辻褃が…」

美鶴さんも首を傾げているので更に言葉が続ける。

「違う。三上優希が生まれたのは——有里渚という赤子が生きて存在するようになったのは、数巡目だ。既に何度かこの1年が俺がいない状態で繰り返された果てに、俺は生まれた。産まれることが出来た」
息を吸う。

「始まりは、『時を操る神器』である自分がここで——この寮で自我を持ったことだった。ただただ、自分はこの場所を観測していた。みんなのこと、観てたんだ。最初は奏子は居なくて、湊だけだった。1年が過ぎた。幾月に嵌められるところも、シャドウと戦うところも、学校に通うところも、喧嘩をするところも、誰かが死ぬところも、全て見た。観ていただけだった。…まあ、身体も形も無い現象に過ぎないからそうすることしか出来なかったが正しいんだけどさ」

自嘲気味にへらりと笑えば皆が目を逸らす。

荒唐無稽すぎるのもあるのだろうが、なにか事情を知っているであろうメテイスが何も言っていないことから、皆も何を問うべきなのかわからないのだろう。

「来年の卒業式の日。湊が死んだ。来る、滅びであるニユクスをどうにかするには…封印するには、魂を楔にしないとイケなくて、だから死んでしまったんだ」

「お!? 待てよ! つまるところ…オマエら死に行くって言うのかよ!?! 許さねーからそんなこと!」

事情を知っている者以外の全員に動揺が走り、そんなの認めないと朝倉先生が叫ぶ。

けれど今はその叫びは邪魔なので無視して遮る。

「…湊が死んだ後、みんなは——特にアイギスは塞ぎ込んでしまった。その時の自分は、死んだとか悲しいだとかがよく分からなくて、皆が

：願ってしまったから、自分は3月31日に皆を閉じ込めた。永遠に繰り返すようにした。『時の空回り』という現象を引き起こした。そうすれば、願いが叶えば辛くないって思ったから」

「……三上くん……」

園村さんが同情するような目でこちらを見てくる。

「でも、その選択は皆を傷つけた。『時の狭間』という空間を生み出し、苦しい過去を引きずり出して、傷口を抉っただけだった。それどころか、皆が願った『出来ることなら湊を救いたい』という願いすら、叶えてあげられなかった。自分には死の渴望であるエレボスも、滅びであるニユクスもどうすることも出来なくて、選択肢を与えたつもりになっていただけだったんだよ」

「エレボス……？」

「そう、エレボス。それが、ニユクスの目覚める原因のひとつ。人類が生み出した死への渴望が形となった存在。アレがいることでニユクスが目覚めかねない。だから、かつての湊さんと奏子さんはアレからニユクス自身を守るために封印することを選んだ。まあ、ニユクス自体は人類の滅亡は望んでませんでしたが……結果、ふたりの命を奪うことになったとしても自分から眠りにつくという選択肢は人類に滅びを願われた時点で無理な話だったんです。良くも悪くも『願い』というのは受け取った神に強制力を与えてしまいますから」

天田くんの疑問に、自分がニユクスだと朝倉先生たちに名乗っていないらしいメテイスがほぼ他人事のように説明をする。けれど、最後の辺りで同情するようにこちらを見てきたのはよく分からない。普通、いまのメテイスは犠牲者という意味で湊と奏子を見るべきじゃないのだろうか。

「結局、時の空回りは解決した。自分は、その状態を解かざるを得なかった。みんな、前向きにはなつたから。でも、自分だけは認められなかった。だって、皆の本当の願いである『湊を救いたい』という願いは叶えられてなかったから。だから、巻き戻した。皆の選択を無かったことにした」

膝の上で手を握る。

認められないだろう。こんなこと。

前へ進もうとしていたのに、全部無かったことにしたのだから。

「…次に来たのは、湊じゃなく、奏子だった。そこからは全部——いや、ほとんど同じだったよ。また、奏子が封印の楔になって、死んで、皆が願って、自分がここに閉じ込めて。その繰り返しだ」

自分は、巻き戻せば、なにか変わるのではないかと安易に思ってしまった。それが間違いだった。

「何度か、繰り返ししたよ。湊が奏子になったのだから、なにかが変わったんじゃないかって。だから、繰り返しさせればいずれ救われるんじゃないかって。自分にはそれしか出来なかったから」

「この一年が繰り返しされてる…?」

園村さんが少しだけ、怪訝な顔をした。

最低だ、と自分でも思う。

「でも、湊と奏子が死ぬっていう結末は何度やっても変わらなかった。そんなある時、普遍的無意識領域の中にある、アカシックレコードっていう世界の情報が記録された場所で情報を見ていたら、奏子と湊には、産まれる前に死んだ兄になるはずだった子供がいたって知って——羨ましく思ってしまった。家族って、どんなのなんだろうって考えるくらいには、2人に肩入れしてたから。

その子がいれば、何とかなるんじゃないかって思っていていつもより多めに巻き戻していたら、その子がニヤルラトホテプに目をつけられたことを知った」

「なに、ニヤルラトホテプだと…!？」

朝倉先生が、忌々しげに表情を変えたような気がした。

「その子は、産まれる前から死んでいた。産まれた直後に死んでしまった。だから、ニヤルラトホテプに目をつけられた。…でもじゃあ、なんで生まれて来れなかったかって言うと、ホントの有里渚には、魂が無かったんだ。あるべきものがなくて、空っぽだったんだよ、元から」

湊と奏子が息をのむ。

その後ろで、藤堂さんと朝倉先生が僅かに目を見開いた。

「自分は…傲慢だけどその子の魂になろうって思った。誰かみたいにその子を駒にするんじゃないやなくて、自分で動いて、救わなきゃって。その時にほとんど全部、捨てたよ。時を巻き戻すって機能以外のほとんどを。今はアカシックレコードにも接続出来ないし、時を進めたりなんてことも出来ない。でも、それでも足りなかったんだ。ちっぽけな自分じゃ、ひと一人分の魂になることは出来なかった」

目を閉じて、息を吐く。自分の声は情けないくらいに震えている。

「……ニャルラトホテプはそれをきつと知っていて、もうひとり。たぶん、やつの犠牲者だと思っ誰かの魂を持ってきて、自分と混ぜたんだ。ついでに、生き返らせなきゃならないから、有里渚をその化身にした」

「なるほどな……」

「そうか…だからか…」

そこまで話せば、朝倉先生と藤堂さんが納得したような顔をしている。

なにか思い当たる節があるらしい。

「そうして、俺が…有里渚は産まれたんだ。だから元から、人間じゃ無いんだよ、俺は」

「……………」

誰も、何も喋らない。

「……、そこから、俺は誘拐されて実験体になって、デスの器になり、後はお察しの通り。と、言いたいところなんだと、その時の俺はタルタロスから落ちて以降、ただの三上優希になっちゃって、春の日の……湊の葬式まで何も知らなかったんだ」

俯く。本当に何も覚えていなかった。

それが、どれほどの罪かというのわからず、皆に尻拭いをさせただけだ。

「バカだよな。救うためって名目で一人のヒトになり替わって生まれてきたのに。その場所や貰えたはずの愛を奪ってしまったのに。すべて忘れて責任も取らず、救わずにのうのうと生きてるなんてさ」

「それは僕のせいだ…！ ヒュプノスである僕が！ 優希の記憶を全

部：実験の記憶やお父さんとお母さんの記憶だけじゃなくて：弟と妹の記憶まで纏めて封じてしまったから！ だから：優希は：悪くない！ ……何もしなかったんじゃないやなくて、何も出来なかったんだ…：優希が傷つかないようになってやったことなのに、記憶を封じることであんなに優希が傷ついてしまうなんて思わなくて…」

朔間くんは顔を手で覆ってしまふ。自分は、それにかける言葉をもちあわせていない。

しかしそんな朔間くんの言葉を聞いたタカヤがなるほど、とこちらに視線を寄越してくる。

「やはり貴方がナギサの中にいたヒュプノスですか。ふむ、確かに、そう言われると幼い頃のナギサの面影がないとも言えない」

「待てよ、オマエ…：ペルソナなのか!？」

ぎよつとした顔をして朔間くんを見つめる朝倉先生の声は想像以上に大きく、ビクリと朔間くんは肩を跳ねさせて顔を覆っていた手をゆっくりと離れた。

「えっ、あつ、はい。僕は…：ペルソナ…：というよりシャドウだけど…：」
「ソなのアリかよ…：いや、アリか…：シャドウも悪魔だとすりやアリだわな…：」

はあく…：と大きく息を吐いて、朝倉先生はガシガシと頭をかいた。
「思った以上に色んなことが起きてんなこりやあ…：」

「全くだ」

朝倉先生と藤堂さんの大人組が困ったように唸る。

自分としても、こんなに複雑になってしまふとは思わなかった。

事の発端は10年前ではなく、ある意味俺が生まれた18年前だったかもしれないのだから。

ただ、こうなると卵が先か鶏が先かの話になってしまふのでどちらが先なのかという話は出来そうにない。

自分でも、俺を使わなかった場合の『器』がなんなのかよく覚えていない。

幾月が語ったという『ヒト』を使うのが1番適しているという話から、嫌な想像はしたくないが誰か別の人間を使ったのではという予想

が浮かんでしまうもすぐにその思考を振り払った。

「…そうして、湊の葬式に行った俺は、そこで初めて湊の事を思い出した。でも、それが認められなくて…シヨックだった俺は、式場を飛び出して…それで一人の男に呼び止められた。それが、ファイルモンだったんだ」

「!!」

「アイツは、そこで俺に選択肢を出した。きょうだいを救うまで終われない繰り返しに身を落とすか、それともこのまま普通の人間として己の罪を知らずに生きていくか。全部、知っててアイツは何も説明せずに提案してきた。俺が、どちらを選ぶかなんてわかりきったうえで」

「そ、そんな、あの人はそんな人じゃ…!」

ファイルモンの事を知っているらしい園村さんが焦ったように擁護しようとする。

気持ちも分からないでもない。

言動の表面的なところを見れば、ファイルモンはニヤルラトホテプに比べたら人に寄り添っていると言えなくもないからだ。

しかしそれを否定し、首を横に振る。

「いいや、園村さん…アイツはそういうやつなんです。どういってもニヤルラトホテプと表裏一体の存在。園村さんが出会った時は、きっと、良い面しか見なかったんです。それを不幸ととるか、幸運ととるかは別ですけどね。逆に、俺にとってはニヤルラトホテプの化身の一人である神条さん…いいや、神取と一緒にいる方が心地よかったです。理由は、俺自身が同じニヤルラトホテプの化身だったからなんですけど」

「ま、待てよ！ お前だけじゃなく…神取が…ニヤルラトホテプの化身だと?! ど、どういうことだよ?!」

「…俺と同じです、先生。神取も、ニヤルラトホテプに化身として蘇らされた存在。俺と違うところは、魂を詰め込んだ死体を染め上げた継ぎ接ぎの化身か記憶と思考を模倣した純粋な化身かではない。あの神取は、"セベク・シヨック"以降10年前の珠？溜での出来事も

含めて、ずっとニヤルラトホテプの化身として蘇らされ動かされていた……いわば模造品デッドコピーなんです」

「嘘だろ……いや、だからまた現れたのか……」

自分からすれば、あれは神取神奈さん本人と言ってもいいとは思いますが、そこに魂があるかも分からないので軽率に本物扱いすれば怒るのは神取の方だろう。あの人はあの人なりに求められた『神取としての道化』を演じようとしているし、汚い手はあまり使わない。自覚のあるなしに関わらず、ニヤルラトホテプの化身の中でもかなり誠意があつて優しい方だ。

誰かを嵌めようという邪気すらない。もしかしたら、ネガティブマインドの中でも『哀』もしくは『ニヤルラトホテプに対する皮肉』の側面を持つ化身として現れているのかもしれない。

同じニヤルラトホテプとは言っても元は人類の感情から来ているのでニヤルラトホテプを嘲笑うニヤルラトホテプや、自分のようにニヤルラトホテプに怒りを向けるニヤルラトホテプがいてもおかしくは無いのだ。

なんだか、こんがらがってくるけれど。

とにかく一枚岩でもなければニヤルラトホテプという化身同士で協力しているということもあまり無い。

あの本体気取りの化身が表立ってじゃかぼこほかの化身を増やして好き勝手やっているだけだ。

そしてそんな強大に思えるニヤルラトホテプも普遍的無意識の住人なので他の神同様、変な『観測』をされたり、人の噂や認知にはどんなに不服な内容だろうと逆らえないという弱点がある。それを人間が意識していないだけで。

「ついでに、本物の幾月もセベク・シヨックと同じ時期に死んでいて、ニヤルラトホテプがそれに成り代わって桐条鴻悦を唆したみたいだ。神取を唆した時と同じく、破滅主義に走らせるのが好きだから。アイツは」

「祖父は……いや、だからといってしたことは許されることではないな。続けてくれ」

「あ！ ちょっと待った！」

「どうしたの、イズミくん」

美鶴からは続けてくれと言われたものの、イズミくんから「待った」がかかって一旦話を止めて聞き返せば、イズミくんは話がよく分からないという表情で口を開いた。

「なんだ？ えーつと？ ごめんな、さっきの話でわかんないことがあってさ…つまり…俺たちやナギサを実験体にしたあの幾月はその、ニャルラトホテプ…ってやつなのか？」

「うん。それでだいたいあってるよ」

「領けば、タカヤ達が難しい顔をした。」

複雑そうな、それでいてなにか決意を秘めたような。

自分は、その顔に覚えがある。

「…憎い、よね。俺でよければいくらでも…つて訳には行かないけど、同じ化身だったから、いくらか当たってくれてもいいんだ。辛かったって捌け口にしてくれてもいい。俺は、大丈夫だから」

矛先を向けられても、自分は大丈夫。そして同じニャルラトホテプだったというだけで、恨みを受ける義務がある。

あの本体気取りの化身が聞けば、抱腹絶倒するような理論だろうけれど、自分がタカヤ達の受け皿としてしてあげられるのはこれくらいしかない。

それくらいでしか罪を償えない。

「憎いわ。けど、ナギサの事じゃない。あの男と貴方は別人でしょ。それくらい私たち、みんな分かっている。だからやめてよね、そういうこと」

「せや。なんで一番の被害者言うてもおかしくないナギサに当たらんなんねん。ワシらはそこまで落ちぶれとらんし、落とし前くらい本人につけさせたる。相手が殴つても罪悪感ないくらいあくどい奴で良かったわホンマ！」

「あの、優希さん。チドリさんの言うように、そういうの本当に悪い癖ですからやめましようね。自分がやった事でもないことを背負う必要はありません。必要以上の卑下は相手を信頼していないととられ

ますよ」

チドリやジンに怒られ、メテイスに窘められる。ほんとに『今回』は怒られてばかりだ。

「あ…うん。じゃなくて、俺は、そんなつもりじゃ…」

「わかっていきます。ナギサが我々を信頼していない訳では無いということは。貴方がこうなのは昔からでしょう。このくらいの言動、慣れています」

「ん、そう言ってくれると…なんだろう、ありがたい…のかな…?」

「どやあ、となぜか誇らしげな顔をして湊達の方向を向いてそう宣言したタカヤは肩に手を乗せてくる。

何なのだろう。

美鶴さんがタカヤをめちやくちや睨むし、湊と奏子も怖い顔をするしでちよつといたたまれない。

この状況を作ってしまったのはある意味自分だけけど。

「当然。ナギサはそちらではなくこちら側にいるべきなのですからこのくらいの理解は当たり前でしょう」

「!!」

湊と奏子の目つきがさらにきつくなる。

タカヤの発言は正しく火に油ではないのだろうか。

「それ、どういうこと? お兄ちゃんは私たちのお兄ちゃんなんだけど! …喧嘩売ってる?」

「か、奏子…?」

「よく言う。何も知らなかったというのに」

「はあ? あなただってお兄ちゃんのことなんにも知らないでしょう!」

いつになく喧嘩腰な奏子に自分はおろおろするしかない。

いつもより敵意が強いような、以前よりタカヤを敵視しているような厳しい対応だ。

急に、どうしたんだろうか。やはり高熱を出した後だったから、しんどいか余裕がないのだろうか。

心配だ。

「というか、優希もまとめて毒ガスで殺そうとしたくせによくその汚い手に乗せられるよね。優希が汚れるから触らないでくれるかな」

「湊までどうしたのさ!？」

「別に。思ってたことを言っただけ」

湊の追撃が来てもう叫ばざるを得ない。

湊までどうしてそんなにタカヤに攻撃的なんだろうか。いや、湊が覚えているという過去9周でタカヤ達と毎回敵対し、ごたごたを起こして戦っていたからなのだろうかとは思っただけで、それにしたって攻撃的やすぎないだろうか。

ほら、隣の伊織と岳羽がビビってるし山岸もドン引きして……あれ？

どうして山岸はアイギスと一緒にうんうんと頷いているんだろうか。きつと幻覚だと思いたい。

もしかしなくても、毒ガス事件はかなりみんなの怒りを買っていたのだろうか。考えてみなくても死にかけたことには間違いないのでそれはそうなのだけけれど。

「あなたがあの程度で死ぬなどとは思っていませんでしたよ。アレはただの神経性の麻痺毒かつ後遺症の残らない安全なものでしたからね」

「えっ」

嘘だろタカヤ。絶対アレ荒垣くんが来てなきや死んでた状況だっただろ。

というか朝倉先生の方をちらちらと伺い見て言い訳をしているという事はバレたら叱られるのではないかとタカヤも分かっているからなんじゃないだろうか。

同じくちらりと横目で朝倉先生を見やる。

「……」

(ほらあ！ 朝倉先生怖い顔してる！)

めちやくちや真剣な表情で何かを悩んでいる。真剣な表情というよりも、睨みつけているに近い。

もう駄目だ。おしまいだ。説明どころじゃなくなって話し合いか

ら説教大会にグレードアップするんだ。

絶対そうに違いない。

「とにかく、ナギサはあなたがたといるのではなく、本来はこちら側にいるべき人間なのです。ナギサ自身もよくその事をわかってはいるはず。でしよう?」

「え? あ、そう、なのかな...? ごめん、話聞いてなかった」

「...タカヤ。私の三上を誑かすのはやめてもらおうか」

朝倉先生の説教に怯えていたらタカヤから何かを問われたので素直に謝つたらなぜか美鶴さんまでもがさらに怖い顔になった。なんなんだ。どうしてなんだ。

「美鶴、まだ三上は正式にお前のものになった訳じゃないぞ。そういうことを言うのは早くないか?」

「事後承諾でも別にいいだろう。三上は私と添い遂げてくれるのだと誓つたのだから」

「?????」
真田くんと美鶴さんが何かを話している。話の内容は聞き取れる

のだが、中身を理解することが出来ない。添い遂げるって誓つただろうか。まっつったくもって覚えがない。好きだとは言つたけど。

なんだか、雲行きが怪しくなってきた。

自分の知らないところで、話が進んでいるような、ないような。

さつき自分が人間じゃないとか元から死体だとか言つたばかりなのに、みんなそんなことは知つたことかと言わんばかりにどんどん方向がズレているような気がする。人数がなまじつか多い分、収集がつかないかもしれない。園村さん達は遠慮して下手に口出しできないだろうし。

ここはなけなしの勇気を振り絞るべきだ。

「話を、戻すけど。俺がこの1年を繰り返して知つた時みたいに、救える権利や救える選択肢があればみんな救いたって思うだろう? 自分 は、『時の空 回り』を 起こして

2009年^過から2010年に来る決戦^去の日まで

2010年^そ3月31日^時の時間と空間を一時的にぐちゃぐちゃに繋い

だ。だから、今からすれば未来の…決戦の日にも接続することが出来た」

「だからこそ、俺達はその『もしも』で死んだシンジや有里姉弟を救いたいと思っていたということか？ ……確かに、死んでしまった人間を過去に戻って救えるとなれば…以前の岳羽のように羨ましがっても仕方ないだろうな」

「ちよつと先輩…それは…」

理解してくれたような真田くんの言葉に気まずそうに岳羽が口を挟む。

別に知られても悪いことではないだろう。

選択肢があることに對して、羨ましがすることはなんら間違いではない。当然の感情だ。

「すまん。俺もあの時のことは蒸し返すつもりは無い。…ただ、過去を変えられるなら、大切な誰かを救いたいと思うのは誰しも思うことだからな」

真田くんが何かを悔いるように拳を握りしめながら目を閉じた。

真田くんが後悔していること。救いたいと思っていること。それを自分は情報だけなら知っている。

「アキ…やっぱあん時の事か…？」

「ああ、本音を言うのなら俺だって岳羽と同じく過去を変えられるのなら妹を…美紀を救いたいと思ったださ。そんなことができる手段があるのなら、諦めるわけにもいかない。だが、その上で俺がこの世から消えたり死ぬことを、美紀が望むかと言われれば——それはないだろう。三上が昨夜やろうとしていたことは、そういうことだ」

美紀ちゃんというのは、真田くんや荒垣くんのいた孤児院で起こった火事で失った真田くんの妹のことだ。

真田くんと荒垣くんが救えなかった、大事なひと。

あの孤児院の火事だって、ニヤル本体ラトホテプ気取りの化身の声に唆された放火魔が原因だ。

ニヤルラトホテプとしては直接燃やせと言ったわけではない。あくまで、本人の氣質を増幅し放火を触発させたただけだ。

それでも、許されることではないけど。

真田くんの言葉に自分が昨日何をしようとしていたのか、何故倒れたのかの理由の一端を知った朝倉先生が厳しい顔のまま、口を開いた。

「おいクソガキ、オマエ…何をしようとしてたんだ」

「……普遍的無意識にある、カダスの奥深く。ニヤルラトホテプの根城よりも深層に、全てを溶かし、無にする “カズムの深淵” というところがあります。そこで、自分は消えるべきだったんです。滅びも、何もかも、全て抱えて。そうすれば、認知が作用して滅びも俺という存在ごと消えます。自動的に世界は救われるんです。ニユクスを封印すれば必ず死んでしまう奏子と湊を救うために、そう、しようとしてました。それが一番正しい方法だと思っていたから」

そう澱みなく答えれば朝倉先生は何かに耐えるような顔で俯いてしまう。

「…そうか」

朝倉先生は叱りもしなければみんなのように引き留めるような言葉も吐かなかった。

ただ、その言葉を受け取って飲み込んだような反応だった。

「でも、俺は…出来なかつたんです。せつかくのチャンスだったのに、それをふいにした」

惜しむ。

あそこで消えていれば。今頃。

みんなはもう使命から解放されて自由な学園生活を謳歌できているはずだった。命懸けでニユクス——ではなくシユブⅡニグラスと戦わなくても良くなるはずだった。下手をすればニヤルラトホテプとも戦わなければいけないかもしれない現状が良いとはとても思えなかつた。だというのに。

「いいえ、これで良かった。…だって、優希さんがニヤルラトホテプやフイレモンとの取引に勝つても湊さん達が負けてしまいますから」

「…？」
メテイスは何を言っているんだろうか。

これで良かっただなんて。そんな訳、あるはずがない。

けれど湊達が負けるといふのがなにか引つかかる。自分が「カズムの深淵」に溶ければシュブニグラスも干渉して来なくなるはずだし、何に負けるといふのか。

「ニヤルラトホテプと取引をしていたのは、奏子さんと湊さんもなんです。そしてそれが、優希さんの記憶にない、9度の繰り返しの原因」
「なっ!?!」

「奏子ちゃんと有里くんも…あの幾月のニセモノみたいなやつと…!?!」

目を見開く。自分は、ファイレモンとニヤルラトホテプの合同取引のようなものだ。だが、奏子と湊までもが、ニヤルラトホテプと契約していただなんて思いもよらなかつた。しかし一体なんのために。

「はい。今から数えて12周前。優希さんが死んでしまった時に奏子さんと湊さんはニヤルラトホテプに唆されました。『兄を救いたいのか?』と。ふたりは、その時、頷いてしまって…そして代償を選ぶことになりました」

「!?!?!?!」

言葉が出ない。

どうして、なんでふたりはその甘言に頷いてしまったんだ。

自分なんて、救う価値など無いというのに。無視してよかつたのに。

ふたりまで、こんな酷い舞台上に上がらないで良かったのに。

自分が居たから、ふたりにそんな選択をさせてしまったのだろうか。

……………。

わからない。

「代償…もしかして、ニヤルラトホテプが言つてた私が記憶を引き継がないことを選んだつて言うのは…その時の契約のこと? だからニヤルラトホテプは私に…覚えのなかつた『9回分』の記憶を突然返してきたの?」

どうやら、自分が倒れていた間に奏子がニヤルラトホテプから受け

たちよつかいは記憶関連らしいと察することが出来た。

これまでにあった、湊が覚えているという『9周』分の記憶を一気に返されたらそりゃあ高熱を出して寝込むと思う。

そんな奏子に自分が触れてぶっ倒れた原因は分からないけど。

しかしそうなると奏子は既にその記憶を思い出していることになる。

だから湊と共にタカヤへの当たりが強かったのだろう。

「おそらくは。湊さんだけが記憶を持っていたのも。奏子さんと優希さんに記憶が無いのも。全てはやり直しの代償……いえ、ゲームの条件だったんです。ただし、やつは契約時の記憶をも黙って奪っていったので奏子さんと湊さんはかなり分の悪い戦いを強いられていたことになりませう。だって、知らないうちにゲームに参加させられてルールも終了条件もわからないまま放置されていたことになりますから」

「過去にあったように記憶を思い出したら世界が終わる、くらいの悪質さではありませんけど」とメテイスは不機嫌そうに愚痴を吐く。

メテイス——否、ニユクスとしても相当フイレモンとニヤルラトホテプのやり方には腹に据えかねているのだろう。

自分も同感だ。あんな悪質なゲームとも呼べないクソゲーを1度敗北したにもかかわらず諦めず乗り越えられた『周防達哉』先輩ベルソナ使いたちを尊敬したいくらいだ。

しかし、突然奏子に奪っていた記憶を返した理由がわからない。

十中八九親切心からでは無いのは確かだが、意図が本当に分からない。

自分も記憶を思い出せば、世界が壊れてしまおうとか、なのだろうか。

(いや……)

そんなはずは無い。この世界はまだ『こちら側』なはずだ。

ニヤルラトホテプによつて滅ぼされ、珠？瑠市だけになった『こちら側』ではないし自分はニヤルラトホテプと同じくその情報を持っているだけで『周防達哉』特異点ではない。

『あちら側』ではそもそも桐条が『時を操る神器』自分を完成させる前に世界が滅んでいるので、正真正銘自分は『こちら側』の存在だ。

だから思い出すような『あちら側』の記憶は無いし世界の統合からのぶつかり合って対消滅などという悲劇は起こらないはずだ。が、(もしかして、過去9回の周回に『あちら側』に自分達が触れた形跡があったのか?)

思考を回すが一向に答えは出ない。

こんなことなら自我が揺らいでしまうからと最低限の情報だけを引き出すのではなく、全て奴の意図もひっくるめてぶっこ抜いてしまえば良かった。

「優希さん、なにか悩んでるみたいですけど、あなたは元々：『時を操る神器』に貶められてしまう前の自分がなんだったのか分かってないんですか？ それとも、覚えがない?」

「え……?」

メティスの言葉の意味が分からない。

『時を操る神器』という存在に貶められる?」

時を操る神器という現象よりも、更に高次元な存在だったとでも言うのだろうか。そのままでも神魔や超常現象に近いのに。

自分はもつと別の何かだったというのか。ただでさえ自分を取り巻く状況は複雑だと言うのに、さらに訳が分からなくなってるんがらがつてきた。

そしてこんな自分の考えをメティスが読み取れていないということとは、既にダダ漏れのそれを遮断したのだろう。だから、メティスは見当違いなことを聞いてきたに違いない。

それにしたって戸惑うには十分なものだ。

「そもそも、『時を操る神器』とかいう『無形の現象』なんて有り得ないでしょう? たとえシャドウが私の欠片ニユクスだとしても、ヒトの心の力だとしても、大元であるニユクスを呼ぶならともかく——時を操ることは有象無象にそう易々とできるはずがありません。なら、別の物を“わざわざそう観測した”って事も有り得る話です」

「待って、自分は：元々『時を操る神器』じゃなくて、更になにかから変わった結果、『時を操る神器』になったってこと：?」じ、自分は：元は誰かのシャドウから産まれた現象じゃないってことなのか?」

さっぱりそんな認識も記憶も無いので頭を抱えながらうんうんと唸る。

「なんだか説明会だったはずなのに暴露大会じみているような気がする。」

「そうですね。…だって、あなたには——今となつてはあなたの大元だといふべき存在には、ちゃんとした、もつと別の名前とカタチがあつたんです。私からは言えませんけど」

時を操ることの出来た自分^{神器}でさえ、その力のほんの一端なのだとしたら、己の元になつたという存在はどこまで強大な存在なのだろうか。

もしかすれば、ニユクスやシュブ^ニグラスと同等かそれ以上かもしれない。

敵対だけは絶対にしたくないとぶるりと身震いする。

「怯えなくてもいいんです。あなたの大元は積極的に興味を持つほど自分からヒトに干渉をするかと言われれば、そこまでもありません。けど、ニユクスや他の神同様、接触されてしまえばどんなに悪しき願いであろうとも断れない、断らないというのはありますよ。だって、それがヒトの願いだから」

それを考えると、神や悪魔といった存在は良くも悪くもヒトに縛られていくことになる。

ニユクスしかり、シュブ^ニグラスしかり、自分の大元だという存在在然り。

酷く不安定で、ヒトによつて在り方を変える。

実質、全ての元凶は俺たち人類であつて、けれどそれを動かそうと——利用しようとしている神や悪魔がいるのも確かだ。

どちらも原因であり、どちらも利用されている側になる。

「なら——」

「ストップ！ ストップ！ メテイスとお兄さん、ふたりだけの話はなしだよ。 僕ら、置いてけぼりになってるからさ」

思考をしたまま話を続けようとして綾時くん^に止められる。

そうだった。せつかくみんなに集まってもらつたのに、メテイスと

自分にしか分からない話をしてても意味が無い。

正直、置いてけぼりなのは自分もだと思いたい。

会話はしているが内容は全く理解出来ないなので、置いてけぼり感否めない。わかっているのはメテイスだけだと思う。

「ごめん。えっと、じゃあ：ちよつと、休憩にしてもいいかな。俺も頭がパンクしそうで：情報も整理したいし、みんなも休憩は必要だと思うし…」

ちらりと美鶴さんの方を見ればしつかりと頷き返してくれる。

「10分後くらいにまた、ここで」

そう言って、ソファアの肘掛けにもたれ込む。

そのまま目を閉じて、深く息を吐いた。

「そんなの、認められないだろ？」（12/3）

目を閉じて即座にすうすうと寝息を立て始めた優希を見て、湊は思った以上に兄が消耗していることを自覚した。

以前の兄は確かに寝つきが良かったが、話し合いの途中で——しかも小休憩中にすぐさま寝てしまうということはなかった。本人としては寝るつもりはなく、ちよつと目を閉じて頭を休ませるだけだったのかもしれないが、完全に寝入ってしまったている。

これでは、約束の10分後には自力で起きてこれないだろう。

「お兄ちゃん、大丈夫そう？」

「うん。寝てるだけっぽい」

心配するように近づいてきた奏子が優希の顔を覗き込む。

伏せられた瞼は奏子がこれだけ近づいても開く様子はない。いつもなら近寄ってきた気配か話し声ですぐに目を覚まし、目を開くというのに。

「お兄ちゃん：：すぐく気に病んでたみたいだね。自分が、ほんのお兄ちゃんじゃ：：有里渚じゃない」からって」

「僕らからしたら、優希しか知らないんだし、ホントの兄じゃないって言われても実感ないよね。優希は優希のまんまだし」

「だよね：：別に、殺したわけじゃなくてお兄ちゃんになろうとしてなってくれたんだよね？ わざわざ、いろんなものを犠牲にして。

：：：なんか、己惚れだけど愛されてるね、私たち」

奏子はそう言って少しだけ顔にかかっている前髪に手で触れた。

「…ん…」

僅かに優希が身動きするも、目を覚ます様子はない。

湊としても、奏子としても兄の人格が元は人間ではなく、『時を操る神器』そのものだった、と言われても失望も怒りも何もなかった。少しの驚きはあったが。

兄の在り方が変わらなければニャルラトホテプだろうが『時を操る神器』^{聖杯}だろうが死の宣告者^{デス}だろうがなんでもよかった。

それは、綾時を受け入れられていた湊と奏子の感性によるものであ

るが、ふたりの知る人外たちが軒並み人間らしすぎるといいうのもあるのだろう。

カダスのナギサしかり、綾時しかり、朔間しかり、メテイスしかり。ベルベットルームの住人は良い意味でどこか抜けているのでノーカウントだが、話に聞くような鼻につくような傲慢ちきな態度もなく、兄は変わらず兄のままにいるのならそれでふたりは良かったのだ。

そして発端が自分たちということに多少の罪悪感はあるけど、何となくその為にすべてを賭けて兄として生まれてきたこと自体に優越感も感じていた。

ただ見ていただけの存在に、他者から願われたからとそこまでするのはかた。

明らかに領分を超えている。

『時を操る神器』としても、放置してそのまま時間を流しておけば一人の人間の死など些事で、あつという間だったろうに救うために力の殆どを使ったとなれば——湊と奏子は正直やめさせたいと思っっているが——今もこうして魂を、自身を燃やしながら血反吐を吐いて試行錯誤し、救おうとしてくれていることを『愛』と表現せずになんと例えればいいのか。

その根底にある感情は恐らく、10年前の事故の時に車から命がけで湊と奏子を逃がしてくれた母親と何ら変わらない。

ニヤルラトホテプとかいう、“かなりいけ好かない”にランクアップした輩が聞けば嘲笑ってきそうだがそれでもよかった。

湊と奏子からしたら、最初から兄は優希しかいなかったのだから。誰かから無理やり席を奪ったのではない。元々空白だった席に優希^{あに}という存在が座っただけだ。

「どうすればお兄ちゃんはお兄ちゃん自身を許して…愛してあげられるんだろうね」

「わからない。…けど、難しいだろうね」

奏子の言葉に湊は顔を顰める。

湊は優希と殴り合い、あそこまで言ってもまだ兄が何もわかってい

ないということをつかっていた。

単に、今の優希は崖から飛び降りそうになっているのをあと一歩と
いうところで立ち止まっているだけだ。

それもモコイという親しかつたらしい悪魔の言葉だけで踏みとど
まっているに等しい。その言葉よりも、もつと大事なことが起これば
優希は即座にその崖から飛び降りることを厭わないだろう。

だからこそ、ひとりにはできない。メテイスの言ったことが本当な
ら、自分たちは3人全員がこの先も生きていかなければならない。誰
か一人でも欠けることは許されないのだ。

それは義務でもなんでもなく、感情から来ている。

「三上は寝ているのか？」

そんなことを考えていけば、なにやら朝倉と話していた美鶴がソ
ファーへと歩み寄って聞いてくる。

「うん。ぐっすり。ほんとにこの後起こして良いのかなってくらい」

「そうか…三上としても疲れているだろうしな…」

愛おしむように眠っている優希を見つめた美鶴は、すぐにその表情
を元に戻す。

「先輩、どうするんですか？ お兄ちゃんのこと」

奏子が問う。

奏子自身、考えたくなかったが兄の命はもう長くない。優希自身が
そう自己申告してくるということは、さうとう無理をしているに違
ないと思っている。

だからこそ、そんな兄のことが好きだと言っている美鶴にどうする
のか、を問うたのだ。

美鶴は大財閥の娘であり、跡取りでもある。そんな立場や責任のあ
る美鶴がほぼ死に体の兄と結ばれるのはあまり良くないだろう。本
人にとっても、家にとっても。

それこそ、父親である武治から許しが出るとはとても思えない。

「…私は、このまま有耶無耶にはしない。終わりが近いというのなら、
終わりまで付き合う。そしてその後もずっと想い続けるだけだ」

それは優希が死んだ後も独り身を貫くと言っているようなもの

だった。

何もそこまでしなくても、と奏子は口を開こうとして、やめた。奏子自身もし恋人である荒垣が死んだとして、他の誰かに気が向くかと言われたら、絶対にならない。

時間が過ぎて、もし誰かと結婚することがあろうとも荒垣を想い続けることはずっとするだろう。忘れられるはずなんてない。無かったことにはできない。

そんな美鶴の想いを理解してしまった奏子は視線を下げた。

「朝倉という医師から聞いたが…三上は機械を、誤魔化して」まで平静を装うとしたらしい。タカヤに話したらしい三上の話からすると、デスの欠片であるヒュプノスを内包していたおかげか無意識に機械を改竄することが容易だった、と。だからあの医師にすら答えを出しかねていたという。だが、嫌でも気がついたのだろうか」

あの朝倉でさえもタカヤに向ける美鶴の言葉と態度に何かを察して「優希は長くはない」と今まで誤魔化していたことをはつきりと告げたという。

その時の顔はやるせなさが滲んでおり、同時に「どうして何もできなかったんだ」という後悔もあったように美鶴には見えた。

「オレ達は、巻き込むことを恐れて足を踏み入れなかったからこそアイツをあそこまで追い詰めてしまった。無理やり聞いてれば、何か変わったのかもしれないねえってのにな。支えてやるのが…事情を知ってる大人の仕事だっていうのに、なにも…」と、責任を感じているようなボヤキまで含めて。

優希本人が聞けばそんなことはないかと否定するような朝倉の後悔は美鶴からしても負うべきではないものだ。朝倉はこの事件に直接関係はない。それどころか、外部の人間であるのに美鶴たちに協力しようとしてくれているのだ。

優希がボロボロになっていることに責任があるのなら、それは桐条のものであり、仲間である自分たちに他ならない。

決して、朝倉のせいではないのだ。

朝倉も根本は優希と似たような性格だと感じ、苦手に思っていたが

そうでもないのかもしれないと美鶴は考え直した。

「…私たちが止めたとしても、三上は進むだろう。なら、せめてその道を歩きやすくしてやるくらいはできるのではないかと思っっている」

そうは言っただものの何の力になれるのかわからない。

もしかしたら、力にすらなれないかもしれない。相手は、『ワイルド』という特別な力を持つ奏子と湊のふたりでも命を懸けて封印することしかできなかったニユクスをさらに取り込んだ相手だという。そして、優希が倒すのではなく抱えて共に消えることを真っ先に選ぶくらいには厄介だと。

優希やメテイスの口ぶりからして、美鶴たちのような「普通」のペルソナ使いが立ち向かえるとは到底思えない。

乗り越えるという決意と覚悟はあるが、実際にはどうすればいいのかわからないのだ。

「違う。僕らは先を歩くのでもなく、後ろを歩くのでもなく、優希の隣に立たなきゃ」

小さく、湊が否定する。

1人に背負わせてはいけないことを、湊は良く知っている。それは、即ちその「1人」が居なくなってしまうえば優希が語った『始まりの1年もしも』のように一気に関係性が瓦解してしまうに等しいからだ。

みんなが、平等に背負わなければならない。

「そうだったな。私たちはみんなまで並んでいかねばならない。誰かについていくというのは思考を停止できて楽だが、それがいけないことだということを嫌というほど味わったばかりだったというのに…」

幾月のことを思い出し、それではいけないと美鶴は首を横に振って考え直した。

美鶴は、幾月を信じていた。信用していた。だからこそ、ここまでやってきていた。だが、それこそが幾月の掌の上で、全て利用されていた。

自分で考えることを放棄していたからこそ、微塵も疑問を感じなかった。

「…そろそろ、時間だな」

時計を見た美鶴がそう呟く。10分はとうに過ぎていたが、話があつたため黙っていたのだ。

しかしそろそろ再開しないとイケない頃合いだろう。このまま長引けば影時間になってしまふ。

ストレガはともかく影時間に適応できていない朝倉達を1時間ラウンジで放置というわけにもいかなければ、今は元気そうだが昼まで高熱を出して寝込んでいた病み上がりの奏子とこうして今は眠っている優希をこれ以上部屋で寝させないわけにもいかない。

「三上、起きてくれ。10分経ったぞ」

声をかけて、揺さぶる。

「……………うん…？」

小さく呻いてゆっくりと顔を上げた優希は目を開いていたが焦点が合っていない。

寝起きそのものだ。ぱちぱちと何度か瞬きして、「んー…」と唸りながら頭を振った優希は口を開く。

「おれ、ねてた…？」

「ああ…だが、そろそろ話の続きをしまわねばならん。あまり遅くなるのも考えものだからな」

「ん……………めん…」

そんな寝ぼけた様子の優希を見ながら、朝倉は少し離れたテレビの前で尚也や麻希に話しかける。

「クズノハの話だとくたまに、いるんだとよ。無自覚な現身や神魔の転生体だったり悪魔の好む特殊な魂や因子を持って生まれてくるやつが。だいたい保護されてたり囲われてたりとそれなりに縛られた人間として生きてたりするみてーだが…アイツは野放しにされてたそういう存在だったつーこと、なんだよなあ…そりゃめんどくせーことに色々巻き込まれるわけだ。そっち方面は流石に思いつかなかつたわ…」

朝倉は頭を抱えた。

悪魔である可能性や悪魔になってしまった可能性ばかり考えていたが、転生体なら話は別だ。そう例えるには経緯が特殊過ぎるが。

そして、ニヤルラトホテプの化身となつてしまったという話が本当なら、優希自身が己をまともな人間ではないのだと気がついてしまった時から無意識に機材のデータを偽るのをやめた、もしくはヒュプノスが出ていったせいで誤魔化せなくなったと考えれば辻褄が合うような気がした。

つまり、ペルソナの制御剤はニヤルラトホテプの肉体と同じ成分から作られていることになる。それ即ちマガツヒかマグネタイトということになるかもしれないが、それらは身体を構成する触媒なだけで別の物に変異していることの方が多い。

ネガティブマインドの化身であるニヤルラトホテプの力なら血であろうともそれに近い物質であろうとも、ペルソナを無理やり抑え込むことは可能であるし、あの邪神のことだ。面白半分で使用者にはとばっちりを、と言う意味であんな激烈な副作用をつけたのだろう。

そうでなくては朝倉たちが簡単に副作用のほとんどない制御剤を作れるはずがないのだから。

元々、副作用が無くても済むものに嫌がらせで副作用をつける。使用するのに対しての葛藤をも、あれは面白がっている。

ほんと、性根が腐ってるな、と朝倉は内心で唾を吐き捨てた。

「私が見たあの『心の海』の絵がなんであんなつたのか、三上くんが語ったことが本当なら、なんだかわかる気がする。あの子自身が、真っ黒に塗りつぶされてたからなんだね……」

麻希も、優希の描いた『心の海』が真っ黒に塗りつぶされていたことを思い出し、視線を下に下げた。

本当にニヤルラトホテプの化身だというのなら、あの真っ黒な絵も当たり前だろうという想像からだ。

実際は、心の海の奥底にある“カズムの深淵”のさらに奥へと無意識に帰化しようとする『時を操る神器』と、混じった『もう半分』としての優希の帰巢本能のようなものが反映されてしまった結果であったが、それを知るものはフィレモンとニヤルラトホテプ以外には居ない。

「なあナオリン。この話も南条の方に持っていくのか？」

「……一応、資料としてはまとめおくべきだと思っっているしその準備はしてる。けど、」

尚也は朝倉の問いに言い淀む。

フィレモンやニアルラトホテプが関係していて、この先の事を考えるならもちろん南条へと持って行って後学の資料にすべきだ。だがここに来て、南条だけでなく桐条に渡すのもいいのではないかという気持ちも湧いてきてしまったのだ。

もしくは、このまま秘するべきか。

尚也は決めかねていた。

許可なく自分たちの情報が資料にされているとなればいい気分はしないだろう。

それも、1人ではなくここまでの大所帯となってしまうえば尚更だ。

「ま、資料を送るかはともかく相談するくらいは良いんじゃないやねえの。それに南条の力もある方がいいだろ。敵はデケえからな」

朝倉はその迷いを流した。

ニアルラトホテプも相手としては十分規格外だが、滅びそのものが牙を剥いてくるとなれば味方は多い方がいい。

こんな巨大な敵に対し、たった10人ぼっちの高校生に立ち向かわせてしまうなど、朝倉の大人としてのプライドが許せそうになかった。

それに、1人は死にかけた。見ないふりをしろという方が無理だろう。

再び、皆が集まり話が始まりそうだったので朝倉はそこでその話題を切り上げて移動する。

「ええと、どこまで話したんだっけ……」

ぼんやりと、未だ眠そうな顔のまま優希が視線を下に落とす。

朝倉としてはこのまま休んでもらっても構わなかったが本人が今日で済ませた方が良くと考えているのなら止める必要がなかった。

「そうだ。俺が、ニアルラトホテプの化身だったって話はしたけど……ニユクス教の教主……あれも、俺なんだ」

「そういえば……昨日そんな事を言っていましたね……でも、あの時……蛇頭

黄幡神との戦いの時の三上先輩はどう考えても先回りできるような状況じゃありませんよね？ だって、先輩は私や奏子ちゃん達を見送ってたし……」

風花の問いに優希は曖昧に頷く。

「あれは……そういう移動を短縮する装置か力かなにかがあったんだと……思う。あと、朝倉先生の腕の骨を折ったのは……多分俺だと思いません。ごめんなさい」

優希が頭を下げる。

「多分自分だと思う」という曖昧な言葉に、朝倉は首を傾げる。そこまです自覚があるのなら、はつきりと覚えているものでは無いのかと。

「別に良いけどよ。たぶんってオマエ……なんだよ曖昧だな。オマエが教主だったってんならオマエしかいねーだろーよ」

「そ、れは……その、俺が変だった時期があったじゃないですか。あの頃、ニヤルラトホテプに操られるような土壌が作られていたみたいで……とはいえ完全に操れる訳じゃなくて催眠みたいなものだったんですけど。指定の日時になったら教会にいる神取に会いに行くようにされてて、そこでまた教主として振る舞うよう暗示をかけられて……って感じらしいです。だから、その間のことは俺、まったく覚えてなくて……意識的には完璧に寝てたんだと思います」

「あー……」

朝倉は苦い顔をする。

確かに11月の初め頃、喋るのが疲れるだのなんだのと妙にぼーっとしていた日があったなと思いついた。あの時はちょうど朝倉の腕が折れていた時と重なる。

何も喋らなかつたのも、ギリギリで朝倉たちを見逃したのも、全て催眠をかけられていたからで、思ったよりも朝倉たちが遠くまで走ったせいとその暗示の制限時間が来てしまったのだろう。だから、急に興味を失ったように踵を返して帰っていったのだ。

随分と時間厳守な教主サマなこと、と朝倉は内心でクスリと笑った。正体と仕組みが分かっただけでしまえば朝倉にとっては可愛いものしか映らない。

「その催眠のようなものが完全に解けたのも——ついこの前で……タカヤ達が出かけていったあの日。影時間に目覚めた俺も無意識に病院から抜け出していたんです。役目を果たすように、タカヤ達をなぶってみんなを誘き寄せる餌にするために。その必要があったから」「やはり、あれはあなたでしたか…」

優希の言葉にタカヤは納得した。

あの時間いた「どうして」という戸惑いの声はやはり優希のものだったのだと確信がもてたからだ。

その戸惑いはタカヤ達が生き返ったからではなく、自身がしてしまったことに対して向けられていた。おそらくあの時正気に戻ってしまったのだらう。

弟妹を含む大事なものを1度己の手にかけ、よくそこから狂わずに平静を装えたなどタカヤはその異常性に慄いた。常人ならば、かつての優希ならばその場で事実には耐えきれずに発狂しているだらう。

否、既に狂いきっているからこそ止まりようが無かったのかもしれない。1度殺したにせよ、全員生き返ってなんとかなったのだからあとは己のやるべき事をやるだけだと、覚悟していたからこそ止まらなかつた。それだけの事だったのかもしれない。

「ごめん、みんな」

もう一度、優希は頭を下げた。

一方、湊はニヤルラトホテプが優希を「人形」と呼ぶ意味をようやく理解した。あの時湊を刺し殺したのは優希であり、そんな洗脳じみたそれに抗えずあの空虚な反響音のような言動しかなかった教主としての姿は正しく操り人形のようなからだ。ニヤルラトホテプにとって兄は本当の意味で「人形」だったのだらう。

そして奏子がああ時の教主を優希だと認知したのはその本質を垣間見てしまったからなのだと予測する。だからこそ、神取はその目を塞いだ方が生きやすいと忠告してきたのだ。

物事の本質が常に見えてしまうというのは辛いものだ。多少はフィルターにかけて見ておかないと、普通の人間では耐えられない。

奏子の性格によって今まで大事になっていないだけで、もつと真面

目な融通の効かない性格であつたなら相当生きにくい人生を歩む所だつたはずだ。

「じゃあよオ、オレの腕が治つたのはどういうこつたよ。普通骨折が即治るなんてこと、ねーだろ」

「そ、それは…たぶ、ん無意識に力を使つてしまつたというか…：先生腕の時間を折れる前までに巻き戻した…：んだと思います。すみません、ちゃんと答えられなくて。ほんとに、あの頃のことにはぼんやりしてばかりで今でも微妙で…」

朝倉がどういふ事だと訊けばまた曖昧な返事が返ってくる。

休憩をとる前までのあのハッキリとした答えようとはまた違ふものによもによとした答え方に「本人でもよくわかつていないんだろうな」という感想が朝倉の中で浮かんでくる。

そりゃああれだけぼんやりしていて朝倉の下らない冗談を真に受けるような隙しかない人格なら、簡単に操られもすると朝倉はため息を吐いた。

そもそもが幾月というニヤルラトホテプの化身だつたという男が優希の精神を粉々にしてしまふくらいの仕打ちをしたのが原因なのだから、回り回つてニヤルラトホテプの仕業でもある訳だ。

もしくは精神が砕けてしまつたのを操る好機ととつたか。

「別にいいぜ。結果的に腕は治つたんだし問題ねえ。もう操られはしないんだな？」

「そこは大丈夫です。俺はもう俺だつてちゃんと意識してるので。それに、自分はもう化身とは別物になつてしまつたのでヤツもあまり干渉できないと思います」

だが、人に戻れたのなら別物になつたなどとは言わないだろう。

なにか含んだような言い回しに麻希が首を傾げる。

「化身とは別物になつた…？ 三上くん、それつてどういうこと？ 人に戻つたつてことなの？」

「違います。俺は昨日、ニヤルラトホテプから与えられていた仮初の命を取り上げられました。その時に、死体に戻つたんです」

「！」

朝倉達は目を見開く。

優希の言葉が本当なら、どうやって今喋って動いているのかが理解できなかったのだ。

ただ言葉は挟まずに続きを待つ。

「でも、湊が…弟が黄昏の羽根という物質を俺に使ってくれて今は何とか生きている感じなんです。だから、俺の中に残っているのは『時を操る神器』としての部分と、ニャルラトホテプの化身部分だったものと、死の宣告者としての力。あとはシユブⅡニグラスの半分。俺は、何とも例えられないけれど、ヒトではない存在になってしまったんです」

「あ？ シユブⅡニグラス？ なんだそれ…」

朝倉はここで突然でてきた名前にはてなを浮かべる。またよく分からない神魔らしき存在の半分をなぜこいつが持つてるんだとめちやくちやな状況に首を傾げることしか出来ない。

「あ…そっか、タカヤ達や朝倉先生たちにはまだ説明してないんだっただ」

そこで「忘れてた」と言わんばかりに優希は呟く。

本人としては説明した気になっていたのだろう。

「シユブⅡニグラス。それが今回俺たちが立ち向かわないといけない敵なんです」

「敵はニユクスじゃないのか？」

尚也も疑問を感じたのか同じように首を傾げた。先程まで、倒すべきはニユクスなのだと話していたにもかかわらず、突然でてきたシユブⅡニグラスという名前とそいつが敵なのだと言われても関係性が分からない。

しかし優希は首を横に振る。

「それを説明する前に、まずはニユクスが何か、というのを説明しなきゃいけない…まあ、端的に言ってしまうえば月そのものなんだ」

「!!」

「は？ え？ あの、それって、空に浮かんでる月、ですよ？ ほんとう？」

戸惑うようなゆかりの反応も仕方がないだろう。

突然、戦うべき敵だった存在が今も当たり前な空に浮かんでいる月だと言われて混乱しない方がおかしい。

「こういうのは俺じゃなくて綾時くんの方が説明に慣れてるだろうし、出来ればバトンタッチしたいんだけど…いいかな？」

「…わかったよ。お兄さんがそう言うのなら」

「へ？　なんでリョージなんだ…？　だってリョージは関係ねーじゃん…？」

順平が更に訳がわからない、と混乱する。事情を知るもの以外は他の面々も何故いま綾時の名前が出たのかわからないようだった。

それもそうだ。綾時は幾月や武治達と同じ、ペルソナ能力を持たない影時間を体験できるものとして説明されていたのだから。

それなのに突然話の核心に近いニユクスについての説明を優希から丸投げされて答えられる立場にいる、と言われれば訳が分からないと思っても仕方がない事だった。

そんな、決していいとは言えない空気の中綾時は口を開く。意を決して。

「僕は——『デス』だ」

「!?」

「はあ!？」

綾時の発言に今度は動揺が走る。元々聞いていた死の宣告者デスは朔間ヒュフンスだった。それが、本当は優希であって驚いたくらいなのだ。

だというのに今度は綾時がデスを名乗れば二重、三重に混乱してもおかしくはないだろう。

「いや、デスだったって言えばいいのかな。アイギスとムーンライトブリッジの上で戦い、湊と奏子ちゃんに封印された『デス』が僕さ」

「でも、あなたからはそんな反応はひとつも…」

アイギスが困惑したように綾時を見つめる。

アイギスとしても『ダメ』だと思ったのは優希と朔間だけだ。綾時のことはノーマークで、あの激闘を繰り返すべき敵だったただなんて言われても到底信じられない。

どこからどうみても、アイギスの機械としての判断も、綾時を“人間”だと判断しているのだ。

「そりゃあそうだよ。僕の『デス』としての殆どをお兄さんが取り込んでしまったからね。残っているのは湊と奏子ちゃんに残したペルソナとしての力くらいさ。僕自身はちよつと変なだけのための人間だよ。いま考えたらお兄さんが僕らの力を取り込めたのも元は『時を操る神器』という僕らの兄弟にも等しい存在だったからなんだろうね」

綾時はかつて、ファルロスだったころに気がついていなかった。

8月末、ファルロスと話をした後には湊は優希の部屋を訪ねた。その際に己の力の殆どを優希に“食われて”いたのだ。

その行動を選択したのは湊が意識を失う直前に優希を介して現れたモルフェエなのだろう。

だが、その力の殆どは優希へと送られてしまった。だからこそ、綾時は何も知らずに湊と奏子から無理やり切り離され、そこで力を使い果たし無力なただの人として生きることになってしまった。

「本来は…お兄さんが語った『かつて』では僕が死の宣告者となって、ニユクスの代弁者——ニユクス・アバターとしてきみたちと敵対するはずだったんだ。でもお兄さんが僕の代わりとなってしまったから、それも変わってしまった」

「お前たち、関係性がめちゃくちゃじゃないか…?」

「元々一つだった存在が三つに分離した。そしてその中で誰が本当の死の宣告者へと昇華するか…ただそれだけのことだから、簡単なことだよ」

要は王位継承争いのようなものだ、と優希は例える。

強いものがより弱いものをとりこんで王となる。それと同じなのだ。

『今回』は最初に覚醒のための因子である大型シャドウを喰らったのはヒュプノスであり、しかしその身に蓄えられるほどの器でなかったために宿主である優希へと流れた。

そこから何度も大型シャドウの捕食を繰り返し、狂いながらその身

に適応させていってしまったがために優希は死の宣告者となつてしまった。

適性で言えば本来の13番目のシャドウであるファルロスが一番適しているのだ。そこを、その欠片であるヒュプノスが奪い、本当はそこでせき止められなければいけなかったのに、適性が低かったために優希へと流れてしまったこと。果たしてそれは本当にたまたまだったのだろうか。

綾時は疑っていた。どうして、突然ヒュプノスは大型シャドウを喰らおうなどと思つたのだろうか。もしくは、最初からヒュプノスの意志ではなく本能的な優希の意志で大型シャドウを喰らつていたのですれば。ヒュプノスが手段として利用されていたのだとしたら。

この状況も想定内だったのではないかとすら思えてしまった。だが、綾時にはそれを聞けるほどの度胸はない。もし訊いて、獰猛な笑みを浮かべられてしまったら。

今の綾時は心の端で優希という「王者」に対し、恐怖を覚えているのもまた確かだった。

それは、本能的な畏れだ。恐らくタルタロスのシャドウですら、今の優希には近づこうとすら思わないだろう。

うまくニユクス^母としての気質を隠しているメテイスとは違い、優希のそれは抑えているようにも見えたがかなり剥き出しだった。

さらに言ってしまうえばそれは本来のニユクスに近いものでもあるため、畏怖される存在には何も変わらない。

「僕は元デスだったからこそ、ニユクスについての説明を何度もしてきたからね。だからお兄さんは僕に説明を任せようと思つたんでしょ?。」

「まあ、そうなる。俺の言葉だと、たぶんうまく説明できないし。…説明は別にメテイスでも良かったけど」

メテイスを見ながらも「ニユクス^{本人}だから」とは優希は口にしなかった。

「と、いうことで僕が説明するよ。とはいっても大事なことはもうお兄さんが言っちゃったんだけど…母なる者——ニユクスは太古の昔、

この星と衝突し、**“死”**なるものを授けた僕らシャドウの母たる存在だよ。目覚めれば、星は純粹なる死に満たされて、全ての命は消え失せる。その実態は彼女の精神、そして肉体から放出される滅びさ」

「すべての命が消え去るだど…？　じゃあ、影人間はなんなんだ…?!
ありやあ、死んでる訳じゃあねえ！　緩やかな滅びを迎えるってんならそんな表現しねえだろ…なあ!？」

朝倉は叫んだ。

確かに滅びが来るとは聞いていた。だが、その内容が突飛すぎるのだ。

そして影人間との関連性も。

「影人間は…僕にもわからない。大型シャドウによって生まれてしまふ、弊害のようなものだけだ…：ニユクスのせいじゃない事だけは確かだ。人の弱さが…もしかしたら、自分の弱さから目を背けてしまったから、ああなってしまったのかもしれないと僕は予想しているんだ」

「…そうかよ。で、ニユクスつてやつを殺せはしねえんだろ？　優希コイツが言ったみてえによ、そのふたりが命を懸けて封印するしか方法がなかったつーことは、倒せねえってことだ」

朝倉は腕組をして面白くないと言いたげに息を吐いた。敵が強大なことはわかっていたが、生命に死をもたらしたものだとするれば倒してしまった方が問題が出る。

「…確かに、ニユクスの前では力の大小なんて問題じゃない。死なない命が無いように…時の流れを止めてしまえないように…ニユクスを消すなんてことは…決してできない。でも、さっき言われたみたい…：封印することならできる。優しい、これまでと同じ穏やかな眠りにつかせてあげることができるんだ。だから、『かつて』のふたりは…」

「…わかった。もういい」

悲痛な顔をしている綾時から顔を逸らして朝倉がストップをかけた。これが、勝ち目のなさすぎる戦いだと理解できたからだ。

「ここで、俺の話になるんだけど」

優希が空気を読まずにそこで割り込む。

「どうして、シユブⅡニグラスという存在が出てきたのか。どうしてニユクスが目覚めたのか。その話をしたいんだ。そしてそこから、〃解決方法〃を得たいと思ってる。…解決できるかはわからないけど」
倒すのではなく、解決する方法が知りたいのだと優希は言い放った。シユブⅡニグラスとやらもニユクスと同じく封印するのか。

だが、その口ぶりからするとそうではないのだろうか。湊と奏子は察する。封印するつもりなら元々アテを優希は得ているはずなので、こんなことを言わない。

「まずは、事の発端は〃人類の死に触れたいと思う感情〃が増えたことに起因するんだ。普通に生活を送っていけば、時が進めば霧散してまたなんともなくなるはずだった。けど、結構情勢が荒れたり、人々がそういうことを望むことが増えてしまった。本来なら、そこまで爆発的に増えないそれは〃セバク・シヨック〃や珠？瑠市での出来事を介して一気に…暴走するみたいが増えたんだ。誰かに意図的に操作されているように」

「操作…？ それって、もしかして」

麻希の言葉に優希は頷いた。

麻希も優希も、他の人間も想像している『誰か』は恐らく同じ存在だ。

「はい。人類はじわじわと——自業自得の面もあるけど、ニヤルラトホテプによって〃人類の死に触れたいと思う感情〃や〃滅びを求める感情〃を増やしていきました。それは人類の総意に近いものとなるほど膨らみ、そしてふたつのものを形作った。ひとつは、死の宣告者たるデス。ニユクスを目覚めさせるための、人類が願った死への渴望——正しく『負の願い』の化身だよ」

「負の、願い…」

奏子がその言葉を反芻する。

兄や綾時がそんな存在だっただなんて信じたくなかった。ただ実験で生み出されただけの、そういう性質をもった存在であって、人類が望んだ滅びの体現者なのだ、〃宇宙〃のアルカナを得てみんなを

守りたいと願った奏子や湊とは対極の位置に存在する、要は『逆位置の“宇宙”のアルカナの力そのもの』だとは思いたくなかったのだ。「それでもうひとつは、エレボスと呼ばれる存在。死の宣告者と似て非なる存在であり、シャドウではなく神として形作られた“人類の死に触れたいと思う感情”や悪意そのもの。こちらの方が、よりニヤルラトホテプに近いと言えば近いのかもしれない、と俺は思っている。感覚的に言えば死の宣告者^デがニユクスを目覚めさせるための目覚まし時計だとしたら、エレボスは直接お触りしてくる変態野郎なんだよね」

「お触りって……変態野郎って…例えばなんだか卑猥じゃありません？」

「だって、そうじゃん…」

さわわ、と震えながら自らの身体をかき抱いたメテイスは心底嫌そうな顔をする。生理的嫌悪を感じているようなその顔を、同じく優希も浮かべていた。

ふたりして気持ち悪そうにエレボスに苦い顔をしているのを見た湊と奏子は「ああ…やっぱり気持ち悪いつて思うんだ」と遠い目をした。

「奏子と湊にお触りしたのマジで許せないしさあ…誰も許してませんけどお？　まずは兄である俺に！　許可取れよ！　死んでも許可しないけどって感じ。シユブⅡニグラスのせいで無意識にアレに愛着を感じそうになってる自分がマジでキモい…うぐぐ…」

ギリギリと歯ぎりしりまでして頭を抱える優希は恐らく、奏子と湊がニユクスを封印した後のことを言っているのだろう。

奏子と湊からすれば意識はあつてないようなものなので気にしてないどころか情報としてしかしらないので何があつたのかはよくわからないが兄がぷりぷりと怒るくらいにはなにかあつたのだろうとしか予測できない。

そして優希も口が裂けても言えない。ふたり（の魂）がほぼ真っ裸で石にされて扉にはりつけにされていたなんてことは。

「じゃなくて…」

脱線しているのを自覚した優希は話を元に戻そうと気を引き締める。

「問題なのは、死の宣告者じゃなくてエレボスの方でさ。いや、死の宣告者も滅びの確約を齎す者って意味じゃ問題なんだけど。：エレボスの何が問題かって言うと、喚び起こしてしまったんだ。月の内側で眠っていた、〴〵もうひとりの母なる者」を」

「それが、シユブⅡニグラスです。かつて、シユブⅡニグラスは外宇宙から飛来し、紆余曲折あり月へと封じられました。ニクスが居ない、空になつた月の内側に。そして、エレボスが黒い山羊としての姿を形どつたのも、彼女の仔としての性質も併せ持っていたから。あれはエレボスであり、彼女の落とし児たる黒い仔山羊でもあつたのです」

優希の言葉をメテイスが補足する。

エレボスがなぜ、黒い山羊としての形をとつたのか。

それは月の内に封じられたシユブⅡニグラスを感じ取りその落とし児として形作つたからに他ならないと。

「：シユブⅡニグラスは二つの相を持つ。男神の相と、女神の相。俺は、『前回』シユブⅡニグラスが目覚めようとしたときにその半分である男神の相を苦し紛れに奪つた。破壊と創造、そのどちらかしかないのなら、彼女はこの星に手出しすることもできないから」

「：？ この星を滅ぼすのがソイツの目的じゃないのか？」

尚也は不思議そうに首を傾げた。

人類の滅びの意志がニクスを、シユブⅡニグラスを呼んだのなら、そこに創造は必要ないはずだ。

「彼女は…この星の全ての生命をひとつにまとめて『産みなおし』、肉体と魂という枷から解放して個としての区切りも死も生も苦楽も総て無い、真の意味で平等な世界にしようとしている。それが、彼女が彼女なりに願いを曲解し、人類を『愛した』結果」

「そんな…」

優希は語る。シユブⅡニグラス自体は人類に対し悪意を持って何かを為そうとするほどの悪い神ではない。むしろ、好意的であり愛着

を持つているともいえるだろう。

だが、願われてしまった『滅び』をシユブⅡニグラスは外から来た神であるために曲解した。

「滅びを願ってしまふほどに辛いのなら、苦しいのなら、『救済』してあげましょう——。」

この人類の住まう宇宙のコトワリではなく、外宇宙のコトワリを適用してしまったからだ。

優希は痛いほどシユブⅡニグラスの「愛」が分かった。しかしそれでは相容れない。愛の形が違う。それは自分たちの幸せではないのだと否定せざるを得ない。

だからこそ、戦わないといけない。それでも理解ができないのなら、共に消えないといけない。

「個としての区切りが無いって、私たちが私たちじゃなくなるってこと!? ふぎけないですよ!」

ゆかりが青ざめて口の端を引きつらせる。

産みなおしがロクなものではないと予想はついていたが、ここまでこの事だとは思わなかった。

滅びもロクでもないが、さらにその上で産みなおして何もかもがひとつになってしまふのが本当の幸せだとはゆかりには到底思えなかった。

「そうだよ。全部、みんな。人類だけじゃなくてこの星にいるすべての生命が溶けあい、ひとつになるんだ。けれどそこに個としての区別も思考も感情も存在せず、ただ在るだけなんだ。そんなの、認められないだろ? 生きているのか死んでいるのか、そのどちらでもないなんて、生き物じゃない。どちらもあるからこそ、俺たちは生きているんだと言えるんだから」

そんな方法では、救われたとは言わない。

はつきりと優希はシユブⅡニグラスを否定する。優希が望むものは「奏子と湊が笑って、これからも普通に日常生活を送ること」だ。そんなグチャグチャとした何かになるのが望みではない。

シユブⅡニグラスの救済は救済ではない。

逆に、幸せな『もしも』な現実虚構の中に全人類を閉じ込める程度だったらもしかしたら手を取っていたのかもしれないがシユブニグラスが選んだ手段はそうではなかった。それだけの話だ。

優希がもし、そんなことができる強大な力を得てしまったとすれば真つ先にそうするだろう。障害も、何もかもを取り除き、真の意味でこんな事件が起こらなかったことにする。途中からでも甘く優しい幸せな夢の中に全員を閉じ込めたって構わなかった。

けれど優希は選んでしまった。この事件があったからこそ得られた絆を無駄だと切り捨てることは出来なかったからこそ大まかな旅路を変えず、結末だけを変えることを。

—— 苦難があろうとも、理想ゆめに溺れず辛い現実じしつを歩む道を。

「悪い癖ですよ」（12/3）

「産みなおし」をするのが人類が願った結果かつ、それが滅びの目的だと衝撃的なことを聞かされた面々はそのスケールの大きさから黙り込んでしまう。

「しかし、あなたが男神の相とやらを持っていればそれは目覚めないはずでは？ 片方しかなければ目的を達成出来ず、手出しをしてこないと先程言っていたでしょう」

タカヤは冷静に分析し、感じた疑問を優希へと問いかける。

しかし優希は首を横に振る。

「俺が抑えてられるうちはそれでもいい。俺が完全に独立した男神になつてしまつても、それはそれでいい。けど、俺がその男神の相を手放してしまえば終わりだし、時間が経てば経つほど彼女は強行手段に出ようとする。受け取る前に拒絶したとかならともかく、既に受け取ってしまった願いを妨害されたりして叶えられないっていうのはカミサマにとつてはかなりクるんだよ。それこそ存在定義が揺らぐくらいには」

少し、同情するような曖昧な表情で僅かに自嘲するような笑みを浮かべた優希は己の表情に気がついていないのだろう。

そのまま、言葉を続ける。

「だから、モル…ヒュプノスが提示した期日までは律儀に彼女は待つてくれるだろうけどそれを過ぎれば無理やりにも「産みなおし」を行うと思うよ。何らかの手段でマガツヒを蓄えて直接この星に降りてきて、俺を力技で飲み込もうとするくらいには」

「その期日っていうものが、1月31日ってこと？」

天田が現実感のなさそうな声でボヤいたその言葉に優希は頷き、また口を開く。

「そう。その日になれば彼女は必ず実力行使にでる。逆に言えば、ヒトもその日にならないと彼女を退けることが出来ないんだ。俺はまた、別だけど」

そこで湊と奏子から視線を外し、もぞもぞと両手の指を組んでは離

す。

優希は少し言いにくそうにして、けれど息を吸って口を開いた。「…彼女を期日前までに殺すことが出来る方法があるにはあるんだ。それは、俺が『カズムの深淵』にいる状態で自分の意志で死ぬ事。自殺は、可能なんだ。昨日、やろうとしたことは後者にあたる」

そんな優希の言葉に、誰かが息を飲む様な音が聞こえた。

風花はゆらゆらと優希を見やり、悲痛な顔をして息を吸った。

「だから、先輩は…あんなことを言って有里くんやみんなに殺されよう…」

「…：うん。それしかないって、思ってたから。ほんとなら、最初にカダスに入った時点で俺は全部抱えて消えているべきだったんだ。それが一番、丸く収まる形だった」

「でも、そうはならなかった。私たちが…お兄ちゃんを探しに行ったから…ナギサちゃんが言ってたことって、そういう事だったんだね。だから、『カダスはお兄ちゃんが自分で死ぬための場所』って変な表現をしたんだ…」

奏子は納得した。

あのカダスのナギサの意味深な言葉も、どっちつかずな態度も、本当に優希の意志を優先した結果だったのだと。

カダスのナギサとて、全てを知っていた訳では無いのだろう。だが、彼女とパンの大神こそが恐らく——優希がシユブニグラスから奪った男神の相だということに奏子だけは気がついた。察することが出来てしまった。

彼女らはなにかがあつて、『カダスのナギサ』と『パンの大神』という存在に分離した。元は、男神たるシユブニグラスであり、またノーデンスという旧き神だったのだろう。

もしくは、身勝手な人の認知によつてノーデンスとパンの大神という神が結びつけられた結果に生まれてしまった二者か。

どちらにせよ、今はいないに等しい。

「いまの俺は、半身であり少なからず彼女と繋がっている状態だ。もちろん、見られたくないから無理やり覗かれなければ見られないよう

には、してるけど。だから、その繋がりをもって消すことが出来る。共に消えることが出来るんだ」

湊は湊で、ニャルラトホテプが特別課外活動部全員にゲームと称し、持ちかけてきた『三上優希を無事にカダスから連れて帰る』という条件が昨日カズムの深淵から連れて帰るといふ所まで継続していたことに気がついた。

なにもニャルラトホテプは今、とは言っていないなかったのだ。そして、連れて帰る存在は「三上優希」であって他の存在ではない。もし優希がパンの大神に呑まれ、変異してしまつて優希でなくなつてしまつたら。もし、ニャルラトホテプがそこで優希を殺していれば。もし、メテイスが綾時を頼つてきていなければ。それもゲームに負けたという事になる。

さらに言えば「カズムの深淵」で説得に失敗していたら。優希が途中で気が変わり湊達に殺されようなどと考えずに1人で消えてしまつていたら。ゾツとした。

恐らく、カダスのナギサが語つたように全て忘れてのうのうと日々を過ごしていたことだろう。兄がいたことも、救われたのも全て忘れて。

それこそが優希^{あに}の願いだということとは分かっている。平和になれば己の存在は要らないのだとどこかでも思っているのも知っている。だが、それは湊と奏子の願いではない。

むしろ真逆のものだ。

「それでも、期日までに解決できなかった場合。倒せなくて、どうしようも、出来なかつた場合。……俺は、全身全霊を懸けて彼女ごと俺を終わらない時間に閉じ込める。ずっとずっと終わらない繰り返しに閉じ込め目覚めそうになつたらまた巻き戻して、俺と彼女の両方を燃やし続けて、彼女が消えるまで永遠に繰り返す輪廻の輪に閉じ込めるから」

決意を秘めた瞳で優希は告げる。

終わらない繰り返しに閉じ込める。その言葉は、湊と奏子、そして

メテイスにとって到底認められることではなかった。

「優希さん、あなたはそれがなにを意味するのか分かってるんですか!? それって……なにも、何も変わってないじゃないですか! 魂を使つてニユクスを眠らせることと、終わらない繰り返しにシユブⅡニグラスを閉じ込めること。そのふたつは結局、同じ意味でしょう!」
そう。何も変わっていない。

刺し違えることも、封印をすることも、閉じ込めることも。誰かの犠牲が出るということには何ら変わらないのだ。

しかし優希はさらに表情をきつくした。

「俺がやらないで誰がやるって言うんだ! この力を持った俺が! 元凶とも言うべき俺が! 責任を取らないでどうするんだ! これぐらいのこと、して当然だろう!?! 力を得てしまったと言うだけで…責任をとるべきじゃない、巻き込まれただけの湊と奏子や他の誰かに尻拭いをさせる方が嫌だ! だから俺は譲らない…! これだけは、絶対に譲らないツ!!」

「っ…」

最後には立ち上がり、叫ぶようにしてメテイスへと反論した優希は昂っているのかふーふーと肩で息をしながらよろめき、椅子になだれ込むように座つて己の前髪をくしゃりと掴んだ。

「…運命だったんだ。だから、これでいい」

泣きそうな顔で笑つた優希の声は先程荒らげたような大きなものではなく、小さく、静かだった。

「きつと、こうなることを俺自身が選んだから、なにも、問題なんて…」
「だから、諦めるって言うのか?」

諦めるような優希の言葉に、荒垣が睨みつけながら噛みつくように問いかける。

「てめえは…奏子や有里を救いてえと思つてその運命とやらを覆そうとしてんだろうが! だったら、てめえの運命くらいてめえで覆してみろよ! なに諦めてんだ! 何度だって繰り返しやいい! そのためなら俺らはいくらでも協力してやる! もう燃やすもんがねえつてんなら俺らの記憶をまた使えば良いだろうが! 話じゃ、最初

はそうしてたんだろ!? なら、今更罪悪感がある訳でもねえだろ!」
「……俺の運命を覆すためなら、いくらでも協力するって、ほんど?」
「……あ?」

怒鳴り散らした荒垣の言葉に反して、優希の言葉は先程と同じ静かなままだった。

しかし、その顔には獰猛な表情が浮かんでいる。

「言ったよね? いま」

「…あ、ああ…」

念押しをされ、気圧された荒垣は先程まで怒り狂っていた気持ちが急激に収んでいくような感覚に襲われた。

なにか、嫌な言質をとられたような気がして、冷や汗をかく。

「みんなも、協力してくれるんだよね?」

さらに念押しをするように優希は周りを見回した。

「ああ」

「エーツト、事にもよるっすけど…」

「だよね…でも、私たちに出来そうなことなら…世界の命運がかかっているんだし」

「僕らは別に。殺してとか以外ならなんでも」

「勿論だ」

「僕も…頼み事の内容によりますけど。大丈夫です」

「わ、私も天田くんと同じく…」

「ワン!」

「危険じゃなけりやな」

「当然」

様々な答えを聞いて満足げに笑みを浮かべた優希はぱちんと1度手を叩いたあとに口を開いた。

「よし。ならきつと大丈夫。じゃあこれからはタルタロスを踏破しつつそれとは別に特訓を始めようか」

「…は…?」

「…え…?」

ぽかん、とほぼ全員が間抜けな顔をして口を開いた。

「と、特訓……？」

天田が訳が分からない、と言いたげに首を傾げる。

何故に突然特訓などという言葉が出てきたのか。優希の頭まで明彦のような脳筋になってしまったのか。

まったくもって運命を覆すことと特訓が結びつかず、はてなが浮かんでは消える。

「カダスの一部はいま俺の根城パレスなんだ。ニャルラトホテプにも手出し出来ないしある程度は自由にできる場所だから、そこに入りすぎるくらいならほぼノーリスクで出来る。それを悪用……じゃなかった。応用して特別訓練でもしようかなって。影時間内ならいくらそこいっても時間は進まないからさ」

「なんスかそれ……つか、いま悪用ってセンパイ言わなかったか？」

優希の発言に思うところがあつたのか、順平が指摘すれば、いい笑顔の優希がそちらを向いて人差し指を立てた。

「おっ、伊織。早速俺の実験台になりたいのかな？俺も自分の力を意識的に使うのは慣れが必要だし……手始めに時間を30秒ほど巻き戻してあげようか？」

「イイエ！オレっちはなにも聞いてません！ハイ！」

「よろしい。なら巻き戻さなくてもいいか」

無理やり順平を黙らせて失言を無かつたことにした強引さに、「ヒョ……」と順平は恐怖のあまり短く息を吐いた。

ここまで知ってしまったえばその脅し文句が洒落では無いのだ。本気と書いてマジと読むくらいには、優希は本気だったようにも見えた。いや、そんなくだらないことに力を使ってもいいのかという疑問が順平や他の面々の中にもあつたがそれを指摘すればまたいい笑顔を向けられるに違いないと口を噤んだ。

先程までの悲壮さをまるで感じさせない優希のくるくると変わる表情に、奏子はなんとなく優希が無理をしているのだと気がついた。兄は、精神的に無理をしている時ほど露骨に笑っている。

「お兄ちゃん……」

「大丈夫。俺は大丈夫だから。きつと、なんとかなる」

心配そうな視線を向け、呼びかけたただけなのに奏子の意図を読んだのか優希に優しく一蹴されてしまう。

なにがなんとかなるのか。なにが、大丈夫なのか。兄は何も具体的に言わない。

わざと言葉を省いている。言わないことによつて、相手に都合のいい解釈をさせて安心させようとしている。

「……今思ったんだけどさ、食べきっちゃった美味しいご飯とか賞味期限切れた食べ物の時間を巻き戻せたら便利なんじゃ……」

「ダメです」

話題を逸らすようにとてつもなく有用だがくだらない力の使い道を見つけてしまいそうになった優希をアイギスが即座に窘める。

さすがにそんなくだらないことにいちいち力を使っていたら無駄使いにも程がある。

桐条鴻悦もまさか時を操る神器としての力を食い物云々というくだらないことに使われるとは思ってもみなかっただろう。作成時の『時の流れを操作し、障害も、例外も、全て起こる前に除ける。未来を意のままにする』というコンセプトとは微妙にズレていてかけ離れている。

「うーん、やっぱりダメか……」

「姉さんの言う通りダメに決まってるじゃないですか。力を自由に使えると分かったら自分のリスクを考えずにポンポン無駄使いし出すのは優希さんの悪い癖です」

ボヤいた優希をジト目で見て、メテイスは咎めるように呟いた。

その内心は手のかかるヒト、という感情でしかない。

「失礼な。常に全力って言って欲しいんだけど？」

「イヤです」

「ぐぬぬ……」

一刀両断され、優希は次の言葉を言うことが出来なかった。

メテイスが優希に対し遠慮のない対応をするのはどちらかと言えば親近感を感じるからこそだ。

メテイスは姉であるアイギスを救おうとして。優希は弟妹である

湊と奏子を救おうとして。

それぞれ行動したことに変わりはない。

そして姉でも仲間でもなく、『目的を同じとするのならば絶対に裏切らないであろう頼れる同士』という意味でメティスは優希へと心を許しているに過ぎない。アイギスを傷つけようものならメティスは容赦なく優希と敵対する。あくまで優先順位は一番がアイギスで、そのアイギスが大事な奏子と湊の方が上である。

ニユクスとしては我が子のような、被害者に対するもののような、不思議な感覚があるのは確かだが、それも優希という存在の生まれが生まれなので仕方ないのだろうとメティスは思っている。

逆に優希自身も、メティスに対しモコイやタカヤ達と同じくらい馴れ馴れしい態度をとっている。というよりかは何も仮面を被っていない、『三上優希』としての素をさらけ出していると言っても過言ではない。

その付き合いはつい最近からであるが、ある意味全てを共有し、思考も何もかも筒抜けという関係のおかげで同じく親近感を感じてしまつて自然とその態度になつてに等しい。要するに、無意識にメティスには心を許しているようなものだった。

逆をいうなれば奏子と湊にはまだ『兄として』、美鶴には結ばれたとはいえ『仲間として』の仮面を被つたままということだ。

別に悪いことではない。だが、それが弊害を起こすところもある。

湊としての理想は、兄が兄の仮面を取つて9月のように素で笑つてくれることなのだが、それも難しいのだろうというのは分かつていた。

優希はふ、と朝倉たちを見て口を開く。

「特訓は——朝倉先生たちはしなくてもいいかな。というより、もしよければ朝倉先生たちには裏方を頼みたいんです」

「あ？ 裏方？」

「恐らく、ニユクス教はこれから活動が続けていくと思います。教主が居なくてももう彼らはニヤルラトホテプにとつては傀儡同然ですから。決戦の日、ニユクスを取り込んだシュブニグラスの増大し

た影響で、少なくとも港区の住民は全員影時間を認知することが出来る、と思うんです。その時にニユクス教の奴らが暴れたりもし悪魔化した場合の対処をお願いします」

「そういうことか」

優希は懸念していた。

ニヤルラトホテプがわざわざタカヤ達の代理でニユクス教の教主と神父に化身である、自分と神取を割り当てたのはなにか意図があったからなのでは無いか、と。

下手をすれば珠？瑠市で噂を蔓延させた時のように同じことを宗教という手段をつかってしようとしているのではないかという心配もあった。だからこそ、悪魔が出てくるかもしれない案件には、そちらに詳しく場数を踏んでいる大人組に行ってもらった方がいいだろうという考えだ。

「任せとけ。人員もきっちり集めといてやる。な、ナオリン？」

「…ブンヤはそういう所だけいつも俺任せだよな」

「いや、だってよ、オレよりオマエが呼んだ方がみんな集まるだろ。よっ、この人間万誘引力！」

苦笑する尚也をからかう朝倉はイタズラっ子のような表情をしていた。

朝倉的には一介の医者となった己よりも南条の調査員をしている尚也に頼んだ方がそれらしい理由づけができるから、という理由がちゃんがある。

もちろん、戦いたくないと思うメンバーもいるだろうと予測はできるのでそれはそれだ。

もうみんなそれなりに大人になり、家庭を築いている人間の方が多い。

事件の後はなにごともない日常をすごすのが人としては当たり前で、奇特なのは常に悪魔絡みの仕事をしている朝倉や南条の調査員をしている尚也たちの方だ。

「…わかったよ。しょうがないな」

「よっしや！ まあ、ナオリンには「はがくれ」のラーメンくらいは

奢ってやるからそれで手打ちってことにしてくれ」

「えーっ、朝倉くんずるい！ 私には？」

「もちろん園村にも奢るに決まってるだろうが！ オマエら二人一組でセツトなんだからよ」

「やったー！」

喜ぶ麻希を見ながら、朝倉は小さく息を吐く。

「っーことだ。しっかりやらせて貰うぜ。後は…悪魔絡みならライドウのガキでも呼び出してパシればいいか…いや、あの若作りババアや鳴海の姉さんにドヤされたかねーしどうすつかない…」

困ったようにブツブツと呟く朝倉の愚痴は他の人間には聞こえない。聞こえても意味のよく分からないものだった。

「と、言うことで、これから特訓もするから特別課外活動部のみんなとストレガのみんなはタルタロスに予定を合わせて来てくれるとありがたいな。てか、なんだかいちいち分けて言うのも面倒だなあ…」

優希が朝倉と同じく困ったようにボヤキ、困ったようにストレガを見た。

「なんやねん。そないにこっち見よってからに…」

「いや、特別課外活動部となかよしこよしは感情的に嫌かなって…」

ジンがその視線に気がついて問いかけるも、優希は曖昧に苦笑いして視線を逸らす。

「まあ…ワシは…正直な所その桐条以外は別にどうってことない。なかよしこよしは流石に無理やけどな。むしろその伊織とか暑くるしうてケツタイやけど最近チドリに対しては悪くないんちゃうかと思うんや。荒垣かてワシらと取引しとった仲やし、ある意味同じ境遇って言えばそうかもしれんし」

順平のことを評価したジンは満更でもなさそうだったが、協調性があるというわけでもなく。特別課外活動部と馴れ合うつもりは無いとはつきりと言いつ張った。

「じゃあ、イズミくんは…」

「俺は協力出来るならなんでもいいよ。朝倉先生も戦うんだし、乾く^{けん}んがいるからってのもあるけど」

イズミはイズミで天田という知り合いがいるからと二つ返事で頷いて笑みを浮かべる。次にチドリに問いかけようとした優希が口を開く前に、チドリが先に口を開いた。

「私はパス。そこの人達の中で順平以外の人間には興味無いもの。私が好きなのは順平だけ。それ以外は…気が向いたら話すくらいはする、かも…しれないけど…」

照れて尻すぼみになっていくチドリの言葉は最後には聞こえなくなる。

「私も遠慮しておきます。協力はしますが馴れ合いなど結構。ただ、なにかそちらと我々をまとめて呼ぶ呼称でもつけたいのならご自由に。こういう場合のナギサの名づけのセンスは壊滅的ですし絶対にこちらは名乗りませんが」

「うつ…」

見透かすようなタカヤの目に射抜かれ、優希はたじろいだ。とはいえ、ネーミングセンスが壊滅的なのは本当のことであるし、ろくなものにならないだろうなというのは本人もわかつての事だった。

しかしそんな優希を疑いの目で見たジンは少し確認してみようという気を気まぐれで起こした。

「ナギサ…なんか浮かんどのやろ？ ほら、ちよつと候補言うてみい…ワシは怒らんから」

「エツ…じゃあ…“ニクス討伐隊”…とか…」

「ダツツツツサ!!! なんなんやそのクソダサイネーミング！ 討伐隊って…フエザーマンとちゃうねんで！ しかも倒すんはニクスやのうてシユブⅡニグラス言うやつやろがい！ 倒す目標間違えてどーすんねん！」

「はい…そうです…で、でもさあ…わかりやすい方がいいかなって…」

「阿呆！ わかりやすいのはええけどダサすぎるわこんなん！ しかも人違いならぬ神違いやないか！」

優希はとりあえずかつての特別課外活動部の名前を遠慮がちに挙げてみたがジンのマシンガンのような鋭いツツコミの前に敗北して

しまう。

哀れニユクス討伐隊。

確かに名づけられたとしてもつばらこれまでの「特別課外活動部」という呼び方の方が使いやすいと、ほとんど誰も自称することがなかった団体名であるので、そう名付けた意味はあったのかと優希ですら疑問を覚えるものだったがニユクスへと立ち向かうという決意の証としてはばっちりであったし、そんなに否定されるのも可哀想だろうと内心哀れんだ。ダサイという評価も妥当であると思ってもいるが。

「……、いやこれナギサに任せたらアカンわ。どうするんやタカヤ……」

「知りませんよそんなこと……」

優希のネーミングセンスに絶望したジンがタカヤに助け舟を頼むも、タカヤは諦めきっているのか素知らぬ顔で逃げようとする。

そんなふたりのやり取りを見ながら、優希はオリジナリティ溢れるとんでもなくダサイ名前を出さなくて良かった、とほっと胸をなで下ろしていた。畜生ここに極まれりである。

「名前なんて、これまで通りで良いんじゃない。どうせ何も変わらないわよ」

チドリが冷めた目で優希を見ながらそう告げる。

特別課外活動部とストレガ、ふたつを纏めた呼称が欲しいというのは優希のわがままであるし、ダサくなるくらいなら別につけなくてもいいかという意見ももつともだ。

ついでにいえば特に名乗る相手がいないので考える必要すらもないというか。

一方、湊と奏子の中では「愚者」コミュのマスターと共に、「審判」のコミュが生まれていた。

——汝、「審判」のペルソナを生み出せし時、我ら、更なる力の祝福を与えん。

頭の中に不思議な声が響き教えられる。その括りは、「運命へと反旗を翻した者たち」。

変えられない結末と抗いようのない死の運命を乗り越えようとしている者たちとの確かな絆の芽生え。

あくまでストレガや朝倉達は協力してくれているという形であり、仲間では無いためにそのような名前になったのだろう。

そして、もうひとつ。

—— Rank UP!

X XI アーキタイプ “原型”

三上優希 Rank 4 ↓ Rank 5

“原型”のペルソナを生み出す力が増幅された！

「っ！」

はつきりと表示されるようになった数字とアルカナの名前に、湊は一瞬たじろいだ。

また、数字とアルカナが変わっている。隣の奏子を見れば、奏子も僅かにその表情を変えていた。

「…？ ふたりとも、どうかした？」

目ざとく表情の変化に気がついたらしい優希が訝しんで訊いてくる。

そんな優希に対し、湊と奏子は首を横に振った。

「なんでもない」

「ほんとだよ。湊の言う通り。なんでもないの。でも、ちよつと…えへへ、嬉しいこと、かなあ」

既に“シヴァ・マハーデーヴァ”という新たなペルソナを得ている奏子は繋がりが失われていないことを再確認できてはにかむ。

「嬉しいことなら詳しく聞かなくてもいいか。…変な事じゃなくて良かったよ」

軽く流した優希は立ち上がる。

結局名前はそのまま、纏めて別の名前をつけずにいつも通りでいくことにしたらしい。

湊や奏子としても兄の名づけが壊滅的なのはわかっているのでほんな名前にならなくて良かった、とほっと胸をなでおろすしかなかった。下手をすれば“なかよくし隊”とかそこら辺の幾月も失笑する

ほどのクソダサネーミングにされていただろう。

審判のコミュ名がそんなクソダサネーミングにされた日にはランクアップするたびに笑いを堪えなくてはならなくなる。

「話はたぶん、これくらいかな。カダスへ行ったりとかはまた明日以降にしようか。……先生、ありがとうございます」

朝倉の方へ身体を向け優希はもう一度頭を下げる。

その「ありがとう」の言葉の意図を朝倉は何となく察していた。

この言葉は話を聞いてくれての「ありがとう」ではなく、「これまでありがとうございます」の意味だ。

これではもう、朝倉が何を言おうとも優希は止まらないだろう。入院などして身体を休ませる、ということをしなないかもしれない。

日常そのままの生活を送り、限界でも入院などをせずに決戦の日まで全力疾走するつもりなのだ。

僅かに朝倉は顔をしかめるも、今更指摘したところで意味がないと分かって最低限の言葉だけで留めることにした。

「いいか、どうしようもなくなつちまつてもな、死ぬことは考えるんじゃないぞ。しがみついて生きることだけ考えとけ」

「勿論です。俺は…シユブニグラスを倒すまで、消えるわけにも死ぬわけにもいきませんから」

「そ…いや、いいか…」

いい笑顔で答えた優希に対し、そういうことじゃねーんだよなあ、と朝倉は言いかけて、やめた。

こういうことは朝倉の役割ではなく、もつと優希の近くにいる人間が教えてくれることだろう。それでも無理だった場合は諦めるほかないが。

バカは死んでも治らない、というのはこういうタイプの人間も言うのだ、と朝倉は諦めた。

朝倉達とストレガ、そして綾時と朔間が去った後、各々が自室へと帰ろうとしたときに湊は優希を呼び止めた。

「なに？」

「ちよつと確認したいことがあつて。僕の部屋か優希の部屋で話したいんだけど」

「わかつた。いいよ」

不思議そうな顔をしつつも快諾した優希を連れて、湊は自室へと向かう。

自室に着き、部屋の電気をつけ、そして鍵を閉める。カーテンも閉めて、ベッドの横に立つ。

「しんどかつたらベッドに座つてもいいから」

「じゃあ、お言葉に甘えて」

少し恥ずかし気にはにかんだ優希はそのままベッドへと腰かけて珍しく部屋の鍵をかけた湊の行動に疑問を覚えているようで、扉の方を見つめている。

湊はそんな優希を見ながらも、本題に入ることにした。

「…優希は、12月31日に消えたりしない？」

「ああ、なるほどね」

湊の心配事の内容が分かった優希は頷く。

『これまで』の死の宣告者となった綾時と同じように、12月31日に消えてしまわないかが心配だったのだろう、と察することができたのだ。

「いや、それは大丈夫。俺は死の宣告者ではあるけど、動かすのにニャルラトホテプの化身としての力が必要だったってだけで、肉体は——たぶん、恐らく、けどまだ純粋な人間だよ。だから消える必要がないんだ。消えるときは、シユブⅡニグラスに取り込まれた時か、俺という存在がなくなる時だよ」

「さっき話した通り、もちろん魂はヒトじゃないんだけどね」と優希は付け足して自嘲気味に笑った。

「ああでも、変わった事ならできる」

そう愉快そうに呟いた優希が立ち上がる。そして揺らめき、その姿を変える。

ボロ布に、獣の頭骨。そして鎖。湊の記憶にある、デスそのもの

だった。

「っ!!!」

「——とは言ってもこれは幻覚みたいなものなんだけど」

すぐにまた蜃気楼のように揺らいで姿がもとの優希のものに戻る。デスそのものな見た目に必然的に『かつて』の綾時のように殺す選択を提案されるのではないかと嫌な考えが浮かんで、湊はバクバクと撥ねる心臓を落ち着かせることに必死になっていた。

「びっ……くりした……冗談きついから……それ」

「あ……ごめん。トラウマだったよね。そこは俺の考えが浅すぎた。本当にごめん。でも実際の俺の姿があんなのになってるわけじゃないんだ。あくまで、俺の身体は人間で、この姿に変わりはない。湊にそう見えるよう、自分の『認知』を弄っただけ」

湊が青い顔をした原因が10年前の事故のトラウマのせいだと勘違いした優希が罪悪感を感じたのか目に見えて落ち込みつつ謝罪する。

湊としてはそちらはどうでもいい——わけではないが、主な原因はそちらではないためジト目で見つめるだけに留めておいた。

それに対し、優希は申し訳なきさそうにしつつもその空気を変えるためか湊の視覚情報を更新しようと思な気を遣っているのか、口を開いた。

「ええと——他にはこんな姿にもなれる」

また、優希の姿が揺らぎ、月光館学園の女子用の制服を着た少女の姿になる。

大きなふたつの三つ編みに、ぱっちりとした金の目。そしてメガネ。その姿はカダスで見た「ナギサ」^{ノーデンス}のものだった。そんな「カダスのナギサ」の姿をした優希は見せつけるように両腕を横に広げてくるりと一回転し、スカートの裾をふわりと広げた。

「やつほー！ ナギサちゃんだよ！ ね、ビックリした？ これも『認知』の応用なんだ。自分に「カダスのナギサ」であるっていう『刷り込み』をして姿と思考を変えてるの！ ニュクス教の教主の時も同じ原理だよ！ これも何者でもない曖昧な存在だからこそ、可能なん

だ。どう？　すごいでしょ！」

声と仕草もそのままカダスのナギサになった優希が話す。まるで本物がその場にいるような擬態度に湊はあんぐりと口を開けた。

「ただ、多用しすぎると自分が誰だかわからなくなるから使うのはほどほどに感じてなんだけどさ」

そして姿と声が元に戻る。

一方、湊は危機感を覚えていた。兄の話によるならば、湊と奏子の兄だと自分を認識せず何者でもない曖昧な存在だと思っっているのは、かなり不味い事なのではないのだろうか、と。

否、ギリギリ、ふたりの兄である、という認識を持っているからこそ、優希は自我を保っているのではないかという嫌な予感すらする。それすら放棄されたら兄は己がなにかわからなくなり、帰ってこれなくなるだろう。

まさに、本当の意味で千の貌をもつ、何者でもない化け物ニャルラトホテブになってしまうことだ。もしかするとそれ以下か。

「てか、見せたのは良いけど使い道がないんだよねこれ。戦闘能力が変わるかと言われたら素の俺のままだし」

呑気にくだらないことを悩んでいる優希には悪いが、そんな力、使わなくていいと湊は言いたかった。

と、いうよりも時を操る力とやらもこの擬態能力も、優希の心身を損ねたり、魂を使うのなら一回たりとも使ってほしくないのが本音だ。

メテイスの言う通り兄は力を得たらくだらないことにも必要だと感じた場合リスクを考えずに使う節がある、ということはこの数分で嫌というほど湊は実感できた。

どんな力を得ようがヒトをやめようが、得た分以上に己の身を切り、使おうとする。そこが危うすぎるのだ。兄は。

「あとは…えへへ、明日の楽しみみてことで。俺もちゃんと戦えるとこ、見せないとだし」

奏子によく似た笑みを浮かべながら、優希は照れたように首に手を回して己の髪を弄る。おそらく、今のは照れ隠しだろうな、と湊は頭

の隅でぼんやりと考えた。

しかしどんな代償を支払うような力を使うというのか。湊は気が気でなかった。

優希の事なので一回一回は『宇宙』のアルカナを使うよりかはマシだが、長期的に見ればそれよりも重い代償を支払うことになるのではないか、とか。

そもそもが兄の力の出所がわからないため知り様がないというのもあるが、そんな不透明な出所の力を使ってほしくないというのが本音だ。

「戦うのは良いけど…変なデメリットとかはないよね？」

「…たぶん」

あからさまに目を逸らした優希に、湊は頭を抱える。

そんな湊を見た優希は慌てて弁解しようとして口を開いた。

「あつ、違うんだ！ デメリットがある力とかを使うんじゃない…その、恥ずかしながら俺自身でもよくわかってない戦い方とかが出てきてるから、そういうのを確かめてからっていうか…絶対デメリットがあるって力とかを無理して使おうっていうんじゃないからね！」
怪しい。

しかしぶつつけ本番や行き当たりばったりが多い兄にしては珍しくちゃんと確認してから行動に移そうとしているらしくそこだけは僅かに湊の安心できるポイントだった。

「じゃあ、明日。やるとしてもちゃんと確かめてから戦いに出よう。これ、リーダー命令ね」

「う…わかってるって。そこはちゃんと、さ。周りも巻き込みたくないし」

どんな戦法をとろうというのか。兄の『巻き込みたくない』発言にそこそこ威力が規模がデカいんだろうなアタリをつけた湊は遠い目をした。もしくは慣れていないためにカバーをされて下手に怪我人を出したくないか。おそらくは後者だろうが前者である可能性もな
くはない。

この時の湊は知る由もなかったのだ。優希が戦闘になった途端、豹

変してしまうことなど。

「燃えろ！ 燃えろ！ 燃えろ！」（12/4）

12月4日（金） 夕方

その日の朝、姉であるアイギスと共に学校へ行く！ と駄々をこねたメテイスだったが、美鶴とアイギスに説得されて通学は諦めたのだった。

通学するにしてもその手続きや準備が出来ていないどころか、メテイスは臨時でアイギスの部屋にいただけであり、正式な扱いがまだ何も決まっていないからだ。

一応、仲間として受け入れてはいるしメテイス自身も最初から仲間だったかのようには振舞っているが優希以外の面々はメテイスと出会ってまだ1日しか経過していない。その1日が濃かったというのは置いておいて。

そんなこんなで学校で授業を受けるのは一旦諦め、アイギスの登下校に着いていくだけでメテイスは我慢することにしたのだった。

もちろん、その機械の体を隠すために諸々の装備は外し、白いブラウスを着て、その上に黒い長袖セーター。赤いタータンチェックのスカート、その下にストッキングを履いて、だ。

ちなみに胸で揺れているリボンもアイギスのものの予備をつけている。

その時のメテイスは心底嬉しそうに、「姉さんとお揃い……！」とほしやいであり、これにはアイギスやメテイスの着替えを手伝っていた風花もほだされニコニコと笑みを浮かべてその微笑ましい光景を見つめていた。

「昨日でかなりわかったと思うんですけど、優希さんってホント矛盾してるんですね。姉さんもあの人にもっと怒ってもいいんですよ！」

下校途中。

アイギスの迎えに来たメテイスは周りからの好奇心丸出しの視線を無視しながらアイギスとの話に熱中する。

今のメテイスの視界にはアイギスと湊、そして奏子しか映っていない

い。

「それは…わたしはまだ、優希さんのことをどうしたいのか…よく分からないから…」

表情を曇らせ、目を逸らしたアイギスにメテイスはきよんとした顔をした。

「分からない、というのは殺すか、殺さないか、ですか？」

「…ええ」

「べつに、難しいことでもないと思いますよ。姉さんの好きなようにすればいいんです。優希さんは実際に敵であり味方でもあるんですから」

そこまで言ったメテイスは悩むような表情になって、小さく俯いてまた顔をあげた。

「ええと、こういうのは違うか。…とにかく、優希さんは敵の力を内包した味方と言いますか！ 複雑な立場であることには変わりません。私だって…そうなる可能性があった。優希さんは私とは違って、姉さんから殺意を向けられることを割り切ってるみたいに見えましたけど…実は内心めちやくちや落ち込んでましたよ」

「あー…やっぱりあれ落ち込んでたんだ…お兄ちゃん、結構溜め込んでじゃうタイプだからなあ」

落ち込んでいる、という言葉に奏子が反応する。

奏子は微妙に、修学旅行の時にアイギスへ向ける兄の視線が変な事には気がついていて。敵意ではなく、なんとなしにアイギスに縋るような、泣きそうな目を向けてている時があったのだ。

そしてアイギスもまた、いつも通りに接していたつもりだったのだろうが、奏子や湊が優希に近づくと優希に対し睨みつけるように見ていたことに奏子は気がついていて。

なにかあったのかとは思っていたが、アイギスが違和感を感じていた時期と合致し、奏子も納得せざるを得なかったのだ。

「優希さんが…でも…」

「姉さんのそれは与えられた命令もありますけど、最終的には姉さんがどうするか決めるしかないの。姉さんはもう、ただの機械じゃない

んだから。命令を無視するも従うも、姉さんの心のままにすればいいんです。ただ、今の優希さんを殺しても何も解決しないことだけは言っておきますね」

「わたしの、心のままに…」

メティスの言葉を反芻したアイギスは何かに悩んでいるようで、そこから言葉を発さなくなる。

「そんなアイギスを置いておくことにしたのか、メティスはまた口を開いた。

「さっきの優希さんが矛盾してるって話なんですけど。なんなんですかね、彼。自分のことをふたりの兄じゃないって言うのに、けれど兄であることをやめられない。三上優希ではあるけれど、有里渚でもあつて、それでも明確に己と有里渚という存在を分けている。機械であることを悩んでいた姉さん以上に自己の認識がめちやくちやなんですよ。私たちと違ってちゃんと肉の器を持つてるくせに……ねえ、なにか解決案ありません？」

「それ、僕らが聞きたいくらいなんだけど」

むくれるメティスに困ったように湊が返事を返す。

解決案を知りたいのは湊たちの方だ。

よくこれまで兄は兄で居られたな、と思うも、これまでは優希は「三上優希であり奏子と湊の兄」でしかなく、有里渚であるという事実を知らなかったのだ。

それが今回、様々なことを知ったり思い出したりした結果、乖離がより酷くなつたのではないかと湊は捉えていた。

本来は確立されるべきアイデンティティの喪失というべきか。それとも目的と自身の存在が相反しているせいなのか。

優希の認識が矛盾しているのではなく、優希が認知している己の存在自体が矛盾そのものなのだ。

有里渚としては被害者で、けれど『時を操る神器』やニャルラトホテプの化身としては加害者だと本人は思い込んでいる。

そこで優希は三上優希や有里渚であり、人間で被害者だと言い張ればいい所を何故か自分は人外で、加害者なのだと受け入れようとして

しまう。優希のことを人間扱いしていないのは優希自身もだった。そこをどうにかしない限り優希は曖昧な存在なままだろう。三上優希というひとりの人間にあらず、しかし振り切って神などにはなれない中途半端な存在。

自分を保つという行為自体が優希にとっては綱渡りをしているようなもの。

だからこそ、何かあればすぐに揺らいでしまうのだ。

「お兄ちゃんに、お兄ちゃんはお兄ちゃんなんだよって言っても不思議な顔されちゃいそうなんだよね…こう、伝わって欲しい肝心なところがどうしてもお兄ちゃんに伝わらないって言うか…」

「そこ。優希は意図してなのか天然なのか分からないけど僕らのそういう気持ちに対してだけはすごく鈍感になるよね」

これまでの経験や、生まれを考えると仕方ないと思ってしまうのは確かだが、6年ほどはちゃんと産みの両親に愛されてすごし、その後も三上家に引き取られ養父母からも愛されてきた。決して、愛情に鈍感だということは無いはずだ。

だというのにあんな風に好意を悪い意味ではないが疑って否定したり、自虐的になりがちなのはなぜなのか。

自分たちがそうでないからこそ、そこが湊にはよくわからなかった。

兄は他人の好意が己を騙そうとしているものだとは微塵も思っていない。ただ、なぜ自分に向けられるのかが分かっていないようにみえるのだ。

「優希さんの事は置いておきましょう。考えたって優希さん自身にもわからないことが他人の私たちにわかるはずがないんですから、無駄の極みです。そんなことより！ あれは噂に聞きたご焼き屋では!？」

あ、あの、あの！ 姉さん、私、あれが食べてみたいですよ！

アイギスの制服の袖をひっぱり、メテイスが目をキラキラとさせながら空いた片方の手でたご焼き屋「オクトパシー」を指さした。

メテイスはまだ財布や自由に使える金を持っておらず、たご焼きが買えない。だからこそ姉であるアイギスの袖を引っ張り催促した。

「たこ焼きを…？ 大丈夫なの？」

アイギスが心配そうにメテイスへと確認する。

この球体関節を持ち姿だけなら旧型そっくりな妹に、飲食を可能とする機能はついているのかという不安があったのだ。朝食や昼食を摂っているように見えるのがつたため、尚更。

それが無ければ故障の原因になってしまう。来て早々妹が故障してしまうなどアイギスは見たくない。

「心配なく！ ちゃんと食べ物で消化してエネルギーにすることは可能ですよ。そこら辺はしっかり調整済みです！ 固形物、液体、果てはマガツヒやマグネタイト由来の物質までパーフェクトです！ コロツケのレプリカだって食べられちゃいます！」

ふふん、と得意げにしながらもメテイスは何で調整しているか、とはあえて言わなかった。

そもそもシャドウでありアイギスのシャドウであり認知上の存在ではないメテイスは、封鎖されている寮の地下に幾月が雑に放り込み放棄されていた旧型のボディである本体をニユクスの力で色々と造り替え”たのだ。

統合され、協力したニユクスの精神は親切心からかこまめにそちらの情報もとってきてはメテイスへと還元していたので身体は最新型と同等もしくはそれ以上の性能になっている。

少々、余計なものがついて魔改造されていると言えなくもないが。

「なら良いんだけど…メテイス、何かあったらすぐ私に言ってね」

「はいー」

出会ってすぐだがすっかりメテイスの事を”妹”だと認識しているアイギスは他の人間に見せない家族に向けるような慈愛の顔を見せている。

そんなアイギスを見ながら湊は良い変化だと微笑み、奏子も同じくメテイスとアイギスという可愛らしい姉妹を微笑みながら見つめるのだった。

「えっ、これ…たこ焼きのレプリカ……じゃないですよね…これが本物のたこ焼き…？ なにかいま、動きませんでした…？」

夜

巖戸台分寮

「なんかさ。目が、見えないんだ」

「え？」

唐突に、夕食時に優希からそう告げられた美鶴は思わず言葉が理解できずに箸を止めてしまった。

湊たちは帰宅途中からそのまま、メティスの要望により外で晩御飯を食べるためにワックに行っていて運良く居ない。天田は先に食べ終えてしまってラウンジにあるテレビの前でコロマルと遊んでいてこの話を聞いていない。ゆかりと風花は既に食べ終え部屋に戻ってしまっているし、順平は今日、チドリのいる朝倉医院で食事をしている。荒垣は荒垣で洗い物に熱中しているのか水の流れる音しか聞こえてこない。

ここにいるのはゆつくりと食事をしていた優希と美鶴、そして走り込みで食事をとるのが遅くなった明彦だけだった。

「すまない、もう一度言ってくれないか？」

美鶴が聞き返せば優希はバツが悪そうな顔をして、参ったと言わんばかりに唸る。

「あー…なんていうか、急に目が悪くなったみたいで、文字がぼやけて読めないんだ」

目が悪くなった。文字が読めない。

ふたつの言葉をそのままの意味として受け入れて、しかしちゃんと頭に入ってこず美鶴は混乱した。

「だから誰か良い眼鏡屋さん知らないかなって、一応、こういうことになっちゃったっていう報告も兼ねてるけど」

そんな美鶴のことなど露知らず、優希は言葉を続ける。

本人は大したことがないと思っているのか語る口調は呑気なままだ。

一方美鶴は病院に行つて検査を受けさせた方がいいのではないか

という気持ちでグルグルと回っていた。急激に目が悪くなる、ということは余程の事が無い限りないだろう。となると、目以外の場所も悪くなっているのではないか。嫌な予想が美鶴の頭を占領する。

「三上、それは大丈夫なのか？」

「ん。大丈夫。ぼやけて文字がよく読めないだけで他はちゃんと見えてるから。それにぼやけてる文字も見ようと思えば目を凝らせば微妙に見えるし…だから眼鏡屋さんで眼鏡作ろうかなって。コンタクトでもいいけど目に物を入れるのはなんか怖くてさあ…」

心配する明彦に優希はまたのほほんと返事を返した。

「どうやら、コンタクトは苦手らしい。」

しかし明彦にとつて訊きたかったことはそれではなく、体調は大丈夫なのか、ということだった。はつきり言わなければ優希には伝わらないと明彦は言い直すことにした。

「そういうことじゃなくてだな…体調はどうだ」

「ん…はつきり言っただけ。可もなく不可もなく。日常生活をする分にはこのまま放っておいても大丈夫、だと思っただけ。勉強できなくなるのは困るから…」

確かに文字が見えないというのは致命的だろうな、と明彦もそこだけは同意した。

そして優希が自身の体調を強がらずに微妙だと表現したことにも少なからず驚いていた。

いつもなら高熱が出た時以外は誤魔化したりなんてことないと言う優希が微妙だとはつきり申告してきたというのはどんな風の吹き回しなのか。

「なら、今日はタルタロスに行くのはやめておくか？ 昨日の今日でもあるからな。俺からでも有里に言っておこう」

善意から明彦がそう告げれば、優希はまたバツの悪そうな顔をして首を横に振った。

「戦えないほどではないというか…その、なんとなくずっと怠いだけなんだ。だからこれまでには比べたらほんと大したこと、ないんだけどさ…ええと、こういう甘えたこと、言ってみたくなくて。だから、く

だらないなと思っていたら無視してくれても構わないから」
「くだらなくはないな」

一刀両断する。

甘えたこと、というが明彦からすればそれは伝えられるべき事柄であり、甘えでも何でもない。

相手の様子をこまめに訊く癖に自分からは誰にも言おうとしなかった優希に、明彦は「ようやくスタートラインと叫ぶところか」と内心でため息を吐いた。

明彦としても優希の様子は9月以降から心配だったのだ。いくら明彦の幼馴染である荒垣が気をつかおうとも、のらりくらりと優希は逃げていた。明彦との距離もただの同級生ではなく気の合う仲間、くらいにはなっていたがそれでもだ。

だがここに来て優希から一方的な理解ではなく相互理解としてのその距離を詰めようと努力して歩み寄ってくるというのはなにか、良い兆しではないかと思えたのだ。

「明彦の言う通りだ。…とにかく眼鏡屋は評判のいい所を家の者に探させておくから明日の放課後にでも私と見に行こう。他にも何かあったら細かく伝えてくれ。いいな?」

「…うん。ありがとう、美鶴さん」

ようやく思考から復帰した美鶴が優希を見つめて即座に予定を入れれば、優希もまんざらではなさそうにはにかみながら頷いた。

が、次の瞬間爆弾発言を落とすこととなる。

「そういえば、これってデートの約束になるのかな…」

「?!?!」

「飲もうとした水を美鶴が吹き出してしまいそうになったの言うまでもない。」

影時間

タルタロス

朝倉医院から直接来たストレガと順平に合流した特別課外活動部

はロビーで各々好きな場所に陣取りながら優希が話し出すのを待っていた。

「——ということで、今日はタルタロスの探索じゃなくて一応特訓の内容がどういふものなのかの説明と、俺がどこまでやれるかっていうのの確認をお願いしたくて」

そう告げた優希は武器を何も持っていない。どうやって戦うのか、という疑問を抑えて湊は口を開いた。

「なら、確認としてタルタロス内には入るってことだよな？」

「そう。一応いちばん耐久力のある敵がいいからみんなが進んでるところがいんだけど…」

みんなが進んでるところ、と言われて湊はどこまで行ったかを思い出す。

行けるところまではつき進んでいるので——

「なら、今は200階あたり…『焦炎の庭ハラバ』の後半かな」

「うわ、登るスピード結構早いな。みんなすごく頑張ったんだね。もちろん、湊と奏子は特に」

伝えれば褒められ、湊は満更でもなかった。大体この頃は兄が死んでいるか普通に参加しているかのどちらかだったので認められることはあれど褒められるのは初めてだったのだ。

「それじゃあ、転送装置でも使って飛んじやおうか。タカヤ達はどうする？ 見る？」

「遠慮しておきます。興味深くはありますが……さすがにこの人数では」

要するに特別課外活動部に混じってそろそろと団体行動は嫌だ、とタカヤは告げた。

あくまでも優希^{ナギサ}という存在に協力すると言うだけで、宣言通り仲良しこよしをするつもりは無いらしい。それか、イロモノ集団と一緒に行動すること自体が苦痛なのか。

少人数なら構わないといったげなタカヤに優希は頷く。

「ん、わかった。しばらくしたら帰ってくるから待っていてくれるとありがたいかな」

「ええ。待たなければここに来た意味がない」
そうして、ユノを展開した風花を置いて転送装置を起動した優希達の姿は消えていった。

202階 焦炎の庭ハラバ

全体的に赤く、虹色の明かりのようなものが照らしサイケデリックなそこに優希達は足を踏み入れた。

かなり視界情報としては最悪だ。

優希も暗い、赤い、見にくいという感想しか抱けない。

さあシャドウを探すぞと歩き回れば最初の頃のように全く居ないという訳でもなく、優希から逃げるといふことも無く普通に徘徊しており、そこだけは綾時の杞憂だった。

視界に一行を入れたシャドウは飛びかかるようにして襲いかかってくる。

しかし優希はそんな事を気にもとめず、皆に告げる。

「じゃあまず、ひとつめから」

ちり、と優希の顔の横で小さな炎が揺らめいた。

【火産霊^{ホムスビ}】

瞬間、それは一気に膨張し、灼熱とも呼べる業火が叩きつけるように一帯へと降り注ぐ。

瞬く間に勢いを増し、優希の周りでごうごうと燃え盛っている。水があれば瞬時に蒸発し、鉄があれば溶け、木があれば炭化させるようなその高熱の中で、優希はひとり嗤う。

「あはははは！ 燃えろ！ 燃えろ！ 燃えろ！」

高笑いし、シャドウを焼き尽くす姿は異常だ。これまでの理性的な戦い方とは大違いかつ、その異様なハイテンションは優希らしくない。

周りや己を鑑みず、ひたすらにシャドウを燃やし続けている。敵味方の区別がついているだけ幸いか。

「ペルソナを使っていない…!?!」

まず、ペルソナを使用していない状態で異能を扱ったことに全員が驚く。本当に人であることをやめてしまったのか、と思うも、美鶴はすぐにその考えを振り払った。もしかしたら、見えていなかっただけかもしれない、と。

「先輩のキヤラ変わってません!? あんなのでしたっけ!? てか先輩、なんかダメージ喰らって…」

ふと、熱源である優希の傍から離れたゆかりが優希自身も自傷ダメージのようなものを食らっていることに気がつく。

そして奏子もまた、機敏にもカダスのナギサが言っていたウィツカーマンのやり方に近いものを今の優希から感じ取っていた。

己を燃やしても敵を殲滅することに全てを懸けているような、そんな姿にしか見えないのだ。

『確かに、ゆかりちゃんの言う通り、あの特殊な技を使っている間、三上先輩も傷を負い続けてるみたいで、これは止めた方がいいと思います』

「でもよ、オレたちにあんなのになったセンパイを止められると思うか…? ヒイ…アレってたしか炎は無効のやつと吸収してくるやつだろ…? マジで耐性貫通してんじゃん…」

為す術もなく焼き尽くされていくシャドウ——恒久の砂時計と破壊のマリア——を見た順平が顔を青くする。

もしあれがこちらに降り注いだらひとたまりもないだろうし、順平にはあの炎の嵐の中に飛び込んでいく勇氣はなかった。

そんな順平を見かねてか、優希を止めるためか、コロマルが炎を怖がらずに飛び込んでいく。そして、

「ワンワン！」

呼びかけるように吠える。それに続いて奏子も大声で叫んだ。

「お兄ちゃん、ストップ！」

「わかった！」

コロマルと奏子、2人の制止に笑うのをやめて幼子のように元気よく返事をした優希はピタリと炎を止める。

延焼していた炎はすぐに消え、先程までの猛烈な熱気もなりを潜め

ていた。シャドウも跡形も消えて無くなっている。

確かにこれは強力だ。だが、自傷ダメージが入るとなれば止めざるを得なかった。

「みんなの役に立ちたくて予定より火力五割り増しにしてみたんだけど、どうかなあ?」

ニコニコと無邪気な笑みを浮かべながら優希が振り返り駆け寄ってくる。その身体の肌が見えるところは所々軽い火傷になっていて痛々しい。

そんな優希を見た奏子は頷きつつも使用は制限させなければと感じてその旨を伝える。

「そ、そうなんだ! 威力はもうバツチリ! でもそれ、お兄ちゃんも燃えちやうから、強い敵以外には使っちゃダメだからね! 禁止!」

「? なんで? 燃やすのが俺の仕事だよ?」

「...?」

「燃やすのが俺の仕事」。その言葉に、違和感を覚える。

どこかで、似たような言葉を聞いたような。

「もしかして...あなたは...お兄ちゃんじゃない?」

今、表に出ているのは兄ではなくあのカダスにいたウィツカーマンと名乗った認知上の優希なのではないか、という意味で奏子が優希を問い詰めるも、優希はきよとんと目を丸くして驚いた。

「へ? 何言ってるんだ...? 俺はふたりの兄だよ! ...: : 兄だよな...? ...え、もしかして俺、兄じゃないのか!?!」

途中から眉を下げ、おろおろと混乱しだした優希は酷く不安げだ。まさか奏子からそんな事を言われるとは全く思っていなかった為か、かなりショックだったようだ。

「そ、それとも偽物だとか疑ってる...? よし、それじゃあ信じて貰えるよう、小学生の頃の奏子の可愛い話をしよう! 夏に怖いビデオを見た日があつて寝れなくなった奏子が俺に——「ストップ! やっぱりお兄ちゃんに間違いないです! 私の勘違い!」...えっと、やめとく?」

「うん...その話はしないで。恥ずかしい、から」

「わかった」

恥ずかしい過去を暴露されそうになり、奏子は目の前の優希がちやんといつもの優希であることを確認できた。別にウィツカーマンでも奏子は気にしないが、ただ確かめたかっただけなのだ。

そのついでとして恥ずかしい話を暴露されてしまつては荒垣にからかわれてしまいそうだと奏子は顔を赤くした。

「なんか、気になるっつーか。奏子っちの恥ずかしい話って珍しくね？　ネ、荒垣サン」

優希の話の続きが気になるのか、そつと順平は荒垣にそう耳打ちした。

奏子の恥ずかしい話というのは滅多に聞かないものであるし、順平としても気になるものだった。

もちろん、聞きたい恥ずかしい話にも度はあるが優希が語るものはそこまで心に傷を負うような類のものでは無いだろうという謎の信用から、順平は興味津津なのだった。

「あ？　まあ、気にならねえつていやあ嘘になるけどよ。奏子が聞かletakねえつてんなら無理には聞かねえよ」

「あー…荒垣サンそういうタイプっすよね。三上センパイも奏子っちから言うなって言われたら黙つてそうだし…こりや聞けそうにないか」

それはそうだ、と荒垣の返事に納得した順平は即座に諦めた。

双子の片割れである湊から聞くというのも手だが、湊は優希以上にこういうことを語らず、己の中で大事な思い出としてしまいがちなので聞けないだろうなという順平なりの予測だ。

『あれ…？』

火傷もあり、継続して優希の状態をアナライズしていた風花は首を傾げる。

(…アルカナ名が外神…？　…クトウ……) 『あつ…』

何かを読み取ろうとして、しかしそのアナライズは完璧にはされなかつた。

突然アナライズ結果が全て真っ黒に塗りつぶされたかと思つたら、

一瞬でいつもの優希のデータと同じものに戻ったのだ。

まるで、誰かが風花がそのデータを見たのだと知ってそうしたかのように。風花のことをからかうような、タチの悪いイタズラのようにも思えた。

(見間違い…?)

再び風花は首を傾げるも、もうアナライズ結果が変わることはなく。

そんな不思議そうにしている風花の声を聞いていたメテイスが優希へと近寄り小声で話しかける。

「ウィツカーマン、あなた、まだ優希さんの中に居られたんですか？」

ニヤルラトホテプに奪われたはずじゃ…」

「あ、バレた？ 奏子は誤魔化せたのになあー…まだ優希俺の方は力の扱いになれてないし馴染んでないから力を使う時だけ代わりにウィツカーマン俺が、ね」

小声でにししとイタズラが成功した子供のように笑った優希はすぐにその表情を拗ねたような顔に変えた。

「…あの時離れたくなくて、あの本体気取りの化身サマにムカついたから変異してやったんだ。ヤツのだーいつきらいな存在にさ。今は、別物だよ。ざまあないつたらありやしない」

「大嫌いって…まさか、もしかして、あなた、生ける——」

「ストップ、ストップ！ しーっ、秘密だよ。ネタばらしは面白くないって」

なにか名前を言いかけたメテイスを小声のまま、優希は止める。

優希は軽く言っているが、ウィツカーマン俺ごときが人の身に収まっているとはいえ完全に独立した外なる神に昇華し、変異するなどというのは滅多なことではないどころかほぼ有り得ない。

いくらその素質や土壌があつたとしても、凄まじい量の条件が重ならなければなれない存在だ。

そして優希とは同一であるがまた別の存在としてそこにいるという異常さ事実にもメテイスは慄いた。

ウィツカーマンと優希は同じでありながらそれぞれ器の中で分か

たれたままなのだ。

メテイスなりに認識するならば、ウィツカーマンを内包する三上優希という所か。

「てか、ウィツカーマン^俺が離れたら魂の結合も無くなっちゃってそれこそほんとに俺が死んじゃうから、そんなのはウィツカーマン^俺の望みじゃないし。だからデヴァ・マールとかベルゼブとかイザ・ベルとか食べても良さそうなのを食ったんだ。ほら、デヴァ・マールはともかく、コイツらの他の分霊もなんとかの王を決める戦いとやらに出てたらしいし？ 力だけはあるみたいだから。イザ・ベルなんて特にそう。相手の精神に寄生して掻き乱すのが得意だから相性バツチリ」

「あとはバルドルとコイツの上司な肉団子だけだったし、食ってみたら「あつたな」などと呟いてまたイタズラっ子の様に凶暴に笑った優希にメテイスはジト目を向けた。一体どこの世界の事例を見ているのか。そしてさらに別のものに変異しようとしてないだろうか、と。

ただ、ニヤルラトホテプはあの時完全にウィツカーマンも奪えたと思っていたのだろう。だが、そうではなかったということだ。だからこそ黄昏の羽根で蘇生することが出来たということか。

「食ったって…他の神性を喰らうのはかなりのリスクがあつたんじゃない。デヴァ・マールはどうしたんですか。あんな強大な存在をあなたが喰らえるとはどう思いえないんですけど」

メテイスの中にいるニユクスからしても、他の神を喰らうなど並大抵のことではないしデヴァ・マールはただの使役される存在に留まる程の器ではないと思っていたのだ。スケールダウンせずに単独で顕現していればニユクスとタメを張れるレベルの死の権化だろうと感じていたところだった。

むしろ、なぜあんな存在が洗脳されていた時の優希の力として協力していたのかすらニユクスにとってはわからなかったのだ。

本来なら、呼びかけにすら応じない存在であり、下手をすれば宿主や世界自体が破滅へと向かわされたり殺されてもおかしくはない。そしてウィツカーマンという化身のなり損ないにも等しい弱小な存在がごときが喰らおうなどとすれば一瞬で消されて終わりだろう。だ

というのに主人格はこのウィツカーマンであり、優希でもあるのだ。そこが疑問に思えた。

「うん。ウィツカーマン^俺がどれかに負けちゃう可能性の方が大きかったよ。でも、デヴァ・マールの方が協力してくれたんだ。もうさ、反抗的なイザ・ベルとか一瞬でボコボコ。なんかあいつも優希^俺のことに気に入ったみたいらしくて、すごく懐かしい雰囲気があると何かとか：いや、本体気取りの化身サマ程度の存在に命令されるのが癪だったとも言ってたかな：だから変異できたほぼほぼの要因がウィツカーマン^俺とデヴァ・マールに含まれるカーマとしての側面にあった。燃やされた”つてとこなんだよね”

「そうですね…」

優希からの返事を聞いて、もうメテイスとしてもニユクスとしても思考するのを諦めた。

イザ・ベルはともかくベルゼブブですら最高位の悪魔であるのに、そこをねじ伏せ、その後は素直にウィツカーマンに吸収されたという天魔の思惑がわからなかった。

気まぐれか。なにかあったのか。返事がない相手の思考など、考えるだけ無駄だ。

「ようこそ、俺の根城（パレス）へ」（12/4）

ひとまず【火産霊^{ホムスビ}】は使用禁止となり、優希は次の手を見せようとまだ一行に気がついていないシャドウに向かって手を伸ばす。

その瞬間、シャドウを黒い炎のようなものが包み、そして消える。

【精神暴走】

黒い炎に包まれたシャドウはぶるりと震えたあと様子がおかしくなり、近くにいた別のシャドウへと飛びかかった。

そして実力はほぼ同じだというのにわざわざ相手の弱点を的確に狙うような行動をしつつも力でねじ伏せるようにして殲滅してしまった。

そのことに湊も奏子も他の全員も混乱する。何かの状態異常でも与えたのか。

「えっ、えっ、どういうこと!? 魅了とかそういう…?」

「……」

混乱し、優希の顔と奇妙な行動をとったシャドウを見比べる奏子に対し、湊は黙ってシャドウに目を向けていた。

魅了されているような様子はない。だが、少し動きがおかしい。知性のあるような行動をとった癖に、シャドウ自体が昂っているような、そんな気がするのだ。

『私の方でもこれはちよつと…よくわかりませんね……』

「さしもの山岸でもお手上げか。三上、正解を教えてください」

白旗を上げた風花の声に、美鶴もわからないので優希へと正解を教えてくださいと催促した。

先ほどの【火産霊^{ホムスビ}】とは違い、今回のそれは優希へとダメージが入るものではなく。しかしなにか正体がわからず奇妙な能力のような気がしたのだ。

「さっきのはこう…シャドウとしての狂暴性をあげてー、ちよいちよいつと俺の命令を聞くようにしたんだ。えーつと、身体は暴走させてるんだけど、思考は俺の命令を聞く、みたいなの？ もし湊たちもさせたい命令があれば俺を通して言ってね。二重の伝達でちよつと面倒

「だけど」

「なるほど、洗脳状態に近いことをしているのか」

優希が答えながら操っていたシャドウにもう一度手をかざせば、シャドウは呻いた後に自分に攻撃し自滅する。

「エグ：いや、えぐいつしよセンパイ…」

「なんだか敵なのにシャドウが可哀想に見えてきた…」

ドン引きする順平と用済みとなったら自殺させるようなあまりの仕打ちにシャドウへと同情した天田の悲痛な声が聞こえる。

湊は出された答えに思考を止め、結論を伝えるために口を開いた。

「優希」

「なに?」

「それも禁止だから」

「え…」

禁止だ、と告げればショックを受けたような顔になり、すう、と優希は大きく息を吸った。

そして、

「ええええ!! なんで!! 便利なのに!! 無駄な戦いを避けたり敵を味方にできるんだよ!! すごい便利でしょこれ! それにやりようによっては相手の意識を全部俺に向けて俺だけ狙われるようにしたりとか出来るんだ! すつつつごく、役に立つよ!」

「ダメだって言ったらダメ。リーダー命令」

どうして禁止されるのかがわからない、と言いたげな優希に湊は念押しする。

デメリットも話していないだけで恐らくあるのだろう。二重伝達が優希と同じくめんどくさいというところもあるが、そんな思考が混線するようなことを不安定な兄にさせられるわけがない。困など以外の外だ。

あと、用済みになったシャドウの処理方法も中々にひどいのでそこも含めて。

「そ、そんな…」

「駄目だよ、お兄ちゃん。ほら、色々と、ね?」

チラチラと奏子へと継るような視線を向けるが、奏子からもやんわりと禁止され、優希は目に見えて落ち込む。

「だ、だって…だってさあ…いまの俺に他にできることって、あんまりないんだよ？ パンタソスやポベートルがいたときみたいに、色々できるわけじゃないし…」

いじいじといじけだした優希はネガティブなスイッチが入ってしまったらしく目を逸らしながらぶつぶつとあまり意味のなさそうな言い訳を垂れ流している。

湊からすれば前の兄が色々出来過ぎただけであるので多少ピーキーでも受け入れるつもりでいた。が、確かにこれはピーキーすぎるなど納得してもいた。

「ほんとに燃やすことくらいしかできないっていうか…敵に対することばっかに力が入っちゃってサポート系統がさっぱりになっちゃってるっていうか…うう、役に立てなくてごめん…」

どうやら攻撃に能力を全振りしているらしい。集団戦をするのではなく、単独で敵に突っ込ませて殲滅させるスタイルが向いてそうだ。

しかし出来ることならそういうことはさせたくない。そんな意見が顔を見合わせた湊と奏子の中で一致した。

「優希はしばらく待機組ね」

「わかった…わかったよ…どうせ俺は使いにくいんだ…わかってる…伊織やコロマルと属性丸かぶりだしふたりみたいに使いやすくないし…」

事実上のスタメン落ちである。

もう優希——ウィツカーマンの心はベキボコ。己が使いにくいことは分かっていたが意気揚々と出した自信のある手がふたつともダメだと言われてしまうと悲しくなってしまうのは仕方ないだろう。

泣きたい気持ちを堪え、内心めちゃくちゃしょげているウィツカーマンは優希と交代してもらおうか悩んでいた。どちらかといえば優希本人の方がメンタルのふり幅が少ないからだ。この程度では愚痴を言うくらいで泣きはしない。しよげないわけではないが。

『あ、でも…三上先輩のこのスキル…見たことの無いものですね。どんな効果があるんですか?』

風花が励ますように別の話題を持つてくる。

天から垂らされた救いの糸のようなそれに優希はぱつと飛びついた。

「どれどれ!? なにかな!? なんでも答えるよ!」

かなり食い気味に食いついた優希の珍しい反応に、風花は笑いをくすりと漏らした。

『ええと…この【火炎サバイバ】というスキルなんです…』

「ああ! これね! これは火炎属性の攻撃の威力を少しだけ高めてくれて、しかも体力が尽きそうになっても1度だけ踏ん張れる優れものさ。【火炎ブースター】と【食いしぼり】の複合版みたいなものかな」
話に聞くだけはとても便利そうだ。

わざわざふたつのスキルをつける必要はなく、ひとつで事足りるのだからその分枠が空いて他のスキルをつけやすい。

珍しく無害で純粋に有用なものを持っていたなと湊が感心している。ならば順平が優希へと近づいてなにやら話している。

「センパイズリーっすよ! そんなのがあるならオレとコロマルにも教えてくださいよ!」

「覚えない? ならこの宇宙的恐怖を孕んだウイスパークボーイスで継承させてあげよう! さあ伊織、コロマル! 星々の囁き声に耳を傾けて…はい、ご一緒に! 9k v8 x i y i!」

意味のわからない文字の羅列のような言葉を呟いた優希はニコニコと笑っていた。どうやら、順平をからかっているらしい。

それもそうだ。ペルソナのスキルの受け渡しなど言葉のみでできるわけが無いので順平の注文は優希にとって無理に等しく、嫌な顔をして一蹴せず話に乗っただけでもマシなものである。要するに、ないものねだりだ。

「きゆうけー…エエト、なんスカその言葉!? フツの人間が発している発音じゃねーでしょそれ!」

「それはそう。…でもコロマルは覚えられたみたいだけど伊織にはま

だちよつと早かったみたいだ。ごめんね、「Dリングル」か【ジャイヴ
トーク】を覚えてからまた再チャレンジして欲しいかな」

「エエツ!? マジで!?!」

順平は無理だったがコロマルは覚えることが出来た、という優希の
言葉に順平は目を剥いた。後半の意味のわからないスキル名らしき
ものは無視をして。

自分はダメでコロマルはOKとは理不尽な、と順平は運命を呪っ
た。

一体なんの差なのか。獣か人かの違いか!? と頭を抱えた順平に
優希が眉を下げる。

「嘘だよ、冗談だって」

「ワン!」

「なんだよ…」

即座に冗談だとネタばらしした優希と「騙されたな!」と言いたげ
なコロマルに順平はがっくりと肩を落とした。

今日のこの優希に付き合うには、それなりに凶太い神経が要りそう
だ、と遠い目になる。

「やっぱりお兄ちゃん、なんか変なんじゃ…」

「奏子もそう思う?」

いつもなら絶対にしらないようなテンションの高い言動に、奏子と湊
の疑念が膨らむ。

先程からずっとテンションが高いままだ。いつもなら、冷静になっ
たり静かにしている方が多いというのに、これだけ口数が多く、湊に
【精神暴走】の使用を禁止された時の食い下がりようからしてもおか
しいというのは何かあるのではないかと思ってしまうてもおかしく
ない。

普通、優希はあのようにハイテンションで駄々をこねるように言っ
たりしない。否定された場合、素直に認めるか反論するにしてももう
少し論理的で静かだ。

そしてこんな風に順平をおちよくったりしない。

「まあ、普段のアイツらしくはねえよな。分かってねえのはアイツ自

身だけだろ」

そこで荒垣も会話に入ってくる。

違和感は他の者も感じていたらしい。順平ですら、何か優希が変だということには気がついているという。

それもそうだ。屋久島に行く時ですら静かだったというのにこんな時だけハイテンションというのはおかしいにも程がある。

無理をして、空元気を装っているのではないかという予想が浮かんでくる。

そして、「役に立つ」ということに固執しているようにも思えた。

「…お兄ちゃん、そろそろ戻ろっか」

「わかったー!」

一応、兄が（使いやすい使いにくいはおいておいて）戦えはするということの方が分かった奏子はエントランスに戻ることに決めた。

そろそろ戻るか進むか進まなければ強力な敵である。刈り取るものが現れかねない。今の優希ならそんなものは関係ないと言わんばかりに燃やしそうだが、下手をすれば殺されるのは優希の方だと奏子には思えてしまったのでそんなことをさせる訳にもいかず。

「風花ちゃん、ごめんね! アレよろしく!」

『わかりました』

風花に頼んでエントランスまで帰還できる【エスケープロード】で戻る。

「…戻ってきましたか。ナギサ、少しこちらへ」

「ん」

エントランスに戻って早々、タカヤが優希を呼べば警戒心もなく素直に寄ってくる。

その事に馴れ馴れしい犬や雛鳥のような印象を受けたが、タカヤはすぐにそのイメージを振り払った。

「ジン、アレを」

横に立つジンに短く声をかけ、タカヤは腕を組んだ。

「任せとき。ほら、ナギサ、口開けえ」

「? うん」

あー、となんの疑いもなく口を開けた優希の口に、ジンが白い錠剤を放り込む。

「んぐっ!？」

突然、放り込まれた異物を反射的に飲み込んでしまい、優希は目を白黒させた。

せめて水くらい飲ませて欲しい、と文句を言おうとした瞬間、ぐらりと視界が傾いた。

「……!？」

そしてそのまま膝をつき、肩で息をいだした優希の様子に特別課外活動部の全員が身構えた。まさか、なにか良くないものを飲ませたのではないかと。

「……やはり」

「アンタたち、三上先輩になにしたの!？」

「黙りいや。大したことやない」

「大したことないって……先輩は倒れそうになってるのに!？」

叫ぶゆかりを無視して、タカヤは優希を観察していた。

大きく肩を上げ下げしながらしていた呼吸はすぐに落ち着き、穏やかなものになる。俯いていた顔を上げた優希は少しぼんやりしているように見えた。

「……あれ、タカヤ……? ジンも……あいや、そうか、そうだった。みんな、俺は大丈夫。ちよつと……糖分不足で……そう、ラムネをさ、口に突っ込んでもらったというか……いや、なんでもない……」

「……」

特別課外活動部への言い訳をつらつらと言いながらもどうしてタカヤが目の前に、と言わんばかりの優希の態度にタカヤは疑念を確証に変え腰を曲げて屈むようにして小声で問いかける。

「あなた、いまは人格がふたつあるのでは? いや、ひとつの人格がふたつにわかれていると言うべきか。そして片方は人ならざるモノ。……違いますか?」

タカヤの指摘に優希は顔を顰めながら答える。

「……当たらずとも、遠からず、かな。別に、無理やり制御剤飲まさな

くたつて切り替えは自然にできるからほつといってくれば良かったのに」

まさか、ウィツカーマンの事がメティスだけでなくタカヤたちにもバレてしまうとは思わなかった優希は内心で舌打ちをしてはしゃいでいたウィツカーマンへの文句を言いそうになり、しかし口を噤んだ。

ウィツカーマンは自分でもあるからだ。なら、はしゃいでいたのも自分の意志なのかもしれない。そう思い直したただけだ。

6月頃の路地裏での件の時のように自分の意識とは別の言動を取っているだけで、危険ではないし本気で止めようと思えば止められる。

どうやら無理やり制御剤でウィツカーマンと切り替えられた余波で、一瞬意識がぼやけたせいでタカヤ達にはなにか勘違いされているらしい。

「…ナギサ、無理してないか？」

「無理はしてないよ。心配かけてごめん、イズミくん」

心配そうに声をかけてきたイズミを優希は謝りながらもやんわりといなす。

「『視て』いたチドリが不安がっていましたからね。良くないものかどうかまではわからなかったようですがナギサの負担になるのなら止めさせるべきだ、と」

「負担になんか…」

「なっているでしょうに。昨日の夜よりも顔色が悪い。無理をしたのでは」

「してない。当たり前のことをしたただけだ」

「そうですか。では、そういうことにおきましよう」

チドリに視られていた事に気がつかず、そしてイズミにまでなにか異様な雰囲気を感じとられてしまったのは優希にとって失態だった。否、ウィツカーマンとしては完全にチドリの観測はされてもどうでもいいものだったのだろう。だから、恐らく気がついていたらというのに放置していた。風花のアナライズの時のように『イタズラ

“をしなかった。

もしくは、構って欲しかったのか。優希にはもう1人の自分だと言うのにウィツカーマンの考えていることがわからなかった。

別に、乗っ取りたいわけでも己が主人格になりたいという訳でもなさそうなのだ。

どうでもいい。なんでもいい。ただ、役に立ちたい。ちよつとだけ、心配している。役に立てなくてごめんなさい。

そんな感情しか優希は感じ取れず、それもすぐに制御剤のせいなのか沈んでいく。

強制的に眠らされてしまったのか、うんともすんとも言わなければ気配を感じとることすら出来ない。

ウィツカーマンは悪い存在ではない。

ニアルトホテプの化身とも呼べる存在だったが、優希という主人格がいたおかげでそこまで堕ちきることが出来なかった。ネガティブな方に寄らないようにと常に笑顔の仮面を被り、自戒し続けていただけだ。

怒りに寄っても哀しみに寄っても、そこから先はただ堕ちるだけと知っていたから。優希自身が、その声に気がつかず、自覚していなかっただけの話で。

カダスにいた幼い優希も優希自身が必要ないと排斥したシャドウであり、このウィツカーマンも己のシャドウである。

そしてメテイスとよく似ている。

捨てられたくない。置いていかれたくない。役立たずだなんて言われたくない。失望しないで。必要だつて言つて。俺は、悪い存在なんかじゃない。要らない存在なんかじゃない。

だから、俺を見て。否定しないで。愛して、愛して、愛して、愛して愛して愛して――！

あくまでメテイスと“似ている”だけで、仮面の裏にそんな激烈な感情を溜め込み、ウィツカーマンは嗤う。

主人格である優希に依存し、心のうちに眠る邪神としてそのカテゴリの中で変異することはできても優希以外の何物にもなれず自己を

確立できていないウィツカーマンは優希と同じでありまた別物。

だからこそ、優希とウィツカーマンでは同調し、知識や記憶の共有が出来ても真なるところでは異なってしまう。矛盾が生じてしまう。優希自身が本心からウィツカーマンを同一の存在だと認めていない部分もあるが、ウィツカーマン自身も優希への依存をやめ、完全に同調しひとつになるという方向へと舵をとれないせいで乖離がより酷くなっていた。

酷く歪で不安定な状態。それは優希自身が気づき、覚悟しなければどうにもならないことだ。ウィツカーマンも優希も、それぞれその都合の悪い状態を見て見ぬふりで放置している。

それが、この中途半端な状態を引き起こしていた。

「このまま特訓とやらの説明は出来ますか。無理ならその分の穴埋めは後日してもらうだけなので気にせず帰ればよろしい」

「…大丈夫。説明くらいは普通にできるから。むしろ影時間内の方が調子は良いんだ。心配しないで」

「その言葉、信用に足るものなら良いのですが」

「……」

優希はタカヤからバツが悪そうに目を逸らした。

別に、その言葉が強がりだとか嘘を言っているわけではなかった。だが、その真剣な目で見つめられるのが嫌だった。それだけだ。

「…じゃあ、特訓についてなんだけど。みんなには特別な条件の戦闘で力をつけて貰おうかと思っててさ。とは言ってもちゃんと頑張ったら頑張った分の報酬？ みたいなのは用意してるし、強さも俺なりに分けてるから、ちよつとずつ頑張っていけたらいいなって」

誰とも視線を合わせないようにしながらも無理やり本題に入り、優希は説明する。

「もちろんやるもやらないもはっきり言って自由で良いんだ。タルタロス攻略で力をつけられるのならそれでもいいから。継続してやらなくてもいいし、気が向いたらしてくれてもいい。ほんとに、オマケ程度の事だからさ」

あくまでも義務ではなく参加自由である、ということと報酬が用意

されているということ強調した優希はトントン、と右足のつま先で床を叩いた。

瞬間、塗りつぶされるようにして景色が切り替わる。

「!!」

「ここは…プラネタリウム…?」

そこは、座席の殆どないプラネタリウムだった。

青い光で彩られたそこは湊と奏子が一瞬ベルベットルームかと思間違えるほどで、中心に天体望遠鏡らしきものがあり円形の部屋のふちにだけ座席が壁に沿うように並んでいた。

そして天井には満天の星空が広がっている。

「ようこそ、俺の根城^{ベース}へ。とは言ってもカダスのごく一部。俺が切り取る事の出来た、俺だけの領域だから安心してほしい」

「こんなところが…意外と先輩ってロマンチック…?」

ゆかりの言葉に照れたようにそっぽを向いた優希ははにかみながら答える。

「…星とか、海を見るのが実は好きなんだ。だから、かな」

「だから…あの時の三上は天文部だったのか」

何かに納得したらしい美鶴の小さな声には気がつかず、「この一年はほとんど見れてないけど」とは言わずに優希は説明を続けようと息を吸った。

「帰りたいときとか特訓にチャレンジしたいときは俺に言ってくれれば良いし、休憩したいなら椅子を自由に使ってくれていいからね。あと、体力と気力の回復がしたいときはその扉の中に入ってお金を払えば回復してもらえるから。価格は…ごめん、俺も引っ張ってきて機能を再現しただけだから時価かも」

「ここも金とるんすね…トホホ…いやまあ、払うのはオレっちじやなくて奏子つちと湊だから関係ないつちやないんだけだよ…」

回復に金がかかると聞いてがっくりと肩を落とした順平と、優希の「引っ張ってきた」という発言に疑問を感じた湊だったが、あのサトミタダシ薬局じゃないだけマシだろうと疑問を振り払う。

カダスのナギサがいた時に扉を開けただけで聞こえてきたあのB

GMは御影町に住んでいた湊と奏子の耳と脳に嫌というほどこびりついている。兄ほどでなくともカラオケで歌えてしまうくらいには。そんなものが蔓延した日にはここの全員がサトミタダシに洗脳されて全滅するに違いない。

「あー…ベルベットルームに繋げるのを忘れてた。でもあそこは俺が勝手に繋げられるようなところじゃないしアイツにココ見られるのは嫌なんだよな…でもなあ…ふたりの利便性を考えるといちいちここから出たり入ったりするよりかはここに扉用意したほうが早いだろうし…：…うーん…」

何かに悩んでいるらしく唸っている優希は真剣そのものだ。

しかし10秒ほど思案した優希はそのまま諦めたのか、よし、と声を上げた。

「今日はこのまま帰る？ それとも、ちよつとだけどんなのが居るとか体験してく？」

「軽い言い方してるけどそれって戦うんだよな…？」

まるで友だちに「ちよつとうち寄ってく？」とでもいうかのように特訓をしないかと勧めてきた優希に、イズミが苦笑する。

優希の言う「基準」がどれほどのものなのか分からないが、特訓というくらいなのだから楽なものではないだろう。

「え、そりゃあ、戦うよ。なに言ってるのさイズミくん」

怪訝な顔をして何を当たり前のことを訊いてくるんだと言う優希に、イズミは内心手厳しいな、とまた苦笑する。

「で、どうする？ 見る？ あ、そうそう。コースはこれね」

湊は高級レストランのようなメニュー本を手渡され、中を開けば『初級 勝利報酬：レキシ―人形（初回限定・以後ソーマなどのランダムな消費アイテム）』『中級 勝利報酬：首狩りスプーンなど各種装備』『上級 勝利報酬：ソードオブキングなど各種×10』と書かれている。

上級のソードオブキングなど各種10個ずつ、というのは中々魅力的だな、と目をつける。うまくクリアすることができればわざわざ宝石をポロニアンモールにある「眞宵堂」で交換してもらわなくても

良くなるわけだ。

ただし、難易度は易しくはないだろう。横からのぞき込んできたタカヤと奏子も難しい顔をしている。

「即席で作ったからちよつとまだ色々足りないところがあるんだけど、更新していつて順調にいけば1月までには全部揃えられると思うから」

初級、などと書いてあるが対する相手の事が何も書かれていない。ヒントも何もないそのお品書きに、湊は一筋縄ではいかないと感じた。

恐らく、兄の事であるので戦闘に関して甘い手は取ってこないだろう。

「ここで力尽きても死にはしないから、遠慮せず、怖がらずに挑戦してくれると嬉しいかな。あ！ もちろん、特訓で消耗した分はタダで回復させてもらうからね。そこはフェアじゃないと」

力尽きても死なない。そんなことを言うということは、殺す気で相手はかかって来るということだ。

「きようは、やめとく。また今度」

「そっか。またチャレンジしたくなったら言ってね」

何が来るかわからない現状、ちゃんと挑戦する心構えと準備をしてから来たい、と湊は告げれば優希は特に意に介した風でもなく、タカヤ達の方へと向いた。

「タカヤ達は？ どうする？」

「我々も遠慮しておきましょう。気が向けば、しないこともありませんがね…」

「ん、わかった」

タカヤの曖昧な言葉に返事を返した優希はまた、トントンと右足のつま先で床を叩いた。

すぐさま景色が黒色に塗りつぶされ、元のタルタロスのエントランスへと切り替わる。

「これからはここで待機してる時に俺に声をかけてくれれば好きなようにあそこへ行けるから、行きたいときは声かけてくれるとありがた

いかな。あ、俺が居ないといけないから、そこだけは注意して。タカヤ達は…まあチャレンジしたくなったら影時間になる前に電話でよろしく」

軽く笑みの形を作り、そう告げた優希はこれ以上何も言うつもりはないようだった。

湊や奏子としても慢心や実力不足は感じていたので、渡りに船だがどんな敵が待ち受けているのか。兄に悪影響はないのか。

それだけが不安だった。

「お前の方がダメだ」(12/5)

12月5日(土) 放課後

なんとか今日の授業をほぼほぼ先生の説明の声だけで乗り切り、美鶴さんと約束した放課後になった。

文字が読みにくいというのとはとても不便だ。自分で書いた字できえもあまり判別できず、常に眉間にしわが寄っている状態だったので機嫌が悪いか体調が悪いのかと朔間くん以外のクラスメイトにも心配されてしまった。

死ぬにしても何らかの奇跡が起こって死なないにしても、勉強はしておいて損はないし死ぬまでの間文字がずっと見えにくいというのも不便だ。期日まで2カ月ほどあるのに全部を投げ出す程自分は破滅主義者ではない。

「ポートアイランド駅の近くに良い職人のいる眼鏡店があるらしくてな。そこへ行こう」

「ありがとう、美鶴さん」

うきうきと少し楽し気な美鶴さんと校門から道路に出ながら会話をする。

今日はかなり寒い気がしたので首にはアザミさんから貰った青いストールを巻いているが、それでも寒い。

「いや、これくらいはさせてくれ。それに、今日は……デート、なのだろう？ ふふ、こんなものが初めてのデートとはな……」

頬を赤く染め、照れたように笑う美鶴さんは可愛い。

「まあ、内容はメガネ作りに行くだけだしどっちかっていうとデートじゃないよね……ごめん。昨日は冗談言ったただだから気にしないで」「いいんだ。それにまだ私たちは対外的には“友人”なのだから。あの時はああ言ったが……まずは父上に話をするにしても許嫁の彼をどうにかしないとイケないからな……」

「ああ、あの……」

遠い目になる。

ウエイターさんに横暴なことをする性格があまりよろしくない許

嫁さんだという話は以前聞いた。明らかに、美鶴さんと合っていないタイプであるし見えてる地雷だ。

どちらかといえば、あの倉橋死んだ祖父黄盛のようなタイプか。いや、アザミさんの話だと結婚相手である妻と娘という家族はちゃんと愛していて横暴ではなかったらしいから、そこだけはあのとんでもないものを残していった祖父の方がマシかもしれない。

「まあ、そんなことはどうでもいいんだ。まずは、きみの眼鏡だ。私もきみに似合うものを選んでもいいか？」

「そりゃあもちろん。というか俺、そういうのは頓着ないから、その方がありがたいな」

許嫁のことを「どうでもいい」と一蹴した美鶴さんは明らかに前より吹っ切れていい表情をするようになってきている。

武治さんが生きていて美鶴さんが巻き込まれるような桐条グループ関係のごたごたがなくなって余裕があるからだろうか。しいていえば、自分がいることによってこうして許嫁関係で問題——というほどの事でもないかもしれないが話をしなければいけないことができているだけで。

そこから会話は晩御飯は外で食べるかどうか、眼鏡を作るのにも時間がかかるだろうし空いている時間にどこか寄り道していくか、などという話で盛り上がった。

ポートアイランド駅

映画館「スクリーンショット」前

「空き時間でちょうど映画が見れて良かったね」

「そうだな、とても有意義に時間が使えた。あの作品は前から気になっていてな。きみと見れて良かった」

眼鏡のフレームとレンズを選び終え、それが出来上がるまで1〜2時間ほどかかると言われてしまったので空き時間をどこかで潰そう、という話になり、道中で話していた通りに映画を見ることにしたのだ。

ちょうど一時間半ほどのその映画を堪能し、今は映画館前の噴水のベンチで余韻に浸るとともに休憩中だ。

「定型的なロードムービーだが、感情の描き方が流石にうまかったな。全てを投げうって旅に出る姿…今の私には、どうも心に響いたよ」

武治さんが生きていても、桐条の娘という立場からは逃れられない。責務ある上流階級の人間であるということには変わりないのだろう。もしかしなくとも、いずれは美鶴さんも武治さんから桐条の代表を譲られるかもしれない。

自分が死んで他の人と結婚したり、もし許嫁と結婚することになれば、その人が桐条を継ぐのだろうが桐条の夫人という立場は何も変わらないだろう。それこそ、武治さんが美鶴さんを桐条から切り離さない限り。

「…ラストシーンで、日常に帰ると決めた主人公は…あの後、幸せになれたんだろうか」

「どうなんだろうね。もしかしたら、幸せになれたかもしれないし、なれなかったかもしれない。幸せか、不幸せかなんて誰にもわからない」

「そうだな…なあ、三上。自分のことなど誰も知らない、どこか遠く離れた場所…そんな場所へ行ってしまうたらと…」

言葉の途中で美鶴さんは一端口を閉じて首を横に振った。

「いや…きみはそうしようとしたのだったな。私はまだ2日の夜の事は許していかないからな。私や有里達を置いて勝手に消えようだなんて言語道断だ。ましてや、殺してくれなどと」

「ご、ごめん…」

むっ、と睨み付けてきた美鶴さんに反射的に謝る。まだ喉元すら過ぎてないタイミングでもあるから、こういうことを言われても仕方がない事だと思っている。

それくらいのことを全部みんな忘れてしまうからとしようとしてしまった。させてしまおうとしてしまった。それがどれだけみんなの心を傷つけたのか、わかっていないわけではない。

ただ、絶対に折れないと自分で決意していたのに結局絆されてし

まったのがダメだった。それだけだ。

「二度としないと誓うなら許してやってもいい。：別に、きみみたいな投げ出すような生き方に憧れてるわけじゃないんだ。ただ、人は時に、自分が大切になっているものによって手足を縛られる。グループの未来：宗家の娘としての責任：もしもなければ：と考えてしまう事は、正直ある」

美鶴さんが暗い顔になり、物憂えげな視線を地面に向ける。これは、本音だ。

こうしてポロリとこぼれてしまった、いつもなら出てこない本音。「こんなことを言うのは、叔母上やお父様、お母様に申し訳が立たないかもしれないが：たまに、時たまに、『桐条美鶴』という名前にさえ、私は束縛を感じることもある：」

「美鶴さん：」

美鶴さんがこういう事を言うのは珍しい。それくらい、自分が美鶴さんを追い詰めてしまったのかもしれないと思うと、罪悪感が背筋から這い上がって来る。

ごめん、とまた謝ろうとして、その声が発されることはなかった。

「…いや、分かっている。こんな考えが許される分けないことくらいな：それに、『桐条』をやめられなくともきみに婿入りしてもらえばいいだけの話だ。母様には事前に相談して了承を得ている」

「えっ…？　む、むこいり？」?!?!

むこいり。婿入り。婿入り?!?!アイエエナンデ婿入り!?

突然矛先がこちらへと向いて頭がフリーズしそうになる。美鶴さんの頭の中では将来、俺を婿入りさせることで決まっているらしい。お母さんには許可をもらったらしいけど、まだ武治さんには話してないよね!?

自分はある意味問題物件であるし、そんなこと相談して良く許可がおりたなというか、ほんとに大丈夫なんだろうか。心配になる。

「マナーや作法などは私が直々にきみを指導しよう。病弱な母様もやれたのだから、きみも大丈夫なはずだ。もちろん、ストレスが多い重役との会合や身体に負担がかかるようなことは出来る限りさせない。

安心して私に任せてくれ」

「そういうのって男の俺が言うべき立場なんじゃ…」

弱い人を庇うのは男である自分の役目だと思っっているし、なるべく矢面に立つべきなのも男である自分だと思っし、守られる立場ではなく守る立場で居たいと思っっているのだが、美鶴さんからすると自分は守られる立場の人間らしい。

この死にかけの身体が心底恨めしい。いや、ある意味最初から死体なのでどうしようもできないとかは置いておいて。

「身体の強い弱いに男女は関係ないだろう。大丈夫だ。私がきみを守る」

「み、美鶴さん…」

俺の手を握り、真剣な目で夏の映画で見た白馬の王子様のようなかっこいい台詞を吐く美鶴さんに、涙が出てくる。

嬉しさではなく主に情けなさで。モコイさん風に言うなれば、シヨンボリさんだ。

そういうのを、自分が言いたかった。格好つけて言っしてみたかった…ッ！ 少し悔しい。

ただ、美鶴さんからの信頼と好意をととても感じる。

「だから、三上…生きてこの先も…」

「ああ、ようやく居た！」

「…？」

美鶴さんが何かを言おうとした瞬間、男性の者らしき大声が遮る。なんだかタイミング悪いなあ、と思っていれば、遠くからこちらへと白いスーツを着た身なりの良い男性がつかつかと歩み寄っってきた。

「おーい、美鶴ー！」

「！」

すごくなれ慣れしく美鶴さんの名前を呼んで近づいてきた男の人は髪の毛をべったりとワックスで固めていて、それでいて香水をかけているのかムンムンと臭い。思わず、顔をしかめてしまう。

というかもしかして、この人は。

「いや、探したよ。こんなところで過ごしてるなんて思わなかったよ。

じゃあ、行こうか」

「??？」

「えっ…？ 待つてください。今日はあなたと約束など、何も…」
行く？ どこにだろうか。美鶴さんとふたりで怪訝な顔をする。

そもそも美鶴さんは自分と眼鏡を見る約束をしていて、帰りも一緒に、という予定だったのだ。横から割り込んできてどういう神経をしているのだろうか。いや、自分の予想が正しければこの男は——おそらく、件のとんでもねえ許嫁だ。

「今夜、めずらしく時間が空いたんだ。なかなか無い事だよ。ボクは忙しい身で、きみは学生。予定は、きみの方が合わせてくれないと」
「そんな…勝手を言われても困ります」

「！」

そこそこ横暴な要求をされ、困ったように眉を下げた美鶴さんを許嫁の男がキツと睨み付けた。

「探したんだぞー！」

そして叫ぶ。

いや、知らんがな。

おっと、ジンの関西弁がうつってしまった。

勝手に探していたのはこの男の方であるし、予定を立てるならば直前ではなくせめて朝や1日前には自分たちのように連絡・相談をしておくべきだ。社会人ならなおさら、そのことが大事だと知っているはずなのに、どうしてそんな態度をとるのだろうか。

「それに、ボクと過ごすより大事な用なんて無いはずだろ…？」

「……」

美鶴さんが思案するように押し黙る。

けれどひしひしと近くにいたためにわかる。美鶴さんは怒りのポルテージをひとつ溜めた。

これがMAXまで溜まったら恐らく処刑だ。白昼の駅前で男の氷像が出来るだなんてとんでもない。できれば、この男の人が美鶴さんのポルテージを溜め切らないうちに帰ってほしいところだ。この人の安全のためにも。

「…そんな、怖い顔するなよ。きみのためでもあるだろう?」

「ご自分のためにも今日の美鶴さんの事は諦めて早く帰ってくださりやがれ、と自分はお祈りしたい気分だ。」

タイミングが悪すぎる。これが、約束の無い日だったら美鶴さんは素直についていくなりなんなりしただろう。だが、先約はこちらだ。美鶴さんは何も急ぎの理由がない場合それを破棄してまで行くほど非常識ではない。

「はあ、と許嫁が溜息を吐く。溜息を吐きたいのはこっちだ。」

「理解していると思っていたんだがな。きみはボクの将来の妻として、従順でいてくれればいいんだ。全く、ご当主にしても、きみにしても、扱うのが難しく困るよ」

「は? なんだ、それ」

思わず、声が出てしまった。美鶴さんが叫ぶ前に、立ち上がり庇うように前に出る。

「…三上…!?!」

「美鶴さんはお前の『物』じゃない。扱うのが難しい? 美鶴さんを難しくしてるのはお前自身で、お前の性格が悪いからだろ」

「なんだお前は?! 部外者の口出しする問題じゃない。どいてろ!」

「……」

睨み付けられ、怒鳴られるがまったくもって怖くない。木っ端以下だ。こいつは。

自分を無視した許嫁は美鶴さんへと向く。美鶴さんの怒りのボールテージがなんだかまたひとつ溜まった気がする。

「なあ、美鶴…わかるだろう? 企業経営は子供の使いじゃない。いくら聡明だって、きみはまだ高校生だ。いずれボクの力が必要になる。それに将来の桐条グループには、ボクが必要なんだ。だからこそご当主はボクときみを許嫁にした。これはご当主公認の関係なんだ! 違うかい?」

「……………はい」

猫撫で声でそう告げた許嫁に、武治さん公認と言われて強く出られない美鶴さんはかなり考えたのちに頷いてしまった。

すごく、こちらに申し訳なさそうに。不服そうに。恐らく武治さんの名前を出されていなければ美鶴さんは領かなかっただろう。そこはこの男の方が一枚上手だということだ。

「いい子だ、美鶴。やっぱりきみは頭がいい。じゃあ、行こうか。ステキな場所を予約してあるんだ！」

「……はい。三上、嫌な思いをさせてしまったてすまない……この埋め合わせは必ずする」

心底申し訳ないという悲痛な顔で、小声で謝り自分の横を通ろうとした美鶴さんの腕を掴む。

「待って」

「っ！」

何かを言おうとした美鶴さんをしー、と音を出しながら人差し指を己の唇に当てて抑える。行きたくなければ行かなくていい。

大人になればそうもいかないだろうが、まだ自分たちは学生であり、この男が言うように子供だ。

美鶴さんの腕を後ろに引いて、位置を入れ替えるようにして立つ。

「なんだお前、美鶴にちよっかい出してるのか!? 身分の違いをわきまえろよ? お前とボク達では、背負っているものが違うんだ。だいたい、きみみたいな庶民がボクらに近づこうとすること自体、間違ってる」

「それはそうでしょうね。俺も以前はそう思っていましたよ。住む世界が違うから、と。でも、俺よりもお前の方がダメだ」

睨み付ける。

この男は、敵だ。美鶴さんにとっての毒。それだけは分かる。

「な、なんだよその目……いい、言ってる意味わかるか? ボクたちにとって、きみは迷惑なんだよ」

男がたじろいで自分から目を逸らす。

その顔は若干怯えているようにも見えた。

「……たく、信じられないよ。美鶴もあんなのに関わっていると良くない。不良にでもなってしまうんじゃないのか? 育ちだつてあまりよろしくなさそうだし、なんだか不健康そうだ。何か病気でもして

いるのなら、美鶴にうつるから近寄らないでくれないかな。これだから下賤な育ちはキライなんだ。役に立たないし不相応にボクの邪魔ばかりして…」

悪態は止まらない。が、自分にとってはこの男から言われることの全てに意味がない事だと思っっているので微塵も響かなければダメージにもならない。そもそもこの男、こちらに怯えてその言葉を俺に向けることすらしていない。地面に向かって情けなくぶつぶつと呟いているだけだ。

美鶴さんの敵じゃなければ、どうでもいい存在だ。ただ、この暴言の嵐が美鶴さんに向くことがあれば、自分は許せないだろう。だからこそこうして未然に防ぐべきだ。

そろそろ聞くに堪えないし止めた方がいいか、と口を開こうとした瞬間、つかつかと美鶴さんが自分の後ろから前へと出てきた。

その身体は、震えている。が、

「黙れ…」

「み、美鶴…?」

恐怖からではない。怒りだ。自分が気がつかないうちに美鶴さんの怒りのボルテージは溜まりきってしまっていたらしい。

「黙れと言っている!! 彼への侮辱は許さない…!」

「ひっ」

「ひえっ」

あまりの剣幕に自分も驚いてしまう。許嫁の方は何が起こっているのかわからない状況らしく、目を白黒させている。

「な、何だよ…! なにを急に怒ってるんだ!」

「私は彼を尊敬し、愛している。彼への侮辱は私への侮辱だ!」

「あ、愛してるって…何を言っている!? きみはボクより、こんなヤツを庇うのか!」

訳が分からない、と言いたげに男は狼狽える。それもそうだろう。両家公認で、許嫁になっている男よりもただの同級生を庇い、あまつさえ愛しているなどといわれれば混乱しない方がおかしい。

「背負ってるものが違う」と言ったな。ああ、そうさ。お前と彼で

は比較にもならない！ お前は、大切なものの為に全てを投げうつ覚悟があるか!? 自分の力では抗いようのない運命と戦うことは!?

自分だけが可愛いお前にはできないだろう！ 私はこれまで、彼のそんな生き方に傷つけられたこともあったが：幾度となく救われ、支えられてきたのもまた事実！ 私はお前などより、彼と一緒に居たい！ これまでも、これからだ！

「は、はあ!? こいつと一緒に居たい？ これからも…とか、何を言い出してるわけッ!? き、きみは：ボクの婚約者だろ!? ボクがこんなガキに劣るって言うのか!? 美鶴、訂正しろ！」

美鶴さんの怒涛の暴露に自分は恥ずかしさで顔が真っ赤になり、許嫁は顔が真っ青になった。美鶴さんにそこまで評価されていたということが嬉しくて、めちやくちや恥ずかしい。

「今なら聞かなかったことにしてやる！ グループの将来を考えてみる！」

「何度でも言えるさ！ 私は彼と居たい。いま私を支えてくれているのはお前なんかじゃない：グループもお前を欠いたところで傾くよ。うなヤワなものでもない。今日限りで、お前と私は赤の他人だ。元々、婚約破棄の話しようとしていたところだったからな。余計な手間が省けた」

「なにいゝゝゝゝゝゝ!!! ど、どういうことだよ！ 認めない！ 認めないからな！」

それでも許嫁は引き下がらなかった。

唾を飛ばしながら今度は顔を真っ赤にして許嫁の男は美鶴さんへと歩み寄り、胸倉を掴もうとする。

「！」
そんなことはさせない、と飛びだそうとした瞬間、男の腕が別の手に阻まれた。

「およしよ、大人が子供の——それも女に手を出そうだなんて見苦しいっいたらありやしない」

黒い、喪服のようなワンピースを着た女性——アザミさんが男の腕をがっちり掴んでいた。

「な、なんだこのばあさん！ くっ、離せ！ ボクはあの倉橋商事の社長なんだぞ!!! こんなこととしてどうなるかわかってるのか!？」

「分かっているさ。分かかってやっってるんだよ」

突然現れたアザミさんは男が抵抗しようとしてもまったくブレない。それどころか、男の方が耐え切れず叫んだ名前に自分は頭が痛くなってきた。

またここでも倉橋商事。もういやだ。なんというか、問題が回りにすぎている。泣いてもいいならここで泣きたいレベルだ。

そんな自分に気がついたのか、アザミさんが振り返ってニツコリと笑った。

「ああ、アンタだったのかい。そりゃあちようどいい。どうする？」

この男をクビにしてもいいんだよ。アンタにやその資格があるんだからね。どうせ経営権を貸してもらってるだけで倉橋の甘い汁を吸ってた血のつながりもないボンボンだ。この男に変わってからは業績も目に見えて悪くなってるみたいだし遠慮しなくてもいいんだよ」

「え…えと…それは…そういうのはちよつと…」

首を横に振る。

まだ会長になると決まった訳では無いし、そもそもそんな権力あるわけが無いのにここでクビにするとかそんなこと出来るのだろうか。したいとも思っていないし色々な影響を考えればそんなことはしちゃいけないと思うのだがアザミさんは愉快そうに笑っているだけだ。

「は？ え？ 何の話をして…」

「アンタ、社長なのに知らないのかい、目の前にいるこの子はこないだ死んだ会長の孫で、次期会長であり大株主さまだよ。経営権を貸してもらってるだけのアンタが逆らったらどうなるだろうねえ？」

「は、はあ!?! こんなガキが…うちの会長?!?! う、嘘をつくなよ！ ボクを騙そうとしているんだな!?!」

だからなると決めたわけじゃ…と否定しようとしたがアザミさんがどどん話を進めていってしまう。

らけらと笑うアザミさんに、困ったような顔をしている弁護士さんらしき人。

「あのさ……メガネ、取りに行かない？」

「そうだな……」

もうめちやくちやだ。

どっと疲れた身体をひきずって、アザミさんに一言断ってからメガネ屋へと向かうのだった。

メガネを受け取りに行き、店を出た瞬間アザミさんからまた声をかけられて美鶴さんと共に黒塗りの高級車に乗せられる。

車種は、車に詳しくないからわからないがリムジンではなさそうだ。気分は市場へと運ばれていく子牛だ。ドナドナだ。

そしてしばらく揺られ、高級そうな料亭の前で降ろされた。それはもう、唐突に。

「いきなり悪いね。後でアンタの家族も来るから安心しなよ」

「え…!? あ……はい……」

兄妹、ではなく家族と言われたことに驚くも、奏子と湊が知るの当たり前だと思うし、株式以外にも相続するものはあるはずだ。主にお金とか土地とかそういうものが。

ついでに自分はともかく二人はまだ18歳以下であって、親権者の承諾なりなんなりが必要なんだろう。となるともしかすると養父さんと養母さんかあも来るかもしれない。あくまで、〃かもしれない〃だ

が。
美鶴さんは慣れているのか自然体でいるし、弁護士さんだという人とアザミさんも気にした様子は無い。ガチガチに固まっていかにも慣れていませんよ” というのは自分だけの様だ。

「青いねえ。だからこそ可愛げがあるってもんさ……」

座敷へと通され、それでもまだカチンコチンと固まったままの自分を可愛い小動物でも見るかのような目で見てくるアザミさんは修学旅行で会った時と変わらない。

しかし自分に会話ができるほどの余裕はないし、誰も何も聞いてこないために沈黙が場を支配する。

「三上、大丈夫か？ 顔色が悪いぞ」

「だ、だいじょうぶ…慣れてないだけだから…」

ぎゅ、と受け取ったばかりのメガネの入った小さな紙袋を握りしめる。いずれこういう場に慣れることができるのだろうか。

美鶴さんと付き合っていくのなら、これくらい慣れないといけないうのはわかっていても、どうも綺麗すぎる場所にいるのは慣れない。

時間よ早く過ぎろ、と念じながら時計の無い静かすぎる部屋で沈黙すること10分。たぶん、10分だ。きつと。

障子があけられ、湊と奏子、それに養父^{とあ}さんと養母^{かあ}さんまでいる。三上家勢ぞろいだ。

その後でもうひとり黒服の男の人が入ってきた。恐らく、彼がアザミさんの言っていたクズノハのワケ知りな人なのだろう。

「じゃあ、説明と行こうか」

そんなアザミさんの声から始まったこの説明会、それはもう、てんやわんやだった。

養母さんと自分は気絶して倒れそうになるし、湊と奏子と美鶴さんは突然降ってきた引き継ぐもの大きさにドン引き。動じていないのは養父さんくらいだった。

なんと、自分が相続するものに更にプラスアルファである倉橋のお祖父さんが持っていた東北の方の八十稲羽と言う場所と、東京郊外の物件がついてきてしまったらしい。

正直、実家は今はない有里家を除いて三上家だけと決めているので要らない。売りに出しているかと言おうとするも、やんわりと言葉を濁しながらアザミさんとクズノハの男の人に止められた。恐らく、悪魔がらみだ。自分で管理しろということか。

倉橋翁自体に兄弟もおらず、遺産を相続できる血縁者と言えば自分たち兄妹だけだったらしく、遺産のお金の方が奏子と湊にそれぞれ半分ずつ。そこそこの金をニユクス教にぶち込んでいたらしいがちま

ちませコく貯金もしていたようで、0が7つ位見えたのは幻覚だと思いたい。

その説明の後はひたすら書類に記入の書類地獄だった。

メガネを作れてホント良かった、と思いながらも湊と奏子、そして両親にまで怪訝そうな顔をされてしまいながら書く書類は生きた心地がしなかった。

終わった後は料亭の食事をご馳走になったが、緊張と疲れからか味はしないし、いろんなことがありすぎて疲れた。もう早く寮に帰って布団に入りたい。

「アンタが養父かい。あの子たちのことはしっかりと守っておやりよ。顔も名前も知らない『親戚』が増えるかもしれないからね」

「言われずとも」

帰り際、アザミさんが養父さんに向かって忠告をする。

顔も名前も知らない『親戚』というのは親戚を名乗るなにかだろう。否、そうでなくても有里の方の、父方がめついい叔母叔父などが知れば湊と奏子に何かしでかすに違いない。それは嫌だ。

あいつらは、ふたりを虐待したクズだ。そんな奴らにふたりは渡さない。渡すくらいなら俺があくのクズどもを――

「ちよつと、抑えな。…アンタ、どうしたんだい。えらく怖い顔してるじゃないか」

「え…あ、すみません…」

アザミさんに肩を叩かれ、はつとする。いけない。自分は今、ウィツカーマンとの力の境界があいまいで、下手に殺意を昂らせると何も無いところを燃やしかねない。

抑えなければ、と深く息を吐けばアザミさんは何かを懐かしむような顔で頭を撫でてくる。

「…そんな顔、できるんだねえ。アタシや、ちよつと驚いちまったよ」
しかし急に撫でるのをやめて表情を真剣なものに変えた。

「でもね、堕ちるんじゃないよ。その先は地獄だよ」

ああ、これはきつと、バレている。自分がヒトではないことを。

分かっている、まだ自分がヒトに対し直接的な何かをしていない

めにアザミさんは手を出してきていないだけだ。

自分が何の罪もない人を襲えば、アザミさんは容赦なく自分を殺すだろう。あの人は、そういう人だ。胸の内にすべてを秘めて、仕事だと割り切つて殺す。それが彼女の立場であり役目だ。

だがそんなことは恐らく——自分がヒトに絶望しない限り起こりえない。そして自分がシュブニグラスに吞まれてしまえばまた別だけれども、自分が自分であるうちは大丈夫だ。

そんなことより。

「株…始めようかな…」

いろいろ詳しく説明を受けてちよつと悩んだのは言うまでもない。その先も地獄ではあるのだけれど。

主に株に手を出しちやいけない！ 的な意味で。

「ダイナミックに失礼致しまーす！」（12/7）

12月7日（月） 放課後

来週から期末試験だ。とはいえ、勉強が出来ているかといえば——
あまりできていない。

「はちやめちやな予定や自分が起こしたごたごたに加え、皆に対し、滅び」について話してしまったせいも、全体的に関係者は集中力に欠けている試験になるだろう。あと朔間くんと綾時くんは初めての試験でもある。朔間くんは真面目に勉強しているので問題はなさそうなんだけど、綾時くんがとても怪しい。とはいえ同じ寮では無いのでこちらに出来ない限りは何も出来ないのもまた確かだ。結果が恐ろしい。いや、信じてあげたいのはやまやまなんだけれどもあの遊びようにとつるんでるメンバーがメンバーなので信ぴょう性に欠ける。湊と奏子から生まれたようなものなので地頭は良い方だと思っただけだ。あれ？ それを考えるとあまり賢くない俺を元になっている朔間くんは賢くないってことにな……やめておこう……似ない所だってあるはずだ。きつと。

閑話休題。

パツと見た総評で言えば希望を捨ててはいないし絶望はしていないが、やはりいつも通りというわけにはいかず皆動揺している感じでもある。

それもそうだ。いきなりあんな大量の情報を寄越され、「じゃあいつも通りにいこう」などと出来るわけがない。

ただ、身体を動かした方が嫌なことを考えなくて済むだの考えがまとまるだのというそれぞれの意見のおかげか戦意は衰えていなかったのであの後二回ほどタルタロスへと潜った。

けれどしばらく待機と言われた通り、自分は前線メンバーから外さされている。しかも、カダスにすら行く素振りがない。

わざとそういう話を自分の前ですることを避けられているような、そんな感じがするのだ。

とはいえ、戦いに関する以外では湊と奏子が変ということもな

く、昨日は山岸と交流がてらクツキーを焼いたらちちゃんと食べてくれたし（一応、山岸がオリジナリティ溢れる味付けだけはしないよう気をつけておいた。奏子とのコミュニケーションによって彼女はレシピ通りの分量で作ったり味見をすればちやんと作れることが発覚した）、会話に違和感があるというわけでもない。

奏子が姿違いの「シヴァ」のペルソナを使っていたのには驚いたが、ペルソナは個人の持つイメージで同じ神格を元にしても姿が変わる場合がある。コロマルのケルベロスと悪魔のケルベロスの姿が違うのが分かりやすいと思う。

コロマルの中のケルベロスはあのような姿で、大衆にとっての悪魔としてのケルベロスはまた別の白い獅子のような姿なのだ。たまに、伝承通りのような三つ首の個体もいるが基本的にはひとつの首しかない。

何故なんだろうか、と思って調べてみても困ったような犬の鳴き声しか返ってこない。

バウ！ ワウ！バウ！ ワウ！ バウ！ ワウ！といった感じで。なんだか無性にT東京デイスティニーランド・D・Lに行きたくなってきた。

行く余裕がないので行かないけど。

ただ、話を戻すと能力の殆どが使いにくいからこそ湊と奏子は自分のことを使いあぐねているのだろう。

【ホムスビ火産霊】は強力であるが自分にもダメージが入るので安定感に欠け、強制的に狂乱状態になるのがキズだ。【精神暴走】も便利っちゃ便利だがこの戦力が整っている今、シャドウが味方になるにしても最後には倒さなくてはならないしリスクを含む戦法を使いたいとは思わないだろう。主に自分ひとりの時に使うのがいいタイプの能力だ。

他にも【カーマ・シラーストラ】はそもそも強力すぎて「深層モナド」以外では皆の戦闘経験を積むという目標とは離れてしまうし、今の自分が使うには力が大きすぎて一気に消耗してしまう。下手をすれば魔力だけでは足りずに生命力まで持っていかれるかもしれない。

そうなれば、本末転倒だ。今身体の内にある黄昏の羽根にある生命力が尽きたら死んでしまう。

その黄昏の羽根もだいぶん身体に慣れてきているのか3日に目を覚ました時ほど奏子や湊の気配を機敏に感じとれるということはない。近づいたらなんだか胸がぼかぼかして安心するくらいだ。

中身は人外だが身体まで完全に悪魔や神といった存在になっただけじゃない。ニヤルラトホテプから与えられていた化身としての力は抜けていて、そこだけはヒトのものであり慣らしている最中だ。黄昏の羽根の生命力が尽きれば死体に戻るけど。

身体だけの話に限れば半魔にすら至っていない、ちよつとした魔法が使えるニンゲン程度。

アザミさんによれば探せば補助機込みCOMPなどで魔法を使えるニンゲンはそこら辺によくいる…らしい。信じたくないが。

他にも、神通力として魔法を使えるニンゲンがいたり、何も降ろしていない生身で悪魔もびつくりな戦いをするニンゲンがそこそこいるとか。…世界って、広いなあ。

そこまで考えて、どうしてカダスへ行くことには忌避感があるような対応をされてしまうのかに思考は移った。

雰囲気暗いとかだろうか。ベルベットルームと繋がってないから不便だとか。それとも、景品に旨みがないとか。BGMとかかけたほうが良いんだろうか。

割とありえる話な気がしてきた。人は景品や報酬に旨みがないとやっていけない生き物だ。となると、チョイスに魅力がなく微妙だった可能性がある。

なんでだ。

レキシ―人形などは喉から手が出るほど欲しいイマドキの女子高生が喜ぶお宝アイテムじゃなかったのか。なんかクラスメイトがそういう話をしていたから奏子あたりが喜ぶかなと思って用意したのにイマイチ食いつきが悪かったのは…もしかして、人気じゃないからだった…？

自分は可愛いと思うんだけどな。テディベアの姿そっくりのバグみたいで。

けども奏子のキモカワセンサーにひっかからなかったということ

はそういうことなのだ。きつと。

なら、金のマールさまフィギュアとかどうだろうか。いや、やめよう。別の意味であんなのが女子高生の部屋に置かれるとかダメだ。湊の部屋に置いてあっても大変なことになる。却下だ却下。

「もし、」

となると他に魅力的な景品が自分には考えつかない。

「もしもし。聞こえてらっしゃいますでしょうか」

「…?」

誰かに声をかけられたような気がしたが、幻聴な気がする。

「もしや私の声わたくしが聞こえていらつしやらないのでしょうか。不肖、このエリザベス、まさかまさか湊様と奏子様の兄君がそこまで鈍感だとは思ひ至らなかつたこと、謝罪いたします」

「……」

クツソ煽ってくる青いワンピースの女性の事なんて見えてない見えてない。うん、見えてない。

「こういう場合は筆談するのが良いと。できれば、しわしわのダンボール板にマジックペンで「みかん」と書くのが習わしとか」

「それどこの習わしなのさ……」

耐え切れずにツッコんでしまった。

ああ、このエキセントリックエレベーターガールには関わらないようにしようと思っていたのに、どうしてこう、絡まれてしまうのか。

湊に電話でもして引き取ってもらおうか。うん、その方がきつといい。そうしよう。

「ようやくお気づきになられましたか？ 私、かれこれ5分ほど貴方様に語り掛けておりました…おや、携帯電話を取り出して…どうされたのでしょうか」

「もしもし湊? ごめん、なんか目の前に真つ青なじやじや馬エキセントリックエレベーターガールが居るんだけど引き取りに来てくれない? え? やだ? 俺が連れて帰ってあげるの? いや責任もって引き取りに来てよ湊のでしょ…俺にはベルベートルームの扉見えないんだからさ…」

目の前をちよろちよろとするエリザベスは無視だ。

どうせ湊に会いに飛びだして来たんだろうから湊に電話して引き取ってもらえばいいと思っていたが、湊はいま別の——友達と食事中らしい。で、エリザベスの相手が出来ないから連れて帰ってあげて、ということらしい。

無理なんですけども。自分がベルベットルームの扉を触れることはおろか見ることができない、ということを知らない筈はない。

いや、何となくは察している。湊はエリザベスの事を憎からず思っているが、自分と一緒に面倒なのだ。

弟であるテオドアにくらべ、エリザベスに付き合うと時間が溶ける。否、テオドアが比較的マシ、というだけであるけれど。

「あの？ 何故、湊様に電話を？ そして何故私を無視されるのか。これは七不思議のひとつに入れることもやぶさかではありません」

「はあ…？ ポロニアンモール？ 一番近いのがそこ？ ええ…学校行くのと変わらないじゃん…もう電車降りてて寮に近いんだけど…」

「わたくし、何かいたしましたでしょうか…やったことと言えばもうじきクリスマスですので我が主の鼻にプチトマトを刺しただけ。…赤鼻のトナカイ、でございますね」

落ち込んでいる、というよりは罪を告白しているエリザベスは放置しつつ湊と通話を続ける。

湊はのらりくらりとエリザベスを迎えに行くことを拒否している。自分も、正直関わり合いたくない。特に、今の自分は。

「んー…わかったよ。彼女が満足するまで付き合えばいいんだな。帰りにお豆腐とバナナ買ってきて。ドーナツの材料にするから。それでチャラつてことで。あ、買うのは木綿ね」

結局、自分が折れることにした。

これ以上電話を続けるのは湊とお友だちにも悪いしなによりも電話代がかかる。エリザベスの事で電話代を無駄にするのはなんだか癪にも思えたからだ。

「……はあ、エリザベス…送ってく」

仕方なしにそう告げれば、意外だ、という顔をされる。

「話がまとまったようですね。ですが、今日の目的は湊様ではありません。そして奏子様でもない。：貴方様です。空虚のお方」

「…は？」

告げられた言葉に絶句する。

あのエリザベスが、わざわざ自分に？

どういうことなのだろうか。というか空虚っていうのやめてほしい。地味に傷つくからその言葉。

これだからベルベツトルームの住人と関わるのは嫌なんだ。自分がニヤルラトホテプの化身という立場にあつたせいかもしれないが、本当に相性が悪い。

黙示録の四騎士の試練があり、そこでようやくマーガレットには忌避感を感じなくなったというだけで苦手意識はまだある。

「少々、お話いたしませんか。『共犯者様』」

「……」

共犯者。

その言葉の意味するところがわからない。エリザベスは別にニヤルラトホテプの化身とかそういうサイドの存在ではないはずだ。ましてや、主であるイゴールやその上司であるフィレモンを裏切る理由がない。

こういう言葉を使うからにはなにか、自分と共通点があるはずだ。…たぶん。

エリザベスのいつもの言い間違いだとは思いたくない。もしそうなら身構えて意味を勘ぐろうとしている自分はアホだ。

「そう身構えずとも。私と貴方様…そして弟、テオドアは共犯者、でございませうから。いまそう決めましたが」

「ええ…」

どうやら思い付きで決めたらしい。こんなトンチキな姉に巻き込まれてテオドアも可哀想だ。知らないうちに共犯者とやらにされているのだから。

「いえ、最初は私と弟だけでございましたよ。巻き込まれたのは、貴方

です」

首を傾げる。つまり、テオドアはこのことを知っていて、何も知らないのは自分だけになる。

なんのことだろうか。それとも、これから巻き込まれるのか。

マーガレット関連だけは絶対に嫌だ。命が何個あっても足りないから。

「ご安心を。そのようなことはございません。姉、マーガレットには秘密、でございます」

「ならいいけど…というかなチユラルに思考読むのやめてくれない？」

「これはこれは失礼を。では私、心の裏の裏を読むことに致します。ヘーイ、コックリさん」

頭痛くなってきた。湊が毎回毎回これを相手にしてるのかと思うとなんだか労った方がいい気がしてきた。これは大変だ。

「とても唐突に本題に入りますが。私、扉の楔になりました湊様をお救いするという目的がありまして絶賛職務を放棄し家出中…にございました。あの憎きエレボスも何度かコテンパンにしておりまして、紆余曲折大波乱な冒険を経てついに愚者のアルカナに目覚め壮大で素晴らしい私の旅路やそれはもうエクセレントなダンス大会などが始まつ——る予定だったのです。『かつて』は」

よくわからないが、シヨンボリとうなだれるエリザベスの口ぶりからすると未来のことを言っているらしい。

湊と奏子がニユクスを封印した、その後。『かつて』ともいう。

その話によればエリザベスは全部ほっぽり出してベルベットルームから家出して愚者のアルカナに目覚めたのだという。

知らなかった。

「それを貴方様が湊様と奏子様を救うために空気を読まずに時など諸々を何度も何度も性懲りもなく巻き戻してくださいやがりましたので。全てチャラです…というわけでもなく。得たものは私の胸の中でだいじーに暖められています。コンビニのお弁当のように。こちら温めますでしょうか？」

「いいや。要らない。てかそれ、俺に対する文句…?」

「いいえ、その逆。感謝をしております」

いけしやあしやあとそう言うが、そうは思えない口調だ。顔も少し不満げであるし、おそらくエリザベスは文句を言いに来たのだろう。「ですので、私なにか貴方様にお力添えをしようかと思ひましてお声掛けさせていただきました次第にございます。湊様と奏子様を救う——それは私どもの願いでもありますので」

そんなことを言われても、力を司る者がやれることと言えばペルソナ使用の旅路をほんの少しだけ手助けするくらいであるし、一緒に戦ってくれというのもルールに反することだろう。ぱつと考えが浮かばない。

そのまま、商店街の方へと引き返して歩く。

「にしても、中も外も多少お変わりになられましたね。以前のヒモなしエクストリームバンジーをしそうな開封して2日経ったおせんべいのようなシケた顔よりかはいくらか好感が持てましよう」

しげしげと顔を見つめてきたエリザベスが突然そんなことを言う。エリザベスはエリザベスでマーガレットとはまた違った毒舌の持ち主であるので自分のことを貶しているのは何となくわかる。

「きみ、俺のこと嫌いなんじゃ…」

「そんなことはございません。オホホ。全てが無事に終わった暁には、貴方様もクラブ・ベルベットにお呼び立てして念願の『ダンス・パーティー!』などをしようございます。踊れるものがなければDJジョウ掬いでも構いませんよ。私、笑いませんので」

「やっぱ嫌いでしょ俺のこと」

絶対にエリザベスはこちらを嫌っている。もしくは、少なからず憎く思っているのではないだろうか。

「滅相もございません。計画を台無しにされたことをほんのちよーつぴり根に持っているだけでございます」

「ああそう…」

やっぱりこちらが時を巻き戻したことを根に持っているらしい。それもそうだ。折角これからだ、となっていたのに突然全部巻き戻さ

れば誰だって怒る。エリザベスの反応が正しいのだ。

「ただ、そのおかげで私どもが湊様と奏子様を救うまたとないチャンスが出来たのも事実。私、全身全霊でご奉仕！ いたしますので！ ついでにテオも奉仕させますので！ さあ！ 願いを言うのです！」
「って言われてもなあ……あ、」

思いついた。

わざわざ頼みに行くのは嫌だったがもうこの際自分の感情は置いておいて、エリザベスに頼んでカダスにベルベツトルムへ行く扉をブツ立てて貰えばいいんじゃないだろうか。こう、脇に抱えて持ってきてもらってバーンと突き立てるように。

カダスへ行くのは自分の許可がいるが、それでもまあエリザベスやテオドアくらいなら邪気はないしフレモンと親しいというわけではなさそうだ。テオドアは職務に忠実そうだが奏子のことを思っているエリザベスと職務放棄してしまったようなのでなんというか、やる時はやる子なのだろう。一応、奏子が懇意にしているということなのでノーカウントということしておこう。

何かあれば速攻でカダスから叩き出すけども。

エリザベスはむしろ、湊の為にだけに仕事をほっぽって勝手に家出したりじゃじゃ馬すぎてイゴールですら扱えていないのだから頼む相手としてはちよūdいいいのでは。共犯者、とエリザベスも言っている通り自分たちは共犯者という対等な立場なら、の話だが。

「というか、ここまでしてくれている……いるのか？ まあしてくれていると仮定して、そんなエリザベスに湊は責任をもつて相手をするべきだと思うのだ。色々。いや、既にしているんだらうけども。」

恐らく様々なことを解決出来て湊が救われたたとしてもこの子はきつとベルベツトルムを出ていくだろう。そして湊の傍にでも居るんじゃないだろうか。その時、ちゃんと傍に置いておいてあげたらなどと思う。いや、心配は無用か。湊だし。あの湊だし。うんうん。

「……じゃあ、ベルベツトルムとプライベートな空間を繋げることで出来る？ なるべく、アクセス元が分からないように。秘密裏で」
「と、言いますと？ なにかメイビーワケありません様子」

「……あまり、きみの主や更にその上の上司に見られたくない俺だけの場所があるから。奏子や湊と親しいきみやテオドアを、信用して頼みたいんだ」

暗に、湊と奏子を裏切るなよ、という意味も込めておく。

俺を裏切るということとはそういうことになる。と思う。たぶん。

それはエリザベスも、無理やり引つ張られるであろうテオドアも望んではいないだろう。

それに自分たちは共犯者だと言うのなら、これくらいのはして貰わないと困る。

「…少し、考えさせてくださいませ。もちろん、その場所に我々二人も行ってよろしいのです?」

「構わないよ。きみたちのふたりだけなら居て構わない。なんなら、邪魔したり害さえ与えなければ何してもいい。寛いでもいいし、俺と一緒にみんなの特訓メニューを考えてくれるのもありだ」

「なんと。特訓……!」

途端に、エリザベスの目が輝いた。鼻息荒く、鼻先がつきそうなほどの距離まで顔をぐい、と寄せてくる。

「よろしいのですか!? ああ、私、胸が高まります! 湊様や奏子様にどんな特訓——いえ、試練をご用意するのか! まさにドキがムネムネ、でございます! いますぐにでも繋げましょう! いえ、繋げてみせます! 主を脅してでも!」

そして、ぐわしと腕を掴んできた。少し考えさせてくれと言ったばかりだったのに、特訓——いや、戦闘の気配をチラつかせた途端にこれだ。即決にも程がある。

あとイゴールを脅すのはやめたげてほしい。あの人今頃ストレスで胃潰瘍になっていないだろうか。もしかして、禿げているのはストレスからだった…?

とはいえ、

「え、ちよ、まっ…今!?!」

「もちろんでございます! 善は急げ、ということわざがありますよ、う、全速力、超特急で急ぐべきです!」

ふんふん、と鼻息を荒くしたまま、エリザベスは興奮気味に見当違いの方向へとこちらを引つ張る。

「あの、エリザベス。……ベス！ ちょっと！ そっちじゃないしこっちで移動はしなくてもいいから！」

興奮してトリップしていたので、エリザベスのことを普通に呼んでも動かなさそうだったので愛称を叫べばようやく止まった。

「まあ。そうだったのですね。それをもっと早く伝えてくださればよろしかったものを……」

「いや、そういうこと言う前にエリザベスが俺の腕掴んで引つ張ったんじゃないか……」

げんなりする。湊以上にマイペースガールだ。この子は。

けれど——なんだろうか。嫌いではない。気がするようになった。案外、悪くは無い。

「……？ どうかされましたか？ なにやらとても楽しげなご様子」

「そうかな、もしそう見えるのなら、きみがそれだけ素敵だったことだ」

笑いかければエリザベスは目を見開いた。そして、震えながら口を開く。

「——驚きました……貴方様がそんな言葉を吐くなどは到底思えず……私、心臓が止まってしまいかと。いえ、これは恋のトキメキではなく、ゾツとするような衝撃……精神的ショック、という意味ですが」

「喧嘩売ってる？ ねえ、喧嘩売ってるよねそれ？」
「売ってますが」

前言撤回。やっぱ無し。相容れない。

「いい度胸じゃん。じゃあ今からでも招待してあげるさ！ 俺の領域パレスに！」

「おぉー！ ぱちぱちぱち。私、とても楽しみです」

売られた喧嘩は買うものだと言っていた。

力を使う。一瞬で周りが塗りつぶされ、景色が変わった。

「なるほど。ここが貴方様の領域——いえ、パレスですね。なんともまあ、ベルベツトルームに近い雰囲気です。ですが、ベルベツトルーム

では無い。不思議なものです」

感心した風にエリザベスは周りを見回す。別にここはベルベットルームのように全て青で統一されている訳では無い。

部屋全体の雰囲気青いと言うだけで小物は色とりどりであるし、椅子はダークなワインレッド色のビロード生地で作られている扉の色だって普通の暗い木の色だ。

「ではまず、扉の設置から、でございますね。ダイナミックに失礼致しますーす！」

ドン！ と虚空からベルベットルームの真つ青なドアを取り出したエリザベスはそのままそこに立てた。

もつと光ったりして幻想的にドアが現れる様子を多少なりとも期待してた節があるからマジで自分の予想通りブツ立てると思ってもみなかった。感動も驚きもなにもありやしない。

普通だ。普通。

ばんばん、と両手を叩いて埃を払う仕草をしたエリザベスはこちらへと向き直った。

「これでここからいつでもベルベットルームへと行けます。……では、始めましょうか」

ギラギラと、肉食獣のような目をしたエリザベスと視線がかけ合う。

「望むところだ」

そうして、火蓋は切って落とされた。

「はははは！ 踊れエリザベス！ 死の舞踏を！」ダンス

「あ、ワンツーワンツー。ドロー！ ペルソナカード！ にございませす」

「いてててててて!? いやごめん調子乗ってすみませ…あつつうい！ あつつうい！ さむうい！ さむうい！」

「三上様は少々貧弱でいらっしやいますね…いえ、耐久性しぶとせきに関してはピカイチのようですが。【食いしぼり】の発動はこれで何回目でしたでしょうか…」

「ひい、ひい……げほっ、むり、しんじやう」

「オーホホホ！ これしきのこと、乗り越えられなくて何になりますか！ あ、そーれ！ 今は立ち向かわねばいけない時。大事な所がどうなってもよろしいのですかー!?」

「あつ、やだ、だめ、だから！ それ、デリケートだからああ！ そんなつ、風に…さき、触るなあ！ 本当に折れ…あつ」

「あつ………やっちまいましたにございます」

「直して」

「はい…」

そのあとはもう色々あつた。

主にエリザベスとガチンコバトルをしたりそれに負けたり吐血したり謎の扱きを受けたり景品にしようとしていた黄金でできたゴールデンご立派ア！ 様のフィギュアの車の部分についてる刃の1本をテンション爆上げなエリザベスにボキツと折られたり。

あれ、金を溶かして作ったマジ物の黄金製だし成形するのめっちゃくちゃ拘ったし細かくツルツルになるようにヤスリがけまでしたのに。暇を持て余したウィツカーマンが。

でもまあちようどいいのでエリザベスにあげてもいいのかもしれない……よくない。なんだかあげるのは良くないという思いが急に浮かんできた。こんどはかつこいいデヴァ・マラーの黄金像でも作ろう！ 普通にインドで売ってるお土産みたいになりそうだけど。

もしくはポベートルのおつきいぬいぐるみとかどうだろうか！ こつちは結構需要ありそう。うんうん、これなら奏子にも喜んで貰えそうだし、さつそく暇になったら取り掛かろう！

………。

思考 いま、意識が混線していた気がする。途中からウィツカーマンの主観になっていたような。

「本日はとても充実しておりました…湊様に案内されて外の世界へ行くことは何事にも代え難いものですが、たまにはこういうことも新鮮でよろしい」

「俺はなんかめっちゃくちゃに疲れたけどね…」

「それは貴方様が弱いからです。特訓すべきは貴方様の方では？」

「…言えてるかも」

はあ、とため息を吐く。

エリザベスに殆ど齒が立たなかった。

今の自分が相性的に偏り過ぎているとは言えども、弱体化もしているのではないかという疑念が浮かんでくる。

まあ、1ヶ月も戦っていないければそりやあ衰えると言わざるを得ないが、それにしただって弱すぎた。

「今の貴方様は無理矢理ご自分をペルソナ使いという枠に押し込めようとする方向に気がいつているご様子。無意識に手加減しているのでしょうか。だから気がそぞろで威力も弱い、と私は分析いたしました。ですが完全な悪魔に身を墮とすことは貴方様の望みではないと来れば…仕方ありませんね」

確かに、エリザベスの言う通り自分は力をセーブしている。死なない為でもあるし、死なせない為でもあるからだ。

全力で行ったとしてもワールドでは無いのでエリザベスに対し応用が効くかと言われれば効かないし、正直手詰まりだ。

「ご安心を。私も時間はかかりましたがワールドに目覚めることが出来ました。即ち貴方様にも、可能性はあるのです。長い間あのおふたりの近くに居た、空虚の貴方ならば」

エリザベスは諭すように、真剣にこちらへと語る。

これは、助言だ。とても大事な助言。

「あとは、貴方様が貴方様だと自己を確立し、〃いのちの答え〃を見つける旅路に出る覚悟をするだけにございます」

「覚悟…」

「今の貴方様は言うなれば1度死した旅人。死から再起し、世界——もしくは宇宙を経て悪魔ではなく愚者にならねばならぬのです」

ふわり、とエリザベスがその手に死神のアルカナのカードを浮かばせる。しかしすぐにそれを消してパターンと魔術書——ペルソナ全書を閉じた。

「それはそれとして。しばらく私はここに居てもよろしいのでしょうか。是非とも、是非とも！ 湊様と奏子様が来た時はお呼び立てく

ださい、ませー！ 超特急で参りますので！」

「はいはいわかった。わかったから迫らないで。ステイステイ。鼻息荒くしないで。落ち着いて」

なんだかベルベツトルムへと繋がなくともエリザベスがいるのなら事足りたのでは無いかという疑問が浮かんだ。

いや、確かペルソナの合体はイゴールが居なければ出来ないとか何とか聞いたような……ん……？ ジュスカロ……？ ラヴェンツァ……？ クソファツキン聖杯ヤルオ……？ 処刑……？ うっ、あたまが。

なんか不安定な未来の電波を受信したようなそんな気がした。それもこれもエンリルとノーデンスとウィツカーマンのせいだ。いや、この場所のせいか。責任転嫁してごめん。

とうかジュスカロってなんだ。何かの暗号か。あと誰だ自分をクソファツキンって呼んだの。善良な聖杯を自負しているし自分はヤルオとかって名前じゃない。3文字って所しかあってないじゃん。

ラヴェンツァ、は確かマーガレットが言っていた末妹の名前だった気がする。いや、ラザニアだったかもしれない。とにかく、そんな感じの噛みそうな名前だ。

「…おや、どうかなさいましたか？」

顔を顰めて長い間黙っていた自分を心配してか、エリザベスが顔を覗き込んでくる。

「なんでもない。ちよつと電波を受信しただけ」

「それはそれは、大丈夫なのですか？ 主に頭が」

ド直球で失礼な事を言うてくるエリザベスにはもう慣れた。慣れざるを得なかった。傷ついてる方が無駄だ。

「俺も自分のことそう思ってるよ。頭おかしいんじゃないのバカ！」

「私、突然狂われた殿方の対応は初めてに近いものがございますので、こちらの方法をとらせていただきます。当て身ッ！」

「ぐふっ!？」

なんかもう、色々と理不尽だ。

こんなハチャメチャエキセントリックエレベーターガールなんて、

二度と相手しないぞと自分は固く誓った。

後日

「じゃーん！ ついに！ エリザベスの協力によりここにベルベットルームへの扉を実装しました！ 利便性アップ！ フーウ！」

「いえーい、にぎいますー！」

「ね、見てよこれ！ ちゃんとここに置いてあるんだよ！ 凄くない!?!」

交渉に交渉を重ね、「戦わないから！ 個人的に来て欲しいだけだから！」「先つちよだけ！ ドアノブの先つちよだけでいいから見ても！」と説き伏せて（ここでかつてモコイさんに教えて貰っていた【おねだり】の交渉スキルがとても役に立った）ようやくカダスへと再入場してくれた湊と奏子に対しこちらはエリザベスとふたりでバシバシと扉を叩きながら満を持して紹介すれば、ぎよつとしたような顔をした湊が口を開いた。

「優希さ、ベルベットルームの扉見えないんじゃないの？ この前電話で言ってたでしょ」

「あ」

：設置してもらった時は気がつかなかったけど、確かになんで今の自分は扉が見えてるんだ？

「俺は、存在しちやいけなかったのか…？」（12／10～12／11）

12月10日（木） 夜

「三上、話がある」

「なに？」

夕食を食べ終えた後、部屋に帰ろうと立ち上がったところを美鶴さんに声をかけられ足を止める。

「先日、私の元許嫁に絡まれただろう。あの時の事は本当にすまなかった。私はあの男の言いなりになってきみに庇われたあげく約束を破る薄情者になるところだった。…それに、聞くに堪えない言葉を聞かせてしまった」

「そんな。いやあれば…仕方ないと思うし、美鶴さんだって俺のことを庇ってくれただろ。それで十分だよ」

頭を下げた美鶴さんに対し、首を横に振った。

「というか、美鶴さんの中でも許嫁（過去形）はもう元・許嫁になつてしまったのか。」

あの時の美鶴さんの呆れようと許嫁（過去形）の奇行を考えれば仕方ないと思うけれども。

「あの後——話が終わった後、私はお父様に電話して色々なことを聞いた。元々、あの男と私が許嫁になったのも10年前の事故があったせいだな。事故で対応に追われぐらついた桐条を援助する条件が私と当時専務だった彼との婚約。南条や桐条には劣るが会社として強力な倉橋と提携を組めれば、それだけで我がグループはより強大なものになれるから、と。お父様からすれば幼い私を道具のように扱うのが嫌で、一時しのぎの話だったらしいのだが…結局、今まででずると続いってしまったということだ」

美鶴さんが苦笑しながらどうしてこうなったのか、を説明してくれる。

要するに美鶴さんは人質みたいなものだったらしい。倉橋が桐条

に協力をするための。

色々、大企業には黒い噂がつきものだというのがその中でも倉橋はドラックなのではないのだろうか。どこまでそこに祖父である倉橋黄盛が関わっているのか考えたくもないけど。

そもそも、あの元許嫁にしたって業務提携の条件に10年前とはいえども小学校低学年くらい的美鶴さんを許嫁につてわざわざ言うてくるのはヤバくないだろうか。だって美鶴さんよりふたまわりも上なのだろう。と、すれば18+24だから…42…？ 10年前でも32歳…？ あ、アウトでは…

いや、もしかしたら上流階級の人にとってはそういうことは当たり前なのかもしれない。ただ、24歳も差があるのに美鶴さんより子供っぽいのはいただけないと思うが。

地位と権力はあっても才能はなかったみたいだ。

アザミさんの話によれば才能があつたのは元許嫁のお父さんの方で、元許嫁さんに代替わりしてからはあまり良い噂がないらしい。武治さんも他の人も、元許嫁の父親が優秀だったからこそ、それを信じて元許嫁との婚約を許したのだろう。

だが蓋を開けて見ればこれなので堪ったものではない。

「今回の事が父親にばれたら、あの男、大叱られじやすまないだろうねえ」と、笑っていたアザミさんの目は笑っていなかった。絶対にタレこむぞという強い意志を感じた。

ちよつと怖かった。

「言つたよ。お父様にあの男とはもう付き合いきれない。三上と共に生きたい、と。…お父様は私が薄々あの男を嫌っていることに気がついてらしたようだな。縁談に関しては即刻破棄すると約束してください。だが、その…やはり私や三上と一度直接話したいらしくて…よ、予定を、聞きたい。13日の朝からなんだが…」

本当に元許嫁は許嫁（過去形）になつてしまったようだ。

武治さんが即答するくらいなのだから、そうとう気に病んでいたんだろうし滅多に我儘を言わない娘がヘルプサインを出したことをいい機会だと思つたのだろう。武治さんは背負うものが大きすぎるだ

けで悪い人ではない。多少、しよい込みすぎて誤解されがちだが家族である美鶴さんには理解してもらえてると思うしそれだけで大丈夫だと思う。

というか、そうでなければ桐条グループの社長なんてやっていけないだろうし。

それはそうとして13日といえば横浜の天海市に停泊している。"ビー・シンフル号"へと行こうかと思っていたところだったのだ。本当は、12月になる前に行きたかったのだが、触媒づくりに時間をかけてしまったのでいけなかった。

もし、アイギスの言う通りモコイさんがカダスのどこかにいるのなら、生き返らせてあげることが可能だ。ただ、自分には封魔管から以外にモコイさんの気配のようなものを感じ取ることはできない。

カダス居るとひと口に言ってもあそこは広大だ。

しかもパレスにしたあのプラネタリウムという限られた場所以外は自分の管轄外で、反応すら探知出来ないために確認のしようが無い。正直、いるかどうかというのを疑いたくはないが信じきることもできていない状態だ。判断材料が少なすぎる。

最初は、モコイさんの管と共に溶けて消えるつもりだった。心中のような事も考えていた。もうそこにモコイさんは居ないし、アザミさんの事を疑うわけではないが本当に生き返らせるかなんてわからなかったから。いつその事と思って。

けれどモコイさんからの伝言だ、とあんな事を言われてしまえばたとえ嘘だとしても死ねない。泣けない。

猶予ができたなら、死ぬより先にモコイさんを生き返らせて、自由にしてあげないといけないと思っていた。

しかし行こうかと思っていた13日に予定が入るとなれば話は変わってくる。

学校があるが明日に行ってもいいかもしれない。勿論、横浜まで行くので遅くなるという連絡はして。

お金をかけて快速とかの電車を使えば多少はマシになりそうなのでこの際、財布は気にしてられない。

「大丈夫。空けとくよ」

「ありがとう…」

そう言えば、美鶴さんはほっとしたような顔で微笑んだ。

13日に武治さんに会って、話をする。十中八九認めては貰えないだろう。

会社の社長としても、父親としても。ある意味元許嫁よりも問題物件なのだから。

少しだけ、怯えている自分がいる。とはいえ、今更“友だち”に戻るだなんて出来るはずがない。

ならば、覚悟を決めないといけない。

12月11日(金) 放課後

天海市芝浜

「これが…ビー・シンフル号…この中に業魔殿つてところが…？」
夕方。

夕日に照らされる大きい船を見ながら呟く。

電車やバスを乗り継ぎやつの事だどり着いたその船はとても大きかった。

あまりそういう船を見たことがないので自分のイメージの中の豪華客船と呼んでもおかしくなくらいには大きい船に気圧される。

しかし気圧されっぱなしではラチがあかない。意を決して入るか

——！ と第一歩を踏み出そうとした瞬間、横を白スーツの男の人が通って船の中へと入っていった。

とても自然に。手慣れているように。

すぐく、見習いたいくらいだ。

「よ、よし…」

大きく息を吸って、足を踏み出した。

行かなければモコイさんを生き返らせることなど出来ないのだから。

そうして古めかしい正しくThe 洋風ホテル！ といった船内を

歩き回っていれば、不意に声をかけられる。

「……………業魔殿にようこそ。失礼ですがどちら様ですか？」

「え、ええと…」

顔を見る。

メイド服を着た血色の悪い女性だ。気配がただの人間では無いので悪魔っぽいがそれでも無いような気がする。

いや、船内の雰囲気自体が異様で暗い場所だからそう感じたり見えるのかもしれない。ついでに警戒するような目付きでこちらを見ている。不法侵入だと思われるのかもしれない。

「失礼ですが業魔殿ではご予約のある方以外、お通しすることが出来ません。お引き取り下さい」

まさかの予約制にぽかんと口を開けてしまう。そこは予想外だった。

アザミさんはここに行けばいい、としか言ってくれてなかったし、すんなり行けるものだと思っていたのだ。ここに来て何もせず帰る、というのはもちろんダメだし、どうにかして入れてもらわねば。

「あの、仲魔？ を生き返らせたくて…そしたらここに来たら良いって言われて」

「それはどなた様の紹介でしょうか」

「その、アザミさん…です」

感情の色のない声で問われ、アザミさんの名前を出す。アザミ、という名前がこういう所でも使われているのなら良いのだが、もしそうでなければ変な人の名前を出す変なやつ、だ。

「アザミ様のご紹介ですか。わかりました。確かにご予約賜っております。こちらへ…ご案内します」

(ほっ…)

表情を変えないままそう告げられ、ほっと胸を撫で下ろしてついて行く。

良かった。アザミさんの名前はここでも有効だったらしい。ついでに予約もしてくれられたとなればほんと、感謝しかできない。

ただ、この人がヴィクトルという訳では無さそうだ。そんな風には

見えないというのものもあるけど。なぜか、そうでは無いという確証がある。彼女は、違う。

ガコン、と音がして目の前にあった大きめの赤い登り階段が下がる。そしてそのままその階段は地下へと降りる階段へと変貌し、自分たちを迎え入れた。

「ええーヴィクトルさん、そりやないですよ！」

「無理なものは無理だ。諦めろ」

案内された場所ではさっきの白スーツの男の人と船長ルックのおじさんが言い争っている場面だった。と、いうよりかは白スーツの男の人が笑いながら食い下がっているだけのよう。じゃれあいにもみえる。

「ヴィクトル様、失礼します。新たなお客様です。なんでもアザミ様のご紹介だとか」

「おお、メアリ。ご苦労だった。……なんだ、この奇妙な感覚は？」

いま、自分を見て顔を顰めた船長ルックのおじさんが恐らくヴィクトルだ。なぜだかそういう確信がある。そして白スーツの男の人もなんだか見覚えがあるような、ないような。既視感を感じるのだ。

「ともかく…業魔殿へヨーソロー。我が輩はヴィクトル。業魔殿の主だ。時に客人よ、COMPはもちろん持っているな？ それを見せてもらおう」

「え…その、あの…」

COMPとやらは持ってない。もちろんと言われても無いものは無い。それが無いとモコイさんを生き返らせて貰えないのだろうか。

「どうした？ まさか悪戯と言うわけではあるまい」

怯えるこちらを見るヴィクトルの目付きが怖い。白スーツの男の人は先程までのヴィクトルに向けていた人懐っこい笑みを消して探るようにこちらを見てきている。

疑われている。なんなのか分からないが、疑われている。あの目を、自分は知っている。

「あの、COMPってモノは持ってないんですけど、管なら…」

「それは…！」

腰に下げた袋からモコイさんの入っていた管を取り出せばヴィクトルの顔が凍りつく。

「17代目のものか!? これをどこで手に入れた!」

「も、モコイさんから…… 17代目って人の仲魔だったモコイさんからです! 俺、その子と一緒に暮らして……それで、それで……」
がつつくようにこちらの肩を掴んできたヴィクトルにたじろぎ、泣きそうになる。けれどそれはヴィクトルの顔が怖いからではなく、モコイさんを守れなかった悔しさで。

理由を告げればヴィクトルは肩から手を離し、納得したような顔をした。

「……そうか。もしや、生き返らせたい仲魔というのは」

「そう、です。モコイさんの……ことです。おれ、俺が……、弱かったから……モコイさんを死なせてしまつて……俺を守つてモコイさんが……!」

我慢していたのにぽろぽろと涙が出てくる。泣かないと決めていたのに。泣くなどモコイさんからも言われていたのに。

「……わかった。試してみよう。確かにお前とモコイには強力な縁があるようだからな」

「あ、りがとう、ございます」

グズグズと泣きながら管を渡して涙を拭う。泣き止まなければ、モコイさんとどんな顔をして会えばいいんだ。また会う時は、笑顔がいい。

その方がきつと、モコイさんも喜ぶだろうから。

「……!?」

しばらく管を弄り、なにかしていたヴィクトルの手が止まって、すぐにこちらへ振り向いて寄ってくる。

その顔はあまり明るくない。いや、元から明るくないと言われればそうなのだけれども。輪をかけて明るくないと言うべきか。

「……残念だが、モコイはこの管から復活させることは出来ん」

「そ、そんな……! なんて……!」

確かにモコイさんの残滓はその管に宿っているはずなのだ。なの

に、生き返らせることが出来ない、というのはどういうことなのだろうか。

やはり、アリスの特殊な技で殺されたのが不味かったのか。

「…モコイの方から拒否されてしまった、と言えればいいのか。お前との結びつきが強すぎて切り離せないのだ」

「え…？」

返ってきたのは予想外の答え。

モコイさん自身が蘇生されたくないと思えばねたらしい。どういう、ことなのだろうか。自分に会いたくないとか、そういうことなのだろうか。やっぱり、モコイさんを死なせてしまったから。

「モコイはお前の中からお前を守ることにしたらしい。そうすれば、お前が生きている限り、共に在れるからだろう」

「俺の、中で…」

目を見開く。そして、右手で己の胸に触れる。本当に、モコイさんは自分の中に居るらしい。

モコイさんは俺を嫌った訳じゃなかった。むしろ、ずっと一緒に居てくれるために自由を捨ててしまった。その事に対して泣きたいような、嬉しいような、複雑な感情が湧き出てくる。

「…我が輩としてもお前のその奇妙な在り方に実験材料としての興味が無いとは言えん。が、触れればモコイが怒り狂うゆえに——手出しはしないでおう」

モコイさんがぷりぷりと怒っても可愛いだけなのだけれど、ヴィクトルはそれでも無いらしい。顔を顰めながら管を返してくれた。

「あの、ありがとうございます。それとすみませんでした」

「なに、蘇生できなかったというのは結果だ。もし使役する悪魔が増え、合体が入り用になった暁にはまた来るといい。メアリ、この客人をこれからはいつでもお通ししてくれ」

「かしこまりました」

ペこり、と頭を下げたメイドの人——メアリさんはそのまま持ち場へと戻っていくのか立ち去る。

自分も用は無くなったのでここらで帰らないと、とヴィクトルに頭

を下げて後を追いかけられるようにして階段を上がり、船の外へと出た。冬は日が落ちるのが早い為か、ちよつとしか船の中になかったというのにもう外は真つ暗だ。少しだけ、海面が真つ暗で怖い。嫌なことを思い出しそうになって、けれどその思い出に心当たりがなくて顔を顰めるだけに留める。

「……………」

モコイさんを生き返らせることは出来なかった。

けれど、それは悪い意味ではなくモコイさんが自分といることを選んでくれたということでもあるのでは無いのだろうか。いずれ自分がもつと力を使いこなせるようになったその時には、モコイさんが応えてくれればいいと思う。

けれどモコイさんの幸せを考えるなら、きつと、生き返った方がいいに決まつてる。自分なんかより、新しい素敵な人の仲魔になって幸せを積み重ねていけた方が、きつと。

——はあー…チミのそのダメダメさんなマイナス思考はいつまで経つても治らないんだネ。世話が焼けるんだから。ボクはボクの意志で、チミが一番だからきつと傍にいるんすよ。

「…」

声が、聞こえたような気がした。思わず周りを見回すも、そこにはだれもいない。

気のせい、だったのだろうか。でも、確かにモコイさんの声が聞こえたような気がした。それは間違いない。もしそれが幻聴だとしてもモコイさんが自分の中にいる、という確証が得られただけで十分だった。

「あ」

そういえば、お代を払ってなかった。

さすがになにかしてもらったのに無料という訳にはいかないだろう。そう思つて船内に引き返そうと踵を返した瞬間——

——ぞわり、と殺気を感じた。

「っ……！」

転がるようにして横へと逃げれば銃弾が1発。地面に当たって弾けた。

避けなければそれは自分へと当たっていたものだ。

「ひっ……」

いや、今更銃弾くらいで怯えるというのも変な話だけれども、こんな影時間でもない街中で殺気モリモリの銃を撃たれるのは人生初だ。

怯えながら飛んできた方向をみれば、なんてことは無いどこにでも居そうな男の人が銃をこちらへ向けて立っている。

その顔を見た瞬間、どくり、と心臓が嫌な音を立てた。

知っている。知らないのに、知っている。顔じゃない。外見じゃない。

中身を、知っている気がして目眩がする。

「キョ、ウジ……？」

口が、勝手に知らない名前を吐き出す。

違う。この人は葛葉キョウジじゃない。いや、こいつはキョウジだ。おれは、知っている。こいつは葛葉キョウジなのだ。

相反する思考がぐるぐると渦巻く。

「何故わかる？ お前は何者だ？ 答えろ」

男が、訊いてくる。

わからない。俺は、おれは。誰だ。

頭が痛い。気持ち悪い。自分は、『時を操る神器』だ。そのはずなのだ。

じゃあ、"おれ"は？

おれは、なんだ。死んだはずだ。居ないはずだ。なのに、どうしてここにいる？

三上優希？ 有里渚？ いや、違う。おれは、なんだ？ この既

視感是谁のものなんだ？

「キョウジさん！ なにやってんすか！ 相手は高校生ですよ!？」

「関係ない。こいつは……人じゃない」

誰かが言い争う声が聞こえる。

わからない。おれは、ヒトだ。

ヒトを、護るために、おれは。

手が、震える。違う。違う。ちがう。

ヒトなんてアバウトなものを護りたかった訳じゃない。自分は奏子と湊のことを救いたかっただけで、

「あの子、苦しそうにしてるじゃないですか！ たとえ人じゃなくても、この子は絶対悪い子じゃないですって！ オレが保証しますから！」

「だからお前は甘いんだ。こいつはここで殺さなきゃならん。絶対にだ」

「なんだか、キョウジさんらしくないですよ！ どうしたって言うんですか！」

おれは、

「俺は、存在しちやいけなかったのか…？」

「ああ、そうだ」

肯定と共に刃の切っ先が向けられる。

殺されるのに、抗う気が起きない。どこかで、こうなることを納得している自分がある。

死体に戻ることが正常だと思うおれがいる。

諦めて目を、閉じた。

「——おいキョウジツ!!! その子に手を出すんじゃないよツ!!!」

のに、止めるような必死の叫び声が聞こえた。

ぱちん、となにかが弾けたような、微睡みから醒めたような音がした。

「なにしやがるツ！この、」

「うるさいよ!!! 嫌な予感がしたと思って来てみたらこれだ！ アンタの方が何してんだい!!! この子には傷ひとつつけてないだろうね!?!」

聞き覚えのある声だ。懐かしい、おれのよく知る大好きな声。恐る恐る目を開く。

そこに、いたのは。

「しししょう……？」

「ごめんなさい。約束を破って死んでしまっただごめんなさい。おれは、貴女と生きたかった。でも、それよりも貴女を守りたかった。おれを救って育ててくれた、貴女を。」

「……アンタ、大丈夫かい？ 怪我はないかい？」

キョウジを言いくるめた師匠が振り向いた。おれの敬愛する師匠。おれもこの人くらい口が上手ければキョウジの誤解を解くことが出来たのだろうか。

違う。あの人はアザミさんで、俺に親切にしてくれる人で、倉橋祖黄盛父の知り合いで、それで。俺は、自分は、なんだっけか。……わからない。

「う……あ……あ、おれ……は……」

ちゃんと答えないと、叱られるのに。

俺おれは答えられない。アザミ師匠さんに、返事はちゃんとしなさいと言われていたのに。

「ああ、答えられないほどに取り乱して可哀想に……キョウジ！ アンタ、この子に何したんだい!？」

「知らん、そいつが勝手にそうなっただけだ」

「いや普通の高校生の子ならキョウジさんに睨まれただけでビビりますって！ 殺意モリモリで刀なんて向けられることも無いですし十分にかしてますってえー！」

師匠アザミせんに抱きしめられながら話が右から左へと流れていく。

「そうだろうそうだろう！ “キョウジちゃん”の言う通りさ！

キョウジ！ 謝んな！ この子はちよいと変わってるけどね、アンタが思ってるようなのじゃあないよ！」

「……おれは認めん」

「まあー！ なんてやつだい！ ここまで強情だとは思わなかったよ！ とにかく、このままなんて訳にはいかないからアタシはこの子を連れて帰るからね！ ……立てるかい?」

ぐい、と抱き上げられて優しく立たされる。

そのまま手を引かれるように連れていかれ、軽自動車の助手席に乗せられてアザミさん師匠の運転でぼんやりとしながら揺られていく。

「済まないねえ…あのボンクラがアンタに迷惑かけたね。もう「スケロク」じゃ無くなってるだなんて思いもしなくてねえ…ポンポン身体を変えすぎなんだよあの男は…」

ハンドルを握り、前を見たまま師匠アザミさんは話す。どうやら、俺おれに伝えた忠告はスケロクキョウウジに気をつけるということだったらしい。

スケロクでは無くなった、という意味はわからないがあおれのキョウウジはおれの知らない身体でありながら中身はおれの知るキョウウジで、横にいた白いいつものスーツを着たりーゼントのキョウウジが、キョウウジの本当の身体であり、中身はアザミさん師匠の言っていたおれの知るキョウウジではない。葛葉キョウウジアザミさんなのだろう。

ややこしいが、そういうことなのだ。

きつと何かおかしな事件に巻き込まれて、ああなったんだろう。おれがこうなってしまったように。

しばらくして、一軒家の前で車が止まり、降りる。

知らない家だ。

「……ここは……し……アザミさんの家ですか」

「そうだよ。遠慮せず上がって良いからね。怖かったらう？」

おれの知る、あの自然に囲まれた屋敷ではない。住宅街の中にある、小さい、普通の一軒家。

「……引越し、したんですか」

「ん？ ああ、よくわかったねえ…確かにここにずっと住んでた訳じゃあ無くてね。ちよつと…悴を亡くしてからは思い出ばっかり詰まった家は辛くてね…匂いひとつで思い出しちゃうんだよ。あの子がまだ生きてるんじゃあないかって縋ってしまいそうになっちゃうし、それじゃああの子に顔向けが出来ないだろう？ だからさね」

おれが、死んでから。

師匠は大丈夫だと思っていた。おれが死んでも、耐えられる人だと。割り切れる人だと。

でも、そうでは無かった。その事にちくりと胸が痛む。この身体

は、おれのものではないのに。

「そう、ですか…すみません。辛いことをお聞きして」

「良いんだよ。さ、上がりな。シナモンを入れたあまーいホットミルクを用意してあげよう」

「…はい」

俺おれがそれを好きなのを、まだ覚えていてくれたのか。

いや、違う。これはおれではなく、俺に向けたものだ。師匠は気がついていない。知らない。わからない。

でも、それでいい。おれは死人だ。俺ではない。いずれ消えてなくなる、残滓だ。きつと、たまたま今日浮かび上がっただけの、亡霊。「今日は泊まって行きな。明日学校まで送って行ってあげるからね。ここは慣れない場所だろうけど、アタシが守ってあげるから、安心して眠るといいさ」

頷けば、頭を優しく撫でられる。

おれは昔からこの手が大好きだった。優しくて、暖かいこの手が。

「…あ…」

しかしそれはすぐに離れてしまう。

「じゃあ、ホットミルクを作ってくるからね。良い子にして待ってるんだよ」

師匠が立ち去ってしまったので部屋の畳の上でひとり、待つ。

携帯の履歴を見て今日は外泊するというメールをさっと送り、また沈黙する。やる事が無い。

見回せば見慣れた羽織がハンガーにかけられ、吊るされているのが見えた。

あれは——おれの羽織だ。あの戦いに着ていかなかったから、屋敷に残っていたもの。

立ち上がって近寄り、しげしげとその懐かしい代物を眺める。

いくつもある修繕の跡と、薄く残り完全にはとれてない血の跡。袖を手を取ってくんくんと匂いを嗅いでみるがおれ自身の匂いはもうしない。

それがどんな匂いかもう忘れてしまったけれど、違うことだけはわ

かる。

大事にしてもらっている。それだけで十分だ。

すぐに興味が失せたので元の位置に戻り、背筋を伸ばし姿勢を正した状態で正座する。この方が、おれは落ち着く。

「待たせたね……って、そんな畏まらなくても良いんだよ？」

ややあつて師匠がホットミルクの入ったマグカップを持って戻ってくる。懐かしい香りがして、少しだけ頬が緩んだ。

「いえ、こちらの方が落ち着くので、これで良い、んです」

「……そうかい？ それならそうしていると良いんだけど……アンタ、そんな堂々とした子だったかい？」

「？」

堂々とはしていない、はずだ。

いつも通り、俺を装えて——いや、俺は、こんなことをしないタイプか。どちらかと言えばこういう初めての場所では背筋を丸めているタイプだ。これはぬかったか。

意識がはつきりと覚醒したのもつい先程だったものだから勝手がよく分からない。さっさとおれが沈んだ方が俺の為になるのではないか。

意識を内に向けてみるも、うんともすんとも返事がない。

どうやら、*俺*は疲れ果てて眠ってしまったらしい。色々あったのだから、仕方の無いことだ。

この身体が寝るまではおれが使うしかないらしい。

「……なんとなく、懐かしいので」

「そうかいそうかい！ おばあちゃんみたいだと思ってくれてるのかい!? 嬉しい限りだねえ！」

また、わしわしと頭を撫でられる。少し乱暴だが、これも嫌いじゃない。

師匠が勝手に勘違いしてくれて良かったと思う。全盛期なら、おそらくこの嘘とも言えない何かの違和感に気づかれていた。

「今日のことは本当に済まなかったね。アタシが一緒に行ってやるべきだったんだ」

「いいや。おれが、諦めず師匠のようにキョウジを説得できていれば…ちやんと説明できていればあんなに拗れずに済んだ」

「無駄だよ、無駄。あの男にやいまのアンタの言葉は届かないよ。まあ、昔よりかは柔くなってるけどまだまだだ。アンタのせいじゃないよ」

その言葉を聞きながらホットミルクを飲む。シナモンの香りとはちみつらしき少し酸味のある甘みが口の中で広がって、安心感を与えてくれる。本当に懐かしい味だ。またこれが飲める日が来るだなんて思わなかった。もう二度と、飲めないものだと思っていた。

「美味しいかい？」

「はい。とても…好みの味です」

「口にあって良かったよ。じゃあ布団を敷いてあげるから、ちよつと待ってな」

「いえ、それはおれがやります」

立ち上がりかけた師匠を制して、自分でやると言えば目を丸くさせた。

さすがにおれはもうあの頃のように子供では無いので1から10までしてもらう必要は無い。自分のことは自分で出来る。

「あつはつはつ！ 何言ってるんだい！ アンタは客で、アタシがもてなす側だよ！ それにアンタはここでの布団の場所を知らんだらうに！ほんと、面白い子だねえ！」

バシバシと背中を叩かれながら笑われてしまった。なぜだ。

「いいんだよ、今日はアタシ任せて、アンタは寝て、身体をゆつくり休ませてるんだ。それが今のアンタの仕事だよ。アタシや、昔もアンタにそう言っただらう」

「…それは」

「ホラ！ 言い訳しない！ 落ち着いたのならちやつちやと飲みきつて服を着替えな！ その間に布団を敷いてやるからね！」

そう言われると言う通りにしない訳にはいかない。

師匠の言葉はほぼ絶対だ。名残惜しいが残り僅かなホットミルクを飲みきり、制服を脱いで用意されていた服に着替える。サイズは、

今の身体には少し大きい。それに見覚えがある。これは昔の「おれの寝間着では。」

師匠はこんなものまで大事にとっていたのか。とっておいたところでもう「おれ」は帰って来ないので邪魔になるだけだろうに。

そう思いながら匂いを嗅げば少しタンスの——虫除けの香りがある。くさい。

むつと顔を顰めた。いや、これは慣れなければいけないのだが、久しぶりに嗅ぐ香りで反射的に——そう、仕方の無いことだ。仕方の無いこと。

言い訳しながら袖と裾をまくり、ずらないようにして待つ。その横で、押し入れから布団を2組出した師匠は手慣れた様子で布団を敷いていく。

「用意できたよ。服も——うん、ちよいと大きいけど着れてるみたいだね。ほら、さっさと寝な」

「…おやすみなさい」

ぱちんと吊るされたヒモを引っ張り、師匠は電気を消した。が、師匠はまだやることがあるのか着替えていない。

おそらくは錯乱していた俺おれを気遣ったことだろう。

ならばそれに応えない訳にはいかない。眠ってしまえばもう二度と「おれ」の意識は浮上しないだろう覚悟をして。これは、おれの出る幕ではないのだから。

そうして目を閉じればやはり身体が疲れていたのかすぐに眠りへと落ちていった。

暗闇の中で、アザミは優希がすっかりと寝た事を確認し、布団から出ているのその手を握り、ぽろりと涙を零す。

「ごめんね…ずっと、アンタはこの子の中に居たんだねえ…：アタシは、最期までアンタのことを信じてやれなかった。だからこそ、償いって訳じゃあないけど…：やれる事はやってあげたいと思うのは、そんなにダメなことなのかねえ…」

優希の顔を見つめながらも、アザミは別のものを見ていた。亡くしたものを手繰り寄せようとしていた。

まさか、とは思っていた。ゴウトや18代目から聞いた報告と、1月の出会いの時点で疑念はあった。しかしアザミが優希を構っていたのはそれだけではなく、単に可愛かったからだ。全く似ていないはずであるのに雰囲気似通っているこの少年が本当の孫のようにも思えて、愛おしかった。

だからキョウジについて警告した。四騎士なんて神降ろししていればその異様な雰囲気から絡まれかねないためだ。

けれども今日の出来事でアザミは別の意味でキョウジが脅威判定をし、この少年に刃を向けたことに気がついてしまった。

わかってしまった。

キョウジは、アザミが先日そう疑いかけたようにこの少年を「17代目葛葉ライドウ」を殺して取り込んだ強大な悪魔だと思って見ている。その事に気がついてしまった。

そしてその後の会話。本人は気がついていなかったのだろうかこへ引越してからもう10年以上経つというのに引越したのかと訊いてきた。なぜ、引越したという情報が出てきたのか。これはもともと住んでいた場所を知らなければ出来ない言動だろう。

さらに見覚えのあるぴんと背筋を伸ばしたあの正座は、アザミの息子のものそのものだった。

三上優希という少年を二度ほど見たアザミは、あれが本来の優希の仕草ではないとすぐにわかった。京都の呉服屋でも先日行った料亭でも、彼はもじもじと居心地悪そうに背筋を丸めるだけであったからだ。

それなのに、初めて来るこの家で真反対の——しかもアザミの息子と同じ仕草をして落ち着いた声色をしつつもアザミのことを師匠と呼べば気がつくなという方が無理な話だ。

ため息を吐く。

アザミがアザミと名乗るようになったのは、17代目息子の死からだ。

以前は、16代目葛葉ライドウもしくは師であり、それよりさらに

前はおつとちやんとした、葛葉の血筋に生まれた女としての名があった。それをもう、名乗るつもりはない。

「おやすみ、――」

アザミは別れを告げる。

次に起きたときはきつと、こんなおぼろげな死人ではなく優希に戻っているだろうと予感めいたものを覚えていたからだ。

18年前に言えなかったそれを告げ、アザミは電気もつけず立ち上がり、その部屋を立ち去った。

「ヒトと一緒にには居られなくなる」(12/12)

12月12日(土) 朝

目を覚ます。見知らぬ天井だ。

ここがどこなのか思い出せない。

昨日、モコイさんを生き返らせようと『ビー・シンプル号』の業魔殿に行つて、それから――

『お前は何者だ?』

最後に聞いた男の言葉と姿を思い出す。

そしてぶるり、と恐怖で身体を震わせる。

俺は、誰だ。なんなんだ。いや、俺は『三上優希』で、奏子と湊の兄で、それで、

それで?

『三上優希』は本当にふたりの兄なのか? だって、奏子と湊の兄は有里渚のはずだ。なら、三上優希は誰なんだ? だって、三上ハジメと三上ヒロコの子供である三上優希という人間は生まれていない。生まれていないからこそ、俺は、その名前を、貰つて。

でも、有里渚だつて生まれていない。生まれていなかったはずなんだ。でも俺は、居場所をとつた。その子の居場所をとつて、居座つている。

じゃあ、三上優希でも有里渚でも『時を操る神器』でもない『俺』つて、なんなんだ?

俺は、何者なんだ。

「おはよう、朝ごはんが出来たよ。起きてるかい? ……つて、どうしたんだい、そんな難しい顔をして」

もだもだと考えていたら襖を開けてアザミさんが部屋に入ってきた。

どうやら、ここはアザミさんの家かなにからしい。どうしてアザミさんの家らしき場所にいるのかはわからないが、ここは絶対に安全で、安心していいという謎の感覚が自分の中にあつた。

「…アザミさん。あの、俺って誰なんですか」

そう問うてみればアザミさんの顔が鬼気迫るような、真剣な顔になる。

「なんだい、まさか、記憶喪失かい!」

肩を掴まれ、大丈夫なのかと背中を擦られる。

違う。別に記憶喪失というわけではなく——否定するようにブンブンと首を横に振った。

「ち、違います! あの、記憶喪失とかじゃなくて、哲学的な? そういう、あれです…」

「ぶ、あはは!…なんだい、そんなことかい! びつくりしたよ!」
笑われてしまう。

これでも真剣な悩みなのだ。しかし心配させてしまったのでそこは謝らないといけない。

「変なこと言ってすみません…」

「いやいや、いいんだよ。そうだねえ…このくらいの歳の子ならそんなことを考えることもあるもんねえ…」

ニヤニヤと笑みを浮かべながら見つめてくるアザミさんはまた自分の事を小動物だとも思っているのか、馬鹿にする風ではなく心底可愛いものを見ているだけ、といった様子だった。

そのことに、不満はない。実際自分は彼女からしたらうんと歳の離れたただの子供だ。自分の悩みというのは、人生経験が豊富な彼女からしたら既に乗り越えたものであり本当に大したことない可愛いものなのだろう。

「まあ、昨日あのバカに何か言われたんだろうけど気にしない事さね」
いとも簡単そうにアザミさんはそう告げる。あのバカ、というのは刀を向けてきたなぜか既視感を感じる「キョウジ」という男の事だろう。

そう、なのだろうか。気にしなくてもいいこと、なのだろうか。わからず、思わず困惑して俯いてしまえばアザミさんは頭を撫でてくれる。

俺は、こうしてアザミさんから撫でられるのは好きだ。なんだか落ち着く。

「アタシはね、職業柄…：沢山名前があるんだ。でも名前があろうが無
かろうが、どんな名前だろうがアタシはアタシだし、ここにいる限り
あんたはあんたという存在なんだ。難しく考える必要はないよ。む
しろ、難しく考えすぎるほうが自分が分からなくなっちゃうからね！
だいたいこのことは美味しい飯を食って腹を満たしてからぐつすと
寝て、そして朝になれば全部気にならなくなっちゃうから安心しな」
アザミ、という名前は本名じゃないのか。それとも、仕事でほかの
名前を使っているのか。自分に対し、アザミさんは多くを語らない。
けれど、悪魔絡みの仕事ならそういうこともあるのだろう。きつと手
を汚したことだってあったはずだ。

それで悩んだことも。でも、アザミさんはこうして笑っている。と
いうことは、ほんとうなのかもしれない。食事をとって、寝て、朝に
なれば。きつと。

「それでも引きずるようなら、外に出て走ってきな！ だいたい走れ
ばそんな問題どうでもよくなるのさ！ それとも、アタシが走らせて
あげようか？ 一番足が速い悪魔マを用意してあげよう」
「遠慮しておきます…」

また首を横に振る。

意外とアザミさんはスパルタらしい。悪魔に追いかけられながら
マラソンなんてすればぶっ倒れてしまう。それだけは勘弁したい。
影時間なら問題ないかもしれないけれど。

そんなことを考えていれば、突然くう、とお腹の音がした。自分の
だ。

その腹の音はアザミさんにも聞こえていたらしく、「ははは！」と笑
われてしまい自分の顔に熱が集まるのが分かる。

「昨日の夜は何も食べなかつたからね。そりゃあお腹も空くさ。ほ
ら、朝ごはんが冷めちゃうから早く着替えてこっちにおいで」

「は、はい…！」

言われた通りにそそくさと着替え、部屋を出れば廊下でアザミさん
が待っていてくれた。

そしてそのまま別の部屋に向かえばそこはリビングだった。キツ

チンとの仕切りは無いようでそのままキッチンカウンターが見える。リビングにあるのはあまり大きくないテレビにカーペットの上に乗った脚の短い長いテーブルと、座布団だ。

「ほら、ここに座りな」

言われて、座布団の上に正座で座る。

「若い子の口に合うかはわかんないから、好きなものだけ食べていいんだよ。食えるもんが無けりゃあ、飯抜きになっちまうけどねえ」

テーブルに並べられているのは至って普通の朝食だ。

茄子と油揚げと豆腐、そしてワカメの入った味噌汁。タッパに入った大根の煮物とひじきの煮物のふたつ。西京焼きらしき鮭。納豆。生卵。そして五穀米のようなご飯。あときゅうりの漬物。

三上家で出るものとは少し違うが苦手なものはない。それどころか、なぜか懐かしさすら感じる。食べなくても直感でわかる。俺は、この人の料理の味が好きだ。

「いえ、大丈夫です。全部食べられます。むしろ好きなものばかりです！」

結局自分も欲に忠実だったのか先ほどまでの悩みは吹き飛んで、目の前の食事にワクワクすらしている。

早く食べたいと思っっているのが顔に出ていたのかアザミさんは納得したように笑うと口を開いた。

「そうかい。じゃあ、食べようね。…いただきます」

「いただきますー！」

手を合わせてそう言った後に箸を手にとって鮭と五穀米を口いっぱい含む。

美味しい。

次に、漬物に手を伸ばして、小皿に置いてからひとくち。

うん、この味だ。懐かしい。

何故か食べ慣れた味がしてやっぱり漬物はこれでないかと思ってしまう。

煮物も同じく。甘めで煮干しの香りが強いこの大根の煮物が好きだ。

味噌汁も、何故か落ち着く味がして、ひとくち飲んでほう、と息を吐いて、そして口が勝手に弧を描く。

「美味しいかい？」

「とつても！　なんだか初めて食べた気がしなくて、すごく美味しいです！　なんていうか、全部びっくりするくらい俺好みっていうか……」

訊かれて答えるも、恥ずかしくなってきた尻すぼみになる。

「どれもこれもなんも特別じゃあない、ただのばあさんが作った料理なんだけどねえ。でも、口にあつたのなら良かったよ。それだけ喜んでもらえたなら頑張つて作ったかいがあるってもんさ」

にこにこ上機嫌に笑うアザミさんを見ながらも箸は止まらない。

美味しい。荒垣くんや養母^かさんの料理も好きだが、アザミさんの料理もすごく好きだ。

なんというか、好き、のベクトルが違う気がする。こっちは病みつきになりそうというか、魂に染み付いた母の味というか、そんな感じだ。

「……やっぱり、似るんだねえ」

「何か言いましたか？」

「いいや、なんでもないよ。独り言さ。鮭はないけど他のおかわりはまだあるからね、たんとお食べ」

アザミさんが何か言ったような気がして聞き返すもこちらに向けて言った言葉ではなかったらしくはぐらかされてしまう。ただ、悪い意味ではなさそうだ。

「ああ、そうそう。昨日の事なんだけどアンタはどこまで覚えてる？」
食べている途中、アザミさんが唐突にそう訊いてきた。

そういえば、この家に来た記憶がない。思い出すために自分の記憶をたどる。

「えっと、モコイさんを生き返らせようと思って業魔殿まで行って、それで、そこから出た後に目つきの悪い男の人に襲われて刀を向けられて——そうだ、アザミさんの車に乗ったところ、まで、ですね」

何かアザミさんと話をしたような気がするが、車に乗せられたこと

をぼんやりとしか覚えておらず、その間の自分の情報がほとんどない。

長距離の移動と緊張で疲れていたのか何かで意識を保てなくなっていたのだろう。体力のない自分の身体が心底恨めしい。この体たらくでは戦える、などと奏子たちに胸を張って言えない。待機だと言った湊と奏子の判断が正しかったということだ。

「…そうだね。アンタは車に乗ってすぐに寝てしまったからねえ。安心しな。着替えはうちのがしてくれただからね」

やはり、寝てしまっていたのか。そして自分を寝間着に着替えさせてくれたのはこの家の人らしい。同居人か、はたまた。

自分には予想がつかなかったがアザミさんが自分を着替えさせるのを（物理的な力を考慮しても）避けた時点で女の人ではないようにも感じる。

「そう、なんですか？ あの、その人にもお礼を。ありがとうございます。したって」

「ああ…まあ、あの子は当たり前のことだつて受け取らないだろうけどね」

なんというか、見ず知らずの男子高校生を着替えさせるなんて重労働だろうにそれを当たり前だと思うのは単にそういうことに慣れている人なのか優しい人なのだろうか。しかも普通に着替えさせるだけじゃなくて少し大きい寝間着の袖と裾を丁寧にも折ってくれていたのだ。すごく心遣いが出る人なのだろう。

考えてもわからないのでさっさと思考を放棄してまた箸を伸ばす。

「で、学校にはアタシが送ってあげるからね。食べたらずぐ用意しな」
「わかりました」

そこからすぐに食事を食べ終え、出かける準備をする。

家の前の駐車場に止めてあった軽自動車に乗って、アザミさんの運転で街中に行く。

途中、青山霊園の近くを通ったのであの住宅街は青山のどこかだったのだろう。つまりあそこって高級住宅街では…？

「また溜まってきているのかい…この前被ったばかりだったのに、

最近多いから嫌になるねえ…」

アザミさんがそんな声を漏らしながら霊園の方を睨みつけていたのでつられて見れば、何か靄のようなものが漂っている。

原因はそれじゃあないだろうと意識して視れば、居る。人は襲っていないが、悪魔が霊園を闊歩している。とはいえ、慣れているアザミさんには何となく悪い気が溜まっているようにしか見えていないようだし、悪魔に足先を突っ込んでいる自分のようにはつきり見えているということではないということは普通の人には何もわからないくらいなのだろう。

すぐに悪魔がヒトに手を出す、という事はなさそうだが、“また”ということは何か異常なことが起こっている証拠だ。

シユブⅡニグラスのせいか、ニヤルラトホテプのせいか、それともまた別の要因か。

六本木の方ではニユクス教に混じって翔門会という宗教も活動しているとか。宗教。うん、嫌な予感しかしない。

けれども調べたら普通にメシア教だとかガイア教だとか、自分が気にしてないだけでいろんな宗教が世界にはあるし、今更宗教の一つや二つ気にしても仕方ないのだけれど。

自分にはできることは無いし、そのまま車で通り過ぎるのを見ているしかない。アザミさんが気がついた、ということは後々アザミさん本人か誰かが祓うのだろう。

それだけの話だ。

辰巳ポートアイランド駅前

さすがに学校の前まで送って貰う、というのは恥ずかしいし注目的にでもなってしまうようなので駅前で降りして貰うことにした。

いつもより早い時間なので、ここから歩いても余裕だ。

「本当にここでもいいのかい？ 学校まで送ってあげるよ？」

100%親切心からそう言ってくれているアザミさんには悪いが、首を横に振る。

「いえ、ここまでで十分です。まだ時間もありませんしゆっくり歩いても間に合うので、散歩がてら歩いていきます」

「そうかい？　なら、ここで停めるからちよつと待つてな…」

アザミさんはそのまま深くは追及せず、駅前の駐車場に車を停めてくれた。自分は鞆を持って車から降りる。

「色々お世話になったみたいで…その、ありがとうございます。ご飯もすごく美味しかったです」

「良いんだよ、老いぼれが好きでやってんだからね。アタシも短い間だったけど楽しかったよ。ありがとうねえ。また、アンタさえ良ければ遊びに来な。今度は弟妹を連れてきたっていいから。はいこれ、アタシの連絡先」

「……はい。その時があればまた連絡します」

自分に電話番号らしきものが書かれた紙切れを渡し、にこやかな笑みのままアザミさんはそのまま手を振って車を発進させる。

遠くへ消えていく車を見送って、メガネをかけてから片手で携帯に電話番号を登録した。

放課後

月光館学園高等部

教室

やることがないので明日のこともあるし真っ直ぐ帰ろうかと思いつながら、何となく動く気になれなくてももう教室にだれもいないというのに机の上で頬杖をつきながら何をする訳でもなくぼーつとしていれば眠気が襲ってくる。

疲れが抜けきっていないのか、それとも朝早くから起きていたせいだろうか。よく分からないが眠いのは確かだ。身体もなんとなくだるい。

「……………」

こくり、と船を漕ぎかける。

目の前がぼやけて暗くなる。眠い。でもこのまま寝たらダメだ、と

いう自制心のようなものが浮かぶ。

ありとあらゆる音が遠くなる。根性で目を開けようとするものの、すぐにまた重りを乗せたように重くなって閉じようとする。

抵抗虚しくどんどん視界が暗くなって、目を開いている時間の方が短くなっている。

(あ…ダメだ、寝る…)

そこで耐えきれずに意識が落ちる。

瞬間、頬杖をついていた腕からも力が抜けたのかごちん！ と額を机に思いつきりぶつけた。

「~~~~~っ!!!」

悶絶。

当たり所が悪かったのか徐々に泣きそうなほどの激痛が額に走る。チカチカと明滅する視界に、じんじんと痛む額。

もうとにかく痛い。刺されたり焼かれたりとはまた違う、なんというかクリティカルな痛みなのだ。

「む…:う…:ぐぬぬ、ぐうう…:うなああ…:」

唸って額を押さえながら頭をゆっくりと上げ下げして振る。

めちやくちやヤバイやつみたいな奇行である。けれどこうすることで痛みを誤魔化せる気がしたからだ。根拠はない。全くもって。

この奇行を誰も見ていなくて良かったと安堵した。

ついでに眠気は去った。去るしかないから去ったともいう。

「なにしてるの…」

「へっ!」

そうやって悶絶していれば、声をかけられて驚いてしまう。

この教室ではまず聞こえるはずのないその声に返事をしようと額を押えたままで振り向いた。

「なんでピンポイントに人がデコぶつけた時に居るのさ…」

「ああ…ぶつけたからそんなに踊ってたの」

この教室にまず居ないだろうと思っていた人物——湊の言葉に先日のエリザベスがダンスパーティーを開く！ などと言っていたことを思い出してげんなりする。

「踊ってない！ 断じて踊ってない！」

どじようすくいなんて絶対にしないぞ。絶対にだ。請われてもやらない。

「というか、湊がなんで3年の教室に？ 美鶴さんでも探しに来た？

それともモル…じゃなかった朔間くん^{モル}に用でも？」

朔間くん^{モル}は別に死の宣告者ではなかったたので12月31日に消えない事は確認している。ついでに言えば、このまま学校に通うということも。

意外と楽しいらしい。自分としても朔間くんには全く別のひとり人間として人生を楽しんで欲しい気持ちもあるから願ったり叶ったりなのだけれども。

自分としては朔間くんは同じ3年生ではなく1年生からやれば良かったと思うのだ。だって、そうすれば綾時くんを『兄さん』って呼んでしまっても変な空気になることは無いし。

ペルソナとしての名の元になった神と同じく、綾時くんの方がシャドウとしての生まれも先で、モルフエの方が後だったらしいから、そう呼んでしまうのも仕方ない気もするけど、それはそれ、これはこれ、だ。こうなると死の宣告者^{デス}よりも完成が（分からないなりに）早かった『時^自を操る神器』^カがやはり長兄ということになるのだけれど。

いや、待てよ？ 意識があると自覚したのは2009年の4月からなのでもしかして自分が末弟なのか…？

「…違う。用があるのは優希に」

くだらない思考をしている自分を他所に、少し間を置いて湊が答える。

なにか大事な話なのだろうか。とはいえ、湊の顔は真剣そうではない。

「そうなんだ。えっと、なにかな？」

「別に。一緒に帰らないかって誘いに来ただけ」

「？ なんで俺と？」

訳が分からなかった。

校門から出たり校内で鉢合わせして帰る、ということはあるけど、湊

から教室にわざわざ来て誘われたことなど無いに等しい。しかも、かなり人気者な湊はアイギスや他の人と仲を深めるので忙しいんじゃないだろうか。奏子も同じく人気者なので同じだけれども。

わざわざ時間を割いて自分なんかに構っている暇があるのか、というのが率直な意見だ。言わないけど。

「気まぐれ。もしくは仲を深めるため」

「うーん…それ本気で言ってる?」

「本気。あと真っ直ぐ優希が寮まで帰れるか心配だから。昨日も遅くなるって言って結局帰ってこなかったし。夜にアザミさん家に泊まるってメールがちゃんとか来たからいいけど」

「うぐ」

そう言われるともうなにも言えない。

普通、こういうのは立場が逆だと思うのだ。兄が弟を心配して、とかそういうのなのだ。弟が兄を（どこかふらつかないか）心配して迎えに来るってどういう状況なんだとツッコまれそうだ。微笑ましい帰宅風景と言うより首根っこを掴まれて連れて帰られるイメージが湧いてしまう。猫か自分は。

(…ん?)

湊は今、「夜にアザミさんの家に泊まるというメールが来た」と言っていたが昨日の夜は寝ていて携帯電話を触った覚えはない。どういうことだろうか。

アザミさんと湊がメールアドレスを交換した、ということは無さそうだし、自分の携帯電話から送られたのだろうか。だとしたら、アザミさんくらいしか居ないが昨日は連絡しておいたともなにも言っていないかった気がする。

いや、たまたま言い忘れただけか。

「どうしたの? 嫌?」

悩んでいれば湊が首を傾げる。

どうやらメールについて悩んでいて黙っていたのを拒否していると思われるしまったらしい。

「違うんだ、ちよつと別の事を考えてた。ごめん、帰ろう」

皆までは言わずに浮かんでいた疑問を喉の奥に押し込んで立ち上がる。ちよつと額を擦り、腫れてないかだけを確認してカバンを持った。

特に変わった会話もなく巖戸台駅から出て、帰り道を歩こうとすれば湊が不意に道を逸れる。

「まっすぐ帰るんじゃないの?」

と訊けば、

「寄り道」

と短く返される。

「普通に帰ってもつまらないでしょ。いつもと同じことやっても知らない一面を知れるってわけでもないし」

「まあ、そうだけど」

今日の湊はなにか変だ。

仲を深めるため、と言っていたが俺と湊は十分兄弟としては仲がいいし距離が近い方ではないだろうか。これ以上仲を深めるといつても何をするのか全く訳が分からない。

「……」

「別に、いつもと同じことはしないけど変なこともしないから」

警戒するな、と湊は言いたいのだろう。けれど湊がいくら突拍子もない事をするとはいえ、自分や奏子相手では特にそんなことはしてこなかったし突然どうしたのか、と思わない方がおかしい。

自分の行動を湊が不審がったのと同じことだ。

微妙な空気のまま向かったのは長鳴神社だった。

階段を上り、境内に入って遊具の近くにあるベンチに座る。

「(ハハ)…」

そつと、ベンチを撫でて俯く。

先月出会ったやけに薄着だった青年はまだ生きているのだろうか。

あの後、ちゃんと湊と奏子に会うことはできたのだろうか。ちゃんと、言いたい事を言えたのだろうか。

「どうかした？」

「…。いや、なんでもない」

自分が下を向いてしまったことに気がついた湊が訊いてくる。けれどなぜか言う事が出来なくて自分ははぐらかした。

きっと、このことは自分が訊くべきではないことだ。本来会うはずのない彼と出会ったことはきっと異常なことで、自分の中で留めておくべきことのように思えたから。

「……………さ、あの舞子ちゃんによく来てたんだ」

「あー、あの湊のお嫁さんになるって言ってた女の子ね。湊はモテモテだもんなあ」

9月ごろにそういうことがあったのだと話を聞いたことがあった。それ以前にもちよこちよこ「オクトパシー」の前で会ったりもしていたので彼女のことはぼんやりと思い出せる。

ただ自分はあまり湊や奏子の交友関係は知らないし、首を突っ込まないようになっている。目を塞いでいるともいえるけれど。

だから湊が古本屋の文吉さんと光子さん夫婦や、同じクラスの友達くんと親しいということくらいしか知らない。あとは留学生のベベくんとか。彼は家庭の事情で帰国してしまっただけらしいけど。

そういえば同級生のグルメキングこと末光くんも湊と食事に行っていたとかなんとか風の噂で聞いたことがある。奏子も湊に負けず劣らずだ。ふたりとも、交友関係が広くないだろうか。

自分の交友関係の狭さに泣けてきそうになる。

その少ない交友関係もだいたい悪魔がらみだったり10年前の事件絡みだし、神条さんは神取でニヤルラトホテプでもあるし。

逆に考えよう。交友関係のあるメンツの内3人が人外だっていうのはある意味珍しいんじゃないだろうか。

「その舞子ちゃんから紹介されてさ、僕と奏子はここに座ってた人とよくしゃべってた…ってだいたい奏子かその人が喋ってたからさ、それほどでもないけど僕は話を聞いてたしそこそこ仲良くなれた、と思う。で、あのお祖父さんからお金も貰ったし奏子とふたりで本を出したいなって思ってた」

「ええと、ごめん。話のつながりがよくわからないんだけど…どうして本を？」

貰ったというか相続した形になるのだが、ペラペラといつになく饒舌に話し出した湊に首を傾げれば、いったん黙った後に言いにくそうに口を開いた。

「生きた証を、遺したいんだ」

「湊の…？」

「ちがう」

湊は首を横にゆつくりと振って空を見上げる。

空は、冬空らしくどんよりと曇っている。

「その、ここで会ってた人の。彼が書いてたんだ。ピンクのワニの物語を。僕らは最後にそれを託されたから、どうしようって考えて、なら、本にしちやえばいいんだって思ったんだ。これまでそういうこと、してこなかったから」

「…：…そう、か」

彼はどうやら湊と奏子に会えたらしい。そして、湊が生きた証を遺したい、と言っていることから、もう彼はこの世にいないのかもしれない。

湊と奏子はその話を相続した金を使って自費出版したいという。

「それ、どんな話が聞いてもいい？」

「もちろん」

聞けば、

ジャングルに住むピンクのワニが友だちの小鳥を空腹のあまり間違つて食べてしまい、失意のあまり湖を作るほどに泣き続け、そして死んでしまう。そしてその湖はワニの涙で作られたものだということもその過程も知られることなくワニの死後、他の動物たちの憩いの場になるのだ。

という話だった。

なんとも暗い話である。

小鳥もワニも、救われていない。いや、この物語は救われることに焦点を置いているわけじゃないし自分なんかには読み取れるようなも

のではないのだろう。

彼が何を思い、何を体験してこの話を書いたのかはわからないが、安直に感想を吐ける作品ではない事だけは確かだ。

「…湊と奏子がそれをしたのなら、俺は止めないし出来る限り協力するよ。とは言っても出来てもきつと1月31日までだけだ」

目を逸らす。

今の湊の表情を見る勇気がない。

「……うん。優希は、それまでしか生きられないの？ もっと、もっとさ……」

2日の時とは違う、湊の震える声に罪悪感が湧いてくる。

けれど、それに負けて耳障りの良い言葉を吐く事は出来なかった。「言つただろ。俺は元々死体で、湊がくれた黄昏の羽根で生きているように見せかけているに過ぎないんだ。中にある生命力が尽きれば、そこまでだ。だから、もし生き延びられたとしてもある日突然死体に戻るかもしれない。それよりかは——…それよりかは、終わりが分かってた方がいいだろ。それに、俺はこれからどんどんヒトじゃない部分の方が大きくなる。ヒトと一緒にには居られなくなるんだ。俺という存在が残っていても、ニンゲンの住まう世界には居られなくなる。居るだけで、存在するだけで大きな影響を持つし迷惑をかけてしまうんだ」

もし、完全に男神たるシユブニグラスになったとするならば黄昏の羽根が無くても生きることにはできる。神に転生したようなものだ。しかしそうなるかとサマナーではない普通のニンゲンと共にいることはできなくなる。最悪、神性に飲まれヒトとしての姿も保てなくなるかもしれない。

なら潔く消えるか、死んだということにしてしまった方が良い。

大きすぎる力はいずれ全てを滅ぼす。望む、望まないに関わらず。「存在するだけで……」

「そう。俺はさ、何度も言うけど湊たちに笑って生きてほしいんだ。でもそれは、俺がいるときつと叶わない。神や悪魔に近い俺が傍に居れば湊たちは常に悪魔や超常の存在と関わらなくちゃなくなる。

下手をすれば巻き込まれて死ぬ。俺自身がそういうのの誘因になる訳だからさ。俺としても、それは嫌なんだ」

「でも、僕らの幸せも、優希が…兄さんが居ないと駄目なんだ。居ないと幸せになれないのに、居ない方が僕らの幸せになれるって、そんなの矛盾してるじゃないか…」

震える湊に自分が守ってやる、などというおこがましいことは言えない。神はそこまで自由の利く存在ではないというのが身に沁みている。

それもこれも、制約だらけだ。

神であつてもルールの上に立ち、存在しなければならぬというのはある意味縛られていると言つても過言ではない。

ニユクスやデスなどはいいい例だろう。望みもしない死をふりまかねばならないというのは辛いことこの上ない。

だからこそ、自分は変えたかった。そんな運命を否定したかった。全て自分に乗せるという力技で一応は成功しているとも取れなくはないが、シユブⅡニグラスを退けられなければそれも意味をなさない。

湊と奏子、そして他のみんなが言うこともわかる。犠牲は出ない方が良いに決まつてる。理屈ではわかるんだ。でも、前も思ったように犠牲もなく何もかも解決できる素晴らしい方法なんてある訳がない。「わかつてる。そのことは、わかつてるつもりなんだ。俺だってそこまで馬鹿じゃない」

「わかつてない！ 僕らは——：優希が生きて幸せになる様を見たいんだ！ 優希ひとり押し付けて、それで幸せにならないって何度も言ってるだろ!？」

湊が勢いよく立ち上がる。

「押し付けてない。俺がやるべきことを、やるだけだから」

「なら、僕らがニユクスを封印したのだって押し付けられたわけじゃない！ 自分で選んだことだ！」

「……そうかもね」

納得はできないけれど、誰かに強制されたわけではなくそういう運

命になってしまったという意味では自由意志の上でだ。だから、頷くしかない。

「でもさ——……、……っ！」

続きの言い訳を告げようとした自分の言葉が発されることは無かった。

まただ。ノイズが走るように視界がぶれ、
“無理やりこちらを覗きこまれた”のだと分かりこれ以上見せないために慌てて目を閉じて拒絶した。視覚情報さえ入ってこなければ彼女も見えないだろうという安直な考えの上で。

さらに酷く鼓動が飛び飛びになってガタガタと身体が勝手に震える。息ができない。くるしい。

「はあ……はあ……はあ……っ、く、う……」

寒いのに、冷や汗が止まらない。

「優希、なにがあつたの。発作？ それとも、別の……」

「だ、いじょうぶ。なんてこと、ないから」

もう覗かれてなさそうなのでゆっくりと目を開く。

無理やり抗ったせいなのか身体が酷くだるい。

「変だ。なんてことないわけ、ないでしょ。朝倉医院が近くにあるんだし、行かなきゃダメだ」

自分よりも不安そうな顔をしている湊が腕を掴む。

「朝倉、医院って、なんだっけ、なににいくところ、なんだっけ……」

「え……？」

頭がぼんやりしているような気がする。思い出せない。頭が痛い。

そこが、病院であることは分かる。なのにどうして行かなければならないのか、そこがなんなのかが頭の中で繋がらない。記憶がうまく引き出せない。

「………月が、よんでる……」

あたまのなかで、こえがする。立ち上がって、いかないといけけない。

「待って、優希、待って！ お願いだから！」

だれかが、叫んでいる。

でも顔がわからない。声も、わからない。どうして、待たないとい

けないんだったか。

「ああもう、知らないから！」

ゴツ、と鈍い音がした。

「ふぎやあ!？」

瞬間、意識がクリアになった。痛い。めちやくちや痛い。目の前が白くスパークするくらいには痛い。

「いきなりなにするんだ！」

「それはこっちのセリフ。優希、明らかに変だったし、全然大丈夫なんかじゃないじゃん」

目の前に湊がいる。いや、それは当たり前か。恐らく変になった自分に頭突きでもしたのだろう。

自分の意識が残ってるのは朝倉医院がなんなのかを思い出せなくなっただけなので数分も経ってないはずだ。たぶん。

「……ごめん」

「ごめんで済んだら医者是要らないんだけど？」

「はい。ごもつともです」

しゅん、と項垂れる。

しかし湊の口ぶりからするとこの前はシュブニグラスの干渉をノーリスクで回避出来たというのに、今日はノーリスクで回避できなかったということになる。どういう条件の違いなのか。

「ほんと、ドキドキしたから。呼びかけても止まらないし、もう優希が帰ってこないんじゃないかって」

「それにしては頭突きの判断するまでのタイムラグほとんど無くない？　ほんとに躊躇してた？」

「緊急時にわがまま言わない」

「えー…脳細胞が死ぬ…バカになる…」

ちよつとそこは異議を申し立てたかった。意外と自分の脳みそはデリケートなんだぞ。いや、脳は誰しもデリケートか。

だから頭突きをされてさらにバカになりたくは無いだ。

「さっきまで自分のことを死体扱いしてたのに脳細胞くらいが死ぬのは許されないんだ？」

「なにおう!?! 俺の身体全体はともかく脳の細胞くんたちは健気にも生きてるよ! たぶん…」

「そういうとこさ、綾時そっくりだよね」
「へ?」

湊が笑うので首を傾げる。

自分と綾時くんはそりゃあそっくりだろう。というか湊も奏子もどこかしら綾時くんと似ているところはあるんだし、むしろ似てないとおかしいというか。とにかく何が言いたいのかわからなくなってきたけどそういうことなのだ。いや待てよ? これって遠回しにバカって言われてるのか? いや、そんなまさか。綾時くんも賢いかもしれないし失礼だからその考えはやめにして、とりあえず。

「もしかして…俺の事、バカだと思ってる…?」

「うん」

「マジか…」

まさかの即答にショックを受けた。

「でも嫌じゃないよ。バカな優希の方が好き」

バカな俺の方が好き、というのは湊の紛れもない本心、なのだろうか。

そもそも兄がバカな方がいいってどういう事なのか。些か直球過ぎないだろうか。

「えーっと…それ、喧嘩売ってる?」

「売ってない。変に気を使ったり考え事されるより素の優希の方がまだマシって言ってるの」

「うんん???」

貶されてるのか褒められてるのかよく分からない。

つまり素の自分はバカ、と言っているようなものでは無いのだろうか。なんというか、複雑な気分だ。

「1人だと、優希は変なこと考えるから。それが嫌だ」

「と、言われてもなあ…」

あまり心当たりはない。

そんなに変なことを考えているのだろうか。

「分からないなら分からないでいいよ。僕や奏子がなんとかするし。それが無理なら桐条先輩とか、真田先輩や荒垣先輩がいるでしょ」

そう言われても、何故か安心できない。

なにをどうするのか分からないというのがこんなに不安だとは思わなかった。

自分はそんなに、バカで頼りないのだろうか。

「ほら、また変なこと考えてる。別に優希のことを貶してる訳じゃないから。ただ…心配なんだ。僕らにまだ言ってないことがあるんじゃないかとか、自覚してないだけで無茶してるんじゃないかとか」無意識に顔を顰めていたのか、湊にそう指摘された。こういう所がやけに気になるのは奏子も湊も同じような気がする。

「それはごっちのセリフじゃないかな。俺だって、湊と奏子の事は心配だよ。怪我とか、疲れてるのかとか、隠してない？ 無理、してない?」

湊に聞かれても答えられないものは答えられないし、分からないものは分からない。だから、聞き返してみれば湊はまっすぐこちらを見つめてくる。

「してない。ゴタゴタが起きてないぶん、むしろ調子はいい方。それよりも、メガネとベルベットの扉が見えるようになったことの説明、されてないんだけど」

「それは…」

短く答えた湊に睨みつけるように見つめられてたじろぐ。メガネに関しては何つうに文字が読みにくくなつたから買ったのであつたなにか無茶をしたとかで視力が落ちた訳では無い、はずだ。

突然ベルベットの扉が見えるようになったことについては本当に原因が分からない。

あの後ポロニアンモールにも行ってみて確認してみたらちゃんとあつたし、タルタロスのエントランスでも見かけるようになった。ただ、見えて触れられるだけで入ることはできない。

エリザベスに相談してみても首を傾げるだけで何の役にも立たなかったし、自分でも心当たりがないので答えようがないのだ。

「メガネは……純粋に視力落ちたなーって思ったから作ったただけだよ。直前に無理とかはして無いから本当にたまたまなんだ。ベルベットルームに関してなんにもわかんなくて俺でも困ってるから、原因が分かるような情報をエリザベスやテオドアとかに貰ったら教えて欲しい、かな」

何も隠さずありのままを伝える。

あまり、問われるような視線を送られるのは好きじゃない。

しかし湊は気にしていないのか少し考えて自然に目を逸らした。

「……そう。調子悪いとかあつたらすぐ伝えてくれていいから」

「うん。すぐ言う。ある意味湊やみんなが疑心暗鬼になっちゃってるのってこれまで俺がやってきたことの積み重ねだし、信じてもらえるか分からないけどさ」

「『しんどい』よりも『大丈夫』って言葉の方を僕らは信じてないけどね」

チクリとそんなことを言われて下を向いて黙る。こうなると、大丈夫という言葉よりも別の言葉を使った方が良さのだろうか。そういうことでもないか。

「ところでさ、湊の言ってた……本を出すって言うの、どんな感じで出すの？ 小説？ 絵本？」

これ以上自分のことについて話していても意味が無いように思えたので気を取り直して顔を上げて話題を逸らす。本を出すにしてもだいたい形が決まっていなければ難しいだろう。

だからそう聞けば湊は迷いなく口を開く。

「絵本かな。奏子も言ってたんだけど、小説や詩とかだと短すぎるからそれが一番良さそうだって。イラスト描いてくれる人募集中。いなければ僕らで描くけど」

「へー」

ちゃんと形はもう決まっているようで安心した。

自分が口出しする必要は全く無さそうだし、手伝うとは言ってもこれならふたりだけでも上手くいくのではないだろうか。自分があてにならないということからは目を逸らすとしても。

「そうだ。優希もなにか描いてみてよ。もしかしたら採用するかもだし」

「良いけど…期待しないでね」

唐突に湊に枝を手渡されたので、地面の砂にその枝を使って絵を描く。イメージするのはビーグル犬だ。

その絵を見た湊が固まって顔を顰めた。

「え…なにそれ……………うーんと……………カバ……………」

かなり間をおいてカバかと訊いてきた湊にこちらも怪訝な顔をす。どこからどうみたって…ちよつと四角いかもしれないけど…ちやんと…可愛い犬の絵だ。…たぶん。

「なにつて…犬……………ビーグル犬だけ……………」

「ええ…？ 優希、才能あるね。想像以上だ」

なんだろう。褒められた気がしない。

そういえば園村さんもカウンセリングの時に描いた絵を苦笑いで見つめていたし自分には絵心が全く無いのかもしれない。

「でも独創的で味がありすぎるから不採用」

「ですよー」

オブラートに包んだ湊からの不採用通知を貰い、笑う。

普通に下手くそだから無理、でいいのにこういう所に気を使うのが湊が人気者になれる理由なのだろう。

いや、そう言える相手を見極めているというか。

伊織相手なら即座に「うわ下手くそ」で終わらせていたはずだ。

ただ、自分はたまにこういう所に距離を感じることがある。いや、伊織と同じような態度をしてくれという訳じゃない。けれど、なんだろうか。

少し寂しい、気がする。

「どうしたの？」

「んー…いや、自分の絵が素晴らしすぎて見惚れてた」

誤魔化す。

さつき感じた寂しさは、気のせいだ。

十分自分たちは仲がいい兄弟なのだと湊から仲を深める云々と言

われた時も思っていただろうに、どうしてその仲を不安がっているというのか。

自分たちは兄弟だ。

その前提だけで十分で、仲の良さは足りているだろうに。

この距離感は、適切だ。そうに決まっている。

だからこれ以上相手のことを知る意味なんてない。深入りする必要も無い。知らなくていい。聞かなくていい。見なくていい。だって、これで十分なのだから。

「さみしい」(12/12)

「どうしたの?」

「んーいや、自分の絵が素晴らしすぎて見惚れてた」

そう言つて目を逸らした兄を見て、湊はなにか兄が誤魔化したのではないかとすぐに気がついた。ただ、いつもの曖昧な笑みではなく不安げな顔をしているので誤魔化しているのが無自覚にも思えて追及することができない。

双子の姉である奏子ならば隠した兄の本心を察することが出来ただろう。だが、湊にはわからなかった。

なんとなく、何かを誤魔化したのではないかと予測をつけたただけだ。

「…そう」

「……………」

一瞬言葉に詰まつてから返事を返すも優希はうわの空、と言つたように不安そうな顔のままぼんやりと湊の手を見つめている。これでは返事が聞こえていたかも怪しい。

そこで、ふと湊は幼い頃に聞いた母の言葉を思い出す。

『お兄ちゃんがね、不安そうな顔をしている時は置いていかれないか怖がつてるの。だから、湊と奏子は早く遊びたいかもしれないけれど一緒に遊ぶならあまり走れないお兄ちゃんのことを置いて走っちゃダメだからね』

思い返せば確かに、幼い頃の兄はあまり早く走れなかった。

だから元気の有り余っていた湊と奏子は遊びに行く時によく急いで兄を置いて行ってしまうことがあったのだ。

その後ろを不安そうな顔をしてせえせえと息を切らしながら必死に追いかける兄を見かねた母が、湊と奏子にそう言い聞かせたのだつた。

もちろん、手を繋いで走ることも多かったがそれはもっと幼いき、よちよち歩きするときかそう注意されて以降の話だ。

(もしかして、優希は——)

寂しいのだろうか。

なぜそう思ったかは分からないが湊はそう感じた。

「……ねえ、いま寂しい？」

「え……？ あ……わ、わからない……」

問えば、一瞬はつとするが不安げな顔のままに首を横に振る。

その目に涙が溜まっていることを、優希自身は気がついていないのだろう。

「わからない……？」

こくり、と頷いた優希が目を閉じる。

その拍子に溢れた涙がぼろりと零れた。

「ほ、本当に……そう思ってるのか、わからないんだ。さみしいとか、つらい、とか。だって、気のせいだろ？ それに気の所為にしないと、苦しい、から……立てなくなるから……それで……俺は……」

支離滅裂だ、と湊は思った。しかし、これが紛れもない兄の本心なのだともわかってしまった。

ようは、誤魔化しているのだ。

寂しい・辛いと自覚してしまえばとことん甘えてしまうと優希自身が思っているために、感じた事を封じて無かったことにしようとしている。

だから、『わからない』と『気の所為にしなければならぬ』という矛盾した言葉がでてくるのだ。

本当は、そう感じてしまっていることに自分でも気がついていない。

けれど認められないから逃避のために自分に自己暗示をかける。

奏子や湊自身もそうだが、兄だって完璧超人だとか鋼の心を持っている訳では無いのを分かっている。人並みに傷つき、嫌なことは嫌だと思う。そんな普通の心しか持っていない。はずだ、と湊は眉を寄せながら考える。

だからこそ、この繰り返しの中でごく普通の親から愛されている人間としての心を持っていた優希の心は歪み壊れかけているだろう。

そこまで考えて納得した。

優希が自身を愛せないのはそこから来ている。

愛されていたおかげで臆病で穏やかな気性を持ち、そのせいで誰に当たることでもできず、呪うことも出来ず、全ての矛先を外には無く内に向けてしまったが故に狂って麻痺してしまった。

もしくは目に見える形で呪ったとしても分からないほどに軽い段階で内に秘めてしまったかのどれかだろう。

順平が5月に言っていたとおり、兄は確かに臆病者だった。けれども戦うことから逃げるのではなく、怖がりながらも立ち向かう強さを持っている。自分へ向けられるものや心から目をそらす癖に運命からは目を逸らさず、あろう事か噛み付こうとしている。

大事なものを守るためだけに自分を顧みずに怯える心を奮い立たせ、ここまで歩いてきたのだ。

あくまで予測だが、おおよそ当たっているだろうという謎の確信が湊にはあった。

なぜなら、4月になるまでの兄はこんなに歪では無かったのだから。

そう、大きな違和感をこれまで感じられなかったが三上家で暮らしていた頃も転校してから今年の3月までも少なくとも優希はここまですべて情緒不安定では無かった。親戚が来た時を除くが。

優希の話の通り、4月6日が繰り返しの起点だとするなら優希の精神は終わった直後からその日に飛ばされる訳だ。

ならばろくにケアもされずにズルズルと引きずることになるだろう。湊と同じく。

だが、湊はまだ9回だ。そのうちの1回は何かがあったのか記憶が無いが、十分辛いと思うものばかりだ。

そんなものを、数え切れないほど繰り返しているとしたら。その分の痛みと苦しみ、無力感を味わったのだとしたら。

このように壊れてもおかしくは無いし、救えなかった無力感が積み重なり自己肯定感は限りなく低くなる。

『繰り返す』について話した時に言っていた口ぶりからして最初から信じて貰えないだろうと諦めていた湊とは違い、最初は誰かを信用して優希は未来のことを話してしまったりしたのだろう。だが無慈悲

にもそれは己か弟妹の死で返ってきた。

だからこそ以降は繰り返しにおいてのレッドカードを出されかねないために何も話すことが出来ないまま秘めた上に、「元々自分は居なかった」などと自身を否定したような形で認知していれば尚更本心からの「仲間」は居なかったのだろう。

優希はわからず屋ではあるが『わかっていなくていい』のではなく、本当に『わからない』ようになってしまったのだと湊は気がついてしまった。

まずは、その認識を変えないといけない。

湊が幼い頃の兄との再会で変わり、救われたように。

「優希は、本当はどっちだと思う？ 寂しいか、寂しくないか」

「え……あ、えと……俺は……」

「べつに、なにも悪いことは思わないししないから遠慮しないで言うて」

言葉に詰まる優希を促すが、そのまま俯いてしまう。なにか、アップローチを間違えてしまった？ と湊は内心で不安になる。

湊にとっても兄は難しい。

後輩としてだったり弟として甘えるなら、簡単だ。好きなだけ優希は兄や先輩面をし、甘やかすだろう。

だが、そうではなく三上優希というひとりの人間として相對するのが酷く難しいのだ。

何も見えない。良かれと思ってかけた言葉がこうして全く響かなかったりする。

かと言って放つたらかしのすれば身を投げ出し、触れ過ぎればやりわりと、しかし明確に拒絶される。

未だ、湊には優希に対する的確な対応がわからなかった。

「……もし、か、すると……」

俯いたままの優希の口から小さく、そんな言葉が零れた。

そのまま湊は静かに待つ。

「さみしい、のかもしれない」

消え入りそうな小さなその声ははつきりと湊の耳に入った。

「湊も、奏子も…俺に…遠慮しないでほしい。さみしい。置いていかないでほしい。…でもわかっている。みんなが遠慮してるんじゃないやなくて、俺が…にげてるだけなんだ…」

もごもごとそんなことを吐き出し、優希はその言葉どおりにずる、と音を立てて腰を上げずにベンチの上で湊から逃げるように距離をとった。

醜い本心を見られたくない、とでも言いたげに。

「ごめん…やっぱり、さっきの無しにして。俺には、わからないから…」

言葉を撤回し、優希はそのまま黙り込んでしまう。

対する湊もその通りにした方がいいのか深堀するべきなのか、悩んでいた。

この対応を間違えれば優希の心を深く傷つけかねず、1発でこの関係は壊れてしまうだろう。しかし答えねば進展はない。意を決して口を開く。

「…素直になってみる、とか。意外と寂しいとかそういうことを正直にみんなに言ってみたらウケが良いかもよ。奏子や桐条先輩とか喜びそう」

「…素直に、なる…」

小さくオウム返しされた言葉に湊は頷く。まずは拒絶されてない事にほっと胸を撫で下ろした。

「そう。優希ってわざと真田先輩や岳羽や山岸、順平とかと距離とってるでしょ。アイギスにもそうかな。自分で逃げてるってわかってるんだし寂しいなら優希から遠慮するのをやめてみたらってこと」

恐らく、湊だけではなく特別課外活動部の全員が優希が距離をとっていることを知っている。

遠慮や拒絶にも似たそれは、一見優希が普通の対応をするために気づくことができないものだ。だからこそ、クラスメイトは気がつかなかった。

だが寮生活は違う。生活を共にするためにクラスメイトやただの知り合いよりも長時間優希のことを見る機会が多い。しかも生死に

関わるような戦いを共にしていればなおさらだ。

そのおかげで、8ヶ月ほど経てば歪みは分かるようになる。ただし『これまで』はその距離感故に本人に問えなかったのだと湊はわかっている。

優希^兄は、揺らいでさえいなければ追及をうまくのらりくらりと躲すからだ。湊も『これまで』、何度もきつかけのようなものを作ろうとはしていた。だがその違和感の正体が分からなかった。

過去を知らなかったために。しかし今はそうではない。変えることができる。

その心が開かれているため距離は確実に詰められるはずなのだ。あとは、優希自身が歩み寄るだけ。

「目指すはメテイスとか…ムカつくけどタカヤとかに對する距離感でいいんじゃない？　まずは僕や奏子で練習してもいいしさ」

優希の反応は11月に変だった時と似たようなものだった。反論や否定もせずに素直に湊の話を聞いている。が、ふいに目を逸らして口を開いた。

「…でも、」

「遠慮しない。優希はいつも僕らにそう言うでしょ。それと同じ」
その言葉に遠慮の気配を感じた湊はすぐに言葉を上書きした。

兄に長く喋らせるとそのペースに吞まれてしまう。いつの間にか曖昧にされて、流されてしまいうに違いない。

「……」

「…同じなんだ。優希が僕らに遠慮してほしくないって思うのと同じで、僕らも優希に遠慮してほしくない。たったそれだけのことなんだ」

返事はない。

迷うように視線が彷徨っている。

「すこし、考えさせてほしい。まだ俺には色々難しい、から…」
ややあって、そんな返事が返って来る。

湊もそんなすぐに心を開けるとは言っていないため、そんな返事が返ってくることもくらいは予測していた。

ただ早速「難しいから」と理由を言えているのは既に変わっている証だ。

以前なら「大丈夫」などと色々なそれらしい理由をつけてはぐらかしていた。それがなくなっただけ進歩だ。

「わかった。じゃあ、今日はもう帰ろう」

「…ん…」

立ち上がり、いつもの自分と同じような返事をする兄を見る。

優希はしんどければしんどい時ほど口数が少なくなる傾向が顕著だ。逆に湊は兄がそんな風だとよくしゃべるようになる。滅多にながが奏子が体調不良などで口数が少ない時も同じく湊が優希が喋る。自分達三人はきつとそれでバランスをとり、補い合っているのだからと湊は何となく思う。

—— Rank UP!

XI “アーキタイプ原型”

三上優希 Rank 5 ↓ Rank 6

“原型”のペルソナを生み出す力が増幅された!

「…!」

もう驚きに声を上げたりしないが順調に『コミュ』は進行しているらしい。

これまで一切進まず、途中までニャルラトホテプの手の上で踊らされていたにしてもこの前から普通にコミュが進んでいるというのはなんなのか、気がついていないわけではない。

恐らく、条件は『12月2日に優希を諦めさせる』ことだ。

いや、『1人やるのではなくみんなの力を借りなければいけないと心を開く準備をすること』なのかもしれない。それこそがこのコミュの真の始まりであり、変化したきっかけなのだ。

優希はなんとなくだがそうしようという傾向を見せている。無自覚なのだろうが、歩み寄ろうとは考えているように見えた。

全てカダスで見られ、やろうとしていたことを阻止されたために

『諦めた』と表現してもいいのかもしれないが頑なだったそれが今、少しだけ緩んでいるのは確かだ。

あと少し。あと少しははずなんだ、と湊は思う。

きつと兄はまだ死ぬことを諦めていない。消えたり死んでしまうことに対し抗おうとは本気で思っていない。

“人として生きること”を諦めてしまっている。それを変えられれば、きつと。

そんな望みを湊は持っていた。

夜

ラウンジ

夕食を食べ、ラウンジでくつろぐ湊に順平が今日も惚気を漏らす。

やれチドリが可愛かったのだ、やれチドリにこの話をしたのだ、最近は会いに行けば寝るまでその話ばかりだ。

「つて、ワケだよ。チドリがオレの為に絵をかいてくれたんだよ！」

「へー、良かったね」

それを湊は受け流す。

と、ふいに視線を感じてそちらを見れば優希が観察するようにこちらを見ており、湊に見ていると気がつかれていると分かったのか即座に視線を逸らして手元の雑誌に顔を隠す。

(…とても怪しい)

持っている雑誌が逆さまだ。どうせよく見ずに無意識に手に取ったのだろう。

「……」

それをジト目で見つめる。

順平と己の距離感を参考にしてもらっても困る。と湊は言いたかった。というより、順平の真似をしてバカな真似をしてほしくなかったというべきか。

いまの優希は誰かを真似しろと言われたら迷いなく完璧になりきるだろう。

一度スイッチが入れば止められない。

下手をするとこの前の変わり身に近いことをやらかしそうだったので、絶対に湊はそれを悪用できるとしてもしたくなかった。

あんなものを使われたらそれこそ優希という存在の中にある『迷い』すらなくなつて誰にも止められなくなる。

「オレっちとチドリの話聞いてないのかよ湊おく…つて、三上センパイなんかキョドってんな、珍し」

ようやく湊は話を聞いていないのだと気がついた順平が湊と同じ方向を見やり、挙動不審な優希を見つけてそう呟いた。

順平から見ても今の優希は奇行をしているように見えるようだ。

原因は、夕方のあの話だ。

順平と湊の距離感がそこそこ近いためにそれを参考にしようと思察していたのだろう。

そういう変に空回りしている真面目なところが兄らしいと言うべきか。

中学の時にはその気質のせいなのか前日に急遽助っ人を頼まれた時などは食い入るように助っ人に入る予定の部活の練習風景を見ている事があったのだ。

そして、次の日には即戦力として貢献するということが何度かあった。

おかしいと思っていたのだ。

優希は確かに自分や奏子と同じく直感で物を扱うタイプだ。

けれど一点集中型の奏子や直感的にどれも上手く扱える湊とは違い、優希は何も知らされないままに使えと言われると困惑するタイプだった。

困惑して、その上である程度使えはするものの覚束無い。頼りないと言うべきか。

ただ、他に誰かが同じものを使っていた場合。それは変わる。それを見、覚え、適応する。

優希はそれが得意に違いないと今更気がついた。

そしてその特性が優希自身の在り方によるものだということにも。

優希は常に、無意識に誰かをミラーリングしているのだ。だから距離が空く。

どちらかから歩み寄るしかないのに。

「そういうえびさ、順平は優希が部活とかの助っ人してるとか聞いたことある？」

切り出す。中学時代はあれだけ引つ張りだこだったのだ。

こちらでも呼ばれてないはずがない。そう思った。しかし今は受験もあり強制的に何かの部活に参加する必要のない3年生だからか、その手の話題は全く聞かない。だからこそなにか知ってそうな順平へと話を振った。

「あー…そういうや、1年の時に弓道部の助っ人に出てたつての聞いたこと事あるぜ。この話ならオレよかゆかりっちの方が詳しいんじゃないかな。ゆかりっち〜！」

順平がダイニングテーブルに座ってホットドリンクを飲みながら勉強をしていたゆかりへと声をかければ振り向いてから立ち上がって寄ってきた。

「なによ？ 何の話？ まさか、卑猥な話じゃないでしょうね？」

「ンなわけねーつての！ いやな？ 湊が、オレらが1年の時にあつた三上センパイが弓道部の助っ人に来た話聞きてえつて言うからさ。ゆかりっちなら詳しく知ってるっしょ？」

「あー…あれか…うん、知ってる」

遠い目をしたゆかりは挙動不審な優希が見えてないのか気を取り直して口を開いた。

「有里くん、あの時の話聞きたいんだよね。とは言ってもあんまり話せることないんだよね。ちょうど他校との練習試合があったんだけど急に家の用事が入っちゃった2年の先輩が休むことになったから、三上先輩がその先輩の紹介で助っ人というか代理で来たつてだけで。公式の試合とかでもなかったし」

そう話し出したゆかりだが、微妙そうな表情をしている。

さつと、逃げるように優希が席を外して階段の方へと小走りでも音もたてずに駆けていく。逆さまになった雑誌を持ったまま。

聞きたくない話だったのだろうか。

「三上先輩、その時に『自分は弓とかあまり触ったことの無い初心者だ』って言ってたんだけど、前の日の放課後にその代わる予定の先輩の練習をちよつと見て帰って次の日来たら全く同じ構えをして真つ直ぐ的に矢を当てたの。それも全部。1度も外さずに。もう驚いたって言うか……なんていうか、あんまりにも出来すぎて嫉妬したって言えばいいの？ ムカついた、のかな」

複雑な表情のまま、ゆかりは顔を下げた。

湊の予感も当たっていたらしい。それと同時にそう思っても仕方が無いとゆかりに同情した。意識してしまえば簡単に模倣できる兄が異常なだけであり、見本が無ければ本当に人並み程度かそれ以下に留められてしまうことに問題がある。どうやっても絵が下手なのが特にわかりやすいだろう。

優希自身の申告は何も間違っておらず本当のことであり、しかし変に自信が無い所から恨みを買いやすい。

ただし、殆どは内に留められる程度の軽微なもので、優希自身の人良さもあってかわざわざ助っ人に来てくれているという負い目が相手にあるため問うに問えずゆかりのように内に秘め続け苦手意識ができてしまうようだ。

「ろくに練習もしてないはずなのになんでその時のエースだった先輩と同じ動きができるの？ 私だって何度もその先輩の動きを見ているのにどうしてちよつと見ただけの三上先輩が……とか、初心者だったのは嘘で、私たちを馬鹿にするためにあんなこと言ってたのかな、とか。正直、それからちよつと近寄り難いカンジって言えばいいの？ そういうのはあったかも……」

そんな疑念があったからこそ、ゆかりはどこかで人一倍優希に対して疑いの心を持っていたのだろう。

それがカダスで確信に変わり、爆発してしまっただけの話だった。「でも、有里くんや奏子ちゃんを見てたらそりゃ三上先輩がああなのも納得というか。まあ……そうだよねって感じ。今は理由もわかってるし嫉妬とかそういうのはないかな。どう？ こういうので良かったか？」

た？」

「うん。ありがと、岳羽」

「いいの。なんか、私もこのこと愚痴りたかったし。ずっと溜めてたから話せて良かった」

スツキリした顔で笑うゆかりに先程までの陰りはない。

小さなことだが確かにしこりの様なものを残していたのが湊の話がきっかけで打ち明ける事が出来、過去のこととしてきちんと消化することが出来たのだろう。

「それに三上先輩、美鶴先輩とお似合いだし。：色んな意味で。だから私、応援してるんだよね。順平、もし邪魔でもしたらこうだからね」「しませんません！ オレにはチドリも居るし馬に蹴られたかねーもん！」

ビツ、と親指を立てた拳を横にし、首を切るような仕草をする。

その仕草に順平は青ざめ、首を横にブンブンと振ったのだった。

「てか私はそういうの、まだなんか良いやって感じなんだよね。最近の三上先輩と美鶴先輩を見てるだけでおなかいっぱいっていうか」「あー：なんとなくわかるわー」

順平が遠い目をして相槌を打つ。

初々しい距離感で楽しげにラウンジで話すふたりは以前の比では無いほどにイチャイチャしている。ように見えた。糖分マシマシ、というやつである。順平自身もチドリと同じような会話をしているのて人のことをいえた義理ではないが。

「でも、有里くんになら私……構わないから……」

僅かに顔を赤らめ、小さな声でそう告げたゆかりに湊は応えるつもりはなかった。

バレンタインデーのともんでもないブッキングを避けるために湊は本命のアイギスひとり決めていた。なのでコミユがMAXであろうとも恋愛的なあれそれのお付き合いはしていない。風花に対しても他のコミユの女性メンバーに関しても同じだ。

美鶴は言わずもがな優希に首ったけなのでそもそもそういう選択肢すら出ず、優希についての相談事に奏子と共に乗るくらいだ。それ

でそれぞれのコミュが進んでしまうのだから驚きである。

黙っていた湊がゆかりに伝えるつもりがないと伝わったのか、はたまた別の事情か、ゆかりはすぐに表情を変えた。

「その…何とは言わないけど。…えつとごめん、やっぱ忘れて」

最後に思考の端にエレベーターガールの選択肢も浮かんできたが咄嗟に振り払い、微妙そうな表情になったゆかりの忘れてという要望に対して頷いた。

微妙な表情をしていたゆかりであったが、ふと何か思い出したかのように「あ」と声を漏らすとまた口を開く。

「そういえば助っ人に来た時の三上先輩ね、助っ人になること自体は承諾してくれたらしいんだけど、最後までうちの先輩に『自分に頼むのは止めた方がいい』って言ってたみたい。…なんでなんだろう。あんなにやれるんなら普通、そういうこと気にしないと思うんだけど」

ゆかりが首を傾げる。

恐らく、ゆかりのようなタイプから中学時代やつかみでも受けたのだろう。もしくはそれが発端で休んだ面子に迷惑がかかったか。

助けるために出たのに頼んできた相手の立場を脅かすことになるのを嫌う。

兄はそういうところがある。だからこそ、高校に入ってからにはあまり頼みを聞くことをせず居て、その弓道部の一件ほどしか聞かないのだろう。

中学時代も三年生の夏になった時にぱたりとそれが止んだ。きつと、その時何かあったのだ。

高校で積極的に頼みを受けていないのはその何らかの理由と病気のことがあわさっているからに違いない。学区的な問題で中学と同じ生徒の多い聖エルミン学園にいた1, 2カ月の間だけでも助っ人の噂を聞いてもおかしくないのにそれが全くなかったのは養母以外に隠して行っていたという医者から止められていたせいだ。

ただ、弓道部の先輩とやらはどこで優希が「できる」と知ったのか。そういうことを知らない限り優希に頼もうなどとは思わないはず。

「岳羽は、どうしてその先輩が優希に助っ人を頼んだか知ってる？」

「え？ えーと…確か… 『中学生の時に別の学校の練習を見に行った時に目をつけた。あいつはすごい奴だ！』 って…だから私、三上先輩が元々弓道部だったのに嘘ついてるんじゃないかって思ったの」

湊は頭を抱えなくなった。

月光館学園は意外と他校との交流が多い。奏子が夏に合宿をしに八十稲羽に行ったのもそれだ。

優希自身が中学の時の弓道部に助っ人に来た際にたまたま、その交流行事に来ていた月光館学園の中等部だった件の先輩とやらが優希を見つけたようだ。

ゆかりが見た時と同じことをしていたと仮定するなら、当時からその先輩の目には相当 “できる” ように見えただろう。

そして高校で再会したというのに弓道部にはおらずフリーとなると惜しく見えたに違いない。 “助っ人に来ていた” という前提条件を知らないがために。

それを説明するために湊は首を横に振った。

「…：違う。優希は中学の時、弓道部じゃなかった」

「嘘でしょ？ じゃあなんで居たの？」

「岳羽が見た時と同じシチュエーション。いわゆる助っ人。中学の時の優希は頼まれたら断れなかったから呼ばれたら何でも行つてたよ。文化部は吹奏楽以外行つてなかったみたいだけど、運動部はほぼ全部」

「…：嘘でしょ…」

ドン引きです、と言わんばかりに同じ言葉を繰り返したゆかりは絶句した。

その気持ちもわかるので同情する視線を送りながらも、湊は溜息を吐く。

「べつに、優希は何でもできるわけじゃないよ。誰かの真似をしてるだけ。その場しのぎのやつなんだ」

続ければその限りではないだろうが肝心の優希本人に続ける気がないので意味がない。

何かが得意、なのではなく無理やり「模倣する」から得意に見えているだけだ。

優希自身は菓子作り以外、殆どのことに突出して秀でてしているわけではない——はずだ、と湊は思う。

ただ、菓子作りだけは優希自身が好んでやっている。

それもデコレーションケーキなどのかなり手の込んだものではなく、家庭でも作れるクッキーやパウンドケーキだったりがメインだ。しかし本人は製菓学校に行くほどの興味のあるものではないし手軽に食べたいからやっている、といった感じだ。

食べ歩きも趣味の範疇であるし、別にできないのならしなくても良いと思っっているフシがある。

(……)

よくよく考えれば『たこ焼きが好き』以外のしつかりした優希の情報も知らない。

家族として一緒に暮らしているはずなのに、一方的に優希だけが自分や奏子を知っているような感覚を覚えるのだ。

たこ焼き以外の味の好みを知らない——わけでもなかった。紅ショウガも好きだった気がする。

それを思い出して、湊はほっと胸をなでおろしかけて——いや、まだぼんやりとしたままじゃないかと考え直した。

それ以外が本当に不透明だ。作るお菓子のレパートリーはいつも湊か奏子の好きなものにあわされており、優希本人が好きな味というモノを知らない。

ファッションも基本的なものばかりで奇抜な格好をしないし好みがあるというわけでもない。

好き嫌いはしないしなんでもニコニコとよく食べる。

その相手の距離感に合わせる性質のせいかな嫌いな人間というモノを喋らないので合わない性格の人間が居る、というのも知らない。苦笑交じりの愚痴のようなものは聞けども悪口は聞かない。感情に任せて怒らない。

日常生活を送るうえでの問題も湊が知る限りでは特に起こしてい

ない。

戦いが絡まなければ本当に、ただの『良い兄』なのだ。

反抗期すらないのは兄妹三人共だが。

しかし何か『個性』と呼べるようなはつきりしたものを湊は知らない。奏子もそうだろう。

幼い頃はもつとなにかあったはずなのにそれらしいことを何も覚えていない。

実の両親と居た頃。優希が有里渚だった頃。そして、小学生だった頃。そのくらいまではまだ、優希は個性のようなものがあつたはずなのだ。星や海を見るのが好き、と先日言っていたように、もつと前に何かを言っていた。味の好みだつてもつと何かあつたはずだ。

なのに10年前の事故以降、背伸びをするように優希はそれらをピタツとやめた。それはなぜだつたのか。実験のせいなのか。

『コミュ』はもう半分を過ぎたが、自分と奏子のもつとそれ以外にも連れまわすなりなんなりしているんな面を知っていく必要があるのではないか。目を逸らしていた分、相互理解をしなければいけないのではないか。

そんな気持ちで湊は覚えていた。

「許せない」(12/13)

12月13日(日) 朝

学校に行くわけではないがきちんとした話し合いなので礼服がわりに制服を着て、寮の外で美鶴さんと待っていれば黒いリムジンがなめらかに止まる。車体がめちやくちや長い。

ドラマとかでも中々見ないだろうレベルの車だ。

「……わあ」

「はあ…」

驚く自分と溜息を吐く美鶴さん。あまり目の前の車にいい感情がなさそうなその反応に自分はおや、と思った。

いや、こんなに長くて目立ついかにも高級車ですよ！ と言っているような車に物怖じする気持ちはわかる。というか自分がそうだ。

けれど美鶴さんは乗り慣れているのではないのだろうか。

そんな疑問を覚えながらもすぐに運転手さんが出てきてドアを開けてくれたので座席に遠慮するように座る。座り心地がヤバイ。ふわわだし革張りのそれはぴかぴかで汚れひとつない。汚さないようにしないと、と謎に緊張する。

「これで迎えに来るのはあまり好かん、と言っていたのに…」

座席に座りながらぼそり、と呟いた美鶴さんの言葉に納得する。

どうやら美鶴さんはこの激長リムジンが嫌い、までとはいかないが苦手らしい。自分もこれで迎えに来られるとなれば恥ずかしい気がする。普段、こういうモノが道路を走っていないがために物珍しい視線を向けられるのは美鶴さんであっても恥ずかしいものがあるのだろう。

「それに……わざわざ三上と一緒にの時にこれで来なくとも…」

聞こえていないと思っているのか、唇を尖らせ、小さく唸ってぶつぶつと文句を言っている美鶴さんは可愛い。

自分と一緒にだからこそ、あまり目立った奇抜な車で迎えに来てほしくなかったようだ。

せめて、武治さんが乗っていた普通のリムジンで良かった、とでも

思っているのかもしれない。

そんな美鶴さんから視線を外し、きよろきよろと都会に来た田舎者の如くリムジンの中を観察する。

テーブルに、小型の冷蔵庫だと思われる物体。ワイングラスにワインボトル。天井は普通の車とは違い豪華な照明がきらびやかに輝いている。うん、眩しい。

「珍しいか？」

「そりやあまあ。初めて乗るからね」

キヨロキヨロと見る自分が気になったのか、美鶴さんが声をかけてきた。

こんなリムジンに乗るだなんてこと、自分のような普通の人間は一生に一度もないだろう。

「美鶴さんの方こそ……緊張してる？」

「ああ。していない、と言えば嘘になるな」

短い会話だ。

けれど、それで十分な気がした。緊張しているのは自分もだったし。

武治さんに会う。

それも普通の用事ではなく、大事な話し合いと来れば緊張しないはずがない。

「上手くいくといいいな……」

「そうだね」

不安はある。けれどなるようにしかならないだろうからその不安を抑え込む。不安なのは美鶴さんもだ。だから、自分が不安がっているような顔をすべきではない。あくまでも強気で気にしていないように振る舞わなければならない。

その後は会話もなく窓の外を眺めるだけで時間が過ぎる。

リムジンはそのまま閑静な住宅街に入った。とはいえ、住宅街と言っても東京では珍しいお屋敷が並ぶいかにもな場所だ。

別世界みたいに一軒あたりの敷地が広い。その奥の奥、私道に入ってからさらに時間をかけ、周りの屋敷よりもさらにランクが上の一

段と広いお屋敷へと車は進んでいき、警備員のいる門を通り、大きな玄関の前で止まった。

そしてまた運転手さんがドアを開けてくれたので車内から出る。

「お帰りなさいませ、お嬢様。お久しぶりです」

それを少しだけ藤堂さんに似た雰囲気のあるメイドさんが出迎えてくれた。ペこり、と綺麗にお辞儀をし、そしてまた戻る。

そんなメイドさんに美鶴さんははにかむように表情を緩め、口を開く。

「ふふ、ああ…」

「——はじめまして。お嬢様の御側御用おそばごようを仰せつかっています齊川菊乃と申します」

彼女は今度はコチラに向かって美鶴さんに向けるものよりも険しい顔でお辞儀をし、自己紹介をした。

斎川さんは聞く限りどうやら美鶴さんに近い？　メイドさんらしい。そしてやはりというかなんというか、こちらに僅かな警戒心を持っていろいろにも思える。

「初めまして。三上優希です」

同じく頭を下げ、無難な挨拶を返しておく。飾った言葉や自分たちがどうという関係なのか、というのとはここでは必要ないだろう。

「菊乃とは同じ年だな。幼馴染でもある」

「へえ…」

自分たちと同じ年なのにメイドさんとはこれ如何に。いや、御側御用というのはメイドさんに使う言葉ではなかったような気がする。

いろいろ気になったが聞かない方が良いこともあるだろうと口を噤んだ。

そのまま屋敷内へと案内され、書斎まで通される。どうやら齊川さんは部屋までは入ってこないらしい。

「旦那様、お嬢様とお連れの方がいらつしやいました」

齊川さんが扉をノックしてからそう言えば、「入れ」と短い武治さんの声があった。

「失礼します」

「お邪魔します」

部屋に入り、美鶴さんとふたりで礼をする。

「ああ」

とだけ武治さんは返し、こちらを見た。

「まず、ぶしつけだが最初に言わせてもらおう。三上くん——済まなかった」

「……」

「どのことを、と訊く気にはなれない。許す気にも、なれない。けれど、

「そういう話はまた別の時にしてもらえませんか。今は、加害者や被害者といった立場の一切を無関係にして話がしたいんです。負い目を感じて甘い判断をされるのも俺としては嫌ですから」

極めて冷静にそれを遮断した。

思ったよりも自分の声は低く、冷たかった。そのことにまず驚く。記憶を取り戻してから武治さんに会うのは初めてだからか、それとも。

「…そうだな。だが、これまでの経緯は聞いている。全てな」

「そうですね。ならアイギスの処遇や部の活動にあたっての援助やバックアップもこれまで通り、ということでもいいんですね？」

自分としては特別課外活動部の活動や生活が阻害されなければどうでもいい。変わらない方が一番いい。

珍しく、頭の中でそろばんを叩くようにもしこれで不利な条件を叩きつけられた場合どうやって有利な情報を引き出そうかという計算ばかりしていた。

武治さんは美鶴さんが居る限りそんなことをする人ではないと知っているのに、何故だか信じ切れないという不信感が浮かんでしまう。

——どうも、自分らしくない。

「ああ。特別課外活動部の活動はこれまで通り行う。それと同時に我々桐条は幾月の資料ときみたちの話から判明した未曾有の相手に本家である南条の力も借りることにした。どこからか情報を得たら

しい次期当主の方から持ちかけてきたからな。やはり腐っても本家。南条は侮れん」

武治さんが話す南条はどう考えても藤堂さんの雇い主らしい。あの「南条のことだろう。」

「だが、直接的な戦いは美鶴やきみたちに任せっきりになつてしまつただろう。我々はその「力」がない事に加え、別のことにいま手を焼いているところだ」

「別のこと？」

「美鶴には殆ど関わりのない事だ。心配するな」

美鶴さんが訝しむように武治さんの言葉を繰り返す。

だが、武治さんはそれを答えるつもりがないらしく美鶴さんの追及を逃れようとする。が、

「きみに、関わりのある事だ」

「――俺に？」

疑問符を浮かべる。

武治さんが手を焼いていて、自分に関係のあること。思い当たる節がないとは言えない。

「倉橋商事の株式の五分の一を相続したそうだな。そして、会長の血族ともいえる。さらに、そんな子供を知らなかったとはいえ実体として扱っていた。そのことに加え美鶴が君と共に居るつもりだ。そのことで今、桐条内で揉めている」

「…まあ、そうでしょうね」

予想通りの答えというか。言葉通りの答えしか返せないというか。そりやそうだという気持ちしかない。

「そして、中にはきみを誘拐しようと思つた者もいた」

「は…?」

「は!?!」

美鶴さんとふたりで素つ頓狂な声を出した。

どうして自分を誘拐しようなどと思つたのか、何故その発想に至つたのか、理解に苦しむ。

自分を振つても打ち出の小槌のように金は出てきたりしない。血

と吐瀉物と悪魔は出てくるかもしれないけど。おえー。

「どういうことなのですかお父様?! み、三上を誘拐?! ふざけているのですか!」

「無論、未然に防ぎはしたが諦めてはいないようだ。今、我がグループの中には幾月の裏切りによる混乱に乗じ、私の意向を無視し犯罪紛いの事をしてでも三上くんを取り込み、利用しようという輩が居る。保有している株式の多さというのもあるが、三上くんがもし倉橋の会長となり業績を上げれば我がグループの脅威以外の何物でもないからな」

「えええ……」

全部、予測でしかないのに誘拐計画まで立てるとかヤバすぎではないだろうか。桐条も一枚岩ではなかった、ということだ。そりやあそうだ。幾月なんて裏切り者がのさばれるのだ。

一枚岩でなくてなんになる。

本来、どの角度から見ても桐条グループからすれば自分は目の上のたんこぶだろう。それがそうではないのはひとえに武治さんの人柄と、自分が美鶴さんの味方でありペルソナ使いだからだ。

けれど最悪闇討ちとか暗殺とかされないだろうかと心配になる。そうなればシュブニグラスに対抗できなくて即滅びが来て終わりだけども。

考えれば、素直に自分と美鶴さんがくつついた方が安泰なのだと思うのだけれど、そうはいかない何かがあるのだろう。だからこそ、こんな問題が起こるのだ。

「その上で本題に入るが——単刀直入に言おう。きみに娘をやることはできない」

「ですがお父様……」

自らは断られたことよりも桐条のゴタゴタにドン引きしており、美鶴さんは食い下がる。

そんな重々しい空気の中、武治さんが美鶴さんの言いかけた言葉に被せるように口を開いた。

「駄目だ。いいか美鶴、何度言われようとそれだけは許可することは

できん」

言い聞かせるようなその声は低く、重かった。

自分からすれば「まあ、そうだろうな」という気持ちがあるので武治さんの気持ちも分かる。

自分は、勝手に巻き込まれた桐条内のごたごたを差し引いてもかなりの問題物件だ。

まず身体以外人ではないし1月末には死ぬか消えるかする。

それがなくともあの倉橋黄盛の血縁者で、株式やら諸々を受け継いでいるために問題まみれ。

オマケにいまは病弱と言っても過言では無いし決戦の後にも生き残れたとしても身体自体の寿命は無いに等しい。

そして言い方は悪いが庶民の出だ。上流階級のマナーもへつたくれもない。

ないない尽くしのこんなやつに、誰が可愛い娘を嫁がせたいというのか。

でも、それでも。美鶴さんが1月31日までだとしてもこんな自分が居たい、と思ってくれているのなら逃げるわけにはいかない。

「なら、あの元許嫁よりもお金があつて素晴らしくて、俺よりなんかよしも凄くて、美鶴さんをととも大事にして、美鶴さんが見た瞬間に俺なんかを忘れて一目惚れするような人を用意してください。それができないなら俺も引くつもりはありません」

息を吸い、そして吐く。

「認めてもらえるまで何度でも、美鶴さんとうこうして話しに来ます。電話だつてします。外堀だつて埋めます。最悪、美鶴さんが望むなら、攫つて俺だけのものにします。倉橋だろうが何だろうが、俺に利用できる手段を、なんでも使います」

なんでもしてやるぞ、という脅しのような自分の言葉を受け、武治さんが苦々しい顔のまま口を開いた。

「…諦めきれんと見える。ならば無謀な条件でもつけるか。…三上くん。きみの保有する倉橋商事の株、全てを桐条へと譲渡するならば、美鶴との事は考えないことも無い」

「えっ…」

「そんな、お父様！」

武治さんの出してきた条件に、目を見開く。

美鶴さんが悲痛な面持ちで叫ぶがこちらとしてはむしろ願ったり叶ったりというか。桐条ならそんなじよそこらの有象無象には負けないだろうしそんなことをしていいのなら喜んで手放すけれども。

「——良いんですか!? 相談をするのでこの場でちよつと知り合いに電話させてもらっても?」

「あ、ああ…」

「ありがとうございます—」

食い気味に喜んで見せればそれにたじろいでいるような武治さんから許可を貰い、携帯を取り出す。話し合いの途中で電話など、いつもなら言語道断なのだけでも緊急なので許してくれるだろう。

今ちようど許可は貰ったし。

「!?」

思考停止から回復したららしい美鶴さんがぎよつとした顔でこちらを見つめてくる。恐らく「正気か!」とでも言いたいのだろう。

正気も正気。己は素面だ。酔ってないし血迷ってもいない。

心配させないためにニツコリと笑いかけておく。

そもそも自分は倉橋商事の会長になんてなりたくないしあんな元許嫁と繋がりがたくもないし経営者なんて柄じゃない。株も増やそうかと思っていたけど増やせる自信はないしそれで全部無くしていれば意味が無い。かと言って、肥やしになるのも勿体ない。

ならば、ちゃんと運用できて力のある人の手に渡った方がもつといいに決まってる。自分の絡んだ物々しい計画が練られているのならなおさら。

それも信用のおける人で、悪いようにはしないと分かっているのなら。そしてこんなものを渡して美鶴さんと結ばれても良い、と許可が貰えるのなら安いものだ。

最悪、その倉橋の力を利用してよつと思っていたがそんな事をしないで済むならその方が何倍もいい。

登録したアザミさんの電話番号を押して、電話をかける。

昨日の今日だが3コール目にアザミさんの声が聞こえてきた。

「もしもし、アザミさんですか？ あの、話があつて。今大丈夫ですか？ …良かった。…相続した株の事なんですけど、桐条に譲渡してもいいですか？ …はい。あ、わかりました。ありがとうございます。それじゃあまた」

結論はすぐに出た。

それはもうさつくりと。

アザミさんは、「アンタが渡したいなら好きにすればいいよ。桐条なら他も手出し出来ないからね」と言ってくれた。

ただ、よく考えるように、とも。

脅された訳でもないし、無理やりという訳では無いのでこちらに抵抗はない。

言い方は悪いがこんなもの、桐条に押し付けてしまえば良かったのだ。そうすれば自分も奏子も湊も、養父母も要らぬ争いに巻き込まれて困ることは無い。

「渡したら、考えてくださるんですね？ いいですよ。許可も貰えましたし、渡します。全部」

そう言い放てば武治さんは有り得ないものを見るような目で見てくる。

「正気かね…!？」

「俺には過ぎたものですし。俺が持っていて誰かを不幸にするくらいならそちらが持っていた方がよほどいいと思っただけです」

「……」

美鶴さんと同じようなぎよつとした顔をした武治さんは、黙って話を聞いてくれている。

「だって、そうでしょう？ …こんな死にかけの子供が持っていたとしても何の役にも立ちませんよ。俺が死ぬ前に株を手放せて、家族に迷惑がかからない上にそれで美鶴さんと一緒に居られるなら、安いものです」

むしろ面倒事を押し付けてごめんなさい、とは思っていても言わな

い。

欲しいと最初に言ってきたのはあちらなので、こんなことを言ったら逆に失礼だろう。

「そうか…きみの考えはわかった。だからこそ、止めておこう。済まなかった、きみを試す様なことを言つて」

「お父様…」

突然、神妙な面持ちになった武治さんが頭を下げた。

こちらとしてはなにがなんだかわからない。どうして武治さんが頭を下げたのか。止めるつてなにをなんだ。

「頭を上げてください！ あと、よく分からないので説明が貰えればとてもありがたいんですけど…」

あわあわと慌てながらそう言えば、困ったような顔をして顔を上げた武治さんが口を開く。

「……冗談だ」

「へ？」

ぽかん、と口を開けてマヌケ面を晒す。

じょうだん。冗談。…冗談!?

つまり、からかわれていた、ということなのだろうか。

一体、何処からどこまで。

「きみの保有する株式が欲しい、と言ったことを含め、先程までの話の全て」

脳に言葉が入ってこない。いや、入ってきてはいるが理解が追いつかない。

狼狽えて、視線がきよろきよろと美鶴さんと武治さんの顔の間を往復する。

「え？ え？ じゃあ、俺は駄目つて言うのも…」

「それも含めて、全部だ。妻の英恵はなえから説得されてな…美鶴がこうも必死になっていれば認めん訳にもいかんだろう。だが、桐条内部できみを害そうとする怪しい動きがあるのは確かだ」

つまり、最初からこの話し合いは結果ありきの茶番だったということなのだろうか。

自分も美鶴さんもめちやくちや緊張しながらここに来たのに、すべて武治さんの掌の上だったと。

認めて貰えないとばかり思っていたので驚きしかない。ついでに自分を誘拐云々も冗談だったりしないかと思っていたがそうではなかった。残念だ。胃がキリキリしてきた。

「ただし、きみが生半可な想いで美鶴と一緒にになりたいなどと言っていた時は妻との約束を反故にし許可しないつもりだった。だが先ほどの言葉を聞いて確信した。きみは自らの死後のことも、考えてしまっているのだな。」

：短い間かもしれないが、最期まで美鶴を頼む。

そして、済まなかった。きみやきみの家族の人生を狂わせたことも、きみがそんなことになってしまったのも、心を壊すほどに途方もない苦しみを与えてしまったのも、全ては桐条の罪だ。あの当時は私のしたことが、美鶴の幸せを壊すかもしれない、などと思いきりなかっただろうな……孤児は孤児、身寄りはなく、美鶴に何ら関係ない存在だと……きみがもし本当に孤児だったとしても、他の誰でも、粗末に扱っても良い命など、どこにもなかったというのに」

武治さんは俺も含めた「ストレガの子供たち」のことを悔いるようにもう一度頭を下げた。

武治さんは勘違いしている。実験の後遺症で俺の寿命が少なくなっただけだと思っ込んでいる。

違う。そうではない。俺は元々死んでいて。自分は元々存在しなくて。だからこそ、消えてしまおうし死んでしまおうのだ。

元に戻るだけで、何も罪を感じることはない。俺に対しての後悔は必要ない。

ただ、自分としては本当に美鶴さんとこれからを歩んでいけない事だけが悔しいだけだ。

でもどうしようもない。どうしろというんだ。どうにもできないのなら、残された日々を生きるしかない。

「だが！ どうしようもないことはわかっている。世の中には、どうしようもない不条理なことがある。寿命はその最たるものだ。しか

し、きみには生きてほしいと私も思う。美鶴の幸せのためにも、きみ自身の幸せのためにも」

バツ、と顔を上げた武治さんが心の内を読んだような強い語気でまっすぐこちらを見ながらそう告げる。

大団円になりそうな流れだが、そうは問屋が卸さない。

武治さんの言葉で自分の中でずっと隠してきたものがここで浮かんできてしまった。

それさえなければ、このまま素直に話を終わらせられたのに。

「……なら、謝ってください。誠意があるというのなら。頭を下げるのは、俺じゃなくて、タカヤ達や死んでいった“俺の仲間たち”にです」

横の美鶴さんから、息をのんだような音がした。

「あの時の、皆の遺体をあそこから掘り出して、孤児だったっていうのなら誰一人余すことなく果てまで探して亡くなった家族の墓に入れ、全員の名前を入れた慰霊碑を作ったり、できる限りのことをして隠すことなく表立って供養してください。皆は…みんなは！死ぬ必要なんて無かった！苦しんで死ぬために産まれてきたわけじゃない！無かったことにされるために生きてきたわけじゃない!!! 実験体なら、切り刻むなり探索させるなり、なんでも俺一人で十分だっただろうに!!! どうして!!! みんな、親が居なくなっただって生きれる未来があったのに!!!」

まくし立てるように言い、最後には叫ぶ。

この望みが、桐条に大きなダメージを与えるかもしれないと分かっているにも止まらなかった。

100人近いこどもを実験体に使っていたなどという非人道的なことが公になれば、桐条は立ち行かなくなる。それをわかっていて、自分は望んだのだ。

実験体だったという過去を結局は捨てられはしなかった。

俺やストレガの子供たちは知っていた。

実験体になった子供が死んだとき、子供の遺体は臭いが出ないように研究所の近くに深く穴を掘ってそこに捨て、乱雑に埋め立てられて

いたことを。自然覚醒したことになっていた自分はもし死ねば余すことなく切り刻まれて全部ホルマリン漬けになっていたかもしれないが、「失敗作」の子供たちは違う。死んだらそこまで。

タルタロスから必死に仲間と共に遺体を持ち帰っても大人からしたら燃やすことすら手間と費用の掛かるただの不燃ごみ扱いだ。大人から供え物すらされない。

そして当時立ち入り禁止だったその墓場とも呼べない場所は今はコンクリートで埋められて、常にだれかに踏まれている。

——許せない。

そう、許せなかった。これは、「怒り」だ。

美鶴さんに対して、憎悪はない。実験とは関係がないからだ。

でも、桐条グループは、武治さんは違う。全部ではないが知っている。あそこでなにが起こっていたのか、知っていたのだ。

これまでは自分に記憶がなかった。封じられていた。だから気にしていなかった。

けれど全て思い出してちゃんと自分のこととして感じるようになってからは、見ないようにわざわざ蓋をしていた。

けれど、どうしても耐えられなかった。ぐつぐつと、マグマのように煮えたぎる怒りが呼吸を荒くする。

これ以上荒ぶらないように抑えつけないと美鶴さんの父である武治さんに今にも跳びかかってしまいそうだった。

荒垣くんや真田くんと、ストレガの子供たち。何が違ったというのか。自分には、違いが判らない。

どっちも大事で、どっちも孤児だ。そのはずなのに、どうして彼らは死んだのか。どうして、荒垣くんと真田くんは大事に扱われたのか。

ひとえに、ペルソナに自然覚醒できたかどうかの違いだなんて分かっていない。自然覚醒できたから、大事にされた。出来なかったから、殺された。

幾月や、基本的に俺に変な薬品を投与して苦しむさまを見て笑ったり切り刻んで遊んでいたあのクソ研究者を含む研究所に勤めていた

者にとつては、役に立たない失敗作「ストレガの子供たち」なんてものは大事ではなかったのだ。

けれど、何故と思わないこともない。荒垣くんや真田くんが悪いわけではないのも分かっている。というか絶対に悪くない。たまたま比較対象になっただけだ。

「なんだと…？ 掘り出す…？ その話は本当か？ それはどこだ…!? 今すぐ掘り返させる」

「あんた、そんなことも知らないのか!？」

侮蔑の感情が浮かぶ。違う、こんなこと、ほんととは思ってはいけないのにも思っても止まらない。

前にタカヤから世間話のようなあっさりとした語り口でマイちゃんもアキラも、他の残っていたみんなも自分の代わりに実験を受けさせられて死んだと聞かされた時、目の前が真っ暗になりそうだった。

俺がタルタロスから落ちたせいで。俺が、全てを忘れてしまったせいで苦しませてしまった。

タカヤはそうではないと言っていたけど、自分がいなくなってしまうたからこそ起こったことなのだから、これは自分のせいだ。けれどアフターフォローをすべきなのは俺じゃない。人手も力も金も時間もあつたはずの桐条だ。

そして、何も知らないようなそぶりをしている武治さんも関係者であるので今だけはその憎悪を向ける。

「いや、今まで気にもしなかったのか!? 責任者だったのに！ 全部、知っていたはずなのに！ 俺の時とは違って、許可した上でみんなを連れてこさせたのに!!! …今はホテルになつてるポートアイランドの研究所跡地に空白の変な区画があるだろ！ あそこのコンクリートの下だよ！ みんな!!! きつと、俺が居なくなつた後に死んだ…マイちゃんも…アキラも…逃げられなかつた他の子供もそこに埋められてるはずだ!」

「……っ、あそこか……! 突然舗装工事をすると言った時は何かと思つたが幾月め、犠牲になつた孤児の遺体は全て供養したと言つていた事さえも嘘だつたか……!」

こちらの伝えた場所に心当たりがある武治さんがぎりりと歯ざしりをする。

その口ぶりからしてどうやら幾月に騙されていたらしい。が、幾月が裏切っていたとわかった時点でそういうことも疑って然るべきなのだ。

資料だって回収しているんだろうし、そこに何か書かれていたりしなかったのだろうか。

武治さんは幾月の裏切り行為によるゴタゴタの後始末や会社経営などもあつて忙しいのでそこを考慮するにしても死んでいった孤児たちのことを幾月の言葉を鵜呑みにして放置していた時点で優先順位は低かつたに違いない。

そして研究所自体が更地にされ舗装された後に隠蔽のためかホテルが建つたが何の因果かその穴があつた場所だけ何も建てられなかったようだ。

まあ、こちらからすればそんなもの関係ないのだけれど。

ずっと、自分には視えていた。視えていたのに無視をしていた。いや、分かつていなかった。だから、連れて帰ってしまった。引き寄せってしまった。自分のせいで皆の魂か、残留思念ともいうべきものが狂ってしまった。歪ませてしまった。

ブラックライダーとの戦いの時、意識を失つた時に自分はその「救いを求める声」をただの怨嗟の声だと——良くないものだとは判断してしまった。本当なら、救わなければいけないかつたのに。

一緒にいかなければならなかつたのに。

「アイツがわざわざ忌むべき過去の罪であるあの穴を掘り返して素直に申う訳ないだろうが!!! あのクソ野郎は——みんなのことを俺をあそこに縛り付ける餌か何かにししか思つてなかつたんだよ! 死んだら生ゴミ扱いされてポイ、だ! なんて美鶴さんや貴方をも裏切つたアイツの言うことなんか信じたんだ! なんて裏切つたと分かつてすぐに調査してくれなかつたんだ!」

いつもとは違い、憎悪も込めて当たり散らしてしまふくらいには10年も蓋をしたまま封じられて煮え滾るほどにどす黒く煮詰まつて

しまった感情はすぐには治まってくれない。殺意ではないために炎が出ない事だけが救いか。

「済まない……言い訳はせん。きみの言葉は至極真つ当な事だ」

武治さんが心底悔いるような顔を下に向けた。

千鶴さんも、彼らも、俺にとつてはかけがえのない存在だった。あの地獄の中で生きるための希望だった。

千鶴さんは事故の犠牲者として遺体が回収され、桐条の墓に入ったらしいが彼らはそうではない。適当な場所に埋められ、誰からも忘れ去られたままだなんてあんまりだ。

これが八つ当たりだと分かっている、ぶつけないとどうしようもならなかった。

それだけ、今の自分の感情はめちやくちやになつている。それでも、この想いはここで消火しなければいけない。これきりにしないといけない。

落ち着かせるように大きく息を吐いて頭を下げる。

「全員、見つけてあげてほしい……から、……おねがいです、おねがい、します……俺には、こうして頼むことしかできないから……」

「……………」

下げた頭が酷く痛む。昂っていたものが引き、さあ、と冷めるような感覚を覚える。

それに顔を顰めながらも遅くなってごめん、と内心で声を出さずに謝る。

みんな、俺が思い出すのが遅かったせいで10年も埋められっぱなしになってしまった。唯一これを伝えられたのは俺だけだったのに。幸せに、何も知らずに生きて、苦しみさえも忘れて。

こんなの、恨まれても仕方がない。どうしてお前だけと思われても仕方がない。

ぐらり、と視界が揺れる。ブレる。

だめだ、なぜかここを彼女に「視られて」いる。

強制的にそれを断ち切ろうとするも無視できない。ぐ、と歯を食いしばる。

『——同一存在であるわたくしの何を恐れるというのです』

頭の中で響くように声が聞こえる。感情の無い、冷徹で低く、それでいて艶めかしい女の声。

これは、『彼女』の声だ。干渉を断っていたはずなのに、無理やりこちらへと言葉を投げかけてきた。

それだけで分かる。彼女は、確実に力を増していつている。

『怒り、苦しみ、悲しみ、恨み。そして置いていかれる寂しき。わたくしとひとつになればそれら全てがなかったことになるのです。貴方の言う、『死した皆』とやらもただただ救済され、ひとつになり享樂に溺れることでしょうか……さあ、もつとお見せなさい。わたくしに知らせなさい、愛憎や人というものを。そしてヒトの愚かさに絶望しきつた暁にはわたくしが貴方を取り込み、生も死もない甘美なる世界をこの青き星に齎すだけです』

自分の感情の昂りに潰け込んできたのだろう。だが、要らないお世話だ。人には人のやり方がある。お前のやり方なんていらぬ。この程度で潰け込まれるほど、俺はお前にほだされてなんかいないし弱くないと跳ねのける。

『…そうでしょうか。ではまた、約束の日に会いましょう。どちらが正しいのか、その時に分かるはずですよ』

拒絶すればすなりと引く。だが、これでわかった。彼女は話が出来ないわけではない。分かり合えないだけだ。

彼女は絶対に己が正しいと思っているからこそ余裕な態度を崩さないし、俺はそれが認められない。それだけだ。

「…大丈夫か？」

「だ、いじょうぶ…って言えば、良いんだけど……ごめん、かなりしんどい……立ってるのも、辛い」

肩をそつと抱いてきた美鶴さんの問いに、首を横に振る。

彼女は接触してくる度にじわじわとこちらにある黄昏の羽根の生命力を削いできている。本来なら、アイギスが命や人格を獲得したように手のひらサイズの黄昏の羽根一枚でヒト一人分の一生を補えるくらいには生命力があるはずなのだ。けれど、自分の場合はそうでは

ない。

本来なら器に留まり循環すべきそれらが身体自体が元々死んでいくために普通に生きていく人によりも消耗が激しく、更にそこから1月31日まで死んで取り込めるように、死ななくともできる限り弱らせるようにシユブⅡニグラスによって接触がある度に奪われていく目減りする一方だ。抵抗してもノリスクで回避出来なくなってきたのは自分の抗う力が12月2日より弱まっているからだ。徐々にだが確実に蝕まれている。

だから、自分は決戦の日以降ももし生き残れたとしても長くはないし殆ど動けなくなるに違いない。

鳥肌が立つ腕を擦る。

彼女に抵抗したせいで逆に体力をこつそりと持っていかれ、酷く疲れているし身体に力が入りにくい。

もうひとつ、この疲労感の原因があるとすればあまりそういうことをするのが好きではないというのに感情を昂らせて叫んだり一方的にまくし立てたからだろう。激情に駆られていたとしても慣れないことはするべきじゃない。

「話はどういだろう。彼の要望をこちらは受け入れ、迅速に対応する。必ず、一生をかけて全員を見つけてみせる。それが私の、我々の償いというものだ。……美鶴は彼を早く休める場所に連れて行ってやれ。顔色が酷く悪い。必要があれば医者も手配しよう。わかったな?」

「はい、お父様。ありがとうございます。それと、お忙しいというのに時間をとらせてしまい申し訳ありませんでした」

「いい。……こちらのほうこそ済まなかったな、美鶴。警備は念入りにしておくから安心して休むと良い。不届き者についても私が手出しません」

そんな約束をしてくれた親子の会話をよそに、自分は荒い呼吸のままダラダラと脂汗を流すことしかできない。

身体が寒く、この部屋は暖房が効いていて暖かいはずなのに芯まで凍えるような感覚に陥る。

恐らく、先程よりもさらに血の気が引いていつているのだろう。

「歩けるか？」

「だい、じょうぶ。なんとか、動けるとは思う」

ゆっくりと、支えられながら部屋を出る。

視界がぼやける。ぐらぐらと揺れて足取りが覚束ない。

今自分がちゃんと床を踏めているかどうかも怪しい。

「話は聞いておりました。お嬢様、お部屋まで案内いたします」

「頼む、菊乃」

そうして齊川さんの先導による美鶴さんに連れられて、客間らしき部屋へと通される。

その時にはもう限界を迎えていて、部屋に入った瞬間に崩れ落ちるように床に座り込んだ。

顔を上げていることすらつらい。身体が重い。

今すぐ意識を手放してしまいたいそうだ。

「失礼します」

感情の色のない、冷静な声が聞こえ、不意にぐい、と脇を掴んで身体を持ち上げられる。

そのままベッドへと連れて行かれて、ふちに腰掛けさせようとしてくるも自分で足をふんばって口を開く。

「ここで、寝て…いいんですか？」

「勿論だ。体調が悪い時にそんな心配はしなくていい」

齊川さんに問いかければ代わりにすぐ横の椅子に座っている美鶴さんが答えてくれた。その事に安心し、流石にベッドに土足は不味いので行儀が悪いがあまり力の入らない足だけで靴を脱いでゆっくりと倒れ込むようにベッドの上に横になる。

「けほっ…ごめ、ん。せっかく、まとまりそう、だったのに。俺が……」

身体が重い。

喉も重い。喉の奥が痒い。息が詰まる。

それでも謝罪する。話をぶった切ってあんなに吠えてしまったのは悪いことであるし、感情を昂らせ過ぎて体力を消耗し自分の体調が

悪くなったのは自業自得だからだ。それでこうして心配や余計な手間をかけさせてしまったとなると申し訳ない気持ちしかない。

「良いんだ。……弔うべき犠牲者をまともに弔っていない。それもまた桐条の罪だ。きみのせいじゃない。被害者のきみがあやつて怒りを感じるのはもつともだ。さ、今は寝て、身体も心も休ませるべきだ」

「……うん」

美鶴さんが愛しいものを見るような目で頭を撫でてくる。冷えた体にその温もりが丁度良くて、すぐに瞼は下がっていった。

「強くなられましたね」

優希が意識を落とした後、数分もせずに菊乃が美鶴へと微笑みかける。る。

彼女が久しぶりに見た美鶴はどこか吹っ切れ、迷いがなくなったようにも見えたからだ。

それは、ここで眠っている倉橋の血を引くというこの少年のおかげか。はたまた同じ寮に住む学友たちのおかげか。

「そうか？ 私はいつも通りさ。むしろ今日も彼に助けられてばかりだ」

美鶴が視線を落とす。

「……私は、三上との事を認めないと仰られたお父様に何も言えなかったからな」

そして、泣きそうな顔になった。

「あんなに怒った彼を、私は初めて見たかもしれない。彼の負の部分、と言えいいのか？ ずっと、あんなものを溜め込んでいたんだなと思うと桐条の犯した罪は到底償いきれないものとも思える。更にこんなことに巻き込んでしまうなどと思ってもみなかった」

「そうでしょう。私だって、そう思いますよ」

この少年がなんなのか、菊乃は測りかねていた。美鶴に害がなければいい。それだけだったが、その美鶴自身がこんなにも1人の男性に

心を砕き、心配するような表情であつたり優し気で穏やかな表情をするのを菊乃は見た事がなかった。

恐らく、父である武治にも向けていない表情があるに違いない。

「ですがお嬢様。お気をつけください。ご当主はあいつておられましたが、私としてはご当主だけでかの一派を抑えきれるとは思えません。近々、ご当主の意向を無視してでも実力行使に出るやもしれませんから。……私としてもそうならないことを祈っていますが、奥様や彼がここに来ていることを見逃す輩ではありません」

そんな菊乃の言葉はこれから起こる騒動を予測するかのような不穏さを孕んでいるのだった。

空は、どんよりと曇っている。

「みんな、あんたたちが殺したのに」(12/13)

今にも雪か雨でも降りだしそんな曇天が窓の外にうつっているなか、菊乃の言葉に美鶴は耳を疑う。

「……私としてもそうならないことを祈っていますが、奥様や彼がここに來ていることを見逃す輩ではありません」

奥様、と菊乃は言った。

それはつまり、美鶴の母である英恵を指す言葉だ。

英恵は元々身体が弱く、遠方で療養しており滅多にこの桐条宗家の本邸にはいないはずだった。

「何故お母様が？」

「お嬢様とのお電話を重ねるうちにお嬢様や彼に会いたい、と言う気持ち膨らんでしまったようですよ。その思いだけでわざわざこちらにいらつしやったようで。ご当主は随分と渋っておられました」

そのことに美鶴は驚いた。まさか母がわざわざ自分や優希に会うためだけにこちらに戻つて來るとは思わなかったからだ。

菊乃の話によればそれすらも、謀反のようなものを企てようとしている不届き者にとっては良い餌になってしまふかもしれないということだ。美鶴は不安をぬぐえない。

「……お母様を害されるのはお父様にとつても痛手だろう。私もお母様を人質に取られた場合、動けるかどうか」

「ええ。ですのでご当主はここに居る彼と奥様の警備を強化しております。本来なら、彼は話が終わつてすぐ寮に帰つていただく予定でしたが、こんな調子ではまず無理そうですからね」

ベッドの上で苦し気に息をする優希を見やる。

そこに心配や情といった甘い感情はなかったが、菊乃は別段優希のことを責めているわけではなかった。

警戒はすれど悪感情はない。菊乃としては美鶴の脅威にはなりえるかもしれないが、あくまで可能性だ。見ている限り可能性は限りなく低い。

むしろこんなことに巻き込まれてこうして体調を崩してしまうほ

どに消耗したという事実には憐れだ、という憐憫の感情があった。

「とはいえ、話を聞く限りご当主のせいでしょう。あんなことを言えばどうなるかなんてわかりきっています。あの場で掴みかかられた精神的負担から気絶して倒れられなかっただけ、マシかと」

菊乃は珍しく武治のことを痛烈に批判した。

扉の向こうからでもわずかに声は聞こえていたらしい。それとも、菊乃はインカムをつけていたから父である武治公認で筒抜けだったか。

美鶴は後者だろうな、と予測する。菊乃に聞かれているくらい、美鶴にはなんともない。

「話すなら、彼の言う通り加害者であるという立場で謝罪をしたりするべきでも、10年前のことを何も言うべきでもなかったのです。それはまた、然るべき時に謝罪すべきこと」

確かに、その通りだと美鶴も思った。だが、不器用な父のことだ。謝らずにはいられなかったのだろう。武治はまず謝罪を挟んでから、話をしたかったのだ。それが礼儀だと思っていたからこそ。

しかし今回はそれが悪手となった。一度は聞かなかったことにして見逃そうとした優希は、二度目は耐え切れなかった。

だからああして感情が爆発し、怒鳴り散らすように武治へと吠えたのだった。

恨みが全くないなどとは美鶴も思っていないかった。だが、普段の優希の素振りが桐条に対する憎悪や敵意を一切見せていなかったがためにないものだと思いついてしまった。意識をしなかった。

被害者や加害者という関係を無しにして、ただの桐条美鶴という女子として美鶴のことは見たいと言った優希の言葉に偽りはないのだろう。実際、あれだけ怒り狂っていたとしても美鶴に当たり散らすことはしなかった。

だが、武治は別だ。謝罪という名目で抉る必要の無い傷を抉った。治りかけの瘡蓋をはがしたようなものだ。

その瞬間、優希の中にあつたどす黒い感情は一気に噴出した。

孤児を実験体にしてしまった武治への恨み。他の子どもたちや美

鶴の叔母である千鶴を殺した幾月への恨み。そしてそれらが起こした事故で両親が死に、遺された弟妹に酷い運命を背負わせた桐条という組織そのものに対する恨み。

なくなつた訳でも軽減されていたわけでもないそれが暴力という形で現れなかったのはひとえに優希自身が自制したおかげだ。そして急に大人しくなつたのも本人が武治の謝罪を求めずに最低限、告げた要望さえ聞いてくれればいいと自分でとりあえずの落としどころを見つけたせいだろう。武治自身は何も許されていない。

むしろあれだけで済んでよかつたと安堵すべきか。悲しむべきか。どちらの立場に立つべきなのか美鶴にはわからない。

だが、優希が次に目を覚ました時、恐らくけろつとしているんだろうなという予感があった。

否、平静を装う、というべきか。全てを押し殺し、あれで終わりだと自分に言い聞かせ続けるのだろうか。元より、ああいう風に感情に任せて怒鳴り散らしたりするのを優希は嫌う節があった。

(困つたものだな…)

美鶴は山積みになつた問題に目を伏せた。

暖かい、微睡みの中で誰かに頭を撫でられている。

『ナギサ、ごめんなさい。ここまで苦しませてしまったのは私がちゃんと貴方を守ってあげられなかったからね』

声が聞こえる。ああ、この声は、懐かしい。

「ちづる、さん…」

ごめんなさいって言わなきゃいけないのは俺の方だ。死なせてごめんなさい。辛い目に合わせてごめんなさい。

千鶴さんも痛かったのに。苦しかったのに。最後はあいつに殺されて。

憎い。憎い。憎い。幾月アイツが憎い。桐条あ鴻悦男が憎い。

自分が憎い。

『違うの。違うのよ、ナギサ。自分を恨まないで。もういいの』

でも、千鶴さんは自分のせいで死んだ。自分が滅びを願わなかったから。自分が死にたいと思わなかったから。アイツら全員を殺す力がなかったから。だから、憎い。少なくとも、力を持っていなかった自分が。だから、力を求めた。全員を殺せるくらいに強力な悪魔の力を。

『言っただでしょうか？ 私が願ったのは滅びではなくて、貴方の幸せなの。貴方に “人として生きてほしい” と私は願ったのよ』

でも、自分はヒトじゃなかった。俺はそもそも生まれてこれなかった。なら、その願いは叶えられない。

『いいえ、貴方はちゃんとした人間よ。道具でも、死体でもない。人としての心があるのなら、貴方はどんな存在であろうとも人よ』

すっかりした声が肯定する。それでも自信は持てない。そうだとは思えない。だって、俺は人としてのペルソナに目覚めてはいない。全部貰った物か植え付けられたものだ。

『“私たち” が証明してみせるわ。貴方の心に宿った幻だったとしても。分け御霊だったとしても。私たちはもう、誰のものでもなく貴方を守る心の鎧。その一部なの』

夢か現かわからない暗い視界にぼんやりと浮かぶようにパンタロス、ポペートル、モルペウス、そして黙示録の四騎士たちとトランペッターが映る。

全部貰い物だった彼ら。それでも一緒に居てくれた彼らのことを、自分は知覚できないでいた。なのはどうして、今になって。

『ナギサ、貴方が分かっていただけで貴方は最初から人だったのよ。まだ見えないかもしれないけれど——その絆は別ればかりだったかもしれないけれど、ちゃんと貴方の中で実をつけて息づいているの。後は、貴方が一步を踏み出すだけ。大丈夫よ、私たちがついていっているんだから！ 信じて！』

明るい声で千鶴さん——いや、パンタロスが笑みを浮かべながらそう言った。

信じる。よくわからない。

『チミってば、こんな美人さんの言葉も信じられないだなんて罪な

男つスね！ まったく、一番星みたいにシャイニーなボクが居ないとダメダメさんかな？』

「……も、こい、さん……」

声が震える。

暗闇の中から浮かぶように現れたのはあれだけ会いたいと願っていたモコイさんだった。

抱きしめようとしても身体は動かない。そもそも、身体感覚がない。喋っている、というのも実は喋れてない可能性だってある。

『あー！ モコイちゃん、だめなのよ！ アリスだってユーキおにいちやんにゴアイサツしたいんだから！』

「あ、アリス!？」

『ちよ、割り込みはダメツスよ！』

驚いた。

自分の代わりにモコイさんに抱き付くようにして現れたのはあります。いや、アリスというべきか。どうして、アリスがここに、と思う間もなくには、とアリスが無邪気に笑う。

『あら、アリスの名前を呼んでくれるのね！ うれしいわ！ うれしいわ！ だってアリス、おにいちやんに嫌われてしまったのだと思っていたところだったもの！ アリスはモコイちゃんを殺してしまつたから…そのことは、悪いと思ってるのよ？ ほんとよ？』

となると本当にこのアリスはモコイさんを殺したアリスらしい。罪悪感を感じているのかしゅん、と落ち込んだような顔になるがそれも一瞬だ。すぐに顔は明るい笑顔に戻る。

『アリスだけじゃなくて赤おじさんや黒おじさんもおにいちやんが食べちゃったから、わたし、驚いちゃった！ でもこれで、みんな…ずうつと一緒ね！ オトモダチも増えてほんとうに嬉しいわ！』

あれだけわかり合えないと思っていたアリスだが、どうやらこの形で満足しているらしくまったく邪気がない。

確かに、アリスはオトモダチ作り以外なら多少感性はアレだったが無差別にヒトを襲わない分まともだと言えよう。なら、モコイさんも平気そうにしているし許すほかない。無邪気さゆえのことならば、反

省しているのならば許さないほど心が狭いわけではない。それに彼女は悪魔といってもその心は恐らく子供だ。彼女よりかは大人な自分が許さなくて何になる。

なぜか自分を殺そうとしてきたことについての反省はないようだが、自分もアリスを殺したのでノーカンということにしておこう。

『ダメよおにいちゃん！ そんな簡単にアリスたちを許しちゃ！ ママに食べられちゃうわよ？』

ママ、というのはシユブニグラスのことだろう。マザーハーロツトではなく。

マザーハーロツトには悪いことをした。自分が屈させるだけ屈させて、利用した拳句に自分で喰らってしまった。

そんなことを思っていれば、深紅の獣が浮かび上がる。

『なんで、そのようなことを悔やんでいたのかえ？ 悪魔はそれが日常茶飯事。強い方が弱者を好きにするのが当然である。この童のいうとおり、悪魔に慈悲を見せれば頭より食われてしまうぞ？ まあ：それでも契約者が我が願いをかなえてくれるというのなら、そうよな——、うむ、またジュンペーとやらやあのチドリとか言うおなごに会わせてくれればそれでよい』

うつそりとしたような声で要望を告げてきたのはマザーハーロツトだ。よく知らないが伊織とチドリのことを気に入っているらしい。ちよつとした執着心のようなものが見える。

というかなんなんだこれは。ちよつと人数が多すぎやしないだろうか。頭がパンクしそうだ。妄想か？ これは自分が役に立てないことに参りすぎて見てる夢なのか？

『夢、というのはそうかもしれないけれど…：私たちは本物よ？』

困ったようにパンタソスが苦笑する。横でポベートルがうんうんと頷いている。あの子、感情表現が出来たのか、と今更驚く。

モルペウスは相変わらず沈黙を保っているようだった。

『そうそう、ボクラがいることも忘れないでほしいな。寂しいじゃないか、ライドウ』

「いや俺はライドウくんじゃな——え？ クリシユナ？」

突然聞こえてきた聞き覚えのある低い声に夢の中で素っ頓狂な声を上げた。そして声の方向を向けばクリシユナがそこでふわふわと浮かんでいた。

マザーハーロツトまでは100歩譲ってまだわかる。だけれども、どうしてクリシユナが。彼は死んだはずでは。

『オレっちもいるぜ！ 忘れんなよな！』

『はあ、キミが煩いのはここでも変わらないんだね、カルキ』

『おうともよ！ オレっちの良いところって明るいところだからな！
ライドウもそう言ってたし！』

クリシユナが半分生暖かいものを、半分忌々しいものでも見るかのように白馬に乗った五月蠅いカルキを見る。

どうでもいいがここ、乗馬率高くないだろうか。マザーハーロツトのは馬じゃなくて黙示録の獣だけだ。

心の中というか、頭の中がこれ以上五月蠅くなるのは正直勘弁りたい。悩みの種が増えそう。俺の心はアパートでもマンションでもないので好き勝手されても困るといっつか、なんといっつか。

『ふふ、でも賑やかでいいじゃない』

『そりゃないよ千鶴さん…』

空気を読まないおっとりとしたパンタソスの言葉に苦笑する。自分、意識がはつきりとしてきた。賑やかすぎるせいかな。

『落ち込んで暗くなるよりかは断然っすよ。チミ、落ち込むとよくないコト考えるしネ』

『モコイさんまで…』

ここにストツパーはいないのか。

モルペウスに助けを求め視線に向けるも、『無理無理』と言わんばかりに激しく首を横に振られてしまった。辛い。いつもは物理攻撃で頼れる彼もこの人数を何とかするのは無理らしい。というか、一番人間としての常識のある、元々千鶴さんだったパンタソスがはっちゃけてしまっているのもう抑えがきかないのかもしれない。もはや無法地帯だ、ここは。

神格を持って余した大乱交ペルソナブラザーズだ。いや、デビルブラ

ザーズか？

パンタソスやアリス、マザーハーロツトと言った女子もいるからあまり卑猥なことは思えないし言わないけど。

『はっはー！ だが、その女の言う通り良い事ではないか？ なあ！』

良くない。断じてよくない。騒がしいペルソナ筆頭のホワイトライダーに言われても何も認められない。

これ以上うるさくするようならコロツケのレプリカを口にぶち込むぞ。自分の口に。もしくはやけ食いか。

あのうごうご蠢くアレをノーちゃんのメル友：いや神友？の〃明星の如く輝くプリティー女子高生のヒカルちゃん〃ことルイ・サイフ^魔ア^王ー^経由^でお取り寄せでもしてやけ食いしてやる。胃もたれするとかは考えずに。

俺は知ってるんだからな四騎士^{お前}の上司（たぶん）であるあの人の携帯のメルアド。問題が増えそうな予感がするのでなるべくなら接触したくはないし、悪魔王がどうして携帯を持ってるかとかはともかく。どうせ戯れだろうけど。

『そうよ、良い事なのよ！ ね、ナギサ。貴方の中にはこんなにも絆が息づいている。ちゃんと、ここに残っているの』

パンタソスは笑う。こちらは来る胃痛に頭を抱えたくなる。けれどパンタソスのその笑みは慈愛に満ち溢れている。親が子を見る視線と同じだ。

本当、だろうか。この絆は本当に俺のものなのだろうか。というか絆でいいのかこれ。

『もう、疑り深いというのは仕方がないけれど見てみなさい。向こうにまだ、いるのよ。恥ずかしがって出てきていないみたいだけけどね』

パンタソスが指す方向に視線を向ける。

暗闇の中には、ウィツカーマンが喰らったはずのデヴァ・マール。そしてそのさらに後ろにぼんやりと黒い木のようなものと、禍々しい光を帯びている古めかしい和服のようなものを着た男が浮かんでい

る。

パツと見ただけでその存在の名前が浮かんでくる。あれは『^{アールキング}榛の木の王』と『^{アマツミカボシ}星神香香背男』というらしい。

アールキングはともかく、アマツミカボシと言われれば心当たりしかない。間違いなく、ライドウくんから貰った曰く付きのブーツである死兆石の欠片関連だろう。おお、くわばらくらばら。

いや、安倍晴明の血を継いでいるらしいしドーマンセーマンと言った方が良いんだろうか。そんなことを思っていれば少しだけ苛ついたような気配がアマツミカボシの方からした。

怖いから触らないでおこうと瞬時に決める。なんだあのニトログリセリンみたいな危険物。

『葛葉ライドウだったキミがそれを言うのは因果なものだね…』

なぜか、クリシユナが困ったように苦笑した。だから俺はライドウくんじゃない。そう言おうとしたけど言葉は出ない。

『まあ、一生気がつかなくてもいいさ。キミはライドウであり、そうではないのだから。ボクらが知っていればいいのさ。だろう？ モコイ』

まーたクリシユナはポエミーなことを言っている。訳が分からない。とにかく、デヴァ・マールとアールキングとアマツミカボシはこちらへ来る様子は無い。というよりも自分に力を貸すかどうか考えあぐねているような、見定められているような、そんな気がする。

彼らの力を借りれるようになるのはまだ後らしい。そもそもそんなことは起こらないかもしれないが。というか、恥ずかしがっているとかそういうレベルではないと思うのだ。

やはり千鶴さんは当時はしっかりした人だと思っていたがかなりお茶目で天然さんな性格だったのだろうか。とても疑わしい。

『ま、そっすね。クリシユナのいう通りっすね。チミが何者だろうとボクらだけが知ってれば、それでいいんすよ。うんうん』

モコイさんまで突然訳の分からないことを言い出したので困り果てる。

ふ、と異質な気配がしたので振り向けば、そこには青い炎が燻って

いるだけ。ただ、ウィツカーマンの炎ではないことはその色からして
確実だ。

「……？」

誰かが、そこにいた気がする。けれどその誰かがわからない。

視線を元に戻せば、皆は消えて。パンタロスだけになっている。あれ
だけ騒がしかったというのにピタリと静寂が戻って来る。

そのことに、一抹の寂しさを感じた。

『そろそろ時間ね。次に私たちに会えるのはいつになるかわからない。
けれどナギサ。私たちはいつでも貴方の心の内に見えている
し、人として生きようと思えたその時は力になるわ。絶対に』

手が延ばされ、見えない自分の頭を撫でられる。優しい手つきに、
夢の中だというのに段々と睡魔が襲ってくる。

『それまではさよならね…でも、私達は貴方のことを信じているから。
だから、どんなに絶望が押し寄せてきたとしても最後まで諦めちゃ駄
目。わかった？』

その言葉に返事をしようとしたものの、できないままに自分の意識
はブラックアウトしていき——くはずだった。

ちよつと待ってほしい。常に心の中にいて見てるってことは色々
見られちゃまずい場面まで千鶴さんに見られていないだろうか。

ほら…思春期を迎えた男の子に必須なアレとか普通に裸とかその
他にもろもろ。大体は戦闘で発散させてたからよかったものの…いや、
メテイスにすらそこは漏れてなかったはずだし大丈夫だ。うん。そ
うじゃなかったら今すぐカズムの深淵に飛び込んでシユブニグラ
ス共々自殺する。恥ずか死んだり社会的に死ぬより自分が居なかつ
たことにされる方がましだ。それくらい、心はガラスなんだ。察して
ほしい。

「……？　ちづる、さん……？」

最低な思考の後に何秒か間をおいてぱちりと目を覚ます。知らな
い天井だ。明かりが目覚めたばかりの目に眩しい。

誰かに頭を撫でられている。なぜか美鶴さんではなく千鶴さんか
と思い、はっとして視線を向ければ見知らぬ女性が椅子に腰かけてい
た。

一気に意識が覚醒する。

「は——あわわわわわわ!!」

そのまま驚いて起き上がり、慌てて後ずさりしようとしてベッドの
ふちから落ちそうになりつつあるととうるんととうるんと肌触りの良い
シーツと数秒ほど格闘してようやくベッドの上に戻る事ができた。
くっ、おのれ高級シーツ。こういうところでこちらに牙を剥いてく
るとは。

ベッドの上で縮こまる様にして正座し、おずおずと女性の方を向
く。

「あの、貴女は…?」

「ごめんなさい、驚かせてしまったわね…私は桐条英恵。美鶴の母で
す」

ニツコリと微笑みながら自己紹介してくれた女性は美鶴さんの
母の英恵さん、というらしい。確かに美鶴さんが笑った時のような雰
囲気とよく似たものを纏っている。

母親、と言ったのは嘘ではなさそうだ。

「三上優希です。えと、娘さんとお付き合ひさせてもらって…ます!」
頭を下げる。

ちよつと悩んだが一応恋人、という括りなので最後には断言する。

そんな自分を見て英恵さんはくすくすと笑いだした。

「止してちょうだいな。頭を上げて…そう。いい子ね。ふふ、美鶴や
千鶴さんが可愛がるのもわかるわ…こんな可愛い子、目の前に居たら
つかまつてしまいたくなるもの」

「へ?」

“かわいい”。

聞き間違えでなければそう言われた、はずだ。初対面で挨拶を交わ
しただけだというのに。

かつこいいではなくかわいい、だ。悪感情を覚えられていないだけ

かもしれませんが、なんだかちよつと情けない気分になる。

「あの、できれば可愛い以外の方向でお願いします…」

初対面の相手だが我儘を言ってみる。断じて可愛いはないだろう。そこそこ身長もデカい男であるのに可愛いとはこれ如何に。

修学旅行の時に家族である奏子からさえも女性に間違われたけど。お兄ちゃんは悔しいぞ。

「あら、そう？　なら——そうね、微笑ましい、かしら？」

きよとん、と綻ぶように笑いながら首を傾げる英恵さんはマイペースだ。英恵さんはお嫁さんらしいので血は繋がっていないだろうが千鶴さんとよく似た性格なのかもしれない。可愛いから微笑ましいになっても何も変わってないけど。

「じゃあ、それで…とところで美鶴さんと斉川さんはどこに行ったかお伺いしても？」

妥協して姿の見えない美鶴さんと斉川さんの行方を尋ねる。ちらりと外を伺えばもう夜になってしまっているのか真つ暗だった。朝から曇りであったのでこれだけ暗くなっても仕方ないと思う。

その上、この部屋に時計は無いらしく、携帯電話を見なければ今が何時かすらもわからない。時間感覚が狂ってしまいそうだ。

「美鶴と菊乃さんは武治さんの所よ。だから代わりに私が来たの。美鶴が熱心に貴方と一緒に居たいと貴方のことばかり話すものだから気になってしまつて。そしたら可愛くお昼寝をしているものだから、つい、ね？」

なにがつい、なのだろうか。よく分からないが頷いておく。あと可愛いはやめて欲しい。結構ダメージがくる。

「美鶴を待っている間、暇でしょう？　だからおばさんとお話しましょ。ただ、私もあまり身体は強くない方だから休憩を挟みつつでね」

ニコニコと朗らかに笑う英恵さんは美鶴さんとは違う。

いや、先程も思ったように笑った時の雰囲気は似通っている。けれども、美鶴さんはこんなにもずっとニコニコはしていないし朗らかでもない。

性格はどちらかと言えば武治さん寄りのようだ。口調からしてそうだと言わんばかりだけど。

さて、話。話か。何を話せばいいものやら。わからない。

千鶴さんのこと、とかだろうか。とはいえ、自分の中にある千鶴さんの記憶の三分の一ほどが焼け落ちていて、残っているのは日常のなんでもない会話だったりグリーンピースを克服しようと頑張っていた時くらいの話や最期の時の記憶くらいしかない。

グリーンピースは結局その時克服できなくて、自分でもどうやって克服したのかわからないが食べられるようになっていた。好きではないが、ゲロマズではなくなったと言うべきか。

いや、ここぞとばかりに美鶴さんの好きな物などの普段は聞けないような話をすべきなのではないのだろうか。

美鶴さんのいない今がチャンスだ。

「じゃあ、美鶴さんの好きな物とか……！」

「うふふ、大胆ね。美鶴の好きな物は——バイクよ。もう、凄いんだから。ビュンビュン走ってかっこいいの。最近は忙しくてせつかく免許をとったのにあまり乗れていないと聞いたけれど……」

既知の情報だったがそれをおくびにも出さずに聞く。

しかし嬉しそうな顔でそう語る英恵さんは途中で心配そうな顔になってしまった。

たしか、美鶴さんは周りにバイクのことを危ないと止められていなかっただろうか。そんな話をボソリと言われたような、無かったような。聞けばあの元許嫁も美鶴さんがバイクに乗ることに反対だったらしい。「女らしくないから」だと。とことんムカつくやつだ。好きな人が好きなことを常識の範囲内ですべて何が悪い。

英恵さんの心配は美鶴さんが危険なことをするというよりも好きなバイクにあまり乗れてないという所に向いている。

確かに、最近では作戦という名目でも大所帯になってしまってるので全員で歩いた方がいいよねという結論になり、6月くらいまでに美鶴さんが乗っていた特別仕様のバイクは今や寮の裏口にある小さなガレージに置きっぱなしだ。

たまに、休みの日などに掃除したり弄ってる姿をみかけることはあるが乗っているところはほとんど見かけない。

「そう、ですね。最近は乗れてないみたい、ですね」

解決法とするならば、美鶴さんに時間を作ってあげるとか自分がバイクに乗って一緒にツーリングに行こう、と誘ったり予定を立てることだろう。けれど前者の考えは現実的ではないし自分はそもそも乗れないことは無いがバイクの免許を持っていない。

ううむ。手詰まりだ。

「俺が免許を持っていたら美鶴さんと一緒に外に行けたんですけど…すみません…」

素直に謝る。美鶴さんの力になれないのが悔しい。こんなことならさっさとバイクの免許を取っておけばよかった。今だと視力検査に引っかかりかねない。

「あら、謝らないで！　そういう意味で言ったわけじゃないの。美鶴もバイクだけが楽しみじゃないんだから、大丈夫よ」

「でも…」

自分の食い意地が張って食べ歩きばかり連れていったことを後悔する。この前のことに関しては自分のメガネで美鶴さんの好きなものですらないし。

そんな落ち込んでいる自分を見てか、英恵さんはなにか閃いたような顔をした。

「それなら、後ろに乗せてもらおうというのはどう？　美鶴もデートという口実で好きなだけバイクを運転できるし、貴方はバイクの免許が無くても良いじゃない？」

「なるほどー」

天才か。

けどなんというか、ドラマとかでよくみるのはやはり男性が女性を乗せてデートに行くシーンばかりだし、複雑な気持ちもある。

けれど美鶴さんが運転をすること自体が好きならば、自分としてはいまはその形が一番いいようにも思えるのでそんな些細なプライドのようなものは捨てようと思う。どうせ、大衆のイメージだ。女の人

の運転で後ろに乗せてもらう男の人がいない訳では無い。それが例え少数派だとしても楽しむことにそんなことは関係ない。

「じゃあ、今度誘ってみます」

「ええ、頑張つてちょうだい。応援してるわ」

「ところで、と英恵さんは話を切り替える。

その表情はともうきうきしているようにも見えた。

「ねえ、婿養子に来てくれるっていうのは本当なの？」

「!? え、えつと、えつとですね…それは…」

突然の問題発言に狼狽えた。確かに、そういう話があるというのはあの元許嫁が突撃してきた日に聞いたが自分は何も返事を返していない。

悩む。これはどう答えるべきか。許嫁になれたとしても恐らく嫁ぐ前に死ぬんです、とも言えずにもごもごと口ごもる。

「どうしたの？ なにか、言えない事情でもあるのかしら…？ それとも婿養子の話は勘違い、なのかしら？」

心配するように見てくる英恵さんに、見た目だけの笑顔を返す。大丈夫。

そうだ、英恵さんも身体が弱いらしいしストレスになるようなことは伝えられない。

「こんなのは建前だ。分かってる。本当は自分が彼女に伝える勇気がないだけだ。」

「いえ。勘違いなんかでは…情けないことに美鶴さんのことをまだ養父母と話してなくて…正式に言ってしまうといいのかと考えあぐねてました。反対はされないとはいえますけど許可は貰えてないのどういえばいいのか…」

「あら、そうだったの？ 答えを急かしてしまったみたいでごめんなさい。けれど本当に悩んだのはそれが理由じゃないでしょう？ どうしてか、聞いてもいいかしら？」

口調は柔らかいが鋭い言葉が来る。

取り繕ったことを見透かされている。これは隠し通せない。

「それは——」

言ってしまったおうか、と口を開いた瞬間、部屋のドアがノックされる。美鶴さん達が帰ってきたのかと振り向けば、ドアが開いて知らない男の人が入って来る。

「失礼します、英恵奥様。それと、三上様」

「ど、どうも…？」

頭を下げられたのでベッドの上でこちらも頭を下げる。

スーツのその人は険しい顔をしていてあまり好かない。というか、なぜか幾月がこちらを見るときのような実験動物を観察しているような視線でこちらを見てくるその人にどうしても嫌悪感が出てしまう。

「あら…貴方は」

「高寺です、奥様」

「それで高寺さん、何の用かしら？　ここには病人しかいないのだけれど？」

穏やかな口調だが確かに棘を孕んだ英恵さんが仕事の話をするのか、と言いたげに言葉を投げつけた。恐らく、この高寺さんという人は桐条でも偉い立場にいる人なのではないのだろうか。

「奥様には何ら関係のない事ですのでどうぞ席を外していただいても構いません」

なぜかはわからないが危険信号が頭の中で鳴る。

駄目だ。ここで英恵さんをこの場から、自分の傍から離してはいけないという直感がした。

そつと、英恵さんに目配せし、首を小さく横に振る。

「…そうね、折角の提案だけれどごめんなさい。私もこの場に居させてもらうわ」

自分の心が通じたようでほつと一安心する。

しかし高寺さんはそんな英恵さんの言葉を特に意に介さずこちらを冷めた目で見たまま口を開く。

「本日、ここに来たのは貴方にお願ひがあるからです。三上様、どうでしょう？　我々桐条グループに貴方の保有する倉橋商事の株式をどうか渡していただけますか？」

「……」

訝しむ。

なぜ、武治さんを通して話をしてこないのか。なぜ、武治さんが要らないといった倉橋商事の株を狙っているのか。

この言葉だけでも疑問に思う要素がないわけではない。さらにあんな話を聞いていれば疑うには十分すぎるほどだ。

「あの、そもそも貴方はなんなんですか？ 高寺さん、と言うらしいですけど、俺はそれ以外のことを知りませんし、なにより武治さんはこのことを知っているんですか？」

質問で返す。信用できない、と明確に表さなければ情報を引き出せない。

そもそも一応信頼はしている武治さん本人に直接ならともかくよくわからない人に言われてすんなりと渡せるわけがない。

「これは失礼。私は高寺一郎。ご当主の右腕、と言えいいいのでしうか。実質的にグループの代表補佐のようなものをしております」

武治さんの右腕。それは本当だろうかと英恵さんに目を向ければ領き返してくれる。だが、その表情からこわばりが抜けていない。普通、右腕だと思っている人にこんな対応はするのだろうか。警戒するに越したことはない。そしてこいつ、武治さんが知っているのかということに答えなかった。

「渡していただければそれなりのお返しはするつもりです。そして、ついでと言えはなんですがご当主に嘆願した要求も取り下げているだけるところらとしてはありがたいのですが」

「…それは、慰霊碑や遺体の扱いのことですか？」

「はい。今、桐条は幾月あの人の起こしたことにより10年前ほどとは言えませんがぐらついております。そんな中、ストレガ計画のことが公になれば桐条は大ダメージを受けます。桐条に関わる現在の就労人口。それがどれだけのものかわかりますか？」

どこから知ったのかわからないが、会話の内容も聞かれていたらしい。

だが、桐条の就労人数を聞かれたところで俺の意志は揺るがない。

自分は最低限のことしか望んでいないからだ。これ以上は“みんな”が泣き寝入りになる。そんなものは認められない。

「——日本の就労人口の約2%です。この数字の大きさがわかりますか？ たかが2%、されど2%なのです。現在の日本の就労人口は全体で六千万。その2%ともなれば二百二十万人ほどでしょうか。その上で、桐条が貴方の要求したことが原因でもし潰れたとしましょう。その百二十万人が路頭に迷うのですよ。貴方は、その責任を負えますか？」

せこい奴だ。そう思ってしまった。

こいつは責任転嫁をしようとしてきている。俺に罪を負わせようとしている。だが、これは自分のせいではない。桐条がすべき自業自得の行いだ。

それこそ、武治さんが望む罪の清算そのものでもあるのに、この人はそのことについて無視しようとしている。

「なら、死んだ人間はどうでもいいってことですか。みんな、あんたたち“桐条”が殺したのに」

「果たして…今を生きる人間より、死した人間のことを優先しなければいけないのでしょうか」

睨み付ければそんな言葉を吐かれ、思わず頭に血が上る。

奪ったのは、殺したのはお前達だろうに。何を——こいつは何を言っている？

「おまえ…ッ！」

「おつと、これは失礼。失言でした」

吠えれば飄々と謝って来るもその顔に誠意はない。

俺さえいなければ、と言った悪意のようなものが僅かに見える。嫌な奴だ。

「高寺さん、今の言葉は事故で亡くなった千鶴さんや、罪の償いをしようとして努力している武治さんをも侮辱する発言よ。聞き捨てならないわね」

ちくりと英恵さんの指摘が入るも高寺は素知らぬ顔で無視をした。

もう“さん”付けは止めだ。こいつは敵で、こちらのことをなんと

も思っていないしこれも話合いに見せかけた脅しだ。認めるわけにはいかない。

「言われたことを全て加味しても嫌です、と言ったら？　俺が望む物を貴方がたが用意できるとは到底思えませんけど」

「強欲な方だ。流石はあの倉橋翁の血を継いでいるだけはある。断られないよう、出来る限りのことはさせていただきますよ」

強欲なのはそっちだろ、と言いたくなった。

こちらの要望や持つものを捨てて、桐条グループに渡せと言ってきていることのどこが強欲でないのか。自分からはこの高寺という男が上から叩き潰そうとしているようにしか見えない。

出来る限りのことをする、というのもこちらの要望を叶えるという意味ではなく『出来る限り全力を尽くして叩き潰す』と言っているようにしか聞こえない。

「ですが、一度はご当主にその株式を渡そうとしたのでしょ？　ならば、桐条グループに渡しても同じこと。違いますか？」

「いいや。俺は武治さん個人に渡そうと思っただけです。武治さんなら、信頼できるから渡してしまおうと思っただけで桐条グループという組織に渡そうと思ったわけじゃない」

「結局は桐条グループのモノになるのです。違わないじゃないですか」

違う。自分としては武治さんが受け取った株をどう使おうが知らないが、桐条グループという曖昧なものに渡してしまえばこいつや自分の知らない人、もしくは美鶴さんや武治さんの敵の懐に入るかもしれないと思えば急に渡したくなくなる。絶対に渡さないぞという意志を固めた。

「武治さんは俺からそれを受け取らなかつた。なら、俺も渡さない。武治さん本人から直接言われるならともかく、貴方がしゃべるなどというのは言語道断です。もう話すことはありません。出て行ってください」

相手はこちらに要望をのませたくてしかたなくて、自分はそれが嫌だ。なら、帰ってもらおうしかない。

こいつ自身が気に入らないというところまで来てしまっている。二度と来んなどという視線と共に拒絶する。

「では、また後で。気が変わってくれることを望みますよ」

何されても変わんねーよバーカ！ と叫びたくなる気持ちを英恵さんが居るために抑え、去っていく高寺を睨み付けるだけで済みます。

というかこの後も会いに来るのか、とげんなりした。マジでなんなんだあいつ。

「はあ…」

「ごめんなさいね…あんな言動、許されることじゃないのだけれど…」
「良いんです。英恵さんのせいじゃないですし。こちらの方こそ巻き込んでしまつてすみません」

英恵さんが高寺のやったことを気にしているようだったがむしろこちらの直感めいたもののせいであんな会話を聞かせてしまったことに申し訳なくなる。

すんなり高寺が引いたことから、自分のあの危険信号は杞憂だったのではないかとも思えるが、何か引つかかる。

用心に越したことはないので警戒は怠らないようにしよう。そう心に決めるのだった。

一方、優希から交渉を跳ねのけられたあげく部屋を追い出された高寺は廊下で部下に囲まれながら怒りに表情を歪ませる。

「実験体風情が…」

心の内にあるのは怒り。それも理不尽なものだ。

だがあれは桐条にとって喉元に突き付けられた刃のような存在だ。上司であった幾月の資料を全て手に入れ目を通していた高寺は知っている。

あれは元々道具として桐条の為に有効利用された後に歴史の闇へと消え、死んでいるべき存在。桐条にとって、居てはいけない存在。いつ爆発するかわからない爆弾と称してもいいかもしれない。

ただの三上優希で居ればよかったものを、忘れていたという実験体

としての記憶を思い出したあげく美鶴と一緒にしろうなどと世迷い事を吐く。

そして美鶴自身も使い潰すべき道具同然の存在と結ばれようとする。

それがどれだけこのグループを左右することなのか、お嬢様もあれも分かっていないのだ、と高寺は憤る。

なんて馬鹿らしい思考なのだろうか。あれは人にはなれない。どこまで行っても実験体であり道具だ。そして倉橋商事の株式というその身に余るものを受け継ぎ、持て余すくらいなら桐条に素直に渡せばいいものを一丁前に人のふりをして抵抗した。それがどういふことか分からないほど高寺は無知ではない。

こちらはわざわざ慮る必要の無い実験体モルモットに下手に出てやっただけでも感謝してほしいところだといふのにと忌々しく思う。

高寺が望むのは桐条グループの存続。それだけだ。その為ならなんでもする。

今回の事を起こす際、美鶴の安全という面で交渉を持ち掛け、御側御用の菊乃を取り込み武治との会話の内容を全て傍受していたがあまり役に立たなかった。

そしてあの交渉の場に英恵がいたこともあり、もう総帥である武治にまで話を通るのも時間の問題だ。ああまでして拒絶されたこともあり手段は選んでいられないな、と表情をきつくして携帯を取り出す。

「私だ。例の作戦を実行する」

その瞳には冷たい決意が秘められていた。

「今からやることに恋愛感情は一切含まれておりません！」(12/13)

夜

帰りが遅い美鶴と優希を心配しつつ、ふたりが帰って来るまではタルロスへは行かないと決めた特別課外活動部は寮で待機することになっていた。

そんな中、作戦室の機械をたまたま触っていた風花の元にメテイスが現れる。

「メテイスちゃん、どうしたの?」

「あの、変なんです」

困ったように風花にそう告げたメテイスにどこか調子が悪いのか、と風花は焦る。

「どこか、具合でも悪いの?」

「いえ、変なのは私ではなく。この寮の周りです」

「え? どういうこと?」

「それが…」

言いにくそうにしながらも、メテイスは語り出す。

朝から敵意に近い、僅かな悪感情を持った人間がうろついており、それが先程一気に数を増したという。それは、この寮を囲むように配置されているかのごとく、綺麗に並んでいるのだ、と。

メテイスはただの機械ではなく半分シャドウであり、その辺の感知もしようと思えばできる。今回、たまたまその敵意をキャッチし本格的に探ってみれば似たような気配を持つ人間が規則的な間隔で何人かいたまでのことだ。

彼らの意図まではなにもわからない。

「そんな…まさか。誰かが私たちを狙って? でもこの寮にはシャドウが来た時のための防犯設備があるから人相手でもそれを使えば……あれ?」

ちようど手元で弄っていた機械で寮の防犯・警備システムを確認し

ようとした風花がそのシステムが切られていることに気がつく。それも、この端末でのオンオフというレベルではなく、根本のシステムからシャットダウンの命令が下されたようなのだ。

「うそ、どうして……！」

頼みの綱である警備システムが無効化され、メティスの言うことが本ならこの寮を狙う相手の込んだことをする敵意をもった連中がいるということになる。

わざわざ警備システムという関係者しか知らないものを切ってきた、ということは相手はこちらを知り尽くしている可能性すらあるのだ。

「……恐らくこの手口からしてこれをしたのは桐条でしょう。美鶴さんと優希さんが居ない時にこんなことをする相手の目的はわかりませんが、来ますよ。相手が敵意を僅かにでも持つてる以上、戦闘の準備をすべきだと迅速に姉さんや皆さんに伝えなきゃ——」

メティスが険しい顔をして身構えた瞬間、窓ガラスが割られるようなけたたましい音が寮内に響くのだった。

もさもさと、椅子に座りながらスコーンを優希は口にほおぼる。

ずっと眠っていたので昼食と夕食を食べていなかった優希は英恵と談笑しながらその味に舌鼓を打った。

とはいえ、夕食代わりにならないため優希は少し物足りなさを感じていたがそれでも英恵の口から聞く自分の知らない美鶴の話は優希の心を満たすには十分すぎるほどだった。

「美鶴ってば、幼い頃は外にある大きな柿の木に登ってはしゃぐのが好きでね。今の様子からは全然結びつかないでしょうけど、あの子、意外とやんちゃさんのよ」

「美鶴さんが、木登り…確かに全然イメージわかないです」
笑う。

2時間ほど前に高寺が帰ってすぐは微妙な空気だったが、警戒しきっている優希をみた英恵が疲れているのだから休憩でも、他のメ

イドにティーセットを持ってこさせたのがこのお茶会の始まりだ。

英恵はメイドにお茶を淹れさせることはせず、自分で蒸らし、自分でティーカップに紅茶を注いで砂糖を入れてスプーンでくるくるとかき混ぜると口をつける前に優希の分も淹れて渡す。

その後は無くなれば部屋に備え付けてあったケトルでお湯を沸かしては飲み、英恵がお茶請けの菓子を補充させたりと色々やっていった。

「美鶴さん達、遅いですね…話が長引いてるんでしよるか」

もう寝てもいい時間だというのに美鶴たちは帰ってこない。一体何の話をしているのか。

あまりにも遅いため今から車で送ってもらったとしても影時間になつてしまうだろう。

このままでは間違いなく泊まりになるのでは、と優希は僅かに眉を顰める。

「そうねえ…こんなに遅くなるなんて、滅多にないのだけれど…何かあったのかしら…武治さん、今日に限って私にこんな指輪なんてプレゼントしてきたものだから…」

英恵も心配そうに顔を陰らせながら指にはめられた小ぶりの指輪を撫でた。

たまたま心配になり話題に出しただけであり、優希としてはそんな顔をさせたくて言ったわけではなかった。

「や、あの、それ、おしやれですね！…それにほんとに話が長引いてるだけかもしれないし！美鶴さんも武治さんに会うのが久しぶりだし、時間も忘れて親子の会話に花を咲かせてるんですよ！きつと！」

なのでしょぼくれたような暗い空気を払拭しようと、優希は空元気に近い表情と声で英恵を励ます。

「むしろ俺はもつと美鶴さんや英恵さん、武治さんの話が聞きたいです！武治さんの話とか特に！俺、あの人のことあんまり知らないままで苦手になつてるので…ちよつとずつ、知っていきたいんです。なんで、あんなことをしたのかなとか…いえ、美鶴さんが大事だから

こそ、ああしたつてこととか、自分のしたことにごく悩んでちやんと償おうとしてくれてるので悪い人じゃないのはわかってるんですけど、どうしても、まっすぐ見れなくて。許せなくて…」

明るくしようと努めた優希だったが、武治のことになると段々語気が弱くなつていく。

複雑なのだろう。そう英恵は感じ取った。美鶴のことを言えば武治の行動の理由はわかる。だが、被害者としての立場に立つならば、武治のしたことを許せず憎く思ってしまうのだろう。

視線を下に下げてしまった優希に、英恵はかける言葉を持ち合わせていない。謝るのも、何か違う気がしたのだ。

しばらく考え、ようやく口を開く。

「そうね…なら、これから知つていきましょ。貴方がうちに来てくれるのなら、あの人について知る機会はたくさんあるはずよ」

「そう、ですね…はい。きつと」

僅かにはにかんだ優希は英恵から見てとても素直だった。

まず邪気がない。普通、英恵に取り入ろうだとか武治に取り入ろうだとかするか、持つものの大きさに物怖じするはずなのだ。だが、優希にはそれが無い。多少の遠慮はあるものの武治にも英恵にもおべっかもなにもないなら変わりない普通の態度をとっている。

言いにくだらう己の気持ちもはつきりと伝えてくる。そこで英恵は理解した。美鶴はこの少年のそういうところに惹かれたのだ。

色眼鏡で美鶴の顔を見るわけではない、異常であるにも関わらず傍目のごく普通の少年を。

英恵が聞いた彼の幼い頃にあつた数年間の生育環境やここに至るまでの経緯ははつきり言つて異常だ。だというのに不気味なくらいこの少年はまっすぐ育っている。

無差別に憎悪をぶつけるわけでもなく、怒るときには怒り、悲しむときには悲しむ。そして無関係の人は巻き込まないようにしている。

自分や他人に全く興味がないというわけでもない。

本来なら歪んで然るべきそれが、英恵はこの少年からは少しも感じ取れなかった。

「あれ、」

最後のスクリーンに手を伸ばそうとした優希が不意にその手を止める。そしておもむろに立ち上がると廊下に繋がる部屋の扉を見つめた。

「……」

「どうしたのかしら？ なにか、気になる事でもある？」

この部屋は防音性が高い。窓以外から滅多に外の音など聞こえるはずがないのだ。だというのに、じつと廊下の方向を優希は見ている。

「なにか、音がしたような。…すみません、英恵さん。俺の後ろに」

警戒心を一気に露わにした優希が英恵を立たせ、後ろに庇うようにした。瞬間、扉が吹き飛びそうな勢いで開いた。

否、蹴破られたのだ。

「！」

そして入ってきたのは物々しく武装をした男たちだった。外にはメイドや武治が用意した護衛がついていたはずだ。だというのにこの者たちはそれらをどうしたというのか。嫌な予感がした。

「なんです!?! あなた方は……!」

この部屋に似つかわしくないその攻撃的な装いは英恵からしても不届き者にほかならず、テロリストかと身構える。

「奥様、抵抗なさらなければ悪いようには致しません。ただし、逃亡・抵抗された場合は発砲・武力行使も許可されております」

「これは武治さんの命令なのではないのでしょうか。貴方がたは、一体誰の差し金で動いているのです?」

平坦な声でそう告げられた英恵はそれでも負けなかった。問い返すが何の返事もない。

ふ、とその男のバツジに目がいき、英恵ははっとした。殆ど桐条の運営に携わっていない英恵だが、それには見覚えがある。

「まさか……貴方がたはうちの私設部隊の……どうして……!」

「……桐条の……?」

英恵の言葉に優希の顔が僅かに顰められる。

桐条の私設部隊。それは人だけでなくシャドウを相手にする訓練も積まされており半ば軍隊じみているものだ。

そして武治直轄であるはずのその部隊がどうしてこの部屋なんかを襲撃したのか。英恵には訳が分からないようだった。

(いや、まさか。そんなことは……)

優希は嫌な予感をひしひしと感じていた。

数時間前に部屋に來た高寺がこの件の首謀者なのだとしたら。武治や美鶴は既に同じような状況になっているに違いない。そして狙いは恐らく自分だ。だが、そうだとしてここに英恵を置いていくわけにもいかなければやすやすと言う通りにするわけにもいかない。そこまでの信頼も信用も優希には彼ら桐条の私設部隊に抱いてはいなかった。

英恵であつても恐らく隙を見せれば害される。そんな、野生動物のような警戒心が優希の内を占める。武治の方は美鶴が居るために影時間まで時間稼ぎが出来れば何とかなる。出来れば合流を目指したところだが、英恵を庇いながら廊下に出るのは狭すぎて分が悪い。ならば、と英恵を見る。

「すみません、ちよつと刺激的なので口を閉じて目をつぶっててくださいー!」

「なにを…!」

「ここから逃げます!」

一瞬で抱え上げ、横抱きにして庇うようにしながら後ろを向き、窓へと身体を突っ込んだ。

力を使い、ガラスと木を一瞬で燃やし、溶かして英恵に傷がつかないようにして三階分の高さから英恵を抱えたまま外へと躍り出た。

「逃がすな! 撃て!」

そんな声が聞こえた瞬間、落下していく優希の頭上すれすれを夥しい量の弾丸が通り過ぎた。

サブマシンガンでも撃っているのか。馬鹿じゃないのか。あんなものヒトに向けていいもんじゃないだろ、と優希は悪態をつきながら着地する。とんだ曲芸だ。意味が分からない。

「大丈夫ですか？」

「え、ええ…それより、貴方の方こそ怪我はない？」

「俺は大丈夫です。それより、安全な場所——は、なさそうですね。しばらく走りますけど、出来るだけ美鶴さん達との合流もしくはここから逃げることを目的に俺は動きます。英恵さんは掴まってるだけでいいので、舌を噛まないように。俺が守りますから」

一瞬で思考を回し、この場において逃げ場はないと悟った優希はなるべく広く合流しやすい場所へ動くことに決めた。

上着を脱ぎ、冷えるだろうと英恵に被せる。薄いがないよりかはマシだ。

外に出たはいいが優希はこの地理に詳しくない。舌を噛むので喋るな、と言ってしまったので英恵の協力は仰げないだろう。そして近い場所にある林に入れば合流以前に迷うこと待ったなしなので無しとなり、正門を目指すことにした。

屋敷の玄関から直線的にルートとれるそこならば広く、場合によっては屋敷の中でやり合うよりもやりやすいだろう。そして屋敷の中から出てきた美鶴たちとも合流しやすい。

安直だが、優希にはそのくらいしか思いつかなかった。

本音を言うなれば、広い場所の方が人的・物的被害を考えずに暴れやすいというのが正直なところだが。

走りつつもこちらを探す私設部隊の隊員と鉢合わせしそうになってはやりすぎし、見つければ迫る弾丸を燃やしてドロップキックで気絶させるという行き当たりばったりなことをやらかしまくった優希はついに、屋敷前の広場までたどり着くことができた。

解放感に少しだけ心が支配されるがそんなものを覚えたのは一瞬。目の前に広がる光景を見た優希は溜息を吐いた。

「いや、なんだこれ…あーもおおおお…嫌になる…うぎぎぎぎ…」
頭を抱えたくなりながらも優希は英恵を落とすわけにはいかないと踏ん張る。

そんな優希の腕の中で英恵は申し訳なさそうな顔をした。

「これなら東の離れの方に行った方が良かったかもしれないわね…案

内できなくてごめんなさい…」

離れの方ならば、もしかすれば警戒が薄かったかもしれない。そう思った英恵は落ち込むしかなかったのだ。

「や…謝らなくてもいいですよ。黙っててって言ったのは俺の方ですし…」

目の前に広がる光景。それは正門を塞ぐように陣取っている私設部隊員たちだ。

「引き返す…わけにはいかないよなあ……」

腹を括るしかない。

優希は覚悟を決めた。もう戦闘は避けられない。相手が強情にも戦うしかないというのなら、こちらもそれを返すしかないのだ。

大きく息を吐いて顔を引き締めた優希は広場へと出る。

正面の私設部隊の近くに居るのは高寺だ。さも、指揮者だとも言わんばかりにそこに居る。そのことに嫌な予感が当たってしまったのだと優希は気がついた。やはり高寺は優希にとって敵だった。

「随分と暴れてくれたようですね」

高寺は不機嫌さを隠すことなく優希を睨み付けた。

部屋から逃げられたあげく、巡回させていた部隊員を気絶させられまくっていれば、不機嫌にもなるというものだ。

「ご理解いただけないのが悪いんですよ。おかげでこちらもこんな騒ぎを起こしてまでとらなくてもいい手段をとらざるを得なかった」

意味が分からない、と優希は口には出さなかったが顔に出した。それもそうだろう。こんな軍隊じみた集団を、自分一人を何とかするために持ち出すなんて正気の沙汰ではない。

「どうやら、立場を解っていないご様子。我々がここにだけ部隊を送っているとお思いですか？」

「…はっ… どういう…」

戸惑った優希に、高寺は思い通りにことは進んでいると確信する。必要な言葉は最低限で良い。

「——巖戸台分寮」

優希の目が、大きく見開かれた。

生活をしている寮の名前を出したということは、そこに部隊を寄越したと言っているも同義。湊と奏子に同じような奴らが迫っていると考えると優希に対する挑発行為に他ならなかった。

「お前…それがどういうことなのか、わかって言ってるのか……！」
「わかってはいるからこそ、言っているのですよ。我々は、桐条の非合法的部分そのものな貴方をこのまま出すわけにはいかないのです」
「……」

睨み付ける。

脅されたとしてもどちらも引けない。優希はここで捕まるわけにはいかず、高寺はここで優希を留めて要求を認めてもらうまで止まらない。

「……嫌だと、言ったら」

「出来る限りの事をするまでです」

「そうですね」

ほんの数時間前にした会話と同じやりとりをし、ゆっくりと優希は英恵を地面に降ろす。

そして身構えた。後ろにはだれもない。わざわざまわってきているような気配もしない。

この時ばかりは私設部隊が英恵に何もしないことを祈るしかなかった。

陽炎のような人肌程度の温度を持つ炎を英恵の近くに纏わせ、最低限の護りしておく。

「だめよ、流石に危険だわ……！」

「でも、待てませんから」

英恵に止められるも、優希は笑うだけでやめるそぶりを見せない。そして前へと向いてその表情を真剣なものへと変えた。そして、駆けだした。

「——全員叩きのめして押し通らせてもらおうッ！」

高寺を含む全員を動けなくしてから美鶴と合流し、さっさと寮へと行かなければならない。

距離はわからないがいくしかないと決意を優希は固めていた。

「本当によろしいのですか」

「ああ。やれ。ただし頭や胴体は狙うな。あくまでも手足だけを狙って行動を止めろ」

突っ込んできた優希に対し、発砲してもいいのかという戸惑いを見せた隊員に高寺は無慈悲にも許可を出した。手足でも撃たれればいくら元ペルソナ使いであろうとも止まるだろうという安直な、それでいてまっとうな考えだった。

その答えを聞いた隊員達は戸惑いなくそれぞれの銃を構える。

しかし、優希は止まらなかった。

銃弾が飛ぶ。それが届く前に燃え尽きる。手近にいた隊員に強烈な蹴りを叩き込んだ優希は手で銃身を持ち一瞬でそれを溶かした。

その光景を見たものは正気を疑っただろう。金属でできた銃身が、手で握っただけで溶けるはずがない。だというのにそれは真っ赤に溶け、地面へと落ちて冷えて固まっていく。

「どういうことだ……！ おい、ペルソナ反応は……！」

「しません！ 全くありません！」

高寺が機械を弄っていた隊員に聞くと、困惑したように首を横に振られる。

それもそうだ。影時間でもないのにペルソナが扱えるなど、滅多にない。それに目の前の少年はペルソナが崩壊し、戦えなくなったとの報告を受けていた。ならば反応はないに決まっている。

しかし目の前の状況と報告がかけ離れており高寺は困惑を隠せない。ブラフだったのか。それにしても、寮でじっとしていることが多かったと聞く。タルタロスの探索の際にも、待機組だという情報も得ていた高寺は疑問しか浮かばなかった。

「ああこれ、貰うね。殺しはしないよ。たぶん」

また一人、無力化した優希はその隊員が持っていた拳銃を手に持つ。召喚器ではなく本当に実弾——それも対Shadow戦闘用の特殊弾の入った物を、手慣れた様子で扱った。

まず、中に入っていた銃弾をマガジンごと取り出して握り締めれば一瞬稲妻が走る。そしてそのままそれを拳銃の中に戻す。

「初めて再現して『造った』けど効果がきつすぎて一日くらい動けなかったらごめんさい。本来、普通の人に向ける用じゃないらしい、これ」

何を言っているのか誰にも理解できなかった。だが『ニヤリ』と笑った優希はそのまま隊員へとその銃口を向け、戸惑いもなく発砲する。

撃たれた隊員の一人が抵抗もなくその場にボタンと倒れ、痙攣し始めた。口から泡を噴いているように見えるのは気のせいだろうか。

「悪魔用の緊縛弾だから耐性の無い人間に撃つもんじゃないな。やめだ、やめ」

じきに震えは止まるだろうし瞬間的なものなので死にはしないだろう、と判断した優希は造った弾を拳銃ごと溶かし、ただの金属の塊にしてしまった。そしてそれを丸めると地面へとぞんざいに投げ捨てる。ヒトに向けるには危険すぎたので没、というわけだ。

「銃なんて、ガラじゃないもの使うからダメなのかなあ。あ、そうだ」
数人の特殊部隊員を何の用品を使ったのかわからないが徒手で無力化し、なるべく長物を選んで奪った優希はそれらを溶かし、ひとつの棒のような物体へと作り替える。そして浮かび上がったのは黒い銃身からつくられたとは思えないほどに白い刃だった。

「うん。やっぱり俺はこっちだ」
持ち手すらない歪な即席の刀モドキをひゅん、と振るい優希は啜う。

「あと何人だっけ、ひいふうみい……10人くらいか」

残りの人数を数えた優希はその刀モドキを構えて走り出す。
当然、それを無視できない隊員たちは銃を構え、発砲した。だが結果は何度やっても同じだ。優希自身にたどり着く前に無力化され、無くなる。

何人かは拳やナイフなどといった物理的な攻撃でなんとかしようとしたが、拳はさっと避けられナイフは銃と同じように溶かされ使い物にならなくなった。

そんな空いた横っ腹や首元の防護服の隙を縫うかのように刀モド

キが強力な蹴りが叩きつけられ意識を刈り取られる。

高寺から見て優希はただの高校生だというのに、あまりにも対人戦に慣れているようにも思えた。人とやり合うときの間合いを全てわかっているのだ。そして常に先読みでもしているかのように相手に合わせて動くため、相手からすればやりにくいことこの上ない。

実験体時代に対人用の訓練を積んでいたという話は聞いていない。幾月の残した資料にも記述がなかった。なら、この戦闘スキルは天性のものか。いや、と高寺は頭を振る。なにか、違う気がした。

「戦えない人を除けばあとは貴方だけです。高寺さん」

軽々しく、それも無傷で優希は全員を伸ばしてしまった。その頃にはもう影時間へと突入していたがそんなことは関係ない。この場に居る全員が人工的にしろ自然にしろ、この場に適応している。

実のところ現代兵器は優希ととても相性が悪い。銃弾程度なら炎で一瞬で溶かしてしまえるために、相手をするなら同じく悪魔かペルソナ使い、もしくは機械の乙女ではならなかったのだ。

そして高寺はその配慮を怠っていた。

——わけではなかった。

「五式・ラビリス」を出せ。奥の手だったが仕方ない」

苦々しく思いながらも残っている技師に伝える。高寺にとって切りたくない切り札であったが、それを切らねば勝負に負けるとなれば切らざるをえない。

ここまでとは正直思ってもみななかった。病人でペルソナ使いですらない少年になにができるのだと。だが、異能は失われていなかった。ペルソナとはまた違うようにも思えるが、異能は異能。忌むべきものだ。

技師が何かコンソールのようなものを操作する。

その瞬間、コンテナが開き中から一人の少女が矢の如く飛びだし優希へと肉薄し、その手に持った戦斧を叩きつけた。

「！」

咄嗟に刀モドキで受け止めたがあまりの馬鹿力に押し負けそうになり優希の顔が歪む。

青みがかった銀髪を振り乱しながら襲い掛かってきた相手の顔を見れば、紅い虚ろな目が見つめ返してくる。

その目に光はない。だが、メテイスやアイギスとよく似たその顔、なにも着ていない素体そのものな機械の身体に優希は顔を顰めた。

高寺は、姉か妹かはわからないがアイギスやメテイスと同じ機械の乙女を優希を止めるためだけに用意したのだ。

それも、人に襲い掛かったあげく何もしゃべらず虚ろな表情を浮かべていることから自我を奪っているというのは想像に難くないことだった。

(クソ野郎…)

優希は高寺を睨み付けた。

自我を奪われ、無理やり戦わせられる。アイギスだつて傷ついていたらというのに、幾月のやったことと同じ仕打ちをアイギスの姉妹にまでするのかと怒りと憎悪が湧いた。瞬間、

「う…ウチは…兵器で…あんたは…誰、なん…？　ひと…？　それとも、」

うわ言のように機械の乙女——ラビリスは小さく呟く。そのことに優希は一層、この子には自我があるのだと確信した。自我があるのに無理やり。

そんなこと到底、許せることではない。段々、優希は己が冷静でいられなくなってきたような気がした。

「……」

「ぐ…っ！」

そのままラビリスはまた黙り込んでしまう。それでも、力は一向に緩まない。それどころかこちらを押しつぶそうと力をさらに込めてきているようだった。

そんなラビリスを同じくらいの馬鹿力で蹴り飛ばし、優希は跳ねながら一旦距離をとる。

相手は巨大な戦斧を所持。オルギアの有無は——分からない。

先ほどの少女が喋っていた言葉に妙な訛りがある。そう、ジンやアザミのようなものに近いそれだ。

まあ、今そこは関係ないだろう。彼女は操られているので被害者だ。破壊なんてできるわけがない。かといって、負けるわけにもいかない。ジレンマのようなものを抱えた優希はどうすれば一番いいのかばかりを考えていた。

高寺の幸運だったところは優希が機械の乙女という存在に弱いところだ。

その生まれの理由や扱い自体に仲間意識のようなものを感じているのか押しが弱く、傷つけることができない。ようは、理由にもよるが敵対した場合に本気で相手をすることができない。それも、操られているのならば。

いまのラビリスは、優希にとって一番苦手な存在ともいえた。

そのラビリスは虚ろな目のまま、再び迫ってきて優希の持つている刀モドキや手足をなぜか集中的に狙ってくる。

その巨大な戦斧で押しつぶされてしまえば武器はともかく手足は粉碎骨折どころではない。

だがそれは裏を返せば絶対に頭や首、胴体を狙って来ないということだ。ラビリスはそれらを避けている。命令を受けたわけでもないのに、嫌がるかのように無理やり戦斧の矛先を逸らすような動きを何度も見せている。無理やりなその挙動はラビリスの機体自身に負担を与えギシギシとした擦れるような音を発させるには十分だった。

「っ、」

それらをすべて紙一重で避けたり刀モドキで受け流し直撃しないように動きながら、優希は解決の糸口を探す。

壊すわけにはいかない。どこかのパーツを破損させていいというわけでもない。

よく動きを観察し、隙を見つけないければと集中する。

「みんな、ええと……あれ……みんなって、だれやろか……シロ……？
……いぬ……海……」

また、まただ。

虚ろな目のままうわ言のように言葉を吐き出したラビリスは一瞬だけ悲哀のような感情のこもった目をするもすぐに虚ろな目に戻る。

なにか、思考をぐちゃぐちゃにされたようなラビリスから放たれる単語を優希は細かい傷を負いながらも一言一句聞き逃さないように気をつけた。

「命令…敵…破壊…勝つ…ウチは、勝たな、あかん…ウチが壊した…024や…みんなの……ためにも、負ける、わけには……ちやう…ウチ、は…逃げな……外に…」

そこで、ピタリとラビリスは動きを止める。が、それも一瞬ですぐに黙りまた猛攻を仕掛けてくる。

「きみは、一体…何をされてきたんだ…」

優希は問いかける。答えがないというのはわかっているけども問わずにはいられなかった。

ラビリスの言葉を繋ぎ合わせ、勝手な想像で補完するならば、ラビリス自身が壊したと言っている「みんな」は姉妹機なのではないのだろうか。

優希は桐条の内情や計画を全て知っているわけではない。だからこそ、アイギスのような対シヤドウ兵器はたしかに兵器として生み出されたもの、それなりにまともな扱いをされてきたのだと思っていたのだ。

機械は機械だが、今のアイギスに対する特別課外活動部のような。そんな扱いなのでは、と。

だが、深く考えてみればそんなわけがない。アイギスは身体が機械で紛うことなき兵器であって桐条での扱いも兵器としてだ。桐条や研究所の人間からヒトとして扱われているわけではない。

ならば、彼女は。アイギスの妹ではなく、試作機か姉に当たる子なのではないか。

命令。壊した。機体番号のような名前。みんな。負ける。勝つ。

バラバラなそれらを自分の都合のいい並びに並び替えるとしたら、彼女は命令を受けて姉妹殺しでもさせられていたのではないのだろうか。それが嫌になって逃げたくなって——逃げられたかどうかはわからないが何らかの事情で封印され、今まで表沙汰になっていなかったのではないだろうか。

そしてここに投入されたというのは桐条に内密で高寺が彼女を持ち出し、制御回路をとりつけられた、ということだろう。

ラビリスが振るう戦斧を避けながら、優希は思考を回す。自我は混濁しているようにも見えるが若干残っているようだ。完璧に死んでしまっているわけではない。

なら、時間切れになる前に話しかけ続けてなんとか綻びを見つけないのかなのだと優希は思い立つ。

「きみの…えっと、名前を教えてくださいませんか！ できればいいんだ！」

「……」

反応はない。虚ろな目のままだ。

「ああと、なら、シロって名前について！」

「し、ろ……」

動きは止まらないが僅かに反応があった。

「…024…しあわせ……会いに、いかな……」

「会いに…？ きみは、誰かを探しているのか…？」

「探す……ウチの……」

分からない。何も知らない優希はわからない。だが、彼女を傷つけさせないためにもこの会話にもならない物を止めるわけにはいかない。

一方、高寺は優希に動きを止めるような傷をなにひとつつけられないラビリスに対し苛つきを隠せない。だが、そんなラビリスに言葉をかけ、会話をしようとしている優希にも苛ついていた。

無駄なことを。どうやってもアレの自我が戻ることはない。それほどに強力な調整を行っているのだ。もう二度と、暴走しないように。

「ウチはいま、しあわせ…？ みんなを壊して…こんどは、ヒトを殺そうとしているのに、これが、しあわせ…？ …ううん…こんなの、しあわせと、ちやう…っ！」

しかしそんな高寺の思いとは裏腹に急にはつきりとした感情の色を滲ませながら喋り出したラビリスはガシャン、と戦斧を落としてし

まう。力なくだらりと頭と腕を降ろし数秒沈黙してからしやがみ込んで頭を抱えだした。

「もう戦いたない…いやや…もう、嫌や…だれか、だれか、たすけて…」

「なんだ…？ ラベリスの様子が…」

高寺は戦斧を落として呻き始めたラベリスの違和感を感じ取り表情を顰めた。調整は完ぺきだったはずだ。

対シヤドウ戦闘が目的ではなかったために全力を出す必要もなく、殆どの自我を封印し、命令通りに動いただけの機械としてだけ使えば、何ら問題はなかったはずだった。

だというのにここに来て戦闘を止めたどころか言葉を話し出したのだ。封じていた自我が解放されつつある。

動かしてしまった今、それを再調整するわけにもいかず、高寺は奥歯を噛みしめた。あれらは、会わせてはならなかったのだといまさら失敗に気がついた。

逆に、ラベリスのその声を聞いてしまった優希はわなわなと震え始めた。

助けてという悲鳴のようなその言葉は、実験体だったところに優希が何度も叫んでいた言葉だ。あの地獄の中で、ヒーローのような誰かにしてほしかったことだ。

そしていま一番彼女の口から聞きたかった言葉でもあった。

誰かがそれを求めるのなら。

過去の自分がしてもらえなかったことをその求める誰かに代わりにしてあげるだけだ。

苦しむラベリスをまつすぐに見た優希はそのまま口を開いた。迷っていたが決意は固まった。

「いいよ。俺は、きみを助ける。助けてみせる」

多少、強引な方法をとるが仕方ないと優希は割り切る。下手をすれば共倒れになるかもしれないし初めて行うやり方なので通用するかなんて分からない。あと、その他もろもろの戸惑う理由があるがそんなものかなく捨てなければ彼女は救われない。

自分の些細な心的ダメージと彼女。どちらを優先すべきかだなんて優希にはわかりきっていた。

「今からやることに恋愛感情は一切含まれておりません!!! すうーはあー…よし!」

自分に言い聞かせるようにそう叫んだ優希はラビリスの顔を両手で優しく持つと上へと向かせる。

そして——迷いなくその唇に自分の唇を重ねた。

「人の手には負えない」（12／13）

遡ること30分ほど前。

優希達と同じく急になだれ込むように書斎に入ってきた数名の私設部隊に囲まれた武治と美鶴、そして菊乃の三人は身構えた。あれだけ警戒して用意した警備は対人戦のスペシャリストである特殊部隊相手に無駄になったらしい。

「誰の許可を得てこのようなことを……！」

歯ぎしりする菊乃は突然の襲撃に憤る。

美鶴を守るため、武治の指令で菊乃は接触してきた高寺との二重スパイのようなものをやっていたが高寺自体も菊乃を信用していなかったのかあまり情報を寄越しはしなかった。

だからこそ何かやっているといるということと有事には手段を選ばずゴリ押ししてくる程度のことしか分からず、その後ろに誰かがいるのか、何が目的なのか。それすらほとんど見えなかった。高寺が動いている。怪しい。それくらいの事だ。

だがまさか私設部隊を手中に収めているとは露ほども思わなかったのだ。いや、有り得たことかと武治は考え直す。

この部隊は武治直轄ともいえるものだがその指揮系統に高寺も一枚噛んでいた。武治も多忙で彼らと警備部門の管理も高寺に任せていたのだ。つまり、書類上の主は武治だが実質的な上司は高寺であった。

なら、彼らはどちらの命令を聞くか。分かりきったこと。それが桐条グループの存続に関わることならば尚更。

「申し訳ありません」当主。それにお嬢様。〃話し合い〃が終わるまで我々はこの部屋で待機しては頂けませんか。貴方がたはそれだけで良いのです。部屋から出なければ自由にしていただいて構いません」

菊乃を無視し、私設部隊の隊員の1人がそう告げる。その視線と言葉には「何も出来ないだろう」という油断のような感情がありありとみてとれた。

話し合い。つい3時間ほど前に英恵付きのメイドから高寺が優希と英恵のいる部屋に来たという報告を聞いたのだ。だからこそ、美鶴たちとの話し合いが長引いたとも言えるが。

内容はのっぴきならない事だったらしい。つまるところ、その高寺の関わっている話し合いはただの話し合いでは無いことは分かりきっていた。

「三上さんと妻は無事なのかね」

低く、重い敵意を隠さない声で武治は睨みつけながらそう問い質す。

だが、隊員はそんな武治に物怖じせず事務的に口を開いた。

「おふたりが逃亡、抵抗さえしなければ。もし逃亡もしくは抵抗のどちらかをした場合は発砲・武力行使が許可されています」

「なんだと…!?!」

隊員の告げた言葉に美鶴はこめかみをぴくりと動かした。

これでは脅迫だ。話し合いではなく無理やり脅して言うことを聞かせようとしている。

一体、何を要求したのか。そして何をさせようとしているのか。

美鶴と武治は同じ思考を回す。

(恐らく目的は彼の持つ株式だろう。だが、それだけでこのように強硬手段をとる必要が…)

あるのだろうか。

そう武治は訝しむ。それだけでこのように大掛かりな謀反の様なものをする必要があったのか。

失敗すれば首が飛ぶどころの話ではない。当主である武治やその家族に手を出したのだ。制裁はかなり厳しいものになるだろう。

だが、それらを覚悟してまで『三上優希』という少年に対しこれほどまでに過剰な手をとるとするのはどういう事なのか。

何に怯えているというのか。

——まさか。

「齊川。昼の会話は高寺に傍受されていたか？」

問いかける。一体どういう事なのか、と戸惑いを僅かに見せるがす

ぐに表情を戻し澁みなく答える。

「え、ええ…その通りです。会話の内容を流せ、と言われていたのその通りに」

「そうか…そういう事か…」

武治は歯噛みした。

高寺の目的は確かに優希の持つ倉橋の株式だろう。だが、このような強行手段に出たのはそれが原因ではない。

恐らく話を聞いていた高寺は昼の会話の優希の要求により、優希の存在自体が桐条の害になると判断したのだ。

武治とて、あの要求が桐条にどんな影響を及ぼすのかくらいは分かっている。わかった上であの要求を呑んだのだ。本来ならば、ストレガ計画が頓挫したその時にすべきことだったのだから。

2時間前に部屋に来た時も優希にその話を諦めろと要求したのでは無いのだろうか。そして、拒絶されたに違いない。

武治から見てあの時の優希はこれ以上引けない、といった追い詰められたような表情をしていたからだ。

被害者である優希の要求をこうして力技で取り下げさせようとするなど、愚かなことを。

武治からしても優希の要求はして当たり前の事だった。10年間も放置していいものではなかったのだ。

事故の犠牲者の慰霊碑はあれどもストレガ計画で犠牲になった子供たちの慰霊碑は無い。それどころか、幾月の話を鵜呑みして遺体すら吊っていないかったのだ。優希があれだけ怒りや憎悪を向けても仕方ないと武治には認めることしか出来ない。だが高寺にとってはそのうではなかった。

もし、優希が害され死ぬようなことがあれば武治は誰にも顔向け出来なくなる。

償う機会すら奪われるのだ。これ以上桐条の罪を増やしてくれるな、と武治は祈りながら何としてでもこの状況を打破しなければという決意を固める。

「美鶴」

「はい。お父様」

目配せし、視線を交わす。思っていることは父子共に同じだったらしい。

同時に動き出した三人に、私設部隊は迷いなく銃を構える。

「自由にしている、とは言いましたが抵抗された場合こちらでも武力行使の許可を貰っています。どうか、そのまま止まってはいただけませんか」

遠慮がちに私設部隊の男は言った。

流石に当主とその家族である武治と美鶴、そして御側御用の菊乃に手を上げるのは憚られるのだろう。逆に高寺は足止めが目的だったので優希と英恵のいた部屋に送り込んだ者達よりも武治に対して好感度が高いか作戦とは言えどもこれは背任行為であり、他者を害することに戸惑いのある面子をこの場所に配置するようにした、とも取れる。

本命は何としてでも仕留めなければいけない。だが、武治たちは本命ではなくあくまで時間稼ぎができればいい。最悪、足止めできなくてもそれまでに決着がつけられればいい。絶対につけられるはずだと考えていたに違いない。

だからこそ、隙があった。

「命令とはいえご当主やお嬢様を傷つけたくはないのです。出来ればお通ししたいのですが我々も生活が懸かっている。この部屋に留まってはくれませんか。ほんの、一時間程度。影時間になり、それが終わる頃までで良いのです」

今はまだ影時間ではない。

だからこそ、私設部隊の隊員たちは武治と菊乃しか護身用の拳銃を持つていない状況で、一番脅威的であるはずの美鶴が何もできないと思っていた。

「断る。矛を納めるのはお前達の方だ。三上くんは私の客であり、美鶴の大切な存在だ。このようなことは許されることではない」

「ですが、彼の存在は我々グループの者やご当主にとつても害になりうるよ……だからこそ、我々もこのようにやりたくない汚れ仕事を任さ

れているのです」

心底、申し訳なさそうな顔をしている私設部隊の隊員は嫌々従っているようにも見えた。

やりたくない、と思っっているのがその表情からありありと見て取れる。そして銃を構えてはいるものの、ここに居る面子はあまりその引金を引きたくはない様子でもあった。

「それは、誰からだ？」

「申し訳ありませんがいくらご当主と言えどもそれは言えません」

武治が首謀者が誰かと聞くと申し訳なさそうに首を横に振られて断られてしまう。

「私たちにこうして銃を突きつけるのは良く、その者を裏切るのは良くない、とでも？」

「…はい。生活が、かかっているのです」

生活が懸かっている、ということ強調した隊員は言えないながらも何かを武治に伝えようとしていた。その目が必死に何かを訴えかけていた。

首謀者にばれない程度に武治に情報を渡そうとしているようにも見えた。なら、その思惑に乗ってやろう、と武治はこの会話に乗る。

「ならば、きみたち全員が動けなくなった場合はどうするのだね。潔く失敗を認めるのか？」

「いえ、我々以外にも動いているものがおります。今頃、とある目的の為にそちらに向かっていることでしょう。我々が失敗したとしても彼らが何とかしてくれます。だからこそ、我々は余裕であるのです」

隊員の男の目からは余裕などという感情は見取れなかった。気づいてくれ、と乞うような視線すら感じる。

しかし、別の者たちが動いているとなればそれは一体何なのか。武治たちがこの場にいる全員を拘束し、動けなくしてもなお、優希に要求を突きつけのませることのできる方法。

武治にはわからなかったが横に居た美鶴は気がついた。自分たちが人質のような役割を果たさなくとも、十分に効力を持つもの。それは――

「まさか、寮に…!? お父様、恐らく別動隊と思しき連中は巖戸台分寮の三上の弟妹や私の仲間たちを狙っているのでは!」

「なんと…!」

「私たちよりも、三上にとって真の急所足り得るのは有里達の方です。弟妹を出されれば、三上は…：抵抗できなくなるかと」

美鶴の言葉に小さく私設部隊の隊員の男が頷いて息を吐いた気がした。

正解だ、と言わんばかりに。言葉で伝えられない分、小さく頷くことしかできなかつたのだろう。

周りの他の隊員も微妙そうな顔をしている。生活が懸かっており、仕事だと割り切っただけでも無実の、しかも子供相手にこんな乱暴なことをしたくない、という気持ちが見て取れた。

「外への連絡手段は一時的に全て断ち切らせてもらっています。送受信の両方を行うことができません」

申し訳なさそうな顔のまま、連絡はできないと聞く前に答えてくれる。巖戸台分寮に警告することもできず、巖戸台分寮に行っているという別動隊のことを武治が何とかする、という手段も取れない。この包囲からなんとか脱出するほかにはこの状況を打破する方法はないようだ。

「…：なんだ、騒がしいな。どうした」

不意に、隊員がインカムを操作し顔を顰めた。誰かからの通信を受け取ったらしい。

「ターゲットが奥様と逃げた? どこへだ? そうか、裏か…：進行方向からして正門へと向かっているんだな? 増援の必要は? わかった。我々はこのまま持ち場で待機する」

これ見よがしに武治たちに聞こえるように目配せしながら内容を繰り返した隊員はそのまま通信を切り沈黙した。

どうやら、優希が英恵を連れて逃げ出したらしい。美鶴はそのことに驚いた。優希ならば、英恵のことを考えて大人しく捕まってしまうのでは、という懸念もあったのだ。

美鶴から見て優希はそれほどまでに自分を蔑ろにしがちだ。だが、

今回はそうではなかった。

優希にとつて退くに退けない条件だったからこそ、
「壊滅させる」
もしくは「逃亡する」という判断を下してしまった。

土壇場まで追い詰められた優希の爆発力を美鶴はいまいち実感して
いなかったのだ。

主にその矛先が優希自身に向けられていたこともあり、それが外に
——人に向くなどとは思いつかなかった、というべきか。

カズムの深淵で殺してくれと言った時でさえ、何かを戸惑うように
遠慮がちだったが為にそんなことはしないだろうと思いつ込んでし
まった。

優希の抱く桐条への憎悪を、未だに美鶴は甘く見ていた。

ほぼ同時刻の巖戸台分寮のラウンジでは物々しい雰囲気の流れ
ている。

巖戸台分寮に侵入したのは桐条の警備部。目的はここに居る全員
の捕縛だ。

風花とメティス以外の全員がそこで集められて拘束されていた。
全員を捕縛したのちに屋上に止められているへりで桐条の元に連れ
ていく、と。

勿論、それぞれ訳も分からずに抵抗したが人を捕らえることに長け
た警備部に実銃を突きつけられてしまえばどうにもならない。影時
間であればペルソナで守りを固めるなりなんなり出来たがそれもで
きず。

「その汚い手で姉さんに触れるな——ッ!!!」

「未確認の対シヤドウ兵器を確認。ご当主が秘密裏に用意したのか：

? ツー!

「姉さんと奏子さん達に手を出したなッ!!! その所業、万死に値する
!!!」

窓ガラスが割られる音がしたために風花を作戦室で待たせ、入って
きた警備部の人間を叩きのめし、下に降りてきてその光景を目の当た

りにした完全武装をした状態のメテイスが激昂したままその隊長に襲い掛かろうとした。

が、

「メテイス！ やめなさい！」

「だめだよ！ その人が大怪我しちゃう！」

アイギスと奏子からのストップがかかり、すんでのところで隊長は複雑骨折と内臓破裂を免れた。代わりに手に持っていた銃がバトルメイスで真つ二つにへし折られたが。

メテイスはガワこそ機械の乙女だが混じりものでありその出力はアイギスよりも上だ。そして人間という存在に対するリミッターも守らなければいけないという思考も存在しない。メテイスの大切であり守るべきものはアイギスと奏子と湊だ。それ以外は正直どうでもいい。

そんなメテイスの全力を普通の人間が受ければどうなる事か。想像に難くない。

「なら、手加減でもして全員を気絶させましょう。それでいいですよね？」

けろつとした顔で後ろへと跳ね、距離をとったメテイスが何が悪いのかと代案を提案する。

それならば、とこの状況を変えなければいけないことに変わりはないアイギスは遠慮がちに頷く。流石に理由も聞かされずにこうも手荒な真似をされた上に黙ってこのまま連れていかれるわけにもいかないからだ。この詰みに近い状況を変えられるのはリミッターも何もついていないメテイスだけだ。

「今の妹ちゃん、完璧に警備部の人をぶっ殺すつもりだったよなアレ…あんなドスの利いた声だせるんだな………」

「怖かった……」

順平と湊はメテイスがあそこまで怒気を高め、声を荒げたところを見た事がなかったので戦々恐々としている。

二週間ほどの付き合いだがここ最近のメテイスは幼い女の子、と言った感じで我儘を言うこともあれば可愛らしくむくれることも

あつたのだ。怒つたとしても駄々をこねる程度。無知ゆえに何か間違つたことをしてもすぐにアイギスに諭されて謝罪をするし、反省もする。

今までシャドウやニヤルラトホテプ以外の誰か——特に人間に暴力を振るつたり敵意を見せた事すらなかったのだ。あのバトルメイスが向く先はいつもシャドウだけだった。シャドウの母との混じり物がシャドウを倒すというのはおかしな光景かもしれないが、基本的な人格はメテイスであるのでアイギスの敵になるようなら容赦しない、といったところだろうか。

ただあそこまで声を荒げ、何の戸惑いもなく人に跳びかかる様を見てしまえば流石の湊であってもビビってしまったも仕方ないというものだ。

「オルギア、発動！」

そこからは蹂躪だった。

対シャドウ用の弾が入った銃をメテイスに向け、発砲する隊員もいたがアイギスのものよりも出力の向上したオルギアモードを発動したメテイスの敵ではなく。全員さくつとそこそこ痛そうなバトルメイスの一撃を食らつて昏倒してしまった。

残っているのは隊長である男だけだ。

メテイスはみんなが話を聞けるようにとその男だけを気絶させないでわざとおいといたのだ。

さつと特別課外活動部の面子の拘束を解き、逆に警備部の人間を攻撃にも使う内蔵ワイヤーで一通り拘束してまとめたメテイスはふん、と得意げな顔になる。

「偉いわ、メテイス。ちゃんと手加減できたのね。ありがとう」

「当たり前です！ 姉さん、私ちゃんとやれましたよ！ もつと褒めてください！」

「もう、仕方ない子ね……」

えへえへと笑うメテイスはまるで子犬だ。アイギスに撫でてほしいと頭を差し出せば、アイギスもそれに答えないわけにもいかず撫でる。すっかりアイギスもお姉さんが板についてきている。

今回のMVPはメテイスだろうと誰もが思った。後からおずおずと警戒しながら降りてきた風花の話ではこの襲撃を察知したのもメテイスだという。

「最初に気がついたのはメテイスちゃんだったの。それで誰かが襲撃してくるのなら寮の警備システムを使って扉と窓をロックしてしまえばって思ったんですけど：根本からシャツトダウンされて。なので皆さんに警告をと思った瞬間にはもう遅かったようで……メテイスちゃんが居なければ大変なことになっていたと思います」

「それで、わざわざ美鶴先輩のいないときに何の用なのよ。この警備部って人たち」

ジト目で襲撃者たちを見つめるゆかりは不信感を拭えていないのかあまり近づこうとはしていなかった。近寄りたくないという嫌悪感を隠そうともしない。

「ゼツタイ、良くないことで来たんでしょ」
「……」

隊長の男は口を噤んでいる。何も答える気はなさそうだった。そこへ、アイギスに思う存分頭を撫でられて満足したメテイスがとてととやって来る。

「無理やり口を開けて喋らせましょうか？ 火器の扱いは姉さんに劣るかもしれないが私も得意ですよー」

「ストップ！ ストップ！ ナニナニ!? 妹ちゃん今日過激すぎね!？」

「何を言ってるんですか順平さん。私はいつも通りですよ？」

きよとん、とした顔でメテイスはそう答える。

メテイスからすれば正常運転らしい。だが、周りから見ればそうも見えない。完全に襲撃者に対し遠慮のない敵意を放っている。

「メテイス、あんまりそういうのはアイギスも好かないと思うんだ……」
「そうなんですか？ 姉さんもあまりそういう手段は好まない、と？」

困った顔でメテイスを諷める天田にもメテイス自身はきよとんと何が悪いのかわからない様子で首を傾げる。天田も他の面子も思っていたことだが、メテイスは一般常識を知識としては知っているもの

の、少々特別課外活動部以外の存在に対し思いやりに欠ける。そこが
いま、問題点として浮き彫りになっていた。『かつて』のことを言えば
アイギスだけだったその「守る」の範囲が特別課外活動部まで広
がっているのは奇跡だとも思えることだが。

「そうね…むやみに人を傷つけるのは良くないと思うわ」

「わかりました！ なら優希さんと同じく【精神暴走】でもつかっ…」

「ダメ！ ゼー…ったいにダメ！」

「無理やり暴力で屈させるのは良くない」と言ったアイギスにメテ
イスはならば精神面だと提案する。【精神暴走】をメテイスも使えるら
しいがそんなものを普通の人に使えばどんな悪影響があるかわから
ない。絶対にダメだ、と奏子が必死に止める。

「では、どうやって彼らから情報を引き出します？ この男、なにも喋
る気なさそうですよ」

「そうだな…」

全員で考える。

こういう時に美鶴が居れば一瞬で何か名案が思い付いた（そもそも
今回の襲撃者は桐条の者なので美鶴が居れば即解決していたともい
えるが）というのに、そのブレインたる美鶴が居ないためにいい方法
が浮かばない。

「では、風花さんの初期作品である料理を召し上がっていただければ
？ 噂に聞けば冷凍庫に保存してあるらしいですね。あのげきぶ—
—」

「ダメ——ッ!!! そんなことしたら死んじやう！ ほんとに死ん
じやうから！」

「山岸の料理は…止めてあげて……」

「ワンワンッ！」

風花のお料理経験初期に作った劇物を食わせればいい、とこれまた
罪悪感も何も感じていないメテイスが提案するがその恐ろしさを
知っている奏子と湊、そしてコロマルがメテイスを止めた。コロマル
はその匂いを嗅いだただけだが。

あれはひと口食べただけであまりの味に卒倒する代物だ。そして

食べた後はトイレとお友だちになれる効果つきだ。パンデミックを起す気か。それとも警備部の全員を地獄に叩き落とす気か。

必死に止めるふたりと一匹を見た風花は段々怖い顔になっていく。そして、

「メテイスちゃんと奏子ちゃんたちは後で私とお話、しよつか」

「ひえ…」

死刑宣告が放たれた。

というより、風花にとってもあの劇物は今となっては黒歴史なのだ。最近ではレシピ本を見ながらちゃんと分量を量り、味見をすればちゃんと食べられてそれなりに美味しいものが出来ている。優希や荒垣にだってお墨付きをもらっている。だというのにいつまでもメシマズ扱いされるのは心外と言うものだ。

ぷりぷりと怒る風花をどうやって慰めるのか。襲撃者を完璧に拘束し、無力化できてしまった時点で目先の問題はすぐにそちらに移ってしまっていた。

「あれ…美鶴先輩の携帯、繋がらない…三上先輩のも…まさか、向こうで何かあったんじゃない？」

ふ、と襲撃者は片付いたので理由を聞くことを込みで引き取ってもらおうと電話をかけようとしたゆかりがどちらにも電話がつかないことに気がついた。

美鶴が多忙で出ないことがあるにしても、優希が出ないなどというのは殆どありえない。話し合いが長引いている、というのも何の連絡も無しにあるわけがない。

ならば、向こうでも同じようなことが起こってしまっているのでは。

(今の桐条…一体どうしちゃったの…？)

そんな疑念のようなものを抱きつつ、ゆかりはふたりの無事を案じることしかできなかった。

場所は桐条宗家本邸の書斎に戻る。とつくに影時間へと突入した

が全員が象徴化せずにそこに居る。

理由は恐らく武治と美鶴以外の全員の手に嵌められている指輪だろう。これは影時間への適性を何の適正もない人間に与える桐条の開発した代物だ。これをつけて適性の無い研究者などは影時間の調査を行っていた。

「……寮へと突入した警備部から連絡がない？ 護送が長引いているだけでは」

インカムから再び連絡が来た隊員の男が油断しきっているのかこちらにすべてを伝えるつもりなのか堂々と別動隊の名前を出して首を傾げるがまだ援護の要請がされていないために動こうとしない。あくまで隊員の男は命令された以上のことはやらないことにしているらしい。

「……」

そして寮へと襲撃をかけた別動隊というのは警備部のことらしい。そのことに武治はより一層高寺の関与を確信する。

だが、恐らくそれは失敗したのだという予測もあった。連絡がないということは警備部自体に連絡のできない事態が発生したということだ。

そして、今が好機でもある。動き出そうとした瞬間、窓の外が白み、ほぼ真っ暗だった部屋の中が明るく照らされる。

おかしい。影時間は常に不気味な緑色で照らされているというのに、真昼の太陽の如き光が放たれるはずがないのだ。

「何が起こっている……？」

隊員の一人が部屋を出て、光源があるだろう反対側の窓を確認しに行く。そして息を切らしてすぐに帰ってきた隊員はありえないものを見たかのような顔をしていた。

「炎が……炎が渦を巻いて……！」

その言葉は要領を得ない。

だが、何か異常事態が起こっているのだと察した隊員の男はいったん部屋の外に出、すぐに先ほど戻ってきた隊員と同じように戻ってくる。そして銃口をまっすぐ上に向け、引き金を引いた。

6秒ほどマズルフラッシュと共に銃弾がありつたけ吐き出され、ワ
ンマガジン分を撃ち尽くした隊員は決意を秘めた顔になっていた。

「行ってください。これ以上は我々の…人の手には負えない。恐らく
美鶴お嬢様の御力が必要となるでしょう」

「っ、お嬢様！」

その言葉と同時に美鶴は駆け出していた。何らかの連絡をしたの
か屋敷内にいた私設部隊の全員が美鶴を無言で通した。中には恐怖
が染みついたような顔をして外を見ないようにしているものもいた。

荒事に慣れているだろう私設部隊の隊員ですら戦慄する炎。

手に負えない。

まさか。そんなまさか。

そうして、屋敷の外に出た美鶴が見たものはあたりを真昼のように
照らす炎の海だった。

いたるところに倒れる私設部隊の隊員。それらの一番奥で太陽の
ような灼熱の炎の塊がごうごうと渦巻いている。だというのに、熱を
全く感じないのだ。なにも、燃えていないように感じる。ただただ、
炎だけが燃え盛り、触れているはずの草木は無事なままだ。美鶴がよ
く登っていた柿の木でさえ、風で枝葉を揺らすのみ。

だが幻覚ではないことはこの巻き起こる風でわかる。その風だけ
はまるでその場を夏かと錯覚させるほどに熱風を吹かせている。

なんなんだ。なんだ、これは。

矛盾しか孕んでいない目の前の地獄のような光景に、美鶴は震える
ことしかできない。

ふ、と横を見れば母である英恵が優希の着ていた月光館学園の制服
の上着を羽織り、そこで上体を起こしている。さらに、その隣には見
覚えのない銀髪の機械の乙女が倒れたまま泣きそうな顔をしてじつ
と炎の竜巻を見つめていた。

優希は一体どこに。どうしてこんなことに。

「美鶴！…三上くんを止めて！…このままでは彼が…高寺さんを殺し
てしまうわ！」

美鶴に気がついた英恵の、悲鳴のような言葉が響く。その言葉で美

鶴は咄嗟に召喚器をこめかみ当てた。

英恵の言葉通りならば、ふたりは恐らくこの燃え盛る炎の竜巻の中だろう。だが一体何がどうなっただろうか。どうして優希が人を殺そうとしているのか。

びゅうびゅうと耳鳴りの如く鳴る風の音は泣いている声のようにも聞こえた。

「――全てを悔いながら苦しんで死ぬ」（12/13）

キス。接吻。口吸い。

俗に言うなれば、優希がラビリスにしたのはそういうものだ。だが優希の目的はただキスをすることにあるのではない。

【吸魔】

このスキルを発動するための手段なだけである。本来なら、触れるだけでいいのだが優希はそこまで頭が回っていない。とにかく制御回路は頭についてるだろうという適当な判断だ。

制御回路だけをこれで壊し、マグネタイトに分解して吸収してしまえばいいのだと思いついたのだ。

しかし、スキルを発動した瞬間、優希の思考は停止した。否、途切れたというべきか。

黄昏の羽根を体内に持つ者同士、接吻という行為の上で吸魔したことが一種の感応リンクのようなものを起こし、脳に存在しない記憶と感情が流れ込んできたのだ。

優希の中にはラビリスの記憶と感情の断片が。ラビリスの中には優希の記憶と感情の断片がそれぞれ濁流のように流れ込む。

これが優希が黄昏の羽根を体内に持つていなければ、普通に制御回路を破壊し魔力を取り込むだけで済んだだろう。だが、黄昏の羽根同士が近い状況下のふたりを結びつけ、干渉しあってしまったのだ。唇が離れる。

ほんの一瞬だったが稲妻のような衝撃はラビリスを強制的に動かしていた回路の呪縛を解くには十分で、一度その瞳を閉じたラビリスは光の戻った目を見開いた。

「ああ…あんた…ナギサさんって言うねんなあ……ごめんなあ、ウチがちやんとしてなかった、せいで…傷つけてもた…」

そう呟き、ラビリスは倒れ、目を閉じる。

無理やり起動させられ、操られ、自分の意志に反することで限界まで戦わされた上に記憶の共有という精神に負担がかかることをすればこうもなるだろう。

元々、メテイスはともかく対シャドウ兵器であるラベリスもアイギスも人の心を持ち、行動理念の根底に人を守るという意識が根強く染み付いている。だというのに人と人の争いに繰り出され、ペルソナ使いと言えども実際に優希という人間とラベリス自身の自我が残った状態で無理やり戦わされるといふのは精神的に大きな負担となっていた。

11月に幾月によって操られていたアイギスが大きなショックを受けていたのと同じだ。

身体は機械でも、彼女たちの心はヒトであり、機械ではない。

「きみは、ラベリスって言うんだね。ごめん、きみのことをもっと早くに気づいてあげられなくて。俺も、屋久島に行つてたのにな…何にも知らなかった」

泣きそうな顔になった優希はそうして倒れるラベリスを抱き留め、横たえさせると高寺の方へと向く。一方、高寺は思ったような戦果を挙げられなかったラベリスに対し、憤り、失望していた。

「優秀な戦闘成績を修めていると聞いたからこそ何かの役に立つのはわざわざ屋久島からリスクを負って輸送させたというのに、捕縛はおろか足止めすらできないとは…やはり暴走した不良品は、だめだったか…あの役立たずが…！」

高寺がそう吐いたのを優希は聞き逃さなかった。目を見開く。

「誰が、不良品だ」

一瞬で詰め寄り、その首を片手で掴んで蹴り倒し馬乗りになる。

「ぐ…ぎ…か、はっ」

「言え！ 言ってみせろ！ 誰が不良品だ！ なにが役立たずだ！ ほら、言えよ！」

首を掴んだまま揺さぶり地面に叩きつける。当然、首が絞まっているので声が出せるはずもなく高寺は答えられない。にも拘らず優希はどんどんヒートアップしていく。

目の色がじわりと滲むように灰から金へと塗り変わった。

「なあ！ 答えられないのか!? ふ、はは、あはは…そうだな、そうだよなあ！ お偉いさんなお前はこんなゴミクズみたいな薄汚い

実験体モルモットの俺たちなんかには答える言葉なんてないんだもんなあ!!」

歯をむき出しにし、怒鳴り散らすように問いかけても答えが返ってくるわけがない。

優希だつてそんなことはわかっていた。だがもう、止まらない。止められない。

どんだん心の奥底からどす黒い感情が湧いてくる。殺意がどんだん膨らんでいく。こいつだけは殺さなきゃいけない。そんな気持ちになってくる。

「あはは！ そうだ、死ねよ！ 死ねばいい！ グチャグチャに壊して、殺してやるよ！ 俺もすぐに後を追ってやるからさあ！ だから、安心して死ねよ——なあ!!」

ギリギリと高寺の首を絞める優希はもはや当初の目的を忘れ、正気ではなかった。狂っているとも言える。

笑いながら泣き、本気で力を込めてすぐに殺してしまわないように片手で首を絞めながらももう片方の手でその手を抑えてぶるぶると震わせた。

「要らないんだよ！ みんなを害そうとするお前も、俺も！ あはははははは！ そうだろう！ そう思うよなあ!!」

滅多にない興奮状態で優希は叫んだ。これが正常な状態ではないことなど、見ていただけの英恵にもわかっていた。

つい30分ほど前に英恵の話聞き、美鶴の話題に目を輝かせ、困ったようにはにかんでいた姿はどこにもない。

あんなに物静かで丁寧だった普通の少年が、ここまで狂ったように高笑いし他者へと暴力を振るうというのは滅多なことではない。壊れかけている。

英恵ははやく武治か美鶴のどちらかが来てくれないかと祈った。英恵では、この少年を止められない。早くしないと高寺は死に、少年の心自体が壊れてしまう。

「ぐっ……う……」

呻き声をあげる高寺を嗤いながらも優希の視線は冷めていた。まるで、ゴミを見るような目だ。

その炎が牛頭の巨人を形作りまた弾け、一瞬にして膨れ上がろうとした。が、

「やめて…」

小さな声が優希を止めた。その声によって一瞬で目の色が金から元の灰に戻る。

優希の足にしがみついたのは、機能を停止したはずのラビリスだった。

「もうええんです……ウチは……だから、その人のこと、殺さんといて…殺してしもたら、ナギサさんまで壊れてまう…！」

「あはっ、なんで？ いいじゃん別に。俺は元から壊れてる。だからまたぐちやぐちやになってもわからないし大丈夫だよ！」

狂気的な笑みをすぐにやめ、にこやかに笑う優希は笑いながらもラビリスがどうして止めるのかが理解できないようだった。否、分かっていて、最早ラビリス程度では止められないところまで来ているために優希は止まらない。そこまで悪化させてしまったのは現在進行形で首を絞められている高寺だ。

「ほら、危ないから、ね？ ラビリス。少しだけ向こうに行ってるんだ」

まるで妹である奏子に呼びかけるような優しい声で優希はそう告げる。

そして高寺の首にかけていた両手を離しラビリスのしがみついている腕を優しく割れものを扱うかのように引き剥がす。

「げほっ…ごほっ…はあ、はあっ！」

手が離れたことで急に血が回り呼吸ができるようになって咳き込む高寺を無視し、優希はラビリスしか見ていない。ラビリスしか目に入っていない。

高寺に向けていた狂気的なそれとはまた違うが、それでも英恵とラビリスは優希の精神が正常に戻ったわけではないとわかっている。

これは、僅かに残った理性だ。

「い、嫌や！ ウチは向こうになんて行かへん！ 行くんなら、ナギサさんも一緒にです！」

それでも、ラビリスは退かなかった。

優希が人を殺してしまえばそれこそ本当に壊れてしまう。大事だと思っっている美鶴と弟妹の前からも姿を消そうとするだろうと記憶と感情を一時的にでも共有したラビリスはわかっていた。だから止めたのは高寺のためではない。しかし、

「ラビリスは優しいんだね。…あのさあ、聞いてる？ ラビリスはこんなにも優しい子なんだ。あんなつらい仕打ちを受けたのにまだお前のことを心配するくらいには。なのにお前、この子にさらにこんなひどい仕打ちをしてさ。使えないだの不良品だの、散々言ってくれたよね。不良品どころか燃えるゴミなのはお前の方だっていうのに」

咳き込み続ける高寺に向かって苛立ちを隠そうともせず優希は侮蔑の視線を投げかけた。ラビリスの言葉は優希に殺しを止めさせることが出来ず、かえって殺意を増幅させただけであった。

結局、優希にラビリスをぶつけたのは高寺にとって失敗どころか最大の悪手に他ならなかった。

優希からしてみればラビリスも犠牲者で、ヒトだ。そんな存在を無理やり操り戦わせるなどと言った所業は実験体時代の憤りや恨みを思い出させるには十分であり、ラビリスが倒れた後の高寺の言動も優希の憎悪を増幅させるには十分な威力を持っていた。

それこそ、憎悪が明確な殺意に変わってしまうくらいには優希の触れてはいけない地雷を踏みまくっていたのだ。

「だから、ごめんねラビリス。俺はもうこの人たちを許すつもりはないんだ。きみが許しても、俺があいつを赦せない」

「ナギサさん、なにを…きやあ!？」

優希は心底申し訳ないという表情をしながらそのままラビリスをその細腕から出せるはずもない力で放り投げた。

英恵の近くに投げ飛ばされたラビリスは自分では止められないとわかり何も言えずにぐらぐらと揺れる瞳で優希を見ることしかできなかった。そしてラビリスが動く気配がないと分かった優希は高寺へと振り返り口を開く。先ほどまでの狂気的な笑みとは違う、とても綺麗な笑みで。

「これから、俺はお前たちを殺します。とはいえ一瞬で殺すのはやめにしました。だって、それじゃ罰にならないでしょう？　じわじわと焼き続けるので、苦しみもがきながら死んでいってください。それでも、俺たちの——みんなの受けた苦しみの100分の1にもきつと満たないけど、俺だって心苦しいのでそれで我慢します」

嘘だ、と高寺は思った。

この少年はいまさら高寺を殺すことに何の躊躇もない。その何も映していない虚ろな目がそう物語っている。心苦しいというのも嫌味だろう。

命乞いをしようなどとは高寺も思わなかった。藪を突いたら悪魔が出た。それだけの話だ。

「ああ、ええ、そうしまししょう。俺は、わたくしは、そういたしますよ」

先ほどからなにかおかしい。目の前の少年の口調がおかしくなってきた。きている気がした。ぐちゃぐちゃに、混ざっているような。それに、なにか女のような声が重なっているような。そんな風に高寺には聞こえたのだ。

「……」

高寺は、一瞬見てしまった。

優希の姿に重なるようにゾツとする程に妖艶な銀髪の美女が笑みを浮かべている。脳をかき混ぜられているような感覚に陥りそこになにもないのにぐちゅぐちゅとねばついた水音のようなものが聞こえる。

しかし、それも一瞬でこの異様な状況のせいで幻覚と幻聴でも見聞きしたのかと振り払う。

「喉を焼き、肺を焼き、全身の皮膚という皮膚を焼き、息を吸うだけでも苦しく、身じろぎするだけで激痛が走る。そんな生き地獄に招待します。大丈夫。ちゃんと、最後には殺してあげますから。永遠の苦しみは与えません。なので皆さんご安心を」

もう誰にも止められなかった。

増幅した殺意は膨れ上がり、爆発寸前だった。それこそ、人を殺してはいけないと自戒していた優希のタガを外してウィツカーマン悪魔の

力を殺しに使うほどに。ここにいる英恵とラベリス以外の全員を殺した後は巖戸台分寮を占拠している部隊を一人残らずくびり殺しに行くのだろう。

それほどまでに、優希は弟妹や大切なものを害そうとした高寺たちを誰も逃す気が無かった。

チリチリと陽炎のように揺らめいていた温度の無い炎が一瞬にして莫大な熱量を持つ業火へと変わる。肌が焼けるような感覚を感じ高寺はついに死ぬのか、と覚悟した。

「――全てを悔いながら苦しんで死ね」

それが優希から高寺や桐条の私設部隊という、武治や美鶴、英恵を裏切り、ストレガの子供たちやラベリスを、その姉妹を傷つけた者達への葬送の言葉だった。

報いを受け取れ、と優希の目は語っている。藪さえ突かなければ良かったのに、と語っている。

会社や社員のことを真に考えるのならば黙っているべきだったのは優希ではなく、高寺たちの方だったのだ。このままでは、優希は桐条に直接手出しはせずとも関係者全員を殺す。

それは私設部隊だけではなく、高寺に協力した人間すべてだろう。「殺すなら、私だけにしろ…ッ！ 彼らは私の命令に従っただけで何の責任もない！」

なけなしのプライドが高寺にそう言わせる。

高寺も悪意はあったがその行動理念はあくまで桐条グループのため、という経営者目線で言えばごく当たり前のことで真面目なものだ。

決して自らの私腹を肥やそうなどという私利私欲なものではない。だからこそ、高寺は他のものを守ろうとした。目の前の、この話が通じるかわからない悪魔に交渉を持ち掛けたのだ。

「……そう。でも、お前の考えに共感して、どうなるか分かって賛同した奴もいるんだよな？ 無理やりじゃなくて、自分から志願して。」

主である武治さんや英恵さん、そして美鶴さんを害してもいいと思っただんだよな？」

簡単に言いくるめられるほど相手は甘くなかった。狂っているとさえ言えども正常な思考が残っているが故にすぐに指摘される。めらめらと燃える炎はまだ高寺を直接焼いてはいないがその勢いを衰えさせてはいない。

「ぐ…だが、それでも」

「くだいなあ。どうせ、楽観的だったんだろ？ 〃ただの子供ひとりやふたり、どうにでもなる」って。勝てる戦いだと思っただけでなかつたわけだ。お前はそれでも用心深いからこんな用意したんだろ？ けど。でも、足りるわけないじゃん」

足りない、と言った優希の言葉に高寺はゾツとする。

確かに、優希の言う通り高寺は甘く見ていた。相手はロクに対人経験を積んでいない素人。たかが高校生の子供に負けるはずがない。それどころかペルソナ反応による探知も反応がなく、異能を失ったとされ、ここ一ヶ月は療養しており戦闘もしていないと言われていた相手に過剰戦力だと思っていたのだ。

そして、楽に優位をとれるとも。だが結果はどうだ？ 異能は失われておらず実際に私設部隊の殆どはたつたひとりに壊滅させられ、奥の手だった対シヤドウ兵器のラビリスマも無力化された。そしてここは火の海だ。

いま無事で残っているのは本邸内部で美鶴と武治の足止めをしている数人だろうがその来るかもわからない増援に命を懸けられるほど高寺はギャンプラーではない。動けば優希は問答無用で高寺を殺し、増援も殺すだろう。

「無駄だよ、無駄。全部無駄。お前にできることは、欲を出さず俺に聞わらない事だったんだ。素直に俺と美鶴さんがくつつくの、待ってればよかったのに。俺はみんながちゃんと弔ってもらえて、慰霊碑が立てば別にそれだけでよかったのに。桐条グループが減ぶことを望んでいたわけじゃなかったのに。こんな俺の当たり前の願いで結果的にそうなるのだとしたら、それこそが桐条の清算すべき罪では無いの

でしょうか？」

心底、愚か者を見るような目で高寺を見下ろす優希の声は激情や殺意を感じさせない平坦なものだった。

「うん。でもいいよ。高寺さん、嘘はついてないみたいだし。だからほんとに命令を聞かざるをえなくて利用されていた人だけ、見逃します」

微笑む。

その返答は高寺の望むものではなかったが、優希にとっては最大限譲歩した形であった。

命令され、仕方なく従っていた人まで殺してしまえば同じ穴の貉だ。優希は、殺意に囚われていながらもそこだけは捨てていなかった。それを気づかせてくれた高寺にそこだけは感謝したくらいだ。あのままでは怒りに囚われ無関係の人も焼いていたかもしれない。それは望みではない。

「じゃあまず、悲鳴を上げられないように喉から焼きましょうか。』かつて『、俺が幾月にそうされたように。俺の時に使ったのは薬で、そのせいで記憶はめちやくちやになるし髪の色も変わっちゃったし目も半分以上視えなくなっちゃったけど高寺さんはそうならないようにちやあんと呼吸ができる程度に軽く焼くので安心してくださいね」
何を語っているのか高寺にはわからない。

目の前の少年の目は悪いらしいが失明していないし喉は焼かれていない。髪の色も変わったことがないと聞く。ついに、ありもしない記憶を創り出し、それと混濁しているのかと高寺は疑う。それほどまでに優希は狂いきっており、高寺から見ても到底素面だとは言えなかったからだ。

ただ嘘か本当か分からない幾月にされたということとその部下だった自分に返そうとしている意図のようなものを感じ取り、ゾツとする。幾月が生きていれば幾月にしたのであろう。だが、幾月はここにはいない。生きてもない。

矛先はどうあがいても高寺にしか向かない。

「あ、そうだ。見聞き出来たら英恵さんやラビリスとか無関係の他

の人の精神衛生に悪いし、もう少し炎の勢いを強めますね。熱いかもしれませんけど、我慢してください」

風呂の温度を上げるかのような、そんな気軽さで優希は燃え盛る炎を強める。

更に燃え上がった炎は轟音を立て周りの音と景色を遮断する。これは、外からもふたりの様子が見えることはないだろう。

「ああほんと、高寺さんは幸運だ。俺みたいに身体を切り刻まれることが無ければみんなみたいに苦しんで、愛に飢えて絶望に染まりながら死んでいって弔われないなんてこともないんです。死んだら丁重に弔われ、墓に入れて貰える。素晴らしい事じゃないですか。もちろん、ラビリスみたいに姉妹を殺し続け自分の心を傷つけ続ける精神的な生き地獄のような想いもしなくて済みますよ。ほんとうに、羨ましい」

また、憎悪を滲ませた優希は喋る。

ここで思い切り憎悪をぶつけておこうという算段か、それとも。

「声を出せなくなっちゃうんですし、最後に何か言いたいことは？

まあ、何もありませんよね。あってももう遅いですけど。知ってます？

直接炎で焼かなくても喉と肺って熱気だけで焼けるんですよ。爛れて息が出来なくなるんです。イモムシみたいに這い蹲って血を吐くしかできなくなるんです。とつても、とつても苦しいんですよ」

一度、言いたいことを語り終えたのか優希は炎を高寺へと向け、喉を焼こうとした。

が、その瞬間飛んできた氷の塊が周りの炎の熱で溶け、僅かな水となつてその炎をゆらめかせた。それはなんの影響も及ぼさない些細なこと。だが、なにかが飛んできて邪魔をされたということ自体が優希にとっては警戒すべきことなのだ。

「……………」

一瞬に起きたその出来事に優希はいったん燃え盛る周りの炎を消し敵意を発しながら身構える。

新手か。それともイレギュラーシャドウか。どちらにせよこいつを殺すのはやめて英恵さんとラビリスを守らねばならない。

「三上…… やめるんだ……！」

しかしそこに居たのは召喚器をこめかみにあてた状態で息を切らした美鶴だった。そのことに、優希は一瞬で放っていた敵意を消した。

なんだ、美鶴さんか。そう口には出さなかったが英恵やラビリスを害する者では無くて良かったという安堵から、本心から微笑む。そして、

「やめないよ。ごめんね。美鶴さんの頼みでもこれはダメだよ。やったことの責任を、この人はとらないといけないから」

明確に否定した。

「どうして……」

美鶴から見ても、今の優希は異常他ならなかった。どうして、あんなに虚ろな目をして笑っているのか。虚ろな目をしているというのにその言動は明確な意思がありとてもはつきりとしていてちぐはぐささえ感じる。そして美鶴にすら一瞬と言えど身も竦むような強烈な殺気を向けたという事実。

一体、美鶴や菊乃、そして武治が足止めの部隊と問答している間に何があったのか。

何もわからない美鶴は他者を平気で害そうとしている異様な優希に対して、どうすべきか悩んでいた。だが、

美鶴はその悩みを振り切つてとにかく動いた。近寄り、その手をとる。

握った手はあれだけ燃え盛っていた炎を扱っていたというのに驚くほど冷たかった。

「三上——いや、優希。もういいんだ。お父様もじきに菊乃とこちらへいらっしやる。寮にいる有里たちも無事だ。そうやって怯えて誰かを傷つけなくてもいいんだ。彼らはもう、誰も傷つけられない」

「俺は怯えてなんかないよ。あそこにいるラビリスにも言ったんだけどさ。みんなが許しても俺が赦せないんだよね、この人のこと」

庇うような美鶴の言葉に、優希はきよとんとしてラビリスへと伝えた言葉と同じものを返す。そのことに、美鶴は優希自身が誰かのため

ではなく優希個人の感情で高寺を害そうとしていることを知った。

誰かを傷つけられる怖さからではなく、もう既に高寺が誰かを傷つけてしまったが故に、優希は怒り狂い、自分で赦せなくなつた。

ならば、と美鶴はアプローチの方向性を変えることにした。殺意があるのは否定しない。だが、それで短絡的に殺してしまえば困るのは優希自身だ。きっと殺意があれども殺したということ自体に悩み続け、悔い続けるだろう。ならば、感情的な面で問いかけるのではなく、社会生活に則した倫理的なことで揺さぶらなければならぬ。

そう思つたのだ。

「私は、結婚相手が殺人の罪や傷害罪で問われるのは困るな……」

「……美鶴さんが、そう言うなら。家族や武治さん、英恵さんにも迷惑がかかるのは確かに嫌だし」

ぼやけば、少し不満そうだったがすんなりと折れた。それはもう、驚くほどに。

あれだけ昂らせていた憎悪や殺意を一瞬でひっこめたことに高寺は戦慄を隠せなかつた。なんなんだこの生き物は、と慄くことしかできな。

ヒトの理から外れた力を有し、精神面でも今回のことでそちらに寄つていたというのにまさか逮捕されるだのされないだのでその矛盾を降ろしたということに。

あれだけの力を有していれば高寺や私設部隊の隊員全員を跡形もなく焼くことだって出来るはずであるし、今回のことを考えれば桐条を黙らせ、高寺を害したことすらなかつたことにもできたはずだ。

だというのに、殺人罪や傷害罪といったヒトのルールですんなりと引き下がる様子はちぐはぐ極まりない。

無視しようと思えばできること。それを無視せずに迷惑がかかる時まで言い出した少年の精神構造を高寺は心底理解することが出来なかつた。

「ありがとう。我慢させてしまつて済まない……当然、彼にも他のものにもきちんと責任はとらせるつもりだ。絶対になあなあにはさせない」

戦慄する高寺を他所に美鶴は優希を抱きしめる。そうすればすぐにしつかりと抱き返され、逆に頭を撫でられてしまう。こんなことは美鶴としても初めてのことだったので内心で動揺する。

「ううん、良いんだ。殺したい気持ちとか憎い気持ちみたいなのはまだあるけど、自分でなんとかするから。俺の方こそごめんね。美鶴さん達のこと助けにいけなかったから…」

「いや、良いんだ。あの人数を相手にお母様を守ってくれただけで十分すぎるほどだ」

謝罪をする優希は未だ虚ろな目のままだったが一応そこに美鶴を映してはいるようだった。力をさらに込められキツく抱きしめられる。まるで、離したくないと不安げにその虚ろな瞳が揺れ、そして泣きそうな微笑みを形作る。

「——美鶴さんが無事で本当に良かった。俺、美鶴さんが怪我してたり死んじゃってたら、あの人達みんな燃やし尽くして消しちゃうところだった」

心底安心したような顔とは真反対なゾツとする言葉を囁きながらひとしきり満足するまで美鶴の頭を撫でて堪能した優希は落ち着きを取り戻したのか美鶴を離して高寺を見た。

「良かったですね。何事も無く命拾いできて。俺を止めようとしてくれた英恵さんやラビリス、そして美鶴さんに感謝してくださいね。とつても」

にっこり。何も映していない虚ろな目で高寺に先ほどと同じ笑みで笑いかけた優希はそれきり高寺から興味をなくしたのかラビリスと英恵が居る場所へと歩いていく。それを見送った美鶴が今度は険しい顔で高寺を睨み付けて息を吐く。

「どういふことか、説明してもらおうか。高寺」

「〃三上優希〃をやめます」（12／14）

12月14日（月） 昼

桐条宗家本邸

「以上が、今回の事の次第になります」

あの後。

夜も遅く、このようなことが起こったあとでは寮にも帰れないだろうという理由で優希と美鶴は桐条本邸に泊まることとなった。

寮を占拠していた（実際はメテイスによって拘束され床に転がされていた）警備部も武治の声によってすぐに回収され、寮内も原状復帰とはいかないが壊れた家具などはすぐに取り換えられることになった。

寮にいた面子には桐条の別派がひとりでに暴走したことだ、という説明がされ優希が目当てだったなどということも伏せられた。そこがまた湊や奏子、そしてゆかりの不信感を若干煽ることになるのだが、まさか優希が桐条本邸を火の海にしたなどとは言えるわけもなく。

「〃対シャドウ特別制圧兵装七式メテイス〃が自立稼働していた？

：あれは人格が発現しないという欠陥により内蔵されていた黄昏の羽根を回収された後廃棄されていたと聞いたが……」

もう一つの報告を受け、武治は首を傾げる。

彼女のコンセプトは遠距離～中距離の戦闘が多いアイギスとの連携を意識した近距離特化仕様であり、戦闘成績の良かったラビリスの経験も応用して作られた真の意味でラビリスとアイギスの妹ともいふべき存在なのだ。メテイスが突撃して敵の守りを切り崩し、アイギスがそこに重火器による弾幕を放ち殲滅する。といったような連携を目指していたという。

だがアイギスと同型であり後継機の機体でもあった〃七式メテイス〃は黄昏の羽根を埋め込まれても動くことなく神経回路に何らかの異常があったのではという予測の元、調査を繰り返されたのちに原因不明として廃棄されたのだ。

しかしそれが人格を得て勝手に動き、アイギスのことを「姉」と認識しており今回の襲撃で襲撃者たちを全て無力化してしまえるほどの性能を發揮したとなれば武治も唸るしかない。

いつ、どこで目覚めたのか。聞き取りを行った桐条の研究員は言いにくそうに口を開いた。

「12月2日の深夜に寮の地下物置——そうです、一階の床下のあそこです。あそこで彼女は目覚め、自ら扉を蹴破って出てきたそうです。彼女も自分がなぜ目覚めたのかわからないようで……いえ、目覚めた後の目的は七式アイギスと有里奏子と有里湊を守る、というものだったようですが」

アイギスに危険が迫っていたのか。そう考えるも、特に2日に何かあったという報告は聞かない。そしてなぜ寮の地下に。とにかく、わき道にそれるような形の話題であるメテイスのことは特別課外活動部預かり、ということにしておこうと武治は置いておくことにした。

「それが……あの機体から黄昏の羽根の反応がするにはするのですが……問題が」

「なんだ」

武治がぶつきらぼうに聞けば、若い研究員の男はあせあせと焦りながら冬だというのに垂れる汗をハンカチで拭った。

「……検査を行ったところ、三上優希さんからも黄昏の羽根の反応が……」

「…!？」

「聞き取りを行った結果、あっさりと『体内に黄昏の羽根を内包している』とおっしゃられ……いかがなさいましょう……?」

困りきったような研究員の言葉に武治も困惑する。

どうする、と訊かれてもどうすることもできないだろう。

メテイスと同じくいつどこで黄昏の羽根が体内に入ったのかわからない。7月末はそんな話はなかった。一体どこで、武治の知らないうちに何が起こっているのか恐ろしさすらあった。

だがその異物である黄昏の羽根をいまさら摘出したところで身体が無事という保証はない。既に癒着・吸収されている可能性もあれば

身体自体が弱っているという優希にそんなことをすれば耐え切れずに死んでしまうのではないかという予感もして、悩む。

だが黄昏の羽根自体を人の体内に埋め込んだという事例。それを武治はつい最近どこかで見たような気がしたのだ。

（そうだ。幾月の資料：「皆月みなつき 翔しょう」という子供に関する研究レポートではなかっただろうか）

人体に黄昏の羽根を埋め込めばどうなるか、という幾月の興味本位で実験に使う用にとエルゴ研に連れてこられた中でも最年少の孤児の少年がその「皆月翔」だった。

孤児の中でも幾月は優希と翔を気に入っていた。前者は道具としてだが。

翔に関しては幾月の秘蔵つ子とも呼ばれており、研究所内でも隔離されて別の計画の為に使われていたらしくその存在をほとんどの人間が知ることはなかった。恐らく優希ですらその存在を知らないだろう。

ストレガ計画が頓挫した際に他の孤児は逃亡もしくは死亡が確認されていたがその子供だけは未だに行方がわからない。死亡した、と書かれておらず最終的な記録は8歳ごろに何らかの手術が行われ、その結果昏睡状態に陥った、とまでしか書かれていない。

調査すべきことは山のようにある。とそれらを幾月に全部投げ、怠ってきた自分自身と自身に知らぬ間に問題を増やしまくったにも関わらず1人死に逃げをした幾月に武治は苛立ちとやるせなさを感ずる。

確かに武治は多忙だったが幾月を信用し、任せきってしまったことにも問題がある。だからこそ、このツケは自分自身でなんとかしなければならぬと再度決意したので。

「…彼に関しては何か健康的な異常がないか今から簡易的なメデイカルチェックを行う。それが済み次第、こちらの部屋に美鶴と共に呼んでほしい」

「わかりました。あの、運動機能検査などは…」

「いらん。こちらで用意できる機材のできる範囲でいい」

つまるところ、専門病院のような本格的な医療器材をつかった検査はせず、あくまでも黄昏の羽根関連の検査と簡易的な健康診断だけがいい、ということだった。

あのような膨大な力を使ったのだから、その身体にかかった負荷はかなりのものだろう。美鶴の話によればあの後すぐから未だ眠り続けているようだが、特に発熱したり発作を起こしたりなど消耗しているような様子は無いらしい。

そこで武治はもうひとつ、問題があつたのを思い出す。

五式ラビリスについてだ。

高寺によって無許可で封印処理がされていた屋久島から連れてこられ、優希と戦わされた彼女だったが、研究員が調べた結果神経回路の一部が焼き切れており、何故自立できているのかが不思議なほどだったという。だが、それでもラビリスは何の異常もなく武治には少々複雑そうだったが礼儀正しく対応し、はきはきと喋っていた。動作にもなにひとつ問題は無い。

簡易な検査とメンテナンス。そして聞き取りをされたラビリスはいま、本人と美鶴の要望によりふたりと同じ部屋に居る。

何かあれば美鶴なら抑えられるし、なぜかこの短時間で懐いているらしい優希の手前荒事も起こさないといいたことかららしい。

戦闘能力は以前と変わらず。ペルソナの発現はしていないが十分戦力になる彼女を、いつそのこと特別課外活動部預かりにしてしまおうか、と武治は考えた。このままここに居てもデータ取りにしかつかわれない。ならば、彼女の妹機たちや優希のいる巖戸台分寮で過ごした方がいいのではないか、という考えだったのだ。

それをまだラビリス本人や美鶴には伝えていない。だが、武治には優希がそれに近いことを要求してくるのではないかという予感があつた。

一時間ほど前。

「ウチは対シャドウ特別制圧兵装五式ラビリスいます。改めてよろ

しゆうおねがいします。…ええと、美鶴さん？ でええんかな…」

優希と美鶴に割り当てられた部屋で、メンテナンスから帰還し、研究者からそこへ連れてこられたラビリスはおずおずと頭を下げた。青い銀髪のポニーテールが前に垂れる。

そんなラビリスの様子をみて、美鶴は僅かに笑う。アイギスやメティスとはまた違った特徴のある性格らしい。

「ああ。大丈夫だ。よろしくラビリス」

「その、昨日のことはほんまにすみません…ウチが武器ぶん回してお庭穴だらけにしても…」

心底申し訳ない、と言う顔で謝っているラビリスの脳裏に浮かぶのは穴だらけになった綺麗だった庭園だ。操られていたとはいえ、流石に砂利を飛ばし土を抉り、芝を吹き飛ばし、ボコボコの穴だらけになった無惨な庭を窓から見てしまえば、謝らないわけにはいかなかった。

優希の炎によって焼けていればもつと悲惨なことになっていたかもしれないが優希は優希でそこをうまく調節していたようで足元の芝が軽く焦げ付いたくらいだ。被害で言えばラビリスのやらかしたことの方が大きい。

しかし、

「いいんだ。庭はいずれ元に戻せる」

美鶴は許した。

優希が避けまくっていたせいで穴が開いたとも言えなくはないが、そもそも避けなければ大怪我だ。誰も責めることなどできない。

唯一、責められるとすればラビリスを操り、使おうとした高寺くらいだろう。

「だれも傷つけなかった、というだけでも十分きみは立派だ。よくやった」

「え、あ…そう、ですやろか…？ ほんまに？」

美鶴の言葉にラビリスの瞳が揺れる。まさか責められもせずむしろ褒められるなどは思わなかった、という顔だ。

「ああ。本当だ。命令に抗うというのは機械としては難しい事だ。し

かしきみは己の心で抵抗した。それを立派だと言わずしてなんになる。：勿論、抗いきれなかった、というのも身体が機械なのだから仕方ないともいえる。悪いのはそうさせようとした我々人間だ」

思った通りのことをそのまま言葉に出せば、ラビリスの顔がどんどん赤くなる。ぷしゅう、と湯気がでた。今のは恐らく排熱だ。

「あ、なんやろこれ…これが、恥ずかしいって、ことなんか…えへへ、こう言うの、正しいかわからへんのですけど…ありがとうございます」

顔を赤くして頬を押さえるラビリスは美鶴から見ても普通の少女のようにも見える。

やはり、対シヤドウ兵器は機械などではなく人の心を持ったひとり人間なのだ。と美鶴は兵器扱いする大人の事を考え憂鬱になる。彼女は、これからどうなってしまおうのだろうか。

操られていたとはいえ、高寺の計画に加担してしまった。その責任を、彼女は取らないといけないかもしれないのだ。

「だが、すまない…きみのこれからのことは私にはわからない上にどうすることもできない。最悪、今回のことの責任をきみも取らなくてはならないかもしれない」

「あー、せやね。結果的に大怪我した人ではれへんかったけど…ウチはまた沢山暴れてもたから…二度目はないでつてことやね…わかってます。廃棄でもなんでも、受け入れます」

照れたような顔から一転。しゅん、と落ち込んだラビリスはそれでも縋るような目で優希を見やる。

「あの、ウチはそれでもええんですけど、ナギサさんはどうなりはるん…？ あんな…強大な力をつこうて…なんもなしに放っておかれるわけ、ないですよ…？」

優希を心配そうに見つめるラビリスは自分のことよりも優希のことを心配しているようだった。確かに、ラビリスの言う通りでもあるが今回大きな怪我をした人間はいなかった。

そしてこうなってしまったのは何度も言うが高寺がこのようなことを起こしたからであり、それさえなければ優希はあのような力を振

るうことはなかったのだ。

なにかがあつたとしてもあくまで私設部隊の隊員を相手取つていた時のように自衛にしか使わず人間に直接それを向けるなどということとはしなかつただろう。だが実際は本邸を火の海にしたということであんな異常な力を見られてしまったからには実験体扱いに逆戻りしてしまうのではないかという心配がラベリスの中にあつた。いくら優希の記憶と感情の断片を得たからとはいえ、ラベリス自身に美鶴たち桐条へのこういつたことの信頼はあまりない。

否、むしろ優希の10年前の記憶を得てしまったからこそ、そう思つてしまったと言えなくもないが。

美鶴はベッドの上で眠っている優希を見やる。美鶴を抱きしめ、英恵とラベリスの元に向かつた後はただ武治に言われたことに頷くことしかしなかつたのだ。どちらかと言えば、湊のようにどうでもいい、といった態度と言えいいのか。高寺や私設部隊の隊員の方を絶対に見向きせず、無いものとして扱つていた。

美鶴も疲れてはいたので諸々の処理を父に任せ、急遽割り当てられた新しい部屋で寝起きをしたが優希は未だに眠り続けたままであり、昨夜は気がつかなくつたが火傷の跡がその身の至る所にある。

恐らく炎に巻かれただろう高寺は首を絞められたこと以外ほぼ無傷だと聞いたために一番火傷を負つたのが本人だという矛盾した状況に美鶴は困り果てた。

(恐らく、三上が：いや、優希が本当に焼いてしまいたかつたのは高寺でも他の誰でもなく己自身だったのでは)

そうなのではないか、と美鶴は思つた。

英恵の話によれば発狂状態に陥つた優希は「高寺を殺し、自分も死ぬ」などと言つていたらしい。自殺願望はまだ治まっていなかったということなのか、それとも新たに噴出してきてしまったのか。それほどまでに精神的に追い詰められてしまったのか。

美鶴には、どれもが原因であつてもおかしくはないという気がしてならない。だがそんな状態である優希を美鶴は、無いに等しいが例え父が危険だと判断して引き離そうが引き渡す気も手出しさせる気も

なかった。

「……大丈夫だ。優希に関しては私が絶対に手出しさせない。ところで……」

「はい？　なんですか？」

美鶴は気になったことがあった。どうしてラビリスが優希のことをナギサ、と呼んでいるのか。ふたりは旧知の仲なのか。何故そんなにも出会ってすぐのようにも思えるラビリスが優希に懐き、心配しているのか。

「何故きみは優希をナギサ、と呼んでいるんだ？　聞いたところきみはずっと屋久島の研究施設にいて幼い頃の彼との面識はなかったはずだ」

「ああ、そのことやね……なんて説明すればええんやろ……」

美鶴が問えば、ラビリスが困ったような顔になる。そして、ポツと顔を赤らめた。

「その??:キス、されてもて……」

「キス!?!」

小さく呟いたラビリスの言葉に美鶴は目を剥いた。キス。すなわち接吻。

まだ私にもしてもらっていないのに、この機械の乙女にはそれをしたというのか!?!　と、美鶴の頭の中はパニックになる。

そんな混乱した美鶴の様子に気がついていないラビリスはそのまま語り続ける。

「ウチ、もう戦いたくなくて、辛くて、苦しくて。それで助けてって言ったらナギサさんがそうやって助けてくれはったんです。よく原理はわからへんのですけど、でも必死で呼びかけてくれて……まるでデータベースで見たヒーローみたいやった……」

顔を赤らめたまま大切な思い出だ、とでも言うかのようにラビリスは唇に手を当てて感触を思い出すかのように目を細める。

「その時に、ウチとナギサさんの記憶と気持ちみたいなのがぶわーっで見えて……それでウチはナギサさんのことを知ることができたんです。たぶん、あの様子やとナギサさんもウチの記憶を見てはると思う

んです」

ラビリスは思い出す。あの炎が弾ける直前の優希の言動を。

まるでラビリスの封じていた気持ちをも代弁するかのようなあの怒り狂いようはラビリスの記憶と感情を得ていなければありえない行動だ。

いや、どちらかといえば記憶と感情の伝播と共にラビリスの負の部分が優希に行ってしまったというべきか。ラビリス自身は妙に思考がすつきりしているのだ。

【吸魔】を行った際にマグネタイト以外のものも吸収していてもおかしくはない。そんなことは露知らず、ラビリスは固まったままの美鶴の様子がおかしいことによく気が付き、首を傾げる。

「あれ、美鶴さんどうしはったん？ しんどいとかですやろか…？
外におけるメイドさん、呼びましょか？」

「あ、ああ。だ、大丈夫だ。大丈夫。そうだ、私は大丈夫だ。だが…
狼狽えながらラビリスへ返事をした美鶴はしかし、むっとした顔つきで眠っている優希を見る。

「彼には詳しく話を聞かねばならん。場合によっては…処刑だ！」
それでも無理やり起こしたりしないところが、美鶴の優しさでもあった。

優希の簡易的なメデイカルチェックを終え、書斎は天井に穴が開いたため改修中なので応接室に呼び出された美鶴と優希、そしてラビリスは椅子に座る。

対面には高寺と、書斎を占拠し美鶴に助力を頼んだ（ついでに書斎の天井に穴を開けた）私設部隊の隊員——どうやら彼は隊長だったらしい——そして警備部の隊長である男が並んで座っている。警備部の隊長の腕には骨折したのかギプスがつけていた。

そして一番奥。議長席とも呼べる単独の椅子に武治が険しい顔をしながら座っている。

「此度の一件は当主である私に対する背任行為と見てそれぞれ責任を

とってもらう。沙汰は追って下すが全員厳罰は逃れられぬと思え。特に高寺。首謀者のお前はな」

「……はい」

高寺は首に包帯を巻きながらもしつかりと着替えを済ませてきたのかスーツに汚れひとつない。しかし、その表情はまさに観念しました、といった表情だ。

「三上くんからは何かあるか。主な被害者はきみだ。最低限、こちらにできることをさせてもらう」

「じゃあ…」

武治が問えば、まだ虚ろな目のままな優希が口を開く。一晚経ち、昨日のような激情を見せることはないが不安定さは治っていないかつたようで一見正常に見えて正常ではないことがわかる様子だ。目が、まったく笑っていないのだ。

「この話し合いが終わった後、この人を二度と俺の前に出さないでください。会わせないでください。謝罪も不要です。見てだけで殺してしまいそうになるので、出来れば今すぐにも追い出してほしいんですけどそこは我慢します。居ないと話し合いにならないでしょう？」

につこりと笑みを形作るがその空虚な笑みは美鶴や高寺からしたら最早恐怖でしかない。

美鶴は優希が壊れてしまうのではないかという怖さから。高寺からすれば昨夜の出来事を思い出させて、だ。

要するに優希は二度とその面を見せるな、と言ってきたのだ。それも、高寺を殺してしまいそうなほどに未だ怒りが渦巻いているせいだと。

「ああでも…社員の人のことを考えてるってのは本当みたいなので、降格や解雇処分などにせず代表補佐のままでもいいんじゃないんでしょうか。社員のこと、だけ、は考えてるみたいなので。でもなにもしないってわけにもいきませんし被害にあった物の賠償をさせたり報酬減額などでいいんじゃないんですかね」

だけ、という部分を強調した優希の声は平坦だ。思いやりからこれ

を言ったのではないことくらい武治にも美鶴にもわかっていた。要するに、裏には一切かわらせず、力を没収し、表の仕事でほぼタダ働きをさせ、荷馬車の如く使えばいいと言っているのだ。

「だって、この人そっち方面ではかなり優秀ですよ。2部門の人間を秘密裏に動かせるほどの信頼もあるようですね。あとは追い込み方とかその用心深さとか。ちよつと話しただけの俺がいうのもなんですけど。捨てる会社じゃヘッドハンティングされるよか桐条に居させてあげた方が良いでしょうって」

逃がすな。と優希の目は告げていた。逃がさず、甘い思いもさせず、お前達で一生こいつを飼ひ殺しにして見張っている、と言っている。

「それに、俺以外の家族に会いに来たり野放しになったら俺がこの人殺すので。どこに逃げても果てまで追いかけて殺します。苦しませたのちに殺します。だからちゃんと首輪は繋いでおいてくださいね」そこで名案を思いついたと言わんばかりに優希はなんとなしに口を開いた。

「…そうだ。もしくは人のルールに乗っ取って上から桐条ごと叩き潰すのも良いですね。監督責任を放棄したとみなして」

追撃のように告げた。高寺に向かい、逃げれば殺すから絶対に逃げるなどと言うことは考えるなど。そして桐条には絶対に逃がすなとさらに釘を刺した。

こうなれば、武治ももとより監視はつけるつもりであったが桐条にまで余波がいくとなれば余計に高寺を逃がすわけにはいかなくなつた。高寺のためにも、桐条のためにも。

「俺、今回のことで決めました。力がなくなにも守れないんだって。戦う力があっても人間として生活する上での権力もないとこうして舐められて大切なものを簡単に傷つけられるんだって。だから、短い間だとしても倉橋を継ぎます。俺は、『三上優希』をやめます」

声色は極めてにこやかだが、それ以外どこも笑っていない目のままでへらりとうすら寒い笑みを浮かべた優希の言葉から美鶴もラビリスも武治も感情を読み取れなかった。

わからない。何も見えない。ただ、あの穏やかだった気性を豹変させるほどの生半可な決意ではないものを秘めさせてしまったということだけがそこにはあった。

武治は、深く息を吐く。

「……わかった。全力でその希望に答えよう」

「ありがとうございます」

また優希が笑うが、その声に本気の感情は含まれていない。まるで、そういう喜んだ演技をしただけのような。そんな気さえ起きる。

「高寺や他の者の処遇に関し、他に言うことはあるか？」

「ないですよ。高寺さん以外のふたりや他の人は命令されただけらしいですし、別にお金とか謝罪とかいりませんし。俺からは昨日言った要望と、さっきのことを守ってもらえればそれで。あ、でもラビリスやアイギスたちを物ではなく、ひとりの人扱いしてほしいというのはありますね」

きたか、と武治は思った。優希の願いは予測済みだ。

そして桐条内部への体裁を保つための言い訳も既に作ってある。

「きみの要求をそのまま叶えてあげたい気持ちはこちらとしてもある。だが今回のことと五式ラビリスが行った暴走事件。それらを全てなかったことにして人間社会へと出すわけにはいかない」

ラビリスは情報としての知識はあれどもメテイスやアイギスと同じく社会生活を行ったことがない世間知らずだ。そんなラビリスを軽い監視をつけた程度でひとり現代社会に出し、機械だとバレてしまえば大問題になる。

だからこそ、武治は続けるように結論を告げる。

「罰として、”対シャドウ特別制圧兵装五式ラビリス”は特別課外活動部^{S.E.}に配属し、彼らと共同生活を行いつつタルタロス踏破の手助け及び戦闘行動に従事すること。その為に必要な手続き・援助はこちらで行う。また、これからきみとその姉妹への管理権限は桐条グループではなく部長である美鶴へと全て移行する。それでいいな」

実質、罰と見せかけたラビリスを特別課外活動部へと送り自由に生活させるという宣言でもあった。無罪放免どころか手厚い対応に近

いその行いは美鶴でさえも上手い落としどころだと父の考えに感心したほどだが、むしろ優希がわなわなと震え始め、立ち上がった。

「そんな……俺は認められません！ 彼女は戦うのを嫌がっていた！ 貴方まで被害者である彼女をまだ戦わせようと言うんですか……！」

「優希……これは……」

「こうするのが一番いいんだってことはわかっている。わかっているけど……戦いたくもない子を戦わせてなんになるんだ！ 辛い事の繰り返しだろ!？」

美鶴が諫めようとするも、優希は先ほどとは違う感情のこもった目で美鶴を見つめ返す。どうして理解してくれないのだという困惑がその目には浮かんでいる。

だが、美鶴はラビリスの意見を聞いていないにも関わらず優希が決めてしまっただけは彼女の意志を尊重できないと容赦なくその意見を却下した。

「本人の意見も聞いていないのにきみが決めていい事ではないだろう。まずは落ち着くんのだ。な？」

「そう……だけど……」

複雑そうに下を向いた優希はあげようとした言葉の拳を下げた。確かにそのとおりであるのはわかりきっていた。これは、優希の我儘でもあったからだ。

そして当のラビリスは少し悩むような表情をしたのちに、笑顔で口を開く。

「ウチ、ええですよ。やります。元々廃棄されてまうんやないかって思ってたところなんです。せやから、スクラップにもならんで良くて……ナギサさんの近くに居られるっていうこんな素晴らしい罰でいいのなら、ウチは誠心誠意償わせてもらいます」

「！」

そんなラビリスの快諾を認められなかったのは優希だ。

否、認めてはいるのだろうがまだ心配らしい。不安げな瞳をゆらゆらと揺らす。ラビリスからしたら、戦わない方がいいのは今の優希に

も見えた。それだけ、不安定に見えたのだ。

「でも、きみが望むのなら、もう戦わなくてもいいんだ。だから——」
止めようとした優希にラビリスは首を横に振った。気持ちはうれ
しいが、ラビリスにもその「償い」は願ったり叶ったりなのだ。

「ううん。ウチ、ナギサさんやナギサさんの記憶で見た、ウチの妹たち
の力になりたい。ペルソナは使えれへんし、戦うのはまだ、確かに
ちよつと怖いんやけど、それでも世界の危機や。対シャドウ兵器とし
て生み出されたのにウチだけ戦わんってわけにもいかへんやろ？」

優希の記憶を垣間見たラビリスはシユブニグラスのことやニヤ
ルラトホテプのこともわかっていた。特別課外活動部という高校生
や小学生のまだ子供とも定義できる人間と妹たちが世界の命運をか
けて戦わなければならぬとなればラビリスは己の使命を全うせね
ばという義務感さえ生まれてきてしまったのだ。

そして、自分たちの「親」とも呼べる病気の少女が笑って過ごせる
世界を守り、いつか会うために。

カラツとした笑顔でそう告げたラビリスに、優希は心配そうな顔の
ままだったがようやく納得できたのか武治に頭を下げた。

「……わかった。すみません、武治さんの取り決めに口出しして」
「いい。きみがそう思う理由もわからなくてもない」

優希の意見もラビリスを思っていたのだとわかってい
からこそ、武治は口出しをしなかった。美鶴が諫めるのだと信じてい
たからでもあるが、今の優希を諫め、宥めることができるのはこの場
では美鶴しかいないと思っていたからでもあった。ラビリスに対し
優希はまだ守るべきだという感情を抱いているようにも感じ、その関
係性は対等ではない。

好意云々もあるのだろうが美鶴自身が優希のことを理解し始めて
おり、守り・守られるの関係ではない美鶴からの言葉だからこそ優希は
美鶴の言葉を素直に聞いたのではないかという気すらある。

「では、お父様。ラビリスはこのまま私達と共に巖戸台分寮へと帰還
してもいいと？」

「ああ。機材などは後から搬入させる。あとは、七式メテイスについ

ても今と同様の扱いでいい」

「ありがとうございます」

美鶴はメテイスの言い分は本当のことだったのか、と目を丸くした。

出自不明の彼女の扱いは一応部のメンバーとしてだが、いずれは武治に話して詳しく調査せねばと思っていたところだった。だが、許嫁の件などが重なり中々言い出せずにいたところ、今回の事件へと発展してしまった。

これを良かったこととするのか悪かったと取ればいいのか、美鶴にはわからない。

「以上で私からの話は終わりだ。高寺以外は席を外してもらって構わない」

その言葉でぞろぞろと部屋を出ていく者達を見送り、武治は高寺へと向き直った。

「此度のこと、何故起こした」

「彼の持つ倉橋の株を得られれば桐条のさらなる成長が見込める、と判断したためです」

「それだけではないはずだ」

武治に眼光鋭く見つめられ、高寺は冷や汗が出るのを感じた。見透かすようなその視線とまっすぐ目を合わせる事ができない。

「彼の…排除を。私は…当主のご理解が…得られると……」

「御託はいい。得られないとわかっていたからこそ、あのような手段に出たのだろうか」

見透かされている。

いや、分かりきったことであつたのだ。

「ただ、このような事を起こした私が言うのも差し出がましい限りであり、信じて貰えないかと思いますが…他のものは良くともあの少年だけは桐条に入れてはなりません…！ あれはシャドウと同じ…いや、それ以上の化け物だ！ あのような強力な異能を扱うものは今は良くともいずれば桐条グループの害となります！」

高寺は必死だった。あのような化け物を桐条に入れば武治も美

鶴も英恵も、あれに関わるもの全てを不幸にするという確信めいたものがあつた。

実際、ここに連れてきた途端に優希が慰霊碑を建てろなどと言いつたのだ。桐条にとつては害にほかならず、武治を脅かすこととなつている。

武治がそもそもストレガ計画のことをはじめに口にしたという事実からは目を背けて。

だが、

「黙れ。それは三上くんを愚弄し、彼を選んだ美鶴や私をも侮辱する発言ととつてもいいのだな？」

返つてきたのは高寺を射殺するような武治の鋭い視線と腹の底から響くような低い声だった。まるで、怒りを押し殺したような。そんな声だ。

「ぐっ……失礼、致しました……ですが代表、貴方も見たでしょう！ あれは人と共に居て良いものではないのです！」

「それでも認められん見える。ならば美鶴を三上くん嫁がせる。私としても私の代で同族経営は止めるべきだと思つていたところだ。私も全ての罪を精算したのち、他のものに経営を引き継ぎこの座から降りる。きみは桐条グループに関わる人間を守りたいと思つているのだから、それでいいだろう」

「……………違うのです……！ そういうことではない！」

あつさりと言つてのけた武治に高寺は引き下がれなかった。

武治が美鶴を巻き込まんとしていることは高寺にもよく分かつていたからだ。そして、会社よりも娘の幸せを武治はとつただけだ。

だが、高寺がらすれば美鶴を当主の娘として大事に思うからこそあれは誰も触れてはいけない存在だと断定できる。人と交わり結ばれるなどと以ての外。殺せるものなら殺してしまつた方が良い存在だ。

言葉を交わそうとする相手にすら災いを振りまくもののようにも思えた。じわじわと侵食し、知らないうちに関わつた人間を善悪関係なく不幸にし、災害を撒き散らす。例えるなら禍津日神なのだと言つる。

「いいか高寺。それは違う。彼は我々を写す鏡だ。我々が彼を人として扱えば人となり、邪なものとして扱えばその通りに牙を剥く。それだけの話だ」

なんの迷いもなく、武治はそう言う。武治とて優希の本質をきちんと理解している訳では無い。付き合いが長いわけでもなく、ほとんど書類の上でしかその情報を知らない。

だが、直感的にそう思ったのだ。短い付き合いだが誠意ある対応をこちらがすれば根は真面目なのでそれに応えてくれる。

逆に、手荒な真似やぶしつけな対応をすればそれなりに返してくる。至って普通の人間関係とも呼べるのだ。だが、今回は高寺が無理やりな実力行使をしたせいでその範疇を超えた。

誰かを傷つけるような力を使うならあちらもそれ以上の力をもつて返す。武治からすれば高寺はそれをさされただけでもある。

「古来からこの国は荒ぶる神々を丁重に扱い祀り逆にそれを守護としてきた。それらに比べれば彼は随分と甘いものだ。何せ生贄も何も望まない。ただ彼も人だ。我々と同じでそれぞれ大切で譲れないものがあり、守りたいものを守りたいだけなのだから。それにさえ触れなければ悪いことにはなるまい」

武治はなんてことは無いと言い放った。

禍津日神は災神ともされるが、一方で善神ともされている。その本質は心の内にある悪を許せぬ荒ぶる正義の衝動なのだ、とも。何度も武治が言うように、物事の見方によりその顔を変えるだけだ。

しかし間近で異能を体感し、殺されかけた高寺には到底信じる事が出来ない。

あれは決して人などではなく、シャドウよりも恐ろしい超常の力が人の形をしているだけのものだ。いや、無差別に破壊しなかったからこそより恐ろしい。

まだ意思のない自然災害の方が適いつこない畏怖すべき自然の力なのだど割りきれれる。暴走してくれていた方が良かった。暴走し見境が無く、無差別だったために仕方なかったのだと己に言い聞かせることが出来る。だがあれだけ取り乱しても殺すべき相手をちや

んと見ていた。話が出来てしまった。守るべき相手に傷ひとつつかなかつたどころかその精神状況まで慮って動いていた。

わざわざ品定めしていたのだ。そして害悪と判断した相手を痛ぶろうとした。全力をもってされた事を返そうとした。それを恐ろしいものと言わずしてなんというのか。

「それに彼がああなつてしまったのは元々は我々桐条の実験のせいだ。それさえ無ければ彼はただの人間で居られた。違うか？」

「……」

それはそうだった。ぐうの音も言えずに押し黙る。

幾月が優希を誘拐し、シャドウを受け入れる器作りの実験に使わなければ。

拷問した末に千鶴を殺さなければ。

桐条のストレガ計画などというもので孤児を苦しめ、殺さなければ。

対シャドウ兵器の開発の際に彼女らを慮り、メンタルケアをするなどただの道具ではなくもう少し人としての扱いをしていけば。

事故で両親が死に、弟妹が過酷な運命に立たされなければ。

幾月が優希を港区へと無理やり連れてこなければ。

優希はただの1人の少年としてなんの異能にも目覚めず桐条への憎悪を募らせることなく、シャドウやタルタロスなどといった超常とは無関係で平穩に人として生きていけるはずだった。

今回のことも高寺が優希に無茶な要求を脅して吞ませようとしなければ良かったのだ。

優希は武治が要求を受け入れてくれたことにそれなりに満足していた。それだけで恨み辛みを割り切ろうとしていたのだ。全てが丸く収まるはずだったというのにぶち壊したのは高寺であり、それら全ての要因が武治の言う通り桐条が根底にあった。

そこまで考えて、高寺は武治の言った言葉の意味がようやくわかった。

（ああ、なんだ…そうか……）

先のことは単に高寺が優希を実験体扱いし、人として扱わなかった

せいでやらかした事のしつぺが返ってきただけだったのだ。

そして武治は観測するにしても人という範囲のうちに留めておけ、とも言ったのだ。そうすれば優希はその範疇でしか牙を剥くことはない、と。ただしそうなった場合これからは倉橋の力を使い人として使える手を全て使い、全力で叩き潰そうとしてくるだろうという気はしていた。あの目は本気だった。どちらにせよやぶ蛇だ。

急に高寺を殺すことを諦めたのも、美鶴が優希を人としてのルールに当てはめて諫めたからだ。人として観測したから優希は無意識でそれに応え、その形に嵌っただけ。それまでは高寺を含む反逆者を本気で痛ぶった上で殺そうとしていた。

武治の言う通りであったのだ。

「彼はあのように驚異的な力を発揮したが結局は誰も殺さなかった。あの三上くんの口から直接殺してやりたいなどとまで言わせたきみですらな。それが答えだ」

静かに告げると武治はそれ以上話すことは無いと席を立った。

やろうと思えば制御されていたラビリスを蹴飛ばした時のようなその馬鹿力ですぐに首の骨をへし折ることも出来たろうになにかに耐えるようにそれを抑えていた。直接人へ向けて力を使ったのも喉を焼こうとした時くらいでそれも未遂に終わっていた。

優希が最後に告げたように一瞬で灰にすることも出来たはずなのに、それをしなかったという事実だけが転がっている。

例えその理由が高寺をじわじわとなぶる為だったとしても高寺やこのことに加担した隊員たちが大やけどを負っても仕方のない状況だったというのにはぼ無傷の五体満足で助かった事に変わりはない。(彼はまさか、お嬢様が止めに来ることに賭けていた、とでも言うのだろうか：)

わからない。だが、あの長々と恨み辛みを吐いていた行動の理由がただの時間稼ぎだったとしたら。尚更訳が分からなくなってくる。そもそもその前にラビリスに止められていた時はその行動を止めなかった。なのに何故、美鶴なら良かったのか。否、美鶴の要求も1度は拒否していた。

高寺には、優希の行動の理由がわからない。酷く不安定なその思考が何一つ理解できない。

残された高寺は悶々とする蟠りの様な何かを抱えてその場に座り込むほかなかった。

「ところで優希。訊きたいことがあるのだが」

部屋に戻ってすぐ。美鶴は先ほどから訊きたかったことをついに聞くことにした。

「なに？」

「ッキス」

「!!」

その言葉だけで何かと察し、脱兎の如く逃げようとした優希を美鶴は逃さなかった。

「逃げるとは言語道断!!! 何かやましい気持ちがあつたんだろう!？」

「処刑”する!!! アルテミシア”!!!」

アルテミシアを気合いで召喚し、扉を凍らせて出入り口を塞ぎ、処刑の準備に入った美鶴に優希は誤解だとも言えずに顔を引きつらせる。そして口を開けて大きく叫んだ。

「死ぬ!!! 今の俺氷結と火炎弱点だからそれ喰らったら死ぬって!」

「うるさい! 私だつてまだきみからキスしてもらつたことがないのだぞ!! もう知らん!!!」

「うわあああああ!!! 待って、待って、あれはラビリスにつけられていた制御回路を壊すためだけにしたのであつて他意はないし恋愛感情もないって!!!」

あまりの美鶴の剣幕にブンブンと首を横に振りながら否定した優希だったが、そこでラビリスの追撃が来る。

「え…じゃあウチのこと、お遊びやったん?」

勿論冗談だ。ラビリスとしても優希をちよつと揶揄してみた

なっただけである。

ただラベリスはその処刑の恐ろしさを実際に味わっていないが為に知らない。

「遊びとか…そういうわけじゃないけど…」

「せやったらウチのこと、嫌いなん…?」

瞳をわざと揺らし、不安げな表情をしてみれば面白いくらいに優希はうろたえ始めた。

「ち、違う！ 嫌いなんじゃないくて…その、えっと…好きだけど、恋とかそういう方じゃないっていうか…ごによごによ…」

狼狽える優希の様子を見、ここでこれまで沈黙していた美鶴がわなわなと震え、口を開いた。鬼の形相のまま。

「乙女心を弄ぶなど…！ 尚更許すことはできん!!! 問答無用!!! 天誅!!!」

「うぎゃああああ!!! なんでさああああ!!!」

桐条本邸に悲惨な優希の悲鳴が響いたとか響かなかったとか。

「全部黒こげにして燃やしちまいなッ!!!」(12/14)

夜

巖戸台分寮

「つて、ことがあってさ」

ラウンジのソファーに座りながら、この二日間に何があったのかを大まかに話した優希はまるで世間話をするようにその話を終えた。

勿論この寮に新しく入るラビリスの紹介も兼ねているので、ラビリスや美鶴も同じ場にいる。ラビリスは素体だけの見た目から、桐条が用意したメテイスの着ているものと近いクリーム色のセーターに黒いミニスカートという装いに変わっていた。一応、人前に出るのだから機械であるということがばれないように、という配慮らしい。

ラビリスを人そのものにみせる幻惑機能も搭載されているらしいが動作が不安定なためにそれを過信することはできないため、という理由からでもある。

そのラビリスの自己紹介から始まったその会話は優希が大まかな経緯を話し終えて終わりを迎えようとしていた。

だが、美鶴から処刑をされたところまでをはなしきった優希の話に眉を顰めていたメテイスがその問題を指摘した。

「それ、キスじゃなくても良かったのでは？」

「あ……あー!!!」

メテイスにバツサリ言われ、優希は愕然として頭を抱えた。

その通りだ。本当に、その通りだ。別にあれはキスじゃなくても良かった。胸に手を当てるとかでもよかったのだ。黄昏の羽根はそこにあるんだしそれでも十分良かったのだと思うのに、操られているのだから頭に原因の回路が仕込まれているのではと思いついで慌てて思い付いたのがあれだったのだ。直接力を流せばそちらにいく確率が高かったというか、そういうアホアホな思考でやったただけだ。

「というか三上。お前はあれだけのことをそういう事があつたと済ま

すのはどうかしてないか？」

「そう？」

なんでもない風を装う優希に明彦は違和感を感じた。

話を聞いていただけの明彦からしても他の人間からしても、この二日間のことは優希がこうもあつさりと言つてしまえるほどのものではないだろうと分かつていた。そもそも、語ったことが大まかすぎるし、相手がアイギスの姉妹機であるラビリスを優希個人に向けてきたことが異常だというのに優希自身はなにもおかしいことではないと思つている風なのだ。

「三上さん、何か…変じやないですか？ 絶対何かありましたよね？」

それに三上さんが狙われた理由つて、ほんとに株式だけだったんですか？」

「それだけだし特に何もなかったよ。そう、何も」

何もなかったことを念押しのように語気を強めて言つた優希は笑つている。だが、その目は笑つていない。虚ろだ。

嘘を吐いているな、と全員が思つた。もしくは、話すほどのことではないと思つているのか。

縮まりかけた距離が離れていったような、そんな感覚すら覚えた。

「や…でも三上センパイ、目が笑つてないっすよ？ それに何か…雰囲気…怖いっす……」

「ああ、」

順平がおずおずといった様子で違和感を指摘すれば、少し目を伏せた後に申し訳なさそうな表情になつた優希が理由の断片を話す。

「ごめんね、ずっと昨日の夜からある人を殺したくて殺したくて、憎くて憎くて憎くて燃やしたくて堪らないから、我慢しようとしてるけど漏れちゃってるんだよね。きつと。出来るだけ早めになんとかするから」

「……………」

声と口調自体は軽いがその表情は歪だ。申し訳なさそうな顔をしているはずなのに、口の端が上がりどこか笑つている。

さらに気配は剣呑で、瞳の奥にどす黒い殺意が燻つているのがわか

る。

——殺したい。憎い。

まさか、優希の口からそんな言葉が出てくるとは思わず、理由を知るラビリスと美鶴以外の全員が固まる。湊と奏子、メテイスも目を見開き、何があったんだと言いたげな表情になっている。

「ど、どうしたんですか…そんなの、普通じゃないですよ!」

ゆかりが堪らない、といった様子で思わず立ち上がり叫ぶ。

あんなに穏やかでゆかりが失礼なことを思っていたと知っても順平がミスをして自身が怪我をしても怒らなかつた優希がこうもはつきりと殺意を滲ませるなどというのはゆかりですら見た事がない。恐らく、湊と奏子がたじろいでいることから、家族であるふたりですら見た事のない様子なのだろうとは察しがつくがそれが何故そうなっているのかが分からない。

「…何もなかつたよ。何もなかつたことにしてくれないかな? たとえ今の俺が普通じゃなかつたとしても」

込み上げる何かを抑えるように大きく息を吐いた優希は再び何もなかつたのだと主張する。何もなかつたと言っておきながら何もなかつたことにしてほしいなどと乞う、矛盾しているその言動に拒絶をされていると全員がわかつた。

ここに居る誰にも話したくないというその頑なな対応に眉間のしわをさらに深くしたのは荒垣だ。

「桐条。テメエなにか知ってんだろ。何があったか言いやがれ」

優希が無理なら美鶴に、と訊く相手を変えた荒垣だったが美鶴はさつと優希の目を見た後に首を横に振ってから口を開いた。

「すまないが…私の口からは語ることはできない。身内の恥とさえばそれまでだが、今回の件は例え皆が相手だとしても詳細をおいそれと話せるようなものではない。それほどまでに、彼らがしたことは許しがたい事だ」

「…そうかよ」

頼みの綱だった美鶴ですら話せない、と言い出したことに荒垣は諦めた。ここまで話せない、と口を揃えて言うことはまともなこ

とではないのだろう。

そして言わないのではなく、言ってしまうえば感情が再燃し、優希自身を抑えられなくなると言っているも同義だった。

「皆が知る権利があるのはわかっている。だが、今回のことだけは諦めてくれないか？ 優希自身が、その理由すらも 無かったことにしたい」と言っている。それが全てなんだ」

申し訳なきような顔をして俯く美鶴にこれ以上追及することができないという空気が蔓延し、微妙な雰囲気になる。ここまで空気が悪化したのはカダスでの選択の時か屋久島に行く前にゆかりが美鶴に突っかかって以来だろう。

優希自身はそんな空気を分かっているのか、ただ美鶴に謝らせてしまったという事実しか目がいつておらず、眉を寄せたまま視線を逸らした。

「…美鶴さんや武治さんは何も悪くないんだ。ただ俺が甘えてて、みんなに話すべきことを話せないだけなんだけどさ、話したり思い出したりすると今まで大丈夫だったいろんなことを許せなくなりそうで駄目だから」

「……」

それきり、その場は沈黙に包まれた。

“今まで大丈夫だったいろんなことを許せなくなる”。その言葉で全員が何があつたかを大まかに察したのだ。

恐らく実験絡みのことだろうということ。だからこそ、余計に訊けなくなってしまった。

傷口を無理やり触り血を流させようなどと思うものはこの場に居なかった。

流石の湊と奏子も実験体時代の兄の話というのは伝え聞きであり、本人の口からは聞いたことがない。

こんなに兄が殺意と憎悪を滲ませる場面も、ふたりは一度も見た事がなかった。

正直言つて優希は誰かを殺すとは言いつつも結局本気になれずあまり殺意もないやわな対応ばかりする物だと思つていたのだ。こん

な風に本気で殺意を滲ませ怒っている——否、憎悪している様子というのは絶対に起こりえないとふたりは思っていたのだ。ありえないということがあり得ないというのに。

ここに居る誰もが、かつてアリスという悪魔の少女を殺した時の優希の様子を見た事が無いためにその片鱗を知ることが無かった。

あの時、誰かが居れば。誰かが僅かでもそれを見ていれば。大切な者を害され、我慢の限界を迎えた時の優希の怒りを目の当たりにしていればこの異様な状況に説明がついたのかも知れないが誰かの目に留まったのは今回が初めてだ。勿論、今は優希の内にいるアリスやモコイは知っている。知ってはいるが対外的な接触の手段が無いために何も言えていないだけだ。

「あれ、そういえば美鶴さん…俺のこと三上じゃなくて優希って…」

「今か!?! 今更なのか!?!」

「ええ!?! それに気づくんちよ遅ない!?!」

しかしそんな空気にした本人にも関わらず突然気配を一変させ、いま気がつきましたという顔で優希は違和感に気がついた。

そのことに明彦とラベリスはツツコむ。双方分かっていてその呼び方になっていたのかと思えばそうではなかったというのだから驚きしかない。

「昨日の夜からずっと下の名前で呼んでいたんだぞ…? わ、私の決意は一体…」

何故気がついていなかったのか。心外だ、という顔で美鶴は落ち込む。

折角頑張って一步踏み出し名前で呼んでみたというのに、対する優希の反応があっさりだと思ふところがあるというものだ。

もしくはそんなことにすら気がつかないほどに切羽詰まっていたのか。

正常とは言い難い精神状況ならそれも有り得るだろうなと美鶴は納得しかけ、しかしやっぱり納得することが出来なかった。

「ご、ごめん…昨日の夜から呼んでくれてたのに全く気がついてないなんて…そりゃ俺、処刑されるよね…乙女心分かってないよね…」

「いや…あれはそういう訳…でもあるのか…？」

どんどん語気とテンションが下がっていきしよぼくれ、しゅんとした優希は先程までの殺意を引っ込めたのか意識を切りかえたのかは分からないが落ち込んでいることを除けば普通そうに見えた。

美鶴は美鶴で優希の解釈が微妙に違った為か首を傾げている。

「てか、下の名前で呼んでもらってるのに気がつかないって相当じゃないですか…？ 美鶴先輩可哀想…」

「で、でも…ゆかりちゃん、三上先輩だって大変だったんだし…そういうこともあるんじゃないかな…？」

そんな2人——主に優希をだが——見てゆかりがドン引きし、風花が擁護しているのかしていかないのかよく分からないフォローをした。

それに確かに、と相槌を打ったのは奏子だ。

「お兄ちゃん、いつもならそういうところ気がついたりするもんね…特に美鶴先輩のなら。…無茶しちやだめだよ？」

「ああ…うん。気をつける」

じい、と見つめてくる奏子に対し、苦笑して頷いた優希の目は殺意が滲んではいなかったがどこかぼんやりしている。

いつもとは違い、奏子は違和感の正体が何も見えずこの切り替わりの速さはなんなのだろうと訝しむことしか出来ない。

優希自身が意図的にしている訳では無いようにも思え、体調が悪いのかと思ったからこそ無茶はするなと口癖のようになってしまったそれを告げたがどうにもこれは優希が無茶をしないという事だけで済むものでは無いような気がしてきたのだ。

「お兄ちゃん、なんか変だよ？ もう休んだらどう？ 色々あつて疲れてるんでしょ？」

奏子は、自分で用意したらしいホットミルクの入ったマグカップの中をぼんやりと見つめている優希にそう声をかける。

「……」

「お兄ちゃん？」

反応が無い。

目は開いているのにそのまま眠ってしまったような。

それとも、疲れていてよく聞こえていないのか。奏子には判断できなかったがどちらにせよこれだけぼんやりしているということは部屋に帰って休まなければいけない状況には違いない。

「お兄ちゃん！ 聞こえてる？」

「な、なに?! うわあ?!」

奏子の大声に驚いて立ち上がり、しかし足をもつれさせてガタンと椅子から転げ落ちるようにして床へと倒れこんだ優希は額を打ったのかそこを摩っている。マグカップも同時に落としたりしく床に転がっているが割れていないのが幸いか。

「だ、大丈夫?! じゃないか…お兄ちゃん、疲れてるみたいだしすぐくぼんやりしてるからもう休んだら? って言ったの!」

「……そうする。ごめんみんな、おやすみ」

「うん。おやすみなさい」

マグカップを持ち直し、立ち上がった優希は一度キッチンのシンクにマグカップを置きに行つてから部屋へと戻っていった。

「思ったより疲れているみたいだな」

「私たちだつて昨日の夜あんなことがあつてテストに集中できたかっ
ていわれるとそうでもないし…美鶴先輩は大丈夫でした?」

去つていく優希の後姿を見た明彦のつぶやきに、奏子がテストの結果を恐ろしく思いながらも美鶴へと話題を振る。

期末試験初日だつた今日、優希と美鶴は高寺の起こした事件の後始末のために夕方まで帰つてこれなかつたのだ。

話し合いは昼に終わっていたが優希が英恵に別れを告げたり菊野から美鶴に説教じみた心配の言葉があつたりラベリスについての引継ぎ作業など色々あつたが為にそこまでずれ込んでしまい、試験を受けることができなかつた。

しかしそこらの事情は桐条から学園の方に連絡が行つたらしく、後日追試ということで対応が済んでいるらしいということだけが美鶴の知ることで。

問題はない。それだけで終わらせていいものか、先は言わなかつたことを本人が居ぬ間に言うべきなのか。美鶴は悩んでいた。

「…ああ、大丈夫だ。それよりもラビリスがここで生活することになるのだが…皆、彼女もここに来たばかりだったアイギスと同様外の世界のことをあまり知らない。優しくしてやってくれないか？」

「そりゃあ、言われなくとも！　なんてったってアイちゃんのおねーさんだろ？　ここにきてカワイコちゃんが二人も増えるってサイコー！…ン、待てよ？　…妹ちゃんもラビっちもあれか…三上センパイ絡みだっけか…」

美鶴の頼みに即答した順平はしかし、最近加入したアイギスの姉妹であるふたりがどうやって加入したのかその経緯を思い出せばどうにも優希絡みであったために苦い顔になる。

メテイスはどちらかといえばアイギスや湊と奏子のため、といった様子であるのでアイギスと優先順位はほぼ同じに見えるのだが、順平から見ても十分メテイスと優希は馴れ馴れしい間柄のようにも見えたのだ。

（でもなんつーか、桐条センパイに向けてるときみたいなカンジではねーよなあ）

首をかしげながらも順平は何か違和感を感じ思考するがその答えがわからずすぐに忘れてしまおうと霧散させる。

ラビリスにしたって確かに優希に対しすごく慣れているように見え優希もラビリスに対し昨夜が初対面だとは思えない程距離が近かったが、やはり美鶴に向けるそれとは違うように見えた。どちらかといえばメテイスやラビリスに対しては湊や奏子といった弟妹に向けるようなものといえいいのか。

それがどんな感情なのかはわからないが順平は明らかに優希はメテイスとラビリスの二人には親愛以上のものを抱くつもりも下心も何もないように見えた。

むしろ、家族のように思っているような。そんな雰囲気だけは感じた。

「私はラビ姉さんとは違って優希さん絡みではないというか…いえ、そうといわれればそうなんですけど。私は姉さんや奏子さん、湊さんを守るのが主目的で、彼に対しては約束を果たしに來ただけです。そ

の約束も奏子さんと湊さんと結んだものではありませんが」

ラビリスのことをアイギスと分けて「ラビ姉さん」と呼ぶことにしたらしいメテイスは順平の呟きに聴く反応してそれを否定する。

「有里達と…？ どういうことだ。アイギスのようにお前もこいつらと以前にも会ったことがあるということか？」

メテイスのそんな言葉に明彦が眉を顰める。たしかに時系列がおかしい。

メテイスが目覚めたと自己申告したのは12月2日。それ以前に約束はできないはずである。だというのにいつ、どこで約束などというものをしたのか。奏子と湊にとつてもメテイスとそんな約束をした覚えはないために二人で首を傾げた。

「覚えていなくてもいいんです。覚えていない方がいいんです。あんなの、思い出す必要すらないんです。それに優希さんが死を選ばなかった『今』の方が大事だから」

途端に不機嫌そうな顔になったメテイスは誰に言うでもなく、わざと感情を押し殺した声で独り言のようにそう言葉を吐き出した。

まるで優希が一度死を選んでしまったとでもいうかのようなその口ぶりに、何があったのだと聞きたい気持ちを持った者は居たがあまりのメテイスの剣幕に誰も問えなかった。

「…それより、ラビ姉さんは私や姉さんと同じ部屋だつて話ですけど…ある程度自己メンテや修復ができる私はともかくラビ姉さん用のメンテナンス機器まで入るとなるとあの部屋歩く場所がなくなりますし床が抜けたりしません？ 私としてはその方が心配なんですけど」

要するに、流石に三人がいるにはあの部屋は狭くないか？ とメテイスは問うているのだ。

確かにそうだが美鶴にすら部屋問題はどうすることもできない。なにか、三人が機械ではなく人間であれば何とかやりくりできようもあるが、と頭を悩ませるも解決策は浮かばない。

「そういえば、今は理事長室つて使われてないですよ？ あらかた部屋の中のもの桐条の人たちが持って行ってほとんど空ですし：

あそこを綺麗にしてラビリスちゃんかメティスちゃんの部屋にする、
というのはどうでしょうか？」

風花が思い出したように今は使われていない三階の理事長室を使
えばいいと提案する。

11月に幾月が謀反を起こした後、その部屋の中身は押し寄せた桐
条の者によって回収されてほぼ空き部屋状態になっていたのだ。

あの部屋ならそこそこの広さがあり、一人生活するくらいなら平気
だ。

問題は、一階まで遠いのといちいち作戦室を通らないといけないと
いうところだが。

「あの部屋についてはもう自由に使ってくれていいと言われているの
で大丈夫だが…」

言い淀む。流石にアイギスは無理としても二人のうち誰か一人だ
け、というのを勝手に決めるわけにもいかず美鶴ははつきりとそうし
ようとは言えなかったのだ。

だが、そんな美鶴を見てメティスが口を開いた。

「それなら、言い出しつぺの私がそこに移動しますよ。だって、私は特
にメンテナンスに機材を必要としませんし。…姉さんたちと離れる
のはちよつと、寂しい…けど」

「メティス…なにも無理して部屋を分けなくてもいいの。私は大丈夫
だし、姉さんさえよければ三人で、ね？」

「でも…三人は流石にきついですよ…？ 姉さんたちが私みたいにメ
ンテナンスを必要としないのなら、いけるかもしれないけど…」

しゅん、と寂しげな顔になったメティスにアイギスが無理はしなく
ていいと伝えるがそれでもメティスはラビリスの分の機材が運ばれ
てきたときのことを考えると部屋を分けた方がいいという意見を変
えることはできないようだった。

メティスとしてもラビリスという「姉」がいるのは情報として
知っていたがまさか桐条の人間によってこんな早くに目覚めさせら
れ、特別課外活動部に入部までしてしまうとは思わなかったのだ。

メティスが居たからか。それとも、優希が居たせいでのか。

恐らくは後者であろう。本来ならありえないこと。に対しメテイスは恨みも後悔もないがペルソナを持たない姉を普通のシャドウではない強大な存在と戦わせていいものなのかと奏子や湊のような心配をするはめになってしまっていることに気が付いていない。

そんな悩みで頭を悩ませているメテイスを部屋割りで悩んでいると思ひ込んだラビリスが声を上げた。

「待ちいなメテイス！ そんな寂しい思い、妹にさせられるわけないやろ？ それにウチがお姉ちゃんなんやしウチが来たせいで妹二人の部屋が狭くなるんなら別の部屋に行くんはウチのほうや。大丈夫。お姉ちゃんやからな！」

ラビリスは妹であるというアイギスとメテイスを初対面であるというのに即、受け入れていた。

優希と記憶と感情の共有を果たし大体の情報を持っていたおかげでおおまかな人となりを知っていたから、というのも大きいがやはりラビリスは他の姉妹たちと共に生活し、わずかでも心を通じ合わせた経験があることから殺し合わなくてもいい姉妹、という存在に無条件で守らねばというお姉さん風を吹かせたかったのだ。

そもそも、拒絶する理由もなかったといえそうなのだがラビリスが戦うことに決めたのもアイギスとメテイスの存在あつてのことだ。もし、二人が居なければ恐らくラビリスは戦うことにまだ恐怖していただろう。

「ちゅうわけで面倒やけど機材の運搬、その理事長室つてところにお願ひできますやろか？」

「大丈夫だ。だが本当にいいのか？ 折角姉妹三人で過ごせるかもしれないんだぞ？」

「いやあ、別に部屋が離れてるって言うても建物自体は同じですし。それくらいウチにとつてはなんでもありません。それよりも妹に寂しい思いさせる方がウチは嫌やから…」

ラビリスの言葉の途中で、ぶつん、と寮内の電気が落ち、急に回りが暗くなる。

「あ、もう影時間かあ。話し込んでたから忘れちゃってたや」

なんともない風に奏子が周りを見ながらそう呟く。いつも通り影時間になっただけ。それだけなのでみな動揺は全くない。

「湊、どうするの？ 今日はお兄ちゃんも疲れて寝てるだろうしラビリスちゃんも寮に来た初日だし、タルタロスは行かないよね？」

「うん。今日はやめとこう。明日も試験あるし…みんなもう寝ようよ」

今日は戦いに行かない、と決めた湊は立ち上がり、自分も部屋に帰ろうとする。

「あ、ちよつと待ってください…何か反応が…！ うそ、近い!？」

「グルル…!」

突然叫んだ風花の言葉に影時間ではあるが完全に気を緩ませていた一同に衝撃が走る。

コロマルも玄関の方を向いて唸り、警戒心をあらわにしている。

「なんだ？ イレギュラーシャドウか？」

「はい。恐らくは…！ もう寮の手前まで来て…三上先輩、起きてきたんですか？」

完全に気が緩んでいたために召喚器はあるが武器を持っていないためにアイギスたち三姉妹とコロマル以外の全員が召喚器に手をかけた状態で身構え、シャドウの接近を知らせる風花の視線が階段へと向く。そこから静かに不機嫌そうに眉を寄せた優希が降りてきた。

「……」

優希は黙ったまま、玄関へと視線を向けるとずんずんと歩いていく。

「え、三上さん！ 危ないですよ！ 今、外にシャドウが——」

天田が危険だと警告するが視線は天田の方を向かず、相変わらず玄関へと向いている。それどころか、

「チツ、うつせえなあ…ガキは黙ってな」

「へ!?! いま、なんて!?!」

舌打ちが飛んでくるといふありえない状況に思考を停止する。天田は一度だって優希からそんな暴言を吐かれたことはなかった。ましてや、舌打ちなど。

「まさかお兄ちゃん…反抗期!? ついに来たの!?!」

「いや、あれは反抗期で済ましてええもんなん…?」

「絶対に違うと思う」

奏子が優希の言動を反抗期だと判断しようとしたがラビリスと湊からすれば反抗期のようにには到底見えず、絶対に違うだろ、という顔をする。

対する優希は玄関の扉の前まで来ると乱暴に片足で扉を蹴り開けた。

「危ない? 誰に向かって言ってるんだよ! どいつもこいつもアタシの邪魔しやがって…この…!」

目の前には獣のようなシャドウがいる。だが、優希は物怖じするどころか怒りを滲ませた。

だがその口調と一人称はまるで優希のものではなく乱暴な少女のようなものであり、明らかに普通ではないことだけはその声が聞こえた者たちにわからせるには十分だった。いつたい、眠っている間に何があつたというのか。そんな疑問を湊が覚えた瞬間に優希が大きく息を吸い、とびかかってきたシャドウに向かって吼えた。

「ぎっけんじゃ…!… ねえええええ——ツ!!!」

叫んだ優希の身体が黒い炎を纏い、その姿を変える。

炎が消え、見えたのは優希よりも低い身長に見るからに女のような身体つき。

ざんばらな青みがかった長い銀髪にラビリスと瓜二つの顔。優希と同じ月光館学園の男子制服を着てはいるがかなり着崩されており、胸の下まで大きくボタンの開けられたブラウスの胸元からは形の整った肌色のバストが覗いている。

痴女とも呼べる格好であつたがその顔には歪んだ怒りの表情が浮かんでおり、姿勢を獣のように低くしてシャドウを睨み付けていた。「しやらくせえんだよ!!! 来い! ペルソナアツ! フアラリス!」

ラビリスに似た少女がこれまた瓜二つの声で叫ぶ。

赤い光と力の奔流と共に炎が渦巻き、現れたのは炎の身体をした雄

牛の頭を持つ巨人。全身全てが燃え盛る炎で構成されており、見た目だけでも暑苦しい。実際にパチパチと火の粉が弾けて舞っている。

「全部黒こげにして燃やしちまいなッ!!!」

雄牛の巨人はその剛腕で炎を練り上げる。そして躊躇なくシャドウへと圧縮した炎の塊を放った。

【地獄の業火】

その炎は一瞬でシャドウを焼き尽くし、跡形もなく消滅させる。

塵と消えたシャドウには最早興味をなくしたのか目もくれず、その少女は身体をのけぞらせると大きく口を開けて高笑いしだした。

「フウ——、アツハハハハハハハ！ ホント最高！ やつと表に出られた実感ってやつを得たわ!!! アタシってば、小指の先程度には『宿主サマ』に感謝しなきゃねえ！」

その少女の顔には抑えきれない狂気が浮かんでいた。

「好きただけ暴れて、ブツ壊したいものをブツ壊す！」
(12/14)

「フウ——、アツハハハハハハ！ ホンツト最高！ やつと表に出られた実感つてやつを得たわ!!! アタシつてば、小指の先程度には『宿主サマ』に感謝しなきゃねえ！」

「きみは…優希なのか…?」

シャドウを一瞬にして消し飛ばし、まるでせいせいしたとでも言いたげに高笑いするラビリスに似た少女に美鶴が何が起こったのか分からないといった顔で首を傾げた。

明らかに優希とは違う身体つき。むしろ、少女と形容していても豊かな女そのものな身体つきはラビリスを少し大人に成長させたような見た目をしている。

そんな少女は美鶴の問いに顔を不機嫌に歪めるとラビリスを睨み付けた。

「アタシい？ アタシは『宿主サマ』じゃなくてそこで突っ立ってるバカのシャドウよ」

「!!」

少女の言葉に動揺が走る。

何故、ラビリスのシャドウが優希の中にいるのか。

優希のことを『宿主サマ』と呼び自らをシャドウと形容した少女の言葉がにわかには信じがたく、誰も口を開くことができない。

「まあ？ アタシつてば、ソイツの中から『宿主サマ』に引き寄せられちゃったみたいで？ その代わりこくくんな素敵な肉の器に巡り合えたってワケ。キャハハ！ 姿も自由自在なんて便利なことこの上ないじゃない！ 管理されなきゃ動かせないポンコツの体とはオサラバよ！」

状況説明にもなっていない歪んだ笑みと共に語られる言葉には『優希を乗っ取った』以外の情報が含まれていない。

もしかすると、敵か。それとも。

「あの子が…姉さんの…!?!」

「ラビ姉さんのシャドウ…? にしては何か…!?!」

アイギスがショックで目を見開き、メティスが人の身体を得た長姉のシャドウと名乗った少女に疑問を覚える。

ちよつとバストを盛っていないだろうかという感想も添えて自らの控えめに設計されているボディの胸を睨み、それぞれ片手で押さえた。

「アンタはウチのシャドウ…なん…? なら敵…? あーもう、よくわからんけど目的はなんなん?! ナギサさんをどうするつもりなんよ!?! 返しいや!」

ラビリスが己のシャドウだと名乗った少女に対しそう問いかける。

こうして表に出てきた目的は何なのか。もしこのまま身体を優希に返さないつもりなら、無理やり返してもらうことになるだろうし、返す予定があるのならいつなのか。それを聞いたかった。

しかし少女は煩わしげに表情を歪めると舌打ちをする。

「うるッせえなあ…アタシは好きだけ暴れて、ブツ壊したいものをブツ壊す! それだけだ! 返せって言われても満足するまで返すわけないでしょ」

「えええ、なに言ってるの!?! それ…身体はお兄ちゃんののに返してくれないってこと!?!」

「そうよ! 何か文句あんの!?!」

奏子があまりのインパクトによる思考停止から回復し、そう問いかければ少女は喧嘩腰で奏子を睨み付けた。優希本人やラビリスではありえないその行動に驚きながらも奏子は睨み返す。

「文句なんてたくさんあるに決まってるでしょ! こうなったら力づくで…!」

「やれるもんならやってみなさいよこのクソガキが! 二度と生意気なこと言えなくしてやろうかあ!?! …あ?」

一触即発の空気になるも、先にその矛を納めたのは少女の方だった。

「何よ。表に出てる間はこいつらには手を出すな」 あ? チツ …仕

方ないわね」

誰かと会話しているようなそぶりを見せ、ため息を吐いて首を二回ほど横に振った少女は奏子に向き直る。

「前言撤回。…あんなこと言われたって『宿主さま』はしばらくは起きないわよ。結構消耗してたし2、3日はかかるんじゃないの。ま、少なくとも宿主さまが起きない限りはアタシだって返せないっての。このままアタシが居なくなったら、ぶっ倒れて頭でもぶっつけちゃって死んじゃうかもねエ〜〜?」

一転。少女はあくどい顔でそう言い放った。たしかに、この少女が語っていることが本当で優希が眠ってしまったとして、彼女が今の身体を動かすことを放棄すればずっと眠り続けることになるだろう。

流星に2、3日眠り続けるのは身体が弱っている今、避けたいことだ。

10月とは明らかに健康状態が違うために昏睡状態から回復できるかも怪しい。だが、あまり協力的ではなさそうに見える彼女がこうして優希の身体を利用しているというのも問題ではあるので港や奏子からすれば今のところ悪印象に近いものしかなかった。

好きなだけ暴れて壊したいものを壊す、というのは無差別なのか。それとも何かちゃんとした相手がいるのか。それすらもわからない。「…アタシが居なくてもあの焼身自殺志願者が使うからほんととはぶっけなんてしないんでしょうけど…まだまだ暴れ足りないんだからいやでも返さないっての…!」

「焼身自殺志願者…?」

ぼそぼそ、と呟いた少女の言葉を湊は聞き逃さなかった。焼身自殺志願者とはなんなのか。マイナスイメージしかないその言葉の意味に興味が湧くも、どうせその口ぶりからして優希本人ではなくラビリスと似たような優希の中に巣食う何かなんだろうと察してそれ以上は口を開くことはなかった。どっちも同じく問題の気配がしたからだ。が、

「嘘。サイアク。アンタいまの間こえてたの? 別に困る事じゃない

けどなんだか癩よね…」

嫌そうな顔になった少女が湊を睨み付けるも、その視線に敵意は一切含まれていない。

めんどくさ、という感情は多分に含まれていたが。

そんな微妙な空気の中、ふたりの雰囲気を変えようとしたのか、少女に「本体だ」と言われたラビリスが割り込んで履いているズボンを指さした。

「ええと…色々気になってんけど…まず、その服…ナギサさんのやろ…？　なんで男の人のんを着とるん…？」

「ハアア~~~~~~~~~~~~？」

そんな質問をするなんて心底ありえない、という顔になった少女はそのままラビリスのスカートをつまみ、ひらひらと振る。

「アンタみたいこんなヒラッヒラしたスカート履けるわけ無いでしょうがッ！　暴れるのに邪魔になるだけじゃないの！」

言葉の途中から勢いを上げ、ひとしきりビラビラとスカートをはためかせた少女は満足したのか勢いよくスカートから手を離れた。

そんな突拍子もない行動をする少女にラビリスはたじろぎながらも再び口を開く。

「じゃ、じゃあ…あの、その身体はナギサさんのやし、それにウチの姿でもあるねんからそんな破廉恥な格好やめてもらえへん…？　せめてブラウスのボタンしめるとかできへんかな？」

「嫌よ。ここ閉めたら胸が締まって窮屈なの。分かる？　っーか、ちよつと前まですっぽんぽんだったヤツがなにを言っただよ！」

この真面目ちゃんがさあ！」

「す、すっぽんぽん!？」

ラビリスはあんまりにもあんまりな少女の言葉に愕然とした。たしかに、ラビリスは昨日まで服を着ずに素体で過ごしていた。だが他の姉妹機だってそうであったしそれがおかしいデザインという訳でもなく、当たり前だがロボットに「裸」という定義はないと思っただからだ。

だというのに己のシャドウを名乗る少女は何のためらいもなく

すっぽんぽん——裸だっただろうと告げたのだ。

「すっぽんぽんって…ひどい…」

顔を赤らめた天田を少女は目ざとくギロリと睨みつけ、噛みつくように口汚く罵る。

「酷くねーよバーカ！ なに赤くなってんだマセガキ！ ガキはママのおっぱいでもしやぶってな！ あ、そうだった。アンタにはもう母親いないんだっけえく……………」

そこまで言って突然沈黙した少女はわずかに考えるそぶりを見せ、そして。

「……その、今のは悪かったわね…」

天田に対し謝った。

そっぽを向きながらだが謝罪したというその事実には天田が目をぱちくりと丸くしている間に恥ずかしいのを隠すためなのか、ふんと少女はわざとらしく咳払いした。

全体的に相手を舐めているような言動をする少女からしても天田の境遇を揶揄ったり馬鹿にしたりなどというのは流石に駄目だと思いがついたらしい。そういうところがラビリスらしい生真面目さを僅かに感じられ、奏子と風花、そして美鶴とラビリス自身が生暖かい目になる。

「うっさいわね！ アタシだって“そういうこと”は一応わきまえてんのよ！ それに……」

誰も何も言っていない。だが、少女はその周りの生暖かい視線自体をウザがったのだ。そっぽを向いたまま、少女は言葉を続ける。

「アンタの母親のこととか、宿主サマの記憶で見たから知ってるのよ。ほんと、からかったりして悪かったわね。愛とか絆とか、甘っちょろいものなんてくだらないって思うけど……母親の愛は別よ。それだけは言っておけるわ。このアタシでも認めざるを得ないもの」

母親についてなにか思うところがあるのか少女はもごもごと言いつつ訳を始めた。

その顔は何故か少しだけ柔らかい気がし、どこにでも居そうな母親らしい少女然としている。

「でもオマエがマセガキなのは変わらねーけどな！ アハハッ！」

「うわあ…おつかねー…」

しおらしい態度は一瞬だけで、すぐに嘲るように表情を変えた少女は天田をからかった。

その反応は素直じゃないなあと思う者が数名。めんどくさいなと思う者が数名。ビビっている順平という感じに大きくわかれた。

「お前、名前は？」

ようやく、少女のペースに吞まれまいと明彦が問いかける。

しかし少女は明彦の問いに表情を歪めたまま不機嫌そうに答えた。

「ハア？ 無いわよそんなの。強いて言うならアタシはラビリス^{コイッ}。ラビリスはアタシ。その事に関わりはないもの。困るってんなら機体ナンバーだった“031”でもいいわよ。あれもアタシ達の名前だもの」

「そんな…」

機体ナンバーでもいいとあつけらかなに言った少女に困ったのはアイギスだ。

「貴女は姉さんなのかも知れません。けれど貴女ももう既に姉さんとは違う自己を得ている。ならまた別の個人と呼べるのでは無いですか？」

アイギスの問いに顔を顰めたのは少女ではなく風花とメティスだった。

「でも…アイギス、彼女からはちゃんとシャドウの反応がするの。メティスちゃんからも似たような反応はするけどメティスちゃんよりも彼女の方がよりシャドウそのものといった感じで…」

「風花さんの言う通りです。でも…どうなんでしょうね。あちらのラビ姉さんを“荒っぽい方”のラビ姉さんと仮称しますが少なくとも抑圧されたシャドウそのものには見えるんですけど…どこか混じり物のような…まさか荒っぽい方のラビ姉さんも私やウィツカーマンと似たような存在…？ それにしたっていつまでも優希さんの身体を使われたままだと支障が出ますし…ああ」

何かに気がついたメティスが声を上げる。

そしてしたり顔で「荒っぽい方」と呼んだ少女へと近寄った。

「あの、荒っぽい方のラビ姉さん」

「ああん？ 何よ。くだらない事言ったらブツ飛ばすわよ」

少女は不機嫌そうにメテイスへと顔を向けた。無視をしないだけマシであると言え、さらに手が出なかったことを褒めても良いくらいである。

それくらいにこの少女——ラビリスのシャドウは喧嘩っばやく戦闘狂なのである。

「…自分だけの身体、欲しくくないですか？」

「！ そんなこと、出来るの？ …っば、べつに期待してる訳じゃねー。出来るんならさっさとやれっての！ 宿主サマにいつか返さなきゃなんないとかめんどくさいことこの上ないのよー」
ぱちくり。

そこで初めて少女が目を丸くしたがすぐに勝気な歪んだ笑みに戻り噛み付くようにメテイスへと詰め寄った。

少女としても自分だけの身体はつくづく欲しいと思っていたのだ。

否、ラビリスという本体へ下克上し、その身体の主導権を奪おうと画策はしていたのだ。ただ、そこへ至るまでの力が圧倒的に足りなかった。

彼女は抑圧されたラビリスの負の側面ではあるものの、そこでまた別の思考を得てしまっただけであり爆発してしまえば乗っ取れたのだろうがそこまでは至らなかった。

そのままラビリスは無意識に姉妹機同士で殺し合いをさせ、ヒト扱いはなかった桐条への恨みや、人への情・絆を信じた己への自己嫌悪。そしてそれらを裏切った人間に対して強烈な恨みと破壊衝動を積み上げていった。

それらは本来自他との対話によったり、時間と共に昇華され消えてなくなるものだ。だがそうはならなかった。

だからこそシャドウとしての彼女が生まれ、そして「吸魔」された際に既に冷静ではなく恨み辛みが再燃していた優希と同調してしまい引き寄せられてしまった。

彼女自身も己と近しい感情を抱き、似たような存在である優希にある意味で「気を許してしまった」のだ。

そしてその逆も然り。優希自身も無意識的に彼女を許し、取り込んでも同調してしまった。

そんな利害が一致しているともいえる二人が影響し合った結果生まれたペルソナ「もどき」が「アラリス」であり、ラビリスのシャドウである彼女も己のペルソナを持つには至っていない。

「ええ。出来ますよ」

そんなことをつゆ知らず、メテイスは脅してくる少女に対しあつげらんかと答えた。

「ただ、今すぐにというのは無理ですよ。色々と準備があるので優希さんが目を覚ましてからになりますけど」

「ふうん。なら待つてあげるわ。騙してたらその貧相なボディをバラバラにしてやるから」

少女はメテイスやアイギスに対し、傍から見れば妹だとは思っていないような辛辣な対応をしておりバラバラにするというのも冗談には聞こえなかった。

そんな姉のシャドウを自称する少女にアイギスはおずおずと気になつていたことを問いかけた。

「『荒っぽい方』の姉さん。聞きたいことがあるのですが、どうして優希さんはそんなに深く眠ってしまったのですか？ 確かに眠そうでしたけど…さっきまで普通そうだったじゃないですか」

「どうしてって…知らないわよ。どうせ力を使いすぎたのを我慢してたとかじゃないの？ 手加減なんてするからよ。爆発させて全部ぶち壊しちゃえば良かったのに。アタシたちはそういうものなんだから、それが正しい形のはずなのに…ホント、意味わかんない！」

訊いてきたアイギスにそうぶつきらぼうに返した少女は不満げだ。だが一気に力を爆発させるより細かい制御をして手加減をする方が力を消耗しやすかった、と少女は語っているのだ。

(やはり負担になっていたということか……)

美鶴だけはあの状況を見ていたので少女の言うことがはつきりと

わかった。

誰も大火傷をせず、物的被害もほぼ出なかったという異様な現象はやはり優希が炎を制御していたからであって、己を焼いていたのは意図的だったという訳だ。

そして普通に会話をしていたのも無理をしていたからであって、すぐに回復したという訳では無かったらしい。

美鶴の「処刑」は食らって数秒後には優希自身が自分の体を炎で包むことで解除してしまったので凍っていた時間はごくわずかだ。だがそれも負担になっていたとしたら。

美鶴はシヨックだったとはいえ己の激情に駆られ、処刑してしまつたことに若干の罪悪感を抱いた。2、3日ほど目覚めないほどの深い眠りに落ちてしまうということはそれくらいに消耗してしまつているということだ。美鶴がその一端を担っていると責められても弁明はできない。

「は？ あー…しょうがないわねえ…おい桐条」

少女が顔を顰め、何かを観念したかのように唸つたかと思えば不機嫌そうに美鶴を呼んだ。

「……なんだ」

「アンタに宿主サマのことであんまり落ち込まれるとこっちも困るのよ。どーでもいいことでグチグチされてもイラつくだけだったの。こうしてクソ憎たらしい桐条なんかのためにアタシが対応しなきゃいけないんだし、ウツザイからそういうのやめてくれる？」

その口から出たのは悪感情を隠そうともしない文句だった。

追い打ちをかけるようなその言葉に周りはギョツとするも構わず少女は続けた。

「別にあれはあのバカが勝手に加減したことだし、アンタ関係ないじゃない。それともなに？ そんな顔するってことは負い目でも感じててえ？ アタシにストレス発散でもさせてくれるのかしらあ？

殺すのはダメって言われてるから別の方法で壊してあげるけど」

「なっ…」

ニヤニヤとわらいながら美鶴に擦り寄りその形の良い胸を押し当

てた少女は舌なめずりをした。

ラビリスと全く同じ顔であるというのにその蠱惑的な艶かしい表情に見ていただけの順平がゴクリと唾を飲んだ。が、すぐに首を傾げた。

「いや…待てよ？ あれ三上センパイの身体でもあるんだよな…？でも中身も外見もラビつちのシャドウで…アレ？」

「？ あれは三上なんだろう。敵意がない以上、何をそんなに悩むような問題がある？」

よく分からない、と首を傾げる順平の気持ちは同じ男性陣メンツの天田も荒垣も湊もよく分かった。この異常さをよく分かっていないのは明彦だけである。言動からして敵意が無いようには到底見えない。

少女は美鶴に対してだけは直接『クソ憎たらしい』などと暴言を吐いたのが尚更それを際立たせる。

彼女がラビリスのシャドウであるというのが本当ならば、ラビリス自身が桐条という組織によくないイメージを持っているというのは明白だった。だがラビリス自身はそんな様子は全くない。どういふことなのか、なにもわからないために空気を読まずこの少女に「桐条を恨んでいるのか？」などと問いかければどうなるかなど火を見るより明らかだ。

「順平、このことについては深く考えない方がいい…」

湊としてもあまり深く考えて気づきたくないことに気づきたくは無かった。

そもそも優希自身が許可をしているのか。『焼身自殺志願者』という優希の中にいる存在らしきものはラビリスのシャドウであるその少女が表に出ることを条件付きで許可しているようだったが優希本人が知らぬ間に、ということであれば大問題である。

彼女が表に出ているのは2、3日の間らしいがその間大人しくしているというのは有り得ないだろう。いま、こうなってしまうというよ

うに。

「有里の言う通りだぜ順平。やめとけ。アイツに関する事で大事な

のはな、〃キリのいいところで諦めること〃だ」

遠い目をした荒垣の言葉に湊もうんうんと頷いた。

確かに、手を離すのはダメだが現象に対する理解を突き詰めようとするのは荒垣の言う通りやめた方がいいのだ。世の中には、人の思考の及ばない現象はいくらでもある。

ある程度の理解が出来たらそういうものなのだと受け入れるのも時には大事な事だと湊は知った。

そしてこれはその現象に当てはまる。

恐らく、優希が湊だけに見せた認知の応用で少女の姿を作っているのだろうが優希自身が少女になりきっているという訳ではなく、人格はラビリスのシャドウと名乗る少女そのものなのだろう。

優希という骨格に認知によつて作り出された外見という肉をつけ、中身が優希では無いとなればそれはもう優希では無いのではということも想像してしまうがどういうことになっているのか湊にも分からないために口には出さなかった。

「待ちい！ そんな風紀の乱れの代表的なもんみたいなん、ウチが許さんで!!!」

相変わらずニヤニヤと笑いながら美鶴へとまとわりつく少女は今にも服を脱がし・脱ぎかねない勢いである。

そんな凶行を阻止しようとしてラビリスが己のシャドウを止めるために鼻息荒く声を上げた。このままではR-18展開になりかねない。ここには小学生の天田もいるのだ。そんな風紀の乱れきつたようなくんずほぐれつな展開はノーセンキュー。そんな正義感から断じてさせる訳にはいかないと少女を美鶴から引き剥がした。

しかし、少女は負けなかった。「いや負けろよ」という内なる声が聞こえてきているが無視して今度はラビリスに歪んだ笑みを向ける。

「ふうん？ ならアンタが相手してくれるの？ それならそれでいいけど？」

「なっ、どこ触つとんの!? やめえやー!」

「隠すんじゃないわよ。アタシには分かるんだから。胸、大きくしたいでしょっ。」

「は……はあ!? んなわけあらへんもん！ なんの冗談を言ってはるん!？」

「我は汝、汝は我。アタシはアンタのシャドウよ。これくらい分かって当然でしょ？ それともお…やっぱりアタシにバラバラにされたいのかしらあ？ アハハッ！」

もちろん、冗談だが。

そもそも機械の身体なのでバストサイズは変え放題ということに双方気がついていないのか、不毛な会話が繰り返される。ついでに言えば少女は自分の胸を本体であるラビリスよりも大きくしたかったからしたと白状しているようなものだ。

こんなくだらないことに我は汝、汝は我という言葉を使わないで欲しいと再び内なる声が少女に抗議を求めるも「アンタも言いたかったから宿主サマにアレを言ったんだろ、なにも変わんねーんだよバーカ！」と心の声で返せば押し黙る。ちよつと泣いてる雰囲気すらする。弱い。

雑魚は引つ込んでな、と内心でさらに追い打ちをかけるように舌を出した少女は本体であるラビリスの顔をマジマジと見る。

(平和ボケしてるようなつままない顔ね…)

感想として抱いたのはそれだけだ。

確かに、ラビリス自身の抑圧された感情である桐条や人間という存在に対する恨み辛みや怒りはシャドウである己が全てこちらへ持ってきてしまっているとはいえ、ここまで優希以外の人間にも短時間で信頼を置き、馴れ馴れしく仲良しごっこをしていれば少女にも思うところがあるというものだ。

あの桐条にもよろしくお願いします、だなんて言うなんて有り得ない、と少女は思うのだ。

何がよろしくだ。

そんな挨拶をするなどまるで、過去の証そのものである己が忘れ去られ、否定されている。そんな気分になってしまう。

(妙に、むしろくしやすんよね。アタシはアタシで良いっていうのに。まさか、宿主サマやあのバカでドジで泣き虫でクソ雑魚な焼身自

殺志願者にでも影響されたとか？ いや、ないない。無いに決まってるわ。ありえないでしょ、こんな短時間で…)

自身とラビリスを同一視しながらも別物として自立しようとしている少女の中でなにかが軋み、音を出す。

(そうよ。アタシは復讐の権化。その為に生まれてきたんだから！仲間だとか絆だとか邪魔なものは全部要らない！アタシだけの身体を手に入ればこんな型落ち品の平和ボケしたポンコツなんか、関係なくなるはず…利用した奴も、こいつらも、全部全部ぶっ壊して自由になってやるんだから！)

しかし少女はそんな音を聞かぬ振りをして無かったことにした。メテイスから提案されたとおり、自分は自分だけの身体を手に入れやりたいようにやるのだと。

それでいいのだと誤魔化した。

肉を裂く様な感触。

生暖かい液体が顔にかかる。

自分はそれを気にせず追撃に備え、己の武器を構えた。迫ってくるだれかに向かつてそれを振り下ろす。

骨が潰れる音。飛び散る液体。

手足を潰し、無力化できたのを確認して戦闘を止める。

「なぜ戦闘を止める？ まだあれは動けるぞ。トドメを刺せ」

一面ガラス張りの丸い部屋の壁にあるスピーカーのようなものを通して声がする。

トドメ。

躊躇する。

生命を奪いたくは無い。彼女らは生きている。自分も生きている。なら、殺すのは良くない。

「早くやれ」

『あなたは知らないのね。最後のひとりにならない限り、ここからは出られないのよ』

声が重なる。

だが、それでも。自分には出来ない。出来るはずがない。誰かを殺すことが自分の役目のはずがない。

「なにをしている。ラビリス^ナキッサ^サ、やりなさい」

自分は、

やりたくない。殺したくない。

動けなくなつたのなら十分だろう。自分が勝者になつたのだから十分だろう。

なのに。

どうして。どうしてどうしてどうしてどうして。

もう動けないはずなのに。人間は、手足を潰されたら動けないはずなのに。もう戦えないはずなのに。

どうして目の前の肉の塊は飛びかかって来ようとしている？

にんげんは、動かない。なら、これはなんだ？

にんげんじやない？ そんな訳が無い。だって、これは俺が殺したみんなだ。

俺のせいで死んだみんなだ。

手は血とあぶらまみれで、そこらじゅうも血とあぶらまみれ。

チカチカと明滅して肉の塊が機械の塊に変わる。ひしゃげた人形の手足が落ちている。

見知った顔が落ちている。

首が転がっている。虚ろな目が責めるようにこちらを見ている。みんな、みんな自分を恨んでいる。

死んでいるのに。

殺したから恨んでいる。どうしてお前だけ。なんでお前が生きているんだと怨嗟の声を上げている。

どうして暗い場所に棄てられ閉じ込められなければならないんだと叫んでいる。

自分は、たすけてと訴えるそれを武器で押し潰した。

ごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい。

「片付けろ」

その声のとおりに這いつくばって、血とあぶら塗れの床に頭を擦りつける。

生暖かい。ベトベトとする。それが何故か酷く気持ち悪くて、吐きそうになって。けれど吐き出せない。なぜか、床の肉と血とあぶらと骨を食べないと思うってしまう。

みんなと一緒にいるためには、みんなを食べないと。

ぼくが殺したんだから。殺したものに感謝をして、いただきますって言うんだっておかーさんも言ってたから。

ちゃんと綺麗にしました。ちゃんと殺しました。許してください。みんなのこと、殺さないでください。殺させないでください。お願いします。もう嫌なんです。もう、嫌。お願いします。

口に運ぶ。ひたすらに口に運ぶ。

ぬちやぬちやと生暖かい肉と、骨を噛み砕いて嚥下する。

おいしくない。たすけて。もういやだ。
ぶつん、と真つ暗闇になり、場所が変わる。

走っている。ひたすら、森の中を走っている。

もう嫌だった。逃げたかった。なんの意味もなかった。彼らは自分をヒトとしては見ていなかった。心がある。それは彼らにとつてはただの反応で、電気信号のやり取りで、なんら慮られることではなかった。

自分は、結局道具で、みんなは自分の材料で。

なら、この生に一体なんの意味がある？

この心になんの意味がある？

誰かに会うため？ 家族に会うため？

家族つて、なんだ。だつて、みんなは自分で殺した。お父さんもお母さんも、千鶴さんも死んでしまった。自分が殺した。024だつていない。アタシが、殺したから。

なら、会いたい誰かって誰なんだ。

わからない。わからないけど、走る。

横で白い犬と一緒に走っている。この子はシロ。それだけはわかる。

逃げている。自分は、逃げている。外に出れば、きっとその会いたい誰かに会えるから。自由になれるから。

そのために、ずっと耐えてこれまで大切になったものを全部壊してきたのに。なのに。

——外なんて、なかった。空は真つ黒で、果てしなく続く海も真つ黒だ。

なにもない。そこには、なにもない。

砂浜に膝をつく。ぼろぼろと涙がこぼれる。唇をかみしめる。

無力だった。誰も守れなかった。壊すことしか出来ないくせに、殺したいヤツらは殺せない。

大切なものを壊すんじゃないで、大切なものを壊せと言ってくるヤツらを壊したかった。なのに、自分には何も出来なかった。命令に逆

らえても、逆らっても。ヤツらの思い通りに行くように全て整えられていた。レールの上を歩かされているだけだ。

憎い。

どうして自分がこんな仕打ちを受けなければいけないのか。

人間は身勝手だ。心だの絆だの愛だの語る口でそれを壊させる。所有物がヒトとして振舞ったり誰かを愛すことを許さない。

どうしてそんな人間のために自分が辛い思いをして戦わないといけないのだろうか。どうして自分がこんなヤツらのために心を得ないといけないのか。

道具に心が必要ないのなら。道具に必要な以上の感情は要らないというのなら。

ただ興味深いの一言で無視されてしまうのなら。

なぜ心なんて植え付けた。なぜ、感情などというものを得させた。慮れないものを造るな。

炎が渦巻く。

あの時、ひとおもいにすべて焼き尽くしてしまえば。ヒトを捨ててしまえば。この世を滅ぼしてしまえば。

何も無くなつて楽になれたのだろうか。

「ええ、その通り。なにもかも、辛いものを排除してしまえばそこに苦しみなど存在しなくなるのです」

大きな黒い巻き角をもった黒衣の女が笑う。

肌のほとんどを隠すようなその古めかしいゴシックなドレスの裾をはためかせ、海の上、赤い月が輝く空に浮いている。

歪だ。それがおかしいと分かるのに、おかしさを感ぜない。

まるで、それが普通なのだと錯覚しそうになる。

「なんら、おかしい事ではないのですよ？ その違和感をお捨てなさい。貴方はこちら側に来るべき存在。搾取される側ではなく、与える側にいるべき存在なのです。それが神たるモノの責務です」

音もなく、女は砂浜へと足を着け、ヤギの体毛を思わせる色の艶やかな銀髪を揺らしながらその赤い瞳を歪ませこちらへと寄ってきた。

渦巻く炎をもつたものでもないその女には傷一つない。そつと、手を伸

ばし頬に触れてくる。冷たく、体温がないその手の肌ざわりは予想に反してきめ細やかで柔らかい。

「辛かったでしょう？ 苦しかったでしょう？ わたくしは全てを受け入れましょう。全てを救いましょう。わたくしたちはそれを願われたのです。なればこそ、その責務を果たすべきなのです」

そして心底愛おしそうな表情で抱きしめられた。ぐちゅぐちゅと、肉をかき混ぜるような水音がしている。

全てを救う。

それは死んでいったみんなも、なのだろうか。

「当然です。この星の全て。物質だけではなく精神や魂をもわたくしたちは救うのです。そう——産み直すことによって」

ぞわり。

背筋が粟立つ感覚がした。違う。何かが違う。

それは本当に自分が望む救済なのだろうか。自分が望むのはみんなが笑って生きていけるこれからをやることだ。

産み直す、ということは別のものになってしまうということなのは無いのか？

急に危機感が湧いてくる。違う。俺は彼女とは相容れないという拒絶反応のようなものが心を支配する。

だめだ。彼女に触れてはいけない。このままではいけない。

自分はまだ、ヒトでないのだめなのだ。

シユブⅡニグラスとなってしまうてはいけない。まだ俺は、シユブ

Ⅱニグラスではない。

そつと、肩を掴んで両手で彼女を突き放す。

「残念です。あと少しだったというのに。堕ちきってしまえば楽でしょうに…まだ抵抗するというのはのですか」

思い出した。自分は彼女の思想とは相容れない。だからこそ、敵対する羽目になっているのだ。

それなのに彼女は拒絶されたというのに何も気にした様子はない。ただ、穏やかに笑っているだけだ。

「全て壊し、すべからくを滅ぼす。それが貴方の役割。そしてわたくし

しが産み直す。そうして全てが循環していくのです。貴方が望むのなら創世の要である「宇宙卵」を創り出し、この世界自体を創り替えでも良いのです。なにも、アナンタ^あシエー^蛇シャだけの特権というわけでもありませんからね」

なんのこともなしに、創世をする、という途方もないことを告げた彼女の声は恐ろしい程に優しい。

自分は彼女を拒絶しているのに、彼女は自分を拒絶していない。俺が彼女を本心から拒絶するはずがないと彼女は思い込んでいる。

そのことに対し酷く恐ろしいという感情を抱いてしまった。

「かの邪神も、天の御使いも悪魔もこの国の守護たる神々も、今のわたくしたちには敵いません。そして産み直しのためのピースは全てわたくしと貴方の中に揃っている。この機を逃さずしてどうしようというのです?」

意味がわからない。なぜ彼女はそこまで「創り直す」ことにこだわるのか。

そんなことをしても誰も幸せになんかならない。これまで生きてきた人たちを否定することになる。

「同じことです。わたくしのやろうとしていることと、貴方のやった事。未来を知り、未然に防ごうとすることと全てを無かったことにして産み直すこと。既に事が起こってしまっているのなら、何も変わらないのですよ」

彼女は物憂げに視線を落とす。黒い水の波が弾け、砂浜を濡らした。

「そもそも人々が救済を願ったのです。この星に生きる者たち自身の願いがわたくしたちを目覚めさせた。なぜ、それを否定するのです。貴方だって誰かの願いでそこに立って居るのでしょいうに」

そこで彼女はふ、と笑うように息を吐いた。

「貴方の拒絶は子が成長期を迎え、親に反発するものと同じやわなものなのです。本当は、わかっているのでしょいう——? わたくしと貴方が同じ穴の貉だということを」

子供に言い聞かせるように、彼女はそう告げる。

どう足掻いても自分と彼女は同じ存在なのだと言いついて聞かせてくる。そんなわけ、ないだろう。

「強情ですね。けれどそうでなくては」

一転。蠱惑的な表情となった彼女は擦り寄ってくる。何度も否定されているというのに再度否定されることをわかっていないような顔と態度に理解が及ばない。

どうしてそんなことが思えるのだろうか。どうして、無条件に同じものになると思っっているのだろうか。

強情なのではなく、そもそも自分たちの目指す先が似て非なるものであり分かり合えないものだということを理解していないのだろうか。

もう一度押し返し距離をとる。声を出す必要すらない。もうここまで来ているとそれほどの拒絶をしているのだと理解されないのかもしれないが受け入れるよりかはました。

彼女は穏やかな表情だ。だが、その目が冷徹なものへと変わる。

「無駄ですよ。わたくしと貴方は深く…深く繋がっている。拒絶など出来ようはずが無いのです。そしてこの夢の中は既にわたくしの領域……わたくしの想いひとつで如何様にもできるのです。望むのなら、またあのような悪夢に誘っても良いのですよ」

ぞるん、と嫌な音がする。

瞬きをした一瞬で全てが黒い触手で満たされた森のような空間へと変貌する。

四方八方触手まみれで何も見えない。木のように見えるものも、絡み、天へと手を伸ばすようにそびえたつ触手の束だ。

シユブニグラスの姿がぼっかりとその中に浮かび、遠くには塔と赤い輪になってしまった月が見える以外にひたすら触手と暗闇が続いている。

そして暗闇からはざわざわと何かの気配がたくさん自分たちを取り囲んでいる。

なぜか、とても居心地がいい。吐きそうなほどに気味が悪いと人間の部分が警鐘を鳴らすのに、もう片方の精神がここにいることは当然

だと判断してしまいそうになる。己の領域なのだ意識してしまいそうになる。

そう感じてしまうということは間違いなくここは彼女の領域に違いない。

だめだ、逃げなくては。そんな思いが胸の内を支配する。

再現されたばかりのかりそめのものだとしても、ここにいるのは「ま
ずい」。

ここにいるだけで内にある男神の相としてのシユブⅡニグラスに
侵食され、人としての精神が塗り替わってしまいかねない。まだ、正
気を失うわけにはいかない。

逃げ場がないのにじり、と後ずさった。

それと同時に、という地響きのような物音がする。

遠くで巨大な手が触手でできた大地をつかみ、巨大すぎる「それ」
が頭を出した。

ヤギもののような角を生やした黒い双頭の怪物——エレボス。

それはこちらを見やると人の歯が生えそろった奇妙な口を大きく
開けた。

「ッ!!!」

咆哮がビリビリと空間を揺らす。

夢の中だというのにエレボスの咆哮は実際にそこに空気が存在す
るかのように衝撃をこちらへと伝播している。

否、夢の中だからこそかもしれない。

夢というのはある意味で普遍的無意識の一部であり、そこに接続し
やすい状況でもあるということだ。

「ほら、エレボスも久方ぶりに貴方に会えたのが嬉しいようですよ。
戯れに付き合っただけではどうですか？」

エレボスは本来、彼女の子ではない。はずだ。

だというのにエレボスは彼女の言葉を聞いている。彼女の命に
従っている。彼女を母だと慕っている。ニユクスではなく、自分を求
めている。

何もかもがおかしい状況で、冷汗が流れる。

夢の中なので冷汗が流れる、ということすらおかしいのだがそんなことを気にしている暇はない。

身構える。たとえば自分が彼女に及ばないとしてもこの状況を切り抜けなければいけない。

その瞬間、強烈な白い炎がシユブニグラスとエレボスを焼いた。

自分が借りているウィツカーマンのものではない。

天から降り注ぐようにして矢のようにそれらが「脅威」に襲い掛かる。

「……なるほど。化身アヴァターラであるというのにわたくしの胎領域のナカへと干渉し、邪魔をする。どこにでも入る者」という異名は伊達ではない、ということですか」

炎に焼かれながらも彼女は無傷で笑っている。何かに納得して特に気を害した風ではないように笑っている。違う。傷は負っているのだろうが目にも止まらない速度で回復しているだけだ。

しばらくして強烈な神性を帯びたその炎が静まると空間自体が揺れ始めた。ヒビのようなものが入り、光が漏れ始める。

「いいでしょう。ここはこちらが退きましよう。それに、わたくしは待つといったばかり。これ以上は約束を違えてしまいますし戯れでは済みませんからね」

ふ、と彼女が笑うと一瞬にしてすべてが消える。シユブニグラス本人も、エレボスも、触手まみれの世界も。何もかも。無だ。ここにはなにもない。

こんなことをしでかしたのは誰なのか、彼女が気が付いたのなら自分にもわかる。あれは――

「カルキとクリシュナ……?」

どうして、自分の中に居てほとんど力を失った彼らがあんな力をと小さく吐き出した疑問と言葉がいまだ覚めない夢の中で溶けていった。

12月15日(火) 朝

「うっ……」

明け方。

少女——優希の身体を使っているラビリスのシャドウ——は優希の部屋のベッドの上で突然目覚めた。そしてがぼりと勢いよく起き上がると口元を押さえて洗面台へと駆け寄る。そして、喉元まで上がってきているそれを洗面台の中にぶちまけた。

「おえっ……！……げっ……うっ、ううっ……おえええええっ！……けぼっ……！」

胃液と少女が身体を奪う直前に飲んだらしきホットミルクの残骸のような白い液体しか出ない。

胃液のすえた臭いと乳製品独特の乳臭さが合わさり、再度少女はえづいて胃液を洗面台に吐き出した。

「はーっ……はーっ……サイアク。忘れてたわ……ニンゲンの身体って脆いし悪夢ってやつも見ると体調不良ってやつにもなるのよね……特に宿主サマのは使いやすくはあるんだけど欠陥品も良いところだったわ……くそ……っ……」

荒い息のまま、口を濯ぎずると凭れるようにして床に座り込んだ少女は目を生理的に湧いてきた涙で潤ませながらも胸の心臓のある辺りを服の上から握る。

「生きるって、メンドクサイよね……でも、みんな……みんな、生きてる。なんで？ どうしてこんなに辛くて苦しいのに生きてんのよ。なんで希望なんか持てるのよ。ホント、意味わかんない……」

トクトクと動く借り物の心臓の鼓動を聞きながら、少女は眉をひそめた。

そして、想起する。

「あの子、まだ生きていられてるのかな……」

ぼろりと零れた声は純粹で、弱々しく、それでいて嘲りの一切含まれていない寂しげなものだった。

少女が想いを馳せるのは生みの親とも言うべきラビリスたちの人格モデルとなった存在。

アイギスやメティスの人格モデルとなった人物もそうだが、対シヤ

ドウ兵器はペルソナの発現の為に精神を有することが絶対条件であり、楽にそれを搭載させるために実在する人物の人格が使われている。

ただし、そのままモデルの人格が使われていたのはラビリスまでの機体であり、アイギスの段階まで来るとあくまでも人格データの基礎、サンプリングされたもののひとつという扱いでありメインモデルの人物の性格は殆ど反映されていなかった。

だが、ラビリスの場合は試作段階だったためかそのまままるまるひとの少女の人格を移植した。そのことと、言語インターフェースの初期化が行われなかったことが重なり、標準語で喋っているつもりでもラビリスから出力される言葉は全て関西弁になっていたというのは余談だ。

だからと言ってはなんだが言語インターフェースなどというものの無い優希の身体を使っているラビリスのシャドウである少女は関西弁に自動変換されることなく喋ることが出来ているというわけでもあった。

しかしなぜひとの少女とも呼べる年の子供がラビリスの人格モデルとなったのか。

優希やストレガの子供たちのようにどこかから連れてこられた実験体というわけではない。

重病を患い、桐条の治療を報酬とする実験に参加したからだだった。彼女はベッドから起き上がることしか出来ない程に重い病気であり、それは年々身体を蝕んでいた。

ゆかりと同じく桐条の名士会に名を連ねる家の子供だった彼女は病気の治療の為に桐条の治療という名目で発表された対シャドウ兵器の為に人格モデルを集めるという実験に参加することとなった。

勿論、それは親の決断だ。

我が子を救いたい。その為なら非人道な事だろうが金がいくらかろうが何でもする。

その想いから彼女の人格は本人の知らぬ間に複製されラビリスたちに宿った。

言語インターフェイスが関西弁になったのも元となった彼女が京訛りの関西弁を喋っていたから。ただ、それだけに過ぎない。

「…ううん。きつと大丈夫よ。アタシたちは会える。きつと、会えるわ。そうじゃなきゃ…アタシの生まれた意味なんて……」

少女に不安が押し寄せてくるもかぶりを振る。

重病を患いベッドの上から動くことも出来ず、ひとり寂しさを感じていたその女の子に少女は会いたかった。ラビリスに心というものを教えてくれた024という機体ナンバーの姉妹機も彼女に会いたいと願っていた。

だからこそ、全てを壊そうと思った。壊して、逃げて、会って。あなたのお陰で自分たちは生まれて来ることが出来たんだと感謝を告げなかった。アタシ達がいるから1人なんかじゃないと伝えたかった。

それを告げると決めた出来事により、少女はラビリスの中で生まれた。明確な意志を持った。

壊すのは手段だ。1番になるのも褒めてもらうためだ。

1番になって、誰よりも強いことを証明して姉妹たちが傷つかないために実験を終わらせる。それがかつての目的だった。

——しかし少女の、ラビリスの後ろには何も残らなかった。殺して、壊した末に1番になった後は残りの姉妹たちを殺す役目が与えられた。

守りたかったものは己の手で全て壊してしまった。もう、残っているのは生みの親に会って色んなことを告げるためという引き継いだ使命のような目的のようによく分からないものだけだ。

ラビリスという個にはなれず、けれど別の何かとして自分を認識することも出来ず、少女は葛藤する。

自分はシャドウなのだと分かっているのに、ただのシャドウだと認めることが嫌だ。

ラビリスと同じにされたくないという意識がある。

不安定で矛盾を抱えた少女はひとり膝を抱えて丸くなる。冬だか

らか床が凍えるほどに冷たいが、どうでもいいとすら思えてしまう。
柔らかい身体。鋼鉄ではない手足。

瞳だってカメラアイなんかでは無いし、涙も出る。髪の毛が抜ける。髪がパーカーのフアスナーなどに引っかかれば痛いと感じる。気持ち悪いという感覚もあれば吐き気だつてして食べたものを吐き出してしまう。

手足が取れば治らない。怪我をすれば装甲と配線の代わりに血管と肉が裂け、オイルの代わりに血が吹き出す。血が無くなったら死ぬ。

人間の身体は弱く、敏感すぎて嫌になるかもしれない、と少女は早々に白旗を振りそうになった。

楽しいし誰にも命令されなければ操られもしないというのは魅力的だがこれはダメだ。何も気にせず暴れるのなら、機械の身体の方がいい、とさえ思い始める。

「はーあ…」

いつまでも悩んでいても仕方が無いので立ち上がり部屋を出て、真つ暗な中階段を下りる。

1階のテレビの前。そこで寝ているコロマルの元へと向かう。

「……毛玉。犬畜生ね」

確か名前はコロマルだったか、と思い出す。だが、少女はその名前では呼ぼうとは思わなかった。

名を呼んで、仲間だと思われたらたまったものでは無い。仲間などというくだらないものは要らない。優希とは間借りしているだけの関係で、仲間という訳では無いので別だ。

眠っているコロマルに手を伸ばし、耳をふにふにと揉み、そして頭を撫でる。暖かく、柔らかい。

思い浮かぶのは屋久島にいた野良犬のシロ。姉妹機である024が可愛がっていた犬だ。あの子も白かったなと少女は目を伏せる。恐らく本体であるラビリスもコロマルを見てシロを思い浮かべただろう。その事が少し癪で、けれどそれ以上の悪い気はしない。

頬に手を向ければちらりとその赤い瞳が開き見つめ返してくる。

少女はコロマルが起きたことに気づき、言いたかったことを告げた。

「おい、犬畜生。ここではアタシが一番だ。だからアタシに逆らうんじゃないわよ。良いわね」

「ワン！」

そんな無茶苦茶な主張をコロマルは受け入れた。犬畜生と呼ばれるのは不満だが、彼女の手はどこまでも優しく敵意はないに等しかったからだ。

「うわ。アンタ、脇のところにホントの毛玉が出来てんじゃない。毛玉に毛玉が出来てるってなんのギャグ？ 汚らしいし触り心地悪いしムカつくから取ったげるわ」

ふん、と不機嫌そうな顔でブラシを探しあて、コロマルの毛玉を優しくときほぐして取った少女のことを要はツンデレだとコロマルは理解した。この瞬間、コロマルの中で少女の立ち位置が荒垣よりかは下だが似たようなものになった。

荒っぽいのは戦闘スタイルと言葉だけでコロマルに対するものは優しかったのだ。

「ま、マシになったんじゃない？ これで心置き無くアタシがアンタを蹂躪出来るってワケ。どう？ 恐ろしいでしょう？」

「キュウン、クーン……！」

その言葉に微塵も恐怖を感じなかったのでコロマルは甘えた声を出して腹を出すことにした。襲い来るのはマッサージに近い気持ちのいい撫で攻撃だけだ。

腹を出し、パタパタと嬉しげに尻尾を振るコロマルに、服従のポーズと勘違いした少女は気分を良くする。

「腹を出すって言うのは降伏したってことかしら？ 煮るなり焼くなりお好きにどうぞってことよねえ!? アツハハハ！ 良いわよ！ してあげるわ！ ほーら、くすぐったくなくなってもう死んじやいたいて叫んでもやめないんだからー！」

わしやわしやとコロマルの毛を撫で始めた少女は酷く楽しげだ。

「はー…はー…ちよつとギア入れすぎたわね…アタシが疲れてどうす

んのよ……てか宿主サマの身体、貧弱すぎない……？」

「クウン……」

十数分後、疲れて息を切らした少女と申し訳なさそうに耳をペタンと曲げたコロマルの姿が。2人とも調子に乗ってはしやぎすぎた。コロマルは撫でてもらえるのが気持ちよく、ここもあそこもこつちもどぐるぐる姿勢を変えながら催促し、少女は少女で気分を良くして求められる限り撫でまくっていたのだ。

時計を見れば5時過ぎ。これから寝るには惜しく起きるには暇すぎる。

「あー…暇ね。退屈。犬畜生の事はもう堪能したし…もう寝るなんてやってらんないし…散歩にでも行ってやろうかしら。外なんて見たこと無かったしいい機会だわ」

散歩。その言葉にコロマルの目が輝いた。どうせ今日の朝の散歩当番は順平で、時間になっても起きてこない為に抜きになるだろうからどうせなら少女と行きたい、と考えた。

近くに置いてあるリードを咥え、少女の足元へと落として吠える。

「ワン！ ワン！」

「あ？ 何よ犬畜生。…リード？ 散歩に連れてけつての？」

「ワン！」

少し考えた少女はリードを見つめるとニヤリと笑う。

「良いわよ。連れてつてあげる。いい？ アンタの為じゃないの。アタシが哀れな犬畜生であるアンタにこの街を案内させる。…そう、利用してんのよ！ しっかりアタシに合わせなさいよね！」

「ワン！」

「フン、いい返事ね！ そこは褒めてあげるわ！ でもその威勢がいつまで続くか見物ねえ？ 泣き叫んでもう歩きたくありませんなんて言わせないわよ！」

コロマルは少し心配した。散歩に連れて行ってくれるのはいいがその威勢が続かないのは少女の方ではないかと。

けれど顔にも声にも出さなかった。コロマルは紳士だからだ。

「待つてなさい！ すぐに着替えてきてやるわ！ 寝てたりどつか

行つてたりしたらブツ飛ばすから！」

ドダダダダツと凄まじい勢いで階段を上つていった少女にコロマルは生暖かい視線を向けた。転けなければいいのだがという心配と共に。

「アハッ！ 行きなさい犬畜生！」

「ワンワンッ！」

明け方の長鳴神社の公園。

まだ薄暗いというのにフリスビーを投げて少女はきやつきやつとはしゃいでいた。

ブカブカナダウンジャケットを着た少女はそれでも気にせず楽しそうにコロマルがフリスビーを啜えて戻ってくるのを待っている。

「ワン！ ヘッヘッヘッ……」

「よくやったわ犬畜生！ ちゃんとアタシの所まで持つて来れたのね！ その賢さは認めてあげるわ！」

コロマルがちゃんとフリスビーを啜えてすぐ少女の元へと帰つてきたことに対し少女は気分がいいのか素直に喜ぶ。

「えーっと、こういう時はどうするんだっかしら……ふーん、撫でてやればいいのね。撫でられるだけで嬉しがるだなんて犬畜生つてば単純よね」

帰つてきたコロマルへの対応を少し悩んだ少女は、すぐに答えがわかったのかコロマルの頭を撫でてやる。コロマルはそれを気持ちよさそうに受け入れ、好きなだけ撫でてもらう。

そうしてそれが終わればまた少女がフリスビーを投げてコロマルが取りに行く。

それを少女が飽きるまで繰り返した頃には日が昇り、朝食にちょうどいい時間になっていた。

「あーもう飽きたわ！ 帰るわよ犬畜生！ あつたかい食事とやらがアタシたちを待つてるの！ もしなかったらあの目つきサイアクニット帽モサ男に作らせるのよ！」

「ワン！」

「目つきサイアクニット帽モサ男」とは荒垣のことなのだろうか。

そう疑問に思ったがコロマルはやはり紳士なのでそれをおくびにも出さずに返事だけしてリードを持った少女に連れられ帰り道を行く。

「おい、モサ男！ 食事！」

どこの亭主関白だ、と言いたくなるような帰宅の第一声を上げたラピリスのシャドウだといった少女に荒垣はため息を吐いた。そしてモサ男とは自分のことか、と微妙な気分になる。

朝、朝食を作りに起きてくれば早い時間だというのにコロマルがどこにもいないと思えば、やはり散歩だったらしいと一緒に帰ってきたコロマルを見て荒垣は思った。

順平が当番だったため、今日は珍しく早起してちゃんとコロマルの散歩に行ったのかと思っていたところだったのだ。

ふたを開ければ新入りの微妙な立ち位置である少女がその端正な顔についている鼻を赤くしてまでコロマルと仲良く帰ってきて満足そうに食事を要求しているという現状だ。

順平はまた寝過アイツごしたな、と分かり切った答えを頭の中に浮かべながら荒垣は口を開く。

「まずはコロの足を拭いてやってくれ。そのあとお前は手洗いうがいしとけ。いいな」

「命令すんじゃないわよモサ男。いわれなくともやるっての」

反抗的な言葉が返ってくるがそれでもいうことは聞くらしくウエットティッシュでコロマルの足を拭いてあげている。道具もそこからへんに放るのではなく、ちゃんときれいにしてから戻しているのを見るに几帳面さはあるらしい。

意外だな、と荒垣は自分を棚に上げて思った。昨日見た少女のしぐさは限りなく乱暴でがさつだった。

男勝りというべきか。

艶めかしい部分もあったが、誰かに向けている部分は攻撃的でまるで威嚇しているヤマアラシのようだとも思っていた。

「犬畜生の足も全部拭いたし手洗いうがいしてきたわよ！ ほら、食

事！ 寄りしなさいよ」

「言い方ってモンがあんだろがよ…」

少女の横暴さに荒垣は再度ため息を吐いた。奏子もじゃじゃ馬だがこの少女もそうとうクセがありじゃじゃ馬だ。

犬畜生というのはコロマルの呼び方か。この少女は他者を名前で呼ばないことにしているのか。それにしても美鶴に対してだけは「桐条」と名字で呼んでいた。

なにかこだわりがあるらしいと見た荒垣はそれ以上の追及をやめ、朝食を少女の前へと出した。

今日の朝食は和食ではなくスクランブルエッグとベーコンとトースト。あとはコーンスープだった。

バターの甘い香りが少女の鼻孔をくすぐる。

「わあ…」

何の変哲もない並べられた食事に少女はきらきらと目を輝かせた。初めて見る宝石のようにそれに見とれている。

「身体、冷えてんだろ。スープのおかわりは作ってあるから好きだけ飲め」

「はあ？ アンタの食事なんておかわりするわけ…」

とは言いつつ一口食事を食べ始めた少女は止まらない。

もぐもぐと無言で食べ続け、10分もすればその皿とスープの入っていたカップは空になっていた。

食べこぼしも、かけらの一つもない。

「美味かったか？」

「……」

返事がない。

「食い終わったってんならぐっ馳走様くらい言え」

食べ終わったのにごちそうさまを言わないなんてダメだぞという当たり前の感情も込めて荒垣は少女へとそう言った。

すると、

「……わ…」

「あ？」

少女が小さく何かをつぶやいたが荒垣には聞こえず聞き返す。

少女は途端に顔を屈辱だと言わんばかりに歪め、スープカップをずい、と前へと突き出してきた。

「おかわり」って言ってるの！　いま食べたやつ、まあまあ悪くなかったわ！　だから、次のを寄こしなさい！」

「へっ…」

大きな声でそう叫んだ少女に荒垣は笑みを零す。

随分と微笑ましいところもあるじゃないかと思つていればおかわりがあるというのは嘘だったのかと思つた少女がその表情を怒りに染めた。

「なによ!?　無いの!?　アタシを騙したの!?　これだから人間は…」

「わーったわーった。すぐ持つてきてやるよ。良い子で待つてろ」

「む…」

人間というくくりで広範囲に罵倒を広げようとした少女をなだめ、スープカップとテーブルの上に置いてあるパンの乗っていた皿を受け取り荒垣はキッチンへと戻る。

そうして持つて行つたおかわりまでもをぺろりと平らげた少女は上機嫌で「ごちそうさま！　そろそろ時間だからアタシ、行くわ」と言うのと再び上へと戻つていった。

それを何も言わず見送つた荒垣だったが、と問題に気が付く。今の時間はいつも優希が朝食をとつて学校へと行く準備をする時間だ。

「まさかアイツ…三上の代わりに学校に行くってんじゃないだろうな…？」

そもそもあの姿で学校に行けるのか？　という当たり前な疑問を持った荒垣は悶々と悩みながらもそろそろランニングから帰ってくるであろう明彦の食事を用意してそれを誤魔化した。

「おい、さっさと歩け豚！」

「はい喜んで！」

「……なにしてるの!？」

風花やゆかりと共に寮の玄関から出た奏子の第一声がこれである。眼前では四つん這いになった綾時の背に座るラベリスと瓜二つの少女の姿が。

そんな少女の肩には優希の通学鞆があり、どう見ても優希の代わりに学校に行く気満々だ。

「なにつて…外に出たらこの豚が絡んできたのよ。だから教えてやってんの。誰が一番強くて偉いかってことをね！　ねえ豚、この世で一番強くて偉いのはだあれ？」

「はい！　それはラベリスさんです！」

「よくわかってるじゃない。豚なりにちゃんと答えられたことを褒めてあげる」

うれしそうに答える綾時も、答えに満足し綾時の頬をすりすりとする少女のことも奏子は理解ができなかった。

そして何故かこんな奇行が行われているというのに道行く人々には気にも止めていないのか全く視線は集まっていない。

「え、えええ…」

なんだろう。そういう「プレイ」なのだろうか。

というかこんな公衆の面前でこういうことするの恥ずかしいからやめてほしいなあ、等いろいろ言いたいことはあったが、それよりも聞きたいことを聞くために口を開いた。

「あのさ、荒っぽい方のラベリスちゃん…学校に行くつもりなの？」

「あ？　そうよ。なんか文句でもあんの？」

沢山あります。なんて奏子は口に出せなかった。口に出せばややこしいことになることこの上ないからだ。

朝のこの忙しい時間に面倒ごとで学校に遅れたくない。特に試験がある今週は。

黙りこくった奏子に代わり、おずおずと風花が口を開いた。

「三上先輩の代わりに学校に行つて大丈夫なのか奏子ちゃん心配なんだよね？　だつて今の姿は三上先輩とは違うから…」

「ああ…そうね。アンタたちが見えてるのはアタシの姿でしょうね。でも周りからは宿主サマが喋つて動いてるように見えるらしいわよ」

他人事のようにそう告げた少女に今度はゆかりが首を傾げた。

「他の人にはアンタが三上先輩に見えるの？　それつてスゴクややくしくはない？」

「それはアタシも思つてるわよ。この身体は宿主サマのもので、でもアタシの見た目になっている。他のボンクラどもは『霊力』つてもんが低いからこの異常を異常と捉えられないそうよ」

少女が告げた言葉は簡単そうに聞こえるも簡単に理解できるものではない。

意味の分からない言葉が出てきて、ゆかりが表情を困惑に変える。

「霊力？　なによそれ…またヘンな言葉が出てきてわかりづらいんですケド…」

ゆかりが訝しめば少女が綾時の上から降り、立ち上がつて汚れを払つた綾時が口を開いた。

「『霊力』つていうのは魔力とも呼べるものだね。呼び方が違うだけで二つは同じものだよ。これらには超常現象に対する耐性とかも含まれているからね。敏感すぎるのも考え物だけど…ペルソナ使いはともかく一般の人にはそういう耐性があまりなくて気づきづらいつて彼女は言いたいんじゃないかな」

「へー…そうなんだ…」

ゆかりが一応は納得した、といった風に頷けば、少女は「ハッ」と馬鹿にするように鼻で笑う。

「全員、都合のいい風にあタシを見てるつてコトよ。ボンクラどもはこの身体を三上優希という存在だと思ひ込んでる。そう世界を捉えているからアタシがいることに気が付かない。アタシだと思わない。そういうモンなの」

歩き出した少女についていくように奏子たちも歩き出す。

「だからアタシが学校つてとこに行こうが誰もアタシが宿主サマじゃないだなんてわからない。思わない。何の問題もないのよ」

少しだけ、ここではないどこか遠い場所を見つめているような目になった少女に奏子はなんとなくだが寂しさを感じ取る。

しかしそれがなにからくるものかまでは奏子にはわからずじまいだ。こんな短い付き合いだけでは何も知らない相手の事情がわかるとすればそれはエスパーになるだろう。

とはいえ、そんな話を聞くような信頼関係もなく。少女自身が攻撃的となれば余計に知ることはできない。

「それにアタシが行かなきゃ試験が受けられなくて困ってるらしいわよ。試験なんかが大事だなんて意味わかんないわよねえ？」

ニヤリとした笑みを浮かべた少女はそのまま奏子たちを見ることなく鞆を担ぎなおして何事もなかったかのように歩き去っていく。

そんな少女にしばし呆然としていた奏子だったがあることに気が付き慌て始めた。

「もしかしてきつき綾時君に跨つてたのもお兄ちゃんがやったことにされて見られてるんじゃないや…うわあ…ど、どうしよう!？」

「僕はああいう体験したことなかったし楽しかったから別にいいけど…」

慌てる奏子に綾時がのんびりと返事をする。

綾時からすれば先程のことも体験したことの無い珍しいこと扱いなのだろう。しかし奏子にとっては「別いい」で済まされることではない。

「よくない！ 綾時くんは帰国子女ってことだから変なこととしても帰国子女だしで済むけどお兄ちゃんはそのうじゃないもん！ お兄ちゃんの評判にかかわるよお！ どうしよ…教室行ってクラスの子に『朝見たんだけど奏子ちゃんのお兄さんそういう趣味だったの…？』とか言われたら！ なんて答えれば…」

「確かにそれはちよつと困っちゃうよね…」

「答えにくいのがわかるかも…いや、間違いなく答えにくいっての。」

どーすんだろあの子…三上先輩の身体でムチャクチャなコトしなきゃいいんだけどね…」

頭を抱えた奏子に同意しながら風花とゆかりがうんうんと頷く。

そこへ綾時がひよい、と割り込んでくる。

「それは大丈夫だと思うよ。彼女が言ったように僕らのさつきやつてたことは受け取った側が見たいように変換されてしまうんだ。傍から見れば僕も彼女も彼女も地面に落とした何かを探しているようにしか見えなかったと思う」

そんな心配を払拭するような綾時の言葉にゆかりが疲れたようにため息を吐く。数分程度のことだがどつと疲れてしまった。

「そういうもんなんだ…なんか、ホントに私たちが見てるものが正しいものなのか不安になってきた…」

「あまり気にしない方がいいよ。世界にはこういうことは沢山あるんだ。…きつと奏子ちゃん達のお兄さんの方が僕らの知らない所で特別な体験をしているだろうしね」

綾時の言葉に今度は奏子のため息を吐いた。

「ありそう…てかお兄ちゃんは荒っぽい方のラビリスちゃんの話は知ってるんだよね…？ あそこまで凄いことは知らないのかなあ…」

さすがの奏子でも少女の無茶苦茶な言動に付き合いきれないのか白旗をあげそうになっている。ああいうタイプは初めてで、奏子も興味深くあるものの初めから拒絶されていては意味が無い。関わり合えないようがないのだ。

「どうなんだろう…確かに三上先輩はああいうメンドクサイことっていかか危なかったりトラブルになりそうなことは避けるよね。でもあの子も口ぶりだと先輩公認っぽいし」

「なんか、お兄ちゃんがあの子に理由なく身体渡すなんてしないだろうしって思う気持ちとあの子の暴走っぷりが釣り合わなくて。あれでも抑えられてる方なのかもしれないって言うのがちょっとね…」

昨夜、奏子に食ってかかった時の少女の様子は誰かに咎められているようにも見えた。それを見るに誰か——奏子は優希と予想した——が少女を咎めたに違いない。

暴走させないように手綱を握っている（実際にはあまり握れていないが）誰かがいるはずなのだ。奏子は思っている。それでもあの有様だという事実には頭が少し痛くなってくるが。

「寝てるって言うけどあの子が居なきやそのまま身体も寝ちゃったはずだし：寝込んでじゃうくらい力を使ったって：美鶴先輩の家でなにがあつたんだろ：」

今まで寝込むとは言っても風邪気味であつたり体調不良が多く、力を使いすぎて寝込む、などというのは見たことがなかった。

思い出した過去9度の『繰り返し』の中でも体調不良で倒れたことはあれども力の使いすぎでは倒れたところを見た事がない。

殺したいほどに憎い。手加減。爆発させてしまえばよかった。

優希と少女の言葉が奏子の中でぐるぐる回る。

もしかしなくとも、桐条でやらかした人物は兄の逆鱗に触れてしまったのでは無いのだろうか。

今まで奏子は自分たちが殆ど害されていないために寮へ襲撃者が来たことは優希が憎いと言いつつ放った相手と関係の無いことだと思いついていた。

だが桐条本邸が襲撃されていた時間と寮へ襲撃者が来た時間がピッタリ合うのだ。無関係だなんてあるはずがない。

だとすると兄を狙ったとする犯人の狙いは、寮のみんなではなくピンポイントに言うなれば奏子と湊だったのだろうか。奏子は正解に近い答えを導き出した。

もし、優希が寮へ襲撃者が来たことを犯人の前で知ってしまったら。他にも許し難い行為をされてしまつていたとするなら。ああいった言動になり、【火産霊】^{ホムスビ}のような強力な力を人に向けて使つてしまつても仕方無いことなのでは無いのだろうか。

（もし私たちがお兄ちゃんを危険な目に合せている犯人が居たとして、目の前でお兄ちゃんに対する暴言を吐かれたり酷いこと沢山されて：：そこで「殺してやる！」ってならないわけが無いよね：：実際お兄ちゃんを殺しかけた幾月に対しては私も憎いし死ねって思うもん。あの人は死んでるけど）

湊なんて拘束されていなければ一瞬で飛びかかっていきそうだと想像してうむむと唸れば風花が心配そうに顔を覗き込んでくる。

「ど、どうしたの奏子ちゃん…顔が怖いよ…?」

「なんでもないよ。大丈夫」

ちよつと殺意に対する理解を深めていましたと言えば心配されるだけだ。

その言葉を飲み込んで、ニコニコと奏子は笑顔を繕う。

兄に問い質す、ということはずとも答え合わせくらいは美鶴に対してしても良いだろうという気持ちで湧いてきて、放課後に予定を入れることに奏子は決めて携帯を取り出すのだった。

放課後

休憩中に机の上に足を乗せたりしていたので姿勢は真面目ではなかったものの、驚くほど静かで、それでいて意欲的には真面目に試験と授業を受けた少女は放課後になるとそそくさと鞆を持って帰宅しようとしていた。

正直、学校に対する憧れは本体であるラビリス同様持っていたが行ってみれば「こんなものか」と思えるようなものだった。妙に冷めた反応になってしまったのは己がシャドウであるからなのか。

そんな疑問を浮かばせてすぐに消した少女は美鶴へと話しかける。

美鶴は奏子達から事情を聞いていた為に少女がここにいることは納得していた。だが、まだ慣れてはいないようどこかぎこちない。

「桐条」

「な、なんだ?」

「ちよつと調べて欲しい事があるのよね。アンタらがした事だし、知ってて当然だとは思うけど」

そう切り出した少女に美鶴はまだ何か桐条という組織自体がなにか罪を重ねているのかという嫌な予感がした。が、

「五式の——アタシたちの人格の元になったガキがどこにいるのか明日の夜までに調べて教えなさい。アタシにもアイツにも情報はあつ

てないようなもんだから癩だけどアンタの力を借りるしかないのよ」
言われた言葉は意外なものだった。

人探しをして欲しい。それも、ラビリスたちの人格の元になった相手をだという。

この少女が願うにしてはまともなものだろう。だが、居場所を知つてどうするのか。

「まさか殺しに行くとは言わないだろうな？ そんなことをするとなれば伝える訳にはいかない」

精一杯美鶴としては警戒した言葉だった。しかし帰ってきたのは、「はあ？」

という敵意のない腑抜けた声だった。

「そんなことするわけないでしょ。探して欲しいヤツってのはアタシらからしたら母親みたいなものよ？ 母親を害そうだなんて頭がイカれてんじやないの？」

どの口が言うのか。

散々周りに攻撃的な態度をとっているばかりか止められるまでは本気で奏子を傷つけようとした少女に対し美鶴は疑念を抱く。

本当に見つけられたとして、会わせていいものか。悩んだ末、美鶴はその探し人の行方が分かってから決めればいいと考えた。調べておくことには損は無い。本体であるラビリスが会いたいと願っているのならこの「荒っぽい方」は抜きで会わせてもいい。

目の前の彼女には悪いが美鶴はリスクを考慮してそう思ったのだ。

「わかった。早急に調べよう」

「…悪いわね。でも礼は言わないんだから！ アンタたちが勝手にアタシたちを造つたのよ。それくらいやって当たり前でしょ!？」

「そうだな…」

それを言われればそうとしか言えない。こちらの勝手な都合で生み出され、酷い扱いを受け、挙句の果てに凍結処理をされ廃棄される予定だった。

それらの所業は殺されたり恨まれても仕方の無いことであり、この少女は正しくシャドウという存在の例に漏れず優希やラビリスの怒

りや悲しみを代弁する形で常に怒ったように刺々しくしているのだろう。

優希やラビリスがある意味で優しすぎただけでこれが普通だ。

否、優希とラビリスの対応は優しさからと言うよりも二人とも被害者意識が薄く、むしろ加害者であるのではないかという意識を持つていたことに起因していると美鶴は分析している。

それらが無ければきつとこの少女のように怒ったかもしれない。もしくは無くとも人の良さで許したか。

わからないがなんとなくそんな気がした。

「ま、いいわ。お小言とかいうまどろっこしいものはアタシもキライだからやめてあげる。期日、守れなきやアンタんち乗り込んで全部燃やすから」

「…善処しよう」

最後にとんでもない言葉を残して去っていかうとする少女に美鶴は頭が痛くなった。恐らく、本邸の場所も優希の記憶から見えて知ってしまったているのだろう。

リムジンに乗っていた為にほとんど外は見えていないだろうがそれでも彼女なら辿り着きそうだという予感があった。嫌な予感だ。

「はあ……」

小さくため息を吐いた美鶴は今言われたことの資料を取寄せるために携帯を取り出し電話をかけるのだった。

一方、教室を出ようとした少女に対し、その男子高校生の平均よりも小さい体躯で朔間が通せんぼをして食ってかかっていた。

「なんだか桐条さんと話していたけど…きみ、なんなの…？ ゆ、優希の身体を使つてなにしようとしてるの…!?!」

朔間——ヒュプノスからすれば何も知らないうちにかつての宿主である優希が別人に変わっているという奇妙なことが起こつていれば問い詰めたくなるというもので。

優希の気配はするものの、ほとんど少女の気配で塗りつぶしたようになつていれば違和感を感じるなという方がおかしい。

そうやって問い詰めれば少女は怪訝そうな顔をする。

「お前こそなんなのよ。宿主サマにくつついてたのは知ってるけど出てったんならもう無関係でしょうが」

率直にそう聞かれ、朔間は混乱した。

「え…なにって言われても…僕は…」

朔間は——ヒュプノスモルフェは優希のなんなのか。考えたこともなかった。

共にいることが普通だと思っていた。当たり前だと思い込んでいた。優希のことは自分が守らないと思っていた。けれど今は別れていて、優希はヒュプノス自分に守られなくても戦えている。歩めている。

それならば、朔間と優希はただのクラスメイトという繋がりではなく。しかし朔間はそれを認めることは出来ずに頭を抱える。ファルロス兄のように宿主と友達になった訳でもない。腐れ縁。相棒、という程でもなく名前のつけられない関係だったことに気がつく。居ただけ。会話をしただけ。力を貸しただけ。

それだけだった。

そもそも、朔間は優希のことを理解しているつもりであまり理解していなかったことにも気がついてしまった。幸せにしようと思っていたのに、自分たちの器になってしまっただけ悲しんだ分の償いをしようとしていたのに逆方向になっていた。

そして優希は優希で何も知らなかった。モルフエという存在に疑問を持たなかった。双方、一方的だったのだ。

「…僕って、優希のなんなんだろう…」

その事に気がついて愕然とした朔間を見て少女は苦虫を噛み潰したような顔をし、距離をとる。

「なによ…いつ…気持ち悪いんですけど」

少女としては同じシャドウである朔間モルフエのことは優希の記憶から知っていた。

しかしそれだけで少女が止められるはずもなく。一体なんの権限があつて少女を止めようとしているのかという意味で訊いただけで頭を抱えだした朔間に少女は嫌悪で慄いた。少女はこういうグズグ

ズなよなよした奴が嫌いだ。

直感的に知らんがな、と本体であるラビリスでは無いがなんとなく関西弁でそう答えたくなつた。少女はなんとかそれを堪え別の言葉を吐くことにしたが。

「よくわかんないけど、そういうのは自分で考えなさいよ。それとも、誰かから貰つた答えで満足したいわけ？ それならそれでいいけど」
「そ、それは……そんなつもりじゃ……」

それだけ言って押し退けて教室を出る。

子守りは好きではないし少女の役目ではない。

「じゃあね。クソザコナメクジ」

ひらひらと手を振りながら鞆を担ぎ直し少女は去る。

教室などという狭い場所から真つ直ぐ寮へと帰るつもりはさらさらなかった。

疲れるまでこの東京という街を見て回ることにしたのだ。

興味深いものは沢山ある。やりたいことだつてある。それに対し、残っている時間が余りにも少なすぎる。優希本人がラビリスのシャドウである少女に対し融通を効かせ、自由にできるのは3日きつかりという期限ができたとしても。

少女はその誰にも指図されないが予定をいれる限り果てしなく多忙とも呼べる状況に少しだけ充実感を感じていた。

学校を出、秋葉原をぶらついていたラビリスのシャドウである少女は不意にあたりが静かになつたような気がして立ち止まる。

おかしい。先ほどまで人の喧騒でにぎわっていたはずだ。なのにこんな、息遣いが聞こえるほどに静かになるなどありえない。

逃げ込むように路地に入った瞬間、何かの気配がしてさつと振り向けばそこに居たのは細身の褐色肌をした見慣れない男だ。

肩にジャケットをかけ、飄々とそこに立っている。だというのに異質さを感じる。

何かが普通の人間とは違う。そう思った。

「誰だ…ッ！」

「僕の名前は鶴龍ジャボ。今はそう名乗ってるただのプロレス好きさ」

「嘘つくんじゃないわよ！…なんなの…アンタ…ただの人間じゃない…わよね…」

鶴龍ジャボ、と名乗った浅黒い男に少女は怯えを覚える。

今まで感じたことのない、圧倒的な力量差。そして少女ほどの存在が無意識に体を震わせるほどの畏れ。

目の前にいる人物がただの人間ではないのは明らかだった。

後ずさり、距離を取ろうとするも逃しはしないとでも言いたげな視線が捉えて離さない。

ペルソナを出そうとすら思えない。出そうとした瞬間ねじ伏せられてしまうことは想像に難くない。

「そんなこと、どうでもいいだろう？　僕が何者かだなんてこれから起こることに比べれば些細でどうでもいいことだよ」

ジャボは少女の問いをはぐらかし、『ニヤリ』と笑って口を開く。

「シユブニニグラスの到来」

「！」

どうしてそれを、何も知らないはずの赤の他人が知っているのか。

少女が目を見開けばジャボが満足そうに言葉をつづけた。

「これも人類がこれまで、これからと幾度となく直面するだろう『絶滅イベント』のひとつ。僕らはそう捉えている」

「はあ？　な、なに言ってるのよ…『絶滅イベント』…ですって？　人間どもはそういうことにずっと巻き込まれてるってわけ？」

「そうさ。本来なら、君もある『絶滅イベント』——母殺しの火の神が起こすある事件に巻き込まれるところだったんだよ。それが、その器の持ち主が居たせいでズレてしまった」

そう言われても少女には意味が分からない。

母殺しの火の神、と言われても少女は神話に詳しくなければ神というわけではない。対シャドウ兵器のシャドウという複雑な立場なだけだ。ある程度の知識のようなものはウィツカーマンから教えられ

てはいるがこの程度の話くらいでピンとくるほどでもない。それに人類という種そのものがこのような危機に幾度となく遭っているという言葉自体が理解しがたいものだ。

内心で白旗を出し、ウィツカーマンに問いかければ「もう少し判断材料が欲しいから会話を続けて」という指示が出たために癩だが黙って聞くことにした。

「そのせいでこれからがどうなるか、僕には『視え』ているけど既に分岐しているものを語るほど無粋じゃないからね。結果がわかるゲームほどつまらないものはないだろう？ 八百長試合も好きじゃないしね」

ジャボの言い方に少女は違和感を覚える。なにか、未来でも見たかのような言い方だ。

「じゃあ、アタシや宿主サマがどうなるかもアンタにはお見通しつてわけね。で、アンタ誰なの」

「言っただろう、僕は鶴龍ジャボさ。それ以上でも以下でもないよ。僕としては人類に滅んでほしくないんだ。人類は僕らにとつては欠かせないものでもあるからね。でも、天に座す神や這いよる混沌を名乗る邪神はそうでもないらしい。前者は人類を失敗作と見ていて、後者は玩具扱いき。色々分岐して今まで運よく滅んではいない道を辿っているけど、まだ諦めてはいないようだしいつ東京にICBMが飛んできてもおかしくないだろうね」

「…何が言いたいわけよ」

長々と語るジャボに少女はしびれを切らしかけていた。

何が言いたいのか全くわからないし、言われたとおりに話を引き延ばしていたが、ウィツカーマンは難し気に唸るだけだ。何かわかつているのだろうか言葉にできるほどの確証を得れていないのだろうか。

「端的に言えばスカウトだね。もちろん君じゃない。器の方さ」

スカウト、ときてウィツカーマンがさらに頭を抱えたような気配がした。「面倒ごととは勘弁して欲しいなあ…」というボヤキとともに。

恐らくジャボには聞こえていないそれを少女は聞かなかつたことにして眉を寄せた。

スカウトだというのがいったい何がして欲しくてスカウトなんぞしてこようというのか。

「そんなこと言われて、宿主サマが『はい、わかりました！』だなんて言うと思う？　ねえ、言うと思ってるの？」

「簡単には領いてくれないことくらいわかってるさ。けど、どうだろう。もし地母神であるシユブⅡニグラスを退けたとしても、数年のうち人類に対する別の脅威が現れるとすれば」

それはシユブⅡニグラスを退けても第二、第三の滅びがやってくる、と言っているようにも取れる言葉だった。

だが、それは少女にもウィツカーマンにも関係がない話だ。過去にも同じようなことがあったのなら、直接的な原因ではないものに首を突っ込むわけにもいかない。

優希という人間は別に救世主メシアになりたいわけではないし手の届く範囲を守りたいだけだ。

それ以外はどうでもいいと言えば聞こえは悪いが節操もなく手を出しまくるほど余裕も力もない。

「んなの誰かが解決するでしょ。宿主サマが居ても居なくても同じことよ」

それが答えだった。

無責任だろうがすべての事件に出張って解決するわけにもいかない。そもそも、生存すら確定ではないのだ。無理な約束はできない。

「その『誰か』が居なければ？　失敗してしまえば？　大切な存在が傷つけば？　恐らく器の彼は見て見ぬふりなどできないだろう。けれど僕らの側についてくれればある程度協力ができる。それに、陛下も彼に興味を持っているようですね」

「知らないっての。それに宿主サマはもうじき死ぬらしいじゃない。協力なんて無理無理」

少女は鼻で笑うもジャボは気にしていないようだった。そのことにまた少し眉を寄せるも、そのことすらジャボは意に介していないのか逆に鼻で笑われてしまう。しかしその笑い方は癩に障るものではなく、からりと乾いていてさわやかなものであった。

「それはどちらでもいいさ。僕としては、協力するという約束ができればそれでいいんだ。それだけで情報の共有ができるだろう？ それにもし彼が人を捨てて完全な悪魔となり、〃シユブ^魔ニグラス^王〃としてこちらに来ることがあればそれだけでまた派閥ができてしまうからね。いくら悪魔が実力主義とは言え唯一神との戦いを控えている今、要らぬ争いはこちらとしても避けたいんだ」

「…ああそう」

少女は相手が高位の悪魔であることをなんとなく察し、ウイツカーマンはジャボの意図を理解した。

要するに、「悪魔として存在するつもりなら、〃唯一神^{LAW}〃ではなく、〃陛下^{CHAOs}の側につけ〃と言いたいのだろう。ウイツカーマン^希としてはどちらも勘弁願いたいが。

そして予想が正しければ優希はカダスのナギサ^{ノイデンス}経由でその〃陛下〃のメールアドレスを持っている繋がりからあちらに情報が洩れているとしてもおかしくない。以前優希が内心で危惧していたことが目の前で起こっているということだ。そもそも黙示録の四騎士自体が〃陛下〃の部下のようなものであると考えればそちらから情報が洩れているほうが可能性は高く、レッドライダーがその名前を出していたことから知られていても当たり前のような気もしていた。

ただ相手はあくまで今回は顔見せ、といったところだろう。本気で今答えをくれということではなく検討していき、程度だ。

「できればいい返事を待っているよ。もちろん、人であることを捨てなくてもね」

「ふん…」

ニコニコと笑顔でそう告げたジャボに少女は顔を逸らすことで返事とした。

恐らくこのジャボという男は優希がどう答えるのかすらもわかっているのだろう。だが、あえて言わず自分の口から言うのを待っている。先も八百長は好きではないと言っていたようにそれなりにこだわりがあるらしい。

代理で起きてきているウイツカーマンですら、本体である優希に話

を伝えずにすぐに返事というわけにもいかずに静観を選んでいる。

思考はウィツカーマンと優希にあまり違いはないために結果は聞かずともわかりそうなものだったが、一応ということだ。

「そうだ。忘れるところだった。陛下から伝言だ。ノーちゃんに代わってこれから色々よろしく」だそうだよ」

最後に振り向きそう言って喧騒の中へと消えていったジャボをひとしきり睨み付けたあと、少女も元の騒がしさを取り戻した街の中へと戻っていくのだった。

不安定な心（12／15）

寮以外で他人の目を気にせず集まれる場所を奏子は知らなかったため、美鶴に放課後に話があると連絡してはいたもののどこですればいいのかと悩んでいたところ美鶴本人から提案があり、ちょうど今日は活動がなかった生徒会室を使うことになった。

「それで、どうしたんだ有里。きみから私を呼び出すというのは珍しいな。いつもは逆だというのに…」

部屋の鍵を閉め、誰も入ってこれないようにした美鶴が振り返りながらそう言った。

実際、奏子から美鶴を呼び出すなどということはこれが初めてだ。奏子はゆかりや風花、荒垣などともに行動していることが多いが美鶴とは美鶴の方から声をかけられない限りあまり寮以外で会うことはなかった。

もちろん、不仲というわけではなく寮ではたわいもない会話をしたりお菓子のおすそ分けをしたり、ゆかりや風花とやることと変わらない対応をしている。

ただ、奏子にとっては忙しい美鶴に特に用事がないのに連絡をするということ自体気が引けることであり、これまで美鶴本人を呼び出してまで訊くようなことがなかっただけという話だった。

「ちよつと聞きたいこと、というより確かめたいことがあって」

困ったような笑みを浮かべながら奏子は返事をする。その答えに美鶴が首を傾げた。

「確かめたいこと？」

「はい。これは私の自己満足、ですけど」

奏子のその表情に美鶴は優希と似たような笑い方をする、とそこでも無意識に優希との共通点を探してしまいそうになりその思考を振り払う。

「…この前、寮が襲撃されたとき。あの人たちの狙いつて正確に言えば私と湊で、お兄ちゃんを脅すために私たちを連れて行こうとしたんじゃないんですか？ 桐条の…その処分されたって人はお兄ちゃん

の触れられたくないところに——例えば私たちの事故のこととか、ストレガの人たちのことに触れてしまったんじゃないんですか？ だから、お兄ちゃんは…」

「……私からはなにも言えない」

奏子の正解に近い追及に、美鶴はそれでも首を横に振った。

だが、その答えは奏子にとっても予測済みだ。

「……ここにお兄ちゃんが居なくても？ 荒っぽい方のラビリスちゃんはもう学校を出てますよ。ここに来る前確認しました」

それが狙いで人目のない場所に行きたいと言い出したのか、と美鶴は納得する。確かに、美鶴がここまで意固地になっっているのは優希の耳に入れたくないからであり、その心配がないなら意固地になる必要もないように思えた。

そして目の前にいるのは何の関係もない言いふらすような人間ではなく、肉親であり家族である奏子だ。

不用意に優希自身に直接それを告げる、といったことはないだろう。

真剣な目をしているいまの奏子相手にごまかしは効かない。この様子では黙ることも許しては貰えないだろう。諦め、口を開く。

「……今回の事件の首謀者——高寺の狙いは彼の持つ倉橋商事の株式、だけではない。あれもグループのために欲しがっていたようだが、本当の狙いは彼の口封じだった」

大きく奏子の目が見開かれる。

「口封じ？ お兄ちゃんを殺すってこと!?!」

「いや、殺すのは最悪の場合だったらしい。高寺としては、過去のことを何も語らず、何も求めずいてほしかったようだ。…いや、何も知らない三上優希でいてほしかった」と。有里渚に戻ってくれるな、とも」

「……なにそれ…身勝手すぎる…」

優希が何を言ったのか、奏子は知らない。だが、高寺はかつての実験体だった優希を——否、実験体のナギサを疎んじていたようだ。

どうして、などと奏子は言えなかった。高寺という人間は桐条グループの中でもかなり上の立場にいたらしいと聞く。ならば、負の面である実験の生き残りは目の上のたんこぶか、それ以上の存在だろうか。

「ああ。そんな身勝手な理由は許されるはずがない。彼は…父にかつての実験の被害者たちの遺体を弔い、慰霊碑を立ててくれと、至極真つ当なことしか要求してこなかった。だというのに…！」

奏子が訊くまでもなく、美鶴が義憤に駆られた様子で憤る。

その言葉を聞いて奏子は高寺が兄の地雷を踏んだことを確信した。優希自身が直接武治に頼みごとをするなどというのはよっぽどのことだ。実験の被害者というのも恐らくはほかの「ストレガの子供たち」だろう。だというのにそれを封じようとした。

（なんていうか、桐条つて美鶴先輩や武治さんがまともなだけで他はもろもろヤバいんじゃない？：手段選ばずって感じがする…）

元から桐条グループそのものを好きでもなかった奏子だったが、余計にそう思えてしまうくらいには幾月や高寺といった人間を輩出してきたグループ自体を擁護できなくなってきてしまった。

手段を択ばず利益を優先することが大人になるということなのか。被害者を泣き寝入りさせることが大人のやりかたなのか。

そうではない、と奏子は思う。朝倉や尚也、麻希たちを見ていて思うのだ。

アザミも当たり前だがカダスで見たシャドウとは違ってピリピリとした雰囲気や敵意も何もなく、料亭で遺産相続の話になった際、奏子や湊に優しくかった。

優しいおばさん、といった対応だったのだ。そして優希や奏子、湊に不利益になりそうな部分は矢面に立って突っぱねていた。

だからこそ、奏子は彼らのように強く優しくありたいと思うようになった。

そして大人ではないが荒垣も被害者とも呼べる天田を泣き寝入りさせようなどとは思わず、向き合おうとしていた。途中までは天田の復讐心を知り、自らが死ぬことによって償おうとまでしていたらし

い。

そこは褒められたものではないが決して他者をないがしろにはしていない。口封じも泣き寝入りにさせることもしていない。

(やっぱり、間違ってる)

奏子は眉を寄せ、再びそう思った。

だが件の高寺という男は既に優希の要望通りに処分が下されているらしく、奏子や湊、そして養父母がその男を直接見ることは叶わないだろう。

知ることができない相手。だが、やったことは聞いただけの奏子にも許せることではないために優希が伏せようとしたことも理解できなかった。

これは、聞かせたくないだろうし話せば殺意を滾らせても仕方ないと思う。奏子がそう思ってしまうほどには予測していた程度を飛び越えやりすぎていたらしい。

「…ありがとうございます先輩。私の方からはもうお兄ちゃんにこのことは話さないつもりです」

「ああ…」

けじめのつもりでそう告げる。

この話は終わりだ。優希本人が語りたがらないのなら、終わらせなければならぬ。

「兄さ…望月くん。今日は優希の弟とか妹や女の子と一緒にやないんだ」

悶々と悩みながら校内の階段を降りていた朔間はぼったり綾時と出くわし思わずそう言ってしまう。綾時は望月姓であり、朔間は朔間だ。兄弟ではないし年齢的にも朔間が優希と同じ高校三年生として『設定』を作り上げてしまったが為に朔間の方が兄になってしまうので兄と呼ぶのも間違っている。

しまった、と思う間もなく綾時が朔間に気がつきにこやかにほほ笑む。

「きみは…朔間先輩って呼んだ方が良いかな？」

「……朔間でいいよ」

「じゃあ僕も綾時でいいよ」

微妙な雰囲気だ。

綾時としては触れにくく、朔間からすれば話しにくい。

しかしなぜか共に自然と帰路を歩く。

綾時には全く覚えのない、デスの一部のようなものである朔間は綾時の知らない綾時を知っている。

そして朔間はモルフェとして綾時のことをループするごとにずっと見てきていた。

そしてその間に優希がループする原因となった湊と奏子、ファルロスに対し、憎悪に近い敵意を募らせていったのだ。

それもそうだ。惨たらしく宿主が死ぬ様を見せつけられ、その原因となった三人に何も思わないはずがない。

朔間^{モルフェ}が優希に頼まれていたにもかかわらず、タルタロスの探索に関わらなかったのはそうやって自分の存在を棚上げし、勝手にそう思っていたのを恥じて合わせる顔がなかったからだ。

そもそも、朔間は特別課外活動部を仲間だとは思っていない。どちらかと言えばストレガの方が朔間の心理的に付き合いやすいのだ。優希には悪いが力を貸すならストレガの方が良い、とすら思うほどに。

だからこそ特別課外活動部の一員のように仲の良い綾時に対し、苦手意識を持ってしまっていた。

嫌いなわけではない。だが、好きでもない、といったところか。

綾時にも朔間と共にいた記憶などないだろうし、ファルロスとしての人格を持ったのは湊や奏子に封印されて以降だろうと知っている朔間は生まれた時系列的に兄と呼んでもおかしくない相手ではあるものの綾時に特に思い入れもないために共感や同情すらできない。

しゃべることが苦手なために話題もない。

ただ、聞きたいことが一つだけあった。

「きみはさ…辛くならないの？ 戦う力を失って…何の役にも立てなくなるのが」

「？ なにがだい？」

朔間の問いに綾時が首を傾げる。

言われていることがよくわからなかったのだ。

「だから、綾時くんは『デス』としての力を失った。そのせいで、戦えないただの人間になったんだよ？ 怖くないの？ 無力なのがつかくないの？ …こんなこと、奪った僕がいうのもヘンだけど」

改めて綾時に説明しなおした朔間は目を逸らした。

その顔に浮かぶのは罪悪感か、それとも責任逃れか。綾時にはわからない。ただ、朔間が無力になることをひどく恐れているようにも思えた。

「べつに、って言ったらおかしいかもしれないね。でも僕は戦えないからって湊や奏子ちゃんとの縁や絆がなくなったわけでもないし、僕の力の断片であるタナトスはそこにいる。それに彼らがただの僕を受け入れてくれるから気にしてないよ」

綾時は飄々と答える。これはまぎれもない本心だ。

湊も奏子も綾時を否定も拒絶もしていない。戦う力がなくともただの人間で友達である綾時として受け入れている。

何も負い目は無いし無力感もない。

彼らはきつと、綾時を戦力として頼らなくても十分やっていける。

そう信じているからだ。

「そう、なんだ…強いんだね、きみは」

目を伏せた朔間はぼつりとそう返事を返す。

朔間から聞いたことであるが、どんな答えを貰えば自分が納得できるかなど、最初からわからなかった。

どんな反応を返すべきかも、このことを聞いてどうしたいかも何も無かったのだ。

ただ、聞いてみたい。そう思っただけだった。

「きみは、どうなんだい。もし戦う力を無くしたとして、その時どう思

う？」

綾時の言葉に朔間は思い出す。

記憶を封印することに注力し、優希に対して無力だったかつての己を。

「最悪の気分だよ。なんにも出来ないんだ。大事な人がただ危険に突っ込んで死ぬのを見てるだけなんだから」

力を失いたくない、と朔間は思う。けれど今、優希の周りにはかつてとは違い、分かり合おうとして共に戦ってくれる人間がいる。仲間がいる。

ならば、自分の存在はいらぬのでは無いのか。優希自身もあの時特別課外活動部を助けてあげて欲しいという要望を言っただけでそれきりだ。朔間がそれをしていなくとも責めていない。何も言わない。

関係はただのクラスメイトに戻ってしまったている。朔間が優希の中に刷り込んだ『設定』として、記憶の整合性や周りとの乖離を少なくするためにあまり接点のない関係を選んだとはいえ、ここまで何も無いとは思ってもみなかったのだ。

電話番号も渡した。出来ることはした。修学旅行の班だって一緒だった。だと言うのに、優希とはたまに会話する程度だ。

だからこそ、

「……でも、優希はきつと無力になった僕を責めはしれないと思う。けどそれだけなんだ」

そう思った。

責めはしないし受け入れてはくれるのだろう。だが、優希はそこま

でだ。
距離を詰めてはくれないし、どうせ自分は卒業できずに死ぬという思いを持っているからなのかクラスメイトと交流を深めようとはしない。それは朔間に対しても同じなのだろう。

いつしか優希は最初に得ていたクラス内の友達でさえも忘れてしまった。作るのをやめてしまった。拒絶している訳ではなく、そこから先の交流を上手くかわしているといったところか。

酷く浅い段階で関係を持つことをやめてしまったのだ。

もちろん、誘われれば遊びに行くが友達としてという訳ではなくク
ラスメイトで数合わせ、といった感じだ。

周りを軽んじている訳ではないのは分かる。それでも朔間は優希
に特に関係を深めるほどでもないと思われているような態度が寂し
くもあつたのだ。

自分は優希にとっては特別ではなかったのか。要らないと思われ
ていないだろうか。

それがいま、朔間モルフエの抱えている悩みでもあつた。

しかしこんなことは本人に訊くしか解決方法が無いことくらいわ
かつていた。だが朔間は訊く勇気がなかった。

「ごめん、僕行くところ思い出したから。じゃあね」

「えっ？　ちよ、ちよつと待って！」

行かなければ。役に立つにはどうすればいいのか。何がいいのか。
行くべき場所はわかっている。きつと、そこに目的の人物が居るは
ずなのだ。繋がりから辿ることが出来る。

朔間は綾時の静止も聞かずに駆け出していった。

走っているうちに、どうして優希が大事なのかと考える。どうし
て、役に立ちたかつたのか。

それは自分たちを内包してしまったせいで受けなくてもいい苦し
みを受けたからだ。

（それだけ？　僕は、それだけのことで優希が大事なの？）

違うと否定する。

優希ナギサはモルフエのことを否定しなかった。受け入れて、実験の合間に
様々な話をしていた。

それは辛いことからの逃避だったのだろう。けれどただのシャド
ウでしかなかったモルフエにとってはその差し出された手が何者で
もない自分に存在してもいいという許しを与えてくれたような気が
したからだ。

知らなかつたとはいえデスヒュブノスの一部ではなく、モルフエとして扱って
くれていたから。

（だから、僕は守りたいって思ったんだ。義理立てでもなんでもいい。僕に僕という形をくれたから、守らなきゃならなかったんだ）

けれどこれからは？ と訊かれれば朔間は答えられないだろう。

もう優希は誰かに守られなくても戦っていいける。

「……」

足取りが重くなる。けれど、行かなければ事態は何も動かない。力を持っていないのに傍観者でいるわけにもいかない。

目の前の雑居ビルを睨み付け、階段を上る。そしてそのまま扉をそつと開けると真つすぐ目当ての部屋へと向かう。

そこにはソファアールの上でだけだるげに何かを考えこんでいるタカヤの姿があった。

「何の用です」

タカヤは朔間の姿をちらりと見ると特に気にした様子もなく自然とそう問い詰める。

問われた朔間は一瞬ここに来たことを後悔しかけるも息を吸い、そして口を開く。

「タカヤ、きみは力が欲しくない？」

言われた言葉にタカヤは眉を顰めた。なにがあつて力が欲しいかなどと唐突に聞いてくるのか。何の用でここに来たのかと問うたのに逆に問われてしまうなどは思つてもみなかったのだ。

「…どういうことですか？」

「きみのペルソナに僕の力を受け渡せば、きみのペルソナは薬を飲まなくても安定するだろうしもつと強くなれる。その代わり、僕は影時間に関するすべての記憶が消えてただの人間になるけど…でもその方が良いと思つたから…だから」

朔間から語られたのはタカヤにとって素直に領けるようなものはなかった。

タカヤのためになるとはいえ、そんなことを優希が許可するはずがない。

「貴方はナギサのペルソナだったはず。ナギサの許しがあつてそのようなことを言っているのですか？」

「それは…」

訊けば言い淀む朔間にタカヤは何も相談せずここまで来てこのようなことを言い出したのだな、と察した。

「馬鹿なことを」と言おうとし、やめて別の言葉で取り繕う。

「違うでしょう。これは貴方の自己判断では？　ならばやめておきなさい。自分がいない間に友人である貴方に何かあれば激怒するに違いない」

そう告げてみるが朔間の顔は明るくならない。

「友…本当に、優希はそう思ってるのかな…」

ぽつりとつぶやかれた言葉にタカヤは若干の面倒くささを感じながらも対応することに決めた。

こじらせて大変なことに発展し、優希を怒らせてはたまったものではないと思っていたからだ。タカヤに直接怒りを向けることはないだろうが、ずつと煙らせ爆発させる方が恐ろしい。なるべくタカヤが優希と敵対したくないというのはその理由も含んでいた。

タカヤは優希の爆発力を知っている。だからこそ、そうさせないために敵対的な態度をとらないようにもしていたし、最悪を防ぐために弟妹を傷つけることもあり得ると事前に話したりしていた。

関わりあいがなく、敵のままではいるのならこの程度の気遣いもしなかったのだろうが一度気づいて誘ってしまったのはタカヤなので仕方ないとあきらめていた。

「…はあ、…思っていますとも。ナギサは自分の懐に入れた存在に手出しされることをひどく嫌います。そして、傷つけた相手に並々ならぬ敵意と憎悪を向ける。彼は意外と激情家なのですよ」

「…友達を傷つけられたときの優希が怖いのは知ってる。まだ完全じゃなかったのに無意識にニャルラトホテプや僕の力を引き出して勝手に使っちゃうくらいにはあの時怒ってたし」

忠告したタカヤにあっさり頷いた朔間の『あの時』という言葉に今度はタカヤはさらに眉を顰める。

「あの時？」

「なんでもない」

オウム返しをするように聞き返せば首を横に振られはぐらかされる。

朔間にとって言いたくない話題だったのだろう。その表情には若干怯えが含まれていた。

タカヤはそれならそれで、と追及するのをやめ、朔間と優希の問題について挙げる。

「ナギサは強制するもされるも好きではありませんからね。自主性を重んじるといいますか。ナギサが良かれと思って貴方にした対応が裏目に出ている。誰かに何かを決めてもらわなければ不安な貴方とはすこぶる相性が悪いのでしょうか」

タカヤからすれば心地の良い距離感である、優希の他者に必要以上に関わろうとしない態度は他者だれかを誤解させかねないと常々思っていたがまさか朔間優希のヒュプノスがそうなるなどとは思ってもみなかったのだ。

そもそも、ペルソナに人格があるなどとも思わなければこうして人間のように動くというのもタカヤからすれば驚くばかりだ。とはいえそんな存在を宿主だった優希に何も確認も取らずなかつたことにはさしてしまつてまで強くなりたいたいなどとは思わない。

見えている地雷に触れて爆発させるほどタカヤは優希を侮つてはいない。

「不安…？ 僕が…？」

タカヤに不安だ、と言われた朔間は気が付いていなかったのかぼかんとしている。

「気づいていなかったのですか？ 貴方は自主性が殆ど無い。いえ、あるにはあるのですが誰かに決めてもらわなければ不安で仕方がないといえますか。自分が正しいかどうかすらわからないのでしょうか？」

「で、でも…」

「それこそ、人間らしくていい」のでは？ ナギサならきつとそう言うでしょう。気になるなら今からでも訊きに行けばいい」

早く出ていけ、と言いたげなタカヤの視線に根負けし、朔間は優希が今どうなっているのかを言うことなくとぼとぼと雑居ビルを出て

いくのだった。

頭の中を占めるのはタカヤにすら優希と相談しよく考えてから出直せ、と言われたことだ。

「いつもそうだ…僕が考えてやること全部優希にとって悪い方向に出てる…」

はあ、とため息を吐いて朔間は帰路を歩き始める。

自分が勝手に動けば悪い方向へと物事が動いてしまう。

これから自分が何をすべきなのか。何をしたいのか。何もわからなくなってきた。

無理にあのラビリスという少女に突撃するほど朔間モルフエには無鉄砲さもなく、ただただ、悶々とした日々を過ごすしかないのかとあきらめの気持ちを抱えながら。

ぱちん、と泡が弾けるような音がして湊は目を開いた。

たしか今日はラビリスのシャドウだと名乗った少女が優希^{ユキ}の代わりに学校に行き、特に問題もなく帰ってきたのだったかと振り返る。色々寄り道をしたようで帰ってくる時間自体は遅かったものの、何も問題を起こすことなく帰ってきた。

その上で晩御飯時に本体であるラビリスといざこざがあったものの、少女は初めて現れた時よりかは敵意もなく柔らかい態度をとっていた。

何があったのか湊は知らないが少女に変化があったのは確実だ。

そして次にここはどこなのかと思考する。

食事の後、湊はいつも通り順平の惚気やくだらな話を聞き、部屋に帰って勉強をして明日も試験があるので早めに布団に入ったはずだ。

だとするならこれは夢か。ベルベツトルームにまた呼び出されたのかと思うも目に映る景色はひたすら真っ暗だ。

そして耳鳴りがするかと思うほどに静かでもあった。

これはベルベツトルームではないと察する。しかし普通の夢でもなさそうだ。

しかし気味の悪さは感じない。むしろ、見知った気配が薄く広がるようにしてしている。

この気配がなんなのか、今の湊には予想ができない。家族か、それとも寮の誰かか。

「ボクの介入をこうして認知出来るというのはキミも随分と変わった存在のようだ」

「！」

聞き覚えのない低い声だし、さっと湊が身構えながら振り向けばそこには湊が予想していた存在ではなく見たことのない少年がふわふわと浮かんでいた。

ファルロスでも綾時でもないその存在は浅黒い肌に深緑の色をし

たジャケットと半ズボンを履いており、その手には笛のようなものが携えられている。おおよそ普通の人間ではないその雰囲気には人ではないと湊はなんとなくそう判断した。

だがどうして見知った気配が見知らぬこの少年からしているのかという疑問が浮かんでくる。

「誰だ？ とでもいうような陳腐な質問はやめてくれよ。ボクらがキミにとってどんな存在だろうと大した問題にはならないからね」

その端正な顔を無にしながら、少年は湊が訊こうとしていたことを遮り勝手に話し出す。

「それとは別で敵だと思われているのなら心外だけれど、ボクはシュブニグラスとは違う。彼女とは相容れない。彼女の『救済』はボクの望む『救済』ではないからね。真に創造主を名乗る不屈き者からの解放が成されるわけじゃない」

「！」

少年がシュブニグラスの名前と目的を口にした瞬間、湊は身体を強ばらせる。そんな緊張した様子を見てもなお、少年は素知らぬ顔で語り続けようとしていた。

「地母神であるシュブニグラスはボクにとって敵。そしてそれに対抗する為にこのボクがキミに力を貸してやろうというのだよ」

「要らない」

自信満々な顔でそう告げてきた少年の言葉を湊は反射的に断ってしまう。

力が欲しいと思っただけで、それは誰かから与えられるものではないというのを分かっているからだ。

それに、こんな得体の知れない存在の力を借りるなどそれこそ危険だと判断した。

その言葉を聞いた少年は目を丸くするが次の瞬間には笑みを浮かべていた。

「わあ、強情だ。さすがは彼の弟だよ」

「彼……？」

「キミたちの兄さ。今の名前は——三上優希だったかい？」

突如少年に兄の名前を出されたことに湊は戸惑い、動揺してしま
う。

「優希の…なんで…」

「何故、と言われても今のボクは彼の力の一端。キミのもつ彼の触媒
を介してこの夢の中に顕れているのさ」

優希の力の一端だと少年は語るが、湊は優希がこの少年のような存
在をペルソナとして使っているのを見た事がない。

ペルソナと言えばだいたい四体の骸骨の騎士かそれとも骸骨の天
使か、オネイロイになった三体のペルソナくらいしか見たことがない
からだ。

それに少年の姿をしてはいるが浅黒い肌に青みがかつた髪をして
いるこの少年は優希と似ても似つかない。似てる要素はなくなにも
関連が無さそうに見えるのだ。

「そんなの…急に言われたって信じられるわけが無い」

にわかには信じ難い事だった。

見たこともないのに力の一端だと告げられても証拠も何も無い。
むしろなぜそんなことを言い出すのか疑問に思い不信感が増したく
らいだ。

「信じようが信じまいが今のままでは絶対にあの地母神には勝てな
い。それだけは断言しよう」

それでもなお、少年は余裕そうな態度を崩さない。しかし湊にとつ
て聞き捨てならないことを口にした。

このままでは絶対に勝てない？ どうしてそんなことが分かるの
か。まだ戦つてすらいらないのになぜそんなことを断言するのか。

そんな疑問がぐるぐると内心で渦巻く。

「ボクが——いいや、ボクとカルキが真の姿を取り戻し、キミの力とな
れば“条件”が揃うんだ」

「条件？」

「そうだ。同等の力をキミはもうすでに目にしているはずだよ」

そう言われても湊には覚えがない。

そんな感情を読み取ったのか、少年はやれやれと肩を竦めてから口

を開いた。

「シヴァ・マハーデーヴァ」。あれは正しくボクらと同質の力。分霊さ。あれはブラフマー梵天によって作り出されたこの世界における重要な3つのグナのうちのひとつだ」

「シヴァ・マハーデーヴァ」。

それは奏子の新しいペルソナだったはずだと湊は思い返す。突然得た強力なペルソナであり、湊も出処を聞いてみたが奏子にはにかまれないながらもぐらかされるだけだったのだ。

それがここで名前が出てくるということは、この少年はそれに関係する存在とみていいのだろうか。湊はじつと目の前の少年を見つめれば気にした素振りも見せずに再び話し出す。

「ボクらはキミと契約をすることにより重要な3つのグナのうちのひとつである、ヴェイシユヌ・マドゥースダナ」へと戻ることが出来る」

「ヴェイシユヌ・マドゥースダナ」という名前からしてヒンドゥー教に伝わる神であるヴェイシユヌなのだろうか。それは湊の知るヴェルソナヴェイシユヌでは無いのは間違いないだろう。奏子の「シヴァ」がただのシヴァではなかったのと同じく。

「そうしてふたつ揃ってやつとあの地母神に対抗できるきつかけの力になれるのさ。とはいえ、キミにその気がなければ無用の長物だ」

意地が悪いのかそれとも親切心からか出そうとしてきていた手を突然引つ込めるような言葉を告げた少年は湊自身にはあまり興味がなさそうだった。

「あくまで、ボクは力があるかと訊きに來ただけだからね。ただ、キミたちふたりが居ないと意味がない。彼を救えないんだ」

「どうやら、少年の目的は優希を救うことらしいと察せられたがそれでも何故優希の力の一端だと名乗った存在がこうして人格を得て優希を救おうとし、湊へと協力を持ちかけてきたのかがまだ本心からは分からない。」

「彼を救いたいだろうか？ さあ、ボクの手を取るんだ」

湊は僅かに躊躇し——数秒ほどその手を見つめた。

ニヤルラトホテプの甘言と似たようなその言葉に戸惑いを覚えた

からだ。

もし、これが罫で、目の前のこの存在が人をとって食らう悪魔だとするならば。湊は魂を食われて終わりだ。

そんな古典的なイメージ通りの悪魔であるという証拠もなにものもないが、悪魔らしい悪魔を見た事がないので湊にはそう思うことしか出来ない。

「どうしたんだい？ まだ躊躇いでもあるかい？」

思考を読んだのか、少年が笑う。

「まあ、ボクの話す理由は納得できないだろうね。悪魔というのは皆、利己的だ。けれどもボクは彼の……いや、彼を気に入っていてね。あの地母神にやるのは惜しいと思っっているのさ。だからあの地母神を打倒する為に力を貸す。それがもつともな理由じゃあ駄目かい？」

ぱちくりと湊は目を瞬かせた。まさか、この目の前の少年がその程度の理由で湊に力を貸そうなどと言っているとは思ってもよらなかったのだ。

もつとよからぬ事に兄を利用してしようとしているのではという不安があったが、ただの独占欲かつシユブニグラスへの対抗心なら問題はないとは言えないが余程のことはしないだろう。

「そんなことない。むしろ少し…驚いた」

この言葉は本当だ。

案外、悪いやつでは無いのかもしれないと湊は思い始めてくる。

「ならもうひとつ、キミの心配ごとを払拭するようなことを教えてあげよう。ボクらは既に身体を失くしていてね。彼の心の内に住まう住人と化してるんだ。直接戦う力もなければニンゲンに直接手出しも出来ない。無関係の人々を巻き込むようなことにはならないよ。それに、『ヴィシユヌ・マドゥースダナ』へと変化したあとは真正正銘キミのペルソナのひとつと化す。暴走もしないさ」

困いこまれているような奇妙な雰囲気を感じるほどに少年は湊の不安を払拭しようとするので思考を読んだかのように問題を消すような返答をした。

感情の起伏が激しくないその平坦な言葉遣いは己が消えるという

ことを告げているにもかかわらず冷静かつ堂々としている。

しかし嘘をついているというふうには聞こえない。信用できる言葉ととってもいいだろう。

「それなら」

ここまで聞いて悪いようにはならないだろうと湊は判断して差し出された蛇の誘いのような手を取った。

警戒をこんなすぐに解いてしまうというのは調子がいいかもしれないが、あに優希を救う為だと言われてしまうとどうも湊は弱い節があるのは確かだ。

「…フフ、それでいい。契約成立だ。今後ともよろしく頼むよ」

少年が微笑み、瞳が妖しげに光る。

その言葉を最後に湊の意識は暗転した。

12月16日（水） 朝

「そうか…わかった。許可は取れているんだな？ ……感謝する」

朝一番に電話で報告を受け取った美鶴は顔を顰める。

ラビリスのシャドウである少女に頼まれた調べ物はたった半日で調べがついた。

簡単に。しかし元から調べられていた訳では無い。

嬉しい結果でもない。

（このことは…どう伝えればいいのだろうか…）

美鶴は頭を悩ませる。

非常に言い難い事態に陥ってしまっているのだ。恐らく、結果を伝えればあの少女は怒り狂うに違いない。違いないが、伝えない訳にもいかない。

そして本体であるラビリス本人にだけ伝える、ということに関してもしにくい話となってしまっている。

こんなことを伝え、ショックを与える必要も無いように思えた。

（だからといって黙ったままでいるのか？ 隠して…バレれば？ そもそも隠す必要などあるのか？）

美鶴は今まで隠し事をしていて良かった試しがないと思ひ返す。ゆかりとも一時期そのせいで険悪になつてしまったことを思えば隠さない方が良くもして来た。

(いずれ知らなければいけないことだ。なら、)

美鶴は覚悟を決める。

着替え、部屋のドアを開けて少女が使っている優希の部屋まで向かいノックする。

「起きているか？ 私だ」

「起きてる。…調べが着いたのね。ちよつと待ちなさい」

部屋の中から返事が聞こえ、随分と良い察しの良さに美鶴は少しだけ目線を下に下げる。

これからのことが憂鬱だ。

「待たせたわね。で、その顔からするといひ報告つて訳じゃなさそうねえ？ それとも、アタシになにかされると思つて怯えてるの？

ま、せいぜいそうやって身を縮めてなさい。それがお似合いよ」

「……」

朝早くだというのによく回る舌だ、と美鶴は思つた。そしてその察しの良さに溜息を吐きたくなつた。

「……きみが予測している通り、いひ報告は出来ない。その…彼女は、」

「死んでた？ ま、それでもいいわよ。予測してたから」

美鶴の言葉に被せるように告げた少女の声は軽口めいていて平坦だつた。

だが、その予測は間違つている。そう美鶴は伝えなくてはならぬい。

「いいや、違う。彼女はまだ死んではない」

「…！ じゃあ、生きてるつていひの!?! あの子、生きてるの!?!」

ここに來て明らかな期待と喜びの感情を出し、美鶴へと詰め寄つた少女は僅かな希望に縋つているように見えた。美鶴が予想していたようなことを起こすつもりは全くもつて無いらしいことがこゝでわかつた。純粹にこの少女は人格モデルとなつた子供に会いたいだけ

なのだ、と。

しかし対する美鶴の顔は明るくない。暫し沈黙したあと美鶴は重い口を開く。

「意識がもう無いらしい。今は機械で延命しているが、回復の見込みはなくあと数日持てばいいほうだと」

「……そう」

それはほぼ死んでいるようなものでは無いか、と少女は思った。しかしまだギリギリで生きている。

死んではない。もしかすると声を届けることが出来るかもしれない。

あと数日というこのギリギリのタイミングで知ることが出来たというところが幸運なのでは、と少女は思った。

「今日、会いに行くことは出来るのよね？」

「そう言われると思っていた。許可はとってある。私と共になら大丈夫だろう」

「わかったわ。アイツ、起こしてくるから」

アイツというのは本体であるラビリスの事だろう。

それを止めることなく見送った美鶴は自らの分と優希の分の欠席を伝えるために携帯電話を取り出した。

一方、4階にある元理事長室でありラビリスの部屋となったその部屋のドアを乱暴に開けた少女は着替えが終わりメンテナンス機械の上でぼーっとしていたラビリスの腕を乱暴に掴んだ。

「行くわよポンコツ」

「ちよ、行くってどこになん!?! 学校はええの!?! 突然どうしたんよ!?!」

「桐条と宿主サマから許可は貰ってるわよ。試験なんかよりもっと大事なことなんだから」

パニックになるラビリスに対し説明するのも惜しいといった風に少女ははずるとラビリスを引きずりながら階段を降りていった。

1時間後。

病室のネームプレートを前に、少女とラビリスは2人揃って同時に息を吐いた。

美鶴は病室の外で待つと言って廊下で待っている。

「…開けるわよ」

「う、うん…こんな形で会えるとは思わなかったからかウチ、緊張してるわ…」

「アタシもよ。だから大丈夫。大丈夫よ」

珍しく喧嘩腰はなりをひそめ、ラビリスを励ますように声をかける少女も同じように緊張しているのだろう。

母とも呼べる人格モデルとなった子供はすべてを破壊すると言い切った少女にとっても“例外”だ。この先の部屋にいる子供だけは絶対に傷つけまいと思っている。

少女がドアを開けてそれにつられるようにラビリスも病室へと入る。

そこには、機械に囲まれてベッドの上で横たわっているやせ細った少女が眠っていた。

身体のいたるところに管がつけられており、その呼吸は弱い。少女の命が風前の灯火なのがわかる。

「覚悟しとったけど…この子が、ウチらの…」

「そうよ。ようやく会えたのよ。“私”の元になった女の子。024の言つてた母親みたいなもんね」

静かに。しかし目覚めることのない弱い子供と称しても仕方のない少女を見つめながらふたりは何とも言えない気持ちを抱える。

ベッドの脇の椅子に座り、ラビリスは子供に対し話しかける。

「言葉、通じはれへんかもしれんけど…はじめまして。ウチら、五式ラビリスいます」

返事はない。当たり前だ。

それでもラビリスは話し続ける。

「ウチらに命をくれて、ほんまにありがとう。ええと、何から話せばええんやろ…」

「なんでもいいわよ。アタシなんか話すことなんてないもの。ううん、アタシもアタシの口で伝えなきゃいけないか」

何もない、と言いつついざ本人を目の前にして何も言わないのは自分の目的に反すると思ったのか少女も口を開く。

「アタシたちがいるからアンタは一人なんかじゃないわよ。最低なことばっかだったけどアンタが生んでくれたおかげで今のアタシが居るの。まあ、…ありがとう」

ここにきて、母親とも呼べる存在を前にしてもぶっきらぼうな少女にラビリスは僅かに笑みを浮かべる。

「素直やないなあ」

「うっさいわね…」

照れ隠しのようにそっぽを向いた少女の耳は赤く染まっている。

こういう時、人間の身体ってわかりやすいんだなとラビリスは思い、その笑みを明るくのものにする。

「せや、妹がおるんよ。しかもふたりも！ それに驚いてはるかもしれんけど、ここにもうひとりのウチもおるんや。驚きやろ？」

「妹つつつても人格モデルは別だけど。片方は真面目ちゃんですつまらないしもう片方は生意気すぎるわ」

ラビリスの言葉に茶々を入れるように少女が感想を述べればラビリスはむくれる。

「もう！ んなわけあらはれへんやろ！ ふたりとも、すつごく可愛いんです。できれば会ってほしかったんやけど…時間、あらへんもんな…」

残された時間は少ない。アイギスとメティスが会うというのは無理に等しいだろう。

ラビリスたちも会えるのはこれで初めて最後かもしれないのだ。

道中で、美鶴から彼女の病気の治療法が見つかったと聞いていた。だが、既に弱り切っておりその治療法は試せない。

ある意味で、遅かったのだ。

「アンタも災難ね。あと少しだったのに…」

惜しさを感じながら、少女が冷たい手を握る。

死んではいけない。けれど死にかけてはいる。もう少し、もう少しだけ早ければ。

体力や寿命があれば。

そんなことを思った瞬間だ。

ベッドで横たわる彼女の姿が一瞬光に包まれた。暖かく、まばゆいばかりのそれは瞬きをした瞬間には消えており、錯覚かそれとも幻覚を見たのかと思う程度のものだ。

しかし少女はわなわなと身体を震わせると突然握っていた手を放し病室の外へと駆け出してしまった。

「え、ちよ、いきなりどこ行くん!？」

ラビリスが止める間もなく少女は走り去り、ラビリスを置いていく。

「どうしたんやろ…? 外には美鶴さんがいはるから大丈夫やと思いたいけど…」

それでも心配だ、と立ち上がろうとしたラビリスの目の前でぴくりと先ほどまで少女が握っていた手が動いた。

動くはずがないそれが動いた事実には、ラビリスの思考回路は一瞬停止する。

「え…?」

とつさに病室から飛び出した少女は美鶴の目の前から止める暇がない速さで駆け出し、人気のない非常階段の近くまでやってきていた。

周りに誰もいないことを確認し、大きく息を吸う。そして、

「アンタ、ぼつつつかじゃなの!?! ホイホイとあの子に生命力を与えるなんて頭がどうかしてるんじゃない!」

叫んだ。

怒りの矛先は宿主である優希だ。既に必要な分の休息を終え、意識は取り戻しており自分から少女に身体の主導権を譲ったまま静観していたのだがここで初めて少女の意志に反して行動したのだ。

とはいえ、したことといえば黄昏の羽根に残っていた生命力の大部

分を人格モデルとなった少女に分け与えただけだ。直接的な行動は何もしていない。

「え？ 『どうせ1月31日までの命なんだから少ないけど治療法が見つかったのなら間に合うように残ってる分をあげてしまった方がいい』？ ノーテンキにも程があるわよバカ！ アンタのものを与えたらアンタの家族が悲しむでしょうが!? ほんと、何考えてんのよ！」

きっかけの生命力さえあればあとはその子自身でどうにかなる。内でそう言い切った優希に少女は顔を顰めた。

その行為自体がラビリスのシャドウである少女にとっては認めがたいことだとしても、善意からこの少女は優希のことを心配しているわけではない。優希のためを思っているわけでもない。この身体が使えなくなれば少女が困るのだ。

こんなことは認められるわけでもなく、痲癩を起したように怒鳴る。

「それに、アンタ燃費が悪くて消費が激しいんだからこのままじゃ下手したら1月31日まで持たないわよ。良いの!?!」

間に合わなければ世界ごと終わる。そんな博打に出た優希に対して余計なことをしてくれやがったんだと少女は憤っているのだ。

だが返ってきた答えは「持たせるよ」という一言だけだった。

「……ああそう、アタシがバカだったわ。アンタ、そういうニンゲンなものね。ほんと…ニンゲンって最悪。家族よりアタシたちを優先するなんてねえ。そういう生易しいところが大っ嫌いなものよ！」

生易しい行為は何も生まない。悲劇を生むだけだ。

人格モデルとなった子供に関しても、生きながらえさせたとしても正常になれるかどうかかわからないのに安易な考えで命を与えるなどどうかしている。

拒絶反応にも似たそれは少女の中で納得に近いものを導き出す。

——ああ、コイツは誰かに自分を切り売りし、分け与えることで自分という存在を確認している大馬鹿野郎なのだ。と。

「でも、いいの？ アンタはこれでより一層、悪魔ってやつに近づいた

んでしょ。ニンゲンの部分を自分から捨ててどうすんのよ」

優希という存在が死へと近づくと人に離れていくのだと知っている少女は呆れからそう問いかけるも「答え」を聞いた少女は大きく溜息を吐くだけにとどめ、それ以上の反論はしなかった。

「…わかったわ。アンタがそのつもりならもうアタシは止めない。その代わり、頼みがあるの」

そろそろ、けじめをつけなければいけない。

少女はそう覚悟を決めたのだった。

三日目（12／17）

12月17日（水）

影時間

「おいポンコツ。アタシと戦いなさい」

影時間、タルタロスに全員を呼び出した少女はカダスへと連れ込むとラビリスを睨みつけながらそう言い放った。

その目には敵意が溢れている。

「ど、どういうことなん…？ 突然戦えって…理由を教えてください」と…！」

「理由？ ひとつに決まってんでしょ。グズなアンタを殺してアタシが『ラビリス』になるの」

「！」

驚いたラビリスに対し、少女の黄金の目は厳しい視線を向けている。

「薄々分かってるんじゃないの？ このアタシが本物のシャドウ…倒すべき敵だつてことに」

「そないなこと…！」

否定しかけたラビリスを見つめ、少女はその目を嘲るように細めた。

「いいえ、むしろ気づいてなきや焼き払つてるとこだわ。ここまで付き合つて分らないとかどんなマヌケよ」

その顔自体は嘲りではなく落胆の色が強く、念押しもしくは確認の意味も含まれているように思えた。

返答を期待していない、どの返答でも結果は変わらない。

そんな風に見て取れた。

その事にラビリスが答えられないでいれば無言で少女が目の前に手をかざす。

影が盛り上がるように少女の前に浮かび、形を作り一瞬でラビリスの武器と同じ戦斧が現れる。

それを構えてラビリスの眼前へと向けた少女はニヤリと笑う。

そして次の瞬間、それを勢いよく叩きつけた。
当たれば無事では済まない一撃を、なんの躊躇いもなく、だ。

「！」

当然、間一髪といったところでラベリスは飛び引くように後退しその一撃を避ける。浮かぶのは戸惑い。困惑。若干の怒り。その他諸々の感情。

「ちよ、な、なにするんよ!? 危ないやろ！」

「危ない? これは殺し合いよ? 危なくて当然じゃない! ほら、さつさと構えなさいよ。兵器は兵器らしく殺し合いましょーよー! アハハハハ！」

戸惑うラベリスに対し挑発的な高笑いで返した少女に周りはいついでいけない。

しかし、突然ラベリスを殺してなりかわるなどと言い出した少女を止めなければと風花は口を開いた。

「『荒っぽい方』のラベリスちゃん、とにかく落ち着いて！」

落ち着かせて話を聞こうと思ったのだ。

一応、話が通じない相手ではないと分かっているからこそ、風花は勇気を振り絞って叫んでみたのだが、対する少女はイラついた様子で風花を睨みつけた。

「あ? 黙れよモヤシ女! 何が落ち着いて、だ! アタシに指図すんじゃない! おい犬畜生、オマエもアタシに指図すんなよ。もし邪魔しようってんならアツアツのホットドッグにしてやるんだから!」
「も、モヤシ女…!」

風花に暴言を吐き、矛先を飛び出そうとしていたコロマルに変えた少女は釘を刺すとラベリスに向き直り上から下まで品定めするかのようじろりと見つめた。

「アンタ、震えてんじゃない? そんなナリでよく妹を守りたいだなんて言えるわねえ?」

「そ、それは…そないな事ない! うちかてキチンと戦える！」

「だったらあ、早く構えろってんだよこのポンコツが! なにグズグズグズグズやってんだよ! アンタのそのくつだららないオママゴト

に付き合つてられるほどアタシは暇じゃないの、わかる?」

過去の経験から機械であるというのに微かに震え、戦うことに抵抗がある様子のラビリスを嘲笑い、不機嫌そうに少女は鼻を鳴らした。「まだ戦うことが怖いんでしょう? だからアタシがアンタと代わつてあげる! アタシがアンタを殺して “私” になつてあげるつていつてんだよ!」

「で、でも! アンタはウチのこと…ホンマはそんなつもりやないんやろ!」

この3日間、少女は刺々しくラビリスとは一定の距離を保っていたが傷つけるような素振りも殺意も無かった。それどころか人格モデルとなった子供との面会に行つた際はラビリスを励ましてさえたのだ。

これから、もつと時間をかければ彼女とはきつと仲良くなれる。そんな幻想を抱いたからこそ、ラビリスは今の状況を受け入れることが出来なかった。

対して、少女はラビリスがそう考えているのだと手に取るようになつたので逆に怒りを露わにする。

我ながら舐めているのか、こいつは、と。

「黙れ! “でも” も “だつて” もねーんだよ!」

声を張り上げ、叫ぶ。

黒い炎が爆発するように巻き上がり、熱風が空間を襲う。

「アタシを…この怒りと憎悪を否定するんじゃないわよ! アタシはアンタ、アンタはアタシ! どうあがいてもアタシたちは “対シヤドウ特別制圧兵装五式ラビリス” なの! 怒りも、憎悪も、アンタが産んで、アンタが抱えてるモノなのよ! それを…無かつたことになんてさせるもんですか…! 来い! “フアラリス” !」

ラビリスと瓜二つな少女の目は怒りに満ちていた。

本気だと言わんばかりに背後で炎の雄牛が蜃気楼のように揺らめく。

「やるしかないのか…!」

「相手がやる気ならこちらもそうするしかないだろう。加えてラビリ

スはもう俺たちの仲間だ。サポートくらいはしてやるべきじゃないのか」

「それは…そうだが…！」

美鶴が歯ぎしりし、少女を見つめる。

明彦の言う通り相手が交戦の意志を見せている以上、戦わなくてはいけない。

「なんか、やりにくいなあ…」

「……」

奏子がぼやく横で湊は少女の言っていることもその事情もよく知らないが、アイギスの姉であるラベリスにとっても少女にとっても大事なことなのだろうと感じ取ってはいた。

少女ともラベリスとも湊は関わり合いが薄く、流されているようにも思えてしまうがまだ出会って3日程度だ。そりやそうだろうと言わざるを得ない。

コロマルや先輩である荒垣は既に少女と親しいようだが湊からすればアイギスやメテイスとはまた違うラベリスの、そのシャドウである少女の事など何も知らずどうすべきなのか、という判断がはつきり下せる立場になかったのだ。

むしろ、ラベリスに関係しているのはアイギスとメテイスを除けば美鶴と優希くらいだ。

やれと言われればやるが一応、兄の身体ではあるので手加減しなければならぬだろう。

そんな悩みを抱えていた湊の視線の先で炎が揺らめき、人型を作り出す。

それはやがて鎮まり、その姿を顕にした。

「あれは…！」

現れたのは優希だ。しかしその目はいつもの灰ではなく少女と同じギラギラとした金に輝いている。

「——この戦いでラベリスに与するつもりなら…この子を排斥するようなら。俺はこの子の側に立つ。全力を持ってラベリス以外を排除させてもらう」

黄金を宿した目で優希は敵意を隠さずに少女の側だと立場を表明する。

その顔には以前までであった戸惑いや「甘さ」が消えている。ここが死ぬことのない空間カダスだとしても、その変わりように驚くほかない。本気だと見せつけるような優希の態度に一同はたじろぐ。

「なによ、アンタの力なんか借りなくてもここにいるヤツら全員ぶっ飛ばせるわよ！」

そんな中でも少女は突然現れた優希に驚くことも無く突っかかり、啖呵を切る。

対して優希は冷めた目で少女を見やってから口を開いた。

「…俺がそういうのは好きじゃないんだ。きみは己だけを相手にしてればいい」

そう言うのと炎の壁でラビリスと少女、優希と特別課外活動部に分断する。

位置関係からして分断を誘導、もしくはこの状況になるのを狙われていたのは間違いない。

「……チツ、余計なお世話なんだよ！」

小声でそう文句を吐きながらそっぽを向いた少女はラビリスへと向き直り、再び戦斧を突きつける。

「で、早くやんないと死ぬわよ。アタシは本気なんだから」

「せやね…ナギサさんもウチらの戦い止める気無いみたいやし。ウチも、腹くくるわ」

震えはまだ僅かにあるが戦斧を構える。

ラビリスからすれば味方だと思っていた優希が少女の側へついたことと2人を皆から分断して戦うよう強要していることにショックがないとは言えない。

だが、意味もなく優希がそれを望むはずもないとラビリスはわかったからこそ覚悟を決めた。

あくまでも優希は2人だけが戦うのならどちらの味方もしない、と言ったふうにも聞こえたからだ。

「…いくで！ 痛くて泣いても知らんからな！」

まだ恐怖心はある。大切な誰かを傷つけてしまうのではないかと
いう恐怖が。

それとは別で戦うことを放棄し、自分なんかよりもしっかりしてい
るこの少女が“ラビリス”になった方が良いのではないか、という僅
かな思いも数分前まではあった。

けれども今のラビリスは何故か目の前の少女に負けたくないとい
う気持ちが浮かんできていた。

「ラビリスとこの子の戦いを邪魔しなければ俺も何もしない」

「何もせず、黙って見ていろと…!?!」

「そうだよ。これは彼女たちの戦い。心と心のぶつかり合い。やらな
きやいけないことなんだ」

一方、ラビリスたちの戦いをやらなければいけないことと断言した
優希にアイギスは間違っていると思った。

対話ができるはずなのにそれを捨てる。敵同士というわけでもな
いのに戦い、傷つくことが本当にやらなければいけないことなのか。

優希がそんなことを望むようになってしまったのはなぜなのか。

「こんな…戦うのが正しいだなんておかしいじゃないですか!」

「本当に? おかしいと思う? 俺は何もおかしくないと思うよ。こ
うしなきや、対シャドウ兵器である彼女たちはひとつに戻れない。対
話をして戻れる段階はとうに過ぎてているんだ。……桐条の行った実
験のせいで」

「!」

全員、大まかなラビリスの置かれていた状況を聞いていた。同情も
していた。

だが、それがここで出てくるとは夢にも思わなかったのだ。

否、コロマル含む察しのいい数人はラビリスのシャドウである少女
が桐条に対して抱いている並々ならぬ恨みのようなものを暴力衝動
に変換していることを察していた。

だが少女自身が初対面の時以外殆どそれを抑えていた為に意識を

していなかっただけで。

彼女はシャドウでありながら暴走しておらず、優希やウィツカーマンが諭したとはいえ自身の憎悪と怒りを制御しきったのだ。

来るべき時の為に。

「だとしてもこんなことは間違っています！ 姉さん達は会話が出るのに：分かり合えるはずなのに：どうして：！」

それでもアイギスは理解が出来なかった。

何故、戦うのか。何故、言葉が通じ、話が出来るのにそれで解決できないのか。そしてそういうことを一番嫌い、躊躇いそうな優希自身がラビリスとラビリスのシャドウ、どちらかが消えることを是としているのか。

はつきりと自我の芽生えを自覚したアイギスだからこそ、この優希の言動もラビリスのシャドウの言動も理解が出来ない。分からない。「なら、アイギス。間違っているというのならきみが俺を倒してラビリスに加勢すればいい。力で証明してみせればいい」

アイギスの言葉を聞いた優希は溜息を吐いてそう言い放った。

それでもなお、目は何も写しておらずただアイギスを「見ているだけ」なのだ。

「違います！ そういうことを言っているわけじゃ…！」

「同じさ。力がなければ何も出来ない。何も守れない。言葉なんて聞いて貰えない。平気で踏み躪られ、奪われるだけだ」

「力がなければ何も出来ない」。言葉聞いて貰えない」。

その言葉にショックを受けたのはアイギスではなく美鶴だ。

高寺との1件は優希に少なくない負担や心の傷を負わせていたとは思っていた。だが、思想をガラリと変えてしまうほどに歪ませてしまっていたとは思ってもよらなかったのだ。高寺は、優希の命を奪うことは出来なかったがその代わり心を殺していった。癒えない傷を残していった。

「三上優希をやめる」と言った優希の言葉は嘘偽りなく本当の事だったのだ。

何も知らない子供、という面を捨て「有里渚」としての恨みも辛さ

も無力感も何もかもを隠さないようにしたのが今の優希だった。

それでも、ラビリスのシャドウを気遣ったり、全員を排除するなどと告げてくるなど手段は暴力的だが公平性を求めたりと何もかもを捨ててしまった訳ではなくその奥底にはまだ優しさが残っているようにも美鶴は思えた。

それに、排除すると言ってもこちらが手を出すのならという条件つきであり未だアイギスとこうして言葉を交わしているのだから大事な部分はなにひとつ変わっていないのでは無いかとも思うのだ。ただ、高寺との1件があつたあとあれだけ戦わせたくないと言つていたラビリスを戦わせようとしている心変わりに違和感を感じるだけで。

「それに、きみだつて俺に対する敵意を解消できていないんじゃないのか？ それは植え付けられたものようだし一度俺を殺して満足すれば収まるはずだよ」

「そんなのっ…出来るはずがありません！」

耐えられない、といった様子でアイギスが叫んだ。

出来るはずがない。もう二度と、幾月に操られていた時のような過ちは犯さないと誓つたのだ。

「できない？ 嘘を吐くのはやめてくれよ。首を絞めて俺を殺そうとしたきみができないはずがないだろう」

告げられた言葉にアイギスは思わず目を見開いた。

表情を一切変えずに淡々とそう告げた優希の声からは感情が読み取れない。

怒っているわけでは無いが優しいわけでも柔らかいわけでもない。

ひたすら「無」なのだ。

「起きて…：…わかつて…あ、ああ…！」

「謝らなくていい。別に責めてるわけじゃないしきみは悪くない。事実を述べたまでだ」

震える声で何かを言おうとするアイギスに対して取り繕うようにそう告げた優希はそれでも感情の色を出さない。

優希からすれば首を絞められたことは本当に今となってはどうで

もいいことだ。今更そのことを出すのは意地が悪いと思われても仕方ないが、それでも出さなければアイギスを動かすことは出来ないと思っただからだ。

いや、少しだけ。優希はアイギスに対し仕返しのような事を考えていた。本当に死にはしなかったものの殺そうとしたのだから、これくらいは言っても許されるだろうという優希なりの甘えだ。

許されなかった場合は戦いになる。それはそれで今の優希にとっては好都合だった。

何せここはどうやっても死ねない空間だ。死亡もしくは主要な部位の欠損など不可逆な損傷をした場合に即座に損傷前の五体満足な状態まで巻き戻されるようになっていいる。

そして力尽きた場合にも同様のことが起こる。

死にはするがすぐに生き返れると言うべきか。そういう風にセーフティーをかけてあった。

優希はここでアイギスの持つ蟠りのようなものを、1度自分を殺させて解消しようという魂胆でもあった。デスの討伐という命令があるのなら、それをズルい手で解決させてしまえばいいと思ったのだ。

そこにアイギスの精神状態は慮られていない。アイギスが優希を仮にとはいえ1度殺し、どうなるかなどというのは考えられていない。

ただ連携に支障があるから解消しようとしている。そこに優希自身がまたアイギスと仲間として肩を並べたいと思う感情は含まれていない。

寮にいろのも学校に通うのも自己満足もあるが元を辿れば全て奏子と湊、そして養父母に心配をかけないためだ。それらの「枷」が無ければ優希は特別課外活動部と別行動を取っている方がアイギスとの諍いも無くよっぽど動きやすい。

それらの問題をわかっていて、わざと考えないようにしていた。

——それに、今のカダスでなら全力で戦える。

正直な話、優希はアイギスに対する自身の感情に名前をつけられないでいた。

アイギスの守るべき“有里渚”として関わっていたのはほんの数日程度。それも、アイギスの記憶回路からはほとんど抹消されている。覚えていないのと同じだ。

そして自身はそのことをあまり覚えていない。というよりもあれは桐条千鶴とアイギスの勝手な口約束のようなものであり、優希自身には何ら関係のないものだ。

だからこそいくらアイギスが自分を大事だと言おうとも、それは奏子や湊のオマケ。2人やメテイス、ラビリスのようにアイギスにとって本当に大事な存在には含まれていない。それをよく分かっていた。だからこそ期待はしていなかったというのに首を絞められたあの時、優希がアイギスに抱いたあの落胆のような感情はなんだったのか。この、失望ともとれるような虚無感はなんなのか。それを知りたかったのだ。

一方、アイギスが優希を殺そうとしたと聞いて動揺を隠せなかったのは奏子で、狼狽えた様子で優希へと問い詰める。

「ど、どういうことなの!?! アイギスがお兄ちゃんを殺そうとしたって…」

「別に。俺は死の宣告者^{デス}だ。討伐対象なら殺そうとしてもおかしくない。それだけの話だよ」

その話はここで終わりだとしてもどうかのように打ち切り、アイギスをじっと見つめる。

「で、きみはどうするんだアイギス。俺と戦うか。それともきみの言うように対話で解決してみせるか。話は聞くけど解決できるかは保証できかねる」

「優希さん、一応警告として言っておきますが姉さんに手を出そうとしないのなら私だって黙ってませんよ」

「それでもいい」

言葉を発したのはアイギスではなくメテイスだった。

きつと優希を睨み付け、挑発するようにそう告げるが優希は意にも介してないのか素知らぬ顔をしている。

「メテイス、きみはわかっているんだろ。だから他のみんなと違ってき

みだけはラビリスの事に口出しも手出しもしようとしなかった。臨戦態勢にならなかつた。姉という存在が大事なきみがいの一番にそうなつてもおかしくなかつたのに」

「……っ！」

「これも、責めてる訳じゃない。メテイスの対応が正しいんだ。ラビリスとラビリスのシャドウであるあの子の間には、俺を含む誰かが割って入っていいものじゃない。これはふたりの——いや、五式ラビリス”の乗り越えるべき問題なんだ」

その手段が戦いというだけで、優希は対話を否定していない。

ラビリスのシャドウである少女については思いのたけをぶつけるために戦闘行動を経由することでしか解決できないこともあると知っているからこそ、優希は戦うしかないと言っているだけで。

言葉だけでは伝わらないこともある。

対話で済むなら優希もそれで済ました方が楽なのだ。こうしてわざわざカダスに全員を呼び出して、排除するだのしないだのを言わなくても済むのだから。

けれど内なる自己との対話で済む段階はとうに過ぎている。ラビリスは己の抑圧してきた願いや感情について、自覚していないからだ。

それが出来ていれば少女は優希の身体を乗っ取り別個の存在として現れたりしなかつた。

言葉では何の解決にもならなかつたからこそ、戦いという手段でもうひとりの己であるシャドウと対話するしかないのだ。

「俺はみんなまとめて相手にしたつて構わない。だからさ、教えてくれよアイギス。俺の抱えてるこれは何なんだ？ どうして俺は、きみに落胆を覚えているんだ？ きみが大事なのは湊と奏子。そしてメテイスとラビリスだ。敵”である俺じゃない。そんなことはわかってる。わかっているんだ。なのに——どうしてこんなに虚しいんだろう」

限界だったのはラビリスのシャドウである少女だけではなかつた。ずっと、ぐるぐると思索していた優希は煮詰まってしまうていた。

意識は覚醒しているが身体を使えないという空き時間が膨大にあつたこの二日間、ずっと優希はウィツカーマンにすら相談せずこの虚しさについて考えていた。考えて、結局分からなかった。

「……」

アイギスは答えられなかった。なにが、「だから」なのかも分からなかった。

優希がそんなものを抱えているとすら思っていなかったのだ。

アイギスだけではない。全員が答えられずに黙り込んでいる。

「でも同時にさ、苛々するんだ。すごく。こんなの、これまで以前の俺じゃないみたいで——ああ、そうだ、頭の中で声がしてて。ずっと、ずっと、憎いって叫んでる。今すぐ全部壊してしまいたくなる。大事なものはずなのに、守りたいのに…俺は………ぐ…」

「三上さん…?」

優希が顔を顰めた瞬間、金の目が赤く塗り替えられる。深く、濃くなりどろりとした血のように赤く、暗い色に。

それと同時に炎がぶわりと勢いを増す。

姿が画面越しに見えているように揺らめき、何度もブレた。

そして足元で黒い泥のようなものがゴボゴボと泡たち、弾けていく。

「う、あ、あああ…うるさい、おれは…おれだ…」

その不安定な様子にパンの大神の姿を重ねたのは何人いたのか。パンの大神自身が優希の姿を模倣していたせいもあってか、今の優希は雰囲気も含め、それとよく似ており異常に見えた。まるで、暴走しかけているのを必死に抑えている。

そんな風に。

「はーっ…、はーっ…!」

息を荒くし、頭を抱えながら何度か呻き優希は何か耐えるように苦し気にしている。

しかしすぐに深く目を閉じて息を大きく吐いた優希の目は次の瞬間、静かな黄金色の目に戻っていた。湧き出ようとしていた泥のようなものも静まり無くなっている。まだ元の目の色ではないというこ

とからある意味ではまだ正常とは言えないが異様な雰囲気ではなくなった。

「…なん、でもない。ちよつと、声が…したんだ。でも、気の所為だから」

声がする。

恐らく実際に聴こえているものではなく、幻聴のたぐいか先程から言っていた頭の中で響くというそれだろう。

「なんでもないわけが無いだろう。そうやって隠すのをやめろと俺たちは言ってるんだ」

「ごめ、ん」

明彦が指摘するも、だらだらと脂汗を垂らしている優希の表情は先程とは違い余裕が無さそうだった。

「……」

謝罪はしたものの黙り込んで目を逸らしてしまった優希へと近づいたのはアイギスだ。

その顔には先程までの動揺は浮かんでいない。なにか、覚悟を決めた顔だった。

優希の片手を握り、真剣な顔でアイギスは口を開いた。

「話してください。優希さんが抱えているものを、すべて。どれだけ時間がかかって構いません。私は——かつて殺せなかつた^{守れなかつた}デスとちゃんと向き合いますから」

「……」

憔悴しきつて虚ろになった瞳とアイギスのレンズアイがかち合う。

小さく、優希の口が開く。

「…もう遅いよ」

発された言葉はそれだった。

本心はどこに (12 / 17)

「それって、どういう——」

“もう遅い”。その違和感にアイギスや他のメンツが気づいた瞬間に乾いた銃声が響き、弾かれるように優希の身体が倒れる。

「え…どう、して…」

その音が発されたのはアイギスの手からだ。

下げられていたはずの銃口は腕ごといつの間にか上げられており、視線はどしやりと力なく倒れた優希を見つめていた。

撃たれた胸からはじわじわと血が広がり、床を汚していく。

突然の事に誰もが動けなくなり、戦っていたラベリスとそのシャドウである少女も目を見開いて戦闘を止めていた。

「わ、わたし…わたしが…優希さんを…あ、ああ…そんな…」

アイギスは絶望した顔で地面へとへたり込む。

あの時は寸での所で止まったのに、今度は止まらなかった。止められなかった。意識すらしていなかった。なのに、どうして優希がここで血を流しながら倒れているのがアイギスには分からなかった。

終わりだ。誰もがそう思った。こんなに呆気なく。しかも仲間の手で終わりが迎えられてしまった。

「ごめんなさい…ごめんなさい…！」

優希を無意識に殺してしまったという罪の意識に押し潰されそうになったアイギスの目に、不意に燃える炎が目につく。

死体となった優希が燃えている。

否、炎となって消えていつている。

「——と、まあこんな感じで。どう、アイギス。対話でつてオーダーだったから多少荒療治だったけどデスの討伐は完了したから、その命令に関するひっかかりが取れたんじゃないかな」

アイギスの頭上から、優希の声が聞こえ咄嗟にアイギスはその顔を上げた。

そこには五体満足でピンピンしている優希が平気な顔をして立っている。

「え…あ…ゆ、優希さん…？ ほ、本物、ですか？」

「うん。こつちの俺が本物。さっきのアイギスが近づいたほうが幻覚で、偽物。それに前も言ったけどあれがもし本物の俺だったとしてもここでは死ねないから結果に変わりはないはずだ」

「いつから…」

いけしやあしやあと答えた優希は全くもって怪我をしているというふうには見えなかった。銃創も出血も何もない。銃で撃たれたという事実自体が消え去ったようにも見えるが優希の説明によればあれは幻覚だったらしい。

あんな生々しいものが幻覚だというのなら、いったいいつから。そのアイギスの疑問は誰もが思っていたことだった。

「いつって…アイギスが足を踏み出した瞬間かな。必要以上に近づきすぎるとああなるって分かってたから。俺の偽物を見せてただけ」

2人きり、かつ近づき過ぎた状態で隙を見せれば殺されるとわかっていたとでも言うかのような発言をしていることから優希はアイギスを信用していなかったようだった。

それでも優希はアイギスの頬に触れ、なにかを探るように目を瞑った。

「…アイギスの意志を無視してまでデスを倒そうとしてるのは凄いと
思うよ」

ぱきん、と頭の中で小さく音がするもアイギスに違和感はない。むしろ何か引つかかっていたもやのようなものが取れた気すらした。

「うん、とれた。ご馳走様。もういいから」

「ありがとうございます。…いえ、どうということなんですか!？」

混乱から抜け出せていないアイギスが身を引こうとした優希に詰
め寄る。

「どうもこうも…アイギスについてた小型の回路を壊したただけだよ。
きみのは———なんというか精神に作用して死の宣告者^{デス}に対する攻撃性をより積極的に、より増幅させるものっぽかったけど。だからわかりにくかったんだ」

「回路が…？」

条件を何度か試し、優希はアイギスとだけ至近距離でいるという事がその装置の動作条件だと推測した。

だから戦って己を1度殺してもらうなりなんなりして命令を完了したと思わせる。そしてその隙に装置を破壊する予定だったのだ。だが、アイギスが対話を求め、自分からのこのこと近づいてきたのでリスクの多いその作戦はやめ、幻覚によって誤認させる方法に変えただけ。

抱えている虚無感は無だにある。

しかしそんなものは吐き出した時点でどうでも良くはないが大した問題ではなくなっている。優希はそう思うようにしている。

その考えこそが湊や奏子、他の人間に指摘された事だと言うのに優希は何も分かっていない。

アイギスに対して未だ必要以上の関係を持ちたくない、となぜか幼少の頃の記憶を取り戻してから優希は思ってしまうようになってしまった。

嫌い、というわけではない。けれどメテイスのように腐れ縁のような気持ちはなく、ラビリスのように同じような境遇だった情が湧いているというわけでもない。

アイギスはアイギスで罪を抱え、湊と奏子のことと苦しんでいる境遇は辛いものであるという事を優希はわかっているのだが、なぜかメテイスやラビリスのふたりのように距離を詰めても良い、とは思えなくなったのだ。

ただ、『仲間』だからそうする。『湊と奏子が大切に思っているから気遣う』程度なのだ。

むしろアイギスは何も悪くないというのに八つ当たりじみた刺々しい言動になってしまいう自分が嫌だった。

なにか、引つかかっている。けれどやめられない。自制の効かない己が最も忌々しかった。

「…そうだよ。俺に近づいてもモヤモヤしてるものを感じなくなったはずだ」

堅い声と苦々しい顔つきをする優希は静かに言葉を吐き出した。

精一杯、それでもマシンに聞こえるように平静を取り繕おうとしたがその声はいつもより低い。

「本当ですね。でも、どうして…」

明らかに優希に対する感情のうち、激しい敵意が無くなったことに戸惑うアイギスはどうして回路が取り付けられているのがわかったのかが謎だった。そういうことに察しが良さそうなメテイスですらもアイギスの機械として与えられた命令のためにそうなってると思っていたくらいなのだ。

「ああ、ラビリスにそういうものがついてたから。幾月が触つてたとはいえずつと寮の地下で放置されてたメテイスはともかく桐条の人の手によく触れてるアイギスにもそういうものがついててもおかしくないかなって」

「姉さんと似たようなものが…」

ラビリスという前例を見たからこそ、アイギスもその可能性があるのではないかと一人ですつと考えていた優希は思ったらしい。

そして実際に、ラビリスのように自我の殆どを奪い無理やり戦わせるほど強力なものでは無いがアイギスの精神と咄嗟の時の行動に働きかけるような回路が取り付けられていたという。

「たぶん、取り付けた人は善意だったんじゃないかな。まさか死の宣告者がヒトになるなんて思わなかったろうし。1度負けた相手に対面した時にきみが怖気付かないようにってことだと思う。あくまで、装置がとりつけられてること自体を好意的に予測するなら、だけど」

そう言つて、優希は苦虫を噛み潰したような顔のままアイギスから距離を取り口を噤む。

そのまま何か息苦しいものから逃れたかのように小さく息を吐き、目を閉じて落ち着くように静かにしている。

これでは何も変わっていない。アイギスが優希を遠ざけるか、優希がアイギスを遠ざけるかの違いでしかない。

取り付けられた機械を取り、アイギスの抵抗感をなくしたとはいえ、今度は優希自身が自らの意志でアイギスを避けていては意味がな

いのだ。

しかし操られているわけでもない心の距離は何か物理的なもので解決できるわけもなく。今すぐに解決できるものでもなかった。

「それでも…姉さんや皆さんの心に傷をつけるようなあんなやり方しなくたって良かったのに！」

静寂を破るように叫んだメテイスは優希が見せた先程の光景について怒っている様子だった。メテイスの中で、優先順位が一番であるアイギスをああして扱えばそう怒りもするだろう。アイギスを傷つけた敵と認定して飛び掛からないだけメテイスは成長しているといえる。

確かに、あのようなショッキングなものをみせ、この場にいるもの全員の心を折りかねないやり方でアイギスの問題を解決する必要などない。

メテイスの言葉を目を開き黙って聞いていた優希だが、何が悪いのか分かっていないような表情を浮かべている。

「ああする必要はあるよ。アイギスには俺を見殺しにしたってことを自覚してもらわないといけない。だから、もう一度殺させたんだよ」

「見殺し…？ いつ、姉さんがそんなことをしたっていうんです!? まさか、『これまで』の繰り返しで起こったことだとしても言いませんよね!？」

アイギス本人が知覚していない事柄を挙げ、それを罪として責め立てようとしているのなら言語道断だ、とメテイスは問い詰めるも、優希は悪びれる様子がない。

「違う。これは俺の八つ当たりだから、アイギスに直接的な罪はない。でも後悔はしていないよ。身勝手だけど忘れないで、背負っていて欲しいんだ」

否定し、優希自身もアイギスには罪はない、と告げているにも関わらず相反するように「八つ当たりだ」と言い出す優希はまったくもって普段通りではない。

湊と奏子ですら、こんな様子の優希は見たことがない。

桐条本邸から帰ってきて以来、兄が極端に悪い方向に変わってし

まったかのように思えて仕方がない。目的の為ならば手段を選ばない強情さを得てしまったように見えるのだ。

「だからといってそんなこと、許されるわけが——」

「許さなくていい。ずっと、許さなくていいから」
即答だった。

誰もが今の優希の内心を理解できない。

「天田くんも、俺を許さないで。ずっと、恨んでいてほしい」

「なにを…三上さん、何を言ってるんですか…！」

流石の天田も優希の言葉が理解できないようで狼狽えている。

確かに、優希は荒垣と共にペルソナを暴走させたせいで天田の母親の死因となった。そしてそれを知った時、天田は恨んだ。だが今は優希に対しても荒垣に対してもそうではない。

だと言うのに恨まれることを望んでいるようなことをいまさら明確に口に出した優希の言葉に違和感を感じて混乱する。

その言葉の意図がなにもわからない。

「恨むも恨まないも自由だ。けど、俺としては恨んでいて欲しいってだけなんだ」

天田の問いに優希はそれだけ答えた。

ただ、優希の無事が分かって再び戦いだしたラベリスたちをじっと見つめている。

その光景を目に焼きつけるように。

「今のが、三上の本心だと思うか？」

ぼそりと明彦が天田に問う。

それに対し天田は困る。本心だとは思えない。が、まったく本心ではないと言いきれない。

黙って首を横にちいさく振った。

「…わかりません」

「俺もだ。いまのアイツが何を考えてるのかさっぱり分からない」

ぎこちなく頼ってきたかと思えばすぐに離れていってしまう優希に明彦もお手上げだった。

近くで呆然としている荒垣や弟妹である双子も同じだろう。

とはいえ頼ろうとしてきた矢先に襲撃され、しかもその犯人がシャドウではなく人間となれば人間不信に陥っても仕方ないともいえる。だが、その反応がかたくなすぎるのだ。

最低限弟妹である湊と奏子、比較的仲のいい美鶴や荒垣といった『いつもの』といってもいい間柄でさえ今の優希はなにも明かそうとしていないように見えた。

(…どうだかな)

明彦は眉を顰める。

明かしていないのではなく、逆なのだ。

優希は隠しているのではなく明かすぎている風に見えた。

今までは隠していたことを隠さないようにして、なりふり構わず前面に出したのがこの状況を作り出しているのではないかと思っただ。

「…よし」

パン、とグローブをはめたままの手を打ち付け、そして構える。

「三上！ 俺と戦え！」

「ええ!？」

「真田先輩正気つか!？」

突然優希へと宣戦布告した明彦に、ぎよつとゆかりと順平が声を上げる。

なにがどうしてこうなったのか。あんな余裕と容赦がなさそうな優希と戦うなんてどうかしてる、とか戦闘狂には戦闘狂をぶつけよというお告げでもあったのか、ともごもごと沢山の言葉を吐き出そうとして——待ってましたと言わんばかりに獰猛な笑みを浮かべた優希を見て奏子はそれを吐くのをやめ、湊は何も言わなかった代わりに大きく溜息を吐いた。

「流石真田くん、分かってるね。俺もちょうど運動したいところだったん、だ！」

その言葉の中には「八つ当たりも兼ねて」という意味も含まれていただろう。

なにが優希を苛々させているのかは分からないが相当なものをた

め込んでいる様子でもある。

トントンと軽く跳びながら最後の『だ』を言い終えるや否や、遠慮も躊躇いもなしにまるで猛獣のように優希は間髪入れず明彦へととびかかった。

強烈な蹴りが明彦の頬に直撃する――

「フッ！」

かに思えたが直線的なその行動を予測できないわけがなく。明彦はその蹴りを身体を傾げるだけで避ける。

「まあ、そうだよな！ アハハ！ これぐらい避けてもらわなくっちゃさあ！」

一撃を避けた明彦に対し、興奮気味に笑う優希は先ほどまでの無表情から一転、楽しそうにしている。

お返しと言わんばかりにストレートを繰り返す明彦の攻撃を全て避けながらけらけらと笑っているのだ。

「男って……」

なんであんなに戦いを楽しめるのか。とジト目で戦っている明彦と優希を見つめるゆかりだったがその声と呆れが伝わったのか湊がまた一つため息を吐いた。

「僕らも一緒にしないで」

とは言うものの、湊は自身でそれなりに戦闘狂だということは自覚している。

奏子は戦闘狂ほどではないものの喧嘩っ早いのでどうやら血は争えないらしい。

気が強いのは母だったのか。それとも父か。母だろうなと湊は思った。

母はヒステリックという訳では無いがああ倉橋黄盛の娘ということもあり、身体は弱かったが芯の強さがあつた。

そして湊と奏子の知る中で父はいつも優しく、母や子供のことを常に気にかけている印象だった。

演奏家としての対外的な名は知らないがそこそこ売れていたバイオリニストだったらしく公演などで家に居ない日の方が多かったが、

それでも湊が覚えている限り家族サービスはきちんとしていたしまつてもらえた思い出がたくさんあり、何もしていないというわけでもなかった。

だが、養父であるハジメのように堅くきっちりしているというわけでもない。

見た目が威圧的というわけでもなかった。ハジメとは正反対で線が細く、美少年がそのまま大人になった男といった感じだった。しかしその見た目にそぐわず身体はとんでもなく丈夫で線の細さに見合わない力持ちだったと聞く。湊と奏子が特に病気がちでもなんでもない健康体であることと音楽好きは間違いなく父親譲りだろう。それぞれ好きなジャンルは違うが。

そんな父が音楽をやめてしまったのは優希兄が居なくなっただけだった、と湊は思い出した。

しかしそれだけだ。家族が居なくなるというのは仕事をやめてしまう原因としても何らおかしくない。

それも、芸能活動ならなおさらだ。

そんなことを考えていれば明彦のストレッチが優希のこめかみにクリーンヒットし、尻もちをつくのがみえた。

その目は一瞬殺気立つも、すぐに抑えられ笑みの形に変わる。

「ふっ、ふふっ、ふふふっ、あはは、あはははは！ いたい！ 真田くんのパンチ、結構痛いなあ！ そっか、そっか！ 痛いんだ、まだ！」
「おい、大丈夫か？」

肩を震わせ、腹を抱えて大きく笑いだした優希に臨戦態勢を解いた明彦が手を差し伸べる。

差し出された手に対して少し戸惑う仕草を見せた優希だったが、ややあつてその手を取り立ち上がった。

「あー…ありがと。なんかさ、スッキリしたかも。真田くんのストレッチ、効いたよ」

「そうか。お前もボクシング、やってみないか？ 今からでも遅くは無いです」

「やらないよ。ここまで動けてるのは影時間で、カダスにいるからだ

し。普通の時間だと今の俺は倒れる。入院生活とかしたくない」

心底、病院や入院生活は嫌だと言いたげに苦虫を噛み潰したような顔をした優希はそっぽを向いて掴んでいた手を離してそそくさと明彦から距離をとる。

不快感からそうした訳ではなく、なんとなしに気まずいようだ。

だがさほどその行為を気にする明彦ではなく、別のことへと疑問を抱いていた。

「結局、お前が仕掛けたのは最初の一撃だけだ。しかも手加減をしていただろう。どうすれば本気を出す?」

「うーん、どうやっても出さないかな。今持つてる力は完全に俺のものって訳でもないし、人に振るうのはあまり好きじゃないから」

「どうやっても出さない、という頑なな態度と意味深な言い方に明彦は釈然としないものを感じる。」

否、言葉の意味は分かっているのだ。そのままのとおりを受け取るだけでいい。だが、明彦が人を辞めれば相手をする、と言っているようにも聞こえてしまったのだ。

「人じゃなければいいのか?」

「悪魔になるとか言い出すのならやめてね。絶対にロクな結果にならないから。そういうのじゃなくて…なんだろう、みんなには向けたくない。こういうのは」

返ってきたのは否定だ。それも間髪入れずに。

優希は一旦ため息を吐き、そして大きく息を吸った。

吐き出されたのは、想像していたものよりも小さな声。

「…人に向けられない訳じゃない。けど、まだ俺のままでもいいって言えば良いのかな。いや、甘えだっていうのはわかってるんだ。自分の心がまだ大事で、あんな力を振るわなくてもいいっていう状況に甘えてる。さっきのだって本気だったけど…ここがカダスじゃないきやあんなこと言えない」

言外にその力を人に向けて振るい、不可逆的な損傷を与えてしまうことがあれば精神的に耐えられないと言っているようなものだった。そしてそれを意図的に避けていることも。

「誰かを守りたいなら、もう覚悟を決めてきやいけないのに」

何かを迷うように震える声でそう告げたその表情は芳しくない。

「三上、お前は…」

「それ以上言わないで欲しいなあ。情けなくなっちゃうじゃん。イライラしてアイギスやみんなに当たってき、駄々を捏ねてワガママまで言つて…まるで俺、小さな子供みたいだ…」

にへら、と先ほどまでのしみつたれた表情をやめ、優希は無理に笑おうとしているのか不格好な笑顔のままに意気消沈している。

「そうだな」

明彦は否定しなかった。

先程までの優希はかたくなだった。優希らしからぬ行動に何かあるのではないかと思っていたが、純粹にイライラしていただけだったらしい。

それはそれでイライラしている時の優希がこういうものなのだと知れて意外だった。多少刺々しくなり思考がネガティブに寄る程度で済んでいるのならマシと言わざるを得ない。

これでワガママを言い、駄々を捏ねた挙句当り散らしていると言うのは些か遠慮しすぎではないのだろうかとも明彦は思ってしまった。「だが、この程度何度でも受け止めてやる。またやり合ってもいい。俺でよければいくらでも付き合つてやるさ」

「…でも、」

「その代わり！ お前も俺に付き合え！ ここまでなら好きだけ暴れられるんだろう？ なら、毎日戦い放題という訳だな！」

「うええ…!? いや、そういう訳でもある…んだけどそういうことじゃないって言うか…タルタロスもちやんと登ろう？」

途中で首を傾げはじめた優希は明彦がここに毎日のように入り浸るのを防ぐためなのか、タルタロスの攻略を促すも順調に進んでいるので特に妨げる要因とはなっていないことに気がついていない。いい場所を見つけたと言わんばかりにハッスルしている明彦を止めることは叶わず来る入り浸りの毎日を想像してげんなりする。

「……真田くんに見せるんじゃないかなここ…」

「諦めろ。てめえがオレらをここに連れてきてこうしてアキを焚き付けちまったんだからよ。ああなったアイツは止まらねーぞ」

荒垣からの憐憫の視線と当たり前の言葉に優希は納得のいかないような顔をする。

「そうなんだけどさ…真田くんだけ連れてこないって訳にも絶対いかないし、でも毎日来られるのもそれはそれで…めんどくさい。せめて3日に1度とか、駄目か。特訓するって言ったの、俺の方だしなあ…」

「気持ちにはわからなくもないぜ。けどな、もう一度言つてやる。諦めろ」

「ですよね…」

諦めろと2度も言われてしまえば観念する他ない。

自由意志を尊重するからこそ、優希は明彦のこの意気込みを止められないでいる。この意気込み自体は願ったり叶ったりのようなものではあるのだが、このようにハッスルしすぎている明彦に対ししい・面倒くさいという気持ちが勝つてしまいげんなりしていた。荒垣が明彦に対しそちらの方面だけに関して諦めの気持ちを持つのもわかるというものだ。

（まあ、特訓とはいえみんなの相手をするのは俺じゃないしいつか）

すぐに思考を切り替え、自らが焚き付けたラビリスたちの戦いを見つめた。

優希は自身が手を貸した戦いのその結末がどうなるのかを責任もって見届けなければならなかったからだ。

解決（12／17）

シャドウである少女がラベリスを戦斧で激しく打ち上げ、そして叩き落したところだったらしく、ラベリスは床に伏せている。

そしてそんなラベリスを少女は踏みつけ「ファリス」を呼び出しながら腕に巻き付けているチェーンを振り回しジャラジャラと鎖の音を鳴らしていた。

「ほらほらほらほらアア！ さっきまでの元気のいいアンタはどこに行ったのかしら!? 本体であるアンタがこんなに弱っちいわけないでしょうが！ 立て！ 立ちなさいよ！ 何度だって甦ってあげるんだから！」

（…「あの子」が優勢か。けど、駄目だな。あの子はラベリスに期待しすぎている）

優希は危ない傾向だと感じた。

方や優希の持つ力の断片と同調し、疑似的なペルソナを得てしまったシャドウと、封印される前から兆候はあったらしいが未だペルソナの獲得には至っていない本体^{ラベリス}。

どちらが出力が上かと問われれば、シャドウの方だと言わざるを得ない。今の状態は優希自身がそうなるように仕向けたとはいえ、一方的なシャドウによる蹂躪となつてしまっている。

要するにペルソナ使いとそれなりに戦える一般人が戦うようなものだ。

しかも、シャドウである少女は常にファリスを呼び出す術に長けており、実質的に手数が二倍。二人を相手にしているようなものだった。

それでも破壊まで行っていないのは少女がラベリスを壊さぬように無意識に手加減しているからだ。

長く遊べるからではなく、今の少女は「本体ならばこの窮地を切り抜ける強さを持つているはずだ」という無根拠に近い無慈悲な期待をしているからだ。

それはそう思っているシャドウ自身も分かっていない無意識なも

のだ。だからこそ、ラビリスはまだ壊れていない。限界まで壊れたとしても瞬時に回復するここでは違いはないといわれるかもしれないが、それでも修復されるほどの大きな破損は未だ起きていない。そのことはこの場の主である優希が一番感じ取っていることだった。

ファラリスを少女に貸し与えているのは優希の意思だ。その気になればファラリスを奪った状態で二人を戦わせることも可能だったが、それをしなかった。ファラリスを直視しない限り、その怒りを身に浴びない限り、ラビリスは己の怒りを理解しないと思ったからだ。

あれをひっくるめて少女を構成するものすべてが過去のラビリス自身の怒り。ラビリス自身の抱えてきた負の感情。

それが、どんなものなのか分からなければふたりはひとつに戻れない。

自覚しなければいけない。

だというのに、シャドウである少女はまだラビリスが何か奇跡的なことが起こって逆転し、圧勝するのではないかとでも思っている。そうやって、期待してしまっている。

「可哀想ねえ…『私』。辛かったよね。悲しかったよね。『あの子たち』を壊すの、嫌だったよね」

「う…ぐ…」

「桐条のこと、恨めしいよね。無茶苦茶な命令を課してきたアイツらが憎いよね。私はみんなを殺して独りぼっちになったのに、桐条はこうして仲間に囲まれて…バカみたい…ねえ、そう思わない？」

少女はラビリスを煽りだした。否、事実という塩をラビリスのトラウマという傷口に塗り込み始めたのだ。

「思わへん…！ だって、ウチは…！」

「『妹たちがいるから』？ それとも、『宿主サマに助けられたから』？ ハッ、笑わせんじゃねーよ！ あのポンコツ共に私の苦しみなんかわかるわけがない！ それに宿主サマはアンタの味方じゃないの！ アタシの、この煮えたぎる憎悪の側よ！」

それに反論しようとしたラビリスを少女は鼻で笑う。ラビリスを

あの状況から救い出した優希でさえ、少女側の立場であり、お前の味方はいないんだぞと告げるような言動は正直攻撃にしても優希からすれば言っているいいものではない。

「——『ラベリス』」

「チツ、分かっている。分かっているの！ いちいち口出ししてくんな！」

優希がそれ以上自分と本体を区別するな、という意味で少女を呼べば忌々しいと言わんばかりの顔をして返事を返してくる。

あくまで優希は中立だ。若干、シャドウである少女寄りではあるがこの行動は『五式ラベリス』を思っている行動だ。
自身との乖離を起こさせたいわけではない。

そしてシャドウをラベリスに否定させたいわけでもないのだ。あれは、受け入れられて然るべきラベリス自身。シャドウである少女も、心の内で本体に回帰することを望んでいる。

それを汲み取ったからこそ、優希はこうしてじつと手を出さずに待っている。

叩きつけられ、踏みつけられたラベリスはハツとなにかに気がついたような顔をして、少女の顔を見つめる。

「……そういう、ことやったんやね……」

「は？ なんだよブツブツ気持ち悪い……」

気持ち悪いという感情をありありと顔に浮かべたまま、少女がラベリスから足を除ければラベリスは少女と向き合うようにしてその場にペタンと座り込み——

「ナギサさんがウチの味方やなくて、アンタの味方やって言うの……あれやね、アンタもナギサさんのこと、ウチと同じくらい好きなんやね。だから、ウチのくだらん嫉妬心みたいなものと同じの、抱いとるんとかやうん？」

——とんでもない言葉を発した。

幸いなのは炎の勢いが強いために優希以外の声が内外からは聞こえなくなっているという点だろうか。

「は、はあ?! んなわけないでしょ!? 宿主サマは道具だったの！」

アイツはアタシに良いように使われる側なの！　す、好きとかある訳ねーだろ！」

思わずそんな訳が無いと吃りながらも否定する少女だったが、顔が真っ赤なので説得力に欠ける。

それは羞恥からか。それとも。

一方、自らの抱えている感情が割って入れるものでは無いと分かっているにもラビリスは自覚してしまったそれを抑えることが出来なくなっていた。

“さん” 付けをする他人行儀な呼び方で距離を保っていたが、そもそもそんな間柄ではないだろうと自覚してしまったのだ。

「でも、ナギサ “くん” にはさつきみたいに手え出させたり口出しするのは許しとるやん？　アンタが誰かを無理矢理戦わせるのが大嫌いなナギサくんにここまで協力してもらてさ、おかしいと思ったんや」

ラビリスが気になったのはそこだった。

一旦、優希が止める気がないという所までは分かっていたが “どうして” その行動に至ったのかがずっと謎だったのだ。

シャドウである少女が出した幻影で無ければ、偽物という訳でもない。

正真正銘、炎の向こう側でじつとこちらを見ているのは優希本人だとラビリスも分かった。

「いくらナギサくんがお人好しやからって親しい相手が2人おったとして、対立した時に何も言わずに一方だけに肩入れしはるってことはまずないやん？　ほら、ストレガやったっけ？　あの子らとのこともそうやし」

「そうね！　アイツは超とバカがつくほどのお人好しだから、そういうことは無理ね！」

ふん、と何故か少女が得意げにラビリスの言葉を肯定する。

「それで…アンタにボコボコにされとる間考えてん。ナギサくんはどっちのウチもウチやと思うて大切にしてくれてはるってことなんやないかって。せやから——アンタがいう通りアンタはウチで、ウチ

はアンタなんやって。ナギサくん相手に素直になれんところはホンマにウチやなあつて思うよ」

「ウソ：アタシがアンタだつて自覚してくるとこ、そこなの？」

がく然と、少女は口を開けた。それはもうあんぐりと。

少女からすれば憎悪と怒りをその身に浴びて自覚してもらい、ズタボロになった状態で負の感情である自分を捨てた後悔に咽び泣く――くらいは想定していたのだが、想定外も想定外。予想の斜め上をいく自覚方法で戦う気が萎えていた。

――アホらし。

そんな感情がシャドウである少女の内を締めている。

それに構わずラビリスは続ける。

「いや、もちろん他のこともあるで？ アンタは “お母さん” のことを心配して美鶴さんに探してもらつてたり、ウチのこと励ましてくれたり。お母さんが見つかった時もウチを連れてかへんって選択肢もあつたはずやのにそうはせんかった。しっかりと手繋いで連れ出してくれたやろ。部屋に入る時も不安なのはきつとアンタもやのに、ウチが欲しい言葉をかけてくれて：嬉しかったんやで？」

目を閉じ、人格モデルとなった子供に会いに行つた時のことをラビリスは思い浮かべた。

温かい手がラビリスの冷たいであろう機械の手をしっかりと握りしめ、心配を払拭させるほどの力強さで連れ出したことに感謝をしていたのだ。あの時、あのままもだもだと理由をつけて断つてしまつていたら。全てが手遅れになつていただろう。そもそも、人格モデルとなつた子供のことすらラビリス自身は「まだ探さなくていい」「気にはなるが色んなことが終わつてからで良い」と思つていたのだ。

自分のことは二の次。みんな大変で、世界が大変なのに自分の我儘をいうわけにはいかないと遠慮していたのだ。

あの時の感情をなぞるように微笑む。

このシャドウである少女がいなければ、きつとラビリスは母親とも呼べる存在が生きている内に会えなかつただろう。

全てが手遅れになつたあと、重く、冷たい石の前で自分のことを話

していたかもしれない。

「…それに、『ウチらがおるから独りぼっちゃない』ってお母さんに言ってたやんか。あれ、ウチがずっと言いたかったことでもあるねん。そこでちよつと気づいたっていうか。でもな、ウチはアンタがウチとは別の、ウチの姉妹やったら良かったのになって思うたよ」

自分とは別の姉妹なら良かったのに、というラビリスの言葉に少女はやつぱりわかってない、と落胆を怒りに変え、叫ぶ。

「ほらやつぱり！ どうせ心の底ではアタシを認めたくないんじゃないー！」

「ちやうよ」

嘘つき、と叫び今にも突進してきそうな少女にラビリスは静かに首を横に振った。

「アンタともっとお話したり、色んなところ行ったり…元気になったお母さんとも話したりしたかったなって言いたいねん。せやかてアンタの口ぶりやとウチが勝っても負けても、どっちかが消えてもう話せなくなるんやろ？ ウチは、そんなの嫌や」

意外なラビリスの言葉に少女は目を丸くした。そんなことを言われるなど、露ほども考えていなかった、という顔だ。

少女はラビリスにとつて忌むべきもの。そう思われていたからこそ、無意識に優希に引き寄せられて——捨てられてしまったと思っていたのだ。

「え…あ…そう、ね。どっちかが消えるの。消えて、元のひとりに戻るのよ」

「でもな、アンタがシャドウでもなんでもええからこうしてもうちよつとだけウチとは別の子として居ってくれへんかなって。ナギサクんの身体をいつまでも使うわけにはいかんし、無理なのはわかつとる。これが贅沢な願いだつてことも」

いつの間にか戦斧を消して俯いていた少女へとラビリスは近寄り、めいっばい抱きしめる。

「——ごめんな。ウチ、はじめてウチを受け入れてくれたみんなに嫌われたくないから…ずっとアンタのことウチやないって思つて見て

見ぬふりしとつたんや」

そして優しく頭を撫でながら、暖かい身体をしているもう1人の自分の震える背をぼんぼんと叩く。不思議と、拒絶はされなかった。

「怒りも、憎悪も、寂しさも、嫉妬も。アンタが言うように『私』のもの。ウチがこうして抱いてもたものなんや。否定したって綺麗にならんしなくなったりせえへんのに…」

「…うん」

「ね、ウチを殺してひとりに戻るなんて止めへん？ 命乞いがしたい訳や無いねん。むしろもう喋れへんようになるのが嫌や。ウチはアンタが大好きなんやって気がついたから。ウチの代わりに怒ったり、行動してくれた優しいアンタがウチの隣で笑ってて欲しいって思うのは、我儘かな？」

ラビリスはもう1人の己だと自覚しながらも少女と統合されることを嫌がった。

また話したい。まだ話していたい。こうして触れ合っていたい。もつと知りたい。

機械なのに心があるという、矛盾し、人に近くも人ではない自身や姉妹の存在は中途半端で宙ぶらりんだ。

戸籍があるわけでもなく、人として存在を保證されている訳でもない。

病気にはならないがもし壊れたら誰かに修復してもらわなければならない立場だ。

そして壊されることは死と同義でもある。

身体を移し替えることは出来ても記憶領域を損傷すればその限りではない。

どこまでいっても身体は無機物で、機械なのだ。そんな矛盾にぶち当たり、悩むこともあるかもしれない。先日だって部屋割りという些細な事だが自らが機械だということでも悩んだばかりだ。

それでも、姉妹がいる限り。隣にこの喧しくも世話焼きで怒りっぽい自らのシャドウと名乗るこの少女が居る限り。ラビリスはいくらでも乗り越えられる気がした。

(ずっと私は独りじゃなかった。『独りになってしまった』ってそう思い込んでただけなんだ。024やシロ、私が壊してしまったみんな。そしてもう一人の私。みんながいたから、今ここに私が居る)元はと言えば人格モデルとなった子供に会いに行くという願いでさえも024と呼ばれた試作機のものだった。

それでも、それを受け継いで、代わりに会いに行くと決めたのはラビリス自身の意思だ。

脱走までして会いに行きたいと願ったのは他ならぬ、ラビリス自身だった。

10年余りの歳月が経ってしまったが、それはようやく果たされた。

ラビリスの頭の中でばきん、とガラスが割れるような音が響く。

瞬間、青い光とともに力の奔流が渦巻いてラビリスを包み、頭上に半透明の長髪の女性の姿が浮かび上がった。

線の細いその姿はしかし、機械乙女でも人でもなく。

「『アリアドネ』…これがウチの…ペルソナ…?」

呆然と消えゆく己のペルソナの姿を見、キラキラと目を輝かせるラビリス。

そしてペルソナの発現を見届けた優希は役目は終わったとばかりに炎の壁を解いた。

「うん。ウチはウチ。オンリーワンで、ナンバーワン! …せやんな?」

ペルソナを得た実感を確かめるかのようにぎゅつとこぶしを握り締めるラビリスに、納得がいかなかったのはすぐそばにいた人物だった。

「ハアアアアア!? ちょっと! なーにが、『せやんな?』だよ!

アタシがアンタの中に戻ってないのになんでペルソナを獲得しちゃってんのよ!? 意味わかんないんですけど! それにナンバーワンはアタシなの!!! 一番強いのは、アタシ!」

「はいはい。分かるとる。分かるとるってー」

想定外の出来事に混乱し、ラビリスに詰め寄る少女から距離をとる

ようにしてそそくさと逃げるように駆け出したのは優希だ。

「……めん！俺と混じっちゃったからラビリスとは別物として確立させてしまったかも！あくまで可能性だけど！」

そう告げるだけ告げようとして逃げようとする優希に対し、「それを逃がすか！」と少女はこうして自身が自由に動かせる肉体を得てから史上初とも呼べる最高速度で駆け出し、首根っこを掴むとブンブンと揺さぶる。

「ぐえ」

つぶれたカエルのような情けない声が優希の喉から絞り出されるがお構いなしだ。むしろ、いい気味でさえある。

「ちよつとおおおおー！なんてことしてくれてんの!? 馬鹿じゃないの！ ああああああもう！ この際、宿主サマだとか関係ねー!!! 焼き尽くしてからぶつ飛ばしてやる！」

ばきん、とガラスが割れる音がする。

「フアラリス」を呼び出し2, 3発は優希を殴らねば少女の気が済まなかったからだ。

だが、

『グオオオオオ—— ツ!!!』

「は……え、ハア!?!」

「フアラリス」を呼び出した少女自身が、呼び出したものの変貌にあんぐりと口を開ける。

そこにいたのは炎で身体を構成した雄牛ではない。

はつきりと黒鉄の身体を得た荒ぶる猛牛——「アステリオス」。

「……ウソでしょ」

はつきりと変貌した己のペルソナを数秒ほど呆然と見つめた少女は次の瞬間ギロリと優希を睨み付けた。

「わあ、おめでとう。キミも俺との混じり物で中途半端なもどきじゃなく、己だけのペルソナに目覚めたんだ」

「ブツ飛ばすー！」

呑気に祝っている優希が癩に障ると言わんばかりに少女は優希を殴ろうとするも拘束を解かれ、ひらりと躲されてしまう。

「逃げるなっ！ アタシが『私』に戻れなきや…アタシはなんなの!?
『五式ラビリス』じゃないアタシは…別の『誰か』になったアタシはなんなのよッ!!!」

「まだ戻れないと決まったわけじゃないし試してみればいいんじゃないかな。ほら、強く念じてみればいけるって！ 念だよ、念！ あと気合い！」

「いや、ナギサくん…それはちよつと難しいかな…?」

飄々とさも簡単気に試してみると告げた優希にさすがのラビリスも少女に憐れみを抱いた。

戻りたいという意思が少女本人にあるのなら、優希も協力するのだろうか。その言い方は無遠慮すぎるだろう、と。

そもそも念じて戻れるのならとつくに戻れているのではないのだろうか。

それは片割れである少女も思っていたようで、半泣きになりながら優希を怒鳴りつける。

「アタシまでちゃんとしたペルソナを得ちまったんだから無理に決まってるんだろ！ ああクソ、こんなことならアンタなんか頼らなければよかった！ アンタなんか…アンタなんか…だ、だ、だ…だ！」

「だ…い…い… あああ！ ダサい死に方しちやえばいいのよ!!! アンタなんかねえ！ 箆笥の角に小指ぶつけて死ぬとか、たこ焼きで舌をやけどしてそのショックで死ぬとかそんな感じの死に方がお似合いなのっ！」

子供の癩癩よろしく意味の分からない罵倒を吐いた少女に優希は困惑した。少女はというと涙目で顔を真っ赤にしており、『ラビリス』に戻れなかったことが相当悔しいようだ。

「ええ…ダサい死に方って…いてっ?! ほ、暴力反対！」

「あんなにアタシ頑張ったのに！ なんでよ！ なんでなのよ！ 放り出すなんてずるいじゃない！ ナギサも『私』やみんなと同じでアタシなんか要らないんだあああ！ うああああああん！」

優希をかなり強めにボカボカと殴りつつ大声をあげて泣き出した

己のシャドウだった少女に困ったのはラビリス自身だ。要らないなどと言った覚えはない。むしろ、要りまくるのだ。

笑顔を作り少女を励ますように呼びかける。

「要らんわけないよ！ ウチは嬉しいんよ!? ねっ、ナギサクんっ！ 美少女のウチがふたりに増えて二倍お得やで！ 嬉しいやんな!?」

お願いだから要らないことを言うなよ、という視線も込めて優希を見れば流石に空気を読まないわけにはいかなかったのか、少女が泣いているのが想定外なのか、うんうんと何度も頷いた。

「い、いやー、俺も美少女がふたりになつてうれしいなく！ 二倍お得だなく！ ハーレムさいこうー！」

棒読みでひきつった作り笑いを浮かべながら普段なら絶対に言わない浮ついたセリフを吐き、様子を窺うように美鶴の方をチラチラと見ている優希はまさにお仕置き待ったなしだ。

どちらにせよ詰んでいる。

(どうしてこんなことに…いや、自分の自業自得か…)

まわりまわつてある意味自業自得と言える因果に内心で頭を抱えながらも優希は少女をどうするか、ということに思考を動かしていた。本当に別物として確立されてしまったのなら「ラビリス」^{メテイス}でもラビリスで無く。メテイスのように最初から自己を別物だと認識していれば別なのだが、少女の場合自分は「ラビリスのシャドウだ」とはつきりと自覚しており、統合され消えるか、ラビリスの主人格として君臨するかしか道はなかったのだ。

だが、ラビリスがそう願ってしまったが故か、優希と混じってしまったが故か。どうなのかわからないがラビリスに統合されず独立して存在してしまった。

今はカダスにいるということとで姿を維持できているが肉体を構成するにあたって十分なマグネタイトを持たない少女は人の世界では活動できない——はずだ。

綾時や朔間という前例があればともあれらは一応特殊なシャドウであり、対シャドウ兵器のシャドウなだけの少女が影時間という場所から出られるとは限らない。

どうしようか、と悩んでいればそんな優希にしがみつくように少女が不安げな瞳を揺らしながら見上げてくる。

「ほんとう…?」

「ほんとほんと！俺、誰かを嫌いとか好きとかに関してもウソはつかないよ。というか好きじゃなければここまで一緒にいない」

優希の“好き”は好きでもLOVEではなくLikeの方だが、そんなことは少女にわかる訳もなく。

「そ、そう？アタシのこと、嫌いじゃない？要らないって言わない？」

「言わないよ。絶対に」

それは誓って絶対だと言える。

優希とて、最初から異物として判断し、要らないのならウィツカーマンがさつきと完璧に取り込んで食いつぶすなり排除するなりしている。

三日間身体を貸し与え彼女の自由にさせたのも、こうして場を用意したのも、同調してしまったものすべて情からだ。

最初は憐憫か、それとも仲間意識かもう判別がつかないが、“絆された”という少女が嫌いそんな要因で存続が決まったのは言うまでもない。

「メテイス…ごめん」

助けて、と優希がヘルプサインを出せば仕方がないと言いたげな嫌そうな顔をしたメテイスが渋々口を開く。

「…まあ、“荒っぽい方”のラビ姉さんと約束しましたし、ニクスも協力しますが“荒っぽい方”のラビ姉さんに関しては優希さんが美鶴さんに愛想をつかさねない程度にちゃんと責任を持って何とかしてあげてくださいね。それでダメダメな貴方にひとつ、貸しですか」

「はい…」

メテイスからの冷めた視線と言葉がぐさぐさと優希に刺さる。

助けて、と言ったのは「引きはがしてくれ」という意味ではなく、この少女の身体をどうにかしたい、という意味だ。

大体予想がついてはいるが、その為の知識を乞おうと思っただけである。

「で、荒っぽい方のラビ姉さんをいつまでもそう呼ぶわけにもいきませんし、別個の存在として確立されてしまったのなら別の——彼女だけの呼び名を考えなくてはなりませんよ。どうするんですか?」

「確かに……これからも荒っぽい方のラビリスちゃんって呼ぶのは可哀想だし、ラビリスちゃんとはまた違うんだよね?」

メテイスの言葉に風花が難しい問題だ、と悩む。

彼女はこれまでラビリスだった存在であり、未だにラビリスに戻る——ラビリスとなることに執着している。けれども別個の存在となったからにはラビリスと呼ぶのもややこしい。

そんな中、勢い良く手を挙げたのは奏子だ。

「はいはい!　じゃあ、ラビリスのシャドウだからシャビリスちゃん?　シャビちゃん、可愛くない!」

奏子の提案はシャドウという呼称とラビリスの名前を組み合わせた安直なものだった。

確かに、これならもともとラビリスであったということも分かりやすくはある。が、

「えー…女の子の名前にしちゃあちよつとダサくね?」

「シャビリス、ねえ…」

「順平と珍しく気が合う…とりあえず保留で。私たちが考えるにしろ、あの子が好きな名前を見つけたらそれでいいんじゃない?」

全員の反応は微妙だった。

とにかくなにがなんだかよくわからないまま、無事に丸く収まつて良かった、いろんな意味で疲れたので帰りたい、と思うものが大半だった。

「ううっぐずつ…ナギサあ…アタシのこと…お、置いてくんじやないわよ…!　置いてったら許さないんだから!」

「おいていけないよ。とりあえずは俺の中に戻って…戻って?　もらって…あれ?」

「わかった!　戻るわよ!　戻ればいいんでしょ!」

自分の中に戻るといふのは適切な表現なのか。

そもそも他人の自分の中に戻れるのなら本体であるラビリスの中に戻れるのでは？ と優希は気がつく。

まさかそれすらも無理になつていいのか、と試せばあっけなく少女は光となつて消え、そして優希の姿を先ほどと寸分違わない少女のものへと変えた。

「あ、あれ？ あれ？ アタシ、宿主サマの中に戻つたんじや…？」

「ど、どうなつてはるん…!？」

混乱する少女とラビリスはお互いを見やる。

「えーと、宿主サマから伝言で、アンタにまだアタシを受け入れる気持ちがあるなら間借りさせてやれ」 って…アイツ、舐めてんの!？」

「え？ それって、ひとつに戻るってことやんな!? ウチと混ざらんの？ もう話したりできなくなるのは嫌やで!？」

つまるところ当初の予定だったひとつの存在に戻れということなのか、とラビリスは混乱した。

折角独立した人格として確立されたのに最後の最後で消えるかもしれない手段をとれ、と言い出した優希の考えが理解できなかったのだ。

しかし、少女は難しそうな顔をしながらも伝言を続ける。

「なんか宿主サマが言うには『ラビリスにはスペアかなにかわからなけれど記憶野が二つあるからきつと大丈夫！ 統合はされないはず！ 危なそうなら中断させるし』だって。アイツ…いつの間に『私のナカ覗いてんのよ…ッ!』」

「知らんかった…そんなの…」

ラビリス自身も知らなかった自身の体内の機構について優希が当然のことに知っていることに若干引きながらも、それができれば一応優希の身体に少女がいる、という事態は解決するということに目を向けた。

「ナギサくんのなかにおるよりかはこの子がウチの中におる方がええんよね…？ ええ、でも受け入れるってどうすれば…！ まさか…!」

「それで方法なんだけど——ふえあつ!?」

どうやって少女を受け入れるのか。手段に困ったラビリスは少女へと近づき、その唇に己の唇を重ねた。

もにゅ、と暖かい湿った感触を感じ取ったラビリスはしかし、羞恥からか目を閉じたままだ。

(たしかナギサくんがこうやってたからこうだよね! あれ? なにも起こらない:?)

数十秒たつてもなにも変わった様子が無い現状にラビリスは疑問を感じ始める。

いったん唇を離せば眼前には顔を真っ赤にした己と同じ顔が。

(な、何も変わってない——っ!)

「~~~~~」

何も変わっていないどころかふるふると涙目で震える少女は今にも泣き出しそうだ。

己の作戦が失敗に終わったと見たラビリスはどうしようかと頭を抱える。

「このバカっ! ポンコツ! 欠陥品! 話、ちゃんときけつての:っ! 宿主サマも唾然としてるわよっ! 間抜け面をアンタにもみせてやりたいくらいだわ!」

涙目のまま、少女が憤る。しかしラビリスが思ったよりかは憤っていないようなので一安心。

優希は優希でラビリスの突飛な行動にあんぐりと口を開けているらしい。

「ふふ、それともお? アタシとキスしたくて堪らなかつた?」

ニタリと涙目のまま強がるように煽る少女だったがぷるぷると生まれたての小鹿のように震えている様を見てしまえば情けない事この上ない。

「いや、ナギサくんがキス:したときにそっちにいったんならもう一回キスすればこっち戻れるかなって:それだけやし:」

「ふ、ふん! そんなことだろうと思った。宿主サマは『手を繋ぐだけでいい』って言ってるわよ。むしろキスされると思ってたみた

いだわ」

それもそうだ。

美鶴に処刑されてから優希は別の手段を思いついていないはずがないのだ。

ラビリスにキスした時は混乱しており咄嗟に取れる方法がそれしか無かったというだけで、別にキスでなくとも良いというのは先日のもテイスの言葉からもわかる通りだ。

それを、己のシヤドウであるこの少女が大暴れしたとはいえすっかり忘れていたことにラビリスは申し訳無くなる。

「うう…堪忍なあ。てかこれ、ナギサクともキスしてるってことになるんやないの!？」

「そうね。良かったんじゃないの? “大好きなナギサク”とまたキスできて?」

「うう、からかわんというて…!」

とんでもない事に気がついてしまったラビリスは頬を両手でおさえた。

自分のしてしまったこととはいえ、満更でもないがなんて恥ずかしいことをという羞恥心で満たされてしまったのだ。

「照れてるとこ残念なんだけど、……こうなった以上、アタシ“処刑”に巻き込まれたくないからさっさとそっちに行きたいのよね。ほら手を出す!」

「せやね…」

“処刑”の二文字が出た瞬間、恥ずかしがっていたラビリスは真顔に戻った。

“処刑”の光景を間近で見ていたのもあってか、あれの恐ろしさはよく知っている。

宿主である優希一人に犠牲になってもらおうと少女はそそくさと急ぐようにラビリスと手を繋いだ。

「で、手を繋いだらあとは宿主サマが勝手にやってくれるから。めちゃくちゃ今テンパってるけど」

「“処刑” 2回目はさすがに嫌やもんね」

かなり慌てているらしい優希の姿を想像し、ラビリスは苦笑を浮かべた。そうしている間に少女の姿が光となって消え、ラビリスへと吸い込まれる。

それは一瞬で、瞬きをした時には既に目の前に優希が立っていた。「ど、どうなったん!?! あの子は!?! ってうるさつ!?! 無事なのはわかったから頭の中でギャンギャン叫ばんといてえな!」

己のシャドウはどうなったのか、とラビリスが心配すれば瞬時に10の返事が返ってきたらしく顔を顰めながら人間なら片耳のあるであろう場所に着いている排熱機構も兼ねられたヘッドギアをおさえる。

「ええと、もうひとりのウチからの伝言…自分だけの身体はもう要らん。自由なんやろけど変なやつに絡まれそうやし面倒臭い。機械の体の方がクソザコなメクジな宿主サマの生身より圧倒的に快適で楽やから、このまま居ることにする。反吐の出るなまっちよろいオママゴトはやりたくないしポンコツに任せるわ」やて!?! なんやの!?!
あの子反抗期なん!?!」

「違うと思う…:というかごめん、あの子ときみの内線を繋いで会話出来るようにもしてみたけどうるさいよね…」

どうやら無事に別の人格としてスペアの記憶野に定着することが出来たらしい。しかも優希は一瞬で内線の回路を繋いでシャドウの声がラビリスに届くようにしておくというお節介もしたようだ。

しかし出力の関係から全て京都弁で出力されたラビリスのシャドウである少女の初めての言葉はあんまりにもあんまりなものだった。要するにコミュニケーションはめんどくさいのでラビリスに任せ、出たい時に出てきて暴れる方式で一応の満足となったらしい。

すっかり少女本人が単品で存在する予定で色々と計画していた優希とメテイス、そして他の面々は出鼻をくじかれたような状況になった。

「ええよええよ。ウチもあの子と会話出来るの嬉しいし。あ、でも」
機械の身体で美味しゅうご飯が食べられるようにして欲しい”って言うて照れとる。ウチはアイギスやメテイスと比べて旧型やもんね

…ご飯なんて食べられるか分からんもん。気持ちにはわかるでー！」
アイギスとメティスは食物を経口摂取出来るがラビリスは試作機
だった為にその機能がついているかは怪しい。むしろついていない
可能性の方が高いのだ。

そのことを残念がつていれば優希が安心させるように頷いた。

「そこは大丈夫。元から予定に入ってる」

「？ なんの？」

なんの予定に入っているのかラビリスには分からなかった。

優希の考えていることがさっぱり分からないのに安心させるよう
頷かれても首を傾げるしかない。

「で、シャビちゃんはどうなったの!？」

「ナギサくんのところからウチの中に戻った、でええんかな？ 一応、大
丈夫みたいや！ もーめっちゃギャンギャン言うてるくらい元気や
から心配せんといてな！ 堪らんくらいうるさかったらウチも内線
をちよつとの間ミュートにしとくしー！」

「うわ、機械的解決方法だ…」

意外と物理的な遮断方法に奏子は口の端を引き攣らせる。ラビリ
スはラビリスで意外と容赦がない。

現在のこの力関係から見ると主導権を突然握られるかもしれない、
という心配はあまり無さそうだった。

とられたところでさして今のシャビリス——あの少女は暴力的な
問題を起こすつもりもないらしいことが分かるからだ。

ラビリスも突然奪われれば文句のひとつやふたつ言うかもしれない
いが、絆されている今、そこまで抵抗や問題はないだろう。

「姉さん、本当に何か変なところはありませんか…？」

おずおずとアイギスがラビリスを心配すればラビリスはニカツと
笑みを浮かべて親指を上立て、前に突き出す。

「ノープロブレムや！ まあ元々あの子はウチやしな！ …あれ？ ウ
チいつの間になんか覚えたんやっけ…？ ま、えっかー！」

自分のした仕草に首を傾げながらもどこかで知ったのだろうと流
したラビリスはぺこりと特別課外活動部に改めて頭を下げた。

「あの子がほんますんません…いや、あの子って言うよりウチでもあるから、ウチもすんません…自分の問題やのに皆さんを巻き込んで…」

「僕らは殆ど何もしてませんし、どちらかっていうとラビリスよりも三上さんと真田さんが勝手に暴れてたので気にしなくていいですよ。ね、おふたりとも」

天田がにつこりと笑いながら優希と明彦を交互に見れば、片方は素知らぬ顔。もう片方は、

「…気にしなくていいは同意だけど暴れてたについてはノーコメントで」

と顔を逸らしながら答えようとしなない。

「マ、とにかく無事に一件落着して良かったんじゃない？ …オレ、気分的に疲れたからもう寝てーよ…」

「確かに、身体は疲れてないけど…三上先輩が怖くて緊張してたのはあるかも。あの目、本気で戦いになるかと思った…」

今度こそもう帰ろう、と誰からともなく言い出し夜は深けていく。

こんなことがあったと言うのに現実の時間が殆ど進んでいないのはカダスが影時間以上に特殊な空間だからなのだろう。

だとしても時間を殆ど止めてしまえるというのは不思議この上ない。一体どういう仕組みになっているのか。

ひとりで考え事をしていた湊の気になる点は結局そこだった。

ともだち (12 / 18)

12 / 18 (木)

放課後

「……もしもし、聞こえますか……」

「……」

「力が欲しいか……?」

「……えっと……」

「……」

「……これ聞こえてるんならいまから遊びに行かない?」

「聞こえてるよ……なにやってるの優希……」

放課後。

溜まっていた追試も「今日の分は」終わり、居残りで勉強している朔間くんにもノートでメガホンを作りながら囁いていけば、ジト目で見つめながらため息を吐かれた。

これは呆れてる顔だ。間違いなく。

「いや……ちよつとやってみただけというか……」

ちよつとからかってみたかったなそういうのだ。

なんか、無性にやってみたかった。別になんでもない追試があるだけの放課後ではあったけど、この機会を逃せばできない気がしたからだ。

めちやくちやくだらしないけど。

「力がなんとかとか遊びに行こうとか……よく分からないけど、そういうの、僕じゃなくて妹さんとか弟くんとか……あとは同じ寮生の伊織くんとか真田くんにすれば良いのに……」

「いやほんと出来心で……ごめん」

迷惑だったよなあ、と謝れば朔間くんは目を丸くした。そしてその後すぐにバツの悪そうな顔になる。

「ええと、違うんだ。迷惑とかそういうことじゃなくて……僕にこういうことするの、優希らしくないなって。他にも試せる人が優希のまわりにはいるのに、なんで僕なのかって」

「？」

なんで、と言われても別に理由はない。

強いていうなれば――

「友達だから、じゃ理由にならない？」

「友達……？」

素直に言ってみたら朔間くんの反応は芳しくない。

「えー？ 友達イ？ マジー？」みたいな反応だ。むしろ友達だと思ってるのは自分だけとかそういうことになっていたりしないだろうか。

それならそれで自分はめちやくちや恥ずかしいやつだ。どうしよう。

「もしかして、朔間くんは俺の事友達とかだと思ってる……？」

恐る恐る訊いてみれば朔間くんは微妙な顔をしている。

なんというか当たりでもなければハズレでも無い、といった雰囲気だ。

「……僕、優希に友達だと思われてないと思ってた」

そうして絞り出されるように出された言葉に今度はこちらが目を丸くする番だった。

「え……友達だと思われてないと思われてたの俺……？」

どこか対応に不備はあったらどうか――と考えて不備しかないのを思い出す。

しかも先日はシャビリスが身体を使っていたし、朔間くんにも迷惑をかけていたと思う。

さらに電話番号を渡されたのに1度もまだ電話をしていなければ朔間くんとしての家も知らないし色々ゴタゴタしていたとはいえまだ友達として1度も遊んだことがない。やってる事は放置だ。放置。

さあ、と血の気が引くのを感じる。ヤバい原因なんてありまくりだ。朔間くんが付き合っている女の子とかじゃなくて良かったと思うものの、これは不味い。

モルフエとしてつきあってきた年数を考えるならば無視なんてしちゃいけないほどの関係で、こんなことを思わせるなんてまずやって

はいけないのに色々後回しにしてみました。

「甘えだ、これは。いやほんとにまずい。悪いことしまくってるじゃないか、自分は。」

「心当たりしか無かったごめん！ 本当にごめん！ 今日なんでも奢るからさ、穴埋めさせて！」

「ええ!? お、お金とか奢るとかそういうことがして欲しいわけじゃないか。」

「朔間くんに申し訳ないし俺がしなきゃ気が済まないんだって！ もう勉強とかいいよね!？」

「う、うん。ちようど勉強は止めて帰ろうと思ってたところだし…」

「じゃあ、どこ行く!? ちょっと遅いけど寮には連絡入れるし、今日は遊び倒そう！ 高校生男子の健全な遊びを楽しもう！」

立ち上がらせ、かなり食い気味に告げれば朔間くんは微かにはにかなんだ。

「なんか、勉強を大事にしないの優希っぽくないね」

「俺はなんだと思われてるんだ…?」

謎だ。

至って普通の男子高校生であって勉強はほどほどに派だ。

勉強大好き！ みたいに思われてるんだろうか。勉強はどちらかといえば苦手な方だと思うしテストの点数がいいのも授業で当てられても覚えているのは『繰り返し』というズルのおかげだ。

「這いずってでも学校に来るとかそんなイメージがある、かな…」

なにそれこわい。

「そこまで病的じゃないと思うんだけど」

「ほらこれまで優希ってば僕がモルフエとして中にいた時も学校だけは何かに取り憑かれてるみたいに行ってたし…あ、でもやさぐれてる人の真似をした時は行ってなかったね！」

やさぐれてる人の真似と言えば不良の真似みたいなことをしていた周の事だろう。

例の酒タバコは二度とやるまいと思った周だ。

あの時はなんかもう色々とどん詰まりになっててヤケになってい

て、学校に行かないという選択肢をとることになにか変わらないだろうかと思つていたけどそういうことも無く。

行かなかつたのはあの時くらいと言われるほどには自分はずいずいでも学校に行くヤバい奴だと朔間モルフェくんフェに思われていたということだ。

確かに、意識が無いとか高熱だとか特殊な事情がない限り学校に行くようにはしてるけど、そういうイメージを持たれる程だとは思わなかつた。ズル休みくらいひひいといとできる出席日数なら良かったんだけれども。悲しいかな、現実はそうじゃない。

「というか、困るかなつて思つて休んでる間の授業をノートやプリントに纏めて渡したけど休まなきゃいけない数日で全部写してそれを返してくるのも…僕的にはパラツと見て返して貰えればそれで良いかなつて思つてたのに」

「写したの駄目だったかな？」

流石にノート丸写しはダメだったのだろうか。パクつてる様なものだから、不快になるのはわかる。でも朔間くんのノート、自分のノートのつけ方と少し似ててわかりやすいんだよなあと頭の隅で言い訳をこねくり回す。

「違ふよ…この前ノート見させてもらった時に改めて思つたけど…：休んでるはずの期間のノートに僕のノートの写してる部分のところがあつてそこに更にプラスしてびっしり要点とか用語とか補足とか書いてあつて驚いただけ。なんで休んでないの？」

「休んでたよ!?!」

「毎回毎回あんなノート作つてたら休んでたなんて言えないよ!?!」

あんなノートとは失礼な。まるでこちらがとんでもないノートを作つていてと思われているみたいじゃないか。

れつきとした受験対策ノート、のはずだ。アレは。一応奏子や必要ないかもだけど湊に遺せるようには作つてある。

なるべく分かりやすく。見直した時に思い出しやすい構成にしているだけだ。

「ノートにページ数を記入して索引を作つてる人間とか初めて見た

…」

「た、たまたまだし…受験対策に作ってるだけだし…」

「…：僕知ってるからね、優希がこっちに転校してきてからずっとそういうノート作りしてるの。しかも全教科。あの頃はなんとも思ってたんだけどヒトとして生活してわかったよ。優希はヤバいしヘンだ！」

「う、嘘だあ」

「わざわざテキストの写真まで印刷して貼り付けて第2の教科書を作るのはノートをとるって意味じゃないんだよ!？」

「……………」

ひとつ言い訳をしたら100返ってきた。

確かに、ちよつとやり過ぎかなと思うこともある。けどもう授業は覚えてしまっていて暇になって仕方ないから今度はどれだけ分かりやすく理解できるノートにするか、というのが一種の楽しみというかチャレンジみたいになっているのだ。

恐らくそれを何周も続けていたからこそ、こちらに転校してきてから2009年4月になるまでの主体な意識だった『前回』の俺もとい、それを代行していたウィツカーマンも無意識にそれをやってしまっていたのだろう。

そして朔間くん曰く「ヤバい奴」が完成されたというわけだ。

「…：優希はさ、あのまま学校を休んでも良かったと思うんだ」

「でも出席日数が…ほら…一応卒業するには要るし」

「そういうところなんだって。それで死んだら元も子もないよ。いまもあんまり体調良くないんでしょ？ また、なんか顔色悪いし」

指摘され、そんなに顔色が悪いだろうかと疑問に思う。寒くて白く見えてるだけではないのだろうか。

「大丈夫だとは思うけど、風邪こじらせたらしらないように暖かくして寝てね」

「…：ああ、うん。気をつける。ところでどこ行く?」

歯切れの悪い返事を返せば朔間くんはムツとするが大きいため息を吐いて追及をそこで止め、一緒に帰ることにしてくれたようだっ

た。

「じゃあ、ワック行きたい。ワイルダックバーガー。僕、友達やクラスメイトとあそこに行ってみたかったんだ」

「了解」

教室を出て、道を歩きながら朔間くんがワックに行きたいと提案してくる。

こちらとしても小腹がすいていたのでその提案はありがたい限りだ。

「何食べる？」

「小さいポテトと普通のハンバーガーでいいよ。大きいのか食べきれないし」

「意外と少食なんだ…？」

「普通だと思う。そう言う優希はすごく食べるよね」

「うちはみんなよく食べるから遺伝じゃないかな。ああでも——最近、なんでか分からないんだけど更にお腹がよく空くようになってちやつてさ…喉も酷く渴くんだ」

そう、とても腹が空いて喉が渴く。

ヒトの食事程度では満たされない。

あの程度のもので、この身に足りるものではない。

「優希？」

マグネタイトとマガツヒが足りない。

足りなければ、降りることすら出来ない。

だからこそ、満たさなければ。

もつと、もつと、もつと、力を、

「優希！… 血が出てる！…」

「……っ！… え、あ…ごめん。何の話してたんだっけ」

顔を上げれば朔間くんが心配そうに片腕を掴んでいた。

さっきまでなんの話をしていたんだったか頭がぼんやりして思い出せない。たしか、ワックに行くという話をしていたような気がするのだがイマイチ確証がない。

そうやって困っていれば朔間くんはティッシュをポケットから取

り出すとそつとこちらの人差し指に当ててきた。

「違うよ！ 指、噛むから血が出てるの！」

「えっ、噛んでた？ 俺が？」

じわりと当ててもらっているティッシュに血が滲む。そこで口の中にも僅かに鉄の味が広がっているのを感じ、顔を顰めた。

どうやら本当に無意識だが自分で指を噛んでいたらしい。

「うん…ねえ、優希…だいじよ——」

「うーん、受験のストレスかな…」

何かを言いかけた朔間くんを遮ってしまった形になるが、ありふれた思い当たる理由のひとつをぼやけば朔間くんは大きく目を見開いた。

「えっ!? そつち!? それだったら尚更休まなきや！ ワックに行ってる場合じゃないよ！ ほら、絆創膏！」

「ありがとう」

思っていただけのつもりが声に出していたらしい。

絆創膏を受け取り指に巻く。

「まあ…冗談だよ、冗談」

「優希が言うとは冗談に聞こえないんだよ！」

「ならストレス発散の為に俺の遊びに付き合ってよ朔間えもん！」

「ワック行きたい！ ワック〜！」

「…しょうがないなあ」

「やったあ」

幼い子供のようにおどけて言えばしばらく思索した後朔間くんは折れた。

11月などは自分によくぼーつとしていたし、このくらいで帰った方がいいと言われるとこちらもなんとするか申し訳なくなってくるし遊びの機会を逃したということ自体に惜しい気持ちを感じてしまう。だからおどけて押ししてみればすんなり方針を変えてくれたのでありがたい限りだ。

それにしても朔間くんは押しに弱いのでなんとかなるとは思ったが、ここまでこちらに甘いと少し心配になってくる。こういうことを

させているのは自分なのだけれど。

無事にたどり着いたワツクのレジで商品を受け取り、朔間くんの待つボックス席に座る。

「はい、これ朔間くんの分」

「う、うん。ありがとう。ほんとにその量食べるんだ…」

そんな朔間くんの声をよそにいただきます、と手を合わせて包装紙を剥いて中身のパティが3枚入ったハンバーガーを齧る。

「ん？」

「もう齧ってる…すごい…」

明らかにドン引きしたような顔の朔間くんがこちらをチラチラと見ながら自分の分のハンバーガーへと手を伸ばし、丁寧に包装紙を剥いている。

慣れきったこちらとは違い、朔間くんは初めてだからか恐る恐る、と言ったふうに包み紙を触っていた。

どうすればいいのか分からないで困ったようにしばらく包装紙と戯れていた朔間くんがなんだか可哀想に見えてきたのでアドバイスをそつと出すことに決めた。

「紙は全部剥ききらずにハンバーガーの上の部分が出るようにこうやって剥くと食べやすいよ」

「そうなんだ。ありが…ってもう2個目!? ねえ、ちゃんと噛んでる? 喉に詰まらせちゃわないの!？」

「噛んでるよ。大丈夫」

まるで荒垣^{オカ}くん並の朔間^カくんの心配にいつも通りだから気にしないでと伝える意味で返事をする。

出会ったばかりの時の荒垣くんもこちらの食事の早さにそうやって心配してきたな、懐かしいなど過去に思いを馳せていれば同時にこの周で荒垣くんと初食事はカツアゲしてきた不良をしばき回したあとのうみうしの牛丼だったなど思い出して憂鬱になる。

あの凶行は荒垣くんバレていなければ良いかと願っている。そ

れに喧嘩を売ってきたのはあっちだし自分は何も悪くない。うん。正当防衛ですー！

「優希ってばまた変なこと考えてない…？」

「な、なんでそれが。へへへ、変なことじゃないし！」

どもりながら否定すれば朔間くんはちよびつとだけ齧ったハンバーガーを下げて、考えていた内容に関しては気にする素振りもなく答えてくれた。

「顔、かな…あと食べるの止まってるから？」

「なるほど…」

不覚である。

どんな顔をしているんだと窓ガラスを見るも、外に向けて張り出されているポスターでガラスが塞がっていて何も見えない。

まあいいか、とどうでもいい事はすぐに流して齧り掛けのハンバーガーをまた齧り始める。

「そういえばね、この前…タカヤに会いに行っただ」

「ふーん…」

朔間くんはタカヤに会いに行ったらしい。

ん？

「えっ？ タカヤに…？ 朔間くんが？」

「うん」

どうしてそんな、唐突にと言わざるを得ない。しかし問いかけをして直ぐ、無意識に口の中にハンバーガーを持ってしまってしまいもう齧ってしまった後だ。

よく噛んで飲み込むまで喋ることが出来ない。

「この前、優希が銀髪の女の子に身体貸してたでしょ？」

喋れないので頷く。

「あの時、僕は優希のなんなのかってその女の子に訊かれて…僕って優希のなんなんだろうって考えて…それで…その、」

暗い表情になった朔間くんはまだ半分も食べれていないハンバーガーを持ったまま視線を下に落とす。

「僕は、優希にとって居ない方が良いんじゃないのかなって思ったん

だ…」

「!?」

唐突な告白に驚くと同時によく噛めたハンバーガーをゴクリと飲み込んだ。

「…なんでそう思ったのか訊いても?」

「僕が居たせいで優希は辛い思いしかして来なかった、から」

「そんなことない。朔間くんが…いや、モルフエが居たからこそ俺は気が狂れることなくここまで頑張れた」

実際、モルフエが居たことによつて自分が後悔していることは何一つ無い。

自分に起こったことは自分が引き寄せたものばかり。なら、そこにモルフエが気に病むようなことはなにひとつない。

そう思う原因もない。

そしてモルフエがいなければ自分は周回の初期も初期に気が狂れておかしくなってしまうていただろう。

「なのにそう思わせてしまったのは俺のせいだ。…ごめん。言葉とか、行動とか、気持ちを伝えるためのものが色々足りてなかった」

「ち、違うんだ! 謝って欲しいわけじゃ、ない。優希が悪いわけじゃないから…」

「それでも、俺はきみを蔑ろにってしまった。いまの俺にはみんながいるけど、これまでの——モルフエという存在には俺しか居なかったのに」

^{三上優希}有里渚という器に詰め込まれ、外を見ることしか出来なかったモルフエの気持ちを自分は同情しかできない。

自由に動けず、宿主はぼんぼん気軽に——ではないが死んでいくのだから見たくないものも見たかもしれない。その拷問めいたそれを受けながら、モルフエもよくここまで一緒に来てくれたものだ。

さらにここに来て要らない力を使って要らない物をこちらから食べさせられて気が狂いそうになってモルフエという存在の得た心とは相反する行動を取ったり傷つき苦しんだりしたのはこちらのせいだ。

それも忘れ、目的の達成がもうすぐなのだからと蔑ろにしていた自分是最悪だ。

モルフエも、朔間くんという存在も、友としてもっと大事にすべきだったのだ。

「……僕、優希が喋る前に言っておくね。色んなことが起こったけど全部が優希のせいじゃないから。だから、謝らないで」

じっとこちらを見つめてきていた朔間くんは急に声を低くしてそう言ってきた。

その事に言わんとしていたことを予測されていたという驚きよりも何と話すべきなのか分からなくなって押し黙る。

「なんだか優希が他の人から言われてたこと、僕もわかった気がしたかも……」

そう言つて、朔間くんは苦笑する。

「——優希も僕も、お馬鹿さんなんだね」

小さく息を吸って目を逸らした朔間くんの意図が読めない。

どうして突然馬鹿と言われたのか、皆目検討がつかないのだ。

よく分からないまま、まだ黙っている自分に対して朔間くんは不快になっていく様子を見せずに——むしろ言うか言わざるべきか悩むように視線をさまよわせたあと、何かを決意したように真っ直ぐこちらを見つめて口を開いた。

「タカヤの所に行ったのは、僕のヒュプノスとしての力をタカヤのペルソナにあげる提案をしに行ったから。力を渡したあとの僕はただの人間になってしまうから、影時間に関わる記憶——モルフエとしての記憶も全部消えて別人になっちゃうかもだけど、その方がいいのかなって思ってたんだ」

頭がくらくらした。

朔間くんが——モルフエが、消える？

「だ、駄目だ。そんなことはしちや駄目だ」

つい、口からそんな言葉が零れた。立ち上がり、下唇をかんで下を向く。

(嫌だ)

ああ、駄目だ。朔間くんが望んでいるのなら、
(嫌だ)

認めないといけけないのに。止まらない。

(消えるなんて許さない)

周回の記憶なんて言うこんな辛い記憶、朔間くんだけ捨てたいだろう。

「絶対に嫌だ」

朔間くん自身のためにもタカヤのためにもなるのに。

なのに何故か認められなかった。

こんな記憶は消えて、自分の事も忘れて友達も他に沢山作った方が絶対いいに決まってる。

なのに何故嫌だと思うんだろう。

その方がよっぽど素晴らしいことなのに、どうしてみつともなく嫌だと縋っているんだろう。

「う、うん。タカヤにも断られたからもう言わないよ」

「……」

立ち上がってしまったこちらに驚いたのか、朔間くんは眉を困ったように下げるとそう告げた。

タカヤも断った、とは言うが自分の行いのせいで朔間^{モルフェ}くん^{フェ}にそう思わせてしまったこと自体が許し難い。もし、タカヤが首を縦に振っていたら。ここに朔間^{モルフェ}くん^{フェ}はいなかった。

微妙な距離を保ったただのクラスメイトの朔間くんだけが存在していたかもしれないのだ。

それを知らずに話しかけ、何も覚えていないという事実を知ってしまったら。

自分は正常ではいられなかっただろう。

「だいじょうぶ。だからそんな…不安そうな顔をしないで。ああ、ハンバーガーも落としちゃってるし…トレイの上だからセーフかな？」
ハンバーガーをトレイが汚れないように起き直して口を開く。

「……ごめん」

こんなことなら、囲って、閉じ込めてしまえば良い。自由にさせな

いで、ずっと、ずっと、一緒に居ればいいんだ。そうすれば、消える
ことがない。

喰らって再び同化してしまえば永遠に離れることなどないのだから、それでいいようにも思える。

本当に？ それで良いのだろうか？

なんだか、良くはない気がする。違う気がする。

正しくない。ヒトとしてその思考は異常な気がした。

「謝るほどのことじゃないから良いよ。でも、きつといま優希が抱いた気持ちって優希に対して弟さんとか妹さんとか：僕やみんなが向けるものと同じなんじゃないかな」

朔間くんの言葉でハツとする。

消えて欲しくないと自分が思う気持ちは、湊や、奏子、みんなのものと、

「…同じ、もの」

「うん、多分、同じものだよ。僕もまだ、人間のことはわからないけど。それでも僕だって優希に消えてほしくないし死んでほしくないよ。それだけは、僕も——ずっと昔からちゃんと持ってる」

とはいえ、それがわかったとしてどうなるのだろう。

自分の場合は避けようがない。生きれる道を探すとは言ったものもう決まりきっている結末が見えている。どうしようも出来ないんじゃないのか。

理解を示すことは可能になった。けれど、何者にもどうすることもできるわけがない。

「無理だ。俺というニンゲンが死ぬのは避けられない」

そんな気持ちから、素直に朔間くんへと否定を吐き出してしまふ。

傷つけることになる。けれど否定しなければ夢を見てしまふ。

縋ってしまふ。

自分のように。

「大丈夫だよ。きつと、なんとかなる。色んなことを変えられるんだって優希が僕やみんなに見せてきたんでしょ？ なら、大丈夫なんだよ！」

大丈夫だ、と連呼する朔間くんは何か必死になっているようにも見えた。

自らとこちらにそう思い込ませようとしているような——自信をつけさせようとしているような。奏子がこちらを励ます際に連呼する無根拠な根性論にそっくりな主張になんとなくこちらもそんな気持ちになってくるような、ないような。

「そう、なのかな」

「そうだよ！ もう時間を巻き戻したり繰り返したりはないかもしれないけど、

それでもきつとなんとかなるよ！ 出席日数も！」

凄まじいゴリ押しのようにも感じられる朔間くんの言葉に段々そう思えてくる——訳もなく、サツと頭が冴える。

「いまからでも出席日数がなんとかなる!? それは…ならないんじゃない…?」

「……そうかも。ちよつと言い過ぎたかな」

流星にそれは無理だろうと冷静にツツコめば、朔間くんが苦笑いした。

出席日数は今でさえギリギリなので、これ以上休めば生き残ったとしてももう一度三年生をやり直すことになる。

覚悟の上だがなるべく回避したいと思うのはおかしくないはずだ。そういう思い切りの無さが悪い部分だと思いつつも、すべてを捨てる世捨て人みたいな生活ができるのはもっと才能があつたり努力していたり覚悟が決まりきっている人間であつて。

ここまで否定してみたが、学校をサボりつつ単位を取得する方法なら無いこともない。

「いや…担任やクラスの人みんなをせんのだ…おっと、認知の書き換えをすればワンチャンあるかも。要は出席してればいいんだよ。出席すれば」

「優希ってば今サラツと洗脳って言いかけなかった!？」

「…ソナナコトイツテナイデス。とにかく教室という場所を一種の異界みたいなものにしてクラスの人みんなや教師陣の認知を書き換えて

常に俺が居るってことにすれば理論上は可能なんだけど…外から見たら居ない存在を居るものとして扱ってることになるし明らかかな異常だしな…普通に替え玉用意して俺のガワ被らせた方が楽そう」

「流石にそのズルの仕方は怒られちゃうんじゃないかな…あ、でも今の優希が何かしても気がついて怒れるヒトなんて居ないか」

誰にもバレないね！ とにっこりと無邪気に笑う朔間くんには悪いが集団的な認知の歪みというわかりやすい異常が発生した場合、アザミさんとライドウくん達クズノハやヤタガラスのサマナーが気がつかないわけが無い。そもそも勘のいい朝倉先生が先に気がつくかもしれない。

そしたら怒られるだけじゃ済まないだろう。

よって、この案は却下だ。

「残念だけど居るんだな、これが」

「居るの!？」

「知り合いに何人か…」

「居るんだ…」

あと、この手の話の弱点は他の人間と認知の書き換えを行った対象の話の辻褄が合わなくなるどころだ。

他人から話題に出されたら終わる。それなら替え玉作戦の方がよっぽどバレにくい。

変える玉がないのでどうにもならないが。

ドツペルゲンガー、どこかに居ないかなと思うものの、顔を合わせたら死ぬらしいのでノーサンキューだ。

「まあ、ズルはダメってことかな。適度にやるよ」

「うーん、優希はこれまで頑張ってきたんだし、ちよつとくらいズルしてもいいと思うんだけどなあ」

むしろこの『繰り返し』が出来ている状況自体が大きなズルなのではと思わないこともない。

他にあとひとつだけ、自分に都合のいいように物事を動かせる方法があるにはあるが、人道に反しているどころか並みの悪魔ではその資格すらないような突拍子もないことなので出席や単位くらいで使う

気にはなれない。

「これ以上単位とか出席日数とか受験とか考えるのやめよう。センター1月だし…もつと楽しい話をしよう!」

朔間くんはどこの大学受けるのか、どういうことがやりたいのか等等など気になるがこれ以上学校に関する話をしていると思考が良くない方向に行きそうなので却下だ。

「楽しい話って言われても…あ、そうだ。優希はクリスマスの予定は空いてる? 24日か25日のどっちかでもいいんだけど」

「予定は…まだ決めてないなあ。でもどちらかは用事が入るかもしれないし空けてたい」

一応、美鶴さんの都合がつけばだがクリスマスデートのようなものをしようかなとは考えている。せつかく武治さん公認の許嫁もとい恋人にはなったのだしちゃんとしたデートのひとつやふたつはしないとダメだと思ったからだ。さすがにそれをしないで死んだら幽霊になって出てくる自信がある。

けれどまだ予定すら妄想の段階であるし、絶対に一日中予定が入る! という訳でもなく。

たしかハッキリと決まってる予定として25日の夜はクリスマス女子会(コロマルのみ参加可)の予定があつて男子はラウンジ利用禁止の通達が来ていて、強制的に外出するか部屋に籠るかを選ばなければならなかったはずなので何かに誘ってくれるのなら都合はいいのだ。

「25日の夜なら不測の事態がなければ空いてると約束できるよ。で、何するのさ?」

「えつとね、もし予定が空いてたらクリスマス会っていうのをしてみたいになって!」

恥ずかしそうにそう告げてきた朔間くんの要望は至つて普通の事だった。

その日は女子もクリスマス会するし。いいと思う。

「僕、そういうことにもちよつと懂れてて…でも1人するのはなんだか恥ずかしかったり勿体ないなって思っちゃって」

「わかる…わかるよその気持ち。なんか1人だとクリスマスになってモチキンとかケーキ食うかなとか思わないんだよね」

寮に入らずアパートで暮らしていた周は家に帰れば結局1人だったので季節の物事に対しやる気がかなりなかったように思える。

旬が過ぎて安売りになったクリスマス後のケーキや半額になった節分豆を買うのは好きだったけど。

「だからね、優希と…もし良ければなんだけどあの寮にいる真田くんとか誘ってくれたら嬉しいなって…」

「？ 真田くんも？」

「うん。優希とふたりもすごく楽しいと思うよ！ でも、クリスマスって大勢で祝うんだよね？ なら、他の人も居た方が良かったんだ」

「なるほど」

理屈はわかる。というかそういう催し物は人数が多いほど楽しいものだ。

だが、

「都合がつけばタカヤ達も誘ってみる。あ、伊織や綾時くんや湊とか大丈夫？」

「彼らのこと…？ うーん…ごめんね。他の人はともかく…優希の弟のことは…僕、苦手かな」

一応誘うかもしれないという意味でそう訊いてみたが朔間くんの反応は芳しくない。

話によると湊に対して敵意や苦手意識を見せていたらしいので確認のためにということだったのがこれは誘わない方が良さそうだ。

「でも…いいよ」

「何が？」

誘わないことを決めた瞬間に朔間くんがそう答えたので首を傾げる。

「彼のこと。そろそろ僕も前に進まなきゃ。…それに、優希の弟だもん。僕が思ってるより悪い子じゃないに決まってる」

よく分からないが湊を呼んでもOKということになったらしい。

知りうる限りの知り合いを呼ぶべきか悩むもののは朝倉先生とか藤堂さんとか会えるとも来るとも思えないが神条さんとかくらいしか居ない。神条さんを呼べばどんな空気になるかは火を見るよりも明らかなので呼ばないけど。

モコイさんが居ればきつと朔間くんも喜んだだろうが見える形では居なくなってしまうたし、モコイさんを除いた大人組はかなり微妙な人選な気がする。

そもそも朝倉先生も藤堂さんも忙しいと思うのでこの案は却下だ。「じゃあ、できる限り声かけとく。全員が来てくれるかは保障しかねるけど」

「だいじょうぶ。ごめんね、突然変なこと言って」「季節的には変じゃないからセーフ」

もう街はすっかり街はクリスマス気分だ。

あと一週間ほどでクリスマスになるというのだから、クリスマス飾りやイルミネーションがそこかしこに設置されている。

明るい電飾で無気力症が大流行している暗い雰囲気の間も少しは華やぐというものだ。

ただ、やっぱり無気力症の人間は『これまで』と変わらず減らず、病院での収容数が増えているとニュースでやっていた。

町中の空気からして生体マグネタイトはともかく、マガツヒの変動はかなりある。徐々にだが増えてきている。

それが先日の青山霊園での悪魔の活発化であったり穢れの触媒としてあらわれているのだろう。専門家ではない自分にはどうすることもできないので見ていることしかできないが、この事態はニヤルラトホテプかシュブニグラスの影響もしくはそれらの下準備にしか見えない。

予測に過ぎないが別の可能性を考えるなら本来降りてくるはずだったニユクスという神本体もこの星にはマガツヒなしに顕現できないので自動的にマガツヒを集めるための機構が働いているか、だ。

何者も感情や願いといった精神的なエネルギーを触媒にしているのはまず間違いない。

「優希？」

「なんでもない。そろそろ遅いし帰るよ」

ハンバーガーを平らげ、包み紙を丸めて立ち上がる。

やらなければならぬことはまだまだある。いろんなことが避けられないにしても、準備はしておいて損はない。

「今日はありがとう。それと、これまでごめん。改めて、俺と友達になっけてくれないかな」

帰り道。寮と朔間君の住んでいるマンションまでの分かれ道で恥を忍んでそう告げてみた。

手を出してみればきよんとその手と顔を交互に見つめて朔間くんはいつものようにはに cand で握手を返してくれた。

「うん。これからもよろしく、優希」

朔間くんを改めて友達としてやり直す。残り一カ月ほどだが、それでも。

特に何かを話すこともなく。そのまま手を離して朔間くんは別れを告げて去っていったので自分も帰路につくことにした。

突撃！ 隣の幽霊屋敷（12／20）

12／20（日）

昼

東京都内某所 倉橋邸

「広いな…」

大正時代のレトロな外観を擁する洋館と隣接するように敷地内に設置してある立派な蔵を正門から眺めながら、溜息を吐く。

ラビリンスの問題を半ば無理矢理のように解決させたあとの、放課後の追試祭りを乗り越えやつの事で迎えた日曜日。

母方の祖父——倉橋黄盛から受け継いだものであるもののひとつである東京の倉橋邸を訪れた。

用事は荷物の整理と悪魔関係の代物が無いかを確認するためという自己満足なものだが、敷地内に足を踏み入れた瞬間の異様な気配と言うべきか、その臭いに違和感を感じた。

カビ臭さは勿論あるだろう。だが、母の生家であり倉橋翁が最近まで住んでいた家だというのに甘く、蕩けるような澱んだ空気の臭いにするのだ。

これは——そう、異界である悪魔の巣と似通った血なまぐさいものだ。

どうしてそういう臭いをするのか。

一応、倉橋翁が死んでからアザミさんやクズノハ、ヤタガラスに雇われた他のデビルサマナーなどが調査の為に何度か出入りしており、それが済んだから好きに出入りしてもいいという許可が降りたはずなのだ。

何も無いから安全だと言っていたのでは無いか。それとも、これは自分が感じているだけでさほど危険なものでは無いか。

（考えていても仕方ないか…）

結局動かなければどうにもならないので鍵を取りだして正面玄関を開ける。

まずは館の換気からだ。埃っぽいと咳が止まらなくなる。それだ

けは勘弁したい。

ぐ、と扉に力を入れて開けた先に広がるのはエントランス。

「うわっ!?! けほっ! けほっ!」

ぶわりとホコリが舞い、思わず咳き込む。マスクでも持ってきた方が良かったかもしれない。

パーティーホールかと思うくらいには広い洋風のメインホールは豪華としか言いようがない。だが間違いなく住みやすくないだろう。

なんというか、広すぎて慣れない。美鶴さんなら平気そうなのだが自分はどうも普通の家が好きだ。

脇のよく分からない台には値段の分からないとにかく高そうな花瓶や謎の像、壺が置いてあり、端には職人の手作りであろうアンティーク物の椅子があった。

しかしその全てにうつすらとホコリが積もっておりもったいない。というよりこの屋敷には倉橋翁以外誰もいなかったのだろうか。

少なくとも、お手伝いさんや使用人くらい居ないとろくに生活も出来なさそうな広さなのだが、中は蜘蛛の巣が張っていたりホコリが山ほど積もっている場所もあってか少なくともここ最近誰かが生活していたようには見えない。

祖父はどうやって暮らしていたのか。疑問が浮かぶレベルで人の活動していた痕跡がないのだ。

一人で来たことを若干後悔しつつ、防犯上悪いかもかもしれないが背に腹はかえられないので正面玄関を開けっ放しにして換気してから二階へと上がる。

電気をつけて歩いているがそれでも何故か薄暗く、気味が悪い。

下手なお化け屋敷よりもお化け屋敷地味ているような気がする。音を上げるのが早いかもしれないが、本格的に一人で来たことを後悔してきた。

本来なら、人のたくさんいるべき屋敷にこう、自分以外誰もいないと怖くなってくるのが人間の性ださがと思うのだ。モコイさんでもいれば心強かったのだろうが生憎まだこちらの自由で会話出来る状態で

もない。

ギシギシと鳴る廊下を歩きながら、ひと部屋ずつ見て回り、窓がある部屋は窓を開けていく。帰りにまた閉める作業があるのでなるべく早く往復したい。昼間でもなんとというか薄暗いのに、真っ暗な中電気を頼りに窓を閉めて回るといふのは恐怖以外の何物でもない。悪魔が住んでいても「でしようね！」で終われるレベルで不気味なのだ。この館は。悪魔なら殴れるだけまだマシか。

幼少の母はよくこんな館に住めたもんだと感心する。いや、逆か。よく母はお嬢様をやめて普通の主婦になれたな、と言うべきなのだ。

倉橋のこの屋敷ははっきり言って土地の広さでは敷地内に別邸もある桐条本邸には負けるだろう。だが、屋敷の大きさは負けず劣らずこちらはかなり広いものだ。本邸のみで勝負するならいい勝負ができるだろう。

そして、先程も思ったようにお手伝いさんや使用人が沢山いたはずなのだ。母が幼かった頃は確実に。そんな母が使用人もお手伝いさんもない環境になぜ飛び出そうと思ったのか。

倉橋翁は娘を溺愛していたらしいが、武治さんみたいなタイプでは無いらしい。どちらかと言うと手元に置いて縛り付けるタイプだったとか。

となると、母が祖父に嫌気がさしてこの家を飛び出した可能性の方が高い。

勝手に考えるのなら、だけれども。

数ある部屋を換気して回り、何かめぼしいものが無いかざっと見たが「臭い」の発生源とみられるものは無さそうだった。

かつての母の部屋らしきものや、倉橋翁の妻であった祖母の部屋がそのままにしてあったのを見てなんとも言えない感情が込み上げてきた。

ホコリはたしかに積もっているのだが、その量は明らかに少ない。蜘蛛の巣もかかっておらず、他の部屋よりも綺麗に見えるほどだった。恐らく、このふたつの部屋は使われていなくとも定期的に掃除さ

れていたのだろう。

そこに、倉橋翁の執着のようなものを感じると共に、あれだけ偏屈でなければ今頃——とありもしない想像をしてしまう。

母に絶縁されてから、祖父である倉橋翁は狂ったという。だが、自分を——有里渚と名付けられた赤子を蘇生させた時の倉橋翁はまだ狂っていないかったのだろうか。あのような外法を知っていたというの？

湊と奏子が生まれたあと。倉橋翁と自分達は会ったことがあるのだろうか。

母が倉橋翁と絶縁したのはいつなのか。何も分からずじまいで口封じをされてしまったが為に疑問が残る。それを知ったところでシユブニグラスになにか抵抗出来るきっかけになるとかそういうことは全くなく、本筋からある意味外れていることではあるのだが、自らの出自に関わることを知れるチャンスというのを逃すのはなにか惜しい気がした。

逆回りに部屋の窓を閉めながらわざと残しておいた書斎へと向かう。書類関係はそこに置いてあるだろう、とアザミさんも言っていたのでそこで何かを見つけられれば僥倖だ。

金のノブを回し、書斎へと入る。2mはあろうかという真つ赤なビロードのカーテンが窓を覆い、部屋の中は真つ暗だった。

一応、電気はあったのでそれをつけ、その分厚い遮光カーテンを開けて窓も開ける。冬の寒い空気が暖房をつけていない部屋に入り込むが我慢して暫く換気を継続する。

五分ほど空気を入れ替え、書類が飛んでいってはいけないので窓を閉め、そうしてようやく書斎にある引き出しのついた大きな机へと向き合う。

艶やかで深い色をした木目の綺麗な机だ。本当に、この館にあるものの値段を想像するだけで恐ろしい。普段使いなど以ての外。傷をつけた日には立ち直れなくなりそうだ。倉橋翁は性格の悪い狸——否、狐だったらしいが物は乱雑に扱ったりということは無かったようだ。

この館にあるもの全てがホコリを被っているものの傷もなく綺麗に残っているというのはそういうことなのだと思っている。

思いを馳せるのはそこそこに文字がはつきりと見えるよう眼鏡をかけてから引き出しを開けて、ぎつと書類を確認する。

「……うーん……」

よく分からない。

というか難しい書類ばかりで知りたいものでは無いことくらいしか分からない。下手にいじくると権利関係でまた面倒なことになりそうなのでそのまま戻していく。

引き出しの中にはめぼしいものが無かった。

机の上を確認する。辞典のように分厚い本が数冊と写真立てだ。

そこには、色褪せた家族写真のようなものが写っている。

藍色の髪の少女と、その両親らしき人物。

色白な少女は奏子そっくりな顔で天真爛漫に笑い、父親はしかめっ面をしており母親は優しい笑みを浮かべている。

これは、きつと産みの母である倉橋琴音有里と祖父母の写真だ。

祖母は母の幼い時に亡くなってしまったという。倉橋翁は家族全員の写ったこの写真を仕事場であるこの書齋にずっと飾っていたのだろう。妻と娘を愛していたが故に。

もし、妻と娘の早すぎる死がトラウマになつていたら。その上で悪魔の誘惑を受ければ永遠の生を求めても仕方ないだろう。

ヒトはこういった状況に陥った時、だいたいはふたつに別れる。

死んだ妻と娘を生き返らせようと外道に堕ちるか、自らが永遠となれば死は怖くないと開き直ってしまうか。その果てに記憶の磨耗で失いたくなかったものまで忘れてしまったとしても。

倉橋翁は救いようのない人間だ。そう成り果ててしまった。素面で殴られた自分のこともだが、悪魔化したあとも奏子や湊、みんなにしようとした仕打ちに同情はできない。

自分に対しては、『本物の有里渚ではない』と分かっていたからこそあの言動だったのだと今はわかる。倉橋翁は正しかった。自分は、本物ではない。偽物だ。

倉橋翁はある意味人間らしい人間だったのだらうと今は思う。悪魔の誘惑を跳ね除けられないほどに弱りきった心。臆病で権力に固執し、弱いものには横暴。けれど家族には他よりかはマシだった、と。程度は違えどよくいるニンゲンそのものだと思ふのだ。

だから、ツケを払った。それだけの話だと思ふ。

そして自分も積み上げてきた罪のツケをもうすぐ払わなければいけない。行き先はきつと地獄ですらない、完全なる無かもしれないがそれでもいい。自分の願いは最初からひとつだけ。

「奏子と湊を救い、この繰り返しを終わらせる」ことだ。

夕方

館部分にめぼしいものは何も無かった。

収穫といえば幼い頃の母の写真と、若い日の祖父母や母の写真が沢山入ったアルバムを見つけたことくらいだろう。

持って帰って奏子と湊に見せようとアルバムを背負ってきたリュックに入れ、おやつ代わりにコンビニで買ったおにぎりを適当に頬張ってから（もちろんゴミは上着のポケットに入れた）館の戸締りを終え、蔵の方を物色しようとした瞬間ムワツとした臭いが鼻についた。

甘くさい。かなり血なまぐさい。

しかし蔵の中は至って普通だ。本が置いてあったり、館の中以上に訳の分からない物が置いてあるだけで臭いの発生源があるような感じではない。

（あれ…？　なんだ、この違和感）

懐中電灯を片手に探索して思っていたが、記憶の中にある蔵となにかが違う。

というか、「自分」の生まれた場所はこんな場所だったのだろうかという違和感がひたすら渦巻いている。

こんな、普通の蔵のような内装では無かったはずだ。

もつと、こう、レンガ造りでワインボトルのようなものが保管され

ていて、決してこんな土壁の蔵ではなかったはず。だが藤堂さんはたまたま出会ったアザミさんと共にここで安倍家のトンデモ書物を見つけたと言っていた。

（さてよう？ たしか、蔵は蔵でも隠し部屋があるって…）

隠し部屋があるのなら、もちろん調査が入ったのだろうがその時にこんな噓せ返るような臭いに気が付かないはずがない。

と、いうことは調査が終わって自分がここに来るまでの短期間のうちに新たな悪魔が根城にしたとでも言うのだろうか。

有り得ない話ではないがクズノハによる雑魚悪魔が入れないような結界の設置がされていて悪魔除けはされているし、大体の危険物が持ち去られたこの場所に悪魔が好むようなものがあるのだろうか。

とにかく、その隠し部屋とやらを見つけないならならぬ。

そうしてしばらく臭いを辿れば床の石畳の、普通なら捲らないだろうと思われる位置にレバーが隠してあり、それを引けば本棚が動いて地下への階段が現れた。ビー・シンフル号の業魔殿へと向かう地下階段と似たような仕掛けにも見える。

絶対大正時代の技術じゃないだろ！ と言いたくなるようなギミックがたかが蔵についていてちよつと興奮し、気分はお宝探索隊だ。

懐中電灯で照らしながら階段を降りれば見た事のある光景が広がっていた。

レンガ造りの地下室。床にある掠れた血の跡。

ここで自分は生まれたのだ、とビリビリと感じる。

そつと床を撫で、目を閉じる。

冷たい床だ。

周りにあったワインボトルは無くなっているので倉橋翁が飲み切ったかクズノハに回収されたかしたのである。だが、臭いの発生源はここじゃないということも分かってしまった。

確かに臭いは外や上よりも更にキツくなっている。けど、ここじゃない。まだなにか隠し部屋のようなものがあるはずだ。

ぐるぐると臭いを辿りながら部屋の中を細かく調べる。

そもそもその筋の専門家であるアザミさんたちクズノハやヤタガラスが見つけられなかったのだからズブの素人である自分が見つけられる確率なんて高くない。

けれどなにか呼ばれているような、そんな気すらしてくるほどに臭いは強くなつていく。

レンガ造りの壁の向こう。そこから臭いが洩れてきているような気がする。しかしさつきと違ってスイッチのようなものは見えないし、壁に隙間のようなものも見えない。

触つてみても壁になにかヘンなどころはない。ひたすら、臭いが壁の向こうからするがこの隠し部屋その1から行けそうにない。

(館のどこかに隠し通路みたいなものがある、そこからこの部屋の隣にあるかもしれない空間に繋がっているとか……?)

いや、そもそも何のためにこの隠し部屋の横に空間を作ったのか。こんなに血甘なまたぐるさい臭いが充満しているということは既に何かがあるということではないのか。

何かを封印しているか、既に何かの根城になっているか。そのふたつの可能性がある。

前者は封印されていてもこんな臭いが漏れ出るほどに冒瀆的で強大な存在という可能性もあるのだ。

これはアザミさんと呼ぶべきか。

携帯電話を取り出し、電話をしようとしたが圏外の文字。

仕方が無いので蔵の外に出てから電話をかけようと、隠し部屋から上にかかる階段を上がろうとした。その時、

「うわ!」

つまづいて転けた。

床に崩れたレンガの一部が落ちていたらしい。そのまま床へとスライディングした自分は手のひらを擦りむいた。

地味に痛いし血が出ている。こんな衛生観念もクソも無さそうな場所で怪我をしてしまうというのは地味にやばい。

カビとか変な菌が傷口から入って膿んだら大変な事になる。

身体自体は自分がどうせ死ぬからと色々やっているせいで体力面

でも抵抗力的な意味でもかなり弱ってきているからだ。

救いなのは影時間やマガツヒの濃い異界だと不調が嘘のように楽になることぐらいだろう。身体自体があちらの世界に順応していると言えればいいのか。存在自体があちらへと寄せられていると言えればいいのか。複雑なところだが戦えなくなるよりかはマシだ。

そう考えながら立ち上がろうとするもふらついたので壁に手をやって支えにする。

(……?)

ふ、となにか空気が変わった気がした。

臭いがさらにキツくなる。

それを辿ればぽっかりと先程まで壁があった場所に人がひとり余裕で通れる通路が口を開けていた。

何故、突然。なにかギミックを触ったとかそういう感触は無かった。だというのに、どうして。

高度な認識阻害の術かなにかの類でもあったのだろうか。

困惑しながらもアザミさんに連絡しなくてはということをつかり忘れて引き寄せられるように通路を進む。

恐る恐る明かりのない真っ暗な通路を懐中電灯の明かりを頼りに進んでいけば、突き当たりに部屋があった。

足を踏み入れた瞬間一気に部屋内の燭台に灯りが点り視界が明るくなる。

そこは先程までいた隠し部屋とはまた違い、レンガ造りではなく館の内装と同じく古めかしい洋風の造りになっていた。

そしてその部屋の真ん中に宝石店や美術館で指輪を飾るようなショーケースがひとつだけ設置しており、その真ん中に五芒星をあしらったマークの刻印された少し大きめの黒い革で作られたリングケースのような箱が置いてある。ちなみにガラスやプラスチックの覆いはないタイプだ。

それ以外にかつて見たものと似たデザインのワインボトルや何かの道具がチラホラと見えるがショーケースの周りには何も置かれてない。

それはそれとして異様なのがこの部屋のどこにもホコリがなく綺麗すぎる点だ。母や祖母の部屋よりも綺麗かもしれない。

この頭が痛くなるほどに充滿している血甘ったるい匂いなまぐささの原因がこの部屋にあるとは思えないほどに綺麗だ。もつとこう、腐肉だらけ骨だらけの悪魔の巣を想像していたのだけれども、不快というよりむしろとても居心地がいい。

そんなことをぼんやりと思いながら部屋を見回していたその時。

——チャリ、

「！」

何かが動く音がして振り向いた。

「せ……いめ……え……アア……やつと……」

目の前にいたのは、黒い霧だ。

人の形をした——否、人の形を保てなくなったマグネタイトの集合体。スライムにすらなれなかった悪魔の残り香か。無害とも有害ともいえないそれが抱き着いてきた。

何か人名のようなものをしゃべってはいるがまともな人間で無いのは確かだろう。

辛うじて「清明」と聞こえたので遠い遠い先祖の安倍清明が使ったとされる式神の成れの果ての可能性もある。

近代化に伴い神秘が薄れ平和な時代になって式神の「力」としての役割がなくなり、また使われる時まで分家の御屋敷の倉庫の地下に封印されてずっと主人の帰りを待っていたのなら健気なものだと思う。あくまで想像だが。

「……さ、ア………、そ……」

こちらが何をするでもなく、ショーケースへのつぺらぼうの顔とも呼べない面を向け、のろのろと腕を上げて指差すとそのまま力尽きてしまったのか人の形すら保てなくなった黒い霧は地面へと落ちる。

もはや言葉を発することもなく、地面に燻るだけとなった霧はしばらくこちらに纏わりつこうとじりじりと動いていたがそのまま動きを止めて空気へと溶けていった。

否、吸収したと言えいいのか。

この部屋自体が大量のマガツヒとマグネタイトの濃い匂いで充満している。

ただ、この部屋のサイズにしては量が多いといった感じなのでこの部屋のマガツヒとマグネタイトでは完全に異界と化すことが無かったようだ。

中途半端な異界もどきで状態が止まっている。

基本、異界化するにあたって核となる悪魔が存在するはずで先程の黒い靄がそれならこの中途半端な異界化も納得出来るかもしれない。式神だつてマグネタイトやマガツヒを媒介に召喚すれば立派な悪魔だ。

この部屋がなんなのか調べなくてはという使命感は吹き飛び、部屋に入った時から気になっていてなおかつ黒い靄がわざわざ見せつけるように視線を誘導してきた部屋の真ん中のショーケースを見やる。

ご先祖さまの大事なお宝かもしれないそれを興味本位で開けてみたいとおもうのは罰当たりかもしれないが、そもそもあの式神(仮)が自分に見せつけてきたのが悪い。

そうだそうだと責任転嫁してショーケースへとそつと近づく。

そして黒いケースを手に取り蓋を勢いに任せて開けた。

中で目がこちらをギョロリと見ていた。

「うわあ!!?!」

思わずケースを手から床にブン投げそうになり、慌ててキャッチして蓋を閉じて大きく深呼吸をしてから蓋を再びゆっくりと開いて中を見る。

赤いベルベットの柔らかいクッション生地の上に鎮座するのはつやつやの目玉。目玉焼きでもゆで卵でも何でもなく、真正銘何かの生き物の目玉。大きさに人間のもののようにも見えてしまう。怖い。

カピカピに乾燥もしておらず、水分で潤んでいるつやつやお目目だ。Oh、キューティー。

「いや保存状態どうなってるんだこれ」

思わず声を出してツツコンでしまった。さすがに素手で触りたく

はないがすぐく気になる。そしてどの方向から見ても目が合う気がする。

そういう錯覚が起こる石とか美術品じゃ無いのだろうかとは思うものの恐る恐る人差し指でつんつんと触ると弾力があり表面がぬるりとしていた。

「うえー…」

どうしよう。触るんじやなかった。

処理に困る。

いや、アザミさんに渡して詳しい人に処理してもらえば早い話それで済む。が、なんというかこの目玉を見ていとすぐく——美味しそ
うにみえた。

口に入れ、舌で転がしたら甘い味がするのだろう。

噛み潰さず、丸のまま喉を通った時の喉越しは堪らないだろう。

そしてなにより、性質の近いものを取り込めば多少は楽になれる。

なぜだか自分はそれを見ていつの間にか口の端を上げ、笑みを浮かべていた。

「あれ？」

気がつけば、蔵の外に立っていた。

辺りは闇に包まれており夜になったことが分かる。

狐かなにかにつままれたのか。

安倍晴明の母親は狐だったというし、ありえない話ではない。直系などではなく分家なので遠縁もいい所ではあるけれど。

確認のために再度、蔵の中へと戻る。が、隠し部屋はあったがその奥の謎の部屋は影も形もない。隠し部屋の壁が広がるだけで甘ったるい臭いすらも消えていた。

そしてなにより、手に持っていたはずの目玉の入っていたケースが無い。

やはり幻覚かなにか夢でも見ていたのだろうか。

(どちらかと言つと幽霊っぽいよな…)

先程も思ったように狐に化かされたか幽霊でも見たか、もしくは幻

覚・夢だったのか。

真相が分からないために釈然としないものを抱えながら建物の鍵を閉め、家路に着くことにした。

「あ、もしもしアザミさん。あそこって幽霊とかいたりしませんよね？ ね!？」

帰り道。やっぱり怖くなってきたのでアザミさんに電話をして確認をすることにした。物理的に殴れないし幻覚を見せてくる幽霊とか恐怖以外の何物でもないからだ。

『あつはつは！ 居やしないよそんなもん！ で、なにかあつたのかい?』

返答は大笑いと共に返ってきた。

ですよねー、と思いつつながら経緯を説明すればアザミさんは不思議そうに唸った。

『うーん、おかしいね。こっちの調査じゃ一応ダークサマナーが関与してるんじゃないかって話だったから調査用の悪魔を使って調べたけど隠し部屋までしか見つからなかったよ。その奥にアンタが見たって言う部屋なんて無い…はずさね』

調査はちゃんとしたはずだ、とアザミさんは言ったがなにか引つかかるものがあるようだった。

『そもそも、そんな部屋があつてよく分からないものが居たつてんなら、あの爺さんは黙っちゃいないだろうね。倉橋爺は身内以外がテリトリーに入るのを酷く嫌がる男だった』

思案するように倉橋爺の事を考察するアザミさんはこちらの見たものの説明がつかない為に結論を出しかね、悩んでいるようだった。『…けど、そのよく分からないものはアンタが聞く限りでは、せいめい』って言ったんだね?』

「はい。『清明』、と」

『ふーん、ま、狐に化かされたんだね！ 幽霊屋敷じゃあないけどあそこは『出る』って言うしねえ!』

「いやそれ、幽霊屋敷って言いません!? 出るんなら幽霊屋敷じゃないですか!」

結局、狐の仕業と決めつけた無慈悲なアザミさんの言葉に盛り塩をして寝ることに決めた。

幽霊が出るわけないと言われて安心したのにトドメにやっぱり出ますと言われたら流石に怖くなるに決まっている。

召喚器と破魔矢も枕元に用意して寝て何時でも迎撃出来るよう構えて寝ないと安心できそうにない。

『やー、そんな怯えなくたっていいよ。どうせ出るのはあの偏屈ジジイくらいさ』

それはそれで嫌な気になってきた。取り憑かれているとするなら即除霊したいくらいには嫌だ。

「ええと、心配はないってことでいいんですよね？」

『そうだね。気にせず帰りな。ああでも、風呂にはしつかり入るんだよ！埃だらけであそこは汚かったからね！』

「はい。くだらないことで電話してすみません」

『いや、いいんだよ。気になることがあったらこんな風に電話してきな』

「ありがとうございます」

まるで母親みたいなことを言うアザミさんに返事とお礼をして電話を切った。

そういえば手を擦りむいて怪我をしていたから帰ったら手を洗って絆創膏でも貼るか、と傷を確認したらそこに傷はなく。

怪我も何も元々なかったように綺麗な手のひらがあった。

アザミさんに心配をかけたかもしれないがあの部屋に入る前後のことは自分の勘違いで夢だったのかもしれない。

そんなことを考えながら歩いていると荒垣くんから晩御飯はどうするのかというメールが届いた。いる、と返事しかけてボタンを押していた手を止める。

有り得ないことが起こったからか、腹が全く空いていない。ここ最近のパターンなら、お腹が空いて仕方の無い時間だというのに。

いらぬ、と書いてメールを送信する。

そして色々思い返してあの屋敷に一人で行くのは絶対にやめよう

と深く誓った。
次行く時はアザミさんかライドウくんを連れていく。絶対だ。

幽霊屋敷のその後（12／20）

夜

ラウンジ

「…あれ？」

奏子は夕食を食べている最中に祖父の遺した屋敷から帰ってきた優希を見てなにか違和感を感じた。

例えようの無い違和感。家族として優希をよく知るものしか分からないような些細な雰囲気の違い。

奏子から見て、なんとなくだがそんなものを屋敷から帰ってきた兄は発していたのだ。

兄がそこに居るのに居ないような。笑う仕草や表情はいつも通りの兄なのに、なにか不純物が混ざっているような。

そんな違和感だった。

それらに似たものを奏子は最近ではないが感じ取ったことがあるような気がして、なんだったのか思い出そうと首を捻った。

「うーん…なんだっけ…」

しかしわからない。

ピツタリと「これだ！」と思えるような出来事を思い出せず頭を悩ませる。

確か、湊も同じ違和感に気がついていて何か話したような、という所まできて横に座っていた湊の肩を奏子はずんずんとつついた。

「なに？」

「んー…あそこにいるお兄ちゃんを見て」

パツと見た限りで何かが変、という訳でもないので上手く違和感を表す言葉を表現出来ず、とりあえず見てもらえばわかるだろうという安直な考えで奏子はそう湊に告げる。

「……？」

訝しげに奏子を見つめ、次になんなんだと言わんばかりに奏子が指をさした優希を見て湊は眉間のしわをさらに深くした。

「わかる？ あれは…お兄ちゃん…だよね？」

「だと思う、けど…」

片割れである湊の反応も奏子と同じく歯切れの悪いものだった。だが、そうなくても仕方ないだろう。今の2人から見た優希は、これまでの優希と纏う雰囲気自体は変わらないというのに明らかになにか違和感があつたのだ。

「また変なペルソナが増えたとかじゃないよね」

「ないでしょ…だってお兄ちゃん、ペルソナ使えないんだよ」

ひそひそと話すもここで奏子は湊の言葉によって今感じている違和感に似たものをいつ感じたのか思い出した。

兄がよく分からない試練とやらに巻き込まれていると事後報告した時に増えていた気配のようなものと同じだ。あの時はペルソナが増えていたというが、今は奏子の言うようにペルソナは使えないためその線は薄いだろう。

なら、なんなのか。

それはそれで釈然としないものが残る。

「えー…じゃあ良くないものが憑いてるとか…？ 年末だけど神社とかお祓いしてるかな…」

「悪魔とか言う存在だったら効かないかもね」

「やだなあ…」

流石になにか違和感があるからお祓いに行ってきたなどと突然頼まれたら優希も困惑するだろう。

さらに悪魔ならお祓いも効かないのでは無いかと予測する湊に奏子は不安がった。が、

「荒垣くん、塩！ 塩が欲しい！ 四隅に置いたり撒いたりするから！」

「はあ？」

と少し迫真めいて叫んでいる優希の声を聞けばそんな不安も吹き飛ばすというもので。

「…お兄ちゃんに自覚があるの初めて見たかも」

「あの様子だと、ほんとに何か連れてきてたりして」
「ありそう」

そんなことをひそひそと話していると、優希は塩を入れたプラスチックの容器を掲げてドタドタと回り出した。

塩を撒かないのは掃除が大変だということを分かっているからだろう。

「うおおおお悪霊退散！ 悪霊退散！」

兄が奇行をするのは今に始まったことではない。が、今回ばかりは真正正銘の奇行と呼ばざるを得ない。

「三上先輩どうしたの？ アタマおかしくなっちゃったとか？」

「わかんない…」

ちようど階段からラウンジへ降りてきたゆかりが奇行を繰り広げている優希を見て恐ろしいものを見たかのような顔をした。確かに、今の優希の奇行はゆかりからすれば幽霊よりも恐ろしいものに見えるだろう。

ただ、事情を何も知らないために幽霊絡みだということが分からないだけで事情を知れば「ヤダ！ もっと入念にやってよ！」くらいは叫ぶかもしれないことを奏子は予測したが黙っておいた。

そんな注目の的の優希だったが唐突に

「えっ」

と何かに気がついたような声を上げる。

そして何も居ない場所を見つめてサア、と顔色を青くした。

「…嘘だろ。いやいやいや、どっかいけ！ どっかいけ！ 成仏してくださいやがれこんちくしょう！ お呼びじゃねーの！」

しっしっ！ と何かを追い払うような仕草をしたかと思えばまたドタドタと走り出す。我を忘れたような、いつになく荒い言葉遣いになった優希を見て、奏子と湊は即座に兄にとっての想定外の何かがあったなと気がついた。

「くそ、卑怯だぞ！ アンタはもう死んでるんだから死人に口なしなんだよお！」

死人に口なし、という言葉聞いて何故か奏子は唐突に幾月を連想した。

否、あの時の幾月の言動が最後の幾月修司という人間としての本性

を表した場面だったからか、印象深く覚えていただけなのか。

すぐにそんな連想を振り払い、兄の行動を見守る。まさか、このま
まずつとドタバタとしていく訳にも行かないだろう。

「おい、さつきからうるせえがどうした？　なんか見えてんのか」

「見えるも何も！　みんなには：聞こえも見えてもないか。そうだよ
なあ：俺に憑いてるんだもんな：なんか逆に安心した」

見るに見兼ねた荒垣が優希に声をかければこの場にいる誰もが優
希が大騒ぎするほどの存在が見えていないことに気がついたのか途
端に冷静になりだした。

「まあ、なんか居んなら部屋にいる山岸でも呼んでくりやいいだろ。
山岸ならなにか見えんじゃねえのか」

「あー、いや、大丈夫。あれは幻覚。あれは幻聴。よし」

「よし、じゃねえよ。あそこまで大騒ぎしてそれで済ますんじゃねえ。
気になるだろうが」

「ちよつと死んだクソジジ：いやー面倒くさ：色々と沢山遺してくだ
さいました素晴らしい倉橋のお爺様がちつさい蛇みたいになってて
ギヤーギヤーうるせえでございますなだけですのよオホホ」

「やべえモンじゃねえか」

エセお嬢様のような言葉遣いになった優希の放った衝撃の言葉に
荒垣は即座にツツコミを入れる。

本音を隠しきれていなければ誤魔化しきれてすらない。

要するに11月に倒した蛇頭黄幡神となった倉橋翁が優希には見
えているというのだ。にわかには信じ難い事だがここ最近の優希の
起こしている諸々を鑑みればこの程度のこと、ありえないことではな
い。

「冷静になったらなんだかこれもすぐに消せると思えば：うん。喚か
れるのも平気になってきたかも」

「だーっ！　お前はすぐそうやってサラツとやべえこと言うんじゃね
えよ！　怖えじゃねえか！」

憑いているという倉橋翁をすぐ消せると発言する優希の目は本気
だった。

「むしろ変な幽霊とか対話不能な悪魔とかじゃなくて良かったって思ってる。こつちのお爺様なら消しても罪悪感ないって言うか。もしかすると本当に俺の作り出した幻覚かもしれないし」

「お前マジで大丈夫か？ 今からでも朝倉センセのところ行ってくるか？」

荒垣は心配した。

明彦ほどでは無いがそれなりに仲の良くなった相手がこのように奇行を繰り返す、ちゃらんぽらんなことを言っていれば何かあったに違いないと思うだろう。

それが本当のことだろうがそうでなからうが、医者朝倉の元ならなんとかなるのではないかと思うのは不思議なことではない。

一方、話題に出された朝倉からしたら連絡を受けた瞬間、血相を変えて「またクソガキがなにかやらかしたか！」と飛んできそうな状況ではあった。

そんな朝倉の名前を出された優希はぎよつと驚いたような怯えたような苦虫を噛み潰したような、そのどれともつかない微妙な顔になる。

「朝倉先生のこと？ いや行かない！ 絶対行かない！ 今行ったら絶対怒られる！」

即座に否定し、ぶんぶんと首を横に振った。

その様子に荒垣はまた「こいつなにかやらかしてるな…」と遠い目になる。確実に朝倉に怒られる何かをした自覚が本人にあるということはかなり悪い状況まで悪化している可能性もあるという訳だ。

実際、荒垣の予測は正しい。

優希が黄昏の羽根の生命力の大半をラピリスたちの人格モデルの元になった少女に分け与えたことを知っているのはシャピリスだけだ。そして、その事に対する口封じもされていることからそれをシャピリス以外知らない、というのが問題なだけで。

「世話になってんだからよ、年始までには1度顔出しとけよ」

「まあ…顔出すくらいなら。行く」

色々言いたいことを喉奥に飲み込んで荒垣は忠告するだけに留め

た。

今見ている分には優希は元気がありあまつていて、むしろ元気すぎて大丈夫かと心配になる程度だがここ最近の顔色の悪さと比べれば健康的で良いようにも見えた。

元気になつてきているのならそれでいい。何らかの前触れならさつさと伝えて欲しい。

それだけだった。

荒垣が黙り込み、そこでその話題は終了し何でもなかったといったふう塩の入った容器を下げに行こうとしている優希に奏子は首を傾げた。

「あのお爺さんがお兄ちゃんに取り憑いてるならちゃんとお祓いに行かなきゃでしょ…あれ？ でもお兄ちゃんが好きに消せるって言ってるなら行かなくてもいいの？」

「さあ…」

奏子としては本当にいるのかよく分からないがあんな暴言を吐きまくり性格も悪い倉橋翁が兄に見聞き出来ているということだけでも不快だった。兄がいくらいつでも消せると言つていても間違いないと喚かれればストレス源になるに違いないと確信している。

「消せるって言つても三上先輩にアイツが取り憑いてるならゼツタイお祓い行つてもらわないと困るって…ね、奏子ちゃん、悪いけどお願いしてよ」

ゆかりは湊がこういうことには積極的に動きはしないことを察知して、奏子に頼む。

ゆかりはゆかりで蛇頭黄幡神に殺されそうになったのだ。良い気分にはならないだろう。

そして奏子と湊の祖父を祖父とも思わない言動からかゆかりも遠慮がない。

そこへ、塩の容器を持った優希が通りかかる。キッチンに行くには必然的にダイニングテーブルの前を通らなければいけないので当たり前と言えは当たり前なのだ。

「あ、奏子、湊。お爺様の屋敷で母さんのアルバムを見つけたから後で

見よう。沢山、おかあさんの写真があったんだ。おとうさんが写つてるのも数枚あったよ」

お爺様、と呼んだ所だけわざとらしい発音をした優希はすぐにふわりとほにかみ、愛しいものを見るような目でふたりにそう提案した。倉橋翁らしきものに憑かれているにしてはえらく上機嫌だ。このまま放っておけば鼻歌でも歌いながらスキップでもしそうな。

先程の騒がしい雰囲気とは違い、それくらいふわふわと酩酊しているような雰囲気は優希は纏っていた。

「あ、うん…」

そんな上機嫌すぎるにも程がある優希に奏子も湊も驚き、曖昧な返事しか出来なくなる。

お祓いに行ってくれ、と頼むタイミングすら逃してしまった。

「ホントにどうしちゃったの？ 三上先輩、ヘンなものでも食べた？」

「さあ…わかんない…」

奏子も流石にそう言うしかなかった。

ころころと気分の変わる兄のことが何も分からないのだ。

私だつて知りたいよー、と内心でお手上げ侍になった奏子の耳に、今度は短い悲鳴がきこえてきた。

「ひっ…!」

その声を上げたのはゆかりと同じように階段からラウンジに降りてきたメテイスだ。

メテイスは優希を見てその顔を怯えの表情に変えたと思えば、すぐに敵対心が見え見えな表情へと変わる。

「お前は誰だッ！ どうやってここに入ってきた!?!」

怒号に近い声をあげたメテイスはツカツカとキッチンから出てきた優希へと歩み寄ると飛びかかるようにして押し倒し、紅い蝶を模したバイザーを顔へと下げてメイスを取り出したかと思うと構える。

突然怒号をあげたかと思えば戦闘モードに入ったメテイスに優希は混乱した。

「へ？ え？ メテイス？ なに!? えっ、どいてどいて！ こんな美鶴さんに見られたら色々誤解されて処刑される！ 死ぬ！ そ、

それに何度も言うけど俺にはメテイス達にそんな気持ちとかないから！ 仲間とかみたいに思ってるだけだから！」

突然のメテイスの暴挙に混乱したのは優希だけでは無い。その場に居た全員だ。

なお、優希はメテイスの行動よりも押し倒されたという事実から美鶴に処刑されかねないことを危惧しているという、迫真めいているのか気が抜けているのか分からない態度だった。

そんな間抜けな叫びを耳にしたメテイスはピタリと動きを止める。

「…優希さん？ あなたが？」

怪訝そうな顔をして押し倒した優希を見やるメテイスは混乱の極みにあるのか奏子達の方を見ては優希の顔を見るとというような行動を繰り返していた。

「メテイス、どうしたの！」

「ちよつと、ギヤーギヤーうっさいんだけど」

そんな中、騒ぎを聞きつけたのかアイギスと今はシャビリスに身体を使わせていたタイミングだったらしいラビリスが降りてきた。

「メテイス。アンタ、ナギサを押し倒すなんてなかなかやるじゃない。大胆ねエ？」

ニヤニヤといやらしい笑みを浮かべながらシャビリスがそう告げればメテイスはバイザーを上げて訝しげな顔をシャビリスに向けた。「シャビ姉さんにもこれが優希さんに見えてるんですか？」

「はあ？ 当たり前だろうが。もしかして壊れたとか？ ヤダ、アタシ達の中じゃ最新型のクセして？」

シャビリスは妹であるメテイスに対しても未だに辛辣らしい。

だが、そんなシャビリスの反応を見たメテイスは何か言いたげにしたがそのまま視線を逸らす。

「そう、かもしれませんが。優希さん、ごめんなさい」

そしてメイスを仕舞い、押さえつけていた優希の上から降りた。

「…メテイスには俺が何に見えたのさ」

「……………それは、」

「そうだな…上で話をしようか。メテイスが誤認したことに思い当た

る節が無いとは言えないし」

問いに言い淀んだメテイスを見て、優希は特に怒る様子もなく自然に立ち上がってそう告げ、その手を引いて階段へと歩みを進める。

「ちよつとメテイスを借りるね」

それだけを告げて他のことを話すことも無くふたりは階段を上がつていった。

屋上

「うわ、寒っ！」

メテイスを連れて外へ出るとやはり冬なので冷えていて部屋の中で話せばよかつたかと後悔した。だが、今の寮内で人が通らないない場所ですこそこ広い場所は屋上くらいしか無かつたのだ。

もし、メテイスの疑いを解けず部屋の中で戦闘になったらめっちゃくちゃになってしまうし。

「あの…本当に優希さん…なんですよね？」

「今のところはね。でも、メテイスにはそう見えないんだろ？」

メテイスがこちらのことをどう見えているかは分からない。が、屋敷から帰ってきた途端にこうなったということはそうなる何か屋敷であつたということだ。

それに心当たりがない訳では無い。

「はい…黒いモヤの…不純物の混じつたマグネタイトの集まりに見えます」

「なるほど」

黒いモヤ。

確か山岸やチドリ、園村さんもそんなことを言っていた気がする。ニユクス教の教主として振舞っていた時の自分がそういう風に見えるたこともあつたと。

「なるほどって、それだけですか？ なにか他に言うこととか…」

「いや…特に無いかな。ところでそのマグネタイト、例の作戦に使えたり——」

「出来るわけないでしょう。そんな不浄なものを姉さんたちに渡さないでくださいよ」

「それもそうだ。」

メテイス——どちらかと言えばメテイスの内に混じるニユクス——曰くの不純物まみれのマグネタイトがなにか悪さをしないという可能性は無きにしも非ずだ。

「と、言うことみたいだけどお爺様は何か知らない？」

肩に何故か当然と言ったふうに乗ってふんぞり返っている小さな蛇の姿になった恐らく倉橋翁に語りかける。

これは倉橋翁を名乗る寮に帰ってきてバタバタ除霊の儀をやっていた時に突然でてきた悪魔だ。口調も傲慢さも全てがあのおじいさんと一緒なので疑うことなくそう扱っているがちよつとムカつく。

『知らん！ 知らん知らん！そもそもお前は——』

「あーはいはい何も知らないならお爺様は黙ってていいですよー」

ギヤーギヤーと喚き出しそうになった倉橋翁を諫め、れてはいないがとりあえず無視しメテイスへと向き直ればメテイスはこちらを怪訝な顔で見つめていた。

「何かいるんですか？ お爺様って言っていましたけど……」

「あー……実体化してない悪魔、かな。屋敷から憑いてきたみたいで。無害だから気にしないでもいいよ」

「気にするなと言われても普通に何もいないところに話しかけてたら気にすると思うんです」

「あはは……まあ、確かに」

正論を言われてしまつてぐうの音も出ない。

「で、優希さんがさつき語った心当たり、とは？」

「……悪魔化が進んだのかなあ、と」

「その連れ帰ってきたという実体化していない悪魔が原因じゃなくて？」

「うん」

メテイスがこちらを誤認した原因。

それはシュブニグラスとの同化が進み、ウィツカーマンの力が身

体に馴染んできたために起こった悪魔化に近いものによるセンサーの異常検知ではないかとこちらは推測した。一応、悪魔に限りなく近いシャドウとはいえメテイスも素体は機械だ。

「悪魔化の進行…たしかに有り得ない話じゃないかも。むしろ、そうなるというのは予測の内。そうならなければおかしいんです」

その言葉通り、予めそうなるとはメテイスも予測していただろう。だが、色々混じっているが故に元々知っている気配と違い、判別しきれなかったのでは無いのだろうか。

そしてその悪魔化——合一が進んだのもメテイスが感じとっている大量のマグネタイトをどこかで得たせいなのでは無いか、と。そう予測している。

「でも、私の知るシユブニグラスの気配でも、ウィツカーマンのものでも——ましてや貴方の大元の存在だったものの気配でもない。大丈夫、なんですか？」

「何度も言うけど今のところは俺だよ」

それは自分が奏子と湊の兄でありつづけるならば変わることは無い。それ以上でも以下でもない。

そもそも悪魔化したという自覚も強くなった感覚も正直なところ全くない。なんとなく、”そうなのか”くらいだ。

なにか使える魔法や能力が増えたという訳でもなく倉橋翁という喧しいオマケがくつついてきたくらいだ。

「そう答えると思ってました。それ以外に優希さんは答えられないでしょうし」

「よく分かってる。流石メテイス」

「貴方が褒めても何も出ませんよ」

「俺以外が褒めたら何が出るのか…」

メテイスはやっぱ結構こちらに厳しいと思うのは気の所為なのだろうか。

「話を戻しますけど、悪魔化が進んだというのならなぜ突然そんなに進んだんです？ 今日行ってきたという場所で何が？」

「大したことじゃないんだ」

幻覚を見ていた。もしくは、何かの1部を部屋中のマグネタイトごと取り込んだ。

そのどちらかだ。

そしてそのついでに倉橋翁の残滓のようなものであるこの小さな蛇も連れて帰ってきた、ということになる。

抱きついてきたあの人影はなんだったのか。なにか関係があるのか。何も分からないがきっかけと言えれば蔵を探索したことくらいしか思い浮かばない。

「大したことないわけではないですって……こうして実害のようなものが出てるんですし。私にぶん殴られてたらどうするつもりだったんです」「なんで!?! って叫ぶ」

それ以外に何が出来るといえるのだろう。あの場合、攻撃する訳にもいかないし逃げても追いかけられるだろう。どうしようも出来ない肩を竦めればメテイスは苦虫を噛み潰したような顔をする。

「怒らないとかお人好しすぎませんか?」

「褒めても何も出ないよ!」

「褒めてませんけど。というかそれ、私の真似ですかやめてください」「辛辣」

メテイスの当たりがきついのは今に始まったことでもないが、それでも今日は特にきつい気がする。

まだこちらが本当に「三上優希」だということを信用しきれないのだと思う。

だからこそ、

「山岸に視てもらって俺だって証明出来たら安心出来る?」

「……どうでしょう。風花さんも私と同じように見えると思いますけどね」

そうだとしたら余計に困る。

澱んだマグネタイトはなんとか消費するか濾過するにしてもそれまで黒いモヤのような姿に見えるというのは不便極まりない。

一応、認知を操作して姿を自分のままで固定してみる。一瞬だけ景色が揺らぐ。

「これでどう？」

「！いつもの優希さんの姿に見えるようになったけど…」

メテイスの目は「何をやったんだ」と言わんばかりにこちらに問いかけてくる。

「ちよつとね。認知を操作しただけだよ。メテイスは俺の事を『三上優希』だと認知している。そして俺も自分のことを『三上優希』だと認知している。その認知を固定化して俺の姿を変な黒いモヤとか他の姿に見えないようにしたんだ」

「そう、ですか…」

『三上優希』という枠から出る必要も無いのでこの縛りは不純物まみれのマグネタイトを消化するまで固定し続ける羽目になるだろうが仕方ない。

メテイスが恐らく心配しているようなデメリットは無いに等しい。というか他者から見えている姿を固定するだけで中身は何も変わらないので別件で姿を変える必要がある、などといった状況に追い込まれない限りなにもないしならないことを祈る。

「…なんだか、ズルされた気分」

「ええ…」

しばらく釈然としない雰囲気を纏わせていたメテイスだったが、そう言うため息を吐くような仕草をしてこちらへとすっかり向き直る。

「姿、いつもの優希さんに戻ったのでこれ以上の追及はしませんけど。何か変なところがあつたらすぐに言うんですよ。吞まれて暴走されても困りますから」

「善処します…」

トゲ7割、優しさ3割のメテイスのその言葉に曖昧な返事を返しておく。

メテイスからすればこちらが悪魔の力に吞まれ、暴走するかもしれないという危惧があるのだろう。

そんなことは無いと思いたい。流石に。

そもそもこちらにはウィツカーマンというストッパーが居るので、

相当なことがなければ悪魔の力に呑まれたりはしないはずだ。

さつきと問題が起こる前に戦闘で消費・発散して無くしてしまった方がいい。

なおさらみんなには特別訓練を受けてもらわないといけない。マグネタイトを消費するには悪魔を吃肉させるのが一番だ。

自分はまだペーパーなので自らの領域であるカダスでしかできず、方法もなんとなく再現したい悪魔を探して「出ろ〜!」と念じているだけなのでタルタロスや現実世界などでは使えないのが難点だが。

しかも正確にはちゃんとした悪魔とは言えない代物たちだ。あくまで、悪魔の再現物、模造品と言った方が近い。

性質的にはシャドウの方が近いので完全な悪魔とは言えず、まだまだモコイさんを召喚するには知識も技術も力も経験も足りない。

決戦の日までに、できる日が来るのだろうか。

首！クビ！くび！（12／21）

12／21（月）

影時間

カダス

「ということではなかなかみんなが挑戦してくれないので俺はしよげました」

「という事でって突然すぎじゃない？」

奏子の鋭いツツコミが入るが無視。

ことはその日の朝にまで遡る。

朝、ふと起きた時にこう思ったのだ。

——あれ？ 湊たちもタカヤたちも俺の訓練受けてくれてなくね？ と。

もう12月も末に近いのに1度も受けてくれてない。

そのことに気がついてしまった。いや、別に強制はしてなかったからみんなにもタイミングがあるのだろうと放置していた自分も悪い。私用だってあるしタルタロスの攻略だって必要だ。が、それにしただって放置されすぎでは？ と思ったからこそ特別課外活動部の全員をこうして呼び出した訳である。

「だってみんな全然訓練受けてくれないじゃん！ もつとこう、やる気があるもんだと思ってたんだよお！」

「いや、まあ、なんつーか……その、」

うわーんと泣き真似をすれば、なにかもごもごと伊織が口ごもっている。

「皆まで言わはらんでもわかるで……ナギサくんは……色々とアレやもんね……」

「アレって何?！」

ラビリスからの追撃に思わずツツコンでしまう。

アレとは何だアレとは。

本来ならこういうものはこそつて来てくれるものでは無いのか。戦闘狂の湊でさえ、微妙に避けている現状にそんなに魅力がないか危

ないのかと考えてしまう。

「とうか、みんな。訓練は怖くないんだよ!? 死なないしある程度の傷は治るし、豪華賞品だってある! 何も怖くない!」

「うわ胡散臭…流石に先輩と言えどもそれは信用0なんですけど……」

「ええ、岳羽、なんでさ…?」

「謳い文句が詐欺のそれだから、ですかね」

ひどい。あまりにも酷い。

本気で泣きそうになってくる。詐欺じゃないし何も怖くない。…たぶん。

悪魔選もなるべくキモくなくて邪悪ではなく怖くないやつを選んでいる——はずだ。

キモカワは居るかもしれないけど。

「てか、みんなは逆にタルタロスで命懸けの戦いしてんじゃん…普通逆でしょ…」

そう、逆なのだ。セーフティのついているこちらにばかり寄るならともかく、なんの保証もないタルタロス攻略に励んでいるというのはおかしくないだろうか。

「だって優希、死んでも最終的に勝てばOKみたいに思っただろ?」

「うん」

何がおかしいのか。負けてもここでは再挑戦出来る。

勝つまでやればいいだけの話では無いのか。というか現実は一度しくじれば終わりなのだから、かなり優しい方では無いのだろうか。

「そこだよ、そこ。その考え方」

「ああ、そうだな。優希、そこがだめなんだ」

「なんでさ!?!」

湊と美鶴さんにそう言われ、本日二回目の「なんでさ」である。

今の考えの何がおかしかったのか。何もおかしいところはなかった…はずだ。いや、まさか。

「再挑戦出来ないようにすればいいのか!?!」

「どうしてそうなるの!?!」

奏子が戸惑ったのでどうやら違うらしい。

全くもって答えがわからない。なにか肝心なところですれ違っている気がする。

が、

「えーもうなんか面倒臭いし初級に挑戦しろ！ してください！」

土下座する。こうでもしないと埒が明かない。

「うわあ、本気の土下座だ……」

天田くんにドン引きしたような目で見られるが構わない。こうでもしないと色々理由をつけて避けられそうな気がしたからだ。

下手したらこのまま決戦に向かいかねない。まあそれでもいいと思うが悪魔との戦闘に慣れていないこのメンツでもし悪魔を仕向けられた場合、どうなるか分からないというのが大きい。

そのまま倒せるのか、それとも。

決戦前に苦戦するかしらないかでその後も変わってくる。

全滅はなるべく避けたいのだ。戦闘不能ならまだ良い。が、誰かが死ぬのはかなり困る。もう一度やり直しだ。

その機会が来ないかもしれないが。

「まあ……初級なら……」

内容は分からないけど、と言いたげな奏子の視線から顔を逸らし、立ち上がる。

「言ったね!? 言ったな!」

気分はウキウキアゲアゲだ。

腕を天高く上げ、悪魔を喚び出した。

「来い！」

雷のような光と共に、三体の悪魔がそこに召喚される。

並んだのは大量の蛇の首だった。

7つと、8つと9つ。

それぞれ水色に近い緑、深い緑、黒と色の違うものだ。

アナンタ、ヤマタノオロチ、ヒュドラ。

それが呼び出した彼らの名前だった。

得意とする属性もそれぞれ違う。

「また頭の多い蛇!？」

岳羽が悲鳴に近い抗議の声を上げた。

しまった。みんなは蛇頭黄幡神と戦っていたんだったか。もう1ヶ月ほど前になるがネタ被りをしたかもしれない。

『そういうことでは無いと思うぞ』

倉橋翁が思考を読んでそう言うがネタ被り以外の何があるのだろうか。

アナンタ、ヤマタノオロチ、そしてヒュドラ。

この三体で臨機応変に対応することを学んでもらおうと思ったがどうやら失敗だったかもしれない。

『アナライズできました!。それぞれ龍王 アナンタ、龍王 ヤマタノオロチ、邪竜 ヒュドラというみたいです!』

説明する間もなく、山岸からアナライズ完了の報せが届く。

だんだん山岸も悪魔という存在になれて来ているのか、アナライズが早くなっている気がする。

良い傾向だ。

「お爺様も入る?」

蛇頭黄幡神も入れば首の数はさらに増えるだろう。いくらかスケールダウンして召喚しているがそれでもここは狭いので絡まったりして。

『やる訳なからう』

「あつそ」

一蹴して消えていったので会話はそこまでだ。

アナンタたちの方向を見れば、なにやら言い争いをしているようだ。

「オレサマ、アタマガ多イ! トツテモ 強イ!」

「なんじやと、わしは千の首を持つ蛇じゃぞ! わしの方が強い!」

「オレサマ、首ガ9本! 1番強イ! オマエ、7本シカナイ! ウソツ

キ! オマエモ、首8ツ! 弱イ!」

「ナンダト!」

「そう見えるだけじゃ! まあよい、いい度胸じゃ! 年寄りを敬わ

んやつはちいとお仕置してやるかの！」

内容は誰がいちばん強いか、だった。

しかも基準が首が多いか多くないかで、本当にくだらない喧嘩から戦闘に発展している。

『ええと、喧嘩してるみたいですね…？』

「お兄ちゃん？」

「すみませんでした」

悪魔として再現しすぎたかもしれない。もしくは、メテイスの言う不純なマグネタイトのせいで制御が出来なくなっているのか。

こちらの命令も受け付けなさそうなので帰還させることも出来なさそうだ。

これでは想定していた訓練にならない。

「ブフダイン」ぢや！」

「オレサマ、寒サニ、ツヨイ！ ヘツチャラ！」

ヤマタノオロチに対し、アナンタがブフダインを繰り返すもあまり効いていないようだ。

威力が低いという訳ではなく、ヤマタノオロチ自体に耐性があるらしい。

「ペルソナのヤマタノオロチと耐性は似てるのか…」

湊がボソリと呟く。

完全に同じという訳では無いがおそらく似ているのだろう。

というか、特訓になっていないこの現状をどう収めるべきか。

「……とりあえず、仲魔割れしてるけどみんなには戦ってもらおうかな…」

「えー」

「何とかしてくださいよ。なんかこれ、やりにくくて…」

「そこも含めて特訓ってことで」

とりあえず不満の声が上がっているが無視をして特訓ということにする。

これだけ悪魔を再現出来ているのだ。戦った時の実力もそれ相応。今の湊達とちようど同じくらいだろう。

中級と上級だと湊たちの実力よりも上の相手を想定しているため、これがちよūdい塩梅なのではないかと思っている。

「ゼンゼン初級じゃなくないスカ？　なんかもつとこう、カワイイ感じのやつ想定してたんすけどー！」

「え？　可愛いじゃんみんな」

「センパイのセンスはやっぱりわかんねえつすわ…」

どうしてそこでその評価になるのか。謎だ。

そんなことを言うのなら、この喧嘩をおさめるために、カワイイ感じのやつを召喚するしかない。ただし、その悪魔は中級以上の強さのトンデモない悪魔なのだ。

「じゃあ伊織の期待に応えて。カワイイ感じのやつを出してあげよう！」

「エツ、マジっすか！」

恐らく、伊織の言うカワイイ感じのやつというのは弱くぬいぐるみのようなカワイイ感じか、それともピクシーのような可憐な感じを想像しているのだろう。

確かに、合っている。合っているのだが、

「嫌な予感がするぜ」

荒垣くんの言葉は正解だ。

その悪魔はただカワイイだけじゃない。

「お願いします！　デモニホ教官！」

「ヒーホー！」

稲光と共に、金色のバケツのようなヘルメットを被った、緑の戦闘服のジャックフロストが現れる。

その手にはマシンガンのような銃が握られており、かわいらしくはあるが物々しい雰囲気も醸し出している。

「訓練を受けたいというのはオマエラか？　この俺がみっちり扱いてやるー！」

発されたのは愛らしいがしかし厳しい声。ヒーホーと可愛く回る丸っこいジャックフロストの面影は少ししかない。

「嬉しいか？　では早く顔面に伝えて、嬉しい顔をしろー！」

「うえっ!？」

「やっぱりな…めんどくせーやつを出してきやがった」

手に持った機銃を特別課外活動部に向け——しかし騒いでいる三匹の蛇悪魔にデモニホは視線を向けた。

「なんだ？ 何をしている！ さっさと陣形につけ！ 返事は『イエス、ホー!』以外認めないぞ！ …ホー!」

「ギャア!」

「イテテツ！ 年寄りをもう少し労わらんかい!」

一瞬で三匹の蛇悪魔に銃弾を放ったデモニホはあつという間に傘下に置いてしまう。

「さあ、訓練開始だホー! 泣いたり笑ったりできなくしてやるぞー!」
デモニホはどうやら不純なマグネタイトの影響を受けていないのかもしれない。人々の認知通り。厳しい教官だ。

不意に、その視線がこちらを向いた。湊たちの方ではなく、自分の方に。

「なにをボーつと突つ立っている！ オマエも訓練に参加しろ!」

「へ?」

一瞬、言われたことの意味がわからなかった。

「なんで？ 自分に言っているのか？ と。」

「扱く側か、それとも扱かれる側か! 三秒で選べ!」

「ええっ…!?! じゃあ、し、扱く側で!」

流石に訓練だというのに味方側に自分も参加しては意味がない。

ゲームマスターである自分が特別課外活動部の味方につくのは原則だ。流石に。

ただ、三匹を諫めるために再現し、呼び出したデモニホが、こうも訓練にノリノリだとは思わなかった。恐らく、本物もこのように訓練にノリノリなのだろう。たぶん。

槍ではなく、刀を作り出して片手でラフに構える。デモニホ教官とお揃いの機銃も用意し、反対の手で持った。

「なんだ、三上、お前も戦うのか?」

「戦わないと俺も教官に扱かれるから…」

仕方なく、だ。

さすがに「てっけんせいさい」は食らいたくない。ただでさえ貴重な脳細胞が減る。

やらなければやられるという状態はごめんだ。

それにしても、この物量ならば特別課外活動部の総勢十名弱にでも勝ててしまうのではないのだろうか。首の多さだけなら余裕で勝っているし。

「えーつと、色々予定変更にはなっただけどみんなには多方向から飛んでくる攻撃の訓練をしておらおうかと思ってる！ 上手くいなすなり、交わすなりして隙を見つけて教官と三体の悪魔を倒してみせてくれ！ はい、よいいドン！」

「えっいまから!?!」

そう言った瞬間、駆け出す。

誰かが驚いたような声を出したが関係ない。狙いを定めずに機銃を乱射する。

「うわっあぶな！」

「危ないに決まってるよ、一応実銃の再現なんだから！ 当たると痛いぞー！」

忠告はしておき、そのままスライディングし、一気に間合いを詰めてアナンタに向かっていった真田君をまずは狙う。

「ローキーツク！」

「っ！」

声を出したせいなのか寸前で気づかれ、避けられてしまうが問題ない。いつも初撃を躲されてしまうので対策はちゃんと考えている。

「フハハ甘いぞ真田君！ 今の俺には飛び道具があるんだな！」

機銃の引き金を容赦なく引く。超至近距離だ。これで避けられたら流石にその反射神経に驚くほかない。

「ぐっ！」

「いや、ちよつとでも避けれるのか!?!」

驚いた。なんと真田君、銃弾を完全にかわすことはできなかったが直撃を避けてダメージを低くしたのだ。

ボクシング部は伊達じゃないというべきか。だが残念だ。これでは二撃目が避けられない。

トドメを刺すべく引き金を引く。

「！」

身構えるがもう遅い。

銃口からばふ、という気の抜けた音と共に、カラフルなりボンと紙吹雪が真田君に降り注ぐ。

「は…!? どういう——」

「はい、真田君は今ので死んでました。ということぞどーん！」
「がっ!？」

強烈な回し蹴りをそのまま叩き込み、刀を構えなおしてデモニホと三匹の悪魔に苦戦している他の面子を見やる。

「アキ！ ちっ、やるしかねえみてえだな…！」

荒垣君だけはこちらに猛スピードで突っ込んでくるがワンテンポ遅かった。もう少し早ければ真田君を助けられたろうに。

「うーん、単独で来るのは推奨しないなあ。そもそもタイマンは想定してないんだなこれが」

これでは訓練にならない。

倒れた真田君を置いて、さっさと逃げることにする。こういう時は逃げるが勝ちだ。

そうやって、合間合間に銃弾をばらまきつつ周りの様子を見る。

天田君や岳羽がすこし、銃弾に対する防御が上手くない気がするの
は気のせいだろうか。天田君はまだ経験不足だからとして、岳羽は遠
距離武器である弓を使って狙いを定めているから立ち止まること
が多いようだ。仕方ないと一蹴できればいいが二人にはもう少し銃弾
に対する対策を何とかしてもらおうなりならしてもらおう。

相手はあの神条さん——神取だ。銃を使って来ないとも限らない
し、この先また何かがあつて銃を使う人間の相手をしなないとも限ら
ない。

対策をされていて損は無いはずだ。

逆に、コロマルやアイギスたち三姉妹はやはりというべきか、銃に

対する動きがかなり手馴れている。特に三姉妹は化け物退治を目的として作られたからか悪魔への対応力も高い。

が、反面、メテイスを除いて鬼教官なデモニホとは相性が悪いのか少し動きがぎこちないようにも思える。

ああいった相手もアイギスたちは大丈夫なのかと思っていたが、まがいなりにも喋って動くヒト型をしている為少し抵抗があるのだろう。

まずはその戸惑いを払拭しないといけないが上手い方法が見つからないし自分がやれば余計拗れてしまうに違いないのでまずはメテイスに相談するかしないといけない。

そしてメテイスは何ともないので何も言わないでもよさそうだ。姉との連携もしつかりとれている。ただ、姉たち以外との連携はあまり良くない。湊や奏子とは息が合うが、他とはメテイスが先行しすぎているくらいがある。

メテイスとて、合わせようとしていないわけではないのだろうが、まだまだ距離感を掴み切れていない様子だ。

ここはこうやって戦闘を積み重ねることでは解決できないので保留。

そんな感じで観察をしていたがデモニホは一応戦っているからなのか、特に何かを言ってくるわけでもないらしい。

ここからはどうするか悩みどころだが、まだまだ戦いは始まったばかりだ。

渚にて問う声。 答える声はいずこ（12／23～12／24）

12／23 （水）

夜

巖戸台分寮

結局、先日の訓練は湊たち特別課外活動部の敗北に終わった。

というか自分とデモニホがやりすぎたのもある。アナンタ、ヤマタノオロチ、ヒュドラは辛くも倒せていたので、実質初級をクリアはしたようなものだ。

とりあえず景品のレキシ人形をプレゼントしたのだが、いまいち反応が芳しくなかった。

やはりレキシ人形はもう時代遅れだというのか。他の景品は活動の役に立つものばかりなので、そんな反応にはならないと思うが、もしかしたら景品の見直しが必要なのかもしれない。

あとエリザベスとテオドアを呼ぶのを忘れていた。まあ、呼んでいたらさらにカオスな状況になっていたと思うので呼ばなくてよかったかもしれないが。

後でどやさされるかもしれないがそんなことは知らない。知らないと思ったら知らない。

とまあそんな反省を胸に、

「もうすぐクリスマスということで、『気になるあの子の心を驚掴み！

可愛いケーキを作っちゃおう！』のお時間です」

「は、はいっ！」

山岸が食い気味に返事をする。誰か気になる相手でもいるのか。

今日は寮のキッチンで美鶴さんを除く女子と自分で集まってクリスマスケーキを作ろうの会を開いている。美鶴さんは用事があるらしく、不参加だ。みんながケーキを作るのを見たがっていたので参加出来なくて少し残念でもある。

ちなみにさっきの謳い文句はいま手に持っている料理雑誌からの

引用なので自分の考えたものではないことだけを伝えておきたい。

「せんせー！ 質問です！ 何ケーキを作るんですか!? もしかしてバナナケーキ!?」

奏子がふぎけながらも質問してくる。が、流石にクリスマスにまでバナナケーキを作るのは食傷気味になってしまう。

奏子がバナナが好きだからと結構な頻度でバナナデザートを出しているのでクリスマスまでバナナはやばい。奏子自身が食べるならいいが、今回はクリスマスプレゼントのついでに好きな子と食べるケーキを作るのだ。自分だけの趣味では好きな子のハートを鷲掴みには出来ないだろう。

とは思ったが、まあどうせバナナバナナ言っているので本人が食べることは予想がついている。

なのでこんなのは建前だけでも。

「いい質問ですね。今日はバナナケーキじゃなくて普通のパウンドケーキを焼きます。プレーンでもチョコでもOK。でもこの本によるとその上に色々と乗せてアレンジしよう！ って話だからバナナは乗せても……OKということにします」

「やったー！」

「ふふ、奏子ちゃんってほんとにバナナ好きだよね」

結局、少し悩んだ末に許可を出す。自分は奏子にかなり甘い。

それに対して山岸が微笑ましげに笑う。おそらく山岸との料理同好会でも奏子はバナナを使った菓子ばかり作っているのだろう。

奏子は1人でもちゃんとひと通りの料理ができるタイプなので不味いものは作らない。そこは心配はしていないが。

「で、いつまでその演技を続けるつもりなんですか?」

「めんどくさいから今やめた」

岳羽にツッコまれ、料理教室の先生の真似を止める。

「なあナギサくん、ウチらもケーキ作ってええの?」

「いいに決まってるじゃん。あー……でもラビリスごめん。色々と間に合わなくて」

ラビリスに謝罪する。

結局、よく分からない手段で手に入れたマグネタイトは不純物まみれなので消費か濾過するまで綺麗に使えない。だからデカめなアンタたちを召喚して一気に消費したのだがそれでもまだまだ残っている気がする。これではダメなのだ。

つまりメテイスとやろうとしている「あること」が出来ず、ラビリスだけは未だに食べ物を食べることが出来ない。

早くそういう機能を追加してあげたいのは山々だが、こうして待つてもらったことにしたわけだ。

流石に山岸が機械に詳しいと言ってもパソコン関係だけだし、ジーンもプログラム関係ばかりでハードウェア的なことは厳しいだろう。

かといって、桐条の技術者に勝手なことを頼む訳にもいかないしで正直にいうと詰まってるのだ。

さすがに異界がぽんぽん現れることもないし純粋なマグネタイトの供給源がないというのはかなり厳しい。

作戦の成功には必ずその混じり気のないマグネタイトが必要なのだ。

「優希さんが余計なものを持って帰るから遅くなってるんです」

「何も言えない」

チクリとメテイスから棘の含まれた言葉が投げかけられるが事実なので何も言えない。

「？ よくわからへんけど、ナギサクくんがうちのためになにかしてくれようとしてるんやろ？ 遅くなってもええよ。ウチ、待ってるで」

「ラビリス…」

ラビリスは優しい。

が、これはなるべく早くしないとイケない。しかし不備をきたすわけにもいかない。

自分が居なくなってもラビリスたちが大丈夫なようにしないといけないために純粋なマグネタイトが必要なのだ。

ろ過しないといけないような不純なものはない。

そんな考え事をしながら作った自分の分のケーキは、いつもより少し不格好な気がした。

(これじゃ美鶴さんに渡せないな)

……こつそりもう一つ作り直すことにした。

12/24 (木)

放課後。

教室で美鶴さんに声をかける。

「美鶴さんちよつといい?」

「どうした?」

「予定空いてる? いったん寮に帰った後で連れていきたい場所があるんだ」

美鶴さんを誘いたい場所があるのでそう告げてみると、美鶴さんは少し頬を赤らめさせる。

「それは…デートの誘いということでもいいのか?」

小さく、吐き出されたのはそんな言葉。

デートの誘い。以前なら違うというかもしれないが今回はその通りだ。

「うん」

「そつ、そうか! その…ラベリスやメテイスは来ないだろうな…?」

「? 美鶴さんだけだよ」

質問の意図がわからず首を傾げる。

デートなのになぜラベリスやメテイスを呼ぶのか。普通、デートと言えば二人きりだろう。

まさか、過去にあの元許嫁が美鶴さんとのデートに他の女を連れてきたりしていたのだろうか。だとしたら尚更許せない。

なんて男だ。

「そ、それならいいんだ。では、また後でな」

「準備しておくから楽しみにしててね」

妙に挙動不審な美鶴さんを少し疑問に思いながらも、こちらも準備をするために一足先に帰ることにした。

夜

「こ、れは…」

美鶴さんが目を丸くして驚いている。

広がるのは満天の星空。

聞こえるのは静かな波のさざめき。

そしてそこには砂浜と、森。そしてアスファルトで舗装された道がぐるりと続いている。

真つ暗だと危ないのでちゃんと電灯もついている。

そのアスファルトの道路の上で、告げる。

「美鶴さんの為だけに用意したんだ」

無人島を。

否、無人島の再現物を、だ。

「美鶴さんにバイクを持ってきてきてって言ったのはそういうことなんだ。最近忙しかったし、思いっきり走ってほしくて…その、創った」

「っ、創った!？」

「そう、正確にはここはカダスだよ。景色を変質させて…まあ色々。クリスマスバージョンってことで」

美鶴さんに贈るクリスマスプレゼントをどうしようかと悩んでいたらたまたまコンビニで旅行雑誌を見つけ、それにバイクで思いっきり走れる島のコラムが載っていたのだ。

これなら美鶴さんも人目を気にせず好きなだけ走れるし、下手なものプレゼントするよりもいいと思ったのだ。

というか、美鶴さんは大財閥の令嬢なのだから無人島のひとつやふたつ、用意されても驚かないと思っていたがそうでもないらしい。

驚いて目を丸くしている美鶴さんはとてもかわいい。

「ポロニアアンモールのイルミネーションには劣るかもだけど、星空も綺麗でしょ?」

「そうだな、綺麗だ。それにきみと見れるならなんだって特別なものになる」

その言葉に思わずこちらが赤面してしまう。

なんというか、恥ずかしい。好きな人から自分が作ったものを綺麗

だと言われるのがこんなにも嬉しいことだとは思わなかった。

こっぴばずかしいような、照れるような、嬉しいような。そんな感情がないまぜになっている。

「つごほん、と、というわけで好きだけ走っていいから！俺はここで待つてるし、楽しんできてよ！」

恥ずかしさを追い払うために咳ばらいをし、美鶴さんを急かす。

折角用意したのだ。好きなだけ走ってもらわないと意味がない。

「それはいいが…」

何か納得のいかなさそうな美鶴さんがこちらを見つめてくる。

何か不備でもあったのだろうか。

「きみも一緒に乗らないか？」

「いいの？」

おず、といった様子でヘルメットを差し出してきた美鶴さん。

自分は運転ができないから後ろにしがみつくだけになってしまうがそれでいいのだろうか。

そう問えば、美鶴さんは頷いてくれる。

「いいんだ。きみとふたりでこの景色を走ってみたい」

「それなら、喜んで」

ヘルメットを受け取って、バイクにまたがる美鶴さんの後ろにつく。バイクに乗るのは慣れていないのでおぼつかなかったがちょうどいい具合に乗れた気がする。

バイクが風をきつて走る。

バイクの音の他に、風の音だけが響いている。

流石に、鳥や虫、他の生き物までは再現出来なかった。

人々の認知から引張ってくれば良いだけなもの、どうしても細かい物感が強くて再現するのを断念したのだ。

本来、必要のない能力なのでこれ以上再現度を上げてどうするんだと思う気持ちもないでもないけれど。

ひとしきり走り終えたバイクが止まり、美鶴はヘルメットを外し

た。

まさか、優希からこんな場所へ誘われるとは思ってもよらなかったのだ。

連れていきたい場所がある、と言われた時はどこか食事の美味しい良い店に連れて行ってくれるのか、それとも遅くはなるが優希の実家にでも行くのかと思っただくらいだ。

それが無人島の再現物だとは予想がつくはずもない。しかも、バイクで好きだけ走っていいなどと、最近美鶴があまりバイクで走っていなかったことまで知っているようなことを言われてしまえば嬉しいプレゼントに他ならない。

どれだけ自分を驚かせれば気が済むのか。美鶴はそう思った。

「少し、あつちで座らないか」

そのまま浜辺に流れ着いていた大きな流木へと向かい、自然とふたりに腰掛けた。

会話はなく、静寂が場を支配する。

ただひたすら、波が押し寄せ引いていく音が聞こえる。

「…きみのもう一つの名前で呼んでみてもいいか？」

「ん？ いいよ」

もう一つの名前。本当の名前、というべきか。

ラビリスたちが優希のことをナギサ、と呼んでいて美鶴もそう呼んでみたくなったのだ。

息を吸い、口を開く。

「…渚」

「なんだか美鶴さんにこの名前で呼ばれるの、慣れないし恥ずかしいな」

恥ずかし気に視線をそらし、しばらく黙った優希は少し憂えげな表情になり、小さく口を開く。

「…渚って、海と陸の間の水際、ちようどこみみたいなモノを指すんだって。お父さんとお母さんは俺に、いろんな人と繋がれるようなニンゲンになってほしいって思いからそういう名前を付けたって聞いた」

「そうなのか…」

おそらく、思い出したのだろう。

桐条の実験のせいで失っていた——否、封じられていた幼い頃の記憶を。

両親が子供に名付けの意味を言ってみせて聞かせるのは何らおかしいことではない。

こうした本当の両親のことも語れるようになってきたということ
は傷が癒えてきたのか、単に思い出したからなのか。

美鶴は優希の内心がわからないためにどちらか判断しかねていた。

だが、無理に訊くわけにもいかなければ言葉が続ける優希の話を聞くことにした。

「湊の名前も奏子の名前も人の中心に——誰かが自然と集まって来たり、寄り添えるような人になってほしいからって。兄妹みんな、似たような願いが込められてる」

優希は一瞬、安堵するかのようについて何かを慈しむような眼差しを波打ち際へと向け、すぐに悲し気な顔をする。

「千鶴さんも、俺の名前の意味を分かって呼んでくれてたらしい。酷いよな、こんな偽物の俺に、『本当の有里渚』じゃない俺に——ニンゲンとして生きてくれ、なんて」

なんて残酷なんだ、と言いたげな優希に美鶴は「そんな意味で叔母上は願ったわけじゃない」と否定したくなり、しかしその言葉を飲み込んで、代わりの言葉を吐き出した。

せめて、優希が傷つかないように。

「私が知っているのはきみだ。私にとつての“有里渚”はきみなんだ。どうして、そんなことを言うんだ」

「本物じゃないからだ。俺は、『本当の有里渚』の居場所をとつてしまったんだ」

「じゃあ、聞かぬが。その『本当の有里渚』とはいったい誰なんだ？」

美鶴の疑問点はそこだ。

優希はこの間から、自分は本物ではないと言い続けているが、それなら『本当の有里渚』とはなんなのか。

元々魂が無いのなら、本物も偽物もなく、『有里渚』という存在すら、
いなかったのではないか。

「元々いなかった存在が、きみが居たから生まれてきたというのなら。
それは、きみが。きみこそが、有里渚ではないのか？」

それでも、その声は答えない。

救いの声（12／24）

「元々いなかった存在が、きみが居たから生まれてきたというのなら、それは、きみが。きみこそが、有里渚ではないのか？」

美鶴のその問いに、優希は答えられなかった。

認めたくなかった。自分ではない、『本当の有里渚』が最初から居ないことを。

否、最初から分かっていた。ただ、認めたくなかっただけだ。

無機物が心を持ち、魂を持って人となり、こうして存在していることを。

アイギスたちの在り方を肯定しておきながら、優希は己自身だけはどうしても認めることができなかったのだ。

始まりの記憶を思い出してからは自分が人ではないという意識が強くなり、違和感ばかりが心を占めていた。

ここに居てはいけけない。ここは自分の居場所ではない。

そんな気持ちばかりが浮かんでは消える。

問いたくなかった。

なら、自分の居場所はどこにある？ などとは。

——問えなかった。

「……」

何も答えられない優希を見やり、美鶴はやってしまったか、と思った。

あまりにも深く入り込みすぎた質問をしてしまったかもしれない、と反省するももう遅い。出してしまった言葉は撤回できない。

大事に想うからこそ、自身を否定するような言葉を吐いてほしくはなかった。だが、こういった込み入った質問をするにはまだ早いような気もしたのだ。

とはいえ、いつするのだ、という話にもなるが。

「昔、」

不意に、優希が口を開いた。

「千鶴さんが美鶴さんのことを話していたことがあったんだ。同い年

で、可愛い姪っ子だって。いつか、普通に合わせてあげるからってさ」
そして視線を海の方へと向ける。

その表情を美鶴は読み取ることができなかった。

「きつと、千鶴さんはあの事故がなければ——殺されなければ、いつかはなんとかして俺を連れて逃げていたんだと思う」

あの優しい叔母なら見過ごせずにきつとそうするだろう。

美鶴はそう感じた。

確かに、あの頃の叔母は優しくだったが何かに思い悩んでいるような表情もしていた。

一度、美鶴は訊いたことがある。なにか悩んでいることがあるのか、と。

その時、美鶴は叔母にはぐらかされたのだ。それが、精一杯の叔母の思いやりだったのだろう。

美鶴に何も背負わせないために。

「逃げて、どうにもならないのに」

「それは、予測か？ それとも『繰り返し』の中であったことなのか？」
「……いいや。デスを抱えていても、抑えていても、きつと、いつかは耐えられなくなる。この前までの俺がそうだったように、いずれおかしくなつて一番に犠牲になるのは千鶴さんだ。これは予測じゃなくて分かり切っている結果なんだ。確かめるまでもない」

性質が同じシャドウという存在でも、元は同じものだったとしても、人として生まれてしまったからには、人の心と肉体を持ってしまったからにはいずれ破綻していったのだと優希は語る。

「相性が良すぎるとも問題なんだ。どちらかがどちらかに吞まれてしまう。溶けて、まじりあって、ぐちゃぐちゃになりやすい。受け入れられるにはある程度、別の存在であるってことが大事だからさ」

だから、自分は平気じゃなくて湊と奏子は平気だったんだ。と、優希は続けた。

「——俺が、『本当の有里渚』じゃないのかって問いには、まだ答えられない」

その声は酷く硬かった。

緊張し、自分でも答えるのが恐ろしいと思っっているような、そんな声だ。

「俺の中でまだ答えが出ていないんだ。俺がここにいていいのか。俺は、だれなのか。まだ何もわからない。たとえいなくとも、魂が無くとも、繰り返ししていれば『本当の有里渚』が生まれたかもしれない。俺は、その可能性を奪ってしまった気がするんだ」

結果論にすぎなくとも、そうなのだ。優希は決めつけているように見えた。

それと同時に美鶴にはそれが違うことはわかるが、難しく、どう答えることもできない。

否定も肯定もできないような問題にこれは思えたのだ。かと言って、上手い言葉が見つかるはずもなく。

「三上優希って名前できえ、ほんとに養父さんと養母さんに生まれてくるはずだった子供の名前なんだ。俺は、なにもかも借り物で生きているんだよ」

自分が名乗ってそう自覚している名できえ、借り物だと言い出す優希は酷く空虚な眼をしていた。

「いつかは、返さなきゃいけない」

「誰なんだ。その名前をつけたのはきみの養父母だろう。きみを愛し、そう名付けたのは彼らの意志だ」

優希の養父母であるハジメとヒロコはそれぞれそ本物の息子のように優希を愛しているように見えた。が、優希は否定するように首をゆっくりと横に振った。

「生まれてくるはずだった子にだよ。おこがましいかもしれないけど、俺はそう思ってる。養父さんと養母さんは俺を愛してくれてるよ。でも、違うんだ。俺は代わりでしかない。本物にはなれない」

優希の口からこんな、養父母の愛を疑うような言葉を聞くのは初めてで、愕然とし、大きく目を見開く。

「養母さんや養父さんそっくりにはなれないし、どうしても違うところが出てくる。本当の二人の息子には俺はなれない。どうやっても。…二人のことは大好きだけだよ」

はは、と笑う顔は憔悴しきっているように見えた。

くしやりと前髪を片手で掴んでそして離れたあとに大きく息を吐いた優希はそのまま立ち上がった。

「もう帰ろう。寮にケーキを作って置いてあるからさ、一緒に食べようよ」

「それは、そうだが…」

このまま話を終わらせていいものか、と美鶴は悩んだ。

なにか、大事なことを見逃してしまうのではないか。これは、彼女のSOSなのではないか。

もしそうなら、これを見逃せば大変なことになってしまっているのではないか。

呪縛のように名前に縛られ、『本物』にはなれないと思い悩んでいる優希に美鶴は答えを見いだせずに行った。

何か言葉をかけなければいけない。そう思わずにはいらなかったのだ。

「私は、きみがどんな姿になろうとも。どんな名前だろうと愛している。それだけは忘れないでくれ」

それが、今の美鶴の精一杯の言葉だった。

「！」

大きく目を見開いた優希は一瞬泣きそうな顔で眉を寄せるも、その表情をすぐに笑みの形に変えた。

「……ありがとう」

自身の部屋でケーキを前に美鶴は綺麗にラッピングされた縦長の箱を出す。

「…これを、受け取ってくれないか」

「これは？」

優希が訊けばわずかに美鶴は頬を赤らめさせ、恥ずかし気にそれを見つめる。

「シャンパンだ。…取り寄せてみたんだ。いつか…きちんとしたもの

で、きみとグラスを交わせるように」

そんな願いを込めて選んだものだ。

まだ未成年なので飲むことはないが成人しても共にいられるように。この先の戦いを、無事に切り抜けられるように。

美鶴はそう信じていたかった。

「そっか。大事に取っておくよ。いつか、飲めるように」

その答えに美鶴は安堵した。否定されてしまうのではないか、そんな未来は来ないと一蹴されてしまうのではないか。

そう思っていたからこそ、例え上辺だけだろうと、優希が快く返事をしてくれたことに安堵したのだ。

頑なに自分が死ぬのは決定事項だ、と言っていた時よりも良い傾向になっっているような気もしたのだ。

一方、それを大事そうに脇に置いた優希は懐から小さな箱を取り出した。

「じゃあ、俺からも。もうひとつ」

シャンパンの箱よりは薄い、掌に乗るくらいのも、ピンクゴールドのリボンで飾り付けられた黒い箱を美鶴は渡される。

「開けても？」

「いいよ」

美鶴は確認し、了承を得てからそのラッピングを外して蓋を開けた。

「……」

中に入っていたのは小さい青い石をあしらったシンプルな指輪と首にかけるチェーンだった。

その石は角度によって青にも白にも見える不思議なモノだった。

サファイアのようにも見えるしオパールのようにも見える。しかしそのどちらでもないと分かるような色合いをしていたのだ。

「お店のものよりかは下手かもしれないけど——作ってみたんだ。美鶴さんに渡したくて」

作った、と聞いて美鶴は驚く。いつの間にかこんな石を用意したのかと訊きたい気持ちを抑え、優希の言葉を待った。

「お守り代わりだと思っただけ。できるだけ、肌身離さず持つてほしいんだ」

言われなくとも、肌身離さず持つつもりだった。

優希からもらった金の招き猫のストラップでさえ、未だにバイクのキーにつけているのだ。

あの時、そのストラップが美鶴とゆかりの命を救ったのだから、直接本人がお守りと言っているそれにも何か特別なものがあるのだろう。

「…私は、幸せ者だな」

思わず、そう告げる。

「それを言うなら俺もだよ。ありがとう。シャンパン、嬉しいよ」

するりと箱を撫でた優希は美鶴へと視線を向け、僅かにほほ笑んだ。が、美鶴ははた、とあることを思い出した。

「そういうえば、あのモコイという存在はきみの一体何なんだ？」

「え？ モコイさんのこと？」

そう、美鶴は気になったのだ。

モコイ、と呼ばれているあの緑色の変な生物が優希の一体何なのか。

あのよくわからない存在に嫉妬心さえ覚えているくらいだ。

「う~~~~くん、モコイさんは——グレートでブリリアントな友達、かな」

「グレートでブリリアントな友達？」

意味が分からなかった。

謎だ。

説明を受けてもその内容が全く分からない。否、言わんとしていることは何となくわかる。

すごく素晴らしい、とかとても仲がいい、とかそんな感じなのだろう。そう美鶴は解釈した。

「モコイさんはすごいんだ。なんというか——存在そのものが」

「そ、そんなにか!？」

「俺のことを助けてくれたし、かわいいし、かつこいいし……こう、癒

し？ 的な」

まるで勝ち目が無いように見え、美鶴はショックを受けた。

どうやってそんな存在に勝つというのか。もし、ありもしないと思いたいが、優希が「モコイさんの方が好き」などと言い出すことがあれば。

「その、きみは…モコイに恋愛感情はあるのか…？」

恐る恐る訊く。これでもし、恋愛感情がある、などと言われてしまつたら終わりだ。

「へ？ ないない！ 仲は良いけど、でも恋人とかそんな関係になるような付き合いじゃないよ！ 相棒みたいなもんだよ」

結果は否定だった。それも、割と真面目に本気の。

「てか、モコイさん女の子じゃないし、どっちかっていうとオジサン…？ うん。性格はオジサンかな…」

「そうか…」

本当にすさまじく仲の良い友達、というだけだということが分かり、美鶴は安堵する。

それでもだ、あの時モコイの言葉一つで帰ることを選んだように見えたことだけは嫉妬すると言わざるを得ない。

「…恥ずかしい話なんだが…私はそのモコイという存在に嫉妬していた。きみがあの生き物を思い出してはにかむたびにどんな相手なのかと思っていたが…そうか、オジサン、か……」

なんだか拍子抜けした感じだった。

オジサン、と言われてしまえばまるで同じ土台に立っている存在とは思えず、まだ女の子だと言われた方がよかつたのかもしれないと思う程度には残念というべきか。

対する優希は何かが面白かつたのかふるふると肩が震えている。そしてついに耐えきれなくなったのか、笑い声が漏れる。

「ふ、あははっ…ごめ、馬鹿にするつもりじゃなくて…でも、モコイさんに嫉妬だなんて…美鶴さんは可愛いなあ」

そしてその笑みの顔のまま、美鶴の手をやさしく覆うように握り、その頬に口づけた。

「こういうこと、するのは……したいって思うのは、美鶴さんにだけだよ」

一瞬美鶴は驚くも、今更照れることでもないかと開き直った。

こういうことには慣れていかないと心臓が持たないし雰囲気も壊れてしまうだろう。

そう思つて内心はドキドキしたままだったが平静を装う。

「それは、『以前』の私にも思つていたのか？」

「全然。好きだったけど、こういうことをしたいって思うのは『今』の美鶴さんだからだよ」

自分の知らない自分に対しても嫉妬してしまいそうな美鶴の問いに、優希は首を横に振る。

そのことに安堵した美鶴はこれでようやく以前の自分に嫉妬しなくて済むと考えた。

自分の知らない自分など、よく似た他人のようなものだ。そんな過去の——存在しない自分に恋人が現を抜かしているとなればいい気分はしない。

そんなことを考えていた時。

「……、あれ……？」

ふいに美鶴から手を離し、片手をこめかみに当てて何かに戸惑うように一瞬眉をしかめた優希はすぐに元の表情に戻る。

その表情に違和感を覚えた美鶴はなにがあったのかと思う。

なにか、気配を感じたのか。それとも、別の何か変なことがあったのか。

「どうかしたのか？」

「ああ、いや、なんでもない……気のせいだったかも」

「……？　そうか？」

訊けば、すぐにはぐらかされ、気のせいだったと言われてしまう。すぐに普通の様子に戻った優希の様子に大したことではなかったのかと美鶴はそのまま流し、ケーキに手を伸ばす。

そうして、二人は夜遅くまで一緒に過ごした。

クリスマスパーティー（12／25）

夜

「ナギサの頼みだからと来てみれば、なんですかこの……」

「なについて、クリスマスパーティーだけだ」

12月25日。朔間くんちでクリスマスパーティーを開くことになったのでできる限りの面子をそろえた。

ら、タカヤがドン引きした。

恐らく、タカヤにはクリスマスパーティーというモノが無縁だったからこのような反応になっているのだろう。致し方なしだ。

代わりにイズミくんと紗耶ちゃんは大喜びしてくれているのでこれだけでも大成功と言わざるを得ない。

「いえ、貴方のトンチキな格好のことです」

「せや、なんやほんまのトンチキ集団になったんかいな？」

げんなりと、疲れたようによろよろと指をさしてくるタカヤとジンに自分の格好を鑑みてみる。

白いファアのついた赤い服に、サンタ帽。

これはどう見ても――

「サンタ服だよ」

「そうでは……、もういいです。貴方がそうなのは何を言っても変わりませんからね」

何か言おうとして、そしてやめたタカヤはひどく疲れたような顔をしている。

まだパーティーは始まったばかりなのにどうしてこんなに疲れているのか。理由はわかるが理解はしない。

まあなんとというか。原因は十中八九自分の格好と湊たちの格好だろう。

紗耶ちゃんを怖がらせないように、自分と湊と荒垣くんと真田くん、綾時くんはそれぞれ着ぐるみかサンタ服を着用だ。コロマルと天田くんは普通である。

流石にこれに付き合わせるのは可哀想だからだ。

ちなみに伊織はチドリと二日連続デートらしい。お熱いことで。

「ほら、紗耶。トナカイさんだぞ」

「トナカイさん！ おおきいー！ ふわふわー！」

なんて言っているイズミくんと紗耶ちゃんが微笑ましい。

時価ネットたなかで着ぐるみやサンタ服をお取り寄せして正解だった。

ちなみにこれ、それなりに防御力があるのかタルタロスにも着ている代物になっている。奏子がもしかしたら面白がって着せたがるかもしれないのでこの先も取っておこうと思う。

自分もみてみたい。サンタ服と着ぐるみで戦うこの面子を。

「あ、吾郎。こんな人たちだけど悪い人じゃないからさ…緊張とか遠慮とかしなくていいからな」

イズミくんが後ろで緊張した様子の茶髪の男の子に話しかける。一瞬少女かと思まごうほどに整った顔だというのがわかる彼はこの間から朝倉医院に居る子で、『明智吾郎』くんというらしい。

天田くんと同じ年で、天田くんと同じく母親と死別している。程度のことを聞いている。

どうして朝倉医院に世話になることになったのかはわからないが、深入りするのも悪いだろう。ヒトには聞かれたくないことのひとつやふたつ、いや、五つくらいはあるだろうから。

それに今日は楽しい楽しいクリスマス会だ。

「してない。あの、挨拶遅れました。…僕は明智吾郎です。今日はクリスマス会に僕も招待していただいてありがとうございます」

「…出会ったばかりの時の天田みたいだな」

きつちりと挨拶をした吾郎くんを見た真田くんがそつと耳打ちしてくる。確かに、歳不相応に丁寧だが固く、距離のある感じは天田くんそっくりだ。

何か訳ありなのは朝倉先生のところにいる時点で確定なので、悪魔絡みか、もしくは。

だが自分にはどうすることもできない。吾郎君は別に今、助けを求めているわけでもなんでもない。クリスマス会を楽しみに——かど

うかはわからないが一応来てくれたのだ。こんなところで人生相談というわけにもいかないだろう。

「なにかあったとしても、俺たちにいま、できることはないよ」

「…らしくないな」

「とは言っても…」

難しい問題なのだから下手に首を突っ込めば天田くん以上に拗れてしまうのは目に見えている。

そもそも何かがある、というのも自分たちが勝手に予測しているだけのことだ。実際一時保護というだけでなにもないかもしれない。

「二応、クリスマス会が終わっても気になるようなら真田くんのほうから朝倉先生やイズミくんに訊いてみればいいんじゃないかな」

「こういうことはどうも苦手だな…シンジか天田を頼るか」

「自分で頑張りなよ…いや、何かやらかす前に相談して」

「やらかすのはお前の方だろう」

「言ったな!?!」

真田くん自身にもかき乱してしまうかもしれないという自覚があるらしい。

というか、天田くんや荒垣くんと親しい間柄ではある真田くんだが、ストレガの面々とはなぜか一定の距離を保っているのかあまり親しくないように思える。

荒垣くんは最近タカヤやジンとも普通に話すようになってきているし、軽いジョークを交わしたりもするようになった。

イズミくんとは特別悪い関係という訳ではなく、普通だ。

イズミくんが荒垣くんを天田くんのお母さんの仇だと思つて復讐を依頼したこともあるという並々ならない関係だったが、荒垣くんだけでなく自分も天田君のお母さんの仇だということを説明し、事情があった（10割自分のせいなのだけれど）と伝えると神妙に、そして悲痛な顔で「そうか…」とだけ言つて、無かつたことにはできないけれど特別態度を変えることもなく荒垣くんや自分に接してくれている。

イズミくんは良い人だ。本当に、もつたないくらいに。

「あ、あの、そろそろプレゼント交換しない…？」

朔間くんがおずおずといった様子でそう告げてくる。

ケーキで汚れたりしないように、先にプレゼント交換をしようということになっていたので、確かにこのタイミングしかないし自己紹介とかもそこそこに、早くしないと紗耶ちゃんが寝る時間が来ちゃう。

「そうだったー！」

慌てて用意したプレゼントを取り出す。

そうしてランダムに交換していく。何が入ってるかは自分が用意したものの以外分からない。天田くんと吾郎くん、紗耶ちゃんの子供組には自分が余分に交換用のプレゼントを用意して手渡してある。

全員が交換し終わったら開封だ。

ペリペリと包みを開ける。

「あ、フェザーマン大全だ」

中には分厚いフェザーマンのファンブックが入っていた。最近発売されたもので、ついでに言うとな自分が朝倉先生からお金を預かって子供組用に用意したものである。回り回って戻ってきてしまったらしい。

「僕のは…なんだろう、これ…？」

横の綾時くんがプレゼントを開けて首をかしげている。

その手には謎の物体が鎮座している。一言で言うなら石だ。

「あ、それ。屋久島で拾ったなんかの石」

そこへ湊がいけしゃあしゃあと答える。そんなものをなぜクリスマスプレゼントに選ばうと思ったのか。

「ご利益あるかなって」

「そうなんだ！へえ、屋久島の！」

マイペースすぎる答えに綾時くんは怒るでもなく若干嬉しそうなので放置だ。

受け取ったのが天田くんたちじゃなくて良かった、とそっと胸を撫で下ろしてタカヤのほうを見れば何かの袋を持ち上げて眺めていた。

「これは——プロテイン…？」

「ぶふっ！ タカヤにプロテイン!? ムキムキになるタカヤ…ふははっ、想像つかない…!」

思わず笑ってしまう。

中身は大量のプロテインと来た。真田くんが選んだのであろう3キロくらいありそうなそれはタカヤでは到底消費しきれない量だ。

もし消費したとしてムキムキになったタカヤを勝手に想像して――タカヤには悪いが笑いが止まらなくなる。

「ふは、ふへへっ！ ひっー！ ダメだ笑いが止まらない！ ムキムキのタカヤ…!」

「何がそんなにおかしいんだか…」

とはいえ、プロテインを飲んだからと言って真田くんがムキムキになっていない（細マッチョではある）ので、タカヤがムキムキになるとは限らない。だがムキムキのタカヤという語感が妙に腹をくすぐってきて、笑いが止まらない。

笑いを堪えるために他の人のプレゼントも盗み見る。

が、ふと視線を感じて探してみれば、吾郎くんがオレンジ色のタコのぬいぐるみを手にとちらをじっと見つめている。

否、こちらの手にあるフェザーマン大全を、だ。

「吾郎くん、もし良かったら交換しない?」

「えっ?」

「俺、海の生き物好きなんだよねー」

嘘はついてない。嘘は。

きつと、恐らく。吾郎くんはフェザーマンが好きなんだろうと思う。同じ歳の天田くんがフェザーマン好きなのだから、そうに違いない。

たぶん。

「俺、どーしてもそのタコさんが欲しくてさ、交換してくれると嬉しいなって」

「それなら…」

「ありがとうー！ すっごく嬉しい!」

若干苦笑いで交換を許可してくれた吾郎くんにお礼を言って交換

して、こちらへ来たぬいぐるみを抱きしめる。ああ、柔らかな感触。素晴らしい。

それにフェザーマン大全が吾郎くんの手元に移ったというの面白い事だと思う。

あまり読まない自分よりかは、ちゃんと読んで楽しめる人に渡った方が本も嬉しいだろう。

「マジで抱きしめてる…」

なにか小声で聞こえたような気がしたが気の所為だということにしておこう。

そこへ、天田くんが吾郎くんへと近寄っていく。恐らく交換したところを見ていたのだろう。

天田くんの手にはフェザーマンのDVDセットが抱えられていたのでちゃんと手に入れられたその運の高さには賞賛を与えたいところだ。

「あ、明智くん。三上さんにフェザーマン大全交換してもらったんだね」

「う、うん…一応」

「僕さ、フェザーマン好きなんだ。明智くんは誰が好き？」

などときこちないながらも会話を始めた2人を他所に、紗耶ちゃんのお姫様なりきりセットとパステルカラーなユニコーンのぬいぐるみをゲットしたイズミくんがガッツポーズを決めていたのが見えた。恐らく自分のように交渉して交換したかどうかにかしたのだろう。

だって、さつき見た時は真田くんがお姫様なりきりセットを持っていたのだから。

「朔間くんは？」

「え？ 僕？ 僕は…これ」

訊けば、朔間くんがおずおずとプレゼントを見せてくれる。

それはシンプルなデザインの鍋つかみだった。恐らくこれは荒垣くんのチョイスだろう。

「でも僕、自炊とかしたことないし…どうしよう…って」

「これからしてみるってのは？ 良ければ教えるよ」

「そうだよね、せっかく貰ったものなんだし使わなきゃだよね」

今日の晩御飯はデリバリーのチキンにピザなので使い道がないが、これから一人暮らしをしていく朔間くんにとっては鍋つかみはあつて困らないだろう。

実際オーブン料理や焼き芋、熱くなった鍋の取っ手を持つのに大活躍している。

ひと通りプレゼント交換が済んだのでプレゼントをみんな脇において食事となった。

ちなみにこのデリバリーのチキンとピザの代金は朝倉先生が出してくれた。

ありがたい限りだ。

「楽しめよ」と一度クリスマス会の件を伝えに朝倉医院に寄った時に笑いかけてくれた朝倉先生の顔は笑顔だった。

先生の好意に甘えてこうして豪華なクリスマス会になったわけで、先生には頭が上がらない。

また今度、タカヤたちと相談して何か贈り物でもしようと思う。

贈り物と言えば先生からもらったアガスティアの木の種はまだ芽吹いていない。

毎日水やりをしているが朝倉先生の言った春先まではまだまだ時間がある。誰かに託してしまおうかと思うも、それができない自分がいる。

折角もらったもの、というのものもあるがどうにも手放しがたく、ついダラダラと世話してしまっている。

ある意味、朝倉先生の思うつぼだ。

そんなアガスティアの鉢植えはあまり寒くないが日当たりは良い机の上に置いてある。

窓際だとさすがに寒すぎて枯れてしまうかなと思ったからだ。流石に、もうすぐ1月になろうという時期に窓際は寒すぎる。

枯らすのは本当にもつたいない。最悪、鉢植え用の毛糸のパンツを編んでしまおうかと考えるくらいには愛着がわいてしまっていて仕

方がない。おのれ朝倉先生。

とまあそんなこんなでピザとチキンを食べ終えあつという間に帰る時間になった。

楽しい時間は一瞬で過ぎてしまう。

朔間くんにお礼を言つて帰路につく。

その途中、雪がちらほらと降り始め夜の道に降り注いだ。

そんな中で、隣を歩いていた天田くんに話しかける。

「天田くん、どうだった？ 楽しかった？」

「とつても。ありがとうございます」

「良かった。というかお礼とかいいよ。むしろこっちが来てくれてありがとうつて言うべきだしさ」

突然の企画だったため、予定があるかと断られるかと思つたが来てくれてよかつたと思う。

来てくれなかつたら初対面の吾郎くんとは気まずいクリスマス会になつていたかもしれないし。

「そういえば、吾郎くんと何か話してたみたいだけど仲良くなれた？」

「はい！ こんど遊ぼうつて約束しましたんです。まだフェザーマン大全を読み終えてないし、今度は朝倉医院さんでDVDを観させてもらおうつて」

「いいんじゃないかな。朝倉先生も快諾してくれるよ、きつと」

順調に仲良くなつていようよよかつた。

吾郎くんのごことは真田くんも心配しているみたいだが、この調子だと心配はいらないかもしれない。

目つきと言動で誤解されやすいが意外と朝倉先生は子供に甘い。紗耶ちゃんに対しては言わずもがな。正直自分たちにも甘いのではないかと思うくらいだ。

だからこそ、タカヤたちストレガをデータ取りの名目で住ませたり、吾郎くんみたいに一時保護をしたりしているのだろう。

もしかしたら朝倉先生のところでわざわざ保護されているということは、吾郎くんの件も悪魔かペルソナ絡みなのかもしれない。

(なんて、そんなわけないか)

本当にたまたまかもしれないし、関係がないのに邪推して深堀するわけにもいかない。

間違っていたらそれこそ恥ずかしいどころか吾郎くんを傷つけてしまったら余計なごたごたに巻き込んでしまうかもしれない。そんなことは避けるべきだと思うし、あと一カ月しかない自分に何ができるかと言われればなにもない。

ずるいかもしれないが、今の自分にはこれで精いっぱいだ。何かできることもなければ何かをする必要性も今のところ吾郎くんには見えない。

「それにしても、あと数日で大晦日だなんて考えられないです。それに……」

天田くんの言いたいことはわかる。大晦日が終わればもう決戦の日まで一カ月を切ることになる。

ここからが正念場だ。

決戦の日、勝てないとは絶対に言えない。だがどうやっても、勝てるようにしないといけないのだ。

「大丈夫。きっとなんとかなるよ」

「そう、ですね。そうですね!」

「それにいまは楽しいことだけ考えるんだよ。正月は荒垣くんとおせち作るから、沢山食べるんだぞ」

茶化してみる。

「おう、沢山食えよ」

と、そこへ荒垣くんも乗ってくるようにニカツと笑いながら天田くんの頭を乱暴に撫でた。

「もう子供じゃないんですから!」

「まだ子供だろ」

「未成年という意味では僕らもまだ子供だけどね」

むくれる天田くんに真田くんがぴしゃりと返せば、珍しく綾時くんがそう静かに告げた。

確かに、と思っているとそこで会話が終了してしまったのか沈黙だけがその場を支配する。

静かな夜に、こうして雪を踏みしめる音だけが響いているというのも悪くない。

今日は本当に楽しかった。

このまま世界の時が止まってしまえば、なんて冗談めかして思ってみる。昨日も同じことを思っていたが。

もちろん、時は止まることなく動き続けている。

そのことに内心ホツとした。冗談めかして思ったものの、止まってしまったらまた3月31日の繰り返しになるのでシャレにならなくなる。

いや、止められるということは動かせるということでもあるので大した問題ではないのかもしれない。

何かあつたら怖いのでこれ以上そういうことを考えるのはやめて、ガードレールに溜まっている雪をサツととってぎゅっと握る。

「なにしてるの?」

「いや、雪の感触確かめてる」

この何とも言えない触感と音が冬だなあと思わせるから嫌いじゃない。

「そう…変なの」

「変で結構!」

手袋もなしに触ると手が冷たくなるが今はなんだか暖かいので気にしていない。

その握ったものを湊の頬に当ててみる。

「えい」

「っ!?!」

びくりと肩を跳ね上げた湊はこちらをじろりと睨み付けると無言で脇の雪をひつつかむとこちらの服の襟の中にその雪を放り込んできた。

あまりに素早い動作だったので反応できず、その冷たさが首筋に襲い掛かった。

「ぎゃあー!」

「何騒いでやがる」

そんな荒垣くんの呆れたような声と共に雪合戦が始まったのだ
た。
帰りが遅くなって叱られたのは言うまでもない。

大晦日（12／31）

12／31（木）

巖戸台分寮 屋上

夜

雪のふりしきる中、屋上で黄昏れる。

今日は本来なら、綾時君を殺すか殺さないかを決める話があるはず
“だった”。そうなるはずだった。

重く、苦しい選択をし、どちらかを選ばなければならなかった。

だが、自分が“死の宣告者”となったことでそれもなくなった。別に綾時君みたいに0時になれば消えるわけでもないし。

それが、良かったかどうかは自分にはわからない。もしかしたら、記憶を消して終わらせる方が、幸せなのかもしれない。

けど、諦められなかった自分がいた。

それではダメだと吼える心が、魂があった。だからこそ、こうして繰り返しているわけなんだけれども。

それ以外に特に何かあった訳では無いが、なんとなく1人になった
かったのだ。

寒いがどうつてことは無い。完全防備、雪だるまと言われても過言
ではないもこもこ加減の服装で挑んでいる。

というかそれくらいしないと奏子と湊が五月蠅い。もつと着こめ
と言われたがこれ以上着こんだら熱中症になってしまうと思うのだ。

カイロにマフラー、手袋、そして厚手のコートだ。あれもこれもと
着こまされたが、十分すぎるにほどがあるだろう。

北海道じゃないんだぞここは。

何度も言うが、どうして一人になりたかったかと言えば特に意味が
あるわけでも消えるわけでもなく、なんとなく、なのだが。

湊からは「0時になって勝手に消えたら許さないから」と釘を刺さ
れたけども。

正直なところ丁度あと一か月で終わりが来る。

それに向けて、ひとりで静かに考えたかったというのもあった。や

ることは決まっている。やらなければならぬことも決まっている。だが、本当にそれでいいのか？ という迷いもあった。

勝つためには、人間を捨てなければならぬ。だが、そうすれば湊や奏子、そして美鶴さんや養父母とも一緒に居られなくなる。

逆に、人間のまま、取り込んだ悪魔やこの力を捨てて戦うとしたら？ それは無理な話だ。

ペルソナも使えないお荷物ができあがるだけ。そんな状態の自分を抱えたままでシユブニグラスと戦ってみんなが勝てるか。

そう言われれば無理としか言いようがない。信じろと言われてもこればかりは無理だ。

相手は明確な意思を持っている。漠然と呼ばれただけのニユクスではない。自ら願いを確固たる意志で叶えに来たシユブニグラスだ。

目的の為ならどんな手だつて使うだろう。

もし、民間人が人質に取られたら。それだけで湊たちは動けなくなるだろう。

いくら朝倉先生たち大人のペルソナ使いがいたとしても、守り切れる人数には限りがある。

戦意を失わせられたら終わりだ。

湊や奏子たちのためには、人で居続けなければならない。だが、勝つためには人を捨てなければならない。

そうしないと、確実に乗り越えられない。

「くそ……」

頭をくしやりとかきむしる。

分かっている。全部が叶う、素晴らしい方法なんてないことくらい。

何かを得るためには、別の何かを失うことくらい。

だが、最善と思っている方法が、メテイスによって否定されている状況ははつきり言って「詰み」だ。

『卒業式の日には兄妹三人で居なければならない』、などという勝利条件は初耳だった。

そうしないと、結局似たような形で湊と奏子がよろしくない運命をたどるということも、信じたくはなかった。

だが、自分の考えている作戦ではそれは不可能だ。

自分は、1月31日に死ぬ。これは変えられない。どうあがいても無理だ。

負けが決まっているゲームほど、つまらないものはない。どうにかしないといけないと頭ではわかっているけども、上手い作戦が考え付くはずもなく。

「……死にたく、ないなあ」

ぽつりと、零す。

どうしようもないことくらいわかっている。

自分で選んで、そうなるようにしてきたツケだ。これは。

それに本来自分は存在しない異物だ。姉弟は湊と奏子だけであり、有里^俺は存在しなかった。

だから、消えるのが世界として当然の流れで。

(……本当に?)

そうなのだろうか。

ずっとそう思い込んできたが本当にそれが正しい流れなのだろうか。

自分が死のうが消えようが、記憶は残る。そうなれば、皆は後悔するのではないだろうか。

(いや、そんなわけないか)

何度も何度も、助からないと説明してきた。

もうダメなのだと、説明してきた。

だからこそ、みんなは納得こそしないものの、分かってくれているものだと自分は思っている。

もう死んでしまうものを、どうやって救うというのか。自分みたいに時を巻き戻せるわけでもない。

巻き戻したところで変わらないものを、どうやって。

湊と奏子を犠牲にするようなら許さない。それ以外の誰かが犠牲になることだって。

記憶も奪い去れたなら。それが一番いい。影時間の記憶の修正と共に、自分が存在していたことも、別のナニカに置き換わればいいのに。

そうなれば、それが一番楽ではある。

自分はただの現象に戻って、みんなは辛い喪失の気持ちを抱えなくても済む。

それで大団円ではないのだろうか。

そう考えていると、屋上のドアが開いた音がした。

湊か奏子か、それとも他の誰かが呼びに来たんだろうかと振り向けば、そこに居たのは、

「…アイギス」

「優希さん」

アイギスだった。

その表情は微妙に気まずそうな雰囲気醸し出しており、困っていると聞いたげでもあった。

この前、自分がアイギスに「八つ当たり」をしてしまったから、このような表情を浮かべていても仕方ないと思う。

あの後からアイギスはまた自分を妙に避けていたからだ。

どんな感情からかはわからないが、気まずいのは確かだろう。

しかしなぜ、アイギスがわざわざ自分に会いに来たのか。理由がまったくもってわからない。

呼びに来るなら別に誰かに頼めばいいだろうし、そもそもアイギスに湊や奏子、メテイスなど自分に用がありそうな面子がこんな様子のアイギスに頼むはずもない。

真田くんとしてここまで無遠慮ではないだろうし、本当にアイギスが会いに来た理由がわからない。

なんでだ？

「……」

アイギスはそのまま同じ場所で突っ立って、何かを言いくそうにもぐもぐとしている。

「そのままじゃ風邪…はひかないだろうけど、冷えるから中に入れば

？」

そう勧めてみるもアイギスは黙ったまま動こうとしない。

「メテイスやラビリスに怒られるのは俺なんだからさ、ほら、中に――」

「あの、」

もう仕方ない、と建物の中へ手を挿んで入ろうとした瞬間、アイギスが口を開いた。

思わず、ぱつと手を離す。

「わたしなりに、あの時の言葉を考えて、みたんです」

ぽつりと吐き出されたのはそんな言葉だった。

あの時、あの時？ あの時、というのはラビリスとシャビリスの件の時のことだろうか。

「俺がアイギスに、俺を見殺しにしたことを自覚してほしいってやつ？」

「……そうです」

やはりそうだったらしい。

アイギスは小さくうなずいて、そして視線を外した。

こちらとしてもあれを真剣に考えられるととても気まずい。完全な八つ当たりであり、アイギスは何も悪くない。

アイギスが幼かった俺を助けられなかったのは、当然の結果なのだから。

「わたし、思い出したんです。……幼かった優希さんを見殺しにしましたったことを。デスの討伐を優先して、千鶴さんとの約束も守れなかった」

「当然だろ？ それがアイギスの役目だったんだからさ」

本当に、アレは八つ当たりなのだ。

アイギスがこうして罪悪感を覚える必要はない。ああ、本当に馬鹿なことをしてしまった。

「……ごめん、アイギスを悩ませてしまつて。本当に八つ当たりだったんだ。だから、気にしないでいい。いや、気にしないでほしい。思い出させて本当にごめん」

頭を下げる。

アイギスの表情は見えない。なにも。

「——でも、わたしは。また、守れなかったんです」

「……？」

アイギスの言葉がよくわからなかった。

また、とはどういうことなのか。

「わたし、カダスで……っ、幼かった優希さんのシャドウを——守り切れなかった！」

さらによくわからない。

自分のシャドウ？ 自分にシャドウはいない。いるとすれば
ウィツカーマンくらいだ。

ウィツカーマンは普通に今でもいるし、消えたわけでもない。今でも急に視界の端に現れてピースしている。うざいからどこかへ行つてくれ。しっし！

なのでアイギスの話が全く分からない。

「ごめん。意味が分からない。順を追って説明してくれないか」

「え、あ、そ、そうですね……すみません」

そうしてアイギスから語られた話は、にわかには信じがたいものだった。

というか、信じたくもなかった。幼い自分がカダスに居て、「死にたくない。消えたくない」なんて喚いていたことなんて。

自分がその場に居たらパンの大神とやらではなく自分の手で消していたかもしれない。

それくらい、認めたくない部分であったことは容易に想像できる。

「……はあ。別にいいよ。守れなかったことくらい」

「よくありません！」

「いいんだよ、本当に」

むしろ守れなくて正解だ。

ずっと喚くだけの存在なんて要らない。弱い自分なんて要らない。殺意すら湧くほどだ。

だから別にアイギスが守れなくとも良い。

「どうしてそんなこと…！ どうしてなんですか！」

「だって、俺にとってはどうでもいいことだから。むしろ要らないのが消えてくれてせいせいしてる」

若干食いついてくるアイギスにイラついて切り捨てるようにそう吐き捨ててしまう。

「要らないって…ひどい…そんなはず…！」

「それに俺、ピンピンしてるし。現実の俺が元気じゃダメ？」

「それは…」

現実を見てほしくてその場しのぎにそう言う。

そもそもアイギスが守れなかった「幼い俺」はもう誰にも救えない。救われなかったという事実だけがそこにある。

それをいまさら後悔してなんになるのか。そうしてほしいと言ったのは自分だが、こうもめめめされるのもなんだかめんどくさい。

ダメだ。アイギス相手になるとどうしてもだめになる。こんな暗い感情が湧いてきてしまう。

(待てよ)

もしかして、自分はアイギスに「自分そのもの」を見てほしくてこうもイラついているのだろうか。

メテイスやラベリスは自分を見てくれている。だからその姉妹であるアイギスにも、見てほしいのだと駄々をこねているのではないのだろうか。

それは、無いものねだりではないのか？

アイギスには、湊と奏子のことだけを見てもらうだけでいいのではないか。

自分のことは気にせずに、居てほしいはずなのに。

そう思うと、急に恥ずかしくなってきた。

「うあ~~~~~!!!」

「っ!? どうかしましたか!?」

「どうもしてない!!! 恥ずかしくなってきただけ!!! あ~~~~~!!!」

アイギス、忘れてくれ! 頼む!

両手を合わせ、頭を下げる。

「えっ!？」

突然の行動に驚いたのであろうアイギスの顔を気にせず、言葉を続ける。

「全部だ。シャベリスの時の話からさつきまでの話も、罪悪感も、全部！ほんとに俺の八つ当たりだったんだ、あれは…」

「どういうことなんですか？ 八つ当たりだというのは聞きました、それと優希さんの今の言動が結びつきません」

「だ、だから…」

説明しにくい。

まさか、自分を見てほしいから八つ当たりをしていたただなんて幼稚にもほどがある理由だと自分ですら自覚していなかったなどは。

恥ずかしい。

「アイギスに……自分を…見てほしくて……八つ当たり…してました…ってこと…」

小さくもごもごと説明をすればアイギスの目が見開かれる。

「そんなことで…」

「そう、そんなことなんだ…ごめん。本当にしようもないよね。アイギスが大事なのは湊と奏子なのにさ」

ガシガシと後ろ髪をかく。

こんなことでこれまでアイギスに八つ当たりをして、アイギスを傷つけた。

許されていいことではない。

「いいえ。わたしはしようもないことだなんて思わない」

そこに、硬い声が響いた。

「わたしが、例え記憶を消されていたのだとしても、幼かった優希さんから目を逸らしていたということは本当のことです。そんなわたしを見て、優希さんがそう思うのは間違っているだなんて、わたしは思いません」

「間違ってるんだよ。こんなこと」

アイギスがそう考える理由が分からなかった。何もかも間違っているだろう。

アイギスの態度に嫉妬のような感情を抱いたことも、八つ当たりをしたことも。なにもかも。

だというのに、アイギスはふわりと笑う。

「では、仲直りしましょう。握手です」

「え？」

そう言って手を差し出し出してくるアイギスに思わず口をぽかんと開けてしまった。

アイギスに限って力いっぱい握ってくるだなんてどつきりはしないだろうが、突然の握手に驚いてしまったのだ。

「何か悩みがあるなら年内のうちに解決しておくべきだ、と奏子さんと湊さんも言っていましたから」

「はあ…」

もう一度後ろ髪をがしがしとかく。

こういう時にふたりの勘は侮れない。アイギスに適切なアドバイスをして送り出したのだろう。

こうなることを半ば分かっていて。

「わかったよ。仲直りしよう」

アイギスは何も悪くない。だというのにアイギスも悪いかのよう。なこの状況は何なのだろう。

アイギスはアイギスでこちらだけが悪いのだということ認めてくれないし、相当強情なのではないのだろうか。

いったい誰に似てしまったのやら。

「はい、仲直り、です。ではこれからは…これまで通り。わたしも優希さんのお友達、ですね」

「これまで通りって…いや、確かにコロマルの散歩やモコイさんと遊びに行ったりしたけど友達…なのか？ 仲間じゃなく？」

疑問に感じる。

仲は悪くはなかっただろうがそんなに親しい間柄だったのだろうか。ただの仲間ではなかっただろうか。

「ですので仲間であり、友達であります」

そう言い切ったアイギスは笑っている。

これはどうあがいても訂正も修正も出来なさそうだ。諦めるほかない。

「じゃあ、そういうことで」

「はい」

そう言うと、アイギスは頷いて屋上を去っていった。

本当に、これでいいのだろうか。

こんな解決で、許されていいのだろうか。

白い息をホッと吐く。雪はまだチラチラと降ってきている。

何がしたかったのか結局わからないまま、仲直りだけをして自分はまた一人でぼつんと屋上に立っている。

（自分も部屋に戻ろう…）

そのままこの場にひとりでいることになんともなく嫌気がさして来たので部屋に戻ることにした。

あと数時間で、今年が終わる。

最後の最後にこんなことがあるだなんて思いもよらなかつた。

（仲直り…か）

だが、気分は悪くなかつた。

初詣（1／1）

2010年

1月1日（金） 朝

巖戸台分寮

「ついに正月だな」

「ついに正月だね」

荒垣くんとふたりで冷蔵庫の中を見る。

中には、昨日までにコツコツと準備してきたおせちの重が入っている。

最後の一品が出来上がった瞬間に二人で「よしっ！」と言ったのは記憶に新しい。

「朝はどうせバラバラに食うだろうからな、初詣に行った帰り…そうだな、昼に出しゃいいだろ」

「で、こっちは初詣のお参りついでに朝倉先生のところに届けに行く、と」

「そうなるな」

すこし小さいお重を指さし、確認する。

どつちかがもっていかないとならないのでちゃんと確認しておきたかったのだ。

「じゃあダイニングにいる腹ペコ虫さん達には…」

ちらりとダイニングに居る湊と真田くんを見やる。

ふたりは食事が出てくるのをなんとなく待っているようでこちらに期待した視線を送ってきている。

残念だが、おせちはでないぞと言いたい。

「適当に食わせとけ。どうせ何でも食いやがる」

「それもそうか」

炊飯器に昨日のご飯が残っていたのでそれをおにぎりにする事にして、ウインナーと卵焼きをつけることにした。

伊織は寝坊確定だとしても天田くんはもうすぐ起きてくるだろう。

その二人と先に出て行った女性陣の分まで考えて量を多めに作っ

て置く。

帰ってきてから食べたくなることもあるだろうし。一応。

山盛りのラップに包んだおにぎりとういんナーと卵焼きを大皿に乗せて、湊たちの前へとドンと置いた。

「はい、朝ごはん。お味噌汁は自分でレトルトのを作ってね」

「えー」

「分かった」

それぞれの返事を聞いて、踵を返そうとしたその時、ちらりと天田くんがこちらに顔をのぞかせた。

「あ、あの…明けておめでとう…ありがとうございます」

「おめでとう」

「今年もよろしく」

それに湊が返せば照れたように天田くんが返す。

ああ素晴らしきかなこれが正月の醍醐味だ。ちなみに真田君と湊のふたりは「明けておめでとう」をいう前に食事に気をとられているのでそんな会話は無かった。

「なあ。みーなど。明けておめでとう？」

「おめでとう」

「よろしい。お味噌汁は作ってやろう」

意地悪っぽく言ってみれば渋々その返事が返ってくる。

なのでこちらも譲歩して味噌汁を用意してやることにした。というか、ケトルからお湯注ぐだけなんだから自分でやればいいのに。

真田君はそこに味のしないプロテインぶち込んでるけど。ちゃんと溶けるのだろうかあれ。

「あ、荒垣さんも明けておめでとうありがとうございます」

「おう」

「今年もよろしくお願いします」

キッチンからひよっこり顔を出した荒垣くんにも天田くんは挨拶をした。

まったく、いい子だ。誰かさんと違って。

「天田、僕の時と先輩の時で態度…いや、どうでもいいか…」

おにぎりをほおばりながら小声でそう呟いた湊の声はしっかりと耳に入ってきた。

日頃の行いだと思うぞ、うん。

「お正月って言っても特別にすることって、無いですね」

「新年の挨拶を交わすつてくらいだな。今年も頼む」

「はい。コロも、おめでとうな」

「ワンツ！」

そんな会話が繰り返されているがこちらとしては言語道断。聞き捨てならない言葉だ。

「二人とも、することあるって！ おせちを食べたり神社にお参りに行ったりくじを引いたり屋台を回ったり…そういうの、やらないの!?! というかお昼にはおせちとお雑煮用意してあるんだよ!?! 腹空かして貰わないと!」

「そんなことを言っておいてこんな量の握り飯を用意するやつがあるか。いや。有里なら食いきれるか」

それもそうだ。

ぐうの音も出ない。時間差のことをすっかり忘れていた。

そんなことを考えていると、奥から伊織が歩いてくる。

「あつべー…すっかり寝坊だよ…：…なんで、あんなの見ちゃったかな…イタリアかなんかのゾンビの映画…：…見ました?」

「見るか。そんなもの」

真田くんは容赦なく伊織の言葉を切り捨てた。

伊織が見たというゾンビ映画、自分は寝付けなくて途中まで見たがそのことは黙っておく。

中々悪くない出来だったような気がするが途中で眠気が限界にきてテレビを消して寝てしまったのだ。なのでどうだったかは憶えていない。

「あ、三上さんが言ってたように、皆さんは、お参りとか、行かないんですか?」

「ゲンは担がない主義だからな」

「オレもそういうのいいや…面倒くさいだけだし…」

「どうでもいい…」

天田くんの問いかけにこの返事だ。

なんとまあつまらない男たちである。正月と言えはお参りだろう。そしてくじ引き。吉と出るか凶と出るかのワクワク感がたまらない。子供っぽいと言われればそれまでだけでも。

「ゆかりさん達は、もう行ってますけどね。美鶴さんが、全員分の晴れ着を用意してたみたいですよ…」

「！…着物ねえ」

全員分というと恐らく奏子やメティス、ラビリスの分もだろう。

本来ならこちらで三人の晴れ着を用意する予定だったが美鶴さんによる「女子同士の方が何かと言いやすいこともある」という一声でバツサリと切り捨てられてしまった。

確かにそうである。自分なんかと選ぶより、断然女子同士で選んだ方が楽しいに決まっている。

それに美鶴さん御用達の呉服屋で着付けとなればさらにバツチリしつかりしているだろう。自分が知っているのは精々京都のあの店と倉橋商事チェーンの店くらいだ。前者はともかく後者とは雲泥の差というものだ。

そう言えば、倉橋商事と言えば輸入業だけでなく色々な分野にも手を出しているらしく、蓋を開けてみれば倉橋商事の子会社だった、などということとは珍しくない。

流石、かつては名を馳せた大企業、といったところか。

「…オレッち、ちよつとコンビニ！」

「おい、待て」

「…は？」

踵を返して出て行くこうとする伊織を真田くんが引き留める。

「初詣に行く気か？　『そういうのはいい』んじゃないのか？」

「や、やだなー。いや、ちよつと散歩してくるだけツスよ…」

「…ふうん」

白々しい。

どうせみんなを強制的に誘って初詣に行く予定なのだからそんな

言い訳をせずともいいと思うのだけれど、そんなことを伊織は知りはないだろう。

「まあ、ヒマだしな、たまには付き合おう」

「…あ、僕も行きます」

「俺と荒垣さんと湊も行くよ。ね、湊」

「はあ…」

三者三様の返事を返し、伊織を見つめれば嬉しそうに笑う。

「なんだ、結局、行きたいんじゃないツスか」

「場所は？」

自分が先に『長鳴神社』だと言えば不審がられるのでここも黙る。どうせ天田くんが聞いているだろうし。

「…あ、聞いてます」

「…よしッ」

「あ、ちよつと…朝ごはん…まあいいか…」

元気よく走りだしていった伊織を見送り、自分もエプロンを脱ぐ。

「行く？」

「行くしかないだろう」

「屋台奢ってくれるなら、行く」

ここにきてまで現金な湊の返事を聞きながら、外に出る準備を始めるのだった。

「というかどれだけ食べるんだ…？」

昼前

長鳴神社

「つーか、三上先輩なんスかその羽織」

「ん？ 修学旅行の時にちよつと仕立ててもらった」

「ちよつとじゃなくないですか？ 僕からでも高そうな品だってわかりますよ」

神社の石段を上がりながらそんな話をする。

折角だし、箆笥の肥やしになっていたこれを着て行こうと思ったの

だ。

箆笥の肥やしのままだとアザミさんや仕立ててくれたお店にも悪い。なので、今着るべきだと思い立ったわけだ。

まあタートルネックに羽織という何ともちぐはぐで寒そうな格好になっているがそれ以外コーデイネートが浮かばなかったのもある。

そしてタートルネックの内側に山ほどカイロを貼っているので防寒対策は――

「ふえつくしよん！」

「コート、着てきた方がよかつたんじゃない」

「ずびび…そうかも…」

―― バツチリではない。動いているとはいえ若干寒い。

羽毛のダウンジャケットが恋しい。ああ素晴らしきかな文明の利器。フワフワダウンジャケット。

調子に乗ってよくわからないまま羽織だけ着てきてしまったので寒い。もつとこう、冬は冬でちゃんとあつたかく着る方法があるはずなのだ。こんなことならパソコンで調べてくればよかつたか？と思うものの、そんなものがすぐ見つかるはずもないし調べたところで実践できるかどうかかわからないのでどのみちこの結果になっていたと思う。

「クウーン…」

コロマルが心配して擦り寄ってきてくれている。

その温かみがありがたい。早く甘酒を貰って飲みたい衝動を抑え、石畳を進む。

そんな視界の両端に色とりどりの出店が並ぶ。夏祭りのものより規模は小さいが、それでも立派に出店が出ている。

今日はどれだけ使うことになるのやら、と財布を確認して、またしまえば、丁度目の前に綺麗な着物で着飾った美鶴さんたちが歩いている。

「明けましておめでとうございます。本年も、どうぞよろしく」

「あつけましておめでとうございませう！」

赤の着物を着了た岳羽の挨拶と朱色の着物を着了た奏子の元気な挨拶

がほぼ同時に振ってくる。

奏子に至ってはピョンピョンと元気よく跳ねているのだ。こけたり着崩れとかしないんだろうか。そこが心配だ。

「つていうか、遅かったですね。もう帰ろうかって言ってたのに」

「色々あつたんだよ、色々…」

「あー、なんか察しました」

実はあんまり何もなかったがそう言うことにしておいた。

実際、行く・行かないでござたござたしたのは事実だし。

そんな会話をしていれば、伊織がぼーつと岳羽を見つめている。そして、口を開いた。

「ゆ、ゆかりツチ…」

「な、なによ…」

見つめあう二人。そんな二人を知ってか知らずか美鶴さんが遮る。

「明けましておめでとう。…ん、どうした、伊織？」

「桐条先輩、すげーイイつす…なんだか、オレ…アウチ！」

皆まで言う前に伊織の足を思いきり踏んづける。

これ以上言及するようなら踵でぐりぐりするの忘れない。

「伊織？」

「ハ、ハイ！ すんませんした！ だからその、足！ 足！」

悲鳴を上げる伊織に足を退ける。

反省したのならいいんだ。反省したのなら。反省してなかった場合ほぐりぐり追加だけど。

「お、おい…」

ちよつと困惑している美鶴さんもかわいらしい。

出来ればカメラで撮りたいところだがあいにくそんなものはないし、携帯のカメラでは美鶴さんの美しさを捉えきれない。

残念だ。もつと携帯のカメラが高画質になればいいのに。

「美鶴さん、綺麗だよ」

「そ、そうか。ありがとう」

につこりと笑いかければ困ったような笑みで返されたがそれでもいい。

自分的にはこの姿の美鶴さんを拝めるだけでも幸せなのだから。

「三上先輩の嫉妬コエ〜…」

伊織が何か言っているが聞こえない。聞こえない。無視だ。無視。

「あ、あの…私、和服ってホントに着た事なくて…帯とか、曲がっちゃってないですか？」

「さあ…よくわからんな。なあシンジ」

「バカてめえ…まあ、変ではねーぜ。安心しな」

「そうですか？ 良かった…」

二人から一応の返事をもらい安心している様子の山岸を、またしても伊織が見つめている。

まあ、美鶴さんではないので良しとしよう。セクハラまがいの言動をするようならもう一度踏むことになるだろうが。

「風花…お前、イイよ…なんかこう…イイよ！」

「も、もう…」

今度はセクハラまがいでなくてもなかつたので良しとする。伊織の平常運転と言えばそうなのだが、それにしたって限度があるというものだ。美鶴さんと奏子を口説こうというのなら俺と荒垣くんを倒してからにしてほしい。

「面白い構成の服ですね。ちよつと動き難いですけど…」

「せやね。今まで着たことない服の感じやね…ウチはこれはこれで可愛くて好きやけど…あの子はぎゃんぎゃん言うてるわ…」

「シャビ姉さんってば…もう」

シャビリスは今ではラビリスに任せて内にいるらしいがそれでも着物の動きにくさにぎゃんぎゃんと吼えているらしい。

シャビリスらしいと言えばそうなのだが、確かにこんな動きづらい格好は彼女からしたらビラビラしていて邪魔で最悪なのだろう。

もし、無いことを願いたいがこのまま戦闘になることがあれば、シャビリスは容赦なくこの高級な着物を破いてしまおうだろう。

おお、くわばらくわばら。

「と…こ…ろ…で。ナギサくん。どーお？ ウチ、おめかしして来てん

で?」

「可愛いと思うよ」

くるりと回って薄い白に近い水色の着物を揺らしたラビリスがウインクしてくる。

彼女もここ数週間でかなり人間味を増してきている。正直、可愛いと思う。純粹に。

「ホンマに? おおきに! でも、他にも何か言うことあるんとちやうの?」

「……これ以上は勘弁してほしいかな」

「——ふうん、ま、今回は勘弁してあげるわよ」

「!」

ニヤリ、とラビリスがあくどい笑みを浮かべた。

否、違う。これはラビリスではない。

ぞわり、と肌が泡立つ。かと思えばラビリスはいつもの笑顔に戻ってにっこりと笑いかけてくる。

「なんてな。冗談や、ジョーダン! どう? びつくりしはった?」

「びつっつくりした…心臓止まるかと思った」

「そっちの方がジョーダンに聞こえへんねんけど…」

ドキドキと悪い意味で高鳴る胸を押さえて大きく息を吸う。

一瞬シャビリスが出てきていなかっただろうか。気のせいかな?

本当に冗談なのかそうじゃないのか判別がつかず、ドキドキしてしまう。主に恐怖的な意味で。

視線を横に向ければ、アイギスの後ろに隠れるようにしてこちらを見ているメテイスと目が合った。そしてぴよんと頭が引っ込められる。

この中で一番恥ずかしがっているのはメテイスなのではないのだろうか、と思うほどに黒い蝶のようなデザインの着物を着たメテイスは小さくなっていた。

「メテイス、大丈夫?」

「どうってことありません。これくらい!」

ぶんぶん、とむくれながらも元気よく返事をしているのでまあ平気

だろう。何故そんなにアイギスの後ろに隠れているのかは知らないが。

「あ、そーだ荒垣先輩。どうですか〜?」

奏子が袖を持ってぴよんぴよんとしている。

ぴよんぴよんと跳ねる奏子に合わせて花のような髪留めがゆらゆらと揺れる。

「どうって、まあ、可愛いぜ。その…今日もな」

「綺麗じゃなくてですか!?!」

荒垣くんの答えにぎよ、と奏子が驚く。

いや、可愛いだけで十分ではないのか。確かにメイクや着付けもされていて、今の奏子は綺麗めだ。だが、所作のせいで可愛さが目立っているようにも思える。

もうすこしこう、おしとやかにだな。

「き、綺麗だ…おう…綺麗だぜ」

「ほんとですか!?! やったー!先輩だいすきー!」

「ちよ、おい。あぶねえだろ! ったく…!」

照れながらも綺麗だと言ったのけた荒垣くんは、奏子が抱き着く。しかしそこは荒垣くん。びくともせずを受け止めて、苦笑い。しかしまんざらでもなさそうだ。

「湊さん、わたしもどうでしょうか。可愛い、ですか?」

「…可愛いよ」

「ありがとうございます」

湊は湊で言葉少なだがアイギスとイチヤイチャしている。

「ああ…眼福…来て良かった…イイよな、お正月ってさあ!」

「なんか…順平さん、ヘンですよ?」

ウキウキとはしゃいでいる伊織にアイギスが訝し気な視線を送る。

「いやー、正月早々、いいモン見れたツス。ねえ、真田先輩?」

「ん? …ま、まあな」

曖昧な返事を返す真田くんの横で、天田くんが不思議そうな顔をして女性陣を眺めている。きよとん、とした顔で。

「それより…寒くないんですか?」

「？」

その言葉に、岳羽が同じく不思議そうな顔をして自らの服装を改めてみている。

「まあ、正直ちよい寒いけど、その方が、気が引き締まるっていうか…てか、三上先輩の服装の方が寒そうじゃない？」

「いえ、そうなんですけどそうじゃなくて…『はいてない』って順平さんが言ってたから…」

「はいてない…？」

「どういふことでしよう？」

女性陣の視線が一気に伊織に向く。それにびっくりと肩を跳ね上げさせ、伊織が後ずさる。

その顔には「しまった」とありありと書いてあった。

だがそれを見逃す岳羽ではない。ずかずかと近づいて足を上げる。そして、

「アウチー！」

二発目が伊織の足を襲った。

くじ引きの結果は『末吉』。

微妙だった。

失せ物はしばらく見つからないし、恋愛運以外はポンコツな結果になっている。健康運なんか末吉の癖に大凶みたいなことが書いてある。

そんなこんなでくじをみんなで引いた後、そろそろ帰ろうかという話になり、石段の前に集まった。

「ねえ、奏子ちゃんと風花は何をお願いしたの？」

岳羽が唐突にそう話題を切り出した。

「私は…今年がいい年になりますようにって。普通だけど、素直にそう思えたから」

「はいはいはい！ ザ・世界平和！」

ささやかな山岸の願いとは正反対に、奏子の願い事はかなりビッグ

なものだった。

願い事というより野望に近い気もするが、例年の奏子からすれば平和的なものだろう。

去年なんかバナナケーキに埋もれたい、というのが願いだっただから。

「願望がデカすぎない？ でも、なんか冗談じゃないのに笑えてきたかも」

「そうだな、いい年になる、というのは私もだ。偽らざる今の気持ちだな」

「みんな大体同じか」

岳羽が納得したように頷く。

世界平和。いい年になる。どちらも、叶ってほしいなと思う。

そんなことを思っていると、美鶴さんがそつと寄り添ってくる。

「しかし、神頼みって訳じゃない。大丈夫。私達なら、必ず出来るさ」
気合を入れ直して頷いた全員に自分も頷く。

これからは一日一日が勝負。カウントダウンみたいなものだ。

「そういうえば、おせちとお雑煮を作って置いてあるよ。帰って食べよう」

出店でベビーカステラやらなにやらを食べた湊はともかく、他の面子はそろそろ小腹が空いてきたことだろう。

「じゃあ、戻りましょうか」

山岸がそう言ってくれたのでみんなで戻る。

行きに朝倉先生のところへ寄っておせちを渡してきたので帰りに寄る必要がない。

今頃、朝倉先生やタカヤ達がおせちを食べてくれていることだろう。後日、感想を聞くのを荒垣くんと楽しみにしているのは秘密だ。

まあ、朝倉先生ならなんでも美味しいと言ってくれそうなので不安はないが。

たとえ偽りだとしても (1 / 2 ~ 1 / 3)

1月2日 (土) 朝

巖戸台分寮 自室

そういえば、というわけではないが許嫁の件や記憶を思い出したことを養父母に伝えていなかったので伝えようかと携帯電話を取り出した。

電話帳を開き、家の電話に掛けようとして――

「……」

――躊躇する。

思い出したと言って、どうする。もう『三上優希』ではいられない、と告げるのか？

美鶴さんの許嫁になったことだって、どう伝えればいいのか。悩んだ末に、通話ボタンを押してコールする。

出て欲しい、と出ないで欲しいを往復しながらその時を待つ。

1回。2回。3回とコール音が鳴り、声が聞こえた。

『もしもし、優希？ どうしたの？』

「……」

答えられない。

緊張のせいか、喉が張り付いて声が出ない。

ただ一言、「思い出した」と言えばいいだけなのだ。ただ、それだけのことができない。

『大丈夫？ なにかあったの？』

「……あの、俺」

小さく、口を開く。

出てきた声は酷く震えていて、情けないものだった。

「おれ……全部、思いだしたから」

『……』

電話の向こうの養母^{かあ}さんは無言だった。

何秒、経つただろうか。気まずい時間が無限に流れているように感じ、思わず電話を切ってしまいたくなる。

だが、

『もう。そんな大事な話、電話でしないの』

その声色はいつも通りの優しいものだった。

責めるでもなく、呆れるでもなく、なんてことないと言うように。

『…今日、帰ってきたなさい。湊くんや奏子ちゃんと一緒に』

養母さんからの言葉は、それだけだった。

「……うん」

ちゃんと、返事が出来ていたかどうか、自分にはわからなかった。

夜

三上家

「おかえりなさい。三人とも」

「ただいまおば小母さん！」

「…ただいま」

「……」

玄関を開けると出迎えてくれた養母さんに、返事をする事ができずに無言で靴を脱ぐ。

心配させたくない、と思いつつも話し合いをしたくない自分がいる。

電車の中で覚悟を決めて、隠さず全部話すと決めたはずなのに。

「…お兄ちゃん」

奏子が心配そうに見てくる。

それでも、いつもの笑顔を張り付けることができずに、ただ無言で歩いた。

リビングに入ると、養父とうさんが既にダイニングの机に座っており、いつもと何ら変わりない姿で夕刊を読んでいた。

「ただいまおじ小父さん！」

「ああ。帰ってきたか」

奏子を見て僅かにはにかんだ養父さんだったが、こちらを見ると厳しい顔つきになる。

「優希。座りなさい」

言われるまま、席につく。

いつも、三上家で座っている、ちょうど養父さんの正面になる席。視線は、合わせられない。合わせることができない。

何を言われるのか、怖くて仕方が無かった。

自分に続いて湊と奏子も同じく席について、養母さんも座る。奏子と養母さんの顔つきは、心配そうな表情をしていた。

全員が席についたのを確認した養父さんは、少しの間の沈黙を経て、口を開いた。

「お前は、どうしたい」

「…え？」

言われた言葉の意味が、わからなかった。

「三上優希で居たいか、有里渚にもどりたいのか。俺たちはどちらの選択肢も、お前に与えてやれる。どうしたい」

そこまで言われて、やっと先ほどの言葉の意味が分かった。

どちらでいたいのか。決めると言いたいのだろう。

自分から「やめます」と言い出すまでもなく、養父さんは「三上優希をやめられる」選択肢を出してきた。

「戸籍上の名前は、今まで言っていないが変わったはいない。お前はずっと、有里渚のままだ。俺たちが、「三上優希」と、ずっとその名乗らせ、呼ばせていただけだ」

「……」

「戻ることは、できる」

どうする、と養父さんの目は問うていた。

あくまで、自分に主導権を握らせてくれるらしい。

とはいえだ。桐条ですでに「三上優希をやめます」なんて啖呵を切っている。

例え俺自身がやめたくなくとも、答えは——ひとつだろう。

「…俺は——有里渚に戻る。戻らせて、ください」
頭を下げる。

養父母のことが好きだからこそ、巻き込めない。その為に、自分

は三上優希をやめるのだ。

やめなくていいなら、やめたくない。

どっちつかずの、中途半端な存在でいたい。

「お兄ちゃん…」

奏子の心配そうな声が聞こえた。

「別に、無理はしなくていい」

湊の気遣うような言葉が聞こえた。

それでも。

「理由を、きいていいか」

養父さんの顔は固いままだ。

こちらの答えに何かある、と察しているような。

養父さんには敵わない。いくら隠し事をしていてもすぐばれるし嘘も見破られる。

視線を外したまま、口を開いた。

「前に、倉橋の遺産を受け継いだって言ったよね。あれが原因で、俺や…みんな。家族が狙われるかもって話が出て、だから、俺は、養父さんや養母さんを巻き込みたくなくて…それで…それで…」

「焦らなくていい。怒りはしない。ゆっくりと話せばいい」

「うん…」

養父さんが落ち着かせるようにそう告げる。

二、三秒息を吸い、吐く。

いちばん伝えたいことを伝えるために。

「ふたりが嫌いになったわけでも、三上優希でいることに嫌になった訳じゃない。むしろ——本物じゃなくてごめんなさい。偽物で、ごめんなさい…」

自然と、涙がこぼれた。

そしてそれは止まらなくなる。

ぼろぼろと、溢れては零れていく。

「…俺たちがそう名付けた事でお前が苦しむなら、名乗らなくていい」

「そうじゃない！」

叫ぶ。

その優しさが、今は苦しかった。

「俺は…名乗ってもいいなら三上優希でいたい…でも…！ 戻らないと、守れない…！」

そう。倉橋の実権を握るためには、有里渚——倉橋渚に戻らなければならぬ。

もどつて、実権を握つて、桐条に負けない力を持たないといけない。そうしないと、大事なものを傷つけられるだけだ。

「本当にそうなのか？」

「え…？」

「大人に頼つてもいいんじゃないか。父さんや母さんは、お前が戻りたくないなら戻らなくてもいいと思つている。戻りたくないと思うなら、全力でお前を守ろう」

「私たちはあなたがどんな姿や名前だろうと愛してる。生まれや姿が問題なんじゃない。それだけは忘れないで」

「……」

嬉しかった。

その言葉が聞けただけで、もう十分だと思つた。

自分は三上優希でいていいのだとはつきり自覚することが出来た。

「……ありがとう」

どちらでも、いていいのだと。

「でも、俺は戻るよ。頼るとか、頼らないとかじゃなくて、俺がやらなきゃいけないことだから」

「…義務感で戻ろうとしてるのなら、やめておけ」

養父さんが制止してくる。はつきりと、「やめろ」と告げてきた。

義務感もある。けど、それだけじゃない。

「折角思い出したんだし、奏子や湊と同じ苗字に——あっちの名前の方も名乗つてみるのもいいかなつて」

名乗れるなら、三人で有里兄妹です！とかもやってみたい気持ちが無くはない。

そう告げると、何故だか四人ははあ…と同時に溜息をついた。

「そんな理由もあるの？ 心配してちよつと損したかも…」

「えっなんで!？」

奏子の呆れ声に目をぱちくりさせる。なんでだ。良いだろう名乗るくらい。

ひとりだけずっと『三上くん』だったのだから名乗れるようになってたら名乗りたいものだろう。

「優希ってば、真面目なのかそうじゃないのかたまにわからなくなるよね」

呆れた顔を隠しもせず、湊がそう言う。

バカにしてるのか。とむっとすると、わざとらしく肩を上げて「やれやれ」と言うような表情を作った。

心外である。ついでにいうと誠に遺憾でもある。

「あ、これからは優希じゃなくて渚って呼んだ方がいい?」

「お兄ちゃん、でしょ! 呼ぶなら!」

どうしても呼び捨てを止めない湊に、奏子が訂正すれば、あからさまに湊は嫌な顔をした。

「え、嫌」

「なんでさ!？」

「子供っぽいから」

そんな理由? と困惑するも、まあこういう年ごろって気になるよねそういうの、と自分を棚上げして考える。

奏子が目に入れても痛くないほど妹として可愛いから『お兄ちゃん』呼びが許されているのであって、湊が『お兄ちゃん』なんて猫撫で声で言ってきた日には鳥肌が立つ自信がある。

何か裏があるのでないかと勘繰るし、そもそもそういうのは幼少期も幼少期、小学生くらいまでだろう。

「僕ら、1歳しか違わないし呼び捨てでもいいでしょ別に」

ぶつきらぼうに言う湊の表情は『やれやれ』から変わらない。

若干めんどくさいと思っているかのような表情だ。

「というか、呼び方なんてどうでもいい。どんな呼び方でも僕らの兄であることにはかわりないんだし」

「どうでもいいならお兄ちゃんって呼んでもいいじゃん!」

どうでもいい、と一刀両断した湊に奏子が食ってかかる。が、湊の方はどうしても嫌そうだ。ここまでにしておくか、と口を開く。

「俺はどんな呼ばれ方でもいいよ」

「優希は黙ってて」

「お兄ちゃんは黙ってて！」

「……はい」

悲しきかな。主導権は自分にはないらしい。

止める力すらないとは悲しいを通り越して虚しい。虚無だ。虚無。

「こら、ふたりとも言い合いしないの。：見せたいものがあるから、この話は一旦終わりにしましょ。それを観てから決めても、いいと私は思うの」

養母さんの言葉の方が強い。一瞬で二人を黙らせ、椅子から立ち上がる。

そうしてテレビの前まで行くと、見慣れないビデオテープを手にし、あらかじめ繋いであったらしいビデオデッキへ入れる。

DVDが普及している今の時代に、ビデオとはまた古めかしいものを、と僅かに疑問に思いながらも黙ってその様子を見届ける。

「まだ早いとは思うんだけど、今、これを見るべきだと思うから」

養母さんの声は緊張していた。いや、緊張というよりかは、覚悟があったんだろう。

なんとなく、そんな気がした。

そんな重要なものなのか。もしかして、この家の秘密とかなのだろうか。

そして、映し出されたのは。

『渚へ。20歳の誕生日おめでとう』

「……っ」

「おかあさん」だった。

養母さんではなく、正真正銘、有里琴音。俺たちの、生みの親。

藍色の髪をひとつの三つ編みにし、笑顔でページュのソファアームに座っていた。

『ここまで大きくなってくれて、お母さんは本当に、本当に嬉しいです』

画面の中の“おかあさん”が振り返る。

顔は見えないが、画面の外から座っているソファアの後ろに誰かが歩み寄ってきた。

『あ、朔也くん、もし私がちゃんと生きてたらこのビデオ捨てておいてね。恥ずかしいから！約束だからね！』

『わかってる。わかったから…』

そう言った後、また画面の外に立ち去る。

朔也。“おとうさん”である有里朔也のことだろう。

つまり、後ろに居るのは“おとうさん”なのだろう。腕が上に上がっており、その腕に抱かれるようにして小さい足が4本見えていたことから、このビデオが撮られた時期は詳しくはわからないが恐らくは湊と奏子だろう。

ふたりを抱いて何か画面を横切る必要が出てきたため、さつと横切ったのかもしれない。

『…おほん。改めまして、渚、大人になってくれてありがとう。生きていてくれてありがとう。渚はいま、どんな大人になっているのかな？

お父さんと同じミュージシャン？ それとも、好きな夢を叶えているのかな？ 今の渚はお魚さんとお星様に興味があるみたいだから、海洋学者か天文学者かもね！』

そうやって、わざとらしく咳払いする。

どうやら先ほどのやりとりは気恥ずかしかったらしい。

夢について語った“おかあさん”の表情は明るい。と、そこへ影が横切り、ソファアを登っていく。

『おかーさーん！ なにしてるのー？』

登った小さな影を“おかあさん”は抱き上げると、膝の上に乗せて頭を撫でる。

『はーい、お母さんはいま、未来の大人になった渚くんに向かってメッセージを送ってるんだよー』

「小さい頃の…お兄ちゃん…」

『おとなのぼくに!? すごい! おとなのぼく、おさかなさんときらきら捕まえてね! 背が伸びたら、きつと捕まえられるよね!』
目をキラキラとさせながらはにかむ「自分」は画面の向こうのこちらに呼びかけている。

何も知らず、ただ、無邪気で居られたころの自分は、直視しづらい存在だ。

憎い、とすら思えてしまう。

その感情は本来持っていないものではないのだろう。お門違いですらある。

幼い頃の自分は何も関係はない。知らないだけなのだから、罪や責務を問うのはそれこそ無茶苦茶だ。

『渚。あなたのやりたいことをやりなさい。どれだけそれが難しい事でも、お母さんとお父さんは応援してるから。いつでも、見守ってるから』

幼い頃の自分の頭を撫でながら、「おかあさん」はまた微笑んだ。

『もし、あなたが自分について悩む時があるかもしれない。そんなことがあったとしてもあなたはお母さんとお父さんの子だから。貴方が誰であろうとそれだけは間違いないから』

ビデオはそこで終わっていた。

まるで、俺の生まれについて知っているかのような、見透かすようなその言葉の端には僅かに悲しみが浮かんでいた。

決して明るい表情ではない。だが、自分が知っている情報では——
朝倉先生や藤堂さんから教えてもらったものでは——「おかあさん」は何も知らなかったはずだ。

何か知ったうえで愛してくれていたのなら、それこそ——やめておこう。考えるだけ野暮だ。

ただ、すぐく背中を押してもらえた気がする。

養父母も、本当の父母も、俺のことを嫌っていない。それどころか、応援さえしてくれている。

偽物なのに、それすら受け入れようとしてくれている。
偽物でもいいと言ってくれている。

奏子と湊も。

「……俺は」

好きなことを選んでいいのだと、自惚れてしまう。

何もかもを投げ出して、頼って、ひとりじゃできないのだと、言つて良いとさえ思えてしまう。

声が震える。

「……ひとりじゃ、全部できないから……わからないことがあったら、頼っても、いい?」

「ああ」

下を向く。

「まだ、養父さんや養母さんの前では、ただの三上優希で居て、いいの? これまで通りわがまま言ったり、相談したり、ご飯一杯食べたり……」

「当たり前でしょう」

「……じゃあさ、相談なんだけど、美鶴さんの許嫁になったけどどうすればいいと思う?」

「えっ」

場が、フリーズする。

「ええ~~~~~~~~~~~~!!?????」

今迄に聞いたことのないく~~~~い、大きな養母さんの声が家中に響いた。

——Rank UP!

XI “アーキタイプ原型”

三上優希 Rank6↓Rank7

“原型”のペルソナを生み出す力が増幅された!

1月3日(日)

朝

御影町

昨日はあれから質問攻めにあい、詳しく話を聞いた養母さんの「婿入り!? 桐条優希になっちゃうの!? それとも桐条渚!? やだあく〜〜〜!!!」という声で一旦終了した。

まあ、そりやそうなるだろう。そんな重大事実をカミングアウトしてしまったが、罪悪感はありません。

その前までの話がそこそこ重かったのもあるが、許嫁に関してはさほど問題ではないような…気も……しない……ことも…いや、大問題か。

とにかく、すぐに答えは出せないということで一晩たち、今はひとりで朝の散歩に出ている最中だ。

朝霧が立ち込めるなか、前方から誰かがゆっくりと歩いてくる。

同じ散歩かランニングか。

肩にジャケットをかけ、褐色の肌をした銀髪の男だ。

その姿に見覚えがあった。

「——お前は、鶴龍ジャボ…?」

ラビリスが自分の体を使っていた時に出会った、人の姿をした人ならざる者。

彼が一体何の用なのか。

のつぴきならない用事で無いことを願いたいが。

「やあ。今日はきみに良い話を持って来たんだ」

ジャボはまるで仲の良い友達同士で世間話をするかのようにそう告げた。

「汚染されていない、純粋なマグネタイトが必要なんだろう?」

「っ…」

こちらの考えが見抜かれている。

実は、ある目的の為に純粋なマグネタイトが必要なのだ。

「——もうひとつの東京^{魔界}に行ってみたくはないかい?」

ジャボの問いは、すぐには領けないものだった。

いざ、魔界へ（1／3）

「——もうひとつの東京^{魔界}に行ってみたくはないかい？」

「行きたいと手放しで喜んで言うんでも？」

顔をしかめる。

ジャボの話はまず信用できるものではない。

そもそもが仲がいいというわけでもなければ信用できるほどの関係でもない。

「そう言うと思ったよ。けど約束を反故にして放っておくこともきみは出来ないだろう」

よくわかつている。

ジャボはこちらを見透かし、否と言わせないようにしている。

その余裕の表れは、未来を本当に見通しているからなのか。それとも。

「シユブニニグラスの一件とは無関係に、魔界の悪魔の石柱がこちらへ出ようとしている。そして、甚大な被害をもたらす。それはもう、被害者が沢山出るだろうね」

ジャボの口ぶりはあくまでも凧いでいる。

まるで、世間話をするかのようだ。

「それを俺に止めろと？」

「話が早い。今の君になら、可能だろう？」

それに、と続ける。

「こちら側へ出てきて、きみの大事な存在が巻き込まれでもしたら——ああ、そんな怖い顔をしないでくれよ。可能性の話をしているんだ」

睨みつければ、肩をすくめて鼻で笑われる。

こちらを買いかぶっているのか、そうでないのかよくわからない存在だ。

そもそも、コイツの話が毘だという可能性もある。何がしたいのか、全くよくわからないというのが現状だ。

ただ、もしこの話が本当なら、シユブニニグラスとの決戦を控えて

いる中で無駄な消耗を——それも、大怪我を負うような戦いは控えた
い。

悪魔は昼夜問わず襲ってくる。影時間のみ現れるシャドウとは違
うのだ。

今のところ、ほぼ影時間でしかペルソナを召喚したことのない湊達
が襲われでもしたら。

とつきに対応できるかと言われれば、そうじゃないだろう。

アイギスやメテイス、ラビリスが多少自衛できるものを持っている
からといって、皆を守りながらジャボの言う”悪魔”を倒せるかと言
われたら厳しいものがある。

この前の桐条の警備部隊の襲撃にしたってそうだ。何らかの理由
で召喚器を持つてなかつたらまともに戦えないだろう。

それらを考えると、答えはひとつしかない。

だが、素直に頷いてのこのこと行ってやる義理もこの男にはない。

「断る」

「何故？ 件の悪魔はこちら側で受肉するために膨大な量のマグネタ
イトをため込んでいる。それも、不純物のない、綺麗なものをね。そ
れはつまり、きみの探し物じゃないのか」

「……クソ」

もう一度、ジャボは幼子に言い含めるようにこちらにそう言っ
た。

こうなれば、頷くほかない。がしがしと頭を掻く。

「こちらが信用ならないのはわかっているさ。けど、これが終われば
ひとつ、貸し借りしたってことで信用してはくれないか」

先程とは違う、真剣なまなざしでジャボはそう告げた。

一体こちらに貸しを作ってなんになるのか。あちらに利はない。
こんな、ちつぽけな存在にそこまで入れ込む利が。

「信用というのは悪魔の中でも重要だ。それを、理解してほしい」

その言葉を最後に、不意に身体が”落ちた”。

「待て、まだいいとは一言も——」

暗転。

「いっ~~~~いっ~~~~!!!」

突然落とされ、受け身など取れるはずもなく、地面に尻もちをついた。

ざり、と砂の感触がし、手のひらを見れば黄色い砂がついていた。僅かなアスファルトと、それを埋め尽くす砂。

顔をあげれば、異様な光景が広がっていた。

「……っ」

色褪せ歪んだ東京タワーと、裏返しに丸まり、球体のようななった世界。

空に空はなく、ひたすら崩壊した建物の残骸と砂地が続いている。

「これが…魔界…?」

思わず、呟く。

もっとおどろおどろしいよくある地獄のようなものを想像していたが、そうではなく。むしろ静かなものだった。

立ち上がり、ズボンの尻についた砂を落とす。

周りは本当に静かだ。物音ひとつなく、風がからからと吹いているだけ。

「え…なに、なに、どう!?」

ふと、聞き慣れた声がして振り向く。

そこにいたのは、奏子と湊だった。

「……は」

なんで。どうして。

だなんて思う暇もない。

そこにいる。それが事実だった。

「あのクソ野郎…」

危険地帯から遠ざけようとして、逆に巻き込んでしまった。

一番巻き込みたくない二人を。

くしゃり、と前髪をかきあげる。

自分にこの魔界から現実世界に帰る手段はない。つまり、ふたりを帰す手段はないのだ。

そして、ジャボの目的が悪魔の討伐ないしは無力化にあるのは間違

いない。

それを果たさなければ帰ることはできないだろう。
なぜ、ふたりを巻き込んだのかじつくりと聞く必要があるが。

「お兄ちゃんー！　ここ、どこなの!?　さっき喋ってた人って誰!?　夢じゃないの!?!」

「奏子。落ち着いて。矢継ぎ早に訊きすぎ」

湊が奏子を窘める。

こういう時に冷静なのはありがたい。

さつき喋っていた人は誰か、という問いがあるということとは奏子と湊は近くまでついてきていたのだろう。

後をつけたのかたまたまなのかはわからないが。

それはそうと、奏子の問いに答えなくてはならない。

「あー…ここは、魔界」

「魔界!?　魔界ってあの悪魔とかそういう化け物がいる?」

「…そう。端的に言えば、俺はここにいるある悪魔を倒しに連れてこられた。たぶん、ふたりが巻き込まれたのは偶然だろうけど」

そういうことにしておこう。

そう思わないと、ジャボに一発入れたくなってしまう。

「それで?　その悪魔って?」

湊が表情を変えずに訊いてくる。

武器も召喚器もないのに冷静だな、と感心するも、自分はその件の悪魔とやらを知らない。

「…それが、わからない」

恥ずかしながら。

ただ、膨大な量のマグネタイトを貯め込んでいるということは、それなりの悪魔だということだ。

そしてジャボが何も語らずにこの魔界に落とした。それすなわち見ただけでわかるやつ、ということに他ならないのではないのだろうか。

「ただ、たぶん見ただけでわかる」

「…そう。ならいい」

ただ、問題なのが自分とはともかく二人は護身用の武器もなければ召喚器もないということだ。

魔界でペルソナが召喚できるのか、とか色々気になるところではあるが悪魔の巣と原理が変わらないのであれば可能だろう。

ふたりの負担になるのであまりそういう事を勧めたくないが。

「ちよっと待って」

近くにあった標識を熱で切り取り、ひとつは刀のように加工し、もうひとつは先だけを加工して薙刀のようにする。

不格好だがないよりかはマシだろう。

「これ、持ってて。できるなら安全な場所でいて欲しいけど…そんなの、ここにはなさそうだし」

どこから悪魔が出てくるかわからない。安全だと思つた場所がそうでないなんてよくあることだ。

タルタロスだろうが寮だろうが、影時間に安全地帯が無いのと同じだ。

「……うん」

「奏子、いつもとやることは同じ。ペルソナが召喚できないだけで何ら変わらない。襲ってくる奴らは叩き潰せばいい」

「そうだよね…うん、わかった!」

一応、悪魔の中にはモコイさんのように話も通じる個体がいるのでシャドウのようにむやみやたらと殴りかからなくていいと思うのだが、ふたりがそんなことを知るはずもなく。

「とりあえず、歩こうか。たぶん近い場所に落としてくれた…と思いたいし」

疲れたら言うんだよ、と言うのも忘れずに。

しばらく歩いた。だが、何も無い。

怖いくらいになにもないのだ。

悪魔もいない。

本当にここは魔界なのかと不安になるほど、なにも出会わない。

静寂。それがこの場所を包んでいる。

山岸が居れば何か気配を感知できたのかもしれないが、いない人間

を頼りにしようとしてもしかたない。

「何も無いね…」

「…うん」

「……」

そんな、短い会話だけが通り過ぎていく。

——と。

「……いい、おい。そこの。三人組のあんちゃんたちだよ！ こっち、こっちに来な！」

半壊しているビルの物陰から、微かな声が聞こえた。

「ねえ、誰か呼んでるよ」

「罨かもしれない」

「どうする？」

奏子と湊が顔を見合わせながら、こちらへと訊いてくる。

だが、罨だとしてもここで初めて声をかけてきた存在だ。無視をして何の手掛かりもなく歩き続けるよりかはマシだろう。

それにもかしたら友好な存在かもしれない。

「行ってみよう」

軽率かもしれないが、何かあれば戦って倒すだけの話だ。

そう決めて、物陰へと近づく。すると、

「よう。あんちゃんら、見ない顔だな。新入りか？ 珍しいな」

目の前にふわふわと小さな狐面を被ったなんとも形容しがたい生き物が浮いている。

「かわいいーっ！ キツネの…悪魔？」

「そうだけ。オイラは聖獣 チロンヌプ。ここいらで道案内やってるんだ」

「つつても利用者はまだ居ねーんだけどな！」と胸を張りながら笑う姿は豪快と言うよりかは愛らしい。

チロンヌプ。初めて見る悪魔だ。

とはいえ、そんなに悪魔に詳しいわけでもないのでもまだ見ぬ悪魔はたくさんいることだろう。

「でも、ここからは早く離れた方がいいぜ。『魔王』が悪魔だろうが

何でもかんでも食っちまうからな」

真剣な声色でチロンヌプはそう告げる。

何でもかんでも食べる魔王。それが原因でこの辺りは静かなのか。「ここいらに弱小悪魔の集落があったんだが、そいつのせいで皆怯えて隠れちまつてる。オイラもその弱小悪魔の一体ってわけさ」

どうやら、隠れている悪魔もいるらしい。

逆に言えば、隠れなかった悪魔は軒並みその魔王とやらの胃袋の中に納まったということだろう。

そう思つて不意にちらりと視線を逸らせば、物陰からジャックフロストとピクシーがこちらの様子を窺うように顔を覗かせていた。

人を殺そうと思えばいくらでも殺せる彼らだが、こうして隠れているということは悪魔の中では弱い部類に入るのだろう。

そして、襲つてこないということは比較的友好的な悪魔ということでもある。

少なくとも話が通じないというわけではないだろう。話が通じなければ即座に襲われて、戦闘状態に陥っているからだ。

「…そいつはどこに？」

「まさか、倒しに行くのか!? 悪いことは言わねえよ! やめときな!」

チロンヌプが慌てたように止める。

だが、その悪魔が目的の悪魔だとしたら、自分はそのいつを倒さなければならぬ。

そうしなければ帰れないのだ。

それを伝えると、チロンヌプはうーん、と唸った。

「でもよお…ニンゲンがたつた三人ぼつちで倒せる相手だとも思えねえ。やめといた方が良くと思うぜ」

チロンヌプの言うことはもつともだった。だが、ジャボが何の考えも無しに自分を——自分たちをこの魔界に落としたわけではないだろう。

何かしらの勝算があつてこそではないのだろうか。

もしかすると、ジャボにとって自分たちは捨て駒なのかもしれない

が、自分の場合は死ぬとシユブニグラスが即座に目覚める爆弾の様なものなのでそういうことはないだろうと思いたい。

「それでも、やらなきゃいけないんだ。できる、できないじゃない。やらないといけないことなんだ」

自分に言い聞かせるようにチロンヌプを説得する。

奏子と湊を無事に連れて帰らないといけない。そして未知の相手というふたつのプレッシャーが襲い掛かっている状態だが、いつも通り気をつけないと足元を掬われて負ける。

それだけは絶対に避けなければならない。もう、ここまで来て「巻き戻し」は出来ないのだから。

そんな覚悟をしつつ、チロンヌプを見つめれば観念したようにチロンヌプは頷いた。

「…よし、わかった！　そこまで言うのなら案内してやる。ただし、しっかりオイラを守ってくれよな！　死ぬのは嫌だからな！」

「ああ。任せてくれ」

この親切な悪魔をモコイさんのようなことにはしない。

絶対に。

そう誓い、先導するチロンヌプについて歩き出す。

まだ見ぬ魔王とやらを倒す算段を立てながら。

魔王（1／3）

チロンヌプの道案内で歩き始めて少し。突如、巨大な影が差し、地面が揺れる。

「あいつだ。物陰に隠れろ」

チロンヌプに言われ、さつと急ぐように三人で傍にあつたビルの中に隠れる。

そして、窺うようにビルの陰から前方を見ると、その姿をはつきりと視認することができた。

緑色のプリンのような体躯に、大きな歯の並んだ口。ぎよろりと周りを探る様に動くふたつの目玉。そしてその体躯に見合った大きな腕。

それは――

「アバドン……」

「アバドンだね……」

「おつきい……本物つてあんな大きいんだね……」

奏子や湊のペルソナで見たことのあるアバドンだった。

だが、実際に悪魔として見るのは初めてで、その質量に驚く。

なにせ、こうして身じろぎするだけで地面が僅かに揺れるのだ。

こんなものが人間界に出てきたら、パニックどころではすまないだろう。

「準備は良いか？ オイラは……まだちょっと待ってほしいけどよ……」

ブルブルと身震いするチロンヌプはアバドンに怯えているようだった。

仕方のない事だろう。実際、自分もあの大きさのアバドンとやり合うという現実尻込みしそうになっている。

（それに……）

もし、耐性がペルソナと同じならば、火炎属性の「ホムスビ」が効かない可能性がある。

そしてあの巨大さだ。自分たちの武器の――それも奏子と湊の武器は急ごしらえのなまくらな状態でどれだけのダメージを与えられ

るというのか。

正直言つて自分単独では勝ち目が無いに等しかつただろう。

「カーマ・シラーストラ」を放つても、一撃でやれたかどうか怪しい。要するに、決定打に欠けている。

ジャボは一体どういふつもりで自分にあれをぶつけようと思つたのか。

それとも、奏子と湊も含めて、「勝てる」と思つたのか。

真意はわからない。聞こうとも思わないが。

しかし、ずつとこのまま隠れ続けるというわけにもいかない。いつかは飛び出して、立ち向かわなければいけないのだ。

「ふたりとも、準備は良い？ 無理そうなら隠れてもいい」

「大丈夫。むしろ、お兄ちゃんひとりにしたらどうなるか：ねえ？」

「そういうこと。絶対無茶するでしょ。そんなの、許さないから」

ふたりの返答はだいぶ肝が据わつたものだった。

不安は多少なりともあるのだろうが、それでもそういったものを感じさせない様子で頷いた。

ペルソナが現状使えるかわからないというのに、こうしてともに立ち向かおうとしてくれている二人を絶対に守らなくてはという義務感が湧いてくる。

「よし、よし、よおーし：オイラも大丈夫だぜ。ふーっ、ふーっ。覚悟、できたぞ！」

チロンヌプの若干興奮気味なその声を聴きながら、気合いを入れる。

そして、1、2の3で飛び出した。

「ッ！」

こちらを視界に入れたアバドンが吼える。

そのあまりの音の大きさにビリビリと空気が震え、廃墟と化したピルのガラスが割れる。

そして、突進。

【狂いかみつき】

勢いよく大口を開けてこちらへと突進してきたのだ。

「！」

質量で押しつぶす、もしくはその大口で捕食しようというのだ。この攻撃により、多くの悪魔が命を落としたのは想像に難くない。そして、食らえば自分たちは一瞬でこいつの腹の中だということも。

「下がって！」

チロンヌプ含めた三人を下がらせる。

そして、目の前のビルに向かって「ホムスビ」を最大火力で放った。

「ぐ……う……っ！」

身体が焼ける。それでも、間に合わせるしかない。

炎の勢いでビルが崩壊し、大きささまざまな瓦礫がいわなだれのようにアバドンへと降り注ぐ。

それを間近で受けたアバドンの動きが止まり、膨大な量の土煙と共にビルの瓦礫の中へ沈んでいく。

「やったか!？」

チロンヌプがそろそろと自分に近づく。だが、まだまだ。

この程度で終わるなら、魔王を名乗ってはいないだろう。

「まだまだ。チロンヌプは何か補助魔法は使える?」

「お、おう! こんなのはどうだ?」【警戒のフホホイ】

フホホイ! とチロンヌプが声を上げる。

その瞬間身体が少しだけ身軽になった気がした。どうやら、「スクカジヤ」と似た効果があるらしい。

その技の効果を確かめた瞬間、瓦礫がガラガラと持ち上がり、再びアバドンがその姿を現した。

傷を負っているようだが、致命傷には至っていない。むしろ、怒っているような様子さえ感じられる。

「オオオオオオ！」

アバドンが呻き声をあげる。おおよそ理性的ではないそれは、けれど確かに不快感を与えるようなものだった。

その呻き声が発されたのと同時に、地面を這うようにして氷が襲い掛かって来た。

恐らくこれは、「マハブフダイン」だろう。

魔法もできるだなんて聞いてない。が、防ぐしかない。もう一度、【ホムスビ】を放ち、相殺する。

そのまま、足を踏み込み、ロンギヌスを投擲した。
が、

【猛反撃】

「がッ!？」

ロンギヌスが当たった瞬間に、大きな腕で薙ぎ払ってきた。

巨体に見合わないスピードで瞬時に振り回されたそれを避けられるはずもなく、吹き飛ばされ、地面をゴロゴロと転がる。

ビルに叩きつけられ、血しぶきにならなかつただけマシだが、しばらくは起き上がれない程のダメージを受けてしまい痛みには呻くほかない。

幸い、チロヌプの【警戒のフホホイ】のおかげなのかどこかの骨が折れているということではなく、強烈な打ち身のような衝撃が襲ってきただけなので戦闘は続行できる程度だがすぐには起き上がれない。要するに、ダウン状態になってしまった。

「お兄ちゃん! ……お願い、来て…っ!」

こちらを焦るように見た奏子は、祈るように目を閉じる。

それでも、何も起きない。

「なんで、どうして…ッ! 私じゃ、駄目なの!？」

何をしようとしているのか、察しはつく。恐らく、ペルソナを召喚しようとしているのだろう。

そんな無茶はさせられない。異界といえども、奏子たちが楽にペルソナを召喚できるとは限らない。ひどく疲れてしまったり、いつも以上に気力を吸い取られる可能性だってあるのだ。

止めようと口を開くも、出るのは呻き声ばかり。

アバドンがその隙を見計らって俺を叩き潰そうと腕を振り上げる。

「やだ、ヤダよ…! もう、死なせたくない!」

「うん。僕らはもう、”死なせたくない”」

そんな声とともにガラスの割れる音が聞こえた。

青い光がふたりを包み、自分の眼前に振り下ろされようとしていた腕が静止する。

腕を、なにかが抑えているのだ。

「お願い、 ヽシヴァアヽ！」

「やれ、 ヽヴィシユヌヽ！」

青肌の破壊神と魔神がその姿を現したのだ。それも、最近手に入れたという、姿違いのそれらだ。

白黒の二柱はそれぞれ持っている武器でアバドンの腕を引き裂き、そして消える。

「!!!」

悲鳴ともつかない声を上げて、アバドンが大きく怯んだ。

そして、切断された腕の断面から血の代わりに赤い粒子をばらまきながら先端の無くなった腕を天高く持ち上げた。

それを見てようやく、痛みが引いて起き上がることができた。

「大丈夫？」

「大丈夫。まだやれる」

心配そうにこちらを見つめてくる奏子にそう返事をする。

幸い、一撃を食らったとはいえまだ余裕がある。

奏子と湊がペルソナを召喚できるようになり、相手は反撃系のスキルを持っているということが分かっただけでも十分だ。

「オオオオオオオ！」

無機質に、またアバドンが叫ぶ。

その瞬間、周囲からアバドンへと力のようなものが吸収され、赤いオーラを纏う。

「ヤバい、アイツ、マガツヒを吸収しやがった！ どでかいのが来るぞ！」

チロンヌプが警戒する。

どでかいの、と言われて想像もつかないが、当たれば即死圏内なのは確実だろう。

近くにはもう、止められそうな大きなビルは無く、逃げるにしてももう遅い。

ここまで来て終わりか、と冷汗が流れる。予想していなかったわけではないが、そこまで追いつめていたとも思わなかった。

せめて、チロンヌプや奏子と湊だけでも守らないと。自分は最悪、死ななければどうでもいい。

そうして焦る視界の端に、小さな蛇が見えた。

「おじいさま…ッ！」

『わかっておる。今のわしらは一蓮托生。協力してやらんこともない』

必死に呼びかければ、不服そうにそれは頷いた。

倉橋翁おじいさまからすれば、利点は何もない。けれど、あれだけ頑なでこちらを敵対視していたというのにこうして呼びかけに答えてくれるというのは、多少何かが変わったということなのではないだろうか。

少しだけ、良い方向に。

「——召喚！」

轟音。

黒いマグネタイトと共に現れた8つの首がぎりぎり締め上げながらその巨体を抑え込む。

ビルを飲み込むほどに大きなアバドンと同等の巨体を持つ、蛇頭黄幡神がぶつかり合うさまはまるで怪獣大決戦だ。

「あれって…あのおじいさんの変身してた…」

「フシユルルル…」

「今だ！」

アバドンは大きく抑え込まれ、その動きを止めていた。

「来て！」【ターンダヴァ】

「来い！」【ニルヴァーナ】

奏子と湊のペルソナである、シヴァ・マハーデーヴァとヴィシユヌ・マドウスダナがそれぞれの技を放つ。

片や、万魔の攻撃。片や、光の柱で攻撃されたアバドンはまたしても大きく怯んで態勢を崩した。

蛇頭黄幡神はその瞬間を逃さず、アバドンは食い散らかされて地に伏せるように消滅した。

「……」

沈黙。

蛇頭黄幡神は空気に溶けるようにしてその姿を消し、そのまま静かになった。

残ったのは大量のマグネタイトと静寂だけだ。

それを、必要な分だけ貰う。大量に貰っても使い道がないどころか、より人から離れてしまう可能性を考えるとあまり良くない。

マグネタイトは必要な分を得てなお、有り余っていた。

あの大きさの悪魔ならば、確かにこれくらい必要だろうな、という感想が出てくる。

人間界へと出てこられた場合の被害も想像したくない。ビルを丸々飲み込めるほどの大きさの悪魔だ。下手をすれば街ひとつを飲み込んだかもしれない。

そんな嫌な想像をしていけば、わらわらとジャックフロストやピクシーといった隠れていた悪魔が出てきた。

あつというまにどんちゃん騒ぎとなり、担ぎあげられる。

そして、一番高い瓦礫の上に湊と奏子ともども乗せられ、こう告げられた。

「魔王様、万歳！ ニンゲン万歳！」

「え???」

困ってチロンヌプを見やると、腹を抱えて笑っている。

「わはは！ 魔王様、だってよ！ 良かったじゃねえか！」

「良くないよ!?!」

全く良くない。

恐らく、先程の戦いを彼らは影から見ていたのだろう。そうでなければ、こんな担ぎあげられ方はしないはずだ。

「オイラ、人間界に行ったらニンゲンを守るヒーローになりたいホ！」

「そうね、守ってもらったんだから私たちだって恩返ししなくちゃー！」

そんな会話を聞きながら、意識が遠のいていく。

ふ、と浮かぶ感覚がし、気が付いたときには三人で元いた道の真ん

中に立っていた。

「あ…」

ジャボの姿はない。

だが、帰ってこれたのだという安堵が胸を満たす。

それと同時にチロンヌプにお礼を言うのを忘れていたことを思い出す。

「…チロンヌプにお礼、言いそびれたな…」

「そうだね…」

「うん…」

三人で、心残りを引きずりながら帰路へ着く。

そしてそのまま重い足取りで三上家へと帰り、リビングのドアを開けた。

「よお、遅かったな！」

「え？」

そこには、小さな狐面のプリティーな姿が何の違和感も無しに昼食の食卓に座っていた。

「え、ちよ、チロンヌプ!？」

奏子が混乱したように食卓にちよこんと座ってもぐもぐと唐揚げを摘まんているチロンヌプを見る。

平然とそこにいるチロンヌプはさも最初からそこにいましたよと言わんばかりに昼食の光景に馴染んでいた。

「あら、この子、チロンヌプちゃんっていうのね。お腹を空かせてたみたいだからお昼どう？　って言ったのよ」

嬉しそうに笑いながら養母^かさんがそう言う。

と、いうより養母さんがそんなことを言っているという衝撃で流しそうになったが、悪魔は普通の人には見えないはずだ。

モコイさんが湊達に見えなかったのと同じで。だというのに、養母さんは自分たちが話しかける前からチロンヌプを認識し、こうして意思疎通をはかれているというのはどういうことなのだろうか。

「決めたぜ。オイラ、MAG^{マグネイト}が続く間はここのペットになる！　コヤンコヤン！」

「ええ…？」

困惑と共に養母さんを見れば、ずっとニコニコと笑っている。虚しい別れが無かったのは良かったが、これで良かったんだろうかという疑問もわいてくる。

だが、チロンヌプはむやみやたらと人を襲うタイプではないだろうし、ペットになると言っているくらいだから可愛がられるつもりでここにいるのだろう。

完全に、養母さんに胃袋を掴まれてしまっている状況だ。

というか、道案内は良いのだろうか。

そんな疑問を残しつつ、微妙な空気で昼食をとり、巖戸台へと帰るのだった。

——Rank UP!

XI “アーキタイプ原型”

三上優希 Rank7↓Rank8

“原型”のペルソナを生み出す力が増幅された！

約束（1／15～25）

1／15（金）

夕方

巖戸台分寮 アイギスの部屋

「えっと、三人と山岸に来てもらったのは他でもない、三人を強化しようと思って。メテイスとの約束もあつたしね」

少々広いアイギスの部屋に、5人ですし詰め状態になっているが仕方ない。

何をしに集まっているのかというと、先日手に入れたマグネタイトと実は前々から頼んでいた桐条からの支援で用意したパーツをぱぱっとアイギス、ラビリス、メテイスの三人に組み込んでしまおうという算段なのだ。

「強化って…どうなるん？」

不安げにラビリスが聞いてくる。そりやそうだろう、今から自分の身体を弄られるのだから。

「端的に言えば、ラビリスとアイギス、メテイスには最新式のオルギアが搭載されて、みんな…よりニンゲンの見た目に近くなる…かな？」

あとラビリスは飲食が可能になる」

「え…？」

困惑するような、呆けるようなアイギスの声が響く。

強化されることにか、それとも見た目が人間に近くなることへか。困惑がそのどちらかへ向けられたものかはまだわからない。

「ただ、完全にニンゲンと同じになるわけじゃない。あくまで、見た目だけ。ケガを負えばマグネタイトが残っている分はその見た目を保てると思う。けれど、マグネタイトが尽きればまた機械の見た目に戻る。一時的なものだよ」

それでも、無いよりかはマシだろうということでもテイスと相談し、この間やつとのことで奏子と湊、チロンヌプと共にアバドンを倒してマグネタイトを得たというわけだ。

要するに、受肉させるわけである。中身は変わらない表面上の受肉。

表面上なので中身は機械のままだし、ラビリスのロケットパンチやアイギスの指の銃が消えるということはない。

しかも、切り替え式にするので日常生活はマグネタイトを活性化させ、人間と同じ見た目で活動し、戦闘中は元の姿で活動するということもできる。

幻惑機能と何が違うの？　と言われると困るところがあるが、少なくとも触り心地は改善されるだろう。

カチカチのアイギス膝枕を奏子と湊が堪能することは無くなるというわけだ。

「姉さんたちに黙って勝手に決めてしまったことは謝ります。でも、わたしだって姉さんたちにもっと人として生活してほしくて…」

メテイスがそう言う。

今だと随分慣れたにしろ、アイギスはともかくラビリスはまだ学校へと通えていない。

見た目がアイギスやメテイスに比べ、機械らしい部分が多いというものもあるのだろう。

随分と遅くなってしまったが、決戦を前に控えて、これだけはやっておかなければならないと思っていたのだ。

「せやけど…うーん…」

ラビリスが言葉に詰まる様に困った顔をする。

彼女も複雑なのだろう。「はい、ありがとうございます」だなんてわけのわからないことをされる手前、言えるわけがない。

「傲慢かもしれないけど、俺もラビリスやアイギス、メテイスたちに自分は機械という負い目を無くしてほしいんだ。……持つてなかったらぶん殴ってもらっても構わない」

「そんなこと！　しない、けど…でも、大丈夫なんですか？」

アイギスが叫ぶ。

不安は山盛りだろう。そりやそうだ。オルギアの強化はともかく、マグネタイトなどという未知の物質を身体に纏わせませす、だなんて言

われて困惑しないわけがない。

「危険性はない、とだけ」

悪魔のように飢えてマグネタイトを欲することはない。あくまで、補助機能の一部だからだ。

ただ、スイッチのように切り替わり、幻惑機能のように一瞬で変えることが出来るためさほど難しいわけではない。

幻惑機能と違うのは自分も騙す必要はない、ということだ。ラビリスに搭載されていた幻惑機能は、ラビリスの精神衛生も考え、ラビリス自身も騙すように作られていた。

だが、それでは意味がない。触ったり戦ったりしたら切れてしまう幻惑機能はそう気づいてしまった時のショックも凶り無いからだ。ただ、今の自身を直視できているラビリス達にその心配が必要なのかと言われると何とも言えないが。

要するに、主に自分の自己満足というわけだ。やるのなら、本気で彼女らを受肉させることも可能だったかもしれない。

だが、そこまで踏ん切りがつかなかった情けない自分の最大限の譲歩の形だ。

「できるのなら、ニンゲンにしてあげたかった。けれど、決戦を前に控えていて戦力の低下も防ぎたかった。我が儘で、ごめん」

「そんな……」
頭を下げる。

出来ることなら人間にしてあげたかったというのは本心だ。だが、彼女たちの機械であるというアイデンティティを捨てさせたくなかったのもまたひとつ。

どこまで行っても、自分の我が儘で言い訳だ。

だから、こんな中途半端な形でおさまることになった。

「頭を上げて！ 別に、わたし、怒ってませんから……」

「怒るとか怒らないとかじゃなくて……」

「もうええから、はよやらん？ な？」

言い合いに発展しそうになった自分とアイギスを、ラビリスが止める。

ラベリスはこのもだもだと続きそうな争いをどうやら好まないらしい。確かに、誰だつてそうだ。

自分もそうなのだから。

「じゃあ、ひとりずつこの機械の中に入って…」

山岸が説明する。

そうして、時間が過ぎていった。

夜

ラウンジ

「でよ…ん？」

それに一番最初に気が付いたのは順平だった。

アイギスたち三姉妹がラウンジに降りてきたその時。奇妙な違和感といえいいのか、些細な違和感に気が付いたのだ。

「な、湊。なんかアイちゃんたち雰囲気違つくね？」

「…？」

湊は順平に言われ、見る。

確かに、どことなく雰囲気柔らかくなったような——否、違う。なんとなく、艶めかしくなっていることに気が付いた。

前まであった良くも悪くも機械らしい雰囲気が消え、丸く、優しくなっている。

より、人に近くなったような感じがするのだ。

「あ、湊くん。うちら、ちよ…つと変わってんで？ どう？ わかる？」

視線に気が付いたラベリスが笑いながらアイギスとメテイスを連れて湊の前までやってくる。

それを、湊は上から下まで全部ぐるりと見渡した。

「…ふともも」

「まず気がつくのがそこ！」

まず、目についたのは太腿が人間のそれと同じようになっている、ということだった。

そして、手も。

学生服や私服の上から見てわかるように、シルエットが機械のそれから明確に人間のものへと変わっていたのだ。

「え、え!? どういう手品だよ!? マジ人間じゃん!?!」
「それが…」

アイギスの口から語られたのは、夕方に優希が説明したこととまったく同じことだった。

「まぐね…? えっと、よくわかんねーけど…とにかく三上センパイがなんかしてそうなたってことか。んで、戦う時はいつもの姿に戻る、てな具合か」

ほへー、と感心するように順平が腕組みしながら頷く。

横にいる湊も、原理はよくわからなかったが兄が何かした、くらいの理解はした。

それが悪いことではなかったことだけが安堵できる要素だ。

「それで…その、湊さん。どう、でしようか?」

正月の着物の時と似た、しかし明確に血の気の通い、柔らかく赤らんだ表情のそれは新鮮なもので。

「可愛い…」

つい、そんな言葉を漏らしてしまう。

瞬間、それを聞き入れたラビリスとメティスが「やった!」とアイギスを抱きしめ、朗らかに笑った。

もう、人間と区別はつかない。誰も彼女らを機械だとは思わないだろう。

別に、湊は機械の彼女たちが劣っているとも、人間が勝っているとも思わない。

機械なら、機械のままでも平気だし、湊は特に頓着というものを持ってはいない。

好きだから、好き。愛しているから、愛す。見た目も含むかもしれないが、基本的に湊が惹かれるのはその精神性だ。

だが、それとこれは話が別であった。

1月25日(月)

夜

ラウンジ

朔間くん——ヒュプノスが教えてくれた『約束の日』まであと6日になった。

自分たちのセンター試験や二年の進路相談も済み、やれることはやった。後はもう、決戦を待つほかない。

「今日って…もう、」最後の月曜日」なんだよね」

不意に、コロマルを撫でていた山岸がそう呟いた。

「もし、戦いに勝てなかったら、来週の月曜日は、もう…」

不安そうに、そう告げる。

気持ちにはわかる。失敗すれば世界は滅び、今のこの世界は無かったことになってしまう。

その不安から、プレッシャーを感じても仕方のないことだ。

だが、

「大丈夫です」

アイギスがその不安を払拭するようにしっかりとした口調で言う。

「え…アイギス…?」

「必ず勝てます。…勝つしかないんです」

「アイギス…うん。必ず勝とうね」

はつきりと、そう告げたアイギスに岳羽が頷く。

不安はあるが、皆、大丈夫そうだ。

「あ、じゃあさ。約束しない?」

「約束?」

不意に、奏子が立ち上がってそう言う。

奏子も不安だろうに、それを感じさせない気丈さで。

「お兄ちゃんも、私も湊も。皆誰も欠けることなく、卒業式の日を迎えるの。ニヤル何とかもその日が『ゲーム』の勝敗が決まる日だって言ってたから、逆に大勝利の日にしちゃわない?」

「いいね、それ」

ニヤリ、と湊が不敵に笑う。

約束。守れる、のだろうか。実際のところ、決定打は見つかっていない

ない。

完全に男神たるシユブⅡニグラスとなり、女神たるシユブⅡニグラスと相打ちとなる形でぶつかり合うか、終わらない時間の中に閉じ込めるか。

その二択しか浮かんでいない。

そうやって、眉を顰めていると、天田くんが顔を覗き込んできた。

「……難しい、ですか？」

「……はつきり、言えば。でも、約束をすることは悪くない。どうせ、勝って影時間が消えてしまえば影時間にまつわる記憶は消える。けど、シヤドウやペルソナが消えるわけじゃない。それを思い出すトリガーを用意しておくというのはいいことかもね」

「そういうことじゃなくてっ！」

奏子が駄々をこねるように叫ぶ。

どういう、ことなのか。そう言う意味で奏子は約束をとりつけたんじゃないのか。

「馬鹿か、てめえ。奏子はそう言う意味で言ったんじゃないよ。テメエにも生きてほしくて言ってるんだ」

「……」

荒垣くんにそう言われ、黙り込むほかなくなる。

「というか、初耳…なんですけど、その情報」

「あれ、言ってなかったっけ」

そう岳羽に言われたが、どうも、記憶が曖昧だ。それもそうだろう。ここまで来るのが珍しかったのだから、説明したとかしていないとか、聞いたとか聞いていないとかを覚えているはずがない。

「それもあって、タカヤ達は影時間が消えることを恐れていた。きつと、今も恐れているのかもしれない。それでも、味方——というか、敵対はしないでくれるけどね」

恐れている理由は、「仕事」が出来なくなるからかもしれないが、朝倉医院に入り浸っている今、それはあまり関係ないだろう。そもそも、お金を稼ぐ目的で復讐代行などというものをしていただけであって、お金があればしなくていいのだから。

「影時間に関する記憶が一時的にでも消えるというのが本当なら、余計に『約束』はしていないとな」

「ワン！」

コロマルが真田くんの言葉に反応するように声を上げる。

そこへ、割り込むように伊織がぬつと顔を出してきた。

「じゃあさ、ついでにぱーつと打ち上げとかどうすか！ 特別課外活動部、大勝利&センパイがた卒業おめでとうございますって具合でサ！」

「今のうちに寿司の予約。僕、マグロかな。あと荒垣先輩の料理」

伊織のその言葉に、湊が手をあげる。

それに続くようにアイギスも立ち上がり、宣言する。

「ではわたしはマグロ、サーモン、たまご、エンガワ…」

「あ、じゃあウチはタコ！ 前から食べてみたいと思ってたんよ〜！」

「姉さんたちはそうするんですね。なら、わたしはいくらがいいです」

「ふふつ、良いだろう、予約しておくよ」

「しゃーねーな。他のやつらは何食いてえ？」

笑う美鶴さんに、仕方がないといった様子 of 荒垣くん。

場の空気が和む。皆、少なからず緊張していたのだろう。

まだ勝ったわけではないが最後の大型シャドウを倒した後のようなやりとりに微笑ましく思っていると、奏子がこちらを向いて口を開いた。

「お兄ちゃん。きつと、なんとかなるよ。大丈夫。だって、その為これまで頑張って来たんだもん。私は——ううん。私たちはお兄ちゃんとの『絆』を信じてる」

「奏子…」

まっすぐな目で見つめられ、思わず逸らしそうになるも、動かない。

いま、ここで動いてはいけな思ってしまう。

たとえ、不安な心を見透かされていたとしても、それでも奏子は否定するようなことを言わない。

ならば、その目を逸らしてはならないとなにかが呼びかけるのだ。

「…そうだな。俺も、皆との絆を信じてる」

それだけは、嘘偽りない想いだ。

ずっと独りだった。そう、思い込んでいた。けれど皆はこうして力になろうとしてくれている。

仲間だと、言ってくれている。ならば、それに応えなくてはならない。
い。

ひとりで戦うんじゃない。皆で、乗り越えなくてはならないのだ。

そこをはき違えてはいけない。

たとえ最後まで別の方法が見つからないとしても、足掻き続けることに意味があると思うから。

—— Rank UP!

XVI “アーキタイプ原型”

三上優希 Rank 8 ↓ Rank 9

“原型”のペルソナを生み出す力が増幅された！

真の覚醒（1／31）

1月31日（日）

夜

作戦室にストレガの4人と朝倉先生、朔間くん、綾時くん、そして皆が集まっていた。

まだ、影時間になっていない為、朝倉先生は象徴化していないが、影時間になればシユブ^{ニユ}ニグ^{ニク}ラスの影響が強まるまでは象徴化しつばなしになるだろう。

つまり、これが最後の話し合いになる、というわけだ。

「よし…こうして号令をかけるのも、おそらく最後だ。みんな…準備は良いか」

「…あ、あの、いいですか!？」

美鶴さんがそう呼びかける。

それに頷こうとしたら、岳羽が遮った。

「影時間を消すことになったら、やっぱり私たちの大事な思い出も消えちゃうことになるのかも…」

「今更なんですか？ 怖気づいたとでも?」

そんな岳羽の発言に、タカヤが冷静に返す。

ストレガは影時間を主軸に活動してきた。だからこそ、影時間に関する記憶が消えるとなれば、人生の殆どに関する記憶を失うことと同義だ。

人一倍、恐怖を覚えても仕方ないというのに、4人は至って冷静だ。

「そういうわけじゃ…私、そうなくても、みんなの事、忘れない！ そのことが私たちの思い出から何を奪おうとしても…ゼツタイ忘れない！ そう言いたかっただけ!」

「フン、そうですか。では、ご勝手に」

タカヤはあくまでも興味が無い、と言いたげに視線を岳羽から外す。

記憶が消えることに関しては、タカヤからはこれ以上何も言うことが無い様子だった。

覚悟を決めているのか、それとも。

「ハハ、なんだよ、ゆかりツチ。…つたりめーだろ！ オレはチドリのこともぜってー忘れねー！」

「私だって、忘れませんー！」

「僕だってー！」

「わたしもです」

「ウチもやー！」

伊織につられて、口々にそう宣言する。

誰だって、思い出せるとわかっていても一時的に消えてしまうのは怖いものだ。

「心配するな。君の方が忘れても、私が教えてやるさ」

「…ああ、大丈夫だ」

「アキと桐条がこう言ってたんだ。心配すんな」

美鶴さんに真田くん、荒垣くんが不安がる岳羽を元気づける。

その言葉に、岳羽はほっと胸をなでおろしたようだった。

「よかった…」

「あ、でもそういや約束…場所を決めてなかったよな」

「確かに…思い出してもどこで会うかは決めてませんでしたね」

伊織の言葉に天田くんが頷く。

確かに、3月5日にみんなが集まってパーティーを開く約束はした。

だが、記憶を思い出した時に集合する場所は決めていなかった。

「寮とかじゃ、当たり前すぎで忘れちゃうか…何もなければ、戻って来るわけだし…」

山岸が、うーんと悩むように言う。

確かに場所選びは大事だろう。その場所がどこに決まるか、大体知っている自分は口出ししないでおくが。

「卒業式の日が、奏子ちゃんたちの勝負の日、なんだよね？ じゃあいつそのこと、街を見渡せる学校の屋上にしない？」

「なるほど、いいですねゆかりさん！」

「確かに、それなら再び平穩の戻ったこの街がよく見えるな」

美鶴さんが頷く。

無事、高等部の屋上で集まることが決まったようでよかった。
変な場所にならなくて良かったという安堵が胸を満たす。

「…今みんなの気持ち……何があっても、決して振り返らず、前だけ見て進もうという気持ち……記憶と一緒に無くしてしまわないために、そこでまた必ず会おう」

「ワン！」

「はは……待ちきれないか？」

全員で頷く。

コロマルだけは吠えて返事をしたが。

「よし……では、そろそろ行こう」

「そうだね。……行こう、みんな」

美鶴さんの言葉に返事をするように、皆に呼びかける。

「わかった」

湊。

「大丈夫！」

奏子。

「……うん」

岳羽。

「……一緒に」

山岸。

「……わたし、やります」

アイギス。

「ウチだって、やるで！ シャビも気合十分や！」

ラビリス。

「絶対に、負けられません」

メテイス。

「いっちょよ、やったりしましょう！」

伊織。

「……楽勝だ。な、美鶴、シンジ」

真田くん。

「ああ」

美鶴さん。

「そうだな」

荒垣くん。

「がんばりましょう！」

天田くん。

「ワン！」

コロマル。

特別課外活動部全員の返事を聞いた。

ストレガの方を見れば、しっかりと頷き返してくれる。

「オマエらー！ ぜってー負けんじゃねーぞ！ 動けるようになったらオレらも戦いに行くからな！」

朝倉先生はいつも通りだ。

影時間を認知できないというハンデがあるにも関わらず、こうやって伝手を使って補助しようとしてくれている。

約束を、必死に守ろうとしてくれている。

「朝倉先生も、どうか、死なないで」

「つたりめーだろー！ 誰が死ぬか！」

真剣な表情でそう言えば、ぎゃん、と大きな声の返事が返ってくる。

この調子なら死んでも死なないだろうなと安堵させるものだ。

朝倉先生は、ズルい。そうやって、俺達に安心感だけを与えて去っていくのだから。

この人になら、この人たちになら、任せられる。そんな、安堵を。

「負けないで。兄さ…望月くんは僕がちゃんと守るから…」

「力になれなくてごめんよ。けど、応援してるから」

朔間くんと綾時くんからもそう言われ、全員との会話が済む。

思い残すことはもうない。

「では…そろそろ行こうか」

「うん」

皆、装備を手に取り、タルタロスへと向かうのだった。

影時間

タルタロス 255F 憂鬱の庭アダマ

シヤドウを蹴散らしながら、上へと進む。

出来るだけ消耗は避けたいところだが、ニユクス——シユブ||ニグ
ラスが降臨するというこの日だけは、シヤドウたちも上へ上へと進ん
できているのか強弱問わずこちらへ襲い掛かって来る。

それらを倒しながら進んでいると不意に通信が入る。

『皆さん、気を付けて！ なにかが近づいて…これは…死神タイプ!』

「は!?!」

「なんやて!?!」

まだこのフロアに入ってから、数分と経っていない。死神が出てく
る段階ではないはずだ。

だというのに、山岸はそれを検知した。どうということなのだろう
か。

ぞわり。

不意に、身体が怖気だつ。

殺気を感じ、そちらを向けば、死神が。

「ッ!!!」

しかも、見たことのないタイプの——否、それは見たことがある存
在だった。

手に持った双刀を大きく振りかぶるそれは、幼い頃にタルタロスか
ら落ちる原因となったそいつ。

「させへん!」

ジンが、^{メギドボム}手榴弾を投げ込む。

眼前で爆発したそれは目くらましとなり、詰められていた距離を離
すことができた。

「ありがとう、ジン」

「ええって。それより、前向いときー!」

煙が晴れる。

そこにはまだぴんぴんしている刈り取るものの姿が。

こいつだけは、倒さなくてはならないという意志のようなものが湧

き上がってくる。

どうせ、逃がしてはくれないのだ。

「やるぞー！」

「うん」

「わかったー！」

この人数だ。苦戦することはあれど、負けることはないだろう。

『皆さん、完全勝利です！ お疲れさまでした！』

その後は、一方的な蹂躪に近かった。

何故かとしてつもなくやる気のあるタカヤを筆頭に、奏子と湊が刈り取る者を圧倒した。

余り消耗はしないで欲しいとは言ったものの、特に大技を使うこともなく、幼少期^{トラウマ}の仇が消えていく様をみるのはなんとというか、くるものがある。

だが、強くなったと言うべきか。無力だったあの頃とは違うというのがよくわかった。

「……」

湊が他の刈り取る者を倒した時と同じように血に濡れたボタンを拾い、ポケットに入れる。

仇とも呼べる存在に特に何を思ったわけではないが勲章として貰っておいても怒られないだろう。

『先の階層を探ります……』

山岸がそう言って、しばらく無言の時間が続く。

探知を先の方まで伸ばしているのだろう。

『……！ 262階に、強い反応がふたつあります。でも、これは……』
山岸が言い淀む。

『シヤドウのような、そうでないような……恐らく、ニユクス教の神父かと』

「あれは私たちの獲物です」

そう告げた山岸にタカヤがそうかぶせた。

神取さんに対し、たった4人で挑むつもりなのか。さすがにそれは看過できない。

口を開こうとすれば、タカヤが「しー」と指を口に当てた。

「貴方がたには、上へと行ってもらわねばならない。それに、言ったでしょう。私たちの獲物だと」

「でも…」

「でもだつてもない。こんなところで消耗してもらつても、困るのです。ああ、それとも、ナギサ。貴方は信用ならないとでも？　まさか、私たちが負けるとでも思っているのですか？」

怒っている。

タカヤが、明確に怒っているのを見るのは初めてかもしれない。

それに、信じていないわけではない。不安なだけだ。だが、その不安すらもきつとタカヤは許してくれないだろう。

こうなればもう、観念するほかない。

「わかった。任せていい？」

「愚問ですね。さあ、行きましょう」

目を見つめ返せば、頷き返される。

そしてそのまま言葉を交わすことなく、上へと進むのだった。

262階についた自分たちを待っていたのは、やはり神取さんだった。

否、神取さんと、幾月のフリをしているニヤルラトホテプというベキか。

「待っていたぞ、諸君」

「やあやあ、遅かったじゃないか。早くしないとシユブニグラスの本体が降りてきてしまうよ？」

二人ともがフランクにそれぞれこちらへ声をかけて来る。

が、こちらは警戒を解くことはしない。

「ああ、それとも。三上くんの寿命が尽きるのが先かな？」

わざとらしく、こちらを見る幾月から庇うように奏子と湊が前に出る。

「お兄ちゃんは絶対に死なせない。だからそこ、どいて」

きつい表情で幾月を睨みつけた奏子が語気も強く言い返す。

そんな奏子に対し、幾月はさも気にしてませんよと言わんばかりにやれやれと肩をすくめた。

「言われて素直に退くとでも？ ……と言いたいところだけれど私は優しいからね。先に行くといい」

けれど、と幾月が付け加える。

「ストレガの面々はどうかやら私たちと戦いたいようだ。その願いを『父』として叶えてあげなくちゃね」

「誰が父よ」

幾月の言葉に、チドリがそうボヤク。

父らしいことを何もしていない幾月が、『ストレガの子供たち』の父を名乗るなど言語道断だ。

たとえそれが、普遍的無意識グレイトファーザーにおける父としての側面をもつニャルラトホテプだったとしてもだ。

タカヤの方を見れば、任せろと言わんばかりに頷き返してくれる。はつきり言つてこの戦いは分が悪いものになるだろう。けれど、誰も欠けることなく勝ってくれるだろうという期待があった。

正直な話をすれば、自分も幾月——ニャルラトホテプに一発入れたかったが、そんなことをしてもあいつは喜ぶだけだろうし、こちらが消耗するだけだ。

やめておこう、と衝動を抑える。

タカヤ達にどんな秘策があるのかわからないが、負けないだろうと信じて上へと進んでいくのだった。

そしてついに——頂上にたどり着いた。

何本もの柱が立ち並ぶ円形のそこには、何もいない。

「ここが…頂上か」

感慨深く、美鶴さんがそう呟く。

皆も周りを見渡し、その景色に呆然とするばかりだ。

自分や奏子、湊はこの景色を何度も見ているため、呆然とすることは無い。

ただ、決意を固めるだけだ。正真正銘、これからが最終決戦なのだから。

そんな中、不意に岳羽が上を見上げ、声を上げる。

「ちよつと見て、空がっ！」

言われて、天高くそびえる巨大な月を見つめる。

黒い闇が集まり、人型を形作る。それは、自分たちと同じ、等身大の人間のサイズだ。

決して、ニユクス・アバターののような巨大な影ではない。

「あそこから何か来ます！」

「『シユブニグラス』か!？」

「ペルソナを出さなくても、強く感じる……、こんな反応、初めて……」
影を見つめながら、怯えるように山岸が言う。

ただの人型。ちっぽけな、何ら自分たちと代わりのないそれが、天からふわりと降りて来る。

「ごきげんよう、矮小なる人間の皆さん」

そして、ドレスのような黒衣を纏った妖艶な美女がにこやかに囁く。

黒き豊穡の女神。

狂気産む黒の山羊。

『千匹の仔を孕みし森の黒山羊』。
マクナ・マーダ
万物の母。

「わたくしはあなたがた人間が『シユブニグラス』と呼ぶ存在です」

——外なる神

シユブニグラス

「わたくしは愛を以ってこの世に生きとし生けるものを滅ぼします。悉く、滅ぼします。そこに抵抗は無意味です」

それは、宣戦布告だった。

それを聞いて、一番にいきり立ったのは真田くんだった。

「なんだと……!? だが、決めたことに後悔は無い。無意味だろうが何だろうが、必ず倒してやる！」

「無駄な足掻きを。貴方達は理解できているのですか？ 人にとって最も恐ろしいもの…最も目を背けたいと感じるもの…このわたくしが、一体何になったのか」

ふう、と溜息を吐くように、シユブニグラスは息を吐いた。

「分かってるさ、そんなの」

「ああ。…誰でも知ってる」

「そうだな。そいつは、身近にある」

「全ての命に約束されてるものだ…」

四人の言葉を聞き、シユブニグラスは冷たい視線を向ける。

それは、呆れと落胆に近いものだった。

「ならお分かりでしょう。抗うなどと、本当は無駄なことだと。恐ろしい思いなどせず、苦痛など感じず、安寧に身を任せ、微睡みの中で果てた方が幸せでしょうに」

「ああ、怖えーよ…決まってるんだろ。でもな…言っちゃってしようがねえ！ オレは、オレ達は…生きなきゃなんねえんだよ!!」

「…もう逃げるのはイヤ！ 生きるっていうのは、命の終わりから目を逸らさない事…」

大きく、岳羽は息を吸う。何かを覚悟するように。

「たとえあんたの前でも、ゼツタイ後ろは振り向かないっ!!」

そう宣言するように叫んだ。

だが、それを聞いてもなお、シユブニグラスの顔色は変わることが無い。

「…わたしは、皆さんと生きたい。これからも。わたしは、自分自身でそう決めたから!!」

「ウチだって、この身に代えてでも勝ってみせる。みんなで、ウチら誰も欠けることなく、生き続けるんや!」

「わたしも…姉さんたちとこの先を生きていきたい。だから、貴方にその力は振るわせない! 返してください! ”ニユクス”を!」

「…そうですか」

静かに、凧いだ声でシユブニグラスは皆の想いを受け止めた。

その顔には、呆れと落胆が浮かんだままだ。

「自ら苦しい道を歩むというのですね。」母としてわたくしは止めません」

ならば、とシユブニグラスは続けた。

「——せめて、苦痛を感じぬ間に殺してさしあげましょう」

「待つて：下からなにかが：巨大な反応が這い上がってきます！」

山岸がそう言った瞬間、ぞわりと背筋が粟立った。

自分は、この気配を知っている。とてもよく。

「さあ、おいでなさい。愛しい我が子、エレボス」

「——ッ！」

淵に、巨大な黒い手がかかる。そうして覗き込んできたのは、双頭の仔山羊だ。

子山羊というには大きすぎる代物が、這い上がり、産声を上げるように雄叫びを上げた。

何故、普遍的無意識領域ではなく、ここに。と言いたいが影時間も一種の普遍的無意識領域だ。顕現することはいくらでも可能だろう。

シユブニグラスが手なずけているとするならば。

シユブニグラスはエレボスの頭上に腰かけ、嗤う。

「さあ、始めましょう。わたくしに敵わないと知りながらも抗う姿を見せなさい」

「来ます……！」

山岸のその声に、全員が戦闘態勢に入る。

自分もロンギヌスを手にも、身構えた。

「抵抗が無意味だということ、その身をもって知りなさい」
闇に包まれる。

その一瞬で、抵抗する間もなく特別課外活動部の面々の意識が落ちる。

順平は、父親とキャッチボールに出かけていた。

口下手な父と、ふたりで。

「順平、いくぞ」

「おっし、バッチコイだぜ！」

返事をする。

父との関係は、良好だ。口下手な父と、優しい母。その二人に愛情深く育てられた順平は、こうして父親と毎週末、ぎこちないコミュニケーションをとるのだ。

父親が喋らない分、順平はお喋りになった。

はて、本当にそうだったのだろうか。キャッチボールをしながら、順平は不意に違和感を感じる。だが、その違和感はすぐに霧散した。何かを忘れていている気がする。けれど、それが何か思い出せない。そして、どうでもよくなってくる。

大事なのは、今の父とのコミュニケーションだ。そうやって、ボールを受け止める。

キャッチボールを済ませ、家に帰り、シャワーを浴びる。

そして母親の用意した食事を家族三人で食べる。そこに恐れるものはない。

「んでよ、オレ様大活躍って感じで！ 部活でもリーダー任せられちゃったり？」

「そうか、すごいぞ」

「へへっ」

家族団らん。幸せなひととき。

そこに、青い蝶が一羽飛んできた。

「ぐ!？」

それを視界に入れた瞬間、不意に、頭に痛みを感じる。

「順平、大丈夫？」

「大丈夫か!？」

珍しく慌てる両親に大丈夫だと返事をしそうになり——順平は気が付く。

どうして、こんな場所にいるのだろうか。と。

「違う…オレは…そうだ…」

気が付いてしまう。

自分は、父との関係は良好などでは無かったということに。両親も、こんなに仲良かったわけではないということに。

「ごめん…オレ、行かなきゃ。オレを待つてる奴らが居るんだ」
「待つて、順平！」

順平は追いつがる母親を振りほどき、玄関を出た。

ゆかりは、父親である詠一郎と共に、ショッピングに出かけていた。今日は珍しく忙しい父が、帰ってきてゆかりに構ってくれる日でもあるからだ。

待ちに待ったこの日を、ゆかりは楽しみにしていた。

母親も、穏やかに「いつてらっしやい」とゆかりを見送ってくれた。

「どうだ、ゆかり。学校の方は」

「普通だよ。勉強も特に躓いてるところとかないし」

それに、友達もいるし、と続けようとして、その友達の顔が上手く思い出せない。

「…？」

「それなら良かった…どうしたんだ？」

「ううん、なんでもない」

感じた違和感はすぐに消え去ってしまった。思い出せないのなら、大したことではないのだろうと思う間もなく、その違和感が無くなっていく。

さも、当たり前だったかのように。

そんな、ゆかりの前を青い蝶がひらひらと飛ぶ。それを目にした瞬間、ゆかりはボトリと買い物袋を落とした。

「そうだ…お父さんは…」

さ、と詠一郎をゆかりは見る。その顔は、優しいままだ。どこまでも。

「ゆかり？」

「お父さん、ごめんなさい。でも、私、行かなくちゃ…！」

頭を下げ、名残惜しさも感じながら、走る。蝶の先導する先にある、光に向かって。

乾は、神社の境内にいた。

そこにはコロマルと、母親の姿が。

本来ならおかしいはずの光景はしかし、今の乾には何の違和感も感じないもので。

「乾くそろそろ帰るわよ〜」

「はあい」

母親に言われ、フリスビーを手に、コロマルのリードを持って神社の奥へと向かう。

そして、コロマルを主人である神主に渡して、帰ろうとした。

その時、二人の間をひらひらと青い蝶が飛んで行くのが見えた。

「ワンワン〜」

コロマルが吠える。生憎、乾にはコロマルの言葉はわからない。だが、その声で乾は違和感に気が付いた。

どうして、母親が声をかけてきたのか。どうして、コロマルの飼い主であるはずの神主さんがまだいるのか。

ふたりとも、死んだはずでは。

ここは、現実ではない。乾はそう気が付いてしまった。

「行こう、コロマル」

「ワン〜」

青い蝶に先導されるがまま、二人は駆けだした。

明彦は、妹の美紀と共にブランコに乗っていた。

明彦はこいではないなかったが、妹の美紀はぶらぶらと足を揺らし、ブランコをこいでいる。

そして、その少し離れたところに、親友である荒垣もいる。

「美紀、学校では友達が出来たか？」

ガラにない事を、聞いてみる。

いつもなら気にしないそんなことを、明彦は聞きたくなくなったのだ。
「うん。いっぱいできたよ〜」

屈託なく笑うその顔は、夕日に照らされよく見えない。

「そうか」

言葉少なに明彦ははにかみ、嬉しくなる。

妹は無事に学校生活を送れている。それだけでなにも代えがたいものだと思っただからだ。

「おい、テメエら。そろそろ帰るぞ」

孤児院の門限が近くなってきたのだろう。荒垣がそう急かす。

ブランコから立ち上がり、美紀へと手を伸ばそうとした明彦の前に、青い蝶が飛んでくる。

「なんだ…?」

「おい、どうし——ぐっ!?!」

荒垣が頭を抑える。それと同時に、明彦も違和感に気が付いた。

何故、死んだはずの美紀がいるのか、と。

「そうだ…俺達はこんなことをしている場合じゃない…!」

「ああ…なにがなんだかわかんねえが…胸糞悪いことしやがって…」

荒垣と共に明彦は顔を見合わせる。

ここは現実ではないと気が付いてしまえば話は早い。

「悪い、美紀。俺は…行く」

「え? え? お兄ちゃん?」

困惑するような美紀妹の声を振り切り、明彦と荒垣は蝶の後を追うのだった。

美鶴は、全てのしがらみから解放されていた。

使命も何もない、ただの令嬢としての生活。それを、満喫していた。

不思議と、なにかに必死になっていたことは思い出せるが、なにに必死になっていたかを思い出すことができない。

だが、それでもいいと思ってしまうた。

平穏な日々。

父と母が居て、なにかに煩わされることのない、充実しているが風いだ海のような毎日。

そんな生活を続けていた美鶴だったが、不意に蝶が前を飛んだ。

その瞬間、美鶴は例えようなない頭の痛みに襲われる。

(私が本当に望んでいたのはこんなことなのか…?)

一度、違和感が気が付いてしまえばもう早い。望んでいた平穩。だが、そこに誰かが足りない。そして、やらなければいけないことも。

美鶴は立ち上がる。

「申し訳ありません、お父様。私は、行かねばなりません」

「…待て美鶴！ どういう…」

言葉を最後まで聞くことはなく、美鶴は蝶を追う。

現実は何が待っているようとも、偽りの安寧に浸るわけにはいかないからだ。

気がつけば、湊は奏子と共に食卓についていた。

それは寮のダイニングでも、三上家のものでもなく有里家のものだった。

普通ならば、敵の罠だということを警戒するだろう。だが、湊の意識はなぜか、それを当たり前だと思ってしまった。

それから、湊と奏子は卓上の料理を見つめていた。まるで、小さな子供のように。

心なしに、視線も低くなつたような気がした。おかしいことのはずなのに、けれどおかしいと思えない。

だんだんと、思考が鈍っていく。当たり前だと思ってしまう。

その時、ダイニングの扉が開いた。

「湊。奏子」

「…母さん」

不意に、現れた人物は湊と奏子、そして優希の実の母である有里琴音だった。

朗らかな笑みを浮かべ、席につく。その横に、父親である有里朔也も並んで座った。

何の変哲もない、明るい家族の食卓。なくしたはずのもの。

その空気に、湊と奏子は飲まれようとしていた。

だが、そこに、青い蝶がふわふわと飛んでくる。

気がつけば、湊と奏子は両親をその手で殺していた。

「どう、して…」

「ごめんなさい、おかあさん、おとうさん…でも、きつとこれは現実じゃない」

「うん。だって、優希——兄さんが居ない。父さんと母さんは兄さんが居ないことを無視するような人間じゃない」

ひとつの確信があった。

景色が白んでいく。そして、意識が浮上した。

「皆さん、良かった…目が覚めて…！」

全員、風花の声で意識がはつきりとする。

倒れ伏したままだったが、身体に傷はない。

「皆さんが急に倒れた後、三上先輩とアイギスたちが必死に守ってくれていたんです…でも…！」

見れば、片膝をつく優希と傷付いたアイギスたちが。

優希はアイギスたち三姉妹を守るようにエレボスとの間に立ちふさがっている。

「愚かな。あのまま安寧に身を任せていればよかったものを」

酷く冷めた声色で、シユブニグラスはそう告げた。

湊達が夢から覚めたことを指しているのだろう。そして、あのまま醒めなければそのまま殺されていたということも。

ニタリ。シユブニグラスは嗤う。

エレボスは健在だ。そして、シユブニグラスも。

対してこちらは起き上がれない面々に、傷付いたアイギスたち。状況は劣勢だった。

「どうしても、折れなかったのです。まずは、その心からへし折って差し上げましょう」

シユブニグラスが見たのは、湊だった。

そのドレスの裾から、巨大な触手のような口を現す。

あまりのおぞましさに、だれも動けない。すぐにでもそれは、湊の眼前まで迫ってきていた。

大口を開けて。

「やめろおおおおおおお!!!」

目を見開いた優希が、手を伸ばしながら叫ぶ。

そうして、ぐ、と一步踏み出し、ぐるりと大口へと向き直る。湊を庇うように両手を広げ――

――その姿が、湊の目の前で呑まれた。

血ひとつ残さず、丸々。

一瞬で、消え去ったのだ。先程までいた兄が。

自分が動けなかったせいで。幻を、見ていたせいで。

「くそ、くそおっ!!!」

「そんな……!」

シユブⅡニグラスは追撃を仕掛けてこない。

ニタニタと気味悪く嗤っているだけだ。

優希という「要」を失った特別課外活動部は大した事無いとも思っているのか。

それとも、勝利を確信しての余裕か。どちらにせよ、絶望的な状況となったことに変わりはない。

特別課外活動部の面々に絶望が襲い掛かってきていた。

絶対に死なせないと意気込んでいたキーパーソンたる優希が食われたのだ。

絶望するなという方がおかしいだろう。戦意を喪失しかねないそれに、耐えれた者は何人いたか。

戦況が一瞬で変化し、瓦解したわけでない。むしろ、優希とアイギスたちに守られ、皆は無傷に近いのだ。だが、それでも精神的ダメージは耐えがたいものだろう。

このまま負けてしまうのではないか。これでは、もう終わりなのではないか。

そんな雰囲気が一瞬でも蔓延する。

それでもなお、湊と奏子は諦めてはいなかった。諦めかけはしたが、諦めなかった。

なぜなら、まだ時が巻き戻っていないからだ。

それは、シユブⅡニグラスの悲鳴で証明された。

「何故!? 何故です!? なぜ、そこから立ち上がれるのです!?」
「いいえ、まだです! シュブニグラスが苦しんで…この反応は…!
三上先輩!? シュブニグラスの内側から三上先輩の強い反応を感じます!」

風花の言葉に、明彦が反応する。

「なら、奴の腹を搔っ捌けば三上を助けられるのかもしれないというわけだな!」

「やってやろうじゃねえか…!」

まだ、希望は失われていない。

そんな期待と共に、全員が立ち上がる。そして、それぞれの得物を構えるのだった。

身体が鉛のように重い。起き上がれない。闇が全身にまとわりついている。

視界も闇一色に染まっている。

自分は——湊を庇って食われて、それで。

もう、終わってしまった。自分がシュブニグラスに取り込まれてしまったから、終わりだ。

守つても意味はなかったのに、なのに。それでも。

託したかった。でも、諦めるほかない。

「……」

どこからか、声が、聞こえる。

——それで本当にいいと思ってるのか?

「…!」

そんな筈は無い。重い首を横に振る。

——お前はいつまでかの邪神の操り人形で居るつもりだ。この先も生きたいのなら、真に皆が大事だというのなら、お前の人生を生きるべきである。そしてそれを欲するのなら、お前が、お前自身の手で、奪い取れ”。

それが、【契約】だ。

邪 神の掌で転がされて、これで終わりだなんて、許せない。こんなのが決められた運命なんてクソくらえだ。ふざけんな。

ふつつつと、そんな怒りが湧き上がり、よろよると立ち上がった。泥が、逃さまいと身体を引っ張る。それを、引きちぎる様にして。「与えられたものでも…決められたものでもなく…」

——決意できたか？ ならば、貼り付けられたその偽りの仮面を剥がし、本当のお前を顕すのだ。

纏わりつく泥のようなどす黒い仮面に手をかける。

「俺は…！ 俺は…ッ！」

自分は、俺自身の足で、皆と一緒に生きたい。

「——生きたい!!!」

——よく言った、契約者よ！

内から聞こえる歓喜の声。それは新たな産声を上げる者を称賛するようだ。

ビリビリと身体が震えるのを感じる。

「あああああー！」

叫び。そして、ブチリとその仮面を力いっぱい引きはがした。

血が飛び散り、力の奔流が辺りをめちやくちやにかき回す。

身体を蝕んでいた黒い泥が今度は自分を守るコートのようにその形を変え、裾をはためかせた。

ロンギヌスも蒼い炎を纏わせながらその姿を変え、一本の拳銃に変わる。

そしてその前で、自分は不敵に笑う。

いま、最高に気分がいい。

——我は汝、汝は我…我が名は…

「『ブラフマー』!!!」

——ああ、全てを変え、全てを救おう。強欲な我が契約者よ。

「もちろんだ！俺は、もう一人じゃない。皆との“絆”があつて今、ここに立ってる！」

さあ、世紀の大逆転劇を始めよう。

この輪廻に終止符を打ち、自分を含めて誰一人犠牲にしない、ご都

合主義のハッピーエンドのように甘いエンディングの為に。

全ての人の魂の戦い（1／31）

暗闇の中、シユブニグラスの姿が浮かび上がった。

「何故!? 何故です!? なぜ、そこから立ち上がれるのです!？」

「まだ、終わっていないからだ」

しっかりと見つめ返せば、ありえないものを見るかのような目で見られる。

「いいえ、貴方は終わったのです！ わたくしに取り込まれた。——
だというのに、何故、まだ人としての形を保っているのです!？」

「何度も言わせるな。まだ、終わっていない！ なにも！」
叫ぶ。

こいつを退けるまでは何も終わらない。まだなのだ。

中途半端な途中で終わるわけにもいかない。それに、生きて帰ると約束した。

そう、決意したのだ。

「ならば、完膚なきまでに殺します。お死になさい！」

冷静さを失ったシユブニグラスがその触手を振るう。

しかし、シユブニグラスの触手がこちらへ届くことはない。

「そのアルカナは示した。避けようのない死。けれど足掻くことの大切さを」

カードが、眼前に浮かぶ。

その絵柄は——死神。

「ヒユプノス！」【アンティクトン】

膨大な魔力の爆発によって焼かれ、その勢いを無くしたからだ。

恐らく、『外』では湊達がまだ戦っているのだろう。ならば、少しでもダメージを与えなければならぬ。

「そのアルカナは示した。安らぎを得、愛を知ることが死からの再起への第1歩なのだ」

カードが、眼前に浮かぶ。

その絵柄は——節制。

「オネイロイ！」【ヒートライザ】

叫ぶ。

三位一体のペルソナ、オネイロイが現れ、自身の能力を底上げする。これで、下準備はばっちりだ。

「そのアルカナは示した。友の裏切りによって乗り越えるべきものを」

カードが、眼前に浮かぶ。

その絵柄は——悪魔。

「ッアリスッー！」

『ねえ、【しんでくれる?】』

アリスが現れ、シユブニグラスに向かってその指をさす。

瞬間、トランプと槍が降り注ぎ、シユブニグラスの身体を貫いた。

もう、アリスに対する怒りはない。

「あああっ!!」

初めての痛みへのけぞるシユブニグラスに手を緩めることはない。

「そのアルカナは示した。今まで信じてきたものに裏切られたとしても、善悪関係なく大事なものを貫く強さを」

カードが、眼前に浮かぶ。

その絵柄は——塔。

「デヴァ・マラー！」【カーマ・シラーストラ】

神取さんとの”絆”。それは、たとえどんな関係であろうとも自分の中で息づいていた。

デヴァ・マラー黒い天魔が手に持っていた円盤を天高く放り投げ、弓に矢を番え、それを天に向ける。

徐々に円盤に日輪の如く光が集まり、そして、一撃が放たれた。

流星のように落ちるそれがシユブニグラスの身体を焼く。

「く…あ…い…小癩な…い…」

痛みに呻きながらも、シユブニグラスはこちらに向かって黒い泥を飛ばす。

それが付着した瞬間、身体から力が抜けるような感覚に陥る。

よく知るそれは、能力低下の攻撃のようだった。

【ビートライザ】で上げられた能力値が一気にマイナスまで下がる。
「そのアルカナは示した。日常に充実を与え、忘れていた生きることへの希望を」

カードが、眼前に浮かぶ。

その絵柄は——星。

「：俺の星。『モコイさん』」

『生きたいネ、一緒に』【デクンダ】

「ああ、共に。生きよう」

暖かい光が体を包み、能力の低下を打ち消した。

「そのアルカナは示した。迷いや不安があっても、信じる者を頼る大切さを」

カードが、眼前に浮かぶ。

その絵柄は——月。

「アールキング！」

朝倉先生との絆の証。

老樹を思わせる風貌のそれが、大きく手に持った杖ごと腕を振り上げる。

【ハンノキの王】

癒しの力が体を包み、一気に力がみなぎって来る。

生命力の増強。それを、このペルソナは一時的にだが行ってくれた。

これでまだ、戦える。

「そのアルカナは示した。成功を掴み取るカギは、常に己の内で燃え滾っているのだと——！」

カードが、眼前に浮かぶ。

その絵柄は——太陽。

「ククトウグア！」

「負けるんじゃないぞ！俺たちは、やり切らなきゃならないんだからさー！」【ホムスビ】

もうひとりの自分である、ウィツカーマン。それが変異した存在。それでも、ずっと共に居てくれた。その炎を胸に灯し、前を見据え

る。

「あああああっ！」

業火に悲鳴を上げるシュブニグラス。

その余裕のない様子から、だいぶダメージが蓄積してきているのがわかった。

あと一押し、いや、ふた押しか。

大きく息を吸い、叫ぶ。

「そのアルカナは示した。堂々巡りの輪廻の輪から抜け出し、自らの手で決着をつけることをツ!!!」

カードが、眼前に浮かぶ。

その絵柄は——審判。

ライドウくんや、クリシュナたちとの縁。そして絆。

それらが、ちゃんとした形で力を貸してくれる。

「アマツミカボシ！」【落星】

何も無い空間から、巨大な星が落ちる。それは、シュブニグラスを凍てつかせ、その動きを止めさせた。

「くっ!？」

「おおおおお!!」　「ブラフマー」!!!」

その隙を見逃さない。

カードが、眼前に浮かぶ。

その絵柄は——世界。

誰に与えられたものでもない、真正正銘、自分のペルソナだ。

ブラフマーが光を放つ。それは、いくつもの光となつてシュブニグラスに襲い掛かる。

回避行動がとれない彼女はそれをもろに受けてしまい、そのまま力なく倒れる。

終わりだ。もう、この彼女は動けない。

「ふ……ふふ……ふふふ……」

シュブニグラスが嗤う。

だが、それを聞き終わる前に、自分の意識は暗闇へと落ちていった。

「あああつ!!」

突如、悲鳴を上げ身もだえたシユブニグラスに、消耗していた特別課外活動部の面々は勢いづいた。

何故ならば、彼女が何もしていないのにダメージを負っているというのは優希が今も戦っている証拠でもあるからだ。

「へっ、俺らも負けてらんねえな」【グラム】

「はい!」【イノセントアタック】

荒垣のペルソナ、”シグルド”がその剣でエレボスに斬りかかり、天田のペルソナである”カラ・ネミ”も追撃に移る。

その隙をカバーするように、ラビリスの”アリアドネ”とメティスの”プシケ”の攻撃が飛ぶ。

迎撃能力を持たず、元々大柄で回避行動などというものをとれないエレボスは、まともにそれを受けるしかない。

「――!」

「お願い、”アテナ”!」【ゴッドハンド】

大きくのけぞるエレボス。そこへ、アイギスの”アテナ”が放つ拳が叩きこまれる。

バランスを崩し、頂上の床へと轟音を立てて沈んだエレボスに炎の爆発が襲い掛かる。

「っしゃあ、どうだ!」

「ワン!」

ガッツポーズをする順平と、どうだと言わんばかりに吠えるコロマル。

その横を、明彦が走り抜ける。

”カエサル!”【ジオダイン】

そしてそのまま召喚器の引き金を引き、”カエサル”を呼び出し稲妻を落とす。

電撃を受けたエレボスはしかし、次の瞬間には態勢を立て直し、明彦へとその剛腕を伸ばそうとしていた。

「やらせないんだから!」【ガルダイン】

「ああ、やらせはせん！」【ブフダイン】

それを、ゆかりの「イシス」の【ガルダイン】と美鶴の「アルテミシア」の【ブフダイン】によって急速に作り出された氷壁が邪魔する。「く…あ…！ 小癩な…！」

上に乗るシユブニグラスが歯噛みする。優希を食らったところまでは余裕たっぷりだった彼女が、焦っている。

その余裕の無さに、追い詰めていることを感じつつも気は抜けない。

エレボスの四つの目がこちらをぎよろりとにらむ。そして、天高く吼えた。

目の前に、闇を凝縮したかのような球体が生まれ、そして滞空する。「何？ あの光は…何かとてつもなく嫌な予感がします…！」

「あれは…早く破壊しないと不味いことになります。全力で阻止して！」

風花の言葉にかぶせるように、メテイスがそう告げる。

その言葉を聞いた瞬間、奏子と湊は顔を見合わせた。

そして、手をつなぐ。

「いくよ、湊」

「うん、奏子」

空いている方の手で、召喚器を持ち、自らのこめかみに突きつける。

「ペルソナ！」

現れたのは、黒の破壊神と白の魔神だ。シヴァ・マハーデーヴァ ヴイシユヌ・マドゥリースダナ

その二柱は光となって天高く昇ると、上空でひとつの光となって舞い降りた。

それは、シヴァとヴィシユヌの合体神。破壊と創造を司るもの。

「——ッハリ・ハラッ！」

白黒のその姿のペルソナが、その手に光を集める。そしてそれを、静かに闇へと向ける。

刹那、爆発。白い光の柱がエレボスごと闇を焼き、霧散させた。

「すごい…力の拡散を確認！ 攻撃、何とか阻止されました…！」

風花が感嘆の声を上げる。

それと同時にエレボスが悲鳴を上げ、再び地に伏せ、闇へと溶けていく。

残ったのは、倒れ伏したシユブⅡニグラスと優希だった。

「…やったか!？」

「お兄ちゃん!」

「優希!」

湊と奏子が駆け寄り、抱き起こす。

幸い、まだ息はあるようだった。

「う…」

目が開く。どうやら意識が戻ったらしい。

「俺は…、っ!」

ぼんやりと視線を彷徨わせていた優希だったが、慌てて飛び起きる。

「いや、まだだ。まだ、終わりじゃない」

「ふ…ふふ…ふふふ…」

シユブⅡニグラスが嗤う。

そう、まだ、終わりではない。湊達が倒したのは、あくまでもエレボスだけ。

そして優希が倒したのは、シユブⅡニグラスの”端末”だ。

本体には何らダメージは入っていない。

「認めましょう。貴方達の力を。けれど、もう、『終わり』です」
ぐ、と上半身を起こしたシユブⅡニグラスの身体が浮かび上がる。

「男神たるわたくしの力は既に取り戻しました。あとは、この世界を”壊し”、全てをひとつにするだけです」

「させるか!」

「逃がさへん!」

そう言い残し、月へと吸い込まれていくシユブⅡニグラス。

そんな彼女に対し、皆が全力の攻撃を放つがすべてすり抜けていく。既に、その身体は虚像となり、攻撃を受け付けるものでは無くなってしまったのだ。

完全にその姿が消えた瞬間、地面が揺れる。

「月が……！」

「まもなく……間もなく落ちてきます。……この場所へ」

月面が割れ、中から醜悪な触手が何本も飛び出してくる。

それは、真つ白だった月を侵食し、黒い混沌の塊となってタルタロスの頂上へ向け、
「落ちて」くる。

その瞬間、象徴化していた人間たちが一気にその姿を取り戻した。
異様な空気にタルタロスの塔。

天から舞い降りる、直視するのも耐えがたい身の毛もよだつ謎の物体。混乱する民衆の中で、ニユクス教の信徒が声を上げた。

「は、ははは……預言の通りだ！ ひやははっ！ あが……っ!？」

だが、その言葉は最後まで発されることはなかった。

シャドウ化し、ばちやりと地面に落ちたからだ。

「きゃあああ——!!!」

悲鳴が木霊する。

各地で人間のシャドウ化が起こり、街は騒然となった。

まさに、終末。大パニックだった。

そんな中、はるか遠く、タルタロスの塔がある場所を、三上夫妻は家の外に出て見つめていた。

家の中で寝ていたのだが、異様な雰囲気を感じ、起きてきたのだ。

そんな二人に、シャドウが襲い掛かる。

「やらせねえよ！」【狐火のアプト】

チロンヌプが三上夫妻を守るように、炎を飛ばす。

各地で現れたシャドウと戦うのは、なにもペルソナ使いだけではなかった。

「ヒーロー！ ヒーロー見参だホー！ みんな、ニンゲンを守るホー！」【復讐の氷拳】

「えーいっ！ 食らいなさい！」【ザン】

ジャックフロストだった悪魔——エースフロストが氷を纏った拳を1体のシャドウにたたきつけて霧散させ、その隙を補うようにピクシーが衝撃波を放つ。

魔界で、優希たちに助けられた弱小悪魔がシュブニグラス降臨の

影響で異界に近くなった人間界に現れ、この数週間で力をつけ——または協力を募り、シャドウへと立ち向かっているのである。

そして、ライドウも。東京を守るために必死に戦っているのだ。

「ヨシツネー！ コウリユウー！」

「なんだ、こいつら…味方…か？」

朝倉は突然の野良悪魔の出現に困惑した。だが、襲ってこないのならそれでいい。

朝倉は仲間と共に、事態の鎮圧にあたるのだった。

一方、タルタロスの頂上。

「これは…」

「どうなってんねや！」

「順平！」

「乾君！ ナギサ！ 大丈夫か!？」

ストレガの4人はボロボロになりながらも頂上へとたどり着いた。

神取と幾月の両名を退けたのだ。だが、正確に退けたのは神取一人だけで、幾月は倒したと同時に溶けるように消えてしまったのだが。

「大丈夫です！ でも…」

「こんなのどうすれば…！」

ニユクスの正体は月だと知らされていた面々だったが、余りの規格外の大きさとその異様に困惑する。

衛星を破壊するなど、そんなパワーを持つペルソナも兵器もない。

もつとも、破壊したらしたで落ちて来る破片のことなども考えると破壊するのは得策ではない。

「！…！ 何か来る！」

風花がそう言った瞬間、重圧が全員に襲い掛かる。

重力波にも等しいそれは、あつという間に消耗していた全員の膝をつかせようとする。

しかし、

「負けられつかよ…！」

「そっだよ…こんなところで…」

「せや…ウチら… まだ負けられん…！」

皆が、重圧に負けずに踏ん張る。

だが、二度、三度とくる重圧に耐えられるわけもなく、最初に倒れたのは一番小柄な天田だった。

「天田！　ぐっ…」

「くそ…こんなところで…！」

バキン、とアイギスたちの関節が嫌な音を立てて軋む。

次々に倒れていく仲間たち。それを見つめながら、優希はただ一人最後まで立っていた。

—— Rank UP！

XI “アーキタイプ原型”

三上優希 Rank 9 ↓ Rank MAX

”?????”のペルソナを生み出す力が増幅された！

”?????”の合体が解禁された！

目を開く。視界いっぱい広がるのは一面の青。

かすかにピアノで奏でられる『月の光』が聞こえる。

水槽が一面を取り囲み、水面が月光を反射する。まるで水族館のようなそこは、湊や奏子のベルベットルームとは大きく違っていた。

その長椅子に、自分と奏子、そして湊が並んで座っていた。

机を挟んだ向こう側にはイゴールとマーガレット、エリザベス、テ

オドアの姿が。

「約束を、果たす時でございませす」

約束。

はて、約束など、した覚えがあっただらうか。

そんな疑問を口に出す間もなく、イゴールは笑う。

「ええ、ありますとも。私どもは貴方と——貴方がたと」とある”約束をしました”

そう言つて両手をもみもみと揉んだイゴールは、目を伏せた。

「さて、話はほどほどに、本題に参りましょう…私共の役割。それは、

“お客人の力をひとつに束ねること”、にございます」

ひとつに、というのはどういうことなのだろうか。

そんな疑問が浮かんでくるが、イゴールは答えようとせずに耳を澄ませた。

「聞こえますかな…数多の声が。ひとつひとつはごく小さな力…しかし確かに貴方がたに向けられている…届いておりますかな？」

わからない。その声は直接聞こえているわけではない。だが、

「目を閉じ、耳をお澄ましなさい…微かですが、感じるでしょう？」

「…ああ。感じる」

言葉はない。それでも、胸の中にしっかりと温かいものを感じる。

「これらは全て、絆を胸に、貴方がたの力にならんとする願いの声…それぞれは微かな力でも、その集まりが大きな変化をもたらすのです」

光がだんだんと大きくなっていく。

「——今こそ、”絆の力”の真価をお目にかける時です!!」

光がはじけ、一枚のカードが現れる。それは、いやというほど見た、^{ユニバース}宇宙のカードだった。

「これは、全ての始まりの力であり、そして、全てを終える力でもあります。それでは、私共の仕事と参りましょう」

そのまま奏子と湊に渡すわけではないらしい。そんなことをしようものなら横から奪い去ってやるところだったのだが、まだ何かあるらしい。

「さあ、始めましょうぞ…」

自分の頭上に一枚のカードが浮かぶ。左右を見れば、奏子と湊の頭上にもカードが浮かんでいる。

その絵柄は、姿違いのシヴァとヴィシヌだった。

それらが、イゴールの手の動きに合わせて、シャッフルされていく。

そして、“宇宙”^{ユニバース}のカードと合体し、光となって自分の胸に吸い込まれた。

力が、みなぎってくる。

「…もはや何事の実現も、貴方にとっては奇跡ではない」

「この部屋も、ようやく真の姿を取り戻せる」

「貴方がここにこうしていること。人として生まれたこと。それが運命なら、この力を得たのもまた運命…ですが、貴方は抗った。避けようのない死を。その、運命の全てを」

イゴールは、ほう、と息を吐いた。

「契約はついに果たされました…私の役目は、ひとまずこれで終わります」

そうして、微笑む。

「…貴方がたは、最高の客人だった」

一面を覆っていたガラスに、ひびが入る。そのひびはどんどん大きくなり、やがて亀裂となり、ガラスをぶち破った。

流れ込む海水。不思議とその中でも息ができる。それでも、上から差し込む太陽の温かい光に視界が焼かれ、意識を手放した。

意識を取り戻す。

驚くほどに体が軽い。立ち上がる。

「そんな…」

「行かないで！」

「なんで立てねえ…！ オレたち…何もできねえってのかよ!？」

そんな声が聞こえ、振り返る。

「お兄ちゃん…信じてるから！」

「死んだりなんかしたら、赦さない」

「行くな優希っ！ 一人で、ひとりで行かせてなるものか！ くそ、動け…っ！」

笑いかける。いつもと同じように、穏やかに。

恐れるものは何もない。全て、上手くいくのだから。だって、そうじゃなくちやおかしいだろう。

「これだけ揃っていて、駄目だなんてこと、許されない。行つてきます」

そうして、混沌の塊の内部へと吸い込まれていった。

混沌の塊の内部

そこには、何も無い。一面の闇が広がっていた。
しかし明確に、こちらへと漆黒の炎が降りて来る。

【DEATH】

それを、身に受ける。

身体が焼ける。痛くない。

『くっ…このまま僕たち…何にも出来ないなんて！』

『諦めるな！どんな時でも、アイツと俺達はひとつだ！』

『どうか…彼に力を!! 共に生きれる未来を！』

仲間の想いが、力を呼ぶ。

胸に、温かいものが広がった。

『先輩が帰ってこなかったら、奏子ちゃんと有里くんはどうするの!?

だから…絶対帰ってきて！』

『すごい…世界を滅ぼす力と、たった1人で…!!』

『ひとりなんかじゃねえ！オレが…オレらが絶対死なせねえ!!』

仲間の想いが、力を呼ぶ。

胸に、さらに温かいものが広がった。

『ワンワンツ！』

『あなたを生んだこの世界が滅びるなんて絶対ダメ…!』

『そうです、絶対に生きて戻ってきてください…! じゃないと…

じゃないと…!』

『ウチも…待つてるから…! だからナギサくん…帰ってきて…!』

『そうよ、くたばったらタダじゃおかないんだから!』

仲間の想いが、力を呼ぶ。

胸に、さらに温かいものが広がった。

『ナギサ。ここまで来て死ぬだなんて私は許しはしない。それだけで
す』

『タカヤは素直やないなあ…まあ、それが貴方のええところでもある。
負けるなや、ナギサ』

『わたしからは、何も無いわ。ただ、順平のことは…感謝してる。だから
死なないで』

『死ぬなよ、ナギサ。俺はまだ、恩を返し切ってないんだから』

仲間の想いが、力を呼ぶ。

胸に、さらに温かいものが広がった。

『ナギサ、負けないで……!』

『僕らは、信じてる。お兄さんが運命に打ち勝つことを!』

朔間くん——モルフエと綾時くんの想いが、力を呼ぶ。

胸に、さらに温かいものが広がった。

『ぜってー死ぬんじゃないねー! 死んだら殺す! 以上!』

『あの子らが戦ってるんだ、アタシらもうひと踏ん張りで行こう
じゃないか、ライドウ!』

『ええ。三上さん…貴方が戦っているのがわかります。だからどうか、負けないで』

『優希…負けないで……!』

『負けるんじゃないぞ……!』

朝倉先生、アザミさん、ライドウくん、養父母の——否、生きとし
生ける全ての存在の想いが、力を呼ぶ。

今ならば、やれそうな気がする。

全てを解決する、たった一つの冴えたやり方を。

手に、光が集まる。

それはひとつの銃の形を成し、手に収まった。

それを、闇の一点に向ける。

「これが、俺達の『答え』だ」

銃弾が発射される。

それは、ただの銃弾じゃない。皆の願いが詰まった、たったひとつ
の弾だ。

だが、傷つけるためじゃない。この弾には殺傷能力はない。ただの
『祈り』。

こちらの願いが強いのだと、理解して貰うためのものだ。

「【トリムルティ・サンサーラ】」

天に、光が差す。それは徐々に強くなっていき、闇を晴らした。

君、死にたまふ事なかれ (1 / 3 1 ~ 3 / 5)

シユブⅡニグラスの本体。さらにその上から、光が降りて来る。

それは、月の光ではなく——暖かな太陽の光だった。

太陽の光はひとつの蓮の花のようにシユブⅡニグラスを包み——
気が付いたときには、一面の宇宙が広がっていた。

どこか温かく、明るいその場所は足元が水面になっている。

穏やかに寄せては引き、寄せては引く。波打ち際のようなそこは、不思議と落ち着く感覚を得る。

ここは、心の海。魂の始発点であり終着点。世界の奥深くにある場所。

“アートマ”である。

生と死の狭間。その水際^{みぎわ}。それら双方だけの場所。

たった、それだけで構成されている場所だった。

それをここに居る面々は知る由もないが。

「ここは…」

皆が、周りを見回す。

「シユブⅡニグラスの…いや、彼^カの力が生み出したのか…？」

美鶴はそう呟く。

その言葉に、この景色に飲まれかけ、はっと明彦は忘れかけていたことを思い出す。

「山岸、あいつは無事か!? 戦いはどうなった!?’

「光に包まれた時、全部消えてしまつて…もう…何の反応も…」

泣きそうな声で、風花がそう告げる。

消えてしまった。その事実、全員に絶望感が蔓延した。

「まさか、この力と引き換えに…」

「なに言つてんだよつ!! そんな筈ねえつ!!」

「ええ、そうです。そんなはずはない」

順平とタカヤが、否定するようにかぶりを振る。

こんなにも暖かい場所だというのに、ひとりが居ないだけで不安になる。

「お兄ちゃんは帰って来るっていった！ 絶対、居るはず…！」

「三上先輩、居るんでしょ！ だから、返事して！」

「わたし達はここです!! 声を聞かせて、お願い!!」

「——居るんでしょ、『兄さん』」

必死の呼びかけが宇宙に木霊した。

皆、この空間をきよろきよろと見渡し、居なくなった優希を探している。

——と、その時。

「ああ。『ここ』に『いるよ』

声がした。

その瞬間、水面が揺れ、ひとりの人物が姿を現す。

「お兄ちゃん…っ！」

「優希…」

それは、優希^渚だった。

傷ひとつないその姿に、皆、安堵する。そして、奏子が抱き着こうと駆け寄った。

が、

「え…っ…」

それは透明な壁に阻まれ、叶うことはなかった。

一体どういうことなのか。疑問が奏子の頭を占める。

その疑問は、奏子だけでなく、他の面々にも波及していった。なぜ、触れられないのか。

嫌な予感がする。

「な、なんで…？ お兄ちゃん…？」

「自分は、皆と一緒に帰ることはできない」

発された言葉に、衝撃が走る。

帰ることはできない。つまり、優希^渚はもう、死んでしまったということなのか。

約束を守ることはできないということなのか。

結局、ニユクスを封印することを肩代わりする、それと同じ結果になってしまったのか。

「な、んで…なんでや!? なんでナギサくんだけ…!」

ラビリスの言葉に、優希^渚が一瞬目を伏せる。

しかしそれは本当に一瞬の出来事で、視線を合わせ、そして微笑んだ。

「自分はもう、人の身じゃない。だから、行かないやいけない場所がある」

優希^渚は後ろを振り向く。そこには、女神であるシユブ^渚Ⅱニグラスやモコイ、アリスに黙示録の四騎士など、沢山の悪魔の姿があった。

それらは、優希^渚が話し終わるのを待っている様子でもあった。

「なら、わたしも行かないや。ただの人の身でないというのなら、わたしも…」

メテイスが前へ一歩出る。だが、透明な壁はメテイスを通すことはなかった。

「どうして!? わたしも…わたしだって、ニユクスなのに!? どうして行けないの!」

「きみはあくまでカケラだ。大本の本体はまだ心の海で眠っている。そして、これから目覚めることはない。もし、目覚めたとしても、全てのモノに死をもたらすものではなく、ただの悪魔だ。だから、還る必要はない」

「まさか——書き換えた…?」

メテイスは慄く。まさか、死の概念を書き換えたのか。

そんなこと、出来るはずがない。そんなことをすればこの世の摂理は狂ってしまうだろう。

「死をもたらしたという事実は変わらない。けれどニユクス^渚を無害なものに変化させることはできる。人々の認知が、そうさせたんだ」

人々の認知。願い。月が滅びを齎すものではなく、ただの月だという認知を増幅させ、書き換えた。

それをなんてことはないという風に告げる優希は、もはやただの人ではないということを書き換えた。

なにもものも、今の優希^渚を邪魔することはできない。一種の「概念」。ニユクスがもたらした「死」と同等の存在になったことを意味

していた。

「帰って、来れるんだろうな？ テメエだけ居ねえなんて認めねえからな……！」

「大丈夫。ちゃんと、帰ってくる。約束の日には」

穏やかに、ごく穏やかに、優希^希は告げた。

そこに何の心配もいらぬ、という風に。

「持ちすぎた力を、置いてくるだけ。ただの人に戻るために、大事なことなんだ」

だから行くのだと、優希^希は言う。

「ああ、そうだ」

それは忘れ物をしたかのように、発された。

「俺^希をよろしく」

渚は、なんてこともないのだという風にもうひとりの自分^希を切り離した。

透明な壁をすり抜け、仲間たちの前に投げ出され、尻もちをつく。

「え……！」

困惑したのは、切り離されたウイツカーマン^希だ。

共に行くつもりだった。だというのに、渚はウイツカーマン^希を切り離し、一人で行こうとしている。

「待って——！」

手を伸ばす。置いて行かないで。ひとりで、行こうとしないで。

そんなウイツカーマン^希の抵抗虚しく、話は終わったと言わんばかりに渚は後ろを向いた。

「それじゃあ、後は頼んだ」

戦いは、終わった。

タルタロスも、影時間も、消え去った。

奇跡は起こり……世界は、滅びをまぬがれた。

死する運命だった二人も救われた。

そして……街にも、平穏と普通の暮らしが戻った。

もう誰も、天変地異のことなど覚えていない。
そして…季節は流れた。

3月3日（水）

朝

月光館学園高等部前

うらかな春の日差しの中、奏子と湊、そして黒髪の少年が校門から校舎へと続く道を歩きながら話している。

黒髪の少年は、そのストレートな髪を短く切りそろえており、くあとあくびをした。

「優希お兄ちゃん、またラビリスさんと喧嘩したの？」

「優希は喧嘩するっていうより、どちらかというと尻に敷かれてるほうでしょ」

「…とほほ」

優希と呼ばれた少年は、肩を落とす。話題に上がるのは、恋人であるラビリスという少女とのやりとりだ。

どうしてだかは覚えていないが、同じ寮に住んでいて付き合うことになった彼女とのドタバタな毎日には充実していた。

「ようー」

「おはようー」

そうやって登校していれば、後ろから順平と綾時が駆け寄ってくる。

「三上センパイおはよーございます！　んで、湊と奏子たちは寒みーのに、今日もサボらずガツコ来てんね。感心、感心」

にかつと笑うその笑顔は陰りが無い。

「つか、もう1年過ぎちまったな…来年から三年だぜ？　高校もあと1年で終わりか…その先、なんか面白いことあんのかね？」

「あるに決まってるっしょー」

「ウワ、三上センパイが言うと言得力あるっつか。マジリスベクトっすわ」

バシン、と優希が順平の背中を叩く。

その表情は悪だくみをする時そのもので。

「大人になつたらなんと！ 大人買いができちゃうんだぞ！ これ、すくくないか？」

「規模が小さい…」

帰国子女で金持ちの綾時は言わなかった。

大人にならなくても大人買いはできるよ、と。だが、キラキラと目を輝かせる順平と優希に対し、そう水を差すのは悪いなどとなんとなく思つたため、口をつぐんだのだ。

湊は空気を読まずにドン引きしていたが。

「でもなんか、三上センパイ以外の三年見てるとき、なーんか勉強してるだけっつーか…いいんかなあ、オレたちも、こんなんで。なんか忘れてるっていうかさ…」

「俺以外ってどういうことなのさ」

「や、センパイはなにやっても人生充実してそうだなというか…エンジョイ勢、てきな？」

「ふふん、苦しゆうないぞ、伊織！」

話しながら歩く。すると、木陰から誰かが覗いているのを順平は見つけた。

金髪のその少女は、こちらをじつと見つめている。

「あれ、あの子…なんかこっち見てねえ？ つか、ナニゲにカワイくねえ!?! あんな子、この学校に居たっけ!?!」

「何言ってるんの、キミは。同じ寮の子でしょ？ ほら、ラビリスさんの妹の…」

そこへ、ゆかりがなにいつてんだこいつと言わんばかりに歩み寄り、ツツコミを入れた。

しかし、順平には覚えがない。

「マジ!? そうだっけ!? え…名前は？」

「そこまでは…知らないけど」

「んだよ、結局よく知らねんじゃん。センパイは？」

「えー…妹さんのことまでは…あんまり…」

困ったように眉を寄せる優希に、順平は肩を落とした。

「つーか寮さ、年度の節目でバタついてて、人の出入りとか最近分かんねーよな。三上センパイも卒業で出て行っちゃもうし、真田先輩ももうすぐ出てくって話だぜ」

「ふーん、そうなんだ…でも、荒垣先輩は留年で出て行かないみたいだよ」

「奏子っちの彼氏サンだっけ。留年、かあ…」

順平は留年、と聞いて羨ましいようなそうでないような気持になる。

だが、

「あの人は、ケガか何かで療養してたんでしょ。アンタは留年しちやダメだかんね」

「わーってるっての!」

ゆかりにきつく言われ、叫ぶように返事をする。留年なんて、良いことはないのは明らかだ。

もう一度三年生をやり直すだなんて、考えたくもない、と順平はその思いを振り払った。

「てか、卒業生は出てくでしょ。桐条先輩も、もう仕度始めてるしね」
「桐条って…ああ、生徒会長サンか。ウチの寮だったんだよな」

そこで、話は終わる。

全員で顔を見合わせ、声をかけたのは綾時だった。

「ねえ君、どうしてこっちを見てるんだい？ 何か用でもある？」

「! あ、いえ…なんでもないです」

思いつめたような表情をし、金髪の少女はそのまま去っていったしまった。

「なんか…ちっと思ひ詰めてる感じじゃなかった？ …って、もしかして、オレらの誰かに気があるとか!?!」

目を輝かせ、順平はウキウキと弾んだ。

あんな可愛い少女がこの中の誰か——彼女持ちである優希は除く——に気があるというのは一大イベントである。

「ハハ、あり得ないね」

「順平くんは他校のチドリちゃんといい感じなの忘れてるのかなー？
大丈夫？」

ゆかりが否定し、奏子が釘を刺す。

何を隠そう、順平は他校の生徒である吉野チドリという少女と夏ごろに出会い、今とても「イイカンジ」なのだ。

そんな彼女を置いて、告白されたいなどというのは言語道断、浮気なのではないかと奏子は釘を刺したのだ。

「うぐ。奏子たちはともかくゆかりツチ、相変わらず、そういうツッコミ、カワイクねえーよな…」

そしてまた、会話は止まり歩き出す。

「なあ…そう言や、ゆかりツチさ…」

不意に、また順平が口を開いた。本当に、唐突に。しかしそれはすぐ閉じられてしまう。

「あ…悪イ、やっぱいいや」

「何よ、言いかけていて。勝手に止めないでよ」

「いや、その…オレらつて、なんで仲良くなつたんだっけ？」

「？」

順平の疑問に全員がはてなマークを浮かべる。

「なんで、今更そんなことを言い出すのか。わけがわからなかったからだ。」

「いや、深い意味はねえんだけど、ふと、そんな風にさ…」

「別に、特別仲良いつもりも無いけどね。たまたまじゃない？」

「ハハ、そうだったよな…」

虚しく笑う順平の笑顔はどこかカラ元気のように、ゆかりも不思議がる。

「でも、不思議だよね。うまく言えないけど、ちよつと…分かるかも」

「？」

「え…？」

「よく分かんないけど、何かへんつていうかさ…」

ゆかりが眉をしかめる。何かを思い出せそうで、思い出せない。

「そういえば…さつきの子…」

何かを言いかけた。その時。
学校のチャイムが鳴る。

「つべ、遅れるー！」

一番に駆けだしたのは優希だった。

「無遅刻無欠席の記録がここでパーになるなんて考えたくない！」

そんな叫びを残しながら、駆けていく優希の後ろ姿を見ながら、一行も校舎へと入っていくのだった。

先程まで話していたことを忘れて。

3月5日（金）

午前

卒業式の日だ。

ホールには、全校生徒が集まっている。勿論、留年予定の荒垣もそこにいた。

「…いよいよ、お別れの時が迫りました。最後になりますが、私たちは先輩方にお会いできたことを心から誇りに思います。皆様方のご健康とご活躍を心よりお祈りし、お別れの言葉と致します。2010年、吉日。在校生一同より」

在校生の祝辞が終わり、お辞儀をして、去っていく。

『続きまして、卒業生、答辞』

司会の先生が、次のプログラムを発表する。

『卒業生代表、D組、桐条美鶴さん』

「はい」

壇上に、美鶴が上がる。そして、礼をしてからマイクの前に立った。「学園で過ごした最後の年は、私にとって大役を拝命しての1年となりました。生徒会長の任を果たすにあたり、私は考え、1年前のこの壇上で、皆さんに言いました。未来の時間には限りがあるという事から、目を逸らしてはいけないと」

さらに美鶴は言葉を続ける。

「思えばこれを考える機会を与えられたのは、運命だったのかもしれない。ご存じの方はいらっしやらないかと思いますが、私は昨年、

許嫁の彼を…」

だが、そこで言葉が止まる。

なにか、違和感を感じたのか、一瞬上を向き、そしてまた向き直る。
「彼を…一度病で失いかけるといいう、試練に…」

澱みながらも言葉を続けるが、頭を痛みが襲ったかのように美鶴は押さえる。

「一度…失う…?」

本当に、そうだっただろうか。許嫁の顔は、どんなだったか。思い出せない。

こんなにも愛しているのに。この気持ちは、どこから。

そんな風にスピーチを詰まらせる美鶴に、会場はざわつく。

「珍しいな。あの人がスピーチつつかえるなんてさ」

「だよね…なんか、変じゃない?」

そんな周りをよそに、美鶴は目を見開く。

「そうだ…思い出した…」

その言葉は、マイクに拾われることはなく。

「そう、私は彼の死に触れ、一度は生きる意味さえ失いかけた」

スピーチが続いていく。それは、先程の不安定な様子とは違い、はつきりとしたもので。

「あれ…私、大切なこと…」

「?」

何かを思い出そうとしているゆかり。その横で呆然としている順平の肩に、手がかけられた。

「え…? 真田…先輩?」

同じ寮のよく知らない先輩。それが肩を掴んできた。

そのまま立ち上がらされた順平の周りは騒然としている。

それを、風花は見つめた。一体何があったのかと。

その瞬間、思い出した。

「…!」

風花は、立ち上がる。

「でも、今は違う。未来から逃げない。必ず、立ち向かうのだと」

スピーチは続いている。

「覚悟にはもう一点の曇りもない。何故なら、」
「約束！」

通路に出て、風花と合流した順平が声を上げる。

そしてそのまま、ゆかりや荒垣と合流し、通路の真ん中に立つ。

「何故なら、私には大切な仲間が居て、そして、どんな未来からも目を背けないと誓いあったからだ！」

そう言うや否や、美鶴は壇上から降りる。

さらに騒然とする会場。しかしそれを気にも留めず、美鶴は仲間たちの元へと駆け寄った。

「先輩、私たち、奏子ちゃん達の事……」

「ああ、分かっている。みんな、行こう！」

ゆかりの声に、返事をして駆けだす。

約束を果たすために。止める声もあるがそんなものは関係ない。そんなものよりも、約束の方が大事だ。

大事な人の待つであろう、そこへ。

「貴方は、誰なんですか？」

遡る事、5分ほど。

桜の舞う月光館学園高等部の屋上。そこに、優希と湊と奏子、そしてアイギスたち三姉妹が居た。

そこにいる全員が、既に記憶を思い出している。

空気は穏やかではあるものの、優希という正体不明の人物に警戒心を露にしないわけにはいかなかった。

なにせ、湊と奏子の義理の兄の立場に居るのだ。そう、あるはずのない記憶が訴えかけてくる。

「俺？俺は三上優希だよ」

「そういうことじゃなくて……」

飄々と、優希は笑う。

そういう意味ではないことは優希もわかっていた。フェンスに背もたれし、再び口を開く。

「でも、俺は三上優希だ。正真正銘のね」

「ど、どういうこと…!?」　なんで私たちの記憶の中には、お兄ちゃん
と、優希お兄ちゃんのふたつの記憶があるの!？」

「さあ。それは渚に訊かないと。きっと渚がなんかしたんだろうし。
俺はなんにもしてないよ」

お手上げ侍、と両手を広げるその姿は、奏子と湊の血縁者には見え
ない。

要するに、全く似ていないのだ。だが、三上夫妻にはよく似ていた。
「変わってしまったけど、元は俺は渚と同一人物だ」

「ユウキくんは、ナギサクん…と同じ存在ってこと?」

「そう」

優希は説明する。

ずっと、三上優希としてこの一年以外を過ごしてきたのは自分でも
あるのだと。

元々一つだった存在が、二つに分かれただけなのだ、と。

それを聞いても、面々の曇りは晴れなかった。それもそうだ。ずつ
と近いと思っていた人物が、実は知らない人物。存在するはずのな
い人物だったのだから。

「ふたつに分けるだなんてそんなこと…」

「できるよ。だって、あの渚には不可能なんて言葉は無かったんだか
ら」

宇宙ユニバースではない、未知の力を振るつたという渚のことを優希は思い出
す。

あの渚であれば、ひと一人を世界にねじ込むことなど容易に可能だ
ろう。

それも、その名前で誰か□が存在していたという基盤があるならなお
さら。

「そんなこととして…ナギサクくんもユウキくんも大丈夫なん?」

「え?　大丈夫。超元気。マジで」

口笛を吹いて見せるも、ラビリスの表情は明るくならない。

実際、平気なのだ。渚はもう、自分という魂を繋ぎとめるものが無

くとも存在していられるし、自分も奇跡によってひと一人分の魂になつた。だから、なんともない。

「それならいいんですけど…」

納得いかない、と言いたげなメティスの視線を避けるように優希は顔を逸らす。

どうも、苦手だと思つてしまう。ウィツカーマンであるということを知られているのもあるが、昔からの仲のような感じがしてムズ痒い。

その瞬間、勢いよく扉が開いた。

「みんなっ！」

駆け寄ってきたのは、記憶を思い出した天田やコロマルも含めた特別課外活動部の全員だった。

これで、全員揃つたことになる。ひとりを除いて。

「思い出したんだね…」

「うん…！」

「でも…三上せんぱ…じゃなくて、有里先輩が…」

風花が困惑する。それもそうだろう。記憶にある“三上先輩”はそこにいる少年ではなく、これまで共に戦つてきた青い髪の少年なのだから。

「まさか…戻つて来れなかつたんじゃ…」

「そんな…」

嫌な予感がした。

戻つて来る、とは言つても口約束に過ぎない。あの渚のことだ。口約束だけして、去つていく、だなんてことを平気でするだろう。

折角記憶を思い出したのに、犠牲者が出てしまった。信じたくない。皆が、そう思っただろう。

ふと、ドアが開く。教師が追つてきたのだろうか。卒業式の途中で7人ほどの生徒が居なくなつたのだから探しに来てもおかしくはない。

強い風が吹き、桜吹雪がその姿を一瞬隠す。

だが、それが晴れたとき、姿を現したのは。

「——みんな、ただいま」

待ち望んでいた、その姿だった。

小話

有里渚調査報告書

※鳴海不在により、ゴウト再々々々代筆

別件にて港区へ遠征。

調査を行っていたところ、有里渚（以下 甲）なる人物と遭遇。

甲、魔人の分霊の何柱かをその身に宿す。また甲、人修羅と類似案件たる「魔人との殺し合い」なる騒動之渦中のにあり。

斯くして17代目の失踪事件と並行して是これを調査。

一方、17代目の仲魔たるモコイ（以下 乙）と接触するも、乙、逃亡。

行方暗に知れず。

本件之大なる収穫、17代目の行方知れる処也。ところなり

港区にて繰り広げられし無気力症なるものに関する一連の事件。

シユブニニグラスなる邪神降臨すも、甲とその仲間の尽力にて解決。

影時間なる我等の感知外の領域があつた模様。

また、16代目葛葉ライドウと乙に対する聞き取りの結果、17代目は甲に転生していたことが判明。

是を以て調査を終了とする。

※特記事項：

幾度やれど猫の手にキーボードは矢張り不当也。

ある探偵事務所に、キーボードの音が鳴り響いていた。

それは一定の間隔で鳴り——そして止まる。それは、文字を打ち終わつたことを意味している。

「ゴウト、報告書の代筆ありがとうございます」

ひよい、と目の前に猫用の液体タイプの菓子が差し出される。が、

猫——ゴウトはそう言ったものを好まない——わけでもなかった。

「ええい、ライドウ。毎度毎度我にねぎらいかは知らんがこのようなものを…」

文句を言いつつ、ちゃむちゃむと食べるその姿はただの黒猫だ。しばらく舐め、満足したゴウトは毛づくろいをはじめめる。

菓子を持ったまま、画面に映る報告書を覗き込んでいたライドウが、困ったような表情をして口を開いた。

「まさか、有里さんが先代だっただなんて…思いもありませんでしたね」

「うむ、灯台下暗し、というべきか」
ぺろり、と前足を舐める。

まさか、ひよんなことからであった有里渚という少年が、居なくなった先代の転生体だとは思ってもよらなかったからだ。

このことは一時、渚を保護した16代目葛葉ライドウ——アザミとモコイの証言により確定した。

どうやって気が付いたのか、本当に渚が17代目の転生体なのか。詳しく聞いていたところ、一度死に、復活したモコイがその詳細を語った。

曰く、ニヤルラトホテプとの戦いに勝ったは良いものの、そのニヤルラトホテプはあくまでも化身だったため、本体を名乗る存在に魂を奪われてしまったのだという。

そして、その魂を有里渚という子供に押し込まれた——のだとか。全てを語り終えたモコイは、そのまま「じゃ、モコイさんは帰るネ。バイビー」と帰ってしまい、それ以上のことを語ることはなかったが。

また、シユブⅡニグラスやニユクス、影時間といったことも全て報告書にある。

にわかには信じがたかったが、桐条グループが行った実験により、滅びであるというニユクスの招来が予見され、そしてその通りになるうとしたところをシユブⅡニグラスが乗っ取り、降臨。

『コドクノマレビト事件』のベヒモスに乗っ取り出現したクラリオンと同じ現象がまた起きたというわけだ。

もつとも、シユブⅡニグラス自身は元から何らかの理由により、

ニユクスに封印されていたという。

「きつと、有里さん達が居なければ今回のことは——…」

「皆まで言うな。分かっている」

ライドウは、己の力不足を実感していた。

たとえば、自分に適性は無くとも、そう言ったことに関わった以上、なにか解決の力になれたと思っていたのだ。

だが、そうではなかった。解決したのは有里渚とその仲間だし、ライドウ自身は民間人をシャドウなる怪物から守っただけだ。それでも、手を抜いてはいないし全力を出し切った。

数々の事件を解決してこの数カ月で成長し、ヨシツネやコウリュウと言った名だたる悪魔を召喚できるようになったのだ。その分、直接力になれなかったのが悔しい。

きつと、大コウリュウならば。あの重圧の中、飛んで行けただろう。だが、それは己の弱さが故にできなかった。

怖気づいてしまったのだ。東京を——人々を守ると誓ったのに、あのシュブニグラスの重圧に。

「自分は——もつと力をつけなくてはなりません。皆を、有里さん達を守るように」

「そうだな。うぬは強くなった。だが、まだ14代目の域には届いてはおらぬ」

しかしな、とゴウトは続ける。

「何度も言うが、命の全てを使おうなどはするでないぞ。有里とて、そんなことをしなかったからこそ、帰ってこれたのだ」

「はい…」

そう、結末は、奇跡が起きたから成ったのであって、最初から捨てる気でいればこうはならなかっただろう。

ライドウは、そのことを胸に深く刻んで書類整理に励むのだった。

☆幕間：三上先輩と私。

三上先輩が歩道に倒れている。ぐったりと、血の気のない顔で。寒い。冬だからかな。なんで先輩が倒れているんだろうと思いで、そうと震える指先をその血塗れの手に添えた。

固く、お腹にぐっさり刺さったナイフを押しさえつけるようにして握りしめている先輩の手は、力強く握りしめすぎて真っ白で。なのに道路に流れるたくさんの血は鮮やかなくらいに真っ赤だった。

そうだ。私は、有里奏子で、先輩とデートをしていて、歩いてて、突然、ニユクス教の人らしいおじさんが叫んでナイフを持って突進してきた。

通り魔だった。もう世の中が終わってしまうから救済してやるんだって叫んでた。

そんな人から私を先輩が守ってくれた。でも、その代わり先輩は、「あ……りさと、だい、じょうぶ……だから……」

息をするのも辛いのに、今にも死んでしまうかもしれないのに、先輩は私を心配している。泣きそうな私を元気づけようとしている。

私は、無傷で、無事で。なんともないのに。なんにもできないのに。ペルソナが使えたら、こんな傷、どうって事ない。治してあげられる。

なのに、影時間じゃないから治せない。そして時間が経ちすぎててもう間に合わない。

10月に死んじやった荒垣先輩みたいに、三上先輩も死んじやう。そんなの、そんなの、

「嫌だよ……なんで……みかみ、せんぱ……うん……お兄ちゃん……!」

私は、知ってたよ。ずっと前から知ってた。

先輩が小さい頃に誘拐されていなくなっちゃった私のお兄ちゃんだってこと。

知ってて、少しでも一緒にいたくて、でも妹だよって言い出せなくて。お兄ちゃんって呼べなくて。

だから……“妹”に戻れないのなら、“彼女”になっちゃって。

先輩は私のことを支えてくれた。間違っていることはきちんと正してくれ、指摘もしてくれた。

リーダーについて悩んだりしていたら積極的に相談に乗ってくれたし、順平にいろいろと当たられたときは先輩にも矛先が行くのに構わずしっかり守ってくれた。

面倒みがいいという先輩の評判から、私にしたようなことは誰にでもしているのかもしれない。けど関係なかった。

こんなの、好きにならない方がおかしいよ。例えそれが家族だった人間に対して持つものじゃないとしても。

特別な関係なら、私、何でも良かったんだ。先輩が私を見てくれるなら妹じゃなくてもいい。

けど先輩は：お兄ちゃんは優しかった。

まるで私の事、覚えてないはずなのに妹を見てみたいに扱った。私が告白した時も迷惑だったと思うのに受け入れてくれた。代わりに「恋人らしいことは出来ない」って言われたけどそんなのどうでもよかった。

お兄ちゃんの傍にいれるような特別になれるなら、なんだって。

そう思ってたのに。

「……」

なにか、小さく口を動かした先輩はそのまま動かなくなっちゃった。

どんどんその目は私を写さなくなる。

救急車が来たけどもう手遅れなのは分かった。分からざるを得なかった。

先輩が死んでしまったその日から、私は何もする気力が無くなってしまった。

なんだか、ぼつかりと胸に穴が空いてしまったみたいで、何も考えられなくなってしまった。

毎日、なんとなく学校に通ってボーツと授業を受けて、そして帰る。そこからはご飯も食べずに部屋にずっといる。タルタロスの探索

にも行かない。行けない。

あんなに美味しかったご飯も最近はどうも味がしない。

ゆかりや風花から心配されてるけど私にはもうどうしようもない。出来

ない。
10年前に事故で双子の片割れだった湊と、お父さんとお母さんを
：家族をみんな失ってからずっと頑張ってきた。

行方不明になっていたお兄ちゃん——三上先輩と出会えて、もつと
もつと頑張つて、やつと前向きに生きていこうって思えたのに、今回
のことで全部めちゃくちゃになってしまった。

だって、私は好きな人と家族を同時に失ってしまったんだから。
家族の中で私だけ生きてる意味が分からなくなってしまった。

綾時くんから、綾時くんを殺すかどうか決めてねって言われて
いるけど私はたぶん、もう立ち上がれない。立ち向かえない。ごめん
なさい。

私のもつと強ければ。きっと遺された命を無駄にはしないと綾時
くんを殺さずに滅びに立ち向かったのかもしれない。けど、もう駄目
だよ。辛いよ。ずっと、ずっと限界だったんだよ。

わたしは湊やお兄ちゃんが居なきや、なんにも出来ない。

リーダーなんかになれるはずが無かった。明るくて、強くなるとな
れなかった。

「これまで辛かったね。……お兄さんが殺されてしまった記憶は消え
ないけど、終わりまでこの戦いの記憶を封じてしまえばきっとキミの
傷はもう少し浅くなるはずだよ」

綾時くんがそう、心配したように告げてくる。

あともう少して綾時くんを殺さなきやいけない。私のする選択は、
世界を滅びに導くもの。すごく、すごく相談を重ねた上でみんなも私
の選択を許してくれた。最近、おかしかったせいかもしれない。

だけど、もうこれしか残っていない。
より楽な方を選びたい。

もう頑張ったんだから、十分だよな？

「十分さ。キミは十分頑張ったんだ。ほんとうに、キミがここに来る

までに置かれていた環境は酷すぎた。その原因となってしまうた僕が言うのもなんだけど……もう諦めてもいいと思う。優しい夢の中で微睡んで、それで終わりにしても僕はその選択を否定しないよ」「ありが、と……う……自分可愛さに……あなたの命を奪うことになって……ごめんなさい……ごめんなさい……！」

「謝らなくていいんだ。言っただろう？ どちらの選択をしてもヒトとしての僕は消えてしまうと」

優しく綾時くんが慰めてくれるも嗚咽が止まらない。

綾時くんは死んでしまった湊が大きくなったらこうなるのかもしれないというような見た目をしてた。だからなおのこと、綾時くんを殺すことは私の中に残ってる湊のイメージを殺すことと同義になるんじゃないかってずっと怖かった。

でも、綾時くんは綾時くんで、他の何者でもなくて、だから。

「綾時くん、こんな選択をした私を許さないでね……おねがい」

——震える指で召喚器の引き金を引いた。

卒業式の日。

卒業する真田先輩たちを送り出した後、いつもの3人で集まって校門からでる。

満開の桜の並木の下で金髪の女の子に声をかけられたけど、私には面識がなくて首を傾げて黙っていたらどこかへ行ってしまった。

「人違いだったのかな？」などと話しながらゆかりちゃんや順平とこれからカラオケに行く約束をしていた時、不意にぐるりと世界がから回るような感覚になる。すんごくきもちわるい。ぐるぐるとする。

「オイオイ奏子っち大丈夫かよ？ カゼとか？ やっぱカラオケやめにしとくか？」

「ちよ、奏子ちゃん大丈夫？」

「だ、だいじょ……うぶ」

心配する順平とゆかりちゃんに何とか返事をしたものの、頭が痛い。何かを忘れていている気がする。何かに引っ張られるような感覚が

する。

数秒としないうちに何もかもが真つ暗になって見えなくなつて、ぶつんつて音が『この1年』の終わりを告げた。